

死憶の異世界傾国姫
～ねえ、はやく、わたしを、殺して～

ぎむねま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世にも不幸な少年は、最後には隕石で死亡する。

神は世界のバグを疑って、少年の前に姿を現した。

なぜなら少年の魂は一度も十六歳になる事なく、一万回の死を繰り返していたからだ。

どんな力を持つヒーローでも、不慮の事故で死んでしまう。

だったらと少年が選んだのは、誰からも守って貰えるヒロインになることだった。

彼、いや彼女に唯一与えられた能力は『参照権』

それは『前世の記憶を思い出せる』ただ、それだけの能力だった。

その本当の価値に気付く時、少女は噛い、滅びを願う。

これは、狂気と、破滅と、カワイイの物語。

・ 本作品は小説家になろう様でも投稿していません。

<https://ncode.syosetu.com/n6266dl/>

【リヨナ・猟奇表現に注意】

エルフのお姫様にTS転生した主人公が、ひたすらに酷い目に遭います。

ただし、一方的に酷い目に遭うのではなく、ブチ切れて暴れ回って殺しまくります。

※なろうでshintek様よりイラストを頂きました

絵師様に依頼して下さったそうで超クオリティで感動しています。

良いのかな……、こんなにしっかりしたイラスト

目次

序章

馬鹿と天災は紙一重 | 1

神から目線 | 9

★序章の設定語り | 23

一章 エルフのお姫様

エルフのお姫様 | 26

姫として生きる | 33

新しい家族 | 40

ラジオ体操 | 51

ガスバーナー | 57

生誕の儀の罨 | 68

兄ーレッスン | 77

舞台の裏で | 89

生誕の儀 | 96

生誕の儀の真相 | 109

いざ別荘へ | 117

湖で誘うもの | 124

混線する記憶 | 131

大牙猪 | 136

キチキチプリンセス | 156

成人の儀 | 170

絶望の朝 | 189

死地での報酬 | 216

逃走の果てに | 228

休息の代価 | 238

絶望の夜	250	弓を探して	372
★絶望の夜明け	267	ハーフエルフの襲撃	400
★狂気の始まり	272	ハーフエルフの村	411
少女発狂ス。	281	★成人の儀へと	417
黒衣の剣士	295	★大岩蠍螂	427
★一章の設定語り	307	薄幸の美少女の残滓	438
二章 薄幸の美少女の追憶		大牙猪 2	448
巻き込まれた田中	316	大牙猪 3	455
可愛くも恐ろしく、そして儂い		大牙猪 4	463
331		戦い終えて	472
少女が村に到るまで	344	勝利の宴	479
こくいのけんし(棒)		恐怖の予感	486
僕悪いウーパールーパーじゃないよ?	355		

★戦闘配備	498
★キチキチプリンセス2	511
★キチキチプリンセス3	519
キチキチプリンセス4	527
グリフォン襲来	535
グリフォンを撃退せよ!	545
戦いの行方	553
戦いの報酬	560
エピソード 改めてスフィールへ	568
★二章の設定語り	574
三章 車輪の少年	
スフィールに到着	578

ゲイル広場	587
スフィール城	595
スーニカの宿屋	603
スフィールを散策	613
スフィールを散策2	622
オルティナ姫	631
ヤツガランの懺悔	638
★執務室での攻防	647
作戦の練り直し	665
早速の襲撃	675
ヤツガランの懺悔2	686
スフィールを出発	699
ゼスリード平原騒乱	713

狂気の侵食	870
★悲しみと絶望と	859
シノニムの過去	842
思いがけぬ迎え	834
崖の上の死闘	820
悪夢の任務	798
ゼスリード平原騒乱 8	788
ゼスリード平原騒乱 7	776
ゼスリード平原騒乱 6	765
ゼスリード平原騒乱 5	759
ゼスリード平原騒乱 4	742
ゼスリード平原騒乱 3	728
ゼスリード平原騒乱 2	720

運命の女性	1019
木村の回想 3	1011
木村の回想 2	987
木村の回想	977
第四章 盲目の姫の残滓	
★三章の設定語り	972
オルティナ姫 2	958
死と踊る	939
前借りの代償	923
破戒騎士団	915
偶然に抗う縁	904
死を誘う記憶	890
止まらぬ獣	879

嘘発見器	—
動乱の王都	—
★舞踏会	—
★専属楽士	—
田中の思い	—
アイス	—
★アイス2	—
アイス3	—
舞台の上で	—
★第二王子	—
舞台の上で2	—
殺戮令嬢1	—
エルフの使者	—

1219120411941181116411531138112211101089106710471036

殺戮令嬢2	—
第二王子派	—
魔人公	—
近衛兵長	—
★近衛兵長2	—
可憐な姫の素顔	—
殺戮令嬢3	—
素顔の裏の本性	—
婚約成立？	—
婚約準備と木村へお断り	—
私の為に争わないで	—
ドレスの競技会	—
★針千本	—

1433141214011385137213561342131712951285127212611234

★針千本2	—————
婚約発表会	—————
婚約発表会2	—————
★思惑を探って	—————
殺戮令嬢と婚約破棄	—————
婚約旅行	—————
復讐姫	—————
巨大墳墓1	—————
巨大墳墓2	—————
巨大墳墓3	—————
欠声裁判1	—————
盲目の姫の残滓	—————
王国の行方	—————

1687167216481633161315921564153715231505148614631449

木村の試練	—————
シヤリアちゃん♪	—————
閑話？木村の独白	—————
閑話 シヤルティア	—————
五章 大森林の英雄伝説	—————
落ち行く先で	—————
下水の穴蔵	—————
気配の正体	—————
敵中模索	—————
ゼスリード平原EX	—————
グリフォン襲来2	—————
外からの来訪者	—————
大牙猪EX	—————

18851877186118431818179917881775

1764174917291699

英雄伝説のはじまり	—
帝国の陰謀 1	—
帝国の陰謀 2	—
反攻作戦	—
動物園	—
姫の願い	—
クロミーネの秘術	—
禁書庫 1	—
禁書庫 2	—
強襲	—
トロイの田中	—
モンスターハウス	—
魔剣 VS 日本刀	—

2111209420712052203120171994198319701942192719111902

凶化グリフォン 1	—
凶化グリフォン 2	—
五章の設定語り	—
六章 吸血鬼の悲恋	—
海賊姫	—
★リボルバーと火薬の秘密	—
吸血鬼伝説	—
帝国の陰	—
シャリアちゃんの閑話	—
古代遺跡 1	—
古代遺跡 2	—
遺跡に張られた罫	—
デッドエンド?	—

232222982280226322532235221321872174

217021482126

デッドエンド??	2560
俺の名は?	2537
少し前の話	2525
雑な男	2525
生まれ変わった私(物理)	2510
逆転する立場	2493
王蜘蛛蛇	2477
魔女の罠	2460
魔女の罠2	2439
王蜘蛛蛇2	2424
王蜘蛛蛇3	2419
アナタをゆるさない!	2398
エピソード1 これ、何の勝負ですか	2374

?	2600
エピソード2 変人しかいない	2600
エピソード3 戦力外通告	2618
閑話 時間停止者は九割やらせ	2632
七章 砂漠の歌姫の涙	
紛争の始まり	2642
晴れときどき姫	2659
男同士、砂漠、ニケツ、何も起こる訳は	2674
なく	
境界地	2688
ポンザル家と境界地の権利書	2703

歌姫の足跡

2712

カラミティちゃんマジカラミティ

2732

水不足と砂漠の掟

地下水路

家出少女を探せ

舞台の上で

★露出狂か？

★露出狂だ！

★性癖の危機

一夜明けて

麻葉ダメ、ぜつたい！

お家騒動

2918290528932864284828302793277727632746

クーデター

クーデター2

★クーデター3

オバサン？

やったか？

フォツガ

砂漠の歌姫

詩

引導

カタパルト

空中戦

灼熱の空

プラヴァスの空模様

3184316531453134311530993085305930433014298229652949

エピソード1	古代の記録	322632033199
エピソード2	アイドル活動	
★七章の設定語り		
八章	沼地の星獣	
王都凱旋		
腋		
墓参り		
開戦前		
恥辱		
★苛めたくなるお姫様		
反撃		
★拠点奪還		
在庫処分		
		337033563343333133063284327232523232

★ミニスカナース		
★フラグ回収		
★アポカプリンセス		
一騎打ち		
一騎打ち2		
馬「やだ、この娘怖い！」		
獅子身中の姫1		
獅子身中の姫2		
獅子身中の姫3		
獅子身中の姫4		
掲示板回???	ユマ姫観察日誌	
ユマ姫観察記録2		
ユマ姫暴走記録		
		3612358835683554353235203506349434553442342033993383

アポカプリンセス2	3843
終末世界の創造者	3866
姫の決意（嘘）	3796
魔女の軍勢	3769
地獄の痕	3796
ダンジョン??	3754
発見、そして突入	3737
もしも、世界と心中出来るなら	3737
竜の記憶	3719
もしも、世界と心中出来るなら2	3692
もしも、世界と心中出来るなら3	3672

騎士をドン・キホーテにする方法	3843
星獣狩り	3866
星獣狩り2	3880
星獣狩り3	3896
星獣狩り4	3922
終わりの始まり	3935
すれ違いの代償	3950
★八章のまとめ的なアレ	3969
九章 皇子の悲願と世界の終わり	3998
黒峰1	4006
黒峰2	4020

黒峰 3	
黒峰 4	
黒峰 5	
魔女の怨念	
新しい私	
公開処刑 1	
公開処刑 2	
公開処刑 3	
戦場に舞い降りた天使	
残された時間	
ロンカ要塞 1	
ロンカ要塞 2	
ロンカ要塞 3	

4268424442254203419041734156415041244108408640674043

聖女伝説 1	
聖女伝説 2	
おっぱいチェーン	
蜂起と開門	
聖女伝説 3	
帝城攻略戦	
舞踏会の獣	
世界一有名な例の洋館	
研究所	
綺麗な黒峰	
汚い黒峰	
変わったのは、何か？	
皇子の記憶	

4554452845104488446844514438442644094399437443424308

お誕生日会の誘い

十六歳

終末の刻

終末の刻2

ザイア

終章 巡る世界

完全世界

全ての始まりへ

その地獄こそが天国だった

絶望の朝 E x

逃走の果てに E x

黒衣の剣士？

スフィール騒乱

4769475647454733472047074701

46744651463646014575

恐ろしいモノ

これが、魔法？

思惑を探って？

厄災そのもの

破滅と踊れ

王国の行方 E x

セレナの拠点

紛争の始まり E x

セレナの思い

殺意が少女に芽吹くとき

塔の上の戦い

呪いの力

戦乙女 V S 呪いの姫君

5034500649954978495249334916489548724855483948284796

転進する戦乙女	5057
戦車と怪獣	5082
常識に隠された真実	5096
皇帝と停戦	5114
二回目の十六歳	5144
終末の刻 E x	5161
巡る世界	5185
ザイア?	5209
取り残された者の戦い	5237
めでたし、めでたし?	5258
最終回?	5288
最終章 N Z	5303
傾ける者	5303

序章

馬鹿と天災は紙一重

俺はどこにでもいる普通の中学生、に見せかけた、日本一不幸な中学生。

いや、生まれつき障害が有るでもなく、病気もなく至極健康に育ってますよ？
それだけで幸せだろうって言うのは解ります、解りますとも。

でもね、例えば前からスマホでわき見運転の車が突然右折してくるでしょ？

最近のハイブリットカーは音が無いから困りますよね。ここまではまあ、無いでは無いでしょう。

で、慌てて道路脇へ逃げ込んだら、側溝のコンクリの蓋がバカツと割れてそのままドボにドブン。

そんな運の無い俺の頭上にハトがウンコをおすそ分けですわ。

これアレだよな？ 明らかに俺をハメて喜んでる奴居るよね？

こういうゲーム知ってるよ、でも古びた洋館でやってくれな、明らかなレギュレーション違反。

「そ・れ・で、お前体育の前からジャージ履いてたの？ フツー落ちるか？ ドブって単

語久しぶりに聞いたんだけど！ さっきのもつかい言ってくんね？ ドボにドブん！

ドボにドブん!!」

なんかやたらウケてるのが俺の親友の田中。四角い黒縁めがねにパリツとした髪型からの、期待を裏切る糞馬鹿である、頭が悪いと言うより興味を持つ対象が偏ってる、つまりオタクだ。

大変笑って頂けているので、俺も不幸に成った甲斐が有ったと思うことにしたい。後、ドボにドブんは言い間違えただけとは言い出せない。

「いや、でもそういう事故ってのは誰にでも起きてるんだと思うぜ。起こる可能性の有る事故は必ず起こる、トーストはバターを塗った面から地面に落ちる。そういうもん」急に冷静に分析しだすのは木村。ちよつとチャライが立派なおタクである。

「つまりマーフィーの法則的にバターを塗るのが悪い。んークロワッサンにしようぜ」マジで言ってる意味が解らないのが凄い。

ちなみに俺はバターが塗ってない面から緊急着陸してくれたトーストを見たことが無い。

つてか、みんなバターは塗るんだから事故は有るって言いたいのか？

慰めてくれるのか知らないけど流石になあ……

そういうレベルじゃないだろ、もつと真剣に考えてくれと。

「おいおい、それを言うならハイソリツヒの法則って知ってるか？ 一つの重大事故の裏には軽微な事故が29個、ヒヤリハットな事例が300は有るって奴」

現場監督の親父がよく言ってる奴の受け売り、だがそこに何故か田中が割り込んできた。

「それ知ってる！ 大きいゴキブリを1匹見つけたら、中ぐらいのゴキブリが29匹、小さいゴキブリが300匹いるって奴だろ？」

はい糞馬鹿である。

この馬鹿話に食いつくのは木村ぐらいだ。

「待てよ田中！ つまり普通のゴキブリを300匹用意すればどうなる？」

「そりゃー29匹の巨大ゴキブリと」

「一匹のキングゴキブリ」

糞馬鹿が増えた、キング糞馬鹿になる前に何とかしたい。

なんかグラウンドにキングゴキブリが破壊光線出してる絵を描き始めたし、程よくデフォルメが効いてて無駄に上手い。

体育のサッカーをサボって堂々お絵かきってどうなんだ？ いや体育より俺の命の

が大事なのは間違いない。

「いやいやいやいや、ちつとは心配してくれよな、このままじゃデカイ事故が起こった

時、俺死んじやうよ？」

俺の話はどうやら完全に無視する方向でお絵かきに夢中な二人。

「いやいや、流石にキングゴキブリには敵わないよ……」

なんでゴキブリと戦う前提なのか？　そしてなぜゴキブリが光線を出すのか、ビルをなぎ倒しているキングゴキブリのスケール感がどうなっているのか、

どこから突っ込んで良いか解らない。

「ゴキブリから離れるよ、いや、この際離れないでも良い！　キングはともかく、巨大ゴキブリが襲ってきたら助けてくれよな！」

「嫌だよ、怖いし、齧られそうだし」

「田中さん御自慢の剣術の見せ所じゃないですかー、何とかしてくださいよー」
「俺の剣はそんな事のために有るんじゃない」

じゃあ何の為に有るんだよカス。いい加減にしろ！

いやまで、怒るな、このままじゃ俺は遠からずゴキブリに頭を齧られて死ぬ。
あらかやだ……俺もゴキブリから離れられなくなってる！

ともかく、ピンチの時に親友すら助けてくれないのはやばい。

ちなみに俺は田中が巨大ゴキブリに襲われてたら、ちゃんとバルサン買うためにお小遣いを貯め始めるよ。

「おいおい、水臭い事言うなよ、俺たちもう友達だろ?」

俺はそう言つて親指をピツとおつ立てた拳を横に倒して田中に突き出す。

拳を合わせて、健闘を称えるみたいな挨拶はフィクションでよく見るが、これは今流
行のアニメ「ガイルランダー」で主人公がやるやつ。

ホントは助ける側が言う台詞であつて、助けられる側が口が裂けても言つて良い台詞
じゃないつて事を別にすれば、なかなか決まつてるだろ?

田中もオタの者の一人としてこれは無視できないハズ。

「あのホント気持ち悪いんで止めて貰つて良いですか?」

「あ、ハイ」

ホントに傷つくんでいきなり敬語とか、お手柔らかにお願いしたい。

俺はそのまま突き出した拳をぐるりと木村に向けると、あいつは既に距離をとつての
ノーサンキューの構え。

思わず木村の指をガツと掴む。

「いやー友達甲斐の無い奴らで困るねー、その指へし折つて良いか?」

「やめろ! ギタリストにとつて指は命」

繰り返すが、マジで言つてる意味が解らないのが凄い。

「お前の指の活躍はゲームやってるとこでしか見たこと無いんだけど?」

「家で弾いてつから！ 離せておい」

指の一本も折れば俺も木村を格ゲーでボコれると思つたのに、残念だが手を離す。

そんな風に騒いでいけば、体育の授業を絶賛サボり中なんだから怒る奴も出てくる。

「ちよつとー田中君たち、ちゃんとサッカー応援してよねー」

文句を言つてきたのは黒峰つて女子、なんかよく文句言いに絡みに来る。

こりゃー俺に気でもあるのかと思つたけど、どうも田中とつるんでる時だけ絡んでくるからお察しだろうか？

まあまあまあ………そんな可愛い訳じゃないですからね。中の上ぐらいかな？ だから俺はまあ許すよ？

爆発しろなんて言わない、対人地雷で片足失うぐらいで良いんじゃないかな？

「いやさー今、高橋がドボにドブんした話聞いてたところで、マジ笑うわこんなん」

「あードブに落ちたんだっけ？ 高橋君つてなんか注意力散漫だよねー」

え？ 注意力散漫つて言つた？ 俺の戦闘力は3万だ！ 的な奴じゃないよな？

やつぱ俺の評価そんなにかよ……でもさ、普通歩いていきなり車がわき見で右折までは有つたとしてさ、側溝のコンクリの蓋が割れるとか意識して歩いてる？ 歩いてないよね？

でも田中よ、お前は対人地雷に怯えて歩けよ。

「えー酷いよ黒峰さん……俺だつて注意してるけどさー、側溝の蓋が割れるつて有りえないでしょ？」

「そもそも側溝の上を歩かないよ、危ないもん」

はーそういう認識ですか？ 幸せでちゅねー、俺だつて好きで歩いたわけじゃねーよ。

お前にピタゴラススイッチのビー玉の気持ち解るか？ 俺だつて解らねえ！

クソデカため息をこぼす俺を無視して、黒峰さんは二人の書いた絵を可愛いねーとか褒めている。

あ、それゴキブリですよーつて言つてあげたいね。

木村と田中、二人してどっちがゴキブリだつて言うのか目で譲り合つてる場面を目を細めながら眺める、いやー青春だねー。ホント爆発して欲しい。

見上げれば抜けるような青空だ、咄嗟に見上げたのも奇跡ならそれを見つけたのも奇跡で、

今思えば、俺の注意力が散漫どころか文字通り3万だつて事の証左であろう。

でもそこまで！ それ以上はどうやったつて無理。どんなに体を鍛えても剣の達人だろうと人類皆平等。

空がなんか光ったかな？ そんな風に思った次の瞬間その光があつと言う間に俺を

包んで。

なんか凄い音が鳴ったような気がする様なしなない様な？

かくして俺の意識はあつと言う間に消え去った。

神から目線

「おおっ?」

俺は謎空間で意識を取り戻した。目の前には威厳を感じる存在の気配!

はい、勝ちましたー、俺くん大勝利。

「異世界へは最強でモテモテチートでお願いします」

「無理じゃな」

却下!・ 0・ 5秒で却下!

「そんなモンで生き残れるなら、とっくにやっておる」

え? と詳しく話を聞くと、どうやら俺は隕石で死んだらしい。余りにも無理ゲーで

あった。

「酷すぎませんか? コレはもう、無双系チートを……」

「無駄と言っている、そんなのはもう何度も試した!」

どう言う事かと詳しく話を聞くと、どうやら俺の魂が不具合を起こしていると言うでは無いか!

……いや、何だよそれ! ってか、魂って何なの?

そう聞いた俺に対して、神さまはふうつと息を吐いた。

いや、そう言う心配がただけで、俺も神様もぼわぼわした発光体で姿なんて無いけどね。

で、神様の解説はこうだ！ 長いから心してくれよな！

魂とは何か？

それを説明するのは大変難しい作業じゃが、人の文明が発展するに従って、挑戦し甲斐の有るモノになってきておる。

もうお前たちは命を構成する要素を知っているし、不完全で不格好ながら大半を自らの手で作成することに成功していると言えるじゃろう？

例えばだ……

お前さんはパソコンを持っているか？

そうだ、パソコンだ。うん、まあそれはいいとして……あー

「パソコンは命じゃない」……か。確かにそうだ、

ただ、神が作ったものが命として、人間が作った命をコンピューターと呼んでいるだけかもしれないぞ？

コンピューターが命を持ったかの様に振る舞う所を見たことは無いか？

心臓が電源、メモリが脳の海馬、ハードディスクが側頭葉で、CPUは前頭葉。目や耳や手足が無いと言うのなら、カメラやマイクやロボットアームでもなんでも好きに付けてみたらいい。

ただ、魂にあたるパーツなんてどこにも無いと思わんか？
そりゃそうじゃ、そんなもんはどこにも無いからの。

人間が死んだらオシマイなのと同じようにコンピュータが壊れたらオシマイじゃろ？

ん？「データをサルベージして他のPCに入れなおせば同じように動く」か。なるほどのお人間も大分賢くなっておる。

で、それがパソコンだけでなく、人間にも出来ない理由があるかな？

そう、出来るのだよ。
ハードウェア 肉体と記憶データが有れば再現出来る！ そんなものどちらも容易に複製できるわい。

つまりな、人間の記憶も感情も脳で作っているのじゃから、魂なんぞにはなんの「データ」も無いんじや。

逆に言うとな、お前の魂を突然に全く違う人間へと入れ換えても、人間は誰も気が付かん。

もちろんお主自身もな。

だから、輪廻転生して記憶が残っているなんてのは不具合でしか有り得ないし。通常はそんな不具合を許す様な真似はせん、すぐに修正するぞい。

まあそんな不具合が有りえないでは無いのが悲しい所じやがな。

……夢が無い話って？ いや、魂が無いなんて言つてないじやろ？

わしが言つたのは「魂にあたるパーツが無い」じやよ。

ああ……「それこそが命とコンピューターの差」だと？

そう買いかぶつてくれるのはありがたいがね。

コンピューターにも魂（ソレ）にあたるものは有るんじやよ、「パーツ」では無いだけでな。

……IPアドレスじやよ。

ネットワーク

神界にぶら下がった人間を判別するための固体識別番号。

人間が増え過ぎて枯渇寸前、ヘビーローテーションで使いまわす様などそつくりじやろ？

それ自体に情報を持たず、通信の為に必要な番号。

そんなものが必要な理由……そう、魂は通信しておる、神の都合でな。

それは神が情報収集と管理を目的とした外部システム。

外部システムで有るがゆえにそれが個体に影響を与えることは許されん。

特定のIPが与えられたパソコンが、立て続けに故障したらどう思う？

管理者はシステム上のバグを疑うじやろうな。

そうだ、その管理者こそがワシじや、輪廻と運命の神、アイオーンとも呼ぶが良い。人が付けた名前は偉大じやが、実態はIPアドレスの管理者に過ぎん。

魂によって収集されたラプラスシステムによる運命予報を元に、魂を割り振るだけの存在。

それがワシじや。

ワシを悩ませ続ける、16歳まで生きることが無い魂。

そこにはどんなバグが有るのか、もしくはは世界のシステムが狂っているのか？

短命なお前さんの魂を、死から遠い場所に配置する事何と一万回。

バグの原因解明どころか、ラプラスシステムの運命予報の精度が疑われる程の破局と破滅で多くに死をばら撒いた。

輪廻のシステムを外れた異世界の、それも平和過ぎて、平和ボケと言う単語を固めたような島国の、何の変哲もない、長生きするハズの少年に無理くり割り振った魂。

アメリカのパソコンに日本のIPアドレスを割り振るような無茶なイレギュラー中のイレギュラーも虚しく。

15の少年は隕石の直撃で跡形もなく地球から姿を消したと言う訳じゃ。

この理不尽な純然たる『偶然』の攻撃に、ラプラスシステムの限界を感じ。

神は神の理解すら及ばない神の神の存在を感じる始末。

これは新しい視点が必要だ、もう『偶然』は有りえない。でも『偶然』としか思えない。

これはもう本人に聞くしかない。記憶をサルベージし疑似人格を通して会話を試みてみる事にしたわけじゃ。

……以上。神様からでした。

「で、それが俺だど?」

「そうじゃね」

軽いなー、道理でなんかもう、俺の存在は意識だけの不定形。

異世界転生させてくれないなら、文句だけは言っておこう。不具合なんだから詫び石ぐらい貰っていくぞ!

「いやー運が悪すぎておかしいと思ってたんすよねー、確率論的に有り得ないですもん」
……怪しげな目で見られてしまった。しかし、コッチは被害者、ココは強気でごねるが吉だろう。

「もつと偉い人の息子とか、すげー丈夫でツエー男とか、大魔法使いとかそう言うのじゃダメだったんすか？」

「……そんなもんは何回も試した。強くなるハズの奴でも初めから強い訳でも無い、運命予報を裏切つて勝てるハズの無いもんにつかかって死んでいく。

超大国が出来た時は喜び勇んで皇帝の息子に転生させたよ。

暗殺されたがね。

一番無茶な所では、魂の規格を無視して土地神の龍子として転生させてみたんじやが

……

土地ごと死んで行きおつた。何人死んだか数えたくもない程じや」

「マジすか！ 俺ツエー出来ないで死んじやう？」

「……マジじや、俺ツエー出来ても死んじやう！」

何か馬鹿にされた様な気がするが、取り敢えずもつと詳しく話を聞く事にする。

『『偶然』には個人の強さでは抗えないのじや。お主を狙った矢はかわせても、味方の矢が、たまたまお前さんが気を抜いた一瞬の隙に後頭部に突き刺さるのは達人であろうとも防ぎようがない』

「どーゆう運の悪さなんすか？ つーか普通に生きてたのに何度も死にかけたのは偶然じゃなかったんですね？ マーフィーの法則じやないつすよ、ハインリヒ？ ヒヤリ

ハット案件ですよ、起こるべくして起こったと言っても過言じゃない」

余りの無理ゲーに文句を言うしか無い。

「はー、それでもだーれも心配も同情もしてくれないんだからそりゃー死ぬよな……」

いや、もう愚痴！ 愚痴しかないよ！ だって酷いじゃん？ 俺の人生、頑張っても頑張っても空回りしてたけど、やっぱり不注意が原因じゃなかったね。

せめて皆がもつと不幸だねって同情してくれたら救われたのにさ！ 俺がどんくさいヤツって扱いだったモン、浮かばれないよ。

……ん？ そう言えば、みんなに守って貰えば良いんじゃないの？

「じゃあ、じゃあ逆転の発想ですよ！ いつでも死んじやいそうな儂い感じの奴が却って死なないで生き残るもんですって。一人じゃダメでもみんなに守ってもらえれば良いんすよ」

良いアイデアだ！ 俺は続けてまくし立てる。

「薄幸の美少女つてのは絵になりますけど？ 俺なんて薄幸の普通少年ですからねー、どんな悲劇だって、なんかよくある事を大げさに言ってるなって思われがちなんすよ」

言いながら、数々の理不尽にイライラしてきたぞ！ 猛アピール！

「あーせめて美少女だったらなー、みんなに心配して貰えたんだけどなー」

アピール終了！ どうだと見てみれば、呆れた気配が漂ってくる。

「まあ、さつきよりマシか」

「……マシって！」

「多くの人間の運命に乗っかってしまえば、しょーもない偶然でコロっと死ぬ確率は、理論上は下がるじやろうな、だがな、そんなのはもう千回試した、みんなお前を守つてくれたよ。命を懸けてな」

コレもやったのかよ！

「えーそれでダメだった？」

「……まとめて死んだよ」

フア——！

「どーすんスカ？ オレあと何回無駄に死ぬんスカ？」

「ワシが聞きたいわ!!」

神様の気配が激しく揺れる、声では無い衝撃が俺を揺さぶった。

不治の病を患った少女は不作の折に自害した。

戦争に行った父の帰りを待つ少年は門で馬車に轢かれた。

もつと多くの人を巻き込もうと、盲目の姫君にした時は国ごと滅んだ

人間に追い立てられ、最後の一人になった悲しい吸血鬼は愛した男と心中した。

砂漠の歌姫は政争の道具にされた末に暗殺された。

古代人の末裔だつてやったし、さっきの皇帝の息子や龍子もそうじゃが。

運命予報を見て因果律の強い、ちよつとやそつとじゃ死にそうに無い奴を選んでな！
みんな死んだよ！ 全滅だ！ 周りのすべてを巻き込んで運命予報を丸ごと破壊する悪夢の号笛だ

さあどうすればいい？ どうすればお前は死なない？ ワシが一番知りたいわ！

凄まじい激情そのものが俺を打ち付けるが、そんな事言われてもどうすりや良いのさ

？

コロコロがあつたら転がしてるよ？

呆気にとられる俺を無視して神は続ける。

……はあ。 まあ、今回は被害が少なかったのが勿怪の幸いかの……無理やり地球の管理者にねじ込んでテストを頼んだ甲斐が有つたというものだ。

「うへええ？」

今、なんて言つた？ 『被害が少なかった？』そう言えば、俺の近くにいたアイツらは？

「えーと、俺だけ死んだんですかね？」

「いや？ 隕石の直撃だからな、お前の周りの何人か一緒に死んどるよ」

「そんな……田中は？ 木村は？」

「……死んどるな」

「なん……でだよ、なんであいつらが死ななきやいけないんだよ」

「それを言うならお前さんが死ぬ理由もさーぱり解らん！ そんなわけないだろと鼻で笑った地球の管理者が頭を抱えて資料^{ロク}を漁っておるのが痛快に思える程だわ畜生ツ！」

神はヤケクソ。俺もヤケクソだ！ 畜生ツ！

「そんな実験で田中も木村も死んだのかよ。なんでだよ……」

「その原因をワシはかれこれ数万年追っかけとるよ。お前らの体感時間で換算するとな」

「そんな糞つたれな運命を、運命を超える力を壊す力が……なにか無いのかよ……」

神が数万年と言うだけ有って、ここでは時間すらゆっくりと流れていた。覚悟を決めて、俺は一つの結論を下す。

何故かって？ どうしたって俺は納得が行かないからだ！

「一つの運命じゃだめでも……幾つかの、運命を束ねれば……」

……なあ神様、全部じゃダメなのか？」

「どういう意味じゃ？」

俺は、とつくにおかしくなっていたのかも知れない。

「王国の姫君も、吸血鬼も古代人の末裔も、土地神も全部まとめて全部盛りだよ、世界中の人を無理やり同情させて、俺の運命に同乗させるんだよ！」

「世界を道連れに心中するのか？ やけくそじゃな、全ての因果律を纏めて運命破壊の『偶然』に抗うか、どうしてそこまでする？ きつと碌な人生にはならなんだ」

神に問われる、確かに……だが、俺はきつと悔しかったんだ。

「田中と木村が浮かばれねえよ、絶対その『偶然』をぶつ飛ばしてやりてえ」

「世界で一番不幸になって、世界で一番同情されて、地位も力も手に入れて世界を巻き込んで。」

「……それで世界のみんなを不幸にして、それでもやっぱりダメかもしれないんじやぞ？」

「やってやる。薄幸の美少女で王国の姫君で吸血鬼で古代人の末裔で、もう何でもいい全部だ！ 全部で良い！」

史上最悪のヒロインをやってやるよ、世界の全てに命を懸けて守ってやりたい、なんとかしてやりたいと思われて

全部を載せて全部と心中する事になっても、一秒でも長く生き残ってやる！」

「ほ……本気なのか……いや、とは言ってもそんな都合のいい転生先が……だが、因果律は先天的な物だけじゃない、後から回収出来る物を積極的に集めて行けるなら……可能

性はある！

良いじゃろ。覚悟があるなら記憶を持ったまま転生させてやる！」

「マジで!？」

さっきの話を聞くに、それは結構な特別措置だ、チート感がある。

「ああ、勿論わしの首が懸かるがな」

「それは……どうやって?」

俺がそう聞くと、神は尊大に笑った気がした。

「魂じゃよ、魂は神が世界の情報収集用に付けたモノだと言っただろう? そして送信が出来ると言うことは、当然に受信だって出来ると言うことじゃ、お主の魂が送信したログの『参照権』をお主に与える。それでお前の意思と記憶、その全てを転生後にダウンロード出来るハズじゃ!」

おお! そう言う事かと驚く俺に、意地悪な神の意志が突き刺さる。

「だが、解ってるのか? その時いたいけな一人の少女の脳に「自分」を上書きすることになるんじゃぞ?」

神は俺に、覚悟を問うているのだ! 俺は親友を殺された怒りに打ち震えた!

「それでも……やってやる、俺やってやるよ」

「わかった、地球の管理者とも協議して転生先を探してやる、……よし良いのが有った。

ヒヨるなよ小僧」

そして一人の少年は少女として転生する。

それは運命を壊す『偶然』に全てを賭けて抗う物語。

★序章の設定語り

こんにちは、作者のぎむねです。

このコーナーでは章の合間に設定でも語っていいのかなって言う、素人小説らしい自己満足で、承認欲求を存分に満たしていいこうと言う謎コーナーです。

読み飛ばし推奨！ どのぐらい不要かって言うと、小説家になろう版には存在しません！

作者だけが喜ぶ、ハーメルンオリジナルコンテンツ！

【異世界転生】

スキルとかレベルってなんだよ！ みたいな文句を最近良く聞きますが、そもそも異世界転生ってなんだよ？ ってのがありません？

ハーメルンで投稿するにあたって、必須タグに【神様転生】と【転生】が別にあつたのを見てビックリしましたが、神様のミスで異世界について一つのジャンルなんですな。

でも僕は、間違つて蟻を踏み潰しても何とも思わないのに、神様つてヤツは随分と律儀だなーとか思つてました。

「だから異世界転生なんてあり得ない！」って言うて話が終わつてしまうので、どう言

う理由があれば神様がワンチャン異世界に送ってくれるかな？

って考えたら出て来た設定です。

【魂】

実は前から、魂ってなんだろう？　って思った時にIPアドレスみたいだな、とは思っていました。

他にも前からそう思ってた人、少なくともと思います。もし、そういう作品が既にあったら教えてね。

IPアドレスで管理するシステムだと、辞めたはずの〇〇さん転生した！　みたいな。あるよね？

で、IPアドレスだとしたら通信してるワケじゃないですか？　そう思ったらこの物語が思いついたんです。

昔は、パソコンが壊れたら保存したデータもオシマイだったけど、今はクラウドに保存していて、買い換えたその日に復旧つても珍しくありませんから。

魂が通信しているなら、転生つても不思議じゃ無いかなーと思います。

【運命予報（クラウドシステム）】

便利なクラウドサービスがあるとして、神様だって人間の為にそんなサービスを運用しているワケでは無いのです。

CIAだけはエシユロンとかでネットワークのあらゆる情報を覗き見していると言いますが、神様は人間に黙って通信していて、一切利用させないんだからある意味もつと酷いですね。

序章では語られませんが、神様が情報収集を行う理由は、世界の情報を収集し、完全な未来予知を実現しようとしているからです。

その為にはその未来を完膚なきまでに破壊する『偶然』が滅茶苦茶に邪魔なんです。絶対に死なない未来を約束された人間を選んで主人公を転生させているのに、未来を破壊して死んでいくワケです。

多くのデータを収集して、それでも『偶然』の原因を突き止められなかった神様。だから主人公に主人公の魂が収集したデータの『参照権』を渡して転生させる事で、主人公は前世の記憶を思い出すワケです。

と、ここまでだと「異世界転生して、記憶を保持している理由」と言う『設定』でしかないですが、本編にその設定ならではの仕掛けがドンドンと出てくるのでご期待下さい。

一章 エルフのお姫様

エルフのお姫様

深い、深い森の中。

静謐な空気に守られた大森林の奥、いや底と言うべきか。人間には辿り着けないと言われる天然の要塞。

そこにエルフの宮殿は有った。

「宮殿と言っても石造りではない、でもそれを見て貧相という感想を抱く者は絶無と言つて良いだろう。木が自ら意思を持つて要塞を形作つたかのような異様な光景に圧倒されるハズである。」

そんな宮殿の奥、切り取られたかのように光差す明るい場所に二人の姿が有った。

「ほらいい子ね、お腹にお耳を当ててごらんささい、赤ちゃんの音が聞こえない？」
「んーわかんない！」

穏やかに語り掛けるのはエルフの王宮が誇る、輝く金の髪も麗しき王女パルメ・ガ―シエント・エンディアンその人である。

彼女には三つの不安な事が有った、一つはもちろんこれから生まれてくる赤ちゃんの

事、

残りの二つは可愛らしく返事をした自分の血を引かない銀の髪を持つ娘の事だ。

もうすぐ三つになる娘、ユマ（家名のガーシエントは成人後、エンディアン王家の名は王自身と王女にしか名乗れない）は健康とは言い難い子供であった。

すぐに熱を出すし、足元も覚束ない事が多く、その所為か引つ込み思案で知らない人が居ると途端に何も言わなくなる。

もう一つは彼女の頭の問題だ、母親であるパルメは娘のユマが決して頭が悪くない事を知っている。そりゃあ魔力量は少ない、でもそれは生まれの段階で誰もが覚悟していた事だ、だからユマが心配されてるのはそんな事じゃない。

「もうすぐユマちゃんはお姉ちゃんに成るのよ？ 楽しみ？」

「うん、たのしみー」

「そう、でもお姉ちゃんに成るのに自分の名前を言えないのは恥ずかしいわよ？」

「そうなのー？」

そうなのだ、ユマはまだ自分の名前を言えない、頭が悪いとは思わない、それどころか普通に大人の様な会話が成立してビックリする事も多い。

なのに自分の名前が言えない。人間でもちよつと遅いかな？ と言うぐらいで、成長が早く寿命も長く、それこそが選ばれた民の証だと思ってる長老たちにとってみれば。

「やはり蛮族の血が混ざるとコレか・・・」

と言う思いがあり、王女の前でもその態度を隠そうともしない者も少なくない。

自分の血を引かない娘だけにご機嫌伺いのつもりでそんな事を言う奴も居るのでやりきれない。

「そうなのよー、じゃあユマちゃん今日こそ自分の名前言ってみよつか?」

「うんー?」

小首を傾げる様はなんとも可愛らしい。

「じゃあ、さんはい! あなたの名前はなんですか?」

「えーとねーわたしのなまえはー」

「名前はー?」

「私の名前は『高橋敬一』」

「エッ!」

意味が・・・解らない『タカハシケイイチ』? そんな単語を王女は聞いたことが無かったし、答える前に覗いたあの子の目が別人みたいに見えて怖かった。

そう、目が合ったのだ。あの子が人の目をあんなにハッキリと見つめる事など有っただろうか?

その目がぼんやりと焦点が合わなくなり、パチパチと瞬くとゆつくりとその場に崩れ

落ちた。

「ユマ? どうしたの? ユマ?」

王女が呼びかけるがユマは答えない、彼女は深い眠りについていた。

そうとても深い眠りだ、ある意味でユマという少女はもう二度と目を覚ます事は無かったのだから。

「ふあああああ——」

奇声が溢れる口を止められない。

気が付くと俺は転生していた、エルフのお姫様みたいです。

「エルフのお姫様」もう響きがエロゲーの其れだ。

いやー驚いたね。驚いたって次元じゃないね。驚き過ぎて死ぬかと思ったって言うたら本当に死にそうな身の上だから深呼吸。

高橋敬一だった時の記憶を取り戻す条件、それは「自分を高橋敬一だと思うこと」

神は簡単に言ってたが、確率が微妙とも言ってた。

そもそも、俺の存在が無いどころか日本ですらなく、名前の形体も日本と全然違う異世界だ。いつくら俺の名前が日本でかなりのレベルで凡庸な名前でも、掠るような名前すら登場する余地もないのだ。

何の脈絡もなく「アレ？　俺、実はエルフのお姫様じゃなく日本の高橋敬一では？」とか疑問を挟む余地は一ミリたりとも無いと言えよう。

だから、夜な夜な夢枕に神の爺ちゃんが「お主の名前は高橋敬一じゃよ」って囁くだけであんな自己紹介に至ったのは奇跡だろう。

もし、もしも早々に「私の名前はユマです！」って言ってしまっていたら、気持ち悪い爺さんが囁く意味不明な睡眠学習の効果も虚しく俺は目を覚ます事は無かった訳だ。

そして母親とキモ爺のどちらを信じるかで、キツチリ神を選び抜いた彼女は賢かったのだろう。

そしてその賢さが彼女を殺したのだ。

そう、殺した。もうユマちゃん（三歳）と言う幼女はどこにも居ない。

かと言って高橋敬一だってもう居ない。彼女の脳に急に高橋敬一のデータが居候を始めたただけだ。だけどまだ三歳にもなっていない幼女のおうちに十五の俺が無理やり侵入した様なもんで、彼女のおうちを事実上乘っ取った様な物だろう。

だけど、高橋敬一だけではいられない。この胸いっぱいには広がる、パルメの事を母と思いその胸に飛び込みたいと言う思いは思春期の少年のエロ心ではない。

幼女が大切にしたい思い、それが解るからこそ辛い。

なぜなら母を思う気持ち、その大切な思いを、ゆっくりと思春期の少年のエロ心が、

「エルフなのにつこー胸大きいのな！ おっぱーいオツパーイ」と言う掛け声と共に穢していくのだ。

事案だとか犯罪なんて生易しいもんじゃない、なんとも居た堪れない。

でも、今更後悔しても遅いのだ。俺はもう殺してしまった、殺したからこそ俺が居る。そもそもバッドエンドは確定してる様な物なのだ。

……神様よう、死にくい癖に滅茶苦茶不幸な運命を選んだんだろ？

で、そこに死亡確定の魂が入っちまった、こいつは俺の責任も大きいよな？

その時点でもう手遅れだ、この子が俺の事を思い出さなかったとしても、泣きながら殺される未来しかなかったんだろ？

神様の睡眠学習は、お告げの様な状況次第のアドバイスを頂ける訳じゃない、まるつきり目覚まし時計だ、三歳までの間決められた言葉を夢で囁くだけ。

この体に神の信託を受ける巫女として、秘められた力がある訳じゃないんだ。

そもそもその所、そんなもんが有るかどうかも知らないけどな。魂やシステムの話は聞けたけど、神はこの世界の事は何一つ教えてくれなかった。神には神のルールが有るんだとよ。

未来予知の精度を上げる為の実験なのに、俺が未来を知っていたら意味が無いってのは納得だよな。

つまり、飛び切りの不幸の前にご都合主義の面白チート能力も無しに、幼女が一人だ、だったら苦しむのは高橋敬一の方が良い、君はそこで俺が頑張る所を見てくれよ、頼りないかも知れないけれど、俺頑張るからよ。

ギョツと胸の前で手を握り締めてから、パンと自分の頬を叩いて気合を一閃。グツと立ち上がると同時にバタツと倒れた。

「あ、俺体弱かったんだっただ」

思わず日本語で呟けたかどうかのタイミングで俺は気を失った。

姫として生きる

それから何日かして俺は再び目を覚ました。

記憶を引つ張る限り、高橋敬一として覚醒して三日、その前もすでに三日も寝ていたらしい。

実は覚醒する前に、乳母さんから水とか流動食を食べさせて貰っていたみたいでギリギリの所で生きてる感じだ。

この記憶を引つ張ると言うのが何とも言えない感覚で、俺が与えられた唯一のチート能力と言つて良い、自分の魂が送信したログに限定されたサーバーの参照権と言つていたか。

自分の高橋敬一としての記憶を思い出すための手段だと認識していたので、大した物では無いと思ひ込んでいた、他人の心が読める訳でも無いので、説明を聞いた感じ自分の記憶を自由に検索したり出来る機能と言ふ認識だったのだが……

例えば自分が0歳児の記憶がある人は居るだろうか？

まず居ないはずだ。どんなに遅くても1週間でもくみも有る程度取れて、おめめがぱっちりしてくる。でもその目がどんな光景を映し出していたのかを覚えてる人は居

ない。まだ人としての脳が未熟でその時の記憶を保持出来ないからであろう。

でも、俺はハッキリとその光景を引っ張り出せる、思い出しているのでは無いのだ。

記憶に無くても目はその光景を映して居るのだから、魂はそのログを送信している。そのログを参照できるのだから、見たものは本人が完全に忘れていても引っ張り出せる。

ただ、その膨大な情報を引っ張るにはキーとなるトリガーが必要で、感覚的には検索エンジンで調べ物をするのに近い。

だから、これからは歴史上の偉人の名前なんて一切覚える必要は無さそうだ、ただしその人物が何をしたとこの人なのかも解らなければ、どうログを漁るべきかが解らない。

「不幸は本当の友人でない者を明らかにする」

そんな名言がスリリと出てくる様なら、ログを一発参照でアリストテレスだ。

この思考法は現代人の俺には慣れたもの、鼻歌で出てきたメロディーで、曲名が解らずとも楽ちん一発検索な辺り、グーグル先生を超えてるとも言える。

ただし、見たこともない物はログを参照してもどうしようもない辺りを考えると、やはりグーグル先生は偉大だ。

……話を戻そう。

俺は生まれた時見たことですら参照できる。コレはユマの生まれた時だけじゃなく、

高橋敬一の生まれた時もだ。

参照出来る最初の記憶を……と探ってみれば、見違えるほど若い前世の母親の姿が目の前に広がって、胸が締め付けられた。

俺は前世の記憶をなるべく思い出さないように誓った。

郷愁に駆られては一步も動けなくなるような気がしたからだ。

次に気になったのは、自分の娘がいきなり他人の息子に乗っ取られたらどう思うか？
ユマの口から「高橋敬一」なんて言葉が飛び出した時の反応が知りたくて、参照してみるとやはり不信、どころかハッキリと怯えが見える。娘が突然に知らない人に成ったようなもんだ。

やっぱり、俺は『ユマ』として生きていくべきだと思う。この世界では誰も『高橋敬一』なんて求めちゃ居ないんだ。

俺がもっと大きくて強いなら、全てを振り切って生きて行く事も出来ただろう、でも三歳の幼女で病弱虚弱不健康児だ。せめて健康優良不良少女にならないと、家出なんて夢のまた夢であろう。

ああ、油断すると名作漫画のログを参照しそうになる。

見た映像をそのまま再生できるので、普通に漫画を見てる感覚と一緒に気を抜くとあつと言う間に時間が飛ぶ。

ユマになりきるにはどうするか？ ユマのログを漁るしかない、最初から要点を絞って早回しで脳みそに叩き込むんだ！ なんせゆっくり見えていたら、まんま三年掛かっちゃう。

どれどれつと……ああそうかよ畜生ッ！

「うああああ」

思わず漏れた微かな呻き声、でもそれで十分だったのか王女パルメが駆け込んできた。

「ユマちゃん？ 起きたの？ ユマちゃん？」

本当に心配していたのだろう、顔色が冴えない、ぐっすり三日も寝てたこつちと違ってろくに寝れていないのかもしれない。

ああ、本当に愛されてる。ここは一つ元気な所を見せて愛嬌を振りまくべきだ。でも、でも、目を合わせる事が出来ない。

自分の中の『ユマ』の部分が悲鳴を上げる。

『パルメは俺の本当の母親じゃない』

それが解ってしまった。

「なんで？」 「どうして？」 そんな感情が渦巻いて胸を焦がす。

ああ、俺はやつぱり『高橋敬一』じゃない、かと言って断じて『ユマ』じゃ有り得ない。

でも、母親に甘える幼児に勝てる存在など有りはしないのだ。だから母親の前で『高橋敬一』は『ユマ』に吹き飛ばされてしまう。

「ママー！ ママァー！」

「ああああ、どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

パルメの胸に飛び込み涙を流す俺を、パルメは慈愛に満ちた目で見つめる。

「ママー！ ママはママなの？」

「ええ、ママはママよ」

落ち着くように背中をポンポンと叩いてくれる、気持ちが悪く落ちていく、でも止める！ それを言うな言うんじゃない！！

「ねえ……ママはホントのママだよね？」

ピシリと空気が凍り付いた気がした。背中を優しく叩く手が止まり、ガツと両肩を掴まれた。

「誰?! 誰にそんな事言われたの?」

パルメは視線を俺に合わせて必死に問いかける。

「答えて！」

「答えられる訳がない、誰に聞いたでも無いのだ、そんな俺をパルメはギュツと抱きしめた。」

「ママだからっ！ 私が、本当の、お母さんだから！」

震える声、パルメは泣いている。ああ、『ユマ』お前はママに愛されてるぞ、俺が保証する。

「ママー！ ママああー！」

泣きじやくる『ユマ』はパルメの胸に縋りつく。

ああ、糞、涙が止まらない。母親の匂いが胸をいっぱいにしてしまう。

パルメを、ママをこれ以上悲しませてはいけないと心が叫ぶ。

「ママはー！ ママはユマのママだよね！」

「そうよ、ママは……ユマちゃん？ ユマちゃんの名前教えてくれる？」

「そうだよな、そうだよ。それが良い、それで良いんだ。」

「なまえ？」

「そうよ、お名前、あなたの名前はなんですかー？」

「わたしのなまえはねー」

「名前はー？」

「ユマ！ 私の名前はユマ」

俺と、俺の中の『ユマ』の部分が元気に答える。

そうだよ、『ユマ』だけじゃない、『高橋敬一』だってこの時を以て死んだんだ。

俺はエルフのお姫様として生きて行く、例えどんな不幸に巻き込まれたとしても。

新しい家族

あれからあつと言う間に二年の月日が流れた。

『ユマ』の記憶と感情の残り香が自然な幼女にしてくれたのか、殆ど不審がられる事もなくエルフのお姫様にしてくれている。

その代わり、『ユマ』としての感情が暴走する事もなく、すっかり俺の中に吸収されてしまった様だ。

とは言え、俺はもう『高橋』じゃない、新しい自我を確立しなくてはいけない。

心の持ちようを変えないとお姫様らしくない粗暴な言葉遣いが顔を出しかねないからだ。

そんな事になって誰が得をするのか？ ハーフの俺を馬鹿にしてエルフの優位性を確認して悦に入りたい馬鹿だけだ。

そう考えると、日本語が通じないのが有難い。日本語が通じてしまっていたら「マジかよ」とか「馬鹿じゃねえの」とか合いの手の様に口をついてた事だろう。

日本語にしたら笑っちゃうぐらい上品で、可愛らしいであろう言葉遣いでも、笑う事もなくすらすと口に出来るのはまるつきり言葉が違うからだ。

「お父様、今日は本当に良いお天気ですわね！」

家族と過ごす朝食の席、挨拶をかわす俺はすっかりエルフのお姫様。

お父様だつて！ お父様！ 自分の口が紡ぎだす言葉が素晴らしい！ 五歳児未満だと言うのにこの言葉遣いはもはや天才と恐れられるのでは？ と思つたがどうもエルフは早熟かつ高寿命。なんとというチート生物！ いやもう世界を征服しちまえよ！ と思うがエルフはこの大森林を守るのが使命で野蛮な侵略戦争などしないんだと、ふうん？

そんな訳で、教育係のおばちゃんは当然の様にこのレベルを要求してくるし、忙しい王様と話せる朝食の団らんは、お作法の成果をお父様に見て貰う好機となつてしまう。

こんな堅苦しい喋りで家族の絆なんて深まるのかよ……と思わないでも無いが家を空けつ放しだった前世の親父よりマシつて思いますかね。

「今日は具合は悪くないのか？ 無理はするなよ」

「はい！ 今日हतつても調子が良いんです！」

優しいお言葉を頂き俺は、深い飴色で緻密な細工の凝らされた木製のテーブルの上でグツと手を握る。

テーブルだけではない、椅子も建物もその意匠全てが前世では見た事も無い物だ。情報化社会だった前世ではあらゆる文明、文化をテレビ等で見てきたがそのどれとも根本

的に異なる。

当たり前だ、文化が違う以上に作り方が根本的に異なるのだから。

『魔法』そう魔法だよ！ 剣と魔法のファンタジー！ そうだよね、エルフが有って魔法が無い訳無いよねー

既にちよつとした魔法の授業も受けている、王族だけに家庭教師のマンツーマンだ、ハーフェルフだから、まあそんなに優秀とは言えないみたいだけど、でもでも魔法制御は褒められてるし。優秀じゃないってのもエルフレベルのお話だと思う、人間から見たら結構やるんじゃないかな？

そんなこんなで、見るもの全てが新鮮な世界で、この二年過ごしてきた。

でも全てが上手くいっている訳じゃない、そう、俺の健康問題だ。

「おねえさまが元気だと、わたしもうれしいです！」

元気に返事をするのは覚醒後まもなく生まれた可愛い可愛い、私の妹にしてもうすぐ二歳になるセレナ、そう二歳。

二歳にしてこの喋り方、それも朝食では「おねえさま」だが普段は「おねえちゃん」と可愛く呼んでくれると言うTPOでの使い分け。

ちよつと人間離れしているとかわざるを得ないだろう、エルフだけだ。

これで性格が悪いならともかく、ホントに良い子なのだ、前世の俺には妹も弟も居な

かったのも有つて可愛くつて仕方がない。

ただし、俺の方が、むしろ妹に心配され可愛がられてる節がある。

それもそのはず、未だに俺は病弱で二日に一度は寝込んでる有様、二年と言つても体感じや一年経つたかな？　ぐらいなんだから笑えない。

しかもこの妹、全方位で優秀で有る。知能もそうだが、本当にトンでもないのは魔法の方だったりする。五歳の私はもうとつくに追い抜かれたし、大人のエルフすら上回りがねないのだから恐れ入る。

彼女の魔法を見て、え？　今のこの子がやったの？　と二度見する召使いの面々を俺は何度もこの目で見てきた。

「ユマは体が弱いんだから無理をしちゃいけないよ？　もしも何かやりたい事が有るなら兄さんに相談してくれるかな？」

そう言つて話しかけてくれるのは、今年で十五歳になる私のステフ兄さん。

兄さんは金髪碧眼の超絶イケメンエルフだ。前世だったら確実に爆発の呪いを口ずさんで居たに違いないが、今は当然だが全く気にならない。

彼が居るから私には王位継承権なんてかすりもしないのは有難い。なにせ複雑なこの身の上、こんな奴に王位継承権が有つて良いのか、とか揉められると死亡コース一直線。そうでなくても滅茶苦茶優しいお兄ちゃんなのである。

「そうよ、ユマ。あなたは一人で居るとすぐに無茶をするんだから」

母親のパールメが優しく微笑む。ああ、お母様は今日も綺麗だ。

金髪でふわふわしたハーフアップの豪華な髪型がさらりと流れ、おっとりとした翡翠の瞳が目を惹く。

「自分の出来る事、やるべき事を常に考えながら行動するんだぞ」

そして親父、エルフの国の王様。エリプス・ガーシエント・エンディアンその人である。エルフだからなのか髭の一本も生えてないし、寿命も長いからか皺も殆ど無い、だからなのか威厳を出すための髪を長くして、難しい顔をしている事が多い。

なーんか魔法剣士っぽい感じ？ 以上、五人家族での朝の団らんだ。

その複雑な家族の成り立ちみたいなのは後でたっぷり説明するとして、今一番、声を大にして訴えたいのは朝食の献立、そっちの顔ぶれだ。

その一、なんか芋っぽい奴。この国の主食だ。タロイモみたいなのかな？ すり潰されている。これはまあ良いとしよう。

その二、なんかの球根、ゆでた後一口サイズにカットされている、少し甘くて美味しい。

その三、葉っぱ、苦みが有るがすり潰した芋と一緒に食べると程よい味のアクセント。その四、花、そう花である、黄色くてきれいな花で、飾りかな？ と除けたら「好き

嫌いは止めなさい！」と怒られた理不尽の塊だ。そういえば飾りと思つてたタンポポも食べられるんだっけ？ あ、参照したらアレは菊の花だとき、今まで完全にタンポポだと思つてた。

参照はこんな感じで本人がすっかり忘れてる豆知識も取り出せる。今食べている花と似たような見た目の花が無いかと参照すれば、カラーと水仙の中間ぐらいの形だろうか？

美味いか？ と問われれば香りは良いけど味は無いよね、と言つた所。

その五、無し。

そう、終了である、計四品。

朝食なんだから四品つてのはまあ良いけど、余裕の野菜オンリーである。飯にも王族の飯がコレか！ と言う思いだ。

エルフは菜食主義、なるほどどうしてテンプレ設定を忠実に守り抜いてる感じ、フアツクだね。

こちらとら純正エルフじゃないところに持つてきて、病弱不健康児なんだから動物性たんぱく質の補給は急務だ。とかさつききのメニューのどこに植物性たんぱく質要素が有つたのかも解らない。

まあ季節によつて豆、キノコ、ナッツ、なんかの根っこ！ 木の皮！ こんな物も食

卓に上がるんで、意外とバランスは整ってるのかもしれない、エルフにとってはないで、そんなハーフエルフな俺の強い味方がパクーミルク、パクーつてのはヤギみたいな不思議生物、と言うかこれヤギだろ。生命力が強く雑草駆除に大活躍でミルクも取れる。

じゃあこの唯一の動物性たんぱく質がエルフの中で押すな押すなの大人気かと言うと、もっぱら子供や病人の飲み物という認識で大人のエルフは見向きもしないってんだから、やっぱエルフの体の構造は人間とは違うと考えたほうが良さそうだ。

そんなこんなで朝食をもっしやもっしやと芋虫気分で食べ終わり、待望の洋ナシみたいなデザート、あ、五品目有りましたね、を美味しく頂きながら今日の雑談タイムだ。「ユマよ、ちゃんと健康値は測っているのか？」

「はい、お父様、今日は5でしたわ」

「5か……やはり少ないな」

健康値！ そう、この世界は健康値と魔力値と言う概念が存在する。不健康な私の部屋に備え付けられた大きな鏡。はじめはこれを見て痩せ過ぎて居ないか目で見て判断しろよ、つてことかと思っていたら、お手々を当てて念じればあら不思議。健康値と魔力値がハッキリポンと数字で御開帳。

「なにこれ！ 魔法みたい！」

って叫んだら「魔法ですよ？」と不思議そうにメイドさんに首を傾げられる始末で大恥かいた。

こういうのがある世界なんだ！ と、ステータスオープン！ とか夜中に叫んでみたのもいい思い出。凄い仕組みだと思ったものの、実はそうでもないようだ。むしろこんな大きな鏡の方が貴重で、その鏡に結果を映し出すところが滅茶苦茶凄いと力説されてしまった。

その仕組みだが、別に世界のシステムにアクセスして個人情報（こまひ）を詳らかに表示している訳ではなく、ちようどアレだ現代の体脂肪計の感覚に近いみたい。

考えてみればアレだってなんか魔法みたいなもんだ、台の上に乗っただけで「はい、脂肪分30%、一見痩せてますけど筋肉ゼロの脂肪の塊ですなー」と言われても、仕組みを知らなければ狐につままれた様な感覚だろう。

で、この健康値計は魔力の通り辛さで、抵抗力のあるやナシや健康度をチェックしているらしいので、ホントに体脂肪計の魔力版と言えるだろう。

そこで私の健康値5！ これでも今日は絶好調で、普段は4とか3とかが普通だ。ちなみに普通は20より多いぐらいだから、どんだけ不健康か解るといふもの。

数字的にここでも体脂肪率が参考になるんじゃないかな？ 体脂肪率が3%の子供。

いやー死ぬんじゃないかな？ 知らんけど。

そんな訳で皆に心配されるのは仕方がない、ギブミーお肉！

「お前ももうすぐ五歳、生誕の儀の準備を始めなければならぬのではないか？」

「あなた、ユマは体が弱いんですから、あんな儀式しなくても……」

「そう言う訳にはいかんだろう？ 長老たちも納得せんだろう」

「……そう、ですわね」

生誕の儀、これは五歳で行われる第二の誕生日の扱いで五歳を過ぎて初めて一人の間として扱って貰えるとの事。自分の両親の馴れ初めを朗読したり、劇にして、お父さんお母さん生んでくれてありがとうとお礼を言う。

両親にとっても罰ゲームなんじゃないかと思ってしまうのは現代人の感覚か？

これが現代だとテニスサークルで知り合って、お父さんが飲み会で潰れたお母さんをホテルに連れ込んで、ねっとり介抱してくれたから僕が生まれました。ありがとう！
とかになるのか？ 悪夢だな。

だからかは知らないが大分骸化しつつある儀式らしい、とは言え王族である我らは無視する訳にも行かず、そして、まあアレだ、私の生まれが心配されてるのだろう。

流石に朗読の一つも出来ないぐらいに頭が悪いと思われているとは考えたくない。

「だいじょぶだよー！ セレナのおねえちゃんならできますー！」

セレナの励ましが眩しい、でもセレナとお姉ちゃんは血が半分しか繋がって無いとは

口が裂けても言え無い感じが辛い。

「ユマ、お兄ちゃんだったらなんでも協力するよ、もし劇をやるんだったらかわいい妹の相手役は他人には任せられないからね」

こちらは事情を知ってるお兄ちゃんの優しいお言葉。

「ダメよ、ユマには私とパパの馴れ初めを朗読してもらうんですから」

「おまえ……それは……」

ノリノリのお母様に困惑する父、私としては複雑だけど、私の本当の母親を無かった事にされてもやっぱり複雑なのでいかんともしがたい。本当に自分の子供として育てようとしている母の優しさだけを受け取って励みにしよう。

「大丈夫ですわ、お母様。わたくし頑張ります、頑張りたいたいです！」

取り敢えずやる気アピール。劇は体力が心配だが、朗読ならソラで朗々と歌い上げたって良い。なんせ中身は一五歳、棒読みなんて醜態は晒さないし、記憶に関しちや参照権万歳だ。

「お前は無理をせず、今日の午前中は休んで午後の授業に集中しなさい」

「はい……」

ぐぐぐ、不健康が憎い、ちよつと動くだけで息切れする体が憎い。

「だいじょーぶ！ おねえさまのことはわたしが見ます！」

そして妹の優しさが何より痛い、ちなみに午後の魔法の授業は妹と一緒にだ、むしろ置いて行かれてる状況で、姉の威厳大崩壊である。

「ありがとう、セレナ」

俺の笑顔は引き攣っていないだろうか？ それだけが心配だ。

ラジオ体操

部屋に戻った俺は鏡の前で健康値を確認する。

健康値：4

魔力値：25

健康値と違って魔力値は二〇歳前後をピークに伸び続け、大人のエルフだと1000は超えてて当たり前になってくる、そう考えると五歳で25ってのはそう悪くない数字に思える。

ただし、妹の魔力値、これが200を超えて来るのだ。二歳にして一角の魔法使いレベル、俺の不健康ぶりに隠れてちよつとこれ異常過ぎるんじゃないか？

母も誇らしいより心配の方が大きいのか、私の主治医（しよつちゆう呼び出されている）にそれとなく妹の事を尋ねたりしている。

そんな妹の健康値は16なので私の4倍も健康と言うことだ、これはいけない。

鏡に映る私の姿も生気が無いように感じる、金髪じゃなく、色が抜けた様な銀髪なのも頂けない。明らかに他のエルフと違うし不健康そう、ちなみに妹は金属質な冴え冴えとした青色で、これも珍しいが、魔力が多い子に極稀に現れる髪色らしいので、王様の

実子でないなんて事は無いそうだが、

母パルメに限って元々それは無いと思うけどね。それにしても肉が付いて無い体である。流石に体脂肪率が4%って事は無いぐらいには付いてるけど。

ちなみに健康値は体力値とも言う、健康値が低いってのと体力値が低いってのでエルフ的に受け取り方が違うみたいで、そもそも言葉が違うんだからニュアンスが伝え辛いんだけど……体力値が低いよりも健康値が低いって方が危険な感じが伝わるし、健康値が多いって言うよりも体力値が多いって言われた方が嬉しいみたいで使い分けをみたい。

「さて、健康になるにはどうするか？」

健康になるための計画を立てなくては、自分は不幸が確定している身の上だ。そこで俺がちよつと水を汲みに行くだけで息も絶え絶えの病弱じゃ、なぶり殺しにして下さいと言っている様なもの。

それどころか目の前で俺を庇う家族が惨殺される様を貧血で震える体で見守る事態にもなりかねない、自分の身は自分で守るが理想で、ダメでも脅威からいち早く逃げられるだけの体力は必須だ。

「そのためには寝込んでるってのはナシだよな」

この世界には筋トレと言う概念が存在しないように思う。寝込んでるから体力が無

くなると言うのもあり得るのに、体力がないなら寝ているの一点張りだ。

時計の機能もある鏡を見るに、今は10マスの内3つが点灯している、前世と同じ一日が24時間ならば1マス2・4時間、5マス点灯で正午なので午後まで5時間近くもある。

毎日、睡眠とは別に5時間も寝込んでいたら健康だって病気になってしまう。

なにより今日は体調が良い……ハズ、なぜか朝食後に健康値が5から4に減ってたけど……なんだから動かなくて仕方がない。

ただし、自室療養を命じられている身。おおつぴらに外出したら首根っこ掴まれてお部屋に強制連行され信頼まで失ってしまう、ここは古式ゆかしい前世の健康運動で体調を整えるしかないだろう。

「ラジオ体操第一 いいいい♪」

そうラジオ体操である。ラジオ体操の順番やらすっかり忘れていてもそこは便利な参照機能。

「いっちゅ♪につ♪さんっしっ♪」

参照機能で脳内に鳴り響く懐かしいメロディに合わせて淡々とこなしていき、完璧な深呼吸でフィニッシュを決めようとしたその時だ。

「おねえちゃん？ なにやってるの？」

シダみたいな植物で作られた、ビーズのれんみために部屋を仕切るスクリーンを掻き分けて顔を覗かせていた妹が、思い切り不審な表情でこちらを見ている。

「あ、あのね、これはね」

「もう、おねえちゃん！ ちゃんと休んでないとダメだよ！」

「違うの、ずっと寝てても体に悪いのよ、体がギシギシツツて動かなくなっちゃうから、こうしてほぐさないと動けなくなっちゃうの」

「本当の事だ、やましい事など何も無い。ただこの世界には準備運動やら柔軟運動の概念も進んでいないだけだ。」

「ほんとー？ そんなの聞いたことないよー」

「本当よ、こうやって体を動かすと運動した時にケガもしにくくなるのよ、セレナもやってみる？」

「え？ やるやるー」

妹様の満面の笑み、頂きました。妹様はお姉様と遊びたかっただけみたい、ここは一つ姉の威厳を取り戻さないかね。

「ちゃーんちゃーんちゃ♪ちやちやちやちや♪腕を前から上にあげて背伸びのうんどー」

参照権で鳴ってる脳内音声は聞こえないので口ずさみ、言葉を大雑把に翻訳しながら

目の前で動きを実演してあげる、それを見た妹様はイキイキと真似しだした。

「ちやーんちやーんちやーんちやちやちやちやーん♪」

ちよつと調子ツばずれだけど其処がかわいい、いやコレ俺が音痴なんじゃないよな？
とにかく可愛い、体操とかどうでもいいから抱きしめたくなってくる、よーし二人で
ラジオ体操を極めよう！ ワシのラジオ体操は三式まで有るぞー

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ハアハアハア……足をも……どして手足のうんど………」

「おねえちゃん？ おねえちゃんだいじょうぶ？ お顔がまっ白だよ？」

キツツイこれキツイ、ラジオ体操は歌いながらやるものでは決して無い。いやはや
歌って踊るアイドルのお仕事がこれほど過酷とは想像もしていなかった。アレ凄かつ
たんだな、声量もダンスもラジオ体操とは比べ物にならないし。

「はい、では、ベッドで伸びの運動で終わりです」

でつち上げました。よろよろとベッドに倒れこんで終了です。

あ、ヤバイ足攣ってるイタイイタイ。

「おわりー？ みじかーい、これで体やわらかくなるのー？」

「なってるよー」

もう碌に返事も出来ない、ベッドで養生だ、あ、ホントに足痛い。

ベッドで臥せっていると妹様もベッドに上がって、あろうことか足をむんずと掴み上げた。

「ほんとー？ あ、ほんとだーやわらかーい」

イダダダダダ、それ攣ってる方の足だから！ 痛いから離して！ イタイイタイ！

「おねえちゃん凄ーい！ アレ？ おねえちゃん？ おねーちゃんん！」

俺は妹の声を聞きながら意識が遠くなるのを感じていた。

ガスバーナー

結局、午後の授業まで三時間以上寝込んでしまった。

この世界、いやこの国か？ お昼はかるーく済ませるもので、枝豆みたいな見た目で意外と固い豆と糖蜜漬けのナッツを齧った。枝豆はともかく糖蜜漬けは王族とそれに準ずる位の者しか食べられないらしいので有り難く頂く。栄養価も高そうだから積極的に摂って行きたいが貴重らしいのと、なにより動物性たんぱく質が欲しいんだよねあ……

ほんとは午後の授業も休むように言われたのだが、魔法の授業でこれ以上妹に置いて行かれるのは勘弁したい。

魔力量で敵わないのは仕方ないとしても、知識量と応用力で上を行くのが異世界転生物の醍醐味だろう。

なにより「おねえちゃんごめんね……」とすっかりしよげてしまった妹に元気な所を見せねばなるまい。

健康値：3

魔力値：27

現実是非情である。自らの危険水域である健康値3、どうしてこうなった？

ちなみに魔力量はちよつとしたことでブレるし、食事を取ると上がったりする、つまり誤差の範囲だ。

「おねえちゃんだいじよぶ？」

セレナがシダのすだれの前で待っているのが透けて見える、気まずくて顔を出せないのだろう、これはお姉ちゃんとして頑張らないといけないところだ。

「大丈夫だよ、お姉ちゃんと勉強に行こっか」

で、ペタペタと離宮内を歩いていく、教室は王宮近くにある（そもそも王宮、離宮と言う区分が正しいか解らない、ただ居住区と王が政治をしているであろう場所は明確に分けられていた）エルフの国の規模が大きい訳じや無いのか、そこまで広くは無いのが救いか。

「おねえちゃん、かおいろわるいよ？ だいじようぶ？」

「全然！ へっっちゃらよ」

強がったものの、城の防御を考えているのか、曲がりくねった道や小部屋を抜けないといけないのが地味に辛い。

小部屋を抜ける度に心配そうな顔をした使用人はおろか、文官みたいな青年まで後ろに付いてくるし、王族つてのも大変だ。

「でもっ！ でもなんかみんなしんばいですって、ついてくるし！ こんなヘンだよ！」

……なるほど、王族だからじゃなくて俺の顔色が其れだけ危険水域だと。ふうむ皆優秀だね、健康値計なんて要らないんじゃないかな？

ちらりと後ろを振り向くともはや大名行列の様相だ、俺の顔色を見たお付きの人々まで顔色を悪くして慌て出す。

あ、これヤバイやつだ、俺の顔色、多分紙みたいになってる。

「ねえさま、ねえさまのおかお、白じゃなくて青くなってきた」

青かー、青と来ましたか。赤が危険だとすれば青は安全かな？ もう正直ここから歩いて自分の部屋に戻るのも厳しいので早く教室に着きたい。

「ハアーハアーハアー」

「だ、だいじよぶ？ ね、おへやにかえろ！ セレナもかえるから！」

うう、妹にここまで心配されてしまうと……でも何とか教室に辿り着いた。大名行列のお付きの方々は代わりばんこに教室に入っては注意してくださいねと先生に訴えかけていく。

「ほ、ホントにひどい顔色じゃのう、どうじゃ？ 今日休んでまた今度と言うのは？」

「ハアハアハアだいじようぶ……です」

正直帰るのも辛いし、妹は心配してるし、でも授業は受けたいし、それに先生は面倒事を回避したいものと前世の経験で俺は知っている。ここで引いてしまったら、次もまた次もと延期されてしまうだろう事は想像に難くない。そして俺の勉強はともかくセレナの勉強まで遅れてしまったら？ そんなのはお姉ちゃん失格だろう。

「だ、だいじょう……ぶです、授業をしましょう」

俺は、なんとか追い返そうとしている先生を左手を突き出す事で止める、ちなみに右手は荒い呼吸を繰り返す胸を抑えるのに必死だ。

「そ、そうか、熱心なのはいい事じゃがの……」

チラリとこつちを窺うが、意思是固いぞと見つめ返す、諦めたのかしぶしぶ授業に入ってくれた。

さて魔法の授業は私も自分の部屋で受ける事が出来ないのには理由がある。

なんせ魔法は威力がある、ましてや火の魔法だって必修なのだから木で出来た家の中ではなかなか試し辛い、その点この魔法教室は石を張り合わせて作った内装がちよつとやさつとの衝撃、火や風の魔法を防いでくれる。それでも火の魔法はかまどの中で使うのがルールだ、そして低年齢のお子様が真っ先に覚えるのが火の魔法の制御だ。

危ないから教えませんより、リスクを取ってでも制御する事。魔法に責任を持つことを覚えさせると言う考え方だ。

マッチやライターと違って取り上げる事も出来ないなら、合理的な考え方と言えよう。

「ではかまどに向かつて種火の練習をしてみましよう、セレナさんは魔力の制御が課題ですからね、少しの火で良いのでゆっくりと出してみましよう」

「は、はい！ 『我、望む、ささやかなる種火を』」

先生の助手の女性の呼びかけに答え、セレナが魔法の言葉を紡ぐ。

基本的に、大気に居ると言われる精霊さんに魔力を渡してお願ひするのが魔法って奴らしい。だから呪文として『我、望む』の部分が必須だ、エルフに取っても古い言い回しで日常で思わず口にする心配が無く、精霊も、あ、お呼びかな？ と思いうらしい。

精霊なんて居るとは思えないけどね……子供に教える為の便利な気がするんだよな。

で、その後は割と適当で良さそうである。要は通じれば良いと、そう言う事らしい。ただ、イメージが大切なのはやっぱり有るようなのでその辺がどうなっているのかは誰にも良く解って居ない様だ。

うーん、「なんだと！ 無詠唱の使い手が本当に居たとは！」って奴をやってみたかったが、どうにも出来なかつた苦い過去が思い返される。そんな事を必死で息を整えながらも考えていると妹の魔法が発動した。

——ゴオオオオオオオオオツツツ！！

「止めるんじや、ストップストロープ！」

教師の爺さんの必死のストップが入る、ささやかなる種火と言うか自衛隊の演習動画で見た火炎放射器みたいになつた。種火の魔法にどれだけの魔力を注いだんですか
妹様。

「口から呼吸と共にちよつとだけシャボン玉を吹く様に優しく魔力を吐くんです」

「いや、それでも多過ぎてああなっているのやも知れん、セレナの嬢ちゃんや、魔力を全く込めずに呪文を唱えて、最後に優しく、お姉ちゃんに語り掛ける様に「ね」と魔力を込めて言ってみてくれんか？」

助手の女性のアドバイスを遮って、おじいちゃん先生がセレナにゆつくりと諭す。

「そんなのでまほうになるんですか？ 『我、望む、ささやかなる種火を！ ね』」

疑問に思いつつも呪文を唱える素直なセレナの指先に、今度は一瞬ボツと大きな火が灯ったもののすぐに小さくなってゆつくりと消えていった、さっきの魔法よりは種火の魔法として使いやすいだらう。

「やった！ できたよ！ おねえちゃん！」

「見てたわ、やったわね、セレナ！」

「やはり多すぎる魔力量が制御を阻害している様じやの……なんとも末恐ろしいもの
じや……」

無邪気に喜ぶ妹だが、先生の眩きのが気になる、やっぱおかしいよな……アレ。

でもでも、私には私のやり方がある！ こつそり特訓していた魔法のお披露目をして妹をビックリさせちゃいますかね。

「先生、次は私の番ですか？」

「ふーむ、ユマ嬢ちゃんには休んでいて欲しいんじやが……無理はせんようにな」

「はい！」

「おねえちゃんががんばってー！」

妹の声援に答えない、これが異世界転生チートだと言う所を見せつけないとね！

俺は深呼吸を一つ、かまどの前で仁王立ちをして指先を中の薪に向ける。

『我、望む、大気に潜む燃焼と呼吸を助けるものよ、寄り合わさりて、ささやかなる種火と共に強き炎を生み出せん』

ポオオオオオ！

指先から青く暗い炎が出る、成功だ！ ガスコンロみたいに酸素を十分に含んだ燃焼が出来ている。

「青い炎じゃと！ 何をした？」

「以前、風を圧縮して刃にする風刃の逆、大気が無い状態を刃にする魔法をお見せしましたね？」

「ああアレは衝撃じゃったが……」

「大気が無い状態では炎の魔法は発動しなかったんです、だから大気の中に燃焼を助けるものがあるんだろうと思ひまして、それを寄り合わせるように精霊にお願いをして、そこに火を付けたんです」

「つまり、この暗く青い炎は普通の赤い炎より強力だと？」

「はい、そのハズです」

「おねえちゃんすごい！」

妹さまの目がキラキラだ！ もうずるっこだろうが何だろうが何でもやる、姉の威厳を守るためならね！

俺が指さした薪はあつと言う間に火がついてメラメラとかまどに火が灯った。

ちなみに妹様の時は言うまでも無くすべての薪が炭化してしまった。

「ねえ、わたしもやっていい？ いまの！ やってみたい！」

「えっっ」

正直、さっきの火炎放射を見る限りやめて欲しい、仮に成功されても姉の威厳が崩壊すると言うハッピーエンド無き結末だ。先生も渋い顔をしてるし思ひは一緒だろう。

「あのね、この魔法は制御がとーっても難しいの、大きくなつてからチャレンジしようか？」

「えーせいぎよがうまくなりたいたいんだもん、おねえさまと同じ魔法つかいたい」

あーこれダメな奴だ、悪ガキ経験が通算二回目のベテランだから解る、ダメって言ってもこつそりやる奴だ、かくいう俺も実はさっきのガスバーナー魔法、コソ練してました。

しかしこうなると俄然恐ろしくなってくる、木造の要塞なんて火を付ければすぐ燃えると思つたら大間違い、生きている木が魔法で要塞を形作っているのだ、生木は燃え辛い上に魔法による抵抗と回復能力が有つて実際にはなかなか燃えない。ただそれも普通の魔法では燃えないと言うだけの話、もしガスバーナーでさっきの火炎放射器を再現されたらどうだ？ 考えるだに恐ろしい。

「先生、あのかまどは特殊な耐火煉瓦ですよ？ 少しだけ、少しだけ試してもらうのはダメでしょうか？」

「う、うむワシもさっきの魔法は教えて欲しい所じゃ、見せて貰つても良いかな？」
「構いませんよ」

この爺本音がダダ漏れだな、保護者の責任を果たせよと思うがこの場合、日和見な態度で断られて、後で妹の起こした火事で宮殿炎上となるよりはマシと思うことにした。

で、セレナに魔法の理屈とイメージ、呪文を教える。

「あのね、大気の燃える部分を集めて貰つてぎゅーって固めて貰うの、それでね……」

「……それで、最後に大事なのは指先、指先から火を出すの、さつきセレナがやったみたいに掌から出すと凄いや量の炎が出ちゃうでしょ？ 指先から出せばちよつとの範囲しか燃えないから」

「わかったー」

なんだかんだ私の説明は長すぎたのか、妹様はちよつとウズウズしてきたし丁度キリも良かった、授業の間何故かずつと私が話して爺と助手がふんふんと隣で聞いているのが理不尽だったが、まあ良い、かまどの前に立つ妹の肩を後ろから支えて、一緒に呪文を唱える。

もちろん私は魔力を込めないしタイミングはセレナにお任せだ。

「じゃあやってみるねー、せーの『我、望む、大気に潜む燃烧と呼吸を助けるものよ、寄り合わせりて、ささやかなる種火と共に強き炎を生み出せん』」

——ドゴオオオオオオオオツツ！

セレナの指先から青い炎が出る、それもすごい勢いで、だが、だがなんと言うか暗い輝きだったはずが非常に眩しいまでの光となっている、それになんか光が白っぽい。

……え？

その光景が信じられず、初めに震える声で口を開いたのは助手の女性だった。

「そんな……耐火煉瓦が……溶けてる……」

うん、溶けてるねドロドロだね。この光、ガスバーナーじゃない、参照先生によると近いのは溶接かなんかのバーナーだ、一般のご家庭では絶対に出番の無い奴だ。

「え！ おねえちゃん止まらない、止まらないよ！」

追い打ちをかける様な妹様の悲鳴、そっかー掌で大放出してたのを指先に集めると高火力になるし、圧が掛かって中々止まらないよね？ お願いだから振り向かないで！

——ビーーーーー——

指先からあふれる光を止めようとさらに絞るともはやレーザー光線の様な光が壁を切り裂いていく、危ないっ！ 危ないから！

「かま、かまの前ツ近づいて残った魔力を放出！」

「う、うん……」

パニックるセレナの肩を押してかまどの前に、って滅茶苦茶熱い！！ そこで魔力を開放ボン！

——ジュウウウウツツツ

「あふうん……」

サウナもビツクリの途轍もない熱気と溶けちゃいけないものが溶ける異臭に、俺は意識を手放した。

生誕の儀の罨

「少し、……困った事になった」

いつもの朝食タイムで父上様が不吉な言葉を投げかけてくる。

ちなみに前回の魔法教室がどうなったかと言うと、結局あれから気絶した俺、燃えそうな教室、渦巻く熱気、泣きながら俺に縋りつく妹様、と言う地獄絵図。そこで先生と助手のお姉さんが風や水の魔法で換気や冷却をして、お付きの方々全員集合のもと、俺はお部屋に運び込まれたらしい。

そんで例によって俺が目覚めますまで二日、その間の記憶は全く無い。

それからと言うもの、セレナと魔法の授業は別々にされてしまい寂しい思いをしている。だからセレナも未だにこちらの様子を怯えた様に窺っているし、なんとも情けない限りだ。

今だって「お姉ちゃんは怒ってないよー」と笑顔で伝えたつもりだが、その笑顔が既に青白かった模様で、泣きそうな顔をされてしまった、むう……

「あなた、何が有ったんですか？」

そんな俺達のやり取りを知ってか知らずか、父様のセリフは不吉であった。母。パルメ

が心配そうに父に尋ねる、そうだ、父上様は何時だつて王らしく泰然自若としていて弱音も吐かず、常に上から目線で私達にも語り掛けてきた。

前世では親父とは友達感覚で話す事も多かったので、最初の内こそ「何様だよ」と思つてしまつた物の、「王様だよ」と脳内突っ込みが入るのに一秒と掛からなかつた。

「最近、凶悪な魔物が増えてきている件でしようか？」

ステフ兄さまも身を乗り出す、それだけ父様が心配事を語る事は少ない、これはヤバい奴か？ と背筋に冷たいものが走る。

そう、この身に宿る、魂という謎システムと運命と言う謎要素により我が身の不幸は確定してる状態。そこに持つてきて『凶悪な魔物が増えている』と来たら、異世界転生ラノベ上級者として、魔物の大量発生モンスタースタンピードが想起されるのは当然の事だ。威厳溢れる父、穏やかな母、優しい兄、そして何より可愛い妹が魔物に蹂躪される様を想像するだけで胸が苦しくなる。

「おねえちゃん？ だいじょうぶ？」

いけない、また妹に心配をかけてしまった。

「やはり、体調は良くないか……生誕の儀は延期するべきかも知れんな」

え？ アレ延期出来んの？ 一生延期つて訳にはいかない？

「あなた、一体何が有つたんです？」

心配そうなパルメ、と言うか魔物は関係無さそう、だが余計に嫌な予感がしてくるのはどうしてか？

「それがな、長老たちが生誕の儀は儀劇を演じる様に言つて来たのだ」

「う、え、っ」

「そんな！ ユマの体力で劇は無理です、何より生誕の儀には朗読を練習しているんですよ！」

あ、変な声出た、お姫様が出しちやいけない声出た！ でも母様の悲鳴の様な叫びで掻き消えてくれて助かった。いや、全然助かつちやいない！

生誕の儀は自分を生んでくれた神と両親に捧げる儀式である、一般的には母と父の男女の馴れ初めを劇にして演じる。普通は村の広場でプロポーズの言葉を再現する程度の両親に対する致命傷な罰ゲームで済むが、王族ともなれば大々的に劇場で行う事になる。

劇と言うのはあれで体力を使う、観客、熱気、照明、緊張すべてが体力を奪っていくし、強制的に主演とくれば立ちっぱなし語りっぱなしと言うだけで体力の少ないこの身に負担に成るのは疑い様が無い、長老たちは俺を殺したいのか？ 殺したいんだろうなちくせう。

生誕の儀の前に死んだ子供は初めから居なかつた扱いになる、これは乳幼児の死亡率

が高い故の事だろうか？ 生まれて居ないのだから当然王族の家系図的な記録にも含まれない。

そう、つまりどここの馬の骨とも知れない母親から生まれた私を王族として存在させた
く無い勢力にとって生誕の儀はラストチャンス、全部を汚点としてノーカンにするつもりだ、生誕の儀の最中に死んだ場合にどうなるのかは知らないが、解釈の問題としてどうにでもするのだろう。

「それがだな……ユマの生誕の儀はゼナと我との出会いを演じる様に言われてしまった」

「うゝえゝええ」

また変な声出た！ 出ちゃった！ 今度こそパルメは悲鳴すら出ないと息を飲む悲痛な声こそ漏れたものの、潰れたガマガエルみたいな呻きを全く掻き消してはくれなかった。

ちなみに、ゼナとは俺の実母の名前だ。

「そんな！ 無理ッ！ 無理です、生誕の儀まで一週間と無いんですよ!」

「解っている、生誕の儀を夏中月の中頃に延期しても構わないと言われている」

「ふえっ?」

「あなた!?!」

もう変な声は良いや、えーと、この世界は四季が春夏秋冬あつてそれぞれが三か月の年十二か月つてのは前世と一緒、前春月、春中月、後春月と言う呼び名で解りやすいちやー解りやすい、で、それぞれが二十五日、三十日、二十五日と言う感じで中月だけ長くて、一年は320日、解りやすいが無理があるのかしよっちゅう閏日が入るのがご愛敬。ちなみに一週間は五日である。

「あなた！ あなたまでユマを殺す気なんですか!? こんな可愛い子を公衆の面前で殺そうと言うのですか!？」

母の剣幕に父上はギョツとする、あ、この顔解つてないわ。

「殺すとは? どう言う事だ?」

「夏中の月の中頃! 一年で最も暑い頃ではありませんか!」

「そうか・・・そうだな」

父上は初めて気が付いたかの様にハツとする、いや初めて気が付いたんだろうな。父様は間抜けかよう。

「劇場は? 劇場はどこになるのですか?」

「それは、ユマは国民の関心も高い姫であるがゆえ、多くの人が入れる青の劇場で・・・」
「野外劇場ではないですか! 夏中の野外劇場と言えば本職の演者でも音を上げる厳しい舞台なんですよ!」

「……………」

王様黙ったった！　ぐうの音も出ないと黙ったった！　偉ぶってる王様がシヨックで黙る姿は笑えるねー、俺はぐうの音どころか魂が漏れ出してるよ、いつそ漏れ切ってくればゴミみたいな運命から逃げられる模様。

バンバンと机を叩きながら、涙を流し必死の形相で詰め寄る母、対する父は頭を抱える様子からなかなか妥協は難しいご様子、こういう切羽詰まった空気感って逆に笑えて来てしまうのは自分だけだろうか？　掛かっているのが自分の命だと思えば乾いた笑いも漏れるというもの。

気が付けば妹様は心配そうにこつちと母をキョロキョロ見てるし、ステフ兄さまはぎゅつと唇を噛み締めて俯いている。いやー死んだかな？　俺、死んだかな？

いや、ここはやらねばなるまい、ただ夏の野外ステージ？　それは論外だ、絶対三十分で死ぬる、前世で見た野外ライブの熱狂、あんな物の場に今の自分が飛び込んだらどうなるか？

あらかじめ救急車を待機させた上で病院搬送前に冷たくなってる事請け合いだ。

「父様！　母様！　わたしやります！」

ガタつと椅子を鳴らして俺は立ち上がる、急に立ち上がったからちよつと貧血だ。

「無理よ！　ユマ、死んでしまうわ」

母が必死で止める、確かに夏の野外ライブは死ぬ、だから春にやればいいのだ。

「大丈夫です！ 今からセリフを覚えませう！ 予定通り四日後に生誕の儀をやればいいのです」

「ユマー！ 座りなさい！」

母様は俺を叱りつけて止めようとする、そう言えば叱られるのは初めてか？

「……できるのか？」

父様が一縷の望みをかける様にこちらを見る、見た瞬間に、あ、ダメだこれって顔を一瞬したあたり本気でぶん殴りたい。

「出来る訳無いじゃない！ ゼナとあなたの戯曲は短くないのよ！」

「出来ませう！ わたくし記憶力には絶対の自信があるんです！」

そうなんです、わたくしの記憶力は絶対無敵の世界一、もう俺の冒険のタイトルは「絶対記憶能力で世界最強！」としたいぐらい自信がある。いや、ごめん記憶じゃないから嘘だ、『参照権』様々である。

「無理に決まっているだろう！ どれぐらいのセリフがあると思っている！」

父様は悔しげに拳を握る。いやさ？ 子供の事を信用しようぜ？

って言っても、普通に考えたら無理だよ、四日だもん。でも俺には出来るんだな！

「出来ませう！ 今！ スグにでも！」

「だったらー！ やってみるが良い！」

ヤケクソめいたお父様の発言。正直言つて、待つてました。

プロンプターって知ってるか？ 俺は忘れてたけどな！ 大統領とかがスピーチの時に見てる奴らしいよ？ 透明の板に読み上げる文章が書いてあるんだけど、空間に表示させた参照権の見た目はそれに近い、ヘッドセットを付けてARで表示してるつてのがもつと近い。これさえあればセリフ忘れの心配はゼロ、一度見た戯曲のページを表示させて読み上げるだけだ。

俺は家族に対して滔々と語つてみせる。

「深い深い森の中、王蜘蛛蛇バウギエリヴァルとの死闘に敗れ、逃げ込んだ深い森の中、助けもなく薬もなく、深手の傷によつて死にかけてるはエリプス王その人であった、そこに朗々たる美声が響き渡る、やあ其処に居られるエルフの麗人よ、汝は我の助けが必要か！ 氣力を振り絞り王が答える、すまんが助けてくれ、それと私は麗人ではない、残念ながらな。そう返すエリプス王だがもう一刻の猶予も無かった、森に響く美声の主がさつと近寄りて懐より取り出したるは魔法の薬、ひとつ振りかける毎にみるみる傷が塞がって行くではないか、これは？ それに君は一体？ 呆然とするエリプス王に笑いかけた声の主、あはは、これは失礼した、こんなに華麗な男を見た事が無かつたからね、これこそがエリプス王と冒険者ゼナとの出会いの時であつた、……ハアハアハア、ど、どう？」

シーンと静まり返る食堂、あ、朝食のお花残しちやつてる。

「すごい！ ねえさま！ すごい！」

無邪気に喜ぶ妹セレナの声と、ハアハアと俺の呼吸音だけが響いていた。

兄ーレッスン

さて、自分の部屋に帰ってきた俺は、まず自分の健康値を確認。

健康値：5

魔力値：26

よし、絶好調だ！ 普通は入院するレベルでも、俺には絶好調だ。生誕の儀まで約三日、ここからは健康値との闘いと言つてよい。

今回の劇を行うにあたって、両親からは最大限の譲歩と言うか待遇改善をもぎ取つた。

そう、動物性たんぱく質だ。とは言えお肉ではない、そもそも俺を排除したい長老をぎやふんと言わせるのに俺がエルフにとつて禁忌となるお肉をもつちやもつちや食べて生誕の儀に挑めばどう思われるか？

それ以上に健康値5の俺がお肉を食べられるかと言う問題もある。前世でも病人がステーキを食べるかと言われたら食べないだろう、トロトロになるまで蒸して柔らかくなった鶏肉だったら食べられると思うが、肉食文化が発達していないこの国でそんな気の利いた物が出てくる可能性はゼロ。となれば有るもので融通してもらおうしかない。

そこで大量に確保してもらおう事にしたのはヨーグルト。そう、ヨーグルト、有ったのである。

ヤギ（パクー）のミルクが有ったのでもしやとは思っていたのだが、ちよつと前に料理に酸味があるソースが使われていたので聞いてみたらヨーグルトだった。

そこに、ナッツの糖蜜漬けと芋っぽい奴や小麦っぽいものに少量の油を混ぜて焼き上げたものを混ぜ合わせ、最後にヤギヨーグルトの臭みをミントっぽい葉っぱで誤魔化せば完成だ。お好みでドライフルーツを加えても良い、つまりはグラノーラだ。

と言う訳で、「私、この三日間は栄養の有るものしか食べたくありません！」と、事実上の三食これ一本でいく宣言だ。

このグラノーラ？ を作るにあたって王宮の台所にオラオラと大乱入。こっちは命が懸かっているので容赦も遠慮も慈悲もない。ヨーグルト単体で食べ始めた辺りで既にかわあ……って空気が漂って、グラノーラを焼く段階で狂人を見る目をされて、とどめに貴重な糖蜜漬けのナッツを放り込んだ辺りで悲鳴が上がった。

妹様にも食べて貰ったが、フルーツたっぷりのグラノーラはお気に召したご様子。両親はそんなもの食べて大丈夫なのかと心配していたが。

「これでお腹を壊したら夏中月に生誕の儀を行います！」

と事実上の自殺願望をひけらかしてやった、それを聞いたお父様は真っ赤になってプ

ルプル震えていた、おそらく健康な男児（つまりは前世の俺）だったらぶん殴られてる場面であろう。だがなにせ王自らが撒いた種、その上こちらは殴られたらその場で死にかねない身だ。「なんだつたらその手で全て終わらせてみるか？ ああ？」とばかりに首を差し出すように睨み付けたまま近づいてやる。後ずさる父、追いかける俺、間に母が慌てて割り込んだ。

「覚悟があるのね？」

コクリと俺は頷いた。なにせ夏中月を越えても後夏月だつて暑い、それを越えると秋だ、秋は収穫期、エルフは畑を耕している訳ではないのかもしれないが、ナッツだつて芋だつて取れるのは秋、なにより冬支度がある、一年で一番忙しい時期なのだ。それを越えて冬となれば今度は寒さに殺される番だ。冬を過ぎれば春、一年経つてしまひ、生誕の儀が汚されたとか難癖を付けられ、生まれて来なかつた扱いにされかねない。

そう考えれば生誕の儀は早ければ早いほど涼しくて良い。長老が余計な工作をする隙も無くなるし、時期も慣例通りで文句の付けようもない。

加えて「どうせ失敗するだろう」と言う油断を誘えるのが良い。普通に考えて三日で戯曲のセリフを覚えきれる五歳児など居る訳が無いのだ。

「やらせてあげましょう、あなた」

「あ、ああ」

父の威厳と地位がストップ安だ、俺はヨーグルトとナッツに買い注文。

「僕も、協力させて貰うよ！」

そこに今まで空気だった兄が突然の参戦表明である、何事か？

「お兄様？」

「妹の二世二代の大舞台だ、兄である僕が黙って見ている訳にはいかないだろう？」

うーん無茶だ、参照権の有る俺と違って、いくらイケメンエルフのチートをもつても今からやれる事などたかが知れてると思うんだ。

「頼もしいですね、お兄様」

ニコツと満面のスマイルを披露したが正直全く期待をしていなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、俺はヨーグルトグラノーラをよく噛んで、無理やり流し込むように頂いた後、退去した自室で膨れるお腹をさすりながら満足げに微笑んでいた。

健康値：5　こんなに無理やりご飯を詰め込むと健康値は下がる事が多かったのだが、あれだけ詰め込んで5を維持しているのはヨーグルトの整腸作用とかが影響しているのだろうか？

待望の動物性たんぱく質だからと言う所も大きいのもかもしれない。上手くいけば、ひよっとしてだが当日までに健康値が10の大台まで乗せられるかもしれない。そう

すれば劇の成功率はグッと上がるはずだとほくそ笑んでいた時だ。

「ユマ！ ユマ、入っていいかな？ 僕だよステフ兄さんだ」

「ステフ兄さん？」

突然の兄の訪問である。兄もあれでいて次期王としての厳しい教育があるらしく、部屋に遊びに来てくれる事は……いや、倒れる度にお見舞いに来てくれるから少なくとも無いな。

だけど元気な時に遊びに来ることは皆無なのだ、どうぞと部屋に招き入れてみるとお付きの人がサツとシダのすだれを開けて、両手に本を積み上げた兄が部屋に入ってきた。

「兄さま？ どうしたのですか？」

「ゼナさんと父との戯曲だよ、いろんな解釈も有るしね、色々借りてきたんだ」

言うなり、大量の本を机の上にどざりと置いた。大きくもない少女向けの机はたちまち占領される。

「えーと兄さま？」

「戯曲も作者によつていろいろな解釈が有るからね、セリフが少ないもの、特にゼナさんのセリフが少ないものを選べば今からでも何とか成るかと思つてね」

言いながら比較的薄めの本を手にとってどっかりと席に座りだす、ご丁寧と同じ本を

もう一冊用意して向かいの席に置く始末だ。

なるほどーなるほどねえーうーん。

「お兄様？」

「なんだい？ ユマ。まだ諦めるには早いよ、劇と言うのはね相手役の技量次第でサポートが効くものなんだ」

しつてる………知ってるから、プロにお願いしようと思っていた。ところがこの兄、わざわざ本まで用意してセリフ合わせをしようとしている節がある、自分でやる気満々である。

三日だぞ？ 三日でセリフを、しかもサポートするってんなら相手のセリフまで覚えられんのか？ この兄、家族愛が強すぎて暴走しかかっているのでは無いだろうか？

「お兄様！」

「なんだい？」

「ここは毅然と行く所だ。」

「要りません」

「え？」

「要らないんです!!!」

凍る空気、大惨事である、しかし今の俺に空気を読んでる余裕は無いのだ。

「わたくし、その本の内容はもう全部覚えておりますから」

「冗談だろ?」

冗談である、覚えてなど居ない。ただし見ながら読み上げるだけの知能ぐらいは、持ち合わせがあるのだ、参照権のチート、今使わないでいつ使うのか?

「どこでも好きなページを誦そとんじて見せますわ」

「……わかった」

真剣な表情でページをめくる兄、どうやら食堂の件はワンシーンだけ暗記していたと思われていた様だ。印象的な出会いのシーンだから良いかと思っただけなのだが、裏目に出たか。

「では、十四ページ目、僕の母パメラが父とお揃いの花冠を作ろうと花畑に向かうシーンを読んで見てくれるかな」

そうそう、ここで我ら王族の家族構成と成り立ちを説明しておこう。それがそのまま戯曲の内容に成る訳だから。

そもそも、王族だからってその馴れ初めが戯曲となる事は稀だ。実際に有った事件が、王エリプスの悲劇と恋と冒険の物語が、今をときめく大ヒット戯曲として完成してしまっているのだ。

その内容はと言うと。

——パメラとパルメの仲良し姉妹、二人は同時に同じ人を好きになってしまふ、当時はまだ王子だったエリプスその人である、ドキドキの少女漫画の様な恋の駆け引きの中で王の死や継承を巡るごたごた等があり、最終的に王子の心を射止めたのは姉のパメラ。

涙ながらに二人を応援するパルメ、そして愛し合う二人の間に息子のステフも生まれてハッピーエンド……とはならなかった。

森の花畑でお花を摘んでいたパメラが魔獣に殺されてしまうのだ。王エリプスは怒り、涙し、そして魔獣の一掃を決意し少数の部下と共に魔獣の掃討作戦を執行する。

無謀に思われた作戦もエリプス王の剣と魔法により多くの成果を挙げていく、しかしある日森の奥で出会ってしまう、最強の魔獣、バウギユリウアル王蜘蛛蛇。

魔法に強い耐性を持ち、糸を吐き拘束し、素早く追い詰め無数の足で串刺しにしてくれる。王は足で腹を突き刺されるも部下の奮闘により単身での逃走に成功。

しかし傷は深く死に瀕していたところを女性冒険者ゼナの薬で応急処置をされ、帰還。パルメとゼナの献身的な介護のお陰で奇跡的な回復を果たしたエリプスはゼナと共にバウギユリウアル王蜘蛛蛇の討伐を果たす。

そして結ばれる二人だがそこは人間とエルフとの道ならぬ恋、ゼナは身を引いて冒険の旅に立ってしまう、傷心の王を慰めるパルメ、しかし不器用な二人はなかなか進展し

なかった、それから一年後なんと赤ん坊を抱えて再び現れたゼナ。

泣きながら謝るゼナと、同じく泣きながら私の子供として育てると誓うパルメ。そうして、正式にエリプスとパルメが結ばれセレナが生まれて今に至ると。

いやー長いね、大長編だね、だいぶ端折ってこれだから、そりゃー戯曲にもなりませんわな。

吟遊詩人だろうが、語り部だろうが本だろうがこの話一色なわけ、その登場人物である俺も国民の注目の的だというのに、健康問題を理由に公の場に出ないと言うのだから、ハーフェルフの俺を王族と認めない勢力とは別に、悪気もなく表舞台に引っぱり出した人も多くてこんな事になってしまったとそう言う事らしい。

その悲劇のヒロインが観衆の目の前で血反吐を吹いて倒れるところをお望みか？ 民衆は更なる悲劇を望んでいると？

愚痴っぽくていけない、話が逸れた。

そんなんだから本だって一冊で済ませると「おっ纏めたね」となる位で、長い奴だと上中下巻、劇だと三日間の公演となったりするんだから恐れ入る。

読んだ事は有るものの盛りも盛ったり、そんな会話ホントに言ったとしても恥ずかしくて他人には教えてくれないだろ！ と言うセリフのオンパレードだ。

いや、短い本の内容だって王族に直接インタビューしてる訳じゃないから、公式発表

のお堅い文章から盛りまくりなんだろうけどね。

「す、凄い、本当に全部覚えてる……」

そんなわけで参照権の力で本の内容を読み上げると、兄は信じられないものを見たかのような驚き様だ。それはそうだろう、本が好きだと、記憶力が高いと言つても全部丸ごと記憶してる様な奴は早々居ない。

「わたくし病弱でしょう？ ベッドの中で本当の母親はどんな方だったのかとか、どんなつもりで母は、パルメは私を育てたのかとか考えてしまつて……不安で不安で、戯曲を何度も読んだんです」

兄、ステフの慈愛に満ちた眼差しが涙で潤む。

「大丈夫、僕も、パルメ母さんも、死んだ僕の母パメラだつて、もちろん父上もきつとゼナさんだつて、君の事を本当に愛しているんだ」

泣きながら俺を抱きしめてくれる兄に罪悪感がチラリ、一方で「死んだパメラさんは俺の事知りもしないだろ」とか脳内で要らない突っ込みをしてみよう、宗教観のアレで見守つてくれてるって奴だろう。当然戯曲なんて一回しか読んでないし。

そもそも、参照権の有る俺は母親の姿を知っている。乳幼児でも気つ風の良い感じで典型的な冒険者装備の赤髪の剣士だった。ゼナは謎が多い女性として戯曲でも扱われているのだが、参照できる記録ログには謎を解き明かせる様な情報はまるで無かった。

そりゃー赤子を背負って狩りに出かける様な事はしないよな。人間の村で俺を生んで、真つ直ぐ森を突っ切り、エルフの王宮まで向かつてる模様。その間ほんの一ヶ月ほど、森の中の強行軍で赤子としてほとんど泣いて寝てるので、『参照権』じゃ何にも解らなかつた。

そんなこんなで、兄さんも諦めてくれるかと思つたのだが随分と粘られた。

「解つた、解つたよ。だけどゼナさんと父上が愛を語るシーン、これだけは僕がやらせて貰うよ、可愛い妹の相手役を他の男には任せられないからね」

はい、シスコン頂きましたー！

この世界のラブシーンは相手を花と称えつつ、自分を群がる蝶へ例えて、蜜を吸うなんて表現があればあわや発禁処分と言う、曲解に曲解を重ねる様な宇宙の神秘を感じるお花畑時空だ。

ちなみに母。パルメが生誕の儀で朗読するのに渡してきたのが、母自作のドリーミー過ぎて全く意味が解らないポエム状態だったので、アレを朗読しないで済んだのは不幸中の幸いと言えるだろう。しかも、そのドリーミーポエムだつて過激にすぎるかと母は人知れず悩んでいた様なものでもはや意味が解らない。

そんなデリケートなラブシーンのお国柄で、簡略化された大衆向けの戯曲の内容は俺には穏当過ぎて意味不明でも、兄には妹が他人とベッドシーンを演じる様な物で、ここ

だけは絶対に譲れないと言う所らしい。

「わかりましたわ、わたくしもお兄様が相手なら恥ずかしがらずに言えそうです」
「そうだろう、では79ページ目からいくか」

と、言う訳で読み合わせが始まったのだが……………

「ああ、どうして君は鳥の様に突然あらわれて、また鳥の様に飛び立ってしまったのか、もし僕に君を、と、と、閉じ込めるお、檻と勇気が有るのなら、君をま、毎日愛し、君のここ、ここ、声を……………」

真っ赤になってポエムをつつかえつつかえ朗読する兄に不安を禁じ得ない。大丈夫なのか？ コレ。

舞台の裏で

健康値：9

魔力値：28

「おおおおお!!」

舞台袖で俺は思わず声を上げていた。簡易型、いや通常型の健康値測定の魔道具を握りしめ驚きを露わにする。

健康値が9など初めて見た。大台には乗らなかったものの想像以上のヨーグルトグラノーラ効果が有ったと言えよう。これはもう、これからもヨーグルトとナッツの大量摂取は約束されたかと、効果の出始めた段階で母上にそれとなく確認したところ、色よい返事は貰えなかった。

そもそもだ、この世界のミルクは病人や子供が飲むもの、一種の薬だ。それはナッツも蜂蜜も同様で体に活を入れるための食材と言う扱い。栄養価が高いので理に適っていると云えるだろう。

で、それを、それだけを、毎日三食食べると言うのは病人が「これからは栄養ドリンク一本で行く!」と宣言するようなモノで、そりゃー親だったらぶん殴ってでも止めた

いところだろう。

ただ折角元氣になれたのに頭ごなしにダメと言うのも可哀想だから言えないだけみたいだったので。

「今まで通りの食事も頂きますから、たまには食べさせていただけませんか？」

としおらしくお願いしたら、OKが貰えた、ちよるい。

ただ、そんな風に良い事ばかりではない、そう溢れんばかりの熱氣がこの舞台袖まで届いているのだ。天候の問題では無い。晴れてはいるものの温度はさほど高くなく、時折さわやかな風が吹いてくる。

俺でもお庭で遊ぶ許可が平気で下りるぐらいに天候に恵まれたと言えるだろう、だからこの熱氣の正体は別にある。

「うへえ」

舞台袖から観客席をのぞき込むと同時に、思わず呻きが漏れる。

人、人、人の超満員、エルフだが。野外ステージは人で埋め尽くされていた。

「うひゃあ、すげえ人だな！ 知ってるか？ チケットの代金、最終的には10グレメルまで行ったらしいぜ？」

話しかけてくる少年は、本日の私の相手役の劇団員の子供だ。私より二つ年上で七歳。

生誕の儀で劇をやる場合、当然の如く相手役が必要で、サイズ感を考えて歳が近い異性の子供が日ごろのお付き合いを通して用意される。それでも本当にどうしようもない場合は、父親本人が代役して娘にプロポーズする事になる。

急に決まったので普通は相手役など見つからないのだが、なんせ親の恋愛事情が大ヒット戯曲になつてる関係で、劇団員ともなればセリフを諳んじれる子供だって、探さないでも普通に居たつて訳だ。

「10グレメルも？ どうしましょう……そんなに期待されてしまつても、わたくし……」

まあ！ と口を押えてショックを表現する俺、いや、本当にショックだ。なんでチケットなんて売つてんだよ！ 馬鹿！

そもそも、生誕の儀なんぞ普通は他人の七五三、もしくはお遊戯会で、見せつけられる方がお金を貰いたいよ、と言うようなイベントだろう。それがまさかのチケット販売である。

そもそも、当初は当然チケット販売の予定などなく、野外劇場でオープン公演だったのだが、三日前にして開催の報を伝えるや否や、来るわ来るわの問い合わせ。現場から当日の混乱を危惧してチケット制にするべきとのご注進。

かくして、関係者をメインに、役場を通して少量のチケットを、思いの外嵩んでしま

いような警備費や劇団への依頼料などの補填のために安価な値段での販売を行ったのだが。チケットの値段はダフ屋を通して高騰を続け、遂には10グレメル。どのぐらいなんだろう？ お姫様なので金銭感覚は乏しいのだが、お城に近い高級住宅地のご家庭でも月給に当たるお値段……と言うから相当な額になったようだ。

ヨーグルトとナッツに買いを入れてる場合では無かったなと、自分の客寄せパンダ能力に想像以上の価値が有ったことに戦慄する次第だ。

「大丈夫だよ！ ユマ様が出ない場面で、先輩たちが10グレメルに相応しい、完璧な演技を見せてくれるハズさ！」

少年はそう元気づけてくれる。

そう、普通は生誕の儀は馴れ初めとプロポーズの二場面もやればむしろやり過ぎ、片方で良いというぐらいなのに、チケット販売の段になつてもう公演にしちやおうぜと戯曲全体を演じる事になってしまった。つまりお父様の伝説を最初からずーっと！

そうは言つてもエリプス王の物語に俺の母、ゼナの登場シーンは少ない。

当然、ゼナの役を俺が演じるので、それまで俺はお休みで、楽屋か舞台袖で待機しておけば良い訳だ。

そこで俺が出ない部分では少年も出番は無く、おそらく普段通りの公演の様に人気俳優が完璧な演技を魅せてくれるはずだ。

とは言え、普段の公演の料金を考えると10グレメルは4、5倍の価格なので、ちよつとあり得ない訳だが。

「だから心配すんなよ、例えば緊張でセリフが飛んじやう事が有つてもさ、俺がバツチリフオローしてやるからさ！」

優しい少年が心配してくれているが、俺にセリフ忘れの心配はない。参照権プロンプター様がいる、緊張や疲れで声が出ない可能性はあるが、拡声器の効果が有る不思議なチョーカーが有るし、緊張の方はアレだ、そもそも求められているのが五歳児の演技なのだから棒読みだつて構わないと思つている。

「……………」

それよりも……だ、馴れ馴れしくも話しかけてくる少年が気になる。優しくて兄貴風を吹かせてくるのは良いのだが、顔を赤くしてチラリチラリと様子を見に来る辺り、意識されてしまつていゝのでは無いだろうか？

そもそも生誕の儀の相手役は家族ぐるみのお付き合ひもあり、愛を語らうのを切つ掛けに、なし崩し的に親公認のカップル認定され、そのままゴールインも非常に多いらしい。

そう考えると、うざつたかつた兄のラブシーン引き受けもファインプレーと言えるのでは無いだろうか。

少年よ、君にお兄様のイケメンチートを超えられるかね？

「大丈夫です、普段から何度も読み直してますから一字一句間違えませんが、でも、わたし体が弱くて……もし途中でふらつく事が有ったら支えて頂けますか？」

そう、そつちが心配だ、悲しいかな病弱不健康児。

「う……うん」

少年は顔を真っ赤にして目を逸らしてしまう、うん、不安大だ、いろんな意味で。

——ピイイイイ！

そんな事をしてると、開演の笛が鳴る。俺らは出番まで楽屋に待機と洒落込もう。

「な、なあ出番まで大分時間も有るし、最後の台本合わせやらないか？」

少年はそんな事を言ってくるが、体力が惜しい。健康値は金よりも時間よりも重い。

お断りさせていただきます。

「すいません、お部屋で休んでおきたいので……」

「そ、そつか、そうだよな」

少年は慌てた様子で取り繕いながら、そそくさと楽屋に帰って行った。

俺はと言うと、お付きの人に抱き抱えられる様に自分専用の楽屋に特別に備え付けられたベッドまでお持ち帰りされてしまうので有った。

あ、思ってたよりも疲れたのか、なんかすつごく眠くなってきた。

ま、出番の前にお付きの人が起こしてくるでしょ、俺の意識は春の陽気の微睡^{まどろ}みの
中に溶けていった。

生誕の儀

〔エンディングアンタムス：生誕の儀特集欄よりグラント老〕

——ピイイイイイ

甲高い笛の音が鳴る。

青の広間の、青の劇場は、青のピューラ木で彩られた由緒正しい野外劇場であり、昔ながらの警笛を開演の合図に使用している。

まだ落ち着かないと、グラント老人は席でそつと息を吐く。無理も無い。今回の公演のチケットを入手するにあたり、都でも指折りの魔道具商グラントでさえも多大な労力と資金を必要とした。

何せ表向きは生誕の儀、チケットは関係者へ配るのがメインで、行政府へ声を掛けてもチケットは少なく、「一般の方と同様に抽選に参加してください」ときたもんだ、結局知り合いのツテで買い取ったチケットは8グレメル、妻の分を入手したときは10グレメルまで高騰していた。

「あなた、いよいよ始まりましたわよ」

妻も興奮気味だ、無理もない。この公演の目玉は何といっても普段病気を理由に表に

出ないユマ姫である事は疑い様が無いが、それ以外にも見どころが多過ぎる。

まず他の共演者達が凄い。なにせ王族と共演できるなど一生に一度有るか無いかの
大チャンス。

三日前に急に決まった公演だと言うのに、自分の劇を放り出し、国と悲劇の姫ユマ様に貢献したいと言うお題目の元、都のトップ演者たちが集まりも集まったりで大変な事になったと聞く。

それでもメインとなる劇団は自分たちだけでやると頑張ろうとしたのだが、三日と言う無理なスケジュールがココで効いてきた。

ベテランにやつてもらって不測の事態の確率を減らし、万が一が起きても責任を分散させたい思惑も手伝って、アレヤコレヤと二度と集まる事が無いと思われるドリームチームが結成してしまった。

ドリームチームなのは出演者だけではない。楽団や演出家。脚本だけは時間の関係で既存のものだが、グラントとしては自分が生きてる限りでは、このメンバーは絶対に集まらないと断言できる程だ。

とは言え、どんなにドリームチームだとしても急ごしらえのメンバーで劇をやるとなれば完成度の低さが心配されるところだが、そこは演じるのが「エリプス王の恋と冒険の物語」であれば話は別だ。

もう何度も何度も、それこそしつこいぐらいにここ数年公演されてきた物語。年端もいかぬ幼子とて、その物語をスラスラと語って見せる程に語られてきた物語は、公演回数もとんでもない事になっている。

今や、この王道を演じずに劇団とは認められない程なのだから、どの演者もセリフの一つ一つが頭に染みついていくのだ。

「ああ、ステフ様のお顔を早く拝見したいわあ」

そして、あまり演劇に興味が無い妻が急に公演に行くとは頑張り出した原因がコレだ。

第一王子にして、次期王の座が現実と言われるステフ王子。これがまた凄い人気で、妻などは公式行事にステフ王子が現れると聞けば、遠方まで竜籠をチャーターして出かけてしまうのだから堪らない。

グラント老としても若い頃なら嫉妬の一つもしただろうが……いや、若い頃だろうがあそこまでの美形で、まして王子が相手となると嫉妬もしなかつたに違いない。

その王子がユマ姫の相手役として急遽登場すると報せが入ると、もうチケットの争奪戦は過酷を極めた。考えてみれば生誕の儀でユマ姫が愛を語るとなると、相手役にもいろいろと噂がたつてしまうのは間違いない。

今回、愛を語るシーン以外の共演個所では、天才子役との評判を欲しいままにしているマールロウ少年がエリプス王を演じると聞いているが、さしもの少年も謂れも無いゴ

シッブに潰されたくは無いだろう。しかしあのステフ王子が愛を語るシーンとなれば死人が出てもおかしくない事になりそうだった。

「ああ、楽しみだな」

せいぜい、妻の手を握って自分の存在を忘れないようにアピールするぐらいしかグラント老には出来そうになかったのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

幕が開いての第一章、もう開幕から凄かった。

パメラとパルメの美人姉妹を演じるは都で一二を争う美人女優セラフイムとミューランだ。

普段彼女たちが共演する事など絶対に無い。都の男たちはセラフイム派とミューラン派に分かれて論争を繰り広げる程の人氣で、それぞれが別々の劇団の顔と言われる立場だから共演などありえないのだ。仲良く花束を作り、お互いの好きな人を当て合う微笑ましいシーンのハズが、劇団を背負つての戦いの舞台になってしまったのか、異様な緊張感が二人の間にある事を観劇のエキスパートであるグラント老は感じ取っていた。

普通に考えてみれば大スター共演の弊害、舞台の失敗とも指を刺されかねない状況だが、グラント老の考えは別だった。

お互いが好きになった人が同じである事を感じ取り、今まで仲が良かった姉妹の間で

恋の鞘当てが始まる。美しくも息が詰まる緊張感が感じられて当たり前ではないか！
新しい解釈が生まれた瞬間に立ち会えた瞬間に人知れず震えた。

エリプス王子を演じる男優ゼスターの演技も素晴らしい。

二人に挟まれオロオロとするところ、突然の王の死に悲しむところ狼狽うろたえるところ、
鉄人の様に王を美化するのではなく、一人の人間が、偉大な王となつていく様を等身大
で演じていく様は心を打たれる。

そして圧巻だったのは王とパメラが結ばれるシーンだ。

祝福の言葉を投げかけて、無理やり笑顔を作ろうとするも上手くいかないパルメこと
ミューランの演技が素晴らしい。

それに答えるセラフィムの演技はどうか？ 申し訳なく思いつつも笑顔が抑えきれ
ず、エリプス王と腕を組む、だけど、妹の事が心配なのかチラリチラリと見つめる様は
ゾツとするほど真に迫っていた。

そして討伐隊と森を進む王。全てを忘れたいと奇声をあげて怪物に挑む王の捨て鉢
とも言える様子、そんなゼスターの見事な演技が観客を掴んで離さなかった。

この段にくるともう観劇なんて本心では下らないと思つていた妻ですら、息を飲んで
ストーリーにのめり込んでいた。もう何度聞かされたか知れないような物語にだ。

そして物語はいよいよユマ姫が演じる、冒険者ゼナの登場シーンに差し掛かる。

本当に森を運んで来たかのような鬱蒼としたセットの中、傷ついた少年が木に寄りかかっている。

なるほど、冒険者ゼナの登場するこのシーンを機に名優ゼスターは一時離脱、天才少年マールロウにバトンを渡すのだが、それに合わせて微妙にセットが変わっている。

木や花が小さいものに取り換えられて、演者が子供に代わる違和感をスケールの違いで誤魔化そうと言う狙いだ。いやはや考えるものだ。

ユマ姫登場の直前に来て一度幕が閉まり、いよいよと言う所で大分待たせるものだから、随分と引つ張ってくれるとヤキモキしていたが、セットの総入れ替えを行っていたと有れば納得せざるを得ない。

「ああ神よ、この身の不甲斐なさをお許し下さい、そして願わくば愛しきパメラの元にいざなわん」

マールロウ少年の滔々^{とうとう}とした語り、悪くない、少年の高い声でも違和感無く聞かせてくれる、流石は天才少年と言われるだけの事はあるだろう。

そして小ぶりになった木々を掻き分けて、いよいよユマ姫が姿を現した。

……………

そこには小さな銀髪の妖精が佇^{たたず}んでいた。

——なんと、美しい。だがそれ以上に現実感を伴わない、夢幻の中に迷い込んだかの

様に錯覚させられる。

その瞳は観客席に向けられながら、ぼんやりとしていて決してこちらを見ていない。なんの感情も浮かばない顔にふっと笑顔が宿る。すると観客席を端からゆつくりと睥睨^{げん}していった。

何かを確認するかの様に、焦点の合わない瞳が観客の一人一人を品定めしている、顔や身なりではない、もつと深い所を見られている。そう思わざるを得ない眼差しだった。グラント老として思わず背筋が伸びる。

そして、これが、これこそが王の血なのかと戦慄せざるを得なかった。この幼き少女はこれだけの観客の前に、緊張も、恐れも、ひとかけらだつて抱いていない。むしろ緊張するのはお前らだぞ、見られているのではなく、こちらが見ているのだ。と圧倒して見せた。

その少女が口を開く。

「やあ其処に居られるエルフの麗人よ、汝は私の助けが必要か」
凄腕の女冒険者の役とは思えない。朗々と声を張り上げ誰何^{すいか}するシーンのハズが穏やかな美声が掛けられる。

目の前に幻の蝶が飛び交うのがこの目にハッキリと見えるようだ、そう、彼女が演じているのは決して女冒険者ではない。森の女神、そしてマーロウ少年演じるは、女神の

御座す妖精郷に偶然落ち延びた哀れな王の姿だ。

これこそ歴史の真実なのかと、王の怪我がたちどころに治る謎、女冒険者が大森林の深くに居たと言う謎、その全ての真実こそがこれなのだと思つめる国民全てが納得させられるだけの説得力。

「妖精郷など幻」と言う輩もいる、だがそれは有つたのだと、他ならぬ王がその加護を受けたのだと感じ入らざるを得ないだけの光景だった。

「……………」

しかし可哀想だったのはマールロウ少年だ、これだけの神々しいまでの庄。固唾をのむ観客の前に、言葉が無いのは仕方がない。

なにせ事、観劇に関してはうるさ型で知られるグラント老とて息をするのも忘れる程の有様だったのだ。

「ああ、なんと痛ましい、汝の助けとなるべく、その傷を癒す栄誉を与え給え」

ユマ姫は消え入る様な儂げな美声を震わせて、少年の脇に降り立ちそつと片膝を突くとペアツと片手を振る。

少女が一体何をしたのか、グラント老にしてそれを理解するのに一瞬とは言えない時間要した。

「脚本を切り替えただと？」おぼろげに理解した時、開けつ放しになった口の端からみ

すばらしくも涎が垂れるのをぬぐう事すら忘れてしまった。

今回はバードウ氏が編纂した「エリプス王の恋と冒険の物語」だったハズだ。

一日での公演に収める事、猶予無き準備期間、ユマ姫の健康を考えれば短めかつ、ゼナ様のセリフが少ない戯曲を選ぶのは当然の事、謎の冒険者ゼナの謎を謎のまま扱う、それ故に他の演者のセリフは多くなりがちだ。

しかし今、ユマ姫が口にしたるは長編三部作ゼバニス著の「エリプス王物語」のセリフであつた。これは一体？ ミス？ 新しい台本？

いや、もしも、もしもだ、セリフが飛んでしまったマーロウ少年の為に、とっさに脚本を切り替えたとしたらどうだ？

「エリプス王物語」では気絶した王を、冒険者ゼナが手当てして夜を明かし、夜明けと共に目覚めた王と二人で都に帰るのだ。

これが少年の為に姫の機転で行われたアドリブとすれば？ 姫は演劇など初めて、それどころか「エリプス王物語」のセリフなど記憶に有るハズもない。それでも偶然とは思えない、何度も何度も読み返したのであろう、母親が登場する数多の書物、まだ見ぬ実の母への思いがこの奇跡を呼んだに違いが無いのだ。

言葉を失つた少年を甲斐甲斐しく介護する姫、本来の台本とは異なる、アクシデントで有る筈だ。

だが説得力と言う意味ではどうか？ 大怪我を負った筈の王が滔々と気障なセリフを語る脚本と比較するのも馬鹿馬鹿しい。

言葉も無い息も絶え絶えな王を回復させ、優しく眠りへ誘う女神。そして力を使い果たし寄り添うように眠りについた女神だけがライトに照らされ世界から浮き上がる。

その微笑みをいつまでも見て居たいと思わせる程の幸せを感じる寝顔、しかしいけずにもここで幕が下りる。

悔しいかな、まだ足りない、まだ見たいと言うタイミングこそが肝要なのだ、そして、そう思わせる事こそが劇など初めての筈のユマ姫が観客の心を驚掴みにした事の証明に他ならない。

次のシーンからは少年に代わり、再び名優ゼスターがエリプス王を演じる事となった。それも無理からぬこと、いくら稀代の天才少年とは言えこれだけの舞台、演者の前では役者不足だったと言わざるを得ない。

むしろ驚くべきはこれだけの共演者を前に全く怯む事の無いユマ姫の胆力だ、いやむしろあの名優ゼスターの方が言葉に詰まる場面など十年以上彼の演技を追いかけてきた身にとっても初めて見る光景だった、なにせ小さい幼子のユマ姫が全く小さく見えないう、むしろゼスター氏が小さくなってしまったのかと錯覚するほどであった。

そして、王蜘蛛バウギユリウアルを討伐し、いよいよ王子ステフの登場だ。

普段、美形俳優が登場する段ともなると、妙齡の女性の黄色い声が飛ぶことは珍しくない。

ステフ王子はそれが公式行事ですら起こってしまうのだからどれだけの声上がるのかと苦々しくも覚悟をしていたのだが、実際の会場はハラハラドキドキの物語にのめり込み過ぎ疲れ果て、声のひとつも上げる事すら出来なかった。

いや疲れだけではない、もう百を超えようかと言うグラント老ですら歳も性別も忘れて頬を染める程の美しさを舞台上のステフ王子は誇っていた、観客は息を飲むしか出来ない。

そんな中でもユマ様だけは臆おぼろ気な雰囲気を保っていた。

バルコニーで遙かを眺める少女、いや女神、そう女神は妖精郷に帰らなければならぬ。

「行つてしまふのかい？」

寂しげに問うステフ様にコクリと頷くユマ姫。

「わたしはここには居られないから」

「ああ、どうして君は鳥の様に突然あらわれて、また鳥の様に飛び立ってしまうのか、もし僕に君を、閉じ込める檻と勇気が有るのなら、君を毎日愛し、君の声を毎朝聞く事が

出来るのに」

「わたしは空にしか生きられない鳥、宿り木に止まっても、もしその木に巣を作ってしまったら、わたしはきつともう飛び立てない」

「それでもまた共に飛び共に生きる事は出来ないのかい？ 僕には君を閉じ込める籠も、君を縛る鎖も持たない、なぜなら空を飛ぶ君の姿こそが僕が愛した君だから」

ステフ王子も役者だ、本物の王子の演技がこれでは他の演者は今後立つ瀬がないではないか。

「それでも、私が飛ぶ空と、あなたの空は別だから、ここでサヨナラを言わせて」

「なら・・・ならせ、せめ、せめて……」

王子が言葉に詰まる、戯曲としては過激なセリフを言うシーン、一国の王子として大観衆の目の前で語って見せるには緊張するに違いない、でも言え！ 言うんだ！ と観客のプレッシャーはもの凄いい、他ならぬグラント老の手を握る夫人の力の込め様が痛い程だ。

しかしそこでユマ姫が動いたのである。

「だからせめて、わたしの姿を、声を、匂いを、ぬくもりをあなたの心に刻ませて」

王子のセリフを奪うかの様に過激とも言えるセリフを五歳の子供が言い切るとは、もはやグラント老はユマ姫を子供と思う事はやめていた、小さくてもこの子は既に誰より

も女性であり女優であり、王族たる姫なのだ。

極め付け、最後に赤ん坊に見立てた人形を手に見れ、ミューラン嬢と本気の涙をボロボロと零しながら謝り許し合うシーンに至っては、観劇を初めて見た時のように滂沱のように流れる涙を止める事などできはしなかったのだ。

生誕の儀の真相

おう？ おおおう！

「ぶひゅ、でゅふう、びゅるう」

姫らしくない笑いが漏れまくる。

今、俺が読んでいるのは先日行われた生誕の儀の講評。観劇の専門誌と言える新聞のコラム欄だ。

この世界、木で作られた紙は普通に有る。おそらく魔法で作られているのであろう、たしかに魔法の力で生きた王宮を作るのに比べればハードルは低そうだ。

で、活版印刷レベルではないモノの、版面の様な印刷は有る様なので、新聞と言う文化もまた有る訳だ。新聞というかわら版と言うべきなのかな？

ともあれ細かい話は良いや、とにかく生誕の儀としては異例の規模だったので、観劇専門誌にも特集が組まれてしまったワケだ。

問題はその内容……観劇に一家言有る魔道具商のグラント老とか言う旦那様が寄稿してくれた文章が、また面白すぎるのだ。

全てを好意的に捉えてくれたというか……そもそもこの公演、準備期間が短過ぎる所

為か開幕から暗雲と言うか失敗が約束されたかの様な有様だったらしいのだ。召使いの方々やステフ兄さんの証言も踏まえると想像以上にトンデモナイ事になっていた。

聞きかじった内容から、事のあらましを纏めるところだ。

まずは、開幕。都で一二を争う美女セラフイムとミューラン。

劇団を代表する二人の間の緊張感と言うがそんな高尚なものでは無い。なにしろこの二人、観客に見えないところで壮絶な『どつきあい』を繰り広げていた。

舞台でこそお互いの足の親指を全力全開で踏みつけたり、長い爪を生かして刺したりつねったり程度？ で済んでいたが、二人が舞台袖に戻るやゴスツゴスツと音がする。

ステフ兄さんなんぞ、すわ舞台装置に不調か！ と顔を出したら、主演女優二人が壮絶な乱打戦を繰り広げてるのだから、開いた口が塞がらなかつたらしい。

ちなみに顔は決して殴らなかつたあたりが唯一残された二人のプロ意識と言ったところか。

その原因はもう一人の主演、大人気男優のゼスター。

そう、この男、都で一二を争う女優相手に二股していやがった。今までは二人の共演などあり得ないからバレなかつたと言う事らしい

……ご愁傷さまとしか言いようがないが、その後がいただけでない。

突然の父の死に、若きエリプスが取り乱すシーン。その慌てぶりは果たして演技だっ

たのか？ 二人の間で終始オロオロしっぱなしのゼスター。

葬儀のシーンで迫真の涙を流すも、父の死が悲しいのか、二股がバレて同時に愛想を尽かされそうなのが悲しいのか、誰にも解らない程に恐慌状態のゼスター。

最早演技を超えている！ 結婚式でゼスターの腕を取り、ミューランの耳元で「負け犬！」と囁くセラフイム。

無茶な魔獣狩りを泣きながら引き留めるシーンでは、「今までの事を全部、暴露してやる」とゼスターに詰め寄るミューラン。

どうとでもなれとばかり、やけくそで奇声をあげるゼスター。

完全な地獄絵図が舞台にはあった。

正直だ、正直そのビツクリゴシツプショーを目にせず済んだのは本当に良かったと思う。

なんせその時、俺は楽屋のベッドでぐっすり熟睡していたのだ。おかげで健康値や精神力が無駄に削られる事態を避けられた。ただし、起こされるや否や「ハイ出番ですよ！」と言うのは宜しくなかった。

自分がいつ着替えたのかも覚えていない。覚えていないだけかと思えば参照権でもログが無い、つまり寝たまま勝手に着替えされてた。

でもそれは良いや、トイレで気絶した経験まであるし、お付きの人はどこにでも来る、もはや俺のプライベートとか羞恥心はゼロ、今や人前で素っ裸になったって構わない。

……いや、やつぱり多少は構うか？

そんなわけでボツとしたままコツチコツチと連れられてみれば、なんと舞台だったとそう言う訳だ。

「焦点の合わない神秘的な瞳」とコラムで称されているが、単に寝ぼけているだけだ。あれ？ ココどこだ？ と辺りを窺えば、大勢の観客がスタンバイ。まさかの舞台上。

混乱しつつも参照権プロンプターを起動してセリフを読み上げるも、相方の少年がまさかの無反応。飛んだポンコツであった。

……その原因、舞台の上の俺の神秘性に魅せられたが故、とあるが、どうだろうか？

少年はきつと舞台袖で、神の様に崇める憧れの先輩方の痴態を間近で見ってしまったのだろう、そのショックは想像に難くない。色々と限界だったのでは無いだろうか？

そうとは知らない俺は混乱の極みに陥る。頭の中は「え？ セリフ違った？」だけである。

『参照権』があるのだから間違えるはずが無い……と気が付くも、根本的に脚本自体を間違った可能性が頭を掠め、このままでは埒が明かないと他の脚本のセリフをドン！

そこで、震えながらも少年の前に参上してみれば、魂が抜けた様に呆然としたポンコツ少年。

全てを悟った俺は、覚悟を決めて続行すべしと腰のポーシオンを取り出すべくも、腰のベルトにポーシオンの瓶がすっからかん。寝ぼけて部屋に忘れてきた模様。

取り敢えず手を振ったり叩いたりしながら少年の再起動を試みるも、少年の起動ボタンは見つからず。さすつても叩いてもポーツとしている。

いつそ「ココか？」とばかり、前世男としての禁忌を犯す、男の急所へのストレートパンチ！

するとどうだ？ 再起動どころか「ポーツ」から「スヤア」へと形態変化。コチラが十八番としている奥義「気絶」を先に繰り出す始末。

……今となつては、なぜ俺はパンチなぞしてしまったのか？

もう誰にも解らないのだが、セットをリアルにし過ぎて、ホントの虫までブンブン飛んでいて、イライラがピークで冷静さを失っていた模様。

俺としてもアレコレ違和感が無いようにセリフを紡いで来たけれど、それもこれが限界。なんだか舞台が暗くなって演出かな？ と思っていたら、実際は緊張のあまり脈が乱れてのブラックアウト。

ピクリとも動かなくなった俺は、幕が下りると同時、お付きの人に引つ込められたら

しい。

……それが、『新解釈！ 女神が奇跡の力で王を救い、最後は力を使い切つて寄り添うように寝てしまう演出』になつてるのだから恐れ入る。

舞台袖に引つ込められた俺は、お付きの人から容赦無くアルコールの気付け薬を飲まされ、なんとか覚醒。キツイ薬に死にかけだと言うのに、なんと演技を続行！

ただし少年は重症だったのか交代、急遽ゼスターが以降もエリプス王を演じる事になるのだが、こつちも負けず劣らずのドポンコツ。

セリフは詰まる、オロオロする、覇気がない。王国イチの名優と聞いてた俺は、そのありさまに焦りに焦つた。

この時に至り、ようやくポンコツぶりの理由を聞くのだが、そのしょーもなさに気が遠くなったのは俺の健康が理由では無いはずだ。

しょうがないから介護するシーンの耳元で「私が三人の仲を取り持ちますから元氣を出して下さい」と囁けば途端に元氣になるゼスター氏。

……今度父上にお願ひして侮辱罪とかで、無理やりでも死刑にするべきだと進言しよう。普通にコイツに我が家の親父を演じて欲しくない。

どうやら、ゼスター氏はセラフイムと仲良くやつてミューランは切りたい模様。

俺は「あんな糞男に振り回されるの止めよう」と、ミューランさんを説得するもの
悉く失敗。^{ことごと}

ラストシーンは「あなたに私の気持ちなんて解らないわ!」とガチ切れするミューラ
ンに

「ごめんね、私が責任を持ってないから貴方に負担をかけてしまうの!」

と言うセリフに万感の思いを込め、本気で怖くて涙が止まらない俺と「八つ当たりし
てゴメンね」とガチ泣きで謝るミューランでとどめだ。

正直、子供が育てられないからとパルメに押し付けるゼナと、自分の為に身を引いた
と勘違いするパルメが謝り合うラストシーン自体、そもそも如何な物かと思っていた
が、アレに比べれば高尚な文学作品だと自信を持って推薦出来る次第である。

ちなみに、結局、役者であるお三方は折り合いが付かなかった模様。

最後の方は薄っすらと覚悟を決め始め、全てを諦め始めたゼスターの鉄面皮が『何物
にも動じぬ王としての自覚を持った姿』の表現らしいから、父上様は今すぐにでもゼス
ター氏を三枚におろす権利がある。

三枚になったら二人で分けて貰って、余った分として我が家に迷惑料として一枚欲し
いぐらいだ。我らはこの怒りを晴らすサンドバッグをご所望です。

……ともあれ、俺が恐れていた、あまりの糞演技に都に下りてみればあだ名が『棒読

みちゃん』とかになつてゐる恐れは無さそうだ、壊れた様に「ゆっくりしていつてね」とつぶやく必要も無さそうで一安心であらうか。

最後に一つだけ付け加えるとすれば、ステフ兄さんとのラブシーンか、兄を不甲斐ないと評する向きも有るようだが、兄に責任は無いし、お父様だつて責められないはずだ、観客もステフ兄さんだつて知らないが、あのセリフは元々ゼナの物だ。

そして、実際はもつと過激である。

なかなか手を出してくれない父上の事を、パルメがゼナに相談した際に言ったセリフを赤字であつた俺の参照先生はしっかりと捉えていた。

「あの人奥手なんだからこつちから誘わないとダメよ、それもハッキリとね。私の体を見て、匂いを嗅いで、漏れる嬌声を聞いて、ぐらゐの事は言わないと」

全く女性は怖いねと、女になつた身の上で更に思い知らされるのだった。

いざ別荘へ

暑い！ あちゆい、あちゆう……

人間と違ってエルフは熱で溶ける、なるほどなるほどー！ 人間に似ていてもやはり他種族。こんな特性があるとはついぞ知らなんだ。

「おねえちゃん？ だいじよぶ？ お水！ お水のむ？」

妹様は今日も元気だ、溶ける様子など全くない。妹のセレナは純粋なエルフ、一方俺はハーフェルフ、つまり熱で溶けるのは種族特性ではない。俺の固有技能だと言えよう、ヴァンパイアは霧に変身する、俺は液体に溶ける。溶鉱炉に落とさん限り俺は死ななぞぞ！

「おかしーん！ おねえちゃんが暑さで死んじやいそうなのーお水！ お水のんでくれないのー」

やばい、ふざけてたら妹様が錯乱しておられる、生きてるぞ、ギリギリの所で生きてるぞぞ！

どのぐらいギリギリかと言うと家族の前なのに、おしぼりを顔に乗せ口は開けっ放しだ。

みつともないから口を閉じる様に言われたのも最初の内だけ、今は口が閉じてるとちゃんと呼吸をしているかと、心配して確かめに来る有様。

「だ、大丈夫よ、ただ少し暑くて参ってしまっただけ」

「今年こそはと思つたのだが、まだ家族旅行は早かつただろうか」

「い、いえ、家に居ても暑いのは変わりませんから……」

父上も心配させてしまった、とは言え俺とセレナにとつて初めての家族旅行、初めての理由は主に俺の健康が理由なんだけど。

そう、今は夏中月、夏中月は一年で一番暑い時期、暑い季節にお金持ちがする事は？避暑地への旅行だ！そして我々は王族、お金持ちオブお金持ち。

だから我々は恒例らしい王室直轄地の湖の畔ほとりへ避暑に向かつている訳だ。

それは良い、むしろ嬉しい。湖のそば、多少なりとも涼しそうで体にも良さそうだし、しかし竜籠とか言う、巨大な爬虫類が引つ張る馬車での移動。これがしんどい。

熱気も籠るし振動もキツイ、そう考えると「この糞暑い季節、呼吸をするだけで溶け出してしまいそうなひ弱な娘に、野外ライブを敢行させようとした親が居るらしい」と嫌みの一つでも言つてやろうと思えば、最近の父上様はどうにもしおらしい。逆にこっちが気を遣う有様で、ちよつと面倒くさくなつてきた。

王室専用の竜籠つて奴は六畳程の広さが有る。前世の馬車基準ではかなりデカいの

では無いだろうか？

森が多くそもそも馬車での移動が少ないエルフの国に於いても最大サイズ。国中の道が狭いのでこのサイズの馬車同士がすれ違う事が出来る道など存在しない程だ。他の通行人や竜籠が王室の印を見てへへーと道を譲ってくれるからこそ運用できると言う事で、その快適性は非常に高いレベルにあると聞いているのだが……それでも暑いものは暑いのだ。

「お、お父様、あの……空調の魔道具を使ってもらっても宜しいでしょうか？」

「いや？ もう既に起動しているが？」

起動してたかー、はあ……確かに薄っすらと風は吹いている。そこでよく見ると天井にシーリングファンって呼ばれるアレに近いのがゆるゆると回転している。

うーん、もつと何かかならないモンかなーと思いつつ、ありがとうと妹の頭を撫でながら受け取ったお水を茎で出来たストローでチューチュー吸う。

あ、そうだ！

「お父様、この竜籠の中で魔法を使っても良いでしょうか？」

「む、魔法か？」

「はい、空気中の水分を集めてみたいんです」

「いや、水ならいくらでも有るだろうか？」

「いえ、涼しくしたいんです」

「それで涼しくなるのか？」

なりません！ この世界に、少なくともエルフの国に氷の魔法みたいなのは無い。

物を冷やすにあたって熱を奪ってと精霊にお願いしても聞き届けられなかった。なんか閃く感じが全くしない。

俺は前世で自作PCを趣味していたため、CPUクーラーには一家言あるわけよ？

ペルチエ素子やらヒートパイプ、ヒートポンプ、逆カルノーサイクルなんて難しい単語までウィキペディアで調べた経験がある。

なので『参照権』でそんな知識を見返す事も余裕なのだが、自分でもハッキリ理解し切れていないことを呪文にして、精霊？ に伝えるなどとてもできそうにない。

酸素はある程度理解しているお陰か、やりたいことをハッキリイメージすれば、何か頭で組み上がった感覚があったのだが……

しかし、諦めるワケには行かない！ 温度を直接下げることが不可能でも、涼しく感じる様には出来るかもと思った、そう湿度を下げるのだ。

「はい、体を感じる温度を下げる事は出来ると思うのです」

「そうか、いいだろう、許す」

「いいよー」

「構わないよ」

「ユマがやりたいようにやりなさい、でもちよつとでも健康値が減ったと思ったらすぐやめるのよ」

家族みんなに許していただいた、実は自分のお部屋では何度も試している、早速やろう。

『我、望む、大気に潜む水の欠けらよ、寄り合わさりて雫となれ』

シューー

両手いっぱい水が滴る、いや予想より湿度が高かったのか大分こぼれてしまう。

『我、望む、この手の水を霧へと散らせ』

プシュー

水がミストシャワーの様に散っていく。

と、なんだろう周りの視線がポカンとしてる様な？ あ、せっかく集めて散らしてるんだから意味が解らないと？

「ねえさまーすずしいですー」

でも近くに居たセレナには涼しさが伝わったようで大満足です！

どさくさに紛れてエルフの中でもとりわけ長くツンと尖った妹の耳を撫でると、くすぐったいのかクスクスと笑って「もう、やめてー」と言ってくるのがもう、かーわい

いったら無い。ちなみに俺の耳は人間とエルフの間ぐらいか、ハーフだからね。

そんなこんなで竜籠での旅は過ぎていった。

さて、二日に渡る竜籠での移動が終わり、別荘へたどり着いた。グラノーラはともかく、生ぬるいヨーグルトには危険なものを感じないではなかったが、幸いにもお腹を壊さずたどり着けた。俺はこれを冷やす魔法を開発する事をライフワークとしていこうと密かに決意。よく聞くと自然を利用した氷室的なものと氷も有るようだが……パーティーで使うレベルの貴重品と父上が教えてくれた。

そんな訳で別荘だが、あらかじめ先に出発していた召使いの方々がお出迎え。しかも前世の別荘のログハウスの様な想像とは異なり豪邸だ。

大木を切り抜いたかの様な玄関を抜けると細い白木が複雑に編み込まれ幾何学模様を作る壁、寄木細工の様な床、日頃の離宮も凄いと思っていたが、まさか別荘が離宮越えとは恐れ入った。

いや、離宮には王が居ないからあの程度になってると考えるべきか、そういえば食堂は王宮にもあるのに離宮まで父上は来てくれてるってんだから、偉そうにしてるとか内心思つててすまんかった。

リビングで家族と別れ、メイドの女性に案内されて部屋に辿り着くと、ここもまた日頃の離宮より豪華で、白いクローゼットにシーリングファン、光るキノコみたいな照明

の魔道具も緻密な細工が施され、レースのカーテンみたいな幕をお付きの人がサツと開けるとオーシャンビューいや湖の場合なんて言うんだ？ レイクビューで良いの？ 参照先生もだんまりだ。

しかし、景色より俺には大事な事が有る、スツと天蓋付きのベッドに近づくとシダで出来たスクリーンを掻き分けベッドを確認、高級羽毛布団OK！ ゴロンと転がる。

シダやツタに囲まれいばら姫となった気分を味わえるベッドだ、素晴らしい。

「あ、あの、もうお休みになられるのですか？ せめて着替えては？」

「え、ええ、でもわたくし疲れてしまったみたいで……」

言ってる傍から大分眠たくなってきた、もう俺は妹のキスでしか起きんぞー！

いやイケメン兄様ならまあいいか？ などと思えるあたり、俺の精神も結構乙女になつてきた！ ヤッホー！

「いえ、せめてお着替えは済ませませんと服が皺になってしまいますよ」

「……………」

「ユマ様、起きてください！」

「スヤア」

「…………ハア」

お側付のため息が聞こえた様な気がした。

湖で誘うもの

パチャパチャ

俺は湖畔で岩場に腰かけ、足だけを湖に浸して水を蹴る。

本当なら夏の日差しでやられてしまう所だが、「お体に障ります」とお付きの人が駆け寄って来て、葉っぱで出来た傘を差してくれた。

なんとも申し訳ない所だ、別荘に到着してスグの時も部屋に着くや寝てしまった俺は、気が付くと夜、しかもすっかりパジャマに着替えさせられていた。

なんとも……うん、まあ我ながら幼児だな。

幼児と言えば、ホントに幼児なのは妹様ことセレナ（二歳）なのだが、いちいち確認しないと不安になるぐらい二歳とは思えない。

竜籠による二日の移動の後、部屋でダウンした俺と違い、セレナは待ちきれないとその日の内に湖に遊びに出かけたらしい。

絶対的な体力の違いを感じる次第だ。さんざん遊んで、ぐっすり就寝したセレナと違い、昼寝して夜中に目が覚めた俺が台所に乱入したり、体が汗くさいとお湯を要求したりと、わがままプリンセスぶりを発揮してしまった、非常に申し訳無い。

と言うか奇行が目立つ姫と思われてる節が有る。わがままと思われている程度ならまあ良いが、ひよつとしてキチキチプリンセスなのでは無いだろうか？

二歳児以下……魂に殺される前にいつそ自殺を検討した方が良いのかもしれない、まっぴら御免だが。

「いい天気ですね」

「！ ええ、でもお天気が良すぎるのも考え物ですわ」

「ふふ、ほんとですわね」

突然話しかけられてビックリした！ この人は御側付きのピラリス。

なにかと俺の事を心配してくれる人で、俺の気絶発見率一位じゃないだろうか？ この人居なかつたら俺、とつくに死んでるんじゃないかな？ なんかもう、運命とか謎の偶然とか魂とか、そういうスケールの大きい話の前に、どうでも良いところで死ぬのはと不安だ。

さすがに乗っ取ったユマちゃんにあの世で申し訳出来んだろ。

しっかし、この世界の太陽は確実に殺しに来てる。なんせ前世の太陽の四倍近い大きさに見える、この大ききでむしろこの程度の温度で済んでいるのが奇跡じゃないだろうか。うむ、その奇跡、もっと盛大に巻き起こしても良いのよ？

「これでも、千年単位で記録を調べると、少しずつ気温は下がっているそうですよ？」

「そうだったの……ピラリスは物知りね」

「勿体無いお言葉に御座います」

マジで初めて知ったな、これでも涼しくなつたのかよ、……あ、参照権先生で調べるとその話聞いたの3回目だつて。俺の記憶力、前世より明らかに下がっている。幼児化の影響か？ いや参照権先生頼みにし過ぎてるからその所為だろう。

と、言うかだな、今の俺、退屈してると思われてるな。

退屈どころかここ数日、妹様とボートでキャツキャウフとデートかと思いきや、風の魔法でジェットスキーみたいな速度で岸辺に激突したり、二人でヤドカ리를突いたら俺だけ指をはさまれたり、兄様に泳ぎを教わつてる途中で力尽きたり、サザエみたいな巻貝を焼いて食べようとしたら怒られたり、イベント的なものはもうお腹いっぱいだ。

お母様も最初は泳いだりもしたけれど、ここ数日は別荘でお休み。父上はたまに泳いでこそのもの、別荘でもお仕事が有るらしく大変だ。

王宮と違つて別荘だとちよつと顔を出せばお仕事しているのが解るので、ますます生誕の儀のゲストター氏へのヘイトが溜まつて行く。

「うふふ、大丈夫、これでもわたくし、楽しんでるのよ？」

「さようですか？」

「ええ、お部屋では本ばかり読んでいるでしょう？　こうして外の景色で見ているだけで、あの本のあの場面はこの様な景色の事だったのかな、と考えてしまいますの」
「なるほど、本……ばかりを……？」

あつ！　マズった！　余計な事を言って、変なヤツだと思われてしまった。

「し、しかしながら……ユマ様はそれほど本を読んでいる様には思えないのですが……」
そう、俺は本を開いている時間は少ない。でも、まあ今も本を読んでいるんですよ
……参照権プロンプターで！

コレはもう、前々から温めていた設定を披露するしかないだろう。

「あら!?　わたくし図書室で本を記憶して、お部屋ですつと読んでいますよ？」

「え？　本を……記憶？」

「ええ、本の内容を取り敢えず全部記憶するんです。それでどんな内容だったかなと後でお部屋でじっくり読むようにしてらんです」

「ま、まさか何時も本をペラペラとめくってらっしやるのは!？」

いや……まさか？　俺氏、本をペラペラめくるが趣味の変人だと思われていた!？」

「え、ええ……全部記憶してるのです」

「そ、そんな事が……」

「それで無くては三日前に決まった劇のセリフを、読み上げる事など出来ませんわ」

今度こそお側付きのピラリスは棒でも飲み込んだ様な顔をして後ずさった。絶対記憶能力つてのはドラマや漫画でよく見た設定だ。多少、変に思われても押し通したい。ピラリスは俺の行動をずっと見ている、本のペラペラは辞めたくないし、変人だとも思われたくは無い。

と、言うかだ……むしろこの『設定』をなんとなく察していると、勝手に思っていた。図書室に行ったと思つたら本を高速でペラペラめくり、部屋に帰ればひたすらポーツとしてる。

うーん、こりやーキチキチプリンセスだわ。

でもさ、ひ弱だから本を持ち上げるのも苦しいし、書架台で読むのも辛い。一度目に入れてから参照権で読めば寝つ転がっても、なんなら目を瞑つても読める。

この世界、スマホで読書の感覚で、ここまで本を読んでる奴は他に居ないんじゃないかな？

俺の身に何が起こるか解らない上に、健康体ともほど遠いなら知識は欲しい。この読書方法がやめられないなら、速読の天才と思われた方がなんぼかマシだ。

異様な天才は妹様が居る。あの妹にして姉有りと思つて貰えた方がむしろバランスは取れるんじゃないだろうか？

そういう意味でも妹セレナの存在は有り難い。転生者だと疑つた事も何度もある。

だが直感として違うとしか思えない、可愛すぎる。つてか可愛いからセレナが何物でも構わない。殺されても良い、むしろ殺してほしい。

妹セレナの事を考えるとニヤニヤが止まらない。

「ユマ様が時折、何も無い場所で突然微笑まれるのも、本の内容を読み直しているからなのですね」

いえ、それは碌でも無いことを考えているときです。

と訂正をしようと振り向いたその時だ、視界に蛙が映った。

なんだろう？ 気にかかる、この世界には不思議な生物が多いがその中でも取り分け気持ちが悪い。

「ねえ、そこにいる蛙、毒は無いのかしら？ 小さいけど赤くて棘が生えてて気持ちが悪いわ」

「蛙？ どこかに居ますか？」

え？ 割と近くに居る。俺は指もさしているし、見間違えるような距離じゃないはずだ。

じゃあ参照権が？ でもこんな蛙の画像望んじやいない、しかも現実の岩の上にちよこんと座っている。この蛙の記録は？ 参照権に反応なし、正真正銘の初見の生き物だ。

「本当に見えませんか？　その岩の上に小さくて赤くて気持ち悪い蛙が、あつ！」
蛙は俺を嘲笑うように湖の中に消えていった。

「いえ、そもそも棘が生えた蛙など、寡聞にして知りませんが……」

何度でも言う、ピラリスは物知りだ。このあたりの生物は調べ上げて来ている感がある。でもそんな蛙は知らないと言う。

……なんだろう気になる。いや？　なんで気になるんだ？　ただの蛙が……

——ポチャン

何故か、俺は、蛙を追いかける様に、湖に、入っていた……

「姫様？　行けません！　本当に毒が有る蛙かもしれませんよ！」

——バチャバチャ

なんだろう、俺はあの蛙を追いかけなくては行けない。

『わー蛙だー』

はしやく少女の声が聞こえる？

いや、俺の？　声か？　俺が？　しやべったのか？

「姫様？　その先は深くなっているので危ないですよ！　姫様?!」

『うふふふふふ』

誰かの笑い声が聞こえた様な気がした。

混線する記憶

気が付くと嫌と言うほど見慣れた自分の部屋のベッドの上だった。

そう、別荘の部屋じゃない、離宮のベッドだ。

「え？」

思わず声が漏れる、意味が解らない。旅行先に居たはずだが……

「気が付きましたか？ ああ……良かった」

ピラリスの声が聞こえる、ギュッと手を握られて、目には涙を浮かべている。

「えっと、わたしはどうしたのかしら……」

「蛙を追いかけて、湖で溺れたのです」

なんとの間抜けか。

「そう、また迷惑を掛けてしまったわね」

「いえ、えっと姫様はその蛙には触っていないんですよね？」

「え、ええ、触ってはいないと思うわ」

そもそもあの蛙が本当に存在していたかどうかすら怪しいものだ。

便利に参照権を使い過ぎた罰が当たったのか？ 神にはそんな事を聞いていなかった

たが全てを教えてくださいましたとも思えない、チートスキルと思っていた参照権にも何かリスクが有るのかもしれないな。

「ああ良かった」

ピラリスはその場にへたり込んでしまう。

「どうしたの、ピラリス、あの蛙に何かあったの？」

「ええ、実はその姫様が見たという、赤くて棘が生えた蛙、猛毒が有る危険な蛙のようなのです」

え？ あの蛙やっぱ危険なの？ いや、見た目から毒々しいもんな。むしろあんな蛙に突撃した自分が信じられない。

「そう、触らなくて良かったわ、あの後、私はずっと眠って？」

「え、ええ。心配したんですよ、姫様が突然湖に入って足を滑らせて、助け上げたものの気絶していらつしやって、毒蛙に触ったのかもしれないと、少し早いですけど皆さんで切り上げてお帰りになられたのです」

うゝえ、あんなに楽しんでたセレナも巻き込んで早帰りしてしまったのか、うううう罪悪感が凄い。

「……………めんなさい」

ほんとに泣けてくる、なんだよコレ、馬鹿にも程があるだろ。

「で、でも姫様が蛙に気が付かなければ、誰か危ない蛙の餌食になっていたかも知れないんですからお手柄ですよ！」

「そ、そんなに危ない蛙だったのですか？」

「そ、それはもう、あの蛙、マネギデスタル赤棘毒蛙が井戸に入ったばかりに、大勢亡くなつた村も有つたそうですから途轍もない毒を持つてるようですよ」

「そ、そこまでの毒が有るのですか」

「は、はい、だから三日も目覚めなかつたのも蛙の毒に僅かながら触れたせいではと」

うへえ……それは、もしセレナが蛙に殺されたら世界中の蛙を殺しても殺し足りないぞ。

「記録によれば、国を挙げて赤棘毒蛙を駆除した結果、500年も前に絶滅させたと有るのですが、もしも生き残っていたと有れば一大事です、湖を探させています」

500年も……前に？ 俺は一体何を見たんだ？

その後、お父様まで心配してお部屋に来てくれたり、セレナに泣かれたり、母様に叱られたり、お兄様に頭を撫でられたりした。

数百年前の赤棘毒蛙のスケッチも見せて貰ったが、間違いなく私の目の前にいた蛙だ、参照権で確認する。間違いはない。え？

「影が無い」

思わず呟いた、違和感の原因はこれだ。やはりあの蛙は幻、ではなぜあんな幻を見たのか？ 原因はさっぱり解らない。

結局、蛙は多分見間違いだと皆に伝えた、でもピラリスは懐疑的だった、そりやそうだと本をぱつと見て全部覚える奴がだぞ？

そしてもつと信じられない事が有った。

健康値：11

魔力値：75

寝込んだ後の健康値なんて5も有れば十分、それが過去最高の11なんて言う値だ、そして魔力値が異常に増えている。

健康値はある意味常人に近づいただけでも言えるが、魔力値の伸びは異常だ。大騒ぎになるかと思えばそうではなかった、むしろ喜ばれたのである。

どうやら、どうやら悪くないと思っていた俺の魔力値。これはエルフとしてはやはり低かった様なのだ、それがエルフとしても恥ずかしくないレベルに上がったと言う事で、母などはお祝いをしようと言う始末。

何かの拍子に成長しただけなのか？ それともアレは幸運の蛙だったのか？ 今となつては解り様が無い。

結局その後、湖での必死の捜索に関わらず、蛙は見つからなかったのだから。

大牙猪

夏が過ぎ、秋はあつと言う間に終わった。

春や秋、過ごしややすい季節と言うのはなぜすぐ終わってしまうのだろうか？

秋だつてずっと寝ていた訳じゃない、健康値も大幅に上昇し今では平均13ぐらいはキープしている。

普通は25だから俺はその半分ぐらい、つまり？ 普通の病弱レベルで済んでいる。ちよつと歩いただけで気絶していた生活は過去の話だ。

で、そうなると生まれは温室、育ちは無菌培養の生活も改められて、子供らしいお芋掘りとか栗拾いとかのイベントに駆り出された。

情操教育つて奴だが、正直必要ない。セレナを可愛がったり、母上に甘えたり出来ればまだ良いのだが、お付きの方々しか居ない状態でそんなイベントこなしても何にも面白くない。気絶はしないでも、帰りはだいたい立っていられない程消耗して、おんぶされて帰るのだから尚更だ。

でも、まあそんなイベントでも、あの弦楽のお稽古よりはマシであろう。

笛か弦楽器が選べる様だったので、小学校の縦笛の悪夢がチラつくからと、弦楽器に

したのだが、まあ、うん、今後に期待だな！

っていうか前世の俺の苦手意識が足を引っ張っている可能性が高い、ユマちゃんのボディに秘めたる才能に期待して頑張るしかないだろう。

……で、冬である。

「では、構えは結構ですので、そのまま矢を離して下さい」

シユツ——パスツ！

俺の放った矢が木のに刺さる、当たり前だ、数メートルと離れていないのだから。今、俺は、真冬の森の中に居る。

豪雪地帯と言う訳ではないので雪は積もっていないし、あまり降る事も無いのだが、霜は降りていて歩くとシヤリシヤリ言う。もちろん気温は非常に低く、皮のズボン、セーターと胸当て、マフラーに帽子とフル装備だ。

「けっこうです、構えに癖が有りますが良く撃っています」

「ありがとうございます」

そう、弓だ！ エルフは魔法、そして弓！ その基本をここでもしつかりと押さえてきている！

寒い！ 辛い！ でも生き死に関わる問題になるかも知れないからサボれない！

前世でほんの少し、弓道で和弓を触った癖が出てしまっているのかも知れない、とは言え弓の大きさからまるで別物なのだ。

エルフの弓は森林仕様なのかかなり小さい、こんなんで威力が出るのだろうか？

見た目は練習用だからシンプルだが、それでいて品が有り高級感が有る。実は高いのかも知れない。

「では次は放った矢を魔法で加速させます、見ていてくださいね……」

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

——ズパシユツ!!!

先生の撃った矢が木の的を真つ二つに両断する。

な……なるほど、威力は魔法で出すから弓は小さくても良いと、そう言う事ですか。弓の先生は自分の矢の威力に満足げに頷くと、新しい的を指差す。

「ではユマさんもやってみて下さい」

「あ、ハ、ハイ、えーと気を付ける部分は何かありますか？」

「そうですね、怪我をしないように、まずは命中させることより、矢に魔法を乗せる事だけを考えてみましょう。矢と体の間に少しだけスペースを作って、そう、矢羽で怪我をしないように」

「ハイ、解りました！」

確かに普通に矢を放つても、素人だけに矢羽が掠つて怪我をしかねない。

それが魔法を併用となると、もうどうなるかも解らない。見た感じ、弓矢と言うよりライフル弾みたいな威力が出ている。

胸当ては一応しているけど「自分の矢で乳首が無くなりましたあ！」とか、女の子として悲しいじゃない？

グツと弓を引いて、気持ち、体から矢を離す。うーん、ちよつと離しただけで、狙いも力も全然込められなくなるのな。

ココで俺は呪文を唱え、魔力を乗せる。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

——シュツ、パスツ！

最初に普通に撃つた時と、さほど変わらない威力に思える。当然的は割れず、普通に刺さっただけだ。

「はい、ちゃんと矢には魔力の補助が乗っていましたよ！ 今後は矢への恐怖心を減らして、狙いを付けて、力を込めて弓を引き、魔力の込め方で威力を調整していきましよう」

先生曰く、ひとまずコレで良いらしい。確かにあんな構えで一応でも飛んだんだから魔法の恩恵は有ったのだろう。

風の祝福つてのがざっくりして、これで矢が強くなる理屈が解らんが。

あー、でも「放つ矢を風で祝福しろ」って言われたら普通に考えれば加速するかな？
変に言葉で説明すると魔法って奴は効率が悪くなる傾向がある。直感的であるに越したことは無い。

細かい理屈は別にあるのだろうが、試行錯誤された上での呪文だろうし、後はもう本
当に練習するしかなさそうだ。

——シユツツ、パスツ！

——ズシユツツ、パスツ！

二発撃ったが……うん、困った。

先生はどんどんどうぞ、と言う態度でこつちを見るが、実はもう右腕が限界だ。

「せ、先生構えをもう一度確認したいのですが」

「わかりました」

そういうと先生は後ろから手取り足取り構えを教えてくれる。流石にたった四発で
「腕が限界です」とは言い出せなかった。

なんか弓の先生ツンとしてて怖いんだもん。

そうして誤魔化したお陰で、なんとかもう一回ぐらい引けるかな？　ぐらいに腕のプ
ルプルが収まった、その時だ。

「なるほど、ちよつとコツが掴めたかもしれないませ……」

チリりと首筋に痛みが走る。

なんだ？ と見回せば遙か遠く、木々の隙間からコチラを見ている獣が居た！

「……先生アレは？」

慌てて俺が指差す先、あれは巨大な猪だろうか？

「大牙猪！ 声を出さないように、静かにゆつくり隠れましょう」

「でも、もう見つかつているのでは？」

「大牙猪は巨大です、ああ見えてかなり距離は遠いはずですよ」

そうなのか？ いや、確かに縮尺がおかしい！

一見して普通のイノシシかと思ったが……周囲の木々が小さく見える。

え？ まさか？ ひよつとして軽トラぐらいのサイズが有るんじゃないか？ あん

なのが迫ってきたらどうにもならないぞ？

迫ってきたら……嫌な予感がするが気のせいだろうか？ しかし大事な事は伝えて

おこう、もちろん声は抑え目に。

「先生、隠れますが、わたくし運の悪さには自信が有ります。逃げる準備をしておい

て下さい」

「え？ ええ、わかりました」

言ってる意味が解らないだろうが、こつちも気の利いたことを言う余裕も無い。

こういう場合それっぽい事を言うよりも「直感です！」ぐらいの勢いで押し切った方が信じて貰える、多分……

俺はもう、覗き込まずに木々に隠れる。先生が様子を見ててくれるだろう。それより探すべきは隠れる場所だ。

「なっ!! こつちに来ます!」

「あの大きさでは木々が邪魔となるはずです!」

先生が叫ぶや否やのタイミングで、俺はもう立ち上がって、木々の密度が濃い場所に走り出していった。

「大牙猪は木々をなぎ倒します、危険です! なるべく遠くに逃げてください」
ザルギルゴール

え? 嘘でしょ?

そうは言っても先生、木って簡単に倒れるもんじやないぜ? たとえ戦車だつて木々をなぎ倒して前進なんて、そうそう出来るもんじやない。

——バキッ! バサバサッ! バキッ!!

後ろから凄いい音がするんですけど……

そーつと後ろを振り向くと、大きな木は器用に避けて、小さい木はなぎ倒しこつちに迫る巨大な猪。

いや、アレは軽トラじゃない！ 4トントラックサイズ有るわアレ！

しかも戦車とは違って体を振じったり捻ったりで、しなやかに動くもんだから、あの巨体ながら狭い隙間も抜けてくる。

うう……逃げられそうにない。それに、植生が濃い所つてのは人間だつて歩き辛い。

「ユマさん、ここは安全ではありません、立ち止まらなさい！ 走ってください！」

「ハアアハアア、すいません、もうこれ以上は歩けません！」

今ので10倍界王拳なんだけ？ 気絶してないのが、控えめに言つて奇跡なんだけ？

「クツ！ 迎え撃ちます！ ユマさんはなるべく遠くへ！」

すまん、ホントすまん。でも、何が正解だったのなんて解んないよ。

そりや木が少ない所に逃げれば距離は稼げた。でも、それじゃ相手からこつちが丸見え。

偶然にあのイノシシが俺に興味を失う可能性に賭ける気にはならない。

あーもう勘弁して欲しい！ 涙目になりながら必死に足を動かすも、ツタが絡まり、思うように進まない。

——バリバリ！ バキバキバキバキツツ！！

物凄い音がした。慌てて振り返ると巨大イノシシが木々をなぎ倒し、間近にまで迫っている。

デカイ！ とても同じ生き物とはとても思えない！ なんだよアレ。あれが『魔獣』なのか？

『魔獣』それは図鑑上では『獣』とは明確に区別される。

魔力を纏い、魔力を求め、通常の生物では考えられない力やサイズを実現している、そんな生物の総称だ。

——バリツバリツバリツ!! ドオオオーン!

再び、木が裂ける音。間を置かず、ズシンと一際大きい音と、振動!

とびきりの巨木がへし折られ、間近に倒れて来たのだ! 地を伝う衝撃が、土埃と折れた枝を巻き上げる。

折れた木の幹と枝に逃げ道を塞がれ、動きがさらに制限される。悪い事に先生は太い幹で挟んだ向こう側。

——ブオオオオオオオオオオ!!

鳴き声だ、巨大な猪の巨大な遠吠えが……マズい! コイツ! 倒れた木に乗って! 倒れた木を橋にして! 不安定な地面を無視して、一息にコチラまで……来る!

——ズパツシャアアア!

——ブモオオオオオオオオオ!

空気を切り裂き矢が刺さる! 凄まじい威力だ、イノシシの血が舞い、木の幹からず

り落ちた。

コレは先生の矢だ！ 何事かと猪は足を止める。でも、ダメだ、どうせ、駄目なんだろう？

「こつちだ！ こつちへ来い!!」

先生の叫ぶ声が聞こえる。魔力を込めた声だ、俺は息を殺している、それでも来るんだろ？

——ブルルルウブウ

猪は声を上げる。また木に足を掛けて幹に乗って……来る！

俺はこの時点で息を殺すのを止め、逆に思い切り吸い込んだ。

——ズパツシユウウ！

再び先生の矢が飛ぶ。でも、今度は猪は足も止めない。一発耐える気で何故か俺へと向かってくる！

『我、望む、大気に潜む燃烧と呼吸を助けるものよ、寄り合わさりて我が腕かいなの中に』

俺は腕を広げて、その中に周辺の酸素を集める。即ち、腕の中以外の酸素濃度は下がった事だろう。

最初に思ったのだ。酸素を集められるって事は相手を容易に窒息させられるのではないかと。

でも出来なかった。魔法にはパーソナルスペースがあつて、他人のパーソナルスペースに魔法を発現させる事は難しい。

だから相手に直接影響を与える魔法は、相手の同意が有るか、魔力に圧倒的な力が無いと発動しない。

——ブブブウウウウ???

ただ、相手がこちらのパーソナルスペースに向かつてくるなら話は別だ！ 踏み込んできた猪が橋の上でふらついた。

そう、俺のパーソナルスペース内の酸素の大半は腕の中に集めた。

酸素が少ない俺のパーソナルスペースに興奮状態で走り込んだ大牙猪はザルギルゴールその巨体が求める酸素を摂取出来ない。

今思えば、妹のガスバーナーの魔法で俺が気絶したのは酸素不足が影響していたかもしれない。今となつては解らないが。

——ズパツシュ！

先生の矢が外れる。急に猪が足を止めるとは思つて無かつたのだろう、間が悪い。

ブオオオブオオオオオオオ！

そして屋外だ。すぐに空気なんぞ混じり合う。

そもそも空気中の酸素をキツチリ全部集められる程の精度は初めから無い。しよせ

んは一瞬の足止めにしかならない。

その一瞬で俺は十分な距離を取れた。

『我、望む、放たれる矢に炎の祝福を』

——シユボツ！ ——バアアン！

放った矢は燃えながら飛んでいき、最後には爆発するように燃えた。木の枝や葉っぱ、腐ったばかりの土が舞い上がった空気、そこは俺が酸素を纏めた場所だ。

燃え盛る矢が着弾すれば、燃え移る物など幾らでもある。

——ブオ!!ブオオオオ!

猪が仰け反る。炎に照らされた恐るべき巨体が森の中に浮かび上がる

——間近で見るその姿は、現実感が吹き飛ぶ程に大きい。イノシシの形をした悪魔と言われた方が納得が行く。

巨大な生物はただそれだけで恐ろしいのだ。俺は根源的な恐怖に縮み上がった。

——ズバッン！

そこに三度、先生の矢が刺さる。イノシシと俺との間には炎が有る。

ココに来て、やっと猪は先生の方を見た。こつちから一瞬でも意識が外れた瞬間、ホツとしてしまった事が悔しい。

何も終わってはいないのだ。先生を危険にさらしてホツとしている自分が恥ずかし

い、でも、こんなのできるんだよ。先生の矢は異常な威力で猪の巨体に矢羽の部分までズツプリと食い込んでいた、それでも、それでも全く止まる心配がない。

あの巨体にとっては針で刺された様な物なのだ、痛い事は痛い諦めて動きを止める様な怪我じゃない。むしろ怒りで痛みを忘れてる。先生がやられたら俺の番だ、どうする？ どうするよ？

焦りで思考が纏まらない、何か魔法を？ でも、それでまた、こつちに來たら？ 怖い！ でも！

恐怖にパニックになりかけた、その時だ。

——ジユプ！

今までの爆音轟く戦いから考えると、驚くほど控えめな音がした。

——ズバン！

猪の頭に人が落ちてきた。

そう認識出来た時には猪の首は半場千切れかけていた。

無論、それで生きてる訳は無い。不死身にも思えた大牙猪ザルギルゴールはあっさりと死んだのだ。

「ス、ステフ兄さん」

思わず呆然と呟いた。

そう、ステフ兄さんだ！ ステフ兄さんが猪に落ちてきた！

で、落ちてきた勢いのまま、双剣を首に突っ込んだと思つたらそのまま振り抜いて——ズバン！とまあ、あっさりと首を切断したワケだ。

——ナニコレ？ 強過ぎませんか？

「すまない、ザルギルゴール大牙猪を追い込んでいたのだが、逆に柵と罠を越えて人里近い所に向かつてしまった」

そう言う事かー！ 弓の練習してる所にあんなのが襲ってくるっておかしいもんな、自分の不運っぷりにため息しかない。

「危ない所でしたが怪我也有りませんでした、助けていただき有難う御座います、お兄様！」

「！ ユマか？！」

あ、今気が付いたの？

「ハイ！ お兄様、こんなにもお強いんですね、凄いですわ！」

いやーイケメンで強い。つまりズルい、凄くカッコいい。

前世の俺の部分は「こうなりたかつたぞ！」と嫉妬する。

今世のユマちゃんの部分はお兄ちゃんに抱き付きたい。

上手く行かないモンだね。どちらにしてもお兄さまに心配して貰えるのは悪い気はしない。

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

「大丈夫です、かすり傷も有りません！」

「……良かった」

ステフ兄様は俺をギュツと抱きしめる。もうね、俺の乙女な部分がキュンキュンしてしまふから怖い。『高橋敬一』が溶けていく。

「兄様！」

思わず俺も抱きしめちゃうね。

「ステフ様、私も助かりましたわ」

「セーラか、お前が付いて居ながらなんだ！」

「申し開きも出来ません！」

うーん、セーラさんかーいや、女性だったんだね。

参照権があるとき、名前とか呼ぶ必要になった時に記憶から引つ張ってくれば良いやつて、全然覚えなくなっちゃうんだよね。そして、お兄ちゃん怒ると怖いね、フオローしてあげないと。

「お兄様、私が迂闊な場所に逃げ込んでしまったただけですわ」

「そもそも、見つかる前に隠れる事は出来なかつたのか？」

「お詫びする言葉も有りません。何せ……発見自体が私よりユマ様の方が先であらせら

れたのですから……」

「なんだとー!」

益々お兄ちゃんはご機嫌斜めだ。

いつもニコニコのお兄ちゃんが怒っていると、俺が怒られてる訳でも無いのに苦しくなるのが不思議だ。

「で、でもあのぐらいの場所で、こんなお豆みたいなのを見つけただけですから」

「ココから、あそこに居るのを見つけたのか? それですぐ隠れたのか? それならこちらに来ることは無いと思うのだが……」

「スミマセン、姫様はすぐに隠れたのですが、私が様子を窺っていたのです、それが見つかってしまった」

もはやセーラさんはツンとした雰囲気も吹き飛び、膝について祈るように謝っている。

十中八九俺の運の悪さが原因だと思うのでなんともやるせない感じ。

「お兄様……」

もう目で許してあげて、と訴えるしか無い。

結局、今後もセーラさんは弓の教師を続けられる事になった、妹のおねだりが効いた格好だろうか?

あと、今夜は猪鍋だ！　と言うぐらいの気持ちで死体をどうするか聞いたら血を抜いて解体し、毛皮などは取るけど、肉は食わないとよ。

「人間はエルフと違って肉を好むと聞きますが、それでも魔獣の肉は食べません、死ぬか病に掛かり、体が魔物の様に変異すると言われています」

セーラさんが教えてくれる、そうか、よく本の物語でエルフや人間が変身するシーンが登場するので、そういう作品が流行ってるのかと思えば、本当に変異する世界なのか……

エルフは魔法と弓が得意な森の民、つまり狩人じゃん、どうして肉食わないんだよ！　と思つたら食えないのが正解とは恐れ入ったね。ちくせう。

「姫様に人間の血が流れている以上、肉食に興味がおありになるのは解りますが、この森には魔獣ではない動物は殆どおりません、誤つて魔獣の肉を食べる事の無いように」

あ、はい……

くそー健康になつたのに肉は遠のいたよ。

戦いの後、燻ぶっていた火も消えて、巨大な猪をそのままに俺達は帰路に就く。

片づけにはお兄様に遅れてきた狩猟の専門家を取り掛かっていた。一人であんなの狩りに出ていた訳無いから、当たり前だがお付きの人が居た訳だ。それにしても「もつたないなあ」と後ろ髪引かれる思いで捨てられる肉を振り返つたのを覚えている。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
 今回の件を後日ベッドで振り返った際、転生後初めて俺の『偶然』が俺を直接殺しに
 来たんだと思いつた。

直接じゃないのはアレだ、生誕の儀。良く考えたら普通の幼女だったら詰みの場面。
 だけど神が五歳やそこで死ぬ運命の少女に、俺を転生させたとは思えない。

父様曰く、元々は朗読でも良いと纏まっていた所が、あれよあれよと話が流れ、俺が
 儀劇を演じる事変わったと言ったのだ。

——前世でも覚えがある。

アイスキャンデーを頬張る女の子のイラストを見た時、普段ならエロいと感じる所
 がアイスを食いたいと夜中に突然思い立つ。

で、夜のコンビニまで走る途中に、工事中で開きつばなしのマンホールに落ちかけた
 訳だ。

今回の大牙猪ザルギルゴールも本質的には同じかもしれない、追い込んだハズが、柵を飛び越し、罠
 を躲してこちらに来た。

そして一見して脅威であろう先生を無視して無力な俺を襲う。

何者かに思考を誘導された？ いや違う、そこに一切の意思を感じない。

何より神ですら気が付かない程の、上位存在の仕業としては、迂遠うえんに過ぎる。

一つ一つ取って見れば有り得ない事では無い。そして根拠も理由もないのだからそれは偶然だ。しかしその『偶然』こそが俺の敵なのだ。

そして同時に気が付いた、大牙猪ザルギルゴールが襲つて来た時の光景。まるでホラーやパニック映画の一場面かの様だと。

ホラー映画の山小屋でも、パニック映画の沈没する船の中でも良い。もし幼い病弱な女の子が出てきたら「あ、コイツ生き残るな」と俺は思う。

だって幼気いたいけな少女が真つ先に怪獣に食べられたら？ 誰だって胸糞が悪くなる。

俺が良く読んでいた異世界モノの小説では、主人公が可愛い幼女をバンバン救つて行くし、殺しても死なない位に主人公は俺TUEETUEEしていた。

でも、これがホラーならどうだ？ 俺の『偶然』は呪いの様な物だ、俺の人生、ジャンルは異世界転生物と見せかけてホラーなのかも知れない。

ホラーだったら勇氣も有つて機転も利く主人公だって、下手すれば死んでしまう。それこそラストシーンで幼気な少女を救つてとかだ。

ああ、今になって神が語っていた事の本当の意味が解り始める。

強さでは助からない、因果律やら周りの運命を巻き込んだ末に生き残れる可能性に縋るだけ。

今回だって兄様がいなければセーラ先生は死んでいたかも知れない、次は兄様だってピンチに成るかも知れない。

俺は今の家族をホラー映画の出演者にはしたくない、だったら俺はここを出なくてはならない。

だけど！ 人並み以下の力しかない俺が、家族の元を離れどうやって生きるのか？

あつと言う間に死んでしまうだろう。

それでは巻き込まれた田中も木村も、全てを奪ってしまったユマちゃんだって無駄死にだ。

でも、でも！ セレナは！ セレナだけは守りたい。俺に初めて出来た妹なのだ。俺は可愛い妹が死ぬ所だけは見たくない。

……ああ、そうだ、もし俺の『偶然』にセレナを巻き込みそうになったら。その時は俺が先に死ねば良い。

俺の頼りない魔法でも、か弱い俺ぐらいは殺せるだろう。

そう思う事で、やっと俺はうなされずに眠れるようになるのだった。

キチキチプリンセス

あれから二年が経った。

歳を重ね、俺はどんな健康に……と思ったのだが、期待にそぐわず俺の健康値はいまだに15止まり。ただ15もあれば病弱なりに生きていける、と言う感じなので無理はしないように体を慣らして行っている。

普通に出歩くだけなら止められない程度にはなっているので、俺はここ二年の間に念願の『異世界N A I S E I チート』を試みた。

異世界転生モノで驚くのが井戸へのポンプ取り付け率だ。正直、俺は、何の予備知識も無しに異世界に放り出されて、手押しポンプを作れる気が全くしなかった。

だと言うのに「異世界に転生したからにはポンプぐらい余裕だよー」とばかりにぼんぼんとポンプを作る主人公達に、中学生だった俺は焦りに焦った。

「アレ？ 俺ひよつとして頭悪いのかな？」と怖くなった俺は、慌ててwikiを見て作り方を調べたモノである。なるほど単純な構造とは思ったが、実際に作るとなると工作精度も必要そうだし、こんなの図面を引いて伝えられるのかと冷や汗をかいた覚えアリ。

しかーし、俺には『参照権』がある！俺の事は歩くWikipediaと呼んでくれ！前世で一度見たwikiなら詳細に思い出せる！

今こそ『異世界で内政チートは出来るのか』の答え合わせをするつもりで、鼻息も荒く井戸に乗り込むと、魔法で勢いよく水を汲むエルフの姿が其処にはあった。

……なるほど、なるほどー

フムフムと訳知り顔で頷きながらクルリと踵を返すと……俺は部屋でそつと泣いた。

よく考えれば……だ、エルフは全員大なり小なり魔法、もしくは魔道具が使えるんだから、キツイ肉体労働の部分はそりゃ魔力を使う。電力で機械化した現代文明と大差がない。汲んだ水だって建物の屋上に貯水してあり、水道管を通って魔力を込めると水が出る仕組みまで有るってんだから恐れ入る。

畑仕事だって当然魔法だ。魔道具で作られた畝うねがキレイに並び。雑草は山羊バクに食べさせる。

つまりだ、内政チートの道は閉ざされた……と、そう言う事みたいだ。

次だ！他に転生のお約束と言えば？ハイ、そうです！料理です!!

食生活の改善は健康になりたい俺の願いとも一致する。

しかし……だ、小麦が乏しい、肉が無い、卵が無い。

もうこの時点で料理チートは両腕複雑骨折してる様なもの。この条件で料理チート

が可能な日本人なんざ居ねーよ！ 居るなら嫁に来てくれ！ いや俺が行く！

俺はタロイモの料理なんてなんも知らない。芋だからって肉無しコロツケでも作るかと説明すれば、パルツコの事ですか？ って聞かれた訳で、つまり既に有りましたと、ちなみに美味しいもんじゃなかった。

コロツケが作れるって事は油は結構有る訳で、石鹼も存在してるし、おまけに高品質だった。つーか現代日本にこれを持って来れば天然素材の高級石鹼としてチート成り上がり出来る気がする。

良かったなエルフの民よ、日本に転生すればチート出来るぞ！ 俺はもう諦めて良いか？

いつそ料理チートは諦めるにしても個人的な健康状態の改善には取り組みたい。

そう！ 動物性たんぱく質だ！ ヨーグルトだけじゃなく、クリームやバターは有ったのでバターミルク共々、最近は結構出してもらえる事になった。

後はチーズだ、チーズはこの世界には普通に存在していて、本によると人間の間ではヨーグルト以上に普及している。

ただエルフの国にはなかったので作ろうぜーって言って作ってもらった。と言うのもエリールと言うイチジクっぽい植物とミルクを混ぜると固まると本に書いてあったので、すっかり廃れてしまったエルフのチーズを文献を頼りに復活させたと言う訳だ。

味は……まあ美味しいとは言えないかもだが、先ほどのコロツケと一緒に食べたりすると味気無さが大分解消される。後はナッツと一緒に本を読みながら手慰みにポキユポキユと食べている。

保存もソコソコ効くので旅をする人や、後は酒のつまみとして人気が出てきていると聞いた。ユマ様が療養のために食べていると宣伝しているらしい。それで量産されて安定供給してくれるなら万々歳だ、名前ぐらい幾らでも使ってくれ。

そういう意味で初めての内政チート成功な訳だが、膨大な読書の賜物であり、1ミリたりとも前世の知識を使った転生チートじゃないのがなんと……「前世の俺の人生って何だったんだろー」と虚しくて仕方が無い。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、そろそろ俺は次の野望に手を掛けようとしていた。

肉だ！

微妙なチーズを齧っているとますます肉が恋しくなってしまった。

俺は肉に思いの丈をぶつけるために、エルフの狩猟小屋で決意を固めている。狩猟小屋と言っても王都の拡張に伴い、町から近すぎて最早キャンプ場扱いされている場所だ。

お付きの人は居ない、わがままを言つて一人で来た。どこかで見張つて居る可能性は

有るが、もういい、今日俺は肉を食う。

魔獣は食べられないと言う理不尽。確かに異世界モノでそう言うルールの作品も見たことが有ったが、どうせなら顔が豚なだけで人型のオークでも美味しく頂ける異世界に転生したかった物である。

正直、今ならオーク肉でも倫理とか糞食らえでかぶりつける自信が有る。何なら前世でオーク呼ばわりされていた田辺君のお腹にだってかぶりつける！……やっぱり可哀想だから止めてやるか。

今日の狙いはブーブー鳥、ドードーみたいな名前だが普通に飛ぶ鳥だ、この森では珍しく魔獣ではなく動物だと言われている。

となれば狩るしかあるまい。

弓を片手に狩猟小屋を出る、他の荷物は小屋に置いてきた、勢い良く駆け出す先は湖、小さくて水質も悪いため泳ぐには向かないが、魚や鳥は多くいるのだ。

ちなみに魚だが食べるエルフも居る、食べた事は有るが、川魚特有の臭みが有るうえ淡白で肉を食いたい欲望を抑えられるものじゃなかった。その上、水質的な問題か食うと腹を壊したりする事が多いと聞くので普通は食べないし、そもそも川辺は魔獣だって来るのでそんな冒険は出来ない。

俺は前々から川辺の木に止まるブーブー鳥を狩ってやろうと当たりを付けてきた。

祈るように狙いの場所に走ると、果たしてブーブー鳥は何羽か木に止まっていた。

フウーフウー

ブーブー

小さい土手の影に滑り込み、深呼吸で息を整える。俺の呼吸音が名前の由来となった特徴的な鳴き声と重なる。ブーブー鳥で間違いない。

土手に片膝を立てて身を乗り出し、そのまま構える。普通に考えたら遠い。でも俺には魔法が有る。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

——シユ、ズパツツツシユウウパアアアン！

当たった？ 当たったよ！ マジか！ 一発で当たるとは！

落下した仲間を見捨てて、ギャーギャーと逃げ出すブーブー達。俺は慌てて木の下に駆け込んで死体を回収。

ここが意外と危ない所で、横取りしようとして魔獣が駆け込んでくる恐れがある訳だ。俺は呼吸を殺して走る。

ハアツ！ ハアツ！

獲物を手に駆け込んだ狩猟小屋。俺は未だに興奮が冷めやらない。

荒い呼吸を必死で整える。お稽古でも思ってたけど俺の弓の腕、なかなか捨てたもん

じゃない。弦楽のお稽古も思ったよりモノになってそうだし、歯を食いしばって生きていけば意外と行けるもんだ。

ってか弓よりもいっそ弦楽のが良いかもな。俺の体力じゃどうやっても荒事には向かない。これからどんな不幸があるか解らない以上、いっそ弓の腕を磨くより、可哀想だねと同情される生き方を研究した方がいいかも知れない。

今の俺はお姫様だから生活には困って居ないが、不幸体質である事を勘案すれば、最悪、国を追い出されるぐらいの可能性は考えた方が良さそうだ。

強くなるより強い奴らに守って貰った方が生存率が高いと信じての転生だった事を考えると、人間相手に流しのギタープリンセスとしての余生を狙うのが正しいのかもしれない。

「実はおばさん、昔はエルフの国のプリンセスだったのよう……」

なーんて客に言いながら不幸話で食っていくみたいなのだろう？ 神様が厳選したんであろう俺の複雑な生まれのおかげで、演目には困らずに済みそうだ。

そんなどうでも良い事を考えてるとスツカリ息も整った。まず羽を筆る。これがかなりの重労働で、すぐに手が痛くなる。

足で羽を踏みつけて両手で引つ張ったりと色々試したが、結局、生える向きを見て、丁寧に抜いた方が早かった。

……折れた羽が残ると、取るのが滅茶苦茶大変なんだもん。

羽の処理が終わると血抜きと内臓の処理だ。頭を落として血抜き。前世の鳥の丸焼きの記憶や、本で見た知識をもとに腹を搔つ捌いてそこから内臓を取り出す。これも大変だがやり遂げた。

足も切り落として、頭の肉や内臓と混ぜ、よく刻んで叩いてミンチにする。

実はこのミンチも主役の一つ。このミンチに油をたっぷり引いたフライパンで炒める、キャンプ場化した狩猟小屋は窯や鍋は充実していた。フライパンや塩、油は持ち込みである。

二十分ほどで色が変わり茶色くなったところで、王宮の台所からパクってきた蜂蜜を投入。貴重品なので普通に怒られそうで怖い。

ぐちゃぐちゃと混ぜ合わせながら更に過熱、もう真つ黒と形容しても良い危険な色合いだ。匂いは良い感じ、しっかりメイラード反応が起きている。

そこにたっぷり塩を足して味見してみると・・・おおっ！『けっこう醤油』している、ケツコーマンと名付けよう！

この醤油作成こそ、隠しミツシヨンだったと言つて良いだろう。俺に取つて醤油の無い生活もまた耐え難い物だったのだ。

しっかし、この醤油コスト凄いよな？ タンパク質は豆、糖分は玉ねぎみたいに熱す

ると甘くなる野菜で代用出来ないもんかな？　今回は一緒に食っちゃうけど残りカスみたいな黒っぽいミンチも出来るし。

肝心の鶏肉本体は、鍋を被せて鍋の上から炭やら薪で過熱する、蒸し焼きに成ったらいいなーぐらいの気持ちだ。三十分ほどで開けてみたらちよつと危険な気がしたので追加で二十分。

一回開けちゃったのもあって、蒸し焼きつて感じじや無くなつたけど皮もパリパリで結果オーライでは無かろうか？　解体にも使ったナイフをキッチリ洗って切り分けて、ケツコーマンさんを振りかけてさあ実食。

「おおおおおおお」

美味ーい、うまいぞー、これが肉だ！　醤油だ！　焼き鳥だー！

ナイフで切る、頬張る、噛み締める、美味い。そのの繰り返し、時折内臓の取り漏れが有ったのはご愛敬か？　大きいと思つた丸焼きが見る見る小さくなる。

「ケプツ」

結局一人で殆ど食いきってしまった、いやー満腹満腹、余は満足じゃ。

満腹のお腹をさすりながら考える、こりやー成人の儀もいけるんじゃないかと。

成人の儀、それは生誕の儀をこなした子供が次にこなすべき試練だ。つてか生誕の儀は試練でもなんでもないので実質、成人の儀が最初の試練だ。

成人の儀で初めて大人として認められる。エルフの中では生誕の儀前は生まれたい扱いで、生誕の儀の後から成人の儀までが子供、成人の儀以降が大人と言う訳だ。

その内容は簡単に言うとお使いだ。エルフの祠って言う聖地の一種まで行って帰ってくるだけ。

問題は昔は祠と町が近かったのだが、都が遷移した際に祠が遠くなってしまったと言うのだ。迷惑な事だがそのお陰で八歳で行うと言う年齢制限が緩和され、十二歳までに行えば良いと変わったのは有難い。

近所の商店街へのお使いが隣の県まで自転車で冒険に変わった感じだろうか？

いや、エルフは育ちが早いと聞く、それで十二歳って事は話以上に危険な道のりと考えた方が良さそうだ。ってか二年前みたいに巨大猪に発見された瞬間に詰む。

何か必殺技が欲しいな、レーザーとか？ いや逃げる為に兄様がやってる木の間を飛ばすように移動する魔法が良いんじゃないか？ 教えて貰おうか、今なら何でも出来る気がする。

しかしこのままでは眠ってしまうなど立ち上がろうとした時だ、急に眩暈がした。

え？ と思った次の瞬間、のどの奥、胸に近い所に激痛が走った。景色が歪む、立ち上がった筈が横になっていた、倒れたのだと理解するのも時間が掛かった。

「あ、ぐう」

声も出ない、のどが痛い、歪む世界がゆっくりと暗くなっていく……………

どれぐらいだろう、長い間、のどが、頭が、目が、お腹が痛い、と、壮絶にのたうちまわった気がする。

真つ暗闇の中で痛みと苦しみだけが何度も襲ってきた。

このまま死ぬのか？ 俺は鳥を食って食あたりで死ぬのか？ そんな間抜けな死に方で良いのかよ？ 何のために覚悟をしてこの世界で一人の女の子の命を乗っ取ってまで生きて来たんだよ。クソツ、クソツ。

……痛い、痛てえ、くるし、つらい。

暗闇の中誰かの声が聞こえた、誰だよ？ 誰が俺を殺すんだ？ 誰が俺に嫌がらせみたいな不幸を持って来やがるんだ？

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

セレナ、妹か。セレナだったら良い、騙されたって裏切られたって構わない。

セレナの所に行こう、セレナが死のうって言うのなら死んだって良いんだ、セレナの所に行こう。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「セレナ？」

目の前に泣いてる妹が居た。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

セレナが抱き付いてくる、重い、二年でセレナも大きくなった。俺は何日寝ていたのだろう、自分の腕が痩せこけて見える。

「お姉ちゃん四日も目を覚まさなかつたんだよ、苦しそうにずっとうなされてて」

四日か、流石にそれだけ一切の意識も無く寝込むのは、最長記録かも知れない。

今までは仮死状態かと言うぐらいに静かに眠って三日と言うのが多かったから、うなされての四日は珍しい。酷い消耗をこの身に感じる。

「あの、お姉ちゃん、だ、大丈夫？」

心配するセレナに大丈夫と答えようと思ったとき、ふと鏡が目に入った。

ベットの上に誰がいる、誰だ？ と思ったがベットの所に居るんだからそれは『俺』に決まっているのだ。ただ、俺は俺が俺だと認識できなかった。

セレナは俺が鏡をみて固まったのに気が付いた様だ、鏡と俺を見比べて笑って見せた。

「大丈夫だから、セレナはお姉ちゃんの髪の色が変わっても気にしないから」

そう、鏡の中の俺は、髪の色が、妖精と例えられた銀髪から輝く様なピンク色が変わっ

ていた。ピンクシルバーとでも言うか、アニメでも中々居ないような派手な色合いと言えよう。

よく見ると目まで、いや右目だけ銀からピンクに染まっている。虹彩異色症^{ヘテロクロミア}、これまた中二病的な因果を背負っちゃったな。これ治るのかな？ 治れない気がするな……話を聞くと、狩猟小屋で気絶してるのが見つかってお屋敷に引つ張って来られたと、どうもやっぱり監視してる人が居たらしく、なかなか出てこないから踏み込んだら気絶してましたと。

発見したのは御側付きとして長いピラリスだったので、初めはいつもの事と思っただけなのに、珍しく俺がうなされている、……で傍には鳥の残骸が有るんだから。

「こいつ食ったな」

とバレて、毒にでも当たったかと思いついて慌ててお部屋に連れて来たらしい。

後で調べると、ブーブー鳥も魔獣の一種とする説が有り、だとするとこの髪と瞳の色の変化は魔獣の肉に依る『変化』の一種なのかもしれない。

角が生えたりしなくて良かったと思えばいいのだろうか？

もちろんこの件で俺は家族総出で猛烈に怒られ、二度と獣肉を狩って食べないと約束させられてしまった。当然であろう。

一方で、心配していた髪と瞳の色だが。

「ゼナが赤髪だったのだからその血が出てきたのではないかと。ゼナの子が銀髪な事の方が不思議だったのだが、途中で色が変わるとすれば納得だ」

と父様に言われて、俺も深く考えすぎていたなど、えらく納得した。異世界なんだし、成長と共に髪色が変わる民族とか居ても不思議じゃ無い。

参照権で見る母は見事な赤髪だ。そう考えると、金髪の父との間にピンクゴールド？ピンクシルバー？似たようなもんだな。そんな色の娘が生まれるのは納得感がある、遺伝子的にはどうか知らね、異世界バンザイ！

しかし、本当に驚くべきは鏡で測った数値の変化だった。

健康値：6

魔力値：126

四日もうなされたのだから健康値6は解る。問題なのは魔力値の伸びだ。

この歳の伸びとしては異常なレベルで、既に一般的な魔力の平均ぐらいに到達した。これは変異？の影響なのだろうか？結局これも解らず仕舞いとなるのだった。

成人の儀

アニメキャラみたいなのピンク髪 変異事件の後は何事もなく冬も終わり、春が来た。

春は妹の生誕の儀だ、姉に演劇じゃないとダメと言ってしまったので、長老は今更、「妹は純エルフだから朗読でも良いよ」と言える筈もなく儀劇となった。

ま、そんな理由がなくともお姉ちゃんに憧れたセレナは劇をやる気満々だったのだから頼もしい。

となればお姉ちゃんが一肌脱ぐしかあるまいと、セレナが演じる母パルメの姉にあたるパメラの役をこなすつもりでいた。

姉妹いっしょに花冠を編む光景は、もう開幕から観客が萌え死するに違いないと期待に胸を膨らませていたのだが……髪がピンクになってしまったので丁度良いとばかり、今回も俺は生みの親である赤髪のゼナ役となった。

ただ、パルメ視点で物語を編纂するならゼナはほんのちょい役だ、でっかい蛇と戦うときになんか居たかな？ 程度。絡みはラストシーンぐらいで、それまではゼナとエリプス王の仲が進展していく様をヤキモキしながら「嗚呼どうして私じゃダメなの！」と

言いながら一人でポエムを読むシーンが多い。

ちなみにポエムは母パルメが日記に書いた当時の貴重な資料を公開してくれた。正直妹様が困ってる様を初めて見た、可愛かったので良しとしよう。

今回、なんと奇跡的にスキヤンダルを乗り切ったゼスター氏のエリプス王の再演が期待される向きも有ったのだが、当然お断りして、マーロウ少年のリベンジの機会となった。

いや、もうマーロウ少年は少年じゃない、十歳となり既に成人の儀をこなしたのでマーロウ氏と言うのが正しい、でも本人は「これをやり切らないと大人にならなかつて両親に報告できない」と凄い力の入れようだった。

そんなこんなで終わってみれば、パルメ視点で当時の資料（ポエム）を交えながら語られる新しい物語は観客に大受けだった、新しい演目になりそうだと聞いている。勇猛な男性が複数の女性と紡ぐ物語ではなく、一途な恋に翻弄される女性の物語なので女性受けが良いそうだ。ま、妹セレナは普通より大分頭が良いので失敗は有り得ないから、そもそも不安は無かったのだが全く緊張しないのがやっぱり凄いなと驚いた次第。やっぱり家の妹が一番かわいいのだ。

その後は、夏は別荘、秋は収穫、冬は弓とか楽器のお稽古と言うサイクルで次々と季節が巡って行った。いやお稽古は他のシーズンもやってるけど、冬は他に何も無いので

お稽古が長いと言うだけなのだが、俺にとっては生き死にに関わるので歯を食いしばって全力で取り組んでいる。唯一の問題は宮殿の図書館の本を読み切ったぐらいだ。

あとはちよいちよいと公式行事への顔見せイベントが挟まったり、なんだかんだチーズは結構普及して、刻印された俺の横顔のマークがブランド化している。飲み屋のつまみの定番になったみたい。

そして、あつと言う間に時は流れ11歳の冬が来た。

健康値：17

魔力値：213

健康値は微妙な所だが、魔力値213はエルフとしてもかなり多い。そしてこの冬、俺は成人の儀に挑戦する。

「さあ！ 行きましようお姉様！」

そう、セレナも一緒……一緒なのだ！

セレナだつてもう八歳。成人の儀に行ける年齢だ。普通に考えたら俺がセレナの面倒を見るべきだが、おそらく両親の狙いはセレナが俺の面倒を見る事だろう。

そのために俺の成人の儀をギリギリまで遅らせたを見る。

つてか、今朝見送りの時に割とハッキリ言われた、「セレナとはぐれるなよ」……と。

お姉ちゃんの信頼感ゼロ。

そんなセレナの健康値、魔力値は？ ジャーン！

健康値：22

魔力値：2126

は？ 意味が解らん。なんだよ2126って。

俺は本を相当読んだ、常識も学んだ。前世で統計の基本だって何となく知ってる。

——で、この2126って数字。控えめに言っても化け物である。

歴史に残るような大魔法使いでも魔力値を1000の大台に乗せるかどうか。

2000超えと言うことはその倍、しかもセレナはまだ八歳である。

筋力みたいなモンで、魔力だって鍛えれば伸びるし、専門の教育を受けている王族の魔力は軒並み高レベルになる。

それにしたって十倍。重ねて言うが、俺の魔力だって多い方である。十倍と言うのは個性の枠に収まるレベルじゃ無い。

この異常さを例えるならば、握力400kgの人間が居ました位の衝撃だ。

……そこでふと思った、人間じゃなければ？

たとえば人間の祖先は猿だと言うが、ゴリラやチンパンジーの握力だったらどうだろう？ 400kg、不自然ではないんじゃないかな？ ひよつとしたら妹は魔法が得

意と言われるエルフの更に先祖返りのな存在？

「お姉ちゃん？ どうしたの？」

いけないいけない、セレナを不安にさせてしまった、全然成長していないな俺。

「何でもないのでよ、セレナがなんであろうと、私はセレナの味方だからね！」

「うん、わたしも！ わたしも、お姉ちゃんがどうなるうとセレナはお姉ちゃんの味方だから」

いやー可愛い。ゴリラどころか天使じゃないか？ 天使だとすれば魔力が高いのも納得、オールオツケーである。

じゃあ、行きますかと魔力を込めて言葉を紡ぐ。

「よし、じゃ、行こっか！ 『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』」

これは移動に風の補助を乗せる呪文。矢に風の祝福を乗せてスピードアップさせたのを自分に掛ける訳だ。

一歩間違うと危ない魔法だが上手く使えばお兄様みたいに木を蹴っ飛ばしながらピンポン玉みたいな高速立体機動が出来る、

まあそこまで頑張らなくても今回は魔法をかけた上でちよつと急げばだいじよ……

「ねえ、お姉ちゃん？ お空飛んじゃダメ？」

え？ つと思わず妹を見てしまう。

そう、妹は膨大な魔力量に物を言わせて飛べる。それはもうギユンギユン飛べちゃう。でも、俺はそんな魔力の使い方をすればすぐに燃料切れで墜落してしまう。うーんお姉ちゃんには無理かなー？

「大丈夫、魔力の制御、すつごく練習したから、お姉ちゃんと一緒に飛べるよ！」

セレナは嘘も誇張も言わない、つまり俺と飛ぶために必死に練習したのだろう、となればもう断ると言う選択肢は無い。大丈夫だ、万が一墜落してもセレナと不時着するぐらいの魔法は使える、多分。

しかしなんでだろう？ 前世でバターを塗った面から緊急着陸を決め、絨毯をべたべたにしたトースト君の姿が思い出されてしまうのは。良くない、良くないよ！ フラグは断ち切る物。

「解ったわ、じゃあ私はどうすれば良いのかしら？」

「えと、セレナにギユっつとしがみついて」

身長が20cmも低い妹にしがみつく図、どう見えるだろうか？ まあとつくに王都を抜け、人気のない場所だからどうでも良いのだが。

「じゃあいつくよー『我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を』」

呪文が終わるや否やギユンつと加速を感じ、気が付くと木々が小さく見えるまでの高度に上っていた、しがみつく手にじつとりと汗が滲む。空気抵抗でギャーつてなる覚悟

をしていたが風の加護なのか抵抗が一切無い、それはそれで怖い。

「うーんあっちの方かな？ どう思う？ お姉ちゃん？」

「北の方角だから合ってると思うわ」

「よっし、じゃあしゅっぱーっ」

魔力の流れで何となく方角は解るし、それを利用した魔導コンパスも存在するのだが、魔力溜まりとかで狂う事もまま有るのだ。太陽の位置で方角を判断するのは数少ない俺の役目だろう。

セレナが北を指差すと凄いい勢いで加速し、同時に景色が途轍もない速度で流れ落ちて行く。驚いた事に思ったより快適だ、目が慣れてくれば流れゆく景色を見る余裕まで有る。冬の景色なんて、と思っていたが空から見ると美しい。

冬もそろそろ終わりになる、南の方から春が迫っているのが解る。妹の溶接バーナーみたいな魔法でギヤーギヤー言っていたのからもう六年も経っているのだ、セレナも成長している。俺たちは古代のエルフの都へと一路、北へ飛んで行った。

……成人の儀がなぜ大人になってからなのか。

ただのお使いで成人の儀なんて訳は無かったのだ、調べるとエルフの祠って奴は、暗い洞窟の奥の奥にあるらしい。

俺たちは早くもその洞窟の前まで来ていた。

文字通り飛んできたのだ、それこそあつと言う間だった。それに魔導コンパスは古代の王都を示す様に出来ているのだから迷う要素すらゼロなのだ。

キツチリと王都を指し示すコンパス。謎システム過ぎる……

いや……魔力の中心に王都を建てたと考えた方が自然か？ そんな事を考え込む俺にセレナが元気に声を掛ける。

「でつかいね、お姉ちゃん」

「そうね、大きいわね」

洞窟と言うが入り口は神殿の様ですらある。二体の巨大なエルフ像が洞窟の脇を守るように仁王立ちしている様は圧巻だ。

「動きだしたりしないわよね？」

「ふふっ動いてもセレナがやつつけてあげます！」

妹は冗談だと思つたようだが、巨像を見るとゲーム脳が刺激される。歴史を感じる建造物に思わず、「これ近づくと動き出す奴だよな？」と思つてしまった。つてかセレナだったらコレが動き出しても普通に倒しそうで怖い。

「頼もしいわ！ 頼りにしてるからね、セレナ」

「うん！」

手を取って二人で歩き出す、真つ暗な洞窟に足を踏み入れた。

「我、望む、我が身に光の輝きを」

暗くなってきたので光の魔法を使う、自分の体がうつすらと発光する魔法だ。ちなみに妹は光の弾を手の上に浮かして転がしている、俺は万が一を考え、片手が塞がるのを嫌った格好だ。

「光ってるお姉様綺麗……」

お姉様頂きました！ 二人の時にお姉様呼びは結構レアだ。溢れ出す神々しさに感じ入ったご様子、実際に光ってるんだけど。

「もう、馬鹿な事言わないの！ 行きましょう」

行くんだぜー

洞窟の中は魔獣だらけ……って程も無かったが、でっかいネズミがそこら中にいて怖かったり。でも、それをひたすら魔法で殺していくセレナの方が怖かった。

「我、望む、この手より放たれたる風の刃を」

呪文は同じ呪文を繰り返していると省略できるらしく……

「我、望む、放たれたる刃を」

「我、望む、刃を」

「どんどん短くなる呪文でサクサク倒していく、つてかここまでお空を飛んで来てるんだよ？」 妹様の魔力は無限か？

「あ、『我、望む、この手より放たれたる、強く大きく熱く疾い、炎と風の鋭き刃よ』」
セレナが本気っぽい呪文を唱えるとギョーンと勢い良く逆巻く炎の刃がカツ飛んで行く。

——ザクザクザク！

ブモオオオオオオオオ!!

ひどい音がして魔法が向かった先を見てみると……

ザルギルコール
「大牙猪！」

左右に分割された巨大な猪の死体が出来上がっていた。

え？ あんなの居るの？ 俺一人で来てたら詰みだったんじゃない？

今でもハッキリとコイツに追いかけられた事はトラウマだ。と言うか誰だつてこんなのに追いかけられたらトラウマだろう。

魔獣だらけの森で過ごし、並の魔獣では動じないエルフであっても、前世で言う「熊が出た！」ぐらいのインパクトを与える力がこの魔獣には有る。

それを一撃で真つ二つにするセレナの魔法がいかに常識を超えているか話。
流石のセレナもこの魔獣には驚いた様子で、

「最近この辺り魔獣が多いから注意しなさいって、母様も父様も言ってたけど、凄いのが出たね……」

「ううっ、こんなのがいっぱい居るなら、姉さんだけではとつても無理だわ」

「大丈夫！ セレナが居るから！」

「ありがとう、セレナ」

セレナの頭をなでる、もう完全におんぶに抱っこだ。

「ってか、コレも俺の運の悪さの所為かな？ そうだよな、だってこんな魔獣が闊歩してたら十二歳以下の子供が幾ら束になっても全滅でしょ。王族以外は友達とグループで儀式に臨むって言うけど、子供が何人居ても無理だよコレ。」

更に進む、洞窟と言っても岸壁をくりぬいて人が作ったものなので、石畳に壁もブロックが詰まれている洞窟って言うよりもダンジョンと言うべき内装だ。

宝箱とか探したくなってしまおうが、お宝は祠に有る宝玉だ。って言っても価値のある物では無く、祠に行きましたよって証の意味しかないビー玉みたいなモノなんだけだね。

俺もネズミぐらいはと魔法を使って駆除していく、たまに狸みたいのも出るので弓も使って行く、ってか狸でも前世の猪ぐらいのサイズが有るのな。

そんな俺を「うふふ」と嬉しそうに見ててくれる妹可愛い！ 抱きしめたい！

「姉様頑張つて！」

応援された！ 頑張らないと！ でも洞窟に入ってからなんとなく気持ちが悪い、湿度とかなのかな？ 逆にセレナは興奮に頬を染めて元気いっぱいと言う感じ。

そういう言ってる内に、祠の有る広間までたどり着いた、流石にしんどい道のりだった。

「あ、もう祠だね」

妹様は暴れ足りない模様、普段より三割増しで元気だ。

俺はただただ荘厳な威容に圧倒されてしまう。岩壁をくりぬいてこれだけの空間と建物を作ったと言うだけで物凄い。

「うわっ、凄いわ！ 歴史を感じる建造物ね」

「そうだね、あ、もつとよく見てみよう！ 『我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ』」

セレナの放った魔法で祠の広間に光が満ちる、洞窟の中と思えない程広い。

表にあつた巨大な像もあるし、祠自体に細かい文様が彫られている。壁には何か意味あり気な幾何学的な模様もあるし雰囲気バツチリだ、雰囲気があり過ぎて普通に怖い。

本を読んだ感じ、エルフの王国の歴史は千年以上有りそうだった、その歴史を感じさせる建造物。この聖地を守るためにエルフは国を作ったとすら言われているのだ。

「お姉ちゃん！ アレなあに？」

「なあに？ どうしたのー……」

え？ 祠の像の後ろから巨大な、巨大ななんだろう？ ハルキゲニアみたいのがのつそりと姿を現した。いや、あんなの本で見た事有るぞ？ それこそ本で何回も見たえーと

え？ マジ？ アレ？

「バウギユリウアル！！
王蜘蛛蛇!!!」

「えー！ アレがそうなのー！」

「セレナー！ ゆっくり逃げてー！」

エリプス王こと家の父上は普通に強い。あの兄様よりも強いって言うんだから相当だ、それが討伐に失敗し返り討ちに有った事もあるこの森で最強の魔獣。

もうこんなの成人の儀どころじゃないだろ。普通に軍隊出動レベルの事態だよ、とつとと帰って報告しないと。

「うん、あー来たー！」

速い。うじゃうじゃ有る足でビデオの早回しみたいな速度で、気が付いたら目の前に居た。

——ギユルウウウウ

変な音がしたと思ったら白い糸が体に巻き付いていた、蜘蛛だから糸だと言われてい

るが、間近で見えて解った、これ系じゃない！ 胸の辺りから生えた触手だ！

「ぐ、ぐうう」

息が漏れる、締め付けられている、苦しい。

「おねーちゃんを離せ！『我、望む、この手より放たれたる、強く大きく熱く疾い、炎と風の鋭き刃よ』」

無駄だ、王蜘蛛バウギユリグアルが最強の魔獣と言われているのは強い魔法への耐性が理由だ、セレナの魔法は魔獣のパーソナルスペースでかき消され……

——ギョオオオオ

……結構効いてるな。

焼き切られた胴体の一分がピクピクしている。

ブヨブヨとした軟体の体は魔法を打ち消し、斬られても再生すると聞いていたのだが……やっぱ、セレナの魔法凄すぎるんだな。

でも、セレナとしては真つ二つに切断出来なかったのはショックみたいだ。今までの魔法で倒せない敵など居なかったのだろう。

「うー！ ううう!!」

「あう！ セレナ！ お願いだから逃げて」

なんとか声を絞り出す。でもセレナは諦めない。完全に俺は邪魔してるだけだ、情け

なくて涙が出る。セレナを守るなんて出来ないかもと思っただけ、でもセレナに守られる事すら満足に出来てない。

「お姉ちゃんを離せ！　このお『我、望む、大気に潜む燃焼と呼吸を助けるものよ、寄り合わりて、大いなる業火となりて強き炎を生み出せん』」

あ！　俺が昔教えたガスバーナーの魔法。

だけど今回は『ささやかなる種火』じゃない！　全力で出すつもりだ！

——ゴオオオオオオオオオオオツツツ！

セレナの手から極太のレーザーみたいな青白い炎が噴き出す。

——ギョオオオオオオオ

盛大な鳴き声、唸り声、触手も燃え上がり俺は解放される。振り返って、バウギユリヴァアル王蜘蛛蛇を見てみると……滅茶苦茶燃えてらっしゃる。

……エルフの王国を揺るがす程に魔法防御が強い、とは何だったのか。

「やったよお姉ちゃん!!」

「逃げるわよ!」

「え?　もう倒したよ?」

確かに、信じられない事に妹は一人、どころか俺のようなお荷物を抱えて、神話級の魔獣を討伐して見せた。凄い!

でもその魔法、洞窟で使っちゃ駄目なんですよ。

「アレえ？ 目が」

酸素が無くなるのだ、ふらつくセレナを抱える様に広間の出口に走り、風の魔法で空気を取り込んだ。

『我、望む、大いなる風の奔流を』

空気が取り込まれて一息付いた。

「やったね！ お姉ちゃん！」

「そうね、やったわね」

でもこんなので良いのだろうか？ ずっと俺は妹に頼りっぱなしのダメダメなお姉

ちゃんだ。

「ごめんねセレナ、お姉ちゃん、ずーっと足を引つ張ってばかりで、駄目なお姉ちゃん

ごめんね」

すまん、本当にすまん、なんでこうも格好付かないんだろうなあ……

「だいじょーぶ、おねーちゃんはずーっと私が守ってあげるから！」

可愛いー

うーん可愛い子ぶつた言い方で、狙ってる感有るけど其れがまた可愛い。

もうどう考えても世界一可愛いだろうが！ もうーお姉ちゃんセレナに一生守って

もうう！

嘘、流石に頼りっぱなしは駄目。お姉ちゃんも頑張らないと。

落ち着いたところで、宝玉を回収して家路についた、帰りは特にイベントは無かったが流石にセレナも魔力が無いのか飛ばずに、手を繋いで二人で帰った。

帰ってから王蜘蛛蛇バウギユリツアルの報告をすると、皆に心配と驚きをもって迎えられた。

中にはエリプス王の物語は終わっていないなかった！ 受け継がれているんだ！ と興奮さめやらぬ人々も現れて、王宮は大騒ぎとなった。

事の顛末は春の俺の誕生日に大々的に報告されるらしい、何と言うか妹の手柄が十割なんで妹の誕生日にして欲しいのだが、俺の誕生日と妹の誕生日が近いので一緒にやってしまおうと言う事らしい。

準備の都合も有るらしいので良いとして、成人することで正式に俺は、ユマ・ガーシエントとなったし、セレナもまた、セレナ・ガーシエントとなったのだ。

成人すると子供扱いはされない、つまり公務やらで働く必要も出るし、親が望むと有れば結婚させられる事も有る。王宮が血筋を維持するには必要な事だ。

そして、王家の人間が成人した際、自分を象徴する魔道具を一つ与えられる、国宝クラスの凄い魔道具だ、ただ毎年一つは王室御用達として納品されるのでそこまで貴重な

アレではないのだが性能はトップクラスの魔道具がいただけけるハズ。

セレナに贈られたのは巨大な宝石があしらわれたブローチだ、なんと一つだけ魔法を保存できるという途轍もない物で、最近開発された魔道具で、貴重な宝石を惜しみなく使用したと言う事だ、なんでも保存出来ると言っても強過ぎる魔力を込めると壊れてしまうらしいので、両親としてはセレナに魔力を程ほどにキープする練習をして欲しいのだろう。

狙い通りセレナはおっかなびつくり、ちよつとずつ大切そうにブローチを撫でながら魔力を込めていた。

俺に与えられたのはキラキラと派手に輝く王冠だ、いや、王冠じゃないんだけどそうとしか見えない感じで大分偉そうな、テンプレみたいなお姫様が被ってる様な奴、凄い豪華な見た目で被って鏡の前に立ってみると、我ながら凄い偉そうだ。

「これは？　どんな魔道具なんですか？」

「これはな、健康値計だ」

「へ？」

「健康値計だ」

いや、お父様？　授与式前の内々での受け渡しとしても冗談はキツイですよ？

「何代か前に、不健康な姫に贈られた冠だ、その姫は健康を気にしながら長生きしてな。」

それにあやかって健康値計の魔道具の機能を付与した物だ、魔道具としては貴重な品じゃないが豪華な見た目になっている、元々国宝だからな、使っている金や宝石も安い物じゃない、むしろ純粋な貴金属としては一財産だ」

あ、そういう事ですか。あー魔道具で無双って線も無さそうですね。

俺が手にした王冠の内側に表示された、

健康値：15　魔力値：220　と言う表示を見てぼんやりそんな事を思うのだ。

絶望の朝

季節は春、もう俺は十二歳になる。成人も果たして、俺は家を出ようと思つていた。

そりやそうだ、俺の魂のもたらす『偶然』と言う不具合は、他人を容易に巻き込む。このままじゃ田中と木村の二の舞だ。

それに……この国に留まっていたつて、俺の人生は変わらない、どうせ何時か死ぬ。王蜘蛛蛇バウギユリツアルをあつさり倒す様を見て、それこそセレナが守ってくれるなら……とも思つた。でも、それで何とかなるなら、神は俺をセレナとして転生させたはずだ。

きつとそれでは駄目なんだ。単純な力でどうにかなるなら、いつそ俺を王蜘蛛蛇バウギユリツアルみたいな化物に転生させるぐらいの事は、とつくに試したに違い無い。

かと言って、皆に同情されるヒロインらしい因果律を集めるつて言われても、いまだに何をするべきかは解っていない。でも、動かなければ確実な死だ。それも大切な家族を巻き込んで！

本当はもつと早く旅に出るべきだったのかもしれない。でもせめて大人として、成人の儀をこなすまではと思つていた。

正直、今でも外の世界で生きていける自信なんてこれっぽっちもない。体はマシになっただけ、丈夫とは言い難いし、本はいつぱい読んだけど、所詮は世間知らずのお姫様。

何より、魔獣だ。ちよつと外を歩いただけで魔獣が出てくるこの世界、バウギユリツアル王蜘蛛蛇はもちろん、ザルギルゴール大牙猪だつて、俺じゃ全く歯が立たない。

それでも、あんな規格外の魔獣でなければ、何とか逃げる事ぐらいは俺だつて出来るようになったと思う。

ああ、でも家を出るなんて言ったらセレナは泣くかな……俺も泣くかもしれない。でも、それでも俺はココを出ないと、このまま漠然と生きて、やっぱり殺されましたじゃ、田中にも木村にも、本当のユマちゃんにだつて顔向け出来ない。

皆の反対を押し切つて国を出た途端に、ザルギルゴール大牙猪にいきなり殺されるかもしれない。でも、それでも行かなくちゃ、1%でも皆を巻き込む可能性が有るなら動き出さないと。朝が来たら、両親に、兄様に、セレナに打ち明けよう。でも、なんて？ 神の使命が有るつて言うか？ 嘘じゃないよな？ 実は俺はユマちゃんじゃなくて体に乗っ取つた『高橋』なんですよーつてか？ ……言えるかよ、俺はもうユマでもある、説明出来る気がしない。

ああ、でもセレナには、セレナにだけは全部話しても良いかも知れない。それで怒ら

れて、殺されたって、悪くない人生だったと言えそうな気がするんだ。

そんな事を考えながら俺は眠りについたんだ、きつと幸せな朝が来ると信じて。

その日は爽やかな朝だった、こんなに気持ちよく目が覚める事など今まで有っただろうか？

「ふあああ」

あくびをして枕もとの王冠を握る、日課の健康値チェック

健康値：30

魔力値：50

……………は？

まさか壊れたか？

マズい、貰って数日しか経ってないんだぞ？ しかも正式に下賜かされるのはまだ先。

成人の儀完遂のお披露目の場での事だ。こんな一瞬で壊したとあつちや、どんだけ乱雑な姫と思われるか解ったもんじやない。いや、これ初期不良だろ？ クーリングオフだ

！ クーリングオフ！

内心パニックになりながら、慌てて鏡に駆け寄る。慌て過ぎてローテーブルに蹴躓き、テーブルの上の文房具や賞味期限が切れたチーズをぶちまけるのにも構わず、健康値を確認。

……それでも結果は同じ、俺は混乱の極みに陥った。

何が起こった？

俺がまず疑ったのは体の『変異』だ。しかし見た感じ、姿はどこも変わっていない。

——ピイイイイイイイ

笛の音が聞こえる、笛？ 警笛だ！ 緊急事態が起きている。

寝ぼけた頭が一瞬で冴える。慌てて窓から外を覗くと、王都では見たことがない程、濃い霧が出ていた。

そして『燃えている』。

王都が、燃えていたのだ！

「敵襲！ 敵襲う——」

切迫した叫び声。まさか……と思った、何かの冗談ではと。

エルフの歴史は千年以上。その歴史の中には巨大な魔獣が群れをなしての侵攻だつて一度や二度じゃ無い。それでも王都は健在だった。エルフは程度の差こそあれ、全員

が人間が言うところの魔法使い、国民皆兵どころか全員が兵器なのだ。

王都と言われながら、碌な堀も、壁も無い。有るのは魔獣除けの簡素な結界と柵のみ。それでも構わないのだ。堀や壁など作ろうと思えばあつと言う間に魔法で作れる。塔を作っても良い、上から得意の弓矢に魔法を載せて射貫いてやればいい。あの威力なら鋼鉄の鎧だつて関係なく貫くだろう。

その王都が燃えている。なぜだ？

——とココで思い至った。

魔力値：50

……まさか？

俺は慌てて部屋を出て、走る。

……体が軽い！ それも、異常な程に！

いつもだったら、寝ぼけ眼で衛兵に挨拶をする離宮の広間。そこが今は戦場の様に殺気立っていた。

「魔法は使えん！ だが、そんなモノが無くても、我々には鍛えた剣と弓がある！」

広間で叫んで兵達を鼓舞する兵士長。その言葉で疑惑は確信に至った。

あの霧だ、霧の所為で魔法が使えない。魔法が使えないエルフなどひ弱な人間に過ぎない。いや、それどころか兵士が皆、顔色が悪い。コレも霧の所為なのか？

しかし、確認する暇は無い。何が起こっているのか聞かないと。

「ユマです、皆はどうしました？」

「ユマ姫！ 部屋にお戻り下さい。セレナ様もパルメ様もお部屋にいらつしやいます」

それは良かった。……だけど、俺の予想が正しければ、セレナを、妹をこの霧の中に居させるのは危険だ。

だったら、原因を取り除かなくてはいけない。

「いいえ、戻りません」

「何故です!？」

兵士長は俺が拒否したことが信じられないと愕然とする。

そりゃ、病弱なお姫様が敵襲だつてのに外をうろつくのに、邪魔じゃ無いハズが無い。

……だけどな、その『病弱』って前提が、まず間違っているんだよ。

俺が黙っていると、兵士長は俺の腕をとって、無理矢理部屋に帰そうとする。

「お戻り下さい！ ここは私が守ります」

仕事熱心だ、だけどその手に力が籠もっていない。女の子一人、グイグイと引つ張る力が無いのだ。

……それどころか。

「我、望む、この手より放たれたる風の刃を」

「なっ!? 魔法?」

俺は指先から風の魔法を出し、兵士長の頬を切り裂いた。

「魔法が……使えるのですか?」

その傷をそつと撫で、指についた血を確認した兵士長が呆然と呟く。

「ええ、私は父様に事情を聞きに行きます」

俺は兵士長の目を真つ正面から見つて、そう言った。

「危険です! せめて兵をお連れになつてください」

どうする? いや、でも時間が惜しい。それに兵士がみんなフラフラなのだ、あんなのが戦力なるとは思えない。

「要りません! あなたたちはココを、セレナを守ってください」

この先には母上もセレナも居る、守りは必要だ。でも俺は父様と霧を止めないと!

「ユマ様! ユマ様! いけません」

兵士長を無視して駆け出す、やはり体が軽い?なぜだ?

いや一つ思い当たる事がある、図書室の本をありつたけ読んだが、魔力が体にどんな影響を与えるかかと言う本だけが不自然に無かった。抜き取られているのでは無いかと、そんな風に思えてならなかったのだ。

この森は魔獣に溢れている。そんな危険な土地に、どうして優れた種族を自称する工

ルフが住み続けなくてはならないのか？ 資源が豊富なわけでも、森で狩りをして生計を立てている訳でも無い。

そもそもなぜ魔獣はこの森に集うのか？ その理由と原因は同じなのではないか？

ひよつとして、猪が魔獣になったのがあ、ザルギルコル大牙猪なら、人間が魔獣化したものがエルフなのでは？

その仮説が正しいのならば、魔法が使えない事も、ハーフェルフの俺が普段は青白い顔でヒーヒー言っているのに今は体が思い通りに動くのも、エルフの兵士たちが、まるで普段の俺みたいな青白い顔をしているのも……

……大気の魔力が無いと言う一点で、説明できるのでは無いか？

先程の魔法、本当は大木ですら切り裂く威力なのに、コイン一枚分の小さな風の刃が発生しただけ。

この霧はきつと魔力を文字通り霧散させてしまうのだ。だからこそ、俺の魔力値が50と少なくて出た。

そして、魔力が奪われる事で兵士達は体調不良に陥り、健康値が無い。だからこそ、俺の放った小さな風魔法ですら掻き消される事がなかった。

この霧を人間が使ったらどうなる？ エルフは動けず、人間だけが動けるのではないか？

俺は廊下を走る、走る。

そして……隠れた。

予感を裏付ける様に、離宮と王宮を繋ぐ通路のそこかしこに敵兵が、人間がうろついていたからだ。

そしてそれ以上に有ったのがエルフの死体だ、王宮へ至るこの場所には戦闘経験の無い文官が多い。抵抗も出来ずに殺されている。

王宮へ至る通路はどれもが入り組んでいる。さんざん呪ったこの通路が今はありがたい。勝手知ったる我が家だ、気配を隠そうともしない鉄の鎧をガチャガチャ言わせる人間を巧みに避けて、俺は王宮の中に滑り込んだ。

ああクソツッ！ 王宮の中は離宮以上の地獄だった。死体がそこら中に転がっている。それもエルフの死体が圧倒的に多い。

マズい！ 敵の布陣は？ 敵はどうやって侵入しようとしている？ 敵の本体とか合わない様に父様の元へ行かないと！

焦る！ 焦る！ でも離宮と違って俺は王宮には詳しくない。

何かヒントは？ 離宮と建物の作りに共通点が無いか？ 死体にまみれた広間を見回すと、死体の一つと目が合った。

それは昔、俺の御側付きを勤めていたピラリスだった。何度も倒れる俺を助けてくれたピラリスも元々はやり手の文官の一人、最近俺の御側付きから復帰して、王宮に勤めているとは聞いていた。

ピラリスの傍に膝を折る、この時まで俺は死を実感出来ていなかった。ゲームのイベントみたいにぼんやりしていたのだ。だってそうだろう？ たった一晩で全てが変わってしまったんだ、付いていける訳がない。

「ひめ、さま？」

正直、その死体から声を掛けられた時、ギョツとした。

死んだと思った知った顔が思いがけず生きていたと言う喜びよりも、それだけの怪我でまだ生きているのかと言う恐怖が勝ってしまったのだ。

それ程の大怪我、もう長くない。だけど俺は聞かなくてはならない、この惨状の原因を！

「ピラリス？ ピラリス！ ユマよ！ 何があつたの？」

「ひめさま、にげて」

そうだよな、でもこのまま逃げられないだろ！ 俺は必死に首を振った。

「教えなさい！ ピラリス！」

「せんそうです、てきが……せめてきて」

戦争……突然、戦争が始まったのか？ そんな事があり得るか？

……そういえば、一週間ぐらい前に突然軍事演習が決まったのだ。だから成人の儀でも魔獣の間引きが甘く、あんな事になったと聞かされた。

だけど、本当は演習じゃなく人間が進軍していたと言うのか？ 何故そんな嘘を？
いや、……本を読み漁った俺なら、理由は解る。

エルフにとって人間の襲撃など、数年に一度ある風物詩に過ぎなかった。何度も何度も散々に蹴散らし、追い返してきたのだ。わざわざ国民に知らせる程のモノでも無かった。少なくとも、今までは。

「父様の居場所を、教えて！」

俺がそう言うと、目の焦点も合わないピラリスが、グツと息を飲んで喋った。

「エリプス王は謁見の間で戦う準備を、そこまで使用人室にある裏口から繋がっています」

ピラリスの怪我は致命傷だ、出血が多過ぎる。治そうにも魔法が使えない。止血なんて無駄だ、もう手遅れだ！ 話せるほうが不思議なぐらいなんだから！

なのに王の場所を伝える時だけは、シャッキリした昔みたいなお調子で教えてくれたんだ。
だ。

「ありがとう……」

俺は泣いていた。そのまま使用人室へと走る。

ピラリスを見捨て、父様に会いに行く！

「いざいざいざい」

最期の力を出し切った、ピラリスのたどたどしい声を背に、泣きながら走った。顔をクシヤクシヤにして泣きながら、頭の片隅では酷く冷静な思考が脳の表面を、まるで他人事のように上滑っていくのを感じていた。

俺は、ピラリスを治そうともしなかつたし、彼女の為に遺言を聞くこともしなかつた。ただ聞きたい事だけを聞いて背を向けた、俺は思ったよりも薄情だったんだなと冷静に自己分析をして心が冷えて行くような気がした。

使用人室も死体の山だった。エルフだけでなく人間の死体も有った。そいつが握っていた剣を手にとって振ってみる。

軽い。

これなら振れる、殺せる。

暗い喜びに震えながら、蛮勇を發揮しない様にゆつくりと息を吸う。ともすれば敵に向かつて特攻しかねない自分の精神状態を自覚する。

それでも剣を手放せず、部屋から部屋に渡り歩いた。

使用人室は幾つかあるのだが、それらは全て繋がっている。もちろん玉座に一番近い

使用人室が最も位が高く。玉座に繋がる通路があるのもそこだ。

「!?」

……そこで人間の兵士と目が合った。一人だ、殺気立った目は充血して獣の様だった。

「(きげんよう)」

お姫様らしい朝の挨拶。俺は笑った、穏やかに、淑やかに。生誕の儀以来の演技と言えるだろう。

このとき俺はなんで挨拶なんてしたのか、なんで笑ったのか？ 後で考えたってサツパリ解らなかつた。ひよつとしたら俺は、やっと殺せると笑ったのかも知れない。

「……………え？」

殺気立っていたはずの兵士は毒気を抜かれた様にポカンとしていた。俺は剣を持たない左手を挙げて、親しい人に話し掛ける様に、無防備に笑顔で、はしやぐ様に、近づいた。

「さよなら」

で、刺した。

鎧の無い所を狙って下から上に、心臓を狙った。

「あがつ！ グッ！」

「……………(ぎげんよう)」

その瞬間まで俺は笑っていたと思う。兵士は信じられないとも言える表情でゆつくりと倒れた。

俺は純エルフ程耳は長くないし、髪もピンクと変な色をしているから、それが原因かもしれない。そんな事はでもどうでも良かったが。

返り血が飛んだが俺の笑顔は張り付いて取れる事は無かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

裏から玉座へ至る使用人用の通路だが、今は玉座へ通じる扉には鉄格子が下されていた。

「お父様！ お父様！」

格子を掴んでその先へ俺は叫んだ。どうやってもこの格子は動きそうにない、こちらからでは絶対に開かないのだ。

「ユマか！ なぜ来た！」

玉座に集う兵たちを掻き分けて、父様が叫ぶ。良かった！ 間に合った。

父様は見慣れぬ青い貫頭衣を被り、腰には大振りの大剣を刷いていた。完全な戦闘モードだと解る。しかし、この状況ではまともに戦いにすら成らないのは明白だ。

「霧です！ 父様、霧を払わないと魔法が使えません」

「解っている！　だが霧を払うにも魔法が使えないのだ！」

そうだ、この国は全てが魔法、魔法が使えないなら？　エルフは途端に何も出来なくなる。現代で言ううと電気が無いようなものなのだ。

じゃあどうする？　雨か？　雨が降れば？　どうやって？

「そうだ！　一旦逃げ出して、王宮と街に火を放ちましょう！　そうすれば雨が降るかも、そうじゃなくても霧が晴れるかもしれません」

「それは王として、看過出来ぬな、王都と国を守る者が街に火をかける訳にはいかん」
そうだよな、でもさ、でもよ、じゃあどうしようも無いじゃないか。

全てを奪われ、殺されるぐらいなら火を放つて逃げると言うのも、ひとつの手段じゃないか？　そんな風に考える俺はおかしいのだろうか？　『偶然』に振り回されて、常に最悪の事態を考え過ぎだろうか？

悩んで動けなくなった俺に、格子の向こうからもう一人の家族の声が聞こえて来た。

「父上、敵はまもなくここまで来ます、お逃げください」

ステフ兄さんだ、兄さんは血にまみれていた。兄さんも戦っていたのだ。

その姿をチラリと振り返った父様が、私に尋ねる。

「ユマよ、その通路に敵は居ないんだな？」

「ユマ？　ど、どうしてこんな所に居るんだ！」

慌てる兄様を無視して俺は答える。

「はい、『今は』敵は居ません」

ここに至るまで、全員殺してきた。兄様に負けないぐらい俺は血まみれだろう。

「よし、良くやった」

言うなり父様は格子を上げ始める。

「父上、ここは任せてユマとお逃げください」

「父様、兄様も……皆で逃げましょう！」

ステフ兄様は残る気で居るが、俺は皆で脱出したい。

火は駄目と言われてしまったが、俺はまだ諦めていない。魔力が通っていないなら今の王宮はただの木の塊、燃えやすいんじゃないか？ 敵を引き込んで燃やす。火計の一種と考えればやっぱり悪くない、後は脱出の問題だけだが、通路の掃除も済んでいる。

一緒に逃げて再起を図ろう。

「ユマ、父上と一緒に行くんだ！ 良いね？」

「ステフ兄さんは？」

「俺はここで敵を食い止める」

俺の肩に手を掛けて優しく語り掛けるステフ兄様、兄様は覚悟を決めている。でも、その覚悟を曲げて逃げて欲しい。

「うわっ!」

「きゃっ!」

どんな言葉を掛けようか考えていたら、兄様がこちらに転がってきた。俺まで巻き込まれ、地面に転がるハメになる。

「え?」

仰向けに転がって、片足を上げる父様を見上げても、その足で兄様を蹴つ飛ばしたのだと理解するのにはしばらく掛かった。

——ガラガラガラガラ

鉄格子が下りる、父様?

「よし、二人は脱出しろ」

「父上!」「父様!」

「王は王の責任を果たさねばならん」

この親父カッコつけてくれる。でも、逃げようぜ? そんなの無駄死にじゃないか。

「逃げましょう父様、ここで戦う意味など有りません」

「有るんだよ! 玉座を守れずして何が王か、王都を落とされるエルフ最初の王だ、間抜けと誇られようが最期は立派で有ったと残さねばな」

ああ……父様はもう、覚悟を決めている。

「そんな！ 父上！」

「行こう、兄様！」

「ユマ？ 父を置いていくつもりなのか？」

「セレナを、セレナを助けないと」

自分でも驚くほどの感情の籠つてない低い声が出た。その声に兄様は言葉を失い俯いた。

そうだ、全てを諦めてでも、セレナだけは助けなくてはならない。

王宮を抜けて、離宮に戻った、途中で出会った人間は、……殺した。

兄様には分けてあげない、顔色が悪い兄様を助けないとね。

いつもは、いままでは、ずーっと俺が助けて貰ってきたんだから。

「ユマ、お前……」

「何ですかお兄様？」

兄様は何か、恐怖に引きつった顔をしていた、イケメンが台無しだ。

ただ、二の句は告げなかった。血塗れなのはお互い様だ、言葉で伝えられる事なんてもう無いんだ。

「酷い有様ですわね」

離宮の広間まで戻ると、兵士は皆、死体に変わっていた。代わりに溢れかえるのは人

間の兵士達。

先ほど声を掛けてきた兵士長が唯一生きていたが、それも取り囲まれていて、断末魔が響くと同時に死体に変わった。

最後の獲物を仕留めた兵士達が俺達を指差す。

「生き残りが居たぞ！ 殺せ！」

この離宮の広間は迂回出来ない。この先にセレナ達が居る。なのにココまで敵が来ている。セレナは？ セレナは無事なのか？

焦る俺の心とは真逆、頭と体の芯だけは、凍える程に冷静だった。

「こんにちは皆さん、本日はどの様な御用件でしょうか？」

俺は親しげに手を振って見せる。お客様向けの声が出る。

「なに？」

ソレを目にした数人が氣勢を削がれ、隊長だろう人物を振り返る。

——そこに兄様が斬りかかった。

「うわっ！」

「クソツ！ コイツ強いぞ！」

「数で押さえ込め！」

後は乱戦だ、斬りも斬ったりだ。

俺は案外戦えた。まず相手はエルフらしくない俺に手加減していた、そして相手の兵士だつてよく見ると体調が万全とは言えない様だつた。森を抜けて王宮まで乗り込んだのだ、疲れが有つたのだろう。反して邪魔な魔力が薄まった俺は絶好調。

——でも、兄様は？　兄様は俺と違つて純エルフだ、魔力が無ければ他の兵士と同じ、きつと体調は悪かつたのだ。

……そうでなければ、そうでなければアレだけ強かつた兄様が負ける訳など無いのだから。

戦っている最中に、剣を突き刺される兄様を見た。俺は、アレじゃあもう助からないなとぼんやりと考えていた。まるで他人事の様だ。

もう俺は、全てがどうでも良くなつていた。気持ち的にはアレだ「なんだよこのクソゲー」つて言つてる時に近い、リセット5秒前だ。

後はどれだけの人間を殺せるかのスコアアタックだ。

さあどうだ？　案外、たつた一人で人間どもを全滅させられるかもしれないぞ？

……そんな事が出来るハズも無く。結局俺は組み伏せられて、仰向けに地面に引き倒された。多勢に無勢つて奴だ、気持ちちはもう「このゲームバランス悪いっすねー」ぐらいいのもんだ。

そんな俺に、兄様の最期の声が聞こえてきた。

「すまない、ユマ、俺はお前にずっと笑っていて欲しいと思っていた、でも、でも、そんな風に笑って欲しかった訳じゃあないんだ、不甲斐ない兄で……」

「五月蠅い！ 黙れ！」

兵士の剣が兄様の胸に突き刺さる。ソレをみて「あ、死んだな」とぼんやり思った。それに……なんだ？ そうか、俺は笑っているのか……

「化け物め！」

「人間とバケモノの間の子あいのことはな！ モノ好きも居るもんだ」

「ギャハハハハ！」

下品な言葉を掛けられ、革靴に顔を踏まれ、それでも俺は笑ってるのか。

ああ、でも仕方が無いだろ？ もう笑うしか無いじゃないか、こんなのどうすれば良かったんだよ。

魔法が有るからって諦めずにチートを模索しておけば？ でも何か作るとしても、多分魔法を組み合わせて作っただろうな。じゃあ霧に妨害されて駄目だったかな？

全て諦めよう。神様だって対処不能の『偶然』に俺が逆らおうつてのが無駄だったんだ。

ああ、でも！ セレナ！ セレナだけは！

……いやもう駄目か、だったらなるべくセレナと近い所で死にたい。

「笑ってやがるぜこいつ」

「イカれてやがる」

「何人も殺しやがって、やっちまってるいいですか？」

「ああ、構わん」

そんな下卑た声に混じって、聞き慣れた可愛い声が聞こえた。

「お姉ちゃんを！ 離せ——」

セレナ？ セレナなのか？

『我、望む、この手より放たれたる、強く大きく熱く疾い、炎と風の鋭き刃よ』

ああ駄目だ、駄目なんだよセレナ。魔法は駄目なんだ。霧の所為で全て消えてしまうんだ。

俺だつてちよつとは試したさ、小さな魔法は出るけれどソレだつてスグに消えてしまうんだ。きつと王宮も、父様と兄様も、俺も、霧の中に消えてしまうんだ……

だけど、良かったセレナと一緒に死ぬる。そう思つて居たのに……

「ぐびゃー！」「あべっ！」「びゃー！」

醜い悲鳴が幾つも上がった。

兵士達の上半身がズリ落ちて、血が溢れ出す。俺の顔面を踏みつけていた足が吹き飛んで、ガツンと部屋の壁にぶつかる。

……セレナの魔法は兵士をすべてなぎ倒した。

「えっ？」

「おねい……ちやん」

そうか、普段2000ちよいの俺の魔力が50。ざっと4分の1。これじゃちよつとした種火の魔法とかコインサイズの風魔法しか出せない。

でも、普段2000を超えるセレナなら？ 4分の1でも500、魔法を使うに十分だ。

「お……ね、いちゃん……」

力なくセレナが蹲る。

駄目だ。魔法を使わせちゃ駄目だ。

外から魔力が吸収出来ないから、体内に残った自分の魔力を使っている。

魔力が無いと生きられないからこそ、エルフにこの霧が毒となる。だったら妹のセレナはどうだ？ 人一倍どころか十倍魔力が多いのだ。だったらきつと十倍辛いはずなのだ。

その証拠に今のセレナの顔色は、ああ、まるでかつての俺じゃないか。こんなに青く、

……なんでこんな。

「ば、化け物だー」

化け物なんかじゃない、世界一可愛い俺の妹だ。

「セ、セレナ！」

「お姉ちゃん！『我、望む、この手より放たれたる風の刃を』」

駄目だ、もう魔法を使っちゃ駄目だ、それは今、命を削って撃ってる魔法だ。

「ギャアー」

兵士の悲鳴が上がる。後ろから俺を切ろうとしたのを……また守ってくれたのか？
良いのに、セレナだけでも逃げれば良いのに！

「セレナ！」

俺はセレナを抱きしめる。

「逃げよう！二人で！逃げよう！」

「お父さんとお兄ちゃんを助けないと！」

俺は、セレナの目を見て……ゆっくりと首を振る。

「え、っ？ うそおお、嘘だよね」

俺は、再度、首を振る！

妹の顔が絶望に染まる、こんな顔、こんなの！絶対に見たくなかったのに。

そして、セレナは父と兄を心配した、じゃあ母は？ セレナの部屋と母の部屋は近い、

つまりそういう事なんだろ？

クソツッ！ クソクソクソ！

「え、びええー……ん」

セレナが泣き出してしまふ、セレナは頭が良いんだ、良い子で、聞き分けが良くて、魔法が強過ぎて暴走することも有るけど、わざと悪戯する事も無いし、子供みたいに泣くことなんて一回も無かつたんだ。

だから、馬鹿なお姉ちゃんは泣いてる妹を慰める言葉の一つも知らないんだ。

「セ、セレナア……」

なんで！ 俺まで泣いてるんだよ馬鹿にも程が有る、何だよ！ 何なんだよ！

——パアアアア

俺が馬鹿なのが悪いんだ、だからその時その音が鳴つたんだ。

気が付くとセレナは倒れていた。

音のした方へ、俺の首が壊れたカラクリ人形みたいにぎこちなく回つた。

あれは？ 歴史の教科書で見た、火縄銃？ ファンタジーだぞ？ なんでそんなもん

がここに有るんだよ？

「よし、化け物は倒した、進め！」

殺す！ 俺は知ってる、火縄銃は連射出来ない？ そうだろ？

兄の死体に近づいて、躊躇なく兄様の双剣を手に取って走る。

まだ動く、まだ軽い。

魔力が流れゆつくりと魔剣が起動する。

その時俺は、セレナが魔法を使えたもう一つの理由に思い至った。

王宮を、王都を、燃やしてでも降つて欲しいと思つた雨がこの部屋だけには降つてい
た。

人間の、

エルフの、

そして兄様の。

文字通りの血の雨だ。

「ヒッ！ 来た！」

まず、一息に走り込み銃を持つ奴を斬る。豆腐を切ったのかと錯覚するような手応え。慌てて隣の兵士が斬りかかって来たのをもう一方の剣で受け止める。

受けたと思つたが、魔剣は逆に相手の剣を切り裂いた。千切れ飛ぶ剣の端が頬を浅く切り付けたのも気にせず、受けた方と逆の剣で鎧ごと兵士を切り裂いた。

一人、二人、三人斬つた、取り敢えず、動くものはなくなつた。

セレナは？ 死んじやつた？ 死んじやつたらセレナと一緒に死のう。

ふらつく足取りで倒れ込むセレナの元へと縋つた。

「セレナ！ セレナ！」

セレナが撃たれたのは太ももだった。致命傷じゃない、でも出血が酷い。剣でカーテンを切り裂いて太ももの付け根を縛る。付け根に物を挟んで血を止める。

俺はセレナをおんぶする、今度は、俺が！俺がセレナを助けないと、まだ体は動く、王宮を脱出するんだ。

死地での報酬

王都からほど近い狩猟小屋、そこに俺達は居た。

以前ブーブー鳥を調理した場所もそんな場所だったが、今回はキャンプ場化されたそれとは異なる。なにせ離宮からの隠し通路が通じる場所なのだ。

万が一の時のため、王族のみに教えられる隠し通路。そんなありがちな存在が本当にあるんだと、教えてもらった瞬間に凄く嬉しかったのを覚えている。……だけど同時に少し怖かった、ココを使うとしたら俺になるんじゃないかと。

ああ畜生、そういう予感だけは当たるんだよな。

俺は完全に人間に制圧された離宮を抜けだした。エルフ達はこんな日が来るなんて夢にも思っていないかった、だから王宮にはこんな隠し通路は無いと父が言っていた。

ただ、万が一を越えて、億が一での確率で、何かが起こってしまった時に、隠し通路で家族だけでも逃げて欲しい。そんな歴代の王の気持ちで作らせたと言われる通路、それを這いつくばるように脱出した。

セレナは寝かせてある。太ももに受けた銃弾で出血が酷い、でも傷よりも問題はこの狩猟小屋をも覆う霧の存在だ、セレナは魔力を遮る霧の中では弱る一方。一体何処へ逃

げれば良い？

考えを巡らせながらも戸棚を漁る。保存が効く食べ物が並ぶ、乾パンみたいな保存食、ナッツ、乾いた豆、ご丁寧に自分の横顔が焼き印されたチーズが有った。それらを纏めて皮袋に突っ込む、水筒袋も一緒だ、森には小川が多い、汲む場所は少なくない。

問題は魔力の分布、北はエルフの古代都市が有った場所。思い起こすは成人の儀の時の事、今にして思えばあそこはココより魔力が濃いのではないだろうか？ あの時のセレナは元気一杯だった、セレナの回復には一番良いかも知れない。

しかし、まだ冬も開けたばかりで寒い。吹雪でも有れば怪我をしたセレナには命に係わる。さらに言えば魔力が濃いのだから魔獣が多い。しかも時期が悪い、今から北に向かうと丁度冬が開けたばかりで冬眠明けの魔獣が餌を求めて徘徊する時期と重なる。

魔獣も冬眠する個体は多く、冬は魔獣が減る。それでも襲われる俺の不運は凶抜けて居ると言えた、それだけに今、北に向かうのは自殺行為に思われた。

次に、東、コレは西から来た帝国、正式名称は確か、セルギス帝国……とは真逆の方向で、東側には帝国のライバルとも言える、ビルダール王国が有るのも大きい。

ビルダール王国を刺激したくない、そんな思惑が有れば帝国だつて東には来られない筈だ。

……ただし問題点も有る。森の東側は森林と言うより人を寄せ付けぬ樹海だ。妹を

抱えて移動するのは難しいだろう。

そして深い谷や切り立った山脈に遮られ、そのままビルダール王国まで抜けるのは不可能に近い。

最後は南だ、南に広がる森にはエルフの村も多く気候だって暖かい。手入れがされている分だけ魔獣も少ない。

こう来れば迷わず南に行きたいところだが、帝国の奴らだって俺らを追っかけるなら南に目を付ける。それに王都を強襲した後、戦端を南に広げる可能性は高い。その時に奴らは当然あの霧をばら撒くだろう。

結局俺は一旦東へ行く事を選んだ、東ならば奴らが追ってくる可能性は極めて低い。そうと決まればまずは革の水筒をもって近くの小川で水を汲みに出かける。小高い丘になっている狩猟小屋からは王都と王宮の一部が見渡せた。

「火は付いてない……か」

苦し紛れに脱出の直前、台所の油をばら撒いて魔法で火をつけてみたが大した成果は上がらなかつたらしい。期待はしないつもりでいたが想像以上に落胆している自分が居た。

水を汲み狩猟小屋に帰る。常備された消毒薬と傷薬を用意して藁葺きのベッドとソファアーの中間みたいなものに寝かせたセレナの元へ。

火縄銃で撃たれたセレナの太ももにはまだ弾丸が残っている、本当はもつと体力が回復してから、せめて霧が無い所で取り出したかったが、まずは早く逃げださなくてはならない。

「セレナ、ごめんね」

意識のないセレナの口になんだかよくわからない革を突っ込む、一応消毒したから大丈夫の筈。それからセレナのドレスを捲り上げて患部を露わにする。

セレナが撃たれたのは太ももの内側、見てみれば大分肉が抉られて、赤黒くなった血に濡れているのが解る。

「我慢してね」

患部に消毒薬を振りかける。

「ンツ！　ンンンツ」

「大丈夫？　セレナ痛くない？　痛いよね？　ごめんね」

「おえ……ひゃん？」

「そうよ、ユマお姉ちゃん、セレナをおんぶして王宮を脱出してきたの」

セレナはブーツとした様子で天井を見つめていた、『全てが夢だったら』そんな事思っているのだろう。でも全部現実なんだ、みんな、みんな死んだんだ。

でも、俺にはセレナが居る。セレナにも俺が居ると思っしてほしい、セレナだけは守り

たいんだ。

「我慢してね、体の中の悪いの抜き取っちゃうから」

『我、望む、この手に引き寄せられる、肉に埋まりし鉄塊よ』

「ンンンツッ！ ウウウ、ンウー！」

「ごめんね！ 我慢してね！」

魔法は何か発動した、体に埋まった鉄を引き寄せるだけ、ただそれだけの魔法が辛い。思った以上に魔法が制御出来ないし、体の魔力を振り絞らないと発動しない。そう言えば魔剣で切るのにも魔力を使ってしまった、兄の魔剣はそれだけ魔力を食うのか。我を忘れて使ってしまった、体が怠く感じ始めたのはそれが原因か、でも妹は、セレナはもつと辛い、血がまた流れてくる、そこに消毒液を掛ける。

「ンンンツッンンンンン！！」

「ごめんね！ ごめんね！」

謝りながら、血濡れになった包帯代わりにしたカーテンを外し、代わりにベッドの敷布を切り取ってキツく巻き付ける。

「……………」

「セレナ！ セレナ！」

マズい、また気を失ってしまった。でも、弾丸が入ったまま移動する訳には行かな

かった。俺は間違ってるよ！ 間違ってるよな？ クソツ！ これはゲームじゃ無いんだ選択肢みたいに考えるな。どっちかが正解で、どっちかが間違いなんで保証も無いし、考えたら新しい選択肢だって有るかも知れない。

俺は今まで、生き死にに関わるような選択を迫られた事は一度も無かった。

だが漠然と、そう言う状況になれば、俺は正しい選択が出来ると信じていた。

だが、当然に世の中『正しい選択』など無いのだ。なのに強烈なストレスの所為か、不思議と却ってゲーム感覚に『正しい選択肢』を選ぶような思考に囚われる。失敗したら二度とやり直しがきかないと言うのに。

……でも、拙速は巧遅に勝ると言う。ゲーム感覚でも良いからやるべき事をドライに取捨選択し、素早く行動するのは間違っていないのでは？

そうだ、今だって安全じゃない、次の瞬間に奴らが扉を蹴破って姿を現してもおかしくないんだ。

「セレナ、ごめん……」

物言わぬセレナを背負い、保存食を纏めた袋を担いで扉を開ける、思った以上に重い。でも諦めない、諦めたくない。背中越しに脂汗に濡れるセレナの湿度と温もりを感じる。

ああっ！ セレナは、セレナだけは！ 俺は絶対に守りたいんだ！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
——ギリギリギリ

口の中で正体不明の革布が悲鳴を上げる。銃弾を抜くときにセレナに噛ませていた革だが、今は俺の口の中に有る。

樹海とも言える難所を女の子でしかない俺が、セレナをおんぶして歩くには、自分の体を限界まで追い込むしか無かったからだ。

歯がボロボロになるかも知れないぐらいに食いしぼる。こんな所を皆に見られたら必死で止められるんだろうな……と思ってしまう。なぜって、歯は回復魔法でも治らないからだ。

ああ、そうだ、この世界には回復魔法がある。自然治癒力を瞬間的に高めるだけだが、怪我には有効だ、今はそれが希望だった。

回復魔法で腕が生えてくるって事は無い。それでも千切れただけなら腕を縫い合わせた上で、回復魔法を掛けてやればくつついたりする。他人の腕をくつつけるのも禁忌とされるが不可能じゃないらしい。

ただこの世界は血液型なんて概念も無いので、なんか知らないけど上手くいった、上手くいかなかった。死んでしまった、呪われていたんだ。みたいな雑な感想文が記録として残っている。

少なくとも銃弾で太ももの肉が抉られた程度のセレナの傷ならば、回復魔法が使えれば治せると言う事だ。俺がギリギリ使えるぐらいの高度な魔法である。霧の影響が全く無い場所まで脱出しなければならぬ。

俺の歯なんて総入れ歯だって良い。まずはセレナを治す。

東の森は正に樹海だった。木の根は入り組んで段差だらけ、疲労の余り足が全く上がらず、両手が埋まっている俺は、段差の度に這いつくばる様に乗り越えるから服はもう泥だらけだ。狩猟小屋に猟師用の服が合つて助かった。サイズまでピッタリと用意してくれたらしい、億が一の備えが役に立ったと言う事か。

ただセレナのサイズの服は無かった。有つたとしても丈夫だが重量も嵩む猟師服を着せる余裕が有つたとは思えないが。

「フーフーフーフー」

口に挟んだ革の隙間から荒い息が溢れる。

あれから二日だ。夜だつて寝ていない、火だつて使えない。追っ手に怯えて、寒く冷たい夜を、妹を抱きしめて過ごした。

運よく大型の魔獣には出会っていない。小型の魔獣が様子を窺つて来たが剣を抜いて威嚇してやれば逃げて行つた。これだけ入り組んだ森だと巨大な魔獣は行動出来ない筈。俺の狙いは当たつた格好だ。

ただし、その分体力はガリガリと削られる。齒を力任せに噛み締め、動かない足をぶつ叩いて引き摺る様に歩いてきた。

ただし、それも限界に近づいてきた、無くなる体力を嘲笑うかのように森は険しさを増して行く。あわよくば王国まで抜けて、同盟を持ちかけるなどと言う夢は捨てた。

まずは東の狩猟小屋に辿り着き、治療と体力の回復を図る。これが今の目標だ。

狩猟小屋の位置なんてモノを細かく覚えていた王族なんて他に居ないだろうが、俺は一度見たものは参照権で好きな時に調べ直せる。

エルフの狩猟小屋は大森林のそこかしこに存在する。なぜなら森で魔獣を狩る事はエルフの使命であり、重要な安全保障だ。

上手くすれば狩猟小屋経由で旅が出来る。王都近くと違い、全ての狩猟小屋に食料の備蓄がされているとは思えないが、一時凌ぎの治療は出来る筈だ。

それだけが唯一の希望と言えた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

……疲れがピークになると、足元しか見る事が出来なくなる。ましてやそれが足場の悪い深い森の真っ只中と来れば当たり前前の事。ただその時、俺はふと前を向いた、そこには立派な葉草が大きな葉をつけて茂っていた。

それで思ったのだ。「やった！ これでセレナを治せる！」と。

そんな自分に、何の違和感も抱かなかつた。ボーツとした頭で足を踏み出す、これでセレナが助かる、セレナが！ セレナが！

「おね……えちゃん？」

背中のセレナが起きた。ここ数日は気を失つてゐる事が多いが、それももう大丈夫、背負つたセレナを振り返る。思つた以上に顔色が悪い、脂汗も浮かんでゐる。でもそれもココまでだ、この薬草で治せる！

前に向き直り薬草へ足を踏み出そうとしたが、疲労で思うように動かなかつた。

……それに、救われた。

目の前には崖があつた。むしろ、崖しかなかつた。

俺が見ていた薬草などは消え失せて、遙か奈落へ続いていくような暗い森へ落ちていく段差が広がるばかり。

サア——と血の気が引いていく。

何だ？ 何なんだ？ 幻覚？ なんで？ 誰が俺を殺そうとした？ コレが俺の魂の呪い、『偶然』なのか？ こんなのは『偶然』じゃないだろ！ 悪意の塊だ！ これじゃ質の悪い怪談みたいじゃないか！

「ハーハーハー」

疲れではなく、緊張の余り荒い息を付く。今、俺は死のうとしていた？ 自分で死の

うとしていた？

妹が声を掛けてくれなかったら、この暗い崖に自ら身を投げていた、セレナがまた俺を救ってくれた！　じゃあ誰が俺を殺そうとした？　誰だよ！　誰だよ！　名前を言え、訳わからねー事ばかり起こりやがつて！　ちよつとは俺の前に姿を現せよ！　自己紹介の一つでもしてみろつてんだよ！

「私の名前はシルフ」

??　思いがけず返事があつた。

誰だよ!?　どこのどいつだ！　姿を見せろよ！

「おねいちゃん?」

崖の上で呆然とする俺に、セレナは不思議そうな声を掛ける。

「シルフつて誰?」

……え?　何つて?　いや俺に聞かれても知らないよ?　え?

まさか今、俺が喋つたのか?　俺がシルフだつて言つたのか?　誰だよ?　シルフつ

て、誰なんだよ!

「う!　ううう!」

「お姉ちゃん!　だいいじよぶ?　おねーちゃん!」

頭が痛い、思わずしやがみ込む。この時セレナの重さも有つて後ろに足が行つてよ

かった、これで前に転んで崖に落ちたりしたら笑えなかった。

「だ、大丈夫、頭が急に痛くなっただけ」

「おねーちゃん……」

セレナは心配そうだが、でも俺はセレナの方が心配だ。俺の心配は要らない、なんせ俺はもう森の歩き方を知っているから。

「行こう、セレナ、上手くいけばこの先に狩猟小屋があるかもしれない」

「ほんと？ 良かったー」

俺は軽くなった足取りで森を進み始めた。

逃走の果てに

「本当に狩猟小屋あつて良かったね」

「ええ、お姉ちゃん一杯、御本を読んでいるでしょ？森じゅうの狩猟小屋の位置を覚えて
いるのよ」

「ホント？ すごい」

褒めてくれるセレナだがいつもの元気はない。出血で血が足りず、今だつて樂觀で
る状況じゃない。そして俺の言葉だつて半分ホントだけど半分は嘘だ。地図は覚えて
るけどそれだけ、あの深い森の中、それだけで正確に辿り着ける訳は無い。森の中、目
印になる物なんてまるで無いのだ。

「それで、セレナ、回復魔法は使えそう？」

「……ごめんさい、ちよつと駄目みたい」

粗末なベッドの上でセレナは力なく笑う、実は回復魔法は自分で自分に使うのが一番
良い。他人の魔法は自分のパーソナルスペースで健康値に抵抗され減衰する。

この場合減衰するのが問題ではなく、抵抗する際に体力が消費されるのが問題なの
だ。自分の意思で受け入れれば抵抗は小さくなるが、それよりも自分の魔法が一番抵抗

が小さくて済む。

恐らく今のセレナの健康値は低い。他人の掛ける回復魔法は無理だ。となるとセレナ自身に掛けて貰うしかない。

「セレナ、この王冠で健康値を測ってみましょう」

「え？ 良いよーそれお姉ちゃんの秘宝だもん」

「そんな事言わないの！」

俺は王冠を強引にセレナに握らせる。

健康値：5

魔力値：219

健康値が5！ 小さい時の俺みたいだ。でも、セレナはもうすぐ九歳、この数字はもっと危険な気がする。

逆に言うとなり魔力値は回復魔法には十分。それでもセレナが回復魔法を使わないのは使うのが危険だと解っているからだ。だとしたら俺が回復魔法を使う訳にもいかない。

どうする？ もっと魔力が濃い北に行くか？ でも健康値が5じゃこれ以上の移動は出来ない。そもそも経験上この値じゃ、寝て栄養の有る物を食べて、後は安静にするぐらいしか出来ない筈なのだ。

魔力値だって普通より多いぐらいの値であつても、セレナにとっては十分の一に過ぎ

ない。ここは既に魔力を奪う霧の圏外だと言うのにだ。

怪我や病気で健康値が下がると、同時に許容できる魔力値も下がる。それだけセレナの体調が危険な状態と言うことだ。

だったらどうする？ 魔力が足りないのか？ 休息が必要なのか？ それとも何か感染症でも患っているのか？ ソレすらも解らない！

焦る俺に、セレナが弱々しい声を掛ける。

「健康値が5か、昔のお姉ちゃんみたいだね」

「ふふっ、そうね、今度はお姉ちゃんがセレナの面倒見るからね」

「うん、ごめんね。セレナ、お姉ちゃんを守るって言ったのに……」

「もう！ お姉ちゃんは私の方なんだから、そんな事言わないの、ゆっくり寝て居なさい。お姉ちゃんが何とかしてあげるから」

「うん、ごめんね……」

「謝らないの！」

大げさに笑って叱って見せる。セレナも安心したのかちよつと笑ってくれた、でもその笑顔が辛そうだったのがキツイ。

ああ、まずはここで体力を付けないと、どこにも行けない。幸い今の俺には森の知識が有る。薬草や食べる物だつて調達出来る。

……そう俺には知識が有る、なぜなら俺は、この森で狩人としてずっと生きて来たからだ。

いや、違う！俺はユマ姫だ。狩人としてなんて、生きてはいない！

……じゃあコレはなんだ？ エルフの少年シルフの知識が俺の頭の中に入り込んでいた。

シルフはここから南に十数キロの所にある、パセラル村に生まれた。両親を早くに無くして、病気の妹と二人で暮らしていた、貧しくてギリギリの生活の中、妹の為の薬草を集める日々。

妹の為に生きる、妹の為に俺は絶対に死ねない。そう思いながら生きて来た、でも運命は残酷な『偶然』を用意した。ある日少年は薬草を取ろうとして、足を踏み外して崖に落ちて死んだ。

ああそうだ、あの場所だ、何年前の事なんだろう？ ひよつとしたら百年以上前なのかもしれない。その時はあそこには薬草が生えていて、夢中で採ってる内に足を滑らせたのだ。

俺が魅せられたのはその時の記憶の残滓。そう、少年は一万回生まれ変わった俺の前世のひとつに違いない。……言うなれば魂の先輩だ。

俺が神に与えられた唯一のチート能力『参照権』

それは、俺の魂が今まで集めてきた記録ログを参照する権利。

俺はこの能力を『高橋敬一』としての記憶を思い出すための仕掛けだと思っ
ていなかった。

参照権プロンプターや、どこでも読書機能、なんて物は、たまたま付いてしまっ
た『おまけ』と言う認識だ。

でも、よくよく考えてみると、神が言っていた『参照権』の能力は『高橋敬一』が集
めた記憶の参照では無かった。もう一度確認しよう。

魂が今まで集めてきた記録ログを参照する権利。

つまり、つまりだ、『高橋敬一』の記憶だけじゃなく、この世界で死んで行った一万人
分の『誰かの記憶』だって、『切っ掛け』さえあれば参照出来る。

……神さまそう言う事なんだろう？

これは神が狙った事か、それとも俺の記憶を思い出させるための参照権が想定外の効
果を発揮しているのか？ どっちだって良いし、どういう理屈かなんて解らない。

思えば、あの湖での事件、あの赤い棘の蛙。あの幻だって……

……ああ、君は？ 名前は何て言うんだい？

「わたしはパルメス」

俺の口から、舌つ足らずに俺の知らない名前が出る。覚悟はしていたのにギョツとした、思わずセレナを見る、寝ているみたいだ、良かった。

そして思い出される。パルメスの記憶、わずか三歳、将来の大魔法使いとして囑望される魔力を持ちながら、あの湖で遊んでいてあの蛙を見つけ、湖に踏み込んだ、そして触ってしまった赤棘毒蛙マネギデスマダに、たちまち痺れて溺れて、そして死んだ。

なるほど理不尽な死を迎えている。本当は英雄になるべき、強固な運命と資質をもって生まれるハズだった者達。そういう奴を狙って転生させて来たと言っていた。それが『偶然』で捻じ曲げられて、殺された。そして、歪んでしまった運命が、俺自身の死を引き寄せた。

蛙の時も、薬草の時も、俺はあと一歩で死にかけている。歪んだ運命の追体験を強制的にさせられた。

全部推測だ、でも考え過ぎとは言えないだろ？ 現に二回も死にかけた。

「畜生、便利だと思ってた参照権にこんな落とし穴が有るなんてよ……」

思わずお姫様だつて事を忘れて呟く。

参照した記憶が死んだ瞬間をトレースしてしまう。きつと神にとつても予想外だったに違いない。今まで『参照権』を人間に与えたことなど一度も無いに違いないのだから、どんなバグがあってもおかしくない。

……あの時はピラリスが、今回はセレナが居なかったら俺は死んでいた。

「……しかし悪い事ばかりじゃない、シルフの記憶だつて『参照』出来る」

そう、俺はもうシルフでもある。だからシルフの記憶が見える。森の歩き方も、食べられる物、食べられない物、何年前の知識か知らないが、その辺りは今だつて通用するはずだ。

「まずは薬草だな」

俺は勢い込んで狩猟小屋を飛び出した。

結論を言うと、薬草は見つかった。何せ狩猟小屋の脇に生えている。

「拍子抜けだな。なんでこんなに無造作に生えている？ より効果が有る草が見つかるか、実は効果が無いとかか？」

心配は杞憂だった。なにせ記憶を頼りに薬草をすり潰すと、脱出した狩猟小屋で手に入れた消毒薬と同じ匂いがしたからだ。

だから消毒薬だと思っていたのは薬草の薬効成分を抽出した傷薬だったのだ。恐らく消毒の効果があるのだろう、前世の消毒薬と同様に、傷口に吹き付けて使うように教えられていた。

だから、残念な事に薬草が有るからつて、今まで消毒薬を塗っていたセレナの傷が急に治るつて線は無くなった。でも消毒薬は残り少なかったし、すり潰して塗ったり、煮

て柔らかくなった薬草を湿布の様に使う事も出来るらしいので、悪くは無いかなど言うところだ。

恐らくだが、昔は貴重だったんだろう。しかし人工栽培に成功しての薬効抽出などの技術革新があったに違いない。

シルフが妹の為にと血眼に探した薬草は、その辺にフツーに生えまくっていた。『参照権』で昔の新聞記事を確認する。……ああ、薬草の栽培成功の記事が参照出来た。

良い事ばかりじゃない。森の知識が手に入った今、絶望的な事も解ってきた。

冬が終わったばかりの森の中には、想像以上に食べられる物が無いのだ。

王都の周りの森はちよつと歩けば食べられる木の実や芋、豆などが取れたので甘く見ている。よく考えればエルフは長年あそこに住んでいるのだから、森にだって手が入っている。何なら野生の木の実だと思つて取つていたのが、誰かの畑だったとしても納得だ。

本当の自然にはそうそう食べられる植物なんてない。ましてや冬は開けたばかりの頃だ、森中で食料の争奪戦だ、土から顔を出したばかりの若芽や土筆つくしを他の動物と奪い合つて、煮込んだりしてなんとか食べる季節と言う事らしい。

セレナを、いや脱出を考えた俺も含めて二人の体力を維持するだけの食料を集められるのか？　こうなると北に行くなんて選択をしなくて良かった。もつと寒く、強力な

魔獣の徘徊する森で、獲物を求めて歩き回るなんて無理だ。一瞬でも北に行こうなんて考えた自分を殴りたい、俺は森を舐め過ぎていた、ここ数日で森の厳しさを知ったつもりで居たが大間違いだった。

マズい、これじゃ長居は出来ない。体を休めたらすぐに出発しないとじり貧だ。でも、こんな健康値のセレナを背負って移動なんて出来るのか？俺の疲れだって十分に癒えてないの？

健康値と疲労は別物だ。健康な人間が走り回った所で健康値は下がらない。ただし疲れた状態で無理を重ねれば過労状態で健康値は下がって行くが、急激な物じゃない。

だから、今の俺の健康値が20……セレナと比較して大分高かったとしても、元気に動き回れるって事にはならないのだ。

この狩猟小屋に辿り着いた時なんて、俺は鼻屑目に見たってボロボロだった。今まで的人生、不健康の代表選手みたいな顔をして動かないでいたのに、森の中で妹を背負っての強行軍。

今だって体中が悲鳴を上げている。短期的な息切れや疲れは精々数時間で回復する、だが体の芯に残る筋肉痛や蓄積した疲労は最低でも二、三日休まなくては回復しない。むしろ健康値って奴はこういう時の回復力や、病気への抵抗力にこそ効いてくるのだ。俺は二、三日も休めば体力も戻るだろう。じゃあ、妹は？

俺はチラリとセレナを見る。あまり使われて居ない狩猟小屋、どう考えたって清潔とは言えないだろう。こんな所に健康値が5のセレナを寝かせて休憩するのか？

しかし現実問題、今の体でセレナを担いで森に出ればあつと言う間に立ち往生だ。一人の人間をおんぶして森の中を歩くことは、少しのミスが死に直結していた。

結局、俺はこの小屋で三日程泊まる事を決める。食料は残り少ないが切り詰めて、なんとか春の若葉や新芽、土筆を狙って行こう、多分煮れば食べられる筈だ、多分。

——俺はこの時の選択をのちに後悔する事になる。

ただし、大抵の後悔がそうである様に、だったらどうすれば良かったかなんて結果論でしかない。いや実の所、結果論すら出せないのだからそれは俗に言う『詰み』だったのかも知れない。

——だけどそれは認めたくないのだ。努力を重ね、機を窺つても、初めから全ては無駄だったのだと思ってしまうえば、全てが無意味に思ってしまうのだから……

現在のユマ姫

健康値：20

魔力値：220

休息の代価

食料が無い！

あれから二日、若芽や蕾、土筆つくしみたいに食べられる物を採って食べてみたが、さほど栄養が有る感じがしない。妹の体を考えるならば狙いたいのには球根や芋、根菜類だ。

しかし季節柄、芋は無く、食べられる球根を見つけるのは難しかった。残る食料は乾パンもどきが二つに、俺の横顔らしいものが刻印された例のチーズが一つ。チーズは紙のパッケージに包まれていて、大きさ的には前世の6Pチーズに換算すると3ピース分ぐらいの質量だろうか？

初めは同じ大きさのチーズが10個、乾パンもどきは20個、他にはナッツ類なども有ったのだが栄養の有りそうなら全部食べ切ってしまった。

こうなるとこのチーズが生命線だ。ジツと手の中のチーズを見つめる、小さいお手々にすっぽり収まってしまう小さいチーズを穴が開くほど見つめる、よく見ると刻印された俺の横顔は王冠を付けていた。

——ああ、もう大分前から俺の秘宝はこれに決まっていたんだな。

知らぬは本人ばかりだったか、よく考えれば王国の宝にして一財産程の価値が有ると

言う王冠が魔道具へ改造するべく持ち込まれたとあれば、世間の話題を攫う事は想像に難くない。きつと驚く程に昔から準備されていたに違いないのだ。

——なんだかんだ俺は愛されていたんだな……くそお！ 今、それに気が付くかよ。だって、だってよお『親孝行したい時には親は無し』とは言うけれど、いくらなんでも早すぎるだろ……

「それ、お姉ちゃんのチーズ？」

「ええ、そうよ」

セレナがベッドから起き上がる、その仕草が辛そうだ。そう、二日経つたのにセレナの体調は回復していない、……それどころか悪くなっている気がする。

「セレナ食べられる？」

「うーん、いいよ、お姉ちゃんのチーズだもん」

セレナは嘔む力も弱くなっていて、前世の乾パンより硬い乾パンもどきはお湯に漬けて食べさせたりしている。そんな中で、このチーズだけはセレナも普通に食べてくれる。残った最後のチーズはセレナに食べて欲しい。

「セレナが元気になったら私も食べるわよ」

「でもお、それ最後の一個でしょ？」

「このチーズが世界で最後の一個って訳じゃないでしょ？」

「うーん、でも今は良いかなって」

……おかしい、ここ数日は充実した食生活とは程遠い。満腹どころか傷ついたセレナの若い体は、本来いくらでも食べ物を欲するはずだ。なのに、本当に食べる事が出来ないように見える。

その事実にはゾツとした。思った以上にセレナは重傷なのかも知れない。

「セレナ、健康値を測りましょう」

「お姉ちゃん、お顔が怖いよおー」

「良いから！ 早く！」

嫌な予感に顔が引き攣る、強い調子で俺は頭から外した王冠を妹に握らせた。

健康値：4

魔力値：152

下がってる！ 上がるどころか下がってる！

健康値は魔力の抵抗係数から体力を測る。だから計測時に、ほんの僅かだが体力を削ってしまう。それを嫌ってあまり頻繁に測りすぎるのも問題と耳にタコが出来る程言われてきた。

それで、セレナの健康値を測りすぎないようにしていたのが完全に裏目に出た。一日一回とは言わず、もつとこまめに測るべきだった。

「セレナ！ 頭を貸して！」

「え？ 大丈夫だよ」

「良いから！」

愚図るセレナのおでこに手を当てる。

——熱い！

「熱が有るじゃない！ 何時から？ 何時から熱が有ったの？」

「え？ えーと、昨日の夜ぐらいから……」

「どうして言わなかったの！」

「だって……だってえ」

駄目だ、セレナに当たったって何にもならないのに、それに昨日の夜言われたって何が出来たって言うんだ。

虚ろな目でセレナはギユツと毛布を握る。

「ご、ごめんなさい」

「良いのよ、セレナは体力を付ける事だけ考えて」

「うん……」

どうする？ シルフは病気の妹に薬草を煎じて飲ませて居たみたいだが、効果が有ったと言いはない。少なくとも即効性の効果が有ったなら、薬草を集め続けるなんてして

ない筈だ。

それでも、一応セレナには飲んでもらった、苦い苦いと不評な所を我慢してもらったのだが、効果の程は不明だ。

青かびからペニシリンが出来るって事は知っているが、具体的な抽出方法は知らないからと、作ろうとしなかったのを後悔する。仮に作った所で試験する方法も保存する方法も無いから意味が無いと思っていたのだ。俺の不健康は病気が原因とも言われていなかったし。

俺は怪我をしても回復魔法で治せる世界で抗生物質が必要になる機会が無いとすら思っていた。消毒液があつて、魔法で傷口がすぐに塞がるなら感染症の危険は少ない。

大体にしてこの世界の青かびにペニシリンが有るのか？ って問題もある。王宮での俺の立場は微妙で、下手な事業を興して失敗したら目も当てられない。そんな風に思っていた。

いや、違う。俺は結局サボつて来たのだ。他にも魔法や地理など、この世界で必要そうな物は幾らでもあつたのだから。

なんならエルフの医者が調合する薬だつて、調べれば抗生物質だったのかも知れない。エルフは魔法を生かして自然を分析し続けて来た、薬草の培養や、畑を作らず森の恵みで王都の人口を支えていた事を考えれば、何にせよかなり効果の高い薬を作ってい

たに違いない。

そんな秘伝の技が易々と本になっておらず、俺の知識として入ってこなかった可能性は高い。

となれば、いち早くエルフの村や集落で薬を手に入れないといけない。更に言えばこの小屋だって安全と言える保障などどこにも無いのだ、食料も足りないとなればジツとしている理由はどこにも無い。

ただ、問題は体力だ。セレナは歩けない。再び俺がおんぶして移動する事になる。おんぶする方はもちろん、される方だって消耗する。

「セレナ、チーズだけでも無理してでも食べられない?」

「え?」

「移動しようと思うの、病気だったらこんな所に居ても治らないわ」

「で……でも」

「セレナはどうしたい?」

そうだ、セレナの意見を聞かないと。俺一人で考えて良い事なんて何にもない、なんなら俺はここでセレナと心中したって良いんだ。

「お熱、下がらないかなあ?」

「ごめんね、森の中で食べる物あんまり見つからなくて……何日もここで頑張れないか

もしれないの」

「そうなんだ……」

本当はセレナの健康値が10、せめて7とか8になったら二人で歩いて移動できないかと考えていたのだ。だが上手いことセレナの熱が引いたとしても、健康値が5になる程度。歩いて移動は出来ない。

どうする？ どうする？ どうする？

何が正解だ？ 状況は絶望的だ、何を優先して何を捨てるのか？ 優先するのはセレナだ、俺の安全係数は捨てたって良い。セレナが死んで、俺が生き残る可能性を上げたって仕方が無い。

ふと視界に兄様の剣が目に入る。兄様の秘宝だった双剣、ここまで守ってくれたが重量が有るのも事実。シルフの記憶に有るパラセル村までセレナを担いで行くとなれば、荷物は限界まで減らしたい。なにせ俺の体力だって完全には回復してない。食料を探して歩き回ったし、精神的疲労だって押し掛かって来ている。

置いていくか？ これは兄様の形見だぞ？ それでも剣を持たなければギリギリ村まで歩けそうな気がする。

勿論武器も無く、持ち前の不幸さで魔獣と出くわしたらその時点で死亡確定だ。でも、それでも良い気がした、二人で死ぬか二人で生き残れるかに賭けられる。俺だけ生

き残れる可能性に何の意味も無いのだから。

「お姉ちゃん、私の事は良いから一人で逃げてよ」

剣を見ていたからかな、妹に余計な気を使わせてしまった。

「どうして？」

「だって、セレナが居なければお姉ちゃん、もつと遠くに逃げられるでしょ？」

「セレナが居ない所に逃げたって仕方が無いじゃない」

「え？　で、でもお……」

「セレナは私が危ない時に一人で逃げられるの？」

「逃げ……ないよ」

「じゃあ、私も逃げない、自分で出来ない事を他人に求め過ぎちゃだめよ？　お母様も

言っただでしょ？」

「う……うん、母様言っただあ」

ああ、母様の事、思い出させてしまった。せめて母の代わりにと、セレナの髪を梳く様に頭を撫でる。

すると、またじんわりと、セレナの目に涙が溜まる。

「うう、きつと罰が当たったんだ」

「罰？」

「うん、私お姉ちゃんの事馬鹿にしてた、不健康で変な事ばかりしてる姉様を私が守らなきゃって」

「セレナ……」

「普通にしてればちゃんと健康になれるのにつて思ってた、でも！ でもお……実際に自分が元氣じゃなくなったら、どうやったら元氣になれるかなんてわかんないよお」

そんな風に思ってたのか……、でも、俺は実際、変な事ばかりして居た気がする。今まですつと、心配ばかり掛けて来たんだ。

「良いのよセレナ、お姉ちゃんが変なのは本当なもの」

優しくセレナの涙を拭う、そんな俺の腕をセレナはギュッと抱きしめた。

「ずつと私が、私がお姉ちゃんを守るんだって思ってたのに、私がお姉ちゃんに守られる……私、馬鹿みたい」

「セレナ！」

なんだよ！ なんでだよお……セレナはずつと俺のヒロインでヒーローだったじゃないか！ 成人の儀の時も、王都で殺されそうになった時も、銃で撃たれて歩けなくなるほど衰弱した時ですら、崖から落ちそうになった俺を守ってくれたじゃ無いか！

「私は、ずつと、ずつとセレナに守られて来たから……お願いだから、お願いだから私もセレナを守らせて」

視界が滲む、涙が溢れる、そうだ、セレナは何回も俺を守ってくれた、なのに俺は一度だってセレナを守ってやれてないじゃないか。

「ごめんね……お姉ちゃん、ごめんね」

止めてくれ、こんな馬鹿なお姉ちゃんに謝らないでくれ。

「セレナ、セレナ」

「母様、守れなかった。凄い魔力が有るって、みんな褒めてくれて、なんだって出来ると思ってたのに、朝起きたら体が怠くて、お姉ちゃんみたい……たまにはサボっても良いよねって、もう一度寝直したら、お昼頃起きてね。起きたら、寝坊したら……みんな、みんな死んでたの、母様もゼノビアも」

ゼノビアさんはセレナの専属侍女だ、そうか、おそらくゼノビアさんも母様もあの霧が特にセレナの体に悪いって気が付いていたのだろう。脱出せずに残っていたのも、ひよつとしたら寝たままのセレナが動かすのも危険な状態だとまで解っていた可能性も有る。

もちろん俺だって、あそこまで一気に敵兵が王宮を駆け上がって来る可能性なんて考えた事も無かった。

セレナは良い子だ、サボリなんて殆どしない。そして姉にはサボリの常習犯みたいな俺が居るんだ、怠い朝だったら、たまには自分だっと思う事だっただけ有るだろう。だが、

その初めての二度寝で、起きた時にみんなが死んでいた。

そんな、そんな事が許されて良いのかよ。

「でも、セレナが寝ていてくれたおかげで、私は助かったのよ」

「そうかなあ……」

「そうよ、多分セレナが起きてたら、母様もゼノビアさんもすぐ脱出したと思うの」

「お姉ちゃんを置いて？」

「私は、お父様の所に行くって兵隊さんに伝えてたから」

「……父様は？ 父様はどうなったの？」

「最後まで戦うって、兄様と逃げろって、でも結局兄様も死んじゃった。セレナと違って

私は何にも守れなかったの……」

「私も、私だつて守れてないよ！」

「セレナは私を守ってくれたじゃない」

「でも、でもお」

「ありがとう、セレナ」

「う、うえええー……」

張りつめていた何か切れた様にセレナは泣いた。

泣いて、泣いて、ゆっくり眠った。私はそっと寄り添ってセレナの髪を撫で続けた。

きつとセレナは今まで眠れなかったのだ、眠ったら俺まで死んでしまうんじゃないかって。

俺も寝よう、起きたら二人で村を目指す。

セレナは俺を守ってくれた、俺だってセレナを守りたい。他の何を守れなくたって、俺の魂が俺を殺してもセレナだけは助けたいんだ。

絶望の夜

「ハア、ハア、ハア」

息が上がる、それでも止まれない、背中に感じるセレナの体温が高すぎるから。

目が霞む、それでも諦められない。肩越しに感じるセレナの息遣いが苦しそうだから。

ひと眠りした後、俺たちは狩猟小屋を出た。セレナの熱は更に上がって苦しそうだったが無理してチーズは半分だけでも食べて貰った。お湯に溶かした乾パンと共に二人で最後の食料を分け合った。

シルフの記憶を頼りに森を歩くが、何年も前の記憶なのだろう、道などの知識は役に立たないぐらい違っている。それでも地形は大体変わっていないし、なにより山歩きの知識が豊富で、ちよつとした足運び、体の動かし方が変わった様に思う。

こう言った知識は口でいっくら説明されたってモノにするのは時間が掛かる、それが参照権によるダウンロードなら一瞬で体得出来るのだから凄まじい。

それでも、まだ疲れが残る体でセレナを背負つての移動はキツイ。火事場の馬鹿力とばかりに王宮で暴れ、脱出し、歯を食いしばって狩猟小屋までたどり着いたまでは良

かったが、狩猟小屋で休憩した時に、一度気持ちが切れてしまった。

そもそも、命を削る様な無茶が続けられる筈がない。解っていた事だが想像以上に体が重い。もしも兄の形見の双剣を持っていたら小屋から100メートルと移動できなかったに違いない。

そう、兄様の双剣は小屋に置いてきた。縁の下に隠したが、剣って奴は案外手入れが必要だ、そんな所で朽ちていくぐらいならいつそ堂々と小屋の目立つ所に置こうとも思った。

しかし兄の双剣を帝国の人間共が使う可能性を考えたら隠さざるを得なかった。

だから今の俺たちは帝国兵に出会っても、魔獣に出会っても、その瞬間にゲームオーバーだ。森を進むのに息を潜め物音を立てない様に移動する、シルフの知識は最大限に生かされていた。

しかし、ずっと山で生計を立てていた当時10歳のシルフの記憶でもパラセル村と狩猟小屋までは半日掛かる。それがセレナを担いで中三日で、二回目の強行軍。

気持ちが途切れた影響なのか、まだ頭の整理がついていないのか、お風呂に入りたいやら、お腹が空いたやら、綺麗な服に着替えたいとかお姫様気分で本能が訴え掛けてくる。

いや、文化的な生活を送っていた王都のエルフならみんな同じように音を上げるのは

想像に難くない。

なんせ今の俺は、泥と汗にまみれた惨めな姿に違いないのだから。

「フー、フー、フー」

俺は大きな木に齧りついていて。呼吸の度に苔むした匂いが口に広がる。別にカブトムシになつた訳じゃない。

木に寄りかかつて休んでいるのだ。文字通り喰らい付いていないと体がずり落ちてしまう。本当は両手で抱きつきたいのだが、背中中のセレナを支えている。

膝について休みたい、しゃがみ込んでしまいたい。でも、そしたらきつと、もう立ち上がれない。

気力だけで動いていたのに、その気力が途切れてしまった影響は深刻だった。

前世の日本人はやる気や気力は無料の様に思っている節があつた。『やる気が出ないのは情弱な証拠、やる気が有るのが当たり前、やる気が無い奴は何をやっても駄目』と言つた風潮だ。

でもエルフに転生して生活を送つてみると、体調や食べ物、生活習慣や、もつと根本的に種族や体質と言つた生まれ持った物までも、俯瞰して見れる様になつた。

すると、気持ちだつて体調に引つ張られる事が体感として理解出来た。体が不調だと、それだけで何も出来ない日があつた。

だからこそ無謀と言われても肉食に拘つて来た。どうしても健康になりたかつたのだ。

元来俺の体は丈夫に出来ていない。ハーフエルフの俺に、適切な食事だつて摂つてきていない。なのに、王宮から脱出して、ここまで体に無理をさせてしまった。気持ちだつて続くはずが無いのだ。

俺の命がゴリゴリと削れていくのが解る。俺は、一体何をしているのか？

そう言えば、日本人は氣力を振り絞つて、それこそ命を削る様な頑張りを美德としていた様に思う。俺はそれを心底馬鹿にしていた。生きる為に頑張るならともかく、死ぬ為に頑張つてどうするのかと、優先順位を履き違えた馬鹿の様に思つていた。

でも……俺にも命より大切な物が出来た。

妹のセレナだ。

俺は隕石で命を奪われた、家族にだつてもう会えない。でもそれは悲しくなかつた、『ふーん』ぐらいのもんだ、だつて俺の責任でも無いし、仕方が無い。それより神様がくれた今後の方が重要に思えたんだ。

でも、俺の巻き添えで友達の名まで奪われていた。勿論、これだつて俺の所為じゃないと思うが、俺なんかと仲が良かった為に死んだと思うとやり切れない思いがあつた、俺らしくない感情だと持て余した。

生まれ変わって新しい家族が出来た、みんな美人で美形で、おまけに優しくてたちまち好きになった、でもみんな死んだ。

残ったのはセレナだけ。前世でも兄弟は居らず、妹なんてフィクションの中の生き物だった、実際に妹が居た田中に言わせればウザいだけの存在だと聞いていて、そんな物かと思っていたが、妹のセレナは可愛かった。

いや、セレナは特別だ、初めから賢くて可愛かった。

だからかもしれない。俺の魂が周りを巻き込む凶星だと解っていて、なかなか外へ踏み出せなかった、家族の中で生きているのは楽しくて、居心地が良かった。

結局俺は守ってもらった。家族から、特にセレナからは何回も守られてきた。でも俺はセレナを守れないのか？

これじゃ、俺はとんだ疫病神じゃないか！ いや、疫病神どころか神すら持て余す迷惑そのものなのだ。おれは全てを巻き込む覚悟があると神に大見得切つて生まれ変わった。それが家族を失う事にすら耐えられそうにない。

それでも、セレナには笑つて居て欲しい。お姉ちゃんが俺で、ユマで良かったと、笑つて言つて欲しかった。

こんな疫病神でも誰かの為に生きてみたかった。

森の中ではこんな思考が同じようにグルグル廻っていた。実際は、こんなに冷静に分析出来ていた訳じゃない。疲れ果てた俺の思考はゾンビの様に単純に成り果てて居た。セレナ助ける！ パラセル村行く！ 行かないとセレナ死んじゃう！ そしたら、わたし死んでもいい！

こんな言葉がグルグルと脳を駆け巡るだけ。本能の様にずるずると足を前に引き摺って歩いた。

そのお陰だろうか？ 日が暮れる直前にパラセル村に辿り着く事が出来た。

いや、パラセル村だった場所、と言った方が良いだろう。そこには誰も居なかった。

「誰か！ 誰か居ませんか！」

大声を上げて人を呼ぼうと思った、でも小さな声しか出なかった。疲れもある、でも大声を出しても人が来ないであろう現実が怖かった。

そこはどう見ても何年も前に打ち捨てられた家々しかない、廃村だったのだから。

俺はこの大森林の村の名前と場所は参照権で見える地図で全部確認できる。パラセル村は確かに有るのだが、場所が異なっていて、俺が見た地図上のパラセル村はずっと南に有った。

だから、廃村と言う可能性は覚悟しているつもりで居た。なのに、シルフの記憶に引きずられ、パラセル村に行けば何とかなると思いついて、思い込んでいたし、思い込む事で何とかこ

ここまで歩いて来た。

いや、ホントは誰も居ないとは思っていなかった。廃村となって村人が移住したとしても誰か残って居るだろうと思ひ込んでいた。理由も無く、信じたい事だけを信じて歩いた。

そうでなくても近くに他の村は無いのだから、結局はここに来るしかなかった。地図で見たパラセル村はずっと南にあつて歩いて行くのは無理だった。大森林が広大だと言ふより、俺がセレナを担いで歩ける距離がたかが知れているのだから。

でも村には一応屋根が有る建物がある。それだけで魔獣が跋扈する森で野宿と比べれば大分違う。

向かったのは恐らく村長の家だったと思われる中央の大きな家。そこだけが立派な作りのお陰で、長年の腐食に耐えて建物の機能を保っていた。

それでも扉は外れかけ、開ける必要もない程。家の中はどこからか入り込んだ枯れ葉や土埃にまみれていた。床板は所々腐っていて、歩くのに注意が必要だ。

それでも屋根が落ちたり、剥がれたりして無いのが救いだ。前世の家はどうなのかは知らないが、エルフの家は作りが悪いと真つ先に屋根板が剥がれ落ちて、一気に駄目になる。

村にあつた廃屋の大半はそんな有様で、家としての原型も留めて居なかった。

埃まみれのソファ―にセレナを預け、セレナを寝かせる部屋を探して家の中を散策する。

この有様では備蓄された食べ物なんて期待出来ない。一階の台所は無視して二階にあたりを付けると、スグに立派な寝室が見つかった。

ベッドが二つに暖炉と筆筒たんす、どれも以前は立派な物だったのだろうが、腐り落ちた窓から吹き込んだ雨風に晒され、既に部屋は荒れ果てていた。

ボロボロのベッドから土埃まみれのシーツを剥がし、まだ使えそうな筆筒の中から引つ張り出したシーツに交換する。ゴワゴワしたシーツだが、他の布が虫食いだらけで、触れば碎ける有様なのを考えると、正に奇跡の様だった。

部屋の中も掃除をしたいが、体が鉛の様に動かない。それでも暖炉の中のゴミをどけて火を使える様にしないと夜は命に係わる。

幸い、燃やす木屑は捨てる程そこらに散乱している。

でも火が、単純な点火の魔法が使えない程に俺は消耗していた。外はもう暗い、火を付けないと春先の夜はまだまだ寒いと言うのにだ。

問題は先送りにして、一先ずセレナをベッドに寝かせることにする。

俺は一階に戻り、ソファ―に寝かせたセレナの手を取った。

「ええ？」

握ったその手が熱かった。

思わずおでこに手を当てて、慌てて引つ込める。

それがセレナの体温なのだ、信じられないぐらいの高熱。

「セレナ！ セレナア！」

シヨックに叫ぶ。でも、セレナは答えてくれない。

ヤバイ！ ヤバイ！ セレナが死んじゃう！

半場パニックを起こして、セレナを担ぐとドタドタと階段を駆け上がりベッドに運ぶ。

「セレナ！ セレナ！」

セレナの手を取って呼びかける。やっぱり熱い！ 熱すぎる！

人間の体温はここまで上がるのかと、それこそセレナが魔法を使ってふざけてるので無いかと、そう願わずには居られない程の高熱。

そんなセレナがうわごとのように呟く。

「おね……えちちゃん？」

「セ、セレナあああ」

生きてる！ セレナは生きてる！

そりゃ熱が有るんだから生きては居るって、普通なら解る。逆に言うとなんな普通な

事すら解らない位のパニックだった。

「どいっ？」

「村に着いたの、でも誰も居なくて、廃村みたいなの」

言い訳の様にまくし立ててしまう。

「そっか」

セレナは辛そうだった、当たり前だ、こんなに熱が有るのだから。井戸を探して濡れ布巾で頭を冷やさないと。

「おねえちゃん……寒いよ」

「えっ?」

思わず、こんなに熱が有るのに寒いなんて。と思ってしまったが病気なら寒気がして当たり前だ。火だ、火を付けないと。

「すぐ、すぐに火を付けるから」

「あ、これ使って!」

左手で慌てて暖炉へと走る俺の服の端をギュツと握って。右手で胸のブローチを外して差し出してきた。でも、そのセレナの目の焦点が合っていないのだ。

「セレナ、セレナ目が見えないの?」

「良いから、使って」

ちよつとずれた位置に突き出された妹の手の中からブローチを受け取る。汗ばんでいて、セレナの体温の高さを感じるそれは、最近貰ったセレナの秘宝。

一つだけ魔法を入れて置ける魔道具だが、少しづつ魔力を込めないと壊れてしまう物で、最近専ら魔力制御の練習に使っていた様だった。

「解ったわ、ありがとうセレナ」

「うん、早いけど誕生日プレゼント」

俺の誕生日は二か月程先、セレナは一か月先だ、まだ大分早いし、俺はセレナにプレゼントなんてまだ用意していない。それが何故か妙に胸に刺さった。

勿論、秘宝自身ではなく中に入った魔法がプレゼントなのだろう。状況から見て点火の魔法だ、秘宝に初めて込める魔法としては順当だろう。

だが俺の脳裏にはセレナのレーザーみたいな点火の魔法が過ぎる。暖炉に木屑を集めた俺は、延焼を恐れ、暖炉の中に手を突っ込んで魔法具を起動した。

『開け』

わずかな魔力を魔道具に流して起動する。薄暗い暖炉の中にヒユと空気が入り込んだ感覚。その後、薄暗い暖炉の中で青い炎がきらめいた。

「あっー！」

俺が教えた、酸素を含んだ点火の魔法。青白い炎が灯っていた。

でも、それだけじゃない。その青い炎は複雑な形を描く。少女の横顔、頭には王冠。俺だ！ チーズにも描かれている俺を表す姫のデザインが、暗い暖炉の中で朧気に揺らめいている。

いや、朧気にも、揺らめいてるのも俺の涙のせいだ。セレナの魔法はしっかりと形作られている。

「あ、うっ」

余りの感動に、いや、これは感動なのだろうか？ 押し寄せる感情に胸が苦しくなる。

ありがとうと口にするどころか、呼吸すら出来ない自分、震える手、なんとかブローチを傾けて木屑に着火する。傾けるブローチに付随して傾く俺の凶案。昔は一瞬しか保たなかった火は、まだしっかりと形を保っている。

ただ、それだけの事が胸に刺さった。

あの時セレナは二歳。もう七年も経っているし、複雑な形だつて作れるぐらいセレナの魔法制御御はもう一流だ。だから着火の魔法がすぐ消えないなんて当たり前で、この魔法の見るべき所は青い炎や複雑な凶案。安定して点火し続けるなんて、何てこと無いはずなのに、そんな事が無性に嬉しくて、その炎が消えるまで陶然と見つめ続けた。

いよいよ木屑が本格的に燃え始める直前で、青い炎は消えた。

もしも炎が消えなかったのなら、手が焼けるまで暖炉に手を突っ込んで、その青い光

が言えないぐらいセレナが辛そうで、掛ける言葉が見つからなくて、悲しくて、悲し過ぎて、俺の口からは嗚咽だけしか漏れて来なかった。

「ねえ、お姉ちゃんの秘宝、貸して」

「う？ あ、うん……」

健康値計の王冠。

健康値を測るには、ちよつとだけ健康値を消費する。千回も、万回も測つて1減るか
どうかの僅かな値。でも、それでも今のセレナには危ない気がして気が引けた。

それでも結局、俺はセレナに王冠を握らせた、何か希望が無いのかと期待して。

健康値：2

魔力値：57

「あ、ああああ」

思わず呻いてしまう、

健康値が2、不健康って言われ続けた俺だつて、今まで一回だつて見たことが無い数字。
字。

ホントはどんな数字が出ようと、「大丈夫、治つて来てるよ」って言おうと思つていたのに。

「ねえ？ どうだった？」

「あ、う……ん」

言葉に詰まる、やっぱりセレナは目が見えてない。だからこそ7だとか8だと言って、励ましたいのに、言葉が出ない。

それにセレナだつて数字が悪い事ぐらい解つてる。解つてて健康値を測つたんだから。

「わた……しも、お姉ちゃんみたいに、『らじおたいそう』やつてれば良かったな……」
初め、セレナが言つてる意味が解らなかつた。参照権で思い出す、いつかセレナと一緒にやったラジオ体操。

俺だつて最近はラジオ体操なんてしてない、セレナと一緒にやったのなんてあの日の一度だけ。よく覚えてたと思う、そう、あの時は五歳だから、セレナは二歳。

二歳？

二歳と言えば、育つのが早いエルフだつて、なかなか記憶が安定しない時期だ。よくそんな事を思い出せるな。

いや、いや……違う。思い出しちゃダメだ、そんな昔の事。

「セレナ！ セレナ！ 行っちゃ駄目！ 置いて行かないで！」

俺はセレナの手を取つて必死に叫ぶ。

……走馬燈。

そんな物が本当にあるのだろうか？ でも点火の魔法もその時期で、俺も急速に思い出す。思い出されてしまう、まだ小さかった時の楽しい思い出。

小さい頃。お姉ちゃんぶってセレナの手を取って先に先にと歩いた、でもすぐに体調を崩して、逆にセレナに手を引いてもらった。

「ごめんね、わたし……お姉ちゃんのこと……守るって約束……守れない」

「良いから！ そんなの！ もう、いいからあ！」

セレナにしがみつく様に、必死に叫ぶ。

思い出してしまふ、竜籠の中、涼しいと喜んでくれたこと。湖で遊んだこと。倒れた時には心配して何日も看病してくれたこと。

セレナにしがみつく様に大森林の空を飛んだこと、恐ろしい魔物も、薄暗い洞窟も何も怖くなかった事。

「だから、わたしだと思って、わたしの秘宝、わたしの代わりに……」

セレナの秘宝、魔道具のブローチ、ああ、そうだ、火を付けた後、まだ返していなかった。お願いだから、返させて。

思い出してしまふから、父様から貰ったブローチを大事そうに抱きしめるセレナの笑顔。

「ねえさ……ごめ……ん」

お願いだから謝らないで、謝る必要なんて無いから。セレナにいつぱい、いつぱい色んな物を貰って、何一つ返せていないダメなお姉ちゃんだから。

「セレナ！ セレナあああああ」

お願いだから笑ってほしい、お願いだから生きてて欲しい。全てを捨てても、聞きたい音がもう聞こえない。

静かな夜だ、

パチパチと火が弾ける音しか、もう聞こえてこなかった。

★絶望の夜明け

そこは幸せな場所だった。温かく、優しい光に満ちていた。それに何より、セレナが居た。

「セレナ、そんなに走らないで」

俺は、いつもの様に走るセレナを追いかけた。

俺は病弱だから、妹の後ろを歩く。コレもいつもの事。距離を離されそうになるけれど、呼び止めればセレナは絶対に待ってくれる。

だけど、今日はいつもと違った。

「ダメだよおねーちゃん、コツチに来ないで！」

「なんで？ セレナどうして？」

セレナに拒絶された。それが、とても、とても、悲しかった。

「えへへ、あのね、お姉ちゃんにはやって欲しい事があるんだ……」

「なに？ 私、セレナに何をしてあげれば良いの？」

「それはね——」

その時、世界が暗転する。

打って変わって、目の前には赤い世界が広がっていた。

それに熱い。汗ばむほどに。ここはドコ？ 私は廃村に入り込んで……それから

……

ぼんやりとした思考は焦げ臭い匂いに中断される。

燃えてる！ 熱い！ 火だ！ 暖炉の火が燃え移っている！

そう言えば暖炉の火は付けたまま、辺りに散らばる木くずに張り込む隙間風。そしてポロポロのカーテン。

火事が起こる条件は揃い過ぎていた。

でも、それで良い。セレナと二人で行けるなら、それで。

冷たくなったセレナの手を握ると、俺はそつと目を瞑った。疲れ切った俺の体は、まだまだ睡眠を求めているから。

ああ、これで、寝られる。ゆっくりと……

だけど、俺の体は突然抱え上げられた。あつという間に部屋の出口まで運び出される。

「セ、セレナ？ セレナ―」

「駄目じゃ！ 行つてはならん」

部屋で寝たままのセレナへと俺は必死で手を伸ばす。だけど、担がれた俺は、そのま

ま部屋の外へと連れ出される。

「なんで？ 誰？ 私は！ セレナと！」

「離して！ セレナが、セレナが」

「無駄じゃ、もう死んでおる」

「そんな、そんな……」

「そんな事は！ 誰より知ってる！ だけど、だけど……私は！」

「俺を抱きかかえるのは誰？ なんで今更！ セレナが死んだ後で!!」

「ハアハア」

俺を担ぐ誰かが頼り無い足取りで階段を駆け下り、ドアを蹴破ると家の外に、一転、冬の寒々しい風が頬を撫でた。

「なんで……」

「まだ、中に……セレナが居るのに！」

「どうして！ どうして！」

目の前には轟々と燃えさかる家、夜空には煌々と輝く大きな満月。炎の明かりもあつて、辺りは夜だと言うのに不自然なまでに明るかった。

地面に降ろされた俺は、現実感の伴わない光景を受け止められない。

「セレナあ……セレナ……」

手の平に残るセレナの秘宝を抱きしめ。俺はただ、泣きじやくる事しか出来なかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何があつたんじゃ?」

尋ねるのは俺を部屋から助け出した爺さんだった。

名はファームス。廃村となった村の外れで炭焼きをしていた所、火の明かりに仰天して目が覚めたらしい。

……いっそ、あのまま見殺しにしてくれれば。

そんな思いが止められない。

あの後、俺はまた、いつもの様に、アツサリと無様に気絶してしまった。

それで、朝、家があつた場所に来てみれば、焼け落ちた跡の黒い炭しか残っていなかった。

これじゃあ、セレナの遺骨すら見つけられない!

「なんで、なんで!」

どうして、俺はこうなんだろう?　なんで、何一つ出来ないのだろうか?

死のう。そう思った。だけど、今の俺はナイフの一本も持っていない。

「どうじゃ?　一緒に来るか?」

話し掛けてくる爺さんの腰には不格好な鉈があつた。

……これなら？　ダメだ、こんなモノじゃ死ねないよ。

「なあ、来ないか？　ココに居ても危ないぞ」

エルフの国が滅びたと言うのに、何も知らない呑気な爺さんが憎かつた。

だけど何より、何も出来ないで家族を、セレナを巻き込んでしまった自分が憎かつた。

「……行きます」

「そうか！　じゃありアカーの後ろに乗ると良い、ワシはピラークの準備をしてくるからのお」

人里に行こう。それで、国が滅んだ事を伝えよう。

この老人みたいに、呑気な寝ぼけた奴らを怖がらせてやろう。

死ぬのはそれからだって十分だ。俺はその時そう思っていた。

★狂気の始まり

——ピユイ

ピラークと呼ばれるダチヨウみたいな鳥が鳴く。彼らが曳く荷馬車はエルフの間ではメジャーなもの。

俺は荷台の上で、積み上げられた炭と一緒に荷物になっていた。三角座りで膝の間を頭を埋めるように縮こまる。

向かっているのはパラセル村。あのパラセル村だ。

廃村になっていたパラセル村は旧パラセル村跡地。いまやあそこに行くのは炭焼き小屋のファーモス爺だけらしい。

何故移住したのか？ 濃くなり過ぎた魔力が人体に害を及ぼしている事が解ったからだ。

そう言えば成人の儀で向かった旧王都。あそこは魔力が特別濃かった。

「セレナ……セレナ……」

思い出してしまふ、あの時のセレナのこと。いつも以上に元気一杯だった。ああ、やっぱり王都から遠いところに逃げようと言うのが失敗だったんだ。人それぞれ、適量

となる魔力量が違うのだ。

自分の愚かさが何より苛立たしい。

「元氣を出すんじゃない……」

呑気に声をかけてくるこの爺さんも憎らしい。

もつと早く、せめて村に着いた時点で現れてくれれば、セレナは助かったのと思わずにいられない。

現れないのなら、最後まで出てこなければ、俺はセレナと一緒に死ねたのに。

夢の中の、セレナの言葉を思い出す。アレは俺が見た都合の良い幻に過ぎないだろう。だけど……セレナは言っていた。

「お姉ちゃんにはやって欲しい事があるんだ……」

夢でも良いから、その答えが聞けなかったのが悔やまれる。『参照権』でもお手上げだ。

残された俺は一体、何をすれば良いんだろうか？

……そんなの決まってる。復讐だ。俺は最後に残った王族なのだから。

でも、でも、そんなの！

「無理だよ、セレナ！」

俺は一人、荷台で膝を抱える。俺は王族の中でも味噌つかず。体力も魔力もからつき

し。

俺は、ただ悲しくて、悲しくて、他の何も考えられ無かった。

だけどゆっくりと、体の中から悪意が染み出してくるのを感じた。

先ずは村の連中を焦らせて、それから？ どうやって俺の悲劇に皆を巻き込めば良い

？

そうだ、皆、苦しめば良い！

俺はもう、阿鼻叫喚の人々の姿を想像し、楽しむ事しか出来なくなっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ピラークに曳かせる荷馬車で一日の距離に新パラセル村は有った。大森林の中では大した距離では無いが、セレナと二人で辿り付くには絶対に不可能だったと解る。

東に行くこと決めた時点で、初めから詰んでいた。それが悔しい。

だけど、楽しいこともある。ココからでも解る。辿り付いたパラセル村の様子がただ事じゃない。

まだ暗くなる前から村の各所で火が焚かれ、厳戒態勢が敷かれている。

村の入り口には警戒感も露わに人が立ち、村に入る人々を厳しく誰何している。

王都が落ちた事に気が付いたのだ。慌てる村の人間を思うと笑いが止まらない。

「これは一体どうした事じゃ!？」

「フアーモス爺さんか、無事だったんだな」

フアーモス爺が門番と話す。俺はその会話に耳を澄ました。

「一体何が起こったと言うんじや!」

「驚くなよ爺さん、どうやら王都が落とされたらしい、人間にな」

「なんじやと?」

「信じらんねえよな? でもマジらしい、あいつら魔法を無効化する秘密兵器を出して来やがったとかで、魔法で一網打尽にしようと思っていた戦士達を逆に一網打尽にして、王都まで一気に駆け上がったって話だ」

「そ……そんな馬鹿な事が」

「有るんだよ、ココだつてヤバいかも知れないぜ? 村長やらが集まって、集会所じゃ喧々諤々の話し合いの真つ最中だ」

「そ、そうだったか……」

フアーモス爺はチラリとコチラを見てくる。ようやく気が付いたか? 俺の正体に

! 敬えよ! そして死ぬ!

ダメだ、俺は本当に壊れている。八つ当たりだつて気が付いてるさ! でも!

感情を押し込むように、必死に膝小僧を握り締める。感情が爆発しそうだった。

そんな俺を見ていられないとばかり、爺さんが続ける。

「では、その話し合いの場に連れて行つては貰えんか？」

「ハア？ 爺さん正気かよ、そんな場に爺さんが行つたらどんな顔されるか解つてんだろ？」

「どんな顔をされようとも構わん、ワシの話を聞いて、それでも下らないと思うなら好きな様に村から摘まみ出せばいいじやろう」

「ちつ、好き勝手言いやがつて、吠え面かくなよ？」

門番は言い放つと馬車を止め、急かすように俺達を村の中へと案内した。

そうして連れ込まれたのは村の公民館みたいな場所だった。

イキナリの急展開。俺は村人が集まるど真ん中に放り出される。回りには人ばかり、住人が残らず集まつてるに違いない。

ザワザワとまとまりのないざわめきが、俺を見るなり実体を持つかの様だった。

誰かが言った、「これはエリプス王の娘、ユマ姫に間違いない」

誰かが叫んだ、「他の王族はどうなったのか！」

ファーモス爺が呟く、ユマ姫と寄り添うように死んでいた青い髪の美しい少女の事。

すかさず響く叫び声、「それこそがセレナ姫では無いか！」

鳴りやまぬ怒号、そして絶叫。

取る物も取らず逃げて来たと言う行商人や、旅人の口からも王都陥落の報が上がる。

村の人々は卒倒せんばかりのありさまだった。

どうやら俺は王都陥落の報が知らされる、狂乱のただ中に突っ込まれたらしい。運が良い！ その狼狽振りを、絶望を、特等席で楽しめるではないか！

俺は一身に集めた注目を独占して、朗々と語る。

疲れ果て、舌も回らず、表情筋も固まったままだが、それで良い。舌つ足らずな位が悲劇を語るのに丁度良い。

「父様も死んだ、母様も死んだ、ステフ兄様も、セレナだって死んじやった」

焦点の定まらぬ目で泣きながら笑う。

「みんなみんな死んじやって、私だってどうして生きてるか解らない」

それまでの狂乱が嘘の様に静まり返り、静寂が訪れた。

——ああ、なんて、心地よい。

まるで自分自身が『絶望』になった様だ。いや、そうだ！俺が！俺こそが絶望なのだ！俺の『偶然』が『絶望』をもたらした。

だったら、帝国だって絶望させる事が出来るはずだ。

その後、どうするべきかと紛糾する論議の中。俺は希望の糸を垂らしてやった。

この村でレジスタンスを結成する？ 様子を見る？ 和睦を持ちかける？ 全部無駄だ、霧の前にエルフは無力なのだから。

じゃあどうするか？

「私は人間の街へ、出来れば王都に向かいたいと思います」

打倒帝国を掲げ、東の王国と手を組む。それしかない、それこそが帝国を打倒する唯一の方法にして、世界を混沌と破壊に導く一手になる。

「魔法を封じる策が向こうに有る以上、我々だけで戦うのは得策ではありません。同じ無能の耳無しでも、この世を統べる権利を神授されたなどのたまう輩より、ビルダール王国の方が話せるでしょう。彼らとて皇帝がエルフの技術と兵力を手に入れた先に何を望むかなど、解らない筈が無いのですから」

それはセルギス帝国と対を成す、ビルダール王国との同盟。

しかし、敵対こそしていないがビルダール王国と国交など一切無いのだ。加えて種族の壁と言う奴は根が深い。突然王都にアポ無しで殴り込むのは危険だと反対される。

それこそ唯一残った王族の生き残りに何か有ったら村の責任問題になりかねないと止める老人が大勢居た。

更に言うなら、人間との同盟など俺の独断で決めて良からう筈が無いのだ。王族は全員死んだと言うのだから、俺の自己申告に過ぎない。

だけど、ココは勢いが大切だ。

「だとすれば、誰が決めるのです！ 父様ですか？ 母様ですか？ 死者に話が聞ける

者が居るのならば名乗り出て下さい！ それとも最後まで戦った父を見捨てて逃げた元老院の生き残りでも探してみますか？ 見つけ次第、今からでも父様の御許に送って差し上げます」

俺は毅然かつ、堂々と宣言する。ハツタリが大事だ。俺は一人でも多くの人間を殺したいのだから。

戦女神の様に、彼らを戦争へと導く、その先に死が待っていても構わない。

初めは戸惑うばかりだった村人も、俺の様子に徐々に惹き込まれて行くのが解る。

どうやって日々の生活を取り戻すのかと言う焦りと不安一色だった心が、奴らに一泡吹かせてやると、地図を取り出し戦略まで語り出すようになった。

朗々と語る俺の姿が人々の勇氣に変わる。それが蛮勇であるとも知らずに。

トントン拍子に俺の出発は決まった。

帝国が攻めて来てからでは遅いのだ、早い内に俺は村から脱出する必要がある。

喧々譁々の論議があったが、大森林から直接に王都を目指すのは無謀と言うのが皆の共通認識であった。

それだけ大森林とビルダールの王都を遮るピルタ山脈は難所であるとの事。

そこで飛び出した一案は、王国の大都市を巡りながら打倒帝国を喧伝すると言うモノ。

直接王都に乗り込めないのならどうやっても長旅になる。だけど、この村の保存食だけで王都へと回り込む長旅には耐えられない。

だとしたら人間の村々に寄る必要があるのだが、いつそ大都市を中心に行脚して、各地の貴族に協力を要請しながらの方が良いと言うのだ。

危険な賭けに思うが、どうせ人間の街に寄る必要があるのなら、その時の反応を見ながら臨機応変に作戦を変えたって良い。

かくして俺は、村の物資を満載した馬車を手に入れた。

ついでに共に行くぞと、声を荒げる若者が数名護衛についてくれた。ピラーク二頭立ての村の規模から考えればそれなりに豪華な荷馬車である。

俺は村の大歓声を浴びながら、外の世界へと飛び出した。

それが辛い旅路になる事は、解りきっていたのだが……

少女癡狂ス。

「フフツ」

自然と笑みがこぼれる、嬉しくてたまらない。

侍女として側に控えていた女の子、村長の娘だったか？ が俺の顔を見て、信じられない物を見たかのように目を見開いた。

怒号が飛び交う馬車にあつて、誰もが後ろを気にする中、彼女だけが俺を見ていた。

「おい、もつとスピードは出ないのか？」

「目一杯だ！」

そりやーそうだ。この状況で笑う方がどうかしている。

馬車はガタガタとケツを跳ね上げる程に揺れ、猛スピードで街道を全力で疾走している。

何故かつて？ 追われているからだ。帝国兵じゃない、だったらまだ理解出来る。逃げ出したお姫様を追いかけて来るのは当たり前。

しかし、違う。俺達を追いかけてるのは魔獣だ。しかも俺が知る中で、最も巨大な魔獣である。

「ふっぎけんな！　なんでこんな所に大牙猪ザルギルゴールが出やがるんだよ！」

大の男の切羽詰まった悲鳴が響く。

こんな魔獣を相手に、一般人は何も打つ手が無い。男たちはこれ以上無いぐらいにギヤーギヤー騒ぎ立てるだけ。

これで笑っているんだから、頭がおかしくなったと思うのも無理からぬ話。

「フフツ、ハハハハ！」

ヤバい、笑いが止まらない、いよいよ女の子が怯えだした。でも仕方ないだろう？

俺を殺そうとする『偶然』は絶好調だ。爺さんと村に行くまで何にも無かったから、俺を殺す気が無いのかと疑ってしまった。

俺の『偶然』が、家族を、セレナを殺してしまったと、後悔と……自責の念。なんて生ぬるいもんじゃやないな、疫病神の俺はとっとと死のうと本気で思った。

でも、よくよく考えてみるとセルギス帝国がエルフの国を攻めこんだのが、偶然ってのはよく考えたら無理が有る。戦争は思い付きや偶然でやるもんじゃ無いだろう。むしろ、ここまでが神が予見していた運命の内なのかも知れないと思いついた。

『上』国のお姫様』

いかにも、だろ？

同情されて多くの運命を巻き込んで、因果律を集めるとか言ってたか？

強さではなく、そう言う理由で死にくい奴を選んで転生させると神は言っていた。まだ亡国と言いつけるのは早い、控えめに落ち延びた姫と言ったとしても、悲劇のヒロインとしては十分だ。

だとしたら俺はこんな苦痛を、悲しみを味わうために転生したって事になる。周りを巻き込む事すら覚悟してると言つて啖呵を切つて転生したが、ハッキリ言つてとてつもなく後悔してる。

でも、もし、もしも、だ。もし俺が転生しても、しなくてもセレナも、父様も、母様も、兄様も、結局は殺されるのが運命なのだとしたら。

だつたら俺は仇を取りたい。

そんな運命を作つた帝国の奴らを皆殺しにしてやりたい。いつそ人間を、いやエルフだつて良い、こんな糞みたいな世界の奴らを全て殺してやりたい。

そう思つた時に、おれの魂に潜む『偶然』つて奴が急に頼もしく感じられた。

『神さえ匙を投げ、運命をぶち壊し、全てを巻き込み、関わる者を破滅へ導く』

結構じゃないか、いつそ全部殺してくれよ！

「クソ、もうピラークが限界だ、追いつかれる」

「どうする？ 魔法で攻撃するか？」

「馬ッ鹿野郎！ そんなしよばい魔道具でどうにかなるかよ、余計に怒らせちまう！」

「じゃーどーすんだよよ！」

「逃げんだよ！」

「逃げられねーから困ってんだろボケ！」

ハア、見苦しい連中だ。まあどうせ死ぬんだ精々使つてやろう。

「このままでは全員死にますね」

俺の言葉に馬車は静まり、一斉に視線が集まる。

「私は馬車を降ります！」

「無謀だ、姫サマ！」

「そーですよ、第一、降りるつたつてどうやって？」

「飛び降りたら大怪我しますぜ？ 自分から餌になる様なもんでさあ」

「……………餌に？」

それを言った男に視線が集まる。

「良くいったダルカス、おめえ飛び降りて餌になってこい」

「あ？！」

「大牙猪がおめえをムシヤムシヤ食ってるえーだに俺たちやドロソつー作戦よ」
ザルギルコル

「ふざけるおめーが死んで来いや」

「んっだとー」

取っ組み合いの喧嘩が始まる。まあ飛び降りるのは勝手だが、エルフがたっぷり乗った馬車を一人にかまけて見逃すかは五分五分と言った所。五分五分だったら俺の居る方が襲われる確率は100%。何言ってるか解らなくなりそうだが、それが俺の『偶然』って奴だ。

多分踏みつぶされて、半殺しにされ、馬車を確保できなかつた時のキープとして放置してのが関の山だろう。

「申し訳ありませんが、私には馬車を安全に降りる方法がありません、皆さんには困りなすて頂きます」

俺に関わる人間はみんな死ぬ、本当にお悔やみ申し上げる。

「……………」

言葉も無いって感じか、みんなポカンと俺を見ている、こう言うのは勢いだ、押し切った者勝ちだろう。

俺はトコトコと馬車の後部に向かうと、バンツと出口の扉を開けた。

「では皆様、さきげんよう」

お元気で、と言うか迷ったが多分元氣じゃ居られないから、せめてご機嫌に逝って欲しい。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

さて、肝心の爆走する馬車からの脱出方法だが単純に魔力のゴリ押しだ。
なんせ今の俺の魔力値、健康値はかなりのモノ。

健康値：42

魔力値：416

意味不明な数値。

まず健康値の原因として考えられるのは魔力濃度だ、旧王都の周辺が最も魔力が強いとして、ここは既に森の外縁部。エルフには魔力が薄いぐらいでも、ハーフエルフである俺にはベストな魔力濃度で有る可能性が高い。

魔力濃度つてのは酸素みたいなもんだと思う。前世の酸素カプセルみたいに、ある程度濃度が高い方が、疲れも取れて元気になるのかも知れないが、濃度が高過ぎれば毒にもなる。基本的に体に無理が無い範囲なら魔力濃度が高ければ魔力値は増えると聞いたので、王都の魔力濃度は俺の体には、相当に無理が有ったのだと思う。

なんせベストな魔力濃度下と思われるココでは、最早エルフ離れした健康値を叩き出している。魔力だつて十分天才と称されるレベル。

ちなみに魔力値200がエルフの魔法戦士の最低限と言われる数値。

魔力値が200もあれば魔法使いになれる、つて小さい頃に聞いていたんだけど、どうもエルフは戦士とか魔法使いってジョブの分け方が無いみたい。

ってか、戦い方が魔法しか無いのだから当たり前。

王都は魔力が濃い。だからその魔力に耐えられる王都の住人は魔力に関しては一リート揃いで、他の地域では魔力値の平均は100ちよつと位。

つまり魔力値400超えてのは通常の四倍の数値だ。

更に言うると、まともに魔法自体が使えないエルフも王都の外には大勢いる。

魔法なんざ習うより、魔道具に魔力さえ流せりや良いんだから必要性は薄いのだ。流石に種火魔法辺りは使えるが、それでも普通は使わない。

精神を集中して、必死に魔力を制御して種火の魔法を使うより、魔道具を使うのは村人にとっては自然な事。

地球だって、誰も日頃から火打ち石なんざ使っていない。

天才なんて言葉じゃ到底収まらないセレナはともかく、父、母、兄と魔力値300越えが当たり前前の環境で過ごして居たから、魔力の平均値や魔法の水準に対する知識は有っても俺には全く実感は無かった。

人間よりよっぽど強くて能力が高いと思っていたエルフも、俺の回りの特殊な人々だけだったワケだ。

魔力を使った便利な道具が無ければ、地球人となんら変わりが無い。まして魔力を奪う霧の下なら電気を奪われた現代人並に無力な存在だ。

コイツらも、俺が馬車から降りるって位でグダグダ言うんだから、本当にまともな魔法が使えないのだろう。

「キヤアアアア」

だから、呪文と共に馬車の外に飛び出した俺に村長の娘の悲鳴が上がる。ただ、心配するべきは自分の命だけ？

——バシユツ

空気が弾ける音がして空中に放り出された俺の体が横に吹っ飛ぶ。

空気圧で高速移動する魔法だが、瞬間的に魔力を込めれば吹っ飛ぶ様な移動が出来る。

そう、兄様が木から木へと飛び移って移動していた魔法だ。

200以上の魔力値が必要なのに加えて健康値も削られるので、決してやるなど言われていたが、今の数値なら何の問題もない。

猪に踏みつけられるハズだった俺の体は、道を外れ森の中に吸い込まれていく。後ろから「魔法だ!」とか「アレが王族の力か!」と驚きの声が聞こえてきたが、あいつらセレナの魔法を見たらなんて言うんだろうな。

森へ飛び込んだ俺は魔法で衝撃を殺しながら着地。すぐに油断なく森の奥、木が密集する場所を目指して突き進む。

ザルギルゴール

大牙猪は巨体過ぎて植生の濃い森の中では移動しづらいハズ。以前は俺を狙って木を切り倒して迫ってきたが、今回はどうだ？

チラリと後ろを振り向く、猛スピードで突き進む巨大な獣の目がギョロリと横目にこちらを睨む。

しかしそれも一瞬の事、化け物は森の中の俺を無視して馬車を追って行った。

「ふう……」

流石に森の木をなぎ倒しながら、俺一人を襲うつてのは『偶然』と言える範疇に無いらしい。馬車の皆には魔獣の相手をお願いしよう。

……死ぬかな？

罪悪感ぐらい感じるかと思っただが、全く無い。俺が乗っていたって一緒に死ぬだけだ。

流石に「理不尽を共有出来て嬉しい」とまでは言わないけれど、護衛として付いて来たのだから覚悟はあるだろう。

むしろ問題なのは俺の方だ。

この後この森を徒歩で進むのか？ 流石に辛すぎる。山道や獣道ですら無い森の中は本当に体力を削られるって事を俺は身をもって知ったばかりだ。

結局、ほとぼりが冷めた辺りで道に戻った。

良くない好奇心が顔を覗かせ、彼らがどうなったのか、魔法を使って速足で追いかける様に走った。

万が一^{ザルギルゴール}大牙猪に見つかっても、また森に隠ればいいのだから気楽なもの。

そうだ、森に隠れるだけで逃げられる。不健康だったあの日の俺とは全く違う、走りながら俺はそれを実感していた。

悠々と散歩しながら、どうしてこんな事になったのか考える。

言つてしまえばこんな所に^{ザルギルゴール}大牙猪が居るのがおかしい。

本当は旧王都の更に北の山に棲む魔獣だと聞いている。そこには他にも巨大な魔獣が居ると言うし、餌も有るのだろう。

木の密度が高いことで有名なここらでは、餌を狩ろうにも軽々に森に入る事すら出来ないハズだ。一回り小さくて象くらいのサイズの^{ギルゴール}牙猪ですら満足に移動できないだろう。

となれば、きつと王都近くまで降りて来た^{ザルギルゴール}大牙猪が帝国の兵器で急に無くなった魔力にパニックを起こし、街道を伝つて南まで逃げて来た。そんな所であろうか？ きつと『偶然』で片づけられてしまう範囲に収まる。

俺は『偶然』との付き合い方が解つて来た気がしていた。運命の16歳が近づくと隕石が降る様な無茶もしてくるのかも知れないが、普段はその限りじゃない。

よく考えたら俺と『偶然』の付き合いはかれこれ何年だ？ 30年近いって事に成るのか？ いや単純に足すのはおかしいか？ まあ良いや。

コイツを手懐ければ、巻き添えに帝国を滅ぼす事まで出来そうな気がしていた。

ご機嫌で道を歩くと、いよいよ横転した馬車を発見。大牙猪ザルギルゴールが入れない小道に逃げ込もうとして失敗したって感じだ。

既に大牙猪ザルギルゴールの気配はない。近づいてきたらあの巨体だ、すぐに解る。俺は慎重に馬車を調べた。

まず目につくは大量の血とその匂い、恐らく繋がれたピラークが食われたのだろう。エルフが食べられた形跡は無いので上手い事森に逃げられたのかもしれない。

ただ、荷物を持ち出す余裕は無かったみたいだ、食料や毛布などがまるまる残って居た。よくよく考えると、俺は食料も何も持たず、一体これからどうするつもりだったのだろうか？

つい勢いで馬車を降りてしまったが食料無しで森を歩くなど、死んだ方がマシな位辛いつて体験したばかりだと言うのにな。

結局俺は、トコトン馬鹿なのだ。ため息混じりに馬車を漁る。

毛布やテントの他に、着火の魔道具や、土や木から水分を集める魔道具も有ったが、こ

の辺は有り余る魔力でどうにでもなるので必要ない。

着替えに関しては、サイズが合うのはドレスばかりだ、ちなみに今着ているのもドレス。

俺がお姫様であるため、いつでもドレスを着るモノと言う思い込みがあったのだろう。同乗していた村長の娘のお古で恐縮と言っていたが、もつと地味な普段着が欲しかった。

着替えがあるだけマシだが、森をドレス姿で駆け抜けるのはしんどい。

しかし、考え方を変えれば、人間の村に行つて野良着姿で「私はお姫様です、王都まで行きたいの♪」などのたまつても、気狂いとしか思われまいだろうから悪くはないか。

肝心の食料は、ナッツや棒状のクッキーと言つた定番保存食がしっかり揃っている。ツイてる、これだけ食料があれば一人でも森を抜けるまで移動できるかもしれない。

思い起こせば俺は死にそうな目に合う反面。それ以外は概ね運が良かったんじゃないだろうか？ 町内会のくじ引きみたいなどうでも良い奴は外れるが、どうしても欲しかったゲームの限定版予約は勿論、懸賞のグッズだつて結構当たつた。

『偶然』に殺されるのは魂の所為として、素の運の良さは案外高いのかもしれない。ま、それもコレも死んでしまえば意味のない話だが。

ドレス姿に似合わぬ大柄で無骨なりユツクを背負つて、俺は一路南を目指す。

南からセルギス帝国とビルダール王国の国境付近に降りて、そこから森を回り込むように北東のビルダールの王都へ向かう。

迂遠うえんな道のりだと最初は思った、しかし人間の街に降りて、我こそはエルフの姫なりと喧伝しながらビルダール王国を巡るのは無駄では無い筈だ。

それこそ直接王都に乗り込んで「俺、エルフの姫なんだけど助けてくれない？」などと言つても相手にされないだろう。

「落ち延びたエルフの姫が、ビルダール王国内を王都へと目指し旅をしている」そう言う噂が立てば成功だ、エルフにも俺の動きが伝わって、使者でも送ってもらえれば証明になるし、なにより『偶然』に抗うには人を巻き込む事、その為には物語が必要だった。縁もゆかりもないエルフの姫の為、帝国と戦争しましょうつて思つて貰える様な、一世一代のストーリーを作り上げる。

ハッキリ無茶だと思う、でも不安は無い、楽しくて仕方ない。これはゲーム、そうゲームだ。

ただしクリアなんて無い、だつてもう負けている。

守るべき城も、家族も全て落とされて、とつくの昔に敗北は決定している。後は生き残ったキャラクターで他のプレイヤーに必死に嫌がらせをするだけだ。

ああそうだ、俺はゲームでもこう言う瞬間が堪らなく楽しいんだ。もうこいつとゲームなんてしたくない、つてぐらいに嫌がらせを繰り返す。

なにせもう負けている。ルールなんてどうでも良い、勝利条件を満たすために頑張る必要も無い、ただただ相手が嫌がる事だけ考えれば良い。

さあみんなで死のう。セレナの元に全てを届けよう。

ついこの間、あんなにあんなに涙を流して泣いたのに、気味の悪い笑顔がべつたりと顔に張り付いて、俺はどんな風に泣くのかも忘れてしまっていた。

黒衣の剣士

黒尽くめの男が悠然と街道を歩いてくる。

「なんじゃありやー」

村人が間拔けな声を上げてしまったのも無理からぬ話。

その男の風貌は、大きな街道から外れた長閑な村に似つかわしい物では無かった。

頭の上からつま先まで、黒一色、その一言に尽きる。この辺りでは珍しい黒髪に、ズボンもジャケツトも黒く染め上げられ、関節などに張り付けられた補強用の革、果ては外套やブーツまでも黒で統一されていると有れば、異様としか言いようがない。

だから、そんな男が村に踏み込むや否や、周囲の農奴達は一齐に男を取り囲んだ。

「全くとんだ歓迎だぜ」

男は手を上げ、反抗の意思がないことを示すが、警戒は解けない。しかし愚痴りながらも男は全く気にして居なかった。

男は自身の風貌が異様で威圧的だと重々理解していた。

色だけではない、身長も周りと比べて頭一つどころか二つ分近く高い、貧しく平均身長の高い田舎の村人に見れば、見た事も無いような大男だ。

加えて、背負う剣まで明らかに人間用のサイズじゃない、顔にも不思議なアクセサリを付けて表情が読み取りにくい。

これだけ揃えば怪しいなんてモンじゃない。長閑な村がパニックに陥るのは当たり前なのだ。

「だからってこれは無いだろう」

今度のぼやきは本心から、男は村に入るや否や村人達に手厚い歓迎を受けた。

金属製の農具を突きつけられたのだ。

「おめえ、何しにこの村さ来た？」

誰何する男はピッチフォークと言われる農具を突き付けながら黒衣の男に迫る。

「用があつて来たわけじゃねーよ！ 旅の途中だ！ 仕事が無けりや、一泊どつか借りて、食料調達して出て行くよ」

「本当か？」

「ああ」

ピッチフォークは農具とは言え、突き付けられた方にとつて見れば三又槍トライデンと大差ない。それでも平然としている男はやはり只物では無いと言えた。

とは言え、続々と村人が鍬や鋤を手に険悪な顔で集まってくるのは面白くない。当てもない旅の途中とは言え、男は魔獣退治の専門家。凶暴な魔獣に困ってや居ないかと、

親切心で立ち寄った所も大きいだけに、納得が行かなかつた。

男はその筋では名の知れた男だった。

だからこそ、村人に混じった行商人が男に向けて声をかける。

「オイ！ おめえさん、まさか妖獣殺しか？」

「ああ、そう言われる事も有る、せつかく来てやつたつてのにこんな歓迎を受けるとはな」

妖獣殺し、男に付いた二つ名だ。

強力な魔獣は、基本的に大森林の外には出てこない。ただし、空を飛ぶ魔獣は別だ。

魔獣の中にもカテゴリーがあり、空を飛ぶ魔獣には、翼獣と妖獣の二種類が存在していた。

翼獣は文字通り翼を持つ鳥の一種。行動範囲こそ広いが、それ程の脅威は無い。

妖獣。危険なのはこちらの方だ。その特徴は、一言で言うときメラである。複数の魔獣がグチャグチャに混ざり合った、突然変異の化物であった。

当然、個体ごとに特徴も大きく異なり、妖獣と一口に言ってもその危険度は全く異なる。

猫の様にしなやかに駆けたり、猿の様に知恵が有ったり、犬の様に鼻が利いたり、鋭い爪や牙を備える事もある。

だが、それらは大森林の中から出てこない。魔力が薄い中をわざわざここまで走ってこない。

だが翼を持って飛ぶ奴だけは別だった。そんな強力な魔獣が人間の村に現れる度に、農村の人々は恐ろしい程の被害を出していた。

そんな妖獣が帝国の小さな村を襲った際、颯爽と現れて、瞬く間に退治した事で一躍名を売ったのがこの男、『妖獣殺し』なのだ。

「へえこんな辺鄙な村でも俺を知ってる奴が居るとは、俺も名が売れたもんだな」

「いま、妖獣殺し様が旅をしてるってお話はへえ、我ら行商人に取って語り草ですから」
この世界の、特にこんな辺鄙な村では情報源は人の噂話に限られる。しかし噂と言うのは娯楽だ、面白い物は際限無く広がるが、そうで無ければ広がらない。

その点、英雄的な妖獣狩りをしながら貴族に飼われず、旅を続ける黒尽くめの戦士の噂は極上のネタとして広まっていた。

「お、おいコイツはそんなに有名なのか？」

焦ったのは村人だ、いつも強気に吹っかけて来る行商人の腰が低い。ただの怪しい奴では無い事を悟ったのだ。

「そろそろコイツを引つ込めちゃくれないか？」

「あー皆さん、彼が『妖獣殺し』ならそんな農具でどうこう出来やしませんよ止めましょ

う

行商人が言うまでも無く、農民達は既に及び腰だ、手にする農具を握る力も弱い。

だがピッチフォークを突き付けた男だけは最後の気力を振り絞って問いただす。

「おめえ、帝国のモンじゃないんだな？」

「帝国から来たが、帝国の手の者って訳じゃない、何か仕事を受けてこの村に来た訳でも無い」

男にもこの村の事情が呑み込めて来た。この村は何か厄介事を抱え込んでいる。其れを帝国に知られたくないらしい。

ここはビルダール王国の外れ、セルギス帝国との国境は遠くない、隠し砦なんかを作ってるって可能性がありそうだ。

それにここは大森林に最も近い村でもある。辺りは濃厚な魔力に満ちていて、新しい魔道兵器の実験と言う線も考えられた。

となれば普通は食料でもねだってから回れ右するのが正しい処世術。しかし男は好奇心が勝った。

「何があつたか教えて貰っても？」

首を突つ込む覚悟を決めた。万が一が有つても、こんな村人相手なら逃げおさせる。

「あ、ああ」

ピッチフオークの男が村の中心部、この世界の典型的な役場をチラリと見やる。

「役場か？ あそこで話をしてくれるって事で良いんだな？」

「あ、いや……ああそうだな、オイ済まんが村長に事情を説明しておいてくれ」

「ああ、解った」

ピッチフオークの男は農具を降ろし、声を掛けられた鋤を持つ男は役場へ走った。

「すまん、気を悪くせんでくれ。事情は役場に行けばスグに解る」

「これで、盗賊に間違えましたって程度なら納得いかねーぜ」

「そう言う事じゃない、何にせよ付いてきてくれ」

「——フン」

鼻息荒く不機嫌も露わな男だったが、内心はワクワクしていた。何が出るにしても退屈はしないだろう。

村役場は男の様な流れの戦士にとってはお馴染みの場所だ。この世界には冒険者ギルドなんてシステムは無い。だから冒険者ランクなんて物も冒険者カードなんて便利な物も無い。

だから畑を荒らし、人も襲う魔獣の駆除は行政のお仕事だ。まんま害獣駆除だと思っ
て良い。ただ田舎ともなれば、その仕事をアウトソーシングしなければならぬと言う

だけの話、それも大胆にだ。

そんな仕事も無い場合、流れの戦士は村長などの権力者の家に御厄介になるか、最悪筋モンのおつかないオジサンのお世話になるしかない。まんま時代劇で言う所の渡世人の様なヤクザな世界である。

男ほど名が売れてくれば、貴族に取り入るのも難しくくない。ただ男は自由に旅がしたかった。

と、なれば派手に稼げる案件があればそれに越したことは無い。厄介事って言うのはそれだけ金になるって事だ。

ピッチフォークの男——いやとつくに農具は手放してるが、の案内で役場の扉をくぐる。

「アレが妖獣殺し」

「噂に違わぬ大男じゃねーか」

「それに見ろよあの剣、あんなモン振れんのか？」

大規模にアウトソーシングされてるから、役場にはゴロツキが大勢居る、そして彼らは耳が早い。

遠巻きに見つめる彼らも、男の噂はかねがね聞いていた。

男の方もそんな視線は慣れっこで、むしろ気になるのはその雰囲気弛緩している所

であつた。とてもじゃないが秘密作戦中と言う風には見えない。

ピリピリしている村人と、対照的な傭兵の様子に首を傾げるが、何かあるには違いない、でなければ村長がわざわざ説明に来るはずがない。

黒衣の男は神経を尖らせながらも、ロビーで待ち構えていた村長と対面した。ひげ面の冴えない中年男と言つた風采だつた。

「わしがこの村の長を務めさせて貰つている、ガスタールだ、お前さんが妖獣殺しと呼ばれる凄腕と言うのは聞かせて貰つた」

「そりやどうも、だがそんな挨拶よりも何が起こつてるか教えて貰つても？」

「ああ、話は上でしよう、会つて欲しい人も居るしな」

この世界、城塞都市でもない限り村の建物は殆ど平屋だ。それでもこう言う役場は大體二階建てとなる、大體は防犯上の理由である。つまり込み入つた話をすると言う事。

——いや、会つてほしい人と言つたな？ 相手は誰だ？ 貴族にしたつて……

「妖獣殺し、あんたはザバを知つてるか？ 会つた事は？」

階段を上がりながらアレコレ考えていた男の思考は、村長の急な言葉に遮られた。

森に棲む者。魔の森と言われる危険地帯に暮す忌まわしき民の名として聞いた事がある。

その特徴は人の理を越えた規模の魔法を扱い、長寿、かつ化け物の様に耳が長い。

伝承や歌の中で森に棲む者の恐ろしさはそれこそ鬼の様に語られる、が。

……それってエルフだろ？

男としては恐れる理由が解らない。

街で「いたずらばっかりしているとザバになっちゃうぞー」と子供の耳を引つ張る母親を見る度、男としては、正直エルフになれるなら大歓迎じゃないか？ と不思議に思つて居た。

「……いや？ 会つたことは無いな、会つてみたいとは常々思つていたが」

そういう男を村長は、変わり者と言いたげに一瞥したが。

「ならスグに会えるぞ」

とだけ言うと、二階の奥、恐らく村長室だろう重厚な扉のドアノブを掴み押し開いた。「彼女が森に棲む者、それも本人が言うにはお姫様だ」

男には村長の言葉が頭に入ってこなかった、窓は締め切られているがランプでは無く贅沢に魔道具の明かりで満たされている。

その光溢れる部屋のソファアーに一人の妖精が居た。

ピンクの髪、細面で線の細い体つき、そして長い耳……はエルフの特徴と一致するが、何より驚くのはその瞳だ。

ピンクと銀のオッドアイ、それが両の目とも大きく見開かれこちらを見ている。

大きい、なんと大きい瞳だ、まるでアニメのキャラの様で現実感が無い。

でも、気持ち悪くも不気味の谷に落ちていく感じもしない、それは立派に生物としてそこに存在している。

可愛い。まさにそれしか言葉が無かった、可愛い記号を押し固めた様なアニメキャラに匹敵する可愛さをその身に宿している、そうとしか男には思えなかった。

絶句していると、おずおずと付いて来たピッチフオークの男が悲しそうに呟いた。

「気持ち悪いと、恐ろしいと思うか？俺も初めはそう思った。でもよ、村に来たあいつはボロボロだよ、今でこそ服も着替えて見違えたが、話を聞くと何だか可哀想だよ」

「それに聞き逃せん事もある、ザバを滅ぼした帝国の新兵器、そしてエルフの兵器の数々だ。それを帝国が手に入れたらどうなるか……」

可愛いどころか怖い？ 真逆の事を言われ、男の思考は上滑りするばかりだ。村長の言葉に至っては意味も解らない。

「……ザバを滅ぼした？」

「ああ、お嬢ちゃんが言うにはザバの国は首都を攻め落とされたと、帝国の奴らが攻め込んで来たらしい」

「おい嘘だろ!？」

「正直ワシらの手に余る話だ、彼女を王都に運んで欲しい。事は一国を揺るがす事態だ

と思えてならん、彼女自身もそれを望んでおる」

「いや、しかし」

思いもよらない依頼、しかし男は躊躇した。少女はむしろ可愛いと思う。だからこそ躊躇した、触れれば消えそうな幻想的な少女に対し、自分は威圧感ある黒衣の剣士だ。

威圧感のあるこの姿は望んだ形とは言え、女の子受けするとは思えない。いや逆に貴族の少女に気に入られる事はあるのだ、あるのだが、それは噂に聞く恐ろし気な剣士を自分のポケットに入れたいと思う思春期の妄想ゆえ。

流石にエルフのお姫様を知るほどに、自分の名は売れていないだろう。だったら自分は恐怖の対象に過ぎないのでは無いか？

その証拠に先程から少女はこちらを凝視し、恐怖に目を見開いている。

「……タ、タナカ？」

「!? ……なん？」

男が焦ったのは無理もない、突如少女が言葉を放つ、しかもその言葉は男にとって特別な意味が有った。

「タナカ？」

「魔法か？」

周りは意味が解らない、だが男には意味が解った、痛い程。

「いや違う、田中は……俺の名だ」

——どうやら俺の名はエルフの国にも売れてるらしい。

そう思うと男は、いやタナカは黒縁眼鏡を上げ直し、ニツと笑うのだった。

★一章の設定語り

一章を読んでくれてありがとうございます。感謝します。

ハーメルンのシステムが良く解って居らず、失礼をしていたら申し訳無い。

とりあえず、一章分の設定を語っていきます。

一章を読んでおらず、設定を見に来た人は申し訳無いですがネタバレがあります。

【エルフのお姫様】

僕は昔のなろう小説みたいな、幼少期の子供に転生して、家族と触れあいながらじつくりと成長して行く物語が好きなのです。

本好きや無職転生と言った作品が有名です。

ですが、最近は退屈だとばかり、殆どの小説で描かれません。人気が無いみたいです。もしくは、生まれてすぐに、幼児のままに無双するタイプが多い気がします。

だけど、好きなんですよね、感情移入のレベルが違うというか。商業じゃ無いからこそ出来るんだと感動した覚えがあるんですよね。

でも、やっぱり流行らないのか、この辺でブラバされやすいのは事実でありましていや、これは僕の幼少期の書き方が悪かったのでしょうか。僕の作品が駄目でも、幼少

期の可能性はまだあると思つています。

皆も幼少期をたまには書いてくれ。決して無駄じゃないのだ。

本作も、幼少期にやったことは一つも無駄じゃ無いので……なんとか！

で、いよいよ一章を読んでもない人にはネタバレですが

【家族は全員死ぬ】

はい。スミマセン。

家族との触れあいとか言っておきながらこのザマ。

しかし、読者をビックリさせてやろうと言うテンプレ崩しがしたかった訳では無く、むしろやりたかったのは王道。国を追われたお姫様と言う王道展開なのです。

ごめんなさい、半分ぐらいは驚かせたい気持ちもありました。

もう一個のテンプレ要素としては、復讐モノってジャンルですね。それをやりたいと言いう気持ちもありました。

復讐に狂った怖い女の子が好きなのですね。

でも、主人公が酷いことをされた過去は、独白でさらっと紹介されるだけだったので多

いのかも。

復讐を決意する程に、主人公がズタボロになる展開を描いたら、そりゃー人気出ないよね……

しかし、狂っていく主人公に感情移入して欲しかった！

〔エルフ〕

なんでエルフが異世界に居るのか？ 当たり前前に思えて、当たり前前じゃない！

正解は主人公が勝手にエルフと言ってるだけ！

耳が長くて、若干、目が大きいのが特徴なのですが、その程度は民族の差で収まる範囲。

名詞としてはお互いが自分達を「人間」に当たる単語で呼んでいます。

ただし、人間は森に住む恐ろしいエルフを森に棲む者と呼んだり。

エルフは森の外の人間を「無能」と罵ったりしています。

他にも異世界のエルフって奴は、けっこう矛盾を感じる存在なのです。

目が大きいのは文明が発達していて、目による情報が重要だから。近視が多いです。

耳が大きいのは森の中で視界が悪く、音の重要性が高いから。

肉を食べないのは、大森林の動物の体内には濃縮された魔力が溜まっているため。

魔法が強いのに、弓を使うのは魔法が健康値で消えてしまうので、矢を加速する事で

物理攻撃力に変換している。

優れた文明があるのに人間界に侵略しないのは、魔力が薄い地で生きていけないから。

森を切り開かないのは、森が無くなると大型の魔獣が侵入してくるため。

と言う感じで、テンプレ要素に理由付けしているつもりです。

それが、設定資料だけの話に留まらず、ストーリーにも結びついてる……と思って貰えれば良いなど期待したりする。

【健康値：魔力値】

一章の主人公の最大の敵は健康値となります。

健康であるために、どうするかを必死に考える話です。

それに応じた秘宝が与えられるのですが、魔力が濃い大森林を抜けると、健康面での不安は無くなってしまいます。

ただし、健康値は今後も重要な要素となります。

実は、健康値はその十倍の値までの魔力値を消すことが可能なのです。

散々、魔力値200が重要と言われるのは、健康値の平均が20ぐらいだからなのです。

相手の健康値を上回れば、相手の体に魔法を流して自由を奪ったり、新陳代謝を活性

化させて怪我を治す事すら容易に可能となります。

魔力が濃い場所に住んでいる生物ほど魔力値が高くなります。そのため、王の血を引いていても、王都に住んでいなければ王族と認められません。

ユマが家族と認められるには、健康を害しながらも王都で暮らす必要がありました。

マラソランナーが高地トレーニングをするように、体も徐々に魔力が濃い環境に慣れていきますが、ユマにとっては限界ギリギリの環境でした。

ただし、生まれてこの方、ずっと高地トレーニングをしていた様なものですから、ユマは魔力が低い場所でも魔力値が高いと言う、特殊な体質になっています。

純エルフが大森林の外に出ると、魔力が薄いため体調を崩し、魔力値も大幅に下がってしまいます。

【生誕の儀】

ここで、腹違いと言う複雑な主人公の生まれを説明しつつ、チート能力のお披露目や顔展開とを考えていました。

序盤で珍しい、スカツとする展開が書ければ良いな……と。

この儀式の後で、やっと人権が認められる形になります。ユマ姫にとっては暗殺の危険があるため、早い内にこなすべきものでした。

【成人の儀】

セレナがどれだけ異常な強さを持っているかを見せつけるイベントですね。

同時に、どんなに強くても死ぬ時は死んでしまおうと言うのを解って貰う為の強さのアピールでもあるのですが……

ちなみに、成人の儀の直前に大人がこつそりと魔獣を間引きするのが慣例です、セレナが空を飛んだために間に合いませんでした。

【魔法】

非常に強力な存在なのですが、生命体に使おうとすると、健康値で減衰してしまうと言う制限がついています。

そのため、健康値が無い無機物に使う分には非常に便利で、土木工事や家の建築などのコストは重機を使う地球よりも安く済むぐらいです。

魔法を使って攻撃する際は、一度単純な物理攻撃力に変換する必要があります。

矢を加速して、相手にぶち当てるのが主な攻撃手段ですね。魔法で制御可能なので百発百中です。ただし、弓の先生であるセーラさんは威力を重視する余り制御に失敗して外しています。

【魔剣】

ステフ兄様が使っていたのが魔剣です。

仕組みとしてはダイヤモンドの粒子をチェーンソーの様に高速で回転させる事で、異

常な切断力を発揮します。

エネルギーは魔力なのですが、例外的に相手の肉体を切り裂いてもこの魔力は掻き消されません。

作中ではパーソナルスペースと言っていますが、自分の健康値の中であれば、相手の健康値で魔力が消される事がないのです。

そのため、剣が自分の体の一部となるまで修行すれば、剣が健康値を纏い、健康値に妨害されずに直接に相手を切り裂けるのです。

当然、魔剣の使い手は、ごく限られた人間だけになります。

人が密集していても使えるので、護身用の武器として人気があります。

【魔獣】

厳密には翼があつて飛ぶ魔獣全般を翼獣バルサー

その中でキメラを妖獣フェンサー

でつかいだけの鳥を恐鳥リコイ

とか設定した気がするんですが、あんまり意味が無いので作者も忘れがち。

普通の動物が魔力によって巨大化、変質した存在で、厳密には普通の動物と大差ありません。

エルフ同様、強力な魔獣は魔力が薄い土地では生きていけません。

【霧】

帝国が対エルフの為に用意した魔力を奪う毒ガスです。

吸い込むと体内から魔力を奪う為、活動に魔力を必要とするエルフは一瞬で体調を崩し、下手をすれば行動不能に陥ります。

人間は殆ど魔力を必要としないので、霧の中でも行動可能です。逆に濃い魔力で健康を害してしまいますが、それも魔力を消す霧で解決しているワケです。

以前の戦争は、魔力で健康値が10以下となった人間に、魔力値200のエルフが魔法を直接ぶつけて虐殺していました。エルフは定期の軍事訓練感覚でした、今回も。

【参照権】

今作で最も重要で作者が気に入ってる設定です。

転生したら肉体も別物。だから記憶は引き継げないけれど、魂が通信しているのだから記憶を新しい体にダウンロード出来る。

そこで、自分の魂が集めたデータに限定した参照権を与える事で、記憶を思い出す事を可能にした。

この能力で、前世だろうが今世だろうが、一度見たモノを主人公は自由に思い出し、目の前に表示することすら可能になりました。

ですが、自分の魂が集めたデータを参照可能と言う制限なので、一万回も早死にした

という今までの人生で集めたデータだって、閲覧できてしまうのです。

ただし、そんな人間が居て、それが自分の前世だと確信しなくてはなりません。

その為には、死んだ場所に行つて、残留思念から前世の自分を感じ取る事が必須となります。

丁度、神が枕元に立って、高橋敬一とユマ姫に宣言させた様に、切っ掛けが必要なのです。

これを切っ掛けに、新しい記憶を思い出し、新しい能力を獲得するのですが、同時に前世の死因に引つ張られて、今後もひたすら死にかけるハメになります。

それでも記憶の回収によるパワーアップがこの物語の中目標となっています。

大目標はもちろん帝国への復讐です。

【田中】

田中もコチラに来ていました。

流れの剣士が国を追われたお姫様を拾う。

これはもう、王道展開ですよ？

ただし、ヒロイン側が主役なのですが。

二章 薄幸の美少女の追憶

巻き込まれた田中

——あなたは死亡しました。

「……はっ？」

いーみがわからん、まーったくワカンネ。

「いや、死んだって言われても『ワタシは地球の管理者です』やわかんねーよ」

俺の言葉はアイツの言葉に遮られた。いや、違う？

アイツって誰だ？ 俺は誰だ？ いや、俺は田中だ、それすらもしつかりと意識を保

たなければ不安になる。

なんなら俺が喋ったのかアイツが喋ったのか、それすらも自信がなくなる、何だこれ

は？ いや、ホントなんだコレ？

——ここは神界、天国とでも思ってください。

これは、間違いなくアイツの言葉だ、俺は喋ってないんだから間違いない。

一体アイツはなんだ？ いや、距離が近いからコイツなのか？ いや近いのか遠いの

かそれすら解らない。

——距離は有りません、ゼロであり無限でも有ります。

なるほど解った、俺は喋る必要が無い。アイツは心を読む。

だったらアイツの正体は……

——神と、思っても支障は有りません。

だろうな。

——あなたは死亡しました。

「どうして?」

心を読まれるなら喋る必要は無い、それでも俺は喋ろう、意識をハッキリ保つために。

——賢明ですね、死亡した理由ですが、『隕石の衝突』となります。

「……………は?」

いーみがわからーん。

——事実です。

「地球が滅亡した?」

——いえ、直径20センチ程度の隕石ですので、それ程の被害は有りません。

「20センチ……それでも死ぬんだな」

——爆発したようですよ、ああ言う隕石が20センチまで目減りしたとはいえあそこ

まで原型を保ったまま着弾する事が奇跡、いえ『偶然』の賜物です。

「偶然？」

——ええ、『偶然』です。

「なんだよそれ、ツイてねーな」

あーあ、これじゃアイツの事、笑えねーじゃねーか……

——気になりますか？

「あ？」

——高橋敬一、貴方は彼に巻き込まれたのです。

「は？」

——高橋敬一、彼の魂はこの世界の物ではありません。

「あいつ、地球人じゃなかったのか？ あんだけ異世界モノに憧れてたつてーのに？」

——違います、彼の魂だけが異世界の物なのです、彼の意識はハッキリと地球人です。

「だーかーらー！ さつきから何一つ意味がワカンねーよ！」

——難しい話ですか？ 死んで、他の人間に生まれ変わったとしても、前世の記憶を持つ方がおかしいでしょう？

確かに、言いたいことは解るぜ？ 少なくとも高橋は仏陀じゃない。

「だな、アイツらは好きだったみてーだが、転生モノつて奴はどうも好きになれねー」

今の知識のままに子供に生まれ変われたら、別に異世界じゃ無かったって天才児と持て

囃はやされる事請け合いだぜ。

——そもそも、魂に記憶は保持出来ません。

「……俺は天邪鬼だからな。そこまで言われると、そんな事無いつて言いたくなるね」

——なぜです？

「感じるからだよ、剣を握るとな、相手の気持ちとかそう言うのが」

——有り得ます。

……どつちなんだよ！

——魂は記憶を持ちません。魂が持つのは送信機能。日々の感情や思考をデータとして我々に送信しているのです。そして送信が出来るなら受信だってもちろん可能です。

……つまり？

——同じ人間同士、気持ち伝わってしまう事も有り得ます、一種の不具合ですが、トラックの無線を勝手に受信してしまう貴方のゲーム機と似たような物です。

「ゲオゲオくんポケットの悪口は辞めろ！」

俺の持つ携帯ゲーム機は、作りが甘いのか良く無線の電波を拾ってしまう。

そこまで知っている神には舌を巻くが、あれはトラックの電波が違法な出力だけだ。

いや、同じ事か？ 相手の強い思いが予期せず伝わってしまう事が有る、そういう事か。

——魂に意味なんてない、ただの送信機、ワタシもそう思っていましたか。
「違うな」

——ええ、魂は輪廻しますが、使い回すのは識別番号だけなのです。

「つまり？」

——死んだ人間の識別番号を新たな命に、魂に振るのです。すると何故か特定の番号を持つ人間だけが夭逝ようせいすると、そう言う与太話が回ってきたのです。

「へー高橋がそれだって？ じゃあアイツも死んだのか？」

——ハイ

「はー」

——どうしました？

「確かにアイツはツイて無かった、でも俺はあいつだけは殺しても死なないと思っ
たんだよな」

——どうしてです？

「どうしてかな？」

——推測は可能です。

「へえ」

——人には運命が有ります。

「メルヘンだな」

——いえ、分析と統計の賜物です。

「は？」

——神の観察と、魂が集めた情報の分析、膨大なデータからの統計。そこから導き出した未来予報です。

「そんな事が出来るのか？」

——天気予報を高度にした様な物と思って頂いて構いません。

「ほう」

——受信機の話に戻りますが、他人の運命も感じられてしまう個体が居る可能性は有り得ます。

「へー占い師でも目指してみるかね」

——未来予報では、あの高橋少年は、事故とは無縁の何一つ何も無い、強固に平坦な運命の元に生まれ、何も起きずに生きて行くハズでした。

「トラブルばかりだった気がするが？」

——それがおかしいのです、未来予報は何一つ当たりませんでした。

「役に立たないな」

——全くです、彼は死と最も遠い所に居る存在として神に選ばれたのですから。

「どういう事だ」

——他の世界の神から助けを求められたのです、特定の魂の人間が次々死んで行く
と。

……。

—— 笑いました、馬鹿にしました、識別番号に意味を見出すオカルト話に。

「おい」

—— 彼の世界に下らないバグが有るだけだと、だから私の世界に、地球に転生して何も無かったら。そういう下らない賭けをしたのです。

「まさかオイ！」

—— 私は勿論、一番死から遠い彼にその番号を割り振りました、たかが番号ですから何か起こる筈が有りません。

「ふっざけんな！ おつまえらのクツソ下らねー実験で、実験で！ 実験動物としてあいつは殺されたのかよ!!」

—— 実験動物、良い例えですね、人間が其れをしていないとでも？

「クソツ！ クツソおおお、あんまりじゃ、あんまりじゃねーかよ、あいつが、あいつが

本当は持ってた筈のささやかな、お前らにとっては『何でもない』幸せを根こそぎ奪うんじゃないよ」

——ワタシが奪ったつもりは無いのですが、取りあえず高橋少年の事は彼に、他の世界の神に委ねる事になりました。

「ふざけるテメー」

——ワタシはむしろあなたが哀れです、完全にとぼちりですから。

「なんだよ！　なんだよそれはよー」

——やってみますか？　天才児を。

「俺をどうするつもりだ」

——ちよつとしたお詫びですよ、我々の賭けがあなたまでをも殺すとは一切考えても居ませんでした。

……。

——それこそ魂に記憶は保存できませんが、受信機能をオンにして生まれた後、貴方の記憶を滑り込ませる事は可能です。

「ゾツとしねえな」

——そうですか？　先程言っていたでしょう？　天才児としてちやほやされると。

「俺は、生まれて来た自分の子が、他人の子供だったら気持ち悪くて仕方がねえよ」

——まあ、そうですね？ 黙っていいれば良いのでは？

「どうしたって、会いたくなっちゃう、母ちゃんや父ちゃん友達にもだ」

——そのまま生き返らせてあげたいのは山々なんです、流石に隕石がほぼ直撃しては、『原型』を留めていません、それが生き返ったとなれば大変な騒ぎが起きてしまいます。

クソツ何もかも苛立たしい！ なんで俺は、俺は！

「じゃあいつそ異世界に行かせてくれよ、居るんだろ？ 異世界の神が」

——そうですね、仲良しでは無かったですけど今となつては知らない仲では有りません。

高橋の供養だ、アイツの代わりに転生して冒険でもしてやるよ。

——転生する必要は有りませんよ。

「……はっ」

——言っていたじゃないですか？ 他人の子供など気持ち悪いと、かと言って、もし地球で生き返ったら？ 大問題になります。他の運命に与える影響も甚大でしょう。でも異世界で生き返ったら？ 彼の世界はそれこそ戸籍だつていい加減な物です。

「……つまり？」

——あなたが、殆どあなたそのまま異世界で蘇っても誰も疑問には思いません。

「ただの中学生が異世界でどうしろって言うんだよ」

——そもそも全くそのままでは生きて行けません、例えば人間は大気の構成が数パーセント異なるだけで不具合を起こすでしょう？

……確かに、ちよつとのガスが大気に含まれていただけでも、毎日吸つてりやすぐに命を落とすに違いはない。

——その世界で順応するように体に手を加えます、それをちよつと派手にやるだけです。

……どういう事だ？

——その世界では当然知っている常識も、言葉も知らないままに転移するんですから多少は色を付けようと言う話です。

「なんだそりや……どういうつもりだ？」

——コチラとしてもアナタにはアチラの世界で生きて欲しいのですよ。

「どういうこつた？」

——先程も言ったでしょう？ 魂は情報送信していると。地球の魂を持つアナタにアチラの情報を収集していただきたいのです。

「チツ、初めからそれが狙いかよ」

——否定しません。では、異世界転移ボーナス、何にしますか？

「ふざけた言い草だな。まあ、貰えるモノは貰う主義だ」

——では？

「剣だな」

——剣ですか？ 剣を扱う為の優れた肉体と理解しても？

「そうだ、どうせ治安だつて良くないんだろ？ そう言えば魔法は有るのか？」

——ありますよ？ 憧れませんか？ 魔法の世界に。

「憧れるね、でもよ魔法つてのは高校デビューで極められる物なのかよ？」

——さあ？ なんともし？ 地球の知識を活かした魔法で無双出来るかも知りません

よ？

「お前ふざけてるだろ？」

——失礼しました、つい楽しくて、すみません。我々の実態は神と言うよりは管理者なのです。普通は世界に干渉する事は御法度なのです。折角作り上げた運命がズタズタに狂ってしまうのですから。毒を食らわば皿までと申しますか。他人の世界ならどうなつても良いと言いますか。

「恨むべきなんだが、異世界の神に同情するぜ」

——ええ、そもそも魂のバグなんて意味が解らないのです、其の原因が解るならワタシの存在が消えても良いと思えるほどに意味が解らないのです。彼も被害者ですよ。

「そうかよ」

——そうです。

「じゃあやつぱり剣だな、俺は剣道よりも実践的な剣術が好きで学校の剣道以外にも、いろいろ習ってたんだ、こいつが異世界で通じるか試してみてえ」

——そうですか。

「ああ、誰も見た事のない剣術だ、モノになるか解らない魔法よりよっぽど世界を引っ掻き回せるだろうぜ」

——それはそれは、彼も可哀想に。

「だろ？」

俺は思いの外浮かれて来た気持ちを感じた、そしてふと今更に気になった。

「オイ？　木村は、それに黒峰さんはどうなった？」

——死にました、他の人間は不自然じゃない程度に介入して回復させる事も出来たのですが。その二人はあなたと同じですよ。直撃コースで『原型』が無かった。

「じゃあアイツらも」

——ええ、彼らとの話はこれからです。

「じゃあ伝えてくれよ、俺は異世界で剣士として大活躍してやるってな」

——解りましたお伝えしておきます。

「そんで高橋は？ アイツはどうなる？」

——高橋少年には彼が、異世界の神が不具合たる『偶然』の原因を知らないかと事情聴取していますが、無駄でしょうね。神が解らない物が人間に解る道理が無いでしょう。

……。

——高橋少年と、異世界神が何を思い、何を選択するかはワタシにも解りません、死んだ人間の予測などリソースの無駄、システム外ですからね。

「俺は解るぜ」

——でしょうね、実はワタシはあなたより高橋少年について知識としては知っていると言えるでしょう、ですがそれはデータの上の事でしかない事が理解できない程傲慢ではないつもりです。

「へえ」

——彼は実験動物だったのですから、我々は常に彼を観察し、そして彼は常に運命予報を裏切り続けて来たのです。

「予報とか統計学なんて持ち出すもんでもねえだろ？ アイツは何時もそうして来た、自分を攻撃してきた奴を攻撃するんだ」

——では異世界神を攻撃すると？

「いや？ アイツを殺したのは結局何らかの不具合なんだろう？ ソレを見つけるまでアイツは暴れまわるぞ」

——まさか、神でも発見出来ない不具合と言う『偶然』に対処するなんて不可能でしょう。

「たとえ無茶でも、アイツは周りを巻き込んででも復讐してやろうと噛みつきまくる、そういう奴だ」

——メイワクな人間ですね。

「だろ？」

——嬉しそうに見えますが？

「俺が？ そうかもな」

——では、そろそろ良いでしょうか？

「ああ、伝えといてくれ」

——先ほどの件ですね？

「ああ、また会おうってな」

——先ほどの言葉と意味が異なりますが？ その言葉で彼らの選択を狭めたく有りません。

「だな、でもきつとアイツも選ぶ、そしてまた会う」

——それに高橋少年には私から伝えようも有りません。

「いいや」

——そうですか。

「もし、同じ世界に居るのなら、トラブルの中心に居るのがアイツさそうだろ？」

——転移するかも解りかねます。

「そうだな、あいつなら犬とか動物、或いは化け物に変わっても不思議じゃない」

——はあ。

「とにかく大迷惑な奴なんだ」

——では。

「ああやってくれ」

かくして俺は異世界転移を体験するのだった、その先に居るのは友かそれとも……。

可愛くも恐ろしく、そして儂い

「夕、タナカ？」

少女が驚きに目を見張る。

だが驚いたのはお互い様だ。田中って名前はどうにも発音し辛いらしく、俺の名前は『妖獣殺し』なんて物騒な二つ名程には売れていない。

ひよっとしたらエルフには珍しくない発音なのかも知れねえな、田中って発音が妙に綺麗だ。

「あの……あなたは？」

「ああ、俺は黒衣の剣士田中。『妖獣殺し』って二つ名で呼ばれている、冒険者とも言うべきかな」

「ゴ、黒衣の剣士ですか……」

おどろおどろしい響きに驚いたのか、少女は困ったような顔で引き攣った笑いを浮かべている、可愛い。

「あの、あなたは どうして？ えと……どうしてここに？」

「チツチツチツ」

俺は指を振る、少女は困った顔から苦虫を噛み潰した顔に変じるが、それもまた可愛い。

「まずは自己紹介、そうだろ？」

「……そうですね、私はあなた達が言うところの森に棲む者改め、森に住む者の国の姫、ユマ・ガーシエント、よろしくお願ひします」

ユマちゃんはムスツとした顔で答える。エルフのお姫様だ、こんな風に失礼な口を利く奴は居なかったのだろう、だがココは人間の世界、礼儀と挨拶は何より大事。そうだろう？

「今、ビジャと言ったがそれは？」

ひげ面の村長が割って入る、勘弁して欲しいね、ユマちゃんとの落差にショック死しそうだ。

「ビジャは森に住む者と言う意味です、森に棲む者は蔑称として人間が付けた物でしょう？ 我々はそんな名前と呼ばれたくはありません。我々は自らを森に住む者と呼称します」

「なるほど、そう言う事ですか」

「つまり、エルフだろ？」

俺がそう言うのと、たちまちユマちゃんは不機嫌な顔になる。

「える、ふ?」

ひげ面は黙ってて欲しい。

「なんですか? そのエルフと言うのは? 我々の新たな蔑称と考えても?」

「あ、いや違うんだ、むしろ逆、敬意を表する言い方と言うか……スマン忘れてくれ」

俺はてへへと頭を掻くがユマちゃんの目は氷の様に冷たい。そんな顔も可愛くて、その……困る。

「あなたが適当な事を言って誤魔化す様な人だと言う事は解りました」

ツーンとそっぽを向いてしまう。可愛い。

「それでな、彼女が王都まで行きたいと言うので護衛して欲しいと思っていたんじやが……」

村長はその髭をぶるぶる振りながら俺と少女を見比べて困っている。

「私としては、厄介になっっている身ですから、その失礼な男が護衛でも構いませんが」

そっぽを向きながら片目だけで俺をチラリと見る、いちいち可愛いな、何コレ。

「俺も構わねえぜ、ただ王都までつてなると長いぜ? この村で報酬は出せんのか?」

俺は安い男じゃないぜ」

なぜかユマちゃんが絶望的な呆れ顔でこちらを見る、流星にちよつと傷つく、でも報酬の話は大事、これ絶対ね。

「いんや、村ではそれほどの予算は出せませぬ、まずはスフィールにまで届けて頂ければ」と

村長は申し訳なさそうに言うが冗談じゃない。

「おい、スフィールは俺も寄ってきたばかりだがよ、国境付近の都市じゃねーか、帝国に追われた嬢ちゃんは大丈夫なのかよ？」

俺の当然のツツコミに対し、したりとばかりに村長とユマちゃんは反論する。

「しかしこの辺りで大都市と言えばスフィールじゃろ？ それに前線だけに帝国の恐ろしさを知っているハズじゃ、力になってくれる可能性は高いのでは？」

「私としても、前線の都市で帝国の恐ろしさを語る事に意味はあると考えています、彼らに相手にされない様では王都に行っても意味が有りません」

髭ばかりかお姫様まで乗り気だが、スフィールは王国領で有りながら中立都市と嘯く奴らまで居る程の人種の坩堝だ。帝国の人間は勿論、砂漠の民だって珍しくない。探せばエルフだって居るんだらうなと思わせる程。

俺の様な流れの異邦人には居心地が良い都市と言えるが、治安の方はご察しと言った所。なによりあんな所で『エルフの姫様ココに在り』と宣言すれば噂は世界を駆け巡るだろう、そうなればあらゆる危険が彼女の元に……

いや、逆か？

「オイ、お嬢ちゃん」

「何ですか?」

「解つてて言ってるのか? スフィールは国境の都市、この世界の中心とも言える場所だ、言うなればこの世界のあらゆる危険が渦巻いてるって事だぞ?」

「理解しているつもりです」

すまし顔で答える、可愛い顔してホントに解つてるのかよ?

「じゃあ帝国の人間だつてゾロゾロ居るのが解るだろ? ガラが悪いのだからウヨウヨ居る。エルフ、いや森に住む者^{ビジャ}だったか? そのお姫様が居るつてなれば帝国だつて狙つてくるに決まってるだろ」

「なっ!」

黙つてたピッチフォークの男が声を上げる。田舎モンには都会の危険なんざ解らんだろうが、人一人居なくなろうが誰も彼も気にしないのが大都市だ。

「むしろ……」

少女はそこで言葉を切る、ギロリと、上目遣いと言うには凶悪過ぎる目で俺を見上げる。

「私は襲つて欲しいとすら思っていますか?」

「な!?! なんじゃと?」

これには村長もビックリだ！ 景気よく髭が跳ね上がる。思い切り引つ張りたいね。
「へえ……」

思った通りだ、このお姫様肝が据わり切ってる。

そもそもだ、どんな事情が有るか知らないが、エルフのお姫様が人間の村に一人でやつて来るのがまずおかしい。

実際にこの目で見ても、姫かどうかは兎も角、只者じゃないってのは感じるが、こんな田舎町ならいざしらず、都会じゃただのフカしだろうって噂にもならない。

だが、上手い事、帝国の奴らが釣れてくれれば何よりの証明になる。本当に姫かどうかなんてどうでも良い、帝国に命を狙われる自称お姫様が王都を目指して旅をしていくってだけで格好の話のタネにもなる。

そうじゃなくても、帝国にまで姫の噂はあつと言う間に広がるだろう。少なくともエルフの国を襲った帝国の幹部連中なら特徴が一致するかぐらいは解るはずだ。

そうやって帝国にプレッシャーを掛けるって狙いだろう。帝国が堂々と公式な外交ルートで王国に引き渡し要求をし、王国もそれを易々と飲む様なら、王国を見限ればいい話とそんな風に考えているのだろう。

仮に死んでしまっても……良いんだろうな、いやむしろ其れが狙いなのかもしれない。今後エルフがビルダール王国と交渉を始める時に、幾らか有利になるとでも思っ

いるのだろうか。

「気に食わねえな」

「……そうですか」

気にした風も無いすまし顔、流石にコレは可愛くないね。ああ、可愛くない、可哀想でしか無いんだよ！

「姫様が、何番目の姫なのか、あるいは影武者だかは知らねーし、姫に生まれた義務だかはもつと知らねえけどよ、嬢ちゃんみたいな女の子が命を張らなきや存続出来ねえ国なんぞ、滅んじまったほうが良いとしか思えねえ」

「……なるほど」

お姫様は呟くと、冷笑と言うには寒すぎる、凍える様な笑みを浮かべた。

「それは良かった」

「良か……つた？」

——怖い。

穏やかに優しく、満面の笑みで見上げて来るのに最早欠けらる可愛く無い。

幾多の魔獣と戦ってきた俺が、俺の半分も生きていない様な少女に恐怖を抱いている。
る。

「もう滅んでますから」

「なに?」

「王都が落とされ、父も母も、兄も妹も全員死にました、エンディアン王家は滅んだと言つて良いでしょう。何番目の姫ですか? 私が最後の生き残りです」

「嘘だろ?」

意味が解らない。王族最後の生き残りだつて? そんな奴がどうして単身人間の村にやつて来るつてんだ? 嘘にしたつてもっとマシな……

「それに森に住む者の王都が落とされてから一月も経つていないのです。未だ暫定政權どころかレジスタンスの組織すらなされて無いのではないかと思ひます」

いや、何を言つてる? 意味が解らない。エルフの王都つて奴は大森林の奥深くに有ると言う、一ヶ月やそこらでココまで逃げて来たなら、殆ど真つ直ぐこの村まで南下してきた事になる。

「だ、だったら何か? 帝国に国を攻められてからお前は誰の指示でも無く、自分一人でこの村までやつて来たつて事か?」

「勿論、そうですが?」

何でもない事の様に断言しやがる。

本気で言つてるとすれば、只者じゃない所か頭がおかしいサイコエルフの可能性が有る。

だってそうだろ？ 命からがら逃げ出したお姫様が、たった一人その足でそのまま直接他国に乗り込んで助けを求めらるってのは意味不明だ。まずは使者の一人も送るのが自然だろうが。

「だとしたら、まずはエ……ビジャを纏めて再起を図るのが筋だろ？ なぜいきなり人間の村に来た？ そんな有様で助けを求めたって求められた方も困るだろ」

「そもそも、私は王都奪還が目標とも、エンディアン王家の再興を指すとも言っていないが？」

「……は？」

——じゃあ何の為に王都に行くのかと、それこそ本当にこのお嬢さんが頭がおかしい事を疑い始めた矢先、こちらを見上げるピンクと銀のオツドアイと目が合った。

ゾクリと背筋に走る。冷感の正体は考えるまでも無い、その笑顔だ。

小さな口が三日月の様に、くり抜いた様にぽっかりと開いているし、目には狂気すら孕んだ強過ぎる意思が宿っている。

その顔を見た瞬間に、正気を疑う気持ちも、作り話を警戒する気持ちも吹き飛んだ。

——復讐だ。

そうだ、さつき言っていた『父も母も、兄も妹も全員死にました』と。

何でもない事のように言っていたので上流階級らしく家族の情なんざ薄いのかと思っ

てしまったが違う。何でもないどころか、きつと彼女の全てが家族だったのだ。

だったら何故何でも無いように言うのか、ましてや嬉しそうに笑うのか。

「つまり、あんたはただ引つ掻き回すためだけに、王都ビルダールに行こうってんだな」
「引つ掻き回すなんてそんなつもりは有りません」

「どうだか……その笑みに宿るのは狂気、そうなんだろ？」

こんな狂気の復讐に巻き込まれたらたまらない、俺ら冒険者の仕事は報酬とリスクのバランスで賭けをするのだ。損得勘定が壊れてる、ニコニコと命すらベットする様な狂人とは勝負が出来ない。

——普通はそうさ、普通はな。

でもよ、見捨てられないだろ？　こんなに可愛くて悲しくて恐ろしくも目が離せない生き物が復讐と狂気で死んで行くのを。

やるせない気持ちにうつすらと覚悟を乗せ始めた俺に、髭の村長が割って入った。

「じゃ、じゃあ何のために王都に行こうと言うんじゃね？」

俺は勢いこのモジャついた髭を筆りたい感情を爆発させそうになった。そんなもん、尋常じゃ無い様子を見れば解るだろ！　言わせるな！　と叫びそうになる。

「イタタタタツ！　何するんじゃ！」

いや、考える前にもう筆ってた。正直限界だった。

——復讐です！ と幼気いたいけな少女が決意を込めて口にするのを俺は聞きたくなかった。

……だが、少女の決意は俺の先を行っていた。

「私は、人質になりに行くのです」

「ひ、人質かね？ うへえ!？」

髭を引つ張られながらも何とか答える村長だが、俺が思わず手を放すと勢い良くひっくり返った。

予想よりずっと悲しい言葉だったからだ。

「人質か……」

「はい……、今まで国交も無かった国に助けを求めるのですから人質は必要でしょう？

そして生き残った王族は私一人です」

——その決意の籠った眼差しが俺を苛立たせる。

「それじゃあ、結局国はどうにもならねーじゃねえか。人質つてのは王様本人がやるもんじゃねえ、その家族とかがやるもんだろ？ 唯一の王族の嬢ちゃんが人質じゃ国が纏まらないぜ」

「ですからエンディアン王家の再興が目的では無いのです、誰が中心に再興しどんな王家が生まれても構わない。ですが森ヒメに住む者ジャとビルダール王国の同盟に時間は掛けれないのです」

「どういう事だ？」

思わず問うた俺の言葉を待たずに——パンツと姫様が両の手で、柏手を打つ様に音を鳴らした。

と同時に部屋が急に暗くなる。

「オ、オイ!？」

急に消えた魔道具の光、天井に頼りないランプこそ有るが、明るさに慣れた目には暗闇の様に錯覚させられた。

そこに涼やかな少女の声がこだまする。

『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』

同時に、部屋に光の奔流が、輝く光球が駆け巡りスツと天井に張り付いた。

初めて見たが、コイツがエルフの魔法か！ 魔道具の明かりだと思っていたのも初めてからコレだったのか！

「森に住む者の魔法、これが帝国の手に渡り、そして帝国にはそれすら打倒した魔法を無効化する兵器が有る。この二つが揃う意味が解らないでは無いでしょうか？」

光に照らされた少女の言葉に俺はゴクリと唾を飲む、その姿に圧倒される。

少女は立ち上がり、右手を広げ左手をその胸に当て、声高に叫ぶ。

「私は王都に向かい、ビルダール王国と森に住む者の間に同盟を結びます、そして……」

俺も村長もピッチフォークの男も、揃って間抜け面を並べるしか出来ない。「帝国を打倒し！ その野望を打ち砕く！」

その少女の宣言に、新しい世界の到来を感じざるを得なかった。

少女が村に到るまで

俺は順調に旅を続けていた。ザルギルゴール大牙猪に馬車を襲われて一時はどうなる事かと思つたが、魔法で強化した俺の足はピラーク（鳥型の騎獣）と比べても遜色の無い速度での移動を可能にしていた。

あり余る魔力値、健康値によるゴリ押しである。

先程からガンガン魔法を使つての移動をしても全く疲れない。肉体的にも魔力的にもだ。これは疲れるよりも回復速度が上回つてる状態だと見ていい。

魔力値が高ければ魔法が強いだけで無く、魔力の回復が早くなるし、健康値が高ければスタミナの回復が早くなる。

今まさに軽くジョギング程度の運動量にプラスして、体を魔法の風で押し出す事で、前世の全力疾走を上回る速度で走り続けている。

それも食料や毛布をたっぷり背負つてこの速度だ。もしこの重量を前世の俺が担いだなら歩いてたつて息切れしたに違いない。

ましてや今生の不健康だった自分を考えると信じられない思いがある。

無理やりゲームに例えるなら健康値がVITで、魔力値がINTかなあ……

「——ッ！」

などと呑気に考えた途端、軽快にビートを刻む俺の足に鋭い痛みが走る。

ブーツを脱いで確認すると足の皮が無残にもズルリと剥けて赤く腫れている。

よく考えてみたら、今世の俺は筋金入りの箱入り姫で有った訳で、ここ数日無理を重ねた体は疲労とは別に肉体的ダメージを積み重ねていたのだろう。

長年のお姫様生活で世界一柔らかい俺の足裏の皮が、魔法を駆使した高速移動に耐えられる道理が無い。

足裏以外にも靴の固い皮に当たる部分は見るも無残な有様で、不用意に触るとズキンと耐え難い痛みが襲い、一度気になるとなかなか走るのには難しそうだ。

こんな惨状で良くもまあ、走っていたと思ってしまう程で、一種の興奮状態だったのは間違いない。前世ではすぐに足が痛いと言っていたのに、えらい違いだと思おうと同時に、胸にチクリと痛みが刺さる。

前世での俺は、無気力、無関心、無感動の権化で、親元で大いに食べ、寝て、ろくに勉強もせず、かと言って遊びすら中途半端で、生きてるのか死んでいるのか、果てはボーツと寝てるのが幸せと言うような虚無を体現した様な男だった。

趣味のゲームや漫画、アニメだって本当に好きだったかは疑わしい、一番好きなゲームだって友達に、特に木村には全然勝てやしなかったし、それで悔しくも無かった。

ただ、そんな人生でもそれなりに楽しかった……と思う。だから俺は結局生まれ変わってもどこか無気力で斜に構えて、当事者意識に欠けた態度でヘラヘラ笑って過ごしてきた。

でも王都が襲われた時に全てが変わってしまった、思えば前世も今世も働きもせず食うだけの人生だ、特に苦勞をした事も無い。

それが命懸けの逃亡劇に前世と合わせても一番大切だった妹も失って……

前世の俺は、小説の主人公みたいに一生涯命に頑張ってみたい、いや「俺が頑張るに相応しい事件が起こって欲しい」ぐらいに思っていた。

本当に馬鹿馬鹿しい。

俺が頑張らないから、『偶然』が家族を殺したと言うのに。

旅に出ない言い訳にしていた健康値なんざ、王都を出てみればどうだ、人の倍近いじゃないか。

良く出来た喜劇だと笑えて来るが、悲しい事に現実なのだ、馬鹿な俺への罰として血塗れのまま痛みを堪えて突き進むかとも思ったが、ただの自己満足だと思い直した。

回復魔法をガンガン掛けて皮膚を再生し、血を吸ったブーツを乾かしてから速度を上げてテクテクと歩いた。

それでも一日30kmぐらいは移動出来たんじゃないかな？ まったりモードの馬

車の旅とそう変わらない。

そうして歩く事六日、ついに俺は人間の村に辿り着いたのだ。

——ソノアール

それが辿り着いた人間の村の名前だった。

名前は参照権の地図で知っている。間違はなく人間の、ビルダール王国の村だ。

ぱっと見は典型的な昔のヨーロッパの寒村といった風情で、比較すればエルフの王都の異質さが際立つ。

雑な作りの土壁に藁葺き屋根が標準で、上等な物でも煉瓦の壁に赤瓦。普通と言うか地球ですと言われても信じてしまう光景だ。

馬車の中で快適に旅をしてる間こそ、人間の村に着いた際には落ち延びた姫らしく、ポロポロで命からがら辿り着いた風に偽装しようなどと考えたりもしたが、最早そんな偽装が全く必要なかった事は言うまでも無いだろう。

辿り着いた時は夕方、薄暗い村に踏み込んだ俺は、早々に発見されるや否やファースト村人にピッチフォークを突き付けられた。

それでも涙ながらに「匿って下さい！」とお願いしたところ、久しぶりに木の上以外で寝る事が出来て一安心。

で、翌日涙ながらにピッチフォークのおいちゃんの家で、ポツポツと事情を語って同

情を買ってみた。

そしたら顔をクシャクシャにして泣いてくれるのは良いんだけど、こっちはピツチフォークのおいちゃんの名前が「サンドラ」で笑いを堪えるのが大冒険だった。

そう言えば、こっちじやサンドラって女性名じゃないんだね、厳密にはサンドウラ的な発音だしな。

奥さんのテイラーさんも涙ながらに応援してくれて、サンドラさんは村長に話を通してやると言って勢良く飛び出して行った。

いやー良い人ばかりでありがたいねー、俺の『偶然』で死なない様に気を付けて欲しい。

俺は留守番がてらテイラーさんに「なんだかお姉さんが出来たみたい」とか甘えて更なる同情を買うのに余念が無かった。

本当は結構老けて見えるからお母さんって感じなんだけど、テイラーさんもサンドラのおいちゃんも多分結構若いんだよね、二十代じやないかな？

老け込んでると言うか、くたびれてると言うか、苦勞してる感じ、少なくともお兄さんじゃなくて「おいちゃん」って感じがしてしまうのは仕方が無いだろう。

あと、身長も低い。

西洋風の世界だから平均身長が高いと思っただら大間違い。サンドラのおいちゃんは

160 cmぐらい、テイラーさんは150 cmぐらいだ。

俺は145 cmぐらいとエルフの国じや歳の割にかなり小さかった訳だけど、ここじや特別ちっちゃい子扱いは無さそうだ。

そもそも参照権で呼び出した30 cm定規を並べて、適当に測ったから数字は適当だけどな。

身体的な違いはそれだけじゃない、まず目につくのは耳の長さ。エルフは例によつて耳が長い。転生して耳が長いから「エルフだ！ エルフに生まれ変わったんや！」とか喜んでたけど、よく考えたらみんな耳が長い世界なのかな？ と思つていた。

しかし本を読むと、やっぱり耳の短い種族は居ると知り、そいつらは無能で魔力が全然無いか書かれるに至つて「やっぱ俺エルフだわ」とか思つた訳だ。

ま、そもそも「エルフ」なんてのが地球の概念で、言葉だからどうでも良い事では有る。

ここまでは本で知つていた知識だが、実際に人間と会つて一番違ふと感じたのは、目に特に瞳の大きさだ。

目がパツチリしているとかそう言う話じゃない。恐らく眼球自体が人間よりもエルフのが大きい。そこへ持つてきて虹彩の部分も大きいので、まるで人形みたいと転生した当初は驚いた記憶がある。

長い事エルフとして生活し、なんの違和感も感じなくなっていたが、人間に会うとやっぱりその違いに気付かされる。

生みの母であるゼナは人間なのだが、参照権の力をもってしても赤ん坊の目もしくは映像を処理する脳の性能は高く無いのか、ちよつとぼやけた映像だけしか参照出来ない。

物忘れには滅法強い参照権だが、脳にインプットすらされていない物はお手上げだ。

それにゼナは特殊だ、人間には魔力が濃すぎる大森林で活動してた事を考えても、エルフの血が混じっててもおかしくない。髪も真っ赤だし、天然にしろ染めてたにしろ、真っ当な人間とはどうにも思えない。

ともあれ目は口ほどに物を言うとはその通りで、その目の有りようが人間と違うと言うのは根源的な恐怖を感じるはずだ。

それでも匿ってくれるばかりか、協力までしてくれるおいちゃん達には感謝しかない。

それほど本で見るのと実際に目にするのでは大違い。本当に違う種族だと言う事を思い知らされるのだ。

そう言えば、思い出したくも無いが俺は既に人間をこの目で見ていた、帝国兵だ。

嫌な記憶として驚く程に記憶から消えかかっている、多分脳がストレスを感じて勝手に

に消してくれたんだろう。人体の神秘に驚くばかりだ、普通の女の子なら全てを忘れて生きていけたかも知れない。

だが俺は忘れたくない。

そして俺には忘れない為の力がある。

参照権で呼び出した帝国兵は、兜が邪魔で目も耳も良く見えなかった。印象に残って居ない筈だ。

しかし、身長は明らかに高い。みんな170cm以上は有る、やはり王都に攻め入る様な職業軍人は体も大きい。

参照権で虚空に浮かべたその姿を見て俺は憎しみと決意を新たに、「絶対に皆殺しにしてやるからな」と。

ギョツと腕を握られて、そばにテイラーさんが居る事を思い出した。参照権は俺にか見えないから、虚空を殺気立った目で見つめる俺は危ない人に見えたとはいえない。

「すいません、気が立ってしまつて」

とかしおらしく言ってみたがどうだろうか？

ほどなくサンドラさんが村長に話を付けて来たと飛び込んで来て、早速に役場の村長室まで連れて行かれた。そこで再び、語るも涙な物語を披露した訳だ。

流石村長と言うべきか、エルフ、人間の言葉で言うと森に棲む者について細かい事ま

で知っていた。それを捕捉するように語って見せたところ、信じて貰う事には成功した様だ。

あつと言う間に昼時で、スープとパンを御馳走になった運び。

どうも歓迎とか拒絶以前に、村は困惑と言った雰囲気だ。まあ無理も無いと思うし、役場の窓口で放置され、見世物にされるよりは余程良い。

結局、忙しいとかで午後はそのまま村長室で放置され、村長の仕事を見守って過ごした。

だが、この村に急ぎの仕事など有るように見えない。俺の様子を見つつ対応を決めようと言う腹に違いない。

日も暮れた辺りで、村長さんから「今日は家に来なさい」と、村長宅に誘われたが敢えて断り、再びサンドラさん宅にご厄介。

これは村長に止められたのだが、敢えて強行した。

サンドラさん宅は中世ヨーロッパの貧乏農家まんまな佇まいなので、そんなところに自称とは言え姫を泊めたくない感覚は解る。

ただ人が良さそうに見える髭面の村長だって、村の責任者と言う立場を考えれば信用しきれる物では無い、そもそもエルフについての細かな質問をエルフの姫に聞くのは違和感しかない。

自分の知識と矛盾点を見つけて、ただのイタズラだと安心したい思惑が透けて見えた。かなり疑われてると思つて良いだろう。

サンドラさんみたいな農民なら腹芸は出来無いらうし、何より自由だ。

そして予想した通りだが、サンドラさん宅には、噂を聞き付けた村人が詰めかけて来た。

娯楽の少なそうな田舎の村、あつと言う間に噂は村中に駆け巡つたことだろう。

サンドラさんに「私の事を皆さんに知つて欲しいです」と相談し、村の酒場みたいな所で本日三回目のお涙頂戴物語を公演した。

都合三回目の公演で、大分演技臭く仕上がつてしまつたが娯楽が少ないだろう村人には大受けで有つた。

翌日、噂を聞いた村人達が役場に押しかけ、やいのやいの騒いで村長を説得。「かわいいそうじゃねーか」「力になってやろうぜ！」「王都への旅に護衛を付けてやれ！」だの、「そんな予算は無い」「嘘かも知れない」「こんな村帝国に襲われたら終わりだぞ」だのの問答の末、取り敢えずスフィールと言う近場の大都市までの護衛を雇うと言う線で纏まつた。

そこまで送るから、その後は領主を説得して自分でやつてくれと、まあ妥当な線だろう。

後は護衛依頼を役場に出し——これで一安心と言う辺りで、アイツが来たのだ。会いたくて、謝りたくて、でももう会えないと思つていたアイツ。

一目見た瞬間、俺の心はあの日に戻る、教室で椅子を持ち寄つて、或いは乾いたグラウンドで座り込んで、何時だつて下らない話を繰り返した日々、同じ様に語り掛けようと、アイツに向かつて伸ばした手が視界に入る、小さくて可愛くて、その時やつと思ひ出す。

『俺はもう高橋敬一では無い』

こくいのけんし（棒）

エルフなんて居ない、そんな物はファンタジーの産物だ。だからこの異世界にだってエルフなんざ居るハズが無い。

なぜならエルフなんて地球の言葉、地球の概念なのだから。

エルフだ何だっつてのは俺が勝手にそう言っただけ。

じゃあ俺が生まれた種族はなんなのか？

確かに耳が長い。

でも、民族が違えばその程度の身体的特徴は地球だつて当たり前には有つたろ？

ましてやこの世界は国が違えど言葉は共通なのだ、だから単語としては自分達こそが

『人間』で、蔑む相手にあだ名を付ける。

人間が俺達に付けるあだ名の中で比較的穏当なのが、『森に棲む者』だ。

森に棲息する人型のモンスター扱いと言った所で純粹に恐怖の対象だ、鬼みたいな物と思えば日本人には理解が早いのでは無いだろうか？

対して大森林にすむ『人間』（以下、便宜上エルフと呼ぶ）、は外の人間を『無能』とか『地べたに』這いつくばる者』とか散々だ。

ハッキリ弱い生き物として扱い見下していて、本を読んでも、エルフと話しても、その優越感が鼻についた。

その優生思想はエルフの間でも蔓延していて、魔力が高いエルフの戦士こそが本当のエルフだと、勇ましく魔獣を狩る者こそが森の民としての在り方だと主張して憚らぬ輩が多かった。

戦士は戦士以外を、魔力が多い王都の民は、それ以外に住む民を、そうでないエルフはハーフェルフを見下していた。

そんな中、英雄エリプス王と人間の間に生まれた俺は、差別の撤廃を訴える少なくともエルフの希望。平等を訴える為の神輿みこしの様な扱いを受けそうになっただけならいい。

思えば俺の本当の敵は俺を殺そうとする長老じゃなくて、俺を担いでエルフの世界を壊そうとする『平等派』の連中だったのかもしれない。

日本人の感覚として主張は正しいと思うが、俺は生きるのだけで精一杯なのに、関係無い戦いに担ぎ上げるのは辞めて欲しかった。

だって俺は虐げられる側じゃなくて王制の人間なんだから、弱き者の代表をやる必要なんて無い、平等論は支配体制を揺るがす論理だ。匙加減一つで俺の家族や王都の人間を傷つける事態になりかねないのだから。

でも、もう良いだろう、もう壊しちゃいけない物は全て壊れた、俺は全てを利用する。

ああ、全てを壊すんだ、今度は俺が壊すんだ、全部全部全部全部。人間と名乗る奴らは全員だ。

まず人間を利用するなら『平等派』に乗っかるしかない、そうじゃないと人間と協力なんて出来ないからな。

更には言えば、人間と共に生きるなら『俺たちの名前』が必要だ。俺たちは協力的な異邦人として存在を訴えて行かなくてはならない。だから俺たちはもう『人間』じゃない、ましてや恐ろしいモンスター『森に棲む者』じゃない、それどころか帝国に蹂躪された悲劇の民で無くてはならない。

そこには新しい名前が必要だろう？

森に住む者それが俺達の名前だ。今、俺が命名した。

エルフには森に住む者の名に誇りを持ち、結束して貰う。

人間には森に住む者は悲劇の民であり、打倒帝国の切り札としても頼りに思っ貰おう。

さあ、たった一人で世界を壊す冒険を始めよう。

村長との話し合いの中。それぐらいの覚悟を一人で固めていたのだが……

「た、田中？」

いや？ え？ 田中じゃん、どう見ても！

村長室で護衛の選定が終わるまでソファーにちよこんとお座りして待っていた俺の目の前に現れた護衛は、どう見てもあの田中だった。

俺は村長室に居ながらにして、村長の本音を探るべく、收音の魔法で盗み聞きを繰り返していた。

だから、男の声が聞こえた時点で「似てるなあ」ぐらいには思っていたのだ。

でも、まさか本人とは思わないだろう？　なんてつたつて世界が違うのだ、仮にアレが本当に田中として、俺はこの世界に魂の不具合、『偶然』に抗う為に転生した訳だが。田中は何の為にこの世界に転生したと言うのだ？

いや、そもそも転生なんざして居ないんじゃないか？

なにせ、目の前の田中は黒尽くめの中二病を拗らせた様な出で立ちだが、見た目の印象は殆ど前世のままだ。

違うのは年齢と、なによりその大きさだ。

デカい、ただただデカい。身長190cmを越え、2メートル近いんじゃないか？　現代でもデカいが、平均身長の低いこの世界では規格外のデカさだ。

年齢に関しては、俺が死んだ時は俺たちはピチピチの中三男子、十五歳だったはずだが、目の前の男は三十前の歴戦の戦士の気配を漂わせている。

そこまで違って……それでもコイツは田中だ、間違いない。

なんせこいつは『眼鏡』を付けている。しかもダテ眼鏡だ。レンズが嵌まっていないのだ。眼鏡に似たアクセサリーなんて聞いたことも無い。

そうで無くてもこの独特の雰囲気、語り口、見聞違うハズがない。

じゃあなぜ、田中は田中のままなのか？ 普通は転生しても記憶なんざ引き継がない、神はそう言っていた。魂はIPアドレスみたいなものだ、記憶は脳に有ると。

じゃあその脳のまま異世界ちに来たとしたらどうなんだ？

そうだ、小説でよくあったもう一つのパターン。異世界転生じゃなく『異世界転移』。肉体はそのままに異世界に転移するパターン。

ひ弱な俺は異世界に転移したって特殊能力の一つや二つで活躍出来るビジョンが浮かばず、どうにも好きに成れなかったジャンルである。

だとすれば、異世界に転移した理由は何か？ アリがちな所で言うと、神様のミスの補填だったり勇者の召喚だったりするが……

あ、俺の『偶然』の巻き添え死の補填か？ 俺に巻き込まれての異世界転生なのか？ ……ん？ だ、だとしたら！

異世界の最強。パワーワード『神のミス』『巻き込まれて異世界転移』『苗字は田中』が全部揃ってるじゃねーかコイツ！

『妖獣殺し』なんて大層な二つ名でどんな奴かと思ったらオイ、チートか？ チート持

ちで無双しとるんか？

やってられねー、こちとら田中の弔い合戦のつもりで転生してからの十二年間、不健康な体を引き摺って、菌を食いしばって異世界転生の主人公の辛さを噛み締めてたのに、まさかの弔う相手が主役で俺は脇役疑惑ですわ。

あ、死んだと思われてるけど実は生きてて強いってパターンもかなりのパワー感あるな。

あー勇者としてわざわざ呼ばれたのに間違って呼ばれた奴にボコられる勇者ってこんな気持ちなのかなー。

「た、田中?」

思わずもう一度呼んじやう、なんか向こうもガン見してるし気が付いたのか？

いや待て、田中と違って俺は前世の面影なんざ無し、ナツシング！ 世界を揺るがす予定の美少女だよ？ でもだったらなんで俺をガン見してるんだよコイツはよー

「あの……あなたは?」

「ああ、俺は黒衣の剣士田中。『妖獣殺し』って二つ名で呼ばれている、冒険者とも言うべきかな」

「コ、黒衣の剣士ですか……」

K O ☆ K U ☆ I ☆ N O ☆ K E ☆ N ☆ S H I !!

DON引きだよ！ 黒衣の剣士って真顔で言えるのが逆に凄い！ 死んで欲しい！

「あの、あなたは どうして？ えと……どうしてここに？」

「チツチツチツ」

田中が舌を鳴らしながら指を振る。

ウザいです、とても。

そもそもそのジャスチャーこの世界で有るんか？ 初めて見たんですけど？ その

上決め顔でウインクを一つ。

「まずは自己紹介、そうだろ？」

ふぁー！ウザさの大渋滞やー！

言わせて貰えば俺、魔法の力で聞いているからね？ お前が村長の自己紹介をガン無視

して本題を急かした所、聞いているからね？

「……そうですね、私はあなた達が言うところの森ザに棲バむ者改め、森ビに住ジャむ者の国の姫、

ユマ・ガーシエント、よろしくお願いします」

俺の顔や言葉が引き攣ヒっていたのも仕方が無いだろう。言いたい事は山ほど有るが、

今は我慢だ。

それなのに田中の奴は言いたい放題でイライラする、向う脛蹴り飛ばしたい。

田中の脛を守る為じゃ無いだろうが、そこに村長が割って入って来た。

「今、ビジャと言ったがそれは？」

流石村長、ソコだよソコ！ 良い所に食いついてくれた。

「ビジャは森に住む者と言う意味です、森に棲む者は蔑称として人間が付けた物でしょう？ 我々はそんな名前で呼ばれたくはありません。我々は自らを森に住む者と呼称します」

昨日一晩で考えた設定です。

言い回しとしては一応は前から有るんだけどね、「我々森に住む者として一丸と成つて——」みたいなの、特に平等派の口癖みたいなものだ。

それなりに説得力があるだろう？ 少なくとも村長は納得してくれた。

「なるほど、そう言う事ですか」

「つまり、エルフだろ？」

は——？ 田中さん？ お前それ日本語だよね？ いや英語か？

コイツは俺を試してるの？ 流石に村長達を前に「オツス、オラ地球人」みたいなやらんからね？ ただでさえ疑われてるのに完全にキチキチ路線だと思われちゃうでしよ。

「える、ふ？」

ほらー村長とか困ってるだろコレ、どうしろつての？

「なんですか？ そのエルフと言うのは？ 我々の新たな蔑称と考えても？」

咄嗟に知らんぷり出来る俺。マジで凄いなと思うよ、アカデミー賞候補。

「あ、いや違うんだ、むしろ逆、敬意を表する言い方と言うか……スマン忘れてくれ」

それで、ワザとらしく頭を掻いて、舌を出す田中殺したい。テヘペロって奴か？ 2

メーター近い男がそれやって可愛いとか思ってたのか？

「あなたが適当な事を言って誤魔化す様な人だと言う事は解りました」

見ると殺意しか沸かないので見ない事に。

「それでな、彼女が王都まで行きたいと言うので護衛して欲しいと思っていたんじやが……」

村長はその髭をぶるぶる振りながら俺と田中を見比べて困っている。

村長に罪は無い、無いどころか相当良い仕事してる。

「私としては、厄介になっっている身ですから、その失礼な男が護衛でも構いませんが」
実際問題、信用出来る奴なんて殆ど居ない中で田中の存在は大きい。黒尽くめで恐らく経歴不詳、普通に考えたらこれ以上怪しい奴は居ないが、俺はコイツが悪い奴じやないって知っている。

強さの方だってチートが無かったとしても、この身長だ。剣の腕だってそれなりなんじゃ無いかと思う。

とは言え、二回も俺の『偶然』に巻き込まれて死んだら申し訳ない……とチラリと見やるとなぜかニヤニヤしてる。

——もう積極的に巻き込んで行こう。

死んだらまた異世界に転移して貰えよな！ 次は針山とか血の池とか名所が豊富で、暖かくて賑やかな所が良いんじゃないか？ 地獄とか。

「俺も構わねえぜ、ただ王都までつてなると長いぜ？ この村で報酬は出せんのか？ 俺は安い男じゃないぜ」

お前はすぐに地獄へ行こうな？ 俺をウザ殺そうとしてるの？ そしてお前、王都までの護衛費用なんて何か月分だよ、この村が出せる訳ねーだろ。

ほら村長困ってるだろ。

「いんや、村ではそれほどの予算は出せませぬ、まずはスフィールにまで届けて頂ければ」と

「おい、スフィールは俺も寄ってきたばかりだがよ、国境付近の都市じゃねーか、帝国に追われた嬢ちゃんは大丈夫なのかよ？」

「しかしこの辺りで大都市と言えばスフィールじゃろ？ それに前線だけに帝国の恐ろしさを知っているハズじゃ、力になってくれる可能性は高いのでは？」

村長は正しい。伊達に髭生やしてない、ココは俺も乗っかって行こう。

「私としても、前線の都市で帝国の恐ろしさを語る事に意味はあると考えています、彼らに相手にされない様では王都に行っても意味が有りません」

すまし顔で答えると、俺の言葉に流石の田中も思案顔で考え込んでいる。

確かに危ないのは解ってる。でも俺に安全地帯なんてどこにも無いんだよ！ だったら味方を増やすなり因果律と云うのか箔を付けると云うか、死ねない理由を積み重ねるのが神曰く唯一の解決策になりうる……多分。

「オイ、お嬢ちゃん」

田中の呼びかけに俺は睨む様に見上げる。

「何ですか？」

「解ってて言ってるのか？ スフィールは国境の都市、この世界の中心とも言える場所だ、言うなればこの世界のあらゆる危険が渦巻いてるって事だぞ？」

「理解しているつもりです」

ツーンとしたおすまし顔で答える。正直、心配して貰って嬉しいのだがこいつにだけは顔がニヤケる所を見られたくない。そもそもお前の為に転生したんだからね！

「じゃあ帝国の人間だつてゾロゾロ居るのが解るだろ？ ガラが悪いのだからウヨウヨ居る。エルフ、いや森に住む者^{ヒト}だつたか？ そのお姫様が居るつてなれば帝国だつて狙ってくるに決まってるだろ」

「なっ!」

田中の言葉に、サンドラのおいちゃんが慌てるがまあ気付いて無かったよな。

「むしろ……」

言うぞ! 良いのか? オメーそこまで言わせて置いて「やつぱ警護ムズイからやめた」とか言わないだろうなああん?

「私は襲つて欲しいとすら思っています」

「な!?! なんじゃと?」

村長も流石にビツクリ、唾然として大きく開いた髭の中から口と歯がハッキリ見えた!
モジャモジャしまくってるから、髭じゃなくて毛皮でも張り付けてるのかと思つた。

「へえ……」

ただ、田中の方は予想していたのか目を細めてこちらを窺う様子だ。田中は馬鹿っぽい馬鹿じゃない、言いたい事は解るだろうよ。

「気に食わねえな」

「……そうですか」

俺は命懸けの博打を打とうとして居る、田中にとってみりや年端も行かない少女がだ、そりや面白く無いだろう。

「姫様が、何番目の姫なのか、あるいは影武者だかは知らねーし、姫に生まれた義務だかはもつと知らねえけどよ、嬢ちゃんみたいな女の子が命を張らなきや存続出来ねえ国なんざ、滅んじまったほうが良いとしか思えねえ」

「……なるほど」

思わずつぶやいた、確かにそう考えるのが普通か、覚えておこう。

「では良かったです」

「良か……つた？」

俺は、俺の顔に王宮が襲われてからずっと張り付いていた笑顔が戻るのを感じた、もつと言うとその瞬間に気が付いた、俺は田中に会った瞬間にこの笑顔から解放されていたのだと。

でも俺はこの仮面と生きて行かなくてはならない……

「もう滅んでますから」

「なに？」

「王都が落とされ、父も母も、兄も妹も全員死にました、エンディアン王家は滅んだと言つて良いでしょう。何番目の姫ですか？ 私最後の生き残りです」

「嘘だろ？」

「それに森に住む者の王都が落とされてから一月も経っていないのです。未だ暫定政權どころかレジスタンスの組織すらなされて無いのではないかと思えます」

さしもの田中もパニックを起こして考え込む、その様子を見て一層冴え冴えと笑えて来る。

「だ、だったら何か？ 帝国に国を攻められてからお前は誰の指示でも無く、自分一人でこの村までやって来たって事か？」

「勿論、そうですが？」

本当は一人では無かった、セレナが居た。村の人も付いて来てくれた……でもみんな死んだ。

「だとしたら、まずはエ……ビジャを纏めて再起を図るのが筋だろ？ なぜいきなり人間の村に来た？ そんな有様で助けを求めたって求められた方も困るだろ」

そうだよ、こっちは困らせに来てるんだよ！

「そもそも、私は王都奪還が目標とも、エンディアン王家の再興を目指すとも言っていないが？」

「……は？」

田中よ、お前に俺の気持ち解るか？ お前が魔獣に無双してる時、俺は一族郎党を無双されてたんだぞ。

「つまり、あんたはただ引つ掻き回すためだけに、王都ビルダールに行こうってんだな」
「引つ掻き回すなんてそんなつもりはありません」

そんな穏当に済ますつもりは毛頭無い、全員死んで貰いたい。

「じゃ、じゃあ何のために王都に行こうと言うんじゃね？」

慌てたように髭の村長が尋ねて来るが、大量虐殺ですなんて言える筈が無い、思い切り髭を引つ張つてやりたいね。

「イタタタタツ！ 何するんじゃ！」

既に田中が引つ張っていた、流石田中さんですわ、頼れる男である。

「私は、人質になりに行くのです」

「ひ、人質かね？ うへえ!？」

俺の言葉に村長がひっくり返る……。

「人質か……」

「はい……、今まで国交も無かった国に助けを求めますから人質は必要でしょう？」

そして生き残った王族は私一人です」

「それじゃあ、結局国はどうにもならねーじゃねえか。人質つてのは王様本人がやるもんじゃねえ、その家族とかがやるもんだろ？ 唯一の王族の嬢ちゃんが人質じゃ国が纏

まらないぜ」

そつちは知らんよ、そもそも王制が維持できるかも知らん、どつちにしろ俺はお飾りの王になるんじゃないか？ だったらお飾りは最高に輝く舞台で飾られようじや無いの。

「ですからエンディアン王家の再興が目的では無いのです、誰が中心に再興しどんな王家が生まれても構わない。ですが森に住む者とビルダール王国の同盟に時間は掛けられないのです」

「どういう事だ？」

そこで俺はパンつと乾いた音一つ、柏手を打つて部屋に放っていた照明の魔法を解除する。

「オ、オイ!？」

急に暗くなった部屋に驚く田中、この明かりが俺の魔法だと気が付いて居なかったんじゃないかな？

凄腕の傭兵が現れたと聞いて、高度な魔法に度肝を抜かせてやろうと画策した照明だった。凄腕ならば見破るだろうと思つたが、むしろ俺が田中に度肝を抜かれる始末。

やはり魔法の造詣は一流の戦士でも深く無いのか？ それとも田中が無知なのか？ 後者っぽいのが悲しい。

だったらもつと驚かせてやろうじやないか。

「『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』」

薄暗い部屋の中、もっと派手な明かりを生み出すことにする。部屋に光の奔流が溢れ、輝く光球が駆け巡り天井に張り付いく。

「森に住む者の魔法、これが帝国の手に渡り、そして帝国にはそれすら打倒した魔法を無効化する兵器が有る。この二つが揃う意味が解らないでは無いでしょうか？」

いや、そもそも魔法を無効化する兵器の事、田中に話したかな？ まあ良いや。

俺は立ち上がり、片手を広げ声高に大立ち回り。

「私は王都に向かい、ビルダール王国と森に住む者の間に同盟を結びます、そして……」
みんな揃って間抜け面、これ俺がDON引きされてる奴か？ いやここはやり切る。

「帝国を打倒し！ その野望を打ち砕く！」

ポーズを決めて遠くを見つめる俺は、皆と目を合わせられなかった。正直ちよつと恥ずかしい。

僕悪いウーパールーパーじゃないよ？

俺は迷っていた。

勿論、俺の正体を田中に話すかどうかだ。

まず信じてくれるかだが、そこは問題無いだろう。田中自身が特殊な境遇だ、今更俺がエルフの少女になったと言っても信じてくれるに違いない。

なんせ、前世から「昨日さー高橋がウーパールーパーになつてる夢見たんだよねー」とか言つてたからな！ エルフのお姫様なんて原型を保つてる方だろう。

つてか思い出したら腹立つてきたな。この苛立ちを参照権でプレイバック……

「昨日、高橋がウーパールーパーになつてる夢見てさ」

「んっ！ 開幕意味不明！」

「でさでさ、必死に俺だよ俺！ 高橋だよ！ つて訴えてくるのよ！」

「いや、ウーパールーパーが俺の声で喋る訳？ 怖くない？」

「勿論喋れないよ？ ウーパールーパーだし」

「いやいやいや、それ俺じゃないでしょ！ もはやただのウーパールーパーでしょ！」

「それが解るんだなー、ぱっと見でもう高橋だつて気が付いちやう」

「訴訟モノなんだが？」

「で、集合写真の高橋のとこ指差して、俺！俺だよ！　　ってやるんだけど、『そいつねー高橋って言うんだけどスッゲー馬鹿な奴なんだよねー』って言うのと滅茶苦茶暴れまわるのね」

「いや？　そこは助けよッ!?　　友達がウーパールーパーになつちやつてるんだよ？」

「おつもしれーんだよなあ」

「ウパー（憤怒の鳴き声）」

参照権の最高に無駄な使い方出たな。当時の怒りがグツグツに煮えて来た。

もうコレわざわざ正体を明かさなくて良いんじゃないかな？　考えてみると俺にメリット無いんだよな。

田中は俺の『偶然』に巻き込まれて死んだ訳だが、転移させた神は俺の『偶然』についても説明したに違いない。

いや、神はアイオンと名乗った爺ちゃんだけじゃない、話しぶりから考えるに地球の神は別だったはずだ。アイツは魂も含めて生粋の地球人。アイツを転移させたのは地球の神に違いない。

だとしても俺の『偶然』に関しては説明したはずだ……その時、俺と田中でお互いの立場が逆として、一緒に居ると隕石が降って来る様な奴と、俺と一緒に旅をしてやれる

だろうか？

……正直俺には自信が無い。

もう俺はこの世界に大切な物が有る、いや……有った。

田中とセレナ、どつちか取らなきや行けない状況なら、悪いけどセレナを取るだろう。

田中は親友だが、セレナは俺の妹で命の恩人でヒーローでヒロインだ。

……死んじまったけどな。

俺は何としてもセレナの、そして家族の仇を取りたい。帝国を地図から消してやりた
い。

だとしたらスフィールまで田中に護衛して貰うのは必要な事だ。信頼できる味方は
一人でも欲しい。

黙っているのは田中への裏切りだろう。……俺は田中と木村の仇討ちのつもりで転
生したって言うのに、馬鹿みたいだよな。

でもよ、やっぱり今の俺はエルフのお姫様でさ、前世のアレコレよりも今生の家族だ。
……みんなみんな死んじまったけどな。

何より田中と仲良くお喋りしてさ、昔の事を思い出して、馬鹿話に花を咲かせてさ、そ
れで俺の復讐心が薄れてしまうのが何より怖い。

そして、田中にさ「復讐なんて下らないぜ」って言われてしまったら？ 正直俺だっ

て意味が無い事ぐらい気付いてる。

例えば帝国の人間を一匹残らず根絶やしにしたって、セレナも母様も兄様も父様も帰っては来ない。

でも、笑いながら兄様に剣を刺した奴らの顔が、セレナを撃った人間の喜ぶ声が頭から離れない。

俺だって帝国兵を殺したさ、殺せたさ。

でもそれじゃ全然気が済まない。あいつらは俺達の、エルフの国を襲って何がしたかったんだ？ あんな兵器まで持ち出して何がしたかったんだ？

魔力が濃くて、魔獣が蔓延る土地に価値が有るとは思えない。

ただエルフが憎いとか恐いとか、その程度の理由なんじゃ無いか？ だったら俺だって殺したいだけで殺して良いだろ？

馬鹿な事だと知ってるさ、知ってるからさ。だから田中に「お前の復讐、俺も協力するぜ」とも言ってるさ、欲しくは無いんだよ。

それにさ、今更だけど前世の友達の前で「エルフのお姫様」を演じるのは恥ずかしいだろ？

あいつと馬鹿話に花を咲かせたその口で「お願いです！ ワタクシの国を！ 家族を！ 民を救って下さい！」って涙ながらにお願い出来るだろうか？

……正直俺には自信が無い。

だから俺は打ち明けるのは何時でも出来るとその考えを頭の隅に追いやった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

あれから俺たちは村長室でスフィール行きを条件を詰めた。やっぱり田中は俺の護衛を引き受けてくれるらしい。

だから今日は二人で村長のお家にお泊りだ。サンドラさん宅に田中と泊まる訳には行かないし当然と言えらるろう。

サンドラさんは田中に念入りに「ユマ様の事頼むからな！」と念押しして帰って行った。

身振り手振りを交えて俺がどんなに可哀想か唾を飛ばして話してくれたし、田中はそれを嫌がらずに聞いていた。

ありがたくて涙が出る。同時に俺が汚い人間だつて自覚させられる。

でも良い、どうせ綺麗には終われない。

村長の家は流石にサンドラさんの家よりなんぼか小綺麗で、暖炉やらランプやら、それなりの品質でしつかり整っていた。

その暖炉は、もう春先でよつぽど冷え込まない限り使わないと言っていたが、今は火が灯っている。

パチパチと火がはぜる音が若干のトラウマだが……仕方が無い。炎の明かりに照らされた田中がガラにも無く真剣な顔を見せる。

「じゃあ、スフィール行きで良いんだな？」

「はい、覚悟はしています」

俺たちは差し向かいで話し合っていた。

村長は居ない。敢えて聞かない大人の処世術と言えるだろう。

打ち明けるには絶好の機会だが、俺は前世の事は打ち明けないと決めた。そして話は徐々にお互いの戦力の話になる。

「巨大な妖獣を倒せるのはビジャの中でも一流の証となります。偉業を成し遂げたタナカと言う戦士の名は、森に住む者の国でも知られていました」

大嘘だ、田中など聞いたことが無いしエルフが人間の戦士の話なんてするハズが無い。だが名前を呼んでしまった以上仕方が無い。

ただ巨大な妖獣を倒せるのはエルフの中でも凄い事ってのは本当だ。武勇伝の一つや二つ語って貰おう。

「ああ、マンティコアな。強かったぜー！ 引き付けてからボウガンで羽に穴を開けてよ。落ちた所を剣でズッパシ斬る予定が、ボウガンが弾かれやがる。あんな薄い皮膜だよ、とんでもない強度を持っていやがるんだ」

「魔獣とはそう言うものです、見かけを裏切る強度を持つ事も珍しくありません。特に妖獣は決まった形を持たないだけに、どんな特徴があっても不思議じゃありません。」
「ってか、マンティコア居るんだな！ 妖獣つてのは早い話、キメラだ。魔力による遺伝子異常で混ざった結果、たまたまマンティコアっぽい生物になっても不思議じゃない。」

それにしても行きずりの村でマンティコア退治とかファンタジーの王道感凄いね！
羨ましくて憤死しそう。

「それで、空から急降下して襲ってくる奴に、さしもの俺もお手上げよ、なんでか解るか？」

いや、田中さんそんな事言われても、今の俺はそんな面白い事言えんよ？

「やはり剣では上空の相手に分が悪いのは当たり前では？」

当たり前なんよ、むしろどうやったかが知りたいのよ、引つ張らないで欲しいね。

「確かにそうだが、相手だつて火を吹く訳じゃないんだ、爪や牙で襲い掛かって来る所を迎撃出来るつて思ってたんだよな、でもよ、そうじゃ無かった」

「……何故です？」

なんか下らない話な気がしてきたが付き合いで聞いてやる事に。

「あらゆる剣術はよ、上から攻撃される事を想定してないんだよ、だから上から襲って

くる奴を斬る技も無い」

……ふーん、対空無いんだ。

いや、ゲーム脳に過ぎるか。そう考えれば無いのは当然って気もするが、でも実はしつかり探せば有るんじゃない？ 言い切つて良いの？ ってか、そんでどうしたのよ？ 引つ張りすぎじゃね？

「ではどうしたのです？」

「そこで牙空殺よー！」

「……ガクウサツ？」

ガクウサツつて何よ？ いや、まさかな。

「知る訳ねーか、こうやって伏せた状態で草むらに隠れてな、爪で襲い掛かつて来た所をこうよー！」

そう言うとき田中は、ガツと上空を突き刺す様なポーズで——つてお前それ格ゲーの技じゃねーかよ！

いやー見飽きたポーズだねー、俺が飛び込む度にそれで落とされたもんだわ——つてたわけっ！

「……そんな……剣術が有るのですね……」

「実はな、その時咄嗟に閃いたんだよ。真正正銘、俺だけの剣術さ」

いやー正真正銘お前のじゃねーだろ！ コレ俺の正体に気が付いて、突っ込み待ちなのかな？ だとしたら負けそうだな。下タメ上Aで誰でも出せるわポケエって突っ込みそうになつたぞ。

「オリジナルの技とは……タナカ流でも作るつもりですか？」

正直、田中の剣道の腕を買って護衛になつて貰つたつもりがさ、これ駄目駄目なんじゃね？ 流石に通用しないっしょ？ 剣からビームとか試してる馬鹿なら、護衛変わつて貰つて良いか？

「田中流か……それも良いかもな。俺の技はそれだけじゃないぜ？ 羽を貫かれてバランスを崩して落ちて来た所を更にこうよ！」

そう言つて、田中は剣を擲り上げる様なポーズを——ハイハイ、弧月昇、弧月昇。それも見飽きたねー、小足小足強弧月昇100回喰らつたねー

「……随分派手な技の様ですが、人間相手にはどうなのです？ 敵は魔獣では無く帝国兵なのです。そんな大振りの技が通用するとも思えません？」

頼む田中よ、初心に、剣道に戻つてくれ。もう言わないから！ 剣道部なら弧月昇ぐらい出せるよな？ とか無茶振りは言わないから！

「そつちはもつと間違いいねーぜ。俺だけが使える俺だけの『剣道』が有るからよ」

「ケンドー……」

「少なくとも、人間相手の一対一なら絶対に誰にも負けねーよ。俺の『剣道』は」
いや其れもお前のじゃなくない？ 俺の俺の詐欺辞めない？ でも安心したのも事実。

「では今度は私の番ですね、森に住む者の魔法の力についてご説明しましょう」

「……へえ、さつきも見せて貰ったが、森に住む者の秘伝だったりしねーのか？」

「しませんね、そもそも人間では扱えないと思います」

多分教えても無駄だから隠す理由が無いと思うんだ。魔力値が人間じゃ足りないからね。サンドラのおいちゃんなんて魔力値10無かった、下手をすれば点火の魔道具すら使えないかも知れない。

「風の魔法で、このぐらいの木を切断する事が出来ます」

俺は両手で大きな円を作る、直径三十センチぐらいの木を想定している。道中試したがこれぐらいなら切断可能だ。

アニメや漫画を見ていると、木なんて剣で簡単に切れる様に錯覚するかもしれないが、実際ノコギリなり斧で切ってみれば、普通の剣の一閃で一刀両断なぞ夢のまた夢だと解る。

三十センチの木を斧で切り倒すまで、人間なら一撃で死ぬ様な一撃が何発も必要だ。そう考えると俺の魔術は結構凄いや？ この威力のまま人間に当たれば人間なんて

真つ二つなんじやないかな？

「しかし、人間にはあまり有効とは思えません、何故だか解りますか？」

お返しに今度は俺が質問する番だ、解るかな？

「……いや、解らないな、話を聞くに威力が足りない様には思えないし。隙が大きいとか出るまでに時間が掛かるとかか？」

「確かに呪文を唱える必要は有りますがそれ程長い物ではありません。隙も無いと言つて良いでしょう」

「そう聞くと強力な様に思うがな」

残念ながら、基本的にそれ程強い物じやない、これは実演するしか無いだろう。

「そうですね、お見せした方が早いと思います、いえ、身構えないで下さい、昼間にもお見せした明かりの魔法です。『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』」

俺の発した呪文と共に輝く光球が一斉に現れては、俺の制御に従つてゆつくりと田中の元へ降り注ぐ。

「ッ！ オ、オイ！」

「慌てる必要はありません、痛くも熱くも無いですから」

ゆつくりと降り注ぐ光球が田中を取り囲み、その体に付着する。暖炉の明かりのみの部屋で田中の姿だけが輝いて浮かび上がる。

「!? なんだ?」

田中は蛍の群れの中に立ち入った様な気持ちで居たに違いない、しかしその光は田中に触れるや否や、雪の様に解けて消えて行ってしまふ。

「これは?」

田中が疑問に思うのも無理はない、昼間に村長室で見せた時、光球は長い間消えずに部屋を照らし続けた。それが田中に触れると瞬く間に消えて行くのだ。

「これが魔法の弱点、パーソナルスペースでの減衰です」

そう、魔法には弱点が有る。それが生命体の支配領域に入った時への減衰だ。

「例えば魔法で水を沸かすのは簡単です、しかし相手の体の水分を沸騰させて、相手を茹でる様な攻撃は不可能です」

「なるほど抵抗^{レジスト}出来ちゃうんだな」

田中もなんだかんだゲーム脳、解りが良くて助かる。

「先ほどの木を切断出来ると言う話ですが、生きた生木ではなく折れた枝の話なのです。木も生きていますから魔法で切断しようとしても、減衰されてしまいます」

村までの道中で見つけた倒木を薪にでも出来ないかと魔法で切断したのだが、その威力に驚いた次第である。

「じゃあ、さっき言っていた風の魔法も、人間に当てた所で威力は無い……か」

「そうですね、流石に首にでも当たれば致命傷にもなるでしょうが、ナイフで切り付けた方がよっぽど早いでしょう」

「なるほどな」

セレナのように圧倒的な魔力値があれば、人間以上に抵抗力が有るとされている魔獣ですら直接的な魔法で即死級のダメージを与える事が出来ていた。しかし、アレはあくまで例外だろう。

普通の魔力値では不可視の刃である事を利用しての牽制や、土や木を操作しての足止めにするのが精々だ。

パウギユリウアル

王蜘蛛蛇なんぞはその減衰領域が広い、かつ強力でその牽制すらも出来ないエルフの天敵だったハズなのだが……セレナは本当に規格外だった……

「ですから、攻撃以外の場面で役立つことの方が多いいと思います。明かりもそうですが、空気や土から水を集めたり、地形を変えたり、怪我の治療も可能です」

剣でも出来る事は剣でやった方が良く、魔法の良さはその汎用性に有る。

「治療？ 回復魔法って奴があるのか？」

田中も大概ゲーム脳だが、大事な事だから確認しておくのが良いだろう。

「はい、回復力を高める事で傷口を塞いだり、綺麗な傷口でしたら切断部位を結合する事すら出来ると言われています。試したことは有りませんが」

「それはスゲエな、……でもよ、それは自分で自分に掛けるのか？ 減衰つてのが有るなら俺が怪我した時には回復出来ないって事だよな？」

「コツは有りますが、相手の魔法を心から受け入れる事で、減衰無く治療を受ける事が出来る筈です。怪我をした際、貴方が私を信じる事が出来れば治療をするのは問題ありません」

相手の魔法を受け入れるって事は、相手の魔法で自分の体を好き勝手される覚悟を決めるって事だ。やろうと思えばそれこそ体の水分を沸騰させる事も可能なのだから。

口先だけじゃなく、本心から相手を受け止める覚悟が無ければ効果は発揮しない。

「なら問題ねえな、信用してるぜ、いや信用じゃないな。お嬢ちゃんみたいなお可愛い女の子に傷付けられるなら構わねえって感じかな」

そう言つて田中はニヤリと笑つて見せるが、発言はまんま変態だ。しかしそれぐらいの気持ちの方が回復魔法の効きが良いのは事実。

「大怪我してのたうち回つて居る時に、その余裕が有ればいいのですが」

俺はそのリクエスト？ にお応えして、サディスティックな冷笑で答える。

「じゃあ、戦闘は基本的に俺の仕事って事で良いかね？」

「ええ、弓が有れば多少は戦えると思うのですが……」

「……弓？ ああ、エルフと言えば弓か」

またエルフとか言ってるが敢えて無視する。

「……ええ、矢を魔法で加速するのです、その場合、相手のパーソナルスペースでもその勢いは減衰されませんから」

「なるほどね、魔法を物理攻撃に変えちまえば良い訳か」

「そうですね、理解が早くて助かります」

ま、元日本人としては理解しやすい所だよな。

「じゃあ、明日、村長にでも村に弓が無いか聞いてみるか」

「そうですね、小さなショートボウが有れば良いのですが」

ただ、この村にまともな弓が有るかどうかな。

馬車の荷物の中に弓が有れば良かったんだが、ガラクタみたいな魔道具ばかりだったのには閉口した。あいつら魔獣と戦わずに、無機物相手に凄い威力だと喜んでたんだは無いだろうか？

「じゃあ取りあえず、スフィールまでよろしく頼むぜ、嬢ちゃん」

そう言つて、右手で左腕の肘を、左手で右腕の肘を掴み、この世界の挨拶をする。目上の人にする挨拶なので、嬢ちゃんと言う呼び方に反して、一応雇い主？ として立てはくれる様だ。

「（こちら）そ宜しくお願い致します」

俺も右手で胸を抑える、動作で答えると、お互いの目が合った。

「その、一つ良いでしょうか？」

「なんだい？」

突っ込み待ちだろうか？ でも聞かないのも不自然だろう。

「その……顔に付けている、そのアクセサリーは魔道具なのですか？ 見た事が無いデザインですが」

「ああ、コレな、『眼鏡』って言うんだけどよ、見るか？」

そう言つて眼鏡を外すと、こちらに差し出してきた。

「メガネ……」

そのままの名前で、見た目は黒縁眼鏡だが……受け取つてみるとずっしりと重い。鉄を曲げて不格好に眼鏡の形にしただけのシロモノだ。

勿論レンズなんか嵌まっていない。レンズって言うのは現代でも技術の塊だ、この世界では簡単に作れるモノじゃ無い。

試しに掛けてみたが、特に何の効果も無さそうだ。

その時、こちらをニヤニヤ見つめる田中と目が合った。

「さしもの森に住む者《ビジャ》のお姫様も眼鏡は似合わないな」

「これは何かの役に立つのですか？ 重くて視野も狭くなり不快なのですが」

これ何なんだ？ 意味が解らない。しかも鉄で出来てるからかなり重い。

「ホントは今の俺には必要無いんだけどよ、コイツが無いと俺が探してる奴が俺に気が付かないかと思つてな」

……そうか、お前、俺を探すためか。それでもう目は悪く無いんだな。

「探し人ですか……」

「ああ、木村と……、高橋つて言うんだけどな。生きてるか死んでいるのか、この世界に居るかどうかすら解らないんだ」

「……………」

木村も居るのか？ 居るのかも知れないのか？ そりやそうか……

と、するとセレナを撃った火縄銃は木村の作か？ いや、そう決めつけるのは早計か、普通に帝国の秘密兵器として作られていたのかも知れない。

「木村はともかくよ？ 高橋なんて人間かどうかすら解らないんだから参るぜ」

ん？ なんだつて？

「…………よく意味が……解りませんが？」

「どんな姿をしていても、どんな事をしていても、そう言うモンかもなつて思つちまう位、良くわかんねー奴なんだよ」

「…………それでは、まるでおとぎ話の魔物の様では無いですか」

「違いねえや、似たようなモンだな。今、この屋敷に居たつておかしく無いんだぜ？」
……コイツやつぱり気が付いてるのか？ そんな駆け引きするなんて、らしく無い気がするが……

「この家に、やたら俺に吠えて来る犬が居たる？」

ああ、あの間抜けっぽい犬な。

「やたら俺に吠えるしよ、今考えると高橋と顔つきも似てるんだ、試しに話しかけてみようかと思ってる」

「ウパー（憤怒の鳴き声）」

「？……どうした？」

「いえ……なんでもありません」

滅茶苦茶暴れまわりそうになった、俺はコイツと旅をして突っ込みを入れずに済むだろうか？

……正直俺には自信が無い。

弓を探して

翌朝、村で短弓を探したが良い物は無かった。

魔法を併用せず、弓の力だけで魔獣を狩る事は難しく、猟師は罫を使うのが主流だった。

魔獣駆除を生業にして、村から村を渡り歩くハンター、いや異世界転生物らしく冒険者と呼ぶか、そう言う存在も村に何人か滞在していたが、使い慣れた自分の得物を他人に譲る馬鹿は居ない。居ても相当吹っかけられたらしい。

そもそも、魔法を使わない俺の素の力は笑ってしまうぐらいの非力さだ。普通の弓は引けないかも知れない。魔法で肉体を補助してやれば引けるかもしれないが、そんな事をすれば、魔法で矢を加速出来なくなるので意味が無い。

そういう意味で弓が見つからなかったのは幸いだった。折角見つけて来てくれたのに引くことも出来ませんって、想像するだけで胃が痛くなるぐらいに気まずいだろう。

王都を出てからと言うもの健康一直線で忘れかけていたが、俺は筋金入りの箱入り姫だったわけで、筋力なんて全く無いのだ。

「いやあ、ほんとにスミマセンです」

と謝る村人、誰だっけ？ ハイ参照権。そう！ ザツカさん。

役場の人らしく、冒険者や狩人に顔が利くとの事で、弓について聞いて聞いて回ってくれたらしいのだ。急な要望に動いて貰った上で、謝らせてしまっている。

昼前の役場は人も多い、流石に申し訳ないと思うんだ。

「そんな！ 謝らないで下さい、急に無理を言った私が悪いのですから」

俺は心の底から申し訳ないと言った風に、ザツカさんの手を取って目を潤ませる。最近演じ過ぎた所為か、若干臭い感じになってしまったが申し訳ない気持ちは本当だ。

「あ、いえ……そんな」

途端にザツカさんは挙動不審に陥る。この感じ、誠に勝手ながら断定させて頂くと、童貞だろう。

真面目一筋の役場勤務で女性と手を繋いだ事すら無いんじゃないだろうか？ 前世では非リア充、陰キヤの王として鳴らした俺としては、どうしたって親近感が沸くじゃ無いか。

「ザツカさんは精一杯やってくれたと思います。私は戦いは素人ですから、弓なんて有っても気休めにしかなりません、弓はスフィールで手に入れれば良いのです」

そう言つて、更に強く手を握り、精一杯の優しい笑顔で語りかけた。

すると益々ザツカさんは顔を赤くし俯いてしまい。ポツリポツリと語り出す。

「……わたしとしては、気休めだからこそ、心細い思いをしてるだろう。姫に弓を持たすてあげたかつたス」

そう言う……：…俯きながらちよつと泣き出してしまつてゐるんじゃないか？ コレ。

いや……：…勘弁して欲しい。

ザツカさんは涙に濡れる顔を腕でグツと拭うと、決意を込めた顔で口を開く。

「わ、わたし、今からもう一回、村を回つてきます！」

「や、止めて下さい！ 私そんなつもりは無いのです」

俺は今にも駆け出して行きそうなザツカさんの服の裾を掴んで止めた。ザツカさんは必死だが俺だつて必死である。

ここまでされて弓を引くことも出来なかつた時の空気を考えると居た堪れない。それどころか、巨大な弓だと背負つて歩くのだつて重労働だ。

……：…弓を背負つただけでふらつく姿、容易に想像出来てしまった。その時の空気感、想像したくも無いだろう。

間の悪い事に、正にその大きな弓を担いだ冒険者が役場に入つて来る。

「ラザルドさん！」

ザツカさんがその冒険者に呼びかける。ラザルドと呼ばれた三十過ぎで顎鬚を蓄えた冒険者は突然呼ばれた事にギョツとして此方を見て、その瞬間に全てを察した様

だ。

喜色満面、自分を呼びかける職員。その職員の裾を引つ張り必死に止める異種族の少女。酷い絵面に違いない。

チラリとこつちを見たラザルドさんに、俺はブンブンと顔を横に振って答えると、ラザルドさんは呆れた様なニヒルな笑みを返してくれた。

「さつきも言つただろうが！　こんなお嬢ちゃんにこの弓が扱えるわきやあねえだろ、ちつたあ考えろ！」

「で、ですが……何か、心の支えになればと」

……いやいや、心の支えが支えられずに、倒れてしまう。

「い、いえ、私の様な非力な者がその様な立派な弓を持つても使いこなせません、引けもしない弓を持つては、弓が可哀想です」

何と言うか、既にラザルドさんにこの弓を渡せと交渉した後の様で、本当にザツカさんの暴走っぷりが恐ろしい。

素人故だろうか？　普通に考えたらこんな弓、女の子が扱える訳ないだろう。

当のラザルドさんは俺の言葉が気に入ったのか、ニヤリと笑った。

「弓が可哀想か、言うじゃねえか！　気に入ったぜ？　嬢ちゃんの護衛は決まったのか

よ。」

やっぱり自分の得物を軽く扱う奴は嫌だよな。俺もいっぱいしにコントローラーには拘る方だ。ちなみに一番ゲームが上手い木村は純正コントローラーだったよ、二万のコントローラーを買った俺の立つ瀬がないね！

どうやら俺の事を気に入ってくれたらしいラザルドさんだが、俺の護衛はもう決まってる。予算的に二人も雇えないため、ザツカさんは慌てた。

「い、いやあ、それはもう」

「ああ、姫さまの護衛は俺で決まりだ」

そこに、いつの間にか現れた田中が割り込んだ。

「ほう?」

田中をギリリと見上げるラザルドさんも170cmは超えているだろう。村の農民と比べると断然背は高い。それでも田中はさらに頭一つ分近く背が高いのだ。

「妖獣殺しか、噂通りの偉丈夫夫の様だが、腕の方はどうなんだ?」

「間違いねえよ、妖獣殺しなんて言われちゃ居るが、本当は人間相手の方が得意な位だ、帝国の奴らが襲つて来ても何ともねえよ」

「言つてくれるな、だがたった一人でするつもりだ? 相手は何人で来るかも解らないんだろ?」

「何人で来ようと、お姫さん一人逃がすぐらいは何とでもなるぜ」

「言うじやねえか」

「言うだけの腕が有るからな」

そう言つてお互いニヤリと笑い合う。

正に男と男の会話である。なんとも羨ましい。

女の子としちやあ、こんな会話に憧れるのは違うのかもしれないが、何を隠そう前世の俺は冒険者ごっこを一人で敢行してた痛い経歴の持ち主だ。

「嬢ちゃんそんな不安そうな面するなよ、俺達の間じゃこんぐらい普通さ」

「ああ、もしこのおっさんが突つかかつて来る様なら俺がぶつた斬つてやるからよ」

「俺が斬れるかよ？」

「斬れるさ」

今度はそう言つて再び睨み合う、ぐぬぬ、見せつけてくれる。

どうやら羨ましさに眉を蹙^{ひそめ}め、唇を噛み締める俺の表情が『荒^ひつばい会話に慣れない少女が、その剣呑な雰囲気^{ひそめ}に戸惑う不安げな顔』に見えたらしい。

俺は既に悔しいを通り越し、悲しい感じになってきた。

「ちよつと待つて下さい！ 姫様が怯えていますから！」

ザツカさんが慌てて二人を止める。俯いて拳を握り締める俺の姿が、ザツカさんに誤解された格好だ。

「わーったよ、邪魔者は去るとしますか。オイ妖獣殺し、嬢ちゃんの事しつかり護れよ」
「言われるまでもねえ」

ポリポリと頭を掻きながら気だるげに去って行く、その動作まで男らしいラザルドさんと、それにやり返す田中の一言。

俺が姫してる間に、冒険者としての踏んで来た場数と歴史を感じる。

……あーあ、たまんねえなオイ。

そうこうしている内に村を出る時間だ、今日は午前中は弓を探し、昼食を取ったら村を出る予定で、昼食は既に役場に来る前に頂いている。

スープには待望の干し肉の欠けらがちよつとだけ入っていたが、弓が見つかったらどうしようと不安で不安で、味なんてさっぱり解らなかつた。

役場を出るとニコニコ顔の村長が待っていた。「村を出るまで、お供しますよ」と言う事で田中と三人で村を歩く。

門に近づくとも見送りの村人が何人も集まっていた。

「姫様達者でな」

「帝国の奴らに負けんなよー！」

「ビジャの姫様の噂、期待してるからな！」

みんなの暖かい声援に涙が出そうになる。特に最後の言葉には、森ザに棲バむ者と言う鬼

の様な存在じゃ無く、森に住む者と云う種族だと言う啓蒙活動が実を結んだという手応えを感じる。

俺がそんな風に感無量の面持ちで居ると一人の村人が進み出て来た、サンドラのおいちゃんである。

「ユマ姫様あ」

「サンドラさん、お世話になりました」

「なのですが、お節介かも知れませんが、もう少しお世話させちゃ下さいませんか？」

「どういう事です？」

何だろう？ サプライズプレゼントだろうか？

「俺あ、まだその男を信用しきれねえ、姫様と二人つきり何か間違いがあつちや事だ、俺も隣村までいいんけ、付いて行きたいですよ」

サンドラのおいちゃんは興奮すると訛りが強く出るのでもう聞き取り辛い。

「えつと、まさか付いて来るのですか？」

「マズいつけ？」

「いえ……そんな、ご迷惑じゃ」

聞けば畑仕事は今集まっている俺の応援団がしばらく変わってくれりとかで、隣町までは同行出来るらしい。

だから心配なのは畑やテイラーさんの生活じゃない、おいちゃんの命だ。

「危険……ですよ？」

「それを言うなら姫様の二人旅のが危険だあ」

「それは……そうですが」

俺の『偶然』は真つ先にこのサンドラのおいちゃんを殺しそうな気がしてならない。その時テイラーさんに申し訳出来ないだろう。

俺は人間を皆殺しにしたいぐらいに思っていたが、俺に優しくしてくれる人を優先して殺したい訳じゃ無いのだ。

「良いからよ、そろそろ出ようぜ」

田中は容赦なく急かしてくる。

「んだ、そんだが大きな荷物持ってバテなきや良いがな」

そう田中は俺がザルギルゴール大牙猪に潰されたピラーク馬車から回収した荷物を丸々担いでくれている。

おかげで今の俺は手ぶらで有るが、ちよつと大きな村で荷馬ぐらいは仕入れたい物だ。

この世界にも馬は居る、正確には馬にしか見えない生物だろうが、違いと言えばちよつと耳が長い程度だから馬で良いだろう。

荷馬は乗用馬より安いが其れでも値は張る。ただ買った後スフィールで売れば良いのだからそれ程の負担は無いだろう。

ただ、当の田中があんまり必要としていない様で。

「この程度でバテる訳ねえだろ？ おめえとは鍛え方が違えよ」

「その減らず口が、何時まで続くつべな」

と、おいちゃんとやり合っている。

「どうかお元気でー」

厄介者が同時に居なくなつたと、清々した顔で送り出す村長の髭を、今度こそ思い切り引つ張りたい衝動に駆られながら、俺はソノアール村を旅立つた。

ハーフエルフの襲撃

——ザスッ！

肉が裂ける音がした。

「グアアアア！」

その悲鳴でサンドラさんが矢で射貫かれたと解る前に、俺は田中に引き寄せられていた。

「待ち伏せされてたか？」

田中のマントに包まれた俺に、そんな呟きが聞こえてきた。

「帝国兵ですか？」

突然の襲撃にも関わらず、発した声に緊張や震えが含まれ無かったのは、自分でも意外だった。

田中の腕の中、マントで遮られ視界はゼロ。それでも不安は無かった。

間近で触れ合う田中の体はガツシリとして鉄の様に固い。それが安心感に繋がっているのは疑い様も無く、その事実が恐怖の代わりに嫉妬とも羞恥とも付かない複雑な感情を発露させた。

「違ふみたいだな」

マントの隙間から見上げた田中の顔は、探る様な怪訝な物で、緊張や絶望とは無縁に見えた。大軍に囲まれたとかでは無いと思つて良さそうだ。

「オイ！ どう言うつもりだお前ら！」

田中が街道脇の林へと叫んだ、そう、大森林を抜けたつて木が一本も無くなるつて訳じゃない。街道沿いには林が有り、そこから矢を射かけられたのだ。

完全に待ち伏せされた形だろう。

「無能どもよ！ 我らが姫を放し、投降せよ！」

線の細い声を精一杯張り上げた。そんな印象の罵声は震えていて、明らかにこう言う荒事に慣れていない者を思わせた。

「無能とはご挨拶だな」

「森に住む者があなた方を卑下する時に使う蔑称です、人が我々を森に棲む者と呼ぶのと同じような物と思つて下さい」

「それにしても、無能たあ品が良い物言いとでは言えねーな」

「全くです」

努めて冷静に答えたが、まさか無能が一番穏当な言い方とは言いづらい。這いつくばる者なんて、もはや意味が解らないって思われてしまうだろう。

「で？ どうするよ」

「どうやら思い違いが有るようです、おおかた私があなた方に攫われた。そんな風
思っているでしょう」

「おいおい、ホントに一人で黙って来たのかよ、せめて話は通して欲しかったモンだ
がな」

「その筈だったのですが、残念ながら馬車での移動中に魔獣に襲われてしまいました
……」

「オイ！ 聞いてねーぞ！」

「ごちゃごちゃ言つてないで姫を放せ！」

エルフの男は怒声を張ると同時に矢を放った。

——ザスッ

景気が良い音と共に、田中の足元に深々と突き刺さるが、外した訳では無いだろう。

これは警告だ。

「オイ、斬つて良いのか？」

斬つて良いのかつて？ やれるのか？ 何人居るのかも解らないじゃないか！

いや、やれるとしても困る。俺が人間に攫われたなんて話になったら、人間との協力
なんて夢のまた夢、むしろ却つて遠ざかってしまう。

「分かりました、私が話を付けましょう」

「そうか……頼りにしてるぜ」

そう言うと田中はマント越しに俺の頭をクシャッと撫でた。

……ちよつと嬉しいのが悔しい。

俺が包まれてるマントは田中の匂いがして臭い、でもそれが余り不快でない所か安心する匂いだと思ってしまうのは何たる事か。

俺の精神は相当に乙女になってると思つて良さそうだ。

「弓を下げなさい！ 私は彼らに捕まってる訳ではありませんん！」

田中のマントから抜け出し、俺は襲撃者の前に姿を晒した。

林の隙間から弓を構えるのは六人、いずれもエルフだ。

……いや、耳がエルフ程長くない、俺と同じぐらいで……ハーフエルフか？

「姫様！」

「本物か？」

「ああ、話に聞いていた特徴とも一致する」

お互いに顔を窺う六人だが、その表情からして俺の顔を知らない様だ。

ハーフエルフには大森林中央部の魔力は辛い。だから俺の顔も知らないはず。精々写し絵を見た事が有るぐらいだろうか？

「姫様、そいつから離れてこつちに来てください！」

「無礼な！ 話が有ると言うのならそちらから歩み寄るのが道理であろう！」

威厳たつぷりに声を上げる。すると困った様子で、再び互いに目を見合わせる。いやもう本当に困ったのはこつちだと言いたい。

エルフの男たちは警戒を解かずに弓を構えながらも、ゆつくりと近づいて来る。当座命の危機は無いと思つて良さそうだ。

そもそもサンドラのおいちちゃんは無事なのか？ 死んで無いだろうか？ 死んでいたら……テイラーさん泣くだらうなあ……。

サンドラのおいちちゃんに近づくと、おいちちゃんは右肩に矢を受け蹲っていた、しかし命に別状は無さそうで、俺はホツと息をつく。

「うぐつ、ウウウ」

「ゆつくりと息を吐くか、何か噛んでいて下さい『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給え』」

呪文を唱え力任せに矢を引きぬ……いや俺の力じやいたずらに痛めつけるだけになりかねない、ここは田中に抜いて貰おう。

目で田中に訴えかけると、田中はむんずと矢羽を掴むと一気に引き抜いた。

「グウウー」

サンドラさんは呻くがそれは仕方が無い、しかしこれでは魔法の効きは悪いのだ。サンドラさんの背中に俺は体を密着させた。

スウ、ハー スウーハー スウーハー

俺はゆっくりと魔法を発動させながら、おいちゃんの耳元で、おいちゃんの呼吸に合わせて浅い息継ぎを繰り返す。

その息継ぎを少しずつゆっくりとしたものに変えて行くと、おいちゃんの呼吸も釣られてゆっくりとしたものに変わって来る。

十分に落ち着いた所を見計らい、一気に患部に魔力を流す。

「おおっ！」

「回復魔法！」

「魔道具無しでこの回復、噂通りだ！ 間違いない！ ユマ姫だ！」

一気に塞がったおいちゃんの傷を見て、色めき立つエルフ達。

確かに回復魔法、特に他人の傷を治す他者回復は高度な魔法だ。ハーフエルフの魔力は80無いのが普通と聞くしハードルが高い魔法だろう。

「ハーフエルフにして、並のエルフを上回る魔力、噂は本当じゃったか」

唸る様に呟くのは六人の中で一番年長のエルフのお爺さん。

そう、俺の魔力値はハーフエルフとしては図抜けて居る、襲撃を受ける前、成人の儀

の時既に2000超えて、それが今や4000超え。

いや流石に人間の領域まで来て、薄い魔力のお陰で300後半まで下がっているが、それでも圧倒的な魔力値だろう。

いや、むしろ魔力の無い場所までここまでの魔力を持つ人間が他に居るのか？ この領域では世界有数のレベルに達しているのでは無いだろうか？

その原因、思い当たるのは二つ。まずは俺が参照権で魂の記憶に触れたパルメスだ。

思えば湖で赤棘毒蛙マネギアスタルを見て、気絶して王都に運び込まれた後から、俺の魔力値はガンガン伸びて行った。

俺が薬草取りの少年、シルフの記憶に触れた際、森の歩き方を自然にマスターした様に、将来の大魔法使いとして囑望されながら、僅か三歳でこの世を去ったパルメスの記憶も魔力値に影響を与えたに違いない。

魔力に大切だと言われる呼吸が変わった？ はたまた魂の記憶に触れると体質までも影響を受けるのか？ それとも神が言っていた因果律の回収か？

細かい事は解らないし解りようが無い。ただ俺がパルメスの記憶をハッキリと意識した山小屋での出来事から、俺の魔力値は更に上がったのは間違いなかった。

そしてもう一つは……、俺は肩に流れる自分の毛髪を、回復魔法を使っていない空いた左手で弄びながら考える。

間違いなく俺の変異の影響だ。変異によつて俺の髪色と片目はピンクに染まった。赤はともかくピンクなんてアニメじみた色、前世も今世も見た事が無い。

俺の体は一体どうなっているんだろうかと考えないでは無いが、考えたつてどうにもならない事は考えないに限る。

ともかく、魔法によつて俺の身分と、捕まっていた訳では無いと理解して貰えただろう、ここは押し切るしかあるまい。

「控えよ！ 我をなんと心得る！」

「ハハッ！ ユマ姫であらせられます！」

良かった、ちゃんと控えてくれた。しやがみ込んだエルフ達に言葉を投げかける。

「何のつもりで我らに矢を射かけたのか、返答次第では只では済まさない！」

「ハ、ハイ！ 姫が人間の村に居ると聞き、姫の乗った馬車ザルギルコールが大牙猪に襲われたとも聞いていたので、彷徨っていた所を攫われたものかと思ひ助けに参ったのですが……」

「誤解だ、私は自らの意思で人間の村へ足を運んだのだ、目指すはビルダール王国の王都である」

馬車の生き残りが村に帰る事も出来ずに、ハーフエルフの村に辿り着いて居たのか。だつたら俺が王都を目指してゐるつて事まで言つてくれれば良いのに。

いや、そんな事聞いたつて、まさか姫が一人で王都を目指してるとは思わないか。あ

んな目に合って、まだ一緒に王都まで来る気だろうか？

「あなた方は王都までの旅に同行してくれるのですか？」

「い、いえ、まずは村長や村のみんなに相談したい、申し訳ありませんが村まで同行して頂けませんか？」

「距離は？ 我々には時間が無いのです」

「ハーフェルフの村落でしたら、大森林の端ですから、ここからなら三日と掛かりませ
ん」

ふむ、三日か、良く考えたらエルフに話を通って無いのはマズい。人間に頭がおかしい偽物と思われるのはともかく、エルフにそう思われちゃマズイし、誤解を解く機会も少ないだろう。

なんせ人間の街にエルフは居ない、いてもハーフェルフが少数って所か、なにしろ魔力値で生活圏が分かれる世界だからな。

ジツと田中を見ると、パタパタと手を振って言う。

「俺あ構わねえぜ？ 〃〃〃まで来たら付き合ってやるよ。エルフの村つてのも見てみた
いからな」

ならば後はサンドラさんだ、傷は治っただろうが削れた健康値が心配だ、ソノアール村まで戻って事情を説明して貰おう。

「サンドラさん」

「うう、済まねえ姫さま」

「落ちて聞いて聞いてください、私とタナカはこれから彼らの村に向かいます」

「ううオラも」

「いえ、傷は治っても体力は落ちています、サンドラさんは村まで戻ってください」

「んでも!」

「村に事情を伝えてください、人間とビジャの戦闘になつてしまつては困ります」

「……分かつただ」

よろよろと立ち上がるおいちゃんに気は無いが、ここは村まで僅か十数キロの場所だ、俺と一緒に居て『偶然』に曝されるより、よほど安全な行程となるだろう。

「では向かいましょう! 先導なさい!」

「ハッ!」

六人のエルフが声を揃えるが、当然の様について来る田中に怪訝な視線が向けられた。

「ユマ様コイツは一体なんですか?」

「彼は私の護衛です、人間の都に行くのですから人間の護衛は必要でしょう?」

「いや……しかし」

胡散臭い物を見る目でジロジロと田中を見定めようとするが、当の田中は気にする風も無い。堂々としたもんだ。

ハーフェルフの六人は再び互いに顔を窺い、取り敢えず保留としたのか村へと歩き出した。

計八人となった奇妙な一行と、俺は再び大森林へと足を踏み入れるのであった。

ハーフエルフの村

ハーフエルフ達の村は、確かに大森林の端に有った。

人間の住むソノアール村とは二日の距離、この距離で二つの村に何の交流も無いと言
うのは不自然。

そうハーフエルフ達はソノアール村まで炭や山菜、山鳥を度々売りに行き、代わりに
小麦などを買っていらしいのだ。

ハーフエルフは耳さえ隠せば人間と見分けは付かない、耳だつてちよつと長いぐらい
だから誤魔化し様は幾らでも有る。

ソノアール村での俺の様子は、人になりすましたハーフエルフの商人によつて筒抜け
だつた訳だ。

その際にどんな伝言ゲームがあつたかは知らないが、俺が人間に攫われたつて話になつて、待ち伏せした上で襲つて来るんだから思い込みつて奴は怖いと言わざるを得ない。

何にしてもハーフエルフ達は以前から、人間ともエルフとも共存して生きていた訳だ。

「エルフの村つて割にはえらい普通だな」

だから田中が村へガツカリしてしまうのも仕方が無い事かもしれない。

エルフの王都エンディアンは正にエルフの都と言った風情だった。

品種改良された木が青い光を湛えて生きた街灯と化し、複雑な幾何学模様を描く石の歩道や、寄木細工の様に組みあがった建物を照らし出す。そんな幻想的な光景が広がっていた。

王都以外でも、パラセル村では、魔法で作られた土の柱や壁、それらと調和して作られた木造の家々がエルフの高い文明を感じさせ、人間にとって未知の好奇心を刺激すること受け合いだ。

翻つてこの村の様子はどうか？

「普通の山村にしか見えねえな」

田中のこの感想にしたつて、大分気を使った物だ。ハッキリ言つて山賊の隠れ家と言つた方が適當だろう。

ログハウスの様な家々と、木で出来た簡素な柵。ファンタジー要素はどこにも無い。

「言つておきますが、森に住む者の王都エンディアンはこんなものではありませんよ」

「……へえ？ 期待しとくわ」

期待つて、コイツは何時か王都にまで来るつもり何だろうか？ 魔力に曝さらされフラフ

ラな田中を見てみたい欲求は有るが、そんな未来は来ないであろう。

ともあれ、案内された村の様子に魔法の痕跡が殆ど無いのは頂けない。ハーフエルフと言うのは想像以上に魔力が少ないと見た方が良さそうだ。

と、その時、俺と田中の会話を聞いてハーフエルフの青年が質問してきた。

「あの？ 森に住む者と言うのは？」

ゲ、マズイな。これ説明が大分面倒臭いぞ？

「それについては後ほど説明します！」

こういう時は先送りだ！ 怪訝そうな顔をする田中と、六人のハーフエルフを尻目に、俺は案内された村長宅にズカズカと乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

案内された村長宅は、他の家より多少大きい程度程度の何の変哲も無いログハウスで、木窓やランプは有るものの、王宮暮らしが長い俺には薄暗い。

『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』

なので、即魔法である。それだけでオオーってなるのがくすぐったい、あとちよつと不安にもなる。

魔法で照らされた村長宅には、俺達八人の他にも、村の長老やら纏め役やら、村の主

だった人物でギユウギユウ詰めだった。

皆が俺の話を聞きに集まったそうだが、ここ数日、まるで吟遊詩人になったかのように同じ話を繰り返し返している、しかし味方を募るつもりだったら、これからも何度だって語るであろう話。大都市で語る前の練習だと思えば是非もない。

「では、王都エンディアンで起こった事、そしてどうして私がビルダールと手を組んでまでセルギス帝国の打倒を目指すのか、説明させて頂きます」

——淡々と事実だけを語ったつもりだが、長い話となった。途中で魔法の明かりをつけ直したにも関わらず、二回目の光も消えてしまった。途中で魔法の明かりをつ

け直したにも関わらず、二回目の光も消えてしまった。

「うううう、グスツ」

暗いのは外だけじゃない、部屋の中はすすり泣く声で満たされていた。

どいつもこいつも泣いている、俺だけだ。涙どころか微笑みすらも、浮かべているのは。

「なあ、なんでだよ？」

田中まで泣きながら俺に迫る、……いや？ お前にはとづくに事情を話していただろ？

あ！ コイツには簡単にしか話していなかっただか？ どうやって父様が、兄様が、そしてセレナが死んだかなんて、詳しく説明する気も無かったからな。

「なんで、なんでお前は！ そんなに悲しそうに笑ってるんだよ！」

田中は泣きながらそう言った。

そうか、俺は笑っているけど、でも悲しく見えるのか。

「せめて、せめて泣いてくれよ、そんな風に、俺の前で……笑わないでくれよ」

田中は泣きながら俺の肩を掴んだ、いや……そんな事言われても。

俺の顔には笑顔だけが張り付いて、剥がれてくれないんだよ。

俺には困った様に笑う事しか出来ないんだ。

鼻水と涙で汚れた田中の顔が、何故だか羨ましい。

俺は……なんで、笑っているんだろうか。

その時、俺の左目から熱い物がこぼれ落ちた。

「……あ」

……涙だった。

後から後から溢れ出し、凍り付いた笑顔が解ける様な気がした。

「やっと、泣いてくれた」

そう言つて田中は俺を抱きしめた。

俺は泣いた、どの位泣いたのかも、何時寝たのかも覚えていない。恥ずかしくて、その時の事を参照権で確かめる時は来ないだろう。昔の様に、まだ病弱で小さかったあの日の様に。

俺は久しぶり安らかに意識を手放した。

★成人の儀へと

「納得いきません!」

俺は大声で村長に食ってかかる。昨日披露したお涙頂戴の逃亡劇は大成功だったハズ。なんとしてでも帝国を打倒するのだ、と一体感が生まれたと思ったのに、一眠りしたら全く状況が変わってしまっていた。

「私がまだ成人していないとはどういう事です? こうして王家の秘宝さえ下賜されています」

「しかし、お披露目の式は挙げておらん、公的には成人していないのと一緒じゃ!」

「全てを忘れて、我々と暮らしてはくれませんか?」

「姫様には平和に生きて貰いてえ」

エルフ達は口々に言うが一体どうしたと言うのか? 今更に俺を王族だと認められないと言いだしたのだ。

俺はセレナと成人の儀を果たした。だから立派に王族なのだが、お披露目がまだだったのは事実。

成人していな俺が、一人で勝手に王都に行って同盟を持ちかけるなど許されないと、

そう言うのだ。

「だったらコツチにも考えがある。」

「だったら今からこの村で成人の儀をすれば良いのですね？」

「え？ いや、それは」

俺がそう言えば、村人は急に黙った。それだけで成人の儀などただの言い訳だと解る。

なにせ王蜘蛛蛇バウギユリウヅアルなんて現れたのは全くのイレギュラー。普通はビー玉みたいのを取ってくるだけのお使いなので、今の魔力があれば全く問題にならない。

「良いだろう、やらせてみれば良い」

だが、そこにヨボヨボなジジイが現れる。

「長老、何を言っているのです？」

「今、あの洞窟には大岩蟻螂ザルティネフエロが巣くっておる。今年、成人出来た者は居らんありさまじゃ、出来るものならやって欲しいものじやな」

「長老！ それでは本末転倒では無いですか！ 我々は姫に幸せに、安全に過ごして欲しいと言うのに、そのために姫を危険な目に合わせるなど」

なるほどね、大きなお世話。村人も、そして誰よりジジイが俺を舐めている。

大岩蟻螂ザルティネフエロだ？ そんなのちょっと大きいカマキリだ。そんなのが数匹で俺がビビる

とでも?」

ジジイは馬鹿にした様に俺を見やる。

「多少魔力がある程度で、自分が強くなったつもりのはねっ返りにはお灸が必要なんじゃよ、いま口先で言いくるめた所で、自分の力で王都を奪還する等言い出しかねん」

「いや、しかし!」

「村長! 良いのですか?」

「……うーむ」

長老と言われるジジイの言葉は重いのか、洞窟でカマキリを殺せば許されそうで、むしろありがたい。

「しっかし、どうして急にこんな話になったのだろう? ひよつとしてコイツの入れ知恵か? 気が付けば、いつも隣に陣取る巨漢の黒ずくめ。」

「言つとくが俺は護衛だ、危ない所に行くと言うならついて行かざるを得ないんだが?」
ドンと胸を叩きながら存在をアピールする田中がウザい。ただただウザい。

「勿論じゃ、お前さんは姫様が危ない目にあつた時、助けてやって欲しい」
「それじゃあ試練にならないんだろ?」

「そりゃそうじゃよ、お前さんの手を借りた時点で儀式は失敗。それでええじゃろ?」

お主はスフィールへの護衛代をそのまま受け取り、村へはワシらから依頼のキャンセル

と護衛代を満額返す。貧しい村じゃがお主の護衛代程度は捻出できる」

「まあ俺はそれでも良いけどよ、姫様が普通にその成人の儀とやらをやり切ったらどうなる？　俺は余計な仕事が増えるだけなんだが？」

「そうじゃな、護衛代がワシらが払う分と合わせて倍に増えるとするれば、文句は無いじゃろ？」

「長老!？」

田中は魔獣退治で名の売れた冒険者。こんな寒村でポンと払える金額じゃないだろうに、現に村人は寝耳に水と慌て始める。

「それでは姫様の安全どころか、この無能に金を渡すだけでは無いですか」

「安心せい、今あの洞窟には大岩蠅螂ザルディネフエロが少なくとも十は巣くつておる」

「じ、十も!」

「姫様の儀式成功はありえん、あの男、仕事への責任感の本物と見た。姫様の安全も問題ないじやろう」

「いや、しかし」

「上手い事大岩蠅螂ザルディネフエロをあつた男が減らしてくれたらしめたもの、無能なぞいつそ死んでくられても構わんからの」

コソコソと話してくれるが、集音魔法で丸聞こえだ。

どういう理屈か田中も聞こえているようで、鼻を鳴らして村長に食ってかかった。

「オイ、あの爺さんはああ言ってるが、村長もそれで良いんだな？」

「ハア……まあ、良いだろう。護衛代は何とか準備する」

苦しげな顔を見せる村長は俺の実力を正しく把握している様だ。サンドラのおいちゃんに掛けた回復魔法のレベルを聞けば憶測するのは難しくない。

みんなが気が付いて前言撤回する前に、とつと話をまとめてしまおう。

「決まりですね。我々、森に住む者には時間が無いのです、すぐにでも出発します！」

これで終わりとはばかり、パンツと手を打つと何も知らない可哀想な子を見る目をされてしまった。

何も知らないのはどっちかな？ どいつもコイツも微妙な顔しやがって！

「姫様、その森に住む者と言うのはどうも……」

……ん？

え？ ダメ？ 微妙な顔されたのって俺のネーミングセンスが問題だった？ 昨日、

どさくさに紛れてドヤ顔で披露したのだが……

呆然とする俺のそばに、若いエルフが駆けつけ耳打ちする。

「あの……姫様、ビジャと言うのは人間が我々を森に棲む者と言うのにひっかけて、差別

を揶揄する言葉なので……その」

フア？ そうなの？ 日本人が日本人を中世ジャップ土人って言う感じ？

そ、そりやー受け入れられない、かな？ ダメ？

ううう、早速お姫様ならではの非常識な所が出てしまった。幾ら本を読んでも細かいスラングとかのニューアンスは伝わらない。

こうなったら逆ギレだ！ 対案！ 俺は対案を要求する！

「じゃ、じゃあどんな名前が良いと言うのです！ 我々は同盟を持ちかける側なのでよ？ 相手を無能などと言っているのは話が纏まりません！」

「ですが、我々こそが人間ですし……」

「相手も人間です！ そうやって見下していられる状況では無いのです！ 森に棲む者と魔獣と同列に扱われている現状を、変えねばならないのです！」

「いやしかし、意味が違ってしまいますし違和感があります、いつそ新しい名前の方が良いのでは？」

「そこまでですか……」

ハイ、ダメ！ 押し切れませんでしたとき。ぐうー悔しい悔しい。何もかも上手く行かないよー

悔しがる俺を余所に脳天気な男の声が掛かる。

「……エルフってのはどうかな？」

田中だ！ とんでもない事言い始めた！ それファンタジー用語だからね？

「エル……ふ？」

周りのエルフはポカンとしている。そりやそうだろう、意味不明だ。コイツ馬鹿なの？

「俺の生まれ故郷では、森に住む妖精の様に、魔法に優れた種族の伝説があつてな、森に棲む者の話を聞いた時からおつかないってよりも会つてみたいって思いが有つたんだ」

いや、適当言つてくれるねー。死んで欲しい。

「そんな伝説が？」

「聞いたことが有りませんな」

「遙か遠くの国なのでは？ 背も顔立ちもこの辺りの者とは思えませんし」

「失礼ながらどこの出身ですか？」

で、田舎者だから回りのハーフエルフ達も余裕で騙されるって言う……

「遙か遠くの国なので、ご存じ無いと思いますがね。遙か遠くの小さい島国で、日本と言う所ですよ」

遠いにも程があるだろうが！ 突つ込みたい気持ちを抑えつけるため、俺はグツと奥

歯を噛みしめる。口を開くことが出来なくなってしまった。

「島！ 人が住む島が有ったのか」

「それでは我らが知らないのも無理はない」

「遠地であるが故、我らの話が良いように伝わったのかもしれない」

ああああー皆スツカリ信じてるじゃないか！ 頭が痛い。ここはとにかく話を變えなければ、本当にエルフって呼称になってしまう。

「取りあえず、その話は良いでしょう!? 私には成人の儀に向かいます。弓ぐらいは用意してくれるのでしょうか？」

「普通は親が送る物なのじゃがな、まあ好きな物を持つていくがよい」

そうして弓選びが始まった。だが、どれもコレもクソみたいな品質である。つて言うか、なんの補助も細工も無い、複数の部材を使用した波打つ形状の合成コンポジット・ボウ弓ならば、非力な俺でもそれなりの威力が出るのに……

そんな中、俺が引ける弓と言えはひとつしか無かった。

「これで良いでしょう」

俺が子供用のオモチャの弓を掲げると、皆の視線が生暖かいモノに変わった。

弓の善し悪しも解らない素人だと思われた様だった。

皆の視線が訴えかける様に田中を見るモノだから、どうにも危なっかしく思われてい

るらしい。

やっぱりダメとか言われても困る。とつとと出発するが吉。

「ではすぐに生まれよう、タナカもいいですね？」

俺がそう言うのと、案の定クレームの嵐だ。

「今からですか？ 無謀です！ 山道を六キロは歩くんですよ？」

「初めて行くんなら往復で五時間は見た方がええ」

「もう午後です、帰るころには真つ暗になりますよ」

「問題有りません、すぐに帰ります」

だが、ココは強行する。俺には時間が無いからだ。

イキナリ動くからこそ帝国の裏をかける部分がある。俺がスフィールに行くのと、近場の帝国軍だけが知り、上の確認を取らず、早く手を出さなくてはと焦るぐらいのタイミングが丁度良いのだから。

しかし周りからはため息と、嘲笑の様な物まで混じり出す。俺の事を世間知らずのお姫様だと思っているに違いない。

「では行つて参ります」

俺は自信満々。手を大きく振り上げて村を出発する。

お供として田中は付いてくるようだが……コイツも俺の事を侮っているのか不安げ

な目を向けてくる。

なるほどね、付いてくるのは勝手だよ？

だけど付いてこれるかな？

★大岩蠟螂

あーイライラする。何故俺が今更、ただの害虫駆除をしなければならぬのか？

「本来の成人の儀は、聖地と言われる森に住む者の古都、その祭壇へ神珠の欠けらに見立てた、ガラス玉を取りに行く物なのです」

都の子供が行う成人の儀と、ここの子供が行う成人の儀は雲泥の差だ。あれはちよつとした旅行と言える距離、対してココの成人の儀はどうだ？

「それが村の近くの洞窟に行くなんて、大したことでないでしょうに、魔物の巣？ 早く駆除するのが大人の役目でしょう！ 自慢げに語っていましたが恥ずかしいと思わべきです」

「あいつらには戦う力はまるで無さそうに見えるな、ザルディネフエロ大岩蠟螂つてのは強いのか？ 大人でも数人がかりで倒すつて言っていたが」

「大したものではありませんよ、そんな事より『エルフ』と言うのは何です？ 人が住む島など聞いたこともありませんよ？ 適当な事を言ったのでしよう！」

苛立ちが止まらない。なんでエルフつて名前を布教しようとしているのか？ 実はコイツ俺の正体に気が付いているのか？

つと苛立ちながらも、俺は慣れた足取りで荒れた山道を快調に進む。シルフ少年の記憶がフル回転である。ただし、悲しいかな、チンタラ歩いていては俺の体力が保ちそうに無い。

「では、そろそろ行きます、準備は良いですか？」

そろそろ村から離れたし、全力疾走で良いだろう？

「ンだよ？ 準備って」

「走る準備です、覚悟は良いですか？」

最後通告だ！ 良いんだね？ 本気で走っても？ ダメって言っても魔法を使うけどな！

「『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』」

俺はそう言うのと、——跳んだ。いや走っているのだが、バツタの様に跳ねるその一歩は途方も無く長い。人間じゃ追いつけるはずが無い。

「魔法かよ！ クソツ」

慌てる田中の声を背に受けて、俺は気持ちよくて仕方が無かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふう、着きましたか」

やっぱり近いな。早々に村で成人の儀に使っているのだろう洞窟まで辿り着いた。

六キロなんて、魔法を使えば数分の距離である。

田中はまだ遙か後方の山道を歩いているに違いないだろう。そう思った俺の背中に聞き慣れた男の声が掛けられる。

「おいおい、そんなにかっ飛ばされたらイザって時に守り切れねーぞ」

「なっ！ 付いて来れたのですか？」

「なんでよ？ 山道をこの速度って尋常じゃ無いぞ？」

「ああ、何とかな、急に走るからビックリしたぜ」

「い、息も上がっていいいでは無いですか」

「ただけー！ どんだけチートな体力持つてるんだコイツはよー！」

「ガキが走ったぐらいで追いつけない様じゃ護衛失格よ、こちとら仕事が無い時だつてキツチリ走り込んで、そういうトレーニングがいざって時の持久力に繋がっている訳よ」

「それにしたつて……」

俺は思わず田中の体を見る。筋肉がはち切れんばかりで、恐ろしく強そうだ。身長もそうだが日本人離れた体格は、明らかにチート感がする。

ぐぬぬ、でも戦力が多いに越したことは無いな。とつとと洞窟に入つて、お使いを終わらせよう。

「良いでしょう、期待通りの力は有るようですね」

「おい、洞窟には入る前に暗闇に目を慣らしてだな……」

「不要です、『我、望む、我が身に光の輝きを』」

ふふうん、この辺りは流石に魔法のが便利だな。わざわざ松明やカンテラを持ち運ぶ必要が無い。

ん？ 目を慣らせて言ったか？ アイツはその程度で洞窟に入れるって事？

どんだけチートなんだよ、クソ。苛立ちながら、俺は洞窟に足を踏み入れた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——シュツ、ズバアアン！

洞窟に、魔法の矢の小気味良い炸裂音が木霊する。

「オイオイオイ」

田中の呆れ声が気持ちいい！

魔法で加速した矢を放ち、俺が^{ザルディネフエロ}大岩蠅螂の頭をすつ飛ばすと、田中は心底驚いた様子だった。

無理も無い。^{ザルディネフエロ}大岩蠅螂はカマキリの魔獣だが、そのサイズは人間と同じ。無力な農民では苦戦するのも納得の魔獣なのだから。

「この威力なら人間の首なんざまとめて吹っ飛ばせるな」

しげしげと魔獣の死体を検分した田中の言葉がコレ。実際にライフル弾ぐらいの威力があるからね。田中の剣がどれほどのチートか知らないが、魔法の方が強いに決まっている。俺はドヤ顔で田中を挑発する。

「何なら試してみますか？」

魔法で体を光らせながらのセリフである。流石の田中もビビったのか、腰が引けている。

「お手柔らかにお願いしたいね、何にしてもこれじゃどつちが護衛かわからねーな」

「魔法も無限に使える訳ではありませんし、なによりソノアール村には弓が有りませんでしたからね」

引ける弓があれば、本来なら人間の護衛など必要無いぐらい。いや、敵には魔力を奪う霧があるのだから人間の護衛は必須なんだけどさ。

「へえ、そんだけの魔法が使ってもやっぱ弓は必要か」

「……それに姫を名乗って護衛も無しでは、説得力が有りませんから」

戦力的に十分でも、ハツタリが効かないのは困る。

「それじゃあ人間よりエルフの護衛の方が説得力があるんじゃないやねえか？ 少なくともこ

こで一人は連れて行くべきだな」

「それはそうなのですが、我々にとつて森の外は魔力が足りないのです、ハーフだったら

問題無いのかも知れませんが」

「オイオイ姫様は大丈夫なのかよ？」

「私もハーフですし、問題無いでしょう、健康値も高いですから」

「健康値？」

あ、外の人間は健康値も知らないのか？ 俺は例の頭の王冠みたいな秘宝を差し出した。

「測りますか？ どうぞ」

「??」

意味が解らないと言う顔の田中に使い方を説明する。

「ここを持って下さい、数字が出る筈ですが」

「へえどれどれ？」

面白そうに覗き込む田中。俺もコイツの数値には興味があるぞ？

健康値：90

魔力値：90

は？

「え？ 何ですか？ この数字は」

「高いのか？」

「……最早健康値は異常と言える値です」

「……へえ？」

この健康値は人間じゃないだろ！ 魔獣かな？

田中はニヤニヤしてるけど、健康値なんて低いと死にそうな目に合うくせに、高くてもそんなに良いこと無いぞ？

「ニヤニヤしていますね、健康値など病気や怪我の治りが良い程度の数字です、一定以上有ってもそれほど意味は有りませんよ？ 繊細さと無縁な健康馬鹿と言う事です」

「丈夫さつてのは冒険者の資質で一番大事な要素だからな、得意にもなるさ」

「そんな物ですか……」

くっそーそうだな、旅をするには健康値が大いに越したことは無い。

魔力値だつて人間の平均を考えれば健康値よりもある意味凶抜けている。村で測つた人間の平均は20未満が殆どだった。

悔しそうな俺を見て、フォローのつもりなのか田中が魔力値を聞いてくる。

「でもよ、エルフ、いや森に住む者の魔力値つてのはスゲエだろうな？」

「そうですね、ですが実用に足る魔法を使用できる、200の上台を超える者はそう多くはありません、200を超えて初めて戦士への試験に挑める訳です」

「ちなみに姫様は？」

「400前後と言った所でしようか」

「ヒュー」

褒められて気持ちよくなってしまったのも悔しい。わざとらしい口笛に一気に現実に引き戻された。

と、そこに大岩蠍ザルディネフエロが物陰から姿を現す。

「ああ、また居ました『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

——ズパシユツ!!

ゴロンと大岩蠍ザルディネフエロの首が落ちる。

「そんな短い詠唱で凄い威力だな、一体何発撃てる?」

「矢尻が壊れてしまいますからね、矢があと十本しかありません」

「つまり、十は撃てる?」

「それどころか、矢さえあれば二十でも三十でも」

「マジかよスゲエじゃねえか」

ふふん! 得意になって矢を撃つ素振りをしてみれば……右手に刺すような痛み。

「……いえ、やはり十発ぐらいですね」

「は?」

「手が痛いです」

腫れてしまった。どうしてしてくれる！ 俺は手の平を見せつける。

「手袋つけてるじゃねーか」

「弓懸ゆがけですね、付けていても痛い物は痛いです、腕もプルプルしてますし」

「回復魔法は？」

「アレはアレで集中力も魔力値も、健康値まで削られるのです、出先ではあまり使いたくはありません」

「へえ？ サンドラとかいうおっさんには使っていたが？」

「知らないのかもしれませんが、ちよつとした矢傷でも感染症などを引き起こす事もありますし、腕に違和感が残る事も少なくありませんから」

「お優しいこった」

「私もあの方に優しくされましたから」

しょうが無いじゃん。俺は世界の全てを恨む勢いだけど、優しくされた人には多少なりとも恩返しはするよ？

と、いよいよ洞窟の最奥。祭壇みたいな所に辿り付いたんだけど……

「オイオイ何匹居るんだよ」

田中が呆れるのも解る。幾ら何でも数が多すぎ！

祭壇の間は広くくり抜かれた空間で、前世の教室二部屋分ぐらいのサイズが有った。

そこに犬ぐらゐの大きさの大岩ザルティネフエロ蟻螂の幼虫が大量にひしめいている。

「大体ですが二十は居ますか」

「矢は十本と言つたな、どうする?」

どうするもこうするも無い。こんな数はやりようが無いじゃんよ。卵も一杯あるから放つておくと大変な事になるのは目に見えてるが、魔獣の駆除は村人にお任せだ。俺は儀式を終わらせれば良い。

「飛びます!」

「は?」

「飛んであのガラス玉を掴んで脱出、後は走つて村まで逃げます」

幼虫は無視、成虫も二匹居るが卵を守っているのであって、儀式のガラス玉をくすねて脱出するぐらゐはワケ無い。

俺がそう言うのと、田中はハッキリと顔を顰めた。

「いや、あの群れはどうする? 村までたつた数キロの距離だぞ」

「成人の儀はガラス玉を持って帰れば成功です、魔獣駆除ではありません」

「そりやそうだが、卵まであるじゃねえか」

「関係ありません」

アイツらには邪魔される一方で、優しくされた訳でも無いからね。村からこれだけ近

い場所に魔獣が巣くっていると知りながら放置したアイツらが悪いだろうが！

「いいですね？ タナカはそこで見ていて下さい。私が戻ったら走って洞窟を抜けます
『我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ』」

まずは光の魔法を天井に放ち部屋を照らす。光の魔法は込めた魔力が尽きるまで勝手に光り続けるので便利なのだ。

カマキリ達が強烈な明かりに動揺した瞬間に、お次は風の魔法を詠唱する。

『我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を』

コレはセレナが使った空を飛ぶ魔法。だが、俺の魔力じゃ空どころか、部屋の中を横切るのに精一杯。

「マジで飛ぶのかよ」

それでも、ただの人間である田中には驚きかな？ 人間は魔法なんて見たことも無いのが普通だろうから、こんな高度な魔法は聞いたことも無いだろう。

ウジャウジャと床に蔓延る幼虫を無視して、あつと言う間に祭壇の中、鎮座する箱に手を掛けた。

なかなか悪くない展開。しかしココで俺の『偶然』が牙を剥いたのだ。箱に触れた途端、俺は強烈な頭痛に見舞われ、瞬間、意識を失った。

薄幸の美少女の残滓

——記憶が、

——混線する。

私が生まれたのは貧しい村だった。

その上、私は病弱で、誰かの支えが無ければ三日と生きて行けない様な有様だった。それでも生きて居たいと思った。一日でも長く、一秒でも長く。

そのためにやれる事は何でもやろうと思った。まず人に媚びる事が上手くなった、私は一人では生きられない、人に嫌われては生きて行けないのだ。

それでも、上手くないかない事もある。そんな時、私は泣いた。子供だった私が、病弱だった私が、泣いてお願いしたら、聞いてくれる人は多かった。

私は泣き真似が上手くなった。

それでも、それでも上手くない事だつてある。

そんな時、私は女性らしさを武器にした。ヨロヨロとしなだれかかり、さり気無く相手の手や背中に触れた、上目遣いで見つめたり顔を赤らめたり。

私は演技が上手くなった。

そこまでやつても上手くない事もある。

そんな時、私は嘘をついた。

「昨日から何も食べていないんです」「この所、咳が止まらなくて」「あなたに会う為に、今まで生きて来たのだと思います」何度言ったか解らない嘘を重ねた。

そして……私は嘘をつき過ぎたのかも知れない。

だから罰が当たったのだとすれば、世界は余りに意地悪だろう。大人しく死んでおけると言っている様な物だ。

いや実際そうだったのかもしれない、初めから生きられる道など残されていないかったのだと今なら解る。でも、私は生きてかかった。

最早好きな様に涙が流せし、輝く様な笑顔も、寂しげな微笑みも、顔色だって自由に変えられた。

だから私に味方してくれる人は増えて行った。私は色々な人に心配されて、それを頼りに生きて行けるのだと思っていた。

それでも、結局は上手くないかなかった。

初めに死んだのは父だ。父は私の為に無理をして森に狩りに出かけた。大物を仕留めて引き摺る様に帰る途中で、他の獣に襲われて死んだらしい。

次に死んだのは叔父だ。

父亡き後、私を引き取った叔父は、病弱だった私の為に、手を尽くして医者を探し、薬を仕入れて来た。

それがどの程度効果が有ったのか、正直殆ど実感はない。でも大変高価な薬や、有名な先生だったらしく。あつと言う間にお金が無くなった。

お金が無いのに薬は出てくるのを不思議に思っていたが、次に無くなったのは叔父だった。いつの間にもやら居なくなり、村の近くの森で首を吊っているのが見つかった。

村長の息子や、有名な医者さん、流れの旅人や、王都から来た戦士まで。

私を守ってくれると言った人は、櫛の歯が欠ける様にポツリポツリと居なくなっていく。

この前、最後の一人が死んだ。

飢饉だと言うのに、少ない食料を私に渡して無理して働いたのが原因だと。

この頃に至って、私は村の疫病神としての地位を不動の物にしていた。

今年の秋も実りが少なく、頼る者も無い私はこの冬を越えられないだろう。

私は成人をしていない、病弱を理由に先延ばしにしていた成人の儀。でも祠に辿り着く事ぐらいは出来るだろう。

でも帰ることは無い、私はそこで死ぬのだ。子供のまま、優しくない世界を恨んで。



一人の少女の記憶がなだれ込んで来る。頭が痛い！ この感覚も三度目となるが慣れそうにない。

頭を抱え突つ伏した俺の背筋にゾクリと悪寒が走る。

その正体について考える前に、地を蹴つて横に飛ぶ。背中の弓を庇いながらの無様な横転の最中、自分の髪が一房刈り取られたのが分かった。

最早その正体は明らか、大岩蠅螂^{ザルディネフエロ}だ。奴の持つ両手の大鎌が直前まで自分が居た場所を刈り取つたに違いない。

吹き出る汗、爆ぜる脈拍、荒れる呼吸。

それらを制御しながら膝立ちで体勢を立て直すと、振り向きながら背中の弓を引き抜き構える。我ながら流れるような動き。

しかし、既に大岩蠅螂^{ザルディネフエロ}は目の前でその大鎌を振り上げていた。

ただ避けたい一心で、ゴロンと横に転がる。今居た場所に鎌がザクリと突き刺さる。その時、すでに呪文は唱え終わっていた。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

魔法の矢！ 当たれ！！

——シユ、バギヤギヤツ！

金属がひしやげる様な音が響いた。

魔法の矢は軌道を制御可能とは言え、無理な体勢から苦し紛れに放った矢が当たつてくれたのは殆ど偶然。残りは余りに距離が近かつたからだ。

放たれた矢はけたたましい音を響かせながら大岩蠅螂ザルディネフエロの細長い腹を、真つ直ぐに貫いた。

——グキユウウウウ

魔獣の甲高い悲鳴にも既に力はない。

「オイ！ 無事か!? 姫様よお！」

俺が不格好に立ち上がつて、最期の足掻きとのたうつ大岩蠅螂ザルディネフエロから逃げ出すと、田中が叫びながら部屋に飛び込んでくるのが見えた。

田中は早速、犬位のサイズが有る大岩蠅螂ザルディネフエロの幼体に囲まれてしまう。

クソツッ！ 野犬だつてそんな数に囲まれば危ないぞ!?

しかし、こつちにだつて余裕はない、残った一匹の成虫がこちらに向かつて走り寄る。こちらの得物は弓、相手の鎌の間合いに合わせて、命懸けで戦うのなんざ一生に一度で十分だ。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

乱れる呼吸を抑えつけ、何とか呪文を唱える。魔法の力で一気に離脱だ。

「わわっ！」

しかし極度の緊張を強いられた体は魔法の制御に失敗した。華麗にステップを踏むハズの一步が、込め過ぎた魔力で馬鹿みたいに吹っ飛んでいく。

魔力値ばかりか健康値まで大きく削る痛恨のミス。だがそれ以上に危険なのは、ここが狭い洞窟の中と言う事。

俺は空中で反り返る、反転した体は奥壁へと『着地した』。アニメの様なアクロバティックアクションだが、狙ったものでは断じてない。

それでも戸惑う事無く追ってくる大岩蠅螂ザルディネフエロが視界に映ると、俺は迷わず壁を歩いた。一步、二歩、三歩で端に、そのまま思い切り踏み切って今度は側壁へ。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

踏み切ると同時に移動の魔法の制御は手放し、次の魔法を唱える、二つの魔法を同時に制御するのは殆ど不可能。今度は肉体の力だけで側壁に着地し、壁を蹴る。

虚空に踊り出た俺は、素早く矢を放つ。

——シュツ、ズツパアアン

前足を高く持ち上げ、迎え撃つ格好だった大岩蠅螂ザルディネフエロを、頭から胴体まで垂直に貫いた。

——グキヤアアアア

派手な断末魔を上げ魔獣が倒れるのは、俺が久しぶりに地面に着地するのとはほぼ同時だった。

これで当座の危機は脱したか？ 俺は緊張の糸が切れ、必死で呼吸を整える。

いや？ そう言えば田中は大丈夫か？ 成虫より小型とは言えあのカマキリ、犬並みのサイズで二十匹は居たはずだ。

魔獣の凶暴さを考えれば、二十匹の猟犬に襲われるようなもの、アサルトライフルを渡されたって勘弁して欲しい所だろう。

「そつちも終わったようだな」

——つて、オイオイオイ。

荒い息をつき蹲る俺の前に、既に納刀を済ませた田中が手を差し伸べる。

チラリとその後ろを見れば、バラバラに散乱するカマキリの死体が無数に転がっている。

「ハア……ハア……ま、まさかアレを全部？」

「ん？ ああ、まだ子供だからかな、お前が戦っていたのより大分柔らかいぜ？ スパスパ斬れた」

スパスパですか！ 一応コレ魔獣ですよ？

俺は田中の手を取って立ち上がる。うわっ！ ゴツイ手だな！ 剣ダコと言うのかカチカチに固い。戦いの歴史を感じさせる。コイツは一体どんな冒険をしてきたのだろうか？

田中は田中で、俺のぷにぷにの手を珍しそうに触ってくる。どうせ、なんもやっていない手だと思っっているに違いない。

なんだか俺の中で猛烈に納得いかない感情が渦巻いて行く。

「何と言うか、ここまでは思いませんでした」

「なにがだ？」

ココまでのチート野郎だとは思ってませんでした!!

何だよコレ、ズルくない？ いやズルい。

「なんでも有りません、其れより私は助けを求めていますし、ピンチに陥っても居ませんよ」

「ああ、儀式の事か？ こりゃあ俺が村の心配をして、魔獣の子供を駆除しただけ。ただのサービスだ、それに村の連中もこいつを見れば否やも無いだろう」

田中が差し出したのは魔石だった。

魔石、この世界の生き物には魔石が有る。恐らく大気の魔力をろ過する臓器だと思われている。恐らくは間違い無いだろう。

この世界の魔力は毒にも薬にもなるのを、俺は身をもって知っている。

……それにしても、そうか、魔石か。ファンタジーでモンスターがゴールドを落とす矛盾を解決する手法として良く使われるが、エンディングの王都では殆ど価値が無い物だった。

魔石には魔力が宿るが、魔力なんて大気に幾らでも満ちていたからだ。魔力が溜まる場所に行けば、魔石と同じ様な結晶も手に入る。しかし、人間の間では価値があると聞いた事がある、持って行くのも良いだろう。

「いちいち回収していたのですね」

「まあな、こんだけ仕留めて、エルフ、いやビジャだっけか？ 大人の資格無しってんならお前がやってみろって言ってやるよ」

なるほど、何よりの証拠になるか。

一応、ビー玉は回収したが、そんな物じゃ田中が助けたんだと言われかねない。

これだけの魔石を集めるのは村人にとっては大変だろう。

「では帰りますか」

「おおおー」

俺達は洞窟を歩く、今度は出口へと。

……いや。

「いい加減手を放して下さい！ 馴れ馴れしい！」

「……はあ、つれないお姫様なこと」

もう勘弁してくれないかなこのチート野郎。

大牙猪2

「な、なんだありやあ?」

田中が間抜け声を上げる。

ある意味で、俺はこの声が聞きたくて派手な魔法を披露してきた部分がある。

なんとか田中の度肝を抜いてやりたいと、常々思っていたが。希望とは裏腹にここに到るまで、俺の方が間抜け声を上げ続けるハメになっていた。

ただ、やっと望みが叶ったと喜んでいられる状況ではなかった。

ザルギルゴール
「大牙猪!」

「知ってるのか姫様?」

なんだよその聞き方! 思わず「うむ」とか言いそうになっただろ。

「ええ、何度も襲われた事が有る因縁の魔獣です。表皮は固く刃を通さず、魔法で矢を射つてもあの巨体、殆ど効果はありません」

「アレがそうか、言われてみれば牙猪ギルゴールを巨大にした感じだな。それにしたってデカすぎるケドよ」

「ええ、本当は大森林の奥にしか居ない筈なのですが」

「あいつに馬車を襲われたのか？」

「恐らく。あんなのがこの領域にそうそう居る筈が有りません」

「何にせよピンチだな」

そう、俺たちは洞窟から出るに出来なくなつた。

洞窟から出る前に、その存在に気が付けたのは運が良かったと言うしか無いだろう。やつと日の差す所へ出たと浮かれる俺の背筋に悪寒が走つたのだ。

よくよく観察してみれば、森の奥に奴の姿が有つた。初めて見た時もそうだったが巨大過ぎて縮尺がおかしく見える。

度々感じるこの感覚が因果律を束ねた運命の加護だとするならば、コイツが無ければここ数日で何度か死んでいる所だ。俺のやっている事は無駄では無いと言えるだろう。

俺はギュツとセレナの残したブローチを握りしめる。お姉ちゃんに任せておけと呼びかける。いま皆を連れて行くからな。

感傷に浸るのは程々に、善後策を考えなければならぬ。大牙猪は巨体、この洞窟までは入つてこられないだろう。

かと言つて、このまま洞窟でジツとして夜を明かすのか？ それこそ有り得ない。それで大牙猪が居なくなる保証も無いからだ。

いや、俺の『偶然』は確実にコイツをけしかけて来る、予感と言うより最早確信だ。

「このままやり過ぎずって訳には行かぬえか？」

「馬車の乗員をここまで追って来る位です、あまり期待しない方が良いでしょう」

「放っておいても村を襲う可能性がある……か」

村……か、そうだな、その手が有ったか。

「仕方ありません、やる事は先程と一緒です」

「……と、言うത്？」

言わせんなよ、こつちだつて気持ちいい作戦じゃないんだ。

「私が魔法を使つて突つ切ります、おそらく大牙猪は私を追いかけて来るはず、あなたは

折りを見て脱出して下さい」

「はあ？　んな作戦許可出せる訳無いだろ？　こつちは護衛だぞ？」

「では二人で逃げますか？　それとも二人で戦つて死にますか？」

「……そんなにヤベー奴なのか？」

あの恐ろしさは実際に自分で体験しないと解らない。まず木をなぎ倒しながら追ってくる生物つてのが地球つ子の埒外、有体に言えば装甲車に生身で追い掛け回されるつてのが一番近い。

「先ほども言ったと思いますが、剣の腕に自信が有るようですがその剣が刺さらないのです、仮に刺さったとして切り裂く事は出来なんでしょう」

「エルフはどうやって倒してるんだ？ 襲われたんだろ？」

「一般的には、十人以上で取り囲んで弓の掃射で弱らせて確実に倒します。大牙猪は足の速い魔獣ですが、深い森の中ではその巨体が仇となり速度が出ません。それを利用します」

兄様とセレナはアツサリ殺していたが、大牙猪はザルギルゴール大森林でも最上位の魔獣だ、これより強いとなるとバウギユリツアル王蜘蛛蛇位しかパツと思いつく魔獣は無い。

それにステフ兄様には魔剣が、セレナには圧倒的な魔力があつた。今の私にはそのどちらも無い。

「私は何も、この身を犠牲にするとは言っていないません。魔法を駆使して森の中を逃げれば追いつかれる危険はありません、前回もそうやって逃げる事に成功しています」

「……そうやって馬車から逃げたのか？ それで他の奴はどうした？」

「……………」

「こいつ、やっぱり知っていたか。」

「姫様が寝てる間に会ったぜ？ 姫様の馬車に同乗していた奴と。ガタガタ震えて要領を得なかったが、姫様に見捨てられたって言うってたぜ」

「私が馬車に乗っていても、何か出来たとは思えません、共倒れでしょう」

「だからって一人で逃げたのか？」

「何が言いたいのですか？ 私に命懸けで戦えと？」

「そうじゃねえ、そうじゃねえがよ」

田中はガリガリと頭を掻くと、キツと真面目な顔で睨んできた。

「お前、あのデカブツを引き連れて、村に逃げ込もうとしているだろ？」

「……………」

「前回もって言ったしな、村人全てを犠牲に自分だけ生き延びる。違うか？」

「そうだよ、そのつもりだ。それが俺の運命なんだよ！ 同じハーフだからなんだか知らないが別にあいつ等に優しくして貰った訳じゃない、それどころか難癖付けられてこの様だ。」

よく考えたらあいつ等の自業自得じゃないか、俺が居ようが居まいが大量の大岩蠅ザルデイネフエロとはぐれ大牙猪ザルギルゴールである村はどのみち詰んでいたに違いない。

俺が試練から帰った所に大牙猪ザルギルゴールが襲って来る、どう見たって俺の方が被害者で悲劇のお姫様だろ？ 俺を加害者だと誰が思う？ 何の問題も無いだろうが。

「さつきもそうだが、やる前から諦めるのは感心しねーな、実際あれだけの数の魔獣がどうとでもなったじゃねーか」

「で、ですが！」

じゃあアレをどうすんだよ！ あんなの倒せるのかよ！

俺は田中をギリリと睨む。

「今、矢は何本残って居る？」

「八です、さつき二本使いました」

「俺が囷になるから、上手く急所を狙うとか出来ないか？」

「難しいでしょう、目や喉を狙うにしても相手も動きません」

それにあいつは俺を狙うハズだ、俺がその身を晒すまで大した動きをしないだろう。

「動きが遅いんだろ？ どうとでもなりそうじゃねーか」

「違います、森の中では動きが制限されるから魔法を使って逃げ続ければ捕まらないと言っただけです」

俺は大牙猪ザルギルゴールの狩り方を詳しく説明した、一人のエルフが囷となつて森の中を魔法を使つて駆け回る。近すぎても駄目、遠すぎても駄目。常に凶悪な魔獣の鼻先をフラフラ漂い、決して触らせない。

その間に周りのエルフ達が矢を射って行く。

ひき回しと呼ばれるそれはエルフの戦士の花形で有ると同時に、最も危険な役割だ。

先程の俺の様に魔法の制御に失敗すればその時点でお陀仏、それどころか距離を離し過ぎ魔獣の興味が他へ行ってしまうと、矢を打つ事に集中していた周りの仲間には危険が及ぶ。恐れを抱いて魔獣から距離を離し過ぎて、味方を危険に晒す事は最も不名誉とさ

れていた。

「だったら、姫様と俺、どっちかが囿でどっちかが攻撃。それで良いじゃねえか？」

「話を聞いていたのですか？ あなたが囿で、私が矢に魔法を乗せて攻撃しようとした時に、あなたからターゲットがこちらへ変わったら？ 魔法を切り替える間も無く轢き殺されかねません」

「姫様の武器は弓だろ？ 俺が襲われたら十分に距離を取って攻撃してくれば良い、逆に姫様が狙われたらしつかりと回避に専念してくれ」

「そこまでしてあいつを倒したいのかよ？ どんだけ戦闘狂なんだか。でもやるしかなかったか？ もうあいつとの因縁は終わりにしたい、自分のトラウマを消し去りたいなら田中が居る今が最後のチャンスかも知れない。」

「信じて良いのですね？」

「あたりめえだろ？ こっちは妖獣殺し、化け物退治の専門家よ」

……その妖獣よりも強いと思うんですが、まあ殺るかね。

大牙猪3

「クソツやつぱり斬れねえか！」

正直、田中先生のチート剣術でアツサリ倒せる。そんな展開を期待していなかったと言えは嘘になる。

しかし現実是非情である、さしものチート剣術も大牙猪には歯が立たないらしい。

そう考えると弓の先生、セーラさんだっけ？ 仏頂面の。結構凄かったんじゃないだろうか？ 先生の弓はズバズバ刺さっていた。いかんせんあの巨体相手に矢の一、二本じゃ役不足だった。

で、田中が大牙猪ザルギルゴールに斬り付けてるって事は？

そう、俺がひき回しの役って事だ、約束された結末と言える。

田中の奴は、自分が襲われると思っていた節が有った。普通に考えたら少女と大男、危険度が高く、食いでが有る方が襲われるのが道理。

しかし、そうは問屋が卸さないのが俺の『偶然』だ。

——クソがつ！クソシヨウ、死ねよカス。

畜生の分際でチクシヨウって叫ばせんなよ畜生！

心の中で愚痴を言つても、現実では息つく余裕もありやしない。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

何度目かになる呪文の唱え直し、移動の魔法も唱え直さないで居ると、徐々に効果が薄くなる。しかし疲れから呼吸が乱れるとその詠唱が苦しい、下手すると先程の様に制御に失敗しかねない。

ブオオオオオオオオ！

ドオオオオン！

俺がその枝の上から脱出するのと、その枝を持つ幹に大牙猪が突撃するのはほぼ同時だった。

結構な大樹であつた為折れこそしなかつたが、酷く傾いては揺れている。枝と言う枝が葉と言う葉が、バサバサと擦れ合つてけたたましい音を上げる。

飛び移るのがちよつとでも遅かつたら、哀れにも転落、即座に餌になるだろう。

こんな死と隣り合わせのアクロバティックをもう何度も繰り返している。

実の所、最初は田中が襲われる展開も有つたのだ。

その時、十分に距離を取つて矢を射つていればこんな事にはならなかつただろう。しかしこの作戦、基本的に濃い森の中でしか成り立たない。

そうで無ければ、大牙猪にあつという間に追いつかれてしまうからだ。

となれば、植生の濃い方濃い方へと逃げる事になる。すると弓矢の射線が通らないのだ。

もし矢が無限に、いや二十も有ったらもつと安全圏で撃つただろうが、残り八と言う数を考えるとどうしても急所を狙いたい。

出した結論は、欲と安全を天秤にかけて、近くに寄って樹上からのスナイプ。

結果は三発が良い所に命中、しかし大牙猪は止まる気配を見せず、四発目を放つ前にこちらにターゲットを移した。

樹上の俺を落とすべく木への突進、最初に食らった時に木から落ちなかったのは僥倖だったが、代わりに四本目の矢をドロップ。

残る矢は四本、しかし撃つ機会は訪れそうにない。

「固つてえー！ どうなつていやがる！」

田中が斬りかかっても全くこつちからターゲットが外れない。ひたすら俺が追い回される展開が続いている。

樹上を八艘飛びで逃げ回るアクロバティックは無駄に体力を消費する。かと言って今更、降りるタイミングも掴めない。下手に降りた瞬間にプチッと踏みつぶされるのがオチだ。

「ハア……ハア……あの！ 役立たずが！」

人知らず愚痴る俺の口調にも、お姫様らしい余裕はない。

田中の奴、偉そうに言った割に使えない事この上ない！

ま、大牙猪ザルギルゴールだつて田中の事を完全に無視している訳じゃない、尻尾や後ろ足で牽制し、無茶な接近を試みると途端に本気で噛みついて来る。

それに全く救われて居ないかと言えば嘘になるだろう。さらに言うとな中の剣、どういふ訳か時折、刺さつてはいるのだ。鉄より固いと言われる大牙猪ザルギルゴールの毛皮、魔法の力を借りずに剣が刺さるだけでも大したものだ。

しかし、それでも致命傷には至らない。人間でいえばケツに彫刻刀が刺さつたぐらいのインパクトしか与えられていないのだろう。

……いや、それ十分に痛いだろ。こつち来るなよホントに。

ひたすらに続く追いかけてこにも終わりが来る、それは俺の体力が尽きる前に訪れた。

「あつー！」

大牙猪ザルギルゴールが俺の木にタツクルを仕掛けんと突進してくる。それを見て俺は枝を蹴り他の木へとジャンプする。

何度も行い、最早ルーチンワークになりかけていたが、それがいけなかった。ジャンプが早過ぎた。そして大牙猪ザルギルゴールは進路を変える。

「クツソツ」

お姫さまらしくない悪態が漏れるのも仕方がない。先回りされて俺が着地せんとした木に大牙猪ザルギルゴールのぶちかましが直撃する。

足を踏み外した俺はこのままじゃ大牙猪ザルギルゴールの口へとホールインワンだ、俺は木の幹を蹴つ飛ばして進路を変える。

最早制御も何もあつたもんじやない、全開の魔力をその一蹴りに込めた！ 決して体に良い物では無いが背に腹は代えられない。

「クツ」

しかし問題は俺が跳んだ先に岩山が有つた事。上手く制御し、着地しなければ、大怪我は免れない。

が、その前に現れた意外な伏兵が俺の頭を悩ませた。

いや、俺の頭を打ち付けた！

——ゴオン

「イギツ！」

鈍い音と不格好な悲鳴。頭にぶち当たつたのはただの木の枝。

着地点の不安から下ばかり見ていおかげで、宙に伸びた枝が目に入らなかつた。

「うううう」

朦朧とする意識、しかし今、魔法の制御を手放せば、したたかに地面に打ち付けられ複雑骨折コースに違いない。朧げな意識の中、何とか着陸予定の岩山を前にして、緊急着陸を果たす。

「クウウウ」

頭が痛い、一刻も早く離脱すべきだが動けない。意識も朦朧として俺は蹲ってしまふ。

——ブオオオオオ

唸り声を上げ、大牙猪ザルギルゴールが迫って来る！

このままじゃ踏みつぶされてミンチになるか、噛み砕かれてミンチになるかの二つに一つ、しかし俺の体は動いてくれないっ！

ほんの数秒の出来事だったが、血も凍る様な絶望を味わうのには十分な時間だった。俺は最期を予感して体を丸めてしまふ。

ひよいつと

そんな音が出そうな位、俺の体は軽々と持ち上げられた。大牙猪ザルギルゴールの仕業ではない。

田中だ。

田中ザルギルゴールが大牙猪より先に、着地点へと回り込み、肩で俺を担ぎ上げた。

「舌噛むなよ、ちよいと手荒に扱うからな」

そうやって田中が駆け出すその刹那、猛烈な勢いで大牙猪ザルギルゴールが突っ込んで来る。

バグン

大牙猪ザルギルゴールの顎が噛み合わさるのを、俺は数センチと言う間近で見るハメになった。

その咬合力こうごうりょくたるや、あのまま噛み砕かれればミンチを通り越して一気にハンバーグに成っていたに違いない。

もし田中が走り出すのが0.5秒遅かったら？ 田中は俺の首無し死体を運搬する事になっただろう、それ程にギリギリのタイミング。

「うひゃあ」

変な声が出るのも仕方のないだろう？ それでも弓を手放さなかった俺を褒めて欲しい。

「う、ぐ、があ」

そして揺れる！ 田中の肩の乗り心地は最悪だ。足を抱えられ肩に担がれて振動はモロに腹を圧迫する。

「クツッ、どこまでも追って来やがる」

田中はばやきながらも、むき出しの木の根を、大岩を、ちよつとした崖すらも軽やかに飛び越え踏破していく。

魔法は使っていない、純粹に肉体の力だけで、俺を担ぎながら、段差だらけの森を風

の様に駆けて行く。

しかし、それでも、それでも大牙猪ザルギルゴールはひたすらに俺達を追って来るのが解る。

なんせ田中の肩に担がれて、俺の頭は背中側、背後から迫りくる大牙猪ザルギルゴールの巨体が視界一杯に広がる。付かず離れず迫力のデッドヒートを存分に堪能して息も絶え絶えだ。

どうすんだよコレ……。

大牙猪4

「オイ、怪我はねーか？アレ使った方が良いか？」

田中が肩に担がれた俺に語り掛ける。

「だっ、い、じょうぶ、ですっ！」

返事をしようにも舌を噛みそうになる、それ程の振動。

アレとは何か？セレナの秘宝である。俺は胸に付けたセレナのブローチに回復の魔法を込めている。

もし田中が大怪我をしても俺が田中を回復出来る。だが、もしも俺が魔法を行使できない程の大怪我を負ったら？

その時はセレナの秘宝を使って俺を回復して欲しいと田中に頼んでいた。田中の魔力は90も有る、魔道具の起動には十分だ。

ただ、今それを使う必要はない。俺は魔法が使えない程には弱っていない。

「我、望む、命の、輝きと、生の、息吹よ、傷付く、体を、癒し、給え！」

呼吸を整え呪文を唱える。振動の所為でつかえつつかえだつたが何とか制御して魔法が発動、頭の痛みと同時に、振動でやられそうになった内臓の痛みも飛んで行く。

——ブオオオオオツツツ

ザルギルゴール 大牙猪の唸り声上がるのは、俺の前髪を揺らそうかと言う距離。そう、田中と俺は今だ大牙猪の脅威から逃れられずに居た。

「このまま狙います!」

「はあ? マジかよ?」

マジだ! 目の前に大牙猪が顔面晒して唸り声を上げている、ココは絶好のスナイプポイント!

『我、望む、放たれたる矢に、風の、祝福を』

田中に担がれた不格好な体勢、とてもじゃないが力は入らない。だが元々、力なんざ全く無い。大した問題にはならない筈。

——ポシユツ

しかし、その思いは裏切られ放たれた矢に力は無い。ザルギルゴール 大牙猪の固い表皮を突き破るどころか、ほんの数メートルの距離の大牙猪へと届きもしなかった。

「なっ?」

想定外の事態に声が出るが、原因が分からない。

「どうした? 何が有った?」

叫ぶ田中もよく見ると既に汗だく、無理もない。俺を担いで深い森の中を巨大な魔獣

と追い駆けっこ、むしろココまで体力が持つのがまともじゃない。

だが、そうか、その田中の体力こそが問題なのだ。

「タナカ！ 私を受け入れてください！」

「ハア？」

エロい意味じゃあ断じてない、魔法だ。

田中の肩の上、当然ココは田中のパーソナルスペースの中、田中の人間離れた健康値で俺の魔法が散らされてしまうのだ。

自分に掛ける回復魔法ならまだしも、魔法の力を外に出す矢の加速などもつての他。当たり前の事であった。

「こ、呼吸を、呼吸を合わせて」

「あ、オ、オオそうか！」

こうなると、サンドラのおいちゃんを回復魔法で治した所を見せていて良かった。呼吸を合わせるの魔法を受け入れる方法の初歩にして奥義だ。

「行くぞ！ 姫様！ セーの！ ヒツヒツフー」

「……ヒツヒツフー」

出産かよ!!!

なんでラマーズ法なんだよ馬鹿!

いや、別に悪い訳じゃない。敢えて言うなら俺が突っ込みを入れたいのが問題だ。

「ヒツヒツファー『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』ヒツヒツファー」

今度はしつかりと番えた矢に魔力が載つたのを確認する。残りの矢は三本! 絶対に外せない!

シユツ——ズパアアン

放たれた矢は、破裂音さえ上げ、ザルギルゴール大牙猪の鼻先に突き刺さる。

ブオオオブオオオオオオ!

悲鳴を上げるも、まだ止まらない。矢を受けた鼻は肉が捲れ広がり、真つ赤な華となる。

美とは無縁の、おぞましくグロテスクな赤い華。

醜悪な光景に我を忘れそうになるが、今考えるのは残り二本の矢をキッチリ当てる事、それも急所へだ。

「目をつ、狙います!」

いくら近いとは言え、揺れる肩の上で目を狙うなんて芸当、出来るとは自分でも信じていない。それでも宣言し、自分にプレッシャーを掛ける。

「……………」

田中も返事では無く、走り方を変える事で答える。膝のクツションを使い極力振動を抑える走りに変えたのが解った。体に負担が掛かる走法だろうが耐えてくれ。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

ギリギリと矢を番える、狙う、狙う！

魔法を使えば矢の進路を調整できるので、番えた時にここまで狙いを定める事は余り無かった。

しかし今回狙うのは揺れる肩の上から、それも標的は動く獲物の二つの目。

「ヒツヒツフ——」

ラマーズ法のフーの所で一気に集中！ 狙うは左目！

シュツ——パアアアアン

ブオ！ブオオオオオオン！！

「あ、当たった!?!」

自分でも信じられない！ 放った矢は左目に直撃しゼリー状の物が弾け飛び、甲高い破裂音が響いた。

直後に大音声での悲痛な鳴き声。

ザルギルゴール 大牙猪はふらつき、膝を折るが、——やったか？　なんて呟く無粋はしない。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

最後の矢を番える、狙うは当然残った右目！

ブオ！　ブオツブオオオオオオオオオ！

ザルギルゴール 大牙猪も最後の力を振り絞り突撃してくる。

シユツ——　ザスツ

ブオオオオオオオオ

最後の矢も命中した、しかし右目では無い。少し外してその上、頭蓋骨の有る固い部分で刺さりはしたものの深くは無い。

でも、悪く無い。下では無く上と言うのが良い、血が流れれば目が塞がる。

「オ、オイッ！　森がつ、森を抜けちまうぞ？」

大森林とは言え、その領域全てが森と言う訳では無い。その中にぽつかりと草原や岩場が広がるスポットが存在する。そういう場所には妖精が住むと信じられていたが、果たして妖精は俺たちの味方をしてくれるのだろうか？

田中が焦り、声を荒げるのも当然。深い森の中だからこそ、巨大な^{ザルギルゴール}大牙猪との追いか

けっこが成立していたのだ。

それが平地ではどうか？ あつと言う間に追いつかれてしまう。

「そのままっ！ 駆け抜けてください！」

「オウ！」

しかしそれでも突つ切る。矢はもう無いが相手も瀕死だ。鼻も眼も潰れ、奴はどうやって俺らを追っている？ 音か？ 魔力か？

どちらにしても、ここで撒いてしまえば、もう追いかける事は不可能だ。

バサツバサツバサツ

田中の足音が土を踏みしめる音から、草原を掻き分ける音へと変わると、薄暗かった森を抜け、茜さす草原に出た。

——ブオオオオオオオオオ

ザルギルコール

大牙猪も満身創痍だ。夕日に照らされ血だらけの体、その全てが露わになる。

良いぜ！ 来いよ！

『我、望む、大いなる断裂よ、指し示す大地を穿ち給え』

残った魔力、その全てこの魔法につき込む！

生み出したるは大地に大きな落とし穴。

木の根が入り組む森の中では使えなかつたが、この草原ならきつと使える。

——ズゾゾゾオオオオ

大地に信じられない程の、大きな地割れが生み出されて行く。

魔力値が400に近い値になったのはここ最近、それから後先考えず全開で魔法を使ったのは初めての事。

疼く様な魔力欠乏の胸の痛みも忘れて、自分にこれほどの力が有ったのかと歓びに震える。

ブオ？ オオオオオオ！

そして期待通り大牙猪がハマザルギルゴールってくれた。

いや期待以上だ、前足が引つかかったアイツは転がって背中から穴に落っこちた。もしも目が、鼻が利いていればココまでの無様は晒さなかつただろう。全ての努力が実つた格好だ。

「よしっ、離脱しましょう」

俺は歓喜に沸き、ご機嫌に田中の背中をポンポン叩く。だが当の田中はトンでも無い事を言い始めた。

「いや、ハハハで止めを刺そう」

「エッ？」

驚く俺を草むらに降ろすと、穴へと駆けて行く。

「キエエエエ」

気合一閃、猿叫だっけ？ 剣道特有の叫びをあげて穴に落ちた大牙猪ザルギルゴールに突きを放つ。穴に落ちた相手を穿つのがだから、剣道とは程遠いスコップみたいに剣を持つ構え、そんな構えにも関わらずそれなりに形になっているのは、剣に打ち込んだ年季に依るものか？

——ブオオオオオオオン

力ない断末魔、剣は大牙猪ザルギルゴールの喉にしっかりと突き刺さった。

「剣が、通るのですね」

「ああ、アホみたいに固い奴だが、筋肉の隙間から喉の動脈を狙った。流石にお陀仏だろうぜ」

……いや、アツサリ言うけど凄過ぎない？

何にしても、俺は、俺達は大牙猪ザルギルゴールを倒した。因縁の相手をついに自分の力だけ、では無いものの倒す事が出来た。

俺が好きで異世界転生ものではオークキングとか、巨大モンスターを倒すのに大体十話も掛からないのが殆どだった、それが俺はどうだ？ 12年も掛かってしまった。

真つ赤に染まった草原で一人誓う。

ココからだ、ココから俺は、この世界を——ぶっ壊す。

戦い終えて

ザルギルゴール
大牙猪を倒した俺達は、村へ帰るのだった。

……しかし、

「どうした？ おねむか？」

「……違います」

魔力も体力も使い果たした俺は、田中におんぶされていた。

おんぶと言えば、セレナをおんぶして険しい森の中歩き回った事を思い出す。頼りなお姉ちゃんの背中中、セレナは何を思っただろうか……

対して田中の背中中は大きくて鋼の様に固く、同時に張りつめたゴムの様に力を蓄えているのを感じる。

父親の様だと思ってしまったが、前世だって今世だって、父はココまで逞しい肉体では無かった。いや、チートな肉体を授かったに違いないコイツと比べるのは酷か。

嫉妬はある。だが同時に安心している。これだけ逞しいなら、これだけ力強いなら、俺の『偶然』にだって簡単には負けないだろうと思える。

それに甘えちゃ駄目だと思いつつも、頼りたいと思う心を止められない。

いや、頼るどころか、利用しなくちゃならないんだ、俺は復讐の為に生きるのだから

……

「……おい、お迎えみたいだぞ」

「ふあ?」

……俺は結局眠ってしまったていらしい。気が付けばもう日はすっかり落ちて、辺りは真つ暗だ。田中はこの暗闇を歩いて来たのか? 明かりも無しで?

恐らく夜目が利くのだ、それこそ何らかのチート能力の可能性もある。だがそんな事より問題は前方から迫る、幾つかの篝火だ。

「村から人が出たのでしよう」

「だろ? 暗くなっても戻らねえもんだから心配してんだろ」

「では、降ろしてください」

「なんでだ? お疲れだろ?」

「成人の儀の後、自分の足で帰れない様では儀式の成功とは認められません」

「つまんねー事言うなよ、俺は見たぜ? 木の上から上へと所狭しと飛び回る姫さんの雄姿をよ。挙句、俺の肩から強烈な一撃を見舞って、止めにあの魔法だ。今日の殊勲賞は間違いなく姫様だ、堂々としてりゃー良い」

「ですが、難癖付けられる位なら」

「姫さんの活躍を疑う奴なんざいねーよ、アレを見たらな」
「アレ……と、は……？」

俺の疑問はまどろみの中に消えていった。

翌日、俺は村のベッドで目を覚ました。結局、田中の背でもう一度眠ってしまったらしい。

で、話を聞けば村の人々は田中の背中で眠る俺を見て、儀式は失敗。と思ったとの事。ぐっすり眠る俺をおぶりながら、「姫様の儀式は成功だ」とだけ言っただけを語らなかつた田中に、村の者は訝しく思っていたらしい。

いや、自分一人でガラス玉を持って帰って来るのがルールとするならば、当然儀式は失敗と言えるのだが、^{ザルギルゴール}大牙猪なんて倒してしまつたらそんなルールは最早どうでも良いだらう。

^{ザルギルゴール}大牙猪を狩る者はエルフにとつて憧れ、前世で言うスポーツ選手の様な英雄的な扱いを受ける程なのだから。

目覚めた俺が、集まつた村人へ簡単に事情を説明するも、^{ザルギルゴール}大牙猪を倒したなど、全く信じて貰えなかつた。

結局、朝から村の有志と共に^{ザルギルゴール}大牙猪を埋めた場所に舞い戻る羽目になるのだった。



「まさか、コレを姫様が？」

「なんて巨大な！ この穴は魔法で？ いや、本当ですか？ 伝説の魔法使い様のようでは無いですか！」

「噂には聞いていたが^{ザルギルゴール}大牙猪とは何と言う大きさだ」

「ありがたやありがたや」

「エリプス王物語など、半ば作り話だと思っていたが……我らと同じ無能の血が混じってこれだけの魔法が使えるとは」

「ああ、話半分どころか、聞きしに勝るって奴だ、おつかねえ」

^{ザルギルゴール}大牙猪の死体を掘り返した一行は度肝を抜かれていた。

そりやそうだ、こんな化け物、たった二人で倒すようなモンじゃ断じてない。

……田中が自慢げにしているのが、何となく腹立たしい。確かに頑張ったんだが。

そんな風に、活気付く一行の中で笑顔が無い男が一人。

「ちつくししよう！ レーナをつ！ レーナを返せエエエエ！」

叫びながら^{ザルギルゴール}大牙猪の死体をスコップで殴りつけてるのが、俺と馬車に同乗したパラセル村の若者だ。

レーナと言うのは……参照権によると村長の娘らしい。その娘が好きだったのか付き合ってたのか、それは聞く気にもならないが……大切な人だったのだろう。

昔の俺はそんな光景を冷めた目で笑っていたらうが、今の俺には大切な人を失う気持が解つてしまう。

「クツ——」

そしてその若者が俺を睨む複雑な感情も……

俺は彼にとって大切な人を見殺しにした仇であり、大切な人を殺した魔獣の仇を討つてくれた恩人でも有る。

俺には釈明の言葉も無い、謝つたつて、もし今、大牙猪ザルギルゴールが再び現れたら同じ事を繰り返す。

いや？ コイツが居れば、コイツと一緒にならもう逃げずに済むか。

「なんだよ？ もつと胸を張つて良いんだぜ？ おめえは悪くねえよ」

見上げれば、ニヤリと笑う田中と目が合った。

「誇る気にはなりませんね、あんなものを見てしまつては」

俺の目線の先では先程の若者がまだスコップを叩きつけている。

「あー俺も大分無茶言つちまつたな、あれ程の化け物とはよ」

「そうですね、大口を叩いた割には頼りになりませんでした」

「厳しいねえ、ま、仕方ねえか」

田中の方はサツパリしたものが、やはり思う所が有る様だ。

「剣がよ、じっくり来ねえんだよな、西洋剣つてのは反りも無いしよ」

「剣、ですか」

「ああ、刀さえあればよ、今の力が有れば何でも斬れそうな気がするんだが」

「カタナ……」

「いや、なんでもねえよ、忘れてくれ」

そう言えば、黒尽くめの格好にハマってるから西洋剣に違和感は無かったが、そうか刀か、そんなもん無いからな。

「取りあえず、皮を剥いで魔石も取った。引き上げようぜ」

そもそも、村の者を連れて来たのは解体の為も有ったのだが、穴の中の^{ザルギルゴール}大牙猪の死体を見るや恐慌に陥り、大して役に立たなかった。

結局、皮を剥ぐのも魔石を取るのも殆ど俺達で行った、その過程で内臓の中からレナとか言う娘の遺品が出てきて、さっきの若者が泣き崩れたりとか色々有った。

そんなこんなで引き上げだ。未だに^{ザルギルゴール}大牙猪の前から動こうとしない若者はもう、そつとして置くしか無いだろう。

魔獣の死体の側は危険だと、幾ら言っても聞く耳を持たないのだ。

気持ちは解る、俺だってセレナと一緒に焼かれて死のうとすら思ったのだ、そこに理屈なんてない。

その若者の事は胸にしこりの様に残ったが、俺達は村に帰ると打って変わって手厚い歓迎を受けたのだ。

勝利の宴

お祭り騒ぎは村長の家を飛び出して、村の広場で成人の儀のお披露目会として正式に行われる事となった。

ザルギルゴール 大牙猪の討伐はそれ程に大きなニュースだったらしい。加えて大岩ザルディネフエロ蟻螂の大群も片づけたとなれば、ヒーロー扱いも無理はない。

あれだけの群れだ、本当は俺の成人の儀どころじゃない騒ぎだった筈。騒動の原因が両方とも、いや俺の分も合わせて三つも問題が同時に解決してしまった。

そもそも、帝国の奴らが攻めて来なければ、この時期に王都で大々的にお披露目会が行われる筈だった。それを思うと悔しさも滲む。しかし、俺は前に進んでいる。

「ひめさまがデツカイイノシシ倒した話聞かせてー」

「ワシらも聞きたいですわい」

「お前みたいのが大カマキリやつつけたってホントかよ」

「コラ！ 何失礼な事言ってるの！ スミマセンうちの子が」

しかし、儀式と言っても王都とは違う。格式ばった所はどこにも無く、まさに村のお祭りと言った様子で、田中と俺はさつきから話をせがまれてばかりだ。子供やお爺さ

ん、悪ガキとその母親にまで囲まれてさつきから同じ話を繰り返してる。

まあそれは田中の方も同じ様な物だろう、そう思つてチラリと様子を窺うとあつちは酒を片手にやんややんやと盛り上がっている。

「そこで姫様の渾身の魔法よ、ありやあたまげたね、なんせ振り返つたら歩いて来た地面がそつくり無えんだ」

「オオオオオオ——」

なんか田中が適当な事を言っている声が聞こえる。盛り上がるどころか、話を盛つてみたいだが、放置して良い物だろうか？

「あれこそがエルフの姫の魔法かと度肝を抜かれたね」

「エルフ、それがタナカ殿の生まれた国の森の民の伝説ですか」

「おうとも、大陸の森に住むエルフに助けを求め、エルフの魔法と共に強大な敵に立ち向かう。俺の国の伝説よ」

「ほほう、だとするとタナカ殿は伝説の体現者ではないですか」

「其れよ！ 俺が剣で魔獣を切り裂き、姫様の魔法で止めを刺す、ガキの頃見た冒険譚そのままを体験したぜ」

「オオオオオオオ——」

「エルフの民に乾杯！」

「そうだ！ 我らエルフの民に乾杯！」

「……え？ エルフって言葉、普及してきてない？」

俺が考えた奴、森に住む者、駄目だった？ ネーミングセンス無かった？

森に棲む者と対を成す感じで考えたんだけど？

……ま、まあどっちでも良いけど？ 俺はどっちでも構わないんだけどお？

それに、魔獣を切り裂いたって？ お前は猪のケツに彫刻刀刺してただけだろ！

いや？ 違ったか？ ま、まあ止めは刺したし、頑張つて走つたからね、良いけどね、

良いんだけどね？ エルフかあ……直球で良かったんだなあ。

俺は何だかんだ動揺を隠しきれず、なんとも落ち着かないままに過ぎす羽目になった。

「ひ、姫様、いえ、ユマー！」

「え？」

そんな俺が突然呼び捨てにされたのは、そろそろ日も暮れ宴も終わろうかと言う頃だった。

「コラ、止めなさい！」

「で、でもあなた！」

俺を呼んだのは、たしか村長の息子の嫁、歳頃は母。パルメと同じぐらい、流石に田舎っ

ぼいが、それを含めて優しいお母さんと言う雰囲気醸し出していた。それが思い詰めた顔で話しかけて来たのだ。

慌てて其れを村長の息子が止める格好だが、嫁さんは止まらない。

「姫様は本当に全てを忘れて、私たちの、只の村娘のユマに成る訳には行かないのですか？」

「……失礼とは思いますが、私もコイツと同じ気持ちです、姫様が家族の仇と帝国を恨む気持ちは解ります。ですがそれは12歳、それこそ成人したばかりの少女にはあまりに重過ぎる！」

「私、私は姫様の歳の頃、成人したって言っても形だけ、なんでも周りに頼って生きていました。そ、それが国を出て無能達の国に乗り込むなんて！」

「私たちは子宝に恵まれず、生まれていれば姫様ぐらいの歳だった、どうしても考えてしまうのです、そんな姫様が無能共に傷付けられる所を！ それを想像しただけで……」

「……そうか、だから俺の事を成人と認めないって村の皆は言ってたんだ。自分達の子供とするために。」

「……優しいんだな。でもさ、俺はホントは12歳じゃないんだ。」

「いや体は真正正銘12だよ？　でもさ、中身は田中と同じ年、戦える年齢なんだよ、いや、ホントはもっと早く戦わなくちゃ行けなかったんだ。」

「……申し訳無いのですが」

俺はゆつくりと田中の側へ。

「私にはやるべき事も、戦う力も有るので！ 私は彼と、タナカと旅に出ます！」

「オオオオオ——」

「うううう」

私の宣言を受けてやんやと盛り上がる村人と、泣き崩れる夫婦。

有難いけどさ、やっと始まったんだ、俺の冒険が。遅過ぎて、失敗だらけでみんな死んじまった後だけ。だからこそケリだけは俺が付けないと。

「タナカ、これからもよろしくお願いしま……」

——チツチツチツ

胸に手を当て、軽く頭を下げた俺の頭上で不快な舌打ち。

……え？ 今のなんだ？ 舌打ち？ 感動の場面だろ？ まさか有り得ないだろ！

……いや、でも間違い無く田中の仕業。

「田中じゃないぜ」

「え？」

「これからは田中と呼んでもらっちゃ困る」

は？ コイツ何言ってるんだ？ 敬語で「田中さん」とでも呼べと？ 調子に乗るな

!

「あなたは何を言っているのです？」

「パパだ！」

「へ？」

「これからはパパと呼びなさい！」

「……………は？」

……………意味が、解らないっ!!!!

「俺がお前のパパになる！ それで全部解決だ!!」

……………何の解決にもならんわ！

たわけっ！ たわけ過ぎだボケエ！

「頭が……………悪いのですか？」

「いや何処も悪く無いぜ？」

「……………」

「どうだ？ 呼んでみるよパパってさ」

そう言つて両手を広げて待ち構えるが、その胸に飛び込むとか有り得ない。

「せいっ！」

「うげっ」

股間にキック一閃。

「馬鹿も休み休みにお願います」

「つれないねえ」

渾身の蹴りも虚しく、田中は大きく効いていない風で笑っている。会場もバカ受けだがどうにも締まらないではないか。

俺としては、もうちよつとカッコいい冒険譚を紡ぎたい。

切実にそう思った。

恐怖の予感

その事件があつたのは、成人の儀のお披露目会の翌日だつた。

「ウオーラスの奴が居ないぞ？」

「まだ戻つてねえのか？」

昨日、ザルギルゴール大牙猪をスコップで執拗に殴つていた男だ。

男は俺と同じ馬車に乗り、結果、ザルギルゴール大牙猪に追われてこの村に辿り着いてしまった、つまりこの村に知り合いは居ない。

哀れに思つた村長の知り合いだかの家で居候していたとの事だが、昨日はお祭り騒ぎで一晩ぐらい目にしなくとも、気にも留めなかつたとの事。

あの不安定さだ。全てが解決した今、どこかで自殺していてもおかしくない。怪しいのはザルギルゴール大牙猪が死んだ場所だろう。

だが、男を探しに行く前に、新たな問題が起こつた。

「オイ、お前ら出てこい！」

「ユマちゃんを攫つてどう言うつもりだ！」

「こいつがどうなつても良いのか！ ユマ姫に会わせろ！」

にわかに村の外から罵声が聞こえて来たのだ。

もうこの時点で俺はまた厄介事かと頭痛を覚え、今すぐ村を出たい衝動に駆られたが、流石にそんな訳にも行かなかった。

彼らの姿に見覚えがあったからだ。

その正体はソノアール村の住民。サンドラのおいちゃんを筆頭に、十人ほどこのハーフェルフの里、ピルテ村まで攻め込んで来たと言う事らしい。

俺が出るしか無いよなあ、ああもう、面倒臭い。

「私は無事です！　これは何事ですか！」

「おおつ、姫様無事でスたか、いんやー良かっただ」

ザツカさん、役場の人まで来てるのか。これは思った以上に大事になってるな。

そして、気になるのは見慣れない子供を引き摺っている事だ。どうも人質を取っているらしい。

「オラが肩を撃たれて、村さ戻った後、こりやーおかしいうって話になってな」

「ああ、村の情報が奴らに筒抜けになってる、こりやあマズイと思つてな」

「……サンドラさんに、ラザールドさんまで」

おいちゃんは兎も角、大弓担いだラザールドさんは冒険者、お金を払って依頼して来て貰つてるに違いない。これは本気だぞ。

「で、村の人間を調べたらコイツが居たわけだ」

「お姉ちゃんごめんよ、俺、そんなつもりじゃ……」

ラザルドさんは人質らしい少年を、首根っこを掴んで差し出して来た、誰だ？

参照権！ うーん、ソノアール村の広場で俺に話をせがんで来た、普通の少年みたいだが？

「こいつが猟師の息子とか言つて、鳥や山菜をちよくちよく売りに来るとは思つてたがよ、その正体がコレだ」

少年が目深に被つたとんがり帽子をラザルドさんが剥ぎ取ると、その長い耳が露わになつた。

「森に棲む者が人間の村でコソコソ調べ回つてやがった」

「えー違うよー、俺達はただ、姫様が心配で」

「うっせえぞガキ！ おめえ何年も前からこの村に来てたじゃねーか」

「そつそれは、俺達だつて塩とか、買いたい物が有るんだよお」

なるほど、目とか耳。種族的な特徴がよりハッキリ出てしまう大人より、子供の方が人間に紛れるのに向いている。

だから、子供に人間との交易を任せていた訳だ。それが俺への襲撃を機にバレたと。

俺が人間に攫われた等と、この村の住民も勘違いしていた理由にも合点がいった。恐

らく子供の報告が悪かったと言うより、大人が信用しなかったのだ。

まだ八歳位だろうが、この子は結構頭が良い。ちよつと話したただけだが、村の他の子より賢いと思つたのを覚えている。

だが、それを聞いた大人の方が都合が良いように解釈した、そんな所だろう。

今回も、同じだろう。人間は子供の言う事など信じない。

「ごめんよう、お姉ちゃん」

「はあ、あなたのお姉ちゃんでは無いと言つたでしょう」

思えば村でもこんな風に馴れ馴れしい感じだった。俺をお姉ちゃんと呼んで良いのは一人だと言うのに。

いや、もうその一人も居ないが。

感傷に浸る俺に、ラザールドさんの声が掛かる。

「そーいや、アイツはどうした？」

アイツ？ ああ田中の事か？

「恐らく、まだ寝ています」

「つたく、ろくでもねえ護衛だな」

ラザールドさんは吐き捨てる様に言うが、頑張ったんで多少は許してやって欲しいものだ。とは言え流石に昨日は飲み過ぎだったと思うが。

「とにかく、村長と話をしましょう」

「ああ、小賢しい事しやがって、とっちめてやる」

かくして村長宅で二度目の会議で有る、もう本当に勘弁して欲しい。

ちなみに田中は叩き起こした、いつまで寝てんだアイツは。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ワタスとしては、この村はソノアールに近すぎると、そう思うんでス」

「じゃあどうしろと？ 我々に出て行けと言うのか！」

「ですな、そうして頂けないと、こっちも枕を高く寝れないです」

「話にならない！」

ピルテ村の村長と、人間側の話会はいきなり剣呑な雰囲気だ。人間側はザツカさんが取り仕切る形だが、村を出て行ってのは流石に無茶だ。人間側はザツカさん

「逆の立場で考えてございませ、不気味な集団が正体を明かさず、こちらの情報を収集していた、恐怖を覚えて当然でございませよ」

ザツカさんの敬語なのかよく解らない言葉はアレだが、不審に思う気持ちも解る。せめて堂々と交易をしてたら問題は無かったのだが。

「我々にも我々の決まりが有るのだ、無能には解らんかもしれんがな」

「無能だとお？ てめえ」

無能って言葉にいきり立ったラザルドさんが割り込んでくる。

あーやっぱりその呼び方問題有るよな。俺は慌てて止めに入る。

「無能と言う呼び方は改めようと言ったでは無いですか！」

「今更そんな事言われてもな」

この村長、本当に頭がド固い。なんとかして欲しいものだ。これじゃあラザルドさんの怒りは収まらない。

「はん、化け物と一緒にされるぐらいなら無能で結構だ！」

「化け物だと！」

「ちげえつてのかわよ？」

あーもう、止めようにも止まらない、もうここは幼女の魅力を使うしかないだろう。

「なんとかか！ なんとか今までの事は忘れて、二つの村で協力する事は出来ませんか？」

俺は必死に可愛いぶりっ子してザツカさんに話しかける。

「姫さまには悪いんですが、姫さま自体が森に棲む者の畏だつたのかと、そう言われてるですわ」

ザツカさんは申し訳無さそうに答えるが俺を見つめるその目にも、あの日の照れでは無く、少しの恐れと疑いが混じっている。

「護衛代をちよろまかす為にそいつと一芝居打ったんじゃないかってな」

ラザルドさんが顎をしゃくって見せるのは田中だ。とんだ言い掛かりだが、村の人はもう何も信じられなくなってるに違いない。

うー、どうしよう？ 俺の力じゃどうにも収められそうに無い。そうだ！ ザルギルコール 大牙猪の

死体でも見せれば？ 争ってる場合じゃ無いと解ってくれるんじゃない？

いや、もう死んでるしそもそも人間には関係無いか。

なんだか考えが全く纏まらない。結局、俺が原因で人間とエルフの小競り合いが始まっちゃうじゃ無いか。これじゃビルダール王国に助けを求める所じゃ無くなってしまおう。

「拗れちまったなあ、事情を説明しても元々が芝居だと思われちまったらどうしようもねえ」

田中も困ったと愚痴るが、俺が一番困っている。でも、そうか、芝居か。

もういつそ全てを芝居で有耶無耶にしてしまうのも有りか？

今の俺にはその力もある、そうだろ？

喧々諤々の話し合い、いや怒号が響く村長宅のリビングの傍らで、俺はこっそり問いかける。

「あなたの名前はなんですか？」

「私の名前は、プリルラ」

そう、成人の儀の祠で、俺は彼女の記憶を拾った。彼女は周りを利用する事に掛けては超一流。おそらく運命的には『偶然』が無ければ長生き出来た筈なのだ。

よっし、ゆつくりと彼女の知識が染み込んでくる、くっさい演技力ともこれでお別れ、口先一つで周りを振り回してやる。

……ん、んん???

ヤバい、ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい。

それどころじゃ無い！ どうすんだよコレ。

「オイ、どうした？ 腹でも痛いのか？」

田中よ、それどころじゃ無いのだ！

昨日からウオーラスだっけ？ 男が帰ってこない。

繁殖した大岩蟻螂ザルゲルネウエロと祠一杯に有った大量の卵。あれは生まれた後の殻も大量に混

じっていた！

そして、大牙猪ザルゲルゴールの死体。

やって来る、俺の『偶然』はそれらのピースを必ず嵌はめて来る。参照権で補完した魔獣の知識でも間違いない。

これは、もう人間とかエルフとかそういう問題じゃないぞ。

「待って下さい！ もつと重要な問題があります！」

俺はザツカさんと村長のガーブラムさんとの話合いに割って入る。

「何だと言うのだいきなり、邪魔だ！」

「姫さまは黙ってて下さいますか」

「……みんな死にますよ？」

「……………は？」

一同揃ってポカンと俺を見る、意味が解らんよな。だがもう一刻の猶予も無い。

「今からこの一帯で、モンスタースタンビード魔物の大量発生が発生します」

皆、今度こそ呆れた様な顔で俺を見るが、もう賽は投げられた。

戦うか死ぬかしか残されていないのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は田中と村の若い衆を連れて、ザルギルゴール大牙猪の死体を埋めた場所に向かった。俺の予感

が外れる事に一縷の望みを託してだ。

「おい、あんだだけデカかったザルギルゴール大牙猪の死体がねえぞ」

しかし、俺の望みは断られた。ザルギルゴール大牙猪の死体は無く、そして当然ウオーラスも居な

い。

食われたのだ、ザルディネフエロ大岩蠍螂の大群に。

俺の前世にして薄幸の美少女プリルラは、言ってしまえば「良い性格」をしていた。病弱であるが故に、周りの全てを利用してでも生き残ろうと足掻いたのだ、それを否定する気は無いが、殊勝な性格だとは言えないだろう。

その最期がただの自殺だと言うのが良く考えたら違和感なのだ。なぜそんな選択をしたのか？ それは彼女が自殺した理由、その年の不作とも関係がある。

不作で食料不足にあえぐ村に見捨てられた途端、少女はあの洞窟に向かった。

そう、その年もザルディネフエロ大岩蠍螂が大量発生していた。ザルディネフエロ大岩蠍螂は定期的に大量発生する危険な魔獣だ。参照権で王宮の図書室の資料を思い出せば大量発生時の危険は確認出来た。

しかし、その大量発生も通常、問題にはならない、ザルディネフエロ大岩蠍螂の幼体が大量に生まれても、餌の供給が追い付かないのだ。

ザルディネフエロ大岩蠍螂の幼体が生まれた瞬間は、田中が退治した犬サイズより更に小さく、ネズミぐらいの大きさ。

そのネズミが食べられる様な餌を、森で食べ尽くしてしまった後は？

壮絶な共食いだ、そうして数を減らし、生き残った個体もリコイ恐鳥と言われるでつかい鳥に食べられ、生態系は元に戻る。

プリルラは、自分の死体をザルディネフエロ大岩蠍螂に捧げたのだ。彼女はエルフの戦士とも関係が

有った、彼から大岩蠟螂ザルディネフエロが大量発生時は、森を焼くぐらいの気持ちで餌を無くさなければ行けないと聞いていた。

じゃあ、自分一人を食べた大岩蠟螂ザルディネフエロはどのぐらい増えるのだろうか？

そんな彼女の狙いが上手く行つたかどうかは解らない。思惑通り彼女の育つた村を道連れに出来たのか。それとも少女の浅知恵だったのか。

それは兎も角、現実として今、ある筈の大牙猪ザルキルゴールの死体が無いのだ、そして、祠で見かけた大岩蠟螂ザルディネフエロの卵、あれは田中が倒した幼体二十四程度の量では無かった。

「マズいですね……」

「何がだ？ 何が起きている？」

田中も不気味な物を感じているのだろう。連れて来たエルフの男達も同様だ。まだ大岩蠟螂ザルディネフエロの幼体が群がっている様なら、皆で駆除しようと思つていたのだが……

「村に帰りましょう、事は一刻を争います」

「だから、なんだってんだ」

「大岩蠟螂ザルディネフエロです、祠で見ただでしょうか？ 大量の卵を、恐らく千、いや下手をすれば万単位の大岩蠟螂ザルディネフエロの幼体が、大牙猪ザルキルゴールの死体を買つた」

「俺達は格好の餌を与えちまつたって訳か」

「ええ、しつかり死体を焼いておけば良かったのですが」

スコップを叩きつける青年を前に、何となくそんな気にならなかつたのだが完全に裏目に出た。もっと早く記憶を見ていれば……いや、焼いても物理的に消滅する訳じゃない。

村に運び込む必要が有ると考えればハードルは元々高かつた。

「今更言つても仕方がねえ、どうする?」

「ですから! 村に戻つて対策を立てるのです!」

俺の叫びは草原の中で虚しく木霊するだけだつた。

★戦闘配備

俺は魔法を使って全力で駆けた。ピルテ村に帰ると、あきれた事に人間と森に住む者
(……もうエルフで良いか)の会議、いや最早ただの口論が続いていた。

だが、それも俺が大岩蠅螂ザルディネフエロの大量発生を伝えるまでだ。

「はんつ、いい気味だな！」

笑うのはラザールドさん。

確かに人間にとつては関係無いと勘違いするのも解るが、既に話はこの森の中だけに
収まらない。

なぜなら俺達はこの村から撤退するからだ。俺は村長を説得する。

「こうなつてはこの村を放棄するしか無いでしょう、ソノアール村の人々の希望通りと
言う訳です」

「何を勝手に！ この村を出てどこへ行くこうと言うんじや」

「ですが、千単位の大岩蠅螂ザルディネフエロの群れがこの辺りに居るのですよ？ 既に犬ぐらいのサイ
ズに育っている可能性があります」

「うーむ、じゃがこの村の者は皆、混じり者、行くあてなどないのじや」

「ほんの一時で良いのです、そうすれば文句を言う人間も居なくなっているでしょう」

俺は意地悪な笑いを浮かべながら、ソノアール村一行を一瞥する。

思わせぶりの演技が全開だ！

「どういう事だ？ オイ」

ラザルドさんが苛立つた様に机を叩く。

「解らないみたいだなー？ 俺がどや顔で解説を……と思えば、後ろから田中が顔を出した。」

「つまり、この村に餌が無いと解った魔獣が、次に何処を襲うかって話だろ？」

コイツ、流石に現代教育を受けているだけに理解が早い。

相手はイナゴの群れだ。幼虫ならば移動距離も短く共食いしか出来ないが、犬ぐらいのサイズであれば、ソノアール村まで駆けることなど訳がない。

それが飲み込めた途端、村長宅は静まり返る。

「まさか？ 来るのかソノアールまで？ 森の外だぞ」

「外って言ってもここから精々二日かそこらの距離だろ？ 子供だつて歩ける距離だぜ、実際歩いてたんだろ？」

田中がソノアールへ通っていた少年を顎で指す。

「今までそんな事、一度も無かっただろうが！」

怒鳴るラザルドさんだけど、煽らせて貰おう。俺は上品に笑った、囀るように。

我ながら、鈴が転がるような美声である。

「森に住む者の戦士の仕事は魔獣の間引きです。帝国によつて国が滅びた今、大森林の中がどうなっているかは私にも解りません」

「何が言いたい？」

「本来こういつたイレギュラーを解決していたのが我々なのです。それが今は居ない。これは歴史上かつて無かつた事、何が起こるかなど誰にも解る筈が無いでしょう？」

俺は笑った。

楽しくて仕方が無い。自分の内側から、破滅を求める衝動が湧き出していた。

狂気の笑みを浮かべ、一つ一つ絶望的な状況を説明していく。

楽しみに、傍げに、悲しげに。歌うように披露すれば、村長も、ラザルドさんも、いままでも余裕の態度を崩さない田中だつて畏怖を抱いた目で俺を見ていた。

コレはゲームだ。勝利条件は？ 何だつて良い。負けても死ぬだけだ。

人間側で話がわかるのはラザルドさんだけだ、おれが丁寧に状況を説明すれば、その深刻さは伝わった。

「クソッ！ じゃあ俺達は引き上げるぜ、村に警戒を呼び掛けないと行けないからな」

「警戒？ 千を超えようと言う魔獣にどんな警戒をするのです？」

「はっ！ 精々足掻いて見せるさ」

無駄だ！ その時にはこの村を食い破って虫は更に大きくなっている。ならば？

「その足掻き、この村で見せては貰えませんか？」

「意味が解らねえなあ？」

「この村で我々と、あなた方で共同戦線を張るのです」

「チツ、だあれが手前えらを守るために戦うってんだよ！」

叫ぶや否や、ラザルドさんは思い切り机を蹴り上げた。

——ゴガアンと響く鈍い音と荒っぽい罵声。村の女性達は震え上がって悲鳴を上げた。

普通はそう言う反応だろう。だが、俺は余計に面白くなってきた。

その程度でビビると思っているのか？ お前の家族も目の前で殺してやろうか？

きつと俺の気持ち解るぜ？

「解りませんか？ 我々が、誰一人逃げずにピルテ村で食い止めればソノアール村は助かる。我々が『餌』となればソノアール村にはより大きくなった魔獣が襲う。もう、我々とアナタ達の村は一連託生なのです」

蹴り上げられた机を元の位置に叩きつけ、その上に膝をついて乗り上がるや、身を乗り出して覗き込む。

ラザルドさんと額を突き合わせさん距離。相手の目に映る俺の姿は、爛々と狂気に輝く瞳をしていた。

だが、ラザルドさんもさるもの。腰が引ける様子も一瞬。気丈に言い返してくる。「それで俺らに何の得が有るってんだよ？ 取引になつてねえんだよ！」

「元々誰にも得など無いのです、誰が『餌』の役をやるかと言う話、戦つて死ぬか、逃げて死ぬかです」

「だから、とつとと村に帰つて戦う準備をするんじゃないかねえか！」

「それこそ何の準備です？ ザルディネフエロ 大岩蠍螂と戦つた事の有る者が何人居ます？ 習性は？」

「大岩蠍螂なんて何匹殺したか知れねえぐらいだ！ そもそも奴らは群れたりなんざしねえんだよ」

「それが、浅慮だと言うのです。この時期の幼体は群れで人を狩る事も珍しくない。知りませんか？」

「知らねえな！ そうだとしても信用出来ねえ」

ラザルドさんが拗ねた様にどつかりと椅子に座つてしまふ。

正直言うとうと、幼体は共食いするぐらいだから群れで狩りをするつてのは言いすぎだが、圧倒的な数の暴力で全てを飲み込むのである。

と、その辺も知っているだろう、エルフであるピルテ村の面々すらも渋い顔。

「ワシらも反対じゃ、戦うにしてもコイツらとなぞ！ 獅子身中の虫となりかねん」

「はあ？ 馬鹿か？ 死にたいの？ 餌になりたいのか？」

黙ってその命を預けるよ！ 俺が効率的に使ってやろうって言うんだからよ！

「ゴミ共が、めんどくせえ」

だから、俺の口から苛立ち混じりに声が出た。あくまで小声だ。誰にも聞こえてないだろう。

俺は神経を集中させるために顔を伏せ、ゆっくりと息を吐く。

「仕方ねえやるか」

やるしかない。無知蒙昧なコイツらを操る！ 利用する！

俺にはその為の力がある！ 深呼吸を一つ。

それだけで俺はハタ迷惑に男を口説き回った少女。プリルラの記憶を呼び覚ます。

記憶が、ゆっくりと体に馴染んでいく。

「どうしても、どうしても一緒に戦う訳には行かないんですか？」

一転、顔を上げた俺はハラハラと泣いた。上目遣いに皆を見渡し、目尻には大粒の涙を転がす。

「私は一生忘れません、平和な王都エンディアンに人間が踏み込んで来た日の事を！」

我ながら大芝居。絶望の記憶を大げさに語る。

あ……田中だけは俺の思惑に気付いたのか、恐怖に顔を引き曇らせている。

コイツは昔から妙に勘が鋭い。『参照権』で急に様子が変わったことに気が付かれたとしても不思議じゃ無い。

かといつて、もはや演技は止められない。

「この村も同じ様な絶望が襲おうとしています。勿論ソノアールにだって！
大群が全てを殺すのです」
大岩ザルディネフエロ蠟螂

我ながらキレキレの演技である。全然関係無い二つの事象をむりくり繋げる。

「なんだってんだ」

ラザルドも呆然と眩くが無視。

「一緒に、一緒に戦えば立ち向かえるかも知れないのです！
もう私は、逃げてばかりは嫌なのです！」

「んな事言つてもよお」

「ザツカさん！ ザツカさんはどうですか？ この村で皆で戦うのと、人間だけで戦うのではどちらが勝機が有ると思いますか？」

ラザルドさんの説得は難しそうだ。だったら狙うのはザツカさんに決まりだ。耐性無いヤツを狙うのが常道よ！

自分でもビツクリするぐらいに華やかな笑顔で彼に微笑んだ。

訝えない村役場の男には刺激が強かったみたいで、一気に顔を赤くした。

「そ、それはたすかに、ココで戦った方が……」

「ですよね！ サンドラさんも一緒に戦ってくれますよね？」

「勿論だ！ どうせ戦うなら姫様とがええ」

「オイ！ おめえら何言ってやがる！」

ラザルドさんだけが抵抗するが、もう一押し！

「何が問題なのですか？ 報酬ですか？ 倒した魔獣の魔石をお渡しすると言うのはどうですか？」

どうせ、村からは大した報酬が出ていないに違いない、だったらどうだ？

俺はは論すようにゆっくりと語り掛ける。

「一つ一つは大した価値が無くとも千を超えるかの魔石ですよ？ 十分な報酬になるのでは？」

「んなゴミみてえな魔石に価値なんざねえよ！」

「そうなのですか？ ではどういった魔石なら価値が有るのですか？」

ザルギルコール
「大牙猪を倒したと言ったな？ そいつだったら価値があるんだがな」

「そうですか、別に構いませんよ。村を守れるなら安い物です」

「へえ」

人間にはどうか知らないが、エルフにとっては大牙猪ザルギルユールの魔石になどトロフィー的な価値しかない。

「何を勝手に言っておる！ 村の宝とするべきものでは無いか！」

だが、そのトロフィーに拘るジジイ！ 村長が邪魔すぎる！ コイツは放置して息子と話そう。

「村長の息子さん、そう、あなたです。一時的にでも村を脱出するとしてどの程度の被害があると思われませんか？」

「それは……備蓄した食料を運ぶのだけでも骨だし、なにより小規模ながら種を撒いたばかりの畑も有るんだ。全滅したとあれば次の冬は越せないよ」

それを聞いた俺は、両手で頬を包み大袈裟にシヨックを表す。

「まあ！ どうせ全滅の危険があるのなら、ここで村を守った方が結果的に得かも知れませんね」

「いや、果たして可能だろうか？」

「可能かって？ 知らねーよ！ 知らねーけど、暴れた方が気が晴れる。どうせなら派手に全てを『偶然』に巻き込んで、その威力を確かめたい。」

心配する村長の息子の手を取って、俺は励ます様に語り掛ける。

「逃げた所で被害を受けないとは言い切れませんよ？ 隠れる家も無く蹂躪されるか

も」

「……あ、いやそうか」

「でも、皆で戦えば、きつと被害は抑えられます！」

「何を言っておる！ ワシらだけで村を守れば良いじゃろうが！」

外堀は埋めた、いよいよ村長に取りかかる。俺は慈愛を込めた笑顔をたたえる。

「大丈夫ですよ！ 力を合わせれば、村長さんが大切にしているこの村を、絶対に守れます！」

「本当じゃろうな……」

やった！ 陥落した！ そう！ 偏屈なジジイどもに理屈なんて要らないのだ。

思い出を語ったり、泣き落としをしたり。そんなんで十分。

理路整然と、勝算が高い方法を説明した俺が馬鹿だった。

プリルラ先生の記憶を頼りに、気持ちを揺さぶって、子供向け番組で主人公が語る希望みたいな、スツカスカな中身の無い励ましでその場の全員を煙に巻いた。

夢と虚構でこの場を支配した。それ故に可能な茶番だ。

「それでは、魔石の件、タナカも構いませんね？」

「……あ、ああ」

最後に田中にも確認を入れるが、何故だが腰が引けている。

コイツは魔獣の群れにもビビらないし、俺が獐猛に笑つてもドコ吹く風をしていたくせに、女の武器をフル活用するプリルラ先生みたいな搦め手には恐怖を覚えるみたいだな。

まーどこでどんな経験値を溜めたか知らないが、羨ましいね。

そうと決まれば後は魔獣の対策だけ、ザルディネフエロ大岩蠍螂には壁も柵も大して意味をなさない。犬サイズの力マキリが登れない壁を築く労力を想像すりや無駄と解る。

水を張った堀なら多少効果はあるかもだが、其れだつて飛び越せる、そもそもそんな物を作るだけの時間も力も無い。

ザルディネフエロ大岩蠍螂は鋭い鎌を持ち何でも食べるがザルギルゴール大牙猪の様に体当たりで家を壊す様な真似は出来ない。

だから、非戦闘員は村長宅に避難し嚴重に戸締りをして引き籠る。

一方で、戦闘要員に必要なのは防具だ、ザルディネフエロ大岩蠍螂の強力な顎でも噛み切れない強度の防具が必要だった。

でないとなんと顎であつと言う間に細切れにされてしまう。

「つて言われても流石にコレは惜しいな」

田中がぼやく気持ちも解る。

防具として細かく切り裂いたのはザルギルゴール大牙猪の皮だ。作戦に必要不可欠とは言え、ちゃん

と加工して樹液で固めれば至上の鎧にもなる逸品だ。

それを簡単ななめし液と魔法だけのお手軽処理で、粗末な皮鎧にしてしまったのだから、皆が呆然とするのも無理が無かった。

それでもこの村で手に入るどんな防具より丈夫なのだから仕方が無い。

それよりもそんな魔法も使えて、知識も豊富な俺を褒めて欲しいね。

後は火だ、たいまつは大量に用意し、広場にはキャンプファイヤーよろしく巨大な篝火を用意した。

ザルディネフエロ

大岩蟻螂に噛まれた際は火で炙ってやれば口を離す、無駄知識かと思っていたが意外な所で役に立った。

何を勘違いしたのか、田中には「魔獣が好きなの?」とか聞かれてしまったので。

「そんな女の子が居ると思っっているのですか?」

と冷たくあしらった。

ぼかーんとしていたので胸がスツとしたね! 俺を怪獣好きの少年だとも思っていたのか? 姫やぞ!

何にせよ装備も準備も整った。ここまでやって気のせいだったら良い笑い話になるのだが、まあ無いよな。

めつつや恥を掻くけどむしろソレで頼むわ。いや、無理だろうな、経験で解る。

『偶然』は俺を見逃さない。

それは準備を始めて僅か二日後の事だった。タイミングを考えれば村人総出で逃げた場合、道中で餌になっていたに違い無い。

俺の選択は間違っていないかった。ある意味でほっと一安心。

「来やがったか」

「オイオイ俺の目がおかしくなったのか？」

「正常だよ、俺の目にも映ってる」

「無駄口は止めてください、ザルデインフェエロ総員戦闘準備ー」

森を茶色に染める程の大岩蠍螂の幼体が村を襲った。

★キチキチプリンセス2

来るわ来るわうじゃうじゃと。

ハーフェルフ達が寄り添うピルテ村。質素な暮らしを営むこの村に、団体さんのお参りだ。

大岩ザルディネフエロ蟻螂の大群であつた。

その姿は巨大なカマキリ。幼虫でも犬ほどのサイズがあり、成虫となれば人と変わらぬサイズがある。

そんなバケモノが数える気も無くす程の大群で村を取り囲んでいるのだ。周囲の森が、見渡す限り真つ茶に染まる。

魔獣の大量発生。単純に言えば、イナゴの魔獣版だ。

本来なら厳しい食物連鎖に曝されて数を減らすハズの幼虫が、ザルギルゴール大牙猪と言う格好の餌にありついた結果、恐ろしい程の大群となった。

「死ぬかな……？」

あまりの数を見て、流石に不安になる。

俺は、村で一番背が高い建物の屋根の上で戦場を見下ろす。

何も高みの見物と言う訳じゃ無い、俺は遠距離攻撃専門。群れに飲み込まれた瞬間に、魔法は健康値に掻き消され、俺は無力に成り下がる。

だから、俺のそばに敵を近づけた瞬間にゲームオーバー。ならば事前準備が大切だ。やるだけの事はやったが、ドコまで通用するか……

「アイツ次第だな……」

見下ろすのは前世での俺の親友。田中だ。

アイツはチート級の戦士として俺の前に姿を現した。

俺の所為で死んだと言うのに、再会と同時にまたぞろ厄介な事態に巻き込まってしまったな。

……だがな。悪いけど、付き合ってくれよ。

俺は、家族の、セレナの仇を取るまでは絶対に止まれないんだ。

それが親友を騙すことになったとしても。

……それにしてもこう言うの、前世のゲームで見たことあるな。

ウエーブ1開始ってか？ 2はあるのかね？

馬鹿らしいまでの不運の連続に、まるで他人事みたいな冷笑がこぼれた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「うおおおー！」

村人達の雄叫びが上がる。

「いよいよ戦いが始まったのだ。」

地面を埋め尽くす ザルデインネフエロ 大岩蠅螂の大群に対して村人の武器は？

鍬くわであった。

これは俺の提案。敵の主力は幼体なのだ。犬ぐらいのサイズである。

動きは犬ほど速くは無いが、体は軽く、顎の力は侮れない。

剣で切ろうとしても、体が軽すぎて致命傷を与える事は難しい。

ならば、叩き潰す様な武器が適格だ。鍬ならば弱点の首を切り落とすことも可能。

なにより農民が主体の彼らにとって、使い慣れた得物が一番。その証拠にトツプスコ

アはサンドラのおいちゃんだ。

「ほっ！ ほっ！ ほっ！」

地面を耕す勢いで ザルデインネフエロ 大岩蠅螂の死体を量産している。

「クソツつたれ！ 多過ぎだ！」

一方で苦戦しているのはラザルドさんだ。得意の弓など役には立たない。鍬を手にも彼も地面ごと魔獣を耕しているが、慣れない獲物に戸惑っていた。

「うおおお！」

そして旋風の様に魔獣をなぎ払うのが我らが田中だ。頼もしいね。

とは言え、剣で膝丈の幼体を狙うのは効率が悪い。彼の役目は別にある。成虫を殺す役だ。

ザルディネフエロ大岩蠍の成虫は人間並のサイズ。人間サイズのカマキリがどれほどの力を秘めているか、考えるまでも無いだろう。

俺も上空から成虫の間引きを行っているのだが、取りこぼした分が村人に迫ったら田中がメイン盾として出陣する。その動きに隙は無い。

田中は鋭い鎌の一振りを躲すと、返す一閃でその両腕を切り落とす。成虫の体は鉄の様に硬いにも関わらずだ。

しかし、コイツらの武器はそれだけでは無い……

——ガキイイイン

危ねえ！ 上から見てても肝が冷えた。

田中の眼前で金属音を響かせたのは……顎！

鉄板をもちみ砕く鋭い顎が田中の顔面を切り裂く寸前、仰け反ることで難を逃れていた。

「芸がねえんだよお！」

オイオイ嘘だろ？

田中は叫ぶと同時にザルディネフエロ大岩蠍の首根っこを引っ掴み、地面へと叩きつけた。

すかさず剣を突き刺しトドメ。

獣染みた戦い方、人間離れた贅力だ。

——シユツ！

だが、俺だつて見ているだけじゃない。

オモチャみたいな弱弓ながら、屋根上から大岩蠟螂ザルディネフエロの成虫をスナイプしている。

——バシユツ！

そんなんで通常、鉄みたいな大岩蠟螂ザルディネフエロの外骨格を貫けるハズが無い。

だが、俺には魔法がある。呼び水となる瞬発力さえ得られれば、ソレを数倍の力にして制御し、逃れ得ぬ一撃をその首筋に叩き込む。

俺が一矢放てば、確実に成虫の首が一つ飛んだ。

成虫さえ間引けば幼体は体も柔らかく、村人でも対処が可能。これで時間が稼げるはずだ。

しかし、ソコに逼迫したラザルドさんの声が響いた。

「オイ！　そこに居るぞー！」

「クツ」

大岩蠟螂ザルディネフエロはデカいカマキリだ。そのメイン戦術は当然だけど『待ち伏せ』。

田中はマンマとその罠に嵌まったようで、物置小屋みたいな建物の陰で奇襲を受けて

いた。目にも止まらぬ速度で伸ばされた両腕の鎌に、ガツチリと掴まってしまふ。

「マズイ！ 魔獣の力は人間の比では無い、巨大な昆虫のソレ！ 一度掴まればどんな戦士でも抗う術は無い！」

「痛てえじゃねえか！ クソツ！」

「嘘だろ？ 抗ってるじゃねーか！」

田中はガツチリとその鎌を握り返した。恐るべき事に、田中は魔獣の膂力に負けていない。

だが、流石に圧倒する程では無いらしい。一瞬の膠着。

「助けやがれ、トンマ野郎！」

「んな暇無えよ間抜け！」

叫んでラザールドさんに助けを求めると、ソツチも当然に手一杯。

「ココは俺の出番かな？」

——シュツ！ バシユ！

実のところ、ここから100メートル近い距離があるのだが、魔法で制御可能な弓矢に距離など何の関係も無い。

「コロンと大岩^{ザルディネフエロ}蟠螂の首が落ちて、田中はその腕から解放された。」

「だらしねえな」

俺は小声でその無様を嘲笑する。

なーにがパパと呼べだ！ そんなんじや呼んでやらない！

今生の俺のパパはな、エリプス王の伝説なんて劇になるほどの勇者なんだよ。

もつとずつと強い魔獣に囲まれたってバツタバツタとなぎ倒していたんだ、その程度の実力でパパを名乗って貰っちゃ困るんだよ！

死んじまつたけどな。俺の『偶然』に巻き込まれて。

……だから、お前は死ぬなよ。

助けられた事を悟った田中は、俺の姿を探していた。

コチラに気付き見上げる顔には、闘志が漲り、不敵な笑みさえ浮かべていた。

戦闘ジャンキーめ、俺に戦いを挑みそうな有様だ。残念ながらアイツは長生き出来そうに無い。

ま、精々俺の目の前で死なないでくれよ。

見渡せば戦況は最悪だ。圧倒的な物量に押し込まれている。

「プランBと行くか！」

俺はオイルが染みた布を巻き付けた矢を取り出し、火を付けてギリギリと引いた。

火矢だ！ 狙うのは村をぐるりと囲む柵！

——シュッ！

放たれた矢は柵に命中。木で出来た柵とは言え、通常はすぐに燃え上がらない。だからココには一工夫。

——ゴオオオ

燃えた！ 何故か？ あらかじめ柵にも油を塗ってあるからだ。

本来村を守る柵に対して火を放つ暴挙。上手く着火したとして、ぐるりと火に取り囲まれるリスク。

作戦を伝えれば、正気を疑われるハメになったがそれでも俺は強行した。

時間稼ぎに最適だからだ。

何故、時間稼ぎが必要かというと……

俺は必死に北の空を見つめる。

「まだ？ まだかよー！」

俺は勝利の悪魔を神に願った。

★キチキチプリンセス3

柵に放った火は延焼こそしなかったが、燃え尽きた後はスグにまた進行が始まった。もう柵は無いし策も無い。

ウエーブ2の防衛は厳しい事になりそうだ。

村の家は木造。火を使うのは最後の手段と決めていたのだが、この期に及んでは仕方が無いと村人達も火を使い始めた。

松明を振り回し、へっぴり腰で逃げ回るザツカさんが見えた。役所の人間には荷が重い事態か。

田中は田中ザルディネフエロで大岩蠟螂の成体の相手で手一杯。幼体には手が回らない。

成体と違い、幼体には人を一瞬で殺す様な危険は無い。

それでも幼体の家々の屋根に登って、俺の足元まで来たら魔法が封じられゲームオーバー。

だから幼体退治は大事な仕事。村人が減ると俺の死期は確実に近づいている。

だが、思ったよりも被害は少ない。幼体でも大岩蠟螂ザルディネフエロの顎は十分に強力だと言うのだ。

その秘密は大牙猪の皮から作った即席の防具にあつた。

エルフの戦士達の垂涎の的である強固な皮、それを雑に使つて作った防具は低級な魔獣の攻撃を十分に退けていた。

足元を守るブーツやズボンを補強するだけで、足を切り裂かれる事態を防げたようだ。

ザツカさんがブーツに食らいついた幼体に松明を押しつけている。

おおっ！ 俺の教えを守っているぞ。

ザルディネフエロ大岩蠅螂は、火を押しつけることで顎を緩める。噛み付かれて離れない場合を考えて教えたのだが、悲しいかな皆は半信半疑と言つた様子だつた。

どうやら俺の知識は間違いがないと、ようやく皆が飲み込めた様だつた。

「キエエエエ」

田中の猿叫に振り返ると、ザルディネフエロ大岩蠅螂の首がコロンと転がる所だつた。

スゲエな、後は任せても良いか？ お手々が痛いのに！

「ハアハアハア」

駄目みたい……：ぜえぜえと肩で息をしている様子が見て取れる。

このままでは押し込まれるのは時間の問題。

こうなれば決死のプランC発動だ！

俺は魔法を使い、村長宅の屋根から飛ぶ。屋根から屋根へ、魔法で飛び跳ね目的の建物まで到着！

獲物を見つけたと幼体が登ってくるより早く、ログハウスみたいな民家、その支柱を風の魔法で断ち切った。

——ガララララ！

屋根の丸太がゴロゴロと転がり落ちていく。丸太の雪崩に巻き込まれたのは、俺を指して壁を伝って登っていた幼体達。

グチャリと挽きつぶし、更に村のメインストリートまで溢れ出す。そこにビッシリと詰めかけた幼体達も次々と巻き込んだ。

「オマケだー！」

さらに火矢を放って着火！ 実は屋根にも油を撒いていた。

ギヤアギヤアと虫どもの悲鳴が上がるのが小気味良い！

……アレ？ 虫じゃない悲鳴が？ どうやらこの家の持ち主だった夫婦の声。

黙っててごめん！ 油まで染みさせて初めから燃やす気でした！

でも、教えたら止めたでしょ？ だから不意打ちでござる。皆で死ぬより良いじゃん

？ 良いよね？

「アハハハハ」

俺の口からキチガイみたいな哄笑が溢れ出す。

いよいよ楽しくなってきた。命がけのギャンブル。だが、予想は全て当たっている。何故か？ 最悪を想像すれば、ソレが必ず正解だ！

笑うしか無いだろうこんなモノ！

よく見れば、村人達は畏怖を抱いた目で俺を見ていた。

無理も無い、我ながら完全にネジが外れちまっている！ でもな、マトモじゃ決して生き残れないんだよ！

俺は追加でいくつかの家をバラすと、残らず火を付けて回った。

キレイに村への侵入ルートが潰れ、渦巻く煙を嫌がり虫たちの侵攻は再びの一服を見せた。

全ては計算の上。女子供は全員、既に村長宅に避難して貰っている。

こう言うチャンスにしっかりと押し返すのが戦争での勝ち筋だが、村人にそんな余力は残されていないかった。

「よおし押し返すぞー！」

いや、田中だけが一人気炎を上げていた。しかし、ラザルドさんを初め、他の面子が続かないようだ。

「ゲホツゲホツ！ 馬鹿な事言ってるじゃねえ！ このままじゃみんな焼け死んじまう

！」

「よく見ろ、延焼しない様、巧みに計算されている、火に囲まれることは無いぜ？」

あの戦いの中、ソコまで気が付いた田中は流石だ。だが、他の面子はお前程丈夫ではないと思うよ？

「だからつてこうも煙くちや戦いどころじゃねえ」

咳き込みながらラザールドさんが言い返す。

それもそのはず、虫が引くほどの煙では人間だって打って出ることとは不可能なのだ。

だとしたら煙が引けばまた大岩ザルディネフエロ蟻は襲って来るだけだ、何も解決していない事になる。

皆その事に気が付いていた。それだけに追い払った喜びよりも訪れた空白の不安が大きい、奴等はまた来ると。

だが、俺の計算では追加の絶望が来る。

対処不能の絶望にはどうするか？

絶望には絶望をぶつけるのだ！

青い顔をして絶望を噛みしめる彼らの前、俺は颯爽と舞い降りた。

「被害は!?!」

「ゴホッ、喘息患者が一名だ!」

ラザルドさんの愚痴は無視。元氣あるじゃん？

「無事なようですね、何よりです」

死者は無し。望外の状況だ、一人か二人は死ぬかと思っていた。

なのに気にくわないと文句を付ける馬鹿な村人がいる。

「村あぶつ壊してどーするつもりだ！」

「死ぬよりはマシでしょう」

ザルディネフエロ
大岩蠍の餌かホームレスの二択。お前は餌派か？

彼らもソレは解っている。解っていても希望が見えないから苛立っているのだ。

だったら俺が絶望を教えてやる。その先に希望があるのだから。

宣教師になったつもりで、俺は村人に祈りを請う。後は祈ることしか出来ないからだ。

「皆さん、後は我らの神が天から舞い降りるのを祈るだけです」

俺は一段高い所に立ち、両手を掲げて天を仰ぐ。両手を合わせて祈りを上げる。

神々しいまでに美しいだろう？ 神様お墨付きの体だ！ 泣けよ！

実際に、感極まって泣きじやくる村人達。そんな中で田中だけはつまらなそうに舌打ちをした。

「オイオイここへ来て神頼みかよ！」

苛立ち混じりの罵声が飛んでくる。こっちは神に縋すがる幼気な少女だよ？ それは無
いんじゃない？

お前だつて神を見ただろうに、罰が当たるぜ？ 俺もアイツを信じてないけどな！
俺の神は別に居る！ 後は祈れば良いのさ。

「いけませんか？ 神は平等です、誰の元へも訪れる。祈りの一つでその確率が上がる
と言うなら安い物です」

「チツ、どの神に祈つたつてご利益はねえと思うがな」

「我らが祈る神は、女神セイリンでも、ましてや森の妖精でも有りません」
では何に？ そう呟く誰かの声は、他の誰かの悲鳴にかき消された。

俺が信じるのは神をも欺き死へと誘う『偶然』だ！ それがいよいよおいでなすつた
！

急に日差しが陰り、辺りが暗くなったのだ。まだ日の入りには早い時間。

俺以外、皆、一齐に空を見上げた。見上げなくても、俺だけはそこにあるモノを知つ
ている。

……空を蠢く無数の影！

「時が来ました」

俺は滔々と語る。神話の一節の様に。

もったいぶった動作で天を指差し、宣言する。

「あれこそが我らが神、恐鳥リコイの群れ！」

ああ！ 絶望だけは俺を裏切らない！

笑顔が内側から溢れるのが解る。新たな絶望が村を襲う。マヌケ面を曝す村人に、俺は笑いが止まらなかつた。　　ホラ！　　笑えよ！

キチキチプリンセス4

恐鳥リコイとは何か？

一言で言うとは、巨大な鳥である。

巨大なカマキリが居るんだから、巨大な鳥だつて当然居る。

そんなモノが、空を覆い尽くすほどに飛来したらどうなるか？

「皆さん！ 家に隠れて！ 今すぐ」

メチャクチャヤベーつて事だ。

思い通りに行かない事だらけの人生だが、常に最悪が来ると仮定すれば、その予想は全て当たった。

恐鳥リコイの襲来に至つては若干気持ち良くなつて、芝居がかった中二病が発動し恥ずかしい限り。

本当は即座に家に隠れるべきだったのだが、どうしたつてドヤ顔を披露したいと言ふ、危険な承認欲求を抑える事が出来なかつた。

恐鳥リコイの襲来、それはありうる限りの最悪事として常に頭の片隅には有つた。

エルフは魔獣を間引いて大量発生が起ころぬようにしているが、それでも人里離れた

僻地となれば防ぎようが無い時もある。

そんな僻地に、無数の恐鳥リコイが飛来する様子は度々確認されている。

地球でも、イナゴが大量発生したと思つたら、どこからともなく鳥の大群が現れてイナゴを食い尽くしていった……なんて話を聞いたことがあるが、近い事が起こつていたのではないだろうか？

そんな大量の巨大な鳥たちが、普段はどうやってエネルギーを賄っているのか？ 想像に過ぎないが、魔力が濃い場所に留まり、大気中の魔力を糧にしているのではないだろうか？

魔獣の体は巨大だが、ソレを賄うだけの餌が広大な大森林とは言え早々転がっているとは思えない。

思えばエルフだって、体格の割にかなりの小食であつた。

そこへもつてきて帝国が大森林のど真ん中、魔力を阻害する霧をブン撒いた。

するとどうなるか？ 俺達が倒した大牙猪ザルギョルみたいに、霧を嫌がり逃げ出すはぐれ個体が現れる。

いや、翼を持つ鳥であれば、はぐれ個体も何も無い。屁をこいた奴から逃げる様に、気軽に霧の範囲から一斉に逃げ出すのは想像に難くない。

だとすれば何処へ逃げるか？ 一番怪しいのは魔力が多い場所だが、大森林の奥程に

魔力に溢れた場所など中々無い。

だったら他に行く場所は？

餌が豊富に有る所だろう！

そしてその餌がココには無数に有る。

ザルディネフエロ
大岩蠟螂だ！

奴らは必ず現れる。厄介事を招く事に関しちや俺の『偶然』は本当に頼りになるのだ、毒を以て毒を制す！ これしか無い！ そう思っていた。

——ブーブーブーブー

聞こえてくるのは恐鳥リコイどもの無数の鳴き声。

このブーブー鳴いてるのは確かドーガーと言う恐鳥リコイの一種だった筈。デカいのだと家と同じぐらいのサイズがある。

そんなのが大量に空から飛来する様は悪夢でしかない。

空に蓋をするように、羽毛布団がのし掛かってくるような圧迫感と違和感。

空気すらジツトリと重く感じ、遠近感が壊れ、自分が小さくなったような錯覚を覚える。

よく見れば俺が昔ムシャムシャ美味しく頂いたブーブー鳥にそっくりだ。

こんなモン、よく見りや完全に魔獣じゃネーか！ こんな喰うヤツはどうかしてる

!

問題は今度は俺が喰われる番ってこった。

「窓も！ 全部閉めて！ 補強してください！」

一緒くたになって、丈夫そうな一軒家に滑り込んだのはラザルドさんと、サンドラさん、エルフの男が二人と、そして田中だ。

田中の奴、護衛として職務に忠実で感心しちゃうね。その活躍ぶりもちよつと頭のネジを疑うレベルだ、適当に剣を持ってぐるりと回ったと思つたら、周りの幼体がバラバラと斬れて行くのは最早笑うしか無いだろう。

挙句、成体の大岩蠅ザルデインフエロと力比べをして遊んでるのには呆れ返った、どんだけ馬鹿なのかと問い詰めたくなる。

まあ本人は必死だったのかも知れんが、人間の範疇のギリギリ外に居るんじゃ無いか？

何にせよ、全ての予想は当たった、後は事態がどう収まるかだ。俺達が恐鳥リコイの腹に収まるって展開だけはなんとか回避したい。

心の中で上手い事言つた気になっていた俺に、食って掛かるのはラザルドさんだ。

「何だあの鳥どもの大群は！」

「恐鳥リコイです、知りませんか？」

「あんな大群見た事ねえぞ！」

「あれだけ餌が有るのですから、大森林中の恐鳥リコイが群がるのも道理でしょう」

「こうなる事まで解つてたつてののか？」

「二つ、餌となる大岩蠟螂ザルディネフエロの大群、一つ、恐鳥リコイの群れが居る大森林で使われた帝国の秘密兵器、一つ、私が派手に上げた狼煙、こうなる可能性は十分に有りました」

「てめえ！ 正気か？ 俺達まで食われちまうぞ！」

——あーぐだぐだうっさいなあ、俺は笑顔でラザルドのおっさんに近づくと、トントとその胸に人差し指を突き付ける。

「虫に食われるか、鳥に食われるか。それだけの違いでしょう？」

ニヤリと我ながら凶悪な笑顔で睨み返してやると、ラザルドさんは滑稽な程仰け反った。

「……狂つてやがる」

「恐鳥リコイはその活動範囲が広い、大岩蠟螂ザルディネフエロと違い森の全てを根こそぎ食べる前に他へ移動します」

「何が言いたい」

「恐鳥リコイ達が満足し、この村を離れば、取り敢えず危機は去つたと言えるでしょう」

とは言え俺もそこまで事が上手く運ぶとは思っていない。だがそんな時でも楽しそ

うな男が一人。

田中だ。

「だつたら鳥共に、俺たちや簡単に食えねえぞつて教えてやりやー良い訳か？」

「はい、その通りです」

田中の言葉に、俺は頷く。流石物分かりが良くて助かるね。お前が食われて、どうぞ

！

「で？ 何かやる事はあんのかよ？」

ラザルドさんもなんだかんだ肝が据わっている、やるべき事を探し始めた。

……いや、真つ先に慌てたふりをして質問を重ね、周囲に状況を把握させる。そんな

道化を演じる事で場を収めたとしたら、流石は熟練の冒険者と言った所か？

「特にやる事は有りません、家の中で休息、ただし警戒は怠らない様に」

「どういう……」

——ズガアアン

ラザルドさんの言葉は家を揺らす轟音に遮られ、悲鳴と怒号が巻き起こる。

「何が起こった！」

誰かが叫ぶも答える声は無い、いや、唯一田中だけがその正体を見切っていた。

「居るな」

天井を見上げ眩く、そうか、屋根に恐鳥リコイが止まったのだ！ その体重で家が軋む。

「どうするよ？ 姫様？」

「皆さん！ 柱の側に！ 家が崩れるかも知れません！」

「だな、ほらコツチに來い！」

田中が恐慌に陥ったエルフ二人の襟を引き摺り、内壁まで引つ張った。思わず柱と言ったがこの家は壁で支える構造、それ故内壁の辺りが最も丈夫と思われた。

——ゴオンガアアン、グギャーブーキーイイ

家の中央で肩を寄せ合った俺達だが、外からは物騒な音が繰り返されている。家を叩く音、恐鳥リコイの鳴き声、大岩ザルディネフエロ蠍の悲鳴。

休めなど言ったが、これで休める奴はそれこそネジが飛んでいる。

「クソツ何時までこうしてりや良い？」

「スース——」

愚痴るラザールドさんに皮肉の一つも返そうと見返せば、穏やかな寝息を立てる田中が視界に映った。

……居たあ！ 飛んでる奴居たあ！

「チツ、コイツも大概イカレてやがる」

「……それは間違い無いでしょう、人間にはこれほどの戦士が居るのですね」

「んな訳ねえだろ、こんなのは例外だ！ 例外！ 人間なのかも疑わしいね」
……だよな。神も大概はつちやけ過ぎだろうよ。

大半の村人は、不安を隠さず十二の俺に縋り付く有様なのだから。

「姫さまよお、おらたちはココで化け物に食われて死ぬんだか？」

「……サンドラさん、それは私にも解りません。後はこの家が保つ事を祈りましょう」
おいちゃんも不安になっている。今やる事は気配を消して家の中でジツとする事だけだ。

それ程長い時間を待たず、辺りは静かになる。しかしその静寂は事態の解決を意味して居なかった。

グリフォン襲来

……静かになった。

外はどうなった？ この粗末なログハウスが保つてくれたのは僥倖きようじょうだったが、非戦闘員を詰め込んだ村長の宅の様子が知りたい。

「どうなった？」

「恐鳥リコイ達は消えたのか？」

部屋の中は締め切つて真つ暗だ、誰かの声があるが、答える者は居ない、誰にも外の様子は解らない。

「魔法で何か解るか？」

「いえ、時折大岩蠟螂ザルディネフエロの悲鳴が聞こえてきますが、それだけです。死にかけの個体が呻き続けて居るのでしょうか」

「そうか」

恐鳥リコイの鳴き声はもう聞こえてこない。だが、息を潜めている可能性は有る。

俺は継り付く村人を遠ざけ魔法を使ったが、部屋の中央に寄り添う状況では限度があつた。

健康値に減衰されて集音の魔法の精度が甘い。

「窓、開けるか？」

「そうですね、『我、望む、ささやかなる光珠よ』」

俺は小さな蛍火を部屋に浮かべた。真つ暗な部屋ならこれで十分、そろそろ俺の魔力切れが近いつてのものもあつて、省エネ運転だ。

田中は木窓の門を外すと、深呼吸を一つ。

「行くぞー！」

取手に手を掛け、一息に開け放つ。

……開かれた窓の先に有ったのは、ただただ黒い円だった。

その黒い円が、巨大な目で有る事に気が付くのに、その場の全員が一瞬の時間を必要としてしまった。

——ドツドードードー

「閉めて！ 早く！」

叫んだものの遅い、恐鳥ドーガーの嘴が窓枠に差し込まれ、抉る様に壁を壊して行く。

「離れろ！ オラー！」

「どいて下さい！ 『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

田中が剣の鞘ごと、その巨大な嘴に叩き付けるがビクともしない。俺は呪文を唱えそ

の嘴の中を狙う。

「オラッ！」

それを見た田中が嘴の隙間に剣の鞘を突っ込むと、俺はそうして出来た嘴の隙間に、すかさず魔法の矢を放つ。

——シユツ、ブシユツツ

——ギキイイイ——

湿った破裂音、今までの低い鳴き声とは打って変わった、甲高いドーガアの悲鳴。

恐鳥リコイは空を飛ぶ為か、他の魔獣よりは軽く脆い、口の中を狙った一撃は上手く行けば致命傷。

「行くぜ！」

だからと言って躊躇なく窓から追撃に飛び出す田中の行動は、どう考えたって真似出来そうにない。

その姿を見失わんと、窓から身を乗り出す。

……雪？

すっかり様変わりした村の姿に愕然とする。

外は真っ白に染まっていた。現実感が伴わないその光景に俺の頭まで真っ白になる。

しかし、幻想的で美しいと感じたのも数瞬、その思考は酷い悪臭によつて引き戻された。

「コレは……雪では無く、フンですか」

村全体が鳥小屋に突つ込んだ様な物、その独特の匂いは気持ちが良い物では無い。それでも哺乳類の糞に比べれば大分マシな匂いでは有るのだが……

——ドッドー、ギ、ギイイ

我に返つて田中を見れば、ドーガーの翼と嘴を掻い潜り、剣の一振りでその喉を掻つ切る所だった。

仰け反り倒れる恐鳥^{リコイ}、その衝撃で吹き飛ぶ白い液体、それとコントラストを成す剣を構える黒尽くめの剣士。

この悪臭さえ無ければ！　これが糞でさえ無ければ！

きつと、名画として飾って置きたい位の惚れ惚れするほどのワンシーン。

もしコレを描くなら、作家もしくは扱う画商は『雪原での死闘』などとタイトルを偽装する必要があるだろう。

俺は興奮気味に窓越しに声を掛ける。

「お見事でした！　ご苦勞様です」

「ありがとよ、だが糞塗れだ」

うん、うん。嬉しいねえ。

なんでって？ 前世では鳥の糞の餌食になるのは俺ばっかりだったのだから、田中もその分のウンを蓄えような、強く生きて欲しい。

「外の様子は？ 恐鳥リコイはどの位居ますか？」

「見える範囲にやいねーな、村長の家も壊されちゃいないみてーだ」

蜘蛛の子を散らす様に逃げた大岩蟪螂ザルディネフエロを追って行ったか？

ジツとしていても仕方が無い、外に出て様子を窺いたいが、魔力の方が心許ない。矢に至っては残り一本だ。

「皆で外に出ましよう、村の様子を確かめなくては」

……申し訳無いが、最悪皆には盾になって貰う。

田中も、ラザルドさんもサンドラのおいちゃんも、ハーフエルフの二人だって殺したい訳じゃ無いが……もう何が起るかは俺にも全く予想が付かない。

家を出た一同は、数刻で白く染まった村の景色に絶句していた。

「雪景色ならぬ糞景色たあな」

ラザルドさんの悪態もキレッキレだ、サンドラさんもこの悪臭には参ったよう。

「クツせえんだ、鳥の糞は肥料にできれば、ええ肥料になるんだべが」

「そうなのですか？」

「んだども、村ん中じあ臭あてかなわんべ」

そりやそうか、掃除が一大事だなこりや。

「穴さ掘つて埋めるしかないつぺ」

「あつ！ ちよつと！」

そう言つてスコップ片手にサンドラさんは広場へと駆けだしていく。それを危ないと止めようとしたその時だ。

——ビイイイイ

どこからか低い笛の音が鳴つた。その正体が何かと考える間もなく大きな影が俺達を追い越すと、サンドラのおいちゃんが空高く舞い上がる。

——ギヤアアアア——

おいちゃんの悲鳴、その肩には深々と鳥類の足の爪が突き刺さっている。だがその正体は先程倒した恐鳥リコイでは無い。

その正体は妖獣。魔力で突然変異した最悪のバケモノだ。

様々な動物の特徴をこつた煮した、いわばキメラ。一口に妖獣と言えど、突然変異の産物なので決まった姿を持たない、コイツ等ばかりはエルフの百科事典でもその種類を網羅出来ていた訳では無かった。

でも、俺はコイツを知っている。ファンタジーでコイツが出ない物語の方が少ない、

それぐらいメジャーな化け物に其れは似ていた。

「グリフォンかよー！」

田中が叫んだ。そう、その妖獣は鷲の上半身とネコ科の下半身を持つていた。正しくファンタジーの定番生物である、グリフォンとしか思えぬ姿を空に浮かべて悠然と飛んでいる。

平時なら感動し、その姿を目に焼き付けようとしただろう。

だがそれも、その鷲の前足でサンドラさんを空高く持ち上げていなければだ。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

残りの矢は一本、外せばサンドラさんは持つてかれるし、当たってもこの高さから落ちて無事では済まない。

でも俺には回復魔法が有る。怪我は治せばいい、だがグリフォンに連れて行かれたらあるのは確実は死だ。

「ハアハアハア」

短い呼吸を繰り返しながら狙いを定める、魔力切れが近い、目が霞む。

——シュツ！——ビシイ

——ビイービイイイ

それでも俺は、かなりの魔力を矢に込めた。その甲斐あつて放った矢はグリフォンの

前足に見事命中する。

しかし、その前足を吹っ飛ばすつもりの一矢は血を流す事に成功したものの致命的な一撃とはならなかった。どうやら見た目以上に固いらしい。

それでもサンドラさんを取り返すと言う目標は達した、痛みに怯んでその前足の力を緩めたのだ。

……だが。

「ギャアアアアアア」

「クソツッ！」

サンドラさんの悲鳴と田中の罵声が重なる。

飛んでいるグリフォンから解放されても結果は上空からの落下、とは言えサンドラさんの抵抗の甲斐あってまだ6メートル程度の高さ、打ち所が悪く無ければ、回復魔法を使えばまだ間に合う。

俺はサンドラさんの元に駆け付けなるべく走り出す。

「オイ、待て！」

その俺の肩を掴んで引き寄せる者が居た、田中だ。

「何です？　すぐに治療しないと手遅れになります！」

「よく見ろ！　ありゃあ毘だ」

「罨？」

指差す先は苦しむサンドラさん、今すぐ治療しないと……いや。

「広場に落としたり、それが敢えてだと言うのです？」

「物分かりが良くて助かるぜ、あそこなら邪魔な障害物が無い、空から襲い放題だ」

まさかあの鳥頭にそんな知能が？　しかし相手は妖獣だ、その知能だって見た目通りと限らない。

「俺の故郷の言い伝えで聞いた魔獣にそっくりだ、空を飛び高い知能を持つグリフォンって伝説のな」

確かにそう言う作品も多かった、それにしたって……

「じゃあ、サンドラさんは見殺しですか？」

「そうは言ってねえが、姫様、残りの矢は？」

「ありません、魔力も心許ないです」

「そう言や顔色がわりいな、大丈夫か？」

俺は無遠慮におでこを触る田中を無言で押しのけ、必死に無事をアピールするが、大きな魔法は使えない程度に疲弊している。回復魔法がギリギリ使えるかどうかだ。

——打つ手が無い！

そうこうしている間にもサンドラさんの悲鳴は弱々しい物に変わって行く。

田中の言葉を証明するかのよう
に、広場を睥睨するようにグリ
フォンが上空を旋回して
いた。

グリフォンを撃退せよ!

「クソツッ! どうにもならねえのかよ」

焦りを含んだ田中の呟き、それはそうだ、目の前でサンドラさんが死のうとしている。だけど俺達はそれを指を唾えて見ている事しか出来ないのだ。

広場の真ん中で苦しむサンドラさんは上空から投げ落とされ、大怪我でのたうち回って苦しんでる。

だが、助けには行けない! ヤツが上空から俺達の出方を窺っているからだ。

その目には確かな知性。恐鳥リコイの群れもヤツが率いているに違いない。

もう田中の言う事を信じよう。コレは罠だ! 助けに行けばたちまち上空から襲いついて来るに違いない。

居るハズが無い空想上の幻想生物。なのにそれが目の前に居る!

グリフォンだ! グリフォンがこの広場を監視するように旋回している。障害物が無い広場のど真ん中、あの質量にぶちかまされたら命は無い。

「俺に任せときな」

膠着すると思われた状況で声を上げたのはラザルドさんだった。手にはソノア

ル村で見た、あの太弓が有る。

そうだ、ラザルドさんの本来の得物はこの太弓。

「今撃ち落としてやる」

引き絞られた弦はギリギリと低い音を立て、番えられた矢は太く大きい。構えた両腕には血管が浮かび上がり、見た目通り、いやそれ以上の強弓だと言うのが窺い知れた。

フウーーーー

息を吐きゆっくり狙いを付けていく。巨大な体を持つグリフォンだが飛ぶ相手に当てるのは並大抵ではない。ましてやラザルドさんは魔法を使えない、俺の様に魔法で狙いを補正したり出来ないのです、弾道だって計算しなければならぬ。

——ビィィィン

「クソッ！」

放たれた矢はグリフォンの尻尾をかすめて行く、やはり飛んでいる相手に当てるのは難しいのだ、めげずにラザルドさんは二矢目を番える。

フウーーーー

——ビィィィン

「やったか！」

今度こそ矢はグリフォンへと突き刺さる軌道を取った、……そして。

「嘘だろ！ 弾きやがった」

グリフォンはその後ろ足で矢を蹴とばして見せた、完全に見切られている。

「なんて野郎だ、俺の弓が効かないだ」と！

ラザルドさんは呆然と眩く、恐らく自分の弓に絶対的な自信があったのだろう。しかし相手は彼の経験に無い様な化け物だった。

となると、そんな化物との戦闘経験が有るのは田中だけだ。

「見切られてるな、それにまともに当たった所で効くかどうかは解んねえぞ」

「んだと！」

「俺が妖獣殺しと言われてる事は知ってるだろ？ かなり近距離でボウガンのボルトを

命中させても大して効果が無かったんだよ」

「じゃあ、見本を見せやがれ！ 妖獣殺しサマよお」

「俺がやったのだから、これほどの大きさじゃ無かった。それに俺を殺す事しか考えられないぐらいの脳足りんだったから、どうとでもやれたんだ、しかしアイツは……」

見上げると悠々と飛ぶグリフォンの姿が見える。いや、余裕なのか俺達が見つめる中、悠然と広場を見渡せる屋根の上に止まった。

狙って見せろと誘うような、その目には明らかに知性の色が有る。

「憎たらしい野郎だ、こつちを見下していやがる」

田中の声にも悔しさが滲むが彼には攻撃手段が無い。対して手段が有っても効果が
出せないラザルドさんは怒りが抑えられない様だ。

「舐め腐りやがって、今度こそぶち抜いてやる！」

目を充血させ、顔まで赤くし怒り狂ってるがこれでは相手の思う壺だ。

「待って下さい、これが最後のチャンスかも知れませんが、ラザルドさんの矢に私の魔法
を載せましょう」

「……んな事、出来んのか？」

俺の提案は一か八かの物、しかし今はそれに賭けるしかない。

「私に呼吸を合わせて下さい、それで魔力が載ります」

「呼吸を？ それだけで良いのか？」

「はい、矢を番えて、準備が出来たら合図をします。それから矢を放って下さい」

ラザルドさんには膝立ちで弓を構えて貰い、俺がその背中に覆いかぶさるように圧
し掛かる。

呼吸と心音を合わせて魔力を載せる。田中とだつて出来たんだ、ラザルドさんとも
出来る筈。

フウーーーー

二人で大きな深呼吸。そしてギリリと強弓が引き絞られる音。

……だが。

「オイ! まだか!」

「まだ! まだです!」

しかし駄目! 魔力が載らない! 思えばサンドラさんも田中も俺を受け入れてくれていた、それに引き換え俺とラザルドさんにそこまでの信頼関係は無い。ましてや今のラザルドさんは興奮し、怒り狂っている。

今も、狙いを付けるグリフォンが屋根の上、その後ろ足で頭を搔いているのが見える。完全にこちらを挑発しているのだ、これで冷静になどなれる訳は無い。

「いつまでだ! いつまでこうしてりゃー良い!」

ラザルドさんの怒号。そりやそうだ、こんな強弓、引き続けるだけで力が要る。

……どうする? どうするんだ? 海千の冒険者の心を一瞬で開く方法なんて俺には無い。

いや、俺には前世の記憶が、人を誑かして生きて来たプリルラさんの記憶がある。

俺の精神が削られる思いで気が進まないが、会議を纏めた時に続いて彼女の力を借りるしか無いだろう。

プリルラ先生! やっっちゃって下さい!

参照権でプリルラの意識を掘り返していく。俺の中にしたたかな少女プリルラの記

憶がゆつくりと染み込んで行く。

……

……

……いや、マジか？ マジなのか？

「オイ！ もう良いか！ 放つぞ！」

いきり立つラザルドさんの顔は真っ赤で、その首にまで血管が浮いている。だがあろう事か、俺はその首に腕を回した。

「何考えてやがる！ 馬鹿かてめ……」

そして罵声を吐き出すその唇に人差し指を押し当てる。

「そんなに怒らないの、ほら深呼吸して」

「あ？」

「ほら深呼吸、ぐずぐずしないの！」

「あ、ああ」

ラザルドさんは呆けた顔で、それでもゆつくりと呼吸を繰り返す。

「良い子ね、そのままゆつくりと私と呼吸を合わせて」

「お、おう」

「良いわ、その調子、そして呼吸だけじゃ無くて。気持ちと心も、ゆつくりと寄り添わせ

るの」

「心を?」

訳が解らないと言った顔で振り向くラザルドさんを無視して、ギユツとその首を抱きしめる。

「気持ちと心を重ね合わせるの、とっても気持ちが良いのよ」

「……………」

そして、魔力が同調していく。

「そう、その調子。偉いわ」

俺は優しくラザルドさんに微笑みかける、慈愛を感じさせる笑顔って奴だ。

……厳つい冒険者のオツサンの心をどうやって開くのか?

プリルラ先生の選択は、まさかまさかのお姉さんキャラである。

歳で言う一回りどころか二回りは違うラザルドさんに、堂々たるやお姉さんキャラである。

プリルラ先生だつて『偶然』の魂持ちだったから、僅か14で死んでいる。それでいてお姉さんキャラどころか、お母さんキャラまで手持ちに有るのだから闇を感じざるを得ない。

今の俺、間違いなく出てるな。

——バブみって奴がよ！

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

ありつただけの魔力をこの一撃に込める、魔力が通じあつた今ならラザルドさんが矢を放つタイミングだつて解るのだ。

ギリギリと弦が絞られる音、ラザルドさんと俺の呼吸、それらの音が全て同じタイミングで鳴り止んだ！

——今だ！

——ギユオオオオオオオオン！！

聞いた事も無い弦と矢羽の風切り音を轟かせ、その渾身の一矢は屋根の上のグリフオンを貫いた。

戦いの行方

——パアアアン

——ピイイイイ——

矢が命中し弾ける音、続いて甲高いグリフォンの悲鳴。

凶太い矢が眼にも止まらぬ速度でかつ飛んで、グリフォンが居た場所を貫くと、バツと白い物が舞った。ただし今度は糞では無い、グリフォンの羽毛だ。

「当たった！ ぶち抜いたぜ！」

ラザールドさんの喝采が上がると同時、グリフォンが屋根の上から転がり落ちて、茂みの中に埋まった。

これで脅威は去ったと思つて良いだろう。俺はサンドラさんを回復させようと広場に走った。

——しかし、再び田中が、俺の手を掴んで止める。

「待て！」

「なんです？ 早くしないとサンドラさんが！」

「奴はまだ生きてる！」

……？ いや生きてるんだから治さないと、……え？

「アイツ躲しやがった、まだ死んでねえ」

グリフォンか？ グリフォンがまだ生きている？　じゃあ、あの羽毛はなんだ？　当たったんだろう？

「羽だ、アイツ自分で転がって直撃を避けやがった。翼をぶち抜いたがまだ死んじやない」

「見えたのか？　あの矢が当たる瞬間を。それがどこに当たったかまで？　何と言う動体視力！」

「ラザルド！　もう一発だ！　魔力は良い、あの茂みに放てー！」

「わーったよ！　俺はてめえの部下じゃねえ！」

そう言いつつもラザルドさんは既にギリギリと矢を番えていた。

——ビィィィン

放たれた矢は正確に広場の向こう、茂みの中へと突き刺さり、ガサガサと葉を揺らした。

……いや、茂みを揺らすのは矢だけではない様だ。

「生きてやがんのかよー！」

グリフォンは茂みから飛び出すと、広場を隔てた反対側の通りに陣取った。俺達を睨

みつけて居るのが見える。その羽は血に濡れ、魔獣の回復力を持ってしても、しばらく飛べはしないだろう。

「クソツ！ オイ！ 妖獣殺し！ 名前負けしてねえ所を見せやがれ！」

「言われるまでもねえ！ 行くぞ」

そう言つて駆け出す田中の袖を、今度は俺が引つ張つた。

両手で握り、両足で突つ張つて、それでもズルズル引きずられる。

「待つて！」

「何だ!？」

「逃げてく！」

俺達の視線の先、グリフォンは俺達を一睨みしてからゆっくりと踵を返すと、村の外へと駆けだした。

「逃げたのか？」

「賢い魔獣の様ですから、命の危険がある狩りはしないと申す事でしょう」

「人間様に恐れをなしたって訳だ」

茶々を入れるラザルドさんも内心じゃホツとしているに違いない。奴が命懸けで挑んで来たら倒れていたのは果たしてどちらか？

——ピイイイイイイ

村の外へと駆け抜けるグリフォンが一際高い鳴き声を上げた。これは悲鳴か？ 本
当に奴は悲鳴を上げ、無様に逃げ帰ったと言うのか？

その時、ザアアつと村の周囲の森がざわめくと、何かが一斉に舞い上がる。

——恐鳥だ。

「恐鳥^{リコイ}達が飛んでいく」

俺の眩きは風に溶け、空には巨大な影が乱れ舞い。グリフォンが逃げた方角へゆつくりと飛んで行く。

「あいつが群れのボスだったってのか？」

……田中の問いに答える者は居ない、だがそうなのだろう。だとしたら見逃されたのは俺たちの方か。

「そうだ！ サンドラさんを助けないと」

今度こそ俺は広場の中心で待つサンドラさんへと駆け出した、しかし俺の体力、魔力はすでに限界。ふら付く足でヨタヨタと走った。

「……ひ、姫さまあ」

「喋らないで！」

サンドラさんの横に腰を折るがその様子は酷い。足から着地出来たのは不幸中の幸いだが、その分足の骨は砕け、腰も打ち付け骨折している。

上半身だつて無事では無い、巨大な鷲の前足で潰された肩は血塗れまみになつていた。俺は必死に呪文を唱える。

『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、……生の息吹を！』

駄目だ！ 魔力が足りない、魔力が載らない！

「姫さま、アイツに伝えてくださいませ、テイラーに……愛してるつてよ」

「諦めないで！ 諦めないで下さい！」

俺は必死に叫び、サンドラさんの手を握る。しかし、その手は冷たく力は弱い。

サンドラさんはゆっくりと目を閉じ、握っていた手がガクリと落ちる。

……死んだ？ いや気絶しただけだ！

『我、望む、汝に眠る命……いの、ちを』

駄目だ！ 魔力が無い、胸が痛い、目が霞む。

「オイ！ ソレ使つて良いか？」

横から田中が口を出してくるが、コイツは完全に門外漢だ。今だけは口を出さずに

黙つていて欲しかった。

——ソレ？

田中は俺の胸元を指差している、……あ。

「良いんだな？ 貸せ！ 『開け』」

田中は俺の胸元のブローチを外すとサンドラさんに押し当てコマンドを唱える。

そうだ、俺はどんな間抜けだ。俺はセレナのブローチに他者回復の魔法を込めていた。田中の手の中のブローチから淡い燐光が溢れ、ゆつくりとサンドラさんの体に染みて行く、気絶していれば抵抗も多くは無いだろう。

「良かった、これで一命は取り留めるでしょう」

「そうかよ、物忘れも程々にな」

「ぐっ」

「冗談だ！ 姫様は休んでろ」

確かに参照権頼みで記憶力がお留守になっている。

いや、それだけじゃない。他人の記憶が一気に流れ込んでくる所為で時間の感覚がおかしくなっているんだ。覚えていた事もところてんの様に後から後から押し流されてしまう。

忘れても好きに思い出せるのが参照権。とは言えとつさの対処が遅れる可能性がありそうだった。

だが、危機は去った。後はしっかりと休んでから、サンドラさんの完治に努めるだけだ。俺は少し気を抜いて辺りを見回すと、同じ様に村を眺めていたラザルドさんと目が合った。

「しっかし酷い有様だな」

ラザールドさんの言う事も最も、村は糞濡れ、家も柵も壊れた。

……いや、家も柵も壊したのは俺だが、そりゃー仕方のない事だろう。一体復興にどれぐらい掛かるのやら。

「これだけ大岩蠟螂ザルディネフエロの死体が有るので、なにか売れる物は無いでしょうか？」

「ねえよ、ゴミだゴミ、成体は兎も角、幼体の魔石の純度は低くて二束三文、使える部位も無い。成体の魔石がちよつとと、恐鳥リコイの魔石や羽が売れるかって位だな」

「純度？」

「ああ、なんでも魔石を道具に加工すのに純度が高く無いと使い物にならないんだとよ」

……いやいやいや、そんなものはさ。

「精製すれば宜しいのでは？」

「せいせい？」

「魔石から魔力の結晶だけを取り出すのです」

「んな事が……出来んのか？」

ラザールドさんの間抜けな声に、俺は心の底から笑顔が溢れ、抑える事が出来無かった。

戦いの報酬

考えてみれば精製するのは魔法の得意技。こればかりは現代でも不可能な事が割とアツサリできるのだ。

例えば空気から酸素だけを取り出したりだ、途轍もなく高度な事を、幼い頃の僅かな魔力値で実現していた。その要領で土から鉄や貴金属すら取り出す事もエルフ達は実現していた。

碌な資源や鉱山が無くてもエルフの王国が資源不足に陥らない理由がコレだ。そして純度の高い魔石が大して価値が無い理由も同じ。

ファンタジーで良く有る、巨大な魔獣を倒して良質な魔石を取るなんてのが無い。精製すれば魔力結晶は魔力結晶。

ザルギルゴール 大牙猪の魔石に価値があるってのものどちらかと言えばトロフィー的な要素が強い。ひき回しのベテランの家には巨大な魔石がゴロゴロしてるって訳だ。

で、人間はどうやって精製する？ 前世で金鉱の原石から、金を抽出するのにも途轍もない労力が掛かっていたと習った事が有る。

ましてや、魔石の精製なんて出来ないとしたら？ 純度が高い大型魔獣の魔石が高騰

するのは自明。

つまりエルフには大して価値が無い魔力結晶も、人間界では途轍もない価値があるとそう言う事か！

「魔石の精製は可能です。精製炉で精製し魔力結晶を取り出すのが一般的ですね」

「精製炉か、この村には……無さそうだな。お前らの都は帝国に占領されると来たし」
喜び一転、ラザールドさんは思案顔だ、どうやって精製炉を手に入れるかって心配だろう。

だがその心配はご無用なのだ。

「精製、出来ませよ」

「は？」

「私は精製する魔法も使えます」

ドヤ顔である。

俺は大体の魔法を知っている。精製なんて炉で行う方が質も高いので魔法でなんて普通はやらない。しかし俺はあらゆる本に目を通し、その上、一通り試している。

「じゃあ、じゃあこの魔石を全部精製したらどの位になる？」

「大牙猪の魔石十個分は下らない量の結晶が取れるでしょうね」

「マジか！」

「マジですー！」

再度のドヤ顔である。

そんな俺の言葉に興奮するラザルドさんだが釘は刺しておく。

「ですが、覚えてますよね？ あなた達の報酬は大牙猪ザルギルゴールの魔石ですよ？」

「……あー！」

そう、俺はプリルラ先生のお力でそう言う方向に無理やり話を持って行った。今となつてはナイス判断だったと言えるだろう。

「そうか……いや、しかしそれを売る必要があるよな？ だとしたら……」

ひとしきりブツブツと独り言を言うと、ラザルドさんは慌てて村長宅に駆けて行く。

「オイ！ ザツカ！ 相談だ」

ゴンゴンとドアをノックするが、中から帰って来たのは盛大な悲鳴。

……そう言えばもう全部終わったって言って無かったな。

何やら「俺は化け物じゃねえぞ！」とか怒鳴っているが、そつちは勝手にやって欲しい。

「オイ、光らなくなったぞ」

振り返ると田中が困った様子で「開け」「開け」と連呼している所だった。

「入れてあった魔法が切れたのでしよう、容体はどうです？」

「ん？ ああ、脈も呼吸も安定した。医者じゃねえから解らねえが多分大丈夫だろ」
「良かった」

これで一安心だ、田中からセレナのブローチを返してもらうと、どっと疲れが出たのか立って居られなくなったのだ。

……視界がゆっくりと暗くなつて行く。

久しく忘れていた、強制的に意識が遠ざかる感覚。ゆっくりと視界が暗転する。

駄目だ、まだ寒い時期、こんな糞だらけで、臭くて不潔な所で寝たら……絶対……病気になるのに……あ、おふとん、ちゃんとかけなきや……

「オイ、人のマントに勝手に包まるな！」

暖かい春の教室で、田中が俺を呼ぶ。

——そんな夢を見た。

【田中視点】

俺は村の広場で途方に暮れていた。

片手には傷だらけで気絶したオッサン。

もう片手には勝手に俺のマントを毛布替わりに眠った少女。

これはどんな状況か？

瀕死なおつさんは勿論、今回も功労者となったこの少女を蹴とばし起こす事は俺の良心が許さない。

「どうしたもんかね」

糞塗れの広場で、俺はしゃがみ込んだまま動けない。ため息も漏れると言うものだ。

この不幸な少女はどれだけの業を背負ってここに居るのか、なにが少女をそこまで駆り立て、なぜ運命は彼女にこの様な試練を与えるのか。

「納得行かねえ事だらけだ……」

眩いても、答えてくれる者は誰も居ない、静かな白に染まった広場に、しゃがみ込んだ俺だけが黒かった。

「全く、早く村の連中を呼びやがれてんだ」

独りごちるが、静かな寝息が二つ聞こえて来るだけだ。

「とう、さま、母様、兄様」

だがその寝息が乱れ、苦し気な声に変わる。……ああ、またか、またこの少女はうなされているのか。

この村に來た時、眠りこけた少女のそばで、初めてこの寝言を聞いた時は堪えた。

コレを聞いてしまったが最後。帝国許すまじと鼻息も荒かった村人さえも消沈して

いた。

家族が死んだ時の事は聞いた、忘れられないし忘れてたくも無いのだろう。だがそこを曲げて全てを忘れて幸せに生きて欲しい……そんな村人達の気持ちも解ってしまおう。

「エゴって奴なのかね」

ぼやいた俺の腕を、少女がキツく握りしめる。

腕に少女の爪が食い込むが、痛くない。

痛いのは多分、腕じゃない。

「セレナ！ セレナセレナセレナセレナセレナ」

とりわけ、この少女が妹の名を呼ぶ時、一際酷くうなされるのだ。俺は少女の、ユマの頭を撫でながらゆっくりと語り掛ける。

「大丈夫だ、俺が、俺が居る」

起きている時は生意気な少女で、こんな事を言うのは恥ずかしいが、うなされている時ぐらいいは良いだろう。

……パパには失格みたいだが、このぐらいいは良いはずだ。

するとユマ姫は寝言で初めて。家族以外の、別の人間の名を言ったのだ。

「夕、ナカ」

俺の名だ。言った、絶対に言った。

嬉しかった。それがなぜ嬉しいのか解らない位に嬉しくて、踊り出しそうになるのを必死で堪えた。

そうだ、俺は、俺がこの少女に家族として認められた気がして、それが嬉しかったのだ。

「タナカ……」

今度こそ間違いない。この世界に飛ばされ、冒険者として長年生きて来たが。俺がこの少女の心を癒せたのだとしたら、それが一番嬉しい事かも知れない。

ありふれた俺の苗字が、こんなに誇らしかった事は無い。

「ヒサ……」

……今、なんと言った？

聞き間違いだ、なにせ、それを名乗った事など一度も無い。

「タナカ……」

田中は俺の苗字だ。

「ヒサ……ユキ」

そして、久幸は

……俺の名前だ！

エピソード「改めてスフィールへ

グリフォンを撃退した後、広場でぐっすり眠っちまった俺は、翌日村長宅のベッドで目を覚ました。

正直アレだ、今世では気絶するように眠る事も、眠ってる間に運ばれる事も慣れてしまつて、ちよつとやそつとじゃ一切起きないのな。

結構危ない事な気がするが、今更どうしようも無いだろう。

起きてからはまずはサンドラさんの治療だ、こればかりはゆっくりやるしか無い。サンドラさんの健康値が高いとは言え、一気に健康値を削ってしまうのは危険だ。とは言え後遺症も無く治せそうで安心した。本当に回復魔法は凄い。

残りの魔力は魔力の精製に費やした。この魔力精製の魔法がえらい量の魔力を食うのだ。

そもそも魔力自体が魔法をろ過していた器官のためか、魔法の通りが悪いのが原因。だから精製炉は結構大掛かりな装置で、起動にもかなりの魔力が必要かつ制御も難しいとかで、精製士と言う専門家が言うのが普通だ。

精製士を目指すには魔力値に200近い値が必要なので、魔力が高いものの戦いは苦

手と言う輩が目指す仕事と言った所。

こんな精製炉の代わりを魔法一つで行うのは非常に高度な技術が必要で、魔法制御は天才的と言われた俺が、制御に戸惑いながら長い時間をかけて小さい魔石一つを精製するのが関の山だった。

しかし今の俺の魔力値、健康値はこうだ。

魔力値：362

健康値：38

まあ、流石に土地的に魔力が薄いのと、魔法の制御失敗とかで400超えから多少減っているが、それでも王都に居た当時の1.5倍はある。

たかが1.5倍と侮るなかれ。

王都時代の魔力で精製に時間が掛かっていたのは、魔石の抵抗力と俺の魔力値が拮抗していたから。

今回はこの魔力の増加分が丸々時間の短縮に効いてくるはず。

そんな俺の目論見通りに精製自体はスムーズに事は運んだ。だが流石に千近い量の魔石の精製は無茶が有った。

皆が村中の糞の始末や、村の家や柵の修復に駆り出される中、俺はひたすらサンドラさんの治療と魔石の精製で一日が過ぎていく。

魔力を吐き出すとその日は暇になってしまいうので、初日こそ挨拶周りやら他の怪我人の治療なども行っていた。

それでも三日目辺りでやる事も無くなり、村の中をブラブラする事にしたのだが。村は復興作業で手一杯、構ってくれる者は居なかった。

サンドラさんがグリフォンから落とされてのたうち回った広場も、今は土木作業の真つ最中だ、村長の息子さんから元気よく号令が飛ぶ。

「よしっ！ この村を人間とエルフの交流の拠点にするぞ！」

「「「おおー」」」

アカン……完全に、森に住む者じゃなくてエルフで定着しとる。呆然とする俺の頭に、誰かがポンと手を置いた。

「姫様の望み通りになったな、この村を起点に、エルフと人間の交流が始まるんだ」

田中だ、キリツとした顔で良い話みたいに言っているが。一つだけ望み通りに行つて無いだろう！

「えるふ……ですか……」

「ああ、精霊っぽい響きで、森を守る民として誇れる名前だとかで大好評だぜ？」

うーん、ま……良いけどね？ 俺のネーミングセンスが無いなんて解り切っていましたよ？

うん傷付いてない、おれは無傷、ノーダメージ。

「なんで怒ってんだよ？ 最高の結果だろ？ ほら見ろよ」

田中が指さす先では、ザツカさんと村のエルフたちが協力して材木を運んでいる。

「別に！ 怒ってません」

そんな俺に苦笑すると、田中は俺の頭をポンポンと二回叩いてから駆け出しに行く。

「おい、手伝うぞ！ 何を運ぶ？」

そう言つて皆に混ざると、制止を振り切つて巨大な丸太を肩に担いでしまう。

「「おおー」」

そうして起こる喝采を白い眼で見ながら、俺は田中が叩いた頭をポリポリと搔いて今
回の顛末について考える。

なるたけ早く王都に着くのが目的と考えると掛かった日数は大きなマイナスだ、だが
エルフと人間が仲良く出来ると言うモデルケースを作れた意味はそれ以上に大きいだ
ろう。

魔石は値崩れが起きないように少しずつ流通させる予定の様だ、現状だと村で魔石を
精製する術は無いし、精製炉が有る様なエルフの都市がどうなってるかも解らない。

だが、魔石が無くても二つの村の交流は続いて行くだろうな、いや続いて行つて欲し
いと願つて止まない。

田中が道を曲がった際に、丸太の端で長老の頭を殴打してしまい爆笑が起こる。田中

は謝っているが、殴られた長老は元気にガミガミ怒っている、そんな光景を俺は目を細め眺めるのだった。

結局、ハーフェルフの村ピルテには六日も滞在してしまった。村人みんなに惜しまれつつ、全員で見送ってくれた。

エルフの村人には結局誰一人護衛に付いて貰っていない。単純に彼らでは戦力にならないのだ。それでも俺の『偶然』から身を守る盾には使えるだろう。

だがそうはしたくない、この村の記憶は綺麗な物として取っておきたかった、最初に襲撃した六人組は最後まで一緒に行くと譲らなかつたが、俺達の戦いぶりを見ていたので、足手纏いだと言うと結局は引いてくれた。

そうして、俺達は村を出た。ソノアール村の住民やラザルドさんも一緒だ。

「帰ったら畑仕事が大変だあ、テイラーの奴にも心配させちまつただ」

「んなモン、コイツが^{ザルギル}ありやー一発だつての」

嘆くサンドラさんに、^{ザルギル}大牙猪の魔石を見せるラザルドさん、この魔石は元々純度が高かつたが悩んだ末に精製してある。

そうして戻ったソノアール村は平和そのものだった、僅か一日か二日の距離のピルテ村でアレだけの事件が有つたと言うのに、ここでは僅か二匹の迷い込んだ^{ザルティネフエロ}大岩蠟螂の幼体を、村人総出で倒したぐらいだと言う。

「今帰ったべー」

「あなた！ 心配したのよ！」

抱き合うテイラーさんとサンドラさんを見届けた。

そして役場で魔石を見せびらかすラザルドさんに。

「お嬢ちゃん、その野郎の御守りを任せたぜ！」

「はい、任せて下さい」

「オイ！ 逆だろ逆！」

そんな風にからかわれながら、スフィールへ向けて二度目の旅立ちを迎えるのであった。

★二章の設定語り

〔田中〕

十五歳で死んで、肉体に違和感が無いようにほぼ変わらぬ体のままに転移。ただし、以後の成長にボーナスを貰い190cm越えの屈強な肉体を手に入れている。

主人公がちょうど十二歳。出産数ヶ月前には魂が振られており、同時に田中も転移している。田中はこの世界で十二年と数ヶ月生活し、その間に数々の魔獣を討ち取り、名を上げている。

元々ピツタリ十五歳と言う訳でも無いので、今の年齢は $15 + 12 + a$ で約28歳。
(厳密には一年の時間が地球とソコソコ違う)

十二歳と二十八歳、TS娘と親友の歳の差の関係って良いよね……

しかも、正体を隠してる。バレたけど。

TS娘に感情移入しつつ、大人の男の視点でTS娘を見ても良いよねとか考えました。

ただし、恋愛関係には期待しないでね……変人なので。

黒ずくめの中二病的装備と、黒縁の伊達眼鏡は目立って友達に知らせるため。

【妖獣殺し】

田中の二つ名。

魔力は放射能みたいに遺伝子にも変異をもたらすため、魔力が濃い土地では複数の遺伝子が混じり合ったキメラが発生しやすい。

放っておけば自然に死ぬ個体が大半だが、極めて強力な個体も発生する。

たまたま翼を持ち、空を飛ぶ妖獣が現れると、恐鳥リコウより強い上に長く居座つたりするので人間としては大損害。

唯一の弱点は突然変異のため、子孫を残せない事。

飛べない魔獣はわざわざ何ヶ月も掛けて大森林の外まで出張しようとしないうし、今回ザルギルゴールの大牙猪の様に迷い込んだとしても、弱っている為に長くは生きられない。

【冒険者ギルド】

そんなモノは無く、魔獣退治の受付は役場とかで行う。都会では懸賞金が掛けたりもする。つまり作者の想像力の限界。

魔獣退治を行うのは一言で言うとかクザ者ばかりで詐欺も多い。ハンターと言うべきだが、作中では冒険者表記。普通の獣を狩る、職業の猟師ハンターは別に居るし……イメージとしては渡世人みたいな感じが一番近い。

この作品では、テンプレ要素に理屈を付けるつてのを目標にしているのですが、冒険

者ギルドってどうやって運営するんだよ！とか考えると難しすぎてギブアップ。

冒険者カードなんてあるワケ無い！って言うのは無粋だから嫌いなんですけど、あつたら、冒険者じゃなくて市民の徴税に使うよなあ……とか無駄なことを考えてしまう。カードで身分を管理する社会だと、それだけで物語が作れそう。カード情報を書き換えるハツカールの話とか面白い気がする。ファンタジーかって気もするけど。

日雇いのバイトで事務所が管理費とかで抜いている割合を考えると、冒険者ギルドって七割抜いても元が取れないよね。

でも、魔獣が跋扈する世界なら、なんか画期的な仕組みが出来上がっていても不思議じゃ無いと言うのは確かになあと思うのですが……

【恐鳥リコイ】

デツカイ鳥。群れで行動するタイプと猛禽類的な一匹狼の巨大な恐鳥リコイが存在する。そう言うのも含めてデカイ鳥。

グリフオンがボスとして君臨したので群れの数が多い。

【森に住む者ビジャ】

ユマ姫が考えたけど不評で浸透せず。エルフで良いよね。作者も混乱するし。

【森に棲む者バザ】

エルフの蔑称。こっちは今後も出ます。

【魔石】

濃厚な魔力が結晶化している。魔力が濃い大森林の中では鉱石の様に土中に含まれる魔石も多いが、人間界では魔獣の体内からの取得が一般的。

電池みたいなモノで、人間界では貴族が照明に使うのが需要の九割。

エルフは空調や料理の加熱、上下水道などにも幅広く利用している。

同じ照明でもエルフの照明はLED、人間は白熱球ぐらいにレベルが違う。

ただし、エルフでも家電レベルを超える、攻撃や回復は魔法のみの領分と言う世界観となります。

三章 車輪の少年 スフィールに到着

俺達はソノアール村を出て七日、とうとうスフィールに到着した。

「大きいですね」

「そりやそうよ、この辺りの要所にして世界の中心とすら呼ばれる都、それが城塞都市スフィールさ」

城塞都市、ファンタジーの定番だ。城郭都市って言うのが正しいんだっけ？

あーどっちでも良いのか。

ググった事が有るぐらいに憧れていた街の姿がここにあつた。そびえる壁の高さは10メートル以上、厚さも3メートルは有るだろう。

この厚さは何を警戒しているんだ？ 大砲？ いや投石器だろうか？

「オイ！ キョロキョロすんなよ、おのぼりさん丸出しだぜ」

「仕方ないでしょう！ 本当におのぼりさんなのですから」

「言つといて何だが、姫がおのぼりさんって偉い矛盾を感じるな」

田中に馬鹿にされたのは腹立たしいが、これだけ迫力の壁を見てワクワクしないのは

無理だろう。俺は顔を赤くして照れ隠しにまくし立てる。

「それよりも、酷い順番待ちではありませんか！ この列では何時まで経っても入ることなど出来ませんよ！」

「あー並んでるのは隊商の奴らさ、馬車も無い俺らはノーチエック、逆に言うとな国審査もガバガバって事」

「帝国の人間も居ると言う事ですね」

「どころか、帝国軍人だろうが金さえ持ってりや大歓迎って場所だぜ？ ここは」

「そこまでかよ、それこそ『偶然』見つかって、『偶然』殺されましたじゃ洒落に成らないぞ。」

「護衛、頼りにして居ますよ」

「良いけどよ、あんまりチヨロチヨロされちやー守り切れないぜ」

うっ、確かにそうなんだろうが、見て回りたい所は多いんだよな、ここは一つアレかな、プリルラ先生のお力でご機嫌取っておくかな。

……

………あーそうか、そう来ますか、良いところを突くね君も！ フムフム。

「なっ！ 何を弱気な！ そこをしっかりと守るのがアナタの役目でしょ！ しっかりとないさーい！」

顔を赤くし上目遣いで睨みながら、スカートの裾を両手でギュツと掴み、ちよつとハスキーなキンキン声で怒鳴り付ける、ツンツンキヤラって奴だな、俺が知る田中の好みから考えても間違いない仕事だ、プリルラ先生は半端ない。

「ハア……そう言うの良から行こうぜ」

「えっ!？」

アレツ!? 無効! ノーリアクションですよ? プリルラ先生?

ため息を漏らしつつ門番の元へとスタスタと歩いて行ってしまう田中へ、今度は本気で睨みながらキンキン声で叫ぶのだった。

「待って! 待ちなさい!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「オ、オイ! コイツが本当に森に棲む者なのか?」

田舎の農民の兄ちゃんに取り敢えず鎧と槍を渡しました、みたいな感じで強そうには見えない門番が震えながら俺を指差す。

俺達はソノオール村の村長に書いて貰った手紙を門番に見せた。そこには当然俺の正体が森に棲む者のお姫様だと書いてある。

隠して都市に入る事は出来るだろうが、そもそも都市に入るのだけが目的では無い。

俺達はこの街で帝国の非道と、脅威を語って世論を動かさなくてはならないのだ。

コソコソするのなど論外、逆に後でバレれば痛くも無い腹を探られてしまう。堂々とするしかあるまい、いきなり斬りかかれる事も無いだろう。

「はい、私がエルフの姫、ユマ・ガーシエント・エンディアンです。」

名乗り出でるや、俺は頭に巻いていたシヨールを解いた。人間と比べて長い俺の耳が露わになる。

「コレが……森に棲む者」

コレ呼ばわりとはご挨拶だが、まあこんな程度で怒ってはこの先どんな目に合うか解った物じゃない。

「私達は森に棲む者改めエルフの代表として、このスフィールの領主、グプロス殿と会談の為に訪れました」

「エ、エルフ？ それにグプロス様と？」

「お前じや罅が明かねえ、ここの責任者を呼んで貰いたい」

話が進まないのを見かねて田中が口を出してくるが、コレは予め決めておいた段取りだ、俺の様な少女が威圧したって何のプレッシャーも無いからな。

「は、ハイ！」

慌てた門番は村長の手紙を片手に駆け出して行くが、こっちは手持無沙汰となる。

「会えるでしょうか？ グプロスに」

「さあな、いや、会わせて見せるさ。俺だって妖獣殺して名前が売れている、その俺が護衛してるんだ、ただのフカしとは言わせねえよ」

「……………それ程の知名度が有るのですか？」

「まあな、帝国じゃ叙勲を受けて、騎士爵への推薦もあつたぐらいだからな」

「凄いいは無いですか、どうして断つたんですか？」

騎士爵の授与、旅の冒険者にとつて最高の荣誉と言つて良い。それを断つたと言えれば悪い意味でも噂になっているに違いない。

「旅をしたかつたからな、褒美を取らせると呼ばれてホイホイ顔を出したんだが、事実上の叙任式だった訳だ、断つちまって随分怒らせちまつた」

「…………それは、そうですね」

旅の為…………か、眼鏡もそうだがコイツ本当に俺らを探すために頑張り過ぎだろう、言うべきか？ 俺が高橋だと、…………でも。

コイツは、多分。俺が全ての元凶だと知つても、手の平を返したりはしない気がする。

俺はセレナのブローチを握りしめ考える、結局は俺の問題なのだ。俺に揺るがぬ鋼鉄の意思が有れば、言おうが言うまいが何も変わらない。

でも揺るぎそうな気がしてならない。楽しく昔を思い出して馬鹿みたいに笑う、それ

で月夜の下、セレナごと燃えて行く家を呆然と見つめながら、復讐に殉じて生きると誓ったあの日の覚悟がもし溶けてしまったら？

色々な記憶を吸収し酷く不確かな何かに成り掛けている自分まで、一緒に消えてしまいうような気がしてならないのだ。

その他にも他愛のない事を田中と色々と話して待った。特にエルフの国の文化や食べ物についてはスフィールまでの道中でも色々と聞かれたものだが、まだまだ話すことはある。

「そのリユードと言う花はどんな味がするんだ？」

「味は殆ど無いですね、香りは良いのですが……灰かに、そうホンの僅かに蜜の甘みを感じる程度です。野菜と同じと思って頂ければ」

「へえ、そんなもんばかりで肉は食わねえのか、魔獣を生で喰らう化け物みたいに言われているんだぜ」

「……そうですね、私は食べたのですが……この様です」

「あ？」

「この髪と目、元は銀だったのです、中途半端にピンクになってしまっただけ」

「オ、オイ、その髪、元々じゃ無かったのかよ！ 随分エキセントリックな色だとは思っていたが」

「染めてる訳では無いのですよ、三日三晩寝込んで、気が付いたらこの色です」
「マジかよ」

そんな事を話していたらようやくと、責任者らしき人が現れた。年の頃は五十過ぎか？ その歳にして鍛え上げられた体に、白いものが混じった髪と髭はしっかりと整えられ、デキる男の雰囲気がある。もちろん先ほどの農民臭い兄ちゃんとは違ってかなり強そうだ。

「お待たせした様だ、私がここの責任者のヤツガランだ、失礼する」

「おおー！ 随分待ったぜ」

「それはご迷惑をお掛けした。多忙の為ご勘弁願いたい」

「ご丁寧にも、俺はこのお方の護衛をさせて貰っている、田中と言う者だ。妖獣殺しして二つ名の方が知られているがね」

「ほう、あなたがあの！」

ヤツガランさんの言葉に適当に話を合わせた感は無い、本当に妖獣殺しの話を聞いた事があるのだろうか。

「この街でも派手に暴れたと聞いていますよ、ダイスのいかさまをしていたゴロツキをダイスごと斬ったとか」

「殺しちゃいねえよ、ちよつと鼻に切れ込みを入れたただけだ、机は斬っちゃったがな」

碌な知られ方じゃ無かった！ 何やっつてんだよコイツ。

俺がタナカをギロリと睨むと、何を勘違いしたのかこのタイミングで俺を押し出してくる。

「そんな事より、このお方が森に棲む者改め、エルフのお姫様、ユマ・ガーシエント・エンディアン様だ」

「ほう」

「ご紹介に預かりました、私がユマ・ガーシエント・エンディアンです」

エンディアン王家の名は、本当は王と王妃ぐらいしか名乗っては行けないのだが、長い名前のがハツタリが効くだろう。王族感有るよな。

あと、もう森に住む者は完全に諦めた。エルフで良い。

「これはこれは、ご丁寧に。ところで失礼ですが浅学にて、エルフと言う言葉、初めて聞いたのですが」

「森に棲む者等と言うのは、人間の作り出した虚像に過ぎません。我々も貴方達と同じ人間なのです。ですが耳の長さ等、民族的な違いが有るのは疑いようも有りません」

「確かに、そうですね」

ヤツガラランさんは俺の耳や目をジッと見る、珍しいのだろう。

「我らが民は今後エルフと名乗り、森に棲む者等と言う化け物ではない事を訴えていく

所存です、そしてビルダール王国と協力体制を築きたい」

「それは大変に壮大なお話ですな、ただの門番である私には過ぎた話です。分かりました、グプロス様のお耳に入る様、私の方で何とかしましょう」

「ありがとうございます」

思いの外上手く行きそう、少し首を傾げ、左手を胸に、右手でスカートの裾を軽く持ち上げる。貴婦人が感謝を表すポーズとして国では散々習って来た。

「いえいえ、ここにこそお待たせして申し訳ありませんでした」

ヤツガランさんも両肘を掌で抑えるポーズで頭を下げる、この辺りの所作からやはり只の門番では無いだろう。

「どうです？ 私はこれからスフィール城まで行きこの事を伝えるつもりなのですが、宜しければ道すがらこの街をご案内しますよ」

「まあ、ではお言葉に甘えてお願いしてよろしいでしょうか」

「ええ、早速ですがすぐに出ましよう、遅くなると受付が終わってしまいますから」

そんなこんなで、ヤツガランさんの案内でスフィールの街へ繰り出す事になったのだった。

ゲイル広場

門の責任者であるヤツガラんさんの案内で、俺達は城塞都市スフィールへ足を踏み入れようとしていた。

ファンタジーを象徴する存在と憧れていた城壁の中は薄暗く、重苦しい圧迫感を感じる場所だった。昼間から灯されたランプの光は頼り無く、何度となく魔法で明るくしてしまいたい衝動に駆られたものだ。しかし、変に威圧するのも本意ではなく、我慢していた。

それだけに、アーチを抜け広場に出た時はその開放感に胸がすく思いがして、身の安んも忘れて駆け出してしまったほど。

門を出たそこはいきなりの大広場で、放射状に三本の大通りが広がっている。城塞都市と言うと整理された街並みを想像していたが、様々な屋台がひしめいて話以上に雑然とした異国情緒溢れる光景だった。

俺はご機嫌に広場に踏み出し、キヨロキヨロとあたりを観察する。まず感じるのは匂い、屋台で焼かれる肉やスパイスの香りはエルフの街では無かったものだ。

人々が着る物も大きく違う、砂漠の民の様なターバンや、蛮族の様に毛皮を纏った者

などまで居る。俺のシヨールで隠した頭なんかも目立つ心配は全く無さそうだ。

人種のるつぼ、文明の集積地と言われるだけの事はある光景だ。何を見ても新鮮でどうにも浮かれてしまう。この独特な香り、焼かれています肉は何の肉だ？

田中に尋ねようと振り返ると、少し離れて呆れたように苦笑する田中とヤツガラんが目に入り、俺は途端に真顔に戻る。

いや、年相応の無邪気さアピールだからね？ 変に警戒されるよりは侮って貰った方が良いじゃない？ 慌てて駆け戻るのも恥ずかしいので、広場の中央で待つことにしよう。

広場の中央にはむさいおっさんの銅像が、むさいポーズを決めている。確か戦争で活躍しこの地を帝国から守り切ったゲイルとか言う人物で、剣を掲げた格好で突っ立っていた。

なるほど絶好の待ち合わせポイントと駆け寄って、大きな像を見上げ——痛ツ!!
——その時、最早お馴染みとなった例の頭痛が、俺の脳髄に突き刺さった。

「うっー！」

記憶が混線し自分の境界がぼやけていく。

急に蹲うすくまってしまった俺に、田中とヤツガラんさんが慌てて駆け寄る。

「いったいどうした？ オイ！」

「彼女は何か持病でも?」

「いや、聞いてねえ」

頭上で飛び交う二人の会話すら、ノイズの中に歪んで聞こえる。

色々な知識が流れ込んで消えていく、それは濁流の様で、自分が高橋敬一だと強く思っていないと自我ごと流れて消えてしまいそうになる。

寄りかかったレンガの感触、背中をさする田中の手、そんな感触を道しるべに、ゆつくりと元の自分へと帰還した。

「どっか悪いのか? 魔力が足りねえって奴か?」

「だいつ……丈夫です」

何とか立ち上がり脂汗が浮かぶ顔を上げると、あんなに輝いて見えたゲイル広場の様子が、なんともつまらない物に変わってしまった。

エキゾチックな衣装を魅力的に見せていたのは謎と言う名のベールだし、串焼きを美味しそうに見せていたのは未知と言う名のスパイスだった。

それらは既に日常の一部に変わってしまい、どんな服かも、どんな味がするかも、俺はもう知っている。

色あせた広場を見て、俺はふうつとため息をひとつ。

「心配いりません、偏頭痛がただけです」

「前も有ったよな？ 成人の儀の時だ。あの時も同じように蹲ってよお……」

「大丈夫ですから！ ヤツガランさん、スフィール城までお願いします」

「え、……ええ」

ヤツガランさんは戸惑っているが、俺は別に体調が悪いわけではない。変に目立ってしまっているのでさっさと移動するべきだろう。

「承知いたしました、我々が通って来たのが北門で、スフィール城は西側ですから、早いのは右手の道なのですが、今回は案内を兼ねて中央通りを進み、中央広場を右に曲がるルートで行こうと思います」

「お任せいたします」

そうして案内のまま中央通りを歩くが、俺の『記憶』の中の街並みとは色々と違って来ている。でも、建物の形状など大きく違う事は無い。この記憶の持ち主はそう遠くない過去の人物だろう。

「姫様、食うか？」

ぼんやりと街を眺める俺に、モグモグと咀嚼しながら串焼きを差し出したのは田中だ。

「ウサギの香草焼きですか……頂きます」

「へえ？ 知ってたか。固いから気をつけろよ、こうやって引き抜くんだ」

「わかっていきますー」

そうだ、もうわかり過ぎる程にわかっている。何度食べたかの方が、よっぽど分からないぐらい。食べたのは俺では無いのだが。

広場で正体不明の肉だと思つたこの串焼きだが、なんの事はない、ウサギみたいな生き物に、生姜と紫蘇の中間みたいな味の葉っぱをまぶして独特の甘いタレで焼き上げたこの街の名物。

「なんだ、ずいぶんと手馴れてるな」

「……………おもつ」

肉を頬張りながら答えつつ、街の観察を続ける。靴屋、帽子屋、桶屋、木工店。どれも記憶の中と大きく変わっては居ない、もちろん売り子のお姉さんや親父さんは違う人物だった。

今まで回収した記憶はどれも何百年も昔の物だった。

しかし、今回は百年どころか数十年しか経過していないだろう。そしてこの記憶の持ち主は、特別強くも悲劇的でも無い、ごく普通の少年のもの。

……ひよつとすると、平々凡々な高橋敬一に転生する直前のテストケースであつたのかもしれない。

そのテストはどうやら上手く行かなかつた様だが……

思考に沈む俺をヤツガランさんの声が引き上げた。

「ここが中央広場、スフィール大広場が正式名称ですね」

そうこうする内、中央広場までたどり着いていた。門の前のゲイル広場も大きかったがその倍以上ある。東西南北に大きな通りが伸び、小さい小道にいたってはそこから中から繋がっている。広場の真ん中では噴水が綺麗に水のアーチを作っていた。

「噴水ですか……」

「ええ、この街の名物です」

噴水があると言う事は、水理計算や工学技術が高い水準にある証明に他ならない。エルフの都にもあったが、大きく劣る訳でも無い。

人間の文明もそこまで馬鹿にしたモノでは無いらしい。

「それに、芸術品まで色々と置いてあるのですね」

「ええ、貴族街も近い場所なので。あいにく私にはサツパリですが」

ヤツガランさんが苦笑するのも無理は無い。美しい女神像や屈強な戦士像だけでなく、理解しがたい現代アートみたいなオブジェまであって、文明レベルは高そうだ。

黒い地球儀みたいなオブジェなど中々に目を引く。解説してくれと言われてもお手上げだが。

しかし、キョロキョロと見回せば、もつと俺の目を引く場所があった。

「この広場を右に曲がれば貴族街、その最奥にあるのがスフィール城です」

大通りを指し示すヤツガラんさんの声も耳に入らない。俺の目はその真逆、左手にある一軒の宿屋に釘付けだった。

いや、今でも宿屋なのだろうか？ 三日月のマークの看板が記憶の中と変わらず掛かっているのだが……

「何見てるんだ？」

「あの三日月の看板のお店なのですが」

「あん？ スーニカの宿屋か？ 変なところに目を付けるな、悪く無い宿だぜ？ なんなら今日泊まるか？」

「……そうですね、それが良いでしょう」

名前も変わっていない、スーニカの宿屋。それは俺の生家だ。

いや、違う、記憶の中の少年の生家だ。有る筈が無い郷愁を刺激され胸が痛むのは参照権のデメリットと言えるだろうか？

「どうかしたのですか？」

ヤツガラんさんが不思議そうに話しかけて来る、そうだ今の俺には聞くべき事がある。

「いえ、なんでも有りません、それより私は人間の事をもっと知りたいと考えています、

この街に大きな図書館はあるでしょうか？」

「ああ、それでしたらスフィールには大きな図書館がありますよ。丁度通り道ですから案内は出来ませんが……入館料は結構高いですよ？」

「そうですか……」

「図書館に行かずとも、簡単な事でしたら私でもお答え出来ると思いますが？」

「これはご親切に……しかし忙しいヤツガラン殿を拘束してしまうのも憚られます、やはり入館料を払っても一度は図書館に行きたいと思えます」

「そうですか、勉強家なのですね」

「ええ私、力は全く有りませんから……知識ぐらいは無いと、これからどうなる事かと不安で不安で」

「そうですか、何か助けになれば宜しいのですが」

社交辞令の応酬だが、記憶通りに図書館は有る様だ。そして記憶通りに入館料は高めの様だが……まあ何とかなるだろう。

俺達は貴族街を歩いて、大きな図書館の前を通過。

「大きいですね」

「ええ、ココがこの街の領主グプロス様の住むスフィール城です」

ついにこの辺り一帯を治める、グプロスの居る、スフィール城に辿り着いたのだった。

スフィール城

スフィール城は一言で言うのと派手だった。

「前線から近い都市だと言うのに、随分と華美なお城ですね」

「ええ、まあ最近では戦争も有りませんし、グプロス様も派手好きなお方ですからね」
ヤツガランさんも困った様に頭を掻くしか無い様だ。

おとぎ話のお城の様な漆喰の白壁に、凝った意匠のバルコニーまで有る。

「またご立派なお庭なこと、何人の庭師を雇ってるんだか」

それに加えて田中も呆れるのは、城の前に大きな庭が有る事だ。壁に囲まれた城塞都市、当然土地は貴重となってくる。近隣の村とは違い三階建て、四階建ての建物も珍しく無い。

そんな中では、庭を持つだけで途轍もない贅沢。だと言うのにスフィール城前の庭は広大だった。

そんな田中の嫌味は無視して、ヤツガランさんは見張りの門兵に声を掛けに行く。

「お二人はここで待って居て下さい、私が話を付けてきますから」

不用意に城に近づかない様、釘を刺されてしまった格好だが、この対応は正しいだろ

う。

エルフの少女と黒尽くめの大男の取り合わせ、かなりの異様と言って良い。実際、何もしていないのに街でも悪目立ちしていた。そんな二人を近づけて門兵を刺激する必要は無いだろう。

「どう思う?」

その隙に田中が聞いてくるのは領主への印象だろう。

「まともな領主とは思えませんね、派手好きで金遣いの荒い、主張の激しい人物に思えます」

「だな、それは街の評判とも外れちやいねえ、でもよ、コレが案外街での評価は悪くねえんだ」

「……………どうしてですか?」

「軍事よりも経済優先。門のノーチェックぶりも見ただろ? 関税は掛けるがそれだつて高くは無い、帝国側の前線近くの都市とはえらい違いだな」

「それは……………私としては有難くない話ですな」

そんな領主では、帝国との戦争には興味が無いどころか、なるべく波風を立てたく無い筈だ。俺は波風どころか嵐を起こし、全てを巻き込みたいのだから。

「だが、逆に考えれば一波乱起こすには最適の街でもある」

「そう言う考え方もありますか……」

当初の予定通り帝国を挑発したり、噂をばら撒くには最適と言う事か？ ただ不確定要素があればある程、それがまとめて襲って来るからなあ……

「話が付きました、一緒に来てください」

「わかりました」

そうこうしている内にヤツガランさんが帰って来た。同時にキィーと高い音が鳴るので見てみれば、大きな門が門兵により開かれて行く所だった。

俺は頭に掛かったシヨールを剥ぎ取ると、大きな耳を見せびらかす様にしながらヤツガランさんの後ろを歩く。

当然、突き刺さる様な視線を門兵から感じる。だがここは見せつけるぐらいが丁度いい。

スフィールの領主グプロスの居城に、森に棲ザむ者バが堂々入場する。そこに意味がある。

通された庭の豪華さは外から見ると、刈り込まれた植木に、美しい花々。タイル敷き整然とした道を俺達は進む。

「申し訳有りませんが、グプロス様は多忙なお方、本日会えると言う事は無いと思います」

ヤツガランさんに言われるまでも無く、会わせてと言つてすぐ会える様な領主など、余程の暇でアホな者だけだろう。

「解つています、ですが何日も待たされる様では意味が有りません。事は一刻を争う事態だとお伝えください」

「そうですね、私からも進言させて頂くつもりです」

実際は暇でも、貴族として舐められない様に何日か待たせるのは良くある事。領主ともなればその間に、密かに相手の身辺調査を行う事も珍しく無いと言う。

俺もエルフの姫と言う立場を考えれば今回、自ら訪れる必要は無かった。下手をすれば舐められかねないからである。

だがエルフの俺が領主と会談に来た。その事実が重要なのだ。

そういう意味では手が掛かりそうな城も悪く無い。この城で働く全ての人の口に戸は立てられ無いだろう。

勿論、より早く会える様に担当者にアピールするつもりだし、何日待たされそうな空気を感じたら面談を断つて次の街へ行く事も考える。

華やかな庭を抜けた先には、目にうるさい程の彫金や彫刻が施された扉が待ち受けていた。極めつけに、その扉を専用のボーイさんが恭しく開けてくれるのには驚いた。

門の時から思っていたが本当に戦闘を考慮していない。

前線の城なのだから門は巻き上げ式の鉄格子、扉は鉄で補強した分厚い物で、庭なんぞ練兵場で有るべきだ。

実際、以前はそうであつたものを表面上取り繕つて、変えてしまつた様な不格好さがある。

そして城の中はもつと凄かつた。

「……華美な内装ですね」

思わずそう漏らしてしまふ程、赤い絨毯はフカフカで、昼間だと言ふのに豪華な燭台には贅沢にも火が灯っている。いや、火どころか魔道具か？ だとしたら魔力が薄いこの土地の事、魔石を相当量使用している筈だ。

「下手に動く壊しちまいそうで怖いな」

窮屈そうに言う田中に俺も同感だ、これ見よがしに花瓶や壺が飾つてあると、どうしても不安になる。

「私もどうにも慣れそうにありません」

そう言つて恐縮しているのはヤツガランさん。確かに彼はどう見ても実務担当、街の防衛の責任者と言つた風で、こんな場所は彼の守備範囲外だろう。

そんな訳で、城に入つてからは執事のお爺さんが案内してくれている。

「……」でお待ちください」

そのお爺さんが案内してくれたのは、入り口からそう遠くない部屋だった。その部屋の中も当然豪華で我々三人はどうにも落ち着かない。

いや、お前は王族だろうが、なんで内装程度でビビってるのかと突っ込まれそうだが、王族は別に何を壊しても問題無かったからね。

微妙な立場の中、違う文明にぶつこまれたら緊張するのも仕方が無いだろう。

「……………」

で、皆で無言である。

なんとも客を待たせるのに向かない空間だと言わざるを得ない。……いや、これは逆に威圧しているのか？

そんなこんなで居心地の悪い思いをしていたが、そう待つ事も無く目当ての人物はやって来た。

「お待たせしました、私はグプロス卿の補佐をさせて頂いているシノニムと申す者です、以後お見知りおきを」

そう言って入って来たのは銀髪。違うな、プラチナブロンドのショートヘアの女性だった。その容姿は端的に言って非常に美しい。整った顔立ちにエメラルドの瞳、薄い唇に知的な笑顔が浮かんでいる。

スタイルも見事で、正に出る所は出て、引つ込む所は引つ込んでいる。そんな抜群の

スタイルは女性向けのドレス姿では無く、男性の様なジャケット、シャツ、パンツ姿に包まれていた。

男装の麗人と言うべきか？ いやそんな派手な主張する様子はない。気取った飾りも派手な刺繍も無く。唯一の女性らしさと言えば可愛らしいリボンタイぐらい、それから細めの下襟と相まって控えめな印象を受けた。

「シノニムさん！ 良かった、実はグプロス様に彼女の事を伝えて欲しいのです」

驚いたのはヤツガランさんの反応だ、こんな美人、どう考えたって顔採用。補佐だか何だか知らないが、話が遠い奴が出て来ちまったかと思つたのだが。

「ええ、お話は伺いました。彼女が森に棲む者の姫君ですか」

「はい、遠く森に棲む者の王国から遙々やって来たと聞いています。あ、彼女はシノニムと言つて、グプロス様のスケジュールを一手に管理している女性です。彼女に話を通せば、数日でグプロス様の都合が付くと思いますよ」

「そんな約束は出来かねますが、火急の用件ですし、善処したいと思ひます」

和やかに話す二人にはしつかりした信頼関係が感じられる。

ヤツガランさんは五十過ぎのおじさんだ。対してこの美人さんは精々三十前だろう、それが対等に話をしているのだから驚かされる。

呆氣に取られていた俺は慌ててソファアから立ち上がる。

「ご紹介に預かりました、私がエルフの王国、エンディアンの姫。ユマ・ガーシエント・エンディアンです」

胸に手を当て優雅に挨拶、ここからいつも通りのお涙頂戴の独演会なのだが……

これは一筋縄で行く相手じゃないぞと気持ちを改めるのだった。

スーニカの宿屋

「良かったですなあ、話が纏まって」

朗らかに語り掛けるヤツガランさんとは対照的に、俺は狐につままれた様な気持ちでいた。

それほどにシノニムさんの態度はあつさりした物だった。

私は姫ですと手ぶらで現れた人間を普通はどう思うだろうか？

頭がおかしいと思わないだろう。

俺の身体的特徴から人ではない森に棲む者とは信じるだろうが……いや人間では無
いからこそ、自分の主人に軽々に会わせる気にはならない筈。

ところがだ。

「なるほど、大変な事が起こっているようですね、解りました。三日後、グプロス様の都合が付くように調整させて頂きます」

あつさりと三日後に会える段取りがいついてしまった、拍子抜けを通り越してポカンとしてしまったのも仕方ないだろう。

適当に言ってるだけ、もしくは罠かと考えたが、だとしても納得がいかない。最低限

本当にお姫様なのか確認する質問だけはみっちりされるだろうと、想定問答集も用意していたのだが。

と、そこまで考え思い至る。……そうか、そんな確認を取らずとも俺が本物であると言っただけで相手にはある？

いやいや、影武者の可能性をどうやって否定する？ 帝国の人間だって解りはしないだろう。

いやいやいや？ もしかして俺が本物かどうかすら重要じゃ無い？ ザバの姫を確保したと宣言出来ればソレで十分？ だとすると……

「おーい、何考えてんだよ、どっちにしろ考えたって結論なんざ出ねえよ、今日何するかを考えようぜ」

思考に沈む俺の目の前、田中がひらひらと手を振った。気が付くと俺たちは貴族街を抜け、中央広場まで戻ってきていた様だ。

「では、私はまだ仕事が残っているのでここで失礼します」

ヤツガランさんともココでお別れだ。お礼を言って二人でその後ろ姿を見送ると、後は三日後まで何をするかを考えなくてはならない。

「……とりあえず、宿を取りますか。先程のスーニカの宿屋と言う所が良いのですが」
「そーだな、とりあえず五日ほど取っておくか」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
そうしてやって来た宿屋はファンタジーの宿屋そのもの、今まで訪れた村々では宿屋
と言うより民泊に近い有様だったので、リアルファンタジー世界にワクワクしてしま
う。

城塞都市らしく四階立てで、カウンターや食堂を含めてコンパクトに作られていた。
その小さなカウンターに体を押し込める様に座っているのは恰幅の良い女将さんだ。

「あんたたち、泊まりかい？」

「ああ、五日程頼みたい」

「あいよ、お名前は？」

「田中だ、タナカ。解るか？」

「ああ、そういうや、前にも泊まってたっけね」

「んだよ、もう耄碌してるのか？」

「止めとくれよ、最近ホントに忘れっぽいだ」

砕けた様子で話が進む、冒険者らしいやり取りは慣れたものと言った所か。

「後ろのお嬢ちゃんは連れなのかい？ 部屋は一緒でも？」

「あー、そうだな、オイ部屋は別が良いよな？」

「勿論です」

道中では共に野宿もしたので今更なのだが、変な噂が立つてもお互い面白くないだろう。予算だつて潤沢に有るハズだ。二倍の依頼料に魔石まである。

「そうかい、じゃあ二部屋だね。お嬢ちゃんお名前は？」

サラサラと澱みなく記帳していく女将さんに俺は元気に名前を……名前を？

「僕の名前はライル！」

元氣一杯に答えてしまう。

……いや、違うだろ！ 俺は……俺はユマ・ガーシエント・エンディアン、それで高

橋敬一だ！

「おい、何言つてんだ？」

頭を抱える俺に、田中が怪訝そうな声を掛ける。気持ち解るがスルーして欲しい。

ライル少年の記憶が押し寄せて来ているのだ。しかし俺に更なる追撃が訪れる。

「ライル！ ライルかい？」

「もう、お母さん！ ライルは亡くなったのよ。三十年も前に」

「でも、今のはライルの声だよ！ ライルが帰つて来たんだよ」

「はあ……ボケちゃつたのかしら……」

食堂から走り込んで来たのはしわくちやのお婆ちゃんだった。でも、そのお婆ちゃんを一目見るなり、俺は誰だか解つた。

あれは……あれは僕のお母さんだ、背は曲がつてるし、顔だつてしわくちやになってるけど。それでもあれは僕のママだ！

「ママー！ ママアアー！」

泣きながら僕はママに駆け寄る、ママは何時もみたい僕を抱きしめてくれる。腕の中、懐かしい匂いがして涙があとからあとから流れて止まらな……なななぐつぐぐぐ、いやいや、俺は高橋敬一でユマ姫だつての！

クツソ！

染み込む少年の知識をゆつくりと整理する。

少年は街の人気者だつたらしい。父は早くに戦争に出かけたつきり消息不明。母は女手一つでこの宿を切り盛り。それを元氣にお手伝いする姉と弟。

幸せな三人家族、いつしか父親の事が話題に上がる機会も減つて行つた。

だけど弟のライル少年だけは父親が帰つて来ると信じていた。来る日も来る日も門の側で待ち続けた。そうして健気な少年は街の人気者に成つて行く。

正直少年は暇だつたのだ、母親もそれを手伝う姉も忙しく、狭い都市で空地も無い。引つ込み思案で友達も少なく街の入り口で色々な人を観察するのが楽しみだつた。

そのついでだ、そのついでで門番に「今日はお父さん来なかつた？」と毎日尋ねただけで、いつの間にか悲劇の少年に祭り上げられていた。

人間版忠犬ハチ公と言う訳だ。少年だつて本気で父親が帰つて来るなんて思つていた訳では無い、それこそついで。

そして、その『ついで』でいつしか同情され、今まで指を啜えて見るしかなかった屋台の串焼きや果実のお裾分けにありつけた。更には門番の兵士達に優しくされ、誕生日さえ祝つてもらふ。

オイシイ思いをする内に、それが仕事の様になつただけ。

誰にでもあり得る事、極めて普通の少年だ。それでいて街の注目を集める人気者。だからこそ神に選ばれ……そして死んだ。

凄いい勢いで走る馬車が、通りから門へ向かつて爆走する。そこへ何時もの通りフラフラと門の前の広場に歩み出た少年が撥ねられた。

それだけ、たつたそれだけ。神に選ばれた無茶をしない、大人しくて多くの人に見守られた優しい少年の最期はそれだけだった。

普通の少年故に、何か特殊な能力が身に付くとかは今回に限つて無さそうだ。ただ其れより問題なのは、お婆ちゃんにギョツと抱きしめられた今の状況だ。

「スイマセンが……」

そう断つてゆつくりと老婆の腕から逃れる。

「私はあなた方が森に棲む者と呼ぶ森の民です」

そう言つて、頭のシヨールをさつと剥がすと、ハツと息をのむお婆さん。

「我々は森に棲む者などと言うモンスターではなく、エルフと言う民族であり、あなた方と何ら変わることに等無い人間なのです。そこはまず、ご理解頂けますでしょうか？」

ゆつくりと優しく問いかけると、老婆も女将さんも目を丸くしコクコクと頷いた。

「そして、私はエルフの巫女、シャーマンをしていました。今、私にライルと言う少年の魂が乗り移つたのです」

「へえーそうなのか？ 姫様で巫女？」

田中よ！ 頼む！ ココはスルーしてくれ！ 俺も無理が有ると思つてる！

思っているのだが誤魔化したいのだ！

「じゃあ、お嬢ちゃんにライルの魂が入り込んだつてのかい？」

女将さんは当然懐疑的だが……

「ライルと！ ライルと話が出来るのかい？」

お婆ちゃんグイグイ食いついた。押し切るしかないだろう。

「ええ、ですが魂を入れるのは危険なので通訳する事になりますが……」

そんな風に誤魔化して、女将さんの名前をルツカ、お婆ちゃんをナーシャと名前を出して、得意なのはレッドベリーのジャム作りと言うと、ライルの大好物だったと驚かれた。

「でも今は作つて無いの、久しぶりに作ろうかねえ」

嬉しそうに昔を懐かしむお婆ちゃん、対照的にまだ疑っている女将さん。

だが、それでも何とか話は纏まった、いや丸め込んだ！ これで一安心だ。

取り敢えず田中と俺でそれぞれの部屋に荷物を置いた、ここからどうする？ 街に繰

り出すか？

いや、まだ日は落ちていないとは言えココまでそれなりに無理をしている。今日は休むべきかも知れない。どうせ三日は身動きが取れないのだから、観光する時間はたつぷりある。

そんな風に考えていると、扉がノックされ声が聞こえた、田中だ。

「オイ、ちよつと良いか？」

「はい、どうぞ。丁度私も相談したい事が」

今日はもう寝よう、向こうもそう言う相談だろうか？

ガチャリと扉が開かれ、入って来た田中は、どうにも齒に物が挟まった様な有様だ。

「いや……あのな」

言い淀んで、椅子に逆に腰掛けると、背もたれに肘を立て頬杖をした。

「なんてーかさつききの？ 霊を呼び出すみたいのでよ、人を探せないのかなと思つてよ。

木村って奴とか、何でもいいから手掛かりを探してるんだ」

そうか、やっぱり田中の行動原理は俺達を探す事か、でもな俺の能力は降霊じゃないんだ。そもそも俺、死んで無いし……いや？ 死んだか。

「ごめんなさい、私はたまたま波長が合う霊が勝手に体に入ってきて来るだけなのです」
「そっか、成人の儀の時もそうだったのか？」

「え、ええ……」

あーうん、説明が面倒だしそれで良いだろう。

「あー悪い事聞いたな、ああ、これからどうする？」

「体調を整える為に、少し早いですが寝ようかと思います」

「んじや、鍵を掛けて一人で出歩かない様に、俺はちよつと出てくる」

「分かりました、お気をつけて」

「ああ」

扉から出て行く田中を見送ると、チクリと罪悪感が滲んだ。

もう俺の事、言ってしまったても問題無いよな？ 流石にココまで来て、俺の『偶然』が
恐いからって放り出すような男じゃ無いだろう。

でも……ソレはソレで困る。余り田中と縁深くなるのも考え物だ。

もう大分巻き込んだしまったが、このままずっと一緒に居るとまた『偶然』に巻き込んで殺しちまうだろう。

「それもキツイな……」

ベッドにボブン寝転がり愚痴る内に、瞼はどんどんと重くなつて行つた。

スフィールを散策

「ふあああ〜」

久しぶりにまともなベッドで寝た気がする。道すがら幾つかの村にも寄ったのだが、これほどのベッドは無かった、流石大都市と言う所か。

ま、お姫様だった頃はもつと豪華なベッドで日常的に寝ていた訳だが、それはもう忘れた方が良さだろう。

ベッドから這い出すと、例の豪華なティアラで日課の健康値チェック。

健康値：29

魔力値：312

ん？ 下がってる？ 昨日はアレだけ寝たから少なくとも30後半は有ると思ったんだが、思ったよりも疲れが溜まって居るのかな？

それとも二度寝が良く無かったか？ 夕飯時に起きてご飯食べて体拭いて、またすぐ寝ちやったからなあ。

釈然としない思いを抱きながらも、パジャマから着替えてブーツの紐を結ぶ。髪が長いので梳くだけでも時間が掛かるが、お姫様感を出すにはショートヘアするのは無いだ

ろう。

成人した以上、本当はもつと化粧なりをした方が良いでしょうが、やり方も解らないし下手に弄らない方が良いでしょう。

正直な所、顔に色々塗りたくるのが嫌いなんだよなあ……

一階に降りて食堂の椅子に座り、朝食を注文した所で田中の方も現れた。

「おはよっさん」

挨拶と共に向かいに座る。

「おはようございます、昨日は飲んで来たのですか？」

「まあな、つつても情報収集がメインだな」

「何かありましたか？」

「あー帝国の動きだな、どうにも慌ただしいみたいだ」

「慌ただしい？」

「エルフの王国を制圧したつてのは噂として出回り始めている、でもよ勝った割には実入りが無かったつて話だ」

案の定か……殺され損、そう思うと何とも居た堪れない。目を瞑つてフーツと息を一つ、どうにか心を落ち着ける。

「でしようね」

「どういこうった？」

俺は片目だけで田中を見やる。

「森の中、金鉱が有る訳でも無し、魔獣はうじゃうじゃ、極め付けなのは人が住めない土地だと言う事です」

「魔力を消す兵器が有るんだろ？　どうにかなるんじゃないか？」

「どんな魔道具かは知りませんが、ノーコストと言う事は無いでしょう、大変な量の魔石を消費するのでは？」

「だったら、国中の魔石をかき集めるとかかか？」

「それこそ、コストに見合わないのでは？」

コスト、そう聞いて田中はハツと思いい出したように袋なかの魔石を取り出した。

「コレだよ、魔石の精製。これで幾らでも帝国の奴らも稼げるんじゃないか？」

「いえ、精製された魔結晶が貴重なのは人間には精製出来ないからでしょう？　大量に流通させたら一気に値崩れします」

「そうか……だとしたら俺らも早いとこ売っ払った方が良いな」

「そうですね、それにもう一つ、精製炉は巨大で複雑、その上稼働させるには魔力の操作に長けたエルフが必要なのです」

「んなもん占領下だろ？　脅せばなんとでもなるじゃねーか」

「帝国の霧が出ている中ではエルフはまともな活動は出来ないと思われれます。かといって霧が無くなれば即座に反乱が起こるでしょう」

そこまで言うのと田中は考え込んだ、ここまで言えば帝国の魔結晶ビジネスはどう考えたって難しいと解る筈。在庫を売り払う事は問題無いだろうがその先はどうなるか？

「つて事は同盟なんぞ結ばないでも、帝国の支配は長続きしないって事じゃねーか」

「恐らく、そうだと思います」

「ハア？」

何言ってるんだと思うよな？ でも俺は帝国が去った後の王国再建なんぞに欠けらも興味は無いんだよ。

俺は右手の人差し指をピツとおっ立てて咳払い。

「コホン、では問題です。勝利すれど美酒にも果実にもありつけなかった帝国が、次に狙うのはどこだと思いますか？」

「……このビルダール王国って訳か」

「ええ、なにしろエルフが持つ強力な魔道具、そんな武器だけはたつぷりと手に入れたでしょうからね」

「チツ！ 想像以上にあぶねー情勢じゃねーか」

だから焦ってるんだが、このスフィールの平和ボケは想像以上。下手すりゃこの都市

を奪われた方が、王国の危機感を煽れるまであるだろうか。

「あと、もう一個気になった帝国の情報だがな、どうも流行り病が蔓延しているらしい」「……罰が当たったと思うのは信心深過ぎるでしょうか？」

正直、帝国の人間が苦しむならいい気味だと思う、上手く行けばペストみたいな大流行もあるかも知れない。

いや余り期待するのは止そう、全部自分の手で片づけるぐらいの覚悟が要る。

「それは良いけどよ、おつかねえのが、この街でも病に倒れる人間が増えてるって噂だ」「それは、有り難く無いですね」

そう言えば健康値が想定より10も低かった。風邪の引き始めじゃないだろうか？
「俺の方はこんなところだな」

田中の情報は思ったより有意義だった、帝国の状態を説明すれば。エルフとの同盟も上手く転がるかも知れない。

「では今日の予定ですが、まずは魔石の売却、それから武器ですね」
「武器か……」

田中はやはり剣に思う所が有るらしい、だが刀なんて無いからなあ。

「タナカさんの言うカタナがどういう物か解りませんが、近い物を探すのも良いでしょう。私はもう少し気が利いた弓と、矢の補充もしたいですね。その後は必要な物を揃え

る為に街を散策、そして明日は丸一日図書館に籠りたいと考えて居ます、良いですか？」
「図書館ねえ、人間もエルフも字は共通かい？」

「ええ、意味が異なる部分もありますが問題無いでしょう。本は私が人間の常識を補完するのに最適。安くはない入館料ですから、どうせなら朝から入るべきかと思えます」
「ま、そりやそうだな」

予定は決まった、まずは魔道具屋だ。おあつらえ向きな事に宿屋の向かいが丁度魔道具屋だ、俺達は朝食を手早く片づけ乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「……まあ、こんなものでしょうか」

薄暗い雰囲気たつぷりの店内とは裏腹に、置いてある魔道具は相当しよぼい。精製していない魔石を前提に、仄かな明かりが灯る魔道具が大半だ。

ランプ屋を名乗った方が良いんじゃないかと思うぐらい、大半が明かりの魔道具。考えてみればこんな程度の低い魔石なら風を起こすのも手で仰いだ方がマシなのだから、実用的なのは明かり位と言う事か？

「いらつしやい、どんな品をお探ですか？ これなんて新型で小さな魔石でも明るいんですよ」

話しかけて来た店員のお爺さんは、シヨボい懐中電灯を薦めて来るがそんなもんは邪

魔なだけだ。

「いや魔石の売却だ、混じりっ気無し純度100%の結晶よ」

田中は適当な事を言いながら魔石を取り出すが、100%は言い過ぎだろう。

「あん？ こんなちっちゃな魔石じゃ価値なんて無いよ、ゴミだゴミ」

店頭に並ぶ魔道具の魔石だつて大したものじゃない、ラザルドさんがゴミと称した大岩蠟螂ザルディネフエロの幼体の魔石と同レベル。

で、田中が出したのも大岩蠟螂ザルディネフエロの幼体の魔石、それも精製した物だと言うのにココまで門前払いを食うのは何故か？

答えは単純、精製した分サイズが小さくなってるからだ。

元のビー玉サイズが、パチンコ玉サイズ。

「大きさを判断するんじゃねーよ、コイツは純度がスゲーんだ調べてみるよ」

田中の外観は威圧感が凄い、なのでしぶしぶお爺さんは田中の魔石を魔道具にセットする。

「このサイズの魔石じゃ起動しやしませんよ」

お爺さんはぼやきつつもスイッチオン。

と同時に部屋がパツと明るくなる、さっきまでの明かりが蠟燭だとすると高輝度LEDぐらいの光が懐中電灯から迸るほとほと。

「こりや驚い——バチン！ あ？」

感嘆の声は無残な破裂音に遮られる。あー何が起こったか解ったぞ。

「魔道具のオーバーヒートですね」

俺は半眼で出来の悪い魔道具を見つめる。丁度アレだ、豆電球をコンセントに突っ込んだ様な物、明らかな電圧ならぬ魔圧？ オーバーだ。

「どういうこと？」

「純度が低い魔石用の魔道具には純度が高すぎたと言う事でしょう」

「なるほどね」

納得顔の田中だが納得いかない人が一人。

「なんてモン渡してくれるんだ！ 壊れちまったじゃないか！」

まあ、店員としては怒るよな。でも俺らは悪く無い、こう言うのを捌くのは威圧感のある田中の仕事だ。

「ハア？ 魔石の鑑定がお宅の仕事だろ？ その見立てを失敗しておいて客の所為ってか？」

「お前さんの魔石が粗悪品だったんじゃないのかい？」

「じゃあなんだ？ お前は粗悪な魔石が入ったら壊れる魔道具を堂々売ってたってのか？」

取り敢えず田中の優勢だし、放置で良いだろう、俺は店内の魔道具を見て回る。

うーんゴミだな、目玉商品は土から水を集めたり、水をろ過したり、種火を付けたりとか。ちよつと便利なアウトドア用品ってレベルだ。

「オイ出ようぜ！」

「どうなりました？」

スタスタと足早に出て行く田中の後ろに、小駆け走りで追いついた。

「魔石の買取は出来ないだよ、もちろん魔道具の弁償もしねえがな」

「どうするのです？」

「純度の高い魔石だって言ったら、だったら高級店に行けとよ」

「そうですか……」

ザルディネフエロ

大岩蠅螂の幼体では、魔石の純度が低くゴミ同然とラザルドさんは言ってたが、電

池の様に、庶民でも手が届く魔石って扱いが正解か。

じゃあ純度の高い魔石ってのは別の使い道があるのだろう。

俺達は街の西側の高級魔道具店に足を運ぶことにするのだった。

スフイールを散策2

「着いたみたいだな」

「流石に綺麗なお店ですね」

西側の大通りに面したその魔道具店は流石に高級店らしく、白壁に彫金が施された扉、加えて窓にはなんとガラスまで嵌まっている。

人間の街でガラス窓など殆ど見ないだけに、貴重な品なのは間違いないだろう。潤沢に資産が有る事をアピールしている。

ちなみにエルフの街ではガラスなど普通にあるし、透明度も高い。なにせ魔法があるからね。

ただ地球の物に比べると割れやすい所為か、あまり活用されて居なかった。

「邪魔するぜ」

田中が豪華な扉を開けると、カランコロンとドアベルが鳴る。店内は落ち着いた内装で、そんな所も含めて前世のちよつと良い喫茶店に入ったような気持ちにさせられた。

「これはこれは、どのような御用件で？」

俺達は黒尽くめの大男と年端も行かない少女の組み合わせ。これ以上ない位に怪し

い二人組にも関わらず、入店と同時に店員からの丁寧な応対。

前世では当たり前だったが、この世界では中々無かった事だ。

「魔石の買取だ」

「拝見させて頂いても？」

「ああ、小さく見えても純度が高い、気を付けてくれ、数も有る」

あつちには田中に任せて良いだろう、俺は商品を見て回る。

ランプ系はココでも主力の様だ、使う魔石もサイズを見れば同レベル。ただし数を増やして出力を稼ぐ方法が採られている様だ、それに用途は貴族の邸宅向け、装飾が贅沢に施されている。

他には風を起こす魔道具や、部屋を暖める魔道具も揃っているのは、一般人ではコストが合わなくても貴族なら別と言う所か。

豪華でも目新しい魔道具は無さそうだ、ただ大型の物も有るので出力が高い魔石の需要はありそうだ。

そうこうしている内に、魔石を売り終わった田中と、店員に声を掛けられる。

「おい、売れたぜ」

「こちらの方がその、森に棲む者の姫君なのですか？」

俺としては特に隠すつもりも無い。シヨールを外して自己紹介だ。

「私はエルフの姫、ユマ・ガーシエント・エンディアンと言います、お見知り置きを」
手を胸に、スカート摘まんでご挨拶。なかなか可憐に振る舞っているのでは無いだろうか？

「これはこれは……あの拝見させて頂いた魔石ですが、どれも非常に質が良く。これは……エルフと言いましたかな、その技術に依るもので？」

「はい、その通りです。しかし残念ながらその技術は今や帝国の物かと思われませう」

「それは！ やはり噂は本当でしたか……」

今回、魔石を売却するにあたって、偶然手に入った上物などと騙し売りする様な真似はしない。

帝国がザバの国を落としたと噂が広まっている以上、すぐにその正体は割れる。そうして評判を落とすよりも、上流階級の人間が通うこの店で顔を売り、ついでに帝国脅威論を振りまきたい。

「帝国は大量の精製された魔石と、強力な魔道具を手に入れました。この街も早く脅威に備えるべきでしょう」

「確かにこれほどの純度が有れば、強力な魔道具が作られるかも知れませんが、……我々も前線の街として魔道具を兵器として活用したいと考えていたのですが。どうにも芳しく無く」

そうして見せて貰ったのは地面に叩き付けると空気を圧縮、そして爆発させる空気爆弾とか、火の玉や炎の矢を作る兵器だった。

「あー」

思わず声が出る。

「やっぱりダメですか……」

自分で使う送風とか過熱は兎も角、敵に使う場合、相手の健康値でガッツリ減衰されてしまう。結局魔力は直接攻撃に向かないのだ。

「直接攻撃する事よりも、堀や土壁を作れる魔道具の方が戦争に役立つと思いますが」「売り込むには、いささか地味と言われてしまい……」

「あー……」

確かにグプロス卿の趣味では無さそうだ。陣地の整形は戦場でとんでもない効果を発揮すると思うのだが、運用するには道具も魔石も一斉に揃える必要がある。何より優れた戦術家が必須だ。上の説得が出来なければ絵に描いた餅だろう。

他には……と言われても困る。研究中らしい空気銃も見せて貰ったが、圧縮した空気が自分の健康値と干渉して暴発してしまい、実用化に行き詰まっているとのこと。

実は、エルフでもソコは全く同じ。魔力と風の関係は、電気と磁力の關係に近く親和性が高い。よって空気の圧縮などはお手のもの、だけど魔道具では圧縮した空気の扱い

が難しい。

魔法で矢の加速とかしてるのに、同じ事を魔道具でやるのは大分難しいのが現実だった。

「出力を上げてても、戦争で使える物にはならないと思いますよ」

「そうですか……」

「ただ、戦争時に一瞬で壁や堀が出来たら恐ろしい事になりますから、帝国の脅威を過小評価しないで欲しい物です」

そういう話してる間も田中はガラクタみたいな魔道具をおもちや箱みたいに漁っていた。

俺は他にエルフでも戦争で使っている、声を大きくする魔道具や大きな音を出す魔道具を提案したが、これらも地味だと言われてしまった。

いや？　こう言うの滅茶苦茶重要だよ？　平和ボケ凄くない？

まあ魔石はそこそこの値段で売れた様だし、お暇いしまするか。

「タナカ、行きますよ？」

「ん？　ああ」

未だにおもちや箱を漁る田中を無視して店を出る。

「次は武器ですね」

「武器屋なら馴染みの店がある」

流石に冒険者と言えるだろう、ココは田中にお任せだ。

そうして辿り着いた先は、正にゲームに出て来るファンタジーの定番感溢れる武器屋。「よう！ マスター」とか話し掛けたくなるハゲのオッサンも標準装備だ。

「よう！ マスター」

まあ言うよなっ！ 田中は言うよなっ！ それは良いよ？ でも、なんでこつち見てドヤ顔するんだよ！ 悔しいだろ！

で、剣を研ぎと手入れに出して、代わりの剣を借りたっぽい。一方俺の弓は……やっぱり引けるのが無かった。

でも、どうにかしてみせる！ とハゲのオッサンも約束してくれたので期待しよう。矢は結構良いのが揃ってるので買っておいた。

その後は街をブラブラと散策し、着替えや日用品をポツポツと揃えて行く。

俺のドレスはストックがあるし、下着とかはサイズに困らないが、田中みたいな大男は居ないので着替えは全てオーダーとなる。逆に売る場合はサイズが大きい分だけ詰めて修復しやすいと高く売れるらしい。

そんな雑談をしていたら、通りの真ん中でポツリと呟く田中。

「付けられてるな」

「そうですか……」

「冷静だな」

「領主とアツサリ約束が取れ過ぎました。この三日、偵察に人を寄越す可能性が高いとは考えていました」

「だと良いがな。最近、人攫いが頻発してるって言うぜ？」

「それが？」

「大つぴらに帝国軍や関係者を動かすよりも、そう言う奴らに握らせた方が楽に事が運ぶ。そう考えたっておかしくない」

「なるほど、そうですね」

「どんな思惑にしろ、とにかく気を付けなくてはならない。いきなり昏倒させられたり、完全に口を塞がれたりしてしまうと魔法も使えないからな。」

「で、どうするよ？」

「やる事は変わりません、他の村と同様に酒場などで帝国の脅威を語って聞かせましょう」

「つまりドサ回りだ。」

「良いのか？ この街だったら領主以外も、貴族とかだつて居るだろう？」

「領主に会う前に他の貴族へ挨拶へ行くと、問題に成りませんか？」

「あーそう言うのがあるか、チツめんどくせえな」

いったん荷物を宿屋で降ろすと、俺達は酒場に繰り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そうして私は、打倒帝国の為に王都を目指し旅を続けているのです」

オオー

やんややんやと盛り上がる。酒場での独演会も慣れたもの。口下手な前世と打って変わってこれは一体誰の能力だろうか？

「大変だったなー」

「エルフの魔法！ もっと見せてくれよー！」

「帝国のやつら許せねえなー！」

盛り上がってくれた様で何よりだ、俺は笑顔で手を振って見せる。

そこにテーブル席に腰かけた、柔らかな物腰の男からの声。

「ユマ姫様、少し良いかな」

「良いですよ、なにかご質問が？」

俺が男の向かいに腰掛けると、田中は俺の後ろに自然に立って睨みを利かせる。

「幾つか聞きたい事が有るんだ」

男がそうして尋ねて来たのは、帝国の新兵器についてや、エルフの魔法や魔道具がど

の程度の脅威になるのか、どうしてたった二人で前線のスフィールに来たのかなど。

男は身なりこそ普通の町民の様だが、口調も物腰も柔らかで、貴族に使える従者だろう事は一目で解る。

「馬車での移動をしていたのですが、魔獣に襲われて馬車が壊れてしまったのです。誰か馬車を提供して頂ければ良いのですが……」

だから、逆におねだりしてしまおう。

「なるほど、わざわざありがとう御座いました、貴方の旅路に幸あらんことを」

その男は最後まで上品に祈りをかわして去って行った。

「どうだ？」

「間違いなく貴族の従者でしょう」

田中と共に、男の背中を目で追う、やっと大都市で俺達の戦いが始まった気がしていた。

オルティナ姫

翌日は予定通りに図書館だ、ちよつと早く行き過ぎて開館してなかったのはご愛敬か。

図書館前のドリンクスタンドで一服しながら今日の予定の確認だ。

「取り敢えず、ジャンジャン本を持って来て下さい」

「あ？ ああ」

「で、一瞬で読み終わりますから元の場所に戻してください」

「は？」

まあ意味が解らんよな。参照権は目と脳で認識出来れば記憶したも同然、エルフの王宮の蔵書だつて少なくとも無かつたが足繁く通つてた時期は長くない。

その後数年掛けて参照権プロンプターで本を読んだのだ、今回も同じ方式で行く。

甘いミルクの様なドリンクを飲み干すと、俺は開館と同時に図書館へ突撃した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あんなんで全部覚えたってホントかよ？」

今は昼過ぎ、遅めのランチを頂いている最中だが、向かいに座る田中から疑問の声も頂く事に。

「勿論です、ただ記憶しただけなので。今読んでいます」

返事をしつつ、野鳥の肉を切り分ける。大丈夫だとは思うが、どうしたって恐鳥《リコイ》や、髪の色が変わった原因のブーブー鳥を思い出す。

「つつたつてよお、ペラペラやつただけにしか見えなかつたぜ？」

「それで良いのです」

意を決して小さな肉片を放り込む、旨い！一度味わえば調子に乗ってどんどん食べてしまう。我ながら何も成長していない。

「心配ありませんよ、流石に全部は無理でしたが、重要な本は記憶できました」

「まあお前が良いなら構わねえけどよ」

立派な図書館の割に蔵書は千程度。紙が貴重っぽいので仕方無いだろう。宗教本が大半で、それらはメジャー所だけ押さえれば十分。

となると読むべき本はそう多くない、地図や歴史、文化や魔法や魔道具についての知識などだ。

俺はエルフの王都でかなりの本を読んだが、実のところ機密と言える内容、特に魔道具絡みの本からは距離を取っていた。

理由は『俺が忘れられない』から。

魔法の知識は人間に知られた所で何の影響も無い、何故なら魔力が無いと真似出来ないからだ。対して魔道具は魔石や大気の魔力量など条件が揃えば人間でも扱える部分大きい。

自分の『偶然』を自覚し、家族を巻き添えにしない為に旅に出ようと思っていたのだが、万が一捕まってエルフの生命線たる技術を漏らさない様に、と言う配慮だったのだが、完全に裏目に出ってしまった。

俺がどんな拷問にも耐えられるって自信があれば良かったのだが、正直そんな覚悟も決まっていなかった。悔やんでも悔やみきれない。

だがもう何も遠慮する必要が無い、魔法技術的な本もガンガン目を通して行った。ただそれ以上に興味があったのが、俺の前世に絡みそうな記憶。俺は神の言葉を思い出す。

——神曰く

不治の病を患った少女は不作の折に自害した。

戦争に行った父の帰りを待つ少年は門で馬車に轢かれた。

もつと多くの人を巻き込もうと、盲目の姫君にした時は国ごと滅んだ

人間に追い立てられ、最後の一人になった悲しい吸血鬼は愛した男と心中した。

砂漠の歌姫は政争の道具にされた末に暗殺された。

古代人の末裔だつてやったし、さっきの皇帝の息子や龍子もそうじゃが。

——以上、抜粋終わり。

参照権は神界での記憶も保持している、一字一句間違いはない。不治の病の少女はプリルラかもしれないし、門で轢かれた少年に至つては、ライル君で間違い無いだろう。

問題は残り、盲目の姫君に吸血鬼、歌姫、帝国の王の息子に、土地神の龍子。

そうそうたる面子だ、コイツ等の情報が少しでも欲しい。

勿論、薬草を集めていたシルフ少年や天才魔法使いのパルメスちゃんみたいな神が話題にしなかつた者も居るだろうが、それを考えても仕方が無い。

神が話題にしたほどだ、とりわけ強力な運命だか因果律だかを持つていたに違い無い。

記述。そうして調べれば、スグに見つかったのが、ビルダール王国のオルティナ姫に関する

分厚いビルダール王国記のページを目の前に浮かべペラペラとめくつた。

オルティナ姫は絶世の美人と謳われるが、幼少期は手が付けられないやんちゃな女の子と言われていた。それが十二の時に大病を患い失明してしまう。

それをきつかけに心優しい少女へと変貌、国中を見て回り、様々な伝説を各地に残している。

或いは洪水を予見したとか、飢饉の際に解っていたかのように食料を備蓄していたとか。

そんな超人じみた伝説だけでなく、貧民に優しく、死んで行く者を抱きしめ涙したと言う言い伝えが各地に残されていると言う。

そんな彼女だが、最期は断頭台の露と消えている。

当時、人氣が有った彼女を魔女だと糾弾する第一王子の一派による謀略だと言うが事実は解らない。

結局その後は姫を支持していた人々の暴動が頻発し、第一王子も暗殺されてしまい国が荒れに荒れた。

その時、ビルダール王国は事実上一度滅んでいる。

オルティナ姫の従妹の少女をビルダール王家の系譜として再興したものの、その際の混乱が元で、いまだに帝国と国力に差を付けられたままと言う。

……うん、コレ間違いないく俺の魂の仕業だわ、間違いない。

「おい、どうした？ ボーツとして」

あー五月蝍いな気が散る、俺は参照権でめくるページの手を止め。田中を睨む。

「何ですか？ 邪魔しないで下さい！」

「いや、俺は食い終わっちゃったし」

知った事かよ。だが、このまま二人で居ても暇な田中が五月蠅そうだ、今日は別行動として俺は宿屋に引つ込もう。

「すいませんが、今日は別行動としましょう。私は宿屋に籠もっています。明日の会見までに今日読んだ内容の整理をしたいのです」

「……まあ良いがよ」

そうして店を出ると、宿屋の前まで送って貰う。

「じゃあ、俺は行くからよ。部屋でジツとしてろよ」

「解りました」

何せどつからでも『偶然』が襲って来る身だ。一人で出歩こう物なら一瞬で絡まれそうだ。

そうやって人目を引くのも悪くは無いが、リスクばかりが大きいだらう。

何より今は大量の情報を整理しなければならない。

心配そうに何度も振り返りながらも街路に消えて行く田中を見送ると、扉を開けて宿屋の中へ。

「ああユマ姫様！ 今日早いお帰りだねえ、ライルのお話、今日も聞かせてくれないか

い?。」

帰ったそばからナーシャお婆ちゃんに見つかってしまう。ライル君の話をせがまれ
ると長くなる、今日はご遠慮願いたい。

「スイマセン、体調が優れず部屋で休もうと思っっているのです」

苦笑混じりに断って、さっさと部屋へと引っ込もうとするが。

「そうか……残念です、私も姫君にライル君の話を聞きたかったのですが」
「ヤツガランさん……」

そこで門の責任者、ヤツガランさんから声を掛けられるのだった。

ヤツガランの懺悔

「ライル少年の話……ですか」

門の責任者、ヤツガランさんが、そんな話の為にわざわざ宿までやって来るだろうか？

何かと理由を付けて、俺の話に嘘が無いのか見極めに来たに違いない。

「いえ、そんなに身構えないで下さい、私もこの宿にはよく来るのですよ」

「そうなのですか？」

ヤツガランさんは根無し草の冒険者と違ってこの街に家を構えている事だろうし、年齢的に妻子だつて居るのでは無いだろうか？

宿屋に顔を出す用件などそうそうあるとは思えない。

「実は、29年前に馬車に轢かれて亡くなったライル少年はね、私にとつても特別な存在なのです」

初めて会った時からヤツガランさんは歳や立場の割に偉ぶらず、小娘の俺にも態度が随分と丁寧だ。すっかり話を聞く気になった俺は、彼の前に腰かけ先を促す。

「ライル君が五歳の頃かな？ 初めて会ったのは、ゲイル広場でね、銅像の前の縁石に腰

かけて足をプラプラさせて暇そうに門を見ていたんだ」

昔を懐かしむ様に語るヤッガランさん、その横顔を見た事がある気がして、頭にチリと痛みが走った。

「もしかして、槍のお兄さんがヤッガランさんなのですか？」

「お、驚いたな。ホントに？ ホントにライル君と話しているのかい？」

ヤッガランさんは腰を浮かせて、俺に詰め寄る。

まさか、本当にライル少年絡みの訪問とは思わなかった。

「彼の思いが、頭の中に響いて来るのです。会話とはちよつと違うかも知れません」

「そうか、それにしたつて私の事をそう呼ぶのはライル君だけだったからね、信じる事にさせてもらうよ」

「信じて貰えると言うのは嬉しいですね、お兄さん自慢の彼女が作ってくれたミートパイは、僕には少し辛かったと言っています」

「……参ったな、こりゃ本物だ。アイツはいつも香辛料を入れ過ぎるんだ」

ヤッガランさんは目に涙を浮かべ鼻をすすると、それを誤魔化す様に両手をグツと前に伸ばして仰け反り、天井を見上げた。

「ハア……」

そうしてため息を一つ。何かの決心を付けたのか一転、真顔になると、前のめりに

なつてこちらを見つめて来る。

「毎日毎日、門の前で暇そうにしていた彼に僕は聞いたんだ、一体何をしてるのかつて。そしたら彼は父さんを待っているんだって言うんだよ、来る日も来る日もね」

ヤツガランさんの一人称が私から僕に変わる。彼も当時の自分に立ち返っている様だった。

「堪らず僕は彼を門の中に招待してね、衛兵の中で彼はたちまち人気者になったよ。明るくて素直で、何より健気だったから」

ヤツガランさんは絞り出すように声を出す。宿の食堂の中、ナーシャお婆ちゃんだけじゃなく、女将さんのルツカも、他の客たちも聞き入っていた。

「だから、僕は彼に言い出せなかったんだ。資料庫を整理して、とつくの昔にコイツを見つけて出していたのに」

ヤツガランさんが、プルプルと震える手で差し出して来たのは、古くなりすつかり退色した戦死公報だった。

「これは……」

「ライル君の父親の消息が何とか掴めないかと、必死に資料庫を漁ったんだ。そうして見つけたのがこれさ、結局、彼の父の訃報は当時の衛兵の怠慢で、門の資料庫に突っ込まれていた」

『ナツシユ・スーニカ　ゼスリード平原にて勇敢に戦うも、敵軍に囲まれ戦死を遂げられた』

簡潔過ぎる文章、他に有るのは日付のみ。その日付も29年どころか、……33年前か？

「見せて！」

ナーシヤお婆ちゃんが俺の手から手紙をひったくる。

「そうかい、そうかい……」

涙を流し、食い入るように手紙を見つめる、それは旦那さんの名前なのだろう。

面白いのは、ライル少年の記憶にその名前は殆ど出てこない。ただ「お父さん」と呼ぶだけだ。

たまに「お父さんのお名前は？」って聞かれて「うーんと……」から始まるぐらいに覚えていない。

どうでも良かったのだ。

きっとライル少年にとって大切だったのは、槍のお兄さんと遊ぶこと。

謝って貰っても、少年も俺も喜べない、俺は困り顔でヤッガランさんに尋ねる。

「今更これを出して来た、理由は何なのですか？」

お婆ちゃんの反応から、既知だったとは思えない。なぜ昨日今日会ったばかりの俺に

こんな手紙を見せたのだろうか？

長身のヤツガランさんが体を丸め、頭を抱えて声を絞り出す。

「僕は、いや私はライル君にずっと謝りたかった。私がライル少年と会いたいが為に、彼の父親がもう死んでいる事を打ち明ける事が出来なかつたんだ」

ヤツガランさんは机に突つ伏し泣きながら、悔しそうに机を叩いた。

「私がッ！ 私が言っていれば！ 父親はもう帰つて来ないのだと言っていればッ！ あんな事故など起こらなかつたのに！」

……そうか、そう言う事か。俺はふるふると首を振る。

「違います、ライル少年は父親を迎える為に門に行つていた訳では無いのですから」

そう言うのと、え？ と言う顔をしてヤツガランさんが顔を上げた。

「じゃ、じゃあなんで、彼は毎日毎日門に来ていたんだい？」

「それは勿論、槍のお兄さん、あなたと遊ぶ為です」

ヤツガランさんのポカんとした顔に、俺は優しく微笑んだ。

「当然、他の衛兵の皆さんや街の人と遊ぶのも楽しみでした、一番楽しみだったのは、たまに貰えるウサギの串焼きでしたが」

「そう……か、そうだったのか」

「ライル少年は馬鹿じゃありません、本当は自分の父親がもう帰らない事ぐらい解つて

いたのです」

「ううっ」

もうヤッガランさんの顔は涙でクシヤクシヤだ、きつとこの手紙を胸に罪悪感と戦っていたに違いない。

「だから、貴方が真実を打ち明けても、父親がもう居ないのだと言い聞かせても。みんなと遊ぶために門に通ったでしょう」

「……………」

「そうして、同じ様に事故に遭ったと思います。残念ながらそれが彼の運命だったのでしよう」

そう論じたが、ヤッガランさんは納得出来ないと洗面を作りかぶりを振る。

「そんなつ、そんな都合が良い事を！ 信じる訳には……行きません」

頑なにそう言うが、もう彼はずっと苦しんだ。それで良いだろう。

何より、きつとどうやったって少年は死んだのだ。もつと安全な世界でも隕石で死ぬぐらい凶悪な『偶然』で。

それでも俯くヤッガランさんの肩に手を載せたのは、ナーシヤお婆ちゃんだ。

「良いんだよ、あたしだってね。ライルはあの人の事なんて覚えても居ないし、気にしちや居ないって知ってたよ」

「そう……なのですか？」

ヤツガランさんは、信じられないとお婆ちゃんを見つめる。

「ええ、何せあの子の口から、あの人の名前が出た事なんて数える程しか無かったからね。毎日毎日聞かされたのは、門番で槍を持った凄腕のお兄ちゃんの話さ」

「それは！」

「ああ、毎日飽きもせず、この型で突くんだとか。こう構えるんだって。花瓶や照明を壊すなんてしよつちゆうだったよ」

「ずっと練習していたんですね」

「そうさね、最後には『僕、衛兵になるんだ』なんて言い出してね、継ぐべき立派な宿が有るのにねえ」

ヤツガランさんは、嗚咽を上げてひたすらに泣いていた。涙がテーブルから零れる程だ。

だが、大の男が泣いている所を観察するのも趣味が悪いか、俺はそつと席を立つ。

「待つて下さい」

しかしその腕を掴み止めたのは当のヤツガランさんだった。

「もう一つ言うべき事が有るのです、ライル君を轢いた馬車。それは今のグブロス卿なのです」

驚く俺と違って、女将さんやお婆ちゃんは知っていた様だ。

「……………やっぱりそうなんだね」

だが、貴族の馬車に轢かれたって文句は言えない、平民には道を譲る義務があるのだ。薄情なようだけど、そんな事を相談されても困ってしまう。俺は眉をひそめて上目遣いにヤッガランさんを見つめる。

「でも、それこそ今更でしょう？ 罪に問える事でも無いのでは？」

「その日は朝から釣りに行く約束でね、おそらく楽しみあまり、暗い内から門に来てしまったんだ。そこにグプロス卿の馬車が突っ込んで来た。猛スピードでね」

「……………」

「確かに罪には問えないが、暗い内から町中を猛スピードで疾走し、子供を撥ねたとあっちゃあ失態だ」

「そうですか……………でもなぜそれを？」

どうして今そんな事を教えてくれるのだろうか？ それが解らない。

「ああ、その失態をグプロス卿は隠蔽してね、反対したんだが。卿はこんな時間に子供を家から出す親の責任を問い始めてね」

「そうだったのですね」

「手紙の事だけじゃなく、それもずっとしこりとして残ってたんだよ」

「ですが、それを話してくれた理由が解らないのですが……」

今更、一緒に糾弾しよう等と言われても困ってしまう。ライル少年をイタコ芸で呼び出して証言させるなんて茶番はしたくない。

「いや、明日グロス卿に何か困った事を言われる様なら力になる、それだけ言いたかったんだ。ライル少年に対する贖罪を込めてね」

「それは心強いです！　ありがとうございます」

これは本当に嬉しい。

何が起こるか解らないのが俺の『偶然』だ、味方は多い方が良い。

「ええ、出来る事は多くはありませんが。協力しますよ」

そう言い残してヤツガランさんはサツパリした顔で宿屋から出て行く。

彼にとつてずっと引つかかっていた物が取れたのだろう。

俺も清々しい気持ちで階段を上がり、自分の部屋に帰ると、ベッドの中で読書をしながら、いつの間にやら眠ってしまうのだった。

★執務室での攻防

本日は快晴なり、今日もスフィール城の庭は美しく、色とりどりの小鳥たちが囀っている。

いよいよ俺達は、このスフィールを治めるグプロス卿と対面する。

「こちらでお待ち下さい」

またまた執事の爺ちゃんから案内された豪華な部屋。

だけど、今日は田中と二人きりだ。

「なあ？ グプロス卿がその場で襲ってくる可能性があると思うか？」

「それは流石に無いでしょう、酒場でも我々が城に向かうと喧伝しましたし」

コイツは何を言ってるんだ？ 俺等を拉致すれば、客人として招いて投獄したのがバレレだ。あまりに外聞が悪いだろう。

「森に棲む者を退治した言わんばかりに堂々と宣言するかも知れないぜ？」

「この国は南方の独立都市、プラヴァスとも取引があるでしょう？ 異民族をその様に扱うのは無策と言えるのでは？」

「かも知れねーが、油断はするなよ」

田中はそう言つて油断無く目を配るが、コイツの実力があればその辺の衛兵の十人や二十人、相手にすることも余裕なんじゃないか？

取り囲まれたらマズいだろうが、建物の中でならその心配は無いハズだ。

そう水を向ければ、素人が！ とばかりに舌打ちをされた。

「良いか？ 何も俺はこの世界で最強の人間つて訳じゃない」

「そうなのですか？」

それは驚きだ、てつきりチートを貰つてブイブイ言わせてるモノかと思つていた。

「ああ、特にスフィールが誇る破戒騎士団つて奴らはヤベーつて評判だ。奴ら日常的に魔獣を狩りまくつてるし、五倍の規模を誇る騎士団相手に完勝してみせたつて話もある」

「それは……驚きました、てつきりグプロス卿は軍事に興味が無い方かと」

俺は驚きに目を見張る。だって、城をこんな風に改造してしまうヤツが、そんな精強な騎士団を持つているとは思わないだろう。

「それが、チゲーんだよ。グプロス卿と言うより今の騎士団長ローグがイカレてるんだ」「イカレてる？」

「ああ、騎士団とは名ばかり、貴族の坊ちゃんのエクササイズに成り果てていたスフィールの騎士団に現れた異端児。噂によればな、弱いヤツは騎士団に不要と決闘を繰り返

し、他の団員を追い出して今の地位に就いたと聞かぜ？」

「……余りに荒唐無稽な話に聞こえます。騎士爵持ちの人間をそう簡単に追い出せるのですか？」

俺は人差し指を顎に添え、可愛く小首を傾げてみせる。

渾身の可愛いポーズだと言うのに、あろう事か田中はソレを無視！

「そこに絡むのがグプロスよ。ヤツは金食い虫の騎士団を縮小したかった。ローグのバックに付いたのさ」

「じゃあ騎士団は人員が減って弱体化するばかりでは……」

「そうだな、実際に以前は騎士が百、一人の騎士に従者が十人は付くから千人規模の大騎士団だったんだが、今はたったの二十人」

「にじゆう？ 全く戦力にならないではないですか！」

「やっぱりグプロスって馬鹿だろ？ そんな数では戦争にならない」

「だけども、千人分の給料はその二十人で山分けだって言うぜ？」

「は？」

それじゃ、グプロス卿の人件費削減目標は達成されないでは無いか。

「それでも、人間が減れば固定費が浮く、無駄な設備が不要になる」

「それで、グプロス卿は納得しているのですか？」

「もちろんだ、二十つて数は傭兵団に近い。才能のある戦士が全員に目を配れる最大人数。魔獣を狩るのに一番効率が良い人数でもあるわけだ。他の騎士団も魔獣を狩るが、奴らの戦果は他を圧倒している」

「つまり、スフィールの騎士団は軍事行動よりも魔獣退治が専門だと?」

「そうだな、でも別に人間相手が弱い訳じゃ無いぜ? むしろ強い。なんせ莫大なサラリー目当てに志願するヤツは後を絶たない」

「志願……ですか?」

「そうだ、他の騎士団と違い、ローグ隊長に実力が認められたら入団可能だ、血筋なんて関係無い。騎士団つてよりも最強の傭兵団つて思った方が近いぜ」

「厄介ですね……」

そんな奴らに狭い城の中、絡まれたら終わりだ。

「俺だつて、刀があれば負けるつもりはさらさらねえんだけどよ……」

そういつて不安げにさする田中の腰の剣は刀ではない。それどころか研ぎに出していて普段の剣ですらない。

良く考えれば、田中が不安に思うのも当然だ。

ま、まあ? 流石に襲つては来ないだろう。きつと、多分。いちいちそんな可能性

を考慮しているはコレから何も出来なくなってしまう。

しかし不穏な名前は気になる。

「それでは最後に、破戒騎士団と言う名前はなんですか？」

「俗称さ、正式名称なんて誰も知らねーよ。金遣いが荒いからな、街ではやりたい放題つて訳だ」

「……………」

本当にメチャクチャな奴らじゃ無いか。大丈夫なのか？ この都市。

「お待たせしました、グプロス卿の執務室へのご案内します」

そこに執事の爺ちゃんが現れて。チラリと不安を抱いたままに俺達はグプロス卿の元へと向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「剣を預けなければならぬのですか？」

「ええ、話し合いの場ですから」

執事にやんわりと促され、仕方無く田中は腰の剣を預ける。

「そらよー！」

「大丈夫なのですか？」

「あつても無くても大差ねえよ、破戒騎士団が出てくるかどうかだな」

……田中にそれだけ言わせる騎士団ってどんだけヤバいんだ？

嫌な予感に身を焼かれながらも、執事のノックと共に俺達はグプロスが待つ部屋へと通された。

「グプロス様、お客人のユマ姫がお越しです」

「入れ！ いや、よく来てくれた」

グプロスの声は多少上ずっていた。巨漢の田中に圧倒されたのだろう。

一方俺は田中の影に隠れてしずしずと入場。

横からびよこんと飛び出すと同時に、振り向きながら優雅にお辞儀をひとつ。

「お会いできて光栄です、私はエルフの姫、ユマ・ガーシント・エンディアン、以後お見知りおきを」

「どうだ！ フリフリ衣装を活かす渾身の挨拶は！ 今日手持ちで一番派手な白地に紫の刺繍が入ったドレスに、秘宝であるティアラも完全装備。」

「……………」

ポカーン！ って顔するの止めて！ 俺が空気読めない娘みたいじゃん！
え？ 作法とか失敗した？

「ゴホン！ グプロス様、ご返事を！」

執事の爺が咳払いを聞いて、グプロス卿がやっとこの再起動。

「……………あ、ああ」

まるで上の空。このでっぴりとした中年男がグプロス卿だろうが、いきなりマヌケ面を拝んでしまった。

コレは……俺の可愛さに圧倒されたとか？

現にグプロス卿が俺を見る目は血走って見える。どうもストライクゾーンに入ったようだ。

「わざわざ遠くから良くお越し頂きました、私はグプロス・ソントールこの城の主にして、この一帯を治めさせて頂いております」

慇懃に挨拶をする中も、チラリと俺を窺う目には覚えがある。酒場でも俺に入れ込みすぎるオッサンはこんな感じだ。余りにも美しいと、拝んでくる奴まで居るからな。

俺も自分の見た目は可愛いと思うし、前世の俺だったら同じ様なリアクションをすだろうから気持ちには痛いほど解ってしまう。

引き攣った笑いを浮かべる俺に、グプロス卿は畳みかける。

「さて早速ですが、私の様な一介の領主の城に、ザバの姫君がお越しになるとは。訳を伺つてもよろしいでしょうか？」

今更取り繕った様に、でかい腹を撫でながらソファーに体を沈めて余裕ぶって見せてくるが無駄だ。コイツは俺から目が離せない。

だが、気に入り過ぎて監禁されたら事だ。こうなってしまうと地位も名声も投げ打つ

て、打算抜きの暴挙に出かねない。

どうする？ いや！ 今更引けるか！ 俺は強気に押す！

「その前に、我々はザバなどと言うモンスターではありません」

「ほう、では何と呼べば？」

「エルフ、今後は我らの事をそう呼んでいただけると」

俺の言葉にもグプロス卿は驚いた様子が無い。既に調べは付いてると言う事か。

「ではエルフの姫君よ、あなた方は一体我ら人間に何を求めるか？」

「我らが求めるのは同盟、共に帝国と戦うための同盟関係です」

「ふむ」

考え込んだグプロス卿に、俺は国で起こった悲劇について滔々と語ってみせる。帝国の非道をたっぷりとだ。

俺の魅力に参ったあまり、味方をしてくれると良いのだが……

「なるほど、噂で帝国がザバの王国に攻め入ったと言う話は聞いていましたが、その様な事になっているとは」

驚いて見せるが、グプロス卿の仕草がいちいち嘘くさい。

「これは、駄目か？」

「ええ、エルフの技術を手に入れた帝国の次の目標はこのビルダール王国になるでしょ

う、その際真つ先に新兵器の餌食になるのはこのスフィールに違い有りません」

「ふむ、しかしザバ、いえエルフの国を落としたりとあれば数年は地盤を固めるのに時間が掛かるのでは？」

「いえ、恐らく帝国はエルフの国を治める事に失敗します」

「ほう」

「やつと興味を引かれたのか、身を乗り出してくる。やはり実務的な未来の話になるとこのタイプは食いつきが良い。」

「そもそも帝国に大森林を統治するつもりがあるかどうか……魔獣蔓延る魔境。魔力も濃く人間が住める土地とは思えません」

「では帝国は何の為にエルフの王国に攻め込んだとお考えで？」

「いや、そんな事俺が聞きたいよ。」

「それこそ帝国にお尋ね下さい、我々の知り得る所では無いのです」

「なるほど、機会があれば聞いてみたいものですな」

「彼らがもし、金銀財宝と言ったお宝に期待して攻め込んだとするならば、それ程の価値がある物は見つけられなかったでしょう。更に言えば我々は大森林でしか生きられないのですから、奴隷としても価値が無い」

「どういう事です？」

グプロス卿は不思議そうに首を捻る。

森に棲む者が見世物として捕まることはあるようで、生態ぐらいは知っているかと思つたが知らない様だ。

俺はエルフが住む土地には魔力が必要で、逆に大森林は人間が生きるには魔力が濃すぎる事を説明した。

すると、当然グプロス卿は俺の事を心配する。

「だとしたら姫は相当無理をしてこのスフィールに滞在して居られる？」

「いえ、私は人間とエルフのハーフなのです、人間の領域でも問題なく活動できます」

「まさか、エルフの王妃が人間なのですか？」

「いいえ、私は流れの女性冒険者との間に出来た妾腹の娘です。ですがエルフの全権を委託されてここにいます、そこは安心して下さい」

全権とか嘘だけだな！ いや、俺が最後の王族なので王族の意向としては全権だし！

「しかし同盟と言つても、同じ場所に生きられぬなら、戦場を共にすることすら出来ないでは無いですか」

「ですが、技術的な協力関係を築く事は可能。帝国がエルフから手に入れた魔道具で王国領を蹂躪する事を防ぐ事は可能でしょう」

「おとぎ話の様な一面を火の海にする様な魔法があると言うのですか」

うーん、探り合いになってしまふな。ドコまで話して良いのだろうか？

あまり派手な攻撃魔法は健康値で消えてしまふ。だがソレを言うと魔道具屋のオッサンが言うにはグプロス卿は興味を失ってしまうだろう。

かといって、嘘はつけない。さりとて魔法を駆使した戦争など、想像で語るしか無い部分が多過ぎる。

多少は盛つていくしか無い。

「使い方次第でしょうが、その様な攻撃以上に恐ろしい物が幾らでも有ると言う事を、身をもって知る事になるでしょう」

「例えば？」

「一晩で城壁が出来上がり、高速で破城槌や投石器が移動しこちらの拠点を砕いて来る。そんな戦術すら取れる、それだけの技術があるのです」

俺がそう言うと、キラリとグプロスの目が光る。

「ですが、それ程の力が有っても帝国に負けた、なぜですか？」

なるほど、良いツツコミだ。言いたくないが言うしか無い。

「霧です」

「霧？」

「魔力を無効化する兵器が帝国にはあるのです、その霧の元では魔道具も魔法も使えま

せん」

「だとすれば、エルフの助力が有っても帝国に勝つことは難しいのでは？」

「霧の中では帝国自身も魔道具を使えないと思われ、魔力無しの土俵に引きずり込んで初めて五分の戦いに持ち込める。そう言う勝負になるかと思われ」

「しかし、それでは同盟と言いながら魔道具の提供だけで戦うのは我々ではないですか！」

「勿論、我々も帝国と戦います、我々には魔道具だけでなくエルフのみが使える魔法の力もありますから」

俺がそう言うのと、待つてましたとグプロス卿が膝を打った。

「それですよ、世に聞こえた森に棲む者の魔法と言われる技、それがどこまでが本当で、どこからがお伽噺なのか、それすら我々には解らない」

「グプロス様は、魔法の力がご覧になりたいと？」

俺はソファーに座ったまま、微動だにせずジッとグプロス卿の目を見つめる。

見たいのか？ 見せてやるよ！ 派手でハツタリだけドーンと効くヤツを！

俺の目力に圧倒されたのか、グプロス卿がグツと息を飲むのが解った。

「それは勿論、見せて頂けると言うなら願っても無い。狭い庭ですが少々派手な事をしても問題にはなりません、オイ！ 客人を「良いのですか？」」

俺は卿の言葉を遮り、ローテーブルに手を付き、勢いよく身を乗り出す。

「この部屋の外で良いのですか？　せつかく用意した方々が無駄になるのでは？」

「何を言っているのですか？」

「壁の裏に四人、机の下に一人。ひよつとして屋根裏にも居るのですか？」

「ツ!!」

…そう、グプロス卿はこの部屋のそこかしこに、兵を隠している。

集音の魔法を使えばそんな事はバレバレ。どういう訳か隠し兵に田中も気が付いて居るようで、目線でソレは察せられる。

まさかバレていたとは夢にも思っていなかった。そんな目で俺を見るグプロス卿の顔色は青い。

「いやはや、何の事ですか？」

そりやー認めないだろう。客の帯剣を認めず、自分だけは隠し兵とはね。

「あら、私の勘違いでしょうか？」

「旅でお疲れなのでは無いですか？　良かったら今晚泊まって行って頂けると、エルフの姫を泊めたとなれば、スフィール城にも箔が付きます」

誰が泊まるかボケ！　苛立ちを押し隠し、オレは怯えた様子で辺りを見回す。

「そうですか？　しかしこのお城、どうにも薄暗くて。お化けが出そうではありません

か、私怖くて怖くて」

「薄暗い……でしようか？」

グブロス卿が首を傾げるのも当然、スフィール城は至る所に明かりの魔道具が置かれ、まばゆいばかりの明るさだ。

意味が全く解らないのだろうか？ キョトンとした顔だが、一方で俺は凶暴に笑った。

コレから起こる事を考えると楽しくて堪らない。

……コレから暗くなるんだよ！

——パァン

乾いた音だ、それと同時に全ての魔道具の光が消えた。

「何ッ!？」

「薄暗いと思いませんか？」

急に暗くなった部屋、何食わぬお澄まし顔で言ってみせる。

俺がやったのは魔力そのものを飛ばし、魔道具をオーバーヒートさせただけ。

丁度、質の悪い魔導ランプに純度の高い魔石を入れた時と同じ事をしたのだ。

「えっ……ええ、しよ、少々暗いかも知れませんか」

卿は必死に冷静を装っている。暗がりに乗じて隠れた兵を動かそうとしているのだ

ろうが、ココはハツタリで押し通す！

おまえら等ごとき、魔法でいつでも殺せるのだぞと言う体で行く。俺は派手な照明魔法を準備する。

「でしよう？ お節介かも知れませんが少々明るくさせて頂きますね『我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ』」

——ガアアーン

俺が魔法を唱え終わると同時、金属が激しく叩かれる音。心底驚いたが、ギリギリの所で悲鳴を飲み込む。

そして薄暗くなった執務室に明かりが戻った。

いや、戻ったどころでは無い。まるで中天に輝く真夏の太陽。俺は照明の魔法にありつただけの魔力を込めたのだ。

そこに照らし出されたのは、俺へと斬りかかる黒ずくめの暗殺者。そしてそれを紙一重、小手の硬い部分で受け止める田中の姿だった。

……危なかった。無闇に刺激してしまえばこうなるのも当然か。俺の頬をツウーッと一筋の汗が伝う。

それだけじゃない、壁の奥から出るわ出るわ、五人ぐらいの真つ黒な男達。

メツチャビビる！ だけど、全部読み切っていたとばかり、余裕の表情で俺は微笑む

！

「良かったですわ、明るくなつて。薄暗い物ですからこんな先客がいらしていたと言
うのに私つたら気が付かず、長話をしてしまつて」

「……………」

呆然と俺を見つめるグプロス卿は、魂までも俺に釘付けだ。

「余り長らく卿を独占しては申し訳ないですわね、グプロス様、私達は王都を目指して旅
をしているのです。エルフとビルダール王国の同盟、賛成して頂けるならすぐにも馬
車を用意して頂けますか？」

「…………いや、それは」

言い淀むグプロスに、俺はニイツと笑いかけ威圧する。

「何か問題が？」

「数日、数日待つて欲しい。国の存亡に関わる事、即答は出来ない」

「…………そうですか、ですが我々もその数日を争う身です、こうしている間にも大勢のエル
フが帝国の凶刃の犠牲になっているに違いないのですから」

「いや、しかし」

脂汗に塗れた顔を必死に拭きながら、考えを巡らせているようだ。考える時間ぐらい
はやろうじゃないか。

破戒騎士団だかなんだか知らないが、拍子抜け。このレベルなら全く問題ないぞ？

どんどん送ってこい。

「では我々は東通りの宿スーニカに数日は泊まっています、その間に心が決まったのならご連絡下さい、これ以上長居するのは申し訳ないですわ」

俺はそう言って飛び出して来た黒ずくめの男達を睥睨する。

更に、挑発するように田中が俺をたしなめる。

「そうですね、我々と違いこの方々は帯剣を許されてここに居るのですから、余程高い身分の方々とお見受けする。姫様と言えど失礼は行けません」

「あら！ 本当にそうですね、その様な高貴なお方をお待たせしては行けませんね、それではグブロス卿、御機嫌よう」

言うだけ言って、俺達はさっさと部屋を後にする。ここまでやられたらマナー違反もクソも無いハズだ。

ズカズカと通路を歩き、ひたたくる様に剣を取り返すと、田中と二人庭に出る。

「どうでした？」

「雑魚ばかりだったな、破戒騎士団は居なかった」

「……そうですか」

あの黒い男達がそうだったら良かったが、やはり騎士団はもつと強いらしい。

「でもよ、話によると魔獣を狩るために出払ってるって言うから当面は気にしないで良

いんじや無いか？ 畏かと思つたがそうじやなさそうだ」

「そうなのです？ でも……」

俺の『偶然』がそんな甘いことをするだろうか？ 俺にはソレが信じられなかった。

作戦の練り直し

「不味いですね」

綺麗な庭を田中と突っ切りながらも考えてしまう、あの対応は正しかったのか？

「喧嘩売っちゃまったな、でも良いんじゃないやねえか？ スツキリしたぜ」

「嫌われてしまったと、そう考えていますか？」

「違うのか？」

「恐らく逆、『好かれ過ぎた』」

「あれでか？」

「あれで、です」

相手が中年親父と言う事で、プリルラ先生の知識を頼りに、大胆に動いた部分もある。だが先生のオーダーは素のままに狂気を前面に押し出して立ち回って良いと言う物。

狂気など意味が解らないが、素で良いと言うのでやりたい放題にやった訳だが。やり過ぎた感はずっとある。

「あれで好きになるならグプロスはDMだな」

「なら良いのですが、DSかも知れません」

「は？」

「小生意気な女の子を泣かせ、屈服させるのが趣味の男と言う事です。そう言う人間に心当たりは有りませんか？」

大なり小なり男ならそう言う気持ちも有るだろう事は、高橋敬一だった俺が良く知っている。だがそれが行き過ぎると危険だ。プリルラ先生もそう言う相手に不用意に媚びを売るのは厳禁と言っている。

田中にしたってそう言う面は有るのだろう、頭をボリボリと搔くと、ちよつと気まずそうに俺を見る。

「……それお前の事か？」

は？ いや、今そう言う話じゃ無かったよな？ 男の性癖の話してたよな？ いや女性でもそう言う性癖は有るか？ で、俺、そんな事してる？

「何故、私の話になるのです？ 私が異性に意地悪を繰り返していますか？」
「あー、そうじゃねえけどよ」

そうじゃないなら何なんだよ！ ホントに意味が解らねーなコイツ。
ぶん殴りたい、助走をつけて思い切りぶん殴りたい！

「あ、姫様が所々俺に冷たいのってそう言うのじゃ無いよな？ その……困るぜ？」
「頭にウジでも湧いているのですか？」

殺してーよマジ。どうすんだよコイツ。

「とにかく、気を許すのは危険な相手です」

「じゃあ何か？ とつとと街を出るべきか？」

「其れも有りますが気になる点多かったですね」

「へえ？」

森に棲む者が怪物と恐れられている以上、兵を隠しているのは想定^バの範囲内。だがアレだけ恥を晒し、俺に魅入られて。馬車の一つも用意してくれないと言うのは違和感がある。

俺達は足早に庭を抜け、門を潜り屋敷の外へ、ここまで何のアクションも無し。帰りにチャンバラ騒ぎを起こさないで済むのはありがたいが、益々狙いが解らない。

何事も無く敷地を出ると、変わらぬ街並みの様子にホッと一息。

貴族が多い西側の通りにはオシャレなカフェだつて存在している、急いで駆け込み作戦会議と洒落込んだ。

テラス席に腰かけた俺は、シヨールも付けず道行く人々に長い耳を堂々曝け出す。

「だいぶ目立って居るな」

「人知れず消されるよりはマシと判断しました」

「物騒だな、そこまであり得るか？」

「私に執着を見せた、でも協力してはくれない。だったらどうするつもりか」
「攫いに来るか？」

「最悪、殺しに来るかも知れません」

「チツ、面倒だな、それこそとつと街を離れるべきじゃねーか？」

田中の言う事も最も、だがおかしいのだ。

「そもそも、女性を屈服させたいのなら全面的に協力し「グプロス様がいなければ私、駄目なんです」と言わせれば良いのです。それが返答を先延ばし、態度も実に素っ気ない。事実上断られたも同じでしょう」

「へえ、そんなしおらしい事、言うつもり有るのかよ？」

「それこそ、全面的に協力し資金も提供してくれるなら幾らでも言いますよ」

「うへえ……怖いねえ」

「からか 揶揄われてしまったが、しな垂れ掛かって媚びを売るなど何の抵抗も無い。

正直な所、俺はあのオツサンと寝たつて構わない。そりや一生あの脂ぎったオツサンの下に組み敷かれてペットの様に過ごすなんて普通は御免だろう。

「だけど、俺は十六までに死ぬ。」

「俺の一生は後四年有るか無いかなのだ。その程度で帝国が滅んでくれるなら、こんなに安らかな死は無いだろう。」

だが、プリルラ先生も言っているが其れは最後の手段。この世界の貞操観念は地球の爛れたソレよりも厳格だし、何より同情を集め命を繋ぐのに『処女性』と言うのは武器になるらしい。

脂ぎった親父に無理矢理犯されたなら兎も角、女性を武器に売春したり、イケメンとパコパコやったりすると、どうしても『女』らしさが滲んで、同性からの同情票は確実に取り逃す事に成るらしい。

かく言うプリルラ先生もイケメンの戦士と事に及んでから周りから受けが悪くなり、その頼りのイケメンが死んでからどうにも行き詰まって、最後には自殺に追い込まれたと。

「話を戻しましょう、私に頭を下げさせるのに下卑た要求の一つもせず、事実上ハッキリと協力を断った。つまりグプロス卿は我らに協力できない理由がある」

「どういうことか？ まさか帝国に寝返ったか？」

「そこまでは解りませんが、順当な理由としてはエルフに協力する事で帝国を刺激したくないと言うのも考えられるのですが……」

「ですが？」

「その程度であれ程までに動揺するかと思ひまして、実は内密に帝国に私を売る算段、いえ約束まで取り付けてしまつて居る可能性も有るでしょう」

「だとすれば、冗談抜きに、あそこで攫う気だったとしてもおかしく無かったか？」
「かも知れませんが」

帝国はエルフを誰彼構わずサクサク殺していた、お宝でも見つけて凱旋する気だったが、目当ての物が見つからず、統治も出来ないとなつて。今更王族を血眼で探してる可能性も考慮すべきだ。

誘拐なんて外聞が悪いことはしないだろうと思つていたが、帝国とがつつり通じてるなら話は変わってくる。

「だとしたら、たった五人とは俺を舐め過ぎだな、頼みの破戒騎士団も出してこないとは」

「普通なら十分でしょう、こちらは武装解除され、相手は完全装備、抵抗しようとも思わないのが普通では」

「俺は刃を止めるわ、姫様の魔法はスゲエわで諦めたか」
「考え過ぎかも知れませんが……」

単に魔法を警戒してただけの可能性も十分ある。森に棲む者の姫なんて言う、俺の存在がイレギュラー過ぎて、どんな可能性だつてあり得てしまう。

もつと短慮に、思ったより俺が可愛いから襲つて来た。そんな可能性だつて考慮しなくてならない。実際グブロス卿はそんな目をしていた。

「何にせよ、これからは貴族を回って馬車を回して貰える様に交渉すべきでしょう」

「領主にまず話を通した、義理は果たしたって奴だな」

「ええ」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ドサ回りの対象を酒場から貴族のパーティーに変更すべく、例の高級魔道具店にやって来た。

「この主人ならば貴族とも顔が利くに違いない。」

「なるほど、実はあなた方の話は貴族様の間でも話題になっております」

「そうですか、恐ろしい化け物の様に言われているのでしょうか？」

「いえいえ、とんでもない、とても美しい姫だと、ええ、私としてもお世辞抜きでその通りだと言わせて頂いております」

「まあ、私なんか美しいだなんて！ 困ったわ、逆の意味でお会いするのが怖くなってしまいました」

「それは失礼、あいにく嘘がつけられないものでして。それにしても会うのが怖いと言う事は？」

「はい、実は領主のグブロス様に馬車を回して貰おうと思ったのですが遠回しに断られてしまつて……頼れる人を探しているのです」

「それでしたら、姫君に会いたいという方に話を通して置きますよ」

「まあ！ でしたら我々はスーニカの宿屋に泊まっているのでご連絡して頂ければ助かります」

「お安い御用です」

とまあ、寒々しい会話をして終了だ。

魔道具屋は話題の俺達を紹介出来て顔の広さをアピールできるし、俺らは貴族を紹介して貰ってウインウイン。

魔道具屋的に、魔石の買取の追加も期待しているだろう。

だが貴族の約束など何日か掛かるのが通例。

となれば今まで通り酒場でのドサ回りも並行して行こう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして訪れた酒場は押すな押すなの大盛況だ。

「応援してるぜ！ 姫様よお！」

赤ら顔のオッサンに気安く声を掛けられる。帝国の人間も少なくないスフィールで、声高に帝国打倒を訴える。当然気まずそうに酒場から出て行く者も少なくない、恐らく帝国の人間だろう。

営業妨害と思うだろうが、事前に酒場のマスターに許可は取っている。実際去る者よ

り来る者が遥かに多いのだから収支はプラスだ。

ゴミゴミしていても、突然襲われるような事は無い。探るような貴族の使いはそこそこ来るが興味本位が透けて見える。深刻な案件では無さそう。

急ぐ旅だが、慌てて王都に向かつて、帝国との戦争などそうそう決断してくれる筈も無い。それが前線で上手い事対立を煽って、それが暴発。開戦ムードなど漂ってこれたら小難しい理屈や利益をチラつかせるよりよっぽど楽で良い。

そんな希望を胸に、数日はこのスフィールでの滞在を決意する。

確かに危険だ、領主のグプロスは何を考えているのかも解らないし、既に裏から帝国の手が回されている可能性も高い。

だが、それだつて望んでいた事。酒場も貴族のパーティーも夜が本番、これからは夜更かして昼に起きる生活になりそうだと覚悟を決める。

酒場の人々すら、まばらとなる深夜までドサ回りをこなした後。田中と二人、宿へと帰った。

街の宿屋と言えども余り深夜の帰宅は歓迎されない。連泊している俺らは問題無いが、チェックインは出来ない時間のためロビーは薄暗く、人の気配も無い。

カウンターの横をすり抜けると、音を立てない様にゆつくりと階段を上る。

自室のある二階で田中と別れ、各々の部屋に滑り込むと、倒れ込むようにベッドに沈

んだ。

どっと疲れが出た。あつと言う間にウトウトしてくる。だが今日からは命の危険も桁違いに高い、無防備に寝てしまつては俺の『偶然』も相まって碌な事にはならないだろう。

「うー、めんどくさいが仕方ない」

そう言えば今日は、領主様と会談とあつてそれなりに良いドレスを着ていたのだった。皺になるからパジャマ替わりの肌着に着替え、水筒の水で軽く顔を拭うと再びベッドに。

「つて、また忘れてたな」

肝心の魔法を忘れていた。ただこの魔法がまともに役に立つた事は、今まで一度も無いので正直信用出来ないのだが……

「まあ無いよりマシか」

一応、結界を張るや否や、俺の意識は微睡みの中に溶けて行つた。

早速の襲撃

「むにやうにや……もう、来るのが早いよう」

我ながら可愛い感じの寝言が漏れた。80点は付けて良い。

「んな事言ってる場合じゃねーな」

一瞬で我に返る、侵入者だ。明確に敵意を持って近づいている者が居る。

俺が使ったのは、敵意を持って近づく者を判別し、その存在を知らせる魔法。

そう聞くと便利過ぎるし如何にもファンタジーだが、案外使い物にならない。

頑張つて理屈を説明すると、まず前提として「死ね！」等と害意を持って強く相手を意識した際に、無意識に発せられた魔力が微力ながら相手を傷つけ様とする……らしい。

その魔力に抵抗するべく健康値が極々微妙に減少する、その辺りを利用して敵意を判別する……らしい。

ちよつとファンタジー過ぎて余り得意な魔法ではない、ないのだが今回は上手く行った模様。ちよつと嫌な感じが頭にガンガンと響いて来る。

今生では一度寝るとちよつとやさつとじゃ全然起きない。だから朝起きたら見知ら

ぬ天井で牢の中って想像をしてしまい、寝れない事も度々あった。それだけにこの魔法で起きられた事實は嬉しい。

この魔法、得意じゃないのもあるが相当にセンシティブ。色んな人の様々な意識が飛び交う昼間に使おう物ならガンガンと引つかかかってまるで意味が無い。

つまり閾値が重要なのだが、今回は想像以上の反応が出ている。コイツは間違い無いだろう。

コンコンコン

壁を三回ノック、隣の部屋の田中にもコレで異常が伝わっただろうか？

コンコンコン

いや、扉の方をノックして来た、既に起きていた様だ。流石と言った所。

「姫様、俺だ」

「侵入者ですな」

「ああ……解ってたか」

解らいでか、むしろ魔法も無しで解る方が凄い。

「入って、隠れていて下さい」

女性の部屋に男を上げるなど褒められた事では無いだろうが、こっちは命が懸かってる。だが問題なのは隠れる場所も無いぐらい殺風景な宿だと言う事。

箆筒は有るが巨体の田中が収まる様なサイズでは無い。

「なんか、間男みたいだな」

で、ベッドの下に隠れて貰った結果がこのセリフだ。誰がお前としつぱりするかと言う話。だったら侵入者とよろしくやった方がマシ。

「では、お客様にはアナタ、とでも呼びかけましょうか？」

「んな事より、無理はするな」

自分だけボケて他人には厳しいのかよ！ 本当に腹立たしい。

心の中で愚痴っていると、木窓に嵌められた門がコトンと落ちた。どうやったのか隙間から外した様だ、流石犯罪組織と言った所か？

流石に緊張に息を飲み、木窓を睨みながら浅く息を吐き出した。

「バンツ！」と一息に窓が開けられると、ガツ！と勢いよく男が身を乗り出した。

と、同時に田中に組み伏せられた。何が面白いのか、何故だか笑えて来るのが不思議だ。

しかし、ベッドの下の居たハズなのに田中の動きは素早い。俺も魔法を準備していたが無駄になった。

「ムグー！　ぐ、テメエ！　ぐげえ」

なんか必死に抵抗してる、見苦しいね。でも素人つてのはあり得ない。その出で立ち

はピツチリした黒の上下にマスクまで。堂に入ったその道のプロだ。

これでただの物盗りは無いだろう、確実に俺を狙って来たのだ。

「殺しましょうか」

「おいおい、物騒だな」

「しかし領主がアレではまともな取り調べが行われるかも怪しい物でしょう？」

正直なところ、ウルトラCで変な難癖付けられたら困ってしまう。

「いやいや、お前が望んでた状況じゃねーか、卑劣な帝国が暗殺者を差し向けて来た、そうしちまえば良いんだろ？」

「それは、そうなのですが……」

これ、タイミング的にどう考えても帝国じゃなくてグプロス卿の手の者だろ？ 完全フリーな人攫いならともかく、バックに領主が居ると最悪、逆にこつちが悪者にされたり、護送中に不運にも逃げられたって事にされてしまう。

面子を潰されたって、裏社会の人間から執拗に狙われる。そんな可能性も考えると二の足を踏んでしまう。

「取り敢えず、ヤツガランとか言う門番を頼もうぜ、アイツすら信じられないならこの街からとつとズラかるべきだ」

「確かに一理ありますね、では着替えます」

実は田中と違って俺はまだパジャマ姿（肌着）、このまま外に出るのはマズかろう。
……いや、下手に着替えない方が良いかな？

寝込みを襲われたと言うのに、完全装備のキリツとした出で立ちで現れるのも違和感がある。パジャマ姿で悄然しよげんとしているのが良いかも知れない。

そんな風にスカートを手を悩んでいると、田中がこちらを怪訝そうに見て来る。

「なんだ？ 俺らが居る前で着替えるのが恥ずかしいなら、俺の部屋使っていないぞ？」

「いえ、変に着替えると寝込みを襲われた感が無いと思ひまして、あ！」

「あ？」

「タナカ、マントを！ あなたの黒いマントを貸してください」

「？ 良いけどよ？」

と言う訳で、ひと騒動始めるか。

「キヤーーーーー!!」

「どうした？ オイつてめえ何してやがる!! 物盗りだ！ 物盗りが出たぞ！」

俺は渾身の悲鳴、田中には大声で叫んでもらう。

「なんだって？」

「どうしたんだい？」

宿の客や女将さんが騒ぎ出す。

「泥棒です！ 私の部屋に泥棒が！ 私、怖くて怖くて」

俺は駆け出し、縄り付く。

「本当かい？」

「ええ、なんとか護衛が取り押さえてくれました」

「怪我は？ 大丈夫かい？」

「……ええ、ですが、ひよつとしたら泥棒では無く、私を狙った殺し屋なのかも知れませ
ん」

女将さんや、お婆ちゃんが心配そうに声を掛けてくれるが。俺は着の身着のまま、ぶかぶかなマントに包まれ悄然としている。（と言う体で行く）

「憲兵に突き出してやる！ 覚悟しやがれ！」

そう言つて男の首根っこ掴んだまま、宿まで飛び出した田中。夜中だと言うのに、下手人を引きずりながら大声でまくし立てる。

「物盗りが出たぞー！ 人攫いかも知れねえ！ 他にも居るかも解らねえ！ 気を付けろー！」

すると寝静まっていた街は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

往來に面した窓が次々に開けられランプ片手にこちらを覗き込んでくる、慌てて通りに飛び出してくる住民だつて少なくない。

「宿屋で物盗りだつて？」

「何時ものコソ泥かい？」

「いや、どうやら狙われたのは最近話題のザバの姫君らしい」

「ザバの姫君のお宝を狙うとは豪気な泥棒だねえ」

「それがどうやら犯人は帝国に雇われた暗殺者らしいぜ」

「ひえーおつかねえ」

暗殺者かもしれないと言つたら、良い感じで広まつている。

特に女将さんが凄いい、それはもうダツシユして方々に必死に噂を流している。おばちゃんの噂を流す力、スゲーな。そのパワフルな動きを田中と二人で呆然と見守る。

「女将さんには悪い事したな、盗みが入ると宿屋の評判は落ちるからなあ」

あ、そっか。泥棒に狙われる宿屋つて嫌だもんな。それが帝国が差し向けた凄腕の暗殺者つて話にすれば、そいつは仕方ないつてなつて評判も落ちないと。そりや必死になる訳だ。

当の犯人はマスクをひん剥いて、猿ぐつわをかまし、後ろ手に縛つてさらし者にした上で、ケツを蹴とばして夜のパレードの先頭を飾つて頂く事にする。

普通なら城近くの詰め所に行くべき所だが、ヤツガラんさんを頼みに北門の詰め所まで派手に行進だ。

「我、望む、この手より放たれたる光珠達よ」

もう魔法で明かりも追加しちゃう。夜中だと言うのに昼間の様に強烈な明かりが大通りを照らし出すと、ゴミを漁っていた野良犬が慌てて路地裏に逃げ込んで行く。

「オイ！ やり過ぎじゃねえか？」

「そ、そうでしょうか？」

襲われた事を派手にアピールしようと思ったが、確かに魔法など使っては「やはりザバは化け物か」と言われてしまい、却って立場を悪くしかねない。

街では何をしたらどう思われるかを考えて行動しないとダメだ、色々面倒でストレスが溜まる。

そうこうしている内、北門まで辿り着く、スフィールに来た時以来だが夜の城門は寒々しく恐ろしかった。

「着いたな、ヤツガランを呼んで貰うか」

「深夜ですし、恐らく居ないでしょうね」

偉い人っぽいし夜勤はしないんじゃないかな？ 知らんけど。

「オイ、何の騒ぎだ！」

そうこうする内に衛兵さんの方から声が掛かった。ここまで騒げば当たり前と言えは当たり前前。それを見て田中はパレードの先頭を蹴つ飛ばす。

「こいつが姫様の部屋に入り込みやがった、この街の警備はどうなってやがる」

男は後ろ手に縛られている。そのケツをあかも蹴り飛ばされれば、バランスを保てるはずもない、固い石畳の上に強制ヘッドスライディング。後は審判にアウトを貰えばゲームセットだ。

「物盗りか？ 協力感謝する」

「違えな、お忍びでやって来た森に棲む者の姫君の話聞いて無いか？ こいつはその命を狙いに来た帝国の殺し屋よ」

「!? なんだと？ 解った！ 詰所で詳しく話を聞かせてくれ」

「何度も同じ事を話したくはねえ、ヤツガランは居るか？」

「ヤツガラン隊長か？ 隊長は日勤だ、今は居ない！」

「解った、牢にぶち込んでおいてくれ、事情は奴に話す」

「何だと!？」

「解んねえのか！ こいつはちやちな物盗りなんかじゃねえ！ 帝国の工作員なんだよ

！ 下っ端じゃ話にならねえ」

「そこまで言い切って良いのかよ？ 良いのか？ 良いかも知れない。とにかく今日はここまでだ、明日の事は明日考えよう。」

「下っ端だと？ 俺達が話を聞き取って、隊長に要件を上げるのがルールだ、隊長と話し

たければまず俺に話をしろ！」

当然、下つ端呼ばわりされた衛兵はキレ気味だが、もうどうでも良いから早くして欲しい。

正直アレだ、お眠^{ねむ}だ。知らないかも知れないが、お姫様は毎日規則的かつ健康的に睡眠を取らないと、肌が荒れ死ぬ生物なのだった！

いやいや先程からテンションがおかしい。脳が考える事を拒否している。駄目だ、普通に体力的に事情聴取など耐えられそうも無い。

「ごめんなさい、私まだ怖くて、ちゃんとお話し出来るかどうか……」
「……そうか、仕方ないな、解った、明日来てくれ」

しおらしくお願いすればアツサリ通った、美少女の破壊力たるや素晴らしいね。
「ありがとうございます、それでは明日よろしくお願いします」

「あ、ああ……大丈夫か、寝込みを襲われたなら無理も無いが、顔色が悪いな」
違った、眠過ぎてヤバいみたいだ、震えが止まらない、足元もフラフラしている。

そんな俺の様子に田中は目を見張ると、屈み込んで小声で話し掛けて来た。
「スゲー演技だな、本当に調子が悪くて震えてる様にしか見えないぜ？」

「いえ？　調子が悪いのですが？」

「え？」

「眠いです」

「お、おう」

「寝ます、オヤスミ」

「おい、どういうこつた？ オイ！」

田中の背中によじ登ると、俺は意識を手放した。

ヤツガランの懺悔2

翌日、いや厳密には今日か？ 俺達は早速ヤツガランさんに呼び出され、北門にある詰所まで事情聴取にやって来た。

ヤツガランさんは、ライル少年の思い出を語る弱気な青年の面影を消し去り、どつしりとした大人の態度で迎えてくれた。

「済まない、我々が不甲斐ないばかりに君らに迷惑を掛けた様だ」

「で、結局アイツの狙いは何だ？ 物取りか？」

「いいえ、恐らくは最近話題の人攫いの一味の様です。あいつらは身元がハッキリしない流浪人を狙って、攫った人間を奴隸として帝国に売り飛ばしている連中ですね」

「おつかねえな、この街は犯罪集団を野放しかよ、おちおち寝ちゃあ居られねえ」

田中はオーバリーアクションで相手の責任を問う、冒険者として活動する上での必須テクなんだろうが、癖になつては居ないか？ そんなチンピラみたいな態度で、強引に譲歩を引き出す場面でも無いだろうに。

だが、流石にただの人攫いに偶然狙われたつてのは無理がある。俺はため息ひとつ、肩をすくめる。

「まさか森に棲む者改め、エルフの姫である私を攫って、見世物にでもしようとしたと？」

「本人はそう言っています」

「馬鹿な事を、人攫いにしたって宿屋に泊まる人間を襲うなどリスクが高過ぎます。誰かの依頼あつての事でしょう」

「でしような、ただ背後関係を洗う事は並大抵ではありません」

「この街は地代が高い故に宿屋だつて安くはない。馬小屋や商店の軒下で雨風を凌いで居る人間は大勢いる。つまり人間なんて攫い放題なのだ。幾らエルフだからつて、壁に張り付いてのアクロバティックまで披露して、わざわざ攫う必要は無い筈だ。」

「ヤッガランさん、ライル少年の贖罪として、力になると約束してくれましたよね？」

「ええ、ですがあなた方が言う通り、帝国が人攫いに依頼して襲わせたとしても、証拠など出てこないでしょう」

「帝国じゃないとしたら？」

「……何か他に心当たりが？」

「元々、グプロス卿に無理を言われた時、力になると言う約束でしたよね？」

「……いや、まさかグプロス様との会談で何が有ったのですか？」

「そう言えば、会談の内容については誰にも話していませんでした。」

かいつまんで内容を説明する。魔道具を吹っ飛ばし、裏から護衛が沸いて、部屋を派手に魔法で照らした。

大暴れしたって訳じゃない、精々そんな所。

「いやいや、その場で切り殺されてもおかしく無いでしょう！」

「そうなたらそうなたで、覚悟の上です」

「そんな！」

ヤツガランさんにそう言われても、大人しくしていれば穏当に事が運んだとも限らない。

「グプロス卿の私を見る目はまともな物ではありませんでした。有り体に言えば獲物を前にした狼のそれだと言えば伝わるでしょうか？」

「いやそんな、グプロス卿は確かに女癖が悪いと言われていますが、その、何と言ったら良いか……姫君の様な年端も行かない少女に熱を上げたと言う話は、聞いたことが有りません」

「性的な意味では無く、私に価値を見出したとしたら？」

俺の言葉にヤツガランさんはハツとした様子で目を見張ったと思えば、思案顔で独り言ちる。

「……まさか？ いや、アレはそう言う事だったのか？」

聞こえる筈の無い、非常に小さな声、それでも俺には聞こえてしまう。

「アレとは何の事でしょう?」

「? いや、聞こえてましたか?」

密かに使った集音の魔法、これひよつとして一番使ってる魔法かも知れない。

「実は、グプロス卿の使いから、姫がこの街を離れる様なら、どこに向かうのか聞いておけと言われているのです、それ自体はザバ、失礼エルフの姫君の動向を知りたいのだと疑問に思わなかったのですが」

「ですが?」

「それを伝えに来たのがズーラー様、グプロス卿の腹心なのが妙だなと思っていたのです」

ズーラー? あー、ひよつとしてあの斬りかかって来た小ズルそうなオッサンか。

「ズーラーと言う男だと何が問題なのですか?」

「ライル少年の事件を口止めしてきたのも、当時からグプロス様の片腕として暗躍していたズーラーなのです、汚れ仕事専門と言うのは言い過ぎですが……そんな人物ですから」

「やはりグプロス卿が私を攫おうとした可能性が有るのですね」

「……………」

今度こそヤツガランさんは黙ってしまった。流石に領主が曲がりなりとも他国の姫を攫おうとしてるなど、考えたくも無いと言った所か？

「信じられないと思いますが、グプロス卿は帝国と繋がっている。私はそう考えます」
「それは……飛躍し過ぎでは？」

「この街には帝国の人間も多い、帝国とパイプが有つても不思議じゃないでしょう」
「それにしたつて、グプロス様がお金に困つてると言う話は有りません、あなたを帝国に売つて、王国中から後ろ指差されるリスクを負つてまで何を欲すると言うのです？」

……確かに。この街に俺が来たのは既に大勢の人の知る所、その後領主と会談した筈が、何時の間にやら帝国の捕虜になっていたとあれば、どんな噂が立つか解らない。

いや、違うな。逆なんじゃ無いか？

「元々全てを帝国に売る気だったとしたらどうです？」

「どういう意味です？」

「少しでも帝国が恐ろしいなら、城をあんな風に改装しないでしょうし、騎士団だつてまともな人数を維持するでしょう？」

「まさかこの街ごと帝国に明け渡すつもりだと？」

「ええ、帝国の脅威を誰よりも知っているからこそ、その可能性もあるかもと」

「それこそ有り得ないでしょう、そんな事をすれば王国はその威信を賭けてこの街を襲

撃しますよ、軍備を整えていないのは事実ですが、だからこそ理屈に合わない」

「そうか、確かにそうだよな。勢いで適当に話し過ぎた。」

「でもよ、だとすれば帝国がこの街を侵略しに来ないつてのは知つてたつて事じゃねーのか？」

納得出来ない風に呟く田中の言葉は的を射ていた、帝国はザバの国へ侵攻は堂々と宣言し、幅広く布告したらしい。

「ザバは人類共通の敵で有り、それを討伐せんとする帝国は正義であると。」

なんともふざけた話だが、そんな事より国力に勝る帝国が軍事力を動かした、それにも関わらずこの街の平和ボケ様はなんだ？

「いや、俺には思い当たるところがある。」

「グプロス卿は、帝国がまさかエルフに対し、勝利を収めるとは思つても居なかつたのでは？」

「それは……そうでしょう、こう言つては失礼でしょうが。私もまさかと言う思いです」
言い辛そうにヤッガランさんが唸る、やはり皆そう思つていたので。

図書館を漁れば、帝国が大森林に侵攻し大敗北を喫した記録は幾つも見つかった。帝国の汚点だけに王国では笑い話として良く語られる事でも有る様だ。

「だとすれば、まさかの勝利に焦つて、今更帝国に媚びを売るべく攫いに来たつて事か

「？」

「いやいや！ 話がおかしいですよ。決めつけしないで下さい、そもそもそこまでグプロス様がユマ様を攫おうとしたと言い切る根拠は何です？ それこそグプロス様の様子に不穏な物を感じた、それだけでしょう？」

田中の言葉にヤツガランさんも流石にムツとして答えるが、田中の思いは違う様だ。

「ソレを言うなら、今思えば執務室のあの布陣。ありやあ用心の為の兵士つてよりは初めから姫様を攫う為だったとしか思えねえな」

「そうなのですか？」

布陣とか言われてもさっぱりで俺は首を傾げてしまふ、初めから壁裏に隠れているのは解っていたし、窮屈そうだなと兵士には同情しか無かったのだが。

「呪文を唱える姫様に斬りかかったズーラーつて奴、本当はアイツが姫様を攫つて、焦った丸腰の俺を四人がかりで倒す。そういう算段に見えたぜ」

「なるほど……そう言われるとそうかも知れません」

「現場に居なかつた私には解りませんが。本気で捕まえるつもりなら四人と言わず、城中の戦力を結集してでも、逃のがれられ無いようにするのは？」

「外聞を気にして、関わる人数を減らしたかったのかも知れませんが、ライル少年の件と言い外聞を気にする人間なのは？」

「……………」

ヤッガランさんは黙ってしまった、何か思い当たるところでもあるのだろうか。

一方で田中はペラペラと言ひ募る。

「なるほどな、宿屋で攫えるなら評判が落ちるのは宿屋で、領主じゃない。望み通り馬車を用意して、そのまま攫つちまえば面倒が無えじゃねーかと思つていたが、パレードまでして送り出し、護送中にまんまと攫われた間抜けと言われるのを避けたかつた訳か」「とすれば、街を出た私達の行き先を聞いた後は、当然襲撃してくるでしょうね」

盛り上がる俺達を他所に、ヤッガランさんはいよいよ考え込んでしまった。

「いくらなんでも考えすぎな様にも思いますけど……実は明日からゼスリード平原で衛兵達の演習を行うのです。身の危険を感じる様なら、我々と一緒に出発しますか？」

悩めるヤッガランさんからの提案は野外訓練に同行しないかと言う物。面白い提案だけに、その内容は確認しなければならぬ。

「それはどんな日程で行われるのです？」

「明日出発して昼過ぎに到着、簡単な訓練を行い野営して一泊、翌日は平原で訓練をしてから、夜には帰るスケジュールになっています」

「その間、街の警備はどうなるのです？」

「もちろん全ての衛兵が参加する訳ではありません、全体の三分の一程、参加者は三十人

前後になる予定です」

なるほど……面白い。どうする？　このまま街に居てもリスクばかりが大きい。だつたらこの提案に乗つてしまうのも手か？

そんな風に考えている俺の肩を、ちよんちよん突く者が居る。

田中だ。

「オイ、こいつはそんなに信用できる奴なのか？」

小声で聞いてくるのはヤツガランさんの事、確かに彼はこの街の衛兵、グプロス卿側の人間だ。だが俺にはライル少年の記憶がある。

「彼が我々を騙している？　その心配は無用です、ヤツガランさんは真面目過ぎる程真面目な人、ライル少年もそう言っています」

俺は毅然と言い放つ、ヤツガランさんに聞こえる様だ。

「そこまで言うなら良いけどよ」

田中はそう言つて引き下がるが、気になるのは当のヤツガランさんの様子、苦虫を噛み潰した様な表情で唸っている。

「……いえ、私もそのこの街の衛兵として三十年、ライル少年と過ごして来た日々とは違い、今では真面目なだけの人間ではありません」

「何か……有るのですか？」

「実は、グプロス卿からギテムツド商会と名乗る馬車はノーチェックで通す様に言われているのです」

「それこそ、我々に話して良い事では無いのでは？」

「ですが、その商会の馬車は荷馬車と言う割には音が軽い。それに王都に拠点を構える商会との事ですが、王国側から来たのならあぜ道を通るはず。雨の日には車体もつと泥に汚れていなければおかしい」

「つまり、それが帝国の人間を乗せていると？」

「あくまでグプロス卿が帝国と共謀し、姫を攫おうとしていると仮定して考えた場合の話です。実は、その商会は今もこの町に居るハズです。いつもは三日程度で街から出て行くと言うのに、今回に限って十日以上もこの街に滞在している」

「決まりですね。グプロス卿は帝国と密約がある、私はそう判断します」

「……そうですか、それにしてもそこまで言うからには、帝国があなたに固執する。それだけの理由に心当たりが有るのですね？」

「ええ、勿論です」

「オイ？　なんだそりゃ？　俺はそんな話聞いてないぜ！」

田中が慌てるが当たり前、そんな理由はどこにも無い。あるのは俺の『偶然』が常に最低最悪を提供してくれると言う自信だけ。

ここまで距離が離れば連絡の齟齬などで、命令が行き違う事だつてあるだろう。なぜか俺が財宝の隠し場所を知っていると吹聴されていたり……そんな『偶然』だつて考えられるのだ。

だがヤツガランさんは、護衛にすら言えない秘密が俺にはあるのだと思つただろう。

「では私たちは、明日の朝一番に街を出て先行します。もし何かあつた場合は来た道を戻りヤツガランさん達に合流を目指します」

「いや、危険だ！ 我々と一緒に出発すべきです」

「それでは流石に人攫い達も襲つてくれないでしょう？ 人攫い共を一掃するチャンスだと思つて頂ければソチラにも利があるのでは？」

「馬鹿な！ 危険過ぎる！ たつた二人、囲まれたらどうするつもりなのです？ 妖獣殺しと言えども守り切れる物ではありません」

そんなヤツガランさんの悲鳴に田中は獐犇な笑みを見せる。

「見くびつて貰つちや困るな、俺は勿論このお姫様だつて並じやない。本気で走れば馬だつて追いつけるか怪しいモンだぜ」

「ご冗談を！ いや……本当なのですか？」

「エルフの魔法つて奴だな、並じやないぜ？ とんでもない使い手だ」

そう、田中の言う通り、俺もピルテ村での戦闘で大分自信が付いた。まともな人間相

手なら十や二十は相手にならない自信がある。

俺は笑みさえ浮かべ、凄んで見せる。

「我らを高々二人と侮るならば、数に勝る帝国を我々エルフが幾度も打ち破った原因を彼らは目の当たりにするでしょう」

「しかし！ 帝国には新兵器があるのでしよう？ 魔法を無効化すると言う」

「それを使つてくれると言うのなら願つても無い、その正体を見極めて見せます！ その為の田中と、それにあなた方です」

「そこまでの覚悟がお有りか！」

覚悟も何も、俺の『偶然』からは逃れる術は無い。あの霧は一体何なのか？ その正体は早くに知つて置きたい。

「そうと決まれば、後はよろしくお願いします。タナカ！ 行きましよう、明日出発となれば忙しくなります」

そう言い残し、俺と田中は詰所を後にする。

扉を閉める際振り返れば、残されたヤッガランさんが頭を抱え突つ伏していた。

「大丈夫、彼は信用できる」ライル少年が呟く様な声が頭の中で聞こえた気がした。

しかし俺の心配はそこには無い、心配なのは、その優しい彼が俺の『偶然』で死んでしまう事。

職務と倫理観の間で悩み、影が有るその姿にどうにも不安を感じずには居られなかった。

スフィールを出発

「忙しくなりますよ！」

詰所を出た俺は、奮然と声を上げる。田中に呼びかけると言うより、不規則な睡眠時間で寝ぼけ気味な自分に活を入れた格好だ。

「全くだ！ 急に明日出発とはな、弓と剣。まだ出来てるか解らねえぞ」

「あー！」

「忘れてたのかよー！」

忘れてた、田中の剣と俺でも引ける弓。武器屋にお任せしたままだった。約束の日は明日だが、朝一で出発するなら今日中に貰わないとマズい。

俺達は駆け足で武器屋に直行すると、田中が大声でマスターを呼びつける。

「オイ！ 親父居るか！」

「うるせえな聞こえてるよ！ 何の用だ」

「急に明日、朝一で出る事になっちまった、剣の研ぎ、上がってるか？」

「ああ、出来てるぜ。それに嬢ちゃんも弓も良いのが有った。貴婦人の娯楽用として作られたって骨董品だが丁度良いだろ？ 豪華な装飾が有るから多少値は張っちゃうが

勘弁してくれ」

そうして出されたのは、白木に緻密な彫刻がなされた実用性とは無縁そうな弓だった。しかし作りはしっかりしているし、よく見ればグリップ部分に細かく掘られた城壁の彫刻が滑り止めの役割を持つなど、実際には使う事も考えられているように見える。

「試して良いですか？」

「勿論だ」

矢を一本借りて番えて見れば、なかなか良い感じ。お姫様として王宮で使っていた物よりかは劣るだろうが、ピルテ村で貰った練習用の弓とは雲泥の差。

「気に入りました、これなら問題有りません」

「解った、親父！ 幾らだ？」

「金貨五枚だ！」

「高けえなオイ！」

「だから言っただろ」

取り敢えず交渉は田中に任せてしまおう、金貨一枚十万千ヨイぐらいの感覚なのかな？

だが、魔石が金貨一枚で売れたって話だから予算は潤沢だ。さっさとして欲しい。

あ！ ……そう言えば魔道具屋！ 貴族と約束を取り付けるよう、頼んでしまつてい

る。

「クソツ！ ぼったくりやがって！」

「そんな事より、魔道具屋に明日発つ事を伝えないと！ 貴族との約束を違えると要らない恨みを買ってしまいます」

「ハア、めんどくせえなあ」

数日前の楽しいショッピング気分が懐かしい。武器屋を後にすると、今度は足早に魔道具屋に滑り込む。

すると魔道具屋の店員が、俺達を見るなり深々と頭を下げて来る。

「申し訳ありません、姫君に会いたいと言っていた方々ですが、話を通してみると皆様どうにも芳しく無く」

昨日の今日でキャンセルの連絡に、こちらが謝るつもりが先に相手に謝られてしまう。

「断られてしまったと？」

「左様でございませす、失礼ですが領主のグブロス様のご機嫌を損ねる様な真似をしてしまったのでは？」

「……………」

これはこれは！ 一介の商売人にしては随分と踏み込んで来るものだ！

いや、これは確かに誰がどう考えても、そこまで言いたくなる程の事態。これはいよいよ俺達がこの街に留まる理由は無くなった。

これはかなり強引なやり口だ。いつそ俺達を街から追い出したがつている様にも感じる。

実は好かれている所か、めっちゃめっちゃ嫌われているんじゃないか？

そもそも、あの人攫いだつてグプロス卿の手の人とは限らない。それこそ全てプリルラ先生の妄想なのでは？ 俺は今一度プリルラ先生になつたつもりでグプロス卿の心理を分析する。

だが、逆にプリルラ先生の判断は確信を深めていた。間違いなくグプロス卿は俺を狙っていると言ってくる。

それ程、アレは俺に執着する目だったと、彼女の知識は訴えるのだ。

他の貴族の目に触れさせたくないと思うほど。

いやーモテモテで困るね。

先生曰く、自分の元に確保したいからこそ、非合法な手段に頼らざるを得ないらしい。誰にも知られず、人目の無い街の外で俺の身柄を抑える為にこの街を追い出すつもりなのだ。

帝国に寝返っているかはともかく、グプロス卿は俺を帝国に引き渡す為に狙っている

わけじゃないと警鐘を鳴らす。

「いよいよ、一つ間違えばあの脂ぎった腹の下で余生を過ごす事になりそうだ。

「オイ? どうした? 急に黙っちゃって」

田中が心配そうに声を掛けてくるが、結局考えたってやる事は変わらない。店員さんには明日発つ事を伝えておこう、それも丁寧。

「何分、文化も違うものですから、失礼をしてご機嫌を損ねてしまったかも知れません。急ですが明日、この街を発とうと思います」

「それは残念です」

店員は慇懃に言ってみせるが、領主のご機嫌を損ねた危険物にはとつと出て行つて欲しいと顔に書いて有る。

「私達は明日も早いので、失礼させて頂きます。お世話になりました」

「いえいえ、こちらこそ、またスフィールに寄る事がありましたらお訪ね下さい」

などと言っているがこの会話も全部領主に筒抜けと思つて良い。外に出るや田中からは疑問の声が掛かる。

「どういう事だ? 領主は何を考えている?」

「恐らく、この街から追い出した後、人目のつかない所で私を確保したいのでしょう。それも何をしてでもです」

「オイ、マジでとつとココから逃げちまう方が良いんじゃないか？」

確かに安全だけを考えるなら、とつと隣の領主が治める地域まで逃げるべき。

逃げられるか逃げられ無いかだったら、多分領主の追っ手は撒ける。田中が言った通り俺の魔法と田中の健脚を考えれば下手な馬では追いつけない速度を出せる。

だが領主から逃げられたとしても、俺の『偶然』から逃げる事など出来るのだろうか？

結局、巡り巡ってどこかであの領主が敵に回るなら、ココで一一緒に踊って死んで欲しい。

「いえ、グブロス卿が帝国に下ると言うなら見過ごせません。我が身一つで釣り出せるなら最高の獲物と言えるでしょう」

「そーかよ、まっ、頑張りますか」

田中はそう気楽に言うが、事態は碌な方向に向かっていないのだけは間違いない。しかし、こうなるとコイツの協力は必要不可欠だ。

そう言えば、もとはと言えば田中とはスフィールで別れる予定だったのだ。いよいよ俺の『偶然』が、コイツを巻き込み殺す為に動き始めたのだろうか？

「んだよ？ 色男だからってジロジロ見るなよ、恥ずかしいだろ」

「ハア？……」

猛烈に苛立つが、文句を言える立場では無い気がして何とも言えないのが悔しい。

その後、街で一通り保存食やら頼んでいた洗濯物やらを回収し、旅の準備を整えると早々に宿屋に引き返す。

明日朝一で発つ事を、ナーシャお婆さんと女将さんに伝えると非常に残念がられた。

「明日発つのかい？ 随分急じゃ無いか、もつとこの街に居る訳にはいかんかね？」

「もう、お婆ちゃん！ お客様にそんな事言っちゃ駄目よ。でも物盗りが出た事を気にしてるなら、窓の門だけじゃなく、扉の鍵だつて変えたわよ？」

「いえいえ、急用が出来てしまったのです」

ナーシャお婆ちゃんはライル少年の思い出を俺ともつと話したいし、女将のルツカさんは物盗りに入られた事を気にしていた。

最後にエルフの国の話などしてくれないかと言われたが、それも断る。

今の俺にはそんな事よりも重要な話が有る。

「タナカ、少し話が有るのですがあなたの部屋で良いですか？」

「俺の？ 別に良いが？」

俺も年頃の女の子の範疇だ、一回り以上歳が離れているとは言え、男と部屋で二人つきりつてのは問題かも知れないが、今はそんな場合でも無い。

田中の部屋に入り込み、机の上に腰かける。一人部屋だから椅子は一脚しか無いし、

ベッドに座るのは気が引けたのだ。

机に腰かけて、やっと椅子に座る田中と目線が合う。

「明日スフィールを発つのですが、あなたとの護衛契約の件についてです」

「あ？ ああ、元々スフィールまでだったな」

「ええ、ですがグプロス卿の説得に失敗してしまいました」

「気にすんなよ、こんな所で姫様をほっぽり出せる訳無いだろ？ それに報酬も魔石を売った分が有る」

「ありがとうございます」

今更だが、こう言うのはちゃんとして置いた方がよい。俺だけ友達気分で頼ってしまつて良い事なんて何も無いのだ。

「それだけか？」

「いえ、明日この街を出ますが、恐らくグプロス卿の手の者と戦闘になります」

「それこそ今更だろ？」

田中は何でも無い様に言つて見せるが、今度もまた危険な事になる。

「ハーフェルフのピルテ村以上の惨劇が起こるかも知れません」

「アレだつて姫様の頑張りで誰も死んでねえだろ？ それどころか大岩ザルディネフエロ蠍の魔石でウ

ハウハじゃねーか」

「そう上手く行くとは限らないでしょう」

少なくとも俺の『偶然』で誰か死ぬ、それが大岩ザルディネフエロ蟻螂だったか俺達だったかの違いだけだ。

「上手く行くかもしれないねーだろ？ それとも俺が居ちやマズいのか？」

「いえ、むしろ居ないと困ります」

「だったら甘えてろよ、お前は今一応十二歳なんだろ？ 俺が危ないからって十二の子を見捨てて逃げる男に見えるか？」

「……いえ」

確かにこの状況で見捨てる奴とは思っていないが、一応十二歳って何だよ？ そりゃ確かに人間離れたところを見せ過ぎたかも知れないが。

なにか言ってやろうかと思えば、田中は何か言いたそうな顔で口ごもる。

「それに……」

「それに？」

「いや、なんでもねえよ」

なんでもねえって何だよオイ！

その後も、色々打ち合わせを行う。何せ命が掛かっている。とは言っても基本戦略はヤバくなったらすぐ逃げる、コレだけ。

帝国の兵器で魔法が使えない状況になったら、田中が俺を抱えて逃走。

そうで無いなら、逃げるのにも余裕が有る筈なので、はぐれない程度に注意しつつ様子を見る。それでも人数が二十人以上なら逃走、それ以下なら返り討ち。

セレナの秘宝には再び回復魔法を仕込んで置いて、俺が気絶した場合に対応する。

「で、目的は何なんだ？ 俺には狙いがサツパリ解らねえんだが？」

「それは勿論、帝国軍、もしくは私を狙う帝国軍とおぼしき部隊とヤツガランさん達衛兵が小競り合いになる事です」

「それで衛兵達に程よく死者でも出れば、一気に反帝国の機運が高まるって寸法か。恐ろしい事考えやがる」

田中が冷たい眼でこちらを見るが、幾らなんでもそこまで言っただろう。

「わざと死者を出すような真似はしません、帝国の脅威を認識して貰えれば十分です」
「解った、流石に何人か死ぬまで手を出さなって言われても領けない所だった」

こいつ、俺の事を試してやがるのか？

「優しいのですね」

「甘いとも言えるな」

だよな、でも俺はお前のその甘さが羨ましいよ。

「でよ、結局襲って来るのは帝国なのか？ 領主軍なのか？ それとも人攫い共チンピ

「ラなのか？」

「解りません、ですが何かしら襲って来るのは間違いないでしょう」

「それはエルフの秘術か、それとも前言ってた霊とか何かか？」

「いえ、ただの勘です」

「勘かよ！」

田中は呆れたような顔をして、ボリボリと頭を搔いた。

「しつかし、その勘は当たりそうだな」

そう、俺の勘はハーフェルフの村で予言めいた冴えを見せた。常に最悪を想定すれば俺の『偶然』はそれに答えてくれた訳だ。いい迷惑だがな！

「ですが今回は私にも何が起ころか解りません、注意して下さい」

しかし今回は陰謀渦巻く大都市で、何が起ころかなどサツパリ解らない。最悪だけを考えれば、街を出た瞬間に帝国軍が何千も攻めて来たって不思議じゃない。

俺達に見えない伏せられたカードが多過ぎて、何があり得て、何があり得ないか、想像すらつかないのが現状なのだ。

ただ、何かが起ころのだけは間違いない！ それだけは信用出来るのだ、残念ながら。「とにかく明日も早いですから、もう寝ましょう」

「そうだな」

俺は自室に帰り、例の悪意に反応する魔法を使って床に就いた。

流石に緊張して寝付けないかと思いきや、すぐに眠気がやって来て俺は結局ぐっすり眠ってしまったのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふああああーうにゅ、まだちよつと眠いですね」

結局、その日の夜は襲撃も無く、俺はベッドの上で目をこすりながら上体を起こす。

街に着いてからと言うもの、朝が遅い事も少なく無い不規則な生活が多かった所為か、まだまだ眠い。しかし今日は寝坊する訳にも行かないだろう。

まずは日課の健康値チェック。

健康値：39

魔力値：364

おっ！ ここに来てこの街に着いてからの最高値だ！ 不規則な生活の所為かどうにも20台後半が多かった健康値が、いきなり10も上がっている。

強行軍を続けて減った健康値がすっかり回復出来てから、次の旅に踏み出せると言うのは何とも幸先が良い。

朝から女将さんやナーシャ婆ちゃんにお別れをして宿をチェックアウト。

宿を出て朝日に照らされる街を見る、今生では始めて見る中世ファンタジーの城塞都

市だっただけに、見納めと思うと感慨深いものがある。

農村の朝一と言えば本当に日の出と同時にだが、都市部ではそうでもなく、普通に歩ける程度に明るい。朝日の下では見慣れた様に思っていた中央の噴水も違った物に見えた。

中央を抜け北門へ、目指すゼスリード平原は北西なので入って来た北門から再び出る事になる。

北門でヤツガランさんに挨拶して行こうかと思つたが、よく考えればどうせ向こうで会うのだからその必要も無い。

もし誰かが監視していると言うなら、却つて変に勘ぐられてしまうだけ。

あくびをしている門番に会釈してさっさと通り抜けようとすれば、その門番が慌てて引き留めて来る。

「あの、ユマ姫とお見受けいたします！ えーと、どちらまで行かれるのでしょうか？」

どうも、そう聞くことを命令された雰囲気がありだ、そう言えばヤツガランさんもそんな事を言っていたしそういう事なのだろう。

だがそんな時の対応も事前にしっかりと決めてある。

「ゼスリード平原の先、ゼス村に一度帰ろうと思つています」

無論、大嘘だ、目的地はゼスリード平原そのものだし。ゼス村なんぞ行ったことは無

い。

俺達はゼスリード平原の東の街道から来たのだから、西の国境ギリギリに存在するゼス村は図書館で地図を見て初めて知った村だった。

「ゼス村？　なんであんな田舎に？」

「実は、その辺りで馬車が故障してしまい……グプロス様に馬車をお借り出来なかったので、なんとか修理出来ないかと思ひまして」

「そうでしたか、いや、引き留めてスイマセン、良い旅を」

「わざわざありがとうございます、それではごきげんよう」

俺はにこやかに手を振って別れを告げる。

申し訳無さそうに頭を下げる衛兵だが、この報告はすぐにグプロス卿やその配下に知れ渡るだろう。

だがコツチだつて故障した馬車が有るなどと大嘘なのでお互い嘘だ。

俺達は一路ゼスリード平原を目指す、その時の俺は軽い気持ちでついた嘘が、どんな結末をもたらすかなど、一切考えては居なかった。

ゼスリード平原騒乱

俺達はスフィールルを出て一路北へ向かった、目的地のゼスリード平原はスフィールルから見て北の高台にあるからだ。

ちなみに大森林はスフィールルの遙か北にある。つまり、北に進むと言う事は方角的には戻る事になってしまう。

そこで、道中で壊れた馬車の様子を見るなどと、嘘をついてまで北に進路を取った訳だ。

ゼスリード平原は、ちょうど巨大な切り株の様な形状をしている。

テーブルマウンテンとまでは言わないが、道中は急峻な山道で、真つ直ぐ登坂できる道がない程。

その為、曲がりくねった山道を進んでいるのだが、先を進む田中の様子が落ち着かない。

「うじゃうじゃ付いて来やがる」

「……それ程、ですか？」

例の悪意に反応する魔法は結界みたいな固定式。一方、集音の魔法も相手の位置に当

たりがついて、初めて使い物になるのだから広い屋外では使い辛い。

だが、田中には気配で相手の位置が解るらしい。それも間違い様も無い程にハッキリ感じるとの事。

気配など馬鹿にしていたが、この世界では本当にあるかも知れない。なにせ悪意に反応する魔法が、自分の健康値の僅かな減衰で判定する理屈だからだ。

達人ともなれば、それを無意識に感じ取っても不思議ではない。

普通では感じられないレベルの変化でも何となく感じる。そんな事も有り得るだろうと、信じる事にした。田中は魔法を使つた俺より先に賊に反応していたし、なにしろここは剣と魔法のファンタジーな世界、なんでもアリだろう。

前世で犬などは体臭から相手の考えを読むとか言う話を聞いた。俺は全く信じて居なかったのだが、近所の犬に「お腹減つたから犬でも食つちまおうかな」とか念じて見ればギャンギャン吠えだした、それ以降あるのかも知れないと考えを改めた事が有る。

そんな話を田中にすれば。

「いや、俺は犬じゃねーよ！ 肌感覚って言うのかピリツと感じるんだ、解らねえか？」
「別にあなたを犬と言っている訳では無いでしょう？」

「どうだか！ それはそうとエルフの街にも犬は居るんだな、狩猟用か？」

「……いえ、殆ど居ませんね」

「へっ、そうかよ」

マズったな、そもそも只の犬では大森林の魔力下で生きて行けないし、魔獣化した犬だか狼は人に懐かない。不自然な会話になってしまった。

それはそうと肌にはピリツと来ると言うのは興味深い、俺は首筋にチリリと来ると『偶然』が襲って来る合図だと思ってるが、アレは俺の運命力が、運命を曲げ死へと向かう行動に警告を送っているんだと思ってる。

恐らく田中の言う気配とは違うんじゃないかな？

とにかく、田中が言うには俺達は朝一でスフィールを出てからと言う物、尾行されっぱなしと言う訳だ。

「我々を殺す気でしようか？」

「とは思えねえ、様子を窺っているって所だ」

「そんな事まで解るのですか？」

「ピリツと感じる強さが薄い、それでいて数が多い。感覚だから言葉で表すのは難しいな」

真面目に答えてくれるが、どうなのだろう？ やはり健康値の減衰を感じているのだろうか？ ならそれはこの世界ならではの感覚のハズ、もし前世から感じていたとか言うのなら田中の話は相当怪しい事になる。

「私には全く分かりませんが、その感覚は何時頃手に入れた物なのでしょうか?」

「ん? ああ、ハッキリ感じたのはかれこれ十、いや八年前になるか? 街道沿いで野宿をした時に野盗に囲まれそうな気配をハッキリ感じ取ったのが最初だな」

八年前か、だとしたらやはり健康値絡みかも知れない。中二病では無いだろう。

「だが、それよりも前から、それこそガキの頃から感じてはいた物が、やっと自覚できた。そんな気がするんだよな」

はい、嘘くさい!

途端に嘘くさい中二ストーリーになってしまった。そう言う後付け設定ホントに要らないから。

「信じてねえだろ?」

「いえ、エルフには悪意を健康値の増減で感じる魔法がありますから、そう言う事があっても不思議では無いでしょう」

「へえ?」

おすまし顔で誤魔化して、魔法の理屈を説明する。だが俺も完全に理解してるとは言い難く、ふにやふにやした説明になるのは避けられなかった。

「つて事は俺の感覚も健康値つて事か?」

「かも知れませんが、違うかも知れませんが」

「ま、そうだよな」

俺達はそうして雑談を交えながら、殊更ゆっくりと山道を歩んだ。

警戒と、そして後続のヤツガランさん達、衛兵隊の行軍を待ったのだ。

何者かが『釣れて』いるのは間違いないが、それすらも衛兵隊の影がチラつければ襲つて来ないに違いない。絶妙な距離の調整が必要だ。

そんな風に思っていたが、結局襲われる事も無くゼスリード平原まで出てしまう。

ゼスリード平原は見渡す限りのまっ平ら、木々も少なく広大な草原地帯となっている。

これだけの土地が、農地開発もされず放置されている理由は二つ。

一つは国境故に戦場になりやすい事、二つ目は大型の魔獣が飛来しやすいと言う事。もし大型の魔獣に狙われれば、隠れる場所などどこにも無いのだ。

そう、平原に出てしまえば身を隠す場所が無い。物陰からコソコソと俺達を窺う気配とやらも、ここへ来てかなり薄くなってしまうと田中は言う。

ここで決着をつけに現れるかと思えば、どうもそうではないらしい。一見爽やかな平原だがゼスリード平原と言えば決戦の地の代名詞、参照権で読んだ物語の数々、その影響で、ついついその気になっていた。

他にもここは、今回みたいに衛兵が訓練に使う場所であり、もつと大人数の、それこ

そ軍の訓練でも専らここで行われると本で読んだ。

なぜなら、この辺りでまともに兵を展開できる平地がこのゼスリード平原しかない。そのためここを舞台にした戦争は、十や二十じゃ利きかないだろう。

しかし、ここ数年、この平原で大規模な戦闘は起こっていない。国境を越え、ゼスリード平原を帝国兵が行軍する様は、歴史書と物語の中でしか見られない。

そのハズだった……だが。

「アレは……なんですか？」

夢か幻か、今まさにその帝国兵が、遙か遠く一団となって平原にその姿を現したのだ。強烈な陽光に手をかざし、それを見つめる田中がぼやいた。

「オイオイ、戦争でもおっっぱじめる気かよ」

ゼスリード平原のど真ん中には大河フィーンナスが流れ、国境線として帝国と王国を隔てている。

つまり、軍が川を渡ったと言う事は、明確に侵略の意思の表れなのだ。

「恐らく私を捕らえる為の軍勢でしょう」

「でもよ、街を出ると決めたのは昨日だろ？ あの人数を用意するには早すぎる」

陽炎に揺らめく帝国兵の数は百人程、急に湧き出る数では無い。

「つまり、ずっと前から用意していた、そう言う事でしょう」

「始めっから俺達を捕まえる為に用意してたって訳か、たまんねえな」
遠くに見える帝国兵に向け、田中は物騒に笑うのだった。

ゼスリード平原騒乱2

「我ら帝国軍広報部隊！ 汝は森に棲む者の姫、ユマに相違無いな！」

見渡す限りの緑の絨毯。そんなゼスリード平原に突如現れた帝国兵の隊列、そこから一際立派な装備の男が一人、進み出たの第一声はそれだった。

「いいえ！ 私はずバ等と言う化け物ではありません！」

まあ、こつちの対応としては当然こうなる。わたくしエルフですわん。

馬鹿にしているのかと怒られそうだが、おかしいと言えばアレだけの装備で『広報部隊』と堂々名乗ってみせる方が、よっぽどネジが飛んでいる。

「何を言うか！ その耳、目、髪、全てがユマ姫の特徴と一致している！ 神妙にしろ、その身柄、我々で預からせて貰う！」

「そちらこそ、その物言い、装備、態度、人数で広報部隊などと恥を知りなさい！」

「ふざけた事を！ こちらはビルダール王国のグプロス伯爵から正式に許可を得てここまで来ている！」

ふーん、グプロス伯爵ね。

やっぱりグプロス卿は帝国と深い繋がりがあつた訳だ。

スフィールの領主つてのは、戦争の度に五つの貴族家で最も功績を上げた家から選ばれる仕組みらしい。

だが大きい戦争が長らく無かったおかげで、グプロス家の地盤は盤石。俺へ圧力の件から見ても、他の四家に対抗できる力は無いだろう。

なので実質は伯爵、あるいはそれ以上の力を持っているにも関わらず、五家は同等と言う名目のために、グプロスは子爵と言う立場に留められている。

俺のプロファイリング通り、グプロス卿が外聞を気にするタイプだとするならば、何とも歯がゆく思っているに違いない。

その彼を、帝国が伯爵と呼ぶのが何とも象徴的だ。

「証拠は！ ビルダールの領主が帝国の兵を通すとは考えられねえな！」

田中が大声を上げ、その巨体の陰に、俺を隠す様に進み出た。

「ここに！ しつかりとグプロス伯爵の署名がなされている」

そう言つて、両手で広げ掲げたのは一枚の紙。恐らくは許可証と言う事だろう。

田中は振り向いて俺を無言で見つめると、大きく頷いた。

「解つた、こちらから行く、確認させてくれ」

一瞬のアイコンタクト、だが田中の狙いは明瞭、時間稼ぎだ。

帝国兵達は紳士的なのか余裕なのか知らないが、俺達から20メートルは離れた所で

整列している。

そこから隊長だけが10メートル進み、俺と帝国兵の真ん中で大声を張り上げている状況だ。

参照権で確認するに、コレは軍同士がやり取りする時のマナーとかで。たった二人のこちらに随分と気を使ってくれている事になる。

いや、これは帝国兵を確認しながらも、足を止めて待つていた俺達を訝しんでの行動だろう。

フル装備の帝国兵百人を相手に堂々と待ち構える俺達は、よほど異様に見えるに違いない。

だが、なにも百人の兵士を向こうに勝算があつてボーツと立つている訳じゃない。

もし俺達が逃げ出せば、奴らは堂々とスフィールで名乗りを上げ、俺達は延々奴らに追われる事になるかも知れない。

グプロス卿がどう言う考えで彼らを呼び出したのかは知らないが、スフィールに辿り着く前の微妙な立場の彼らに問題を起こして欲しいのが本音だ。

俺はチラリと後ろを、スフィールへ至る木々に囲まれた小道を見る。すると今まさにキラリと光る、鎧の反射らしきものが見えた。ヤツガランさんと衛兵達だ。

「これがグプロス卿のサインかあ？」

「フーン！ お前の様な野蛮な流浪人に文字が読めるのか？」

殊更ゆつくりと近づいた田中が、帝国兵が掲げた紙をジロジロと眺める。

「一応読めるぜ、あんまり難しい言葉や、グプロス卿のサインの真贋なんかわかんねえけどな」

「ハッ！ それでは何の意味も無いではないか！」

「それでもコレが、質の悪い冗談だつて位は解るぜ？ グプロス伯爵の許可と言つたよな？ コレにあるサインにはグプロス子爵つて有るぜ？」

「そんな物！ 王国の下らない慣例の所為ではないか！ 我々がそんな事に頓着する気はない」

集音の魔法で聞くに、どうにもグダグダとやってくれている。

「こんな物無くても、お前一人、叩き斬る程度何の問題にも成らんのだぞ？」

「おーおつかねえ、帝国兵が王国内で堂々の殺人宣言とはね。あの姫様と俺達が地平線の彼方から歩いて来るお前らを見て、一切逃げる素振りを見せなかつたのはなんでだと思ふ？」

帝国兵の隊長が探る様に田中の顔を見る、やはり其処が知りたいのだろう。答えはここで時間稼ぎをして、戦い易い平原の真ん中で、ヤツガランさん率いる衛兵達と戦争を始めて欲しいからだ、真面目に答える義理も無い。

「いつくだけでも逃げられるからだよ、ご立派な鎧で着飾った兵士サマと追いかけて負ける道理は無いからな」

「なっ！ 何だと？」

嘲る田中の言葉に隊長が青筋を立てるが、そう言えば『広報部隊』に馬は少ない。斥候用とみられる三匹のみだ。ひよつとしたら彼らはスフィールの街中で決着を付けるつもりだったのかもしれない。

「この人数だ！ 逃げ切れるハズが無いだろうが！」

「そうかな？ かけっこつてのは足が速い奴が勝つんだ、数を揃えりや良いってもんじゃないぜ？」

「こつちには馬も有る」

「伝令が使うような馬じゃねーか、大声上げたら逃げちまうんじゃねえか？」

「ほざけ！」

田中の悪態にも大分飽きて来たな、こんなのを集音の魔法で聞かされる方の身にもなつて欲しい。

20メートル離れた敵軍を見やれば、鎧姿で平原に立たされている相手も辛そうだ。日本人では有るまいし、訓練を受けた兵士と言えども何分も立ったままジツとして居られる物では無い。

既に集中力を無くし、カチャカチャと身じろぎする度、音が聞こえる。

それでも大半は大人しく待って居たのだが、待てない者が出て来てしまった。

「あ、あ、あ、あああー……めんどくせー」

その男は始めつから目立っていた。田中に匹敵する長身で、他の兵士より頭一つ以上飛び抜けて見えたからだ。

「ブッガー？ アイツ何やってんだ？ オタクらが雇ったのか？」

「上の命令だ」

田中が、長身の男を見て笑い、隊長が頭を抱える。

「どうやらアイツは有名人らしい、しかも残念な意味で。」

「たった二人じゃねーか！ ぶっ殺しちまえば良いだろーが、タナカは俺に殺らせろ！

お前らは百人掛かりでお嬢ちゃんのケツでも追いかけてろや！」

男はそう言いながら、巨大なウォーハンマーを振り回す。典型的な嘯ませっぽい武器のチヨイスが堪らない。個人的に高得点である、中ボス感が全身から漲みなぎっている。

「あいつはああ言ってるが、試してみるか？ 見通しが良い平原、誰が見てるかワカンネーゾ？」

「チツ！ オイ！ お前ら!! その馬鹿を抑えておけ！」

その命令の前に、既にブッガーと呼ばれる男は五人がかりで地面へと押さえ込まれて

いた。

「ガアアア、うぎつてー!」

……が、ブツガーはその怪力で全てを押しつけ、立ち上がる。

驚異的な力だ、田中とどっちが強いのか？ 田中とは因縁がありそうだし気になる所。

そんな光景に目を細めて居ると、どうやら田中の方は話を締めそうだな。あいつ、逃げたな。

「ま、とにかくそのグブロス卿のサインの真贋だけはハッキリしそうだな」

「どういう意味だ？」

「アレだよ？ 見えねえか？」

田中は振り返らずに、自分の背後を指差した。俺を指差したのではあるまい、振り返るとそこにはスフィールの衛兵達がハッキリと見える距離に近づいて来ていた。

「何だアレは？」

「スフィールの治安を預かる衛兵達だ、グブロス卿の許可が有るならあいつらはお前らの話を知っているハズだよな？」

「そんな物、聞いていないぞ？」

隊長は今更ながらに時間稼ぎに気が付き、舌打ちを漏らす。こうなってしまうては槍

を片手に、ゼスリード平原で俺達と追いかけてっこない。

「残念だったな、えーつと帝国騎士様のお名前は？」

「クソツ！ マムルーク・ギツドマン、マムルークで良い」

「クソご丁寧にどうも、俺は田中、お見知り置きを」

最後まで田中は悪態をつきながらこちらに戻って来る、とにかくヤツガランさんと合流しよう、話はそれからだ。

ゼスリード平原騒乱3

「確かにグプロス様のサインで間違いありません」

「当然だッ！」

「へえ、そりや良かったな」

俺達の元にヤツガランさんが合流し、マルムーク隊長と田中の三人でごちゃごちゃやっている。

百人もの帝国兵は未だ20メートルの距離を保ってはいる物の、最早しやがみ込んだり、陣地の設営を始めてしまう者まで出始めた。

アレがこちらを油断させる為の演技だと言うなら相当な役者だが、恐らくは衛兵三十人を加味しても未だ三倍以上の戦力差がある事に、本心から油断しているに違いない。

むしろ俺達が逃げる可能性が減ったと喜んでいる節がある。やはり彼らもただっ広い平原で少女一人を相手に、不毛な追いかけっこはやりたく無かったのだろう。

そんな中、ブツガーと呼ばれた大男だけは、巨大なウォーハンマーを地面に叩き付けたり、大声で田中を罵ったりと元氣一杯だ。

ま、アレは馬鹿だからペース配分つてのが理解出来ず、途中で疲れて眠ってしまう子

供の様なモノだと思ふ事にした。見るからに頭が悪いし。

なお、ブツガーは鼻を隠す黒いマスクをしている。これが中ボス感を出すための弛まぬ努力かと思いきや、鼻を田中が斬ってしまったらしいのだ。

——曰く

「あの野郎、ダイスで勝負だつて取り出したのが、どうみても出目が偏るのが丸わかりの出来の悪いトリックダイスでよ、文句を言おうモノならあの巨体で威圧するつてありやタダの恐喝よ。で、本人だけが知的に稼いでるつもりで、ご満悦なモンだから苛立つて鼻ごとダイスと机をぶつた切つちまつた」

で、滅茶苦茶恨まれてると。馬鹿過ぎて乾いた笑いしか出てこない。

「そぎ落とした訳じゃなーんだぜ？ 縦に斬ったし、そんなに目立つもんじゃなーのに、乙女かよアイツは」

とか好き勝手言つてるが、本当に勘弁して欲しい。

だが一番の被害者と言え、ヤツガランさん衛兵達に付いて来てしまった商隊だろう。

見れば巨大な馬車を背に、全員が顔色を青くしている。

彼らは見通しが悪いゼスリード平原に到る山道を護衛を雇わず安全に通れると、衛兵の訓練のタイミングに合わせて出発したに違いない。

なのに盗賊より厄介な帝国兵に意味不明な足止めを受け、何食わぬ顔で通り過ぎる事も難しそうだ。

なんせ、帝国のマルムーク隊長は現在、絶賛いきり立ちのまつ最中。

「解つたらさつさとアイツの身柄を差し出すんだ！」

マルムークは俺を無遠慮に指差し、田中に唾を飛ばす。

集音の魔法は「汚ねえし、息がくせえよ」とぼやく田中の小声を拾つて来るが、マルムークにもしつかり聞こえた様で、こめかみの青筋をピクつかせ、「流浪人風情が！俺を臭いだと？」と憤っている。

大した量でも無いが魔力の無駄遣いだ、集音の魔法切つて良いかな？ コレ。本気で下らない。

「で、無学な流浪人の俺に教えて欲しいんだがよ、こいつには『広報部隊』に逮捕権を委譲するつて書いて有る訳か？」

「え、い、いや、ここに書いて有るのは、帝国が森に棲む者の国を侵攻した意義を説く使節団、約百人の領内への立ち入りを許可するのだけ」

「じゃあ、お前らに俺らを拘束する権利はねえ訳だ、お疲れさん！俺達は行つて良いな？」

「ふざけるな！ザバなど危険なモンスターを拘束するのに権利など要らぬ！」

「だーかーらー、うちのお姫様はそんなんじや無いって言ってるだろ？ だつたら何か？ 帝国は相手をザバって決めつけて不当逮捕を繰り返している訳か？」

「屁理屈をこねるな！ 誰がどう見てもアレはザバだろうが！」

「しっかし、その化け物とお前らが頼みにしているグプロス卿は、一昨日和やかに会談してるんだぜ？ ちなみにその場に俺も居た。で衛兵隊長さんにザバの逮捕命令は来ているのかな？」

「いえ、その様な命令は有りません」

「なんだとお！」

あーくつだらねえー。ザバじゃないが王国民でも無いだろうとか、それを言うなら中立国ゾツデムの砂漠の民の人権も保障しているとか、ぐだぐだぐだぐだ話が長い。

いつそ矢の一本も放ってくれないかと20メートル先を見やれば、スツカリ気が抜けた兵士達の中に一人、気が弱そうな若い兵士が青い顔でこちらを窺っていた。

この視線、覚えがある。スフィールでも無かった訳では無い、俺を森に棲む者だと知って恐れおののく視線だ。

「悪い子は森に棲む者が森からやって来て攫いに来ちゃうぞー」と言うのは、いたずらつ子に母親が繰り返すお伽噺。

実際は俺の方が攫われそうになってるんだから、笑い話にもなりやしない。

勿論大人になれば、其れは大人の都合で作った作り話だったのだとすぐに気が付く。現に街でも、道行く人からギョツつとした視線を浴びる事こそ良くあったが。よく見れば俺が綺麗な洋服を着たお嬢さんだと気が付き、「こんな子供に恐れを抱いたのか」と恥ずかしさから、逆に好意的な視線に変わった物だ。

だが、たまに居るらしいのだ、前世でも居ただろう？ 年甲斐も無くサンタクロースを信じて居るおめでたい奴がさ。で、奴がそうだとするならば俺の事が怖くて堪らないハズなのだ。

俺は奴を見る、観る、視る。

その動きを、顔を、服装や物腰を。距離が有るとは言っても精々が20メートル、表情だつて見えない訳じゃない。

——ビクンとその男、いや、まだ少年だろうか？ その肩が撥ねる。

そう、俺がこつちを見ている事に気が付き、ついに目が合ったのだ。

彼は滑稽な程に落ち着きが無くなった。慌てて目を反らし、それでも気になって二度見、三度見。それでも俺は見続ける。

仕舞いには、正に蛇に睨まれた蛙。こちらから目を離す事も出来ず、俺と目が合ったまま固まってしまった。

うーん、でもこれじゃ何にも起きないんだよな。見上げれば帝国兵との邂逅時には中

天にあった太陽も、最早大きく傾き始めている。

思い出せ、俺は近所の犬を吠えさせた時に何を思った？

そうだ、食いたいと、犬鍋にしちまうぞと念じた時に犬は吠えた。

俺は震える兵士を見ながら、自身の魔力を解放し、ほとほし 進らせる。

相手を殺したいと願う時、相手へ向かった素の魔力で、ほんの僅かに相手の健康値が減る。

その理屈が本当なら、魔力が漲る俺の殺意はどうだ？

——ビクン、

固まっていた彼の肩が再び撥ねる、本能が何か危険を感じ取ったのかも知れなかった。

その、子ウサギの様な姿に思い出す。スフィールの街に入った時、そしてライル少年が何度も奢って貰って頬張った、スパイスの利いた串焼きの味を。

そうだ！ そう言えば！ 俺の頭に天啓が閃く。

魔獣を、ブーブー鳥を食った時、俺は何日も寝込んでしまった。何が魔獣で何が魔獣じゃ無いか解らない、下手に肉を食ったら死に掛けるとトラウマになった。

大丈夫だと解ったつもりでも、未だに街で肉を食う時ちよつと身構える。

でも、確実に魔獣じゃ無いと言い切れぬ動物が居る。

そう、人間だ。

人知れず俺は生唾を飲み込む。

その時、いよいよ恐慌状態に陥った彼が、俺の目線から逃れる様に隊列の中へと紛れ、消えてしまう。

その時の俺の心境は、獲物に逃げられた猟師の其れであつた。美味しそうな餌だつたのにと。

そうだ、餌だ。

奴は殺したくて堪らない憎き帝国兵で、それで、餌だ。

彼が見えなくなつた後も念入りに念じる、本気で期待していた訳では無い。ちよつとした暇つぶし、結構楽しめた、その程度のもりだつた。

その時だ、隊列を割つて、再び彼が現れた。顔を真っ青にし、手には弓。

俺は心の中で快哉を叫ぶ。

まさか？ それで俺を狙ってくれるのか？

期待に違わず、彼は矢を番え、俺を狙う。

周りの兵達が異変に気が付き、彼を止めようとするが遅い。

——ビィイーン

まだ集音の魔法が効いていた、間延びした弦の音が聞こえる。スローモーションに

なつた世界で彼が他の兵士達に組み伏せられるのが見え、田中が慌ててこちらを振り向くが遅い。

通常、そんなへつぱり腰で撃つた矢など当たる筈が無い。だがそこは俺の『偶然』補正の賜物か、見当違いの方向に飛びそうな矢が風に流され、ピタリと此方に狙いを変えたその瞬間までハッキリ見えた。

着弾地点は俺の首。たった20メートルも真つ直ぐ飛ばず、弓なりに落ちて来るこの矢が、このままでは俺の命を奪うだろう。

だがそこまでサービスする気は毛頭無い。俺は数歩後ろに下がる。ここは俺の魔力圏内、どんな『偶然』だって許しはしない！

そうして落ちて来た矢は、正確に、俺の腹へと吸い込まれた。

よりによってコルセットベルトの隙間、ドレスが裂け、血が滲む。鉄の鍬やじりが自らの肉に食い込む感触に顔を歪める。

痛い！ 痛い！ だけど……嬉しい。

これで殺せる！ 憎い帝国兵をまた一人！

矢も楯も堪らずとは正にこの事か？ 多分違うな。震える手で弓と矢を背中から何とか引き抜き、ゆつくりと構え、番え、唱える。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

自分の声が弾んでいるのが解る、殺せる。そしてこの一矢で状況を決定的に出来る。それが嬉しい。

——シユズバツ！　ピイイイイ——

「あっ！」

思わず声が出る、矢を買った時、一本だけ鎗矢みたいに音が出るのを買っていたのを忘れていた。

矢は甲高い音を上げながら、猛然と直進する。

この場の全ての人間の視線が矢に吸い込まれた。

実際の所、合図なら魔法で十分。だが帝国の兵器で魔法が使えない状況もある。と言うのは建前で、殺傷能力を残した鎗矢つてのをちよつと使ってみたかったのだ。

殺傷力も音の大きさも中途半端な失敗作と聞いていたが、なるほどおかげで安かった。

だがそんな、先が少し潰れた鍬を受けてしまった、彼の頭はどうなるだろうか？

——パアアアアアアン

答えは、地面に思い切り叩き付けたトマトが一番近い。

弾けて、赤い霧が舞う。

うわあ、グロい。彼を組み伏せていた兵士達の顔に、べつたりと血糊が張り付く。

血で赤黒く染まった顔の兵士達は、一様に皆ポカンとしている、理解が追い付かないのだ。そりやー人間がいきなりトマトになるとは撃った俺にしたって想像の外。

だから復帰したのは、遠くで見ていたマルムーク隊長が一番早かった。

「見よ！ 魔法だ！ ザバが殺りやがった！ 全軍に命じる！ 奴を捕らえろ！」
使節団の筈が全軍でと言うあたり、マルムークも相当テンパってる。

「いや、先に矢を放ったのはそちらです。アレでは正当防衛と言われても仕方が有りません！」

ヤツガランさんが叫ぶが、マルムークが被せる様に大喝する。

「まだ言ってるか！ アレは怪物だ！ 人間を水袋みたいに破裂させやがった！ 人間に、お前にあんな事がで、ムグウ」

「動くな！ 今度はお前らの隊長の頭も胴体とお別れする事になるぜ」

だがマルムークの叫びは、田中に組み倒され、首筋に刃を突き付けられ遮られる。

田中は俺が無事と見るや取って返し、マルムークを人質に取ったのだ。

お優しいこつて、そう俺は心の中で呆れてしまう。恐らく今戦ったら俺達は勝てる。

人間が弾けたトマトに変わった瞬間を目撃し、次はお前だと言われてビビらない奴は居ない。帝国兵たちは一種の恐慌状態に陥っている。

実際、衛兵達を盾に出来れば、矢の数だけ十も二十もトマトを収穫出来る自信が俺に

はある。

ま、実際にはあの矢はあれきりなのだが、普通の矢でも当たれば死ぬしね。

だが、その有利を捨ててまで田中は戦鬪を止めた。もう十分と、そう言う事だろう。

恐慌状態から立ち直る時間を与えてしまうが、むしろ一旦落ち着かせて、まだやるのかと交渉するつもりなのだ。

で、俺はと言うと、草むらに蹲ったフリをして、腹の傷をとつとと治してしまう。

まず、力づくで矢を引き抜く。

鏃の返し部分が引っかかり、肉が裂け、ブチリと不気味な音がするが気にしない、死ぬ程痛いのが気にしない！

あとは脂汗が滲む手を患部に当てて、呪文を唱えればオーケーだ。

『我、望む、命の輝きと生の息吹よ、傷付く体を癒し給え』

程なく傷が塞がり、痛みも一服する。

だが、一人殺しておいてコツチは無傷では交渉にならないだろう。引き抜いた矢を踏みつけ、矢羽根を持って一息に持ち上げればポキリと矢が折れる。

そうして先端が無くなった矢を手に、血に塗れた腹部にあてがえば、いまだに矢が刺さっている様に見えるだろう。

服に開いた穴も、赤い血の染みも本物だけに、疑われる事は無いと思う。

むしろやり過ぎてしまったようで、心配そうに駆けつけた衛兵の一人が「大丈夫か？」と近寄ってきてしまうが、これを固辞。

「近づかないで！……ヤツガランさんの指示に従って下さい。衛兵が森に棲む者と通じているなど、痛くも無い腹を探られては困るでしょう？」

「そんなー！」

俺が血の気の引けた顔で、力ない笑みを浮かべ言えば、衛兵は悔しげに唇を噛んだ。実際は衛兵の健康値に阻害され魔法が使えなくなるのを嫌ったのだが、勘違いして貰えれば重畳だ。

そうしてヨロヨロと立ち上がってみれば、状況はまだ動いて居なかった。

帝国兵と衛兵達にらみ合い、その真ん中でマルムークのし掛かっているであろう田中の上半身が窺える。ヤツガランさんは衛兵達に静まる様に声を掛け、田中の様子を注視している。

恐らくはヤツガランさんもこの場を穏便に纏めたいのだ、だから田中に期待している。

「俺の事は良い！ お前らやっちなええ！」

マルムークの叫びが聞こえるが、兵士達は動けない。彼らは若い兵士の暴拳を見ていたし、その彼がトマトに変わる瞬間も目撃している。

ましてや隊長が人質に取られ組み伏せられている、彼らの頭の許容量を遥かに超える事態と言えた。

だがそんな事態も、常に頭の許容量をオーバーしている奴には関係ない。

「よっしゃー隊長良く言った、待ってる俺がそいつをぶつ殺してやる」

「ブッガーか、こうなるとめんどくせえな」

集音の魔法は使っていないにも関わらず、田中のぼやきが聞こえる様だ。

実際面倒な事態だ。こうなっては暴れるブッガーを止める術は無い。マルムークを

速やかに殺して、戦争を始めるしか無い。

田中よ、覚悟を決めろ！ 心の中でそう念じる。

その思いが通じたのか、覚悟を決めた田中がフウーっと息を吐き。

——ブスツ

田中がマルムークの首を斬った音では断じてない。

既に田中の間近にまで迫っていたブッガーの足元、そこに一本の矢が突き刺さったのだ。

「誰だー俺に矢を放った奴は誰だあー！」

どう見ても衛兵達ではない。予期せぬ方角から突如飛んできた矢にブッガーがいきり立つ。

「待てッ！ 待てー！！」

振り返れば、馬を駆りこちらに向かつて来る男達が五人、更に後ろから徒歩で五人。計十人の男達がドタドタとコチラに走り込む。

先頭の馬上の男は確か……そう、スフィール城の執務室で俺に斬りかかった、確かズーラーとか言う奴だ、ヤツガランさんが言うにアイツが黒幕みたいなもんか？

「ハア、ハア、その戦い、待てー！！ この場はこのズーラーが預からせて頂くー！」

息を切らして駆けて来る、何にせよ、これ以上状況が拗れるのかと思うと気が重い。

「あーもー、めんどくさいなあもう」

思わず、お姫様らしからぬ、可愛く無いぼやきが漏れるのであった。

ゼスリード平原騒乱4

「ハア、ハア、その戦い、待てー！ この場はこのズーラーが預からせて頂くー！」

なんか小汚いオツサンが、俺達の前に転がり込んできた。

ズーラーはグプロス卿の腹心で、裏の仕事を専門にしていると聞いた。

自己紹介された訳じゃないが、予想通り執務室で俺に斬りかかってきた奴もコイツ。そんな裏方が何を思っこんな舞台に出て来たんだか……

ヨタヨタと馬の上から降りると、組み伏せられたマルムークの眼前に、恭しく膝をつく。

「私はズーラーと申す者、グプロス様の命を受け、セルギス帝国使節団、マルムーク様のご案内にとはせ参じました」

「御託は良い！ さっさとコイツをどけろ！」

ズーラーが格式張った礼を見せても、相手が地べたに組み伏せられては締まらない。ズーラーは未だマルムークに押し掛かるタナカを見やる。

「申し訳ありませんが、彼を離して頂けませんか？ 悪い様には致しません」

何が悪い様なのかは解らないが、相手は領主の名代として来ている。無視をするのは

得策では無い。

チラリとコチラを見つめる田中に頷いてみせれば、渋々といった様子で田中はマルムークの背から離れる。

自由になったマルムークはすかさず田中に食ってかかるが、そこにブーラーは割り込んだ。

「お止め下さい、我々も一部始終を見させて頂きましたが、死んだ彼が先に矢を放つたのは間違いありません」

「それこそ、ザバの魔法で操られたのであろうが！」

「ですが、姫様も矢傷を受けております」

皆の視線が一齐に俺に向く。

俺の顔色は真つ青に違いない。実際に出血で血が足りないからだ。矢を引き抜く時にメチャクチャ痛かったから、珠の汗だつて浮いているだろう。

その矢は手で押さえ、まだ刺さっている様に見せ掛けているし、ふらついた足取りを演出してやれば立っているのもやっとに見えるハズ。

皆が痛ましいモノを見る目を俺に向けてくる。

……コレでますます俺を帝国に引き渡すのは難しくなったハズだ。

帝国と通じているグプロス卿だが、俺を差し出すような真似は出来ないと考えてい

た。

衛兵達が見ている前、そんな事をすればグプロス卿の評判は地に落ちる。外聞を気にするグプロス卿には出来ないことの本ズ。

何とかこの場を穩便に済まそうとするに違いない。その証拠にズーラーは揉み手でマルムークに語りかける。

「お互い一矢ずつ放った結果、たまたま運が悪い方が死んだと言う事で水に流してはどうでしょう？」

「何を馬鹿な！ 先に矢を放ったからなんだと言うのだ！ 奴は人間ではない、獣に矢を放った所で責められる道理は無い！」

「そうでしようか？」

ここで一転、下手に出ていたズーラーの態度が一変する。

マルムークは怪訝そうに顔を歪めた。

「なんだと？」

「恐れながら言わせて頂ければ、ここは既に王国領。我が主、グプロス様が出されたのは、使節団の御歴々に対する王国領への立ち入り許可のみに御座います」

「だから？ 何だと言うのだ？」

「ゼスリード平原は禁猟区では御座いませんが、無許可でキツネ狩りをして良い訳では

ありません。仮に彼女が人間では無いとしても、捕獲には我が主の許可を取って頂きた
く」

「馬鹿な事を！ そんな茶番の間に獲物が逃げてしまうのでは無いか！」

「ですから、一度皆でスフィールへと向かい、そこで我が主、グプロス様の意向を伺おう、
そう言っているのです」

ズーラーの提案を受け、マルムークも思案顔となる。

「それはあのザバのガキも含めてスフィールに行くと言う事だな？」

「勿論でございます、ユマ姫は当事者で御座いますから、彼女抜きでは話になりません」
「フン、それをアイツらが納得するかな？」

「それはもう、私から説得させて頂きます」

「どうやら、みんなで一旦スフィールに帰りましょうと。そう言う話でまとまったらし
い。」

ズーラーはマルムークの前から離れると、俺のそばまでやって来て囁いた。

「ユマ姫様、お怪我の具合は如何でしょうか？ お見受けするところ矢はかなり深く刺
さっている様子。いや、無理をなさらない方が良い！ 鏃の返しが肉を裂き出血しま
す。ここでは縫合する事もままなりません、一度我々と共にスフィールに帰還しまし
う」

俺に斬りかかって来たヤツが良くもヌケヌケと、と言ってやりたいがコイツに言っても意味は無いだろう。

問題なのはグプロス卿が何を考えているか……グプロス卿は帝国が来るのが解つていながら、俺をスフィールから追い出す様なマネをした。

やっぱり、グプロス卿は俺を独占する事を諦めていないのだ。脂ぎったオッサンにズイブンと好かれたモノである。

俺としては……うーん、ココで帝国軍と衛兵で戦端が開かれるのが一番だったのだが、スフィールの街中にて、我が物顔で俺を追い回す帝国軍と言うのも戦争の発端として申し分無いモノを感じる。

何にしても魔法を封じられるのはマズイ。健康値に阻害されないように距離は離して貰わないと。

「そんな！ 帰ると言っても、百人からの帝国兵に囲まれてしまつては、抵抗し様も無いでは無いですか」

「いえいえ、そんな事にはなりません。なにせグプロス卿は急にスフィールから出発してしまつたユマ姫様に大変心を痛めておいでですて」

「まあ！ そうなのですか？」

俺は大げさに驚いて見せる。

「だけど、五十過ぎのオッサンに心を痛めてガチ恋されても困るだけ。

「ですが、わたくしに馬車を用意しては下さらなかったではないですか」

「そう言つて俺が恨めしげに睨めば、ズーラーは慌てて手を振った。

「いえそれは……実は我々は陰に日向に、様々な形で帝国から圧力を掛けられてしまつてね」

「そう言つて、ズーラーはチラリと帝国兵達を一瞥する。

「王国の安全の為なら幾らでも突っぱねられる物ではあるのですが、残念ながらエルフはザバと言われる恐怖の対象でして、表立つて協力しては、スフィールも人類の敵なのかと喧伝されてしまい立場無く、我が主もお悩みだった訳です」

「……そうだったのですね」

「そこへ来て百人からの使節団を名乗る、武装した兵士の領内の通行許可を求めて来たのです。これには我が主も腸が煮えくりかえる思いでしたが。逆に考えたのです」

「逆とは?」

「民衆の前でその使節団と姫、お互いの主張を戦わせればどちらが正しいかなど一目瞭然だと。なに、御心配には及びません、百人からの武装した男達が貴女の様な年端も行かない少女を糾弾するのです、誰の目にも貴女が被害者なのは明らかでしょう」

「……え、ええ」

思わず空返事。どういいうつもりなのか、全く意味が解らない。

流石に海千山千のオッサンだけある、なんか筋が通っている様に聞こえるから恐いね。

ズーラーは気圧された様子の俺に気をよくしたのか、堂々と胸を張る。

「そうなればグプロス様も貴女を援助する事になんの障害も無くなり、鼻持ちならぬ帝国に一杯食わせられる」

「で、ですがスフィールで、私は攫われそうになりました」

自信満々の所悪いけど、バレバレなんだよ？ その場その場で適当に話を繋いでないか？

俺が青白い顔でジツと見つめると、ズーラーは慌てた。

「我々が、あの時あんな真似をしかしたのは、姫様の魔法に度肝を抜かれたから。そして主の身の安全を考えた場合、仕方の無い事でした」

「ですが、我々に武装解除を迫り、裏では武装した兵士を壁裏に待機させる行いは許せるものではないでしょう」

「それです！ それがもう半分、我々は帝国が姫様を狙っている事を事前に掴んでいたのです。もしも会谈の最中、スフィール城からエルフの姫が攫われたとなれば、ビルダール王国とエルフの関係を悪化させる、これ以上無い一手となってしまう」

いや、城だよ？ 本當にこのオツサン適当にしゃべるなあ……

「にわかには信じられません、スフィール城のただ中でその様な事、起こり得る筈無いでしょう」

「残念ながら……それ程、帝国の牙はスフィールに食い込んでいます。それ故、穩便に話し合いの末に姫様を説得し、我々が所有する秘密の別邸に潜んでもらう準備を整えて居りました。私の独断による凶行のお陰でその様な提案をする雰囲気では無くなつてしまいました」

「そうだったのですか！」

なるほど、なるほど……

つて、なるかボケエ！ その別邸で脂ぎつたオツサンに抱かれまくるんだろが！

余りの苛立ちに俺が顔を伏せると、ズーラーは尚も言い募る。

「ええ、ですから一度スフィールにお戻り下さい。悪い様には致しません」

自信満々の表情である。嘘も本當もない交ぜにして更にスラスラと語ってみせる。

「何しろ、我が主グプロス様はユマ姫様の美しき、可憐き、そしてお伽噺のような悲劇の運命に大変参つて居りまして、姫様が矢傷を受けた事を知れば帝国兵に怒り狂う事は請け合いで御座います」

いや、凄いな、自分で嘘を言っている自覚も無さそうで呆れてしまう。

だがな、嘘だったら俺だって負けてはいない！

「……………そうなの……………ですか？」

あどけない、キョトンとした顔でズーラーを見上げる。ズーラーは膝をついているが、矢傷を受けた俺も蹲っており、座高の差は明らか。

小さい体はとても弱々しく見えるに違いない。

崩した足先、スカートとブーツの間からチラリと生足をのぞかせる。

足を挫いた様に見せ掛け、痛みに喘いだ声を上げれば、ズーラーがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえるようだ。

「それはもう、グプロス卿のいれあげ様は、領主としての職務が疎かになる程です」

「まあ！ 私父よりもお年を召していらっしやるのに、いけない人だわ」

俺は冗談めかして（一切冗談ではなく心底気持ち悪いのだが）そう言って、恥ずかしくようにイヤイヤと首を振る。

ズーラーに「なーんだコイツもまんざらでもないんじゃないか……………」ぐらいに油断して貰えればめつけもの。

……………だったのだが、ズーラー自身に刺さってしまったらしく、ポヤポヤとコチラを見ている。

全く我ながら罪な女ぶりだが、この隙に要求を突きつけよう。

「私がスフィールへ帰るにあたって、条件は二つあります」

俺はそう言つて、二本の指をピツと立てる。

「一つは帝国兵だけでなく衛兵達も共に帰還する事」

「勿論でございます、姫様の安全、スフィールの誇る衛兵達が保証させて頂きます」

「ありがたい、そしてもう一つは、私が怪我でスフィールまで歩けそうにありません。馬車を用意して欲しいのです」

俺が見つめる先には、衛兵達と共にゼスリード平原に現れた商会の馬車があつた。

「そんな事ですか、いや姫のお手を煩わせるまでもなく、元々そのつもりで御座いました、オイ！ ヤツガラン！」

「なんででしょう？」

ズーラーは声を荒らげてヤツガランを呼び、商会の馬車を徴発するように命じた。

なるほど、何の問題もなく馬車を借りられると思つていようだ。

果たしてどうかかな？

……思つた通り。馬車の徴発は難航した。

ヤツガランさんがどれだけの金額を提示したのかは解らないが、商会の代表は決して首を縦に振らなかつた。

「オイ！ 何を揉めている！」

いよいよ焦れたズーラーが割り込んだ。商会の主は年若い青年だったのだが、領主の名前を出しても一向に首を縦に振らなかつた。

それどころか説得が上手く行かないと見るや、今度は帝国側へ、マルムークへと話を持って行ったのだ。

「戦時中では無いのだ、馬車を丸ごと徴発すると言うのは横暴では無いか？」

そしてあろう事か、マルムークはこんな調子で商会側を擁護する。

ズーラーは信じられないとばかり呆然とする。スフィールの領主の顔に泥を塗る行為、そんな真似をすれば今後の商売が立ち行く訳がないからだ。

だが、俺にとつては予想通りの展開。

だつて、その馬車……ギテムツド商会の馬車だもの。

帝国とスフィールを秘密裏に行き来していたギテムツド商会。それが帝国軍がやってきて一波乱と言うその前に、スフィールからせつせと脱出して帝国へと帰ろうとしている。

何を積んでいるのやら、気になるだろう？

オカシイとは思っていたんだよ、だつて商会つて割に、これだけ揉めてるのに一向にスフィールへ逃げ帰ろうとはしないしね。

それで集音魔法を使つてみれば、衛兵の会話からギテムツド商会と判明したわけだ。

ヤツガランさんに聞けばアツサリ教えてくれただろうが、本人は交渉に大忙しだ。今も、商会の青年に食ってかかる。

「ですから、馬車は借りるだけ、中の物資は我々で買い上げます。徴発どころか売る手間が省けたと喜ぶ場面では御座いませんか？」

それでも商会の主、アイクと言う青年は納得しない。

「金の問題じゃないだ！ この積み荷は貴重な薬がギツシリ詰まっているんだす、こいつを帝国に持って行かなければ、多くの人が病に倒れる事になるだ」

「ふむ、帝国で流行り病が蔓延している事は、皆も知って居るだろう。ここは荷物は我々が買い取ると言う事でどうだろうか？」

アイクと言う商人が田舎言葉で反抗し、マルムークが急に紳士的に提案してくる。

これはどう考えてもおかしい、あの馬車にはよつぽどの何かある。

ようやくズーラーとヤツガランも、事態の異常さに気が付いたみたいで、二人して顔を突き合わせている。

俺は集音魔法でその声を拾う。

「何だと思う？」

「恐らくは禁制の薬、依存性の有る麻薬、或いは偽造通貨と言った所でしよう」

「だろうな、しかも帝国の秘密工作としてやっている」

つまり帝国にとって見られたくない荷が積まれている、そう言う事だ。

「クソツ！ 馬鹿にしやがって！」

苛立たしげに地団駄を踏むズーラーをヤツガランさんが諫める。

「落ち着いて下さい、ズーラー殿、ここは王国領。荷の権利は我々に有ります、そうで無くても荷の検分を求めるのは問題無いでしょう」

「いや、もういい」

「何故です？ あれは我が国に害を成す物でしょうか？ こんなチャンスでも無ければ尻尾を掴むことは難しいハズです」

「……解った、やってみろ」

許可を貰ったヤツガランさんは意気揚々と馬車に検閲を求めた。日頃の鬱憤を晴らさんとばかりの勢い。

だが、それでも商人は固辞し、帝国側も穏やかに割って入る。

「駄目です！ この薬はデリケートで開封して日や空気に触れるとダメになってしまう」

「ヤツガラン殿、この薬は我々が買い取る事にしたのだ、勝手な事をして貰っては困るな」

そんな薬など聞いたことも無い。ヤツガランは珍しく青筋を浮かべ、唾を飛ばして荷

を改めさせろと激昂するが、説得は不可能だった。

「もういい、荷は諦めろ！ 馬車だけで良い」

ズーラーは肩を落とし、シッシと追い払う様に商人に手を振ると、商人達は歓喜の声を上げ荷を運び出し始めた。

「どうしてです！ 奴らは危険な荷を運搬している。これはスフィールだけに止まらず、王国の国防に関わる問題です！」

「大事の前の小事だ、今はユマ姫の問題を片づけなくてはならん」

「だからこそです！ あの荷が危険な兵器である可能性が否定できません」

「突飛な事を！ 何を根拠にそんな事を言っている！」

「……根拠は、有りません。ですが何故……そんな、そんなにもギデムツド商会と言うのは力が強いのですか？」

「……何と言った？」

ギデムツド商会の名前を聞いた瞬間、ズーラーの目がつり上がった。

なんだ、気が付いていなかったのか、それで安請け合いたした訳だ。ヤツガランさんにしてみればズーッと検閲したくて堪らなかった馬車なのだから、このチャンスに逃す手はないよな。

「ギデムツド商会です、以前から、かの商会の積み荷はチェック不要とのお達しを受けて

いました。しかし王国の商会として王国内での商売を行っているとしながら、頻繁に帝
国と取引を行っていたと思われまます。今回はその決定的な証拠」

ヤツガランさんは一歩も退く気が無い。

一方で、ズーラーは気が狂ったように暴れ始めた。

「クソツッ！ クソツッ！ クソオー！」

苛立ちがピークに達し、子供の様に地団駄を踏む。

俺はその様子が愉快で堪らない。何もかも上手く行かず裏目に出る、そう言う時は
何もかもどうでも良くなってしまふもの。

どうだ？ 暴れてみようぜ！ ココで戦争を始めちゃえば良いじゃないか。

俺はその様子をニヤニヤと観察する。

ズーラーが正気を失っている間にも、ヤツガランはアイクと言う商人とマルムークの
間に飛び込んで、必死に取引を止めようと体を張っている。

だが、絶対に相手は荷を見せる事を認めないだろう。なにせ積み出された荷物はメ
チャクチャ怪しいからね。

まず、やたらとデカイ。馬車の中身はあの木箱一つで殆ど埋まっていたのでは無いだ
ろうか？

麻薬か何かだと思っていたが、もっと危険な破壊兵器でも作っていたのかも知れな

い。

なんせ、みんなおっかなびっくりその巨大な木箱を腫れ物の様に触っているのだ。気になる。あの中身がどうしても見たい。ひよっとして、アレこそが……

こうなつてはズーラーやマルムークを黙らせて、どうやつてもあの中身を曝け出した
い。

俺が作戦を考えていると、狂った様に地団駄を踏んでいたズーラーが動いた。

腰の鞘ごと剣を掴み取ると、一息に抜き放ち乱暴に鞘を投げ捨てる。

なんだ？ 剣をチラつかせて強制的に荷を改めると言うのなら願っても無いのだが
……

ヤツガランさんもそう思ったのか、感極まった様子で敬礼する。

遂にズーラーが帝国の奴らに、毅然とした態度で物申すつもりになったのだと歓喜したに違いない。

「ズーラー殿！ 私は職務の為に命を投げ出す覚悟が出来ております！」

ヤツガランはこの人数差でも命を賭けて戦う意思があると、ズーラーにアピールした。しかしズーラーの凶刃の向かう先はその思惑の真逆の所。

「そうかい、そうかい、そうやって貰えるとコツチも気が楽だッ！」

——ザシユツ

体当たりの様な勢いで、ズーラーが飛び掛かったのはヤツガランの体、その一刀は正
確に心臓に突き刺さったのだった。

ゼスリード平原騒乱5

— ザシユツ

「なっ！」

ズーラーが突然ヤツガランさんを刺殺した、想定した最悪の更に下、あまりに突然で考えもしなかった。

ズーラーは確かに冷静で無かった、苛立ちでおかしくなっていた。

だが俺は祈ってしまった、その凶刃もひけらかして周囲を脅すだけだろうと思いつき、停滞した事態を動かしてくれれば何でも良いとばかり、願ってしまった。

良く考えれば、訳が解らないと言うほどの行動では無い。

ヤツガランさんは堅物で、俺に協力してくれると約束したこともあつて。この機会に何としてでもギデムツド商会の馬車をあつた検めるつもりが見て取れた。

だが、中に入っているのは恐らく危険な兵器。検閲など決して帝国は許さない事もズーラーには解つたに違いない。その中身を知つても不思議じゃ無い。

だとしたら、帝国軍か衛兵達か、どちらかが暴力に訴えるその前に、自分の手で衛兵の隊長であるヤツガランさんを殺して収めてしまおうと考えた。

……そんな所だろう。

そんな短慮で、刃はヤツガランさんの心臓に滑り込み、そして死んだ。

「ヤツガランさん！」

慌てて駆け寄るが無駄だ、どう見ても即死。現にパニックに陥っても自分の冷静な部分が発復魔法の無駄な詠唱を妨げ、冷めた目でその死体を見ているのを感じる。

一方で、狂乱し、涙を流して縋り付く自分が居る。

彼との思い出、一緒に齧った屋台の肉、辛いミートパイ、頭をクシャクシャに撫でられた事、槍の筋が良いと褒められた事。

これはそう、ライル少年の記憶だ。

だが、記憶が潜り込んだだけと言う意味では『高橋敬一』もライル少年も、何の違いもやはりはない。

会ったばかりの自分が、こんな風にヤツガランさんに涙を流す。異常な事だ。だが流れる涙を止められない。迸る意思を止められない。

これは、俺も家族を目の前で殺されたばかりと言う事と、無関係では無いだろう。

復讐の意思は、俺にとって何より優先される感情だ。

ヤツガランさんが持っていた槍を握る、構える。思ったよりは様になっている。きつとライル少年の記憶のお陰だ。

だが、非力な少女の体では、鍛えられた大人のヤツガランさんが持つていた槍を振り回す事など不可能だ。

かと言って弓は使えない、これはライル少年の復讐だ。ライル少年は弓を使えない、使えるのはヤツガランさんに教わった槍だけ、槍だからこそ意味が有る。

だから俺に、『高橋敬一』に出来る事は、その少年の背中をそつと押すだけ。それも魔法でだ。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

移動の魔法。風吹きすさぶ草原に、呪文が流れる。

ぼんやりとした意識の中、ズーラーを目で追えば、異常なこちらの様子に気が付いて、慌てふためき馬に跨るところだった。完全に逃げる気にいる、敵ながら判断が早い。

なるほど、ヤツは俺が人間をトマトにするところを見ている。まさか衛兵一人殺しただけで、こんなに激昂するなどと、夢にも思っていなかったのだろう。

正直、俺も思っていなかった。

「無駄だよ」

少年の様に一人眩くと、口角が吊り上がるのを感じた、馬なんかじゃ逃げられはしないのだ。

風の魔法での高速移動。

一步、二歩、たった三歩目で追いついて、四歩目で馬上へと槍を突き上げた。
——ドシュツ！

その姿勢、突きの鋭さ。非力なお姫様のそれではない。ライル少年が習った槍術は、子供の手習いと馬鹿に出来る様なモノでは無かった。

少女の力はお弱くとも、移動の魔法で恐ろしい程に勢いが乗っている。その勢いは滞る事無く、全て馬上のズーラーへと叩き込んだ。

おかげでズーラーは馬から転げ落ち、そのまま地面に縫い付けられた。

「あつぐ、ゲエ」

急所を外してしまったので即死ではない、だがその口からは醜い断末魔と血が漏れるのみ、助かる傷では無いだろう。

そして再び、平原で漂う濃い人間の血の匂い。狂乱の気配。

「クソツッ！ やはり化け物！ 人間らしい説得など無意味だったのだ！ 武器を抜け！ 化け物狩りだ、無傷では言わん！ だが絶対に殺すなと上からのお達しだ、かかれ！」

マルムークの絶叫が聞こえる。当然だろう、戦闘は避けられそうに無い。

……あーあ、やつちまった。

いまだ謎の木箱は相手の手の内、一体全体あそこから何が飛び出てくるか全く解らな

い。

しかも、ズーラーを殺し、ヤツガランさんも居ないとあつては、衛兵達も味方になつてくれるとは限らない状況だ。

だが後悔は無い、俺はセレナの、家族の復讐をしたくて旅をしている。そして今やライル少年は俺の一部、彼の復讐もまた俺の復讐なのだ。軽んじて良い筈が無い。

しかし田中には悪い事をした、俺の暴挙でここが死地に成るかも知れないし、敵に囲まれたら使えない魔法の弱点を考えれば、田中に頼る部分が大き過ぎる。

だが田中は既に剣を抜き構えている。

既にやる気。頼もしい事この上ない。

……いや？ だが奴は、田中は帝国兵を見ていなかった。

何だ？ そんなところには何も無いぞ？ なんの気配を感じている？

上？ 空を見ている？

「オイ！ アイツが来るぞ！」

田中が俺に向けて叫ぶ。アイツ？ アイツとは？ 空？

——ビィィィィィ

低い低い、笛の音、いや笛じゃない、参照権で調べるまでも無くこの音は覚えている。耳を澄ませば、他の音も次々と聞こえて来る。

——ドツドードツド、ギイギイ

「……まさか？ ……恐鳥リコイの群れ？」

呆然と呟く。最低最悪を想定していたつもりだった、だが現実是最悪の下の、その更に下。

一度襲われたら二度目は無いと、無意識に思ってしまった。

だが考えてみれば、大森林からはるか遠いこの地でも、翼を持つ彼らには大した距離ではない。

そして、このゼスリード平原には隠れる所などどこにも無いのだ。

見上げれば、空を黒く染め上げる集団が急速に迫って来ていた。

ゼスリード平原は帝国と王国が鎬を削る決戦の地、その筈だった。

だが既にエルフも人間も、帝国や王国も分け隔てなく、恐鳥リコイ達の餌場へと成り果てようとしていた。

ゼスリード平原騒乱6

北の空から現れた恐鳥リコイの群れ、だが空を見上げた俺の眼前にはもつと身近な死が迫っていた。

——ヒヒーン

間近で発せられた甲高い嘶いななき。鞍上のズーラーを失った馬は、突然現れた恐鳥リコイの群れに恐慌し、棹さお立ちとなった。

馬は大きい。それは当たり前の事だが、前世では実感する事など全く無かった。

だが後ろ脚のみで立ち上がった巨体は、空を見上げていた俺の目線を遮る程。

——怖い。

思った瞬間に横に跳んだ、恐怖に足が竦むなんて真似は許されない。

現にさつきまで俺が居た場所を馬が踏みしめ、その巨体がもたらす音と振動がすぐ横を駆け抜けて行く。

下手に避けたせいで却って当たってしまうなんて心配は無用。『偶然』は俺が居る場所を確実に狙うのだから。

間一髪のピンチを脱した俺だが、喜ぶ気にはなれなかった。飛び込んだ草の中、舌打

ちが漏れる。

駆けて行く馬が羨ましい、流石は動物、危険に対する反応が早い。

呆けている暇など無かった、遮る物の無い平原で恐鳥リコイの危険度は跳ね上がる。

ゼスリード平原を囲む急峻な斜面と森の中、逃げ込むとしたらそこしか無かった。

だが空を行く恐鳥リコイは素早く、既に頭上で太陽を遮り、数多の影を地面に落としている。

今から駆けた所で、俺の『偶然』は見逃してはくれないだろう。

だったら『餌』のど真ん中で紛れるしか無い。

「我、望む、足運ぶ先に風の祝福を」

再び魔法を使って駆ける。ただし今度注視すべきは空、そして向かうは衛兵と帝国兵

が向かい合うど真ん中。

ズラーを追う時の様に大きなステップは踏めない。頭上に気を払いつつ、ステップ

を刻む。

その視界の端に、逃げて行った馬が映る。すでに平原の端に近い、死地と化した平原から脱出一番乗りだ。羨ましくて仕方が無い。

と、その馬が森を目前に突然、何かに『踏みつぶされた』

——ビィィィィィィィィ

ヒヒーン

低い笛の様な鳴き声、そして悲痛な馬の嘶きは遠くに有つて、尚ハツキリと耳に届いた。

笛みたいなのこの鳴き声を俺は忘れない。

突如として平原に現れたのは、鷲の上半身と獅子の下半身を持つ、お伽噺の中にだけ居るハズの幻想生物！

グリフォンだ！ 村で戦つたあのグリフォン。射貫いた翼も完治している様で、空を飛ぶ他の恐鳥リコイとも更に一段違う速度で飛来し、あんなに大きく感じた馬を一掴みで圧殺した。

……最悪だ、アイツ、逃げる奴から狙つてやがる！ ゼスリード平原からネズミ一匹逃がす気が無いらしい。

最悪の中の最悪、その中をどう動くか？ 一瞬の判断を迫られた俺は、魔法を慎重に制御してスピードを保つたまま、いよいよ帝国兵と衛兵が睨み合うど真ん中に躍り出る。

声を掛けて来た田中さえ振り切つて、衛兵達に囲まれた一台の馬車の下へと滑り込んだ。

そう、ギデムツド商会の馬車、その真下。

俺の『偶然』は周りを容赦なく巻き込んで行く。だったら帝国兵のど真ん中で踊つて

やりたい所だが、こうなつては流石に蛮勇が過ぎるだろう。

だつたらこの馬車の下、帝国の兵器と思われる荷物を少しでも巻き添えにしたい。なによりこの平原で隠れられる場所などココしかない。

潜つた側から、ガゴンと鈍い音がして、馬車の片輪が持ち上がった。

早速恐鳥リコイが馬車へと体当たりをしたに違いない。

だが、おかしい。軽すぎる。

そんな風に眉を顰める俺の隣、真つ黒な何かが転がり込んで来た。

「ここまで姫サマの計算の内つて訳か？」

田中だ、軽口を飛ばしてくるが、こんな事態を想定出来る奴なんざ居るハズねーだろ！

「当然！（そんな筈ないでしょう）」

俺の叫びは、再びの恐鳥リコイの突撃、その振動で遮られてしまい、「頼もしいねえ」等と田中に啜られてしまう。

「余りに（馬車が）軽い、荷物は？（どうなりました？）」

苛立ち混じり、言葉足らずに叫ぶ。しかし、問題無く田中には通じる、そんな事すら微妙に悔しい。

「あそこだ」

田中の指差す先は帝国兵のただ中、マルムークの傍だった。巨大な木箱が鎮座し、アイクと言う商人もそこに居た。

アレを運び出したのは見たが、荷物はアレだけだったのか？

馬車の轍わだちからなんとなく重量を計算していたのだが、あの木箱は重量の大半を占めていたと言う事になる。益々怪しい。

帝国の兵器、ココで俺に取って一番嫌なモノを想像すれば、中身は一つしか無い。

大砲でも投石機でも無い……俺が知っているのはエルフの国を滅ぼした霧だ。

帝国が万が一を考えて、俺を確保する為に運び出したとするならば筋は通る。

よく見れば、マルムークがアイクを恫喝し、木箱を指差し、必死に何かを訴えているのが見えた。

何を話しているか聞きたいが遠すぎる。狂乱の中、人と恐鳥リコイが数多く入り交じり、集音の魔法も使えない。

俺が歯噛みしていると、焦った様子で田中が俺に聞いて来た。

「なんだ、あの中身？ 何が入っていやがる!! まさか？ 前から言っていた帝国の新兵器ってアレか？」

田中には何も言っていなかった、しかしそれでも自ら結論に行きついた、つまり？

「聞こえるのですか？ この距離で？」

「まあなんとかな」

とんでもない地獄耳、それこそ地獄と化したゼスリード平原、^{リコイ}恐鳥の鳴き声、人間の悲鳴、馬の嘶き。そんな中これほどの距離で会話を聞き取って見せるとは。

「マルムークがアレを使えと命じ、アイクって商人がそれに抵抗してるな」

田中が言うには、「今使わないでいつ使うつもりだ！ このままじゃ全員鳥の餌だぞ！」そう叫ぶマルムークと、「こんな所で使う為に、危険を冒して充填していた訳じゃない」と激しく抵抗するアイクで言い争っているらしい。

充填？ 何の事だ？ そもそも、兵器は俺に使う為に用意した物じゃない？ 俺は何かを勘違いしていたのか？

「いよいよ使うみたいだぜ」

「マズいですね……」

本当にマズい、最悪だ。あの兵器の本質は霧。使用されたとしても霧が広がる前に逃げられる期待も有ったが、足を^{リコイ}恐鳥に封じられた上で、逃げ場無く使われれば絶望しかない。

見事『偶然』は俺を殺す為の舞台を作り上げたと言える。

激高したマルムークは、遂にはアイクを殴りつけた。崩れ落ちるアイクを取り押さえ、部下に木箱を剥がさせる。いよいよ俺の仇がその姿を現した。

「アレは？ まさか!？」

それは金属の黒い地球儀に、蜘蛛の足が生えた様な気味の悪いオブジェ。

俺は既にそれを見ていた。エルフの国では無い、スフィールの、それも中央広場でだ!

まさか! と思いながらも参照権で確認する。間違いない! 近代芸術のオブジェだと、特に意識もしていなかった。

そして参照権で確認すれば、確かに今朝の広場には無いじゃないか! 朝に広場で違和感を覚えた正体はそれだった。

だけど帝国が誇る秘密兵器だぞ? そんな物を堂々広場に置くなんて正気じゃない。

もしエルフの国を脱出する際に、俺がアレを一目見ていたら? 参照権が無くとも絶対に忘れないし、広場で見かけた瞬間にぶち壊したに違いない。あんな場所に置くのは危険過ぎる。

いや? だからこそこのドサクサに慌てて運び出したのか? しかした、そもそも目立つ場所に置く意味が全く解らない。

何かある、何だ? 俺は何を忘れている?

アレは、魔力を掻き消す兵器だ。俺はそれに近いモノを……

「あつ! ああああああつ!」

「なんだ？ どうした？」

「そうか！ 知っていた！ 魔法を打ち消す兵器。それ自体は聞いたことも無かったが、同じ様に魔法を打ち消す物を幼い時分から知っていた。」

俺はそれをずっと気にして育ってきた、とても身近な物だ。

「健康値！」

「なに？」

「あの兵器は恐らく、他人の健康値を吸収します！」

魔力の結晶たる魔石、同様に健康値も物質化出来るとすればどうだ？ それを霧状に散布したらどうなる？

そう、魔力は打ち消される！

エルフの魔道具にすら、全く無い概念だ。有ったとしたら俺のために多少は使ってくれたに違いない。大森林の奥、濃すぎる魔力に常に苦しめられて居たのだから。

しかし、魔力は魔獣の体内や、空気中からかき集めて抽出したり、時には魔力溜まりでそのまま結晶として手に入る。

だったら健康値はどうするか？ 健康値は生きている生命の魔力への抵抗力だ。集めようと思えば、生き物から集めるしか無いだろう。そんな事が可能だとすれば、それこそとんでもない事。

だが間違いない、それならば『充填』と言う意味が通じる。

思えばスフィールでずっと低かった健康値、最終日だけは期待通りの値が出た。あれは搬出するために、健康値の充填を止めたからだ。

更に更に、帝国で蔓延する流行り病、スフィールでも増えて来ていると田中は言っていた。それらの原因は何か？

知れた事、健康値を吸われた人間はどうなる？ 30の人間が10吸われて20ならまだ良い。20の人間が吸われて10なら既に危険域。それ以下ならちよつとした事が致命傷になりかねない、俺はそれを身をもって知っている。

アレは俺に使う為に用意したんじゃない、ずっと前からスフィールの人々の健康値を吸い取っていたのだ、恐らくは混迷極める大森林の制圧に利用するため。

最初は自国で吸収していたのに違いはない、だが限界が来た。病や怪我、普通なら何でもない事で死ぬ者が激増し、自国で賄う事が出来なくなった。

じゃあどうする？ 他国でやれば良い！ グプロス卿は知っているだろうか？ 恐らくは知らない、馬鹿正直に健康値を吸い取りますなんて言う必要が無い。そんな概念すら無いのだ、こつそりと、いやそれこそ美術品として設置させて貰えばそれで良い。バレルの要素など全く無いのだ。

金属の球体に蜘蛛の足が生えた様な気味の悪いシロモノ。広場の他の銅像と混じれ

ば気にもならなかったが、よく見れば非常に禍々しい。

アレが俺の仇だと、参照権など要らないとばかりに目に焼き付ける。

いよいよ恐鳥リコイの襲撃は激しさを増し、衛兵達が何人も襲われ、命を落として行く。中には同じく馬車の下に転がり込む者や、馬車に乗り込む者が出て来たが、同時に恐鳥リコイも必死に馬車を蹴り始める。

馬車は長くは保たないだろう。

帝国兵だつて無事ではない、軍馬でも無い馬達は次々と恐慌に陥り、真つ先に逃げ出し、そして真つ先に死んだに違いない。グリフォンの鳴き声と、馬の悲痛な嘶きは平原で断続的に聞こえていた。

他にも逃げる兵士から真つ先に襲われて行く。いよいよ寄り集まった中、アイクの部下の商人風の男達まで恐鳥リコイの爪に攫われ、悲鳴と共に空へと舞い上がって行く。

それを見たアイクがいよいよ腹を決めたのか、一転して黒い球体の操作を始めた。

「来なッー」

田中が叫ぶまでも無い、金属の球体の上部から爆発的に霧が広がっていく様を見て。俺達は堪らず馬車の下から這い出した。

俺は破壊する！ 家族を殺し、国を滅ぼしたあの兵器。絶対に許せない！

そんな俺の決意を嘲笑うように、俺の仇である球体のオブジェは、霧にその姿を消し

て行く。

だがココだ！ チャンスが有るとすればこの瞬間しかあり得ない。

俺は覚悟を決めて、田中のズボンの裾を引っ張った。

「私を空高く放り投げて下さい、あの霧の噴射口を狙います！」

「冗談だろ!?!」

田中の間抜け声を無視し、俺はその準備を開始した。

ゼスリード平原騒乱7

「私を空高く放り投げて下さい、あの霧の噴射口を狙います！」

「何言ってるやがる!？」

まあ、実際問題、頭がおかしくなったと思われても仕方ない。しかし相手は金属の塊、思った以上に丈夫そうだったのだ。

健康値での減衰さえ無ければ、ファンタジーらしくファイアーボールの一つでも投げ込んでやるのだが、現実的に攻撃力として期待出来るのは、加速する弓矢だけ。

加速された矢の常識を超えた威力は拳銃どころかライフルぐらいに感じるが、それでも相手は金属の塊、効果が有るとは限らない。

健康値の吸収の為、広場に設置する程なのだから元々かなり丈夫な作りに違いないのだ。

しかも一矢撃つたら二矢目は警戒され射線を塞がれるだろう。

となれば噴射口を狙いたい、下から噴き出す様なら手の打ちようも無かったが、上ならジャンプして狙えば良い。

それこそ馬鹿かと思われるだろうが、城塞都市スフィールに入るにあたって俺は田中

と、方が一の脱出を想定し、壁越えの練習を行っていた。

その時、想定以上に高く飛んでしまったのだが、それがここでは役に立つ。

「構えて！ 早く！ 『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』」

「おい！ マジかよ！ 大丈夫なんだろうな!？」

懐疑的な田中の声は封殺、すでに霧は目前まで迫っている。呪文を唱え、田中へ向かって魔法の力でステップを踏む。

バレーのレシーブみたいに組んだ田中の手の上、魔法を使って思い切り踏み込んだ。

——ゴオオオオオオ！

耳元で、風をつんざく音がする。

田中が腕を振り上げると同時、魔法の力で空高く跳んだ。みるみる地面が遠ざかる。

練習した時、手が痛えよと田中がボヤいて居たが、それはそうだろう。これだけの威力で跳び出せば、踏み切られた手の負担はどれほどか？ むしろ脱臼とかしないのが凄い。

その田中も俺の視界の中、どんどん小さくなったと思ったら、急速に広がった霧へ飲まれ、最後には見えなくなった。

一方で上空には霧の影響がない。思った通りだ、あの霧は比重が重い。上空だけは霧の影響を受けない安全地帯。

背中の中の弓と矢を抜き出す、既にかんりの範囲が湧き出した霧に覆われていた。だがあの兵器の場所は解る、湧き出す霧の中心地。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

生クリームみたいに濃厚な白い霧、それがもつこり盛り上がる場所にアレは有る。

未だ上昇が続いているが、それが収まり重力に従って落ち始める直前、その無重力状態の一瞬が好機。

ビリビリと体に押し掛かるG。移動の魔法は爆発的な推進力だけでなく、Gや風の抵抗を軽減してくれるが、加速する弓矢の魔法の為に既に解除している。

やがてゆつくりと体が浮き上がる様な浮遊感、無重力状態に近い。

弓を大地へと向け、見下ろせば霧の大地が雲海の様だ。恐鳥達と共に、雲の上を飛んでいる様な、ファンタジックな景色。心配したその恐鳥達^{リコイ}は突然の霧に混乱し、俺を襲う様子は全く無い。

矢を番え狙う！ 狙う！

弓矢の魔法は放った後もコントロールと加速が効くが、それも俺の魔力の圏内だけ、まして霧の中に入る前に矢は加速しきって居なくてはならない。

フウウー

ゆっくりと息を吐く、やがて肺から一切の空気が無くなった瞬間。

俺は重力から解放された。

今ッ！

——ズパツシャアアアア！

裂帛れっぱくの気合と共に放った矢は、一気に加速し霧の中心へと飛び込んで行く。

一方の俺は無重力状態が終わり、喪失感と言うか、重力に囚われ肝がキュっとなる独特の感覚を胸に、代わりに品切れとなった酸素を胸いっぱい叩き込む。

「あガッ！ グッ」

だが、せっかく吸い込んだ空気が吐き出される、激しい痛みと圧迫感。そして始まる、更なる浮遊感。

何事かと振り向くと、俺を驚掴みにする妖獣が其処に居た。

(グリフォン!!)

叫びたいが、言葉に成らない！ 恐鳥リコイ達と違い、コイツだけは突然に空へと侵入した

俺に反応し、俺が静止した一瞬後、見事に俺を捕まえたのだ。

馬すら握りつぶす握力の持ち主、それでも俺が即死しなかったのは、俺が小さ過ぎてまともに握れなかった事、そして背中中の矢筒が引つかかったお陰であろう。

だが、それを幸運と喜ぶ気には全くならない。

「ぐっ！ ギツ！」

体をひねりながら、背後のグリフォンへと必死に弓を構え、矢を番える。

が、そんな無理な体勢でもともに放てるハズも無い。

まして魔力が載らない！ どれだけ集中して魔力をかき集めようとしても、グリフォンの持つ多量の健康値にかき消される！

ああっ！ これは……死んだか？ でもっ！ でもせめて！ あの兵器だけは道連れに……

——グガァン！

思わず見やった霧の中心部、そこから金属が弾ける様な耳障りな爆発音。

爆発した！ それは白い爆発！ その正体、恐らくはあの黒い金属球に溜め込んだ大量の健康値、それが一齐に溢れ出す、破壊成功だ！

しかしこの溢れ出す白の奔流はどうだ？ 途轍もなく巨大な白の塊。

俺はコレに近いモノをどこかで見たことがある、綿菓子？ 噴き出すムース？

そんな甘いもんじゃない、これは……思わず使ってしまった参照権。

知っている映像で一番近いのは……

海上での原爆、核実験映像。

ゾクリと冷や汗が流れる、そして一瞬にして爆発は白い壁となって、俺達を飲み込んで行く。

——ビィイ

視界ゼロ、白で閉ざされた世界にグリフォンの鳴き声。そして始まる再びの自由落下。
フリーフォール

地球では有り得ないサイズの飛行生物。重力が軽い訳じゃない、その推進力を支えるのは恐らくは魔力。

その魔力が奪われれば、恐鳥リコイもグリフォンも仲良く落下するしかない！

グリフォンは必死に翼を広げ、空気抵抗を頼りに減速、グライダーの様に滑空する。

が、それでも結構な速度で落下している。鳥の様な前足に掴まれたまま着地されたら、俺の体は揺り下ろされた血痕しか残らない。

少ない筋力を総動員し、この前足をこじ開けるより他は無い！

力を籠めるべく、腹いっぱい空気を吸い込んだ。その瞬間。

「ふえっ？」

白い視界の中、意識までもがホワイトアウト。

思い切り吸い込んだ霧。それが体内の、生きる為の魔力すら消滅させて行く。

思えばそう、エルフ王国が強襲された日、霧に囲まれエルフの兵隊は誰一人まともに

動く事すら出来て居なかった。

そんな中、俺だけがいつも以上に元気に動き回れた理由。それは俺が、魔力を必要としない人間との間に生まれたハーフエルフである事と、そんなハーフエルフにとって過剰な魔力が体内を常に侵していたから。

だが今は、人間の地。ハーフエルフの俺にとって魔力はむしろ欠乏気味だったのだろう。

そこへ来て、魔力を打ち消すこの霧を吸い込んだ！ しかも爆発によってもたらされた霧の濃度は、あの時の比では無い。

「あっ！ ぐっ」

全く力が入らない、意識を保つので精一杯。

……これは、流石に詰んだか？

もう、魔力も力も奪われた。どんなに気合を入れ、食いしばっても、根こそぎ意識が遠ざかる。

悔しい、何も、何も出来ないっ！

(ごめんね、セレナ。ごめん、お姉ちゃんセレナの、家族の仇を殺せない……)

走馬燈か、家族の顔が次々浮かぶ。

笑顔の母、そして兄さん、だがそんな中、セレナだけは怒った顔で俺を見ていた。

これは俺が六歳の時。まだ不健康だった俺が、ベッドを抜け出して台所でナッツとヨーグルトを漁っていたのを見つけた時の顔だ。

懐かしい。でも、俺が見たかったのはこれじゃない。どうせなら俺はセレナの笑顔が見たかった。

(どうして? どうしてセレナ? 私は、お姉ちゃんは、必死に頑張ったんだよ?)

走馬燈つて奴は、参照権と違いどうにも気が利かないらしい、最期に見るのが怒ったセレナじゃ浮かばれない。

意識がゆっくりと落ちて行く。いや、本当に落ちているのだ、垂直に。

命を削る霧の中、グリフォンすらも爪の中まで意識が及ばなくなったらしい。

爪の間からすり抜けたであろう俺は、落下による強烈なGを感じながら、地面に叩き付けられる死を待つばかりだ。

壁越えの練習の時、高く飛び過ぎた俺は、地上で待ち構える田中に受け止めて貰った。今回も同じ感じで行けると思っていた。だがグリフォンに襲われて落下位置はズレ、おまけにこのクリームみたいな濃い霧だ。

もう俺は、自分でも何処へ落下しているのか解らない。

気が利かない走馬燈の代わり、参照権でセレナの笑顔を見ようか? いやもう間に合わない。

それに、……焦る必要はどこにも無いのだ。
ゆつくりと目を閉じる。

きつと天国ではセレナに会える、きつと笑っていてくれる。
ゆつくりと意識が溶けて行く。

涙が重力に置いてきぼりにされ、霧の中キラキラと光った。

「……綺麗」

……これが、死か。

しかし落下していた意識と体は、バフツと言う音と共に、何かに受け止められた。
そしてズササツと地面を滑る音。

「間に合ったあああ！」

田中だ、間一髪で俺を受け止めたらしい。

腕に抱かれた至近距離、それでも顔も解らないこの霧の中。

「ど、どうやって？」

「心配だな、そうとしか言えないぜ。信じるかよ？」

信じる！ 信じるよ！ 控えめに言って、これ半分奇跡だろ！

「ズラかるぞ、立てるか？」

「え、ええ……、うっ」

グリフオンに掴まれた脇腹、恐らく肋骨にヒビ。立とうとすれば足首に痛み、捻挫だ。空へと踏み切った際か、或いはもつと前、とにかく移動の魔法による無理をさせ過ぎた。

「無理、の様です」

「そっか、じゃあほらよ」

俺は田中の背中におぶわれた。ザルギルゴル大牙猪を倒した時以来。

おんぶ。どうしても、何度でも思い出してしまふ。セレナをおんぶして大森林を歩き回った事。

頼りない背中だったに違いない、それに対してこの大きな背中の中の安心感よ。

先程の、怒った顔のセレナがチラつく。胸が苦しいのはその所為か？ それともこの霧が奪った魔力の影響か。

痛みを我慢して必死に田中にしがみ付く。それを気遣いながら駆ける田中だが、その声色に余裕は無い。

「クソツ追われてやがる」

「本当……なのですね」

もう信じるぞ、その気配って奴をよ。でもこんな霧の中、どうやって俺達を追っている？

「これは？ この気配は？ そうか！ 犬だ、あいつら犬を隠して居やがった」

人を探し、追い込む。だったら犬を用意するのは当然か？ 街の中で追いかけてこするつもりなら、馬よりよっぽど役に立つに違いない。

しかし、なんの臭いを頼りに追っている？ 魔石やボロボロだった俺の弓？ そんな物は何日も持つ様な匂いが付くだろうか？

「なんの臭いを辿ってやがる？ 姫様の着衣は売らずに燃やした筈だ」

そう、俺の服はスフィールまでは、全てパラセル村で貰った物。横転した馬車から拝借したエルフ製の服だ。

そこにはどんな技術が使われているか解らない。 ザルディネフエロ 大岩蠅螂との闘いでボロボロになった服や、旅でくたびれた肌着、全部売らずに燃やして来た。

だったら何だ？ 何が原因で追われている？

「そうか！ そうかよ畜生！ 追われているのは姫じゃない！ 俺だ！」
霧の中、田中の叫びが木霊する。

確かに、スフィールで着替えや日用品を揃える際、田中の服は無造作に売った。

この世界、服は高級品。ましてや田中の服はそのサイズから特注品。田中にはゴミでも、ダメになった部分を切り取って、ほかの部分で補えばいい、それだけで十分着られるサイズを切り出せる。

そして、手に入れる方はもっと楽だろう。古着屋に持ち込まれた服の中、最も大きい物が田中の服に違いない。

「マジで走るぞ！ しっかり掴まってる！」

「ハイ！」

ホワイトアウトした平原は、右も左も上も下も解らない。なんなら進んでいるかどうかすら解らない。

全く視界が利かない世界、そんな中を駆け抜ける田中。

俺はその背中にギョツと必死にしがみ付く事しか出来なかつた。

ゼスリード平原騒乱 8

田中の背の上、俺は田中の首に必死にしがみ付いていた。

マジで走った田中の背は揺れに揺れ、歯を食いしばって目も瞑り、なんとか落ちずに済んでいると言う所。

そんな中、田中が急停止するモノだから堪らない。何事かと尋ねる前に、田中が叫ぶ。
「オイ！ 冗談だろっ！」

「どうしたのですか？」

先程から、次から次へ滅茶苦茶な事ばかりが起こる。これ以上は勘弁して欲しい。

「もう平原を抜ける、だが……回り込まれた？」

「あり得ません！」

「だが……いや、そうかよ！ アイツ等だ！ ここに来るまでにつけて居やがった奴ら」
回り込まれるなんてあり得ない。犬が臭いを追っているとは言え、何も見えない霧の中だ、目を瞑って全力で走ると変わらぬ。

そんな事が出来るのは相当にネジが緩んだ命知らずだけだろう、そんな馬鹿が田中以外にそう居てたまるか。

……いや、敵方にも一人居たな、ブツガーだっけ？ ネジがユルツユルな馬鹿が一人。いや、しかしそれにしたって、回り込まれるハズも無い。となれば、あらかじめ其処に居たのだ、俺達を狙ってスフィールからウジャウジャついて来た連中が、アレだけの騒動を目にして、いまだに待機していたとしか思えない。

「てつきり、ズーラー達だと思っただがな！」

「別動隊？ でしようか？」

「少なくとも味方じゃ無いだろうな」

「でしようね」

味方の当てなんて無い、じゃあ敵だ！ と断ずるのは早計か？ いやいやそうじゃな

い、俺の『偶然』はどこまでも最悪を運んでくる。

「まあ心配無いだろ、この霧じゃ見つかりっこ無え、行くぞ」

「ええ」

隣の人間の顔すら解らない霧なのだ、田中の様な超能力者が居ない限りは問題が無い。い。

……いや、考えるのは止めよう、本当に超能力者の一人や二人、現れそうだな。

田中の足取りが変わり、ゼスリード平原を囲む急峻な斜面に入ったのが解る。下草を蹴散らす音が止み、代わりに木の根を跨ぎ、段差を降りる衝撃が襲った。

「大丈夫か？　しかしマズいな」

「ええ、霧が……」

「体調はどうだ？」

「マシにはなりました、でも魔法はおろか、力も本調子ではありません」

「クソツッ！　とことん崇めてくれるぜ！」

平原を出て、森に入るとすぐに霧が薄くなったのが解った。木々の鬱蒼としたシルエツトが浮かび上がり、白く染まった世界を不気味に彩る。

霧が自分の足元すら覚束ない程に濃いのは平原だけらしい、このまま霧が薄くなれば体調も回復するだろう、この振動でも振り落とされずにしがみ付けて居るのが証拠でもある。

が、そうなれば俺達を狙う連中から逃げるのも難しくなる。

「連中に動きは無いのですか？」

「後ろからは犬を連れて順調に詰めて来てる、前の連中は動きがねえ、この霧を警戒してるのかも知れねえな」

「そうですか……」

やはり、最悪か。このまま先、霧が薄くなった所で網を張られていると思つて良いだろう。

「どうするっ？」

「どうする……と言われても」

どうしようも無い、俺に出来る事は殆ど無い。

「見ての通り、これじゃ俺は戦えねえ」

そう、田中は背には俺を、前には最低限の荷物が入ったバックパックを抱えている。

この有様では戦うどころではない、見つかった瞬間にオシマイだ。

それに俺には『偶然』と言う田中も知らないマイナス要素がある。適当に放たれた矢でも命中しかねないのだ。

だが俺には何も出来ない、出来る事と言えばヒロインらしく「私を置いて一人で逃げ下さい」と言う事ぐらいか？

でも……でも俺は死にたくない。

死ぬのが怖いんじゃない、何も果たせずに死ぬのが嫌なのだ。セレナの仇も討てず、『偶然』に翻弄されるために生まれ変わったなんて思いたくない。

とは言え、何の為に転生したのかと問われれば、最初は田中と木村の弔い合戦のつもりだったのだ。それなのに俺が田中を殺そうとしているなんて笑い話にもならない。

それに、どうせ逃げられ無いなら二人で死ぬより一人で死んだ方がマシ、そう言う事
だろ？

「あ、あの……」

「ああ、姫様はここで待つて居てくれないか？」

「え、あ……」

解つていた、それどころか、こちらから提案するつもりで居た。それなのに、田中からそう言われると思いの外堪えた。

シヨックを隠し、冷静に答えようと思つたが、少し上ずつた声が出た。

「え、ええ、ここでお別れですね」

「あ？ ああ、違えよ、見捨てる訳じゃねえ、犬に追われてるのは恐らく俺だ、俺が奴らを追つ払つて来る」

「え？」

「その間、姫さまには荷物番でもして貰おうつてな」

田中が顎で示したのは一本の大木、その根元。

「洞、^{うら}ですか」

「ああ、人一人ぐらいは余裕で隠れられる、姫様なら荷物も一緒にな」

禍々しい程に広がつた木の根、しかしその中心部、幹は人に抉られた様にぽっかりと空洞になつていた。俺が隠れるには打つてつけの大きさだ。

田中は背中から俺と、そして抱えていた荷物まで降ろしてしまう。そして洞の中に俺

を押し込むと、荷物を俺に押し付けた。

「ほらよ、しつかり見張つてろ」

「え？ ええ」

この荷物は二人分、田中の着替えや野営道具だつて入っている。コイツは、田中は本当に一人で戦うつもりなのだ。

確かに足手纏いの俺が居るより、一人の方が戦いやすいだろう。

だが、そもそもこの状況、一人で逃げたつて誰も責める奴は居ない。それに俺はどんなに隠れたつて『偶然』に見つかつてしまふに違いないのだ。

最悪のケースとして、俺が人質に取られて田中の邪魔となる未来すら見える。

……だから言わないと、ちゃんと言わないと。

俺はゴクリと唾を飲み込み覚悟を決める。

「いえ、もう十分です、タナカ、あなたは一人逃げ延びて下さい」

「あ？」

「犬に追われているのはあなただけ、無理に戦わず逃げて注意を引き付けて貰えば十分。私はここに籠つて居れば早々見つかかる事も無いでしょう、霧が晴れたタイミングで自力で脱出します」

「ハア？ お前馬鹿か？」

「!? 馬鹿とは何です馬鹿とは!」

馬鹿つて言われた! 馬鹿つて! こちとら決死の覚悟で提案してゐるのに、こんな時までコイツはふぎけ切つてる!

「変に遠慮してゐるんじゃないやねえよ! 今更だろ!」

「別につ! 遠慮している訳では有りません、その方がお互いに安全性が高いからと提案したままです」

嘘だ、俺は隠れても早々に見つかるとは思つたろうし、霧だつて何時晴れるかなど解らない。この濃度だ、三日三晩掛かつて薄くなる程度の可能性は捨てきれない。

「はあ、こんな時までお姫様なんだな、そんな意地つ張りだつたか? お前」

そう言つて田中は頭をガシガシと搔くが、俺には何を言つてるか解らない。しかし何故だが胸がザワつく。

「……どういう、意味です?」

不安気に尋ねると、ニヤリと笑つて田中は拳を突き出した。

『おいおい、水臭い事言うなよ、俺たちもう友達だろ?』

突き出された拳は真横に倒され、親指はピツと立てられていた。

「え?」

このポーズ、このセリフ。俺は知っている。何より決定的なのは田中が発したのがこ

の世界の言葉でなく、日本語だったという点。

前世で何度も見たアニメ、『ガイルランダー』そのポーズとセリフ、そのままだった。「なんで？ 何時から？」

「ちよつと前だな、それも自分で気が付いたんじゃない、お前に寝言で呼ばれてな、それも下の名前で、俺、教えて無いだろ？」

何だよソレ！ 今まで一人で恥ずかしがったり、悩んだり、気を遣ったりしてたのに、寝言でバラしてるとか、馬鹿みたいじゃないかよ！

「そんな顔するなよ、様になってたぜお姫様がよ」

「ぐうう！」

なんでだよ！ 意味ワカンネーよ！ 馬鹿にしやがってえ！

「そもそもこっちはお前の巻き添えで死んでんだ、今更遠慮すんじゃないよ」

『んっだよそれ！ もうわかったよ俺のお姫様ごっこに笑ってたんだろうが』

俺は日本語で怒鳴るが、田中は鼻で笑って取り合わない。

「そんだけ元気なら大丈夫だな、荷物、任せたぜ」

『糞がッ！』

癩癩を起して暴れ出したい気持ちを何とか鎮める。追っ手がそこまで迫って来て居ても不思議じゃ無いからだ。悔しいから悪態はやめないがな。

「ほら、これで隠れるし。匂いも大分紛れるだろ」

『おいっ！ 雑過ぎるだろ』

田中は俺に小枝や腐葉土を振りかける、確かに見た目も匂いも大分誤魔化せるだろ
う、仕事雑だが。

「じゃ、行くぜ」

『オイ！』

『んだよ？』

すぐにでも俺を置いて出発しようとする田中、だが俺はそんな田中を呼び止めた。

胸に付けたブローチを外して、腕を伸ばし差し出す。小枝に埋もれながらじゃ格好は付かないが。

『これ、持ってけ』

『おい、これ』

『セレナの、妹の形見だ』

『いいのかよ？』

『やるんじゃないからな、返せよ！ 怪我したら戻って来られてもメイワクだからな！

一度霧の外に離脱して、回復してから返しに来い！ 絶対な！』

『わーっつたよ、ありがとな』

久しぶりに日本語で会話をした、懐かしさに胸が締め付けられる。

いや、締め付けられるのは懐かしさの所為では無いかも知れない、言い知れぬ寂寥感せきりようかんこの正体はなんだ？ 思わず大切な、そう命よりも大切な筈のセレナの形見を預ける程。

『じゃあ、行つて来る』

『ああ、いや』

『まだ何かあんのか？』

『何もねえよ』

『そうかよ』

田中は苦笑しながら行つてしまった、足場の悪い森の中、身軽になった田中は目にも留まらぬ速度で駆けて行く、音も無く。

頼もしい筈のその姿、しかしそれを見ても俺はちつとも落ち着かない。

俺は首筋を抑え、荷物に顔を埋めて一人唸った。

『なんでだ、何でだよ!？』

さつきからチリチリとした感覚が首筋を撫で、収まる気配は微塵も無かった。

悪夢の任務

「あれが全部、恐鳥……だと?」

呆然と空を見上げるマルムーク、その声は掠れていたが不思議と良く通り、居並ぶ帝国『広報部隊』の頭に響き渡った。

「嘘だろ!」

「逃げッ、逃げましょう!」

「あ、う、ああああああ」

無理も無い、空を黒く染め上げる程の恐鳥の大群など聞いた事も無い。

正に恐慌、この『広報部隊』いや、『帝国軍第三特務部隊』は寄せ集めに過ぎない。特務部隊なんて名ばかり、特殊な訓練など一切受けていなかったのだ。

だがそれで十分な筈だった。第一、第二特務部隊は王国や大森林へと逃げ出した犯罪者を追うために、国外で活動する訓練を受けたエキスパート。

対して急造の第三部隊は、王国に侵入し、目の届かぬ村で麻薬や贖金をばらまいたり、時として略奪を行うなど、戦争を前提にした単純な暴力機関と成るべくして設立された。

大森林の攻略を達成し国力を増した帝国に王国が危機感を抱く、そして帝国の脅威を声高に叫び、やがて戦端が開かれる。

そんな事態を想定し、第三特務部隊は立案され、森に棲む者の都の攻略成功と同時に正式に編成された。

が、森に棲む者の都の占領によって、帝国は国力増大どころか傾く一方だった。

目新しい技術や魔石が有れど、肝心の支配は予想以上に難航した。そして追い打ちとなつたのは蔓延する流行り病だ。

しかも、それが帝国自らが引き起こした事態と言うのが笑えない。帝国は森に棲む者の国を落とす為に、臣民の生命力を吸い取っていたと言うのだ。

まるきりオカルト話、俄には信じ難い兵器の情報、マルムークの所まで降りて来たのはつい最近なのだ。

いっそ知らせずにくれればとマルムークは願う。そうしたら彼だつて化け物の大群を前に蜘蛛の子を散らす様に逃げる事も出来たのだから。

だが、彼は現場指揮官。彼はこの場に守る物が多過ぎた。

まずはその帝国の秘密兵器。アイクと言う男が偶然にもこの場に持つて来てしまつていた。

いや、偶然ではない、今後スフィールで行われるユマ姫の捕獲作戦、そのどさくさで

破壊などと言う事が無い様に持ち出されたのだ。

その原因となつたユマ姫、これもまた作戦目標であり、殺す訳には行かない。いつも以上に念を入れた上層部からのお達しだ。その身柄に帝国の命運が掛かっているとま
で言われれば逆らう言葉は持たない。

そして当然部下達、現場指揮官としてヒヨッコの彼らを守る義務がマルムークには
有った。

とは言え、訓練もソコソコのヒヨッコ達、普通だったら制止も聞かずに逃げ出す所。
そうなつてしまえば指揮官にはどうし様も無い。

しかし、^{リコイ}恐鳥達は見事に統率され、逃げる者から狙い撃ちにして行く、狂った駄馬た
ちが隊列から飛び出すと、次から次へと餌に変わった。

其れを見た兵たちの足が止まり、ギリギリの所で部隊は瓦解せず、マルムークの指揮
の下、^{リコイ}恐鳥から身を守る様に寄り添った。

ではそのまま撤退出来るのか？

否。撤退した場合、例の兵器の扱いが問題となる。抱えて移動する事は出来ない、
^{リコイ}恐鳥達は存外に賢いのだ、兵器を担いだ者が端から殺されるのは目に見えている。

撤退するならこの兵器は諦めるしか無い、するとどうなるか？ 王国の手に渡るに違
いないだろう。

マルムークは帝国軍人として、それだけは看過できなかった。しかし吸い込んだ生命力を蓄えたこの兵器。聞けば破壊すれば何が起こるか解らず、それすらも難しい。

それ以前に、この兵器を大森林に届けられるか否かが、大森林でいまだ続く抵抗勢力との戦いの浮沈に関わる。破壊など最後の手段にしなければならぬ。

せめて、持ち出さず馬車に載せたまま有れば、どさくさに紛れ馬車でそのまま離脱出来た。

しかし馬車を徴発されそうになり慌てたマルムークとアイクは、衛兵の一瞬の隙を突いて自陣にまで持ち込んでしまった。

最高のファインプレーが一転、最悪の失策となってしまう。

考えれば考える程に今の状況、マルムークには呪われているとしか思えなかった。

しかし、そんなマルムークには秘策が有った。

この秘密兵器。奪われる、もしくは壊されるぐらいなら、いつそ起動してしまえば良い。

大森林からの報告が本当であれば、この兵器は周囲から魔力を奪う。魔力が奪われた恐鳥達は飛行能力を失い地へ落ちる。飛べない恐鳥など最早脅威ではない。

そして、脅威で無くなるのはターゲットのユマ姫と同じ、怪しげな魔法を封じる事が出来る。これこそ一挙両得、起死回生の一手と思われた。

「恐鳥如きに慌てるな！ この帝国の兵器の前では恐鳥などウサギ同然よ！」

マルムークは大声で兵を鼓舞し、アイクには兵器の起動を命ずる。大森林へこの兵器を届ける役目を負ったアイクは溜め込んだ健康値を損なう事に必死に抵抗したが、それにも限界が訪れる。

マルムークに殴られ、更にはアイクの部下が恐鳥に殺された事が止めとなつて遂にアイクは兵器を起動した。

効果は劇的だった。

霧を見た恐鳥達は一切襲つて来ようとしなくなり、霧は静寂と共に急速に平原に広がっていく。

「犬を出せ！ 森に棲む者の姫を追わせるのだ！」

ここで、マルムークは切り札を切る。

犬、それも軍用犬だ。

帝国は近年、革新的なアイデア、技術を次々形にしているが、軍や警察で徹底的に訓練を施した犬を使う事もその一つ。

今までの犬の使い道は精々が番犬、警備用だけだったが、近年は犯罪者の検挙や密輸入の監視に非常に大きな成果を挙げていた。

今回の任務では夜間や街中での搜索を想定し、まだ数も少なく高価な軍用犬を三匹も

用意していた。その鼻は霧で視界が悪くなった中で、存分に活躍するように思われた。「しかし隊長！ ユマ姫の所持品がありません」

しかしどんなに嗅覚が優れた犬でも、匂いを特定できなくては意味が無い。しかしそれも大した問題にはならない筈だった。

「これを使え、タナカとか言う護衛の物だ」

そう、護衛のタナカは名の通った大男、事前に古着の一つ、帝国にしてみれば入手するのは容易かった。

人間の癖に森に棲む者の護衛をしているのはマルムークには理解しがたい事だが、この状況ではありがたかった。

大きな上着を犬に嗅がせ、「探せー」とブリーダーの男が命じれば、スラリとした体躯の真つ黒な犬達が目散に駆け出して行く。

「うへへえ、タナカア待つてろよー」

下卑た笑いで犬を追い駆けて行くのはブツガー、問題行動が多い男で、マルムークとしては対タナカ用にと上層部から押し付けられた格好なだけに、せめてこの機に働いて貰わねば困る。

霧によってひとまずの安全を確保し、後はユマ姫の確保と兵器を無事に搬送すれば任務は完了。兵器の搬送はアイクの専門で手伝えることは無い。そして残る仕事をブツ

ガーに任せられる筈も無い、マルムークも姫を追うべく、兵器に背を向け駆け出した。その瞬間。

——グガアアアアアン

金属が引き裂かれる、けたたましい破裂音。

「なっ！」

振り向けば白い霧の中で、さらに白い壁が迫って来る。マルムークは瞬時に悟る、兵器が破壊された、恐らくは制御に失敗したのだ。

「クソッ！」

とことん運が無い。しかし其れで全て諦める訳にも行かない

「皆の者、付いて来い！ 森に棲む者の姫を確保する！」

最早全く視界が利かない白の世界でマルムークは叫ぶ、兵器を無事に搬送する事は叶わなそうだが、破壊する事で、最低限王国の手に渡る事は防げたと前向きに考える。

後は、残りの仕事の成果で帳尻を合わせるしかない。

「私はココだ！ 続け！ 続けえええええ！」

マルムークが殊更に大声を張り上げるのは霧で全く視界が利かない所為だ。見えるのは精々自分の肩や胸元まで。

そう言えばと、マルムークはふと自分の胸元を見る。マルムークには隊列制御用の笛

が与えられていた。

とは言え、ただのお飾り。音は出るが、音の意味を知る隊員が居なければ意味が無い。しかし自分の位置を知らせるだけ、それならこれは使えるかも知れないと。マルムークは首に掛かった笛を啜え、思い切り息を吐く。

——ピイイイイ

澄んだ笛の音、これなら通日も良い筈と気を良くしたマルムークは、声出しと笛を交互に繰り返す。

「続け！ 続けええ！」

——ピイイイ

マルムークは笛を吹きつつ声を上げ、自身は時折聞こえる犬の鳴き声を頼りに、足元すら覚束ない白い世界を駆けて行く。

彼には先に誰が居るのかも、後から誰が付いて来るかも解らない、それでも止まる訳には行かなかった。

「ぐあっ」

駆け出すマルムークは生暖かい壁にぶち当たった。

ふさふさとして柔らかく、まるで生きているような

……そこまで思った時に気が付いた。

——ブーブー

「なっ！」

間近での鳴き声。壁の正体はドーガーと呼ばれる恐鳥^{リコイ}。それがこんな風に無造作に蹲っているとはマルムークは想像だにしていなかった。

が、考えてみればこれだけの霧だ。逃げきれない恐鳥^{リコイ}が出てくるのも当然の事。

マルムークは慎重に恐鳥^{リコイ}を避けて進む。恐鳥^{リコイ}は瀕死なのか殆ど動かない。しかし大きさが大きすぎだ。身じろぎ一つで大怪我を負いかねない。

しかし、こんなのがウロウロしている様なら、大きな音を出すのは憚られた。慎重さを取り戻したマルムークは、白い霧に閉ざされた世界を窺う。

そこに黒いシルエットが立ちふさがる。

「うっ？」

それは、ゼスリード平原を悠々と飛んでいた妖獣、鷲頭にネコ科の胴を持つ化け物だった。

——ビイイイ

正に蛇に睨まれた蛙、相手は恐鳥^{リコイ}の群れの中でも飛び抜けて危険な存在に思われた。

それが首を伸ばし、マルムークの事を間近で睨む。冷や汗が止まらずグラグラと地面が揺れているのかと疑う程のプレッシャー。

しかし妖獣はマルムークには興味無いとばかりにプイと顔を背け、いずこかへと去っていく。

「ハアハアハア」

荒い息をつく、長い間呼吸を忘れて居たかのよう。フラフラと立ち上がると追いついた部下ら声が掛かる。

「隊長？ どうしたんですか？ 隊長？」

「気を付けろ、そこから中に落ちた恐鳥リコイが居るぞ」

「恐鳥リコイが……」

そこからは部下と共にゆっくりと進む、合流できたのは精々が二十名程。死んだ者も少なく無いだろうし、何よりこの霧だ。悪く無い数だと思ふ事にしてマルムークは先を急ぐ。

そして遂にゼスリード平原の端、森の前まで辿り着く。

「お待ちしていやした、匂いを追って来ましたがこの足跡です、大きいでしょう？」

待つて居たのは五十過ぎのブリーダーの男、犬は二匹。だが犬は三匹の筈だしブツガーも居ない。

「あの犬男ですか？ 犬を一匹連れて先に森に入ってしまったいなあ、ワシは止めたのです」

「そうか……」

勝手な行動にイラつくマルムーク、だがココでも悪く無いかと思ひ直す。奴には先行して護衛のタナカとか言う男とやり合つて貰いたい、そうすれば足止めにもなると言う思惑だ。

「森に棲む者の足跡は無いのか？」

「あの少女のですか？ 無いですな。しかしこの護衛の男が背負っているのやも知れませんか」

「どうして解る？」

「足跡です、だいぶ深い。あれだけの大男、体重もかなりあるでしょうが、それにしてもです。ホラ、ブツガーと言う男の足跡と比べて下さい」

「……同じぐらいに見えるが？」

「ええ、あんな巨大なハンマーを持つブツガーと同じ深さ、何か重量の有るものを背負つていやす」

「ふむ……」

ブリーダーなど犬の世話係かと思えば、その知識に舌を巻くマルムーク。

そう言えば引退した第一特務部隊の人間かと思ひ出す。頼もしい人材が居た物だと、そして自分の運はまだまだ枯れては居ないぞと自分を鼓舞した。

「よし、追跡はお前に任せる。先導してくれ」

「承りました」

そう言つて愛嬌たつぷりに笑い、禿げあがつた自身の頭をペチリと叩く。

「お前、名は？」

「ベアードでさ」

ブリーダーのベアードは歩きながら腕をブンブンと振り答える。……が、その腕の先が無い。気の所為では無い、森の中、霧は薄くなりシルエットなら見間違える事も無い。

「お前」

「ん？ なんでさあ？」

「いや、何でもない」

怪我で引退など良く有る事、むしろベアード程の洞察力で早めのリタイヤとなれば、この程度の理由は当然とも言えた。

「まあ、こんななんで腕つぶしには期待しないでくださいませ」

「ああ」

「ワシも素人相手にやそれなりにやれますがね、なにしろこのタナカつてのはトンデモ無い腕前でさあ」

「見たことが？」

「いいえ、足跡を見りや十分でき、まず正気じゃあ無いのが歩幅、視界が利かないゼスリード平原を一息で走り切ってやす」

「あの霧の中か？」

「ええ、そんで次に、かなりの重量を担いでいるにも関わらず、この森でも飛ぶように移動してますな」

「ちよつと待て!？」

「なんでしょ？」

「それではこんなペースで歩いていては追いつかないでは無いか」

「それどころか我々が全力で走った所で追いつきませんな」

「なんだと？」

それではとんだ無駄足では無いかと、声を荒らげるマルムークにベアードは笑い掛ける。

「しかし、あの森に棲む者の姫は怪我をしていやす」

「む」

「見た所、矢傷は相当に深い、それこそ馬車で無くては移動が出来ない程」

「つまり？」

「こんな斜面を駆け降りるなんぞ無理がある、どこかで休む必要があります。もし

かしたら道中で打ち捨てる可能性も有る」

「確かにな」

恐らくは金の関係、だとすれば命を賭けて守る可能性は低い様に思われた。

「いや、余り過大な期待はせんことです」

「どういう事だ？」

「逃げるんだつたらもつと早く逃げてやす、ワシが思うに森に棲む者に恩が有るとか、ひよつとしたら本気で入れ揚げちまつてるのかも知れませんな」

「ちつ厄介な」

もう十分に兵を失った、これ以上被害が増える様なら、現場責任者のマルムークにとって任務が成功しても喜べない事態となる。

「おっと！」

「どうした？」

「奴らは犬に気が付いてますな」

「なんだと？」

「この草、ベリスってんですが傷薬にもなるんですが何しろ臭い」

「犬の鼻を潰しに来たか」

「こんなもんじゃ潰れはしませんが、追い辛くはなりませんな」

「クソツ！」

「警察犬でしたらな、こいつは違う」

そう言つてベアードは二匹の犬の頭を撫でる、この犬達は特殊部隊を引退したベアードが手塩に掛けて育てた生粋の軍用犬。

他の警察犬などとは一線を画す嗅覚と忠誠心を備えていた。

犬達は少し悩んだようだが、すぐに先へ先へと駆け出した、タナカの臭いを感じ取つたのだ。

「これからはベリスの草の臭いも目印です、100キロ先まで追えるでしょう」

「人間が先に参つてしまうわ！」

「全くで」

ベアードとマルムークの声も明るい。なぜならばこんな小細工をする事が姫を抱え走り続けられなくなった証拠と考えたからだ。それで無いなら一息に駆け抜けてしまえば良いのだから無理も無い。

田中の気配を読む力も、この森に潜む勢力も知らなければ当然の帰結。

敵は近いぞと足跡を追うと、その先に大男の影が浮かび上がる。

「タナカか！ 神妙にしろ！」

「んあ？ タナカ？ タナカが居るのか？」

しかし帰って来たのはここ数日でマルムークが聞き慣れてしまった間抜け声、ブツガーだった。

「貴様！ こんな所でなにを遊んでいる」

「あああああん？ あぞんでね。え！ ごの犬ところが匂いを見失ったんだ！」

「なんですと？」

この言葉にいち早く反応したのがベアードだ、彼の自慢の軍用犬を出し抜くなど考えられなかった。

「確かに、足跡も匂いも途切れている様です」

しかし、現実にはココで匂いは途切れていた、ベアードの常識では人間は飛べない、軍用犬の臭いを誤魔化す事も不可能となれば考えられる事は少ない。

「まさか、いや、そうとしか思えない」

「どうしたと言うのだ！」

独り呟くベアードに苛立ちが隠せないマルムークが噛みつく。

「恐らくここまで来たタナカは、そのまま後ろ向きに歩いた、足跡をなぞる様に」

しやがみ込んだベアードは、重なった足跡に僅かなずれを見つけると、どうやら推測に間違いないと結論づける。

「恐らくはそうして戻ってから、靴を脱ぎ別のルートへ出た」

「何の為にだ！」

「そうすれば我々はベリス草の臭いが付いた足跡を追ってしまふ、結果は御覽の通りです。どうやら相手は犬の嫌がる事を知っている様です」

「どうするのだ？」

「戻りましょう、匂いが消えた訳じゃない、誤魔化されたに過ぎません、丹念に探せば跡を見つけられる筈です」

最早ベアードにもお道化た雰囲気は無い。自慢の愛犬をこころも翻弄する相手は初めてだった。

「よし、ブツガー戻るぞ」

「わーつてつよ、クソがあ」

苛立ち気にブツガーがハンマーを振り回した、その時だ。

「うわああああ」

悲鳴、それも今まで来た道から、マルムークの部下達だ。

「どうしたあ？」

今だに霧で視界が悪い、その中をマルムーク達は駆ける。

「た、隊長！ 奴が！ 奴が突然現れて！」

腰を抜かす部下が指を指す先では兵士が三人、物言わぬ死体となって転がっていた。

「奴は！ どこへ消えた」

「突然悲鳴が聞こえて、振り返ったら真つ黒な影が凄い勢いであっちへ！」

「追うぞ！」

「は、はい！」

勢い良く飛び出すが、こんな霧の中、逃げる相手を見つけれられる筈が無い。

「ギヤアアア」

また違う部下の悲鳴、狩る側から一転、狩られる側へ。こちらは相手が見えないのに相手はこちらを正確に狙って来る。しかしその手妻がマルムークには解らない。

いや、解るハズも無いのだ、実の所『種も仕掛けもありません』なのだから。

しかし彼にはまだ手が残っていた、ベアードの育てた軍用犬だ。

「犬を放ちます！ 追って下さい」

「おう！」

ベアードの合図で犬が駆け出す。霧の中、ベアードの持つ手綱に繋がれていた犬達が解き放たれた。

「追え！ 追え！」

「よっしやー」

マルムークはブッガーと共に駆ける、すると直ぐに森を抜け、視界が開ける。

「なっ！ こんな所に逃げ込んだのか？」

そこは岸壁、ゼスリード平原の東を一望に出来る場所だが、現在は霧に覆われている。しかし多少視界が悪くとも、ここから落ちたら命が無いのは考えるまでも無く解る。そんな崖の突端に陣取る男が一人、そしてそれを追いこむ様に唸る犬が三匹。

「タナカアアアア」

ブッガーが叫ぶ、間違ひなくこの男がタナカ。森に棲む者の姫の護衛だ。しかしタナカの側に姫の姿は無い。

「森に棲む者の姫はどうした？」

「ハッ、知らねえな」

マルムークの問いに馬鹿にした様なタナカの返事。どうにも答える気は無いらしい。しかし、この展開はマルムークにとって面白くない。タナカを殺してしまえばユマ姫を追う方法も無くなってしまふ。

この森のどこかに隠したのは解るが、霧深く足場が悪い中を探し出す事は不可能にも思えた。

「待て！ ブッガー、奴を殺すな！ 森に棲む者の場所を吐かせろ」

「ばつきやろー！ そんなつもりで勝てる相手じゃねえ！」

言い争う間にも、タナカと言う男は一匹ずつ犬を倒して行く。

踏み込んで一匹、犬すらも反応出来ぬ速度で、真上から真つ二つに斬り落とす。

次に飛び掛かって来たのを殴って崖下へ叩き落とし、最後の二匹は脚に喰らい付こうとした所を思い切り蹴り上げた。大型の軍用犬が舞い上がり、二度と立ち上がれない。

一瞬。一瞬の内に三匹の軍用犬を殺して見せた。

正に化け物、しかし相手は崖の突端、取り囲む事は出来ない。

「槍だ！ 槍を持って！」

こういう場合の対処はマルムークも知って居た、腕自慢の犯罪者は細道に逃げ一対一を繰り返す事で窮地を脱しようとする。

そんな時、役に立つのは槍、それも複数人で形成する槍襖やりぶすまだ。

「いえ、それが……」

「槍持ちが居ないだど？」

マルムークの部下が口ごもるのは、槍を持つ者が一人しか居ないからだ、それも短槍しか持っていない。

加えてこの状況で有利な弓も無い。そもそも市街戦を考え長物と弓は少なめだったとは言え、こうも槍も弓も無いのはおかしい。

森の中の襲撃は槍と弓を狙った物、そしてこれは追い詰めたのではなく誘い込まれたのだとマルムークも否応も無く理解した。

「舐めた真似を！」

マルムークは齒噛みする、仕方なく取った策は短槍持ちと長劍持ち二人で追い詰め、他の者で石を投げる事。

「ハツ、そんな事でどうにかなるわきやねーだろうによ」

しかしブツガーだけは石を投げずせせら笑う。

「なあ隊長？ 殺らせろよ！ 殺るつもりじゃねえとアイツは倒せねえ！」

「クツ！」

石を投げていたマルムークだがタナカは背中に目が有るかの様に躲し、味方の投石は時としてタナカを追い込む三人に当たった。

そして、タナカはあつと言う間に三人を切り伏せる。

「どうした？ 掛かって来いよ！」

タナカが崖上で挑発する、死んだ三人の死体を蹴り入れ邪魔だと言わんばかりにどかして行く。

「ぐうう」

マルムークが悩むのが時間制限、この霧の効果時間だ。

一体いつまで霧は持つか彼は知らない。霧が晴れたら恐鳥リコイも森ザに棲む者バの姫も力を取り戻すかも知れないと思うと、長い時間を掛ける気にはならなかった。

「ブツガー！」

「つんだよ？」

「殺す気で行く！ 残った全員で一斉に押し込むぞ！」

「そー来なくちやーな！」

ブツガーは笑うが、マルムーク達は既に九人、一人は戦力外のベアードだ。

残った八人で切り立つた崖のすぐ側を駆ける、恐怖心は有るがそれ以上に怒りが勝った。他の者にしたつて元は腕自慢の冒険者や荒くれ者、たつた一人に良い様にされたとなつちや面子が立たないと、その思いは一緒だつた。

「全く命が幾つ有つても足りやしねえぜ！」

その様子を見て不敵に笑う田中だが、彼にも余裕がある訳では無い。

相手に捨て身のタツクルでもされれば逃げ場は無く、奈落の底まで共に落ちるしかない。

命を賭けて崖上で死神と勝負する。狂気の戦いの幕が上がった。

崖の上の死闘

なーんでアイツの為に命を張ってるんだか。

崖上で、自嘲染みた笑いが漏れるが、ヒリつく程のスリルは嫌いじゃねえ！

「へっ、向こう様もいよいよやる気かよ」

鼓舞するように、俺は獰猛に笑った。

黒一色の衣装に大剣をぶら下げ、お姫様の為に戦う。まるで漫画の主人公にでもなつたみてえじゃねーの！ コレで燃えねえってのは嘘だよな。

中身がアレだつてのは、この際目を瞑る！

「行けっ！ 殺せえ！」

「へっへー覚悟しろよお？ タナカア！」

ヤケクソに叫ぶマルムークと、馬鹿笑いを上げるブツガー、他六名。武器を掲げ、崖先の俺を指して一斉に迫り来る。

俺は崖の上で一人笑う。

もう笑うしかない位上手に行った、正直な所、一番厄介なのは犬だった。

犬さえ居なければ視界が悪い森の中、少しずつ相手を削っていける。いわゆるゲリラ

作戦だ。

実際それで厄介な弓持ち、槍持ちを始末出来た。が、犬を放たれたらもう駄目。足元を駆ける犬に注意を払いながら、人間の相手をするのは自殺行為。

訓練された犬が三匹。並の冒険者じゃ危ない所だが、俺なら問題ないと言い切れる。が、視界が利かぬ霧、生い茂る木々にキツイ斜面。人間には不利な要素が多過ぎる。その上、一匹でも足に食いつかれ、動きを阻害されたら、そのままゲームオーバーだ。放たれた犬から逃げ、切り立った崖の端に陣取った。この場所で一対一を繰り返し、手早くこいつらを始末する計画だ。

そうして問題の犬と、残った短槍と長剣持ち三人を始末した。

ここまでは思った以上に上手く行った、しかしそれも俺をたった一人と油断して、どうにか殺さずに確保しようとする相手に助けられての事。

だがそれもココまで、俺を絶対に殺すと息まく六人の兵士達が、狭い崖先へ我先に突進して来る。

武器を持っただけの農民ならいざ知らず、それなりに鍛えられた兵士六人を相手にするのは無茶にも程があった。釣り出した犬を倒した時点で、もう一度森でゲリラ戦を繰り返す手もあるだろう。

しかし、この森の中、蠢く気配はコイツ等だけじゃない、あいつ……ユマ姫の事を考

えれば長く時間は掛けられない。

「ウガアアアア」

馬鹿がいち早く突っ込んでくる。しかも崖の突端だと言うのに全力で、巨大なウォーハンマーを叩き付けに来る。

ズガンと強烈な音、そして振動。そんな大ぶりな一撃に当たる訳も無く、俺はブツガーの懐へ潜り込む。

そこへ滑り込むマルムークの刺突。ブツガーの陰に隠れ、油断なく隙を窺っていたのだ。

が、それも読めている、俺は体を大きく傾け躲す。

そもそもブツガーだってこんな隙だらけの大振りをする程の馬鹿じゃない、生意気に連携している訳だ。

まずはタフなブツガーを無視してマルムークを狙う、体を大きく傾けた無理な体勢、そのまま掬うように足を薙ぎ払う。

「おっと！」

「グガッ！」

蹴られた!? マルムークへ剣が届く前、ブツガーの蹴りで、俺は無様に転がされる。素直に転がったらそのまま崖下まで一直線、無様に地面に縋りつき何とか留まる。

しかし蹴りだと？ この崖先で不安定な足技？ ブツガーの野郎、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが想像以上の糞馬鹿だ。

馬鹿は高い所が得意つてのをスツカリ忘れていた。

「死ネツ！ 死ねえ！」

無様に転がった俺に、レイピアによる刺突の追撃。マルムークだ。

ゴロゴロと転がり何とか躲す、クソツ立ち上がれねえ！

転がった先では、六人の兵士が俺を崖から逃すまいと待ち構えている。

「任せて下さい！」

が、その内の一人が飛び出して来た。色気を出したのか、転がる俺に腰が引けた剣突を繰り出したのだ。

顔を狙った剣先、俺はギリギリの所で首を傾げ躲す、耳を浅く切り裂きながら剣先が地面へと突き刺さる。

俺が起き上がれるように、手を貸してくれるのか？ ありがたいねえ。それで首までくれるってんだから、まるきり聖人じゃねーか。

相手の腕を掴み一気に引き倒す。その反動で俺は上体を起こし、つんのめってむき出しになった相手の首筋へと剣を振り下ろす。

——バシユッ！

派手に血が舞い、首が飛ぶ、その勢いで俺はいよいよ立ち上がり、体勢を立て直した。
「ハァー！」

そこへ再びマルムークの刺突。今度の俺は、体を僅かに傾けるだけで躲す、俺の脇の下ギリギリを鋭い剣先が抜けていく。

極限の見切り、ここへ来て俺は安全マージンを捨てる。

先程の蹴りも、直前のマルムークの刺突を最小限の動きで躲していけば、避けきれぬ物では無かった筈。だが、俺はソレが出来なかった。

俺は、実戦では達人めいたミリ単位の見切りなど自殺行為だと思っっている。

何かの拍子で剣先がブレたり、肩が外れて間合いが伸びたり。実戦では不測の事態は幾らでも起こり得るからだ。

だが万が一を考えられる程の余裕は既に無い。マルムークの刺突を捌きながら、背後から残り五人の兵士の相手もしなくてはならない。ブツガーもマルムークの背後でチャンスを探っている。

一対一を繰り返すつもりが、完全に挟撃を受ける格好になってしまった。

マルムークの連続突きを躲す、躲す！一センチ、そして一ミリ、終いには薄皮を切り裂かれ血が滲む程。集中力が尖り切り、音が無い世界が訪れる。

所謂ゾーンと言われる現象、聞こえるのは自分の心音と呼吸音のみ。世界は色を失

い、その速度をゆっくりとしたものに変えていく。

その時、俺の背後から攻撃が来る、理屈抜きにそれを感じてギリギリで躲す。兵士の一人が俺の背中から斬りかかったのだ。

俺を狙ったマルムークの剣と兵士の剣が交錯し、マルムークの剣がその兵士の腕に突き刺さる。

一瞬のチャンスに俺は剣を振り抜いた。

——シユルン！

金属が喰る音、たったの一太刀で、マルムークの足を浅く斬ると同時、一人の兵士の腹を内臓がこぼれる程に深く切り裂いた。

コレで二人殺った。やはりマルムークとブツガー以外は取るに足らない雑魚。

と、なれば、足を負傷したマルムークに止めを刺したいが、その背後にはブツガーが待ち構えている。マルムークを斬った隙を狙っているのは明らかだった。

俺は立ち位置を微妙に調整して、マルムークを盾にブツガーの介入を防いでいた。乱戦であのウォーハンマーの衝撃を受けるのは危険に過ぎたからだ。

そのマルムークが負傷したと見れば、ブツガーが黙っているハズも無い。

「代われエー！　グズが！」

マルムークを押しつけブツガーがウォーハンマーを振りかぶる。我慢が出来なく

なつたに違いない。

最初とは違い、今度はウォーハンマーをコンパクトに振つて来る。それでもガードも、弾く事も許されない超重量の打撃となる。

だが、これも紙一重で躲す。お返しにと反撃を狙うも、そこに背後から四人の兵士達が殺到する。

「死ねえー」

「オラアアアア」

躲す隙間も無い剣戟が殺到するも、俺はその剣筋の、僅かなズレを見逃さない。

自らの剣でズレをこじ開け、隙間に変える。剣林の間をすり抜け、転がる様に背後に抜けた。

包囲網を抜けた！ 挟撃を回避し一気に情勢が楽になる、こうなれば再び森に逃げたつて良い。

しかし、今は超集中のゾーン状態。こんなモノは長くは続かない。
一気に勝負を決めたいと欲が出た。

「キエエエエッ！」

俺は振り向きざま、奇声を張り上げ斬りかかる。

——ザシユッ！

背後に抜けられた事に今更に気が付いた兵士を袈裟懸けに断ち切り、慌てて転進しようとする状態になった残りの三人には体当たりをぶちかます。

体勢を崩した三人はゴロゴロと転がり、踏み出して来たブッガーの足に纏わりつく。

「邪あああ魔だあああ！」

ブッガーは容赦なく三人を蹴とばした。と言うよりは、巨体のブッガーは止まれなかつたと言うのが正しいだろう。

兵士の一人は崖下に転がり落ち、残った二人も踏み潰され戦闘不能だ。

やった！

残るはブッガーと、足に怪我を負ったマルムークだけ。どうとでも成る、勝利の予感に笑みが浮かんだ。

それが行けなかった。

「油断大敵ですぜ」

「ぐあッ！」

目の前で火花が散る様な衝撃、そして脇腹に燃える様な熱を感じた。

振り返れば背後からレイピアでの刺突。まだ兵士が居た！！

その兵士は軽装でおまけに片腕が途中で無い、恐らくは非戦闘要員で、これまで機を窺っていたのだ。

「よくやったベアード」

マルムークが快哉を叫ぶのが憎らしい。苛立ち混じりに俺はベアードと呼ばれたおっさんを蹴り飛ばす。

「ぐへえ」

その一撃でベアードは吹っ飛んで行く、確かに戦闘要員では無いらしい。しかし気配の消し方だけは一流だった。完全に想定外の敵。

脇の傷は深い、早く止血しなければ命に係わる。

「オラァー！」

そこへブツガーの一振りが襲い掛かる、俺は躲す余裕も無く剣を構える。

——ギィィィン

しかし、脇に傷を負った俺の力は弱く、剣は弾かれ宙を舞い、崖下へと落ちて行く。

「どうしたあ？ 元気が無えなあー！」

「馬鹿は元気で羨ましいぜ！」

嘲笑うブツガーに、俺は血の混じる声で軽口を返す。しかし武器も無く出血は激しい、状況は最悪だ。

逃げる程の足は無い、血は肺に入り込み、まともな呼吸もままならない。

限られた選択肢の中、俺は迷わずブツガーの足元へと飛び込んだ。

決死のタックル、こつちがやられたら嫌な事は、相手も嫌に決まっている。下手をすれば一緒に地獄へ一直線。しかし最早やれる事は殆ど残っていないかった。

低空タックルでブッガーを引き倒す、しかしそのままマウントポジションを取れる程の力は、俺に残されて居なかった。

「うざってえ！」

逆にブッガーに押し掛かれ、動きを封じられる。しかし俺だって、タダでマウントされた訳じゃない。

「これで五分だな」

「痛てえええ！ クソがああ」

腰のナイフを引き抜き、ブッガーの脇へ一突き、深々と突き刺さった傷は俺と大差ないだろう。

「死ねえええ」

しかし五分等と言うのは大嘘だ。相手はマウントポジションで、ウオーハンマーも未だに手放していない。槌を振りかぶるスペースは無くとも、その重量を活かして長い柄で俺の首を締め上げて来る。

俺は下からブッガーの脇を蹴とばしたり、殴ったりして抵抗する。

子供じみた泥仕合だが、やってる方は真剣だ。

「くたばれ糞野郎！」

「一人で死んでろ間抜け」

「ガアアア！」

「うおおおおお」

男臭い血塗れの力比べ、しかし其れは唐突に幕を閉じる。

「グハッ！」

「なっ!? に?」

ブツガーの胸から剣が生え、そのまま俺の胸も貫いた。

「ヒヒッ! 邪魔! 邪魔なんだよ!」

その狂った声で何が起こったか悟る、マルムークがそのレイピアで、ブツガーごと俺を刺し貫いたのだ。

色を失った筈の光景に赤い血が広がる。間違いなく致命傷、このまま放つて置いても失血死は免れない。

赤い世界の中、俺はブツガーの脇に突き刺さったナイフを抜き、マルムークへと投擲する。

放たれたナイフは、吸い込まれる様にマルムークの胸に突き刺さった。

「あっ……」

呆然とするマルムーク、そこにブツガーのウォーハンマーがぶち込まれた。

ダンプカーに轢かれた様に、グシヤリと変形し崖下へと吹っ飛ぶマルムーク。

「あ、あ、あああぐぞう」

「ガツ、ウツ、ハアハア」

俺もブツガーもボロボロ、立って居るのがやつとの惨状だ。もう止めないかと提案するべき所だが声が出ない。このままじゃ放って置いても二人とも死ぬ大怪我なのだ。

「お、まえ、だけはごろじてやるう」

無駄……か、俺そんなに恨まれる様な事したか？ 精々が鼻を切ったぐらい、それだつて不快な顔から一転、同情を買える顔へと進化したのだから、お礼を言つて欲しい位。

だが、こんな状況でもウォーハンマーを離さない武器への愛着は正直嫌いじゃない。失血を重ね、視界は徐々に薄暗く成つて行く、ゾーンも切れ、頭はボケボケだ。考えは全く纏まらない。

死ぬ？ 俺が？ クソツ!? 何だつて俺が？ 俺が死んでアイツは？ ユマ姫、いや高橋はどうなる？ せつかく会えたつてのに妙に可愛くなつちまって。

そういや、このブローチがあつた！ 回復魔法が……いや駄目だ魔力は阻害されてるし、そんな隙もねえ。まずこの霧を抜けないと……しかしこの霧、どこまで広がって

る？ 何キロも広がっているなら最早間に合わない。

取り留めも無い思考、その中で体は無意識に崖際に向かつて歩いていたら、覗き込めば崖下は何十メートルも下、落ちたら即死だ。

「ぢねえええ」

ブツガーが大きく振りかぶる、崖際に移動したのはブツガーもウォーハンマーを振り辛いだろうと本能で判断したから。

しかしその判断は誤りだった、最早ブツガーの思考は思い切りハンマーを振り下ろす事のみ。

「がああああ」

振り下ろされたハンマーは俺を外し、盛大に崖際の土を削る。

衝撃、そして崩れる足場、俺は慌てて地面にしがみつく。見上げるとブツガーの上体が泳いだ。外れたハンマーの勢いに踏ん張れず、崖際へとフラフラと流れて行く。

馬鹿がつ！俺は心の中で嘲笑う。それでもブツガーはウォーハンマーを手放さないのだ。

「あゝあゝ——」

遂にブツガーはハンマーに引き摺られる様に落ちて行く、——しかし。

「ッ！ふざけっ」

ブツガーは最後の最期にハンマーを手放した、そして縋る様に掴んだのは俺の右足だ！ 勢いが付いたブツガーの重量に、俺の体は為す術なく引き摺られる。

齧りつくように地面に爪を立てるも駄目！ そのままズルズルと落ちて行く。

「ぢねえええ」

「ひとりですつ！ 死んでろッ！」

左足でブツガーを蹴落とそうと試みる、だがそれが止めになってしまう。

俺が齧りついていた地面もボロボロと崩れる。

俺とブツガーは中空へ投げ出された。

失血死を待つまでも無く、確実な死が迫っていた。

思いがけぬ迎え

霧深い森の中、白と黒だけの世界、動いているのはヨタヨタと歩く男の影のみ。

「はあ、みーんな死んじまった」

不格好に歩くのは、マルムૂクにベアードと呼ばれていた男。元より無い左手と健在である右手で大切に抱きしめるのは一匹の犬。

片手を失い特務部隊を引退後、与えられた任務は軍用犬の育成だった。思いの外、性に合った犬の世話、今回連れて来たのはその中でも選りすぐりの三匹だった。

手塩に掛けて育てた三匹の軍用犬、しかし生き残ったのはこの一匹のみ、その一匹も蹴とばされ内臓に深刻なダメージを負っている。

「我慢してくれ、ワシも同じだて」

ベアードは痛みに鳴く犬をそつと撫でる。犬だけじゃなく彼も重症だった、原因は共にタナカと呼ばれる男に蹴られた事。恐らく肋骨は何本か折れている。

「おつそろしい男だったあ、絶対に殺ったと思ったけども」

乱戦の最中、気配を隠し、ひたすらチャンスを狙った。軽装に見えても服の下に鉄板などを仕込む輩は多い。引退し年老いた彼の膂力では貫く事は敵わない。

だから訪れた絶好の好機、狙ったのは脇の下。ここに鉄板なぞ仕込んでしまえば、動きは大きく阻害される。実際ベアードの手にはハッキリと肉を突き刺した感触があった。

が、その感触は魔獣の肉の様に固かった。

結局突き刺さったのは目論見の半分ほど。それでも肺に届く大怪我だろうに、タナカは素早く反撃してきた。

「ぐう……」

いまだ痛みは収まらない、折れた骨が内臓を圧迫している。突かれた直後、万全とは程遠い姿勢からだと言うのに、恐ろしい威力の蹴りだった。

しかし驚くのはその後、大怪我を負ったにもかかわらず、極限の死闘を演じて見せた。取っ組み合うブッガーとタナカ、二人の戦いは魔獣同士の争いの様で、彼にはとても同じ人間の仕業とは思えなかった。

あの戦いに介入しようとしたマルムークに、ベアードはすっかり感服する程だった。

……背後から、味方ごと敵を貫くと言う手段は、褒められた物では無いだろうが。

しかし、更に驚く事に、胸を貫通する程の怪我を受け、その後も二人は戦い続けた。急所は外れていた様だが、呼吸もままならぬ怪我の筈。

「バケモンだな、アレは」

最後にはバケモノ同士、もつれ合う様に崖下へと落ちて行つた。残されたのは静寂と、共に怪我を負つた一匹の軍用犬と、一人の男だけ。

生き残つたベアードにしたつて、もう一刻も早くこんな場所から脱出したい。したいが、元々は義手の一つも作るため、小遣い稼ぎのつもりで参加したのだ。

しかし、作戦は失敗、大失敗だ。百人からの部隊で、娘つ子一人捕まえられず、部隊は全滅。逃げ延びた者も居るだろうが、所詮寄せ集めの連中、戻つて来るとも思えない。

目当ての特別報奨金どころか、怪我の治療費だつて出るかどうかが怪しい所。ベアードはただのブリーダーとして参加した以上、責任を問われる事は無いだろうが、大事に育てた軍用犬を失つた上で、その価値まで疑われるのは耐えられないと感じていた。

「だが、まだチャンスは有る」

ユマ姫と言われた少女、それを発見し連れ帰る。

タナカと言う男、背囊の一つも持っていなかった。ここまで手ぶらで来た筈も無い。どこかに、そうユマ姫と一緒に置いてきたに違いないのだ。

ベリス草の臭いや、幾つかの小細工に誤魔化されたが。ゆつくり探せば例え土の中に埋められようとも、見つけられぬ愛犬ではない。

「くうーん」

「よしよし、こつちか？」

辿り着いたのは古めかしい大木、その根元だ。

「いっいか？」

愛犬に導かれるまま、洞つらの中を覗く、中には古びた小枝や土が詰まっている様にも見える。

ベアードは傷付いた愛犬を足元に降ろすと、洞を塞ぐ小枝をゆつくりと取り除く。

——居た！

「……あつ」

掠れた弱々しい声、青白い顔で震える少女の顔は、絶望に染まっていた。

それにしても美しい少女だった。ベアードにとつて孫と変わらぬ歳頃だと言うのに、年甲斐もなく見とれる程。洞に住む精霊の様に見えたのだ。

人間離れたピンク色に輝く髪、左右で異なる色彩の瞳、この世の者とは思えぬ美しさ。

神聖不可侵な超常の生物にも思えるが、コレを確保しなくては明日を生きることもししい。

「よし、怖かったね。おじちゃんに任せておきなさい、安全な所に連れて行ってあげるから」

「あ……ああ、いえ、私は動きません、待ち人がいるのです」

少女は顔を背け、固い声を絞り出す。そこに有るのは護衛の帰りを信じる強い意思。しかしその思いは叶わないのだとベアードは知っている。

「それは……タナカと言う男かね？」

ビクンと少女の肩が跳ね、泣きそうな顔でベアードを振り返る。

ベアードは少女の縋るような視線を受け止めると、その望みを断ち切る様に目を閉じてゆっくりと首を振った。

ヒツ！ と少女は息を吸う、悲痛なその音が耳に痛い。

「悪い様にはしねえ、一緒に来てくれ。最期にタナカに頼まれただよ」

嘘だ、しかしベアードも怪我をして、少女を背負って歩く程の力は無く、精々が肩を貸すぐらい。

だが少女も深い矢傷を負っているはず、歩かせるのは危険かも知れない。

しかし帰らぬ人を森の中待ち続け、矢傷が癒える筈も無い。だったら無理にでも連れ出した方が良く、少女が死んだとしたら……その時は遺品の一つも持って帰れば良い。

その方が手ぶらで帰るよりは、よっぽど評価も上がるだろうと考えていた。

「いいえ、それには及びません。私はここで彼を待ちます」

「だども、死んじまった。ここで無駄死にするのはあの兄さんの遺志に反するですよ」

ギリツ——と、歯を食いしばる音が漏れる。

現実を認められないのだろう、儂げな容姿も相まって、見ている事が辛い程に痛ましい。

「ほらっ、頼むから一緒に来てくんろ」

ベアードはゆつくりと右手を差し出す、無害を主張するように、手の無い左腕を振ってもみた。……その時だ。

——キャンキャン。

突然の犬の鳴き声、何事かと振り向くも、あつと言う間にベアードは取り押さえられた。

「ご心配なく。彼女は我々が全霊を注いで保護します」

「ぐっ！ 何者だ！」

腕を取り、手慣れた様子で押し掛かるのは軍服を纏った女性、それも美しい。煌めく銀髪に整った目鼻、そして肉感的なプロポーションは、白く煙った霧の中でも輝く様な美しさ。

「ツ！ あなたは！ シノニム！」

少女が叫ぶ、ベアードには知らぬ顔でも少女にはそうでは無いらしい。

「グプロス卿の片腕の貴女がここに居る、やはりグプロス卿は帝国と繋がっていたのですね！」

少女がまくし立てる。スフィールの領主グプロスが、帝国に先んじてユマ姫を狙っているとは聞いていた。それがこのタイミングで現れるとは、ベアードにとって最悪の事態。

居ると知つていればとつと逃げ出していたし、正体なんて知らせずに解放してくれるならば、全てを忘れて消えたと言うのに。

——ああ畜生ッ！ このガキ解つててベラベラと喋りやがった！

歯噛みするベアードを他所よそに会話は続いて行く、女の他にも何人もの男が居る様で、茂みの中からゾロゾロと姿を現した。

「彼を、逃がさないでね」

「ハッ！」

ベアードの背中から柔らかな女性の感触が失われ、代わりに骨張った男に取り押さえられる。せめて美人に殺されるなら、と望んでいたベアードは密かにため息を漏らす。

しかしそんなベアードを他所に、思わぬ方向に会話は進んで行く。

「いいえ、私はシノニムではありません」

「何を？ 言っているのです？」

呆然と少女が答える、ベアードにしてみれば何も聞かせずに解放して欲しいのだが、その願いは叶いそうに無かった。

銀髪の女性は、怯えるユマ姫の前で優雅に一礼し、思いもしない言葉を紡ぐ。

「私の本当の名前はカフェル。スフィールの隣、ネルダリア領を治めるオーズド様の使いとして、ユマ姫様をお迎えに上がりました」

事態は想像だにしない方向に進んでいた。

シノニムの過去

カフェルはネルダリア領にある小さな貴族家の子女として生まれた。小さい頃から美しく、そして抜群に頭が良いと評判だった。

それは良い事か？ 普通は良い事だ。美しく賢くて、悪い事など無いと思うだろう。

しかし其れは不幸だった、彼女は美し過ぎ、そして賢^{かし}過ぎた。

だから自分の親の領地経営が行き詰まり、資金が回らなくなった時。救世主の様に現れた大貴族の御曹司の申し出に、喜ぶ気持ちは一欠けらだつて持てなかつた。

彼女だけは気付いていた、両親が肝いりで始めた投資案件、その全てがこの御曹司が仕組んだ罠、詐欺だったのだと。

そしてそれが、自分を手に入れる為に、入念に仕組まれた罠だと言う事も。

その時の彼女は、まだ僅か十三歳。両親にその事を相談しても「折角のお話を！」と逆に叱られてしまう始末。

だが彼女は確信していた。その御曹司の粘つく視線、舐め回されるような気持ち悪さに覚えがあつた。

鼻つまみ者だった親戚筋の男、働きもせずブヨブヨと太って気持ち悪い癖に、やたらと自分に絡んで来る。どうし様も無く気持ち悪い馬鹿で、終いには二人きりになるや襲つて来た。

その時は大声を張り上げ、助けを求めれば、家の爺やが駆け付けてくれた。その馬鹿は親戚中から絶縁され、その後はどうなったのか知りもしないが、恐らくはどこぞで野垂れ死んだに違いない。

しかし、今度はそうは行かない。泣こうが叫ぼうが、皆がアイツの味方なのだ。粘つく視線は同じでも、そこに宿る知性が違う。十三歳の自分より遥かに賢く、そして邪悪な目。

カフエルは両親の投資案件を調べ上げた、そこにあの御曹司の影を探したので。

普通に考えて、十三歳の少女に見つけられる筈も無い。それが油断だったのか、それとも奇跡が起こったのか。その尻尾の欠けらと言える様な証拠を遂に掴んだ。

が、所詮は怪しいと言うだけの話、それでも藁にも縋る思いで彼女は領主様に手紙を書いた。

正直期待はしていなかった。両親だつて十三歳の自分の話を聞いてくれないのだ、ずつとずつと偉い領主様が自分の話を聞いてくれるとは思わなかった。

だから彼女はより大胆に、御曹司の持つ私邸に忍び込んだ。しかし所詮は少女の浅知

恵だ、「そこに詐欺の動かぬ証拠が有る」その噂すら、御曹司が仕掛けた罠だった。

「ヒツヒ、貴族の子女とは言え、上位の貴族の住居に無断で忍び込んだとあれば、生殺与奪はこちらの物よ！」

「あ……あー！」

手首を縛られ吊るされて、上着を剥がれて露わになった幼い体。そこに直接あの粘つく視線が絡みつき、肌を舐め回す。

「だーけど優しい僕は！ 少しの教育的指導を与えるだけで許してあげるよ♪」
「そんなー！」

ビツ！ と張力が漲る音をさせ、両手で御曹司が見せつけるのは乗馬用の鞭。

「初夜は結婚後にとっておくからね♪ それまでにこの鞭で素直になっておくれよ？ 鞭で傷だらけの女の子なんて、誰も愛してくれないからね？ でもでも♪僕は！ 僕だけはそれでも君を愛すよ！ だからいい声で鳴いてね♪」

—— 気持ち悪い！ 気持ち悪い！ 気持ち悪い！ 気持ち悪い！

何を言ってるか解らない、ただただ気持ち悪い。そんな彼女に頓着せず、鞭を振り上げる御曹司。

賢い彼女は解ってしまう、鞭がもたらす痛みの程を。

きつと今までの人生で味わった僅かな痛みとは、全く次元の異なるものに違いない。毛と厚い皮で守られた馬でさえ、泣き出す程のその痛み。人間が味わえなくなってしまうのか？ 自然と彼女は想像出来てしまう。

聡明な彼女には、自分の上げる悲鳴までもが想像の内、それどころか自分は何発打たれた後に気絶するのか？ 気絶したら後は許してもらえるのか？ それとも水でも掛けられて覚醒の後、更なる鞭を浴びせられるのか？

それはホンの一瞬、鞭を打ち据えられる前の、振り上げられたその刹那。

その状況、その一瞬で、そこまで思考が至ってしまう。

この賢さは、果たして自分を幸せにするのだろうか？ 加速する思考の中で、人知れず自嘲まで覚える程。

滲む脂汗と冷や汗、溢れる涙を堪える様に固く目を瞑ったカフェルだが。想像した痛みはいつまで経っても襲っては来なかった。

「誰だ！ お前は！」

焦燥に駆られた御曹司の声。うっすらと目を開けると、部屋の片隅、暗がりの中に自分の父と同じぐらいの歳の男性が立っていた。

「その子を離して貰おうか、彼女に聞きたい事がある。無論君にもだ」

「なんだと？ 貴族の邸宅に無断で立ち入って、無事に済むと思っているのか？」

「上位貴族の邸宅に無断で立ち入れれば罪になる。ならば私を罪に問うことは出来んハズだが？」

「なんだと？」

ポカんと間抜け顔で立ち尽くす御曹司と、撫でつけられた髪に整った口髭の、自信溢れるその男性。

屋敷の主と侵入者、まるであべこべの様だった。

「私はオーズド・ガル・ネルダリア、君の犯した不正の数々。その調査にやって来た、ご協力願おうか？」

男がパチンと指を鳴らす、同時に目を開けられぬ程の魔力光が部屋を照らす。大出力の魔道具、そしてゾロゾロと部屋に入り込むのは制服姿の男達だ。

「ネルダリア諜報特務部隊だ！ 貴様には詐欺や横領、領主への背信行為の疑いが掛かっている！」

「馬鹿な！ 馬鹿なあ！」

屈強な制服姿の男が事務的に令状を読み上げ、取り押さえられた御曹司が泣き叫ぶ。

そんな中、吊り上げられたカフェルは解放されて、痛む手首を抱えたままキョロキョロと辺りを窺うしか出来ない。

半裸のままうすくま蹲る哀れなカフェルに、自らの上着を差し出したのは先程の男性だった。

「大丈夫かね？ 怪我はないか？ 君の手紙を貰ってから確証を得るまでに随分と時間が掛かってしまつてね」

「……まさか！ 領主……様？」

それが彼女、カフェルとネルダリア領主、オーズドとの出会いだった。

その後は簡単だ、すっかりオーズドに惚れ込んだカフェルは家を飛び出した。オーズド様に救われた恩を返す為と、領主の館に奉公に出たのだ。

半分ぐらいは話すら聞いてくれなかった両親への当てつけであつたが、一部始終を聞かされた両親に、反対する言葉は残されていなかった。

かくして領主に仕える事になったカフェルだが、彼女は領主の館の水くみやシーツの洗濯の為にオーズドに仕えたいと思つたわけでは無かつた。

カフェルが目指すのは彼女を救つてくれた諜報特務部隊、そこに入隊し同じ様な境遇の人を救いたい。そして命懸けでオーズド様の為に働きたい。

そんな彼女の思いが届いたのか、カフェルはオーズドに気に入られた。元々非常に頭は良いのだ、あらゆる知識を吸収し、オーズドの悪戯めいた質問や相談に、的確な答えを返す程。

尊敬出来ぬ両親に見切りをつけ、自分を我が子の様に可愛がってくれるオーズドの元の生活は幸せだった。

しかし彼女は頭が良すぎたのだ、娘の様に可愛がってくれるなら、娘の様に甘えればよい。

だのにカフェルにはそれが出来ない、オーズド様には返しきれぬ恩が有る。だから自分を諜報特務部隊で使って欲しいの一点張りだ。

そしてオーズドも冷血では無いが、打算的で無駄を嫌う男だ。これほどの少女を遊ばせておくのは……と考えてしまう。

結局、ネルダリア領主は一人の少女を諜報特務部隊に送り込み、たった二年で一人の立派な女スパイが仕上がってしまう。

送り込むはきな臭い隣領のスフィール。かの地は五つの貴族家で持ち回り治める筈が、戦争も無く、もう何年もソントール家による支配が続いている。

領主のグプロスソントールは、戦争は遠い昔だと言わんばかりの厭戦論を展開し、自由貿易を訴え低い関税を設定、帝国との取引も活発だ。実際に相当の利益を生んでいる様で、景気のいい話がいくつも聞こえて来る。

だがその利益は国防を犠牲にする程の物か？ 浮ついた気風の街と、白く塗られ煌びやかに飾られた城に、王国の盾として謳われたスフィールの面影はない。これが帝国に

牙を抜かれての事だとすれば隣領のネルダリアも黙つてはいられない。

そうしてカフェルをシノニムとして送り込んだオーズドだが、実の所それ程期待してはいなかった。

なにせ只、一介の奉公人として勤め、何か気になる事を報告するだけの事。

スパイごっこみたいな物だとまで思つていた。

今回作成したシノニムと言う仮初めの身分にしたつて、実は殆どそのまま。

表沙汰に出来ない不祥事に巻き込まれた婚姻前の子女が、こつそりと名前を変えるのは珍しくはない。

隠す要素が殆ど無い。隣領のスフィールに奉公に出た事だつて、不祥事に巻き込まれた子女として遠くに勤めるのは良くある事。

しかし彼女はあつと言う間に頭角を現す、その美しさ、賢さが見いだされたのだ。

雑仕から侍女、侍女長補佐、そして侍女長になり、そこからグプロス卿の秘書に。

おしまいには卿の政策や遊興、公私を問わない計画の立案までこなす補佐官としてスフィールでは君臨するに至る。

その間僅かに五年、その速度にオーズドは密かに頭を抱えた。

早過ぎる、とても真つ当な手段で勝ち取ったとは思えない。しかし実の娘の様にも思つていた少女から、その手管の仔細を聞き出すのは苦痛に過ぎた。

實際、カフェルは夜伽の相手として、躊躇なくグプロス卿と閨ねやを共にした。それまでカフェルに男性経験など無かつたにも関わらずだ。

下種な男から純潔を守ってくれた男の為に、別の脂ぎった下種に純潔を捧げる。

矛盾している様だが、当の彼女に悩みは無い。實際の所、御曹司の秘密を暴こうと奔走した時から、彼女はこうしたスリルの虜だったと言つて良かった。

救つてくれたオーズド様のため、助けてくれた諜報特務部隊への憧れ。その思いに嘘は無い、だが全てでもない。

世界を揺るがす様な大きな陰謀に係わりたい、そしてそれを暴きたいそんな思いが疼いていた。

そんな自分に薄々気が付いてしまい。自分自身が、かつて軽蔑していた下種な男達と殆ど変わらぬ下種では無いかとさえ思えてしまうのが、最近芽生えた唯一の悩みと言つた所。

もちろん早過ぎる出世を重ねる彼女の事、グプロス卿の周囲の人物だつて見逃していた訳では無い。

彼女の身辺調査はブローラーを始め、グプロス卿の側近が丁寧に行った。もし彼女が全くの瑕疵かしが無い乙女なら、却つて怪しまれていただろう。

しかし彼女には目くらましに打つてつけの瑕疵があった。大貴族の御曹司との婚約、

そしてその御曹司の不祥事による婚約破棄と改名。

御曹司を嗅ぎ回り、最後には破滅に迫いやったという噂を含め。地元に住られなくなった才女の理由として、苦笑が漏れる程にらしい物だった。

「いかにもシノニムのやりそうな事よ！」

伽の最中にグプロス卿が水を向ければ。

「だって！ その時の私はまだ十三ですよ？ 気持ち悪いじゃないですか？ 私との婚姻を条件にした融資なんて」

恥ずかしいのか、ベッドの中で拗ねた様にシノニムは顔を背ける。

「ほっほー、しっかし婚姻、本妻となる訳だぞ？ 良い話とは思わなかったか？」

「まだ十三、気持ち悪いってのが先に来ました。それに調べてみたら前の奥さんは若くして亡くなっているんです、それで怖くなっちゃって……」

不安げに布団で顔を隠すシノニムに、意地悪な気持ちちが芽生えるグプロス卿。

「それで破滅まで追い込んでしまうのだから、私も油断できないな」

「もう！ ただ怪しいって地元の警邏けいろうのお兄さんに相談しただけですよ！ 結局、その御曹司は、不正の証拠を貴族筋の上の人に見つかって、最後には遠方に飛ばされました。私の家にはお詫びの小銭が少々と、大貴族に見限られた少女って不名誉な称号が残っただけ。まだ十三だったのに、気分は未亡人だったんですよ！ もう！」

シノニムは憤然とした様子で眉を吊り上げるが、本気で無いのは明らかだ。既に過去として割り切っているのがグプロス卿にも見て取れた。

「ではスフィールの領主として、私には若き未亡人を慰める義務が有るな」
そう言つてシノニムの臀部をさするグプロス。

「もう！ そんな事言つて、全然優しくしてくれないじゃないですか！」
はにかんだ様に笑うシノニム。初心にすら見える笑顔の裏、グプロス卿から寝物語に語られる情報は、全てオーズドの元へと流れていた。

始めこそ仔細は聞きたくないと思つていたオーズドも、スフィールに入り込む帝国情報部など、日増しに話がきな臭さを増すにつれ。ここに至れば細かい前後の会話も聞かざるを得なくなる。

「因果な商売だ、自らの業の深さに押しつぶされそうだよ」

年に数度、出入りの商人のふりをして、スフィール城へ直接話を聞きに来るオーズドが、思わず漏らした言葉は果たして冗談か、本気の愚痴か。

淡々と報告するシノニムの顔に、グプロス卿へ向けられた柔らかな笑みは無い。冷たい表情で淡々と報告を繰り返すのみ。

カフェルにとって初恋の相手で、最も敬愛するオーズドには少しも笑いかけず。内心

軽蔑するグプロス卿には初心な笑顔で微笑みかける彼女の乙女心はどうなっているのか？

その複雑怪奇な心の在り様を言葉にするのは不可能に近いが、少なくとも其れが自分だと彼女自身は割り切っていた。

が、そんな彼女の心をかき乱す少女の話が聞こえて来る。

ユマ姫だ、シノニムが密かに整えた情報網は、姫がスフィールを訪れる遙か前、既にその情報を捉えていた。

ソノアールと言う田舎町に、森に棲む者の姫を名乗る少女が現れた。

初めこそ取るに足らぬ噂話に思われた。実際その足取りは謎が残る。

スフィールを目指し護衛と共に旅立ったと言う話だが、次の街へは一向に姿を見せ無かったと言うのだから出来の悪い詐欺の様。

実際、スフィールまでの警護と称して、男が村から依頼料をふんだくつたと聞けば詐欺としか思えない。

だが少女が語ったと言う話、幸せに暮らす森に棲む者の都に無慈悲な帝国兵が踏み入った、逃げ延びた姫が助けを求め、人間の王都を指すと云うストーリー。

一見して笑える与太話では有るが、帝国が森に棲む者の国に攻め込んだ日から逆算す

れば、そのタイミングが整い過ぎている様にも思われた。

だからこそ、シノニムは森に棲む者の少女が面会に訪れたと聞いた時、一も二も無く話を受けた。実際に会って、詐欺の臭いを微塵も感じなかったのも理由の一つ。

本当に姫と言う事は無いだろうが、ひよっとしたら何か話を聞けるのではと言う程度。

しかし、慌てて詳細に集めようとしたソノアール出発後の姫の足取りは、全く計算が合わない物だった。

計算が合わぬのも無理はない、よくよく調べればソノアールには二回、日を置いて訪れている。

一回目の訪問と異なり、二回目は一瞬で見た者も少ない。しかしその後のソノアールには魔石の噂を含め、気になる点が多い。

もつと不思議なのはソノアールの先、その道筋と日程だ。

聞けば馬車も馬も使わず、幼い少女と護衛の二人旅、なのにその速度は馬での早駆けの様ですらある。

なにせその足取りの全容が掴めたのが、領主との面会、その後だ。噂の集まるスファイルにしてそれなのだから、あらゆる商人や旅人よりも、彼女たちの足が遥かに速かったのは間違いない事実。

と、なれば考えられるのは魔法。或いは魔道具か？ どちらにしても捨て置けない技術を森に棲む者が持つのは間違い無いと言うことになる。

しかも数々の情報と同時に聞こえて来るのは、仇の帝国を呪う言葉と助けを求める王国への期待、それらを大勢の前で語って見せたという話。

事実なら、本当に森に棲む者の国は落ちた。

森に棲む者の進んだ魔法技術も丸ごと帝国へ渡ったとみるべきだ、その先にあるのは？

王国への侵略に他ならない！

いまだかつてない程の大事事件に心が躍る。そして国を追われた姫の年齢に、かつての自分が重なるのだ。

どうしても救いたいとカフェル、いやシノニムが思ったのも無理は無い。

そうして、密かにオーズドに諜報特務部隊の出動を要請したのだった。

僅か二日前の出来事だった。

その結果として、諜報部を率いて姫の後をつけ、まさに今、霧深い森の中で立ち往生する羽目に陥っていたのであった。

「カフェル隊長、これ以上は霧深く、視界が利きません」

「そうですね、ここで待機しましょう」

隊長として諜報部を指揮する事になったシノニム改めカフェルは、自らの誤算を悔いていた。

彼女はユマ姫の情報の多くをグプロス卿らに秘匿していた。スファイルルまで至ったルートだけでなく、宿屋への襲撃を受けた翌日、急遽スファイルルを出発すると魔道具屋に告げた事さえも。

もちろんコレだけの情報を握りつぶした事が明るみに出れば、シノニムには拭い去り難い嫌疑が掛けられる。

しかし、既にグプロス卿と帝国で交わされた密約の証拠も揃った。これ以上シノニムとして活動する理由も少ない、そう判断しユマ姫達がスファイルルを出た所で、彼女自身がユマ姫を迎えに行く予定だった。

そこまでは予想通り、しかしユマ姫達が向かう場所こそが予想と大きく異なっていた。

てつきり王国を目指し東へと向かうと思われた進路だが、実際には北。しかも自分たち以外にユマ姫を追う怪しい人間が見え隠れしていた。

加えて言えば、速いと思っていたユマ姫達の移動速度、実際には物見遊山の旅行者の様に遅かった。

カフェルはこれが自分たち諜報部を釣り出す罠の可能性を考慮し、一時様子を見る事にしたのだった。

その結果、ゼスリード平原で起こった事態はカフェルの想像を絶した。

何より痛いのはズーラーが、ユマ姫と懇意にしていただろうヤツガランと言う衛兵隊長を切り殺したことだ。

それを見たユマ姫は逆上し、怪我を負った身でありながら恐ろしい勢いでズーラーを串刺しにした。

ユマ姫が知るカフェルの身分は、ズーラーと同じくグプロス卿の片腕と言う物、説得どころかカフェルが目の前に現れるなり切り伏せられるかも知れない。

そう思い、出て行くタイミングを逃す内、話に聞いた帝国の兵器が発動、そして暴走。その異常な霧が人体に与えうる影響を考えると、諜報部は一時撤退を余儀なくされた。

いつそ引くべきか？ それともユマ姫を助けるべくリスクを取るか？

視界が確保出来る程度に霧の薄い、森の奥へ引き上げたカフェル達は今後の行動を決めかねていた。

そこへ一つの知らせが届く。森の中へ索敵に出ていた部隊員が怪しい影を発見したのだ。

「その男は犬を抱えていたのね？」

「はい、何かを探させている様に見えました」

カフェルは帝国が犬の育成に力を入れていている事を知っていた。それが既に治安維持に効果を上げ、軍事運用すら検討されている事も掴んでいた。

それだけに男がユマ姫を探している事はすぐに解った。

「追いましょう、その男がユマ姫の場所を突き止める可能性は低くありません」

そうして、霧深い森の中、一人と一匹を追跡した。よろよろと歩く癖に、勘が鋭い男で難儀したが、その結果。目当ての人物を発見するに至ったのだ。

★悲しみと絶望と

銀髪の女性士官と言った出で立ちのシノニムさんが、霧の中突然に現れた事情をかいつまんで説明していく。

隣領ネルダリアの諜報特務部隊がグプロスの配下として潜り込み、長らく帝国への寝返りを警戒していたらしい。

「以上が、わたくしめがここに居る理由で御座いますユマ姫様」

「そう……」

「けどそんな事はどうでも良い。」

田中が、アイツがそんな簡単に死ぬハズが無いんだ。けどあれだけの大軍だ、無傷じゃ無い。俺が、俺が治療しないと。

「なりません、姫様。ココは危険です。スフィールを離れネルダリア領まで来て下さい、我々は姫様を王都までご案内する意思があります」

「……行きません!」

「……そんなの、意味が無い。」

馬車を用意して王都に行くのだから、田中を巻き込まない様に他の護衛を欲しただけ

だ。

「では？ あの護衛、タナカと言う男の帰りをここで待つと言うのです？」

「ええ、私は彼と約束しました、ここで待つと」

「しかし！ 姫様は怪我をしている！一刻も早くちゃんとした場所で治療をすべきです」

言われて思い出す、腹に刺さってる風の矢を俺は無造作に投げつけた。

「いいえ、もう傷はありません。魔法で治しました。生憎とこの霧の中では実演する事は出来ませんが」

「そんな？ 魔法とはそんな事まで？」

だからこそ！ 早く田中と合流しないと。

どうやら、ベアードと言う男が田中が崖から落ちたところを見たという。

だとしたら、俺の魔法が必要なのだ。俺はその場に駆け出そうとする。

だけど、霧の中、俺の体は思った通りに動いてくれない。体は震え、手の平は病的に青白い。

その手を握り締め、シノニムさんが訴えてくる。

「しかし！ ユマ姫様のお体はとても正常とは思えません」

「それは、この霧のせいです、この霧の中、エルフの健康は大きく阻害されます」

「でしたら！ それこそ早く！ 我々と脱出するべきです」

シノニムさんは手を握り締め懇願するように声を絞り出す。

そこに邪悪な意思は感じない、実際に今の俺は見えていられない程に酷い顔色をしているのだろう。

健康値が低かった俺は、お付きの侍女からいつもこんな目で見られていたっけ。

「いいえ！ 引きません。田中は、私が、必ず助けます」

……だけど、今の俺はか弱いだけじゃ駄目なのだ。今は俺が、守らないと。

「解りました、タナカを探しましょう、ユマ姫様は歩く事が出来ますか？」

「いえ……少し厳しいかも知れませんが。なるべく早く探したいのです、申し訳無いのですが背負って頂けますか？」

自分でも情けなくて涙が出るが、ふらついてとても歩けない。

意地を張って搜索に時間を掛けるぐらいなら、引き摺られたって構わない。

だけど、シノニムさん達は四人。ベアードと名乗る犬使いの確保に一人、俺を背負う一人、そうなれば二人だけしかまとともに戦えなくなる。

それが解っているのかシノニムさんの表情は険しい。

「オイ！ タナカが落ちたと言う崖まで案内しろ！」

「イタタア、解りましたよ！ そんなに蹴飛ばさず下せえ！」

犬を抱えるベアードを蹴飛ばして移動する。

今、田中の手掛かりを知るのはこの男だけ、火が出る程に俺はベアードを睨み付けていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ここから？ ……落ちたのですか!？」

声が震え、歯の根が合わない。

なんだよこれ！ 崖とは言っただけど……余りに高い。

身を乗り出して必死に下を確認する、それだけでも恐い。それでも底が見えない。

こんな所から落ちたら……人間は絶対に助からない。

嘘だ、こんなの……

過呼吸に陥りそうな程に、勝手に肺が酸素を求める。胸を押さえて必死に呼吸を整え

ようとするが上手く行かない。

自分の鼓動と呼吸音だけが、他人事の様子に耳を騒がせる。

ベアードの案内した崖、見渡せば死体が散乱し、死闘の熱気がいまだに燻る様だった。

しかもコレでほんの一部。田中も含めて崖下に落ちていった人間も多いと言う。

——なんで！ こんな無茶を！ 逃げようと思えば逃げられたはず。

答えは解ってる。一切動けない俺の為、ここで全ての決着をつけようとしたのだ。

そんな俺の悔しさを知ってか知らずか、呆然とする俺にシノニムさんのお供のジジイがとつてつけた励ましの言葉をかけてくる。

「タナカは素晴らしい戦士だった様です。様々な戦場を見て来ましたが、一人でこれ程の戦いを演じた男の話は聞いたこともありません」

何が！ 『戦士だった』だ！ 過去形にするな！ 勝手に過去形にするなよ！

「いえ！ まだ！ まだです！ 彼は！ 彼は特別なのです！ 死んだと決まった訳ではありません！」

歯を食いしばり、勝手な事を言う隊員のジジイを睨み付ける。

歯を剥き出しに威嚇すれば、皆が憐れんだ視線を俺に向ける。

止めろよ、憐れまれるのには慣れてるが、そんな目で見るなよ！ アイツは生きている！

「仕方ありません、ここまで来たのです。崖下を探しましょう」

「カフェル隊長!? 無駄です、それに帝国の別動隊と接敵したら危険に過ぎます！」

「それでもです、ネルダリアの、いえ、ビルダール王国の存亡がかかっています、今はリスクを取ります」

シノニムさんの声が響く。憐れまれた甲斐はあった。

ボロボロの俺の様子を見て、それでアイツを探してくれるなら。どんな目で見られよ

うが構わない。

俺は絶対に田中を捜し出す！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして行われた崖下の搜索、しかしその過程で見つかるのは死体のみ。それも身元すら解らぬ程に損傷した死体だった。

人間とは思えない。言うならば服を纏ったミンチ、破裂した肉団子。そんな悲惨な死体ばかりが転がっていた。

原因は高さで地形だ。まず高さは少なくとも百メートル。その半分でも普通は即死。加えて地形、切り立った難所でキツイ斜面や大岩が転がり、吹き飛んだ死体があちこちに散乱している。

少しでも息がありそうな死体すら発見出来ない。

唯一の朗報は、崖を下る程に霧が薄まり、俺が歩けるほどに回復したことぐらい。

俺はフラフラと幽鬼の様に歩いて、死体が見つかるたび、原形を保たぬグロテスクな死体を必死に検分し続けるしかなかった。

それすらも、崖を下れば下るほど、当然の様に死体の損傷はより激しくなる。

シノニムさん達が、もう見ていられないとばかり、悲しみの目で俺を見てくる。

それで田中の搜索を続けられるなら構わない。俺はひたすらに崖を降りながら肉片

を漁る。

……コレも田中じゃ無い、アイツはもつと大きいし衣装は真つ黒だ。

俺は、現実を認めたく無かったんだ。

この崖が永遠に続いて、どこまでも死体を探して行ければ良いとすら思っていた。だけど、そんな逃避行も終わりを告げる。

崖の底にまで辿り付いたのだ。

「あと調べて居ないのはこの下ぐらいです」

「そうですか……」

そこは崖下の更に下、ぽつかりと斬り込まれた様な谷間がそこに有った。

もし崖の真下ではなく、その谷間へと落ちた場合。その体は更に百メートルは下の谷底へ、合計して一気に二百メートル近くを落下した事になる。

コレで終わりかと思えば大穴が空いているのだ。何だよコレ……なんでこんなのがポツカリと空いているんだ。

コレも俺の『偶然』なのかよ！

こんな下まで落下したら、アイツだって……

だけど。俺は……

「降りる場所を探してください」

「……解りました」

息を飲む音が聞こえた。もう止めてくれと悲鳴を飲み込む音だった。俺はどれほど虚ろな目で、谷底を見つめているんだろうか？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

最後の最後、本当の底の底で、俺達は一つの人体を発見する。

黒いマント、ジャケツトにパンツ、何より奇跡的に原型を保ったその巨体……田中の服装に……間違い、無い。

「アレだアレ！ 間違いねえ、あのタナカって男の死体に間違いねえよ」

やっと終わると喜ぶベアードの歓声が白々しく響いた。

そんな！ いや、まだ死んだとは決まっていない。生きているかも。

走り出そうとする俺を、シノニムさんが押し止めた。

「お待ちを！ 我々が先に確認します」

止める！ 止めるよ！ 俺が早く行かないと！ 掴まれた肩を振りほどこうとする

が上手く力が入らない。

足がもう動きたくないと、目がもう見たくないと悲鳴をあげている。

でも、でも俺は！ 見なくちゃ、見なくちゃ駄目なんだ。

そうして居る間、うつ伏せの体を起こして顔を確認した隊員の顔が引き攣るのが見えた。

引き返してきた隊員がシノニムさんに耳打ちするのを、集音の魔法で聞き取る。

「ここまで来れば、この程度の魔法なら問題なく使えた。

「そんなに酷いのか？」

「戦場を経験した者でさえ、二、三日は悪夢にうなされる事請け合いですよ。年頃の少女に見せて良い物じゃありません」

「しかし！ それではあの子は納得しないでしよう！」

「それでもです！ あの姫が気を違えちまっては意味が無いでしょう」

「……それ程、ですか？」

「ええ、悪い事は言いません。ゴザをかけて隠していますから、なんとか誤魔化す事です」

部下の報告を聞いたカプエルは痛いほどに俺の肩を掴んだ。何を悩んでいるんだか。

「……全部聞こえているよ。」

俺は乾いた笑いを浮かべた。確かに死んでいるのかも知れないが、アレが田中と決まった訳じゃ無い。

「誤魔化されなどしませんよ！ 確認します。よろしいですね？」

ギョツとする一同、肩を掴む両手を振り払い。ゴザがかかった死体のそばへ。

「見せて下さい！」

「え？ いやそれは？」

呆然とする隊員に声を掛けると、諦めた様なシノニムさんの悲しげな声が響いた。

「見せてあげて下さい」

「は、はい」

「……ユマ姫様、お気を確かに」

シノニムさんの命でゆっくりとゴザがまくられる。

……それは、打ち上げられた深海魚の生皮を剥いだような酷い代物だった。

見るに堪えないその死体を俺は必死に検分する。服、マント、そしてグチャグチャに崩れたその顔面、そこに埋まった歯の一本一本まで。

……服は田中の物、マントや靴までも。だけどそれぐらいなら……たまたま似ている服だつてある。

俺は決定的な証拠が出ないことを祈つてすらいた。

………だけだ。

「あ、ああ、ああああ！」

奇声を上げ、そして走った。しかしすぐに足がもつれ、地面に転がり蹲った。

「ぐえ、あう……ガッ！ グッ！ ゲエエ」

そして吐いた。

あった、有ってしまった。見たくなかった物。決定的な証拠。

誰かが蹲る俺の背中をさする。

ヤメロよ！ やめてくれ……俺を、このまま、死なせてくれ！

「大丈夫ですか？ 姫様！ 今度は！ これからは私がユマ様を守ります！ だから！

気をしっかり持って下さい、彼の為にもです」

シノニムの声、俺は思わず抱きついて、そして泣いた。

「うう……ああああああ」

わんわんと子供みたいに泣き出す俺をシノニムさんは抱きしめた。

「やはり彼が、タナカだったのですね……」

「ヒッ……くく」

泣き止んで、それでも止まらぬしゃっくりを抑えて俺は何とか首を縦に振った。

殺してしまった！ 俺が……田中を。

黒尽くめの太男の潰れた死体。その歪んだ顔に埋まっていたのは細長く黒い鉄だっ

た。

この世でたった一つ。レンズが無い黒縁眼鏡の変わり果てた姿だった。

狂気の侵食

「あ、あああああ、ああああああー！」

俺は悪夢にうなされ、豪華なベッドから飛び起きた。

「こ、こここは？ 何処だ？」

今は……夜？

寝ていたのは天蓋付きの豪華なベッド、しかし見慣れたエルフの文明による物では無い。
い。

……では？ ここは何処だ？ クソツ記憶が！ 混濁している！ 丁度、前世の魂の記憶を取り込んだ時の様、頭にかんりの負荷が掛かっていたに違いない。

「参照権」

俺は薄暗い部屋で一人眩く。実際は眩く必要も無い、無いのだが気持ちを切り替え、覚悟を決める為、敢えて眩いた。

……

お、思い出した……そうだ……田中が……

……死んだ！

俺は慌ててベッドサイドのテーブルを探る。

そしてランプの横、大切に添えられた、歪んだ黒い針金を手に取って抱きしめる。
「う、うう、あああああ」

俺は谷底で田中の死体を見つけた。それはあの高さから落下して、元々が人間だったと信じたくない程に損傷した姿だった。

ほくろや歯並びなんかで判別がつくかと思つたがそんな生半可な姿じゃ無かつた。結局は体格と服、なにより潰れた顔に埋まったこの眼鏡が決め手。

信じたくは無かつたが、信じざるを得なかつた。

俺は結局また、田中を巻き添えに殺してしまった。

……いや、違う。前世じゃ俺は自分の不幸が他人を巻き込むなんて、思つても居なかつた。

だが今回はそれを知つていて、それでもあいつを巻き込んだ。
全ては俺の復讐のために。

結局、俺はアイツを身代わりにしても、自分が助かる為に田中を味方に付けたんだ。それも自分の正体を黙つて。国を追われた哀れなお姫様の立場を使つてだ！

そうすれば、田中の事、おいそれと見限る事など出来ないと見越しての行動だ。

……結局は田中にバレバレだったみたいだが、全てを知つた上、それでも俺を守つて

くれた。

思惑通りに行ったぞ？ 笑えよ俺！ 笑えよユマ姫様よお！

「くうー！」

笑えない！ 笑える筈が無い、結局の所、覚悟が無かった。まるで漫画やゲームの主人公みたいに強くなった田中なら、俺の偶然にも負けず、俺を守ってくれるんじゃないかと、都合の良い希望を押し付けた。

それで死んだ。無残に死んだ！ あんな状況、俺なんて置いて逃げれば良かったんだ。

あるとき俺は吐いて、泣いて、死体を引き上げる事も出来ず、埋めた。

形見と言えるのはこの歪んだ眼鏡だけ。金目の物は財布は勿論、セレナの形見のブローチだって何処を探しても見付からなかった。

帝国兵の残党、もしくははたまたま居合わせた山賊に、死体を漁られた可能性が高いとシノニムさんは言っていた。

それらと出くわすのは余りに危険と、シノニムさん達はすぐに撤収してしまった。その時の俺は茫然自失で、ロクに抵抗も出来なかった。

妹の形見は、それらしい逸品が市場に出回るか監視してくれると言っていたが、その価値を知らなければ話題になるとは限らない。

そもそも、ブローチから宝石を外されたりしてしまえば、もう見つける事など不可能だ。

結局残されたのはこの歪んだ針金だけ。

その後の俺は、それこそ『高橋敬一』としては壊れていた。

茫然自失のまま、促されるままに乗った馬車が向かったのはスフィールの隣、ネルダリア領の領主の館だ。

領主のオーズド・ガル・ネルダリアとも面会したが、すっかり壊れた俺は、気の無い相槌を返すのみ。

シヨックによる精神的退行も見られるとかで、病氣療養の真つ最中。

……あれから何日経った？ 五日？ 六日？ 参照権を使っても、意識を失っていた時間が長く、正確な日付が解らない。

「ハアハア、こ……ろす、殺すうう！」

問題は感情の制御がまるで利かない事だ。先程までは胸が締め付けられる程に悲しかったと思ったら、今度は腹が煮える様に熱いのだ。

全ては勝手な勘違いが原因だった。

シノニムさんが言うには、帝国は魔力を動力にした車を狙って俺達を襲撃した節があると言うのだ。

確かにエルフの国に魔力で動く車はあるが、魔獣を呼び寄せてしまうのでとてもじゃないが気軽に使える代物じゃ無い。

だけど、田中の超人的な足と俺の魔法での移動は早過ぎた。

俺が本物の姫かどうか足跡を辿ると、何らかの移動手段があるに違いないと思われるしまったと言うのだ。

そんな勘違いで、田中は殺されたのかよ……

殺したい！ スフィールの領主、グプロス。それをそそのかした帝国情報部の奴ら！
そして何より自分自身をぶっ殺したい。

「くせう……くせう！」

しかし俺は結局のところ、ベッドの上で唸る事しか出来ないじゃないか！

クソツ！ どうすれば良い？ セレナと田中、仇を取らなきゃいけない理由が二つに増えた。

なのに俺の『偶然』は俺の周りの人間から殺していく、こうしてネルダリアに居るだけでネルダリアの人間を殺しているかもしれない。

でも、俺が殺したいのは帝国やそれに与する奴らだ、なのに実際には俺の周り、味方してくれる人から殺しちまう。

「殺しちまえよ」

俺の中の誰かが言った。

「全部、全員、目につく限り殺しちまえば良いじゃないか」

そうだ、セレナが死んだ時、俺はそう思っていたはずだった。

「それとも殺しちや困る人間でもいるのか？」

居ない、そうだ、セレナが死んで、全部殺そうと思っていたのに。

田中だ、田中が居る世界なら、悪く無いかと思えてしまった。でも駄目だ、やっぱりこの世界は俺から奪うだけなんだ。

「思いつく限り、スカッと全員殺せばいい。失敗して、死んじまっても別に構いやしないだろ？」

そうだ、俺は、俺は……

この体に詰まった臓腑の中、渦巻く怒りが熱を帯びる。

じつとりと額に汗をかき、浅い呼吸の中、得体の知れない力が混ざる。

魔力だ、今の俺の体には魔力が残されている。

には魔力が残されている。

霧の影響で、かき消されたハズの魔力。それがもうハッキリと戻っている。……それどころか。

俺はベッドサイド、歪んだ眼鏡の横に置かれていた魔道具に飛びつく。

派手なティアラ、俺の秘宝、最後に残った唯一の秘宝だ。

健康値：45

魔力値：472

高い。今まで見た事もない程に。

渦巻く魔力、昂ぶる原因はコレだ。しかしこの胸の奥から湧き上がる魔力の原因はなんだ？

その時、視界の端、大きな鏡に映った自分の姿に違和感を覚える。

『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』

放った光の玉は一つ。控えめな光を放つ筈が、思いの外強い光で部屋を照らした。

「白い、いや銀か、元に戻った？」

俺の髪、ピンクに染まった髪が幼い頃の銀髪に戻っている。片目はいまだピンクだが、それも少し薄まったかの様に見える。

魔獣の肉を食べた事で過剰な魔力に侵され、俺の体は変質した。何日も寝込み、大きく健康値が削られた。余剰魔力が体内で結石みたいに固まって、体を圧迫していると診断された。

今度は逆だ、濃密な霧で生命活動さえ危うい程に魔力を奪われ、精神的ショックで何日も寝込んだ。

今や変質した体は元に戻り、凝り固まった魔石から溶け出した魔力が溢れ出している。

魔力値が上がっているのはきつと一時的なもの、溶け出した魔力が無くなったらここまでの数字は出ないはずだ。

「じゃあ、今やるしか無いだろ」

俺は何時の間にか着せられていた、可愛いパジャマを脱ぎ捨て、下着姿でクロウゼットに向き合う。

「全部フリフリしやがって」

可愛いドレスばかりの中から、少しでも動きやすい服を選ぶ。

選んだのは控えめにフリルがひらひらするミニスカート。だが短い分、動きやすいに違いない。

ここ数日、侍女たちに着せ替え人形にされていた記憶が参照権で雪崩れ込む。

ロングスカートの大半は、マトモに動けたものじゃない。

エルフのドレスは大半がロングスカート。それでも纏わりついて動きを阻害する事が少なく、今更ながらに優れた物だと思いついた。

しかしスカートが短ければ、生足を晒して駆けるのか？ 論外だ、下草や枝に足がズタズタに切り裂かれる。

そこでお嬢様らしく、シルクつぽいストッキング。と言うにはちよつと厚めか？ そいつに足を通して完了だ。

部屋の端には元々の旅の荷物が袋一つに纏められている。あれも半分は田中の遺品だ、手放したく無いとギユツと抱えていたのが良かったか。

「自殺行為かな、でも行かないと収まりそうにないんだ、ごめんな」

誰ともなしに謝る、内からこみ上げる感情が、最早制御出来そうに無かったのだ。

「ああ、もう全てを殺したいんだ」

俺の中の誰かが叫んでいた。

止まらぬ獣

「マズイなアレは」

「ここはネルダリア領主、オーズド・ガル・ネルダリアの執務室。そこでカフェルはオーズドと二人、膝を突き合せ、話をしていた。

「無理ありません、故郷を追われ、頼りにしていた護衛まで無残な姿に」

「お前が私に手紙を書いたのもあの位の歳だったか、思う所が有るか？」

「多少は、ですが彼女の心労は私の比では無いでしょう」

話しているのはカフェルがやつとの思いで救い出した一人の少女の事、遠い大森林の奥、魔法を使う異種族の姫。

森に棲む者と恐れられる彼らの事、カフェルも良くは知らない。

だが途轍もない魔法を使い、お伽噺の中では悪魔の様に語られるその実力。何度も帝国の侵攻を防いだと言うだけで、この王国に匹敵する力が有る事は疑いようが無い。

それが敗れた。それで無くてもこここの所、新技術と新しい価値観で帝国の発展は目覚ましい。

今まで小競り合いは数知れず、それでも何百年もギリギリの所で保たれていた薄氷の

二国間のバランスが一気に崩れようとしている。

その時、鍵を握るのは森に棲む者の動向。本当にあのユマ姫が森に棲む者の王族唯一の生き残りと言うのなら、その協力は得難い物になるはずだった。

「そうだ、私が話し掛けても上の空、感情を無くし人形の様、あの様子……心がスツカリ摩耗してしまっている。人間、心だけは一切の取り換えが利かん。なんとか感情を取り戻し、勇ましく帝国と戦うと語って貰わねば、あんな様子の少女に戦争は出来んよ」

「そもそも……戦争をさせるのが無理な話では？　まだ精々が十二、三でしょう」

「解らんで、森に棲む者は長生きと言うし、案外三十を越えているかも知れん」
「まさか」

カフェルは笑うが、脳裏に過るのはタナカと呼ばれる護衛、その死体を見つめる尋常ではない様子。

本当に護衛と同じぐらいの歳頃、三十前後と言う事もあり得るのか？

そんな思いをカフェルは振り払う。

あり得ない。彼女が酒場で話した内容からも、歳は十二。そんな嘘を敢えてつく意味もない。

「どちらにせよ、放心したあの様子、ショックを受けたのは解るが同情だけでは国は動かん」

「あの様子を見て、守ってあげたいと我が王国の民も、森に棲む者の民も思わないでしようか？」

「思うだろうな、だが守りたいのはあの少女だけだ。その為に一致団結して戦争をしようとは思わんよ」

「やはりなりますか？ 戦争に」

「なるな、守るだけのつもりじゃ相手にもならんよ」

カフェルはギリツと歯を噛み締める。

ユマ姫の語る所、彼女は両親も兄も、最愛の妹も殺され。人間に助けを求め人里に向かうも魔獣に襲われ。

逃げ延びた先、頼りにしていた人間の護衛、それすらも無残に殺された。

カフェルは唯一自分を助けてくれたオーズドが、もしあつけなく誰かに殺されたらと思うと、その悲しみの程も解る気がした。

しかし、そのオーズドと運命の歯車は、少女を更なる死が舞う戦場へと引き摺り出そうとしている、それが悔しくてたまらなかつた。

「ではどうします？ 彼女が正気になるまで待ちますか？」

「あの様子では碌に喋れんだろう、いつそ手足を切り落とし、帝国にやられましたと森に棲む者の国に送り返してみるか？」

ここに来てカフェルはため息を漏らす、自らの上司は偶に露悪的な事を言うが、実行出来た試しが無いのだ。

「出来もしない事を言わないで下さい、誰が幼気な少女の手足を切り落とすのですか？私ですか？」

「出来ないと決めつけて貰っちゃ困るな、こう見えて少女に恩を着せ、隣の領主の伽の相手をさせる程度には悪人のつもりだが？」

「はあ……」

そうやっていちいち気にして愚図る所が子供っぽいのだ、だがそれもカフェルは嫌いでは無かった。

オーズドはそれこそ悪戯っ子の様に笑い、問いかける。

「恐らく彼女は大切な物をすべて失った、生きる事も死ぬ事も最早どうでも良くなってしまうっている、それをもう一度正気にするにはどうしたらいいと思う？」

「それは……解りません、私はすんでの所で何も失わずに済んだので」

あなたのお陰です、と言う思いを込めてカフェルはオーズドを見つめるが、当のオーズドはニヤリと笑う。

「どうかな？ 十三の時、君が送って来た手紙にはそれこそ騙されている両親の為と書いて有ったが？」

「それは……ただ結婚相手が嫌なわがまま娘だと思われたくないからです」

「だが、あながち嘘でも無いはずだ。しかし愛していたハズの両親の話など、君から聞いた事も無い」

確かに、とカフェルは思う。あんなに慕っていた両親の事が今では無知で愚かに思え、恥ずかしくてオーズドに両親の話をするのは憚られた。

口に出せば恐らく悪口になってしまふ、だけど両親の悪口をオーズドに話す事にも抵抗を覚え、聞かれても言葉を濁す事が殆どだった。

「人の興味は移り変わる、現に君の興味は私からあの少女に移りつつ有る、違つかね？」
「違わない。カフェルはユマ姫を戦争に引き摺り出そうとするオーズドに不快感を持った。それはオーズドに心酔している自分にはあり得ないはずの事だった。」

「ユマ姫に必要なのは、大切にしたいと思う人間だ。それに君がなりなさい」

「私が……なれるでしょうか？」

「なるんだ、それがきつとこの国と、世界の在り方を守る鍵となる」

カフェルはそう語るオーズドの、上品に整えられた口髭を引つ張つてやりたい衝動に駆られた。

オーズドは自分のツボを心得ている。ただ少女の友達になる事を壮大な任務の様に言う辺り、敵わないと思わされた。

「解りました、今までで一番難しい任務になりそうですね」

「君なら成し遂げられると信じているよ」

コレだ、この優しい笑顔にやられてきたのだとカフェルは苦笑する。

そして、ため息交じりに少女の涙を思い出す。あの心の傷を自分は癒してあげられるのだろうか。

しかしそんな思いを踏みつぶす様に、何時も運命は理不尽だった。

「スイマセン！ オーズド様はいらっしゃいますか？」

ノックもそこそこに慌てた声が執務室に届く。言うまでも無く礼を欠いた行動だが、切迫した声はそれどころじゃない事態を示していた。

「入れ、どうした？」

「失礼します、門番が小さな少女が壁を越えるのを見た」と

「悪戯か？」

「いえ、それが……壁を内から外に越えて行つたと、それもただジャンプしただけに見える」と

「何だと？」

「それで、確認したのですがユマ姫様の姿がありません、ベッドは既に冷たくなっています」

「それを早く言え！ カフェル！ ……もう行つたか」

慌てて飛び出した廊下、オーズドの声は微かにカフェルの耳に届くだけだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

カフェルは走った、それも館一の駿馬を使ってだ。

追うべき少女の足取りは不明、しかし何処を目指しているかは解る気がしていた。

あの谷底、いやひよつとしたらスフィールか？ 何にせよ、来た道を戻るに違いない、

馬車の中ボーツとして碌に景色も見えていなかった様にも見えた。

それでも正確に、来た道を辿って戻る予感がカフェルには有った。

……そして。

「居たっ！」

夜道に輝く魔法の光、そうじゃないかと近づけばやっぱりそうだ。

「ユマ様！ 止まって、一人で行つても何にも出来ません！」

ドレス姿で駆ける少女、その速度は馬の速歩に匹敵する。そして魔法の明かり。

魔法具の明かりかと思えば違う、光っているのは少女自身。人間が光るなど聞いた事

も無い。

これが名高い森に棲む者の魔法なのかと背筋が凍る。

「シノニムですか……」

並走すれば、やっと少女の声が聞けた。

「止まってください、どこへ行くこうと言うのです！」

「スフィールです」

「行つてどうするのです！ この速度で走つても二日は掛かります！」

「そうですか……ではもつと速度を上げないと」

「なっ！」

言うなり少女は更にその速度を上げる、既にそこらの馬の全力疾走に近い速度だ。カフエルは必死に馬を走らせた。

「無駄です！ スフィールではオーズド様の配下とソンテール家以外の四家が協力して動いています、姫様が行かなくてもすぐに全部解決します」

「……そうですか」

「姫様が手を下さなくても、奴らは討たれます。好きにはさせません、安心してください！」

馬上から必死に叫ぶ、しかしその言葉に反応したのは『ユマ姫』では無かった。何処からか聞き慣れない声がある。

「そうかい」

「!? え?」

「でもよ、この手でぶつ殺さないと気が済まねえんだよ」

「……あなたは、誰です?」

カフェルは自分でも間抜けに思う、喋っているのは確かに目の前の少女。しかし違う、これは『ユマ姫』じゃない。

「あーそうだな、魔法つてのは簡単な物でも、同時に二種類使うつてのは出来ねえらしいんだ」

「……………」

「でな、走りたいし暗いしで、二つ使いたいんだが、考えて見りや脳は二つ有る。知ってるか? 右脳と左脳、分かれてるんだぜ」

「何を言っている!?!」

「でも魔法は一個しか使えない、不思議だよな? でよ試してみたんだ」

「何を……あなたは誰なんです?」

「誰つて、俺もユマ姫だよ。あー分離してるから違うかな? 人格を二つに分けたんだ、そしたら魔法も二つ使えた」

違和感、先程からカフェルが果てしなく感じる其れ、コレだけの速度で走りながら息も切らせずに流ちように喋る少女。それだけではない、首から上、まるで切り離された

かのように不自然にこちらを見ている。

まるで、体と頭で違う生き物がくつついた様な奇妙な感覚。

「なんだ……お前は何なんだ？」

「そうだな……敢えて言うなら、『高橋敬一』だ」

「え？ タカハ、え？」

「もう良いだろ？ 俺は殺したいんだ」

「無理！ 無駄ですッ！ たった一人で何をすると言うのです！ 死に行く様な物で

すー」

「だよな、でもよ、俺が殺したいのは『俺も』なんだよ」

「え？」

「じゃあな」

少女は、いや少女の形をした何かは、それから何かを呟くと。更にその速度を上げる。

最早、オーズド自慢の駿馬でも追いつけない、何よりどんな馬でもこんな全力疾走、続けられる筈が無い。

「何が……起こっているの？」

カフェルには理解出来ないが、それでも良くない事が起こっている事だけが解ってしまった。

オーズドは言っていた、人間は心だけは取り換えが利かないと。

確かにその筈だ、けどももしも無理矢理にそれを行ってしまったとしたら？ 今あの少女に入った心は何なのか？

解き放たれてはいけない歪んだ狂獣が、夜明けの街道を駆け抜ける姿。それを呆然と見送る事しか出来なかったのだ。

死を誘う記憶

薄っすらと発光する女の子が、夜明けの草原を疾走する。

客観的に自分を見たら、ちよつとしたホラーに違いない。現に俺を追いかけて来たシノムさんの態度はかなり引き気味だったし、相当不気味に見えた事だろう。

少しづつ日は昇り、明かりの魔法はそろそろ必要ない。

分離した人格も統合するか？ いや……いいか、コレは、コレだけは俺の復讐だ。

精神の分離。

ここに至るまで、俺は多くの人間の記憶と意識を吸収し融合して来た。それでもその主人格が『高橋敬一』だった事は間違いない。

が、田中の死でその高橋敬一の人格が異常をきたし、影響を抑える為に切り離した。

そんな所だろうか？

これまでも精神的なショックを受ける事は多々有った、特に帝国に襲撃され家族を失った衝撃は計り知れない。

あの時は、俺もユマ姫も共にショックを受けた。だけど今回殺されたのは俺の親友、田中だ。

だから俺だけが深く傷つき、俺の人格が隔離された。でも、だからこそ、今回は俺が俺だけで決着を付けなきゃ納得出来ない。

何十年経つても、俺を探してくれていた俺の親友。だから今回は体を貸してくれよ。

『我、望む、疾く我が身を風に運ばん、足運ぶ先に風の祝福を』

俺は殆ど飛ぶように地面を跳ねる。ステップの度に魔力を込める移動とは異なり、常時魔法で加速し、地面に落ちる時には自力で跳ねて浮力を得る。

推進力は全て魔法。速度は出るが、魔力の燃費も健康値の減衰もキツイ移動法、だが今は良い。今だけは良い。

「見えた」

二日は掛かるとは何だったのか？ 夜明けと同時に俺はスフィールに辿り着いた。

普段なら夜明けと共に門は開かれ、夜の間に待機していた旅人や商人が雪崩れ込む時間。

しかし、今は夜が明けたにも関わらず門は閉ざされ、傍に人影も無い。

まるで戦時中、いや正にそうなのか？

門は開かない、何とか魔法を駆使してあの高い壁を越えるか？

いや、その必要は無い。

ライル少年の記憶には、中への抜け道。地下水路への記憶があった。

記憶の中、スフィールの地下は大人には入り込めない、少年の庭だった。

スフィールの北側に回り込めば、フィーナス川から引き込んだ水路、それが壁の中へと引き込まれる場所に、少年の記憶と違わぬ水路管理用の通路があった。

その通路は金属柵で遮られ、取り付けられた扉には南京錠が掛けられ封じられているが、金属柵の隙間は大きい。開けずともライル少年に近いユマ姫の体格なら、問題もなく滑り込める。

俺は薄暗い地下道へとその身を滑り込ませた。

薄暗い地下道、そこを強烈な光球を放ちながら進む。

始めは両手が使え制御が楽な自発光の魔法を使っていたが、滅茶苦茶に虫にたかられ諦めた。今は大光量を遠くに置いて虫を遠ざけている。

「臭いな」

地下水道は上水道だけでなく、下水道もある。中世ヨーロッパには下水道が整備されておらず臭かったと聞いた事が有るが、スフィールでは下水道が整っている。

スフィールの図書館で読んだ本の知識によれば、スフィールは元より帝国へ睨みを効かせる最前線の都市として設計されており、計画的な上下水道の整備から街作りが始まったと書いてあった。

しかし、少年の記憶よりも現在の下水道は数段汚い。ゴミで堰き止められた水が脇の

通路まで溢れる場所も多々あった。

当時からずさんな管理だったが、今はまるで手付かずの様に見えた。

「一体全体、どういう管理をしているんだか」

地上に上がるには水路の管理室、その横を通らなくてはならない。ライル少年の姿ならともかく、ドレス姿の少女が下水道に一人。見つかつてしまえばこれ以上ない程に怪しまれるだろう。

だが、これだけ不真面目な管理なら、管理室に誰も居なくても驚かない、俺は管理室の横を素早く駆け抜け……

「血の臭い?」

下水の臭いにも負けない程の濃厚な錆臭さ。なんだこれは? 何人死んでる?

俺はそつと管理室の扉を開ける。管理室と言っても、少年の知識ではただ寝床と掃除用具が有るだけのハズ。

それがどうだ、乱雑に転がるのは手錠、剣、怪しげな薬、それに何より。

「ひでえ有様だな」

斬殺された死体が三つ。皆、袈裟懸けに一斬りで終わらせている。良い腕してるぜ、街のチンピラじゃこうは行かないだろう。

——!?

その時ガタンと奥の部屋から物音がする。

やはり居たか、俺の偶然が厄介事から逃してくれるハズが無い。下手したら後ろから斬りかかられる。

だからもう逃げるのは辞めだ、怪しいと思ったら目につく限り殺しに行く。

グチャグチャに、そう田中の死体より無残に切り刻んでやる。

『我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ』

『我、望む、この手より放たれたる風の轟音よ』

可愛らしいユマちゃんの声と、冷めた俺の声。ユマちゃんの人格と、切り離された高橋敬一の人格、その二つがそれぞれに呪文を唱え、両手に白と緑の魔法が灯る。

その二つの光球を、格子から扉の向こうへと投げ込んだ。

——バァン！

「グギャァー！」

光と爆音のスタングレネード。

光の魔法はあるし、爆音と衝撃は風の魔法で作れる。ずっと作りたいたいと思っていた魔法だが、どうしても光と風を一つの魔法に纏める事が出来なかった。

それも魔法を二つ使えるなら解決だ。

音も光も物理現象として発現すれば健康値で消される事も無い。じゃあ風の刃も物

理現象と言われそうだが、あれは空気を圧縮する魔力が霧散すれば、スグにただのその風になってしまふ。

今回の魔法も、投げ込んだ発動体が人間に余りに近いと、健康値で消されてしまう訳だが、それならそれで中に人間が居る証拠とも言える。

今回は思った通りに発動し、その効果を發揮してくれた訳だが。

そうして扉を開け放ち、中へと滑り込む。片手には拾った剣、王宮を脱出する際には使ったが、あんなのはただ雑に振り回しただけ。

もしあの悲鳴がブラフで、斬り殺した犯人が魔法に怯まず潜んでいるのなら、俺なんぞ相手にもならないだろう。

しかしその心配も無用で、部屋の中、開け放たれた檻の向こうで男が一人、のた打ち回るだけだった。

「目があー！ 痛てええええええ」

檻の向こうに踏み込み、転げる相手の背中を踏みつけ首筋に剣を突き付ける。

「お前らは何だ？ 何があった」

「知らねえ！ 俺は何も見てねえ！ ……え？ あ？ 子供の声？」

「何があった？ 言えっ！」

高橋敬一の気持でも体は少女、努めて冷たく低い声を出すも、所詮は少女の声。脅し

には全く向かないのだ。

「いえ、あの、昨日、グプロス卿の騎士がやって来て全員殺して行きやがった、です」
「そうか、それでお前らは何だ？　ここで何をしている」

「俺らは奴隷商だ、でも、でも俺らは領主様の許可を受け、誠実に商売してるって聞いて。なのにあいつら関係者は消すって」

「へえ」

「俺は怖くて、ずっと檻の中に閉じこもっていたんだ、外には誰も居ないのか？」

「ちっー！」

グプロス卿は今までの反社会との繋がりを全部清算して、どこかに引き籠るつもりだ。

ここは、攫った人間をほとぼりが冷めるまで隠しておく場所らしい。

奴隷商と言うがコイツ等の実態は人攫い、立派な犯罪者だ。領主の座を失えばすぐ露見して罪に問われると言う判断だろう。

そしてこいつだけは檻の中で身を隠し、難を逃れたに違いない。

「外で三人死んでるが、お前を合わせて四人、これで全員か？」

「うぐつ、そうだ、おっさんに同僚の二人、全員だ」

そうか、精々が四、五人の組織だった訳か。拍子抜けだな。

「肝心の奴隷は居ないのか？」

「居たけど持つてかれちまったよ」

「そりやそうか」

奴隷を解放するにしても、利用するにしても、そのままにするハズが無い。

いや、ここから運び出された後で口封じに殺された可能性も有るか？

「なあ嬢ちゃん、この事を衛兵達に知らせてくれよ。俺はもうスツカリ改心したんだ。それにこのままじゃ、持つて行かれた奴隷だつてどうなるか解らねえ」

「人攫いが売られる奴隷の心配か？ 笑えるな」

「今だ目も見えていないだろうに、踏まれたままの人攫いの男がそんな事を頼んでくるのが意外に過ぎた。」

「笑えよ！ でもよ、仲良くなっちゃまったから仕方ねえだろ。そうだ！ 北門の衛兵隊

長は堅物だつて聞かぜ、アイツに助けを求めてくれ」

……北門の、ヤツガランさんか。

死んだよ。堅物でいい人だからな、ライル少年への贖罪の思いを抱えて死んだ。

他人に入れ込む人間は死ぬ様に出来ている、奴隷を心配するコイツもきつと死が近い。

「お前……奴隷商には向いて無いな」

「そうだよ！ 人攫いだけだよ、表向きは下水の掃除業者って看板なんだ。俺はそっちの方の人員なんだよ！ なのに人手不足だとコッチの仕事に駆り出しやがって、あげくこの様だ！」

なるほど、この男は組織の下っ端、掃除要員って訳だ。だからヤツガランさんが死んだ事すら知らねえのか。

それにしても、人攫いにここまで同情される奴隷って何なんだ？ 『偶然』から生き延びる為にも知りたいもんだね。

「お前の頼みのヤツガラン隊長は平原で死んでいる、残念だったな」

「え？ そうなのか？ じゃあズーラーさんが殺したってのがそうか？ じゃあ北門の奴ら、余計にグプロスの野郎に怒り心頭のハズだぜ、北門の奴らは結束が固いんだ」

「そうか……」

話してみるのもありか？ いや、コレは俺の復讐だ。城に一人で飛び込むなんて自殺行為だろうが、でもいつそそれで良いと思っていた。

ユマ姫には悪いが俺がこのまま生きていても、助けに来てくれた周りを巻き込み殺すだけ。いつそこで当たって砕けたって良いんじゃないか？

そんな風に思った時だ。

「——うぐっ」

頭に鈍痛、これは無理に人格を分離させた副作用か？ それともユマ姫の抵抗か？

ユマにしてみれば自分の体だ、怒ったとしても無理はない。死にたがりは許せないつて事だろう。だとすれば、やはり北門に助けを求めるか？

いやいや、北門の人間はそれこそ、俺さえ居なければヤツガランさんが死ななかつたと恨んでいるに違いない。

でも、ダメ元でグプロス卿が北門から出ない様に頼んでみるか？ ここを片づけたつて事はグプロス卿は脱出まで秒読みかも知れない。

クソツ考えが纏まらない。

そうして頭を抱える俺に、いよいよ視力が回復した男が、足の下から声を掛けて来る。

「オイ、ひよつとしてお前、あのユマ姫つて森に棲サむ者バか？ なぜこんな所にいる？」

そうだ、どつちにしろコイツは始末しないと、こんな所で変な足がついたら笑えない。

「オイ！ なんだ!! 止めろ!」

男が必死に叫ぶが、俺は何の感情も無く、ただ作業の様に剣を振りかざし……

「グツ!」

また頭痛、しかも今度は大きい。

——ふざけるな！ 邪魔するんじゃない！

心の中で叫ぶがどうにもならない。

「うわっ！ うわあああああ」

その隙に男が足元から抜け出し、叫びながら外へと逃げて行く。

クソッ、なんだってんだ、制御出来ない人格が、殺しに抵抗してるのか？ いやいや、今までだって平気で殺して来たじゃないか。今更なんだってんだ？

主人格として『高橋敬一』が統合してきたが、それが分離し、却って制御が効かないのか？

だとしたらマズイ、俺はグプロスもその部下も、帝国情報部とか言う連中もこの手でぶっ殺したいのだ。

樽に入った短槍を一本抜き取り、構え、俺は想像する。

グプロス卿をぶっ殺し槍で串刺しにする様を。そしてその部下や帝国の奴らも妄想の中でどんどん突き殺す。

……何の嫌悪感も抱かない。

参照権で過去の殺人の記憶を見ても同じ、さっきの頭痛は何だったんだ？

訳が解らない思いを抱えながらも、槍を片手に逃げた男の後を追って地下道を抜ける。

地下道を抜けた先は北門の内側、初めて来た時にライル少年の記憶を見たあのゲイル広場、その端っこだ。

「どうする？ 北門か？ 真っ直ぐ城に行くか？」

俺の呟きは風に消える。人通りが多かった広場に、今は誰も居ない。店も家も戸を閉め切って正に戦時中の様相だ。

となれば城は守りを固められている、一人ではどうにもならない可能性が高い。

「北門か……」

逃げた男の動向によつては衛兵達まで敵に回る、俺はゲイル広場を速足で突つ切る。

……その途中だ。

ガラガラと音がする、馬車の音だ。静かな街並みで車輪の音だけが迫つて来る。

逃げるには遅い、北門は既に閉め切られている。

どんな間抜けか振り向こうとした、なのに……

「えっ？」

体が……動かない、その間に馬車の音は間近に迫り、地響きすらも感じる程。

その音で思い出す、ライル少年の最期の記憶。時刻こそもつと早い時間だが、人通りの無いゲイル広場の景色がピタリと重なる。

恐怖だ、今の俺なら馬車なんぞ怖くない、魔法でどうとでもなる。なのに体が動かない。

俺の中から切り離されたライル少年が、恐怖で体を硬直させている。

「ママ……」

何処からか少年の声が聞こえる。

いや、喋っているのは俺だ、口が勝手に少年の言葉を発していた。

不味い！ 思えば俺は記憶に引つ張られ、何度も死に掛けている。平和な街の中、ライル少年の記憶だけは無害だったが、この重要な場面で体が言う事を聞いてくれない。

ライル少年の恐怖が体を支配する、角を曲がりいよいよ馬車が姿を現す。

「あつああー！」

ライル少年の恐怖が切り離された俺に伝わり口をつく、現れたその馬車は、あの日と全く同じに広場に姿を現した。

そう、グプロス卿の馬車だ。緑地に派手な彫金が施された大型馬車、見間違うハズが無い。そして体は益々硬直する。

広場の真ん中で呆然と陣取る俺へ、迫り来る馬車の御者が大声を張り上げる。

「どけ！ どかねえと轢き殺すぞ！」

それでも体が動かない。

「ヤツガラン兄ちゃん……」

何時も助けてくれる頼れる兄貴分。

少年は死ぬ間際にその名前を呼んでいた、そして今回も。

でも、助けは来ないのだ。彼はゼスリード平原で死んでいる。
死を誘う記憶が、呪いの様に体を支配していた。

偶然に抗う縁

ガラガラと轟音を響かせ、大きな馬車がこちらに向かつて来る。

四頭立ての豪華な馬車、緑の車体は金の装飾も煌びやかで、淡い朝の日差しの中で強烈に主張していた。

間違いない、グプロス卿の馬車だ！ なぜ卿の馬車が門へと爆走しているのか？

決まってる！ この街から脱出する気だ。

閉めきられた門、人気のない街。明らかに非常事態宣言の最中。

シノニムさんの裏切りで数々の悪事が露見するのは時間の問題。まして罪状が帝国への寝返りと来れば、自害で済めば温すぎる。恐らくは一族郎党が断頭台送りに違いない。

てつきり籠城するつもりかと思つたが、何らかの事情でそうも行かなくなり、兵に囲まれる前に逃げを打つたと言つた所か。

絶好のチャンス！ 狙うべき相手が向こうから来てくれた。

しかしその幸運に歓喜するどころか、俺は追い詰められ、浅い呼吸を繰り返すだけ。

——体が！ 動かない！

同じ広場、同じ馬車に轢かれ、ライル少年は死んだ。

その死の記憶に引きずられる様に、当時のライル少年同様、恐怖に体が固まって動かない！

パルメスの記憶から蛙の幻影を追って湖で溺れた時は、御側付きのピラリスが居た。シルフ少年の記憶で、薬草の幻に足を踏み外そうとした時は、妹のセレナが助けてくれた。

成人の儀の祠では、プリルラ先生の死の間際の記憶で頭を抱える俺に、田中が声を掛けてくれた。

考えてみれば今まで俺は、一人で記憶がもたらす死から逃れられた事は無い。全部、周りの人間が助けてくれたんだ。

何故、記憶から来る死が危険なのか？

普段なら『偶然』が死を運んで来ても、死なない様にと神が定めた運命が死を遠ざけてくれる。

だけど、死の記憶が現実と重なる時。かつての死を今の運命に重ね合わせ、運命すらも俺を死へと誘導する。

『偶然』と『運命』

その両方を敵に回し、俺の死へと事象が収束していく。

記憶の中の馬車と現実の馬車は今やぴったりと重なり、轟音と死を運んでくる。

恐怖で固まったライル少年は、轢き殺されて死ぬその瞬間まで、一步も動けず、自分を轢き殺す馬車を呆然と見ていた。

だから自分が死んだ直接の要因を知っているし、俺の唯一自由になる目線は石畳のその一点から離せない。

轍だ、往来激しい広場、どんなに固い石畳でも、人や馬車の通り道だけがすり減って溝を生む。

この轍にライル少年は殺された。轍で跳ね上がった馬車に無惨に踏み潰されたのだ。

そして三十年の年月が経ち、新しく交換された石畳。しかし再び同じ場所に轍が刻み込まれていた。

その事実にはゾクリと背筋が凍るが、死の宣告は確実に履行されて行く。

「どけえ！ どけえ！ 道を開けろー」

御者の叫び声、あの時のライル少年にも御者の叫びはハッキリと聞こえていた。

御者はあの時とは全くの別人、だが叫ばれた言葉は全く同じ。

コレだけのスピードだ、平民を避ける為、事故を起こしたとなれば責任問題。怒鳴つてどかせるのが普通だが、相手がショックで動けないと見るや、慌てて御者は馬車の制

御を試みる。

あの時も、そして今この瞬間も。

だが、ぐいつと引かれた手綱も虚しく、石畳に彫られた轍わだちがジャンプ台の様に車輪を浮かせた。

超重量の馬車、その腹となる底板が見上げた視界一杯に広がり、猛烈に空転する車輪が目前へと迫り押し掛かる。

——グチャリ

自分がミンチへ変わるその音が、少年の最期で、そして俺の最期でもあるはずだった。

……だが。

「なん……で？」

いつの間にか、目を瞑り、蹲っていた俺が恐々と目を開けた先には横転した馬車、そして嘶く四頭の馬。

——ゴロゴロゴロゴロ、……カラン。

転がった末、壁へと衝突し、乾いた音と共に石畳へ倒れたのは木製の馬車の車輪、その片割れだ。

思えば轍を踏んだ瞬間、ガコンと何かが外れる音がして、馬車の姿が二重にブレて見えた。

無残に俺を轢き殺した馬車と車輪はライル少年の見た記憶が生んだ幻影。本当の車輪は轍の衝撃に耐えきれず馬車から外れ、その馬車は無残に横転した。

「ありえぬええ！」

何たる偶然、何たる幸運と快哉を叫ぶ気になれない。

『偶然』は常に俺を殺しに来ていたハズだ、ここぞと言う場面でデレるなどあり得ない。

だったら何が？ 何が俺を守ってくれたんだ？

そんな俺の逡巡^{しゆんじゆん}は、横転した馬車の窓から這い出す人物を見た瞬間掻き消えた。

「ロゴス！ ロゴス！ どうした？ 何が起こった！」

でっぷりした腹に豪華な服、愚鈍な様子で窓から這い出すと、バランスを崩し無様に地面に転がった。

グプロス卿、その人に間違いない。

俺は杖代わりになっていた槍を手に取り、一目散に駆け寄つ……れなかった。

「グッ」

槍が異様に重い。杖代わりに地面に立てていたから気が付かなかつたが、穂先に重量の有る何かが突き刺さっていた。

「ゲエッ」

死体だ、立てかけられた穂先に貫かれ、恐らく即死。参照権で確認するに、馬車の御者に違いなく、横転する馬車から投げ出され、俺の槍の穂先に偶然に飛び込んで死んだ訳だ。

……いや、ただの偶然じゃない、これも俺の『偶然』だ。

もし俺が槍を杖代わりにして蹲っていなければ、吹っ飛ばされた御者は俺を巻き込んでいただろう。

少なく見積もっても60kgは有る御者の体が直撃すれば、40kgも無いだろう俺の体は無事では済まない。下手をすれば……いや多分下手をして死ぬ様に吹っ飛ばされたのだ。『偶然』に。

だとすれば、『偶然』はやはりいまだ俺を狙っている。

そして、地下室で何気なく手に取ったこの槍が、俺を守ってくれたのだ。

俺は今更に、手に取った槍をジツと見る。

「そっか、そう言う事か」

やはり俺は守られていた。俺は穂先から死体を外し、かつて教えられた様に腰だめに槍を構える。

「ヒッ！ ヒー！」

その様子を見たグプロス卿は、腰が抜けたように後ずさる。そのあんまりな様子に思

わず笑つてしまう。

「なんだよつれないな、あんなに熱っぽい視線で見えていたくせに」

よく見れば俺の体は血塗れちまみでこれでは恐怖するのも仕方が無い。どうやら御者の血を全身に浴びたらしい。記憶の中の死の幻影に怯え、そんな事すら気が付かなかつた。

ようやく色と臭いを取り戻した世界で、最早恐怖も震えも無く、軽やかに足が動いた。

「や、ヤメツ！」

グプロス卿の叫びも気にならないし、まして魔法なんて必要も無い。気負いも無く、習った通りに体が動く。

——下段の構え。

本当は脚を払って転がった相手を突く型だが、既に転がった相手にも勿論有効だ。

「イヤアア！」

練習通りの掛け声、そして踏み込みと共に突き出された槍は、真つ直ぐにグプロス卿の心臓を捉えていた。

「練習通りに出来たよ、ヤツガランさん」

更に血に塗れた槍を見て、俺は笑う。

この短槍は、まだ見習いだったヤツガランさんが好んで使っていた物だった。

ライル少年が槍に悪戯し、こつびどく怒られた。その時の傷が残っているのだ。

隊長になったヤツガランさんは、もつと別の立派な槍を持つていたが、この槍は後輩へと大事に受け継がれていたに違いない。

だけど、きつと受け継がれた誰かはゼスリード平原で死んだ。

犯罪組織の連中が死体を漁るのはよくある事、なんの因果か、それこそ運命か。俺の手に収まり、そして俺を守ってくれた訳だ。

「しかし、結局ライル少年に仇を取られちまったな、いや……その心配は無いか」

幻影に怯え気が付かなかったが、馬車が横転する音や馬の嘶きは、衆目を集めるに十分な騒音を発したらしい。

固く閉ざされていた窓からこちらを窺う無数の視線を感じる。怯えた市民が遠巻きにコチラを窺っているのだ。

あまりに目立ち過ぎた。

北門から衛兵達が飛び出してこないのが不思議なぐらい。

いや、その理由はスグに解った。もつと厄介な連中がゲイル広場へと飛び込んでくる。

スフィールの領主グロス卿が、たった一人で逃げ出す訳がない。

馬蹄を響かせ駆け付けたのは、騎士鎧に身を包んだ男達だった。

「あーあ、隊長！ 見て下さいよ。あんなにスピードを出すから、転がっちゃってます

よ」

「しかも止めまで刺されて、ツイて無いですなー、僕らと違って♪」

「えー？ でも俺らもヤバく無いスカ？ グプロス卿死んじやって、どうします？」

騎士姿に似合わぬ軽い調子でニヤニヤと笑う男達、その数は五騎。どれも立派な鎧に反して、一見してロクでも無い人間だと解る。

現にアレだけあつた窓から窺う視線が、騎士たちを確認するに再びピシヤリと閉められた。

騎士達は馬上のまま、遠巻きに俺の周囲をグルグルと周り、ニヤニヤと笑う。

「いやいや、この娘でしょ？ グプロス卿と帝国が狙っていたって森に棲む者の姫って、帝国に逃げるならサイコーのお土産でしょうが。あんなオツサンの元で腐るよりよっぽどオイシイ展開ですよ」

「ええっ!? 森に棲む者ってヤバく無いですか？ 帝国兵百人からを返り討ちにしたんでしょ、ヤーバイツスよお」

「生け捕りにしようとするからですって、なんでも死に掛けの人間でも、魔法で治せるらしいですよ？ 手足の一本や二本千切ってしまいなさいな、僕たちの得意分野でしょう」

「俺、いっつも殺しちゃうんですよねー、死んだら流石にマズイでしょ？」

「うーん、それでも手ぶらよりは良いんじゃないですか？」

「それもそつスねー」

馬鹿な会話だ、だがその間も馬の脚を止めず、一切の隙が無い。態度に反してかなりの腕と思つて間違いない。

加えて、その数も五騎では済まなかつた。気が付けば取り囲む騎士以外にもゾロゾロと十五騎、合計二十セットの人馬がゲイル広場を占拠していた。

……コイツがひよつとして破戒騎士団か？

「マズイ……な」

いよいよ出て来やがつた！ しかも最悪のタイミングで！

馬は人間以上の健康値の塊だ。今の魔力値なら大抵の人間の健康値なら突き破つて魔法で攻撃出来るはずだが、馬が相手ではそうも行かない。

城に忍び込めば人間が密集し陣を組む事も無く、狭い通路でなら人間を幾らでも殺せると思つていたし、それが勝算だつたと言つて良い。

しかし、相手が馬ではズーラー相手にやって見せた様に、高速移動で体ごと槍で突っ込むしかない。

アレだつて逃げる相手だから上手く行つたに過ぎない。

騎士相手に同じ事をやったなら、突っ込む勢いのままに串刺しになるのは、俺の方になるに違い無いのだ。

再び俺は動けなくなつた。

先程と違い、恐怖に身が竦んだ訳では無い。

ゆっくりと包囲を狭める騎士をどうするか？　俺には何一つ思いつかなかつたから
だつた。

破戒騎士団

二十からの騎馬が遠巻きに俺を取り囲み、徐々にその包囲を縮めていた。

「ローグ隊長！ この娘、カワイイじゃないツスカ？ 何とか無傷で確保出来ないツスカね？」

「いえ、止めておきましょう。衛兵だけでなく四貴族家も動いています、時間が惜しい」
軽口を叩きながらも、動きに油断は見られない。装備も衛兵のモノとはレベルが違う。

——破戒騎士団。

あの、田中が生前アレほど警戒していた連中に間違いない。

目の前に現れたというそれだけで、コイツらの強さが良く解る。

隣領のネルダリアの諜報部はこの日の為に入念な準備を重ねていたと聞いている。

グプロス卿以外の四つの貴族家は裏切り、衛兵達もクーデターに参加した。

城へ兵を手引きするなど簡単だろう。なんせシノニムさんがスフィール城の雑事を取り仕切っていたのだ、城内は諜報員だらけに違いない。

『わざわざ手を出さないでも全部解決する』

シノニムさんがそう思うのも当然だ。

だが、実際にはグプロス卿は悠々と脱出し、城からは混乱の気配だけが伝わってくる。これほどの騒ぎだというのに、衛兵達が追いかけてくる様子も無い。

その意味するところは一つ。

城内で取り囲まれた状態から、彼らは堂々と真つ正面からグプロス卿を助け出した。

貴族家の戦力と衛兵の数を考えれば、クーデターに参加者は百は下らないハズ。それどころか二百、三百だったとしても驚かない。

対して破戒騎士団はたったの二十と言っていた。

そして目に見える数も二十。つまりは全くの無傷で押し通ったと言う事。

今も小娘一人だと言うのに、包囲に一切の油断が無かった。ゆつたりと馬を歩かせながら、徐々に収縮させていく。

俺は早鐘を打つ鼓動を持って余しながらも、ゆつくりとソレを目で追った。コイツらがいっつ突撃してくるかも解らない状況。

ローグと呼ばれた隊長騎がゆつくりと足を止める。そうして訪れた静寂、突撃の瞬間とき！
今だ！

「降参します！」

俺は澄ました顔で悪びれも無く言い放った。

手放した槍がカランと石畳に転がると共に、俺はゆっくり両手を挙げる。

虚を突かれた騎士達が顔を見合わせるのが解った。

俺の姿は血に塗れているし、悪鬼のような形相でグプロス卿を刺殺したのも見られている。今更に降伏などと言う話。

それでも俺を無傷で捉えたいと言う欲が、少しでもあつたら悩むハズ。なんせ、俺の見た目はただの少女に過ぎないからだ。かといって、俺をバケモノと警戒する理性もある。

どうする？ と騎士団の視線が交錯していた。

そうして様子見とばかり、一人の騎士がコチラに踏み出そうするのだが……その前に俺は動いた。

血塗れの顔を上げ、馬上のローグ隊長を真っ直ぐと見つめる。

目が合うと同時に、俺はニッコリとよそ行きの笑顔をふりまいた。余りに場違いな、柔らかな表情。

瞬間、騎士達の思考が凍るのが解った。

こうなればコイツらは、もう俺から目を離せない！

高く挙げた俺の両手から、白と緑の珠がコロリと転がる。

「魔法です！」

我に返った隊長が叫ぶが遅い！ 風と光、二種類の魔法を含んだスタングレネードが炸裂する。

——ドオオオオオン！

激しい衝撃、爆音、そして閃光！

こんなモノを馬上で食らえばどうなるか？

馬たちは暴れ背中から騎士達を振り落としていく。一瞬でゲイル広場は馬の嘶きと騎士達の怒号、悲鳴が重奏する地獄と化した。

対して俺は瞬間、耳を塞ぎ、目を瞑った。頭を揺さぶられフラつくが、最もダメージが少ないのは間違い無い。

カッと見開いた視界の先。しかし棹立ちになる馬を制御し、一人馬上のままに居られた男が一人。

隊長のローグだった。

恐らくローグは魔法に気付くや声を上げ、同時に目を瞑り、両手で顔を庇ったに違いない。

全くの初見だぞ？ コイツは危険だ！ 他の誰よりも！

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

槍を拾い、魔法を唱える。ズーラーを殺った時と一緒、移動の魔法で駆け抜けて、勢いのままに串刺しにする！

溢れる魔力値をつぎ込み、踏み込む。

瞬間、未知の加速が景色を後方へ押し流し、槍の穂先がローグ隊長へと吸い込まれていく。

殺とった！

——ギイイイイン

金属がこすれる音。まさか？ 防がれた？ あの速度を！

「なっ!？」

「ふふ、甘いですよ」

俺が呆然と見上げる先、馬上のローグは笑っていた。

俺は、動けない！ 逸らされた穂先は深々と馬の腹へとめり込んでいたからだ。

——シュン！

立っていた場所を剣閃が通過する。音だけで伝わる鋭さだった。

だが俺は既に槍から手を放し、ゴロリと石畳を転がって馬の腹下を潜り抜けていた。

殆ど反射の行動、それでも紙一重の回避となった。

だけど、これで包囲から抜け出した！

駆けだして馬の下から脱出すると同時に、悲痛な馬の嘶きと、背後で大質量が立ち上がる気配を感じた。ようやく腹を貫かれた痛みに気が付いたとばかり、馬が暴れ出したに違いない。

さしものローグもこれで落馬は免れないだろう……

だが、首筋にチリリと痛みが走る。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

焦燥に焼かれ、魔法で再びの加速！ 殆ど同時にギインと金属音が響いた。

慌てて振り返る先、俺が居た場所に蹲るローグが居た。

暴れる馬の勢いに任せ、三メートル以上の距離を飛び込んで来た。どこまでも人間離れした技術と判断。

しかし、馬も無くては俺の速度に追いつくことは不可能だった。追撃の様子も無い。ひとまず安全圏まで逃げた俺は、ローグの戦闘力に死んだ親友を思い出し歯噛みする。

アイツ！ 人間離れしてる！ 田中みたいに！

そう思うと、胸を締め付けられる思いだった。アイツは別にチート主人公じゃ無かつ

たんだ、探せば同じレベルの強さの人間だつて居る程度。

アイツ自身がそう言つてたじゃ無いか、なのに俺はそれを内心では信じず、アイツに頼り切つて、そして殺してしまつた。

——アイツらは田中が恐れる程に強い。本当に。

歯噛みする思いだが、気持ちを切り替えた。確かに敵は強い、だからその分殺し甲斐がある。そうだろ？

思いがけない幸運から、目の前に転がつて来たグプロス卿をこの手で突き殺した。だがアツサリ過ぎて消化不良も甚だしかつた。

グプロス卿が逃げるほどに蜂起が進行しているなら、もう一つの仇、帝国情報部とか言う奴らが居残つている望みは殆ど無いだろう。

じゃあ、もう残つてるのはコイツらの始末ぐらいだ。

——殺したい。

浅く息を吐き、呼吸を整える。

相手は騎士、その高い実力も確認済み。まして直接の仇では無いぞ、と自分に言い聞かせる。

——それでも殺したい。

やっぱりね、冷静になつたつて殺したい。

胸の奥から黒い靄の様な殺意が沸き上がり、吐き出された吐息さえ黒く幻視する程に膨れ上がっていた。

そしてそれを止める様に、首筋をチクチクと刺すような痛みが続いた。運命の警告だ、運命に逆らい寿命を削る様な行いを咎めているのだ。

なるほど、殺意に飲まれ殺し殺されの舞台に上がったら。死なない筈の運命を持つていたとしても、何かの拍子に死ぬ公算は高くなる。

まして俺には死を呼ぶ『偶然』がある。なるほど確かに、なるべく憎まず、誰も殺さず。石の様に生きた方が長生きできる事だろう。

でもな、そんな風に生きたつて、喜ぶのは神だけだ。十六歳を超えて生き、『偶然』に立ち向かう。そんな目標は既に無い。

踊つてやるよ『偶然』と、舞台の上でなるべく多くの死をばら撒いて散つてやる。

だったらやる事は一つ、武器だ！相手の剣技に付き合わず、間合い外から魔法を載せて殺せる武器、弓が要る！

今回は武器屋での買物なんて必要ない、俺は手っ取り早く北門の詰め所に忍び込んだ。

前借りの代償

北門の詰め所に辿り付く。以前に人攫いを搬送した時と違い、建物は火が消えたように静まり返っていた。

魔法を使えば忍び込むのは難しくもない。開け放たれた二階の窓に飛び込み、ライル少年の記憶を頼りに忍び込んだ武器庫の中、壁に掛けられた弓を取る。

大きい！ 俗に言うロングボウ、張力も強く引けるかどうかも解らない。

だが引く！ 引ける気がする。『高橋敬一』の意識が分離してから、なんだか体が軽い気がするのだ、その証拠に夜通し走っても息一つ切れていない。

弓の様子を確かめ、矢を物色し終えると、にわか詰所が騒がしくなる。

聞こえて来たのは切迫した衛兵達の声だった。俺は立て掛けられた武器の影、部屋の隅に身を隠す。

「何だつてんだ？ 一斉蜂起とやらは成功したのかよ？」

「どうやら別件だ、清掃員のミダナンが駆け込んで来た。清掃業と言いながら裏では色々とやっていたらしいぜ」

「あのミダナンが？ 冗談キツイぜ」

「ミダナン以外が、らしい。清掃業社と偽って、地下の管理室を根城にしてたとか」
「おいおい、マジか？」

「中々捕まらねえ訳だぜ、地下道を使えば街中どこでも逃げられる、いや街の外へもか」
「で、今からそいつらをとつちめに行くって訳か？」

「いや、そいつらが全員殺されたらしい」

「は？」

「考えてみるよ、清掃業務を上から請け負ってた奴らだぜ？ 悪の秘密結社はグブロス卿とズブズブだったんだよ」

「え？ あ？ なんで？ じゃあ蜂起に巻き込まれて殺されたのか？」

「馬鹿ツ！ グブロス卿にだよ！ 俺達にも蜂起とか革命って話が聞こえてくる位ケツに火が着いてるんだ、この街から逃げ出す前にと片づけられたんだよ」

「清掃業だけに綺麗に一掃されたってか？」

「笑えねえよ」

そんな事を言いながら、幾つかの武器を纏めて担ぎ、部屋を出て行く。

事情は知れた、逃がしてしまつたアイツが北門に駆け込んで、衛兵達が動き出す。

スタングレネードで混乱していた破戒騎士団だが部隊を整え次第、北門を通ろうとするだろう。衛兵達と鉢合わせになる公算はデカイ、どうやら面白い事になりそうだった

「？」

「チツ……」

口からでまかせ……の割に、実際に俺は下水から入ってきたので当たらずも遠からず。

いや、それにしても破戒騎士団が下水の抜け穴を知っているのは意外だな……そうか！ 管理室の死体。人攫い達を始末したのもコイツらか！

北門の衛兵達は隊長であるヤツガランさんがグプロス卿配下のズーラーに殺されたばかり、それでも唯一クーデターに参加していない辺り、部隊の損耗が激しいに違いない。

グプロス卿への怒りはあるが、相手は精強で知られる騎士団だ、抵抗など出来るはずも無い。更によえば、騎士団は直接の仇でも何でも無いのだ。

渋々と言った様子で開門作業を始めようとノロノロと動き出す。

今だ！

「いぎげんよう、みなさん」

俺は北門二階の窓べり、張り出した庇ひさしの上に立ち、優雅に声を掛ける。

ザワザワと混乱する衛兵と騎士達を上から見下ろす。こういう場面は上からの登場が鉄則だ。

「ここぞのタイミング、魔法まで使って音も無く跳び移った。

だと言うのに破戒騎士団のローグ隊長だけは驚く様子も無く俺を指差す。

「ああ、皆さん彼女がグプロス卿殺しの犯人です、見た目に惑わされぬ様。森に棲む者の魔法を使いますから」

余裕綽々の態度が気に食わないが、言っている事は事実だし、認めるのもやぶさかじゃない。

「ええ、私はグプロスを殺しました」

俺は高らかに宣言する。

「でも、それは死んだヤツガランさんの仇討ちです」

俺の言葉に衛兵達はざわめく、ヤツガランさんは良い隊長だったに違いない。半分のいや大半は田中の弔い合戦のつもりだが、ヤツガランさんの為と言うのも全くの嘘じゃない。

「そして、復讐はまだ終わっていません、グプロス卿の悪事を陰で支えて来たのが破戒騎士団なのですから」

この俺の一言で一気に潮目が変わった、衛兵達は騎士団に向き直る。先程の武器庫から運び出したであろう槍を手に手に構える。

騎士たちは慌てて口々に弁解する。

「馬鹿な事を言わないで下さい、森に棲む者ですよ？ 元々こうやってスフィールを引つ掻き回すのが目的だったのです。それをまあ、まんまと引つかかってくれちゃつて」

「バツカだよなあ、森に棲む者の脅威を訴えるグプロス卿が邪魔だったんだよ、物の見事に排除完了つて訳、いい面の皮だよアンタ達」

が、潮流は変わらない。衛兵達はいまだ騎士達に身構えたまま。ここでダメ押しとばかりに話を振ろうとした相手が先んじて声を上げた。

「あつー！ ああつー！」

下水道の管理室。俺が見逃した人攫いの一味の男だった。

死体転がる下水道へ案内するため、彼が衛兵を連れ立って北門を出る。そのタイミングこそ俺が狙った好機。

「どうです？ 彼らの声。あなたの仲間を殺した方々の声と似ていませんか？」

声なんて似ているハズだと言つてしまえば似ていると感ずるモノだ、それにしたつてそんな小細工、不要なぐらいに男は腰が引けていた。

「に、似ている！ そつくりだ」

こつとも上手く行くとは……、あの地下室で殺さないで本当に良かった。

あの頭痛はなんだったのか？ あれも俺を守つてくれる運命の干渉なのか？ 解ら

ない事だらけだが、今は目の前の獲物に集中しよう。

「彼らもグプロス卿の悪事に荷担しています、そして今、その証拠を消して回っています。ヤツガランさんに守られた私もまた、消されようとしていました」

「クソツ、マジかよ騎士様よお」

「隊長の仇と思つて良いんだな！」

衛兵達は完全にやる気、これは貰つたか？

「結局、最後にはこうなつちやうんですかねえ」

「逆に考えましようよ、あの森に棲む者の姫様を捕まえるチャンスでしょ」

「やりますかー」

しかし、騎士達は全く観念する様子もない。それどころか手に手に武器を構え戦意十分言つたところ。

対してゾロゾロと出て来た北門の衛兵達は十八人。破戒騎士団の数とそう変わらないうが、それを見ても騎士団は余裕の表情を浮かべている、一切負ける気がしないのだらう。

それも当然、武器も防具も、体格だつて全く違う。この世界の人間は栄養状態が良くないのか、一般人の身長は低い。衛兵と騎士では中学生とマツチヨなボデイビルダーぐらい、体格に大きな差があつた。

でもな、俺が居るんだぞ？ 森に棲む者いやエルフの魔法がさっきの自殺紛いの突撃芸だと思ふなよ？

俺はギリギリと弓を引く、今まで扱っていた軟弱な弓じゃない。長距離射程のロングボウ。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

お馴染みとなった矢の加速魔法。しかし今日の俺は弓も魔力も今までとは違う。

——ビィイーン、パチュン！

放たれた矢からは思いの他に軽い音。

狙いを外した訳では無い。速度の余り、水風船の如く軽い音となったが、コチラに弓を構える騎士の頭部をアツサリと吹き飛ばした。

——ベチユ

頭部を失った騎士の体が、ズルリと馬上から落下するまでを全員が呆然と見届けた。「散開しろ！ 衛兵達を盾に動け！ 何が何でもアイツを殺せ！」

慌てた様子で叫んだのは、先程までニヤついていたローグ隊長だった。

どうだ？ エルフの魔法の神髄は？ イラつく余裕面を片っ端から吹き飛ばしてやる！

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

矢筒から二本目の矢を引き抜き魔法を唱えるが、眼下は蜂の巣をつついたような騒ぎになつてゐる。

そんな中、厄介な敵の隊長はどこだと見れば。命令とは真逆、自分一人、逃げる衛兵に紛れながらも距離を離していた。

「チッ！」

流石に判断が早い！ 俺は舌打ちをひとつ、仕方なく他の獲物を狙う。

——ビイイン、パアアアン

カーン、カンカン。

水袋が弾ける音。その後に、固い金属が石畳を転がる音が甲高く響いた。

皆がギョツとした表情でそれを見ている。転がったのは？ 人間の頭だ！

鉄の兜を被れば大丈夫かと思つたか？ 甘い！

頭が吹き飛んだ同僚を見て、慌てて鉄の兜を被つた騎士達だが、魔法の矢はそれごと吹き飛ばして見せた。

高々数ミリ、鉄だか鋼だか知らないがそんな物で防げる筈も無い。それどころか矢は兜を突き破つた後、頭蓋骨を粉碎、脳を攪拌した後。首ごと頭を吹き飛ばした。

見せたかつた訳じゃないが、転がった兜からドロリと中身が零れるグロテスクな光景まで皆の目に焼き付けた。

そしてとうとうこの一矢で、今度こそ騎士達はパニックに陥った。
「に、逃げろおー」

騎士の一人が叫び、騎士達がゲイル広場を一目散に逃げ散って行く。

対して一瞬ポカンとした衛兵一同だが、掛け声を上げながら追撃に入った。

俺は更に魔法を唱え、三本目の矢を番える。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

——ビイイイン、——パアアアン

逃げ行く騎士の頭をまた吹き飛ばす、コレで三人。

「四人目！ 『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

——ビイイイン、——パアアアン

「五人目！ 『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

——ビイイイン、——パアアアン

魔法を唱え次々と矢を番える。馬で逃げる騎士は素早く、一部は既にゲイル広場の中央まで到達している。

だが多少距離が有ろうと、魔法で制御する俺の矢は絶対に外れないのだ！

「六人目！ 『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

——ピイン

しかし、六発目に放たれた矢は大外れ。間抜けな弦の音と共に見当違いの方角へ飛んで行った。

すつぽ抜けだ。引き絞り番える前に、矢が手から離れてしまったのだ。

何だ？　　と思ひ、俺は自分の右の手の平を見る。

「えっ？」

血の気が引いた。指先の皮は残らず剥げ、筋繊維が見えそうな程。

勿論血だらけで、この血で矢羽が滑つたのだと一目で解つた。

「あつ」

間抜けな声が漏れる。それもその筈、コレだけの怪我ならば本来は激烈な痛みが伴う筈、なのにそれに気が付かずに矢を放つていた。

思えば、ここに来るまでも呼吸も乱れずに走り続け、足も痛く無かつた。

丈夫になつた物だと思つていたがとんでもない、『高橋敬一』の制御下で怒りに痛みを忘れていただけだつた。

全身の毛穴がブワツと開く、それ程の恐怖が背筋を凍らせる。怒りに任せ、俺は体にどれ程の負担を掛けた？

そうでなければ子供用の弓がやつとの俺が、ロングボウなど引けるハズも無い。火事場の馬鹿力みたいなリミッターが外れた力の代償は？

意識した瞬間に、手が、腕が、肩がズキリと強烈な痛みを訴えた。それどころか目の前の光景がグラグラと揺れ始める。

「グッ！　くう、ろっ六人目！　『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』」

それでも俺は矢を番え、放つ。

痛くても、苦しくても、本当は体がヤバくても。それでも俺の憎悪は止まらない。

——ビイイン、——パアアアン

余分に握力を込めたお陰で今度は狙った通り、衛兵に追われる騎士の頭を吹き飛ばす。

やったと思うと同時に、その代償は不気味な音と共に俺を襲った。

「ぐっ！」

肩が外れた。ゴキリと自分の骨を伝わり内側から響いた音は、痛みを戻した途端の幼い体に、強烈な電流を流されたかの様な衝撃をもたらした。

「がつ！　ぐううう」

こんなにも痛いなら！　痛みなんて意識するんじや無かった！

しかしもう後の祭り、痛みを感じない事に恐怖を抱いてしまった体は、痛みを飛ばす事を受け付けなかった。

あるいはそれこそ体が、限界も限界だったのかもしれない。

力が増したと思っていたが、ただの火事場の馬鹿力。人間は体の持つ百パーセントの力を使えないと言うが、使えないのではなく使えば只では済まないのが正解と聞いた事がある。

つまりはそう言う事だ、『高橋敬一』の人格で、まさしく他人事のように体を酷使した代償がやって来ていた。

弓を肩に通し、残った左腕で外れた右腕関節を嵌める、再び強烈な痛み。しかも少女のか細い腕力では、いまだ嵌まり切った感じがしない。

「ふうーふうー、うっ！」

荒い呼吸を繰り返していると、急に目がぼやけた。汗が目に入ったのだ。

染みる目の痛みに慌てて顔を拭くと、頭から水を被ったのかと思う程にビチャビチャとずぶ濡れだった。

冷や汗だった。

気が付けば運動した後の爽やかな汗と異なる、気味の悪い冷たい汗が全身を濡らすほどに噴き出していた。

加えて右肩を抑えた左手ではなく、手の怪我也忘れ、咄嗟に右手で拭った物だから汗に血も混じり益々視界がぼやける。

「ぐっ？ がっ！」

目と手と腕の痛みが混じり、獣じみた悲鳴を漏らす。その時、瞬きの合間、歪んだ視界の端が光った。

……なんだ？ とは考えない、考えたら死ぬのだから。

俺は庇の上を無様に転がり落ちて、受け身もそこそこに地面へと激突した。

「ぐぎん！！」

その衝撃に任せ、嵌まり切っていなかった右肩を強引に捻じ込んだ。目の前に火花が飛び、全身に電流が駆け抜ける。

死ぬ程痛いッツツ!!

痛みが生きてる！ それで良いと思えるのは、転がり落ちる直前に背後で響いた金属音。

放たれたのは恐らくナイフ、俺を追うように庇の上から転がり落ちたそれが今、右肩を抱き蹲る俺の真横にカランと落ちて来たからだ。

もし庇の上から動かなければ、投げつけられたコイツが突き刺さったに違いない。

痛みの余り、目から湧き出した涙が血を流れ落とし、瞬きを三回。戻った視界に映るのは、あの騎士、ローグ隊長だった。

とつくに上手い事逃げたと思っていた、だが鎧すら脱ぎ捨て、衛兵に紛れ、こちらを攻撃する機会を窺っていたのだ！

「思い込みでこれ程危険な相手から目を切るなんて、余りに迂闊としか言いようが無かった。」

「外したか……」

「おい？ 何をした？ なんだ？ お前は！」

「見ない顔だな？」

二人の衛兵が無造作にローグへと近づくと、騎士鎧を脱いでいるので解らないようだ。警告しようにも俺は声が出せない。

もし、この衛兵が居なければ、庇から落ちて満身創痍な俺は即座に追撃されて死んでいただろう。

しかし、だ。

「はあ、鬱陶しい」

涙に滲む視界で、ローグ隊長は腰の剣を引き抜き、無造作に二回振った。

「え？！」

「あ？ くげ？」

それだけで二人の衛兵が死んだ、他の衛兵は逃げた騎士を追って既にこの場に居ない。

「あー被害甚大ですよ、こうなりや死ぬ気でお土産作らなきゃ逃げるに逃げられません」

常に薄目で薄ら笑いを作っていたローグ隊長。だが今は目を見開き、爛々と光る眼光がこちらを射貫いていた。

死と踊る

血に塗れ、汗に濡れ、涙が滂沱し、もう全身が体液でビチャビチャだ。

後は涎と尿でコンプリートだが、それを人前で披露したくはない。

「我、望む、放たれたる矢に風の祝福を」

早口に呪文を唱えつつ、庇から落ちた際にこぼれた矢を這いつくばるように拾う。

肩に掛けた弓を左手で握り直し、嵌めたばかりの右手で矢羽を摘まみ、弦にあてがう

……が、

——引けないッ！

肩を嵌めたばかりの右腕は痺れ、どうしても弓を引く事が出来ない！

そもそも殆ど感覚も無く、長時間正座した時の足の痺れより尚強烈に、右腕はビリビリとした痛みだけを脳に送り込んで来る。

「グッ！・ガッ！」

悲鳴を押し込める様に噛み締めた。

噛んだのはそれだけじゃない、ぶるぶると震える右手に代わり、矢羽を前歯で噛み挟む。

弓を横に構え、そのまま後ろに仰け反る様に、ひっくり返って弓を引……

「——シッ！」

視界には振りかぶられた剣、聞こえたのはローグ隊長の掛け声。

あつ？ と驚き、啞え番くわえつがええた矢が放たれる。

魔法の加速もそこに、矢は飛び出した瞬間に迫り来る剣へと衝突した。

パリインと甲高い金属の破裂音。

大道芸みたいな構えから中途半端な魔法。それでも半ばから砕け散ったのは剣だった。

俺は矢を放った勢いのままに後ろにグルンと後転、綺麗に一回転した後は追撃に備え前を向き直す。

——ガッ！

しかし、向き直った視界一杯に迫っていたのは革のブーツ。

——蹴っ飛ばされた。

剣を折られたにも関わらず、一切の躊躇も無しに距離を詰めたローグ隊長が、サツカーボール宜しく俺の顔面を蹴っ飛ばしたのだ。

「グッ！ ギッ！」

変な鳴き声を上げながら、俺は更に後ろに転がる。

蹴られたのが額で良かった。もし顎や鼻、いや額以外のどこでも一発で気絶、下手すりや死んでいてもおかしく無かったと思う。

とにかく脱出だと俺は早口で捲し立てる様に呪文を唱える。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝』グッ！』

また蹴られた！ 今度は顔を庇ったガードの上から。それでも俺の華奢な体に鍛えられた騎士の蹴り、耐えきれぬハズも無く後ろに吹き飛ばされる。

とにかく早い！ 衛兵に紛れるため、重装鎧を脱いでいるのが俺にとって悪い方に働いている。

どうする？ 魔法は唱える暇も無い、いや？ 簡単な魔法ならいけるか？ 相手は魔法の事は何も知らない、そこに付け込めないか？

もしも魔法の特性を知っていれば蹴つ飛ばさずに俺を抑え込む筈だ。それだけで魔法は健康値で霧散する。だがローグは蹴つ飛ばして距離を取り、魔法を唱える隙を狙って一撃離脱戦法をとっている。

正体不明の相手だからこそ、組み合う事を避けているのだ。

『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』

選んだのは光の魔法、威力はゼロ、ふわふわとした光球を放つだけ。

魔力も殆ど注がず、制御も適当の超早口。

だがそれだけで、ローグ隊長は踏み出すことが出来なくなつた。

光の魔法は完全に制御を手放しても、注いだ魔力の分だけ暫く漂う。

手品のタネが割れるまでに、次の呪文を決めなくてはならない。

だが移動の魔法は駄目だ。距離を取りたいのは山々だが、そもそも制御が難しいのだ。

蹴りのプレッシャーに怯え、近づかれただけで減衰する魔力に制御を乱される状況では、何処へ吹っ飛ばか解らない。

じゃあ、弓で迎撃か？ それも最早厳しい。

何度となく転がされ、その度、弓は背中で変な音を鳴らしていた。ひしゃげてしまつたに違いない。

構えてみたけど使えませんでしたじゃ、そのまま死を待つだけになる。

簡単に、怯ませられて、聴力を奪う。轟音の魔法が良いか？

魔法決定までの一瞬の間。その一瞬が正に命取りとなつた。

「なっ!?」「我、望む、この手より放たれたる風の轟音よ!」

悩む俺に対し、ローグ隊長が光球に躊躇したのは一瞬。その一瞬後には覚悟を決め、顔を覆い、光球に突っ込んで来たのだ。

当然光球は瞬く間に健康値で掻き消える。

近い！ 折角唱えた魔法すら掻き消える距離！

俺は咄嗟に轟音の魔法を横へ投げ飛ばし、慌てて顔をガードする。

「ぐぶっ！」

そのガードを外し、蹴られたのは腹！ 意識が飛ばなかったのが奇跡。胃液と唾液が混じった物が口から飛び散り、ぐるんと視界が空転する。

白目を剥いて一瞬、意識を失った。だが腹を蹴られ前かがみに倒れ込んだお陰と言うべきか？ 石畳にゴツンと額を打ち付けた痛みで、ギリギリ意識を完全に手放さずに済んだ。

——バアアアーン！

その後、気付く覚ましとしては強烈過ぎる轟音。横に投げ出した魔法がどこかで爆発したのだ。

強かに頭を打ち付け、爆音が鼓膜を揺らし、グラグラと視界が揺れる。遠くなる意識と麻痺した耳に、無邪気な子供の笑い声が聞こえてきた。

それはずっとずっと、遠いところから響いてくるようだった。

「——槍のお兄さん、馬の乗り方を教えてよ」

「いいぞー、でもあんまり大声出して脅かしちゃ駄目だぞ」

「大丈夫だよー」

ライル少年の声だ。相手はヤツガランさんだろうか？　ホワイトアウトした意識の中で二人の声が聞こえ、その姿すら脳裏に浮かんでくる。

お世辞にも駿馬とは言えないずんぐりした馬に、若き日のヤツガランさんが跨がっている。

……ああ、また死が呼ぶ声か。それに馬の嘶く声、コレは何時の記憶だ？

馬の嘶きは狂った様で、ライル少年はヤツガランさんに逆らうように大声を上げたに違いなかった。

「あ、うう『我、望む、我が身に風の祝福を』」

ふら付く頭で魔法を唱えた。足に掛けるべき移動の魔法を体に掛ける魔法だ。

足ではなく全身、当然健康値もゴリゴリ減るし、移動量も少なく、おまけに何処へ吹っ飛ばか解らない。

全くのゴミ魔法で使い道なんて全くない。

ただ蹲った姿勢から、どこでも良いから素早く吹っ飛ばすにはこれしか無かった。「グガッ！」

ゴムで跳ねるおもちゃみたいに高く吹っ飛んだ、巨大な鉄球が全身を強打したみたいな衝撃だった。

気が遠くなりながら思う、なんで俺はここまでして移動したかったんだ？

ああ、そうか、馬が暴れたら俺に突っ込んでくるに違いないもんな。

ははっ、もう記憶と現実の区別も付かなくなってるのか。

宙を舞いながら、虚しい思考が駆け巡る。

その後、俺は無情にも地面に叩き付けられた。

グチャリと体が潰れる音がして、俺は意識を失った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「オイ！ 大丈夫か？ 嬢ちゃん」

誰かが呼ぶ声がする。

「田中？」

「タナカ？ いや俺は衛兵だが、どうした何が有った？」

気絶していたのはホンの数分か？ それでも俺を殺すには十分な時間だったはず、衛兵が戻る前にアイツが俺を殺すなんて訳ない筈だ。

「うっ」

「無理だ、立つんじゃない！ 全身傷だらけじゃないか！ 骨だって折れているかもしれない」

衛兵の制止を振り切って立ち上がり、霞む目をこする。

目に飛び込んで来たのは、倒れる馬。そしてその下敷きになって呻くローグだった。
「えっ? はあ? あっ!」

訳も解らず混乱するが、俺はこの馬に見覚えがあった。いや正確にはその胸に突き刺さった槍に見覚えがあった。

これはゲイル広場で俺が槍を突き刺した馬、ローグが乗ってた馬だ。

馬の出血もおびただしく、長くないとみて捨てられたんじゃないだろうか?

その馬が俺に突っ込んで来てた?

「はあ! はあ!」

「オイ、無茶すんな!」

制止を無視して、言うように近づけば、倒れた馬の下敷きになっているローグ隊長が居た。

意識は朦朧としている様で、呻き声を上げるだけ。

死に掛けの馬が最期に暴走して俺を踏みつぶしに来た? それとも爆音に驚いて突っ込んで来たのか?

それで俺を殺すどころか、最期の足掻きでご主人様を蹴り飛ばしちまった訳か?

だとすると、俺が幻聴だと思った馬の嘶きは本当だった? いや俺は爆音に耳をやら

れていたんだぞ?

爆音の魔法は一瞬だが聴力を奪う。だからこそローグ程の実力者が無様にも背後から馬に轢かれたのだ。俺に鳴き声が聞こえるはずが無い。

ライル少年の記憶が助けてくれた。つてのは流石におセンチが過ぎるか？

確かにあの時、嫌な予感ほした。そして『偶然』に殺されるぐらいなら、自殺した方がマシだと常々思っていたからこそ、あんな極限状態で自殺紛いの回避が出来た。

そんな所だろうか？

結局は嫌な予感程度でも、全力で回避行動をとれる俺とそれ以外の差。

もつと早く田中に俺の事を打ち明けていれば……いや、俺を守るために頑張る様じゃ、結局は何時か死んだに違いない。

やっぱり死んでも良い人以外、俺の身近に居させちやいけないんだな……

そんな悲しい気持ちを抱きながらも、俺は笑っていた。

「オイ！ 何してる、オイ！」

「何って？」

俺はグイッと馬の胸から槍を引き抜く。

「殺すに決まってる！」

俺はブスリとローグ隊長の喉に槍を突き刺した。

ただそれだけで、あのローグ隊長は死んだ。アツサリと。

——殺った！

殺せる！ やっぱり俺の『偶然』は俺の味方だけじゃなく、俺の殺したい奴や、俺を殺そうとする奴だつて殺してくれる。

今までだつて色々な奴が死んで行つたが、こうまでハッキリ俺に敵意ある人間が、俺の『偶然』に巻き込まれ死んだケースは無かつた。

近くに居たら手あたり次第、敵も味方も関係ない。だつたら俺は踊ろう。

王国と帝国の最前線で死の舞踊を舞い、等しく全てを殺して回ろう。

「フフツ、ハハハツ」

「ホントに大丈夫かよ、お嬢ちゃん」

壊れた様に笑う俺に、衛兵が慌てて近づくが。

「近寄らないで！」

「ヒッ！」

強い調子で拒絶すれば、腰が引けた様子の衛兵は怯えた様に引つ込んだ。

俺の体がボロボロだなんて百も承知。回復魔法で治さないと、一生モノの怪我になる。

『我、望む、命の輝きと生の息吹よ、傷付く体を癒し給え』

「ネルダリアに帰る馬車の中で、ユマ姫様」

「シノニムさん！」

プラチナの髪もくすんで見える、疲れた様子のシノニムさんが教えてくれた。

「俺は何日、気を失って？」

気絶には慣れている、この感じ、一日や二日じゃないだろう。

「三日です、グプロス卿は死に、スフィールは暫定的にオーズド様が治め、他の四つの貴族家から選んで引き渡すそうです」

「そう、ですか……」

「『俺』なんて言い方するんですね……お姫様ですのに」

「あー！ いや、いえ、荒っぽい話し方がうつつてしまったみたいです」

しまった、迂闊だった。いや、今更か？

「はあ……暴れ過ぎですよ！ まさか仇討ちにグプロス卿を殺すなんて、こっちは大騒ぎだったんですから」

言う事はもつとも、シノニムさんの愚痴やお説教が続くが間違ってたと謝る気もない。

目を逸らせば壁には鏡が掛かっていた、人間にとつては結構な高級品のハズだった。

俺は馬鹿面を下げて寝ていたに違いない、いまだに半ば寝ぼけた顔に、涎の跡まで

ハッキリ見えた。

そう言えば体液コンプリート、腹も蹴つ飛ばされて胃液まで出したし、尿以外網羅してしまったのかと鬱になる。

……いや。

「あの、シノニムさん」

「なんです？ もう大丈夫ですよ、護衛も信頼できる者達で姫様の安全はネルダリアが保証します」

「いえ、あの汚れた服が替えられているのは良いのですが、下着まで取り換えられている様ですが」

「あー、いえ、下着も汚れていましたので、失礼ながらこのシノニム、交換させて頂きました」

フィと逸らされる視線が辛い。

どうやら俺は、知らずに体液コンプリートしてしまつたみたいです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 二日前◇

馬を飛ばしに飛ばし、ようやくシノニムはスフィールに辿り着いた。

ユマ姫から丸一日、遅れての事だった。

「冗談でしょう？」

「いや、冗談だったらなんぼか良かったんですが」

辿り着いたユマ姫はグプロス卿を槍で刺殺した上、あの破戒騎士団相手に大立ち回り。

オーズドが『我が領の騎士の数倍強い』と悔しそうに話した荒くれ者を殺して回ったと言うのだからシノニムに信じられる訳が無かった。

だが、破戒騎士団の死体が転がる広場を見ては騎士団の存在は疑い様もない。シノニムは歯噛みする。

今回の蜂起自体。破戒騎士団の留守を狙つてのモノだったが、彼らはとつづくにスタイルへ帰還していたようだった。

ではどうやってと首を捻るが、間違い無く姫の仕業と衛兵達は口を揃える。

「信じられませんよね？ 本当なんですよ、今でもおつかないですよホントはね」

話すのは姫が気絶した時に側にいた衛兵だ。彼は一部始終を見ていたらしい。

「うちの奴らはゼスリード平原のショックで引き籠つちまつて、蜂起に誘われても乗らず、広場で馬車がひっくり返ろうが無視する始末。でもアレだつてあのちっちゃい嬢ちゃんがやったに違いねえんだ、それで這い出したグプロス卿を一突きよ」

何が有つても、どんな音がしても門の死守に徹するとしていた衛兵の中、彼だけは大きな音に釣られ、見に行つたらしいのだ。

「その後、破戒騎士団が出て来てブルって俺は引つ込んじまったんだけどよ、轟音と閃光がまるで雷みたいな威力の魔法よ、囲みを抜けてから俺達と共に放つた弓もまたドえらい威力だったぜ」

一番よく見ていた男でこれ、魔法の詳細は杳^よとして知れない。なにせ聞く者が変わればその印象も全く変わってしまうのだ。

ある衛兵は語る。

「うーん？ 魔法？ 使つてたんですかね？ 凄^まい速い矢が飛んだみたいですけど。あれって最近帝国で使われてる謎の魔道具^{まどう}って奴じゃないですか？ 甲高い弾ける様な音もしてましたし」

現に頭が吹つ飛ばされた破戒騎士団の死体が幾つも、しかしそれが大魔法の力かと言えど何となく違う気もする。それは明らかに物理的な破壊であった。

辺り一面を火炎に包んだり、風が敵を切り刻んだりでは無かつたのかと首を傾げざるを得ない。

雷を落とす大魔法も、実際に見た者は居ないのだった。

聞くべきその張本人はスーニカと言う宿屋でグースカ寝ている。

森に棲む者なんて怖いと引き受けてくれるのがこの宿しか無かつたらしいのだ。

「ごめんなさい、お姫様だつて聞いてて、恐れ多くてお着替えが用意出来ず……」

「いえ、私がやります、ご心配なく」

宿の女将は恐縮していたが嫌悪は無い様だつた、シノニムは街で手に入れた着替えを手にベッドに向かう。

「!! 血塗れ! でも、怪我は無いのね」

その姿の割に、外傷は殆ど無い、指先に擦過傷があるぐらい。

しかし打つて変わつて服は酷い、ほつれて千切れて、血と汗を張つた桶に漬けたかの様。

「臭い、あ……」

——漏らしてる。

どうやら下着も買いに行かなくてはならないらしかつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 一日前 ◇ (シノニム到着の翌日)

「ええ? タナカが居たのですか?」

「ええ、偉丈夫な大男、ユマ姫と共にスフィール城を訪れた者に間違いありません」

見間違いではあり得ない、滅多にない程の大男なのだ。そうでなくても執事と言う職業は人を見るプロである。

「私が耄碌して居なければ、間違いなくタナカ本人でしょう。体の大きい男は何人も見て来ましたが、隙の無さまで身につけているのはあの方だけです」

「でも、タナカはゼスリード平原で死んでいます、死体も確認しました」

「死体を確認したあなたと、生きて話をした私。どちらが正しいと思いますかな？」

「……………」

確かに死体は顔が潰れていたので偽造は出来る、でもあの状況、あの短時間でのサイズの死体を用意した？ どうやって？

グルグルと思考を巡らす、シノニムには答えが出なかった。

「でも良かった、ユマ姫様にとつて彼は、それはもう、大切な人だったのです。無事を知れば元気になるに違いありません」

「いえ……………」

「？」

「それが、彼は帝国情報部の奴らを追ってスフィールを出たのです、我々もグプロス卿の死を確認した後、すぐに情報部を追いました……………ですが」

「見失った？」

「いえ、必死の探索の結果。情報部の使っていた馬車を発見するに至りました、ですが……」

「あなたにしては歯切れが悪いですね、どうしたのです？」

「馬車の周囲はグチャグチャの死体だらけだったので、タナカが其処に居たのか。死んだのか逃げたのか、其れすらも解りませんでした」

「なっ!？」

「発見したのはゼスリード平原、恐らくは例の魔獣がまだ居たのでは無いかと」

「なんでそんな所に? 国境はあそこ以外にも……」

「どうやらタナカは彼らの行く先が解っていたようです、彼がゼスリード平原に向かった形跡もありました」

「何が……あつたと言うの?」

あの日、ゼスリード平原で何が起きたのか。シノニムにも執事にも、想像もつかなかった。

そもそも、タナカは本当に生きていたのか? 幽霊の一種ではなかったのか? そんな風にも思えてしまうのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 今朝 ◇ (馬車で旅立ちの日)

ユマ姫はまだ目を覚まさなかったが、蜂の巣を突いた様な騒ぎで混沌とするスフィールに姫を置くのは危険過ぎるとシノニムは判断した。

寝たままではあるが、馬車を手配してネルダリアへと護送する事に決める。

シノニムの心配を余所に、スフィールを脱して間もなく、ユマ姫は目を覚ます。だが

……

……結局、シノニムはタナカの話ユマ姫に打ち明ける事は出来なかった。

オルティナ姫2

もう少しだけ、私はシノニムとして生きる事になった。今はユマ姫様と旅をしていく。ネルダリア領を越え、遙か王都への旅路だ。

慣れない旅は不安だが、同時にワクワクもしている。どうにも私は平穩に生きるには向いていないらしい。

オーズド様は馬車と潤沢な資金を用意し、ユマ姫様を王都に送り届ける事にした。

狙いはエルフを王国の味方に付けた功労者として、王都での発言力を強める事。その手柄を掠め取られない様にするのが私の一番の仕事だ。

とは言え私も王都に行ったことは無い、そもそも普通は生まれ育った土地を離れる事は稀だ。

貴族の中でも当主は王都に参勤する必要があるが、それだって毎年の事では無い。

この世界で住処を転々とするのは旅商人と吟遊詩人、それに冒険者ぐらいだろうか？冒険者と言えば姫様の護衛だったタナカだ。執事として働いていた同僚曰く、実は生きていたと言う事だが、帝国情報部を追いかけてから行方不明。

見つかれば次第早馬で知らせてくれると約束してくれたが、その様子から望みは薄そう

だった。

結局、その事を私はユマ姫様に伝えられないでいる。

生きていましたが、やっぱり死んでしまったかも知れませんが伝えられない。

時折タナカの形見、ひしゃげた金属を握りしめている時の姫様の顔は見えないかかった。

その姫様だが見た目通り、性格も控えめで優しい方だ。

あの夜に見た不気味な姿が何かの間違いでは無かったかと思う程、狂気に染まったあの様子ではまともな会話も難しかったに違いないのだ。

私の仕事の枢要はユマ姫様と信頼すうりょう関係を築く事。

エルフの事、魔法の事、様々な情報を聞き出しつつ、ネルダリアの存在もアピールしなくてはならないからだ。

だが、決して気が合わない訳でも無いのに。思いの外情報は聞き出せていない。

その原因は王都への旅の間、ユマ姫様は床に伏せる事が多かったからだ。

一見して無傷に見えるのだが、その足取りは覚束ない。最初の内は着替えすら満足に出来ず手伝う事も多かった。

王族ともなれば着替えを一人で行う事の方が稀と聞くが、エルフは違うのだろうか？
着替えを手伝った時の恥じらう様子が可愛かったのを覚えている。

とにかくユマ姫は寝込むばかりで碌に会話の機会すら無かったのだ。

村に付けば、エルフの惨状と帝国の横暴を語る為に病床からのそのそと這い出して来るのだが、常に顔色は悪く、それが悲劇のお姫さまとしての説得力を増していた。

それでも決して語り聞かせを止めようとはしなかった、その思い詰めた鬼気迫る様子は、霧の中で見せた悲痛な顔に近く、見ていて少し辛かった。

ある日、その体調不良は生来の物か魔法を使った副作用か尋ねてみたところ「よく解らない」と言われてしまった。

聞けば、エルフは魔力が濃い大森林にしか生きられない。逆に人間は大森林の濃い魔力に耐えられないと言うのだ。

確かに時折エルフを捕まえたと言う話を聞くし、それで見世物小屋に押し込められているのを見るが、その後どうなったかと聞けば、決まって衰弱して死んでしまったという話だった。

姫様は「自分はハーフだから死にはしらないと思う」と、言っているが道中は気が気じゃ無かった。

どうやら日常生活に支障が無いだろうと言う位に回復した時には一月が経っていた。既に長い旅は終わり、王都の門を叩くタイミングだったのである。



一月ほどの旅が終わった。

魔力を無茶に使った報い、大幅に削れた健康値はなかなか回復しなかった。

そもそもが、ハーフエルフの自分にとってベストとは言い難い魔力濃度、加えて健康値4というのは生きてるのが不思議と言うレベル。

ここまで健康値が削れてしまうと体の芯から活力が失われ、ちよつとした事でも風邪を引いたりする。

大事を取って一日を揺れる馬車の床にへばりついて過ごし、健康値の回復に努めても、馬車の揺れや運動不足で健康値が減少する始末。

完全に悪循環に陥ってしまうのだ、幼少期を思い出して歯がゆい気持ちになってしまった。

最初の内は自分で着替えも出来なかった、高橋敬一の人格では恥ずかし過ぎて、そのため分裂した人格を必死にまた一つに寄せ集めた。

そうでなくても管理下から外れた人格が突然暴れる恐れがある。スフィールの件では良い方にも転がったが今後どうなるか解らない。

その恥ずかしい相手のシノニムさんだが、魔法の力やエルフについて何とか聞き出すとしている節がある。

しかも何と言うか、かなーり魔法について期待してる気がする。

王都に辿り着いた俺達を待ち受けていたのは人、人、人。
見渡す限りの人の群れだった。

都会だ都会だとは聞いていたが、前世の東京並みの人口密度とは思わなんだ。

正直ただでさえ魔力が薄い地だ、そこへコレだけの人間がひしめけば健康値で魔力なんて全く無くなってしまふんじゃないだろうか？

見ているだけで薄っすら気持ちが悪くなる程、俺はこんな所で生きて行けるだろうか？

そんな俺を見てシノニムさんは微笑む。

「皆、ユマ姫様を一目見る為に集まったそうですよ」

「え、？」

意味が解らん、どういう事？

「森に棲む者の姫君が王都に来る。それだけで話題性は十分だと言えますが、姫様が必死に各地で宣伝しただけに、悲劇のユマ姫伝説は王都でも既に有名だそうです」

「……歓迎、して貰えていると思っただけで良いのでしょうか？」

「それはもう！」

だとすれば俺の頑張りは無駄じゃ無かったと言う事か。

自然にむふーっと得意げな鼻息が漏れた。笑顔が堪えきれず、にまにまど口角が歪

む。

「もう！ 嬉しいなら我慢せず、窓を開けて笑顔をサービスしたらどうですか？」

呆れたようにシノニムさんに言われてしまう。確かに一理あるな。

今生では王族としてイベントに顔を出す事もそこそこあった。

ボーッと考え事をしながら微笑む俺の笑顔は、何故かユマ姫スマイルとか言われ好評を博していたんだぞ。

気合もひとしおに「ですね」と言つて、俺はガパツと窓を開ける、すると何故か当のシノニムさんが驚いて声を上げた。

「アッ！」

アッ？ 後ろから聞こえたシノニムさんの声に引つ掛かりを感じながらも、窓の外に微笑む。

「きゃーユマ姫様あ!!」

「ユマ姫！ ユマ姫！ ユマ姫！」

「うおおコツチ向いてー」

……なんかすごい事になってる。

自慢のユマ姫スマイルが速攻で引き撃つたのを自覚した。

そこへ後ろからシノニムさんが腕を伸ばしてパタンと窓を閉じた。

「済みません、軽率でした。ちょっと人が集まり過ぎています、ひよつとしたら事故が起ころうかもしれません」

確かに、とんでもない熱狂で押すな押すなの大騒ぎだった。

何ならさっきの一瞬で何人か押し潰されて大怪我しても不思議じゃない。

人ごみの所為で馬車は遅々として進まず、中央広場に至った所で完全にストップした。

「困りましたね……」

「……ええ」

シノニムさんと顔を見合わせる。

翌日王城に参するつもりなので今日はこれから宿に泊まるだけだが、このままじゃ宿まで辿り着けたとしても遅い時間だ。諸々の準備が出来そうにない。

そんな折、馬車がコンコンとノックされた。

「もしもし、私は王宮からの使者です、中に入れては頂けないでしょうか」

どうやらアチラさんもこの状況に困り果てて居るらしい、シノニムさんとアイコンタクトを一つ、俺が無言で頷くとシノニムさんは扉を開けた。



——で、こうなる訳だ。

俺は広場の野外常設ステージの脇で出待ちしていた。

取まりが付かなくなつた民衆に、取り敢えず挨拶をと言う段取りになつてしまつたのだつた。

だが悪い事ばかりじゃない、いやむしろ良い事の方が多いだろう。ここで一気にファンを獲得できれば、王国との同盟はグツと現実味を増すハズだ。

俺は椅子ごと舞台袖ギリギリに移動して、そつと様子を窺う、そこには視界一杯の人。ひしめく人ごみに眩暈を覚える。

なんだこれ？ 王都中どころか、周辺からも人が集まつてるんじゃないか？

突発イベントだけにチケット代も糞も無い、貧富も貴賤の差も無く、様々な人種が広場で押し合いへし合うのはこの世界じゃちよつと無い光景だ。

と、よく見れば貴賓席みたいなものもあるじゃないか、櫓が組まれて偉そうな人が一段高い場所に陣取っている。

そんなとりわけ目立つ場所に、とりわけ目立つ格好の男が一人。

スナフキンみたいな帽子に、仕立ての良い服には刺繍もバツチリでとにかく目立つ。

なにしろこれまたスナフキンリスペクトなのか全身が緑で統一されている、おまけに背中にはギターも標準装備。

「よし、お前の名前はリッチマンスナフキンだ！」と心の中、勝手にあだ名をつけた時。何気なくこちらを見たスナフキンと偶然目が合った。

「あつ……」

俺はその顔に覚えが有った、正確にはその顔にアイツの面影が確かに有った。

「木村！」

俺はガタンと音を立て椅子から飛び出し、あわや段取り無視で舞台袖から飛び出す寸前で何とか留まった。

アイツもこちらを見てる、ポカンとした馬鹿面でぼーつとしてる。俺の事に気が付いたのだろうか？

いや、あり得ない。木村と違って俺の見た目は前世とは全く異なっている。

田中だつて俺の正体は見た目から気が付いた訳じゃない、解るハズが無いのだ。

始めて見るエルフに驚いたとかそんな所だろう、それにしたつて間抜けな顔しやがって。

その姿が溢れる涙で歪んでいく。

「馬鹿ッ！ 馬鹿野郎！」

スナフキンみたいなカツコしやがって。

良かった、本当に良かった！ 生きてた！ 木村は生きていた！

魔獸なんかが跋扈ばっこするこの世界、折角転移したって死んじまっても不思議じゃない、なんせ俺は何度も死に掛けてる。

そんな中、木村は生きていてくれた。田中が死んで、地球の馬鹿話を出来るとしたらアイツだけ、本当は今すぐに正体を明かして昔話に花を咲かせたい。

(……でも、そんな訳には行かないよな)

そうだ、俺の『偶然』は人を巻き込む、俺と一緒に居たら田中に続いて木村まで殺しちまう。

だったら俺が『高橋敬一』だって事は墓の中まで持つて行こう、そんでなるべくなら木村が王都から離れる様に仕向けるんだ。

なんせ俺の目標は家族の、そしてセレナの復讐。それは絶対だ。

帝国は絶対に滅ぼしたい、その為だったら何でもやる！ 仮に木村を巻き込む事になってもやる！

でもな、出来れば！ 出来ればお前には生きていて欲しいんだ！

悲痛な思いがこみ上げて、感極まった涙はポロポロと零れ落ちてしまっていた。

そんな俺に慌ててシノニムさんが近づいて、ハンカチで涙を拭いてくれた。

「大丈夫ですか？ やはり調子が悪いのでは？ 中止にして貰いましょうか？」

「いえ、大丈夫！ やります！」

俺は感傷を切り捨て、前を向く。その時には普段のおすまし顔に戻っていたはずだ。舞台ではいよいよ俺を呼ぶ準備が整い、拡声の魔道具で俺の名前がコールされた。

「それでは遠く大森林からやって来た、森に棲む者の姫君、ユマ様の登場です！」

俺は椅子から立ち上がり、垂れ幕で隠された舞台袖から笑顔で踏み出した。

「ユマ姫様あぁア」

「キャーーーーーーー」

途端に色取り取りの声が響く、高くなつた舞台からは広場を埋め尽くす人々が一望できた。

その中には櫓の上に陣取つた木村の姿もハッキリ見えた。

お前は王都から追い出してやるからなと心に誓う。なにせ俺が居る限り、この王都は血生臭い事になるに違いないのだ。

俺はいよいよ舞台中央に辿り着き、備え付けの拡声魔道具の前に陣取つた。

——その時だ。

「えっ?」

いきなり視界がブラックアウト。しよつちゆう気絶していた幼少時代でもこんな風に視界が一気に暗転する事など一度も無かつた。

圧倒的な闇の世界、民衆の熱狂的な声だけが耳に届くが、それが怖い。

……その時、闇の世界に花が咲いた。

色とりどりの花、いや花じゃない、コレは光だ。

赤、青、オレンジ、緑に黄色、紫、白や金、銀まである。そしてその数も尋常じゃない、
い、

大きさもまちまち、大きい光も有れば、小さく消えてしまいそうな光も有る。

闇の中、光だけが競うように咲き誇っていた。

——なんだこれ？　なんだよ!?　なんなんだ？　何が起こってる??

どうやらおかしいのは俺だけ、それも俺の視覚だけ。

聴覚はいたって正常で、民衆にパニックは無く、司会もそのまま進行していた。

「それでは今一度、王都に集まった人々に向け、お名前を伺っても宜しいでしょうか？

可憐なお嬢さん、貴方の名前を覚えて下さい」

舞台中央で固まった俺に、司会のお兄さんが話を振ってくれる。その様子は慣れた

もの、舞台でパニックになる素人など少なくとも無いのだろう。

俺も取り敢えず、視力の問題は棚に上げ、スーッと息を吸い込み魔道具の前に立つ。

「私の名前は……」

「お名前は？」

「わたくしの名前は、オルティナ・ラ・フィリア・ビルダール」

「…………え？」

「17代目ビルダール王、グスタルトの娘にて、第一王女のオルティナ姫です」
俺の口は俺の意思を無視して、予想もしない事を口走っていた。

★三章の設定語り

【黒い球体のオブジェ】

帝国内では霧の悪魔ギョルドスと呼ばれている兵器。

周囲の生物の健康値を吸い取る事で、稼働時には霧として広範囲に振りまく。それによつて魔力が必要なエルフは魔法の行使はおろか、活力も奪われてしまいます。

結構な貴重品なので、帝国情報部第三特務部隊を呼び寄せる前に撤収命令を受けたアイクが回収し、帝国に持ち帰る途中でした。

エルフの国を落とす時には何十個もの霧の悪魔ギョルドスが稼働していました。

【スフィール】

国境沿いの大都市。帝国とは勿論、南方の砂漠の少数民族とも交易をしている。

長大な城壁は対帝国を想定したもので、魔獣相手にはオーバースペック。もしも大牙猪ザルギルゴールが現れたなら有効でしょうが、ここにはあんな強力な魔獣は現れません。

【グリフォン】

続いて登場したグリフォン。大森林が荒らされているため濃厚な魔力を必要とする

魔獣は大慌てなのですが、空を飛ぶ魔獣は魔力の代わりにエネルギーを餌で補おうとここまで飛んで来た格好です。

大量の恐鳥^{リコイ}たちは普段は魔力を糧にやたらと繁殖する苔や虫を洞窟で食べています。

基本は南米のコウモリの群れみたいな連中なんですね。ボスとしてグリフォンが収まった事で攻撃的になっています。

【魔導車】

魔石を燃料に稼働する車。自動車の様なものなのですが魔力を使って稼働する関係からどうしても魔獣を呼び寄せてしまったため、エルフの間ではそれ程使われていません。

魔獣が少ない人間の世界では世界を変えるほどの発明たり得るため、帝国情報部のギデムツド老は目の色を変えて狙っていました。

ユマ姫は走って来ただけなので勘違いなのですが、ゼスリード平原の北西にあるゼス村に壊れた魔導車があると勘違いされています。

【グブロス卿】

太ったオッサンですが、無能ではなく開放路線の経済通だったりします。

千人からの騎士団を解体したのだから、二十人前後の方が魔獣を狩るには向いている訳で、騎士団自体が軍が近代化を始めるタイミングで、無用になりつつあるのを感じ取っ

ているのです。

更に言えば帝国情報部からボウガンや、銃の試作品を以前から見させられているため、帝国へ傾倒していったのです。

それでも、帝国がエルフの国に勝つとは思って居らず、これで帝国が損耗すれば戦争など起こらずに平和に過ごせるなど皮算用していたため、焦っています。

女癖は悪く、評判の町娘を攫って別荘に軟禁などしていますが、この世界のクズ貴族の中では珍しくありません。

それにしても、ユマ姫の美しさにはメロメロになってしまい、冷静さを欠いています。馬車には拘りあり。もちろん日々のメンテナンスにも予算を割いていたのですが

……

【帝国情報部】

ギデムツド老と言う人物がグプロス卿を口説いていたのですがハーメルン版では登場していません。

ギデムツドは帝国軍の上層部からユマ姫を取り逃した事、なんとしても確保したい旨を聞いていました。

グプロス卿にユマ姫を確保する様に要請するのですが、ユマ姫に惚れ込んだグプロス

に明け渡す気が無いと見て、帝国情報部の第三特務部隊を呼び寄せます。

【第三特務部隊】

寄せ集めです。マルムークだけがそれなりに軍務経験ありで、他は魔獣退治の専門家や傭兵を適当にかき集めたただけですね。

【ブッガー】

田中に恨みがある巨漢の戦士。ウォーハンマーを振り回す。

【アイク】

ギデムツド商会として活動していました。霧ギユルドスの悪魔の無駄遣いに抵抗したのですが、却って霧ギユルドスの悪魔自体を失う結果になりました。

【ヤツガラン】

現場たたき上げで北門の隊長までになった真面目な兵士。ライル少年との思い出を胸に生きていました。

【人攫い】

グプロス卿の下で女の子を攫ったり、目障りな人間を消したりしていました。

下水道を拠点にしていたのですが、グプロス卿が派遣した破戒騎士団に尻尾を斬られ、一人を残して全滅しました。

唯一残ったミダナンはゼスリード平原で拾った奴隷の無事を気にしていました

【田中】

……

……

四章 盲目の姫の残滓

木村の回想

えーとここは？ いや、俺は？

俺は木村だ、それすらボンヤリとしてくる。何だ？ ココは？

見渡す限り、全てが白で埋まった世界。

気が付けば、そんな場所で俺は浮いていた。

——ここは神域。とても言うべき場所でしょうか？

どこからか？ 声がした。

いや、声は俺の内から響いた、だから俺は己の内に問いかける。

——へえ、じゃあアンタが神様って訳か？

——ほう！

そう返せば、『神』が笑った。

姿が見える訳では無い、ただ俺の認識上にそいつが居る。

だから俺の認識に俺の思いをぶつけければ、それで会話が成立する。

それが直感的に解った、そしてその事に神が驚いた。それだけだ。

——思った通り、貴方は理解が早い。

——でも、でもやつぱり慣れないですね。低次元の僕に合わせてアバターでも作って貰えないでしょうか？

そう言うと、今度は微笑みでは無く、ハッキリと声を出して笑う神を認識した。

——出来ませぬ……面白い！ 流星にコレだけ文明が進めばこういう者も生まれま
すか！

——いやあ、僕の為にわざわざスミマセン。

神は俺達と同じ次元に存在しない。だから姿が見えず、俺の認識に働きかける。

だが、俺がSNS上で二次元のアバターを作る様に、神だって似た事は出来るだろうと要望した訳だ。

すると、あつという間に地味なカッターシャツとジーンズ姿の青年が目の前で出来上がる。

顔は……顔も地味だ、認識し辛い顔。恐らくは出会っても別れた途端に名前も思い出せない類の男、それを狙って作った。そうだろう？

「そうですね、その通りです」

こつちの認識に干渉するのだから、心の機微まで丸見えか、ゾツとしないね。

しかし、神はそんな俺を気にする様子もない。

「それよりも、僕と言いました？ 俺ではなく？」

俺の思考の中で、どうでも良い部分に突っ込んでくる。

「あー目上の相手に俺って人稱は余り歓迎されないんですよ」

「なるほど、面白い」

俺の言い訳に、何故か面白いがる神。こっちの思考はダダ洩れだが、相手の思考はまるで解らない。会話の上でコイツはどえらいハンディキャップだ。

「そう言われましても、アナタも感じてみますか？ 私の思考を」

「あーどうせ駄目なんでしょう？ 生命としての次元が違い過ぎて、脳がついていけないとかなんとか」

「今の貴方に脳は無いので、認識が。ですね。処理出来ずにあなたの自我が崩壊します」
「ほうら来た来た、あんまりか弱い人間を苛めないで下さいよ」

失礼な態度かなと思うが、口が止まらない。俺の悪い癖だった。

だが、神は怒るところか面白がつてくれているのが幸いか。

「本当に、ふふ、貴方って人は本当に話が早い。いえ、助かります」

「まあ、漫画とか小説の受け売りですけどね」

「それでも想像力は大切ですよ、だからこれほどの不測の事態に慌てず対処出来ている」
「対処出来てます？ いや、慌てたって仕方ないからですけど、言つときますけどゴネれ

「ば何とかなるなら全力でゴネますよ？」

「ゴネるとは？」

「面白がってますよね？ 脳が無いって言いましたし。この白い世界。つまり私は死んでいる」

「ピンポーン！ 正解！」

「馬鹿にしていますよね？ いや、その軽いノリも俺、あ、僕が望んでいるからなんですか？」

「……いや、そこまで認識しているとは、正直予想を超えるレベルです、なるほどこれが知的生命体のもたらす運命の破壊か」

神は気さくなお兄さんと言った風で、その表情はコロコロと変わった。

「そうですね、そう、貴方の意識や欲求によって私の認識は変わってしまう、私はそういう性質の存在でも有るのです」

「へえ……」

神が俺の思考に影響を受ける？ この次元に合わせてくれるからだろうか？

だが結局は理解の及ばぬ次元の話。取り敢えず、確認したい所を詰めてしまおう。

「で、僕は死んだ、何故ですか？」

「隕石です」

「やっぱり」

「解っていましたか？」

「場所は校庭の真ん中、死ぬには突然過ぎます、それに死ぬ間際に感じた閃光。だとしたらミサイルか隕石。考えられるならそれぐらいしか無いですよ」

「なるほど、で、どうします？」

「どうしますとは？　なんででしょうか？」

「ゴネると言いましたよね？　想像がついてるのでは無いですか？　アレですよ、異世界転生、出来ますよ」

「……唐突ですね、いや、隕石だとすると一緒にいた田中と高橋も死んでますよね」

「はい」

「いや、そう言えば隕石？　隕石だって？　そんなのは高橋に落ちる筈だ、そうですね？　つまり高橋は異世界転生した？　それで俺は巻き込まれた！」

「流石！　理解が早過ぎる」

「アイツの運の悪さは統計学とかを馬鹿にしていた。その原因はなんです？　隕石が落ちる確率なんて文字通り天文学的って言葉のママでしょう」

「その原因が解らないので困っているのです」

「ハッ？　神が解らない？」

「神にだって……わからないことぐらい……ある……」

「ふざけるの辞めて貰って良いですか？ いやコレも俺が求めているのか？ クソツ」

冷静なつもりだった、だが不安とか焦りが滲む。俺自身では何も制御出来ない。

そんな俺に人の良い笑顔で神は微笑んでいた。どっかりと胡坐をかいてヨレヨレのシャツを腕まくりし、頬杖をついた姿勢でニヤニヤとコチラを窺う。

「勿論、あの隕石が何処から来たかも、どうやって来たかも解っていますが、が、それは落ちるはずの無い隕石でした。可能性は有ってもあり得ない運命だった。しかし運命は破壊され隕石は落ちた」

「……いや、どういうことですか？」

「解っているのは彼の、高橋君の魂を入れた人間は、我々の想像し創造した運命を超えて早死にすると言う事です。世界のバグを疑う存在です」

「運命、バグ、魂。解らない事だらけだ。教えて下さりませんかね？」

一気に解らない事だらけになった。確かに高橋は図抜けて運が悪い、その運の悪さに同情して異世界転生。……そして俺はそれに巻き込まれた。

その位のシンプルな筋じゃないのか？

こう考えてしまう事自体が、高橋の好きだった異世界モノの小説に俺までカブレてしまっている証拠だろうか？

俺はああ言った小説が大っ嫌いだった筈なのだが、何故だかここがそう言う世界だと認めてしまっている。

それは目の前の神が掛け値無しに超次元の存在だと、認識させられているからだ。そしてその神から語られる世界は想像を超えていた。

「少し複雑な話になりますが貴方なら理解出来ると信じて居ます。まずは魂の本質、魂とは認識コードに過ぎないのです。地球で言うとIPアドレスが最も近い」

「IPアドレス？ 確かにIPアドレスなら使い終わったら転生するか……でも、同じIPを前に使っていたPCの影響なんざ受けないぞ？」

「はい、受けるハズが無いのです。ですが、或るIPアドレスを割り振ったPCだけが故障を起こすとした場合、何を疑いますか？」

「そのIPに対してハッカーが攻撃を仕掛けている？」

「そうです、つまり我々が作ったネットワークに悪意のある攻撃が仕掛けられている事になる。ですが、どんな調査を行ってもそんな形跡が無い」

「IPを割り振るプロバイダ、いやもっと上流のネットワークにバグが有る可能性は？」

「そう思っつて、思い切っつて全く別の異世界の人間にIPアドレス、魂を割り振る事にしたのです、丁度海外のIPを日本のPCに割り振るぐらいの無茶ですが」

「そうか！ その為に高橋は異世界に転生した。ついでに俺もつて事か！」

「ぶつぶー、違います」

「……はあ」

駄目だ、俺の精神に呼応してるのは間違い無いのだが、どうしたってイライラする、怒ったら負けだ、本来俺は怒らせる側で怒る側じゃない、クールになれ！

「じゃあ、何故、高橋は異世界に？」

「逆です、彼にとつてここが異世界なのです」

「え？」

「彼は私が管理していない異世界で一万回以上も十六歳前に死亡していた。早死にも珍しくない世界ですが、余りに回数が多い。その為、英雄や豪傑となる運命の人間にその魂を割り振った。ですが、運命を破壊して結局死ぬ。それを何度も繰り返した末。バグを疑った異世界の神から私に、地球の人間にその魂を割り振る事を持ち掛けられた」

「……なる。だけど、高橋は英雄とも豪傑とも違うだろ？ いや、これから覚醒する予定だった？」

「違います、彼は逆に他人の運命に殆ど関わらず、平凡に長生きする筈の運命の持ち主でした。例えば多くの人間に影響を与える強力な運命を持つ英雄に転生させれば、多くの人間の運命の保護を受けられる。ですが逆に多くの運命の影響をも受ける為、死ぬ機会も多い上に、もし死んでしまった際は大勢の人間を巻き込んで、運命の破滅をもたらす

のです」

「いやいやいや！ 運命って言われても解らないんですって！ 何ですか？ 運命って誰が決めてるんです？」

「我々です」

「……で、ですよね？ ン？ 解る様で解らないんですが」

よく解らない、解らない事だらけだ。そもそも何故そんな面倒な事を神はやっているんだ？

運命を作ってそれが壊れると困る。じゃあなんでそんなモンを作るんだ？ いや言ってしまうえば魂を作る理由は？ 世界を作る理由は？

「理屈立てて説明する事は可能ですが、流石に理解しにくい話となっております」
「それでも！ それでも聞いてみたいんです！」

俺は異世界転生物の何が嫌かって理屈が無い事が嫌いなのだ、だから専らSFを読む事が多かった。……SFだってオカルトじみた話が多かったりもするんだが。

もしも神に質問出来る機会が有れば、聞いてみたい事は山ほどあるんだ。

「貴方が疑問に思っている事を説明するには時間も気力も必要です。大丈夫ですか？」
そんな風に神が尋ねるが、そう言われても前提が解らない。

「時間制限とか有るんですか？ 気力って言われても」

こっちは認識だけの霊体みたいなモノだろうか？ この状態でも時間とかで何か靈魂とかがすり減るのか？

「時間制限は無いですが、精神体として貴方に成長は有りません。理解出来ない物はどれだけ時間を掛けても理解出来ないし、気持ちが理解を放り出した時点でどうにもなりません」

「じゃあ、ほぼノーリスクですかね？ だとしたら取り敢えず話して貰って良いですか？」

「良いでしょう」

そうして神が説明する世界は、俺の想像を超える物だった。

木村の回想2

一面の白い世界で俺と神だけ。俺の姿はなくその存在は自我だけだ。

神の方は俺の要望で白いヨレヨレのカッターシャツとジーンズ姿のお兄さんと言った感じの姿を取っている。

その姿で、俺を試す様に得意げに鼻を鳴らし、世界とか運命の解説をしてくれる事になった。

なんで俺はそんな説明を求めているのだろうか？ 恐らくそれは俺がそう言う『設定』に拘る人間で、それに呼応して神が気を利かせてくれているからに他ならないだろう。

俺は設定に拘り過ぎて、みんなが楽しめている漫画やアニメを楽しめない事が結構あるのだ。

例えば世界的なヒット作『ドラゴンダイス』。内容は①から⑥までの数字が書かれたキューブを集めると、それが一つに合体、ドラゴンダイスとなって神龍が現れる。

神龍は出たダイスの目の数だけどんな願いも叶えてくれるとかなんとか。

で、キューブを巡って大冒険が始まる訳だが。俺が何より気になったのはドラゴンダイスって『システム』を誰が作ったかだ。

キューブを集めてダイスに、ダイスから神龍が出て願いを叶えるとダイスはキューブに戻って世界各地へと散って行く。

「どう考えても面倒極まりない。そんな仕組みで誰が何の得があると言うのか解らない。」

俺は色々と想像した、ドラゴンダイスを作った者の目的を。

「人々を冒険に駆り立て、種族間の交流を活発にする」

……と言うのが考えた中で一番穏当な理由で、他には

「人類を争わせ、戦争を誘発し、人類の数を調整している」

みたいなダイストピアめいた理由を想像しては体を震わせた。

そんな風に『理由』を期待してアニメを見続けた俺はその後、完全に裏切られた。

明確な理由は一切出てこなかったのだ。

正直、俺はビツクリした。タイトルにもなってるキーアイテムの存在理由が曖昧で、それでも大ヒット作なのだから意味が解らない。

もちろん作中の神がドラゴンダイスを作ったと言う設定はあるのだが、理由が全く見えてこない。

大ファンを名乗る級友ですら、面倒なシステムの理由については全く知らなかった。

なにより俺を驚かせたのが、『それを誰も気にしていない』事だった。

大ヒット作のタイトルにもなっているキーアイテムの存在理由を誰も疑問に思っていないかったのはショッキングの一言に尽きた。

それどころか、俺に言われて始めて「そう言えばなんでなんだろうね？」みたいな反応をする程だった。

それを親友二人に尋ねた事が有る、その時の反応はこうだ。

「あー作者の鳥川さんが冒険活劇を書きたくて作った設定でしょ？ 深く考える意味無くない？」

高橋が言うことはいつも身も蓋もない、聞いてしまった事を二秒で後悔した。だが言っている事は間違っていないだろう、でもそれじゃ納得出来ないだけで。

「ドラゴンダイスには理由も理屈も不要、絶対不可侵でただそこに有るだけ。だからこそドラゴンダイスはドラゴンダイス足り得るんじゃないやねーの？」

田中の言葉も俺が求める物じゃ無かったが、言いたい事は解る気がした。

高橋も田中も、どちらも直感的に本質を突いている。だから俺が納得行かないのは俺が本質以外のとって付けた理由が欲しかっただけだ。

大事なのは本質で、理由や理屈なんておまけに過ぎない。

現に「有る訳ねーだろ！」と俺が高橋を馬鹿にしていた異世界転生小説、その開幕そのままの状況が今、正に目の前に顕現しているではないか。

以前、高橋が俺に異世界転生小説の大ヒット作を薦めて来た。SF好きの俺にファンタジーは鬼門に思えたが存外ハマった。

いきなり誰も知らない未開の地へ投げ出された主人公が、古代遺跡や魔獣を相手に大冒険する。

よく考えたら宇宙船が不調に陥り、見知らぬ惑星に不時着、遺跡や宇宙生物相手に戦うSFと話の筋は何一つ変わらないからだ。

だが、俺はまたしても裏切られた。

異世界転生した理由が全く解らないのだ。

SFだったら「魔のバミューダ宙域で宇宙船が突如不調に陥る。不時着した惑星Xでの大冒険の末、その原因は惑星Xが実は巨大な宇宙生物で、巨大なエネルギーを発する宇宙船を吸収するべく引き寄せていたからだ」と判明。

このままでは肥大化した惑星Xが宇宙の全てを飲み込んでしまうぞとなつて、惑星Xの内部で核融合炉を爆発させ破壊、間一髪崩壊する惑星Xから脱出するラスト」つてのがまあお約束。

が、高橋から借りた異世界モノはラスボスを倒したら、メダシメダシでヒロインと子供を産んで幸せに暮らしましたで終了なのだ。

高橋に納得いかないと文句を言ったら、「いや中盤の遺跡で、稀に次元の狭間から落ち

て来る魂があるって説明有ったでしょ？」と来た。

あんなの、設定でもなんでもないだろと怒鳴ってしまった。とても納得が行く物じゃない。

異世界転生なんて不思議体験で始まったのなら、不思議体験の原因が全ての謎の根源でラストまで繋がっていて当然では無いか！

そもそも、転生とか魂とかなんなんだと問い詰めたくなる。

いや、それこそ神に問い詰められる機会があるなら問い詰めると心に誓った。

来るはずの無いそのチャンスが来た！ 来てしまった！

「そんな怖い顔で見つめないで下さいよ」

神は苦笑するが、俺は笑えない。

「……俺に顔なんて無いでしょうが」

今の俺は認識だけの存在だ、姿は無い。それで困る事も無い。

「とにかく教えて下さい、世界を作った理由。魂とは？ 運命とは？ 一体何なんです

？」

「ふうーむ」

神は指先に顎を寄せ、意味も無く上を見上げて考え込む。一々芸が細かいと感じてしまっているのが人間に似せているだけだと解るからだ。

相手は神なのだ、それを無理やり俺に『認識』させてる時点で、神と呼称するに足る存在だろう。

……いや、そもそも、神とは何だろうか？

俺だってSF好きとして神の存在を考えた事は有る。SF作家でも神が居ないとこの世界は説明出来ないと言う人間は結構居るのだ。

もし、神が本当に居ると仮定して……いや、実際居た訳だが。それが世界と人間を管理していると言うなら、その目的は。

・愛玩

・家畜

・実験

この三つしか考えられない。人間が動物を飼う理由がそれしか無いからだ。

良く有るのは、人間の信仰心が神のエネルギーと言う、実質の家畜設定だが、人間の信仰心に世界を作るだけの価値と力が有るとするならば、人間はもつと救われているべきだろう。

「その三つの中なら実験が一番適当ですね」

「へえ」

神が俺の思考を読み取って答える。

それは思っていた通りの結論だった。世界も宇宙も途方もない存在だ、それを作れる力が有りながら、神が我々を観察する理由が有るとすればそれしか考えられない。

だが問題なのはその目的だ、流石に神にとつても世界の作成は簡単な事じゃ無いだろう。

「実験の目的をお聞きしても良いですか？」

「まず、我々はラプラスの魔になりたかった」

「いや、無理でしょ！」

初っ端からいきなり話の腰を折る様にツツコミを入れてしまった。

だが神は気を悪くした風もなく、ニヤニヤと笑う。

「そうかな？」

「そうです！」

ラプラスの魔、この世の全てを把握すれば未来を完璧に予言できると言う考え方から、全てを知る事で全てを予知する悪魔をそう呼ぶ。

だがその存在は否定されているハズだ。

「何故です？」

「観測するための装置の精度の問題が有りますね、真つ暗な場所に存在する物質を把握しようとして光を当て干渉してしまえば、その物質の在り方が変わってしまう」

「ふむ、では干渉せずに観測する方法があればどうです？」

「まさか！ 観測するには干渉は避けられないでしょう？」

物質を見るには光の反射が、重さや組成を知るならもつと大胆に干渉する必要が出て来る。

「それは世界の中から、世界の全てを観測しようとするからいけないのです。世界の外からなら干渉せずに世界の全てを知る術すべが有る」

「いや、流石に壮大過ぎませんか……」

世界の外って何だよ……人間には宇宙の大きさすら解らないのに、その外と言われても想像もつかない。地球の砂粒の数より星の数のが多いと聞いた事が有るが、正に途方も無いだろう。

「これは概念として理解して貰うしか無いのですが、世界を外から観察すると、その世界の全ての状態を映した影が出来るのです」

「……影、ですか」

「本当の影とは違いますよ？ そうとしか言いようが無いですが、そこに世界の全ての情報が反映されています」

……アカシックレコード。神の言葉を聞いて脳裏に浮かんだのが其れだ。宗教的な考え方だがSFにもよく出て来る、世界の全てが記録されている記録媒体。

「いえ、影は影、現在の状況を映しているだけです。そしてその影を記録するシステム、アカシックレコードを作ったのが我々と言えるでしょうか？」

「で、その影から得たデータを解析すれば、世界に影響せずに全てを観測出来るかと？」

「その通り、まず我々は実験のために極々小さい世界を作成しました、丁度太陽系程度の大きさの閉じた世界です」

「……太陽系、程度の？」

一々スケールがデカい、だが宇宙が基準だとそうなつてしまうか。

「生命体の一切居ない、光とガスと岩だけの単純な世界です、この規模なら全ての未来を簡単に予想できる、その筈でした」

「失敗したと？」

「ええ、勿論天気予報レベルなら的中率100%と言えるでしょう、ですが我々が目指したのは砂粒一つの位置や在り方、その全てを求める事でした」

「ラプラスの魔になるためには、世界の全てを把握する必要がありますもんね。でも何が原因なんです？」

「失敗した理由も実験開始の目的もそこに関係してはいますが、結局のところ対象が小さくなるとそのふるまいが予測出来なくなるのです」

「え？ どういう事？ ですか？」

「石が何処に転がるか？ その位なら人間にも予測が付くでしょう。ですが、ミクロ世界で、分子が、原子が、粒子が、いったいこれからどう動くか。対象が小さくなればなる程に、それが却って予測出来ないのです」

「いやいや、逆でしょうに、そんな小さいレベルで解らないなら、大きい物なんて絶対予測不能じゃないですか！」

「ですが、そう言う物なのです。転がる石と違って、対象が極めて小さい場合は時として右に行くか左に行くかと言うレベルで解らない。その原因としてさっき貴方が言った通り、小さい物程知らずに干渉してしまうのが原因とも考えていました。だから世界の外から影を測定すれば、影響を与えずにそのふるまいの不確かさと偶然の理由も判明すると言う期待があつたのです」

「それが解らなかつたと」

「ええ、貴重なデータは取れましたが、結局は極小の世界に踏み込む度に、不確かさと偶然の影響は濃くなつて行きます」

「逆の気がするんだが……極小の世界がわからないなら、その集合である普通の世界がわかる筈が無い」

「統計学的に、あるべき世界に収束します。ですが、それは統計学的な決着で、一切の誤差がないわけではありません」

「来週の天気は解つても、100年後の天気は保証しかねると言う感じか」

「そうです、実際はもつと長いスパンの話ですが」

「マジかよ……」

その天気予報は羨ましい、地球の天気予報は今日の天気ですら外れまくる。

しつかし、小さい物ほどに神でもその動きを予測出来ないってのは意外と言うか、よく解らないが、そう言うものと飲み込むしか無いだろう。

「何と言えば良いのか……大きい物がそれぞれに干渉する場合、その干渉結果を想定する事は難しく無いのです、ですが、極々小さい物が自由に動く場合、そのふるまいを想定する事は不可能でした」

うーん、解る様な？ 解らない様な？ 小さなチリが何処に飛んで行くかは、紙飛行機がどうやって飛ぶより予測し辛いのに近いかな？

「……まあ、取り敢えずそんな理解で良いでしょう」

……この反応、大分外してるな。だが仕方ない。

「で、良いデータが取れたねで終わる筈の実験でしたが、ある日途轍もないミスをしてしまいました」

「ミス？」

「ええ、影の記録用の……鯖？ サーバーのデータを、未来予測用のサーバーのデータで

上書きしてしまったのです」

「サーバーつてのも、俺の概念で一番近い単語を拾ってくれたと言う理解で良いんですよね？」

「ええ、それ以上に理解する事は不可能なレベルで似ている存在だと思って下さい」

「つまり、貴重な記録を予測結果で上書きして消してしまつたと」

「ええ」

「大惨事ですね、地球でも良く有る奴ですけど」

「ええ、大惨事です、ですが本当の惨事はここからでした」

「と、言うとは？」

「世界はその後、上書きされた予測データの通りにふるまつたのです」

「ん？ どういう事ですか？」

「予測データは、予測不能なミクロの物質のふるまいを適当に作成した乱数表の通りにランダムに、それでいて乱数表通りと言う規定値で動く事を想定して作成していたのですが、サーバーに予測データが上書きされるや否や、その後は偶然にふるまうはずの全ての粒子が予測通りの挙動を示したのです」

「んん？ いや、え？ それって心電図記録用紙に冗談で記入した脈拍で、ホントに患者が脈拍を刻むみたいなの、あり得ない事じゃないですか？」

「フフツ、そうですね、面白い例えですが、当時の衝撃はそんな感じでした、あり得ないとね」

「いや、あり得なくても起こった事には理由が有る筈、つまり影の観測は影響を与えないどころか、偶然で法則性が無いと思っていたミクロの世界に大きな影響を与えていたって事でしょう？」

「ええ、その理由も調査中ですが、未だに解っていません」

「うーん」

「ですが、それでも私たちはラプラスの魔になりました、未来が解らないなら未来をこちらで決めてしまえば良いのです」

「めっちゃ強引な様な……でも、結果は同じか」

「ええ、そうして全てが予測可能な世界を我々は手に入れたのです、これをラプラスシステムと名付けました」

「で、その結果を活かして、自分達自身が住む世界も改変しようとしたと？」

「それは話が飛躍し過ぎでしょう、そもそも自分たちの世界の影に内側からアクセスする方法も有りませんし、途方もない話です、まずは極小の世界の次、もつと大きい世界で実験する事にしました」

ふーむ、面白い、SF小説みたいな壮大な話じゃ無いか。ワクワクして来た。

「楽しんで貰えているようで良かった、でもっと大きい世界でラプラスシステムを起動してみたのですが、結果は芳しくありませんでした」

「未来は思った通りにならなかつたと?」

「はい、それも想定以上の差異が出ました、様々な実験を繰り返し、原因は知的生命体の発生に有ると断定されたのです」

「なるほど、全ての物質の位置と祖形を特定しても、思考までは測定しそこねたと?」

「ええ、脳の物質を分析して思考と行動を想定するのですが、致命的に精度が足りないと言う結論になりました」

「うーん、今の地球の科学力じゃ脳を解剖してもその人の記憶とかを覗けません、科学が進めばそう言う事も可能かと思っていました」

「ああ、その程度なら、現に私はあなたの思考も記憶も読めますし」

「ですよね」

「ですが、貴方にも覚えがありませんか? 思ってもいない様な行動を突然とつてしまつたり、急な思い付きで計画を大幅に変更してしまつたり。生命体の思考は様々な干渉を受け、その僅かな干渉が即座に大きな事象を伴つて、ラプラスシステムの予測を破壊してしまいます」

「うーん、結局、移り気な人間の心つてのは神でも予想しにくいって事ですかね」

「と言うより恐らく、感情と干渉し合う魔力と言うエネルギーが関係していると思うのですが、その所為で予測を想定範囲に収める事自体が困難なのです」

「魔力？ 想定範囲？」

「先ほどの乱数表ですが、もし範囲を誤って絶対に粒子が到達出来ない場所に移動する事を予測してしまうと、その時点で予測は崩壊してしまいます。さっきの心電図の例えで言うと、脈拍数一万つて書いても無理な物は無理でしょう？」

「そりゃあそうですね」

「生命体の思考は複雑で干渉を受けやすく、中々想定範囲を算出する事も難しい。なので二つの方法を試みました」

「二つの？」

「まずは情報の精度を上げる事を考えました、用意したのは知的生命体の思考と感情、脳の情報をサーバーへと送信する魂システムです」

「それが魂の正体ですか……」

「もう一つは、情報のブレを無くす事。精神に干渉する魔力エネルギーを世界から除去する事を考えました」

「ん？ 全然解らないですが、まず魔力エネルギーってなんですか？」

「説明不可能ですが、知的生命体の精神と干渉するエネルギーと思っして下さい、説明不可

能の理由は地球には、いえ、地球のある世界には魔力エネルギーが極端に少ないからです」

「それが魔力エネルギーの除去ですか」

「ええ、ですが魔力エネルギーが無い世界で知的生命体が発生する可能性は極めて少ないのです、何故なら魔力エネルギーは知的生命体の精神に呼応して知的生命体を守るからです。実験用として地球は極めて貴重な星となります」

「魔力エネルギー？ あ、いや魔力でお願いします。 エネルギーってのはフアンタジーな力でない事を示すために付けてくれたんでしよう？」

「ええ、ですが、貴方が考えるフアンタジーな特性も持ちます」

「それが精神に干渉、感応することですか」

「そうです」

「壮大だなあ……」

俺は白い世界でひっくり返る。そうは言っても天も地もないのだが。

「ここまでの話を理解できる生命体が存在するだけで奇跡ですね」

「へへっ、で、魂システムってのは？ 詳しく教えてくれませんか？」

「人間が考え、認識した全てをサーバーに送信するシステムです、通信するからこそ認識用の番号が必要だったのです」

「なるほど、そして高橋の番号は不幸が多いと」

「そうです、それにしたって物理法則を越えた訳でも、我々のシステムの全てを否定して不幸が起こる訳では無いのです。ラプラスシステムと魂システムで集めたデータで例えば99.9999%の未来を予想出来たとして、0.0001%が未確定として残ります。ですが確定部分から未確定部分を予測した上で、未確定部分が取り得る値の平均値を算出すれば、ほぼ間違いない予測が出来る筈なのです。このラプラスシステムと魂システムを組み合わせたものを我々は運命と呼んでいます」

「凄いシステムに聞こえますが現に運命は変わってしまった。精度が100%じゃないならある意味当然なんですかね？」

「ええ、ですが予期しない偶然でも試行回数が多くなれば、中央で値が安定します。ですが、我々が予測していない0.0001%で極端に確率が偏れば……例えば5000兆回サイコロを振った結果、全部1でしたとやられてしまうと、中央値付近で想定していた予想結果から大きなズレが出る。そうして穴が開いて、予期しない割合が増えた運命に、更にあり得ない偶然が頻出して、あつと言う間に穴が広がって大きく運命を変えてしまう」

「……本当にあり得ませんねそれ」

「度々、既定の未来に向けて演算して定め直すのですが、それでも未来を変えてしまうの

です」

「うーん、意味不明ですね」

「はい、しかもその偶然がああ魂を狙っている意思が有るとしか思えないのが不気味なのです。どんな偶然が重なればどのような結果をもたらすかは、我々にとつても非常に難しい演算を必要とするのですが、その偶然は我々ですら予期しない場所から恐ろしい不幸を呼び寄せる」

「むしろその、魂システムつてのが悪影響を与えている可能性は？ そのシステムの要件を聞くに外部から思い切り干渉してしまっているでしょう？」

「苦肉の策で有る事は否めませんが、干渉しても干渉した結果すら計算の内に入れる事で補正出来ますし、世界の影響を与えない様に世界のシステムとして組み込んでいきます、だからこそ他の世界の番号を振るのは冒険で有ったのですが」

「なるほどー、はい、設定と言うか理由は解りました」

うーん、聞いてみる物だ。正直理解し切れたとは言えないが大分スッキリした、ここまで説明してくれる異世界モノなんて聞いた事も無い。

大体は神様のミスで死んじゃったからお詫びにーとか意味不明な奴だ。

……ん？ お詫びに？

「そーいや、それで高橋や俺達が異世界に行く理由ってなんですか？」

「それですね、やっと本題です。まず死んだのは、高橋さん、田中さん、貴方、そして黒峰さんと言う女の子ですね」

「隕石が衝突してたつた四人ですか？」

「小さい隕石ですしね、他の人は運命の復元力が働いて、『奇跡的な回復』って奴をしています。不慮の事故の後に良くある奴です、こちらでもそうなる様に運命を弄っていますから」

「ううむ、だけど俺達はどうし様も無いと？」

「原型が無いレベルですからね、流星に不可能でした」

「で、高橋と一緒に異世界に転生するのはなんでよ？」

「高橋さんはアッチの世界の神の担当なのですが、死なない様に頑張るからって本人の弁で転生する事になったらしいですね」

「いや、頑張るって何をだよ？」

「アッチの世界は魔力が満ちていますから、地球の薄い魔力下で、誰にも注目されない事で、魔力の影響を極限まで抑えてラプラスシステムの補正のみを頼りに生き抜くプランは無理でしょう。なにより今回失敗していますし。となると魂システムの情報の精度を上げる為に人々の意識に頻出する事が重要かも知れません」

「うーん、目立つアイツが想像付かない」

「もしくは何が何でも生きてやるって気持ちとか？ 守ってあげたいって思われるとか？ 気持ちの強さで魔力の保護を最大まで高める方式が有効かもしれませぬ」

「どっちも高橋に向いてるとは思えないけどなあ、無気力人間だし」

「確かに、既にテストパターンもあるようですし、一人や二人の気持ちで何とかなるとは思えませんがダメ元ですかね？」

「で、俺とか田中が転生？ ってのは何で何ですか？」

「まず、本当にお詫びって気持ちもあります、我々のイレギュラーな実験の被害者ですから」

「でも、実験動物を実験で殺しても人間は謝らないからピンと来ないと言いますか」

「地球の魂をアチラに送る事で、地球の神である私も異世界のデータを処理が可能になるのです、地球のデータ処理能力は膨大ですからね」

「地球の処理能力が膨大って？ 魔力が無い世界ですよね……どうしてそんなに処理能力があるんです？ 世界の分岐が少ないのでは？」

「それがですね、さつきも言った通り地球は貴重なんですよ、そもそも地球が出来たのが偶然みたいなモノで、初めには地球にも魔力は有ったんです。まず魔力が濃い世界を作って、知的生命体が出来たらそこから徐々に魔力を抜いて行こうと」

「え？ そうなんですか？」

「ですが思ったほど、知的な生命体が生まれず、比較的単純な爬虫類型の巨大生物が跋扈する世界になってしまいました。半ば自棄になって環境を一新して魔力濃度を下げて見たら、なんと知能の高い生命体が発生したのです」

「それが人間、と」

「そうです、しかもアチラの世界の人間と形状もほぼ近く、全体的に魔力濃度以外の環境も似ている。そして地球には計測の邪魔をする魔力が少ないからと実験対象として優秀だと処理能力が高いシステムが割り当てられていました。それが……こんなにも運命を破壊されるとは、向こうの神から話を持ち掛けられた時は想像もして居ませんでした」

「……愁傷さまとしか……」

「なので、この世界をこれ以上破壊されたく無いのです、対してアチラはもう運命が破壊されて何度も演算をし直しているのと、人間の数自体が少なく、居住範囲も限定的なため計算し直しも労力が少ない。実験に向いた環境なのです。加えて賭けに負けた代償として私の持つ演算能力も貸し出しますから、運命に穴が出来たら頻繁に演算し直して補正出来ませぬ」

「解ったような解らんような、でも転生するってなんか使命とか能力とかあるんですか？」

「あー転生の場合、記憶を引き継げるだけで天才少年となるわけですからサービスは無しです、が、幼児の体に大人の思考、更に言えば元の存在を上書きする訳で、あんまりお勧めしません、自我を保てないリスクもあります」

「ですよー、転生物のいきなり赤ん坊で無双するのって脳の作りの無理が有ると思ってます」

「そう言う体で生まれるなら、人間を辞める必要が有りますね、結局色々無理が有りますが」

「うーん、で、お薦めは？」

「アツチの世界用に私が地球での体を元に新しい体を作るので、それに入って転移するのが一番無難ですね、体とのズレも少ないので精神の拒絶反応が有りません」

「ほおーで、その体にちよつとサービスが乗ると」

「そうですね、縁もゆかりもない土地で言葉も解らないのは凄まじいハンデなので多少はサービスします」

「え？ 言葉も？ 言語知識入れた状態で体を作れませんか？」

「記憶と精神は結びつきが強いので、記憶だけ追加すると齟齬が出やすいのです、それに異世界に行く前に異世界の言語を詳しく知っている矛盾が世界に悪影響を与えかねません」

「うーん、参ったな。だとすると生きる為に必要な力か……田中は何にしたのか聞いてもいいですか?」

「田中さんは剣を扱うに適した肉体ですね、大活躍してやるそうですよ? 向こうの世界のどこに転移したとか、そう言った情報はさっき言った通り異世界の情報になるので喋れませんが」

「物理か、アイツらしいな、じゃあ俺は魔法? 魔力があるって事は有るんだよな?」

「ありますね」

「ううん、でもなあ知識が無い状態で転移して魔法を覚えるのってキツイよな、最初はハードモードが約束されてるって言うか」

俺は悩んだ、だがよく考えれば田中が剣を選んだのなら、俺だって得意分野を磨くしかないだろう。

「器用さで」

「器用さですか?」

「そうです、指の器用さとか覚えの早さ、それって脳の性能なんですかね」

「大半はそうですね、ですが神経回路や指の性能も影響します」

「じゃあ、それで」

「いいんですか? 生きるには不向きな能力では?」

「いや、有る程度文明が進んでるなら大体何とかあります、それで行かせてください」
「解りました」

神の言葉を最後に、俺の意識が溶けて行く。これが、異世界転移って奴か。そうして俺の異世界冒険譚の幕が上がるのだった……

「あ、そう言えば最後にひとつだけ」

俺のモノローグは神の言葉で遮られた。

「田中さんより、また会おう。だそうですよ」

——ははっ、そんだけかよ、らしいなオイ。

俺の笑いは白い世界で溶けて行った。

木村の回想3

起きたらそこは一面の麦畑だった、と言つても麦の絨毯は金ではなく緑。新緑に彩られ、爽やかな風が吹いている。

季節は春？ か？ よく考えたら麦つぼく見えても麦に似た植物なのかもしれない。しかし、それが人の手が入った畑で有るのは疑い様も無い、誰も居ない荒野から始まる異世界サバイバルとはならず済みそうだった。

——異世界。

そんな突飛な事実を即座に信じられるのは、神との会話が記憶に有るから、——それと。

「でっかい太陽だこと」

明らかに地球の物より大きい太陽が中天で輝いている。この大きさの恒星に照らされながら、この程度の暑さで済んでいる辺り、あれは太陽ですら無いだろう。

よく見れば植生の全てが地球と異なる、今までテレビで見た何処とも異なる。

「本当に異世界なんだな……」

実感が湧いて来るが、怖くも有る。こんな誰も知らない場所で俺が神から貰ったチー

ト能力はよりによつて『器用さ』

『器用さ』ゲームでも割とよく見るパラメータだが、正直おざなりにする奴が多いのは無いだろうか？

使いたい武器が器用さ30以上必須、と言われた時に渋々上げるか？ 程度のパラメータだ。

だが、俺にはこれしか無かった。

一応確認はしたのだ。成長率倍化とかスキル強奪とかそういうチートらしいチートが無いかどうかを。

ま、流石に無かった訳だ、ゲームじゃあるまいしレベルもスキルもステータスも無い。地球での俺に近い体を作る際に、ちよつと弄つてスペックを上げてくれると言う話。大きく分けて肉体的な強化と、地球には無かった魔力を扱いやすくする強化。

だが、肉体的な強さじゃ田中には敵わない。体が強くても技術がついて行かないからだ。

斬つた張つたの暴力で、毎日剣を振つてる連中に敵う筈がない。

魔力の方もつと酷い、完全な素人。一応、異常な魔力適正があれば、なにを習わずとも慣れれば肉体的な強化は取得可能で、将来性は有る能力と聞いたが、RPGでも一番危なく死にやすいのは序盤。

その序盤に冒険する訳には行かないだろう。

ならば手つ取り早く活躍出来そうな能力が良い、それでいて暴力とは無縁で安全な能力、狙うは俗に言う内政チート。

初めて聞いた時から疑問なんだが、何が内政なんだよと思うが、高橋曰く現代知識で生産系を頑張るのをそう言うんだと。

ともかく現代知識と其れを実現する器用さが有れば、色々とオイシイに違いない。とは言え、そんなものは文明が余りに遅れていても駄目だし、進んでいても役に立たない。

だが仮にそう言う世界だとしても、単純に器用さが高ければ物覚えも良く、色々と捗るのでは無いかとまあ、そんな浅知恵だ。

それに、神も元々得意だった分野を伸ばす方が、精神に無理なく上限が高い肉体に出来ると言うので、元より器用だと言われた俺はこの能力を選んだ訳だ。

こうして、俺の異世界生活は畑の真ん中で、器用さ一つを武器にしてスタートしたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——で、十年とちよつとの月日が流れた。

あつと言う間だった。だが思いの外、拍子抜けするほど安定した十年だった。

思った通り最初はハードモードだった。言葉も話せぬ白痴と思われ、馬鹿にされた。だが季節が丁度、芋の収穫期とかで人手が欲しかったらしく手伝えれば最低限の飯が食えたのだ。

そこで芋掘りの筋が良いと褒められ、次第に言葉も覚えて行った。

転機が訪れたのは三か月後、近くに海があると知ってからだ。

——ズバリ、釣り具の作成である。

俺の器用さはここで遺憾無く発揮された。現代知識を活かして釣り針や釣り竿を作成、リールに至っては存在もしていなかった。

いや、正直に言うると現代知識が役に立ったかは微妙、だが神様印の安心保障。絶対的な器用さで作った釣り具の性能はかなりの物だった。

まずは自作した釣り竿と釣り針で釣りをした、しかも生餌では無く現代的なルアーを使用した釣りなので、芋虫を取る手間も無く効率的。

始めはこんなので釣れる訳無いと笑われた。だが、釣れた。

釣りに釣れて、魚を持って帰ればご厄介になっていた農家で喜ばれ。食事が豪華になった。

もちろん村で話題になって、釣り具を売ってくれと頼まれた。

当然売った、毎日毎日、作って作って、売って売って、作って売った。

ここでも俺は笑われた、折角の飯のタネを売るなんて馬鹿だと言う訳だ。

だが、俺は漁師で一生を終えるつもりはない。タネ銭が出来れば十分なのだ。

そこそこの小金を持って、俺は王都に辿り着いた。

そこからもうやりたい放題だ。

定番のマヨネーズから始まり、石鹼の作成、馬車や靴の改良。服飾でもビーズや刺繍などとにかく目についた物を全部やってしまった。

異世界モノは馬鹿にしていたが、内政パートって奴は好きだったので、ホントに可能かどうかネットで調べたりもしていたのが役に立った。高橋に感謝だな。

田中は「そう上手く行くわけねーだろ、材料だって同じものが揃う筈ねーし」と否定的だったがやればやれるもんだ。

だがそもそも、金と時間を掛けてもやっぱり出来ませんでしたってのが非常に多いのが発明だ。

その典型例が錬金術。金を作るなんてのは現代でも超難関な訳で、筋が悪い研究と言えるだろう。

一方、俺がやってるのは厳密には発明じゃない訳で、困難だとしても絶対に不可能な筋ではない。

投資としては固い部類と言える。

しかも、紙作りに向いた木を探させたら山椒の実みたいな味の木の実を見つけたり、シロツブが無いかと探せば、漆が見つかったりと、答えを知ってるが故に商売のタネの見逃しが少ない。

そうして用意した食べ物や文化が、残念ながら現地のニーズに合わない事も有る。

だが、そこは売り方だ。

服飾が特に顕著だが、良い物でも売り方が悪ければ流行らない。

だが、逆に言えば売れない物でも悪いとは限らないし、売れている物でも良いとは限らない。

本当に良いか悪いかは歴史の証明を待つしか無い訳だ。

で、俺は歴史の裏打ちが済んだ物売るんだから、自信をもってお届けできるし広告にコストも掛けられる。

その広告だって、試食会やらイベントを開いたり、他の人気店とのタイアップや、劇団とタイアップして服を着て貰ったり、食べ物は劇中で食べて貰って宣伝したりする。

現代では常識でも、この世界では斬新な広告にガンガンと金を使える。

その広告効果の確認も、アンケート用紙で抽選プレゼントや抜き打ち調査、モニターを雇うと言った手法が使えるのだ。

一個一個は地味な知識でも組み合わせると途轍もない破壊力を生む。

例えば山椒は独特の刺激があるので初めは受け付けなくても、食べ慣れれば色々な食べ物に合わせて貰える様になった。

本当は長い年月の投資が必要な案件なのだが、広告手法を組み合わせ、普及までの時間を一気に短縮出来ると利益がドンと膨らむ訳だ。

当然、生息地や苗木に至るまで商会で独占している。

そう、たった一人でここまで手広くやれる訳が無いわな、当然、俺は商会を作った。そして同時にヤクザを作った。

巧妙に無関係を装った商会を作成し、そこにゴロツキを加盟させた。

色々手を広げるのに、いちいち既得権益との利益調整なんてやってられないからだ。で、トドメは金融業だ。

なんせ帳簿の付け方だっといういい加減な世界で、金利とか分割払いとかの考え方だっという理解出来ない連中ばかりだったが、そこはコンサル業も兼業して、帳簿や仕入れもこっちでコントロールしてしまう。

店の金をこっちが管理してしまえば事実上の乗っ取り成功だ。

パン屋に至ってはフランチャイズ契約みたいな業態で何店舗もやっている。酒場もチェーン店化してるので黙っていても金が入って来る。

金が入り過ぎて、王宮や貴族たちも無視できなくなっただのか爵位も貰ってしまった。

勿論、とんでもない寄付金を要求されたが安いもんだ。
と、ここまでやったら十二年なんてあつと言う間だった。

運命の女性

「んつつはあーっつつまんねー」

俺は飽あいて居た。

そもそも俺は金を稼いだったのか？ もう途中から「この世界の経済を滅茶苦茶にしてやろうぜ！」ぐらいの勢いでは無かったか？

「シミュレーションゲームとかでも無駄に凝つちやうんだよな、最速クリアじゃいて」

なんでもやり過ぎてしまうのが悪い癖だ、だが今更言っても遅い。

ゲーム感覚で事業を拡張金を稼いだが、俺にとつてはそれこそゲーム内の通貨と変わらない。

元々酒も博打もやらない。酒は弱いし、博打をするなら投資をする方がリターンが大きいので興奮しない。

後は女つて話になるのだろうが、この世界の女の子は地球出身の俺基準で言う素直に臭い。

体臭もキツイし、そもそもが不潔で、顔もちよつとケバい。頭も悪いし、案外恥じら

いも薄い。

簡単に言うとは萌えない。

「はあ……ファンタジー詐欺だろ、何処にもリユーナたんみたいな娘が居ないんだが？」
リユーナとは地球で見ていたファンタジーアニメのヒロインで、銀髪エルフの美少女だ。

異世界転生って言われりゃ、そう言うファンタジーな可愛い子の一人や二人、居ると思う俺の気持ちは空回り。

女の子が可愛いだけのアニメだと馬鹿にして居たけれど、女の子が可愛ければ十分だろ、他に何もいらぬ、何も足さない。

俺、青かったなー、なーにが異世界転生のシステムとか理屈を問い詰めるじゃ、たわけ過ぎてるだろ。

俺が聞くべきは俺が愛せて、俺を愛してくれる女の子が集うテーマパークの住所だよ。

理屈なんてどうでもいいーわ！ 美少女動物園に入園したい。

ゴリラにバナナをあげる感覚で、美少女のほっぺを札束でペチペチする夢を見て、気が付けば三十の手前に来てしまった。

いや、この世界は金貨だからお札じゃないけどな。

そんな俺に少年の呆れる様な声が掛けられた。

「まあた、先生の病気が始まったよ。なーに変な妄想してんですか」

鉛色の光沢を放つ執務机、そこに泣きながら突つ伏す可哀想な俺を笑うのはフィードゴ少年だ。

丁稚として働きに来ているのだが、頭の回転が速く便利なので傍に付いて貰っている。

「はーここで女の子が出てこないのが俺の人生なんだよなー」

そう言つて机をバタバタと叩く、そしてそんな俺を見る少年の目は酷く冷たい。

まー丁稚として修業に来るのは男の子になりますわな。

一応、将来の人材確保を狙つて学校に出資もしてみたが、そこでも男の子ばかりが集まる訳よ。

この世界では貴族でも無い女の子に、わざわざ高等教育を施そうとはしないご様子。大変な男尊女卑社会ですわ。

しかも女つ気が皆無な所為で、少年を侍らせる変態が、今度は学校を建てて少年を物色していると評判になってしまった。

「俺、完全にシヨタコンのホモだと思われてるんだけどどうしよう?」

「はあ……知りませんよ。いつそホントに少年愛好家になったらどうですか?」

「で、お前を抱くのかよう。冗談キツイっての」

「月に金貨百枚で良いですよ」

「……どんな高級娼婦なのかと」

金貨百枚。大体、一千万円ぐらいの感覚か？ 酷い冗談だ。この少年は貧乏商家の子供なのだが、なんでも売ろうとする心意気は買う、でもだからって値段設定がガバガバ過ぎるでしょう。

「じゃあ、その高級娼婦でも、貴族の娘でも囲えばいいじゃないですか！ 先生の資産があれば、向こうの方から売り込みに来ますよ」

「それが嫌なんだっての、俺だって良い歳だし、本当の自分を愛して欲しいとは言わんがね。ああもガツガツ来られるとコツチが引いてしまうよ、なにより可愛いと思えない」

「先生、顔も良くて、頭も良くて、性格も良くてってのは無理ですよ」

「いや、金目当てでも良いんだがね。お家復興の為に嫌々ながらも、俺と結婚しなきゃ！
って、思い詰めてる方がガツガツ押ししてくるより大分マシだよ」

「んー、その条件で良いなら貴族のお嬢様に結構居そうな気がしますよ？」

「あー、駄目なんだよ、そう言うのに限って馬鹿で不細工なの。実際器量と頭さえ有りや
少々の借金なんざどうとでもなるからね」

「……確かに、じゃあどうすりゃ良いんです？」

「例えば、俺が居ないと駄目！俺じゃ無いと救えない！　つてのが良いね。少々可愛くって頭が良くてもどうにもならないレベルの借金とか」

「先生の資産が無いと救えない借金こきえてる女ってヤバく無いですか？」

不肖の弟子が何か言っているが俺には聞こえないし、聞きたくない。

「それより、旅に出るってホントですか？　どの位の期間ですか？」

「期間などない、俺はギター一本で食っていく、明日から本気出す」

「じよ、冗談ですよね？　先生の腕が有れば可能でしょうけど。わざわざそんなの意味不明ですよ」

ニートの若者みたいに言ったが、少年はマジに取った様だ。

実際、ギターを作ったのも俺ならば、ギターを一番上手く弾けるのも当然俺なので、俺が俺を呼ぶ俺の物語を語るだけで、吟遊詩人として最強なのは確定的に明らか。

「なんで先生は旅に出たいんですか？　昔っから言ってますよね？」

「ギター一本で戦う俺を愛してくれる人を探しに行く」

「居ませんよ！　そんな人！　いや……居るかもですけど、危ないですよそんなの」

「フイーゴ少年よ、金つてのは手段だ、手段だけ有っても俺には目的が無いのだよ」

金で揃えられる情報や装備は揃った。

俺は得た金で、田中と高橋、そして黒峰さんの情報を探った。

田中は多分、帝国で傭兵だか冒険者として活躍中。

「王都にて待つ——ヌルポ」

って手紙を出したから、そろそろガツ！ しに来るんじゃないかな？ 別に来なくても良いわ。

黒峰さんの情報は無いが、状況証拠から何処で何をしてるかは想像が付く。そんなに悪い状況では無いだろう。

問題は高橋だ。

アイツは持ち前の不ハードラック運ダンスと踊ってるに違いない。

既に死んでいても全然不思議じゃないし、それならそれで良いや。

問題なのは生きていた時だ。生きていた場合、最悪アイツには隕石が降り注ぐ。

もう、金属の檻に困って嚴重に管理するしか無いだろう。

俺は高橋動物園には入園したくない、飼育員はフイーゴ少年で決まりだ。

「なんでコツチ見るのですか！ また変な事考えてるですね！」

フイーゴ少年が顔を赤くして慌てる。少年は焦るとカタコトになるのだが、なんと言うかあざとい。

そのあざとさは要らない！ ノーサンキューだ。

「俺にはどうしても探し出さなきゃいけない珍獣が居るのだ、魔獣ハンターとして生き

て行く。オトコアイルーも一緒に来るかね？」

「なんですか？ その『オコトアイルー』って？ 連れて行ってくれるなら僕も付いてきますよ？」

「いや、やっぱりお前には商會を頼みたい。オトコアイルーはオトナアイルーに進化してくれ、商會を頼む」

「全く意味が解りませんが、無茶しそうなんで一緒に行きますね」

「やめーや」

やべーぞ、シヨタの呪いが掛かってる。美少女動物園どころか、美少年動物園の飼育員に就職した気がする。

これ高橋もシヨタって可能性は無いよな？ いや、アイツは人間に転生なんて事は無いだろ、そう言う顔じゃない。

取り敢えず、巨大なウーパールーパー（海トカゲの一種に近いのが居た）を見つけたら報告しろとお触れは出している。

成果として、この執務室の一番目立つ位置を陣取る大きな水槽に、一匹の海トカゲが寝ている訳だ。

しかし、なんと高橋と名付けたウーパールーパーは言葉を話す兆しを見せない、ひよつとしてコイツ高橋ではないんじゃないか？ まさかな？

「あつ！ でも、タカハシの世話をする人が居なくなっちゃいますね、人を雇うには勿体ないし……」

「ホントについてくる気が、少年」

「どうやら少年はマジに俺の股間のエクスカリバーを狙っている。俺を手ごろな玉の輿でも思っているのか？ 俺の腰に玉がついてる奴を乗せる甲斐性はないぞ？」

「でも、先生が商会を捨ててまで何をするのか、僕見てみたいんです」
「なるほどな、勘弁してくれ」

「コイツを何のために後継者として育ててきたのかわつかんねー。」

「とは言え、まだ少年を後継に指名するのは時期尚早か。現実的には副商会長の繰り上げかな？」

「旅に出る前に、俺の現金の半分は宝石にして持ち運ぶとして、半分は商会に預けておくか。」

「などなど、具体的なプランを考えていた所に。」

「そーいえば、今話題の森に棲む者の姫君の噂、知ってます？」

「フィーゴ少年が話し掛けて来る、真面目に考えている所に少年が水を差すのは稀だ。」

「ああ、聞いてるよ。なんでも幻想的で儂い雰囲気少女だとか」

「ですよ！ いやいよ明日、王都に着くらしいですよ、見に行きませんか？」

銀髪のエルフ（魔法が得意な耳が長い森の種族って、そりやもう決まりだろうが）と来れば、リユーナさんの幻想がチラつくが、俺は貴族のお嬢様って奴に幻想をパリーンされ続けたから慎重にもなる。

「凄いい人出になりそうですよ。傘下のチェーン店にも張り切ってチーズクレープを準備させてます」

「良いぞ、片手で持てて、ゴミが出ない食べ物徹底させろ。ウチのゴミが散乱するとイメージが悪いしクレームが来る」

「でも、折角大通りに屋台を出す計画だったのに何で取りやめたんです？」

「ハッ！ そんな事したら中央広場が抑えられないではないか！」

人出があると知れば、どいつもこいつも道端に屋台を出したがる。

平時だつて商会同士が鎗しのぎを削るナワバリバトルだつてのに、イベントと来ればその争いは苛烈を極める。

だが、俺の商会は今回ばかりはそのバトルから手を引いた。狙いは一点、中央広場。

「広場？　そこで屋台を出すんです？」

「馬鹿か！　もつと大規模に、大胆に！　ガヴァ・ゼツサ・フィンザード音楽団と俺とのセッションだ！」

「え？　聞いて無いです！　用意もしてないですよ！」

少年は慌てるが其れもそのはず。

「だろっうな、主演の俺すら用意してない」

「……ハ？」

なんなら音楽団には小遣いを渡して、当日は自宅で療養してくれと伝えてある。

一方で、対外的にはその日に音楽祭を開くと発表し、王宮からも許可を貰っている。

——何故か？

「そもそも、屋台は出せない」

「え？」

「騎士団のパレードとはレベルが違う！ ユマ姫の話題性は桁違いだ。当日はきつと通

りは人で溢れかえる」

「だからこそチャンスなのでは？」

「パレードならば人気ゆえの行列も許容されるが、相手は他国の貴賓だ、往来で何時間も

立ち往生させるのはマズイ」

「じゃあ、騎士団が人払いをするのでは？」

「みんなユマ姫を見に来てるのだぞ？ ウチの王族を凌駕する人気と言って良い。笑顔

で答える姫と、民衆を追い払う騎士団。偉い対比になってしまうな」

「じゃあどうするんです？」

「まず、邪魔な屋台は全撤去される。そうすれば道が広がるだろう?」

「ウツ! だったら! だからこそ広場で屋台をやれば一人勝ちじゃないですか!」

「それも恐らく撤去される、そうじゃ無くて一人勝ちなんて他の商会から要らぬ恨みを買うに違いない」

「んん? じゃ、何を売るんです?」

「恐らく、ここで姫様のお披露目会が急遽開催される、民衆を満足させるためだ」

俺は地図上で中央広場をトンと指差す。

「まさか!? その日の内にですか? 翌日に城のバルコニーでやるんじゃない?」

「それもやる、だが姫様の最速お披露目会はここになる」

そうでも無くてもバルコニーでお披露目の日に、城へ入り込むのは難しい。そちらは貴族同士の熾烈なナワバリバトル。

一応貴族の端くれとしての地位を貰ったが、そこに首を突っ込むのは得策じゃない。

「でも、だったら広場のスペースも取り上げられてしまうのでは?」

「そうだとしても、ガヴァ・ゼツサ・フィンザード音楽団を迎えた野外公演がペアなのだから? 屋台の撤去とは訳が違う! 王宮に対して大きな貸しになる」

「……なるほど、だからこそ高名なフィンザード音楽団なのですな」

「しかも、お披露目会におあつらえ向けの舞台が綺麗に整備されている。奴等は俺へ、幾

ら感謝してもし足りないだろうよ」

「おおっ！」

「しかも、舞台が一番良く見える特等席に立派な櫓やぐらを建ててある、立派過ぎて急には撤去出来ないし、何よりバンザール卿を始め有力貴族を招待していると言え、騎士団だつて強くは出れないだろうよ」

「ホントですか？　バンザール卿を？　中止になったら偉い問題に成りますよ！」

「ダイジヨブだ、呼んでない」

「んー？」

「呼んで無くても来るから問題ない」

「あ、なるほど」

「フイーゴ少年も合点が行つたらしい。」

ただの演奏会ならともかく、噂のユマ姫のお披露目と来れば政治的にも重要なショーになる、そこに顔を出せない様じゃ貴族失格と言う訳だ。

正にプラチナチケット。席が無い会なら、席を作つて売る。これが俺の商売だ。

仮に普通に撤去されただけでも王宮へ貸しになるし、貴族はそもそも呼んでないから汚点にはならない。

日程がズレて当日にユマ姫が来ない場合や思ったより人が集まらない場合は、空公演

を打ったとバレると問題になってしまう。

とは言え急遽中止つてのも珍しくない世界だし、実は前売りチケットも売ったフリなので被害も無い。

他の商会だって、割増料金で屋台の場所を取り合っただろうし、そうなれば損をするのは他の商会も一緒だ。自分の所だけが大幅では無いなら許容できる。

「流石ですね」

「だろう？ もっと褒めて良いぞ！」

「はあ……」

少年はため息一つ、冷めた目で俺を見るのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、当日。俺は櫓の上でギターを掻き鳴らしていた。

「お耳汚しを失礼いたしました」

「とんでもない、噂以上の腕前で感動していますわ」

褒めてくれるのはバンザール卿のご夫人だ。

全て俺の思惑通りに事が運んだ。急遽、公演を中止にして舞台を貸してくれと連絡があり、そこから急いで付き合いのある有力貴族へ連絡。

バンザール卿自身は時間の都合が付かなかったが夫人が来てくれたし、他の貴族は夫

婦同伴で来てくれた。

プラチナチケットとは言ったが、本当にお金を貰って売ったのは僅かだ。貴族への顔つなぎと、彼らに貸しが出来るのが大きい。

しかし、唯一誤算だったのが想像以上の人出により開演時間が遅れて、招待した櫓の上で貴族様方を暇にさせてしまっている事だ。

仕方なく自慢のスナフキンスタイルでギターを演奏し、時間を繋いでいたと言う訳だ。

櫓の下からも俺のギターを聞いて拍手してくれる人が居て、少し広場が静かになった。

我ながら最高の前座じゃないか？ そろそろ姫よ、出て来てくれよと舞台袖を覗く。

「フア!？」

そこに妖精が居た。

舞台袖からこちらを覗き込む幻想的な銀の左目は理知的な光を宿し、色違いで薄くピンクがかかった右目には強い決意が宿っていた。

流れる銀髪は軽くウェーブが入っていて、揺らめく水面の様に不規則で不思議な光を放っている。

薄暗い舞台袖にありながら、まるで彼女だけ、世界から浮き上がる様にうつすらと光

り輝いて見えるのだ。

ああ、間違いない、彼女が、彼女こそが噂のユマ姫にして、俺の運命の女性^{ひと}。

なに？ 銀髪エルフのリューナたん？ あんなのただの野良猫だ、動物園で飼育する価値無し。

言葉無くす俺に、周囲の貴族は怪訝な顔を浮かべるが、それも姫が舞台袖から登場するまでだ。

俺達は貴族も庶民も、揃って間抜け顔を並べるしかない。

それ程、圧倒的な可憐さと可愛さ、儂さを持つ少女がそこに居た。

そんな姫がいよいよマイクの前に立つ。

早くその声が聞きたいと、年甲斐も無く前のめりに櫓の手すりを掴んだ。

だがよく見ると姫の様子がおかしい、なんだか酷く動揺していて、しきりに周りをキョロキョロと見回している。

ひよつとして急な事態に付いていけて無いのかもしれない。考えてみれば無理もない、ここまでの人出と、急に舞台に引つ張り出されるなんて想像が付くはずが無い。

しかし、その困った様子もまた可愛いのだ。櫓を飛び出し、そのまま舞台まで走り込んで、抱きしめて守ってあげたくなる位のいじらしさ。

「それでは今一度、王都に集まった人々に向け、お名前を伺っても宜しいでしょうか？

可憐なお嬢さん、貴方の名前を教えて下さい」

催促する司会の男が憎い、手すりから飛び出して駆け付けたい。

声を出して応援したいが、少女が振り絞った小さな声を潰してしまいそうで、実際は息すら潜めて注視するしか許されない。

それは俺だけじゃ無くて、広場に集まった何千？ いや、万近い人全ての総意だったのか、一気に広場が静まり返る。

そして、覚悟を決めたのか、息を吸い込み少しだけ背伸びをして、マイクに向かってユマ姫は話し出した。

「私の名前は……」

鈴の音よりも尚透き通る澄んだ声、たった一言で心が浄化される。

対して、先を促す司会の声の不快な事よ。

「お名前は？」

問われて微笑む少女の顔が、突如自信に溢れた表情に変わるのを確かに見た。
「わたくしの名前は、オルティナ・ラ・フィリア・ビルダール」

「……え？」

「17代目ビルダール王、グスタルトの娘にて、第一王女のオルティナ姫です」

——妖精が、国を転がす声がした。

嘘発見器

おはようございます、ユマ・ガーシエントです。

皆さんは私が今、何処に居るか解りますか？

なんと！ 私は今、ビルダール王国の地下、尋問室に来ているんですよ。

では早速、尋問室を統括している神経質そうな片眼鏡のおじちゃんに話を聞いてみましょう。

「なにをブーツとしているのかね、質問に答えてくれたまえ」

「……………」

——現実逃避が過ぎた。

俺は広場での挨拶で、オルティナ姫を名乗ってしまった。

言うまでも無く王族の詐称は重罪だ、それが例え何百年も前に亡くなっている歴史上の偉人で有ってもだ。

だが俺は他国の王族だ。エルフの国エンディアン自体は無くなつてるとしても、その全てが死に絶えた訳でも無い、流石にいきなり死刑にしたら国際問題。

で、なんのつもりであんな事を口走ったか問われている訳だ。

「なぜあんな事を語ったと？　ですが私は気の迷いであのような宣言した訳ではございません」

「なんだと？」

おじちゃん的眼鏡が跳ねる。周囲の監査官も跳ねるし、なんなら心配そうに見ていたシノニムさんが一番飛び跳ねた。

「正気か！　例え遙か昔に死んだ御方でも、王族を詐称するは重罪ぞー！」

片眼鏡のおじいちゃんが大喝するが、こつちだって頭がおかしくなつて口走つたと言いたいさ。

片眼鏡も、無体な尋問が行われ無いかを監視する監査官も、へたり込むシノニムさんだつて。私が急に頭がおかしくなつて何となく口走つたと言つて欲しい筈。

だけど、それは叶わない。俺は自分で言うのも何だけど、いや、神から宛がわれた肉体だから恥ずかしげも無くハッキリ言えるが、見た目は可愛い。

だから、「間違えちゃつた、てへ♪」とか言えば許してくれるに違いない。

だが、そんな人間の言葉を今後、誰が真面目に聞くと言うのか。

私を信じて帝国と戦つて下さい、命を預けて下さいと言つて、誰が従つてくれると言うのか？

「気の迷いでも、何となくでもありません、わたくしはオルティナ姫の生まれ変わりなの

です」

「貴様！ 同じ事をほざいた町娘が厳罰に処された事もあるのだぞ！ 冗談で済むと思
うなよ！」

片眼鏡はイキるが、嘘では無い。そしてそれはすぐ証明されるだろう。

「つまらん嘘はすぐに暴かれる。森に棲む者は知らんだろうが、これはその為の装置で
ある」

そう言つて片眼鏡は俺の頭に被せられた装置をトンと叩く。

そう、俺は今、嘘発見器に掛けられている。

見た瞬間はそのおどろおどろしい異様にビビった。なんせ前世のエロゲーの洗脳装
置の様な見た目なのだ。

手は椅子の肘掛に固定され、頭にはボウルの様な銀のメットを被せられている。

それこそ洗脳装置かと思つて、王国の望む事を喋る機械にされてしまうのでは？ と
背筋が冷えたが、オルティナ姫の記憶を漁ったらその正体は知れた。

何百年も前に死んだオルティナ姫が知っている。つまり、なんとも年代物の機械な訳
で、遺跡から発見した魔道具をベースに作り上げたシロモノで、オルティナ姫の更の前
の世代から受け継がれ、大切に使っているらしい。

ちなみにエルフの国でも同様の装置は普通に有る。

それどころか生産しており、小型化すらも成功している為に、俺はこれが何の機械か全く解らなかつたのだ。

だが、エルフの国でもこれを無断で作るのは禁忌とされている。プライバシーを侵害する魔道具は厳しく規制されているのだ。

と言う訳で、俺はこの機械の特性を知っている。

魔力を尋問相手に流して、その揺らぎを計測しているのだ。

魔力は精神の干渉を受けるので、魔力の揺らぎで嘘を判別していると言う訳。

とは言え、エルフの間でも禁忌であるため細かい部分は知らない。ひよつとして地球の嘘発見器みたいに、脈拍や発汗も判断材料なのかも知れない。

まあ、どっちにしろ、嘘などついて居ないのだから嘘発見器に引つ掛かる筈もない。

「どうだ？　結果は」

「……そ、それが」

「なんだと？」

頭に被せられた銀のボウルから伸びたコード、その行き付く先には水晶をあしらった機械が鎮座していた。

水晶のモニターとにらめっこしていた三十過ぎの魔道具官は、片眼鏡のおじいちゃんに申し訳無さそうに結果を伝える。

「嘘つきかと思えば気狂いの方であつたか……」

すると、片眼鏡はそう結論付けた。

そう、この装置はあくまで嘘発見器。本当に自分が偉人の生まれ変わりと信じて居る変人には無力。

つてか、この場合本当に生まれ変わりなので嘘になる訳がない。

なんて言つても神様の保証付きみたいなもの。自身満々だ。

「信じないならそれで構いません、ですがわたくしは確かにオルティナ姫の生まれ変わりでです」

「馬鹿な、何故いきなりそんな事を言い始める？ 王都に来た途端にだ！」

「王都に来た途端だからです。もしも王都に居つてから、エルフの国を助けて下さいと訴えた後、駄目押しとばかりに、我こそはオルティナ姫の生まれ変わりと主張しても誰も信じはしないでしょう。なぜ今更そんな事を言うのかと、そう言うに違いないのです」

「ふん、なんにしても馬鹿な事。オルティナ姫は今でも人気の姫だ。だからこそ利用しようと思ひ至つたのでしようが、それだけにオルティナ姫の研究者は少くないのだ。オイ！ 入つて来い！」

その言葉を合図に、尋問室に入つて来たのは本を抱えた小太りの男だ。

「は、はい、お初にお目に掛かります私は……」

「挨拶は良い！ この男はオルティナ姫の専門家だ、貴様の浅い知識では直ぐにボロが出るぞ知れ！」

出る訳無いんだよなあ……そう思いながらも、俺はその専門家の質問に答えて行く。

「オルティナ姫が好きな春の果物は？」

「そうですね……メイドのピアンヌが毎朝剥いてくれる、ギットの実が好きでした」

「……それは違えますね、当時のヴァリアル領を訪問した時にヴィサスを最も好むと発言したと記されています」

「それは、ヴァリアル領がヴィサスの名産だからそう答えたのですわ。それに王族用にと厳選された完熟果実だからです、王都に居ながら常食出来る物でも無く、好物かと問われた時に真っ先に挙げる物ではありません」

「ふむ、ちなみにその時の領主のお名前は解りますか？」

「ランフォード子爵ですわね、大変な美食家で様々な果実でお酒を醸造していたと記憶しています」

「ふむ……」

我ながら完璧な受け答え、そりやそりやだ。

専門家の質問は、オルティナ姫自身の公務記録だけでなく、挨拶をした貴族側の記録や日記にまで及ぶ。

そんなもん、たとえ当時の本人だろうと絶対に忘れている内容だ。

だが俺は幾らでも調べられる。そう、『参照権』で検索すれば良いだけだ。

だからスラスラとこんな調子で答えていくのだが、徐々に質問がおかしくなっていく。

「オルティナ姫が起こした奇跡ですが、その最たるものは洪水の予知です」

「いいえ！　神の思し召しです」

「ええ、ええ、ですが収穫前の刈入れを控えた麦畑を放棄するように訴えても、農民たちは従わなかった。そこで、反逆罪の嫌疑を掛けて全ての村人を王都へと召喚します」

「はい、そうですね」

「しかし、当然反逆の証拠など有る筈が無い、村人は姫に罵声を浴びせ。それが王都での人気の急落を招きます」

「そうでしたね」

「しかし、村人が村に帰ると、そこは鉄砲水で家も畑も全てが跡形も無く流されていた。そこで村人は愚かにも初めて姫の正しさを知るのです」

「そうなのですね」

「はい、ですが第一王子の術中に嵌まり、人氣が陰った隙に冤罪を掛けられてしまう。そうですよ？」

「勿論です、私が愛する父を暗殺し、王座の篡奪さんだつを図るなどあり得えません」

「そう、そして遂に断頭台に掛けられてしまうのですが、その時、折角助けた村人についてどう思いました？」

「どう思いましたと言われても……」

いや、どう思ったかなんてどうやって判定するんだよ。ふっざけんなカス共死んで詫びろやとしか思わなかったみたいだが？

「……そうですね、複雑な思いがあったのは事実です。ですが、彼らに関しては、帰った後で鉄砲水に巻き込まれて死んでいないか。それが一番の気がかりでした」

そりゃ、一時的に叩かれてでも守ろうとしたのに無駄になったら悲しいからな。

何より、洪水で一瞬にして死んでしまうなんて詰まらないにも程がある。

自分たちの所為で、自分たちの為に、皆から愛される姫が死んだと知って、後悔と絶望に塗れた上で、のた打ち回って舌嚙んで自殺して欲しいとは思ったね。

ま、そこまで言う必要は無いから言わないが。

「なんと！ 流石聖女と言われるオルティナ姫だ、最期の瞬間まで誰も恨まらずにいたの

ですわね！」

いや……この専門家おかしいだろ！」

最早、ただ聞きたい事聞いてるだけじゃねーか！」

そう思ったのは俺だけでなく、片眼鏡のおじいちゃんも苛立った様子で割り込んだ。

「それでどうなのだ！ コイツは騙りか気狂いか、ハッキリしろ！」

その二択かよ。ま、普通の発想だ。俺だって「私はキリストの生まれ変わりです」とか言う奴には精神病院をお薦めする。

「いえ、驚くべき事ですが彼女は本物です」

「なんだと？」

「彼女の言葉に矛盾は有りません、それどころか私の調べた知識を上回る！ ああつ！」

感動だ、私は本当のオルティナ姫の御前に居る！ こんな拘束など許されません！

直ぐに解放してください！ これでは王国の悲劇の二の舞ですぞ！」

「馬鹿を抜かすな！ 生まれ変わりなどある筈が無い！ 良く調べ上げた様だが私は騙

されんぞ！」

「お言葉ですがルワンズ伯、私はオルティナ姫の研究をして二十年、それも先達せんだつが調べた資料を纏め続けての二十年です。それを他国の姫が同じだけ、いや上回る知識を調べる等絶対に不可能です」

「馬鹿な！ そんな馬鹿な！」

「それにルワンズ伯、輪廻転生はセイリン教の教えです。終末に訪れる女神の復活、それを否定するなどとてもない事ですぞ！」

「しかしっ！ 現に転生者など見た事があるか!? お前の子供が『前世は貧民窟で泥酔して死にました』と語るか？ 語らんだろうが！」

「あのオルティナ姫であらせられますぞ！ 神に愛された御方なれば、この様な奇跡が起こつたとしてなんの不思議もありません！」

「じゃあ何の為に!? 何の為に何百年も経つた今！ わざわざやって来たと言うのだ！」

なんか、俺を無視して二人で盛り上がってしまったている。ここは研究家へ助け舟を出してやるかね。

「わたくしは神に命じられて現世に降り立ちました」

「なんと言つた!？」

「私は神の使命を受け、再びこの世に舞い降りたのです」

片眼鏡は、バツと音が出る勢いで水晶の前の魔道具官を振り返るが、魔道具官は首を横に振るのみ。

そりやそうだ、だって嘘じゃない。ただ俺の使命は生きてりや良いってだけだがな。

「本当だと……まさか、いや……言え！　どんな使命を帯びていると言うのだ！」

「神の使命、その全てを語る事は出来ません」

「ふん、馬脚を現しおったな！」

勝ち誇った様子の片眼鏡。だが、俺には言うべき事が有る。

「ですが、言える事が一つだけ」

「な、なんです？　教えて下さい！　オルティナ姫！」

専門家のおっちゃんはノリが良くて助かる。

「そうですね……」

俺は勿体ぶったタメを作って答える。

「このままでは、数十年、いえ、あと数年で王国は滅びます」

俺の言葉に、空気が凍った。

そして部屋の全員の視線が一齐に魔道具官へと突き刺さる。

全員の耳目を集めた魔道具官は、ただ蒼い顔をプルプルと横に振るだけだった。

動乱の王都

王城の上層、豪華な調度品に彩られた部屋の中で、俺は優雅にお茶を飲んでいた。

ふーむ、紅茶の様でいて後味は緑茶に近い。結構好きかも。

「なにを呑気に、お茶など飲んでいるのですか！」

そんな俺を窘めるのはシノニムさんだ。どうやら本気で怒ってる。

「そうは言っても今こちらから動く事はありません、一服のラウ茶は妙手の元と言いますよ！」

「……ことわざで誤魔化さないで下さい。今、王宮は上を下への大騒ぎになっているのですよ！ 一体どういふつもりですか！」

そう、今、この瞬間も部屋の外ではドタバタと侍従達が駆け回っている。

それもコレも原因は全て俺だ。

昨日は広場で挨拶キャンセル尋問のコンボを食らって一日が潰れてしまった。元々の予定では、今日はバルコニーでの挨拶と、貴族達との舞踏会みたいなのがあった筈、しかし今をもってどうなるか不透明となっていた。

「落ち着きませしよう、慌てても今出来る事など殆どありません！」

「あの……お言葉ですが、生まれ変わりなど本気で言っているのですか？」
「本気です」

シノニムさんの問いに俺はノータイムで断言する。

「でしたら！ 何故これまでに私に打ち明けて下さらなかったのです？」

「言つたとして、信じて貰える訳では無いでしょう？」

「信じます！ 信じようとはします。しかし話して貰わなければそれすら出来ません！」

シノニムさんは怒っているが、俺にとつてもアレはアクシデントだったのだ。相談など出来る筈もない。

俺が答えに窮していると、控えめに扉がノックされた。

「スイマセン、私、侍女として派遣されて来たネルネードと言います。宜しいでしょうか？」

「……はい、少々お待ちください」

まだ言い足りないとはかり、俺をキツと一睨みしてからシノニムさんは扉を開けに向かった。どうやら本気でお冠の様だ。

俺は新しく派遣されたメイドさんをダシに、どうやって怒りを逸らそうかと思案する。

俺は外国の貴賓として招待されていると言う体なので、王宮からも侍女が派遣され

る。

今までと違い、舞踏会やパーティーもあるとすれば侍女兼付き人がシノニムさん一人では回らない。

かと言ってシノニムさんはネルダリア領の紐付きで、他の侍女もネルダリア領で固めてしまうと露骨に過ぎる。

王宮からの侍女を受け入れるのは不可避と言えた。

そうしてシノニムさんに連れられ部屋に通された侍女は、まだあどけない笑顔で頭を下げる。

「私、本日からユマ姫様のお世話をさせて頂くネルネードと言います。皆からはネルネと呼ばれています、よろしくお願い致します」

そう言っただげられた頭から伸びる耳は長い。——これは？

「ネルネード、あなたひよつとして？」

「あ、ハイ、私は『あいのこ』なのです」

それはつまりハーフエルフと言う事だ。王都広しと言えどエルフが普通に暮らしているとは思えない。

「どうして？ ひよつとして誰かに捕まったの？」

「いいえ！ いいえ！ 違います！ 私のお母さんが森で道に迷った時に森に棲む者に

助けられて、それで、その……」

あせあせと手を振って、あたふた否定する様子が可愛い。

良かった、同じ森に棲む者だから丁度良いだろうと、奴隷として捕まえた女の子をメイドにと宛がった訳じゃ無かった。

ネルネは青みがかかった金髪をポニーテールに纏め、榛色はしばみいろの瞳はクリクリと可愛い。フリフリとした短めのスカートが快活さを醸し出している。

全体的に可愛らしい印象の少女。ハーフエルフと言うのも同じだし、恐らく歳の頃も俺とそう変わらないだろう。

どうやら、大分俺に気を使った人選だ。王宮の希望をグイグイと押し付けて来る様な腰が強い相手では無いと思って良いだろう。

この事態を想定して、ハーフエルフの少女を凄腕のエージェントに仕込んでいたなら、それこそ相手は予知能力者だ。

シノニムさんもそう思ったのか、ネルネの後ろでホツとしているのが見て取れる。

俺としてもあんまり我の強いメイドは困るし、シノニムさんにとってみればネルネは直接のライバルだ。与し易い相手で一安心と言った所か。

俺はネルネにっこりと微笑む。

「解りました、私達は王宮の事情に疎い所があります、色々教えて下さいね」

「は、はい！ 頑張ります！」

ネルネは顔を真っ赤にして答える、何と言うか可愛い。そう言えば今生では同じ年の友達と言うのは居なかった。女の子とキャツキャウフフとお話し出来るのは、前世の男の部分でも今生の少女の部分でも楽しいに違いない。

「ふふつ、ネルネ。私達同じぐらいの歳でしょう？ もつと友達のように思ってくれて良いのよ」

「そんな！ お、恐れ多いです！」

だが、ネルネはそう言つて恐縮してしまふ。

まあ、徐々に仲良くなれば良いだろう。

「それよりも、この騒ぎを何とかしませんと！」

「え？ 今日お城が騒がしいのつてやつぱりユマ姫様が原因なんですか？」

シノニムさんの言葉に慌てるネルネ。どうやら顛末を知らないらしい。

ま、そうだよな。ネルネが俺の侍女に選ばれたのは俺が王都に辿り着く前だろう、その相手が初日から悪い意味で話題沸騰とは思うまい。

俺は何も知らないネルネに尋問室でのあらましを説明した。

「ええええ？ ビルダール王国が滅びるつて？ 本当ですか」

「まず、間違いないでしょう。そもそもエルフの……あー、森に棲む者の新たな呼び名

なのですが、エルフの存在は二国間で大戦が発生しない為の、緩衝材になっていました」
「確かに、帝国との大戦で喜ぶのは森に棲む者^ザだけ、反戦派の常套句ですらありました」
シノニムさんが俺の言葉を補足してくれた、勢い込んで俺は話を継ぐ。

「ですが、帝国はエルフの国に攻め込み、そして勝利した。邪魔するものは無くなったと言えます」

「ですが、それを持ってして王国が滅びると言うのは短絡的では？」

「エルフの国の技術を手に入れるのですよ？ 戦力はあつと言う間に開いてしまいま
す」

「だからこそ！ 貴方を頼りにエルフの残存勢力と同盟を組んで、帝国を牽制しようとして
いるのです、それでは足りませんか？」

今度はシノニムさんの反論がヒートアップする……が、俺には俺の理屈がある。

「説明は出来ないのですが。王国には恐ろしい厄災が迫っているのです！」

「だから！ それは何ですか？ 何が起これると言うのですか？」

「それは……解りません」

「それではっ！ 話になりません！」

……まあそうだよな。

因みに厄災が迫ってるのは間違いない、なんせ俺が居る所厄災^{偶然}有りだ。

で、その正体なんざこつちが聞きたい。なんせ神だつて知らないんだからな。

……つまり、結局は何の根拠もなく適当にフカした訳だ。

なんでそんな風にフカしたかつて？

決まってる。俺が来た途端に王都に不吉な事故が頻発すれば、森に棲む者の呪いだ何だと言われるに違いないのだ。

だつたらあらかじめ、王都に迫る厄災を払う為に顕現した神の使徒と名乗っておけば、落雷なり、洪水なり、隕石なり、信じられない『偶然』が起こる度に人々は俺の言葉を思い出す。

しかし現状では何の根拠の無い言葉に過ぎない。それにも関わらず皆が無視できないのは何故か？ それは俺がオルティナ姫を名乗るからだ。

そう、皆は洪水や大飢饉などの天災を予言したと言われる、オルティナ姫の能力を恐れている。

幾つもの伝説を築きながら、謎が謎を呼ぶその力。

当然ながら、記憶を参照出来る俺はその能力を知っている。俺はオルティナ姫を思いながらゆつくりと瞼を閉じる。

「目を瞑らないで下さいー！」

途端にシノニムさんに怒られてしまった。良く寝たふりをして誤魔化すので、今回も

同じと思われてしまったか。

シノニムさんの怒った声がする方、まぶた瞼が閉じられた暗闇の世界に、ぼうつと光の華が咲く。

これこそオルティナ姫が見ていた神のお告げの正体。盲目になった姫がそれと引き換えに手に入れた新たな視覚。

——オルティナ姫はコレを天命と呼んでいた。

天命はどんどん小さくなって、最期に消えると人は死ぬ。村の人間全員が、今にも消えてしまいそうな小さい天命しか持たないのを視た時、彼女は村に異変が起こるのを悟った。

そうして、一芝居打って村人を助けたと言う訳だ。

何なら彼女は本当に自分が神に選ばれたと思っていた節もある。

何故こんな物が自分には見えるのか？ ひたすら苦悩した記憶が山盛りだ。

しかし、俺にはコレの正体に当たりが付いた。

恐らくだが……コレは運命の強度を表している。運命が強ければ大きく輝き、死が目前に迫れば小さくなる。

だとすれば、俺の運命はどうだ？

「何を笑っているんですか、もう！」

シノニムさんの呆れ声も気にならない。

内から湧き上がる輝きは、銀にルビーを練り込んだ様な絢爛けんらんな光色を放ち、他の運命が霞む程に巨大な輝きを放っていた。

よく考えてみれば当たり前、俺は死から遠い強大な運命の少女を狙って転生したのだから。

……その割に何度も死に掛けた？

そうなのだ、結局運命の守りが厚くても恐らく死ぬときは死ぬ。

運命はそれ程、絶対的な物では無い……のか？ ひよつとしたら俺の『偶然』がアレなだけかもしれない。

逆に消えかけの小さな運命しか持たない人間を救う事にだって、オルティナ姫は何度も成功していた。

結局は、一つの目安として役立てるとか、その程度にしておこう。

ゲームで言うと、生存ルートが少ないからイベントシーンが極端に少ないキャラみたいな扱いか？ いや、違うかも。

そんな事を考えていると、また扉がノックされ再びシノニムさんが応対しに出て行く。

残された俺とネルネは、思わず見つめ合った。

「あ、あの、ユマ姫様の噂は王都でも持ち切りで、噂に違わぬお美しさで！ その髪とかウェーブがキラキラしてて、目の色も神秘的で！ それで！ あの、綺麗です！」

「ありがとう、うれしいわ」

につこりと微笑むと、ネルネは真っ赤になって俯いた。照れる様子が可愛い。

にしても、髪が綺麗……か。

そうは言っても、今の髪型は端的に言って苦肉の策だ。

流石に俺だつて冒険中も髪ぐらいは手入れをしていたし、馬車での移動中はシノニムさんが梳すいてくれていた。

が、昨日の舞台挨拶は突然で、馬車の中でだらけていた俺の髪はスツカリくちやくちやになっていた。

その髪を何とかウェーブを掛けて誤魔化して、それからはトラブルの連続で碌に手入れも出来ていない。

「ネルネ、悪いけれど髪を梳いてくれる？」

「は、ハイ！ 喜んで！」

そうして、ネルネは俺の髪へ油など付けながら梳いて行く。柑橘系の上品な香りが付けられていて、恐らくは高級品だ。

「うわっ！ 綺麗！ 髪が真っ直ぐになって、それに内側から光ってるみたい」

ネルネはそう言つて褒めてくれるが、ちよつと持ち上げ過ぎでくすぐつたい。

「ネルネつたら、そんなにおだてないで」

「そんな、ホントですから、ほら！ 見て下さい！」

そう言つてネルネが鏡台を開けると、確かに鏡に映つた俺の髪はキラキラと輝いている。

うーむ、エルフの国でお姫様していた時も、ここまでの輝きは無かつた気がする。こちらの整髪料恐るべし。

「凄いですよね、今流行りの梳き油なんです、洗髪料もですけど、近年もの凄く進化してるんですよ」

「そうなのね」

そんな風に女の子らしいお喋りをしていたら、シノニムさんが戻つて来た。

「どうやら、バルコニーのお披露目はお流れですが、舞踏会は予定通り行うようです、準備して下さい……凄い輝きですね」

シノニムさんも女性、どうやら気になる様子で、三人でかましくお喋りしながらも、舞踏会の準備を整えた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして訪れた城内の大ホール、俺は思いつき悪目立ちしていた。

「なんと美しい！ 広場でお目にかかった時以上の美しさだ！ 正に輝く様ではないか！」

「しかし、綺麗な華にはと言いますが、あの華の毒はとても扱える代物では御座いませぬぞ」

「左様、ワシはあの娘がオルティナ姫を騙るのを確かに聞いた。しかもいまだに訂正する気は無いそうだ」

「それはなんとも、しかし噂によると元老院から派遣されたルワンズ伯が尋問したと聞いたが？」

「君たち情報が遅いな、ルワンズ伯の尋問の甲斐なく、オルティナ姫の生まれ変わりで無いとする証拠は出なかった。それどころか歴史家も黙らせる程にオルティナ姫の知識を持つていたらしい」

「まさか！ ぐ冗談を！」

「冗談どころか、オルティナ姫の生まれ変わりを名乗る姫は、その場でこのビルダール王国の崩壊を予言したのさ、それで昨日から王宮は大騒ぎって訳だ」

「なんと！ なんと！」

「不吉な！ オルティナ姫を騙って民心を騒がせるなど許される事ではありませんぞ！」

「しかし！ しかし！ もし本当にオルティナ姫の生まれ変わりとなれば一大事である、オルティナ姫を捕らえて罰するなど、王国の悲劇の二の舞ぞ」

もう、終始こんな様子で遠巻きに噂話に興じているが、收音の魔法を使えば筒抜けだ。貴族達のこの微妙な距離感の正体は、俺が危ないサイコ姫と思つての物と言うよりは俺の立場が今後どうなるかの問題だろう。

王族を騙る罪人なのか、伝説の姫の再来なのか。

それが確定するまでは取り入れれば良いのか距離を取れば良いかも解らないと言う訳だ。

だが、そんな微妙な選択を迫られる男達と違い、女性陣はグイグイと距離を詰めて来る。

「まあ、とても美しい髪ね、嫉妬してしまうわ」

「どの様なお手入れをしていらつしやるの？」

「エルフには優れた化粧品があると云うのは本当なのかしら？」

美容と健康に関して女性陣はガンガン押ししてくる。

なんせ、俺の立場がどうあれ関係無く付き合えるのが女性だ。何気ない日常会話を装つて、情報収集する思惑も有るだろう。

「そ、そんな風に言われると照れてしまいます……」

俺ははにかみながら、小動物じみた動きで無害アピールに余念が無い。変にながつついて情報収集したり、誰かに取り入ろうとするのは厳禁だ。取るに足りない小娘と思われるぐらいが丁度良い。

それとは別に、俺への嫌がらせに精を出す連中も存在する。

「あああら、あんなに頬張って、まるでリスみたい」

「野蠻ねえ、動物なのかしら」

「森に棲む者と言われるだけあって、人間よりリスに近いのでは無くて？」

それは別室に用意されたビスケットを頬張っている時だった、手慰みにポリポリと食べていると聞こえよがしに嫌味を連発された。

「あの、ユマ様、こういうった場のビスケットは食べる物じゃないんですよ」

恥ずかしそうにネルネが耳打ちするが、俺は気にしない。

「オルティナ姫の生きていた時代には無かった慣習ですね」

「え？ そうなのですか？」

そうなのだ、そもそも食べもしない物を用意する訳がない。大方、食欲旺盛な御婦人を笑いモノにする過程で、誰も食べられなくなってしまったのだろう。

「美味しいですよ？ ネルネも食べませんか？」

「いえ、あの、私達にとって、それは下げられてから食べる物なので……」

……そのルールはオルティナ姫の時代から不変だ。そう言えば他の侍女からも恨みがましい目で見られてしまっている。

だが、砂糖やバターをふんだんに使ったお菓子は久しぶりだ。余り遠慮する必要も無いだらう。

俺がモグモグと美味しく食べていると、不思議と周りの空気は柔らかい物になっていった。

日本人だった時に覚えが有る事だが、外国の人が日本のお菓子を褒めているのを見ると得意になるし、親近感も湧く。

これはその類の現象では無かろうか？

そして、美味しそうに食べる人が居れば自分も食べたくなるのが道理だ。

「ほ、本当に幸せそうにお食べになるんですね」

ネルネは物欲しそうにビスケットを見る。

これはちよつとやり過ぎてしまったか？ 周りの侍女達の反応も小リスを見る様な

微笑ましい物が半分、自分の分が無くなると切なそうにするのが半分だ。

——きゅーう

すると、可愛いお腹の音がした。

音がしたのはビスケットを頬張る俺を馬鹿にしたお嬢さんがたの方向。

「まあ、はしたないですわよ！」

「そんな！ わたくしではありませんわ！」

「人の所為にするものではなくってよ」

そう言つて揉める三人の元へ、俺はビスケットのお皿を持つて近づいた。

「あの……私、バクバクと食べてしまつて。恥ずかしいので……お姉様方も一緒に食べて頂けませんか？」

俺がそうやつてお願いすると、三人は途端に食いついた。

「そ、そうね、ユマ様は賓客なのですから、一人だけ恥をかかせる訳には行かないわ」

「みんなで食べれば恥にはなりませんものね」

「ふふ、仕方のない方ね」

そう言つてバクバクとビスケットを摘まんで行く。

これは本格的にビスケットは残らなそうだ。さぞや恨まれるなど思つて侍女たちを窺うと、最早苦笑いでこちらを見ていた。

これは何か侍女達に差し入れでもしなくてはならないか？

とは言え俺の生活費はネルダリアから出てるので、自由に出来るお金など全く無いのが現状なのだ。

そんな事に頭を悩ませていると、突如一人のスナフキンが現れた。

木村だ。

「あら、キイムラ男爵。控えの間で女性に近づくのは、褒められた事では無くてよ」
ビスケットを摘まんでいたお嬢様の一人が木村を非難するが、それも形だけだ。ウインクなどをしてハツキリと媚びた様子が見て取れる。

男爵と言うのにも驚いたが、貴族のお嬢様にここまで媚びさせるのも凄い。

お嬢様と言つてもそれは『高橋敬一』の感覚で、ユマ姫から見たらお姉様と言うべき年齢だ。

木村は結婚適齢期のご令嬢の相手として不足無しの地位を持っている事になる。

茫然とする俺へ、ネルネがタタタツつと近づいて耳打ちする。

「ユマ様！ あのお方はキイムラ男爵です。裸一貫で王都に現れたと思つたら、あつと言う間に王都随一の商会を作り上げ、男爵位まで授かった奇跡の人です」

「……そ、そうなのですね」

なーにやっつてんだアイツ！

明らかに内政チートでイキり散らしてるじゃねーか！

クソツ！ クソツ！ く、悔しいい！

俺なんて、チーズを作るのが精一杯だったって言うのに。

殺意が籠った視線で睨むと、同じく熱心に俺を見つめていた木村と目が合った。

「これはこれは、ユマ姫様、お初にお目にかかります。私はキイムラ男爵。しがな商人の端くれなれど、王宮の深い温情を賜り男爵位を務めさせて頂いております」

「奇妙な格好をしておられるのですね」

「これは失礼、少しでも名を売りたい商人の浅知恵で御座います」

そう弁解するも木村に照れは無い。

實際豪華なスナフキンみたいな格好は浮いているのだが、普通の格好をした所で日本人の顔立ちの木村は浮いてしまうに違いない事を考えれば、これは苦肉の策では無いだろうか？

とは言え、そんな事情を察しつつも俺は木村に容赦しない。

「気持ち悪い方、近付かないで下さいますか」

「……これは、お見苦しい姿を晒し、申し訳ありません。お詫びと言っては何ですが、我が商会のビスケツトがお気に召したご様子でしたので、後で届けさせましょう」

「結構です、代わりに侍女たちに配って頂けますか？ 彼女たちの楽しみを奪ってしまつた様ですから」

「これはこれは、ユマ姫様の慈悲深さ、このキイムラ痛み入ります。仰せの俥に」

そう言つて木村はすくすくと退散した。

そんな俺達のやり取りに貴族のお嬢様方は目を丸くするし、ネルネに至つては猛然と

突っ込んで来た。

「な、な、な、なにをやっているんですかあ！ キイムラ様は押しも押されぬ大商人！ それを敵に回すような！ ああああ、本当は何としてでも味方に付けなくてはいけないの！ さつきからお食べになつてるビスケットも、髪に付けた整髪料もキイムラ商会の物です！ 今の王都の流行を作っている御方だと言うのに！ ああもう、取り返しがつかない事を！」

「そ、そうなのですね」

そ、そこまで手を広げてるのか……

う、……そ、そりゃあ俺だって味方になつて欲しいさ。

アイツが助けてくれるなら、こんなに頼もしい事は無い。

でもな、田中において木村まで俺の『偶然』で殺しちまうのか？ 俺は友達を二度殺

すために異世界転生した訳じゃない。

「それでも！ 私はあの方の助けは借りたくありません」

「そんな！ ユマ姫様はご存じないかも知れませんが。大商人は誰も彼も、いずれかの王族の派閥に属しています。そんな中、キイムラ商会は全ての派閥から平等に距離を取っている唯一の大商会。姫様がどこの派閥にも属さず力を付けるにはキイムラ商会を味方に付けるしかありません！」

「そこまで、なのですか」

「そこまでです！」

うう、で、でも、流石に木村を巻き込むのは……と考えた所で、気になった。

「ネルネは私にどの派閥にも属して欲しくないのですか？」

「え？ あ、あの、そう言う訳では……」

そう言う訳なのだろう、恐らくは宰相派。ど真ん中で盤面を支配したい連中から派遣されたのがネルネと言う訳か。

ま、解りやすいしネルネはそんなに問題無いだろう。

とは言え派閥……か、どうやらめんどくさい事になりそうだった。

★舞踏会

「ユマ姫、どうか僕と一曲踊ってくれないかい？」

小腹を満たし、別室からダンスホールに戻った俺はそんな風に声を掛けられた。

——ざわり、と周囲がどよめく。

声の主は、それこそ見た目から王子様然としていた。

歳の頃は二十の半ば、金髪碧眼で白い上着にブルーのズボン。その上下の生地は光沢を放ち、装飾には金糸がふんだんに使われている。そして何より外国の姫扱いの俺を形式上、様付けで呼ぶ必要がない人物は限られる。

「えつと……？」

俺は可愛く小首を傾げ、挨拶を促した。

「これは失礼、挨拶がまだだったね、バルコニーでお披露目する時に紹介する予定だったから、とつくに名乗ったつもりでいたよ。僕の名前はカディナル・ラ・ゼルト・ビルダール、こここの第一王子さ」

「そう、……だったのですね」

見た目通り王子様だった、しかも第一王子。次期王に最も近い存在。

だとしたら愛想良くしてご機嫌を取らなきゃならない相手の筆頭と言える。

……が、気に食わないッ!

優しい眼差しに柔らかい表情で、一見柔らかな印象を受ける王子。

だが俺は騙されない。

頭が空っぽの貴族のお嬢様はそれで参ってしまふのだろうが、今生とオルティナ姫の二度のお姫様生活の記憶に加え、情報化社会で生きていた高橋敬一の記憶も訴える。

笑顔は笑顔でも、相手を陥れようとする嫌らしい裏の顔が張り付いているのがハッキリと見て取れる。

優しい気に取り繕った目の奥には、ドブ底の様な腐った物が詰め込まれ悪臭を放っている。

コイツは駄目だ、コイツだけは信用出来ない。

「それでどうかな? それとも僕と踊るのは嫌かい?」

優しい物腰だが、それゆえに嫌らしいし、その考えも透けて見える。

「まさか、婚約者のシャルティア様を差し置いて最初のダンスの相手に誘うのか?」

「王子はご乱心か?」

集音で聞くに、周りの貴族はこの誘いの意味に気が付いて居ない。馬鹿ばかりか。

しかし、気が付いた者もちらほら、俺の侍女にしてシノニムさんもその一人だ。

「カディナール王子、ユマ姫は王都に着いたばかり、ダンスは愚か曲目すらご存じありません。今日の所はご容赦願います」

そう言つて頭を下げるシノニムさん。彼女もまたドレス姿で舞踏会に参加している。

同じ侍女とは言えネルネは完全にメイドさんだが、シノニムさんはどっちかと言うと付き人みたいなモノで「末席とは言え貴族の身分も持つています」との事だった。

と、言うか俺の立場を考えれば侍女として下級貴族の娘が送られてくるのが普通で、行儀見習いみたいな立場で平民のネルネが送られてくるのは、普通だったら怒つても良い案件なんだと。

ま、俺にもシノニムさんにも都合が良いので文句は無いが。

「へえ、でもおかしいな、ユマ姫はオルティナ姫の生まれ変わりなんだろう？ 舞曲の一つや二つ、いや、僕より得意でもおかしくないと思うんだけどな」

王子はそう言つて嗤う。嫌らしい事この上ない。

そもそも、交流の無い外国の姫を招いて初っ端から舞踏会つてのが酷い。

以前には王への謁見と聞いていたが、王都に来る直前になつて「皆がユマ姫に挨拶をしたいと言つていて——」と舞踏会に変わつていた。

シノニムさんも、「曲も知らない異国から来た姫に舞踏会など開いても、壁の華になる

しか無いでは無いか」と憤っていた。

勿論、今回はご勘弁頂くと言う段取りで納得して貰い、俺は踊らないと告知していたので誰も俺を誘うような事は無かったのだが……

「そうか！ オルティナ姫と言うなら王族として古典舞曲は知っていて当然！」
「踊れない時点で偽物、そう言う事ですな」

「こればかりは知識を幾ら詰め込んで形になりませぬぞ」

集音魔法を使うまでも無く、沸き立つ貴族たちの声が聞こえて来る。

其れを聞いて悔しそうに顔を歪ませるシノニムさんを押しのけ、俺は前に出た。

「ではサルートンは如何でしょうか？」

「へえ、踊れるのかい？」

「!? 姫様？」

俺の言葉に、王子もシノニムさんも驚く。

それも無理はない、ビルダール王国の古典舞曲の一つサルートンは、激しい転調と、早いテンポのステップ、トドメにリフトと言った派手な動きも特徴だ。

とても素人に踊れるモノじゃないし、下手をすれば怪我をするのは女役として振り回される俺の方。

「よし、良いだろう。オイ！」

そうやって、王子は執事に言って曲目を伝えた。

……速やかに曲調が変わる。

サルートンの調べ、最初はゆったりとした始まりだが、間もなく激しい戦いを思わせる転調を果たすハズ。

「では踊って頂けますか？ ユマ姫」

「喜んで」

そうやって俺は意地悪王子の手を取った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「嘘でしょう!？」

ホールの真ん中で踊る俺の耳まで、シノニムさんの悲鳴が聞こえた。

それだけじゃ無い、楽士たちが奏でる舞曲をかき消す程に動揺の音がさざめきとなって広がった。

「完璧じゃないか」

「美しい!」

「何と絵になるお二人か」

「ユマたんハアハア」

観客達の賞賛の声が気持ちいいいいいいいい!

……最後のは木村か……アイツ救えねえな。ホント。

俺に突っかかって来るから、気が付かれたのかと思っただが、本気で俺に萌えてるらしい。

勘弁して欲しい感がある。

兎も角、俺の踊りは完璧。シノニムさんなんて、日頃のヨタヨタとした動きしか見ていないから信じられないに違いない。

どうして俺が初めて踊る曲の振り付けを完璧にこなせるのか？ 答えは単純。

「オルティナ姫ー！」

「正にオルティナ姫の再来なのでは？」

「ま、まさかー！」

その、まさか、だ。病気により盲目となったオルティナ姫だが、そうなる前はやんちゃな姫だった。

盲目となった後も、体を動かす事を好んだがどうしてもやれる事が限られる。

その中でこの社交ダンスは数少ないオルティナ姫の楽しみだった。その技術はその道のプロに劣らないレベル。参照権でその記憶を受け継げば俺だって踊りの一つも踊れるって訳だ。

「随分と上手なんだね？」

「リードが良いからですわ」

エスコート役のカディナル王子にとつても予想外だったのだろう、顔には焦りの色が浮かんでいる。

……いや？ 違うか。

「ハハッ負けてしまいそうだよ」

「アラ、ご謙遜を」

俺は控えめに笑うが……コイツホントに負けそうじゃねーか！

社交ダンスの男役つてヤツは力が必要なんだ、女性役をしつかりと支え、重心がぶれない為には体幹がしつかりしていないと駄目。

軟派に見えて、武術にも通じるモノがある。だと言うのにカディナル王子のエスコートには不安しか無い。

……このままじゃ大怪我だ、それに『偶然』が合わさればどんな目に遭うか。

——丁度良いじゃ無いか。

頭の中でそんな声がある、そうだ、俺は田中を二度も殺してしまった。無駄に生きる事を考えたって仕方が無いだろう？

「流石、王子様ですわ。踊っていて安心感があります。もつと激しく踊っても？」

「え？ あ、いや構わないよ」

何が構わないだ。そんな実力も無い癖に、プライドばかりが高いと見える。

俺は踊りに勢いを付け、全体重を預ける様にカディナル王子へもたれ掛かった。

「グッ！」

途端に、漏れるカディナル王子のくぐもった声。もつれる足取り。

「オイ、なんだ？」

「ふらついてるぞー！」

途端に観客からのざわつきも違う種類のモノになる。

「グッ！」

しかし、それでも王子は大人しくしてくれと訴えて来ない。

忬度されるばかりで生きてきたのだろう。だが、俺は手加減なんて一切しない。

時には勢いさえ付けて、飛び掛かる様に体重を預ける。ダンスが得意と言う事は、ど

うやれば相手に負担が掛かるかも知り尽くしている訳だ。

と言つても見苦しく嫌がらせをしている訳では無い。一歩間違えれば大怪我をするのはコツチの方だし、余程相手を信用してないとこんなダンスは絶対に出来ない。

俺は王子への敬愛を込めた目でしなだれかかる。

「流石、カディナル王子ですわ、安心です」

「あ、ああ」

異国から来た姫から、全幅の信頼を寄せられた大胆なダンス。これだけ見せつけられて、実は僕ダンス苦手なんです。とは言い出せないのだろうか？

外面を気にする奴だからこそ、こう言うプレッシャーがきく。

「おい、危ないぞ」

「誰か止めろ」

「見ていられないわ」

いよいよふらつく王子の足取りに、観客からも悲鳴が上がり始める。

だけど、誰も止められない。止めるのは王子の恥になるからだ。

元々、俺と王子では体格が違いすぎる。子供の俺では身長が足りずにこぢんまりとしたダンスになりがちで、補うには大振りなダンスをするしかないのだ。

つまり俺は何一つ間違っていない。もし王子がしっかりと俺の体重を支えていれば、華麗さが生まれ素晴らしい舞踏となる筈。恥をかいているのは王子の方だ。

恐らく王子は普段、身長が釣り合う相手に気を使われながら踊っているのだろう。

身長が格段に違う相手に大きく動かれれば対処が出来ない、所詮王子はその程度のダンスの腕前と言う事だ。

やらかすのは時間の問題……

そしてその予感現実になる。

曲はいよいよ激しくなり王子の顔にも珠の汗が浮かぶ。足取りは益々怪しく、ふらつき始める。そこへ飛び掛かる様に勢い良く俺が体重を預けに行つた。

その時だ。

——ベチャリ

俺は大理石の床に墜落し、自分の体からカエルを潰したみたいな音が聞こえた。

「ヒツ」と息を飲む観客の声だけが、ドコからか聞こえて来た……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ゆつたりとした曲が流れるホールで、壁際の椅子に座り俺は脚をブラブラとさせていた。

大丈夫かって？ 大丈夫だよ。肋骨の骨も折れ、内臓にもかなりのダメージがあったのだが、回復魔法でちやちやっと治した。

便利だね、魔法。だが一方で治さなかつた場所もある。

足だ！ 足首は痛ましい程に腫れ上がり、紫色に変色している。

俺がそれをこれ見よがしにプラつかせるものだから、シノニムさんはお冠だ。

「なんであんな無茶を！」

「とりあえずコレでもう動かなくて済むでしょう、運動したので少しお腹が減りました

ね」

「ネルネ！」

「は、ハイイ！」

可哀想に、シノニムさんが怒鳴るとネルネは軽食を取りに飛んで行った。

「そんなに怒る事無いでしょう？ 婚期を逃しますよ？」

「もう逃しています！ そんな事より、何故あんな無茶を？」

「解っているでしょう？」

立っているシノニムさんを見上げる俺の心は、驚く程に渴いていた。

シノニムさんはやり手、相手が王子だからと言ってあの人品を見間違うとは思えない。

これは王子に対する嫌がらせだ。その上で同情まで集めようとしている。それほどまでにあの王子が気に食わなかった。

それが伝わったのだらう、シノニムさんはグツと言葉を無くす。

アレは碌な物では無い。アイツは痛みでのたうち回る俺を心配する所か、薄く笑っていやがった。真性のサデイストだ。

俺はシノニムさんに微笑みかけた。

「あの王子はいけません、それが第一王子と言うのはむしろ運が良いと言えますね」

「何がですか？ 危険なだけでは？」

「第一王子と言う事は、安定を望むでしょう？ イレギュラーの塊である私が邪魔な筈、蹴落とすのに気兼ねせず済みます」

「そ、そこまで……」

シノニムさんがドン引きしているが、あんな悪辣な人物と一緒に帝国を攻めるなんてまっぴら御免だ。その前に裏切られたり、内部崩壊しそうじゃないか。

取り敢えず王子に恥を搔かせる事には成功。だが、ホールの端っこで捻挫した足を見せつけるだけと言うのは弱いかな？

もつと、あり得ない方向に足が曲がってれば……いや、いつそ。

「もつと派手に、顔にでも怪我をすれば良かったかも知れませんか」

「冗談でしょう!？」

「本気ですよ？ 傷物にされたと言えば上手く抑え込めたかも知れません」

「……最悪、消されますよ？」

「覚悟の上です、そうですねシノニム、この足の関節を外してくれませんか？」

「……何を！ 何を言ってるんです！」

良いこと考えた！ ぐらいのノリで俺が言うもんだからシノニムさんが泣きそうになっっている。

恐怖で血の気が失われ、声まで震えているじゃないか。

俺も真性のサディストなのかも知れない。結構、気持ちが良い。

よし、パパ目の前で自傷行為しちやうぞー。

「そうですか、では自分でやります」

「えっ?」

俺は抱えていた膝を降ろし、腫れた足を地面に付けた。それだけでも激痛が走るが
視! そのまま足を思い切り捻る!

——グリッ

俺の足が変な方向に曲がる。

痛い!!! 予想の四倍ぐらい痛い! だけど!

「え? なんで? えっ?」

それを見てシノニムさんが我を失った声を上げると、なんだか満足した感がある。

「こんな! 酷い! 下手したら歩けなくなりですよ!」

「それ! 良いですね。常に椅子に座ってプレッシャーを掛けましょうか」

慌てて踞り足を心配するシノニムさんを見下ろしてニツコリと笑うと、額から零れた汗がシノニムさんの手にポタリと落ちた。

えっ? と見上げるシノニムと目が合う。

シノニムさんがヒツつと悲鳴を飲み込むのが解った。

俺の顔は激痛のあまり冷や汗に塗れ、目は血走ってるだろうから仕方が無い。

俺は俺の覚悟をシノニムさん見せつけたいのだ。

倍ぐらいに膨れ上がった俺の足首を見せつけければ、人の見る目も変わるだろう。

そこにやつとネルネが軽食を手に戻って来た。

「ユマ姫様、サンドイッチとギツトの実って果物を持って来ましたー ……つて、さつき

より腫れてるじゃないですか！」

「ええ、どんどん腫れて来てしまつて」

「そんな！ 流石にお医者様に見せましょう」

「でも今はなるべく多くの人の名前を覚えたいのです」

可愛らしく拗ねてみせる。俺だつて同い年ぐらいの女の子を威嚇したいわけじゃ無い。

「でも、でも」

慌てるネルネだが、魔法でも無くてはやれることも無いだろう。

そこに、一人の男性から声が掛かった。

「ユマ姫が怪我をしたつて聞いたけど、本当かい？」

優しい声色、恐らくは医者だろう。カディナールが派遣したのかな？ だけど今は邪

魔でしか無い。

「ええ、でも手当は結構です、部屋に帰ったらエルフの薬を使おうと思っっていますから」
勿論これは嘘、身一つで王都に来ているのに薬など有る筈無い。魔法を使えばスグにでも治せる所を敢えて包帯もつけずに見せつけているのだ。

「そうか、でも兄がしでかした事だからね、怪我を確認したいんだ」

「あなたは？」

「僕はボルドー・ラ・ヴィット・ビルダール、第二王子でアイツの弟さ」

そう言つて、先程のカディナル王子を指し示すが、……似ていない。

「あの、本当に？」

思わず聞いてしまうのも無理は無いだろう、髪の色も瞳もくすんだ茶色で全く違う。だがネルネや周りの慌てた反応から間違い無さそうだ。

「よく似て無いつて言われるよ、地味だってね。母が違うんだ、腹違いって奴だよ」

そう言う第二王子のボルドーは確かに地味な王子だった。ブラウンのジャケットにモスグリーンのズボンと言う配色からして地味だし、装飾も殆ど無い。

顔も見た目は美男子だったカディナル王子と違って、肌はニキビ跡で凹み、頬骨も張り顎はガツシリとして朴訥とした印象だ。

控えめに言つてもカッコ良くは無いだろう。

「一応、医学も齧っているからね、見せて貰っても？ ああ、こりやあ酷いな」

確かに王族と言うよりむしろ医者と言う風情、あの王子の弟と言うのが、兄と言う方がしつくり来るほどに落ち着いて居る。

「こども腫れてしまうとテーピングも難しいな。湿布を巻いてなるべく負荷を掛けないようにね」

そう言つて、王子は松葉杖をシノニムさんに渡してくれた。

「肩を貸すよりはこっちの方が歩きやすい筈だよ」

「いえ、ユマ姫様は私がおぶつて部屋までお連れしますので」

「ははっ、そうか、ユマ姫は女の子だもんな。ワンパクだった僕とは違うか」

「いえ、ずっと侍女と一緒に行動する訳ではありません、助かります」

俺は王子にお礼を言う。薬も塗つてくれたし、態度にも悪意を感じない。会話だつて小娘の妄言と馬鹿にした所が一切無かった。

「では、本当にこの国に危機が迫っている？」

「はい、それを伝える為にオルティナ姫として生きた記憶が蘇つたのだと。小さい頃は異国の姫として生きたぼんやりとした記憶が有るだけでしたが、この国に来てハッキリと思ひ出しました」

「確かに、あのダンスを見たけれどアレだけ踊れる森に棲む者が居るとは驚きだね、ルワ

ンズ伯の尋問も切り抜けたとか?」

「ええ、本当にオルティナ姫の記憶が有りますから、当然です」

「そうか、オルティナ姫の予知により見通せる、この国の危機か……」

考え込むボルドー王子、その姿に不安を覚える。何か心当たりが有るのだろうか。

「いや、実は最近親父の体調が優れないんだ」

「親父? ビルダール王がですか?」

王が危篤。まして死亡となれば国が荒れるのは間違い無い。そんな話をして良いのだろうか?

「まあね、あんなに元気だったのに最近は寝込む事が多いんだよ、今日も来ていないだろう? まだ五十前だ、少しばかり気に掛かる」

「それは……心配ですね」

「ああ、一応これは秘密と言う事になってるから注意してね」

「はい、気を付けます」

……全く、少女に「君は間違っていないよ」と励ます為に重要な機密を喋ってしまうなんて、人が良いにも程がある。

だが、舞踏会に出ていないだけに公然の秘密なのだろう。どちらかと言うと王子の立場が悪くなるだけ。ほとんど人が好いらしい。

「だから、僕は君の言葉を信じるよ。何か有ったら僕に知らせてくれないか？ この国を守るためなんなんでも協力するよ」

「はい、頼らせて頂きます」

「ハハッ、とは言つても地味で才気の無い王子だと評判で、味方も少ないから期待し過ぎないでね」

「ふふつ、ではご負担とまらない程度にお願いします」

「お手柔らかに頼むよ」

そうして王子は去って行った。俺はその背をジツと見つめる。コレは狙い目だな。あの第一王子と違って推せる。

アイツと一緒に第一王子を蹴落とすのも面白そうだ。

その後、第一王女や第二王女とも挨拶したが、無難な会話に終始した。これで会っていない王の子は第三王女のみとなる。

第三王女は変わり者の王女としてダントツに人気が無く、公式の場にも姿を見せるのは稀らしい、噂には聞いていたが本当に出席していないとは驚きだった。

ともあれ、舞踏会は終わった。後は帰るだけ。

「ユマ姫様、おぶります」

「いえ、折角ですからポルドー王子に貰った松葉杖で帰ります」

「そんな！ 余計に足を痛めます」

「私に王子の厚意を無にしろと？」

「そんな事は王子も言っていないでしょう？」

そうは言われても、退場の時は大怪我アピールの絶好の機会。逃すわけには行かないのだ。

俺はチラリとホールで所在なげにしていたカディナル王子に一瞥をくれた。

目が合った王子は俯いて目を逸らし、顔を真っ赤にしている。恥をかかせるつもりが恥をかいた。顔にそう書いて有る。

気持ちいいったらありやしない、足の痛みも飛んでいくようだ。

同情の余地など無い。その態度からも明確。

女の子に、仮にも一国の姫に怪我をさせた事よりも、自分の恥が大ごとなのだ、取り繕った化けの皮は簡単に剥がれた。どう考えても碌な人間ではない。

そう言う俺も碌な人間では無いだろう、見せつけるように足を引きずり、時折くぐもった悲鳴まであげる。目には涙を浮かべるも、文句の一つも言わずに儂げな顔で心配をおかけして申し訳無いと謝ってさえみせた。

俺には同情的な視線が集まり、瞬間チラリと王子を見る目には非難めいたモノが混じるのを止められる程に器用な人間は少なかった。

そのたびに王族はプルプルと震えるのだから面白い。

ホールを出て、幾つかの角を曲がり。這うように階段を登り。やっと人目の付かない廊下に出た。

「ああ、もう誰も見ていません、もうパフォーマンスは十分でしょう!?　お願いですからおぶわせて下さい」

シノニムさんはそう訴えるが、その必要は一切無い。

「そうですね、もう良いでしょう」

そう言って、投げたのは杖。体を支える松葉杖だ。

そうして、ピョンピョンと軽やかなステップで廊下を跳ねて行く。

「馬鹿っ！　なんで？　そんな！」

シノニムさんはパニックになって奇声を上げながら、俺の足元に滑り込んだ。

きっと俺が痛みを無視して無理をしてると思っただけに違いない。

……だが。

「え？　なんで？」

足の腫れはすっかり引いている。滑らかで綺麗な俺の足がスラリと地面についてるだけ。

「治りました」

「まさか!」

そのまさかだ! コレが魔法の力だよ!

通常なら一ヶ月以上は掛かる怪我、それが魔法でなら一瞬で治る。

呆然とするシノニムさんを余所に、トタトタとネルネが駆けて来て、蹲って俺の足を眺める。

「え? ホントに治っています。どうしてですか?」

「エルフの秘術です」

「そんなものが! えーっと、私には使えません……よね?」

「解りませんよ? 習ってみますか?」

「本当ですか! お願いします。実はおとぎ話の魔法に私、ずっと憧れてて!」

「ふふっ、私の特訓は厳しいですよ」

「望む所です!」

そんなやり取りを呆然と見つめるのがシノニムさんだ。

彼女はいまだに魔法に関して眉唾だと思っている節がある。かと言って派手にドーンと見せるのは危険だ。ネルダリア領へどんな報告をするか解らない。

案外使えませんよ、アレ。とか言われたら目も当てられないし、便利なんでエルフを捕獲しましょうとか言われても困る。

ちよつとふしぎ、程度に収めておくのが肝要だ。それにビツクリするシノニムさんは可愛いし、いつも怒られているので溜飲が下がる感じがしないでもない。

「シノニム、何をブーツとしているのです？ 置いて行きますよ」

振り返ってそう言うと、俺は悪戯が成功した子供みたいな無邪気な笑顔で、踊る様に軽やかに廊下を歩いてみせるのだった。

★専属楽士

白壁の大きな部屋に床は大理石、その上には赤い絨毯、天井には巨大なシャンデリア。そんな結婚式場もかくやと言う部屋で、俺が座る椅子も白を基調にゴテゴテと刺繍や彫刻が施され、ハッキリ言ってデザインがうるさい。

前の部屋の方が狭いながらも落ち着いた家具で印象が良かった。

それに使用人もワラワラと群がって来て気が抜けない。

それもコレも全て第一王子、カディナールが原因だ。

あろう事か奴が怪我をしたお詫びにと提案して来たのはもつと豪華な部屋への移動と身の回りを世話する大量の召使いだ。

曰く、「怪我をさせて申し訳無い、その足では不便でしょうから、もう少し広い部屋と幾人かの小間使いを用意させて頂きました」との事だ。

明らかに俺への監視を強める為の策略だが、客観的に見たら厚遇なだけに、断つてしまふと意固地になっているとか狭量だとか言われてしまふ。

勿論アレだけの怪我、一瞬にして魔法で治しちゃいましたーと言える訳もなく。今も

俺は右足首にグルグルと包帯を巻き散らしたまま。

歩く事もままならず、スツカリ自由が無くなつてしまった。完全に想定外である。

「ハア、どうなる事かと思いましたが怪我の功名ですな」

向かいに座るシノニムさんは俺が大人しくせざるを得ない事に満足そうだ、雑用からも解放されて綺麗な服を着てニコニコ笑っている。

「わ、わたしはなんだか落ち着かないです」

ネルネもシノニムさんの隣に座り、もじもじと身をよじる。メイド服は脱ぎ捨て今はひらひらとした華やかなワンピースを身に纏っている。

数日だけとは言え、御側付きとしてはネルネの方が先輩。雑用は新入りに押し付け、二人は俺の話し相手だったり、お洋服選びの仲間としてお供に付いている。

が、ここでは新入りとは言つても本来は王子付きの使用人達。言わばこの国最高の使用人な訳で、部屋の壁にピタリと張り付いたまま一切動かない。その洗練された佇まいを見せつけられれば只の女の子のネルネが恐縮しない訳も無く。

「ううう、何でこんなことに」

今も、壁際のメイドさんをチラリと見ては目が合ったのかバツと下を向いてしまう。

本人は引き続き雑用をやりたかつたらしいのだが、ネルネに洗濯や掃除をさせても恐らくはあの使用人達と比べれば手際が悪く、お荷物になるだけだ。ハーフエルフと言う

解りやすい地位を使って、俺の友達としてドーンと構えていれば良いのにと考えてしま
う。

逆に、そう言うアドバンテージも無しに堂々としているシノニムさんが凄い。この世
界でも珍しいプラチナブロードの美人で背筋を伸ばし、時として俺に小言を言つて来る
から、どう見ても俺より偉そうじゃないか？

「小間使いはこちらで雇おうと思つていたので助かりました、私はある程度自由に動き
たく存じます」

「そんな事を言つて、私が他の侍従を気に入つてしまうかも知れませんよ？」

「良いですが、ネルネ以外は皆、第一王子の紐付きですよ？ それで良いのならご自由に
なされば良いのでは？」

そう言つてこちらを見る目は冷たい。やり過ぎちゃったかな？ いやー、シノニムさ
ん怖いねー。この歳で特殊作業員みたいなモノらしいからそりやあね。しっかし何を
するつもりなんだろう？

「自由に動くとは？」

「誰が敵で、誰が味方か見極めたく」

「そうですか」

シノニムさんも俺も主戦派だ、ま、そこは幾ら取り繕つても仕方ない。帝国に国を追

われた姫が平和を訴える訳無いしね。

しかし貴族の多くは戦争には慎重だ。俺への人気とスフィールの一件で対帝国への機運は高まっているらしいが、平和な世で十分な富と恩恵を預かる人間は戦乱の世を望まないのだろう。

そこをなんとか主戦派をまとめ上げるのが俺達の役目だが、それ以前に誰が主戦派で、反戦派で、穏健派で、と言った基本的な所を押さえなくては話にならない。

「それなら私は、お呼ばれしているお茶会にでも参加しておきます」

「大丈夫ですか？ お茶会と言っても権謀術数渦巻く舞台ですよ？」

「私を誰だと思っているのです？」

俺はこう見えて二度のお姫様生活の記憶が有る。一応相手が求める事ぐらいは外さないつもりなのだが、シノニムさんは俺を空気の読めない野生児みたいに扱い過ぎじゃ無いだろうか？

「ならば良いのですが……やり過ぎない様をお願いします」

やり過ぎとは？ シノニムさんは一体何を心配しているのか、お茶会で無茶など出来る筈も無い。やけに念押しされてしまったが、取り敢えず俺は幾つかのお茶会に参加する事を決めるのだった。



と言うわけで本日はお茶会の日だ。

有力貴族であるバンザール侯爵の庭で開催されるお茶会に呼ばれるのは、貴族の子女にとつて憧れとかなんとか。知らんがな。

今日のお付きはネルネだけ、シノニムさんは裏で何か動いているのだろうか、お任せだ。

そのネルネだが、先程から緊張でカチコチ。侍女になってまだ三日だ、仕方が無いだろう。

「落ち着いてネルネ、大丈夫よ」

「は、ハイイ」

大丈夫かな？ どうにも心配なんだが……これ逆だよな、俺が心配される方だろ。

取り敢えず、お茶会は和やかに進んで行く。テーブルマナーはオルティナ姫の記憶があるから問題ないし、お上品な会話だって故事にまつわる雑学だったら独壇場だ。

異国の姫への意地悪な質問のつもりだろうが、コツチにとつては好物。逆に最新のフアッション事情とかを振られても困る。

だけどピンチは意外な所からやってきた、それも純粹な厚意だから断りづらい。

「右足の怪我は酷いの？ 良かったら診せて下さらない？」

俺は右脚をこれ見よがしに見せつけていたのだが、それでも今まで誰も足の怪我に触

れては来なかつた。

なぜなら怪我の話になると第一王子を攻める流れになつてしまふから、皆々様で自然なまでに話を避けていた。

だけど、このご婦人は何と勇気のある事か、嬉しくなつちやうね。

たしか、主催のバンザール夫人。このお茶会のボスと言う事。流石の肝つ玉である。女医をしていると言うだけあつて、包帯だけでなくギプスの道具まで完璧に揃つていた。

まあ、こんな事もあるうかと……つと、ソコに勘違いしたネルネが血相を変えて割り込んできた。

「あの、ユマ様のお怪我はその、空気に晒すと良くないと言われていて」

「あらあ、そんな事無いはずよ、外傷では無く捻挫なのでしょう？　むしろそんなにグルグルと包帯を巻いては良くなるモノも良くならないわ、全く何処の医者かしら」

「え、あの、その」

言い淀むネルネ。いや、気持ちは解る。魔法で治してしまつたから、大ピンチだと思つているのだろう。

俺はネルネの腕を引き、下がらせる。

「良いのよ、丁度、包帯が解けてしまつて、自分で巻き直したのだけど、あんまり調子が

良く無くて困っていた所なの」

そう言つて、俺はスカートをまくり上げ、足を晒して目の前で包帯を剥がしていく。露わになるか細くて美しい足。自分で言うのもアレだけど可愛いよな？

目を向ければ何かを覚悟したネルネはギョツつと目を瞑っていた。

……だけど、包帯が膨らんだ所、最後に現れたのは痛々しいまでに腫れ、紫色に変色した俺の足首だ。

「まあ、まだ腫れてるのね、痛いのか？」

「あつ、いつ、痛いです」

夫人が患部を優しく触る。我慢出来ぬ程では無いが、俺は可愛らしく悲鳴を上げた。

「包帯の巻き方が滅茶苦茶ね、これ位の腫れだと包帯の巻き方で大分違うのよ」

「ありがとうございます」

バンザール夫人はテキパキと包帯を巻いていく、その手つきから悪意は無さそうだ。

一方で、信じられぬと立ち尽くすのがネルネだった。

「えっ？」

今更に目を開け、呆然とするネルネに俺はバチンとウイंकを一つ。

いやー痛かったよ？ こんな事もあるうかと、昨日の内にもう一捻り入れといたからね。人知れずのたうち回る俺の横で、あなたグースカ寝てましたよね？

あの、無駄に安らかな寝顔。忘れませんよ。

まあ、でも驚いて貰えたようで何より。魔法で戻すことも一瞬だとか誤魔化しておけば良いかな？ いや、そんな事よりこれからが本番だ。

お庭でのお茶会でも、大貴族となれば専属の楽士がズラリと並び、華やかな音楽を奏で始めるモノ。

俺はソコに割り込んだのだ。

「そして、私は妹の亡骸を前に、ただ泣き尽くすしか出来なかつたのです」

滔々と語ってみせるのは酒場でやっていたドサ回りの延長。だがココでは楽士がアドリブでBGMを付けてくれるし、酔った客が絡んでくることも無い。

まるでイーजीモード。皆が俺の話にのめり込み。グイグイと先をせがむ。

穏やかな王都の中、刺激が無い日々を過ごしていたご婦人にとって、俺の冒険譚は最高の娯楽に違いない。

さあ、これで憎き帝国へカチ込むぞ！ と気炎を上げるかと思つたら……

すすり泣く声ばかりが重奏する。よく見れば一番泣いてるのがネルネじやねーか！

しみりした所でお茶会は終了、みんな大満足の様子で、一身に同情は集まったのだが、俺は面白く無いモノを感じていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「大失敗ですね」

「ええ？　なんでですか？」

その日の夜、ネルネとのOFFROタイムで俺が吐き捨てる様に言うと、意外とばかりにネルネは慌てた。

確かに同情を集める事には成功したが……それでは足りない。

ここはネルネと二人だけ、他の侍女達はお断りして二人きり。女の子と二人きりの風呂など、前世の俺だったら血涙モノのイベント。

しかし、そんなのがどうでも良くなるぐらいの焦燥感が募っていた。

ネルネはお茶会の大成功を祝うつもりだったらしいが、どうにも手応えが違ったのだ。

「あれでは可哀想な私のお涙頂戴の物語でしかありません」

「えええ？　それではいけないんですか？」

「私自身の人気取りなら問題はありません、ですがあれでは戦争の悲惨さを訴えた様な物です、可哀想と同情した裏で、ああはなりたくない」と皆の顔に書いて有りました」

「そ、それは穿ち過ぎではないですか？」

「そうでしょうか？　ネルネも皆も皆悲しそうな顔をしていませんか？」

「そ、それはそうですけど……」

「本当は、こんな小さな少女一人に戦わせてなるものかと齒を剥き出しに鬪争心を煽りたいのです、これでは逆に反戦派を調子づかせる事になりかねません」

「うう……確かに、可哀想な女の子の物語に聞こえてしまいました、でも、全部事実なのでしよう？ ユマ様のお話に問題があつたとは思えません」

「ええ、自分でも話が上手くなつたと思つていますが、今回は違う要因がありました」

「な、何です？ 何が悪かつたんです？」

首を傾げるネルネは思い至らない様だ、無理も無い俺もココまで差が出るとは思つていなかった。

「音楽です」

「ええ？ お茶会の楽士様の演奏ですか？ すつごく上手だと思ひましたけど」

「はい、確かに上手でした。ですが其れゆえに話のイメージを物悲しい方向に持つて行かれてしまつたのです」

「あつ」

この世界の弦楽器、名前はリアンリユース。今日の奏者は本当に上手だったが、その悲しい音色に場を支配されてしまつていた。

儂い少女には悲しい曲が似合うと思つたのだろうが、そればかりでは困るのだ。

「で、では？」

「はい、専属楽士を探しましょう、折角の話が思わぬ方向に誘導されない様に」

そうして、楽士を探すオーディションの開催が決定したのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

部屋の中央で一人の楽士が奏でる弦楽器リヴァリユースの音だけが鳴り、その音を皆で真剣に聞いていた。

専用楽士を決める審査員はシノニムさん、俺、そして一応ネルネも王都のセンス担当って事で呼んで、三人で必死に音を聞いている。

「私には一番綺麗な音色に聞こえましたが」

「流麗過ぎるのでは？ もっと力強い音が欲しいですね」

「えっと、素晴らしかったと……」

まあ、ネルネはやっぱポンコツだったのだけど、初めから期待していないからどうでも良い。

うーん、どれもこれも悪くはないけどどうにも音に迫力が無い。

皆、立派な経歴ではあるがホールや貴族の邸宅で演奏するだけで、音が綺麗過ぎて場末の酒場や雑多な広場ではとてもじゃないが音が負けてしまうだろう。

俺は庶民への人気取りに、そういう場所でもドサ回りを続けるつもりだから上品すぎる音では困る。

バイオリンよりもかき鳴らすギターが欲しいのだが、そう言う楽器は無いのだろうか？

そんな思いを他所に、シノニムさんが最後の一人のプロフィールを読み上げた。

「最後の一人ですが、厳密には楽士ではありませんし、どこの楽団にも所属していません」

「でも選ばれたと言う事はそれだけ腕が立つと考えても？」

シノニムさんの言葉には流石に目を剥いた。最後にとっておくからどんな人物かと思えばズブの素人とか！

急な楽士募集の報せにも関わらず、市井での俺の人気のお陰か多くの応募があったらしい。

フリーの楽士の中ではトップレベルの人材から五人に絞ったと聞いていたのだが？

「ええ、彼は全く新しい弦楽器を開発し、その奏者でもありません」

『……キムラか』

思わず呟いてしまった。そう言えばギターとかやってたな……

シノニムさんは俺の呟きが聞こえたのか補足してくれる。

「ご存知でしたか、キムラ男爵は王都で新進気鋭の商人にして、最も有名な楽士でもあるのです」

アイツ！ そんな事までやってるのかよ！ 手広くやり過ぎだ！ 参照権で思い出せば、舞踏会でも確かにギターを背負っている。

「いつも背負っているのがそのギターですね」

「それも知っていましたか、アレがギターと言う楽器で今大変に市井の酒場などでは人気があるのです」

「そうなのですね……」

「ええ、風のスナフキンと言う名前で大変な人気だとか」

「ええええ！」

ネルネと俺の悲鳴が重なるが、聞いてみればその悲鳴の中身は全く違った。

風のスナフキンと言えば、噂の吟遊詩人で、緑の異邦人の二つ名で謳われる伝説のギタリストって事らしい。

「ひでえネーミングセンスだ」

下品な言葉が漏れるのも止む無し。そんな俺を非難がましい目でシノニムさんが見てくるが無視！

しかし、アレだけ突き放したのに。専属楽士に応募してくるとか、アイツ俺に夢中過ぎない？

どこかに俺に惚れる要素あったか？ ないよね？

それどころか、シノニムさんによると楽士に応募してくる事自体があり得ないとか。

「今まで何人もの貴族が彼をお抱えにしようとしましたが、今や彼自身も貴族。多忙故に演奏会の依頼も断っていると聞いていただけに、応募してくれたのは意外でした」

「そ、そうですよ！ あの方にしませう！ 絶対です」

何を勘違いしたのかネルネはキャツキャとはしゃいでいる。

俺と木村の間にロマンスの予感を感じるのは止めて欲しい……

それどころか、俺はアイツと距離を離さなきゃならないんだ。コレじゃ田中の二の舞になつてしまう。

「あの方は、その……ちよつと余りお近づきになりたくないと思つています」

「何故です？ 楽士としてだけでなくその財力、影響力も見逃せません。確かに黒い噂も付き纏う方ですが、凄腕の商人とはそう言うものです」

「そうですよ、キムラ商会の化粧品や嗜好品は発売されれば必ず話題を攫うんです。それが優先的に手に入ると言うだけで、値段以上の価値があります」

「えと、それは……」

結局は俺の我が儘なので反論する材料が無い。これは、困った。

「とにかく、規定の三曲を聞いてみましょう。姫様もそれで良いですね？」

「良いでしょう、聞きませずに追い返すなど出来ませんし」

俺はギュツとスカートを握り締める。曲も聴かずに追い返したとなれば悪評が立つが、エルフのセンスには合わなかったと言えば良いだけだ。

シノニムさんには不思議そうに首を傾げられるが……コレばかりは譲れない。絶対に断つてみせる。

そんな俺の思いを知らず。とうとう風のスナフキン（？）が姿を現したのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「凄い！ 凄いです！」

「ありがとう、お嬢さん」

立ち上がって拍手までしてしまうネルネに、木村が慇懃なお辞儀を返す。

その顔は穏やか。木村ってロリコンだったのか？ いや、それは良い。

問題なのは音楽だ。課題曲は同じなのだが同じ曲とは思えない程に力強くノリが良かった。

ネルネなど踊り出してしまいう程、興奮気味に話し掛けている。

「風のスナフキン、その噂通り！ いえそれ以上の演奏でした！」

「ハハ、お恥ずかしい。楽器のプロモーションのつもりの手慰みが、想像以上に評判になってしまいました」

「感動です！ わたしもギターが弾きたくなりました！」

「良かったらお教えしますよ」

「本当ですか？ ユマ様！ 決まりですよ、確実にキイムラ様の音は世界を獲れます！」
「世界を獲るって……」

目的変わってない？

つてか不採用は揺るがないよ？ だけどシノニムさんも木村を推す。

「私も良かったと思いますよ、戦意高揚にもこの音は良さそうですし、一方で郷愁を誘う音も出せていました、姫様の求める音楽に最も近いかと」

「う、で、ですが規定の三曲は終わっていませんよ、最後は自作の曲を披露する最も重要な演目です」

シノニムさんとネルネは「もう決まりでしょう」と言う風だが、俺はどうしても断りたい。

作曲に難癖を付け、追っ払うしかないだろう。なんせ風のスナフキンってネーミングセンスだよ？

シノニムさんも一応は納得いったとばかりに頷いた。

「そうですね、ただ器用なだけで作曲は苦手かも知れませんが、やがてはユマ様の活躍を曲にしたいと思つているので作曲能力も確かに重要です。ですが、ただの演奏家としても商人としても彼を手放す手は無いのでは？」

「で、ですが！ とにかく聞きましょう！ 三曲目です！」

「まあ、良いでしょう、それではお願いします」

「承知いたしました」

そうやって緑のローブを翻し、三曲目が始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

あ、ああ……コレは。

俺は、後から後から溢れてくる涙が止められなかった。

この曲は知っている。

『ガーランドファンタジー』の曲だ！ 生前大好きだった長編RPG。

何百時間と聴き続けたフィールド音楽。

コレがまた聞けるなんて！

「えっ？」

コチヲを覗き込むネルネの声が聞こえるけど無視！

一音たりとも聞き逃したく無い！

ずっとこの曲を聴いていたい。コレこそが俺の故郷の曲なのだ。ああ思い出す、あの

平和で楽しかった日々。田中と、そしてコイツと馬鹿な事をやって遊んだよな……

クソッ。

なんで俺は、俺はああああ。

と、ソコで、突然に転調。フィールド曲だけじゃない、戦闘曲やボス曲へと続くメドレーだった。

演奏はテンポを上げ、俺のテンションも上がっていく。

そうだ、俺はセレナの、田中の仇をとらないと！ 帝国を滅ぼす！

何という名曲なんだろう！ どうしてこんなに心が震えるんだろう？

しかし、何故かシノニムさんとネルネは白けた様子でボンヤリしている。何故だ？

——ジャーン

ああ、木村が最後に一鳴らし。曲が……終わってしまった。

——ガタン

椅子を蹴る音が聞こえた。あ、俺の椅子だ！

——パチパチパチ

思わずのスタンディングオベーション。堪らない！ 言葉にならない！

「では、楽士はキイムラ様でよろしいですね？」

シノニムさんの問いに、俺は滂沱の涙でコクコクと頷くだけ。

「お気に召した様で光栄です」

そうやって木村が頭を下げる。だけど俺ははまだ茫然自失で応対出来ない。

シノニムさんと何事か話を通してアツサリと木村は部屋を辞去して行った。

あああ！ アイツが専属楽士になっちまった！

だけど、俺はいまだ、久しぶりに聞いたゲーム曲の衝撃に打ちのめされて全く動けずに居た。

しかし、シノニムさんやネルネにはあの良さが解らないらしい。首を傾げている。

「それにしても、ユマ様はどうして最後の曲があんなに気に入ったのでしょうか？ 正直、音は固いし、テンポも速過ぎるし、全然良い曲だとは思えなかつたのですが……」

「私には解りましたよ」

「え!？」

シノニムさんが何か知った風な事を言っている……

「エルフと我々とは文化が違う、だからきつと好む曲のテンポが違うのです」

「そうなのですか？」

「私は田舎に住んでいたのですが、都会の音楽はテンポが速くうるさく聞こえたモノです、それが都会の音楽に慣れるにつれてテンポが速い曲を好む様になり、田舎の曲は懐かしくもダサく感じてしまう様になりました」

「そうなのですか？」

「ええ、それに住んでいたスフィールは帝国や南方のプラヴァスとの交流も有りました、

初めは変に思ったリズムが徐々に体に馴染んで行くのです」

「それでは!」

「そう、キムラ男爵はユマ姫様がいまいちノリ切れないのを見て、咄嗟にテンポの違う曲を用意したのです。聞かぬ者の様子を見て曲を変える。彼は天才ですよ」

「そうなのですね……」

「ユマ様、そうですよね?」

「え、ええ、そうですね。その様な物です」

いや、全然違うが……もうそれでいいや。

俺だってココまでシヨックを受けるとは思っていなかった。

『参照権』で地球の記憶だっていつでも探れる。だけど、俺はそれを長い事封印していた。

郷愁に打ちのめされるに違いないからだ……こんな所で罨が待っているとは。

田中ゴメンよ……俺はまた失敗してしまった。木村を遠ざけるつもりが、何故か専属楽士に選んでしまった。

どうしてこうなった?

いや、コレ俺が悪いか? 悪いよな……、うう……

「ゲームの曲なんて反則だろ……」

俺の言葉に、不思議そうにするネルネの顔が妙にイラついたので覚えている。

田中の思い

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

俺は夜、一人ベッドで転げまわっていた。

なんで？　なんでだ？　クソツ！

木村が俺の専属楽士として帯同する事になってしまった。

まさか応募してくるとも思ってたが無かったが、難癖を付けて断れば良いと思っていた。

だが、ギターを使った演奏は、新鮮味だけでなく驚くべき完成度を誇っていた。

なにより強烈だったのは三曲目。披露されたのは創作楽曲とは名ばかりで、馴染みのあるゲームの曲だった、しかも複数の曲を編曲して纏めていたのだ。

ゲームの曲はアニメや流行りの曲と違って、短いフレーズを何度も何度も繰り返し聞く事になる。

RPGのフィールド曲とかはそのゲームにハマっていた時の事を鮮明に思い出すし、格ゲーに至っては十年単位で同じ曲を使い続けたりする。

だから思い出してしまった。前世に徹夜でゲームをしながら寝落ちした事、ゲーセンでいつもの三人でワイワイと対戦した事。

懐かしさに震えていたら、気が付いたら専属楽士は木村に決まっていたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……こうして私は家族と、そして最愛の妹も全てを失い、帝国の魔の手から逃れたのです」

「そんな事が！」

「おいたわしや」

「しかし、女子供まで皆殺しとは、帝国は許せませんな」

それからのお茶会は木村と参加する事になった。基本的に俺はパーティーに参加する側なので、既に会場には主催者の用意した楽団が居たりする。

その辺りと上手い事、話を付けて、木村は俺の後ろでバックミュージックを演奏する訳だ。

今までと違い、物悲しい曲だけでなく、帝国が築いた死体の山を見てしまうシーンではギヤーンとシヨッキングに掻き鳴らし、俺が帝国兵相手に一矢報いるシーンでは勇壮な音楽が鳴らされた。

観客の反応も悲しさ一辺倒ではなく、帝国への怒りも見られる様になっている。

木村の効果はそれだけではない。

「あのキイムラ様の演奏が聞けるなんて！」

「キイムラ商会を味方に付けるとは、ユマ姫様も油断ならぬ人だ」

俺を呼べば噂の吟遊詩人もセットで付いて来る。俺自身の人気も相当のモノの様だが、風のスナフキン（笑）も噂が噂を呼んで話題性に事欠かないらしい。

加えて、大商会在バツクに付いた事で、腫れものに触る様な俺への扱いが大分変わった。

いや、文字通り俺の足は腫れモノで、下手をすると第一王子を敵にしかねないし、そうで無くてもオルティナ姫を自称するアブナイ奴だ。

だが、利に聡い大商会在バツクにつくなら危険も無いだろうと安心感が広がった。

結果、俺をイベントに呼べるかどうかが貴族としての力を測るバロメーターと化しているとまで聞いた。

どの派閥の、どのイベントに参加するかはシノニムさんが決めてくれているが、引き合いが増えて嬉しい悲鳴が上がっている。

そうして、今日のパーティーの幕が下りた訳だが、概ね成功と言って良いのでは無いだろうか？



「失敗ですね」

「ええっ!?!」

強烈なデジャブ感が有るが、今回のダメ出しは俺じゃない。

「(一) (二) (三) 様子見に徹して来ましたが。ユマ姫様の体験談を考えればもつと効果的なやり方が有る様に思えます」

木村である。

今回、俺はネルネと一緒に驚く側に回ってしまった。

ここは木村が経営する王都一等地のカフェの個室、城内はどこにどんな耳があるか知らないからと移動したのだ。

「具体的にはどうするべきだど?」

冷静に質問するはシノニムさん、後は木村の助手と言う少年が一人、その五人だけで大きな個室を占有している。

「その前に、お尋ねしたいのですが……」

そう言つて木村がジツと俺の目を見る。

「なんでしよう?」

「その、エルフと言う種族の名前についてです」

……やっぱり、そこが気になるよな。怪しく無い様、俺は一から説明していく。

「まず、我々は森に棲む者などと化け物の様に呼ばれていますが、我々がそう自称している訳では無いのです」

「そうでしょうね」

「我々こそが人間で、大森林の外の人間を『外人』と言ったり、もつと差別的に『無能』などと称していました」

「わたしみたいな『あいのこ』も『無能』呼ばわりされると聞きました……」

俺の言葉に割り込んだのはネルネだ。

「どうせ差別されるならお母さんと一緒に居た方が良いつて、それで王都に住んでいるんです」

「それぐらい、差別意識が強いのが我々なのです、それに人間の我々に対する恐怖心も問題です。どうしても新しい呼び名が必要でした」

「単純に同じ人間として、国名から『エンディアンの民』とかではマズかったですか？

それこそ王国民や帝国民と同じように」

「エンディアン王国自体が滅亡してしまい、今後どうなるかも不透明でしたので」

「ふむ……」

木村は考え込む様に言葉を切った。

まあ、この辺は怪しいよな、動くのが早過ぎる。シノニムさんだって帝国情報部の動

き無しには俺を姫とは信用しなかったに違いない。

半ばヤケクソで、どうせ俺の『偶然』に巻き込むなら同じエルフより他国の人間の方がマシと大森林の外へと乗り込んだだけ。

それが、あろう事か一番巻き込みたくない人間をピンポイントで巻き込んでしまっているのは笑い話にもならない。

俺だって遠ざげたいのだが、その木村の方からグイグイ来るのだから堪らない。

「そこでエルフと言う名前を付ける訳ですな」

「その通りです」

「それは、冒険者のタナカが考えた名前、違いますか？」

「……その、とおりです」

認めたくは無いが認めざるを得ない。

この世界の言語は英語でも日本語でもない、そんな世界でエルフと言う単語がピタリとハマれば怪しいのは当たり前だ。

そして、木村の言葉にシノニムさんは驚きの声を上げる。

「キイムラ男爵はタナカさんを知っているのですか？」

「ええ、田中の奴とは同郷でしょね」

「どこの生まれか伺っても？」

「この大陸の外、帝国でも王国でも無い所から、私は来ました」
「まさか！」

シノニムさんが信じないのは当然、この世界はとても狭く閉じた世界だからだ。

エンディアン王家は非常に長い歴史を誇っていたが、その蔵書の中にもこの大陸外の事など記述がなかった。

海の向こうには何も無いと信じられているし、果ての山脈の向こうは延々と荒野が広がっていると言われている。

だが、外も外、違う世界から来てるのだ。「消防署の方から来ましたー」みたいな詐欺な手口だが、そこはまあ良い、俺は認める事にした。

「田中と同じ事を言っていました、そしてエルフとは田中の国で森に住む魔法を使う優れた種族を指すと」

「その通り、だからこそエルフと言う言葉が気になっていたので。その田中がどうなったのかお聞きしても宜しいでしょうか？」

俺は唇を噛み、苦痛に耐える。そんな俺を見かねてシノニムさんが代わりに答えてくれた。

「タナカさんは、……死にました」

「……………」

今度こそ言葉を失う木村に、俺は大森林を脱出した後の顛末をポツポツと語って行った。

「……なるほど、そんな事が有ったのですね」

そう言つて木村は天を仰いだ。親友の死を知つたその胸中は知れないが、友の死が悲しくない訳は無い。

俺も辛くて、何度もつつかえながらも必死に説明していった。

「ええ、田中からはキムラと言う名前の人間を探していると聞いていました。なのでキムラの名前を聞いた時から、もしやとは思っていました」

なんだかんだ迷いながらも、結局守られて生き延びてしまった俺。木村だけは巻き込みたくない。

そんな俺の言葉を聞いたシノニムさんは不満そうに机を叩く。

「そう言う事は早く言つて下さい！ キムラ男爵が帝国のスパイではないかと無駄に調べてしまいました」

それを聞いて木村は薄く笑う。

「何者かが私の身边を調査していた事には気が付いておりました、結果はどうでしたか？」

「きな臭い噂はそれこそ数多く！ ですが王都に現れる前の経歴に関しては全く解りませんでした」

「だろうな！ しっかしシノニムさんには無駄な手間を掛けさせてしまったな。」

「だからこそ、しっかりと俺の気持ち伝えておかなければならないだろう。」

「私を助ける為に田中は死んでしまいました。そしてその友である木村まで巻き込みたくは無かったのです」

「そう言った事情は説明して欲しかったですね」

シノニムさんは不満そうだが、俺にも言い分はある。

「説明したとして、逆に田中の繋がりを強調して味方に引き込もうとするのではと疑っていました」

「それこそ！ 私を信用していないじゃないですか！ 姫様は私をもっと信用してくださいさー！」

「ごめんなさい、結局は私の弱さが原因なのです。もし木村さんまで死ぬ様な事になったらと思うと、怖くて堪らなくて。でも一方でそんな個人的な感情で国民をないがしろにしている様で、自分の中で整理が出来なかったのです」

事実、俺は個人的な感情と、復讐したい思いの板挟みになっていた。

田中と出会った時からその感情は有って、おかげで自分の正体を明かす事が出来ず、

かと言って突き放す事も出来ず。結局は殺してしまつたと言う後悔が残つた。

それだけに、今回は徹底的に距離を置こうとして、結果的にまた失敗したのだ。

気落ちする俺に、木村はしかし明るい声を掛ける。

「ユマ姫様、なあに気にする必要はありません。私も田中も事故でこの大陸に来てしまつた訳ですが、その時点で死んでいてもおかしく無かつた。拾つた命も同然なので
す」

「……だから気にするなと言うのですか？」

「そうです、それどころか私は田中が羨ましいとすら思えます」

「どういう意味ですか？」

「そのままの意味ですよ、私も田中も異邦人。あいつは剣技を、私は財力を。それぞれに力を付けました。しかし結局はこの地を守る物も無く虚しさだけが残りました。そこで私は旅に出ようとすら思っていたのです」

そう言つて木村はチラリと助手の少年を見る、少年は苦々しげで、木村の言葉が正しい事が窺えた。

「旅に……ですか？」

「ええ、ですが思い止まりました。私は王都でやる事ができました」

「それは？」

「勿論、我が友、田中の思いを伝える事です。そしてそれはユマ様の希望にも沿う筈。考えてもみて下さい、落ち延びた異国の姫を守るために戦い、死闘の末に姫を守り切り、その命を落とす。まるで英雄譚の一節の様には思いませんか？ 正に男の本懐！」

夢見る様に謳う木村に、冷静にシノニムさんが話を継ぐ。

「つまり国を追われたユマ様の話だけでなく、タナカさんの話を語って行こうと？」

「語り聞かせただけでなく、曲や舞台にもしていきます。国を追われる異国の悲しい姫の物語ではなく、姫を守った人間の戦士の物語の方が皆も感情移入がし易い。それに次は俺がと戦意の向上著しいでしょう」

「一理ありますね」

頷くシノニムさんだが、俺としては複雑だ。

「そうまでして貴方が私の為に行動してくれるのは、やはりタナカの遺志を継ぎたいからでしょうか？ 私としては貴方まで殺してしまうのではと不安で仕方ありません」

俺は……今こそ自分の正体を伝えるべきだろうか？

田中が死んでから、もつと早く、自分から伝えていればと何度も後悔した。しかし、田中は俺の正体に気が付きながら俺と一緒に居た。

結局は、恐らく、結果は何一つ変わらなかつただろう。

変わらないのなら、伝えた方がマシ。正体を隠すのは不義理に過ぎるのでは無いだろ

うか？

そんな風に悩みを見せる俺に、木村は陶然と言い放った。

「何もアイツの弔い合戦と言うだけではありません、私は愛に殉じたのです」

「あいに？」

……なんだろう、急に雲行きが怪しくなってきた。

「中央広場で舞台袖から顔を出す貴女を一目見た瞬間！ 私は愛の虜になったのです」

木村はそう言つて席を立ち、ツカツカと歩いて近づくと俺の傍に跪き、片手を上げ俺を見上げる。

その目は……何と言うか遠い宇宙に旅立つて見えた。

「その銀髪も、憂いを帯びた瞳も、その全てが愛おしい。どうか愚かなわたくしめを、せめてお傍に置いて頂きたく思うのです」

そう言う木村は鼻息も荒く、その目は俺を見て離さない。

コイツ！ 本気だ！

これは……言い出せねえ……いや、知らない方が良い事も有る、よな？

「よ、よろしくお願ひします……」

俺はそう言つて何とか微笑みを返すが、その頬は引き攣つていた事だろう。

アイヌ

「姫よ！ お任せ下さい、我が身に代えてもお守りします！」

「駄目です！ 相手は多勢、死に行く様なものではないですか！」

「解つて下さい姫様、男に生まれたからには、やらねばならぬ時がある、それが今なのです！」

……恥ずかしい。

メチャクチャ恥ずかしいツ!!!

このコント、いや寸劇？ は俺の独演の代わりに始めた田中の英雄譚だ。

ちよつと所じやないレベルで脚色されているが、そこはまあ良いだろう。

問題は俺が当然ユマ姫役、そして田中役を木村が演じると言う所で、精神的に絶賛公開羞恥処刑プレイな訳だ。

しかし、処刑は中世ヨーロッパの娯楽と言うだけに、この辱めは非常に好評だった。

「おおっ！」

「これ程の猛者が居たとはい！」

「帝国恐るるに足らず！」

今までとは明らかに違う反応。燃える様な熱狂は貴族だけでなく、庶民にも広がった。

何せギターを売り、教える木村の商會が最初に教える曲が俺と田中の物語となったのだ。

いまや王都の酒場では俺の物語を爪弾く輩が最低一人は居ると言うから恐ろしい。しかし反応が大きくなるにつれて問題は浮き彫りになって行く。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そろそろ城を出た方が良いでしょう」

シノニムさんの言葉に俺は頷く。

「その様ですな」

俺の手にあるカップはヒビ割れ、中のお茶にも正体不明の何かが浮かんでいる。

嫌がらせだ。

第一王子のカダイナルから貸し出されている使用人、始めこそ俺の行動を逐一調べただけだったが、最近では直接的な嫌がらせまで始めた。

それだけ俺の存在が邪魔で、見逃せなくなってきたと言う事だろう。

彼らには人一倍プロ意識が有る。だからこそ上からの「仕事の手を抜け、邪魔をしろ」

と言う命令に悩み抜いているとは、彼らに話を聞いたネルネの談だ。

既に足が治つていっていると云つてしまつても問題無い頃合い、そろそろ城住まいは返上して良いだろう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして移り住んだのが、ネルダリア領主、オーズドの別邸だ。

夏に差し掛かったこの時期は、普通は貴族とあれば社交界シーズン。本来はオーズドも王都に参上するべきなのだが、スフィールの後処理で免除されている。

その空いた邸宅に俺が滑り込む格好だ。

では何故、初めからオーズドの屋敷に泊まらなかつたかと言うと、一応姫の名を冠する俺を泊めるには調度品の格式が問題になつたらしい。

「オーズド様は物には拘らない方ですから」

そう語るシノニムさんが自慢げなのはどうしてだろうか？ 豪華な調度品と言うのはバカ高いのは勿論、一朝一夕に揃うと言う物では無いらしい。俺の為にムダ金使わせで申し訳ないね。

「氣にする必要はありません、グプロスの屋敷からは多額の資産が見つかっています。調度品も良い物が幾つもありました」

「それは、……縁起が悪いですね」

今座っているお洒落で足が長い椅子と、それに合わせた一本足の小さなハイテーブルもまさかグプロスの遺品じゃないだろうな？

俺は地面に付かない足をぶらぶらと不安気に揺らす。

いきなり椅子の足が折れたりしたら原因が『偶然』か、グプロスの呪いか、判断が付きそうにない。

「ご安心を、ユマ様の部屋には入れておりません」

「だと良いのですが」

そう聞くと、カデイナール王子の用意した結婚式場みたいな豪華な部屋よりも、なお落ち着かない気分になる。

そんな俺を無視してシノニムさんは話を続ける。

「いよいよ次の段階に入るべきかと」

「次の？ 具体的には？」

「我々で主戦派を、対帝国を担う勢力をまとめ上げるのです」

「私達が派閥を立ち上げるのですね」

人が三人集まれば派閥が出来ると言うが、俺達が派閥を……ねえ。

「その為に、今度は我々がパーティを主宰するのです」

シノニムさんの鼻息は荒い。今までの語り聞かせは、お茶会やら園遊会、遊戯盤や

カード大会などの一プログラムと言う扱いであった。

当然尺は限られ、木村に提案される前は大森林脱出までを語るのが精々で、それこそ木村が田中の話を知らなかった原因だったのだ。

今は田中の部分を切り取っているが、それだつて一部に過ぎない。

「キムラ男爵が提案した舞台化、アレの初公演を主催し、それを派閥の結成式としましょう」

「キム……キムラ男爵とは、話が済んでいるんですね？」

「勿論です、オーズ様からも資金も人も出して貰っています、後はエルフのユマ姫が主催すると、解りやすくアピール出来るモノがあればと思うのですが……」

「エルフらしい珍しいモノ、ですか……」

そんな事言われても困ってしまう、王都にはネルネの様なハーフエルフも何人か居るらしく、幾人かを大森林に使いに出して「ユマ姫は王都にアリ」と伝えて貰っているらしい。

だが、未だ成果なくエルフからの使節が来る様な事は無い。

そもそも、エルフのまともな残存勢力と接触出来たと言う話が無いのだから当然なのだ、気が逸る。

まさか全滅、と言う事は流石に無いと思うのだが……

何にせよ、交流さえあればいくらでも珍しい物が手に入るだろうが、今は俺の独力で何とかしなくてはならない。

が、俺は生まれつき体が弱く、起きている間は本を読む事と魔法の練習にあてていた。お裁縫やお絵かきはサツパリ、そして楽器はエルフの楽器が無いのだからお手上げ。割と打つ手が無い。

「そんなに深く考える事はありません、何かエルフらしい雰囲気が出せれば良いのです」
「そう……言われても」

正直、全然心当たりがない、これはどうした物か。
狼狽える俺に、シノニムさんは優しく語り掛ける。

「キイムラ男爵は、色々と珍しいお菓子や軽食を用意しているそうですよ？」
……いや、そんな「美味しいもの用意するから宿題頑張つて」みたいなノリで言われても。

なんか木村は木村で、事あるごとに俺へお菓子を与えては、食べる様子をニヤニヤと観察して来るし。

なんだろう？ みんなして俺を奈良公園の鹿みたいに思っていないか？

この前なんて、ネルネまで期待に満ちた目でおずおずとクツキーを差し出して来た。

いや、流石にキレたよ？ 俺も。

……正直、木村と絡んでからコツチ、俺のお姫様としての威厳が崩壊しつつある気がしてならない。

そうで無くても、演奏だけでなく田中役（これは本人がノリノリでやっているのがイラつきを加速させる）、お菓子や会議室の手配、資金援助と何から何まで木村の世話になりつ放しだ。

これはいよいよ意識して距離を取らないとヤバい！ 『偶然』に巻き込むどころか、気が付けば餌付けされて、木村動物園のパンダとして笹喰つてる未来が来かねない。

「うーん、キムラ商会に頼り過ぎるのも問題ではないですか？」

「勿論です、食事には他の商会からも自慢の一品を募り、この品評会すらイベントとして盛り上げます」

「それで、優秀賞にはユマ姫印のお墨付きマークを付与すると言う訳ですね？」

「……流石ですね、まさか既にキムラ男爵から説明を受けていましたか？」

「いいえ、ですがあの方が考え付きそうな事です」

クソッ！ 木村め、解りやすく暴れてくれる。俺はモンドセレクションじゃねーぞ！

「マークの図案ですが……これにして下さい、思い入れのある図案です」

そう言つて、俺はハイテーブルの上からメモ用紙を一枚取り、スラスラと俺の横顔のシルエットを筆記する。

そう、俺がエルフの国で発明したチーズに、何時の間にかやら入れられていた図柄だ。

「ハッ！ ……驚きました、ユマ様にはこんな才能も有ったのですね」

「いえ、元々私の名を冠する製品が国には有り、その図案です」

「正確に覚えていて描けるだけでも凄い事に思いますが……」

ただ参照権で絵柄を出して、それをなぞっただけだ。考えたのも俺じゃ無いし、凄い事は何も無い。

因みにチーズ自体は王都ではありふれているし、エルフに伝わるヨーグルトは山羊のミルクを木桶に入れておいたら、なんか出来ちゃったのが始まり。

つまり再現のしようがないのだ、ちよつとでもヨーグルトが有れば増やせるのだけだね。

そんな訳で何を用意するべきか、うぬぬと唸っていたら、勢いよく扉が開け放たれた。

「大変ッ！ 大変です！」

入って来たのはネルネ、血相を変えている。

「もうっ、ネルネ！ はしたないですよ」

「スイマセン、でも、大ニユースです！」

聞けば遂に公然と俺を批判する派閥が出来たらしいのだ。

シノニムさんも顔を曇らせる。

「相手は第一王子カディナールの派閥ですか？」

「いえ、それが、ルワンズ伯が立ち上げた会だと聞きました」

「なるほど」

思わず頷く、ルワンズ伯は元老院派の貴族。オルティナ姫を名乗った俺への追及を任された人物で、片眼鏡に白髪白髭のおじいちゃん。

だが、ルワンズ伯は俺がオルティナ姫の生まれ変わりでは無いと言う証拠を出せなかった。

大恥を掻いたルワンズ伯は悔し紛れに俺への暴言を繰り返し、何時しか周囲から距離を取られる様になっていた。

それだけなら俺の人氣に嫉妬し、時代に取り残された哀れなお爺ちゃん。当然派閥を立ち上げる求心力などありはしない。

恐らくは支援している者が裏に居る。

それは、マズ間違いなく第一王子カディナールに違いない。元老院は穩健派だし、落ち目のルワンズ伯の為にそこまでの支援はしないだろう。

当のルワンズ伯は事務方の法服貴族。法律関係の結構なお偉いさんと言うが、爺さんが気炎を上げたって、今の俺の人氣にそれ程の影響は無いだろう。

だが、公然と俺に反旗を翻す勢力が居る。それが問題なのだ。

今の俺の人気はハッキリと行き過ぎている。そして行き過ぎた人気はある日裏返る。その時に一気に攻勢を強めるだろう相手がそのルワンズ伯一派となるに違いない。

そうで無くても、今までスポットライトを浴びていた人にとってみれば、ぼつと出の俺に話題を奪われたと思っっているに違いない。

見逃して良い物では無いかも知れない……

「私は相手方の主張を調べ、対抗意見を纏めて置きます。姫様は変に動き回って隙を晒さぬ様をお願いします」

シノニムさんもそう言っって席を立ち、情報収集に動き出した。

「ど、どうなるのでしょうか……」

そう言っって不安がるネルネ、俺はその髪をそつと撫でる。

「大丈夫、オレが何とかするさ」

そう言っって『俺』はネルネに微笑んだ。

「??」

小首を傾げるばかりのネルネに、何を企んでいるかは教えない方が良いだろう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時間は宵の口、辺り一面が紫色に染まった世界の中で、俺は一人。

それはそうだ、こんな所に来る人間など居やしない。

俺は屋根の上に居た。それも急勾配な三角屋根の塔の屋上。通常、人が登れる場所じゃない。

そこから一望出来るルワンス伯の屋敷では、星の瞬きを打ち消す程に明かりが灯され、幾人もの貴族達が気炎を上げていた。

收音の魔法を使えば、その中心から館の主の大声がハッキリと聞こえて来る。

「あのユマ姫、いや何処の馬の骨とも付かない化け物は！ オルティナ姫を詐称した！ その大罪人が我こそは王家の一員と言う顔で！ この王都を徘徊している！ この事実が私にはどうしても許せんのです！」

「そうだ！ そうだ！」

「何が姫だ！ ただの化け物では無いか！」

「森に棲む者など見世物小屋がお似合いだ！ それに綺麗な服を着せ、有り難がるなど正気の沙汰とは思えませんな！」

盛り上がる貴族達、選民意識が凝り固まっている。ま、エルフだって他人の事は言えないが。

「嬉しいねえ、コッチも少ない良心が痛まらずに済む」

「俺は『高橋敬一』の自我で笑う。俺は田中が死んだショックで目覚めてからコチラ、人格の分離と統合が自在に出来るようになっていた。

基本は統合していた方が出来る事も多く、姫らしい仕草で受け答えが出来るのでそれで十分。

だが、今から俺がやる事は、俺だけが責任を負いたいのだ。
暗殺。

その禁忌を犯す。

今までの命を守るための殺人とは違う、まして相手は憎い帝国兵ですらない。

立場を守るための利己的な殺人。

だったら俺がその罪を被ろう。

用意したのは金属の筒。矢がたった一本だけピタリと入る形状。

何かと問われれば、俺は矢筒だと答える。

「霧の中、湿気ってしまつて矢が使えなかった」そんな嘘で作つて貰つたのは、水も漏らさぬ精度の矢筒。

と、言つても錫すずで矢の型を取つて、縦にカット。噛み合わせに樹液を塗るだけ。さして難しい作業は無かつたと聞く。

しかし、この矢筒に収まっているのは矢ではない。

水だ。

水も漏らさぬ精度なのだから、水を張つたバスタブで閉じれば中は水で満たされる。

そして、そのまま冷却魔法で冷やせば出来上がるのは氷の矢だ。

冷却魔法。俺はこれを幼少期からずっと追い求めてきた。

体の弱かった俺は、暑い夏の日差しを恨んで、涼しくするための魔法を幾つか開発した。

空気中の水分を集め、湿度を下げる魔法もその一つだが、アレは案外に難しい。

現に家族で使えたのは俺とセレナと母だけだった。涼しくなると解つてからは、皆が使いたがったが、まず繊細な魔力制御が必要で、その上で目に見えない空気中の水分をしつかりと意識する事がハードルとなるのだ。

同じ理由で酸素を集めるのは更に難しい、俺以外に出来たのはセレナだけ、それも「お姉ちゃんの言う事だから」と幼少の頃に無条件に信じ込んでくれたから。

事実上アレは俺とセレナ専用の魔法だったのだ。

今行おう冷却魔法は、それに輪を掛けて難しい。王宮の学者さまが言うに、こんな事が可能な術者は金輪際現れないと断言したほど。

俺が目標としたのはエアコンみたいに、熱だけを取り除く魔法だ。しかし、酸素以上に想像する事も難しく冷却魔法の開発は困難を極めた。

だが、そこでヒントになったのはセレナがアツサリと酸素を集めていた事だった。

空気中の水分や酸素を集める魔法は繊細な魔力の制御が必要となる。

しかし、セレナは魔力の制御が苦手だった。それでも酸素を集める事を可能としていたのはその豊富な魔力を空間に飽和させ、全てを知覚、制御可能としていたからだ。幼少期の俺ではとてもじゃないが不可能だった。

しかし、俺の魔力は増えている。セレナとは程遠いが極狭い範囲なら魔力を飽和させられる、それでなんとか狭い範囲の温度を下げる事が可能になったのは、成人の儀を成功させた後、王都を襲撃される直前であった。

『我、望む、小さき粒子の脈動よ、指し示す先より奪い給え』

やる事は単純で、一つ一つの分子の動きを魔力伝いに外に逃がす感覚。魔力を飽和させた全てを把握した様な全能感が有って初めて可能となる。

俺が魔法を発動させて暫く、徐々に金属筒に水滴が貼り付き、それすらも凍っていく。

「よしっー」

氷の矢が完成した！ 次は……屋敷の照明を落とす！

俺は魔力を制御して自分の魔力を触手の様にウネらせ延ばす。

グブロス卿のお屋敷でもやった事だが、人間界の魔道具には過剰魔力に対する安全装置が無い。

質の悪い魔石から何とか出力を得る事に特化しており、そこに俺の高濃度の魔力を紛れ込ませればどうなるか？

——パァン!

「なんだ? どうした?」

魔道具の明かりが失われ、パニックの声が聞こえて来る。

ここからは時間との勝負だ。

俺は金属筒を開け、氷の矢を取り出した。筒から剥がすときに少し欠けてしまったが、どうせ魔法で制御するから大丈夫。

俺は弓を構え、ゆっくりと矢を番える。指先が凍える程に冷たいがそれすらも心地よい。

狙うはルワンズ伯邸の窓、通常、ここから撃つても中のルワンズ伯には絶対に当たらない角度。

だが、俺は魔法で矢の軌道を制御出来る、しかしそれでも射線が通っていないと言う事はターゲットが見えない。位置が解らないと言う事だ、通常これは致命的な問題となる。

だが、俺はあろう事か目を瞑った。ターゲットどころか全てが闇に包まれる。

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

呪文を唱えると、何処からか不吉な風が吹き、バサバサと俺の髪が風にたなびく。その風すらも考慮して魔力を制御する。

——ビィン

屋敷からパクつてきた長弓は弦を震わせ良い音を響かせる。今日は一発だけ、この一発に全てを賭けて弓を引いた。

魔力は速度よりも制御に振った。氷の矢はスルリと軌道を変え、ルワンズ伯邸の窓へと滑り込む。

そして……闇の世界で輝く一つの光へ向けて、魔法の矢を制御する。

命中！ 魔力を通じての感覚。すると、ルワンズ伯を示す光の華が収縮し、そして消えた。

そう、俺はまず集音の魔法で大体の位置を掴み、それから目を瞑って運命の光を見て、ルワンズ伯の正確な位置へと矢を放ったのだ。

程なく、予備の照明なのか、屋敷の中からより一層の明かりが漏れるがもう遅い。

最早集音の魔法を使うまでも無く、ギャーギャーと地上の騒動が聞こえて来る。

だが証拠は出ない。氷は人体に刺さった瞬間に砕け、スグに溶けるだろう。

まして、開け放たれた窓からあの位置を狙える狙撃ポイントなど存在しない。

これがミステリーなら魔法を使いましたなど、冗談にもならないだろう。

誰も居ない屋上で俺は一人笑うのだった。

★アイヌ2

「大変ッ！ 大変です！」

ネルネが転がる様に部屋に飛び込んでくる。

「ネルネ、はしたないと云った筈ですよ？」

「うっ……」

俺がたしなめると、ネルネは血相を変えて後ずさった。

今の俺、そんなに恐いかな？ 無理も無いか、昨夜俺は人を殺した。

罪悪感など抱かないと思っていたが、手足は冷え、心は揺れる。

案外に俺も小心な所があつた様だ。異様な俺の様子に飲まれたのか、他の小間使い達もやんわりと俺を避ける始末。

だが、ネルネにだけはそんな風に避けて貰いたく無かつたのだが。

「どうしたの？ 言つて御覧なさい？」

「あの、その……」

ネルネはゴクリと唾を飲み込むと、つつかえながらも報告する。

「昨日報告した姫様を批判する派閥、その主であるルワンズ伯が変死致しました！」

「変死？」

「変死です、心臓を撃ち抜かれた様な傷がありながら、矢は発見されていないとか」

「そう……きつと神の矢に討たれたのね」

「神の……矢ですか？」

「そうよ、神の意志に反する者は皆、死に絶える」

俺がクスクスと笑えば、ネルネがヒツツと息を飲んだ。

そんなにも今の俺は迫力が出てしまっているのだろうか？

鏡を眺めれば銀髪の魔女が椅子の上、片膝を抱えた姿で薄く笑っていた。その笑みは冷たく、凄惨で破滅的な雰囲気周囲に渦巻いている。

うーん、我ながら恐いな……

しかし、こんなに引かれるぐらいならクツキーを囓る小動物扱いの方がなんぼかマシだ。

と、そう言えばアレはどうなったかな？ と俺の気持ち伝わったのか、単に話を交

えたかったのか、ネルネが声を上げた。

「あつ、今日の予定ですが、いよいよキイムラ様が企画した品評会ですよ！」

「……そうですか」

うーん、困ったな……眉間に皺を寄せ、悩んでいますアピール。

「最近の我々はキイムラ商会に頼り切りだと思いませんか？」

「はっ！ た、確かに」

楽士としてだけじゃなく、金銭的な部分も、こう言う企画の取り仕切りもアイツがやっているのだ。

品評会には多くの商会が参加して、自慢の逸品を披露してくれると言う。この企画の意義を考えれば、木村の商品を選ぶのは避けた方が良さだろう。

「一所いっしょに寄りかかってしまつては、キイムラ男爵に逆らえず自由に動けなくなつてしまいます。それに私たちは弱い。どうせなら多くの味方を集めなくてはなりません」

「ううー、難しい話ですが、お金を借りるなら、色々な所から借りるのは身の破滅と言いますよ？」

「それは借りる金額が少ない場合です、返しきれないお金を借りるつもりなら、一人から借りると言う事は、その人の奴隷になる事と同義です」

「か、返しきれない金額を借りないのが一番だと思つてですけど……」

「国を動かすのには、全てを賭ける必要が有るのです」

いつそ全員から多額の借金をしてしまえば、誰も我々を破滅させられない。

そう言つて微笑めば、ネルネは大いに仰け反り、顔を蒼くした。

「えっと、それでは今日の品評会で、すつごく美味しい物をキイムラ様が用意した場合は

「？」

ネルネの問いに、俺はゆっくりと首を振る。

「どんな物が出てこようと、キムムラ商会の物品を選ぶことはありません、それをネルネには伝えておきたかったのです」

「ううう」

ネルネは何故か悲しそうに俯いた。まだ俺と木村にロマンスを予感してるのか知らんが、木村が企画して木村が優勝じゃみんなが白けるし、当たり前じゃ無い？

品評会に出かける時も、まだ寂しそうにするネルネは言葉も少なく、トボトボと付いてくるだけだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ユマ姫様、こちらの商品はクラツカーとチーズと言う王道の組み合わせに、フィグ鳥の肝を組み合わせた物になります、ご試食下さい」

「ネルネ！」

「は、はい」

厳選した商人達のみが参加できる品評会とは言え、毒見は欠かせない。エルフにだけ効く毒だつてあるかも知れないし、ここはネルネに毒味をお願いする。

するとネルネはパクリと一口でクラツカーを放り込む。……いや、全部食べる必要あ

るか？

すると途端に目がキラキラと輝く。美味しいのか不味いのか、一目で解るのがネルネの良いところ。

クラッカーには濃厚なクリームチーズに併せ、フォアグラみたいな肝をペーストにしたものを載せているとの事。確かに美味しそうだった。

「お、おいひいです」

それは解ってる！ 飲み込んでから喋れ！ 俺がギロリと睨むとネルネはシユンとしました。

仮にも俺はお姫様。ネルネみたいに大口は開けず、上品に少しだけ齧って味わった。

「ふむ……まろやかなチーズと、良く裏ごしされた肝の食感がマッチしています」

「ありがとうございます！」

褒められた商人は満面の笑顔を咲かせるが、まだ早い。

「ですが、少々クドイのでは？ ワインを飲むならともかく、昼間の軽食では食べ続けるのは辛いでしょう。ハーブを加えれば爽やかになり、彩りも良くなるのでは？」

「ハ、ハハッ、噂以上の食通ぶり、恐れ入ります」

俺の評価に、商人は喜び一転、うなだれてしまう。

この世界、食べ合わせや食べ方に対しては男性中心で、お酒に合わせる事ばかりを考

えている気がするな。少しばかり味が濃い。

まあ、柑橘系のジュースでも飲みながらだったら結構美味しいか？

パリッ、モグモグ。

駄目出したククラツカーの残りをなんだかんだ飲み込むと、ネルネがジト目でコチラを見てくる。

いや、捨てるのも勿体ないじゃん？ 食べるよ？ 俺は。

魔力が薄い土地だからか、妙にお腹が減るんだよ。そう言えば恐鳥達も大岩蠟螂ザルディネフエロをバクバクと食べていたよな。

そんな事を考えていたら、ネルネが俺の袖を引っ張った。

「あつー！ 人だかりがありますよ、姫様ー！」

「そのようですね」

この品評会、参加者として王都中の商会が集まった結果。

貴族や、食通、記者と言った人間まで詰めかける大イベントになってしまった。

それもこれも、この世界にはこう言った品評会が今まで無く、更に話題のお姫様が審査員となれば話題の為に参加したいとミーハー共が集まったと言うワケ。

膨れ上がった人数を捌くべく、その方式も新しい。ドンと構える貴族様の前に次々と食品を供えるのではなく。

立食パーティーを意識して、身分の貴賤無くテーブルの上の食事を好きに取っていくと言うビュッフェみたいなスタイル。

つまり、みすばらしい料理は手も付けられず、美味しい料理には人が群がるって寸法だ。

つまり、アレだけ人が居るって事は、そこにとんでもなく美味しい物があるって事に違いない。

ネルネが興奮するのも当然だった。

「姫様！ 行きましょう」

「……そうですね」

急かすネルネだが俺にはオチが読めていた。警戒感も露わにゆっくりとテーブルへ。この品評会の主役は俺。テーブルの周囲に群がっていた人達も、流石に道を譲つてくれた。

そうして辿り着いた机の側には、緑の上下に身を固めた黒髪黒目の人物。はい、木村です。解ってました。

確かに現代知識があるコイツだったら美味しいモノの一つや二つ、作れるのも当然だろう。

だが、俺は今回コイツの商品を選ぶわけには行かない。どんなモノが来ようと、俺は

なんでも無い素振りです。素気ない評価を下すのみ！

さて、どんな華やかな逸品が並ぶのか？ 覚悟を重ねて覗いてみれば、しかし、机の上には金属のカップが並ぶだけ。華やかな他のテーブルに比べると一見地味な印象で、ネルネなんかは首を捻っている。

だが……俺はその恐ろしい罫の正体を知っていた。

「プ、プリンツ！」

慄く声おのが漏れ、頬をツウツと汗が伝った。

プリンツツ！ まさか？ 卵が貴重なこの世界で、これだけ大量に？

俺の顔は色を失い、手が震える。ドコでコイツはこんなモンスターを用意しやがった

！

俺の尋常じゃない様子が伝わってしまったのか、にわか俄に周囲も騒がしくなってくる。

そこに木村の野郎がプリンを片手に現れた。

「これはプリンと言って、近頃我が商会で売り出したのですが、まさか既にご存じとはお耳が早い！ ですが、今回はそれだけではありません」

そう言って、金属カップの底から杭を抜きポンと叩くと、プリンがその艶めかしい黄色を皿の上に晒した。

その食欲のそそること！

「綺麗ですっ!」

思わず感嘆の声を上げるネルネを、責める事は出来ないだろう。

「恐れ入ります、ですが今日はこれに加えて」

しかし、木村の追撃は止まらない。取り出したのは茶色のソース。そして真っ白なクリーム!

「ううっ!!」

その正体に気が付いた俺は呻き声を上げるしか無い。いや、まさか? しかしこの甘い香りは間違い無い。

それが解らないネルネは無邪気に木村へ問い直す。

「これはなんですか?」

「カラメルとホイップクリームです、砂糖を焦がしたものと生クリームを丹念にかき混ぜた物になります」

説明を聞いてもピンと来ない様子のネルネだが、この組み合わせの破壊力。俺は痛いほど良く知っている。

「どっぞぞ」

そう言つて木村は俺にプリンが載つたお皿を差し出して来る。コイツ相手に毒味は必要無いだろう。

だが、別の心配があった。

俺は、今生で碌なモノを食べていない。

エルフの味覚は淡白過ぎて、ハーフである俺の口には合わず、ビルダールの王都に着いてからも、文明レベルの低さから、望むような物が食べられたとは言いがたい。

そんな中で、木村の商会が用意した何気ないクツキーに、手が止まらない程にハマってしまったのは記憶に新しい。

そんな中でプリンだと？　こんなモノを食べたら俺はどうなってしまうのか？

俺の視線はジツと皿の上のプリンに釘付け。手はカタカタと震え、顔は蒼白に違いない。

歯の根は合わず、カチカチと口内で音を立てている。

これを食べて、俺はちやんと「この程度ですか……がっかりですね」みたいに憎まれ口を叩くことが出来るだろうか？

いや、出来る！　俺はやる！　たかがプリン。前世では幾らでも食べていただろう？

専属楽士だっただけでも木村を危険に晒しているのに、ユマ姫御用達、みたいな看板まで与えて、食料の供給まで頼ってしまったら？　木村を殺しているのと変わらない！

カツと目を見開き、歯の根が合わない顎を噛みしめる。冷や汗は首を伝い、スプーンを持つ手はぶるぶると震えた。

今朝の俺を思い出せ！ 俺は感情を失った氷の魔女だ！ 威厳に溢れた近づきがた
いお姫様だ！

まるで試食と言うより、絶望的な戦いに身を投じる前。洞の中で田中を送り出す時
りも、なお深い悲壮感がある。しかし、俺は覚悟を決めた！

「い、頂きます」

ギョツと目を瞑ってプリンとホイップクリームが載った匙を口へと運ぶ。

——あつ！

プリンだああああ！

脳内にはお花畑が咲き誇り、強烈な甘さが脳を焼く。まろやかなコクが舌を絡め取
り、官能的な刺激を送り込む。

声が出ない！ 瞬きすら出来ない！

「だ、大丈夫ですか？ 姫様あ！」

ネルネが肩を必死に揺らす、俺は少しも動けない。

「……ふわあ」

たつぷりと二分ぐらい経ってから、俺の口からは艶めかしい甘い声が漏れた。

頑張つて引き締めていた表情が緩んで、体ごとフワフワと飛んでいきそうな程に蕩けてしまう。

そんな俺の様子に、ネルネがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

「あ、あの、わたしもっ！」

「はむ、はむっ」

ネルネが俺のプリンへと匙を伸ばそうとするのを必死でブロック。奪われない内にと俺は必死にプリンを口へと運んだ。

美味い！ 旨い！ 甘い！ たまらないいい！

見かねた木村が銀のカップをネルネに差し出す。

「ネルネさんもどうですか？」

「あつ、ありがとうざいますう!!」

受け取ったネルネも、プリンを掬って口の中へ。

「ふわあ」

たちまち俺と変わらぬ放心を見せつけるネルネ。無理も無い！ 美味し過ぎる！

はむっはむっ、と二人して匙を動かすのを止められない。

ガツガツと食べ進めれば、あつと言う間にプリンは無くなりホツと一息。でも気が付けば一心不乱にプリンを食べる我々を周囲が微笑ましく見つめているのだ。

恥ずかしさに顔を真っ赤にするネルネだが、俺なんてそれどころじゃ無い。アレほど憎まれ口を叩くと決意したのにい！

悔しくて悲しいハズ。なのに俺はプリン之余韻から逃れられず、陶然としていた。

パニックによる現実逃避と言っても過言じゃ無い。

「お気に召した様で光栄の至りにございます」

「あッ！」

木村の声に、俺は今更に正気を取り戻した。しかし、時既に遅し。

何時の間に現れたのか、シノニムさんまで追い打ちを掛ける。

「では、最優秀賞はキイムラ商会のプリンで決まりですね？」

「ううう」

なんでだよ、ズルいだろ！ プリンはズルいだろ！

絶望に打ちひしがれて、肩を落とす俺に、同情的な目を向けてくるネルネが憎い。

お前が止めてくれないからああ！ いや、無理だよ、だってプリンだよ？

木村はニコニコと嬉しそうに笑っているに違いない。全部アイツの手の平の上かよ

！

何か一矢報いたい。なにか……何か無いか？ 爪を噛み、必死に考える。

アッ！

バツつと顔を上げて、木村の元までトタトタと駆け寄る。

「キイムヲ男爵、あの……ひとつお願いがあるのですけど」

おねだり攻撃！ 上目遣いで木村のズボンの裾を掴んで、必死のおねだりだ。

しかし、これは木村に屈したワケじゃ無い。俺の策を実行するためには木村が用意した材料は必須。

だが、同じ材料でもつと凄いやつが作れるって事を見せつけることが木村を一泡吹かせるのに丁度良いのだ。

……なんか当初の目的が変わっている気がしないでもないが、やられっぱなしは性に合わない。

と、ソコで後ろからスカート裾を引っ張られた。

「ユマ様？ プリンのおかわりはまだありますか？」

ネルネが的外れな事を言ってくるけど無視！ どんだけ食いしん坊キャラだと思ってるんだよ！

一方で、木村は何事かと首を傾げ、困ったように見下ろしてきた。

「何でしょう？ どんな事でも、何なりとお命じ下さい」

「で、では！ 卵と生クリーム、それに砂糖は大量に手に入るのでですか？」

俺は必死でお願いする。プリンと生クリームが作れるなら、当然に入手のツテがある

のだろう。

「どれも希少な物ですが、ユマ姫様の頼みと有ればご用意しますよ？　ただ鮮度が命なので時間を指定して頂けると宜しいかと」

「では、それぞれ小さな樽に一つ分程度の量を、劇の前日までに融通して頂きたいのです」

「……失礼ですが、それだけの量をどうなさるおつもりですか？」

「恥ずかしながら、私もお菓子作りをしたいと思ひまして」

俺がモジモジとお願いすると、快く木村は約束してくれた。

このぐらゐの歳の少女がお菓子作りに憧れるのは普通のことだ。

「そうですか、では劇の当日は姫様の手作りお菓子が食べられると考えても？」

「ええ、期待して下さい」

俺はニツコリと木村へ笑い返す。これで少なくとも一矢報いる事が出来そうだ。

いや、もう完全に目的が変わっているが。木村がいなくても俺だつて材料さえあればお菓子ぐらゐ作れるんだぞつて所を見せておかないとな。

俺が居ないと駄目なんだ！　ぐらゐの気持ちで木村にべつたりされればアイツを殺す事にも繋がるし、何より俺が悔しい。

そんな決意を新たにする俺を、ネルネは不思議そうな顔で見つめていた。

アイス3

「それではお菓子作りを始めます！」

「え？ あ、わたしもですか？」

ネルネは慌てるが、俺一人で作るって何だよ？ こう言うのは女の子同士でキヤツキヤウフフとやるのが普通なんじゃないの？

転生TS物の醍醐味って言ったら女の子同士の子同士のイチヤイチャ、中でも重要なのはOF UROイベント！

だけど病弱だった幼少期、お風呂と言えばお側付きの女性が入れてくれる物、いちやいちやと言うより要介護者とヘルパーさんみたいな感じで、楽しいモンじゃ決して無かった。

なんだかんだ凄いい美人なシノニムさんとお風呂。道中でなにげに期待してたんだけど、なんてーか犬を洗うようにワツシャワツシャとやられてしまひなんか違うと。

そんな訳で、待望だったネルネとお風呂なんだけど、ネルネは俺の思い出したくない部分をピンポイントに話題にしてくるのだ。

「今日のキイムラ男爵カツコ良かったですよ、最後の曲ぐらいテンポが速い曲がエ

ルフでは流行りなんですか？」とか「必死にプリンを食べるユマ様は本当に可愛らしくてみんなの心を驚掴みにしていましたよ」とか。いちいち的確にこつちのハートを抉つて来る。

本人に悪気が無いから良い物の、嫌がらせで言ってるならグーで殴ってるよ？

そもそもだ。

「ネルネ！ 私はキイムラ商会の物は選ばないと云ったでは無いですが、それを止められなかつた分、ここで挽回して貰いますよ！」

「えええ!? あんなに美味しそうに食べておいて！ あんなの止められっこ無いじゃないですかあ」

……やっぱり痛い所を突いて来るな。だつてプリンだよ？ ズルいだろそんなの！
こちらら王族だつてのに、良く解らない花とか芋とか、精々がナツツとヨーグルトで生きて来たんだが？

それがいきなりプリンじゃ、プツリンと弾けるだろそんなモン。

「とにかく！ 一緒に作つて貰います」

「ハッ、ハイ！ でもわたしもお菓子作りの経験は少ないのですが……」

そう、お砂糖が貴重なこの世界、お菓子作りが趣味の女の子つてのは意外と少なかった。

逆に言うとお金持ちの貴族の女子の趣味としては、そこまでおかしい物では無いのが救いか。

ま、ネルネのぼやきは無視して進めよう。

「では、まず卵を泡立てます」

「ハ、ハイ」

ネルネはワシヤワシヤと金属ボウルの中の卵を泡立てる。ホントは湯煎するんだっけ？ お湯か……この世界のコンロって言えば、レンガ製の釜の上部に穴が空いていて、熱気が上がって来るからそこに鍋とか置いて下さいってタイプ。燃料はもちろん薪。使いづらいいし面倒くさい。魔法でお湯をちやちやつと作る。

「ネルネ、このお湯でボウルを温めながら混ぜて下さい」

「え？ このお湯、いつ温めたんですか？」

「魔法です」

「魔法……」

いや、魔法だよ？

で、逆に生クリーム、こっちは冷やす。

「え？ それ氷ですか？ この季節に何処から？」

「魔法です」

「魔法……」

魔法だつて。

いや、氷じゃ無くて直接冷やせば良かったのかな？

で、後は二人でワツシヤワツシヤと混ぜるだけ、合間に砂糖を適時入れて行く。

最後に二つを混ぜ合わせれば完成だ。

「出来ました」

「え？ これ何ですか？ 焼いたらプリンになるんですか？ 違いますよね？」

「違います、これはアイスクリームです」

「ええ!! もう夏ですよ、どうやって？ ひよつとして？」

「魔法です」

「魔法……」

この世界にもアイスはある。でも食べられるのは春の初めぐらいまでだ。

氷室って概念はあるのだが、しかし氷室に適した高地は魔獣蔓延る危険地帯、夏場ともなれば氷は王族ですら滅多にお目に掛かれない。

木村の奴が何か用意している可能性は有るが、それにしたつて俺の魔法は優にマイナス20度ぐらいは温度を下げられるので勝負にならないだろう。

そして、氷が無いと言う事はアイスの発展も疎かと言う事。オルティナ姫の記憶にあ

るアイスにしたって牛乳に卵と砂糖をブツコンで冷やしたただけの代物。

ちやんと生クリームを泡立てて空気が入ったアイス、それもキンキンに冷えた物は未知に違いない。

「では冷やします、『我、望む、小さき粒子の脈動よ、指し示す先より奪い給え』」
「え、!? あつ！ ホントだ、スゴイ！」

ボウルは急速に冷えて、あつと言う間にアイスの完成。いや？ 急速に冷やし過ぎたか？ でもゆっくり冷やすのは俺が辛い。取り敢えず食べてみよう。

「ふみゆ、なかなかですね」

「スゴイ！ 冷たいです！ 美味しいです！」

とろける美味しさ。たまらんね。

「あのーキイムラ男爵がお見えになつておりますが」

と、その時丁度良く女中さんから報告が入る。大方材料が届いているかの確認だろうが、コイツを見せてビビらせてやろうかね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ユマ様。これは、とんでもない事ですよ！」

……予想以上に驚いて貰えた。

「間違いなく、世界の流通に革命が起きます」

だろうね、温度が低く保てれば食料品は長持ちする。でもな……

「ご期待の所すみませんが、この魔法。多用出来る物ではありません」

冷却魔法は魔力も神経も使う、そうホイホイと使える物では無い。

「では、エルフの魔術師であればどうでしょう？」

「残念ながら、この魔法が使えるのは私だけです」

「……なんと！」

オリジナル魔法だよ！　むふふ、俺TUEE感出て来たな。

しかし、そうなるとこの魔法、案外に使い道が無いんだよな。それこそ個人的にアイスクリームを楽しむぐらい。

「ふむ、となるとこのアイスクリームを最大限売り込む必要が有りますな」

「そうですね」

「その為には足りないモノがあります、お気づきですか？」

痛いところを突いてくる。だが、無理だと思つて諦めていたのだが？

「……香り、ですね」

「流石、その通りで御座います」

そりゃ気付いてたけど、バナナなんて無いから仕方ないだろ。

「私はこのアイスに適した香料に覚えがあります、どうかお任せ頂けないでしょうか？」

「本当ですか？ 是非、お願いします」

まさかあるのか？ バニラなんぞ地球でも貴重品だっただろ？ 詳しく聞けばキューティムって胡蝶蘭みたいな派手な花の実を、同じ花の蜜と油に漬けて発酵させると良い香料が取れるんだと。

よく考えたら、キムラ商会は食料品と化粧品が主な商材。香料は専門と言って良い。その木村がピツタリの物があると言うのだから、ほぼバニラみたいなモノが出て来ると思つて良さそうだ。

こりや明日の派閥の結成式が楽しみだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、翌日。俺達は派閥の結成式が行われる会場に来ていた。

「大きいですねえ」

「そう……ですね」

ネルネと見上げてしまう。会場は木村が新しく作った劇場と聞いていたが、想像以上に立派だ。

結成式がこの劇場の落成式でもあるらしい。

外観も立派だったが中に入れば大理石の床、彫刻が施された柱、天井は高く開放感がある。

面白いのが、広告スペースの多さと大きな物販スペースだ。

「ルイーンの宝飾、偽物ですよね？　でも良く出来てます」

「と、言うより量産しやすいデザインにしたのでしよう」

ルイーンの宝飾は身につけた者に変身能力を与える神具、コレを巡った騒動が戯曲となつて居るのだが。当然ながら伝説のアクセサリーなので現物など誰も見た事が無い。

だから良く出来てるも糞も無いのだ。それを大寫しにしたポスターで劇の宣伝。量産して物販で販売。よく出来た商売だ。

と、言う事は？　ひよつとして俺のグッズも……あ、俺の秘宝のティアラ!?　いつの間^にに用意したんだコレ？　それに田中のメガネまで！

「勝手な事を！」

「おや？　てつきりご存知と思つていましたが？」

いきじお
憤る俺に、思いがけず返事が。木村である。

「シノニムさんとは一個当たり9%の金額で折り合いが付いて居るのですが」
「そ、そうだったのですね」

なあーに勝手にやつとんねん、シノニムさん！

とは言えシノニムさんは、俺のメインスポンサーであるネルダリア領主オーズドの名代な訳で、お金に関しては任せっぱなし。反対する事は出来そうにない。

ま、別に俺がデザインした物でも無いし、ネルダリアが俺に投資した金額だって、そろそろ洒落にならないレベル。文句はないのだが勝手に進めてるのは面白くない。

シノニムさんを探し出して嫌味の一つも言っちゃりたいがそんな時間は無さそうだ。今日のスケジュールはキツチリ分刻みで決まっている。

まずこれから俺たちが楽屋に入って、その間に木村が商会の関係者と劇場の落成式として劇場前で挨拶とテープカット。

劇場にお客が入ったら俺はオープニングセレモニーとして舞台挨拶、昼休憩では軽食を摘みながら貴族様に挨拶回り。劇が終わってからは夜食と待望のデザートにアイスを食べ、最後に締めめの挨拶でお仕舞い。

こんなスケジュールだから、当然、劇の出演は全面的にプロにお任せする。

俺はシナリオの監修と、通し稽古を一度見学した位。なんせ練習する時間も無いし、今後この劇場で何度も演じるのに、毎回俺が出る訳にも行かない。

シノニムさんを探すのは諦めて楽屋に引込むと、来るわ来るわ、役者さんや楽士等、劇の関係者が次々と。

俺が挨拶攻めに遭っていると、にわかに外が騒がしくなる。どうやら落成式が始まった様だ。

「盛り上がっていますね」

「で、でも、何だかキムラ様の挨拶だけにしては、盛り上がり過ぎじゃないですか？」
確かにネルネの言う事も最も、嫌な予感がするな。

そう思ってたところに、シノニムさんが飛び込んで来た。

「姫様！ 大変です！」

「シノニム丁度いい所に、私からも話があります」

「それは急ぎの案件ですか？ そうでないならこちらの話から、させて頂きたいのです
が」

そうまで言うならと先を促す。

「良い話と、悪い話があります」

なんだよ、その洋画みたいな二択。

「まず良い話ですが、第二王子のボルドー様がいらっしやいました」

「本当ですか？」

まさか？ 第二王子がこっち側に付いてくれた？ 第一王子は俺を面白く思っていない事が明らかだけに、下手をすれば国を二分する大騒動になりかねない。

その覚悟がああ地味な兄ちゃんにあるのか？ いや、顔見せだけでもコツチにとっては大収穫だ。

「それで、悪い方は？」

つまり外の騒ぎの原因は王子。だとすると悪い方の見当が付かない。

苦虫を嘔み潰したような顔でシノニムさんが言葉を紡ぐ。

「実は主演女優が来ておりません。住居に迎えを行かせたのですがもぬけの空。どうやら昨晩から帰った様子がありません。……何者かに誘拐された可能性があります」

……マジかよ。

そう言えば、挨拶に……来てないね。

舞台の上で

「仕方ありませんね、私が出るしか無いでしょう」

舞台裏で、俺は当然とばかりに宣言する。

舞台挨拶の時間はすぐそこだ、言い争つてる時間は無い筈なのだが。

「いくらユマ姫様でも無茶でしょう。失礼ですが演劇の経験は？ プロの舞台、端まで声を通すのは並の事ではないのです」

「それだけじゃありません、ユマ様はストーリーこそ把握しているでしょうが、セリフの方はどうです？ 劇作家の手で多くのアレンジが加えられています。知ってるつもりで勝手に喋れば他の役者さんに迷惑となりますよ」

木村とシノニムさん、口々に反対されてしまう。

俺を題材にした舞台に主演女優が行方不明と言う非常事態。しかもこれが劇場のこけら落とし兼、俺の派閥の結成式、そこに第二王子まで駆け付けたって言うのに、劇はやれませんかじゃ格好が付かないだろ。

「気持ちは解りますが、恥の上塗りとなるだけです」

聞き分けの無い子供を叱る様なシノニムさんだが、だったらどうするつもりだ？

「では誰か代役に心当たりが？」

「残念ながら、そもそもが無理なスケジュールです、他に演じられる者は居ないでしょう。練習中の候補生は居りますが、鑑賞に堪える出来では無いと思われます」

答えるのは木村、その辺りは劇団へ既に確認済みなのだろう。だとするとそれこそ八方塞がり、ならば俺が演るしかないだろうが！

「ではやはり、私が出ましよう。素人である私ならば多少稚拙な演技でも見逃して貰えるハズです」

「いえ、セリフが聞こえなければ観客を退屈させてしまいます」

「それ所か！ セリフを憶えていないでしよう？」

やはり口々に止められてしまう。

「ではどうするのです？ 劇無しにはとても時間が持ちませんよー」

「仕方ありません、今のメンバーで演じられる演目を演るしか無いでしょう、ルイーンのお宝飾と言う劇だったら、元々ユマ様の劇と交互に打つ予定でしたのですぐに準備が可能です」

あのイミテーションアクセサリーの劇か、うーん俺の派閥の結成式なのに関係無い劇つてのは。それに……

「これは明らかに妨害でしょう？ 屈したくは無いです」

「だからこそ！ 劇に出るなど危険だと言うのです」

シノニムさんの言う事も解る。そりやそうか、うーん悔しいなあ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「主演女優が急病のため、本日の公演内容を変えさせて頂きます」

舞台挨拶、木村が公演内容の変更を宣言するや、場内は騒然となった。

行方不明を急病とするのはお約束みたいなもんだが、そう言われても納得行かないよな。

何が納得行かないって、舞台の下から意気揚々とドヤしてくる貴族の爺さんだ。

「なんとまあ、この檜ひのき舞台ぶたいに体調管理も出来ないとはけしからん、一体何という女優ですか？」

大声を張り上げる爺さん。その隣に派手な衣装で『私、愛人です』と言う風に座る女性。

紛うこと無く、我らが主演女優である。

舞台の上で固まる一同、返事が出来たのは木村だけだった。

「今、我々どもの商会で一押しにさせて頂いているイライザと言う娘です。ちようどお連れのお嬢さんと生き写しの様似ていらっしやいます」

いや、木村。お前スゲーよ。どういう神経してんだ？

流石に爺さんも面食らった様子だったが、それも一瞬。不敵に笑うと憎まれ口を叩く。

「ほう、実はこの娘もイライザと言いましたな、なんとも不思議な偶然が有ったものですねあ」

「それはまた、不思議な巡り合わせと言うべきでしょうね」

「まったく、まったく」

「ハハハハハハ」

「……………」

貴族の爺と木村の、とぼけきった会話に頭が痛くなる。当の主演女優が所在なさげにしてるのが救いか。

これ、なんか脅されてるとかのパターンだな。そこまではまあ解るけど、閉じ込めるでもなく喧嘩売るために、本人を会場に連れてきちゃうのが凄い。女優さんコレ、居たたまれなくて死にそうになってるじゃねーか。

だが、そんな彼女を無視して貴族の爺さん連中がやいのやいのと勝手に盛り上がっている。

「しっかし、主演女優など居らずとも、ユマ姫様自身が演じればいいのでは無いですかな？」

「そうですねあ、そもそも女優に演じさせては興ざめ、我々は姫様の生のお姿を見に来たのですから」

「全てが狂言、それ故に語る口を持たないと言うことでは？ オルティナ姫を騙る様な者ですぞ？」 森に棲む者の姫と言うのも怪しいモノですな」

……どうも奴らは、故ルワンズ伯の派閥のメンバーで、弔い合戦として決死の嫌がらせを仕掛けてきたと、そう言う事らしい。

事情を察した来賓客や、第二王子も眉をひそめているのが救いか。しかし奴らだって結局は他人事、内心面白がっているに違いない。

だったらもつと面白くしてやろうじゃねーの。

「心得も無く、拙いものとなりますが、それでよろしければ私が演じさせていただきますが？」

舞台の上、堂々と宣言してしまう。

同じく舞台上で木村や劇団の人達は、それこそ飛び上がらんばかりに驚いてるのだが、知ったことか。

「えっ？」

「なにを！」

「馬鹿なっ！」

「おおおー、楽しみですなあ」

反応は様々、ま、盛り上げますかね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なぜ、あんな事をおっしやつたのです!」

舞台挨拶も早々に切り上げて舞台袖、待ち構えていたシノニムさんに早速怒られた。

が、俺だって何も考えていない訳じゃ無い。

「アレだけ堂々喧嘩を売られているのです、負けっ放しでは笑いものでしょう?」

「劇で失敗したら余計に笑われるだけでしょう!」

「そうしたら、かわいそうな私と意地悪爺さんと言う形になるだけです」

「だとしても安全はどうです? あの様子じゃ何をするか解りませんよ!」

「犯人が誰の目にも明らかな状況。これ以上行動を起こすでしょうか? 対応だつてし

やすい筈です」

シノニムさんと言い争う中、木村が現れ割って入る。

「今聞いて来ましたが、恋人が人質らしいです。難癖をつけられて監禁されてると」

「よく有る手段ですね」

「田舎はともかく王都では異例ですよ、人気女優を狙い撃ちで強権を振るうなど貴族の中でも鼻つまみ者になります」

つまりは自爆テロみたいなモノか？ シノニムさんはそれを聞いて慌てて飛び出そうとするが、それを木村が止めた。

「商会から迎えに行っています、それになんと第二王子の方から協力を申し出て頂きました」

「第二王子から？」

シノニムさんが驚きの声を上げる。確かにこの状況、最悪全てが第二王子の差し金で俺を笑いに来たのかと勘ぐってしまつたが流石に違うらしい。

貴族の屋敷に押し入るのはハードルが高い、木村は名ばかり貴族だし、シノニムさんは代理に過ぎないだけに知らぬ存ぜぬで通されればやり様が無い。

だが第二王子の使いを名乗る人物を追い返せば、下手すりやお家取り潰し。

思つた以上に早く片が付きそうだ。

「それでも、午前の部には間に合わないでしょう、午前はいつも通り、私と姫様とで弾き語りをするのはどうです？」

木村の提案は一見良さそうだが、劇場に呼んだ人全員に聞かせるのは難しく、客を絞つて演奏するつもりらしい。

そんな鼻屑をすると選ばれなかった人は面白く無いに違いない。やっぱりここは俺が演るしかないだろ！

決意が堅いことを伝えると、なんとか木村もシノニムさんも折れてくれた。

「どうにも成らないと思っただらフオローさせて頂きます」

「セリフを忘れても慌てずに堂々としていて下さいね、迷ったら他の劇団員に任せましょう」

散々な言われようだが何とか劇に出ることが許された。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、そんなこんなで劇団員の人達に「私出演します」と宣言したらみんな露骨に気まずい顔をした。

素人がなんか言い出したと言う風で、セレナを演じる子役、いや背の低い童顔の女優さんなんか悲壮な覚悟を決めていらした。

だが、俺には勝算が有る！ 不安そうな周囲とは裏腹に自信満々。

てんやわんやの落ち着かない空気の中、いよいよ開幕が迫っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

薄暗い舞台の上、あつらえられたベッドの上に横たわった俺は幕が上がるのを待つていた。

物語はあの日のエルフの王都、異変に気がつき飛び起きた俺が、霧に霞む王都に火の

手が上がっている様を目撃する場面からスタートする。

ぶっつけ本番、いよいよ舞台の幕が上がって行く。

万雷の拍手が鳴り響くが、そこに含まれる張り詰めた緊張がベッドに寝転ぶ俺にも伝わってくる。

客も何が起こるのか、期待よりも不安が勝っているのだろう。

まして舞台袖で待機する役者の面々は言わずもがな、ひよつとして一番リラックスしているのが、舞台上の俺かもしれない。

魔道具のライトがその光を増していき。薄暗い舞台に朝の訪れを知らせると、俺はベッドから飛び起きた。

「なんてこと！ 王都が燃えているわ！」

窓に見立てた木枠を覗いて、俺は悲痛な声を震わせた。

声はしっかりと劇場の端まで届いているだろう。

かといって、大声を張り上げている訳でもないし、腹から声を出すような特殊な発声が素人の俺に出来る筈もない。

魔法である。

幼少のみぎり、生誕の儀で使った拡声の魔道具。体調不良が頻発する俺は人を呼ぶのに便利だからと、その後も常時付けている時期があった。

だが、首に付けると蒸れるし邪魔だしで、同じ様な魔法を早々に覚えたのだ。

なので、かなり使い慣れた魔法。そもそもやってる事はおなじみの集音の魔法とほぼ同じなので、合わせれば使用率はダントツトップだろう。

「お兄様！ 私も戦います」

「だめだ、おまえはセレナと一緒に脱出するんだ」

「そんな！ イヤよ！ お兄様も一緒に逃げましょう！」

そしてもちろんセリフは完璧。これもおなじみ、参照権だ。

今回は、通しでリハの様子を見学してるので、主演のイライザさんの演技を参照しながらトレースしている。

仕草や声の細かいニュアンスまで、結構真似出来てるんじゃないか？

ステフ兄様役の男優なんて、時折引きつった顔で畏怖すら抱いているのが解り、正直言って気持ちが良い。

残念なのは、男優と言うことで流石に整った顔をしているが、それでも本物のお兄様程のイケメンじゃない事ぐらいか？

なんだかんだお兄様にはドキドキすることが多かった。今生の初恋と言っているのには無いだろうか？

てつきり異性として意識してるのだと思っていたが、よく考えればステフお兄様イケ

メン過ぎて、元の『高橋敬一』のままに出会ったとしても、ドキドキしたんじゃないかと思ってしまう。

ホモとかじゃなく、男でも見とれるレベルの美形だったのだ。

お兄様にドキドキするから、将来は男に恋するものだと思ひ込んでいたけれど。今考えれば怪しく思えてくる。

今や俺は自分の意識が女なのか男なのか正直良く解らない。

ネット小説ではこう言う場合、どんどん女の子に近づくのがセオリーなんだが、俺の場合色んな人格が混じり合ってグチャグチャだ。

俺がそんな事を考えてしまうのは、他人を通して自分を演じていると、俺の異質さを突きつけられている様な気がしてくるからだ。

「こんにちは皆さん、本日はどの様な御用件でしょうか？」

殺気立った帝国兵に、何故かにこやかに話しかけるシーン。

笑顔で人を斬りつけ殺す。ここで俺は敢えて主演女優イライザのトレースをやめた。リハーサルの時からここは不満だったのだ。あの時、既に俺はもうハッキリと壊れていた。

その狂気は誰にも真似出来ないし、真似されたくない。

「セレナー！ セレナー！」

撃たれたセレナを背負う。この重さを、この絶望を、嘘の演技で知ったように語って欲しくなかった。特に木村には。

だから俺は挑発と知っても、これ幸いと自分で演じる事にした。最初ぐらい、たとえ下手でも俺の苦勞を演技を通じて見て欲しかったのかもしれない。

そう、木村は俺の背負ってきた苦勞の重さを知るべきだ！

重さを……重さ……重いいいい！

「うあううう」

森のセットの中、俺はあの日さながらの苦しいうめき声を上げる。

「あ、あの？ 大丈夫ですか？ 重くないですか？」

「重……いです」

背中の上のセレナ役女優さんが心配そうに小声で話しかけて来る。

そう、重さを知れも糞も！ 女優さんは子供じゃないからセレナよりは背が大きいし体重も重い。

とは言え舞台は真つ平らで狭い。デコボコの深い森をさ迷った事を思えば何でも無い！ とか舐めて考えてた、普通にキツイ。

つてか、セリフをハッキリしゃべる事を意識して、演技するつて普通に体力勝負。演劇、舐めてました。

「ハア、ハア、ハア」

「あの？ おぶったフリで良いですよ？ 歩きますから！」

いや、俺はこの苦勞を木村や観客に見せつける！

半ば意地になって歩き回ると本気で死にそんな感じだが、ある意味リアルだ。
いよいよ舞台は一部の山場に。

「あり、がとお、せれなあありが、とう」

セレナが死ぬシーン。

俺は女優さんとの演技を辞め、参照権であの時のセレナを見る。

辛くて辛くて、今まで絶対に見ようとしなかったけど、一度冷静に向き合いたいと思っていた。

「セレナ！ セレナあああああ」

そうすれば、演技などしなくても本物の涙が幾らでもあふれてくるのだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺、木村は、ピンチを迎えた理想の美少女を前にして、気が利いたことを言えなかった。
た。

「どうにも成らないと思ったらフォローさせて頂きます」

商会の主にして、男爵位を授かった俺だが。決意を固めたユマ姫を前にすれば、それぐらいしか言う事が出来ない。

何かあつたら即座にフォローするつもりで舞台を離れ、客席の端で台本を片手に劇を見ている。

もちろん姫様がセリフに詰まったり、この客席の端まで声が届かない場合は、俺が代わりに声を張り上げようと言う魂胆だった訳だが。

「マジか……」

俺が上げられたのはセリフでは無く、驚きの声だけ。

ユマ姫の声はポツリと呟いた様な声色ですらハッキリと届いた。不思議と通る声、王族として生まれた者の、天性の素質と言つて良いだろう。

その最たるモノは舞台上で群を抜く存在感だ。他の出演者も皆、王都を代表する華のある役者なのだが完全に霞んでしまっている。

演技も堂々として、安定感すら感じてしまう。用意した台本を丸め、俺は次第に一観客として舞台にのめり込んでしまつていた。

だがその演技が帝国兵を殺すところから徐々に不安定になり、やがて意味不明なセリフすら目立つようになる。

やつぱり無茶だったかと思つて反面、——目が離せない。

セリフを忘れてアドリブで適当に話している？ いや違う！ コレが本当なのだ。

この徐々にネジが外れて壊れていく感じが本当なんだとすれば、真に迫る恐怖と狂気は痛いほど観客席まで伝わっていた。

そこから森の中を彷徨うシーン、もはや本当の遭難者の様な悲痛さ。

何日も歩き続けた様な疲れと、観客席の端でも解る程の尋常じゃ無い汗。

——演技の範疇を超えている。

その思いは死んで行く妹セレナの前、泣きじゃくるユマ姫の姿を見て確信に至る。

俺達にコレを見せたかったのか！ これでは女優の演技に満足出来ず自分で演ると言い出すのも無理は無い。

想像を超えるリアリティは、これが狂言などではなく全て真実なのだと言う段違いの説得力に溢れていた。

そして妹のセレナが死に、最後には泣き疲れて、ドタリと気を失う。

その様が客席から悲鳴が上がるほどに真に迫っていた。

こんな演技があり得るのか？ ましてやまだ子供じゃ無いか。

知るほどにユマ姫は不思議だ。異常に賢いのは少し話しただけで解る。

何より記憶力が恐ろしい、名前などは一度聞いたら絶対に忘れないし、一度見ただけのりハーサルでセリフを覚えるなど人間技では無い。

誰よりも賢く、誰よりも美しく、誰よりも演技が上手い。おまけに魔法と言う不思議な力まで使えるとなれば、地球なら国の一つや二つ傾けていたに違いない。

などと物思いに耽っていたが、舞台は幕が下りたまま、中々切り替わらない。はて？　ちと長いな。このシーンにセットの切り替えなんてあったか？

とか思っていたら、いきなり腕をひっぱられた、フィーゴ少年だ。

「ボーツとしないで下さい！　イライザさんの彼氏の救出は成功したそうです」

「そりゃ良かった、後半は行けそうか？」

「……それどころかスグ出て貰う事になりそうです」

「ん？」

「ユマ姫様が気絶しました、やっぱり無理してたみたいです」

……マジかよ。

いや、もうどこまで演技でどこからマジだったのか解らない。

しかし、いきなり役者を変えては何なんだと思われるし、ここまで盛り上がってるのに何より白けてしまう。

「どうします？　イライザさん変わってもらいます？」

「あーイライザにはコレを付けてユマ姫に変わって貰え」

「これは？」

「ルイーンの宝飾、そのレプリカ、王家の秘宝の一つって事にして姫が普通の女の子に変身したって設定で押し通すぞ」

「マジですか!」

「マジだマジ! さっさと行くぞ!」

もう、この劇は誰にも何がどうなるか解らぬまま、駆け抜けるしかねーだろうが!

★第二王子

気が付けば見知らぬベッドの上。ユマ姫となつてからは良くある事だ。

そこに声が掛けられる。

「気が付きましたか？」

「シノニムさん？ 劇はどうなつたのです？」

確か舞台の真つ最中。セレナが死んだ所から記憶が無い。

「イライザさんが代わりに。救出は無事に成功した様です」

「そう、良かった」

ギリギリセーフ！ あそこで俺は本当に寝落ちしてしまうワケだし、迫真の演技と言

えるのでは？

でも、突然役者が変わってしまうのはアレかな？ 折角観客もノツて来てたのに勿体

ない。

俺が残念そうにしていると、シノニムさんから驚くべき報告が。

「途中で役者が変わった理由として、ルイーンの宝飾。あの秘宝で普通の女の子に変身

したと言う筋にした様です」

「え？ ずいぶん思い切った変更をしましたね」

「私も驚きました、ただそうでもしないと観客も納得しなかったかもしれません」

「と、言うとは？」

「……全くもう！ それだけユマ様の演技が素晴らしかったと言うことです。まだ私は姫様の事を見くびっていたのでしようね」

「ふふ、悪くなかったでしょう？」

俺がイタズラっぽく微笑めば、シノニムさんがポツと顔を赤らめたのが解った。

……デレたな。

「悪く無かったどころか、客席で見たいイライザさんが感銘を受けていました。私もです。ネルネなんて姫様を放ってまだ客席に張り付いてるぐらい熱中しています」

オイオイ、ネルネちゃん？ まあでも許すよ？ 今日の俺は気分が良い。

「もう、あの子ったら」

フツツとお上品に笑ってみる。

「ところで……ユマ様は演技の経験が？」

「いえ？ ああ、五歳の時に劇と言うか、お遊戯はやりましたね」

「お遊戯……それであんな風に演じられるモノですか？」

「記憶力には自信があるので、見たままを演じただけですよ」

そう言うのと、シノニムさんは胡散臭い物を見るように目を細めた。

「劇の変更で、ユマ様は後半に再び出番があります」

「? どうなるのです?」

「ユマ姫を演じるイライザさんは、途中で田中として死んで、そこから最後までユマ様が再び演じる事になりました、大丈夫ですか?」

「え? 田中として? ああ! 田中が私に変身して、おとりになる訳ですね?」

話が読めたぞ。町娘の姿に変身しているユマ姫が、その秘宝を田中に託す。

グプロス卿の手下は、むしろ本物のユマ姫の姿を知らないのだからルイーンの宝飾の力で町娘に変身した田中を追いかけ、元の姿に戻ったユマ姫はまんまと脱出しオーズドに保護される。

そんなシナリオに変更したのだ。

「理解が早くて助かります。そう言う筋です。そこからスフィールで大立ち回りして、グプロス卿を誅する部分はユマ様自身が演じる事になりました。体調の不安から反対しようかと思っただけですが」

「いえ、大丈夫です。やります」

「そう言うと思っていました」

シノニムさんも大分俺を理解してきたな。嬉しくってニヤニヤ笑いが止まらない。

さあて、どうやってあの意地悪爺さんどもをとっちめるか？

と、その前に仕事があるぞと釘を刺された。

「その前に、もうすぐ前半の部が終わります、予定通りホストとして対応して下さい。劇について、きつと質問攻めに合いますよ？」 第二王子の扱いには特に注意してください」

「わかっています、ですが私への質問は劇の事だけでは無いと思いますよ？」

……そう、休憩中には軽食、そしてデザートとしてアレが出る。アイスだ。

本当は夜食と共に出す気だったが、俺が低温を維持する余裕が無くなり、先に出すことに決めたのだった。

今からワクワクしてしまう。

「実は作った私自身、楽しみなのです。香りを付けた完成品は食べていませんでしたから」

悪だくみの笑みから一転、あどけない笑顔で微笑んでやれば、その変わりようにシノニムさんはドン引きしていた。

うーん、なかなか好感度が上がらんね……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さあ、ご飯ご飯。

午前の部が終わって、休憩時間だ。

いや、当初の予定ではこの休憩時間が一番の頑張り所だったのだが、今の体力ではお客の間を泳ぎ回って、一人一人と話していくのは無理。

基本的には椅子に座ったまま、挨拶しに来る相手を捌くだけに留めるつもりだった。だが、それでもこちらから挨拶しに行かなくては成らない相手が一人。

第二王子のボルドーその人だ。俺は笑顔で王子へと近づいた。

「お久しぶりです、ボルドー様」

「ユマちゃんか、舞踏会の日以来だね」

「その節はお世話になりました」

あの時の松葉杖は既に返却している。

実は、シノニムさんは返すついでにお礼と称してアポをとろうとしたのだが、『王子は多忙なので』とすげなく使用人に追い返されてしまったらしい。

一気に王族を口説こうなんぞ、虫が良すぎたかと思っていたのだが、今度は相手から訪ねて来てくれた。これはどんな変化によるものか、見極めなくてはならない。

「演技、見させて貰ったけど驚いたよ。途中で女優さん変わった時、残念に思ったほどね」

「拙い演技で恥ずかしいです」

「いや、トラブルだったんだろ？　いきなりには上手すぎるよ、実は練習していたのかい？　それにしても凄い」

ボルドー王子は、屈み込んで俺に目線を合わせて語ってくれた。

子供扱いだが、威圧感たっぷりに話し掛ける大人と違って、悪い感じはしない。

「光栄です！　頑張った甲斐がありました」

俺は少女らしい笑顔（のつもり）で快活に笑う。こう言う時は子供の純粋な無礼さでグイグイ行く方が良い。

『美辞麗句を並べ、迂遠うえんな表現でなんとか相手の本心を探ろうとする子供』

どう考えても気持ち悪いし、鼻持ちならないだろう？

「あの、本日はどういったつもりで観覧に来て頂いたのですか？　ひよつとして私の派閥に入ってくれるとか？」

「ハハツ、いや純粋に観覧がメインかな。後は、どちらかと言うと勧誘……かな？」

「勧誘？　ですか？」

「うん、君を僕の派閥にね」

「ええっ！」

驚いて見せるが、想定内。と言うか当然だ、王子が俺の派閥に入るなんて聞く方が子供らしさを演出するブラフ。俺が王子の派閥に入るのが自然だろう。

ぶっちゃけ、ちゃんと帝国の危険度を認識し、エルフと同盟、戦争の準備をしてくれれば俺もシノニムさん（ネルダリア領）も、派閥の長で有ることはどうでも良いのだ。

国境から遠く離れた王都はそれほどに状況を実感出来ていない。今が滅亡の危機という自覚が無いのだ。

問題は、この第二王子にそれだけの認識があるかどうかなのだが。

「難しい話は後にしようか、今日は劇の続きを楽しみにしているよ」

「是非！ 楽しんで行ってください、私もまた少しだけ出るんですよ」

「そりゃ楽しみなな」

突っ込んだ話は大人を交えてと言うことだろう、後は軽食をつまみながら劇のあの部分、実際はこうだったとか雑談を続けた。

合間合間に帝国の武器や軍に対して脅威を語るのは忘れない。

そしていよいよデザート。プリンとそしてアイスクリームだ！

俺はおずおずとアイスが入った容器を渡す。木村が持ってきた断熱容器は見るから怪しい、大丈夫かコレ？

「あの、これ私が作ったお菓子なんです」

「本当かい？ 楽しみなな」

そう言つて、スプーンで掬ってパクリと食べてしまう。毒味もしないで大丈夫かと

思ったが、やっぱり問題らしく「王子！」とお付きの人が声を上げた。
「!?」

が、王子は固まったまま。

「王子？」とお付きの人も何事かと眉をひそめる。

ボルドー王子はハツとした様子で再起動すると、俺を見て『やったな?』と言わんばかりに、ニヤリと笑った。

俺は曖昧な笑みを返すしかない、いやイタズラしたつもりは無いよ?

王子は付き人へアイスの入った容器を突きつける。

「オイ！ ガルダお前も食ってみろ！」

「ハア……びつくりさせないでくださいよ」

「うるせえ、ホラ！」

そう言うと、お付きの人の口くちにぞんざいにスプーンを突っ込んだ。

粗野な外見に見合わぬ丁寧な人物と思っていたが、コツチが素か。

「これは？」

「冷たいだろ？」

「ハイ！ でもまさか……信じられない……」

「ユマちゃん、いやユマ姫はこれをどうやって？」

気になるよなあ？

「わたしの魔法です！」

ふんぞり返って宣言する。子供らしくて良いんじゃないかね？

「魔法か、お前どう思う？」

「本当なのでは？ それ以外説明が付きません」

側近と二人で話し合っている様子がカワイイと言うか、男同士の会話が懐かしいと言
うか、見ているとなんとも微妙な気持ちになる。

こうやって気を許した相手と話していると素が出るよな。

ちようりようぼつ
跳梁跋扈する王宮と脅されたが、この第二王子は多分シンプルな人間だ。

そのあたりを変に取り繕わないのは俺を子供と侮ってくれているからかも知れない
が、見ていて楽しい。

王子はアイスを平らげると、今度はプリンも食べ始めた。

「このプリンと言うゼリーも旨い、全体的に商品のクオリティが高いのは流石だな」

「キムラ商会の本領発揮と言うことでしようね」

「是非組みたいが、なんと言うかね？」

「はて、天才の変わり者で通っていますから私のオツムでは計り知れません」

「俺もだ」

ずいぶんザックリ目の前で話してくれる。

変に聞くと面倒そうだが、この辺でおいとましよう。

「あの……難しい話は解らないので。スイマセン、他の人に挨拶に行っても良いですか？」

「あ、ああ……構わないよ」

「ハイ！　ありがとうございます！」

会話は集音魔法で聞けば良い、そうじゃなくてもシノニムさんの部下とかが聞き耳を立てている筈だ。

相手だつてこんな所で話す内容はある程度聞かれること前提。そんな駆け引きに付き合つてる暇も無い。

第二王子との話も重要だが、当初の予定通り派閥の足場固めが大事。

そして何より、このアイスクリームをどや顔で自慢してやりたい気持ちで一杯だ。

「みなさん、私が作ったオリジナルのお菓子を、ご賞味ください」

木村が作った断熱容器に入ったバナラアイスの前に陣取り、貴族達にアイスを振る舞いながら挨拶ラッシュを裁いていく。

演技良かったよ、等と通り一遍褒めてくれるが、その後は聞きにくい事、例えば木村の商会への文句とか、エルフの残存勢力と連絡が取れているのかとか、めんどくさい話

題を振ってくる。

それをアイスを食べさせ、その話題で押し流しつつ、合間合間にアイスを冷やし直しながら対応する。

ヤバい！ これ、結構重労働だわ。

俺はヘトヘトになりながら愛想笑いを振りまくのだった。

その一方、第二王子ボルドーは側近の男性と、いまだ話し込んでいた。

「お前、あのユマ姫どう思う？」

「どうって、小さいのにずいぶんしっかりしてるし、演技力もありますね」

「そう言う次元じゃねーよ、明らかなトラブル。ろくに練習もせずに演技なんて出来るか？」

「いや、私は演技はサツパリで」

「可能性は二つ、一つは全てがトラブルに見せかけたアイツらの壮大な仕込み」

「なるほど、キムラ商会のやりそうな手ですね」

「だけども、だとしても少なくとも姫様はこれ知らされてたって事になる、食えないお嬢ちゃんだな」

「なるほど、もう一つは？」

「あのお嬢ちゃんが純真な糞馬鹿糞真面目で、キムラ商会の言うとおりに疑問も持たずにひたすら動いている」

「はあ、ありそうな感じはしますが、それもちよつと怖いですね」

「もつと怖い第三の可能性がよ、キムラもシノニムってオーズドの代理の食えない女も、全部あのユマ姫が動かしてゐるって絵図よ」

「はあ、冗談にもなりませんよ」

「俺も冗談だと思つてたがよ」

「なにか？」

「どうにも、違和感がな、あのアイスにしたって夏だけ？　いくら飛ぶ鳥を落とす勢い

だつて一商会に用意出来る物じゃ無い」

「たまたま姫が持つていた魔道具と知識で完成したのでは？」

「なんとも簡単にポンと完成度が高い物を出してくるじゃねえか、おかしくないか？」

「それだけじっくり用意したのでは？　自慢げに胸を張つちやつて可愛かつたじゃないですか？」

「そこよ！　俺にはどうも、そのいかにも子供っぽい部分が出てしまつたーつて方が、むしろ演技臭く感じて仕方ねえのよ、俺の人生経験上『わたし馬鹿だからわかんない』つて言う女は絶対に馬鹿じゃないし、おつかねえ」

「いえ、私の知り合いにはそう言う馬鹿女が大勢居ますが？」

「庶民は違うのかもな、だが少なくとも王族の俺に絡んでくる様な貴族のお嬢ちゃん、
そう言う手合いは食わせ者よ」

「ハア……」

「てめえ信じてないな」

「あんな子供がですよ？ あり得ないでしょう」

「まあな、でもよあの演技力なら何だって出来ちまうだろう？」

「そりゃそうですけど」

「少なくとも子供だからって油断すんなよ」

「解りました」

以上、集音魔法でした。

ま、中身はキイムラと同世代だから子供らしからぬ部分も当然。俺の人生やつとチー
ト感出てきたね！

取り敢えず、第二王子、なんか憎めないと言うか好感が持てるな。

発想も柔軟で勤も良いし、自分に都合良く考える様な気持ち悪い部分も無い。

マジで第二王子傘下に入るのもアリかもしれないな。

舞台の上で2

さて、午後の部の幕が開く。

午後はイライザさんが主演、俺は舞台袖で待機。出番は最後にちよつとだけ……のハズが、急遽鏡に映った本当の姿としてチヨイチヨイ登場することになってしまった。

シナリオ的に、エルフの村では自分が王女で有るとアピールする必要があるが本当の姿を見せる必要があるのが一つ。

もう一つは、俺を見たがる観客が多すぎて、演技もセリフも不要だから出て欲しいと言われたのだ。

だからと言って、いきなり出番を作るとはよく考えた物だ。どうせアイツのアイデアだろう？

解っちゃ居るが、俺は答え合わせのつもりでシノニムさんに尋ねた。

「呆れた発想ですね。キムラ男爵のアイデアでしょう？」

「その様です、咄嗟に二つの劇を混ぜてしまう発想もそうですが、大胆不敵と言うべきでしょう」

シノニムさんもため息を漏らす。ルイーンの宝飾は違う劇のキーアイテムで、登場の

予定は無かったのだから、確かに恐ろしい度胸と思いつきだ。

「このアイデアの肝はそれだけじゃないですよ」

「キムラ男爵！」

いつの間にか木村の奴が後ろから現れた。ビツクリするから辞めて欲しい。

「まず、途中で役者を切り替える事で、この劇の泣き所。一人の女優に掛かる負担が大き
いと言う問題を潰せます」

「確かにそうですね」

自分で演じて解つたが、演劇は声を張つて、身振り手振りも大きくして、後ろの席ま
で楽しませなくてはならない。案外に体力を消耗するのだ。

だがシノニムさんは別の利点を指摘する。

「それだけじゃないでしょう、覚えるセリフも半分に減るのです、それに前半と後半で登
場人物が全て異なるから別々に練習することも出来る。違いますか？」

「その通り、主演女優の負担や仕上がりから隔日公演にせざるを得ないと思っていまし
たが、上手くすれば毎日公演にすることが出来る」

木村は嬉しそうだ、しかしそんな事をすれば、ルイーンの宝飾のための用意は無駄に
なつてしまわないか？

あ、そうか。

「しかも、用意したルイーンの宝飾のイミテーションは無駄にならず、それどころか売り上げを伸ばせると」

「その通り、被害は少なく利が多い選択を取る。商人の基本ですな」

勝ち誇った木村の顔が憎らしいやら。ま、いいけどな。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

始まった舞台の上、俺の出番は早々に現れた。

「嘘だ！ 俺はユマ姫様を見たことあるが、似ても似つかぬ姿だったぞー！」

「そうだ！ そうだ！」

「もつとマシな嘘をつくんだな！」

場面はエルフの村。イライザさんが村人達に自分がユマ姫だと宣言するが信用されないと言うシーン。

ルイーンの宝飾は一生に一度しか使えないと言う設定にして、鏡に映る本当の姿で自分を証明すると言う筋書きだ。

舞台の上で、付け耳を付けた村人役の人達がざわめくと、主演のイライザさんは観客に背を向け、鏡に見立てた木枠の前に移動する。

壁の裏で待機していた俺は、それに合わせて壁に開けられた木枠から舞台に向けて姿を覗かせた。

「おおおおおおお」

湧き上がる観客。どうにも俺は今回の騒動で、また人気を上げてしまったようだ。

元々俺の派閥の集会だから反応が良いのは当たり前とも言えるが、それにしたつて熱気がある。

俺の人气が上がれば、それだけ俺の寿命が延びる事になる。同時に帝国への復讐も近づくとなれば、満面の笑顔も出ようと言う物。

そんな俺へ、向かい合うイライザさんも笑みを浮かべる。

「流石！ 笑顔一つで場を支配しましたね」

観客に背を向けてるから見えないとは言え、話し掛けてくるイライザさんは大胆だ。

彼女は俺の演技に感銘を覚えたとは聞いていたが、完全に俺を信用している様で、先程ちよつとだけ打ち合わせした時も色々付け足そうと画策してきた。

変に期待されてしまっている……まんま真似しただけで、俺は演技に自信など無いのだが。

「合図をしたら反時計回りで回転してください」

「ハイ」

「さん、に、いちー！」

イライザさんがぐるりと反転して観客側に向き直る。俺も同時に反転して客席に背

を向ける。

「私はこの秘宝で姿を変じています、鏡に映るこの姿こそが本当の私です！」

イライザさんが声高に宣言するが、舞台に背を向けた俺はにわかには緊張していた。

鏡として向かい合わせた役者同士がピッタリと演技をシンクロさせる。ルイーンの宝飾ではおなじみの演技だが、息を合わせるのは当然難しい。

開幕前の数分で突然、イライザさんにやろうと言われて、やることになってしまったのだ。

彼女としては、自分とそっくりの演技を披露する俺を見てこの程度余裕と思ったんだろう。

中でも背中合わせで演技をシンクロさせるのが最も難しい。しかし一度見せて貰ったら参照権でタイミングは何とかなる。

「なんとー！」

「どれどれ！」

村人が寄ってきて鏡を確認、そこで再びターンしてイライザさんと向き合った。

「おおお、本当だー！」

村人役が喝采を上げるが、声とは裏腹に顔は引きつっている。俺が鏡の演技をするなど他の役者は聞いていないみたいだ、一方でイライザさんはウキウキと話し掛けてく

る。

「本当に凄い方！　こんなに凄い方を演じるのだと解つていれば。あのハゲの脅しなんて屈しなかったのに！」

恋人へ〈俺〉になつてしまつたのだろうか？　だとしたら怖い。

が、もう一つ気になることが。

「ハゲ……ですか？　あの貴族のお爺さんですよ？　髪はフサフサだつたと思いますか？」

至近距離でイライザさんと向かい合う場面、コレなら俺の姿は観客から見えないし、ごく小声なら話しても問題ない。

「ああ、アレはどう見てもカツラですわ。職業柄、カツラには詳しいんです」
なるほど、それは良いことを聞いた。

あの爺さんはいまだに劇を鑑賞している。第二王子が劇が終わり次第話を聞きたいと伝えたらしく、出ようにも出られない状況だ。

爺さんとしては今、生きた心地がしないだろう。

だがそれでも庶民を一人監禁しただけなので、大した罪には問えない可能性が高いらしく、俺としては面白く無かつた。

そこへ来て、この情報はお楽しみが増えたと、俺は一人ほくそ笑むのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
その後の舞台は順調に進行。グブロス卿の屋敷でも、俺は再び鏡の演技をしたりしたがコレは顔見せ程度。

「本当の姿を見られちゃ行けないのに！」と観客ばかりがヒヤヒヤすると言う筋書きだ。

そして、いよいよ田中が死ぬシーン。霧の中、逃げるイライザさんが帝国兵に崖へ追い詰められる。

その時、イライザさんが胸に付けたルイーンの宝飾を外すと、素早く田中役の男性と入れ替わる、その後は田中役の男優と帝国兵で斬った張ったの大立ち回りだ。

派手な殺陣は見応え十分で観客もヒートアップ。

しかし最後には敵と道連れに崖の下へ落ちていつて舞台は暗転。

——で、俺の登場だ。舞台に出るや観客は盛り上がるが、すぐに田中の死体を前に泣きじゃくるシーンで一気に湿っぽくなる。

「タナカ！ タナカアア！」

実際泣けてくるのは、思い出して悲しいのも有るが、木村が見てる事への恥ずかしさだ。

特にネルダリア領主オーズドのお屋敷で、田中のメガネの残骸をギュツと胸に抱いて

眠るシーンとか、正体が知られたら自殺物の恥ずかしさだろう。

それはまあ良いとして。いよいよお楽しみはラストシーン

オーズドの屋敷を抜け出し、スフィールに向かった俺がグプロス卿の馬車の前に仁王立ちするシーンだ。

——ま、脚色だな。俺は堂々とグプロスの馬車の前に陣取った。それでいいじゃ無いか？

「グプロス卿！ あなたはやり過ぎました。受けなさい！ 神の裁きを！」

舞台の上、かつこいいポーズで叫ぶ。俺の魔法は強力だけど神が許した外道にしか発動しませんよと言う体で行くのだ。

俺の魔法が弱いつて思われても権威が無いし、強いなら一人で戦えと思われるとマズイので、酷い制限がありますよと言う設定で押し通すのだ。

俺の叫びと共に舞台の明かりは消え、代わりに特殊な魔道具の強烈な光が瞬き、舞台裏で金属をひっくり返した大きな音を立てる。

今回はそれに加えて、俺は皆に内緒で魔法を使って強烈な音と光を足してやる。

——ドガアアア

爆音、そして閃光。

ちよつと盛りすぎた！ ほとんどスタングレネードの魔法と同じ規模になってし

まった。

客席からはご婦人方の悲鳴や金切り声が聞こえる気がするが、耳が馬鹿になってよく解らない。

この隙に運命視で貴族の爺を確認。頭へめがけて風の魔法を強めにホイッ！

——やったか？

目を開けると、馬車が壊れた事を表す車輪が、舞台の上にゴロゴロと。

実際に馬車を転がす訳にも行かないので小道具である。本来はこれを合図に舞台袖を指さし討伐を宣言するのだが。

「見なさい！ 悪は討たれました。正義は成されたのです！」

俺が指さすは観客席！ それも貴族の爺さんの頭頂部。きらめくハゲ頭。

「どんなに隠しても、悪事は露見します。神の目は欺けません、必ず天罰が下ります」
違う物が露見してる事に気が付いた観客が、ドツと湧き上がる。

顔を真っ赤にして悔しがる爺さんに胸がすく思いだ。

「帝国の脅威は迫っています、皆さん！ 共に立ち向かいましょう！」

そう宣言して、舞台は終わる。のだが。見苦しく暴れ出した爺さんが取り押さええられ
たりして大騒ぎだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なぜあんなことをしたんですか!」

そして、もう一人大騒ぎしているのはシノニムさん、怒られるのは想定内だが、想定外の事態が一つ。

「スイマセン。反省しています」

「……やけに、素直ですね」

俺は心底自分の行いに後悔していた。

……失敗した。やり過ぎた、きつと目立ち過ぎたか反感を買いすぎた。

オルティナ姫の能力で幻視すると、俺の天命は大きく減衰していたのだった。

殺戮令嬢 1

ここはカディナル王子のサロン。

白壁に大理石の床、柱には彫刻。金細工の豪華なシャンデリアなどは真昼の太陽のごとく強烈な明かりを発している。

夕暮れ時、カディナルは豪華なソファアに寝そべり爪を研いでいた。美しい容姿と煌びやかな内装が相まって、天使の住処を思わせる程。

そこへ場違いにも強烈な影を纏った男が入り込んでくる。

服装こそ金糸に彩られ豪華だが、この場に不釣り合いな程に威圧感を放つ凶相。彼はカディナル王子の側近、ダックラム公爵だった。

公爵が物騒な表情を浮かべる理由こそ、華美なサロンの維持費を想像し頭痛に苛まれたと言うだけ、それでも周囲を威圧してしまうのが公爵の生まれ持った顔だった。

公爵はなんとか取り繕って、王子へ時候の挨拶を述べると、示された一人掛けのソファアへ身を沈めた。

このソファアも極めて柔らかく、しっとり上品な光沢を放っている。

恐ろしい程の高級品だが、公爵自身は体が埋まるようなソファアは自由が奪われる様

で好きでは無かった。

——或いはそれが狙いなのか？

公爵はそうも考えたが、同じくどつかりとソファーに埋まり綺麗な顔を愉悅に歪める第一王子の姿に考え過ぎと思ひ直した。

「いやあ、良く来てくれたね、ダックラム公。いや、お義父さんと呼んだ方が良いのかな？」

「いえ、それは……」

「あはは、冗談だよ」

王子の冗談はダックラム公にとって反応に困る物だった。

公爵の娘、シャルティア・フォン・ダックラムは第一王子の婚約者だ。

婚約者。そう、第一王子のカデイナールは三十手前と言うのに結婚していない。これは王子としては晩婚に過ぎる。

これはビルダール王国の三大公爵家の一角ピーグル家が七年前、投資に大失敗して爵位を手放す羽目になった事から端を発する。

巻き起こったのは、空いた公爵家の地位を狙う貴族同士の派閥争い。

その主戦場となったのは、未婚だった二人の王子へいかに婚約者を押し込むか。

そして見事、その戦いに勝利し公爵の地位を勝ち取ったのがこのダックラム公であ

り、その娘シャルティアなのだった。

しかし王子の心を射止めた理由は、シャルティアの美貌では無い。

まして金銭面ではあり得ない。当時のダックラムは軍閥の貴族で、爵位は侯爵どころか、伯爵、だがそれも名ばかり。精々が一大隊を動かせる程度の権力しか持っていなかった。

では、何を期待して王子はシャルティアと婚約したのか？

「私を呼び出したと言うことは、また『仕事』の話ですか？」

「んーいや、まだそこまでじゃないけどね、話を聞きたくてさ」

ダックラム公の言う『仕事』

それは暗殺の事で有った。

ビルダール王国の暗部。暗殺を請け負う一家として知る人ぞ知るのがダックラム家だった。

そもそもが裏家業、そのルーツはオルティナ姫の時代に遡り、歴史も深く、かつては栄華を誇ったとも言いが、近年では没落。外聞の悪さも手伝い爵位は子爵となっていた。

しかし、平和の中、腐敗が進んだ世は暗殺者を求めた。

子爵から伯爵と爵位は上がり。トントン拍子に王族へ次ぐ公爵の地位まで上り詰め

てしまう。

公爵自身が世も末だとあきれた程だが、文句を言う人間は皆無であった。

ダックラム家の娘を嫁に貰い、公爵まで引き上げる。

それ自体が『逆らったら殺すぞ!』と言う、カディナール王子からのメッセージであったからだ。

それほどまでに、今代のダックラム家は図抜けた力を誇示し、貴族達を震え上がらせていた。

それは暗殺だけでなく情報収集能力の面でも同様で、ダックラムが報告したと言われる裏切り者の数は両手の指では足りない程。

今回、王子がダックラム公を呼んだのも、それを期待しての事だった。

「弟がね、あの森に棲む者の娘に接近したって聞いてね」

「確かに、ボルドー殿下はユマ嬢の派閥の結成式に顔を出したそうです」

「それでね、あの二人が手を組むと何か問題があるかな?」

「ううむ、読めませんな。そもそもユマ嬢は森に棲む者の姫を自称し人気を博していますが、後ろ盾はネルダリアのオーズド伯爵のみ、姫とする証拠すら皆無と来ています。

第二王子殿下は癖の有る者達を手懐けていますが、才気走る所が無く人気がありません」

「逆に言うとき、アイツとユマちゃんがくつつくと人材と人気が一つに成るじゃない？」
「確かにそうとも言えますが……」

「アイツは僕に遠慮して婚約もしなかったけど、僕の結婚を機に動き出すかとも思つてね」

「あり得る話ですな」

頷きながらも、内心では——よく言う、とダックラム公は笑う。

ボルドー殿下の婚約者だった、ピーグル公爵家の娘はダックラム家が暗殺した。

それこそが暗殺一家ダックラム家が王子から受けた最初の仕事だった。

その後、失意に沈むピーグル公爵家を経済的に追い詰めた手腕こそダックラムの物ではないが、そう言った裏の人員が幾つもカディナル王子の背後には揃っているのは周知の事実である。

ビルダール王国は生まれが早い子息に絶対の継承権が有る訳では無い。継承には現王の意思や三公爵家の意向などが絡む。

が、暴力と財力で第一王子の支配は盤石。次期王の地位は間違いないと言われている。

しかしカディナル王子はその手綱を緩めない。一見享樂的で不真面目な性格だが、人の足を引っ張る事を好み、人に足を引っ張られる事を何より嫌う性格は、ある意味王

族向きと言えた。

そして竹を割った様な性格のボルドー王子とは水と油。犬猿の仲だった。

それでも第二王子自身が暗殺されなかったのは第二王子が権力から自ら遠ざかっていったからだ、それほど迄に愛した婚約者の死がショックだったのだと言われている。

だが、満を持してボルドー殿下が動くとなると、いよいよ邪魔になつてきたらしい。

「それでどうかな？ ユマちゃんの仕業に見せて、アイツを殺すつてのは出来そう？」

「難しいでしょうな、我々が動いたのは見え透いてしまうでしょう。今の時点でもやり過ぎていると言えます」

「だよねえ、僕の側近も同じ意見だよ」

王子は呑気な物だが、実行するダックラムにとつては冗談では無い。

あまりに暗殺と言うカードをひけらかすと貴族達も恐れのみならず纏まらない。そう
なつた時、ダックラムが真っ先に切られる事は見え透いていた。

「じゃあユマちゃんを暗殺するつてのはどう？」

「それも同じ事、と言いたい所ですが」

「へえ？」

王子の目がキラリと光る。それを見て、ため息交じりにダックラム公は続けた。

「ルワンズ伯が死んで、ゼープ老が吊い合戦だとユマ嬢の排除に熱を入れています。こ

の前も下手な嫌がらせをして逆に大恥をかいたとか」

「なるほど、罪を着せるには抜群の相手を訊だ！」

「左様で、警護もボルドー殿下ほど嚴重では無いでしょう」

「へえ、イイネイイネ。でも結局の所、二人がくつつく可能性はどんな物かな？ 僕は正

直ユマちゃんの事は良く知らなくてね」

「いえ、実は私にも良くわからないのです、それを言うならユマ嬢へ使用人を貸し出した王子の方がお詳しいのでは？」

「それがねえ、側近には宰相が貸し出した森に棲む者の娘が一人とネルダリア領の女の子が一人。それだけしか置かないらしくてねえ。色々水を向けてみたけど反応が悪

いってさ」

「ふむ、人見知りが激しいと？」

「かもね、同族なら良いのかと思つて森に棲む者の女の子を探したけど、急に見つかるモノでも無し、コレに関しては宰相にやられたね。で、直接的に盗み聞きとかスパイとか、得意の潜入術で探りを入れられないかなつて」

王子の言いたい事は解る、まずは情報収集。それは今や遲きに失した感さえ有る。

王都のユマ様フィーバーなど飽きやすい民草の事。スグに終わると第一王子派は高をくくつて居たのが事実。

しかしキイムラ商会の念入りなマーケティングでその人気は陰るどころか上がる一方。ボルドー王子が接近する段に来て、遂に無視出来る物では無くなったのだ。

殺害ではなく情報収集。王子としては比較的穏当な策のつもりであったが、当のダックラムは押し黙ったまま。

「……ダックラム公？」

「あ、いや、実はですな。既に三人程忍び込ませたのです」

「へえ、流石！」

「いや、それが……」

手を打って喜ぶ王子だが、ダックラム公は沈痛な面持ちで噛みしめる。

「まさか、連絡が取れない？」

「……………」

ダックラム公は、王子に重々しく頷いた。

「そりや凄い！ 相手にも専門家が居るって訳だ」

「間違いないでしょう」

「いいね！ 燃えるよ。王都一の暗殺一家の力！ 見せてくれるんだろ？」

「ハッ！」

「しっかし、これで万が一にもユマちゃんとボルドーをくつつける訳には行かなくなっ

たな。その凄腕がコツチを襲いに来るかも知れない訳だろ？」

「あり得ないとは言いい切れませんな」

暗殺の口口を知るもの、殺意に敏感なもの。いずれも同業。暗殺者の可能性は高い。森に棲む者の王族が一人で王都に辿り着いたのも、そう言った存在が陰に日向にフオローしたお陰と言うのは頷ける話だ。

「面白い！ 面白いよ！ 森に棲む者と人間、それぞれ最高峰の暗殺者の一騎打ち。当然君が出るのかな？」

「いえ、私は」

「ハハツ、君も今や公爵だからね。冗談だよ」

「私が出るのは最後の手段となりますな」

「ふふっ頼もしいよ」

「ハツハツハ、お任せあれ！」

ダックラム公は豪快に笑い胸を叩く。

王子も楽しげに笑い、とっておきの酒を公に送ると秘密会合はお開きとなった。

ユマ姫の情報収集に本格的に力を入れながら、チャンスがあれば暗殺も辞さない。

そう言う姿勢で今後、ダックラムは暗殺者をユマ姫サイドに仕向ける事に決定した。

豪快に笑いながら、公爵の背中には冷や汗が伝っていた。

その凶相から王都随一の腕と恐れられるダックラム公であるが、実は小心で荒事には全く向かない性格であった。

今も帰りがけ、サロンの通路にひしめく動物の剥製の数々に肝を冷やして声を上げかけた程。

リアル過ぎる剥製の出来映えに舌打ちをすれば、サロン付きの侍女達が恐怖の余り気を失ったのだが、それに気が付かず真つ直ぐにダックラム公は家路に付いた。

わずかな距離で馬車に乗るのも、豪華な公爵家の豪邸も慣れたものでは無かったが、一番慣れないのは別にあつた。

遅い時間にも関わらず、玄関で出迎えてくれた愛娘、王子の婚約者シャルティアだ。

「ふふっ！ また『仕事』ですか？ お父様」

豪華な巻き髪。縦ロールを幾重に揺らして上品に微笑む。

豪華な見た目に負けないぐらい、顔立ちも美しい。自慢の娘だ。

その髪型はヒラヒラしたドレスと相まって、深窓の令嬢を思わせる。

——だが。

その目が違った。目だけが爬虫類の様に、感情の窺えぬ捕食者の目をたたえていた。

「ああ、だがお前の出番は無いよ」

「あつっ！」

「この時期に結婚を控えたお前を出せる訳無いだろう！ 万が一があればダックラム家の破滅だ」

「暗殺一家なんて、何時だつて破滅と紙一重でしょう？」

「今、無理をする必要は無いだろう！」

「まあっ！」

思わず声を荒げたが、ダックラム公は娘へと合わせた目を思わず反らしてしまう。

それほど迄に恐ろしかった。

ダックラム家は暗殺を誇っていたが、それも今は昔の話。

……ごく最近までそうだったのだ。

執事の男が僅かに一人、その技を継ぐのみ。しかし、当時仕事で忙しかったダックラム公がその執事へ子守を一任すると。愛娘はいつの間にか誰よりもナイフを上手く扱う様になってしまった。

そして、娘はその腕を試し始める。猫、犬、そして野生動物まで。

血に狂った娘を両親は止める手立てを持たなかった。

ダックラム家の暗部を継ぐのは彼女だ。

まだ弱冠十九歳。

七年前にポルドー殿下の婚約者を暗殺した時は僅かに十二歳。奇しくも今のユマ姫

と同じ年齢。

カディナール王子へ暗殺を持ちかける娘。冗談半分に依頼する王子。

そして、難なくそれを実行してしまう娘。

——王子は今をもって、アレは私の差し金だろうと思っっているが……

その実、全ては娘の手腕。

育てた執事曰く、百年、いや千年に一人の逸材と言うが。親としてはたまったものは無い。

今では暗殺団を組織してダックラム家の暗部を取り仕切っている。

とは言えだ、いくら娘が優秀な暗殺者であろうと、この時期はマズイ。

ダックラム公は必死に娘を止めた。

「ユマ姫を暗殺も視野に探って欲しい。だが相手にも凄腕の護衛、または同業が居る可能性が高い。この時期に下手は打てない。部下に任せるんだ」

「へえ……お父様に貸してた彼ら、連絡が取れないのですか？」

「ああ、三日前からな、悪い事をした」

「いいのよ、でも楽しそうなのに残念ね」

「頼む！ 控えてくれよ」

「わかってるわよ」

イタズラつぽく微笑むが目は笑っていない。

ダックラム公はこんな化け物を相手にしなくてはいけない相手に心底同情した。

なにせ、一見して貴族のお嬢様然とした娘の中身が、まさか凄腕の暗殺者などと誰も
思いもしないだろうから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一方その頃、ユマ姫はオーズドの屋敷でくしゃみの音を響かせていた。

「クシユン！」

「ほらあ、夜更かしするから夜のお星様が怒っているんですよ」

ネルネはそう言つてユマ姫を叱る。

しかし、何を思ったかユマ姫は部屋の中、立てかけられていた弓を構えて窓を開け
放つた。

「な？ なにを？」

「ふふつ、だったら星を打ち落としてあげます」

そう言つて弓を引き、放つ。

「ええ？ なにやってるんですか？」

常識外れの行動にネルネは焦るが、幾ら夜も明るい王都とは言え、矢の一本など窓か
ら覗いて探せる筈も無い。

「誰かに当たったらどうするんですかあ！」

「大丈夫よ、誰かにしか当たらないから」

「何を言ってる？」

「まあまあ、オヤスミなさい」

「は、はあ？ オヤスミなさい」

釈然としない思いを抱えながらもネルネは床につく。

実はネルネはユマ姫と同じ部屋で寝る事が多い。

影武者として身を挺して守る事を期待してるのだろうとネルネは思っているが、ユマ姫がなんとなく女の子同士で夜通しキャッキヤと騒ぐのに憧れていただけだったりする。

守られる必要を感じない程度には、ユマ姫は暗殺対策に自信が有った。

何気なく窓の外へと放った矢。それは魔法で制御され寸分外さず突き刺さり、侵入を試みた不埒者を人知れず絶命たらしめていた。

魔法と運命視のコンボは障害物すら迂回して人を殺せるし、奇襲を受ける事も無い。

「それにしたって最近多いな。警備どうなってるんだよコレ!! 悪意に反応する魔法無かったら死んでただろ! マジで」

布団の中で一人、愚痴るのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
一方で、同じ頃。ダックラム公爵家の一室、窓辺に腰掛け。高価なガラス窓の向こうに月を見る女性が一人。独り言を漏らした。

「でも、変ね。私もユマ姫の姿は見たけど、そんな凄腕の護衛が居るようには見えなかつたけど」

潜った修羅場は並では無い、一目で相手の実力は測れるつもりだったがそれらしい者は居なかつた。

——ひよつとして？

相手は十二歳、丁度、自身が王子から暗殺を請け負った年齢と一緒。

「まさかね」

そうやって、公爵令嬢も眠りにつくのだった。

エルフの使者

「つ、ついに来ましたよ!!」

必死にアイスを冷やす俺の元に、息を切らせてやってきたのはネルネだった。

しかし、息を切らせて居るのはネルネだけではない。

「ハア、ハア、一体なんだと言うのです?」

「お、お疲れ様です、ユマ様……」

確かに俺は疲れていた。

アイスは今や王都で大評判、伝説のお菓子として話題を掠さらいまくっていた。

文字通り魔法のお菓子。木村主導でプロデュースされ、食通ヘレビュを依頼、劇に

も度々登場する。

貴族しか食べられない不思議なお菓子として庶民に認識されているが、実際は貴族で

も俺の派閥に属さないと食べられない。

なんせ作れるのが俺しか居ないのだから当たり前。

それで俺の派閥の会合には貴族のご婦人、お嬢さんが列を成すようになってしまっ

た。当然、お嬢様がたが出席すれば貴族の男性も駆けつける。

アイス以外にも、キムラ商会主導の珍しい食べ物が出される上、同時に開催される劇や音楽会のクオリティーも高いと来れば、普通は退屈なだけの派閥の集会が目新しいお洒落なデートスポットになっている。

侯爵などの位の高い貴族はオーズドや木村の商会経由でアイスを要求してくる。

こちらはオーズドの配下やキムラ自身がお土産として持参するのだが、その行為自体が派閥の勧誘として効果抜群だ。

つまり、最近の俺はアイスを製造するマシーンと化していた。

なにせ、珍しい、美味しい、涼しいのトリプルコンボだ。ただの珍しいだけのお菓子とは訳が違う。

一度食べた人間は次も食べたいと思うし、話題性も十分。そしてスグ溶けてしまうので保存が出来ない。転売が出来ない。

これが非常に重要だ、継続的に食べたければ、俺の派閥に参加するしか無いのだから。たかがお菓子、されどお菓子。

貴族の娘さんは外出も制限され刺激に飢えている。深窓の令嬢に与えられるのは本や演劇鑑賞。

それらのメディアでたっぷり煽られて、なんとしてでもアイスが食べなくなった時から、お父さんへの必死のおねだりが始まるのだ。

しかし入手するには俺に頼むしか無いのである。

このアイスのお陰で俺の派閥は急速に勢力を拡大していた。

かと言つて、温度を下げる魔法は燃費が悪い。俺はお茶とプリンで休憩を取る事に決めた。

思えば、同時に登場したこのプリンの存在も大きい。

こちらはかなり裕福な家では食べられる程度に広まっている。

これも今までのお菓子と比べれば、革命的に美味しいと評判だ。

だがアイスはそれ以上に美味しく、そして冷たい不思議なお菓子と紹介されれば貴族のご令嬢は想像力を働かせて、期待を膨らませる。

そして、その期待を裏切らない味だ。すこし気温が高くなった昨今。その魅力は止まる所を知らない。

今の状況と、掬ったプリンの味に顔がにやつく。ラウ茶とか言う謎のお茶の味も慣れれば美味しい。

「あ、あのビツクニユースですよ！ ユマ様！」

そう言えばネルネが何か聞いて来たらしい、俺はお茶を飲む手を止めて続きを促す。

「えつと、今、エルフの使者を名乗る者がお屋敷に来ているらしいです！」

「本当ですか？」

「ハイ、今シノニムさまが応対中です」

「そうですか……」

……遂に！ 遂にこの日が来た。

今までエルフの姫を名乗っても、全く信用しない人間は少なくなかった。

そもそも、エルフの軍を従えるどころか、付き人の一人も居ないのは嘘くさいと言われても仕方が無い。

その辺の事情を劇で伝えて来たつもりだが、姫一人守れないエルフの戦士に戦力として疑問の声まで上がる始末。

それが一気に覆る。

それだけじゃ無い、エルフとの貿易が実現出来ればその利益は計り知れない。

未知の技術、未知の素材のオンパレードだ。

逆に言うと、王国にはとっととエルフの技術を吸収して貰わないと、帝国との戦争で戦力にならない恐れがある。

だが俺は王族とは言え、そのエンディアン王家は滅びている。

今の体制がエンディアン王家と縁もゆかりも無ければ、却って邪魔者として疎まれて
いる可能性もある。

とにかく現状は何もわからない、すぐに話を聞くべきだ。

「ネルネ！ 案内なさい！ 直接話します」

「えっ？ で、でもいきなり出て行くなんて」

「安全には考慮します、いきなり顔を出す様な真似はしません」

「は、ハイ！」

案内されたのは応接間の前、分厚い扉で仕切られて中の音は漏れていないが、集音の魔法なら造作も無い。

中からシノニムさんと、一人の男が争う声が聞こえてきた。

「だからっ！ ユマ姫を騙る不埒者の顔を一目見せよと言っているのです」

「どこの馬の骨と知れない者に会わせる訳には行きません、今日の所はお引き取りを」

「我々にそんな時間は無いのだ！ それに私はユマ姫に面会に来たのでは無い！ 姫を騙る者を確認するためにきたのだ」

「そもそも、あなたが我らがユマ姫を偽物と断ずる理由は何です？」

「髪の色だ！ ユマ姫は二人とおられない特徴的な桃色の髪、銀髪では無い！」

「だから！ 護衛をしていた男が死んだシヨックで髪の色が変じたと言ってるでしょう？」

「そんな事が有るはずが無いだろう！」

なにやらヒートアップしてるが、この声には聞き覚えがあるような……

一方、何も聞こえていないネルネは不安そうに、考え込む俺の顔を覗き込む。

「ど、どうです?」

「多分ですが、私の知っている者ですね」

父様と話しているのを聞いた事があつた、名前は——参照権で、そう! ガイラス。確か大森林の外周部まで遠征して、おかしいところが無いとか、外の様子を探らせていた。この場に様子を見に来るのも自然な相手だ。

俺の言葉にネルネは目を丸くする。

「ええ? ならっ!」

「そうですね、機を見て登場しましょう」

「は? はい」

ネルネは不思議そうな顔をするが登場タイミングは重要だ、俺は機を探る。

「劇を見ろだと? その劇をユマ様も演じただと? 馬鹿を言え、それこそがユマ様が偽物と言う証拠だ! そんな体力がある訳ないだろうが! 下らん! 帰るぞ!」

——ガチャリ

ん? タイミングを計っていたら、怒ったガイラスは扉を開けて出てきてしまった。

お互いの目が合う。扉の前で盗み聞きしていただけに気まずい。

「なっ!」

先に声を上げたのはガイラス、昔見たまま、エルフ特有の長い耳だが、エルフにしては線が太くて頑丈そうな見かけをしていた。

その姿は焦燥し、すこしだけやつれて見えたが、気になったのはその衣装。どこかで見たような青い貫頭衣かんとういを被っている。

「久しぶりですね、ガイラス」

「ハッ！ ハハッ」

ガイラスは慌てて膝を折る。

良かった。「誰？」とか言われたら立ち直れない所だった。

しかし、屈しながらもガイラスは信じられない物を見るように俺の顔を伺う。

「どうしました？ 私の顔に何か付いていますか？」

「いえ、まさか生きておられるとは」

「私が生きていたら何か不都合でも？」

「いえ、あの、どうやって生きているのです？」

失礼な、いや……何度も死にかけたが。それにしたって無いだろう。

「どうって、死んでいないから生きていますとしか言えませんが？」

「しかし！ この地には魔力がありません！」

なんだそう言う事か。

「忘れたのですか？ 私はハーフですよ？ このネルネもハーフですが王都で暮らしています」

俺はネルネを前に押し出すと、ネルネは慌てた様に手と首を振って抵抗したが、そう言う事では無いのかガイラスの困惑は止まらない。

「えっ？ いや……」

どうもガイラスの反応がおかしい、俺たちはシノニムさん、ネルネと一緒に詳しい話を聞く事にした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

話し合って解った事だが、俺が王都で生きていられるのは奇跡的らしい。

俺はハーフとは言え、最終的にはエルフの王都の魔力に馴染んでいた。だから人間の生活圏のド真ん中、ビルダールの王都で普通に生きられる筈が無いとの事。

で、そのガイラスが普通になっている理由はあの貫頭衣にあった。

コレは父エリプスが、大森林の外を探索するために作成した、魔力が少ない地でも活動出来る様にするための装備らしいのだ。

それを聞いて思い出す、確かにあの日、魔を打ち消す霧の中で、父様はこんな貫頭衣を着ていた。

だけど！ そんな物が有ったならどうしてセレナや兄ステフの分は用意してなかつ

たのか！

俺は思い出の中の中の父に裏切られた思いで、目の前が真っ暗になった。

「なんで？ ……どうして？」

「エリプス王は……、ゼナ様にもう一度会いたいとその消息を探っていたのです、これはそのための装備」

「そう、なのでですね」

「これは一人一人の魔力の性質に合わせたカスタマイズが必須。そうで無くては無駄に健康値を削ってしまいます」

なるほど、つまり母ゼナを探して、こつそり一人で会いに行くための装備がたまたまあの魔力が阻害する霧の中で役に立ったと言う事らしい。

それにしても、同じ物がセレナに有ったらと思つて止まない。

それに魔力が無い事がそんなにエルフの体に毒だとすれば、ひよつとしなくてもセレナにトドメを指したのは……俺じゃ無いか！

「私は、セレナを助けたくて……なのに、魔力が少ない地へと……」

「いえ、パラセル村付近はそこまで魔力が薄くはありません、それにセレナ様は我々の魔導衣よりも性能の高いドレスを着ていらつしやいました。死因とは関係ないでしょう」

聞けば、セレナは特異体質で俺とは真逆、常に魔力が余分に必要な体だったらしいの

だ、そのためガイラスが着ている青い貫頭衣と同じ性質の青いドレスを常に着ていたらしい。

そう言えば、セレナはあの霧の中でもそこそこ動けて、魔法も使えていた。

「それにしても、どうして私には魔力と健康について誰も教えて下さらなかったのです？」

「それは……エリプス王が伏せるようにと、恐らくですが恨まれたく無かったからだと思います、ユマ様はハーフェルフの身で王都の濃い魔力に辛い思いをしていましたから」

「そうですか……」

それだけでは無く、恐らくは俺が母ゼナみたいにエルフの都を離れていくのを恐れたんだと思う。

あの人は強気に見せて、妙に臆病な所が有るのだ。

少し懐かしく、——そして悲しい。

「パラセル村でユマ姫の事を聞きましたが、人間の都に向かったと聞いて天を仰ぎました。彼らもまた魔力欠乏の真の恐ろしさを知りません、魔力値のギャップは数ヶ月単位で徐々に体を蝕むのです」

「そうなのですか？」

俺は頭のティアラを外し、健康値を計る。

健康値：21

魔力値：195

アイス作りに無理をした事を考えれば、悪く無い。

いや、確かにかなり減ったが、なんならエルフの王都に居る時の方が危険な数字がポンポン出ていた。20を超えていれば大丈夫と聞いているので安全圏だ。

「まさかー、これほどは」

ガイラスも数値に驚いている、健康値もそうだが魔法をガンガン使っていける魔力値が殊更異常との事。

ガイラスにも測って貰ったが魔力値は120、それでもエルフの都では魔力値が30に迫る猛者だ。通常のエルフでは100を切るかも知れない。

つまり、エルフに冷却魔法を覚えさせてアイスの量産の夢は不可能っぽい。

いや、そもそもが冷却魔法の概念的に、俺以外に誰にも真似出来ない可能性は高いが。俺の異常な数値は恐らくだが、参照権が関係している。

パラセル村のシルフ少年の記憶を得た俺は山歩きの素養を得たがそれだけじゃ無い。

オルティナ姫の運命視だってそうだし、蛙に殺されたパルメスの死を視てから魔力が上がり、エルフの都での健康も大分マシになった。

同様に、人間であるライル少年の記憶を回収して、魔力が無い土地での耐性を得ていても不思議じゃ無い。

だが、そんな事は話しても仕方が無いし信じて貰えないだろう。

とにかく俺が特異体質と言う事で片付けて、ガイラスとは他に色々な情報交換を重ねた

その中で最も気になるのはエルフの現状だ。

聞けば、エンディアン王家は滅びたものの、その血を濃く受け継ぐ女性が王都の奪還を目指して指揮をしているらしい。

「セーラさん……ですか？」

「ええ、ユマ姫もご存じだと思います、しかし彼女もユマ姫様が生きていると知れば、その地位を譲るのに異存はないと思われませう」

「いえ、それは良いのです。私はここでやる事がありますから」

「……それは」

「結局、帝国の本拠地を叩くには他ならぬ人間を頼るしか無いでしょう？ それが成

されない限り我々の勝利とは言えません。そのためにはビルダール王国との同盟は必

須です」

「ハッ！」

敬礼するガイラスを尻目に俺は冷えた気持ちで居た。

本当はエンディアン王家の再興もエルフの復興も、勝利にだって興味が無い。

ただセレナの、兄の、母の、父の復讐として帝国を滅ぼしたいだけだ。

エルフ全員を生贄に、帝都に核ミサイルを撃ち込めるなら、俺は即座にそのボタンを押すだろう。

それに、セーラさん、確か弓の先生だった人だが、俺の従姉妹に当たるんだったかな？ 彼女を中心に纏まり始めているならそれを邪魔する必要は無い。

「セーラさんには私の全権を委ねます、エンディアン王家の直系では無い癖にと愚図る連中が居たならそう言っってやりなさい！」

「ハッ！ セーラ様も大分動きやすくなるかと思えます」

「コレを持ち帰りなさい」

「こ、これは!? いけません！ 姫！」

俺は自分の秘宝、ティアアラを渡す。

既に思い入れはたっぷり有るが、こうでもしないと俺の存在を誰も信じないだろうから仕方が無い。

「良いのです、その代わり頼みが有ります」

「何でも！ 何でもおっしやって下さい」

ガイラスの言葉に気を良くした俺は、こっそりと一つの要望を伝えた。

「まさか？ 禁術を記した禁書をですか？」

「ええ、ここで生き残るのに必ず必要です」

「しかし……いえ、やってみます」

「頼みましたよ」

通った！ 禁術通ったよ！

禁術、それを記した禁書とは？

それはこんなご時世でも無ければ絶対に見えない危険な魔法だ。

とは言っても、極大魔法！ 相手は死ぬ！ みたいのじゃない。

例えばこの前の嘘発見器。あれに相当する魔法など出回ってしまつては、まともな人間関係など築けない。

もしくは人の精神に作用する魔法や、思考を誘導する魔法の存在が有ると言われている。

もし実用レベルなら人間を操つて一気に帝国へと乗り込んでやる！

「なんにせよ、事態が落ち着いたら一度、本国へお戻り下さい。皆、あなたの帰る場所を作るために戦つていると思えば士気も上がるでしょう」

「解りました。エンディアンの王都を制圧し、こちらの情勢が落ち次第帰ります」

「ハッ！ その日を一日でも早く実現するために、粉骨砕身します！」
ま、自分そんな日は来ないだろう、エンディアン解放軍は定期的に使節を送ってくれる事に成った。

いよいよ俺の国盗り？ が本格的になっていく予感がした。

殺戮令嬢 2

俺は自室のベッドで仰向けに寝っ転がっていた。

「はあ、もう嫌だあ……」

俺はアイスを作り続ける生活に飽き飽きしていた。

作れば作るほど派閥の力は強化されるとは言え、消え物だけにキリが無いのだ。

侯爵の一人など、アイスだけでコツチに付いてくれたらしいが一体どれだけアイスが好きなのかと問い詰めた。

使いすぎて、かなり魔法も洗練されてきたが、元々難しい魔法なので気は抜けない。

それに……

俺はチラリと部屋の隅に立ってかけた矢筒の中身を確認する。

ひーふーみー……結構減っている。それだけ夜に忍び込もうとする不埒者ふらちものが多いと言う事だ。

怒りに任せて、俺は布団を思い切り蹴っ飛ばす！

「おかしいだろ！ 流石に！ ドンだけ働かせるつもりだ！」

「どうしました？」

俺が人知れず愚痴っていると、シノニムさんが入ってきた。そう言えば鍵をしていなかった。

だがノックぐらいして欲しい。

いや……、寝てるかも知れないから鍵が掛かって無かったら入っていい、と伝えただった。

「いえ、少し疲れから気が立っていた様です」

「お疲れ様です、しかしもう少して足場固めが終わります、これ程アイスを作る必要は無くなるでしょう」

「それは楽しみですね、ですがアイスだけでなく、来客が多すぎるのが考え物です」

「? 来客? アイスを作り始めてから、来客どころか、派閥の集会にすら最低限の出席しかしていませんよね?」

そう、シノニムさんの言うとおり。俺は自分の派閥の集会なのに、殆ど出席していない。

派閥の集会と言いながら実際はデートスポットと化しているので、参加しなくても出席者からはそれ程苦情は無い。

しかし俺の人气が落ちた訳でも無い、それどころか人気はもはや伝説の域にまで達していると言う。

一目見たい。しかしどこにも顔を出さない。

そんな俺に、ビルダール王国の民は焦れている。

そうやって敢えて顔出しを減らす事で、俺と言う存在のレアリティを上げていると言
う寸法だ。

国を奪還するために、新しい冒険の真つ最中と言う噂も撒かれているが、実際は屋敷
に籠もって必死にアイスを製造しているのだから笑えない。

そんな訳で俺はアイス作りに専念出来ているが、表の客は断れても裏の客はそんな都
合などお構いなしだ。

「私が言っているのは昼間の客ではありません、夜の無法なちんにゆうしや闖入者どもの事です」

俺が肩をすく竦めて視線で弓を指し示すと、シノニムさんは怪訝な顔をした。

「夜の？ いえ、何のことですか？」

「……え？ アレ？ 何かおかしいぞ？」

「何って！ 夜に忍び込もうとする輩ですよ！ 今月に入って、えーと……既に十人
ですよ？ 多すぎると思いませんか？」

「ちよ!!? ちよつと待って下さい！ 侵入者？ が、居たんですか？」

「……ええ？」

「えっ??」

——そこから!?

取り敢えず、落ち着いて二人で話し合う事に。

「では、気のせいでは無いと?」

「ええ、と、言うか最近ではネルネに『姫様はアイスの作りすぎで夜な夜な発狂して弓を放つ』と吹聴されるぐらいの頻度で、ですよ?」

「いえ、それは聞いてましたが、……本当にストレスでおかしくなったのかと」

「フアツ? 最近妙に優しかったのってそう言う……」

「え、ええつと、本当に気のせいでは? 声を聞いた者も死体を見た者もおりませんが」

「だからこそ、シノニムさん達が片付けている物だとばかり……」

「いえ、正確には一度だけ、死体はありました。しかし矢では無く、頭部が破裂した変死体で、我々に対する強烈な嫌がらせと想っていたのですが」

「頭部が無い? ああ、確かに魔法で強化した弓矢はその位の威力があります」

「た、確かに。スフィールでも同じような死体を見ましたが、本当に弓矢だけであれほどの破壊力な?」

「ええ、……しかし一体だけ? 通算で二十は殺りましたよ?」

「ま、まさか! それだけの死体が毎朝転がっていれば、この屋敷は幽霊屋敷と噂が立つ

「ているでしょう？ たった一体の死体でも大騒ぎだったのですよ？」
「……………そうですか」

こつw れつw はつw w w w w

いや、もう草しか生えない。

俺は今まで、亡国の姫なんて暗殺者が来て当たり前。

むしろコレでも間引いた後、人知れずネルダリアの諜報特務部隊とか言うのが張った網を潜り抜けた、ホンの一部の相手を始末してると思っていたのだ。

それがまさか、最終防衛ラインが最初の防衛ラインとは思われないだら流石にい！

「しかし、姫様の部屋は定期的に変えていますし、屋敷に侵入された形跡はありませんが？」

「なのですが実際問題、侵入者は私の部屋の真下の壁に取り付いて来ます。家具を設置する職人から情報が漏れているのでは？ 最近では敷地に入った途端に殺しているので、

前の部屋に忍び込もうとする人間も居たかも知れませんが、解りませんね」

「え？ 敷地に入った瞬間に？ ど、どうやって？ ですか？ いえ…………」

「魔法です、そして魔法で制御する矢からは逃れる事は出来ません」

「本当だとしたら……………恐ろしい力ですね」

シノニムさんもそんな程度の認識か…………、魔法で加速した矢は必中で防御も出来な

い。

放つたら確実に相手を殺せるチート性能だ。

よく考えたら侵入した瞬間に殺しているのだから、俺より早く殺れつても無理な話か。

でも、そんなの放置してリラックス出来る訳も無いから仕方ない。接近されたら魔法は役に立たないだけに油断は禁物だ。

とにかく、シノニムさんは警備の強化を約束してくれた。

「まず、屋敷の警備を洗い直します」

「よろしくお願いしますね」

俺はニツコリと微笑むが、シノニムさんは微妙な顔だ、信じてないのかも知れない。

「あの、もしも可能なら頭では無く足を狙って貰う事は出来ますか？ 何か情報が掴めるかも知れません」

恐らくは……あんまり疑うと失礼、と、……信じられない、の狭間から折衷案で出てきたのがコレだ。

つてか、確かに俺も考え無しに頭を抜いてしまうのが悪いのだが、運命視の光を目指して射るから仕方ない面もある。

「解りました努力します」

「申し訳ありませんがよろしく願います、部屋には護衛を付けますか？」

「では二人用意して廊下に待機させて下さい」

「かしこまりました」

そうして、俺の生活は余計に窮屈になってしまった。

しかし、思った以上に俺の状況は悪いから仕方が無いと諦めるのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「壮観ね」

ダックラム公爵が持つ私邸の一つ、その地下室では十の死体が吊されていた。

「家の者は一人、他の九人は？」

問う少女は爬虫類を思わせる切れ長の目を油断なく走らせる。

シャルティア・フォン・ダックラム。公爵令嬢にして王子の婚約者と言う立場。

女性なら誰もが憧れる地位に居ながら、女性らしい幸せなどに興味が無いのは明らかだった。

危険な雰囲気どころか、その様子は狂人のそれだ。強烈な死臭漂う地下で薄笑いすら浮かべている。

「どれも頭部が吹き飛ばされている、コレが魔法だというの？」

独り言かと思われたが其れに答えんと、じわりと闇から浮かび上がる男が一人。

「まず魔法で間違いありません。他の九人ですが、おそらくはアイスの作り方を探ろうとした商人崩れでしょう、装備はまるで素人でした」

男の名はウィルター。

シャルティアの片腕とも言える男だ。彼もまた卓越した暗殺者だった。

「ふうん、一般人だろうが容赦なしって訳ね、面白いわ」

「それは……違うかも知れません」

「どういふこと？」

ウィルターは信じられない物を見たその記憶を手繰りながら、見たままを伝えていく。

「まず、私の部下が侵入しようとしけ垣を越えた瞬間、それは起こりました」

ウィルターの視線の先には最も腐敗が進んだ死体、シャルティアも知るダックラム暗殺団の新人だ。

「頭部が弾ける音とは最初は思いませんでした。音は小さく、はじめはコケたのか？ ぐらいいにかいしませんでしたが、コレで覗けばあったのはその死体です」

取り出したのは潜望鏡、潜水艦に付いているアレだ。これで壁の向こうを確認して潜入するのだが、単純ながら潜入には画期的な装置と言つて良かった。

これはシャルティアの発明品である。単純な暗殺の腕だけでなく、彼女は図抜けたアイデアも多く生み出していた。

……すべて暗殺の道具ではあるのだが。

「その瞬間は見てないの？」

「はい、見ておりません」

「それで、生け垣を越えた途端に魔法が飛んでくるのに、その死体がここにあるのはどうして？」

「私が回収したからです」

「あなたが？ 大丈夫だったの？」

「ええ、殺した相手が即座に駆けつけると思われたのですが、半刻ほど観察しても現れず、死んだ原因は畏の類いに掛かった物と判断しましたので」

シャルティアは頷く、魔法だろうが弓だろうが殺したのなら死体の検分に現れるのが当たり前、まさか「めんどくさいし朝になれば誰か片付けるだろう」と放置したとは夢にも思わない。

そして、暗殺者の装備は機密の塊だ。

鍵開けのピッキングツールは勿論、壁に張り付くかぎ爪やロープの一本まで暗殺一家としての研鑽の賜。

タネが割れば対策も容易となつてしまう物も多く、絶対に回収したい。

「それにしても死体ごととは恐れいったわね」

「あまりに気配がせず、いつその事と相手を釣り出す目的もあつたのですが、結局誰も現れませんでした」

「へえ……」

シャルティアの顔には冷たい笑み。

相手に馬鹿にされている、そう感じたからだ。

「面白いわね、後悔させてあげたいじゃない？」

「難しいかも知れません」

男の声を聞いたシャルティアの目が、怒りからカツと開かれた。

滅多に無い事で、両親ですら萎縮し目を逸らす視線を男はじつと見返した。

「以降、オーズドの屋敷に張り付き、忍び込む者を観察。時として商人を焚きつけましたが、ご覧のありさまです」

目線の先には同様に頭部を失った死体が九つ。

「怖じ気づいたの？」

シャルティアは笑うが男は首を振る。

「死体は九つですが、忍び込んだ男が全て死んだ訳ではありません」

「ふうん？」

「忍び込み、何かを持ち出した男が一人、私はその男を飲みに誘いました」

「ふふつ得意の手ね？」

シャルティは想像して笑う。

この男は根暗な暗殺者らしい目をしながら、必要とあれば誰よりも快活に声を掛ける。目の前の暗い男と、飲みに誘ったであろう時のギャップを想像すれば自然に笑いがこみ上げた。

一方、男は面白くなさそうに話を続ける。

「男は新入りの庭師でした、それ故、生け垣の隙間を知っており、そこから侵入して、日中に忘れた仕事道具を持って帰った。そういう話でした」

「顔見知りだから殺さなかった、それだけでしょう？」

「しかし新入りですよ？ それに私が言いたいののは、つまり、これは自動発動の単純な罠では無い」

「なるほどね」

「そして、ユマ姫の姿を一目見ようと、同じ生け垣の隙間から忍び込んだ少年もまた無傷でした、ただし彼は使用人に見つかり摘まみ出されましたが」

「それは子供だから殺されなかった？」

「もう一人、頭がおかしい若い商人も死にませんでした、彼は堂々と生け垣を踏み越え侵入しましたが、同様に摘まみ出されています」

「……頭がおかしいってどういう感じ？」

「それは、アイスと言う新しいお菓子の製法を教えてくださいと、自分に教えるのが正義で独占しているのが悪だとわめていました」

「本当に頭がおかしイのね」

「ええ、自分の都合の良い事を信じてしまうというか、商売に困った自分に姫様は秘密を教えてくださいるに違いないと信じ込んでいる様子でした」

「はあ……」

それはシャルティアの一番嫌いなタイプのキチガイだった。しかしたまに居るのだ、ギブアンドテイク、交渉の基本すら理解出来ない輩が。

「そこで、ひよつとして思ったのですが、悪意を持って忍び込もうと、明確な敵意を持った相手だけが殺されるのでは無いかと」

「まさか？ いえ……それが？ 魔法？」

「はい、そして罠の様に自動で発動する、それ故に誰も確認に現れない」

全ては想像。だが今の事態がそもそも常識外れ。無理矢理だが筋は通っている様にも思われた。

「なので、敵意に反応と言う線で。屋敷に勤める執事の妻に、旦那が不倫の最中だと吹き込みました」

「? それで?」

「勿論、怒り心頭、殺意を滾たぎらせて屋敷に乗り込みました。ただし正門から堂々と乗り込んだのですが」

「衛兵は?」

「近所の善意の協力者として押さえ込みました」

「それはまあ……」

呆れた声のシャルティアを無視して、ウィルターは続ける。

「当然これも無傷。結局摘まみ出されましたが、音や強い感情に反応している訳でも無さそうです」

「フフツ」

「笑い事ではありません、そして最も恐ろしいのが、我々が片付けているが故に、オーズド邸の使用人達は誰も侵入者がいた事すら知らないのです」

これには流石にシャルティアも眉を顰ひそめた。

「まさか!? ではこれだけ死人が出ているのに、使用人達は何事も無く生活している?」

「その通りです」

いつそ呆れてしまうが、ウィルターの表情に冗談の色は無い。

「ここに居ない、リオール様に貸した最初の三人ですが、二人がバックアップとして待機。一人が忍び込もうと生け垣を越えた瞬間、頭を打ち抜かれました。原因がわからず撤退。リオール様に報告するも、失敗を誤魔化していると相手にされなかったとか」

「まったくあの人は……」

シャルティアは金儲けこそ得意だが、致命的に殺しのセンスが無い父の厳めしい顔を思い出したため息を吐く。

「そして、彼らも今回の我々同様の観察を続け、時には商人をけしかけ、トラップの正体を探ろうとしました。その間、やはり死体を引き上げ続けました」

「それで？」

「そして、頭部を守れば大丈夫と、重騎士の兜を被って忍び込み、視界不良から転んで捕まったらしいです」

「はあ度しがたいわね」

思わず少女はこめかみを押さえる、名うての暗殺団らしからぬ失態だ。

「で、残った一人が逃げ出したと？　そう言う事ね？」

「いえ、残った一人はミスを取り返そうと忍び込み、頭を吹っ飛ばされています。これが唯一オーズ邸に残された死体。最初の死体は生け垣の上に倒れ込んだので二人に回

収まっています」

「じゃあ？ 報告で一人逃げたって聞いたけど？」

「重い兜を被って捕まった一人、イタズラと思われるので早々に解放されています、まさかそんな間抜けな殺し屋などが居るはず無いと思われたのでしょうか」

「ハア……」

自分は大間抜けで、それをフォローしようとした仲間が死亡じゃ、合わせる顔も無いと言うのも当然か。

「勿論間抜けは聞く事を聞いた後、始末しました」

「当然よ、それにしても人材不足も洒落に成らないレベルね」

「大半は急造ですからね、殺しのマニュアル化のせいだつてベイターさんは怒るでしょうが」

ウィルターはそう言つて肩を竦める。

シャルティアとウィルターは殺人技術を細分化しマニュアル化を果たした。

人材の不足を補う手だが、シャルティアに殺しを教えたダックラム家の執事ベイターはインスタントな殺し屋に反対していた。

——既に彼はこの世に居ないが。

「ないものを急造すれば無理は出る、情報が漏れなければ問題は無いわ、そうでしょう

？」

「末端は最低限しか知りません、我々まではたどり着けないでしょう」

「かといつて、素人じゃ正体も暴けない……そうね、だったら私ならどう？」

「危険です！ 近寄っただけで殺されたって不思議じゃ無い」

「でも、埒が明かないわ、魔法の見物、それだけよ」

ウィルターは苦虫を噛みしめた、またお嬢様の悪癖だ。

すぐに自分で殺りたがる。そして誰よりも上手いのだから何も言えなくなるのだ。

「しかし大事な御身に、今何かあつたらどうします？ 万が一の危険は——」

「もし、公爵令嬢が天下の往来でいきなり殺されたら？ それがオーズド邸前だったら

？ 相手には結構なダメージでしょ？」

「いえ、ですが」

「行くわ、決定！ 餌を用意して」

「……はい」

こうなるとお嬢様は止まらない。両親ですら説得は無理だ。

それを知っているウィルターは領くしか無かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「それで？ ここがオーズド邸？ 普通。いえ、ネルダリア領主の割に質素な屋敷ね」

「はい、余り豪華なのは好まない人と聞きます、それはユマ姫も同様、贅沢品の消費も無く、本当に姫が居るのかと疑う向きすらあります」

「いえ、居るわ、感じる！」

「は？ はあ……」

断言するシャルティアを訝しむウィルターだが、シャルティアは自分の勘を信じていた。

それは、勘というより強大な魔力の気配を無意識に感じているのだが、その概念が無い人間には絶対に解らぬ事。

いや、エルフの知識にもこんな遠距離から相手の魔力を感じる等という常識は無い、シャルティアもまたある意味超越者と言えるだけの特異な存在だった。

相手の殺意や敵意を魔力の揺らぎとして直感的に肌で感じてきたからこそ、数多の窮地を紙一重で乗り越えて来たのだ。

まだ見ぬ獲物に戦意を滾らせるシャルティアだが、そこに戸惑い混じりの声が掛かった。

「あの……なんの話です？」

とぼけた顔の商人。ダックラム家と取引のある商会を通して、アイスクリーム作りに興味がある商人を焚きつけたのだ。

材料が運び込まれるのでココでアイスクリームが作られているのは間違いない。その秘密を探ってくれないか？ と声を掛ければアツサリと乗ってきた。

死んだ九人もそうだが、こんな輩は今の王都に掃いて捨てるほど居るのだ。

それだけユマ姫の登場で益々隆盛を極めるキイムラ商会は、鮮烈な印象と一攫千金の夢を国民に与えていた。

「何でもありません、あなたは何としてでもアイスの作り方を探して下さい」

「わかりました、でも素人ですから、失敗すると思いますよ？」

「何も宝物庫に忍び込む訳じゃありませんわ、ユマ姫がアイスを作るキッチンに忍び込むだけの事」

「確かにそうですね！ やってみます」

「生け垣の隙間は調べてあります、どうぞここから」

「ど、どうも、では行ってきました」

そうしてズリズリと生け垣の隙間へ体を滑り込ませる商人、それを見送ってホンの数秒だった。

「来た！」

「!? 何がです？」

ウィルターには見えない、だがシャルティアは感じた。

凶暴な殺意が超高速で飛来してくる。

「よく見えない、飛びます！」

「なっ！ お嬢様あ！」

シャルティアは跳んだ、その常軌を逸した身体能力での背面跳びは易々と生け垣を越える。

月明かりを背に、暴れないと言う約束を誇示するために、上品に結った巻き髪が連なつて揺れる。

ウィルターは思わず美しいと思つてしまつたが、状況は悪い。

「クソッ！」

悪態をつくウィルターの反面、その心配の対象のシャルティアお嬢様はご機嫌だ。

背面跳び故に、あわや頭部からの落下、それを片手で防ぐとそのままバク転の要領で見事な着地。

その瞬間、ユマが放つた矢はシャルティアの目の前で炸裂する。

——バシユウツ！

魔法で細かい制御を行うために、多めに風の魔法を纏わせた。それ故に音は意外に小さい。

だが、その威力はこの世界の人間にとって全くの未知の物。

いや、攻城兵器であるバリスタなら同等の威力は出るだろうが、こんな街中でいきなり飛んでくる物ではない。

着弾したのは商人の足、吹っ飛ぶ右足、飛び散る血。

間近でその全てをスローモーシヨンの如くハッキリと捉えるシャルティアの両目と、一方で何が起きたか理解出来ない商人。

「ギャアアアア」

一拍置いて悲鳴、そして駆けつけてくる衛兵の音。

——しまった！

シャルティアは相手のやり方が変わった事を悟る。

今までは頭を潰して即死させてきたが、今回に限って足を狙ってきた。

頭を狙ったけど外した訳では無く、明らかに足を掬う軌道で矢は貫通した。

そう、矢だ。

シャルティアの動体視力はハッキリとその姿を捉えた。

だったら魔法ではない？ いや、あんな風に『自在に曲がって狙いを付ける矢』があるならば、それは魔法でしかあり得ない。

着弾と同時に矢が消し飛んだのは、威力の所為か魔法の性質かは解らないが……

とにかくまともではない、しかしそんな事よりも今のピンチだ。

「た、助けて！」

シャルティアに助けを求める商人、それに笑顔すら浮かべて近づくと。

「今、楽にして差し上げますわ」

「え？」

シャルティアが撫でる様に触れる、それだけで商人の喉が裂けた。まるでマジックだが、それは隠し持ったカミソリの仕業。

商人は濁った目で、ヒューヒューと息をするが長くは無い。

口封じ。別に縦ロールのお嬢様など他に居ないでも無いが。ダックラムの悪名を考えれば思いつくのは一人だろう。

考えてみれば即死の魔法だと思つて完全に油断していた。とんでもない失態だと一人笑う。

「コツチだ！ 賊が居るぞ！」

着弾、悲鳴、それから数秒とたつていなかったが、すぐそこまで衛兵は迫っている。中々に練度が高い。

「良い物を見れたわ、さようなら」

そう言つてシャルティアは入つてきた時同様に生け垣を跳ぶ。その時だ。

——来たッ！ まさか、連射出来るのッ？

背面跳びの頂点、生け垣の真上でゾクリと感じる。自分に迫り来る死の予感。

——早く、早くッ！

地面が遠い、空中では回避も不可能。

しかし間に合わない！ 闇夜ではほとんど不可視のスピードで迫ってくる。

「シッー」

殆ど勘だけで髪から外した簪かんざしを放った。キンツと高い金属音、それとほぼ同時に超高速の物体が頭のすぐ横を通り抜けた。

その衝撃だけで頬の皮膚が少し切れるほど。

死の衝撃は、落ちゆく自分を追い越して地面へ向かった。ホツと息を吐き、愛しの大
地へと手をついたシャルティア。

「お嬢ー」

しかしウィルターは見た。高速で飛来してきた『何か』が地面へとぶつかる瞬間、ピ
タリと停止。

そしてギュルリと音が聞こえそうな勢いで進路を変える様を。

「クッ」

シャルティアは着地の直後。それも背面跳び故に手からの着地。

不完全な体勢で出来る事は殆ど無かった、精々が逆さになった足で、生け垣の下、レ

ンガの部分を思い切り蹴つ飛ばして姿勢を大きく変えるぐらい。

——ピキッ！

しかしそれがシャルティアを救った。矢は何も無い空間を貫くと、音を立て、粉々に崩壊した。

今回ユマが狙ったのは足。

ユマが運命視で見えるのは人間の運命の核となる部分、基本的には意思のある頭。

足は見えないので光る場所の下あたりが足だろうと衝撃波の威力に期待して適当に放っていた。

今回、逆立ち状態のシャルティアの光は地面スレスレにあつて、光の下に矢を通そうとしていたユマは一瞬混乱した。

が、すぐに逆立ちだと気が付き、光の真上に矢を通すが、レンガを蹴つ飛ばして足の位置を変えたシャルティアは難を逃れたのだ。

そして、再度の方向転換をしようとした矢は、最後には耐えきれず崩壊。

忍び込んだシャルティアは知る由も無いが、それが今回の顛末であつた。

「これが？ 魔法の矢？」

蹴を残して崩壊した矢の残骸を急いでかき集めるも普通の矢にしか見えない。

「追っ手が来ます！ お嬢様！」

「わかってる！」

急かすウィルターと一緒に走る。

「全く！ とんでもない化け物がいるじゃない！」

しかしシャルティアは笑っていた、こんなに面白い相手は今まで一人だっただけ居なかった。

「……………」

しかし笑うシャルティアを見つめるウィルターには、このお嬢様も同じく化け物にしか思えなかったのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

襲撃の翌日、俺はシノニムさんから話を聞いていた。

「侵入者は死亡、商人ですが、アイスクリームの作り方を探っていた様です」

「一人ですか？ 最低でももう一人居たはずですが？」

「はい、商人は足を撃たれていますが、死因は喉の裂傷です、口封じに殺されたのかと」「そっちが本命ですね、どうやったのか、魔法の矢を防がれたのは初めてです、凄腕の暗殺者かもしれません」

それは殆ど初めての経験だった。タフな魔獣に効果が無いとか弾かれるならともか

く、紛れも無い人間に必殺の魔法の矢が防がれたのは。

その事実は人間を甘く見始めていた俺へ、非常なプレッシャーとして襲いかかった。

近づかれれば負けなのだから、屋内で戦いたくは無い、だがあの暗殺者なら屋内に忍び込むまでは可能に思えたのだ。

「まさか！　とは言えませんね……警備と魔法を組み合わせる事を考えた方が良いでしょうね」

「確かにそうですね」

俺は頷く。例えば、かぶらや 鎬矢で音を出して相手の位置を知らせるのが良いかもしれない。

いや、だったらそのまま殺した方が早いかな？

「そして、確かに家具職人が姫様の部屋を整えた事を自慢して回っていたらしいです、そこから部屋の場所を推測したのかと」

「なるほど」

「加えて、壁に張り付いた首無し死体を悪霊と勘違いした庭師が、人知れず焼却していた事実も判明しました、それも何体も！」

「また迷惑な」

「あなたがそれを言いますか!？」

怒られてしまった。

「しかし、度重なる悪霊に怖じ気づいた庭師は先月職を辞しています、それに焼いたのは六体らしいので全然数が合いません」

「不思議ですねー」

「ふざけないで下さい！ 恐らく暗殺者が死体を回収しています、全くおぞましい」

「そんな事言われても……」

「ユマ様が言ってくれていれば良かったでしょう？」

「それこそ、そんな事言われても……」

「……はあ、全く、全て報告して下さいれば、今頃事件は解決していたかも知れないんですよ？」

「さて？ どうでしょうか？」

シノニムさんの言葉に俺は微笑む。

「こちらに反応が無いからこそ、相手は連日連夜攻めてきた。そして大胆に二人一緒に侵入してきたのを見計らい、生け捕りを狙う。失敗こそしましたがひよつとして大物を捕まえる直前だったのかも」

「またそんな屁理屈を」

シノニムさんはそう言って呆れるが、俺にはそう思えて仕方が無いのだ。

あの日忍び込んだアレはただ者じゃ無い。出来れば捕まえ……いや、頭を狙って殺す

べきだった……と。

それだけあの日視た運命の光は強くそして大きかった。

そしてなにより印象的だったのはその色だ。

「血のような赤……」

思わず、一人眩いてしまったのは不安が故か。

不吉なまでに濃い赤が、俺に死をもたらす死神に思えて怖かった。

第二王子派

本日、ネルダリア領主オーズド邸では突然の大物の来訪に、ちよつとした騒ぎが起こつていた。

「では、我々を第二王子派へと勧誘に？」

「いいえ、どちらかと言うとコレは同盟だと思つています」

破格の提案、なにより異例なのは第二王子自らがオーズド邸へ訪れた事だった。

エルフの使者によりユマ姫の身元が証明された事。

そして何よりユマ姫を狙つてオーズド邸へ侵入者が有つた事は、ちよつとしたニユースになっている。

今まで人気はあれど芸能人的な人気だと思われていたユマ姫。

それが政治の場で重要な意味を持ち始めたと同時に騒動に、各派閥ではユマ姫の争奪合戦が始まろうとしていた。

大半はユマ姫の人気とキイムラ商会の力が目当て。そして暗殺者に怯える今だからこそ、有利な条件で傘下に引き込めるだろうと言う算段。

しかし、そんな中で当人直々の勧誘と実質的な同盟。ボルドー王子の出した条件は破

格としか言いようが無かった。

「それ程までに我々を評価して下さる事を嬉しく思います」

丁寧な頭を下げつつもシノニムは不審を抱く。余りに条件が良すぎるからだ。

その硬い表情に、気安い声を掛けるのは王子の付き人ガルダだ。

「そう警戒しないで下さい、何も裏は有りませんよ、ただコイツがユマちゃんが心配だつて五月蠅かっただけですから」

「オイ！」

駆け引きも何も無く、親友に思惑をバラされて慌てる第二王子。無邪気な二人の様子は策謀とは無縁に思われた。

そう言えば——とシノニムは思い出す所があった。

「ええ、コイツ、婚約者を暗殺されているんですよ。それだけに今度は絶対に守りたいって五月蠅くて」

「お前ツ、それは言うなつての」

じゃれ合う二人だが、その内容と声からは重い決意を感じる。これは信用に足るとシノニムが頷きかけた時だ。

「今の話は、本当なのですか？」

「ユマ姫！」

応接間の扉から現れたのはユマ姫。その顔色は青白く、シルクのネグリジエ姿。伏せていたのが明らかかな姿だった。

「ユマ様、お客様の前ですよ！」

下着も同然の姿など、貴婦人が見せて良い格好では無い。しかし声を荒げるシノニムを制してユマ姫は話の続きを促した。

「今の話は、私の耳で直接聞いておきたいのです、どうかお願いします」

簡単に手折れてしまいそうな儂さなれど、か細い声にはハッキリとした意思が籠もっていた。

無理を押しても気丈に振る舞う姿に、王子は同情を超えた声を掛ける。

「ユマちゃん、辛かったね」

「こんな事、国を追われた時の悲しみに比べたら何でもありません」

何でも無いようには決して見えない憔悴具合だが、必死に強がる少女を追い詰める気は王子には無かった。

「言った通りの意味さ、俺は愛した女性ひとを守れなかった」

自嘲気味に笑う王子。

聞けば七年前、婚約者だった女性を暗殺者に殺されてしまったと言う。

三つの公爵家の一角、ピーグル家と第二王子の結婚は、第一王子が優勢とみられた勢

力図を書き換えるとも言われていた。

表向きはピーグル家の強引な領地開発で恨みを買っていた故と言われているが、それを信じる者は少ない。

「俺は今まで復讐の機会をずっと探っていた、異国から来たユマ姫の登場、兄の結婚。これ以上無いチャンスのはずが、こんな少女を巻き込んで良い訳が無いと踏ん切れなかったんだ」

静かに語る王子の目は復讐の炎に燃えていた。

それを聞いたユマ姫は、シノニムが慌てて持つてきたガウンを凍える様にギュツと抱き合わせる。

「解ります！ 私だつて父も！ 母も！ 兄も！ 妹だつて帝国に殺された。でも！

その復讐にこの国を巻き込んで良いのかつて怖くなるんです」

ユマは羽織ったガウンを青い血管が浮き上がる程に握りしめていた。

その震える肩を王子は優しく抱きしめる。

突然の事に、驚きで目を見張るユマ姫を諭すように、王子は静かに語る。

「大丈夫だ、幾らでも巻き込んで欲しい。君のような小さな女の子を見捨てるぐらいなら、こんな国なんて無くなつても構わない」

その言葉を聞いたユマ姫の目がよりいつそう見開かれ、後から後から大粒の涙がこぼ

れ落ちた。

「うあ……ありがとうございます」

少しだけ背伸びして、王子を抱きしめ返すユマ姫の泣き笑いの表情は、やっと年頃の少女らしい柔らかさを取り戻していた。



「どう、思いました？ あのユマ姫の様子です」

オーズド邸から帰る馬車の中、付き人たるガルダは王子に疑問をぶつけた。なんとなく釈然としない思いに包まれていたからだだった。

「大分憔悴していたな、もっと早く助けてやればと後悔したさ」

警備人員の提供や、第二王子の庇護下にあるとの宣言も成される。

これでユマ姫はただの有名人では無く、第二王子派の重要人物として認識され守られる事になるだろう。容易に手を出せる相手ではなくなった筈だった。

しかし、ガルダの心配はそこでは無い。

「確かに守ってあげたいと思う儂さがありました。しかし、あまりに『儂く、いじらし過ぎる』と思いませんでしたか？」

「まさかアレが演技だとしても言うのか？　俺も演劇は好きだが、アレが演技なら王都の役者はみな廃業だぞ？」

言ったガルダ自身、まさかとは思う。侯爵家の次男坊として気楽な立場から放蕩三昧遊び倒して来た自分だが、それ故、女心は知り尽くしていると言う自負があった。

それだけにユマ姫と顔を合わせる機会にはいつも連れ回されているのだが、ユマ姫に二心ありと思う部分は全く無かった。

しかし何か引つかかる。

「しかし、ですよ。お付きの女性、シノニムと言う娘もネルダリアの諜報部員。只者ではありません。そのシノニムの顔が今日は少し引き攣つて見えました」

「伏せていたユマ姫が出て来たからでは無いのか？」

「たしなめる様な風ではなく、『そこまでやるか？』と引いている様に見えたのです」

「終始無表情に見えたのだから」

「そう装っていますが、目は泳いでいましたよ。実は俺モロにああ言うのがタイプです。良く口説くのですが、ああ言う娘は目に本心が出るんです」

「だとしたらユマ姫はお前に本心を悟らせない程の演技派つて事になるな、あの歳でか？」

呆れる王子だが、ガルダは真顔だ。

「思い出して下さい、共演した劇団のイライザという女優。姫の印象を聞き出しました
が『私以上に演技の才能が有る』と言っていましたよ」

「それは、同じように練習したらと言う話だろうか？」

「そうは感じませんでしたね、心底惚れ込んでいましたよ」

ユマ姫の噂は多すぎて何が本当かは解らない。

本当はエルフに聞いたら違うのだろうがそのツテも無い。

「仮に、魔法を使って人間を殺して回る化け物だとしても、味方に引き込んだんだから心配は無いだろう？」

豪快に笑う王子だが、ガルダは笑えない。

「内側から乗っ取られるやも知れませんが、仮に全てが演技ならばとんでもない狸ですよ」

「アイツに一泡吹かせられるなら、狸だろうが竜だろうが乗りこなしてやるさ」
急に変わった声のトーンにガルダはハツとした。

それだけ王子は今回のチャンスに賭けているのだと解ったからだ。

「しゃーない、内部の引き締めはコツチでやっときますよ」

「頼むぞ、ユマ姫の派閥と一緒に動く事も増える。付け込まれる事も、馬鹿にされる事も避けたい」

「りよーかい、任しといて下さいよ」

すぐに気安い雰囲気に戻った二人を乗せて馬車は進む。

「しかし、アレが演技などあり得るのか？」

抱きしめた、か細い肩の感触を思い出し、じつと手を見る王子だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

王子が出て行った後の応接間。

来客用の豪華なソファーにネグリジエ姿で寝そべる俺に、シノニムさんの雷が落ちた。

「出て来る必要は無いと言ったでは無いですか！」

怒るシノニムさんだが、俺は脱ぎ捨てたガウンを振り回して笑う。

「でも上手くいったでしょう？ 守ってくれるそうですよ？」

「男性が弱い女性を前に口にする常套句みたいな物です、本気にすると痛い目を見るのは女性の方ですよ」

「そんな不義理な人間と同盟を組む気ですか？」

「お願いですから、話をややこしくしないで下さい」

シノニムさんは怒るが、こんなのは何時ものやりとりだ。しかし気になる事も幾つ

か。

「それより第二王子の付き人の、ガルダですか？ ああ騒ぎの中、私では無くシノニムさんを見てましたよ。少し妬けますね」

「なんの話です？」

「ハッキリ言わせて貰うと。私より、あなたの方が与し易しと様子を探られていたので
は？」

「馬鹿な事を、あの人は前から事ある毎に口説いてくるんです。いちいち茶化さないで
下さい」

「王子の付き人たる人物が、主人の大事に女性に目を奪われるでしょうか？」

そう言うと、シノニムさんは爪を噛み、押し黙った。

一本取ってやったと嬉しく思う反面、重大な危機に肝が冷える。

もし俺が相手の立場だとしたら、空前絶後で唯一無二の存在である俺より、周囲の人間から俺の人となりを探るに違いない。

しかし、それは俺の本性が半ばバレていると言う事に他ならない。

まさかね、と思いつつもくしゃくしゃに丸めたガウンをシノニムさんに投げつける。

「これ、返します。それにしてもなるべく感情を表に出さないように注意した方が良い

ですよ?」

諜報部員として鳴らした彼女にとつては、これ以上ない侮辱だろう。

俺が投げたガウンを頭から被ったシノニムさんは、プルプルと震えだした。

「だれの所為で怒つてばかりだと思つてゐるんです!」

ヒステリックに叫ぶ声を背に、俺は応接間を抜けアイス作りのためにキッチンへ。

こうなると中々怒りが収まらないので、退散するのが一番だ。

「しかし、同盟ね」

相手は独身男性、こちらは十二歳とは言え、この世界の常識では一人前の淑女として扱われる。

一回り歳が離れているとは言え、貴族の間じやこの程度の歳の差は珍しくない。

そんな二人の同盟ならば、結束を強めるシンプルな方法がある。

「ま、良いけどね。悪い奴じや無さそうだし」

俺は第二王子の風貌や人柄を思い出す。

イケメンでは無い、ニキビの跡も有るし、地味で朴訥とした雰囲気の良い男だ。

丁度、野球部の杉田が成長したらあんな感じか? と思つたが、俺はその想像をすぐに打ち消した。

悪く無い相手と思つていたが、杉田と結婚するかと思うと想像以上に気持ち悪かつた

からだ。

「それでもアイツに貰われるぐらいなら、何でも良いか」

何故だか思い出したのは木村の顔だ。

木村が今の俺に向けてくれる好意には、流石の俺も気付いている。

だが、その気持ちには絶対に応える訳には行かないし、応えたくない。

「木村よ、お前の恋は絶対に実らんぞ」

前世で親友と交わした、下らない恋愛談義の数々を思い出して、俺は少し悲しくなるのだった。

魔人公

今日は俺の派閥の大規模な集会が行われる。

場所は例の劇場をメイン会場とし、ちよつとしたパレードや広場での演説まで予定されていた。

アイスが振る舞われ、話題の演劇も鑑賞出来る俺の集会は常に満員御礼の人気を誇ってきたが、今日の集会は特別だ。

久しぶりの俺自身の参加、そして俺の派閥は第二王子傘下へ入る事が伝えられる。

殆ど同盟と言えるその内容は、耳の早い貴族の間では既に話題になっているらしい。

ひよつとして、その場で婚約発表も有るのでは？　と言う気の早い噂まである。

控え室で身なりを整える俺は、鏡越しに後ろのシノニムさんに尋ねる。

「私は構いませんが、向こうはどう思っているんでしょうね？」

「ボルドー様もそのあたりは飲み込んでいるでしょう」

疑問の声に、俺の髪を結うシノニムさんは当たり前と言う顔で応える。

それはそうだが、男女の仲って奴はそう割り切れる物ではない。特にあの第二王子は女性を裏切れる性質ではないと思われた。

「あの歳で良い仲の女性が居ないなどあり得ないでしょう？　変な恨みは買いたく無いのですが？」

「さてどうでしょう？　ボルドー王子は婚約者を亡くしてから女性を連れ立つ事は殆ど無いと聞きますよ」

それはそれで重い。だが変に恨まれるよりはよっぽどマシか。

俺に出来るのは、美しい姫としての評判を落とさぬ様に気をつけるのみ。ニツコリと笑顔を確保すると、鏡の向こうでは可憐な美少女が儂げで少し陰のある微笑みを浮かべていた。

ただし、シノニムさんの目は冷たい。

「中身は酷い物なのに、姿は何時見ても美しいですよね」

「貴女も人の事が言えますか？」

「ユマ様に比べれば可愛い物でしょう？」

諦めた様子でため息をつくシノニムさんに、俺は思わず笑ってしまふ。

お互い銀髪だし、姉妹の様に……は見えないか。流星に全く似ていない。

こんな感じで、最近はずつかりシノニムさんには本性をさらけ出してしまっている。

流星に『俺』とか、『ふざけんな！』とか、男の口調で叫んだりはしないが、可愛いだけの悲劇のお姫様のフリは辞めている。

侵入者をぶつ殺す度に青くなっては話が進まないからだ。

その点、シノニムさんは普通の女性と違って、首無し死体を目にしても声も上げないし頼もしい。

そう言う意味で、最近はまだ一人の侍女も逞しくなっていました。

「で、でもユマ様は本当に意地の悪い方では無いですよ？　ちよつと大胆で裏表がありませんけど」

……ネルネにも最近はずつかり変わった人扱いを受けてしまっている。

意地の悪い貴族とは？　とネルネに聞けば、癩癩持ちで使用人を鞭で打つとか恐ろしい話が飛び出してきて、そう言うのを基準に優しいとか言われても全然嬉しくない。

「何にせよ、私は自分の家族を殺し、国を襲った帝国に復讐したいのです、ただそれだけの思いでココに居ます。今日は私にとって正念場になります、よろしくお願いしますね」

「解っています」

「あの、頑張ります」

二人とも気合い十分。いよいよ俺は久しぶりに表舞台に顔を出すのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

会場のメインステージ。一段高くなった舞台に俺が現れると、ワツと会場がざわめい

た。

「おお！ アレが！」

「まるで妖精、噂半分と思っていたが聞きしに勝る」

男性陣の賞賛は何時もの事。それに加えて女性陣からも感嘆のため息と、息を飲む声
が聞こえてくる。

「羨ましいわ、あの輝く髪的美しさ」

「それよりも、あの気品、優雅さ、悔しいけど真似出来ないわ」

最近は女性からの支持も厚い。

それも俺の物語が広く知れ渡ってからは憧れの目線が、時として男性陣よりも熱心に
刺さってくる。

やっぱり女の子は悲劇的なストーリーに弱いのだ。不憫ねと哀れみながらも、物語の
主人公の様な悲劇にどこか憧れてしまう。

悲劇の主人公たる俺としては、隕石の一つや二つ王都に落ちてお前らもまとめて悲劇
の主人公にしてやりたいと心がザワついてしまうのは俺の性格が悪いからだろうか？

その反面、女性から憧れの視線を浴びると、少しだけ気持ち良く思ってしまう自分が
居た。

怒りも、優越感も、情けない不純物の様な気がして自分の中で消化出来ずに、少し困っ

た顔で笑うと、それを見た観客はホウっと切なげに息を飲むのが解った。

何でも良いのかと一瞬投げやりになる気持ちを奮い立たせて、集まってくれた事に簡単な謝辞と挨拶を述べる。

そしていつも通り、有力貴族を中心に挨拶巡りを始めようかと言う瞬間に、会場入り口がザワめいた。

「魔人公だ!」

「魔人公が来ただと? 彼は第一王子派だろうか?」

少女漫画のヒロインを愛でるマツタリとした集いが、突然にサイヤ人襲来みたいな空気に変わってしまった。

「シノニムさん、魔人公とは誰です?」

「第一王子の懐刀、リオール・ダス・ダックラム公爵です」

「公爵? 大物ですね」

「ええ、ですが最近公爵になったばかりで爵位程の力はありません、本当に恐ろしいのはその腕力です」

「腕力?」

「豪腕の間違いでは無くて? 貴族が腕力を自慢にするってどうなんだ?」

「七年前、第二王子の婚約者が殺されたのは聞きましたね?」

「はい、その後、ピーグル公爵家が傾いたり王国が荒れたとか?」

「その混乱期、第一王子にも放たれた刺客。遠乗りに出た第一王子カディナル様を襲うたつた一人の暗殺者に、周りを守る騎士達は根こそぎ殺されてしまいます」

「それで?」

「その暗殺者を返り討ちにしたのが魔人公リオール様です、他にもある時は十人の暗殺者を前に一步も引かずに王子を守つたとも言われていて、その功績を買われ、空いた公爵位に抜擢されています」

「それはトンだ脳筋貴族が居たものですね」

怖い貴族が居たもんだと笑うと、シノニムさんは一段声を落として話を続けた。

「いえ、実際にはダックラム公爵自身も暗殺者の元締めともつばらの噂です」

「へえ」

面白いじゃねーの、その殺し屋の元締めの顔、是非とも一目見てやろうじゃ無いか。

相手は公爵、俺の方から挨拶に向かつて何もおかしいところは無い。

人垣をかき分ける様に進み、その顔を拝んでやる。

すると人混みの中、一際大きな体格かつ強面で立派な髭の男性が一人。

その顔は、子供が見たら泣き出しそうな程に恐ろしく厳つい。一目でこれが魔人公だ

と解った。

「ようこそ私の主催する集会へ」

「ああ、君がユマ姫かね、噂に違わぬ美しさだ」

鷹揚に応える様子は威圧する様子も無く、目は優しげにすら見えた。

しかし周囲はそうは思わなかった様で、挨拶をしたと言う、ただそれだけでザワめいた。

「おおつ 魔人公に全く物怖じしない！」

「笑顔で自分から挨拶に向かう女性を初めて見ましたぞ」

……いや、散々な言われ様だな魔人公。

確かに顔は怖いがそれだけ、案外気が小さくて優しい人なんじゃ無いだろうか？

そう思う根拠はオルティナ姫が言うところの天命。運命を示す光だ。

運命光はその人の歩んできた人生や、コレから進み行く道、意志の力を表している。

魔人公の淡い緑色は気が弱い男性に多い色だ。

勿論それだけで性格が解る訳では無いが、見た目の様に怖い人間には思えなかった。

「今日はどのような用件で？ まさか私の派閥に加わってくれるのですか？」

「いやいや、ただの冷やかashiで申し訳ない。一介の伯爵だった私を取り立てて貰った恩

から、第一王子カディナル様以外の派閥には加わらん事になっているのです」

「まあ！ だつたらどうして？」

「実は家の娘が、一目瞞のユマ姫を見たいとウルサイのですわ。目に入れても痛くない一人娘のために、恥を忍んで足を運んだと言う訳ですな、オイ！ シャルティア！

コツチに来なさい」

気安い呼び方は公爵家の物とは思えない。最近まで弱小の伯爵家だつたと言うのを考えても、ざつくばらん物言いだが、そんな喋り方に不思議と威厳を感じてしまう。

そして現れたのは男らしい父親とは真逆。深窓の令嬢。と言うか、一昔前の少女漫画のお嬢様みたいな縦ロールで気が強そうな目つきの女の子だつた。

歳は二十歳前後、ツリ目と縦ロールに目が行くが、衣装もふんわりしたロングスカートにゴテゴテとリボンやレースが派手に彩られている。

顔は目鼻立ちのハッキリした美人で、一言で言うとお悪役令嬢のイメージそのまんま。

扇子とかで顔を隠しながら、意地悪な事を言ってきたきそうだな……と思つていたら、ホントに扇子をバツと取り出して来て、俺は思わず笑いそうになつてしまった。

「お初にお目に掛かりますわ、私はシャルティア・フォン・ダックラム。公爵令嬢などと言われていますが、父のお陰で成り上がったに過ぎません。気安くシャルティアと呼び捨てにして頂きたく思います」

「良いのですか？ では私もユマと、そう呼んで下さい」

「まあ！ 光栄ですわ！」

「あの……私、まだ王都の流行には疎いんです、女の子らしい遊びを誰かに教えて欲しいって、ずっと思っていました」

「本当？ ふふつ、お姉さんが色々教えてあげるわね」

その笑みにゾクリとする物を感じたが、これが女性の凄みなのかと思うだけ。

第一王子の婚約者と言う事で、一種のライバル宣言なのかも知れないが、コッチは真面目に付き合うつもりもない。

仮に見た目通りの悪役令嬢だとして……気は強そうだし意地悪なのかも知れないが、俺の今の状況は女の子の意地悪でどうにかなるレベルはとうに超えている。

そうは思いながらも、俺は念のため運命視で天命を確認する。

だが、目を瞑ってしまった俺に構わず、シャルティアの声が楽しげに弾む。

「王都で流行のお洋服を教えるわ、アクセサリーも！ でも、代わりと言っては何だけど、エルフの洋服やアクセサリーについて教えて下さらない？ わたくし他の国の洋服にも興味があるの、帝国や南方のプラヴァスの服まで集めているんですよ？」

「ふあ、ふあい……」

「？ どうしたの？ 様子が変よ？ それに凄い汗」

心臓が跳ね、呼吸が乱れ、汗が噴き出す、冷静になりたいと思っても上手く受け答え

が出来ない。

目の前に有るのは

——血の様な、赤。

見間違ふ筈は無い、あのときの侵入者！

シャルティアが饒舌に洋服について話しているのは解る。だが何一つ頭に入つてこない。なんならシャルティア自身、自分の言葉に興味がある様に思えない。

一度その運命光を間近で見えてしまえば、そんな事に興味がある人間とはとても思えなかつた。

今話している内容と、外見。それと凶悪な運命の光がまるで一致しない。

何かの間違いだと思つても、運命光は変わらず血を煮詰めた様な濃い赤い光を放つていた。

身のすくむ様な凶悪な光。そして、その持ち主にジツと見られている気配。

とてもじやないが直視出来ない。だけど、見ないで居るのも怖い。俺は浅い呼吸を繰り返しながら汗が噴き出す手を握りしめ、決意と共に顔を上げるとその様子を窺つた。

「ヒッー」

すると目が合った。爬虫類の様に細められた目は人間の物とは思えなかった。

——間違いないツ！ コイツまともじゃ無い。

もう怖い物なんて無いと思っていたが、まるで蛇に睨まれた蛙。自然と目が泳ぐ。

泳いだ目が自然と『誰か』の助けを求めてさまよう。人混みの中をふらつく視線がそれとなく会場の様子を探っていた木村の姿を見つけた。

「あつー！」

思わず俺は安心した声を出してしまった。

その様子をみてシャルティアが笑う。

「二人で盛り上がってしまつて恥ずかしいわ、姫様はご気分が宜しくない様ですから、目を改めてお話ししましょう、私は新しいお洋服のアイディアが無いからキイムラ男爵へ話を伺いに行きますわ」

「あう……」

マズった、木村を巻き込んでしまった。あのお嬢様は危険だ、だが声を荒らげる訳にも行かないし、木村に注意しろと伝える方法も無い。

ただ必死に木村に話し掛けるシャルティアを見つめるだけだ。

「どうしました？ 大丈夫ですか？！」

シノニムさんの声も無視する。

「やっぱりダックラム公の威圧感に圧倒されたか」

「当然だよ、女の子にはあの顔と威圧感はおつかないさ」

周囲の貴族は口々に語るが、その目はまるで節穴。

木村と話していたシャルティアがチラリと振り返り、再び俺と目が合う。

その目は笑っている様に見えた、俺が木村を大事に思っている事を知られてしまった。

いや、俺のメインスポンサーだし大事に思っただけ前なのだが、精神的にも支えにしていると思われてしまった。

第二王子との同盟も良いタイミングだ。こうなったら一刻も早く木村には俺の派閥から抜けて貰うしか無い。

いよいよ最近では鳴りを潜めていた俺の『偶然』が動き出す気配がする。

木村だけには絶対に生き残って欲しい、それだけが狂気と復讐にまみれた俺の希望となっているのだから。

その後はダックラム公爵家は早々に辞して行った。気を取り直した俺は挨拶を再開、パレードもこなし、広場ではサプライズゲストとして現れた第二王子へ、派閥の参加を表明した。

広場は驚きに包まれ、今回の集会は大成功に終わったが、俺の心は焦燥感で灼ける様
だった。

近衛兵長

「思ったよりも精強ですね」

「これは手厳しいな、国一番の部隊だと誇っていたんだが」

場所は城の中庭の練兵場、そこでは百人前後の兵達が訓練に励んでいた。俺達は第二王子ボルドーに連れられて、彼の擁する近衛兵を視察に来ていた。

「二人一人が選りすぐりの実力と頭脳を持っていて、全員が一団を指揮するだけの力を持つています」

「そうなのですね、そう聞くと勇ましく見えてきます」

王子の付き人ガルダさんの補足に頷く、思ったよりもと言うのは普通に失言だったのだ、俺のフォローは必死だ。

第二王子派の主な支持層は軍属だ。第一王子はそれこそ王子様然として華やかで、悪く言えばチャラチャラして、人気は有っても軍人受けが悪いのだ。

その一方で朴訥とした第二王子は軍からの受けが良い、ただちよつと、いや、かなり地味で人氣が無かった。

それを補うのがマスコット役の俺と言う訳だが、その俺が軍に受け入れられないなら

組織が瓦解してしまう。それに俺を護衛してくれる兵も、今後はここから選んでくれる様なので、その強さを見せつけて俺を安心させる狙いもある様だ。

「よう、こそいらつしやいました」

俺達を出迎えてくれたのは、190センチはあるかと言う上背の男、その身長の割に体は細く見えた。

だが貧弱と言う言葉とは無縁、引き絞った体には一分の隙も見当たらない。

「ああ、コイツはゼクトール、近衛兵長にして俺が知る限り最強の男だ」

「余りおだて無いで下さい、そう言われて姫様が比べるのはあの男でしょう」

田中の事だ、確かに最強の戦士と言われると思ひ浮かぶのはアイツ。少し感傷に浸つてしまうが、それを引き戻す様に嘲る声あざけが聞こえて来た。

「幾ら何でも冒険者風情が団長より強い訳ねーつての」

「ああ、団長も人が悪いぜ」

集音魔法を使う俺の耳には、小声で笑い合う兵士の声だつて聞こえてしまう。

この世界の冒険者、と言うより魔獣駆除人と言うべきか？ とかく地位が低い。地元もとに居場所が無くなった渡世人が食い詰めてなる仕事と言つた認識だ。

勿論英雄めいた人物も時折生まれるが、それすら本もとを正せば盗賊まがいの悪党だつたと言う事も珍しくない。

そして、あくまで専門は魔獣退治。仕事として対人戦を極めた騎士に比べると、直接対決では一段も二段も見劣りするのが普通だ。

それは解ってるが俺としてはやっぱり田中を馬鹿にされるのは面白く無い。

「国一番の騎士と言う事なら、お相手願いませんか？」

「姫様がですか？ 冗談でしょう？」

「姫様が魔法の使い手と言う事は聞き及んで居ますが、流石にその格好で訓練は無理でしょう」

キョトンとした様子のゼクトールと苦笑するボルドー王子。

確かに今の俺は略装とは言え可愛らしいワンピースのドレス姿で、このままちよつとした夜会に出ても失礼に当たらない姿だ、戦う格好じゃ無い。

「今回は及ばずながら僕がゼクトールと戦わせて貰うとしようか」

そう言つてボルドー王子が剣を取る。そう言えば今日の格好はギリギリ礼服か？

と言うぐらいのラフな格好で、初めから訓練に参加するつもりだったに違いない。

ちよつと気になるのが、俺へ話し掛ける時、『俺』だったり『僕』だったり『私』だったり王子の一人称が安定しない事だ。

恐らく女の子へ、特に俺の様な小さな女の子へ話すのに慣れて居らず、どうやって話し掛けて良いか困っている感が有る。

もうちょっと仲良くなる必要があるなと思うと同時に、王子もそう思っているからこそ格好いい所を見せに来たと言う感じか？

「頑張つて下さい、応援しています」

「こりやあ張り切らなきやな」

肩をすくめる王子だが、ゼクトールは目を細める。

「姫様の前でも、私は手加減しませんよ？」

「解つてるよ、お手柔らかにな」

そう言つて二人は練兵場の中心へ、周囲が固唾を飲んで見守る中、試合が始まった。

「ハッ！ テヤッ！」

振るうのは木剣、それでも当たれば当然大怪我だろうに、二人とも躊躇無く振るつて
いる。

人間は魔法で癒やす事も出来ないのに随分思い切つた事をすると思れるが、やはり非常識らしい、ガルダさんや他の兵士はヒヤヒヤした様子で見守っていた。

試合の内容は流石に兵長である、ゼクトールさんが圧倒している。

一見ボルドー王子が果敢に攻めているが、170センチそこそこのボルドー王子と一回り大きいゼクトールさんではリーチが違う。

それをボルドー王子は上手い事掻い潜るが。

「罨ですな」

「ええ」

眩きに応えたのはシノニムさん、彼女もそこそこ剣技を解っている様だ。一方でガルダさんはついて行けてない。

「よしッ！ え？ ああッ！」

ゼクトールさんが放った胸を突く一撃を王子は姿勢を低くして躲す。チャンスと見るやそのまま足を払おうと踏み込む王子だが。

「ぐあー！」

狙い澄ました蹴りが王子の顎を捉えた、ボルドー王子は堪らずひっくり返る。

「あちゃー」

額を押さえるガルダさんだが、王子が弱いとは思わなかった。ゼクトールさんが強いのだ、それもかなり差があるからこそ大怪我をさせずに無難に勝てる。

「やりますね」

「まず上背がありますからね、田中さんも同じぐらいありましたか？」

「そうですね、ですが彼は徹底的にリーチ差を押しつける戦法ではなく叩きつける威力を重視していました」

「魔獣を狩ると、どうしても威力を重視する様になるそうですよ」

「そうなのですね」

シノニムさんは物知りだ。そう言えば大牙猪ザルギルゴール相手に田中の攻撃は効いていなかった。

魔獣は固い。だからこそ威力を求めると言う事だろう。田中だって一つ下の牙猪ギルゴールは余裕で倒せていたらしいので、剣の威力はあつたのだろう。

そう考えると、田中の剣は前世の剣術とは大分違つたし、何時も剣が馴染まないとボヤいていたものだ、木村の財力と俺の魔法があれば日本刀だつて再現出来たかとも思うと、空しい気持ち募る。

「オイオイそれじゃ、団長の剣が魔獣に効かないみたいじゃ無いか、それは聞き捨てならねえな」

そんな俺たちに割つて入つたのは、暑苦しいほどにガツシリした体格の、粗野な男の声だつた。

「貴方は？」

「ああ、失礼、俺はここの副長のワツツだ。ウチの団長は対人戦だけじゃねえ。魔獣だつて何匹も狩っているんだぜ」

「どう言う事です？」

「どうもこうも、団長は信じらんねえ事に長期休暇たびの度に、ピルタ山脈のあたり迄ちよく

ちよく魔獣を狩りに行くんだ」

「本当ですか？」

「あたぼうよ、俺は嘘は苦手だね」

そう言うウツツは、イライラするほど良い笑顔を見せてくる。

「オイ、勝手な事を言うな」

そこにゼクトールさんが戻ってくる、王子を連れ立ってだ。

「いや、情けない所を見せてしまった」

「いえ、ゼクトールさんが強すぎるだけでしょう、他の兵士と比べれば見劣りしない実力に思えました」

「そう言って貰えると救われるな」

頭を掻くボルドー王子だが俺の言葉は掛け値無しの本心だ。むしろ他の勉強そつちのけで剣を振るって来たに違いない。

「この奴らは上級騎士の中でも選りすぐりのエリートなんだから、王子と同じ程度の実力じゃ問題なんですけどね」

そう言って呆れるゼクトールさんに「俺程度とは何事だ」と食ってかかるボルドー王子。

二人もまた気心の知れた男友達と言った風で、なんとなく羨ましい。それはそれとし

て魔獣について聞いておこうか。

「休日は魔獣を狩りにピルタ山脈まで行くと窺いましたが？」

「ああ、趣味と訓練の一環ですね。流石にザルギルゴール大牙猪なんて大物にはお目に掛かった事も御座いせんが」

「そうは言ってもギルゴール牙猪なら何匹か狩ってますぜ」

ワッツが無遠慮に割って入る。

つまりゼクトールさんは田中と同じぐらいの実力があるのか？ 因みにギルゴール牙猪だって小型車ぐらいのサイズがあるので大変な大物だ。

「お前は出しやばるな！ 私ギルゴールは牙猪相手でも大変な死闘でした。あれより大きいとなるとちよつと難しいでしょうね」

そう言つてゼクトールさんはワッツを小突きながらフォローしてくれる。

「しかしアレより大きな生き物など想像もつきませんなあ」

「オイ！ 失礼だろうが！」

ワッツはザルギルゴール大牙猪自体を信じられないと言いたげで、ゼクトールさんも流石に怒り出しました。

ま、俺だつてこの目で見てなきや信じられない位だ、大型トラックみたいなのが森を分け入ってくるのは恐怖でしか無い。

それでもワッツの態度は不快だけだな！

「何でしたら、大牙猪ザルギルゴールを仕留めた一撃をご覧に入れましょうか？」

「へえおもしろえじやねえか」

ワッツは野太い声で笑う、望む所と言った感じだ。

今の魔力じや魔獣の巨体を沈める様な大穴は無理でも、人間一人落とすぐらいの穴は訳無い。

俺としてもここらで魔法のお披露目をして、エルフとの協力の有効性を示しておきたい。

人間界でも魔石を使った魔道具で地形を変える事ぐらい出来る筈だ。戦場にいきなり落とし穴が作れる有用性は語るまでも無いだろう。

しかしそんな思惑はシノニムさんに止められてしまった。

「いい加減にして下さい、こちらにも予定があります」

「そうですか……」

別に魔法で相手の頭を吹っ飛ばすつもりは無いのだが、最近のシノニムさんは俺が魔法を使うと聞くとビビってしまって仕方が無い。

結局、魔法のお披露目も出来ずその日は大人しく帰るしか無かった。

後日聞いたら、大分負けん気の強いやんちゃんお姫様だと思われてしまったらしく、

ちよつともによる。

しかし、団長のゼクトールさんは王子とも仲が良いみたいだし、魔法の実力を見せて置きたいね。

ピルタ山脈か……

★近衛兵長2

俺は、ストレスに狂いそうになっていた。

原因はシャルティア。あの蛇みたいな目を思い出すだけで背筋がゾツとする。

じゃあ殺してしまえば良い！ と思いついたモノの、真つ昼間に殺してしまえば、怪現象だと言われ、疑われるのは魔法使いである俺。

じゃあ夜は？ と言うとお嬢様は地下室に引き籠もってしまう。

貴族のお嬢様が地下室で寝るなんて聞いたことが無い。

シャルティアはルワンズ伯を殺ったのが俺だと感付いているに違いなかった。そんな状況で社交界やら、園遊会やら、ストレスでハゲそうである。

で、そう言う時には気分転換である。

「姫様？ どこに行くんですか？」

窓に足を掛けた俺に、ネルネは呆然と声を掛ける。無理も無い、時刻は深夜アニメモやら無いぐらいのド深夜である。

「ちよつとピルタ山脈まで」

「ええっ？ 冗談でしょう？」

いやいや、この格好を見て欲しい。どこに冗談があると云うのか？

皮のチョッキにグローブとブーツ。スカートでは無く半ズボンにタイツ。長くて邪魔な銀髪はアドベンチャーハットの中に納めてある。

どこからどう見てもキャンプに行きますと言う装いではないか？ 俺はソロキャンプに行く！

「荷物は何？ それに一人で？」

荷物など要らないのだ。テントや窯は土を魔法で固めればOK、水は湿度があれば土や空気から集められる。火を付けるのも魔法で十分。

ホラ！ 荷物なんて塩と携帯食が少々あれば十分。それに、魔法の移動に付いてこられる人間が居ない以上、同行者は邪魔でしか無い。

「メチャクチャですよ！ だって夜ですよ！」

……いや、夜じゃないと止められるじゃない？

「はあ、精々捕まっておきなさい。王子様が派遣した近衛兵は凄腕ですからね」

あ、ネルネの奴、俺の脱走が失敗すると思ってるな？ 今までとは違うって。でもね、魔法の力で屋根から屋根へ飛び跳ねたら誰も捕まえられっこないから。

「じゃあね！」

そう言い残して、俺は窓から颯爽と飛び出した。

寝不足なので宿屋で一眠り。朝にチェックインする美少女の存在は不審だったに違いないが、深くは突つ込まれなかった。

昼過ぎに目を覚ますと、簡単な朝食？ を採つて早速山に突撃。

昼過ぎから山に入るなんてクソ馬鹿と罵られそうだが、魔法の力が有ればなんとかするだろ……多分。

それに、先に入ったゼクトールさんに合流すれば良いだけ、俺の運命視が有れば余裕だろ？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

つてのがフラグだと自分でも覚悟していたと言うのに、ゼクトールさんはあっさりで見つかった。

……しかし。

「まっさか、ギルゴール牙猪と戦闘中とはね」

山脈の中腹、ぽつかりと開けた場所で陣取つていたギルゴール牙猪に、ゼクトールさんが攻撃を仕掛ける所だった。

コレがザルギルゴール大牙猪なら助けに入ったが、ギルゴール牙猪は倒した事があると聞いている。コレは特等席で観戦せねば。

俺は木から木へと魔法で飛び移り、見やすい場所をキープ。樹上ならギルゴール牙猪に襲われる

心配は無いのだから気楽なモノだ。

少し遠いから望遠鏡を取り出し、集音の魔法で現場の音をお届け、臨場感アップだ。

ゼクトールさんが懐から取り出したのはなんだ？ 俺は必死に望遠鏡を覗き込む。

スリング
投石機か！ しかし、相手は軽自動車サイズのイノシシ。そんなんじやダメーじは与えられないぞ？

ゼクトールさんは近場の石をスリングに包むと、グルグルと回し始める。

「シッ！」

気合いの一声と共に放たれた石は、ギルゴール牙猪へ命中した。

——グルウ？ グガアツ！

ゴツンと鈍い音が響いたが、それだけ。人間なら即死の一撃だろうが魔獣には効果が薄い。何事かと首を捻るだけ。

それでも良いところに入ったのか、ギルゴール牙猪は足をふらつかせた。しかし、ゼクトールさんは追撃しない。

ギルゴールいよいよ牙猪はゼクトールさんを見つけ、低く構える突撃体勢をとる。

てつきりファーストヒットを生かして攻め込むと思ったが、このままではゼクトールさんはギルゴール牙猪の突撃を受けてしまう。

——グアアアア！

咆哮、そして突進。牙猪ギルゴールの真骨頂。一トン近い重量が高速で突っ込んで来るのだから人間に止める術は無い。

それをゼクトールさんは槍を構えて迎え撃つ。

馬鹿な、と思った。

獣の突進、それも人間の十倍はあろうかという体重を持つ魔獣の突進を人の身で止める事は不可能。

——ドオオン！

最悪の想像に顔を顰めた俺の想像とは裏腹に、牙猪ギルゴールは槍を構えたゼクトールさんを吹き飛ばせなかった。

ゼクトールさんの構えた槍は背後の木に支えられ、つかえ棒の様にして牙猪ギルゴールの突進を受け止めたのだ。

——グギヤアアアア

突っ込んだ勢いで自らの鼻先に深々と槍を刺してしまった牙猪ギルゴール、だが、それでも止まらない。首の一振りですき刺さった槍を吹き飛ばして見せる。

ゼクトールさんはその動きに逆らわず槍を手放し、木を盾に回り込む。

ソコからはもう、大立ち回りだ。地形や木を生かし、少しずつダメージを蓄積させていく。

流石は第二王子の懐刀。圧倒的質量を誇るバケモノに一歩も引かない。

か弱い人間にとつて、一つミスを犯せば即座に死ぬ様なギリギリの勝負。

俺は手に汗握つて観戦していた。対戦時間は優に二十分近く、終わりの時は近づいていた。

「はああつ！」

槍は深々と喉元に突き刺さり血が噴き出した。決着である。

「おぉー」

俺は樹上でパチパチと手を叩く。

途中で颯爽と現れるつもりが、最後まで観戦してしまった。ピンチに駆けつけるプランがおじゃんである。

ピンチに樹上から颯爽と舞い降りるのが理想だったが、仕方無いので地上からトコトコと近づいた。

「流石の腕前です、あの失礼な副官が言うだけの事はありますね」

「誰だ！ え？ まさかユマ姫ですか？」

ポカんとするゼクトールさん、そりやそうだろう。森の危険地帯にお姫様がやってくるとは思わない。

「何故こんな所に？ お一人ですか？」

「そうです、魔獣狩りと聞いて興味があつたので、それにしても見事な手並みですね」
「こちらら興奮のあまり勝利者インタビューに駆けつけた次第だが、露骨に胡散臭い顔をされてしまった。」

「いや、だつたら解つているでしょう？ ココは危険です！」

「私の心配は無用です。自分の身は自分で守れます」

「お転婆も大概になさい！ 我々は貴女を守るために日々働いているのです」

「私が抜け出した事すら誰も気が付かないのに、ですか？」

「なっ？」

言われて思いだした様だが、俺は凄腕の護衛を振り切つて来ているのだ。舐めて貰つちや困る。

「一体全体なにがしたいのです？ こんな所まで」

「ボルドー王子の側近であるあなたには、魔法の力を知つて貰いたいと思ひまして」

「ただそれだけの為にココまで？ 正気ですか？」

……まあ、キチガイだよ。自分でも思うけど、ストレスでおかしくなりそうだったんだよ。ソロキャンプしたい。

「大穴を開ける様な派手な魔法は城では使えないでしょう？ それにここは魔力も濃い。魔法を見せつけるには絶好の——」

その時、首筋にチリリと痛み。

「姫様?」

首を傾げ近づいて来ようとするゼクトールさんに対し、俺は手の平を突き出し必死に止める。

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

「何を?」

何って? 俺にも解らない。ただ嫌な予感がした時は逃げなくては死が待っている。

俺は魔法を使つて跳ねた。木の幹を蹴り、一気に樹上へと駆け上がる。

「え?」

ゼクトールさんが間抜け声を上げるのも仕方が無い。俺が居た場所へと入れ替わりに飛び込んで来たのは巨大な蜘蛛。

ザルアブキユリ 大土蜘蛛! ザルギルゴール 大牙猪よりは一段劣るが、大森林でも最強レベルのバケモノだ!

ギルゴール 質量こそ牙猪の半分以下だが、足を広げたサイズは遙かに大きい。その足の外骨格は鉄よりも固く、倒すには四つの巨大な目を潰すしか無い。

「何だ!?! アレは!」

ザルアブキユリ 「大土蜘蛛です」

樹上から声を掛けるが、ゼクトールさんは混乱していた。

「そんな魔獣聞いた事も無いですが？」

「よそ見は危ないですよ？」

「なっ!?! グッ!」

ザルアブキユリ
大土蜘蛛が長い脚をカサカサと動かせば、あつと言う間にゼクトール氏の目の前に迫っていた。

実は大土蜘蛛ザルアブキユリの実物を見るのは俺も初めて。想像以上に素早く、危険な魔獣だった。

頭上から振り下ろされる脚の一本一本が、鋼鉄の槍での一閃よりも尚鋭い。初見でありながらそれを紙一重で避けてみせたゼクトールさんは流石と言える。

「気をつけて下さい、牙猪ギルゴールより格上の魔獣です。大牙猪程では無いですが。とにかく素早くて固いです」

そんなアドバイスをしながらも、俺は魔法の矢を放つ。

——シュツ、ガアアン!

しかし、外骨格を凹ませるだけに終わる。

目を狙ったのだが、魔法で制御可能とは言え、あそこまで素早く動かれると中々どうして難しい。

外骨格に歯が立たないのはゼクトールさんの剣も同じだ。

突き込まれる脚と、それを切り裂かんとする剣が交錯する。

——ガアアアン！

甲高い音を響かせ、脚の軌道を逸らす事しか出来ない。やはり目を狙うしか無い。

しかし、このままじゃ何時かゼクトールさんは死んでしまう。どうにか身を守つて貰えれば、その間に俺が一方的に目を狙えるのだが……

と、ソコでゼクトールさんは木を盾にする作戦に出た。牙猪ギルゴールに使った手だが、

大土蜘蛛ザルアブキユリには悪手。

奴らは木に張り付き、登るのだ。

頭上から飛び掛かる蜘蛛を防ぐ術など無い。木に張り付いた蜘蛛を見上げるゼクトールさんの顔が絶望に染まる。

——バシユツ！

間一髪、俺の矢が間に合った。ベチャリと蜘蛛が地面に落ちる。コレで目を一つ潰した、残り三つ！

「目を狙つて下さい、他は効きません」

まだゼクトールさんは呆然としている、俺の魔法のお披露目らしいハードモードでお送りしているので仕方が無いか？

いや、ゼクトールさんは果敢に斬りかかり、目を狙った。流星である、切り替えが早い。

但し、脚が長すぎて剣が届かない。何故槍を使わないのかと思つたが、先ほどの光景を思い出し納得する。

剣を使つて脚を打ち払わねば、生き残るのも難しいのだ。だつたら、そのまま守りに徹して貰い、俺が狙う！

——だが、^{ザルアップキユリ}大土蜘蛛がコチラに向かつてきた。

そう、コイツらは牙猪ギルコールと違い、木に登るのだ。俺は魔法の移動で木から木へと飛び移つて逃げるが、大きく逃げ過ぎるとゼクトールさんが襲われる。

その繰り返しとなつてしまい、突破口が見出せない。

そして徐々にゼクトールさんの動きが鈍る、^{ザルアップキユリ}大土蜘蛛の八本の腕から繰り出される攻撃に、捌く事も躲す事も不可能な攻撃が混じる。

そうだ、ゼクトールさんは連戦、体力も続かない。むしろ、ココまで紙一重の回避が続いたのが奇跡。

「ぐあつ！」

受けたのは右太もも。一息に貫かれ、大穴が空いた。

——バシユツツ！

薄情な様だが、俺はその隙に^{ザルアップキユリ}大土蜘蛛の目を打ち抜く。残り二つ！

「その調子、そのまま足止めと防御に徹して下さい」

……？ ゼクトールさんに随分と恨めしげな顔で睨まれてしまった。

あ、そうか！ 普通だったなら再起不能の大怪我、二度と兵士として活躍出来ない程である。

ただし、俺には魔法がある。一ヶ月もすれば完治するだろう。

だと言うのに、ゼクトールさんは捨て身の行動に出る。

振り上げられた大土蜘蛛ザルアブキユリの足、動けないゼクトールが選んだのは転がったの回避ではなく、僅かに上体を反らせるだけ。当然避けきれず顔を掠め、グチャリと右目が潰れるのが判った。

更に追撃と蜘蛛の顎が迫る。そこに敢えて左手を差し出すでは無いか！

ギヤリギヤリと手ガントレット甲ゴと手をかみ砕かれる。コレは治すのに手間が掛かるぞとゲツソリするが、チャンスには違いない。俺は急いで矢を番える。そしてゼクトールさんは右手で剣を振り上げる。

——ギイイ！ ギヨオオオオオオオオ！

魔法と剣、それぞれが残った二つの目を潰すのは同時だった。

不気味な魔獣の断末魔と共に戦いは終わった。ゼクトールさんの捨て身の行動は結果的にベストだったと言える。あのまま戦いが長引いては、二人とも危険だった。

「やりましたね！ 大丈夫ですか？」

ウキウキで声を掛けたのだが、当のゼクトールさんは死にそうな顔で元気が無い。つて言うか、死にそうである。

「傷を見せて下さい、コレは……酷いですね」

左手も、右目も潰れて、右足の出血も無惨なモノ。

俺は帽子を脱ぐと、髪を纏めていたりボンを外す。太ももの付け根を縛れば取り敢えずの止血は可能のハズ。

右足よりも右目の治療が優先だ、不純物が入れば視力は一気に落ちてしまう。

だが、治療を焦る俺を押し止めるのがゼクトールさんだ。

「やめて下さい、もう俺はここで死にます」

「なぜですか？」

いやいや、死ぬには早いだろう。回復魔法は疲れるが、魔法のデモンストレーションに最適と割り切った。

ピルタ山脈は魔力が濃い、ココでなら十分治療は可能なのだ。

だが、それを信じて貰えない。再起不能の怪我に、騎士としての自分は終わりだと勘違いしてしまっている。

本人に拒絶されれば回復魔法は抵抗されてしまう、どうしたものか……そうこうしている内に、右目の状態は危ない。

汚れが入れば取り返しが付かないからだ。まずは潰れた右目を綺麗にしなくては……どうやって？

——舐めよう。

オツサンの顔をペロペロ舐める。

正直言つて、あんまり嬉しくは無いのだが、逆に考えよう。

俺がオツサンになったとして、美少女に顔をペロペロ舐められたらどうだろう？

絶対に嬉しいに決まっている、つまりコレはサービスだ。慈善事業、ゼクトールさんを取り込む為の投資と言つて良い。

俺がズズイと顔を近づけると、ゼクトールさんはぼーつとした顔で俺を見つめる。

コレはどう見ても俺の美しさに参つてる顔だろう。ゼクトールさんの好みじゃなかったらどうしようかと思つていたが、杞憂のようだ。

そこから更に顔を近づけると、いよいよゼクトールさんは焦りだした。

「なんです？ 手向けにキスでもしてくれませんか？」

「違いますけど？」

ふざけんな！ 流石にソコまでサービスはしないよ？

俺はゼクトールさんの右目に口を付ける。

ペロッ、ペロペロ

ちと塩っぱいな……なんの液体だ？ コレ。

俺が潰れた眼球を舐めていると、ゼクトールさんは混乱の声をあげた。

「？ なっ!!? なにを？」

「何って、目はくつつけても、汚れや雑菌が混じると白濁したり視力が失われたりするのです」

俺がそう言えば、ゼクトールさんは優しい顔で笑った。一転「なるほど、ありがとう
ございます」とすら言い始めた。

……コレ、信じてないな。潰れた目が治るって普通じゃないもんな。

うーん、結局コレでは抵抗されてしまうぞ……ん？

「アレ？ 抵抗がなくなっただけ。コレなら行けるか？ 『我、望む、汝に眠る命の輝きと
生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給え』」

回復魔法を唱え、手を目に翳す。ぽおつと淡い光が灯ると、潰れた目がゆつくりと元の姿を取り戻していく。

「なんっで？ 見える！」

「おお、良かった成功した」

潰れていない左目を左手で隠し、潰れた筈の右目の前で右手を振れば、ゼクトールさんの右目はその動きをハッキリと捉えていた。

大成功である！ ふんぞり返る俺を尻目に、折角治した目をまん丸にして、ポカんと虚空を見つめるばかりなゼクトールさん。

魔法初心者には刺激が強すぎたかあ？（どや顔）

この世界、怪我からの不具に悩む者は大勢居る。それこそ貴族にすら。

そんな彼らに怪我を治すと言えば、金貨をうずたかく積み上げて懇願するだろう。

アイス作りなんぞよりもよっぽど強力なカード。だが、あまりにも強力過ぎて、国中から狙われる事態に陥っても不思議じゃ無い。

俺のこの力をどう使うか、ボルドー王子にお任せしたいと言うわけだ。

とりあえず、折角の魔力溢れる土地、治療を終わらせてしまおう。

魔法は人間の再生能力を増強する。放置しただけでは絶対に治らない大怪我すらも治療が可能なのは、止血を優先する体ごとにかく穴を塞ぐ事を優先するのに対し、回復魔法は無事だった細胞を選んで上手いことくつつけるから。

かさぶたが出来てしまうと、むしろ回復魔法で治すのはグツと難しくなる。

治す順番は大事だ、そして難しい魔法を使うとなれば自然と独り言も増える。

「んじや、次は右腿、いや左手が良いか？ あ、でも血も肉も足りなくなるな」

そして、失われた血は魔法で作れないし、失われたタンパク質の補充は急務だ。

「あつ！ そう言えば肉は大量に有ったな！ どう？ キルゴール 牙猪の肉？ 田中が言うには結

構イケるらしいですよ？」

俺は塩をとりだし、ゼクトールさんに笑顔を向ける。

ピルタ山脈では俺の健康値は40近いんじゃないかな？ 小さい頃大牙猪ザルギルゴールの肉を目

前にお預けを食らったのがずーっと心に引つ掛かって居たのである、ここらでリベンジ
と行きたい。

だが、ウキウキな俺と対照的に、呆然とするばかりのゼクトールさんなのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから四日後、無事に王都へと戻ったゼクトールだったが、いまだにあの日の事が
信じられない思いで居た。

近衛騎士として、ゼクトールに与えられた城の一室に、大声を上げて飛び込んできた
のはゼクトールの親友であり第二王子でもあるボルドーだった。

「オイッ！ ユマ姫と魔獣を狩ったと言うのは本当か！」

「そうですよ、ザルアブギユリ大土蜘蛛とか言う巨大な蜘蛛です。牙猪ギルゴールより格上の魔獣らしく私では全
く歯が立ちませんでした」

「それを二人で倒したのか？」

「二人と言うか、殆ど姫様一人でやった様なものですよ」

「そ、そうか……」

ゼクトールとしては自分はただの困だったと言うのが今の率直な感想だ。自分を置いて逃げるだけならユマ姫は何時だって出来たと、今なら解る。

一方でボルドーは知らない凶悪な魔獣がこの付近に現れた事に施政者としての対策に頭を巡らせていた。

ゼクトールはその様子を微笑ましく見つめていると、ボルドーは慌てた様に弁解する。

「いや、その何にしても無事で良かった」

——全く無事では無かったんだが、そうは見えないよな。

左手を閉じたり開いたりする様子を右目で見る、どちらも違和感は無。右腿の大穴も塞がって元通り。

恐ろしい力だ、しかし味方で有ればこれほど頼もしい力は無い。

「ボルドー、いやボルドー・ラ・ヴィット・ビルダール殿下」

「どうした？ 改まって」

「ユマ姫様は絶対に敵に回さないで下さい」

「……それ程に、魔法は強力か？」

「噂以上かと、その力が知られれば、何が起こるか想像もつきません」

「……そこまでか」

「ええ、助けられた身故、どうか私の口からではなく姫様から直接、魔法について伺って頂きたく存じます」

ゼクトールの言葉に、ううむとボルドーは唸る。

ゼクトールは忠臣として主人に洗いざらい話すべきかと思つたが、それは危険と考えた。

治療魔法はやはりと言うか、ユマ姫もそれを公にするのは気が進まない様子であつたのだ。

今でも菓子子の製法を探らんとする不埒な商人は引きも切らないと聞くが、比較にもならない狂乱に巻き込まれるのは目に見えている。

秘密にしている以上、自分は姫様の言葉の証人として選ばれたのだと思つていた。

だとしたら、自分の見解を話すのは後で良い、変に話せば信頼を失う事になりかねないとゼクトールは結論づけた。

「絶対に敵には回さない様に、逆に味方であれば王子の身はあらゆる事態から守られま
す」

「そこまで言うか？」

「はい、ですからボルドー殿下にはいつそユマ姫を口説いて頂きたく」

「はあ？ お前それは」

「本気です。もし殿下が口説かないと言うなら私が口説きます」

「ハッ、余り笑わせるな……」

ボルドーはゼクトールの言葉を冗談かと思ったが、恐ろしい事にゼクトールの目は本気の様に見えてしまった。

「オイ、お前とユマ姫じゃ俺以上に歳が離れているだろうが！」

「それどころか死んだ妻との間に、生まれた息子が今年十二になります」

「馬鹿か！　じゃあ息子と……って言うのが普通だろうが」

「いや、アイツにはまだ早い！」

「お前には遅すぎるわ！」

親友と笑い合いながらも、ボルドー王子は首をかしげる。

ちよつと前までボルドー王子は、ユマ姫が軍部に受け入れられるかを心配していた。それが、今や近衛兵達は皆ユマ姫に心酔している様子だ。

堅物に思われたゼクトールまでこの様子では、今度は組織を乗っ取られる方を心配しなくてはならない。

冗談だと思っていたもう一人の親友ガルダの忠告を思い出す、もしもあの可憐な少女の顔が全て演技とするなら、裏にはどんな顔があるのだろうか？

「ゼクトールに言われるまでも無く、今度じっくり話し合わなくちゃならないな」

王子はいよいよユマ姫と向かい合う事を決意した。守るべき少女としてでは無く、一人の盟友として。

可憐な姫の素顔

ピルタ山脈へ三泊四日の強行軍を仕掛けた俺は、帰って来るなりシノニムさんに怒られていた。

「なぜ！ どうして？ 魔獣退治なんて無茶をしたんですか!？」

その疑問はもつともだが、一言で説明するのは難しい。俺は手元でザルアブギユリ大土蜘蛛の魔石を転がしながら答える。

「……ストレスが溜まっていたのです」

「ストレスとは？」

ストレスの原因はハッキリしているが、それを正直に打ち明けるのは躊躇した。

「日々、自由が無く行動が制限されるものですから」

「すべて貴女を守る為なんですよ!」

それはその通りなのだが、イライラの本当の原因は魔人公と恐れられるダックラム公爵……ではなく、その娘、シャルティアをぶつ殺せない事なのだから、打ち明けられる訳がない。

もはや氷の矢とか生ぬるい事は言わずに、普通の矢で射殺いころしてやろうとすら思ってい

るのだが。中々シャルティアが隙を見せないのだ。

いつそ、第一王子を殺してしまおうかと思つたが、それはマズイ。

今の俺達には第一王子をはじめ、政敵となる存在は少なくない。だがそこで安易に暗殺と言う手段を選択するのはリスクリターンが合わないのだ。

まずリスクについて考えてみると、例えば第一王子の様な大物を暗殺してしまえば犯人を捜し出さねば収まらない事態になるのは明白だ。

そして、その死因があまりにも不可思議な物だった場合、『魔法の仕業だ！』『魔法使いと言えば？』『ユマ姫だ！』の三段論法で俺が犯人にされてしまう。

いや、その場合はホントに俺が犯人なのだが、証拠が無いから無罪と行かないのが中世の理屈な訳で、更に嘘発見器に掛けられてしまえば言い訳のしようも無い。

嘘発見器と言え、ルワンズ伯を氷の矢で殺したのは、不思議な暗殺が起きた時、どう言う成り行きになるかを見守っていた側面もあったのだ。

ハツキリ言つてあの件だつて当然、嘘発見器に掛けられたらヤバかつた。

しかし、嘘発見器を貴族に使うには、訴える貴族がその責任を負う必要がある。

当たり前だ、気軽にポンポンと嘘発見器に掛けるぞと訴えられたら、とても政治が回らない。貴族としての地位とプライドを賭ける必要がある。

国賓として貴族扱いである俺を訴えたルワンズ伯。奴は意気揚々と俺を尋問室に連

れて行ったものの、俺が本当にオルティナ姫を前世に持つと証明するや、一気に立場が弱くなり、結果俺を憎むようになっていった。

それ以来、ルワンズ伯は俺のことを嘘発見器すら誤魔化す魔女と断じていたので、ルワンズ伯が暗殺された時ですら、奴を支持していた貴族達も俺を嘘発見器に掛ける事は出来なかつたのだ。

そりやそうだ、百歩譲って俺がオルティナ姫の生まれ変わりなのだと思っても、俺が神の使命を帯びてこの地にやってきた等と信じる方がどうかしてる。

……代わりに大量の暗殺者をけしかけたみたいだが、それらも第二王子傘下に入った時点でピタリと収まっている。

そんな訳で勝算こそあったものの、あれだつて結局誰かがイチかバチかで俺を嘘発見器に掛けたらヤバかった。実際は綱渡りであつたのだ。

と、そこまで織り込んだ上で、それでもシャルティアは危険に過ぎた。

どれだけ危険かと言えば、シャルティアに目を付けられた辺りから凄いい勢いで俺の巨大な運命力が削れて小さくなっている。

先程暗殺のターゲットとして第一王子を殺すと危ないと言つたが、そんな危ない橋を渡つた末に、リターンが有るかと言えばそうでもない。

例えば第一王子を殺してもその後ろ盾となる勢力が、王位や権力の座を諦める訳も無

く、他の第一王女とかに神輿をすげ替えるだけだ。

それに引き換えシャルティアは……あんな化け物にすげ替えが効いてたまるかと言いたい。

なので腹を括つてさあ殺るぞと、先週あたりからちよくちよく屋敷を抜け出して、夜の王都へと飛び出していった。

だが、その成果は芳しくない。ダックラム公爵の邸宅にシャルティアの運命光は無く、王都中を屋根から屋根へと忍者みたいに飛び回って探した結果、ダックラムの持つ私邸の一つに引きこもっている事が解った。

しかもシャルティアは絶対に窓際に窓際の部屋に寝泊まりしない。それどころか窓際に出てくる事も少なく、地下室で過ごす事すら多いなど徹底している。

コレはもう間違い無く、相手にも俺のやり口がバレていると思つて良さそうだ。

それと平行して、俺が矢を魔法で制御して恐ろしい火力を出せると言う事は、凄いい勢いで広まってしまった。

劇中では見せているものの、フィクションだろうと信じていない者が大半だった魔法が、事実として受け入れられたのはエルフの力を示す意味では願つたりだが、いかんせんタイミングが悪過ぎた。

魔法の力でポロポロに砕けた矢なんて物まで証拠として見世物になつてゐるらしい。

それと同時にシャルティアは「ユマ姫様のご機嫌を損ねてしまったみたいで、魔法の矢で何時射られるのじゃないかと気が気じゃ無いわ」と周囲にこぼして「心配性ね」と笑われているらしいのだ。

この段まで来ると、流石に俺も矢での暗殺を諦めなくてはならなくなった。

恐ろしい相手を前に、俺はいよいよ手詰まりになってしまっていた。そのストレスが俺を森へと掻き立てたと言うのは流石に言い過ぎか？

とにかく、家でじっとしていると、突然あのお嬢様が窓から入ってくるんじゃないかと言うプレッシャーに耐えきれなくなったのだ。

常に目を瞑って運命光を確認したり、敵意を確認する魔法の閾値を下げ過ぎて、野良猫の喧嘩に夜中に飛び起きたり。

いよいよ奇行が本格的に心配される様になってしまった。

変な事をする度にネルネも必死に俺の背中をさすってなだめてくれたりするので、なんとも居たたまれない。

何より睡眠時間的に限界だった。例えばピルタ山脈に向かったのもまともな思考回路じゃあり得ない。殆どヤケクソになってたみたいだ。

こうなれば、素直にシャルティアが怖いと相談する必要があるかも知れない。

実際に知恵を出し合うのもそうだし、シャルティアもやっている事だが、もし自分が

死んだら、誰が犯人として怪しいか周囲に相談して話題にしておくのは、抑止力としても効果がある。

頭を抱えて考え込む俺に、諦めた様なシノニムさんの声が掛かる。

「実は第二王子から腹を割って二人で話したいと連絡を受けているのですが」

「ボルドー殿下からですか？」

「その調子じゃ辞めた方が良いでしょうね」

「いえ、会いましょう！」

「ですが、ストレスでおかしくなりそうなのでしよう？　問題発言をされてしまえばユ

マ様一人の問題では無いのですよ？」

「そのストレスを取り除く為の相談です」

「だ・か・ら！　そのストレスとは何なのですか？」

堂々巡りである。

結局シノニムさんには魔人公を脅威に思っている事を伝えると、思ったよりも普通の悩みだと拍子抜けされた。

しかし、脅威の対象が魔人公そのものではなく、むしろその娘シャルティアだと伝えると流石に信じられない様子で。

「だとすると、七年前の暗殺事件ではシャルティア様はユマ様と同じぐらいの年齢です

よ？　とても暗殺なんて可能とは思いませんか？　……まさか？　シャルティア様も魔法が使えるとおっしゃっていますか？」

「いえ、それは違うと思うのですが……」

でも、正直自信が無い。俺がシャルティアの住居に近づくと、運命光が地下室に移動するなんて事が二度も有ったのだ。

コレが偶然や勘の冴えなどで起こり得るのか、判断がつかない。

その辺りもあって、どうしても奇襲出来るビジョンが浮かばないのだが、魔法か何かとすれば納得も出来る。

考えてみればオルティナ姫の運命視だつてかなり特殊な能力だ。魔法じゃ無かつたとして、シャルティアに何か特殊な力があつても不思議じゃ無い。いや、考えるほどにあれほどの運命光の持ち主だ、何か特殊な運命に干渉する力があると思つた方が納得できさる。

「……魔法とは限りませんが、何か特殊な能力を持つていても不思議じゃないと考えています」

「むしろ、そう言う力があると殆ど確信しているのですね」

「……はっ」

魔力がある世界だからか、この世界では飛び抜けた人間が突然変異的に現れる事が有

る。あいつはソレだ。間違い無い。

そうして俺はシャルティアの事を第二王子と相談する事にした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

かくして俺達は第二王子の住む、城の別棟にやってきていた。

一口に城と言っても本丸以外にも別棟が幾つもある。その中で第一王子カディナールの住まいは豪華絢爛と謳われ、社交界が毎日の様に開催されるとか。

一方で第二王子の別棟は、その人となりを表す様に地味だった。王子の邸宅と言うよりは砦と言われた方が納得がいく。それ程に無骨な佇まいたたずであった。

「このお屋敷はまるきり戦闘用に出来ているのですね」

俺が驚いたのは、通された中庭に芝や植え込みが無い事だ。

コレは貴族の邸宅としては非常に珍しい。少なくともオルティナ姫の記憶では、綺麗な庭は貴族のステータスであったハズ。

その証拠に俺が厄介になっているネルダリア領主のお屋敷、質実剛健を旨とし貴族が使うに相応しい家具すら碌に整って居なかったと言うのに、庭だけは美しい植栽で彩られていた。

俺がギョツとするのも当然なのである。

「そうなんですよ、アイツ本当に役に立つかどうかしか興味が無くて、殺風景な庭に有る

唯一の緑と言えばホラ、アレ位ですよ」

案内を買ってくれた王子の付き人たるガルダさん、彼が指さす先に有ったのは青々と茂る……

「……あれは？」

優美さの欠片も無い青々とした茂みが並ぶ、どこかで見た事がありそうで、しかしその正体が解らない。

オルティナ姫は幼い頃に盲目となった。そのため俺はこの王都の観葉植物に詳しくないのだが、それにしたって姫の記憶に全く無いのは珍しい。

俺の疑問の声に、驚きつつも答えてくれたのはシノニムさんだった。

「まさか？ 芋ですか？ 貴族の中庭で芋の栽培とは……ポルドー様はここで籠城戦でもするおつもりですか？」

まさかの芋。

……参照権で全ての記憶を紐解けば、むしろ見たのは最近。スフィールの市場で見た事があったっぽい。でもまさか大国の王子が庭で芋の栽培とは。

「どうせ育てるなら食えるモノにしろって、こうですよ？ あの方は優雅さなんて理解出来んのですよ」

諸手を挙げて大いに嘆いて見せるガルダさんだが、本音ではそんな友人への好意が透

けて見える。

友達と住み家を見れば本人の人柄も知れる。ボルドーはやはり実直で裏表の無い良い奴なのだ。

だが、それでいてボルドーは馬鹿じゃ無い。そんな相手に裏表どころか中身と外見が重大な齟齬を起こしている俺の様な人間を根っから信用して貰うのは難しい気がしてしまう。

考え事をしている間に、いよいよ邸内へ。

屋敷の中もグレーのレンガが剥き出しで、しゃれっ気も皆無。極めつけが「窓かと思つたら矢狭間やさまだった」と言うわけで、いよいよ邸宅ではなく砦か何かと思つた方が良さそうだ。

そんな邸宅だが案内された応接間は流石に立派なモノで、精緻な彫刻がなされた豪華な作りの重厚な木の扉を開ければ、落ち着いた雰囲気だが安くは無いと思われる家具や調度品に洒落た暖炉まで、センス良く纏まった部屋が設えられていた。

そんな中でソファアールに一人座るボルドー王子は、なんだか何時もより小さく見えた。「良く来てくれた、歓迎するよ」

そう言いつつも疲れた様子の様子のボルドー王子の顔には、困つた様な表情が浮かんでいた。

厄介事かと身構えるが、その前に一つ言っておきたい。

「呼びつけて置いてその態度は失礼では無いですか？」

ソファアにグデツとしたまま挨拶されちゃ堪らない、当然の文句と思つたがコレまでニコニコと案内してくれていたガルダさんが急にいきり立った。

「おまえ！」

「いや、いいんだ、失礼した。良く来てくれたありがとう」

ボルドー王子はガルダさんを抑えて、立つて挨拶をしてくれたので俺もそれに応える。

「お招きいただき、ありがとうございます」

片手でスカートを、もう片手でおなかの辺りを押さえ軽く頭を下げる。

この辺りの作法と言うのは自分と相手の立場で変わり無駄に複雑だ。もちろん他国の姫用の作法など有るはずも無いので、同じ王族同士での作法を流用している。

「これは……いや、参ったな」

それを見たボルドー王子は頭を抱えた。

「この国で王族として育つた俺よりもよほど作法に詳しいらしい」

「オルティナ姫を前世に持ちますからこの程度は当たり前です」

俺は澄まして答える。純然たる事実だから仕方が無い。

「今日は君と、いや貴女と一対一で腹を割って話したくて来て貰ったんだ」
「王子!? それは危険では?」

ガルダさんが聞いていないとばかりに慌てる。

「ガルダ、余り俺に恥を掻かせるな、普通は密室で一対一となれば心配するのは女性の方だぞ?」

「それはそうですが、相手は魔法使いですよ?」

「それでも、だ」

どうやら王子は俺とサシで話をしたいらしい。俺としては断る理由は全く無い。

ここで寝首を掻かれるならば、俺に人を見る目が無かったと言うだけ。

「良いでしょう。シノニム、外して下さい」

「……大丈夫ですか?」

「ボルドー王子は策謀とは無縁のお方とお見受けしました、罨の心配は無いでしょう」

「そうでは無くて、ユマ様が暴走しないかが心配なんです?」

澄ました笑顔のまま、俺はピシリと固まった。

「……………」

「そつち? え? じゃあナニ? つまり、どっちの陣営も俺が暴れ出さないかを心配

している?」

最近の俺の評価はどうなってるんだ？ 自分としては可憐でお淑やかなお姫様を精一杯演じているつもりなのだが。

とは言えシノニムさんもガルダさんも黙って席を外してくれた。

いよいよボルドー殿下とサシで話す事になる。

「重ね重ねになるが、良く来てくれた」

「いえ、私もお話ししたい事がありましたから」

「君がかい？ 全て君の思う通りに進んでいると思っていたが」

「まさか、私は亡国の姫ですよ？ 何もかも思う通りに行かないと言うのが本当の所です」

「そうか……いや、そうなのだろうか……」

結局俺は姫とは名ばかりの亡命者に過ぎない。一応は先日エルフの諜報員と渡りが付いたが今の俺にどれほどの価値があるかは不明だ。

つまりただハツタリだけでここまで来たと言っても過言じゃ無い。全て思い通りとはどう言う事だろうか？

「詳しく話を伺っても？」

「そうだな、まず君の陣営と同盟を組むにあたって、君には俺の派閥の陣容を紹介したな？」

「ええ、そこで私が何か粗相をしたでしょうか？」

「逆だ、初めは君が彼らに受け入れられるかを心配していたが、蓋を開けてみれば君の評価は異常な程高かった」

「それは嬉しいですね、でもそれが何か問題ですか？」

俺もちよつとお姫様として上品に頑張ったつもりだ。ニコニコと笑顔を振りまいて可愛らしい姿を見せつけた。

気に入って貰って嬉しい反面、媚びを売りすぎてしまっただろうか？ 女性陣の反発でもあったのかも知れない。

「問題も何も、ウチの知恵袋たるファイダーソン老の君の評価など耳を疑ったぞ」

「あの書庫のお爺さんですね？ 良くして貰っていますけど……」

この世界は本が貴重だ。で、その書庫の番人たる爺さんとは仲良くしたくて良く話し掛けたワケだが、何か問題があっただろうか？

「あの爺さんが！ 中央書庫の偏屈ジジイと恐れられたあの爺さんが！ 君の事を『自分よりよほど物知りだ』としよぼくれて居たんだぞ？ あり得るか？ この国の生き字引と恐れられる人間だぞ？」

「それは流石に私の事を持ち上げてくれたのでしょうか？」

「いいや、あの爺さんはそう言うのとは無縁なんだ。俺の事だつて糞ガキと一喝して杖

でポンポンと殴ってくるんだぞ」

「…………お元氣ですのね」

「その元氣な爺さんが、十二歳の少女に知識で負けたとしよげかえって居るのだぞ？
あり得るか？」

「……………」

そんな事言われても、生き字引と言う意味では俺はエルフの書庫の殆ど全てを参照権
で呼び出せる。

ここの本だつて一度ペラペラと目を通せば、好きな時に参照出来る。

しかも検索機能付きだから、脳内にグーグル検索が搭載されている様な物だ、そりや
あ知識では誰にも負けないだろう。

「お次はウチの陣營で最強の兵士と言われるゼクトールだ、コレは君も覚えが有るな？」

ザルアップキユリ
「大土蜘蛛の一件ですな？」

「ああ、そうだ！ あれ以降アイツは君の事ばかり話しているぞ。すっかり参つてし
まった様子でな」

「まあ！」

確かに、ちよつと力を見せすぎたか？ でも仲良くなるのに問題は無いだろう。

「年甲斐も無く、妻も子も居る身で恋する少年の様に君の事を話す様子は見るに堪えん」

……そつちかー

「それは、申し訳ないですが、あの方を恋愛対象としては……」

傷口を舐めたりしたのが良くなかったかなー？ 俺の見た目は自分で言うのもアレだけど、滅茶苦茶可愛いからね、仕方ないね。

「いや、そう言う話では……いやそうなのか？ 君の写し絵が欲しいなど言い始めてな。あんなアイツを見るのは初めてで本気なのかどうかも良く解らん」

「……そうですか」

多分だが、アイドルを応援している様な感覚に近いのでは無いだろうか？ 実はエルフの都でも似た様な経験は有った。我ながら罪な女である。

「魔法の力についても色々聞いているが詳細は話してくれないんだ、君自身の口から聞いて欲しいとね」

「……そうですか、ではまずそこからお話ししますね」

そして俺は、人間の頭を吹っ飛ばす矢の加速と制御。そして回復魔法について説明した。

「まさか！ そんな事が出来るなら正に無敵じゃ無いか！」

「そうですね、自分は隠れて攻撃可能で方が一攻撃されても回復出来ませぬ」

「攻撃よりも問題は回復魔法だ！ それが有れば負傷兵に悩まされずに済む」

「いえ、それ程大人数を治すのは私一人では無理です。一日に二、三人が限界でしょう」
「そうか、いやそれでも将校クラスの幹部を怪我で失わずに済むのは大きい」

「戦争だけでなく、今怪我の後遺症で苦勞している人間も救えるかも知れません」
「本当か？ それは凄いで！」

ゼクトールさんが語っていた事だが、足の腱を切ったりして松葉杖で過ごしている人間は大勢居るらしい。

そんな人を魔法で救える可能性は高い。……だが。

「しかし、期待を持たせて駄目だったとなると逆恨みされたり、日に二、三人となると順番待ちで、どうして自分を治してくれないのだと暴動が起こったり。何より魔法が体に合わないと逆に健康を害してしまう危険があります」

「む、その辺りは薬と変わらないのだな」

「そうですね、下手に死人が出ればこの身が危うくなります」

「そうか……確かにな」

俺の言葉にボルドー王子は考え込んだ。回復魔法で売り込むのはリスクが高い、強力だが変に恨みを買う事にもなりかねないのだ。

「では怪我で退役した軍人を中心に試してみるか。恐らく圧倒的な支持が集まるはずだ。そうなれば軍に表立って文句を言う人間も少ないだろう」

「それだけの価値がありますか？」

「ああ、軍部と衛兵達の組織を掌握出来れば、カディナルが王となっても最悪、クーデターでひっくり返すと言う目もある。それに……」

「それに？」

「同じだけの力を帝国が身に付けているとすればどうなる？ その時、倒しても倒しても蘇る敵兵と直接戦うのは彼らだ、必死にもなるだろう」

「なるほど」

何度も訴えている事だが、魔法や魔道具と言う力を間接的にでも手に入れた帝国は、領土的野望に火が付かないはずが無い。

「だが、そこで聞きたいのだが。君は自分が神の使者だと言ったな？」

「いえ、神の使命を帯びているとだけ……」

「同じ事だ、そしてその使者は帝国との戦争を望んでいる。コレが俺には理解出来ない」
ポルドー殿下は何時になく真剣な顔で俺を見つめていた。

「神は平和を愛する存在じゃ無いのか？ 神のくせに戦争を求めるとか？ いや、違うな……神に選ばれた建国王の血筋たる王族がこんな事を言ったとなれば大問題だが、敢えて言おう」

「なんででしょう？」

「俺は神様なんざ信じていない、そんな者が居るならアイツは死んでいないさ」
「……そうですか」

王子は婚約者を殺されている、神の存在なんて信じる事は出来ないだろう。

「それでも神は居ます」

「ハッ！ だとしたらソイツは余程薄情なんだな」

「その通りです」

「なんだと？」

「神は万物を創造した。この国の神話でもそう語られていますね？」

「ああ」

「万物を創造したのなら、人間だけを特別扱いするはずが無いでしょう？」

「それは、神は邪悪な魔獣と戦う為に人間を……」

「いいえ、神はそれ程人間を特別扱いするつもりは無いでしょう。当然エルフもです」

「……そうか、いやその方が納得できるな。しかし、見てきた様に言うのだな」

「見てきましたから」

そう言う俺の目を、ジッと王子は見つめてくる。

「嘘を言ってる様には見えないな」

「本当ですから」

「俺もこう見えて、王族として嘘を見分ける目には自信があるつもりだった、だが君の言葉は嘘か真か、サツパリ解らない」

「嘘と真。キツチリと割り切れる事の方が少ないのでは無いでしょうか？」

「そうなのだろうな、だとしたら君自身が嘘か真か割り切れない存在だと言う事か」

……確かに、そうかも知れない。俺自身が姫などとは真つ赤な偽物とも言えるし、これ以上無いほどに本物の神の使者でもある。

「だが、神を見たというのは本当に思える。そして、その神に好意を持っていない、違うか？」

「その通りです、コレは他言無用に願うのですが、神の使命などと言いつつも実際の所は大した物では無いのです」

「そうなのか？」

「神の使命などおまけ。私は所詮、国を追われた女に過ぎません。そして国を襲った帝国に復讐したい、ただそれだけで生きているだけの存在なのです」

「そうか……それなら解りやすくして良い、神の使者などと言うより余程安心出来る」

ボルドー王子はそう言つて笑つた。その笑顔は屈託無く、なんだか可愛くも思えた、俺はなんだかんだ、この王子が気に入っているのだ。

どうせここまで明かすなら、転生と『偶然』と言う部分を除いて、全て言つてしまお

うと言う気持ちになっていた。

「ええ、使者と言えども大した力もありません、先程のファイダーソン老も驚く記憶力。それが私が神から与えられた唯一の力です」

「なるほど、記録者として神に遣わされたと言うのか……それ故の記憶力」

王子の考察は当たらずといえども遠からず。実際は俺だけじゃ無く、全ての人間の行動が記録されていて、引き出せる事が特殊能力なのだが、わざわざ言う必要は無いだろ
う。

心苦しいがこの辺が限界だ。全てを語ると、前世もそうだが俺が『偶然』に死をばら撒く疫病神だと教えなくてはならなくなる、それだけは間違っても知られては行けないのだ。

「それにしても、本当に神は居るのだな」

少し寂しそうに王子は笑った、思い通りにならない世界に文句を言いたいと言う顔だ。

そして、その気持ちは俺が誰よりも理解出来る。

「帝国兵に、家族も知り合いも全て殺されました。神の試練と言うのなら私は神を恨みます」

「そうか、神の使者殿に言って貰えると、俺も神への愚痴が言いやすくて助かる」

「言い合ひましょう！ 神の文句を、盛大に」

「そうだな、少なくとも君にはその権利がある」

俺達は二人きりでしばらく笑い合ひ、ひとしきり神様への文句を言い合つた。

気が付けば二人で話し始めてから、かなりの時間が経つていた。

取り留めも無い会話が途切れた瞬間。王子が俺を優しい目でジツと見下ろす。

「そう言えば、コチラの話ばかりだったな。君の話聞かせてくれないか？」

「そうだ！ 俺は相談したいことが有つたのだ、すっかり忘れていた。そう言えばこんなにもシャルティアの事を忘れて過ごしたのは久しぶりだった。

「そうでした、実は私、命の危険を感じているのです」

「それは！ 穏やかじゃ無いな、暗殺者はめつきり減つたと聞いていたが？」

「あんな三流暗殺者、私に掛かればモノの数ではありません、不安なのは魔人公ダツクラム——」

「アイツか！ やはりアイツが黒幕なんだな!？」

「——ではなく、その娘シャルティアです」

「シャルティア？」

氣勢が削がれた様子でボルドー王子がズッコケるが、事実なんだから仕方が無い。

「いや、だつてシャルティアつて言つたらアレだろう？ いかにも成り上がりのお嬢様

みたいな古くさい格好で、運動だつて苦手だつて聞いてるぞ？」

「そのシャルティアです」

「冗談だろう？」

「彼女が運動音痴なら、王国に運動が得意な人は居ないでしょう」

「それ程か？ 俺よりもか？ あのお嬢様が？」

「ボルドー殿下がかなり強いのは解りますが、それでもです」

「そうか……」

ボルドー王子は謎のシヨックを受けている様だ、いや、あの縦ロールお嬢様の方が強いと言われればシヨックなもの無理は無いか。

「いえ、あの……ボルドー王子がその辺の近衛兵より強いのは理解しています、この前のゼクトールさんとの立ち会いも、負けてしまいましたでしたが格好良かったですよ」

「そ、そうか。君にそう言われると、なんだか……照れるな」

い、いや、半分おべっかだから照れないで欲しい。なんだかコツチまで恥ずかしくなってきた。

顔が赤くなるのを感じて、思わず俯いてしまう。

「あ、いや、俺にしたって別に変な意味があつた訳じゃなくてだな」

「うう……」

慌ててフオローするのも辞めて欲しい。ガチっばいし。

二人の間に、なんとも気恥ずかしい空気が流れる。甘酸っぱいと言うのか？ 俺、なんだか王子と良い感じじゃ無いか？ マジで玉の輿、行けるかも知れん。

俺がそう思ったのもつかの間。突如、血相を変えたボルドー王子が俺に覆い被さり、俺は地面に組み敷かれる。

「ユマツ！」

「な、なんです！」

あまりにあまりな急展開だが、悪くない。いつそのまま――

ボルドーが王として選ばれば、二人で並んで帝国へと侵攻しよう。その戦いに勝ったあかつきには二人で国を盛り上げて子供――は、『偶然』で死ぬから無理か？ いやエルフは長命かつ早熟。ワンチャン無いか？

そもそもココまでトントン拍子、ひよつとすれば俺も長生き出来るかも知れない。

と言う打算の元に俺は王子の体を抱き返す。――だが。

「え？」

その手はヌルリとした感触、そしてこの匂い。嫌と言うほど俺はコレを知っている。

――血だ。

「フフツ、そんなに褒められると照れてしまいますわ」

王子の肩越しに、ボウガンを構えた黒ずくめのシルエット。そしてその声。
——悪夢を見るまで思い続けたシャルティアが、そこに居た。

殺戮令嬢 3

「フフツ、そんなに褒められると照れてしまいますわ」

——シャルティア？　なんで？

——王子は？　怪我？

——ボウガン？　背中に刺さってる！

混乱する頭で必死に状況を整理する。

つまり、王子は俺を庇うために抱きついて、代わりにボウガンのボルトを食らったのだ。

一方俺はどうだ？　抱きつかれたショックで呆けた妄想を抱いて、シャルティアに気が付くのが遅れたのは悔やみきれない、それにしても……

「一体ッ！　どこから!？」

「フフツ種明かしは地獄でしますわ」

「くっ!」

シャルティアはまだ俺を殺る気だ！

構えたのは小ぶりのナイフ。——気付けば既に手が届く距離！

マズイッ！ 俺はボルドー王子に押し倒された状態。王子の健康値が邪魔をして、俺は魔法が使えないッ！

なのに混乱する俺は魔力を練り上げてしまった。殆ど条件反射と言っている。

抱きつかれたままのろくに体が動かせぬ状況、溺れる人間が藁をも掴まんともがく様な無様さで、固めた魔力を振り上げる。

「シッ——」

すると何故か、シャルティアは気合いの入った声と共に大きく回避行動をとる。

バックステップを一つ、ローテープルの上に乗る。

さらに一つ、暖炉の脇まで飛び退いた。

——何だ？ こんな固めただけの魔力なんて何の脅威も……

いや？ 何故魔力を固めたと解る？ 他人の魔力などエルフにだって見えやしない。

触れた時に健康値と相殺される『嫌な感じ』で初めて存在を感じる程度。

——まさか？ 見えるのかッ！ 魔力が？

だとしたら……今までの疑問が解^とける気がした。

と、同時に魔力が見えるシャルティアは、魔力を扱う俺の天敵となり得る。

シャルティアはコチラを警戒し、窺うがそれも一瞬、再びコチラに駆けてくる。その間に俺はなんとか王子の下から這い出す事に成功。同時に叫ぶ。

口にするのは魔法じゃ無い、もつと単純で効果的な言葉だ。

「誰かあつ！ 賊です！ 王子が！」

助けを呼ぶ。ただそれだけの事がここに至るまで頭から抜け落ちていた。

不測の事態に陥ると案外に声が出ない、遅すぎる救援要請だったがすぐさまシノニムとガルダさんがなだれ込んでくる。

「なんですか？ えっ？」

「曲者だ！ 取り押さえろ！」

屈強な兵士が駆けつけるが遅い！ 扉からは距離がある、シャルティアの凶刃は止まらない！

俺は王子の健康値の圏外に逃れ、魔法を唱える。

『我、望む、指差す先に風の奔流を』

指差した先へと風の奔流が突き抜ける。それを見たシャルティアは腕を交差し防御の態勢に、しかし魔法は健康値の前にかき消え、そよ風が頬を撫でるだけ。

怪訝そうなシャルティアの顔が一瞬見えた。

ただし！ それは吹っ飛ぶソファアの影越しだ。

ガゴオンと重い音を立てて、シャルティアの居た場所を大きなソファアが踏み潰す。

魔力が見えるからこそそのフェイント、本命は突風で吹っ飛ばすソファアの一撃。

——やったか？ などと確認しなくても殺っていない事は解っていた。

転がるソファアの影に紛れて、暖炉に飛び込み煙突から逃げていくシャルティアを俺の目は捉えていたからだ。

——追うか？ いや、無謀だ。それに俺にはやる事がある。

「賊は？ どこへ消えました？」

しかし、一方で到着した援軍は誰もシャルティアの姿を捉えてはいなかった。

シャルティアの実力を知っていて、あの程度でどうにかなると思っていない俺だからこそギリギリ見えたのだ。

それ程に動きの全てが自然で、注目を抱けない。殺意に満ちているはずなのに。誰よりも自然体であった。

「煙突です！ 屋根を調べて下さい！」

だから俺がそう言うのと、「え？」と言う顔で兵士達は中々動かない。転がったソファアやテーブルの影に潜んでいると思いついてしまっている。

「早く！ 逃げてしまえますよ！」

俺がそう声を荒らげると、泫々暖炉を調べ始める。言いたい事は解る、季節は夏、暖炉は恐らく一切使っていない。

元々狭い暖炉、そこに薪やらが積み上がって非常に狭い。

ここに目にも止まらぬ速度で飛び込んだ上、煙突に逃げるなど信じられないのも無理は無い。

まるでウナギがニユルンと隙間に入り込む様な早業だった。本気で人間技とは思えない。

「いや、誰もいませんぜ？」

なんとか身を屈めて暖炉から煙突を見上げた兵士がススだらけの顔でぼやく。

結局まんまと逃げられてしまったか。

「どこにも見当たりません、賊の特徴は？」

一方で家具の影など、部屋の中を調べていた隊長格の人物が俺に訊ねてくる。だから煙突に逃げたって言ってるだろうが！ と怒鳴りたいが、深呼吸してなんとか押さえる。

そんな俺に苛立ったのか隊長は急かす。

「早く！ 取り逃してしまえます！」

クツソツ！ イラツとするなあもう！

「賊は黒ずくめ。シルエツトからは女性に見えました」

苛立つ俺の代わりにシノニムさんが答えてくれる。

「しかし、姿が見えませんが？」

実の所、後から入ってきた兵士はタイミング的にシャルティアの姿を見ていないか、見ても吹っ飛ぶソファアの影に溶け込んだ姿だろう。

いつそ賊の侵入すら疑っていて、シノニムさんとガルダさんが見ていなければ俺の狂言扱いにされても不思議じゃ無かった。

そのシノニムさんも向き直って俺に訊ねる

「ユマ様、賊はどこへ？」

「何度も言っています！ 暖炉から煙突に逃げていきました、もう屋根まで抜けているでしょう、屋根伝いに逃げるのを防いで下さい」

シノニムさんの問いに無駄だろうなと思いつつ答えた。

そのやりとりに、今更ながらに隊長格の兵士が訳知り顔で頷いた。

「なるほど、女性ですか。小柄な女性でしたらこの狭い煙突に入る事も可能かもしれませんな」

等と今更のたまう！ 殴りつけたい気持ちで爆発しそうだ。

「いや、隊長そんな痕跡ありませんよ、あの一瞬でこんな所に逃げ込めますかね？」

先程、暖炉を調べた兵士はそう訴えるが、それ程の凄腕だから王子の私邸に入り込むなんて言う無茶が出来たんだろうと怒鳴りつけてやりたい。

あ、あ、—— ストレスが堪るうー

駄目だ、あんな化け物に並の兵士が対抗出来るハズが無い、そつちはもう諦めて。もう一方の騒ぎの方へと目を向ける。

「ボルドー！ お前ッ無事か！」

「ガルダ、俺が死んだらヨルミに付け、事なかれ主義だが俺のためなら動いてくれるだろう」

「そんな！ ふざけるなよ！ そんな遺言聞かねえからな！」

などと、コッチはコッチでお涙頂戴の寸劇を繰り広げている。

背中に二、三本ボルトが刺さった位で死ぬ訳ねーだろ！

……いや、死ぬな。普通死ぬわ。

「ユマ様」

「解っています」

シノニムさんに促うながされ、俺は王子のそばへと膝をつく。

「ユマ……君か、君にも迷惑を掛けてしまったな」

「ハイハイ、解りましたから黙って。それとガルダさんも離れて下さい」

王子は掠れる声で俺にまで遺言めいた事を言ってくる。

正直、イライラも手伝って対応が雑になってしまうのも無理は無いだらう。

「なんだと！ ふざけるな！」

すると怒り出すのはガルダさんだ。しかしコレは読めた事。

「ガルダ様、失礼！」

シノニムがガルダさんの首根っこを捕まえて引き離す、流石に俺と付き合いが長くなってきたからか、シノニムさんの有無を言わさぬ対応は気持ちが良いね。

……ま、何時もは俺が首根っこを捕まえられる側なんだが。

しかし、当然ながらガルダさんは激しく抵抗する。

「馬鹿が！ 遊んでる場合じゃねーだろー！」

「動かないで下さい、動いたら刺します」

「なっ！ 狂ったかー！」

シノニムさんはガルダさんの首筋にナイフを突きつける。

いやースゲーわ、容赦がなさ過ぎて惚れるね。揉めている二人を余所に俺は準備に入ろう、まずは呼吸を合わせる事だ。

「王子、死ぬのは早いですよ。先程説明したでしょう？ 回復魔法です」

「あっ！ そ、そう……か」

忘れていたな、ま、無理もないか。普通なら死ぬ様な怪我だ、パニックだったのだから。う。

「呼吸を合わせろ、息を吸って——吐いて」

「あ、ああ……」

言いながらも、王子を抱え、王子の右耳を俺のささやかな胸へと密着させる。心音を聞かせるのは呼吸を合わせるのと同じぐらい効果がある同調方法だ。

おっぱいが大きい女性だと逆に興奮してしまうんじゃないかと思うが、俺にそんな心配は無用だろう。

……いや、母親を思い出して逆に安心するんだらうか？ ま、そんな事はどうでも良いな。

「体が、暖かい。コレが回復魔法？」

王子がそんな事をほざくが、まだ同調段階。体が温まりリラックスしてくるだけだ。

回復魔法を使いたくても、王子の背中にはまだボルトが刺さっている。

俺は手を伸ばしボルトに付いた鉄の矢羽根を握って、一気に引き抜いた。

「ぐあああつ！」

「わめくな！ 男だろうが！」

俺は悲鳴を上げる王子に一喝する。つてか俺の手もちよつと切れた。痛い。

つと、その手の平が僅かに痺れる。ボルトからは独特の匂い。

——毒だ！

念入りな事、相手も本気か。

恐らく死苔茸チリアムの毒だろう、腐っても王族だから毒に閑しちや俺もみっちり教わってる。

その中でも死苔茸チリアムはポピュラーな毒で、大森林では容易に手に入る。

メジャー過ぎて逆に要人暗殺には使われないレベルだが、この場面で使ってくる以上、ココでは珍しい毒なんじゃなからうか？

「あの、手が痛い様なら、残りは私が抜きましようか？」

シノニムさんが問いかけて来た、俺が怪我した手をジツと見ていたので気になった様である。

そう言えば、……つと見てみればガルダさんはぐったりしていた、多分シノニムさんが締め落としたのだろう。後ろでギャーギャー五月蠅かったので正直助かる。

「いや、回復魔法の邪魔になるので誰も近づけるな。それとボルトには毒が塗ってある、気をつけろよ」

「???……………毒、大丈夫ですか？」

「問題ない」

他の毒なら兎も角、死苔茸チリアムの毒ならまず大丈夫。俺は残ったもう一本のボルトも無造作に引き抜く。

「ぐううー！」

くぐもつた悲鳴を上げる王子を無視して、俺は傷口に顔を寄せる。

——ジユル、ペツ！

傷口から血を吸つて吐き捨てる。

魔法で毒を抜くと言つても、まずは物理的に血を吸い出した方が効果が高い。

……しつかし何が悲しくてここ数日、連続で男の傷口を舐めなきやならんのか、どうせなら女の子を舐めたか——

——と、そんな思考に至つた時。自分が『高橋敬一』の思考に寄り切つているのに気が付いた。

そう言えば先程から口調が荒つぽい。

普段俺の思考はユマ姫と溶け合い、自然と女の子らしい言葉遣いが口をつくのだが田中が死んでからどうも暴走しがちだ。

自由に人格を分離、統合出来ると思つていたが勝手に分離する事もある様だ。

ユマだけでなく、プリルラやオルティナ姫と言つた女の子の人格も吸収して来たが、今回みたいな命の危機となると、彼女らは残らず引つ込んでしまう。

つて事はだ、例えばポルドー王子と結婚したとして、初夜に初体験を迎えた瞬間、痛みで『高橋敬一』の人格になつてしまう事もあり得るか？

胸に抱いた、ポルドー王子を見る。

意識は朦朧として額には玉の様な汗をかいている。

初体^{その時}験の事を思わず想像してしまった。

——キツツイ！

先程まで甘い妄想を抱いていたのに、今は一転気持ち悪い。

コレヤバいな、俺、どうやっても幸せになれなく無いか？

苦いモノを噛みつぶした俺の表情に、心配そうなシノニムさんの声が掛かる。

「マズイ状況ですか？」

「いや、問題ねーよ」

毒の方は問題ない、さっさと治療に移ろう。

『我、望む、汝に混じりし死苔の毒よ、この手に引き寄せられん』

魔法の発動と共に、血に混じり散っていった毒が再び傷口に集まり、やがて手の平に。

——ジュル、ペッ！

最後に再び傷口に残った僅かな毒を吸い出せば完了だ。

と、ココに至ってやっとお医者様の登場だ。

「ボルドー王子が瀕死の重傷というのは本当か！」

現れたのは王子とも話していた中央書庫の偏屈爺さん、ファイダーソン老だった。

確かに爺さんなら医療の心得もあるんだろうが、俺が居れば必要ない。

「今治療中だから黙って見てろ」

すげなく追いつ返すが、爺さんは引かない。

「なんじやと！ ワシに見せてみよ！ 暗殺の場合毒が使われている可能性があるぞ
い」

一周遅れの爺さんに、引き抜いたボルトを顎で指し示す。俺は回復魔法の制御に忙しいからだ。

「なんと！ コレは死苔茸チリアム！ 何という事じゃ、この毒の特効薬は、存在しない！」

「そんなに強力な毒なのですか？」

「強力なのもそうじゃが、特効薬が存在しない毒を使うと言う事は交渉する余地も無く殺す事のみを考えていると言う事じゃ、王子は……もう、……助からん！」

「……そうでしょうか？」

ファイダーソン老とシノニムさんの掛け合いを横目に、俺の治療は終了する。

「治りましたよ？」

「なんじやと!?!」

これは何かのコントだろうか？ 王子の怪我を調べるファイダーソン老だが、当然そこには傷口すら存在しない。

「なんじやコレは？ 奇跡か？」

呆然と呟く老を尻目に、俺は大盤振る舞いした魔法の所為で酷い疲れに見舞われていた。

それに、右手から入り込んだ毒も少量ながら体に回ってしまった。今から魔法を掛けても効果は低いだろう。

「シノニムさん！」

「なんです？」

「寝ます」

「はっ？」

俺は一方的に宣言すると、暖炉の脇まで転がったソファアートを立て直し、ゴロンと寝転んだ。

「なっ!? 馬鹿ですか! ちょっと」

慌てるシノニムさんの声が、はるか遠くへ遠ざかっていった。

素顔の裏の本性

「んじゃ、情報交換と行きますか」

言いながら、俺はドツカとケツをソファアに沈み込ませ、足はローテーブルの上へと投げ出した。

ハッキリ言つてヤケクソだ。女の子らしい仕草とか口調を色々頑張ってきたが、緊急事態で滅茶苦茶に曝^{さら}け出してしまった。

こうなれば逆に、過剰なまでに不遜な態度で押し通してやる！

変に凶暴な人格が混じっているとと思われるよりも、人格が突然切り替わると思つて貰つた方がまだ都合が良い。

王子は不遜にふんぞり返る俺を見て、引き攣つた笑いを浮かべている。

「……随分と、今までと態度が違うんだな」

「そりゃーな、命を獲^とられるかつて時にキヤーキヤー泣いていられないつての」

対面に座る王子の問いに俺は肩を竦めて答える。

「王子、やはりコイツ危険です！」

「黙つてろ」

いきり立つガルダさんを王子は一蹴する。他にもファイダーソン老やシノニムさん達も壁際に立つて事態を注視していた。当然だが、みな豹変した俺の態度に驚いている。

舞台となるのは同じくボルドー王子の私邸、部屋こそ移したが、まだ半日と経っていない。それなのに王子も俺も既にすっかり回復していた。

「まずは怪我を治してくれて感謝する」

「そりやどーも、元々俺が撃たれる所を庇ってくれたんだから、感謝するのはコツチかもな」

俺は手をヒラヒラさせて感謝の言葉を受け流す。

「それで、聞きたいのだが。……君は本当にユマ姫か？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるな」

「どう言う事だ？」

俺はボリボリと頭を掻きながら、どう説明するかと思案する。

「まず、俺がオルティナ姫の生まれ変わりと言うのは言ったな？」

「ああ」

「だが、オルティナ姫が死んでからン百年と経ってる。当然ユマ姫に生まれ変わるまでに色々他の人間も経由してってるって訳だ」

「それがお前だと？」

「理解が早くて助かるね、この非常事態にヨヨヨと泣いてるだけじゃ、おっ死んじまうからな」

「……じゃあお前は、誰だ？」

「誰って程でもねえよ、色々と荒っぽい人格が混じっただけさ」

俺の言葉に王子は考える素振りを見せる。

「なるほどな、ガルダの忠告もゼクトールの傾倒もコレで合点が行く、シノニム嬢はこれを知って居たのか？」

王子の問いに、控えめに手を上げたシノニムさんが答える。

「いいえ、でも正確には一度だけ。タナカさんが死んで塞ぎ込んでいたユマ様が突如飛び起きて、オーズド様の屋敷を飛び出した時、同じ様な事がありました」

「つまり、精神的なショックがトリガーか」

納得行つた様子で王子が呟くが、怪訝な顔で俺を睨んだ。

「それで、お前の目的はなんだ？ どう言うつもりでユマ姫に取り憑いている」

「取り憑くとは随分だな、お化けじゃねーよ、目的だつて一緒。帝国への復讐さ」

「信じると思うか？」

「じゃあ何だ？ このビルダール王国の転覆を狙っているとしても？ それで俺に何の得がある？」

「知れた事、王国の乗っ取りだ」

「だつたらもつと上手くやるよ、それこそ同盟相手の王子サマが死にそうだったなら、涙ながらにオイシイ遺言を引き出すとかな」

「……………」

俺の言葉に皆が押し黙る。結構説得力があつたんじや無いかね？

「で、今度はコッチの質問だ。シャルティアは見つかったか？」

「いや、怪しい人影は一切発見出来なかつた。あれは、本当に？」

「……ああ、シャルティアで間違い無い、俺は声も聞いた」

「しかしあのお嬢様がそんな」

王子は暖炉を見る。部屋こそ違うが暖炉の作りは変わらない。非常に狭く、ココに人間が瞬時に隠れられるとは思えないのだろう。

もちろん現在、暖炉はしっかり封鎖されている。

「気持ち解るがアイツは化け物と思つた方が良く、俺と同じレベルのな」

「それは、アイツも魔法を使うと？」

「そうとは言わないが、マトモじゃないと思つて事に当たれって意味さ」

「……………ふむ」

「なにを隠そう、俺はアイツに目を付けられてここ数日、酷いストレスに見舞われてい

た。そこへさっきの襲撃がトドメになって、俺が出て来たって訳よ」

「だが、確実にアイツがシャルティアと言いつけるのか？」

「間違いない、賭けても良いね！」

「だったら話は早い、シャルティアを嘘発見器に掛ければ良い」

「……………へえ」

なるほど、その手が有ったか。

嘘発見器を使われる心配だけで、俺が訴えるのは勘定に入れてなかった。

「しかし、嘘発見器を誤魔化す方法は本当に無いのかねえ？」

「解らない、有るとしてもそれを見つけたと吹聴する者は居ないだろう」

確かに、そんな手段が有れば、もしもの時のため隠すだろう。王子は更に続ける。

「誤魔化す方法が有る、と言う噂は根強く存在する。……例えば、魔人公と恐れられる

ダックラム公は何度も嘘発見器に掛けられているが——」

「ああ、そりゃ無駄だな」

「そう、君が言うに、彼は暗殺に関わっていないのだろうか？　だったら反応する訳が無

い」

ふむ、だとするとシャルティアを嘘発見器に掛ける意味は有るか？　……いや、微妙

だな。

「多分無駄だろう、俺が使える魔法の中に、自分に対する敵意を感じする魔法が有るんだ。実は今までソイツを使って暗殺者達をぶっ殺して来たんだが——」

「それがシャルティアには効かないと？」

「ああ、今日も密かに使っていたが、撃たれる寸前まで、いや撃たれてからも、まるで反応しなかった」

「やはり、それは相手も魔法が使えると言う事にならないか？」

「いや、その割に魔法に対する反応が素人じみていた。俺はもう一つの可能性を推した
い」

「もう一つの？」

王子の問いに対して、俺は壁際に突っ立っている物知り爺さんに水を向ける。

「フィダーソン老、嘘発見器が通用しない相手に心当たりは？」

「知らんな、いや正確には有るが、嘘をついた自覚が無い奴には効果が無いと言われているの」

老の言葉に皆が頷く。嘘のつもりが無くても、結果的に嘘になってしまう事が有る。誰にでも経験が有る事だ。

「それだけじゃ無い、嘘について置きながら後になってアレは嘘じゃ無かったと心底思
い込める人間も存在する」

「そんなおめでたい人間が居ますか？」

シノニムさんの疑問ももつともだが、そう言う人間は居る。そしてその強化版と言えるのが俺だ。

「もつと凄いのが居るぞ？ 一人の人間に複数の人格が共存する人間だ」

「君の事か？」

「俺だけじゃない、この国にだって探せば居るはずさ、そうだろう？」

俺は王子の問いを皮肉げに笑って、ファイダーソン老に水を向けた。

「確かに、多重人格と呼ばれる病気じゃ。突然に言葉遣いも性格も変わってしまう。強烈なストレスが原因の病と考えられておる」

「さつすが中央書庫の偏屈爺さんだ、話が早い」

「お主に言われても嬉しくないの」

いや、実際、現代人の俺と遜色無い知識があるのは凄い。

「実際に俺も……そうだな、もうそろそろ『戻して』も良いだろう」

言いながら俺は居住まいを直し、皮肉げな笑みを引つ込める。

「……そう、人格が切り替われば仕草も表情も、雰囲気的全てが変わります」

「えっ？」「うおっ！」「凄いのお」

優雅に微笑む俺に、周囲からは驚きの声がかかる。

あまり見せびらかす機会は無かったが、田中が死んだ時からこの程度は可能だ。

「シャルティアも同じ様な物かもしれませんが、パーティーの時、突然変貌した様に見えました」

「……言われてみれば、深窓の令嬢をアレだけ演じ切れるのはおかしい。ガルダもそうだが、王宮は人物鑑定のプロが何人も居る。なのにシャルティアが異常と言う話は聞いた事も無い」

「ある種の異常者なのでしよう、悪気も無く人を殺せるなら私の魔法にも掛かりませんし、嘘発見器もすり抜けるかも知れません。シノニム！ マテ茶を」

「少々お待ちを」

口寂しくなつて、俺は優雅な動きでお茶を要求。すぐにあらかじめ用意してあったポットから、熱々のお茶が注がれる。

シノニムさんが淹れてくれたお茶を上品にする。良い香りが鼻に抜け、少し落ち着いた。

そう言えばお昼も大分過ぎた、落ち着いたら、なんだかお腹が減ってきたぞ？

「シノニムさん。何かお茶菓子でも貰ってきて頂けませんか？」

「ふざけるな！ 何を言っている！」

そんな俺に怒鳴ったのはガルダさんだ、おちやらけキャラだったのに、怒り散らす

キャラにすっかり変わってしまったな。

王子も同じ事を思った様で、ガルダさんをたしなめる。

「ガルダ、止さないか。最近怒りっぽいぞ」

「……解つていますよ、解つていますが！ 色々起こりすぎて、俺の頭がパンク寸前なんです！」

「もうお前は休め！」

「嫌ですよ、ここで投げ出せません！」

「だったらせめて、黙って見てろ」

「……………」

なんだか二人の世界だな、また男同士の友情が羨ましくなってきた。

これって前世の『高橋敬一』の友情を思い出しているの感傷かと思つてたけど、ひよつとして腐女子的なアレなんかな？

ま、良いか。聞く事は聞いてしまおう。

「では話を戻しましょう、シャルティアは煙突から侵入してきました。警備はどうなっているのです？」

「その件については警備主任から話を聞いていますよ」

気を取り直したガルダさんが、警備からの報告を読み上げる。

「そもそもが、あの煙突はどんなに小さい人間だろうと入れる構造じゃないのです」

「しかし、実際に奴は来た」

説明半ばでの王子のツツコミに、ガルダさんはため息を漏らす。

「そう、ですが煙突には雨水の浸入防止機構なんかがあつて、実際は見た目以上に狭いらしいんです」

「ふむ、では？」

「ええ、そう言った機構が綺麗に取り除かれていました。こんな事は一朝一夕で出来るもんじゃありませんね」

「つまり、煙突の清掃業者が怪しいと？」

「ご明察、今、話を聞きに行つて貰つています、随分前から狙われてたつて事になります」
聞けば煙突の清掃は専門の業者へ委託していたらしい。

高所作業で、内部構造もそこそこ複雑な煙突は、専門の職人じゃないとメンテが出来ない。

勿論、貴族の家の保守をするのだから信用第一の商売なんだろうが、そこはソレ、暗殺者も必死だ、人質を取つたりして上手くやるのだろう。

で、上手くやるのだろうから、当然証拠も残していかないだろう。取り敢えず暖炉は封

鎖だな、こりや冬までにカタを付けないと、大分お寒い事になるぞ。

王子とガルダさんは二人で捜査の方針を話しているが、俺はシノニムさんが持つてきてくれた茶菓子をつまむ事に。

——旨いな！

「なかなか美味しいですよ、シノニムさんも食べませんか？」

「では少しだけ」

「ワシも良いかの？」

なぜか爺さんも含め、三人でクツキーを食べる事に。

しかし、さっすが王子サマのお屋敷だ。屋敷の見かけこそは地味だが、良い物を食べべている。

「これだけの物をポンと出してくれるのは流石ですね、どこのお店の物が聞いて帰りましょう」

「キムラ商会の新作です、持ってきたのは私なので間違いありません」

「え？」

「急なお招きとは言え、手ぶらと言う訳には行かないでしょう？」

「……………」

自分で持つてきて自分達だけで食べちゃうのかよ。流石にどうなの？ いいの？

駄目だよな？

ま、シノニムさんが良いって言うなら良いだろ。

まったりする俺達をガルダさんが睨んでくるが、捜査なんぞ無駄な作業に思えて仕方が無い。今更そんな奴らを洗っても何にも出てこないに決まっている。

今考えるべきは……ジツとクツキーを見る。

「キイムラ商会を私の専属から外した方が良いかもしれません」

「考え過ぎでは？ 元々キイムラ商会は多くの恨みを買っています、今更でしょう」

シノニムさんはそう言うが、パーティーの時の様子から木村が目を付けられたのは間違い無い。

そんな俺に賛同してくれたのは、ガルダさんと話していたボルドー王子だった。

「その意見には賛成だな、君の派閥も大きくなってきた、一つの商会を頼みにするのは良くない。それに彼の商会は悪い噂もつきまとう」

「それは一理あるかも知れませんが、外すのでは無く追加を検討してみては？」

追加ならばとシノニムさんも乗ってくれた。うーん『偶然』の事を考えれば距離を置いて欲しいのだが、いきなり外すよりはそつちのが無難か。

俺が領こうとした時に、控えめに扉がノックされた。

「あの一、ここにボルドー兄にいが居ると聞いたんだけどー」

ボルドー王子を兄と呼ぶ間延びした声、つまり相手はお姫様だ。

しかし、第一王女も第二王女も第一王子側、つまり仮想敵。他に王女の話は聞いていないが？

「ただいま参ります」

ガルダさんが応対に向かうと、一人の女性を連れ立つて部屋に戻ってきた。

「その方は？」

「おはつー、あたしはヨルミ・ラ・ガードナー、一応ですが第三王女となっておりますー、お見知りおきー」

俺に挨拶を返す黒髪の少女は少し変わっていた。

黒髪自体は特筆するほど珍しい物ではない。金髪に生まれても成長するにつれ黒みがかかる事も多いし、色が濃い方が優性遺伝なものも地球と変わらない。

なので、その少女が変わって見えるのはその顔立ちだ。凹凸が少なく目が小さい地味な顔立ち。いや……もつとハッキリ言うとはアジア人っぽい。

同じ地味でもボルドー王子とは方向性が違う。この辺りでは見ない種類の顔である。

それに、第三王女が居るなど俺は聞いていない、これは一体どう言う事か？

「ボルドー王子、ヨルミ様は一体？」

「ああ、ヨルミは第三王女だが余り表に出る事が無い、理由は見ての通り彼女の母親がこ

の国の人間では無いからだ」

王子から語られた所、彼女は現王が手を付けた侍女から生まれたいらしい。

その侍女が南方のプラヴァスの少数民族の生まれと言う事で、少し変わった見た目になってる。

「キイムラ様やタナカ様に少し似ているでしょうか？」

シノニムさんの言う事はもつとも。西洋人的な顔立ちのビルダール王国民より、日本人に近い感じである。

ってか第三王女なんて居るなら、シノニムさんもあらかじめ教えて置いて欲しいものだ。

……え？ 話した？ 忘れてるだけ？ うーん『参照権』あつ！マジだ。

実際にシノニムさんが第三王女に言及したシーンはありませんが、ユマ姫はシノニムさんの説明を受けて、舞踏会で第三王女を探しています。

と、その第三王女はソファアで頭を掻くボルドー王子に眉をひそめた。

「あんのー？ ボルドー兄にいが重傷じゆうって聞いて慌いて来てただけど？」

「あーその件ことだな」

ヨルミはボルドー王子が危篤と聞いて、慌いてて飛んで来たと言う事らしい。

対してボルドー王子は気まずそうに答える。

「一時は本当に瀕死だったのだ、ユマ姫の魔法で治して貰った。それを伝えなかったのは、それで犯人をあぶり出そうと思っっているからだ」

「どう言う事かと言うと、死苔茸チリアムを使ったシャルティアはボルドー王子が死んだものと思わす、そこをつけ込んで犯人を捜そうと言うワケだ。

「ボルドー兄にしちやー冴えてるね」

「俺にしては、とは言ってくれるじゃないか」

二人は大分仲が良いらしい、不人気連合と言った所か。いや、流星に全く無名なヨルミよりはボルドー王子のが人気はあるけどな。

俺は二人の掛け合いを黙って見守る事にした。

「こう見えてヨルミは中々頭が良い、犯人を追い詰めるのに、良いアイディアを出してくれるかも知れん」

「こう見えてって……兄ちゃんも言う様になったねー、しっかし死苔茸チリアムかー。よく死ななかつたねー」

「全くだ、ユマ姫には助けるつもりが助けられてしまった」

「へえ〜」

二人して俺を見るが、俺はお茶をすすってお澄まし顔。そこを誇るつもりはあんまり無いからだ。

「でもでも、あぶり出すってどうやってー?」

「そりや、死苔^{チリアム}茸を使った以上、相手は俺が死んだと思っているだろうからな、黙って居ても下手な動きを見せるだろう?」

「んーちよつと弱いなあ〜」

「弱いとは?」

「どうせならもつと派手に焚きつけないと意味ないよ。例えば――」

ヨルミはニヤリと俺を見た。

「兄ちゃんとユマちゃんの婚約発表会を開こう!」

俺は盛大にお茶を吹き出した。

婚約成立？

「はしたないですよ、ユマ様」

シノニムさんは俺が吹いたお茶を拭いてくれるが、こっちはそれ所じゃない。

「なぜこのタイミングで婚約なのですか？」

俺の鋭い視線にもヨルミはどこ吹く風だ。

「このタイミングだからだよ、暗殺者は兄ちゃんじゃなくてユマちゃんを狙ったんだよね？」

ヨルミの軽い調子に気が抜けてしまう。

「ヨルミさん？」

「ヨルミちゃんって呼んでよ」

うーん、この。

「では、ヨルミちゃん」

「はいはい」

「なぜ、私が狙われていると婚約になるのです？　いつそ距離を置くのが普通では？」

「ユマちゃんはお兄と距離を置きたいの？」

「そう言う話ではなく——」

「まずね」

ヨルミはピツつと人差し指を立てる。

「相手はお兄がピンピンしてるって思わないハズでしょ？ それどころか死んでいないとおかしいぐらい、なのに婚約が発表されるって事はさ——」

「都合が良い事を、私が言わせてると思う訳ですね」

王子を見殺しにして組織を乗っ取る。

先程も言ったけど俺自身、全く考えなかった訳では無い。シノニムさんやガルダさんが見てる手前、その選択は取れなかったが……

「もしくはガルダさんやライダーソン爺ちゃんとかが、王の側近って夢が捨てきれずつてね」

「え？ 私はこの国の王族では無いのにですか？ ボルドー王子と婚約した所で継承権は無いでしょう？」

「普通ならそうでも、オルティナ姫の生まれ変わりって肩書きがあるからねー、お兄の嫁で、市井の人気を考えれば、少なくとも私よりは全然可能性あるね」

「よ、嫁……」

「そうでなくても愛し合い、結婚を誓った王子が死んでしまうって展開は、悲劇のヒロイ

ンとして更に人気に拍車が掛かるだろうね」

確かに『悲劇の王女ユマ』のストーリーとしては面白いかも知れない。

ヨルミは更に続ける。

「でもね、やっぱり血が繋がってないのが問題だつてなると、ほら？　王子はもう一人居るじゃ無い？」

「ゾツとしませんね」

つまり、俺の人氣が凄すぎて、第二王子が死んだなら、代わりに第一王子と結婚して貰おうって話になりかねないって事か。

あの性格の悪さがにじみ出てる王子とは同じ空気を吸うのも嫌だ、結婚など論外だ。

「で、そうなる困るのはカディナル王子の婚約者であるシャルティアちゃんって訳、そこまで行かなくても敵に塩を送ってしまう結果になるなら焦るよねえ」

「つまり、婚約発表を餌にしてシャルティアを釣り上げると？」

「そーゆーコト♪」

なるほど、偽の婚約発表と言う事か？　俺は納得しかけたがシノニムさんから疑問の聲が割って入った。

「ちよつと待って下さい、婚約の発表。それも王族の婚約発表など虚偽が許されるのですか？　信用問題となりませんか？」

痛い所を突かれたヨルミは手をモジモジと組む。

「まーそれが問題よね、発表した婚約が嘘だったって言われても。婚約を破棄された姫って汚名が付いちやうかも」

「それは……ありがたく無いですね」

シノニムさんとしても、俺のイメーჯアップに長い事奔走してきただけに婚約破棄の汚名は看過できないだろう。

しかし、ヨルミちゃんは茶目つ気たつぷりに微笑んだ。

「でもさー、いつそ本当に婚約しちやええば?」

「「なっ?」」

反応したのはガルダさん、シノニムさん、俺の三人。特に拒絶反応を示したのは当然だがガルダさんだった。

「ふざけるなっ! 今回の怪我だってユマ姫のとばっちりだろうが!」

「はあーもう! そんなのお互い様でしょ? そもそもこの屋敷がガバガバだから狙われられたんじゃないの! 責任を感じなさいよ責任を!」

「うっ!」

「それに、この暖炉に仕掛けをしてたってコトはね、相手は前からお兄を狙っていたって事でしょ? お互い様よそんなの」

「うううっ！」

「それにね、万が一怪我をした時だつて魔法で治せる訳でしょ？ そんな人他に居る？
もうね、コッチから頭を下げてお願いするのがフツウでしょーが」

ヨルミちゃんがガルダさんにビツつと人差し指を突きつけ、仁王立ちで宣言する。
いやー、他人の婚約をココまで勝手に宣言出来るのはある意味凄い。

当の本人の気持ちとかお構いなしだ。本人と言えば……と目をやれば当のボルドー王子と目が合ってしまった。

なんとも気まずいというか恥ずかしいというか。しかし王子の方はそうでも無かったのか、「ふう」つと一息吐くと話し始めた。

「ガルダ、お前の負けだ。それとヨルミ！ お前も他人を便利な道具の様に扱うな。失礼だろうが！」

「すみません」

「ごめんなさい……」

殊勝にも謝る二人に頷くと、王子は続ける。

「それでな、ユマ姫よ。格好良く助けるどころか、助けられた身でこんな事を頼むのはどうかと思うが、どうか俺と婚約して貰えないだろうか」

「えっ？？」

い、今、断る流れじゃなかった？ マジで？ マジか？

「あの、折角のお申し入れなのですが、と、突然で私……」

「君もそんな風に動揺するのだな、それが演技で無いとすれば初めて驚かせる事が出来て嬉しく思う」

いや、驚いたよ。驚いたけど、良いの？ 当然ガルダさんも大慌てだ。

「王子!? 正気ですか？」

「もちろん。助けられた事とは関係無しに、こう言うのは男の方からお願ひするのが当たり前だろう？」

「い、いや……」

「俺はな、ずっと女性と付き合うのが怖かった。また守れず殺してしまうんじゃ無いかとな」

「……………」

ボルドー王子は婚約者を殺されている。女つ気が無いのはそれが理由とは聞いていた。

「ユマ姫についても同じ心配があった、ある程度距離を保たなければ殺してしまうかもと不安だった。だがゼクトールが強さを、ライダーソン老が賢さを賞賛し、守るどころか実際には命を助けられる側だった。しかし、それでも俺は婚約なんて乗り気じゃ無

かった」

「……なるほど、俺が木村にしている心配と全く同じ心配をボルドー王子は俺にしていたのか。」

カディナルと戦うならもつと早く同盟を組んでも良かったはず。更に言えば、形だけの婚約なんて貴族には珍しくも無い。

結局は俺を守る為にと同盟を組む結果となったワケで、ひよつとしたら遅きに失した部分もあるかもしれない。

だが、そこも含めて、突き放すつもりが木村に頼ってしまったっている俺の現状とダブって聞こえた。

しかし、俺は王子に強さを見せつけた。俺は守られるだけのお姫様じゃ無い。ナニが問題なんだ？

「……いや、見せつけ過ぎたのか？」

「乗り気では無かったのは、王国が乗っ取られると言う心配からですか？」
シノニムさんの問いに王子は首を振る。

「いや、ユマ姫がこの国にどんな影響を与えるか俺には解らない。だが、このままアイツに、兄であるカディナルが王権を握ったら碌な事にならないのは確実だ。ユマ姫が権力を握ったら悪魔の様に豹変するなんて、そんな仮定だらけの心配をする余裕は俺には

無いさ」

「では?」

「ああ、俺は結局、どんなに能力があろうと、まだ子供にしか見えないユマ姫を歪んだ政争に巻き込みたくなかったんだ。だが、君は見た目通りの子供じゃ無い、そうだろう?」
「ええ、何人分もの記憶が私にはあります、ですが」

俺はボルドー王子を見つめ返す。

「逆に王子はそれで良いのですか? 私は見た目通りの子供でも無ければ、人間でも無い。こんな正体不明の存在、恐ろしく思わないのですか?」

ギラギラと輝くであろう俺の瞳を真っ直ぐに見ても、ボルドー王子は少しもたじろがなかつた。

「怖くないと言えば嘘になる。だがな、少々嫁さんを恐ろしく思っている位の方が、夫婦関係が上手くいくらしいぞ?」

「そう言う問題ですか?」

「何よりな、君に抱きついて、背中に傷を受けた時。コイツと一緒に戦い、生きていきたくて思ったんだ。魔法で傷を癒やされた時、それが確信に変わった」

「そ、そうですか……」

照れるう! なんだか俺も抱きつかれてドキドキしてしまった事を思い出してし

まった。

赤くなる俺を微笑ましげに見つめる王子。イケメンでは無いが、誠実そうな顔にはその人柄が表れていた。

そして、あろう事か王子は俺へ手を差し伸べ告白してきた。

「ユマ姫、君の事が好きだ。俺と婚約してくれないか？」

「ええっ？ ああ……ハイ」

俺は真つ赤になって王子の手を取った、元より願ってもない話だ。

俺の目的は帝国と戦い、そして復讐する事。

目的の為に王国の力を借りる必要があるし、その為にはエルフの王族で唯一の生き残りである俺がビルダールの王子と結婚するのが一番早い。

だから、答えはイエスしかあり得ないのだが。それにしたって躊躇してしまうのは、

俺の男の部分、『高橋敬一』の部分、男と結婚すると言う事に激しい違和感を訴えて、逆に女の子の部分、王子様との結婚と言う物に、憧れを抱いている。

二つの真逆のドキドキに俺の感情は制御が利かなくなり、顔は赤く、目は泳いでいたが俺は何とか両手で王子の手を握り返した。

これでプロポーズはOKと言うサインとなる。王子はホツとした様子だ。

「良かったよ受けてくれて、君にとって俺なんてオジサンだろうからね」

「いえ、そんな事は……あの私、そろそろお暇いとましても宜しいですか?」

「こ、このままでは自分でも意味不明な行動をとってしまう! その前に一度落ち着きたい。一回家に帰って考えを纏めなくては。」

「そうか、送ると言いたい所だが、俺は瀕死の重傷のフリをしなくてはいけないんだっとな?」

「そだね、お兄はしばらく表に出ないでね」

惚気はウンザリとばかり、ヨルミちゃんがプラプラと手を振ると、ボルドー王子はそれをペチリと叩いた。

「気が重いが仕方ない、ユマ姫にはゼクトールを護衛に付けよう、逆に俺は死んだ人間だ。裏で動いて黒幕を釣り出す事に専念するさ」

ソレはありがたい。取り敢えず、ここ数日は護衛を厚くして貰いたい。

俺は辞去の挨拶を済ませると、そそくさと王子の私邸を後にした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ユマ姫が辞した後のボルドー王子の私室にて。

「お前本気か?」

ユマ姫が去った部屋で真っ先に声を上げたのはガルダだった。

「もちろんだ、俺はユマ姫を愛してる。アイツを愛したのとはちよつと違うかも知れんが、ただ守りたいだけでなく一緒に戦っていきたいと思うんだ」

「全部、嘘で、騙されてるかも知れないんだぞ?」

「それ位おつかない相手だからこそ、その見た目とのギャップに惹かれちゃったのかもな、それに今はまだ幼すぎるが、数年も経てば絶世の美女になるのは間違い無いだろ?」

「それは……」

王子に言われるまでも無く、多くの女性を見てきたガルダにとつてもユマ姫の美しさは別格だった。まだ幼いながら、ただ美しいだけで無く、圧倒的な華と言うか、オーラがあった。

それが成長し、女性としての色香をも纏ったら、王国の全ての耳目を集める存在になる事は疑いようが無い。

……いや、今でも自分の無垢な見た目と愛らしさすら利用して、女性人気も集める手腕は年齢に見合わず、いつそ異様で恐ろしくもあった。

「抱きしめるとな、本当に小さくて可愛らしい、ただの女の子なんだよ。なのに中身は凶暴で野獣の様な人格が宿っている」

「兄ちゃんホントに入れ込んでるねー、ロリコンじゃないって言ってなかった?」

「ロリコンと言われようが構わんさ、俺はユマ姫が好きだ」

愛おしそうに語る兄をヨルミがからかうが、それでもボルドー王子は動じなかった。

「あーこりや本気だねー」とヨルミは犬も食わないと匙を投げる。

そう言うヨルミには、兄であるボルドーが本当はユマ姫のどこに惹かれたのか解つていたからだ。

「お兄はさ、ユマ姫の目に復讐の炎が燃えているから好きになつたんでしょ」

「……気付いていたか」

「そりゃね、あのぐらいの子がさ、あの時のお兄ぐらいに、いやそれ以上にさ、復讐に狂つているのは可愛そうだと思うと同時に、何か力になつてあげたくなるよねー」

「そうさ、そうなんだ、俺とあの子はどこか似ていると思つていた」

王子の意思は固かった。ガルダもファイダーソン老も結局は根負けしていった。

「解りましたよ、ではそのお姫様をどうやって守るか話し合ひましょう」

「ワシも協力するぞい」

こうして王子の陣営はユマ姫との婚約で結束していく事になった。

今後の戦略やシャルティア対策へと、次第に議論は過熱していく。

「しかし、この王国にはおつかかない少女が多いもんじゃな」

そんな中、そうしみじみと呟いたのはファイダーソン老だった。

「それはシャルティアとユマ姫の事か？」

「それだけでなく、最近はトリアン男爵家の娘、えーとなんと云ったかのう？　まあその娘の占いが当たると評判でなあ」

「へー、初めて聞いたー」

「はあ、ヨルミ様はもつと社交界の情報を仕入れるべきですよ、ルージユって娘で信望者が大変多いんだとか、問題になっています」

「そう、洗脳されてると親御さんからワシの所にまで相談が来たんじゃが、年頃の娘には良くある事じゃと云っておいたよ」

ガルダとフィダーソン老はそう云った流行にも詳しくかった。しかし意外にもその名前は流行に疎いボルドー王子の耳にも入っていた。

「ルージユ？　そう言えばそんな娘がカディナールの奴の屋敷に出入りしていると聞いたな。アイツも占いなんて信じているのか？」

「流行には乗る方ですからね、人気取りに囲い込む事を狙っているのかも知れません」
「そうか……」

このときは誰も気にせず、ルージユと言う少女を誰も本格的に調べようとしなかった。

後に彼らはそれを後悔する事になるのだった。

婚約準備と木村へお断り

俺、ユマ姫とボルドー第二王子の婚約は大々的に発表された。

で、来週には婚約披露パーティーが開催される。

かなり急なスケジュールだが、それ以上はボルドー王子の性格的にジツとしてるのが無理との事。

そもそも、婚約っていう結婚の前段階みたいなシステムがピンと来ないのだが、貴族ともなると結婚は大イベント過ぎて年単位の準備が必要なんだと。

その上、結婚は家の都合で行われるので、結婚前だからと簡単に反故にされては堪らない、予約制度が必要になるって感じか？

当たり前と言えば当たり前だが、前世の庶民感覚では理解し難い世界であった。

では今生のお姫様、ユマ姫としてはどうか？

実はエルフの王国でも婚約と言う制度は当たり前に存在していた。

しかし俺は病弱だし、妹のセレナは……異常な魔力を持つていた所為だろうか？ とにかく、二人とも婚約相手が定められる事は無かった。

俺にだって縁談話が全く無かった訳じゃ無い、実際に同い年の男の子を紹介される機

会も無いでは無かったが、俺は将来、国を出るつもりであった為、つれない対応に徹して居たら、いつの間にかそんな話も無くなっていた。

俺としてはラッキーだと思わなかったが、周囲には酷く焦っている人も少なくなかったのを覚えている。

それだけ、貴族の将来の相手と言うのは当たり前に決まっているモノだ。

そう言う意味で、このビルダール王国も異常な状態と言える。

第二王子は二十も半ばを過ぎて、婚約者が今まで居らず。第一王子カディナールだつて婚約者のシャルティアが居るものの、いまだ結婚には至っていない。これは歴史的にも珍しい状態らしい。

全ては第二王子ボルドーの婚約者の暗殺に端を発した政情不安が原因だが、それが落ち着こうと言う矢先、追い打ちの様に現王の健康問題が取り沙汰されている。

これで荒れない訳は無いです。

ビルダール王国に動乱の嵐が吹き荒れようとしていた。

その動乱の真つ只中に居る俺は、自室で落ち着かない思いをくすぶらせていた。

「私が、婚約……ですか」

俺はシノニムさんが淹れてくれたお茶を啜りながら独りごちる。

「ユマ様でも、婚約となれば複雑な思いがありますか？」

シノニムさんが不安そうに尋ねて来るが、これは一般的な婚前のアンニュイな気持ちとは違うと思うんだよな。

俺の中の男の『高橋敬一』の意識が邪魔をするのだ。女性的な部分では納得しているのだが……

ポルドー王子を思い描いた時の胸のドキドキが、不安からなのか恋心からなのかも良く解らない。

そうで無くても『偶然』に巻き込んで殺してしまう可能性も非常に高い。

『偶然』

ここ王都に辿り着いてから、俺の身近な人間がポコポコ死ぬ事態には至っていない。

だが、神から聞いた『偶然』の性質を考えればそれも納得なのだ。

神が言うには『俺を強く思う人間』が狙われやすいのだと。

その理屈として、頭の出来がいまいちな俺に何とか説明しようとした神は、シユレディングアの猫を例に出していた。

箱の中の猫は不確定で、不確定であれば『偶然』は容易く猫を殺す。死んでいることに対して辻褃を合わせてくる。

だが多くの人間が観察している猫を『偶然』は殺せない。『偶然』はあくまで不確定な事象にのみ干渉出来るとかなんとか。

では、多くの人間に観察されている猫をどうやって『偶然』は殺すのか。

それは観察している周りの人間を殺してから、満を持して猫を殺すのだ。

誰も見ていない猫は、箱の中の猫と同じ、というワケだ。

だつたらなんで誰にも注目されない普通の少年『高橋敬一』にそんな魂を入れたのか？

それも猫に例えて、シユレディングアの猫も野良猫と混ぜてしまえば、どれがどれだか解らない……とか。

それと、普通であるが故に、たった一人を狙つて不確定要素も介入し辛いとか何とか。そんな理屈を言っていたが、全部後付けで、理由は良く解っていないらしい。

俺の魂を持った奴の死に様を統計的に分析した結果。思いつきり普通か、思い切り目立つか。極端な位が長生きしやすいと言っただけの話のようだ。

ただし目立つ方は周りの人間を大勢巻き込むので、地球で試す上で、穏当な方をチョイスしたとの事だった。

で、今生の俺は目立てるだけ目立とうと決めた。今やこの王国で、俺を知らない人間は居ない。

ならば、俺は滅多な事で死ぬ事は無いはずだ。しかし逆に身近な人間は死ぬ確率がグツと高まる。第二王子も例外では無い。

そう言う意味で、最も身近な観察者であるシノニムさんなんかは何時死んでもおかしくないと思っていたが、そこそこ運命力が強いのと、俺の事をコマとして割り切つて淡白に接しているお陰か、今のところ無事だ。

だが、第二王子ボルドーは性格的に婚約した俺を守ろうとするだろうし、運命力も至つてフツのレベルだ。

そして、巻き込んで殺してしまうには、ちよつと良い奴過ぎる。

女の子としては勿論、男の部分でもなんだかんだアイツの事は気に入っている。それだけに悩みは尽きない。

それに俺には絶対に殺したくない人間が一人居る。

「ハア〜」

「そんなに悩む事は無いのでは？ 王都に來た時の身一つの状況を思えば、王子との結婚など存外の成果と言えるでしょう？」

シノニムさんの言う事はもつともなのだが、『偶然』の事は中々に打ち明けづらい。

「取り敢えず、後回しも限界でしょう。挨拶に行かなくては」

「挨拶？ それはどこに？」

「勿論キイムラ商会です、専属を外れて貰わなければ」

「ああ、そんな話ありましたね」

シノニムさんの返事はアツサリとした物だ、彼女の中で婚約と比較して、大して比重が大きくない話なのだろう。

しかし、俺にとっては一大事だ。

今や唯一の絶対に殺したく無い人間、それが木村だ。

田中が死んじまつて、木村まで『偶然』に巻き込んでしまつては堪らない。

俺はセレナと、そして家族の復讐の為に。世界の全てを巻き込んで思つて構わないと思つていた。

だが、田中を殺し。木村まで殺してしまつたら、流石に俺も決意が鈍る。

思えば初めから頼るべきでは無かったが、ココまで甘えて来てしまつた。

「キイムラ商会に向かいます」

「了解しました」

決意を胸に、護衛を従え。俺は木村に会いに行くのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

とある昼下がり。我がキイムラ商会は一人の来客を迎えていた。

マイ・ハニーこと、ユマ・ガーシエント・エンディアン。エルフの国のお姫様だ。

もうその肩書きだけでサイツキヨなのだが、銀髪オッド・アイの儂げな容姿。なにより鈴も転がす美声が堪らない。俺の鈴口も決壊寸前だ。

「今日は大切なお話が有つて参りました」

神妙に語り、緊張感の乗る声が美しい事。

生きてて良かった。一度死んでるから、生き返つて良かったが正解か。

ちよつと宜しくないのが彼女の後ろにズラリと控えるムサイ護衛の数々。

ま、それも例の話が真実ならば納得ではあるのだが。

「それは、私の商会を専属から外すと言う話で宜しいでしょうか？」

「ツ！ その話、どこから聞きました？」

当たり前だ。どうやらユマたんを驚かせる事に開幕成功した様子。

なんか隣から「うえ？」って汚いフィーゴ少年の声が聞こえたのは無視で。

「簡単な推測ですよ、ボルドー王子との婚約。となれば相手側の商会との関係も有る、私どもを専属として使い続けるのも無理があるでしょう」

当たり前ではある。婚約して相手の神輿に乗るなら商会も相手側を使う必要が出てくる。

それにしても、婚約か。

そのニュースを聞いた時にやー、思わず傷心旅行に出ようかと思つてしまった。

でも相手はお姫様。名ばかり貴族の地位を手に入れたとは言え、所詮は一介の商人に過ぎない俺には釣り合いが取れない相手だとは初めから解つていた。

それでも諦めきれず、ぶっちゃけ子飼いのヤクザ共に攫わせようかとも思ったが、100パー失敗するから辞めた。

あー、こんな事ならもつと派手に暴れて、権力を付けておくべきだったかなー
しかし、そんな俺の後悔を無視してユマたんは続ける。

「そう、ですか……お察しの通り、今日は私の婚約と、専属の見直しについて説明に参りました」

「それはそれは、ご丁寧に」

実際、立場を考えれば俺の方を呼びつけるのが普通だ。わざわざ来てくれるのはありがたい。

と、言うべき何だろうけど、惚れた相手から直接婚約の報告を聞くのはキチーのなんのつて。

この年にしての初恋が、ひと月とちよつとで早々にブレイクだ。

しかし、続くユマたんの言葉に俺の心はブレイク、ブレイカー、ブレイキスト（最上級）の領域に。

「ただ、本当の所を言わせて頂くと。専属の解除どころか私との関係を切つて欲しいのです」

「それは!? 一体どうしてでしょう? 我々に何か落ち度がありましたか?」

「後ろの護衛の数から解る通り、私は命を狙われています。タナカの友人である貴方を決して巻き込またくないのです」

ユマトンから語られたのは、オルティナ姫の生まれ変わりを名乗る自分を絶対に殺したい勢力。そして意外だったのは。

「シャルティア様が？　ですか？」

「間違いありません、私が保証します」

あの縦ロールのお蝶夫人が暗殺の首謀者？　どころかメインの実行犯とか、さつすがの俺にも意味がサツパリ解らない。

フイーゴ少年など「コイツ頭おかしいツスよ」のサインをひたすら俺へ連打している。交渉の最中にこっそり意思疎通する為に練習させたハンドサイン。しつかり活用してるな！

客観的に見れば、変なりアクションを繰り返す少年が最も頭おかしい様にしか見えな
いのがポイント高い。

一方で、なんとも微妙な顔で少年を見るユマトンの顔。
シニール過ぎるでしょう！

そんな顔すら可愛くて、傷心に染みてちよつぴり切ない。

「なればこそ、今までも語らせて貰った様に、私に友の意思を継ぎ、貴女を守る榮譽を与

えて欲しいのですが」

「タナカの友人である貴方に守つて貰える事。私は心から嬉しかった。しかし、今の私を守る権利があるのはあの方（ボルドー王子）だけです。貴方の気持ちを利用する様な事は出来ません」

「そうですか……」

……これは完全にアレだな。振られたな。

友の意思と言いつつ、下心満載なのがバレていた。

いや、堂々と好きだとは言つたけどね……

それで王子と婚約する以上、俺をキープするような不義理は出来ない。

フィーゴ少年は顔を真っ赤にして怒っているが、貴族としてはユマたんは義理堅過ぎる位だ。

つてーか、そう言う風に意識して貰えているって意味で、王子との婚約さえ無ければ脈ありだったのかも知れん。うーん悔しい。

アイドルが結婚した様なもんだと自分を慰めていたが、結婚しても応援してねではなく、応援しないでねってのは余計にキツイ。

代わりのアイドルを探そうにもこれだけの逸材が他に居るはずも無い。

つてか、銀髪オッド・アイだけでアレなのに、亡国の姫で、悲劇の姫の生まれ変わり

でって、設定盛りすぎでしょう？

俺だけが救える、俺だけの悲劇のヒロインを探していたが。完全に手に余るヒロインを愛してしまった感。

小器用だけど、いつも主役にはなりきれない自分の特性からして、身の丈に合わない恋と覚悟していたが、それにしたってバッドエンドも甚だしい。

だけど俺にも意地がある。それに田中の吊い合戦と言うのも全部が全部嘘じゃ無い。最後に一花咲かせたいし、振られた相手に精一杯格好つけて終わりたいじゃんか。

「では、振られた男が哀れに思うなら。最後の贈り物として婚約披露宴で着るドレスを贈らせて欲しいのですが」

「それは……」

これは無下に断れないだろう。

婚約を正式に発表するパーティーは一週間後だ。

どう言う事か知らないが急にも程がある。ユマ姫が婚約発表に見合うレベルのドレスを持っていない事ぐらい、専属だった俺は勿論知っている。

当然、今からオーダーしても間に合わないし、どこからかお下がりを買って仕立て直すにもギリギリのスケジュールだ。

頭が痛い問題なのでは無いだろうか。

「本当にドレスを用意できるのですか？ 今からですよ？」

食いついたのはユマたんのお付きのシノニム女史だ。

実際に頭を悩ませていた問題なのだろう、食いつきが良い。

「勿論です、この様な事もあろうかと準備をさせて頂きました」

「そうですか……ユマ様、やはり今更にキイムラ商会と関係を切るのは難しいでしょう？ 専属は無理でもこれからも良い関係を続けるべきでは？」

「で、ですが……シャルティアは既にキイムラさんに目を付けています。これからの危険度は今までの比になりません。キイムラさんが死んだら私は……」

そう言つてユマ姫たんは俯いてしまう。

俺はその様子に感動したね。なんせ「オメー色目使ってくるんじゃねーよ、こちらら王子サマつて言う婚約者いるんじやい！」と邪魔者扱いされてると覚悟したら。どうやらある程度は本気で心配してくれてそうなのだ。

これは俄然やる気アップである。

「これでも私は田中の友人ですよ？ 商人としてだけでなく腕の方も多少は自信が有ります、暗殺者が何人来ようと返り討ちにして見せますよ」

ドンと胸を叩き、自信満々に語つてみせる俺。

対してフィーゴ少年は『ドン』とワンピース並の擬音が出そうな勢いで「お前頭お

かしいんじや無いの？」のサインを連打である。

うん、正直なトコ、腕っ節には全く自信が無い。つーか剣も殆ど握った事が無い。しかしココは覚悟の見せ所と判断、根拠の無い倍プツシュで攻めさせて頂く所存。

一方で守ってあげたい当のお姫様の方はと言えば、呆れたと言わんばかりの深いため息を一つ。

「貴方がどの程度強いかは存じませんが、それでもシャルティアには絶対に勝てません。それだけの相手なのです。信じてくれないなら結構。私の頭がおかしくなったと思うなら、それこそ縁を切って下さい」

そうして可愛い指で結ぶのは「コイツ頭おかしいツスよ」のサインである。突きつけられたフィーゴ少年は蒼白だ。

……な、なるほど。

俺のハツタリ倍プツシュは筒抜け!! 筒抜けです!

これはアレだな、「俺、地元じゃ結構なワルだったんだぜ?」って言ったら、相手も地元民だった時ぐらいの気まずさあるな。

しかし、驚くべきはユマたんだらう。

ハンドサインは難しい物ではないが、商会の幹部数人しか知らないのだ。

商談では凄いオイシイ話で絶対獲れ！　って時でも「うーん、大変良い提案なのですか」などと言ってガツツかない方が良い事もあるし。

相手が偉い人だったりすればコチラに全くメリツトの無い、頭がオカシイ意味不明な商談でも、無下に断れない時もある。

そう言う時を想定して「yes」「no」「相手が」「コチラが」「凄く良い」「良い」「普通」「悪い」「凄く悪い」「頭オカシイ」

ぐらいの単純なサインを用意している。逆に言えばこの程度しかない。

とは言え、幾ら簡単なハンドサインでも今まで見せる機会は精々数回、勿論目立たない様に動作に混ぜ込んでるので、気が付かれる道理が無いのだ。

だが、そう言えばユマたんは絶対的な記憶力があると聞いている。後から振り返って分析すれば、解読も可能だったのかも知れない。

それにしても、ユマたんは本当に底が知れない。一体幾つ隠し球を用意してるのか。更に俺は、驚異的な魔法の力まで見せて貰った。

もうね、神のチート能力とは何だったのかと言いたい程の圧倒的なファンタジーを感じてしまった。

……そして、これはユマたんりのアピールだ。

私は守られる弱い存在じゃ無いと言いたいのだ。

「私もですが、シャルティアも超常的な力を持っています。まともな人間に太刀打ちするのは難しいでしょう」

「解りました。しかし、それでも、それでも私は貴女にドレスを贈りたい」

「……では、コンペに出す事は許しましょう。しかし選ばれるとは思わないで下さい」

「十分に御座います。寛大な処置、感じ入ります」

「行きますよ！ シノニム」

「ハッ、ハイ」

そうして、ゾロゾロと護衛を引き連れ、ユマトンはあつという間に帰ってしまった。

残ったのは赤くなったり青くなったりで大忙しのフィーゴ少年だけだ。

因みに今は怒りで赤くなっている。

「キー、アイツめー！ アレだけ世話になっておきながら、コツチの好意を馬鹿にしてー」

一人で憤っている。中々頭の回転も速い奴なのだが、ユマトンが絡むとどうにも愉快に変わってしまう。

「よし、少年。君には仕事があるぞー！」

「え？ なんですか？」

なんだかんだ、仕事と言うと真面目になるのが良い所。

「これは君にしか出来ない仕事だ、上手くすればユマ姫に一泡吹かせられるかも知れない」

「なっ！ なんです？ 僕なんでもやりますよ！」

ん？ 言つたね？

「宜しい、厳しい戦いになるぞ？ 覚悟は良いな？」

「ハイ！ 頑張ります！ 僕、何をやれば良いですか？」

ユマ姫のドレス、コンペに出すならマネキンに着せたって面白く無いよなあ？

「女装だ！」

「え、？」

私の為に争わないで

「思った以上に騒ぎになっていきますか？」

「そうかも知れませんが」

シノニムさんの報告に焦る。

俺とボルドー王子の婚約は思った以上の反響があった。

良い方にも悪い方にもだ。

なんだかんだ王族は国の象徴。そこに他国の血が混ざる……どころか、この世界ではいつそ森に棲む者^ヅと言う化け物として扱われている種族の血が混じるのは、ユマと言う個人には好意的だった人でも複雑な気持ちになるようだ。

一方で俺の熱心なファンにしてみれば、『王子サマとの結婚』と言うのは物語の理想的なゴールとして祝福してくれている。

だが、おとぎ話は王子サマと結婚したらめでたしめでたしだが、俺はソコで終わりにするつもりは毛頭無い。

そして俺と王子との婚約に危機感を抱く人間もそれを恐れている。

なんせ、俺は帝国に故郷を追われた姫だ、帝国への恨みは隠しようも無いし、帝国だっ

て俺を狙っている。

そんな人間と王子が婚約など、その存在自体が帝国を刺激するに十分。

主戦派と和平派、そして種族や民族差別の問題まで、ビルダール王国は街中で一般市民が唾を飛ばして意見を交える程の騒ぎになっていた。

治安も悪化していると言うし、命の危険は更に倍。

そして、もう一つ微妙な問題が……

「私とポルドー王子が駆け落ちや心中まで考えている。との噂ですが？」

「議論は過熱するものですから……」

シノニムさんは「さもありません」と言わんばかり、俺も言いたい事は解る。

つまりだ、

「森に棲む者との婚約、この歳での婚約なら数年経つたらすぐに結婚だろ？ 王族に化

け物の血が混じるのは……」

「はあ？ お前、種族を越えて愛し合う二人を引き裂くのかよ！ この婚約が認められないなら二人は駆け落ちするつもりらしいぞ」

と、話がエスカレートしているらしい。

確かに、物語の筋的にも恋愛結婚じゃないと締まらない。俺の支持層は俺とポルドー王子がラブラブなのだとしている。

「そうでないと、国を追われた姫が人気が無い第二王子を利用して国を乗っ取り、帝国へ積年の復讐を果たす、そんなホラーになってしまう。」

「いや、紛れも無い事実なのだが、俺の支持者は夢見がちな女の子が多いので、そういうイメージは致命傷になりかねない。」

「心底王子に惚れ込んでいるお姫様で居ないといけないのですかね?」

「そう言った甘酸っぱい空気は、女性が最も好む所ですから」

「正直そういうのは最も苦手なジャンルだ。プリルラ先生の男を口説くテクニクともまた違うだろうし。」

と、なれば一応練習しておきたい。

「ではシノニム、王子役をやって下さい。夢見る少女の練習をしてみます」
「必要ですか? いえ、やってみましょう」

「なんだかんだシノニムさんも特殊工作員、そう言った演技はお手の物。スツートと息を吸い込むと、さっそく演技に入った。」

設定はズバリ、婚約発表会だ。

「ユマ、見てご覧! 僕たちを祝福するために多くの人が来てくれたよ」

……いやいやいやいや。

「ボルドー王子は俺を呼び捨てにしないし、そんなキザっぽい口調で話すか? まて

よ、ボルドー王子側もラブラブって設定なら間違いないじゃ無いか？

「うふふ、そうね。私達二人の幸せ、みんなにちよつとだけでも分けてあげたいわ」

そりゃね。そつちがその気なら、俺だって負けないよ？ 多少は臭くなるのは仕方無い所。

ウツトリした俺の表情に動じず、シノニムさんはキリツとした表情で答える。

「それは反対だな」

「あら？ どうして？」

尋ねると、シノニムさんは俺の肩を抱き寄せ一言。

「君の愛は僕が独占したいからさ」

「もうっ！ わがままなんだからっ！」

俺はシノニムさんにしな垂れかかる。

何だコレ？ 意味有ったか？ このやりとり。

——バサッ

その時、扉が開くと同時、洗濯物が落ちる音。

「何やってるんですか？」

呆然としたネルネがソコに居た。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ、外では凄い騒ぎになっているのに遊んでいたんですか?」

「遊びでは無いのですが……」

ネルネは呆れて我々の言い分は通りそうにない、どうしてこうなった!?

「なんか殺気立った人達が大勢、屋敷の前にたむろしていて怖いです」

ネルネは洗濯や買い出しで外に出る事も多い、身の危険を感じている様だ。

どんなもんかと、窓を少しだけ開けて様子を窺ってみれば(曇りガラスだから開けないと外が見えない)正に二つの団体が取っ組み合いの喧嘩を始める所だった。

恐らく片方は俺の支持者達で、もう片方は反対派だろう。

俺はそつと窓を閉めた。

「どうしましょう? 暴動が始まったようですが」

「放っておきましょう、じきに衛兵が鎮圧します。今、この屋敷にはボルドー様の肝いりの優秀な兵士も詰めていますし、問題ありません」

シノニムさんは何時も冷静だが、それじゃ面白く無い。

「ですが、市民を暴力で鎮圧するのは気が進みませんね、人気も落ちるでしょう?」

「それは……仕方が無いのでは?」

「うふふ、先程の特訓の成果、見せる時では無くって?」

そう言つて、俺は可愛らしく笑つたつもりだったのだが……

「姫様……怖いです」

ネルネには不評であった。

「取り敢えず、ネルネは拡声器を、シノニムはギットの実を用意して下さい」

「？ 拡声器はともかく、ギットの実ですか？」

「ええ、シノニムには私とボルドー王子の愛に嫉妬する、未婚の女性の役をお願いします」

「……ええ、ええ。そう言う事ですか。……解りました、未婚の女性ね……全力で務めさせて頂きます」

「え？ ええ？ 意味が解りませんよ？」

ネルネと違ってシノニムさんは理解が早くて助かる。

……いや、理解が早すぎて怖いって言うか。他意は無かった所まで余計に理解されたって言うか。

シノニムさんの目が冷たい。

——素直に後悔してます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ネルダリア領主オーズドの屋敷。

そこをユマ姫が宿にしていると言うのは周知の事実であった。

そのため、ボルドー王子との婚約の噂が駆け巡る昨今、その噂の真偽を確かめるために屋敷の前には多くの人が集まっていた。

しかし、集まった人々の心は一様ではない。

一方はその婚約を祝福するためだが、一方は断固反対と気炎を上げている。

「化け物が王国を汚すな！」

相手は貴族と同等の人物。直接的な物言いは避けていた反対派だったが、にらみ合いが続き、遂に過激な言葉が放たれる。

しかも、口を突いた言葉も、話す当人も良くなかった。

「何言ってるんだ！ お前の方がよっぽど化け物みたいな見た目じゃないか！」

擁護派から放たれた言葉は正にその通り、二人の婚約に反対の声を上げる女性は、それはそれは醜く、お前こそ化け物だろと言いたくもなる様な見た目をしていた。

実の所……その女性はまさしく暴動を発生させるためのトリガーとして、婚約反対派の貴族から雇われていた。

『醜い化粧』を施し、ツツコミ待ちの暴言を吐き、相手から暴言を引き出すと、夫に扮した男が掴み掛かる。

たちまち発生した暴動は屋敷の衛兵に鎮圧されるも、更なる話題と共に潜在的な婚約反対派を決起させるきっかけとなるハズだった。

……だが、その時。

良く通る澄んだ女性の声が、荒ぶる男達の怒声をもかき消す程に大きく響いた。

「見て！ 二階の窓！ ユマ姫よ！」

声につられて人々が見た先、開け放たれた窓に銀髪の少女が姿を現した。

「おっ！ おおっ！」

男性陣は声にならない声を上げ、ハアつと女性陣は息を呑む。

目は大きく、耳は長い。人間とは明らかに異なる容姿だが、それは醜いどころか人間離れした美しさを誇り、流れる銀髪や華奢な体つきも、全てが強制的に人の目を奪う程の魅力に溢れていた。

「皆さん、私の事で争わないで下さい！」

可憐な声が響く。本来ならユマ姫の魅力だけで暴動は収まっていた。

それ程に見る者を圧倒的し、醜い心を浄化する美貌であった。

ただし、それでは『仕事』で来ている人間までは止まらない。

「ユマ様ア！ あんたは！ 王国を乗っ取るつもりですか！」

「この国を血で染める気ですか！」

「森ザに棲む者バの血を混ぜるな！ 王国の血を汚すな！」

まだ幼い少女に向けるには、あまりに苛烈な言葉。しかし投げつけられたのは言葉だ

けに止まらなかつた。

「化け物め！ 森に帰れ！」

良く通る女性の声と共に、投げつけられたのはギットの実。

赤い果汁を称えた果実は、寸分違わず二階の窓際に立つユマ姫に命中した。

「痛いっ！」

上がった悲鳴は先程の毅然とした声では無い、見た目通りの、か弱い少女の声だった。潰れた果実は赤い果汁で姫を濡らし、痛々しい姿を晒していた。

集まった人々は余りの事に言葉を失う。あれほど気炎を上げていた反対派も毒気を抜かれ、可愛そうに思ってしまう程だった。

——誰も、その果実が投げられたのが庭の中、より屋敷に近い所などと、気が付く者はいなかつた。

お付きの女性が慌ててユマ姫を窓から遠ざけようとする様子は、通りからでもハッキリ見えた。

しかし、ユマ姫はそれに抵抗した。

必死に齧り付く様に窓に取り付いて、ギットの実で濡れた顔も厭わず大声で訴えた。

「私はっ！ ただ、愛した人と！ 愛した人の側で！ 一緒に居たい！ それだけなのです！」

ユマ姫の慟哭は集まった人々の心を激しく揺らした。

そして侍女が引きずる様にユマ姫を部屋に引っ張り込み、パタンと窓が閉まるまでの様子を呆然と見つめる事しか出来なかつた。

以降、ユマ姫とボルドー王子の恋愛は悲恋の物語として熱く語られる事になる。

それに文句を言うなど、恋を知らない無粋な人間と罵られる事になるのであつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「このギット、美味しいですね」

俺は顔に付いた果汁をペロリと舐める。

「はしたないですよ！ 今切りますから」

シノニムさんは予期していたのか、用意していたギットの実を一つ、綺麗にナイフで皮を剥いてくれた。

俺はそれを頬張りながら笑う。

「それにしても、全力でぶつけ過ぎでは無いですか？ 本気で痛かつたですよ？ シノ

ニムさん？」

「失礼しました、独身女性の嫉妬が乗ってしまったものですから」

「うふふふふ」

「おほほほほ」

「……本当に仲が良いですね、えっと……良いんですね？」

笑い合う俺達に、何度目かの呆れたネルネの声が掛けられた。

ドレスの競技会

競技会コンペの日がやってきた。

王族との婚約の意味は重く。格を考えれば今までのパーティー用のドレスでは失礼になってしまう、……らしい。

新しいドレスを用意するのはシノニムさんにとっても頭の痛い問題だった。

今まで楽士や料理の競技会を行ってきたが、いずれも木村が勝っている。

しかし今回は貴族の礼服、ドレスの作成だ。

一流の針子は一朝一夕で育たないし、布の仕入れルートも信用第一。新興の商会じゃ手が出せない分野と聞いている。

しかも今回は致命的に日にちが無い。コンペで選ばれてから三日程度しか時間が取れない。

普通はそれこそ年単位で準備する晴れ着なのだから、とつてもじやないが一から作っていたら間に合わない。

その為、元となるドレスをリメイクする事になるのだが。まずそんな高級素材のドレスを手に入れるのが既に難しい。

その上で、入手のメドが立った商會がそのドレスを元にした、リメイクのデザインを提示する形となる。

そうやって選ばれた後、実際のリメイクに入るのだが、期間を考えれば多くの針子を投入しての作業が必要で、新興の商會では無理だろうとはフィダーソン老の言葉だ。

本来、王子との婚約ドレスともなれば大々的にデザイン案を募るのだが、ハードルが高過ぎてポルドー王子が頼みにしている商會に一任するしか無いと思われていた。

新郎の衣装とも合わせる必要があるからだ。

なので今回は競技会と言いつつも出来レース。一応デザイン案を募った事実と、木村の顔を立てるために、競技会を開いてやるかと言う程度だと思っていたのだが……

「七組も候補が集まったのですか？」

「ええ、これも姫様の人気の表れでしょう」

シノニムさんが言うには、俺の人气が高まり過ぎたのが全ての原因らしい。

まず大きなハードルとなるはずの元のドレス。

かなり高位の貴族でないとそんな格の高いドレスは持っていない。それも結婚や婚約のドレスに限られる。

それだつて縁起物だし、記念にとつておく貴族が多いのだが、俺の人气が高すぎて『ユマ姫に着て頂けるなら』と容易に集まってしまったと言うのだ。

「発表形式ですが、ドレスの持ち主、または同じ貴族家のお嬢様が実際にドレスを着てお披露目をするそうです」

「そうですか……」

加えてアレだ。貴族のお嬢様にとって、自分の家ゆかりの自慢のドレスを着て、有名人とお話し出来るオイシイイベントになってしまったと、そう言う訳か。

「ではそろそろ行きましょう、まずはドルト商会とバンザール侯爵家のドレスとなりませう」

シノニムさんが言うには、既に個室に待たせているらしい。

二つの応接室を交互に使い、終わった組から退場してもらい、お嬢様はリビングルームでアイスでも食べながら待つていて貰い、最後はみんなでおしゃべりして、結果発表して解散と言う流れらしい。

「では、行きますか!」

「そんなに気負わなくても宜しいのでは?」

そう言われても、なんだかんだ同じ年ぐらいの貴族のお嬢様と話すのが一番緊張するんだよ。

価値観とか違いすぎて、話が合う気がしないんだよねえ……はあ、気が重い。

……想像通り、俺はテンションの高いお嬢様に圧倒されていた。

「私、ずっとユマ様と二人でお話ししてみたくなって、噂以上にお綺麗で！ 憧れます！」
「ありがとう、でもユマ様だなんて。今の私はただの国を追われた女の子に過ぎないのですから」

「でも、ボルドー様と婚約するのでしょうか？ そしたら今度はこの国のお姫様になる訳でしょう？ 二つの国でお姫様なんて聞いた事がありませんわ！ なんて素敵なの！」
「……え、ええ、大変名誉な事だと思うのですが。夜寝る時なんて、いつも不安で押しつぶされそうになりますの」

「そうよね、貴女に国の命運が掛かってしまっているのですもの。でも、他人事だから気楽なモノねと笑われてしまうでしょうけれど、壮大な運命に巻き込まれるって、女の子の憧れなのよ！」

「……もし、代われる物なら代わって欲しいと願わない日は無いのです、何故私なのかって、いつもそればっかり」

「わかる！ わかるわ！ でも！ 一目見て解ったわ。私じゃ貴女の代わりにはなれない！ だって凄く可愛くて、本当に物語のヒロインみたいなんですもの」

「そんな！ 王国の女の子はみんなお洒落で、私なんてと物怖じしてしまっ」

「まあ！ まあ！ まあ！ ユマ様でそれなら私なんて外に行く顔が無くなってしまっ

わ」

などなど、ちっちゃなおばちゃんのおくぐい来る。

ドレスやデザインそっちのけで喋るもんで、商会の人涙目、俺も若干涙目だ。

とは言え実際の所、商会も貴族のお嬢様も、俺への顔つなぎに来てる感がある。

ドレスの由来を説明する過程で、貴族家の説明も出来て一石二鳥と言う程度。本気で狙いに来ている感じはしない。

ボルドー王子が推薦した商会は流石に真面目に服をプレゼンしていたが、他は大体がそんな感じで、対応するこっちはドツと疲れてしまった。

そしていいよ、残るは木村んトコのドレスだ。

ココは待たせても大丈夫だからと後回しだったらしい。

「次はキムラ商会の番なのですが、キムラ商会は貴族家のドレスを使用していません」

「どう言う事です?」

「新品のドレスを用意したとの事、この短期間ですから、あらかじめ用意してあったのかと……」

「うっ!」

愛が重い! 重すぎる!

しかもその愛が、同性だったかつての友人からの物なのだから、なんとも言えない物がある。

「つてか、俺と結婚する事を夢見てドレスを作っていたんじやあるまいな？」

それにしたつて俺だつてまだ色々……その、成長するだろうし！（胸回りを抑えながら）

「折角今のサイズで作つても、全くの無駄になる確率が非常に高い物をウツキウキで作つていたと思うと、もはや重いと言うよりキモいまである。」

「ですが今回、商會長のキムラ様は別件があるとかで来ておりません、代わりに人間がドレスを着てプレゼンを行う様です」

「？ ドレスを着て、ですか？」

「はい、そう書いてあります」

メモを見るシノニムさんも困惑している。

女性にして商會の幹部と言うだけで珍しいのに、俺のサイズを考えればその人の体格はまるきり子供だ。

あり得ないと思うのも無理は無いだろう。

「とにかく会つてみましょう」

そう言つて、応接室に入ったのだが。そこに待っていた人物を見て、俺は驚く事にな

る。

それは、王国の女性に対して初めて抱いた感情だろうか？

——自分よりも可愛いかも知れない。……なんか、悔しい。

つと、コレが嫉妬なのだと思って思った。

そしてそれと同時にこんなに綺麗な子がいたと言う事実には、俺は何故か嬉しい気持ちにもなってしまった。

はしほみいろ
榛色と言うのだろうか？ 茶に赤や緑が僅かに混じり合う瞳と髪色、薄い唇にほつ

そりとした顎のライン、不安げに寄せられた眉はなんとも言えず可愛く思えた。

「あの、初めまして。で、宜しいですよね？」

恐る恐る聞くと、相手は不安げな様相を一変、どこか恨めしそうな目で睨んでくる。

初対面だと思つたが、何か恨まれるような事でもしたのだろうか？

いや、彼女がキイムラ商会の人間だとすると、ここに来て専属を外すどころか関係を切りたくないと言われれば、俺に対して恨み骨髄なものも無理からぬ所。

「うっ、いいえ。以前に会っています」

しかし、顔を赤らめて少女が言うには、俺はこの人と会った事があるらしい。

どこだ？ 参照権!!! 該当データ無しッ！ データありません。

「いえ、間違い無く初対面だと思うのですが？」

尋ねる俺に、シノニムさんから待ったが掛かる。

「ユマ様！ ユマ様！」

「なんです？」

「多分ですが……この方は」

「え、？」

シノニムさんの予想は斜め上、まさかと思いつつ確認するも、本人から帰ってきたのは間接的な肯定の言葉であった。

「ううっ、笑うが良いですよ」

「ほ、本当に？ 本当なのですね??」

ア、ツ、ツ、ツ

木村の腰巾着だったフィーゴって男の子かーっ

この世界で初めて自分より可愛いかも、と思つた相手が男の子かー

罪深いなー

つてか、こんな可愛い少年を囲つてるのか木村は。

アイツ、もう死んだ方が良いよな。

変態だーっ！ おまわりさーん。

フ、ツ、落ち着け。

俺は素数なんかには負けたりしない！ 取り敢えずお茶を飲もう。
 「ふふふ、驚いたようですね！」

すると、羞恥で赤くなっていたファイゴ君が一転、突如勝ち誇った顔で挑発してくるではないか。

そんな顔も可愛くて、どう反応して良いか困るんだが？

でも、確かに驚いた。

驚き過ぎて、ペロペロしたいのかペロペロして欲しいのか、ペロリストなのかペロス
 トレイカなのか。

何が何だか解らない。

脳内で巻き起こる革命に次ぐ革命に、受けとか攻めとかそう言う次元を越えてしまっ
 ている。

ホモなのか？ レズなのか？ 揺れる狭間でペーコンレタストマトサンド B L T S。

お茶だ！ お茶を飲んで落ち着くんだ！

「ふふつ、まるで『タカハシ』みたいな間抜け面でですね？」

「ブツ」

えあ？ はあ????

「お茶を吹くのが癖になっていますよ？」

シノニムさん？ 今ッ、それどころじゃ無い！

「あの？ 『タカハシ』とはなんですか？」

「あ、ウチで飼っている海トカゲです」

「そっかー」

木村^{アイツ}ホント死なねーかな。

もう意味が解らなすぎて、どうでも良くなってきたぞ！

とは言え、気になるのはドレス。

「あの、それで……あなたの着ているドレスについてなのですが……」

そんでね、少年が着ているドレスの方もツツコミ待ちと言うか、非常に気になる仕上がりなの。

「このドレスは、いつかアナタに着て貰うんだと、キムラ様が丁寧に丁寧に、一針一針縫った物です」

やっぱりかー、キツツイ！ 重ツイ！

何がキツいって、一番キツいのが、ファイゴ少年が自らの肩を抱きすくめ。愛おしそうにドレスの縫い目に指をなぞらせる所だ。

もう俺は口がガバガバ。お茶をこぼしながら、呆然とその様子を眺める他に無い。

倒錯していた少年はハツと我に返ると、キツつとコツチに向き直り、ピツつと指さし

てくる。

「なのに！ アナタは王子と結婚して、キイムラ様を捨てようとしている！」

「……………」

えーコツチだって木村を守ろうと必死なんだっての！

つてかアレだよ？ むしろここでキツパリ断らないと、キープみたいで酷いよね？

酷くない？

つてか、最後に最大のツツコミ所なんだけどさ。

「あなたの気持ちは解りました、では次に、そのドレスのデザインについて教えて頂けますか？」

「これは……、キイムラ様の故郷で流行っているデザインだと聞きました」

「そ、そうですか……………」

出ました、地球への熱い風評被害。

俺はこの衣装を知っている。設定資料も薄い本も買ったから間違いない。

ゴスゴスロリロリしながらも、絶妙に体のラインが出るフェイティッシュな衣装。

バルディアン戦記のリユーナ姫の衣装に間違い無い。

こんな服が流行っているのは、一部のマニアの間だけだと弁解したい。

なるほどなーリユーナたん、銀髪エルフだからなー、俺にダブらせるのも仕方無いよ

な

……つてなるか！ たわけが！

「いくらなんでも、王子の礼服とデザインが異なり過ぎて論外でしょう？」

「で、ですが、ドレスの素材も、刺繍も、間違い無く一流の出来映えです！ 仮に選ばれなくても、一度は袖を通して欲しいと言っていました」

フィーゴ少年の弁解も空しい。

木村の奴、ただ俺にコスプレ衣装を着せたいだけじゃねーか！

「とは言え、ユマ様は異国の姫なのですから、多少デザインに個性がある位が宜しいと思われませんが？」

シノニムさん！ その助け船はいらない！

「こんな扇情的な衣装では問題でしょう？」

「そうですか？ それほどでも無いような？」

体にピッタリ張り付いて腰回りのラインが見えるが、露出は多くない。

国が違えば、エロの基準が違うのかも知れない。逆に肩とか出すのは非常に大胆な衣装って扱いはなんだよね。

「目新しく、キムラ商会らしい斬新さを感じます。それに素材の高級感も申し分ありません、ただ私には衣装以上に気になる事が幾つかあります」

そう言つて、シノニムさんがグイツとフィーゴ少年に食いついてきた。

「まず、その髪。カツラですか？」

「は、ハイ」

「染めているのですか？ 染料は？」

「僕の瞳の色に合わせて、キムラ様が調合しました」

「では、次。その睫毛です。あなたはそんなに睫毛が長かったのでしょうか？」

「いえ、コレは付け睫毛です。付けるのが大変で、痛くて」

「付け睫毛！ そんな物まで！ では？ その肌は？」

「昔から商品の化粧水と乳液は宣伝も兼ねて使っていたのです、今回はファンデーションを何種類か使つて顔にメリハリを出した、とか言つてました」

「凄いメイク技術ですね、噂以上です」

シノニムさんは唸る。

どうも、キムラ商会の本領は食品、そして何より化粧品だと言われるらしい。そして商會長の木村自身が施すメイクは神業とまで言われてるとか？

なるほどー！

そのメイク技術を強調するために、わざわざ男の子を女装させたのかー

つて信じるか！ ボケエ！ ホモオオ！

「ユマ様、やはりキイムラ商会を切るのは無理筋です、ボルドー王子推薦の商会に衣装をお願いし、メイクはキイムラ商会にお願いするのが落とし所じゃないですか？」

「う、アナタはそれで良いのですか？」

俺は一縷の望みを託して女装少年に問う。

「あの人が幸せなら、それで良いです……」

いやー純愛だねー。もう、勘弁して下さい。

とは言え、衣装はやはりボルドー王子の商会の衣装に決まりかー

文句をブツブツ言ったけど、結局は俺もオタク。

リユーナちゃんの衣装、正直言つてちよつと着てみたかった……

女の子に生まれ変わって間もなくの頃、大人になったらコスプレとかしてみたいって思っていたのを思い出してしまった。

その後は健康問題が長引いて、服なんて笑われない程度に楽で負担にならないものならなんでも良いとなってしまう。

つまり、前世と服の選択基準が同じになってしまつて、お洒落に興味が薄れてしまつていた。

そんな俺が、この服を着てみたい！ っと思つたのは前世を含めてもコレが初めての経験だっただけに、晴れ舞台上で着れないのはちよつと残念かも。

……などと思つてしまつた俺に、罰が当たつたのかも知れない。

事態はフィーゴ少年を連れ立つて、貴族のお嬢様方が待つリビングに戻つた時に急転した。

「「「「「キヤー—————」」」」」

迎えたのは、黄色い絶叫だ。

「ホントに？ ホントに男の子？」「凄い！ お肌ツルツル」「睫毛長い！ これがお化粧？」「こんなドレス見た事無いわ！ 綺麗！」

「あう、……あうう」

フィーゴ君は六人の腐り始めの女子にもみくちやにされた。

男の娘。

倒錯した危険な魅力は、お嬢様方を一瞬で虜にしてしまつた。

先程までは、あんなに俺にチャホヤしてくれた女の子達が、今ではすっかり女装少年に夢中である。

そう言えばシノニムさんも先程、若干鼻息が荒かつた気がします。

「素敵ですわ！ このドレス！ あのキイムラ商会に言えば作つて頂けますの？」

「あの、コレはキイムラ様の手作りなので注文は受けられないのでス」

「え？ ええっ！ 本当に？ じゃあ、キイムラ様がユマ様を愛するあまり、手作りのドレスを作ったって噂は？」

「あの……本当です」

「「「「「キヤー……キヤー……」」」」」

いちいち絶叫が五月蠅い。

悲鳴を聞いて度々衛兵が飛び込んで来るので、俺はシッシと追い払う作業に必死だ。

「愛する人に手作りのドレスを贈る、それだけでも素敵なのに」

「それが他人との婚約を発表する舞台上で着ていくドレスだなんて！」

「悲恋だわ、なんて一途なの！」

「でも、ユマ様を見てると。惚れ込んでしまう殿方の気持ちもわかるわ」

「二人の男性に愛されるユマ様、悩んだ末に王子を選ぶも、揺れ動く気持ち！」

「はあー私もこんな風に愛されたいわ」

なんか、スッゲー盛り上がってる。

生暖かい目で見守っていたら、その熱はコッチにまで飛び火してきた。

「ユマ様！ キイムラ様の最後の贈り物。選んであげなくちゃ可哀想です！」

「私達、断固キイムラ様を応援します！」

「……え？」

なんだろう？ 流れについて行けない。

なんかボルドー王子の選んだ商会、そのドレスの提供元の貴族の女の子が、控えめに手を上げている。

「あの、私、衣装の提供を辞退しようかなって」

「私もー」「私もよー！」「この衣装を着ているユマ様を見たいわー！」「そうそうー！」

えー

そうして、結局俺は木村に三度目の敗北を喫するのであった。

いや三度か？ もう数えるのもいいや、ハイハイ、ワロスワロス。

俺はすっかり投げやりになってしまふのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一方で同時刻、ボルドー王子の私邸はヒッソリと静まり返っていた。

殆どの護衛はユマ姫が居るオーズドの屋敷に詰めており、最近暗殺者の襲撃が有った場所とは思えぬ程に手薄であった。

これもヨルミの策。

ここまで手薄で有れば、ボルドー王子はここに居ない、それどころか既に死んでいるのでは？ と思わせる手管である。

しかしボルドー王子はここから一步も出ずに、気付かれぬように部下を巧みに動かして暗殺者の尻尾を掴もうとしていた。

死苔茸チリアムの毒は僅かでも致命傷。暗殺者はボルドー王子を殺したと思っっている事だろう。

事実、第二王子は既に死んでいるのだ、伏せて一步も動けないのだ、実行犯が流したと覚しき噂が流れており、その出所を必死に追っている段階だ。

……しかし結果は芳しくない、全ての情報は巧妙にコントロールされていた。

そのために、今日は逆転の一打として一人の男を呼び寄せていた。

「君に来て貰うのは同じ男としてどうかと思っただがね」

「お気になさらず、ユマ姫を狙う暗殺者を退治したい。その思いは一緒で御座いませう」

ボルドー王子の対面に座る男こそ、王都に名を馳せる新進気鋭の商会の長、キイムラ男爵であった。

商会長の領分を越え、ボルドー王子の婚約者となったユマ姫に入れ込んでいると評判で。ボルドーとしても顔を合わせづらい相手。

それでも今回の難題、頼るべきはこの男以外にあり得なかった。

「君に作って貰いたい物が有る。適任をと調べれば皆が口を揃えて君しか居ないという

のでね」

「それは光榮に御座います、未熟な身なれど、精一杯務めさせて頂きます」

提案されたのは納期が短い一つの仕事。しかし木村は澄ました顔でこの難題を了承する。

その澄ました様子に、ボルドー王子は何故か苛立ちを覚えた。

「今日はドレスの選定があるはずだが？ そちらは良いのか？」

「私がおらずとも、ユマ様は私のドレスを選ばれるでしょう」

「その自信はどこからだ？ ユマ様は絶対に選ばないつもりと言っていたが？」

「私の思いは必ず届くと、そう信じておりますので（腐女子達に）」

自信満々のキムラ男爵の様子に、ボルドー王子は益々苛立ちを募らせる。

「君は……、いやお前は。私の婚約者であるユマを好きだと公言しているとか？」

「はい、憧れの女性です」

「まだユマ様は十二、お前との年齢差は相当な物だろう？ お前は子供が好きなのか？」

「失礼ながら、それはボルドー殿下も同じでしょう？ 歳に関わらない魅力をユマ様はお持ちでいらつしやいます」

「そうか、だったら俺とは違うな」

「と、言いますと？」

不思議そうにするキムラ男爵に近寄り、ボルドー王子は耳元でささやく。

「ユマ姫には裏の顔がある。清纯な少女の顔の裏に、大人顔負けの恐ろしい顔を隠している。お前の知っている可憐な姫はアイツの一部分でしか無いぜ」

王子には、ユマ姫を戦友と認めるだけでなく、あんな厄介な女を愛せるのは俺だけだと言う思いがあつた。

ユマ姫の表の外面だけを見て、好きだと恥ずかしげも無く公言する男に、あの裏の顔突きつけてみたいと言う意地悪な感情が抑えきれなかつたのだ。

……しかししかし、ボルドー王子が相手にしているのは稀代の変人だつたのだ。

「……ボルドー殿下はその二つの顔のギャップに惚れ込まれたのですか？」

「ギャップに？　そうか、そうかもな」

現代の萌え文化に、首までどっぷり浸かつた木村にとって、当たり前と言えるのがギャップ萌え。

しかしボルドー王子にとっては、指摘されて初めて気が付く概念だつた。

その様子に木村は目を細める。

「一粒で二度美味しいと、ますます殿下が羨ましく思います」

「そうか……しかし並の男ではあの少女は扱い切れんよ」

「ハッ、その通りで御座いましょう」

自分が『並の男』だとは欠片も思っていない物言いに、ボルドー王子も苦笑が漏れる。「ふっ、お互い変なのに惚れたもんだ。苦労するぞ」

笑いながら木村の肩を叩くと王子は部屋を後にした。

部屋に一人、残された木村もホッと息を吐く、木村も流石に呼び出された間男みたいな具合の悪さを感じ、緊張していたのだった。

ドサッとソファアに沈みながら呟く。

「ユマたんは多重人格っ」と

嘘発見器をすり抜けたと聞いた時から、木村はその可能性を考えていた。

「にしても、亡国の姫で、オッド・アイで、銀髪エルフで、自称伝説の姫の生まれ変わりのサイコな多重人格とか、属性盛りすぎ問題」

……まあ、だから好きなんだけど。

と、口の中で付け加えるも、彼もまた厄介な娘を好きになったと自嘲するのであった。

★針千本

「はあ……」

思いがけず、ため息が漏れた。

「新婚さんのため息は幸運が逃げるって言いますよん」

耳元で馬鹿みたいに明るい声が返される。

モジャモジャの赤髪にそばかす。それでいて底抜けに明るいこの人は針子さんである。それも十人以上の針子さんを従えるリーダーだ。俺は十人以上の針子さん達に取り囲まれていた。

……逃げ場は無い。

ココはオーズ邸にて宛がわれた俺の私室。そこでドレスのお直しの真つ最中だった。

木村のドレスは俺の為にと一から作られたモノ。そして、木村の商会は専属で、何を頼むにもアイツの商会が窓口になっている。

つまり、今までも何着かドレスの注文をしてるので、俺の体のサイズはアイツに筒抜けだったと言うわけ。

だから、ドレスのお直しの工数も比較的少なくて済む……かと思いきや、今度は斬新なデザインが問題となった。

体のラインがハッキリと出る服なので細かい微調整が必須、更に言えば競技会^{コンペ}でフイーゴ少年に着せる為に、緩めてしまった箇所も幾つかあつたらしい。

……ちよつとの細工で着られたと言うのに悲しいモノがあるが、ソコは気にしたら負けだろう。

そんなワケで木村のツテで集められた女性針子が、何人も集つて寄つてたかつて採寸と修正、試着を繰り返しながら細かい調整を行っている最中だった。

ドレスの作成者の木村もこの作業には立ち会っていない。ドレスを着たり脱いだりするの当然か。

俺の私室が今や女の戦場と化していた。元男の意識では全く落ち着かない。

だが、やる事が無いので、シャルティアの殺し方や、健康値の影響を受けながらの魔法の制御、あとは『参照権』で本を読んだり、見た目よりは忙しく過ごしては居る。

逆に言うところ、そういう事をしてから男の意識のまま、この場に馴染めないで居た。そんな時に飛び込んで来たのがシノニムさんだ。顔色が悪い、何事だろうか？

震える声で話すのは、来客の報せだった。

「ソルダム軍団長……ですか？」

今まで絡みが無い人物だ。アポ無しでやって来るとはふざけている。だが、そんな輩は大勢居る、敢えてシノニムさんが取り次いで来る理由とは？

「よりによつて、王子から貸し出された近衛兵が懐柔されています」

「へえ？」

つまり、なんだ？ 断ろうとすれば押し入つてくると？ 随分とヤンチャじゃないか。

シノニムさんは、近衛兵相手だからと身体検査に抜かりがあつた事を詫びるが、何も相手は俺の首を取ろうと言う剣幕では無いらしい。

俺の魔法と同じだ、悪意が無いからこそタチが悪い、主戦派として帝国脅威論を唱える小娘が気に入らないと言う話なのだろう。

実際、いざ戦争となれば初めに矢面に立たされるのが彼らだ。

近衛兵長のゼクトールさんが近衛騎士や貴族の保有する騎士戦力の頂点だとするならば、軍団長はいわば雑兵の頂点だ。

侮るなかれ、お世辞にも練度が高いとは言えず、士気も低く、意識も低い彼らを纏めるのは並大抵の事では無い。

貴族階級では無い人間が、身一つで目指せる立身出世の到達点と言われる軍団長。そこに必要な資質は強さと、何より『恐ろしさ』と聞く。

育ちの悪い兵士、徴兵された農民、ゴロツキ。有事となればそんな人間をまとめ上げて出兵する必要があるのが軍団長だ。

つまり、ビビらせてケツを蹴つ飛ばして言う事を聞かせる専門家。諜報部とは言え貴族の生まれのシノニムさんじゃ荷が重い相手か。

俺はざつくばらんに命じた。

「ここに呼んでよ、時間ないし」

「ここに……ですか？」

俺の言葉にシノニムさんはハッキリと眉をひそめた。だけど、コツチだつて暇じゃ無い。丁度女の子ばかりで居心地が悪かったところだ、不快感の共有をしたいね。

通常、女の子だらけの中に男が一人つて居心地の悪さは、二人で味わう事は不可能。だけど俺だけは例外だ。

「相手は命がけで来てるんだろ？ 女ばかりで居心地悪い位でガタガタ言わせないぜ」

「しかし！」

「あんたも、その方が良いだろ？」

俺が、もじゃ髪の新子リーダーに問いかければ、あつけらかんと言い放つ。

「ん！ そうだね、期間がギリギリ、一秒だつて惜しい」

「ほら、呼んでよ、早く！」

「……解りました、ですが姫様、口調の方はご注意を」

「ああん？ わーってるよ！ ……私あやまがその様な過ちをするとでも？」

態度を一変させ、氷の様な冷たい微笑みを返してやれば、シノニムさんが薄く笑った。

「……失礼しました」

そう言つて部屋を辞すシノニムさんだけど、なんか楽しんでない？

なるほど、アポを断つたときによつほど酷いことを言われたに違いない。シノニムさんもアレで女の子、ヤクザ紛いのオッサンに恫喝されれば恐かつたろうし、腹も立つたに違いない。

これは、もう、俺がガツンと言つてやらねばならないな……

「邪魔するぜ」

そんな事を思っていたのだが、入ってきたソルダム軍団長はイメージと違った。

ヤクザと思つたら、洋ゲーとかアメコミの敵役みたいな顔だった。ハッキリ言うと、顔面が焼けただれて溶けていた。

てつきりヤクザみたいに恫喝されたのかと思つたが顔が恐かつたみたいだ。シノニムさんも案外乙女である。この手の顔は洋ゲーとかやっていると見慣れてしまう。なんで海外の人つてすぐに顔面溶かすんだらうね？ 謎。

だけど、女の子に受けが悪いのは認めざるを得ない、針子の女性達は軽いパニツクに

陥った。

三百時間ぐらいヘッドショットを狙い続ければ、その顔面が愛おしくなるのだが……
針子リーダーだけは動じていない、どんな服が似合うか考えている顔だ。全身タイツとかどうですか？　って提案したいね。

「ほらほら手を止めない！」

針子リーダーがパンパン手を叩くと、おっかなびつくり他の針子さんも作業に戻った。

シノニムさんが簡素な椅子を一つ、俺と向かい合う様に置いた。そうして壁際に戻ると片目で俺を見る、お手並み拝見と言いたげだ。

「どうぞぞ」

俺が着席を許せば、ソルダム軍団長は収まりが悪そうにそこに座った。

「こりやあまた、お忙しい所にどうも」

はい、不快感の共有大成功である。

「では、帰りますか？」

「そうは行かねえな」

牙を見せて笑うが、敵意が無い。ハツタリだ、身の危険は無いだろう。

それより、俺はどうやったたらこんな迫力満点の火傷になるか考えていた。

溶けて熱々のチョコをぶっかければこうなるか？ チョコ食べたい。

俺が、今世で味わえない至高の甘味に思いを馳せれば、ソルダム軍団長から動揺の氣配が伝わった。

こんな顔をしている癖に心の機微に聡い奴だ。……なるほど、寧猛に笑ってみせれば他の奴は怯えたか？ そうやって雑兵を支配してきたのか？

俺みたいな小娘が、どんな事を考えているかお見通し、そう言う自信で来たのに、感じたのが甘味に対する渴望じゃ、驚くのも無理はない。

いや、チョコを思つて俺はウツトリとした笑顔を向けてしまったか？ 言葉に詰まったソルダム軍団長がなんとか口を開く。

「先ずはよ、お礼を言わせてくれ、ブルンガの膝を治してくれたそうじゃねえか」
「ブルンガ？ ……ああ、あの豚みたいな男ですな」

「ヒヒツ、違えねえ！ 確かにアイツは豚顔よ！ だがなアイツの突進は豚どころかギルゴール牙猪だつて目じゃねえぜ」

「勇敢な戦士とは聞きました、膝をやられて引退したとか」

「そうよ、これが戦場での傷ならまだ救われたがな、訓練中ちつと、おふざけが過ぎた時の事故だからもう落ち込みましてよ、すっかり酒に溺れちまつてな」

「はあ……」

「それが徐々に元気で嬉しいと思ったら無いぜ、お陰でアイツ、すっかりアンタのファンだぜ？」

知らんがなと言いたい、俺は軍の偉い人だと言う事でゼクトールさんのツテで怪我を治したただけだ。変に癒着したスジを切り裂いて、正しくくつつけた。

……ただし、麻酔無しで。

ギヤーギヤー泣きやがるから、ホントに歴戦の猛者なのかと笑ってしまった。

だけど現金なモノで、抱きついて可愛らしく訊ねれば、途端に泣き止んだのを覚えて
いる。

俺がきいたのはふたつだけ。

「わたしに切り刻まれるのは、いやですか？ わたしにころされるのは、いやですか？」
じつと目をみて訊ねれば、悪くないと笑った。途端に魔法の通りも良くなった。

俺は美少女だ、美少女に殺されるなら、無為に生きるよりはマシだろう？ 俺はソレ
を知っている。

元気になった後は忠誠さえも誓ってくれたよ？ お前の知り合いか？ ソルダム軍
団長。

少しでも心が読めるなら読んで見せろと俺が薄く笑うと、軍団長は少し腰が引けた様
だった。

「ファンと言やーよ、あの堅物のゼクトールも随分とアンタに入れ込んでるんだって？」
「ゼクトール近衛兵長ですか。近衛兵の支持を得られたのは嬉しいのですが、最近は好きな食べ物はないとか意味不明な質問が多い上、サインやら握手を求めてきて……正直言わせて頂くとウザったいですね」

コレは大マジだ、あのオツサン。俺をアイドルか何かと勘違いしている。

「ウザったい！ 傑作だね！ マジかよ！ アイツ、公私混同するなが口癖だった癖に！」

「今度私が言いましょう、公私混同しないで！」と

「傑作だな！ 頼むぜオイ！ そつれにしてもよ、騎士も一般兵も区別無くアンタの人氣は高まる一方だ、ブルンガ以外にも治してくれるんだろ？ 噂になってるぜ」

「手が空けば……ですが」

「軍人にとつちや怪我は死活問題よ、それも障害が残る怪我なら何をしてでも治したいだろうぜ、アンタは軍の支持を総取りだ」

「……………」

「ましてや王子の婚約者、いつかはアンタの命令ひとつで軍を好きなように動かせる様になるんだろうなあ！」

「……………なにが、言いたいのですか？」

いい加減、オツサンの話が回りくどい。顔が無い分を補う様に、オーバーリアクションだから余計にウザい。

ソルダム軍団長は軽薄な笑みを引つ込め、真面目な顔になる。いや、顔は無いのだがそれが伝わる。

切り替えが早い、リアクションとかもそうだが、役者の方が向いているんじゃないか？ モンスター役を用意したいね。

「俺はよ、お嬢ちゃんに覚悟を問いに来たのよ」

「覚悟、とは？」

「一言で言えばよ、嬢ちゃんは戦争をするつもりだよな？」

「そうですね、否定はしません」

俺は、帝国を引き裂きたい！ それだけは揺るがない。

「それが間違ってるんだ。戦争なんてな、無いに越した事はねえんだ。それでも起きちゃう時だけで十分、自分から仕掛けよう、準備しよう。それが要らねえ戦争を却って招いちまうんだよ」

「では、王国が何もしなければ戦争は起きないか？」

「そうは言っちゃいねえが、お嬢ちゃんのやろうとしてる事が……いや、嬢ちゃんが婚約するだけで、十分戦争の原因にはなるわな、それは解ってるのかい？」

「そちらこそ解っているのですか？ 我々、森に棲む者と呼ばれる者たちは帝国と戦争をするつもりなど無かった、それでも何度も攻め込まれ、遂には滅ぼされた。我々が帝国を挑発したとでも？」

「絶対に違うと、お嬢ちゃんは言い切れるのかい？」

「言い切れますね」

「へえ、何故だか聞いても？」

「戦争の理由は帝国が臆病だからです」

「へえ？」

森に棲む者が魔獣を操ってけしかけている、そんな妄想で襲ってくる奴らだぞ？

そうでなくても奴らは俺達が超科学を持っている事を知っている、知ってしまえば放置は出来ない。ソレが人間だ。

「根も葉もない噂、それを信じて戦争を仕掛ける相手です、戦争は回避出来ません」

「しかしよお、それはザバ、いやエルフの国が帝国と話し合いをしてこなかったからだろう？」

「話し合いをして、その結果戦争が起こらないとも限りません。武器が無いと知るや、取るに足りぬと攻めてくる相手も居るでしょう」

「戦力を整えている事が、戦争の切っ掛けにもなるだろう？」

「そうですね、どっちにも転びます。しかし確実に言えるのは、今やこの世界のパワーバランスが明らかに変わってしまったという事実。これは揺るぎません、ならば少なくとも『覚悟』を決めるべきではないですか？」

化かし合いはよせよ、結果論なら幾らでも言えるんだ。事実だけを並べても、戦争の公算は大きいぜ？

「そうは言うがよ、お嬢ちゃんは戦争の本質を理解してるのかい？」

「本質とは？」

「戦争ってのはよ、人間と人間をぶつけ合ってよ、グチャグチャに搦り潰す。それが戦争だ。それで真っ先に搦り潰されるのは貴族でも騎士様でもねえ、俺達一般兵よ」

「そうでしょうね」

俺は何でも無い様に、笑った。無垢なる笑顔で。

ソコに込めた思いは、……俺も搦り潰される第一候補だ。と言う一念。

一人で潰されるのが嫌なら、一緒に踊ってやるよ。ソレじゃ不満か？ と笑いかけても俺の思いは伝わらなかつた。

「ホントに解ってんのかあ？ お嬢ちゃんの知り合いが、家族がどんだけ死んだか知らねえがな、今度はお嬢ちゃん自身がその原因を作る事になるんだぞ！」

「……あの時、私達には『覚悟』が無かつた、自分たちが『搦り潰される』側などと、夢

にも思っていないかった」

「……そうか、そうかよ」

「皆は、いつも通り一方的に『播り潰せる』と、そう思っていたのでしよう。それどころか、作業だと考えて居たかもしれません。戦争がある事すら私は知らされていませんでした。軍事演習の事実をうつすらと聞いただけ」

もつと俺が気を配っていれば、そう思わなかった日は無い。

思い出しただけで、血は凍り、目の奥から火花が散る様な痛みが走る。

「私達には『覚悟』が無かった。だからまさか王宮まで攻め込まれるとは思わず、誰も何の準備も出来ていなかった。攻め込まれてから『覚悟』を決めても、準備を始めても既に遅いのです、『覚悟』を決める事が戦争の原因だとしても、『覚悟』無しで戦争に巻き込まれるより後悔は少ないでしょう」

俺の中で、怒りと、絶望に、魔力が溢れ、ほとほと迸る。

渦巻く力は見えなくとも、皆の行動を縛るには十分だった。

唯一動けたのはソルダム軍団長だけ、そして、よりによって俺に覚悟を問うてきた。

「そうかい、でもよお嬢ちゃんが言う『覚悟』ってのはなんだい？」

「どうぞ、と見せられるほど安い物では無いと思っっていますよ」

「それでもよ、見せて貰えるなら、播り潰される側だつて納得が行くんだよ」

「そう言われても、私に前線で戦えと？　そう言う事ならむしろ願ってもいいませんか？」
俺は殺したい、一人でも多く。そのための力もある。

俺が部屋の壁に立てかけられた弓をギラついた目で見つめれば、ソレ見たことかとかばかりにソルダム軍団長は立ち上がった。

「やっぱりアンタは復讐心に狂つちまつてるよ。アンタはただ、死んでいく帝国兵を間近で見たい、そんだけだろ？」

「そうだよ？　悪いか？」

「違うと言いい切れる自信は有りません」

「ほらな！　俺が問いたい『覚悟』つてのはな、そんな狂気を満たす道具に使われる人間の事を考えた事があるかって事よ」

「考えたからなんだと言うのです？　それでも戦争は起こります。その時に、納得出来る『播り潰され方』なんて存在するのですか？」

「有るね！　俺が悩み、考えるのはいつもその事よ。どうやったら納得して死ぬのかってな。国の考えはどうあれ、直接兵士に死んでこいって命令するのは俺だからな、考えねえ日は無いぐらいだぜ」

「では、その納得出来る死に方を、『播り潰され方』をお聞きしても宜しいでしょうか？　そんな物があるのなら！」

「ああ、いいさ。言つてやる。それこそが『覚悟』よ！ かの名将ゲイル將軍の逸話として、兵達に言つた言葉がある『お前らを一人死なす度、俺は一本の針を舌に刺す。千人死ぬなら俺の舌は針山になるだろう』とな」

なんだそれ？ ただの自己満足じゃ無いか。

「?? 解らないのですが、舌に針を刺す事が、死者の供養になるのですか？」

あまりにストレートな俺の質問に、毒気を抜かれたように軍団長が答える。

「そりゃあ……自分の死をそれだけの痛みとしてくれたら、戦う方は嬉しいんじゃないか？ 少なくとも俺は死地へ向かえと命じる上司に、それだけの覚悟があれば嬉しいぜ？」

へえ、そうなの？ そんなんで良いのなら俺はスグにでもその『覚悟』を見せられる。

「そうですか、それは良い事を聞きました」

俺は心の底から笑った。本当に嬉しかったのだ。

そんな供養があるのならやってみよう。

皆が俺を漫画の登場人物みたいに思っている、俺の悲しみも苦しきも知らず、羨ましいとすら思っている。

上つ面のお姫様としての可愛さだけしか見ていない、何でも無いフリをして、失つたモノの大きさを見せない様にし過ぎたか。

——よく見ておけ、俺の絶望の百分の一ぐらいは伝わるだろう。

採寸を続ける針子リーダーを無視して立ち上がると、俺は裁縫箱を引つ摺んだ。

「アルト、フェンス、リザー、ドムト、グンザ、ココラ、イーナ……」

広げた布の上、眩きながら一本一本針を並べる……

俺が何をしようとしているのか、気が付いたのはシノニムさんだけ。

「止めてッ!!! 止めなさい!!!!」

シノニムさんの悲鳴を余所に、俺は並べた針を一気に自らの舌へと突き刺した。

★針千本2

「止めてッ!!! 止めなさい!!!」

シノニムさんの言葉も無視して、俺は自らの舌に針をまとめて突き刺した。

——脳の中で、何かが弾けた。

強烈な痛みが舌から直接脳を焼いた。視界が真っ赤に染まり、燃える様に舌が熱い。なのに冷たい汗が体中から噴き出して、ブルブルと体が震える。

キヤーキヤーと泣き叫ぶ針子達の声が遠くに聞こえる。

そうだ、よく見ておけ。見ているだけで痛いだろう？ 俺はその百倍は痛いぞ？

だけどな、俺の悲しみは、俺の苦しみは、こんな痛みじや表せない！

もつとだ！ もつと鋭く！ もつと強烈な痛みじやなきや、伝わらない。

強引に裁縫箱から掴み取ったのは、先ほどよりも大きい針だ。

「止めろと！ 言っています！」

シノニムさんが俺の腕を掴んで、止める。

邪魔を、するな！

——ッ！

ギロリと睨めば、ハツとした表情でシノニムさんが後ずさる。

何を見たんだ？ 俺も見た、シノニムさんの背後に見た。

——アルト、フェンス、リザー、ドムト、グンザ、ココラ、イーナ

針に見立てた皆の顔だ。みんな笑っていた。みんな！ 笑っていたんだ。

彼らは俺の侍女や護衛だ、ずっと俺の世話をしてくれた。家族よりも話した時間は長いかもしれない人達だ。

きつと幻覚だ。強烈な痛みで幻覚を見てるんだ。

それは解る。解るけど、俺は嬉しかった。舌に刺さる針の一本一本が愛おしくすら思えてきた。

なのに……シノニムさんは邪魔をする。

「抜きます！」

決意を込めた目で、俺に立ち向かった。伸ばした手で、舌に刺さった針を掴む。

「邪魔ア！」

俺はシノニムさんを突き飛ばした。枷が外れた腕力は、長身で鍛え上げた体のシノニムさんを吹き飛ばす。

尻もちをつくシノニムさんの顔を、口から飛び散った血飛沫が赤く染めた。

針が抜け、舌から出血したのだ。シノニムさんの握り締めた右手には赤く染まった針

が見えた。

侍女達を奪われた！ 瞬間、頭が煮える様な苛立ちを覚えるが、シノニムさんも侍女だ、彼女も一人では大変だろう。

そのぐらいいは譲つても良い。そう思えた。

俺には、もつと大切な人達がいる。

「……ウーブ、ガルゴ、リオール、ピラリス」

机の上には先ほどよりも、ずつと大きな針が並んだ。

彼らは、彼女たちは、特別な侍従たちだ。陰に日向に、不健康な俺を見守つてくれた人達だ。

俺が、気を失つた時、変な所で寝てしまったとき、ベッドまで運んでくれた人達だ。死にかけていたとき、見つけてくれた人達だ。

声も上げられないときに、転んだときに、溺れたときに、黙つて抜け出してこつそり気絶したときに、それでも絶対に見つけてくれた人達だ。

みんな、みんな、死んだ！

俺は、彼らが笑つた顔を思い出せない。

『参照権』で思い出そうとしても、山と積まれた死体に混ざつた彼らの姿しか思い出せない。

内側から制御不能な魔力の奔流が駆け巡り、俺の体を焼いていく。命を削って溢れる魔力が、体の外へと漏れ出した。

もう、他にどんな音も聞こえない。誰の叫びも届かない。

たとえ見えなくても、どんなに鈍くとも、力が渦巻いているのを感じるだろう。圧倒的な魔力を前に、軍団長がハナハナと座り込むのを見届けると、俺は作業を再開した。

何って？ 針を並べるのをだ、たった四本の訳が無い。

まだ、メインが残っている。

「……父様、母様、ステフ兄さん、田中、セレナ」

父様は、厳しくともずっと私を見守ってくれた。

母様は、面倒臭いぐらいに私を愛してくれた。

ステフ兄さんは、ずっとカツコイイ憧れだった。

田中は前世からの親友だった。馬鹿な話も、真面目な話も聞いてくれる親友だった。

セレナは、私の生き甲斐だった。

私の思いに比べて、ずっと針は小さいけれど。それでも……他の針よりはずっと大きい針。

串みたいな針が四本。田中とセレナの針なんて、編み棒みたいな大きさだ。

俺は一本一本、針を取り上げた。

——ウーブ、ガルゴ、リオール、ピラリス。

まずは四本、凶太い針を舌に突き刺す。暗転した視界が赤く明滅した。

——父様。

串みたいな針を取り出し、刺す。ブチリと肉が裂ける音がした。

——母様。

更に大きい串を、刺す。脳を灼き尽くす火花が散る。

——ステフ兄さん。

太く捻れた串を、刺す。手が、足が震え、天地が解らなくなる。

「う、あ、あ、う」

奇妙な呻き声が聞こえ、ソレが自分の喉から鳴っているのだと初めて気が付いた。

大量に溢れ出た血が、喉を塞いでいた。飲み込もうとしたら、刺さった針が邪魔をし

た。喉に針が詰まり、ズタズタに引き裂いていく。

信じ難い程の痛み、俺は体の自由を失った。

ひきつけを起こし、手足がガクガクと震える。針だらけの舌を無理矢理喉奥に引っ込

めようとする反射行動が起こり、余計に喉を引き裂いた。

大量の血と引っ込んだ舌が気道を塞ぎ、呼吸すらも不可能になった。

俺は、私は、死にかけていた。

視界の端に、泣きながら近づこうとするシノニムさんが見える。

だけど、要らない。俺には二人が居る。

机の上、ひったくる様に両手に掴んだ二本の針。俺は高々と持ち上げた。

——そして。

その針を自らの口内へと突き刺した。引っ込んだ舌を強引に刺し、貫く。

「うぐ、グゲツ」

そのまま突き入れた針を、ゆつくりと持ち上げた。

ひきつけを起こして、勝手に引っ込んでいた舌がゆつくりと外にでた。

突き入れた針と、刺さっていた串針とが絡まって、気道を塞ぐ舌を引き出すことに成

功した。

俺はビチャビチャと血を吐き出す。

「なんて、事を」

恐慌するシノニムさんの震える声が聞こえる。ズルズルと這いつくばったまま、それ

でも俺に近づいてきていた。

ああ、馬鹿な事をした、俺を心配するその姿に、あの日のピラリスさんが重なった。

「ゴホッ、ゲェ」

俺は大きな二本の針を引き抜き、小さな針も次々と舌から抜いていく。口内や喉に突

き刺さってしまった針も残らずだ。

その過程で俺はふらつき、血反吐を吐く。シノニムさんに顔を拭いて貰うのだが情けない思いで一杯だった、痛みと貧血に意識が飛びそうになると肩を叩かれた。

そうだ、今、気絶してしまつてはマズイ。

舌の怪我は命に関わるし、出血も酷い。少しでも早く魔法で治さなくては、マトモに喋る事も出来なくなる。

「少ひ離れてくらはい、魔法を使ひまふ」

挽き肉みたいになった舌では、マトモに言葉が出なかつた。

それでも呪文は発動し、少しずつ舌が癒えていく。

——だが。

欠損が酷い、コレでは……中々治らない。

トチ来るつて馬鹿な事をした。だけど、仕方が無い。コレが俺だ、他ならぬ覚悟を問われて、俺には止まることなど出来はしない。

背筋に冷や汗が伝うが、それすらもいつそ心地よく思える。

「大丈夫、ですか？」

「治りきつてふあ、いませへんね」

でも、まあ、後悔はしている。俺は痛みに頬を押さえる。

ホツと息を吐くシノニムさんだが、俺は魔法に必死だ。

「どうふえ、暇なのですから、徐々に治します、問題はこの惨状ですね」

針子達は殆どが気絶し、部屋の中で倒れていた。唯一倒れていなかった赤もじや毛の針子リーダーがパンパンと、一人一人叩き起こしていく。

「ホラ！ 起きて！ 起きなさい！ 間に合わないでしょ！」

いや、タフだなオイ。そう言えば木村に針仕事を教えたのはこの女性だそうな、なるほどね。

あとは、ソルダム軍団長の話の途中だった。

「そへで、なんお話でひたつけ？ 覚悟を見せゆとか？」

「いや、もう良い！ 十分だ！ 止めてくれ」

血だらけの俺を見て、スツカリ腰が引けてしまった軍団長は、そのままスゴスゴと退散した。

……全く、なんだったんだよアイツ？

で、どうやら後でシノニムさんから聞いた話だけど、俺の覚悟に感服したとかで「何でも言ってくれ、腹は決まった」みたいな事を言っていたらしいよ？

意味が解らないね。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「痛っ」

「当たり前でショーよ」

俺の悲鳴に呆れた声を上げるのは針子の女性、この人はなんと言うか図太いねーマジで。

馬鹿な事をしたと自戒の思いがあるが、後悔はしていない。

結局、ズタズタになった心に合わせて、体を痛めつける必要があったのだ。

なんとなくサツパリした思いすらある。俺がうじうじしたって仕方無いのだが『参照権』の弊害か、あの日の記憶は消えてはくれない。

何かの拍子に思い出してしまうし、忘れたくも無いので時折見返してしまう。

すると夜、一人になると眠れず。密かに開発した電気魔法、通称スタンガンを自分に使って、気絶して無理矢理眠るのだ。

本当は護身用に開発したのだが、当然魔法なので健康値で消されてしまうので全く使えないものにならなかった。

お蔵入りと思っていたが、気絶するために頻繁に自分に使う事になるなどと、その時は思っても居なかった。

外傷が無いので重宝していたが、毎晩寝不足でおかしくなる位なら、いつそもつと早く、こんな風に派手に痛めつけた方が良かったのかも知れない。

自己満足には違いないが、なんだか不思議な達成感がある。

俺は手元の二本の針を見つめる。

——田中とセレナだ。

「この針、頂いても宜しいですか？」

「……良いけど」

大切に大きな二本の針をしまい込む俺を、針子の女性は可哀想な者を見る目で見つめる。

いや、実際に可哀想なのだが。まあ、記念と言うか？　なんだろう？

そう言えば田中とセレナは針になっても俺を守ってくれた。氣道を塞いだ舌を引つ張り出してくれた。

その事が、なんとも言えず嬉しいのだ。

——いや？　あんまり健康的な思考では無いと解っていますよ？

でも自己満足以外の要因として、可哀想な者を見る目で見られるのも悪く無いと言いますか、同情されるのって美少女に転生して良かったなと思える部分ですな。

前世の普通の少年の時は、不幸な目に遭っても、変な奴だなーって笑われるだけだったからね？

俺はこんなにも普通だと言うのに！　変な奴だと言われるのがどれだけのストレス

だったか！

ところが今世では絶世の美少女。お陰で不幸な目に遭った時は勿論、今回の様な自傷行為でも可哀想と同情して貰えるのはなんだか嬉しい。

不健康だとは思うのだが、嬉しい物は仕方が無い。せいぜい癖にならないように気をつけよう。

前世でリストカットするメンヘラな女の子を見て、どうしてこんな可愛い子が病んでしまうのだろうか？

と不思議で仕方が無かったが、可愛いからこそ、同情を買えるからこそ、自分で傷つけてしまうのかと、美少女に生まれ変わって、心からの納得だろうか。

ま、馬鹿臭いからもうやらないけど。……多分ね。

「あ、姫様」

その時、部屋の中にネルネが入ってきた。

あのトチ狂った様子をこの娘に見られなかったのは幸いか。恥ずかしいからね。

「今夜の夕飯なのですが……」

ネルネの言葉に、思わず顔が引き攣る。舌が痛いし、溢れる血を大量に飲んでしまった胃が荒れている。なんであれ、喉を通りそうに無い。

なるべく刺激の少ない物をお願いしたい所だ。

「実はキイムラ男爵が用意してくれた新作らしいです！ 楽しみですね！」

続く言葉に、俺は益々顔を強ばらせる。今度は逆の心配だ。

今まで俺は木村に負け続けている。

今回もまた、俺の気持ちに応える様に、舌と胃に優しい出汁の利いたおかゆでも出されてしまったら、きっとトロけきつたアへ顔を晒してしまうに違いない。

ただでさえ、ドレスを選ばざるを得なかった事で「なんだかんだ、ユマたんは俺の事が好きなんだなあ」などと勘違いしている木村の顔を想像するだけで、沸々と殺意が湧いてくると言うのに！

ココに来て、木村が用意したご飯を幸せそうに食べる姿、決して見られたくは無い。

「何という、食べ物ですか？」

「確か——カレーパン、と言っていました」

その言葉に俺は満面の笑みで応える。

「そうですか、楽しみですね！」

「ハイッ」

ネルネと笑い合う。

大好物のカレー。

今世で初めて食べるカレー。

しかし、強烈な刺激物。今日に限ってはトロけ切った顔を木村に晒さずに済みそうだと俺は笑うのだった。

婚約発表会

遂に、婚約発表の日がやって来た。

その会場だが、例のキイムラ商会の劇場となっている。

いやさあ……コレ、俺が決死の思いで木村の商会を専属から外そうとした甲斐ないじゃん？

何なんだよ！ しかも知った時には全てが決まっていたし。

会場選びは難航したらしいが、最終的に決定したのは第三王女のヨルミちゃんと聞いた。

まず貴族の間にはいまだに俺の圧倒的な人気を知らず、バケモノと罵ののしって憚はばからない頭の固い連中が少くないらしいのだ。

そんな奴らに俺の人気を見せつけるには、市民が立ち寄れる会場が必要だった。そうなった時、第二王子には市民に近い位置にある大劇場のアテがなかったのだ。

しかし同時に木村からも猛プッシュが有ったのは間違い無い。

新しく出来た劇場は、既存の既得権益を破壊する為に建てたと聞いている。

イベントスペースも備えていて、情報発信基地として設計されている。

こんな大イベントを逃して堪るかと思うのも無理はない。

情報を制する者が全てを制する。それを知っているのが木村だ。安価な紙、印刷技術の向上、教育改革にも乗り気と聞いた。

……アイツ、数年後には革命でも起こすつもりだったんじゃないか？

メチャクチャあり得る。

薄ら寒い物を感じながら窓の外を見ると、ソワソワと劇場を見守る多数の市民に、引つ切り無しにやつてくる貴族の馬車の群れ。

馬車はキャパオーバーだから別会場に駐車場も用意するらしいよ？ 詳しく知らんけど。

「緊張しているのか？」

アンニュイな気持ちで外を見てみると、声を掛けられた。未来の旦那様たるボルドー王子が俺の隣に座る。

俺達がいる場所は劇場の四階。貴族のために特別な接待をするスペースだとか。

いや、エロい意味じゃなくて。貴族が遊びに来た際に、出演前の主演女優が挨拶に来たりとかするらしい

……アレ？ エロい意味なのか？

まあ良い。つまり貴族用の待機スペースだ。で、今日この待機スペースで長時間待機

する予定の第二王子。

これも作戦の一つなのだが、それはつまり婚約発表なのに、開幕は俺が一人で凌しのがなくてはならないと言う事だ。

正直コレは、かなりしんどい。

「ええ、少しだけ。……私で大丈夫でしょうか？」

「ユマ、君なら大丈夫だ。保証する」

王子はそう言いながら、俺の肩に手を置いた。

左横に並んで、右手で俺の右肩にだ、つまり肩に手を回して抱き寄せる感じ。

……え？　なんか、距離感が近い。

名前を呼ぶのも珍しいし、これではシノニムさんの予行演習を笑えない。

……いや？　何もおかしくないじゃないか！　俺達は婚約発表するんだから、甘い雰

囲気作りは確かに必要だ。

だったら俺もやってやらんとマズいな、王子にだけ恥を掻かせる訳にはいかん。

王子の肩に頭を預け、甘える様な声を出す。

「アナタがそう言ってくれるなら……私、頑張れそうな気がします」

「!？」

「??……」

「……………」

「……………」

ハイッ！ 大失敗。

沈黙ッ！ 答えは沈黙！

気まづいままに、俺はそつと王子の肩から退くと、そこに気遣った声が掛けられた。

「…………あの、余り無理をしないで良いと思うぞ」

「ええ、ありがとうございます」

俺はもう、それだけ言うのが精一杯だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、いよいよ会場が開かれ、大ホールには多くの貴族達が泳ぎ回っていた。

俺はそれを舞台袖からチラリと眺める。

オープニングは俺の挨拶でスタートするはずだ、婚約発表なのに一人で登場する異常事態にどう言う反応があるか不安なだけに、会場の雰囲気は押さえておきたい。

立食形式のパーティーである事はいつも通りなのだが、今回は木村の商会だけでなく、王子の付き合ひのある商会の食べ物や飲み物も並んでいる。

が、それはハッキリと公開処刑の様相を呈していた。

向かって右側。木村の方はプリンやゼリー、シュークリームなどの甘味は勿論、ウニ

やあん肝みたいな海産物（勿論、加熱している）を裏ごししてコク深いクリームを作ったり、山椒みたいな山で取れた目新しい香辛料を組み合わせ、刺激的な味を作っている。一方で左側、第二王子の商会は伝統的な料理を並べるが、見た目も味も地味で話題性にも乏しいため、全く手に取られていない。

結果、料理が無くなり、がらんとしたキムラ商会側のテーブルと、料理が満載の第二王子側のテーブルと言う構図になってしまった。

一方、人間の方の偏りは真逆だ。

食通の貴族がその素材を予想しながら、豊富なうんちくを披露していて、それを聞くと人だかりが出来ている。

机の回りには料理の供給待ちの貴族が世間話をしているが、大切な情報交換のハズが気もそぞろ。

それどころかウェイターやメイドさんがワゴンを押してくるのだが、あろう事かそのワゴンから「ちよっと拝借」してしまう貴族の多いこと！

マナー違反だし普通はそんな事しないのだが、待ちきれないと言った様子だ。

それだけでも困った事なのに、貴族達は食材当てゲームの答え合わせをメイドさん達に求めてくるので、その受け答えも大変である。

そんな熱狂を見ながら、俺は顔を青くし、歯を食いしばって耐えていた。

——俺も食べたい、味わいたい。

食べれば良いだろう？ と人は言うだろうが、実は人には言えない事情があった。味が、分らない！

そう、この前、調子に乗ってメンヘラ気味に針をぶつ刺してしまったからだ。

いやー治ると思っただけだなー

実際ほぼ治ったし、一見元通りなんだけど、味覚に対する刺激が極端に鈍くなつてしまった。

もう二度と以前のように食事を楽しめないとと思うと、目の前が真つ暗になる思いがする。

これが誰かの陰謀で毒を盛られて、その後遺症で味が分からなくなったとかなら良いよ？

そしたら俺だつて「陰謀に巻き込まれ、味覚すら奪われたアテクシ」として、ヨヨヨと回りに泣きついて同情を買ったりとか、悲劇のヒロイン的な楽しみが出来たと思う。

それが、トチ狂つて自分で舌に針を刺した結果つて……

控えめに言つて、キチガイである。

クソ馬鹿としか言い様がない、針を刺した事も馬鹿なら、その後カレーパン食べたり、翌日の治療も程ほどにアイスとか作ったりしてるのがクソ馬鹿キングダム。

人生でこんなに後悔した事は無い。悲劇は一通り体験してきたが、それらはあくまで不可抗力。

気が狂いそうな後悔つて中々無いよ？

余りにアホの子過ぎて、シノニムさんにも打ち明けられない。

「え？ 馬鹿ですか？」とか言われたら立ち直れないからだ。

かといって、誰にも打ち明けられない現状も辛い。

「美味しいですか？」と聞かれて「ええ、とつても」などと応える時の絶望感とか筆舌に尽くしがたい。

……いつそ死にたくなつた。

セレナや田中が死んだ時だつて、こうも死にたくなつたかと言われれば疑問だ。

仇は取つてやる！ とか、何クソ屈してなる物か！ という闘志が湧きようが無いからだ。

それどころかこんなクソ馬鹿死んで当然！

とか、どうせ生きていても何にもならねーよ！

みたいなネガティブな感情が味覚が鈍つただけで湧いてくるから凄い。

そうして青くなつて震えていたからだろうか？ 急に後ろから抱きしめられた。

「ううっ、ユマ様あ！ そんなに緊張しないで下さい、私もついてますからー」

ネルネだった。ネルネは泣きながら俺を励ましてくれる。

「もし、もしユマ様がなにか失敗しても、最後の最後まで、絶対に見捨てない人が揃っています」

いつの間にか現れたシノニムさんも俺を励ましてくれる。

「でも……私はッ」

しかし、心は晴れない。俺の悲しみはソコには無いからだ。

悲嘆に暮れる俺に、荒々しく野太い男の声が掛かる。

「生きてりや取り返しの付かない事なんてこの世にねえよ、現に俺の怪我はお嬢ちゃんが治してくれた。今度は俺の番さ、お嬢ちゃんが失敗したら俺が代わりに何でもやってみるぜ！」

格好いい事を言うダンディな声に振り返れば、そこに居たのは巨大な、豚？

この豚は？ 誰？

あ、ブルンガだっけ？ 凄腕の兵士らしいが、訓練中にはしゃいで膝をやって引退していたのを俺が魔法で治したのだった。

いやーコーコイツが言うと言得力が有るな！ 膝を治した時はふざけて、怪我をして、落ち込んで、死にたいとか、どんだけ甘えた奴だと内心馬鹿にしていた。

それこそクソ馬鹿かと思っていたが、今、初めてコイツの気持ちが解る。

「どんな人間にもミスはあります、でも、それを助け合えるのもまた人間だと思います」
「おっ！ おおう！ 俺は絶対に、死んでもお嬢ちゃんを助けるからな！」

号泣する豚。汚い感じなので止めて欲しい。

ネルネヤシノニムさんも涙ぐんでるけど、コツチは可愛いからやつぱり女の子は得だな。

つてか、言ったな？ この豚。俺、マジで命がけで助けて貰うからな？ 俺、度々死にそうになるから、口だけとか絶対に許されないよ？

元を正せばお前の膝がアツサリ治ったから、自分の舌なんて余裕と勘違いした所あるからね？ (膝と舌じゃ複雑さが全然違ったよ！)

それに「生きてりゃ取り返しの付かない事なんてこの世に無い」つてのは良い言葉。よっし、こいつに取り返して貰おう。

実は、俺の舌を治すアテは在る。

——吸血鬼だ。

神の言葉を信じるなら、俺の前世には最後の吸血鬼がいる。

王都に残る吸血鬼伝説、最も有名なのはオルティナ姫の後の王国動乱期。不吉な伝承が数多くあるのだが、最たる物が吸血鬼だ。

混乱期ゆえに信憑性は不明だが、吸血鬼は腕を切り落とされるも逃げおおせ、次に出

会った時には元通り生えていたとか何とか。

あのね？ 酒呑童子だって流石に腕は生えないよ？ くつつくだけだよ？

オルティナ姫の運命視みたいはこの力を手に入れる事が可能なら、舌の復活とか余裕だろう。

俺の寿命を考えたら、狙って前世を回収する暇など無いし、吸血鬼の本拠地なんて何があるか解らんトコに突っ込むリスクを勘案すれば、現実味は薄いと思っていた。

そもそもが眉唾で、プラスになるかマイナスになるか解らんからね。

でもまあ、そんなに俺の尻拭いをしたいならして貰おう、そうしよう。

「本当……ですか？ 本当に私のミスで、どれだけ多くの方が犠牲になるか知れないのですよ？」

「それでもだ！ 俺は嬢ちゃんの為なら何時だって命を賭けられる！」

豚はそう言って、俺の脇に手を入れて大きく持ち上げる。

……怖いので止めて欲しい。

！
どうやら感動的なシーンなのか、皆涙ぐんでいる、でも俺の涙は恐怖からの物だから

それにしても、回復魔法で治すと、どちらさんも即デレてくれる。

ゼクトールさんとかキャラまで変わってしまったから笑う。

そう言えばさっきの王子の様子もデレ気味だった。これ、何か変な精神的作用とか有るんじゃないか？

まだ禁術の準備も出来て無いのに、洗脳する魔女と弾圧されるのは勘弁して欲しいのだが。

そんな事を考えて居たら、いよいよ式が始まるらしい。

「勇気をありがとう、私、行つてきますー！」

儂げな笑みを意識して、俺は舞台へと飛び出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

この世界が中世と明確に違う点は魔道具のあるなしだ。

魔法というエネルギーは、エルフの国ではそれこそ電気みたいに幅広く利用されていたが、ビルダール王国では精々ライトぐらい。

たかがライト、されどライト。

劇場と言う場所ではその有無の差は計り知れない。

さらに拡声器の魔道具はちよっとお高いのだが、この劇場には完備されている。普通の大形マイクなので演劇には使いにくいのが、スピーチなら問題ない。

この二つが揃えば、現代の結婚式とそう変わる物では無い。

照明を落とした会場で、俺はスポットライトを一身に浴びていた。

「ボルドー様は体調が優れず、本日は私から報告をさせて頂きます、私、ユマ・ガーシエント・エンディアンとボルドー・ラ・ヴィット・ビルダールは婚約します」

俺の言葉にザワめく会場、だが俺は無視して話を続けていく。

俺を守る為にボルドー王子が同盟を申し込んだ事。

兄の様に慕っていたボルドー王子への気持ちだが、次第に恋心へ変わって行った事。

そして、暗殺者の死体を目にして震える俺の姿に、ボルドー王子も恋をして、二人の文通が始まったと。

そういう『設定』で、作家に作って貰ったポエムを朗読した。

そんな茶番染みたワンマンショーだが、なんだかんだ場が暖まってきた。

会場に明かりが戻る。次は質疑応答の時間だ。

この質疑応答の時間こそが勝負。ボルドー王子の体調不良が本当なのか？ 流石に姿を見せないのは問題では？ と強く食い下がる相手が怪しいと言う事らしい。

ガバガバな作戦に思えるが、そこはお任せだ。

俺や木村は地球で様々な物語を読みすぎて、客としてはスレて居る。

案外この世界の人には、単純すぎる策のがハマるのかも知れないし。

そんな事を考えていると、会場がどよめいた。どうやら遅れて大物が登場したみたい。

「カディナル殿下だ！」

「シャルティア様もいるぞー！」

……一応招待状は送っていた。

だがボルドー王子との仲の悪さは有名で、来る事は無いと思われていたのだが……
相手が王位継承権第一となれば、俺も舞台の上で安穩とはしてられない、慌てて舞台を降りて挨拶に向かう。

「カディナル様！ 今日に来て頂けないのかと」

「ハハツ、実の弟の婚約だよ？ 兄として出席しない訳には行かないさ。それが、僕が怪我をさせてしまったユマちゃんとの婚約ともなればなおさらね」

「まあ！ 私、カディナル様を兄と呼べる日が待ちきれませんわ」

「僕も君みたいな可愛い妹が出来ると思うと楽しみだよ」

「ふふっ」

「ハハツ！」

なーにが、「ハハツ！」だ、おまえはミッキーか！

と笑い合っていると、出て来たのはシャルティアだ、今日も凶悪な血の様な運命光が目に見え、目に痛い。

「もう、カディナル様ったら、私にもユマちゃんと話をさせて」

「ハハツ悪い悪い」

「シャルティアお姉様、お久しぶりです」

俺は両手を広げ、シャルティアへと抱きついた。

「? え、ええ、この前の同盟発表会、以来かしら? 思えばあの時、既に二人は好き合っていたのね」

「はい、秘密だつて言われていたのです」

「もうっ! サツパリ気付かなかったわ、いい人を紹介するなんて余計なお世話だったのね」

「へへっ」

「うふふ」

抱き合つて笑い合う、俺とシャルティア。

「オイオイ、二人は仲が悪いと聞いていたが随分と親密じゃ無いか」

「噂はアテにならない」

「二人の恋路から目を反らす為の、シャルティア様の策だったのかも知れませんが」

などなど、ギャラリーは驚愕の声を上げるが、俺にしたつて命がけの行動だ。

なにせ暗殺者、即効性じゃなく遅効性の毒だつて持っている可能性があるし、どんな仕掛けをされるか解らない。

俺だって数日前だったら頼まれたって絶対にこんな行動は取らなかった。

因みに、ただのヤケクソである。

味がわからねーとか生きてる意味ねーし！ やれるもんならやって見ろクソが！

そんな感じである。

ココで死んだらセレナや田中の無念を晴らせない！ 何としてでも生きたい。

そう言う思いはある。あるにはあるが、だからと言って、死にたくないと籠もって居ても事態が好転するとは限らない。

だったら勝負した上で、殺された方が納得が行く。

そう言う意味で、いつそ生への執着が減ったお陰で、よりドライに命を賭けられる様になった。

死に際のアカギ状態と言えば、なんとなく強そうな気がしなくても無い。

「あら？ 私、シャルティアお姉様の声、最近聞いたような気がします」

そんな事を言いながら、俺は体内の魔力を脈動させ、目に集める。

怪しく魔力光が輝く目、そして活性化する魔力。

シャルティアが魔力が見えるのならば、それを利用して、逆に存分に揺さぶってやれば良い。

「！、そう？ 気のせいでは無くて？」

しかし、シャルティアは一瞬の動揺を見せた物の、俺を突き飛ばす様な、致命的な失態は犯さなかった。

至近距離で魔力が渦巻いているのを感じれば、エルフ同士だつて警戒する。

それが、魔力を目視出来ると思われるシャルティアが耐えたのは意外と言うか、空恐ろしい。

これが魔力が見えると言うのが気のせいなら良いのだが、シャルティアは明らかに動揺していた。

顔色も青く、声も上ずっている。ここまで演技ならお手上げだが、流石にないだろう。動揺しているシャルティアは、こう見ると結構可愛い。

気の強い女の子が顔を青くしている所つて良いよね？　それが、いつもは蛇みたいに鋭い目をして超然としている女の子なら最高だ。

その動揺に目を凝らせば、何時もは隠している目線の動きがハッキリ探れた。

確実に魔力が見えている。顔に掠めた魔力の動きにハッキリ反応した。

油断出来ないなと警戒度を上げながらも、名残惜しさすら演出して俺はシャルティアから離れる。

「今度は二人つきりでシャルティアお姉様とお話ししたいです」

俺はありったけの魔力を絞り出し、嵐の様に渦巻く中で、不気味に笑った。

きつとシャルティア以外には、ただの満面の笑顔と映つただらう。

「ええ、私も楽しみだわ」

涙目になる姿を期待したのだが、ソコまでのサーブスはしてくれなかった。

シャルティアも蛇の様な鋭い瞳で迎え撃ち、俺を睨むが、顔は笑顔。全く隙が無い。

「うふふ」

「えへへ」

笑顔の中に殺意が渦巻く危険地帯、どんな素人だつて腰が引けそうな物だが、極度に鈍い人間は居るモノで、無遠慮にカディナル王子が割り込んだ。

「ところでユマちゃん、弟のボルドーはどこだい？ 今日の主役だろう？ 僕に挨拶を

させてくれないか？」

いや、コイツ凄いな。と初めてカディナル王子を尊敬しかけた。

だが、この位鈍くないとシャルティアの旦那とか無理だし、納得か？

「それが……あの人は、今日、急に風邪を引いてしまって。体調不良で伏せつてしまつて
いるのです」

「それはいけないね、でも、兄である僕にぐらいはお見舞いさせて貰えるだろう？」

「でも、良くない病かも知れないって、感染するとマズイと心配してました」

「ハハッ、僕は弟に風邪をうつされた位でどうにかなるほど、弱くも無いし、小さい男で

は無いよ」

……ふむう、筋は通っているな。

そもそも、婚約発表の場だと言うのに主役がいない方が余程筋が通っていない。

これは流石にこれ以上引つ張れないぞ？

「あの、でも、本当に調子が悪くて、挨拶が出来るかどうかも解らないのです」

「そう言つて、それっぽく見える木偶と対面させる訳では無いだろうね？」

「なっ！ そんな事！」

「どうかなあ？ みんな！ 聞いてくれ！ 実は非道な噂が流されている！」

カディナルは突然に大声を張り、宣言した。

「このユマ姫が、弟ボルドーに呪いを掛け、王座の篡奪を目論んでいると言う外道な物言いだ！ 僕はこの噂に決着を付けるためココに来た！」

カディナル王子は朗々と語る、つて言うか大分気持ちが良いさそうである。

「ユマ姫の名誉の為に、そして弟の方が一を考えて僕はどうしても弟に会いたいのだ！

ユマちゃん、弟に、会わせてくれるね」

俺へと向き直つたその笑みは、酷く歪んでいた。

「……………」

なるほど、ボルドー王子の狙いはコレか？

カディナールの言い分は、俺への嫌疑を晴らす風であつても、疑っているのはミエミエだ。

ボルドー王子が元気に出て来たら、白けた空気はカディナールへ刺さるだろう。

ま、その程度じゃシャルティアを追い詰めるには、ちよつと弱いなとは思うが、そんな些細な恥を気にするのがこのカディナール王子だ。

「うつ、わ、私！ どうすれば良いか、ボルドー兄様に聞いて来ます！」

「あらつ、普段はボルドー兄様って呼んでいるのね、可愛いわ」

「あう、ううう」

シャルティアのツツコミに、俺は赤面する。

……当然演技である。

こう言う、咄嗟の時にボルドーを兄様と呼んでしまう、恋愛未満な感じ、最高に萌えるじゃん？

スルーされるかと思つたけど拾つて貰つて嬉しい。

と、そこへ、舞台から声が掛かった。

「オイオイ兄君、僕のハニーをそんなに苛めないでくれないかい？」

ボルドー王子であつた。

「……は？ はあ？」

素の声が出た！ 低つくい声出た！ 自分でもビックリする程。演技台無しである。

現れたのはボルドー王子だ。さつき控え室で会ったばかりだから間違いない。

間違いないのだが、声がなんか酒焼けした様な変な声だし。加えて格好もオカシイ。婚約衣装はさつきも見たが、問題は胸元。そこに衣装と全く似合わない浮いた存在のシルバーアクセサリーが光っていらつしやる。

それはもう、露骨に！ 光ってらつしやる！ 正直センスが酷い。

もつと酷いのが言動だ。

なんだよ？ ハニーって！ ハニーってなんだよ！ シノニムさんの王子の演技の方が十倍良かった。

まさかボルドー王子、地味だ地味だとは思っていたが、華やかな舞台に引きずり出せばココまでセンスがない男とは、露程も知らなんだ。

ホラッ！ カデイナール王子だってドン引きしてるし、俺は恥ずかしいよ。

「何故ッ！ 生きている？」

あつ、そつちね、そりやそうだよね。

カデイナール王子は、暗殺の張本人たるシャルティアを睨む。

睨まれたシャルティアも眉をひそいぶか擡め訝しむ。

この様子が余りのセンスの悪さに引いてるのだとしたら、むしろ一周して笑うよ？

「どう言う事だ？」

「魔法で治したのでは？ 怪我をたちどころに治す魔法が有ると噂に聞きました」

二人はコソコソと会話をしている、ちなみにコレは集音の魔法で拾った会話だ。

これだけ人が多いと、こんな魔法でも使うのは一苦勞、範圍を絞った上で、魔力を多く使って制御していた。

しかし、魔力を無駄に渦巻かせた影響と、無遠慮に近づいてきた貴族の健康値の干渉を受け、最も使い慣れた魔法だと言うのに、俺は魔力を暴走させてしまう。

「死苔茸^{チリアム}を塗った矢を刺したと言ったでは無いか!!」

カディナール王子の小声は、大声に変換されて、広間に大音量で再生された。

会場はシン——と静まり返る。

魔法の出力に失敗した。俺の健康値にしばらくはマイナス補正だし、魔力もちよつと弱まるが、そんなのがおつりが来る位のラッキーだ。

『偶然』が良い方に仕事したと思っただけなのか？

一方で、小声で話したハズの内容が大音量で暴かれた王子は驚愕する。

シャルティアは俺を睨むが、俺は『計画通り』と不敵に笑う事で応える。

そこにボルドー王子から追撃が入る。

「今、死苔茸チリアムなどと物騒な単語が聞こえましたか?」

「五月蠅い! 黙れ!」

カディナル王子は取り繕う仮面も剥がれ、焦った声を上げる。

「そうは行きませんな、兄君。実は最近、死苔茸チリアムを使う賊が侵入したのです、もしも知っている事が有るのなら、何でも良いので答えて頂けると」

「兄君あにきみだと! 気持ち悪い、お前にそんな事言われる謂われは……」

言いかけてカディナル王子はハツとする、その視線の先には悪趣味なシルバーアクセサリー。

その時だ、カディナル王子が見つめる目の前、突然ボルドー王子が白く発光した。

「うわっ?」

「なんだ?」

凄く眩まぶしい。

今のは? と見上げれば、単純にスポットライトが多重にボルドー王子を照らしただけだと解った。

……なんだ? なにが起こっている?

何か、俺の知らない事が起こっているのは間違いない。その証拠に追い詰められたカディナル王子が突然高笑いを始めたのだ。

「ヒヒツ、ハハツ、そうか！　そう言う事か！　兄君あにぎみね！　兄君あにぎみか！　アイツは兄上ならともかく、そんな風に僕を呼ばないよ」

……なるほど、付け加えさせて貰えば、俺をハニーとも呼ばない。

そしてカディナル王子は一転、俺へと邪悪な笑みを浮かべる。

「そう言えばユマちゃんは最近、大事にしていたティアアラを付けていないね？　無くしたのかな？」

なんか急にコツチにお鉢が回ってきたぞ？　そんな事突然言われても、正直に答えるしか無い。

「いえ、私が無事である事を証明するために、預けてしまいましたか？」

「ハハツ、唯一の宝を預けた……ね。代わりにどんな秘宝を手に入れたんだい？」

ん？　あ！

……そうか、そう言う事か。

「俺は赤の他人に兄と呼ばせる趣味は無いよ！　姿を現せ！」

そう叫ぶと、カディナル王子はボルドー王子の胸元のアクセサリーを引きちぎった。

しかし、当然だが、何も起こりはしなかったのだった。

婚約発表会 2

「何故だ！ 何故？ 正体を顕せ！」

カディナール王子は異様な様相でボルドー王子に迫り、肩を掴んで揺すっている。

「兄上、一体何事ですか？」

一方で、ボルドー王子も急変した。いや、コレこそがいつものボルドー王子、さつきまでがおかしかったのだ。

酒焼けした様な声は鳴りを潜め、変に浮ついた様子も無い。

「何故だ!?! 何故……」

一方でカディナール王子の狼狽はいつそ滑稽な程。青い顔で身を引くと、引つ掴んだアクセサリーを片手に呆然としている。

……どうやら、信じがたい事にカディナール王子はボルドー王子から引き千切ったアクセサリーが『ルイーンの宝飾』だと勘違いした様だ。

ルイーンの宝飾。それは、他人の姿に化けられると言う秘宝だ。

しかし言うまでも無く、そんな便利なモノはエルフの国にだって存在しない。

地球で言うならアラジンの魔法のランプとか、そう言う類の伝説のアイテムで、決し

て実在しないのだ。

では何故、カディナール王子は物語と現実をごっちゃにしてしまったのか？

まず、俺を題材にした演劇の存在だ。今や王都の名物と化したロングラン公演なのが、それにルイーンの宝飾が登場する、コレが大きいだろう。

そして、そこに登場するルイーンの宝飾のデザインが、ボルドー王子が身に付けていたセンスが悪いシルバーアクセサリーに似ているのだ。

更に、カディナール王子にしてみれば、ボルドー王子は強力な死苔茸デリアムの毒を受け、死んでいなくてはオカシイ。

姿を見せない、と聞いたので俺を糾弾する為に意気揚々とやって来たのに、拍子抜けする程元気な姿でボルドー王子は現れた。

しかし、兄君と言う呼び方も、そしていつそ声すらいつもと異なる。

そして、最近になって俺がエルフの使者と接触したのは周知の事実。

そこに思い至って、閃いてはいけけないモノを閃いてしまったのだろう。

しかし、よくよく考えれば、演劇に登場するルイーンの宝飾のデザインにだって根拠は無い、それに似ている事に一切の意味は無い事は自明だ。

どんな馬鹿かと言う話だが、恐らくカディナールにとつて、まずボルドー王子が出てくる所が予想外。

動揺した所で、シャルティアと相談する内緒話を俺の魔法で暴露されるのも予想外。混乱が頂点に達した所に、スルリと垂らされた糸は当然罠だったと言う寸法だ。

恐らくは周到にボルドー王子が仕掛けた罠。それにしたってハマり過ぎだ。

嬉しいを通り越して、乾いた笑いに引き攣っている俺に、楽しい声が掛けられた。

「思った以上、この上ない大物が掛かりましたね」

木村である。見上げる表情はいつもよりくたびれて見える。

そっか、やつぱりアレを作ったのは……

「ええ、私です。ユマ様が婚約者へ贈るアクセサリー。専属商会の主にオーダーメイドで依頼するのは当然のことでしょう？」

そっかー

あの趣味の悪いアクセは俺のプレゼントだったかー

……俺のログには何も無いが？

「私がセンスの無い人物と思われたらどうしてくれませう？」

「人間、一つぐらい欠点があった方が可愛いですよ？ 姫は完璧過ぎます」

ふーん。

いや、センスが悪い理由は解っているつもりだ。

——ワザと、衣装とマッチせず、浮いて見える様、むしろ巧みにデザインされている。

そのために、センスが悪く見えるのだ。

「カディナール様、おやめ下さい！」

シャルティアの悲鳴、何かと目をやれば、カディナール王子が偽ルイーンの宝飾を床に叩きつけていた。

「黙って見てろ！ コレを壊せば、きつと！」

カディナールの愚行にため息をつくシャルティア。一方でカディナールは勢いよくアクセサリーを踏み潰した。

——グシャツ！

おーおー、なんとまあ壊れやすい事！

あしらわれた青い宝石はいつそ清々しい程にはじけ飛び、シルバーの装飾はクタクタに潰れてしまった。

何より面白いのは、潰れると同時に木村が「……あう」と力ない声を漏らした事。

その憔悴した様子から、けっこう無理なスケジュールで作った力作だったに違いない。

「ざまあ！ と言う感情も無いでは無いが、代わりに俺が文句を言ってやろうじゃないか。」

「え、!? あっ！ あああっ！」

俺はカディナール王子の足元に滑り込み、悲痛な声を上げる。

「どうしてっ！ どうしてこんな！」

そして泣きべそをかきながら、必死に砕けた宝石をかき集める。

一方でカディナールは俺に構う余裕も無い様だ。

「どうして!? 何故正体を顕さない！」

「王子、我々はハメられました！」

変化のないボルドー王子を見つめ、呆然とするカディナールへと、シャルティアは小声で、しかし毅然とした口調で話し掛ける。

小声と行っても近くの人には丸聞こえ、取り繕う意味も無いのだろう。

「まさか！ お前？ 嘘をついたのか？」

「私ではありません、死苔茸チリアムを食らえばどんな人間も死に至る。そんな我々の常識を利用され、罠に嵌められたのです」

「そんな！ まさか……」

と、二人のやりとりは進んでいるが、俺は俺で仕事を続けなければ。

俺は砕けた宝石とひしゃげたアクセサリーを手に、涙ながらにカディナールへと詰め寄った。

「なぜです？ なぜ？ 私がボルドー王子へと贈ったプレゼントを壊したのですか？」

「何がお気に障ったのですか？」

俺の涙ながらの訴えに、周囲はアツと言う顔をする。

新郎が目立つ所に付けていたセンスの悪いアクセサリー。どうして第二王子ともあろう人物が壊滅的なセンスのコーディネート？　と言う疑問も異国の新婦が贈ったアクセサリーと思えば納得出来ることだろう。

そう言った事情が飲み込めた時に、思わず非難の目を向けてしまうのは、相手が第一王子カディナールと言えど必定だった。

「なっ！　なんだと！　元はと言えば、お前がこんな紛らわしい、センスの悪いアクセサリーを作るからだろうが！」

そう言ってカディナール王子は俺の手をはたく。当然、俺の手の上の壊れたアクセサリーは再び飛び散った。

「きゃっ！」

手をはたかれた俺は可愛らしい悲鳴を上げてよろめくと、跪いて泣きながら必死に散らばったアクセサリーを拾い集める。

「なんで!?!　なんでなの？　酷いよう……、私、頑張つて！　頑張つてデザインしたのに！」

してない！　断じてしてない！

が、第一王子の手前、周囲は泣きながら這いつくばって、無様に、そして必死に欠片を拾い集める俺を、それこそ胸を締め付けられる思いで見つめるしかない。

……ハズだったのだが。

「大丈夫、君の思いは僕の胸に、もうとつくに届いているから」

そんなキザなセリフと共に、俺の手のひしゃげたアクセサリーを取り上げ、自分の胸元にそっと付け直したのはボルドー王子だ。

「あっ！」

俺は驚きの余り口元を押さえ、先ほどと異なる涙に潤んだ瞳で、王子を見上げる。

「大丈夫！ 君は何も悪く無い！」

ボルドー王子は俺をギョツと抱きしめた。

「ボルドーお兄様！ わたし！ わたしっ！」

俺も感極まった声で抱き返す。

……しかしだ、

問題なのはボルドーお兄様のお手々に、少々力が入りすぎている。俺の右肩を掴む握力の強い事、また更に違う種類の涙が滲みそうになる。

「なぜ勝手な真似をした！」

小声だが、確かな怒り。

思ってますやん！ 俺の事、何もかも悪いと思ってますやん！

「……………」

何も言い返せないでいると、王子は静かな怒りを滲ませ、言い募る。

「……嵌められた暗殺者は、我々を恨むに違いない。君には無関係で進めた計画と思わせたかった」

そっかー、そうだよな。そりやそうだ。

普通に考えたら俺に事情を説明しないのはオカシイ。当たり前前に考えたら解る事なのだが、どうしても溺れた犬にダウン追い打ちを噛みたい欲求に逆らえなかった。

「でも、こうした方が有効でしょう？ 私をのけ者にしないで下さい」

「いい加減にしろ！ これでは君が首謀者だと言っている様なモノだー」
てへぺろ。

抱き合いながら、そつと木村の様子を窺うと、アイツも俺が咄嗟にこんな暴挙に出るとは予想だにしていなかったのか、コチラを見て呆然としている。

木村にしたって、俺がこんなにアドリブかますとは予想外だろう。意味が解らないと困惑する俺に、事情を説明する優しさが、こうまで事態を揺るがすとは。

……俺はちよつと自棄になりすぎたかも知れない。反省しよう。

王子と抱き合って二人の世界を作っている風に見せ掛けて、密かに青くなっている俺

俺の質問に、ボルドー王子は頷く。

「ああ、まさかと言う思いだ。俺が姿を見せない事へ声高に文句を言うのは、カディナーの息が掛かった貴族だと思っていた」

「ええ、ボンディール伯爵あたりじゃないかと、王子と話していたのですが」
続けたのは木村だ、当然コイツも計画は知っていた。

「考えたのは私だから、お兄の事は怒らないでね」

そう言うのはヨルミ第三王女だ、全ての絵図は彼女が引いたらしい。

確かに仲間はずれにされたのは苛立つが、俺のやらかしを考えると、黙っていた事に文句は言えない。

俺は「私」「凄く悪い」のハンドサインをチラ見せしながら木村にも謝っておく。

「済みません、私、皆の期待を裏切ってしまった」

「いえ、そんな事はありません、それを言うなら、私めの商会を専属から外そうとしたのは、暗殺者から遠ざける為だと言うではないですか！ 姫様の優しさを最初に裏切ったのは私でありますから」

そう言つて木村はへりくだる。

うん、そう言えばそうだな。オデ、ワルクナイ！（知能低下）

「それにしても、ボンディール伯爵が文句を言った後、元気にボルドー王子が出て来る。

そこまでは良いのですが、本当にルイーンの宝飾に引つかかるでしょうか？」

「ここで掛からずとも、他の行事でも必ずこのアクセサリーを付けていく様になれば怪しいと声が上がると思っていた。だが、おおっぴらに騒がれず、陰で偽物では？」と噂を流される展開は恐れていた所だ」

「だから、色々工夫したんだよねー」

俺の質問に答えるボルドー王子を遮る様に、ヨルミちゃんが割り込んだ。

「まずね、この偽ルイーンの宝飾。うっすら光ってたの気付いた？ 超小型の光の魔道具でもあったのよ！ 魔道具を組み込んで『らしい』デザインに仕上げるなんて、キムラ男爵ってホント器用よねー」

ヨルミちゃんの言葉に「そんな事は」と謙遜する木村だが、光っていたのは俺も見ていた。

「ええ、気付いていました、その光る所為で余計にセンスが悪く見えました」

俺の言葉に「だよねー、ちよつとやり過ぎだったかも」とヨルミちゃんは呆れた様な声を上げる。

「そんでね、これはキムラ男爵のアイデアなんだけど、衣装をパリつとさせるノリの一種がね、スポットライトを多重に当てた時、溶けるんだって」

「どう言う意味です？」

「ライトの熱でね、ノリが蒸発して白いもやが出て、姿がぼやけるの、気付かなかった？」
うーん、一瞬眩しくボルドー王子が光ったとは気付いたが、そうは見えなかった。
ひよっとしたらカディナル王子には違って見えたのかも知れない。

木村がヨルミちゃんの言葉を引き継ぐ。

「元々、過剰にのり付けした衣装を着た際のトラブルとして知っていたのですが、舞台演出に使えないかとずっと温めていました。デビューがこれほどの大舞台になるとは流石に予想も付きませんでした」

との事。ちなみに酒焼けした声はそのまんま、酒に特殊な果実を入れたモノでうがいを繰り返すんだとか。飴でも舐めればすぐ治るんだと。

「しかし、ユマ様の即興には驚かされました」

木村は感嘆する様子だが。ボルドー王子は不満げだ。

「敵の目をこちらに向けさせる計画がおじやんだがな」

「でもさー、それこそ効果抜群だったみたいよ？ なんせ悲劇のお姫様が愛する王子を思つてデザインしたアクセサリーなのに、カディナル王子が粉々に破壊しちゃうんだもん、颯爽だよー」

そう、カディナル王子の行為は、傍目には弟の婚約発表に乱入し、新婦が贈ったアクセサリーを引き千切った上、踏みつけ破壊。さめざめと泣く新婦を余所にさっさと退

場する、と言う鬼畜極まりない畜行だ。

一方でボルドー王子はカディナールに声を荒げず、俺を励まし、歪んだアクセサリーを付け続けたのは美談として語られている。

庶民の間でカディナールの奇行は、俺を嫁にしたボルドー王子へ対する嫉妬と解釈されている。

カディナール王子は密かに俺へ思いを寄せ、妾にしようかと画策するも、第二王子が婚約すると聞いて嫉妬心が押さえ切れなかったと言う筋だ。

一方で、貴族の間にはまた違った解釈がある。

最近軍部への影響を強めるボルドー王子が、カディナールにとって非常なプレッシャーとなっていたと言うのだ。

軍部を掌握されれば、王権を握つても最悪クーデターすらあり得る。看過できる事では無かったが暗殺に失敗。

重傷を負わせ寝込んでいると思われたが、俺が治してしまいアテが外れたと。

この辺りは狙われたのが俺で、ボルドー王子が怪我をしたのがたまたまと言うだけで、事実とさほど相違は無い。死苔茸チリアムと聞けばイコール暗殺なのだ、この業界。

「流石にクソ兄貴を見限る貴族も出て来たねー、でもさ、これでも勢力は半分ぐらいかなー」

ヨルミの言葉に頷く一同。

そう、軍部の影響を強め、木村の商会を味方に、今回いくつかの貴族を味方に寝返らせ、庶民の支持も絶大な俺達だが、それでもまだまだ勢力としては半分ほど。

それだけカディナールの持つ貴族の支持基盤は分厚いし、木村以外の大手商会や既得権益はがっちり唾が付いている。

なんせ派手で見栄えが良い第一王子。最近はアレだが、目立った失態も無く、何事もそつなくこなして来たのだ。

周りが次期王だと放つては置かず、それを仕切る暴力もキツチリと管理しているのだから隙が無い。

そんな漂う緊張を払うかの様に、木村がパチンと一つ、柏手を叩く。

「さあー、いよいよ戦いはコレからと言う事で、皆さんには英気を養って貰おうと、新しい料理を開発しましたので味わって頂けたらと」

「たのしみー」

切り替えの早いヨルミちゃんは無邪気に笑う。こう言う時に明るく振る舞うのは大切と理解している感じだ。……いや、いつもこんな感じか？ この人。

今回、料理店での会合となったのは多分だが俺が原因だ。

この所、俺は急速に痩せこけて来ている。味を感じずに食事が楽しくないからだ。

むしろ前はバクバク食い過ぎて、太るんじや無いかと心配していたが太る様子は全く無かった。

不思議に思っていたが、味が解らなくなつて、食べる量を標準レベルに減らしたら、たちまち痩せてきてしまったのだ。

原因は恐らく魔力。

オカシイとは思っていた、異様にお腹が減る事に。耐えられぬほどに、ご飯が美味しい事に。

それは多分、この地に足りない魔力の代わりにエネルギーを吸収しようとする本能だったと考えて良さそうだ。

魔法を使わなければ普通の食事で大丈夫だろうが、アイスの需要も、怪我を治したいと言う要望も引きも切らない。

しかし、その為に寿命を減らす程の無理をしては本末転倒だし、味がしないゴムの様な肉を口の中に放り込み続けるのもまた、想像以上の苦行だったのだ。

今更ながらに後悔先に立たず、馬鹿な事をしたと後悔が募る。

そうやって心を曇らせている内に、早くも準備が出来たようだ。入ってきたウエイトレスをみて木村は笑う。

「お、いよいよ料理が出来上がったようです」

「え？ 高級料理なんですよ？ 早すぎない？」

ヨルミちゃん、それはね、今から来るのが高級料理じゃないからだよ？
独特の強烈な匂いで、俺はコレから出てくる料理の見当がついていた。

「これこそが新しく開発したラーメンです」

出て来たのは……豚骨ラーメンだった。

「おおお、流石、キムラ商会のスープは絶品だな！」

ボルドー王子はそのスープを絶賛する。

どうも、木村はスープを売る商売をしているらしいのだ、味の根っこを押さえられた
らどの料理店も逆らえない。

多分だが、圧力鍋でも使って居るのでは無かるうか？ だとしたら真面目に大量の薪
と時間を使って出汁を煮出している他の商会が、光熱費の面で太刀打ち出来る道理は無
い。

俺も一口するが、匂いはすれど味を感じない。食感も確かにラーメン。大好きな豚
骨ラーメン。なのに味がしない、とても、空しい。

余りの悲しみに、俺は八つ当たりを開始する。

「この麺のコシが珍しいですね、ひよつとして植物の灰を使って居ますか？」

俺の質問に木村は目を丸くする。

「お解りになりますか？　いえ、灰自体ではなく成分を抽出しています、安全ですので安心を、ひよつとして……エルフの国では良くある食材ですか？」

「ええ、それに、このスープはひよつとしてブルンガ、……じゃなくて豚の骨を煮出したモノですか？　独特の臭みが苦手です」

「正解です！　我々の商会の秘密もユマ様の前では形無しですな」

キムラがちよつと悔しそうで、俺は溜飲が下がる。この美味しそうな匂いで味を感じないとか拷問でしか無いからね。

あ、護衛の豚ブルンガさんは間違つて呼んだだけですから、来ないで下さい。

こつちの世界の豚（つぼい生き物、ちよつと毛深い）なんて馴染みが無いから、呼び名なんざ咄嗟に忘れちゃうよ。

スープはカロリーが多いハズなので飲んでみるが、味が無いので生臭い匂いだけ感じて辛い。

なんてモノを飲ませてくれるんや、なんてモノを。

「泣いているのですか？　そんなに美味しくなかつた？」

「いえ、そんな事は、とつても美味しいですよ。故郷を思い出します」

しかし、無理をしているのは丸わかりの様で、ちよつと重苦しい空気になってしまった。

そんな空気をぶち壊すべく、ドタバタと足音がして大きな音でドアが開け放たれると、焦った声が放たれた。

「大変でス！ 大変でスよ！」

フィーゴ少年だ。彼も別室でネルネやシノニムさんと食事をしていたハズだが？

ここに乱入するのはよっぼどの非常事態、木村も慌てて問いただす。

「どうした？」

「あの、その……」

快活な少年にらしからぬ様子で言い淀む。それ程の一大事。

「王様が、ビルダール国王が崩御されました！」

シーンと、場が静まり返った。容体が悪いとは聞いていたが、すぐに死ぬ程とは言われて居なかった。流石に早過ぎる。

真っ先に席を立ったのはボルドー王子だ、俺達も後に続く。

王子は駆けながらも、少年を相手に情報収集を怠らない。

「後継は？ 指名したのか？」

この国は国王の指名でも、それだけで跡継ぎは決まらない。

それでも強い影響力があるのは紛れも無い事実なのだが……

「指名をする暇も無い急逝だったそうでス、昼寝と思っていたら……と」

「……そうか、親父は本当に逝ったのか」

思い出もあるのだろう、悲しそうなボルドー王子だが、それ以上に耳に残る印象的な言葉は、誰からとも無く発せられた。

「こりゃ、荒れるな」

ただそれだけ、木村が発したモノか、それともただの一般兵が残したモノか。

しかしこの場の皆の気持ちや代弁するその言葉は、結局最後まで誰が発したモノかは解らなかつた。

★思惑を探って

さて、国王崩御の報は王国中を揺るがしている真つ最中だ。

ポルドー王子は葬儀の準備で大忙しだが、逆に俺達がやれる事は限られてくる。

夏場なので葬儀を長く引つ張る事は難しいだろうが、国王の葬儀となればどうしたつてそれなりの準備期間が必要なようだ。

第一王子との全面对決を控え、その間に不確定事項は潰しておかなくてはならない。

「そんな訳で、我々もそろそろ余裕が無くなって来たのです、本当の所を教えてくださいませんか？」

「な、なんです？ どう言う状況ですか？」

ネルネが慌てた声を出す、俺とシノニムさんはそんな事では追及の手は緩めない。

ここはオーズド邸の一室、広々とした部屋にあるのはポツンと椅子が一つだけ。

そこに主人である俺を差し置いて座るのはネルネただ一人。

そう、今日の主役はネルネだ。俺はネルネに優しい声を掛ける。

「ネルネ、私達はあなたを尋問しなくてはなりません」

「じんもんっ!? なんで？ 私悪い事なんて、してないですよ？」

「本当に？」

グイツつとシノニムさんが上から被さるように顔を寄せる。

元々シノニムさんの方が背が高いのに、ネルネは座っている訳で、圧力は一入だ。ひとしお

「ええ？　なんですか？　この前お皿割っちゃった事ですか？」

「……それも気になりますが、そうでは無く、あなた、宰相へ我々の情報を流しているでしょう？」

シノニムさんの言葉に俺も頷く。

そう、ネルネはそもそも王宮を取り仕切る中央執務室から派遣されたメイドだ。

ハーフェルフで俺と同じ年ぐらいのメイドさん。エルフが魔力の少ない土地で生きているのが難しいと聞いた今では。当初考えていた以上に貴重な人材なのではないだろうか？

そんな人材を用意してくる中央執務室は当然だが強力な組織である。侍従長と女官長が表向きのトップであるが、予算の決定権を握るのは宰相だ。

そして、宰相は元老院の議長も兼ねていて、国王を除けば事実上、国を動かす最重要人物と言って良い。

そんな人物がこれだけ気を使って派遣してきたメイドを要りませんと突っぱねれば、悪だくみしていますと宣言するようなモノ、我々に受け入れないと言う選択肢は無かつ

た。

さて、どんな事を吹き込み、ましてや吹き込まれているのやら。

「ええ？ あっ！」

だがネルネにそれを指摘すると、それこそ今思い出したみたいな顔をするのだ。どうにも不安になる。

「あなたが中央に情報を流すのと同様に、中央の動向を私達に教えてくれれば良いのです、ネルネは私の友達でしょう？」

「うう……」

俺はとりわけ優しくネルネを諭すが、反応は芳しくない。俺は尋問する時のアメ役いわゆる『良い警官』の役割なのだが、直接的過ぎただろうか？

一方で『悪い警官』のシノニムさんは、冷たい微笑で追い詰める。

「大丈夫ですよ、ネルネがちゃんと話せば痛い事はしませんから」

「ええ？ それ、話さないと痛い事するって意味ですよね？ で、でも話せる事なんてホントにないんですよ……」

俯くネルネの様子に、思わず俺とシノニムさんは見合ってしまった。これはどうもオカシイ、スパイを尋問するつもりが、自分がスパイである事すら忘れていたみたいなのこの反応。

一流のスパイとはむしろこう言うモノなのだろうか？ いや、でもネルネだぞ？

「うう、私は確かに宰相様から派遣されてユマ様にお仕えする事になったのですが……」
「宰相に？ 直接ですか？」

「は、はい。あの、元はグレインビルド様の所で侍女をして、宰相様と仲が良い方で今度やって来る森に棲む者のお姫様の為につて事で派遣されたのです、優しそうでおじいちゃんみたいだったのに……」

「続けて下さい」

「で、ですね。ユマ様が何を考えているかとか、森に棲む者の戦力とか、後は魔法の力の秘密とか、何でも良いから教えてくれって」

「そう！ それです！ 正にスパイじゃ無いですか」

「うう、で、私言われたとおりに色々伝えたんですよ！ それなのに……」

「それなのに？」

あ、コレ、マズイ奴だ、チラリと横を向くとシノニムさんとまた目が合う。やな予感しますねー。

「それなのに、聞き取りの担当は別の人で、その人はすぐ怒るんです！ 全部本当の事なのに、信じて貰えないんです！」

「……えっと、ネルネ、あなた何を報告したのです？」

「まずは、姫様が足の怪我を治した事です。凄いですよねって報告したんですけど」
「信じて貰えなかったと?」

コクリとネルネは頷く。なるほど、回復魔法など信じられる物では無いのかも知れない。

それにしたって、勝手に決めつけるのはオカシイ気がするんだが……

それを尋ねると、ネルネは悔しさが滲む顔で声を絞り出した。

「あの、最初はある程度、信じてくれたんです。でも、次のお茶会で姫様は怪我した足を見せつけたじゃないですか?」

「……そんな事も、ありました……ね」

「それで! お前の言う事を信じて居たのにと落胆されて」

「あー」

女医さんが診てくれた事が有った気が、ひよつとしたらアレは宰相の手の者で、そこから俺の弱みでも握って——みたいな算段だったのかも知れない。

「私だって、姫様は定期的に自ら足の関節を外してらっしやると説明したんです! でもぜんっぜん信じてくれないんです」

「あー」

もう、シノニムさんと二人、『あー』しか言えない。

「なんなら、お前の足の関節を外してそんな事が可能かどうか確かめてみるか？ とか脅されてしまつて」

「あー」

今度の『あー』は俺だけ、シノニムさんは咎めるような視線を向けてくるが無視。

だつて、鞆帯伸びっぱなしだと変な癖が付きそうで怖くない？ それぐらいなら痛い
の我慢して、グリツつと、ひと思いにやった方がマシつて言うか？

「後は、夜な夜な姫様が突然飛び起きて、外へ向かつて矢を放つ事とか、精神的に参つて
いる様ですと」

うーん、酷い言われようだ……

「そ、それに対して、なんと言われたのです？」

「それ自体は、国を追われた姫なのだから不安定になるのも仕方無いと言う感じだった
のですが……」

おもんばか
どんなキチガイと思われてるか怖かつたのだが、俺の心労を思えば無理も無いと
慮つてくれた様だ、いやー中央執務室なかなか見所あるね。

しかしギユツと膝を握つて悔しそうなネルネが気になるので、俺は先を促す。

「それで、どうしたのです？」

「後で解つたじゃないですか？ その矢は侵入者の頭を打ち抜いていた様ですつて！

ビッグニュースと思ってそう伝えると、また信用してくれなくなつて

「あー」

「あ、あと……」

「あ、あと……」

「なんです？ 他にまだ何か？」

シノニムさんは冷たい声で先を促すが、当のネルネは顔を真っ赤にして言い淀む。

先ほどから俺とシノニムさんの顔をキョロキョロと窺つて、話して良い物かと悩んでいた。

「どうにも先に進まないの、俺が「怒らないから話して下さい」と言うとうにか続きを話してくれた。

「あ、あの、姫様が精神的に不安定になつてから良く一緒に寝る様になりましたよね？」

「……はい」
これ、アカン奴な気がしてきた。顔を真っ赤に染めたネルネが意を決した様に見える。

「で、でですね。あの、姫様は私のその、おっぱいを揉んだりするじゃ無いですか？ それでひよつとして姫様はそう言った趣味があるのかも」と

ネルネの告白、こうげき痛恨の一撃！ 俺はダメージを受けた！

シノニムさん『え？』と言う顔をして、静かに俺から一步距離を取るの、本当に傷つくから止めて下さい。

だってさ、夜は襲撃が来るかも知れないから、意識を完全に『高橋敬一』にしている訳よ？ そこに可愛いハーフエルフの女の子が夏場だし、薄着のネグリジェ姿で迫ってきたらそりゃーね？

……はい、後ろからがつつり揉んで、耳を甘噛みしました。赤くなつて可愛い声で鳴くのが最高でした。

でも、ホラ、それだけだから！ 一線どころか二線も越えてないから！ セーフ！
圧倒的セーフ！

「それで、私ぐらいの歳の可愛い女の子をパーティーで差し向けたりに、全然つれない反応で。逆に素朴だけど優しいような男性とかだと反応が良かったとかで……」

あーなるほど、逆に昼間、特にパーティーなどの場ではマナーを完璧に理解している『オルティナ姫』の意識を表に出している。

統合人格としてはあくまで俺、『高橋敬一』なんだけど、利用している人格を軸に好みや咄嗟の判断は当然変わってくる。となると女の子より格好いい男のが反応が良いのは当然だろう。

「それが決め手で、私の事、全然信用してくれなくなっちゃって、私が姫様に良いように騙されてるとか、酷いのはとくに裏切つてて中央に嘘を言つてるとまで……」

ネルネは目に涙を溜めて、グスツツと鼻をすすると、シノニムさんに必死に縋り付いた。

「あの、私をコッチで雇つて貰う事つて出来ませんか？ 私、お給金を受け取りに行く時すつごく肩身が狭くて」

「あー」

ネルネの給料は当然、中央執務室から出ている。ある程度チップは弾んで居るのだがそれだけでは十分な金額では無いだろう。

コチラに予算がない訳では無いが、ネルネを囲い込んで意味が無いと思つての事だったのだが……

もう、これ責任を取るしか無いだろう。色んな意味で。

シノニムさんの刺すような目線は鋭さを増す一方だが、別に俺が悪い訳じゃ無くない？

「取り敢えず、引き抜く格好になつてしまうとマズいので話を付けに行つてきます」

シノニムさんはそう言うのと、ネルネと二人。中央執務室まで話を付けに行くらしい。

そうなる、俺は久々に一人だ。流石に護衛はいつぱい付いているが話し相手にはならないし、そもそも普段は部屋にまでは入ってこない。

と、部屋の中を見回せば、衣装ケースの前、どーんと鎮座する木箱が目付いた。

………確か、ネルネが言っていたな「キムラ様から衣装が届きました」とかなんとか。

話を聞くと、どうも木村なりに俺を諦め、吹っ切るために、俺を思っで作っていた衣装を纏めて贈って来たんだとか。

……つまり、だ。木村が俺を思う余りシコシコ作っていた衣装は、あの婚約衣装だけでは無かったのだ。

ってか、よく考えたら俺と出会ってから婚約衣装を作り始めたとしても、全く計算に合わない裁縫の速度なんだよな。他の仕事だっしてする訳だし。

針子リーダーみたいな赤毛の女性に聞いたけど、木村は意味不明な速度で縫えるんだって。そう言う針子さんも他の人の倍ぐらい速かったんだけどさ。

それに、魔道具でミシンみたいなまで作ったみたいで、そりゃもう、常識で考えられない、尋常じゃ無い速度で服が出来上がるらしいんだ。

でもミシンは下手すりゃ何人もの針子が失業するし、既得権益に与える影響が凄いから中々販売に踏み切れないんだ。しかも魔石の需要が増して、結局採算が取れなくな

る可能性を考えると、木村の事業には他にも魔石を使うのが幾つかあるから、得策じゃ無いと普及させる気は今のところ無いらしい。

実はエルフの国には機織り機もミシンもあつたけど、魔力がそれこそ地球で言う電気みたいなインフラとして整備されてたからなあ……

ココでは魔道具一つで、魔石の需給バランスが崩壊してしまうとは盲点だ。

その辺も含めて、魔石の輸入に関して木村は並々ならぬ関心があつた。と、話が逸れた。

俺は木箱をじつと見つめる。

木村が俺を思つてこしらえた衣装、ひっじょーに嫌な予感がする。

なんて言うか性癖の発露と言うか。黒歴史の塊みたいな危険な感じ。

「まあ開けますけどね」

正直興味がある。友達のエロ本を漁る感じに近い。

しかもその性欲が自分に向いてると思えば、こちとら変な汗まで出てくる。

……結構どギツイの出て来たらどうしよう？ いや、仮にもお姫様相手にそれは無い
か？

でも、地球の衣装だと意味も解らないだろう、と高をくくつてそう。そもそも着て貰いたい訳じゃなく愛のゴミ捨て場扱いだし、なんでもOKだと判断してるかもしれない。

覚悟して蓋を開けると、見覚えのある洋服が飛び出した。

「いきなりコレか……」

一発目、出て来たのはブレザーだった。

敢えてセーラー服じゃない当たりが逆にマニアックじゃないか？ リボンじゃ無くて細めのネクタイ、背中のベルトみたいなのはウエストを絞めるのか？ フリフリで短めのスカートとか、黒タイツとか、なんとなくコスプレっぽい感じがエロい。もうハッキリ言っちゃうと風俗っぽい。

……で、取り敢えず着てみた訳だが？

キラキラの銀髪にブレザー姿。

いやーファンタジーアニメの学園物だと生徒会長的なキャラかも知れない。

ちよつとボス感出てる。

……なんだか楽しくなってきたぞ？

念のため護衛の人には、色々と服を試着するから入ってこないで、と伝えているし奇跡のカーニバル開幕である。

いや、言わせて貰えば、お姫様らしいドレスをいつも着るってのは実に辛い。

なんせ夏だよ？ ハッキリ言って、フワフワのロングスカートよりフリフリ短めス

カートが嬉しい。

それに木村が用意した衣装は前世の俺の好みとも近い。平たく言うとおタク趣味である。

前世の理想の女の子に近しい姿になれると言うのはなんとも楽しい感じがする。

「さて次は」

木箱をひっくり返せば出るわ出るわ！ って言うかいつペンに出過ぎである。

巫女服、ナース服、軍服、メイドさん（地球のコスプレ風デザインで、ホワイトブルムにフリフリ短めスカート）だけに止まらず。

猫耳、吸血鬼みたいなマント、白いハイヒール、ローファー、などなど小物まで入ってる！

面白がって色々着てみるが、どうにもこれだけ有ると、組み合わせたくなくなってしまい、混ぜるな危険というかゲームの衣装選択でふざけているみたいな感じになってしまう。

猫耳、ホワイトブルム、ナースジャケツト、巫女袴、吸血マント、ローファー。

……酷いなコレ、闇鍋過ぎて笑えてくる。

そんな感じで楽しんでいると、箱の底には二重底気味の謎スペースがあるでは無いか！

ぶち破ると、そこはいよいよ性癖渦巻く魔境と化していた。

「スクール水着？ つぼいののに背中がガバって空いてるし！ コレはセーラー服？ なのに白い部分が無いんだが？ 襟とリボンとスカートだけ？ エロッ！ えーっとチャイナドレス？ 短っ！ スリット深ッ！」

錚々たる禍々しいラインナップに混じり、ありました！ 王道にして頂点！

「バツ！ バニーガール！」

思わず顔が引き攣る。

なにせこの世界、肩を出すのはとても『はしたない』と思われると言うのに、堂々混ぜ込んで来やがった。

バツクフアスナーの王道タイプにして、色は白。どうやったのかテツカテカに光ってやがる！

つてか、この世界の住民じゃ、言われなきや服だと思わないんじゃないか？

ご丁寧にカフスも網タイツもあるし、先ほどのハイヒールとも色が合わせてある。

——ゴクリッ

静かな部屋に、俺が生唾を飲み込む音が響いた。

ろくに乳も育ってないのにバニーガール？

否ッ！ 逆に育ちきっていない今だからこそ背徳的なエロスがあるので無かろう

か？

言うまでも無いが、今や意識は完全に前世の中学生のエロモードである。

「行きますか!」

俺は少々血走った目でバニースーツを掲げたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あ、上がらない!」

で、足を通してみたのだが。

フアスナーが中々閉まらなかったのである。

前世でもフアスナーは某企業がかなりのシェアを独占していたものだが、独占可能と
言う事は、地味に見えて作るのが難しいと言う事だ。

オーバースペックな商品の数々を送り出す木村としても、かなり難易度が高かったの
だろう。

引っ掛かって、閉まらない! 背中のフアスナーだから尚更である。

部屋の大鏡にケツを突き出して、半脱ぎのバニーガール衣装で悩ましげな表情でお尻
をフリフリ。

誘ってんのかと言われても文句が言えない惨状だが、誰も居ないから大丈夫……

——ガチャ！

「あっ」

瞬間目が合い、声が重なる。

ネルネさんが帰って参りましたあああ!!

「う、うさぎさん?」

俺の身なりに視線を落とすや、みるみる顔が赤く染まる。もちろん俺も赤く染まる。恥ずかしい! だ、だが! こう言うのは恥ずかしいと思うから恥ずかしいのである。

俺は世間知らずのお姫様設定。箱に入っていた衣装が良く解らず、着てしまったとかそう言う雰囲気で押し通す!

見てはいけないものを見たと言う風に、開けた扉を閉めようとするネルネに俺はあどけない表情で待ったを掛けた。

「あの……」

「な、なんででしょう?」

まさか話し掛けられるとは思っていなかった、と言う様子で焦るネルネ。

よし、主導権は握れた。ココは押す!

「背中のファスナー……で通じます? このツマミを持ち上げて下さい」

「ええ！ やっぱりそれ、着るんですか？」

「気まづくなつたから、もう着ないとも思つたか！ 恥ずかしいって何のことですか？ そう言う風情で着る！ それでノーダメージ！」

「だって、凄くエツちな衣装ですよ」

「……………」

……………うん、誤魔化しようが無いエロ衣装だよな。

「だが、世間知らずなお姫様が、旦那様を籠絡するにも真面目って感じでなんとか……私も婚約したのですから、その……殿方を誘うような格好も必要かと……」

「ま、まだ早いと思いますよお！」

「いやいや、侍女は夜のアレコレだって相談に乗るのが仕事だよ？ とにかく、絶対に逃がさんぞ！」

「そうしてネルネにもエロ衣装を着せる事に成功した俺は大満足……だが。」

「さめざめと泣くネルネがポツリと零した。」

「うう、早まったかも知れませんが」

「どう言う事かと訊ねれば、今日二人で中央執務室に訪ねれば（そう言えば、シノニムさんは逃走したようだ）、対応がかってと全く違ったというのだ。」

「俺が死チリテム苔茸に犯された王子を治療した事は勿論、多重人格？ である事もバレてい

た。

するとネルネの言っていた事が全て本当だったのでは？ となつて、今後は堂々と俺の様子を中央に伝える役目を担うことになったのだと言う。

「コレで堂々と姫様の様子を伝えられると思つたのに……」

……止めて下さい。社会的に死んでしまいます。

と、言うわけで、俺はコスプレ衣装をそつと箱に戻すのであった。

殺戮令嬢と婚約破棄

国王の葬儀は盛大に行われた。

大量の花に囲まれた遺体にお別れを告げると、馬車に乗った俺達は棺桶と共に王都のメインストリートを進む。

熱狂的な歓声こそ無いものの、俺が王都にやって来た時以上に人々が通りに溢れ、しかし誰もが静かに黙祷を捧げていた。

王都はこれから五日間喪に服す。全ての商店は営業時間を短縮し、派手な看板も引っ込めるし、喪服の着用が義務となる。

この世界でも喪服は黒い。鏡で確認すれば俺の銀の髪は黒に映えて美しく、幸薄そう（実際に薄い訳だが）な雰囲気は喪服と非常にマッチしていた。

だが、流石にそれを褒めてくれる人は居ない。馬車の中、隣に座る未来の旦那様は先ほどからだんまりだ。

なんだかんだ、実の父親の死がショックなのだろう。

そう言えば、俺は死んだビルダール国王の事を何も知らない。顔を見るのもさっきのが最初で最後になってしまった。

「あの、国王様がどんな方だったのか教えてくれませんか？」

悲しみは共有した方が救われる。思えば俺は自分の不幸ばかりを高らかにアピールしてきたが、他人の不幸にはまるで頓着しなかった。

正直、自分以外の人間に興味が無かったからだが、未来の旦那様の悲しみぐらいは共有してやっても罰は当たらないだろう。

……そう思ったのだが。

「いや、考えて居たのは親父の事じゃないんだ……いや、親父の事でもあるのだが。どうにもきな臭い動きがある」

沈んだ声でボルドー王子の語る所は驚きの報告だった。

「シャルティアが婚約破棄された？」

「ああ、この時期にだ。どう思う？」

……どうって、全く意味が解らない。

言われてみれば、今日のカディナールは一人で参列していた。周りが気を使ったのか俺達とは大分距離が取られていたので、その表情までは窺えなかったが、特におかしい様子は無かったはずだ。

まさかカディナール王子はシャルティアこそが暗殺組織の主力だと知らないのか？ いや、だとしてもダックラム公を怒らせる愚を犯すだろうか？

カディナールは支持基盤として多くの利権や商人を抱えているが、それを纏めているのはダックラム公の暴の力だ。

ハッキリ言うと『裏切ったら殺すぞ』と言うプレッシャーが組織を纏めると言つて良い。

実際、最近は特にカディナール派の有力者が不審な死を遂げたり、行方不明になつたりしている。

ボルドー王子だつて今までは、敢えて地味な出で立ちで目立たない様振る舞つたり、利権の一部をカディナール王子に譲つたり、ひたすらに引き籠もつていたのは暗殺を恐れての事。

その裏でボルドー王子は暗殺と言う暴の力に対抗するため、軍と言う武の力に目をつけ、少しずつ軍部にパイプを作つていた。

そこに俺の登場、民衆の支持と軍部への更なる影響力の増加を果たし、婚約披露宴ではカディナール王子を罠に嵌める事に成功した。

至つてついに盤面は五分五分に、そこへ国王崩御の報せ。

誰がどう考えてもここからがお互いの力の見せ所、この場面でダックラムの暴を手放す理由は全く見当たらない。

「理由は？ 何だと言われているのです？」

「表向きは、シャルティアがユマ姫を中傷する妄言をまき散らした事だと発表されているが……」

「それって！ ひよつとして自分が恥を搔かされたから？」

「全くあり得ない話じゃ無い、アイツはプライドが高い。衆人環視での場で、あの失態は耐え難い物だったに違いない。加えて死苔茸チリアムの解毒は不可能と言うのが定説だしな、襲撃自体が功を焦ったシャルティアの嘘と断じられたのかもしれない」

シャルティアがボルドー王子に打ち込んだ矢には、致死毒が塗られていた。

俺の魔法が無ければ間違いなく死んで居たハズだし、嘘の報告と判断されてもおかしくは……いや？

俺の疑問が伝わったのかボルドー王子は続ける。

「あり得なくは無いが、それでもやっぱリオカシイだろう？ 恥を搔いたのはシャルティアも同じだ。嘘の報告をする意味が無いし、君が魔法で治した上で、俺達に嵌められたと考える方が筋が通る。その位はカディナールの奴だつて解らないハズが無い、たとえ我慢ならぬほど怒ったとしても、婚約破棄なんて軽挙、側近が止めるハズだ」

そう、カディナールは邪悪だが馬鹿じゃ無い。国を傾けそうなクソ馬鹿は、流石に次期王の神輿に担げないからだ。

「そして、即座にカディナールの新しい婚約者が発表された」

「急ですね、相手はどなたです？」

驚いた一方納得もした、相手がシャルティア以上にメリットがある相手なら鞍替えする可能性もなくは無いです。

「……いや？ そんな相手居るのか？ 他の公爵家？ いや今のカディナールに必要なのは金でも権力でもなく、ダックラム公に代わる暴力の象徴だ。

「その相手がまた謎なんだ、トリアン男爵の娘、ルージュ・トリアン。占いが得意な娘として名が売れてきている。しかし、それだけだ、身分も前代未聞と言えるほど低く、ハッキリ言って何の力も無い」

「……不気味ですね」

「いや、追い詰められたカディナールが占いに傾倒しても不思議じゃ無い。現にルージュの占いを酷く気にしている風だと報告が上がっている」

婚約発表の時に見せた狼狽具合では、占いに頼ってしまうのもあり得るか？

普通、敵が占いに頼ると言うのはラッキーな事だろう。追い詰められた証でもあるし、神に祈り、不確定要素に身を任せるのは、勝負を投げたも同然だからだ。

だが俺の場合は違う。『偶然』が牙を剥き、ぶん投げた勝負が俺の顔面に突き刺さる。顔を険しくする俺の頭に、ポルドー王子がポンツと手を置いた。

「そう深く考えるな、何があつても守つてやるさ。最悪国をひっくり返す事になつても

だ」

「それは……クーデター、ですか」

「そうだ」

軍部を押さえている以上、そのカードはある。だがそれは最後の手段でなくてはならないだろう。

コイツは俺の為にそのカードを切る覚悟があるらしい。

俺の頭を撫でる王子のゴツイ手が、意外にも嫌では無かった。打算の上での婚約なのだ、俺にとって王子が絶対に恋愛対象にならない、と言いつかれるだろうか？

多くの人格が混じり合い、俺の感情は俺自身ですら良く解らなくなっている。

そんな複雑な気持ちを振り切るように、俺は戦いの覚悟を決める。

「喪が明けたら、ついに戦いが始まるのですね……」

「いや、喪が明けぬ内から水面下で有力貴族の引つ張り合いが始まるだろう。やり切れぬ思いもあるが仕方が無い、こっちだって既にルージュの事をガルダに探らせている最中だ」

「因果な物ですね」

「そうだな……」

元々甘いロマンス無しでの婚約だったが、いよいよ血生臭くなってきた。

こっからの王都はどこからでも死亡フラグがぶっ飛んで来かねない、魔窟となるだろう。

そんな俺の恐怖が顔に出ていたのか、頭を撫でるのを止めた王子は緊張で震える俺の肩に手を回し、グイツツと体ごと引き寄せた。

「大丈夫だと言っているだろう？　だが攻められるのが性に合わないのは俺も同じだ。いつそ釣りに出すか？」

「釣りに出す？」

「そうだ、婚約旅行。丁度、俺の母、キュリアナに顔を見せに、ヴィットリア領まで行く必要があるだろう？」

確かに俺はボルドー王子の母親に挨拶もしていない。ボルドー王子の母はカディナール王子の母親である第一王妃に苛められ、王都に住んでいないからだ。あと、元々庭いじりが好きとか余り王妃らしくない趣味のお陰もあるらしい。

精々二日程度の距離なので、葬儀には来るかと思っただが。間に合わないからと、断つたというのだ。

いや？　良く考えたら死を知った時には既に二日経ってるって事だもんな、そこから準備してーって、全く間に合わんわ。どうにも地球の情報伝達スピードを基準に考えてしまう癖が抜けないね。

そもそも、今回の葬儀は死体が腐る前に棺に入れて、埋葬するだけの物。

本当の葬儀は次期王の最初の仕事として、音頭を取って盛大に行うのだそうだ。そこらには王妃は勿論、国中の貴族が王都にやって来るのだと言う。

「ですが、王が死んだ以上、婚約旅行は中止でしよう？」

「華々しいパレードは無理だが親父の死を含め、母に報告すべき事はむしろ増えている。喪に服するのが五日と言うのも往復するには丁度良い」

「そこで警備を手薄に見せ掛けて、暗殺者を釣り出すつもりですか？ 流石に危険過ぎないでしょうか？」

「君はシャルティア以外の暗殺者ならどうとでも対処出来ると言っていただろう？ 彼女が王都を離れる様なら釣り出しを中止すれば良い。王都で襲われるのを待つより余程安全だ。違うか？」

「……………」

一理ある。暗殺者なんて大体は殺し殺され、何時死んでもおかしくない運命力が弱い存在だ。

シャルティアみたいな特異点の存在が絡まぬ状況で、間引き出来るチャンスは見逃すべきでは無いかも知れない。

「そうですね、旅行、行きましよう」

「よし、そう来なくちゃな」

……なんでコイツちよつと嬉しそうなんだ？ ボルドー王子は俺を庇護欲ひごよくが掻き立てられる、か弱い少女と認識してただけなんじゃ？ もしくはあくまでビジネスパートナーとしての関係だったハズ。

なのに王子は俺の肩に乗せていた手を首筋、そして顎へと移した。

すると俺は顔の向きを固定され、ボルドー王子と至近で向き合う羽目になる。

「大丈夫、俺を信じてくれないか？」

「……え、ええ」

顔が近い！ コレは!? キスする流れじゃねーか！

いや？ 婚約したんだし、それは良いんだよ？ 良いんだけどさ！ ビックリしたからってオルティナ姫とかが引つ込んで『高橋敬一』の精神を表に出してくるの止めて頂けませんか？ キツツイってのマジ！

とは言え……だ、王子との今後の関係を考えれば恥は掻かせられまい。俺は覚悟を決めてギョツと目を瞑る。

……しかし、唇には何の感触もやって来なかった。俺は恐る恐る目を開ける。

「……無理をしているな、そんなに思い詰める事は無いさ、ゆっくりで良い。いつかは俺を受け入れてくれよ、君は俺の婚約者なのだから」

そう言つて、優しい手つきで王子は俺の髪をかき分けた。

そんな王子を見上げる俺の顔は熱かった。きつと真つ赤になつてゐる事だろう。

何が恥ずかしかつたのか自分でも良く解らない。からかわれたと感じた事か、自分だけ思い詰めてしまった事か、あるいは君は俺のだと語る王子の仕草か。

「もう！ いじわるしないで下さい」

いっそ、なるたけ可愛らしく振る舞つておこうと、いじらしい反抗を試みたが、当然に悪手だった。

「そうか？ だったら今からでもやり直すか？」

そう言つてこの男、再び肩を抱いてくる。

「あ、あう……」

「冗談さ、今はまだ……な」

真つ赤になつて照れる俺に、王子はおどけた様な笑いを返す。

クソツ、本気で遊ばれてんな。

素に近いリアクションとは言え、自分でも可愛いと思うので王子の好感度は爆上がりだろう。それは良い。

だけど、なにがアレつて『高橋敬一』の部分も女の子化してきてる感じがヤバイ。

いや、ヤバくないのか？ むしろその方が自然で利点が多いか、いや、でも、うーん。

自分でも何が嫌なんだか解らないが、なんとなく嫌だった。

気が付けば馬車は王都をとつくに抜け、郊外にある巨大な王族専用の墳墓に辿り着いていた。

「大きいですね」

「ああ、歴代の王族が眠る場所だ、オルティナ姫は罪人として処理されてしまったのでここに死体は無いがな」

「改葬は行わなかったのですか？」

「肝心の死体が見つからなかったそうだ」

「そうですか……」

なんとも世知辛いもんだ、オルティナ姫の記憶が疼く気がする。

一方で俺は、お墓特有の静謐な雰囲気せいひつに圧倒されていた。豪華絢爛とは言えないが、とにかくデカイ。歴史のある彫刻や石版がゴロゴロしていて、一言で言うところ遺跡系のダンジョンっぽい。

棺を先頭に、そんな通路を誰もが無言でしずしずと進んでいく。

通路の左右を覗けば、いまだ主の定まらぬ部屋が数多く存在していた。

「……………」に収まるのは大分後にしたいもんだ」

「同感ですね、と言つても私はそもそも結婚までこぎつけなくては、王子とココに入る事も出来ませんが」

小声でこぼした独り言に、返つてきた俺の言葉が意外だったと言わんばかりに、王子は目を丸くした。

「へえ、一緒に墓に入つてくれる気はあるんだな？」

「それは、当然でしょう？」

「どうかな？　いつかふらりと消えちまうんじゃないかって、結構不安なんだぜ？」

「そんな、事は……」

あるかも知れない。

いつかそれこそ俺へと目がけて隕石が落ちまくる程に『偶然』が暴走したら、俺は一人帝国を目指して旅立つだろう。

「なにか心残りが有るんじゃないかってな、それが死んだタナカつて男か、商人のキイムラの野郎の事か、間男に奪われるんじゃないかって、俺は不安で押しつぶされちまう」
「いえ、そんな！　違います！」

そんな恋愛的な事情じゃ無い、特にその二人にだけは、そう言う感情はあり得ない。

そして、思わず上げてしまった大声で、俺達は神父から嚴重注意を受けてしまうのだった。

「こっぴどく怒られたな」

「もうー！」

結局朝一番で始まった葬儀は昼過ぎで終わった。途中ハプニングは有ったが、埋葬もつつがなく終了し、墳墓の前で解散となる。

後は各自の自宅に戻って急いで旅行の準備だ。

「送っていいんか？」

「いえ、馬車を用意してますので」

王子の提案を丁重にお断りする、つれない様だが、なんせ王子の馬車は揺れるのだ。

いや誤解しないで欲しいのだが王族の使う馬車の性能は悪くない、それどころか王都に来るまで乗って来たネルダリア領の馬車よりもよっぽど立派だ。

「そうか、キムラ商会の馬車は揺れが少ないと聞く、今度は俺も乗せて貰うでしょう」
「……………」

そう、木村の作った馬車は更に、圧倒的に揺れが少なく快適なのだ。

多分サスペンションの機構がまるごと違うに違いない。ひよつとしたらタイヤまで違う可能性がある。

しかし、断られた王子はなんだか寂しそうだった。まるで俺がボルドー王子より木村

の奴を選んだみたいに感じたのかも知れない。

いや、そんな斜め上の嫉妬されても困るんだが……

「姫様あー準備出来ましたよー」

迎えに来たネルネに連れられ、収まった馬車の中、俺は木村や田中の事を考える。

アイツらは好きは、好きだが、それは決して恋愛じゃない。一般的に恋愛感情と言うものは友情よりも強いのだろうが、それでも、あの友情を上書きしたくはないのだ。

そうか……俺は自分が、『高橋敬一』の部分だけは男で居ないと、アイツらと友達でなくなってしまうような気がして、それが嫌だったのだ。

そんな事を思いながら、俺は帰路につくのだった。

婚約旅行

「確かに……揺れないな」

「ええ、そうですね……」

俺とボルドー王子は二人、馬車に揺られていた。王子の母親へ婚約報告を兼ねたちよつとした新婚旅行である。

揺られていたと言っても、王子の言うように穏やかな物。木村の作った馬車のサスペンションは他の馬車の比では無かった。

あれから気になって馬車を下から覗いてみれば、板バネを何重にも重ねてあつたし、タイヤもゴムつばい素材で出来ていた。軸受けもベアリングつばい。

酷いオーバーテックノロジーもあつた物だが転生チートの定番感はある。

ちなみにエルフの童籠はシャーシとボディの間が浮いてるとかで、幼少期に俺の内政チート欲をポツキリへし折ってくれた。

それでも童籠が揺れまくつてたのは、それだけ大森林の道が良くなかつたと言う事だろう。

結構な予算を街道の整備に使っていたハズなのに、今考えればアレは一体どう言う事

だ？

いや、あれだけ深い森の中の道路を整備し続ける事自体が土台無理なのだろう。

大森林の植物は地球の常識より遙かにパワフルだった。レンガをぶち破って伸びてきた新芽を何度も目にした物だ。

——ムニユ

なーんて考え事をしていたら。俺は王子にほつぺたを引つ張られた。

「どうした？ アイツの事でも考えていたのか？」

「ち、ちがいまふ……」

アイツと言うのは木村の事だろう、最近の王子は嫉妬深いと言うか、木村と張り合つて困る。

「アイツの馬車を使うのは少し癪だが、お陰で馬車の中で君と話せるのは感謝だな」

「そうですね、普通の馬車では舌を噛みそうです」

そう、普通の馬車ではよっほどスピードを落とすし、歩くのと変わらないぐらいの速度でなんとか会話が出来る位に揺れるし、なによりガタガタとうるさいのだ。

その点、木村の馬車ならジョギング以上の速度でも揺れに悩まされない。普通に会話も可能だ。

暗殺者なりを釣り出すと言う裏の目的もあるだけに、いざと言う時に速度が出せる馬

車は必須。それに婚約旅行だと言うのに会話も出来ないのは寂しい。

木村の馬車を使うのは当然の選択であった。

加えて言えば、俺の健康状態にも配慮されたと言うべきだろう。

体調が悪いのは知られているようで、王子は頻繁に俺の顔色を窺う。

「少し、痩せたか？」

「そうですね、魔力の使い過ぎかも知れません」

「そうか、傷病者に回復魔法を使うのは少し控えた方が良いな」

「私は嬉しいですが、反発はありませんか？」

「君の健康を害してまで助かりたい奴は居ないさ。確認だが、魔法を使う事自体が命を削ると言う事は無いのだな？」

「それはありません、でしたなら少なくとも、アイスなどを作ろうとはしませんよ」

「それは、そうか」

結局、舌を駄目にして食べる量が減ってしまったから痩せているだけだしな。

まだ、そこんところは言い出しづらい。単純に恥ずかしいからな。

因みにアイスは冷たくて香りも良くカロリーも高いので、よく食べている。

「少し寝たらどうだ、横になるだけでも大分違うだろう？」

「……で……ですか？」

「ああ、邪魔する者も居ない、仮に何かあっても俺が守るさ」

「え……で、でも寝顔を見られるのは恥ずかしいですし……」

もじもじと女の子らしい回答を試してみた。因みにどこでも気絶していた幼少期も手伝って、ホントはそんな部分に全く抵抗はない。

とは言え、男が居てもグースカ寝てしまう隙だらけの女の子と思われるのも癪だ、守りたい薄幸の美少女感も損ねてしまう。

だが、王子は俺の戸惑いを見無視してどうしても俺を寝かせたいらしい。

「寝顔ぐらい婚約したんだ、今更だろう？ そんなに嫌ならココで向こうを向いて寝れば良い、それなら寝顔は見えないさ」

そう言って王子はポンポンと膝を叩く。

「ひ、膝枕ですか？ 王子に対して不敬では無いでしょうか？」

「それこそ今更だろう？」

「……………」

そう言われれば、そうだな。

つてか、この王子は単に俺とイチャイチャしたいだけでは無かろうか？ それで膝枕って発想がなんとも控えめだが、女の子と縁遠かった前世を考えれば共感しやすい。

「では、失礼して」

「おう、しつかり休めよ」

そう言う事なら、と膝を借りて目を閉じれば、王子が俺の髪を撫でる感触。

俺の髪は綺麗なので触りたい気持ちは、そりや解る。

婚約してるのだから、気安いですよ！ と怒るのも筋違いだろう。

結局俺は、なんだかんだ心地よい振動と、髪を撫でる感触に眠くなり、気が付けば意識を手放していた。

「あらあらー良く来てくれたわねー！ 随分まー、早かったじゃない」

馬車で二日の距離のはずが、木村の馬車は僅か一日でヴィットリア領まで辿り着いた。

揺れないと言う事は、馬への負担も抜群に少ないのだ。

ボルドー王子の母、キュリアナさんは恰幅の良い肝っ玉母さん然としていた。

王妃らしさは一切無いが、ボルドー王子の母と言うのは納得と言える。喪服と言うのをさっ引いても地味な服装で、言われなければ王妃などとは絶対に思わない。

「馬車の性能が良かったからな、予定より早く着いた。紹介するよ、この子がユマ姫だ」
え？ なんだよその紹介。ホントに貴族か？

不躰な態度に虚を突かれたが、俺まで適當と言う訳には行くまい。目上の女性の場合はどうするんだっけ？

左手を胸に、右手でスカートをつまみ、会釈する。

「この度は国王様の死、お悔やみ申し上げます。私は王子と婚約させて頂いたユマと言います。この度は婚約の報告に伺うのが遅れたばかりに、国王様の訃報まで同時にお伝えしなければならぬ事が残念で仕方ありません」

王子の性質から、あけつびろげな性格だとは思ったが、幾ら何でも国王の弔辞が後回しなのは驚いた。

「まあまあ！　ちっちゃくて可愛い子ね、あんたと結婚するにはちよつと可愛らし過ぎないかい？」

「そうは言うがな、中身は俺なんかよりよつぽど大人だぞ」

「そりゃアンタがガキ過ぎるだけじゃないかい！」

……いや、あけつびろげ過ぎるだろ！　宿屋の女将とどら息子か？

頭痛を覚えるやりとりだが、この息子にして母と言う事だろう。

とは言え、確認すべきはセキュリティだ。扉まであけつびろげでは命に関わる。

「あの……失礼ですが、防犯の方は大丈夫ですか？　国王様の死によって、今王都では権謀術数が渦巻いています、ここも無関係では居られないでしょう」

「解っています、元々あの女からの嫌がらせに備えて、この屋敷の防犯は万全を期しています、安心して下さいな」

俺へと向き直ったキュリアナさんは、瞬時に肝っ玉母さんを引っ込め、貴族の奥様らしい笑顔で答えてくれた。

なるほど、流石に中身まではただのおばちゃんと言う訳では無いか。

そして、『あの女』と言うのは第一王妃、カディナル王子の母親だろう。

葬式の時に見たが、美人だが神経質そうでカディナル同様、馬が合わないの是一目で解った。

国王も顔に惹かれて第一王妃と結婚したものの、気疲れから第二夫人は肝っ玉母ちゃんにしたと思えば納得でもある。

でも、当然二人は仲が悪くて、肝っ玉母ちゃんは王都を脱出。

……いやはや、早死にするのも納得だわ国王。

にしても、俺はここで何をすれば良いのか、それが良く解らない。

親子の二人を見てみると、何というかアットホームなのは良いが、他人の家に突然上がり込んでしまったみたいいな居心地の悪さあるなコレ。

「何日ぐらい居られるんだい？」

「二日か三日だな、一泊のつもりが馬車が速いから時間が取れた」

「良かったじゃないか、この娘を湖にでも案内してやんな」

「元からそのつもりだ」

「へえーがんばんなよ！」

キュリアナさんは王子の背中をバンバン叩く。

湖と言うのはこの辺りの人気観光スポットと言った所か？

そこでしつぱりデートしてこいと、そう言う話だ。デートされる俺としては、なんとリアクションすれば良いか悩むな。

そんな居心地の悪さも一瞬、夕暮れでの到着だったので、その日は名物と言われる地鶏の丸焼きを振る舞われ、デザートとしてキュリアナ王妃が焼いてくれたパイを食べたりしてすぐに終わった。

そして翌日、俺は馬の上にいた。

地球の馬と違って、耳が長い馬は可愛らしい。そして馬の上と言うのは案外目線が高いと言うのは新しい発見だろうか？

などなど、俺は必死に現実逃避していたのだが。

「落ち着かないみたいだな、馬は初めてか？」

「そうですね……」

いや、俺は決して、馬の上だから落ち着かない訳じゃ無い。セレナと空を飛んだ事もある俺に、この程度の高さはなんでも無い。

今の俺はもつと特筆すべき状況にあった。

馬上で俺は、王子の腕の中に収まっているのだ。

スカートなのでお姫様みたいに（お姫様だが）横乗り。手綱を握る王子の膝の上にあちよこんと乗って、王子の右腕に体重を委ねている。

つまりラブラブ二人乗り状態である。

湖への小道は馬車が入れないし、俺は乗馬など出来ないのだから仕方が無いとは言え、コレは恥ずい。

膝上に乗っているのに、ちっちゃい俺の視線は王子の喉の辺り、話をするには見上げる様な格好だ。

「どうだ？ 馬車も良いが、この方が風が気持ちが良いだろう？」

「そうですね」

「この湖は避暑地として人気があるんだ、何しろ景色が良い」

「それは楽しみです」

我ながらちよつと笑顔が固いが、恥ずかしいだけで別に嫌な訳じゃ無い。

実際、今日は天気が良いだけに、ちよつと楽しみになってきていた。こうしてただ馬

を歩かせるだけでも心地良い。

髪が風に流れ、俺が手でかきあげるとキラキラと光を反射した。

揺れはするが、馬車と違って不快な揺れでは無い。風は気持ちよく、日差しは心地よい。

夏の暑さも心なしか今日は控えめで、乗馬日和と言えるだろう。

湖から流れ出している小川を道しるべに、川岸をゆつたりと遡る。

どれぐらい歩いたか、せせらぎと馬の足音が作り出す単調なりズムに、少しウトウトとし出した頃、王子から声を掛けられた。

「そろそろだぞ？　俺が見せたかった光景は……コレだ」

「わあ……」

それは、言ってしまったえば何の変哲も無い湖畔の風景だ。

キラキラと光を反射する湖面に、小さい釣り舟が浮いている。向こう岸は深い森で、湖畔にあるのは小さなペンションが一つだけ。

全く違うはずなのに、どうしてか俺は、幼い頃、家族みんなで訪れた湖畔の避暑地を思い出していた。

あの時は俺が蛙の幻影を見て、旅行を台無しにしてしまったんだっけ。

思いっきり楽しんでたセレナに悪い事をしてしまったなあと、ほろ苦い思いが胸の

中でしこりの様にいつまでも残っていた。

あの後も俺は、家族旅行なんていつでも行ける、埋め合わせの機会はある。そう思っていた。

でも実際はアレが最後の家族旅行になった。もう二度と俺は家族で旅行に行く事は出来ない。

みんな死んでしまった。

みんな……みんなだ。

セレナも、兄さんも、母も、父も。

「ど、どうした？ 何で泣く？」

「ずみません、昔の事を……思い出してしまった」

クソツ、また良く解らないタイミングで泣いてしまった。

どうにも精神的に不安定だ。

しかも今は王子の腕の中、逃げ場は無く、王子に泣き顔を見せるか、王子の胸に顔を埋めるしかやりようが無い。

どっちも抵抗があったが、なんとなく泣き顔を見せたくなくて、王子の胸に身を寄せた。

「そうか……湖は家族旅行の思い出、か」

「……はい」

背中をさすられながらのしつぱりした雰囲気で、俺は泣いた原因を王子に話してしまつた。

「そういや、俺も親父と一度この湖に来たな」

「それは……」

言われてみれば、ボルドー王子にしてみれば親が死んだ直後。俺の感傷に付き合わせるタイミングでは無かつただろう。

コレは、なんとも恥ずかしい。本来なら、俺が王子の感傷を慰める場面だろう。

しかし俺が王様の話を促すと、王子はあまり話したくないのか、不承不承と言つた様子。

「親父つたらな、遊びに来たつてのにペンションで仕事なんざしやがつて、遊ぼう遊ぼうつて、俺がひたすらダダをこねたのを覚えてる」

「ふふっ」

「どうした？」

「いえ、私の父様も旅行なのに仕事をしていたなつて」

「お前もか、そうだよな、どこも王様なんて難儀なばかりな仕事だよな」

「そうですね……」

「でもよ、だからこそあんな奴にはやらせておけないな」

「ふふつ頑張つて下さいね、旦那様！」

「なんだコノ！ 大人をからかいやがって」

「ふふつ」

「ははは」

笑い合いながら、湖畔で二人と一匹。カッポカッポと歩ませながら、優しい時間が流れていた。

ふと王子が正面から俺を見る。

自然と、俺は、目を瞑った。

『高橋敬一』の意識も溶けていき、私はキスを待つ体勢だ。

そしていよいよ……

——ピイイイ

甲高い笛の音が鳴った。

賊の合図である。

思わずパチリと目を開ければ、苦り切った顔の王子のどアップがそこにあつた。

「クソツ、空気が読めない殺し屋だ」

全くだと思いながら、俺は守られてしまった唇を思わず押さえる。

「どうしましょう？ ペンションに立てこもりますか？」

「あんまり舐めてくれるなよ、笛の音から包囲を抜けたのは少数、すぐに決着を付けてやる！」

言うや否や、王子は馬首を返して湖畔へ到る山道へと戻った。結構な速歩で俺は王子にしがみつくのに必死だ。

元来た道を飛ばしていると、途中で賊を追い越してしまつたらしい近衛兵達と出くわす格好となつた。

先頭に陣取るゼクトールさんが息を切らして報告する。

「申し訳ありません、一人突破されました」

「いいさ、昨日から50人近く相手をして一人だ、悪くない」

……そんなに!?

襲撃が無いと思っていたら、どうやら気付かれぬ内に抹殺されていたらしい。

十重二十重と警備が敷かれているとは聞いていたが、それでも取り逃した時だけ笛で知らせる、そんな仕組みだったようだ。

「丁度良い、ゼクトール、受け取れ」

言うや否や、俺は王子に抱えられ、馬上から馬上へと受け渡された。

おいおい、俺はボールじゃ無いぞ！

「格好つけるのも大概になさい、王子！」

慌てて俺を受け取ったゼクトールさんが必死に王子を制止する。雰囲気から察するに、どうもコレ、王子が一人迎え撃つ流れっぽい。

「新婚を邪魔されてイライラしてんだ、格好ぐらい付けさせるよ」

そう言つて一人で飛び出してしまふ。

「馬鹿をおっしゃい！ 我々が片付けます、お戻り下さい」

「大丈夫さ！ 俺には女神が付いてる！」

そう言つて俺へと振り返る王子だが、クーリングオフはナシに願いたい。

幸運の女神どころか、禍々しさで言えば呪いの邪神像みたいな物だからな。

しっかし、これ以上無い見事な死亡フラグ。

……いやいや、流石に大丈夫だよな？ コレ。

「まったく殿下は、いえ、心配には及ばないと思えますが……」

ゼクトールさんはボヤきつつも、俺を気遣つてそう言うが、王子が単騎駆けとかどう考えてもあり得ない状況だ。

「本当に大丈夫……なのですか？」

「ええ、ああ見えて、殿下は近衛兵の平均より上の実力はお持ちです。生半可な賊に遅れは取りませんよ、まして相手は疲れ果てている筈です、注意すべきは飛び道具ぐらいでしょうが……」

「あつ！ その飛び道具の様です！」

50メートルぐらい先、王子が離れ一人になるや、木陰から飛び出した賊が構えるは、なんとボウガンだった。

ボウガンならそれこそ疲れていても威力が出せる、一番この場面で嫌な兵器だろう。……だが。

「躲した!？」

「あの方は、何しろ目が良いですからな」

王子は馬上ながら体を反らしてその一撃を避けてしまう。すると連射出来ないボウガンの弱みが出る。

慌てて逃れんとする襲撃者だが……なんと足がもつれて転んでしまう。

いや、足に何かが刺さった？

「王子もボウガンを？」

「ええ、アレはこの前の襲撃者が使ってきた小型の奴ですね。妙に精度が良い、やはりアレは恐ろしい敵でしたな。今回の様な雑魚とは違う」

ゼクトールさんが言うには、王子はシャルティアが使っていたボウガンを馬に載せていたらしい。

ボルトをセットしておけば片手で扱えるボウガンは、馬上で使うのにも非常に効果的だと言える。

「ここ数年で帝国から登場した武器ですが、戦争を変えかねません。恐ろしいものです……いや、帝国はもつと恐ろしい兵器。『銃』を開発している。

だが、それはここでは良いだろう。目線の先、王子は馬を走らせ賊へと追いつがる。賊もさるもの、足をやられても立ち上がり、正眼に構える……だが。

派手に血が舞った。

当然、賊の血だ。斬り合いにすらならない。王子は馬上のまま、一太刀で賊の首を飛ばした。

「強い、ですわね」

「そりゃあね、アンタは本当に王族かって位に訓練してますから」

ゼクトールさんが笑って俺の肩をポンポンと叩く。

それを見たボルドー王子が、猛然とした勢いで戻ってきた。

「オイ、人の嫁に手を出さないでくれないか」

「申し訳ない。姫が美しく、つい賊を応援してしまいました」

「お前が言うとお洒落にならんぞ」

「半分本気ですからな」

「とんだ忠臣がいたもんだ」

謎のブラックジョークと共に俺は王子の胸へと戻された。

結局、賊の襲撃はこれ以降無く。湖で二人、俺は王子と遊んだ。

ボートを借りて、二人で漕いで湖を横断したり、釣りをしたり。

二人して家族を失った傷を癒やす様に、新しい思い出を作ろうとしていた。

遊び疲れた俺達は、日が暮れる前にキュリアナさんの邸宅に帰る。

ここにも襲撃があったようだが、屋敷の警備も優秀で何事も無かつたらしい。

夕飯はキツシユっぽい物と、タルトっぽいデザートだったのだが、なんかキュリアナ

さんがやたらと俺に、料理の感想を聞いてくるのが困る。

いや、他人の家で料理を食べるとそう言う物だつてわかっちゃ居るんだけど、不味

くつたつて美味しい以外に言えやしないし。そもそも今の俺は味なんて解らない。

そんな俺の様子を優しい目で見てるキュリアナ王妃がなんとどうか、申し訳なく感じ

た。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌日はキュリアナ王妃自慢の庭を案内された。

「どうだい？　綺麗だろ？」

「ええ、でも安心しました」

「何がだい？」

「ボルドー王子みたいに、庭にお芋を植えているのでは？　と思っていたので」

「はははっあの子はもうっ！」

いや、真剣にあの庭は無いからね？

庶民の感覚ではたかが庭かも知れないけど、貴族の庭って凄く大事なんで。

芋が植わった庭で園遊会とかやれないでしょ？　ましてアレでも王子さまだよ？

せめてお屋敷が豪華だったらまだ室内でパーティーとかやれるけど、屋敷と言うより

要塞だし。

いつまで木村から会場をレンタルするのかと。

「まああの子はああ言う感じだから、許しておくれよ」

「ええ、まあ」

言うても戦争をするのに、相手が浪費家では無いのは良い事だろう。

何せ、これからの戦争は経済戦争の様相を見せるに違いないのだ、俺は戦争の移り変

わりを歴史で知っている。

銃が出来てしまつては、兵の練度より武器の数を揃える方がずっと大切なことから。

「あんな風に育ちまっただけど、婚約者が死んでから沈んじまってね、こんな嬉しそうなあの子を見るのは久しぶりなんだよ」

「そう、ですか……」

見た目は幸運の女神でも、中身は邪神な上に男で申し訳ないが、元気になってくれたのならまあ良いだろう。

「あの子の事、これからも支えてあげてね」

「そんな！むしろ私が助けられてばかりで……」

「それでも、よ」

「……………」

そんな風に女性同士？の会話をして一日を過ごした。

王子を含め、護衛や男衆は高木の手入れとか、橋の修理とか力仕事に駆り出されていた。

これは、姑が嫁の値踏みをするための一日だったのだろう。

俺は合格だったのか？そもそも、隠居して庭いじりをしている奥様の採点基準など解らないので気にしても仕方が無いのだが……

夕飯はデミグラスっぽいスープに黒パン。羊の肉が少々。デザートはクッキーだった。

今日も今日とて、肝っ玉女将ことキュリアナ王妃は俺へとにじり寄って、料理の感想を求めてくる。

「今日の料理も美味しいかい？」

「ええ、とつても」

俺はクッキーを頬張りながら答える。味なんて解らんが営業スマイルで押し通す。

カロリーが高そうな料理は多少無理してでも口の中に放り込み、お茶で飲み込むべし！

「嘘おつしやい！ あんた味なんて解つちやいないだろ？」

「ゴホッ！」

むせた！ お茶が気管につ！

「あんたの食べてるクッキー、あんたの分だけ、のってるのはナッツじゃなくてコイツだよ」

「これは？」

「山椒フィクスさ、最近王都でも流行ってるんだって？」

木村が扱っている香辛料だ。山椒さんしやうっぽい見た目と味だが、フィクスと言わらしい。

「最初は悪戯のつもりでパイに少しだけ入れたんだ、どんな反応をするだろうってね、でも平気で食べちゃう。それで翌日のタルトはもつと量を増やして、今日のクッキーなん

ざ丸ごとき、そんなものかじったらたちまち舌が痺れちまうのにな」
「……………」

そう言う、事か……

「あの子は、気付いているのかい？」

「いえ、こうなつたのは最近ですから。魔法の副作用で……」

嘘を付きました。

だつて、トチ狂つて、舌に針を刺したら味覚が無くなりました！　つて白状する娘とかヤバいだろ？

むしろアレだよ？　そんなキチツた子が欲しかったのよ！　とか言われたらドン引きだよ？

俺は、使いたく無かつたけれど、危険な魔法を使わざるを得なかつた悲劇の少女と言う体で乗り切る事にした。

「もう、あの子は鈍いんだから。でも、言わない方が良いのかしら？」
「ええ、その方が」

「あんまり抱え込まないで、あの子にも教えてあげてね」

「……………はい」

おばさまにも撫でられてしまった。

恥ずかしさを誤魔化すように、俺はクッキーを頬張る。

「あっ！」

そんな俺をみてキュリアナおばさまは声を上げるが、俺には何でも無い。

いや、言われてみれば喉の奥の清涼感？　みたいのがちよつと痛いと言うか、変な感じはする。

「ふふ、私にとつてはかえって美味しいかも知れません」

「もう、変わった子だね」

キュリアナ王妃に笑われてしまった。

その様子を見て、王子は蚊帳の外でブスつと拗ねていたのが印象的だった。

この日も泊まって計三泊。

翌日、もう朝から王都へと帰るだけだ、早朝からキュリアナ王妃は出迎えてくれた。

「その子を大切にするんだよ」

「解ってるさ」

そんな普通過ぎるやりとり、本当に宿屋の女将とドラ息子みたいだな、と最初と変わらぬ印象を強めた。

帰りの馬車はもう、本当に何も無かった。精々、俺が王子の膝の上で甘えたぐらいか？

つてかここ数日そればかりだな、俺。

数日ぶりに帰ってきた王都は、当然だが未だに喪に服していて静かな物だった。

まだ夕暮れ時なのに、全ての商店は店を閉じていて、人通りもまばらだ。

しかしヒツソリと静まり返る通りを見ると、俺はなんとも言い様の無い胸騒ぎを覚えた。

その正体がわからぬままに、馬車は王子の屋敷へと向かう。

王子の屋敷は城の中の一区画、大きな門を抜け、広大な芋畑の奥にある。

畑を抜けた馬車が屋敷の前に付けるなり、待ちきれぬとばかりに慌てた様子でガルダさんが馬車の扉を開け放った。

「王子！ 聞いて下さい。調べていたルージユの正体が判明致しました」

「お前は、情緒と言うのが解らん奴だな」

王子が俺の膝の上で答える。

そう、王都に近づいてからは、今度は逆に俺が膝枕をさせられていた。

納得行かない所も有るが、交代だと言われれば流石に断れなかったのだ。

「し、失礼しました！ ですが急ぎですので」

「ハア、そうか、では執務室で聞く。ユマ、君は屋敷に帰っている」

「あの……私も聞かないで良いのですか？」

「あまり見くびってくれるなよ？ 万一、助けが必要ななら相談するさ」

そう言われれば体力に劣っているのも確かなので、反論もしづらい。

「解りました。スミマセンがこのままオーズド邸に向かって下さい」

俺が御者にそう言うと、すぐに馬車は動き出し、広大な芋畑の庭を進んでいく。

——しかし

「ごめんなさい、やっぱりちよつと止まって下さい」

門の直前。俺は再度、御者に指示を出した。

馬車は急停止し、御者は何事かと振り返るが、理由など説明出来ない。

さっきの胸騒ぎ、そして何より、チリリと首筋に特有の痛み。

目を閉じて屋敷を振り返れば、遠くに光る王子の運命光。

——それが、消えようとしていた。

俺は慌てて馬車を飛び降りる。御者が呼び止める声を振り切って走り、芋の植わった庭を突っ切る。

すぐに辿り着いた屋敷の前、立っていたのは先ほど出会ったガルダさん。

そして血だらけで倒れているのがボルドー王子だ。

「な、なん………で？」

この声は俺のではない、俺も思いは同じだが。それを言葉に出来ないほどに、意味が解らなかつた。

「なんで？ 俺が？」

その言葉は、血だらけの小剣を握ったガルダさんから発せられていた。

「どっちにしろ死ななきや。そうだ、死ななくちゃ」

そう言つてガルダさんは、その剣を自らの喉元へと運び。

「止めッ！ 止めなさい！」

声を張り上げ制止する、しかし走つて息を切らせた俺に、それ以上何かをする力は残つていなかつた。

「あ、ぐっ」

そうして、ガルダさんはそのまま喉を突き。

——自害した。

「え？ 何？ なんなの？」

呆然と立ち尽くす。意味が解らなすぎて涙も出ない。現実が受け入れられず、でも目の前には王子の死体。

目を瞑っても、消えてしまった王子の運命光が俺に現実を突きつけていた。

復讐姫

市街地の穀物倉庫、真夜中の庫内は薄暗く、静寂に包まれていた。

しかし静寂とは裏腹に、満ちていたのは濃密な人の気配。

それだけではない。その場に居れば誰だつて張り詰めた緊張感と、むせかえる様な人いきれを感じ、息苦しさを覚えただろう。

秋の収穫を前にガランとしている筈の倉庫には、百人以上のプレートアーマーを着込んだ男達が整列していた。

「ボルドー王子の暗殺に失敗した」

彼らに対して一段高い所に立つ男が静かに告げる。彼だけは鎧ではなく、豪華な服を纏っていた。

でっぴりした体格の男であつたが、目には隈が濃く、焦燥した様子は正気には見えな
い。

この男はボンデール伯。熱烈なカディナル王子の支持者にして、強硬派として知られた男だ。

ダックラムを裏の刃とするならば、ボンデール伯は表の剣。

精強な騎士団を有し、魔獣討伐や国防に於いて華々しい実績を持つ名家である。

そんなボンデイル伯にとってみれば暗殺専門の戦力と言えるダックラムが公爵家として大手を振っている状況は許しがたかった。

暗殺や潜入など、下賤な人間に僅かな小遣いを握らせてやらせる行為。そんな認識のボンデイル伯ではあつたが、一方で平和な時代が騎士よりもそう言った人間を求めている事も理解していた。

そんな中、ボンデイル伯がダックラム公に対抗するために組織したのが、裏の世界であぶれた人間を買い叩いて組織した暗殺団。

結成して一年ほどではあつたが期待通りの成果は上がっていた。情報収集をメインにしつつも、邪魔な商人や下級貴族は何人も始末してきた。

やはり裏の仕事など難しい物では無い。そんな風に自信を深めたボンデイル伯。

だが満を持して大物であるユマ姫に投じた暗殺者は、ただの一人として帰ってこなかった。

それは良い、失敗したのだろう。だが失敗したのなら屋敷は大騒ぎになるはずだ。しかし、そんなものは初めから居なかつたとばかりに、なんの反応もない。

それこそボンデイル伯自身、暗殺者を放った事が夢かと思うほど。

それでも確実に手駒は減っている。まるで森に棲む者に幻影を見せられ、切り立った

崖に突撃命令を出してしまった愚かな將軍の逸話の様ですらあった。

空恐ろしい物を感じながらも、戦力を整え機会を待った。

が、その間にも政局はどんどんとポルドー王子に傾き、このままではカディナル王子が即位しても軍部のクーデターすらあり得る情勢。

そこに来て、国王の死だ。

いよいよ戦いが始まる、その段でポルドー王子は婚約者のユマ姫と連れだつて母方の実家、ヴィットリアに顔を出すという噂が流れてきた。

明らかに罠。しかし、それでもここでケリを付けねば後が無い。

なにせ、カディナル王子はシャルティアとの婚約を破棄。事実上ダックラム家を切つたのだ。

ライバルが居なくなり嬉しい反面。最早、自分がやるしか道が無い。

そうでなくても、今のところ大口を叩いておきながら何一つ成果が上げられていないのだから。

……そうして、暗殺団の全戦力を投じたのだが。

「ドブネズミ共は全滅という訳ですな？」

ボンデイル伯と対峙する鎧姿の男達、その先頭。とりわけ大柄な髭の男が鼻で笑つた。

彼らはボンデール伯の虎の子たる騎士団の面々。そして彼こそが騎士団長であった。

悠然とした態度を崩さない騎士団長に、ボンデール伯の苛立ちは募る。

「百人からの暗殺者が全滅だぞ？ それも近衛兵にはかすり傷一つ付けられずと来た！」

「お言葉ですが閣下、騎士という物を甘く見ないで頂きたいですな。あんなネズミ共を幾ら放とうが、獅子の餌にしかありません。さぞや連中の士気が上がった事でしょう」
団長の言葉に騎士達からは失笑が漏れる。

自分らも当然同じ事が出来ると言う自信の表れであつた。

確かに、ボンデール伯が擁する騎士達、そして王子を守る近衛兵の技量は、騎士と呼ばれる者の中でも最上位である。

しかし、暗殺大失敗の主要因は、練度以上にユマと王子が乗る馬車の性能が予想外だつたことが大きい。

街道での待ち伏せ部隊と、王都からの追撃部隊で挟み撃ちの予定が、馬車が速すぎるあまり挟み撃ちとして機能しなかつた。

後続をアテにした待ち伏せ部隊は良いところ無く蹴散らされ、やつとの思いで追いついた追撃部隊は間抜けを晒す羽目になる。

その汚名をそそぐ為、翌日には無茶な突撃を慣行、典型的な愚策と言える戦力の逐次投入が行われてしまった。

それが、ユマ姫とボルドー王子が直面した、あの無様な襲撃の顛末であったのだ。

そして百人からの人間が無為に死んでしまい、焦ったボンディール伯は今夜、最後の手段に打って出ようとしていた。

「そうだ！ やはり、騎士には騎士を当てるしか無い、ボルドー王子の屋敷に攻め入り、その首を上げるんだ！」

「ハッ！ この剣に誓って……、と申し上げたいのですが、それでは我々は逆賊として処刑されてしまうのでは？」

「安心しろ、ボルドー王子はユマ姫に幻術を掛けられ正気を失っているのだ。それを正すのはビルダール王国を思つての事。忠臣と言われこそすれ、逆賊などにはワシが決してさせぬ」

言われた騎士団長は「ふむ……」と考える。

真夜中に突然の呼び出し。碌な命令ではないと思つていたが、王子の屋敷に攻め入れとは想定した中でも最悪の部類だ。

しかし、このままこの主人に仕えていても騎士団に未来は無いだらう。かといってボンディール伯に仕えていた身では、ボルドー王子らの派閥に乗り換えた所で痛くない腹

を探られ、碌な地位に就けないに違いない。魔獣退治と称して地方に飛ばされるのが関の山。

だったら、本当にボルドー王子を討ち取るのはどうだ？

ボンディール伯が守ると言っても、討ち入りなど極めて外聞が悪いため、それこそカディナール王子から切られる可能性は高い。それこそボンディール伯もろとも消される可能性すらあるだろう。

だが、今のカディナール王子にはダックラム公が居ない。そう簡単に我々を切れるだろうか？ それこそ最悪、カディナール王子すら誅してしまう手もある。

それに、金目の物が無さそうなボルドー王子の屋敷だが、その分密かに軍資金を貯め込んでたつて不思議じゃ無い。

財宝をキープして、ヤバそうだったらとんずらする事も十分可能だ。

団長はそこまで考え、決断する。

「宜しい、閣下がそこまでの覚悟をお持ちでしたら我々は従うだけです」

「おおっ！ やつてくれるか！ お前達なら近衛兵すらモノの数では無いわ！ 蹴散らしてこい！」

「ハッ、この剣に誓って」

そう言つて剣を掲げる。

しかし……

——バシユツ！

男は剣を掲げた体勢のまま地面に転がる、まるでバランスを崩して倒れてしまった甲冑の置物の様ですらあつた。

なにせ、倒れたシヨツクで頭が外れてしまう。その様子までソツクリだった。

「なっ！ なんだ？」

ボンデイル伯は顔を拭う。この顔にかかった飛沫は何なのか？

薄暗いので色が解らないが、このヌメリのある液体は『血』じゃないのか？ その事実が遅ればせながら、ようやく頭に染みこんでいく。

「敵襲だッー！」

叫んだのは団員の誰か、ボンデイル伯は腰を抜かして動けない。

「退却だ！ 急げ！」

奇襲を受けた時のマニユアルは騎士団毎に色々あるが、何より大切なのは退路の確保である事に変わりは無いだろう。だが……

「開かない！ 閉じ込められた！」

唯一の出入り口である両開きの大扉が開かない。普段は穀物倉庫として利用しているこの建物は、泥棒やネズミを警戒して窓も高い位置にある上に格子が嵌まっている。

完全に袋のネズミ、しかし物は考え様と騎士達は声を上げる。

「射手を探せ！ 賊はこの建物の中にいる！」

そう、窓が無いなら襲撃者は建物の中。どんなつもりか知らないが、脱出不能は犯人も同じ。そう思ったのだが。

——バシユツ！

また一人、正体不明の攻撃に倒れる。威力から考えればボウガン？ いやこの常識外の火力はバリスタの其れに近い。

下手をすれば一矢で二人以上が被害に遭っている。鎧を着た人間を容易く貫通するボウガンなど騎士達は知らない。

しかし、建物の中にバリスタなど有るはずも無く、射角から考えられる位置には誰も居ない。その事に気が付いた時には既に十人以上が物言わぬ骸と化していた。

「これが！ 魔法の矢か！」

騎士の一人が叫ぶ、しかし打つ手は無かった。

何しろ、射手は建物の中どころか、隣の倉庫の屋根上に居たからだ。

「鳴撃ちだな」

屋根上に陣取った少女は、夏の夜の三日月を背に、淡々と矢を放っていた。

狙うは二階部分の窓、嵌まった格子の僅かな隙間から矢を通し、運命光を目印に矢を

制御、そこから一気に加速させ常識外れの威力で鎧ごと打ち抜く。

少女に自覚は無いが、運命光を抜きにしても、エルフの戦士の中に同様の事が出来る者は唯の一人として存在しないだろう。

卓越した魔法制御のなせる業。魔力以上に精神がすり減る制御を少女は淡々とこなしていた。

「死ね！ 死ね！ 死ね！」

それは狂的で、偏執的でもあった。そこにおとぎ話のお姫様を思わせる可憐な美しさを備えた、かつてのユマ姫の姿はどこにも無かった。

其れは不吉を具現化した様で、目は落ち窪み、隈も濃い。頬がこけて青白く、楽しいな笑顔すら恐ろしく、そして病的。

……しかし、それでもユマ姫は美しかった。

その病的な姿すら幻想的で、死神の使いを思わせる、危険な美をはらんでいた。

「ヒヒツ、ハハハッ！」

やがて倉庫の中に動く者は居なくなる。だがそれは騎士団が全滅したからではない。

ユマ姫は動く人間から真っ先に射貫いてきた。それ故に騎士達は我が身可愛さに、暗い中、物音一つ立てずに身を潜めれば、自分だけは助かると哀れな勘違いをした。

「馬鹿が！ 無駄、無駄ア！」

だが暗闇は少女にとって何も障害にもならない。フクロウすらも見通せぬ無明の中ですら、恐らく少女は寸分違わぬ矢を放つだろう。

運命光を頼りに放つ矢は、暗闇に紛れる事も、死を偽装する事も許さない。

結局、少女は動ける者が居なくなるまで、矢を放ち続けたのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ボルドー王子が死んでから四日が経った。

俺達は今日も今日とて、犯人捜しの作戦会議に朝から顔を突き合わせていた。

メンバーはシノニムさんにゼクトールさん、第三王女ヨルミちゃんにソルダム軍団長にフィダーソン老と言った所。

「昨夜、ボンディール伯の所有する倉庫で火事がありました」

開口一番、ゼクトールさんからの報告に、皆が「だから何だ？」と首を傾げる。犯人捜しを後に回す程の話題では無いと顔に書いてあった。

だがそれも、ゼクトールさんが話の続きを言うまでだった。

「焼け跡からはボンディール伯、それにグラム騎士団の死体が山のように発見された、と報告がありました」

今度はバツツと音が出る程、皆が一斉に俺を見る。あまりに熱い視線、俺じゃなきや

火傷しちゃうね。

照れ隠しに俺は舌を出して、可愛らしくはにかんで笑う。

「穀物倉庫だそうで、思ったより燃えちやいました♪」

「一体何をやってるんです!」

ゼクトールさんが怒声を上げる、他の面々も渋い顔だ。シノニムさんだけが私しらないって顔でお茶を啜っている。いやー流石だね。

「そうは言っても、彼らは放っておけばポルドー王子の屋敷に攻め入るつもりでしたから。先制攻撃を仕掛けたまです」

被告俺、無罪を主張。

なんせ市街地の倉庫に人知れず騎士団を集めた時点で、『謀反の疑いアリ』と断じられても文句を言えないのが普通。

その点、俺は、集音魔法で犯行に至らんとする言質まで取っているので清廉潔白。N
O 冤罪。

「我々に活躍の機会は頂け無いですかね? 近衛兵も鬱憤が溜まっているのですが?」

ゼクトールさんはいつそ相手の騎士団とガチバトルしたかったと主張、彼らもまた心
労やら、ストレスがハンパないのだろうよ。でもな!

「申し訳ないのですが、ストレスと言う意味では私の方が上でしよう?」

「しかし、危険でしょうが!」

「動かない敵を射るだけです、楽な物ですよ」

「魔法は健康のため控えると言ったでしょう!」

「大した消費ではありません、それよりも悲嘆に暮れ、ふさぎ込む方が体に良くありません」

「クソツ! ああ言えばこう言う!」

ゼクトールさんがブチ切れ、ガシガシと頭を搔く。よく見ると、怒る役から解放されたシノニムさんが、若干嬉しそうで腹立つ。

因みに、部屋に閉じ込めた方法だが、単に魔法で扉の前の床石を変形させて、つかえ棒の代わりにしただけ。

と言っても床石と一体成形の無敵のつかえ棒だ、絶対に開かないだろう。

力づくで木扉を割ろうにも、動けばたちまち俺の矢が飛んでくるのでは、奴らに出来た事など何も無かっただろう。

死体や穀物の影に隠れている奴が面倒だったので、最後には穀物に火を付けて蒸し焼きにしてやった。

悪だくみに適した場所と思ったのだろうか、アイツらはあそこで集まった段階で詰ん

でいた。

俺に言わせればあんなオイシイ所に閉じこもってくれたんだから、ハメ殺さなきや逆に失礼と言うモノ。

少なくとも前世のゲーマーだった感覚ではそう。

しかし、そんな感覚に慣れてない人間も居たようで。ヨルミちゃんが不安そうな声を上げる。

「本当に？　ほんとのほんとにユマ姫が人を殺したんです？」

……ま、俺みたいな見た目美少女が、今さつき百人ほどぶつ殺してきたわ。等と言っても信じられないのも無理は無い。

だが、既に王都は戦場に等しい。安全地帯などどこにも無いと知るべきだ。

俺は向かい合わせに座るヨルミちゃんに脅しを掛けることにする。

「殺しましたよ。安全な所から、一方的に、最後には火をつけて一網打尽です」

俺はローテーブルに膝をつき、四つん這いで向かいに座るヨルミ王女へ、じわりじわりとにじり寄る。

「ヒッー」

「止めなさい、姫様がやると、呪いの人形が動いている様にしか見えません」

シノニムさんは酷い事言う、なんてーか俺に突っ込む為だけの機械かよってレベル。

因みに、俺には計画性などまるで無かった、暗殺者を送り込んで来たボンディール伯の様子を見に行ったら反応が無く、どこだと探し回ったら丁度あの場面だったと言う、突発的な犯行。

その是非について問う人間が居るのも当然だろう。

「じゃが、カディナル派の主要人物の一人、ボンディール伯爵を殺してしまつてよかったのかのう？ 何か知つておつたかも知れんぞ？」

「いいえ、ファイダーソン老、それは違います。ボンディール伯はボルドー王子に討ち入りするために戦力を集めていたのです、彼は何も知らなかつた」

「ふむ、なるほどの」

爺の言う事も解るが、あの様子じゃ期待は出来ないだろう。

なんせ、ボンディール伯爵はボルドー王子暗殺が何者かの手によつて既に成つている事すら知らない。完全に蚊帳の外、戦力外として扱われていたに近い。

カディナル王子の行方を知つているとは思えなかつた。

「軍の人間も動かしてるが、誰一人行方を知らないみたいだ。まさかあの我がまま王子が従者も連れずに雲隠れなんてできるかねえ？」

ソルダム軍団長は徴兵された一般兵やゴロツキ紛いの傭兵を部下に持つだけに、下町の全てに顔が利く。

一方で、ヨルミちゃんは城を、ファイダーソン老やゼクトールさんは貴族街を調べている。

そう、実はカディナル王子、そして目下の所一番怪しいと思われるルージュとか言うカディナルの新しい婚約者も、揃って行方をくらませているのだ。

現在我々は全力で二人の足取りを追っている、しかし、何の手がかりも得られていない。

それこそボンデール伯から足取りが掴めると思っていたのだが、無駄骨だったとしか言い様が無い。

それこそストレス解消にしかならなかった。

こうなった以上、現状は敵方が根負けして顔を出すのを待つしか無いのだが、こっちは待つ何時までも待てる訳じゃ無い、其れを指摘するのはソルダム軍団長。

「しかし、ボルドー王子の死は、何日も隠し通せる物でも無えだろ？」

「いえ、案外長い間気が付かれないかも知れませんが」
待ったを掛けたのはヨルミちゃんだ。

「まず、一番大きいのは前回のボルドー王子の死の偽装です」

確かに、シャルティアに襲われた後、ボルドー王子の死を偽装した。結果カディナルの失態を引き出した訳で、今回も同じと思えば誰もが其れを指摘するのを控える筈

だ。

「次に、カディナール王子も顔を出していない以上、ボルドー王子だけが攻められる事は無いでしょう」

確かに、そもそもボルドー王子の不義理を攻める相手が居ない。

「そして、今回の虐殺です。たった一人で百人以上の騎士を惨殺……したんですよね？ そんな人の前にカディナール王子は姿を見せられないでしょう？ そうなるとボルドー王子の死を糾弾する人も居ない事になります、誰だつてこのタイミングで飛び出す勇氣は持てないでしょう？」

ヨルミちゃんの言うとおりかも知れないな。やり過ぎた所為で、カディナール王子は俺を押さえるまでは顔を出すのが恐ろしいんじゃないか？

実際は上手くハマっただけで、取り押さえてしまえば俺は健康値で魔法が使えない。

しかし、そんな弱点だつて知る者が居なければ意味は無い。

「結局、殺るか殺られるか、そう言う事ですな？」

俺の言葉に一同は押し黙る。

物騒だが事実、俺達がカディナール王子を発見してぶつ殺すのが早いのか、カディナール王子が俺をぶつ殺すのが早いのか、それだけの勝負だ。

「解りましたからユマ姫はお休み下さい、寝ていないのでしょうか？」

いきり立つ俺をなだめる様に、シノニムさんに諭されてしまう。

確かに昨夜は勿論、ここ数日ろくに寝ていない。

「言いたくは有りませんが、酷い顔になっていきますよ」

「そうだけ、姫様がそんな顔してちゃ皆がビビっちゃう」

「呪いの魔女の顔に見えるからの、要らぬ噂を流される前に休むのがよからう」

口々に皆が言う位、俺の顔は酷い状態らしい。

確かにちよつと不気味かな、とは思いますが、これはこれで可愛いんじゃないかと思うのだが……

「解りました、少し横になります」

とは言え、今の俺に出来る事は多くない。少し休むしか無いだろう。

「私かネルネがついていきましょうか？」

「いえ、不要です」

シノニムさんの好意はありがたいが、今の俺は誰かが居ると却って寝られない。ポルドー王子に直前まで膝枕をしていた事を思い出してしまふ。

「そうですか……」

クソツ、そんな可哀想な者を見る目で、俺を見るなよ！

シノニムさんだけじゃ無く、皆が悲痛な顔で俺を見ていた。

王子が死んだ事以上に、俺の憔悴した様子が皆の精神をすり減らしている。

「失礼しますー！」

俺は皆の視線から逃れる様に、部屋を後にした。

苛立ちに身を任せ、足早に自室に向かう。欠かさずにしてきた警護兵への挨拶も無しに部屋に入ると、ベッドの中へと飛び込んだ。

「はあ〜」

俺自身、驚く程にポルドー王子の死にショックを受けてしまった。

俺にとつての王子は愛する夫だったのか、それとも心を許せる友達だったのか、或いはその両方か。

今となつてはその答えは出ないが、自覚が無い中で大きな存在になつていたのは間違いない。

それで、結局殺してしまったのだ。

まだだ！ そろそろ慣れろと自分でも苛立つ。

俺が生きている限り、誰かを巻き込んで殺してしまう。それは解つていたはずだ。

王子が死ぬ事だつて想定内。考え無かつたとは言わせないぞ！ だからこれは計画通り、そりやアイツに即位して貰つて、きちんと結婚して王妃として国を動かせりやべストだったが、それは望み過ぎ。

今だって決して悪い状況じゃ無い、婚約者のボルドー王子を失った悲劇の姫と言う肩書きが増えたと思えば良い。

このビルダール王国を好きなように切り回せる良いチャンス、だつてのによお。

「この顔は、マズいよな」

ベッドの中、上体を起こして鏡台を覗く。そこに居たのは成る程、呪いの人形と言われても仕方が無い位に景気の悪い顔をした少女だ。

これはこれで可愛いと言うのは本心だが、前世の萌え文化を知っている俺だからであつて、この世界の人々にはどうあつても受け入れられないだろう。

……と、その時、木村は今の俺を見て、どう思うだろうか？ と考えてしまった。

何故かズキリと胸が痛んだ。気持ち悪いと言われてしまったらどうしようかと不安になつたのだ。

どうやら……本当に精神的に参っているらしい。

木村に嫌われて、遠ざけたかつたと言うのに。……それとも俺は、木村に慰めて欲しいのか？ それで木村まで殺そうつての俺は！

「はあ……クソオー」

ベッドの上。眠いのに寝付かず、悪い事ばかりが頭を巡る。

無心だ、無心でゆつくりと頭と体を休めるんだ！ こう言う時は呼吸法、波紋だ！

波紋に目覚めるんだ！

——スウーハァー

……うん、意味は無いよな。いつそ、少し体を動かすか？ 俺はムクリと起き上がり、ベッドに腰を掛ける。

スクワット？ いや負荷を掛けるより体を柔らかくして血行を良くしよう。柔軟運動とかだな、例えば——ラジオ体操とか。

「……………」

ダメだな、大人しくするしか無い。再びベッドに戻ろうとした時、控えめに扉がノックされた。

「あのシノニムです、ユマ姫様に来客が来ています」

「来客？」

今の俺は例え公爵家の来客であろうとも出るつもりは無い。どっちがより多くの貴族を味方に付けて——などという『平和』な勢力争いは終わったのだ。

今はもう、殺るか殺られるかしか残っていない。

だと言うのに、シノニムさんが伝えてくる来客。相手は誰だ？ 木村？ いやアイツにはしばらく会わないと伝えたハズ。

……誰だ？

「あの、エルフの使者、ガイラスさんなのですが」
俺は慌ててベッドから飛び起きた。

「お久しぶりですね」

「ユマ姫……なのですか？」

応接間にやって来て、第一声がそれか。

そりゃやつれたが、見間違う程かね？

「やはり、大森林に戻るべきでは？　ここは余りに魔力が薄い。ビルダール王国の協力を取り付ける事が出来れば、対帝国に心強い事は認めます。ですが、それもユマ様が死んでしまつては何にもならない」

「レジスタンスの旗印と言う、セーラさんは何と言っているのです？」

俺は返して貰つたティアラ？　健康値の魔道具を被りながら尋ねる。

今の俺は、寝ていたまま、肌着代わりの生地が薄いキャミソールみたいなドレスにシヨールを一枚羽織つただけの姿だ。

いかにも病気ですつて格好だが、事実、不眠で苦しんでるので許して貰いたい。

「セーラ様はユマ姫から預かつた魔道具と共に無事を伝えると、涙ぐんで居ましたよ。これでエンディアン王家が復興出来ると感無量でした」

「最早王家がどうと言う次元の話では無いでしょう？ エルフの存亡を考え無ければ行けない事態なのですよ？」

「だからこそ、王家の旗印が重要なのですよ」

「私はハーフなのに、ですか？」

「それでも、です、我々が纏まるのに姫様の名前が必要なのです」

「名前ぐらいなら幾らでも使つて下さい、それが打倒帝国へと繋がるのなら」

「ハッ！」

ガイラスが敬礼を返す。

しかし、エルフは大概、頑固だなあ。

その後も情報交換を幾つか、まずエルフつて名前は大森林の民に好評らしい。

ガイラスからは良い反応は貰っていたものの、母ゼナの情報を以前から探っていた彼にしてみれば、ユマ姫と同じエルフと親しまれるのと、恐ろしい森に棲む者と蔑まれるのの違いなのだから、エルフの印象が良いのは当然。

だからこそ、大森林に住むコテコテの純エルフの方々に、拒否感が無かつたのは朗報だ。

たかが名前、されど名前。エルフの意識改革を促したいものだ。

他にも、帝国はやはりエルフの都や村を完全に占領出来ている訳では無いらしい。

言葉を濁して居るが虐殺されているのだろう。だからエルフは逃げるか、決死の覚悟で抵抗する。

降伏すると言う選択肢が無いからだ。

なぜなら帝国は霧の下の局地戦でしか戦えない。霧が無制限で無い以上、本格的に占領したりは難しいだろう。

聞けば、奴らは王宮内に霧を張り、立て籠もっているらしい。

幾ばくかの人質を取り、情報や魔道具、魔石を収集し、帝都への運搬を行っているとか。

「反攻作戦が何度か行われましたが、作戦が進むにつれて霧が濃くなり、あえなく敗走を余儀なくされています」

「霧は自由に強弱を切り替えられるという事ですね？」

「その様です、しかし、最近霧を出し惜しんでいる様子が見られます、何か予定外の事態が起こったようです」

「それは、私が破壊した霧の発生装置の影響かも知れませんね」

「恐らくは、だとすれば姫様は既に国を救ったと言えます、どうかこれ以上のご無理はなさらないように」

「……そう、ですね」

ふむ。霧は無限じゃない、人間の健康値を吸い出した有限資産だと言う情報は、やはり有用だったようだ。

基本的に待ってれば奴らは時間切れで撤退せざるを得ないし、無駄撃ちさせればそれだけで戦果と言える。

エルフから健康値を吸い取る事も考えていたらしいが、人間が広場に堂々設置した怪しげなオブジェなど、即破壊するに決まっている。

既に三体以上の霧の発生装置を破壊し、それ以降は遮蔽物の無い場所には出てこないらしい。

合わせて、コチラの現状もかいつまんで伝える。

婚約者たるボルドー王子の死と、それこそがやつれた原因であると伝えると泣かれてしまったのが予想外。

「大変な状況にある姫様に申し訳ないご報告が、なんとしても言われた禁術なのですが、禁書が保管されていると言われる封印書庫、その場所へと辿り着いたのですが……」

「まさか？」

「ええ、残念ながら既に帝国に略奪され、幾つかの本は持ち出されていました」

「……………」

おかしいとは思っていた。ホモかと疑う程仲が良かったガルダさんの裏切り。そし

て自害。

ハツキリと誰かの洗脳を感じさせたが、催眠術や短期の暗示でああはならない。自傷行為は最も植え付けるのが難しいのだ。

……だが、禁術ならどうだ？

可能かも知れない。

人間の脳に作用する術は嘘発見器で確認済み、アレだつて催眠や暗示を掛けるのと併用すれば、その効率は全く違うだろう。

複数の禁術を組み合わせた時、どれぐらいの効果があるのか？ 正直な所全く想像が付かない。

「それが、王子の暗殺に利用された可能性はありませんか？」

「いや、まさか！ 仮にエルフの裏切り者が居たとして。ただでさえ高度な魔術制御が必要な禁術を、この魔力の少ないビルダール王都で行うのは現実的では無いのでは？」

「……確かにそうですね」

そもそも王都にはエルフが居ない、知ってる中ではネルネぐらい。

いや、……ネルネが？ あり得るだろうか？

実はネルネの魔力はハーフにしては異常な程高かった。確か250位。

ある種の突然変異なのではないかと思つたほど。しかし、ネルネは全く魔法が使えな

かった。

魔力値以外にも魔法を使うには条件が必要なのだろうか？ と考えて居たのだが、まさかネルネが敵側の間者だった？

流石にあり得ないだろう、だとしたら我々の目が節穴だったと言う事になる。

「シノニムさん、そう言えばネルネはどこに？ 姿が見えませんが？」

「それが……」

なんと！ ネルネは昨日から行方不明と言うでは無いか。

これは決まりか？ 信じたくないがそうなのか？

「これはマズイですね、ネルネが敵である可能性、すぐに伝えなければ大変な事になります」

「私が向かいます、姫様は安静にしていして下さい」

「私の不手際です、私が伝えないと。それに可能性の話です」

シノニムさんの申し出を断る。これは魔法の秘密を含むデリケートな話題だ。それに一刻を争う。

俺は上着を引っ掴みながらガイラスに急用を知らせると、足早に部屋を出た。

廊下を走りながら上着を着込み玄関に、そこで出くわした男に薄い違和感を感じた。

誰だ？ 参照権！

便利な参照権は男が木村の商会の従業員だと教えてくれる。

「木村の商会からですか？」

「え？ いや、そうですが……」

顔を覚えられていたのが意外だったのか男は狼狽える。

……いや、この狼狽え方はおかしくないか？

「なんの用件です？」

「いえ、姫様では無くシノニム様か警備主任、もしくはゼクトール様に伝えるようにと言われていま……」

「私に黙って何をしようと言うのです？ 見せなさい！」

嫌な予感に、使いの男が持っていた封書をひったくり、千切る。

出て来た手紙を開くと、内容は短く、簡潔だった。

『家の丁稚であるフィーゴ少年が攫われた、舐められたら終わりの商売なので若い衆を連れて取り返しに行く。』

指定された場所は王家の墳墓。余裕があれば救援求む。ただし陽動の可能性アリ、注意されたし。

くれぐれもユマ姫には内密に願う。

以上』

……そう来ますかね。

巨大墳墓1

地鳴りの様な音と振動。巻き上がる大量の砂埃。

まさに、ド迫力！ 何十もの騎馬が駆ける様は勇壮の一言。

木村商会を立ち上げ地球の知識で商売をしようにも、既得権益との衝突は避けられなキムラい。俺はガラが悪いお兄さん達のお世話になることにした。

平たく言うとかクザ。英語で言うとかYAKUZAZA。

……ダメだな、どーやっても格好良くはならんわ。高橋が好きだった異世界小説、内政だかなんだか知らんが現代知識で商売するわけだが、既得権益との衝突についても様々だった。

だが、ヤクザを組織して嫌がらせつてのは無いわな。そんな主人公、誰が応援すんだって話。

しかーし、俺は主人公なんてガラじゃない、何でもアリアリだ。

今回出張って貰ったのはそんなヤクザの中でも元騎士だったりする精鋭、その数、ざつと五十。ちっちゃい騎士団と言える規模。

特製の馬車にこいつらを護衛に据えて、高速で物資や人を運ぶ特急便の構想を練って

いたのだが、初陣が誘拐事件とは恐れ入ったね。

フィーゴ少年は昨日、在庫管理の途中で攫われた。護衛も居たのだが殺されていた。無茶な事業拡大で敵は多いが、こんな事は初めて。異世界つて奴を少々舐めてたかもな。

たかが誘拐犯に五十人からの騎士、普通に考えたら過剰戦力だが、いざ現場についてから向こうでも騎士が待ち受けていたっておかしくはない。

なんせ、今の俺は王位継承の争いに、ガッポリ巻き込まれている。

本格的な貴族達の権力争いからは、極力距離を置いていたこの俺がだ。

「らしくねーかな？　これが惚れた弱みって奴か！」

圧倒的な器用さで、三日と前からマスターした乗馬テクが唸る。王国でも指折りの駿馬を駆り、俺は騎馬隊の先頭を爆走する。

愛する女性むとの為に、戦いの世界へと身を投じる事も厭わない俺。人生で最高に格好良
いんじゃないか？

「オイ！　会長がお怒りだぞ！　攫われた男娼を絶対に取り戻せ！」

「オー！」

……後ろで吠えるYAKUZAの組長的なおっさんは無視で！

違うから！　惚れた弱みって言っても、相手はユマ姫だからね？　フィーゴ少年とは

知り合い以上、尻愛未満の關係だからっ！

フィーゴ少年とは初めはただの師弟關係だったのだ、それこそ数居る生徒の一人。だが抜群に優秀で秘書やら何やら任せる内に、後継者として育てることになった。

単純に実力で言えば商会にもつと気の利いた人間も居るが、裏切る心配が無い上に成長性が高い。そんな人物を重用したくなるのは当然だろう。

しかし、そんな鼻屑をすれば現状で実力が上の人間が反発するのが世の定め。だが俺の男娼と思われているため、表立って文句を言ってくる人間も居ない……と言う訳で、さして否定するでも無く何かと便利に使ってしまった。

今や抜き差しならない關係って奴だ、抜いたり刺したりしないだけに。

いや？ コレって結合したまんまって意味なのか？ この言葉作った奴は直結厨かよ！

現実逃避はよそう、犯人から指定されたのは王家の墓たる巨大墳墓。王都からほど近い場所であり、名前の通りに巨大な一方で、中は薄暗く狭い。

重要なのは、ココは王家の人間以外立ち入り禁止の場所でありながら、実質的には誰でも立ち入れる場所だと言うことだ。

巡回の兵は居るし、詰め所も有る。だが、古墳みたいな巨大な墓には圧倒的に不十分。金目の物が無いから誰も忍び込みはしないだけで、少人数ならバレーに誰でも入り込め

る。

誘拐犯の狙いは明らか。少人数が相手ならば、人質を盾に幾らでも交渉の余地が有ると、そう言うことだろう。

だが、そんな事は知ったこつちやねえ！

「詰め所だ！ 突破するぞ！」

俺の号令で皆が一斉にバンダナを口元に巻く。ご丁寧にスカル柄のテロリストスタイルだ。

「オラア！」

「なっ？ なんだ？」

強行突破！ 顔を隠して五十もの騎馬で押し通ると、詰め所でボヤつとしていた兵士は目を剥いて慌てる。

木っ端の兵士じゃこんな事態には対応できない。助けを求めに王都に向かうだろうが、そこに現れるYAKUZAの後続部隊に可哀想にも巻き込まれて、中々助けが呼べないだろう。

これで少人数でやって来ると思っている誘拐犯の裏をかければ良いのだが……

「真っ暗だな」

巨大な青銅の扉を数人掛かりで押し開けると、当然の様に墓の中は真っ暗だった。

「馬は無理だな、十人は馬番と退路の確保に残れ！ ランプを！」

俺の言葉に皆が馬を降り、荷物からランプを取り出す。魔導ランプは値は張るが取り回しが良い。熱も出ないのでベルトに引つ掛けて使っても熱くなく、手が塞がらない。「行くぞー！」

抜刀して臨戦態勢の男が四十、彼らに比べりや非力な俺も細身のサーベルを手に進む。騎馬ではイキつて先頭を走つてた俺も、流星にココからは陣形の中心で守られながらお姫様スタイルで進む事になる。

「明かりは？」

「つきません、壊されています」

墳墓の中、設置された照明は点灯しないように破壊されていた。

騎士達は舌打ちをして苛立ちを隠さないが、内心で俺は一安心。明かりが消されていると言うことは、相手はまっとうな勢力ではない。誘拐犯を成敗しに来たのにカディナル王子直属の近衛騎士が待ち構えていた。なんて最悪の展開だけは避けられたと見て良いだろう。

ひよつとしたら、全ては取り越し苦労。王位継承問題など何の関係も無く、俺の強引なやり口に恨みを持った、たった一人の誘拐犯を相手にするだけで済むかも知れない。

そんな俺の期待を裏切る様に、暗い通路をしばらく進むと煌々と明かりが漏れる部屋

が見つかつた。

「呼んでるな」

「初心うぶな招待ですなあ、気が利かない」

組長はそのぼやきに反して、今にも駆けつけてカタをつけたいと気が逸つて見えた、しかし俺には準備がある。

「我々が主賓だ、少々待たせても構わんだらう？」

「はあ、何用で？」

「まあ見てろ」

俺は荷物を広げて準備を少々。コイツには俺でも結構な時間が掛かる。

「よし、行こうか」

「よし、突撃！」

明るい部屋へ足を踏み入れると、そこは狭い墳墓の中にあつて、大きく開けた空間であつた。

体育館ぐらいの広さがあるか？ 目に付くのは中央にそびえ立つ巨大な女神像。ここは祈禱場と言つたところだらうか？

美しい女神像がライトアップされているが、その造形美に感嘆している場合では無さそう。女神像の胸元、ネックレスの様に縛り付けられている人物が一人。

フイーゴ少年だった。

「趣味が悪いな、いや、良いのか？」

「会長、あれが男の子なんですか？」

若い騎士の一人がそう言うのも無理は無い、少年は女装して化粧まで施されていた。意識は無いのか反応が無い。死んでいなければ良いのだが、まるで生贄の様である。

……祈禱場を満たす異様な雰囲気、にわかに騎士達がザワつき出した。

「綺麗だな、俺の彼女より綺麗かも……」

「ばっか、あのブスと比べモンになるかよ、身の程を知れつての」

「んだと、オイ、アイツだつて黙ってりや可愛いんだよ！」

「あのおしゃべりが何時黙るつて言うんだよ！」

「寝言ぐらいいは控えめだつての！」

「オイ！ 嘘だろ？ 寝言まで言うのかよ！」

「いい加減に黙れ！」

俺らしくないが、声を荒らげて黙らせる。

誰がどう考えてもアレは罠、助けに向かった所を射貫かれると見て間違いない。となればマズは潜んだ犯人を捜し出さねばならない。僅かな物音を聞き分けたい状況で私語は困る。

……俺だつて緊張を和らげる為の軽口だとは解る、それが騎士のやり方なんだろうが今は困るのだ。

「散開して賊を探せ！ 盾持ちは俺と来い、少年を解放する」

俺の号令で騎士達が一齐に散っていく。その瞬間、だ。

「おーっと、余り勝手に動き回って貰っては困りますね」

そう言つて女神像の肩口から姿を現したのは一人の青年だった。

その顔を見て、少なくとも騎士では無いと直感する。真つ当な日の当たる場所を歩いてきた人間では無いと確信出来た。

狙いは何だ？ 俺の命？ いや、俺の商会はユマ姫が看板になりつつある。今や俺を殺す意義は薄い。少なくとも身柄を確保しなければ意味が無いだろう。つまり俺が殺される可能性は低い、OK強気に行こう。

「動くなど言われて、大人しくするとでも？」

「この部屋に踏み込んだ時点であなた方の命は、もう我々の手の内にある、試してみますか？」

どこから来る自信だ？ 水攻め、火攻め？ あり得ない、ハツタリだ！

「是非、頼む」

俺の返答と同時、部屋の明かりが一齐に消えた。残されたのは我々のベルトにつけた

魔導ランプの微かな光と……

……闇に浮かび上がる、無数の螢火！ クソツ！

「伏せろお！」

俺が叫ぶや、パーンと乾いた音が複数。それと同時に何人も騎士が倒れていた。

最悪を越えた最悪！ 火縄銃だ！ つまり？ ……奴らは帝国と通じている！

「ま、魔法の矢！」

騎士達が狼狽える。不可視の攻撃が鉄の鎧を貫通するのだ、そう考えるのも無理はない。

だが、奴らが使ってるのはただの火縄銃だ、螢火に見えた火種がその証拠。戦国時代に戦争を一変させた兵器ではあるが、全てに於いて弓に勝っていた訳じゃ無い。

「アレは銃だ！ 連射は利かん！ 一気に詰めて殺せ！」

「しかしっ！」

俺は大喝するも、騎士達の足取りは重い。俺にとっては時代遅れの産物でも、彼らにとっては未知の兵器なのだ。

悪い事に、再び乾いた音が響き、騎士が倒れる。言うまでも無くあらかじめ弾をこめてあった別の銃なのだが、騎士達は俺を疑いの目で見える。

その事に苛立ったのは正直な所だが、スペインが南米で行った虐殺を例見るまでも無

く、知らない武器を見れば人はその性能を過大評価してしまう。

実際に彼らが手にしているのが火縄銃では無くAK-47だったら？　それが例え第三世界で作られた粗悪なデッドコピーであつても、ここに居る全員を瞬く間に虐殺せしめるぐらいの性能はあるだろう。

その時は、真っ直ぐ突っ込めと命令する俺こそが間抜け。誰が騎士を責められると言うのだ。

と、同時に歴史を見れば、このままではこのビルダール王国は骨まで帝国にしゃぶられるに違いない。二人の王子の内紛とそれに付け込む未知の兵器を持った帝国の図式は、まさにインカ帝国の崩壊を思わせる。どれだけの血が流れるか知れない。

「俺を信じろ、と言うか、逃げてでも背中から撃たれるぞ！　カデイナーは帝国と通じている、この秘密を握った俺達を、奴らが生かして帰す道理は無い！」

俺の言葉を聞いて、騎士達の顔にやつと決死の覚悟が浮かぶ。この世界でも騎士は負けたら捕虜になってお金で解放されるのが当たり前。だからこそ劣勢の場合、決死の抵抗など行わないのだ。

俺の一言はそんな彼らに火をつけるに十分だった、訓練された騎士達は部屋中に散開し、油断なく銃撃犯を探していく。

俺はその様子を見て、相手が暗い中でも正確な射撃を行う理由を悟った。

「ランプを捨てろ！ 的になるぞ！」

皆がランプを外し、投げ捨てる。魔導ランプは投げられた先でも健気に光を発し続けるが広い部屋を照らしきる事は出来ず、周囲は一気に暗くなる。

だが、こうなれば相手の位置が解るのはこちらの方だ。

「盾兵！ ランプでは無い微かな光点に敵が居る、盾を構えて突っ込め！ 俺の護衛は団長だけで良い」

少々怖い仕方が無い、余裕が無いしこれ以上の人的被害も出したくない。この決定に驚きの声を上げたのが組長だった。……いや、今更だけど勝手に心の中で組長呼びしてるだけで、普通に鎧を着込んだ騎士団長。今更だけど。

「私を評価していただけるのは嬉しいですが、正気ですか？」

「無論」

「勝算が？」

「あいつらの本命は俺を人質に取ることに、そしてあの銃にそこまでの精度は無い、誤射が怖くて俺へは撃てんでしょ？」

「ほう、随分とお詳しいですな」

「ユマ姫から銃の話はみっちり聞いていますから」

嘘だけだな！ 折角ユマ姫と話せる機会に銃の話なんて誰がするんだってーの。だ

が、商人たるもの新兵器の情報を聞き込むのはむしろ当然、違和感は無いだらう。

「ははっ！ 流石会長だ、こりや驚きました——なっと！」

高笑いを上げる騎士団長に俺が内心うるせーな！ と辟易した瞬間。騎士団長はギョルリと音がしそうな勢いで翻り回頭す、引き絞られた膂力に遠心力が乗り、振るう剣からはゴウつと風斬り音が鳴った。

続いてギンツと金属が弾ける音、弾かれたのはボウガンのボルトだ！

「残念ながら、会長を狙う方策はあるようです」

「らしいな」

火縄銃は紐につけられた火種が丸見え、暗い中では良い的だ。相手が明かりを消すのが間尺に合わなかったが、コチラのランプを的にするためと、内通の証拠たる銃の姿を見せないため……と素直に考えてしまっていた。

火縄銃オンリーに見せ掛け、本命のボウガンから目を逸らす策でもあったとは恐れ入る。

だがボウガンも装填に時間が掛かる武器だと言うのは変わりが無い、これで時間が稼げた……と思ったのもつかの間、襲撃者は一息に斬りかかってきた。

——ギイン！

ココでも団長が寸での所で、その一撃を受け止める。むしろ、受け止めてから攻撃を

知覚した。

「ぐぬっ、コイツやる！」

薄暗い部屋の中、団長と交わす剣戟の火花で黒衣に身を固めた人物が浮かび上がる。足取りは軽やかで心配が無い。騎士団長の苦悶の叫びが無くとも、異常なレベルの達人であることは武術の心得の無い俺でも解る。

突く、払う、斬る。騎士団長の攻撃が次々いなされ、躲される。力ではなく技で騎士団長を圧倒して見せている。

高速バトルに素人の俺が出る幕は無い……が、引っ込んで居られる程、相手は甘く無いらしい。

「武器を捨てろお！ コイツを殺すぞ！」

響いた叫び声は先ほどの青年から、女神像を見上げれば青年の手には螢火が灯り、その銃口は吊されたファイゴ少年へと向けられていた。

なるほどね。確かにその距離なら外さない。しかし、ココへ来て人質を使うか……、想定外ですって言ってる様な物だぜ？ 銃の威力を目の当たりにすれば俺が戦意を失うとも思っていたか？ そしてまさか、その程度の高所に陣取っただけで、自分が安全だと勘違いしてるんじゃないだろうな？

「その武器は帝国からだな？」

「ハッ！ 随分と余裕だな！ ココからお前を打ち抜く事もワケ無いんだぜ？」

女神像の上で、不気味な男が笑った。

そして……俺も笑った。

「そうか、奇遇だな」

「なに？」

「俺も、だ！」

パーンと乾いた音。だが硝煙が上がったのは俺の手元。俺が懐から取り出したのは部屋に入る前、弾を込め、準備を終えた銃だった。

放たれた銃弾は青年の肩口に命中、「ぐあっ」と汚い悲鳴を上げ女神像からずり落ちた。試し打ちは殆ど出来なかったが期待以上の成果に笑みが漏れる。

「お前らと違って、俺の手作りだからな、精度が違いよ」

アイツらが持っている火縄銃とはまるで違う。

まずはサイズ、大型拳銃程度の小型化に成功している。

だが、喜んでいられたのも、後ろから澄んだ女性の声が聞こえるまでだった。

「いい物を持つてるのね、羨ましいわ」

「プレゼントには向かないけどな」

「そんな事無いわ、私、メロメロよ」

まさか、と思った。しかしこの声はハッキリ聞いたことがある。振り返ればアレほど強かった団長が、既に物言わぬ骸と化していた。

残りの騎士は突っ込ませたまま、俺を守る人間はもう居ない。この身を守るのはこの銃だけだ。

俺はゆつくりと銃口を、その女性に向ける。

「婚約は破棄され、もうカダイナルとは切れたと思つていたけどな、シャルティア様！」

「それより、そんな物をレディに向けるのは無粋じゃ無い？」

辺りを闇が覆い、黒衣に身を包んだ体はシルエツトしか見えない。それでも何時かのパーティーで聞いた特徴的な艶のある声。間違ひなくシャルティア嬢だ。

ユマ様の言葉とは言え、コレばかりは根っから信じ切れて居なかつた。貴族のお嬢様が殺し屋と言う空前絶後のファンタジー。

「自信満々に構えてるけど、さつき言つてたわよね？ 銃は連射出来ないって」「俺のは特別製でね、試してみるか？」

俺の言葉に黒ずくめのシルエツトは少し逡巡しゅんじゆんを見せた。……が、結局は好奇心が抑えられないと言つた風情で、先ほどのお返しとばかりにニヤリと笑つた。

「是非、頼むわ」

じゃあ遠慮無く、と俺はトリガーを引く。乾いた音と同時に、キンツと高い金属音。舞い上がった火花は瞬間、シャルティア嬢の顔を映す。

しかしそれもすぐに闇と硝煙に紛れて消えた。

嘘だろ？ 弾きやがった!! この距離だぞ？ バケモノか!?

俺の焦りをあざ笑うかの様に、闇の中から楽しげな声が響く。

「本当に連射出来るのね？ 何発？ どうやって発火してるの？」

六発だ！ コレはパークッション式リボルバー。発火方式こそ雷管を使うが、前装式なのは火縄銃と一緒。打ち切ってしまうえば装填には火薬を込めてギユツギユツと押し込む必要がある。事実上リロードは不可能と思つて良い。

雷管は着火の魔道具の代わりにと前から開発していたが、葉莖を作成するのはどうにも間に合わなかった。

この世界、そもそも火薬が無かった。し尿から地道に火薬を生成するのは非常に手間だ。かといつて科学的に化石燃料から窒素を固定するには知識がまるで足りていない。

蒸気機関や電気など、他に発明したい物は山ほどあると、武器を後回しにしてきたツケが回ってきていた。

「どうだかな？ 幾らでも撃てるかもしれないぞ？」

「ふふっ益々あなたが欲しくなつたわ」

声のする方、俺はトリガーを引く、しかし当たらない。薄暗い中動き回られては当てるのは難しい。騎士達の手前、俺もランプを外してしまつたが失敗だつた。

俺は置き去りにしたランプへ飛びつき、暗闇へ翳す。

「?」

しかし闇は晴れない。それどころか、そこにはより深い闇がたゆたつていた。

——煙幕ッ!

混乱したのは一瞬、暗闇の中で煙幕を使う非常識に我を忘れた。逃がしたくないハズのターゲツトたる俺に、煙幕を使ってみせる意味が解らないからだ。

そんな物を撒いてしまえば、フクロウだつて闇の中を見通せない、逃げて下さいと言つている様なモノ。

人質がいるから俺が退かないとでも思つているのか? そこまで甘く無いぞ? ここまでイレギュラーが重なり、帝国との内通の確証まで得られた。ひとまず逃げる事に是非は無い。

視界ゼロの空間を、サーベルを白杖代わりにしてゆつくりと進む。

「アリア? どこへ行くの? 遊びましよう?」

声が聞こえたのは耳元。視界ゼロの世界で相手は正確に俺の腕を取り、地面へと引き倒された。

「ぐあつー！」

腕を捻られ、俺は銃もサーベルも取り落とす。何故だ？ 何故この暗闇で正確に動ける？

「ふふ視えるのよ、生憎ね」

クソッ！ 敵の過小評価が過ぎたか？ シャルティアが途轍もない使い手と言われ
ても、信用仕切れなかつた俺のミスだ。

思うのはシャルティアの危険性を訴え続けたユマ姫の事。あの姫には、いやこのシャ
ルティア嬢にも、俺には視えていないナニかが視えている。

初めは赤外線感知サーモグラフィや暗視装置ナイトビジョンにあたる魔道具を疑ったが、ゴーグルなどは付けていな
い。

フアンタジーへの敗北、俺はこの世界を舐め過ぎていた。

「面倒だから、肩を外させて貰うわ」

「グッ、ガアッ！」

激痛、そして両腕の感覚が失われる。女性らしからぬ力、それにしたつてその技術も
俺の常識の外、簡単な動きで俺の関節を外してみせた。

コレで俺の生命線の『器用さ』が失われた。チエックメイトなのか？

「ウィルター生きてる？ コイツを運ぶわよ」

「ぎよ、御意」

シャルティアに呼ばれて、ふらつきながら女神像の後ろから出て来たのは先ほどの青年だった。

畜生！ あの高さから落ちて生きていたか……肩の傷は右手を奪った程度。

幸いだったのは青年にはこの暗闇の中、何も見えて居ないと言うこと。よろよろとした足取りで、声の進む方へと歩いてきた。暗殺団に伝わる特殊技能では無さそうだが、恐らくはシャルティアの唯一技能^{ユニークスキル}。

俺はウィルターと呼ばれた青年に刃を突きつけられ、ヨタヨタと歩かされる。

「キリキリ歩け！ 墳墓を抜ける」

「無駄だ！ 出口には十人以上の騎士を残している」

「フン、出口はひとつじゃ無い。ここは無数の地下通路と通じている」

噂は有った。曰くこの墳墓は王城から地下道で繋がっている。曰く地下には初代王の残した財宝が埋まっている。

なんにしろ王族にしか知らされていない道だが、カディナル王子は当然知っているだろう。

もうダメか？ 何か、何か手は残っていないのか？ 俺はファンタジーに屈してしま
うのか？

焦る俺に、しかし現れた救いの手もまた、この上なくファンタジーな一撃だった。

「来たわ！ ウィルター！ 避けなさいッ！」

「えっ？」

俺の背に刃を突きつける青年は、突然のシャルティアの絶叫に『意味が解らない』そんな間の抜けた声を上げた。

……それが最後の言葉となった。

——バチユン

肩を掠めた衝撃の後、後ろから粘度の高い泥が弾ける音がした。振り向けば煙幕の中でも解る至近距離。青年には『頭』が無かった。

力を無くした体が、グラリと俺の背にもたれ掛かり、粘度の高い液体をまき散らしながら倒れると、グチャリと湿った音を立てる。

「ウィルター！ ……そう、やっぱりあなたも視^みえるのね」

シャルティアの眩きが聞こえた。その声で、俺は彼女が見通せぬ煙幕の向こうへと眩いたのだと察する事が出来た。

つまりこの一撃の主も、この煙幕の向こう、不可視の闇を切り裂いて寸分違わぬ遠距離攻撃を仕掛けた。

こんな攻撃が出来る人間が他に居るハズもない。ユマ姫だ！

彼女がココに来た！
来てしまった……

巨大墳墓2

「間に合ったか」

木村達が居る部屋の外、通路から放った矢は扉を抜け、木村の運命光の後ろで輝く光点を射貫いた。

射貫かれた運命光がひとつ消える。

アレが至近距離から木村を守る護衛なら俺はとんだ間抜けだが、恐らくは違う。シャルティアが近くに居たのがその証拠。

恐らくは捕まっていたか、もしくは殺される瞬間だった、それを寸での所で助けられた。

連日の無茶に目が霞む、魔法を使って走ってきたから足への負担も相当な物。魔力欠乏なのか頭だつてボーツとする。

それでも木村を守れたと、つかの間の達成感に浸る……その余韻さえも許されそうに無い。

「解放はなちなさい！」

聞こえたのはシャルティアの大声。どう言う意味だ？ 何故自分から位置を知らせ

る様な真似を？ その狙いは不気味で計り知れない。

出来ればアイツは初撃で仕留めたかった。しかし木村を救うのを優先した、そこに後悔は無い。

どうせこの狭い空間、なにをしようと思えば逃げ場など与えない！ 俺は悲鳴を上げる体に鞭打ち、二撃目の弓を引き絞る。

と、そこへ遠くからキーキーと鳴く無数の声と、ザーザーと鳴る波音の様なうねりが聞こえた。

なんだ？ と思つて目を瞑れば、木村達が居る部屋の奥から、目を焼かんばかりの光が溢れ出していた。

……なんだ？ 何が起こっている？

よく見れば、ひとつひとつは微細な運命光。だが桁違いの数が光の奔流とも言える光景を生み出していた。

——キーキー

通路まで溢れ出した光の奔流は、俺の答えを待たず足元に迫った。

ネズミだ！ 地面を埋め尽くす程のネズミの群れ！ 俺が大量に放った照明魔法があつという間にネズミの波に飲まれ消えていく。

シャルティアの狙いはコレだ！ 完全に俺の魔法封じ！ たとえ微細な健康値でも、

繊細な魔法の制御は阻害される。

そこら中にネズミが這い回る状況では減衰だつて激しくなる。

「チツ、やつてくれる!」

悪態と舌打ちが漏れる、だがそんな場合では無かつた、俺の体を無数のネズミが這い回る。

「痛ッ」

噛まれた! 微細なダメージでも重なればマズいか? ……いや、どんな病原菌を持っているか知れないんだぞ? まして俺の『偶然』は的確に俺を殺す病を用意するハズだ。

ペストでも流行つて人類全てを巻き添えに死ぬるなら本望だが、だったら死にゆく人類を見届けないと満足なんか出来っこない!

「のけ! 邪魔ッ」

振り払うが、後から後から湧いてきやがる!

苛立つ俺だが、すぐにそんな余裕も無くなる。部屋から俺が陣取る通路へと飛び出して来たのは、紅く不気味な運命光。そこから甘つたるい声が掛けられた。

「お久しぶりね、と言つても婚約発表の時代以来かしら? どう? 私のプレゼントは?

可愛いでしょう?」

「シャルティアアアアアア！」

目に浮かぶのはポルドー王子の死に様。消えてしまった運命光と、広がる出血が止めようも無く、レンガの隙間に染みこんでいく悪夢の光景。

——俺も、お前に、会いたかったぞ！ 全員、残らず、殺してやる!!

俺の中の『高橋敬一』が暴走する。人格の使い分けが可能になってから、俺は人体のより深い部分にアクセス出来る様になった。

体を守るリミッターを意識的に外し、成人男性さながらの膂力で弓を引く。

限界を超えた力に悲鳴を上げる体を無視し、ブチブチと変な音を出す肩の痛みを遮断する。

まさか、ネズミを放ち、魔法を封じれば、俺が無力だとも思ったか！

「死ねっ！」

「!? グツ、カハツ」

胸元を狙った矢は、しかしシャルティアの剣に弾かれ、それでも腹に突き刺さった。

軽く打ち落とそうとして失敗したと見え、少女の力と甘く見ていたのは明らか。不用意に近づいた所を至近からお見舞いした一矢は、十分に致命傷に見えた。

……だが。

「フフツ、面白いわあ、それも魔法なの？ あなたの体格ではあり得ない力だけど」

平然と、いや血走った目でシャルティアは走り込んでくる。

ダメージはある、よく見れば矢は腹に刺さったまま。ノーダメージなどあり得ない。だが痛みを遮断する術でもあるのか、しつかりとした足取りで迫ってくる。

逃げるか？ どうやって？ 出口までは距離がある、だったら？

「ぐッー」

イチカバチか、俺はシャルティアに向かって前転する。さっきの一矢で外れてしまった肩の関節を嵌めるため、体を地面に叩きつける様にして。

激痛に声が漏れるが、何とか肩は嵌まってくれた。こんな動きばかりが上手くなってる気がして嫌になる。リミッターを外すと言えば聞こえは良いが、体に無理をさせてるだけ、脆い体はすぐ関節が外れてしまうのだから仕方が無い。マズいことに段々と癖になつて外れやすくなっている。

ウジャウジャとネズミにたかられながら、転がる様にシャルティアの横を抜ける。

……？

一見して間抜けな動きだ、てつきりネズミごと斬られる物と思っていた。腕の一本で済めば良いとすら。

しかし、俺は無傷でシャルティアの横を転がり抜けた。慌てて立ち上がりトタトタと無様な足取りで木村の居る部屋へと駆け込む。

……なんだ？ なぜ？ シャルティアは俺の姿を見失っていた？ そんなヌルい相手じゃ無かったはずだ。

「なっ!？」

だが、そんな考え事も部屋の中を覗き込むまでだった。俺はてつきり部屋の中はランプの明かりで照らされている物と思っていた。

だが、実際はどうだ？ ネズミから逃れた僅かな俺の照明魔法。その光すら届かない完全な暗闇。これは？ まさか煙幕？

深く考える暇はない。身を隠すにはうってつけと、闇の中へと飛び込む。

部屋の中、木村の運命光が全く動かないのは、怪我でもしているのかと心配していた。それが暗闇に身動きが取れなかっただけと思えば、コレは悪いニュースじゃない。

それどころか、この中ではシャルティアと言えども俺の位置が解らないんじゃないか？

誰が撒いた煙幕か知らないが、運命光が見える俺には断然有利に……

いや違う！ コレはシャルティアが撒いたんだ。そうだ、奴は魔力が『視える』言わば歩く非常識！

だからこそ、さつきは視えなかつたんだ！ 魔力視に頼っていたからネズミの健康値に消され、俺の魔力を見失った。

そうだ！ 魔力を封じるためにシャルティアが放ったネズミを逆手にとつてや……？

その瞬間、ギャリつと金属音がして足が滑った。

ズツコケてネズミにたかられながらも、転倒の原因となったモノを掴む。

それは一本のサーベルだった。

——コレなら！

昨日からの無茶が祟つて、俺は限界を超えていた。先ほどの一矢がトドメ。指の皮はズルりと剥け、血だらけ。さつき嵌めた肩も無茶をすれば、またすぐに外れてしまうだろう。更に手は痺れ、震えが止まらない。

それでも、それでもサーベルを構え、体ごと突つ込む位は出来る！ 思い出せ！ 帝国が攻めてきた日、剣を振るって何人もの兵士を殺した事を！

シャルティアの真つ赤な運命光はスグ傍まで迫っていた。

転んだのを幸いと、俺はネズミに紛れて息を潜める。

——キーキー

好きなだけ噛んでろ！ 喜べ！ 俺の体をそんな風に噛んだのはお前らが初めてだ

ぞ！

そう考えた時、なぜかボルドー王子を思い出し、悔しさに涙が滲む。

俺はもつとボルドー王子に触れて欲しかったのだろうか？ それこそ舐めたり噛んだりされたかつたのか？ いや、考えるのはよそう。

俺は伏せたまま、目を閉じて機を窺う。ネズミに塗れようとシャルティアの特徴的な運命光は見間違う事は無い。

今の俺は魔力がスツカラカン、だがそれで良い。相手が用意した魔法対策を逆手に取ってシャルティアを殺す！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

部屋に入ったユマ姫がネズミと共に地に伏せて待ち伏せる。

対して腹に矢を受けながらも、それを感じさせぬ軽い足取りで部屋に戻ったシャルティアは、確かにユマ姫の姿を見失っていた。

それでもシャルティアに焦りは無い、それどころか上機嫌ですらあった。

ネズミは魔法を封じる策としてこの日の為に用意したモノ、ユマ姫をこの場所へどうおびき出すかが難題だったが、木村を利用する策が思いの外上手くいったのだ。

一方で絶望的な気持ちで息を潜めるしか無かったのが木村だ。

守りたかつたユマ姫を却って危険に晒してしまった。そして自分は関節を外され、腕は使い物にならない。更に言えばユマ姫が現れたと言うことは自分の人質としての価

値は激減。リアルに迫った命の危機に震えていた。

——なぜ、ユマ姫は来てしまったんだ！

何もかも上手くいかない現状に、そんな苛立ちすら抱いてしまう。

だが、あのまま人質とされていれば余計に危機的状況に陥っていた事が解らない程、木村は愚かな男では無い。

本当に苛立っていたのは肝心な時に全く役に立たない自分だ。冷静な頭でそれが解るだけ上出来と、歯を食いしばり沈んでいきそうな心を踏み止める。

木村は生来の器用さで何事も上手くこなせた。それ故に、何かひとつでも上手くいかない事が有ると原因を他に求め、全てを諦めてしまう事が多かった。

——だが、諦められない。あの女性ひとに変わりは居ない。居るハズが無い！

木村が物事をすぐ諦めてしまう原因は、もう一度同じ様にやったらもつと上手く出来るという自信があるから、……と言うのは半分だけ正解だ。

もう半分は、大局を見れば大体の事はどうでも良いと、俯瞰的に物事を見てしまうからだった。

木村は何でも器用にこなせるが、何でも一番と言う訳じゃ無い。むしろ器用貧乏で一番にはなれない事が多い。

それでも悔しくなかった、一番を目指すでも無く、ナンバー2である事に満足してい

た。

それは今でも変わらない。どちらかと言えば脇役である自分が好きだったから。

だからこそ、憧れのユマ姫がボルドー王子と結婚すると聞いてもシヨックは少なかった。あんな如何にもなメインヒロインと結婚出来る器では無いと諦めていたからだ。

そんな風に、自分の人生すらも俯瞰して見てしまうだけに、何事も冷静に損切り出来てしまう。

だが、あの姫の命だけは損切りなんて出来っこない。彼女は物語の主人公だ。直感的にそう思った。

彼女の足を引っ張っては『悪い脇役』になってしまふ。脇役でも良いと思つてはいるが、目指したのはミスティアスで主人公を導き助けるオイシイ役回りだ。

だからこそ、木村は親友だった田中の死に様に嫉妬した。

——俺が死んだら、ユマちゃんはあんな風に泣いてくれるだろうか？

泣いて欲しいと思う自分はサディストなのか、彼女の為に苦しみたいと思う自分はマゾヒストなのか？

そんな馬鹿な事を考える自分を笑いながら、動かぬ腕をぶら下げたまま木村は見通せぬ暗闇の中、取り落とした銃を探し始めた。

恐怖からくる震えは、いつの間にか止まっていた。

シャルティアはユマ姫を見失っても木村を人質にすれば引きずり出せると思っていた。

だから、木村が暗闇の中動き出したのは誤算だった。人間は暗闇の中では体が動かなくなる。それは、本能の根源的な呼びかけ故に、特殊な訓練をした訳でも無い木村が動けるとは思っていなかった。

追いつがろうと暗闇の中、足を運ぶ。シャルティアは暗闇でも自然に動けるし、音をたてずに行動出来る。

だが、幾らシャルティアとは言えネズミが這い回る地面を歩く訓練はしていない。ネズミだって踏まれれば五月蠅く鳴くし。蹴飛ばして歩くのも同様だ。

魔法を封じる策だったが、自分の強みも封じられていた。音をたてドタドタと歩く事に暗殺者としての矜持を傷つけられる思いで、苛立ちながら木村の後を追いかけた。

当然、後ろからの物音に気が付いた木村は慌てて足を動かす。それでも暗闇で動く事にかけて、木村とシャルティアでは場数が違う。

あつという間に追いつかれ、襟首を捕まれる……その寸前。一際ネズミが団子の様に固まっていた場所からひとつの影が立ち上がる。

ユマ姫だ。ユマ姫は少女とは思えぬ力強い足取りで、ネズミをモノともせず一直線にシャルティアに迫る。

——キンッ

固い音が響いて、火花が散った。

シャルティアの懐剣はユマ姫の決死の一撃も受け止めて見せたのだ。

そもそも、近接戦闘はシャルティアの十八番。リミッター解除による少々の踏み込みの鋭さと、ネズミに紛れる程度の策で、どうにかなる相手ではなかった。

シャルティアにとって、返す刀でその喉元を一閃し、ユマ姫の息の根を止める事は容易かった。

だが、敢えて袖を取り投げ落とすと、関節を極め、外した。

正に木村にやったのと同じ手順であったが、余りに軽く外れてしまうので失敗かと思つたほど。

だが、同時に納得もした。先ほどからの体格、年齢からあり得ぬ力は体に無理をさせていたのだと正しく理解が及んだからだ。

「ああっ！ やっぱり貴女は『私と同じ』なのね！」

シャルティアの心は歓喜に震える。シャルティアもまた、自分の意思で脳の忠告を振り切つての無茶が可能だった。腹に貰つた一矢を無視して動ける事がその証拠。

この世にたった一人。羊として生まれてしまった狼が初めて出会った同種。だからこそ殺したい。だけれども殺したく無い。

その狭間で、シャルティアは思う。

『食べたい』と。

一方で木村は待望の銃を手にしていた。

ユマ姫とシャルティアの剣戟で散った火花は、散り始めた煙幕の残滓を瞬間切り裂き、木村へ銃の場所を指し示す事に成功していたのだ。

木村は背後に追いつがるシャルティアに突撃した人間を自分が連れてきた騎士の一々人と思ひ、余り気に掛けなかつた。この暗闇の中、肝の据わつたのが居るなとしか。

だが、銃を手にした瞬間。安心と共に戻つた冷静な思考で思う。

——そんな奴が居るか？ まして団長は死んでるんだぞ？

ゾクリと背筋が冷え、肌が粟立つ。

——まさか？ ユマ姫なのか？ 俺はまた救われた？

半ばパニックになった頭は、痛みも打算も捨て去り、無理矢理地面に叩きつける様に関節を嵌めさせる。

——ッ!!

人生で初めて味わう激痛に目の前が真っ白になる。これまた初めての冷たい汗が体中から湧き出る感覚。

口から漏れそうになる悲鳴を血が出るまで唇を噛みしめ、堪える。

深呼吸をひとつ、音がする方向に銃を構える。未だにもみ合う音がネズミの鳴き声に混じって聞こえてくるのだ。

だが、嵌めたばかりの腕は激痛としびれをもたらし、ガクガクと揺れ狙いは定まらない。そうで無くても目の前に有るのは視界を塗りつぶす暗闇だけ。

だが、あのシャルティアの剣術を見た以上、ユマ姫が敵う相手とは思えない。イチカバチカの賭けに出るべきだと、冷静な思考は訴えてくる。

——撃てッ！ 撃つんだ！

カチャリと撃鉄を引く音が妙に耳に響いた。

呼吸も五月蠅く、嫌な汗は目に掛かる。

見えない！ 音を頼りに撃つしか無い！ だが、ユマ姫に当たったら？ コレがナニかの作戦だったら？

良かれと思った行動で主人公の足を引っ張るキャラは、木村が最も嫌う物だった。

いや、そんな理屈は抜きに、愛した女性を殺してしまう可能性に木村はトリガーを引けなかった。

を捉えていた。しかしユマ姫の苦痛に満ちた声を聞いた瞬間、息が詰まる程の快感に震え、動けなかったに過ぎなかったのだ。

一方のユマは暗闇の中でも、それが目前であるが故に、息づかいや感触で自分が何をされたか理解出来てしまう。

——食べられた!!

気持ち悪さと、それ以上に得体の知れない相手への恐怖に震えが止まらない。

「うう、あ、あ、あ」

生きたままに食われる。その根源的な恐怖にユマ姫は恐怖し、涙した。それこそ普通のか弱い少女の様に。

その様子はシャルティアを余計に喜ばせた。そして口に含んだ眼球を噛みつぶす様を見せつけようとして気が付く。煙幕は晴れてきたが、明かりが無い。

仕方が無いので、耳元で噛みつぶし、咀嚼音でも聞かせようと顔を近づけた瞬間、それは起こった。

暗闇の中、一瞬の閃光。そして炸裂音。

「ひっ！」

ユマ姫は間近に浮かび上がったシャルティアの顔を見てしまう。ましてその口内に自分の目がある様を残った右目だけの視界に収めるや、軽いパニックに陥った。

シャルティアもシャルティアで、気配で感じるユマ姫だけで感極まったのに、光の下で恐怖に引き攣る顔や、がらんどろになった左目、絶望に沈む様子を堪能して頭の中が真つ白になる思いだった。

——グチャリ

歓喜のあまり、眼球を噛みつぶす。とろりとした苦い触感が口の中に溢れるも、それ以上に甘美な悲鳴が耳に届いた。

ユマ姫の口から漏れたのは「キヤア」と言う可愛らしい悲鳴。噛み潰す瞬間こそ暗闇に戻って見えなかったが、寸前の光景からその音が何を意味するかは容易に想像が付いてしまった。

見えないからこそ、想像力はより深い恐怖を掻き立て。ホラー映画の様な光景に、闘争心すら潰されてしまう。

同様にシャルティアも、可愛らしい悲鳴によつて想起した恐怖に涙するユマ姫の姿に、頭が茹だる程の快楽を得てしまった。

それ故に、らしくないミスをした。

——パァン！

二回目の閃光。そして乾いた破裂音。

言うまでも無く、音の正体は木村が放った銃声、閃光はマズルフラッシュだ。

マズルフラツシユで浮かび上がったマウントを取るシャルティアに、間髪入れず木村は二度目のトリガーを引いたのだ。

「うっ！」

今度上がったのはシャルティアの悲鳴。弾丸は肩口に命中。鉄の丸玉なので過剰な威力で弾丸は貫通してしまうが、それでも大きなダメージとなった。

木村は痺れる手での銃弾の連続発射に成功した。一発目の閃光で大まかな位置を確認し、二発目で仕留める策が見事に嵌まった格好だ。

と言つても、器用さが自慢の木村と言えどこの様なコンデイションで頭部に弾丸を当てるのは困難、肩でもむしろ上出来が過ぎる結果。

そもそも連射が効くりボルバーとは言え、この様な連続発射は賭け。さらに冷静に考えれば、閃光の正体など自明であるが故。一発目のマズルフラツシユでシャルティアが逃げおおせる可能性は非常に高かった。

しかし、木村は全ての賭けに勝つて見せた。

シャルティアは腹に受けた矢傷と合わせて、いよいよ出血に体が言う事を聞かなくなつた。

しかも感極まつた感情の発露は、痛みをダイレクトに脳に届けた。覚悟を決めて、弓を構えるユマ姫の前に立つたときとはまるで違う。

その隙をユマ姫は見逃さなかった。振り絞った背筋の力だけでのし掛かるシャルティアを押しつける、上体を起こすと同時に右肩の関節を嵌めてみせる。

今回は外れやすく、嵌まりやすくなつた関節が奏功した。嵌まつた右腕で、乱暴に左腕の関節も嵌める。

するとユマはリミッターを外した力を総動員し、逆にシャルティアを押し倒す。

上下が入れ替わる格好、それこそ形勢逆転。

しかし、木村にはそれが解らなかつた。弾丸は当たつた様だが致命傷は与えられなかつた事が、もみ合う音から判断がついただけ。

煙幕は僅かに晴れてきていたが、ネズミに塗れたランプの明かりは二人のシルエットをぼんやりと煙の中に浮かび上がらせるのみ。

つまり、木村の目に映つたのは地に伏せる女性と、それにのし掛かる女性のシルエット。

木村は当然、直前に見たユマ姫にのし掛かるシャルティアの姿を思い出す。六発の内、最後の弾丸をそのシルエットに放つ事に迷いは無かつた。

……だが。

闇を切り裂きマズルフラッシュに浮かび上がったのはシャルティアにのし掛かるユ

マの姿だった。

そして『偶然』は弾丸を正確にユマの胸元へと運ぶ。

その光景を目に、果てしない絶望が木村を震え上がらせた。

巨大墳墓3

——え？

閃光が闇を切り裂く一瞬、銃口を向ける木村が映った。

何で？ と疑問に思うも、また『偶然』がロクでも無い悪さをしたんだろうとすぐに解った。

死ぬ？ 死ぬのか？ ……ああ、でも木村に殺されるなら悪くない。悪鬼の様に復讐に狂って苦しみながら生きるより、余程マシじゃないか。

弾丸は胸に着弾。強い衝撃に体が仰け反る。ああ、死んだ。こりや死んだわ。

走馬灯がゆつくりと流れていく。幼児になって母パルメに抱きついた事、生誕の儀、湖への家族旅行に、セレナと行った成人の儀。

走馬灯とは死ぬ間際、脳が異常な処理能力を發揮して、過去の経験から何とか生存方法を探ろうとする防衛本能と聞いた事が有る。

なるほど凄まじいモンだ。短剣を空振ったシャルティアの姿がハッキリ見える程。俺の喉を切り裂くハズの一振りは、皮肉な事に弾丸の衝撃で仰け反った故に不発に終わ

る。

良かった、シャルティアに殺されるより、木村の弾丸で死んだ方が心穏やかに逝ける。
……ああ、ゆつくりと意識が遠くなっていく。

しつかし走馬灯も善し悪しだな、弾丸が肉にめり込む感触までハッキリと解つてしま
う。心臓が弾ける瞬間までスローで味わう事になるのだろうか？ それは勘弁願いた
い。

……遅いな。いつそひと思いに……、アレ？

いや？ 幾ら何でも遅過ぎる、つて言うかさ、何故暗闇の中、シャルティアの姿が見
えた？ 火花が散った？ なんで？ 弾丸は何にぶつかった？

静止した世界で、俺はゆつくりと眼球を巡らせる。

——あ、ああっ！

弾丸は俺の胸元で止まっていた。セレナのブローチをつけていたその場所に、代わり
にぶら下げていた金属片。

ひしゃげた田中のメガネが、小さな鉄球を包み込む様に受け止めていた。

木村と田中が！ また俺を守ってくれた！

ああ！ そうだ！ 田中が居る！ それにセレナも！

停滞した世界。ゆつくりとしか動かない体をもどかしく思いながら。俺は袖に仕込

んだ田中とセレナを引き抜き……

シャルティアの眼球へ突き刺した。

——瞬間、世界は動き出す。

「ギツ！ 痛ツウ！」

悲鳴を上げたのはシャルティア。よく見れば二つの眼には共に大きな針が突き刺さっていた。

その針を両手で強く握り締める。シャルティアに馬乗りになった俺は極太の針にギリギリと体重を掛けていく。

もう少し、もう少し力を込めるだけで、針は脳へと至り。死に果てるだろう。

……が、俺には聞きたい事が有る。

「ボルドー王子暗殺の主犯と手管を言え！」

「そう、……そうなのね」

針を握ったまま詰問する俺に、シャルティアはぼんやりした調子で答える。

が、そんなのに付き合ってる暇は無い、俺には時間が無いのだ。

がらんどろになった眼窩からは血が噴き出しているし、そうでなくても昨夜から無理を重ねた体はボロボロだ。

「私じゃ無いわ、ボルドー王子の暗殺が成っていたのも今知ったの。ルージュよ、彼女は

帝国と繋がっている」

「知っている！ 禁術を使ったのだろう！ ネルネか！ それとも他のエルフか！」

「禁術？ アレも森に棲む者の魔法なの？ ネルネって貴女の侍女の？ 解らない事だらけだわ、でも少なくとも私じゃない。解るでしょ？ 私の美学に反するやり方だわ。本当に便利で……気に食わない」

「何も……知らないのか？」

「ルージュに関しては、ね。カディナル王子の事は色々知ってるわ。婚約破棄だって私からお願いしたのよ？ 貴女と決着をつけるため、万が一を思えば関係を絶っておいた方が良くと思ったの」

「どうやら主犯はルージュ。シャルティアはその居場所を知らない様だ、だがカディナルの居所は知っていると云う。」

本来、真つ先にそれを聞き出すべき場面。だが、俺は妙な所が気になった。

ひよつとして、俺はシャルティアに親近感を抱いているのかも知れない。それこそ自分と近い存在だと。

だからこそ、そのどうでも良いハズの事が気になった。

「何故だ！ 何故あのクズ男にそこまで義理立てする！ アイツはそんな価値のある男じゃない！」

「そうね、確かにド屑ね、だけど彼は私の作品を評価してくれる、唯一の人だったのよ」
「どう言う……意味だ？」

「うふふ」

シャルティアから語られたのはおぞましい二人の趣味。芸術家とパトロンの関係の様に語ってみせるが、それは狂気に満ちていた。

「狂ってる！」

「あら、貴女には理解して貰えると思っただけだ」

コイツに親近感を抱いた自分が恥ずかしい。完全なキ印である。

クソツ！ 聞くんじゃ無かった、すぐにカディナールの居場所を押さえないといけな

いのに！

「どこだ？ アイツはどこにいる？」

「地」下よ

「？」

「この地下」

「なっ!?!」

かび臭いこの地下にカディナールが？

「この地下は王城とも通じてるの、結構広いし、案外快適なのよ」

「兵士は？ 何人居る？」

「それなりに。カディナールの直属の近衛は殆ど揃ってるんじゃないかしら？ 貴女が

あなた

どれだけの戦力を揃えて乗り込んで来たか知らないけど、自信が無いなら逃げた方が良いわよ、もう碌に動けないんでしょ？」

「……………」

戦力も何も、考え無しに飛び出してきた。木村の兵がどの程度か知らないが。マジモンの騎士は体格から全然違う、勝負になんかなりっこない。

「キムラ男爵、引きましょう！」

「ちよつとお待ちを！」

俺の叫びに女神像に取り付く木村から返事があった、どうやら女神像に人質がくくりつけられていた様で、必死に縄を切っている。

「急いだが良いわ、動き出したみたい。すぐそこまで迫ってる」

シャルティアはそう言うがその目は見えるハズが無い。その両目は針で突き刺されたままなのだ。

いや、シャルティアの魔力を感じる力も目による物では無いのだろう。

そして俺の運命視も急速に迫る光を目の当たりにする。

逃げよう！ でもシャルティアをどうする？ 魔力は品切れ。運ぶ術は無い。殺す

べきだ。だが……

「どうしたの？ 殺さないの？」

「大事な証人だ、殺さない！」

コイツは死を恐れていない、寧ろ俺に殺される事を望んでいる。なんとなくそれが解る。

「あら残念。解ったわ。もしも裁判になる様なら貴女の望む通りに発言する、そしたら私を殺してくれる？」

「解った」

思った通りだ。コイツは俺と力比べをしたかっただけ、俺が勝った以上、言う事を聞いてくれる。そんな気がする。

別に嘘でも構わない、目が見えないなら魔力視があっても今までみたいな脅威にはなり得ないだろう。

「キムラさん！ 私は先に脱出します！ カディナルの配下が迫っています！ アナタも早く脱出して下さい」

「は、はい！ 奴らは銃を持っています、お気をつけて！」

助けに来た木村を置いて行くのはナンセンス極まりない気もする。だが、俺の体は限界で、ここに残っても足手まといにかなり得ない。

何よりもヤバイのは首筋にチリリとお馴染みの痛み、そして目を瞑れば収縮する自分の運命光。

俺は残り少ない魔力をかき集め、加速。一気に部屋を抜け、通路を駆け、一直線に出口を目指す。

……だが。その判断は余りに遅過ぎた。

「動くな」

「がふっ」

脇の部屋から進路を塞ぐように飛び出して来たのはフル装備の騎士。魔法はかき消され加速のままに衝突、そのまま俺は組み伏せられた。大柄な男の体重に押しつぶされて、息が詰まる。

しまった！ 待ち伏せ？ こう密着されては俺の魔法は全く使えない。いや、そうでもなくても俺はもはや大した魔法が使えぬ程に消耗していた。

「ハハッ、無様だね」

そこに気に障る声が掛けられる。カディナールだ。ゾロゾロと兵を連れ立つてのご登場。

出口付近に網が張られていた、その意味は重い。墳墓の地下深くを根城にしながら、俺達を迂回して出口を塞いでいたのだ。ここは正にカディナールの庭。兵だつて目に

見える数だけじゃないだろう。

あのまま木村といった所で、結果は大して変わらなかったに違いない。あの時点で半分以上詰んでいた。

俺は乱れる呼吸のままに苛立ちをぶつける。

「ハア、ハア、ハア、クズが！ 今頃登場とは、良いご身分だな」

「おやおや、口が悪いな。折角の可愛いお顔が台無しだよ」

「ほぎけー！」

「ふうーん、コレはもう、ココで取っちゃおうか。しつかり押さえておけよ」

「ハッ！ オイ、起きろー！」

カディナールが兵士に命令すると、無理矢理に俺は立たされた。

奴が手に持つのは……不気味な細長いハサミ!!

クソッ！ 俺はコレを悪趣味な本の中、気味の悪い挿絵で見た事が有る！

「口を開けるよ、ホラ」

「ぐ、が、うぐ」

奴の狙いは解る。だが、それだけは！

しかし、か弱い俺の体では、屈強な戦士に抗う事など土台不可能。

体が軋む程の必死の抵抗虚しく、俺は口腔をカディナールのクソに曝け出す。

「ホラ、よつと」

——バチンッ

「ツ！ カハッ！」

「ほら、どうだい？ 取れたよ君の喉、コレで魔法は使えない♪ 違うかい？」

目の前に突き付けられたハサミ、そこに挟まっているのは小さな肉芽。

俺の喉だ！ 声が！ 魔法が奪われた！

俺は絶望と出血に限界を迎え。ゆっくりと闇に意識が溶けて消えて行く。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ルミナス・ノール・ピーグル

名前は知っていた。ボルドー王子のかつての婚約者。

姿絵は見てきたが、こんな形で会う事になるとは思わなかった。

穏やかに笑っているが、彼女と目が合う事は決して無い。彼女の目はガラス玉だから。

ささやかな胸のふくらみも、柔らかな曲線を描く肢体もピクリとも動かない。

ああ、そうだ。吐き気がする。彼女は……剥製だ！

「ハハッ、どうだい？ 僕のお気に入りなんだ」

気狂いと、悪趣味と、クソと、蛆野郎と、楽に死ぬると思うなど。語彙の許す限りの罵倒の言葉は、しかし形にならない。

俺の喉は切除されてしまった。

「ああつしゃべれないんだったね、可哀想に。それに片目も。でもね、目も喉も腐りやすい部分だろう？ どうせ除去するんだから気にする事は無いよ」

カダイナールの糞が何か言っている、ウンコにたかるハエの様に、その一言が一言が、全てが不潔で汚らわしく、耳に障る。

「でも、随分顔色が悪いね、クマが酷いや。体も随分痩せてしまっている。いけないなあ、ああ、いけないよ。それじゃあ飾つても映えない」

おぞましい、コイツの言ってる事が解る。それだけに気持ちが悪い。

「初めて見た時から思っていたんだ。コレは絶対に僕のコレクションに加えないとつてね」

コイツは！

俺も！

剥製にする気だ！

ココは？ 恐らくはカダイナールの屋敷の地下。

シャルティアは言っていた。そこに王子の『コレクション』があると。

俺を招待したのは、いずれここに並ぶ予定の俺に向けた内覧会のつもりだろうか？

だとしたらサービス過剰としか言い様が無い。喉を奪われた俺は、最早虚弱な少女と変わりが無いというのに、嚴重に枷を嵌められ、石畳の床に転がされているのだから。

あまりの気配りに乾いた笑いすら上げられない。失われた喉は笑い声さえスカスカと抜けていく。

「そんなやせっぽちじゃ貧相で困るんだよ。しっかりとエサを食べて、健康で居てくれな
いとね」

そう言つて、コイツが床に置いた皿の中には、山盛りのシリアル。

こんな物食べると言われても、俺は後ろ手にゴツツい鉄枷を嵌められ、足には重り。

ご丁寧に鎖がついた首輪まで嵌められているのだ。

これは……そう、つまり、そう言う事だろうか？

エロゲーで見た！ 予習はバッチリである。

俺は膝立ちでズリズリと鎖の許す範囲で移動して、皿の前に陣取る。

「どうしたあ？ 食べないのかあい？」

感極まったとばかりにろれつが怪しくなるカディナール。

プライドが高いコイツにとって、舞踏会で俺に恥を搔かされたのは、耐え難い苦痛

だったと言う事か。

いや、そんな事が無くたって、コイツは女の子を苛める事に快感を覚える、典型的なサディストだろうと察しがついた。

俺はそんなヤツを上目遣いに見上げると——ニツコリと微笑んだ。

我ながら会心の笑顔。

「？」

コレにはカディナールも言葉を失った。怪訝な顔をする。

一方で、俺は楽しみに笑顔のままに目を瞑る。

——ああっ！ そうだ！ やっぱりそうだ！

俺は苛立ちが一転。なんともウキウキと、楽しい気分になつてきた。

うーん、カディナール君、君も随分ともつたいない事をしたね。喉さえ切らねば「いただきます」と可愛い声で挨拶してやったのに。

俺は前のめりに倒れると、皿に盛られたシリアルに口をつける。

手を使わない（使えないのだが）犬食いである。

——モシャモシャ、悪くない。

ハツつと息を飲む声が聞こえた。カディナールにとって俺の行動はそれはそれは意外だったのだろう。

そりやそうか、お姫様のプライドを破壊する為に、犬みたいに這いつくばって食えと命令しようと思つたら。その前に自分から喜んでパクつき始めたんだからな。

「ハッ！ ハハッ！ 食つたよ！ オイ！ 知つてるか？ それは僕が飼つてる犬の工サだぞ！」

まあそんなこつたと思つたよ。お前にとってコレがプライドを砕く最低の食事って訳か、世間知らずもココまで来るといつそ清々しいね。

割といいもん食つてるよお前トコの犬。栄養バランスが考えられてる。完璧さ。

味？ んなもん、端っからわかんねえんだよコツチは。

気にせずモシヤモシヤ食つてると、苛立つた声でカディナールが叫ぶ。

「オイ！ 白痴か？ 惨めだな、何とか言つたらどうだ？」

そう言つたカディナールが何をするか。

……大体解るな。秋葉原の教材は嘘をつかない。

俺は頭を踏みつけられた。グシャリと顔面がエサに埋まる。

「ああっ！ そうだった！ しゃべれないんだつたな、俺が喉を切つたんだつた！ 身も心も犬になつたつて訳か、生まれ変わった記念だ！ 存分に食べるが良い！」

何がおかしいのか、カディナールは高笑いを上げる。

俺も楽しくて笑つてしまった。踏みつけられたのは笑顔を隠すのに丁度良かったし、

切除された喉は笑い声も出ないので安心だ。

——なあ？ 知ってるか？

なんでお前の待ち伏せが綺麗に決まったか。

お前の運命光、ネズミ以下だぜ？

ああっ！ 教えようにも、俺、しゃべれないんだった！ 残念だなあ！ ああ残念だ

！

「お前はボルドーを殺した罪を被つて貰う。数日後に広場で裁判をして、そのまま断頭台だ。シャルティアに処理を頼めないのは残念だが、ギロチンの切れ味だつて捨てたもんじゃ無いさ、さつくり切れれば繋げてても跡は目立たないし、血も抜けて丁度良い」

何が楽しいのか、カディナールは俺の分まで饒舌だ。

「不満があるならその場で何か弁明すれば良い。あーそうか！ しゃべれないんだつた

！ じゃあ仕方無いな！ 有罪！」

それはそれは、楽しそうにケタケタとカディナールが笑う。

俺も笑う。

楽しいパーティーが始まろうとしていた。

欠声裁判 1

俺は木枷ほくがを嵌められた状態で広場まで引つ張り出されていた。

木枷。ご存知ない？ エロゲーでよく見るアレだよ。エロゲーは何でも教えてくれる。二枚の板で挟まれて頭と手だけがコンニチワ、ご丁寧にも板は金属枠でがっちり固定されている。

しかも枠には鎖が付いており、犬の散歩よろしく半ば引きずられる様に広場まで移動させられた。

広場には俺が初めて王都に来て、挨拶した時以上の人がギツシリでビックリ。正直、血の気が引いてしまった。

設置された断頭台を見た時なんざ、自分の頭と胴をさよならバイバイさせる装置だと言うのに、変な話、ちよつと安心した程。

……いやさ、エロゲーだとエイブラハム・木枷Ⅱリンカーンなのよ、次の一枚絵では白濁液まみに塗れてるのが普通だから要らない心配しちゃったね。

「コレより、ボルドー王子暗殺事件の裁きを始める」

ステージの一段高い所で裁判官が宣言する。

いや、良く作ったねコレ。数日で広場にステージを作るばかりか裁判セットまで設しつらえ
てある。つーか断頭台まで用意して今更何が裁判かって話。

でも、処刑は地球の中世でも庶民の娯楽だったと聞いた事がある。今から殺すけど、
良いよね？ 申し開きあるなら一言聞くよ？ って奴だ。

俺程の有名人となると、こつそり処刑なんてしてしまおうと庶民は納得しない。この辺
の理屈はこの世界でも全く変わらない訳だ。

で、被害者から証言があつて、反論が無ければそのまま死刑って流れよ。

……反論があつても大概はそのまま死刑なんだけどね。

今回はその証言者も豪華絢爛、第一王子カデイナールが涙ながらにボルドー王子の死
を嘆き。殆ど話した事も無い第一王女やら第二王女やらも、ボルドー王子との思い出を
声高に語る。

俺はボルドー王子からお前らの良い話、聞いた事無いけどな！

彼らが言うには、俺が魔法でガルダさんを操って殺したんだって！

いやー俺、そんな魔法使えたとは驚きだなー、だつたら真つ先にお前らを抹殺するの
になあー。

証言はそれに終わらない、ココで真打ち、我らが木村さんの登場である。

コレは事前に聞いていたので驚かない、当然証言が許されると言う事は、木村さん

はカディナル殿下のご意向通りに喋ると言う事だ。

「お前の熱心な支持者が裏切ったぞ」

地下牢で鎖に繋がれた俺に、楽しそうに報告してくるカディナルの笑顔がキュートな事、一刻も早く忘れたいね。

……ま、木村の狙いは解るよ。すまし顔の木村が俺を見下ろす視線は冷たく、まさしく裏切った男のそれだが……

「私はキイムラ商会の商会長を務めるキイムラです、貴族の端くれとして男爵位を頂戴しています」

そう言いながら慇懃に挨拶するも、裏切り者の木村に対して民衆からはブーイングが上がる。

この民衆の反応を見るに、俺の人気ははまだ健在なのだろう。片目を失ってボロボロの姿で現れた俺に、痛ましい悲鳴と、狂おしい呻き声が上がったので解っては居たが、まだまだ俺も捨てたもんじゃ無い。

だからこそ、内情を知る木村に俺の悪評を語らせて、この裁判でイメージダウンを計る。そうで無ければ処刑に反対する民衆の反応が怖いからだ。

民衆の人気がある姫を処刑した事で起こった暴動と言えば、オルティナ姫の伝説だ。しかも俺はオルティナ姫の生まれ変わりを標榜しているので、誰もが其れを想像してい

るのが見て取れた。

ステージの上、証言台の木村と目が合う。

《お前》《頭オカシイ》

《相手》《凄く良い》

俺は木枷から出た両手でハンドサインを送ると、同様に木村から返事が返る。

このハンドサイン、フィーゴ少年が木村の横でコチヨコチヨやっていたので参照権を頼りに分析したものだ。

恐らく、木村が少年に交渉を任せた時に、良いぞ！ とか、ダメだ！ とかをジャツジしてハンドサインで伝えながら教育していたのだろう。

で、フィーゴ少年は俺に対する苛立ちを思いっきりハンドサインに乗せていた訳で、なんとなく解読出来たのだ。

《お前》と《相手》ってのは甲と乙みたいな感じで、お前と相手では無いのかも知れないが、フィーゴ少年がやっていた通り《相手》が《ユマ姫》で、《お前》が《木村》と置き換えて良いだろう。

「この女はボルドー殿下の死を味方である私にも隠しておりました、《ユマ姫》《悪い》《その事からも此奴が王国の乗っ取りを企んでいた事は明らかで御座いましょう》

No》」

木村の言葉に合わせて、ハンドサインを送る。隠していた事は悪かったので素直に俺が悪いと送る。

そして、別に王国の乗っ取りまでは考えてないので否定のNoを送っておく。

何が狙いか解らんが、木村の証言に合わせて返事をしてやる事にする。

多分、俺が喋れないのは織り込み済み。それでハンドサインの解る木村が証言して俺から何かを聞き出そうとしている。

正直、今の俺に、どの程度の味方が残っているか知れない。何か策があるのだろうか？

「正直、私はこの女の処刑に反対です《良い》、と言うのも現在行方不明となっておりますシャルティア様の居場所をこの女が知っている可能性が極めて高いからです《ユマ姫》《No》」

俺がハンドサインで答えると、木村は僅かに眉を歪めた。

……なるほど、木村が俺に期待していたのはシャルティアの居場所。

確かにシャルティアは裁判で俺に有利な発言をすると墳墓で約束した。そして、其れを木村も聞いていたのだろう。

だが俺はカディナールに捕まってからシャルティアの姿を見ていない。

これはいよいよ終わりかな？

木村の発言は予定に無かったのか、カディナール王子が慌てた様に弁明する。

「いや、シャルティアの奴は病に伏せているのだ。その、体調不良から自ら婚約破棄を強弁したぐらいでな」

「それはそれは、存じませんでした、考えてみればこの度の変事の一歩の被害者はシャルティア様で御座います。体調不良の原因も此奴の呪いの可能性があります、是非すぐにもお見舞いに向かわせて頂きたいのですが」

「いや、其れには及ばない。アイツもああ見えて繊細でな、伏せている姿を見せたくないらしいのだ」

「それは出過ぎた真似を、失礼致しました」

王子と木村の化かし合い。シャルティアも馬鹿じや無い「わたくし、ユマ様の味方をする事にしました」などと宣言をしては居ないだろうが、カディナールとしては両目を潰されたセンサーシヨナルな姿を表に出したく無いのかも知れない。

そうで無くても要らん事言いそうと判断された可能性は高い。

しかし、困ったな。実の所、俺にはカディナールを失脚させる特大ネタがあるのだが、其れを表現する術が無い。

何とか伝えられないかと悩んでいると、木村が続けた。

「思えば、ボルドー王子の婚約者ルミナス様《凄く良い》の死に關しても不審な点が多

い《Yes》《Yes》、彼女の死も森に棲む者が仕込み、何年も掛けて王国を乗っ取る策と思えば納得も行きましよう《No》」

まさか、このタイミミングでその名前を出してくれるとは思わなかった！ ひよつとしてカディナールの凶行に当たりがついていたのだろうか？ 俺は慌ててサインを送った。

——え？

すると、そんな声が聞こえて来そうな程、驚いた表情で木村が俺を見てきた。

あ、コレ完全な偶然だわ。余罪を追及する為にと俺の死刑を遅らせる策とか、その程度のアレだ。

だが瓢箪からコマ、このチャンスをモノにしたい。俺は《木村》《凄く良い》のサインを打つ。

だが、カディナールは慌てて木村の発言に食ってかかる。当然だろう。

「それは聞き捨てならないな。ピーグル家は件の悲しみからやつと立ち直った所なのだ、それをまたぞろ、ほじくり返すのは、貴族を代表する存在として看過出来ぬよ」

その王子の様子に、木村の方も何か思うところがあつたのだろう、俺には見えないが後ろ手で何か合図を送っているのが肩の動きから察せられた。

その証拠に、それを合図に慌ただしく動く人物が一人。フィーゴ少年だった。

少年と木村では、もっと細かい意味が通じるサインがあるのかも知れない、少年の側に屈み込んで話を聞いているのはシノニムさんだ。

その様子に、俺はなにやら感動してしまった。皆がまだ俺を助けようと一生懸命に協力している、投げやりになっていた自分が若干恥ずかしいほど。

木村は木村でカディナールに食い下がる。

「いえ、だからこそ真実を明らかにせねば。失礼ですがルミナス様は貴族ですから、火葬では無かつたのですよね? 《Yes》 今の私の持ちうる技術を持つてすれば死因の特定が適うかも知れません《良い》。非礼を承知でお願いしますが、ルミナス様の墓を暴く許可を頂けないでしょうか? 《木村》《良い》」

「乙女の墓を暴くなど! たかが商人上がりの男が恥を知れ! 《凄く悪い》」
「これは! 出過ぎた真似を、失礼致しました」

木村が頭を下げるが、その目はキラリと光ったように見えた。

俺の陣営はシノニムさんを中心に慌ただしく、騎士達がルミナスの墓を暴きに行つたに違いない。

だが、ソコには何も無いのだ。墓が空だったとして、それがカディナールを追い詰める証拠にはなり得ない。

シャルティアの証言か、ルミナスの剥製そのモノが必要だ。

そう言えば……ルミナスの死体はどうやって手に入れたのだろうか？ ルミナスは婚約段階で、王族の墳墓には入れなかった。

だからボルドー王子はルミナスの為に巨大な墓を作ったと聞く。カダイナールにとつて王族の巨大墳墓よりも入り込むのは骨では無いだろうか？

「実は、ボルドー王子の暗殺に關しても謎が多いのです《ユマ姫》《No》（知らないの意味）。更に、一度目の暗殺未遂では犯人を取り逃していると聞きました。《Yes》その犯人の正体を暴かなくては王国にとつて拭いがたい汚点となるのでは無いでしょうか？」

木村がつつらと語る内容は市民にしてみれば初耳の内容で、驚きの声上がる。しかし、俺にとつては特に重要な意味が無い。恐らくは時間稼ぎの策。ルミナスの墓を暴いた結果を待つために粘ろうと言う策略だろう。

いや……そう言えば、アレは煙突からシャルティアが入ってきたんだっただな。それでガルダさんは煙突清掃の業者を調べていた。当然の様に始末されていたらしいが……

あ、ルミナスの墳墓も換気口が必要だよな。そこから死体を取り出したのか？ そうじゃなくても、ボルドー王子の屋敷の作成に關わる工房が、ルミナスの墓を作っているとおかしくない。

だとすると……あっ!!!

驚愕する俺を余所に、カディナールと木村の会話は続いている。

カディナールは木村の証言が打ち合わせと違う事に焦っていた。

「この国を預かる者として、暗殺者の存在は見過ごせないが、このユマ姫を生かしておく事こそが森に棲む者の暗殺者を調子づかせる事になりかねないだろう?」

「つまり、殿下はボルドー王子の暗殺の犯人が森に棲む者の暗殺者だとお考えですか?」

「ああ、ボルドーの居城は半ば要塞の様な作りと言うのは王都では語り草。そこに忍び込むなぞ森に棲む者の魔法を無くしてあり得ないだろう?」

「ふむ、私が聞き及んだ所ではボルドー王子の屋敷の煙突《凄く良い》から入り込んだと聞いておりますが?」

俺のハンドサインにふむと考え込む木村。頼む! 気付いてくれ。

それを受け、木村は更に続ける。

「勿論であります、貴族家の煙突、おいそれとこそ泥が入り込める作りにはなっておりません。《Yes》だとすれば、煙突技師ぐるみの犯行と言えます。《木村》《凄く良い》その調査を行わなくてはならないのでは? 《良い》」

ついさつきまで俺が囚われていた地下室にも換気口はあった。言われてみればと『参照権』で確認すれば、その通風口に設えられた金具の意匠がボルドー王子の要塞で見た暖炉の意匠とそっくりだったのだ。

シャルティアが忍び込んだ煙突、俺は煙突清掃の業者が怪しいと思っていた。だが、煙突自体が初めから侵入ししやすい様に仕掛けが成されていたらどうだ？

その技師に作らせたルミナスの墓から通風口で死体を運び出したとしたら、それを剥製にし、飾りつける地下室だってもちろんその技師に作らせるだろう。

人間を剥製にする悍ましい狂気、知る者は少ないに越したことはなかったはず。

カディナールの屋敷は複数ある。その技師が関わった屋敷と言うだけで、一気に絞れるんじゃないか？

そう言えば、ガルダさんは煙突に関して調査していた。

てつきりルージユを洗う内に、相手に捕まって洗脳されたのかと思っていたが、そっち方面で尻尾を掴んでしまった故に、邪魔者として洗脳された？

だから、暗殺が成功しようが失敗しようが自殺するようにコントロールされていたとしたら？

考え込む俺を余所に、カディナールと木村の会話は続く。

「気が長すぎる。そんな事をする前に国を安定させなければいけないのだよ。森に棲む者の姫が居ては纏まる物も纏まらないだろう」

「お言葉ですが殿下、ココで真相を明らかにせず此奴を殺してしまえば、狂乱した森に棲む者の暗殺者が何をしでかすか解りません」

「ふん、だつたらどうしろと言うのかい？ この様な少女を拷問し、真実を吐かせろと？ 貴様はそれでも人間か！ 僕には年端もいかない少女を矚る趣味は無いね《No》」俺の《No》を見た木村はギリリと歯噛みする。俺が碌でも無い扱いを受けたと悟つたのだらう、ま、俺が喋らない時点で解ろう物だな。

カデイナールの言葉に激昂しかけた木村だったが、深呼吸を一つ。チラリとステージに構えられた巨大な衝立を一瞥。

……あの衝立、よく見れば穴が開いている。ひよつとして裏では鉄砲隊が待機しているのか？

カデイナールが帝国と繋がっているなら銃も持つているのは当然か。

危険な発言が飛び出そうものなら、一発放つて神罰に倒れたとか言えば銃を知らない人間は誤魔化せるって寸法だろう。

俺は憔悴して失声症になっているとか設定らしいが、喉を取り除いていると指摘するのは銃で撃たれる危険があると言う事か？

あー、コレ本気で厳しいな。

アレ？ でも帝国と繋がっているのは隠さなくて良いのか？

と、その疑問はご丁寧にもカデイナール自身が解説してくれた。

「それに、新しく婚約したルージユは帝国の技師を何人も引き抜いて連れてきてくれた、

今や帝国と我らにお前らが主張してきた様な技術格差は無い！ それはつまり帝国同様に森に棲む者など恐るるに足らずと言う意味だ」

なるほど、帝国の技術を引っ張ってきた功績で婚約と。そう言う筋書きにしたのね。無理筋だけどもあ、シャルティアだって無茶苦茶だったし通るのだろうさ。

木村は当然、それに食い下がった。

「だとしても、ボルドー王子の死因は側近のガルダ卿の裏切りに依るところと聞いています。彼の忠心は誰もが認めるところ《Yes》。その死因には謎が多い《Yes》、森に棲む者に人間を洗脳する技術があるとすれば《Yes》恐ろしい事になる。彼が出入りしていた所を徹底的に洗うべきでは？ 《良い》 先ほどの煙突技師《Yes》《凄く良い》の件もあります、そうでなくてはカディナル殿下《頭オカシイ》も枕を高くして眠れないのでは？」

木村が言い終わると同時、俺は両手で下を指さす。《地下だ！》と言う俺の思いが通じたのか木村は俺を見て頷いた。

通った!! 意図は通じた！

ってーか木村の奴、天才的な勘の鋭さとしか言い様が無い。俺の言いたい事が大体伝わった感触がある。

以降も真相を明らかにするために処刑は延期すべきとする木村と、カディナルの口

論は続いた。

その最中、いよいよルミナスの墓は空だったと言う報告が来たのだろう。フィーゴ少年ヘシノニムさんが耳打ちしている。

それを受け、少年はなにやら木村へとサインを送っている。さあ、どうなる？ このカードは何時使う？

ルミナスの墓に、ルミナスの遺体が無く、カディナールが焦って見せる。

コレに、俺の《頭オカシイ》の合図を併せれば、剥製と言うのは木村に辿りつけない結論じゃ無いハズ。

……まさかと俺を見る木村に俺は頷く。

意味が解ったのか、爪を噛む木村。カディナールが動物の剥製をいっぱい持つてる事は周知の事実、このまま行くと俺もコレクションに加わりまーす。

「話にならないな、僕は暗殺者など恐れない！ 王国の安寧の為に正義を成すことに躊躇は無い！ この者を断頭台に！」

しかし、時間稼ぎも限界だった。俺はカディナールの宣言で木枷のままに断頭台に引つ張られる。

で、木枷のまま、跪くようにギロチンの真下にセットされた。

——ん？

俺はてつきり一旦、木枷から外されて、断頭台にセツトされるのかと思いきや、この木枷、そのまま断頭台にセツト出来る構造なんだ！

へえー便利だねーって、この木枷を外す時が最後のチャンスかと思っていたのにクソッ！ ガツカリだよ！ ってか首だけじゃ無くても両手も切るの？ 血がビュービュー出るよ？ あー血抜きに丁度良いんですかね？

荒んだ目で俺は広場の人間を一瞥する。するとどうだ？ みんな悲しげな顔で俺を見ている。どうやらボルドー王子暗殺の犯人が俺と本気で信じている人間は少なそうだ、なんせ俺は可憐で華奢なお姫様。まさか殺人を犯すようには見えないのだろう。

実際は殺しまくってる訳で、いやー申し訳ないね。

そう言えば、やることも無く這いつくばって食つちや寝だけしていた数日で、俺の怪しげな見た目（魔女じみた濃いクマと痩せぎすの体）は大幅改善している。

それでいて着替えも許されずボロボロになった服と痛々しい眼帯で、一言も喋れない様子を見れば、一般市民だって何やら察してしまおうと言うモノだ。

「お兄さま、このまま殺しては不味いのではないで？」

「長引かせて良い物じゃないさ」

市民の悲しむ顔を見た第一王女やらが不安を口にするが、それでもカディナールは退く気が無い。

どうにも俺を早く殺したい様子。察するに俺を支持する勢力は裏で相当暴れ回っている。

だが、この場に乗り込んで暴力に訴えても、俺達の立場が危うくなると知っているの
だろう。

逆転の一手を探しているのだ！ コレは時間との勝負。なら、どうやって時間を稼ぐ
？ なにか、何か無いか？

と、その時、発言が終わったハズの木村が駆け寄ってきた。

「話が違います！ カディナル殿下！ 私にこの者の身柄を自由にさせて頂けるので
は？」

——ん？

「なにを言っている！ そんな約束はしていない！」

「で、ですが、この者はこの幼い体一つで軍部を骨抜きにしたのです、その技術、気にな
るではありませんか。首を飛ばしてしまうのは余りに惜しい」

突然の木村の妄言に俺は、《木村》《頭オカシイ》を連打である。

が、この木村の妄言に食いついたのが第一王女やら第二王女だ。俺の人气が面白く無
いと思っていた二人で、俺のゴシップを熱心に探っていたと聞く。

「まあ！ まあ！ 堅物の近衛兵長や軍団長が骨抜きになっていると聞いて、どんな魔

法を使ったのかと思いきや、まさか体を使つての接待だとは思いませんでしたわ」

「詳しい話を聞かせて下さいまし、キイムラ男爵」

ゴシツプ好きの王女が身を乗り出す。釣れた！ それにこう言つた話題は俺の人氣を落とすにも一役買う、カディナールも続けろと促してきた。

そうして、木村から語られたのは根も葉もない下品な話の連続だった。ポルドー王子は俺の売春の仲介を行い、そのコネで権力を拡大したとか。木村も抱かせてくれるとの約束で味方したが、いまだ指一本触らせて貰つていないとか。

いや、根も葉もないでは無いな、俺が宴会上で雌犬みたいに振る舞つて出席者に媚びを売つて回つたと言う下りなんて、ある意味その王子にやらされたからね！

王女二人はキヤーキヤーと興奮しきりだったが、カディナールは思うところがあつたのか舌打ちを一つ。

お姫様が自分からエサを啄む不自然。あらかじめその様に調教されていたとすれば筋が通ると思つてしまつたか？

「そんな！ そこまで下劣な女だったのか！」

激昂した声でカディナールが吠える。コレから人形にして飾ろうかと言う女が売女だったら嫌だよな。俺も中古フィギュアは良くても『ぶっかけ済み』はNG。

と、そこにもう一人の乱入者が現れてしまう。

「姫様は！ そんな事しません！ それどころか、処女です！」

とんでもなく恥ずかしい事を叫んでやって来たのは、ネルネだった。

えっ？ おまつ？ 裏切ったんじゃ？

ネルネはドスドスと怒り心頭の様子でステージに上がる。

「私は姫様の侍女です。私が保証します！ 姫様は処女です」

また、大声で宣言である。一方で俺に向かって走り込んで涙ながらに語る。

「ごめんなさい、ユマ様あ、私、親戚の家で風邪引いて、寝込んでて」

なるほど、なるほどー、全て俺の考え過ぎか？ でも違和感あるな。まあ良いや。

この場に出て来てるって事はシノニムさん達のチェック済みと言うことだろう。

つーか処女処女、連呼するのやめて欲しいね。オブラートに包んで、ヨロシク。

「ねえ？ 本当に処女なの？」

「そんなの！ 当たり前です！ 結婚前なんですよ！」

「じゃあ、確認する？」

「！」

好奇心まんまん丸と化した王女二人の言葉に、ネルネは詰まった。

って言うか俺も、えっ？ ってなった。

——まさか？

「ほらお尻突き出してゐるし、スカートをバサツとやって見せてよ。きつと使い込んで真つ黒よ」

「そんな！ 違います！ 新品です！」

し、新品つて……ネルネさん？ あなたは敵なの？ 味方なの？ え？ 俺、この衆人環視の状況で処女膜確認されるの？

俺が木枷のコツチ側で顔を真つ赤に、口をパクパクさせていると、いよいよ後ろからスカートをごそごそとやる感触が！

「あら、臭いわね何日も服を替えていないんじゃない？」

「ふふ、不潔ね、売女にはお似合い」

「違います！ 新品です！」

あなた達さー、楽しみすぎじゃない？

拘束されてるときも、下の世話は最低限して貰つてたからね？ クズ王子だつて、ウンコまみれで皮膚がかぶれまくつてゐるフィギュアは嫌みたいで、おつかないビツクリ侍女がお世話してくれたよ。臭いって言つても最小限じゃない？ 普通もつと匂うよ？

なんせ俺、体臭に至つては何か甘い匂いするしね。体、大丈夫か？

なんかもう、このままじゃ生き残つても俺の尊厳とかアウトじゃねーか？

と、そこに救いの声が広場に響き渡つた。その大音量は恐らく拡声の魔道具だろう。

「その必要はありません、姫様が体を捧げたとキムラ男爵は言いましたが、実際に捧げたのは汚れ無き神祕の御業に他なりません、その力で彼女は我らを救ったのです」

この声は！ ゼクトール隊長！ 人でいっばいの広場には巨大な櫓が一つ。俺が初めてスピーチをした時、木村が居た場所だ。そこに拡声器を前にした隊長と白いシーツを掛けられた物体が一つ。

——間に合ったか！

「我々はルミナス様の死に不審なモノを感じ、許可を取ってその墓を改めました。しかしその姿は無く、全軍をもって調査した所、一つの場所が浮かび上がりました」

ゼクトール隊長がシーツを剥ぎ取る。出て来たのは、当然ツ！ ルミナス嬢の剥製だ！

「コレは恐れ多くもルミナス嬢を剥製にしたもの！ 他にも幾人もの少女が剥製で見つかりました！ カディナル殿下！ 貴方の別邸の地下からです！」

静まり返る民衆、対して顔を赤くし、唾を飛ばして反論したのがカディナルだ。

「嘘だ！ 畏だ！ この僕が！ そんな下劣な真似をする訳が無い。陰謀だ！」

そう怒鳴るが、ハッキリ風向きは変わっていた。別邸とは言え家令かれいや執事は居て、現物を押さえた上で証言を迫れば、罪悪感から真実をこぼす者も居る。

櫓の上からゼクトールさんがスピーチさせている男がそれだ、見る人が見れば、聞く

人が聞けば、それが嘘の証言では無いと一目瞭然。

曰く、王子は死体を愛でる趣味がある。気に入った美女を剥製にしたいとダダをこねる。

それは聞くに堪えない証言の連続。

だが、カデイナー王子は粘る。

「馬鹿な！ 言わされているだけだ！ それに見ろ！ その剥製の見事なこと！ まさに森に棲む者の邪法ではないか！」

などと証言しており、状態だが、コレはコレでシャルティアを引っ張り出す好機であつた。木村がそれを逃がすはずが無い。

「思えば、シャルティア様は剥製作りの名人と聞きました。彼女が剥製を作っていたのでは？」

当然、シャルティアの趣味が剥製作りなどと聞いたことも無いが……肝は死苔茸だ。アレは防腐剤としての効果がある。

アレで死んだ動物は腐らずに死苔茸の温床と化して長く森に止まる。その特性を利用して剥製作りに利用されるのだが、初めから死苔茸を使って殺せば話が早い。

シャルティアが囁んでると予想したのだろう、本当に頭の回転が速い。《木村》《凄く良い》

「そ、それは……」

口ごもるカディナールに、控えめに声を掛ける女性が現れる。

「あのカディナール様、シャルティア様に話させてあげれば良いのではないですか？」

「ルージユ、君か！」

この声は？ そうか！ コイツが！ ルージユかあ！

後ろが向けない俺は必死に体を捻る。が、見えない。

——ん？ 鏡を持ったネルネが俺の前に来てくれた。つと、見えた！ コイツが？

……地味で冴えないタイプ少女漫画の主人公みたいだが……本当に黒幕なのか？

そんなイメーজが全く湧かないぞ？ 人の良い女の子と言う感じ。

「あの、差し出がましいですが私、シャルティア様をお連れしました」

そう言うルージユが手を引いて案内するシャルティアは目隠しをされていた。軽く

グロい両目を見せない様にだろう、いや、ただの包帯なのかな？

ただ、特筆すべきはその足取りだ、フラフラと落ち着かない。意思を感じない。

見えないだけで、あのシャルティアがこんな足取りになるだろうか？ ゾンビみたい

に「あ、ー」とか叫びだしそんな感じじゃ無いか。

——まさか？

その様子にカディナールは笑みを深め、許可を出す。

「そうだな、シャルティアよ、君がこのおぞましい剥製作りに関わっていると言われているのだぞ！ その汚名を雪いで潔白を証明するが良い」

シャルティアはぼーっとした様子でコクリと頷くと、ヨロヨロと拡声器の前に立つ。それを見ているルージユもニコニコだ。

——ひよつとしてシャルティアも洗脳されているのか？

邪気が無い笑顔のルージユ。もし彼女が洗脳しているのだとすれば、コイツはトンダサイコパス少女。全く笑えない！

歯噛みする俺に、心配そうな声が間近から掛けられた。

「あの？ 姫様、喋れないんですか？」

不意に、鏡を持つネルネが尋ねて来たので俺は頷く、「そんなー」と泣くネルネ。

そんな俺達をボーツとした様子で眺めるのはシャルティアだ、目は見えないうららに、コチラを見て、笑った。

「さあ！ 早く発言しろ！」

苛立ったカディナルが叫ぶ。

すると、急にシャンとしたシャルティアが笑顔を湛え、楽しげに宣言した。

「剥製？ ええ、私が作ったの！ カディナル王子のために丹精こめてね♪ どう？

綺麗に出来ているでしょう？」

うん、コイツを洗脳とか無理だわ。

盲目の姫の残滓

「剥製？　ええ、私が作ったの！　カディナール王子のために丹精こめてね♪　どう？

綺麗に出来ているでしょう？」

艶やかなシャルティアの声が無邪気に響く。

鏡に映ったルージュの顔は呆然としていた。

いや、よく見れば広場の面々全てが呆気にとられていた。こんな凶行を堂々と認めるとは欠片も思っては居なかったのだ。

いや、違うな。人間を剥製にすると言う猟奇的な凶事、市民はまだ飲み込めては居なかった。そこに追い打ちを掛けるはシャルティアの様なお嬢様の突然の犯行宣言だ。

それをまともに受け止められる人間が居たとすれば——木村ぐらいのモノだろう。

「と、言うことは。カディナール殿下が指定した女性を。貴女は殺し、剥製にしてきた？」

「ええ、暗殺も誘拐も、なんでもね。ホントはそのユマ姫も仕上げたかったんだけど……失敗しちゃった」

シャルティアはてへっ……と言いつい出そうな舌出しで、可愛らしくコツンと自分の頭を

叩いてみせる。

もうね、俺も最近どうにも死生観とか壊れてきたと思ってたけど、やっぱモノホンはちげーつす。シビれるねえ！ 憧れないねえ！

「なるほど、では今回の裁判なのですが。ボルドー王子の暗殺事件。その犯行も貴女とみて宜しいですか？」

「いえ、それも失敗しちゃったの♪ ボルドー王子のお屋敷を煙突から襲撃したのは私。でもね、ボルドー王子の部下を洗脳して殺させたのは……」

シャルティアは優雅な仕草で片手をスイッと伸ばし、指差す。

「カディナル殿下の新しい婚約者。ルージュよ。正確には彼女が連れてきた帝国の魔術師ね」

その指先は、今まさにコツソリと逃げ出そうとするルージュの場所を正確に指していた。

「ひっ！」

悲鳴を上げるルージュ。そして再起動したカディナルが遂に声を上げた。

「撃て！ 殺せ！」

——バアアアアン！

宣言と同時に、乾いた炸裂音が連続する。恐怖にサツと血の気が引くが痛みは無い。俺

には一発も撃たれなかった。

理由は冷静になれば解る。綺麗な剥製にする為に、俺には絶対に撃たない様に厳命されていたに違いない。だから、狙われたのは証言台の二人。

鏡の向こう、シャルティアが綺麗な飛び込みで証言台の下に転がり込むのが見えた。

コイツ、本当に目が見えていないのか？

対して木村は？ ネルネが震える手で鏡を傾けると、既に物陰に隠れ、懐に手を突っ込む木村の姿が見えた。取り出したのは鉄の塊。

「アレは？ 何ですか？」

銃だよ！ ネルネに答える俺の言葉は、しかし声には出来なかった。

だが、その必要は無いだろう、そこから火花が散って、衝立の向こうに射撃をする姿を見れば正体は明らか。

しかも、その精度、連射力は火縄銃の比では無い。時には衝立の穴を正確に打ち抜き銃を壊し、時には穴から覗く兵士を撃ち抜いている。

「全軍突っ込め！」

そこに聞こえて来たのはソルダム軍団長の怒号。そして大勢の男の雄叫びだった。

見れば広場のどこにそれだけの、と思える程の兵士達がステージに向けて雪崩れ込み、これまた湧いてきたカディナールの兵士たちと揉み合っている。

気が付けば既に広場は戦場になっていた。怒号と悲鳴が響き渡り、市民は我先にと逃げていく。

が、俺は逃げられない！ 断頭台に固定され、一步も動けない！

弾丸飛び交う戦場のど真ん中。一步も動けず声を上げられない強烈なストレスに頭が真っ白になる。握りしめた手から汗が滴り、呼吸と鼓動が耳に響く。

「い、今助けますー！」

我に戻ったネルネが鏡を手放し、何とか断頭台へ固定された俺の木枷を外そうと奮闘するが、少女の力で外せるようには出来ていないのだ。

——止めろ！

叫びたい俺の気持ち、声にならずもどかしい。

鏡を無くした俺に、ステージの様相は知れず。聞こえてくる音に想像力が膨らんで、恐怖に竦んでいた。

そして、最も聞きたく無かった声が、俺の耳に飛び込んでくる。

「邪魔だッ！ どけけ！」

「キャッ！」

その声はクズの声。

劣勢を悟ったカディナルが、いよいよ無謀な行動に出たのだった。

悲鳴の主はネルネ。殴られたのか、ステージから転がり落ちてピクリとも動かない。か弱い少女の腕力なんてこんなモノ、ロクに鍛えていないひ弱な王子の力にも抗えない。そして今や俺もネルネと同じ、何の力も無い普通の少女だ。

いや、普通の少女以下か、枷に嵌められ一步も動けないのだから。

——コイツに殺されるのだけは！

許せない！ 悔しい！ だけど何も出来ない！

俺の気持ちをあざ笑うかの様に、狂気を孕んだカディナールの奇声が響く。

「おっ前だけはあー！ 殺すうー！ 絶対にだー！」

俺の真横に陣取ったカディナールが細剣を振りかぶる。必死に体を捻り見上げるも、逆光で王子の表情は知れない。

ただ、太陽と振り上げた剣が眩しくて、俺は思わず目を瞑ってしまった。

……いや、正直に言おう。俺は顔面を斬られる瞬間が怖かった。

必死に目を瞑り、歯を食いしばり。その衝撃に備える。

だが、衝撃は来ない。代わりに聞こえたのはブツリと何かが切断される音だった。

今の音は？ なんだ？ 俺の頭が理解するより早く。体がソレを理解していた。

目の前の全てが止まった様にゆっくりと動く。

走馬灯だ！ そうだ、俺は決して助かっちゃいない。より確実な死が迫っている！

知ってる、さっきの音！ 俺は知っている！ アレは断頭台のロープが切られた音だ

！

ギヤリリと金属がレールを滑る音が、停止した世界で間延びして聞こえてくる。

この音も知っている！ ギロチンが滑り落ちる音、普通は一瞬の出来事で聞こえやしない。そんな音すら今の俺にはハッキリと聞こえてしまう。

走馬灯の超感覚と言うのは、こうなると残酷だ。今の俺には何も出来ない！

ただ、固く目を瞑り、歯を食いしばり、その瞬間に耐えるしか無い。

オルティナ姫の記憶の中の死と、俺の運命が、ゆつくりと重っていく。

……なあ、知ってるか？

オルティナ姫の最後の記憶は断頭台の上じゃ無い。

人間は首を切られても、しばらくは意識があるって聞いたことがあるが、まさか『その記憶』まである人間は、どこの世界にも居ないんじゃないか？

ああ、そうさ、転がったオルティナ姫の首は。意識が闇に落ちる寸前まで、目に映る世界の全てを呪っていたよ。

カディナルよ、お前の運命力はネズミ以下、最早無に近い。呪うまでも無いが、一応呪ってやるよ。

お前は帝国に操られ。王国を荒らすだけ荒らせれば、結局は消されるコマに過ぎなかったのさ。

ああ、悔しいなあ、悲しいなあ。全ては帝国の糞共の手の平の上か……
せめて俺の呪いが世界の全てを滅ぼしますように。

俺は信じてもない神に祈った。あの変なジジイじゃ無く、もつと上位の創造神的なクソツタレの神様に。

そしていよいよスローモーシヨンの世界で刃は俺へと至った。

ギロチンの刃は切れやすいように鋭く斜めに角度が付いている。

だから、まずは真ん中の首ではなく木枷に嵌まった俺の左手を切断した。

——ブチン、ブチンと血管や筋肉、そして骨が切断される衝撃。

痛みは無い、脳が遮断してるのか、超スローの世界についていけないのか、もはや音も色さえも消えた世界で俺は、痛みも無く間近に迫った死を突きつけられていた。

ソレをただ、死んだ魚の目で見ると見えない現実。

ああっ、このまま俺は首を切られて……

俺が、全てを諦めたその時だった。

——ギイイイン

激しく金属が衝突する音が響いた。

同時に世界に色が、音が、時間が、戻っていく。

そして、ゴロンと俺の左手が目の前に転がった。

「嬢ちゃんっ！ 無事かつ！」

そして掛けられた渋い声。

——いや、誰だよ？

こう言う時は、もつと馴染みのキャラが助けに来るもんじゃ無いの？

えーつと、『参照権』あーつ、ブルンガつて豚顔の男。けつこう凄腕で知られた兵士で

俺が膝の怪我を治したんだつたか。

しかしどうなっている？ 俺には後ろの様子が一切解らない。ただ、声が掛けられた

のは殆ど俺の真上の位置。そして、凄まじい圧力にギリギリと悲鳴を上げるのが断頭台

だ。

そうか！ ひよつとしてこのブルンガと言う男が、今まさにギロチンの刃を押さえつ

けて止めているのか!?

落ちてくる刃を瞬間見切つて、横から押さえつけ止める等、何という神業だろうか！

……いや、違うな。そんな事出来るハズが無い。きつとコイツは断頭台に掛けられる

俺の身代わりにと飛び込んで、切られて死ぬつもりだったんだ。

そう、『死んでもお嬢ちゃんを守る』と、約束したその言葉通りにだ！

そして、間一髪間に合わず。しかし横から押さえつける結果となって俺の首は守られた！

いやいや？ それだって、本当に可能なのか？ ギロチンの刃は重い。特に今回の見せしめのため、俺には過剰なほどに、巨大で立派なモノ。

ひよつとして何十キロ、下手をすれば百キロ近い重量があるのでは？

それが勢いよく落下するのを、止めることなど可能だろうか？

と、切断された俺の左手首。見ればグロテスクな断面を晒しているが。そこからナニかが滑り落ち。チリンと高い音が鳴った。

——田中だ！ 針になった田中が！ またっ！

恐らくはブルンガが押さえつけて速度が緩んだ所、田中がその身で受け止めてくれた。

真つ二つに折れてしまった極太の針が、その証拠。

その事に俺の心は奮い立ち、手首からの出血でブラックアウトしかけていた意識が急速に戻る。

だが！ いまだに俺は動けない！ それどころか、超重量の刃が首筋に突きつけられる真つ最中！

ブルンガが力を緩めれば、細っこい俺の首など一瞬でへし折れる。

「邪魔をするな！ 死ぬ！ シネ！ しねえええ！」

「グッ！ があ！」

そして、カディナールの狂乱する声。肉が裂ける音。そしてブルンガの悲鳴。

ブルンガは刃を押さえつけ、動けない！ そこを斬りつけられているのだ！

状況が解った俺は、左手首が無くなったのが幸いと木枷から引き抜き――

カディナールの声ができる方へと振り抜いた！ 少しでも触れられれば、邪魔を出来ればと言う思いだったが、夥しい出血は存外の効果をもたらした。

「うっ、くっ」

カディナールが数歩後ずさる、ソレでヤツが俺の視界に入った。その顔は血に塗れている。

きつと俺の血だ！ 恐らくは目に入った。その程度の痛みでも、この王子には耐えられなかったのだ。出血多量で遠くなる意識の中、やってやっただ俺は笑みを深める。

そして、その数歩の後ずさり、奴を視界に収めたのは俺だけでは無かった様だ。

――ひとつ、乾いた銃声が響いた。

木村が放った弾丸はカディナールの腹を抉り、そのまま王子は力なく蹲った。

「お待ちを！」

そんなセリフと共に走り込んできた木村は、俺の左手が収まっていた穴をこじ開ける

ように銃身を突っ込む。

「お待ちを！」とかつて言われても困るんだが？正直、意味不明なセリフだ。だが、なるほど、テンパって見えても冷静だ。こうすればつつかえ棒になつて刃は落ちてこない。ついでに俺の首と木枷の隙間に細身のサーベルを突っ込んで、これで俺の命は守られた。

「嬢ちゃん、すまん」

それと、ブルンガの消え入りそうな声。そしてグシャリと倒れ伏す音は殆ど同時だった。

「ユマ姫様！大勢は決しました！勝利です！」

木村の報告もどこか遠くで聞こえる。血が足りない。

だが、その言葉は嘘では無いのか、多くの気配が俺の回りに集い。刃は持ち上げられ、俺を苦しめた木枷は遂に取り外された。

その作業と並行し、俺の脇は圧迫され簡単な止血が行わた。キツめのアルコールで傷口が洗浄された後、包帯がギツチリと巻かれる。

やっと解放された……木枷で頭の横に両手を固定される体勢は、実のところ肩に酷い負担が掛かった。いまをもって右手は痺れ、口くに動かさない。

……いや、もう片方は動かす手も無いのだ。

俺の体はどんどん欠損して行く。このままじゃ消しゴムみたいにすり減って消えて行くんじゃないかと自嘲気味に笑う。

そんな俺の視界にズルズルと引きずられていくカディナールが映った。

……うん、アイツもどんどんと削って行こう。幸いシャルティアが居る。お願いしたらやってくれるんじゃないかな？

などと、我ながらどす黒い笑みを浮かべて楽しい妄想に浸っていたが。まてまて、もう一つ仕事があつた。

「あの、ユマ様、お休み下さい」

心配そうに、復活したネルネが俺に駆け寄るが無視。

大勢の男が寄つてたかつて取り囲む中心へと分け入ると、血だらけで倒れる巨漢が一人。

「ブルンガ！ 死ぬんじゃないやねえ！」

大喝を上げ、力ない手を握るのは軍団長のソルダムさん。いやいや、最期に侍らせるのが火傷面のおっさんじゃ浮かばねえよ。

ブルンガを見る軍医は必死に止血し、脈を保とうとするが、希望は見出せない様相だ。ま、消えかけた運命光がなよりの証明だろう。

カディナールの剣技は大した物では無いのだろうが、無抵抗のままに斬りつけられ

ばあつという間に致命傷。むしろアレだけ良く耐えた。

「大義です、感謝します」

とか、言つてやれば良いのだろうが、残念ながら声が出ない。
逆に、俺の姿を見たブルンガが呻く。

「あ、う」

「喋るな！ 喋るんじゃねえ」

俺を見て、嬉しそうに声にならない呻きを上げ、それをソルダム軍団長が止める。

いや、もう手遅れだから喋らせてやれば良いのに。

あ、俺の魔法に期待してるんじや無いよな？ 無理だからね？ 喉が無くたってコツ

チが回復魔法欲しい位だよ？

だから精々、俺に出来るのはこの位。

俺はブルンガの横に座ると、そのほつぺたにキスをした。

「あ、よがつ、た——」

そして、ジャストのタイミングで運命光は消えた。

ほつぺたなのは、唇にキスする勇気が無かったから。ボルドー王子にすらしてないんだから、流石にね。

それで、仕事は終わったとばかりに俺は立ち上がって、スタスタと囲みを抜けて行く。

そんな俺の様子を、皆が呆気にとられた様子で見上げる。

どう思われたか知らんが、俺なりの手向けだよ。恐れられようが気味悪がられようが知ったこつちやないね。

ととつ、足取りがふらつく。そろそろ辛くなってきた。つてか、ヤバいな下手すりや死にかねないぞ？

力なくへたり込んだ所に、ネルネが必死に声を掛けるが限界だ。意識が少しずつ遠くなる。

——あ、コレヤバい！ 帰つて来れないヤツ。気絶常習犯だから解る。何時もと違う

！ 正真正銘ヤベーヤツ。

と、その時声が聞こえた。

セレナが呼ぶ声なら良かったのに、またしてもむさ苦しいおっさんの声。おっさんばっかり多いね。どうも。

「どけ！ 退くんのだ！ 通せ」

暗転しかけた世界。目の前に跪くのはエルフの男、ガイラスだった。

「治します。我が命を賭けて！ 『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給え』」

——あ、回復魔法。しかも他者回復はエリートにしか使えない高等魔法。使えたんだ、良かった……

俺は安心と共に意識を手放した。

王国の行方

俺は柔らかなベッドの上で目を覚ました。

ぼんやりと薄目を開けて、記憶を整理する。

ちやつちやつと整理するべきのだが、辛い記憶が多くて中々意識は浮かび上がってこない。

現実を受け止めるのを、意識が拒否している。俺は布団から引き抜いた左腕を目の前に掲げた。

——無い……か。

意識を失う直前、エルフの使者ガイラスが俺に回復魔法を掛けてくれたのを覚えている。

なので、目を覚ましたら腕がくっついていたと言う奇跡に一縷の望みを託していた。だが現実には厳しい。間に合わなかったのか、ひよつとして傷口がグチャグチャになっていたのか。

そうで無くても、切断面を結合するのは回復魔法を高度に使いこなす必要がある。ガイラスはエルフの国の特殊部隊の一員なのだろうが、医療の専門家じゃ無い。

あまり責めるのは酷だろう。

……だが、俺はこんな体で今後どうやって戦えば良い？

弓も引けず、片目で、喉を失い魔法も使えない。

それで前線に立って、兵士を鼓舞して。今度は右目か？ 右手か？ 足か？

こつびどくズタボロに犯されるのか？ 見せしめに吊されるのか？

それでも俺は生きたい。そうやって最期の瞬間まで戦って、一人でも多くの人間を巻き添えにしたい。

だが、逆に言えば俺にはもう、そんな生き方しか出来ないのだった。

『偶然』に頼った人間爆弾みたいな生き方しか。

その時、心の底から、魂の叫びが、思わず口を衝いて漏れ出した。

「——くやしいッ！」

………??

………えっ？ 俺の口からはしゃがれた声。喉には激しい痛み。でも！

「『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』」

しゃがれた声でも意味は通じる。魔法は発動し、ふわふわと光の珠が宙を揺蕩う。

使えた！ 魔法が！ コレなら俺はまだ。でも、弓が……いや、銃がある。

木村が使っていた銃なら片手でも撃てる、銃と魔法を組み合わせた全く新しい戦い方が出来るかも知れない。

だが……これ以上、木村を俺の戦いに巻き込んで良いのだろうか？ このままじゃアイツも『偶然』に殺される！

そうだ、木村とは一度、じっくりと話をしなけりやな……そうだ、いつそ。

と、その時、寝室の扉が控えめに開かれた。

「お目覚めでしたか」

「シノニムさん！」

俺はしやがれた声で、久しぶりの挨拶をかわした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そう、ヨルミさんが……」

「はい」

シノニムさんが語るその後の顛末は、意外なモノだった。

権力を忌諱していたヨルミちゃんがなんと国王になったのだ。

ま、カデザイナーは勿論ダメとして、第一、第二王女も謹慎。それどころか俺の復讐を恐れて引き籠もる有様だから消去法と言うことか。

人氣が無いどころか、知名度が全く無いヨルミちゃんだ。当然、俺がサポートにドサ

回りを重ねる必要がある。今から気が重い。

「つてか、ユマ姫が協力しないなら王位を継がず出奔するぞ！　とまで宣言してるらしいので、本人だつて嫌々なんだろう。」

「私を治してくれたガイラスさんはどうしました？」

「……………亡くなりました」

「……………そうですね」

「死んだらしい。」

「んー？　なんで？」

「ガイラス様の代わりに使者として訪れたエルフの方にお伺いしたのですが、エルフにとって、この地は魔力が薄く生きていくだけでもやっとなか？」

「そうですね」

「そんな場所で魔法を使うのは自殺行為と聞きました」

「コクリと俺は頷く。」

「どうして？　今までそんな事はおつしやつて無かつたではないですか！」

「私はハーフです、純粋なエルフとは条件が異なります」

「それについても聞いています。そもそもハーフでは魔法は使えないのが普通とか？」

「そうですね」

「結局、無理を重ねていたのではないですか！」

はあ……俺はため息をひとつ。心配してくれるのは良いが大きなお世話だ。

「見くびらないで下さい、私は王の血を引く者。そして神の意志を継ぐ者なのです」

「まだ！ そんなことを！」

いや、大マジだけど？ どちらかと言うと、ハーフの俺にとつて魔力が渦巻くエルフの王都での生活の方が酷だった。

だが、一種の高地トレーニングみたいなもんで徐々に高い魔力に体は適応。王族の血のなせるワザか、魔法も使いこなせた。

そして、記憶の回収によつて、本能的な魔力の扱いを覚えれば。俺はこの人間界でも魔法が使える特異点として完成していた。

逆に言えば、俺以外のエルフはココで魔法が使えない。無理して使おうモノなら死ぬ！ 文字通り。

「ですが、今や体に魔力が滾つて仕方が無い位なのです。この貫頭衣のお陰ですね」

「ええ、ガイラス様が残して下さいました。姫様の魔力に同調する様にあつらえてあるそうです」

寝ている間に着せられてたのはバジヤマだけではない、ガイラスさんも着てた魔力を補助する青い貫頭衣だ。仕組みは魔石を加工して、着る人の魔力と同調する様に加工し

て、細かく縫い付けてあるらしい。

同調しない魔力では、当然だが健康値で打ち消す事になり、逆に体調不良の原因にしかならない。

言うまでも無く、高度な技術を必要とする。今の情勢で作れるとは思えない。実際、どこかの倉庫から回収してきたとの事。

こんなモンが出てくるって事は、あらかじめ俺が出て行く事を両親はなんとなく察していたのかも知れない……

今となつては知れない、その真意に思いを馳せる。

……と、しみりしてしまったな。

「私の事はひとまず良いでしょう？ 他の情勢を教えてください」

「……承知致しました」

渋々と言つた調子でシノニムさんが答える。

木村は俺を辱める発言をしたとかで責任論が出てるとか？ ちゃんと庇つてやって欲しいとシノニムさん。

カデザイナーは最低限の処置をして取り調べの最中。これはアレだね、お任せして欲しいね。主にストレス解消目的で。

シャルティアは、罪状を考えれば問答無用で死刑なんだけど。証言を拒否しているら

しい。俺に言うことが有るとか。あー俺が殺す必要があるの？

と、そんな事より重要な要件があるだろう？

「死んだ？ ルージュが？」

「厳密には、生きては居ますが廃人状態とか。取り調べの最中、突然奇声を上げてそれきり……と」

「ふうん」

つまり、ルージュも操られていただけ。そう言う事だろ？

本命のヒントはシャルティアの発言にあつたはず。アイツも洗脳されたフリをしていたつまり……

「シャルティアが言っていた帝国の魔術師とは？」

「何しろ、シャルティア様は盲目でしたから。姿が解りません。声は憶えていらつしやるそうで、『目の前に連れてくればすぐに解る』と豪語しているのです」

「既にルージュの屋敷はもぬけの空と？」

「……その通りで御座います」

空振りか、後手後手だねえ。

それにしても……帝国の魔術師ねえ？ 何度も言うが俺は特異点だ、帝国に魔術師な

ど……いや？ まさか？

……考えても仕方が無いか。

「あの……」

俺がソファアールと一体化する勢いで、柔らかなクツシヨンに埋もれて色々考え事をして
いると、シノニムさんから控えめな声が掛けられた。

「実は本日の午前中にヨルミ様の戴冠式でして」

「もう、午後に差し掛かりますが？」

「ですから、お体に問題がないなら、午後のパレードに参加して頂けませんか？　ヨルミ
様と一緒に姿を見せれば市民も納得するかと」

「……ふうん」

一体全体、俺に無理をさせたくないのか、無理をさせたいのかちつとも解らんね。

ま、解るよ。結局社会のしがらみってヤツは、個人の体調など気にしちやくれな
いんだ。ブラックだね、全く。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は起きて早々にパレードの馬車に押し込められていた。

ワーワーと歓声が聞こえるが。馬車の中からも、盛り上がり欠けることが解る。

そんな様子を眺めながら、俺はお茶とスコーンを頂きながらホツと一息。

「何をまったりしてるんですうー」

階上から間延びした非難の声が掛けられる。ヨルミちやんだ。

この馬車は、アレだ、選挙カーをイメージして貰えば良い。階段があつて登ると馬車の屋根の上に出られる。

そこで国民に手を振りながら、大通りをぐるりと回つて新王のお披露目と言う訳だ。

そりやお祭りだから人通りは多いのだが、いまいち盛り上がりには欠けるのは明らか。俺が初めて王都にやつて来た時とは比べようも無い。

「あまり人氣が無いのですね」

「言うねえええ」

ヨルミちやんは額に血管を浮き上がらせて、控えめに言つてブチ切れている。やりたくも無い仕事をさせられた挙げ句。「お前向いてないよー」とか言われれば誰でもキレる。

「今まで人前にすら出てこなかったのですから、仕方無いのでは？」

「そりや、コレまではー、あんまり人氣が出ると暗殺の危険もあったしいー」

ふむ、典型的な本気出せばイケるってヤツだ。

「最低限、民衆の支持を集める方法は心得ていた方が良いでしょうよ」

「ほーん、お手本を見せて欲しいものにやー」

「良いでしょう！ 本当の人気取りと言うモノをご覧に入れましょう」

語尾が意味不明化してゐるヨルミちゃんとお上から目線の俺。そんな二人のやり取りを見つめるシノニムさんはニコニコしながら「仲が宜しいのですね」とか嬉しそうにのたまっているが、どー見てもハチャメチャなだけだ。大丈夫か？ この国。

と、まあ仕方が無いので俺は階段を上り馬車の上に顔をだす。

——ウオー——

——キヤー——キヤー——

——ワ——ワ——ワ——

悲鳴の様な歓声が一斉に上がり、耳をつんざく。

ふふっ、どうだねヨルミ君。コレが人気の差だよ。と、横のヨルミちゃんを見やれば、遠くを見つめ、ひたすらに心を無にしていた。

……まあ良いだろう。そのレイプ目みたいな瞳に俺の勇姿を焼き付けておけよ。

俺は満面の笑顔で周囲を一望。それだけで皆の心を鷲掴みにする。

今日の俺は、ウエーブの掛かった髪にちよつとゴスロリっぽいゴテゴテとした衣装でとにかく目立つ事が最優先。

ともすれば痛々しい眼帯も、ちよつと中二っぽいデザインで逆に格好良く見えるんじゃないか？

そして、皆の歓声に応えるように左手を高く上げると、優雅に手を振った。

「……………」

——シンツと、先ほどまでの熱狂が嘘の様に、静寂が訪れる。

そう、俺の左手は『無い』のだから。

ハツとした様子で、俺は無くなってしまった左手の先端を眺める。

青い顔で果てしない絶望の表情を浮かべるも、ソレは一瞬。すぐにちよつと困ったような、はにかんだ笑顔を浮かべ。代わりに右手をブンブンと元気よく振り回した。

——ワアアアツ

悲痛な熱狂が、人々を支配していく。「何故、世界はこんな幼気な少女に過酷な試練を与えるのか」「俺なら、命を賭けて守ってやるのに」

人々の表情から、そんな声が聞こえて来そうなほど。

目を瞑れば、膨れ上がっていく俺の運命力がハツキリと感じられ、なかなかにご満悦。「やり過ぎじゃ無い?」

そんなヨルミちゃんの苦情は無視。仕方無いので彼女と腕を組んだり、顔を寄せ合ったり。親密さをアピールして過ごす。

声優さんの百合営業みたいな感じか？ 全然違うな。

と、まあこんなもんで良いだろう、ここらで引つ込もう。俺は急勾配の階段を降りようとする。

この手の階段、正直上がるより降りる方が怖い。慎重に慎重を期して――

――ゴロゴロググシャツ！

俺は盛大に階段を転がり落ちた。

ちやうねん、手すりをガツチリ握ったつもりだったんだって。そしたらまあ、左手が無かったんだなあ。

「大丈夫ですか？」

当然、シノニムさんが大慌てで駆け寄ってくるし、その痛ましい様子に。ううつと鳴咽を漏らす兵士まで。

そして、屋根上からはちよつと戸惑ったヨルミちゃんの声が聞こえた。

「そ、そこまで徹底するの？」

……そう言うことにして貰おうか！

木村の試練

ユマ姫に呼び出され、俺はひとり王宮を訪れていた。

現在ユマ姫は王宮で暮らしている。王宮に今までの様な危険は無いし、女王ヨルミ様はエルフとの同盟を検討している。

正式に国の賓客として扱われる事になったユマ姫にとつて、一貴族でしかないオーズ様の屋敷にこれ以上留まるのは、政治的な弱点リスクとなりかねない情勢だったからだ。

新しく王宮に設えたユマ姫専用の私室。そこに案内すると言う話で、当然何人もの招待客が居るモノと思われた。

私室と言つても、ちよつとしたパーティーが可能な程に豪華な部屋を想像したからだ。

……だが。

「……、ですか？」

「はい、コチラへお連れする様にと」

見知らぬメイドさんは王宮付きの古株だろう。いつもの二人では無いので気安く話し掛けられる雰囲気では無い。

だが、この場所は？ 客間を抜けた二階部分。部屋のレイアウトってヤツは大体同じなのだ、今生は勿論前世を含めても。

コイツは明らかにパーソナルな場所。少なくとも未婚の女性が未婚の男性を軽々しく案内して良い場所じや無い。

——本当に？ そんな俺のジエスチャーに「どうぞ」と言うジエスチャーで返すメイドさん。

仕方無く、俺は豪華な扉と向き合うハメに。

扉は加工性の悪い重厚な広葉樹の無垢材を根気よく削り出したモノで、緻密な装飾が施されている。加えて表面は丹念に磨かれて艶々と輝いて見えた。

これだけの一品と比べれば、我が商会本部の執務室や応接室の扉だって一段劣る。

それらは男の戦場として舐められない様、かなりの大枚をはたいたにも関わらずだ！ 高級な扉と言うのはそう言った場所にこそ使うもの。

男なら執務室。女なら……

俺は覚悟を決めて、扉を押し開いた。

目に飛び込んで来たのは天蓋付きの豪華なベッドだ。

——やっぱり、と言う思いと。苦々しい慚愧の念が募り、俺は一步も動けないで居た。

「何をしているのです？ こちらへいらして下さい」

ベッドから、少ししやがれた声が響いた。その声を聞いただけで俺は途轍もない罪悪感に打ちのめされた。

「いえ、私はこの場より失礼します」

まさか、寝台に近づくと出来はしない。下手をすれば間男として処刑される案件だ。

だが、ベッドからは続いて不満げな声が掛かる。

「私の声が解りませんか？」

そう言つて天蓋幕を割つて現れたのは、当然にユマ姫だった。その姿は

——姿は？

「な、何なのですか？ その格好は!？」

「? 貴方が贈つてくれた衣装でしょう?」

贈つた、贈りはした。

だが、半ばセクシャルジョークと言うか、シノニムさん辺りに除去されて届かないものと思つていた。

「可愛く……無いですか？」

「い……いえ」

逆だ! 可愛すぎる!

今までの罪悪感がどうか、そんなモンは一撃で吹っ飛んで脳みそがピンクに染まっています。

それだけの威力があるのだ！

バニーガールと言う魔物には!!

その圧倒的魔力に、俺はフラフラと誘引されてしまう！

が、少女が眼前に迫った時に。逆に俺の理性は危険を訴えてきた。

「? どうしたのです?」

「い、いえ」

小さい体に、控えめな胸。まだ幼い体だからこそ、犯罪臭が強烈に過ぎる!

何よりこの世界で肩を出すのは極めてはしたない、過激なファッションなのだ。

「あ、あの……そ、の衣装はですね」

「なんです?」

自分を安売りしちやいけないと、肩に手を置いて、膝を折って説得しようと思ったが、まずッ!! その肩に手を置けないッ!

もし、手で触ってしまったら穢してしまう! それ程に尊い。

「良かったら、中に入りませんか? 余人にこの姿を見せるのは……その、恥ずかしいです」

「あ、ハイ」

な——にが、「あ、ハイ」じゃ！ なっさけねー もう完全にテンパってしまいましたあ！

中？ 中って？ 腔なかに出すぞ！ 的な？

って？ どの中？ と、幕を割って入って彼女が招待するのは？

「どうぞで」

って、天蓋の中アアア！

そこに男を招くと言うことは？ 言うことはああ？

俺はフラフラと天蓋に入る！ 入ってしまおう！ 二人でベッドに腰掛けるう！

「あの、私、こう言ったことは初めてで……リードして下さいますか」

「は、は、ハイ」

いや！ ハイじゃねーよ。理性よ来い！

地球のみんな！ オラに素数の力を分けてくれ！

など、ひとかけらの理性をかき集めていたのだが。

「あの……この衣装、私には胸の部分のボリユームが足りませんよね」

胸元を開いて、ジツと見つめるユマ姫。

ん、理性がログアウト。

俺は綺麗なルパンダイブで少女を押し倒そうとして……

「コホンツ、す、スイマセン」

痛々しい咳の一つで、俺の理性がカムバック。

——馬鹿かよッ俺は！

「あの……裁判の時、ユマ様の体を自由にしたいとか。他にも下劣な事を口走りましたが、全ては処刑を引き延ばす策。決して私の本意ではありません」

「そう……なのですか？」

「……はい」

嘘です！ 本当は色々な事したいです。でも、でもやっぱりその、初めはホラ、映画館でデートとかそう言うのからスタートしたいじゃん？

それにしても……、何故彼女は俺に媚びを売る？

何が彼女をココまで追い詰めた？

「無理はしないで下さい、こんな事をせずとも、私は貴女の味方です」

「そんなつもりはありません。ただ、私は貴方のことが……」

「それで、私と結婚したいと？」

「それは……」

「違いますよね？ だとしたら、貴女の悪い風聞を流してしまった私に貴女を抱く権利

はありません」

そうだ、今や彼女は国の重要人物。エルフとの同盟を強固にする意味でも有力貴族と婚姻すべき。だが、その障害になるのは俺が口走った悪評だ。だからこそ、彼女の処女には価値がある。

他ならぬ、俺が散らしてしまつて良い物では無い！

後悔に押しつぶされながら、俺は固辞するしかない。

……だが。

「ダメですか？ たった一晚の過ちを求めてはいけませんか？ どこかの豚みたいな貴族の男に抱かれる為に、私は生まれてきたんですか？ それが王族として生まれた者の務めですか？」

ユマ姫は俺に抱きついてきた。小さい体で、無くした左手。力は強く無いけれど、ギョツと押しつけられた体には確かなふくらみ。

——理性がゴリゴリと削られる、だが俺は大人としての責務がある。

今度こそ、俺は彼女の肩を掴んで引き剥がす。

「無理は……しないで下さい」

「そんな！ 私は、アナタが好きただけなのに！」

うひょー肩もやわらけーし、手に吸い付く肌のなめらかさたるや！

はらはらと泣きはらす、その涙の痛々しくもいじらしい事。

こぼれる涙と輝く髪が光を反射して、神々しく輝いて見える。

……だけどな、綺麗すぎるんだよ。

「あの……」

「なんですか？ わたし、どうしたら良いですか？」

必死に縋る、その姿は美しい。

「……」

「……………」

沈黙する俺に彼女はコテンと首を傾げる。その仕草も可愛らしい。

……が！

「嘘泣きですよね？」

「……………」

そう、俺だっついていい大人。子供の嘘ぐらい見破れる。

いや、男だったら誰だっつて騙されるし、騙されてやるものだ。酷い男が居たモノだと自分でも思う。

だけど、こんな少女が自分を傷つける為の嘘だけは。指摘しない訳には行かないだろう？

俺だって、決死の覚悟が必要だった。

対して彼女はどうか？ 俯いて真っ赤になってプルプル震え、必死に何かを堪えていた。

「きゅ……」

「きゅ……」

「着替えてきます!!」

怒りの表情も露わに、ドスドスと音がしそうな足取りで、奥の扉へ向かっていく。

「ふう……」

残念な気持ちで一杯。でもコレで良かった。

俺が彼女を穢す権利は無い、もし、そうしてしまつたらきつと大切なモノを失つてしまふ。

俺がそうやって一息ついていた時だった。

いや、ベッドに腰掛けたまま、一息ついていたのが良くなかった。俺だって一杯一杯だったのだ、だからこそ天蓋の中、一步も動けず中に居た。

その天蓋幕が再び開かれる。今度は豪快に。

「失礼!」

そう言つて、再び入つてきたのは当然、ユマ姫だ。今度は紫のラインが入つた美しい白銀のドレスに身を纏い、高貴な雰囲気をも身に纏っている。

いや、変わったのは服だけじゃ無い。表情からは媚びた部分が抜け、代わりに凜とした気高い精神を滾らせていた。

まるで別人になつた様。いや、コレが噂に聞くアレか。

ユマ姫の人格の使い分け。先ほどの幼気な少女の様に見せかける狡猾な女性の顔こそが噂のソレかと思いきや、さらに高潔な貴人としての人格が裏に隠れていた。

コレでは普通の男は幾らでも手玉に取られるハズだと、見破つた俺には余裕の笑みが浮かぶ。

そんな俺の余裕も、彼女が次の言葉を発する迄だった。

ユマ姫は勢いよく俺の隣に座り、ジツと真つ直ぐな瞳で俺を見つめて、一言。

「私を犯して下さい」

「ふあ？」

笑みが固まる。大人の余裕は場外ホームラン。

「手切れ金代わりとでも思つて下さい。今までアナタの商会を専属として利用してきましたが、コレからはそう言う訳には行きません」

「存じております、が、その為に貴女が体を差し出す理由は無い」

「他ならぬ、私が許せないのです。一番辛い時期を支えてくれたアナタに報いる術が思いつかない」

「そんな！」

彼女は間違っている、報いるも糞も無いのだ。

「報いなければいけないのは私です！ 貴女のその腕も、喉も、私の所為で失われてしまった！ 私は命を賭して報いなければいけないのに！ 私は！」

俺は、あの時、動けなかった。

ギロチンの刃が落ちる時、銃弾に撃たれるのも、刃に断ち切られるのも厭わずに駆けつければ、俺の位置からならば彼女を守れたはずなのだ。

なのに俺は動けず、ブルンガと言う男が彼女を守った。

ユマ姫のキスで安らかに死んでいくブルンガが、俺は羨ましかった。

あんな風に死ねたらと、多分、あの時、あの場の、全ての男が、同じ思いだったのだ。俺が頭を掻きむしる程の後悔と懺悔に塗れていると、ユマ姫は優しく俺の肩を抱いた。

「気にすることはありません、結局、あのままではギリ貧でした。全ては上手くいったのです」

「だが！ 貴女の体は？」

上手くいった？ その勘定に貴女の体の被害は入っているのか？ 自己犠牲も大概にして欲しい。だが、俺の気持ちは別の意味で取られてしまう。

「そうですか……不具の女はお嫌いですか？」

「ちっ！ ちがッ！」

「違うと言うなら、ソレを証明して下さい」

「ですが！」

俺の抵抗を遮る様に、彼女は俺の服のボタンを外していく。

……だけど、片手ではそれすら上手く行かない。もたもたした手つきでボタンを外そうとする仕草は、言い表せない程に痛々しく見ていられない！

「止めて、下さいっ！」

「なぜ？」

「もし、貴女が褒美として抱いてくれるというのなら、私が命を賭けて貴女を守った時にお願います！ 今の私に、その権利は無い！」

そう、あの時のキスの様に。

そう言うのと、姫は呆気にとられた様子で笑った。

「そうか、頑固よの」

呆れた様子でそう言うと、彼女は急に、ガクリと俯いて脱力した。

? なんだ? 急に?

「あの……」

そして、控えめに、上目遣いに話し掛けてくる少女の顔は、また違った物だった。

——また人格が変わった?

「なんです?」

「ひとつ、お願いしても良いですか?」

自信なさげな表情、媚びとは違う、窺う様なその瞳は、この位の少女が俺の様なオジサンに話し掛ける時としては、ひどく自然な表情では無いだろうか?

鎧の様に纏った人格を剥いていった後には、年頃の少女らしい顔がそこにあつた。

これが! コレこそが本当のユマ姫なのだ! やつと彼女に辿り着いた!

俺は柔らかな笑みを浮かべ、頼れる大人を演じて答える。

「勿論です、貴女の為になる願いなら。私は何だつて叶えてあげたい」

それはもう、命を賭けて。俺は心の中でそう付け足す。

だが……俺は、思い上がっていた。

彼女の本心をやつと探り当てたぞと。

或いは、どんな手段で今度は口説いてくれるのかと、楽しみにしていたのかも知れない。

軽々しく、何でもと言ったことを、俺は後悔することになる。

彼女の覚悟は、俺の及びも付かない所にあつた。

よく見れば、その瞳は年頃の少女に見えて、凧いだ湖面の様に澄んでいた。

「じゃあ……………」

彼女の笑顔は、吹っ切れた様な、とても清々しいものだった。

「私の事を、殺して下さい」

「……………」

「ころして？ なぜ？ なにをいつている？」

「なぜ……………」

俺の疑問は、そのまま口を衝いて出た。

「なぜって、決まっているじゃないですか？」

泣きそうな顔で彼女は笑った。

彼女は自分の体について語る。

——まるで、歌う様に。

「千切れた私の左手は、毎晩、幻肢痛が襲います」

「喉は喋るだけで鋭い痛みが走り、たまに血が出ます」

「残った右手も良く指先の皮が剥け、痛みが走ります」

「肩の関節は、すぐに外れて激しい痛みをもたらします」

「食いしばり過ぎた奥歯は、ひとつ砕けてしまいました」

「足も、魔法での無理な移動が祟って、走ると変な痛みを感じます」

「無くしたはずの左目が、時々、猛烈に痒くなります」

「片目なので遠近感がわからず、良く何かにぶつかります」

「舌は、ボロボロで本当は味なんて解りません。オイシイと嘘をついています」

「内臓だって、ろくなものじゃありません。痛みを感じるのが恐いです」

「後悔と激痛に寝れない夜は、自分で体を痛めつけ気絶して眠ります」

「動かない体を、魔法で無理矢理動かしています」

「それでも、生きなくてはなりませんか？　それでも、戦わなくてはなりませんか？」

「それは、いったいどんな呪いでしょうか？」

満面の笑顔で、彼女は笑う。

そして、すぐる様に、ねだるのだ。それが最後の希望とでも言う様に。

「ねえ、はやく、わたしを、殺して」

………俺は、俺は、

解っているつもりでいた、見れば解る事ではあった。

でも、どこか、超然とした女神の様に彼女を見ていなかったか？

狡猾な女性としてのベールや、高貴な姫としてのベールを剥ぎ取れば！

当然ッ！ こうなるに決まって居るでは無いか！！

何故、無遠慮に彼女の鎧を剥ぎ取った？

なんだ俺は!? 一体、全体ッ！ 何がしたかったと言うのだ？

「アッ……グッ」

言葉が出ない、大人らしい、安っぽい励ましの言葉が出せない。

ただ、彼女はジッと俺の事を見つめてくる。何かに期待して。

何に？ そんなのっ決まっている？

でも、出来ないッ！

グニヤリと視界が歪む、呼吸が出来ず息苦しい。

何か言わなきゃいけないのに！ 言葉にならない。

果てしない沈黙の後、絞り出せたのは陳腐な言葉に過ぎなかった。

「死ぬのは、何時でも出来るのではないですか？」

「果たして、そうでしょうか？」

俺の必死の一言は、少女は当然の様に織り込んでいた。

「死ぬべき時に、死にたい様に死ぬることは幸せな事です。先日のブルンガさんの様に
だったら、私は、アナタに殺されたい」

それは、絶望的な愛の告白だった。

「アナタだから良いのです、アナタでなくてはダメなのです」

「な、ぜ？」

「理由が必要ですか？ 田中さんが死んで、ボルドー王子も死んで、私にはアナタしか

残っていないのです。もし、アナタまで死んだら、私はどうやって死ねば良いのですか？ 一人で寂しく、ギロチンの刃で死ぬべきですか？」

そんな……そこまで、追詰められていたならば。俺は彼女を抱くべきだったのか？ そんな俺の後悔すら、彼女は許してはくれなかった。

「もし、アナタが抱いてくれたなら。私は一人で帝国に挑み。死に行くつもりでした」
「なっ!？」

「アナタの為に何かをして、アナタの中に何かを残せればと。勿体ぶって指一本触れさせないままに、今度はアナタまで死んでしまったら？ 今度は自分で死ぬ事も出来ない。狂った様に、命が尽きるまで、全てを巻き添えにして、戦い続けるしか無くなってしまう」

彼女はジッと俺を見つめる。

「私は、それが、恐かった。人は何時でも、自由に、死ぬる訳では無いのです」

彼女の言葉に俺は完全に打ちのめされて、結局、最後には自分勝手な利己的な思いしか残らなかった。

「貴女が居ない世界で、僕は、どうやって、生きていけば良いのですか？」

俺は泣いていた。絶望と、悲しすぎる世界に恨みを込めて。

だが、そんな俺の言葉すら、彼女はお見通しだった。

「でしたら、私を殺した後、アナタも死んで下さい」

「それは……」

「その棚にある香水。中身は毒、それも死チリアム苔茸です」

「そんな！ どこから？」

「知り合いが持つていまして、ですが、私は毒では死にたくない、アナタに絞め殺して欲しいのです」

「絞め殺……な、なんで？」

「最期の瞬間まで、アナタの顔を見ていたい。それだけです」

あああああー

そこまで言われて、そこまで言わせてツ！ 俺はツ！ 俺はあああ！

俺は、彼女を、ユマ姫をベッドに押し倒していた。

彼女は幸せそうに、ゆっくりと目を瞑る。

でも、それはキスをせがんでる訳でも、犯される事を望んでも無い！

俺は、ゆっくりと、その首に手を掛けた。

「んっ」

色っぽい声が漏れた、だけど、これから起こるのは艶っぽい事じゃ無い。

俺は……ゆっくりと、その指先に力を込める。

しっとりとした喉に、ゆっくりと指が埋もれていく。

「カハツ」

苦しいハズだ、だが、彼女は幸せそうに。でも少しずつその顔は赤黒く、やがて蒼白に染まって……

……

……

……

俺は、ベッドの端で泣いていた。

泣けども泣けども、涙は尽きなかった。なんで俺はこうもダメなんだ？

俺は、自分が情けなくて。もうこれから生きていても、何も出来そうにない。

俺は——結局！

殺せなかった!!

何故？ ここは綺麗に心中するシーンだろ？ もうダメだ、自分が情けなくて許せそ

うにない、もう一人で毒をあおって死のう。

「殺しては……くれなかつたのですか？」

……そこに、目を覚ましたユマ姫の声が掛けられた。

なんてこと、くそう、きつと幻滅した。最期の期待まで俺は、裏切ってしまった！

少女の最後に残った、たった一つ、どんな人間にも許された、最期の救い。

それすらも！ 俺は！

せめて罵つて貰えれば、いや、俺にそんな価値すらない。ゴミの様に死ぬしか。

と、毒を手にとつた時だった。

「はぁー……」

品の無い、糞デカため息。

俺を見限つたのだから当然なのだが、あまりにあんまりで、俺は耳を疑つた。

なんだろう？ 言うなれば、次々と少女の纏うベールを剥ぎ取つて。やつと、生身の少女に出会えたと思つた。

そして、更に生皮まで剥がれてしまい、見てはいけない不気味な骨の怪物が飛び出して来た様な不吉な予感。

『ヘタレが！』

そう、俺はヘタレ。

でも、それは『日本語』だろう？

『クソツ、俺の負けだ』

は？ 何だ？ 何が？

『俺だよ、高橋敬一だよ』

意味がわかんねーんだが？

『面倒くせえし、お前に殺して貰って。それで終わりにしようと思っただがなあ』

「なっ、なあー」

『なっ？ 夢つてのは綺麗に終わった方が良いんだ。男二人でみすぼらしく死ぬ事になるぜ？ お前の所為だからな！』

悪戯っぽい笑顔は、あーそうだね、アイツのものだ。

『えっ？ 騙したの？ ココまで黙ってる必要無くない？』

目頭を押さえて俺は抗議するも、情けない姿を晒したのは俺だ。

『だーから、可愛い女の子と心中させてやろうとしたんじゃねーか、はー糞ッ！ ヘタレチンポ！』

その顔でそう言う事、言わないで欲しいねー。

「あー」

俺はベッドに飛び込み顔を埋める、そうか、そう言う事か。確かに年齢的に、計算は合うのか？ 碌でもねーな！ コイツはよー！

「ハハハハハッ」

「フヘヘヘッ」

俺は、俺達は、ひとしきり笑った。

「で、コレからどうする？」

そして、アイツはそんな事を聞いてくる。

「どうしたいんだ？」

「そりゃ、俺は帝国と戦うさ、仇だからな」

「じゃ、付き合うよ」

「んな必要ねーだろ？」

「そもそも、この人生を俺は持て余しているんだよ。ロスタイムにしちゃ長すぎる」

「そーかよ」

「そーだよ」

ベッドで大の字になって、二人で笑う。デカイベッドなのもそうだが、今のコイツが小さすぎるのだ。

「じゃ、派手に内政チートして帝国をメッタメタにすつか」

「俺は既にやらかしてるけどな」

「今度は国ぐるみでやれんだろ？ ヨルミちゃんに言えば大体通るぜ？」

「そうだな」

二人で話し合えば、大体の事は何とかなるだろう。だったら、何故コイツは心中なんてしようとした？ いや、そうか、そうだな。

俺の気持ちを悟ったのかユマ姫は言う。ユマ姫の澄ました表情でだ！

「でも、良いのですか？ 私の『偶然』で、きつと碌な死に方は出来ませんよ」

「今更、その口調はズルいだろー、くそ、解ったよ。覚悟の上だ」

そう、俺にメインヒロインと悲劇的な死なんて許される訳は無いんだ。

コレでいい、二人して絶望的な死に向けて、戦っていこう。

コイツは俺の覚悟を試す様に、俯いていた俺の顔を覗き込む。

「言つとくけど、ほんつとーに禄でも無いぞ？」

「痛いのが手なんだよな……」

「俺だつて得意じゃ無かつたけど、慣れちまったよ。でもな、上には上があるぜ？」

「ん？」

「カダイナルな、殺したんだけどさ。回復魔法を使いながら、死なない様に死なない様に削って行くとき、いや、こんなちっちゃくなるまで生きてるモンだね」

「お前、何言ってるの?」

ドンツ引きなんだが? 狂ってるだろコイツ。

その両手で大きさを表現するのヤメロ、え? 嘘だろ?

「イライラをぶつけるつもりだった、そして同時に、俺は覚悟を決めるつもりだったんだ。最高にキツイ死に方ってヤツを見て、こうなっても折れないぞって、でもな」

「逆に、今すぐ、死にたくなつた?」

真つ青になって、コクンと頷く様子は可愛かったが、中身はアレだと思うと何とも言えない。

「で、いつそ木村に殺して貰おうってな」

「オカシくない?」

「犯してくれないんだもん、そしたら、しがらみを捨てて一人で死に行くつもりだったのに」

「はあ……」

「お前、解ってるの? 田中だって最期はグチャグチャのハンバーグみたいに死んだんだぞ?」

……そつか、お前が本当に恐れたのは、酷い死に方をする自分じゃなくて、酷い死に方をする俺を見る事か。

しやーない、覚悟を決めますか。

「まーそーなつたらそーなつた時だ、田中の形見、あるか？」

「あるぜ、流石に寝ようって時に他の男の形見を付けるのはどうかと思つて外してたが」
「そう聞くとキツいなオイ、取り敢えず出せや、田中も交えて打倒帝国の誓いをあげようぜ」

俺の言葉に、ユマ姫はベッド脇の戸棚をゴソゴソと漁る。その可愛いお尻を見て、なんとも微妙な気持ちになった。

「ほらよ」

「ととつ、ホントに俺の弾丸を包み込む様に絡まつてるのな」

「ああ、守つてくれたんだ」

「そっか」

俺はそのオブジェを光に翳す。なんとも、不思議な感覚があつた。

「それ、持つててくれよ」

「良いのか？ いや、解つたよ」

俺がコイツを持つてる事で、お前が安心して過ごせるなら、田中も喜ぶだろうぜ。

「よっしゃ！ 吊い合戦だ！ ハチャメチャやつてやろうぜ！」

「おー」

「元氣よく右手を振り上げる、その様子が可愛い。いやー詐欺だね。

「で、まずは手始めに」

「手始めに？」

グイツと食い気味に高橋が、いや、ユマ姫が身を乗り出す。

聞いて驚け、これが打倒帝国、渾身の一手。

「おっばい揉ませてくれ」

「……は？」

沈黙。答えは何時だってコレ。

勢いで「おー」とか言ってくれなかったか。

「おっパオ揉ませて下さい」

「言い直してもダメだろ!? アホかよー」

「おっばお、おっばい、おっばれ」

「ハチャメチャやるってそう言う？」

「軽く、ふにふにつて頼むよ、サイズ確認とかしておきたい」

「いや、さつきやれば良かったら？」

「さつきは、幼気な少女が無理してる感じで罪悪感があつたけど、今ならホラ、男同士で

キンタマのサイズを確認する感じでホラ」

「お前、そう言うの大っ嫌いだったよな？」

「ところ変われば品変わるってね、何なら今、確認する？ 俺のサイズ」

「キチガイかよッ！」

俺は、今度こそ少女をベッドへと性的な意味で押し倒した。

俺は今こそ神に祈ろう、日ごとの糧に感謝する大事な祈りを。

俺は合掌して、その言葉を唱える。

「いただきます」

「いや、殺すよ？ フツーに殺すよ？ それでも良いからね俺は！」

うーん、俺もそれで良いけど？ 殺してみてよ。

……いや、これだけ良い様に騙されて、今後の友情がさ、ピンチでしょ？ 一生マウ
ント取られるのが目に見えてるからね。

そりゃーオツパオの一つや二つ、揉み揉みしてコリコリしてほぐす権利あるっしょ？

そんな俺の『お楽しみ☆タイム』は無粋な乱入者によって打ち切られた。

いや、本気じゃ無かったけどね？

「たいっへん！ 大変です！」

重厚な扉がパワフルな体当たりでブチ開けられた。鍵はしてなかったしね。

「あつ！ う！ 失礼しました」

暴れたことで天蓋幕は吹き飛ばされていたから、扉の位置からも姫を押し倒す俺の姿は露わ。こつれつは、あられもないね！

真つ赤になつて頭を下げるネルネちゃん、それを押さえつける様に引つ張つて行くシノニムさんが見えた。

が、それを止めるのは我らがユマ姫だ。

「お待ち下さい、じゃれ合つていただけです、話して下さい」

「え？ でも……」

チラチラと俺を見るネルネちゃん、うん、着衣は乱れてないから安心して欲しい。

「早く！ 寝室に飛び込む程に重要な事でしょう!？」

「ハッ！ ハイイ！ あの……」

「なんです?？」

「今つエルフの使者の人が来て！ あのつ、エルフの国が、奪還されました。帝国は撤退。エンディアンの都は解放されたとの事です!？」

「嘘っ!!」

俺も声を上げかけた、早過ぎる！ 帝国は魔力を消す霧頼みの占領だったので長く占領状態は続かないとは聞いていたが、物資を運び出したり反撃の芽を潰す為に、もつと頑張つて占領しなければ意味が無いのだ。

「どうして？ 何が起こりました？」

「それが……たつた一人の英雄が、帝国兵をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、あつと言
う間に都を奪還して見せたとか？」

「そんな！ まさか！ そんな事、ありえますか？」

驚愕するユマちゃんだけど、俺は話の先が見えてきて、正直お腹が痛くなってきた。

「それですね、その英雄の名前が『タナカ』って言うらしいんですけど。コレってあの
タナカさんですよ？ こんな珍しい名前！ 偶然じゃないですよ？ 生きてたん
ですよ！」

「……………」

そんな気はしてた。それで、話の途中で目が泳ぎだしたシノニムさん、短い付き合い
だけらしくないよな。こりや、なんか知ってるね。

で、俺にはいつこ、真っ先に確認しなくちゃいけないことがあるんだ。

「あのユマ姫、この田中のメガネの残骸ですが、お返ししても良いですか？」

「あつ、捨てといて」

で、で、で、ですよね……！

シヤリアちゃん♪

「状況を整理しましょう」

俺は喉の痛みをおして声を上げる。ちなみに、敢えて痛めつけている。なぜかってーと傷口が開く度に回復魔法を使う作業を日ごと繰り返す事で、喉の肉は徐々に盛り上がっているからだ。

だからまあ、肉体的には言うほど絶望的な状況では無いのだ、舌だつてちよつとずつ味が解るようにはなっている。ま、流石に目や腕はどうにもならんけど。

場所は変わらず、無闇に豪華な俺の寝室だ。黒歴史の極致になるはずだった場所だが、幸か不幸か俺はまだ処女だし、死ぬ事も出来ないらしい。

「取り敢えず、そのエルフの使者に、詳しい話を聞くことは出来ますか？」

そんな俺の問いに対し、大理石の床に正座させたシノニムさんが控えめに手を上げる。

「お言葉ですが、エルフの使者は帰してしまいました」

「なぜ!？」

「本日は二人でお楽しみと聞いていたものですから」

そう言つて、俺と木村をチラチラと見比べるシノニムさん。

……うん、そうだね。

しやーなし！ でも、俺が怒つてるのは田中の事、別に理不尽に床に座らせているの
では無いのだ。

と、シノニムさんを問い詰める、その前にだ。

「でしたら、まずはキイムラ男爵に私が個人的に雇つた新しいメイドさんを紹介させて
頂いても？」

「これはご丁寧な、しかし個人的とは？」

「シノニムさんはオーズド伯付きで、ネルネは中央の侍女ですから、私が私的に雇う初め
のメイドと言うことになります」

「……………」

何かを察して、「うわあ……」と言う声が聞こえて来そうな程に嫌な顔をする木村。勘
が良くて困るね。

「シヤリアちゃん出て来なさい」

「はい」

可愛らしい声と共に、部屋の奥の小部屋からフリフリのメイド服にツインテの女性が
現れる。

キッツツツイ！

「あの？」

「質問は受け付けません！」

「いや、お待ちを。どう見てもシャルティア嬢じゃないですか？ 処刑されたと聞きま
したが？」

「シャルティアは死にました、別人です、シャリアちゃんです」

「さいますか」

木村は諦めも早いので助かる。

「ダックラム家は公爵から一気に子爵まで降格。実行犯のシャルティアは処刑。後は罰
金刑で済ませました。家ぐるみの犯行では無く、シャルティア個人の凶行、それだつて
カディナールの命令で仕方無く、と言う事にしたので妥当でしょう」

「大変な恩情処置だったと、噂で聞いてはりましたが……」

「因みにその沙汰を私の代わりに読み上げたのが、シャリアちゃんです」

「うわあ……ととつ、それは……さぞや見物であったでしょうね」

「面白かったですよ。娘は処刑しました。で、泣かせてからの、あなた達の処分を発表し
ます、で、現れたのがコレですから」

「いえ〜い♪」

「シャリアちゃんや、何が「いえ〜い♪」なんだい？ 君のお父さんは泣いたり喚いたり、笑い出したり大変だったじゃない？」

それを淡々と無表情でたしなめる君を見て、俺は究極のサイコパスを見る思いだったね。

「ま、やらせている俺が一番のサイコとヨルミちゃんに言われたけども。」

「あの……やはり、幾つか質問宜しいでしょうか？」

渋面の木村から、再度質問を要求される。仕方無い……

「良いでしょう」

「まず、シャリアちゃんの目、治っていませんか？」

「何の話です？ シャリアはシャルティアとは無関係ですので」

「それはもう、良くないですか？」

「……針で刺したただけだったので、回復魔法をかけてみたら治りました」

「魔法ってヤツは……次の質問ですが、どうして奥の部屋に居たのです？」

「そりゃ、この腕ですから一人では着替えも出来ませんし？」

「ん？ ちよつと待つてください。ずっと奥の部屋に居た？」

「そうですか？」

俺の答えに、ぎゅーつと木村が目頭を押さえる。

「え？ 大丈夫ですか？」

「何がですか？」

「殺されませんか？」

「私を殺そうとした人が、それを言いますか？」

「いや!! 命じたのはあなたですよ？」

このやり取りには流石にネルネやシノニムさんも仰天し、質問や非難が相次いだ。そして色々話しあつた末に出た、俺の結論を言わせて貰おう。

「みんなして私を殺そうとする癖に、いざ殺しても良いよ！ つて言うとな殺さないんですよね」

「メチャクチャだー！」

抗議の声は受け付けない。

エロいことばっか言ってる癖に、実際にエロい事しようとする尻込みしちゃう耳年増の女の子みたいな感じだと俺は判断しているよ？

ま、俺もシャリアちゃんのリスクは承知の上。それでも俺の『偶然』の性質を考えるのと、これだけの特殊な人間に守られるのは意味が大きい。

それにシャリアちゃん相手なら、多少ヤバイ事を漏らそうとも問題ない。そもそも噂話をする相手も居ないハズ。それでも面倒な事態になるようなら、いつそ殺してしまつ

ても誰からも文句が出ないと言う、メイドとして究極の優良物件なのだ。

護衛としても、これ以上の人材はいないだろう。腕っ節は勿論、薬物や罠、侵入や逃走経路に関する知識で並ぶ者が居ない。

唯一の欠点と言えば、俺を殺すかもって事ぐらい。

繰り返すが、抗議の声は受け付けない。

「それで、シノニムさん。そろそろ田中の事を教えて欲しいのですけど？」

「それなのですが……」

いよいよ正座が限界に至ったシノニムさんが立ち上がって説明してくれた。

曰く、あの死体ハンパレクが田中じゃない事は知っていた。

なぜなら、スフィール城に捕らわれていたのを執事となり潜んでいた工作員が解放したから。しかし、セレナの秘宝を持ち逃げした帝国情報部を追いかけた後、行方不明。

そう言われても、黙っていられた俺は面白く無い。シノニムさんに詰め寄った。

「なぜです？ アレだけ私が田中の事を気に掛けていたのに、どうして黙っていたのです？」

「気に掛け過ぎていたからです。あなたは谷底で、酷い状態の死体を真っ青になりながら、ひとつひとつ確認して行きました。今度は同じ事をゼスリード平原の無数の死体に対して行うかと思うと、私はとても耐えられませんでした」

「つまり、シノニムさんは田中が死んだモノと……そう思っていたのですか？」

「当然です！ その後の調査で見つかったのは帝国情報部の破壊された馬車、それに姫様がグリフォンと呼ぶバケモノが暴れた痕跡と、無数の腐乱死体です。これで生きていると思う方がどうかしています」

……チツ！ 確かに筋は通るね。次っ！

「次に疑問なのですが、田中から連絡は無かったのですか？」

……そう、国交は無くとも、手紙なりなんなり連絡の取り様は……

あ！

「無理だと思いますよ、今、王都中からユマ様宛てにしたためられる手紙の量をご存じですか？」

シノニムさんの言う通りだ、手紙の仕分けだけで人を雇っている程。しかも大半は気持ち悪いラブレター。

気を引くために、我こそタナカだと書くヤツだって一人や二人じゃ無いだろう。

そもそも、死んでいるのだから誰だって悪戯だと判断する。

「じゃあ、セレナの秘宝を追っていった田中が、どうして救国の英雄と化しているのですか？」

「さあ？ 使節の方も全く存じていないそうで」

「そうですか……」

「今回の一報は先触れで、じきに正式な報告があるようですから、それを待ちましょう」
「その正式な報告には、田中は帯同するのですか？」

「いえ……大変な盛り上がりで、英雄としてもなされているらしく、しばらくは離れられないだろうと」

「そうですか……」

「コレは使節の方の個人的意見ですが、寧ろ姫様にエルフの国へと戻って頂いて、英雄と二人で国を再興してくださいとされれば。と国民は願っているそうですよ？」

「……ん？ それってどう言う？」

ハテナで埋まった俺の脳みそに、ネルネちゃんの必死の訴えが響く。

「わたし！ それを聞いた瞬間。今すぐお伝えしなきゃって！」

対してシノニムさんは。

「私は手遅れだった場合、気まずい事になるので止めようとしたのですが……。まだしておられなかった様で、結果的に良かったですね」

「……なーんも良くないんだが？ それって、つまり？」

オイ木村！ 耳元で「お前ホモなの？」って聞いてくるの止める。その理論でホモならお前が一番ホモだろ！ 参照権でお前の愛の告白一生語り継いでいくぞ！

まあもう田中の事はそれで良いとして、今回の騒動。最後に残った謎がある。その話をして締めと行こうか。

「田中の事は解りました、では最後に、帝国の魔術師について私が調べた事をお伝えしたいと思います。ですが、話が長くなりましたね、一旦お茶にしましょう。ネルネ、今日はアナタがお茶を淹れてください。シノニムさんはそのサポートをお願いします」

「ええ？ ハー！ ハイ！」

「かしこまりました」

別の意味で緊張した二人が部屋を出て行く。この場には俺と木村とシヤリアちゃん
の三人になった。

早速、木村は表だつて言えない疑問をぶつけてくる。

……要するにセクハラだ。

「で、田中のお嫁さんになる気はある？」

「ねーよ！ 大体、今俺が居なくなったらヨルミちゃんの求心力じゃ貴族の反乱を招いて即瓦解するぞ」

「それが解つていて死のうとしたのかよ」

「死んだ後なんざ知ったこつちやねーよ。正直なところ、俺が居れば貴族が大人しくしている理由も謎なんだが？」

「ボルドー王子が死んでるって判明しても、ユマ姫を支持する軍属は多かつたら？ お前の媚び売りが効きまくってる。熱狂的なシンパは増える一方だ。それに、ボンディール伯のグラム騎士団を一人で壊滅させたんだって？ 当然、誰もお前一人の犯行と思っていない。エルフの魔法使いが山ほどバックに居ると思われてんだよ、締め付けには過剰戦力だな」

「ほー、俺がやって来たことは何一つ無駄じゃ無かつたと」

「それどころか、全部が上手いこと噛み合つてとんでもない事になってるぜ、ユマ姫グッズは飛ぶように売れて、商会としては嬉しい悲鳴よ」

「ライセンス収入、今度確認してみる」

「パチモンをちやんと取り締まって欲しいね。うま味が無くなっちゃう」

「OK、わかった」

「で、帝国の魔術師って誰よ？ セクロスしたら、一人で帝国に喧嘩売り行くつもりだったって言つてたよな？ 犯人に目星がついたか？」

「それがこつからの話よ」

と、そんな話をしていたら丁度、ネルネがお茶のカートを引いてやって来た。カチコチに緊張していて、普通にお茶が淹れられたかどうかも怪しいもんだ。

「どうでした？」

とシノニムさんに尋ねれば。

「おかしな所は無かったと思うのですが……」

と答えが返る。

それに対し、ネルネは緊張を深める。コレが侍女としての実力のチェックとも思っているのだろう。

「どうぞ」

と、つたない動作でお茶が入ったカップを差し出してきた。

「では、シャリア」

しかし俺はそのままカップをパス。

「はい、では失礼して」

「ええ？」

受け取って、カップに口を付けるシャリアと、なんで？ と疑問の声を上げるネルネ。

うーん、演技では無いよな？

「えーと、黒ね。リオネライル入り」

判定は下った！ 早い！ いやープロの仕事ってスゲエな。

「なるほど、ネルネ、ではあなたもこのお茶を飲んでみてください」

「ええ？ は、ハイ」

不思議そうにネルネは差し出されたお茶を気負いも無く飲むとして……

——俺はそのカップを叩き落とした。

「え？　ええ？」

高級なカップがガシャンと粉々に割れる。うーん勿体ない。

「なるほど、こういう事ですか。いやはや、凄いですね。コレが洗脳魔法ですか？」

「恐らくは」

事態を察した木村が楽しそうに訊ねてきた。呑気なもんだよ。

ちなみにリオネイルとはその筋（シャリアちゃん曰く）では極めてメジャーな……

——お茶に混入させる毒だ！

「えっ？　えっ？」

一方で、錯乱し幼児退行したネルネは指をしゃぶろうとして……

——その手をシャリアちゃんに押さえられた。

その手の中に収まっていたのは小さなペンダント。

「自殺用の薬が塗ってありますわ。私も似たものを持たされましたから」

なるほど、で？　ネルネは？　と覗き込めば、壊れていく真つ最中だった。

「え？　ええええええ　あ、ぐうううう」

こうなるのか……マジでおつかねえな。白目を剥いて、発作を起こしている。

恐らくは、俺の侍女の中で隙だらけの彼女が狙われたんだ。

侍女だったらお茶を淹れる機会ぐらいある、その時を狙って無意識に発動する洗脳。実の所、ペンドアントもリオネイルもとくに気が付いていた。毒の専門家（シャリアちゃん）に言わせれば、その毒の特性を考えれば、どういったタイミングで洗脳が発現するかもあたりが付こうと言うものだ。

ネルネの突然の狂態に眉を顰めつつも、俺は一つの呪文を唱える。

『我、望む、揺蕩う海の寄る辺なき魂よ、我、指し示す先に安寧あれ、

一つ、母なる命脈に身を委ねん、

二つ、父なる世界を恐るるなかれ、

三つ、内なる自分に目を向けよ、

息吹を強く持て、鼓動に耳を澄ませよ、汝は生きている。

我、指し示す先に安寧あれ』

クツソ長い！ 多分一行目にしか意味はないんじゃないかと思う。

コントロール用だかなんだか知らないが、魔法書に書いてある呪文の記述には余計な文言がいっぱい付いていて、俺はガンガン端折ってしまうのだが、慣れていない魔法なので一応従った。

コイツの正体は精神安定魔法。ガイラスさんの置き土産で、禁術の中から必死に探し

てきてくれた魔法だそうだ。

数ある禁術の中で、精神安定を選ぶあたり、どんだけ俺の精神状態が危ういと思われてたかって話よ。

ま、結果、役に立ちそうなんだがね。

「あ、ああああ……ふうー」

狂乱状態が一転、今度は眠る様に穏やかに、うわごとの様にしやべり出す。

その状態で、俺は優しい口調で質問を重ねる。いわゆる催眠状態だ。

「ネルネ、あなたが居なかった二日間。本当はどこに行っていたの？」

「街で、パンを買ったんです。そしたら声を掛けられて、占いに興味はないかって……」

ネルネはつらつらと語り出した、とりとめが無く、時には脱線する話を纏めると。

占いと言われてついに行ったら攫われて、心理テストと称して色々質問されたらしい。

いよいよ俺の話題に入るまで、たつぷり一時間は掛かってしまった。

「……ユマ姫様の事を聞かれたので、凄い綺麗で、目が離せない不思議な人と答えました」

ほーう、嬉しいね。同性？ からの評価はなんとも言えず気持ちが良い。

「そしたら、悔しくないのか？ 同じハーフェルフなのにどうしてこうも自分とは違う

のか、と思わないのか？ と聞かれました」

「それで？」

「わたしは、とんでもないと、姫様と私では生まれから星の巡りまで、私とは何もかも違うのだと答えました」

「そう言ったら相手はなんと？」

「もしもユマ姫と君が成り代わる事が出来るとすればどうする？ と、聞いて来ました。お互いに薬を飲めば、精神を入れ替えられる魔術があると云っていました。あの姫の人生をソックリそのまま自分のモノに出来るのだぞと」

なるほど！ 殺人や自殺は抵抗感が大きい！ 催眠が解けてしまう危険がある。

だから入れ替わりの薬と嘘をついたという訳か！ 俺はいよいよ暗示、洗脳の本質に近い話題だと身を乗り出した。

「それで？ あなたはなんて答えたのです？」

「わ、わ、わたしは」

ネルネは何かとてつもなく恐ろしい想像をしたかの様に、ギョツと自分の肩を抱きしめた。

「嫌だと！ 仮に世界中の金貨を積み上げられても！ 絶対に姫様の代わりなんて御免だと答えました」

……え？

「……………」

部屋を重い沈黙が支配する。

コレは意外すぎるでしょう？

「それは……そうでしょうね」

シノニムさん？ それにシヤリアちゃんも困ったように首を傾げている。

そうなの？ 誰もが憧れる悲劇のヒロイン枠じゃないの？ 俺の人生の評価低すぎ

ない？ 俺だってホントはスローライフで無双する人生を歩みたかったよ！（自己矛盾）

盾

「それで、相手はなんと言ったのです？」

「驚いた様子で、何故だ！ ……」

だよな！ 俺だって聞きたいわ！

「あんな、国のため、一族のため、復讐の為に、その身をすり潰すのは恐いと答えました」

ほらね？ みたいな顔をしてシノニムさんが見てくる。無視で！

「そしたら、君がユマ姫を楽にしてあげなさいって」

「楽につて？」

「ぐつすりと長く、長く眠れる薬だって、ペンダントを渡してくれたんです。眠ったら君

もコレで一緒に眠る様になって」

……なるほど、俺が深い安眠を、いつそ永眠を望んでいたと？

ぐっすり眠れる薬。洗脳状態とは言え、その意味が解っていないなかったと言ってしまうて良いのだろうか？

精神安定の禁術を使ってみて解ったが。おそらく催眠術と精神系の禁術もそれ程遠いものじゃ無い。自分の望みと全く反することを植え付けるのは難しいのでは無いだろうか？

そして、俺と四六時中一緒に居る侍女だからこそ、俺の潜在的な願いに気が付いてしまっていた可能性はある。

つまり、全ては俺の死にたがりが原因か。

因みに、ガルダさんの洗脳方法にもあたりが付いている。

ガルダさんの日記が見つかったからだ。

彼はボルドー王子が好きだったらしい。自分ではずっと女好きだと思っていたが、俺とボルドー王子の婚約が発表されて、本当の気持ちに気付いたと。

で、精神が不安定な所に、心中をけしかけられたのだろう。

恐いのは洗脳された自覚が無い事。後になって調べればネルネは親戚の家についておらず、それで洗脳が発覚したのだ。ひよつとしたら俺の回りに、他にも居る可能性が

ある。

当然、犯人を捕まえるのは急務だ。

「ネルネ、あなたはその質問者を見ていないの？」

「部屋が暗くて、でも、髪も目も部屋よりも暗かった」

やっぱりな。

と、そこへシャルティアからも質問が。

「訛りはありませんでした？ 丁度、キイムラ男爵の様な特殊な訛りが」

「はい、ありました」

……決まりだ。

「つまり、犯人はキイムラさまですか？」

ハハッ！ シノニムさんナイス、ジョーク。

「いえ、恐らくは同郷の者です、タナカも私も、この世界の人間に比べ超常の力を持って

います」

木村のカミングアウトに俺も乗っかる。

「神の国の使徒と言うべきでしょうか？ 私に使命を与えた神とは別の」

「そうですね、そして彼女は我々の敵に回った」

「彼女？ その魔術師は女性なのですか？」

木村の言葉にシノニムさんが食いつく。だが、その質問に答えるのはネルネとシャリアちゃんのみだ。

「はい、女の人の声……でした」

「そうね、女性の声だったわ」

そこで、俺は逆にシノニムさんに尋ねる。

「聞いたことはありませんか？ 帝国の黒き魔女、クロミーネ」

「噂ぐらいなら、まさか彼女が王都に居たと？」

「まず間違いないでしょう」

そう……黒峰さんだ！ 田中が『強い体』を、木村が『器用さ』をチートとして貰ったなら。彼女が貰ったのは！

「圧倒的な魔法を使う、恐るべき相手の可能性があります」

「そんな！ 姫様以上の？ ですか？」

「勿論です、恐らく及びも付かない」

俺の言葉に一同が静まり返る。

それだけ、恐ろしさが飲み込めたと言うことだろう。俺の暴れっぷりを見ていればそれも当然。

俺だけじゃ無かった、魔力が薄い人間界で自在に魔法を操れる。

世界でたった二人の特異点！

閑話?木村の独白

俺は商会本部の執務室で考えを纏めていた。

思うのは俺の親友、高橋の事だ。

と、言っても今生の奴はエルフのお姫様。そして俺の恋した相手でもある。

「はあ……」

ため息と共に机に突っ伏した。

キツすぎるだろお……神様は俺に何の恨みがあつてこんな嫌がらせを……

いや、冷静に考えれば年齢は合うし、多くの運命を巻き込む人物と来れば彼女しか居ないとも言える。

田中と知り合いだったというダメ押しまで考えれば、俺の洞察力をもつてすれば自明であつたはず。

それでも俺は、アイツがユマ姫だとは欠片も想像していなかった。

それは何故か?

俺にとつての高橋は『普通』を絵に描いた様な少年なのだ。見た目も、考え方も、能力も。

実際、友達になる前はつまらない奴だと思っていた。孤高のサムライを気取っていた田中に気まぐれに声を掛けられた時、田中にくつついてる無個性な奴が高橋だった。

友達になって、よく観察してみれば、その不思議さがわかってきた。異様な運の悪さは勿論、なにより自分から普通であろうとする事が異様なのだ。

中学生と言え、誰もが自分だけの個性を求める年頃。中二病って奴の正体である。

だが逆に高橋は自分を没個性に落とし込むことに腐心していた。

俺はその理由を自分なりに分析し、田中に披露した事がある。

「俺、思うにアイツが普通であろうとする理由って周りにあると思うんだよな」

「突然だなオイ、陰口か？」

「ちげーって、いや、オカシイだろ？ web小説を読みふける中学生がいかにか自分が

『普通』であるかに拘るのはよ。アイツの趣味を考えれば、家で黒龍召喚の儀式をしてても驚かねー程なのによ」

「封印された力って奴か？ アイツが言うとな気味に感じるがな」

「いや？ そうか？ アイツは普通だろ？」

「そうかよ？」

「そうだよ」

時間は昼休み、俺は田中の前の席を借りて田中のノートに図を書いていく。

「アイツの運の悪さは異常そのもので、アイツは常にドブに嵌まったり、車に轢かれそうになったりするだろ?」

「まあ、訳がわからねえが、そう言うモンだと思っしつか無えんだよな」

「それよ! 理不尽なアイツの運の無さを周りは理解出来ない。だからこそ、その原因を高橋に求めちゃうのよ」

「ははあ、そう言う事か」

「そ、アイツが酷い目に遭うのはアイツが変な事をするからだつてな。犯罪被害者が叩かれる『公平世界仮説』に近いモノがあるな」

「難しい言葉は解んねえけど、言いたいことは解るぜ。なるほどね、オモシレエな」

「だろ? 皆がそう言うから、酷い目に遭わないようにアイツは自分をドンドンと普通にしていった、それがお前の目から見えていっそ異様に映るつて事よ」

俺は自分の持論に自信を持っていた、田中が奇妙だと言う高橋の秘密に迫った気がしたからだ。

だが、田中は若干呆れ気味に笑って、俺を見てくる。

「ま、お前はそう言う考察をするの好きだよな、アニメとか小説でもよ」

「真面目に考察しなきゃ、なんだつて楽しくないだろ?」

「でもよ、そうやって頭でつかちに考えると本質からドンドン遠ざかる様な気がするぜ、

それに肝心のアイツの運の悪さを説明出来てない」

「マジで、たまたまって事は無いか？」

「どうかな？ その謎を解かないと、きつと真実には辿りつけないぜ？」

「難題だなオイ！」

……この時の俺は、そんな冗談みたいな疑問が、まさか神ですら匙を投げる程の謎だとは思ってもみなかった。

だが、高橋が普通であろうとする理由に関しては、今でも自信を持っている。最早、体に染みこんだ本能みたいになっちまって、運の悪さなど気のせいだと言っても普通である事を止めようとしなかった。

……なのに、今生のアイツは普通からは程遠い。これは何故だ？

決まっている！ 前世の普通の中学生として生まれた時とは全てが違う。エルフのお姫様なんて、どこを基準に『普通』とすれば良いか解りはしないのだ！

「まさかっ!？」

その時、俺の背中を薄ら寒いモノが駆け抜けた。

そうだ………だったらアイツは何を自分の『普通』の基準にした？ エルフのお姫様。地球じゃ荒唐無稽な存在だが、アイツが愛するフィクションの世界では、枚挙に暇が無い程に溢れかえっていた。

そんな『主人公』みたいな癖が強いキャラを自分の『普通』に設定してしまったとしたら？ だったらアイツはどうやって生きてきたのだろうか？

ソレこそストイックに知識を蓄えたり、魔法の練習を重ねたりしたんじゃないだろうか？

例えばアイツの魔法は如何にも便利過ぎる。全てのエルフにあれ程の力があれば、エルフの文明は人間界へ強い影響を持っていたのでは？

だとしたら、アイツの魔法の腕前はエルフの中でどの程度のレベルにあるのだ？ アイツは自分の魔力を大したことが無いと言っていたが、自分の腕前を語る時、基準にしていたのは同じ王族である家族だった。

しかし、エルフの最強血統を誇る彼らも当然に一級の魔力を誇っていたのでは？

そんなアイツが「魔法の制御には自信ニキ」とか懐かしいネットスラングで嘯うそぶいている訳で、その魔法制御とやらはエルフの中でも異次元のレベルにあるのでは？

そして、そんなアイツが精神に干渉する禁術を「制御がめんどくさい」と言ったのだ。その難易度は一体どれほどなのか？

黒き魔女クロミーネ、いや黒峰さんは魔力を能力として貰った？

でも、彼女は俺や田中と同じ条件。寄る辺ない身でこの世界に落とされ、加えて身体的特徴は人間のソレだ。

どうやって、誰から魔法を習うというのか？ たまたま、エルフの師匠なりに師事する事が出来たとして、どうして小さい頃から英才教育を受けて育ったユマ姫以上の魔法が使えると言うのだ？

——何かがおカシイ。

俺はその疑問を解消するために、詳しい話をアイツに聞きに行くことにした。

とは言え、相手はお姫様。手ぶらと言うわけにも行くまい。俺が選んだ手土産はカレー粉だ。

たかがカレー粉と言う無かれ、香辛料は極めて貴重。それゆえに今まで香辛料として使われていなかった山椒や柑橘類の皮を干したモノが、俺の商会で手軽な香辛料として大ヒットしているぐらいなのだ。

代替品が見つかって従来の香辛料の値段が下がったかと言われれば逆。皆が香辛料の重要さに気が付いた結果。余計に皆が質の良い香辛料を買い求め、珍しい香辛料を試そうと言う気運の高まりから、その値段は上がる一方。

で、そんな南方の珍しい香辛料を山ほど使うカレー粉は極めて高価な食べ物だ。更に言うと、カレーにおなじみの香辛料の幾つかはこの世界では薬の一種として使われるモノで、料理に使うなど勿体ないと言われる始末。

つまり、ユマ姫とは言え早々食べられないのがカレーなのだ。

金を積んだところで街で簡単に手に入るモノは無いので、俺の商会のツテが頼り。

コイツを持っていけばちよつとデカイ顔で話を聞けるだろう。

ちなみに、なぜアイツがそんなにもカレーを食いたがるのか？

どうやら馬鹿になった舌でも刺激的なカレーならばちよつとは味を感じる事が出来る上、香りが強烈でそれだけでも楽しめる。加えて様々な食材を一遍に摂れて、健康にも良く、なぜか自覚出来るほどに元気になると、あの顔でねだられてしまえば嫌とは言いにくい。

元気になる理由を本人も不思議がつていたが、そこに意外な人物から興味深い意見が飛び出した。魔力が見えると豪語するシャルティア嬢である。

彼女曰く「ウコンやニンニクみたいな根菜には魔力がたくさん含まれていますから、魔力不足には良く効くんじゃ無いかしら？」と言う話。

だったら、芋で良いだろと思つたが、芋にはあんまり含まれていないらしい。

根と言うならゴボウを食わせてやりたい所だが見つからない。似た植物が有つても、えぐみが強い品種しかなく美味しくないのだ。これは調理法が悪いのかも知れない、だが誰も根つこなど食いたがらないのでさっぱり研究していかなかったのだ。

で、カレー粉を持って王宮に乗り込み、手ずからカレーをコトコト煮込んで作成。

カートを押して私室に直行した。

シノニムさんには外して貰って、ネルネちゃんはまだ療養中。シャリアちゃんはもう居ないモノとして腹を括る。

何せ、会話を聞かれても問題ない。俺は日本語でガンガン話し掛ける。

「どうよ？ カレーも工夫してメツチャ旨くなってるんだけど？ フィーゴ少年がガツガツ食う料理って中々ないのよ？」

「いや、確かに良い匂いだわ。旨そう」

「だろ？ 飯が無いからパンとかクラッカーだけど悪く無いぜ？ どうよ？」

「ん〜？」

ユマ姫は難しい顔で、スプーンを咥え、唸る。

「いや、香りが良いし、楽しめるんだけどさ……」

「なんだよ？」

「香りが良いのに味を感じない違和感が凄いというか？」

「わがままだなあ……」

「正直に言おうと、カレー味のう〇こってパワーワードを思い出してしまつて一気に食欲無くなった」

「子供かよ！」

余りのくだらなさに、ツツコミにも力が入らない。

そのカレーに金貨何枚分の価値が有ると思ってるのか。

だが、高橋の下品な暴言は止まらない。

「でもさあ、味が分からないからお前がコツソリう〇こを混ぜていても、俺には解らないわけじゃん?」

可愛い顔でそんな事を口走る。完全なる風評被害。

「お前の中で俺は何時から異世界のスカトロマニアって業を背負い込んでるの? スカ

○マニアだったら良いよ?」

「悪かったって、いや、香りで期待し過ぎた」

悪びれずそんな事を言う。

「食いたいと言うから折角作ったのに! 真面目に腹が立ったので、う〇こ連呼して嫌がらせ。」

「そもそもカレー味のう〇こって何だよ? それ、最早カレーだろ!」

「いや、逆はともかく、カレー味でもう〇こはう〇こだろ?」

「うーん、例えば高級コーヒ〖『コピルアク』がジャコウネコのう〇こって知ってる?」

「あ、ー聞いたことあるかも、未消化のコーヒ〖豆が発酵してるんだっけ? う〇こだけに」

「そ、だから同じ理屈で猿のう〇こから出て来たウコンで作ったカレーがウンと美味しくたつて不思議じゃ無いだろ？」

自分で言つてウコンがゲシユタルト崩壊しそう。

一方、匙を口に含んだままのユマ姫はピタリと静止する。

「……まさか、コレがソレじゃないよね？」

怯えた様子でこちらを窺うユマちゃん可愛いねー。

「いや、生産者表示が有るわけじゃ無いし、どうやって採取してるかはサツパリ」

俺はおどけた様子で肩をすくめてみせる。

コレは掛け値無しにホント。でも、流石にう〇こつて事はないだろ……

だが俺の言葉に、ユマたんは渋い顔でカレーを遠ざけた。

「完全に食欲が無くなつたんだが？」

「いや、折角心を込めて作つたんだし食べてよ」

「お前がクソみたいな事言うからだろうが！　じゃあお前、猿のケツからひり出されたカレーでも食べれる？」

「え？　食べないけど？」

「あゝ」

いよいよ、からかわれた事に気が付いたユマたんが文字通り匙を投げる。

いじわるし過ぎたかもだが、自業自得だろうが!

「で? ガチで食わないなら勿体ないから俺が食うよ?」

「……いや、折角だし食うよ」

「そんな無理することはねーよ、そう、ちよつと位ユマたんの唾液が入ってても、俺は気にしないし」

「は? キモすぎるんだけど!」

「冗談抜きでさ、貴重なカレーだから俺も食いたいんだつての。無理して食わんでも良いって」

「そっか……うーん、やっぱり食うよ。考えてみればさ、俺自身がカレー味のう○こみたいなモンだろ?」

自嘲気味に笑う。

コイツはよー、急に鬱モードに入るの止めて欲しいね。

「言い得て妙だな。カレーのお姫様とう○こ高橋」

「ノータイムで俺がう○こなのな! 良いけどよ! どうせ俺はユマ姫のう○こだよ!」

「ん? ちよつと待ってくれ! う○こはう○こでも、ユマ姫のう○こなら話は変わってくるよっ!」

「なんも変わんねーよ！」

ユマ姫が牙を剥いて、怒りのツツコミを入れる。うーむ、可愛い。

やつぱり高橋のツツコミは鋭さが違うね、敵わんわ。僕はボケ担当です。

「やつぱり生産者表示は大事。むしろ非常に価値があると云えないだろうか？ 少なくとも俺はカレー味なら間違いないくイケる」

「やつぱりスカトロマニアじゃねーか！」

渋面を作って怒るユマ姫。うーんたまらん。

などとイチヤついて居たら、背後からシャリアちゃんの殺気が凄い勢いで飛んで来たので、そろそろ真面目な話をしよう。

カレーを食べ終えたユマさんに俺はカラダの調子を尋ねる。エロい意味じゃなくてね。

「で、義手を作るとして、義眼も要る？」

「要らないでしょ？ 眼帯の方が格好いいし」

「だよな、どうしたってガラス玉だし」

この世界の技術じゃどうしたって不気味な印象しか与えないのだ。

だが、目には別の問題があるらしく、ユマ姫は眼帯越しに無くなった目を擦る。

「ソレよりもメツチャ痒いんだよ」

「痒い? ああ、そう言っただけど幻肢痛の一種なの?」

「うん、痛いのはもう慣れたし我慢できるけど、痒いのは我慢していると頭がオカシクなりそうなんだよ」

「痒いのが痛いより辛いのか? そう言うモン?」

「思うにさ、痒みを我慢出来るのは痒かったら搔けるからだと思うんだよ」

「なるほどね」

「無い左目が一生痒いのってマジ辛いよ? どんな痛みよりツライ。気が狂いそう」

「腫れてるんじゃないの? 見せてよ」

「……良いけどさ」

グロテスクな眼窩を見せたく無いのか、逡巡したユマたんだが結局は眼帯をペロンとめくって中を見せてくれた。

よくよく考えれば、少女の穴の中。剥き出しの肉壁を見るのって何かエロい気がする。

一方で瞳があるハズの場所が暗い虚空しかないビジュアルは、違和感から脳がパニックを起こす様な不思議な感覚に襲われる。

奇妙な感覚に脳を左右に揺さぶられる。甘い物と苦いモノを同時に口に突っ込まれたみたい……それでも俺はランプを近づけ、患部の様子をジッと確認する。

うーん、エロいしエグい！ 俺は頭がオカシくなった。

——ペロツ！

「なっ！ なんて舐めたの？」

ユマたんが顔を真っ赤にして抗議するが、そんな俺にだって解らない。

「傷口を見たら舐めたくなるのが動物の本能だと思っただ！」

「猿かよ！ 馬鹿かよ！ このスカトロマニア！」

引つ張るねーソレ。

「で、どこが痒い？」

「あ、痒くなくなっただかも？」

ふうーむ、精神的なものっぽいし、コレで治ってくれば良いな。なにより照れてるユマたんの表情はいつ見ても可愛い。

「うーとにかく、義手は早めに頼む！」

「解ったよ」

と、サイズを測りながら、魔法について聞いてみたが、結局重要な情報は得られなかった。

これについても「普通であろうとする高橋の謎」と『偶然』の関係と一緒だ。

黒峰さんの能力が魔法じゃないとして、だったら何の能力か見当がつかないのだから

考えるだけ無駄と言えた。

取り敢えず、俺に出来ることは義手を作ることぐらいだ。

……しかし、本当にアイツはこんな義手で良いのか？ 完全に雰囲気を選んでる気がする。

う。どうせ次に言い出すことは決まっているのだ。あらかじめ服と帽子も準備しておく。

また要らない仕事を始めてしまったが、俺がデザインした服を着るユマたんの様子を想像すると、どうにも楽しくて熱中してしまうのであった。

閑話―シャルティア

時はユマ姫がカディナールに投獄されていた頃。シャルティアはルージユの屋敷で治療を受けていた。

真つ白な部屋に格子が嵌まった窓。ドアには鍵が掛けられ、中からは開けられない。治療の為といつつも実態は監禁状態であった。

(困ったわ……このままじゃ約束を果たせない)

シャルティアが思うのは、ユマ姫との約束。裁判でユマ姫に有利な証言をするというもの。だが、監禁されていてはそれも叶わない。

(誤算だったわ……)

自分はカディナール派の主要メンバーとして、もつと信頼があるかと思えば早々に監禁されてしまった。

かと言って、裏切りが発覚した訳では無い。どうやらカディナールは自分を血の氣の多いただの女の子としか思っていないのだと、シャルティアはようやく気が付いた。

(もう、信じられない馬鹿ですわね……)

七年前、ボルドー王子の婚約者ルミナスをギラつく視線で見つめていたカディナー

ル。その目に映るのは間違い無く狂気だった。手に入らない玩具の様にルミナスを見ていたからだ。

そこに声を掛けたシャルティア。それから一貫してシャルティアは王子の依頼をこなしてきた。

(なのに、カディナール王子は私を単なるメッセンジャーで父の使いと勘違いし続けた。だから口封じと父への人質を兼ねて、監禁されてしまったんだわ)

目の前で剥製を作ったり、傲慢の騎士を打ち倒して見せたりもしたと言うのに。度し難い愚かさだとシャルティアは目眩すら感じていた。

(初めは自分と同じだと思ったのよね……)

そう、初めて出会った時は、綺麗な見た目に中身はドロドロの悪意が詰まったカディナールを見て、ある種、自分の同類だと認識したシャルティア。だが、もつと自分に近い存在が現れた。

(ユマ姫！ 私の愛しい人。だからこそ負けたくなかった、だけど！)
結果は完敗。

そもそも勝負にもなっていない、相手は隠れている自分の場所を瞬く間に探し当て。どこまでも誘導する魔法の矢は防ぎようが無い威力を誇っている。

対策として、遮蔽物の多い墳墓に魔力を阻害するネズミをばらまいて、地の利を生か

し、人質まで使つて。

それでも結局勝てなかった。

(それも当然。ユマ姫は私が唯一勝っていると思つていた殺戮への渴望と狂気すら、遙かに上回つていたのですもの)

そんな相手があんなに可愛らしいなんて。彼女に殺して貰えるなら最高の最期だと思える。

いや、最高の最期にするためにはしつかりと『仕事』をしなければ。

幸い洗脳の魔法は自分には効いていない。あの頭の足りないカディナル王子の事。すぐに追い詰められて自分を呼ぶのでは？と思つていたが案の定だった。

「出なさい、シャルティア！あなたに証言をして貰うわ」

ルージユが呼ぶ声が聞こえた。シャルティアは笑つて席を立ち上がった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

証言は終わり、全ては解決した。後はユマ姫に殺して貰うだけ。

シャルティアは一人、監獄の中で待つていた。囚われている部屋は貴人としてはあるまじき質素な牢屋だが少しも気にならない。

がらんだりの部屋の中、手足は縛られ、ひとつだけしか無い椅子にポツンと座らされている。

見捨てられたかの様な扱いであったが、目当ての人は必ず来る。そう信じられた。

カツンカツンとその軽い足音だけで、それがユマ姫だとシャルティアは解った。いや、そのずっと前から、輝く様な銀色の魔力の渦を感じていた。

「シャルティア、居ますか？」

「ええ、居るわ」

魔力視で見えるまでも無く、ユマ姫はたった一人。殺人鬼相手に差し向かいで面談するなんて、どんな無茶を言えばまかり通るのか？ それだけ自分との最期の時間を特別に思ってくれたのだと、シャルティアは歓喜に沸いていた。

「私に殺されたいと言うのは本心ですか？」

「ええ、勿論」

シャルティアは恍惚の笑みで答える。しかし、それを見たユマ姫には一分の動揺も無い。平然と質問を重ねた。

「では、殺し方に希望はありますか？」

「いいえ、貴女の好きな様に」

「でも毒で殺されるのは嫌でしょう？」

そう言われシャルティアは眉をひそめた、あれだけ毒殺もしてきたと言うのに、その可能性を少しも考えていなかった。

切り裂くように、髑髏殺しにしてくれる物と思ひ込んでいたからだ。

「そうね、毒では貴女が殺した事にならないわ。刃物か鈍器、もしくは魔法で殺して欲しいの」

「そうですか……その前に、一つ試したい事が有るのですが良いですか？」

「どうぞで」

元より贅沢が言える立場では無い。それに、シャルティアは先ほどのセリフでユマ姫がどこまでも自分と同種だと、愛する者に手ずから殺されたいと言う感情さえ理解していると解ってしまった。

そして、理解の上でなら、ユマ姫がどんな選択をしようが悔いは無い。

自分が嫌がると知って、それで敢えて毒殺を選ぶなら、それはそれで満足出来る死に様と思えた。

「では失礼して」

ユマ姫はそう言つてシャルティアに顔を寄せると。

——キスをした。

「?!?!? な、なにを?」

目が見えないシャルティアには、それは全く唐突に感じられた。見えていたとしても

意味が解らなかつたに違いない。

一方で、ユマ姫は赤く染まつたシャルティアの様子をマジマジと観察する。

「どこがおかしな所はありませんか？ 急に心臓が痛くなったりとかは？」

「何を言っているのか解りませんわ！」

「いえ、キスをした人間や、しようとした人間が死んでいくので、そう言う呪いでも掛かつているのかと思ひまして」

それはユマ姫にとってみれば『偶然』の検証の一つだったのだが、シャルティアには運命に翻弄された悲しい少女の狂気に感じられた。

「貴女のキスで死ねるなら、これ以上無い素敵な死に方だと断言しますわ」

掛け値無しの本心で思う。それに対して、ふむ……と考え込んだユマ姫はとんでもない事を言い出した。

「では、今度は舌を入れてみましょう」

「え？ んっ！ むう」

理解不能だった。生まれた時から殺す事だけを考えていた自分に、それを誰よりも理解している少女から、文字通りの命を預ける様な奇行。

「あつああ！」

シャルティアは潰れた目からはらはらと涙を零す。

「両親すらも自分を理解してくれないと言う思いを抱えて生きてきた。それが遂に理解してくれる人間が現れただけでなく、まさかこうやって受け入れて貰える等、想像だにしていなかった。」

一方でユマとしては受け入れたつもりは毛頭無く、投げやりになっただけで有ったが、それでもシャルティアの事はなんとなく理解して、舌を噛んでこないだろうと思っていた。

「死にませんね」

行為の後、ケロツとした顔で様子を確認するユマ姫だが、一方でシャルティアはキスだけで腰砕けになっていた。

「あ、うう……」

「少し経過を見たいですね、その間に人形遊びをしませんか？」

両の手を合わせて、無邪気な笑顔を浮かべ、首を傾げておねだりする。

そんなユマ姫の仕草は誰が見ても愛らしいモノだった。

年上の女性へと、子供っぽいと笑われるのを心配しながら、なお人形遊びをねだるその様子が、光差す花畑の中だったらどれだけ平和で美しい光景だっただろう。

だが、ユマ姫がシャルティアに持ちかけたのは、狂気と恐怖の提案だった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

シャルティアは回復魔法に感嘆した。もう二度と戻らないと思った光が両目に戻ったからだ。

同時に、あれだけ強かった死にたいと思う気持ちは消え失せ。生きて居たいと思える様になった。

それは断じて『目が見える様になったから、生きる希望を取り戻した』等と言う都合が良い物では無い。

(なんて！　なんて良い顔をするの！)

シャルティアは墳墓でユマ姫の可愛らしい悲鳴を聞き、眼球を喰らった。

あのユマ姫をココまで追いつめられるのは自分しか居ないと言う自負があつた。

それがどうだ？　いま目の前にある、手も足も出ない。ただの肉塊となつたカディナールが遙かにユマ姫を追い詰めていた。

「こんなになつても……死ねないの？」

震えていた、真つ青になつて。

菌の根は合わず、それでも必死に回復魔法を掛けて、その様子を観察し、自傷行為の様に自分から打ちのめされていた。

(ああつ！　なんて！　愛おしいの！)

シャルティアの脳は沸騰する程に茹で上がった。それは墳墓で眼球をかみ締めた時

以上の興奮であった。

ユマ姫は小さくなったカディナールに、自分の死、それ以上の絶望を見ていた。きつと大切な人が『こう』なることを想像しているのだ。

シャルティアは殺し殺される事しか頭に無かった自分を恥じた。ただ彼女の横で敵を痛めつけるだけで、殺し以上の快楽を得られると解ったからだ。

同時に、シャルティアはすっかりサディストになってしまった自分を自覚した。ユマ姫の絶望も、痛みも、全てが愛おしかった。

ただし、もう直接痛めつけようとは思えない。そんな痛みでは彼女はめげないし、折れない。

ただ、横に居るだけで。自傷行為の様に彼女は自分から傷ついていく。

だつたらずつと一緒に居たいと、今更にそう思った。

実は、シャルティアはカディナールがなんだかんだ嫌いでは無かったので、鋭い刃で痛くないように切り取っていた。

それは『なるべくスグには死なないように、ちっちゃく切り取る』と言うユマ姫のオーダーとも一致したので、実は見た目よりカディナールに痛みは無いとシャルティアは知っている。

恐らく、今の自分がどうなっているのかもカディナールには解らないのでは無いかと

思っていた。

実の所、もっと苦しい死に方の方が普通。例えば、何年も四六時中、痒みや痛みに苦しむ薬が存在する。見た目もイボだらけになって絶望し、自分から蟄居してくれるので病氣療養と称して廃嫡するのに使われる薬だ。

正に今回のケース、ユマ姫が何も言わなければ使われたのではないだろうか？

だが、ユマ姫が選択したのは見る方ばかりが痛い、自傷行為の様な処刑方法だった。その悲しい少女の生き様に、シャルティアは完全に惚れ込んでしまった。

「是非、お供させて頂きますわー！」

だから、カディナルを殺した後に、一緒に帝国の魔術師に挑んで死に行かないかと誘われた時は、天にも昇る気持ちで即決した。

これこそがユマ姫なりの、事実上のプロポーズの様に思ったからだ。

その前に、世話になったキムラ男爵と寝ると言われても、少しも気にならなかった。体よりも命で繋がった繋がりこそが、至高の関係だと信じていたからだだった。

——だが。

「ねえ、はやく、わたしを、殺して」

寝室の奥で二人を覗き見るシャルティアは震えていた。いや、もうその名前は捨てて

シヤリアちゃんとして両親に挨拶も済ませたのだが。

全てを忘れるほどの衝撃を受けていた。

コレこそが究極の愛の告白なのだ、目からは涙が溢れ、切なさに胸が震えた。

そして、目の前で一人の男の手に掛かって、大好きな少女が死んでいく。

覚悟の重さを知っているからこそ、それを見ている事しか出来ない自分。制御できない感情にどうにかなりそうだった。

もし、それを木村が聞けば、NTRと言うジャンルの一種と揶揄しただろう。全くその通りなのだが、特殊過ぎてシヤルティアには理解のしようも無かった。

そして、結局ユマ姫を殺す事すら出来なかつた木村に、苛立ちと、嫉妬と、羨望と、良く解らない感情がない交ぜになった思いを抱えてしまう。

今まで、全てを殺戮で解消してきたシヤルティアだったが、殺してくれると言う約束も、一緒に死ぬという約束も、全てをファイにされたと言うのに、それでもユマ姫にもキムラ男爵にも手を出すことが出来ず、ジツと複雑に狂気が混ざった目で見つめることしか出来なくなってしまう。

それがシヤルティアの性癖として根付いてしまった為だ。

それをシヤルティアが自覚した時。「なんて神様は残酷なの……」と生まれて初めて神を恨んだと、後にユマ姫に打ち明けている。

五章 大森林の英雄伝説

落ち行く先で

「(ハハ)はっ? どっだ?」

確か俺は……そうかブツガーと崖から落ちて、ここは……崖下か?

薄暗い視界の中、大の字に倒れ込むのはブツガーだ。どうやら仲良く落下したらしいが、その体はピクリとも動かない。

当然だ、あの高さ、百メートル、いや二百メートルは有ったか?

あの高さで落ちて生きていられるハズが無い。

では俺は何故生きている? いや、そうだった、俺はあの時……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ひとりです! 死んでろツ!」

崖にへばりついた俺は、ブツガーに叫んだ。

ウオーハンマーの重量に引き摺られる様に落ち行くブツガー。

ソコまでは良かった。だが、落ち際にアイツは馬鹿力で俺の右足を掴んだのだ。

踏ん張ろうと地面に爪を立てるも、その地面ごとボロボロと崩れ、遂に俺達は空中に

投げ出される。

「クソツテメエ！ どういうつもりだ！」

宙に投げ出されても、俺の右足を掴んで離さないブツガーを左足で蹴り飛ばす。

すると、あれほどの馬鹿力で掴んでいたにもかかわらず、その手がアツサリと離れた事に驚く。

——クソツ！ 気絶していやがる！ やり切った顔してるんじやねーよ！

清々しい顔で意識を手放したブツガーの笑顔に殺意を抱くも、このままじゃ俺もブツガーも仲良くお陀仏だ。

——畜生！ 何か？ 何かないか？

見回すも崖壁ははるか遠く、手が掛かりそうモノは何も無かった。俺達はせり出した崖の先端から落ちたのだから当然の事。

——こんなトコで、ブツガーなんてむき苦しいのと心中かよ！ どうせなら……

……クソツがッ！ どんな走馬燈だ！

俺の脳裏に浮かんだのは悲しそうなユマ姫の奴の泣き顔だ。

見たくねーもんを見せるんじやねえよ、どうせなら派手な魔法の一つでも使って助けやがれ！

……魔法？

……そうだ！ 確か……

俺は財布と一緒に腰に付けていた、魔石を入れた袋に手を突っ込んだ。

コレだ！ だが時間がねえ！ クツ！ あ？ 崖の下は谷？ まだ落ちるのかよ！

だが！ 丁度良い！

俺は袋から抜き出したその魔道具を、落ち行く谷底へと叩き付けた。

——パァン

乾いた破裂音。

そう、俺は魔道具屋で失敗作のガラクタ、風が破裂する魔道具を買っていた。

なにか、例えば目眩まじとかに使えないかと思っていたのだが、うまくすりや風の

クツシヨンになるかもしれない。

来るッ！

凄まじい風の奔流、それを俺は深呼吸と共に受け入れた。

これは魔法、受け入れようとしなければ、この風は瞬く間に掻き消えてしまう。

「グウツ！」

痛い程に体を打ち付ける暴風を受け入れる。

言うのは簡単だが、容易い事では無い。それが簡単に出来るなら、そいつはどんなド

Mかと言う話。

いやいつそ、これが美女に打ち据えられるピンタだったら受け入れられようが。
……いや？ そうか！ これを美女に叩かれていると想像するんだ！

……

……なんでだツ!?

——クソツお前は出てくんない！

ニヤニヤと笑うユマ姫と高橋の顔を思い出しながら、俺は意識を失った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうだ……それで俺は生きてる。だが……

「グッ！ ガあ！」

激しい痛み、当然だ。脇と胸に大穴、そして最後には谷底への急降下だ。呼吸が苦しいのも、視界が暗いのも、手が震え痺れるのも当然。

俺は今、死に掛けている。

「アレを！ ブローチを」

黒から赤へ、端から視界が染まっていく。

風と落下の衝撃を受け、全身が強烈に圧迫されたのだ。今の俺の体は、あらゆる臓器

から出血してるに違いなかった。

「……ハア、ハア、有った!」

俺は魔石を入れた袋をまさぐり、ブローチの感触を見つけ、取り出した。

「『開け』」

俺がその言葉を唱えると、柔らかな光が体を包み、ゆつくりと体を癒して行く。

これも魔法、健康値と言う概念であの暴風と同じく相殺されてしまうとと言うが、これを受け入れるのは、叩き付ける風を受け入れるよりは難しくない。

視界に広がった赤が少しずつ引いて行き、呼吸もどんと楽になる。

「スゲエ効果だな」

何とか一命をとりとめた、クリアになった思考の中、色々な事が気になり出した。

「魔法が発動している、この霧は違うのか?」

この谷底にも霧は充満していた、しかし魔法は発動するし、独特の嫌な感じも無い。

ひよつとしてこの霧は普通の霧で、この霧のお陰で魔力を吸い取る霧は入り込めなかったのかも知れない。

全ては想像だ、しかしここでは魔法が使える。それが事実だ。

「で、魔石がパアかよ」

魔石を入れていた袋に再び手をつ込み、中からザラザラとした砂を取り出す。

「これが魔石の成れの果てか」

抜き出した手の中からサラサラとこぼれ落ちる砂粒、輝いていた淡い光も無く、まるきりただの砂に見える。

考えてみれば魔力を吸い取る霧の中、魔石だけが無事に魔力を保てるはずが無い。

と、なれば何故、風の魔道具とブローチの魔力が残っていたのか？ ひよつとして、魔石の魔力が守ってくれた、もしくは魔石の魔力を吸い取ったのか？

「なににせよ、まだギリギリの所でツキはあるな」

恐らくは魔石と同じ袋に突っ込んでいなければ、二つの魔道具の効果は失われていたに違いない。

不連続きだったが、なんとかまだ終わらずに済みそうだ。

そうこうしている内に、なんと脇と胸の傷が塞がりつつあった。

「マジでとんでもねえ魔道具だぜ、売れば一体いくらになるのやら」

輝きを放つブローチを見る、一つの魔法を入れて、一度しか使えないと言うが十分だ。この回復魔法一つ入れただけでいくらの値が付くか？

こんな超再生。前世の医術でも不可能だし、ちよつとした化膿で死んでしまうこの世界、貴族や王族がこのブローチにどれ程の価値を見出すか計り知れない。

「こりゃあ絶対に返さねえとな、その為にはまずは休まねえと」

怪我はもう大丈夫、山は越え致命傷では無い、しかし血が足りない。痺れる手足と霧が掛かる頭、何より体温の低下が著しい。

少し休まなくては、動く事すら出来そうに無かったのだ。

そうして俺は呑気に眠ってしまったのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「クソツ！ ギリギリの所でツキが無え！」

目が覚めると早速、俺は先程の発言を撤回した。

「へっへえ、元気の良いこって」

「クソがあー！」

次に起きた時、俺は全裸に剥かれ、手足には枷が嵌められていた。身動きとれぬ俺の前、小汚いおっさんがたばこを燻らせている。

「ナニモンだお前ら！」

正直、一目見てその正体は解る、解るが納得出来ず俺は叫んだ。

対しておっさんは、だらしなく顔を歪め笑う。

「見てワカンねえか？ 人攫い様だよ」

「人攫いだと？ なんでお前らがこんな所に？」

小汚いおっさん、そしてその周りの四人の男たちは誰も彼も汚く、全く品が無い。単

に不潔と言うだけでなく、その精神が薄汚れているのが見て取れた。

「こんな所とはご挨拶だな、ここは俺達が入って、たまーに拠点として使っている。言わば秘密基地よ、そこにお前たちの方が乗り込んで来た訳だ」

そうして天を差す指先、つられて上を見れば確かに谷底で薄暗く、犯罪者の拠点としてうつつつけの雰囲気である。

「オイ、俺はこう見えてその筋じゃ有名な『妖獣殺し』だ、捌こうつたつてすぐに足が付くぜ?」

「おお! おつかねえ! でもな、そんなのはゼーんぶ承知の上よ」

「……そうか、そうかよ、やつぱりお前らが俺らの跡をつけてたんだな?」

「そうだな、ホントはあの娘つ子を捕まえる様に言われたんだが、流石に帝国兵やら出て来ちまつたら手が出ねえつてんで、潔く諦めようかと思つたんだが」

おっさんが汚い顔を突き出してニヤリと笑う。

「そこにお前さんが落ちてきたつて訳だ、ここは俺達の勝手知つたる場所よ、死体でも漁ろうと思えばたまげたぜ! まさか生きてやがるとはな!」

ガハハツと笑うおっさんがひたすらに不快だ、枷をなんとか外したいが、俺はそんな訓練を受けちゃいない。

俺の膂力は人類最高峰と神のお墨付きだが、逆に言えば人間レベルの外ではない。漫

画のヒーローみたいに力づくで枷を壊せる程ではない。ましてや今は病み上がりだ。

「オイ、俺を攫つてどうしようってんだ？ おれはユマ姫の居場所を知ってるが、これじゃ案内出来ないぜ？」

とにかく枷を外させれば素手でもどうにかなる。コイツ等はブツガーやマルムークみたいな凄腕とは程遠い、素人に毛が生えただけの連中だ。

しかし俺の提案に、コイツ等は乗って来なかった。肩を竦め薄ら笑う。

「あーそっちの方は諦めよ。なんせ森から窺っていたのは俺らだけじゃねえ、今頃帝国の奴らに取っ捕まってるに違いねえや、あんな奴らとやり合う気はねえーよ」
帝国軍は全滅していますが、森に隠れたシノニムさん達の事を誤解しています

「んだと？」

最悪だ。一応アイツを守り切れたかと思えば、結局は帝国の手に渡っちまったって言うのか？

絶望に身を焼かれる思いだが、もう一波乱あるのは悪い事ばかりじゃねえ。

「オイオイ？ 良いのか？ だつたら帝国の奴らは俺の事、血眼に探してると思うぜ？
なんせ隊長含め、何人斬り殺したかわからねえ、メンツに掛けてドコまでも追つてくるだろうぜ」

「怖いねえ、だがそれも問題ねえよ、ここでお前は死ぬんだ」

「何だと?」

おっさんの意図が解らず間抜けな声が出た。生かして売るかと思えば、結局は殺そうってのか?

「アレを見ろ」

親指で後ろを示すその先に、俺の服を着せた死体が有った。ブツガーだ。

「なんだありゃ? 人形遊びにしちゃあ悪趣味だな」

「お嬢ちゃんのお遊びと違って俺らは本格派よ、ほらよ!」

ひっくり返したブツガーの死体は内臓や眼球が飛び出すグロテスクな物。いやあの高さだ、むしろアレだけの原型を保っている事に驚く程の頑丈さ。

その潰れた顔には、ご丁寧に俺の掛けていた眼鏡まで付けられている。

「オイ、まさか俺の服を着せて俺の死体に仕立て上げるってのか? 冗談キツイぜ」

「まあ思った以上に形が残っちゃってるな、そこでコレよ」

そういつておっさんの横、若い男が取り出したのが、あの見慣れたウオーハンマーだ。「やれ、誰だか解らない程度にな」

「へい!」

元氣良く叫ぶ若者だが、ハンマーは持ち上がらない。結局二人掛かりでハンマーを持ち上げ、重力に任せて叩き落した。

たちまち眼鏡は顔に沈み込み、体も血塗れに。見るに耐えない姿になった。

「あーあ、ブツガーも草葉の陰で二枚目に成れたとむせび泣いてるだろうよ」

死闘を繰り広げた相手の無残な姿、俺の声には複雑な思いが籠る。

「お前さんも二枚目にならない様に気い付けろよお？」

「わっかつたよ！　で？　どうするつもりだ？」

「ズーラー様が死んじまったからな、なんとかグプロス卿に連絡を取らねえとな」

「アイツに？　アイツは俺なんかに興味はねえだろ」

「どうだかな？　決めるのは俺じゃない、お前の持つてる情報に興味があるかもしれないだろ？」

「だと良いがな」

あの領主がゲイだったとは思えない、一体コイツ等は何を考えているのやら。しかし何を考えてるか解らぬ輩なら物の価値だって知らぬに違いない。

「オイ！　俺が持つてたブローチはどうした？」

「ああ、ここに有るぜ。立派な宝石。ついてやがるなあ！」

ブローチは無造作に袋の中に詰め込まれていた。

「そのブローチに傷一つ付けるんじゃねえぞ！　そいつあ魔道具だ、台座から宝石を外したり、宝石に傷が付いちゃあ台無しになるぜ」

「へえ……こいつがねえ」

おっさんがしげしげとブローチを眺める。

「上手く売れば貴族のお屋敷がダース単位で買える筈だ」

「どういう効果なんだ？」

「エルフ、いや森に棲む者の魔法が一つだけ込められる、実の所俺が生きてるのもそれのお陰よ」

「そいつは良いぜ！ とんだお宝だ！」

「今は使っちゃまって空だがな、しかし森に棲む者を捕まえりやあ意味が有る」

「はあ？ それじゃあ誰も使えないだろうが！」

「いや、帝国は喉から手が出る程欲しがらるだろうぜ」

「そうか……そうだな……」

考え込むおっさん、売却ルートでも思案しているのだろう。

俺がベラベラとブローチの価値を説明するのは訳が有る。

それは宝石だ。ブローチに付けられた宝石にどの程度の価値が有るかなど俺には解らない。

ただ犯罪者に盗まれた大きな宝石は、足が付かない様に必ず砕かれる。

砕かれれば宝石としての価値は激減するが、魔道具としての価値に至ってはゼロ。ま

してやあのブローチはアイツの妹の形見。バラされちまったら意味は無い。

「良い事を聞いた、よおし長居は無用だ！ 出発するぞ！ コイツを括り付けろ」

そうして俺は粗末な荷台に括りつけられた、小汚い武器や鎧も積んでいる。恐らくは死体から剥ぎ取ったのだ。

「オイオイ、ルームサービスがなつてないんじゃないか？」

殆ど簀巻きにされた状態でも、俺は悪態を忘れない。

「言つてろ！ オラ！ 行くぞ」

人力で荷車を曳いて行く、こんなボロい荷台でどうするつもりだ？

「オイ!? どこへ行くんだ？」

「聞いて無かつたんかよお！ スフィールだつて言つたら！ 多少揺れるが舌は噛むなよ？」

「ああクソツ！ わかつたよ！」

そうして俺は、止まらぬ舌打ちを漏らしながら、荷物の様にスフィールへと運ばれていったのだった。

下水の穴蔵

落下の傷が癒え切らぬまま、簧巻すまきにされて粗末な荷台で運ばれた俺は、激しい振動に再び意識を失っていた。

そうして気が付けば、薄暗い小部屋の檻の中つて訳だ、全く笑えねえ。

檻の向こう側で一人、暇を持って余した様子の看守に尋ねる。

「オイ、どこだココは？」

「ちつ、誰が答えるかよ！ グースカ気持ち良さそうに寝やがって、どんだけ肝が太いんだか」

恐らくは二十そこそこ、人攫いつて割りには人が好きそうな若者だが、言わせて貰えば肝がどうこうと言うより単純に俺の体の限界だった。

何が『俺の剣で世界を引つ掻き回す』だ！ 落下が無くたって、致命傷と言えるだけの大怪我の連続だった。

世界最高レベルの肉体と言うがそれも素質の話、温い旅の間に鈍なまらせちまったか？

こっちに来てから魔獣とか言う化け物の相手ばかりで、肝心の対人戦がお留守だったのは疑うべくもねえ、自慢の剣術が最も生きるのが対人戦と言うのによお。

とにかく今は体力の回復が先だ、血も肉も足りてねえ。

「オイ、飯はねえのかよ」

「馬鹿かテメエ！ 虜囚らしく大人しくしやがれ！」

「こつちは崖から落つこちて、掛け値なし体の限界よ。外傷こそ治つちや居るが見た目よりヤベエんだ、死体を売るつもりじゃねえなら飯ぐらい出せよ」

「そんだけ減らず口が叩けりや十分だろうが！」

「そいつあ生まれつきよ、だがヤベエのはマジだぜ？」

「チツ！ これでも食つてろ」

「お？ なんだ？」

そう言つて檻の向こうから投げつけられた物を俺は片手でキャッチする、監守の若造が放つて来たのは油の塊？ いやよく見りや蛙か？

「こいつは良いや！ ゲツタルカかよ！」

ゲツタルカはこの世界の料理で、蛙の腹に味付けした煮豆をパンパンに詰め込んで油で揚げる田舎料理だ。

「へえ、都会の人間はコイツを嫌がると思つていたがね」

「ハツ、見くびるなよ。こちとら魔獣退治の冒険で野っ原駆け回つてんだ、蛇や蛙を焼いたモンをいっつも食つてんだよ」

そう言つて俺はゲツタルカに齧りつく。言うまでも無く蛙に豆、どちらも良質なタンパク質だ。今の俺に最も必要な物と言つて良い。

「ん？ こいつあ？」

「へへっ、驚いたか？ そいつの腹に詰まつてるのはただの煮豆じゃねえ、ガデッドよ」
悪戯が成功した子供の様に若造が笑う、ガデッドはどんな料理かつて言う……納豆だ。

ただし、味は全く違う、中東っぽいエスニックな感じだ。

豆を発酵させて、その独特の臭いを南方の香辛料で誤魔化す、ピリ辛で刺激的な味が、淡白な蛙を揚げたゲツタルカに存外マツチする。

「オイオイ、コイツはあウメエじゃねえか！ ゲツタルカの中身をガデッドにするたあよ」

「お前マジかよ？ ガデッドが臭くねえのか？」

「ああ？ こいつは俺の故郷の味よ！」

「マジかよ、スールーンの生まれか？ そうは見えねえが」

「スールーンは第二の故郷だな、だが本当の故郷にも豆を腐らせた料理が有るんだ」

スールーンは俺がこの世界に落ちた場所、帝国の南部地方の名前だ。右も左も言葉だつて解らねえ世界で中坊が一人、田舎の村に救われた。

その時、このガデッドには随分お世話になったもんだ。

俺の体はこのガデッドで作ったと言つても過言じゃねえ。そうじゃなくても前世から納豆でこの手の臭みには慣れっこだ、初めっから大して苦痛でも無かつたな。

そもそもこいつが無けりやチパタって言われる、ナンだかパンだか解らねえ焼きしめた固いモン、食えたもんじゃ無かつた、全粒粉で口の中がザラザラするんだから堪らない。

「ガデッド以外の腐った豆料理なんて聞いたことがねえぞ？　どこの生まれだ？」

「遙か遠く、帝国でも王国でも、ましてや南方のプラヴァスでもねえよ。もつと遙か遠く、行くに行けない場所さ」

「吹かすなよ！　この世に帝国でも王国でも南方でも無い国なんて聞いた事ねえぞ！」
「ククツ！」

「からかうんじゃねえ！」

監守の若造の文句に、思いがけず苦笑が漏れる。そりゃー日本は『この世』に無いから仕方がねえか。

「んな事より、こいつはもつとねえのかよ？」

そう言つて俺は蛙の骨を左右に振る、丸揚げだが流石にコイツは食えねえ。ちなみに頭は元々切り落としてある。

「ああん？ もう喰っちゃまったのか？ ゆっくり食わねえと腹あ壊すぜ？」

言われるまでも無く、この世界の揚げ物は油の質が悪く胃もたれする。いやこの蛙自体の油も碌なモンじゃねえのか、ゲツタルカはゆっくり食えつてのが格言みたいになっている。

だが、俺の体は神様謹製よ、消化器官だつて並じゃねえ……いや、流星にあの怪我の後だ、ゆっくり食えば良かったな。

「わりいな、思いの外旨くてよ」

「へっ、変わった奴だぜ、でもアレでゲツタルカは品切れよ、これでも食ってな」

「ん？ ああ、これは普通の芋クだな」

次に投げつけて来たのは普通に茹でた芋、この辺りで良くとれ畑も多い。味はジャガイモに近いが、茹でれば里芋みたいな独特の粘り気が有るのが特徴だ。

「打って変わってコイツは随分と普通だな、オイ、バターとは言わねえが塩ぐらいねえのか？」

「贅沢言うんじゃねえよ！ ゲツタルカは俺の私物、おめえの飯はその芋一つだ」

どうやらこの若造の気まぐれで、俺はタンパク質たっぷりの蛙にありつけた様だ、こんな芋一つじゃ力は戻らないに違いない。

「そいつはどうも、あの蛙、旨かったぜ、何より久々のガデッドだ、この辺りでガデッド

なんてどこで手に入れた？」

俺は芋を齧りながら、世間話を持ち掛ける。

情報が欲しいのものも有るが、なにしろ芋がマズイ、塩が無きや食えたもんじゃねえ。この辺は内陸だから塩は少々値が張るとは言えこれはキツイ。

「ああ、あれは俺の手作りよ、俺の地元のガデッドと嫁さんの実家の蛙で一旗上げようと思つて屋台を出したが鳴かず飛ばず、借金だけ残っちまった」

「あー」

俺の感覚では納豆もガデッドも旨いが、喰い慣れない者にはキツイに違いない。

「ぜつてー旨いんだが、みんなして臭い臭いと言いやがる」

「おい、チーズは試したか？」

「なんだと？ チーズ？」

「ああ、チーズを混ぜりゃガデッドの臭ひはもつと消せる、実証済みさ。ピザつて料理を聞いた事ねえか？」

「ピザ？ そういやスールンで流行つてゐるって聞いたな、確かチパタに具とチーズを乗つけて焼くんだったか？」

「何を隠そうピザを流行らせたのがこの俺よ、チパタに乗せる具はガデッドでも構わねえ、むしろ臭ひが消えるんだ」

「何言つてやがる！ チーズだつてくせえじゃねえか！」

「打ち消し合うのよ、おまけにケルタオイルを振つちまえば誰もガデツドの臭いを気にしねえ。ガデツド嫌いも気が付かずにガツガツ食つたぜ」

「マジかよ」

そんな風に世間話に興じていた訳だが。

「オイ、うつせえぞ！ 何くつちやべつてやがる！」

俺を監視している若造の背中側、この部屋の外、扉の向こうから谷底で見た、あの小汚ねえおっちゃんの大喝が飛ぶ。

……今までそんな気配はしなかった、あいつ今までどこ行つてやがった？

「ふざけんな！ こつちだつて遊んでんじゃねえんだよ！ 俺なりにコイツから情報を聞き出そうとしてんだよ！」

叫びながら看守役の若造が扉から出て行くが、生憎と檻は頑丈でこの隙に脱出なんてのは無理そうだ。

なにより俺は素っ裸、体調だつて、まだ本調子とは程遠い。

「うるせえ！ どうせ逆にこつちの情報を聞き出されちまうのがオチだ！ 黙つて見張つていやがれ！」

バキッと鈍い音がする、その後、再び開いた扉からあの小憎らしいおっさんの顔が飛

び出してくる。

「よお！ 元気でやってるか？」

「なかなかの好待遇に感謝だな、塩がありやもつと良かったがね」

「そうかよっ！」

そう言っておっさんが投げつけて来たのは、陶器の筒に入った塩だ。塩をケチる飯屋が多く、こう言った物を常備する人間は少ない。

「どうも！」

素直に出て来るとは思わなかった、俺は残り少なくなった芋に塩を掛け、一息に頬張る。

「返せよ」

「はいよ」

キープしたかったが、まあ無理か。俺は陶器を投げ返す、コッソリ塩は抜いたがな。

「で？ 俺を売る算段は付いたのかよ？」

「それよ、ズーラー様が居なくなつて誰に連絡しようかと思つてな」

「誰だつて良いじゃねーか」

俺にはおっさんの言葉がピンと来なかった。そりや小ズルそうなズーラーつてオヤジは、似た者同士で馬も合つたんだらうが、アイツ一人消えた途端、誰とも連絡が付か

ないってのは解せない。

「ズーラー様の部下も含め、根こそぎあそこで死んじまったのかも知れねえ、コイツは困った事になったぜ」

「おいおい、普通に正面から商会かなんかのフリをして近づいて、シノニムだったかあの辺の嬢ちゃんに話を通せば良いじゃねえか」

「それがよ、そのシノニムちゃんも居ねえのよ」

「んだと？」

「で、代わりに見知らぬ輩がウロウロしてきな臭え、そもそも面会の受付とかもストップしてるし、どうにも慌ただしいんだ、おめえ何か知らねえか？」

「知るわきやねーだろうが！」

「……だよな、参ったぜ」

頭を掻くおっさんの話は俺にも全く見当が付かない物、見知らぬ輩？ 帝国軍か？

百人からの部隊が全滅、それもたつた二人相手なんて考えつかねえだろう、グプロス卿が裏切ったと思われた。そんな所か？

何にせよ、情報が全く足りてねえ。

「とにかく、連絡が取れるまでお前さんはココで暫く塩漬けだ。体調を整えて置けよ」

「へー、ありがたいねえ」

「抜かせ、お前が売れないとあらば躊躇なくぶつ殺すからなあ。よおつく考えて行動しろよ」

「肝に銘じて置きますよつと」

「フン！ 減らねえ口だ！」

そう言つて、おっさんは出て行き、代わりにあの若造が入つて来る。しかしその頬は赤く腫れあがり、恐らくはぶん殴られたに違いない。

「お前の所為で殴られちまつたじゃねーか」

「俺の所為じゃねえだろ？ 敢えて言うならゲツタルカが旨過ぎるのが悪い」

「へへっ 違いねえや」

そう言つてお互いに笑い合う、しばらく顔を突き合わせるんだから仲が悪くちやどんな目に合うか解らねえ。

なにしろ俺はこの檻で暫く過ごすしか無いらしい、その間に体を回復しねえと話にならない。

脱出してまずは剣、そしてブローチだ。

ここが何処だかも、あのおっさんの大声でアタリも付いた、反響音から恐らくは地下。

俺が気絶してるとは言え、真つ当に門を潜つたとも思えねえ。と来れば恐らくココは地下下水道。

そんなトコだろ？

「明日も頼むぜ、チーズ入りゲツタルカ、試食してやるよ」

「言ってる馬鹿が！」

とにかく今は、飯にありつく方法を全力で模索する、考えるべきはそれだけだった。

気配の正体

「でよ、俺のツレがチーズにガデッドなんて絶対合わねえって食おうとしねえのよ」

「ぼっか、挽き肉だつて騙して食わせちまえば良いのよ」

「かみさんに許可無く肉を使ったなんて言ってみろよ、殺されるぜ」

「おいおい、だらしねえなあ」

「言つてろよ、家のかみさんを怒らせてみる。お前のケツなんざ果ての山脈まで蹴っ飛ばされるぜ」

「そりやおつかねえや」

狭い檻の中、俺は肩を竦めて笑う。

俺はすっかり監守と仲良くなった。

「んな事よりどうなんだよ？ 結局ガデッドとチーズ入りゲツタルカ、かみさんは食つたのか？」

「ああ、ギャーギャー騒いだ末にペロリと食いやがった、『おいしい』だつてよ」

「良かったじゃねえか」

「あんだけ騒いでそれだけかよ！ って叫んだぜ、でよ、実は嫁さんもガデッドは本心

じゃ臭いと思つてたらしいんだ」

「ブハツ！ マジかよ！ それこそ商売始める前に言つてくれつて話だな」

「だよな！ そうなんだよ、今更そんな事言われてもつてな」

「旦那の故郷の味を否定したく無かつたつてトコロか？」

「そう！ 正にソレらしいのよ！ そんなトコで急に良妻ぶりを発揮されてもよお」

「良い嫁さんじゃねーの、借金抱えた旦那を見捨てないだけで上出来だ」

「始めつから素直に臭いつて言つてくれりゃー、その借金だつて無かつたつての！」

「ハハツ違えねえ！」

藁が敷かれただけの寢床の上で、俺は腹を抱え笑う。

対して檻の向こう、雑な作りの丸椅子で笑うのが話し相手である看守役の若造、ミダナンだ。

ミダナンは、ゲツタルカつて名の蛙に煮豆を詰めて揚げた田舎料理に、ガデッドつて納豆みたいな癖の強い食材を組み合わせる危険な素人料理を屋台で売り出した。

結果、見事に借金をこさえ奴隷として売られる、つて瀬戸際で、逆に奴隷を仕入れる側、人攫いつて犯罪者に身をやつした訳だが、度胸も腕つぶしも無く、ひたすら表向きの仕事、下水掃除だけをさせられているらしい。

本人は情けなく思っている様だが、ここは足を洗う絶好のチャンスと言える。

ここスフィールの領主グプロスは王国の守りを担う立場にあつて、恐らくは帝国に寝返っている。

広報使節団と称した帝国兵を百人から呼び込むのだから間違いは無いだろう。

しかもその結果、帝国兵は壊滅。大損害を負つた筈。

百人からの部隊を失つた帝国がどう思うかは解らないが、面白くは無いらう。その上コレだけの騒ぎとなれば、近隣諸侯も異変に気付く可能性が高い。

更にゼスリード平原ではグプロスの片腕、ズーラーが死んでいる。これまた死んでしまったヤツガランとか言う衛兵隊長が言っていたが、ズーラーは昔から裏の仕事を取り仕切っていたらしい。

現に俺を捕まえた人と人攫い共がグプロスに連絡を取ろうにも取れず、既に四日も俺はこの狭い檻の中で待たされていた。

ここまで揃えばグプロスがどう出るか解らない。ただグプロスが逃げるにも追い立てられるにも、後ろ盾が無くなった組織が辿る末路は悲惨な物だろう。

俺は笑いを納めて、真面目な顔でミダナンに向き合つた。

「でよ、今日の分のゲツタルカはまだかヨ？」

「真面目な顔で言う事が其れかよ、ほらよ」

ミダナンが檻の向こうから投げて寄こすゲツタルカを俺は両手で大切にキャッチし

た。

「コレよコレ、良い匂いじゃねーの」

「ああ、漏れ出る匂いも、ガデッドの臭さじゃなくて美味しそうな香りだったかみさんも太鼓判よ」

「へえ、相当気に入ったみてえだな」

「おうよ、お陰で最近晩飯はこればかりだぜ」

「へへっそいつはご愁傷様、俺は毎日だつて構わねえがな」

そう言つて俺は蛙の腹にかぶり付く。腹に詰まつたチーズとガデッドはまだほのかに暖かく、チーズとガデッドのところが混じり合い、更には強烈な二つの臭いが鼻に抜けて行く。

「くあーたまんねえな」

口に広がるガデッドとチーズの味は滋味に溢れている。実際ここ数日食べ続けたコイツのお陰で俺の体は既に調子を取り戻していた。実際ここ数日食べ続けたコ

大怪我を魔法で癒した俺の体だが、魔法が無から有を作るので無ければ、体中の血と肉を寄せ集めて傷を塞いだに過ぎないと思われる。

実際、かつてない程の眩暈や不調に見舞われ、度々気を失う有様だった。

それがどうだ？ たったの四日での完全回復。俺の体の作りの良さを考慮しても驚

異的なスピードだった。

しみじみと蛙の腹に詰まった、ガデッドととろけたチーズが混じり合つた具を眺めている俺に、ニヤニヤと監守のミダナンが話し掛けて来る。

「どうだ？ うめえだろ？」

「ああ、日に日に良くなってる。ガデッドの香辛料、辛みの強い奴に変えたか？」

「解るのか？ 流石だな」

「ああ、この辛みが良いアクセントになってる」

「へへっ、かみさん以外にも誰に食わせても本気で評判良いのよ。前は舞い上がってそんな事も見えて無かつたんだなって思う程にな」

得意そうに鼻をこするミダナン、しかし状況は案外に悪い事を伝えなくちゃならぬ。
い。

「オイ、ミダナン」

「どうした？」

「ゲツタルカはうめえけどよ、不味い事になると思うぜ」

「んだよ？」

俺が捕まつて四日、グプロス卿との連絡はまだ取れていないらしい。

それだけでグプロスサイドの混乱の程が知れると言う物。

「百人からの帝国兵が全滅したんだ、間違いなく荒れるぜ。何が起こるか解らねえ」
「その、全滅つてのはマジなのかよ？」

「マジだ、それに碌でもねえ事しか起こってねえ、それでよミダナン！ これはチャンスだぜ？」

「チャンス？」

「借金だよ、あの糞親父に立て替えて貰ったって言つてたじやねえか」

「そうだよ、大恩人だぜ」

「その大恩人がヤバくなくても助けようなんて思うなよ？」

「どういう事だよ？」

「……………」

どういふ事と聞かれて俺は言葉を濁す、どうにも説明しきれぬ気がしねえ。

ゼスリード平原からこつち、俺の気配を感じる力は増した様に思える。

俺が感じる気配って奴が何なのか？ 漫画の中では当たり前に出て来るキーワードだけに今までは疑問にも思わなかった。

だが暇になってここ四日考えた、気配にも個人差があつて、気配が薄い人間と濃い人間が居るのだ。

濃い人間の筆頭はユマ姫こと高橋だ、あの濃い霧の中でも何処に落ちて来るかハツキ

り解る程にその気配は濃かった。

逆に薄い人間は誰か？ 色々見て来たが直近で気になる程薄い奴が居る。それも三人だ。

それが兎に角ヤベエと感ずる原因なんだが、それを説明出来ない以上、力業での説得しかない。

「とにかくヤベエと思つたら隠れてろ、絶対に碌でも無い事が起こる。荒事専門で生きて来た男の勘を信じてくれ」

「そんな事言われてもよ」

ミダナンは困惑気味だが、納得して貰わなきゃ困る、俺が声を荒げようとした時だ。

「オイ！ うるせえぞ！」

部屋の外、扉の向こうから荒つぽいダミ声が届く。

いつの間に？ 何時から居たんだ？ 人攫いは四人、あのいやらしい親父とミダナン以外に二人。この声は髭が濃い方。だが髭の濃さなんてどうでも良い。

——俺は今、コイツの気配を全く感じなかった。

そんな俺の焦りを知らず、ミダナンは呑気に言い返す。

「でもよお、こつちだつて監視しろつて部屋に閉じ込められて暇なんだよ。これじゃどつちが奴隷だか解らねえよ」

「ハッ！ お前も奴隷一歩手前だろうが！ 売られたく無かったら黙ってろ」
「解つたよ……」

「親父さんがそろそろ帰つて来る、報告させて貰うからな」
「ええ！ 勘弁してくださいよお」

二人の会話も頭に入らず、思考に沈む。

『気配を消す』普通に考えたら達人の仕業だ。

だがこの髭が濃い男はただの人攫い、そんな技とは無縁のハズだ。

言い知れぬ焦燥感に苛まれるが、そこに新たな気配が二つ。

「おっ!? 噂をすれば親父さんが帰つて来たみたいだぜ？」

髭の濃い男のにやけた声、確かに気配なんぞ読むまでも無く、地下室に足音が響く。しかしその足音の数が問題だった。気配は二つ、しかし足音は地下の反響を考慮しても

明らかに三人分。

俺がその事に密かに戦慄したその時だ。

「ああ、ミダナンの野郎、また親父さんにどやされるぜ！」

——は？ また違う声！ 髭が薄い方も居たのかよ！

響く陽気な声とは裏腹、俺の背筋には更に冷たいものが走る。

コイツもまた、気配を全く感じなかった。

「よお！ 戻ったぜ！」

浮かれた声、親父と呼ばれる小汚いおっさんの物。しかしその声の元からは気配がない！

これで三人、元々極端に気配が薄い三人だったが、今や全く気配を感じない。

「どうだよ親父、首尾の方は」

「バツチリよ！ ワザワザ引き取りに来て下すつた」

声と共に部屋に入つて来る気配が二つ、こちらは濃い気配と共に金属音を鳴らして歩く。扉の向こう、姿は見えないが恐らくは鎧で身を固めている。

「オイ、例の男は何処だ？」

聞いたことが無い無機質な声。殺し屋や職業軍人を思わせた。

それに対するおっさんの声は、もみ手で答える様が目に浮かぶ程。

「奥の部屋に確保しています、オイ！ 連れて来い！ 念入りに枷を嵌めろよ！」

「へいー！」

景気の良い返事と共に、髭の濃い男が部屋に入つて来る。

「ミダナン、出荷だ、枷を嵌めろ」

「あ、ああ……オイ枷だ、嵌めろよ」

「おう……」

ミダナンが木枷を檻の中に放り込んだ。俺としても変に齒向かうつもりは無い。木枷つてのは案外面倒なんだ、俺達は檻を挟んで二人、木枷を嵌める共同作業となつた。

自然、俺達は檻越しながら、至近に向かい合う形になる。

ミダナンは悲し気な顔で話し掛けて来る。

「悪いな、これでお別れだ」

「んな事はどうでも良いから話を聞け！」

しかし俺はその感傷をバツサリと切り捨てる。今は一刻を争うのだ。

「んだよ！ 人が折角……」

「良いから！ 俺が出て行つた後、入れ替わりで檻の中に隠れろ！ 頭から藁を被つて

部屋の隅で丸まつてろ！ 良いな！」

「は？ んな事したら親父に殺されちまうよ」

「もし何にも無かつたら、世話のお礼に藁の中に指輪を隠したと、俺に嘘を吐かれたと言え！ 馬鹿にされるだけで済む」

「何だつてんだよ？」

「さもなくば……死ぬぞ！」

「なっ！」

俺の迫力に声を失うミダナンだが、どうやらコイツは酷い勘違いをしたらしい。

「やけっぱちで暴れる気かよ？ 無駄だぜ？ 立派な騎士様が二人も来てる」

——チツ

騎士が二人、自分の予想通りの事が起こりそうで、ミダナンの言葉に思わず舌打ちが漏れる。そしてそれが更なる勘違いを生んだ様だ。

「オイ無謀だぜ？ 嘘だよな？」

どうやら本格的に俺が暴れると思ひ込んだ様だが、俺はいつそコレに乗つかる事にした。

俺は思い切り大法螺を吹いてやったのだ。

「嘘じゃねえ、俺は森に棲む者の魔法具をケツの穴に隠してる、コイツが爆発すれば辺りが吹っ飛ばぜ」

「自殺じゃねえか！ 馬鹿な事は辞めろよ！」

ミダナンが慌てた声をあげるもんだから、髭の男が苛立たしげに檻を蹴っ飛ばす。

「オイうつせえぞ！ 枷を嵌めたならとっとと檻から出しやがれ！」

「ハ、ハイ！」

ミダナンは怯えの混じる返事と共に檻の鍵を開けて入って来た。

今度こそ最後のチャンスと俺は小声で必死に訴える。

「頼む！ 俺を男にしてくれ！ お前は部屋の隅に居るだけで良い。それで借金も無くなり、あの糞旨いゲツタルカでやり直せる」

「そんな！ そんな！」

「ありがとよ、お前のゲツタルカ旨かつたぜ、俺が死んでも俺が考えたゲツタルカが残る。それを誇りに逝かせてくれよ」

「うっ！ うう！」

ミダナンは泣くが、勿論大嘘だ。

「なあーにをボヤボヤしてやがる！ お客が待つてんだ！ もたもたすんなー！」

「ああ、木枷も嵌まつてるし大丈夫だ、連れて行つてくれ。俺は部屋の掃除をしてから行くよ」

「そりやあ良い、お前は掃除のプロだからな」

髭の濃い男がガハハと笑うが、掃除のプロ、その方が人攫いよりよっぽど良いだろうに。

木枷がしっかりと嵌められたまま、髭の男に連れられ扉を潜る。俺は四日ぶりに部屋の外に出た。

監禁部屋の外も同じ様な地下室だが、流石に四倍以上には広い。小さなテーブルに謎の薬品、樽の中には一杯の武器。薬は言うまでも無いが、武器はゼスリード平原で拾っ

た物だろうし真つ当に捌けない物の見本市だ。

振り返ると、俺を悲しそうに見つめるミダナンと目が合つて、俺は黙つて頷いた。そこに大きな気配の主から声が掛かる。

「その男が例のタナカか？」

低い声の主はやはり鎧の男、それも一目で騎士と解る姿だった。悪党の巢の中で正騎士の重装備は酷く浮いて見える。

「騎士様がお出迎えとは、俺も偉くなつたもんだな」

「馬鹿な事言つてんじゃねえ！ スイマセン、口の悪い野郎で」

おっさんは俺の頭をぶつ叩きながら、気味の悪い猫なで声で騎士に笑いかけるが、騎士の方は愛想笑いも返さない。

こりやヤバいか？ 軽口とは裏腹、俺はじつとりと重い汗を掻く。

騎士の体は大きく、仕草にも一々隙が無い。その強さは一目瞭然だった。ブツガーにも劣らぬ実力者に違いない。

だが本当にヤベエのは奥でジツとしている方。俺と同じかそれ以上に強いじゃねえか！

——噂なに違わねえ！ コイツらが、破戒騎士団！

俺の視線に気が付いたのか、奥の騎士が柔らかい声でおっさんに尋ねた。

「組織の人間は三人だけですか？」

恐らくは三十過ぎの男、氣遣いの出来る優しい気な声だが、俺には妙に冷たく感じられた。

対して人間が少ない事を指摘されたと思つたのか、おっさんは慌てた声で返す。

「いや、ホントはもつと居たんですがね、色々有つて減つてつちまいました」

「いえ、責めてる訳では無いのです。それ所かこの男の確保は大変なお手柄で、直々に予算を貰つているのですよ」

「ホ、ホントですか？」

どう考えても怪しい話だが、おっさんは疑いも無く乗つかった様だった。

「ええ、報奨金とは別に、騎士団からのお礼としてね。近くに良いお店が有るんですよ、可愛い子いっぱい居ますよ」

「おおっ！ 騎士なんざお堅い職業と思つてましたが、ありがたい！ 大好物です！」

「ご冗談を！ 破戒騎士団と言われているの知つてますから、で、予算は有りますから組織の人間は残らず呼んで下さい。人数が少なくてもお店のグレードは上がりませんからね」

冗談めかして騎士が言うが、その目が笑っていないのに俺以外は気が付いていない。俺はごくりと唾を飲むが、対照的におっさんと髭の濃い方、薄い方はニヤニヤと笑つて

見つめ合う。

「いえ、これで全員です、早く！ 早く行きましょう」

おっさんが急かし、髭の二人もウンウンと首を縦に振る。コイツ等ミダナンをハブるつもりだ！ しかしこれはツイてる。

「そうですか、三人で全員ですか……」

騎士から柔らかな笑みが消え、代わりに腰から剣を引き抜く。

「な？ 何ですか？」

「直々に送ってあげます、最高にいい女、女神さまがおわす所にね」

「ふざけっ」

おっさんは最後まで文句を言う事が出来なかつた。

袈裟懸けに一斬り。ソレで真つ二つとは……叩き付けるのが普通の西洋剣にしちゃ、鋭く研がれている。

もう一人の騎士も剣を抜き、髭の濃い男を同様に斬り殺していた。

「ヒッ！」

残る髭が薄い男が悲鳴を上げたがそれだけ、すぐに斬り伏せられる。

全員即死！ コイツ等！ 人を殺し慣れている。

騎士なら当たり前？ いや、ここんどこ戦争も無く二十年は経って居る。大規模な山

賊団が出たとも聞かない、恐らくは捕まえた犯罪者を日常的に切り殺している。

「へへっ！ さつすがローグ隊長、良い剣筋ですねえ一撃ですよ」

騎士達はそれまでの硬質な態度を一変させた。人間的な柔らかな笑顔、だが少しも穏やかになれない。それが傷口をブラブラと弄びながらの言葉だからだ。

「いや駄目駄目ですよ、最近殺してませんからねえ、ちよつと鈍りました」

「とんでもない、俺の斬り口なんて酷いもんです、見てくださいよ」

奥のヤベエ方がローグ隊長か……しげしげと部下が斬った断面を検分する様は正気じゃねえ。

「うーん、剣を引くスピードをもう少し上げましょう、それに剣は魔獣用とは別に、人斬り専門の物を買った方が良いでしょう」

「さつすが、こだわりますねえ」

部屋は血塗れ、なのに楽し気に話す二人は異質に見える。

見えるが……これがコイツ等の日常なのだと一目で解った。コイツ等は殺しを楽しんでいやがる！

「隊長、こいつは？ コイツは殺しちゃまずいんですか？」

「おやおや、折角迎えに来たんです、その人は殺さないでね」

部下の騎士がケラケラと俺を指差し笑うが、ローグ隊長とやらがそれを止めた。

「どうやら俺は殺されずに済むらしい。」

「どうやって倒すか必死に頭を巡らせていたが、今の俺は木枷を嵌められ、武器どころか服も無い。全裸に枷の変態紳士スタイル。殺された素人三人が相手だったら兎も角、コイツ等とは勝負にもならないだろう。」

「これはこれはお優しいね」

「必死に軽口を叩くがキレが出ない、声も震えているだろう。」

「そんな俺を無視して、騎士二人は部屋を見やる。」

「他に人は居ないか一応見ておきましょう」

「わかりました」

「ヤバイ！ ミダナンは檻の中だが、調べればすぐにバレてしまう！」

「居ない様ですね、しかし隊長が奢ってくれるとは知りませんでしたよ」

「騎士は俺が囚われていた部屋を一瞥しただけで判断してくれた。」

「はは、ああ言えば仲間と言う仲間を呼ぶと思っただんですが失敗でしたかね？」

「いやあ、本当に三人で全員だったのでしょうかよ」

「楽し気に話す二人とは裏腹、俺は浅い呼吸を繰り返す。」

「どうやらミダナンは死なずに済んだか？」

「じゃあ、行きましょう。グプロス卿がお待ちです」

「おい、せめて下になんか着させてくれよ」

「あーそうですね、私もその粗末な物を見たくは無いですし」

粗末じゃねえだろ！ お前のモン見せて見ろ！ 叫びそうになるが見せて貰っても困るのでグツと堪える。

で、俺に着せてくれたのは死んだおっさんから剥ぎ取ったズボンだった。

有難くって涙が出らあ。

「じゃ、今度こそ行きましょ」

そう言って柔らかに笑うローグ隊長に連れられ、地下道を抜ける。

外に出ると暗く、時間は深夜。しかし場所は解る、スフィールの北門広場の脇、待機していた馬車に乗せられ、俺はグプロス卿の屋敷へと再び向かうのだった。

今度は囚われの身で。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

馬車の中、俺は自分が感じる気配に関しての考察が正しかったと確信する。

前世で、俺は高橋だけは絶対に死なない様に思っていた。

それに対して神は言っていた、死を運ぶ偶然に対抗するべく、最も死にくく平凡な運命を持つのが高橋だったと。

そして俺がその運命の力を感じていた可能性は否定できないと。

だとしたら、俺が感じる気配、それは運命の力そのものじゃないのか？
だとしたら？　だとしたら高橋は、ユマ姫は巨大な運命を持っている。まだ死な
ない。死んでいないハズだ。

だったら俺はあのブローチを取り戻し、そして再会しなくちゃならねえ！
決意を胸に、俺はグプロス卿の城へと向かうのだった。

敵中模索

馬車に寄せられ、恐らくは裏口からグプロス卿の城に連行された俺は、再び薄暗い地下室に押し込められた。

「待遇の改善を要求したいね」

同じ地下室でも待遇は天と地の差だ。

手枷だけでなく足枷まで嵌められ、手枷はフックで吊り上げられている。

手枷を嵌められた両手に全体重が掛かると痛く、かと言って必死に地をこすようにも、つま先しか届かず其れもまた痛い。

そして俺を連行して来た騎士も、念の為と部屋の中に陣取ったまま。

いかにも『さあ尋問しますよ』と言う形で笑ってしまう。

……いや、これが尋問の型だと言うのは帝国での話。悪ぶった奴らから『尋問されても口を割らなかつた自慢』を武勇伝として何度も聞いたもんだ。

しかし王国ではどうか？ 長らく帝国を拠点にしていたので断言は出来ないが、たまたま同じって事が有り得るか？

そんな事を考えられる位余裕が有るのは、鍛えた足の親指のお陰だ。足の親指は踏み

込みや急停止の肝、剣術や剣道に限らずあらゆる武道で重要度は高い。

どんな悪党だってたちまち音を上げる仕打ちと言うが、不自然なつま先立ちに、俺の体は十分に耐えていた。

軽口さえ叩く俺に、俺を吊るした下男は不満げだ。

「黙つてろ、ある御仁がお前の話を聞きたがつている。口はその時に回せ」

「へえ、プロポーズの言葉でも考えておくぜ」

「馬鹿が！ やせ我慢しやがつて！」

この手の尋問で余裕を見せるのは悪手、軽口を叩きながらもダラダラと汗を流す俺は、必死にやせ我慢している様には見えないう。は、

これもある種の武道の技、心理的に自分を追い詰め体を臨戦態勢に持つて行く。体温が上がり、汗が流れ、アドレナリンが湧き出し、痛みにも強くなる。

マジで死ぬような拷問なんぞ考えたく無いが最悪も考えなくちゃならない。僅かな隙も見逃せない。

「オイ！ タナカとか言う護衛はココか！」

しかし殆ど待たされる事も無く、目当ての人物が地下室に姿を現す。グプロス卿だ。

「グプロス様？ なぜこの様な場所に？」

下男にとっては予期しない人物だった様で、その登場に驚きの声上がる。

「ホッホ、なあに卿もその男に聞きたい事が有ると言つてな」

そう言いながらグプロス卿と共に現れたのは老人。しかし、その眼差しは全ての人間を虫の様に見下す、底冷えのする物。

直感的に解つた。このジジイが帝国側、薄汚い暗部の親玉だ！

「いや、しかし尋問は我らに任せてくれると……」

「しかし、じゃない！ コイツを連れて来たのは誰だ？ 俺の騎士だろうが！」

困惑する下男に怒鳴るグプロス。だが髪の毛が跳ねたままで、顔色も悪い。グプロスは明らかに追い詰められていた。

無理も無い、片腕だったズーラーも含めて大勢死んだ。

そして、下男は我々と言つた。コイツも帝国側の人間か！ きつと後ろのジジイが連れて来たに違いない。

部下の死んだ人数で言えば桁が違うハズ。なのに余裕たつぷりにジジイは笑う。

「ホホッ、なあにグプロス様の聞きたい事は先にお聞きください、ただ無理はなさらぬ様
お願ひしますよ？」

「かたじけない、オイ！ タナカ！ ユマは！ ユマ姫はどうした？ どこへやった？」

なんだ？ ユマ姫はグプロスや帝国の手に落ちていないのか？

俺は慎重に、言葉を選んで返答を返す。

「はあ？ こっちゃんが聞きてえよ！ 霧の中で別れ離れ。俺は体良く囷に使われて、アイツ一人で逃げやがったんだよ」

「誠か？」

「ぐっ！」

グプロス卿の問いに、俺は何故か思わず笑いそうになる。

笑っちゃいけない時に笑いたくなる謎現象有るよな？

だって、誠か？ とか言われてもよ！ 誠じゃねーよ！ 嘘だよ！

頑張つて口を閉ざしても何のメリットも無い。嘘でもなにか言つた方がマシだ。

裏切られた男として、何もかも洗いざらい喋つた方が良いだろう。

実際問題、俺は喋っちゃいけない機密情報なんて何一つ聞いていない訳だしな。

精々がエルフの魔法の脅威か？ いや、それだって帝国は既に知り尽くしてらだろうしな。

「誠も糞もねーだろ！ 現に俺だけ捕まって助けにも来ねーじゃねーかよ」

「ふむ」

平静を装いながらもグプロス卿は目に見えて肩を落とす。コイツこの期に及んでアイツをどうにかしようと思つてやがるのか？ ホームラン級の馬鹿だな。

呆れる俺だが、ジジイの方もそこに食いついて来る。

「お待ちを、タナカと言ったか？ 囹に使われたと言ったがユマ姫は敵の位置が解つたとどう事か？」

「さあな？ 二手に分かれましようからの、あなたはコツチ、わたしはアツチ。で、見事に俺の方に敵の本隊が居て、十人以上は殺つたか？ で、足を踏み外し崖から落つこちた所を取つ捕まつた訳よ」

「……なるほど」

適度に嘘を撒いて置く、これで俺がアイツを恨んでるって思つてくれればやりやすくなる。

「で？ 俺が何の罪に問われてる訳だよ？ おりゃあ何も悪いことしてねえだろ？」

「何だと？」

グプロス卿が食つて掛かるが、事実俺の行動は法的に問題は無いはずだ。

「俺は確かに帝国の使節団とチャンバラしたさ、でもよ、アイツらはこの王国領でユマ姫に弓を引いたんだぜ？ ユマ姫はそのグプロス様と同盟の協議中の立派な客人だ。俺は会談の時に一緒に居たからしつかり聞いたぜ？ 領主の客人に帝国兵が弓を引いたんだ、善意の第三者としては戦うのは当然だろう？」

「何か帝国とは行き違いが有つたようだな。なにより魔獣の襲撃が起こつた」

魔獣、確かにアレは誰にとつてもイレギュラーで有つたのだろう。グプロス卿は自分

でも半信半疑の様子ながらこちらに問いかけて来る。

「なあタナカよ、もしかして森に棲む者が魔獣を操ると言うのは本当なのか？」

真面目な顔でとんでもないトンマな質問をしてきやがった。

流石にこいつは予期しなかった質問だ！ 森に棲む者の物語では森に棲む者こそが魔獣を操り、人間にけしかけると言う話が少なくない。

根も葉もない噂だが、帝国にしてみれば『百人からの兵士で姫を捕獲しようとした途端に魔獣が現れた』そんな様に映るか？

「知らねえよ、俺も魔獣に齧られそうになつたんだ。ホントなら姫様には追加で文句を言つてやりたいね、それに森に棲む者の戦い方は打ち破つた帝国のが知ってるだろうよ！ いっそ帝国に問い合わせりやどうなんだ？」

俺がそう言うと、グプロス卿は思わず隣のジジイを見やる。その目線が答え合わせ！ ジジイは確定で帝国人だ。

ジジイは面白く無きそうにするが一瞬の事、ニコニコと話し掛けて来る。

「いやいや、実は私は帝国の人間ですがね……」

「へえ？」

初手から素性を明かしてきた。バレバレだったが隠す気も無いか……バラした本人であるグプロス卿の方が慌てている。

「で、上からは姫を捕らえて来いと、その執着はかなりの物でして。私の様な下っ端に詳細は知らされていないのですが、もし魔獣を操れるとすればそれも合点が行くと思ひましてね」

「さあな？ 知らねーよ、でもよ、だったら森に棲む者の国を襲った時に魔獣の群れに襲われてなきやおかしいんじゃないか？」

「あの霧は魔獣除けにもなりますから、その技が使えなかつた可能性も有りますかと」

「ふうん、悪いけど知らねーな、マジにそうだととしても、ただの護衛の俺には教えてくれないだろ」

「旅をしていて魔獣の襲撃を心配していないとか、何か通常の旅と異なる部分が有りませんでしたか？」

「そー言や、警戒していなかつたな。でもよ、姫はああ見えて鋭い。街中で寝込みを襲われたつて、賊が窓を破る前に既に気付いて居たんだぜ？」

「ふむ、それは魔法ですか？ なにか道具を使つていましたか？」

「魔法の様な事を言つていたな、嘘だとしても俺に魔道具と見分けは付かねえよ」
「でしような」

納得した様子の子のジジイであるが、俺は苛立ちが募るばかりだ。

「そんな不確かな可能性で姫様は追っかけ回されてるのかよ」

「いやはやお恥ずかしい、何分上が秘密主義で困っていますよ」

「俺の雇い主の姫様も秘密主義でよ、最後には見捨てられちまったぜ？　気をつけろよ？」

「肝に銘じておきます」

ジジイとは淡々と話が進む。尋問慣れしてると言うか、スルスルと話させる間の取り方に慣れを感じる。

こつちとしてもスルスルと全部話したいのだからコレで良い。

が、グプロス卿が邪魔しに来る。

「そんな事より、聞く事が有るのでは無いですか」

「おおお、そうでしたな」

聞きたい事？　話す事なんぞ、端から無いぞ？

敢えて言うなら姫様自身の戦力つてのはネタと言えるが、所詮個人の戦力など戦争の前ではどうでも良い話ではない。

しかし、グプロス卿の質問はそんなモノでは無かった。

「オイ、タナカ！　お前は奇妙な馬車を見なかったか？」

「奇妙な？」

「ああ、車輪が無い馬車だ」

「は？」

意味が全く解らない。なぞなぞは手足も痛くなってきたので勘弁して欲しい。

そこにジジイからフォローが入る。

「いえ、車輪が無いと言うのは可能性の話でして、馬が無い馬車と言うのを見た事は有りませんか？」

そりや見たことあるぞ？　ただし前世でな。自動車つて言うんだ。知ってるか？

エルフの国に自動車があるなんて聞いていないが？　ソレが秘密だったのか？

知らねえが、適当にフカしておくか？

「ああ、見た事有るぜ？　スゲエよな馬もねえのに車輪が回るんだ。車体は鉄の塊、重そうなのにス〜ツと動くんだぜ？　揺れも殆ど無えんだ、操作はこう……ああ、コイツを外しちやくれないか？」

まるで見て来た様に語りながら俺は手枷を降ろす様に訴える。

「降ろしてやれ」

ジジイが命じると下男はレバーを回す。滑車がガラガラと鳴って俺は地面へと降ろされた。

「オイ、コイツも外してくれよ」

「フックだけだ、枷を外すかは話を聞いてからだ」

いつの間にかジジイは好々爺然とした態度を捨て去り、冷然と先を促す。

これが話の核心なのか？ だとしたら見当違いも甚だしい、だが絶好のチャンスだ。「わ、解ったよ、でもよ目立つからってあんまり乗せて貰って無いんだ、話せる事は多くないぜ？」

「構わない、知ってる事を全て話して欲しい」

「あ、ああ、扉は車体の横、左右に有ってよ、操作は丸いハンドルを回すんだ。門や跳ね橋を巻き上げるハンドルとは違うぜ？ こう持つてよコレで右に、こつちに捻れば左に曲がる訳よ」

俺は自動車を知らない未開人に自動車とは何かを教える体で、身振り手振りで話を紡ぐ。

手枷足枷も縛りみたいなもんで、ジェスチャーゲームみたいで結構面白い。

皆真剣に聞き入っているが、相手が知りたい事とは無関係の、全くのゴミ情報つてのが堪らなく面白い。

「加速減速はどうすんのかって思うだろ？ よく見たらよ足元にペダルが有るのよ。ペダルって解るか？ ヴァンスって楽器には足で音を制御するパーツが有るんだけどよ。それとそつくりなのよ。ヴァンスじゃ音を伸ばすのに右ペダル、音を弱めるのに左ペダルを踏むんだけどよそれと全く同じ。右ペダルで加速、左で減速って訳だ」

などなど、面白おかしく話していたら様子がおかしい。

老人と下男はアイコンタクトを繰り返して、グプロス卿はご満悦だ。

そして、馬鹿話に似合わない真面目腐った顔で下男が頷き答える。

「一部異なる部分がありますが、こちらの得た情報とも大部分で一致します。間違いないでしょう」

「やはり実在したか」

「戦争が変わりませぬ」

——は？

思わず声が漏れそうになったのを必死に堪える。

え？ 有るの？ 自動車有るの？ マジで？

老人とグプロス卿が感じ入った様子で頷くがコツチはそれどころじゃ無い。

え？ 高橋さん？ 自動車作ったの？ 凄くない？

……いや、まだ十二年だぞ、あり得ない、アイツは工業系に詳しい訳じゃなかったしな。

だったら、元々エルフには自動車が有った？ ある種の完成した形だし、それをアイツが改良したって可能性なら有るか？

でもよ？ だったらアイツが乗って来たって言うピラークって飼いな^リらした恐鳥^{コイ}に

曳かせる馬車の話は何だ？

自動車が便利な事は知ってるハズのアイツが、エルフの馬車が如何に揺れないとか、速いとか、そんな話ししか無かった。

それだけなら、自動車を隠してただけとも思うが、大牙猪ザルギルゴールにピラークが喰われたとか話が余りにもリアルだった。

自動車なんざ無い、もしくは一般的じゃないんじゃないのか？

「な、なんだよ初めっから知ってたのかよ。お二人とも人が悪いぜ」

俺は間抜け顔を晒した自分を誤魔化す為に、適当に話を合わせる事にした。

しかしそんな俺をジジイは薄ら笑う。

「知っていたのではない、簡単な予想だよ。我々が森ザに棲バむ者の都を落としてからまだ二月と経って居ない、馬車で真っ直ぐスフィールに向かえばギリギリ間に合う日程だが、これではレジスタンスの結成どころか森ザに棲バむ者の生き残りと話し合う時間も無い。自然、我々には未知の乗り物が有ると言う事になる」

へへっ、笑えるう！ どや顔で語るジジイの馬鹿な事よ。いや馬鹿なのはあの姫様だ、アイツは家族が殺されるや否や、真っ直ぐ人間界に来たのだ。

そんなの予想が付くハズも無い。

だが俺には解る、今となつては俺だけにはその理由が解るぜ。

お前、自分の『偶然』にエルフを巻き込まない為にコツチに来たんだろ？
全く良い根性してるぜ。

加えて俺とアイツの足の速さが並じゃ無いのも予想外だろう、普通の馬車の旅程とは比べ物にならない早さだった。

しかし良かった、結局自動車はただの予想、いや妄想か。だとしても何か知ってる風だし、何を話すべきか解らねえ。

どうする？ いや、もう勢いで突っ切るしかないだろう。

「おい、あんたらあの馬車、いや馬も無いから自動車か？ あれが欲しいんだったら案内出来るぜ、早いとココイツを外してくれよ」

俺は大仰に手枷を掲げておどけて見せる。が、俺に浴びされたのはジジイの無慈悲な一言だった。

「それには及ばんよ、車の場所は調査済みだ、ゼス村に有るんだろ？ 違うかね？」
「なっ？」

丁度ゼス村に馬車があるって言おうとしたので、俺はビックリした！

……そういや、スフィールを出るとき、門番には馬車の修理でゼス村へ行くって嘘を言っただけだったな。

図らずも、俺のリアクションも含めてリアリティが増してしまった。

「凶星の様だな、しかも故障していると云うのは本当らしい。ゼスリード平原に現れなかったのがその証拠だ？ 違うかね？」

——全然違う！ 違うけどっ！ それで良いや！

「そこまで知ってんのか、でもオイ、頼むぜ！ 俺も連れて行ってくれよ。ここんとこずつと地下で気が狂いそうなんだ。俺もあの姫様に騙されてたんだよ、ギャフンと言わせてやりてえ、協力させてくれよ」

「いや、不要だな。不確定要素を連れ歩く気になれんよ」

「でもよ、俺が行かないと森に棲む者の連中は馬車を破壊して逃げるかも知れねえぞ？」

俺と行った方が絶対に上手く行くぜ？」

「お前が森に棲む者と合流するや寝返るリスクと比べれば大したことではない」

「そんな！ そりやねえだろおが、同じ人間じゃねえか」

「私は人間を一番信用していかないのだね」

なるほどね、恐らくは帝国の情報部、らしい物言いで参っちまうぜ。

俺は標的をグプロス卿に切り替える。

「グプロス様も何か言って下さいよ、無辜の民が虐げられてるんですよ？」

「ふん、森に棲む者に味方しておって、何が無辜の民だ」

正直、このままじゃバツサリ殺される可能性も高い。馬車への道案内で助かるかと

思ったがそうは問屋が卸さないらしい。

「ですがね……あ、そう言えばブローチ！ ブローチはどうなった？ アレの使い方を
知るのも俺だけでしよう？」

俺は必死にブローチの話題を振る、助かりたいのもそうだが、あの騎士辺りがコツソ
リがめて、バラバラにして売っちまったら堪らねえ。

「ブローチと言うのはコレかね？」

そう言つてブローチを取り出したのはジジイの方だった。

マズイ！ 帝国はこのブローチを活用する術がある。なるべくならグプロス卿に確
保して欲しかった。さらに言えば帝国の研究所とか持ち込まれたら奪還が難しくなる。

「オイ！ グプロス様よお？ 良いのかこのブローチはスゲエ品だぞ？ みすみす帝国
に渡しちまつて良いのかよ？」

「ふん、ブローチ一つで首が繋がるのなら安い物だ」

グプロス卿の吐き捨てた台詞は、それだけ今の状況のヤバさを物語っていた。

「魔道具のブローチも魔道車もお渡ししましょう、くれぐれも派兵の件お願いしますぞ」
「ふふつ、その件はココでは無く、二人つきりでお話ししましょう」

グプロスがジジイに派兵を求める。つまり、王国はグプロスの動きに気が付いてい
るってワケか。

「しかし、事は一刻を争うのです！」

「では早速話し合いまししょう、何時もの談話室で良いですかな？」

「よろしく願います」

そう言つて二人はさつさと部屋から出て行つてしまふ。

残されたのは俺だけじゃない、二人の騎士は困り顔で話し合う。

「全く、折角連れて来たのに劳いの言葉も無しかよ」

「あのオッサンに劳つて貰つてもね」

「違いないですが、どうします？　これ？」

顎で俺を指し示すが、俺だつて知らねえよ！　いつそ逃がしちやくれねえかな。

「また吊るしときましよう」

しかし無情にも下男が騎士二人に声を掛ける。

「オイ？　嘘だろ？　殺す気かよ？」

俺だつて吊られたまま放置なんてされちゃ流石に参つちまう、うつ血すれば、手は二度と使物にならなくなる事も有る。

「足はしっかり着く様にしますから、それで今晚の所は十分でしょう」

下男はそう言うが、だからつて楽なもんじゃない。藁も無く体だつて冷え切つちまう。

「元氣過ぎるからな、一晚経てば大人しくなるだろ」

「そうですね、その位で丁度良さそうです」

騎士二人はもうどうでも良さそうだ。クソツ！ 他人事だと思いやがって。

そうして騎士二人と下男はさっさと引き上げてしまうのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、吊るされた俺だけが真つ暗な地下室に残された訳だ。

「クソツ、マズったか？ どう言えば良かった？ いや、どう言っても駄目だったか

……」

ユマ姫に裏切られた体で寝返った様に見せたかったが、奴らだってプロだ、バレバレだった可能性は高い。

「こんな形で終わっちゃうのかよ……」

それから暗い部屋で何時間も吊るされ、柄にもなく弱気になっちゃった、その時だ。

「失礼」

ランプの明かりと共に、部屋に滑り込んだ一人の男。その顔には見覚えがあった。

「あんたは……」

「ええ、以前、会談の際お部屋まで案内させて頂いた執事でございます」

そう、スフィール城へ来た際、二度ともこの執事に案内して貰った。だが何故コイツがこのタイミングでここに来た？ 俺を普通の檻に移動させに来たというなら大歓迎だが……

「あなた様を助けに参りました」

「本気か？」

「訳が解らん、何故執事が？」

「はい、今の私は隣領ネルダリアの工作員でございますゆえ」

「なんだと？」

「聞けばネルダリアはここ数年、国防を疎かにするグプロス卿の調査を重ねていたそう
で、この度、遂に決定的な証拠を手に入れたとの事」

「ちよつと待てよ、話が見えねえ、何を言っている？」

「ユマ姫様のお話です」

「……そうかよ、そう言う事か」

あの霧の中、うじゃうじゃと感じた気配、少なく見積もつて十人は居るかと思つたが、人攫いだけじゃ数が合わねえとは思つていた。

隣の領主さまもアイツを狙っていた訳だ。

「アイツは無事なんだな？」

「勿論です、ネルダリア領主オーズド様の邸宅で貴人として扱われている事でしょう」
ある種の捕虜？ いや、証人か。

グプロス卿の裏切りの証拠となれば、王都まで召喚される事は確定、重ねて当初の予定以上にセンサーシヨナルに話題をさらうに違いない。

だとすればネルダリア領主も下手な扱いは出来まい、アイツの事はひとまず大丈夫と考えて良さそうだ。

「それにしても執事が工作員たあ驚いたな、グプロスの奴の行動は、全てネルダリアに筒抜けだった訳かよ」

「いいえ、裏切ったのはごく最近。元来スフィールでは帝国との裏取引など常套手段ですがユマ姫様と出会ったグプロス様は、とうとうスフィールそのものを帝国に明け渡す事を決めてしまいました、余りの事に悩んでいた所、シノニム様から勧誘されましてな」

「そーいやシノニムも居ないらしいな、アイツもスパイだった訳だ」

「アイツもというより、あの方がスパイで私は単に謀反ですよ、代々スフィール城に勤めていましたが、それも王国の為。それがスフィールごと帝国に売り渡す様では勤める事など出来ません」

「なるほどな」

勤め人にも矜持が有るか、グプロス卿には解らんだろうが、勝馬に乗るだけが人生じゃ無い。

執事の男はレバーを操作し鎖を降ろす、だが肝心の枷の鍵は持っていないらしく、後は力業と相成った。

「オイ、ここを引つ掛けてそつちを思い切り踏んでくれ」

「大丈夫ですか？ 手首が外れてしまうのでは？」

「構わねえからやれ！」

ボールの様な物を隙間に引つ掛け、執事の爺さんには思いつきり体重を掛けてもらう。

バリバリと音を立てて枷がひしゃげ、やっと両手が自由になった。

「こうなりや自分でやる、貸しな」

ボールもどきを受け取ると足枷もバリバリと引つpegす。その様子に執事の爺さんは目を丸くする。

「凄まじい力ですな」

「それでもねえよ、結局自力じゃ脱出も出来なかつた」

「この枷です、自力で破れたら人間では無いでしょう」

そう慰めてくれるが、俺が目指す領域が人外だ、漫画のキャラみたいに強くなりてえ

んだよ。

執事の爺さんは用意周到で、服まで用意してくれていた。

今の俺はオッサンから剥ぎ取ったズボン一丁、それだつて丈足らずのスツテンテンだ。こんなありがたい差し入れは無い。

黒尽くめじゃ無いのが惜しいが俺にしちやサイズが合つてるだけで僥倖、贅沢は言えない。

「このサイズの服が有るとはね、流石はスフィール城つてトコかね」

「ええ、貴族の護衛などは体格の良さで選ぶことも多うございますので」

俺は早速着替えに袖を通し、これまた用意された剣を佩く。

「剣まで悪いな、業物とは言え無いが十分過ぎる」

「氣に入つて頂けた様で、では脱出しましょう、こちらです」

そう言つて部屋を出る執事の爺さん、どうやらご丁寧に裏口まで俺を案内してくれる様子だが、俺にはやらなきやいけない事が有る。

俺は小声で執事の爺さんに話し掛ける。

「いや、待つてくれ、俺は取り返さなくちゃいけない物が有る」

「それは？　今で無くてはなりませんか？」

「ああ、悪いが俺はジジイからブローチを取り返さないとならない」

「ジジイ？ ギテムツド老なら、既に城を出ましたよ」

「なに？」

地下だから解らないが、まだ夜明け前とかだろ？ そんな時間に城を出たのか？

そんな俺の疑問に執事の爺さんは答えてくれた。

「我々にも予想外でしたが、一刻も早く兵を揃えるとか言っていました。しかし実際は我々の計画に気付かれた可能性が有ります」

「計画？」

「ええ、衛兵達に声を掛け、蜂起を促しました。北門以外の衛兵達は賛同してくれています」

「クーデターか、そんな中、俺を助けてくれたのか」

「こんな時だからこそ、あなたにも加わって欲しかったのですが、ギテムツドを追ってくるなら願っても有りません」

なるほど、帝国情報部とグプロス卿、一網打尽の計画がのっけから崩れてしまったらしいのだ。

しかしギテムツドは馬車で逃げたとの事、常識で考えれば足で追いつくのは至難だ。ならばと執事の爺さんは俺を馬房へと案内してくれた。

「こちらです」

するりするりと扉を抜けて、あつと言う間に外、そして馬房の中だ。流石に長年執事をやってるだけには有る、この城を知り尽くしている動きだった。

「駿馬ばかりですが、あなたのサイズだと乗れるのはこれ位ですね」

そう言つて指し示す馬は確かに大きく、俺でも乗れそうだ。

が、俺は正直乗馬テクにはそれ程自信が無い。

「いつそ走つても良いんだがよ」

「ご冗談を！ 国境までに追いつくつもりなら時間が有りません、早くしましょう」

国境？ 確かにそう思うのが普通だが、今回はそうじゃない。

「いや、奴が向かったのは国境じゃ無いな」

「なんですと？」

「ゼス村さ」

「ゼス村？ あんな田舎に何が有るのです？」

「何も無いさ、何かあると思つている奴が居るだけだ」

「はあ……」

禅問答みたいだよな、ま、説明し様も無いんだから仕方が無い。奴は夢追い人なんだよ。

と、その時俺の目に、一際立派な馬車が映る。

「アレは？」

「アレはグプロス卿の馬車でございます、それが？」

「ちよつと弄つて行くか」

「な、何を？」

俺は立てかけられていたのこぎりを手に、立派な馬車に細工する。モノの数分で完了したが外見には一切影響はない。

執事の爺さんは理解不能らしく、呆然とそれを見ていた。

「これは？」

「車軸の一番脆い所よ、上手くすりや往来のど真ん中で車輪が外れて立ち往生つて訳だ」

「はあ……」

破戒騎士団の実力は本物だった、奴らがグプロス卿を守る以上、結局あと一歩で取り逃がす、そんな可能性が少なくない様に見えるのだ。

「じゃあ、行くぜ、北門で良いのか？」

「いえ、北門は衛兵が足りず閉めきつています、行くなら東門ですね。蔽戒態勢で門は閉じられていますがあ外へ出る分には問題ないでしょう」

「そうか、何から何まですまねえな」

俺は礼を言うや一息に馬に飛び乗った。

馬は苦手だが、この馬は俺の重さに愚図る事無くトコトコと歩を進める。大人しそうで安心し、俺は一気に馬を走らせた。

「武運をー！」

執事の爺さんが俺の背中に静かに礼をする、感極まった声で、どうやら爺さんは俺が死ぬ気だと思っている。

そりゃ、一人で帝国の馬車を襲うなんざ正気じゃない。

でもよ、この前みたいにブツガーやマルムークみたいな凄腕さえ居なけりゃよ、十人以上の山賊を一人で退治した事だつて有るんだぜ？

やれるさ、アイツとの約束、守らねえとな。

ゆつくりと日が昇り始めたスフィールの大通りを、決意を胸に俺は真っ直ぐに駆け抜けた。

ゼスリード平原E X

「見えたー！」

日が昇ったばかりのゼスリード平原をひた走る馬車が視界に映る。地平線まで見渡す大地に米粒みたいに小さい姿。

それでもアレがギデムツドとか言うジジイの乗った馬車なのは間違いない。

「どうにも臭うぜ……」

朝の平原つて奴は、本当だったら風が澄んだ空気を運んでくるはず。俺が帝国からスフィールに入ったときにや、その爽やかな空気を胸いっぱい吸い込んだものだった。

つい先日、姫様と来た時だって、あんなトラブルが起こる前は春風が気持ち良い程の爽やかな陽気だった。

だが、今のゼスリード平原はどうだ？

「壮絶だな、まるで地獄かよ」

死体がそこら中で腐乱していた。恐鳥リコイについばまれた人間や馬、そして当の恐鳥リコイ自身も又、至る所で無残な姿を晒している。

様々な思惑が入り交じった末の死闘の残骸。違うな、もはや半分以上は事故と言った

方が良い塩梅だった。

その爪痕ははまだハッキリとゼスリード平原に残されていた。

こんな場所を朝も早くに突っ切ろうなんて、そんな奴が他に居るわきやねーわな。

「つたく、平地じゃ走れよこの野郎」

俺は跨った馬に毒づく。平原に至るまでの坂道、俺は馬を降りて走った。

馬に乗るよりその方がよっぽど速かったからだ。逆に馬のケツを引つ叩く勢いで、急峻な斜面を登り切った。

だが平原を走らせた馬は脚を溜めた甲斐も有って、素晴らしい速度で平原を駆けて行く。

対して奴らはどうか？ あの斜面で馬車を曳くのは馬にとっちゃキツかったに違いない。その距離はみるみる縮まって行く。

「お出迎えかよ」

三百メートル程に距離を詰めた所で、いよいよ相手も動き出す。

馬車の集団から一人と一匹、騎乗した従者が速度を落とし距離を詰め、俺へと向けて大声で誰何^{すいか}する。

「何者だ？ 何の用でこちらを追う？ 答えろ！」

アレは？ 通常は顔の判別などつかぬ距離。だが俺の視力は並じやない、格好は違う

がアレは城の地下で俺を吊るした下男で間違いない。

「ハッ！」

少し強めに腹を蹴ると、馬は思いに応え、更にその歩幅を広げる。

一足毎ごとに飛ぶような加速、速度を落とした相手と一気に交錯した。

「な？ お前は！ ガッ」

「あばよ」

駆け抜け様、一太刀で首を刎はねる。

俺を一晩中吊るしやがった恨み、スツキリ爽快って奴だ。馬上での戦闘にやてんで自信が無かったが、存外にやれそうだ。

「オイ！ なんだアイツは！」

「止めろお！」

当然馬車は途端に騒がしくなる、楽しくなつて来やがった！

声に答えて騎士が二人、俺へと馬首を翻し左右から挟み込み迫つて来る。手には槍、隙の無い身のこなしから、実力はさっきの下男とは大違い。

そもそもが馬上で剣と槍、そのリーチの違いは強烈に尽きる。

「慣れない事はっ！ するもんじゃ無いよなっ！」

俺は手綱を手放しゴロンと転がる。馬上から左後ろへと転がり落ちて、危うく馬の後

ろ足に蹴られそうになりながらも、綺麗に地面へ着地する。

剣を振り回した後、バランスを崩して無様に落馬。そう見えてくれれば御の字、そうで無くても意味が解らん行動だろう。

だが俺はその辺の馬より速く走れる、並走するぐらいは訳無いんだぜ？

東からの刺すような鋭い日差しが、平原に長い長い影を落としていく。俺は馬の影へと滑り込み、並走する。これは右から迫る騎士からは完全に死角になる位置。

落馬をチャンスと見た騎士は止めを刺すべく歩を速め、俺が落ちた所に一気に駆け寄った。

「馬鹿！ 油断するな！」

声を荒らげるのは左から近づいた騎士。アイツからは馬の影に隠れ、並走する俺の姿が丸見えだから当然だ。

だが、その位置からは突出した騎士を止める術は無い。

とは言え、騎士から見て死角と言う事は、俺からも突っ込んで来る騎士が見えないと言うこと。これじゃタイミングが命の奇襲は成立しない。下手を打てば騎士に挟まれる格好になる。

——普通は、な！

「何？」

「貰うぜ、槍とツ！ 首もだ！」

駆け寄った騎士は、馬が走り去った後に落馬した俺が居ない事に驚愕する。

一方で俺は走る空馬の影から飛び出すと、想像と寸分違わぬ位置で槍を構え呆然とする騎士へ駆け寄り、左手で槍を掴み、思い切り引つ張った。

「なっ？ グツ！」

抵抗も一瞬、馬上で前のめりになっていた姿勢では耐えられず、降りて来た首筋を振り上げる刃で向かい入れた。

パツと鮮血が舞うと、首が一つ転がる。

そして当然、右手の剣を振り切った無防備な俺の背後へと、残った騎士が距離を詰める。

「貴様！ よくも！」

「ありがとよ！ 助かるぜ！」

クルリと体を反転させ、左手で掴んだ槍を投げつける。

「グツ！」

投げられた槍は見事に騎士の胴体へ突き刺さった。

「目線で相手の位置を教えてくださいましたばかりか、背後から襲う時まで声で位置を教えてくださいるなんて、律義にも程が有るぜ」

気配で大まかな位置は解るが、ここの所今ひとつ信頼出来ないで助かった。

コイツら訓練は重ねていた様に思うが、実戦経験の無さは明白だった。

最近大きな戦争が無いってのがその原因だろうな、だとすると破戒騎士団の場慣れた
雰囲気はどうだ？

あいつらは俺と同種の実戦叩き上げの雰囲気があった。この世界の平均を考えると
ひよつとして凶抜けた存在なのかもしれない。

蜂起だかクーデターだか知らねえが、ひよつとしたらマズい事になるかもしれねえ
な。

ま、こつちだつて他人の心配出来る程の余裕はねえか。

見れば馬車とはまた距離が離れちまった、距離は四百メートル程。

十メートル先では空になった俺の馬が、コチラを不思議そうに振り向いていた。

「悪いいな待たせた！」

俺は馬に飛び乗り、馬車への追撃を再開した。

馬が気持ちよく下草や土を踏みしめる音に混じって、時折グチャリと湿った音がす
る。

死体を踏んだ音だ。いよいよ激戦区だった平原南部の中心地点に差し掛かる。

走る馬に優しい足場と言えないが、馬車にとってはもつと厄介であろう。

見れば死体は裸。鎧も武器も身につけていない、もう数日経つてただけにすっかり漁られている。

通常、こんな暴挙は許されず厳しく取り締まられるが、スフィールがああの様じゃそうは行かなかつたに違いない。

俺達は腐臭立ち込める地獄をひた走る。馬も大分へばって来たが、どうやら間に合いそう。護衛も品切れなのかこれ以上突つかかかって来る奴も居ない。

その時、目指す馬車の屋根上で何かが光った。

「何だ？ ツ!? クソツ！」

目を凝らせば光ったのは鏃^{やじり}、屋根には弓を構えた男が一人。

放たれた矢が音も無く迫る。俺の視力は矢の軌跡をしつかりと捉えたが、狙われたのは俺じゃ無かった。

「畜生！ 済まねえ！」

撃たれたのは馬。軌道から解つちや居たが、俺の未熟な馬術じゃ避けようも無かつた。

鼻先に突き刺さった矢は致命傷じゃ無いだろうが、無事とも言えない。ちよほど呼吸の邪魔になる位置だった。

痛みに暴れちまつて俺の技術^{テック}じゃ制御しようもない。

「お前はスフィールに帰れ、俺は……」

短い間だったが相棒だった馬を乗り捨てた。発したセリフは通じないのが解ついても思わず馬に叫んだモノか、それとも自分に言い聞かせたのか。

「後は走って追う！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「やりました」

屋根の上からスルリと降りて来た男はアイク、商人としてスフィールに紛れ込み対魔法兵器の管理をしていた男だ。

情報部のホープとも言える存在で、何でも器用にこなす。走る馬車の屋根に飛び乗つたばかりか、激しく揺れる中、迫り来る騎馬に矢を放ち当てて見せるなど、並大抵の腕で出来る事では無いのだ。

「殺つたのか？」

「いえ、狙つたのは馬。狙い通り落馬しました、タナカとか言う男が無事か否かは解りませんが、馬の方は使い物にならないでしょう」

「部下を殺されたと言うのに、手堅い男よのお」

尋ねたのは皺を刻んだ老人、ギデムツドだ。

ギデムツドはアイクを信用していた。

歴戦のギデムツド老とて、タナカが追つて来たと聞いた時はまさかと思つた、なにせ奴はスフィール城に幽閉した筈、なによりゼスリード平原で帝国に甚大な被害をもたらした男だからだ。

被害を受けたのは肝いりで編成した第三特務部隊だけでない、アイク率いる情報部の中心メンバーもだ。

健康値を吸収する対魔法兵器、霧ギユルトスの悪魔。

地方の伝承に出て来る魔物の名を付けた魔道具だが扱いにくく、下手を打つて自らの健康値を根こそぎ吸われれば命に係わる。

その制御を行える人間は多くない、アイクとて手塩に掛けて育てたその部下達の殆どをあの事件で失つた。タナカへの恨みは深い筈。

それでも仇を狙わず、確実に馬を撃ち追撃を妨害に徹する。

なかなかできる事では無い。

「コレで何とかワシの首も繋がりそうか。スマンな……」

「……いえ、任務ですから」

ギデムツドは謝るが、今回は不運だっただけ。むしろギデムツド老は慎重に慎重を期して行動したとアイクは知っている。

急展開に備え、第三特務部隊を待機させた上で、万一を考えて霧の悪魔はスフィールから撤収する。

過剰なほどに、まさかに備えた布陣だが、何の因果かその二つが交錯する。まさにその瞬間、その場所に、特大の不運が待ち構えていた。

これが誰かの策謀だと言うならあまりに出来過ぎた、薄氷の上に立てられた作戦と言わざるを得ない。

あり得ない、『偶然』だとアイクは思っていたし、ギデムツドの判断は正しかったように思う。

ただ、全てが『偶然』と言うのは引つかかる気もしていた。

出来過ぎた相手のカード運を罵る様な、全く無意味な考えだとは解っている。

だが、酒場で勝ちを重ねる男が言っていた一言が思い出された。

「ここぞつて時にその『偶然』を引き当てられる男がギャンブラーなのよ」

アイクはその言葉を思い出しながら、誰にも解らぬように頭を振った。

ユマ姫とタナカ、奴らがそうだと言うのは思いたくも無いし、なにより言った男自身
が後にイカサマで捕まっている。

タネの無い幸運も不運も長続きはしないものだ。だと思えるから、自分が特別不幸だと思わずに済む。

ツイてる男とツイてない男などに分けられる筈が無い、『偶然』は平等にやってくるのだと言い聞かせた。その時だ。

「大変です、奴です、まだ追つて来ます！」

「まさか！ あり得ない！」

御者の叫びにアイクは怒鳴り返す、彼らしくない冷静さを欠いた声だった。

それもその筈、アイクは馬を射つた矢に手応えを感じていた。

「あの怪我じゃ、馬は使えない筈だ！」

「そ、それが……」

アイクは御者の言葉を待たずに馬車の小さい窓から身を乗り出して後ろを見た。

「馬鹿なっ！」

走っていた、走って馬車へ追い縋っている。

これが低速で歩かせる荷物を載せた荷馬車ならともかく、この馬車は四頭立ての上に乗車も小さい貴族用の快速馬車だ。

まして一見して普通の馬車に偽装しても、サスペンションや車輪は帝国の先端技術をつぎ込んで作られている。並の馬車の速度とは訳が違うのだ。

アイクは知らない事だが、田中が神から貰った体は上限一杯、人間最高峰の肉体だ。

そのスペックは地球のオリンピックで活躍する選手のそれに近い。

だが百メートルを十秒以下で走り、なおかつ42.195 Kmを二時間ちよつとで走り切る男など居る筈が無い。

短距離用と長距離用、用途別にカツカツに仕上げられた肉体での上限値がそれなのだ。

だが田中の体はそれに近い事を可能にする。常識を無視して、世界最強、遠近問わず、上限一杯の基準で揃えられている。

ましてやこの世界の人間の大半はオリンピックに出て来る超人には程遠い、それ所か農民の身長は150cm程度、貴族や騎士で170cm有れば上出来と言った所。

地球でも平均身長が今の様に伸びたのは近代の事、そんな中、田中の鍛えられた肉体は常識をぶち壊す物だった。

ブツガーは田中に匹敵する巨漢だったがアレだって例外も例外。中国の兵馬備へいばようの様に、国中から集めた近衛騎士となれば似たような大男も居るが、数は少ない。近衛兵長であるゼクトール氏など

そんな例外にしたって短距離も長距離もこなせる男など居る訳もない。

もつと言えばトレーニングなんて概念も殆ど無い世界だ。継続的なトレーニングはスタミナの持続に如実に効いて来る。

だからこそ馬に追い縋れる人間など完全に彼らの常識の埒外だった。

「化け物かッ！」

「奴も純粹な人間では無かつたと言う事じやろう」

だからこそ、アイクとギテムツドがそう結論付けたのも当然、一応は遺伝子レベルで人間の範疇を超えない様に調整されている物の、そんな事が二人に解る筈も無い。

彼らはタナカを森に棲む者に作られた人造人間の様な物と結論付けた、おあつらえ向
けに伝説にはそんな人造人間の記述も有つたのである。

「まさか実在したとは」

「サンプルに欲しいがリスクしか無いな、ここは逃げの一手だ、アレを使う」

「危険ではないですか？」

「テストは十分、今使わずに何時使うのかね？」

「ハッ！」

それでも彼らには余裕が有つた、とっておきの切り札を用意していた。

ギテムツドは自らが腰かけていた備え付けの長椅子の座面をパカッと開ける。

「よし、いけるぞ」

中にはぎっしりと魔法陣が刻まれた齒車、怪しげなポンプとガラス瓶に詰まった魔石が押し込められていた。

『『進め』』

起動呪文を唱えればみるみる車体が加速する、魔道車だ。

帝国は限定的ながら魔道車を開発していた。燃費も悪く、操縦も出来ない為に馬との併用が必須だが起動すれば、馬に取ってみれば馬車の重量が消えたような物だ。

アイクが窓から顔を出せば、タナカは手が届こうかと言う程に迫っていた。

だが、裸馬同然の速度と持久力で走り続ける馬車に追いつくのは流石に無理だったらしい。ジリジリと距離が離れていく。

「逃げ切れそうです」

アイクの言葉にギテムツドは頷くだけ。なにしろ揺れが酷い、下手に喋れば舌を噛む。

通常の馬車では未知の速度。帝国の最先端のサスペンションでも振動を殺しきれないなかった。

それでもギテムツドは手すりにしがみついて御者に指示を出した。

「警笛を吹けえ！ 全速前進だ！」

——ピイイイ

そして甲高い笛の音が鳴る。

帝国の進軍の笛で、馬はこの音と共に前進するように調教されていた。

この世界の馬車の常識を外れた速度で有るので、念の為進路に向けて警告を発する目

的でも有った。

しかしギテムツドもアイクも知らない事が有る。

彼らが魔道車と呼ぶ魔力を動力とする車が、魔法文明が発達したエルフの間でも広く普及していない理由だ。

自分達が開発出来るのだから、エルフも当然開発している筈。その考え方は正しい。だが、サンプルが手に入らない理由はその秘技を帝国侵略に先んじて廃棄したためと思いついでいた。

しかし、エルフにそんなつもりは無かった。負けるどころか苦戦する事すら予想もして居なかったのだから当然。

サンプルが無い理由は極端に数が少ないから。その理由は大規模に吐き出される魔力が強力な魔獣を引き寄せるからだ。

そして、間の悪い『偶然』で、彼らが吹いた警笛が、『奴』を呼ぶトリガーに成るなどと、彼らの思い至る範疇を易々と超える事実であった。



「嘘だろッ！」

もう少しで手が届く、その寸前で馬車が急加速してグングンと距離を離して行く。

その速度は異様。騎馬はおろか、裸馬もかくやと言う速度。流石の俺もズルズルと距離を離される。

「ハッ、ハッ、あり得ッ！ ねえ」

この世界の馬はサラブレッドじゃねえ、ましてや馬車を曳くのはずんぐりとした足の太い馬が多い。

更に言えば、馬は案外にマラソンみたいな超長距離走は苦手としている。

だからこそ、本気で走ればあつと言う間に距離は詰められるハズだった。

だが実際はどうだ？ 馬は馬車の重さが無いかの様な加速で駆けていく。

——いや、マジでそうなんじゃ無いか？

よく見れば馬と馬車を繋ぐ軛具ハネスは緩み、御者台は馬の尻を叩きそうな程に接近している。

「もう出来てるんじゃねえかよ！」

魔道車、奴らがそう言つてた物が既にある。俺が適当に吹いた前世の自動車の様な妄想じゃ無く既に形が有つた訳だ。

「でもまだ不完全って事だよな！」

息を整えながら叫ぶ、だつてそうだろ？ 既に完成してゐるならエルフの技術を欲しが
る道理が無い。燃費か操作性、安全性もか？ 何らかの不備が有るからエルフの持つ完
成品を欲しがった。自分らが不完全な物しか作れないから余計にな！

半分は願望、だが的外れでも無いはずだ。萎えて行く気力に鞭を入れ、息を整えて再
び駆け出す活力に火を灯した。

その時だ。

——ピイイイ

笛の音だ、どこかで聞いた音に近いなど微かに思った。

——ピイイイ

その音に答える様に、笛の音よりも少し低い音が返された。

「うっそだろ！ オイ！」

その音こそ、ハッキリと聞き覚えが有った。

朝日の差す平原、その空を切り裂く様に、再び奴が現れた。

鷲の上半身にライオンの下半身。だが翼を広げたサイズはそのどちらをも上回る。

なにせ、押し掛かれた馬車が玩具箱みたいに見えるのだ。

「グリフォン！」

俺の雄叫びがゼスリード平原に響き渡った。

グリフォン襲来2

「グリフォンー！」

——ビィィィィィ

俺の叫びに応える様にグリフォンが啼^なく。

空から飛来したコイツが驚掴みにして見せたのは、俺が追いかける馬車だった。

俺は馬車に乗るギテムッドってジジイから、アイツから預かった魔道具を取り返さ
にやらねえ。

「お前に助けられるとはな」

言っではみたがグリフォンがホントに助けに来た訳じゃないだろう。真つ平らな平
原で高速に動く馬車が格好の獲物に映った、……そんなトコか？

「ツイてんだか、ツイて無いんだか、わっかんねーな」

崖から落とされ、監禁されたり、吊されたり、ロクでもねー目に遭い続けたが、俺の
狙いは一にも二にもアイツ、ユマ姫から預かった魔道具だ。魔道具自体の効果もスゲエもんがあるが、一番大切なのはアレがアイツの妹の唯一の
形見だつて事だ。

他の何を逃してもアレだけは取り返さないと洒落にならない。

ましてやあの技術が帝国に解析されて、それがアイツに牙を剥く事になれば、これ以上無い悲劇になっちまう。

それが何より怖かったのだが、この段に来ればその心配は無いか？ 問題が有るとすればむしろ我が身の安全だ。

——ビィィィ

なにせグリフォンは目的の馬車を猛然と突っついていて、下手に近づくと訳にも行かない。

「ご愁傷様だな、にしてもどうすつか」

下手に近づけばこつちがヤバい。かと言って落ち着くまで放置するのも引つかかる。

なにせグリフォンに掴まれた馬車は玩具箱みたいな大きさと錯覚するほど、馬車を抱えて飛び立つイメージが頭をよぎったからだ。

まさかとは思うが、俺はもう自分の常識に自信が持てない。

俺は息を潜め、様子を窺う事にした。

「さつすが、金が掛かってそんな馬車だ、ズイブン丈夫じゃねえの」

馬車はグリフォンに突かれながらも、いまだに形を保っている。

……いや、猫が獲物をいたぶる様に、遊んでいるのか？

どちらにしても壊れるのは時間の問題。このまま中の人間^{エサ}を食べて貰った方が面倒が無い様にも思える。

しかし、欲を言えばジジイは生きたまま捕縛したかった。アイツが魔道具を持って行ったと聞いているが、身に付けているとは限らない。

万が一ブラフ、もしくは既に誰かに預けたり隠したりしているなら、口を割らせる必要性が出て来るからだ。

「さあて、どうなるか」

草むらに伏せながら、気取られない様に風下に移動して様子を窺う。

……その時だ。

ひっくり返された馬車から一人の男が転がり出た。

グリフオンの隙をついて飛び出したその男は、下草に紛れグリフォンから距離を取ると、油断無く草むらに飛び込んだ。

男が草むらに飛び込むその寸前、俺に気付いた男と俺で、視線が交錯する。

誰も居ないと思つて全開で鼻歌を歌っていたら、通りすがりの相手と気まずい感じに目が合つちまう瞬間と言えば解るか？

いや、全然違うか。とにかくギクリとした。

その顔には覚えが有った。ゼスリード平原まで霧の兵器を持ってきた商人に違いな

い。

……アイツまだ生きていやがったか。

背中の方から見て、さつき俺の愛馬を射かけたのもアイツに違いない。

しつかり嫌な予感がする。ココから更に面倒な事になる気がして成らねえ。

俺のそんな予感を肯定するように、男は草を掻き分け近づくや、背中の方を取り出した。

俺へ向け、ギリリと矢を番え叫ぶ。

「貴様ア！ 早くアイツをどうにかしろ！」

「……ハア？ ……何言ってるんだ？」

「とぼけるな！」

「——あーそう言う事な」

一瞬本気で何を言ってるか解らなかつた。

だがそう言えば奴らはエルフの技術で魔獣をけしかけてるとか疑っていたな、この状況がまさにそれだと思つてやがるのか。

ま、絶妙なタイミング、そう思うのも無理も無いか。

「早くしろ、撃つぞ！」

「いや、そう言われてもね……」

俺は両手を挙げて無抵抗を示す、曖昧な表情を浮かべ、ニヘラと笑った。

「何を笑ってる！ 早くしろ」

「誤解だつてーの、魔獣を操れる訳無いだろ？ なあ？ お前もそう思うだろ？」

そう言つて、俺は男の背後へと声を掛ける。だが。

「そんな見え透いた手に引つ掛かるか！ 死ね！」

奴は振り返りもせず、そう言つて俺に矢を放つた。俺は慌てて横つ飛びにその矢を躲す。

成程、奴は実戦慣れも有るのだろう、俺の誘いには全く乗つて来なかつた。

だがな、確かに俺は嘘つきだが、不思議と嘘が現実になるつてのに定評が有るんだぜ？

なにしろ俺が跳んだのは矢を躲すためだけじゃない、それだけならもつと小さな動きでも躲せる。

俺が話し掛けたのは……アイツ。

「ぎゃー！」

グリフォンだ。

グリフォンが音も無く飛び込んで男を踏み潰した。そのサイズを裏切る音の小ささは、まるでCGの様な現実感の無さだった。

しかし、そのパワーは疑うべくも無い。確認するまでも無く即死、いや即ミンチ。そのまま突つ切つて俺の居た所を駆け抜けて行く、そのスピードは生き物の常識を遙かに超えていた。助走の末に翼を広げ、再び大空へと駆け上がつて行く。

「行つたか? ……クソツ」

見逃して貰つたかと思いきや、グリフォンは旋回し再びこちらに滑空して来た。

ゼスリード平原は身を隠す所の無い見渡す限りの平地。ここでは隠れる所もねえ。

だがそれにしたつて、なんでアイツは執拗に俺らを襲う? 餌だつたら死肉がそこら中に転がっているだろうが!

腐つた肉は食わないグルメ野郎なのか? そんな繊細には見えねえが。

腐ると言えば、コイツとはズイブンな腐れ縁。利用しているどころか呪われてるつて言つた方がしつくりくるぜ。

兎に角、この状況はヤベエ。だが逃げ場もねえと来れば、取り敢えずやれる事から片づけるだけだ。

俺は横転した馬車へと駆け寄ると、気配を探る。

居るな……

手早く上へと飛び乗ると、窓から中を覗き込む。中には頭を抱え蹲る老人が一人。

ギデムツド老に間違いない。

「アイクか？ 奴はどうなった！」

「生憎死んだよ、俺だ。死にたく無ければ魔道具を返しな」

「くう……無念」

だが爺さんは震えながらも、素直に渡す気は無いらしい。

「死ねっ！」

取り出したのは小型のボウガン、慌てて首を引つ込めた途端。ボルトが木窓に突き刺さる。

ボウガンは連射出来ない。このチャンスに交渉オハカシを試みるべく、俺は馬車へと乗り込んだ。

……だが。

ガンツと激しい衝撃が馬車に伝わった。見上げれば文字通り馬車を驚掴おどつかんだグリフォン。

ギョロリとコチラを覗き込む目に思わず息を飲む。サイズもそうだがその鷲目は鳥類よりむしろ爬虫類じみっていて、その意思を感じにくい。

啄ついばまれただけで命取りの状況だが、腹を括る。かえつて好都合と開き直った。

まるでグリフォンが俺のしもべとばかりに、堂々うっとうと嘯く。

「オイ、無駄な抵抗は止める、コイツに馬車ごと踏み潰されたいのか！」

「……解った、まずはココから出してくれ。魔道具は返す」

狙いは当たった。俺は御者台の方から這い出すと、残った爺さんの手を引き外へと引つ張り出す。

「ヒッ！」

爺さんの引き攀つた声。何っ？ と振り返れば、後ろからグリフォンがコチラに嘴を突き出す所だった。

「わッ！ つとお！」

思わずビビって距離を取る、演技が台無しだが仕方が無い。

「ぐぎゃ、グギ」

馬車の中から奇妙な悲鳴が聞こえるが、見たくねえな。しっかし何故俺を無視した？

俺の疑問は、グリフォンが血だらけの嘴を引っこ抜いた時に知れた。

「魔石か！ 魔石を喰ってやがるのか」

啜えていたのはガラス瓶に詰まった魔石。恐らくは魔道車の燃料だ。それを噛み砕き嚙下する。

「……成程な。」

そう言えばアイツも言っていたっけ、大森林は魔力が濃い故に強力な魔獣が跋扈する。

エルフも強力な魔獣も、魔力が薄い地では生きられない。だがその割にあのグリフォンは人間の土地で活動しまくってるのが不思議だったが、そのカラクリがアレって訳だよ。

「ウメエかよ？ 喰って満足したら帰れよ馬鹿野郎」

思わず毒づくが流石に通じちゃ居ないだろう。グリフォンの目的が魔石だとするならば程なく引き上げるに違いない。そう思った矢先だ。

——グル？ ビイイイ！

目が合った!?

訳も解らず地を蹴った。頭を狙った嘴の咬合を仰け反り躲す。反らした背のままにバク転をする最中、反転する世界にはグリフォンの姿が見えた。

何というスピード！ あのまま立っていたら？ アイクとか呼ばれてた男の二の舞だ。

綺麗なバク転を決めた俺だが、体勢を立て直す間もなくグリフォンは爪を振り下ろす。

慌ててバックステップで後ろに跳ぶ、前髪どころか鼻先を爪が掠めた。

魔石を食っただろうが！ なぜまだ俺を狙う！

——そういうや、俺の魔力値は90だったか？ 人間の平均よりは遥かに高いとアイツ

も言つてたな。

それを聞いて正直嬉しかったが良い事ばかりじゃ無いらしい。

いや、そうじゃ無いか？　グリフォンだつて馬鹿じゃねえ、何を考へてるかまでは解らないが、動きから知性は感じる。

俺の事が解るのか？　だつたら俺を怨敵と思つていても不思議じゃねえ、それぐらい深い付き合いになつちまつてる。

だがまあ、腹が一杯になるまで其れを思い出せないのだとすれば、所詮は獣と言つた所か。

目が合つた瞬間に途端に思い出したみたいな顔をしやがった。本当に忌々しいつたら。

「いい迷惑だぜ！」

叫びながら爪の攻撃を避け右へ左へ、時には剣でいなすが重い！　そして信じられない位に固い。

魔獣つて奴はどうしてこうもチートなのか、生物の常識をぶつ壊す硬度だろうか！

幾度かの攻防の末、なんとか比較的背の高い草の中へと転がり込んだ。

どうやら見失つてくれたようだが、しばらくすると奴は再び助走をし、天空へ舞い上がる。

思えばハーフェルフの村では助走も無くホバリングしたり、浮き上がったりしてなかったか？

だとすれば多少は弱つてると言う事だが、そんな物は気休めにしかなりそうにない。なにせ上空から見下ろせば俺が隠れている下草なんぞ、何の邪魔にもならないに違いないのだ。

「ひっさしぶりにアレをやるしかねえか！」

草むらに伏せ、剣を引き抜き空を眺める。走り回ったせいで汗が吹き出し、顔中に草や泥が引つ付いた。

草むらからはこの世界特有の虫の鳴き声がひっきりなしに鳴り響く、コオロギみたいな恰好をしていて、金属がたわんだみみたいな音を出す奴だ。

痛い程握りしめた剣の感触を確かめ、呼吸をゆっくりと細めて行く。

少しの間、我慢比べだ、期待はしないが万一見逃してくれるならそれで良い。フオンフオンと虫の音が耳に痛い程鳴り続けている。

その時、雲一つ無い空から影が伸び、一瞬だけ周囲を暗くしていった。

——奴だ。探し回っている。

気付けばもう太陽は高い所に登っていたらしい。

じつとりと汗ばむ手の平に対して、背筋には冷や汗。俺の体力にどこまで保つかと相

談する。ふと嫌な予感に見上げれば、居た！ 空に小さい影！ 高い！

そして奴が見えると言う事は、奴からも俺が見えると言う事だ。その影がみるみる大きくなり迫る。

気付けば虫の音も鳴き止み、全くの静寂。虫も危機を感じたか、それとも俺の極限の集中力がそう感じさせるのか？

どンドンと巨大になる影に、今更ながらに恐怖する。やはり人間が戦えるサイズの相手じゃない。だが走って逃げたって追いつかれる、なんせ相手は空を飛ぶのだ。

攻撃をかわすならギリギリまで引き付けてから、それしかない。

俺はそのタイミングを必死に計る、恐怖を殺し、必死に距離を見切って引き付ける。

「3・2・1！ 今だ!!」

俺は横つ飛びに跳び、そのまま地面を転がる。極限の集中力の中、俺が居た場所が驚の前足でグシヤリと吹き飛ぶ様子がスローモーションみたいにハッキリ見えた。

まずは無事！ だがそれだけじゃ納得しねえぞ！

俺は転がって突つ伏した体勢から、立ち上がりざまに右手の剣を高々と突き上げる。

「^{ガクッサツ}牙空殺！」

必殺技！ 文字通り必殺技だ！ コマンドは下溜め上A o r B だがゲームじゃ

ねえぞ？ 真正正銘実戦で決めてやった、それもコレで二度目だ。

——ピイイイ——

グリフォンが悲鳴を上げる、それもその筈、俺が突いたのは奴の傷跡だ。

村でユマ姫が射貫いた翼、そこを狙った、むしろそこしか無かった。

なんせコイツはかつて俺が斃したマンティコアとは比べ物にならない大物。

魔獣つてのは硬い。それも伝説級の魔獣つてのは桁違い。大牙猪ザルギルゴールに自慢の剣で歯が

立たなかつた時、俺は痛感した。

そしてコイツはサイズこそ大牙猪ザルギルゴールより小さいが、肌で感じるプレッシャーはそれ以上

の化け物、と来ればまともな攻撃じゃ通らない。

そして今回、固くて刃が通りませんでしたは即、死を意味する。

悔しいが、動かない的相手なら兎も角、剣で姫様の魔法以上の威力は中々出せねえ。

だつたら頭を使うしかねえだろ？ 一度破けた脆い所を狙うのよ！

「ハアアアア！ 弧月昇！」

などと必殺技の名前を続いて叫ぶが、動きは全く違う。気分だけだ。

突き立てた刃に任せ、刃が通る方向に思いつきり剣を振る。

グリフォンの羽は生物的に考えて奴の中で最も脆い部分だろうが、それでも生え茂る

羽毛が魔獣らしい固さを誇り、中々刃を通さない。

だが、一回刃を通してしまえば、外側に向けてスルリと切れるんでは無いかと野鳥を

解体した経験から想像していたが、全くその通りになった。

それでも俺は顔を真つ赤に剣を振ったのだが、このレベルの魔獣にこれほどの打撃を与える方法は他に無いだろう。

切り裂いた裂け目は外側に抜け、深いスリットが入った様にパツクリ裂けた。

——ピイイイイイ!!!

グリフォンは叫ぶがコレでもう飛ぶことは出来ないだろう、後はその辺の茂みに隠れてやり過ぎせばゲームセットじゃないか？

茂みの中に転がり込めば、思った通りグリフォンは草むらを掻き分け、踏みつけ怒り狂うばかりで、もう飛ぶことは出来そうに無かった。

泥だらけになりながら、しめしめとその様子を暫く窺っていたが、グリフォンはようやく諦めたのか、再び馬車を漁り出した。

「持ってけ、持ってけ」

どれだけ魔石が残ってるか知らないが、そんなもんは幾らでもくれてやる。そう思っていたんだが。

「!? ウツソだろ?」

顔を引き抜いたグリフォンの嘴に引つ掛かるのはペンダント。アイツの妹の形見の魔道具だった。

その他にも光物を中心に、お宝をたつぷりと嘴に啜えている。

——そう言えば、カラスは光物を巢に持ち帰ると言うが、アイツもか？ 鳥頭しやがって糞がああああああ！

ご丁寧に止めと馬車を踏みつけ潰し、グリフォンは進路を北に取る。

おいおい？ こんだけ暴れといて大森林に帰る気か？

だとしたらやべえ、ここで逃したら一生取り返せる気がしないぞ!?

俺は慌てて後を追う、奴は飛べない、なんとか追い続ける事は出来る筈。

ヨタヨタ走るグリフォンを追いたいがこつちは準備が必要だ、慌てて潰れた馬車を漁る。思った通り幾つかの非常食と水を見つけ、失敬する事に。

コレで追撃第二段の準備は整った、体力はヤバいが相手の動きは思いの外遅い。

まともに喧嘩を売るには厳しいが、寝てる間とか隙を見て取り返せる公算もある。

……しかしだ、ひよつとしたら長期戦になるかもしれない。

そう思えば俺は振り返ってスフィールの方角を見た。

「頼むぜ、アイツの事、守ってやってくれよ」

眩きを寄せた相手は、ユマ姫を保護してると言うオーズドって領主か、シノニムか。

それともこの世界の運命とか言うクソシステムへ向けた物か、言った俺にだってよく解らねえ。

だが、神を信じない俺が祈る様に何かに願った。

そして、ヨタヨタと逃げて行くグリフォンのケツを目印に、それを必死に追う旅が始まった。

外からの来訪者

「大森林中央部 エルフの鍛冶師モルガンの仕事場にて」

「悪いが、剣を貸してくれんか？」

偏屈で知られるファームスが、訪ねてくるなりそんな事を言い出した。

エルフの鍛冶師であるモルガンは百と五歳。エルフの中でも高齢で、それだけにファームスとも長い付き合いだが、こんな事は今まで一度も無かった。

「老いぼれが、まさか戦うと言うんじや無いだろうな」

「馬鹿言え！ 誰が戦うもんか、それにお前さんとはそう歳も変わらんじやろうが！」

ファームスは百と十。お互い何時お迎えが来てもおかしくない年齢だが、矍鑠カクシヤクとして

頭の働きも鈍くない。まさか、都を占領した人間たちに無謀な勝負を挑むほどボケても居ないし、若くも無い。

「じゃあ、何に使うと言うんじや？」

「それがの……」

ぼつぼつと語る所、なんと、また人を拾ったと言うのだ。

ファームスは炭焼きを生業にしている。そのため、危険を押しして街の外で働いてい

る。

燻る煙は文字通り煙たがられるし、燃えやすい松は火事を恐れて村の近くには植えない。どうしたって炭作りは街の外で行う必要があるのだ。

「この非常時にまだ炭など作つとるのか！」

「お前さんにだけは言われとう無いわ！」

呆れたと言わんばかりのモルガンの言葉に、ファーモス爺は激昂する。

それもその筈、ファーモス爺の炭の主な買い手は鍛冶師であるモルガンなのだ。ファーモスの作る火力の強い炭は、モルガンの仕事に必要な不可欠であった。

「それにしたって命あつての物種じゃ！ 在庫はあるんじゃないやろう？ しばらく大人しくしとれ！」

「ふん、帝国兵だつてこんな老いぼれを襲いはせんわ」

実際の所、レジスタンスは武器をかき集めていたので、鍛冶師は忙しく、炭の在庫も心元無かった。老人達もエルフの為に必死に戦つていたので。

そして、一步街の外に出るとソコは鬱蒼とした大森林、何かとんでもないモノに出くわしてしまう事もある。

「今度は何を拾つた？ お主の厄介事を呼び込む才能は昔から神懸かりじゃ。それにしたって前回は大物に過ぎたがの」

「ユマ姫か……生きとるかな？」

「……さあな、神が本当に居るなら、あの少女だけは見捨てないだろうよ」

「……そうじゃな」

フアーモス爺はつい最近、うち捨てられた廃村で一人の少女を拾った。

その少女は空つぽだった。全てを奪われた。そんな目をしていた。

空つぽの少女は村人を鼓舞し、皆の戦意を駆り立てた。空つぽだった少女の目には、いつの間にか、ありつたけの狂気が詰め込まれていた。

それがユマ姫だ。この大森林、エルフの都エンディアンのお姫様。

そして彼女は人間に救援を求めると森の外に向かった。村一番の馬車に、村長の娘や血の気の多い若者を引き連れて。

……だが、彼らが乗った馬車は無残な姿で見つかった。大牙猪ザルギルゴールに破壊された可能性

が高いと聞く。生存は絶望的だった。

「前回が姫なら、今回は王様か？ それとも英雄か？」

「茶化すな、えらい長身の男だ。それも帝国の人間だ」

「這ホいつくばる者ズだと？ 正気か？」

モルガンが腰を浮かせる。這ホいつくばる者ズとは人間の事、エルフにとって人間は自分達、それ以外の人型生物を虫の様に見下す言葉だ。

正確には、最近までそれ程の蔑視はしていなかった。帝国に都を落とされた事で人間に対する敵愾心が強まった上での言葉であった。

「えらくボロボロでな、脱走兵かと思っただんじやが……妖獣を追って来たと言っ
てな」

「このご時世に這ホいつくばズる者を匿うのは不味いぞ？ スパイと疑われ殺されかねん」

「アレはそんなんじや無い。凶体の割にえらく覇気が無くてな。話を聞けば剣が折れち
まったらしいんじや」

「それで剣が欲しいだと？ 盗人に追い銭じやろうが！ 即刻叩き出せ！」

「でももの……妖獣に盗まれた秘宝を追って大森林に踏み入るとは、這ホいつくばズる者に
しては剛毅ではないか」

「魔獣が盗みなどするか！ それに覇気が無いと言っただでは無いか、話がメチャク
チャだ！」

「それが、剣が無いと力が出ないと言っただ、飾りでも良いんじや、剣を貸してくれんか
？」

「ハア……」

モルガンは親友の無茶に大きなため息を一つ。お人好しにも程がある。

「剣が折れたと言っただな？ あるんじやろ？ みせてみい！ 軽く打ち直してやるわ」

「それがの……」

フアーモス爺が取り出したのは、ぼろ布に包まれた剣。しかし、ポツキリと折れていた。

「コイツは悪くない剣だな。使い手もかなりの腕、じゃが……」

「ああ、金属疲労。もう寿命じゃろ？ 打ち直しも効かん、素人目にも解る」

「どんな使い方をすればこうなるんじゃ……」

中々の業物。だが酷使を重ねた剣は芯からボロボロだった。

「じゃがなあ、今は忙しい、イチから剣を打つ時間なぞ無いぞ？」

「打つ必要はないじゃろ？ アレでいい」

そう言つてフアーモス爺が指差すのは家の欄間。目立つ所に堂々と掛けられた一振りの剣だった。

「馬鹿な！ アレはワシの最高傑作だぞ！」

「誰も使えん剣なぞ、棒きれと一緒にじゃ！ 使わぬなら溶かしてしまえ！」

「くう……」

モルガン爺は追い求めた。最高の一振りを。

エルフは鉄の剣を武器に使う事は殆ど無い、有るとすれば衛兵が護衛用に持つ程度。

エルフに取つて花形の武器は弓矢だ。魔法を併用した矢は音速を超え、途轍もない威

力を發揮する。そこまでやって、初めて大森林の恐るべき魔獣に対抗出来るのだ。

鉄で出来ただだの劍など、魔獣には何の役にも立たない。そうで無くても魔法と言うのは、他人の健康値に阻害される。魔法を併用して戦う以上、魔獣と近づく必要がある劍は最もナンセンスな武器と言えた。

ただし、唯一の例外が存在する。それは健康値に干渉され難い魔力を持つ者。

彼らは劍に魔力を込めたまま斬りつける事が出来る。特殊な魔劍はバターの様に魔獣を切り裂く。

王子ステフは魔劍の使い手として、熱狂的な人気を誇っていたので、憧れる若者だけは山ほど居たが、十代の内に現実に打ちのめされるのがお約束だった。

魔劍を作りたがる鍛冶師も数多く居たが、モルガン爺の求めたのは鉄で出来た、ただ鋭いだけの劍だった。

元より魔法の知識に疎いモルガン爺には魔劍など作れない。ただただ、鍛冶師の誇りにかけて鋭い刃を求め続けた。

モルガン爺の腕は、普段は良く切れる包丁作りに遺憾なく發揮されている。

だが男として生まれたからには、最強の劍を作りたかった。

何層も折り返した刃に心鉄を挟み、計算された反りに、薄い刃。

そうして出来た会心の一振りには、しかし誰にも扱えない代物だった。

エルフの戦士に与えてみても、かれらは枝打ちに使うばかり。それすらスグに刃こぼれすると評判が悪かった。

そんな彼らにモルガンは顔を真っ赤にして反論し、一時は評判が地に落ちた事もある。

「爺さん、剣つてのは使う人間あつてのモノだぜ？」

あるエルフの戦士はモルガンにそう言った。全くその通りだ。

そう言う意味で、この剣は完全な不良品。刃筋を立てて正しく切らないと、その切れ味は発揮されない。

ただし、この世界にはそんな剣術も、それを教える道場も存在しないのだ。剣と言うのは剣術と共に成長するモノ。

特異点の様に、ポンと特殊な剣術に特化した、切れ味ばかりの剣が生まれても何にもならない。

だから、この剣は本来ならこのまま、使い手も無く朽ちて行くハズだった一振りだ。

「じゃあ借りていくからな」

「くそう、返せよ！ 絶対だからな」

「はいはい、解りましたよ」

そう言つて帰路につくファーモス爺の手には、布に包まれた一振りの――

——『刀』が有った。

それは、長命のエルフが、一つ折り、二つ折り、鍛造を繰り返す度に、強烈な意思と大森林の魔力を練り込んだ刀。

もし、この刀が中世の日本に落とされたなら、恐らくは神劍と恐れられたに違いない。なんの因果かそれは最も危険な男の手に渡る。

もし、この男が中世に産み落とされたなら、恐らくは武神と恐れられたに違いない。その二つがあらゆる因果を越えて交わってしまふ。

大森林の英雄伝説の始まりで有った。

大牙猪E X

旧パラセル村。逃亡の果て、ユマ姫がたどり着き、その妹のセレナが死んだ場所。

そこに今、一人の男が流れ着いていた。

「はあ〜」

深いため息、ファーモス爺の言うとおり、その顔には覇気が無い。切り株の上に座り込んだまま、左手で頬杖をついていた。

「剣がねえと落ち着かねえ」

男は根っからの剣士だった。だがその腰に剣は無く。代わりとばかり、右手には小ぶりな手斧。

カッーンと小気味良い音を立て、薪が割れる。ココは炭焼き小屋だ。幾ら割つても薪の作り過ぎと言うことは無い。

「あのジジイも人使いが荒いぜ」

もう小屋に入りきらない程の薪を割った。それで今は外に積み上げる分の薪を割っている。これだけの木材が転がっているハズも無く、木の伐採すらやらされている。今割っている木は数日前に切り倒した物だ。

「このまま木こりなんてごめんだぜ」

座つたままの男はぼやきながら面倒とばかり、ポイツと薪を後ろに投げた。すると驚くべき事に投げられた薪は、綺麗に薪の束へと積み上がる。

一瞥もしないでコレだ。男がここ数日、うんざりするほどに薪を割らされていることが見て取れた。

「我慢出来ねえ！ 爺さんを迎えに行こう」

すつくと男は立ち上がった。——大きい。全身が黒ずくめ、服もマントも髪も、そして瞳すら。

気の抜けた顔は締まりが無く、服はボロボロ、だが少しもみすぼらしく見えない。鍛え上げられた男の体は、はち切れんばかりの膂力を秘めていることが素人目にも感じられた。

よくよく考えてみれば、先ほどの薪割り。使っていたのは右手だけ、それも小手先の力だけで軽々割ってみせていた。

恐るべき腕力。これほどの怪力を持つ男が早々いるハズが無い。

——田中だった。

彼はユマの妹セレナの秘宝を啜えたグリフォンを追って、大森林の中核近くまで入り込んでしまった。

手負いのグリフォン、すぐに追いつくつもりだったが、やはり相手は獣。森での捜索は困難を極めた。

本当は森に入る前に決着^{ケリ}をつけるつもりでいた。だが道中に於いて、タナカは連日の監禁生活と無茶な戦いのツケを払わざるを得なくなつた。

痛みや疲労だけでなく発熱まで。これらは極度の疲労に対する体の警告だ。無視出来るモノでは無い。

物資の購入も含め、何日かゼス村で足止めを食うことになつた。

金は馬車に積まれた宝石を捨て値で売り払えば十分な金額が手に入った。しかし、その際、魔獣から村を守るイベントなどが目白押しで発生してしまい、あれよあれよと気が付けば大森林の奥にまで逃げられてしまったと言うわけだ。

そして、大森林の中、とうとう物資が尽きてしまう。

森の中、水も肉も現地調達出来るが、炭水化物が足りない。こうなるとお世辞にも美味しくない携帯食でも恋しくなってくる。そして何より塩が足りない。

更に悪いことが続く、剣が折れてしまったのだ。悪くない剣だったがココまで酷使し過ぎたのが原因だった。

と、来れば。エルフの村で調達したい所だったが、考えるまでもなく困難を極めた。まず人間と見ればエルフは容赦なく攻撃してくる。当然だ、今まさに彼らの都が人間

の攻撃を受けているのだから。

そうなればもう、泥棒しかないのだが土地勘が無い場所での盗みなど成功する筈もない。
い。

困り果て、たどり着いた炭焼き小屋、僅かな塩味を求め、炭と灰をしゃぶる程に飢えていた。

そこをフアーモス爺に拾われた、そこから延々と薪を割らされているのだった。

田中だつて無報酬で薪を割っている訳じゃ無い。フアーモス爺に剣と塩の調達をお願いしていた。

アテがあるとは言っていたが、塩はまだしも素人の爺さんに剣の善し悪しなど解ると思えない。となれば、まがい物を掴まされた時に返品ぐらいは出来るのでは？

そう思い立って、新パラセル村まで行こうと決意する。

……しかし、剣が無い剣士など、ただのデクの坊と一緒。田中はすっかり腰が引けていた。

「くそう、くそう、おつかねえ」

魔獣に追われれば逃げるしか無い。足にも自信がある田中とは言え、獣相手に徒競走では分が悪い。

ビクビクと周囲に気を払い。たつぷり半日掛けて、なんとか新パラセル村の外れまで

やって来た。

既に夕暮れ時、長い影が道に落ちてている。遠目に見える村の様子に田中はホッと息を吐いた。

その時だ……

薄暗くなつた森。木々のシルエツトが不気味に揺れる。

冷たい風が吹く。ざあざあと葉擦れの音だけが響いた。

肌が粟立つ感覚。研ぎ澄ますまでも無く、濃密で危険な気配。

マズイ！ そう思つた瞬間、甲高い悲鳴が聞こえた。同時にゴオンと地面を伝わる低い衝撃。

「マジイな、この気配。覚えがあるぜ」

呟きながらも走る。衛兵に咎められるのも構わず、柵を跳び越え村に駆け込むと、田中は騒ぎの中心地へと滑り込んだ。

——ブオオオオオオオオオオオ!!

地響きの様な咆哮が間近で響く。恐らくは家だったモノの中心で、黒光りする巨体が見えた。

——大牙猪!!
ザルギルゴール

田中は内心で盛大に舌打ちする。人間界では伝説の魔獣扱いなのに、これではまるで

バーゲンセールだ。

ギルゴール 牙猪ならまだしも、コイツに剣が通らないのは体験済み。前回はユマ姫の魔法で穴に嵌まつてたところにトドメを刺したに過ぎない。

並の魔獣ならファーモス爺に剣を貫つて撃退、一躍ヒーローにと言う可能性もあった。しかしコイツが相手では剣が有つても逃げの一手しか無い。

田中はファーモス爺を探す。見渡すと辺りは狂乱に飲まれていた。打ち倒されたエルフの兵士が視界に映る。

その様子に田中は僅かな違和感を覚えた。

(なんだ？ 何かがオカシイ、あつ！ クソツ！)

その兵士は剣も槍も持っていなかったのだ。背負っていたのは矢筒。エルフが剣で戦うことは稀なので当然と言えた。田中は贅沢を言わなければ、エルフの村でもそこそこの剣が手に入ると信じていた自分の甘さを呟った。

(これじゃ、碌な剣が有るわけがねえ！)

必要とする者が少なければ、当然全体のレベルも下がる。以前、ザルギルゴール 大牙猪と戦った時、持っていたのは選りすぐりの業物だった。

だが、それでも歯が立たなかったのだ。それがナマクラだったら？ ザルギルゴール 大牙猪は勿論、追っているグリフォンにすら相手にならないだろう。

コレでは何の為にグリフォンをココまで追いかけてきたのか解りはしない。

泣き出したい気持ちもグツと押し殺し、田中はファーモス爺を探す。土地勘の無い村の中、自慢の気配感知だけが頼り。だが、狂乱した村ではそれもままならない。

「オイ！ 這ボいつくズばる者が居るぞ！ アイツザルギルゴールが大牙猪を操つてるんだ！」

「本当か？ クソツ、生かして帰すな！」

同じく大牙猪ザルギルゴールには齒が立たない村人は、一縷の望みに賭けて田中を追い始めてしまふ。怨嗟の様な悪態をつきながら、田中は魔獣からも、村人からも逃げるしか無い。

（爺さんとは後で合流するとして、ここは一旦引くか？ だが、退路も無い！）

黒ずくめの格好は非常に目立つ。それに村人の武器も大半は弓、一斉に射かけられれば脱出は困難。万策尽きた田中は、窓から一軒の民家に転がり込んだ。

しかし、そこには当然に住民が！

金髪巻き毛のおっとりとした淑女がロッキングチェアで編み物をしている所だった。年の頃は四十代と言った所か？ 幾つになっても可愛らしい、そんな印象の女性だった。

「きゃあ！ ボ、這ボいつくズばる者？」

「待て、待ってくれ！ 我ながら怪しいが、悪い人間じゃ無い！」

「ぷっ」

「?」

「ふふつ、我ながら怪しいって、そんなのオカシイじゃ無い?」

笑われてしまった。

だが、田中は黒ずくめな自分の風体がこれ以上ない程に怪しい事を知っていた。好きでやっているモノの、折れかけた事も何度かある。

しかし、この格好こそがファンタジーな世界で生きる覚悟の証。変えるつもりは一切無かった。

「なんじゃ! 騒々しい、非常時じゃぞ!」

しゃがれた声と共に、部屋に入ってきた老人に田中は驚きの声を上げる。

「ファーモス爺さん!」

「タナカか? 何故来た!」

ここはファーモス爺さんの娘夫婦の家だった。剣と幾らかの携帯食を手に入れたが今日はもう遅い。一晩厄介になってから、明日出発しようとした矢先の騒動であったのだ。

「いや、爺さんに剣選びを任せてられねえと思つてな、薪はもう山程割つたぜ」

「そうか、しかしお前さんも運が無いな、大変なことに巻き込まれた」

「ああ……そうだな」

言いながらも田中の視線はファームス爺の手にある白い包みに釘付けだった。何故か、不思議な胸の高まりを感じていた。

「爺さん？ それが剣か？」

「あ？ ああ、まあ一応な。お眼鏡に適うとは思えんが」

ファームス爺は言い淀む。どんな剣でも、持ちさえすれば心の持ちようが違うのだと田中が力説するので一応は持つてきた。

だが、これが剣と言えるか自信が無かったのだ。巨大なカミソリでは無いかと言われれば、ファームス爺に反論の余地は無かった。

一方で田中は、布越しに見えるシルエツトだけで、あり得るはずが無いナニかへの期待が高まっていく。

（まさか？ いや、あり得ねえ、期待すべきじゃない。それどころかナマクラで当たり前）

ガツカリしないように、必死に期待を押し殺す。

「と、と、と……取り敢えず！ 見せてくれ」

全く押し殺せていなかった。そうで無くても珍しい剣だけで心が躍る男なのだ。

その様子を見て、申し訳なきで一杯になったのがファームス爺だ。

「い、いや！ この剣はな、模造刀だ」

「模造刀？ 切れないのか？」

がつくりと肩を落とす田中。それを見てファームス爺はまた慌てる。

「いや、切れる。何より切れる。切れるは切れるが……」

「切れるが？」

「いや、見て貰った方が良いか」

ファームス爺から包みを受け取った田中は急いで紐解き、一本の剣を取り出した。

（ま、まさか？ だが、間違いねえ！ 刀だ！）

握った瞬間、理解した。これは刀だ。それも途轍もない業物。飾りの無い白鞘を、勝手知ったる様子で田中は一息に抜きはなつ。

その様子を見て、ファームス爺は眉をひそめた、そこに強烈な違和感があったから。初めて触るハズの剣。だのにこの男にしっくりと馴染んでいる。手に取った瞬間、空気が変わったような錯覚すら覚えた。

魔道具の明かりの下、抜き身の刃が晒される。それは妖しい光を放って見えた。

「綺麗！」

思わず呟いたのはファームス爺の娘だった。

確かに素人目にも美しい、シンプルな直刃すくはながら見た目からも伝わる切れ味が、危険な魅力を放っていた。

「これが模造刀だつて？ 冗談だろ？」

これほどの刀、ついで持ったことが無い。これが模造刀なら、今まで使ってきた剣など玩具以下の代物になってしまふと田中は評した。

「いやな、確かに美しいし、切れ味も鋭い。だが扱いが難しいんじや、下手に枝打ちでもしようモノならあつという間に刃が欠けてしまふ」

フアーモス爺の言葉に、「まあ」とその娘は口を押さえる。エルフの剣の主な使い道は鈍でやる様な枝打ちであるから、それすら出来ないのではナマクラと言われても仕方が無いのだ。

一方で田中はそれを聞いて腑に落ちた。技術が無いのだ。刀つて奴はキチンと刃筋を立てて、斬つて、初めてその威力を誇る。使い方を間違えればすぐに折れてしまふだろう。

「で、これは貰つて良いんだな？」

「あ、ああ。だが使おうとするなよ？ いざと言う時に裏切られてもワシは責任持たんぞー！」

「裏切らねえよ、コイツはさ」

しゆるんと、流れる様な動作で刃を収めた。その動きも極めて自然で、再びフアーモス爺は妙な胸騒ぎを覚える。

それは危険な予感であった。合わさってはいけないモノが二つ。合わさってしまった様な……

と、その時、地面が揺れ、ズガアアアンと何かが崩れる音が響いた。それも間近で、だ。
——ブルルルウブウウ！

続いて、心胆寒からしめる唸り声。恐らくは隣の家が破壊された。最早一刻の猶予も無い。

「逃げるぞ！ 二人とも！」

叫んだのはファームス爺。娘の手をとって玄関へと駆けて行く。

……が、一方で田中は入ってきた窓から再び外へと踏み出していた。

「じゃあな、刀ありがとよ、一生忘れねえ」

「馬鹿な！ どこに行く？」

慌てたファームス爺だが、帰ってきたのは簡素な一言だった。

「斬ってくる」

なにを？ 尋ねるまでも無い。ザルギルゴール大牙猪を斬ろうと言うのだ。

やってしまったとファームス爺は後悔した。あの剣は見た目こそ美しいが、獲物を切れる様な強い剣では無いのだ。無闇に振り回せばすぐに折れてしまう。

ましてや相手はあの大牙猪。ザルギルゴール斬ろうとして斬れるなら苦勞はしない。

劍さえあれば心のありようが違う。なるほど、アレだけ美しい劍。心が昂ぶただろう、だが、元より劍でどうにかなるような魔獣では無い!

金属と並ぶ強度を誇る体毛は、あらゆる武器を通さない。エルフの戦士が誇る、魔法で加速した弓矢でなんとかダメージが与えられると言う程度。

一人なら必死に連れ戻す所だが、今は娘が居る。ファーモス爺は悔しそうに唇を噛んだ。

「あの? お父様?」

「なんじゃ!」

家から脱出し、距離を取った矢先、実の娘から間の抜けた声を掛けられて、ついついファーモス爺は声を荒らげてしまう。

「もう、大声出さないで。カタナってなにかしら? あの人が言っていたけど」

「カタナ?」

そう言えば、「カタナありがとよ」と言っていた。劍にも色々種類があること位はファーモス爺も知っていたが、カタナとは聞いたことが無い。

いや、問題はそこじゃない! 名前があると言うことは、あんな形の劍が他にもあると言うことか!?

考えながらも二人は小高い丘の上、集会場の前までやってくる。奇しくもここは傷心

のユマ姫が、帝国の襲撃を皆の前で語った場所だった。

——ゴオオオン

轟音が響いた。続いてガラガラと木材が崩れる音。

「ああつ、ライアムさんのお家が」

ファーモス爺の娘が叫ぶ。今まさに大牙猪ザルギルゴールに崩された家が、仲良くしているはず向かいのお家だったのだ。

家なんぞよりも心配するべきモノがあるじやろうが！ とファーモス爺は思うが、昔から娘はこう言う子であった。

「ローンで買ったばかりなのに、可哀想だわ」

「それより命の心配じやろうが！」

「大丈夫よ、あの家、この時間は共働きで仕事に出ていますから」

なるほど、近所付き合いは伊達じや無い。だが、やはりピントがズレていやしないだろうか？ ガツクリとファーモス爺が肩を落とした時だ。

「あ、タナカさん」

「なんじやと？」

大牙猪ザルギルゴールの目の前に、立ち塞がるは黒ずくめの男。田中であつた。

逃げるでもなく、堂々と大牙猪ザルギルゴールの前に陣取ってみせる。そして、見せつけるように刀

を抜き放った。

(斬れるのか? まさか?)

その姿に気負いは見られず、極めて自然体。普通に考えたら大牙猪ザルギルゴールの常識外れの堅さを知らない、無知から来る蛮行と思う方が自然なのだが……

ファーモス爺に不思議な予感と期待を抱かせる程度には、その姿は堂に入っていた。

——ブモオオオオブモオオオオオオ!!

大牙猪ザルギルゴールが唸りを上げ、突進する。目前には田中だけ。明らかに狙われている。しかしまだ田中は動かない。

大牙猪ザルギルゴールの突進で家だった木材はひしゃげ、吹き飛んでいく。太い丸太さえも何メートルも空を飛ぶ様を見れば、距離をとって見ているこちらまで背筋が凍る程。

それでも田中は動かない。ゆっくりと刀を正眼に構え迎え撃つ。

「馬鹿な? 死ぬ気か?」

誰もがそう思った。超重量を前に人間が出来ることなど何も無い。だが田中は逆に大牙猪ザルギルゴールへと走り出したのだ。

「嫌ッ!」

娘は破滅的な結末を幻視して目を逸らす。しかし目を逸らさず注視していた者達ですらも田中の動きは見切れはしなかった。

——ブモオオオオオ!!

巨獣の鼻先に田中が触れようかと言う矢先、幻影の様に田中の姿が揺らいだ。

その動きの正体は剣術由来の特殊な歩法。剣先の動きに惑わされた大牙猪ザルギルゴールは狙いを外し、田中のすぐ隣を大質量が走り抜けていった。

「……ふう」

そして、すっかり大牙猪ザルギルゴールが通り過ぎると、ゆつくりとした動作で田中は全て終わったとばかりに納刀してしまふ。

「何をしてるー！ 逃げろ」

誰かが叫んだ。大牙猪ザルギルゴールは一度の突撃で諦める事は無い。超重量に見合わぬ急制動で足を止めると、すかさず旋回。再び正面に田中を捉え——

——ぐしやりと倒れた。

「たか。」

その間の抜けた声が自分の口から出た物だと、ファーモス爺は後から気が付いた。爺だけでなく他の誰もザルギルゴールが理解不能とあんぐりと口を開けている。

倒れ伏した大牙猪ザルギルゴールの体の下からはおびただしい血が染み出し、それを見て、既に

ザルギルゴール
大牙猪が事切れていると皆は初めて気がついた。

田中はすれ違いざまの一瞬で大牙猪の首筋を切り裂いていた。

その鋭さは、斬られた大牙猪すらも気がつかぬほど。無理な体勢から進路を変えた瞬間に、傷口が開き血が噴き出したのだ。

「おい爺さん、血抜きしたいんだ。手を貸してくれ」

田中が丘上のファームス爺へと声を張り上げる。皆がジロリと見つめる居心地の悪さから、ファームスは今度は深いため息を吐くのだった。

英雄伝説のはじまり

俺が^{ザルギルゴール}大牙猪を倒すと一転、村はお祭り騒ぎとなった。

「凄い剣じゃないか、見せてくれよ！」

もう何度この言葉を掛けられたか解らない。

「オイオイ、見た目から切れ味抜群じゃないか！」

刀を抜き放つとそんな風にて囁す。続いて「這い^ホつくばる^ズ者の武器も馬鹿に出来ねえな」「ああ、これじゃ王都の奴らがやられるのも無理ないぜ」なんて声まで聞こえてくる。

「いや、この剣はそのファーモス爺に貰った物だが？」

そう言うと、皆が血相を変えてファーモス爺へと突撃していく。

このやり取りをこの短時間で四回は繰り返して、俺はほとほと嫌気が差していった。

「お疲れですね」

そう言って話し掛けてきたのはファーモス爺さんの娘。えーつと

「ミクトルです、パラセル村を救って頂いて感謝していますわ。こんな時だから、なんの

お返しも出来なくて悪いんですけれど……」

「んなもん、この剣一つでお釣りが来るぜ、どこで手に入れたんだ？」

「それは……」

視線の先には、何故だか村の若いのに揉みくちやにされているファーモス爺さんの姿が！

……なるほどな、悪いのは俺だ。

だが、爺さんは程なく解放された。若者達は刀を作った鍛冶師の所へ向かったらしい。

「ふう、偉い目にあつたわい」

「オイオイ、この剣の秘密。そう簡単に話しちまつて良かったのかあー？」

「誰の所為じゃ！ 誰の！」

年寄りには怒りっぽくて敵わない。俺としても一度、鍛冶師には挨拶に行きてえ所なんだがな。

「そんな事より、この剣について知ってることを話してくれよ」

「わしが知ってる事など何にも無いわ！ コイツはワシの友人モルガンの最高傑作。

知ってるのはその程度だな」

「ヒュウ♪ 最高傑作をどこの誰とも知れない男にくれるとは随分と俺の腕を買ってく

れたモンだな」

「違うわい、解つとるんじやろ？ この劍はお主以外、誰にも扱えない劍だ。いや、劍で無くカタナと言うべきかの？」

呆れた様子だったファーモス爺だが一転、得意そうに俺を見上げてくる。

なんか……ドヤ顔なところ悪いんだが、言いたいことが解らねえ。

「つと、そりやあどう言う意味だ？」

「隠すんじや無い。あの時お前はこの劍をカタナと呼んだ。モルガンの奴が長年の研鑽の上、独学で辿り着いた劍の境地だが……境地であるが故、頂点であるが故、他にも同じ結論に至った劍があつても不思議じゃ無い」

「なるほどな、故郷の劍がそんな風に評されるのは悪くねえ」

地球にも様々な国に、様々な劍があつた。バスタードソードやシミター、レイピア。他にもマニアックな物を挙げればそれこそキリが無い。

だが、俺はこと斬る事に関して言えば、日本刀が、刀こそが最強だと信じてきた。

地球とはかけ離れた土地で、エルフの鍛冶士が人生を賭けて辿り着いた境地が刀だったと言われて嬉しくないはずが無い。

そんな俺の様子をみて、ファーモス爺は訳知り顔で頷いた。

「やはりな……モルガンの奴は自らが初めて辿り着いた劍の境地と豪語していたが、残

念ながら先人が居た訳か」

「いや、そうでも無いぜ？ 少なくともこの世界では初めての筈だ。俺はココでは無い世界から来た。少なくともビルダール王国の人間でも、セルギス帝国の人間でもねえ」

「なんじゃと？」

「遙か遠い、島国とでも思ってくれ。行きたいと思っても行けるはずが無い。神の導きがあつて初めて辿りつける場所だ」

「世迷い言を！ と言うべきなんじゃろうが、先ほどの剣技の冴えを見れば否定はし難いのう。大牙猪ザルギルゴールを切り裂く剣技などがあれば、我らはとうの昔に滅ぼされていたじゃろう」

「そこは安心してくれ。少なくとも俺みたいな剣士がゾロゾロ出てくる事は絶対にねえよ」

俺はそう言いながら、木村や高橋、黒峰さんの事を思い出す。みな剣術はおろか、剣道とも無縁のメンバーだった。

と、そんな事を考えていた俺に、ファームス爺がウンウンと頷いている。

「それで、お前はその国で剣士の一族だった、と言うわけじゃな？」

「……どう言う意味だ？」

「……そうとぼけるでない。何か事情があるんじゃないだろう？ タナカと言う名前の剣士

と、カタナと言う名前の剣。察するなと言う方が無理があるわいなにそれ恐い!

「い、いや、俺の名前と刀は何の関係も無いが?」

「……ないの?」

「ないよ!?!」

この爺さん萌えキャラか?

いやあ、その視点。無かったね。

一瞬、意味が解らな過ぎて。頭が真つ白になった。漢字って大事な。だってどう見たって田んぼの真ん中って意味じゃん?

「家は代々農家だったし。親父の代で農家辞めちゃってるけどな」

「そうなの?」

「そうなの!」

「……………」

爺さん……真つ赤になって俯くぐらいなら、ドヤ顔で指摘してこないで欲しかった。

因みに爺の娘のミクトルおぼはんは、さつきから笑い転げている。

「おとーさんったら! むつかしからボケてるんだからもう! 思い込みが激しくつて

! ……、困っちゃ……ぶっ」

「笑うな！ 笑うでない！」

仲が良いね二人で。

「聞いてよタカナさん！ おとーさんってば六十年前からこうなのよ？」

ゲラゲラと笑いながら話し掛けてくるが……このおばはんもキツチリ俺の名前を間違える抜けっぷりで、完全に親子だ。

あれ？ 六十年？ 精々四十代かと思つたが、そう言うとき非常に嬉しそうに笑つた。

アレだ、人間とは寿命が違うと言うことだ。

六十代と思つた爺さんは百を超えてるし、四十代に見えたミクトルさんは八十位と、完全におばあちゃんだつたと言う話。

じゃあアイツは？ と思つたが子供の年齢は人間と変わらないと言うか、むしろちよつと成長が早いぐらいなんだと。

大人の時間が長いとは便利な生物と思つてしまう。非常に羨ましいと思つてしまつた。だが、アイツには関係ないな。まず十六まで生き残れるかどうかの問題なのだ。

と、そう言えばこの空気ならアイツについて聞けるかも知れないな。下手に名前を出すと殺し屋として狙っているのかとか、警戒されちまう恐れがあると、今の今まで話せていなかったのだ。

「なあ？ ユマ姫って知ってるか？」

「……………」

と、俺の一言は、周りで俺達の様子に聞き耳を立てていた周りのエルフ達も含めて、全員を一齐に沈黙させてしまった。

マズったか？　と思つたのも一瞬。スゲエ勢いで食いついてきた。

「ど、どこでその名前を知つた!？」

聞けば、城を脱出したユマ姫を拾つたのもこのファーモス爺らしいのだ。何つゝ偶然だよ。

俺は結局、そのまま集会場に集まつた皆の前で事の顛末を話すことになつた。

ソノアールって人間の村でユマ姫と出会つて、ハーフェルフの村。えーとピルテ村だっけ？　やべえ記憶が曖昧だ……そこでグリフォンって化け物と出会つて退ける。

その後、スフィールルへ行くも領主のグプロス卿の陰謀でゼスリード平原で襲われ、そこに再びグリフォンが襲撃。逃げ延びるもユマ姫と離ればなれになり、俺はユマ姫の妹の秘宝を追つて再びゼスリード平原へ。

そこで、またまたグリフォンと死闘を演じるも、秘宝を奪われ大森林まで追つてきた。

一方でユマ姫はスフィールルの隣、ネルダリアの領主の庇護下で王都に向かっている最中。いや、今頃は王都に辿り着いた辺りだろうと説明していく。

改めて語るとなんとまあ大冒険だ。たっぷり何時間も話し込んで俺もそろそろ眠い。だが皆が真剣でどうにも明日にしようぜとは言いづらかった。

「生きておったか……」

呟いたフアーモス爺は魔道具の青白い明かりの下で、ポロポロと泣いていた。

爺さんばかりじゃ無い、村の皆が泣いていた。それだけで無く、中にはユマ姫と一緒に旅立った若者達の両親も居て、息子を知らないかと詰め寄られた。

だが、ユマ以外唯一の生き残りだった青年の様子から絶望的、その青年も恐らくは大岩蠟螂ザルディネフエロに殺されているとあつて希望は無かった。

村長なんかは大事な一人娘が一緒だったとかで、何度となく特徴を説明して来た。だが俺は馬車に乗つてた訳じゃ無いし知りようが無い、残念ながら死んでるものと思われた。

どうも村人に若いのが少ないと思つたら、そう言う事情があつたらしい。

しみみりとした空気の中。若者達はユマ姫を守つて死んだんだと、遺族は子供達の死を悼んでいた。

「ユマ姫を守つて貰つて、この村まで守つて貰つた」

「ああ、タナカさんは俺達のヒーローだ！」

そんな声が聞こえてくるが、俺は俺の仕事をしただけ。加えて言えば、アイツはエル

フの姫である前に、俺のマブダチでもある。

「よしてくれ、俺はそんなんじや……」

「照れるでない、少なくともセレナ様の秘宝を追って大森林の奥まで追ってくるなんて、仕事の内ではないじやろう？」

「流石、謙虚でシビれるぜ！」

「オイ！ 誰か空飛ぶ妖獣を見た奴は居ないか？ タナカさんを手伝うんだ！」

そんな調子で祭り上げられてしまう。

マズいな……なんて言うか、どんどんと大げさになっている。

「タナカさん、是非、家に泊まっていつてくれ」

「あ、ああ……」

村長に請われ。俺はパラセル村を拠点にグリフォンを探すこととなった。

しかし、完全に祭り上げられちまったな……面倒なことにならないと良いんだが。

帝国の陰謀 1

「タナカさん、本当にお体に異常はございませんか？」

「何ともねえよ、絶好調過ぎて恐いぐらいだ」

一晩明けて、俺は村長の家で朝食を頂いていた。

結局、パラセル村の住人にグリフォンを見た者は居なかつた。

マズイ事にひよつとしたら大森林の更に奥、果ての山脈の辺りまで逃げた可能性があると云う。

果ての山脈は大森林の更に北。壁の様に広がる山脈で、世界の果てとまで呼ばれている。

人間の間でも知れた存在で、セルギス帝国の北やビルダール王国の北にも果ての山脈が広がっている。山脈の向こうを見た者たちも居るには居るが、そこは何も無い不毛の地だつたと口を揃える。

どうも詳しく村長に話を聞くと、魔力つて奴は地面を伝うらしい。そう聞いて比重が重いガスみたいなモンを想像したが、恐らくそうかけ離れてはいねえんじやねえか？

だとすると、魔力つてエネルギーが遮られた果ての山脈の向こうが不毛の地つてのは

納得が行く。

一方で、せき止められた大量の魔力は淀み、強烈な魔力溜まりが形成されるんだと。冒険者生活の中で、山や谷に危険な魔獣が出没するのは肌で感じていたことだが、その理屈に合点がいった格好だ。

そこに世界の果てと恐れられる程の大山脈だ。当然世界最強レベルの魔獣がウヨウヨいる魔境と化している。

「果ての山脈には岩塩の鉱山がありまして、そこから塩を取ってくるのはエルフの戦士の榮譽ある任務なのですが、戦士たちは帝国との戦争に駆り出され。最近塩がスツカリ不足しています」

村長はそう言ってスープの味の薄さを愚痴った。一方で村の英雄となった俺に出された大牙猪ザルギルゴールの肉には塩がたっぷりで申し訳ないね。

「しかし……大牙猪ザルギルゴールの肉を喰らうなど、考えられませんぞ」

「つつてもなあ？ マジで旨いぜ？ 食わないか？」

「ご冗談を、健康値が保ちません。最近ただでさえ二十を下回ってしまつて……」

「ふうん」

俺は昨晚も血抜きしたばかりの大牙猪ザルギルゴールの肉を喰らつたが、まるで問題ない。前に仕留めた時から、本当は大牙猪ザルギルゴールの肉が食いたくて仕方が無かつたのだ。

前回は村から遠かったし、精根尽き果てていたから諦めたが、今回は村の真ん中で血抜きも内臓の処理も完璧にこなせた。その結果、それはもう美味しく頂いている。

だが、エルフ達は普通、強力な魔獣の肉は食わないらしいのだ。

ココで問題になるのは健康値。アイツに測って貰ったのが懐かしい。

強力な魔獣の肉は魔力の塊。他人の魔力は自分の健康値と相殺される都合、肉を食うと、どうしたって健康値は削られる。

だからこそ、エルフは植物を主体に食べてるんだと。だがここまで運動続きの俺はどうしても肉が食いたい。さらに相手は伝説の魔獣と来れば食わない理由は最早どこにも無い。

昨日は流石におっかなびつくり口に運んだが、今日は大胆に厚切りステーキにかぶり付く！

「くうー……！ ウメエ！」

「ジユル……」

剣が刺さらない程の魔獣。肉だつて勿論、柔らかくは無い。むしろ固いぐらいだが、その濃厚さは天然のコンビーフを思わせる。一方で味の方は肉本来のフレッシュなうま味に満ちていた。

固いと言つても、噛みついちまえば歯切れは悪くない。ざらりとした食感の肉を噛み

切って、口の中に放り込む。後は奥歯でしっかりと噛み締めれば、バラバラとほどけながら濃厚な赤身の味が口の中に広がり、多幸感さえ抱く程。

んーたまらん！

そんな俺を村長が羨ましそうに見てくるが、よく考えれば軽々に薦めるのはマズかった。

なんせ俺の健康値は異常値らしいからな。

健康値：52

魔力値：220

以前、ユマ姫の秘宝で測った時は90・90だったからコレでも大分下がったモンだ。だが、20〜30が普通と言われる健康値。コレでもまだまだ余裕がある。流石神様ボディと唸る所だ。

そんでその分、爆上がりしてるのが魔力値。ただし魔法が使えない俺じゃコイツは宝の持ち腐れ……

そんな話をしていたら、村長さんからツツコミが入った。

「いやいや、それだけの魔力があれば高度な魔道具を起動できる筈ですよ。タナカさんならば魔剣を使えるかも知れない」

「魔剣……ねえ」

話を聞けばSFの高周波ブレードみたいな武器らしい。

人間界では拝めない恐ろしい魔道具がポンと出てくるからエルフの国はおっかねえ。炭焼き小屋で木を切り倒した時だって、簡単に木を切れる魔道具って奴を貸して貰って、その簡単さによつたまげたモンだ。

ぶっちゃけ、薪を割る方がよっぽど重労働だった。

金属質のホースみたいな魔道具で、木に巻き付けて起動するだけ。中で流体金属が高速で旋回して木を切断する……とか？ SF過ぎて理屈は全く解らねえ。

魔剣も同じだ。便利なんだろうが、理屈も解らないモノに命を預ける気はしねえな。

「悪いけど、興味ねえな」

「そうですか、いや、ザルギルゴール大牙猪を切断する剣があれば確かに不要でしょうな」

「そーゆーこつた」

俺は不敵に笑って、残りのステーキを攻略するが。本心ではエルフの魔道具に興味津々であった。

ただ、アレコレ聞きまくるのはビデオデッキの使い方が解らないおばあちゃんみたいだな……と思つてちよつと恥ずかしくなつちまつたんだわ。

ま、その辺はおいおい攻略していきますか。

と、エルフの村での生活に思いを馳せていたのだが、どうにも俺は、ゆつくりとは出

来ない運命にあるようだ。

急に外がザワザワと騒がしくなるや、何者かが村長宅に駆け込む音が聞こえてきた。

「村長大変だ！」

同時に玄関から発せられた大声は、食事を終えリビングで寛ぐ俺達に届いた。

「失礼、なにか厄介事のようなのです」

「大体想像付くだろう？ 斬って良いなら俺が出るぜ？」

俺の提案に村長は片眉を跳ねさせ、探るような目で俺を見てくる。

「本気ですか？ 帝国にはお知り合いも多いとおっしゃってましたが？」

「今更だ。ゼスリード平原でたっぷり喧嘩売っちゃまったからな」

何が起こったかは明白。帝国兵が様子を見に来たのだ。

エルフの国は帝国の占領下にある。この村は特に軍事的には価値がないため、兵士が

常駐していないだけと聞いている。

そんな村でもアレだけの騒ぎがあれば、帝国兵がやってこない道理は無い。

「なるほど、ですが当面はお待ちください。まずは私が話をしましょう」

「そりゃあな。だが揉めそうだったら遠慮無く呼んでくれ」

「ありがたい、そうさせていただきます」

そう言って村長は家を出て行った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

んで、あつと言う間に俺の出番が回って来ちまった。

「ふらりと現れた男が大牙猪ザルギルゴイルを斬つただと？ 信じられるか！」

帝国の兵士。数はざつと二十。その隊長と思われる男が声を怒鳴り散らす。

それはそうだろう。この村は王都に近い割に田舎で、若者が少ないから無視されてきた一面がある。

そんな村に巨大魔獣が現れるや、即討伐された。

どこにそんな戦力を隠し持っていたのか警戒するのが当然。若者が居ないと言うのが嘘。更にはレジスタンスの拠点になっているのではと警戒しているのだ。

「オッス、呼んだか？ 俺が大牙猪ザルギルゴイルをぶつた斬つたタナカだ。ちつたあ名が知れた剣士のつもりなんだが……知らねえか？」

「何だお前？ タナカだと？」

首を傾げる隊長さん、対照的に後ろの兵士達は「タナカつて？ あの？」「ああ、妖獣殺した」「本物か？」とザワついている。

うぬぼれじゃ無えが俺は、マンティコアつて妖獣を倒して騎士の推薦を受け、なおかつ叙任を断つて冒険者であり続けている有名人だ。

こう言うサクセスストーリーは庶民にこそウケる。だからこそエリートの隊長さんが知らねえのも無理はない。

副長と思わしき人物から耳打ちを受けて、隊長は俺の事を聞いたのだろう。殊更苛立たしげに俺に絡んで来やがった。

「タナカだかなんだか知らないが、流れの傭兵崩れが何故こんな所に居る！」

「それこそ傭兵崩れだからじゃねえの？」

食つてかかる隊長さんに、俺は耳掃除をしながら雑な言葉を返す。隊長さんはそんな俺の挑発をまともに受け取り、獰猛な笑みさえ浮かべて脅して来やがった。

「まさか森に棲む者どもに雇われる気か？ 腕自慢らしいが帝国に逆らうなら森に棲む者共々死ぬ事になるぞ？」

「だつたらどうだつて言うんだ？ 大牙猪を倒したのは俺だ、こんなオイシイ所が他にあるかよ。稼げる所で自由に稼ぐさ」

格下の牙猪の皮だつて一財産となるのだ。大牙猪の皮なら天井知らずの値が付くはずだ。

同時に俺の強さをアピールし、牽制したつもりだったが、コイツが裏目に出た。

「ほぎけ！ 一人で大牙猪を倒せるものか！ 我らも大變な被害を出しながら討ち取つたのだぞ！」

「へえ?」

正直、帝国兵じゃどれだけ集まっても大牙猪は倒せないと思っただけに、討伐経験があると聞いて意外に思った。

なんせ中世の軍隊に装甲車の相手をさせる様なモンだ。対処のしようが無いと思つたが、中々どうしてやるじゃねえか。

感心する俺の態度をどう受け取つたのか、隊長さんは更に激しく俺を恫喝する。

「解つたらとつとと大牙猪ザルギルゴールを倒した奴らの居場所を吐け! こんな村、残らず焼き払つても構わんのだぞ!」

「だからよお、俺が斬つたつて言ってるだろ? 何なら俺の腕、隊長さんが試してみるか?」

「貴様ア! 言うに事欠いて!」

叫びながら隊長は俺の刀に手を伸ばす。激昂しつつも、どさくさに俺の剣を奪おうとする辺り抜け目がない。

「オツと! 手癖が悪いなあアンタ」

「グッ、ふざけるな!」

が、俺は大人しく刀を渡すつもりは無い。剣が無くて惨めな思いをするのは、もうウンザリだった。

俺は隊長の手を押さえると、そのまま後ろ手に関節を極め、押さえ込む。

一旦落ち着かせようと思つての行動だったのだが、コレも裏目に出てしまう。

「オイ！ 隊長を離せ！」

声の方向を見ると、先ほどの副長が村長の首筋にナイフを突きつけてるじゃねえか。

はあ……クツソ面倒くせえ！ 副長は「武器を捨て投降しろ」と言うし村長は「私の

事は構わず」とかありきたりな事を言いやがる。

どうしたもんか俺が悩んでいた時だ。

——ドスツ！

何の音かと思えば、村長を人質にとる副長の顔面に、深々と矢がぶつ刺さっている

じゃねえか！

「クズ共が、我々が来たからには好きにはさせん！」

そう宣言し、弓を片手に現れたのはエルフの若い女性だった。後ろには屈強なエルフの男を五人も連れている。村人が暴走したのかと焦ったが、どうにも様子が違う。よく見ればそれぞれがエルフの鎧……と言うより、プロテクターと言った方がしっくりくる。防具を身に付けているし、動きにも素人臭さが見られない。

一体何者だ？ と問い正す間もなく、その正体が村人達の声で判明してしまう。

「セーラ様！」「レジスタンスが来たのか！」「こんな田舎の村によくぞいらした」

どうもレジスタンスの有名な。俺は益々面倒な事態になったことを悟った。これでレジスタンスなど知りませんと言つても誰も信じないだろう。

しやーねえ！ いっちょ殺るか！

と、覚悟を決めた。だが覚悟を決めたのは俺だけじゃ無かつたらしい。

関節を極められた隊長が叫ぶ。

「遂に現れたな!! ギュルドスを起動しろ! 早く!」

ギュルドス? なんだ? つと。いよいよ隊長が捨て身の反撃に出た。極められた

右腕に構わず、左手で腰のナイフを引き抜いて暴れ出したのだ。

俺は咄嗟に手を離すと同時、隊長の背中を蹴りつける。

「ぐおー」

無残に地面に転がった隊長。俺はその後頭部を思い切り踏みつけ、黙らせる。

同時に俺は腰の刀を抜き放ち、大きく横薙ぎに一閃。小気味良い音と共に隊長を助けに駆け寄つた二人の兵士の首へ剣閃を走らせる。

——サンツ!

人を斬つたと思えぬ程の軽い感触に、自分でも驚く。残心も無しに、手早く刀を収めるまで、掛かったのはものの数秒。

——カンツ

白鞘に刀を収める時の、心地よい木の音が響いた。

瞬間、忘れた様にポロリと二つの首が胴体からこぼれ落ち、ザアザアと血が噴き出す。余りにも素早い一閃は、端から見たらひとりでに首が転がった様に見えただろう。我ながら会心の一刀だった。それだけに知らぬ者からは不気味に映っただろう。

遅れてバランスを失った体が、バタリと今更に地面に倒れ、大きな血だまりを作っていく。

「どうだ？ ビビって声も出ないか？ と俺は辺りを見回した。

「なんだ？ 何をした？ 貴様は何者だ？」

余りにも理想のリアクション！ サイコーだよアンタ！ ただ欲を言えばそのリアクションは帝国兵から欲しかった。

残念ながら、そう誰何^{すいか}してきたのは先ほどのレジスタンスの女性。セーラ様？ だった。

「俺か？ ただの流れの冒険者だよ」

「妖しげな術を！ 神妙にしろ！」

格好つけて答えてみたが、コイツも裏目。面倒くせえから後にして欲しいぜ。ファームス爺なんぞ「ワシの知り合いじゃ！」とか「妖しい者じゃない！」と声を出してくれているが、全く効果は無く、警戒を解いて貰えない。

「取り敢えず、コイツら片付けてから説明するから待つてろ」

俺はセーラ様へと振り向いて、親指で後ろの帝国兵を指し示す。釣られて背後から一人か二人斬りかかってくれば、振り向きざま叩つ斬つてやるつもりだったのだが不発に終わった。

……味方を斬られた割に、積極性が見られない。コイツら、まるで何かを待っている？ それがギルドスつて奴か？ 一体なんだ？

俺はその名をどこかで……

「黙つてないで、何とか言え！ まず名を名乗れ！」

コッチが考え事していると、セーラ様とやらはまだ小うるさく突つかかつて来る。はあー面倒くせええええええ！

「黙つてろ！ ヒステリー女！」

「何だと！ 貴様から血祭りに上げてやろうか？」

そんな馬鹿みてえな言い争いをしていた時だ。

「霧だ！ 霧が出たぞ！」

「なっ!?!」

エルフの間で動揺が広がった。それで辺りが急にガスつて来やがった。

そうか！ ギルドス！ おとぎ話の中に出てくる霧の悪魔の名だ！

「グッ！ クソッ」

威勢が良かったセーラ様とやらが、急に胸を押さえて蹲る。

なるほどな、あの時よりは大分薄いがコレが魔力を奪う霧か！ エルフ達が魔力を奪われバタバタと倒れていく。効果は抜群って奴だな。

一方、霧で視界が効かなくなった世界で、形勢逆転とイキがるのが帝国兵達だ。

「ハハッ！ ざまあ見ろ！」

「妖しげな魔術を使いやがって、皆殺しにしてやる！」

なんて喜んでいゝ。ひよつとしてアレか？ さっきの俺の一閃も、魔術的なナニかだとも高をくくっているのか？

霧の中、俺は無造作に帝国兵に近づいていく。

「よっ！ 元氣一杯だな！」

「なんだ？ 何故動ける？」

気安く声を掛けてみたら、非常に驚かれてしまった。

どうやら俺自身が魔術的な何かと思われていた模様。悲しいね。

「オイオイ、つれねえな。仲良くしようぜ？」

「困め！ 圧殺しろ！」

ザッと、一斉に俺を取り囲む。隊長は気絶し、副隊長も死んだと言うのに中々の練度

だ、プロ意識が高くてコッチもやりやすいじゃねーの。

俺は両手を挙げて無防備に近づいた。

「止まれ！ 武器を捨てろ！」

「いやいや、同じ人間だろ？ 仲良くやろうぜ？」

笑顔で近づく人間に斬りかかれるのはネジが外れた奴だけだ。良心に訴えかける様で申し訳無いが、多勢に無勢なんでね。

一歩一歩、距離を詰める。俺は気安い調子に見せ掛けて、内心では緊張感を高め、集中力を振り絞っていた。

上げた両手に意識を集中。五感から余分な情報が抜けていく。

白黒の色が抜けた世界の中、間合いまで、

三、

二、

一、

ゼロ！

その刹那、手は腰へ、

抜刀し。

払い。

そして納刀。

全てが終わった後、しびれを切らせた兵士の一人が叫んだ。

「死ね！ 殺せ！」

物騒な事を口走り、皆が一斉に斬り掛かってくる。

……だが、悪いな。

「それには及ばねえよ……もう死んでる」

「えっ？ ハ？ あ？？」

取り囲んだ兵士達の首が、一斉にゴロンと落ちた。

残りの兵士が、理解が出来ないとポカンとしている所、俺は一息に距離を詰め。更に

一閃。

それで終わりだった。

血に染まった広場で、俺はふうつと息を吐く。

しかし、切れ味が良すぎるのも考え物だぜ、まさか斬られた事にすら気が付かないとはな……

漫画かよ！ とツツコミそうになっちゃった。

帝国の陰謀 2

帝国兵達はぶつ殺したものの、事態を収めるまでに大分時間を食っちゃまった。

特にいけなかったのが、後頭部を踏みつけた敵の隊長が死んでいたことだ。

俺みたいな大男に、頭部を思い切り踏みつけられれば人は死ぬ。そりやそうか……気絶させるつもりで斬らずにいたんだが、ココでも完全に裏目に出てしまった格好だ。

なんてーのか、やっぱ世の中上手く行かんね。結局、ギョルドス？ とか言ったか、霧を出す装置を起動させた兵士をどうにかとっ捕まえて、やつと停止させることに成功した。

いっそ装置を叩き斬ってやりたかったが、あの時みたいに、中の霧が爆発したら堪らねえ。

で、なんとか装置は停止。操作した兵士はふん縛って捕虜として確保した。

後は、霧が風に散らされるのを待つばかりだが、問題はセーラ様とか呼ばれたレジスタンスの女の扱いだ。

ヒステリックにギャーギャー騒ぐし、ある事ない事言われて、折角協力的になつてくれた村人を刺激したくはない。

俺はセーラ様とやらを肩に担ぐと、手近な小屋へと連れ込んだ。

「鍛冶場か？」

窯に赤々と火が灯り。激しい熱気に満ちていた。締め切られていたお陰もあって、霧の影響が見られないのは僥倖だ。

もしかして？ と、俺の想像が正しい事を裏付ける様に、奥から爺さんが現れた。丁度ファームス爺と同じぐらいの歳に見える。

「お主が田中か？」

「そう言うあんたが、モルガンって鍛冶師か？」

「ああ、その剣を打った者だ^{もん}」

「良い仕事だ、感動ものだぜ……と、爺さん水あるか？」

俺は尋ねながらも、積み上げられた藁の上にセーラ様を降ろす。

「ああ、ちよつと待つてろ、浄水槽から汲んでくる」

「いや、飲むんじやねえんだ、コイツで十分」

「オイ！ ソイツは！」

止める爺の声も聞かず、俺は窯の横に用意された消火用の木桶を掴み、中身をセーラ様へとぶつ掛けた。灰とか浮かぶ汚え水だが、氣付けにぶちまけるんだからこれで良い。

「うあ、ぶあー！」

意識を取り戻したセーラ様は嘔吐えずが……灰でも口に入ったのかな……悪い。

しかし、暴れられても困るしなあ。

「おう、大人しくしろよ」

「なっ!？」

見下ろす様にセーラ様の眼前に屈み込んでやると、彼女は滑稽な程に怯えを見せた。訳が解らないと、俺とモルガン爺の顔をキョロキョロと見比べる様子は哀愁を誘う。

んなつもりは無かったが、その妙に嗜虐心を刺激する様子に変な笑いが漏れる。

「へっへっへっ、そうやって、しおらしくしてりや結構可愛いじゃねーの。中々に色っぽいぜ?」

実際、濡れて髪が肌に貼り付き、呆然とするセーラ様の様子は中々魅力的ではあった。

俺の言葉にセーラ様は青かった顔を一転、赤くしながらも決意の籠もった顔で歯を食いしばり、俺を睨み付け――

「殺せっ!」

――クツ殺頂きました!

なるほどね、ごちそうさま。しかし、過剰サービス。

いや、まあ小屋に押し込められて男に囲まれればそんなもんか。俺は一見して優しげ

な好青年だが、もう一人はそうじゃない。

「オイ爺さん！ 顔が怖いぞ！ 怯えてるじゃ無いか！」

「そうか？ ワシはファーモスの奴と違って優しい顔をしとるじやろう？」
「なるほど解った」

この爺さんボケだ！ ツツコミを期待した俺が馬鹿だった。

ファーモス爺さんがツツコミで、この爺さんがボケ担当。二人して若い頃は人気をさらった漫才師に違いない。

漫才はボケが二人では成り立たない、おふぎけも控えめに行くか。つと！

俺は突き出されたナイフを避け、セーラ様の腕を取る。

「クソツ！ 離せ！」

元氣一杯である。どうにも最後まで抵抗する気らしいが、話をしたいだけだから大人しくしてくれや。

俺は助けを求めてチラリと後ろを見る。

「しかし、最近は鏡なんぞ見とらんかったなあ……老けたとは思ったが、怖い……かのう？」

手鏡を眺め、一人で悩む爺さん。

これはアレだ。ボケじゃない、痴呆老人だ！

「おーい、俺がこの村の英雄だつて説明してくれよ爺さんよお」

「ふむ、英雄かどうかは知らんが、ワシの劍を使いこなせるようじやな、物騒な男が居たもんじや」

駄目だ。この爺さん役に立たない。

俺の困惑を余所にセーラ様は暴れ続け、俺は覆い被さる様に押さえつけるしか無くなつてしまう。

「クソツッ！ 嫌だ！ 離せ！ 離して！」

まさにレイプ寸前の事案状態にして、膠着状態。

ちよつとずつ、抵抗がお願いに変わつてるのがマズイ。可愛い。

つてか、確実に犯罪であつた。

押し倒して、両手を押さえてのし掛かる体勢的に、顔が間近に来るのもマズイ。

どうするべきかと、悩んでいる内に、いよいよセーラ様は泣き出してしまった！

「やだあ……お母さん……」

お母さん……まで来ちやつた！

これぞフルコース。もうコレ、レイプしなきや逆に失礼なんじやないか、と言う気さへして来るから不思議。いや、しないよ？

つか、大分ピンチである。

と、そんな膠着状態を救ってくれたのは、頼れる方の爺さんだった。

「無事か！ モルガン！」

「あゝ」

元氣よく入ってきたファーモス爺に、俺は思わず安堵の呻きが漏れてしまった。

「お主、何をしてるか！」

何故か、めっさ怒られた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「つまり、纏めると帝国兵が集会場に設置した『帝国の偉大さを示す像』、とやらは偽装された霧の噴出装置。その名も霧の悪魔ギョルドスだったわけですか？」

ココは村長の家。霧が収まったので、今後の作戦会議が始まったのだ。

それじゃあ、イカれたメンバーを紹介するぜ。

ツツコミ役のファーモス爺。

痴呆担当。俺の潔白を証明する為に連れてきたモルガン爺。

やたら睨んでくるセーラ様と、お付きの男性。

まとめ役の村長。

そして、村の英雄たる俺。

以上六名だ。

俺はスフィールで見たモノ、そしてユマ姫の仮説も踏まえ状況を整理する。

「ああ、霧の悪魔はスフィールでも無造作に広間に置かれていた。何故かってーとユマ姫様が言うには、アレは人間の健康値を吸い取り、霧として放出するんだと」

「馬鹿な！ そんなモノは我々だって作れん！ 這い^ホつくば^ズる者にそんなモノが——」

「どつかの遺跡から拾ってきたんじゃねーの？ 現にアイツもそう考えていたみたいだぜ？」

何かと食つてかかつて来るセーラ様の言葉を待たず、俺はその可能性を言及する。

フアンタジーよろしく、古代遺跡つて奴に超文明があつたりするのだ。この世界には。

「だとしたら、再現は出来ず。数は限られると？」

「そう言う事。それでいて健康値を吸い取るんだから、村の真ん中に置かなきゃ意味が無い」

「なるほど、そう言えばあの像が置かれてから健康値が妙に低かった。村の者の中でも体調を崩す者が後を絶たず心配していたのですが、敗戦のショックが原因だとばかり……」

「無理もねえ、大都市のスフィールだつて誰も気付いてなかったんだ。つってもココと違つて健康値なんぞ測れないから仕方がないんだがな」

「ふん！ 健康値すら測れんとは、蛮族が！」

……セーラ様や、いちいち突つかかって来るの辞めて。そんな事言うなら俺にも考えがあるよ？」

「俺の住んでいた場所だったら、体重や脂肪率も測れたんだけどな」

「脂肪率とはなんだ？」

おっ！ 食いついてきた。

「太って見えても筋肉質なだけだったり、痩せていても筋肉が少なく体の大半が脂肪の人も居る。太っていると勘違いして食事を減らせれば体に悪いし、脂肪が多いのに痩せてると思つて食うのもマズイ。脂肪率が解れば体調管理が容易になる訳だ」

俺の説明に、鳩が豆鉄砲喰らつた様な顔をする一同。そして食つてかかるセーラ様。

「そんな話は聞いた事が無いぞ!」

そんな彼女に、俺は華麗な返答。

「そうか、蛮族だな」

「貴様アア！」

期待通りのリアクションで笑うわ。マジ。

「まあまあ、今は霧ギョルドスの悪魔の話聞きましよう」

対して村長は必死で話を進めようとするから大人だ。

「うーん、今のアイデア、魔道具商に売れんかのう？」

一方こつちの爺さんは駄目な大人だ。痴呆は恐い。

そして話を締めてくれたのは、頼れる方の爺さんだ。

「つまり、ウチの村みたいに霧キョルドスの悪魔が置かれている村を捜し、確保すれば、替えは利かず、我々は有利になると言うわけじゃな？」

「流石、ファーモス爺は、俺の癒やしだな」

「？ お主は時々気持ち悪いな」

なるほど、相思相愛つて奴だな。言つてみた俺も気持ち悪いし。

「それだけじゃ無い、大牙猪ザルギルコールが現れたのも無関係とは思えねえ。思い出せばアイツの様子はナニか探している様にも見えた」

「どう言う事じゃ？」

「魔獣にとつて魔力は大事な訳だろ？ その魔力をかき消す霧はエルフだけでなく、魔獣にとつても天敵なハズだ」

「ちよつと待て、エルフとは何だ？ 説明しろ！」

セーラ様はまだイキリ散らしている。

「後で説明するからちよつと待つててね？ 良い子良い子」

「馬鹿にするなっ！」

「いちいち食いつき過ぎで、流石に面倒。」

「で、魔獣は本能なのか匂いなのか、魔力を削る兵器を目の敵にして、この村に行き着いたんじゃねえかと思うんだ」

「つまり、霧ギユルドスの悪魔とやらが置いてある場所は魔獣が現れると？」

「流石、村長さん飲み込みが早いね。思えばゼスリード平原での二度目のグリフォン襲来は偶然だけじゃ無いかも知れないと思つてな」

「三度目は魔石を食うためだったみたいだが、二度目の襲撃は謎だった。大変な量の翼獣の群れであつたから、一度目同様に食料確保がメインだと思つていたが。あそこまで先導してきたグリフォンには別の目的があつても不思議じゃ無い。」

「何にしても、健康値は吸い取る。魔獣は呼び寄せるで碌な事が無いのう」

「それでエルフの戦士を殺す兵器として稼働するんだから相手にしてみりや一石三鳥だわな」

「だからエルフとはなんだ！」

「この女しつこい！ 仕方無いから俺はエルフについて説明してやる事にした。」

「……つまり、ユマ様が這ホいズつくばる者と仲良くする為に、我らの名前を？」

「そうだ、俺ら人間が多数派なのは疑い様も無い。なにより助けを求めるのに、お前らは

人間じゃないから改名しろ！ っつても筋が通らねえだろ？ かと云って森に棲む者^{ザバ}って化け物扱いの名前は困る。それでユマ様が考えなされたのがエルフって名前よ」

「そうなのか……いや、しかし」

セーラ様は悩んでいる様子だが、ココは折れて頂きたい。

俺としてもエルフな見た目の種族をエルフ以外で呼びたく無いので、俺が面白半分提案した下りはバツサリカットする程には必死だ。

結局、お付きの男性の説得もあり、セーラ様は折れてくれた。

彼女はレジスタンスの最重要人物？ まあそうは見えないが、らしいので彼女が納得して、広めてくれれば、エルフと言う名前が浸透するのは間違い無いとか。

この村の人々も、エルフと名乗ることを約束してくれているので、ドンドンと広がる事だろう。

ザバだかボズとか面倒なんで、俺としてもありがたい。切実に。

「本当に姫様は生きているのだな？」

「それは何回も言ってるだろ？ 生きてねえならこんな危ねえ所に来ねえよ」

それはそれとして、セーラ様は俺に何度もユマ姫の生存を確認してきた。

シノニムさんが確保したって聞いてるから、問題なく生きているはずだ。

「嘘だったら許さんからな！　つい先日ガイラスと言う使者を王国に向かわせた所だ、下らん嘘はすぐに知れるぞ！」

「そうかよ……と、その使者は大丈夫なのか？　純エルフなんだろ？」

「心配無用。魔導衣という青い貫頭衣で魔力の保護が可能だ」

「へえ」

そんな便利な物があるなら、是非ともユマ姫アイツにも送ってやって欲しい。そう言うと、またまた怒り出す。

「そんなに簡単に手に入るなら私が真っ先に着ている！」

なるほど、納得である。聞けば一人一人へのアジャストが必須。ユマ姫にあつらえた物はエンディアン王家の倉庫に眠っているらしい。

「加えて、あの霧の力で、魔導衣に蓄えられた魔力は霧散している可能性が高い。今から姫様の体質に合わせた魔石を用意するのは不可能だ」

聞けばその魔導衣って奴に使う魔石も特別にアジャストする必要があるんだと。

「ましてや姫様は特殊な魔力を持っている。三種の波動を均一に持つ不偏の魔力だ、中々手に入る物では無い」

つまり、魔力の波動パターンが一致すれば健康値が削られず、魔力の助けになる訳だ。

魔力のパターンは三種、それが何段階にもレベルが有るので全てが一致する事は殆ど

無い。

仮に一致する魔獣が居れば、その魔石から魔導衣が作れるし、肉を食っても健康値の減少も最小限で済むと言うから驚きだ。

つと、何か引つかかる。

「でも、待てよ？ 俺が追ってるグリフォンはんなモン気にせず、魔石をゴリゴリ食ってたぞ？」

「なんだと？」

「凶化してるというのか？」

知らない単語に疎外感！ みんなして、俺を置いてきぼりに盛り上がってくれちゃつて。

堪らずファーモス爺が解説してくれる。まっこと癒やしだ。

「凶化と言うのはな、あらゆる魔石を食って力に変えられる危険な魔獣の形態じゃ」

「そりゃ、見れば解るが」

「そもそも妖獣は、複数の魔獣や動物の特性を取り込んでいる。柔軟で変化しやすく、それゆえ不安定」

「なるほどね、確かに不思議生物だよな」

「だからこそ凶化しやすい。そうすれば様々な魔力の波長を柔軟に吸収出来る」

「つまり、滅茶苦茶ツエーって事だろ？ 覚悟の上だ」

そう言い切った俺だが、皆が一斉にため息。傷つくなあ、おらあ寂しいよ。

「凶化すれば様々な魔獣の魔石を吸収出来る。ただ、様々な魔石を吸収して無限に強くなるかと言うとそうではない」

「どっかに天辺があるってか？」

「いいや、狂ってしまうんじゃないよ。複数の魔石、そして魔力に乗った複数の意識が精神を蝕んでいく」

「複数の、意識……」

「そりゃあ、まるで……」

「じゃあ、ほっときや勝手に死ぬって言うのか？」

「なら良いが、凶暴化して滅茶苦茶に暴れ回るんじゃない。だから凶化と言われとる」

「物騒だなあ」

「十数年に一度しか現れない、凶事を運ぶと言われる恐ろしい魔獣じゃ。只の妖獣の比では無い。恐ろしく強いぞ。毎回被害は大きく、倒せば名実共に勇者とも英雄とも名乗り放題じゃ」

「名声には興味ねえよ、他の人が殺ってくれるならそれでも構わねえ」

「それにな凶化して複数の魔力を吸収していると言う事は、魔石は平均化され、魔力は丸

い。姫様と同じ不偏の魔力を持つ天然の巨大魔石である可能性は高いじやろう」

「オイオイ、何だよそれ！ 一石二鳥かよ！」

ユマの妹、セレナの秘宝と便利な魔石。こりや益々グリフォンを狩らねばならなくなつた。

となれば、コレからやる事は決まりだ。

「セーラ様、俺をレジスタンスに入れてくれ」

俺はセーラ様に握手を求めろ。

レジスタンスはコレから大森林中の街を巡つて霧ギョルドスの悪魔を確保するだろう。

そしてそこにはグリフォンが現れる可能性が高い。そして例え霧がばらまかれても俺なら戦える。

WIN—WINの関係つて奴だ！ 損はさせないぜ！

——パンッ！

しかし、俺の手は凄いい勢いで弾かれた。

「ふざけるな！ 馬鹿が！」

駄目かあ……

反攻作戦

血風舞う中に男が一人。戦場のただ中にして泰然自若。その足取りは散歩の様に気楽な物だ。

いっそ異様な光景であった。戦場と言つても帝国兵に対峙する男はたった一人。一方で倒れ伏す死体の全ては帝国兵のものである。

それでもなお、いまだ多くの帝国兵が男を取り囲んでいる。生死の懸かった難局であるハズだ。

それなのに男が放つのは気の抜けたような一言だった。

「蒸し暑いなオイ」

男は堂々と黒塗りの兜を脱いでみせる。眼前の敵から目を切つてみせる愚行だが、帝国兵達はこのチャンスに斬りかかる事が出来ずにいた。

明らかな挑発。誘われている事は明らかだった。

似たような誘いを受け、見事に第一陣が地べたに転がっているのだから、後に続ける訳は無い。

「んだよ、つまんねーな」

脱ぎ捨てた黒塗りの兜の下から、黒髪黒目の男の顔が覗く。

そう、田中であつた。

結局、彼はレジスタンスに加入し、霧ギユルドスの悪魔を捜し回収する任務をこなす事になった。ただ、帝国側も早々にレジスタンスの動きに気が付き、健康値の回収を諦め、霧ギユルドスの悪魔の撤収へと舵を切っている。

当然、各地で帝国兵との戦闘が余儀なくされた。霧ギユルドスの悪魔から吐き出される魔力を奪う霧の中、まともに動けるのは人間である田中一人。

多勢に無勢に思われたが、たった一人で圧倒的な戦果を叩き出していた。

「いい加減帰つた方が良いぞ？ こんな所に居りや黙つてたつて長生きできねえからな？」

「黙れ！ 人類の裏切り者め！」

余裕綽々と話し掛ける田中に、追い詰められた様子で怒鳴り返すのは、兵達を指揮する立場の帝国将校。

彼は田中からたつぷりと距離をとり、後ろから大声で指揮を出す。それは指揮とは名ばかり、ただの罵倒でしか無かつた。

「死ね！ とつとと殺せ！」

ヒステリックに叫ぶ。そんな言葉でも末端の兵は逆らう術を持たない。

いや、しかし、繰り返すが、取り囲み無数の刃を突きつけているのは帝国兵達なのだ。だのに彼らには一切の余裕も無く、一方で田中はあくびでもしそうな有様。

コレではあべこべだ。それは何故か？

その答えの一つが、田中の持つ圧倒的な切れ味の『刀』に有るのは間違いないだろう。「ほいよっ！ とっ！」

掛け声もどこか真剣味が欠ける。だが、それでも田中が刀を振るう度、腕が、足が、そして首が、小気味良い音さえ伴ってスパッと切断される様は、いつそコメディと思えてしまう程に現実味が薄い。

だが、これは決してフィクションでは無い。

斬られれば誰だって死ぬ世界。

幾ら強力な剣を持つと、無数の刃に身を晒せば、全てを躲す事など到底不可能。

それだけに、田中の余裕は異様に映る。……その理由とは？

「貰った！」

徴兵された一般人の中にだって、そこそこの腕自慢は混ざる。

そんな腕自慢にとつて『取り囲んだ状態で背後から』と言う好条件までが整えば、鋭い一撃を打ち込む幸運を掴む事に何の不思議もない。

田中が如何に剣の達人であろうと、避けられないモノは避けられないのだ。

……だが。

——キンッ!

響いたのは高い金属音。剣が折れる音だった。

「え?」

「ほい、残念賞」

背後からまともに一閃されたハズの田中は全くの無傷。

一方で、渾身の一撃が思いがけず固い手応えに阻まれた兵士には、無残な死が待っていた。

田中の振り返りざまの一刀で、いつそ滑稽な程に首が飛び、血が舞った。

「嘘だろッ!」

「コイツ! 不死身か!」

「人じゃねえ! 怪物だ!」

兵士達から悲鳴と絶叫が木霊する。

勿論、田中が丈夫になつたのではない。狙われているのが解つた上で防具の固い部分で敢えて受けただけなのだが、その防具の性能こそが大きな問題であつた。

防具の正体は大牙猪ザルギルコルの皮で作つたジャケット。そして肩当てや肘当てと言つたプロテクターの類だ。

鎧と言わず、プロテクターと表現したのは当の田中だ。それ程に未来的なデザインの防具で、どうにも鎧と言うにはシツクリ来ない。

出来上がって来た装備の数々を見て、思わず呟いた田中の第一声は「カーボンか？」と言う呆然とした物。

エルフ達は知らない事であったが、そのエルフ伝統の防具の数々は田中が知るカーボンファイバーと酷似していた。

田中がハーフェルフの村でユマ姫と共闘した際に使っていた鋼の剣は決してナマクラではない。

にも関わらず、^{ザルギルゴール}大牙猪に殆ど刃が通らなかつたのは、かの魔獣の毛皮がほぼ炭素繊維で構成されていたからに他ならない。

そして、魔法と言うのは直接的な攻撃以上に、物質の加工や変化に特段の力を発揮する。

炭素繊維たる^{ザルギルゴール}大牙猪の毛皮を編み込み、樹液で固めた後に圧着する工程は、エルフにとつては難しいものではなかつた。

しかしエルフにとつて簡単な技術でも、現代の最先端工場のみで行えるドライカーボンの高度な加工。それに匹敵、いや上回る性能の防具の数々をエルフ達は生み出していたのだ。

肝心の材料となる大牙猪ザルギルゴールの素材が足りないのが唯一の懸念で有ったが、それだけに退治した田中に優先的に防具が提供されるのは当然。

そして、黒ずくめの戦士を自称する田中にとつて、カーボンファイバーで構成された漆黒の防具の数々に否やはない。

それどころか貰つた当初はもうご満悦で、軽くて丈夫な防具にワクワクしていた。

だが、それは何時しか退屈に変わつてしまふ。

——強過ぎちまうな。劍の腕もクソもねえ。

余りにスリルが抜けた戦場に、齒がゆさすら覚えると同時に、相手を不憫にすら思つてしまふ。

だからと言つて殺されてやる訳にもいかない。田中は呆然とする兵達に向かつて踏み込み、一太刀。

それだけの動作で、鉄の鎧ごと袈裟懸けに切断されてしまふ。

その鋭い断面は劍の腕に鈍りが無い証左で、田中としても満足のいく結果であつた。そして、同時に帝国兵としては耐え難い悪夢であつた。

なにせ、下半身が直立するそのままに、上半身が斜めにずり落ちていく様子など見せられては、正気を保てる方がどうかしている。

「うわっ！ うわあああ」

総崩れ。たった一人の男に対し、三十を上回る帝国兵がみつともなく潰走する。

「待て！ 戻れ！ クソツタレ！」

残るのは先ほどに暴言紛いの指示を出した隊長一人。アレだけの惨状を見せられて、彼が逃げ出さないのには立場から来る責任感……ではなく、理由があった。

「ハッ！ タネは割れてるんだよ！ 俺の鎧も同じだよ！」

そう、隊長が身に付けていたのも死んだエルフの兵士から剥ぎ取った漆黒の防具だったのだ。

「そうかよ」

「あ、っ？」

しかし、田中は意に介さない。無造作に近づいて一閃。それだけで自慢のカーボンの鎧ごと隊長を切り裂いた。

隊長は徴兵された一般人では無い。軍で訓練を受けた歴とした将校なのだが、それも全く田中の相手になり得なかったのは、武器の差、腕の差、それだけではない。

其れこそが、殺し合いの戦場すら田中が退屈に感じてしまう、最大にして最後の理由だ。

「あんな動きでどうするってんだ、無茶しやがって……」

思わず田中は愚痴る。

そう、隊長の動きは明らかに悪かった。他の帝国兵もだ。

パラセル村での戦闘から薄々感じていたが、田中の中で、それは確信に変わっていた。

この森の中、魔力が無い霧の中にあっても人間達の動きは悪い。

それは何故か？

原因は魔力だ。

魔力が奪われる霧はエルフに取って猛毒。

そして濃すぎる魔力もまた、人間には毒なのだ。

霧の中では魔力は薄まるが、濃い魔力に晒されていた体がいきなり全快する訳では無い。

霧が晴れてもエルフ達がいきなり元気になるわけでは無いのと同じ理屈だ。

それに、霧だって人間に全くの無害と言うわけでは無い。

霧の元は生命の健康値。それだけに霧に包まれると言う事は、満員電車の中に押し込められる様な不快感を体の内側からも味わうに等しい。いつも通りの動きが出来る方がどうかしている。

その点、田中は圧倒的な健康値で魔力を意に介さないばかりか、特有の無神経さで霧の影響を殆ど受けない特異な人間と言えた。

「う…………ぐあ…………」

考え事すら始めた田中だが、上半身だけになった隊長はまだ死ねずに居た。

楽にしてやろうと田中は刀を手に見下ろす。その時、血の泡を吹いていた隊長が一転、狂気の笑みさえ浮かべ思いがけずハッキリした声で唸った。

「道連れ、だ、動物園を、解放した……」

「…………？」

辞世の句にしては、意味が解らない。

どうぶつえん？ 田中は異世界の言語に自信が無く、他に意味が無いかと首を傾げた。

隊長を問い質そうとも思ったが、既に物言わぬ骸と化している。

頭を抱える田中に朗報だったのは、その言葉を聞いたのが一人では無かった事だ。

詰問の聲が飛ぶ。

「オイ！ 動物園とはなんだ？」

「セーラちゃんか、大丈夫なのか？」

現れたのはレジスタンスのリーダーである、セーラだった。田中とは対照的に白いプロテクターを身に纏っている。

黒い防具は雅みやびでないと、強度を犠牲にしても白い樹液で固めるプロテクターがエル

「フの、特に女性の間では人気であったのだ。」

「セーラちゃんとは何だ！ セーラ様と呼べ！」

「わーったよ、セーラ様。体は大丈夫なのか？」

「ああ、霧の毒にも、もう慣れた」

「慣れるもんかよ……フラフラじゃねえか」

レジスタンスのリーダーであるセーラには、思い詰めたかの様に肩肘張った部分がある。

女騎士みたいなもので、そう言う性格と割り切っていた田中であつたが、役に立たないのを承知の上で、それでも命を削る現場まで顔を出すのはいささか病的に映つた。

「外様に任せて私がのうのうとしている訳には……」

「そんなんじや却つて邪魔だつての、引き上げるぞ」

そう言つて、田中はふらつくセーラを抱き上げる。

「待てっ！ ふざけるな！ 調子に乗るなよ！ さっきの兵士が付けていた防具は

大牙猪の鎧ザルギルゴールじや無い、ずっと格下ギルゴールの牙猪の毛皮を固めた物だ！ あの程度斬つたぐら

いで……このっ！ 離せ！」

セーラは戦場へ頑張つて顔を出す物の、霧の中での戦闘に参加は出来ず、見守るのみ。全てが終わつた後になつてフラフラになつて現れるセーラを、田中はお姫様抱っこで

運んでいく。

これが最近、毎度の事と化していて、最早抱っこされたいだけじゃないかと田中もあきれていた。

「お？ 香水付けたのか？」

「あう、いや……汗臭いかと思って……」

こりや、完全に抱っこされに来てるな。とは思ったが、口にはしない。

田中としても金髪碧眼のエルフの美女とイチヤイチヤ出来るのは、悪いものでも無かったからだ。

だが、今回ばかりは美女を腕に抱いて凱旋、とは行かなかった。

「マズいな、囲まれてる」

「まだ居たのか？」

帝国兵の残党？ しかし既に霧ギユルドスの悪魔は確保し、霧は晴れている。

この魔力下では、人間達は霧を吸い込んでしまったセーラ以下の動きしか出来ないはずだ。

しかし、田中の気配感知に引つかかるのは人間のそれではない。樹上の其れを見上げ、小声で尋ねた。

「何だあれ？ 虫か？」

「馬鹿な!? 大土蜘蛛だどー!」
ザルアブギユリ

田中の腕の中、セーラは叫ぶ。大土蜘蛛は蜘蛛型の強力な魔獣。しかし思わず叫んだ理由はここが生息域とは異なる事。なにより奇襲と待ち伏せを得意とする蜘蛛型の魔獣が、あろう事か群れで姿を現した事だ。

魔獣と戦う事を仕事とするエルフの戦士。そのセーラにとつてあり得ぬ事態。

だが、現実には眼前には四匹の大土蜘蛛ザルアブギユリが姿を見せていた。

「お前は逃げ……いや、無理だな。取り敢えず降ろすぜ?」

「無理だ……大土蜘蛛ザルアブギユリが四体など、どんな戦士だつて勝てつこない」

「やってみなくちゃわかんねーだろ?」

軽い調子で答えるが、田中とて流星に余裕は無い。セーラをその場に降ろすと、脱いだ兜をゆつくりと付け直す。

今回は挑発でも何でも無い、相手が魔獣ならば防御はどれだけ厚くても、厚過ぎと言う事は無いからだ。そして一瞬だけ視線を切つても、それを隙と捉えて突つ込んで来る知能は無いだろうと言う賭けだった。

「ふうー」

賭けには勝った。ただ兜を被る、只それだけに異様な緊張を強いられ、息を吐く。

だが、ふらつくセーラを守りながら戦わねばならない問題は残った。

「私を置いて逃げろ！ それしかない」

「嫌だね」

言うだろうと思っていたが、田中としては譲る気は無い。そもそも退屈とばかり勝負を長引かせたのが原因の一端。そう言う意味では刺激的で丁度良いとすら思った。

「弱点は？」

「目だ！ 目を狙え！」

田中の問いにセーラが叫ぶ。

瞬間、殺到する蜘蛛。田中はセーラを片手で庇いながら下がるが、無数の足が降り注ぐ。

その全てを避けきるのは不可能。田中は急所だけは避け、刀で弾き、或いは防具で受ける。刀を持っていてもリーチは相手の脚が上、人外の怪力を受けてふらつきながらも、田中はその脚の下へと距離を詰めた。

「駄目だ！ 剣では届かない！」

セーラは悲痛な声を上げる。その通り。大土蜘蛛ザルアブギユリの甲殻は金属さながらの硬度を誇る。鋼では通常どうやっても歯が立たない。

だからこそ魔力で制御した矢で、その目を狙うのが絶対の攻略法。しかし、眼前に迫る魔獣はさながら小さな櫓やぐらのようだった。

剣ではリーチが足りず、後を考え無いイチかバチかの特攻で目の一つを潰せるかどうか。

それすらも王国最強の騎士と謳われるゼクトールが、腕の一本を犠牲にして何とかと言うれベル。

しかし、今の田中の剣の冴えは尋常では無かった。

——ギイイイイン

硬質な音。そして大土蜘蛛ザルアブギユリの胴体が綺麗に二つに別れる。

「嘘っ!？」

思わずセーラは叫んだ。示されたのは完全に助言を無視した解答。それでいて満点の答え。

田中のカタナは不可能を可能にした。

田中はすれ違い様に大土蜘蛛ザルアブギユリの前脚を切断。バランスを崩して前のめりになった胴体を一太刀で真横に両断して見せた。

頭上から青みがかかった体液と臓物が零れるこぼ。田中は転げる様に躲すと、すぐさま二体目に取りかかった。

剣を正眼に構えたまま、一気に距離を詰める。その歩法は変幻自在。

迎え打つ様に振り下ろされた蜘蛛の右前脚に対し、スツと剣を引き急制動でやり過ご

す。

空を切った脚は田中の眼前の大地をザクリと切り裂き、地に埋まる。

その突き刺さった右脚を盾に回り込めば、次に振るわれた蜘蛛の左脚は、右脚と交差する様に不格好に地面に突き刺さるしかなかった。

地面を切り裂く音を置き去りに、田中は一気に大土蜘蛛ザルアップギョリの懐にまで飛び込む。

脚が交差し、前のめりに迫った蜘蛛の土手つ腹を、先ほどと同じく切り裂く算段であつたのだ。

——ギャギャッ！

しかし其処に待ち構えていたのは蜘蛛の顎。ギチリと開かれ、田中を食い潰さんと自ら高度を下げて迎え撃つ構えをとっていた。

——顎ごと叩ききるか？ いや、それじゃ相打ちが精々だ。

田中は反転し、跳んだ。目指すは突き刺さった蜘蛛の両脚が交差する一点。脚を掛け、そこから背面跳びの要領で空を駆る。

蜘蛛が脚を引き抜く勢いも加わり、田中の大きな体が宙を舞う。

ムーンサルトプレスの要領で上空から降り注ぐ田中。その姿は蜘蛛の四つの瞳すべてに反射し、映り込んでいた。

——ザシユッ！

——ギユオオオン!

ザルアフギユリ 大土蜘蛛の背中に落ちるのと同時、田中はその四つの目を一太刀で同時に切り裂いた。

「コレで二匹! 次は? クソツ」

自分こそが唯一の敵と言わんばかり、派手に立ち回ったつもりだったが一匹の蜘蛛がセーラを狙う。

しかし、セーラも伊達にエルフの戦士として生きてはいない。腰から二本のナイフを抜き放ち、無数の脚を捌いていく。

だが、悲しいかな。霧による体調不良に加え、女の膂力ではザルアフギユリ大土蜘蛛の怪力には抗しきれない。

なのでセーラは相手の力に逆らわず自分から弾かれ、あえて大地を転がる。それは咄嗟の機転であったが、思いがけず妙手となった。

長すぎるザルアフギユリ大土蜘蛛の脚は、泥にまみれ地面を転がるセーラを捉えられずにいた。

だが、セーラにも余裕など無い。転がり避けるすぐ横で、猛烈に地面を削る音が連続する。

——ザク、ザクザクザク

無数の脚が今居た大地を貫いていく。そのひとつひとつが容易く自分の命を奪う事

をセーラは知っていた。

それでも、叫び出したい気持ちを抑え、蒼い顔でゴロゴロと転がり続ける。それこそが生き延びる唯一の方法。

だが、必死の逃亡は程なく終わりを迎えた。

ガンツ！

回転する先で、ぶつかっただのは蜘蛛の脚。

魔獣とは言え底なしの間抜けでは無い。転がる先に一本の脚を置いていた。

サアツ——つと血の気が引くのをセーラは感じていた。転がった先、思いがけずぶつかれば、人間は咄嗟に動ける物では無い。

そこにゆつくりと、一本の鋭い脚が狙いを定め、自分へと向き直るのをハッキリ目視した。

「キヤアアアア！」

目は瞑らなかつたが、悲鳴までは耐えきれず漏れてしまった。

戦士らしい死に様では無いなど、脳の片隅では妙に冷静な思考が滑る。

だが、飛び込んで来たのは蜘蛛の脚では無かつた。

「あんまり可愛い悲鳴上げんなよ」

田中だった。彼はもう一匹の蜘蛛を振り切り、地面に転がるセーラに覆い被さる様に

滑り込んだ。

だが、その代償は安くは無い。

「おまつ！ 腹が」

「……流石にコレは防げないか」

脚は背中から腹へと貫通。田中の腹から蜘蛛の足先が生えていた。

プロテクターの固い部分で受けたが、鋭い脚先は滑り、硬化していいジャケットを切り裂いて、柔らかな胴を貫いた。

編み込まれたジャケットも炭素繊維だが、硬化したプロテクター部分とは異なり『刺せば刺さる』

そして、一度貫いた獲物をザルアブギユリ大土蜘蛛は逃がさない。

「ヤベエー！」

田中の体は軽々と持ち上げられる。

迫るのは何でも噛み潰す蜘蛛の顎。

「チツ！ マズ過ぎるぜ！」

しかも、背後から貫かれ持ち上げられた状態では十分に刀を振るえない。

刀を振り回し抵抗するも、食われるのは時間の問題であった。

「舐めるな化け物！」

その時、セーラが叫んだ。

その手には弓。セーラは王族ゆかりの貴婦人でありながら、ユマ姫を始め多くのエルフに弓を教える程の名手。

——ギイイ！

苦しげな魔獣の鳴き声。セーラの放った魔法の載った矢は^{ザルアブギユリ}大土蜘蛛の目を一つ、潰した。

「助かったー！」

田中にとっては其れで十分。顎との戦いから瞬間、解放された田中は、胴から脚を引き抜き、逆に顎を足場に頭へと駆け上がる。

——ギイイ！ ギョオオオオ

そして残った目へと素早く三連撃。目にも留まらぬ速度で突きを繰り出すと、それだけで^{ザルアブギユリ}大土蜘蛛は活動を停止した。

しかし田中も既に満身創痍。体中に裂傷、そして腹からは血だけでなく、内臓すら零れる程。

——ギイイイイイ

「危ないっ！」

セーラの叫びを聞くまでも無く、田中はその存在に気が付いていた。

残った最後の^{ザルアフギユリ}大土蜘蛛が迫る。

セーラのピンチを見て取った田中に置き去りにされた個体が、怒りを露わに突撃してきたのだ。

「つたく、しつげえな！ モテる男は辛いぜ」

この男は本当のピンチであろうと軽口を忘れない。

そこに最後の・^{ザルアフギユリ}大土蜘蛛が飛びかかる。

目を潰され、活動を停止した蜘蛛の上。田中は腹から流れ出す血にも構わずに跳んだ。

飛び掛かる蜘蛛の、その更に上で田中が舞う。

空中での目にも留まらぬ一閃。そして着地。

——ギョオオオオ！

両断された蜘蛛の死骸が地面に落ち、ぐしゃりと潰れた。

「ふいー流石にしんどいぜ」

とうとう田中は四匹の^{ザルアフギユリ}大土蜘蛛屠ってしまった。

その様子をへたり込み、信じられない思いでポカンと見ていたのがセーラだ。

「^{ザルアフギユリ}大土蜘蛛を真つ二つとは、夢か？ これは」

セーラにしてみれば人間技では無い。甲殻はあまりに固く、目を狙う以外に倒せる筈

の無い相手。其れを細枝の様に気持ちよく切断するのを見せられては無理も無かった。レジスタンスには「人間を幾らか斬った程度でデカイ口を！」と田中を罵るエルフの戦士も存在していた。

だが、そんな奴らもこの蜘蛛の死骸を見れば黙るに違いない。エルフの戦士は魔獣との戦いが日常。それだけに大土蜘蛛サルアブギョリ四体を相手に立ち回る無謀を知らない者は居ないのだ。

そんなセーラに田中はあっけらかんと話し掛ける。

「おう、あんがとよ。助かったぜ」

そう言われてもセーラにとっては喜べる物では無い。

「馬鹿な！ 助けられたのは私だ」

「ま、そうだけだよ。助けて貰うのはココからよ」

「なっ？」

田中はへたり込んでいたセーラ目がけ、のし掛かる様に覆い被さった。

「馬鹿ッ！ 止めろ！ こんな所で……どうした？」

突然に襲われ、真っ赤になってセーラは叫んだ。初対面の印象から彼女の中で、田中は野獣の様な男と誤解していたからだ。

だが、覆い被さる田中の表情は青白く、珠のような汗が浮かんでいた。

「思ったよりヤベエトコをやられたらしい、血が止まらねえ、治してくれ」

「あ、ああ……すぐに血を止める！」

セーラは拙い回復魔法で田中の出血を止める事に成功。

かくして二人は脚を引きずる様にして、二人で支え合いながらレジスタンスの本拠地まで帰る事になった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あ、余りくつつくな！」

「そうは言ってもよ、俺だつてツレーのよ」

「そうは言ってもだな……」

今回はいつもと真逆。倒れそうな田中を支えるセーラがゆつくりと歩を進める。

と言つても、長身かつ大柄な田中がセーラにしがみつくと、どうしても後ろから抱きしめる様な格好になってしまい、セーラとしては落ち着かなかつた。

遅々として進まない歩みも手伝つて、二人は何時になく言葉を交わしていった。

日も暮れ始めた森の小道で二人の会話だけが響く。

「でもよお、アイツの魔法だつたらあつという間に怪我なんざ治つたぜ？」

「アイツと言うのは……ユマ様か。不敬とは言うまい。お前に取つては普通の女の子と言つていたしな」

「いや、普通では無かったがな」

「違いない、ユマ様はあらゆる魔法を使いこなす天才だった。魔力値こそ王族としては物足りない数字だったが、ハーフェルフと言う事を考えれば、森の外では無敵であっただろう」

「やっぱ、アイツの魔法はまともじゃ無かったか……。強すぎるとは思ったぜ」

「無論だ、ユマ様は専門医でしか扱えぬ様な超級の魔法すら当然の様に使って見せた。例えば……我々の中では医者是非常に高い社会的地位を与えられているのだが……」

「コツチもだ、専門知識と技術が必要なんだから当然だろう？」

「フン、どうせ傷口を焼いたり、骨を接いだりが精々だろう？」

「まあ……な」

「こちらの医者は高度な専門教育を受けた魔法使いだ。時として死体を分解して体の構造を学ぶ事も有る」

「へえ……だが、その程度はコツチでもするぜ？」

「結果が違うさ、そこから分析した知識でもって彼らは内臓すらも再生してみせる」

「そりゃあ凄いが、俺の土手っ腹に穴が開いたのは初めてじゃ無い。アイツの魔法で一度綺麗に治った事もあるんだぜ？」

「だろうな、姫様の魔法はそんな専門家すら上回っていた。勿論彼女はそんな経験は一

切無い。にも関わらず、姫様は人体の神秘を知り尽くしていた」

「ああ……だろうな」

「何か知っているのか？」

「俺が言うわけには行かねえよ、本人に聞いてくれ」

「聞ければ良いのだがな」

「聞けるさ」

「解った……とにかく、姫様の回復魔法は異常だった、シミだらけで悩んでいた侍女の一人を見た時など、王宮がパニックになりかけた」

「まさか？」

「ああ、治した。それもナイフで削って再生させると言う猟奇的なやり方だ」

「そりゃあ、他の医者には出来ないのか？」

「……言い忘れたが、回復魔法でも全てが元通りとはいかない、傷跡は残るんだ」

「……言われてみりゃ、確かにアイツに治された場所は緑に跡も残ってねえ」

「それが異常なのだ。シミと傷跡ならシミの方がマシに決まっている。だがその侍女はシミだらけで生きるぐらいなら、姫様に傷物にされた方がマシと、半ば投げやりに、半ば好奇心旺盛な姫様を騙すように顔を削らせた」

「で、綺麗になっちまったって訳か」

「そうだ。言っておくがエルフの女性は私みたいな男勝りばかりじゃ無いぞ？ もっとお淑やかで美しい。一方で美に対する探求は私から見ても尋常では無いものだ」

「つまり、殺到した訳だな？」

「顔を削る様な手術にだ、正気では無いが、美を求める婦人にとっては障害にはならなかつたらしい」

「さもありなん、おつかないぜ」

「お偉い元老院の婦人までが殺到し、結果ハーフのユマ姫を排斥する運動が収まったのは良かったが、健康に不安があるユマ姫が高度な魔法を何度も使うのは問題だった」

「でも、収まらないって訳か」

「ああ、普通は諫める立場の侍女達が、こぞつて列を成すのでは止めようが無い。問題の意外な深刻さに誰もが音を上げそうになったが、その解決策も姫様が考えた。顔を酸で溶かし回復魔法で回復させる狂気的な方法を提案した。そしてこの方法なら他の医者でも同様の効果があつたのだ」

「ピーリング……か？」

「？ なんだ？ いや、いい。とにかく姫様は天才だ。対して私は弓が少々得意なだけで、他者回復魔法は止血が良いところだ。しかし、それでも普通はエリートなのだぞ？

重傷患者を治せる使い手は、王都にだってそれ程は居なかつた」

「オイオイ、レジスタンスには居るんだろうな？ 内臓が飛び出しっぱなしはゴメンだ」

「無論だ。傷跡は残るが、違和感が無い程には治る」

「頼むぜ？ それに欲を言えばセレナって妹の秘宝、其れに近い魔道具が欲しい所だがな」

「それはどう言う意味だ？ セレナ様のは魔法を登録出来る魔道具だが、言うほど実用的な物では無いぞ？」

「……………マジかよ」

「どうした？」

「さっき言った、土手っ腹に穴って奴、そのセレナ様の秘宝で治したんだぜ？」

「馬鹿なツ！ あり得ない！ アレはそもそも、ちよつとずつ魔力を注ぐ事で、セレナ様の魔力制御を向上させる為だけの秘宝だぞ？ 巨大な秘石を使用しているから溜められる魔力は多いが、其れで実用的な魔法が組める訳では無い」

「そりゃ、アイツも近い事は言っていたが現に俺の穴は塞がったぜ？」

「解っていないな、魔力の注ぎ口が小さいと言う事は、その中とか細かい糸を編むように魔法を組み立てるしかないのだ。例えるなら瓶の口から材料を入れて、中で小さな城を作るような物、出来るはずが……………」

「……………出来たんだろうな」

「う……あり得ないのだが。だが、ユマ様なら……不可能では無いのかも知れないな……」

「こりや、今度アイツの魔法について摺り合わせが必要だな」

「確かに、この話が広まれば士気も上がる。未だにあの方を出来損ないのあいのこと罵り、私に玉座をそそのかす者が後を絶たないのだ」

「アイツはそんな事に興味はないさ、あーそれでも完全に縁を切るのもマズいぜ？　アイツは人質として王都に居るんだろうからな」

「人質など！　其れこそ、許される事では、無い！」

「ま、そりやあ良いや、とにかくもつとアイツの話をしよう」

「あ、ああ。それにお前の事もな」

「んだよ？」

「あの大土蜘蛛ザルアフギユリの死体を見れば、馬鹿な奴らの態度も変わる」

「別にどうでも良いがな」

「そうは行くか！　回復も、装備も、それに食べ物だって待遇が変わってくるぞ？」

「あーそうか？　じゃあ、頼めるか？」

「任せておけ、ただし姫様の話はキツチリ聞かせて貰うぞ」

「わーってるって」

「それに、動物園と言う言葉も気になる、その後の大土蜘蛛ザルアブギユリの群れと無関係ではあるまい」

「だろうな」

「だからこそ作戦会議が重要なのだ、これからは私の話も聞いて貰うからな。田中には常識がなさ過ぎる」

「うへえ……」

彼らは休み休み歩き続け、やっと本拠地に帰った時には既に夜は明けていたという。

動物園

「二人の兵士の会話：大森林中央部 王都エンディアン 王宮前広場」

「なあ知ってるか？ 黒衣の剣士タナカの噂」

「ん？ ああ、聞いた事有るぜ。強い魔獣を倒して叙勲されたんだったか？」

「その様子じゃなんも知らねえのか、そのタナカが森に棲む者についたつてもちきりだぜ？ たった一人に百人以上がやられたつてのは、流石に尾ひれが付きすぎだろうがな」

「はあ？ そもそもタナカつて実在するのかよ？」

「そつからかよ、居るに決まつてるだろうが」

「でもよお、そんな英雄。国が大々的に宣伝しない訳が……」

「馬鹿か！ その英雄に爵位を袖にされたとあつちや、英雄が一転。鼻つまみ者よ」

「ははあ、お貴族様の面子つて奴か、おつかないね」

「それどころじゃないぜ？ 貴族にしてみりや自慢の爵位を馬鹿にされた様なモンだ。色々悪い噂も流れたが、今となつちやホントに化け物だったのかもな」

「でもよお、タナカが森に棲む者につくのも解るぜ。……見たかよ？ この広場に積み

上げられた死体の山。霧で動けない市民まで生きたまま燃やしちまった。俺はいまだにあの光景、夢に見るぜ」

「オ、オイ！ 滅多な事は言うなよ。お前も動物園の餌にされちまうぞ」

「どうぶつえん？」

「それも知らねえのか？ 森に棲む者に対抗して俺らも魔獣を操ろうって研究をしているらしいぜ、何十匹もの魔獣が檻に収まつてるのを見た奴も居るとか」

「マジかよ？」

「大マジよ。で、な。タナカにやられて逃げ帰った連中は、見せしめに餌にされているつてもつぱらの噂だ」

「嘘くせー、何もかも嘘くせー。オカルト好きも大概にしろよ」

「たった一人に何十人もの帝国兵がやられたつてのは面白く無いだろうぜ？ 口止めしたいと思つても不思議じゃ無い」

「んな訳あるかよ、大体、餌にするなら俺達じゃなくて森に棲む者を餌にするだろうが、あんなに『余つて』いるんだからよ」

「……………」

「どうした？ なんで黙んだよ？」

「いや、最近、森に棲む者の数が減つたと思わないか？ 身の回りにも、もつと下働きの

女が居たと思うんだが……」

「……おい」

「冗談だ、本気にするなよ」

「洒落にならないんだよ」

「悪い悪い。ま、タチの悪いジョークだよな」

「決まってるだろ」

「この森の所為だ。どうにも頭がボーツとしてオカシクなってくる、檻に入った魔獣を見たって奴も、数日後には消えちまったって言うんだから、幻覚でも見たんだろう」

「脱走かよ、国に帰ってもお尋ねモンだろうにな」

「ああ……それに、地下にそんな場所があるならちよつと見てくれば良いんだよ。どうせ噂だ」

「オイ止めとけって」

「大丈夫だつての、このままじゃ寝付きが悪くて仕方が無え、お前と話してたら、やっぱ確かめないと駄目だつて思つてな」

「俺は知らねえぞお？」

「いいさ、明日もどうせ二人でココの警備だろ？　結果を教えるぜ？」

「言つたな？　頼むぜ？」

「任せとけ」

そう言って二人はその日の警備を終えた。

だが次の日、地下を調べに行った兵士は姿を見せず。上官に問い合わせても梨の礫。脱走したと聞かされたのは、それから数日後の出来事だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

大森林のただ中に忌み地として恐れられる場所があった。

苔むした丘。朽ちた倒木が幾重にも折り重なり、昼間でも淡い光しか差し込まない。大気の湿度が高く、じつとりと肌に纏わり付く。訪れた者はただ呼吸をするだけで、張り詰めた圧迫感に押しつぶされそうになるだろう。

そんな場所に好き好んで近づく者は居ない。巨人の墓所とエルフ達に恐れられる土地だが、レジスタンスはそこを本拠地としていた。

歴代の王達が人が寄りつかない事を利用して、地下に秘密基地を築いていたのだ。

そんな基地の最奥。魔道具の光が煌々と輝く会議室で、一際態度が大きい男が一人。頭の後ろで手を組み、脚は机の上に投げ出してている。

態度だけでなく、その体もデカイ。人間より長身で知られるエルフの男達がまるで子供のように。

もちろん、田中であつた。

「貴様！ 神聖なる戦いに挑む、我らを愚弄する気か！」

吠えたのはセーラだ。彼女がご機嫌ナメな理由は田中の態度だけが原因ではない。

「そうは言っても、もう街に霧の悪魔は無いんだろ？ 俺はお役御免でいいじゃねえか」
めんどくさそうに田中が耳をほじる。

田中が言うとおおり、主要な街での霧の悪魔の回収任務は終わりを迎えつつあった。

ここまでグリフォンの情報はゼロ。ここらが潮時と感じていた田中は一縷の望みを託して遙か北。果ての山脈にまで脚を伸ばす計画を立てていた。

だが、セーラにしてみれば霧の悪魔の回収は敵の力を削ぐ策でしかない。

王都奪還には道半ば、動物園と言う不気味な事象までちらついているのに、ココで田中に離脱されては堪らないと言う思いであったのだ。

……多少は私情があるかも知れないが、其れを指摘する程野暮な人間はこの場に居なかった。

「其れを言うなら、霧の悪魔は王都にもあるだろうが！」

「そりやあな、でも占領部隊の本拠地だろう？ 流石に俺一人で戦争するつてのは無理だぜ？ 放っておいても霧の悪魔が無けりやアチラさんはジリ貧だ。わざわざコツチから突つかかってやる必要は無いさ」

「いや、しかしだな……………」

セーラは口ごもる。

実際、霧ギョルドスの悪魔を起動されたら戦力としてアテになるのは田中だけ。まさか敵の本拠地に一人で乗り込めとは言えない。

まして霧ギョルドスの悪魔のエネルギー源は健康値、ならばその在庫は早晩尽きる筈。待てば被害を抑えられると言うのに突っ込んでやる馬鹿はいない。

「それに、俺の目的はグリフォンなんだよ、霧ギョルドスの悪魔はついで、王都つてのは強力な魔獣避けがあるんだろ？俺が行く意味は無いね」

「……………」

セーラには言い返す材料が無い。彼女は田中の強さに憧れと尊敬、或いはそれ以上の感情を抱いて居た。

しかし、だからと言ってそんな自分の感情で田中を引き留める事が出来る程、彼女は素直でもわがままでも無かった。

……まだココが田中にとって過ホしややすい場所ならば引き留めやすかったのだが。

「セーラ様、出て行くと言うなら良いでは無いですか。這ホいつくばる者スを討つのに這ホいつくばる者スの手を借りては示しが付きません」

「王都の奪還は我らの手で行わなくては」

「霧ギョルドスの悪魔の力が尽きた時こそ奴らの終わりです。この世の地獄を見せてやりましょ

う

エルフの男達は鼻息も荒く、セーラに進言する。

中には優しく諭す様な口調も混じるが、年若いセーラを子供扱いしているだけだ。實際のところ、論じているのだから、言いくるめようとしているのか、怪しいモノだとセーラは感じていた。

セーラは漏れそうになるため息を抑え、まなじり 眦を決して睨みつける。

「お前ら！ その物言いはユマ様を愚弄する物だぞ！ 理解しているのか！」

「そ、そんなつもりは……」

狼狽え言い淀む彼ら。どうもその自覚が無かった様で、セーラとしては頭の作りを疑うしかない。

帝国を討つために敵対する王国へと助けを求めたのはユマ姫だし、這ホいつくばズる者を人間とし、我らをエルフと名付け、差別的な言葉を禁じたのもユマ姫だ。

彼らを見てみると、セーラはエルフの誇りが揺らぐ。

這ホいつくばズる者と馬鹿にして知能に劣ると思っていた人間の方が、よほど知的に感じてしまう。

実際に小柄で虚弱と思っていた人間の中に、例を見ないほどに強く大きい田中が居る。彼女の中の常識は揺れていた。

なにより、これほど人間にしてやられていると云うのに、いまだに人間を下に見る者が後を絶たない。

「ふふふ、どうやら我らのお嬢様は随分とあの黒いのに入れ込んでいる様ですな」

「セーラ様も女だったと言う事でしょう」

「しかし、これ以上奴に手柄を挙げさせる訳には……」

「左様、それに這いつくばる者を追い出しても、次期王が這いつくばる者の子供では士気も上がりますまい」

「ククツ、同感です」

聞こえぬように、小声でクスクスと笑い合う。

彼らはセーラが集音の魔法を使える事を知らない。セーラは弓を持って戦う事しか興味が無い脳筋女と思われるからだ。

だが、威力ばかりが話題に上がるセーラの弓魔法だが、その精度こそが本当の自慢。

そして、風魔法の制御に長ける彼女が、音を拾う魔法を得意中の得意とするのは当然であつた。

その程度の事が解らずに、ニヤニヤと笑う彼らの顔。そこには知性を感じとれない。

「しかし、我らに残つた王族の血を引く者が、野蛮で間抜けなお嬢様とはな」

その一言にセーラはギリリと音が出るほど奥歯を噛みしめる。

嘲るような目でチラリとこちらを見るのは、元老院唯一の生き残りのベルデグ卿だ。無能であるが故に、式典の日付も忘れて釣りに出かけていたが故に助かった老人である。

どちらが間抜けなのかとセーラは怒鳴り散らしたくなる。

だが、一方で自分も間抜けなのは疑いようが無い。セーラが助かった理由は有る意味でもっと間抜け。

成人の儀。ユマとセレナの二人は試練の洞窟に入り、伝説の魔獣である王蜘蛛蛇バウギユリウアルを討伐する。

洞窟の中には他にも超危険な魔獣のオンパレードで、後から洞窟に入ったセーラ達は顔を蒼くして死体の山の中から王女二人を探そうとしたほど。

普通に考えて子供二人で倒せる様な魔獣じゃ無い。

旧王都付近は魔力が濃く。魔獣がはびこる危険地帯と化しているが、それでも子供にお使いに行かせる程度には安全でなければならぬ。

そう、セーラ率いる部隊は二人が訪れる前に魔獣を間引きする任務を帯びていた。

だから二人が旅立つずっと前に王都を出て、旧都に向かっていたのだが、誤算だったのはセレナが空を飛んだ事だ。

下手をすれば一日掛かりの道程を、二人は一瞬で飛び越えた。

セーラは頭上を飛び越した二人に気が付かず、洞窟で魔獣の死体の山と遭遇した。

(もし、セレナ様が居なかったら最初に洞窟に入ったのは私だった)

セーラは思い出す度に情けなさに涙が滲む。自分達ではアレだけの魔獣に立ち向かえたとは思えない。

そして、セーラが救われたのはセレナの存在にだけではない。彼女はその前にも大きな失敗をしている。

(もし、ユマ様が居なかったら、私は大牙猪ザルギルゴルに訳も解らず殺されていた)

弓の訓練での失態は、今も強烈にセーラの心に爪跡を残す。

当時の何の力も無かったユマ姫にすら、自分は劣っているのだと思わざるを得なかった。

成人の儀はその挽回の機会だった。そこに恥の上塗りをしてしまう格好となったのだ。

王家の傍系ながら魔法の実力は直系の方々に勝ると思ってきた。だからこそ、いざと言う時には自分こそが王女や王子を守るのだと。

ところが現実、自分が守られる側。

セーラは堪らず修行の旅へ出る許可を貰い、危険極まる果ての山脈に一人旅立った。

——それが三度目の後悔となる。

一番居なくてはならぬ時に呑気に修行の旅に出て。異変を感じて慌てて戻ってくれば既に王都は占領されていた。

その理由が彼らを守る為の旅に出ているからと言うのだから、笑い話にしかならない。

思い出すだけで、羞恥と後悔で顔が歪む。そんな彼女を気の毒そうに眺めるのは田中だった。

「言わせときゃ良いのに、全く、思い詰めちゃってまあ」

驚くべき事に、この男は魔法の補助も無しに男達の小声を耳で拾っていた。恐るべき聴力と言えるだろう。

「ほんとにのう、もうちよつと力を抜いた方がいいと思うんじやが」

しみじみと呟くのは魔法使いらしい、とんがり帽子の老人だ。

見た目通りこの老人は魔法使い。それもエルフの中でも指折りの実力者で、王族に魔法を教える役割を担ってきた。

当然、ユマ姫にも魔法を教えた事が有る。それに関して本人は教える事より教えられる事の方が遙かに多かったと言っているが……

因みに、田中の腹の穴を治したのもこの老人で、田中は恩を感じていた。

だが、田中が恩を感じるはこの老人だけでは無い。

「旨いモノでも食べてゆっくりするべきじゃない」

「いや、熱い風呂にでも入って、一杯やるのが一番じゃろう」

領き合うのはファーモス爺とモルガン爺の二人だ。

田中は三人並んだ爺達を見て「こっち側は老人ホームみたいだな」と思うが、それだけに恩があるので口にはしない。

「ご隠居さん方が集まってなんの相談だ？　これ以上、介護士のセーラに迷惑掛けるんじゃないぞ？」

いや、全く気にせず言ってしまうのが、田中と言う男であった。

「迷惑なんぞ掛けとりやせんわ」

「左様、こちらが面倒をみてやってるぐらいだ」

「お主のカタナもだぞ！」

老人達は老人達で、気にした風も無く言い返してくる。

其れを見て、田中は元気な老人達だと苦笑するしかない。

そればかりか、当のセーラも半笑いで乗っかってくる。

「田中よ、流石の私も果ての山脈までは介護について行けないからな」

「あのなあ……」

今までおんぶに抱っこで介護してたのはコッチだろうかと田中は笑う。だがセーラ

が笑ったのは田中にとつても救いだっただ。

思い浮かぶのがあんな顔では寝覚めが悪い。これでスッキリと旅に出られると思っただ、その時だった。

一人の年若い少年が会議室に転がり込んだ。

「失礼します！・ビルダールの王都に偵察に向かっていたガイラス様が、今、戻られました！」

「なんだと？　すぐ通せ！」

弛緩した空気が流れていた会議室に緊張が走る。

いまだにエルフ達は人間界で何が起こっているか、多くを知らなかった。

そして、ガイラスによつてもたらされた情報は一方で予想通り、もう一方で予想外のものだった。

姫の願い

「つまり、ユマ様は健在。それどころか大衆から凄まじい人気を誇っていると?」

「左様で御座います。美しい姫君の話題が貴賤を問わず席卷しておりました」

「おおっ! 流石ユマ様だ!」

セーラは予想を超えたユマ姫の頑張りに感動し、打ち震えた。

一方で、予想外の驚きに震えていたのは他のエルフ達もだった。

「まさか、本当に生きていたとは」

「あの男が言っていた事が本当であろうとは……」

「いやはや、予想外でありますな」

彼らはユマ姫の生存をまるで信じていなかった。大牙猪ザルギルゴールの襲撃の痕跡や、翼獣の群

れの痕跡を見て生存を諦めていたのだ。

ハーフェルフの村での証言を始め、諜報部はユマ姫生存の痕跡を報告していたが、そ

れすらも何かの欺瞞工作で、田中が仕掛けた詐欺だと疑ってすらいた。

「だあーから言っただろ? アイツは王都に行ったつてよ」

調子良い事を言いながらも、田中は田中で『高橋敬一』の運の悪さを知っているだけ

に、生存報告にホツと息をついていた。

しかしそんな田中を不審がるのは当のガイラスだ。

偵察任務から帰って来たら、どう見ても妖しい男が幅を利かせているのだから当然だろう。

「失礼ながらあの方は？」

「あ、ああ、彼はタナカ。ユマ姫の脱出を助け、今はセレナ様の秘宝を奪った妖獣を追っている所だ」

「なんと！ 彼がタナカですか？ いや……しかし」

「知っているのか？」

ビルダールの王都へ偵察に出ているガイラスが、田中の事を知っていた。

当然、ユマ姫自身から田中の事を聞いたのかと思いきや、話によればどうにも奇妙な事になっているようだった。

「へえ？ 俺が命がけで姫を守った英雄ってか？」

「ああ、貴殿の活躍は劇として語られ、ユマ様の人気に一役買っていた」

「ふうん？」

考えてみれば当然ではある。命からがら城を脱出した姫を守って魔獣や帝国相手に大立ち回り。

英雄譚の一節の様だと、庶民が沸き立つのも無理は無い。だが、問題なのはそこでは無かった。

「劇の中で貴殿は敵を道連れに崖を落下。英雄らしい最期と感動を呼んでいたのだが……」

「いや、崖には落ちたが、セレナ様の秘宝って奴でスツカリ治ったがよ？」

「うーむ、どうしたことか？」

田中に見れば、当然自分の無事は伝わっていると思っていた。自分を助けたのはネルダリアの間者なのだから。

確かにその後はグリフォンを追っかけ、そのまま大森林に向かってしまったが、途中の村では王都へ向けてユマ姫やキームラ商会（木村で間違いないだろう）へ、複数のルートで手紙を出している。

幾ら郵便制度が未発達でも、全てが届かなかったとは思いたくない。

「本当に、アイツは俺が死んだと思ってるのか？」

「いや、正直、私はその事に余り興味が無かったので詳しく話をしていない。知つての通り我々は魔力がない場所では長く活動できない、この貫頭衣の魔力にも限りがあるからな」

「……ふうむ」

人間がエルフの姫を助けた英雄的なエピソードが必要で、劇を解りやすくする都合上、田中を死んだ事にした方が話が早かった可能性はあるだろう。

だが、それでは田中が後から合流する可能性をまるで考えていない、流石にあんまりと言えるだろう。

(やはり、アイツは俺が死んだと勘違いしていると考えた方が良さだろうな……)

そう考えた田中は、ガイラスに自分が生きている事をユマ姫に伝えてくれと頼んだ。だが意外にもガイラスの反応は芳しくない。

「それ以前に、このままでは姫様の命が危ない」

「なんだと!？」

真つ先に反応したのは田中では無く、セーラ。だがショックだったのは全員同じだ。

「ピルタ山脈に遮られ、彼の地は想像以上に魔力が薄い。加えて第一王子を相手取っての政争の真つ只中だった」

ガイラスが語る所、魔法を使って無茶をするのは危険で、かといって魔法を使わずに過ごすのも難しい状況と言う。

「その様な……その様な事が……」

呆然とするセーラ。

セーラにはユマ姫の窮状が容易に想像が付いてしまう。

エルフの国にあつても美容の為の回復魔法で似たような状況は発生していた。

魔法が使える者が他に居ない人間の世界では、どの様な扱いを受けるか、考えるまでも無い事であつた。

「今すぐ姫様をお助けするために兵を送らねば！」

「お待ちを！ 魔導衣無く、大勢の兵士が向かつたところで何の力にもなりませんまい」「くう、しかし！」

セーラはほぞを噛むが、そもそも魔導衣と呼ばれる青い貫頭衣は、人間界を偵察するために、諜報員に向けてオーダーメイドで作られた物。

現在、その諜報員の大半は帝国の動向を探るため出払っている。

因みにその開発には、王族のために組まれた予算の多くをつぎ込んでいた。その為にユマ達は王族の割に質素な生活を強いられていた訳だが、ユマ姫は其れを知らない。

全ては過剰な魔力に苦しむユマ、逆に潤沢な魔力の中でしか生きられないセレナ。そして人間であるゼナを捜し出し、何時か全員が一緒に暮らすため。

他にも魔力と健康に関する研究に、エリプス王は多くの国家予算をつぎ込んでいた。

当然、それを面白く思わない勢力も存在し、元老院の面々は王と対立する事も多かつた。

そんな研究が、結果的に今のエルフをギリギリの所で支えているのだから、セーラは

この世の因果を感じてしまう。

目的がどうあれ、王の判断は正しかったのだ。しかし、そんな王の血を引く最後の王族が今、命を落とそうとしている。なのにこちらから何も出来る事は無いのか……

そう気落ちするセーラの視界に、困ったように頭を掻く男が映る。

「そ、そうだ！ タナカ！ お前なら姫を守れる！」

「ま、そうするしかねえかな……」

田中は物事をひとつひとつ解決出来ないで、どうにも気持ち悪くなってしまふタイプの人間。

ユマ姫を王都に送るのを投げ出したばかりか、心に決めた秘宝の奪還もまた半ばにて投げ出すのは気持ち悪くて仕方が無かった。

とは言え、それもユマ姫が死んでしまつては全てが台無し。自分が行くしか無いかと覚悟を決めた時だった。

「大変です！ 王都に妖獣が現れました！」

再びの大声で、連絡員の少年がまたしても走り込んでくる。

「本当か？ それは田中が追っていた奴なのか？」

セーラの問いに、少年はチラリとタナカを見やる。少年の目には田中の強さへの憧れが見て取れた。

「あの……、鳥の頭に獅子の体。たぶん兄貴が探していたグリフォンって奴だと……」
「マジかよ？ このタイミングとか」

田中は頭を抱える。

グリフォンを倒してセレナの秘宝を奪還したいが、そうするとユマ姫の元には行けなくなってしまう。

「？ あの、グリフォンとは？」

一方で、使者であるガイラスには事情が知れない。仕方無く爺さん達がガイラスに事情を説明していく。

所々、話が脱線してしまうのは老人の癖みたいな物で仕方無い。

「なるほど、姫様の魔導衣を作るにはグリフォンの魔石が適格では無いかと？」

「そうじゃ、だが倒しても、肝心のベースとなる魔導衣は宝物庫だろうて」

「そう言えば、姫様が欲している物がありました」

ガイラスは今更にユマ姫からのリクエストを思い出す。

ガイラスも多くは知らず、安易に請け負ってしまったが、其れは想像以上に危険な代物であったのだ。

「なんじゃと？ 禁術!？」

魔法使いの爺が大声で叫ぶと、その声に皆が一斉にザワついた。

禁術は人の精神に作用したり、危険な物質を精製したり、時としてエルフの文明を左右する危険で重要な代物であったりして、軽々に外に出して良い物では無い。

「じゃが、そうじゃの。姫が人間の中で一人。生きていく為には必要な力かも知れぬ」

だが、ココでも問題となるのは禁術を収める禁書庫が王都のほど近い、帝国の勢力圏の中と言う事。

一方で、その魔法の存在を聞いて穏やかで居られなかったのが田中だ。

「ちよつと待てよ？ そんな魔法があるのか？ 人間の精神に干渉するだつて？」

「左様、だが非常に繊細な制御と、人の心に入り込む巧みな話術も要求される」

「催眠術みたいなもんか？ それって魔獣にも使えるのか？」

「どう言う事じゃ？」

「いや、前も言ったが、俺らは蜘蛛のでっかい魔獣に襲われた。明らかに帝国の手先みたいなタイミングでだ」

「無理じゃよ、人間ならともかく、話の通じぬ獣に禁術を掛けようなぞ。人間技では無い」

「それは、アイツの様な途轍もない魔法制御が出来る人間でもか？」

「……うーむ」

そう言われ老人は少し考えるが、結局は無理だろうと言う結論。

話の通じぬ獣に催眠術紛いの魔法を掛けるのは、どうやっても無理だと思うのは当然であろう。

だが……

「帝国の情報を集めているんだろ？ 黒き魔女クロミーネって知らないか？」

「それは聞いた事はあるが、ただの詐欺師だろう？ 人間に魔法が使える訳がない」

セーラの疑問は無理も無い。実際ハーフエルフで魔力に優れた者でも大半は魔法を使えないのだから、そう考えるのが彼らの常識であつた

だが、他ならぬ田中自身が、転移者という常識を否定する存在なのだ。だとすれば黒峰さんがどんな能力を持っていても不思議じゃない。

「俺はクロミーネに会つた事がある」

「なにっ?」

眉をひそめるセーラと、再びザワつく会議室。だが何でもない事のように田中は続ける。

「そんな驚く事でもねえだろ？ 俺は名誉騎士の叙勲まで受けるトコだつたんだ、それなりに有名人よ」

「確かに、そうだったな、しかし何故黙っていた?」

まさか前世からの付き合ひとは言えない。だが、それ以上に異様で妖しげな雰囲気

纏う黒峰さんとの邂逅は気持ちの良い記憶ではない。

アレほど他人を恐いと思っただのは、前世の高橋の偶然を垣間見た時ぐらいかだらうか？

田中は思い出すも不気味な記憶を語っていった。

「目が虚ろな男達に傳かたずかれていたと？」

「ああ、アレこそ洗脳魔法じゃないかって今なら思うぜ。俺もその一員にされちまうんじゃないかと気が気じゃなくてな、逃げ出す様に屋敷を出たモンだ」

「……まさか、人間にそんな高度な魔法が？」

驚く一同だが、田中にしてみれば其れが神に貰った能力なら不思議はない。黒き魔女を名乗るのも必然と言えた。

「しかし、こうなりやアイツの所に行くわけには行かなくなったな」

「どう言う意味だ？」

「どうもこうも、グリフォンを倒して、妹の秘宝を手に入れ、禁術を手に入れ、魔導衣も手に入れる、そしたら全部一遍に解決するだろう？」

「それは……つまり？」

セーラは恐る恐る尋ねる。それは時間が味方してくれる筈だった攻略作戦が、逆に時間制限付きの物に変わってしまう苦渋の決断である筈だ。

それでも、この男はやる気だ。
「ああ、王都を攻略する」

クロミーネの秘術

——ピイイイ

甲高い笛の音が、占領下にある都の重苦しい空気を切り裂いた。

敵襲を知らせる警笛にも拘かかわらず、敵兵の姿は大地のどこにもなかった。

エルフの王都を襲撃したのは空を舞うグリフォンだったのだ。

「うわっ？ あ？ ああああ」

「嘘だろ！」

笛を吹いた隊長が真つ先にグリフォンに掴まれ、空高く持ち上げられた。間近にいた兵士達はその様子を呆然と見上げるしかない。

「あっ！」

空を見上げていた兵士達の視線が揃って下を向く。その先にあるハズの隊長の姿は潰れ、肉塊へと変貌していた。

「ひっ！ 逃げっ！ 逃げろ！」

蜘蛛の子を散らす様に、兵士達が建物に転がり込んで行く。

帝国軍は空からの襲撃者に全くの無力であった。

エルフの戦士であれば、弓の魔法を一斉に射かけ、数の暴力で打ち落とす事も容易だったはずだ。

だが、彼らが持つのは普通の弓でしかない。

「放てッ！」

号令と共に弓兵達から放たれた無数の矢が、うねる魚群の様に蒼天を駆け上がり、悠然と翼を広げるグリフオンを飲み込んでいく。

「よし！ やったぞー！」

しかし魚たちが重力に逆らう力を失い、やがて矢の雨となって大地に墜落した後も、グリフオンは何事もなかったかの様に、確かに空を泳いでいた。

「全く効いていないのか？」

無数の矢が命中したグリフオンは全くの無傷。

それもそのはず、相手はユマ姫が放った魔法の矢ですら、その前足ではじき返して見せた化け物。

普通の矢の威力では体のどこであれ、刺さる道理はなかった。

帝国には大型で高威力なボウガンの用意もあったが、数と精度の両面に問題があり、空を飛ぶグリフオンに当てられる様な代物ではなかった。

空を見上げる兵士達の顔が、悔しげに歪んだ。

——パアアアン

そこに乾いた音が響く。

そう、帝国兵にはコレがあつた。

火縄銃である。

連射能力はどっこいか、むしろボウガンにも劣る火縄銃だが、威力や精度では大きく勝る。

着弾まで早い事も相まって、何発かはグリフオンに直撃してみせた。

——ギユイ！ ビイイイイイ

怒りの咆哮が上がつた。今度は無傷では居られず、滴る血が空から降り注ぐ。

——だが、致命傷には程遠い。

繰り返すが、ユマの弓魔法はグリフオンの前足に弾き返されている。

エルフの戦士が放つ弓魔法は人間の頭部に命中すれば頭が吹き飛ぶ程。丁度ライフ
ル弾と同程度の威力がある事を思えば、グリフオンの体は尋常な硬さではない。

火縄銃は火薬の量で大きく威力が変わるので定量的に威力を判ずる事は出来ないが、
現代のライフフルに勝るモノでは無いだろう。更の上にに向けて撃つ今回のケースでは滅
衰も激しい。

実際に与えた衝撃は、ハンドガン程度が精々だろう。

それがグリフォンの柔らかな部位にたまたま数発命中し、小さな穴を開ける程度に終わるのは必然と言えた。

とは言え、それでも確実にダメージは通っている。このまま鉄砲隊を守りながら、手傷を負わせ続けければ、追い払うぐらいは可能かと思われた矢先であった。

——ビイイイ

——ピイイイ

笛の音と、グリフォンの鳴き声が交錯し、また一人の兵士が空高く攫われる。

帝国にとって不幸だったのは士官が吹く軍令の笛の音が、グリフォンにとって非常に『気になる』音だった事だ。

一瞬仲間かと思うが、違うと解ると苛立ちが募る。その繰り返しだった。

魔力による突然変異で、複数の獣が遺伝子的に混ざり合った化け物である妖獣に、同種などはないのだが、グリフォンは本能から来る欲求に逆らえずに居た。

一方で、帝国兵から見れば士官を正確に狙い撃ちに行っている様にすら見え、ひよつとして、と気が付く頃には、既に被害は大きく拡大していた。

「ま、マズいぞ！ このままじゃ……アレを使うしかない！」

しかし、帝国にはまだもう一つのカードがあった。霧ギョルドスの悪魔だ。

魔力が無くなれば、魔力を利用して推進力を得ている魔獣は飛ぶ事が出来ない。それ

を帝国は、ここまでの侵攻で把握していた。

だが、霧の悪魔の魔力を奪う霧の元は健康値。簡単に補充が利く物では無い。さらに言うとうと霧の比重は重く、空には中々広がらない。

以前、ユマ姫が霧の悪魔を破壊、爆発させた時の勢いは言わば例外だ。同様の事を起こそうとすれば全ての健康値を使い切る事になる。

ただでさえ、最近レジスタンスの抵抗で、貴重な霧の悪魔が余計に不足している最中なのだ。

そして、霧の悪魔が無くなった瞬間に、森に棲む者からの反撃は熾烈を極め、狩る側と狩られる側は決定的に逆転する。

其処まで理解して尚、現場の判断で一人の男が霧の悪魔を引っ張り出すべく倉庫に駆けていく。

幾ら霧の悪魔を温存しても、指揮系統に深刻なダメージが加わり、占領の維持に支障が出ては同じ事。

決して臆病風に吹かれての愚行では無かったが、其れを制止する者が居た。

「やめなさい」

「あ、アナタは！」

倉庫に向かう兵士の肩を掴んで引き留めたのは一人の女性だった。

全員の視線がその女性に釘付けとなる。彼女はそれだけ目を奪う格好をしていた。

戦場のただ中で優雅なドレス姿。それも体のラインが浮き出る扇情的な物。色合いこそ黒一色と地味に見えるが、煌めく光沢は生地の高級さを主張している。

なにより、片側に大きくスリットが入ったスカートは歩く度に太ももが大胆に露わになるし、肩を大きく露出させるデザインに至っては、この世界では異端に過ぎる。

いつそ痴女と罵られても不思議では無いハズの格好なのだが、その女性はそんな格好を何でも無い風に着こなして見せていた。

——まるで、『全く違った文明からふらりと現れた』様な違和感を体現する姿だった。

「黒き、魔女？」

「クロミーネ様だ！」

誰かが呆然と呟く。そう、彼女こそが黒き魔女と恐れられる帝国の魔女。クロミーネ。

だが、一方でこの登場に眉をひそめる者も少なくなかった。状況に鑑みぬ服装はもちろん、魔法使いと恐れられる彼女の魔法を、実際には誰も見た事が無かったからだ。

「ここは私に任せてくれる？」

だからこそ、クロミーネがそう言った事に皆が驚いた。魔法使いとは名ばかり、ただのお偉いさんの愛妾と揶揄する声さえ上がっていたから当然だ。

そんな彼らはお手並み拝見と、すこし引いた目で彼女を見ていた。

「行きなさい！」

だが、それも彼女の号令を聞くまでだった。ある者は腰を抜かし、ある者は逃げ惑う。「ばっ、馬鹿なッ！」

穀物倉庫と思っていた石造りの建物から、巨大な魔獣が二匹。姿を現したのだから無理もない。

——ブゥーブゥーブゥーブゥー

特徴的な鳴き声はブーブーと呼ばれる恐鳥リコイの特徴だ。そして恐鳥リコイと呼ばれる鳥形の魔獣は、その巨体で当たり前に空を飛ぶ。

「うわっ！」

二つの巨体が砂塵を巻き上げながら浮かび上がると、一直線に空へ飛ぶグリフォンへと飛び掛かった。

「なんだコレは？ 地獄か？」

突然始まった魔獣同士の戦いに、皆の頭はついて行けず呆然とするのみ。

一方、ただひとりだけ、つまらなそうに其れを見つめるクロミーネ。

「まるで怪獣映画ね」と日本語で呟いたが、当然にその意味を理解する者は一人も居なかった。

——ビィィィィィィ

そんな彼女でも予想外だったのはグリフオンの強さだ。

グリフオンの爪の一振りで、恐鳥^{リコイ}は傷つき、大量の羽が舞い落ちてくる。

二体の恐鳥^{リコイ}を相手に圧倒してみせるのは、流石に想定外。

「なんとか降ろしなさい！」

次に発したのはそんな言葉、コレもまた、他の兵士達は理解出来なかったのだが。

「3番を出して、スグに」

「かしこまりました」

唯一、いつの間彼女の側に控えていた銀髪の男には意味が通っていたらしい。命令を受けた男は恐鳥^{リコイ}が出て来た穀物庫へと平然と入っていく。

その様子を怪訝そうに見つめる広場の兵士達だが、クロミーネは逆にそんな彼らを怪訝そうに見つめ、指差す。

「そこ……」

「なんですか？」

突然に話し掛けられて兵士は焦った。

だが、もっと別の意味で焦るべきであっただろう。

「どかないと、危ないわよ」

「……ええ？」

「オイ！ 上だ！ 落ちてくるぞ！」

兵士の口から漏れた間抜けな声は、悲鳴と絶叫で遮られた。

——ドオオオン！

凄まじい衝撃。兵士達はほうほうの体で逃げ出していく。

二匹の恐鳥はグリフオンの翼を抑え、広場に落とす事に成功したのだった。

——ブウー——ブ……

ただ、当然に落下の衝撃で恐鳥は既に息も絶え絶え、一方でグリフオンは獅子の後ろ脚と、鷲の前脚とで綺麗に着地。殆どダメージを負っていない。

だが、其処に突っ込む大きな影。

——ギイイイイ

「竜だ！ 地竜クイツァが突っ込んで来やがった！」

地響きと共に現れたのは、地竜クイツァの中でも頑健竜ゴバルオンと呼ばれる巨大なトカゲだ。

竜籠と言う馬車の爬虫類版を使う時に、牽く役目を担うのがこの竜だった。

ユマが湖に旅行に行った時に、竜籠を牽いたのと全く同じ個体でもある。比較的大人しく、エルフが活用出来る数少ない魔獣の一つだった。

そのパワーは言わずもがな、サイズも大きく、単純な力では大牙猪ザルギルゴールと匹敵する。

当然、恐鳥リコイとは比べものにならない。空を飛ぶ魔獣は軽く、力は弱いのが常識、これで決着と思われた。

「まだ動くの？」

だが、グリフォンにはそんな常識は通用しなかった。頑健竜ゴバルオン相手に一步も引かず暴れ続ける。

「何とか抑えて！」

クロミーネが叫ぶと頑健竜ゴバルオンは競り合うのをやめ、グリフォンを押さえ込まんと、のし掛かる動きを見せた。

「マジかよ……」

ここに至っては、流石に兵士達もクロミーネが魔獣を操っているのだと理解せざるを得なかった。

人に飼われる牛馬とて、ここまでの意思疎通は不可能。全く常識外の事に兵士達は戦慄していた。

「そのまま抑えておいてね」

「危険です！ クロミーネ様！」

彼女はいまだに暴れる二体の巨獣の前にふらりと近寄ってしまう。いつの間に戻った銀髪の青年の制止も聞かず、そこは既にグリフォンの爪のテリトリーであった。

しかし、クロミーネは止まらない。体を捻って前足の一撃を躲すと、グリフォンの真つ正面に陣取った。

それどころか、噛み付かんとするグリフォンの頭、クロミーネはガツシリと掴んでみせた。

「良い子ね、ホラ、ゆっくり目を閉じて。そう」

見上げる彼女の視線と、見下ろすグリフォンの視線が交わる。

するとどうだ？ 暴れ回るグリフォンの目がトロンとし始め、彼女の言うとおりに瞼がゆっくりと閉じられた。

「そう。良い子、良い子、甘えん坊さんね」

遂にグリフォンは甘える様にクロミーネの胸に頭をこすりつけ、クロミーネは其れを優しく抱きしめた。

「嘘だろ？」

それは一人の兵士の眩きであったが、その場の全ての兵士の思いを代弁していた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「嘘だろ？」

田中も頭を抱えていた。

グリフォンが出たからと、いきなり王都に突っ込むわけでは無い。マズは情報収集と諜報員からの応答を待った。

実際、被害が大きそうなら、そのまま王都に突っ込むぐらいの気持ちで「王都を攻める」と啖呵を切ったのだ。

しかし、返って来た報告は最悪中の最悪だった。

「街中での事ですので、目撃者は多数、クロミーネは田中様がグリフォンと呼ぶ個体を手懐けたと……」

「ばっ、馬鹿なッ!」

諜報員の報告を遮る様に叫んだのはセーラ。エルフ達の思いは同じ。彼らだって魔獣を手懐けようと何年も研究してきた。

その成果こそが、頑健竜ゴバルオンやピラーク（ダチヨウの様な鳥の魔獣）といった。大人しい草食の魔獣の幾つかだった。

なのに、肉食の、それも襲いかかってくる魔獣をその場で手懐けるなど考えられない。長年研究を重ねたが故に、その非常識さにショックを受けていた。

「何かの間違いでは?」

「目撃者が多すぎます、まず間違いが無いかと」

「……動物園か」

霧の悪魔だけが帝国の秘密兵器かと思えば、またとんでもない隠し球があった。

その事実には顔を蒼くする一同。だが事実は事実として受け止めなくてはならない。

黙ってしまった周囲に代わって、田中が尋ねる。

「で、そのグリフォンが、今はエルフの王都を守ってるって訳かよ？」

「そ、それが……」

諜報員の歯切れが悪い。彼自身が信じられない様な報告をしなければならぬからだ。

「ど、どうやらグリフォンはクロミーネを乗せ、空を飛んでいったと……」

「ウツソだろオイ！」

ファンタジーに過ぎるだろ！ と田中とて笑うしか無い。

だが、あのグリフォンの力を思えば人を乗せる事も訳がないだろう、現に目の前であの男が吊り上げられるのを見ている。

問題はそこではなく、そこまで制御する事が可能なのかという一点のみだが、現実には飛んだと言うのだから仕方が無い。

そして、空を飛ぶ相手が敵だとするとその機動力は脅威だ。

「マジイな、そんな奴が相手じゃ陽動もクソも無い」

田中は呆れかえるしか出来なかつたが、爪を嚙り悩むセーラは別の事を考えていた。

「まさか、王国に向かったんじゃない？ ユマ姫が危険だ！」

「そりゃあ、考え過ぎじゃ無いのか？」

慌てるセーラに田中が疑問の声を上げるが、彼女は首を振る。

「我々だってユマ姫がビルダール王国に居る事は知れたのだ、奴らが知らない訳は無い。直系の王族はユマ様が最後、狙うのは当然だろう」

「でもよお、帝国が魔獣に乗って攻めてきたってなれば、ユマ^{アイ}姫にとつても願ったりだぜ。無理に王国を刺激する理由は無いはずだ」

「確かに……」

「悪い方に考え過ぎだぜ、冷静になれよ」

セーラはふうつと息を吐き、落ち着きを取り戻した。

「そうだな、では奴らの狙いは何とみる？」

そう問われても田中にだつて見当が付かない。

「わっかんねーよ、どうだ？ 爺さん？」

だから気まぐれに、年の功だと爺さん達に丸投げしてみた。

「偵察や情報収集ではないかの？」

「物資を取りに戻った可能性があるの」

「まだ試しに飛んでみただけで、特に狙いはないんじゃないかの？」

田中は「思った以上に、まともな返事が返ってきて驚いたぜ」と思った。思っただけのつもり。

しかし、思った以上を口にしてしまうのが田中だ。

「良かった。ボケ老人はいなかった」

「「ボケとるのはお主じゃろうが！」」

良いツツコミだ、と満足しながら、田中はセーラに向き直る。

「俺も、そんな所だと思うがどうよ？」

「お前の老人達の扱いはどうかと思うが、そうだな一理ある」

「それより、このままじゃ相手の戦力は増大する一方つてのがマズいぜ、霧の悪魔ギユルドスを抑えて、健康値が切れるのを待つて逆転つてプランが崩れちまった」

相手が魔獣を籠絡出来るなら、時間が経てば経つほどに戦力は増強されてしまう。

「そうだな、しかし手が無い」

「でもよ、手をこまねいていると魔獣軍団が増える一方かも知れないぜ？ そう考えると帝国の侵攻は、魔獣軍団を作る事。それ自体が目的だった可能性もあるんじゃないかねーか？」「……無いとは言い切れないな」

魔獣で構成された軍隊があれば、帝国と長年争っていたビルダール王国を平らげる事も容易い。餌代だけで養える最強の兵力と言えるだろう。

ひよっとしたら其処まで便利な代物では無いのかも知れないが、今は其れすら解らない、そこに田中は危機感を持った。

「とにかく、魔獣を手懐ける方法すら解らねーから、打つ手が無いし、余計に不安になっちまう、違うか？」

「何が言いたい？」

セーラは田中が言いたい事を図りかねていた。

「だからよ、俺が禁書庫を襲って、禁術を手に入れる」

「正気か？」

「禁書庫は王都からそこそこ距離があるし、警備もそれ程じゃ無い。禁じ手だかなんだか知らないが手段を選んでいる場合じゃ無いし、相手の魔法の正体が判明するかも知れねえ」

「いくらなんでも危険過ぎるだろうが！」

「このまま黙って見てるのも危険なんだよ！ それに元々グリフォン退治は俺の仕事だ、いま突っつけば出てくる可能性は高いだろ？」

「……………」

田中の意思が固いと見て、セーラは二の句が継げなかった。自分は何の力にもなれないのかと、無力感に苛まれてもいた。

「オイオイ、何黙ってるんだよ、協力してくれるんだろ？」

だから、意外そうに覗き込んでくる田中こそが、セーラにとつては意外だった。

「足手まといでは……ないのか？」

「今までは……な、でも今度の敵は魔獣だろ？ だったらそつちが専門家だろ？」

「そうか……そうだな！」

セーラは色めき立った。今までの汚名を返上出来る機会だと思おうのが一つと、この男と並び戦えるのが嬉しかったのだ。

しかし……

「でも、あくまで後方支援で頼むぜ」

「なあにー!!」

期待していただけにセーラの怒りと落胆は大きい。だが、良く考えてみれば当然の話。

「何って、エルフのメイン武器は弓だろ？ それに相手が霧を撒いてきたら真っ先に逃げる必要がある。出来れば馬……じゃなくて鳥に乗って戦った方が良いぜ」

「鳥？ ピラークか？ しかしピラークに乗りながらでは魔法は使えんぞ？」

「そうなのか？」

「ああ、ピラークは人間以上に健康値を持っているから当然だ」

そう言われて田中はふむ、と考える。そう言えばユマ姫アイツを担いで大牙猪ザルギルゴールから逃げる時、呼吸を合わせてなんとか魔法を放った。

器用と言われるアイツでアレなら、完全な意思疎通が難しい動物相手では、無理と言うのも頷ける。

「じゃあ、近くに置いておいて、霧が出たと思ったらスグに鳥に乗って逃げるってのはどうだ？」

「それも試したが、少しでも霧の範囲に入るとピラークも速度が落ちるし、視界も悪くなる。スピードが落ちた所に物量で押し込まれると逃げられるものではない。一度か나의被害を出している」

「なるほどね」

「何が言いたい？」

「簡単な事さ、反撃が無いと解っているから視界が悪い中も一目散に追えるんだ。俺がケツを守れば大分違うぜ？」

確かに今までは撤退する時に殿しんがりを勤められる人間が居なかった。霧の前にはエルフは無力だからだ。

「危険だが、お前を一人で突っ込ませるよりはマシか。それで行くか」

「よおし、決まりだ！」

田中がピシヤリと手を叩く。その様子を苦々しく見る者も居たが、代案が出せない以上何も言う事が出来ずにいた。

それに一番危険な殿を守ると言うのなら文句の付けようも無い。

「志願者は居るか？ ピラークに乗り慣れた者が良い」

だがセーラの志願兵の募集に手を上げる者は少なかつた。

この場は比較のお偉いエルフが多く、分が悪い賭けと言うか、田中任せの作戦に命を賭ける気はならなかつたのだ。

「俺も行きますよー 兄貴ー」

「ワシが行かんと、場所が解らんじやろう？」

手を上げたのは伝令の少年と、魔法使いの爺と言う面子。

そのあんまりな様子に田中は呆れ、煽る。

「オイオイー、子供と老人に任せてオッサン達はダンマリかよ？」

実際の所、セーラは戦士達に人気があるので余計な人員は必要ない。指揮官としても襲撃メンバーは少数精鋭だけに、無用と言える。

それこそ足手まといになるだけだ。だから、来ないのかと言う誘いは単純に田中が幹部連中を煽りたかつただけなのだが……

「解った、私が行こう」

と言って、手を上げたのは眼鏡の男。感情が読めない目で田中を見つめる。

「アイツは？」

「ドネルホーン、士官ではあるが学者肌で目立たない男だ。こう言う場面で積極性を見せる事はないのだが……」

セーラは耳打ちするが、当のドネルホーンには聞こえていた。

「ドネルで結構。私は禁術に興味がありました」

いや、この距離は通常聞こえる筈が無い、集音の魔法と見るべきだ。だとすれば、そうと悟られない魔法の腕はかなりのモノ。

「なるほどな、ヨロシク頼むぜ」

そうして禁書庫を襲撃するメンバーは決まった。

軍馬ならぬ軍ピラークの数の都合で、出撃出来るメンバーは精々五十人。

それでも禁書庫と言う、軍事的に価値がないと思われる場所を襲うには十分な人数だ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

エンディアン王都、王宮内広場にて

「じゃあ行ってくるわね」

グリフォンの背に乗ると言うファンタジーを体現する女性こそ、クロミーネであつ

た。

普段のパンプスと違い、流石にブーツを履いては居るが、それでも大胆なドレス姿は変わりが無い。なんとも現実感が無い光景に見えるであろう。

「本当に行くのですか？」

尋ねるのは銀髪の青年。

「ええ、森の中に埋もれているのにも飽きたしね。たまには息抜きも良いでしょ？」
「それが本心ですか……」

青年は大きいため息を吐く。

クロミーネは会議で、王国の様子を見てくると豪語して偵察任務を買って出た。

そう、考え過ぎと言われたセーラの予感当たっていた。

クロミーネはユマ姫を倒しに行こうとしていた。その理由は森の中に飽き、そろそろ街で遊びたいと言う不純な理由だが、一応少しは仕事もする気でいた。

帝国は第一王子カディナルを裏から支援している。今や圧倒的に次代の王に近い所に居るはずだが、そこにユマ姫が現れ、ボルドー第二王子に付いて情勢が変わりつつあると言う。

どこまでも邪魔をしてくれるユマ姫だが、ここでカディナルをもう一押しして、王に据える事が出来れば、邪魔者の排除も出来て一石二鳥とも言える。

そう主張して、グリフォンに乗れる自分が銃を担いで王都に飛ぶのだと、会議の場で自信満々に語ってみせれば、誰も反論など出来なかった。

そうで無くても皇帝のお気に入りと言われるクロミーネに意見出来る者など一人も居ないのだが……

「じゃあ、王都でしばらく遊んでくるからそのつもりでね、ソルン」

ソルンと呼ばれた青年は、不安げに顔をしかめる。

「解りました。ですが銃も減って、グリフォンも無しでは、コチラの守りに不安がありませんか？」

「大丈夫よ、王都に着いたらグリフォンだけ帰すから」

「え？ それは制御出来るのですか？」

グリフォンだけ帰されてもどうしようも無い、ソルンはそう反論するのだが……

「何言ってるの？ アナタが制御するのよ。従うように言っておくから」

「そんな、他人に制御を任せても暴走する事が多いじゃ無いですか？」

「その時はその時よ」

「はあ〜」

ソルンはこめかみを必死に抑えて、これから訪れるだろうストレスに耐えた。

一方でクロミーネは気楽な様子で空に舞った。

「じゃーねー」

軽い調子で空の彼方へ、小さくなっていく一人と一匹を見守るしか無い。

あまりに現実感が無い光景。子供の頃に憧れた絵本の世界かと思ってしまう。

「凄いな、あの人は」

だから、そう眩く言葉は掛け値無しの本心。

「あんな魔法は聞いた事も無い。魔力に關しては知り尽くしたつもりの僕でも」

その言葉通り、この青年の魔法に關する知識は群を抜いている。

……それは、人間はおろか、エルフすら凌ぐレベルの知識。

それでも青年にクロミーネの秘術の仕掛けは解らない。

「不思議なものだな……なんと言っていたか」

聞いた事も無い響き。だから中々記憶出来ないのだが……

「……たしか、『コウシンケン』と言っていたか」

その言葉の意味は、青年にはどうしても解らなかつた。

禁書庫 1

「で、禁書庫つてのはどんなトコなん？」

深い森の、道とも言えぬ獣道。しかし、俺の歩みには余裕があった。

気楽な調子で魔法使いの爺さんに声を掛ければ、淀みない言葉が返った。

「外観はそうと解らぬ様、よくある取水施設に偽装しておる。井戸に見える場所を降りるとそこは図書館と言う寸法じゃ」

「そうじゃねーよ、どう言う目的の施設かってハナシ」

外観なんざコレから見に行くんだ。聞きたかったのはそんなモンを建てた理由。

「だったらそう言わんか！ ……お主らには理解出来んかも知れんが魔法の中には世に広まらぬ方が良い物もあると言う事じゃ」

「確かに洗脳魔法なんてもんが広まっちゃうと危ねえけどよ」

「誰しも他人を自由に操ってやろうとするだろう。だが、んなコトが簡単にできるハズもねえ。」

俺の言いたい事が解つたのか爺さんも頷く。

「左様、簡単に習得可能でも無いし、そもそも同意が無ければ洗脳など不可能。苦手の克

服とかに使うのが精々じゃよ」

「だよな」

やっぱただの催眠術に毛が生えた程度の代物だ。

精神が魔力に、魔力が精神に干渉するって話だから、そりや地球の催眠術より強力なんだろう。

だが、この世界の人間は当たり前に魔法への抵抗を持っている。健康値って奴は生命力そのものにして、霧の正体でもある。

だから他人に直接働きかける洗脳魔法なんざ、そうそう掛けられるモノじゃ無え。

いっそ出来る物ならやって見ると堂々と公開した方が良いんじゃないか？

そう水を向けてみると、爺さんは苦い顔をした。

「そうなんじゃが……我々エルフには時々桁外れの実力を持った存在が生まれるのじゃよ。セレナ様がそうじゃった。自分には出来ずとも出来る者も居るのでは……と言う疑心暗鬼が政争や暗殺を生み、危険な魔法は全て封印する事にしたんじゃ」

「なぜ封印なんだ？ 焚書ぶんしょじゃなく？」

「惜しかったんじゃろうな、それらの知識は魔法学の集大成でもある。それに、役に立つ魔法が良く解らん理由で封印される事も少なくないんじゃ」

そんなモンかと鼻を鳴すと、突然後ろから声を掛けられた。

「そう、私が禁書庫から持ち出したいのはそんな魔法なのです」

「アンタは？」

コイツは確か……レジスタンス上層部の一人。鼻持ちならない連中ばかりで、作戦には参加せず口だけかか煽ってみれば、一人だけ手を上げる奴が居た。

それがこの冴えない無表情の男だ。一見して学者肌。戦いを好むようには見えないのだが、どんなつもりで付いて来たのやら、たしか名前は……

「ドネルホーンです、植物学の研究をしています」

「それはまあ、ご立派なコトで」

「はい、全ての人類の為になる研究をしています」

馬鹿にした様な俺の言葉にも、顔色ひとつ変えずに言い切りやがる。

大した自信だ。実際、植物学者と言うのは森に埋もれるこの国では最も重要な研究だろう事は想像に難くない。

だが、結局の所、禁書庫を目指す理由がワカンねー。

俺がそう聞くと、待つてましたとばかりにベラベラと語りやがる。

「先ほど話にありましたが、有用な魔法でも理由も無く危険とされ、封印されてしまう事が少なくないのです。私が欲している魔法もかの植物学者ラクトンが発見した植物育成の最終定理とまで言われていて、植物の育成に欠かせない肥料作りに関する——」

「待て待て待て、ンなしやべつて貰ってもひとつも解らねえよ」

俺は学者じゃねえし、そもそも魔法のコトは何も知らない。

解った事はただひとつ、相手を構わずベラベラ話しまうコイツは根つからの学者サマつてこつた。

とにかく変な裏が無けりやそれで良い。

「そう！ 解らなければ、関わらなければ良いのです。それを不要に恐れ、遠ざけようとするのは後進的に過ぎる！ 愚かとしか言い様が無い！」

ドネルホーンは鼻息も荒く言い募るが、お前の隣にいる爺さんが禁術認定担当だぞ？
そこまで言つて良いんか？

「オイオイ魔法の大家たいかの爺さんよう！ 好き放題言われてるぜ？ 後進的なんじゃネーの？」

「そうかもな……確かに禁術とは名ばかりで、碌に使えぬ術ばかりじゃよ」

「お？」

「じゃがな、先人達にしろ、なんの考えも無く封印したとはどうしても思えないんじゃ。世の中には常識を超えた人間が度々現れる、常人の物差しだけで判断して良いものではない」

「そりや、噂に聞くユマ姫の妹のセレナつて娘か？ 死んだつて聞いたがそんなに凄

かったのか？」

「そうじやの、優秀な魔法使いの魔力値が二百と言われる中、十倍の二千の魔力値を誇っていたと言えばその異常さが解るかの？」

「数字だけなら聞いたけどよ、どれぐらい凄いのかピンと来ねーのよ。あ、数字は解るぜ？」

この世界は百より大きい数は知らないって人間だつて大勢いる。特に俺みたいな冒険者や傭兵崩れにゃ一生百より大きい数字なんざ扱う機会は無いからな。

そんな中じゃ中学中退の俺だつて立派なエリート。数字に強い扱いだ。

つつてもよ、百だの千だの聞いたつて漫画ドラゴンダイスの戦闘力じゃねーんだから、数字だけで強さが測れるもんじゃないぜ？

不満げな俺の様子に爺さんは丁寧に説明してくれる。わりかし面倒見が良くて愛嬌があるんだよな。

「ふむ、魔力値と健康値の関係をまずは知るべきだな」

爺さんが俺に語るのはエルフにとつちや常識みたいな知識なのだろう。現に学者肌のドネルホーンはつまらなそうにどこかに行つてしまった。

「いいか？ 魔力と健康は等価ではない、十の魔力を持っていても、たった一の健康値にかき消されてしまうのじや」

「……確か、人間の魔力値が二十から三十ぐらいって言ってたよな？」

「左様。つまり魔力値が二百が魔法使いの条件と言われる理由がソコよ、二百以下の魔力では相手に通せないんじゃない？」

「なるほどね。それでアイツは俺の魔力値90が高いけど使い道が無いと言った訳ね。」

「そんな中で、魔力値二千はどれだけの力があるか解るじゃろ？ 人間は勿論、健康値に

勝る魔獣すら魔法で一蹴出来ると言うわけじゃ」

「そりゃスゲー、だけど凄すぎて納得出来ないな」

「どう言う意味じゃ？」

「普通どんなに凄いつて言っても、常人の十倍も凄いなんであり得ねーんだよ。俺だつて背が高いつて言われるが十倍高い訳じゃ無い。それに背が高いのが生き残るのに絶対に有利とは限らねえ」

「ほう？」

興味深そうに見つめる俺に、俺は聞き囁つた知識で対抗する。

「シンカロンつて言う考え方があんだよ。生き物は世代を重ねる度に変化して形を変えている。全ては取捨選択の結果で意味があるつてな。背がデカイほどモテるなら、人間はドンドンデッカくなるが、飢饉でも起こつて食料が少なくなりや小さくて燃費が良い

方が有利だろ？ 魔獣みたいになかくならずこのサイズに収まってるのにも意味があるのさ」

「驚いた、人間にもその様な考え方があるとはな」

爺さんはモシヤモシヤと茂る眉毛を跳ね上げて驚くが、あまり地球育ちを見くびって貰っちゃ困る。

「こう見えて、それなりの教育は受けてるんでね」

「微妙な訛りがあると思つとつたが、訳ありと言う事か」

「まあな」

「だつたら知つてるか？ 人間は猿から変化したと言う説が有るんじやよ？ お主が言つていたシンカロンと言う考え方の延長じや」

持ち上げたモシヤモシヤの片眉の奥から、探る様な爺さんの目が見える。口元は悪戯っぽく笑う様子は俺がシヨックを受けるのを楽しみにしているのが窺い知れた。

だが、んなモンは俺に取っちゃ常識よ！

「ハッ、そんなんで驚くもんかよ。人間は神が作った特別な生き物だとは思つちや居ねえよ！」

「ほう？」

俺がそう言うと、爺は意味深に笑つた。

「ワシはそうだ特別と思っっているがの」

「へえ、ロマンチストだな」

科学的な話が出来る数少ない人間（エルフ）だと思っただが、流石に最後の最後は神を信じるか。

現代地球だつて、人間は猿から進化したと認められない人間が大勢居る。この中世っぽい世界じゃそれも当然か？

ちつとガツカリ半分、論理的に考えられる自分に優越感が半分つてトコ。

俺がそんな風に思っていたら、爺さんが意味深に声を潜めるのだ。

「少なくとも我らには魔法が有るじゃろ？ 魔法を使えるのがお主の言うシンカロンの結果なら、何故魔法を使う猿が居ない？ 魔力で体を強化するよりも色々な事が可能だと言うのにじゃ」

「……………」

俺は二の句が継げなかった。

確かに、何故エルフしか魔法が使えないんだ？

アイツが好きだったファンタジーでも精霊魔法とやらはエルフにしか使えない。そんな謎の設定を聞いた事があつたから、俺まで当たり前に思っちゃまった。

少なくとも人間にだつて使える奴が居ないとオカシイだろう？

ましてや魔獣や動物だって使えても良い。

いや、そもそも詠唱が必要と言うが詠唱って何なんだ？ 冷静に考えると全く意味が解らねえ。

困惑する俺を脅かすように、爺は続ける。

「魔法が使えないエルフだっておる、その違いは何なのか？ 狂った一人の脳医学者が殺人鬼となった……そやつはのう、色んなエルフの頭蓋を引っぺがして中身をぶちまけて事細かに特徴を記録した」

「ゾツとしねえな」

「その結果、魔法が使えないエルフは、使えるエルフと違って脳の一部が小さかった。そして他の動物にはその部分が無い。人間の解剖例も一ケースだけ有ったがそこにも存在しなかった。ワシはその研究を見てから、神は居るのではと想い始めたんじゃ」

まさか？ いや、スツカリ忘れていたが俺は正真正銘の神を知っている。

あの神は呪文の詠唱で力を貸してくれたが、人間を改造したりするのか？

どう考えたってそんな風に干渉する存在じゃなかっただろ。

……だが、そもそも俺が神様の改造人間みたいなモンだ。

以前にも神が干渉した結果が有ったとしても不思議じゃ無え。

いやいや、そんな無茶で実験を台無しにするような干渉をするか？ 俺達はそれこそ

イチかバチかのイレギュラーだと、そう思っていたんだが？

「何ならそのレポートを見るかの？ 正に今から行く禁書庫に保管しておる」

「成る程ね、禁書庫って言われるわけだけ」

余りにグロ案件。俺は遠慮しておくと思肩をすくめた。一方でそう言えばと爺さんは笑う。

「脱線したの、シンカロンはワシも似た思いで居るんじや。現にセレナ様の様な存在は淘汰された」

「どう言う事だ？」

「さっきの身長の話と一緒にやよ。例え十倍身長が高い人間が生まれても、食料が無ければ生きていけない。セレナ様の場合、必要だったのは十倍の魔力じや」

「そう言う事かよ」

「そう言う意味で、過去にはひよつとしてもつと魔力が濃かった時代があったのやも、とワシは考えとる、そんな先祖返りの様な事例がセレナ様以外にも結構有るんじやよ」

「そりや……使い方次第じゃ凄いや戦力だろう？」

「成長と共に、必要な魔力量は増える一方、子供の内に死ぬ事が殆どじや。その為に魔導衣を研究してたんで」

「そう……か」

ひよっとして、セレナって子は帝国に関係なく長生き出来なかったのかも知れねえ。

……いや、そんな事でアイツの絶望が癒やせるってモンじゃ無いよな。

沈む俺に、復讐の為だけに生きるアイツの顔がチラついた。

だが、アイツの事を思っただけに居たのは爺も同じ。ただし考えていた事は大分違った。

「そう言う意味で言うとな、ワシはユマ姫さまの方がよっぽどイレギュラーだと思うし、何より恐ろしかったものじゃ」

「どう言う意味だ？」

「それこそ、人の十倍、いや、百倍。下手をすれば千倍は魔力操作に長けていたし、常識外れの知識や考え方を持っていた。まるで違う世界から来たかの様に思ったものじゃ」

「……そんなに、か？」

「それこそ見た方が早いので、凄い物が保管されておる、それ、着いたぞー！」

「ココが？」

そこは突然に森が切り取られた様な場所だった。

その真ん中にある、……アレが取水施設だと？

「所々、こうやって森が開けた場所があるんじゃない。妖精の住み家とも言われての」

「そうじゃねえ！ あの真ん中の建物は何だよ？」

「ああ、古代遺跡じゃな。古代から水の豊富な場所はそう変わつとらんのだらう。丈夫

な建物だからわざわざ壊す事も無い、そのまま使っておる」

「よくある取水施設ってそう言う事かよ……」

森から切り取られた様な草原のど真ん中。建っていたのはコンクリとガラスで出来た近代的な建物だ。

いや近代どころか、屋根なんざメタリックな光沢でSF感までありやがる。

こんな物がアタリマエなのか？ 俺のちっぽけな常識なんざ何一つ通用しねえ！

「神、か……」

俺はその正体に思いを馳せて呆然と呟いた。

ここで言う神は俺が会った神なのか？ それとも別の？

クツソ、俺には難しい事は解らねえ！

立ちすくむ俺に、苛立たしげに爺から声が掛かる。

「ボヤツとするんじゃない！ セーラ様たちは先に行つたと言うぞ？」

「あんの！ 後方待機って言つたじゃネーか」

俺は殿を経験する為に最後尾について行つたが、セーラは禁書庫が見えるところで待機って言つたのに余裕で無視かよ……

ため息交じりで駆け出すと、爺の乗るピラークも森の中の鬱憤を晴らすかのように軽快に駆け出した。

「おうおう、元気じゃネーの。ユマ姫の話、続きを話す前にポツクリ逝くんじゃネーぞ？
アイツがどれだけ化け物だったのか聞いとかねーとな」

「はあ、まあ良いが、そう言うお主も元気じゃの」

「それだけが取り柄だからな」

呆れた様な爺の言葉に、力こぶをつくって言い返す。

そんな俺を見て、ジジイは尚もブツブツと呟いていた。

聞こえぬように言ったつもりだろうが、俺の聴覚を舐めちや困るぜ？

「あの森の中を、ピラークに乗った行軍に徒かちで着いてくるとはの。それもとびきり魔力
が濃い場所を這ポいつくばる者ズが？ 息も切らしておらんし、汗も碌にかいとらん。化け
物はどっちじゃ全く……」

どんな愚痴かよ。まあ俺も確かに神懸かりの体だ、アイツに近い存在か。木村はどう
なんだろうな、地味で嫌な能力を選びそうだが……

「へへっ」

「なーにを笑つとるんじゃ、気持ち悪い」

「気にすんなよ爺さん、ハゲるぞ。ん？ 手遅れか？」

「余計なお世話じゃ！」

爺は三角帽子を押さえて怒る。

ま、化け物として、精々頑張りますかね。

禁書庫2

爺さんに連れられて禁書庫の敷地の真ん前。鉄格子の門扉まで辿り着くと、ソコには既に乗ってきたピラークから降り、待ちきれないと言う顔をしたセーラがふんぞり返っていた。

「やつと来たか、タナカ！」

「そりゃ冗談で言ってるんだよなあ？」

セーラのドヤ顔は見慣れたつもりでいたが、今度ばかりはイラついた。

今回の作戦の肝はセーラ達、エルフの戦士の後方支援。

それが目標である禁書庫の門、そのド真ん前でドンと構えているのだから、脳みそを道中で落としてきたに違いない。

エルフが魔力をかき消す霧に弱いのは周知の事実だが、魔獣だって濃い魔力を必要としているのは同じだ。

そうで無きや大森林から溢れ出した魔獣が人間達を蹂躪しているだろう。

前回の襲撃も霧が収まった辺りで大土蜘蛛ザルアブギョリが現れたのが決定的。

あの時だって、もし人間と魔獣が同時に襲ってきたなら、流石の俺も危なかったに違

いない。

つまり魔獣が出て来たら霧は無い。その時こそセーラ達、エルフの戦士の弓に頼りたかったのだが……

「姫様が一人、ビルダール王国で戦っていると言うのに私が後方待機では格好が付かないだろう？」

クソふざけた事をのたまいやがる。

「格好だあ？ テメエの格好つけの為に後方待機をしてやるつもりは無えよ！ 引つ込んでろー！」

「何だと？ お前にお守りを頼んだつもりは無いぞ！」

「んなコト言つて、いつも抱っこされて帰るのは誰だよ！」

「それこそ！ そんな事、頼んだ覚えは無い！」

クソ聞き分けが無え！ ぶん殴つてでも引かせようとした時、頭上から決意を込めた少年のハスキーな声が割り込んだ。

「兄貴！ 姐さんは俺が守るよ」

「ガキか……生意気言うんじゃないよ」

「ピラークとか言う鳥に跨がるのは伝令の少年だ、確か名前は……」

「マーロウだよ、そろそろ覚えてくれって」

「名前を覚えて欲しかったら、それだけの男になるんだな」

「そんなあ……俺、こう見えても結構知れた魔劍の使い手なんだぜ？」

……わーつてるよ！　んなモン。俺ぐらいになれば立ち姿だけで実力は知れる。

歳は十四だとか言ったか？　歳に見合わぬ研鑽を積んでる位は一目でわかる。

初めて会った時、変に突っかかって来るんで自慢の魔劍を叩き斬ってやったら、今度は兄貴と来たモンだ！

才氣溢れる素直な若者。同じ劍士として歓迎してやりたい所だが、俺は名前一つ覚える気は無い。

なぜか？

「お前は薄いんだよ！」

「それ！　前も聞いたよ！　意味が解らないよ！　なんだって言うのさ？」

気配が、だよ！　お前はもう死にかけている。

一方でセーラは自信タップリ。腕を組みながら人差し指をピンと立て、片目で少年を一瞥する。

「そうだ、お前は実戦経験が足りない。大人しく後方で待機している」

イラつくが、気配だけなら誰より立派なのがコチラのお嬢様だ。ドヤ顔で待機してるなどと言うが、司令官のお前が一番後ろでドツカリと構えるべきだと言うのによ！

ともあれ、死から縁遠い奴はそれだけで強い。それこそ俺がセーラをなんだかんだ拒絶しない最大の理由だ。

セーラは躁鬱気味で、鬱の時は「自分だけがむぎむぎと生き残ってしまった」と愚痴るばかり。

だが、危険な戦場を生き残る嗅覚こそ、戦士として最も希有にして必要な能力だ。話を聞けばこのお嬢様は常に紙一重で死を遠ざけている。

コレが神の言つてた運命力って奴か？

正直なトコロ、俺にだって強運にあやかりたい気持ちは強い。

「セーラは仕方ねえが、ガキ！ テメエは帰れ！」

「な、何でだよ？ 意味が解らないよ、俺は魔剣使い、後方支援なんて出来ないよ！」
「それでもだ！」

元子役と言うだけに、顔立ちも整っているし人望もある。俺とは違ってこんなトコロで死んで良い奴じゃない。

「嫌だよ！ 護衛なんだ、少なくともセーラ姐姐さんが引かないなら俺も引かない！」

「……クソツ！ オイ！ セーラ！ 聞いたか？ 若い芽を摘みたく無いならとつとと引つこめ！」

「なんだと！ マーロウだけ帰らせれば良いだろ！」

「あのーワシの事忘れとらん？ 爺さんの心配だつてしてもいいじゃろ？」

まあセーラは引かねえよなあ、コイツは面倒くせえぞ。

……地味に爺さんが拗ねてるが、禁書庫に詳しいのは爺さんだけで仕方無い。言つてもジジイも本気じゃ無いだろう。年長者の愛嬌で和ませに来てるだけ。

「はー死ぬ前にもう一度チーズリゾットが食いたかったのー」

「……………」

いや、このジジイ本気で拗ねてるかも知れねえ。

「まあ、しゃーない。ガキはそのまま鳥に乗って付いてこい、霧が来たらセーラを回収して引け、良いな！」

「解った！」

「仕方無いか」

取り敢えず二人は納得した様だ。

しかし、肝心の爺さんが意味不明な事を言い始めるのだ。

「はーしんどい、あ、セーラ様もうちよい高くしてください、少年が死んでしまうでな」
「解った、任せろ」

「？」

なんだ？ 意味が解らねえ……と首を傾げた瞬間。それは起こった。

——パアアアン

甲高い破裂音。そして俺だからギリギリ目視出来た高速の弾丸は、完全に音と同時にマールウ少年を襲った。

「危ねえ！」

思わず叫んだが庇おうにも庇えるタイミングじゃ無い。俺に出来たのは二の舞はごめんと地に伏せるだけ。

クソツ、死ぬと解っていて救えなかった。仇は取ってやると、地に伏せながら鉄格子の門扉越しに、禁書庫らしい近代的な建物を睨む。

見れば屋上から煙が上がっている。あんな所に隠れて居やがったか！

……あれ？

「なにやってんすか？ 兄貴」

視界の端、見下ろして来るのはマールウだった。

「無事なのか？」

「そりゃ、姐さんの障壁ですからね、破れませんよ」

「障壁？」

——パアアアン

呆然と立ち上がる俺に二発目の弾丸。

真つ直ぐに俺を狙った弾丸だっただけに、今度はハッキリと見えた。

着弾と同時に前方の空間がグニヤリと歪んで無数の白い筋が走る、その筋が巻き込む様に弾丸を止めちまった。まるで蜘蛛の糸にかかった虫の様。

「コイツは？」

「障壁だと言っているだろう？ 弓矢を加速する事が可能なのだ、飛来物を減速させる事も当然可能だ」

まーたセーラが片目で人差し指をおつ立ててドヤ顔しやがる！ その顔止めろ！

畜生！ 恥を搔いた時のドヤ顔は万倍効く。

爺さんは爺さんで、「敵意を感知したのはワシなんじゃけどね……」とか拗ねてるしよ！

いや、実際爺さんの方が高度な事をやっているのだろう。俺の気配も感じぬ場所からの狙撃を感知しやがった。

「爺さん流石にやるな」

「オイ！ 私には何か無いのか？」

そのドヤ顔で満足しとけよ！

俺は苛立ち混じりにセーラに尋ねる。

「つーかこっからどうするんだよ？ ジリ貧だろ？」

なんせ、障壁は解除出来ないし反撃の手段が無いだろ？

そういう言ってる内に三発目の銃声。それも障壁に遮られるが、一瞬セーラがビクツつとなつたのを俺は見逃さなかった。オイオイ大丈夫なのか？

障壁を眺める爺も興味深そうにめり込んだ弾丸を観察する。

「ふうむ、威力はそうでも無いが、これは鉛か？ 小さい分、矢より絡め取るのは難しいぞ？」

「うっ！」

「うっ！ じゃねえ、不安になるじゃねーかセーラ様よお？」

「ま、まあ大丈夫だ、確かに長くは保たないが——それは向こうも一緒さ」

そう言つてセーラは物騒な笑みを浮かべ手を振った。それがどう言う意味か……考えるまでも無い。

弦を弾く音が一齐に響いた。

俺達は四人で遊びに来たわけじゃ無い。戦争するつもりの大所帯で来てるのだ。

俺達の頭上を越えていく無数の矢。それが禁書庫の上でグニヤリと進路を下に向けると、目視不可能な速度で一齐に禁書庫の屋上に降り注ぐ。

——ズバアアアーン！

アイツの弓でも見たが、異常な軌道で曲がつて最後の加速からもたらされる火力は火

繩銃を上回る。

グシヤリと弾ける音と血煙が舞うのが見えた、屋上の惨状は想像したくも無い。

「コレが我々の、エルフの戦士の力だ。魔法さえ使えるならば這ホいつくばスる者如きに遅れを取る事は無い」

「そうみてえだな」

エルフの戦士達の弓。確かにコイツは頼もしい。

「行こうぜ、俺も昂ぶっちゃまった」

言いながらも俺は門を蹴破る。振り返って笑う俺の顔は獵犬の様に獰猛に見えたに違いない。

「ああ、奴らに目に物みせてくれよう」

「えええ？ めちやめちや待ち伏せされてるじゃん！ 慎重に行こうよ？」

セーラは乗り気、マーロウは慎重だがコイツはそれで良い。爺さんはため息混じりについてくる。

俺達は堂々と敷地を突っ切ると、禁書庫の扉に手を掛けた。

「さあーて、鬼と出るか蛇と出るか。なんでも掛かって来やがれ！」

バーン！ と豪快な音と共に、俺は勢いよく扉を開け放つ。

「「「……………」」」

……扉を開けて、いきなり住人と目が合っちゃまう。こう言うのは異世界でも気まずいもんだな。

それが腹に穴が開く程に、苦手な相手だったらなおさらだ。

「ずらかれ！ ザルアブキユリ 大土蜘蛛だ！」

三人はピラークに乗って、俺は全力で走る。門まで僅か二秒。久々に本気で走った。

振り返れば、扉から出るわ出るわ、三匹も……。

真つ直ぐコツチを追って来やがる！

——ズバアアシュ！

だがな、あれだけ苦労した魔獣だろうが、エルフの弓の前では一瞬なのよ。

轟音と共に無数の矢が降り注ぎ、魔獣達は一瞬で無残な死骸に変貌した。

「結構強力な魔獣だつて言つてなかつたか？」

「ハン！ 森で突然に遭遇するから恐ろしい相手なのだ、普通はこんな大勢の前に姿を現さない」

俺の文句に呆れた様子で鼻を鳴らすセーラ。ムカつくが確かに道理だ、日本だつて腕利きの猟師が熊に襲われ死んだりするが、銃を構えた軍隊の前には無力に違いないのだ。

しっかし、余りに強すぎて俺の出番がねえな。

っと、言ってる側から第二陣がうじゃうじゃと湧いて来やがった。

「オーイ！ 頼みます！ 派手にやっちゃって下さいな」

俺は大声を張り上げ、後方待機のエルフ達に声を掛ける。

アレだけの威力を目の当たりにしたら、俺だつて多少は腰が低くなる。

気分は「先生やっちゃって下さい」って奴だ。完全に楽勝ムード。

だが、それもマローロウの叫びを聞く迄だった。

「兄貴！ 霧が！」

「冗談だろ？ 複合攻撃か？」

アテが外れたのか？ 霧と魔獣は同時に攻められるつてーのか？

いや、違う。バルサンを焚いたみたいに、建物から虫がうじゃうじゃ湧きやがる！

建物で飼っていたのをあややって追い出してるんじゃないか？

いや、考察は後、とにかく何とかしないとマズイ。霧だけで無く魔獣からも追われる

事になつちまう。

溢れ出す魔獣に頑張つて弓を放つてくれる戦士も居るが、あんまり頑張ると霧に飲ま

れて死ぬだろう。

「逃げろ！ 霧に飲まれたら終わりだ！」

こっから始まるのは霧と魔獣、そしてエルフと人間で織りなす追いかっこ。

いよいよ俺の仕事の始まりだ。

「よっしやああ！ 掛かってこい！」

逃げるケツを守るのは俺。人間が相手かと思えば相手が魔獣だっただけの事！

俺は群がる魔獣の前に陣取った。

……のだが

——ギョオオオオオ！

「うん？」

咆哮を上げながらまさかのスルー。格好良く啖呵を切った俺の横を猛然と魔獣が通り過ぎる。

「ざっけんなー！」

恥ずかしさを誤魔化すために叫んだが。良く考えれば霧から逃げてるのだから当たり前か？

だつたら俺にもやりようがあるぜ？

——ズバァン！ サンツ！ ザシユ！

心地よい手応え、ザルアブキユリ大土蜘蛛の足を次々と切断する。

攻撃する意思も無く、ただ逃げるだけの相手を斬るなんざ、造作もねえからな。

五匹の足を切断し機動力を奪った所で、俺もいよいよ霧に飲まれた。

——ギョ……オオオオ!

霧に飲まれた蜘蛛は明らかに力が無い。刀でサクツと両断する。

「死ねええ!」

「お前がな!」

そして斬りかかってくる人間は返り討ち。霧と同時に出来た奴らが十人以上は居やがったのだ。視界は悪いが心配が読める俺には関係無い。

「ギャアアア! やめ! やめろ!」

悲鳴? 目を向ければ大土蜘蛛ザルアブキユリに囓られる帝国兵の姿があつた。

「止めろ! 違う! 俺じゃ無い! アツチだ! アツチ!」

必死で俺を指差すが魔獣は従わない。完全に制御を外れている。

いや、元々ロクに制御なんて出来ていなかったのかも知れねえ。

「ひでえモンだ」

完全に捨て駒じゃねえか。しかも大して役に立ってねえ。

俺はバツサバツサと魔獣と人間に関わらず斬りまくる。俺は霧の中じゃ無敵だった。魔獣はスローモーションみたいに遅いし、人間は元々敵じゃ無い。

「大体片づいたか、さーてアイツらは大丈夫か?」

……少しずつだが霧が晴れてきた。辺りには無数の死体。魔獣も、人間も、違う色の

血が混じり合つてひでえ有様になつていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

しばらくすると完全に霧は引いた。ただ待つのもアレだから一通り禁書庫の一階は探検してみたが、ロクに成果は無い。

「取り敢えず一階は制圧しておいたぜ」

「グチャグチャじゃないか！」

セーラは文句を言うが、魔獣が巣くつていたのだから仕方がないだろう？

建物の中の部屋では魔獣を飼育していた痕跡があった。どうやってこんな小さい部屋に押し込んだのかは謎だが、押し込んだのを解き放つただけで、元より制御なんてされて無かつたと言うのが俺の見立てだ。

それを霧で押し出して俺達にぶつけただけだろう。

「洗脳の禁術も時間が経てば弱まるからのお、いや、しかしオカシイの、てつきり霧で弱らせて健康値を削つてから洗脳するのかと思つていたが……アレほど霧から逃げるのではそれも難しそうじゃ」

「考察は後だ、早く地下に案内してくれ」

ちやつかり生きていた爺さんを急かす。ハッキリ言つて長居したい場所じゃ無い。

「兄貴！ 俺、^{ザルアブギユリ}大土蜘蛛を叩き斬つたぜ！ それも二体も！」

生きていたのは気配の薄いマーロウ少年も同じ。コイツは本当に良かった。気が付けば気配も少し大きくなっている。

……つまり、死ぬ確率が高いと気配が小さくなるし、危機を脱すると大きくなる訳か？

オイオイ！ 滅茶苦茶いい加減じゃねーか！

だが俺に戦いを挑んだ帝国兵なんぞ、勝ち目が無いのに気配は有ったぞ？

とは言え、俺は逃げる相手は追わなかった。それが斬られる瞬間までは行動次第で生存ルートはあったと言う判定になるのか？

今回みたいに霧に追い立てられる魔獣や、魔獣にも襲われた帝国兵の気配は薄かった。

薄すぎて、扉を開けるまでその気配に気が付かぬ程にだ。

死兵として扱われた時点で、奴らの意思じゃどうしようも無い程に詰んでいたからだとすれば領ける。

俺だつて今回はエルフの戦士の手前、見逃す訳には行かなかつたからな。

「兄貴！ ボーツとしてないで行こうぜ！」

「ああ……」

マーロウに急かされて俺は地下へと向かう、それが禁書庫の本体だからだ。

ソコへ至る装置は特殊な操作が必要だと聞いていた。

だが、実際に見てみれば拍子抜け。

「ただのエレベーターじゃねーか！」

言葉も文明も違うが、同じ目的で同じ様な物を作れば似るモノなのかもな。

割とよく見るガラス張りのエレベーターだ、下ボタンを押せば地下から籠がせり上がって来るのが丸見え。

開いた扉から飛び乗ると、開くボタンっぽいのを押しながら皆が乗り込むのを待つ。

「どうした？ 乗れよ」

「随分手慣れてるのだな？」

まあ神の使徒だからとでも思ってくれよ、セーラとマーロウを乗せて地下へのボタンをポチっと

……つい癖で押しちまった！

「あ、ヤベエ多分下で待ち構えてるわ」

良く考えたらエレベーターなんて使ったら着いた途端に蜂の巣じゃねーか！

「お前は どうして そう マヌケ なの だ！」

「いや、セーラにだけは言われたく無えよ！」

「どう言う意味だ！」

「い、今は止めましょう！　ね？　ね？」

言い争う内に到着！　チーンと音が鳴り、扉が開く。地下はガラス戸じゃないみたいで、開くまで外の様子は解らなかつた。

「え？」

「あ、？」

呆然とした様子の白衣のオッサンと目が合った。

まさかココから来るとは、相手も思つて居なかつたのか……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

特に問題も無く禁書庫を制圧した。残っていたのは研究者が大半。エルフの技術の中枢を知ってしまった以上、捕虜にするのも難しい。無抵抗の民間人が死ぬのを傍観するのは癪だが仕方ねえか……

一応俺の目に見えない所で処分してくれる様だ……クソツ！　胸くそ悪い。

一方でご機嫌なのはドネルホーン、レジスタンス幹部の一人で植物学の研究者様だ。

「お！　おおお！　素晴らしい！　コレだ！　コレこそ私が求めていたモノ！　魔力だけで何も無いところから植物の肥料を錬成出来る！　何故こんな有用な技術が禁術なのだ？　これを応用すれば誰も飢える事が無い世界が作れる！　真に平和な世界が訪れる！」

一人で盛り上がってるが、無から何かを作る事など出来るのか？ どうにも夢物語に思えてしまう。

で、肝心の禁術の方はどうなんだ？ 俺は爺さんに尋ねる。

「ううむ、洗脳術に関して多くが抜き取られとる。しかし眉唾の書物が殆どじゃからな。逆に実用的な相手を昏睡状態にする術や、自分の意識を相手に浸透させる術は残っておった。これを姫様に渡せば良かろう」

「眉唾って言うのは？」

「使えると主張したのが高名な魔術師だったと言うだけで、まともに検証も出来ない程に高度、もしくは妖しいモノじゃな」

「見栄を張ってフカした可能性も否定できないと？」

「その通り、そう言う輩も少なくないのう」

……逆に言えば、嘘とも言い切れず仕方無くココに仕舞っている。

コレを運び出したのが黒峰さんだとすれば、本当に高度な禁術を使っているのか？ 洗脳術を持っていったのはクロミーネで間違いない」

割り込んできたのはセーラ。研究員を拷問したのか、返り血を浴びている。

目つきが荒んでいるな、こう言うのは性格的に向いてないよな……

「セーラか！ 尋問は済んだのか？」

「ああ、奴らは初めから我々の魔法技術を篡奪する事が目的だった。研究者を帯同させていたし、占領して支配しようなどと思って居ないからこそ民間人も虐殺したそうだな」
吐き捨てる様に言う。聞いていて気持ちが良い話じゃないな。

「ココでは主に魔獣の研究をしていたらしい。資料が揃っていて万が一でも王都とも帝国とも距離が有るから被害が出ないとな」

「そうか……計画が漏れて待ち伏せされていた訳じゃねーんだな？」

「ああ、重要拠点として考えられていたから日頃から警備は厚かったらしい」

「そうか……しかし本当に帝国は魔獣を操作する技術を研究していた。その成果がアレなのか？」

結局解らない事だらけか……結局グリフォンも現れなかった。ロクに成果がねーじゃねーか！

「まあまあ、ユマ様の助けにはなるじやろ、ガイラス殿には急いで禁術を届けて貰おうじゃないか」

「ああ、そうだな……」

爺さんの慰めにも空返事で答える。せめて魔導衣だったか？ 魔力を補助する装備が届けられれば良いんだが……

「納得しておらんか、ユマ姫様は一筋縄では死なんよ。コレを見るが良い。王都を攻め

るにも助けになるぞ、見た事がないじゃろ？ 王宮の見取り図じゃ
「コレは？」

禁書庫の天井から吊されていたのはガラスの球体。大きい。ひと抱えは有るんじゃ
無いか？

そんでこの中に有るのは……ひよつとしてエルフの王宮のミニチュアなのか？

アイツがこれを作ったって言うのかよ？

「なんて細げえんだ」

「そうじゃろ？ 大々的に発表したかったんじゃが、防犯上の理由で公開出来ず、こんな
所で燻っておる」

「これはどうやって作るんだ？ 瓶の中だろ？」

「小さい穴があつてな、そこから魔力を流して操作して組み立てる。魔力制御の練習と、
後は暇つぶしの大人の趣味じゃな」

……まるでボトルシップだ。実際にコツチの言葉で瓶の家、言うならばボトルハウ
スつて名前で普通は瓶の中に自分の家を作る遊びらしい。

それが、自分の家だからと王宮を作っちゃうのだから規格外と恐れるのも解るわ。

アイツ滅茶苦茶やってるじゃねーの！

「どのぐらいの時間を掛けて作るんだ？」

「普通は年単位、それこそ柱一本建てるのも神経を使う作業なんじゃ。それを姫様はたった三日で作って。……そして二週間寝込んだらしい」

「馬鹿かよ……」

とにかく王宮の間取りはなんとなく覚えた。宝物庫への侵入経路や諸々だ。

アイツの置き土産、有効活用しねーとな。

「本気か？ エンディアンの王都は今や魔境と聞くぞ？」

ギユルドス霧の悪魔も何基もあるらしい

ぞい？！」

爺さんはコツチを窺うが、むしろ霧は願ったり。

「結局グリフォンも来なかったしな、次は王都。それで駄目ならビルダール王国にまで

行くしかねーよ」

「ふおふお、尽くす男じやのー」

クソジジイが！ 髭を聳ってやる！

強襲

禁書庫の奪還は成った。

高々図書館と思っていたが帝国もその重要性は理解していたらしく、防衛には銃や魔獣と盛りだくさん。それでもエルフの戦士達との共闘の前には敵では無かった。

簡単に言やあ、霧さえ無ければエルフは無敵。そして霧が出ちまえば俺が無敵だ。いつそ王都だって楽勝で奪還可能では？

そんな期待感が押さえ切れず、兎にも角にも見てみようとして一人で出発した。

今、俺は王宮の裏山で息を潜めている。ユマ^{アイツ}姫が脱出の際、燃える王都を見たと言う場所も、そう遠くでは無いだろう。

エルフの王都に高い壁は無い。魔獣除けの結界はあるし、それでも魔獣がノコノコ出て来たら誰にでも戦う力はある。何なら一晩でちよつとした堀や城壁ぐらい作れる。

確か、ユマ^{アイツ}姫はエルフの都についてそんな風に言っていた。

「まあな、作れるんならそりゃ、作らせるよな」

今や王宮は真新しい城壁にぐるりと囲まれていた。

「厄介だな」

一人でいる所為か、面白くもない独り言が増える。俺は考えるのは得意じゃねえが、そうも言つてられない状況が独り言に拍車を掛ける。

この壁の厄介な所は二つ。

まずは単純に目視出来ないのも、ギョングン曲がるエルフの弓でも中への援護が期待出来ない。

二つ目は、壁で区切られた中ではバンバン霧が焚かれている事だ。

霧の比重は重い。だからコンビニのアイスを売る什器じゅうきみたいなモンで、上が空いても問題ないわけだ。

……いや、バンバン焚いてる訳では無いみたいだ。壁の中、洗濯物を手に移動するエルフの侍女が見えた。

つまり、エルフが倒れず、人間に不快じゃない程度に霧を焚いてる訳だ。

それでも、いざって時には霧を全開でフカすだろう。となればエルフ達は壁の中に入っていけない。

雨の日を狙うとか、風が強い日を狙うって案も有ったが。壁でぐるりと囲まれた中じゃ、霧を散らす効果はあんまり期待出来ないだろうな。

つまり、壁のお陰で中に入り込んで魔導衣だかつて言う、ユマ姫の服を奪還するには俺一人しか戦力にならない。

俺は人間相手なら無双出来る自信はあるが、ハナから俺しか居ないんじや相手もわざわざ霧なんて焚かず、魔獣をけしかけてくるに違いない。

流石に厳しいな。裏手に山と聞いて、そこから射かけて貰えば楽勝なんじやないかと思つたら、そうは問屋が卸さないか。

ま、流石にこの程度はレジスタンスの連中も調べていて、話には聞いていた。だが、実際に目で見ると、他にも奴らの対策が見て取れる。

例えば、この裏山、地面が荒れていて滅茶苦茶歩きにくくなっている。

コレは鳥に乗つての一撃離脱戦法を警戒しての事だろう。馬より登坂力に長ける鳥だが、魔獣より上つて事は無いだろう。

ザルアブキユリ
大土蜘蛛辺りをけしかけられたら全滅は必至だ。エルフにとつちや近づくのも命がけになってくる。

「クツソ！ 隙がねえな」

結局、向こうは霧を出すか出さないか、地形や情勢を見て自由に決められるのがデカ過ぎる。

……アレ？ そういや使えるか？

「取り敢えず相談だな、一旦帰るか」

活路は見えた。後は協力者を募るだけ。

危険な作戦だが付いてくると五月蠅いだらう女の事を思うと、憂鬱半分、嬉しさ半分で帰路についた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

いつもなら濃い緑の匂いがするレジスタンスの秘密基地。

なのに今は、硝煙の匂いだけが漂っていた。

「なんだ？ こりゃあー！」

苔むした丘は踏み荒らされ、その荘厳で静謐な気配は完膚なき程に穢されていた。

だが、敵の姿は見えない。全ては終わった後であった。

「留守にした間に襲撃が有ったのか！」

丘を見上げて唸る。俺がいない時を狙ったこのタイミング、流石に出来すぎているからだ。

「兄貴イ！ 生きてたんですね！」

呆然とする俺に、丘の上から声が掛かる、なんと！ マーロウ少年だ。

「マジか！ 生きてたのか？ 俺はてつきり……」

「いや、驚き過ぎでしょ！ コレぐらいじゃ死にませんよ、どうして兄貴はいつも俺が死ぬって決めつけるんですか！ 縁起でも無い」

そりゃ、お前の運命が弱いからだ……つっても信じちゃくれないだらうから

言わねーけどな。ユマ^{アイツ}姫が言うんだったら説得力もあるだろうが、俺みたいなオツサンが運命だなんだって言っても、ハッキリと気持ち悪い。

「いや、まあ、そう言やセーラは？」

「姐さんは……」

マールロウは泣きそうな顔で俯き、悔しそうに握りしめられた拳はプルプルと震えている。

……つまり？

「攫われたのか？」

「え？ いや、そうなんだけどさ。どうして姐さんの場合は死んだって聞かないのさ？」

……そりゃ、アイツの運命力は凶太いからな。

とは言え、最近は運命力と言うか、気配の濃さなんざ大してアテにならない気がして来ちまった。

「そんで被害は？」

「酷いよ、大勢死んだ。けどこの基地は密閉しちやえば霧は入らないからね、壊滅的って程じゃ無い」

「へえ、流石はって所か」

この基地も、元は古代遺跡を改修したんだっただか？ 秘密基地Ⅱシエルターって考え

なのか気密性が高い。

それこそ、核戦争でも想定してたんじゃないかってぐらいにな。

それが霧から守る力として有効だと判断して、レジスタンスの本拠地になっているらしいが、コイツが期待通りの力を発揮したらしい。

「じゃあ、なんでセーラは捕まってるんだ？」

「そりゃ、私が敵を引きつける！　って飛び出すんだもん……」

「はあー馬鹿かよ、いや馬鹿だったな」

「そんな言い方！　誰かが牽制しないと扉をこじ開けられて終わってたよ」

「チツ！　なにもセーラが出る必要はねーじゃねーか」

「そりゃ、そうだけどさ……」

まあ、誰かを犠牲にして選択はアイツには出来ないか……

「仕方ねえ、どうやって取り返すか、作戦ぐらいあるんだろう？」

俺はそう言つて少年の肩を叩くと、基地の入り口である丘の中腹、地下へのハッチへと歩を進める。帝国がわざわざセーラを人質に何を企む？　想像がつかない訳じゃない。ひよつとしたら俺にとっては渡りに船かも知れねえぞ？

だが、ズカズカと歩く俺に、マーロウ少年が待ったを掛けた。

「待って！　今はマズいんだ！」

「んだよ？ どうした？」

「それが、敵が置き手紙を残してき、そこに姐さんを攫った事と、そして兄貴が裏切つてこの場所まで兵士を手引きしたつて書いてあつたんだ」

「ハッ！ まさかそれ、信じてるのか？」

「俺は信じてないよ！ だけど……」

歯噛みする少年を見るに、信じてる奴も居るつて事か？ エルフつてのは存外馬鹿なのか？

俺が今まで何人帝国兵を斬り殺したか計算も出来ねーのかよ。

今更俺が裏切つた所で吊されるに決まつてるじゃねーか。

ガツカリだな、とため息をつく。

それと同時に、危険な気配を感じて俺は大きく仰け反つた。

——シュツ

今まで頭があつた場所を矢が通り過ぎる。魔法で強化もされていない普通の矢だ、当たつても死ななかつただろう。

「失せろ！ この裏切り者め！」

叫んだのは……爺だ、最近ジジイとばかり話してるから爺がゲシュタルト崩壊を起こしてるが、偉そうに子分を引き連れた、一番いけないジジイだ。えーと？

「誰だっけ？」

「ベルデグ卿、元老院の生き残りで、姐さんの悪口を言ってた」

「ああ、あの性悪爺さんね、アイツが俺が裏切り者って信じてるワケ？」

「うん、諸悪の根源だつて。言いふらしてるんだ」

「そっか、いやー、いつそ馬鹿が一人で済んだのは救いだね。エルフに絶望するところだった」

「だけどさ、皆気落ちしてて、信じる人も少なくなってるんだ」

「ふうん？ まあ任しとけ、説得してみせるさ」

「流石兄貴！ こんな絶望的な状況でも動じないんだね！」

「この程度、絶望でもなんでもねーよ」

「ワシを無視するでない!!」

老人の叫び声。同時にジジイの後ろに控えてた男から、今度は魔法がのった矢が放たれた。だが、この距離なら見切るのは容易い。

「よっ！ と、オイ、今のは殺す気だったよな？ 洒落にならねーぞ？」

俺は加速する直前の矢、それが一瞬停止した瞬間に踏み込んで、刀の一閃で叩き落とした。

失敗していたら死んでいたぞ？ 俺に失敗なんてあり得ねーが、殺す気は殺す気だ。

もう容赦しねーからな？

「ええ？ 最初の一矢も普通に殺す気だったと思うけど……」

少年のツツコミは無視！ 俺は今、爺さんと話してるんだよ！

「ふん、ノコノコ帰って来おつて、血祭りに上げてやる！」

「ハア……」

思わずため息出ちゃった。やつば会話とか無理。ノコノコ帰ってきた事 자체가、俺が裏切り者じゃない証拠って思えないのかね。

……いや？ 違うか？ なーるほどな、見えてきたぜ。

この爺さん、どうにも人間を見下す選民意識が強かった。そんな中、俺が好き勝手やるもんだからメチャメチャ嫌われてた自覚はある。

それで、俺をこのチャンスに追い出そうとしてやがるに違いない。しかし、今の俺が何を主張しても……

と、考えていたら、ハツチからまた一人ズルズルと不格好に這い出て来やがった。「いやあ、彼は犯人じゃないですよ」

呑気な声が掛かる。確か、植物学者のドネルホーンとか言ったか？ 白衣姿でボサボサ頭。

擁護は有り難いけどよお……大丈夫なのか？ 爺さんは顔を真っ赤に怒ってるぜ？

アレでも、一応は権力者なんだろ？

「貴様ア！ 這いつくばる者をかばうのか！ それとも貴様が裏切り者か！」

顔を赤くして叫ぶ爺さんに対して学者先生はドコまでも冷静、と言うか馬鹿にした様子で笑う。

「いえいえ、もし彼が私達を裏切るなら、とつくに我々は死んでいきますよ。保管している霧の悪魔を起動すれば良いだけでしよう？」

「何を言っている！ そんな事が許されるハズが無いだろう！」

爺さんが理屈にならない叫びを上げる。もはや妄想と現実をごっちゃにする態度だが、一方で学者先生の言葉は理詰めで頼りになるね。

そう、俺が各地で帝国から奪った霧の悪魔は破壊していない。この基地に保管しているのだ。

もし、俺がこの基地で霧の悪魔を起動したならば、バルサンを焚かれたゴキブリみたいにエルフは逃げる間もなく壊滅したに違いない。

ちなみに、霧の悪魔を破壊しなかった理由は単純。破壊する方法が無かったからだ。

下手に破壊したら、霧を破滅的にばらまくのはゼスリード平原で証明済み。その結果、魔獣をどんな風に刺激するかも解らず、密室で保管するしか無かったってワケ。

学者先生は、更に続ける。ジジイの言う事は既に全く聞いていない。

「帝国がセーラ様を攫つた目的は恐らく霧ギユルドスの悪魔の奪還でしょう？　霧ギユルドスの悪魔を奪つたのもタナカさんなので、彼が敵と言うのは理屈に合いません。言うなれば彼が一番、信頼できる人間なのです。そう、アナタよりもね」

先生様も流石に気が付いてたかよ、セーラを殺さず攫つた理由。

今までお互い捕虜なんて取つてないんだから、交換するべき相手が居ない。

それが突然捕虜なんて取るんだから、奴らはよつほど霧ギユルドスの悪魔が欲しいんだろうよ。ここまで理詰めで先生が言っているのに、ジジイはまだヒステリックに鳴きやがる。

「馬鹿な、ワシで無く這ホいつくばる者ズの肩を持つと言うのか！」

「そりやそうですよ、なにせアナタが裏切り者なのですからね」

ん？　今、なんでも無い様子で学者先生は言つたけど、突然どうした？　超展開だぞ

？

当然ジジイは半狂乱だ。

「ワシが？　なにを！　なにを！　言うに事欠いて！　何を言っている!!」

「何って、アナタが裏切り者だつて話ですよ。大体、どう考えたつてこんなのは敵の離間策でしょう？　まんまと乗つてしまう時点で害悪だ」

「なんだと！　どうしてそう言い切れる！　このまま這ホいつくばる者ズを野放しにすれば

！」

「ハアッ」

「いよいよ学者先生は老人の話をデケえたため息で遮つちまう。ま、俺もそろそろ茶番に飽きてきた。」

「つーか、自分の事だよ？ 俺だって話に加わりたい。」

「先生はアレだろ？ 俺がホントに裏切り者なら、どうして敵がわざわざ正体をバラすような事を手紙に書くのかって言いたいんだろ？」

「それもありませんが、秘匿されてきた基地に、よりによつてタナカさんが居ない時を狙つて襲撃があつた。コレが重要です、タナカさんが居ればこうもやられる事は無かつたでしょう」

学者先生の言葉に、色めき立ったジジイが割り込む。

「そうじゃ！ それこそが此奴が裏切り者の証拠じゃろうが！」

「つて言つてるけど先生はどう思つてるわけ？」

「私はそれこそ、それがこの老人の裏切りの証拠であろうと思つています」

「おい？ 随分と話が飛ぶじゃネーか」

「なんじゃと？ ワシが敵を引き込んでなんの得がある？ 下手をすればワシの命だつて危なかつたのだぞ！」

キョトンとした様子のジジイ。一切可愛くないね、馬鹿だし。むしろ苛立つ！

俺はこのジジイを反面教師に、訳知り顔で領く事にしまーす！

正直、俺も全く意味が解らんがな！

「なるほどな……そう言う事か」

思わせぶりなセリフまで言っちゃうもんね！

だって話について行けてないのがバレると恥ずかしいし。

「え？ どう言う事だよ兄貴？」

やめろ！ 少年！ 俺はそんな質問望んでない！

「気が付きましたか、我々よりも這ホいつくばる者の方が知性があるというのが皮肉なものです、今の現状も必然と言う事ですか……」

いいねえ！ 先生は本当に空気が読める。いやー頼もしい！ 俺の事は良いから、そのまま続けて。

「襲撃を受ける前日、基地に鳩が飛んで来たのを何人もの兵士が目撃しています、その鳩を受け取ったのはベルデグ卿、アナタですね？」

鳩？ 伝書鳩か！ それをこのジジイが？

「だから何だと言うのじゃ！ 情報収集はワシの務めじゃ！」

「鳩は基地の場所がバレる恐れがあるから危険と、禁じられていたハズ。それでもアナタは鳩を出し、そして返事が来た」

「ワシの鳩を目印に奴らが基地に辿り着いたと言いたいのか！ そんな事が這いつくばる者^スに出来るものか！」

「そうですかね？ 相手は魔獣ですら操るのですよ？ そうで無くても犬に匂いを辿らせれば簡単だ」

……確かに、帝国は猟犬を実戦投入している。鳩の匂いを辿らせるぐらい訳がないだろう。

なんなら手紙を入れた筒に強烈な匂いを付けたって良いんだからな。

「だとしても！ ワシがどうして這いつくばる者^スを手引きなんぞしなくちゃならないんじゃない？」

「アナタは帝国にこの基地を襲わせたかったのでは無い。あなたが襲わせたかったのは……タナカさんでしょう？」

「なっ！」

爺さんが絶句する。

あーなるほどな。流石に俺にも解ったぜ。先生答え合わせ頼みまーす！

「アナタはタナカさんが、いや、這いつくばる者^スが組織を我が物顔でうろつくのが耐えられなかった。だから彼が都を偵察に行くと言うので、その情報を帝国に流すよう、王都の知り合いに頼んだ。違いますか？」

「ぐ、ぐう……」

出たー!!　ぐうの音!　初めて聞きました!

まさか異世界まで来てリアルにぐうって聞けるとはね。

「だが、帝国はタナカさんを襲わなかった。なぜか?」

「そうじゃ、な、何故?」

何故?　じゃねーよ!　爺さん、語るに落ちすぎだろ……死んでくれ!

「たった一人に軍隊を差し向けたとしても、即座に逃げるに違いない上、ひよっとしたら手紙自体が罫かも知れない。だったら鳩を追って我々の基地を襲った方が得策に決まっているでしょう?」

「そ、そんな馬鹿な……」

ガツクリとうなだれるジジイ。コイツ!　つまり自分がしでかした事に気が付いてすら居なかったのか。

馬鹿な味方が最大の敵とは言ったモノだが、あんまり過ぎて笑うね。

苛立っているのは俺だけじゃなかったのか、無表情だった先生すら不愉快だと眉間に皺を作る。

いや、先生の怒りは俺の想像を遙かに超えていたらしい。

言葉の端々から殺意が溢れ出す。

「私は自分の種族に、貴い生まれである事に、選ばれた学士である事にすら、誇りを持つた事など一度も無い。なぜならどんな所にでもアナタのような馬鹿は紛れ込むからです、そんな奴らと同じにされる事が苦痛ですらあった。そう……無能は死ぬべきだ」

まさか？ 先生は担いでいた弓を引き絞り、老人へ、いや、元老院のベルデグ卿へと構えた。

完全に殺る気のだ。俺には解る。

「な、な、な！ 違う！ ワシはそんなつもりじゃ、こんな事になるなぞ、知らなかった！」

「知らなかったから何だと？ 無能は罪。せめてアナタが本当に裏切るつもりならまだ良かった。良かれと思って全てを台無しにする。これほど苛立つ事は無い」

流石に止めるべき？ いやー俺もマジで苛立つから殺してくれると助かる。オロオロしている少年も内心は同じ気持ちじゃ無いか？ 今回はエルフの仲間が大勢死んでるみたいだしな。

現に、老人を守るハズの従者ですら、気が付けば距離を開けている。

そうこうしている内に先生が呪文を唱え終わる。コレは……魔法の矢だ。

「死ね！」

——ズパアアアア

うわっ！ グロツ！

「で、マールロウさん。腐れジジイの脳みそがバーンって景気よくぶっ飛んじやつたんだけど、これ、良いんですか？」

「え？ 兄貴なんで急に俺の名前呼ぶの？ いや？ 無理ですよこんなの、誰も責任取れないですよ」

「いやー、でも、俺は先生を責める気はしないんだ。先生がやらないなら俺がバシユつとやってたと思うんですよ」

「えー？ いや、俺も気持ちと同じですけど——」

「ほらね？ じゃあ君が、いや、マールロウ少尉殿が責任をとるべきだ。頑張れ！」

「え？ いや？ は？」

少年のリアクション良いね。目が泳ぎすぎて飛び立ちそうだわ。

もつと見ていたかったが先生からフォローが入る。

「いえ、私の責任で問題ありません。私はセーラ様とベルデグ卿の次ぐらいには序列が上ですから、戦時下の緊急措置として処理させて貰います」

「お、センセつてば案外偉いのな。この調子でセーラの奪還作戦も頼むぜ？」

無茶ぶりを言つたつもりだったが、不敵に笑うのが先生だ。いや、これマジで頼りになるんじゃないか？

「ふつ、大した案はありませんよ。ただ、アナタは以前、魔獣はともかく同じ這ホいつくばる者スが幾ら集まっても敵ではないと言っていましたね？」

「ああ、魔力に当てられた人間の不調は目に見える程だ。霧の中じゃ少しはマシだが、全く動けないエルフよりマシって位で決して良くはない。その点、俺はどっちでも問題ねえからな。加えて装備も違うんだから負けようがねえよ」

「ふむ、ならば行けるかも知れません。アナタばかりが危険な作戦になりますが……」
「へっ、考える事は一緒ってワケか」

「またまた俺は訳知り顔で笑って見せたが、コレで俺と全然違うアイデアだったらメツチャ恥ずかしいんだが？」

「兄貴？ どう言う事なんですか？」

「止めろ！ 少年！ 俺に聞くんじゃない！」

「返して差し上げるんですよ、霧ギョルドスの悪魔を」

「すかさず先生の方オロー、お？ やっぱ、俺の考えと一緒にか？」

「そうさ、何なら俺達の健康値分、利子を付けたって良い」

「なるほど、ソコまでは考えて居ませんでした。存外アナタは頭が回るようだ」

「いやあ、学者先生にそう言って貰えると自信が出るね」

「いえいえ私など先達の天才に比べれば大した事ではないですよ」

「フツ、ハハハハ」

「クツクツクツ」

「いや、二人で笑い合っていないで教えて下さいよ！」

止めろ！ マーロウ少年！ 俺は半分ぐらい笑って誤魔化してるだけだ！

トロイの田中

「思ってた以上にクソみたいな作戦だった！」

完ツ全に騙された！ 狭い！ 苦しい！ 暗い！

学者先生の立てた作戦は、言うならばトロイの木馬。霧ギユルドスの悪魔の中に俺が隠れると言

うクソ塗まみれな作戦だったのだ。

霧ギユルドスの悪魔の内の一つ、パラセル村で奪った奴に関しては既に中身の霧が空っぽだった。

そのため、研究用にと分解していたのだが、その中身を放り出して代わりに俺が中に入って潜入するって寸法。

いや、俺の寸法の方を考えてねーだろ？ マジでクソだね。狭過ぎるんだが？

「おい、それはそつちに運べ」

「ハイ！」

外からはうつつすらとそんな声が聞こえてくる。俺が死にそうな以外、作戦は概ね順調だ。

帝国との折衝には学者先生自らが引き受けてくれたし、そう下手は打たないだろう。

「クソツ 限界だぞ?」

問題は真面目に俺の体だ。

やってみれば解ると思うが、狭いところに押し込められてしまうと、体はなかなか本調子に戻らない。

この手の潜入は夜を待つてから外に出るのがセオリーだが、今回ばかりは無理。侵入すれば良いってワケじゃ無いからな。適当な所で抜けさせて貰うぜ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「よっ!」

移動が終わるや俺は勢いよく霧ギユルドスの悪魔の中から飛び出した。国民的アニメで巨大なフルーツからパカって出てくる感じ? さーて来週の田中さんはー?

「は? え?」

早速発見されちゃった。どうやら霧ギユルドスの悪魔は台座の上らしく、呆然と見上げる兵士が眼下に見える。

「よっす、こんちわ、そんでサヨナラ」

飛び出すと同時に、俺は一刀で兵士の首を刎ねる。

そう、霧ギユルドスの悪魔の中が狭かったのはこの刀がまあ、嵩張ったのよ。だがコレばかりは外せねえ。

発見されたと言っても、実のトコロ心配で敵の位置は解つてた、コレが俺じゃ無かつたらこう素早くは行かないだろう。

目当ての場所に着いた以上、検査なんざされたら即バレる。俺の体を抜きにしても、隠れるのはここらが潮時だった。

心配なのは人質のセーラや学者先生が逃げる時間があるかどうかだが……

「ま、時間が無いのは先生の交渉術にお任せしますかね」

他人の心配ばかりをしていられない、ココからが重要なのだ。

「で、ここから先は俺のアイデア通りなワケだけど……」

見渡せば暗い倉庫の中。俺が持ってきた五個だけでなく、合計で十以上の黒くて丸い巨大な球体が並んでいる。全てが霧ギョルドスの悪魔だ。

「さーて、派手に行きますか」

俺は凝り固まった体をほぐすために、コキコキと首を鳴らした。

狭い所に押し込められていた事だけが原因じゃ無い。コレからの大仕事への緊張に、流石の俺もヒリつく程のスリルを感じていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ここはエルフの王宮の一室。かつては侍女達の部屋で、今は帝国兵士達の待機室となっていた。

「ホイットと、俺の勝ち」

机を囲う兵士達。その一人が持っていたカードを得意気に突きつける。

「クツッ、また負けた」

「一人勝ちかよ」

「へへっ、お前らセンスが無いんだよ」

カードゲームに興じる彼らは、本来警備をしている時間。

エルフの王都を守る帝国兵の士気は決して高くなかった。

彼らも大森林の空気が体に悪い事は肌で感じ始めている。そうで無くてもエルフが開発した健康値計はこの家庭にも有るありふれたもので、兵士達でも触れる機会が多い。

部隊の中では積極的に隊員の健康管理に利用している所もあるほどだ。バレない方がどうかしている。

そうなると、どうしたって大森林での勤務自体が気乗りしないモノになってしまう。

なにせ、有事以外はなるべく室内に居る事を求められるのだ。せつかく貴重な霧で魔力の濃度を低く調整しているのに、勝手に外に出て体調を崩されては堪らない。

だが、健康な若い男子達に部屋で待機しろと言うのは拷問に等しかった。

更に言えば、侵略戦争だと言うのに、略奪しようにもエルフの貨幣は金では無く魔法

的な処理をした金属板。

他にお宝と言えば、使い方の解らぬ便利な魔道具が精々と言うのが兵士の不満を募らせていた。

丁度、彼らが地球人の家を襲撃したところを想像すれば近い。貨幣は金ではないし、お宝は車とか家電製品。使い方が解らぬとなればゴミでしか無いのだ。

「はあ、つまんねえな」

「気を抜くなつて、今、森に棲む者達と捕虜の交換中だつてよ」

「へえー、誰か捕虜に取られてた訳？」

「いや、この前捕まえた森に棲む者の女と霧の機械で交換らしいぜ？」

「ふーん」

誰一人として興味が無い。

それもその筈、ここ最近では魔獣を操る見慣れない奴らが軍の中で幅を利かせている。魔獣は一般の兵では為し得ない力仕事もこなすのだ。

加えて言えば、森に棲む者が魔獣を操っていると聞いていたのに実際に魔獣を操っているのは帝国。

それに他種族とは言え、吐き気をもよおす程の虐殺に参加させられたとあれば、正義について考えてしまう。

彼らは肉体的にも精神的にも参つてしまい、この戦争の意義が感じられなくなつて
た。

だが、そんな彼らでも自分達の危険となれば話は別だ。

「火事だあ！」

待機室の外から誰かの大声が届く。

「なんだと？」

「どこからだ？」

出火場所を見誤れば消火は勿論、脱出もままならない。皆が一斉に窓から首を突き出
して外の様子を窺つた。

「西棟から煙が出てやがる」

「あの辺はお偉い学者サマが実験してる場所じゃ無かつたか？」

「奴ら下手こきやがった」

他人のミスは話のタネだ。それが鼻持ちならないホワイトカラーのエリートとなれ
ば尚更。

しかし、西棟から吹き出る煙の様子は尋常では無かつた。西棟が既に見えなくなる
程。

「いや、アレは煙じゃ無い！ 霧だ！ 霧が溢れ出してやがる！」

煙より人工の霧は重く、地を這うように広がった。まして急造の壁で囲まれた王宮の中では霧は逃げ場が無く、一瞬の内に王宮を覆い尽くしていく。

兵士達が居る待機所として例外では無い。部屋の端から端まで見渡す事も難しくなる。

「チツ、どうなつてやがるんだ？」

「霧は貴重なんじゃなかったか？ 大丈夫なのかよ」

「これほど濃く霧を焚くなんて無かったよな？ 視界が利かねえぞ？」

「クソツ気持ち悪いなあ」

天然の霧ではあり得ない程に曇った視界。加えて普段の濃い魔力とのギャップに体調を崩すものが続出した。

そこに悪魔がやって来る。ドオーンと轟音と共に木製の扉が吹き飛んだ。

「よおー！ 邪魔するぜー！」

扉を蹴破つたのは大柄な一人の男。エルフの防具で全身を固めている。

言うまでも無く、田中だ。

彼は全ての霧ギョルドスの悪魔を全開で稼働させ、霧を吹き出させた。

コレこそが彼が思いついた作戦。

霧を出すか出さないかの選択肢が相手側にあるのが厄介なら、いつそ自分が霧を出してしまえば良い。

壁に囲まれた王宮で稼働させれば、霧は長く留まり容易には取り除けない。エルフの弓矢対策、そして恐らくは霧を節約する為に帝国が作った城壁を逆手に取った格好だ。

田中にとって想定外だったのは潜入方法。

霧ギョルドスの悪魔を返却する使者として王宮に乗り込んで、その場で発動させるつもりでいた。

だが、田中の様な危険人物を王宮まで通す訳がない、と学者であるドネルホーンに笑われれば、散々暴れて来た田中としても納得せざるを得なかった。

そして狭苦しい所に押し込められた鬱憤を晴らすかの様に、暴れ回る最中だった。

「何者だ？」

「外はどうなっている？」

霧さえ無ければ、入ってきた男が黒ずくめの上、返り血まみれの怪しい風体な事は一目瞭然だったハズ。だが、田中が蹴破った扉からはいつそう濃い霧が入り込み、もはや隣の男の人相すら判別がつかない有り様だったのだ。

「みんな落ち着いて聞いてくれ。森ザに棲バむ者の襲撃だ」

田中は堂々とそんな事をのたまう。

「どう言う事だ？」

当然、兵士達は突然の事態について行けず、説明を求める。田中はそれに対し立て板

に水、気負いも無く言葉を重ねる。

「どうもこうも、霧ギョルドスの悪魔は奴らの天敵。だから狙われ、破壊された。霧が一斉に溢れ出している。この機に奴らは仕掛けてくるぞ！」

「どうすりや良い？」

「逆に打って出る、裏山に潜んだ敵をあぶり出すんだ」

「よっしゃー！ 行くぞー！」

「おおー！」

部屋での待機が続き、皆が暴れ回りたくて仕方が無かった。田中はソコを巧みに煽つた。

実は同じ事をしたのは既に三部屋目。

気配が濃い部屋を回って、適当な事を言って追い出していた。

田中にとって部屋の全員を斬って伏せる事は容易い。だが、弱い一般兵を斬る事がい加減面倒になっていたのだ。

「皆は準備を整えて東門に集合してくれ。私はこの事を上に報告する。ところでクロミーネ様は天守に居るのか？」

田中はどきどきに紛れて情報を聞き出すべく、質問を返す。

「いや、魔女様は留守だ。ソルン様は居ると思うが……」

「そうか、では後は頼む」

そう言つて田中は気安く肩すら叩くと、待機室を後に……しようとした。

「おっと、勝手をして貰つては困る」

出て行こうとした田中を、扉の外で待ち受けていた男達が居た。

揃つて田中と同じ、エルフの戦士が身に付けるカーボン系の防具を着けている。

彼らは帝国の精鋭部隊。エルフの戦士から奪つた貴重な鎧を身につけるだけの立場にあつた。

そう、見ず知らずの田中が偉そうに命令を言えたのも、この鎧が精鋭の証となつていたから。それが今、本物に見つかった。

「随分と好き勝手暴れてくれたようだな」

精鋭部隊は抜き身の剣を突きつけ田中を部屋の中へと押し戻す。ようやく様子がおかしいと、周りの兵士もザワつき出した。

「そんなカリカリするなよ。カルシウムって知ってるか？」

一方で田中は柄に手も掛けず、ニヤニヤと笑っている。毒気を抜かれる態度だが、精鋭部隊は流石に油断が無かつた。

それを見て取つた田中は、今度は大げさに目線を外し肩をすくめる。

「——シッ！」

ふざけた態度で呼吸を乱してからの、突然の一閃。田中の得意技だが今度ばかりは読まれていた。

ギインと乾いた軽い音が響く。田中の剣筋に割り込んだのは分厚いカーボン製のエルフの小手。流石は精鋭部隊、僅かに腕を上げるだけで首筋を狙った一閃を防いでみせ——？

「俺達の防具とて、森に棲む者の特別製。装備が同じならばたかが傭兵一人に好きにはさ——」

得意気な口上の途中。ズルリと顔面がずり落ちる。

同時にゴトリと落ちた小手は、鋭い断面を晒していた。

一瞬の静寂、そして狂乱と怒号が渦巻いた。

防ぐ？ 防げるモノでは無い！

鎧の原料は大牙猪《ザルギルゴール》の毛皮。その毛皮を易々と切り裂くのが田中の刀なのだから、斬れない道理はドコにも無いのだ。

「殺せ！ 取り囲め」

「うわっ！ やめっ、俺じゃ無い！」

室内は霧にまみれ、碌に視界が利かない有り様だ。そこに精鋭部隊が田中と同じ鎧を着ている事が悪い方へと働く。

ぼんやりとしたシルエットを頼りに斬りかかれば、相手が精鋭部隊だったと言う事も起こってしまう。

田中はまれに見る巨軀だが、精鋭部隊も当然体格は良い。そして霧の中に浮かび上がる影は、光の加減で大きく見える事もある。

そんな中で、田中だけは斬る相手を迷う事は無い、理由は簡単。全てが敵だからだ。そして、霧で獲物を見失う事もまた無い。気配もそうだが、彼は息づかいを読む事も長けている。

一方的な殺戮が始まった。

霧に閉ざされた部屋の中。悲鳴と怒号、そして血潮が飛び、それらが過ぎ去ると恐ろしい程の静寂が訪れた。

結局助かったのは、先程カードで馬鹿勝ちしていた強運の兵士ただ一人。

「あつ、あ……」

彼は部屋の隅で腰を抜かしていた。

田中が作動させた霧の悪魔はいまだに霧を吐き出し続けていたが、一時的にこの部屋の霧だけが晴れていた。

部屋を塗りつぶす程の血飛沫が、一時的に霧をかき消していたのだ。

だが、霧が晴れた部屋でその兵士が見た光景は、大量の首無し死体が折り重なる、悪夢のような光景だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ、しんど」
血まみれになった田中は王宮を歩く。模型で地理を確認したが実際に歩くと、また印象が異なる。

曲がりくねった通路が多く、緩やかに上がったたり下がったりの繰り返し、現在地の把握が困難な作りになっていた。

かなり乱暴なショートカットを繰り返し、ようやく中枢部まで来たはずだった。

「まあココだよな」

通路の影から顔を出す。珍しく真っ直ぐな通路。その先の衝立こそが問題だった。

兵士が隠れているのが気配で解る、それも、多分だが鉄砲隊だ。

防犯上の理由で曲がりくねった通路が多い。それは侵入者である田中にとって悪い事だけではない。なにしろ飛び道具に困らなくて済むからだ。

だが、謁見の間へ至る通路は見晴らしの良い直線通路。誰だつてココに鉄砲隊を配置するだろう。

「コイツの出番か」

田中は懐をまさぐる。そこから取り出したのは何の変哲もない革袋。この世界では水筒代わりに広く使われている物だ。

だが、今回入っているのは水ではない。

——火薬だ。

「ホイよー！」

同じく火薬を練り込んだ紐に着火し、投げつける。

衝立の向こうに落下した革袋は即座に破滅的な爆発を巻き起こす。

——ドオオオン

思いの他大きな音となった原因は、鉄砲隊が持っていた火薬に引火したから。

田中が持ってきた火薬も、禁書庫で倒した鉄砲隊から回収したものだった。

爆発と同時に滑り込んで斬りかかるつもりだった田中は拍子抜け。斬るべき相手は

既に残っていないかった。

「さて、最大の難関はクリア、後は消化試合かね？」

どんな精鋭部隊だろうが敵じゃ無い。そんな余裕から来る独り言だったが、思いがけ

ず返事があった。

「それでも無いさ、『俺』が居る」

扉から現れたのは一人の男。実はこの男も衝立の向こうで待ち構えていた一人。

だが、放られた革袋の正体を瞬時に見破り、扉の向こうへと難を逃れた。

味方を見捨てた判断は褒められたモノでは無いかも知れないが、みすみす共倒れするよりも好判断だったと言えるだろう。

だが、たつた一人現れて何をすると言うのか？

「それで？ なにか面白い芸でも見せてくれるのか？」

引っ込んでろ、と田中は挑発したつもりだったのだが……

「ああ、とつておきが有る。見物料はお前の首で良い」

用意は有った。その自信に田中とて警戒を強める。

だが、対峙する男は、その警戒の上から堂々と不意を突いて見せた。

「グツ」

田中は思わず呻き声を上げる。

脛すねを斬られた。浅かったのはエルフの防具のお陰。まだ斬り合いの間合いではない、

そして剣士で有る田中が間合いを違える筈も無い。

「厄介な玩具を持つてきたな」

「面白いだろう？ コレが使えるのは俺だけだ」

男の手元からはワイヤーが伸びていた。その先には小ぶりの短剣が繋がれている。

男の指の動きに反応するようにワイヤーは揺れ、複雑な動きを見せる。ただのワイ

ヤーではあり得ない動きだ。

「魔道具か？」

「ご名答。その名も自在金腕ルー・デルオン。これも古代遺跡で発掘された奴だ、ただの玩具と思われていたが、誰よりも器用な俺には使えた訳だ」

器用と聞いて、田中は小器用な友人を思い出す。と、今は目の前の敵に集中するべきだ。

相手はただ者じゃない、強者特有の雰囲気がある。

「へえ……語るじゃねえか。アンタ名前は？」

「俺か？ 俺は帝国情報部、第一特務部隊のフェノムだ。田中よ、マルムークが世話になつたらしいな？」

「……ん？」

「え？」

田中は会話をしながら、自らのエルフの防具ごと脛を切り裂いたカラクリを考えるつもりだった。しかし、会話では相手が上手か？ 惑わす様な事を言う。田中の全く知らない名前が出て来た。

「おい？ お前がゼスリード平原で戦った奴らだ、忘れたとは言わせんぞ。隊長のマルムークとは付き合いが長くてな、礼がしたかった」

「……ああ、んな事も有ったか？」

いや、惑わすつもりは無かったようだ。つい数ヶ月前の事だったが、田中はすっかり忘れていた。

この男、人の名前は特に覚えられない性質たちであった。

だが、フェノムにとって、田中は友人の仇となる名前だ。ここ数日この機会を待ちわびていた。

「ふざけてくれるじゃないか、舐めた口をきけないようにしてやる」

言葉と共に左手で引き抜くのは刀身がうねる異様な剣だった。蛇行剣とも呼ばれるこの剣は、この世界では毒を仕込まれた卑怯者の剣、それこそ蛇蝎のように嫌われている。

だが、このフェノムは敢えてこの形に拘る。実の所、毒は塗っておらず、フェノムの剣術にフィットしていると言うのが理由だ。

特徴的な形状は人目を惹きつけ、ユラユラとした動きは虚実が入り交じり捉えどころが無い。

田中にとっては初めて見る剣だが、想像以上に厄介だった。

「チツ」

舌打ちと同時に、バックステップで慌てて距離を取る。蛇行剣に目を取られた瞬間、視

野外から短剣が飛んで来たのだ。しかも今度は首筋を狙っていた。

当たれば死ぬ。理屈抜き、直感でそれが解った。エルフの防具が役に立たない。

「魔剣か？」

「そうさ、この自在金腕ルー・デルオンで魔剣を使えるのは俺だけだ」

フェノムは笑う。自在金腕ルー・デルオンは想像以上に厄介な魔道具だった。

そして魔剣とは魔力で刀身を高速振動させ切り裂く、エルフの強力な魔道具だ。

そう、魔道具。どちらも魔道具に違いない。だのになぜ霧の中でも使えるのか？

「爆風で霧が散っちゃまったか？」

「さあ？ どうかな？」

フェノムは左手で蛇行剣を振り、幻惑する。

蛇行剣はフェイントだけでなく防御にも使える。相手の剣筋をずらし、凹みで引っ掛

けるのだ。そして、自在金腕ルー・デルオンの先の魔剣で一撃を狙う。

一方で田中は覚悟を決めてどっしりと構えた。脇構え、刀身を隠して自らの半身を曝

け出す独特の構えで、今回は更に腰を落とし、低く構えている。

今度はフェノムにとって未知の構えだったが、何のつもりだ？ とは聞かない。聞く

迄も無く一刀で決める気迫が見て取れた。

「ハッ！」

フェノムが仕掛けた。今度は蛇行剣でのフェイント無し。自在金腕ルー・デル・オンで初撃と同じ、脛を狙う。そして、動きが止まったところ、フェイントに見せ掛けた蛇行剣こそが本命。一度見せた動きではあるが、コレこそがフェノム必殺の形であった。

なにせ、剣士にとって地面スレスレから脛を狙う攻撃は型に無く、対応は酷く難しい。だが、田中はそれを予期した故に、低い構えを取っていた。

「ハッ！」

超低空の下段攻撃を、その更に下からすくい上げる様に跳ね上げた。

そして、自在金腕ルー・デル・オンは体重が載らないため押さえが利かない。だからこそ力が要らない魔剣なのだ。制御を失った魔剣は、跳ね上げられたままに飛んでいく。

「グッ！」

呻く事になったのはフェノム。弾き上げられた魔剣が頭を掠めたのだ。

魔力で強化された刃は当然自らも傷つける。一歩間違えば終わっていた。

こんなのは偶然と思うのが普通だが、違う。とフェノムは気が付いた。

今ならあの構えの意味も解る。下段が来る事も、フェイントも読み切っていた。

(何故だ？ 動きがこうも読まれるとは……)

解せないフェノムだが、理由は簡単。

田中は剣士として一番嫌な攻撃を想定し、それがピタリと嵌まっていた。

(かなりの使い手だ。それも悪辣。だが、それ故に読める)

戦法から相手は真つ当な剣士では無い。特務部隊と言った、つまり裏の世界の殺し屋だ。こんな表舞台で斬り合う様な人間ではなく、日陰こそが主戦場の筈。

それが、たまたま良い玩具を手に入れて、復讐できるとヤンチャをしてるに過ぎない。本職の剣士として、決して負けるわけには行かない手合いであった。

「次で終わりにしようぜ？　玩具で遊ぶ子供に構ってられねえんだ」
「そうだな、俺もそろそろお前の顔に見飽きた所だ」

田中の誘いにフェノムは乗った。

実は、フェノムが魔道具を使える理由は火薬と魔石を混ぜ込んだ魔爆と言う兵器にあった。

火薬と魔石の純粹結晶を混ぜ合わせ、爆発で広範囲にまき散らす。

魔石の魔力で霧を相殺すると、短時間だが霧の中でも魔法が使える空間が出来上がる。

鉄砲隊で終わらせるつもりでフェノムだったが、万が一を考えて用意していた。

それが田中の投げ込んだ爆弾に引火してしまっていたのだ、そして効果時間を考えればそろそろ決着を付ける必要がある。

少々の焦り、それだけにまたも先手はフェノム。

「死ぬー！」

再びの脛狙い。そして今回は同時に、顔面を目がけて蛇行剣を投げつける。足と頭、上下の同時攻撃。

だが、田中は首を傾げて蛇行剣を躲し、自在金腕ルーデルオンの脛攻撃は足を上げてスカす。不格好な回避だが、問題ない。最早相手に武器は無く、隙だらけ。

自在金腕ルーデルオンは力が無い故に、一度振り抜くと剣先は流れ。制御が出来ない欠点がある事を田中は既に見切っていた。

その一瞬があれば、距離を詰めフェノムを両断する事は容易い。

「シッー！」

呼吸を吐き出し、爆発的な加速で田中はフェノムへと迫る。

対するフェノムは蛇行剣を投げ放った左手を後ろに回した。何かを取り出す構えで有った。

「喰らえー！」

そうして突き出された左手。

——そこには何も握られていなかった。

虚を突くだけの突飛な行動？

取り出す素振りにはそんな狙いも有ったが、それだけでは無い。

確かに何も握つては無いが、結びつけられていたのは初めから。

指に巻き付いたか細い金属線の先。田中の背後、投げつけた筈の蛇行剣が鋭い切っ先を向けて田中の首筋を狙う。

自在金腕ルーデルオンはひとつ。そう思わせる事こそがフェイク。

フェノムは初めから、両手に自在金腕ルーデルオンを嵌めていた。

見せつけた何も無い左手に虚を突かれ、田中が停止する一瞬、背後から首筋を貫く。

——そのハズだった。

しかし田中は伏せる。いや、伏せると言うより、躓いて前に倒れたとしか見えぬ程の勢い。

だが無様に地面とキスする直前、勢いと体重を左手一本で支える。それでも体幹が小揺るぎもしない恐るべき膂力。

「お返しだ！」

そこから右腕一本で振り抜く無茶な斬撃。

それでもだ！ それでも、田中の刀は無類の威力を發揮し——

「グアアアアアアア！」

相手の脛を切り裂いた。

と、その直後。田中の首筋を後ろから狙っていた蛇行剣は、吸い込まれるようにフェ

ノムの胸元に向かう。

「あ?」

呆然と自分の胸から生えた蛇行剣の柄を見つめるフェノム。

呻き声も一瞬、ドサリと倒れ伏す。

即死だった。

「プツ! 手こずつちまつたな」

田中は立ち上がると、すりむいた手のひらに唾を吹きかける。

フェノムは最後まで卑怯に徹した男で有った。それ故に、狙いは読めたし。こちらも正々堂々? 剣士らしからぬ邪道な剣術で倒すと決めていた。

「悪辣さが足りねえよ、アイツに比べればな」

思い出すのはゲームの達人であった友人だ。最もやられて嫌な事、更にその上を行くのが木村という人間であった。

「終わつたら久しぶりに会いに行かなきゃな、アイツまで見た目が変わつちまつて無いと良いが」

既に難所は越えたつもりの中だが、まだココからが本番であった。

いよいよ敵が待ち受ける謁見の間への扉へ手を掛けた。

モンスターハウス

俺は覚悟を決めて、重厚な大扉を押し開けた。

謁見の間。

権威の頂点にしてその象徴ともなると、国は違えど間取りつーのは似るもんだ。

天井は高く、長い部屋突き当たり、一段高い所に玉座が設えてある。

エルフの国ならではの変わったトコロと言えば、採光の為に大きく作られた天窓だろうか？

計算され尽くしたであろう幻想的な日差しが、壁や柱の緻密な装飾を引き立てている。

なるほど、素晴らしい場所だ。だが頂けないのが床の汚れ。謁見の間の床は砂まみれだった。ブーツで踏みしめればジャリッジャリッと音がする。

「まあ……砂じゃねえよな」

肌にチリリと刺さる様な感覚がある。目に見えないナニかが俺の健康値を傷つけている。

「まさか？ 魔石を砕いてばらまいてるのか！」

ココに来て霧の無効化方法が解った。思えばゼスリード平原で俺の魔石袋の中の魔道具は力を失っていたいなかった。

そうなりやすさの戦いのタネも同じだろう。フェノムは当然の様に魔道具を使っていた。

こんな方法が有ったとは……いや、言うてもこれだけの魔石をばらまくのは余りにお大臣。幾ら掛かるか知れたモノじゃ無い。

いやいや、戦術として使えるかどうか考えるのは俺の仕事じゃない。

今、俺が考えなきや行けないのは目の前の状況だ。何故、奴らは魔石を撒いた？

「まあ、そうだよな」

謁見の間には幾つか裏口が存在する。ユマ姫だつてそこを使つて脱出したとは聞いていた。

そこから出るわ出るわ、三匹も！

四つ目の虎、お馴染みとなった巨大な蜘蛛、まんま恐竜じゃねーか！ ラプトル。

全てが魔獣だ。いや、俺に魔獣と普通の動物の違いなんざ付かねーけどな。

「大歓迎だな。幾ら何でも準備が良過ぎるじゃねーか！」

思わず愚痴をこぼすのもしゃーなしだろう。

ンだよコレは！ 違和感しかねえよ。まるで俺が霧を撒く事が解っていたみたい

じゃねーか!

返事を期待しない独り言だったが、思いがけず返事があった。

「買いかぶりだよ、交渉が決裂して君が攻め込んで来る可能性を考慮してただけさ、コは普段から霧を薄く撒いているからね」

玉座の裏から姿を現した男。銀髪に中性的な顔立ちは可愛らしく、軍服だつてゴテゴテと手が入つてコスプレみたいに見える。

いや、実際にコスプレ感覚なんだろうな。俺はコイツに会つた事がある、確か黒峰の屋敷に行つた時だ。黒峰ヤツのお気に入りと思えばヘンテコな衣装も納得だ。

「悪いな、会つた事は覚えてるが名前を忘れちまつた」

「ソルンだよ、名乗るのは初めてだから安心して欲しい」

「なるほど、お返しにコッチも名乗る必要があるかよ?」

尋ねながらも俺はじりじりと後退する。人間相手ならどれだけ囲まれようが問題ないが魔獣相手は流石にマズイ。

「知つてるよ、タナカさん。忘れた事も無い。僕はずっと君を殺したかつた」

「照れるじゃねえか」

軽口を言いながらも考える。ソルンつてのは兵士から聞いた責任者の名前とも一致する。

だが、オカシイだろう？

スフィールでも今回の遠征は話題になっていたが、こんな怪しい奴が総大将のハズが無い。責任者を出せよ！

「わざわざ来てやったのに、主役のテムザン大將軍が留守なのはガツカリだな」

兵士に聞いても、その姿を誰も見ていなかった。名の知れた將軍を討ち取るのが俺の役割と自負していたのだが……

「ああ、あんなのは名前だけだよ。あんな老人じゃ大森林の魔力に耐えられない」

「そりゃそうか……」

肩をすくめ戯けて見せるが、俺は内心ガツクリ来ていた。

それじゃあ、この戦争を終わらせる方法が無えじゃねーか！

歯噛みする俺に、哀れむようにソルンは言った。

「安心して良いよ。僕が死ねば帝国は撤退する、その程度には重要人物のつもりさ。それに欲しいモノはあらかじめ手に入った」

「そりゃーありがてえな」

なるほど、技術や魔石の略奪は既に終わったと言う事らしい。霧が有限である以上、何時までも占領を続けられるワケが無い事は解っちゃいたからな。

だが気になるのは、ソルンは言葉の最後、付け足す様に

——今はまだ、手が出せない事も解ったしね。

小声でそんな事も呟いたのだ。

意味が解らねえが、特に聞かせる気が無かったのだろう。なんせ俺だから聞こえた程度の声量だ。

忘れるワケには行かないが、とは言え意味をじっくり考える余裕はない。

言葉の通りなら、この優男を一人斬るだけで済むと言うがそんな事があり得るか？
だが嘘は感じない。自分の命を餌にしても俺を逃がしたくないと見た。

俺が帝国に与えた被害は相当なモンだが、それ以上に何か恨みを買ったかね？

「おしゃべりはここまでにしようか、見せておくれよ。剣一本で魔獣を倒す腕前を」
「良いぜえ！　ちよーつと地味だが我慢しろよ？」

自信満々な態度、それに反して言葉と同時に俺は反転。一気に入り口へと駆け戻る。

そうだ、俺は逃げた！

相手が逃がしたく無いと言うのなら、勿論逃げるに決まっている！

「は？　……逃げがすな！　追え！」

虚を突かれたソルンの反応が遅れる。その隙に俺は入り口の扉を引き開き、謁見の間の外へと滑り出る。

そう！　引き開いたのだ。この謁見の間の扉は内開き！

立て籠もるのに都合が良いからだろう、しかしこの場合はどうだ？ 操られているとは言え相手は魔獣だ、扉を引いて開くと言う知能はあるのかね？

——ドンツ！ ガンツ！

答えはこの音。ただ引くだけの扉を奴らは開ける事が出来ない。

しかし、俺はこのまま魔獣が扉をぶち破るのを待つつもりは無い。

「ヨッス！ 元氣？」

廊下側から片方の扉をちよいと開ける。途端にガリツつと長い脚が割り込んできた。

大土蜘蛛ザルアブキユリ、お馴染みになった蜘蛛の魔物がトツバッター。

勢いよく扉をこじ開けた蜘蛛だが、廊下に顔を出した途端、ピタリと一瞬動きが止まる。

金属質の四つの大きな眼がキラリと反射して、間近で見ると中々綺麗だ。

——シュルン！

口に出すならそんな音になるか？ それだけで魔獣は死体になった。

硬質な外殻を切り裂くとギインと高い金属音がするものだが、そんな音すら無しに刃が通った。我ながら会心の一刀。

大土蜘蛛ザルアブキユリはあつという間にバラバラに分解される。

なにせ、魔力たっぷりの謁見の間から一転。廊下側コッチがわは魔力を掻き消す霧に塗れてい

る。

その落差に魔獣と言えどもギョツとして動きを止める。その瞬間に斬りつけるなら、巻き藁を斬るのと変わらない。

「次の方どうぞ〜」

蜘蛛の死体が引つかかって扉は半開きのまま。だがそれが却って都合が良い。その死体を踏みつけて次の獲物が入ってくる。

——キユオオオ！

ラブトルだ。ピヨンと軽快に飛び込んでくる姿はけっこー可愛い。

——シユツ！

だが、斬る！ それで終わり。

動きが止まった瞬間に首を刎ねた。

「引け！ 引くんだ！ 行くんじゃ無い！」

俺の狙いに気が付いたのか、中から慌てた声が響く。

だが手遅れだ、既に魔獣は残り一匹。こうなれば逆にソルンが逃げる可能性もある、今度は俺が扉の隙間から中へと滑り込まんと蜘蛛の死骸を踏み越える。

「やべっ！」

意気揚々と踏み込んだ瞬間、ガリツツと扉を引つ掻く虎の手が突き込まれたのだ。軽

く頭を掠っただけだが、鋭い爪は硬い扉に大きな傷を付けている。兜を付けていなければ死んでいたに違いない。

完全に油断していた、魔獣はソルンの命令に従ってるかと思っちゃまった。良く考えれば残ったのは虎、デツカい猫みたいなモンだ、洗脳されてるって言っても獲物を前に素直に従うハズは無え。

それにしても装備が優秀で助かるね、どうしたって真剣勝負つてのは一瞬の油断で全てが終わっちゃうからな。

さて、反撃だ。俺は扉の隙間からコチラの様子を窺っていた虎の顔面に向けて突きを放つ。

——ギャオオオン！

手応えと同時に、飛び跳ね逃げる勢いはネコ科特有のモノ。途方も無い脚力で、刀を引き抜くのが一瞬遅かったら刀ごともっていかれたに違いない。

手負いの虎は距離を取って、謁見の間の中央でグルルと喉を鳴らし迎え撃つ構えを見せた。さっきの突きで四つの瞳の内の一つが潰れているが、戦闘力の低下は期待出来そうに無い。

「よっす、お待たせ」

俺はソコに自分からふらりと飛び込んだ、コレは殆ど自殺行為に等しい。

なにせネコ科の生物が飛び掛かる速度は並じゃ無い。まして相手は魔獣、人間の反射神経じゃ迎撃は不可能。

だがな。

——バシユ!

狙い澄ました一閃で四つ目の虎の首が飛ぶ。

刀を振り抜いた瞬間に、虎の方から首を差し出しに來たとしか思えぬ程の絶妙なタイミング。

自分で言うのもナンだが、神業としか言い様が無い。そうは言ってもタネはあるけどな。

俺が反応出來た理由は簡単。

音だ。

謁見の間には砂状の魔石がばらまかれている。普通の床なら自重が大きくともネコ科の動物が踏み込む音など聞こえないだろう、だが砂が撒かれているこの部屋では踏みしめる音も踏み出す瞬間の音も大きくなる。

そう言った音の情報は精神を研ぎ澄ませた劍士に取っては光の情報より有益だ。

なにせ「よいドン」の合図も音である事から解るように、音での反応の方が目での反応より遙かに早い。

後は音がした瞬間、踏み込んでくるであろう場所に刀を振るえば猫の死体が出来上がるって寸法よ。

加えて言えば、砂のお陰で力が逃げて、踏み込み自体が甘かった。

「驚いたな、人間技じゃ無い」

呆然と呟くのはソルンだ。綺麗な顔がマヌケに歪むのは気持ちが良いね。

「見物料はお前の首で良いぜ」

「悪いが請求は彼に回してくれ」

ん？ 見ればソルンの傍らに一人の男が居る。どつから湧いて来やがった？

俺ほどでは無いが大柄な男だ。歳は四十前ぐらいのオッサン。ボサボサ頭に対して、手入れがバッチリな見事なカイゼル髭。いつそ髭をハンドル代わりに握ってやりたい程ではあるが、それ以上に気になるのはその目つきだ。

俺と同類、人斬りの目。堂々と人を斬ってきた人間特有のモノで、フェノムの様な殺し屋の腐った瞳とは違う。

荒々しく、野蛮な人間。凄腕の傭兵と言われれば納得だが、一方で陣羽織みたいなド派手な衣装がちぐはぐに映る。

成り上がり者丸出しであるが、小金を稼いだ商人にはとても見えない。

気安い調子でソルンと会話をしているのだから、それなりの地位に達しないのだ

「だーつから、ペットなんぞ役に立たんと言ったでしょう」

「奴は選りすぐりの魔獣を三匹、一瞬で倒したのですよ？　あなたなら勝てるかと？」

「とーぜんでしょう、でなければ挑まない。妖獣殺し、前から一度……やつて見たかった」

そう言つて男が発したのは剥き出しの殺意。

殺し殺されの場に立たぬ者にはとても信じられねーとは思うが、強烈な殺意にあてられた人間は臍腑を押しつぶされる感覚と共に、グラグラと地面が揺れた様に、前後不覚に陥るモノだ。

まさに達人の圧の掛け方で、雑兵ならこれだけで参つてしまうトコロ、だが俺は違う。すうーつと息を吸い込み丹田に力を込めて突き刺さる殺意をはね除けた。

「結構ヤルみたいだが、自己紹介をお願いしても？」

コイツは途轍もない使い手だ。

聞きながらも油断なく刀を構える。小手先のフェイントが効く相手じゃ無え。

名前を聞かれた男は片眉を吊り上げ、口の端を歪ませる。

「嘘だろ？　俺を知らねーのか？　いーぜえ、教えてやる。俺は殺人卿こと、ローグウツ

ド男爵。聞いた事は？」

「ああ、あるな」

ローグウッド、山賊殺しのローグウッドだ。寂れた村の自警団の一人に過ぎない男だったが単身で大盗賊団を討伐した功績をもって騎士に叙勲された有名な。

剣一本で出世したと言う意味では、妖獣殺しで叙勲された俺の大先輩とも言える男だ。

この戦争で出世して男爵にまでなっていたのかよ、殺人卿とはヤベエ二つ名が付いたもんだ。何をやったか想像したくもねーな。

知らない嘘を吐いて氣勢を削いでも良かったが、下らぬ嘘で自分の気持ちが萎えちまったら論外だ。

こう言う口上は相手を馬鹿にすれば良いってもんじゃないのが難しいのよ。

「その程度か？ 俺の方は山賊殺しって名前が妖獣殺しってのより地味で、随分気にしてたんだがね？」

「女の事なら兎も角、オッサンの事を気に掛ける趣味は無くてね」

「俺もだが、飲み屋のネーちゃんにとつちが強いのかと毎度聞かれるのが、少々ウザったくてね」

「俺もだ、確かにな。良い機会って訳だ」

軽口を叩きながら相手を観察する。

アホみたいに派手な衣装だが視線誘導を兼ねているのだろう、キラキラと目障りで邪

魔な衣装だ。

ジャリジャリと無造作に音をたてる足運びは、いつそ素人染みてるがそれもフェイクに違いない。

何よりマズいのが太刀筋を見られている事。

一発勝負の殺しの世界でタネが割れている事は恐ろしい程のハンデとなる。

……だが、まあ勝てるだろ？

まず、防具が違う。エルフ製で素材から近未来感。

そして地の利がある、魔石がばらまかれた謁見の間は魔獣はともかく人間では厳しいハズだ。

そしてなにより武器が違う。モルガン爺さんが作った俺のカタナは俺が知る前世の日本刀よりよっぽど凄い。

考えてみれば負ける要素は一つもねえ、例え相手が同じレベルの達人であろうとも、装備が中世と未来レベルで違うのだ。

「面倒くせえな、とつとと終わらせようぜ」

俺はいつそ無造作に歩を進め……なんだ？ 何かオカシイ。

……不安。それが頭をよぎった。

完全に理屈抜き、直感が俺の足を止めさせた。

よく見れば、ローグウツドは抜いていない。二本の剣は鞘に収まったまま腰にぶら下がっている。

……気になる、何故かその二本の剣から目が離せない。

二刀流。格好いいのは認めるが、剣術として主流じゃないのはこの世界でも同じだ。分厚い剣で重厚な鎧を身に纏った騎士をガツンとぶん殴るのが主流、重い剣は片手でブンブン振れるものじゃ無い。

そうでなくても利き手じゃ無い腕で剣を扱うのは人一倍の技術が必要だし、力も必要だ。だったら片手で盾を使うか、両手でより長くて大きい得物を持つかした方が普通は強い。

……だが、一つだけ例外に心当たりがある。茶化す様に探りを入れる。

「なあ、随分とゴキゲンな剣じゃないか、見せてくれよう。」

俺は自然に笑えただろうか？ 嫌な予感が止まらねえ。

「ハツハツハツ！ 気が付いたか？ 最近手に入れたモノだがこれだけで戦争に参加した甲斐があった、爵位など今となってはオマケと思える」

引き抜いて見せた両の剣、その刃は冴え冴えと蒼く輝いて、言い知れないプレツシャーを放っていた。

「魔剣……か」

「そうだ、それも森に棲む者共が持つ中でも最強の魔劍、名前はファルフアリツサ」
……その名は聞いた事がある。なぜならレジスタンスの連中が必死に探していたからだ。

何故かって？ この魔劍がユマ姫の兄の形見、王族の秘宝だからだ！

ユマ姫が狩猟小屋に隠したが、レジスタンスは見つける事が出来なかった。それも当然、帝国が先んじて手に入れていたのだ。

「そりゃあ、土産が増えたな」

言いながらも俺は内心焦っていた。マールロウ少年の持つ魔劍……恐らくはずつとグレードの低いソレですら、かなりの切れ味を誇っていたからだ。

少年は手練れとは言えない未熟な腕前だったが、それでも据物斬りでは俺の刀に匹敵するような切れ味を披露した。

ならば最強の魔劍が相手では、どんな防具も紙切れ同然に違いない。魔力で切り裂くならば力は不要。片手で扱う不利も無い。

そして魔劍を使える人間は高い健康値を持っている事が多い。強い魔力も苦にならないうに違いないのだ。

アレだけあった有利が一瞬で無くなっちゃった。

それどころか、頼もしかった防具がむしろ足かせになる。兜は視界を遮るし、鎧は動

きを阻害する。

かといって悠長に脱がせてくれるとは思えねえ。

ローグウツドは俺の焦りを見透かした様に嫌らしい目で俺の刀を見る。

「お前の剣も面白いじゃないか、俺が使つてやるさ」

「そりやどうも、つて言つても俺のはそんな高級品じゃないんでね」

「ほう？ 随分と暴れ回つたと聞いたが？」

「そりや俺の腕が良いからさ」

半分ホントで半分嘘だ。確かに刀は高級な素材と複雑な魔術を使った魔剣では無く、ただの鉄のカタマリ。

それでも刀つて奴は魔剣と比べても捨てたもんじゃ無いハズだ。

現に俺は魔剣使いのマーロウ少年に圧勝してるが……まあ、使い手も未熟だし、魔剣のグレードもずっと低かった、それでも刀が魔剣に勝てる事は証明済みだ。

俺の強気に対し、ローグウツドは抜き放つた二剣を広げ、見せつけるようにゆつたりと構える。

「ほう、言うじゃねえか妖獣殺し。見せてみるよ、その腕前を」

「ジジイじゃ見切れない速度だ、諦めな！」

ズシリと空気が重くなるのは濃厚な魔力の所為では無いだろう。

……負けられねえ。

妖獣殺しとしてじゃないし、ましてやこの国の為でも、アイツの為でも無い。日本の剣士を代表するような思いで俺は居た。

異世界最強の剣士に最強の魔剣。

上等じゃねーか！ きつと俺の刀の方が強い。

そうじゃなきゃ納得が行かねえ！ 日本の剣と剣技はどの世界でも最強だ。

俺はそれを証明する！

魔劍 VS 日本刀

——魔劍とは魔力を使って切断する劍の事である。

その原理は？ と聞かれれば説明するのは酷く難しい。

敢えて言うならSFに良く出てくる振動劍や高周波ブレードと言われる劍が近い。

現代にも振動で切り裂く超音波カッターは存在し、医療用メスや模型工作カッターなどで利用されているが、どちらにも共通するのは慎重に切り裂く必要がある場合の用途に限られると言う事だろう。

もしも単にぶった切る事だけが目的ならば、丸ノコやチェーンソーの方がエネルギー効率が高い。

では魔劍は？ と言うと、その構造はチェーンソーと超音波カッターの良いところ取りに近いのだから、その威力にも納得だろう。

魔劍は微細な運動を繰り返しているが、それはただ揺れているだけでは無く、微細な粒子が振動しながらも流れる様に劍の表面を高速で周回しているのだ。

魔力はこうした微細な粒子の操作に優れた特性を持つのである。

結果、魔劍に触れたモノはバターの様になり裂かれるのだ。

しかし、魔力を原動力にしている以上、相手の健康値に掻き消されてしまうのでは？
もし、そんな疑問を抱いたとしたら、拙作を読み込んでくれている証拠であり感謝しか無い。

だからこそ魔法の矢などは相手の健康値圏に入り込む前に十分に加速して、魔力を単純な物理エネルギーに変換している。

では何故、魔剣が相手の肉を切り裂きながらも、その力を失わないのか？

それには健康値の衝突ルールを説明する必要がある。

この異世界のあらゆる生命体は、自分の周りに魔力値と健康値でそれぞれがパースナルスペースを持っている。

健康値が30で魔力値も30ならば、全く同じだけのスペースが自分の周りに展開される。

そして二人の人間が近づけば、前述の通り魔力値圏は相手の健康値圏に一方的に負けて掻き消される。

では、ぶつかった健康値と健康値はどうなるか？

押し合いになるのだ！

押し合いが発生した場合、二人の間に健康値の境界線が発生する。

そして、当然だが自分の健康値であれば自分の魔力が消される事は無い。

だからこそ、魔劍は『優れた剣士』でなくては使うことが出来ない。

では、優れた剣士とは何か？

——それは『剣を手の延長として扱える者』だ。

熟練の剣士にとって剣は自分の体の一部。そう言えるだけ馴染んだ時に、剣は健康値を帯びる。

だから魔獣の肉を切り裂いても、剣は自分の健康値に守られて魔力を失わない。

特に我が強い者は健康値の押し合いに強く、有望とされている。

(話は逸れるが自在金腕ルー・デルオンと自分の腕として魔劍を使えるフェノムは真に恐るべき才能を持つていた。だが、魔劍の割に威力は低く、長時間は使えぬ暗殺用の技ではあった事は明記しておきたい)

ここまで聞くと魔劍がいかに便利な武器かが解るであろう。

……だが、意外にもエルフに魔劍の使い手は少ない。

その威力は絶大だが、魔劍が剣である以上、危険な魔獣に肉薄する必要があるからだ。ましてや剣を自分の手の延長と思える程に幼少期からの厳しい訓練が必要な上、それで魔劍の使い手としての才能が有るかも解らない。

となれば、一定以上の魔力があるなら弓を使った方が安全で確実。なんせ魔法の矢は百発百中で、ライフル並みの威力があるのだ。相手が**ザルキルゴ**でも無ければ過剰な程の威

力と言える。

魔劍の使い手が少ないのも当然だった。

だが魔劍はその性質上、護身用に最適であった。

周りに人が居る状況でも問題なく使えるし、閉じ込められても全てを切り裂き脱出が可能。

それ故、貴族の男子の必修科目であった。とは言えユマ姫の兄、ステフ王子程の使い手は歴史上でも希有な存在である。通常は魔獣討伐に使う武器では無いのだから。

そんな風に健康値に強い魔劍だが、霧ギョルドスという形で剣や体内から直接魔力を奪う霧の悪魔には無力だった。

もしあの日、霧の影響なくステフ王子が魔劍を振るえていたら、エルフの王国はいまだ健在だったに違いない。

話を本編に戻そう、場所はエルフの王宮の中枢。謁見の間。

そこで田中が向かい合うのはローグウッド男爵と言われる男だった。

彼はこの世界で最強の剣士として真つ先に名前が挙がる人物。名を上げ騎士に叙勲されたのは十年以上前だが、まだ四十前の脂が乗った年齢で衰えは一切無い。

健康値も田中並で砂状の魔石が撒かれた謁見の間でも苦にしない。

そして手にはステフ王子の形見、最強の双魔劍ファルフアリッサ。

およそ剣士としては究極の男が田中の前に立ち塞がっていた。

対する田中が持つのは日本刀だ。異世界とは思えぬ程に、その刀身は完全なる日本刀である。

自分の剣が劣っているとは思いたくない田中であつたが、コチラだけが相手の剣の性能も太刀筋も知らないのは極めて不利だと認識していた。

それ故に田中は下段構え。刀を低く構える守りの姿勢をとる。

剣道ではあまり見ない型で、真剣を想定した剣術を信条とする田中らしい構えと言えた。

田中が警戒していたのは刀を斬られる事。噂に聞くファルファリツサの威力を聞けばその程度は容易い事に思われた。

だから剣を突き出す通常の剣道の型は取れず、自然、守りの体勢となる。

あわよくばそのまま足を狙おうと言う構えでもあつた。

一方でじわりと距離を詰めるのはローグウツド男爵。

彼の強みは最強の魔剣ファルファリツサが双剣であることに尽きる。さして力を入れずとも相手をバターの様に切り裂く剣が二本。

攻撃は勿論、防御に使つても隙が無い。いつそ駄々っ子の様に振り回してもそれなりに強いであろう。

とは言っても両の剣に健康値を纏わせる事自体が、駄々っ子どころか並の剣士では不可能であり、『使えている』と言うだけで二刀流に不慣れと言う可能性は皆無と言えた。

田中にとって不利な戦いに見えるが、それでも退く気は無かった。

エルフの為ではない。ココまで来たらユマ姫の為でも無い。

田中には自分こそ最強の剣士という自負があった。日本刀を手に入れるまでは弱気になる事も多かったが、今は言い訳しようも無い程の一振りがある。

剣士として、日本人として、逃げたくないと言う思いが強かった。

ローグウッドが踏み込む度に、じわりと二人の距離が縮む。

いよいよお互いが剣を伸ばせば、その剣先が触れ合う程の間合いになった。

トンツと、軽い音と共にローグウッドが踏み込む。

音に反してあまりにも速い。軽い足捌きに気負いは無いが、その剣先は確実に田中の顔を捉えていた。

ローグウッドの初手は半身になったの突き。

フェンシングの様な突きは最速かつ最長。それを田中は沈み込む様に躲した。

(……チツ！ 囀かよ)

田中は内心で舌打ちをする。顔を狙った突きは殺意に溢れて見えるが、違う。

顔を狙った攻撃は躲しやすい。躲した後は反撃がしたくなる。そして突き出され

た右手は斬って下さいと言わんばかり。

だが、その時は相手の腕とコチラの首との交換になる事が目に見えた。

田中は沈み込んだ体勢を生かし、地を蹴って飛び退く。同時に相手の脛すねを払う様に斬る算段であった。

——チイン

甲高い澄んだ音が鳴る。

しかし斬れなかった。むしろ斬られたのは田中の持つ刀。

距離をとった田中が剣先を確認すると、切っ先10センチが無く、鋭い断面を晒していた。

呆然とする田中。無理も無い、ローグウッドはただ左手の魔剣で脛への攻撃を受けただけ。

だのに斬られたのは日本刀。逆なら解る、普通は防御に使った剣の方が斬られる。だが現実には斬られたのは田中の方、しかもその手応えが全く無かった。

(ライトセーバーかよッ！)

まるでSFの様な魔剣の切れ味に戦慄する田中。

一方でローグウッドは楽しげに笑う。

「良い剣の様だが、残念だ」

少しも残念には見えない。ローグウッドは魔剣の切れ味に自信を深めた。田中は悔しさにギリリと歯噛みする。

何が悔しかったかと言えば、剣の性能差ではない、気持ちで負けた事だ。

ローグウッドは腕一本犠牲にするつもりで勝負に出た。エルフに魔法を使わせれば腕をくつつける事も可能なのだから合理的でもある。

一方で田中は逃げ腰で、小手先の剣を放ち、結果大切な刀を折ってしまった。

「いめんな」

「……？」

田中は謝った。刀にだ。

その行為はローグウッドには理解出来ないだろう。そもそも日本語で呟いたので理解出来るハズも無いのだが、物に謝るメンタルそのものがこの世界では異質であった。

だが一方で伝わる物も有る。

「ほう……」

ローグウッドが驚きに目を見張ったのは、田中が大上段に構えたからだ。

非常に攻撃的、後は振り下ろすだけの構え。

それが不思議に思えたのはローグウッドは田中が逃げると考えていたからだ、剣先10センチでも剣士には致命的な間合いのズレとなる。

なにより劍の性能の差をここまで見せつけられれば、諦めるのが普通に思えた。

しかし、田中は日本刀を信じた。半端で弱気な劍を捨てて、一刀に全てを賭ける構え。
(そうか……おまえも『そっち側』か)

驚きが過ぎれば、ローグウツドは興が削がれた思いでいた。

この劍の性能を見て、どう攻めてくるかを楽しみに思っていたのだが、田中の構えには何の工夫も見られない。

勝つ算段が付かないなら、逃げを打った方がよほど賢い。

劍士は生き残る事が何より重要だ、プライドや誇りと心中する騎士を馬鹿にしてすいたローグウツドは内心、田中に失望していた。

ローグウツドは逆二刀に構える。

左手を頭上に構え、右手を突きつける。相手が振り下ろすと解っているなら斬り合いに付き合う必要は無い。

頭上に構えた劍で防御して、右手を突き込む。それで終わり。

勝ちが決まった勝負に退屈さすら感じながら、相手の一撃を待つ。

と、ローグウツドは田中との距離がいつの間にか縮んでいる事に気が付いた。

田中は剣道特有のすり足で、密かに距離を詰めていた。

田中とて、実戦剣術だけでなく剣道にも通じている。むしろルーツは剣道であり、最

後はそれに殉じた格好だ。

「メエエエエーン！」

そして通じる訳も無い掛け声と同時に、脅威の踏み込みで一瞬にして間合いに入り込む！

——深い！

剣が短くなったので深く踏み込む必要があつたのは確かだ、しかしそれ以上に気持ちに乗った大胆な踏み込みであつた。

がら空きの胴体を両断されたとしても、この一刀は絶対に振り抜くと言う決意の表れ。

その太刀筋は素直で何の変哲も無い面打ち、だがソレに全てを賭けた。

一方でローグウッドは左手の剣を掲げ、頭を守る。

確かに胴はがら空きだが、無理をして先手を取る必要を感じなかつた。

受けるだけで田中の剣は折られ、勝負が付く

……そのはずであつた。

ところでココで日本刀についても語っておきたい。

日本刀を説明する時、その特徴として良く語られるのは何度も折り返し鍛錬を行いミ

ルフィーク状になっているから強いと言うモノ。

だがミルフィークはサクサク柔らかかで、私は固いと思った事は一度も無い。

実際、何度も折り返し鍛錬をするのは劣悪な鋼を使った時に不純物を取り除く為で、不純物の少ない良質な鋼を使うなら、むしろ折り返す度に強度が下がると言う資料を見た事がある。

確かに何度も折り重ねるだけで強度が上がるのなら、現代の技術を駆使した自動車や自転車のフレームにはそうした材料が使われていなくてはオカシイだろう。

だが、だからと言って日本刀の職人が劣悪な鋼を使っていただけだと、無駄な工程を重ねただけだと思つて良いのだろうか？

古代の日本刀の製法は解つていない事も多く、神秘のヴェールに包まれている。その材料さえも不明な点は多い。

儀式めいているとも揶揄される折り返し鍛錬だが、実際に神へ奉じる儀式でもあった事は忘れてはならない。

その時使われる鉄として、天からもたらされた隕鉄を多分に使つたのは想像に難くない。

物理法則で説明不能な巨大恐竜が闊歩する時代、世界には魔力が満ちていた。

そんな世界から不確定要素を減らすため、魔力を除去されたのが現代の地球。だが一

方で地球の外には除去しきれ無かった魔力が残存していたとしたら？

そんな宇宙からこぼれ落ちた隕石に、魔力が残っていても少しも不思議では無いだろう。

田中の持つカタナは魔力が濃い大森林でモルガン爺さんに打たれた物。

使われた炭もファーモス爺が作った大森林産で、特に魔力が濃い土地で作られた逸品である。

折り返す度に空気の層でサクサクになるのがミルフィーユだが、この『カタナ』にたっぷり入り込んだのは空気で無く魔力だ。

階層状になった隙間に魔力が詰まり、『斬る』と言う意思が柄から剣先までまんべなく刀身全体へと伝わる。

むしろコレこそが、魔力がふんだんに含まれたこの剣こそが、本当の日本刀の姿と言つても過言では無い。

——サンツ！

清涼感すらある斬撃音。

田中が振り下ろした一刀は、止まる事も折れる事も無かった。

ただ『斬る』と言う意思だけが乗った一閃は、その意思を尊重し全てを切り裂き床ま

でもその傷跡を残した。

(馬鹿……な！)

ローグウッドは薄れ行く意識の中ズレて行く景色を見ていた。

魔劍ごと唐竹割りにされながら、一瞬意識が残る程に綺麗に両断されたのだ。

真つ二つにされた体よりも先に、頭上に構えたファルフアリツサの剣先がカランと床に落ちる事で勝負の決着を伝えた。

田中は「日本刀こそが最強だ」と、魔劍を前に見事に証明してみせた。

——いや、違う！

日本刀が魔劍で無いと誰が言った？

むしろ日本刀こそ、最強の魔劍なのだ！ 田中はそれを力尽くで証明した。

もちろん当の本人は細かい理屈は知らず、自分の刀を信じただけ。

「ふう〜」

昂ぶる心を鎮める為に大きく息を吐く。

脱力しながらも油断は無い。田中は玉座のソルンを油断無く見つめる。

——ドチャリ

そこで、ようやく自分が斬られた事を思い出したかの様にローグウッドの死体が崩れ落ち、グロテスクな断面を周囲に晒した。

その時、天窓から燦々と降り注いでいた太陽光が急に陰った。

暗くなった謁見の間、撒かれた魔石の砂だけが蒼い燐光を放っていた。それが血の朱に染まっていく景色は、幻想的を通り越し、もはや悪夢の様な狂気を孕んでいた。

「で？ 覚悟は決まったかよ？」

その中に浮かび上がるのは、黒塗りの鎧を着た悪魔の姿。

田中はゆつくりとソルンに近づく、そこに一切の隙は無い。

ソルンは懐に試作品のマスケット銃を隠し持っていたが、そんなモノでどうにかなる相手でない事は明らかだった。

「オモチャを捨てな、そうでなけりゃ片腕を失う事に——」

そのマスケット銃の存在すら田中にはバレていた。

歯噛みするソルン。田中が途中で言葉を切つて上を見たが、それは誘いに違いない。

ソルンはとてもじゃないが、イチかバチかで銃を撃つ気になどならなかった。

むしろ、動いたのは田中の方。

「クソッ！」

しかし田中は距離を詰めるどころか、その場を飛び退き距離をとった。誘いにしてはオカシイとソルンが不思議に思った瞬間だった。

——ガシヤアアアン！

ガラスが割れる大きな音。そして言葉にならない程の破碎音が謁見の間に響き渡った。

美しかった謁見の間は一瞬にして崩壊した。大きな天窓もろとも天井が崩落したのだ。

その犯人は堂々と謁見の間の中央に陣取ったが、瓦礫と埃でその姿が判然としない。それでも風通しの良くなった謁見の間は、立ちこめた砂埃を勢いよく吹き飛ばす。

燐光を放つ魔石の砂が舞い、折れた柱の彫刻と美しい壁画の残骸が、今度こそ幻想的な光景を作っていた。

それこそ問答無用で幻想的なのだ。何者であつてもその光景を幻想的と語るであらう。

なにせその中央に現れたのは、誰もが名を知る幻想生物。

因縁の相手へ田中は叫ぶ。

「グリフォン！」

——ビイイイッ!

甲高い咆哮が鷹の口から放たれた。

凶化グリフォン1

謁見の間の天井を突き破り現れた、新たな敵。

ローグウッドとの死闘を制した俺の前に、突如として乱入したのはあの因縁深いグリフォンだった。

「次から次へと！」

ドンドンと出て来やがる！ もう十分だって程にボスラッシュを捌いたつもりだが、まだ出るかよ！

流石にここまで仕込んでいたワケじゃないだろうから、ソルンと名乗った銀髪野郎にとつちや、まさに天からの恵みか。

グリフォンを挟んだ向こう側、奴は必死にグリフォンの背に誰かの姿を探していた。

「クロミーネ様？ いや、ノエル！ 君か！」

「まあーな！ 助っ人に来たぜー」

ソルンの呼びかけに答える軽い声、よく見りやグリフォンの背には男が一人。

ノエルと呼ばれた男の姿、なんだ？ ……服装こそ乗馬服っぽい地味な姿だが、ソル

ンと同じ顔、同じ銀髪だと？ 見分けが付かねえぞ？

……双子か？ 或いは影武者か。

グリフォンに乗ってきたって事は黒峰の関係者、間違いない敵であろう。

ワケが解らねー状況を整理するためによくよく観察すりや、グリフォンは既に傷だらけだった。

羽はボロボロで体中から血が流れている。極めつけは片目に深々と突き刺さる矢だ。

ッ！ あの矢羽根！ セーラのじゃねえか！

なるほどね、奴は空から駆けつけたワケだが、そんな事をすればエルフ達が放つ魔法の矢の的になるのは必然だ。

だとすりや助っ人ってのは話半分だな、魔法から逃げる為に強引に不時着したって可能性のがデカいと見るね。

セーラの奪還は成功している。コイツは朗報だ。後は俺がコイツらをどうにかすれば全ては解決ってワケ。

「盛り上がって来たじゃネーか！」

そうと決まれば手負いの魔獣を一匹斬るだけ。以前も退けた相手、加えてコッチは昔とは大違い。なんせ欠けちまったと言えど刀が有る！

負ける要素がねえし、絶対に負けられねえ！

オマエの魔石が！ アイツの魔導衣には必要なんだよ！ 黙って死ぬ！

俺は目一杯に姿勢を低くして駆ける。そのまま砂埃に紛れ肉薄するや、折れた柱を足場に高く跳ぶ。目指すはデカイグリフオンの更の上に、そこから奴の素っ首を切り落とす！

「バーカー！」

しかし聞こえて来たのは男の下品な声。

砂埃から出た俺が眼下に見たモノは、グリフオンの背からコチラに銃を構える男、ノエル！

ヤベエ！

——バアアン！

火薬の破裂音、そして激しい衝撃！ 俺は無惨に空中で吹っ飛ばされる。

咄嗟に顔を両腕で守ったのだが、襲った衝撃の『種類』が想像と違った。

一点を貫く痛みでは無く、面で叩かれた様な衝撃だった。知識が無かつたらさぞや混乱しただろうが俺にはその正体にあたりがかった。

——ショットガン……だと？ ンなモンがあるのかよ！

考えて見ればちっちゃい弾丸を一杯入れれば良いだけ……なのか？

吹っ飛ばされながらも空中で体勢を整える。腕は？ 無事だ、動く。だが多少シビレ

が残る。

とは言えショットガンを間近で受けたにしちや深刻なダメージは無さそうだが、一方で深刻なのはプロテクターのダメージ、バリバリにひび割れて最早使い物にならないだろう。

実はエルフのプロテクターは意外にも防弾性能はそれ程でも無い。

軽くて固いのは良いのだが、一点に力が掛かるとアツサリと割れちまうんだと。魔獣対策の装備なんだからあまり防弾性能を意識していないと言われちまった。

だから今回は鎧の下に防弾シャツを着込んでいる。それが功を奏した格好だろうか？

俺はクラックでバリバリになったプロテクターを脱ぎ捨てる。固い分だけ割れちまうと却って危ねえとは散々聞いた。

——パァン

軽い音と共に脇腹に衝撃。ソルンの銃か！

「なぜだ？ 効かない？」

なるほど、大仰なプロテクターを脱ぎ捨てて肌着みたいなシャツ一枚。流石に銃が効くかと思っただか？ 甘えな！

つと！ 危ねえ！ グリフォンのクチバシが俺の頭を狙ってバクリと閉じる。

それを間一髪で転がり躲す……痛え！ カーボンの欠片がシャツに入った！ クソツ！ ふざけんな！ 死ねっ！

——バツン！

横一文字、駆け抜け様の一閃で、太いグリフオンの後ろ足を切り落とす。あまりにも固い手応えと、生き物を斬ったとはとても思えぬ切断音。

——ビィィィィィィィィィィ

響くグリフオンの悲鳴。俺は急制動と同時に、振り抜いた反動のまま翻る。右脚は斬った、次に狙うは左脚！

が、目当てのモノは目前に有った。いや、眼前に迫っていた。

「ぐおー！」

俺はグリフオンの左後ろ脚に蹴り飛ばされた。右足を失った直後だぞ？ どうしてそんな真似が出来る!?

吹っ飛ばされた俺は玉座の手前、小さな階段にぶつかり強かに背中したたを打つ。肺から追い出された空気が強制的に排泄されて、グホツツと濁った悲鳴が口から飛び出た。

クソツ 鎧をダメにしたのが早速響いて来ちまった。ぼやける視界の中でヨタヨタと逃げて行くグリフオンの姿が見える。

そうか！ ポロポロの羽で右脚が無くなった分のバランスをとってやがる、器用な真

似しやがって！

——とっ？

「危ねえっ！」

嫌な予感に身を任せ、体を捻る事で、グサリと突き刺さるレイピアを紙一重で躲した。ソルンだ！ 玉座から降りて来やがったか。真っ白のもやしっ子が調子に乗るなよ

！

俺はレイピアの刀身を握り、グイツと引つ張るやその反動で立ち上がる。

「は、離せ！」

「離すかよ！」

立ち上がる俺、それとは逆に体勢を崩したソルン。そこへ目がけ右手の日本刀を振り

抜い——

——キイン

「なっ？」

折れた！ 刀が折れちまっただど!?

魔剣とぶつかって脆くなったところにショットガンを受け、トドメにグリフォンに足蹴にされたのが決定打。

俺の振り抜きに耐える強度が残っていなかった。

斬られる恐怖に目を瞑っていたソルンがゆっくりと目を開ける。

いや、しかし相手はこのもやしっ子だ、素手で十分。このレイピアを奪えば――

「つと、動くなヨォー！」

言葉と同時に、真横から突きつけられたのは――ショットガン！

チツ！ コイツが居たか。

ノエルと言われたソルンと瓜二つの男、だが纏う雰囲気はまるで違った。歪んだ笑みを貼り付け、舌を突き出す相貌には品性が見られない。

足を斬られよろめくグリフォンから振り落とされる所までは視界の端に映っていたが、てつきり怪我でもしていると放置していた。

「オイオイ銃って奴は連射が出来ないだろう？」

俺はそんな希望的観測を言っただけの様子を見る。なんせこの世界の銃は基本的にまだ火縄銃レベル、火薬を入れてからシユコシユコと押し込む行程にはタツプリー分近い時間を要するハズだ。

だが、そんな事を言いながらも俺はノエルの言葉を欠片もハツタリだとは思っていない。

……だからこそ左手でソルンのレイピアを思い切り引っ張った。

「うわっ」

大きく体勢を崩したソルンの首根つこを右腕一本で背後から締め上げる。体の良い盾代わりだ。

「うぐっ！」

「どうした？ 撃たないのか？」

「ダメエー！」

激昂するノエルを俺は悪役さながらの笑みで挑発する。

——ちなみに、ノエルの持つシヨットガンには銃口が二つ有る。だからこそ二回目を撃てる確率が高いと見ていた。

そしてシヨットガンだからこそ躲す事は不可能と同時、俺だけを撃つ事も不可能。

「……………」

にらみ合う俺とノエル。千日手だが時間は俺に味方してくれないだろう。グリフォンがちよつかいをかけて来たらマズイ、アイツに人質が通用するはずもねえからな。

だが、妙にソルンは焦っていた。俺の腕の中で苦しげに訴える。

「ノエル、俺ごと撃て！」

「だけだよ……………」

「大丈夫だ、死なない限りは、何とでもなる」

感動の「私は良いから撃って」って奴だ。普通はヒロインのセリフだが、女みてーな

面^{ツラ}とは言えお互い同じ顔だし締まらねえよな。

……ん？ ナンだ？ 首筋にチリリと刺激が走る。

嫌な……、予感がする。

だが何があるって言うんだ？ グリフォンはヨロヨロと逃げて行つた。謁見の間の入り口で蹲つてやがるから、ココからは大分距離がある。

コイツ以外の不確定要素などドコにも……

だが、俺はグリフォンの様子に酷い違和感を覚え、その姿から目が離せない。

その違和感の正体は程なく判明する。

……オカシイ、どうしてだ？

どうして……斬つたはずの右脚が生えているんだ？

——ギユオオオオオオオオオオオ!!

そして、グリフォンはあんな風に鳴いたか？

さつきからクチャクチャと鳴るこの音は何だ？ 咀嚼音？ だとしたらヤツは何を

喰っている？

俺の疑問に答える様に、グリフォンはその顔を上げ、振り向いた。そのクチバシからハミ出しているのは巨大な蜘蛛の脚。

「伏せろ！ ノエル！」

ソルンが腕の中で吠える。細い体のどこからそんな声が出るのかと思う程。嫌な予感したのは俺も同じ、ソルンを抱えたままに床に転がる。

——シユバツ！

不可視のナニかが頭上を通過する。遅れてドスンと鈍い音と振動がやって来た。なんだ？ と頭を上げれば柱が残らず綺麗に切断されて、地面に転がる音だった。

——どう言う威力だこりや！

乾いた笑いが漏れる。だが俺は次に笑いすら出てこない光景を目の当たりにする。

——ズズズズズ

低い振動音が木霊する。何の音かなど、考えたくも無い。

どうやら謁見の間は角部屋に位置していたらしい。なぜ今そんな事を言うかって？ そりゃあ壁がずり落ちて、外から光が漏れて来るからだ！

「崩れるぞー！」

叫ぶと同時に頭を庇い再び身を屈める。天井からはスゲエ量のガラスや破片が降り注いだ。

それが終わった後に、階下から響く信じられない程の轟音と振動。それらが破壊の衝撃を如実に伝えてきた。

「嘘だろー！」

ヨロヨロと立ち上がり破壊の痕跡を確認すれば、見晴らしが良い景色が広がっていた。

玉座側と左手の壁が横一直線に切断されて綺麗に無くなっている。

圧巻なのは直立したままに背もたれがバツサリと切断された玉座、鋭い断面があの不可視の衝撃波の鋭さを物語っていた。

既に天井が崩落していたのが嬉しいし、ガラスの破片での致命的な怪我を負わずに済んだのは不幸中の幸いか？

いや、不幸はココからだ。なにせこの破壊をもたらした犯人ははまだ健在。

「ンだよ!? 今のは?」

俺は腕の中のソルンに問いかける、思いがけず瓦礫から庇ってしまっ格好になっていた。

「僕にも解らない。いや? アレは? まさか、凶化?」

凶化ってのは色んな生物の魔石を喰って吸収出来る状態だっけか? そうか、さつきから何をしてるかと思ったら、俺が倒した魔獣を魔石ごと喰ってやがったか!

「つつても、前からアイツは魔石をボリボリ喰ってやがったぜ?」

「そうなのか? だとしたら大分進行している事になる」

「オイ!? ペットの事ぐらい知っておきやがれ!」

「さっきの衝撃波は？ 来るのが解っていたんだろ？」

「ヤツの口内を見るんだ。蝙蝠の魔獣の特徴的なヒダが見えるだろう？」

辺り構わず鳴き叫ぶグリフォンを指差し、ソルンは言うんだが。

「いや、ワカンネーよ」

「とにかく、あのヒダで空気を圧縮して射出するんだ。飛行生物同士の戦いでは、相手をよくめかせる効果がある。ノエルを狙って居るように見えたんだが……」

はあ？ あの威力が『よろめかせる』とは良く言ったぜ。

ソルンも自分が見たモノを信じたく無いって顔でかぶりを振った。

「あんな威力は考えられないんだ。あれじゃまるで、まるで……」

ソルンの考えは恐らく俺と同じ。認めたく無いようだから言つてやろうか？

「エルフの魔法、だろ？」

「そうだ……だけどそんな訳が……」

ハーフェルフの村で、ユマ^{アイツ}姫は魔法で家を切り裂いて見せた。

だが、魔法だとすりゃいくつもオカシイ所が有る。

「アイツはエルフじゃないし、呪文だつて唱えられない。それに俺たちの健康値を無視して頭の上スレスレを切り裂いて行つたぜ？」

「だからあり得ないと言つただらう！」

だよな、それに口論している余裕は無さそうだな。アイツは全員殺す気で魔法をぶつ放して来た。

いや、そんな理屈抜きに目を見りや解る。アイツは狂っている。

「なんなんだ……アレは、なんなんだ！」

「グロテスクとしか言い様がねえな」

セーラの矢は刺さったまま、しかしその傷口から膿の様に吹き出しているのは蜘蛛の複眼か？

なんつーキモい外見だ。片方の目も血走って正気とは思えねえ。

切り落としたハズの右脚は虎の脚特有の縞模様が浮かび上がっている。

アレらは俺がココで斬った魔獣の特徴か？ それを喰って取り込んだ？

——ビィイギョオオオ

聞くに堪えない鳴き声が響く。マジイぞ？ とにかくヤベエ生き物に仕上がってる。

よく見れば体毛が赤く変色していく。ボスだからって変身なんてするんじゃないやねえ！

「アイツを何とかしねーと全員死ぬぞ！」

ソルンとも一時休戦としたい、それ程にアイツはヤベエ。

ソルンにも俺の気持ち伝わったのか、親切に解説してくれる。

「妖獣は先天的に様々な生物の遺伝子が混じり合っている」

「見りゃあ解る!」

「だが、凶化した生物は後天的に喰った生き物の遺伝子を取り込めるのだ、あの吸収速度は異常だがな」

「それも見りゃあ解る!」

だからって喰った生物の体で、無くなった部位を補えるのは生き物の範疇を超えていく!

……いや? ソルンが何を言いたいか。解ったぞ? だがな! 胸くそ悪いから言うんじゃねえぞ?

「エルフは殆ど肉を食わない、当然だが畜産場などないのだ。しかし魔獣を養うには肉が必要だった。手に入らなかった肉の代わりに魔獣の餌に使ったのはエルフ自身。傷病兵や脱走兵もだ」

「クソがつ!」

んなコトがあり得るのか? いや、あり得ちまうからこうなっている!

「じゃあ何か? アイツはエルフを喰ったから魔法が使えらと? 俺を喰ったら剣が使えるってか?」

「無いとは言えないな、気をつけろよローグウッドの死体が無い」

「ふざけッ!」

全く喜べねえ情報ありがとな！ お礼を言うまでも無くソルンからは追加情報が。

「更に言うと、アイツの魔法が我らの健康値を貫通する理由はアイツの魔力値が高いからだろう、加えて魔石のお陰でコチラの健康値が減衰している」

「(丁寧にどうも！)」

俺の健康値が90。だが大森林では50で、魔石の砂で減衰したとして40か30ぐらいか？ その十倍の魔力として400ありやあ貫通するのか？

アレだけの威力を見れば魔力値が千を越えていても不思議じゃ無い。

「どうすんだ？」

「どうしようもないだろう、凶化の最終段階は誰にも止められない。無数の遺伝子を取り込んだ末の自己崩壊を待つしか無い」

「その前にコッチが死ぬだろうが！」

「ッ！ 来るぞ！」

「クソッ！」

叫ぶと同時に、俺達は同時に跳んだ。グリフォンがコチラに突っ込んで来たからだ。

「最悪じゃねーか！」

「全くだ！」

瓦礫に突っ込んだ俺達は、互いの立場すら忘れて愚痴る。だが、ソルンは何か希望を

見出し出した様だ。

「いや、案外終わりは近いらしい」

ンだと？ 見てみればグリフォンは玉座の右手の隙間に首を突っ込んでいる。

「アレは？」

「あそこには魔石を溜めていたんだ、ココに撒く為にね」

「なるほどな……」

「あの赤く変色した体毛を見ろ、過剰な魔力を放出している証拠だ。魔力を欲しているのに体が魔力に耐えられない、じきに崩壊するだろう」

なるほど、そうかも知れねえがその前にコツチの命が保たねえ。

なんせ魔石を食べたグリフォンの様子はもはや尋常じゃねえ。体中の傷口からウニョウニョと触手が生えて体を作り替えている。

——ジねええええええ

最早鳴き声とは呼べない、完全に怨嗟の籠もった人間の声がグリフォンから響く。

そして空中に現れるは……無数の火球！

——ドゥン！

しかし、火球は見当違いの場所に飛んでいき爆発した。制御が甘いのは朗報だ、だが半端な威力じゃない、強烈な爆風に吹き飛ばされそうになる程だ。

どこかは解らねーが人間の喉があるのだろう。アレなら呪文を唱えられるだろうよ。正に無敵の怪物。しかもコツチには武器が無い。

「使え、コレで斬るんだ！」

「つとむ。」

爆風で瓦礫に埋もれたソルンが投げて寄越したのは……魔剣。ローグウッドが使っていた双魔剣ファルフアリツサの片方だった。

「良いのか？」

「アイツに喰われるなら、貴様に斬られた方がマシだ」

そうかよ、でも俺は魔剣なんざ使った事がねえんだよ！ ぶつつけ本番かよ。

「しゃーねえ！ ヤルか！」

俺はグリフォンに駆ける。相手の頭がオカシイのが唯一の救い、ロクにコツチを見ていやがらねえのを良い事に、一直線に駆け寄った。

相手が回復するなら狙いたいのは首。だが位置が高すぎる、マズは前脚を頂くぜ！

——ギイイン

しかし無情にも剣が通らない！ ンだよ！ 俺には使えないってか？

慌ててバックステップで距離を取る……が、間に合わず、鷲の前脚で蹴っ飛ばされて転がされるハメになった。

「グアッ！」

オマケに不可視の衝撃を食らい、吹き飛ばされて空中で更に一回転。

コレがさつき言っていた蝙蝠の空気砲って奴か？ 俺はベチャリと地面に墜落する。

まだ体は動く、全く神様の体は丈夫でありがてえぜ、だが状況は最悪だ、伝説の魔剣じゃなかったのかよ！

「斬れねえぞ！」

「やはりか、相手の魔力値がコチラの健康値の十倍を超えているんだ、魔剣が効力を発揮しない」

苛立ち混じりの俺の叫びに、ソルンから返答が返る。

理屈は良く解らねえが使えないんだな？ クソッ！ 刀さえ有れば叩ききつてやるのに。

「息を潜めろ、こうなつてはやり過ぎすしかない」

ソルンは瓦礫に紛れ、生き残る道を探るが、どうだか？ 見た事もない生き物に仕上がって、何を考えてるかなんぞ解りやしないが、たった一つの感情だけはありありと伝わってくる。

アイツは餓えている。

一度認識した以上、絶対にアイツは俺達を捜し出して喰らう。逃げる方法なんぞ無

い。

瓦礫に隠れ、俺は反撃の機会と方法を考える。しかし打つ手は皆無。

何せ攻撃手段がない。グリフォンの体はこの瞬間も更に凶悪に作り替えられている。だがその時、ふと、グリフォンが上を向いた。

——なんだ？

つられて上を向いた瞬間に間抜けな声が聞こえて来た。

「うわあああああー！」

空から女の子……じゃねえな。アレはマーロウ少年じゃねえか。

人間が空から降ってくる。アニメみたいに非現実的に聞こえるが、この場に於いてはそう不思議じゃない。

王宮の裏には山が有る。ハンググライダーみたいな大型の凧を使い、王宮の最深部に直接奇襲する作戦は、レジスタンスに以前から有ったのだ。

これは俺の侵入が失敗した時のプランB。一見無謀に思えるだろうが、凧を操るエルフは凧と魔法を組み合わせれば、自由に空を飛べるのだからあながち無茶でも無い。

では何故メインとして採用されなかったかと言えば、ハンググライダーの経験があるエルフが非常に少ないからだ。

なぜなら、空は恐鳥リコイが飛び交う危険な場所。風の制御と魔法の矢の同時使用が出来な

以上、自殺行為になりがちだ。

加えて、木が生い茂る大森林に離着陸に適した場所は少なく、結果、度胸試しの娯楽として以上の価値が認められていないと聞く。

だからこそ、以前からハンググライダーを嗜んでいたマーロウ少年が作戦に選ばれていた。

だが、何故だ？ 見ての通り霧ギョルトスの悪魔の起動には成功した。霧に満ちた王宮は見えて
いるだろうか？ プランBは不要なはずだ。

周囲は既に霧の影響下にあるはずで、魔法で自由に飛び回る事は難しいだろう。

その証拠に少年のグライダーは見事に墜落して……いや、それにしてもあんな無様な
落下はオカシイ。

！
そうか！ グリフォンが上を見たあの動作、空気砲でグライダーを打ち落とすのか

考えながらも俺は墜落したグライダーの下に滑り込む。

「おらー！ 来いー！」

「兄貴いいいいー！」

グライダーを受け止めると同時に、少年を地面に引っ張り込む。

——シュバ！

そこを風魔法が襲うも、引つ張ったお陰でギリギリの回避に成功。代わりに今度は扉側の壁が吹き飛んだ。

「あ、兄貴。嘘だろあの威力！ あの怪物がやったの？」

「だろ？ マジでヤベエんだ！」

マーロウ少年が目を丸くする。魔法に慣れたエルフにとっても常識外の威力なので、妙に嬉しい気持ちになったが、冷静に考えれば嬉しい事など何も無い。

「んなコトよりどうして来た？」

「そりゃ、あの怪物を打ち落とせず、王宮に入って行つたから」

「なるほどな、つて言つてもお前が来たつて何にもならねーだろー！」

俺がそう言うと、マーロウ少年はニヤリと笑つて細長い包みを取り出した。

「それでも無いよ、コレ欲しくない？」

「オイ！ そりゃあ！」

マーロウ少年が持つていたのは刀だった。それもモルガン爺の『最新の最高傑作』。

「これはデカ過ぎて霧ギョルドスの悪魔に入らなかつたでしょ？」

「ありがてえ！」

日本刀は魔剣と違い、特別な材料で出来ている訳じゃない。鉄とか炭があればモルガン爺さんの頑張り次第で幾らでも打てるのだ。

俺の体格と腕力を勘案した、最強の一振りが作戦を前にして完成していた。

だが、入らなかつたのだ！ 霧ギョルドの悪魔に！

それに危険な作戦を目前に試し斬りの猶予もないと来れば、ここ数ヶ月使い慣れた剣に命を託したかつたのもある。

だが、今は何よりコイツが欲しかつた！

「代わりに少年はコレを使い給え」

「え？ コレ、ファルフアリツサ？ 嘘でしょう？」

少年は魔剣使い、俺より立派に使つてくれる事だろう。

あー効かないんだっけ？ まあそこは伝えておく。

「マジで？ 魔剣で斬れないモノとかあるの？」

「試すか？ オススメはしねーがな！」

只でさえ控えめな少年の気配が薄まっている。運命を決める紙一重の瀬戸際だ、出来れば隠れて居て欲しい。

「解つた、サポートに徹するよ」

「よおし、じゃあ行くぜ！」

仕切り直しだ！ 今度こそぶつた切つてやる！

凶化グリフオン2

マローロウ少年から渡された刀を見やる。手の中でズシリと主張する重量が頼もしい。日本刀の常識から考えれば凶抜けてデカイ。一メートルを大きく超える刀身は、日本では確か大太刀と言われていたはずだ。

通常は馬上で使う武器と聞いたが、俺の身長は2メートル近いので徒でも扱えないワケじゃない。

それでも腰にぶら下げていては、抜刀するのも苦労するだろう。俺は眼前に構えた状態でゆっくりと鯉口を切った。

すると銀の刀身が姿を現す。

綺麗だ、あまりの美しさに思わず見とれてしまった。

相変わらず飾り気のない直刃^{すくは}直線的な刃文だがそれがまた良い。長くなった分肉厚で、今度は簡単に折れはしないだろう。

鞘も渋い黒塗りだ、俺の趣味に合わせてくれたんだろうが、ちいと邪魔だな。

「持ってるー!」

「う、うん」

俺は鞘を少年へと投げ渡す。鞘の長さも今までとは当然違う、ぶら下げたまま戦って何かの拍子に引つかかったらマヌケに過ぎる。

次は柄だ、俺は握り心地を確認する。一転してココにはエルフの技術がタツプリと使われていた。

ゴムみたいな手に吸い付く素材で風情は無いが、大森林で鮫の皮を求める方がどうかしてる。

日本刀らしく無いだけで性能に関して言えば文句は無い、握った瞬間に一体感を感じる程。

一振りすれば、ビュツつと強烈な風切り音。コイツは斬れる、間違いない。

——ギョオオオ！ ビイイイイ！ おおおん！

俺の一振りに触発されたのか、グリフォンの叫喚きょうかんが重奏する。どこから声が出ているか考えるのも馬鹿らしい程の異形がコチラを見ていた。

「待たせたな、やろうぜ」

ハッ！ と裂帛の気合いと共に再びグリフォンへと駆ける。が、今度は楽に近づけそうも無い。獣の本能でこの刀の危険性に気付いたか？

——シユバツ！

例の不可視の風魔法が足元を切り裂く。先程の超火力が脳裏を掠め、思わずたたらを

踏むが、それじゃあ何時まで経っても近づけねえ。

「つか、好き放題に撃たれば、助けに来てくれた少年の命だつてヤベエ。」

「伏せて小さくなつてろ！」

後ろに向かつて叫びつつも、勇気を持って更に踏み込む。だが三步も進まぬ内にゾクリとした気配が迫る。

「クソツ」

身を屈めて避ける。同時に頭上スレスレを不可視の斬撃が通り抜けていくのを感じた。

極限のスリルに滲んだ手汗が、刀のグリップに刻まれた溝へと吸い込まれていく。

「悪くねえ！ 精神が研ぎ澄まされる心地よさに、自然と物騒な笑みが浮かぶ。」

「ヒヤア！」

後ろから少年の物騒な悲鳴が聞こえるが大丈夫か？ 別の意味で笑つちまうから自重してくれ。

「兄貴イ！ なんでアレが躲せるのさ？」

「知らねーよ！ 勘で避けてる！」

しかし厄介なのはグリフォンの魔法。威力を抑えて連射する方向に切り替えて来やがった。

ッ！ 急に目の前が熱く、赤く、染まって行く！ 目前に迫るは、大火球！
「ハアアアアッ！」

もはや防ぐ事は勿論、躲す事も不可能な距離。俺は気合一閃。真っ直ぐに刀を振り下ろす。

馬鹿な考えは百も承知、それでもこの刀なら斬れると信じて疑わなかった。

真っ赤な火球がスパリと割れ、吹き出した熱風が突き抜けて行く。

——ズドオオン！

斬れた！ 斬れたぜ！

生き残った事以上に刀に不可能が無いって事が嬉しい。

分割された火球が背後で閃光と爆風を巻き起こし、不気味なグリフォンの姿を鮮烈に浮かび上がらせた。

——ギョオオオン！

ハッ！ さしものグリフォンもビビってやがる！

「ビヤアアアエエー！」

背後の少年もビビってやがる、元氣そうで何より。

ココは既に相手の魔力圏内、ノータイムで魔法が間近に発生する。

健康値の十倍を超える魔力値が如何に恐ろしいか、セーラからうつつすら聞いていた

が、なるほど、コレでは勝負になんか成りっこない。

でもやるしかねーよな？ つーかヤラなきや気が済まねえ！

「キエエエエー！」

えんきょう

猿叫と共に先程と同じ、前脚に斬りかかる。脚の間をすり抜けながらに横一文字に一閃。

一見すれば、まるで先程の再放送。魔剣の時は無惨に弾かれた。

——ズパン！

しかし今度は斬れた。

後ろ脚を斬った時より、なお固い手応え。しかしそれすらも射精しそうな程に気持ちが良い。

「堪んねえ！」

新しい刀の感触は極上。完全に俺用にあつらえた刀だと腕が真つ先に理解した。

左前脚を切り裂いた後、体の下を対角線に走り抜け、次に狙うは右後脚。

——バシユ！

生えたばかりの後ろ右脚は想像通りに柔らかかった。

コレで二本の脚を失いバランスを崩す……かと思いきや、グリフォンは羽を広げバランスを保つ。

いや……違う！

「嘘だろ？」

既に前脚が生えている……だと？ 見れば斬ったばかりの後ろ脚にも触手が蠢き、新

しい脚が生えようとしていた。

「クソがッ！」

俺はうねる触手を切り裂く。が、焼け石に水だ。ドコまで斬ってもキリが無い。

状況は最悪。しかしグリフォンは最悪の上を越えていく。

——ギョオオオオ！

「なんだとお？」

俺は呆然と見上げるしかない。

グリフォンは翼を広げ、飛んだのだ。いや、飛べるのは知っていたが、部屋の外、魔力を奪う霧の中で飛べるとは思っていなかった。

だが、よくよく考えれば、既に壁は無く砂煙と共に魔石も舞い散って久しい。それでもグリフォンは元気に動き回っていた。

グリフォンは魔石を大量に喰っていた。既に霧すらも苦しめない程の過剰な魔力を体内に溜め込んでたつて事かよ。

後ろ脚が無くなって身軽な体はいつそ軽やかに宙に舞った。今までも空へと何度も

取り逃してきた相手、その苦い記憶が蘇る。

——また逃げるつてのか？ いや、違う！

空飛ぶグリフォンの周囲に火球が浮かぶ。コチラかは手が出せない高さからの爆撃！ コレでは反撃のしようも無い。

クソツッ！ 何か、何か無いのか？ アイツが持っていたショットガンはどうだ？ いや、今から探す時間など無い。どうする？ どう……

——バシユ！

——グギツ！ ギョウオオオオオ！

キョロキョロと逆転の一手を探す俺の頭上から、突如グリフォンの悲鳴が降り注ぐ。

なんだ？ と見上げればグリフォンの左目に深々と突き刺さるはセーラの矢！

突然の衝撃にグリフォンの体が傾ぎ、ゆっくりと落ちて来る。

「タナカア！ 決めろお！」

恐らくは拡声器で響く、少しノイズが乗ったセーラの大声。

「言われなくても！」

落下地点に滑り込んだ俺の目の前、グリフォンの頭部が落ちてくる。驚だった頭は最早グチャグチャで何の生き物か判然としないが、流石に頭とそれ以外を見誤ったりはしねえ！

——シュルン

会心の一刀。それ故に手応えは無く、ドサリと頭部は胴体から切り離された。

「ふう、面倒なヤツだったぜ」

このグリフォンとの長い付き合いもやっと終わった。

「帰るぞ、少年！」

「えつと、良いの？」

少年が見やる先、敵の大將であるソルンが瓦礫から這い出して、埃まみれの姿を晒していた。

「投降するよ。抵抗をしても無駄そうだ」

「賢明じゃねえか」

コレで終わった、と思つた矢先だ。

「動くんじゃないぞ！」

マールウ少年の背後から銃を突きつける男、ノエルが居た。死んで居ないのは気付いていたが、今まで気絶でもしていたのか？

今更出て来ても場違いだつて解らねえとは、思わず笑つちまつた。

「ハッ！ 止めとけよ、無駄死にするぜ？」

この期に及んで何をすつて言うんだ？ 俺が少年を人質に取られて刀を捨てると

でも思ってたのかよ？ ヒーローじゃあるまいしんな事しねーぞ？

「うるせえ！ 黙ってる！」

あ、コレ何にも考えてねーヤツだ。呆れたのは俺だけじゃ無い、ソルンだってノエルを言い論ず。

「止すんだ、ノエル！」

「でもよ！」

「でもじゃない！ 我らのグリフォンが暴走したのだ、みつともない真似は止め。僕らの負けだ」

「クソツッ！」

悔しがるノエルだが、銃を突きつけられている当のマーロウ少年は下らないやり取りに鼻白んでいた。

「どうでも良いけど、その銃、もう撃てないよ」

「？ なんだと？」

ノエルが構えた銃を見ると同時、銃身がずり落ちてその長さを減じた。

俺には見えた。マーロウ少年はノエルがソルンに視線を転じた瞬間、音もなく銃口を斬っていた。

しばらく銃が分断されなかったのは、ファルファリツサの凶悪なまでの鋭い切り口に

よるものだろう。

「やるじゃねえか！」

「ま、この位はね」

得意気な少年の頭をぐりぐりとかき混ぜる。少年は「止めてよー」と文句を言うが、まんざらでも無さそうだ。

「クソオオオ！ フザケンじゃねえ」

その様子にキレたノエルは腰のサーベルを引き抜く。しかしどう見ても素人、俺や少年には傷一つ付けられないだろう。

「兄貴イ！ 危ない！」

だからこそ油断した。何せ全く意味が解らなかつたのだ。叫びながら突然に突っ込んで来たマールロウ少年の勢いに、俺は思わず尻餅をつく。

——それで、救われた。

「グギアアア！」

響いたのは、ノエルの悲鳴。

なんだ？ アレは？

見上げる俺の目の前、謎の生物がノエルの右腕を噛み潰していた。ソレは背後から長い首を伸ばし、俺が立っていた場所に長い首筋を晒していた。

爬虫類の首、コレは俺が斬ったラプトル！　そして胴は……グリフォン！
「首も生えるのかよ！」

あのまま立っていたら噛まれていたのは俺の頭だ。少年には感謝だな。

「ありがとよ」

「うん、でもアイツは何なのさ？」

「コツチが聞きてえよ！」

苦情を言う相手が見当たらねえ、生命の神秘なんてレベルじゃねえぞ！

あの時、俺は確実にグリフォンを殺したハズだ。一つの気配が消えたのは間違いない。
い。

だが、既に生き物として分裂が始まっていたのだ。その証拠にグリフォンの体からは複数の気配を感じる。

しかし、それも微弱だ。コイツの崩壊は近い。

問題なのはソレに合わせて俺達の気配も消えかけているって事だ！　コイツが何かするのは間違いない。

どっちにしろ、俺に出来るのは斬る事だけだ！　俺は目の前に曝け出されたラプトルの首を一閃する。

——ギゴガゴキイイイ——

「痛えええ」

ラプトルの首が切断され、金切り声みたいな鳴き声と嘯まれていたノエルの悲鳴が混じる。しかし当然グリフォンは死なない。

木村から「首無し鶏のマイク」って趣味の悪い写真を見せられた事があるが、これはアレ以上に不気味な生物だぜ。

どうする？ 斬っても死なないヤツをどうやって倒す？

悩む俺をあざ笑うかのようにタイムリミットは迫っていた。

突然、少年が不調を訴えたのだ。

「あ、ぐ、気持ち、悪いよ……」

原因は考えるまでも無く、グリフォンの体に集まる大量の魔力だ。

「マズイ！ 自爆するぞ！」

叫んだのはソルン。だが言われるまでも無く俺も気が付いていた。

ヤツの魔力値の圏内だからこそ肌身で感じる。強烈な魔力がヤツの体内へと収縮している。魔力の奔流で体の中をかき混ぜられる様な感覚はエルフにはキツいに違いな

い。
「マローウ！ 隠れてろ！」

「う、うん……」

息も絶え絶えの少年を抱え物陰に避難するも、危険な予感が高まるばかり。

「アレはどうなる？」

一緒に逃げ込んだソルンに尋ねる。

「アレだけの魔力が爆発したら王宮ごと吹っ飛んでもおかしくないな」

「冗談じゃねーぞ！」

「アイツの体に穴でも開けて魔力を散らすんだ」

「簡単に言うじゃネーか！」

仕方ねえ！ やるしかない。

ノエルってクソ馬鹿の方は腕を噛み千切られて危険は無い、気を失った少年を一旦ソルンへと預ける。

俺は首無しグリフオンの前に躍り出る。

頭は無いが代わりに体中から目玉を生やしていた、キモいにも程がある！

もはや理性は無いのか、ただの魔力のカタマリをぶつけてくるだけ。

「ぐう……」

だがソレが辛い。俺ですらもふらつく程の魔力の渦。近づく程に凶暴な魔力に内臓が悲鳴を上げる。

「ハッ！」

俺は刀を振り回す、不可視の魔力が斬れると信じて。

実際に効果は有った……気がする、どうせもう刀に全てを賭けるしかない。

気合いで一気に走り寄って、高まった魔力ごとヤツの体を両断する！ さつき火球を斬つたみたいだ！

もうソレに賭けるしかない、俺はふうつと息を吐き集中を高めた。

……だが、俺の気負いは不発に終わる。

——ズパアアア

俺の覚悟をあざ笑う様に、グリフォンは真つ二つ引き裂かれた。

真つ二つ、文字通りに二つにパカリと割れたのだ。

縦に両断だぞ？ その馬鹿馬鹿しさが解るか？ 胴だけで7メートルはあろうかと言うバケモンがだぞ？

真つ二つになったグリフォンが切り開かれた時、その中心に佇む男が一人。

「桃太郎つてワケじゃねえよな？」

思わずそう呟いてしまった俺は、とことんシリアスに向いていないらしい。でもよ、パカッと割れたグリフォンの中から生まれてきたみたいに見えるじゃねえか。

だが、実際には違う。俺の動体視力をもってしてギリギリで見えていた、その速度。一瞬でカッ飛んで来て瞬間、グリフォンを両断した。

——あり得ねえ！ 人間の速度じゃねえぞ？

男の手には大きな剣が握られていた。俺の大太刀も霞むような漫画みてえなバカでかい大剣。アレは恐らく魔剣だ。それに高速移動の正体は魔法、ソレ以外に考えられねえ。

つまりコイツはエルフ。その顔はベール……それもキョンシーのお札みたいな謎の文字が書かれたモノに阻まれて見えないが、コイツがただ者じゃないって言うのはハッキリ解る。

「オイ、少年！ アイツは誰だ！ ……少年？」

しかし、少年は既に気を失っていた。

代わりに男の登場に反応したのはソルンだった。

「オマエは……意識が戻ったのか？」

ノエルに肩を貸して立ち上がったままに、ソルンは半信半疑と言った様子で男へと問いかける。

俺は完全に蚊帳の外、全く状況が掴めない。

ただ一つ解るのは疲れ果てた中で、コイツとやり合うのは余りにもヤバい。

「痛え！ 痛えよ」

ただ、ノエルだけは空気を読まずに悲鳴を上げていた。俺は呆れる思いだったが、意

外にも男はノエルの言葉に反応し、顔を向ける。

ノエルは更に続ける。

「助けやがれ！ 早く、この場から脱出するんだよ！」

ヒステリックなノエルの叫び。そうは言うが、どう脱出するって言うんだ？

明らかな無茶振り、しかし謎の男はノエルの言葉に従う意思を見せた。

いつの間に、その手に握るのは凧。マールロウ少年が乗ってきたグライダーだ。

凧と風魔法。組み合わせれば高く飛び上がる事は確かに可能だ！

「行かせるかよ！」

コイツらから黒峰の事、そして帝国の狙い。全て聞き出さねえとマズイ事になる。逃げられるのは勿論、殺されるのだから宜しくない。

「ッー！」

しかし、駆け寄らんとする俺の機先を制する様に、男の大剣がピタリと目の前に突きつけられた。

デカすぎる剣だ、リーチの差は圧倒的。そしてそれだけの太剣を真っ直ぐに伸ばして、小揺るぎもしない男の体幹も並じや無い。

「邪魔をするのかよ？」

「……………」

俺の問いに男は答えない。いや、答えられないのかも知れない。

先程から男は一切喋っていない。そしてペールで隠れた表情は窺い知れず、目線も探れない。

俺は氣を失った少年を見る、相手にはけが人が居るがコッチも同じ様な物。

それに空からグライダーで逃げようとしても、セーラ達の弓が打ち落としてくれるに違いない。

「……………」

俺が諦めたのを察したのか。男はブツブツと呪文を唱える。

「ノエル、大丈夫か？ 残った片手で掴まっっているよ」

「痛え、痛えよ」

ソルンとノエルは脱いだジャケットでお互いの体を縛ってグライダーに捕まった。そして謎の男もグライダーに捕まるが手には大剣。

「重量オーバーじゃねえのか？」

俺はあざ笑うが、それだけこの男は魔力に自信があるのだろう。風が強ければグライダーの大きさに見合わせぬ重量を運べても不思議じゃ無い。

ふわりとグライダーが浮いたと共に、凄まじい突風が三人を空へと舞い上げた。

一緒に飛び散った魔石の砂が、青白い軌跡を空へと描く。

なるほど、魔石と共に舞い上がる事で霧の影響を抑えたか。だが、それはつまりエルフが放つ矢も障害無く迫ると言う事だ。

高く舞い上がるグライダーにいち早く迫るのはセーラの矢だ。あんな超速度の矢をどう凌ぐ？

見物する先で、謎の男が取った行動は剣の一振り。

「やるねえー！」

思わず呟く。男は音速を越えるセーラの弓を叩き落としたのだ。

読みか、もしくは魔法に関して俺の知らない知識で、矢が加速する瞬間を見切ったか。しかし、矢は一発では終わらない。続いて他の兵士の無数の矢が迫る。

流石にコイツはチェックメイトだろう。

だが、今度は魔法で矢を受け止める。セーラが禁書庫の前で見せた魔法、しかしその強度が恐ろしい。全ての矢を受け止めてみせる。

「マジかよ」

俺はもう呆然と見上げるしかない、魔法で受け止めたに留まらず、受け止めた矢の推進力すら利用してグライダーは更に高く飛ぶ。

そして、高く距離を稼ぐと異常なスピードで空を切り裂き飛んで行った。

「逃げられたか……」

もう魔法の矢でも追い切れない。同じくグライダーで追おうにも敵の陣中に飛び込むのは自殺行為になるだろう。

「オイ、少年！ 起きろ！」

「う……え？ アイツらは？」

俺は少年を叩き起こす。少年の気配はスツカリ普通になった。危機は脱したと見て良いだろう。本当は逃げたアイツらを追うべきなんだろうが、流石に疲労が溜まり過ぎていた。

「逃がしちゃった。でもな、取り敢えず大勝利で良いだろ？ 兵士達も逃げて行くが、追撃戦までは勘弁してくれ。オーバーワークだ、体が保たねえよ」

「そうだね、仕方無いよ」

壁が取り払われて見晴らしが良くなった謁見の間から、城内の様子を見下ろす。霧が晴れてきているので逃げて行く兵士達の姿が丸見えだ。霧の在庫が無いのだろう。僅かな霧ギョルドスの悪魔と共に兵が引いていく様子が見られた。

「コレで決まったな、エルフの国の再興は先生にでもお任せするかね」

俺は派手に暴れる位しか出来ねえからな。こつからはエルフ自身の手で頑張つて貰うしか無いだろう。

……完璧とは言わねえが、大勝利だろう？

「あゝあのね？」

だが、マローウは言い辛そうにコチラを見る。

「なんだよ？」

「実はさ……」

「ンだつての！」

余りに歯切れが悪い。疲れから苛立ちが募る。

「実はさ、ドネルホーン先生がね？」

「まさか、死んだのか？」

「いや、……裏切った」

「ハア？」

この作戦の責任者の先生が、裏切った？ いやいや。

「ンな馬鹿な」

「それがね、僕らは先生が言っていた肥料の大規模生成を止めたでしょ？ 先生はアレ

に賭けていたみたいで、反対されたのがショックだったみたいでさ」

「だからって裏切るこたあねえだろ！」

「いやさ、結局世界を食料で満たせば根本的に平和な世界が来るって、交渉に現れたのが帝国の技師でさ、凄い興味津々で先生の研究を褒めるモンだから……」

「マジ？ マジなの？」

「うん……エルフより進歩的な考えだって、帝国で研究するって言うてね」
「うっそだろ？」

食糧問題を解決したら戦争が無くなるって、お花畑過ぎるだろ。

しかし、防衛戦で一方的に敵を狩ってきたエルフには戦争の知識が無くたって不思議じゃ無い。

むしろ地球人に戦争の知識がありすぎるとも言えるよな。

……それに、ヤベエ予感がする。無限に肥料が作れる魔法の技術。胡散臭いし、危険過ぎる予感がビンビンする、何の意味も無く禁術とされていたとは思えねえ。

「追うかア……」

「ええ？ さつきは取り敢えず休むって」

「そうは言ってられねえだろ？ 先生は最低限殺さねえとヤベエぞ、絶対！」

「そ、そうだよね……」

と、言うわけで俺は地獄の追撃戦に打って出る事になる。

このグリフォンとの死闘は遠くからも見えていたらしく、エルフの英雄だなんだと持ち上げられてしまう事になっちゃった。

そうそう、目当てのセレナ姫の秘宝はグリフォンの心臓付近で無事、見つかった。

あのグリフォンが異常な生命力を發揮した理由は、秘宝が核となって崩壊を防いだ結果とかなんとか。俺には難しい事はワカラネーがな。

そんなこんなでアイツらが待つビルダール王国に旅立つのが大分遅れてしまった。

しかも結局、学者先生や逃げたソルンとノルンを捕まえる事は叶わなかった訳だ。

後悔しきりだが、コレが後々想像通り、いやそれ以上の危機を後々巻き起こす事になるのであった。

五章の設定語り

四章の設定語り忘れた。

ただ、もう余り設定も露呈してるので控え目に。

【田中】

なろう版ではユマ姫視点と交互に挟んで、ザツピングシステムの

田中が馬車に細工する↓ユマ姫が馬車に轆かれずに済む。

みたいに進んでいく仕掛けでしたが、読みづらいのと田中の生死をボカしたくなって5章に一気に纏めてしまいました。

ユマ姫視点で物語を書くとなれば、その方が良いかなって思っ

【破戒騎士団 ローグ隊長】

本当に地味ながら、刀を持つ前の田中よりも強い設定です。見返してもかなり頑張っている。

ユマ姫に関わったのが運の尽き。馬に突っ込まれて死んでしまいました。

【グリフォン】

なんだかんだ、現れて助けくれたり邪魔をしたりする。

二章からずっと出てたけど、遂に爆発四散。

妖獣とは複数の魔獣の特性が混じった存在なのですが、大昔には殆ど存在しなかったとか。

誰だろうね、こんなのを世にはなった奴は！

〔ファーモス爺とモルガン爺〕

個人的には好きだった爺さん達。ファーモス爺さんはユマ姫も田中も救っているし、モルガン爺は田中以上に空気読めない希有な存在。

鍛冶についてですが、石炭が取れない大森林だからこそ、木炭で製鉄を行うしか無く、鍛造が発達したと言う背景があります。

一方で人間界では石炭からコークスをつくって製鉄しています。完全に鉄を溶かせる高温となるので、鑄造で大量生産も実現しています。水車を使った高炉法ですね。

エルフも近年は反射炉の様な、高炉よりも先進的な炉を作ったりもしているのですが、結局鉄が貴重なので、モルガン爺みたいな人が昔ながらの方法で鍛造した方が性能が良いために普及が進んでいません。

〔日本刀〕

モルガン爺が、魔剣に負けない切れ味の鉄の剣を求めて辿りついた境地。

高温で柔らかくなった鉄を鍛造しながら魔力を流して、余計な不純物を魔術的に取り

除いたりもしています。

フアーモス爺の炭も炭素として入って、特殊合金的な強度を誇っています。

【魔剣】

極小の粒子がチエーンソーの様に高速運動をして、どんなモノでも手応えを感じさせずに切り裂きます。

貴重な物質を材料に必要とするので量産出来ません。極小の粒子と言えど、世界で一番固い物質で無くては、カーボン級の硬度を誇る魔獣を切り裂く事が出来ないからです。

具体的には六方晶ダイヤモンドを魔力で飽和させたモノ。遺跡でたまに見つかるぐらいです。

【ノエルとソルン】

銀髪の怪しい青年達。

双子と見紛う二人ですが、性格は真逆。ノエルは粗暴で、ソルンは知的。怪しいですね。

【コウシンケン】

更新権です。『参照権』があるのだから更新権もある。

黒峰さんは一体神に何を望んだのか？

【謎のベールの男】

なんか突然出て来た。

その正体は、次章で明らかになる！

あ、次章では普通にユマ姫が出るから……お待たせしました。

田中も思い入れがあるんだけど、5章の受けは悪い……

全部コイツが空気読めないのが悪い。多分、きつと。

第六章 吸血鬼の悲恋

海賊姫

あの事件から三ヶ月。季節は秋を通り越し、冬が始まっていた。

「ふふーん♪」

俺は姿見の前でクルクルと回り、おニューの衣装を確認していた。

王宮内部に部屋を貰ったので、クローゼットルームも以前より豪華だ。姿見も大型の物が前後に設置されていて、後ろ姿も確認出来る。

クルクルと回ると、軽い体が左手の重量に振り回される。だが、ソレだつて悪い気はしない。

「見た目に強そうだよな」

俺は左手のフックをブンブンと振り回す。

そう、フックである。

ネタ装備と割り切つて木村に注文を出したのだが、案外便利でビックリした。

フック船長つて何で腕にフック付けてるの？ ネタなの？ ぐらいに思っていた以

前の自分をドヤしたいね。

ドアノブを引っ張ったり、手すりに掴まったり、有ると無いとで大違い。

そして、挟まれた左目には格好いい眼帯。眼帯にはセレナの秘宝をモチーフにした図柄を入れた。何時だって心は一緒だぞと言う思い。

で、ココまで来たら察する事も出来るだろう。俺は完全に海賊バイレイツスタイルの格好で鏡の前に立っている。

頭にはトリコーン、ジャケットはジユストコール、フリル付きのドレスシャツに、コルセットスカートとロングブーツと言う出で立ち。

ま、そんな風に名前を出されても俺にはちつとも解らない。俺から木村にオーダーしたのは『海賊っぽい衣装』ってだけ。

若干コスプレっぽいのはご愛敬、むしろ大好物である。

「ご機嫌ですね」

と、そこに寝室からシノニムさんが顔を覗かせる。

俺は顔を赤らめ身をよじり、慌てた様子でシノニムさんへと振り返る。

「み、見ていたのですか?」

「別に恥ずかしがる事は無いでしょう?」

……そりやそうだけどき。

大体にして一人ではブーツを履くのも一苦勞なのだから、殆どシノニムさんに着せて

貰った様なモノ。「しばらく動きを確認します」と言つてクローゼットから追い出して、その間にベッドメイクを済ませて貰つていただけだからな。そりや見られるよ。

でもさ、楚々としたお嬢様が、一人だと思つて浮かれている所を見られてしまい、恥ずかしさに悶える様は最高に可愛いと思わんかね？ どや？

「安心しました、ユマ様も服に夢中になる事があるのですね」

……いや、コレ「化け物でも服とか気にするんだ！」的なやつじゃないよな？ 違ふよね？ こちとらファッションモンスターだよ？

「私を何だと思つているのです、今まではお洋服にまで気が回らなかつただけです。それに今までと違つて勇ましい衣装でしょう？ どう見られるか気になつてしまつて……」

俺は上目遣いでシノニムさんに感想を求める。こう言う時はゴツイフックは後ろ手に隠すのがポイント。

「勇ましいかどうかまでは存じませんが、儂げな印象は薄れたと思います」
「余り……好ましくは無いですか？」

自信なさげにシユンとしてみせる。

実際、気になっているのはソコだ。儂げで弱々しい雰囲気押し出して得をしている場面は多い。

なにせ、亡命した他国の姫が王宮内を我が物顔で闊歩し、現女王よりも高い人気を誇っていると言うのだから、王家の乗っ取りを企んでいると揶揄する声も少なくない。なので千切れた腕と抉られた目を見せつけ、儂げで害の無い被害者オーラを出しまくって何とか凌いでいる側面がある。

かといって、正直このままではマズいと言う思いもあるのだ。

なにせ、俺の最終目標は王国を扇動し、帝国との全面戦争に持っていく事だ。俺が痛ましい姿を見せつければ「帝国め！ 許せん！」と思う人は増えるだろう。

だが思うだけ、涙するだけ。それで満足してしまう人が一杯居るからこそ、悲劇と言うのは楽しく消費されるのだ。

帝国に「許せない！ 悔しい！ 恐ろしい！」とネガティブな印象を与える事に成功しているが、肝心の「勝てるぞ！」と言う機運が無いと戦争には至らない。

その為にはエルフの技術を使って勇ましく戦う俺の姿も、王国の人間には見せておきたいのだ。

相反する二つのオーダーをクリアするため、衣装で雰囲気ガラリと使い分ける事を考えたのだが、ソレはソレで『今までの猫かぶりだったのか』と、悪い印象を与える可能性も捨てきれない。

そこでシノニムさんの冷静なジャッジが欲しかったのだが、その言葉は俺の求める次

元の話とは異なっていた。

「私としては非常に助かります。なにせ教会からは再三に泣きつかれていたのだから教会に、ですか？」

なんでソコで教会が出てくるん？

「ええ、姫様が痛々しい姿を見せる度に『神はどうしてユマ様を救わないのだ！』と猛烈な抗議が入ると言うのです」

「そ、そうなのですね……」

「ええ、それで頭を抱えていたのですが、この衣装で凜々しく振る舞えば『神は無慈悲だ！』と嘆く民は減るでしょう。ただし、実際に戦うのは金輪際ご自重願います」

「……はい」

なるほど、そう言えば俺は『神から使命を授かり、この世に転生を果たしたオルティナ姫の生まれ変わりと』喧伝しているのだった。

いや、100%真実なのだが、肝心の神からのアフターケアは受けられない契約だ。文句を言っても始まらないワケだが、この世界の人にとってみれば余りに薄情と映るだろう。

……実際、ちよつとぐらいサービスしても良いのよ？ 神様♥

と、ふざけていても始まらない。

とにかく、勇ましい格好をするのは大丈夫そうだ。だったら残る心配は似合うかどうかなのだが……ひよっとしてシノニムさん的には宜しくないか？ 俺の服を見て不思議そうな顔で首を傾げている。

「私としてはユマ様にはもつと可愛らしい服が似合うと思うのです、むしろその様な衣装は派手好きの伊達男といった人物が好む物かと」

「スルドイですね、神の世界でもそう言った男達が着ていた服です」

「では、何故？ 勇ましい姿なら伝統的な軍服もありますが」

「……だってアレ、焦げ茶色の作業着みたいでダサイんだもん。」

「解りませんか？ 私の様なか弱い女の子が、いつぞ攻撃的なまでに派手な格好をする、そのギャップが可愛らしいのです」

「……そうなのですか？ いえ、正直に申しますと似合っているとは思いません。ただ、敢えてその様な服で無くとも、姫様は何でも着こなしてしまうだろうと思ひまして」

うーむ、これは誤解があるな。

木村も俺と価値観を同じくしているので、簡単な指示でパツとソレっぽい衣装を作ってしまうのだ。

今まで見なかったデザインや意匠を俺に似合うようアレンジして、異常な完成度で纏め上げてしまうので、俺が何でも似合う女の子と勘違いされてしまっている。

「それは誤解です。私には生活感のある服は似合いません。派手な刺繍だったり、可愛らしいフリルやリボンで装飾された服しか似合わないのです」

「……それは、どうなのですか？ そう言った服の方が、普通は着こなすのが難しいのですが……」

「そう言われましても……」

悲しいかな、今の俺にはむしろ普通の服を着こなすのが難しいのだ。

理由は単純、銀髪のエルフってだけで浮世離れしているのに、儂げな口りで眼帯にフックまで付いてしまえば、見た目に中二病の大渋滞を起こしている。

もう俺は真つ当な服を着れない体なのだよ。

かと言って全力で着飾れば凄い悪目立ちするだろう。このまま街中に散歩に出よう物ならどれほどの耳目を引くか……ちよつと楽しみになつてきたな！

「ひよつとして、今日はその衣装で外出するのですか？」

「そうですね、服を作つて頂いたキイムラ男爵に会うのですから着るのが道理でしょう」「かしこまりました」

シノニムさんが準備に出て行く。今でも結局木村の商会にはおんぶに抱っこだ。

結局、殆ど専属商会と化している。短期的に見れば、色々な商会を味方に付けた方が権力争いで有利かと思つていたが、カディナールがあんな事になればもう俺達に敵は居

ない。

そうなれば長期的な視点で、キムラ商会にグイグイと産業革命を推進して貰った方が国力が増すと言う判断だ。

「あのおう、馬車の準備が出来たみたいです」

「では行きましょう」

迎えに来たネルネを連れだって、俺は馬車へと乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「す、凄い人ですね」

「こゝも人が多いと進みません」

馬車の後ろからネルネとシノニムさんのヒソヒソ話が聞こえてくる。

頬を撫でる風が少し肌寒い、ふうつと吐き出した息が白くなる。

今回は新しい衣装のお披露目と言う事で、オープン馬車を手配した。しかも俺は貴人にあるまじく御者の隣に陣取っている。御者台は位置が高く、目立つからだ。

逆に客席に座らせている侍女の二人から、酷く居心地が悪いと猛抗議を貰ったが無視。

さて、肝心の市民の反応は？

「おおっ！ 何と凜々しい」

「アレは本当にユマ姫なのか？ 魔性の美しさに目が離せない」
「一体どんな心境の変化なのだ？」

などと声が挙がるが、若干わざとらしい。恐らく彼らは詩人や記者と言った人種で、俺の事を飯の種にするべく待ち構えていたのだろう。

道行く普通の人はボケツとした顔を並べるだけ。あんまりに浮世離れた俺の格好に声も出ないと言った様子だ。

だが、決して否定的な印象では無い事が、息を飲みウツトリと俺を見つめる人々の顔で良く解る。往来のど真ん中で立ち止まるので、馬車の行方を遮ってしまい渋滞すら発生させるほど。

「おい！ 道を空けるんだ！」

御者は声を荒らげるが、その御者すらチラチラ俺の方を見て集中力を欠く事も、進まぬ馬車の一因になっている。

ほうつとため息をつく人々の表情は、完全に俺に心酔している様だった。

「もうっ！ コレでまた、あの衣装はドコで買ったのかと問い合わせが殺到しますよう」
「ハア、面倒なのですよね。普通の人では似合わないしと解りそうなモノですが」

唯一、後ろからは別の種類のため息だけが聞こえてくる、そう言うのはソツチで捌いてくれたまえ。

海賊が居ない世界で、海賊フェチを作ると言う偉業を成し遂げてしまったに違いない。
い。

こんなに性癖を歪ませて良いのかな？　と思わないでもないが、正直言つて気持ちが良い。

なんせ今の王都では、全ての劇や小説、歌や新聞、あらゆるメディアの中心は俺だ。ユマ姫が登場しない劇などは書いても全く需要が無い状態。

既存の劇や物語ですら、ユマ姫をモチーフにしたキャラクターがねじ込まれ猛威を振るっている程。

馬車が中央通りの劇場前に差し掛かる。例のキムラ商会の劇場で、俺の人気を支える中心地、当然ズラリと並んだポスターには全て俺の姿が……

「あの、スミマセン？」

「な、何でしょう？」

バツと御者がコチラを振り向く。一言一句聞き逃すまいと言う姿勢だ。

「あのポスターは一体なんでしょう？」

思わず突っ込まざるを得ない。なんだよあのポスター。

「ああ、アレですか。不快ならば取り下げの様に言つて来ましょうか？」

「いえ、別に構いませんが……」

ソコには鎖に繋がれた俺がカディナールに鞭を打たれ、涙を流す絵が描かれていた。「別に鞭で打たれた訳ではないのですけど……」

剥製にする為、カディナールは俺に大きな傷を付けようとはしなかった。そう言う意味では鞭を打つよりもよっぽど鬼畜ではあるのだが。

「カディナール王子の非道を解り易くする表現だと言っていますが、姫様を見世物にしている様で私には面白くありません」

御者は憤るが、どちらかと言うとこんな表現をしてしよつ引かれないのが凄い。

と言うか。既に市民の性癖をねじ曲げると言う次元ではないのでは？ 世が世なら俺の薄い本が溢れかえっているに違いない。

だけどアレだな、やっぱり弱々しくて苛めたくなる女の子と言うイメージが先行してみたいだ。もっと凛々しく強いイメージも欲しい所。

「姫様？ 一体ドコへ行くのです？」

俺は御者の制止を振り切つて、ちつとも進まない馬車から飛び降りた。目指すは俺が鞭を打たれるポスターの前。

ポスターは貴重かつ盗まれやすいので護衛が付いているのが普通。

「どうしました？」と不安そうに尋ねる彼らを見無視して、俺は腰のサーベルをシャラリと抜き、抜き身の刀身でビシツとポスターを指し示す。

「おおー！」

「やはり、過激に過ぎるか」

「品の無いポスターに姫様はお怒りだ！」

何事かと集まったギャララーが俺の様子にザワつくが、なにも皆が盛り上がっている所に水を差そうってワケじゃない。

——ブスツ

俺は勢いよくサーベルをポスターへと突き刺した。狙ったのは描かれたカディナールの顔面。突き刺したサーベルは立て板を貫通して固定された。

これだけ見るとポスターに怒っているかと思われるので、ポケットから万年筆を取り出すとササツとサインを入れる。

『不埒者には神罰が下る —— ユマ・ガーシエント・エンディアン』
「フフツ」

俺は満足げに笑う。これでやられっぱなしの姫では無いぞと、手を出したら必ず痛い目に合うというメッセージが伝わるだろう。

「コレは、このまま残しておきなさい」

「は、ハイ」

俺は敬礼する護衛を残して馬車へと戻った。

一部始終を見ていたシノニムさんがため息を深くする。

「ずいぶん派手な事をしますね」

「か弱いだけの姫と思われたくは無いですから」

澄まして答えるが、少しやり過ぎた気もする。

後で聞いた話だが、この突き刺さったサーベルはそのまま接着剤で固定され。観光名所になったらしい。

それどころか、立体的な広告手法として随分と広まったと聞いている。

その後も、ユマ姫が切り裂いたポスターや引つ掻いたポスターが登場したが、それらは当然フェイクだ。

他には、悪徳貴族に捕まった異国の姫が、義手とサーベルを振り回して復讐する小説が人気を博しているらしい。

過激な濡れ場もあるらしいが実名を出していないので文句を言うのも難しい。俺はこれ以降、王都の住民の性癖を心配するのを止めるのだった。

手遅れだ、と。

★リボルバーと火薬の秘密

木村の商会を訪れて挨拶も早々に案内されたのは、地下に作られた秘密の射撃訓練場だった。

「淑女を招くには殺風景な場所で恐れ入ります」

「本当に殺風景ですね」

気を使う相手でも無いので素直に言わせて貰う。なにせ簡素なのが並ぶだけで特に広くも無い、本当にただの地下室なのだ。

「コレは手厳しい、ですがコチラは少々頑張らせて頂きました」

と言って、木村が手渡して来たのは拳銃だった。

銀色に輝いていて、緻密な彫刻まで彫られている。植物のツタの中に俺をモチーフにした横顔がデザインされていたりと、異様に凝っている。

「美しいですね。ですが性能の方はどうなのですか？」

以前に木村が撃っていた拳銃だつて6発も連射していた。この世界の銃は火縄銃が基本なのを考えると異常な性能に驚いたモノだ。

だが、聞けば今回の銃は以前に木村が使つて居たモノとは、全くレベルが違うと言う

のだ。

「本当に凄いのには性能の方です。彫刻は彫金師が頑張った成果ですが、それ以外は私が手ずから行いましたから」

「それは……苦勞を掛けましたね」

木村はマジで忙しいらしく、本当に苦勞を掛けている。

木村は器用さに特化した体を神様から貰った訳で、同じ精度で作業が出来る人間はこの世のドコにも存在しないだろう。

そもそも、神様からサービスでチート能力を貰うと言うのは小説ではまま見るが、一体どう言う理屈なのか？

ソコン所も凝り性の木村は俺や田中と比べ、神から多くの事を聞き出していた。

それによると、一見転移した様に見える木村の体だが、木村が違和感を抱かない様に神様が一から作成した体なのだそうだ。

全く同じ体を作る事も可能だが、魔力に対して一切の抵抗が無い地球の体では、この世界で生きられない。どうせこの世界の向けの体を作るなら一つぐらいリクエストを受けつける。それが神様の特別サービスの全容だった。

神の仕事とは言え、……むしろ秩序を重んじる神だからこそ生物としてのルールには厳格。人間の限界までは超えさせてくれない。

マラソンランナーとウエイトリフティングの選手では体の作りが全く違う様に、全てが最強と言うのは無理な話。

そこで、田中が選んだのが『剣士として理想の肉体』と言うのは解りやすいだろう。

一方で木村が望んだ『器用さ』と言うのは、俺ではちよつと考えつかない選択肢だ。

荒事無しに地球の知識で食っていくには最適な能力と豪語する木村曰く、器用さ特化の体と言うのは単純に指先が精密に動くと言う話だけでは無く『頭の冴え』が良くなる効果まで有つたというのだ。

体を正確に動かすには、指の性能よりも脳の性能が重要で、ソコにチートを貰つていると言う感じらしい。

脳の改造と聞くと、ちよつと恐く感じてしまうが、肉体が全く違う俺に比べれば今更か。

だから、今や偉くなったアイツは直接に器用さを生かした物作りより、その頭脳を生かした商会運営がメイン。

そんな中で限られた時間をやりくりして、自慢の器用さをフル活用で俺の銃を作ってくれたと言うのだから、その性能が気になるじゃないか。

「一番の違いは、コレになります」

そう言つて木村がコトトリと机に置いたのは――？

……至ってフツの弾丸だった。後ろから覗き込むシノニムさんも首を傾げている。
「あの？ それは、何なのでしよう？」

あ、シノニムさんはソコからか。それぐらいなら俺にも解る。

「これは弾丸です。弾と火薬が一体化したモノ。そうですね？」

「その通りです、もつと言うと着火用の雷管こそが肝だったりするのですが」

「……なるほど、でもコレの何が新しいんです？」

そう尋ねると、木村は一瞬「え？ マジで？」と言う顔をした。シノニムさんが居なかつたら実際言ったに違いない。

言い含める様に、殊更ゆっくりと説明してくる。

「私は、着火用に雷管の開発には成功していましたが、弾丸の形に出来たのは最近です」
ん？ そうなの？

「では、裁判の時に撃っていた銃はなんですか？」

「アレは火縄銃の様に火薬をグイグイ押し込んで、後ろから雷管をセットする方式ですね。実演してみましようか」

そう言つて、あの時撃っていた拳銃を取り出し、実際にリロードする様子を見せてくれた。

火薬を入れて、弾丸の挿入。その後、グイグイと押し込む作業を6セット繰り返し、後

ろから雷管をコレまた6回セット。

たつぷり4分以上の時間を掛けてやっとこ発射が可能な状態になった。パーカッション式リボルバー

「時間が掛かるのですね……」

「事実上、戦闘中のリロードは不可能です、その点コレなら」

そう言いながら木村は俺のリボルバーに弾を込めていくが、速度が全然違った。

シリンダーは横に外れるし、弾丸だから火薬や雷管を押し込む作業など不要。僅か3秒でリロードは完了した。

「スイングアウト式のシリンダーですが、しっかりロックしてガタつきは無し。何より拘ったのはコレです」

木村は自信満々に拳銃を構え、狙いを定めてトリガーを引いた。

パーンと景気のいい音と硝煙が舞う。

流石の腕前、弾丸は正確に壁に掛かった的中心に命中していた。

どや？ とコツチを見てくるのだが……

「結局何が凄いのです？」

いや、地球の銃しか知らない俺にはもうね、普通の銃としか思えないのよ。

またもや「嘘でしょ？」って顔をする木村。

「トリガーを引くだけで弾が出たでしょうか？ 撃鉄を起こしてからトリガーを引いて弾を出すのがシングルアクション。トリガーを引くだけで撃鉄が引かれて、更に引けば弾が出るのがダブルアクションです。当然ダブルアクションの方が仕組みが複雑となります」

「なるほど」

なーんて言いつつ、全然解らん。

俺はモデルガン一つ触った事が無い。ゲームでは撃鉄を引くなんてボタンは無いからな。

だが、一応撃鉄を引く動作は映画で見た事があったので納得はあった。

「つまり、私の左腕に配慮してくれたのですね？」

「その通りです、連射したい場合、シングルアクションなら撃鉄を左手で起こしたりするのですが姫様の腕では難しい事も有るでしょう。ただしダブルアクションだとどうしてもトリガーが重くなってしまうので、撃鉄を引いてシングルアクションの様に使う事も可能です、それに——」

よっぽどの自信作なのか木村の舌も滑らか。

だが殆ど理解出来ないなので、取り敢えず試射させて貰う事に。

銃を構える的に向かってトリガー。それだけで射撃訓練場にパァンと乾いた音を響

かせる。

うーん、トリガーが重いし。反動がキツイ。狙いが定まらない。仕方無い、本気を出すか。

「すうーふううー」

ゆつくりと息を吸い、そして吐く。ギリリと音が鳴るほどに奥歯を噛みしめる。

瞳孔が思い切り開くのを感じる。一方で視界は極端に狭まり、銃口の先、狙い定めるだけの世界が現出する。

——パーン

軽い音と共に打ち出された弾丸が、真つ直ぐに的の中心を打ち抜くまでがハッキリ見えた。

今度はトリガーも軽く感じたし、反動も制御が出来た。だが、その代償は大きい。

感覚が鋭敏になる分、腕や肩の筋繊維がブチブチと断裂する感覚までハッキリと味わってしまった。正直クソ痛い。

「腕が痛いですね、シノニム、魔導衣をお願いします」

「はい」

俺はシノニムさんに命じて魔導衣、例の青い貫頭衣を上から羽織ると、簡単な回復魔法で腕の痛みを取り除く。

手汗はビッチョリだし、額にも珠のような汗が浮かんでいるだろう。割とマジで痛い。外れ易くなった肩の関節が保ってくれたのが不思議なぐらい。

そんな俺の様子に木村は慌てる。

「今のは？」

「リミッターの解除、日本語で言うと『火事場の馬鹿力』。田中が死んだと勘違いした時から自由に使えるようになりました。見ての通り体への負担は大きいですが」

「無理をせず、両手で撃つたらいかがですか？ フックでも反動は抑えられますよ」

「……………」

そう言う事は早く言つて！ 拳銃だから片手で撃つモノと思ひ込んでいた。

結局、撃鉄を引いてから撃てばトリガーは軽い。左手のフックで銃身を抑える様に撃てば反動も制御可能だった。

フックだから、普通は熱さで触れない銃身を抑えられるのは利点だろうか？

他に確認するべきは魔法との相性だが……余り大つぴらには見せたくないな。

「シノニムさん、席を外して貰えますか？」

「……………かしこまりました」

シノニムさんは渋々と言つた様子で射撃部屋を後にする。木村の方もフイーゴ少年や使用人を下げさせたので二人つきりになった。

「や」と

俺は木村の膝の上にぼふりと座り、背を反らせて木村を見上げた。

女の子が甘えに来たぞ！ どうだ？

照れた顔をしているかと思ったら、ジトツつとした目で見られてしまった。

「おい、何のつもりだ？」

「いや、女の子を膝の上に乗せたく無いかなど思つて」

「はあー男の心を理解する少女つてのは最悪の兵器だにや」

にや？

動揺はしている様だ。盛大なため息をつくが嫌いでは無いらしく、ここ三ヶ月の状況を説明してくれる。

「内政チートをするなら物流を押さえたいが、線路の作成は数年掛かりになりそうだ。別の方法を考えた方が良さだろう」

「普通に魔導車で良いんじゃないか？ 魔石が足りてたらだけど」

「ンなモンが有るのかよ！ 早く言え！」

「きかれなふあつたひ！」

思い切りほつぺたを掴まれる。イチャイチャしてる感じなのか？ コレ。

「肝心の武器はどうなん？」

「火縄銃レベルならソコソコの数が作れると思う。だが肝心の火薬が無い」

「ふーん、戦国時代って火薬はどうしてたの？　輸入？」

「いや、ウンコ」

「うんこ？」

「ウンチ！」

「言い直しても同じだろうが！　どんだけスカトロ好きなの？」

「こども異世界は人の性癖を歪めてしまうのか？　恐ろしいね。」

世の無常を嘆いていたら木村に首を絞められた。

「解つてて言つてますよね？　硝石はウンコとか腐れたモノから出来るんだよ」

木村の口調もやたら怪しい。だが、ウンコなら幾らでも用意出来るのでは？

「結局精製するのが難しい。水に溶けるから流出しやすしいし結晶化するには数年掛か

る、今使つてる火薬なんて何年も前に仕込んだモノだぞ！」

「ふうん、するつてーと帝国は相当大規模にやつてるんだろな」

「まあそうだろうな、調べさせたんだが大規模な硝石の鉱山は無さそうだ、黒峰さんは歴

女だったからな、知識があつても不思議じゃ無い」

「歴女？」

コレは初耳だ、黒峰さんが腐女子的なアレだとは。

「ゆうても俺も彼女については詳しくは無いけどな、確か歴史好きで通つてたと思う」「うーん、だとしたら火縄銃が出てくるのも納得かな?」

「そ。だからそれ以上、例えばこのリボルバーとかは彼女には作れない」

「そりや朗報だな」

「幾ら何でもウンコからの精製には限界があるからな、ガンガン爆弾を放り投げるみたいな使い方は出来ないだろう。コッチは手回し式のボウガンやバリストアで十分対抗出来ると思うぞ」

木村はそう言つて俺を机の上に座らせると、自信満々にボウガンを取り出す。

両手で弦を引くボウガンは、片手で引く弓よりも強力なのは自明。だが手回し式のギアの力で弦を引く機構にすれば、より強い張力のボウガンが作れるとの事。

実際に発射されたボルトは的を貫通した。銃と同等かそれ以上の威力があるかも知れない。

「おおー」

俺は机の上に座つたまま、パチパチと手を叩く。実際コレが配備されたら戦争は変わるだろう。

木村も自慢げに慇懃な言葉遣いで解説してくれる。

「この世界の鎧は弓矢を防げれば良いと言うモノでした。ですが数年前から現れたボウ

ガンはその常識を変えてしまった。この世界の騎士は全身鎧で武装した重騎士が多いのですが、今や殆ど役には立たない集団に成り果てています」

「ああなるほどね」

思えば俺が穀物倉庫でハメ殺したグラム騎士団だけは重騎士だった。一方、スフィールで戦った破戒騎士団やボルドー王子傘下の近衛騎士が騎士と言うには身軽な装備で驚いた記憶がある。

その違いの正体が、時代の変化をキャッチアップ出来ていたかどうかだとすれば納得が行く。

「すると、戦争はどうなるのです?」

「大盾を構えて前進、騎兵隊が突っ込んで来たらボウガンの方で射しようね。例えば相手に火縄銃が揃っていても連射力が無い以上、威力を増したコチラのボウガンと戦略上は変わらないでしょう」

「そうなのですね」

俺も真面目な会話になると女の子口調になったりして全然一定しない。もう日本語で話そうかな。

『そーなると、火薬を気にせず撃てるボウガンの方がむしろ有利ってワケだ』

『そゆこと、不安なのがエルフの技術で帝国が何を作るかわカンネーの! その辺どう

なの？ 魔導車とかどんなのよ？ カボチャから作る訳？」

『はあー魔法って言っても科学なんだが？ 虚空から何かを発生させたりは出来ないし、カボチャを馬車にしたりネズミを馬にしたりは出来ませんがな』

『言うて、魔法の矢とか完全にファンタジーじゃん？』

『結構厳しいルールがあんのよ』

俺は銃を構えて発射、同時に俺は弾丸を使って魔法の矢を発動する。

『やっぱな、魔法の矢は銃には使えない』

銃弾は加速するどころか失速して落下する。

「コレは？ 一体？」

木村に聞かれるが、魔法の解説はコッチの言葉じゃ無いと逆に無理。

「魔法の矢は物体を制御、加速させる魔法ですが、その辺の石を投げて加速させる事は出来ません」

もし出来るなら、わざわざ弓なんて担がない。

「魔法の矢は厳密には結界魔法なのです、結界を貫いた矢が結界を巻き込んでソレが推進力となり制御の要にもなるのです」

「なるほど、それは解りましたが銃弾は問題なく結界を貫通したのでは？」

「銃弾は小さすぎて結界を巻き込めないのです、蜘蛛の巣を想像して下さい」

もしも小枝を蜘蛛の巣に突っ込んだら、枝は蜘蛛の巣を巻き込んでネバネバになる。だが蜘蛛の巣にポップコーンを投げたら、ポップコーンは蜘蛛の巣で止まってしまっただろう。

コレが魔法の矢にある程度の初速が必要な理由だ。魔法の矢を強力にしようと思ったらその分結界も分厚くするしか無いので、貫く為の初速もより必要になる。

グリフオンを撃退したラザールドさんの弓矢と魔法の矢の組み合わせは強力だった。大分昔の事に感じるが、つい数ヶ月前の事件である。

と、なればより強力な弾丸は、より強い結界を貫けて、強力な魔法の矢になりそうなもの。

だが、もし蜘蛛の巣に銃弾を撃ち込んだらどうなるか？

いや、やった事無いから解らないけどね？ 多分、巣を巻き込む事もなく小さな穴を開けて貫通しちゃうんじゃないかな？ 魔力を巻き込むには弾丸は小さすぎるのだ。

「つまり、銃は魔法で威力を上げる事は出来ないのか？」

『ん、ソコは色々工夫すれば何とかなるかも』

俺は色々試しながら銃を撃ってみるが、上手くはいかない。

『頼むぜ！ 銃弾を作るのは難しいし火薬も貴重なんだつての、あんまり無駄には出来ないぜ？ なんならエルフの魔法で量産できない？』

木村から泣きが入ってしまった。前々から聞かれているが、そう言われてもエルフの国には火薬自体が無かったのだからどうしようも無い。

「ま、色々考えて試すしかないでしょう」

細々と色々な事を報告し合ったが中々スグには解決しそうに無い話ばかり。結局、魔導車を一台回せないか使者に相談してみようと言う話になった。実際に使ってみないと、魔石の燃費がどのぐらいのかも良く解らないからね。

「ちよつと楽しみだな」

木村がワクワクしてるが、魔獣を引き寄せるのであんまり使い所が無かったんだよな。

「カボチャの馬車じゃ無い事は保証します。あ、そう言えば田中はまだ裏切った学者を探し回っているそうです」

「ふーん、よつぽどヤバい奴なのかね？」

「ソレに関してですが、エルフの秘密なんですけど、一つだけファンタジーな魔法が有りまして、カボチャの馬車じゃ無いんですけど、ソレこそ虚空から魔力で精製出来るモノが一つだけあるんですよ」

「ひよつとして魔石か？」

木村が当てに来る。確かに魔石は理論上、空気中の魔力を圧縮したら出来るらしい

が、自然に圧縮された鉱石として産出するか、生物の体内から取り出すのがメインだ。「違います、肥料ですよ。裏切った学者は肥料の研究をしていたらしいです、植物を操るエルフのイメージ通り、植物の研究は非常に進んでいました。その知識が帝国に渡るのを田中は危険視しているみたいです」

お澄ましお姫様モードに戻った俺は極力冷静に語るが、内心イライラしていた。ぶっちゃけ早く合流した方がよっぽどマシな気がするんだが？

しかし俺の話聞いた木村は顔を蒼白に染めていた。

「嘘だろ？」

「？ 何がですか？」

「肥料を！ 空気から作るって話だよ！ 何で黙ってた！」

木村が俺の肩をガクガクと揺すり、目は血走っている。明らかにマトモじゃ無い。

「ど、どうしたのです？」

「お姫様してンじゃねーよ！ ガチでヤベエ！」

『だから何だつてーの！』

『あ、いや大丈夫か？ そんなに化石燃料が豊富なハズは……炭が無限に手に入るか？』

木村は挙動不審に過ぎる様子でグルグルと狭い地下室を歩き回る。

『なあ、お前はその魔法使えるのか？』

『使えねーよ、なぜか禁術だし。王族の管理下で肥料の精製をしてたからさ。利権だろ？ 知らない方が安全かと思つてさ』

俺は殆どの魔法はマスターしていたが禁術とされるモノとはなるべく距離を開けていた。知りすぎた所為で殺されるのはゴメンだからな。

しかし俺の返答を聞いた木村のシヨックは尋常では無かった。

「クソツッ！」

ドンツと机を叩く。深呼吸する、爪を嚙る。その様子がちよつと恐い。

「多分大丈夫だ、占領されたままならヤバかったが、森から撤退したなら燃料はそう手に入らない、仮に手に入つても……」

ぶつくさと呟くが……なんだつてんだ？

「そんなにヤバい魔法なのか？」

「いや、それでも無いかも知れない、その魔法について知ってる事を何でも良いから教えてくれ」

血走つた目で懇願してくる木村。付き合いは結構長つもりだが、こんな木村を見るのは初めてかも知れん。

俺は『参照権』を駆使して肥料の禁術について知っている事を話していく。

「確か、伝説の植物学者ラクトンが植物が肥料を作る過程を解明し——」

「フアアアアア!!!」

話そうとしたらいきなり開幕から絶叫する木村。

マジで五月蠅いんだが？ コイツ壊れおった。

悲鳴を挙げながら腰を抜き、ひっくり返って一回転。デンデンでんぐり返しでまた来世。死ぬんじゃないかコイツ？

「プギャー」

変な鳴き声で鳴いてるけど。どうしよう？

「ヤベエよー ヤベエよー」

そのまま地面でゴロゴロと転がっている。

「マジで壊れた？」

本気で心配になってきたんだが？ 踏んだら治るかな？ また性癖が壊れるから止

めところ。

覗き込むと、木村は俺の姿をポケットと眺める。

見とれていますね？ この海賊衣装に！ さつき見せつける様にくるりと一回転したらフックで思い切りドツイちやつたけど、アレはノーカンで！

しかし、ノーカンにはならなかった。

発狂した木村は机に座った俺の頭を思いっきりゴリゴリと締め上げたのだ。

『痛ッ！ 何？ 痛え！』

「あ、ああああ！」

え？ マジで壊れてるんだけど？ 狂った様に啼き続ける。

「火薬！ 火薬作れないって！ さっき言ってたじゃないですか！」

ふえ？ な、何言ってるの？ 作れるのは火薬じゃ無い！

「いや、肥料だって！」

「俺は火薬が作れる魔法を聞いた！ お前は肥料を作れる魔法を知ってる！ ソコに何

の違いもありゃあしねえだろうが！」

「そうなん？」

「そうだよ!!」

木村は絶叫して、ガスガスと地団駄を踏む。

「ハーバー・ボツシユ法って知らない？ お前が好きだった異世界モノでもあったはず

だぜ？」

「あー、聞いた事あるかも。火薬を作れるって奴だな。あーあったあった」

スツカリ忘れていたが『参照権』で思い出す。

でも、火薬を作る方法で、肥料を作る方法では無いのだが？

俺がそう言うのと、同じ窒素化合物だから大して違いが無いと言われてしまった。

現代のハーバー・ボッシュ法は主に肥料の作成に使われているとか。

『ハーバー・ボッシュ法には人類が消費するエネルギーの数%をつぎ込んでいたはずだ。それで作った肥料が近代の人口爆発を支えていたのは間違いない』

『マジで?』

全然知らなかった。目をまん丸に大きさに驚いて見せる俺に、苛立ちが隠せないときリギリと右拳を握り込んで見せる木村。リヨナ反対!

『ただ、かなりの設備が必要だし俺の知識もそんなに無い。何よりさつき言ったとおり異様に化石燃料を消費する。石炭は貴重だし石油は見つかっていない。この世界にはそれ程のエネルギーは無い。そう思っていた』

なるほどなるほど、理解理解。木村が心配している事は解った。でもソレは勘違い。俺が教えてやりますか!

『化石燃料の代わりに魔力って事? 確かに無限のエネルギーだけどそんなに便利でも無いぜ? 空気中の魔力を利用するシステムじゃ、夜に電気を灯すぐらい。丁度ソーラーパネルに近いんだ。大規模に魔力を集めようとすれば大規模な設備が要るんだぜ』
安心した? 俺がどや顔で訊ねると、苦々しい顔で「魔力は?」と訊いてくる。

「オイオイ、ソレこそ魔力は高いし貴重だからそんなに使えないよ? 現にエルフだつて炭を作ってるからな。熱を生み出すだけならよっぽど高火力で安いぜ?」

知らなかっただろ？ 自信満々に胸を張ると、ほつぺたを引つ張られた。何故だ！

「でも王族は肥料を作っていたんだろ？ 何故だと思おう？」

「ふえ、なんふえ？」

そう言えば、なんでなんだ？

つてか木村あ、コレほつぺた引つ張りたいだけだろ！ どうやつても可愛いから安心しろ！

「それはな！ 窒素を固定する方法がハーバー・ボツシユ法じゃないからだ！」

「ふえ？」

「良く考えて見ろよ、肥料を作るのにそんなにエネルギーが必要だったら自然界ではどうやって肥料を作ってたんだよ？」

「んんん？ 意味が解らない。ハーバーボツシユ法じゃないの？ じゃあ、さつきまでの長い話は一体何だったのか。」

え？ 今までの前置き？ 長すぎない？ 老人か？

『じゃあ、自然界ではどうやって肥料作ってるのさ？』

『ソレを発見したらノーベル賞なんてレベルじゃ無いぜ？ 英雄になれる。量子コン

ピューターでも作らない限りは解明出来ないだろうな！』

『そーなん？』

『そう、だけどコツチじゃ違った。さつすがエルフの植物学者サマだ！ ソレを突き止めた』

木村は俺に、簡素な地図を突きつける。

「よく見ろ！ 魔力が濃い場所は？ 木が生い茂る場所は？ どっちもエルフが住む大森林だ。エルフが切つても切つても植物が生えてくる！ 他にはスフィールの北、ゼスリード平原へ至る山道も木が茂っていたハズ。大森林以外で木が生い茂る場所は大体斜面だ、何故だと思っ？」

「魔力が溜まりやすい場所……」

「その通り！ ユマたんも知つての通り、魔力は比重が重くて段差に引っ掛かる！」

確かに、だからこそ谷間や山地に魔力溜まりが出来る。魔獣も天然で算出される魔石も山地に現れるのはソレが理由だった。

つまり、魔力が多い場所と森の場所はピタリと重なる！ だとしたら、南方が砂漠地帯なのも、魔力が薄い事で説明がついてしまう。

「つまり、この世界の植物は大気から吸収した魔力で肥料を自分で作っている。思い出してくれ、カレーの時に話しただろ？」

「スカトロ？」

「そっから離れて！ 今真面目な話をしてる！」

これ以上おふぎけしていると、マジなセクハラをされそうなので、素直に話を聞く事に。

「魔力が視えるシャルティア、いやシャリアちゃんが言ってたろ？ 根っこには魔力が含まれてるからウコンとかに魔力が多いって！ 魔力を根っこに送って恐らくは窒素固定菌に窒素化合物を作らせているんだ」

「窒素固定菌って？」

「地球でも大気中の窒素を固定する菌は発見されてるんだよ。それが植物の根っこに居る訳」

狂った様に頭をガリガリと掻きむしる木村。ドン引きである。結論を言え！ 結論を！

『えーつと、つまり？』

『割と少ないエネルギーで肥料も火薬も作り放題です！』

『やつべえー』

『さつきからやべーって言うてるだろ！』

じゃあ無限に爆弾をポンポンと投げ込まれるって事？ 無理ゲーでは？

「コレは田中にその学者サマを殺してもらうしか無いね」

俺はジッと地図を眺める。国力的にも戦争になる気がしない。木村も渋い顔だ。

「後は、馬鹿な帝国が肥料を作るだけに賭けるか……いや、期待出来ないな」

肥料＝火薬が解っているから、大量の報酬で引き抜いたに違いないだろう。田中が学者先生の裏切りを危険視する理由が解った。

アイツは俺以上に知識は無いが、勘だけは昔から異常に良いのだ。流石田中サン！
さつきはコツチに來ない事に文句を言つてたつて？ ええ、手の平クルクルですよ？
ん？ つまり、アレか？

『じゃあ禁術になつてる理由もソレ？』

『多分だけどヤベーつて気が付いたんじゃ無いか？ 植物学者のラクトン様は天才だったんだろ？』

確かに火薬なんてモンが広まれば、魔法が使えるエルフの有利が消えかねない。絶対に秘匿しなくてはいけない情報だ。

コレ、マジでヤバすぎるぞ！ 俺は青くなり、木村は机に突つ伏す。

「クソツッ！ シヤリアちゃんの話聞いた時点で気が付きそうなモノなのに！ 自分で自分が情けないぜ！」

「そうだぞ！ そう言うのに気が付くのはお前の仕事だからなー！」

そうだそうだ！ 木村のせいだ！ そう言う事にしよう、そう言う事にして！

……うん、おふざけは止めよう。やたらと劍呑な目で睨まれた。

『いや、俺も悪いとは思ってるよ？ うん』

『じゃあ、今度俺が作ったパンツ履いて』

『は？』

『パンツ！ 紐パン！』

『なんでだよ！』

またコイツはクツソみたいな性癖を拗らせとる！

『つうか、履いたって見せないよ？』

『澄ました顔で、皆の前で振る舞っている時でも、紐パンを履いてると思うと頑張れる』

『キチガイか？』

『その通りで御座います』

コイツも仕事をしすぎで相当に追い詰められている模様。

作るだけなら良いよ？ 履くかどうかは神の味噌汁。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから数週間後、エルフの街から割と超科学的な感じの魔導車が届いたが、同時に肥料作りの秘術に関する資料は持ち出され、専門家も居らず誰も詳細を知らないという最悪の報がもたらされてしまう。

特殊な炉が必要で、そう簡単には作れそうに無いのが唯一の救いだが、それが魔道具

ならば手順さえ解れば誰にでも使えてしまう。

結局、コレで完全に田中頼みになってしまった。ソレがダメなら後は火薬の量産を前に何とか片を付けるしか無い。

その為には記憶の回収が必要だ、今の俺の体ではいつ死んでもおかしくない。

「是が非でも吸血鬼の謎を解き明かし、体を万全に戻さなくてはなりません」

皆を集めて、作戦室で地図を前にお澄まし顔で宣言したモノの……

下半身が心許ない。

……はい、履きました！　なんか、自分の中の欲望を抑えられなかった。

鏡で確認しましたが、エチエチだった事は報告しておきます。

吸血鬼伝説

俺は禁書庫で記録を読み漁っていた。

禁書庫と言ってもエルフの禁書庫ではなく、ビルダール王国の、つまり人間の禁書庫である。

禁書庫と言うとヤバイ技術がてんこ盛りみたいなイメージだが、そんなモンが有るのはエルフの禁書庫ぐらいだ、ってーかアレがオカシイ。

なんだよ火薬が作り放題って。窒素を固定って言ってもさ、空気の80パーぐらいが窒素らしいじゃん？（木村曰く）それって空気を固めて火薬作ってるみたいなモンじゃねーか、どんなチートだよ！

まあ良いや、良くないけど！ 悩んでも眠れなくなるだけだしさ、スタンガン魔法で寝るのはもう嫌だ！

で、禁書庫だが、実態は機密ファイルの保管庫だと思っただけだし。機密ファイルと言われると陰謀論者の血が騒ぐがUFOの目撃情報では無く吸血鬼の目撃情報だったりするから、流石のファンタジー世界。

そんな訳で欠損した体を取り戻せないかと吸血鬼伝説を調べていた。今の俺の立場

なら国家機密も見放題。

するとまあ出るわ出るわ。出ちゃあイケない記録のオンパレードですわ。機密として封印するのも領ける。

まず基礎知識として、この世界でも吸血鬼なんざお伽話とやばなしの妖怪であった。

『あつた』と過去形なのはそれがある時を境に現実的な輪郭を帯びてくるからだ。

——オルティナ姫の処刑によって訪れた混沌の時代。荒れ果てた王都はいつしか悪鬼羅刹がはびこる地獄へと成り果てた。

そんな下りで始まる伝奇小説は表の図書館でもよく見たモノ。

だが、俺は信じていなかった。国が荒れた時にはちよつとした流行り病でも人は大勢死ぬ、人々の恐怖心や苦悩が恐ろしい幻覚を生み出すのは良く有る話。この怪談もその手の話と本気にしていなかったのだが……

「本当、なのですね……」

ふうーとため息を一つ、資料の束をバサリと机に投げ出した。書き殴ったメモを紐で纏めただけの代物だが、それが逆に説得力を増していた。

俺達が苦戦したグリフォンみたいな妖獣が、ワツサワサと王都に大量発生したのは間違いない。違い無さそう。

その化け物達を調伏ちようぶくして混乱の時代を終わらせたのが当時のティタン王、そして彼の

息子である四人の王子達だと言われている。

王子達は競うように魔獣を打ち倒し、それぞれが個性と能力を發揮。協力し合って魔獣を討伐していく英雄譚は人気で、小説で目が肥えた俺ですら面白いと思つた程。

だが資料を読む限り、実際には協力して魔獣を討つどころか壮絶な足の引つ張り合いの記録ばかり。どうやってあのグリフォンみたいなのを打ち倒したのかサツパリ解らない。

資料に無いと言う事は文官達は本当に知らなかつたのだろう。

——そこに登場するのが吸血鬼だ。

その姿は一見普通の人間の様だとある。一方で吸血鬼は数多の妖獣の中でもとびきり粗暴だと記されていて、魔獣と素手で取つ組み合うイラストが禍々しく描かれていた。

赤髪で牙を生やし、素手で魔獣を組み伏せ喉笛を食いちぎり最後には血を啜る。それ故に吸血鬼の名で呼ばれるようになる訳だが、お伽話の吸血鬼とは大きく違う点がひとつあった。

血を吸うに止まらず、そのまま貪り食べてしまうのだ。

グロテスクなその姿を見るだけで、王国の民は震えあがったとかなんとか。

「可愛い様にも見えるのですが……」

俺は思わずこぼしてしまふ。

『赤髪の長髪を振り回し素手で魔獣と戦い、鋭い牙で血肉を食らう』

まあ、この世界の人間にとってみれば不吉であろう。だが、アニメと漫画で育った俺に言わせればカッコイイまである。

『ダークヒーロー感あるよな』

日本語で呟いたのはダークヒーローにあたるコッチの言葉が見つからなかったから。まるでアニメのキャラみたいな感じがしてしまふ。

俺がそう思うのも吸血鬼が女性であるからだ。禍々しいイラストも女性と言われれば確かにそう見える。

なんせ神は言っていた『人間に追い立てられ、最後の一人になった吸血鬼は愛した男と心中した』と。

魔獣の一種の様に描かれる彼女こそが実は妖獣を討ち倒した功労者だった可能性は大いにある。だとすれば彼女は本当にダークヒーローだ。

魔獣を喰らうと言うのもコッチの人には不気味だろうが、俺としてはアリ。

その程度のパンチが効いたヒロインなど、アニメや漫画ではゴロゴロしていたのだから。

何より良いのが「失ったハズの腕が数日後には元通りになっていた」と言う記述。

腕が生えてくるなんてただの噂話と覚悟していたのに、公的な資料にそう記載されていれば否が応でも期待してしまう。

今まで俺は前世の記憶に触れる度にその能力を手に入れてきた。

記憶と言うのは経験なのだから当たり前だが、マネキデスタル赤棘毒蛙の毒で溺れ死んだパルメスの豊富な魔力みたいに、説明が付かないモノもある。

元より俺に出来ることは殆ど無い。吸血鬼の記憶を手に入れて身体欠損がどうにかなる可能性があるならそれに縋るしか無いのだ。

「この辺りが怪しいですね」

分析の果てに俺は地図上に丸を描く。王国内の一地方、ピルタ山脈の麓の村が吸血鬼の拠点とアタリをつけた。

もとより本を読むだけなら参照権で事足りる。サツと目を通して後は部屋で思い出すのが一番楽だ。

しかし分析をしながら資料を探すなら図書館に籠もった方が良かった。

吸血鬼の目撃情報を時間軸に纏め、場所を記述。それらを信頼性でランク分けして足跡そくせきを繋ぐことで、拠点とおぼしき場所を割り出した。

そうして割り出した場所からほど近い村での怪談話や領主への陳情を漁ってみれば、それらしい記述が頻出したと言うワケ。

こうなつたら後は現地で調査するしか無いだろう、手当たり次第に搜索するなら人手が必要だ。

「面白くなつてきましたね」

俺は図書館で一人、ニヤリと笑うのであつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ファイダーソン老はユマ姫の私室へと招かれていた。

招かれたと言つても事実上の召喚と言つても良い、ユマ姫は既にこの国で一番の重要人物だからだ。

ファイダーソン老はユマ姫が現れてからの激動を思い出す。

森に棲む者と言え少し前までは敵性種族だつた。だから帝国が森に棲む者を滅ぼしたと聞いても、帝国を褒めこそすれ怒る者はどこにも居なかつた。

だが森に棲む者の姫が王都に落ち延びるや、森に棲む者の評価は一変した。森に棲む者の姫であるその少女はそれ程に美しく、虜になる者が続出したのだ。

蔑称だつた森に棲む者はエルフに呼び名を変え、美しい姫の悲劇の物語は王都を席卷しエルフへの好感度はうなぎ上り、対して帝国への敵愾心は燃え上がった。

調べれば劇も歌もすべてユマ姫自身が仕掛けたモノ、まだ十二歳でしかない少女の手

腕に震え上がった記憶がある。

どんな化け物かと興味を持つては居たが自分から会いに行く程では無かった。それが王族の中ではマシな方と後援していたボルドー王子の婚約者に収まったと聞いてもだ。

ある日、そんな相手が自分のテリトリーである図書館に現れた。

確かに息を飲むほどに美しかった。図書館の淡い光の下でも輝くような銀髪と、左右で色の異なる銀とピンクの瞳から目が離せない。

それでも話してみれば賢しげな所も無く、亡国の姫と言う割には思い詰めた部分も無い。

本当に、本当に掛け値なしに年頃の初心な少女の様にしか感じられなかった。

だからこそ、当時のフィダーソンは少女の背後に絵を描いている人物が居ると判断し、その正体を新興貴族のキウムラ男爵だと思い込んでいたほど。

そんなユマ姫がただ一つ、オカシかったのはパラパラと本を捲る速度だけ。

初めは資料を探しているのだらうと思っていた。だが年若い乙女が好む恋愛譚でもペラペラ捲って終わりにしてしまう姿が、些か奇妙に映ったモノだ。

だが、普段の世間話で気がついた。気が付いてしまった。

少女はペラペラと捲った書物、その全てを余す所なく記憶していたのだ。

それを知ったときの衝撃は死ぬまで忘れないだろう。あり得ないのだ、そんな事は。だが事實は揺るがない。コレではオルティナ姫の生まれ変わりで神の使徒と言う妄言を信じてしまう者が出るのも頷ける。

その後の回復魔法の披露、婚約パーティーを経て、婚約者であるボルドー王子の死。ファイダーソン老は取り繕っていた幼気な少女の器が割れ、中から怪物が飛び出してしまったような恐怖を味わった。

何の変哲も無い少女の姿は、ただの擬態に過ぎなかった。

いや、違う。家族を失い、国を追われ。助けてくれた傭兵も殺され、すっかり壊れてしまった少女がなんとか心を癒やし、元の姿を取り戻した矢先。

——再び完膚なきまでに破壊されたのだ。

その痛々しき、破滅的な美しきと病的な儚さはいっそ磨きが掛かり、不安定な少女は一層目が離せない存在となった。

トドメはあの公開裁判だ。訴えたのは第一王子カディナル。そしてそこで少女は片腕も失う事になる。しかも、王子の目的は少女の剥製だったと言うのだから、猟奇的に過ぎた。

まるでマジックだろう。『可哀想』と『可愛い』で全ての注目を集めた後。その少女を舞台の上で無残に破壊してみせる。

しかも今度は我らがビルダール王国こそが少女を傷つけた加害者である。

その少女が新女王となったヨルミ様の隣でビルダール王国の国民へ健気に笑うのだ、無理が見え見えの笑顔と失われた左手を上げながら。

国民の全てが罪悪感に胸を焼かれ、姫のためなら命を投げださんとする勢いだつた。

実際に命を投げ出す者も居た。ユマ姫が乗る馬車が一人の浮浪者を轢いてしまい、大怪我をさせてしまったのだ。

慌てたユマ姫が回復魔法で浮浪者を癒やすべく飛び出すや、浮浪者は衛兵に介錯を願ひ、命を捨てた。

ユマ姫の回復魔法が自信の生命力を分け与えるモノと聞いていたからこそ、浮浪者は手を煩わせる前に命を投げだし、衛兵もそれに答えたのだ。

それに涙するユマ姫の姿は語り草で、浮浪者をたたえる歌すら出来るほど。

だがライダーソン老にはコレも仕込みの様に思われてならない。何の信条も無い浮浪者ですらユマ姫の為に命を捨てるのだぞと言う宣伝と圧力だ。

だが、それをすんなり信じる者が続出するほどには、王都はユマ姫の信者で溢れていった。

庶民の人気はこの通りだが、上流階級への影響はどうだ？ 彼らは上つ面のお涙頂戴には左右されない。

しかし回復魔法の力で軍部はスツカリ掌握されている。彼らは戦争となれば何の疑いも無くユマ姫の為に死ぬだろう。

つまりユマ姫がクーデターを起こせば正面から王家の乗っ取りも可能なはずだ。ユマ姫にはオルティナ姫の生まれ変わりと言う大義名分すらあるのだから。

では歯止めを掛ける役割の貴族は？ それすら最早骨抜きになっている。

ユマ姫の回復魔法は貴婦人のシワやシミを治してしまう。

久しぶりに社交界に現れた婦人の顔が、妙に艶やかに若返っていたらユマ姫が回復魔法で癒やしたと思ってしまう。

普通なら殺し合いが始まる程の醜い争奪戦が起こる事は想像に難くない。だが婦人たちは、あの美しいユマ姫の生命力を譲渡されたのだから若返るのも当然と納得し、ユマ姫の強烈な信奉者になっている。

それにユマ姫は既に王国の地盤を固めている以上、どんな大貴族と言えども無理は通せない。

いや、逆だ。大貴族として無茶が通せない段になって、初めて危険で強烈なカードを切ったのだ。

そして、最後に女王であるヨルミ様についてだ。彼女はユマ姫と仲が良かっただけで何の地盤も無い存在。ユマ姫の影響力を使ってなんとか政治をしているに過ぎない状

態だ。

事実上、このビルダール王国はとくにユマ姫に占領されている。

そんな相手がこの老いぼれにどんな用があるのかと、呼び出された応接間のソファで身を固くしていたのだが……

「吸血鬼の根城を探し出したのです、心当たりのある人物はいませんか？」

やっと現れたユマ姫が言うのは、そんな荒唐無稽な命令だった。

最近のユマ姫は失った体を補う様に眼帯にフックを身につけている。普通なら痛々しいだけの姿だが、不思議と力強く感じるのはどんな魔法か。

儀礼様の軍服に似た男勝りの上半身と、可愛らしい顔と可憐なスカートとのミスマツチは不思議な魅力を持っていた。

フィダーソン老はいよいよユマ姫が可愛いと可哀想だけでなく勇ましい、にまで手を伸ばしている事に危機感を強めた。

ユマ姫が国民皆兵として、最後の一人まで帝国と戦えと命令する未来を幻視したからだ。

だが、一方で今回の命令は意味不明で狙いが全く見えない。この少女が夢見がちに伝説を信じて事を起こすとは思えなかった。

二人、心当たりがありません。オルティナ姫死後の騒乱期に現れた妖獣の専門家です。

て」

「興味深いですね、すぐに会えますか？」

だからこそ、意味がわからない。

早速に専門家を紹介すると直ちに吸血鬼狩りが始まってしまった。名目はオルティナ姫の失われた秘宝を取り戻すため。

そんな秘宝など聞いたことが無いしどんなモノかも判然としない、そんなあやふやな説明で、近衛兵の半分と即日動かせる直轄兵団の三分の一、千人以上の投入を即断する。勿論独断、誰の了解もとっていない。

これほどの規模となれば費用も莫大だ、だが誰も反対が出来ないのは目に見えた。この状況は極めて危険だ。

貴族であっても舐めろと言われるれば衆人の前でユマ姫の足を舐めかねない状況。

……と、言うよりだ。

「あの、ユマ姫様。この老いぼれに状況を説明して頂きたいのじゃが？」

「作戦目標なら説明したでしょう？ 吸血鬼が奪った秘宝を取り返すのです」

「いや、そうでは無いのじゃ」

「？ では何です？」

ライダーソン老がスツと視線を下に移すと、スカートからはみ出した健康的なユマ姫

の足が覗いた。

室内ゆえに硬いブーツは脱ぎ捨てられて、大胆に素足が晒されている。

いや、もうそんなレベルでは無く、もっと大胆で異常な存在が先ほどから目に入って仕方が無いのだ。

彼女の足下でその素足を一心不乱に舐めているメイドが目について仕方が無い！

「彼女は確か……」

「シヤリアちゃんです！」

有無を言わせぬユマ姫の態度。カディナル王子の婚約者だったシヤルティア嬢に足を舐めさせる事で、裏切ったらどうなるかを見せつけているのだとばかり思っていたが、その割に舐めさせられている方ばかりが愉悦に浸って居た。

「ぐへへへ……」

「……これは、気にしないで下さい。お願いします」

ユマ姫は困惑と羞恥が入り交じった顔で懇願してきた。

なるほど、やらせているワケでは無さそうだ。と言うより清純なユマ姫のイメージからこんな見せしめは逆効果でしかない。

そもそも、舐められすぎたユマ姫の足裏はふやけきつており、薄くなった皮からは血が滲み始めている。

「おいちい！ おいちい！」

「痛い！ 山羊責めなの？」

それでも舐め続けるシャルティア嬢。コレではどつちの見せしめなのか解らない。おそらく初めから見せしめなどではなく、好きで足を舐めているのだろう。

アレだけプライドが高く、貴婦人の中の貴婦人と言われたシャルティア嬢が見る影も無く床に這いつくばり、ライバルであったユマ姫の足を舐めることに生き甲斐を見いだしている様は異様に過ぎた。

「ユマちゃんしゅきい」

シャルティア嬢は舌先で足の指の間はおろか、爪の間までねぶり尽くしていた。

「んあつ！」

時折ユマ姫が切なげな声を上げるのがなんとも悩ましい。見てはいけないモノを見せつけられている。とても現実の光景とはとても思えない。

ユマ姫の魅力はココまで人間を壊してしまうのかとファイダーソン老は恐れを抱くのであった。



私、ネルネは洗脳されてユマ姫の命を狙う間者に仕立てられてしまった過去がある。

幾ら不可抗力とはいえ、暗殺となれば一族郎党死刑が当たり前。それが命を助けられ、今まで通り働けるとはユマ姫の温情に感謝をしなければなりません。

今まで森に棲む者とのハーフとして、愛されずに育ったと思っていました。だけど、私を引き取った宰相様が自らの進退すら賭けて私の助命を嘆願したと聞いて涙したものです。

私、案外みんなに愛されていたのかも。

そうやって自分に自信が持てる様になったのですが、行軍に同行するのは流石に怖いんです。

なんせ、私が乗る馬車の周りは騎士達がグルリと取り囲み、勇壮な蹄の音と振動が鳴り響いているのですから。

「スゴイ！ 速い！」

私は馬車から窓の外を見つめて歓声を上げます。

いえ、馬が牽いていないのですから馬車とは言えないでしょう。

これは魔石で動く魔導車なのです！ エルフの技術で作られたモノで、速度も騎兵と足並み揃えて進軍が可能な程、これだけの速度と言うのに振動も少なく、キューーンと鳥みたいな鳴き声でするぐらいしか欠点がありません。

もーたー音と姫様は言っていますがそんなに気になる程では無いので最高の乗り物です、エルフの技術は本当にスゴイと姫様に興奮を伝えます。

「凄いですね！ 姫様！」

「ええ、ですが欠点も有るんですよ」

……ですが、姫様はそうやって謙遜します。何か欠点があるように私には思えませんが、そりゃ貴重な魔石を消費するのは痛いですが、貴族が乗ったり軍用に使うには障害にならないでしょう。

……そんな事より気になるのが。

「あの、姫様、くすぐったくは無いのですか？」

先ほどから姫様に後ろから抱きつき、エルフ特有の尖った耳を舐め回している新入りメイドの存在です。

「……くすぐりたいですが、諦めています」

「不敬じゃ無いですか！ 止めさせるべきです！」

全く意味が解りません。と、言うかそんな事をして良いのなら私だって姫様を舐め回したいです！

そう言ったら、頭を抑えて「頼むから止めて下さい」と言われたので諦めたのですが、なぜ新入りのメイドはそんな無礼が許されているのでしょうか？

端的に頭がおかしいとしか思えません。

「ぐへ、ぐへへ」

鳴き声は完全に狂人のソレです。美味しそうに姫様の耳をしゃぶっています。正直羨ましいです。

こんな気ぶりが何かの役に立つとは思えないのですが、姫様は重要な場所にこのメイドを連れ回します。本当に嫉妬でどうにかなりそうです。

そんな新入りを睨み付けていると、姫様の耳をねぶるのを止め、ピクリと顔を上げました。蕩けきった顔から一転、怖いほどに鋭い視線を窓から遠くに飛ばします。

そして、再び姫様の耳に口を当てるや何事かを囁きました。

ソレを聞いたユマ姫が満足そうに笑い。

「確かにその様ですね、いよいよ現れましたか」

そうやって眩くと、魔導車の屋根へと上がっていきます。

「あの、危ないですよ!」

私は必死に止めますが、こういう時の姫様は絶対に止まってくれません。

「ネルネも来なさい、良いモノをお見せします」

「はいい!」

やな予感がしますがこうなつてはとでも逆らえませぬ。私も屋根へと上がります。

すると同時にプップーと警笛？ が鳴らされ騎兵を含めて全軍が停止しました。そうして現れたのが姫様の腹心であるキムラ男爵です。

「アレを撃つと聞いたのですが」

「ハイ、魔獣が現れました」

え？ 魔獣？ と姫様が指さす方に目をやれば、遙か遠くからこちらに突撃してくる

イノシシが一体居ます。

でも、そのサイズがオカシイのです。距離を考えればちよつとした馬車ぐらいのサイ

ズが有りそうです。

ギルゴール「牙猪ですか、大物ですな」

ザルギルゴール「大牙猪に比べれば可愛く見えますね」

望遠鏡を覗くキムラ男爵はギルゴール牙猪の名を口にします。ハッキリ言つて村が壊滅する

ほどの魔獣の名前に私は慌てました。

ですが、ユマ姫はそんな魔獣を可愛いと笑うのです。そんな人はこの世にユマ姫ただ

一人でしょう。

「アレを使います」

「拝見させて頂きます」

アレとは何でしょう？ と、姫様を取り出したのはジユウと呼ばれる兵器でした。

帝国が使うジュウよりは小型で、とてもあんな化け物を倒せるとは思えません。

ですが、キムラ男爵は信頼仕切った様子で距離を取り、地に伏せるように頭を下げたのです。

こ、これはトンデモナイ威力なのかも知れません！ 私も慌てて魔導車の上で伏せます。

頭を下げたキムラ男爵は真面目な様子でユマ姫に何事かを語りかけます。

『衝撃波でスカート捲れ上がってパンツ見えたりしない？ むしろ見せて！』

コレです！ この不可解な言語こそが！ キムラ様とユマ様の二人だけ、神々の使徒のみが許された特別な言葉。

きつと神聖な祈りを捧げる高貴な言葉に違いありません。

『ねえよ！ 誰が見せるか！』

答えるユマ様の表情もキリツとしていて、神敵への怒りに満ちて見えます。

『派手に行くぜえ！』

不敵な笑みと共に呪文を唱えると、光の渦が姫様を中心に舞い上がり、ゴウツ！と風が吹きすさびます。

「キレイ……」

私が思わずそう呟いてしまったのも当然でしょう。魔導車の上で、真昼の太陽よりも

強く輝く光とキュイイインとドコからか響く音、途轍もない事が起こる予感に震えます。

周囲の騎士達も呆然と見上げる者や、うつむいてひたすらに神への祈りを捧げる者など様々、コレから起こるのであろう奇跡に胸が高鳴ります。

『ソレ要るう?』

『演出だよバーカ!』

キイムラ様の言葉にも呆然としたモノが混じり、姫様は不敵に笑い返します。

キイムラ様は不安になったのか、じりじりと姫様への距離を詰め直しました。

『ねえ、ふらついたりしない? 押さえていようか? おっぱいとか』

『要らねえよ! まずお前をぶち抜いてやろうか!』

物憂げな姫様は、構えたジユウを一転。キイムラ男爵へと突きつけます。私はその凶行に思わず悲鳴を上げそうになりましたが早合点でした。

コレは騎士の肩に剣を当て、叙任する行為と全く同じ。キイムラ男爵のジユウを信頼しているとどう意思表示に他なりません。

ジユウを当てられたキイムラ男爵は決意の固さを悟ったのかすごくごとく距離を戻し、ユマ姫は再び銃に魔法を込め、更に強い光がジユウへと集まっていきました。

そして仕上げの呪文を唱えた後、姫様はゆっくりとジユウを構え直し、既に近くへと

迫っていた牙猪ギルゴールへと照準を合わせます。

魔獣が迫っていると言うのに、騎士達は戦うでも無く道を空けます。

きつとあらかじめ命じられていたのですが、姫様への絶対の信頼を感じます。

……そして。

『死ね！』

短い言葉と共に放たれた弾丸は、恐ろしい威力を持っていました。

ゴウ！ と風が舞い。顔を背けたと同時に、——パアンと何かが弾ける音。

恐る恐る覗いてみれば……

「うそっ！」

アレだけ頑丈に見えた牙猪ギルゴールの巨体が倒れ伏しています。

それだけでは無く、その内臓が飛び散るグロテスクな光景。とんがっていたハズの鼻

先が無くなって、逆にえぐれて大穴が空く様子は不気味さと同時、神への恐怖を抱いて
しまいます。

ですが二人は飄々とした様子で会話をなさっていて流石です。

『コレが魔法と銃を組み合わせた威力かよ！ エグいね』

『魔法とは言えないぐらいに単純な方法でさ、風の道を作って弾丸を加速しただけ、まだ
まだ無駄が多いな』

『そうだな、俺、衝撃波でちびるかと思ったし。あ、パンツは見えました。ご馳走様です』
『え？ 嘘ッ！』

何事か、姫様は慌てた様子で下半身を押さええます。何かトラブルでしょうか？

一方でキイムラ男爵は両肘を押さええる動作で頭を下げ、最上級の敬意と礼を返すのですから対照的。

『紐パンマジで履いてくれるとは、感謝感激の至り』

『うう、履くんじゃ無かった』

顔を赤くして恥ずかしがるユマ姫は珍しく、可愛らしいモノでした。何か失敗したのでしょうか。

それを励ますようにキイムラ男爵はユマ姫の肩に手を置きました。

『……あの、ホントは全く見えてなかったんで改めて見せてもらって良いですか？』

『はあ？』

呆気にとられるユマ姫様の表情は可愛いのですが、何なんでしょう？

その後、貴重な弾丸を容赦なくキイムラ男爵に打ち込む姫様。そしてキイムラ様に空いた肩の銃創を洗々治す姫様の姿が魔導車にはありました。

コレが世に言う神の試練なのでしょうが、凄く痛そうだったので私は良いかなと思うのでした。

帝国の陰

俺たちはピルタ山脈の麓の村、クドラックへとたどり着いた。

俺の読みが正しければこの辺りに吸血鬼の根城があるはずだ。

神のぼやき？ によれば吸血鬼の最期は恋人との心中。

自殺なんだから、住み慣れた場所なりで息を引き取った可能性は大いにあるだろう。

吸血鬼の目撃情報が一番多かったのはダントツで王都なのだが、俺は吸血鬼が死んだのがココだと確信していた。

理由は単純な消去法。なんせ王都の中はシャルティアやカディナルを狙って、くまなく駆けずり回った自信が俺にはある。

俺の参照権の制限なのだが、切っ掛けとなる記憶の欠片を手に入れる為に、前世の人物が死んだ場所に行く必要がある。

そうじゃなかったら、ひたすら王城に籠もってアレコレ手掛かりを探すように命令するだけで済んだのに、非常に惜しい。

外に出るとそれだけで不確定要素は増える。不確定要素があれば俺の『偶然』は俺を死へと近づける。

かと言って、引き籠もって普通にしていても最後には隕石みたいな理不尽で死ぬ。だったら俺は、『参照権』がもたらす可能性に賭けたかった。

死にたく無い、死にたく無かった。そんな思いを複数束ね、記憶と共に能力も手に入れば俺は死から遠ざかるハズ。

更に言うと、今回、俺を守りたいと心の底から思っている兵士を千人単位で連れてきた。

そう言った思いすら、俺の運命を補強し、『偶然』を遠ざける力になるだろう。

ここまで大事にする理由はひとつ。吸血鬼の能力が恐らく回復だからだ。目や腕はともかく、美味しいモノを楽しむために舌だけは絶対に治したい。

なんだかんだ痛みにも痒みにも慣れてきたが、味だけは如何ともし難いのだ。

目指せ、美味しいご飯！俺は絶対に諦めない！

そんな野望に燃える俺が村人に聞き込みを始めて間もなく、最近ここらで怪しい人物の目撃情報が相次いでいると判明するのだった。

もう諦めて良いかな？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

部屋の中、シノニムさんが険しい表情で村人を問い詰める。

「白髪の男が山中を歩き回っていたと？」

「へえ、最近は魔獣が暴れ回って危ないと言ったのですが聞く耳を持たずで、どうしたもんだか」と

答える相手はこの村の村長。俺達は村で一番立派な村長宅を借り上げ宿にしている。小さい村なので宿なんかは少なく、あつても素泊まりの安宿なので仕方が無い。

同行した近衛兵達もその辺の民家を借りているらしい。

それでも千人からなる後続の本隊なんざその辺でキャンプだろうから、コッチは恵まれてる方だろう。

話が逸れたが、白髪の男と言うのが気に掛かる。田中が見たと言う帝国軍の怪しい双子が確か銀髪だった。

お茶を飲みながら話を聞いていた俺だが、眉をひそめながらティーカップをコトリと置いた。

「白髪ですか？ 銀髪ではなく？」

「いえ、すいやせん森の中なんで、色の見分けはちよつと」

「そうですか……どちらにしろ、それ程珍しい髪色では無いと思いますが」

そう、俺もシノニムさんも銀髪だし、この世界では超レアと言うわけでは無い。

「へえ、ですがこの辺りにやあんまり無い色です。それに召し物もなんぞけつたいなもんで」

「シノニム、紙とペンを」

「かしこまりました」

俺は渡されたペンをサラサラと走らせる。そうは言っても参照権で表示した映像をなぞるだけ。

「姫様の絵心には驚かされます」

それだけで普段は厳しいシノニムさんすら持ち上げてくれるし、碌ろくに絵も見たことが無い村長なんぞは口を開けっぱだ。

俺は王都を襲った兵士の服装を一通り描いた。その内の一つを村長が指差す。

「コイツはおでれえた！　そうですこんな服装でしたわ！　いんやーお上手だ」

「……そうですか」

何でも無いフリをしてカップを口に運ぶが内心は複雑だ。

絵を褒められるのは嬉しいし、久しぶりにチートっぽい事出来た！　と喜ぶ気持ちもそこそこに、憂鬱な気持ちが大半であった。

俺の絵を見つめるシノニムさんの目線も険しい。

「帝国の軍服、それも最新のモノですか？」

「迷彩服です、森の中で見つからない事を目的にした柄ですな」

軍隊みたいな迷彩柄と言うのはファンタジーなこの世界で酷く浮いている。誰の考

案かは一目瞭然だ。

——黒峰さんが来てるのか？

ネルネ洗脳の後、ドコに隠れたかと思っていたら、また先回られたか？

嫌な予感に身を焼かれ、急せいた心を落ち着かせる為に反射的に親指の爪を噛んだ。

——ガリツ

思ったよりも強く噛んでしまい血が出た。下らない自傷行為に苦々しく思いつつ、滲む血を見つめるしかない。

——パクツ

「ええ？」

思わず間拔けな声が出てしまう。血が滲んだ親指をしゃぶる横顔は幸せそのもの。

……シヤリアちゃんです！　ってクソたわけ！　ビツクリするわ！

村長は目を丸くしてるし、先輩侍女として叱る役目のシノニムさんは、どうにもシヤリアちゃんには腰が引けている。

いや、腰が引けない方がどうかしてますけどね！　マジキチだから仕方がない。

「あの、考え事をしてるので今は控えて頂けますか？」

なーんて優しくお願いするも。

——ペロペロ

だめだ！ コイツ聞いてない！

だが我らには彼女がいる。こんな時に頼れるのが我らがネルネ。

「な！ 何してるんですかあ！ ほら！ コツチに来なさい！」

飛び出してきたネルネがシャリアちゃんに抱きつくつと、ズルズルと隣の部屋へと引き摺って行く。

「あ、なんで私の耳まで舐めるんですかあ！ いい加減にしなさい！」

びしやりと閉められた隣の部屋から、そんな悲鳴まで聞こえてくる。

ネルネよ、君の勇姿は決して忘れない！

俺は隣の部屋へビツと敬礼するのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

次の日「ううー、私、食べられそうになっちゃいましたよー」とぼやくネルネと、ソレを聞いて顔を引き攣らせるシノニムさんをヨソに俺は村長宅で会議を開く。

メンバーはゼクトール近衛兵長、木村、シノニムさん、俺。計四名。

「私は先遣隊せんけんたいとして数名を山へと先行させるべきだと思います」

先に帝国軍が来ている。その事実焦つての提案だったが、計画外なので止められると思つていた。

「そうですね、後続が揃うまで遊んでいる訳にもいかんでしょう」

「別に姫様が出る訳では無いのでしょうか？ ならば問題はないと思います」

だが、ゼクトール兵長もシノニムさんも賛成の様だ。

ま、最後には俺が出張って行かなくてはならないが、それは目標が定まつてからで十分。

近衛兵が何人か出張つても護衛が減る位で特に問題も無いと許可が下りた。

……で、木村にセクハラされたり、それをシャリアちゃんに物陰から監視されたりしながら数日。ようやっと後続の歩兵が追いついた。

その頃には先遣隊によって探索すべき場所も絞られていた。

俺たちは設えられた作戦室で目標を確認する。地図を広げて進行役を買って出たのは実際に山に入ったゼクトールさんだ。

「ピルタ山脈は複数の山々が連なる険しい場所故に未踏ゆえの魔境と化していますが、本当に危険なのは山頂よりもむしろ谷です」

そう言ってピルタ山脈の中心を指し示す。そこは山々に挟まれて深い谷間が広がっている場所だ。

そんな報告にやっぱりなと頷くのは木村。

「私の仮説ですが魔力の比重は重く地を這うように広がると考えられます、それが山に

遮られ吹き溜まる事で山岳地帯には魔獣が多い、この仮説が正しいとするならば本当に危険なのはむしろ谷でしょう」

「おっしゃる通りです、谷の魔獣は強力な上、濃厚な魔力溜まりに体調を崩す者が続出ですが、だからこそココが怪しい」

ゼクトールさんが言うには谷には人工的なオブジエが散見されると言うのだ。

エルフにとつてもピルタ山脈は禁忌の土地、それ程に危険な場所。遺跡があつても発見されていない可能性は高い。

だがそんな魔力が濃い場所なら役に立つのは人間よりもエルフだろう。

と言うか、人間の兵士が何人も居ても役に立たない可能性は高い。コレはマズったか？

「魔導車の運転手に連絡して、エルフの戦士を手配出来ないか聞いてみましょう」

俺は慌てて指示を出す、ソレを遮る声が響いた。

「それは無理ですよ」

「何者です？」

現れたのは年若いエルフ。人間よりも老けづらいエルフだがそれにしても若い、つて言うか見たことがあるような……

「あなたは……もしかやマーロウですか？ 生誕の儀で共演した」

「まさか！ 覚えていらつしやったんですね！ オレ、なんて言ったら良いのか……光栄です！」

感極まった様子で涙ぐむマーロウは俺より二つ上だったかな？ 正直全く覚えて居なかったので『参照権』サマサマだ。

そう言えば当時から色気付いたガキで、王族の地位を狙って色目を使って来やがったのをギリギリ覚えているが、ソレは今でも変わらないらしい。

「オレ、姫様を守る為に役者を止めて戦士になったんです。当時のオレは本当に情けなくて、でも覚えていてくれた、ソレだけで……オレ！」

ポロポロと涙を流すマーロウ。だが俺はだまされんぞ！ コイツは役者、嘘泣きなんてお手の物だ。

ココだけの話、エルフの国エンディアンで俺の噂は気持ちが良いモノばかりでは無い。

確かに見た目は良いため、生誕の儀では初お披露目と言うこともあって大好評だったが、アレは役者陣が超豪華だったと言うのも大きい。

あの劇だってマーロウ君にしてみれば、悪夢そのもの。俺を好きになるハズが無いのだ。

加えてプライドの高いエルフにとって、人間とのハーフは忌むべき存在だし、俺は魔

力も低く、不健康さでは並び立つモノも居ない存在。

それに肉を食っては倒れたり、大牙猪ザルギルゴールに追い回されたり、おまけに侍女の顔をえぐってグロテスクな美容整形を繰り返して大騒ぎを起こしたり。

お騒がせ者としての悪評ばかりが目立ってしまったのだ。

だのに言うに事欠いて、何が「姫様を守る為に役者の道を捨てた」だ！

エルフの戦士は普通にエリートコースなので、俺の為に役者の道を捨てたというのは眉唾。

彼は元々魔力が多かったので、「東大生でバンド組んだけど、やっぱり医者サマになりまあす！」みたいなモノ。より安定する職業に就いたに過ぎない。

あらかた最後の王族という未曾有のブランドに、降って沸いた逆玉チャンスを感じているに違いないのだ。

なにより当時七歳の時分で既にカツコ良かったが、今は十四か五か？ もう体つきは完全に大人、細マツチョに鋭い眼光のメチャクチャなイケメンなのである。

おしやれなイケメンⅡ。パコパコヤリチン。コレは絶対の方程式。

女を泣かせる為に存在しているような、人類の敵と断じてしまって間違いないだろう。女つ気無いままにホモに殺されたボルドー王子の弔い合戦として、こんな奴とは断固として仲良くしない所存！

とは言え、話は気になる。

「ところで、どうしてエルフの戦士は動員出来ないのです？」

「それは……魔導車を姫様に届ける重要任務にオレみたいな若造が派遣される位には人手不足なんです。特に魔獣退治が得意な弓兵は少なく、魔剣は元々の使い手が少ないところに魔剣自体も帝国に相当数が奪われて……」

「……そうなのですね」

聞けば冬の狩猟シーズンに魔獣の間引きが行われなかった影響は計り知れないのだとか。

大森林には魔獣が溢れ、戦士達は帝国との戦争もままならない有様と聞く。

コツチに回せる兵力は本当に無さそうだった。

「で、でも！ オレ！ マジで強いから！ 魔導車を運ぶまでに牙猪ギルゴールだったら三匹も仕

留めています！」

マールロウは力説するが牙猪ギルゴールなんざ俺だってワンパンである。

いや、確かに一般的には強い魔獣だったな。インフレが激しい。

魔導車が魔獣を引き寄せると言う話でもマジって事だ、覚えておこう。

と、まあ、戦力として他の兵士よりマシな事に違いは無い。

なにせ、笑顔はタダ。媚びの一つも売っておくか。

「解りました、頼りにしていますよ」

「ハイッ！ 任せて下さい！」

ビシツつとした、元氣一杯の敬礼である。

エルフの軍服はパリツつとしていてカツコイイ。不覚にも俺の乙女の部分がキュンキュンするのが心底悔しい。

俺はメツと眉を上げ、釘を刺す。

「かといって主力は人間の兵士達です、余り出しゃばってエルフの評判を落とす様なら容赦はしませんよ」

「心得ております！」

若いだけに功を焦る恐れだつてある。結局はたった一人、大した戦力にはならないだろう。遺跡探しがメインなんだからモノを言うのは人海戦術だ！

そうして俺達は輜重隊しちゆうたいや陣地の警備を残し、七百人近い規模で山地へと進軍するこ
とになったのである。

その勇ましいこと！ 凄い規模での進軍。コレでは数人の帝国兵などモノの数では無いだろう。

トンデモナイ予算を掛けての出陣なのだ、この作戦に失敗はあり得ない！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「失敗だったかも知れませんが」

山狩りにしては多すぎる人数で突っ込んだ訳だが、俺は眼下の光景に早くも後悔していた。

細い道を大人数でズラズラと連なって歩くのは効率が良いとは言えず、一つの山を越えるだけで数日を要した。何より一つ目の山を越えた辺りで一気に魔力の濃度が上がったのだ。

濃すぎる魔力の影響で、密かに頼みにしていたシャリアちゃんならではの症状でダウン。これは魔力に過敏なシャリアちゃんならではの、慣れるまでに時間が掛かりそうだった。

他の隊員は単純に健康値が足りずに離脱する者も多く、問題の谷に差し掛かる頃には残りが四百人程に、更に谷に住む強力な魔獣との戦闘となると……

「うわあああ！ 助けてくれえー！」

舞い上がる兵士達。そう、全く頼りにならないのだ。

精神的にも物理的にもだ！ 兵士達が^{ザルギルゴール}大牙猪に次々と吹っ飛ばされていく。

谷の中では逃げ場が無く、突っ込んでくる魔獣を止める術も無い。

何よりキツイのは人間の武器が全く歯が立たないこと。

弓も^{ザルギルゴール}槍も大牙猪レベルの魔獣には効果が無いので、群がる兵士には肉壁としての意

味しか無い。

「仕方ありませんね」

俺はホルスターから銃を取り出し、構える。

立つのは神輿みこしの屋根の上。

神輿！ 大名か！ と突つ込みたい所だが『かよわいユマ姫』に険しい山道を歩かせたく無いと言う謎の配慮でアホ程揺れる神輿に詰め込まれた。

魔法で木を蹴つ飛ばして移動すれば一瞬なのに！ と、舌を噛みそうな揺れに強制閉口。食いしぼりながらぼやいていたが。

群がる人の健康値に左右されず、上から銃を撃てるのだけありがたい！

——パーン！ バシユ！ パーン！ バシユ！ パーン！ バシユ！

ザルギルゴール

火薬が爆ぜる乾いた音と、血肉をえぐる湿つた音が三連続、それだけで大牙猪はその巨体をふらつかせて最後にはズシンと倒れた。

アレだけ苦渋を舐めさせられた魔獣だが、銃と魔法の組み合わせの前には形無しだ。魔法の矢より火力が有るのに連射が出来るのだから即勝負が付く。

どちらかと言うと、「姫様は俺が守る」とか言つて、頼んでも無いのに近寄るマーロウが一番強敵だった。

折角潤沢な魔力に溢れている場所でノーリスクに魔法が連発出来ると言うのに、健康

値に遮られてしまうと無駄弾を撃つことになる。

と、言うか銃さえ有れば大抵の敵に負けない感じなので、兵士達をこんなにつばい連れてくる意味もかなり怪しくなってきた。

麓で祈っていて貰った方が、よっぽど良かったのでは？

さりとて人海戦術は偉大である。戦いも調査も数だよ！

実際に谷の調査を開始して三日と経たず、崩れた岩盤の中から近代的な建物の痕跡を発見する。

「コレは間違いなく先史文明の遺産ですね」

そう言うのはファイダーソン老が紹介してくれた吸血鬼の専門家であるトクラ博士だ。彼はこういった遺跡に関しても造詣が深い。

博士やゼクトール兵長、ワッツ副長とマーロウ君と木村とシノニムさんとバテバテのシャリアちゃん、他数名の兵士と共に遺跡の中に侵入する。

と言つても既に決死隊として先行した兵士が先の安全を確認済みだ。

しかし、遺跡に入った瞬間、ギョツとした。

話には聞いていたが、想像以上に近代的だ。地球のアスファルトに近い道路だし、淡く光るのは非常灯だろうか？

雰囲気と言うと完全に長距離トンネルのソレであるが、終着に雪国は無いだらう。

代わりにその終端にあったのは如何にもな感じの鋼鉄の扉だ。

先に侵入していた部隊はどうしても開けられなかったと、申し訳なさそうに報告してくる。

「破壊しようにも余りに強固で、我々には歯が立ちません」

「それでしようね、気にしないように」

なにせ見た目はシエルトの入り口だ。普通にやつても絶対に開かないだろう。

となると、気になるのが扉の横にある数字入力コンソールだが、肝心のパスワードが解らない。

記憶を手に入れたら解るのかも知れないが、記憶を手に入れる為に中に入りたいため、残念無念。

しかし前向きに考えれば、コレは初めての謎解きイベント。異世界ファンタジーな世界とは言え、小説だったらバトルの合間にこう言うイベントはつきものだ。

だとすれば、案外身近な所にヒントがあつたり……

と考えている俺をヨソに木村がコンソールをポチポチと。

「あ、開きました」

ハイハイ！ まーたそういうオチかよ。

「一体、なんと入力したのですか？」

一応答えは聞いておくよ、一応ね。

「いえ、単純に正解の番号部分だけボタンがえぐれてまして、数通りの組み合わせでアツサリ開きました」

俺の使っていた自転車の鍵みたいな単純な奴かよ！

本気でつまらないんだが？

と、俺のガツカリを無視して、扉はゴゴゴと開いていく。

ゲームだったら魔獣が飛び出して来てのバトル展開だが、出て来たのは残念ながらもっと厄介なモノ。

より濃厚な魔力であつた。

ハーフエルフの俺だつて結構キツイ魔力に顔をしかめる。

「なんて濃い魔力！」

「コレは強烈ですな」

ゼクトールさんも辛そうに歯がみするが、それでも他の兵士に比べればマシな方。後は木村とマールロウ君が無事なぐらい、他に動けるのは数人の近衛兵ぐらいと言う惨状だ。

エルフか、普段から良いモノ食つて健康値が多そうな連中だけが無事。それだけ強力な魔力が渦巻いている。

いよいよ大人数を連れてきた意味が無い。結局、マローウ君とゼクトールさんを筆頭に、健康自慢の近衛兵を数人。頭脳労働担当に木村を連れだつて、遺跡の中へと入らざるを得なかつたのである。

危険は百も承知だが、欠損を治す千載一遇のチャンスに俺は抗えなかつた。

ココまで金も時間も、犠牲だつてソコソコ出ている。どうしても何か成果が欲しくて諦める事が出来なかつた俺は、きつとF Xとか向いていない。

それはもう後悔することになるのであつた。

シャリアちゃんの閑話

薄暗く殺風景な部屋の中、妖艶な微笑みを浮かべるは、途轍もない美女だった。

まるで合成と見紛う程にチグハグな光景。オペラ座や舞踏会こそが相応しい美女の姿で、優雅に指差し、軽やかな声で説明するのは、部屋のただ中の『奇妙な肉塊』についてであった。

「昨日のネズミはこの二匹です」

豪華な金髪を背に流し、恋する乙女特有の上気した頬は見る者を惹き付けて止まない。

ただし、それもこの『現場』で無ければの話。部屋の全体像を俯瞰して見れば、彼女は決して目を合わせてはいけなない類の悪魔だと、本能が真つ先に理解するであろう。

城内の一室に吊されたのは二体の死体。勿論ネズミなどでは無く、『人間』だ。

「ご苦労様です」

そんな猟奇的な『現場』に同居しながら、何でもない様に彼女へねぎらいの言葉を掛けるのはユマ姫。城下の話題を独占している人物である。

だがそこに町で語られる虫も殺せぬ少女の姿は無い。大の男でも悲鳴を上げるであ

ろうグロテスクな死体を前に、眉一つ動かない。

一方でユマ姫の代わり、残酷な死体を目の当たりにして顔色を失うのは侍女であるシノニムだった。

それを見たユマ姫は一転、シノニムに心配そうな表情で声を掛ける。

「顔色が悪いですね？ 風邪ですか？」

「いえ、拷問の様子が余りにも衝撃的だったので」

ユマ姫と違い、シノニムは事前に拷問の様子を見学していた。

確かに女の子が見て気持ちが良いものでは無いだろう、と思うユマ姫であったが、それでも納得出来ないと言を傾げた。

「あなたもオーズド伯の特殊部隊に在籍していたと思いませんか？」

「諜報特務部隊です、確かに拷問の訓練も受けていますがコレほどは……」

言葉と共に吊られた死体を見上げるシノニム。

本当は見たく無かった。だが仕事柄、目を逸らすわけには行かなかった。それ程までにプロの手際だ。

——どうやったらココまで綺麗に！ ココまで薄く！

——人の皮を剥げるのか！

吊られた死体は赤黒い肉を外気に晒していた。それでも『壊れた』と見なされトドメ

を刺されるその直前まで、確実に生きていたのだから常識外の絶技と言える。

その絶技の持ち主が凄腕の拷問官ではなく、目の前の高貴な笑顔を振りまく女性と言うのは何の冗談だろうか。

「お褒めに預かり光栄です」

慇懃に頭を下げるその振る舞いは完璧。少し前まで公爵令嬢だったのだから当たり前と言えるだろうか？

彼女はシャルティア。暗殺を生業とするダックラム家の表の顔だった。

実際には表だと思っていたモノが裏で、裏だと思っていたモノが表だと聞かされてシノニムは頭がどうにかなりそうだった。

だが、あの拷問の手際を見せられては信じない訳にも行かない。

「それにしても流石ですね、今月だけで十匹は退治しています」

褒め称えるユマ姫の言葉にシノニムは冷静さを取り戻す。

そう、本当に恐ろしいのは拷問の手際では無い。紛れ込んだ間者を捉える手腕だ。

シャルティア嬢改め、シャリアちゃんはどれほど用意周到に忍び寄る暗殺者であつても絶対に見逃さなかつた。

それどころかシノニムがユマ姫について、余り良くない心証を上司であるオーズドへ奏上する場合、通常と異なるルートで情報を流しているのだが、それすらも突き止めら

れてしまっていた。

物陰から突然現れるシャリアちゃんに肝を冷やしたのは一度や二度では無い。

いや、その場合はシャルティアと呼ぶべきだろう。暗闇から現れる彼女には、普段のシャリアちゃんのおちやらけた姿は見られない。

「勿体ないお言葉です」

死体を前にすると真面目な顔を取り戻すのは何の冗談かとシノニムは思う。

だがもつとイカれているのがユマ姫だ。

「コレはなにか褒美を考えなくてはいけませんね」

顎先に指をあてた可愛らしい仕草は、友達へのプレゼントに悩む少女そのもの。

だが元々シャルティアが狙っていたのはユマ姫の命だ。

それどころか、たまたま失敗しただけで、愛するボルドー王子を殺した仇の一人と言つても過言では無いだろう。そんな相手に褒美だなんて！

——アナタの命が欲しいです。

等と言いついたらどうするつもりなのか？

そんな心配をついシノニムはしてしまう。流石にあり得ない……と頭では思いながら。

「では………アナタが欲しいです」

「なっ！」

妄想と現実がシンクロしたような声に驚き、シノニムはキツく腰のサーベルを握りしめる。

この暗所ではとても敵わない。それでも決死の覚悟を決めるのだが、一方で困った表情で笑ってみせるのがユマ姫だ。

「そう言われても……はい、そうですか、とあげる訳には行かないのですが？」

「少しだけ！ 先つちよだけでも！」

「食べちゃいたいぐらい可愛い」とか、「先つちよだけ」とか、まるでモテない男の様な物言いだ、シノニムはゾツとする思いだった。

話には聞いていた。だがまさか、と信じていなかった。

『シャルティア嬢はユマ姫を喰らいたがっている』

事実だった。これはもう理解不能の狂人だ。

だがそんな相手と笑顔で談笑するユマ姫は、それに輪を掛けた狂人であった。

しかし流石のユマ姫も食われるのは嫌だとばかり、呆れた様子で欠損した左腕を見せつける。

「そう言われても、もうアチコチ欠けてしまって不便で仕方が無いのですが？」

「でき物とか、豆とか、吹き出物でも良いので、何か口に入りたいのです」

ユマ姫が天を仰ぎ、シノニムは気色の悪さに俯いた。

一方で真剣にユマ姫を見つめるのがシャルティアだ、彼女は以前食べたユマ姫の『味が忘れられなかった。

一つになれたような快感があった。臭みが無く花のような香りがした。

ストーカーの様に追いかけた相手と、遂に巡り付いた境地の様に考えていた。

だが、ユマ姫も食べられたくは無いので代替案を提示する。

「ハーフェルフが食べたいのでしたら、ご存知の通り私の侍女にもハーフェルフの少女が居ますよ？」

ユマ姫の提案にシノニムはギョツとした。同僚であり、宰相との連絡役のネルネを化け物の餌にしようとする暴挙。

だがシャルティアは首を振る。

「いえ、ハーフェルフではなく、アナタだから食べたいのです」

「それは……困りましたね」

心底困ったと二人悩むその様子に、怪談の世界かとシノニムは戦慄する。

それ程に荒唐無稽、狂人同士の会話に全く付いていけなかった。

こちらもユマ姫がかつての仇、シャルティアちゃんに気を使う理由は何か？

ユマ姫はシャルティアちゃんに借りを感じていたのだった。

せつかく意気投合し「一緒に死に行こう」と二人の世界とばかりに誘っておいて、結局木村とイチヤイチャした所を見せつけるだけに終わってしまった。

殺すべきところを生かしてやってるんだからチャラ、位に思っていたが、ここの所の活躍は想像以上。

ユマ姫を狙うのは過激化したカデイナール派の残党が主だが、バックには多くの貴族が控えている。

なにせ他種族の姫が国を支配しているのだから、冷静に考えてしまえば危険にも程がある。目先の利益に捕らわれない良識派こそ、この状況を憂いていた。

諜報員を送り込むぐらいいなら良いのだが、難癖をつけるための仕込みを行う連中や、直接的に殺し屋を送り込む輩も居るので眠れぬ夜を覚悟したモノ。

だが、実際にはシャリアちゃんの八面六臂の活躍で、ユマ姫は枕を高く眠れていた。この感謝は計り知れない程で、何か報いたい思いが強くなっていった。

しかし死んだことになってる身に地位は論外。かと言ってお金などでは少しも喜びそうにない。

自分を好きなのは解っているが、恋人同士と言う訳にも行かず。「キスとか、なんならセクロスでも良いかな？」ぐらいに考えていたのだが、流石に食べられるのは本人としても想定外であったのだ。

ユマ姫は頭を悩ませる。

眉を八の字にして唸る事、数分。

最後には大きな大きなため息を一つ。若干の涙目と共に、観念したように絞り出す。「今度の遠征が終われば、この先つちよだけなら食べても良いですよ」

差し出したのは欠損した左腕の先端。体を保護するために大きく脂肪が盛り上がり、柔らかな触感を誇っていた。

ここなら余り感覚も無いし、ちよつとぐらいは切つてもまた脂肪が盛り上がるだろうと言う判断。

「あっ！ ああ！」

一方で感極まったのがシャリアちゃんだった。

殆ど意地悪のつもりでしつこくお願いしてみたが、聞き入れられるとは夢にも思っていないかった。

それが許された。まさか食べても良いと言う言葉が聞けるなどと！

もしもノリノリで食べて！と言われてもコレほど嬉しくは無かつただろう。

……さて、大変に突然だが、ある性癖について語っていこう。

世の中には『根負けセックス』と言うエロジャンルがある。

何度も懇願される内に体を許してしまう、と言うシチュエーションで、レイプでは無いが乗り気でも無いのが非常に重要なのである。

シャリアちゃんが辿り着いた境地はそれに近い。いやソレを超えた献身であった。

嫌で嫌で仕方が無いが世話になっているし仕方が無い、と文字通りに体を捧げるユマ姫の諦観がシャリアちゃんには余りにも愛おしく思えたのだ。

「はい！ 優しく！ 優しく囓ります！」

意味不明な事を言いながら今にも齧りつきそうなシャリアちゃんをユマ姫は必死に制する。

「待つて下さい！ 今度の遠征、怪我で失敗したとなれば後悔が残ります、帰ってからにして下さい」

必死で抵抗する。ユマ姫には「ひよつとしたら吸血鬼の力で腕なんてスグ生えるようになる」と言う希望があったのも要因の一つであった。

そんな事は知らないシャリアちゃんはユマ姫の言葉に素直に頷いた。

「解りました、期待しています」

「そのように願います。今でも体を舐めるぐらいなら許しますから、えっ？ いきなり？」

こうしてご主人様の体を所構わず舐める『おしやぶりメイドシャリアちゃん』が爆誕

したのであつた。

古代遺跡 1

「驚いた、今まで見たことの無いタイプの遺跡ですね」

キヨロキヨロと辺りを見回すマーロウ君はどうにも落ち着かない様子。

純エルフで魔剣使いでもある彼には、我々の先頭に立つて貰っている。なので警戒心が強い分には良いのだが、どちらかと言うと好奇心が勝って見えた。

遺跡探索は男のロマンって奴なんだろうが落ち着きは欲しい。別に珍しくは無いぞと釘を刺しておこう。

「大森林南西部にある緑の六番遺跡に近いですね」

なんでも無いとばかりに俺がそう言うと、目をまん丸に驚くマーロウ君。

「え？ そうなんですか？ って、まさか全ての遺跡について覚えていらつしやる？」

ハイ、来ました！ よーし、チートアピールしちゃうぞー。

「私は遺跡の資料に限らず、王立図書館の全ての書物を記憶しています」

「ま、まさか？ 噂には聞いてましたけど、アレって本当なのですか？」

「ええ、ですから記憶違いはありません。おそらくは病院、もしくは研究所として作られたモノでしょう」

「流石です！ ユマ様！」

少し年上の少年が目キラキラさせて褒めてくれるのは、案外気持ちが良い。

だが気を良くした俺に、前を歩む緑の外套が翻る。

「流石はユマ姫様、エルフの中でも卓越した知識をお持ちなのですね」

そうだ、木村^{コイトツ}が居たんだった。

木村には『参照権』のネタバレをしまつてしまっているからな、慇懃^{いんぎん}な口調でありながら目は冷ややか。なんだか種が割れた手品を披露したみたいなのバツの悪さがある。

適当な事を言つて誤魔化しておこう。

「神の力の一端です、この世界の真実を記録し、神に伝えるのが私の使命の一つです
ら」

俺がそう言うとは後方から「おお！」と歓声上がる。声の主は近衛兵。彼らは選りすぐりのエリートなのだが、現在は息も絶え^た絶え^だえ。

濃すぎる魔力の影響で碌に会話に参加出来ないのが現状だった。

彼らはボルドー王子の死後、ゼクトールさんを筆頭に強烈な俺のシンパになっている。俺が神に近い存在だと本気で信じているし、そんな話題を出すといちいち喜ぶので面白い。

だが、そんな近衛兵のノリに慣れていないのがマーロウ君だ。喜色を浮かべて食いつ

いてくる。

「だとしたら帝国は地獄に落ちますね！ 姫様を通じて外道な侵略行為を神に見られているのですから！」

まーね、確かに見ては居るよ？ でも、あの爺かみは人間の争いになんざ、欠片も興味が無いに違いない。

「マーロウ！」

「な、なんですか？」

「復讐と言うのは自分の手で行わなければ意味がありません」

「で、ですが！」

「既に力は頂いているのです。何より神を利用しようなどと、不遜な考えです」

「ハッ！ 出過ぎた口をききました」

「解れば良いのです」

と、そんな感じで気取っていたら……小声で話し掛ける奴がいる。

『なあ、ちよつと適当に設定を盛り過ぎじゃねーの？』

木村に心配されてしまった。

『良いんだよ、本当の神話だって矛盾だらけだし』

『あー解る、だから俺、神話って嫌いなんだよ』

理屈屋の木村には耐えられない領域が神話だ。

だから神の使いを名乗るからには、逆に理屈が無い方が丸く収まる。

もうノリで押し切ったモン勝ちの世界で、神聖不可侵な雰囲気纏う美少女として、適当にソレっぽい事を言えば何でも通るから凄い。

例えば夜空を見上げて「星が泣いています」とか言えば勝手に良い様に解釈してくれる訳で、『漫画でよく見る、思わせぶりな台詞コレクション』が面白い様に通用した。

そしてどんなハツタリも巧妙に真実を混ぜ込むのが肝。

ぶっちゃけ、さっきの言葉だって嘘は何一つ言っていないのだ。

ただ、俺だけじゃ無く、魂を持つ全ての生命体が記録者つてだけである。

それに『参照権』の方はマジで神様から貰ったチート能力。

記録によると、緑の六番遺跡は風雨に晒され、既に生きた設備は残されていなかった。だがココは防護壁に守られていたのだから期待大だろう。

「ココが古代の病院だとすれば、私の体を治す事も可能かも知れません」

俺がそう言うと、再び歓声が上がります。

「だとすれば、無理にでもトクラ博士に同行を願うべきだったのでは？」

魔力に侵された青い顔でそう尋ねるのはゼクトールさん。トクラ博士はファイダーソン老に紹介して貰った吸血鬼の専門家で、古代遺跡に関しても詳しくあったのは確か。

「あの方では魔力に耐えられないでしょう、それに遺跡の知識だけで言えば私の方が上です」

「……なるほど」

この世界にはスマホもネットも無い。全てを完璧に覚えていられる『参照権』の力は計り知れないのだ。

それに、資料を見て前々から思っていた事だが現物を見て確信した。古代遺跡って奴は地球の建築物にソコソコ近い。警戒しているマーロウ君には悪いが、俺はトラップなんか有るハズ無いと思っている。

なにせコンクリートの壁やその塗装まで、学校とか病院みたいな雰囲気なのだ。

『この感じ、懐かしいな』

俺はブーツを踏みしめキュッキュツと床を鳴らす。上履きだったらもつといい音で鳴るんだけどな。

懐かしいのは木村も一緒だろう。……いや、何か見つけたのか？ 若干興奮した様子で振り返る。

『参照権でリノリウムって検索してみ、多分めっちゃ小説出て来る！』

……どーでもいいがな！

ま、一応検索しますよ？ するだけ。

『……俺のログには何も無いな』

『おいイ！ アナタ読む小説が片寄り過ぎでは？』

『知らんがな』

いや、ホント、知らんがな。

リノリウムって何？ フツーに初めて聞いたんだが？

その後もブツクサと「俺にも参照権が欲しかった」とか愚痴る木村を尻目に、俺達は案内板を発見。それを頼りに中央ロビーへと足を進める事にした。

ココが病院だとすれば、ロビーには詳細な案内板なりがあるだろうと言う思惑だったのだが……

「コレは……何なんでしょうか？」

余りの不気味さに思わず、と言う様子で木村が呟いた。

ロビーに辿り着いた俺達の前に広がっていたのは底知れぬ大穴であった。

吹き抜けかと思ったが違う。突き破られていて、はるか地下深くから巨大なナニかが突き抜けて出て行った様な、そんな不気味な大穴であった。

「コレは流石に似た事例がありません」

俺の『参照権』もお手上げ、マジで意味が解らない。

見上げれば貫通する様に天井まで突き破られており、その先は遺跡では無く岩肌が露出していた。ひよっとして外まで通じているのかも知れない。

だが今は地上へのルートを開拓するべき時では無いだろう。狙うは地下側、なにせ見下ろせば地下深くまで遺跡は続いている。

落ちたらミンチの深さだが、全容を知るには打ってつけ。俺は得意の光魔法を穴の底へと解き放つ。

「我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ」

LEDみたいなギンギンの光が穴の深くまで満ちていき、暗闇に閉ざされていた大穴の姿が露わになった。

「……深いー」

叫んだのはマーロウ君。

大穴は、タツプリの魔力に任せた光魔法をもつてしても、なお見通せない程に深かった。

少なくとも二十階層分以上はある。距離にして六十メートル以上となれば、穴の底がどうなっているかと問われても難しい。

こりゃー先は長いぞと、ずーんと暗い気持ちになったのは事実。

うんざりしたのは俺だけでは無いらしく、マーロウ君は焦れた様子で声を上げた。

「俺、ちよつと下に降りて様子を見てきます！」

「止めておきなさい、階段を探して皆で降りるべきです」

近衛兵がフラフラな以上、君は俺のメイン盾。単独行動は困るのだ。

だが、地下何階まで有るのか？ ひよつとしてこの穴はマントル深くまで続いているのか？ その位は知っておきたい。

俺は手頃なコンクリの塊を放り込むと、音を聞こうと大穴に身を乗り出した。

……その時だ。

記憶が！ 雪崩れ込んでくる！

……遙か遠い昔の、吸血鬼と呼ばれた少女の記憶だった。

最初の記憶はガラス越しにこちらをのぞき込む男女の姿。

二人は夫婦、私はその娘。でも生まれたのはガラスで区切られた培養槽の中だった。

カプセルの中、私はパパから科学技術を、ママから料理や家事の事を学んだ。

早く二人と触れ合いたい、その一心で私は必死に勉強した。パパにおんぶして貰いたい、ママに抱っこして貰いたい。

四歳になった時、やっと私はカプセルの外に出る事が出来た。

「ママ？ どこに居るの？ パパ？ ドコなの？」

でもカプセルの外には誰も居なかった。

全てはカプセルのガラスに浮かんだ立体映像だったのだ。

私はママを恨んだ、パパを憎んだ。

でも、音声ログを聞いて、仕方ない選択だった事を知った。

ログの中でママは「ごめんね」と何度も謝っていた。

……ある日、魔力炉の暴走により、栄華を極めた古代人の文明は終わりを告げる。

滅亡を自覚した古代人はあらゆる生物の保存を目的とした保管庫を建設した。

しかし余りにも長い年月が過ぎる中、想定しない事故が発生するのはむしろ当然と言えた。

直下型地震で幾つかの装置が故障、そこに地割れからの漏水がトドメを差した。

標本の保存もままならなくなり、多くの生物がカプセルから解放される。

その中には当然、古代人自身も含まれていた。

——それがパパとママだった。

魔力炉の暴走は続いており、世界は有害な魔力で満ちていた。

古代人のパパとママが長く生きられる世界ではなかったらしい。

それでも隔離された部屋の中、愛し合った二人の間に子供が生まれる。

二人の遺伝子を引き継いだ私も長く生きられるハズが無い。だからこそ、二人は私に遺伝子改造を施した。

『凶化人間』

毒となる魔力を逆に生命力として取り込む逆転の発想。

危険な人体実験であつたが、パパとママに選択肢は無かつた。

最後には自分たちが生きるための設備まで使い潰して、私は培養槽から第二の出生を迎えた。

二人が残した設備と知識は生きていくには十分な物だつた。でも、残された遺産は嬉しいモノだけじゃなかつた。

私の為に。パパとママは動物標本を使つての『凶化』実験を繰り返していたのだ。私が生まれたのはその被検体が大量に脱走した後だつた。

私は両親が残した実験体を回収するために旅に出た。

滅びたハズの世界には、新しい人類が住んでいた。

凶化人間である私は新しい人間よりもずっと強かつた。力は魔獣以上だし、近代的な武器だつて使える。

新しい人類の都で暴れ回っていた凶化魔獣を捕まえて、——私は食べた。

魔力と共に他の遺伝子を取り込んで、私はどんどん強くなつた。

そしてどんどん化け物みたいになって行った。

でもソレで良かった、全ての生物の頂点に立つて、新しい人類も、魔獣も全てを滅ぼしてしまいたかった。

ある日、私は怪我をした。片腕を丸々失う程の重傷だった。

拠点に帰れば治療が出来る。だけど怪我を負った私を新しい人類は追い立てた。

逃げ込んだお城の中で、赤髪の化け物がこちらを見ていた。

——鏡の中の自分の姿であつた。

髪はざんばらで口内にはギザギザの歯が整然と並んでいる。コレでは化け物と言われるのも仕方が無いと自嘲した。

そんな姿を城の主たる王子に見つかつてしまう。

「綺麗だね」

そんな声が掛けられた。

どんな皮肉なのかと思えば、どうやら王子は本気で、少なくとも悪ふざけでは無いらしいかった。

それから二人で協力して魔獣を倒して回つた。彼は私を利用しているだけ、でも私だつて彼を利用しているのだ。

そう思っていたのに、自分でも単純だと思つたが、私は恋に落ちていた。

第四王子であつた彼は魔獸退治で名を上げ、その結果、嫉妬で罫に嵌められた。生死の境をさまよう程の大怪我を負つてしまう。

彼を担いで、私は拠点へと逃げ込んだ。ココでなら彼の治療が出来るから。

でも、地下深くに作られた施設は濃厚な魔力溜まりになつていた。新しい人類である彼であつても、濃すぎる魔力は害になる。

「もう良いんだ、僕を置いて行つてくれ」

彼は何度もそう言った。確かにこんな所で治療が出来るなんて、信じられないのも無理は無い。私は彼を必死に励ました。

「大丈夫だから、私を信じて！」

私は彼と、最初で最後の口付けをする。

目を瞑り、ギュツと抱きしめて、初めてのキスは血の味がした。

「僕を食べるのかい？ それでも構わない」
違つた。

キスなんてしていなかつた。私は彼の肩口に噛みついてたのだ。

それでも彼は私を拒絶してくれなかつた。

私は馬鹿だから、この時初めて彼も本気で私を愛してるんだと気が付いた。

「あ、ああ……」

全ては無意識だった、でも思い当たる節があつた。遺伝子を取り込む内に、私は壊れていたので。

『凶化人間』が完全無欠の技術なら、古代人は滅びていない。

私は徐々に精神を蝕まれ、食欲が抑えられなくなっていた。自分が何者なのか、それすらもあやふやになっていた。

「ごめん、ごめんね」

私は泣きながら謝って、強く彼を抱きしめた。

そして……、そして？

「あ、があー！」

「どうした？ オイ？ どうしたの？」

俺は嘔みついていた。誰に？ 木村にだ！

「はあ、はあ」

『参照権』は死者の記憶を吸収する。そして、死の運命をも引き寄せてしまうのだ。混線した記憶は、死を求め、引き寄せる。そして運命はかつての死をなぞる。

——だったら！

俺は氣力を振り絞り、記憶に抗った。

抱きつきたいと言う気持ちを必死に押さえ込むと、木村を振り払って歩き出す。

「私の名前は？」

自分で名前を尋ねる。それと同時に、自ら大穴へと身を投げた！

「私はポーネリア！」

そして自分で宣言する！ そうだ、運命には逆らえない、一部をなぞらなくてはならない、だったら一人で身を投げる。

慌てて駆け寄った木村が俺へと手を伸ばす、だが俺はその手を取らない。

俺は魔法が使える、一人だったら何とでもなる。

だけどさ、不安なのは確か。

さつきから幻聴が止まらない。

「ごめん、ごめんね」

ポーネリアの末期の言葉が頭に響き、ログに残された彼女の母の声と重なった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

突然アイツが俺に噛みついたと思ったら、脈絡も無く大穴へと身を投げた。

カンテラを投げ込むが、余りに弱い光で全く見通せない。

「落ちた？　なんで？」

マーロウつて名のエルフの若いのが慌てるのも無理は無い。

唐突なユマ姫の身投げ、気が狂ったとしか思えない。

……だが、俺には解る。アレこそが死者の記憶を取り込んだ証拠。今際の記憶から死に様をトレースするって聞いた時にも思ったが、最早ある種の呪いだ。

オルテナ姫の宣言は俺も見た。アレだつて記憶を吸収した瞬間こそ、ただ名前を名乗っただけだが、ソコから既に事態が傾いていた。

回り始めた歯車は、断頭台の露と消える方向へユマ姫を押し込んだ。

どうあつても逃れられないなら、勝算が強い所で勝負を挑む。

強がつてアイツは言ったモノが、その勝算に俺は勘定に無かつたのかよ！

伸ばした手を無視したアイツの笑顔が気に入らない。だが俺じゃ空は飛べないのは事実だ。

一方で多少なら飛べる奴だつて居る。

「追いますー！」

「おい、勝手をするな！」

俺の制止も聞かず、マーロウは姫を追つて穴へと身を投じる。しかし後には続けな

「クソツッ！ 好き勝手やりやがって！」

俺には魔法は使えない、飛び降りたって死ぬだけだ。

「階段に向かうぞ！」

エレベーターはこの惨状では期待薄。近衛兵を引き連れて階段を探す、建物の端にそれは見つかった。

……だが。

「どうしました？ キイムラ様？」

急にしゃがみ込んだ俺をゼクトール氏が覗き込む。

俺はカンテラで照らされた床の跡を指差した。

「隔壁が開けられている、しかも最近だ」

「どうして解るんです？」

「この施設は掃除が行き届いている、きつと掃除するロボットでも居るんだろうよ」

「ロボット？ とは？」

「魔道具みたいなモンだと思ってくれ、だがな、壁際までは掃除出来ないのか端に埃が溜まるんだ」

「それで？」

「最近までココは壁だった、埃が残ってる、でも壁が無い」

「壁が、ですか？」

ゼクトール氏にとつちや、防火壁は馴染みが無いか？ 落とし戸や城門はあるから理
解は出来るだろ。

俺は頭上を指差し、隔壁が収まる隙間を見上げる。

「火事とか侵入者防止に壁を降ろすんだ」

「城内に良くある仕掛けですな、それが解除されてると？」

「その通り、恐らく先客が居る」

「それは！ 急がなくては！ 総員抜刀を許可する」

ゼクトール氏の合図で全員がシャラリと剣を抜いた。対して俺はホルスターから銃
を引き抜く。

遺跡に入った当初、想像もしていない程に事態は悪化の一途を辿っていた。

古代遺跡2

落下する世界で俺は焦りまくっていた。

Gが思いの外キツくて、胃が引つ張られる様な苦しきに見舞われたのも一つ。

だが、なによりも暗闇でのフリーフォールが恐かった。

アレだけ強烈に輝いた魔法の光だが、その分持続は短く既に掻き消えている。

なんにせよ、その時俺が、情けなくもパニックに陥っていたのは認めよう。

それを救ったのはたった一つの明かり。俺の後を追うように降ってきて、間近をすり抜け、追い抜いていった微かな光明。

——木村のカンテラだ！

奴め、咄嗟に投げ入れたのか！ 当たったら大惨事だぞ？ ……自信があつたんだろ

うな、流石の器用さか。

落ちていくカンテラに導かれる様に落下、しかしこのままではミンチだ。少し冷静を取り戻した頭で思考する。

「ッー とー！」

その時、落下していたカンテラが中空で何かに引つ掛かった、俺はソレに向けて左手

のフックを振り回す。

——よし！ 掛かった！

カンテラに照らされた小さな世界で、瓦礫から飛び出したケーブルを左手のフックが捉えたのだと理解した。

左手のフックを固定しているベルトが右肩を締め上げ、体は急停止の衝撃に悲鳴を上げる。そして加速が効いた全体重を受け止めたケーブルは大きくたわんだ。

それにより、辛うじて引つ掛かっていたカンテラは零れる様に落下し、ケーブルは端からブチブチと断裂していく。

「我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を」

体が安定した僅かな時間さえあれば、魔法を発動出来る。俺は落ちていくカンテラを追うように、ゆっくりと降下していく。

俺の魔法の出力では空を自由に飛ぶなんて事は出来ない。ジャンプと同時に魔法を使えば高く飛び上がる事も可能だが、もう30メートルは落ちてしまっている。

だったらいつそ下まで降りようと思ったのだ。高度な浮遊魔法と光魔法は同時に行き出来ないの、カンテラの明かりを目指すのが安全だ。

「うわああああ」

そう思った矢先、強烈な悲鳴と質量にぶつかった。

暗闇でもその正体は知れた。マールロウだ！ 魔法の制御に失敗して落ちやがったか？ あの糞ガキが！ いや、ユマおれ姫のが年下だけどき。

んな事よりッ！ ヤバイ！

魔法つて奴は健康値でアツサリとかき消える。ソレも高度な浮遊魔法、他人と接触した状態で維持出来るハズが無い！

俺はマールロウ君と揉み合った状態で落ちていく。このままじゃ二人でお陀仏！

俺は縋るように左手のフックを振り回す、するとカリカリと壁を削る感触が！

しかし少女の細腕、その程度じゃ二人分の重量と加速は減じない。

「マールロウ！ 魔剣をー！」

「姫様!? ハ、ハイ！」

マールロウ君は落下しながら魔剣を起動、壁に突き刺すとズザアアつと俺のとは異なる音で壁を削って行く。

いや、壁を斬っている？ 魔剣つてのはいつ見てもチートな切れ味！ しかも健康値の影響を殆ど受けないうつてのが羨ましい。

「止まれええええ！」

絶叫するマールロウ。左手に俺を抱え、右手の魔剣を渾身の力で突き立てる。

壁の表面はガリガリと削れ、飛び散る火花の中に浮かんだ横顔は真剣そのもの。跳ね

返る破片を受けながらも動じない。

いや、まあ、うーん、カツコイイけど、全く納得が行かないぞ！

少女を守る為に躊躇無く大穴に飛び込んで空中でキャッチ、自慢の魔剣で壁を削りながら速度を減じる。

まさに主人公な活躍だけども、実態は俺の邪魔してるだけだからね？　そこんとこ頼むな。

「姫様は俺が守る！」

そんな熱い絶叫も「オメーが危険に晒してるんだよ」と冷めた目線で見てしまうのはご愛敬。

それでもこの熱いシチュエーションに、俺の乙女な部分が僅かに反応している。説明が難しいがこう、なんと言うか、雰囲気次第で無条件にキュンときちやう的なアレ。

って言っても、俺の最も少女っぽい部分でも二対八で無しの部類ではある。

それでも俺の為に頑張ってる男の子の前に、その腕を振りほどいて、蹴っ飛ばして、距離をとって、それでもってイチかバチか浮遊魔法の再起動に賭けるって選択肢を取るのが憚られる程度にはカツコイイワケだ。

……いや違うな、コレは俺が男だったからこそ、男が振り絞った勇気を無碍には出来ねーって奴なのよ。

照れてないよ？ ホント。

……と言う訳でな。

「左手を！」

叫ぶやマーロウ君にしがみつく。

「ハイ！」

するとマーロウ君は俺を抱えた左手も使える。壁の抵抗に押し出され、表面を切り裂くに留まっていた刃がより強く、深く、壁に刺さる。

それでも抵抗に押し出され、徐々に剣の角度は浅くなる。加速が付いた二人分の体重を両腕で支えるのだから当然だ。

なので俺はよりマーロウ君に密着、抱っこされるかの如く正面からしがみつく。

「何を？」

焦るマーロウ君を無視して、そこから更に俺は彼の腕へと取り付いた。ガリガリと壁を削る音が一層大きくなる。

重いレバーを下に引く所を想像してみても欲しい。

二人掛かりで引くのなら、体に抱きつくよりは腕に抱きついて体重を掛けるのが良いだろう。

腕へのダメージは増し増しかも知れんが、それは知らん。

そうして落ちながらも、俺はマールウと意識と呼吸を合わせて行く。俺の魔力が浸透すれば、この状態であっても魔法を使え……

「危ない！」

しかし、突然のマールウの叫びと共に、俺の意識は暗転した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

マズいな、ドンドン危険な雰囲気になっている。

落下したユマ姫を追って階段を駆け下りた俺達だが、五階ぐらい下った辺りから、のどかな病院の雰囲気ガラリと変わった。例えるのも難しいが、バイオハザードが起きそうな研究所と言うか、とにかく真つ当な施設じゃない。

しかも一気に下層まで行けると思いきや、五階毎に階段の位置が変わるため、フロアの中を移動する必要があった。

地球で言うところのテロリスト対策に放送局などがそう言った作りになっていると聞いたが、だとすれば益々ききな臭い。少なくともただの病院では無いだろう。

そんな中で十五階程降りた時、ようやく遺跡の中が綺麗に保たれている原因を目撃した。

予想通りに、その正体はお掃除ロボだ。だが、てつきりルンバみたいなモノかと思っただが違う。スライムに機械が貼り付いたみたいな奇妙な装置だったのだ。

お掃除スライムロボには一見して攻撃能力は無さそうだ。我々を見つけてもピーと警告音を発するだけ。特に問題が無いと思っていたのだが……

——ベチャリ。

「あつ？」

一人の近衛兵の足にスライムがぶつけられた。別に溶解液では無いらしく、それ自体に危険は無かった。

「あ、足が！」

しかしスライムはトリモチの様に貼り付いて足を封じた。なるほど侵入者を拘束するのに穏当な手段と言える。

だが、俺達はユマ姫の救出に急ぐ身。ここで足止めされる訳には行かない。

「靴を脱いで脱出しろ！」

ゼクトール氏は流石の判断の早さだが、反応が遅れた数人は靴紐ごとスライムに取り込まれ身動きが取れない。

一方で俺はスライムの粘液自体を上手い事避けている。コレは俺の運動神経が優れていると言うより、近衛兵の面々の動きが悪いのだ。

深く潜る毎にドンドンと魔力が濃くなっている。これ以上の探索は危険な程だ、だがユマ姫が落下した以上退却は許されない。

「私は先行させて貰います」

「クソツ！ 頼みます！」

ゼクトール氏の声を背に、俺はマントでスライムを防ぎながら駆け抜ける。

走りながらも曲がり角を曲がる際に、チョークで目印を付けるのを忘れない。迷いや
すい建物だけに万一の保険であるが、後続のゼクトール氏に向けた目印でもある。

この建物は近代的であるが故、彼らには馴染みが無い構造となっている。俺の案内が
無ければ彼らはスグに立ち往生するに違いない。

こつから先はスピード勝負だ。モタモタしているとスライムまみれで身動きが取れな
くなくなってしまう。

だが、逃げるのと同時に薄暗く入り組んだ建物の中で、正確に下への階段を捜し出す
必要もある。

階段を示す標識を一瞥し、足を止めずに駆け抜けるのはパズルゲームさながらだ。

いや、いつそゲームと思おう。ゲームなら俺は負けない。少なくとも初見なら俺以上
に上手くやれる奴は見た事が無い！

俺はお掃除スライムロボを躲しながら、チョークを壁に押しつけて走る。

「コレで二十階！ まだあるのか！」

案内板の表示でまだ最下層では無いと知る。建物は既に病院どころか宇宙船の様な

内装になっている。どう考えてもヤバイ予感しかない。

——どうする？ そろそろ穴の底だ、姫を探すか？ いや……

その時ブーンと低い風切り音が聞こえて来た。壁の一部がパカリと開くと、同時に飛来してくる不気味な球体の群れ。

——ドローン！

地球人でなければソレの正体に気が付くのは不可能だっただろう、メジャーではないが、球体のドローンは現代にも存在した。

飛行するロジックは地球と同じくプロペラか？ 敢えて球体になっている理由はなんだ？ 地球の場合は障害物へのクッションだったが、なぜクッションが要る？

——ピューーン！ ブブブ……

ドローン群が俺に気が付くや、赤い警告灯が灯る。同時に甲高い警告音と低い風切り音を上げながら、一斉に向かってくる！ その数は6！

その表面には青白い輝きと……特有のオゾン臭！ スタンガンか！ 表面に電気を纏つての体当たりが攻撃手段かよ！ その為の球体か！

「難易度が急に上がりすぎだろうが！」

俺は叫びながらも銃を抜く。

——ペアアン

乾いた銃声が一つ、だが……

「効かねえか」

球体の表面は銃弾をキレイに受け流した。そんなこつたらうと思つたがコレはヤベーぞ！

編隊を組みながら六機が一遍にツツコンで来やがる！ しかもちよつとでも触れたら電気ショックで昏倒は必至と来た！

「オツとー」

アクロバティックなポーズでドローンの間隙をギリギリですり抜ける。俺を追い越したドローンはすぐさま反転、再び一丸となつて突っ込んでくる！

「クソツ」

今度は伏せてギリギリ躲す。頭上スレスレを飛ぶ、耳障りな風切り音と強烈なオゾン臭。

——こんな大道芸、長くは続かねえぞ！

焦るが妙案は無い、それどころか床に伏せた目の前にスライムロボ！

——ッ！ 逃げッ！ ヤベエ！ 粘着液で足が動かねえ！

六つの赤い警告灯が高速で迫っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
いてて、ココは？

ぼんやりと視界が霞む。そうだ、俺はマーロウの奴と落下して何とか無事に……クツソ全然無事じゃない！

肋骨がボキボキと折れてるし、右足首もポツキリいつてる。

「ゲホッ！」

咳が出ると思ったら血が！ あーもう！ コレ折れた肋骨が肺に刺さってる！

魔力を体にゆつくりと流せば、自分の体の状態が知れる。一種の探査魔法だ。

こりや随分とボロボロだ、俺もだが、それ以上に……コイツがな。

「つと」

俺はゴロリとマーロウの上からまぶ転び出る。コイツなりに最期まで俺を守ろうとしたのか……

つと、まだ生きてるか？ だいぶ死にかけだが。

取り敢えず俺の怪我を治さなくては始まらない。

肺に魔法で空気を送り込み、刺さった肋骨を押し出す。折れた骨の位置を調整しながらゆつくりと回復魔法で治していく。

内出血した部分から血を抜き出して胃に送る。出血を体に戻すのは難しく、体の外に

排出するのに穴は空けたくないためだ。俺の中ではお決まりの処置なのだがどうしたって胃が荒れる。

「いや、それでも無いな……これが吸血鬼の記憶の効果か？」

とは言え、気の所為な感じもする。なにしろ俺の体は何一つ変わっていないのだから。

それにしてもココは魔力が濃い。もはやエルフの都以上、俺にとつちや毒になるレベルの魔力のハズなんだが……

「むしろ調子が良いな、やっぱり記憶の影響か？」

濃厚な魔力で回復魔法の効きも良い。出血で気だるいのを除けば体はスグに回復した。

「さてと、上手く行くかは解らんが」

次に俺はマールロウに魔力を通していく、意識が無いとは言え無意識に抵抗されちや魔力が通らない事もあるのだが……

なんと異常に通りが良い。コレはガチで死にかけてるか……もしくは無意識でも俺に気を許しているか。

いや、両方か。認めようコイツは俺の事をマジで好きなんだ。

「最後の王族……か」

エルフって奴は妙に生まれの貴さを気にして止まない。

それは魔法の適性がある種族を残すための方法であるのだろうが、目的と手段が入れ替わっては居ないか？

王族を守る為にエルフが死に絶えたら何にもならないのにな。

生き残ったエルフは全体の何割だ？ 半分か？ 三割か？ 元々数が減ってきた所だ。このまま何も無くても種の存続が危ういレベルのハズ。

しかし、俺は王族の権威を振りかざし彼らを戦争に引つ張り出そうとしている。

いっそ『おめおめと逃げ延びた卑怯者』と罵ってくれば楽だったかも知れない……だが、利用できるとなったら、俺はもう、どうしたって利用したい。

帝国に俺は全てを奪われ続けている、もう憎んでも憎んでも……クソツ魔法が安定しない、落ち着け！

「う、うう……」

マールロウから呻き声上がるが魔法に失敗した訳じゃ無い、これはむしろ回復した証だ。

なにせソレまでは声など出せない位に内臓が破けていた。かなり打ち所が悪かったのだろう。恐らくは俺を庇って落下した影響だ。

庇われた俺もすっかり重傷だったのは俺の体が異常に脆かったからに他ならない。

カルシウムは足りてると思うんだけどなー

悪い夢でも見ているのか、マーロウ君はやたらとうなされて、俺の名前を連呼している。

いや、お前の夢の中で俺はどんだけ死にかけてるのかと聞きたいぐらい。

つて言うか、むしろお前に殺されかけたんだが？ つと苛立ちが限界に迫った所で、ようやくとマーロウが意識を取り戻した。

「はあ、はあ、姫、サマ？」

「気が付きましたか？」

俺の献身的な介護の甲斐あって何とか話せる程度には回復した。

俺は穏やかな笑みを浮かべのぞき込む。膝枕つて奴だ、泣いて喜んで欲しい。

お前が飛び込んで来なけりやかすり傷一つ負わずに済んだのになーとか、嫌味の二つや二つ言つてやりたい所なのだが、グツと我慢。

彼にはコレからもメイン盾として奮闘を期待したい。

……だが。

「くっ」

「動かないで下さい、全身の骨がズタズタだったのですよ」

マーロウ君は訝しげな表情を浮かべるが、それもそのハズ。体中から抜き出した血で

水たまりが出来る程の大怪我だったのだ。

その割に外傷が無いので違和感が凄いのだろう。だが傷口を塞いただけで本調子からは程遠く、その違和感に苦しんでいる。

「コレは？ 怪我の跡も無い。コレが姫様の魔法？」

「見かけだけは綺麗に治せますが、医者では無いので保証しかねます」

「いや、コレは凄いですよ、ホラ何ともない！ ぐっ」

あー、ド素人！ 俺の回復魔法は高精度で体を繋いでるから治りは良いが、その為には俺の魔力で骨の髄まで染め上げる必要がある。

つまり、魔力で一時的に健康値は大幅に削られているのだ。出血と併せればそれなりの休息が必要だろう。

だが、正直言うと俺はココに長居したくはない。落下して辿り着いた場所だが、ココはどうにも怪しい。

広大な空間だがドアも無く完全な閉鎖空間、まるで何かを閉じ込めて居たような……恐ろしい事に、吸血鬼ポーネリアの記憶でもココに何が保存してあったのかは解らない。

危険な魔獣の保管庫とだけ資料に残っていたが、それだけ。更に言うならば最期に拠点に戻るまで、こんな穴は空いていなかった。

粗方魔獣を退治し終わって、やっと拠点に帰ってみればこんな大穴が空いていれば、そりや自殺したくもなる。

凶化の副作用と王子の容体だけが原因じゃ無かったわけだ。

……ここの魔獣がドコへ行ったのか？　んなコト、考えたくも無い。

だが、ここでジツとしていれば身動きの取れないマールロウ君は確実に死ぬ。

既にマールロウ君の運命はガリガリと削れている。このままじゃ無為に『偶然』の餌食になるのは確定だ。

つてか、二人でジツとしていれば共倒れの予感。どっちにしても俺がココに留まる理由は無。

そうと決まれば何か理由を付けて一旦別れるに限る。

「待っていて下さい、ロープを探してきます」

「いえ、その必要は、私も、行きます」

身を起こそうとするが顔色は蒼白。いや、無理でしょ。

「この部屋から抜けるには四メートルほど駆け上がる必要があります、魔法を使わず可能ですか？」

「いえ、その位の魔法、俺にも！」

「今の体で魔法が使えますか？」

使えないだろ？ 見た目以上に健康値がすり減ってるんだよ。下手に魔法を使うと命が危険な程に。

「それでも！ それでも一人では行かせない！ 行かせられない！」

分からず屋なマールウ君はそれでも必死の表情で俺のスカートの端を握りしめる。

いやー邪魔！ 普通に邪魔！

「マールウ……」

「俺、悪い予感がするんです。このままじゃユマ様が、姫様が死んでしまうってそんな気がして」

はぁーこれ、夢と現実の区別が付いていないだろ。想像以上に重傷だったらしい。意識レベルを見誤ったか？

「解りました」

「ああ、ありがとうございます」

俺は寝込むマールウの横に陣取り、優しく微笑む。

こう言う時は格好良く首筋をトンツ！ とやりたいのだが、殺ってしまう危険もままある。つてーか、首筋トンって意識飛ぶの？

大人しくお腹ズドンにするか。

「どこにも行きませんか、だから目を瞑って？」

「いえ、そんな……」

マーロウ君の目を左手で閉ざし、一方で右手を振りかざす。

「グヒョー！」

マーロウ君から珍妙な悲鳴が上がる。

——やっちまった。

男の急所へ右ストレート。スヤアつと安らかに眠ってくれたから良しとしよう。

……いや、この泡を吹いた寝顔。見た事あるな。

ま、いいや、『参照権』を使うまでも無いだろう。

俺はマーロウを置いて、ポーネリアの記憶を頼りに目当てのブツを探す事にしたの

だった。

遺跡に張られた罨

——ピピピピ！ ブブブブブ！

甲高い警告音と唸るような風切り音が重奏する。

そこにパチパチと刺激的な放電音と鼻につくオゾン臭まで混じれば、サイコーにイカれたセツシヨンの始まりだ。

唯一の観客としちやあド派手なモツシユでも決めたいところだが、ガツチリとスライムに足を固められちやあそれも叶わない。

突っ込んでくる球体ドローンは六。どうやっても躲せない。

ライブは俺の盛大なシャウトの後にブラックアウトで幕か？ いや、こんなんじや終われない。

せめてスライムで足が封じられて無ければ……

——そうだ！ スライム！

俺はマントを手に取り、大きく広げる。気分はさながらマタドール。しかしヒラリと躲すワケじゃない。

「来いよ！ お前らのダイブ、受け止めてやる」

視界一杯に広げたマント目掛け、次々とドローンが突っ込んで来る。

「ウグツ」

連続する衝撃は結構な勢いだが転げはしない、スライムで足をガツチリ固定されているのが幸いした。

ボスツボスツつと鈍い音が連続し、突進を次々と体で受け止める。痛え！ 鼻打つた。だが……

「おらっー！」

俺はマントを投げ捨てる。そこに包まれたドローンは六体。全てがマントから抜け出せず、混乱した電子音と激しい風切り音を鳴らすだけ。

特にヤバいのがバチバチと弾ける物騒な放電音。マトモに喰らえば一撃で昏倒する電圧だったに違いない。

「中々シビれたぜ」

手をグーパーして感触をチェック。全くのノーダメージとはいかないが、動く。

器用さが命の俺にとって無視出来ないダメージなのだが、この程度は仕方が無い。

なんせ、スライムまみれのマントで受け止めなければ転がっていたのは俺の方に違いないからだ。

俺は上層を駆け抜ける際にこのマントでスライムを防いできた。

その時べったりとこびり付いたスライムが、ドローンの放電を遮断した上、とりもちみたいに貼り付いて自由を奪ったのだ。こりや我ながらナイスな機転。

「つつてもそうは保たないか」

スライムお掃除マシンは当然、スライムの除去だって可能なはずだ。

現に目の前でノズルから泡を吹き付け、マントとスライムで団子になった球体ドローンを救出しようとしていた。

「ふむ……」

俺はブーツから足を引き抜き近づくと、吹き出す泡をインターセプト、そのままブーツにぶっかける。

無事、スライムまみれになったブーツの救出に成功つと。

靴無しで遺跡を歩き回るなんざ、修行僧だつて御免な荒行。都会っ子の俺に耐えられる訳も無い。

そういうする内、スライムロボも洗剤がタネ切れになつたらしく、球体ドローンを見捨ててどこかに引き上げて行つた。

「流石にマントの回収は無理か？」

下手を打てばドローンとの延長戦に突入だ。マントは諦めるしか無いだろう。

そうするとこつから先、球体ドローン対策が無いって事になる。

「さっすつがっに！ 難易度高過ぎ問題」

ぼやきながらも時間が無い。俺はユマ姫を探して更に奥へと目指す事にしたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

フリーフォールを脱した後、マーロウを置き去りにした俺は、悠々と遺跡探検を続けていた。

「んーコッチだな、つとー！ 邪魔ー！」

俺は風魔法でスライムロボを両断する。ポーネリアの記憶ではログラムって言うんだってさ。

ポーネリア本人だったら生体認証でスルーパスなんだろうが、こればかりは記憶だけではどうにもならない。

中央コンソールまで辿りつけたら生体登録も可能だろうが、ソレまでは地道に戦って行くしか無い。

「つつても余裕だけどな」

ピツと指を立てる仕草を一つ。それだけで今度は忍び寄る黒い球体ドローンをノールックで撃破。こっちはザカートって名前前で、放電しながら体当たりを敢行してくる危険なヤツだ。

——が、問題ナシ！ なぜかって？ 相手は機械。健康値が無いからだ。銃や弓矢なんざ使う必要が無い。魔法を直接ぶち当てれば終了だ。

「つまり、俺達^{エルフ}向けの警備じゃないって事だよな」

記憶を探るとロボは中々頑丈に出来ている。

人間がぶん殴った程度じゃ壊れない上、ドッグで修理も可能、定期的にターミナルで魔力供給を受けるだけで半永久的に動き続ける優秀なメカである。

逆に言えば、メカが動いているのは施設が無事だと言う証拠。

「ツキが廻ってきたな」

施設が生きている。その意義は大きい。

俺はウキウキ気分で宇宙船みたいな建築物を歩む。今までだったら見慣れない施設にキョロキョロとしていただろう。

だがポーネリアの記憶を受け継いだ俺にとっては庭を散歩するに等しい。警備ロボだつて魔法の前に敵じゃ無いし、それだつてあくまで制圧用。殺しに来る程物騒なシロモノじゃない。

となると下手に合流するより、まずは中央制御コンソールへのアクセスを試す方が得策だ。

俺は最短ルートで中央制御室へと走る。

魔法を駆使して駆け抜ければ、ドローンだつて俺を捉えられない。驚くべき事に記憶の中のポーネリアの動きは魔法を使った俺の速度と遜色が無い。信じ難いレベルの身体能力を誇っていた。

「なんだ？」

そんな俺の足が止まったのは更に十階層は下った先の最下層フロア。

いよいよ中央制御室を目前にして、通路の隔壁がゆっくりと閉まり始めたのだ。

「嘘でしょ？」

思わず悲鳴じみた声が漏れた。

流石にこれは想定外も想定外。なにせコレは既に施設が何者かの制御下にあると言
う確かな証拠。

村での聞き込みで帝国の影を感じてはいた。だが連中が古代遺跡を操作できるとは
夢にも思っていなかった。

状況は最悪に近い。このままでは通路に閉じ込められる。

——加速ッ！

地面スレスレを滑る様に飛ぶ。場に満ちる濃厚な魔力を使つての最大出力。

だが地面を蹴つた瞬間、後悔に顔が引き攣つた。なんと言つても地面スレスレの超高
速。それは想像を絶する恐怖だったのだ。

例えるならボブスレー？ いやスケルトンってヤツがもつと近いか？

魔法で制御しているとは言え、瞬間的な加速と地面スレスレの視点は実際以上の体感速度をもたらす。

ギユンギユンと後方に流れていく景色の中、閉じゆく隔壁の隙間に次々と滑り込んで行く。

一つ、二つ、三つ！ 隔壁をすり抜け、とうとう四つ目。最後の隔壁。

視界に映った隙間は、既に大の男なら通れぬ程。歯を食いしばり、更に低く、速く、地面を掠る様に飛ぶ！

——間に合え！

ギリギリで滑り込んだ背後、ドオンと鋼鉄の扉が落ちる低い音。

それは間一髪も間一髪。

丁度、小柄な少女が一人。薄い体を生かしてギリギリに通れるだけの隙間を見事すり抜けた。

「ふう——」

危なかった。あのまま閉じ込められたら詰んでいたのは間違い無い。なにせ最下層のセキユリティは閉じ込めてからの睡眠ガスだ。さしもの魔法でもどうしようも無い。

さて助かったのは良かったが、コレからどうするかってのが悩ましい。

物語だったら落ちてくる隔壁を必死にすり抜けた先、すぐ目の前にゴールつてのがお約束。

だけど俺は敵が居ると解っていないながら、一人で突っ込むほど蛮勇ではない。隔壁が閉まり始めた瞬間、俺は元来た道を引き返し、一つ上のフロアまで戻っている。

なので目的地からは却って遠ざかってしまったのだ。

ちなみに最下層フロア以外では睡眠ガスの危険は無い。最下層以外の隔壁は防火シャッターに過ぎないし、特別な工夫が無く換気口で全てのフロアが繋がっているからだ。

となれば、ここらで後続を待つのも一つの手。

さて、どうするか……

などと、俺はスツカリ油断していたのだろう。オカシイと思った時には、既に視界が僅かに白く染まっていた。

——睡眠ガス！ アイツら施設中にばらまく気か？

見ればガスが漏れているのは通風口だ、どういうつもりだ？ そんなことしたら自分達だつてガスに巻かれるに違いない。

ガスマスクでも持っているのか？ いやいやココにはそんなモン無いって事は俺が一番良く知っている。

何にせよ不気味だし、催涙効果もあるガスで転げ回る趣味も無い。俺はこの場を離脱するべく、魔法の力で思い切り踏み込んだ。

「がつー！」

制御に失敗、俺は思いきりツンのめってコケた。

何故？ 俺はなんでこの程度の魔法を失敗した？

「ハッ、くううー！」

衝撃によつて胸から突然空気が押し出された場合、人体は反射的に息を吸い込む。

特殊な訓練など受けていない俺は、当然、地面に漂う濃厚なガスを吸い込んでしまつた。

転げ回る様な痛みを覚悟したが……何ともない。不可解に思っていると目の前に黒いボールが転がっている事に気が付いた。

それは、飛行ドローンだった。

球体ドローンのザカート。魔力で動くドローンが力なく転がっている。

「霧ギョルドスの悪魔！」

ヤバイ！ 濃厚な魔力に酔つて、危険な霧に鈍感になつていた。

さながら真夏日に、クーラーが効き過ぎたお店に入り込んだ時の様。体に害となるモノが、反動で心地よいと感じてしまう現象に似ている。

体を蝕む程に強烈な魔力が霧で薄まり。違和感に気が付くのが遅れてしまった。

そして睡眠ガスと違ってコイツは人間には害が無い。俺にしたって純エルフみたい
に昏倒する程ではなくて、精々魔法が使えず、体調が悪くなる程度。

だがその精々が俺に取っては致命傷なのだ。すりむいた膝をおして俺は走った。
……だが。

「ああっ！」

上層への階段は隔壁で封じられていた。

考えて見れば当たり前の事、霧ギョルドスの悪魔法まで使って逃げられたくは無いだろう。あらか
じめ隔壁を閉めていて当然だ。

だがそんな当たり前に存外にシヨックを受けてしまった。

最下層以外の隔壁は、言ってしまうえば薄っぺらい防火シャッター、魔法なら切り裂け
ない訳は無ない。

しかし、か弱き少女の細腕では、手動操作で隔壁を巻き上げる事すら難しい。

苛立ち紛れにドン！ ドン！ と隔壁を叩くが小揺るぎもしない。

どうする？ 体のリミッターを外して、馬鹿力で何とか隔壁を開けてみるか？

いや、慌てるな。そんな事したらまた肩が外れて、何も出来ずに鬨り殺しになるだ
け。

良く考えれば霧がある限り、ドローンが使えないのは見たばかり。……だったら。

俺はホルスターから銃を抜く。相手の武器は精々が火縄銃、コッチは六発装弾のリボルバー。更には打ち切った後のリロードも数秒で済むのは大きいアドバンテージだ。

こんな施設に何百人も連れてくるハズが無い。十人や二十人が相手なら十分に勝ち目がある。

俺はゆっくりと目を瞑る。迫り来る運命光は十二。それを見て俺はニヤリと口角を吊り上げる。

——イケる！

彼らの運命光は驚く程に小さい。小動物と見紛う程、コレなら十分に勝機がある。

俺の巨大な運命光とはソレこそ雲泥の差じゃ……

——ッ！

それは声を失う程の衝撃だった。

「なん……で？」

無かった、俺の運命光が欠片も！ まるで死にかけの病人の様。

リボルバーを握る俺の手が、カタカタと震えていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「侵入者はどうなった？」

銀髪の青年が中央制御室の主となった相棒に進捗を尋ねる。

「出来る事は殆ど無いかな、ドローンはオートモードしか無いからね」

問われた青年がヘッドマウントディスプレイを跳ね上げると、尋ねた青年と寸分違わぬ面容が現れる。

「じれってえな」

「仕方無いよ、どうしても殺したいなら最下層まで誘い込んで刺すしか無い」

しかし二人は表情や仕草こそ全く違った。一方は底意地の悪さを隠そうともせず顔を歪め、もう一方は澄ました様子で酷薄な笑みを浮かべた。

共通するのは彼らが自分達の勝利を微塵も疑っていないと言う事。他のドコでも無い、遺跡の中でなら自分達は無敵と信じていた。

「どうせなら一カ所にドローンを集める事は出来ねえのか？」

「僕の腕と言うよりはシステムの問題だね、巡回警備から外れる命令を受け付けない」

「使えねーな、ロクな武器もねえし」

「箱船だからね、兵器は無いよ。それにしたって自衛用の武器すら持ち出されていたのは予想外だけだ」

彼らはハッキングによって施設の大半をモノにしていた。

ハッキングはおろか、コンピュータと言う概念すら無いこの世界でだ。

二人はノエルとソルン。田中がエルフの王宮で取り逃した、帝国軍を裏で操る銀髪の怪人達だ。

「ま、拘束するだけならドローンでシビれさせてスライム塗まみれにして終わりだよ。すぐ済む」

ソルンはディスプレイをかけ直すや、虚空に指を走らせた。ただそれだけで全てのドローンがアクティブ化され、一斉に侵入者へと群がっていく。

斥候の報告で王国軍が来た事は知っていた為、侵入者の存在に焦りや驚きは無い。遺跡を掌握している以上、人間の兵士に恐れる事は無いからだ。

コレがエルフの戦士達ならマズイ事態になっただろうが。彼らは荒れ果てた王都の再建にかかり切りで身動きが取れない事も調査済みだった。

だとすれば濃い魔力への対策も無く、ふらつく彼らを一方的に追い詰めるだけ。

その様子を終始つまらなそうに見つめていたノエルだが、浮かぶ大型ホログラムディスプレイの端に光点を見つけるや目を見張った。

「オイ、21階になんか現れたぞ?」

「ホントだ、大穴から侵入したんだね。あそこは崩れていて監視下に無いから」

「上からは陽動だったんじゃないか?」

「だとしたら人間にしちゃ随分と手際が良いね、でもまだ十層以上は余裕がある」

ソルンが指を振ると、その動きに連動してドローンが光点の行く手を塞いでしまう。
「チエックメイト、かな？」

「どうかな？ コレがアイツならこんなのはモノの数じゃ無いぜ」

「解ってる、コレはお試しさ、下層で閉じ込めて睡眠ガスが本命だよ」

お手並み拝見と見つめる二人を余所に、デイスプレイの光点は全く歩みを止めようとしな

散歩するかのようになり、ゆったりとした速度でぶらりと歩を進めていく。オカシイ、もうとつくにドローンの音や光は伝わっている距離。

二人の視線の先、遂にドローンと光点が重なる。だが光点の速度は何事も無かったかの如く、ドローンの隙間をすり抜けていく。

「オイ？ どうなった？」

「ダメだ、全滅。各機のステータスを見る限り、スツパリ斬られてる」

ソルンの報告に、ヒューとノエルの口笛。ふざけた態度だが目は少しも笑ってはおらず、歯を剥いた表情は戦意に溢れている。

「決まりだな、アイツだ」

「ああ、最下層までおびき寄せて睡眠ガスで無力化しよう」

二人の脳裏には、ここ数ヶ月、散々に追い回された厄介な男の姿が浮かぶ。

「今度こそタナカの脳天にコイツをぶち込んでやる」

ノエルがポンと叩くのは腰に吊り下げた自慢のショットガン。獲物を追い回すのは好きでも逃げ回るのは彼の性分ではない、最近是非常にストレスが溜まる日々だった。

彼は獯猛な笑みを浮かべ光点を睨み付ける。一方で腹に据えかねているのはソルンも同じ、ペロリと舌舐めずりをひとつ、追加でドローンをけしかけたのだが……

今度はドローンでの包囲にすら失敗した。なぜなら光点が信じがたい速度で移動したからだ。

「ンだコレ？ 速えぞー！」

「驚いたな、人間離れしている」

光点の速度は秒速12メートル程、驚異的な速度で移動していた。対人用に低速での安定性を重視したドローンでは追い切れない速度である。

取り囲んでいたドローンは大半が置き去りにされ、瞬く間に光点は最下層まで迫っていた、驚くべき事にその進路に一切の無駄が無い。超高速でありながら一切の躊躇もなく最短ルートを突き進んでくる。

ソレはまるで、『何度もこの道を通った』とで言いたげな程。

「オイオイオイ大丈夫か？」

「予定は早まるが計画通りさ、もうすぐ下層に入る。モニター出来るよ」

映像素子は魔力で劣化しやすい部品の代表だし、広帯域無線通信は濃厚な魔力にジャミングされ使い物にならない。

そうなれば中央コンソールをもってしても、音波と赤外線センサーでのあいまいな情報で、なんとか状況をモニタリングするのが精一杯だったのだ。

しかし最下層には保護されたワイヤードネットワークと軍事クオリティの監視カメラが稼働している。

侵入者の姿を確認した上で隔壁を落とし、通路の真ん中に閉じ込めるのは容易い事と思われた。

だが、最下層に現れた侵入者の姿は彼らの予想を大きく裏切った。

「女の子?」

「幽霊か? ゾツとしねえな」

ノエルは大袈裟に身をすくめ震える、それはあくまで空気を読まないジョークの一種で、そんな悪癖を苦々しく思うソルンは舌打ち。

「チツ、冗談じゃ無い! 非科学的な! 見ろ彼女はエルフだ」

苛立ちながらヘッドマウントディスプレイを剥ぎ取ると、大映しのディスプレイの一点、少女の耳を指差した。

確かにソコにはエルフ特有の長耳、だがノエルは納得が行かない。

「じゃあなんだ？ エルフの女の子が人間と一緒に遺跡見学に来たって言うのか？ ドローンを破壊しながら高速で？ ソレこそオカルトだろうが」

「だから、彼女こそがあのユマ姫なのさ」

「ンだと？」

眉を寄せるノエルに対し、ソルンはバックパックを引き寄せると書類の束から一枚の絵を取り出してみせる。

それは数多く出回ったユマ姫の姿絵で、生誕の儀での幼い姿ではあったが、モニター上の少女にはその面影が強く残っていた。

角度を変えた次のセクシヨンの監視映像では、いよいよその特徴は見間違えようもない。眼帯を掛け、失った左手代わりにフックをぶら下げた異容が映される。

「決まりだな。王族ならば高度な魔法が使えるのも不思議じゃ無い。彼女を生け捕ればそれで戦争は決着だ」

「おいおい、嘘だろお？」

敵のお姫様がたった一人で乗り込んでくるか？ あり得ない。とノエルは首を捻るが、コッチにも一人で一騎当千の活躍を見せる女傑が居る事を思えば、苦笑するしかない。

「トンだお転婆だな、生け捕りにして、俺達がしつけてやるか」

「嫌らしい男だな、君は」

下卑た笑いを上げるノエルに呆れながらも、ソルンは通路のただ中、逃げ場も無いユマ姫に一齐に隔壁を降ろす。そのタイミングは完璧、そのはずだった。

「何だ？」

メインモニタの中から少女の姿が掻き消える。実はサブウィンドウの端には、弾ける様な速度で隔壁の下をすり抜ける様がチラリと映ったのだが、二人の目には止まらなかった。

「瞬間移動？ そんな魔法があるのか？」

「まさか……」

そして気が付けば悠々と元来た階段から上層へと戻る後ろ姿だけが、大映しで表示される。

慌てて映像をスワイプで巻き戻すソルンの指が、見失った直後の少女を指し示す。

「そんなモノは無い！ 超高速移動だ、こんな速度で吹っ飛ぶなんて自殺行為、イカれる」

歯噛みするソルンだが、ノエルはコキコキと首を鳴らすと席を立つ。

「随分ヤンチャなお姫様みたいだな、俺が直接しつけてやるよ」

そう言って、背を向けると部屋から出て行こうとする。

「待て！」

「ンだよ？」

止めるソルンに振り返るノエル。だがその目から決意の固さが見て取れた。

タナカを仕留める為の罟は空振りに終わったが、それでもユマ姫を確保出来るならお釣りが来る。多少の危険を冒す価値は確かに十二分にあるだろう。

だが、あれだけの魔法の使い手にどうするのだろうか。

「手はあるのか？」

「あん？ アレはエルフなんだろう？ じゃあ決まってるじゃねーか」

「霧の悪魔か……」

ノエルの戦略はギルドスによる霧の散布。これだけで生命を魔力で繋ぐエルフを昏倒させるには十分。

それでも懸念は尽きない。

「ココは魔力が濃い。霧の効果が相殺されて完璧には発揮されない可能性は高い、それに霧をまけば魔力で稼働する全ての機器やセンサーが停止する」

「わーってるよ、ガキ一人、魔法を封じりや十分だろ」

「解ってないのはお前だ！ その隙にタナカが来たら俺達に打つ手は無いんだぞ！」

沈着を常とするソルンがその可能性に吠える。タナカの恐ろしい所はソコだった。

エルフを封じる霧がタナカには効かない、それどころか霧を撒いてしまえば一切の魔道具が使用不可能な分、却ってタナカを止める手立てが完全に無くなるのだ。

「じゃあ何か？　上層に人間を忍ばせ、それに気を取られた内に魔法使いの姫を大穴から下層深くまで侵入させる。餌に釣られた俺達がまんまと霧の悪魔ギルドスを使った瞬間を見計らって、満を持してタナカが斬り込んでくる。そう言いたいのか？」

なるほど完璧な戦略に見える、だがあまりに完璧ゆえ荒唐無稽に過ぎるとノエルは声を荒らげる。

その様な作戦、この遺跡を知り尽くして無ければ立てようも無い。

もつと言えば、王族たるユマ姫を囷に使うなどあり得るハズも無いのだ。

「それでも頭の片隅に入れておけ、最悪アイツらを盾にする気で逃げる」

「わーっつたよ」

手をヒラヒラとさせながら中央制御室を抜け出したノエルが向かったのは、帝国兵が待機する一室。

彼らはたつた二人で遺跡に來た訳では無かった。木村や近衛兵が苦戦する道のりも、ギルドスでドローンを停止させればピクニックに等しい、人間の兵士を引き連れるのに大した障害はなかった。

しかも連れてきたのは諜報部のエリート、帝国情報部第一特務部隊の面々だ。

隊長として辣腕を振るってきたフェノムがタナカに斬られた後、宙に浮いていた部隊員十二人を引き連れての行軍は当初、非常に士気が高かった。

フェノム隊長への弔い合戦と聞いていたからだ。

だが現在は濃厚な魔力で健康値を削られるのを嫌って、霧の満ちた部屋での待機が続き、流石に士気が落ちている。

ここらで活躍して貰う方がお互いの為だろう。

部屋に入れば既に部隊員は整列していた。部屋に籠もろうと、外の異常を察知していたのは流石の特殊部隊か、単純に長引く待機に飽き飽きしていたのもあるだろう。

「お前ら、喜べ、仕事だ！」

「タナカが来たのですか？」

敬礼する女性はトリネラ、フェノムが存命時に副長だったため、現在は臨時で隊長を務めている。敬愛するフェノムを殺された事で、タナカへの恨みは深い。

「違う、もつと大物だ」

「大物？」

トリネラには思い当たる顔が無い。エルフ側のトップと言えばセーラだが、彼女は王都に溢れる魔獣の対処に手一杯の筈だった。

「ユマ姫だ、行くぞ、とつとギユルドスを配備しろ」

「は、ハイ」

それ以上の説明も無く出て行ってしまふノエル、彼女は慌てて部隊員に命じ、小型のギョルドスを担がせる。

意味が解らない、と思いつつも問いただしはしない。長年続く訓練の賜物ではあったが、彼女の頭は混乱していた。

一方でノエルも説明に足る材料は持ち合わせていない。

「安心しろ、俺だって訳がわかってねーの、コレを見ろ」

「こ、コレは？」

先程の監視映像、ユマ姫が映ったタブレットが手渡される。彼女にとっては未知の超科学であるが、遺跡に入ってから否が応でもこの手のモノは見慣れていた。

「お姫様が一人で乗り込んで来た、お前、信じるか？」

「信じ難いです、ですが……」

「ああ、だが事実だ。罨だとしても行くしかねーよな」

「……ハイ」

部隊員にタブレットを廻すとその表情が変わる。困惑と期待が半々だ。

「どーだ？ 可愛いんじゃないの？ 捕まえたら皆で楽しむか？」

「女性の私にそれを聞きますか？」

トリネラはノエルのあんまりな発言に眉をひそめる。

情報部であるトリネラでもノエルの事は良く知らない。ソルンと同じ顔で共に古代遺跡に通じる等、怪しい部分が満載な男である、それだけに深入りすべきで無いと自重していた。

だが、それにしたってソルン氏とは違い、品の無い発言が多い。それでも情報部を下に見て、手を出そうとしてくる騎士たちよりはずっとマシ。

だからセクハラに怒ったと言うより、第一特務部隊が人質を髑る様な、規律無き一般兵と同じに見られた事に、むしろ腹が立ったと言うのが正解。

何より相手は年端もいかない少女では無いか、そこまで言われてむしろ心配だったのは待機が続き、一体何様とノエルを内心面白く思っていない部隊員の士気。

そう思っ振り返れば、タブレットを覗き込みゴクリと唾を飲み込む年若い男性隊員達の姿に直面し、ギョツとした。

「何時まで見ているの、返しなさい！」
「ハ、ハイ、失礼しました」

言いながらも、名残惜しそうにタブレットを見つめる男性隊員の姿に、トリネラは少なからず衝撃を覚えた。

ノエルに返す前、改めてユマ姫の容姿を確認する。

——可愛い。そして、美しい。なにより、恐ろしい！

あどけなさや妖艶さ、儂さと力強さ、相反しがちな二つが両立し、危険で破滅的な魅力を放っている。

諜報部員として鍛え上げた直感が危険を訴える。決して関わるなど。

「これは……罨では？」

タブレットをノエルに返す際、わかりきった事を思わず尋ねる。

「だよな？　だが強力な魔法を使い、この容姿だ、偽物つてのはねえだろ」

「……そう、ですね」

タブレットを返すが、その間も少女の映像が頭から離れない。

トリネラには画面に映る少女が、死神の様に見えていた。

ゲツドエンド？

——ピーピー・ピー・ピー　ブブブブブブブブ

「多過ぎだろー！　ふざけんなー」

絶叫しながらの猛ダツシユ、なんせ背後から通路を埋め尽くす程のドローンが追いかけてくる。

古代遺跡に侵入した俺が、ひよんな事から単独行動。ユマ^{アイツ}姫を助けに行くために必死の行軍なのだが、もう俺の方が助けて欲しい。

良く考えりや、アイツの魔法なら機械相手に滅茶苦茶相性が良いんじゃないか？

なんで俺はこんなに頑張ってるんだか、走馬灯の様にアイツの顔が浮かぶのは勘弁して欲しい。

「うおー」

捻った体のすぐ脇をドローンが高速で通過していく。お馴染みとなったオゾン臭は慣れちまって殆ど感じないレベル。匂いつてのはそう言うトコあるよな。

……いや、鼻水出た。

必死過ぎると良く解らん事ばかり考えてしまう、みつともなく流れる鼻水を拭う隙も

無いのが辛い。

「クツしょお！」

あらビックリ、通路の先からもドローンの群れがコンニチワ。いよいよ進退窮まり、空いていた部屋に飛び込んだ。

「ダメだ、詰んだ！」

飛び込んだ部屋は……なんだかカプセルホテルみたいでやんの。狭い個室がズラリと並ぶ。

ガラス張りの個室に住民は居ない。一見して何にも無い部屋だ、少なくとも武器は無い。

一体なんだってんだこの施設は。エイリアンでも出てくるのか？

ピピピ・ピー ブブブブ

いや出て来たのはドローンだ、必死にドアを押しえてドローンの侵入を防いでいたが、部屋の中からも出て来ちゃったらお手上げだ。

「くつそお！ 南無三三」

俺は空のカプセルに飛び込んだ、しかしこんな狭いカプセルに籠もったら、余計に詰むのは解りきっている。

目先の痛みから逃れたいだけの苦し紛れ。狭い出口に陣取られれば、このまま出られ

なくなってしまう。

それだってこの薄いガラスだ、どこまでドローンの体当たりを防げるかは疑問である、割れたガラス片で却って大怪我になる可能性は高い。

——情けねえ、情けなくて涙が出る。

ガラスの破片でズタズタになる恐怖に歯を食い縛り、目を閉じる。だが……

——なんだ？ どうした？

痛みはおろか衝撃すら一向にやってこない、なぜだ？ このガラスが、実は防弾素材だったりとか？

恐る恐る開けた目に、白く煙った部屋が映る。

——霧ギョルドスの悪魔!!

見ればゴロゴロと力なく転がる球体ドローンがそこにあつた。

「……………」

オカシイとは思っていた。なにせこれだけの警備、先行する『何者か』はどうやって突破したというのか？

争った形跡が一切無いのは流石に不自然。

その答えが伝え聞いたギョルドスだとすれば辻褃は合う。魔力を奪うゆえにエルフの魔法だけでなく、魔道具をも停止させる霧ならば、ドローンを起動させずに入り込む

事が可能。

「まつじいぞー！」

カプセルから這い出し部屋を飛び出る。転がる大量のドローンに蹴躓けつまづきながらも走る。

「ハア！ ハアツ！」

何がマズいか？ そりや『何者か』が霧ギユルドスの悪魔を使った理由だ。

いや、『何者か』じゃないな、ギユルドスを使う以上、敵は帝国で確定だ。

調査が終わって、そろそろ脱出しようって理由で彼らが霧を出したのなら問題は無い。だがそんな偶然があるか？ 希望的観測に過ぎる。

「あのっ！ 野郎！」

息を切らして走る。なんせユマ姫とマーロウ、あの二人は既に帝国兵と接敵しているに違いないからだ。

二人はエルフであり、そして魔法使い！

魔法を封じる、それ以外に霧ギユルドスの悪魔を起動する理由が無い。

「アホか！ アイツは！」

魔法が無ければフツの女の子に過ぎない、いい加減にしろよ畜生。

邪魔なドローンが無くなり、無機質な通路がひたすらに伸びている。

俺は渾身の力を振り絞り、全力で駆けるのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
霧ギユルドスの悪魔の霧に包まれ、退路は隔壁で断たれてしまった。

だが、それでも俺は諦めていなかった。なにせ俺には木村から貰った最新式のリボルバーがある。火縄銃と違い六連射可能な上、リロードも一瞬。十分に勝ち目があるはずだった。

だからオレが本当にショックだったのは、ユマオ姫レの運命光が無い事だ。

本来俺の運命は誰よりも強固に、最も死から遠い場所にあるはずなのだ。それが既に『偶然』によって破壊された後、これはちよつとした不運で死に兼ねない状況と言う事だ。

そして迫る敵の数は十二。俺は……死ぬのか？

震える指を胸に押しつけ深呼吸。

大丈夫だ、運命は変えられる、良くも悪くもだ。

運命光なんてちよつとした事で増減する、なにせちよつと前まで大輪を咲かせていた俺の運命光が、落ちかけの線香花火みたいなのが良い証拠。

こんなモノ、こつからの選択次第で幾らでも挽回出来る！ きつと！ たぶん！

……現実を見よう。

逆に言えば、俺が盛大にやらかした故に、あり得ない速度で死に向かっているって事なんだよ。

……何故だ？ 一体全体、俺が何を間違えたと言うのだ！

いやー、すまんこ。心当たりしか無い。調子に乗って一人で突っ込み過ぎた。

こりや、死ぬのも当然だね♪

「ダメだ！ ネガティブになるな、俺は絶対に諦めない！」

ゲームで失敗する度にリセットを繰り返し、それでも上手く行かないと全部がどうでも良くなって諦めてしまう……そんな事が前世では何度もあった。

俺はもう自分の死すら他人事みたいだし、痛みだつてそう恐くない。だからこそ、油断するとシラけた感情に支配されそうになる。

……もう十分だ、つてな。

そんな時はセレナの事を思い浮かべる。健康値を削られて、廃屋の中、ボロボロになった姿をだ。

次に目の前で切り刻まれた兄、山の様に折り重なったエルフの死体。あの日の地獄は脳にこびり付いて、一生消えてはくれないだろう。

それだけじゃ無い、ボルドー王子も帝国の策謀に殺された様なモノ。

湖で二人、乗馬して過ごした光景は参照権無しでも忘れない。

湖の記憶は家族の思い出とも重なる。かつてのみんなの笑顔が浮かぶ。

……でも全て奪われた。

「は、はははははは」

笑いと共に、恐怖や諦観とは異なる涙が目尻に浮かぶ。心の底から泣ける程に笑える。

——そうだ！ 俺は一人でも多く、帝国兵を、道連れにする！ その為に生きています！

死んでも良いなんて、どうして思った？

死にたいんじゃない！ 俺は！ 殺したいのだ！

遺跡を支配下に置く謎の存在。それが霧ギョルドスの悪魔を使い、エルフへの侵略を首謀した可能性は高い！

どう考えたって霧ギョルドスの悪魔はこの世界の科学力から逸脱している、古代遺跡に通じた人間が裏に居る事は予想できていた。

——そうだ、ずっと追い求めた仇が近くに居る！

竦んでいた体が熱くなり、力を取り戻していく。

なんだかんだ、俺の体はいつも無茶に答えてくれたじゃないか。

弾丸は全部で三十発。牽制に撃ちまくれる程では無いが。全員殺すだけなら何とで

もなるだろう？

槍が届く間合いで、頭を狙えば良い。

一人あたり二発以上撃てる勘定だ、十分に足りる。そう考えれば視界を奪う霧だって悪いだけのモノじゃ無い。

リミッターを外した体は大人顔負けの脚力に、少女の体重だ。

魔法の力無しだって、相手を攪乱するぐらいの速度は期待出来る。

——そうだ、俺が、一人残らず、ぶち殺してやる！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ユマ姫が危険な覚悟を固める少し前、ノエル達は霧ギユルドスの悪魔をダクトへ直結させ、大型送風機で通風口へと送り込んでいた。

「コレで施設全体に霧が行き渡る。そうすりやシステムは全停止。隔壁の操作もだ。その間、俺達は丸裸、覚悟は良いか？」

「これだけで、霧が行き渡るのですか？」

換気システムなど見慣れないトリネラは半信半疑である。

「送風機は上部から空気を引き込むのと、ココから吐き出すのの二カ所、気圧差でつて言ってもワカンネーか？ 霧が一巡して最下層に戻って来て、この送風機が止まる頃に

は、霧は施設全体に行き渡っているさ」

「申し訳ありませんが、私には理解出来ません」

「構わねーよ、これからガキと鬼ごっこする。ただし制限時間付きで、魔道具は使えませ
ん。それだけだ」

「了解です、銃は使用可能ですよね？」

「あたりめーだろ？」

「そう言われても、トリネラは魔道具の中で、銃だけが霧の中でも使える理由が解らな
い。

使えないモノとしてはフェノム隊長も使っていた自在金腕ルーニテルオンがある。

アレは使いこなすのこそ難しいが、使い方次第でどんな達人相手でも裏を搔ける。究
極の初見殺しの魔道具なのだが……

——あの時、フェノム隊長は霧の中でも自在金腕ルーニテルオンを使うために、魔石を散らして待ち
構えていた。負ける要素は無かったはずだ。

それに留まらず、帝国一の剣士、ローグウッドすら両断したとされるタナカの剣はど
れほどののか？ 狙う仇の強さをトリネラは図りかねていた。

悩むトリネラの様子を見て、おおかた銃が使える理由でも考えているのだろうと察し
たノエルだが、門外漢に説明をするのはとうに諦めている。

代わりにと壁のインターホンでソルンへ通話、魔力が満ちて無線が通じぬ世界だが、最下層では通信手段に事欠かない。

「ターゲットまでの隔壁は開けたか？ 霧が回ったら開かなくなっちゃうぞ」

「ああ、解放済みだ。まだターゲットは二十九階層に居るが、じきにモニターは不可能になる、注意してくれ」

「注意しようがねーだろー！」

二人にとつて何気ないやり取りだが、壁から声が聞こえてくる事自体がトリネラ達、特務部隊の面々には驚きであつた。

一方でノエルにとつて、余りにも足りない隊員達の理解度。苛立ちを覚えながら声を張る。

「さっさと行くぞー！」

「ハイッ！」

そうして部隊員を連れ立って最下層を抜け、二十九階にまで上がってきた。既に辺りは霧に満ちている。

「この分じゃ既にシステムはダウンしてると思つて、間違ひねーな」

つまりソルンのサポートは一切期待出来ない、始まるのは本当に原始的な鬼ごっこ。

「この霧の濃度では、エルフは全く動けないのでは？」

トリネラの懸念は霧の効果を知っていれば当然のもの。普通のエルフは逃げるどころでは無いハズだった。

「そうなんだけどな、ユマ姫は侵攻時、霧の中で兵士を斬りまくったって記録があんのよ、だから油断すんな」

「それは……ユマ姫は魔導衣を持っていると？」

「……ま、そうだろうな」

言いながらも、間尺に合わない引っかけかりをノエルは感じていた。

だとしたら何故あの時、ユマ姫だけが魔導衣を着ていたのかと言う話になる。

だが、考えても仕方が無い事。細かい不安は笑い飛ばすに限る。

「ガキとは言え、女のケツを追い回せるんだ、運動不足の解消法としては最高だろ？」

「ハイー！」

「間違いありません！」

「ハア……あなた達は……」

ノエルの品の無い軽口に対して、いつになく綺麗な敬礼を返す隊員達の姿を見て、トリネラはため息を隠せない。

気が滅入る屋内待機が続いていただけに、気分転換は大切。皆がその程度の認識だった。

魔導衣があろうが、霧の中で魔法が使えない事に変わりはない。だから油断するなという言葉とは裏腹に、皆がどこか弛緩していた。

霧の中兵士を斬ったと言われても、侵攻時は霧の濃度調整がまだ甘く、一般兵の多くはエルフほどで無くとも不調な者が多かった。

そんな中でふらつく兵士を二、三人、斬りつけたのが大げさに伝わっているだけだろう。

その位の認識だったため、広い二十九階層を探索するにあたって、彼らが取った手段は一つ。

「じゃ、手分けして探すぞ、二人一組な」

ノエルの提案は霧の容量という時間制限を思えば当然の事。

「了解です、私はノエル様のお供をさせて頂きます」

「ん？ あ、ああ構わねーぜ」

付いてくるトリネラに、面白くも無さそうにノエルは了承する。別に誰が相手でも構わないからだ。

二人一組なのは決して少女の反撃を恐れてでは無い。

発見次第、一人が見張って一人が応援を頼むのに必要だからに過ぎない。彼らが恐れているのは狭い場所に潜り込まれ、ちよこまかと逃げ回られる事だった。

「じゃあ、俺らは一番奥から探すか」

「ですね」

彼らの読みは、ユマ姫が一番上層に近い場所で震えている。と、言うモノ。

……だが。

「居ない、か」

「頭は回るようですね」

奥まった一室での搜索は空振り。さて次の部屋、と言う時。

——パン！　パン！

聞き慣れたモノとは違った、だが確かに火薬の爆発音。音がしたのはまるで反対、最下層に近い場所だった。

「ンだと？　誰だ？　ハマしたのは！」

部隊員には銃が配備されている以上、皆が火薬を持ち歩いている。何かの拍子にその火薬が引火したに違いない。その様に考えたのはノエルだけでは無かった。

なにせ聞き慣れぬ爆発音は連続していた。通常のマスクेट銃で連射は不可能。

言い訳の一つも聞こうと、音のした場所へ気の抜けた足取りで集まったのは、しかしノエルを入れて十人。

この段に来て、ようやくと皆の顔色が変わった。

「残りの二人は？」

トリネラの言葉に首を振る隊員。よく見れば目の前の部屋を担当している二人が居ない。

「ッ！ 散開！」

トリネラの号令に隊員達は瞬時に散る。想定外の事があつた際に、一カ所に固まるのは悪手。同時に慎重な手つきで部屋の戸に手を掛けた、のだが……

「モタモタすんな」

ノエルがさつさと蹴破つてしまう。

「危険です！」

「どうせもう居ねえよ」

二発の銃声の意味は？ 考えるまでも無い、ノエルの目の前、部屋の中には折り重なる二人の隊員。

「まさか？ 死んでる！」

トリネラにとって信じられない事である。彼らは諜報員であると同時に、全員が屋内戦の専門家でもある。

どんなに油断していても少女一人にやられるハズが無い。

「銃だな、それも連射が可能な最新式だ」

連射が可能な銃として、ノエルが想像したのはフリントロック式のダブルバレルマスケット銃。

(火縄では無く火打ち石で着火する、銃口が二つ有る銃)

丁度自分が持つ銃の、散弾では無いバージョンだ。

「二人は危険だな。出来れば4人。せめて3人だ、そうすりゃ全滅は無い」

残り十人を3・3・4で分隊に分け、死体のあつた部屋を中心に探す事とする。更にノエルは武器の使用を許可した。

「発砲を許可、なんなら斬りつけたって構わねえ、発見次第即座に無力化しろ」

「それでは人質にならないのでは？」

トリネラの質問は当然である。彼らの見立てではユマ姫は実権を握った厄介な指導者と言うより、反帝国の象徴的アイドルだ。

殺す事は王国の弱体化には繋がらない。

むしろ彼女が殺されたとなれば、却つて国民感情が煽られ、戦争は泥沼化するのが見えた。

そして、ちよつとした銃創や切り傷から死んでしまうのがこの世界の常識であつた。

……で『あつた』。つまり『過去形』だ。

ことココに於いてだけは。

「死なねえ限りはどうにでもなるんだよ、俺の右腕が生えた事、忘れたか？」

「それは……」

ノエルがトリネラの眼前で右手を振る。それは最近『生えた』モノだった。

魔獣に噛み千切られたと言う彼の腕は、巨大ガラス瓶の中で見る間に再生した。彼女の常識では決してあり得ない事。

「わーっただか？ ヨシ、おまえ等！ 殺す気で行け！ だが油断するなよ、銃の威力に子供も大人も無いのはおまえ等だって、よつく知ってるだろうが！」

喝を入れるノエルだが、言われなくても部隊員に、もはや油断は無い。

だが、ソレをあざ笑うかの様に、事態はより悪い方に向かい、一向に解決には向かわなかった。

……誓って部隊員に油断は無かった。

それどころか、少女は最新の銃を手に、少しでも迂闊な行動を取る者を虎視眈々と狙っている。そう言う想定の外、慎重を期して行動していた。

ただ、彼ら全員が忘れていた。

鬼ごっこは決して多人数が一人を追い詰めるゲームでは無い。

一人の鬼が、他の人間を追い回すゲームなのだ。

——パン！ パン！

だから次の銃声が二発、無造作に、それも四人組の分隊が入った部屋から響いた時。それが追い詰められた少女の浅はかな行動だと、彼らは勝利を確信してしまった。

……だが。

——パンパンパンパン！

今度は四発、無慈悲に連続する発砲音。

「ふっげーけんよー！」

ノエルが叫ぶ、彼にも理解不能な事態であった。明らかに隊員が持つマスケツト銃の音では無い。

他の誰もその音を理解出来ない、理解したくない。彼らの常識では二発でも考えられない銃声が六連発。

そうなれば、後はもう幾らでも連射出来るのでは？ と考えてしまうのも道理。

「弾を込め、構えろ！」

トリネラの号令に、残った4人の部下が銃を構える。狙うは銃声がした部屋の出口、少女が姿を現した瞬間に一齐に撃つ構え。

だが、すぐに視界は遮られる事になる。

——シユボオオオー、パパン！

今度こそ兵士が持つ黒色火薬が引火した音だった。もうもうと硝煙が立ちこめる。

屋外であればともかく、室内で黒色火薬を燃やせば結構な煙があがるもの、ユマ姫が出てくるハズの出入り口は、スツカリと見えなくなつた。

——パアン！

恐怖に負けたのか、隊員が煙に向かつて命令無視の発砲。だが当然不発に終わる。ただでさえ精度が低いのに、視界が利かぬ煙幕に撃つてもどうにかなるハズが無い。

——パアン！

だがお返しとばかり、今度は煙の中からの発砲。もちろん見えていないのは向こうも同じ条件だ。

……だが、結果は全く異なつた。

「があー！」

放たれた銃弾は、隊員の顔面。しかもド真ん中に直撃した。

——パアン！ ギャア！

続く銃弾も命中。それも、逃げだそうとした隊員の後頭部目掛けてだった。

鳴き声みたいな悲鳴が上がる。これも即死。

——見えている！ 何故だ！

慌てて伏せたノエルが知恵を絞るが、思い当たる節は何も無かつた。

しかしノエルは悪くない、なにせ思い当たるハズが無いのだ。その正体はユマ姫だけ

が許された、科学や魔法を越えたチート能力、『運命を見る力』なのだから。

——パアン！ パアン！ パアン！

続く銃声は連続した三発。ドサリと間近に死体が倒れる。そこには三つの銃痕。

——今度は何故、三発撃った？ 一発目で死んでいない事が解ったのか？

その通り、ユマ姫は運命が完全に消えるまで、ただトリガーを引き続ける。

——化け物だ、俺達じゃ計り知れない何かがある！

この時点でノエルは人質を諦め、殺し切る事を目標に切り替えた。ユマ姫は余りにも危険だと、遅まきに気が付いた。

コチラに残るは三人、連射可能な銃を相手に余りにも心細い。地の利を作る必要があった。

今は相手の土俵だ、煙幕で視界を奪われ一方的に捌られている。

コチラの土俵に引きずり込むにはどうすれば良いか……

「付いてハニー」

叫ぶと同時にノエルは走る。目指すのは初めに探した部屋にあった。

そこにあつたのはステンレスタンク、中身は極めて灯油に近い性質の液体。

つまり、揮発性のオイル！

「よし、皆でコイツをぶちまけるぞ」

「コレは？」

「油だ、とびつきりのな、よく燃えるぜ」

彼が考えたのは燻り出しだった。

どうせ防火シャッターで遮られているのだ、上層まで延焼する事は無い、心配なのは隔壁を上げてしまった最下層だが、長い通路には燃えるモノも無い。

「なるほど火攻めですか」

「燃えやすそうなモノを見つけてきます」

トリネラと、残った最後の男性隊員はタンクを小脇にそれぞれ駆けだしていく。彼らは特務部隊員として、こう言った工作ならば慣れたもの。

……だが

——パンッ！

ノエルの見ていた先、男性隊員の背中がぐらりと倒れる。

——パンッ！ パンパン！

そこに追撃の三連射。恐ろしい程の連射力だった。

——ドコだ？ ドコから？

なにを置いても逃げるべき状況だが、案外こう言った事態に体は動かない。ドコから撃たれたかも解らない状況ではなおさら。

咄嗟に伏せなかっただけでも見事なモノだ、なぜなら音の発生元は余りにも近い。障害物も無い通路のただ中で伏せるのは自殺行為に他ならない。

数瞬の間ではあるが、ノエルは必死に視線を巡らせる

——クッ！

見えたのは壁から生える銃口！ 必死に体を捻ると同時、パンツパンツと二連射。

——まだ撃てるかよ！

都合六連射。常識外れの銃撃をノエルはギリギリでの回避に成功した。

——完全にッ！ 目じやない何かでコチラを見ている！

連射力も危険だが、最も危険なのはその非常識な索敵能力だった。

それこそ、ノエルがユマ姫の狙撃地点に思いを至らなかつた理由。

タネは恐らく極めて単純、ユマ姫は部屋の中から、通路を走っていた隊員を横から

撃つたに違いない。

それも、薄く明けた引き戸の隙間。硝煙が漏れていない事を考えれば扉から離れて

撃つたに違いない。

言うのは簡単だが、それが如何に非常識かは言うまでも無いだろう。足音などの情報があつても走り抜けていく一瞬を、僅かな隙間から打ち抜くのは困難だ。

極めつけは銃口だけを出してノエルを狙った銃撃。こんなモノはコチラがソコに居

ると確信していなければ不可能。

これはもう、本格的に化け物だ。ヤツは壁越しにもコチラの動きを見る事が可能。燻り出しなどともない、建物の中で戦う事自体がナンセンス。ノエルは考えの甘さに歯噛みする。

「トリネラッ！ 撤退する！」

「ハイッ！」

この叫びは半分フェイク、トリネラは撃たれた隊員とは逆方向に走っていたのでノエルよりユマ姫から距離がある。

走ってくるノエルの合流を待つフリをして、トリネラは銃口を扉へと合わせる。撤退の声にのこのことユマ姫が顔を出したらズドン。

だが、ユマ姫は姿を現さなかった。

(…………どう思う?)

(単純に弾切れなのかも、それか六連射までが限界の可能性もあります)

小声で話すが、結論は急ぐ必要があった。もしも全てコチラの動きが見えているなら、立ち止まるのは的でしか無い。

壁から突き出される小さな銃は、打ち抜くのは勿論、警戒するのも難しい。

そうなのだ、ユマ姫の持つ銃はノエル達が持つモノよりも遙かに小さかった、それで

いてあの連射力。

ここまで不測の事態が続けば一度撤退してソルンと相談するべき。ノエルは相棒の頭脳を信頼していた。

「走つてずらかるぞ」

「はい……」

トリネラとしては部下であり、同僚だった隊員を全て失ったのだから、一矢報いたい気持ちが強かった。

だが、この間がリロードしている時間であれば状況は悪くなる一方。後ろ髪引かれる思いで撤退に同意した。

……それでも諦めきれず、背中を向けて逃げ出そうという一瞬、本当に後ろ髪を引かれたかの様に振り向いた。

瞬間、少女がそろりと部屋から出てくる姿を目撃する。銃を構え続けていればと後悔するも、即座に反転。

「居ました！ 撃ちます」

「オイ!？」

ノエルの制止を振り切つてトリネラの発砲。だがユマ姫には読まれていた。アツサリと伏せて躲される。

だが、それを見て千載一遇のチャンスに瞠目どうもくした男が一人。
「でかしたー！」

ノエルが構えるのは右手のシヨットガン。余りにも遠い距離、拡散する弾丸は致命傷を与え得ない、しかしそれで構わなかった。

——パンツッ！ カンツッ！

発砲音とほぼ同時、軽くて高い音がした。

狙ったのは灯油の入ったステンレスタンク。ソコから灯油が零れ出しているのを目にした故、上手い具合に着火して行く手を遮れば儲け物。

その程度の期待だった……だが、実際に起こったのはそんな生半可な反応では無かった。

危険な『偶然』が幾つか重なり、破滅的な結果がもたらされる。

——ドオオオオオン

それは想像を遙かに超えた爆発だった。

「え？」

「馬鹿がッ！」

呆然とするトリネラをノエルは咄嗟に庇い、押し倒す。

その背中を爆発的な熱波が駆け抜けていく。

それが過ぎれば石油系特有の黒い煙と、未だに着火して赤く燃え上がる灯油の池。

——そして、そこに横たわるのは黒焦げに燃え続ける少女の死体だ。

ノエルは余りにもおぞましい光景に言葉を失うが、意外にもトリネラは冷静だった。

「確かに、良く燃える油の様ですね」

「あ、ああ……」

答えながらも、どうしてあんなに燃えるのかノエルには解らない。灯油はたしかにこの時代の粗悪な油より引火しやすいが、それにしたって早々爆発する様なシロモノじゃ無い。

火の付いたマッチを一本投入しても、火が付く事はないぐらいだ。

——いや、今はそんな事、考えている場合じゃない。

ノエルは頭を振って無駄な考えを追い出した。全ては終わった事と切り替える事にしたのだ。

「ずらかるぞ」

「良いんですか？ 死体を漁れば何か出てくるかも」

「いや……」

正直なところ、そうした方が良いのは解りきっている。だが一刻も早くこの場を離れたかった。

「良いんだ、煙に巻かれちゃ何にもならねえ」

「了解です」

トリネラも本心では同じ思い、逆らいはしなかった。無惨な姿になった少女の姿を最後に一瞥し……

……その少女の死体がムクリと起き上がった。

——ア、ア、アアアアア——

地獄の釜が開いたかのような咆哮が、少女だったモノから響いてくる。

「なんで？ 痛みでマトモに動けるはずが無いのに！」

この世界には火炙りの刑が存在する。トリネラは仕事柄、執行する側に回った事すらあるので、火を付けられた人間がどうなるかは良く知っていた。

全身があのように焼けてしまつては、痛みに発狂し、転げ回るので精一杯。立つ事など絶対に出来はしない。

「化け物がッ！ 逃げるぞ！」

ノエルは呆然とするトリネラの腕を引く。だが、それと同時に、視界の端で黒焦げの化け物が跳んだ。

——速ッ！

ノエルの胸へ異常な速度のタツクルが突き刺さる。それでも黒焦げの体は軽く、倒れるには至らなかつたのは幸いだった。

「クソッ！ 離せ！」

だが、かつて少女だった『黒焦げ』は『まだ燃えて』いた。

美しいウエーブが光を反射し、輝く様だった銀髪は燃え尽き。レースがあしらわれた海賊風衣装は灯油を吸って発火した結果、あつという間に炭化。

そして肌に付着した灯油がドロドロに皮膚を溶かしながら——燃えていた。

そんなありさまで……それでも黒焦げのカタマリは凶悪な意思をもって、離すまじとノエルに組み付いていた。

そんな化け物に抱きつかれたノエルは、灯油が燃えるその熱さ以上の、恐怖と不安に精神こころが灼かれた。

胸にガツチリとしがみつく、『黒焦げ』の『少女だったモノ』。

溶けた肌も炭化した服も、がらんどうの眼窩だつてドコまでも黒い。

ただ見上げてくる残つた単眼だけが、爛々と輝いて見えた。

あまりにも不気味で、根源的な恐怖に狂いそうになりながらも、しがみついてくる『黒焦げ』を左手で殴りつけ、振り払う。

「このっ！」

——グチャ！

殴ってみて、想像よりずっと軽い華奢な手応えに不安が過ぎる。

腰の入っていない、苦し紛れの拳だったのだが、それだけで『黒焦げ』の体の中がグチャグチャに潰れてしまった事が感触で伝わって来た。

その『黒焦げ』が本当はただの少女だった事を思い出させる弱々しい手応えは、押し殺したハズの罪悪感を強烈に刺激した。

ともあれ、それでも悪夢を振り払う事には成功した。

「大丈夫ですか!？」

「ああ……」

右手を挙げて答える。ようやく全て終わった。少なくともノエルはそのつもりでいた。

——痛っ？

ノエルの左腕に痛み、なんだと思って目をやれば……目が合った。

左手に噛み付いた、黒焦げの単眼がソコに居た。

——なんで？ 軽いッ！ 下半身がもう、無い！ とうに焼け落ちて！

噛まれていた。

殴りつけた左腕、分厚い革製ロンググローブの上からで、余りに弱々しく、余りに軽いので気が付くのが遅れた。

へばりついた『黒焦げ』が、文字通り齧り付いてでも殺すと言う殺意だけで動いていた。

どうして？ どうやってこんな姿で動いている？ だが、こんなに姿になっても少女だった『黒焦げ』は少しも諦めていなかった。

辛うじて残ったのは燃え尽きる直前の右手、そこに握り締めて居たのは……

……銃だ！

——マズイツ！

思った時には遅い、ノエルの眼前に銃口が突きつけられていた。

——銃で反撃……間に合わない！ 腕を振って？ その前に発砲される！ 伏せ？

頭を傾け？ 無駄だ！ 躲せるタイミングじゃ……

ノエルの脳内では走馬灯の如く、高速化した思考が生存を探るが、その全てが手詰まりを示していた。

——死？ 死ぬのか？ このオレが？

「止めッ！」

叫びながらもノエルはハッキリと死を意識し、覚悟した。

……だが。

——カチツ！

撃鉄はただ、金属音を響かせるだけ。

それは、恐ろしい程の沈黙だった。タラリとノエルの顔に冷や汗が伝う。

そんな止まった世界でも、少女だった『黒焦げ』だけは躊躇無く引き金を引き続ける。

——カチツ！ カチツ！

ダブルアクションのリボルバーは火の中でも故障せず、その駆動を維持していた。

——カチツ！

……だが、不発！

アレだけの熱、弾丸が既に暴発した後だった。

我に返ったノエルがショットガンを構える、ダブルバレルの残った一発、外しようが

無い距離、お返しにと黒焦げの頭を狙う。

——ドオン！

その頭部がベチャリと吹き飛んだ。

「ハア……ハア……」

見れば、左腕のグローブを貫通し、小さくて可愛らしい歯が腕に突き刺さっていた。

どれほどの執念なのか、腕から引き抜きながらもゾツとする。

「終わりましたね」

「流石にな、頭を吹っ飛ばせば、神様だつてどうにもならねーよ」

言いながらも二人、気分は晴れない。後味の悪い決着だった。

「コイツは持つていくか」

「……銃ですか、ユマ姫の持つていた」

「ああ、どうしてこんなモノがあるか、それがわからねえ」

「それで死体は、どうします?」

トリネラはそう言うが、もはや原型を留めていない。

「ほっとけ! そんなモン、討ち取ったと掲げて見ろ! エルフも王国も最後の一人ま

で怒り狂つて向かつてくるぞ、掃除ロボにお任せだ」

「そうですね」

下半身は焼け落ち、皮膚は残らず溶け、トドメにとばかりに壁のシミと飛び散つた脳味噌を見る。

不気味に思っていた相手でも、流石に気持ちが良いモノではない。

「ざつさとズラかろう、万が一アイツが来たらヤバイ」

「タナカ、ですか?」

「ああ、元々アイツを嵌める罠だったんだからな、女一人と侮つた末に、エライ損害だ」

「それは……」

亡くなった部下を思う、だが、生きている以上、最善を尽くさなくてはならない。

「施設を復活させないとな」

「ええ」

生き残ったのはたった二人、ソルンの待つ中央制御室へと戻っていった。

デッドエンド??

【少し前の話】

覚悟を決めた俺は、霧が漂う部屋の中で銃を握り締めた。

「さて、どうするか?」

殺ると決めたら、急に頭がクリアになった気がする。

敵は十二人、弾丸は三十発、でもリボルバーは一度に六発しか撃てない。固まって動かれるのが一番面倒臭い。

もしそうだったら、ひたすらに逃げ回るのが正解だろう。

霧は有限だから焚き続けるのは不可能だし、ドローンが停止している間に、後続の味方が来てくれる可能性もある。

……だが、俺の『偶然』はそんな消極的な策を許さないだろう。運命すらもねじ曲げて俺を死へと向かわせるからだ。

それに俺自身、すっかり殺る気になってしまっている。この遺跡を操っている奴が、仇の一人で間違い無いのだ。

そうこうしている内に、敵の運命光が一斉に散開した。

なるほど、俺を女の子と見て油断してくれたか。

確かに魔法が使えない俺なんて、ただの美少女。二人で十分と思うだろう。

しかし、壁越しに相手の位置を見られると言うのは、正にチートである。FPSで言う所のウォールハックと同等の効果で、銃の性能差も含めれば勝機は幾らでもありそう
だ。

光を見れば相手が来そうな場所に先回りするのは簡単だった、俺はがらんどうの部屋に人知れず滑り込み、やってくる相手を待ち構える。

後はどうやって二人を一気に殺すかだが、相手がリボルバーを知らない所に付け込める隙がありそうだ。

裁判の時に木村が公衆の面前でパーカッションリボルバーを連射しているが、詳しい情報は流石に持っていないだろう。

この世界の銃は結構な大きさだし、これが銃だとは思わないのでは？

そんな相手を更に油断させるには？

いつそ幼気いたいけな少女のいじらしさと色気？ で勝負する。

俺は海賊風マントを脱ぎ、首のヒラヒラした白い奴（シャボつて言うらしい）を緩めると、ドレスシャツのボタンを外し、はだけさせる。

——どうして遺跡のなかで服をはだけさせてるのかって？

良いんだよ、理屈なんて。事実の前には大して気にならないモンだ。

さして準備はOK、運命光で位置を確認すると、いよいよ獲物がやってきた。

ガラリと扉が開けられると同時に、演技を開始スタート。

「キャツ！ だ、誰？」

はだけた肩を見せつける、ラッキースケベ風。

「いや、その……」

「き、君は？」

目にした二人が晒すのは、唾を飲み込む音まで聞こえそうな程のマヌケ顔。

お？ 案外色仕掛け効果あるじゃん！ 色つぼさと言うより、幼気な部分で勝負する

つもりだったが、なかなかどうして？

「な、何ですか？ で、出て行ってください！」

俺は震えた声で訴える、そして腰のサーベルを突きつけて牽制。いかにも素人なへっ

ぴり腰に、脅威は感じないだろう。

「大丈夫、怪我なんてさせないよ」

「ああ、俺達が保証する」

優しく笑いながらも、二人はチラリと目配せ。怪しい笑みを浮かべている。

二人でちよつと味見しちやおうか？ とかそんな感じか？

「おいおい、マジでコレ、色仕掛け通用してるな。子供扱いされる事も多かっただけに、ちよつと自信を取り戻した感はある。」

「ほ、本当ですか?」

「本当だとも、君みたいな可愛い女の子に、誰も酷い事しないよ」

酷い目ばかりに遭つて来たがな!

まあ良い、俺は感極まつた様子で震える手からサーベルを取り落とす。

「あ、ああ……」

カランと転がったサーベルをさりげなく回収する男。うんうん拾つとけ拾つとけ、重いだけで邪魔なんじゃ。

もう一人は呆然とする俺にニコニコと微笑みながら、後ろ手に扉を閉める。いやー好都合!

「え?」

俺が呆然とそれを見つめると、下卑た笑いを浮かべて男は言う。

「大丈夫、静かにして、実は僕たちは王国側のスパイなんだ。君がユマ姫だと言うなら悪いようにはしない。それにはまず、君が本当にユマ姫なのか調べないと、体の特徴をさ、これも仕事だから」

ガバガバ理論である。

密かに気になっていたので。これから人質にしようって敵国の姫に、どういう理屈で手を出すのか？

下手すりゃ物理的に首だぞと思つたら凄いな無茶な言い訳が出て来た。

いやー罪な女である。

もう一人の男に至っては、期待に胸も、鼻の穴も、股間まで膨らませている。

「大丈夫、痛いのは最初だけ、すぐに頭が真っ白になる程、気持ちよくなるから」

おうおうおうw

「そ、そんなー！」

バツと身構える俺に、迫る二人。

「へへへへ……」

「たまんねえ……」

もう隠す気ねーなコイツら。

俺は、もううんざりだとホルスターから銃を抜き、下品な顔面に突きつける。

「先に、お前の頭を真っ白にしてやるよ」

「は？」

——パン！　パン！

ドサリと重なる二つの死体。

はい、討伐完了つと。

俺ははだけた服を手早く直すと、そそくさと部屋を脱出。

流石にここの扉は銃声を遮れる程じゃ無い。

ゾロゾロと残りの十人が集まってくる。

物陰に隠れて様子を見ていたが、リーダーっぽいのはやはり白髪の不気味な男だ。な

んだか軍属っぽい雰囲気じゃない、抜けた感じの男であった。

奴が古代遺跡に通じているのか？ どこかの科学者だろうか？

まあ良い、これで相手が固まって行動すると言うなら、おれはただ逃げ回れば良いだけだしな。

……と、アイツらの選択は残る十人を3・3・4で分けて探すと言うモノ。

なるほど、二人一遍にやられた。だったら三人で、つて？ 馬鹿かよ。

俺は迷わず四人が向かう部屋へと飛び込む。四人殺せれば、残るは六人になるからだ。

六人相手だったら、上手くすれば一気に殺せる、逆に言えば七人以上で来られると詰み。

次は流石に油断してくれないだろうから、俺は部屋の中、扉の真上の天井に張り付いた。

どうやったって？

答えはこれ、スライムだ。停止していたスライムドローンからスライムを拝借してマントの背中に貼り付ける。

それを着込んで、リミッターを外した脚力と握力で壁をよじ登り、天井に背中をくっつければ完了だ。

またぞろ、キョロキョロと辺りを見回しながら兵士が入り込んでくる。

——パン！ パン！

マズは無防備な首筋を晒す二人を始末。

慌てた残りの二人がこちらを見上げるも、長くて取り回しの悪いマスケット銃。俺の方が早い。

——パンパンパンパン！

今度はこちらに気が付かれていたので、一人頭二発掛かってしまった。拳銃弾の火力では急所に当てない限り、至近でも中々殺せない。

だが、まあ順調。コレで半分始末した計算だ。案外簡単じゃないか？

なーんて思っていたら、背中のスライムが思った以上にべったり張り付いて動けない。

結局、マントを脱いで脱出したんだけど、マントにフックが引っ掛かったりして、無

駄に時間が掛かってしまった。

僅かな間ではあつたが、他の六人が射撃体勢を整えるには十分だった様で、運命光は膝立ちの高さで静止する四人を映している。

一番恐かつたのは一斉に部屋へ突っ込んで来る事だったので、ある意味助かつた。この隙にリロード、左手はフックだけど練習したので割かし早く済む。

さて、どうするか？ そんな時、死んだ兵士達の腰にぶら下がる火薬に目が付いた。おあつらえ向きな事にマッチ棒も持っている。こりや決まりだな。

——シユポオオオー、パパン！

俺は部屋の前に火薬をばらまいて、マッチを放り込んで着火した。

黒色火薬つて奴は単体で大爆発する程凶悪なモノじゃ無い、地味な花火みたいなモンだ。

不純物が入ってたりするみたいで、弾ける様な音がしたり、思ったより煙も多かつたが、今回は願つたりだ。

結構な量の火薬を携帯していたので。一人分でもそれなりの煙幕になった。霧のお陰も相まって、狭い通路は先を見通せない程の煙が満ちる。

——パァン！

いよいよと顔を出そうとした目の前を、空気を切り裂き銃弾が通り過ぎていく。見え

ずとも風圧で解る程。数センチ、下手すりや数ミリの世界だ

ブワリと冷や汗が吹き出す。そうだ、俺は『偶然』で死へと導かれている。油断は禁物。

それでも居竦んではいられない、煙を吸い込まぬ様にフワフワのシャボで口を押さえながら、慎重に上半身を覗かせ、よおつく狙つて一発。

——パン！

命中！ 膝立ちの奴に一撃。次は？ 伏せた奴は放置、突然立ち上がった奴に決まりだ、撃たれる前に撃つ。

——パアン！ ギッ！

反撃では無く、逃げようとしていたらしい。これも一発で済んだ。

次はまた膝立ちの奴。

——パアン！ パアン！ パアン！

次は三発掛かった、コイツは撃たれる事を意識してガードしてたに違いない。

運命光が見えるのは光の位置だけ、立っているのか座っているのか位は解るが、相手の姿までは解らない。

結構察せられるものだけど、今みたいな咄嗟の状況判断に使うのは難しい。

コレで五発撃つてしまって、シリンダーには残り一発。相手は三人。

万が一だが、一斉に向かってきたらヤバイ。

そうじゃ無くて、撃たれるに厭わず、煙の中に突っ込んでくるバーサーカーが居たら終わりだ。

急所を守った姿勢で突っ込まれると、弱い拳銃弾の一発で殺す事は絶対に不可能。息を潜めて、相手の出方を窺う。

と、伏せていた奴が反転して猛ダツシユ、他の二人も続く。コッチは逃げてくれるなら都合だ。

ふうー、なんとかなった。余裕に見えて、結構綱渡りだ。無策に突っ込んでくる奴だと終わっていた。慎重で居て却って助かった。

俺はリロードして後を追う、残る弾丸は十七発で、残るは三人。思ったよりも余裕である。

大半を一発で仕留められたのが大きい。油断をしなければ大丈夫だがどうか？

逃げた奴らを慎重に追いかけてみれば、どうやら三方に別れて散り散りに逃げて行く。

だったら望み通り、一人一人確殺するのみ。

先回りした俺は、部屋の中から通路へ向けて銃を構える。狙うは薄く戸を開けた隙間。

——パンツ！

命中！ 運命光で位置を見ればこんな荒技も可能。だが防具のある脇腹だったので致命傷には至らず、そのまま倒れ込んだ相手に三連射。

——パンツ！ パンパン！

これに残るは二人だが、シリンダーには二発。そろそろリロードしたい。

だが、ここらでリロードのタイミングを読まれそう、グツと我慢して敢えて打ち切る。運命光を利用して、扉から手だけを出して撃ってみる。

パンツパンと二連射、無理な体勢での射撃だったが、思ったよりはまともに撃てた感じ。

でも、まあ、当たらなかつたんですけどね。

牽制は完了。急いでリロードって？

クソツ肩が外れてしまっていた。一拍遅れて体中から汗が噴き出す。

我慢出来る痛みでも、体の反射には抗えない。命に関わる手汗を即座に拭う。思わぬタイムロスとなったが仕方が無い。

それに、噴き出すのは汗だけでは無かった。涙は袖で拭うが、鼻水をかむ程の余裕はナシ。

「トリネラッ！ 撤退する！」

「ハイッー！」

おっ！ ツイてる！ コレで安心してリロードが可能。今、突っ込んで来られたらヤバかった、運命光を見れば遠ざかっていくので一安心。

そうしてリロードが完了、残弾は残り十一発だが、この六発で決めたいところ。

逃げるなら面倒臭いな、と思ったが大丈夫。まだ二人はこちらの様子を見ている。

確かに出入り口を狙われるのは厄介、銃だけ出すにしたって、唯一の武器を打ち抜かれたらその場でゲームオーバーだ。

だが、俺には火薬がある。先程も使った手、倒れた兵士から五袋分も回収している。

なんせ今の俺にとって、煙幕の価値は計り知れない。

運命光で敵の位置が解るのもそうだが、ポーネリアの記憶から目を瞑っても歩ける位に施設の中は知り尽くしている。

俺は大盤振る舞いに三袋分の火薬を撒く、霧も少なくなってきたし、さつきは思ったよりも煙が薄まるのが早かったからだ。

で、着火しようとマツチを出した途端、敵の運命光に動きが。

「逃がさない！」

今なら無防備な背中を撃てる！ しかし顔を出した途端、振り返る女性兵士と目が合った！

——釣られた!

反転し、膝立ちに銃を構える動作の早い事。途轍もない練度だった。慌てて伏せた頭上、弾丸が通過したのを直感した。

ヨシッ! これで連射出来ない相手に一方的に撃てる!

と喜んだ俺の鼻に、刺激臭が突き刺さる?

——なんだ? コレ? 灯油の匂い? 参照権! あ、タンク、これマジで灯油だ!

え? なんで? ひらひらのシャボや、シャツのレースに灯油が染みこんで行く。

や、ヤバい! 灯油もヤバいが、さつき巻いた火薬が!

もしも、今、撃たれたら!?

——パンツ! カンツ!

あ、

——ドオオオオオン

灯油を吸い込んだ火薬、灯油をタツプリと吸い込んだ俺の衣装。そして腰にぶら下げた黒色火薬。

それでも立つ。

「なんで？ 痛みでマトモに動けるハズが無いのに！」

「化け物がッ！ 逃げるぞ！」

そうだ、俺はバケモノ、狩る側、だ。

魔法で飛ぶ、脚力は要らない、アレ？ 使える、爆発で霧が飛んだか。

「クソッ！ 離せ！」

これだ！ こいつが俺の、家族の、仇！

「このっ！」

殴られる、それでいい、噛み付いて。ハナサナイ。

噛み付いて、しがみついて、体は殆ど燃え落ちて。

でも、右手にはまだ銃が有る。それだけで十分で、それだけが素晴らしい。

「止めッ！」

——止めない！ コロス、ぜっつたいに。

——カチッ！

あ、れ？

——カチッ！ カチッ！

あ、だめ？ だめなの？

ガチャリと目の前に相手の銃口。

——ドオン!

俺の意識は完全に消え去った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ハア、ハア、ハア」

ドローンに囲まれた所、皮肉にも霧に助けられカプセルだらけの部屋を脱出した俺は、霧で視界が悪くなった遺跡の中、全力で駆けていた。

正直、遺跡探索と言うより肝試しで廃墟の探検と言った風情だが、切羽詰まっているのは間違い無い。

帝国がユマ姫相手に霧を使ったのだとしたら、一刻の猶予も無いからだ。

「ココは? 二十八階か?」

壁に大きくペイントされた数字を信じるなら、大分潜ってきた事になる。

当初見込んでいた地下二十階を大きく越え、地下三十階が近い。

これだけ地下深いと、穴を掘るのも一苦勞のハズだ、一体全体、どうして古代人は穴ばかり掘り返したんだか……

と、次の階層への階段は、とうとう隔壁が閉まっていた。

うーん、敵はココには来ていないのか? いや逆にこの奥に待ち構えている可能性も

……

判別は不可能、だったら開けてみるしかない。

「重いっ！　じゃねえか！」

手回しで隔壁を開けるのは大変。だが、こう言うのは電源が落ちた時だって開けられなきやオカシイよな？

実際、男の力ならギリギリ開けられる位の重さに仕上がっている。

「臭いな？　石油か？」

辿り付いた二十九階層は、灯油をひっくり返したみたいな匂い、いやもつと強烈だ。焼け焦げた悪臭が充満していた。

——なんだ？　ここで何が？

戦闘があつたのは間違い無い、しかし火を使つての戦闘か？　優位な側が取る選択肢では無い、ならば数に劣るユマ姫達が火を付けたと考えるべきだが……

あいつは運が無いのに、火なんて不確定要素に頼って大丈夫なのかよ！
苛立ちながら足を進めれば、今度は洗剤の匂いが漂う。

お掃除ロボだ。スライム達がそこかしこで活躍している。よく見ればこの階層には霧が無い、霧も燃えちまったのか？

更に言えば、そこら中に死体が転がっている。新種の地獄かってエリアだが、一番酷

いのは一面黒焦げになったエリア。

——ココで何があった？

スライムに隠れながら様子を見る、石油系の中に、タンパク質が燃える嫌な匂いが混ざる。

人が燃えたのか？ まさか？ いや、まさかだよな？

黒焦げの男の死体に、むしろホツとする。そうだよな、ユマ姫があんな風になったりは……流石にだろ？ アイツがこの世界のヒロインで中心なんだろう？ 神様よ。

大体にして、一応見た目は可愛い女の子なんだ、敵だつてそんな血も涙も無い事は……

「えっ?」

間抜けな声が出てしまった。

スライムに掃き集められたゴミの一部、それが人間の下半身の様に見えたからだ。

我を忘れてその下半身に取り付いた、スライムロボは掃除に精一杯なのか俺を無視してくれている。

この炭のカタマリは人間？ じゃないよな？ マネキンだよな？

でも、小さくて見慣れた少女みたいなの下半身。

殆ど焼け落ちて、丈夫な皮のロングスカートと金属の一部だけが辛うじて原型を留め

ている、

……だが、その衣装に……わ、僅かばかりの面影が。

「うそつ、嘘だろツ？」

俺は下半身を抱え、最高に嬉しくないスカートめくり。

「あつ？ えつ、そ、そんな！」

嘘だつ！ あり得ない。

……黒焦げの下半身は、俺が贈った紐パンを履いていた。

「なんでだ？ なんでだよ！ まだ何にも出来てないだろうが！」

涙も、鼻水も全部垂れ流しで泣きじゃくる。大声を出したつて構わない。

いつそスライムに塗れて死にたいと思うが、ロボすらも俺なんかにも目もくれず通り過ぎていく。

オカシイだろ！ こう言うのはギリギリで間に合うモノだろう？ 息を切らして駆けつけて、どうしてチョン切れて炭化したヒロインと遭遇しなきゃならない？

どうして俺は間に合わない？ 俺はその程度だつて笑いたいのか？

「なぜつ、こんなの！ 俺は！ 認めない！」

神様はこんな結末の為に転生させたのかよ！ あり得ないだろうが！ ふぎけるなよ。

「勘弁してくれよ、神様お願いだ、コイツを生き返らせてくれ！」
俺の叫びは神へは届かない。

——ただ、変な奴には届いた。

「いやあー、その状態で治せつてのは神も困るだろ」

泣きじやくる俺を見下ろす、黒ずくめの大男。

十三年ぶりで姿も大きく変わったが、そのとぼけた顔は見間違えるハズも無い。

「田中!？」

前世からの旧友が、そこにいた。

俺の名は？

「ヒデエ目に合ったぜ」

命からがら中央制御室に帰ったノエルはドツカリとソファーに沈み、天を仰ぐ。

その様子を不安げに見つめるソルン。

「部隊は全滅……か、ただの女の子に？」

「そのカラクリはコレよ」

ノエルが見せるのはユマ姫が持って居た拳銃。リボルバーだ。

「コレは？」

「ユマ姫が使ってた武器だ」

「驚いたな、このシリンダーにカートリッジ式の火薬を詰め込む訳か？」

「ご名答！ 六連射まで可能って事だ」

「それだけじゃ無い、カートリッジ式ならばリロードも一瞬のハズだ、考え方は丸つきり

魔力銃と一緒だぞ」

魔力銃は魔力で空気を圧縮してカートリッジ化した古代人の銃だ。

魔力と風は親和性が高い。丁度電気と磁力の関係に近く、魔力が流れれば風が吹き、

風が渦巻けば魔力が圧縮される。

それだけに風魔法と言うのは最も原始的で、最も応用の利くメジャーなモノ。

だと言うのに、空気を圧縮して弾丸を発射するだけの空気銃をエルフですら実用化出来ていない。

魔力で圧縮された空気は、さながらはち切れる寸前の風船。健康値の一突きで爆発する危険があるからだ。

それを解決するために、魔力銃ガイデッドの弾丸は魔力でコーティングされたカートリッジ内で空気を圧縮する事により、健康値に晒されても魔力と相殺する事で暴発を防ぐ仕組みとなっている。

だが、そんな複雑な仕組みである故に、空気圧と魔力圧に晒されるカートリッジの寿命は短く、現存していない。

話が逸れたが、古代の兵器に通じる彼らは火薬が詰まった弾丸をカートリッジ化すると言う発想はあったモノの、その為の方法も技術も持っていなかった。

ソルンが食いつくのも当然と言える。

「コレの弾丸は？」

「あるにはあるが……」

ユマ姫が持っていた弾丸は残らず火炎に飲まれ暴発済みだった。

「残念だな、でも使用済みカートリッジだけでも構造が探れるかも知れない」
「それに、このシリンダー構造は単純なのにスゲーぜ？ 魔力も使わず複雑かつ合理的な構造をしていやがる」

彼らの知る文明は全て魔力の上に成り立っていた。

魔力銃も魔力でリロードや排莖までこなす銃のため、アナログな機構でそれらをこなすリボルバーは驚きの兵器だった。

「銃の解析は任せたま、それより僕はコレを作った人間に興味があるな」

「ああ、魔女と同郷って奴で間違い無いか」

彼らが敬愛する魔女は、魔力が使用不可能な状況でも使える数々のアイデアを持っていた。

火縄銃はその最たるモノ、皇帝にしたって銃が無ければエルフはともかく、王国との戦争に踏み切る決断は下さなかったに違いない。

だからこそ、より強力な銃を相手を持っていると言うのは問題だ。厭戦論が出るに違いない。

「邪魔だな」

「ああ、それにタナカも」

彼らの計画には、余りにも邪魔な不確定要素。何としても殺したい。

「ユマ姫の死体はどうした？」

「んなモン、捨ててきたよ」

「何だと？」

ノエルの言葉はソルンにとって、捨て置けないモノだった。

「人形ぐらいは作れたかも知れないじゃ無いか」

「あ？ 俺達三人で、大きな赤ん坊の子守が出来るのかよ？」

「それも……そうか」

ソルンが人質に拘った理由は一つ。

アレ程しつこかったタナカの追跡が、遺跡に入り込むやピタリと止まってしまったか

らだ。

遺跡の最奥でドローンやガスまで用意しての待ち伏せ。万全を期したつもりであつ

たが、それゆえ余りにも見え透いた罠であつたことを認めなくてはならなかった。

だが、あの化け物を確実に始末するにはこの程度の仕掛けは必要不可欠。

何としてでもタナカを誘い込むネタが欲しい。その為にはユマ姫を人質に欲しかつ

たのだが……

「なんにせよ、霧が残る内は僕たちに出来る事は無い」

「んだな、俺は寝るぜ」

「ああ、休んでおけ」

霧が晴れるまで、中央制御室で出来る事は殆ど無かった。いつそ脱出する事も考えた霧の中で人間と出くわすのは最悪である。

更に言えば、霧が晴れてからも精密なコンピューターである中央コンソールの復帰にはかなりの手間を要した。

結局、システムが完全復旧したのはソルンの徹夜の頑張りをもつてしても10時間程度の時間を必要とした。

「ふあああー、どうだ？」

起き抜けの眠気を隠そうともせず、ノエルが尋ねる。

「良く寝る男だな君は」

「まあーな、凶太いのが取り柄だね」

「丁度復旧するところだ、見ている」

「へえ」

モニターにポツポツと明かりが戻る。そうして表示された空中ホログラムには施設の様子が表示された。

「所々、モニター不可能なエリアがあるな」

「霧が滞留している所だろうな、換気が進めば直にもどるさ」

「そうかよ……目立った侵入者はナシ……は？」

ノエルの目に止まったのは、ココからほど近い最下層の一室だった？

「オイ！ 冗談だろ？ 誰か居るぜ？」

「まさか？ なんだこの熱源は？」

映し出されていたのは二つの光点。どう考えても宿直室で休むトリネラではない。

「モニターは？」

「今やってる！」

問題の場所は最下層。監視カメラも設置されているため映像も確認可能であった。

「映像、出るぞ！」

「オイ！ コイツは！」

宙にデカデカと映し出されたのは黒ずくめの大男。難しい顔で一点を見つめている。

「タナカ！ マズいぞ？ いつの間に入り込んでいやがった！」

怨敵が目と鼻の先に居る、それも自らを守る兵士も、ドローンも無い最悪の状態。

だが、ソルンはコレが千載一遇のチャンスと色めき立った。

「いや、ツイてる」

「なんだと？」

「ココは最下層、気密性も高い、部屋をロックした上で——」

ソルンの指が不可視のコンソールをなぞる。それでモニターの中に変化が訪れる。
「睡眠ガスか！」

「(づ)名答」

モニターの先、部屋の中に白いガスが満ちる。田中が苦しんだのも一瞬、すぐに動かなくなった。

「ずいぶんアツサリだな……」

「無理も無い、毒ガスの罠なんて彼が知るはずが無いからね」

「コレでコイツとの因縁も終わりか」

「いや、タナカからは他の転生者について聞き出そう」

「確かに、もう一人居るって言うていたな、だがタナカのそばに居るコイツ、コレがそうなんじゃ無いか？」

「それも含めてだ、焦ることは無いよ。なんせ彼らは既に僕らの手の内なんだからね」

「わーったよ、俺に任せな、ソルン、お前は寝ておけよ」

「……わかった、そうさせて貰うよ」

かくして、ノエルは睡眠ガスで気を失った田中と木村の確保に成功する。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ガスを抜いてから部屋に飛び込んだノエルは、真っ先にタナカと、もう一人の男を拘

束した。

後ろ手に手首を拘束する金属は、田中や木村が知る手錠と殆ど同じモノ。帝国軍第一特務部隊の所有物である。

人間の腕力で引き千切る事は、どうやっても不可能に出来ている。

そうして一息ついた所で、ノエルは彼らがココで何をしていたかを理解してしまう。

「ハ！ ヒヒツ！ ハアーハツハ」

それがいかに愚かで空しい行為かを知っているだけに、笑いも漏れようと言うモノ。

「何か面白い事でもあったか？」

しかし、思いがけず声が掛かる。捕らえた田中からだった。

ノエルは一瞬ギョツして振り向くも、自分の優位を思い出す。

「オイオイ、ガスを喰らったのに元気だな、その調子で鎖を引き千切ってみるか？」

「残念ながら無理そうだ」

声を掛ける前に、とつくに試していた。しかし後ろ手に嵌められた手錠はびくともしない。

その言葉に安心したノエルだが、そうなると今度はタナカの余裕が気にくわない。

「丁度良い、俺はな、お前に聞きたい事があったんだ」

「なんだ？ 可愛い女の子の居る店か？」

「それも興味あるけどよー、お前以外の、転生者の話よ」
「へえ？」

田中は面白そうに目を見張る。木村がノエル達にどう評価されているかに興味があつたのだ。

「とんでもない銃を作つていやがった、コッチにつくなら良いが、その気が無いなら消させて貰うぜ」

「ほうー危険な銃ね」

面白そうに田中が笑う。そうしてごく自然に、隣で眠る男に話を振つた。

「どんな銃なんだよ？ お前が作つたんだろ？ 木村」

しかし返事は無い、木村はまだ催眠ガスで眠りこけていた。

一方でノエルは、ひよつとして、と思つていた事をアツサリと白状した田中の態度が益々不気味に映る。余りにも余裕が過ぎるのだ。

ノエルは苛立ち混じりに、寝ている木村を蹴つ飛ばした。

「オラッ！ 起きろ」

「グッ、ガア！」

災難だったのは木村だ、催眠ガスに混じる催眠効果で苦しんだ挙げ句、足蹴に起こされた。

「なんだ？ どうなった？」

「残念ながら、捕まっちゃまったみたいだ、ホラ」

田中は後ろ手の手錠を見せつけるが木村は取り合わない。

「んな事は良いんだよ！ アイツの事だ！」

「ん？ ああ、アレだよ」

俺達、生きるか死ぬかの瀬戸際なんだぜ？ と苦笑しながらも田中が顎で指し示す先には一つの巨大なカプセルがあつた。

大の男でも余裕をもって入れるサイズ。

その中にぶかぶかと浮かぶのは、一糸纏わぬ少女の姿。

——ユマ姫だった。

「良かったー！」

安堵する木村、だがソレが彼らの余裕の正体だとすると、ノエルは笑いが止まらない。

「プツ！ クハツ！ ヒヤアヒヤ！ オイ！ 勘弁してくれ！」

ノエルは笑う、笑い続ける。余りに滑稽で愚かしい二人に、涙が出るぐらい笑いが止まらない。

木村は突然笑い出すノエルに不気味なモノを感じ、眉を顰めた。

そうで無くても大ピンチ、後ろ手に縛られたコチラは全く笑えない状況だからだ。

だが、そんな空気を全く無視する男が一人。

「ハツハツハツ、いやー愉快愉快」

田中だった。

「いや！　なんでお前が笑うんだよ！」

木村のツツコミも追いつかない。

「そりゃ、めでたいからさ、なんとかなるものだろう？」

「……そりゃ、そうか」

ユマ姫の復活。常軌を逸した夢物語に思えたソレがアツサリと叶った。喜ぶべき事である事には違いない。

だが、ソレを見てノエルはいじわるな笑みを浮かべ、カプセルに繋がるコンソールを操作する。

「オイ！　止めろ！」

「酷い言い草だな、俺はこの娘を培養槽から解放してやろうってんだぜ？」

木村は声をあげるが、ノエルの指は止まらない。後ろ手に縛られた身だが、体ごとぶつかって止めようかと逡巡する。

「オイ、良いだろうが、折角向こうが出してくれて言うんだ」

しかしソレを田中が小声で遮った。いたづらを思いついた様な笑みを浮かべていた。

それでいて一転して大声を張り上げ、コンソールを叩くノエルに訴える。

「なあ！ 俺達はどうなつても良い！ どんな事でも話す！ 約束してくれ、ユマ姫だけは解放するとな」

「いいぜ」

田中の悲痛な訴えが通じたのか、ノエルはアツサリと了承する。

「だけどな、解放したら何としてでも喋って貰うぜ？ 洗いざらいな」

「ああ約束する、ほらお前も！」

田中は即答。更には木村に対して、肩でぶつかり催促までする。

「ああ、俺も約束する」

空気を読んだ木村が約束するも。

（オイ！ どう言うつもりだ？）

木村には状況が掴めない。

（ワカンネーか？）

（ワカンネーよ！）

（常識で判断するな、信じようぜ、神の奇跡って奴をさ）

（……なにを？）

小声のやり取りを遮る様に、ノエルは木村に潰れた弾丸を見せつける。

「コレは、お前が作ったのか？」

「……そうだ」

「火薬が入っていて、ケツをハンマーで叩くと着火する、入っているのは小さい火打ち石、違うか？」

「違うな、雷管だ」

「ライカン？」

「ああ、起爆用の特殊な火薬を火打ち石より火花が出やすい金属で刺激する、それで確実に弾が発射される、雨に濡れてもだ」

「へえ？」

ノエルは目を見張った。想像していた以上の技術を持つていたからだ。

「銃の方にも色々仕掛けがあったよな？」

「ああ、シリンドー構造で撃つだけで次の弾丸が装填される、引き金を引くだけで六連射、弾の詰め替えだつて一瞬で済む」

「良いじゃねえか！　なあお前！　俺達と一緒に来ねえか？」

誘われた木村はチラリと田中を見る、余裕過ぎる田中の態度の理由が理解出来ない。

時間を稼いではいるが、ノエルの話す雰囲気でも、田中は良くても、田中は見逃すつもりは一切無さそうだと感じていたからだ。

とにかく、誘いをはぐらかす必要があった。

「……ユマ姫が良いと言うなら、俺もお前に従うとしよう」

言うはずが無い、他の何を妥協しようと、ユマ姫が帝国に付くハズが無かった。

だが。

「ああ、すぐに了承は取れるとおもうぜ」

ノエルは何事も無くそう言った。

「なに？」

「簡単さ、いや、それにしてもこんなガキが好みなのか、お前？ いや、確かに可愛いが

な、人生賭ける程じゃねえだろう？」

「質問に答えてくれ、どう言う意味だ？」

「そのまんまの意味さ、折角だ、お前専用の人形にしたらどうだ？」

「……人形？」

どう言う意味だ？ と、木村は首を捻る。

（話がちつとも見えてこな……いや、なるほど人形、そう言う事か）

遅まきにも、木村にも事態が飲み込めた瞬間であった。

（なるほど、そうか、それが道理か、だとしたら……）

憎たらしい田中の顔に合点が行った。

ノエルの言葉も田中の余裕も。

そして、ノエルの返事は木村の想像を裏付けるものだった。

「なんなら、お前好みにユマ姫を育てても良いんだぜ？」

「俺が？ ユマ姫を？ 俺だけのユマ姫を？」

木村はパツと笑顔を見せる、想像の裏付けが取れ、立ちこめる霧が晴れたかの様であつた。

しかしノエルにそれは、欲望^{たぎ}滾る男の顔に見えた。

「ああ、そうだ、お前専用。何でもしてくれるユマ姫の誕生だ。見てな、仕上げだ」

ユマ姫が浮かぶ培養槽から液体が抜かれていく、その様子を落ち着かない様子で見つめる木村だが、知識があるノエルに任せられた方が安心だと思ひ直した。

「ほら！ 出ろよ！」

ノエルは液体が抜けたカプセルをガポツと開けると、少女の左手を握つて強引に引つ張り上げた。

そう、左腕を、だ。失われたハズの左腕。そして左目も元のきらめく輝きを取り戻していた。

ノエルはリュックでも担ぐようにユマ姫を肩に掛けると、二人から見える場所にドチャリと落とした。

きつと痛かったに違いない。その証拠にユマ姫は泣き出した。

「うあ、うえ、う、ヒック、オギャアアアアア」

そう、赤子のように泣いた、いや、赤子そのものの泣き方だった。

「ほら、どうした？ 挨拶でもしてやれよ、感動の対面だろ？」

ノエルはユマ姫を促すが、泣きじやくるだけのユマ姫は立ち上がる事すらしなかった。

いや、出来なかった。

「こ、これは？」

「ど、どういふことだ？」

驚愕の声を上げる、田中と木村。しかし田中の方は少しばかり棒読みではあったのだが、ノエルはソレに気が付かなかった。

ノエルは自分が笑うのに忙しかつたからだ。

「解らねえか？ ワカラネーよなあ！ ヒヤ！ ヒツハハツ！」

「お前、一体何をした！」

「なんもしてねーよ、装置は確実に作動して、ユマ姫は復活した、お前らの望み通りさ」

ノエルは木村に訴えかける、両手を広げた大げさな身振りだった。

「お前ぐらい賢いなら理解出来るか？ 人間は生まれた時から喋れるか？ 歩けるか？」

出来ないよな？　じゃあ何故歩けるようになると思う？」

「そりゃ、経験を積むからだろ、生まれて一年ぐらいで歩けるようになる」

「そのとーり」

言うと同時に、ノエルは泣きじやくるユマ姫の髪を引っ張り上げ、自我のない顔を二人に見せつける。

「そこで、このお嬢ちゃんの年齢は幾つだと思う？」

「そりゃ……」

木村は口ごもるが、その前にノエルは答えを発表した。

「ゼロ歳だ！　解るか？　コイツは今生まれたんだよ！」

「なにを、言っている！」

「そのマンマの意味さ、この装置はな、人間の体を読み取ってその設計図を元に、体を復元するんだ、意味が解るか？」

「設計図？　毎日皮が剥けたり、髪が抜けても、また同じように生えるのはその設計図のお陰？」

「そうだ！　筋がいいじゃねーか、他の奴とは全然ちがうぜ」

ノエルはユマ姫からパツと手を離し、ご機嫌で木村へと向き合う。この世界にマトモに話せる人間は殆ど居ないと思っていたからだ。

「それで、設計図は子供にも引き継がれる。母と父それぞれの設計図をな、だからある程度、親に似た子供が生まれる訳だ」

「なにが言いたい？」

「わかんねえか？ 子供は親の記憶を持っていないだろ？」

ノエルは笑う。こんなモノは常識だからだ。

彼は知らない、彼の常識は、彼らに取っても常識なのだ、そして、彼らの常識は彼の常識では無い。

「じゃあ、記憶はどこにあると思う？ どこに記憶があると思う？ それはな、ココさ」
ノエルは左手で自分の頭をトントンと叩いてみせる。

「人間が積み上げた記憶って奴は脳にあんのよ、そしてな、他ならぬ俺が、ユマ姫の脳をぶっ飛ばした、その意味が解るか？」

「ま、まさか！」

「そうさ、設計図から脳を作れても、記憶はどうやっても戻らねえ！」

「そんな、じゃあ？ ユマ姫は？ あの心優しき少女は？」

「死んださ！ 人間の本質は記憶にこそあるんだ！ 死んじまった人間はどうやっても戻らない」

「そんな、ばかな事が……」

木村はガツクリとうなだれた、笑いを堪えながらもノエルはその肩を叩く。

「悪い事ばかりじゃ無いさ、あのユマ姫は記憶も無い人形。お前の好きに出来るんだぜ？」

ノエルは背後のユマ姫を親指で指し示す。その指の先、美しい裸体を晒す少女の姿に、木村はハツとした様子であつた。

「ユマ姫が、俺のモノ？」

「そうさ、だから俺達と銃を作ろうぜ？ 二人で幸せに暮らしていけるさ」

実際には、頭が空っぽの大人は長生き出来ない事をノエルは知っていた。

体と知識がちぐはぐだと、リミッターを外れた様な痲痺で暴れば、自らの腕を折つたりする。自死に至る事すら珍しく無いのだ。

ただでさえ大人の体で泣き喚き、垂れ流す赤子など、育てるのは難しい。

だが、ソレは言わずとも良い事、この知識に長けた男を引き抜く事をノエルは優先した。

言わばこれはノエルにとっては茶番。

だが、それは二人にとつても茶番だつた。

——しかし長過ぎた茶番、そろそろ耐えられぬ男が一人。

「クツクツク」

田中だった。

「デメエ！ 何笑ってやがる」

ノエルは田中を蹴つ飛ばすが、それでも田中は笑い続ける。

「これが！ 笑わずにいられるかよ！ ユマ様をどなたと心得る、エルフ族の神聖不可侵たる王の系譜、そして神にいぎなわれた聖女なるぞ」

狂った様な笑顔を貼り付け、爛々とした目でノエルを見つめる田中の表情は不気味だった。

「なーに言ってやがる！ この期に及んで神頼みとはな、俺の話が理解できなかったんだろ？」

「理解する必要なんざない、何が脳だ、何が記憶だ、なにが設計書だ、神の奇跡の前にそんな屁理屈は無意味と知れ」

心底楽しそうに田中は笑う、完全に狂った様にすら見えた。

それを見て一気に冷えてしまったのがノエルだ。呆れたため息と肩をすくめた。

「ハッ、この時代の馬鹿共はなーんでも神、神って馬鹿かよ、モノの道理を知らねえ、お前は違うよな？」

話を振られた木村も、ケラケラと笑う。

「ああ、生命の設計図、俺らは遺伝子って呼んでるけどな。たった四種類の塩基からなる

二重螺旋構造って知ってるか？」

「なんだ？ 何を言っている？」

豹変した木村の様子にノエルはギョツとした、言っている事の意味が少しも解らない為だ。

「お前等が使っている機械も補助記憶装置と主記憶装置は有るんじゃないか？ 主記憶装置は魔力を流した時だけ記録可能な代わりに高速、補助記憶装置はおおかた金属版に魔力で記録を刻みつける事で、魔力を流していない状態でも記録が保持される、違うか？」

「違わない。違わないが、なぜそんな事をコイツが知っている？ ノエルにはソレが解らない。」

「脳の記憶も記憶装置の内容も、壊れたら復元は難しい。だがバックアップは取れる、クラウドで外部サーバーにバックアップを置くのがオススメだ」

「何を、言っている！」

声を荒らげるノエルだが、今度は田中が笑う。

「神の力を見よ、我らが前に顕現なされた！」

「いい加減黙れ、気狂いめ！ お前は邪魔だ！」

ノエルは田中の顔面へショットガンを突きつける、引き金一つで脳味噌が吹っ飛ぶで

あろう距離。

それでも田中は余裕だった。

「オイオイ、お前は神を信じないのか？」

「信じる訳ないだろうが！」

ノエルが吠える、だが木村も笑う。

「そりゃ残念だな、俺達はもう会ったぜ？」

「だから！ お前まで！」

理知的だと思っていた男まで、完全に気狂いに変わってしまった。

「お前はきつと神の使徒から神罰を喰らう」

「だから！ そんなもん居る訳ないだろうが！ 居るなら見せてみろ！」

唾を飛ばし怒るノエルはトリガーを引く寸前。それでも木村と田中、二人は楽しげに

声を重ねる。

「居るぜ？ お前の後ろに」

——シャラン

涼やかな音が鳴った、聞き慣れた音だった。

なにせソレはノエルが持つ自慢の一振り、腰のサーベルが引き抜かれる音だったからだ。

「なっ!?!」

慌てて振り向いた目の前に、裸の少女が立っていた。

抜き身のサーベルを構えた姿で。

そう、立っていた! ユマ姫が、その目に殺意を湛えて。

「死ねッ!」

そして、迷い無く、サーベルをノエルの胸へと突き刺した。

「あぐっ」

ノエルには何が起こったか理解出来ない。脳を吹き飛ばしたのは間違い無いのだ、他ならぬ自分の手で、欠片も残らず吹き飛んだ!

もうユマ姫の人格は破壊され、永遠に失われたはずだった。見た目だけ体だけが戻ろうと、生き返るなどあり得ない。立って歩いて剣を振るうなどあり得ない。

「何故だ! おまえは! 何者だ!」

だから問う、刺されて尚問う。理解出来ない少女の形をしたモノの正体を問い詰める。

少女は笑った、不気味な程つり上がった口は少女らしくない笑みを浮かべた。

不思議と、タナカとキムラ、二人の男とよく似た笑顔だった。

より、サーベルに力を込めて、念入りに突き刺すと同時、言い放つ。

「俺の名前は『高橋敬一』、——どこにでもいる普通の中学生だ」

少し前の話

時は少し前、ユマ姫や木村達が遺跡に入った直後まで遡る。

場所は同じくピルタ山脈。大森林とビルダール王国を遮る世界屈指の難所である。

ゴロゴロと岩ばかりが転がり、切り立った崖に左右を挟まれた谷の底、高いモーター音を轟かせ疾走する漆黒の機体があった。

その正体は？

この世界の人々ならば腰を抜かす威容だが、地球人からすれば間違えようも無い。

——バイク。

フアンタジーにあるまじき異物。漆黒の機体は同じく漆黒の剣士を乗せていた。

もちろん田中である。

フアンタジックなマントを背に、腰には刀を佩き、SFチックなバイクで駆ける姿は中二病的な格好良さに溢れている。

だが、そんな姿と裏腹に田中は迷子であった。

遺跡に踏み入らなかつたのは、罨を見破つた訳でも何でも無いのである。なにせ田中は大森林に土地勘が無い。超人的な視力と気配察知で追い続けたが、一度目を離してし

まうと搜索は困難を極めた。

そしてソレを誤解したのがノエルとソルンの二人だった。彼らは田中を優秀なハンターと誤解し、猟師であれば見逃さない程度の痕跡を罫として残した。

しかし、田中はそれらに全く気が付かなかったのだ。

更に言うのと逃走経路に裏を搔かれた。彼らが逃げたのは東、王国側だ。

帝国とは真逆の方角になぜ奴らが逃げ込んだのか？ 田中にはそれが解らない。

「足が無かつたら終わってたぜ」

跨がっているのは大型三輪バイク。ドライバーの魔力をキーに魔石で稼働する魔道具であった。

その超科学の正体は、古代遺跡から発見した遺物をエルフの技師が整備、改造の末にエルフの魔石でなんとか動くように仕上げたシロモノ。

コレはエルフの王都を奪還した立役者として、田中に大々的にプレゼントされたもの。

初めて見た時、田中はファンタジー離れたそのシルエットに感動し、とんでも無いモノを貰ったと喜んだ。普段は凶々しい癖に本当に良いのかと何度も確認した程だ。

だが、セーラから言われたのは「そんなモンに乗る奴が居ない」の一言。

この世界のバイクはあくまで『娯楽』なのだ、いっそハンングライダーのソレに近い。

なにせエルフが一人移動するなら魔法を使った方が早くて安全だ。勿論、エルフにだって魔法を使えぬ者は少なくないが、魔法が使えねばバイクの魔力に呼び寄せられる魔獣に対処不能である。

なにより運搬能力が無い。荷物を運ぶなら魔導車で良いとなってしまう。

なるほど確かに、バイクと言うのは地球でも趣味性が高い乗り物だった。でも、だからこそ欲しがる奴は少なくないのでは？

田中がそう水を向けると、これだけ国が傾いているのに、趣味もクソも無いと言われてしまう。

なるほどと納得した田中だが、彼にとってはこれ以上無い実用品だった。

なにせ、田中は体が大きい。

馬に乗ったら馬の方が参ってしまう。田中の体重に加えて野営道具一式を背負ったらマトモに走らない。

仕方無いので馬に荷物を持たせて田中は歩くのだが、途中から田中が馬を引っ張る始末。

田中はこの世界の馬が地球より遅いのかと訝しんでいる程である。

だが、実の所、地球の馬と大差は無い。

田中がイメージする馬は競走馬であり、時速60キロ以上の速度が出るが、普通の馬

であれば40キロ程度が限界。

どちらも荷物も無い短距離での話で、長距離はと言うと馬の旅でも一日に50キロも走れば立派なもの。

そんな中、田中は荷物を担いだ状態でも一日に100キロは優に走破してしまう。

馬鹿な！　と思うだろうが、こと超長距離走となると人間は下手をすれば馬より早い。

例えば江戸時代の飛脚は一日に130キロ超を走破したと言う。

一方で普通の馬は一日に100キロなんて走ってはくれないのだ。

そんな田中にとって、馬なんざ要らないとなるのは当然。傭兵として護衛任務などもあったので乗馬はこなせるが、高い金を出して買う物では無かった。

ユマ姫との旅だって、最初の内こそ馬に乗ったりもしたが、ユマ姫が風魔法での高速移動が可能と知るなり、とっとと売り払ってしまったりもした。

だが、そうは言っても疲れるには違いない。

敵を追い詰めたは良いが、息も絶え絶えでは返り討ちに遭うのがオチ。ピラークとか言うダチヨウみたいのでも借りてみようかと田中は悩んでいた。

と、ソコにバイクだ。田中が色めき立つのも当然。

いや、ゴチャゴチャとした理由抜きに、田中はこのバイクが気に入ってしまった。

マットブラックのカーボンフレームに前輪が二輪で後輪が一輪の三輪バイクは未来的で途轍もなく格好良かった。

しかも、魔力が濃いピルタ山脈を転がす分には燃費も非常に良い。

——ブモオオオオオオ！

しかし、ご機嫌なドライブで快走する前方。向かってくるのは牙猪ギルゴール！

そう、コレこそがバイク最大の欠点。

魔石で駆動するが故、噴出する魔力で魔獣を呼び寄せてしまうのだ。

並の兵士では束になっても叶わぬ相手、エルフの戦士でも安全な樹上から射る事が討伐の肝となる難敵だが……

田中はバイクの速度を一切緩めない。

そのまま、すらりと刀を抜く。

陽光が冴え冴えとした直刃すくはに反射し、ギラリと冷たい光を放っていた。

——ブキョオオオオ！！

その光をマトモに見てしまった牙猪ギルゴールが眩しさに怯んだ瞬間、田中はアクセルを全開に。

——ズシヤアアア

すれ違い様に振り抜いた刀。振り返るまでも無い手応えだった。二つに開かれた

ギルゴール
牙猪の死体を置き去りに、変わらずバイクは疾走する。

「ご機嫌だぜー！」

田中は悦に入っていた。もう追跡がどうでも良くなる程にドライブが楽しくて仕方が無い。

だが、楽しんでばかりも居られない、いくつかの谷を越えた先。いよいよ王国領に近づいた時、銀の鎧がきらめく大集団を目撃する。

「なんだあ？　ありや」

取り出したのは懐のオペラグラス。これもまたエルフからの献上品。田中の圧倒的な視力と合わせれば、相手から悟られぬ距離からでも一行の正体は知れた。

「王国軍、奴らも帝国の動きに気付いたか」

鎧の意匠で大体の所属が解る程度には、田中もこの世界に馴染んでいる。

かといって、やあやあ我こそは田中なりと乗り込んでいくのは気が引けた。

ユマ姫からの手紙で王国が事実上の同盟関係である事は認識している。

そして田中自身もユマ姫を救った手柄などで、大変な有名人だとも聞いている。

それでも写真など無いこの世界、バイクに跨がる異様な風体の自分が乗り込んでも歓迎されない事ぐらい、田中にだって予想がついた。

「さて、どうするか……」

微妙な味方は下手な敵よりも始末に悪い。バイクで搜索するのに彼らは邪魔であつた。

……
いつそ魔獣に襲われてくれれば、華麗に助ける事で味方だとアピール出来るのだが

そんなテンプレ展開にうつすらと期待して、こつそりと様子を窺う事にした。

一見馬鹿みたいなアイデアに思うだろうが、なにせココは魔獣がはびこるピルタ山脈。田中の狙いはそこまで分が悪い賭けでも無いはずだった。

登場するなら上からだよな……と、切り立った崖をバイクのフルスロットルで大胆に駆け上がると、そのまま崖上を走らせ崖下の様子を探る。そんな時だった。

——何だ？ 斥候？ しかもこの距離で気付かれたか。

田中が拾った気配は二人の間。一人は微動だにせず、一人はコチラの存在に反応するや即座に隠れる動きを見せる。

考えて見れば当然のこと。崖下を行軍する以上、崖上からの奇襲は最も警戒するべきで、斥候ぐらい出しているのだろうと田中は理解した。

だったら幸い。その斥候に面通しを願えば良いと切り替える。

ピンチに頭上から颯爽と登場するプランが崩れたのは残念だが、一對二なら穩便に（力尽くで）話を聞かせる位は訳が無い。

と、気配のする方向に進むと、森がポツカリと空いた中央。田中の見たモノは果たして地面に転がる生首だった。

「驚いたぜ、ここらじや人間が生えてるのか？」

「お前は？ タナカ！」

答えたのは生首、いやよく見れば地面に埋まった人間だった。

「オイオイ生きてるのかよ？ ひよつとして岩盤浴つて奴か？ ダイナミックだな」

「ふざけた事を！ クソツ！ アレはお前の差し金か！ 解つた話す。だからココから出してくれ」

「何の話だ？」

田中には意味が解らない。気配を辿れば、見つけたのが地面に埋まった人間なのだから仕方が無いだろう。

「よく見れば、お前、見た顔だな、アイツらの仲間か？」

「よくもヌケヌケと！」

田中は顔を覚えない。だが、命がけで追い回したノエルと共にあつた男の顔とあれば、流石に記憶に残っていた。

だとすれば、この岩盤浴にいそしむ男は帝国軍情報部第一特務部隊の面子と言う事になる。

それなりにヤル連中だ。少なくとも田中から逃げ切る程度には。それを捕まえると言うのは相当な手練れ。

そう、この男の趣味がダイナミック岩盤浴でないならば、生き埋めにされ尋問中だったと考えるのが妥当だろう。では、誰が捕まえたのか？

「出てこいよ、居るんだろ？」

田中が森に向かって叫ぶ。見つめるは一点。樹上に忍ぶ一つの気配。

「アラ？ 見つかつちやっただわ」

現れたのは豪奢な金髪の美しい女性。

シャルティア、いやシャルリアちゃんであった。

今の彼女は斥候として目立たない紺色のボディスーツを着ているのだが、体に張り付くデザインは女性らしいメリハリの利いた肉体を強調していた。

男なら生唾を飲み込む魅惑のスタイルであるが、田中は違うところが気になった。

「アンタどうした？ 随分と顔色が悪いじゃないか？」

「……そうかしら？」

そう、シャルリアちゃんの顔色は蒼白。それには幾つかの理由がある。

マズは魔力に敏感なシャルリアちゃんが魔力溜まりのピルタ山脈で魔力酔いを起こし

ていた事。

二つ目に、息を潜め、心音すら制御可能な自分の位置をアツサリと見破られた事。

三つ目、そして何より、一目で田中の強さに気が付いたからだだった。

——とても勝負にならないわ！

覚えが無い程の冷たい汗がシャルティアちゃんの背筋を伝う。

修羅の中でしか生きられない彼女であつても、こうも打つ手が無い状況はかつて一度も無かつた。

……シャルティアは決して無敵の戦闘力を誇る暗殺者では無い。

真つ正面からの戦いでは騎士一人と切り結ぶのがやつとである。

そうは言つてもこの世界の騎士はエリート中のエリートであり、朝から晩まで鍛錬を重ねたパンパンの筋肉と、剣術の腕を誇っている。

そんな相手と持ち前のセンスと動体視力だけで同等に立ち回れるシャルティアの技量は驚異的と言える。

だが、そんな騎士の中でも選りすぐりのセンスや視力、体格などを持つ近衛兵達と比べてしまうと、シャルティアと言えども分が悪い勝負になる。

それでも、シャルティアが最強の暗殺者である事に議論の余地は無い。なぜなら彼女は負ける状況では決して勝負を挑まないからだ。

即ち、シャルティアは相手の実力を絶対に見誤らない。

そして、シャルティアはコレほどに強く、厄介な相手を終ぞ見た事が無かった。

——ダメだわ！ 逃げる事すら出来ない！

加えて言うなら、田中とは絶望的に相性が悪かった。

先程、真つ正面から斬り合えば近衛兵に負けると言ったが、煙幕を張つて視界を制限するだけで、シャルティアは近衛兵を圧倒できる。

それこそシャルティアが最強の暗殺者である二つ目の理由。

シャルティアは視力に頼らず、魔力と図抜けた聴力での気配察知で相手を正確に捕捉できる。その上で自分が動く時は衣擦れの音ひとつさせないのだからタチが悪い。

目を瞑つての斬り合いであれば誰にも負けないとシャルティアは自負していた。

だが、目の前の相手も自分同様、光や音以外の何かで、コチラの位置を正確に補足できるのだと、シャルティアは持ち前の洞察力で確信していた。

果たして、その確信は的中していた。

——随分と強烈な気配をもってるじゃねーの。

田中はシャルリアちゃんの気配に目を睜^{みは}る。

一般的に言う気配とは、呼吸や心音、衣擦れの僅かな音などから無意識に感じ取るモノであるが、田中が感じる『気配』はそんなあやふやなモノでは無い。

田中の魂が相手の魂と共鳴し、感じる『運命』の強度。

ユマ姫が引き継いだオルティナ姫の運命視に近い特異な能力である。

シャリアちゃんへの気配、いや運命は、狂乱に満ちた苛烈さを表す様に、尖りに尖った存在として田中には感じられた。

顔を覚えぬ田中にとっては、何よりの目印。煙幕を焚いたところで、見失う事はあり得ない。

「王国の人間だよな？ 悪いけど、ユマ姫のところ案内してくんねーか？」

「アラ？ 私じゃ無く姫様にご用かしら？」

答えながらもシャリアちゃんは首筋の組紐を緩め、胸元をはだけさせる。敵わない相手とみるや即座に色仕掛けを行う切り替えの早さは流石と言える。

しかし、その実、全く余裕は無い。

敵の狙いがユマ姫と聞いた以上、刺し違えてでも阻まなくてはならない。

覚悟を決めたシャリアちゃんに対し、田中は余裕があった。シャリアちゃんの危険さには気付いていたが、そもそも敵では無いからだ。

「まあな、ちよつとした昔なじみよ、その前にコイツなんだけどな？」

田中は剣先で地面に埋まった情報部員を指し示す。

「そうね、でも渡す訳には行かないわ」

「いや？ 要らねえけどよ？ 話ぐらいは聞かせてくれよ、コイツが俺が追ってる奴の

行方を知つてンだよ」

「追つている？」

そろそろシャリアちゃんにも事情が飲み込めてきた。潜んでいた帝国の斥候を締め上げている途中での乱入者だったため、当然に敵と決めつけていたがそうでは無い可能性に思い至る。

だが、埋められても腐らないのが帝国情報部。こう言う時に多少の機転は利いた。

「タナカさん！ お願ひします！ 助けて下さい！ 俺アイツにぶん殴られて、気が付いたらこのザマで！」

田中とシャリアちゃん。二人が知り合いでは無いと見るや、男は離間策に打つて出た。

「はあ？ 何で俺がお願いされなきゃなんねーんだよ？」

「……タナカ？」

しかし逆効果である。タナカと言う名前、シャリアちゃんにとつても知らない名では無い。百人からの帝国兵をたつた一人蹴散らした男は既に伝説だ。

——この男がタナカ？ たしかにこの実力なら百人とは言わず……

シャリアちゃんがそう思つてしまう程、田中は強大に映つた。

確かに今の田中は当時よりも遙かに強い。仕草の一つ一つに自信が漲つていた。刀

一本でこうまで変わる人間はそうは居まい。

「アナタがタナカなの？ ユマ姫を救った英雄の？」

「英雄のつもりはねーけどよ」

つまらなそうに田中は答える。死にかけたあの戦いは田中にとって誇れるモノでは無い。刀を手にして二回り上の実力を手に入れた今なら尚更。

可哀想なのは地面に埋まった情報部員。二人のやり取りに墓穴を掘った事を悟り、焦りながらも破れかぶれに足掻いて見せた。

「いや、解ったよ！ ノエル達の場所に案内する！ だからココから出してくれよ！」
惨めつたらしくお願いする。しかしコレも計算の内だった。

彼は帝国軍情報部第一特務部隊、十二人のウチの一人であり、主な任務は外の偵察。更には可能ならばタナカを発見した場合、遺跡の最奥までおびき出す事。

その為には裏切ったフリや、敢えて捕まって場所を吐く事までも許されていた。

なにせ仕掛けた罠が睡眠ガスと言うのが都合が良かった。案内すると言いながら一緒に罠に掛かろうとまるで問題が無い。彼らなりに作戦を詰めていたのだ。

まさか姫付きの侍女に昏倒させられ、魔道具で地中に埋められるとは思ってはいなかったが……

だからココで汚名返上と必死に足掻く。そんな男の必死の申し出を田中はアツサリ

と受け入れた。いよいよ迷子に飽き飽きしていたからだ。

「つーわけでコイツを掘り出して構わねえか？」

「いやよ」

「あ？」

「そんな奴、生かしておいても何にもならないわ。そう見えてソイツはプロよ」

シヤリアちゃんは情報部員の狙いを概ね見切っていた。

案内すると言つて罠に嵌める。見え透いた手である。大体は自死を覚悟の上での作戦になるが、その位の覚悟はありそうだと地に埋めた男を評価していた。

実際、睡眠ガスではなく毒ガスだったとしても男は作戦を実行する覚悟があったので、見立ては正しいと言える。

一方で、どんな罠でも蹴散らすつもりの中はもどかしい。

「いやいや、俺は早いところ仕事を終わらせてーのよ、ヤベエ予感がブンブンするぜ？」
「コイツを生かしておく方がよっぽど危険よ」

言いながら、シヤリアちゃんはそつと田中に寄り添うと、色つぼく身をくねらせ胸元を強調する。

しかし田中はソレを無視して土中に手を突っ込むと、ズルリと男を引き摺り出した。

「なっ！」

引き摺り出された男も言葉を失う。ついでにズボンも靴も失う。土の摩擦を考えれば当然で、下半身裸のままに打ち上げられた。

当然ながら、人間離れたままの凄まじい膂力無くして不可能な仕業である。

——危険だわ。あまりにも。

話を聞かない田中にシャリアちゃんは焦燥感を募らせる。

タナカの名前は有名過ぎて騙りの可能性も捨てきれない。加えて今の状況、制御不能な強者は危険に過ぎると判断した。

「もう！ 困るわ。止めて下さる？」

言いながら肩に手を掛ける。軽いボディタッチ。そう見せ掛けて袖から毒針を取り出していた。

その毒は死苔茸^{チリアム}。名の通った確殺毒だが、今や別の意味があつた。

——人間界ではユマ姫だけが解毒可能な毒。

今までより遙かに使い手がある毒として、シャリアちゃんは有効活用していた。

針先に僅かな量を塗る事で、じわじわと対象を弱らせ、言う事を聞かせる事が可能。

だが、今回は相手が悪かつた。

「刺さーらねーよ」

田中はシャリアちゃんの暴挙を見切っていた。ソレでいて振り向きもせず、刺される

に任せる。それでも特殊繊維で編まれた防刃インナーは毒針を通さない。

「ッ！」

シャリアちゃんにとってみれば、装備も能力も、全てが規格外の相手。同じ強敵であつてもユマ姫の様な同類では無く、ひたすらに自分の天敵なのだと思底ゾツとした。

「つたくヤンチャが過ぎるな」

田中は左手でグイツとシャリアちゃんの腕を引つ張り体を引き寄せる、ダンスの様に自然な仕草で、お互いの吐息が重なる距離。

だが伸ばされた田中の右手は腰では無く首筋を押さえる。

それだけで大きな右手にシャリアちゃんの細い首筋はスッポリと収まってしまふ。

これは田中にとっては軽い警告。

しかし、シャリアちゃんは相手の力量を正確に見抜く力がある。いや、あり過ぎた。

それ故に解ってしまう。

今、田中が少し力を込めるだけで、絞まるどころかアツサリと首の骨が砕かれると言ふ事実。それを当の田中以上に感じ取れてしまふ。

「ハッ、グッ」

常に死を意識しているシャルティアだが、こうも手の平で転がされるのは初めての経験。

不安がじわりと心に広がる。……いや、それは不安ではなく……

「なんだよ、そんなにビビるなら初めから仕掛けるなよ」

「グッ」

恐怖だった。既に顔色は白に近く、体は僅かに震えていた。

死ぬのは恐くないと思っていたが、何も出来ず、無様に死んで、守るべきモノを守れないのはこんなにも恐ろしいのかとシャルティアは愕然とした。

守りたいモノが出来る前には、決して感じた事が無い感情であった。

だが、そんな思いを全く斟酌しんしゃくしないのが田中なのである。

「おっかない女かと思っただけど、そうやって震えてると案外かわいいな」

言われた瞬間、シャルティアの口からギリツつと音が漏れた。

意識せず、歯を食いしばっていた。殺し屋として積み上げた矜持を踏みにじられた気がしたからだ。

恐怖が吹き飛び、蛇の様な目で睨ねめ上げるシャルティアの視線は、大の男でも震え上がる程の力を持っていた。

「わりの、怒らせたか？ でも怒った所も可愛いと思うぜ？」

「……………」

シャルティアちゃんの顔が白から一転、朱を過ぎ、どす黒く染まる。

視界が赤く染まるほどの怒りがあつた。

そして田中には断じて悪気は無い。

田中は、魂の感受性が強い。だからこそ、他人の強い感情が刺さりやすい。特にシャルティアの様な尖つた運命を持つ存在であれば尚更。

只でさえヒリつく様な刺激を求めて、自ら死地に飛び込むような男なのだ。殺意を胎んだ感情の爆発は好ましいほど。

一方で、常に周囲の激情に晒された結果、細かい心の機微は無視する傾向にあつた。

即ち、そう言う意味でもシャルティアちゃんの天敵なのだ。表面を取り繕つたお為ごかしや化かし合いが通用しない。

そんなシャルティアちゃんは強過ぎる怒りに、却つて思考が研ぎ澄まされていくのを感じていた。

そしてただ、怒りのままに感情と要求だけをヒステリックにタナカに叩きつけることにする。

それは通常、殺し屋として絶対に許されない禁忌であるが。ソレだけが唯一有効なのだと直感で理解した。

早い話、ブチ切れた。

「黙れ」

「そう怒るなよ。ちょっと借りるだけ、すぐ返すからよ」

田中は尚、空気を読まず、へたり込む情報部の男の首根っこを持ち上げる。

可哀想に男はシャリアちゃんの剥き出しの殺意と怒気に当てられ、既に意識を失っていた。

シャリアちゃんは取り合わず続ける。

「お前が、ソイツを連れていくと言うなら、私には止められない」

「ンだな」

田中は頷く。この娘には負けないと、絶対の自信があつた。

「だが、お前が勝手をするなら私は死ぬ！」

「え？」

シャリアちゃんはナイフを自らの胸に押し当てた。

呆気にとられたのは田中、咄嗟にシャリアちゃんを取り押さえようと手を伸ばすが

……

「それ以上動いても死ぬ。触るなカス下郎」

「おい、何なんだよ急に」

田中は狼狽える。強烈な怒りと指向性の無い全周囲の殺意だけがシャリアちゃんから溢れていた。

「急では無い。元から私の仕事だ。いい加減な気持ちで首を突っ込むな」
「……あ、ああ、そうだな」

田中が折れた。

珍しい事であり、親から言われた『面白半分で首を突っ込むな』と言う言葉を思い出したからでもあった。

確かにこの世界に来てからは余計に酷い。

田中としては面白半分どころか全部と言うか、何時だつて命を賭けて死ぬ覚悟もあるんだから、好きにやると言うスタンスで生きてきた。

命が軽いからこそ、何事も雑なのは田中としても否定出来ない部分であった。

両手を挙げて降参する田中を一瞥して、シャリアちゃんは捕虜へと向き合う。

「黙って見てろ！」

「は……」

素直に頷く田中。

そうして、観客一人の人間解体ショーが始まった。

雑な男

一人の作業員が肉へと変わった。

ソレを成したのは一人の美しい女性で、側に佇む黒衣の剣士はその作業を楽しげに眺めるだけ。

解体された男が埋まっていた穴は、今や男の血と内臓がドツサリと溜まっている。

その体は肉屋に並べても良いほどに解体されていた。

「こうしてみると、案外旨そうだな。肝臓あたり、わさび醤油があればワンチャン」

「塩でも食える」

「いや、止めておく。食い物の禁忌ってのは理由があるモンだぜ？」

「……………」

イラつく田中の言葉を聞き流し、シヤリアちゃんは脳味噌をナイフで掬って……………食べた。

——苛立ちで味がわからないわ。

一番好きな部位だったが、茹だる程の怒りで味覚は鈍っていた。

「なあなあ？ それって旨いの？ あ、いや食いたい訳じゃ無くてな。純粹に興味がさ」

シャリアちゃんの口からギリツつと歯ぎしりが漏れる。全ては規格外なこの男の所為だった。

半ば脅すつもりで目の前で人間をバラし、禁忌と恐れられる食人行為を披露しても、ヘラヘラとした態度が一向に崩れない。

苛立ち混じりに脳にナイフを突き立て、掬い、突きつける。

「食え！ 絞めた直後じゃないと食えない」

「あ、いやー流石にな、恐いって言うか」

急にモジモジとしてみせる。

——コイツ！ 苛立たせる天才なのね……

苛立ちで言葉がカタコトになるなんて経験をシャリアちゃんは初めて味わっていた。相手のペースに乗らない様にと、ゆっくりと胸に手を当てて深呼吸を繰り返す。

しかし、田中はソレを無視して言葉を掛けた。

「なあ？ どうする？ 敵さん、俺を待ち構えて罠を張ってるらしいが？」

「解ってる！」

思わず声を荒らげる。

敵を締め上げ解体した成果にシャリアちゃんは焦っていた。

ユマ姫が意気揚々と潜った遺跡は既に敵の手の内。それだけでなく魔力を奪う

霧の悪魔の配備もあると言う。

何より、このクソ男を嵌める為の罠が準備万端と来ていた。

何というクソ迷惑な男！ 苛立ちばかりがこんこんとこみ上げる。

「悪いニユースばかりじゃねえじゃん。培養槽つてのでノエルの腕が治った。つまりユマ姫の腕だつて治るつて事だ」

「それも解つている！」

その為にはるばる遺跡まで来たのだ。本来朗報のハズであるが、それでもこの状況は手放しに喜べない。

目当てのモノを目と鼻の先にして、張り巡らされた敵の罠。

どんな軍師だつて欲に目が眩み判断を間違う配置。ましてやユマ姫は抑えがきく性格では無い。

シヤリアちゃんは気が狂いそうだった。

「ま、俺が行けばなんとかなるだろ」

田中が気楽に言う。ソレを恨めしそうに睨め上げるシヤリアちゃん。

この大言が全くのハツタリでも無いのがこの男の厄介な所だった。

シヤリアちゃんの見立てでは、タナカ一人で帝国兵の十や二十は軽く屠れる。それだけ図抜けた力を肌で感じていた。

「私も行くわ」

それでも、この男を野放しに出来ないと思う。

「良いけどよ……」

情報部員が使っていた遺跡へのショートカットまでには、少しだけ距離があった。

田中としてはバイクでひとつ走りの距離なのだが、シャリアちゃんはどうか？

「乗れよ」

田中の選択は彼女を背後に乗せる事だった。

殺人鬼であり、食人鬼でもあるところを見せつけて尚、余裕綽々でそんな事を言う。

途轍もない豪胆さ、いや、舐められているのだとシャリアちゃんは歯噛みした。

しかし、敵わないのは事実。そして乗れと言うからには謎の機械は速いに違いない。

「解ったわ」

シャリアちゃんにとっては見るのも初めての機械。なにしろ魔力視で強大な魔力の

カタマリである事が解ってしまう。おっかなびつくり跨がろうとするが……

「焦れっつえ」

「いやっ！」

田中は強引にシャリアちゃんを持ち上げ、後ろに乗せる。

田中はシャリアちゃんのプライドを傷つける行動ばかりを自然に選択していた。

それでも怒りに顔を歪めたシャリアちゃんがか後部座席に収まる。

「しっかりと掴まってるよ」

「ハハハ」

意趣返しとばかり、痛いぐらいに強く抱きしめたつもりであったが、田中は全く意に介さなかった。

「そうだ、行くぞー！」

バイクは一気に速度を上げ、驚くべき勢いで景色が流れていく。

乗ってしまえば馬よりも視線は低いぐらい。馬であればシャリアちゃんも淑女の嗜みとして殿方の後ろに乗るぐらいは経験が有った。

——ああ、でもカデイナー王子の後ろだったわね。

しかし、あの生臭王子とは肉体のモノが違う。いや、今まで見てきたどんな男とも。

——なんてカラダなの！ ドコまでもしなやかな筋肉。バランスも気味が悪いほどに完璧だわ。

しがみついて初めて解る事もある。その均整の取れた肉は芸術品のようであった。内側から弾けそうな程のパワーを感じる。

——ふざけている癖に、なんて男なの！

シャリアちゃんは初めて男の肉体を羨んだ。

自分の体こそ、強さと同時に女性としての美しさまで兼ね備える最高のモノ。そう自負してきたが、その自信が揺らぐ。

最近でも、儂さや可愛らしさと言った、自分に無い類の美しさを秘めたユマ姫にやられたばかりなのだ。

シヤリアちゃんは悩んだ末、悔し紛れの憎まれ口しか叩けなかった。

「いいの？ 私を後ろに乗せた男は、さつきよりもバラバラになったのだけど？」

「ヒヤッ！ 刺激的じゃねーの！ どうせ死ぬならいつそ可愛い子に美味しく食べて欲しいね、俺は」

「チッ」

シヤリアちゃんの口から派手な舌打ちが漏れた。

誰がお前なんか食うものかと言う思いだった。

「つと、着いたぜ」

想像以上に速く、大穴まではあつという間だった。

「ココが？」

「そうみたいだな」

巨大生物が這い出たみたいな穴。情報部員も詳しくは知らなかったが、ココから潜るのが一番早いらしい。

「こういう所を駆け下りるのは得意なのですけど」

シヤリアちゃんは歯噛みする。殺し屋家業で鍛えた身軽さを見せる場面だが、穴の底には恐ろしい程の魔力が漂っているのが見える。

飛び込めばあつという間に魔力酔いを起こすに違いないのだ。

「俺は行くぜ？」

「きつと魔力でマトモに動けませんわ」

「大丈夫だ、俺は並のエルフより魔力に強い」

「どういう体よ」

信じ難いがありそうに思えてしまう。

「それに、俺にはコレがあるからな」

田中が取り出したのは金属のワイヤー束。

「それは？」

「自在金腕。ルー・デルオン まあ見てな」

「え？」

田中はワイヤーを右手に嵌めるや、一気に大穴に身を投じる。それは底まで一直線の落下死コース。

しかしシユルンと崖際の木にワイヤーが巻き付いて、巨漢である田中の体重を支え

た。まるで意思を持ったかのようにであった。

「なんなの？」

「コイツも秘密兵器さ、どうやらお前は魔力に敏感過ぎるみたいだな」

田中は今までのシャリアちゃんの様子で彼女の特性を見切っていた。

「大人しくしてな、最前線に乗り込む女なんてアイツだけでいい」

そう言い残して田中は穴の底へと消えていく。

……アイツとはユマ姫の事だろう。シャリアちゃんはそう思った。

取り残された。それが猛烈に悔しく、悲しかった。しかし突っ込んでも足手まといになる事が、どうしたって解ってしまう。

戦力差の見極めが完璧であるが故、無謀な行動が出来なかった。

「なんで……」

穴の縁で悔しくて涙を拭う。それこそ少女の様に。

それ自体が本当に屈辱であった。

因みに、田中が言うアイツと言うのはお騒がせキャラである、セーラ女史なのだが……そんな事をシャリアちゃんが知る由も無い。



俺は自在金腕ルー・デルオンを使いながら大穴を快調に飛び降りた。

途中で、霧ギユルドレスの悪魔が発動し、自在金腕ルー・デルオンが力を失ってピンチだったのは内緒な。そんなこんなで微妙に時間を食っちゃった。

だが、いよいよ最下層が迫った時。

俺は奇妙な気配を察知する。

「性格が悪い奴だな。間違い無い」

それは捻れて歪んだ気配を纏っていた。そしてそんな気配と裏腹に強烈で真つ直ぐな悲しみを感じる。

まさかと思つて近づいたがアタリだった。

「勘弁してくれよ、神様お願いだ、コイツを生き返らせてくれー」

木村だった、滅茶苦茶泣いている。しかもなんか千切れた女の下半身を抱いている。

さしもの俺もドン引きである。

「いやあー、その状態で治せつてのは神も困るだろ」

抱いているのはユマ姫の下半身か、いやーおっかない趣味だな木村の奴。

しばらく見えない間に、性癖変わったか？

「田中ー」

「よっ！ どうやらギリギリで間に合ったみたいだな」

「間に合ってねえ！ 間に合ってねえだろ全く！ ドコ見て言ってるんだ！」

木村はアイツの下半身をグイグイと突きつけてくる、俺にそんな趣味は無いので止めちくり！

「まあまあ、待てよ。ギリギリアウトかギリギリセーフかで分けるならセーフ寄りのアウトだろ？」

「アウトど真ん中だ！ クソツッ！」

だから下半身突きつけるの止めろ！ 灯油臭い！ え？ 紐パン？ それもまさかお前の趣味？ 恐いわぁ。

久しぶりに「結局アウトじゃネーか」ってツツコミを期待したのにクスン……

で、俺は下半身フエチじゃ無いので目当てのモノを拾う。かなり薄まったがギリギリアウト寄りのセーフ。

「お前が下半身なら、俺にはコイツをくれよ」

「それは？」

木村が呆然と見つめる。俺の手の中にはユマ姫の魔石？ と言うのか魔力溜まりがあった。

エンディアン王国では多くのエルフの気配を見たが、驚いた事に人間とは気配を感じる場所が違った。頭ではなく、胸の辺り。

実際に今もココからアイツの気配がする、……スツゲエ微細だがな。

逆に言えば微細でも運命が尽きていない。アイツはまだ生きられる可能性があるってこった。

「エルフの本体みたいなモンよ、知ってるか？ この地下には回復カプセルがあるんだぜ？ どんな怪我でも治るってハナシよ」

「そう言えば……ユマ姫も怪我を治す手段がこの地にあるって……」

「こそ、そこにコイツを入れればイケる……かも？」

「カモかよ、でもソレに賭けるしかねえか」

「そう言うこった、あ、一応、体のパーツも集めておこうぜ、役に立つのかも」

「解った」

そうして二人で肉片をかき集める訳だが。

「エッグイなおイ！ アイツどんだけ恨みを買ったんだよ」

「ヒデエ事しやがる」

脳味噌が飛び散って壁のシミになっている。どうしたモンかと思ったが仕方が無いのでマントに包んで持っていく。

ううエルフの王国製のお気に入りだったのによ。

……さっきの女、脳みそ旨そうに食ってたな、コレ、ひよつとして食べるのか？ な

んかキモい男の脳と違って艶々していてメチャクチャ美味しそうって言うか……
「オイ、何してるんだよ」

「あ、いやスマン」

木村に声を掛けられ正気に戻った。マジで人としてヤベエモンを失う所だった。

そうして俺は地下三十階、最下層へと降りる。

美味しく脳みそ食べられちまった男によると、ここが遺跡の最下層。そしてカプセルもあるハズだ。

「コツチか？ いやコツチ！」

「どつちだよー！」

部屋の番号とかは聞いたけどな、中々見つからないモンだ。

頼りになるのは手の平のアイツの気配。

それが薄まる場合は目当てのモノから遠ざかってるって事。

……コレが消えたらゲームオーバーってのは解るがこの気配って奴は神が言う所の魂なんだろ？

なんとなく俺にはソレが解る。

そして思っていた以上に制限時間がギリギリだと言う事も解ってきた！ 今にも消

えそうじゃねえか！ クソヤベエ！

エルフがこんなカタマリになっても再生可能だとすれば、なぜ時間制限なんてものが存在するのか？

頭が吹っ飛んでるのに、これ以上何がマズいのが解らない。

そういうえば今まで、死体から魂の気配を感じる事は無かった。それどころか、生きている人間でも詰んでいれば気配を感じなかった。

では魂の気配があるコイツとの差はなんなのか？ 今、俺達が助けようとしているからこそ、まだ詰んでいないのが一つの原因だろう。

だったら死んだエルフを俺が復活させようと考えた段階でソイツの魂が復活するか？

そうはならないはずだ。

俺はこう見えて、パソコン音痴じゃ無いからな、魂はIPアドレスに近いつて神サマの話は一応理解出来た。

パソコンが壊れていなくても。ルーターの電源を切るだけでIPアドレスなんざ変わったりする。

つまり、死亡判定が出たらアツサリと魂は返還されるんじゃないか？

肉体が復活したらその時点でまた魂を付け直せば良いだけの話。

記憶が魂と紐付かない俺達は、魂がコッソリ変わっても気が付かないとも言われたっ

け。

実際に、そう言うケースもソコソコあるんじゃないか？　それで誰も気が付かず生活している。

だが、コイツだけは違う。この魂あつての『高橋敬一』なんだ。そうじゃないと生まれ変わりが説明つかねえ。

だとしたら魂から死亡判定が出て、魂が返還された時点が本当の詰み。今のコイツは、客観的に見たらどう考えても死んでいる。

魂が死亡判定を遅らせているだけだ、まだ生きてる細胞もあるって程度理由でな。

これロスタイムのなアレじゃねーのか？　そう長くは保たないぞ？

「マジイ、焦るぞー！」

「ンだよ!?　オイ！」

木村が下半身を抱えて走る。ホント好きだな、ソレ。

「時間がネーんだ！　急げ！」

「意味が解らねえ！」

そうして、ようやく見つけた一室。中央のカプセルにポポイと材料をぶつ込んだ。

今日の献立

ユマ姫の水煮　くネバネバ粘液のカプセル包みく

・脳みその破片少々

・黒焦げの下半身

・下顎と舌

・胸元に有ったであろう魔石

・紐パン

「やっぱダメだろ！　コレ！」

木村が叫ぶのも解る。明らかにパーツ不足。ぶかぶかと培養液に浮かぶこれらで、人間が再生可能とは信じ難い。

「やるしかねーんだよ。足りないパーツは培養して増やすらしい。現に目の前で腕が生えたらしいぜ」

「マジかよ」

「で、操作は任せた！」

俺は操作パネルの前へと木村をく招待。

「は？　え？　解る訳ネーだろ！」

「古代とは言え言語もそう変わってない、操作もなんだかスマホみたいじゃ無い？　得意だろ？　雰囲気イケる！」

「嘘だろ？」

「俺だつて詳しい操作方法まで聞いてないし、どうせ知らなかつたと思うぜ？ 敵の大將なら知つてるだろうが、いまさら絶対に間に合わねえ」

「クソッ！」

気配はマジのガチで消える寸前だ。木村はコンソールをトントンとタツチしていく。

「助かる！ 対話式インターフェイスだ、所々意味が解らない単語が有るが、想像で補える」

「頼もしいぜ！ 木村先生！」

「モード選択とか解らねえぞ！ 凶化つてのは字面がヤベエが？ 押しちやイケない奴

？」

「やっっちゃえ！ やっっちゃえ！」

「雑過ぎない？」

「いや、マジだ。凶化したグリフォンと戦つたが、頭もニョッキリ生えてきた。マジやばい生命力」

「良いのか？ ソレ？」

「ダメで元々だろ？」

「クソッ！」

そうして機械が起動する。

ゆつくりと、そして確実にユマ姫が精製されていく。確かに細胞は増えている気がしないでもない？

なんかカプセルの中、服の欠片が漂っているのが、今さらに気になるんだけど？

「コレ、牛革の服から牛と混じって復活したりはしないよね？」

なんならハエと混じっても不思議じゃ無いヤツ！

「いや、ちゃんと人間の細胞を読み取っていた、再生対象を選択してくれて項目で、ユマ姫の年齢と体格の少女を選んだから大丈夫だろ」

「おいしい、有能か？」

「無能だよ！ 完全に死んでるだろコレ！ さっきからヤバそうな警告がバンバン出てる」

……まあ、脳みそ飛び散ってたもんな。普通に考えたら蘇らないよな。

「まあまあ、気配から死亡判定が出てなければセーフだから」

「俺にはその基準が全然ワカラネーんだけど？」

ソレは知りませーん。

「んな事より俺はアレが気になるんだが？」

木村が指差すのは培養槽の中、漂うのは人間のパーツや服だけではない。

青く輝く宝石があった。

セレナ姫の秘宝で有る。

ユマ姫の水煮　くネバネバ粘液のカプセル包みく

・隠し味　セレナ姫の秘宝　一ヶ

「あ！　ヤバエ混じっちゃった！」

「ふざけてるのかテメエ！」

血走った目の木村に首を絞められた。キツいねコレ。

「間違いつて事にしてくれよ。コレはアイツの妹の形見なんだ」

「感傷で遺品を投げ込む場面じゃねえだろ！」

「アレはな、さつき言った凶化グリフォンの体内にめり込んでいた」

「……それで？」

「アレは魔法を吸収する特殊な魔石だ。凶化した魔獣が、あそこまで症状が進行して、肉体を保っていたのは異例なんだと、その原因があのかの秘宝だとしたら？」

「根拠は、あるのか？」

「ねえよ、半分以上は感傷だ。アイツの妹が守ってくれるってな」

「チツ」

木村が舌打ちと共に俺から手を離す。

俺、なんか最近舌打ちされてばかり、傷ついちゃうね。

「もうやれる事は無いぜ」

木村曰く、後は待つだけ、そう言う事らしい。

「じゃあ寝るか？」

俺はゴロンと横になる。

待つなら寝るが一番、俺としては当然の発想だったが。

「正気か？」

「だったら、剣を片手に敵の大将の所に乗り込むか？ 扉を開けて？」

「ダメか……」

「ダメだな」

施設の中は霧が舞っていた。

この部屋の中でだけ、魔石をブン撒いてなんとか機械が作動するまで霧を中和したのだ。

今扉を開けて、万が一機械が停止したらどうなるか？ 想像したいモンじゃない。

「じゃ、お休み」

「お前さ、何事も雑過ぎない？」

木村になじられながらも、結局俺は眠ってしまった。

一方で木村はまんじりともせず過ごしたっぽい、健気だね。
で、寝なかつたツケは巡るモンだ。

逆に俺はタップリ寝た分だけ催眠ガスの効果が薄かつた訳だが。まあそんなのは結局誤差の範囲かね？

生まれ変わった私（物理）

「ママ？ どこに居るの？ パパ？ ドコなの？」

ドコからか声がする。

……自分の頭の中からだ。

そうだ、わたしは……ポーンリア。この培養槽の中で生まれた凶化人間。カプセルの中、手を伸ばす。するとパパとママの幻影が消える。

何時もの夢。何度も見た悪夢。

だけど、今日は何かが違った。

「うあ、うえ、う、ヒック、オギャアアアアアア」

私は赤ん坊みたいな声で泣いていた。まるで生まれ変わった様な……

そして、いつもは掻き消える幻影が、今日に限って消えなかった。

それはパパでもママでも無い姿。でも、どこか懐かしい。

誰だろう？

思い出せない。

いや、思い出した事がある。

パパとママの手前に居る男。この後ろ姿。

殺したい。殺さなきゃ。

殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す。殺す、殺す、殺す、殺す。

殺意だけで頭が染まる、そうだ、私は凶化して、殺意が止められなくなつて。

そして自殺したんだ、私は生きていてはいけない存在。

私は……私は……

立つて、歩いて、本能のままに男の腰からサーベルを奪う。

「なっ!?!」

振り返った男の胸に、そのまま突き刺した。

「死ねッ!」

ズブリと肉に刃がめり込む感触。染み出す様に血が漏れ出す。

……ああ、やってしまった。

また、殺意のままに殺してしまった。

殺したくなんて無かったのに。

——嘘だな。

誰? 私は殺したく無い。

——俺は、殺したい。

誰？ 私？ 私なの？ 私、私は？

「何故だ！ おまえは！ 何者だ！」

刺し貫いた男に問われて思い出す、私は、いや、俺は！

「俺の名前は『高橋敬一』、——どこにでもいる普通の中学生だ」

俺は手のサーベルをギユツと捻り込む。

「グツ、ゲエ」

殺意が！ 抑え！ られない！ って言うか！ 抑える必要も無い！

「お返しだ、神に挨拶してこい」

俺は銀髪の男の手から銃を奪い取る。コイツを！ ぶち込まなきや！ 気が済ま

ねえ！

「オイ！ やめろ！」

木村が止めるが知ったこっちゃやねえ！！

——パアアン

男の脳みそが飛び散った！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「いめんなきや〜」

「いめんなきや〜」

俺は木村に全裸土下座していた。

べちやりと粘液にまみれながら、地面に這いつくばった姿勢。木村のブーツだけが視界に映る。

一回り年の差があるわけで、今の俺は幼女寄りの少女な訳で。

こんな幼気な女の子に、全裸土下座を強要するとは！

木村もいつの間にか趣味が良くなったよな。客観的に見て、コレかなりエロいんじゃない？

「いや？ そんなの求めてないけど？ つーか、どうすんだよ！ 殺しちや何にも聞き出せないだろー！」

「仰せの通りで」

殺意のあまり撃ってしまった。ゼロ歳児だからね、仕方無いね。

「ヤベエぞ！ コイツ鍵持てない！」

一方でノエルのウエストポーチを足で漁っていた田中から泣きが入る。

「マジで？」

これには俺も焦る、木村も焦る。

なにせ、田中と木村、二人はいまだに後ろ手に手錠を掛けられている。このままでは何も出来ない。

「魔法！ 魔法でどうにかならないか？」

田中が俺に結構ガチ目に泣きついてくる。この狼狽え様は珍しい。流石に予想外って感じだ？

でもね、俺にも予想外な事が一つ。

「使えないっぽい」

「え？」

「は？」

呆気にとられる二人だが、俺に責任は無いんだが？

「まだ脳が馴染んでないって言うか？ 魔力が集まらない」

「合成失敗かー」

悪魔合体みたいに言う木村は無視！

田中は心配してくれるか？

「チェンジで！」

「デリヘルじゃないから！」

そんなシステム無いからな。あつたらヤクザ呼んでるよ？

「真面目な話、一過性のモノか？」

「解らんね、そして今、メチャクチャに眠い」

「寝たら死ぬかもしれないぞ？」

「あ、それだけ微妙な状態？ そう言えば俺、どうなつてたの？」

俺は燃やされた後の記憶が曖昧だ。なんか飛びついて噛み付いた気はするが。

「頭吹っ飛んでた」

「千切れた下半身を木村が抱いてた」

オーケー、想像以上にキツイ状態だったみたいだ。

あと、木村は思った以上に性癖を拗らせてみたい、こりや全裸土下座程度じゃ満足しないはずだわ。これからは距離を置きたいね。

「とりあえず、鍵を探すにもストリーキングは勘弁したいんだけど」

今の俺は真っ裸。このまま外に出るのはサービスが過ぎる。って言うか普通に寒い。

良く考えると最悪の状況だなコレ。後ろ手に縛られた男二人と真っ裸の幼女。

完全にド変態の集会である。

「今死んだら、俺の性癖誤解されちゃうじゃん！」

ダメだ、脳みそが死んでる。自分でも何言ってるか解らねえ！

だが、田中には通じたみたいだ。したりと頷いた。

「でえじよぶた、培養槽で生き返れる！」

「もう死にたく無いんだよう」

「取り敢えず、そこにある俺のマントを羽織れよ」

「おう」

二人ともマントを着ていないと思ってたけど、既に脱いでいたのか。

アレ？ 田中のマントしか無いな。

で、大きな漆黒のマントを広げ、包まる。けど正直、俺の体には大きすぎる。

「何か、彼シャツみたいでアレだな」

自分で言つててキモいと思うが、思ったんだから仕方が無い。

人知れず、一人で興奮してるのもソレはソレで意識しまくりつて感じがしません？

「……裸の幼女にそんな事言われると、犯罪感スゲエな？」

田中、いきなりのマジレスであった。心底迷惑そうである。

いやいや、正直に言うてみ？ まんざらでも無いだろ？

可愛い女の子がお前のマントの匂いを嗅いでるんやぞ？

「コレがお前の匂い。なんだかドキドキするな」

言いながら上目遣いで田中を見つめる。コレでキウンとしない男が居ます？ ドコ

に？

見上げれば真剣な表情で真っ直ぐにコチラを見つめる田中と視線が重なる。

あ、アレ？ なんだかマジでドキドキしてきたぞ？ ヤバい！

顔が赤くなって、鼓動が引つ切り無しに脈打つ。なんだってんだ？

「そりや、ドキドキするだろうよ」

呆れた様に田中が見下ろす。

「？ それってどう言うの？」

「そのマントにお前の脳みそ包んで持つてきたから」

「お前の匂いじゃなくて、俺の匂いかよ！」

そりやドキドキしますわ。自分の脳髄液の匂い嗅いだ人居ますかー？ 濃厚な死の

香りがしますよー？

「乳繰りあつてないで鍵を探そうぜ！」

「そうだな、仕方がねえ」

木村は扉を開け、部屋の外を警戒していた。田中もノエルの死体から鍵を探すのを諦める。アレだけ探して無いのだ。いよいよ他の場所に保管してあるとみるべきだった。

「なあ？ コレなんだ？」

だが俺は落ちていたワイヤーがどうにも気になった。何せうねうねしててなんだか気持ち悪いのだ。

だがそれを見るや、お宝発見とばかりに田中が快哉を叫ぶじゃないか。

「ルーデルオン！ そうか！ コイツがあれば！」

るーでるおん？ 何だソレ？

しかし問い質す間もなく、外を見ていた木村が叫んだ。

「やべえぞ！ 誰か来た！」

最悪である。

「どうするよ？ オイ？」

「どうにもならねーよ！」

大慌てであるが、後ろ手に縛られた二人も、素っ裸で頭がボヤつとしている俺も何も出来ない。

「ボヤつとしてないで、ソレを俺に付けてくれ！」

だと言うのに無情にも田中に怒られた。ソレつてのはこのワイヤーか？

「ダメだ間に合わねえ、俺が時間を稼ぐ。木村に付けてやってくれ。きつと俺より上手く使う」

「え？ 俺？」

木村もビツクリである。

そうこうしている内に、一人の女性が扉を開けた。

「ノエル様、銃の回収が終わりまし……なにが!？」

女性は手に持っていた大量の銃をポトポトと取り落とした。

部屋を開けたら頭が吹っ飛んだ死体とご対面、ではそりや驚くだろう。しかも犯人達は堂々と居直つていと来たモンだ。

「久しぶりだな、ねーちゃん！」

「タナカ！ アナタが、ノエル様を!!」

田中が知り合いみたいな軽い調子で挨拶をするも、女性は容赦なく銃を突きつけた。

一瞬味方なのかと期待した俺が馬鹿だった。コイツは敵だろうが味方だろうが常にこんな風なのだ。

「いいやあ？ やったのは俺じゃ無いぜ？」

そして田中の奴がコツチを見る。

ヤメロ！ 見るんじゃ無い！ 違います！ 僕じゃありません！ ノエル君とは友達です、お互いに頭を吹っ飛ばし合う程の仲なんです！

と、女性と目が合った。よく見ればノエルと一緒にいた女で間違い無い。

「ツ！ バケモノ！」

酷い言い草だね。ま、死んだ人間が復活したら仕方無し。

「地獄に送り返してやる！」

凄い形相でコチラに銃口を向けてくる。実にあんまりなりアクションである。

アレだな、ホラー映画でやっと倒したと思つた怪物が脱出寸前に襲ってくる奴。アレ

の怪物側になった気分だよ。こちらら絶世の美少女だと言うのにな。

……何をノンビリしてるのかと言われそうだけどな、実際に銃口を突きつけられてみる。気軽に動けるモノじゃ無い。

横つ飛びに弾丸を躲せればカッコイイだろうが、失敗して打ち上げられた魚みたいに床に転がってみろ、ここぞとマヌケを打ち抜くに違いないのだ。

だから相手もスグには撃てなかった。睨み合ったのは一瞬、だがその間に田中は女性に向けて猛ダツシユを決めていた。

「オラッ！」

後ろ手に縛られているが故、前傾姿勢のタツクル。

「馬鹿め！」

だが読まれていた。突っ込もうとした田中の眼前に鋭いサーベルが突きつけられる。

銃からの持ち替えが素早い、それだけでもかなりの使い手だった。

「グッ！」

「遅い！」

急停止した田中、その顔を切りつける女性。

解ると思うが、前傾姿勢では急には止まらない。たたらを踏んだ所に追撃を掛けられれば回避は難しい。

「痛つてえー！」

顔面が切り裂かれ、田中の血が舞う。マズイ！ このままじゃマヌケ顔がハードボイルドに仕上がってしまう！

肌寒いとか言つてらんない。俺はこの隙に真つ裸で飛び出すと木村の元に向かった。

「ボヤつとしてんなー！」

「あ、いや俺は戦えないつてー！」

木村をドヤすがどうにも腰が引けている。戦闘は専門じゃないし後ろ手に縛られるとあれば、確かに死にたてホヤホヤの俺以上に戦力外に見える。

「コレを付けるんだよー！」

「なにしてんだー！」

だが、そんな木村を無視して背後に回り込むと、その指にルーデルオンとか言うワイヤーを嵌めていく。

田中の弁によるとコレを木村に付ける事が逆転の一手になるハズ！

付けられた木村の方はたまったモンじゃないみたいだが。

「なに？ 俺の指になにしてんの？」

「うわっ！ 何だコレ？ 気持ち悪い！」

指に嵌めるや否や、ワイヤーは触手の様にうねり俺の体に巻き付いた。俺はパニツ

ク。ソレを操作しているだろう木村もパニック。

端的に言つて地獄絵図だった。

裸の幼女に巻き付くワイヤー。

又とないシチュエーションであるが、観客は誰も居ない。

木村は後ろ向きであるし、田中は……

「ハッ！ やあ！」

「クソッ！ もたねえぞ！」

大ピンチであつた。後ろ手に縛られた姿勢、回避もままならない。

俺も色々と手足を拘束された経験が有るが、思つた以上に動けない。

特に後ろ手はヤバイ。足技で抵抗出来るじゃん！ と思うだろうが足で蹴り上げる時なんか、手でバランスを取つてたりするからね。縛られちゃマジで動けないし、無茶な動きをしたらすぐに転がるよ？

そんなワケで、結構な剣の達人っぽい動きをしている女性兵士の太刀筋をなんとか見切つてる田中は結構凄いなと思うんだ。その勢いで頑張つて欲しい。

「いや！ 無理だから！ 助けて！」

……駄目みたいですな。

躲しきれないサーベルが田中の足に刺さりまくっている。足から着実に削ろうつて

作戦だ。よく見れば田中はエルフの装備に身を固めている。並の装備じゃとつくに終わっていただろう。

「クソツッ！ 全然制御出来ねえ」

木村はいまだにワイヤーと格闘中。俺が行くしか無いかと覚悟を決めた瞬間、首筋にチリリと痛み！

——パアアン

銃声！ それも背後から！ 嫌な予感を感じて咄嗟に横つ飛びに転がって何とか回避！

一体誰が？ そんな所に誰も居ないハズなのだ。

——銃が浮いていた。銃だけが。

「何だコレ！」

「はあ？」

俺は驚く、木村も驚く。

「外したか……」

「ルーデルオン！ お前も使うのか」

一方で解っている二人はシリアスな空間を作っている。そこで田中は益々血まみれで、いよいよヤバイ。

よく見れば銃にはワイヤーが巻き付いて女性の手から伸びている。

「お前、フェノムの知り合いか？」

「我が隊の隊長だ、私が副長のトリネラ。帝国軍情報部第一特務部隊、今や隊は私一人だ
がな」

「へえ」

「お前等に！ 全員！ 殺された！」

言うや否や、鋭い突き込み。田中はソレを鎧の固い部分で受けると、再度のタツクル。

「甘い！」

「ぐえッ」

しかしトリネラが田中の顎を蹴り上げる。加速する直前、前傾になった所を蹴り上げられた田中は大きく仰け反るハメになる。

ベシヤリと血が舞った。相当なダメージが蓄積している。足なんてもうズタズタだ。更にトリネラが追撃で太ももにサーベルを突き刺し、足を削って行く。

「随分とタフだな！」

トリネラは焦燥混じりの声を出す。

胴は鎧で守られ足を狙うしか無いようだった、そのため致命傷なしに時間が稼げている。下手に近づくと田中の体格を生かしたタツクルを喰らう危険があるので、トリネラ

は安全策に徹している様に見えた。

つまり、だ、俺達は居ないモノとして舐められてるってワケ！ 銃にビビって動けないってな！

「ふぎげんなー！」

俺はダツシユして落ちてる銃に取りすがる。

コレはトリネラが部屋に入るや取り落とした銃だった。おそらく二十九階層で死んだ隊員達から回収した銃だろう。

必死に縋り付くとおあつらえ向きに、火薬と弾丸もセットで置いてある。

銃ならば生まれたての少女にだって火力が出せる！ 必死で火薬と弾丸を込めるが

……

「グビヤツ！」

俺は後頭部をぶん殴られた。ベチャリと倒れると同時に、美少女らしからぬ声が出る。なんだ？

——ルーデルオン！

振り返れば宙に浮かぶ銃床が俺の血で塗れていた。田中と戦いつつ、俺にはワイヤーの手で十分か！

現に俺は後頭部を殴られ、目が霞み足元もおぼつかない。手もプルプル震えて銃なん

て握れない。こうなれば頼みの綱は木村なのだが、いまだにワイヤーと格闘していた。「クソッ！ どうすれば！」

「木村！ よく見ろ！ ルーデルオンはああやって使うんだ！」

田中が叫ぶ。そうだ、トリネラが見本を見せてくれている。器用さ特化の木村先生なら何とかなる。

俺達の命運は木村先生の指に託された。

「でもよ！ 五本のワイヤーを指に嵌めて、ソレを擦よって一つに纏めて腕にして操作するって、難し過ぎ！」

……駄目みたいですね。

木村は涙目で指をまさぐるがルーデルオンの動きはしつちやかめつちやか。自分の体に巻き付いたりしてマトモに制御出来ていない。

ソレを一瞥したトリネラは薄く笑った。

「無駄だ！ ルー・デルオンは一朝一夕に操作出来るモノじゃ無い。戦闘に使いこなすには何年もの歳月が必要だ。ましてや両手に付けるだど？ そんな事が出来たのはフェノム隊長だけだ」

何とも自慢げに言い放つ。アレ？ それって俺が両手に付けたのがダメだった感じ？

音ゲーで初回からダブルプレイにチャレンジするぐらいに無理だった？

「木村ッ！ 何とかしろ！」

いよいよ進退窮まった田中が叫ぶ。体中が真っ赤に染まる重傷であった。

頼みの木村の混乱もピークだ。

「いや、だってよ！ 五本のワイヤーをどうして一回纏めるんだよ！ 意味が解らねえ

！」

涙目であった。どうせなら片手に集中して制御しろと伝えたいが、俺は力なく横たわるだけ。

そう、俺は先程から後頭部の痛みで意識を保つのがやっと。ぐったりと地面に横たわって絶望的な状況をトドみたいに横になって見ているしか出来ていなかった。

こんな、こんなトコで終わっちゃうのかよ！ 裸の少女と後ろ手に縛られた男が二人。

悲し過ぎるだろ！ こんなラスト！

「クソッ！ クソッ！ こうだ！」

とうとう木村は撚り上げたワイヤーをバラバラに分解してしまう。

そうすると、指に巻き付いた五本のワイヤーが、てんでバラバラ、イソギンチャクみたいに動くだけ。

もうルーデルオンが機能して居ない事は明らかであった。

「馬鹿が！」

「ハッ、どうだ？ お前も観念しろ」

田中が毒づく。トリネラは笑う。

そしてゆっくりと田中へと距離を詰める。大きく振りかぶったサーベルは、次の一刺しで田中を仕留める決意の表れだろう。

その圧にじりじりと後退する田中。その足元に描かれた血の跡を辿り、ゆっくりと詰めていくトリネラ。

「逃げるな！ 往生際が悪い！」

「クソッ」

ドンつと、田中の背が壁にぶつかる。絶体絶命の状況であった。

「ココがお前の終着だ！」

トリネラが叫び、サーベルを握る手に力を込める。

しかし、田中は笑う。また笑う。

「どうかな？ 俺じゃ無く、お前の終わりかも知れないぜ？」

「？ 何だと？」

その時、サーベルを構えたトリネラの顔に影が差した。

ハツとしたトリネラが周囲を見渡す。

その影の正体は？

——銃が浮かんでいた。

トリネラを取り囲むように、その数は、一つ、二つ、三つ？

……いや、十！

十挺の銃が宙に浮かび、トリネラへ銃口を合わせてピタリと狙う。

「なんだ!? 何なんだ! 何だコレはああ!」

トリネラは叫んだ、意味が解らない状況に。

そりゃ、そうだろう。間近で見えていた俺だつて解らない。

呆然とする一同に、あつけらかんと言いつ放つ男が一人。

「なんかさ、燃よらずに十本のワイヤーを個別に操作した方が簡単じゃ無い?」

木村だった。

拍子抜けた様にいとも簡単に十本のワイヤーを操つてみせる。

トリネラのリアクションを見るに……いや、見るまでも無く、ハチャメチャにキモい。

木村の両手の指、その全てに収まる十本のワイヤーの挙動を見るだけで、そんな事が可能なのはこの世に一人だと解る。

「撃つて良い?」

他人事みみたいに田中に尋ねる木村。

「良いんじゃない？」

面倒臭くなつたのか、同じく他人事みみたいに答える田中。

そして絶望的な顔で宙に浮かぶ銃を見上げるのがトリネラさんだ。

「嘘だ！ 馬鹿な！ こんなワケが！ ルー・デルオンは！ その銃は、我々のモノだ！」

あー、ソイツ手癖が悪くてパクるのが得意なんスよ。

恐慌に陥るトリネラに、木村は無慈悲にトリガーを引く。

「お返した、神に挨拶してこい」

俺のセリフもパクられて、十挺の銃が一斉に火を噴いた。

逆転する立場

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

俺は木村を土下座させていた。

……それで全裸！

土下座させている側が全裸！！

全裸土下座の新しい可能性が開かれた瞬間であつた。

「うりうり！」

俺は素足で木村の後頭部を踏みつける。

「ヤメロ！ やめて下さい！ 開かれちゃう！ 開いちゃイケない扉が開いちゃう！」

木村の性癖が耐えきれず悲鳴を上げる。

あ、その体勢で見上げようとするのは犯罪だぞ！

「乳繰り合っていないで助けて！」

田中の悲痛な声。血だらけの姿は正に死にかけてあつた。

俺はコツチにも笑顔でやり返す。

「でえじよぶた、培養槽で生き返れる！」

「お前と違うから無理！ 謝る！ 謝るから！ お助け！」

言われたら嫌な事を言っではいけません。田中も良い勉強になったな！

満足した俺は木村を踏むのを止め、勝手知ったる葉棚からお馴染みの小瓶を取り出した。

「ホラ、コレを使えよ」

「何だコレ？ 見た事無いんだが？」

そうだろう、そうだろう。俺も初めてだ。

——今生こんじょうではな！

「ポーシヨンだ！」

「ぼーしょん……」

ゲームのアイテムの名前を勝手に当てはめる。ポーネリアの記憶を辿れば正式名称はソルバルド。でもそんな名前じゃピンと来ないだろう？

ナノマシン混じりの粘液で、培養カプセルの中身と同質のモノ。壊れた細胞をつなぎ合わせて修復してくれる。

役目を果たした後は造血剤の効果も発揮する。

使い方は振りかけるだけ、簡単で良いだろ？ 説明が終わるや封を切った田中がべ

チャベチャと傷口に振りかけてる。それだけであつという間に傷口が塞がっていく。

「お！ おおっ！ まるで魔法だな！」

「んだろ？ むしろその効果を落とし込んだモノが回復魔法らしいからな」

魔法は術者がナノマシン代わりに魔力制御で細胞を修復するってワケ。

「へえ？」

田中が面白そうに瓶の成分表を眺めるが、どうせ読めないだろう？

と、言っても、実は古代人の言語は現代と殆ど変わらない。エルフも人間も、王国も、帝国もだ。

この事から、今の文明が古代人の文明を礎にしているのは間違い無いのだろう。

だったら読めそうなモンだが、実際は読めない単語が山盛りだ。

地球の風邪薬の成分だつて意味が解らないのだから当たり前。ポーネリアの記憶が無かったら、俺だつてサツパリ解らなかつたに違いない。

「さて、後は鍵が必要なんだが……」

「ははあ！ 発見しております！」

土下座したままの木村からご注進。土下座のままに両の手で掲げ上げたるは鍵だつた。

その手首に既に手錠は見当たらない。自在金腕ルーニェルオンでトリネラの死体から鍵を漁った成

果であろう。

『死体から』である。

そう、トリネラは見事に死んでいる。ソレこそ俺が木村に土下座させている理由。

俺は殺意の余りノエルを殺してしまったが、木村だつて人の事は言えない。十発も弾丸を撃たれりやそりや死にますよ。

「どうすんだよ！ 殺しちや何にも聞き出せないだろ！」

俺はココでも言われた事を言い返してやる。しかし帰つてきたのは言い訳であつた。

「……いや、田中が撃つて良いつて言つたし」

思わずと顔を上げた木村の顔面、俺はガシガシと踏みつける。

「誰が顔を上げて良いと言つた！ 死にそんな田中はそりや撃つてつて言いますわ！」

「ヤメロ！ 開くだろ！ 新しい扉が開くだろ！ あ、良い眺め！」

などと、全く反省の色が見られない。すっかり傷が塞がった田中がため息混じりに頭を掻いた。

「いや、そもそも十発全部撃つとは思わないじゃん？」

冷静なツツコミ。その視点は無かつたね。確かにそうじゃん？

「いや、二人とも動いてるから撃つタイミングが無くてさ、自在金腕ルーデルオンの操作も面白くて、

次々に弾を込めていったら十挺全部撃てる状態になつてさ、そうならもう、撃ちた

いだろ？ 一斉に頭をバーンって！」

「頭がバーンなのはお前だクソ！」

全力で顔面を踏みつけた。

怒りに任せてどんなに口汚く罵っても、口から出るのはプリティボイス。完治した喉の試運転としてはハード過ぎるから勘弁な。

田中も目の前でバーンされたのは堪えた様だ、血だらけの顔を拭う。

「その所為で吹っ飛んだ脳みその直撃を受けたんだがな」

田中の顔は自分の血とトリネラの脳でグチャグチャ。

それだけじゃない。幾つかの弾丸は田中のそばを掠めたらしく、壁の銃痕を指差し田中が猛抗議。

「一歩間違えば、俺にも当たる可能性あっただろうが！」

「そこは、狙った！」

「いや？ ギリギリだったぞ？」

「ソレも、狙った！」

「……………」

田中は絶句、俺も絶句である。

なるほどね、木村先生はもうちよっと踏んでおこう。

「ふやあー！ 浄化されるうう」

……駄目みたいですネ。

そうして俺達はやつとまともな装備にありついた。

田中の手錠も外され刀も無事で完全装備。木村は自在金腕ルーニテルオンつて新武装でホクホク。

一方俺は、穴だらけ血だらけのトリネラの服で我慢。

サイズは違うが木村に微調整して貰えば、一応は着られる状態に仕上がった。

……帝国の軍服つて結構カッコイイのな、王国でも取り入れて欲しい。

「靴までは合わせられないな」

「しゃーない、裸よりマシ、付いてこい」

ようやく部屋から脱出。勝手知ったる通路をベタペタと歩む。目指すは中央制御室。

今の俺にはポーネリアの記憶がバッチリある。カプセルの中で生まれ変わってシンク
クロ率100%だ！

——ピ・ピピピ ブブブブ

そんな俺達に黒い球体ドローン、ザカートが一齐に向かってくる。

「オイ！」

散々に泣かされたらしい木村が後ずさる。

「大丈夫だ」

俺は余裕綽々。ザカートが飛び交う中に自ら突っ込んで行く。当然に一斉に取り囲まれ、レーザーが俺を探っていく。俺の顔、目の虹彩。体型。指紋。

——ピー、ピロリロ♪

可愛らしい音と共にザカートは飛び去っていく。

「今のは？」

「俺の生体認証が通ったって事よ！」

今の俺はシンクロ率100%。どう言うワケか凶化してポーネリアの遺伝子を取り込んだらしく、既にセキュリティはフリーパスだ。

ポーネリアは凶化していた。外見は勿論、遺伝子だって変異するワケで、生体認証にゆとりを持たせまくっていたワケよ。

医療部屋でチェックして驚いた。機械は俺をかつてのあるじと認識する。パスワードだつて勿論参照権で思い出せるので、今の俺なら施設の全てが自由になる。

その為にはマズは中央制御室に向かいたい。

「ココだ」

辿り付いた大扉。まだ帝国兵が居るとすればココしか無い。

木村が扉をチェックする、原始的な罫を警戒しての事だった。

「まだ居るかね？」

「何が居ようと、俺に斬れないモノなんて無いさ」

刀を装備した田中の頼もしい事！ さっきまで「助けて！」と泣いていたのと同じ人物とは思えない。チェンジされたのはお前だったか。

危険な罠が無いと見るや、そんな田中が元気良く飛び込んでいく。

「たのもー」

掛け声が完全に狂人のそれ。道場破りか？ やっぱコイツもチェンジ。

「誰もいねえみてえだな」

恐る恐る乗り込むと、記憶の中の中央制御室と変わり無い。

部屋の中には色々な機械が鎮座しているモノの、隠れる所はナシ。

しかし飲みかけの水や脱ぎ捨てた服が、直前まで人が居た事を教えてくれる。

「システムは切られてるか……」

早速コンソールの前に腰掛け、モニターをチェックするが電源を入れる所からスタートとなった。

強引に切断された場合の自己診断プログラムを華麗にキャンセル、それでも起動には10分ぐらいは掛かりそうである。

これだけで敵はとっくに脱出してるのは窺い知れる。

「ソフアーが少し温かい、まだ半時と経ってないぜ」

「じゃあ、とつとと追いかけてようや！」

ソフアーを調べる木村が悔しげに唸り、ソレを聞いた田中は堪らず部屋を飛び出そうとする。

だが、この施設はなんだかんだ広い。三人で手分けして探したって見つからないだろうし、なにより俺はもう頭を吹っ飛ばされるのは懲り懲り。

「まあ待てよ、モニターに出るから」

まだシステムの起動は半ばだが、俺はホログラムモニターを大寫しにする。それを見た二人は口笛を吹かんばかり。

スクリーンにはこの施設の地図が階層毎に細かく表示されていた。

「ヒューー！ 使い方解るのか？」

「さっきのドローンと良い、記憶を回収したってワケか！」

「ご名答！」

俺はご満悦でコンソールを叩く。すると、続々とコンソールに光が灯る。

「この小さい赤点は飛行ドローン、スライムドローンは青いんだけど邪魔だから表示オフ！ 上層の光点は多分ゼクトールさん達かな？ 一人だけちよつと離れてるけどなんだろ？ それでー？ この26階層をとぼとぼと歩くのがあ？」

「ソルンってワケだな？」

「多分ね」

俺は相手の顔も知らないが、田中にはお馴染みの相手っぽい。

「コイツが強いかかってワケじゃねーけど、マジで嫌な予感がすんだよ、学者先生の研究次第で、マズイ事になりそうな……」

言葉に出来ない焦燥感に焼かれる田中。自分でも未知の感覚らしく、言葉に出来ないままに必死に訴えてくるが、木村はしたりと頷いた。

「お前の焦り、俺にもワカルぜ」

「マジかよ！ 解ってくれるか！ いやー、俺にも解らねーのに？」

「肥料を作る魔法のこったろ？ 肥料が作れるなら、ちよつとイジるだけで火薬が作り放題って知ってた？」

「ぼフェー！」

システム復旧に必死な後ろで、ショートコントの練習するの止めて欲しい。ちつとも面白く無い。ただでさえ五月蠅いのに唾とか飛んで来たし。

慎重に唾を避けながらエンターキーをポチリ。

「はい、システムオールグリーンね、隔壁降ろしまーす！」

「高橋君、いやユマ姫様！ いっそレーザーとか撃つてぶっ殺せませんか？」

「無理ツス！」

田中が後ろから俺の華奢な肩を掴んでガクガクと揺らす。

「うおーい！ 火薬が普及したら、せつかく刀を手に入れたつてのに活躍出来ねーじゃん」

知るかいな、黙って木村とコントしててよ。サイレントで政治風刺的な奴で頼む。

「あ、前時代的遺物さんチーツス！ 銃作っただけど撃ちます？」

「木村アー、俺にガンブレード作ってくれー」

「無理でーす！ ゲームじゃありません！ どうです？ いっそ棍棒と毛皮で戦ってみては？ 敵はビビるよ？ 俺もビビるし」

「パオーン！」

「マンモスだ！ マンモスが出たぞ！ コラ！ 痛いだろ！ 殴んな！」

後ろのコントは佳境を迎えていた。正直楽しそうで混じりたい。

そんなワケにも行かないので26層付近の隔壁をガンガン降ろしていく。

「お？ おお？ 焦ってる焦ってる！ まさかコツチもコンピュータを使えるとは思いませんよねえ」

モニターには光点でしか表示されないが、オロオロとしたその動きだけで焦りは十分に伝わった。赤外線サーモグラフィで体温上昇まで手に取るよう。

そんでトドメにドローンをレッツゴー。

「決まりだなー!」「ああ」

コントの練習を終えた二人も、逃げ惑う光点の動きの方が面白いと見える。もはやコツチにかぶり付きだ。

ソルンさんと君らじやコンテンツツ力が違うんだよ。見習って欲しい。手始めに田中にもドローンけしかけて良いか?

「ふざけてないでよく見ろ! 様子がおかしいぞ」

「ん?」

二人に言われてモニターを注視。なんか2-1階層に突然巨大な光点が発生したんだが?

——発生。

あり得ないと思ったが、そう言えばこの施設は大穴に削られている。

地図上にあの大穴は反映されていない。当然だ、あの大穴はポーネリアが死ぬ直前まで存在しない。

だったらソコにセンサー類も存在しない。

「人間の、サイズじゃないな」

「魔獣か?」

「ソレしか無いよね……」

そう言えば、施設には大穴が空いているのに魔獣は入り込んで来ていない。だとしたら魔獣避けの結界や音波が出ている可能性は高い。

だと言うのに、今、このタイミングで魔獣が施設に侵入してきた。これは偶然か？

「嫌な、予感がするな！」

「ああ」

固唾を飲む二人に考え過ぎとは言えない。なにせ魔獣はすぐさま動き出した。

隔壁をぶち破りながら、向かうは階下。目指すのはコチラか、或いはソルンの救出か。

「俺は行くぞー！」

「オイ待てよー！」

我先にと飛びだそうとする田中のマントを木村が引っ張る。

「高橋改めユマ姫様！ 俺と田中は出ます。姫はココでお待ち下さいー！」

なるほどね、周囲に敵がない事はモニターで確認済み。

そこで今の俺は魔法も使えぬ幼女なんだから、そりゃココに居た方がよっぽど頼もしい事だろう。

それにしてもユマ姫サマね……

俺も『高橋敬一』を引っ込め、姫の顔で微笑む。

「良いでしょう。ですが私の魔力制御も戻って来ています、しばらくすれば戦う事も難しくありません。それでもたった二人で凶悪な魔獣に挑むと言うのですか？」

俺は光の魔法で後光もきらびやかに尋ねる。

すると木村も恭しく拝礼する。

「非才の身なれど、僭越ながら姫の御身を守る荣誉に預かりたく」

「許す！ 行きなさい！」

「ハッ！」

姫と騎士ごっこである。

ノリノリでやってみだが、空気を読まない男が居た。

「いや、精々通路に入ってこれるサイズだろ？ もっと巨大な魔獣だって俺一人で倒せるんだけど？」

田中である。コイツ、空気を読まないね。

だが、適当言って貰っちゃ困る。サイズが小さくても強力な魔獣はゴマンと居る。

逆に大きかったって大したことない魔獣だって居るのだ。

「どんな魔獣です？」

俺はお澄まし顔で尋ねる。

「一点物のグリフォンを除くと、良く狩ったのは大牙猪ザルギルゴールとか？」

最上級の魔物であった。

「ぼフェー！」

お澄まし姫様、大崩壊！

話には聞いてたけど、アレは魔法なしに倒せるモンじゃないからね？ 現にさつきも兵士が百人掛かりで突っついて、吹っ飛ばされて、結局俺が銃で倒したから。

それを『ちよつと一狩り』って感じで言うのは中々凄い、お姫様が原始時代まで退化したって仕方が無い。

「パオーン！ パオーン！」

「マンモスだ！ マンモスが出たぞ！」

家臣だって当然退化している。

姫と騎士ごっこなんて時代遅れよ。今は野生。

「ふざけてないで行こうぜ？」

田中さん、アナタさつきまで一番遊んでいたじゃない？

俺は気を取り直して命じる。

「行きなさい！ 王国の命運はあなた達に掛かっています！」

「ハイヨ！」

「オイ！ 俺も行くって！」

最後までマイペースに田中は出て行つた。当然、木村も後を追う。

一転、中央制御室に静寂が訪れたと思つた矢先。

忘れ物でもしたのか、ひよっこり木村が顔を出した。

「なあ、聞き忘れたけど、ザルギルゴール大牙猪より強い魔獣つて居ないの？」

……なるほど、確かにザルギルゴール大牙猪は最上級の魔獣。遺伝子変異で生まれる妖獣や、他の遺

伝子を取り込み続ける凶化した魔獣を例外とすると、種としてソレを上回る魔獣など

……

「一つだけ、ハッキリと格上と言える魔獣が居ますね」

「ソレは？」

俺は思い出す。『参照権』など使わずとも、今でもハッキリ思い出せる。

エルフの戦士が数十人で倒すのがザルギルゴール大牙猪だとするならば、エルフが軍を動かす唯一の

存在。

「王蜘蛛蛇！」
パウギユリヴァル

ハルキゲニアみたいな魔獣。

かつてセレナが倒した魔獣。

愛する女性のかたきと、今は亡きエリプス王が軍を動員し、それでも追い詰められた魔獣でもある。

「まさか……な」

見つめるモニターの光点に、最悪の予感が拭えなかった。

王蜘蛛蛇

——ギョオオオ

化物の咆哮が木霊こだまする。

およそ真つ当な生き物とは思えない姿をしていた。

通常の魔獣は動物が巨大化、もしくはは複数混ざった生き物であるのに対し、この魔獣だけは地獄から這い出て来たかの様な不気味な姿で知られていた。

バウギユリアル
王蜘蛛蛇

極めて珍しい魔獣である。

長命なエルフであろうと、一生に一度も目にしないのが普通なほど。

それでいて、知らぬエルフは一人も居ない。

矛盾するようで矛盾しない。この魔獣は常に彼らの神話と共にあった。

時には勇者の前に立ち塞がり、時には偉大な王の誕生を促した。

お伽噺を彩るべき、伝説の魔獣がソコに居た。

——ギョギョギョヨヨオオ!!

本来は、エルフ達が軍をもつて対処する魔獣である。

だと言うのに、相對するは、たった一人の黒衣の劍士。

「コイツあ、グロテスクだな！」

田中であつた。

自慢の刀を抜刀するや、走る。

——ギョオー

「あつぶね！」

一直線に突き出された触手を紙一重に避ける。

蜘蛛と蛇の王。

ソレを意味する名前を冠しているが、そのビジュアルは無数の足が生えた巨大なウジ虫と言つた方が理解が早い。

或いは『ハルキゲニアみたいな姿』。そう言つて伝わるならばソレが一番近い。少なくとも、この魔獣の数少ない目撃者であるエルフの姫はそう感じた。

その体から生える無数の触手は、移動にも攻撃にも使用される恐るべき武器。

「オラよ！」

だが、田中の一振りであツサリと切断される。しなやかで柔軟性のある触手は、斬り裂いてみれば極めて柔らかく、そして脆かつた。

痛みを感じないのか、それでも尚、王蜘蛛蛇は攻撃の手を緩めない。

バウギョウリツアル

鞭の様に打ち付ける触手、槍のように突き込まれる触手。

暴風の様に襲いかかる無数の触手を、田中は全て躲していく。

「ヨッ！ ヨッ！ YO!!」

ノリノリであった。

タイミング良く、躲し、斬る。それだけの繰り返し。

簡単に見えて、全ての瞬間に自らの命が掛かっている。

ソレが心底楽しい。そう言う男であった。

「お手々がもう無エみてえだゾ？」

田中は転がる触手の中心で笑う。苛烈な攻撃を全て凌ぎきった証であった。

既に王蜘蛛蛇バウギユリウアルには振り回すべき触手が残っていない。

「結構強かったぜ？ あのイノブタより大分マシじゃねーか？」

刀を手にしてこちら、田中は苦も無く多くの魔獣を屠ってきた。

そんな中で、目の前の奇妙な魔獣はグリフォンを例外とすればダントツに強かった。

「あばよ」

だが、それでも敵では無い。サククリと胴をぶった斬る。

巨大なウジ虫と成り果てた化物の、その凶太い断面が晒される。

「見た目だけじゃなく、斬った感触までロクでもねーな」

チン、と涼やかな音をたて、納刀。

戦い終わったそんな時に、ジャケツトとズボン、帽子までも深緑で揃えた男が滑り込んでくる。

「田中ア！ 終わったのか？」

「おせえよ」

木村であった。

ユマ姫と話し込んで少しだけ出発が遅れた。その差と足の差が合わさり、到着した段には戦闘に幕が降りていた。

——いや、幕が降りた。と、思い込んでいた。

「危ねえ！」

木村は叫ぶ。コチラへ向き直った田中の背後、切断された巨体から無数の触手が伸びていた。

「ぐおー！」

田中は触手に弾き飛ばされ、地面を転がるハメになる。木村の声で慌てて体を捻ったが、それでも僅かに遅かった。

不格好に体勢を整え、刀を抜いて振り返る。その頭上に立ち上がる異形があった。

触手は全て切り離れた。頭すら切り落とした。

それでも王蜘蛛蛇バウギユリヴァアルは前と変わらぬ姿で蘇った。

「ユマ姫かよー！」

「いや、失礼じゃね？」

田中の暴言に流石の木村も顔を顰める。

見た目だけは傾国の姫な少女とは比べようも無く、途轍もなくグロテスクな化物である。

共通点と言えるのは、精々が頭を切り落として尚、死なないと言う事ぐらい？

いや、やっぱりどちらも大概だな。そう思いながらも木村はこの化物をユマ姫と一緒にしたくない。

なにしろ木村は王蜘蛛蛇バウギユリヴァアルが復活する瞬間を目撃していた。

晒された断面から無数の触手が湧き出し、切断された頭と結合。その姿に鼻から飛び出す角栓を思い出した木村は、思わず吐き気を催した程である。

「スライムみたいなモンだと思った方が良いみたいよ？」

その姿からユマ姫から聞き出した伝説の魔獣。それに間違い無いと木村は確信した。

しかし、そう言われても田中には強さがピンと来ない。

「スライムう？ 雑魚じゃネーか！」

「伝統的なファンタジーじゃ、物理攻撃無効の結構な強敵なんだぜ？」

「物理攻撃無効って、ゲーム脳も大概にしるよ」

笑いながら駆けだした田中は再び無数の触手を切り落とし、バウギユリウアルまたも王蜘蛛蛇の本体に肉薄する。

「シッ！」

裂帛の気合いと共に切断。今度は胴が幾つものカタマリへと分断されていく。

今度こそ無力化に成功したかに思われた。

「チッ！ クソッ！」

しかし今回、田中は斬ってすらいなかった。バウギユリウアル王蜘蛛蛇は斬られる前に自ら分裂。

困うように田中の退路を断ってみせた。

「ヤベエなオイ！」

田中を取り囲んだ胴体達は一斉に体を震わせる。ソコから吐き出されるは更にその数を増した触手であった。

360。ドコにも逃げ場が無い。白い牢獄が哀れな獲物を捕食する。その瞬間。

——パーン！

銃声が響いた。一回ではない、同時に複数の炸裂音が重奏する。

逃げ場が無かったハズの牢獄に大穴が空き、好機とみた黒ずくめの男が転がり出る。

その先には煙を噴く無数のマスケット銃。

ルー・デルオン
自在金腕を使った複数同時発射。

木村は十挺ものマスケット銃を担いで持ってきていた。一挺が4kg程でも十挺で40kg。

弾丸や火薬も含めると50kgを越える。木村が田中から大きく遅れるのも当然と言えた。

「また助けちまつたな！」

「またカスつたんだが？」

「また狙った！」

「またクツソ！」

二人の会話に意味など一切無い。口を衝いた単語を垂れ流しているに過ぎない。

「また斬って！」

「また撃って！」

「また斬ってえ！」

「また撃ってえ！」

リズムを刻むように、田中は触手を切断し、木村は凶太い胴体に銃弾を叩き込む。

「また斬ってえ!!」

「また撃つてえ!!」

「また斬つてええ!!!」

「また撃つてええ!!!」

ヤケクソであった。

それでも二人の息はピタリとハマリ、お互いの隙をカバーしながら王蜘蛛蛇バウギユリヴアルを削つて行く。

……だが。

「またキリがねえ!」

「また奇遇だな! 俺もそう思ってた!」

体力も弾丸も無限では無い。王蜘蛛蛇バウギユリヴアルは僅かに体積を減らしたただけだ。

「クツソ! ホントはどうやって倒す魔獣なんだ?」

「ユマ姫が言うには、こうやって少しずつ削るのが王道らしい」

「邪道なのを頼む! 俺は裏技やハメ技が大好きなんだ!」

元来、軍の物量で押しつぶす魔獣。たった二人で取れる策では無かった。

「そう言われても、簡単に出来るモンじゃねえんだよ」

「物理攻撃無効と言ったな? 魔法か?」

「ぶつぶー! 魔法も無効です!」

「ふざけんな！ 無敵か！」

文句を言いながら触手を切断する田中。答えを焦らす木村に苛立ちを隠せないが、別に木村だつて意地悪で言わないワケじゃ無い。

木村は必死に攻略方を探すが、簡単にできる事では無かった。

それ程に規格外の魔獣なのだ。

幾ら切つても死なず、膨大な健康値で魔力を打ち消す。

魔剣と魔法で戦うエルフの天敵。

セレナは相手の膨大な健康値すら上回る異次元の魔力で、強引に風と炎の刃で焼き切つてみせた。

エルフの蔵書を読み切り、知識を蓄えたユマ姫すらも目を剥いた、常識外れの魔力を持つセレナだけが可能な攻略法。

ソレを人間でこなそうとすれば、一体どんな手があるか？

優れた頭脳を持つ木村にも妙案は出ない。

「焼き切つちまえば、もうくつつく事が無いらしい。使えないのかよ！ フォースとか！」

「無理です！ ジェダイじゃありません！」

「パオオオン！」

「うぜえ！ もうマンモスはヤメロ！」

「チューバツカなんだが？」

「解るかボケエ！ おいやベエ！ ふざけてる場合じゃない！」

冗談を言っている間すら、触手の攻撃は容赦が無い。

相手は幾ら攻撃を食らっても復活するが、コチラは一度でも良いのを喰らえばソレで終わり。

フエアな戦いでは無い、しかも悪い事は続く。

「ソルン！ クソ！ てめえ！」

パウギユリヴァル
王蜘蛛蛇の背後、ソロリソロリと破られた隔壁の隙間から外に出て行く銀髪の青年の姿があつた。

「冗談だろ？ 明らかに守つてやがる！」

回り込もうにも王蜘蛛蛇が触手を伸ばす。パウギユリヴァル どうあつても倒さねばソルンの確保は不可能。

「逃げられちまう！」

既にその背中は見えない、ただでさえタフな敵に時間制限のオマケ付き。

ココで木村は賭けに出る。

「仕方ないな！ 奥の手だ！ 田中ア！ できる限り細かくぶつた切れ！ そんで俺が

合図したら伏せろ！」

「嫌な予感しかしねーんだけど？」

文句を言いながらも田中は再び駆ける。流石に疲労でキレが無い動きだが、田中はココはリスクを取るべきと、長時間の観察から来る見切りで補う事にした。

紙一重どころか皮膚一枚を犠牲にするほど最小限の回避。無数の触手が作り出す僅かな隙間をすり抜けて行く。

頬に受けた一筋の傷跡から滲む血液が一滴。ポタリと落下するだけの僅かな間、田中は既に懐に潜り込んでいた。

「ありったけだ！」

切った後に包囲を抜け出す余力を度外視した六連斬。斬ったモノも斬る前に分裂されたモノのも含め、九つもの分体に取り囲まれる。

「オイ！ 出番だぞ！」

田中は叫ぶ。むしろ、叫ぶのが限界。無理な姿勢での斬撃により、転げたような無理な体勢。逃げるにも一呼吸の間が必要であった。

「おわっ？」

田中は足を掴まれズリズリと引き摺られた。いつの間にか足首に巻き付く金属のワイヤー。自在金腕ルーテル腕の一本であった。

残ったワイヤーが触手を牽制、開いた包囲網の僅かな隙間から田中を引き摺り出さや、交換とばかりに閉じていく包囲網に投げ込まれる革袋。

「弾けるー！」

木村の声と同時に、触手で編まれたかまくらみみたいな姿となった王蜘蛛蛇バウギユリウアルの隙間から閃光が溢れる。

——バアアン！

殆ど同時に爆音。木村が投げ込んだのは、ありつたけの火薬と弾丸を詰め込んだ即席の手榴弾。

べちやべちやに吹き飛ばされた王蜘蛛蛇バウギユリウアルはその体積を大きく減じた。

「クッソ！ こんなのバツカリかよ！」

「二応言っておくけど、今度は狙ってないぞ」

田中はまたしても体液でべっとりとならぬと体を濡らす。距離を取っていた木村の足さえ魔獣の体液で白く染まるほどの爆発だった。

そんな二人の軽口をつんざく咆哮。

——ギョオオオオオオオ！

まだ生きていた。その体積を半減しようとも、いまだに王蜘蛛蛇バウギユリウアルは戦う姿勢を見せていた。

「不死身かよー！」

「こりや訂正するぜ！ ユマアイツ姫の方がなんぼか可愛げがある」

「ハア……」

田中の失礼な物言いに、今度こそ木村はツツコム気力も無い。

……だが、ツツコム必要は無さそうだった。

「果たしてそうかな？」

不敵に笑う少女の声。振り返れば予想通りの姿があった。

「ユマ姫様！ どうして？ って、え？ 誰？」

いや、予想とは僅かに違った姿であった。少なくとも木村にとっては。

しかし頓着せずにユマ姫は続ける。

「俺より可愛いと言うのなら、コレに耐えて貰わなくっちゃな!!」

……誰も言っていない。

そもそも王蜘蛛蛇バウギユリツアルは喋らない。

お構いなしにユマ姫が投げつけたのはステンレスの一斗缶。少女の細腕では到底不

可能な遠投、魔法を使つての投擲だった。

「ホラよー！」

掛け声と同時に、さらに取り出したのはノエルが使っていたショットガン。

——パンツ！ カンツ！

発射された散弾は正確に一斗缶を打ち抜いた。

中身は勿論、灯油。

そして、……火薬！

——ドオオオオオン！

「うおっ！」

「なんだ？」

木村と田中、二人はこの爆風にゴロゴロと吹き飛ばされる。灯油は勿論、火薬を使つてもコレほどの爆発は起こせないはずであった。

しかし、少しの灯油に火薬をタツプり混ぜたモノ、それは現代で言う所のアンホ爆薬と言われるモノに近い効果を生み出していた。

ユマ姫が燃え死んだ爆発の正体である。

「ハハハハハ！ どおおだあ？」

ノエルの頭をショットガンで吹っ飛ばし、コッチの方も誰かにやり返さなければ気が済まないと思つていたユマ姫だが、案外に早くチャンスが巡つた。

——ギョヨヨ……

炎の中、バウギユリヴァアル王蜘蛛蛇のシルエツトが力なく揺れる。

「そうだよな？ 熱いよな？ その痛み解るぜ、俺にも経験あるからね」

炎の前まで歩み出た少女は、恐らく人類唯一の経験を自慢げに語ってみせる。

——ヨオオオ

燃え尽きていく王蜘蛛蛇。パウギユリヴァル それを見て少女は少しだけ寂しそうに笑った。

「セレナ、お姉ちゃんにも倒せたよ……」

かつて自分を守ってくれた妹に黙祷を捧げる。

静かな眩きは、聴力に優れる田中にすら聞こえない程にささやかな声だった。

個人的な感傷を振り払うように、少女は炎を背にバツとコチラを振り向いた。

ポーズすら決めて、姫らしい威厳を取り繕って見せる。

「どうです？ 私の方がずっと可愛い！」

そう言う話ではない。

ないのだが。手が付けられないほど自信満々なので顔を見合わせる木村と田中。

「ナニ？ アレ？」

「さあ？」

少女はそれでもポーズを崩さない。

「世界一！ 可愛い！」

何故なのか？

ソレはソレとして木村には気になる事があった。

「あの、姫サマ？ その髪の色は？」

「え？ あー！」

ユマ姫の髪色は、再びピンクに染まっていた。

その事に本人は全く気付いていなかった。

魔女の罠

「お？ おおッ？」

俺はクルリと一回転。いつの間に髪色がピンクに戻っている。

「スフィールで田中と死別して以来だな」

「死んでねえ死んでねえ」

いや、ホントに髪が脱色するぐらいショックだったのよ。ソコは汲んで欲しいね。

「俺は初めて見るな、今までも大概だったけど、余計にアニメキャラみたいだな」

一方で木村は初めてか？ 力抜けよ。

いや、マジで力抜け！ グイグイ来すぎだろ、女の子の髪をペタペタ触るな。

「なあ？ エルフってのは髪の色が変わるのか？」

「ないない、どんな生き物だよ！」

「……アザラシとか？」

「ゴマちゃん！」

今まで赤ちゃんだったとでも言うのかね？ バブー！

「心配ないって。元々銀髪で、子供の頃にピンクになったんだけどさ、魔力過多が異常な

レベルに達すると体毛が赤くなることがあるらしいんだよな」

俺が鶏肉を食べてひっくり返った際は、王国一の名医が呼び出された。ソイツの診断だから間違い無いだろう。

更に言うと、ポーネリアの記憶から古代人の知識を検索しても同様だった。

そう考えると銀髪に戻ったのも田中の死のショックで脱色したと言うより、魔力不足で色が抜けたと考える方が妥当だろうか。

「赤ってよりもピンクでは？」

「診断では、赤よりはマシな状態じゃないかって話だったかな？」

「あー！」

田中が唐突に声を上げ、木村との会話に割り込んだ。

「そうだ、確かグリフォンも魔石をボリボリと食いまくって、体毛が不気味に赤く光ってやがった」

「ああ、凶化の最終段階だな」

そりゃあ魔力暴走で弾ける寸前と言われている状態だ。

コレはもちろんポーネリアの記憶による所だが、エルフの知識だって中々捨てたモノじゃ無い。机上の実験データでは無く、実際に戦った記録と言う観点ではむしろ上等ですらあった。

凶化した魔獣はエルフを大変手こずらせたので、王宮図書室には少なくない資料があつたワケだ。

今思えば、新しい書物が多かつたあたり、この施設から逃げ出した奴の生き残りじゃあ無かるうか？

ま、だとしても俺に責任がある訳じゃ無い。

俺が現実逃避をしている間も、木村は俺の髪をしげしげと見つめる。

「それで、体調は大丈夫なん？」

「んだけ、助けて貰つておいてアレだが、どうして来た？」

む、田中の奴めどうして来ただと？ 危なかつた癖に態度がデカイぞ！

こつなつたらピンク髪の義務をこなさなくては。

——ふう、ちよつと緊張するな。深呼吸をひとつ。

手始めにと田中へ向けて、ビツつと人差し指を突きつける。

「べつ、別にアンタの為に来た訳じゃないんだからね！ ついでよ！ ついで！」

「……………」

「……………」

キマつたな！

喉も完全復活で舌つ足らずなキンキン声突き刺さる。もはや二人はぐうの音も出ない様子。

我ながら見事過ぎるツンデレである。

ピンク髪と言えば、ツンデレ。ツンデレと言えばピンク髪。

そんなイメージあるよね？ みんなも好きだろ？

「そうだな、ソルンを追わねえと」

田中。まさかの、ガン無視であった。

「俺は、……可愛かったと思いますよ？」

木村は中途半端なフォローをヤメロ！

まあ良い。俺達はソルンの追跡を開始する。

実際、ふざけていないでとつと追いたい気持ちはあった。だが王蜘蛛蛇バウギユリウアルとの戦いは

かなりの激戦であつたらしい。

汗だくの二人は男臭いを通り越し、もはや獣臭い。クタクタに疲れ果てていて、とて

もスグには動けなかった。

勿論、か弱い俺が一人で突つ込む、なんてのはもつての外だった。

……なんせ今の俺は、ほぼほぼ無力。走りながら自分の魔力を確認する。

「体調は大丈夫っぽいんだけどなあ」

「魔法は無理か？」

「コホン、多少は使えますが、魔力値で言うとも100もありません。いつもの半分以下ですわね」

そろそろ口調もお姫様に戻しておく。

ちなみにこの位の魔力だと矢を加速して、やっと人並みの威力って程度。

「戦力外じゃねーか！」

「それでも施設を把握しているのはこの私です。それに銃ぐらいは撃てますし」

自信满满、ノエルが使っていたショットガンを見せつける。すると、申し訳無さそうに木村からのご注進。

「その……銃なんです。実は私、火薬を切らしております」

「え？」

あんなにあつたのに？　どんだけ撃ってるんだよ……あつ！　十挺で廻し撃ちしたの？　え？　爆弾にも使った？　クソ馬鹿では？

「つきましては、姫様は火薬をお持ちで無いですか？」

「さっきの爆発を見たでしょう？　ンなモン、使い切ったに決まってるじゃん！」

足りない胸を反らせて堂々と宣言。お姫様はキャンセルだ！

むしろ、俺が木村から借りようと思ってたんだが？

念のため言っておくけどさ、さつき使った火薬だつて俺が見つけた物だから文句を言われる筋合いはナツシング!

中央制御室のそばに宿直室がある事を思い出し、ひよつとして、と探したら奴らの荷物がしつかり残っていた。そこで拝借したのがさつき灯油を混ぜた火薬つてワケ。

もちろんオールイン。何しろ相手は伝説の魔獣だよ?

俺の言葉を噛み締めるように、木村は優しい笑顔で頷いた。

「なるほど……ズバリ、戦力外!」

「あ、ハイ……」

しょんぼり。またしても無情な戦力外通告。

「留守番しておくか?」

そう田中に問われるが、ぐぬぬと首を横に振る。

実際、戦う力はないのだが、久しぶりに三人揃ったのだ、一緒に冒険したいではないか。

でもなあ、戦力外だけなら兎も角、俺が居ると『偶然』に巻き込んで却つて危険に晒してしまう。

今だつて二人だけならもつと速く走れる。どうやら灯油の一斗缶を担いで移動したのが、思った以上に足に来ている。

そんな俺の様子を木村が一瞥すると、速度を緩めようとしないうちに田中に舌打ち。

「そうは言っても、こんな所にお姫様をひとりで放置つてもマズイだろ？」

「ンだからオマエも留守番だつて」

「え？ 俺も？」

いや、木村さん。なんで俺が？ みたいな顔してるけど、良く考えれば銃が使えないや戦えないのはアナタも一緒じゃない？

「いや？ 俺には自在ルー・デルオン金腕があるし」

「さつき指が痛いつて言つてなかつたか？」

「……言いましたあ！ メツチャ痛い！」

木村が降参のポーズで赤く腫れた指を見せる。

自在ルー・デルオン金腕は指に金属のワイヤーを巻き付けて使用する。

五本束ねて一つの腕とする通常の利用法ならそれ程問題はないらしいが、五本同時に操る木村の場合、指の負担が大きいようだ。

まあね、普通に考えて、指一本一本にマスケット銃の5kg近い重量がのし掛かるのだから当然だわな。

木村を指差し「ズバリ、戦力外！」と言い返してやれば、思い切り木村にほつぺたを抓られた。理不尽過ぎない？

こうなると戦えるのは田中だけ。

「じゃあ、二人でゆつくり来いよ、俺は先に行くぜ」

言うなりスタコラ一人で駆けていく。

その速い事。そう言えば、かつてアイツは魔法を使った俺の速度に付いて来た。馬にも劣らぬ速度と言える。

「行つちまつたな」

「そうですね……」

一方で俺達は速度を緩める。もう焦っても仕方が無い。

「どうする?」

「万が一を考えるなら、追加で灯油を探すべきですね」

考えたくも無いが、バウギユリツアル王蜘蛛蛇が一体とは限らない。だとすれば備えは必要だ。アイツにトドメを刺すには燃やす以外にないのだから。

「この遺跡に火薬は無いのですか?」

「古代文明は魔力を電気の如く様々な用途に使っていました。何しろ簡単に手に入るので。ただし、保存性が悪いので魔力を灯油の様な他のエネルギーに変換する事はありますが、武器として火薬を使う発想はなかったようです」

「なるほど……」

木村は澄ました顔で思考に沈むが、俺は田中が居ない場面で木村とどう会話するべきか悩んでしまう。

今までは二人きりであつても、日本語で冗談を言う場合を除くと、真面目にお姫様していたのだが……

なんか、こう。お互いに口調をどうするかつてのが気まずいんだよな。

却つて他の誰かが居てくれた方がお姫様しやすいんだが……

と、そんな俺の気持ちを通じたのか、上の二十二層へ通じる通路の前、思わぬ集団と出くわした。

「姫様……ご無事で！ キイムラ様も！」

近衛兵たちである。

ボルドー王子亡き後、王族の護衛ではなく俺の護衛を選んだ時点で、厳密には近衛とは言わないらしいが……そんな事はどうでも良い。貴重な増援だ。

だけど、気になる事が一つ。彼らの先頭に居るのが副長のワツツさんなのだ。

「ゼクトール隊長はどうしたのです？」

「隊長とは途中ではぐれてしまつて」

「まあ！」

大変だ、この遺跡はドチャクソ広い。下手すりや建物の中で行き倒れ。

「だいじよぶツスよ！ 隊長はとにかくしぶといんで」

「ちげえねえ！」

「そんな事より！ 本当に腕と目が治ったんですね！ おめでとうございます！」

「まさに奇跡だ！ 隊長が見たら喜ぶぞ」

魔力が濃くて辛いだろうに、彼らは強がつて笑つてみせる。

そう言えば確かに中央制御室で確認した光点は、一人だけが妙に離れた位置に居た。

それにしても濃い魔力の中で辛いだろうに、ワイワイと盛り上がる。流星に体育会系の奴らだ。

お陰で文系の木村は居心地が悪そう。よし、君に使命を与えよう。

「キイムラ様。灯油がこの階層の北側の部屋にあるハズです。探して持つてきては頂けませんか？」

「ふむ、探してみます」

「よろしくお願いします」

近衛兵は七名。むしろ彼らに灯油を探して欲しい所だが、灯油がどんな物か判別不能だろう。

もちろん俺が一番捜し物に向いているのだが、そうすると護衛である彼らもセットで付いて来てしまう。

大の男が七人。折角の戦力をソルンの追撃に使わない手は無い。

つと、そう言えば？ 彼らは上層から来たのだ。

「皆さん、黒衣の大男とはすれ違いませんでした？」

「いえ？ そんな者は見ていませんが？」

「では、銀髪の青年は居ませんでした？」

「銀髪の？ そう言やピーク、オマエが見たつて言うのがそうか？」

「ほら、ワッツ副長！ だから見たつて言つたじゃないですか！」

ピークと呼ばれた赤毛の男が口をとがらせブーたれる。

ワイワイとまあ、微笑ましいね。聞けばスグ上の二十二層の小部屋に入り込んだのを見たとの事。

「まあーた、幽霊だーつてビビつてるとぼっかり思つたぜ」

「そりや無いつすよー」

「幽霊よりも隊長のがおつかねえよな」

「違いねえ」

ゼクトール隊長が居ないせいとか、みんなして伸び伸びとしてらつしやる。そう言うのがあるよな。

それにしてもゼクトールさんはドコへ行つてしまったのか。

あの時の光点を『参照権』で思い出し、その経路を予想してみるか。
——ん？

「姫様、あの小部屋に入ったのを見たんでスよ！」

俺の思考はピークという赤毛の男の声に遮られた。それに対しワッツ副長も威勢の良い声を上げる。

「ホントに見たんだろうなあ？」

「間違い無いっスよ！ 多分」

「よおーし、探ってこい」

「ういっす」

赤毛の男が扉を探る。罨の有無を調べているのだろう。ただのお調子者かと思いきや、どうやら彼はその手の専門家だ。

「やっぱり誰が入った形跡がありますよ」

「誰も居ないのか？」

「もう居ないみたいですね。ん？ 何だコレ？ 良く解らないモノがありますよ？」

……なんだろう？ いや、何にしても俺が見れば解るハズ。

俺がトトトと扉に近づくや、ピークは明るい顔を覗かせた。

「あ、姫様！ 見て貰って良いですか？ コツチなんですけど」

「構いませんよ、あつ」

了承するや、ピークは気安く腕を取ると俺を部屋へと引き込んだ。コレが陽キヤの積極性と恐れ入る。

しかし、パツと見、部屋には大した物がありそうには思えないが……

——シユパツ

「え？」

ゴロンと目の前に転がったのは赤毛の頭。

ピークの生首だった。

「ユマ様！ お下がりで下さい！」

ワツツ副長に抱えられ部屋から引き摺り出される。

その腕の向こうに見えたのは

ふらつく足取りでボロボロな金髪の女幽霊？ いや、違う！

……シャルティア嬢だった。

「ユマツ姫さま！」

その様子は尋常では無い。青白い顔は幽鬼の様であり、顔にはびつしりと珠の汗が浮かぶ。

「貴様！ ユマ姫の侍女ではないか！ 狂ったか！」

ワッツ副長が大喝する。そう、彼らは俺の侍女を知っている。もちろんその正体も。彼らが敬愛していたボルドー王子を狙った暗殺者だった過去ですら。

狂ったと思うのも当然の所業だ。

狂ってる……か。

確かに彼女は元々頭がおかしい側の人間だが、今回は文字通り狂っているのかも知れない。

敵には王蜘蛛バウギユリウアルすら使役する異能の魔女が居る。以前のシャルティアはその力を退けたモノの、この地では濃すぎる魔力に苦しんでいた。

そこを狙われたとして、全く不思議では無い。

「恩を仇で返しおって！ 成敗してやる！」

ワッツ副長は大剣を抜き、部屋の中央に陣取るシャルティアへと構え、踏み込む。

……だが、俺がそれを止めた。

「待ちなさい！ ワッツ！」

「待てません！ こやつはピークを」

「待てと言っています！」

俺は副長を抑え、代わりにとシャルティアへの前に躍り出た。

「シャルティア。いえ、シャルリアちゃん」

「ゆ、ま、サマ……」

なるほど、ゾンビの様だ。コレなら操られてしまったとしても仕方が無いだろう。

「そのナイフを離しなさい」

「い、嫌ッ、ちがう……の」

「離しなさいと言っています！」

私が声を荒らげると、悲しそうにシャリアちゃんはナイフを床に落とした。

「ひめ、さ、ま」

「お待ち下さいユマ姫！」

ワッツの静止も聞かず、俺はナイフへ近づくとゆっくりと拾い上げた。

うーん、何の変哲も無いナイフである。肉を切るにも薄すぎて頼りない印象。なのに人間の首をああも見事にかっ切れるか……

腐っても暗殺組織のトップだった女だ。まあそれでもこうなっては辛いだろう、俺が仕留めてやらんとな。

「ワッツ！ 私の代わりにこの者を拘束なさい」

「ハッ！」

後ろからドタドタとワッツが近づく。

「ユマ、さ……ま、逃げ……」

シヤリアちゃんは切なげな顔でコツチを見るが駄目！ コレは譲れない。

ワツツ隊長がシヤリアちゃんにのし掛かり、その体を床に押しつける。

これでチエックメイトだ。俺はナイフを振り上げる。

「わたくしが始末を付けます」

「ユマ様、わざわざ手を下さずとも我々が！」

「いえ、私の責任でもありません。私自身がケジメをつけないとなりません」

「解りました」

ワツツのぶつとい腕で肩を押さえられ、シヤリアちゃんの白い首筋が晒される。すこぶる付きの美女に汗だくの首筋。それを押さえつける大男。満貫だね。かなりエロイ。

コレは一息にやらないと申し訳無い。専門家が見ているのだ、半端な真似は出来ないだろう。

俺はギュツと奥歯を噛みしめリミッターを解除。久しぶりに奥歯があつて嬉しい。またスグにすり減りそうだけどき。

そして少女の枠を越えた力をもって、ナイフを持つ手に力を込める！

「行きますー！」

掛け声と同時に、俺は曝け出された首筋にナイフを突き立てた。

——ドスッ！ ギリギリギリ。

それから力任せに引き裂けば、なんとかゴロンと首が落ち。パツキン美女が真っ赤に染まった。

「ふう……」

一仕事終えた感動に俺はホッと一息。

「どうして?」

そんな俺に問う声。

虚ろな瞳でシヤリアちゃんはコチラを見ていた。

「そりゃあ、コイツら洗脳されてるからね」

血塗れの笑顔で、俺は転がったワッツ副長の生首を蹴飛ばした。

魔女の罨2

「そりゃあ、コイツら洗脳されてるからね」

血塗れの笑顔で、俺は転がったワッツ副長の生首を蹴飛ばした。

ソレを目で追うシャリアちゃんは信じられないと言う顔。

その顔、嗜虐心をそそるね。シャリアちゃんにはこれまでやられっぱなしだったから余計にさ。

あ、口調が『高橋敬一』に戻ってしまった。ピンチになると流石にね。

「どう……して?」

またシャリアちゃんに問われる。うーん、そうだな。理由は色々あるんだけど……

「私の姿を見て、何か感じませんか?」

俺は両手を広げてシャリアちゃんにアピール。

「ケガが、治って」

「それ以外に」

「……?」

アレ? 解らない?

「髪の色が変わってませんか？」

「ああ……」

ああ……つてリアクション薄いなあ。ぱつと見の印象つて意味では、腕や目よりも大きいと思うんだけど。

アイツらがそれをナゼと聞かなかつたのが違和感の一つなんだけど……実は髪の色つて王国ではデリケートな問題だったり？ だから誰も突つまなかつた？ あと、そう言えば俺は服だつて変わつてたな、忘れてた。

「実はわたくし、殆ど色がわからないのです、服が変わっている事には気が付きましたが……」

突然の色盲カミングアウトである。なるほどね。

「それは……私が目を刺した後遺症ですか？」

だとしたら申し訳無いが、どうやらそうでは無いらしい。

「元からですわ。その代わり暗所では人一倍よく見えますの」

「そう、だったのですね……」

目まで暗殺専用に使上がってんのか、恐ろしいね。

「髪が銀からピンクに変わっているのに、兵士の皆さんがその事を気に掛けないのは流石に不自然です。今考えると、予定通りの会話をしているような違和感がありました」

「気を使っただけでは？」

「確かにそうですが、それだけじゃありません」

たしかに女の子の髪色はデリケートな話題と避けた可能性は高いよな。もちろん理由は他にもある。

「光点の数が合わないのです」

「こーうてん？」

むう、中央制御室のモニターの話からしなきゃいけないから面倒だ。

近衛兵達は七人。一方であの時見た上層の光点は十個。今考えると全く数が合わない。

スグに気が付きそうなもんだが、あの時は上層の光点なんてロクに見てないんだから仕方が無い。もし『参照権』なんて能力が無ければ、俺は永遠に気が付かなかっただろう。

中央制御室で光点を見てから精々二時間かそこらしか経っていない。大冒険の果てにゼクトールさんとはぐれてしまったみたいない分だったから、余計に辻褄が合わない。

そして、ゼクトールさんを入れても八人。まだ二人足りない。

一人がシャリアちゃんとして、もう一人は？

……魔女なんじゃないか？

そう考えると、コイツらは下手すりや何時間も魔女と仲良く過ごしてたって事になる。

いや、マールウ君と合流してたとか、他にも色々可能性は考えられるけどさ。だったら一言あつてしかるべきじゃない？

何より最も決定的なのは、ココが遺跡の深部ってコト。

魔力が相当に濃いんだよ。俺はハーフエルフだし、木村も田中も神の体で健康値は高い。

強がっていると思っていたけど、シヤリアちゃんの辛そうな様子を見ると流石に無理だと思えてしまう。

一度まさかと思えば、髪色に突っ込まないのも、ゼクトールさんが居ないのも、変な小部屋に案内しようってのもドンドン怪しく思えてくる。

ソコで気がついたんだけど、コイツら匂いが無いんだよ。汗だくだった木村が居なくなつて、初めて気が付いた。

近衛兵のみんなだつてここ数日、遺跡の中を駆けずり回つたに違いないのだ。猥染みた男の体臭をさせていて当然。

だのに、代わりとばかりに爽やかなお香の匂いがする。

こんな遺跡でお香を焚く理由ってなんだって話よ。

「兵士たちの匂い、嗅ぎ覚えがありますか？」

今度は俺がシャリアちゃんに問う。匂いつて言うのは不確かで、主観が混じりがち。『参照権』が頼れない部分であるからだ。

「きつと魔女が使っていた……お香です、ケシの香りの……」

……なるほどね、ケシと来たか。

黒峰さんは、本格的に世界を壊す気だ。人の事は言えないけどな！

それで、シャリアちゃんに洗脳が効かない理由にも合点が行った。彼女は幾つかの毒物への耐性を身に付けている。だから洗脳が効かないのだ。

意思がある人間を好きなように操るには、やはりタネも仕掛けも必要だったか。

——本格的に決まりだな。近衛兵は操られている。

勢いよく首をカツ斬ったけど実のトコロ、確信なんて全く無かった。シャリアちゃんとワッツ副長、それぞれの命を天秤にかけただけ。

もつと言うと、俺の『偶然』を信頼した格好であった。なんせ、この状況。シャリアちゃんよりも、近衛兵が敵だった方が『最悪』に近いではないか！

まあ、結局は最悪の状況なんだけだね。

いやいや、前向きに考えよう。首を切り落として「やつぱり間違いでした」ってオチ

だったらシャレにならない。むしろラツキー。

そんな時、部屋にドカドカと入り込む複数の足音。

「何事ですか？」

「ワッツ副長！ どうして？」

部屋に入り込んできたのは残った五人の近衛兵。

彼らが見たのは首が千切れた副長とピークさん。それに血塗れのお姫様と侍女。こりゃあ意味不明だろうね。

とは言え、状況を考えると全員洗脳済みと見るのが正しいが……どうだ？

「何があつたんです？」

血相を変えて問い直す彼らに怪しいところは見当たらない。

認識をズラされている可能性がある。じゃあどうやって何をズラすのか？

「ワッツさんとピークさんが急に襲ってきて、それで無理矢理に脱がされそうになって、それで！ シャリアが！」

まあ、この方向性で行くか。当たらずといえども遠からずだろ？ なんでって、人気の無い部屋に理由を付けて呼びだそうってのがアレ。

この部屋、怪しいところなんかまるで無いからね。

ネルネの時に解つたが、殺すつてのはやっぱり忌避感が強い。毒殺の時もゆつくり休

める薬と言つてネルネに持たせたワケ。

今回はどうか？ 言つてはナンだが近衛兵達に俺はモテモテ。そりやあもう、宗教染みたレベルで崇拜されている。そんな彼らに俺への敵愾心を植え付けるのは並大抵じゃ無い。

どうせ欲望や独占欲と紐付けて、ユマ姫と結ばれるにはコレしかないとかそんなんだらう？

わざわざキツイ言葉で殺せなんて言わんでも。ユルユルになった精神力で俺の穴までユルユルにしちまえば、勝手に血みどろの殺し合いが始まるに違いないのだから……「まさか！ ワッツ副長に限つて」

だよな、真面目そうだもんね。俺はちよつと服をはだけたまま、残つた兵士の一人に抱きつく。

「本当なんです！ わたし！ 恐くて！」

嘘だな！ 涙ながらに見上げると、ハツと息を飲むのが解つた。

「何を？ されたのです？」

何をつて？ 部屋に入つてそんなに経つてないだらう？ たぶん整合性とか考える脳みそが飛んでるね。

「私の服を脱がすと、無理矢理……」

兵士の手がプルプルと震える。俺は他人事の様にソレを冷めた目で見つめた。

それで、ゴクリと唾を飲む音まで聞こえたと思つたら、震える手でガシツつと肩を掴まれる。

ちなみに肩はこの世界では性的な場所だからね、あんまり驚掴みにするモンじゃないよ、お姫様との約束な。

「無理矢理、こころしたのですか？」

「キャッ！」

更には押し倒される。コレはもう万国共通でアウト。半端に服をはだけていたから、冷たい床材の感触を味わうハメに。

「アイツは！ 姫サマになにを？ 俺より先に！」

目が血走って正気では無い。それは他の兵士もだった。

「オイ、俺が先だ」

「さて、階級順だろうが！」

「この期に及んで、階級なんざ関係ないだろ？」

「真面目にやれ！ 俺は姫サマをお守りしてるんだ！」

「その体勢でどう守ってるって言うんだ！」

ギャーギャーと騒いでくれる。まさに脳みそトコロテン状態である。いつそ、色々と

聞いてみるか？ トコロテンみたいに、ピユツつと答えてくれるかも。

俺はにこやかな笑みさえ浮かべ、覆い被さる無礼な男に、あえて自分から抱きついた。

「素敵な匂い。香水ですか？」

「にお……いい？ 匂いとは？」

「覚えがありませんか？ でしたら、どこかでお香でも使いませんでしたか？」

「そうだ……野営の途中で良い匂いがしてきた、かも？」

「お香なんて焚いてない、だけど煙は良い匂いだった」

「きつと俺が勝手に焚いてたんだ、俺のお陰ですよ」

みんなして、ボーツとした顔で語り出す。物事の整合性やらがグチャグチャだ。

「女性がいませんでした？ 黒髪の」

「居た、かもしれない……」

「彼女は何と言っていました？」

「そうだ！ ユマ姫が偽物かもしれないと」

「私が、偽者ですか？」

「あ……ああ」

押し倒した体勢。兵士の顔が至近距離に迫る。お互いの顔が良く解る距離、相手はま
たもゴクリと唾を飲む。

「犯せと。汚れ無き聖女が汚れるならば、偽者だと暴けると……俺が……俺だけが暴けると」

「なるほど……」

グダグダだ、思った以上に洗脳は適当で良いのか。コレは良くない情報だな。

「そうだ、俺が、俺達が！ ユマ姫の正体を暴くんだ！」

「何を！」

今まで揉めていたのにどうした事か。五人の兵士が団結し、一斉に俺へと襲いかかる。

腕を、足を、皆が寄ってたかって取り押さえ、口さえも封じる。

「ふぐっ！ ふぐぐぐぐぐ」

精一杯の抗議。そっくりさんじゃないよ！ 本物だよ！ 髪色は違うけどね！

あ！ アニメだとなりすました他人フラグじゃないですか、やだー！

「まあ見てろよ、俺達がタツプリ穢してやるから」

「ハアハア……」

「そうだ、偽者なんだ」

「俺達が……俺達で！」

「俺達のモノだ！」

力自慢の男五人に組みしかかれて、一斉に犯されそうになる。いやー恐い。キユンと来ちやうね。エロゲーみたいだな！

でも、こう言うシーンで大写しにするべきは犯されそうな女の子の姿だろ？ 俺の目の前にはむさい男共しか居ないのか？

あ、俺が女の子役ですか？ そうですね。

馬鹿な事を考える俺の眼前に迫るのは、突き出されたむさ苦しい男のクチビル。こんなクソゲー返品でしょ。

——サクツ

でもコレ。ジャンルはホラーなんですよ。

唇から出て来たのは舌ではなく、ナイフの先端。

「ハアハア！ 死ぬッ！」

はい、シャリアちゃんです。彼女が居るのに放置してる段階で兵士達はハッキリと壊れてるんですわ。

服をはだけた俺しか見てないんだから、そりやシャリアちゃんだって拗ねるよ。彼女もお年頃の女の子だよ？ プライド傷つけちゃダメ！

「ゲッ！ ゴフツ」

「きたないッ！」

兵士の口から粘ついた血がゴボツつと零れるので、俺は体を捻って回避する。

と、その間もシヤリアちゃんはサクサクと死体を作成していくのだった。かるーく刺しただけなのに次々と殺していくから凄い。

これぞプロの仕事だね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

近衛兵の始末が終わってホツと一服。俺はシヤリアちゃんとお食事会の真っ最中だ。

モグモグ。

「で、魔女を追ったら近衛兵が洗脳されていたと?」

「ハイ、妨害しようにも見た事も無い怪物を使役していて。とてもじゃないですが今の

私では倒せないと……」

バウキュリヴァル
王蜘蛛蛇だろう、あんなのが居たら手を出さないのが正解だ。

「それで、魔女と魔獣が離れた瞬間を狙ったのですが……」

その辺りが俺が制御室で光点を見たところだろう、シヤリアちゃんは少し離れた場所
で様子を窺っていた。

しかし、暗殺は洗脳された近衛兵に妨害されたい。

「ケシは痛み止めの効果があるので何度か使った事があるのです」

「そうなのですね、下手をすると中毒性のある危険な薬です、常用する事の無いようにし

て下さい」

「そうなのですか？」

うーん、ケシが麻酔になるとは知っていても、麻薬に成る事は知らないか。

「どちらにしろ、手足の感覚が鈍るのであまり私は使いません。魔力酔いを起こすこの状況では使った方が良いのかも知れませんが……」

下手をして魔女に操られたら元も子もないしねえ……そうなるか気になるのが生死不明の隊長さん。

「ゼクトールさんは？ 近衛兵の隊長なのですが」

「一人、効きが悪かったらしく、その場で魔女に刺されていました。恐らくは……」

「……そうですか」

ううっ、ゼクトールさんだけは頑張ったんだなあ……泣けるぜ。

と、ソコに木村の声が聞こえて来た。

「ユマ姫！ ドコです！」

「ココです！」

おおっ！ 良くココが解ったな！

「なっ！ 何ですか？ コレは！」

木村はすっかり腰が引けている。アラかわいい。

うんうん、女子会のただ中に入っていくのはハードルが高いよね。その気持ち解るよ。

「食事中です、食べますか?」

血の池の中。ナイフでこそぎ取ったモノを笑顔で木村へ突きつける。

この女子会。話すのは恋バナじゃないし、食べてるのはクレープじゃ無い。

殺戮の反省会と人間の脳みそだ。

木村も混ぜりたいなら混ぜても良いよ?」

「いえ、遠慮しておきます」

「そうですか……」

言いながらも俺は脳みそをパクリ。そう言えば味覚が戻って初めての食事だ。

濃厚で旨いと言えば旨いけど、醤油が欲しいねコレ。

そんな俺達に、引き攣った顔の木村から控えめな提案が。

「あの、食事でしたら腕によりを掛けたモノを提供しますので。まずはココから脱出し

ませんか?」

「そうですね……」

ノリで食べてしまったが、もっと久々の味が解る食事を大切にすべきだったか?

しかし美女が二人、血溜まりの中で人間を食べてるってビジュアルはどうかね?

結構そそるんじやありません？ 俺は血塗れのままに妖艶に微笑んだ。

「私が、恐いですか？」

凄惨な光景から目を背ける木村に問いかける。

「俺は、……可愛いと思いますよ？」

ツンデレを披露した時と一緒にやネーか！ 俺のツンデレはそんなにグロ案件だっ

たと言うのかね？

ブンブン！

王蜘蛛蛇2

ユアマツ
姫と木村、戦力外二人を置き去りにした俺は遺跡を駆け抜け、遂に逃げ惑うソルンを発見した。

追い詰めた先は、俺が遺跡に侵入する際に降りてきた大穴。

見上げれば微かに日の光が差してる。どうやら遺跡の中で一晩明けてしまったみてえだな。

アイツの回復に時間が掛かったとは言え、思えば長丁場になったモンだ。

「そろそろ観念したらどうだ？」

俺からの心の籠もった忠告。なのに聞いちや居ないとばかりソルンは隠し持った自在金腕ルー・デルオンを上層へと投げつけた。

「ハッ！」

「やせるかよ」

俺はそれを無造作に断ち斬る。

投げ縄の如く、剥き出しの鉄骨に引つ掛かった自在金腕ルー・デルオンをブツリと斬れば、上層へと逃れようとしていたソルンは地べたに転がるハメになる。

「グッ」

「全く、生け捕りつてのは手間だぜ」

アイツらが雑だから俺が苦勞するハメになる。他にも捕虜が居て、コイツを斬つて良
いならとつくの昔に終わつていた。

俺みたいな良識派が、いつだつて苦勞するンだよなあー。

「オラ！ 神妙にしろ！」

苛立ちを乗せてソルンの背中を踏みつける。俺は長身で体重もかなりのモノ。ジタ
バタと暴れるが逃がしはしない。

しかしソルンは突然に抵抗を止めた。そして地べたに這いつくばったまま、背中を踏
む俺を振り返りニヤリと笑つた。

「そうだな、解つた。降参だ」

なんだ？ 奇妙だ。諦めた顔じゃない。そう思つたのは一瞬。

——いや、見てるのは俺じゃ無い、後ろ？

ココは俺が降りてきた大穴だ。背中を踏みつける俺の後ろには遙か地上まで虚空が
広がっているハズだが……

——ッ！

気配と空気を切り裂く音。

受けッ？ いや！ 躲す！

横へゴロリと転がると、慌てて立ち上がった目の前。先程まで俺が居た場所に立っているのはひとりのエルフ。

「オマエか！」

「……………」

答えは無い。不可思議なベールを被った長身のエルフがソコに居た。気が狂ったグリフォンを倒した奴で間違い無い。

「……………」

奴は無言のまま、その長身より更に長大な大剣を突きつけて来る。コイツの異常な切れ味を俺はよく知っている。バターみたいにグリフォン化物を切り裂いていた。

「つくづく邪魔してくれるなア！」

「……………」

無口なヤツだ。しかしソルンを守って一步も退く気は無い様だった。

まるで隙が無い。凄腕の剣士は何人も見てきたが、ここ最近はとんでもないヤツとばかり戦っている気がする。

力なら崖上で死闘を演じたウォー・ハンマーを振り回すブツガー。技なら謁見の間で戦った魔剣使いのローグウッド。

しかし、コイツは力も技も、そして武器の性能でもそれらを遙かに上回る。
「そろそろ名乗っちゃくれないか？」

「……………」

名ぐらい聞いておきたかったが全く喋る気は無いらしい。だが、思わぬ所から返事があつた。

「彼は私のナイトよ」

「黒峰ッ！ オマエか！」

遙か上空から声が掛かる。現れたのは久しぶりに見るクラスメイトだった女。

「ンだよ？ そのオモチヤは、面白そーじゃねーか」

「でしよう？ 私の元に下るなら遊ばせてあげるわ」

黒峰がいるのは遙か上空。切り取られた小さい空を背に巨大な黒い球体が虚空に浮かんでいた。

ドローン！ いや人間が乗ったらドローンとは言わないのか？ プロペラを内部に複数搭載した球体の檻。そんなモノが空中に静止し、その中で優雅に座っている。

その巨大な球体がコチラへゆっくりと下降してくる。

「オマエ」

「……………」

追いつがろうとするがボールのエルフに止められる。コイツを斬らねば追撃は不可能。

しかし、一筋縄でどうにか出来る相手では無い。

「ソルン。行きましょう」

「はい、クロミーネ様」

そうこうしている内に地面に降り立った球体はソルンを回収しちまう。クソツ！

球体はそのままゆつくりと上昇。俺はエルフと遊ばなければならぬようだ。

「おいおいナイト様よ！ 置いていかれたみたいだなあ！」

「……………」

無言、それでも構わない。機先を制すればそれで良い。

俺はヘラヘラとした態度で近づいた。毒気を抜かれたのか知らないが、斬り掛かってくる様子はナシ。

「しっかし、オタクいっつも顔を隠して、さては恥ずかしがり屋か？ それともよつぼど

の醜男か？」

「……………」

刀も抜かずに話し掛ける俺に、時間を稼げるなら好都合とばかりに動く様子がない。

でもな、納刀した状態でも瞬時に斬りつける技がある。

——シッ!

居合いだ。静止状態から突然の横薙ぎ。だが読まれていた。バックステップで躲される。

お返しにと相手の一振り。大剣とは思えぬ速度で同じく横薙ぎの一閃。いや、同じに見えて剣のリーチが全く違う。

俺の剣を避けた先からでも余裕で届く一振りを俺は伏せて躲す。

「行くぜ!」

大剣を振り抜いた後、がら空きの胴体を斬りつけるのは長物相手のお決まりの手だ。

「……………」

「嘘だろ!?!」

しかし、振り抜いたハズの大剣はその重量を感じさせず切り返して来た。

今度は伏せて避けようも無いナナメに切り下ろす斬撃。

今度はジャンプで回避するも、削られた床の破片が宙に留まる俺の身を打つ。それだけじゃ無い、その大剣は地面に埋まった事が嘘だとばかり、再びの方向転換。

宙で逃げ場の無い俺の身を追撃する。

こうなつちまうから剣術に限らず、戦闘においてジャンプなんぞもつての他、そう教える武術は多い。

だが、実戦にルールなんざ存在しない。特に俺の様な天才にはな!

「オラツ!」

「グウツ……」

俺は空中で床を一閃、その反動で俺はヤツの大剣の軌道から逃れると同時に、削られた床材がヤツのヴェールを吹き飛ばす。

そうして初めて見るヤツの顔は端正なエルフのイメージそのもの。

「案外イケてるじゃねーか、よっほど顔に自信が無いのかと思っただぜ」

「……………」

「褒めてるんだから喜べよ」

めんどくせえ! いや、洗脳されているんだろが、ここまで意識が無いのはどうなんだ?

お互いの剣の威力が規格外。それ故に一切の受けが取れない。防御が成り立たない。故に常に死と隣り合わせ。一瞬の油断で全てが決まってしまう。

自然とにらみ合いが増え、斬り合っている時間は僅か、殆どの時間を相手の隙を窺う事で消費してしまう。

その間にドンドン黒峰達は逃げて行ってしまいうだろう。時間は俺の味方をしない。

「田中ア!」

いや、そうでは無かった。聞こえて来たのは前世来の親友、木村の声。「無事だったのですね！」

そして性別や種族まで変わってしまった高橋の可愛い声も。

「形勢逆転だな、降伏するなら剣を捨て「えっ!?!」」

ドヤ顔での俺の宣言はその可愛い声に遮られた。

イヤイヤ高橋さん？ ココは俺の見せ場なんですが？

「そんなっ！ 嘘っ！」

そればかりか、ヨロヨロと長身のエルフへと近づいていく。

「危ねえぞ！」

「離して！」

馬鹿かコイツ！ 馬鹿だ馬鹿だと思っていたが斬り合いのど真ん中に突っ込んで来るヤツがあるかよ！

「あの人は……私の！」

？ オマエの何だっつてんだよ！ そう怒鳴りつける前、遙か上空から声がした。

「彼は私のモノよ、返して貰うわ」

黒峰だ！ まだ居たのか！ だったら今からでも！ そう思っただけで先。

落ちてきたのは悪魔だった。

「ギョオオオオギョオオオ！」

ズドンと音を立て、砂埃が舞う。

その中心に立つのは再びの王蜘蛛蛇！バウギユリウアル しかも先程の倍はある！

「代わりにそのコと遊んで下さる？ 私には彼が必要なの、来なさい！ エスプリ！」

エスプリと呼ばれた長身のエルフは呪文を唱える、まさか？

『我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を』

飛ぶのか！ 凧も使わず、風の力だけで！

長身のエルフはふわりと宙に浮く、まるでコチラを睥睨する様に。

セーラに魔法で飛べないのかと尋ねた時、エルフの中でも魔力に優れた者のみが自在に空を飛ぶと苦々しい顔で言われた。

セーラはそれなりに優秀らしいがそれでも無理、だとするなら、ソレが可能なアイツは何だ？

しかし、ポケットと上を見ては居られない。なにせ眼前には恐るべき化物が迫っている。

……だつて言うのによ！ それらにまるで頓着しねえお姫様が一人。

「待って！ 待ってください！」

ヨタヨタと歩き、浮き上がっていく男へと手を伸ばす。

「危ねえ！」

その進路を王蜘蛛蛇バウギユリツアルの触手がなぎ払う。ソレを間一髪、抱きかかえて押し倒す事でも何か回避。

「なんで！」

しかし返ってきたのは感謝の声では無かった。

恩に着せる気はねえが、なんだってんだ！ その言い草は。文句を言おうと覗き込んだユマ姫の瞳。

押し倒した体勢、間近に見る銀とピンクのそれらの中に、俺は全く映っていなかった。そこに映るのは虚空に浮かぶエルフの男。そこへ向かってユマ姫は必死に手を伸ばす。

曇り無き水晶の如く大きな瞳、その中で像を結ぶ男の姿が急に歪んだ。ユマ姫が泣いているのだ。

大きな瞳一杯に涙をたたえるその様子に、マヌケで狂暴な高橋の面影はまるで無い。見た目通り、年頃の女の子。俺はその理由を思い知る事になった。

「行かないで！ ……パパ！」

「パパあ？」

——アイツが、パパ？ つまりエルフの国の！ 王か！

……確か名前はエリプス王。それでエスプリたあ、ずいぶん^{エスプリ}と知性のない改名じゃねーか。

確か、エルフは王族に近いほど多くの魔力を持つと、そう聞いた。

じゃあ、本当にアイツが……

——ギョオオオオ！

しかし、感傷に浸る余裕は無かった。寝っ転がった俺達に怪物の触手が迫る。

「何やってんだよー！」

間一髪、打ち付けられる触手の一撃から床に転がる俺達を救い出したのは同じく触手？ いや、か細い金属のワイヤーだった。

ルー・デルオン
自在金腕だ！ 木村が俺達を窮地から引き摺り出した。

「木村あ助かつたぜ、それでオマエはしっかりしろ馬鹿！」

「ハア！ ハア！ くう！ 解った」

俺の腕の中、ユマ姫が必死に涙を拭う。顔の造形こそいまだ幼い少女のソレだが、中身は見知った男の顔へと戻っていた。

その相貌が狂気に歪む。

「まずはコイツを倒す！ ソレで良いだろ？」

「ああ、細けえ話はそれからだ！」

「しっかし、どう倒す？ さっきのヤツより大分デカいぜ？」

木村が不安になるのも仕方ねえ。なにせさっき二人で大苦戦したヤツの倍の大きさ、そして火薬が一切残っていない。

俺達が見上げる先、触手を振り回す巨大な王蜘蛛バウギユリグアルが立ち塞がる。

王蜘蛛蛇3

父様が生きていた。

全てが変わってしまったあの日。謁見の間に立て籠もった父は、共に逃げ延びる事を良しとしなかった。

捕虜にされたと言う話も無い以上、当然あのまま死んだものと思っていた。

だけど、違った。アイツらに、黒峰に操られていたんだ！

失われた家族との幸せな日々。もしも父様だけでも助けられたら、全てが元に戻りそうな気がして……夢中になって手を伸ばした。

そんな事はあり得ないのに……

お陰でだいぶ無様を晒した。何を微かな希望に縋っているのやら、俺に出来るのは立ち塞がる『敵』を残らず俺の『偶然』の道連れに殺す事！

「まずはコイツを倒す！ ソレで良いだろ？」

精一杯に強がって、見上げる先には巨大な影。

バウギユリツアル 王蜘蛛蛇、その無数の触手が縦横無尽に周囲を切り裂いていた。

何しろ巨大だ、さっき倒した個体と比べても倍ぐらいのサイズがある。

伝説の魔獣。それがまるでバーゲンセールじゃないか！

コイツを倒せば英雄だ。とか言われるが、だったら子供の頃に妹と、そしてさつきも二度もコイツを退治した俺は、さしずめ勇者ってトコか？

俺こそがお前の天敵だ！ 来いよ、見せてみるお前の全力を！

「つてー！ 全力で来すぎだろうが!!」

超大量の触手に追いかけて回される。俺はぶかぶかの服で全力のトンズラ。

自慢の魔法はどうしたつて？ 今の魔力じゃロクな魔法が使えないし、なんなら触手が近づくだけで魔法なんざキャンセルされてしまうので却って危険だ。

王蜘蛛蛇バウギユリウアルつてヤツはそれ程に健康値のカタマリなのだ。分裂し伸縮する体がそれぞれ健康値を纏っているために、どうやっても魔法が掻き消されてしまう。

「コツチだー！」

木村ルー・テルオンが操る自在金腕が視界の端に滑り込む。慌ててソレを掴んだ瞬間。俺は舞い上がり、世界は空転する。

「うおおおお？」

旋回し反転する視界の中、俺を追いかける触手と自在金腕ルー・テルオンの壮絶なドッグファイトが巻き起こる。

その一方で田中が触手をバスバスと斬りつける音まで聞こえてくる。

おーおーおー、勇者である俺を守る為にみんなして必死じゃネーの！

「全く！ デコイとしちやあ優秀だな」

「違いねえ！」

……あ、ハイ。

デコイとかは前世でも良く言われていた。同じように騒いでいても、何故か俺だけ先生に怒られるって言う理不尽。つまりアレだ、お馴染みの『偶然』の力だよ。

つまり今回も何故か王蜘蛛蛇バグギユリガエルは俺ばかりを狙って触手を伸ばす。

コレで俺の防御力が高かったらデコイどころか優秀なタンクなんだが、残念ながら即死体質である。

「死んでも復活するんだから頼もしいぜ！」

「そう考えりや、滅茶苦茶優秀なタンクだな」

いや、二人して何言ってるの？ あんな復活何度も出来ねーからな？ 偶然が幾つも重なった奇跡。ソレさつきから言ってるから！

——あ、言ってたかった！

やべえ！ やべえよ！ 俺、何度も死ねないよ？ そもそも打ち所が悪けりや魂だつて無事では済まないハズ。

そうじゃ無くても俺の体を一から再構成するほどの薬が残っていない。

二人に文句を言おうにも、俺の体は空中を滅茶苦茶に振り回されている最中だ。

さつき食ったモノをゲロりそう。俺、何食ったつけ？ 脳みそじゃん！ 真性のホラー映像をお届けするハメになるよ？ ソレでもいいの？

「しかし幾ら斬つても埒が明かねえぞ！」

「俺の指も限界だ！」

……ダメみたいですね。

「無理だ！ スマン逃げろ」

「ぐべっ！ オロオロ」

振り回された末、二階層上のフロアへと投げ飛ばされる。デコイとしてはお役御免か。そんでまあ結局ゲロりました。盛大に。

お姫様が脳みそゲロる光景ってどこかの好事家こうずかに需要ありませんか？ 無いですね。

「ハアハア……」

それでも息つく暇も無い、背後から無数の触手が迫ってくる。

「お助け！」

フロアの中を奥へ奥へと駆ける。孤立してしまうがコレが最善。

何故って、あの王蜘蛛蛇バウギユリツアルは余りにも巨大で、吹き抜けになつたあの場所以外にはサイ

ズ的に入つてこれないからだ。

——ギョオオオ!

そう思っていたら来ました。小さく千切った分体が。

バウギユリツアル

王蜘蛛蛇は体を分割したり結合したりが可能である。それでも体の核は一つなので、長時間の遠距離操作は不可能らしいが、この場合何の慰めにもならない。

「やばいー！ やばいー！」

あの体積から考えれば百分の一位のサイズか？ それでも俺にとつては十分な脅威だ。机が並ぶオフィスフロアみたいな場所をひたすら駆ける。

ポーネリアの記憶にもこの場所の思い出は少ない。それこそ大昔は大勢が働く場所だったらしいが、ポーネリアの時代には既に使われていなかった。

背後の敵をどう切り抜けるか考える俺の前、かつての脅威が立ち塞がる。

——ピユイーン！ ブブブ……

球体ドローンのザカート！ だが今は敵じゃ無い。それどころか救世主。

生体認証済みの俺を無視して、当然とばかり王蜘蛛蛇バウギユリツアルへと殺到する。

——ギョオオオ！

しかし触手になぎ払われてしまう。自慢の電気ショックも効果はいまひとつ。流体である王蜘蛛蛇バウギユリツアルには効かないのか？ いや、単純に人間向けだから電流が足りない可能性が高い。

しかし、意外な程に効果を發揮した物が有る。名前はログラム。我らがスライムドローンだ！

——ギョオオ！

バウギユリウアル
王蜘蛛蛇は完全にその足を止めてしまう。スライムの粘液が体に混じってしまおうと、一歩動く度に体が床へと張り付きもげていく。

コレだ！ スライムドローンを集合させて王蜘蛛蛇にけしかければ？ バウギユリウアル

いや、それでも足止めと、少しばかり体積を減らす事しか出来ないだろう。どうにかして燃やさないと……でも火薬が無い。あるのは木村が探してきた灯油だけ。

アルコールやガソリンならまだしも、灯油を爆発的に燃焼させるのは不可能だ。

——そうなの？

久しぶりに父様の顔を見たからだろうか？ 頭の片隅でセレナの声があった。だからだろうか？ 俺は家族の事を思い出してしまった。

幸せな家族だったと思う。なのにみんな殺されて、生きていた父は洗脳されて敵に回った。

悔しさに噛みしめた奥歯がギリリと悲鳴を上げる。くう！ ダメだこんな所で泣いちやダメだ！

——魔法のこと、教えて。

またセレナの声が聞こえた。魔法なんて私よりもずつとずつと得意だったのに、それでも私のオリジナル魔法を見せるとスゴイスゴイと褒めてくれたっけ……

——あつ！

頭の中で色々なピースが嵌まっていく。

「そうだ！ イケる！」

俺は壁に埋められた簡易コンソールに取りすがる！ フロア内のドローンなら操作可能だ。

一カ所に集めれば……唯一の難題である足止めは、スライムドローンで出来るハズ！
バウキュリツアル
 王蜘蛛蛇め！ また俺が、いや、俺とセレナが！ お前の天敵だつて所を見せてやる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

古代遺跡の中、壁も床も削り取られ出来上がった吹き抜けの底。

地下深い場所でありながら、遙か上空から差し込む光が太陽が中天にあると告げていた。

その強い光で大きな影を落とすのは、バウキュリツアル
 王蜘蛛蛇の巨体であった。

相手は伝説の魔獣。その中でもとびきりのサイズ。立ち向かう長身の男が小人のように見える程。

20階層での戦いは熾烈を極めていた。

「わかつちやいたが、キリがねえ」

田中は日本刀で触手を切り裂くが、少しづつしか敵の体積を減らせない。

それどころか切り落とした触手に足を取られる事も多くなってきた。

「スマン、俺に至っては何もできねー」

「くだらねーコト言うなよ」

木村は悔しそうだが、田中はここまで何度も木村が操る自在金腕ルーニェルオンにピンチを救われて
いる。

しかし、それだけ。二人にはどうしたって相手に纏まったダメージを与える術が
ない。

木村は虎の子である灯油の回収に成功していたが、これだけでは決定打と言える程の
火勢を得るには全く足りない。

木村はコレがガソリンだったらと思わずには居られない。それにしたって大規模な
爆発を起こすにはひと手間必要なのだが……

なにか手は……そう考える木村の鼻腔をくすぐる灯油の匂い。

まさかと振り向くと、用意したステンレスタンクが無くなっているでは無いか。

嫌な予感に周囲を見回すと、化物を挟んで向こう側に少女が立っていた。それも抜群
に狙われ易く、死にやすい少女がだ。なのに堂々と腕さえ組んでいる。

決死の思いで比較的 안전한上層へと退避させたつもりがノコノコと戻って来てしまっていた。

「あんの馬鹿！ 脳みそにオカラでも詰まってるのか！」

田中が叫ぶ、コレには木村も全くの同感。いや、脳みそはお腹に詰まっているのだが、と先程の強烈な光景を思い出す。

しかし冗談を言える状況では無い、ココは危険地帯。正直言つて自分の身ひとつ守るので精一杯の場所だ。戻つてこられるのありがたくなかった。

しかし、ユマ姫も本物の馬鹿じゃ無い。なにか手があつて戻つたに違いないのだと思ひ直した。

まずは灯油で何かする気だろう、しかしそれだけと言うことはあり得ない。では何か？

「ドローンか！」

床に広がる大量のスライムに木村は快哉を叫ぶ。

確かにコレで足止めは可能に思える。しかし、足を止めたとして、そこに灯油をぶっかけても大したダメージは期待出来ない。

何度も言うが、灯油はそう簡単に燃えるモノじゃ無い。

(何をやる気だ?)

木村の心配を余所に、ユマ姫はステンレスタンクを抱え、スライムの前に陣取るだけ。
(冗談だろ?)

まさか本当にスライムで足止めして灯油で燃やすだけ? そんなんでどうにか出来る怪物では無い。

せめて前回見せた火薬と混ぜるなどの隠し球が無くては……しかし少女は建物のドコにも火薬は無いと言っていた。

「畜生! 行くぞ!」

田中は駆ける、驚くべき速度、そして脚力。だが木村の方はとても間に合いそうに無い。

なのに、あろう事か当のユマ姫が王蜘蛛蛇バウギユリツアルを挑発する。

「来いよ! デカブツ! 俺はココだぜ?」

両手を広げ、堂々と宣言する。浮かべるは凶悪な笑顔。麗しの姫の仮面を脱ぎ捨てたソレは、明らかに高橋敬一のモノに見えた。先程見せた、悲劇のヒロインの泣き顔がどこにも無い事に、木村はどこかホツとする。

(しかし、どうなる?)

無防備なユマ姫へと王蜘蛛蛇バウギユリツアルが殺到する。それに遅れて田中、大きく遅れて木村も続いた。

——ギョオオ？ ギョオオオオ！

狙い通り王蜘蛛蛇はスライムに足を取られる。スライム達はいじらしくも自爆覚悟で王蜘蛛蛇の足元へと滑り込み、確実に足を奪った。

——ギョオオオオ！

だが、この化物には触手がある。遠距離からでも一直線に伸ばされる触手。コイツをどう防ぐつもりなのか？

「ヤベッ！」

（ヤベッって言ったか？ 今！）

木村は耳を疑う。しかし両手を広げたまま仰け反るユマ姫の顔色は悪い。

（マジで何も考えてねーじゃねーの！）

木村は焦る。だがこんな時、頼れる男が一人居た。

「オラア！」

田中だ。

駆け抜けざまの一閃だが、図太い触手がアツサリと千切れた。ユマ姫へと届く寸前に紙一重で間に合った形。

しかし、それに終わらない。王蜘蛛蛇はその足を切り崩し、スライムの呪縛から逃れようとした。

「ハハハ、ヒヤアアアハハハ！」

真相を知るのには狂った様に哄笑こうしょうを上げる一人の少女だけだった。煌々と輝くオレンジの光焰が少女のイカレた笑顔を照らし、その背後には化物よりなお巨大な影が浮かんだ。

ユマ姫は狂った笑いの中、劫火にのたうつ化物を見て、ふと寂しげに笑った。

「ありがとう、セレナ」

それは今は亡き、幼い彼女の妹が褒めてくれた魔法だった。

蒸し暑い馬車の中、ユマは空気中の水蒸気を集めた後、再び霧状に散布した。それだけで随分と涼しくなったもの。

けれども今回散布したのは水では無い。

灯油だ。

灯油を霧状に吹けば、ちよつとした電気でも爆発的に燃えるのは当然。

とは言え魔力は健康値に掻き消されるため、直接に王蜘蛛蛇バウギユリツアルの回りに灯油を散布する

のは不可能。

散布した場所に敵をおびき寄せ、留まらせる事が肝要だった。

しかし一番の問題となるおびき寄せにはユマ姫の『偶然』があり、そして足止めにはスライムが有効だった。

燃えさかる火の中、化物の悲鳴が木霊する。

——ギョオオオオオオオオ!

「ゲツッ! ゴホツッ!」

ユマ姫が咳き込む。

「ぐえッ!」

「ハアツ……なん……だ?」

田中と木村も不調を訴える。田中は爆発の余波もある至近であったので当然であるが、十分に距離を離れたユマ姫と木村すらも膝をつく。

何故か?

灯油を霧状に散布する。それは燃えにくい灯油で火力を生み出す必要条件であるが、それだけでは先程のような大爆発が発生する理由としては弱い。

もうひとつ、タネも仕掛けも必要だった。

そのタネは? ——酸素である。

コレもまた、いや、これこそがセレナが初めてユマ姫を凄いと認めた魔法であった。

それを応用してセレナはレーザーの様な熱線を放ったが、ユマ姫自身も幼少のみぎり
ザルギルコール
大牙猪を足止めするファインプレーを演じている。

魔法は対象の質量が重いほどにその魔力を要する。

その特性から、霧状に灯油を撒くことも、酸素を一カ所に集めることも、現在のユマ姫の僅かな魔力で事足りる。

引き換えに必要と成るのは、広範囲へ薄く、広く、魔力を制御する圧倒的な制御能力であるが、ソレに関してユマ姫は天性のモノを持つていた。

——それこそエルフの歴史の中で並ぶ者が無い程に。

魔力値や健康値と違い、制御力と言う存在を示す解りやすい指標が無かったのは彼女にとつて不幸だったのか、それとも幸いだったのか？

今となつては知る由も無いが、エルフの中では落ちこぼれの様にも語られるハーフエルフの姫はある意味で度を越した天才であったのだ。

そして、これはいまだ本人すらも知り得ない事であるが、ユマ姫の体に取り込まれたセレナの秘宝。

それが酸素の収集と灯油の散布と言う、極めて複雑且つ真逆とも言える二つの魔法の多重制御を可能にしていた。

セレナは姉の様な優れた魔法制御にずっと憧れ続けていた。

それ故に願ったのは訓練用の秘宝。それが今、ユマ姫の中で生き、彼女の命を繋いでいる。

「やった、やったよセレナ」

ふらつきながらも笑う。爆発的な猛火を彩る為に、ユマ姫は危険なまでに周囲の酸素を集めてしまったから。

だが、施設の換気装置は生きている。それが霧ギユルドスの悪魔の効果を施設全体に行き渡らせたのは記憶に新しい。

程なくして皆も復調する、ユマ姫がそう思った時だった。

——ギョオオオオオ！

燃えさかる炎の中、王蜘蛛蛇バウギユリウアルが立ち上がる。炎の中でスライムが焼け、足止めが効かなくなったのだ。

一步、また一步と炎の中を歩み、いよいよ炎の外へと足を掛ける。

「そんな！ 効かないの？」

効いてはいるのだ、だが田中と木村が必死に削った前回と違い、今回は王蜘蛛蛇バウギユリウアルの体積が余りにも大きすぎた。

熱に弱いとは言え、その内部まで熱が伝わり切らない。燃え盛るに構わず王蜘蛛蛇バウギユリウアルはその触手を伸ばす。

一方でユマ姫を守る者は誰も居ない。田中は位置が王蜘蛛蛇バウギユリウアルと近すぎて、爆発の余波をマトモに喰らった。それより後方に居た木村は炎の向こう側で身動きが取れない。

もちろん近衛兵は全滅済み。頼みの侍女は魔力酔いにつき戦力外と地上へと帰して

しまつてゐる。

「い、嫌ッ！」

だから、彼女を守る盾は無い。火がついたままの触手がゆつくりと迫る。

「ひっ！」

か細い悲鳴。熱で焼かれ鈍重な動きの触手だが、酸欠に陥る少女の動きはそれ以上に遅い。

あつという間に壁際まで追い詰められた。彼女はギリリと歯噛みしてまなじり涙をたてる。

ゆつくりと伸ばされた触手はグツグツと煮えており、ユマ姫を撫でるだけでその美しかんばせを台無しにするに違いないというのに、それでも誰も彼女を守れない。

「うおおおおお！」

いや、居た！ 彼女を守る命知らずがたった一人。

ソレもまた、あの日の光景の再現となった。

弓の修行をしていた幼少の日。酸素で爆発を起こして尚、それでも向かつてくる大牙猪からユマ姫を間一髪、救い出したのは誰か？

「兄様ッ！」

ユマ姫はそこに兄の姿を幻視した。無理もない、ザルギルゴール大牙猪を倒した時と同じ。上空か

ら飛来し、全く同じ双剣を、全く同じ軌道で突き刺した。

それは王家に伝わる魔剣にして、王子の為の秘宝。双聖剣ファルフアリツサ！

——ただし、使い手だけが、かつての光景と異なっていた。

「マールロウ！ あなたなの!?!」

見上げたユマ姫が叫ぶ。そう、紅顔の美少年、マールロウだ。

彼は大怪我と魔力を打ち消す霧に追い立てられ上層に逃れていた、だが階下に広がる猛火を見て、再び虚空にその身を躍らせたのだ。

「姫は！ 守る！ 俺が、今度こそ！」

それは今回も自殺同然のダイブであった。しかし柔らかい王蜘蛛蛇バウギユリヴアルの体が今度ばかりは良い結果をもたらした。上層からの着地の衝撃が容赦なく王蜘蛛蛇バウギユリヴアルの巨体へと伝

わる一方で、少年にダメージは少ない。

ソレばかりかその勢いを使い、少年は双剣を深く、深く、突き刺していた。

「おおおおおおお！」

ここからも、また、あの日の再現となる。

少年がファルフアリツサが起動すると同時、はさみを広げる様にして王蜘蛛蛇バウギユリヴアルの巨体が分断される。

少年の背に、羽の様に広がった双剣に光焰が反射する。

「アレは！ フアルファリツサ！ 兄様の剣！」

ユマは今度こそハッキリと兄の形見を視認する。

それは田中がエルフの暫定政府から預けられ、ここまで持ち込んだものである。

実は田中は遺跡に侵入した際、倒れていたマールロウ少年と遭遇していた。ユマ姫を救う為に壁を削り、虎の子の魔剣をダメにしたと意気消沈の少年に秘かに魔剣を託していた。

その切れ味は今更語るまでも無い。

「ハア！ たあ！」

一振り毎に王蜘蛛蛇が分断される。そして、落下した分体は即座に灯油に焼かれ、二

度と結合する事は無い。

王蜘蛛蛇はみるみるその体積を減じていく。

「グッ！ ゲエツ！」

但し^{ただ}マールロウだつて無事では済まない。彼もまた、炎の中で焼かれているのだ。酸素も無ければ肺を焼く黒煙すらも周囲に充満している。

「があああー！！」

しかし、彼は斬る事を止めない。半ば消えかけた意識を奮わせ、姫のため、ただそれだけを思つて斬り続ける。

だからこそ、バウギユリツアル王蜘蛛蛇も最期の獲物に彼を選んだ。

「グガツ！」

「マーロウ！」

ユマ姫の見つめる先、バウギユリツアル王蜘蛛蛇の背に乗るマーロウはその腹を串刺しに貫かれた。

突然に足場としていたバウギユリツアル王蜘蛛蛇の背中から触手が生えたのだ。伝説の魔獣とは言え、

予兆無しにそんな事は不可能のハズだった。

バウギユリツアル王蜘蛛蛇は背の上の邪魔者を道連れにするために、なんと自らの腹ごと、触手をもつ

て串刺しにしたのだった。

「あ、ああ！ 誰か！ 誰か助けて！」

灼けて行く無惨な姿にユマ姫はかつての妹をダブらせてしまう。

これもあの日の再現なのか、燃えさかる炎を前に泣くことしか叶わない。燃えさかる

炎の中へと助けに行くことなど誰にも不可能、

「まかせろ！」

いや、違う！ 今回はソレが可能な者が居た。

木村だ！ 射程一杯に自在ルーニデルオン金腕を伸ばすと、貫かれたマーロウの体を救出！

「クソツ！」

しかし助け出したものの、その容体を見た木村は唇を噛むしか無い。

大穴が空いた腹はもちろん、全身の火傷だけでも十分に致命傷。出血も激しく、手の施しようも無かったからだ。

「マールウ！ あなたは！」

そこにユマ姫が滑り込んだが、少年の余りの姿にハツと息を飲む。

「姫サマ……俺、今度は守れたかな？」

「ええ！ もちろんです」

伸ばされた手をユマ姫は必死に握ったが、濁った瞳には既にその姿も映っていない。

「良かった……おれ、今度こそ、ずっとそれだけを思つて……」

伝説の魔獣に挑み、大怪我を負った英雄。それもまた、いつかの再現だった。

劇の中、エリプス王を演じた少年は、その役を全うできなかつた。しかし、今度はどうだ？

後悔に押され、天才子役だった少年は、少女を守る為だけに、戦士への道を志す。

その道がどんなに困難だったかを知る者は、とても少ない。

だが少年はやつとその目的を遂げたのだ、もう誰も、彼を実力不足と笑わない。

「ふふ、大丈夫です。今度は忘れてませんから」

いや、笑う者が一人。ユマ姫だ。彼女だけは笑うのだ。

あの日、無様なミスをしたのは少年だけじゃない、むしろユマ姫こそが真つ先にやら

かしているのを忘れてはならない。

少女はあの時、あの場所で、劇中の大切な小道具を持っていなかった。だが今回は？
「コレを使います」

取り出したのはポーション。奇跡の小瓶だ。

「なに……を？」

少年は解らない、思い至らない。まさかエリプス王の伝説は掛け値無しに本当だったなど、夢想だにしていけない。

エリプス王はゼナの秘術と、その詳細を黙して語らなかつた。だからむしろゼナ自身がセレナの母、パルメになんとなく漏らした言葉が伝説の由来。

「まさ……か？」

古代人の残した薬は、腹に開いた大穴の応急処置のみならず、失われた血液すらも補った。魔法では不可能な事である。

マーロウの傷口はみるみる塞がり、血色すら戻っていく。

ココにエリプス王の伝説が再現された瞬間だった。

「ああ……」

「良かった。間に合いましたね」

奇跡は成った。少年は一命を取り留め、少女は笑う。

その様子に木村もホツと息を吐いた。

しかし、一命を取り留めたハズの少年に悪意が迫っていた。

パウギユリツアル

王蜘蛛蛇の触手、その最期の一欠片。核となる魔石もろとも、対象へとぶつかる

ラストアタック

最期の衝撃はライフル弾に匹敵する威力を秘めていた。

——シュツ！

しかしたったの一太刀でその野望は潰える。

「オイオイ、俺の事、忘れてねーか？」

爆発の衝撃から身を起こした田中は、虫でも潰すような何気ない一振りで、最後の悲劇を回避したのだが……

「なんだよ、もう終わっちゃったぜ？」

「ユマ^{オマ}姫^エなあ！ 思いつきり爆発に巻き込んでおいてその言い草かよ！」

だが、それを知る者は誰も居なかった。

アナタをゆるさない！

「ソルン、一体何があったの？」

「それが……」

巨大球体ドローン、ザルザカートに乗り込み遺跡から脱出を図る魔女クロミーネは、傷ついたソルンに事の顛末を尋ねずには居られなかった。

しかし、ソルンも語るべき言葉を持たない。何もかも解らないのだ。

「ユマ姫の捕獲に失敗したのです」

「見れば解るわ」

クロミーネが降り立った吹き抜けの底。そこからほど近い場所にピンク髪の少女が居た。エルフの都で聞いた通りの特徴的な風貌、ユマ姫で間違い無いだろう。

だが、ソルンはそれこそが悪夢かのように激しく首を振る。

「違う！　違うのです！」

「何が違うの？」

「ユマ姫の捕獲に失敗、それは『生け捕り』が出来なかったと言うことです」

「どう言う事？」

ココに来て、クロミーネにも尋常では無いソルンの様子が気になった。

「ユマ姫は死んだのです。ノエルが言うには……頭を吹き飛ばした上、黒焦げに燃やしたと」

「頭を？」

「そう！ そうなのです！ それを、あのタナカが黒焦げになったユマ姫の遺体を培養槽に入れ肉体を復活させた。それがあのユマ姫です」

「そうなの？ だとしたら何もおかしい所は無いんじゃない？」

「オカシイのです！」

ソルンは悪夢に頭を抱える。

「頭を潰されているのですよ？ ご存じ無いかも知れませんが、頭には人の記憶が保存されているのです！ それが破壊されれば、その人格は永遠に失われる。そのハズなのです……」

ソルンは力なくうなだれる。

ユマ姫を殺してしまったのは誤算だが、忌々しい怨敵、タナカを睡眠ガスで眠らせる事に成功。トータルでは悪くない成果のハズだった。

眠ってしまった男など、ノエル一人で対処が可能。そう思ったが嫌な予感に寝付けず、ノエルの様子をモニターしたソルンは凍り付いた。

まさにユマ姫がノエルにシヨットガンをぶつ放す瞬間だったからだ。

ソルンはログを漁る、ユマ姫を殺したと言うのはノエルの勘違いだったのか？

いや、違った。正真正銘、培養槽は頭が無い死体を受け付け、度重なる警告を発信していた。

そうして出来るのは人形だけ。だが、ユマ姫は歩き、楽しげに会話すらしていた。ソレは理解しがたい言語。なのに三人は通じ合っていた。

あれは？ ……ひよつとして？

「まさか……ニホンゴ？」

「どうしたの？」

「クロミーネ様が口にする言語、ユマ姫も似た様な言語で、タナカ達と会話していました」

「ふうん……」

「ここまで聞けば、クロミーネには全てが察せられた。

「なるほどねー。記憶は頭に保存している。それが普通よねー」

「？ どういう？」

「フツーじゃないのよ、きつと。……私の能力『更新権』は知ってる？」

「もちろんです！ アレこそ、神の力かと！」

ソルンが頷く、魔獣を操ってみせる不思議な力。アレが無ければ遺跡探索をこなす事など不可能だったに違いない。

『更新権』と対になる力、ひよつとして『参照権』つてのもあるんじゃないかと思っただけけど……本当にあるのね……」

「どう言う事です?」

「単純よ。ユマ姫は記憶を脳以外に持っている。たぶん神の記憶領域にアクセスしているのね」

「そんな馬鹿な!」

神の存在自体が信じがたいのに、そんなモノがあるなどとソルンには信じられない。

「本当よ。私はきつとソコに記憶を追記する事で生き物を操っている。けど、参照する事は自分の記憶ですら出来ないの。だったら『参照権』も別にあるんだと思っただけ」

「そ……そんな!」

「でも、お陰でハッキリしたわ。ユマ姫、彼女こそが私の仇よ」

「……そう、でしたか」

言われてソルンには腑に落ちたことがある。

自分には扱えないと思っただけで古代遺跡。停止処理すれば起動も出来ない和高を

くくっていたら、脱出途中でドローンに襲われたのだ。

それもこれも、敬愛するクロミーネと同種の方だと言われれば納得せざるを得ない。一方でクロミーネはユマ姫の正体を確信していた。『高橋敬一』だ、と。

クロミーネは前世の『高橋敬一』とは友達でも何でも無い。ただのクラスメートだ。神曰く、彼の『偶然』に巻き込まれ、平凡な人生を台無しにされ、危険が渦巻く異世界に放り込まれた事を思えば、恨んでも恨みきれない相手であった。

「そうと決まれば、何としてでもユマ姫を殺しましょう。そうすれば下らない神の遊びは終わるわ」

「……神に逆らって大丈夫なのですか？」

「さあ？」

「さあつて！ そんな！」

そう言われても、クロミーネには解らない。大体にして、神の怒りを買ったとしても構わない。

彼女は唯々、ただただ苛立たしいのだ。

「全部！ 全部、煩わしいのよ！ この世の全てが！ アナタもそうでしょう？ ソルン」

「それは……そうですが」

世界の全てを滅ぼしたいと願う。それは彼と彼女の共通した目標だった。

ある日、ソルンは目を覚ました。遺伝子改良の果て、魔力に耐性を持った体を手に入れた。

しかし、世界には既に別の種族が我が物顔で蔓延っていた。彼はあらゆる人間を、エルフを、憎んでいる。

「私達のやることは変わらない、いえ、もっとスッキリしたと言えるわ」

「ソレは？」

「言ってるでしょ？ ユマ姫の抹殺。そうすれば下らないゲームは終わる」

「……それは、この世界がこんな風になったのも神の暗躍があるとしても？」

「あるんじゃない？ こんな盤上みたいな世界。不自然なもの」

クロミーネは投げやりに言い捨てる。本心を言うと、全てがどうでも良いのだ。全てを台無しに出来るなら。

だが、その前に自分が殺されるのだけは嫌だった。

クロミーネは世界の破滅を見届けたいのだ。

……それは、奇しくもユマ姫と全く同じ願望であるのだが。彼女たちはソレに気が付かない。

ザルザカートはいよいよ遺跡を抜け、太陽の下へと浮上する。

アレだけの戦闘があつた地下とは異なり、地上は不気味な程に静まり返つていた。
——カシャンツ

だから、その何気ない金属音が気になった。

クロミーネは前世でヘリコプターに乗つたことがあるのだが、回転するローターの騒音は凄まじく、近くでは会話など成立しない程だった。

ザルザカートは複数のプロペラを内蔵した乗り物でありながら、その駆動音は驚く程静かである。

その原理は、複数のプロペラが発生させる風斬り音が、お互いの振動を逆位相で打ち消し合うためであるが、ソレを彼女達が知る由は無かつた。

重要なのは、その金属音が不気味なまでに響いた事。一体、どこから？

疑つたのはザルザカートの不調。遺跡の深くに安置されていたが、年代物には違いな
い。どこに不良があつてもおかしくないのだ。

見渡して、そして見つけた。底部に引つ掛かる鉤爪、そして縄。

「敵よー」

叫んだが、遅い。ザルザカートの外見は公園の遊具、グローブジャングル（回転式ジャングルジム）に近い。外殻は衝突時の衝撃を和らげる柔軟なフレームのみで、隙間は大

きく空いている。

だから、外殻に張り付いた侵入者からも中の様子は丸見えで、攻撃も容易であつた。

「ゆるさない!」

フレームに張り付くは美しい金髪の女性。しかし、その相貌には般若の如くの怒りが張り付いていた。

その正体は帰還を命じられたシャルティアであつた。

彼女はユマ姫の前でこそしおらしくしていたが、内心では情けない自分にも、自分の手を一切汚さないクロミーネのやり口にも、煮えたぎる程に怒り狂っていた。

それらは殺し屋としての彼女のプライドを著しく傷つけた。

ましてそんな相手に、もう何度も良いようにやられている。看過出来ようはずが無い。

「死ね!」

放つたのは彼女が持つ小型ボウガン。ボルドー王子を撃つたモノであり、小さいながらも威力は高い。

「ギャツ!」

一方で狙われたクロミーネは荒事に関して、一切の興味も能力も無い。だから弓を構える相手に無様にも手を翳し、目を瞑るしか出来なかつた。

放たれた矢はその柔らかな手の平を貫通し、肉へと突き刺さる。

「いぎっ！ 熱い！ あついい」

……ドコに？ よりによつて、クロミーネの右目にだ！

「クロミーネ様！」

狂乱するクロミーネとソルン。ザルザカートは制御を失い大きく揺らぐが、その程度じゃシャルティアは振り落とされはしない。

打ち終わったボウガンを投げ捨て、追撃の投げナイフを手を取った。

「チッー」

しかし追撃は叶わない。彼女を邪魔する影。エリプス王、いやエスプリだった。

異様な気配を纏う男は大剣を構えたままに、ザルザカートに張り付くシャルティアへ向け、風の魔法で突っ込んだ。

構えたナイフで剣先を逸らそうとしたシャルティアだが、嫌な予感にザルザカートを蹴飛ばし、宙へと逃れる。

虚空へ残されたシャルティアの短剣が——ギイインと奇妙な音を上げながら消滅した。

——なんて威力！

落下しながらもソレを目にしたシャルティアは戦慄する。恐るべき魔剣の力であつ

た。

だが、それ以上に今は自分の心配をするべき場面でもあった。宙に投げ出されたシャルティアは猫ごとく体勢を整えるも、地上までは10メートルの距離がある。

必死で衝撃を和らげる材料を探すが、周囲には木々も無い。上手く受け身を取ったとしても、下手をすれば骨折、良くても捻挫程度は避けられそうに無かった。

(まずいわ……)

僅かな怪我が命取りになる状況、少しでもダメージを抑えようと必死に着地点を確認する。

(アレ……は?)

よりによってソコに有ったのは田中のバイク。言わば金属のカタマリであった。このままでは直撃。ドコまでも崇つてくれる男の存在に歯噛みする。

良く考えれば大穴の横に停車していたのだから、この可能性は大いにあった。

せめて柔らかい土の上になら受け身も容易かったのに……そう思わざるを得ない。

——精々、派手にぶち壊してあげるわ!

踏み潰すつもりでハンド目掛けて足から着地。そのまま衝撃を殺す為、猫の如くしなやかに体を丸めると、シート部分に手をついた。

「ッ?」

本来ならそのまま横に転がって受け身を取るのだが、ハンドルに着地した反動はサスペンションに吸収され、バネの様に反発した。

その勢いでトランポリンの如く下半身を跳ね上げられたシャルティアは、シートについた手を起点にくると前転。体操選手の如く、キレイに大地へ着地する。

無意識に着地でポーズすらキメてしまったシャルティアは、思いがけない挙動に動揺を隠せない。

(なん……で?)

大森林の中を走行する目的で調整されたバイクは、恐ろしい程に優秀なサスペンションを備えていた。

前二輪型の三輪バイクなので、特に前面の安定性は極めて高かった。

結果、シャルティアは一切無傷での着地に成功する。それが田中に助けられたようで、若干悔しかったのだが……

そんな感傷も許さぬ程に、事態は予断を許さない。

「殺せ！ 殺しなさい！」

頭上からは片目を押さえるクロミーネのヒステリックな声。エスプリは進路を変え、地上へ落ちたシャルティアを追撃する。

(——ッ！ 速い！)

「……………」

田中に劣らぬ実力者相手では、真つ正面からの斬り合いでは勝ち目が無い。

しかし、シャルティアには奥の手があった。

「喰らいなさい!」

シャルティアが取り出したのは爆弾……いや、煙幕玉。火薬の含有量を増やしたソレは、叩きつけると同時、激しい爆発で瞬間的に煙をばらまく。

無視界戦闘はシャルティアの十八番、二回り上の実力者相手でも立ち回れる自信があった。

『我、望む、指差す先に風の奔流を』

しかし、突風が全てを押し流してしまった。シャルティアはソレが魔法であると悟るが、打つ手は無い。

秘密兵器も打ち止め、無防備な自身が常識外れの太剣の前に晒される。

——死。

ソレをシャルティアが明確に意識した時だった。

「放て!」

男の声と同時、降り注いだのは弓矢の雨。幾つかはシャルティア目掛けて降り注いだ
が、落ちてくる矢を躲す程度、何の問題もない。

問題なのは弓矢を放った相手の正体。

「コツチだ！」

その声にシャルティアは聞き覚えがあった。

一方のエスプリは何事かと距離を離す。

そして出来たスペースに飛び込んだのが声の主だ。

「シャルティアのお嬢ちゃん、生きていたか」

「アナタこそ、死んだモノと思っていたわ」

声の主はゼクトール。近衛兵長であった。

だが、彼はシャルティアの目の前で腹を刺されたはず。暗殺を生業にするシャルティアから見ても、十分に致命傷の一撃に見えたのだが……

「スライムで傷口を塞いだのね」

「ああ、今でも死にかけてるけどね」

言葉の通り、その顔色は白く、脂汗が浮かんでいる。それでも今すぐに死ぬ様な事はなさそうだ。その腹には見覚えのある粘着性のゲルが張り付いていた。

元来、警備スライムの役目は暴徒鎮圧。人体に無害な弾性タンパク質で構成されている。傷口を塞ぐ効果は極めて高かった。

現代の地球には医療用接着剤と言うモノが存在するが、スライムが丁度同じ効果を発

揮したのだった。

ゼクトールは靴にへばりついたスライムで傷口を塞ぐや、大穴を伝って一直線に脱出した。這々の体で陣地へ戻るや、死にかけの体でとって返し、ココまで部隊を率い戻って来た。

命知らずの行動だが、無理も無い。彼にしてみれば自分の部隊が裏切って、他ならぬユマ姫を殺そうとしているのだ。命を賭けるに十分だった。

「……………」

コレで数は揃った。だが、何でも無い様にエスプリは剣を構える。矢を躲しきつたのはシャルティアだけでは無い。エスプリにだって全てを防ぎ、全くの無傷。

——マズいわ、これでも勝てない……

ゼクトールがもたらした思いがけない援軍。なのにシャルティアは喜ばなかった。相手に取ってみれば獲物が増えたに過ぎないからだ。

十名の兵士は恐らく精鋭ではあるのだろうが、あの剣の前にはモノの数では無い。エスプリはそれ程の手練れに見えた。

——相打ち覚悟で戦いを挑むしか無いと、覚悟を決めた時だった。

——バシユッ！

「グッ……………」

突然、エスプリが片膝をついた。よく見れば足からは夥おびただしい出血。その太ももには深々と矢が刺さっていた。

躲せなかつたのも当然。誰が放つたモノかシャルティアですら気配も掴めなかつた。

——超遠距離からの狙撃！ 誰なの？

シャルティアが目にしたのは、木々の間から呆然とコチラを見つめるネルネの姿だった。

「当たっちゃったみたい……」

手にしているのは木村が作った特注のボウガン。歯車を回し矢を装填するクレインクイン式で非力なネルネでも扱う事が可能だった。

そうは言っても普段はユマ姫の私室に設置されていて、ネルネは試しにと何度か撃つたことがあるだけ。

だと言うのに、放たれた矢は見事に命中した。

「その様ですね……信じられません」

それを望遠鏡で確認するのはシノニム。200メートル先の光景に息を飲んだ。

二人とも、まさか当たるなど思ってもみなかつたのだ。ただでさえ弓矢に比べて遠距離での命中率に劣るクロスボウ。

牽制にでもなればと、当てずっぽうで弓なりに放つた矢が、たまたま命中したに過ぎ

なかつた。

「……………」

「来なさい！ エスプリ！」

再びのクロミーネの声を受けたエスプリは、呪文を唱え、飛んで逃げた。兵士達は逃さじと矢を射るが、それらが当たることは決して無かつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ソルン！ 吸い出して！」

難を逃れたシャルティアと異なり。クロミーネの方が脱出してからが問題だった。遺跡で確保した回復薬を使おうとしたソルンが固まる。

「吸い出す？ 何をです？ まさか！」

「毒よ！ 早く！ 吸い出して！」

シャルティアは今回も矢に死苔茸チリアムを塗っていた。

そのまま傷を塞いでは却って命を落とす事に成る。

慌ててソルンはクロミーネの手の平に開いた穴に口づけると、血と共に毒を吸い出した。

——この匂いは？ 死苔茸チリアム！

気が付いたが、魔法を使えるエスプリは戦闘中。そうしている間も毒は回って行って

しまう。事態は一刻を争うのだ。

「目を、挟ります！」

「ッ！……や、やりなさい！」

クロミーネも頭では解っていたのだが、面と向かって言われると覚悟が揺らいだ。麻酔も無しに目をえぐり出すなど、発狂しそうだった。

「ぐ、ぐあああああああああ！」

泣き叫び、暴れるクロミーネをソルンは必死に押さえつけた。

幸いにも矢は眼球で止まっており、えぐり出した目と共に矢も除去する事が可能だった。

「許さない！ 絶対に！」

眼窩から血をたれ流しながら、地上を睨む。

しかし、地上の形勢も悪い。引き時であった。

「来なさい！ エスプリ」

そうして、クロミーネはエスプリを呼びつけ、解毒魔法を使わせた。

但し、魔法でもポーションでも、欠損を治すことは不可能。

彼女は今後、眼帯での生活を余儀なくされる。

それは丁度、ユマ姫と立場が入れ替わった様でもあった。

「見てなさい、次は目に物見せてくれるわ」

ポツカリと空いた眼窩を大穴に向けて、クロミーネは呪詛を吐くのであった。

エピローグ1——これ、何の勝負ですか？

二体目の王蜘蛛バウギユリウアルを倒した俺達は、空を見上げた。

遙か遠くに切り取られた青空が見える。先程まで真上にあつた太陽は既に傾き、その姿を隠している。青白い魔力灯の明かりを残して、周囲は一気に暗くなっていた。

巨大な球体ドローン（ポーンリアの記憶ではザルザカートと言うらしい）はもうとつとつに脱出した後だろう。いまさら階段で登ったところで、間に合うとは思えない。

だとしても、ココから脱出する必要があることに変わりはない……か。

……階段、嫌だな。

見上げるだけで気が遠くなる。当然だけど、この施設だつてエレベーターぐらいある。

しかし、稼働停止して無駄なエネルギーは節約状態。エネルギーを集めて無理矢理に稼働したとして、何年もメンテナンスしていかないのだから使うには不安しか無い。

「おんぶしてー」

「はあ？」

だから田中を頼ろう。そうしよう。

俺はぺたんとして女の子座りのままに、右足首をさする。

「あの……わたくし、足を捻挫したみたいで……」

嘘だけだな！ でも歩けないのはホントだよ？ 俺、体力無いのよ。気力の限界って

奴だ。こちらら死にたてホヤホヤだよ！

俺は田中を見上げる。田中は立ったまま、ジッと俺の足を見下ろす。

「そうか……」

「そうなのですー！」

運んでくれよ。王道を征くお姫様抱つこでも良いぞ。

いや、むしろそれが良い！ 田中コイツは一種の狂人だ。頭のネジがユルユルなのだ。剣で

殺し殺される世界にしか興味が無いようにすら思える。

俺の味方として側に居てくれるとしても、敬語とか使えるようなタイプじゃないから

な。そう言うのが嫌で帝国で叙勲を断ったとも聞いている。

こんな奴を側に置くのは危険と、まあ普通に考えたらそう言われるのが当たり前。周

囲の反発を想像するだけで頭が痛い。それを俺が健気に庇えば庇うほど、ボルドー王子

が死んで間も無いのに次の男をくわえ込んだと、そんな陰口を言われるに違いないの

だ。

だったら、田中には誰もが一目置く英雄になって貰わなければ困る。

そうして誰にも頭を下げない不遜なキャラクターを皆に認めて貰うしか無い。幸いにして今のビルダール王国は気さくなお姫様が統治してるし、皆の認知さえあれば他の貴族だって抑え込めるはずだ。

まずは俺の支持基盤である軍部にお披露目したい。そして、丁度良く外の陣には軍の偉いサンが揃って居る。

後は面白おかしく、盛れるだけ盛ってやれば良い。

——帝国の卑劣な罠に掛かり、絶体絶命絶対に絶命していたの意のピンチを迎えたお姫様は地下深くへと囚われてしまう。

そこに、演目にもなった『黒衣の剣士タナカ』その人が地獄の底から颯爽と現れ、絶世の美姫ただし胴体のみと再会。二人で力を合わせ脱出する。

所々オカシイ部分はあるが、大筋は王道のストーリー。俺を抱きかかえての凱旋となれば、なんとまあ、絵になるでは無いか。

欲を言えばステフ兄様みたいなキラキラの美男子だと良かったが、まあ田中でも美女と野獣感があつて良いんじゃないかな？ 知らんけど。

田中サンや、君は中々オカシイ役どころですよ？ 俺を地上へエスコートする榮譽を与えよう！

「んー」

俺はずいっと右手を差し出す。恭しく引き上げて、抱き上げてくれたまえ。

俺はニッコリと微笑むが、しかし、田中は迷惑そうな顔。

「……また今度な」

「え？」

今度とか意味不明なんだが？

『何言ってるの？ お姫様だよ？』

日本語で猛抗議だ！ いや、コツチだって階段を上るのが面倒だからってだけで言ってる訳じゃないよ？ オマエの事を考えてのお願いだからね？ 8対2ぐらいで。

『しょーがねーだろ？ 今回のヒーローはコイツだからな、このまま野ざらしって訳には行かねーだろ？』

そう言ってる田中が担ぎ上げたのはマーロウ君だ。安心したのか彼はスツカリ眠りかけている。睫毛長い。

……なるほどー、そう来たかあゝ

ふむふむ、理解理解。俺はコクコクと頷いた。つまり、アレだろ？

『ホモなの？』

『ちげーだろうが！』

いや、だって女の子より男の子を取るワケじゃん？ でも確かにマーロウ君をココに

放置するのはいただけない。

……仕方無い、歩くか。

女の子座りから、ゆっくり立ち上がろうとしたのだが……

「う？」

「……なんだよ？」

「歩けない！」

「……嘘くせえ」

そう言うなよ。いや、気が抜けた所為か、冗談抜きで力が全く入らない。死にかけた後遺症の可能性もある。普通にヤバい。

「マジだ！」

「マジかよ。仕方ねえ、木村におぶって貰え」

「いや、俺も無理」

なんと、甲斐性が無い事に木村さんまで拒否とな？ 良いのか？ 今ならドサクサにおっぱい揉めるんだぞ？

って言うか、よく見ると顔が青白い。どうした？

「俺は寝てないの！ フラフラで俺がおぶって貰いたいぐらいよ」

「寝れる時に寝ねえからだろ」

「ア・レ・が、寝れる時だあ？ あの状態で寝れる方がどうかしてんだろー！」

聞けば、木村は俺の体が再生されるところをヤキモキしながら見守ったらしい。なるほどね、理解理解。そりゃ俺のおっぱい程度じゃ動かないワケだわ。

「寝る間も惜しんで私の全裸を見続けたのですね？」

「言い方ア！」

どう言いつくろつても事実なんだが？ ちょっと恥ずかしい気がしてきたぞ？ 何時間も裸をじっくり鑑賞しました宣言は、流石にね。

俺は上目遣いで、頬を赤らめ木村をなじる。

「……エッチー！」

「エッチじゃネーよ！ 急にラブコメ感出そうとしてんじゃネーよ！ つーか、あんなの見て何が嬉しいんだよ！」

いやいや、木村さんソレは無いだらう？

「嬉しいでしょう？ 私はスタイルだつて悪くないハズです！」

ツーンと言い放つてやると、木村は頭を掻きむしった。

「スタイルつて何だよ！ 小顔だつてか？ 頭が無いのは小顔と言わねー！」

一理、ある。

ちよつと面白いのが悔しい。

いや、待て、まだ俺には武器が残っている。

「すらりと伸びた手足とか……」

「千切れてた！ 足はねえし、右手もグチャグチャ！ 左手はかろうじて無事だったよ？ 金属製のフックじゃ！ たわけ！」

捨てるなんて勿体ない！ それは期間限定のレア装備だぞ！

「……胴体は、胸とか？」

「炭化してたがな！ 黒乳首どころか、黒胴体だよ！」

失礼な！ 俺はキレイなピンク色だぞ？

マジレスすると、むしろ色素が薄すぎて青っぽいかも知れん。まあ、ソレは良いや。

今更だけど、俺の体は酷い状態だったんだなーと思つたら田中から注釈が。

「そう言えば下半身だけは比較的、無事だったな。木村が大切そうに抱えてたからビビったぜ。十年も経てば趣味も変わるんだなって」

「うぜえー」

木村が叫ぶ。ガラに無く照れていらつしやる。なるほどね、木村の趣味も理解した。

「オナホが好きですか？」

「クソが！」

仰け反って感極まっている。そんなに嬉しいか？ そうと決まればエルフの魔導文

明で何か協力出来そうだ。ゴムとかシリコン素材？ ありと思います。

しかし女の子をオナホにするって、フツフは好き勝手に性欲処理に使うぐらいの意味だよ？

胴体だけを切り取って使うってハイレベル過ぎませんか？ 不安になってきた。膜の確認とかして良いか？

「ふざけてないで行くぞ」

と、遊び過ぎたのか田中から突っ込みが。見れば鎧は脱ぎ捨て、バックパックにマローウ君を縛り付けている。これは？

「お姫様抱っこは無理だがお前一人ぐらいは抱えて帰れる」

「だいしゆき？」

「チツ！」

舌打ちされた！ 美少女なのに舌打ちされた！

……まー冗談を言う気力もそろそろ残り少ない、田中へ必死に抱きついた。

だが、俺の体力は想像以上に限界だった。腕に力が入らずズリ落ちていく！

「だいしゆきホールドして良い？」

「？ 気持ち悪いから嫌だ！」

心底嫌そうな顔しないで頂きたいね。木村さん説明してあげて！

「足を絡めて抱きつくだけだから、犬に噛まれたと思って気にするな」
「俺は噛まれたく無いんだが？」

犬じゃねーだろ！ 噛まれたいのか？

言いながらも木村の表情は抜け落ちて、マジで余裕が無さそう。田中は「気持ち悪い言い方するなよ」とかぶつくさ言いながらも足を掛けるロープを用意してくれた。

俺の足は田中の胴に絡めた状態で固定、腕は首の後ろに回して密着した。正統派「だいいしゆきホールド」である。挿入は御免だが。

そうしてようやく俺達は地道に階段を上り始めた。

「しんど。重い」

田中が愚痴る。そして木村は既に一言も喋らない。相当に追い詰められている。

「……………」

ルー・デルオン
自在金腕を階上に巻き付けて、自分の体を吊り上げ移動している。

マグロかな？

そんな様子を眺めていたら田中からクレームが入った。

「キョロキョロすんなよ、髪の毛が邪魔だ」

「……………」

俺がしおらしく謝ると、田中はビミョーな顔をした。

「いや、髪自体より、臭いがなあ」

「……臭い、ですか？」

「メチャメチャ甘い匂いがするんだよ」

ふーむ、俺の体臭は変わらなうか。なんでか異様に甘い匂いするんだよな。俺の体なんか異常なのかな？

そこに表情をなくした木村の掠れた声。

「桃みたいなの香りはラクトン10と言つて、女性特有の体臭です」

説明セリフありがとな、オナホと女性の体臭に一家言ある木村さん。取り敢えず病氣じゃない事が解つて嬉しいよ。

そう言えば幼少期の王宮ではまるで汗をかいてないし、石鹸とか香油の匂いもあつて体臭を意識したことが無かつたね。

まあ堂々と体臭の話されて、無反応つてのもアレだよな。サービスしまつせ。

「か、嗅がないで下さい。恥ずかしいです」

恥ずかしそうに耳元で囁くと、ますます田中はビミョーな顔をした。

「エロゲーのセリフ？」

「違います！」

もうちよつとマシな反応しろよ。

そこに木村から無慈悲な告発が。

「高橋が好きだったエロボイスCDのセリフだと思うよ」

「お前らの趣味も大概業が深いな……」

……おうおうおう、お前らがその気ならコツチにも考えがあるよ？

俺は田中の耳元でお気に入りのセリフを囁く。

「うう、私の事、はしたない女の子だと思いますか？」

顔を赤らめ訴えかける。

破壊力ばつギユンだろ？

「思ってるけど？」

「ハア？」

台無し！ 台無しです！

「私が誰にでも股を開く様な女だとも言うのですか？」

「現在進行形で開きまくってるじゃねーか！」

一理、ある。

だいしゆきホールド!!

「あと、尻が軽い」

……揉むなや！

「触らないでくれますか？」

「実際、体重軽いぜ？　ちゃんと食ってる？」

「食ってるよ、脳とか」

「……友達は選べよ？」

選べるなら真つ先にお前を切ってるよ！　って田中と話していると木村が羨ましそうに見てくるんだけど？　俺はお前のマグロスタイルでの移動が楽しそうで羨ましいよ？　　そう言えば木村には頼みたいことがあった。他ならぬユマ姫として。

「そう言えば木村さん、曲を作っていただけませんか？」

「曲を？　ですか？」

「ええ、父様に聞かせたいのです」

「父様……あの、ベールの男ですか？」

「そうです」

家族は全員死んだ。そう思っていたけれど、父は生きていた。父様こそがエルフの王だ。

俺がそう言うと、田中は本気の舌打ちをした。

「言いたかねえけどよ、そんなんで正気を取り戻すとか、そんな甘いモンじゃないぜ？」
「解っています、ただ、最後に、聞いて欲しいのです」

「……そうかよ」

田中も、嫌われ役を買ってくれたのだろう。だけど、俺だつて一曲歌えば父が正気を取り戻すとは思っていない。覚悟は……出来ている。

それでも木村は任せて下さいと了承してくれた。

「ですが、その時は僕も一緒ですよ、自慢のギターを披露します」

「……そうですか」

いや、何でだよ？　と思わなくも無いが、来たいなら来ても良いけど？　コレには田中も首を傾げる。

「それで、お嬢さんを僕に下さい、とでも言うのか？」

「いや……それはちよつと」

木村氏、ノーセンキューの構え。

『それはちよつと……じゃねーだろ、なんで俺がフラれたみたいになつてんだよ』

なんたる理不尽。俺が怒りに震えていると、何故か田中までノーセンキューの構え。「引出物に脳みそ渡されても嫌なんだけど？」

『渡さないし、結婚式も開かねーよ！』

なんで、俺が喰人鬼みたいな扱いなんだか解らない。シャリアちゃんだけだからね？　俺は付き合いで食べただけだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

なんだかんだ、地上まで残り五階ぐらいまで来た。田中は穴の天辺まで上がろうとしていたが、入ってきた通路を使えばそこまで登る事も無い。

ここまで来ると、疲れから全員が無言であった。

「ハア、ハア……」

耳元で囁かれる田中の呼吸音も乱れているし、抱きついて感じる体温も高い。湯気が出そうな程であった。

何より臭い。抱っこされてる側だから言いにくいだが、体臭は俺の比じゃ無いだろ！

汗だくで男が駆けずり回って、ここ数日水など浴びていないだろうから、お察し下さいと言う所。危険な程に獣臭がする。

余りの匂いに頭がクラクラしてきた。

「ふう、ふう……」

そこで、抱きついていてる方だつて楽じゃ無いのよ。残り少ない体力はすり減って、田中の呼吸に合わせて吐息を吐き出す。

「……………」

すると田中が迷惑そうな顔をする。どうやらくすぐったいらしい。そう言われても疲れてるんだから仕方が無い。

アレだけの激闘の後、人間二人ぶら下げて二十階上がってくるのが辛いのは解るけどな。

俺だつて振動が体に響いてキツイ。

「ンツ、アツ」

「……………」

いや、変な声出ちやつたけどさ、そう睨むなよ？ 極限状態なのは俺も一緒だよ！

あ、こいつチンコ勃ってる？ 死にかけると勃つヤツ！ ぬへへ、俺も前世で車に撥ねられそうになった時に覚えアリ。

それで田中の首筋にはビツシリと玉の汗。テカテカ光って旨そうだな。

うまそう、嚙りたい、旨いぞ絶対。お腹減った。食う、嚙る、お腹すいた。

「痛えー！」

叫ばれた、お腹減った、嚙る。美味しい！ オイシイ！

「どうしたんだ？ 急に？ オイ！ クソツ！ 正気じゃねえ！ 口に突つ込むモノ無いか？」

あああああ、お腹減ったあ！ ぐえ、ナニコレ？

「それでも嚙つてろ！」

おいしくない、コレじゃ嚙れない。仕方無いので首筋から流れた血を舐める。

ペロペロ、オイシイ！

「ヤベエな、完全に狂ってるぜ」

「吸血鬼に浸食されてるのかも知れないな、落ち着くまで血を飲ませてくれ」

「キツイぜ、ある意味、助かったけどよ」

あああああ、俺は俺は？ 『高橋敬一』だあああああ！

意識が消えそうになる側から、俺は参照権で上書きした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふががげ？」

気が付いたら遺跡の外だった、ふかふかのベッドには覚えがある。ココは出口の近くに張った野営地の中に違いない。

「なんわこへ？」

口から出て来たのは布？ コレ！ 真っ赤に染まった俺のパンツ？ しかも赤いは血！ 血で染まった自分のパンツを口で啜えてるって恐怖でしかないんだけど？

「気が付かれましたか？」

と、そこにシノニムさんが入ってきた。

「何が、あつたのです？」

俺がそう尋ねると、シノニムさんは言い辛そうに目を伏せた。

「それが……私にも何が何だか……」

聞けば、シャリアちゃんがクロミーネに手傷を負わせるも、父様の反撃を受けピンチ。そこに颯爽と駆けつけたネルネが……え？ ココまでで既に俺の理解を超えてるんだけど？

とにかく、ネルネ様の活躍で皆は無事らしい。

「そこに、姫様達が現れたのですが、ユマ様はタナカ様に噛み付いたまま離れず、ソレを見たシャリアさんが怒り狂い、キムラ男爵が説得を試みるも限界とばかりに倒れて、それをネルネに運ばせるも、寝ぼけて抱きつき……」

トンでも無いカオスであった。

しかし、口の中のコレは一体？

「ああ、それは姫様がタナカ様に噛み付くので口に含ませたそうです」

口にパンツとか！ レイプモノのエロゲーみたいなマネは辞めろよ……

と、そこに美味しそうな匂いが漂ってきた。俺のお腹がきゅーつと可愛い音を立てる。それを見たシノニムさんは俺の着替えに取りかかった。

「……朝食にいたしましょう」

朝食か……どうやら長い事寝ていたみたいだな……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

朝食の席には田中と木村、マーロウ君とシャリアにネルネ。あと変わったところではソルダム軍団長が揃っていた。

「帝国の待ち伏せに遭ったと聞きましたが、ご無事で何よりです」

「無事とは程遠い状況でしたが、またこの方に助けられました」

俺は田中をチラリと見る。挨拶は済んでいるみたいだが、ソルダムさんには不審な男に違いない。

「驚きましたよ、この方がタナカさんなのですか？」

「ええ、スフィールで別れて以来です」

「まさかここまで熱烈な歓迎を受けるとは思ってたけどな」

田中は包帯で巻かれた首筋を見せつけてくる。マジで空気読まないね、コイツ。

「犬に噛まれたと思って諦めると言ったではないですか」

「本当に噛む奴があるかよ」

などとやり合っていると、その様子を愛おしそうに見つめてくるソルダムさんに気が付いた。

「どうしました？」

「いえ、本当に手や目が治ったのだと……」

「ええ、おかげさまで」

ただ、残念ながら皆の怪我に使って貰える程、薬品などの在庫が無い事を伝えると「いえ、その様な奇跡は我らには勿体ない」とまで言って貰えた。

今、寝込んでいるゼクトールさんは俺の魔力が戻り次第、回復魔法を使ってあげたい。戻らないなら遺跡からポーシオンを探すしか無いな。

で、気になるのがシャリアちゃん。憎きクロミーネに一矢報いた功労者なのだが、なぜだか必死に黒い布をしゃぶっている。あれ田中のマントじゃ無いか？

どう言う事だと目で田中に尋ねると、心底嫌そうに説明してくれた。

「コイツ意味が解らないんだよ、噛み付かれている俺を見て「私はまだ舐めて貰って無いのに！」とか怒り出すし、挙げ句自分の首を切りつけてお前に舐めさせようとするし」
「ええ？」

シャリアちゃんまで首に包帯を巻いているのは激戦の証かと思っていたのだが……ただの自傷行為だったらしい。

「で、お前もお前で構わず舐めるから、奪ってやったぞとばかり、勝ち誇った様にコツチを見て来るしよ」

……うーん。謎空間。

「とにかく安静に寝かせるべきだったのにな、そこでコイツが脳みそ好きだって思い出したから、マントにお前の脳髄液ついてるぞって教えたらあのザマよ」

「な、なんてことを」

肉食獣に俺の味覚えさせるようなモンだろ！ やめるよ、マジでやめるよ……

ってか、ソルダム軍団長が居るんだよ？ 俺以外はキチガイしか居ないのがバレちゃうじゃないか！ とにかく話を覚えよう。

「とにかく、ご飯にしましょう！ 私お腹が減ってしまっ……」

「それなのですが……」

俺だって、空腹のままだと何をするか解らない。今だってフラフラなのだ。なのに木村から横やりが入る。

「灯油を探している際、こんなモノを見つけたので、炊いてみたのですが」

「コレは……!?!」

まさか？ 米？ ご飯？ なんでこんなモノが？ 結構探したけど、この世界には無いハズじゃない？

あ、ポーネリアの記憶にもある！ 古代にはあったのか！ 現地名でトネル！

「ご飯！ ……ご飯……！」

俺は反射的に身を乗り出していた。はしたない女の子だからね、仕方無いね。

「……と、取り敢えず塩むすびを作ってみました、毒味したら姫様にも……あつ！」

関係あるか！ そんなもん！ 毒があるならわざわざ施設で保存してねえよ！

俺は椅子を蹴倒し、テーブルの上に乗りに上げる。そうして木村の手の上にあるおにぎりに齧り付いた。

「うまつ！ うまい！ 味が、解る！」

それが何より嬉しい。うまい！ オイシイ！

「ハッ！ ハッ！ ハッ！」

「あの！ ちよつと？」

呼吸も忘れて、犬のように手の上の米を食べる！ この味、ああ、ずっと、ずっと食べたかった！

あつという間に食べきって、手の平についた塩味ですら愛おしい。

「いや、もう無いですから、舐めないで下さい」

オイシイ！ オイシイ！ ペロペロ、止まらない。もう、ずっと木村の手の平を舐めて

ていた。

「どうやらこの勝負、木村の勝ちみたいだな」

「悔しいですが、その様ですわね」

「これと言う勝負だったのかよ!?!」

舐めるのに必死な俺を余所に、皆の声が聞こえてきた。

「ハア……酷い光景です」

シノニムさんのため息だけが、やけに耳に残っていた。

エピソード2 | 変人しかいない

あの後、俺は木村の手の平をペロペロと舐め続けたいらしい。

らしい、と言うのは記憶が曖昧だからだ。更に言うとか舐めるのを止めた後も、多幸感に包まれた俺はひたすらにブーツとしていたらしい。

『参照権』に記録はあるのだが、まるで実感が無い。味覚と言うのはかくも人を壊すのかと戦慄したね。

で、今回の出撃の収支を見てみよう。

失ったの方から言うと、まずは近衛兵の兵士達。選りすぐりのエリートである彼らはボルドー王子が肝いりで育てていた盟友でもある。

家督を継げない貴族の次男坊三男坊とかで構成されているので、死体をあのままと言う訳にも行かない。

健康値が多いメンバーで死体を回収したワケだが、その状態が問題となった。

……食べちゃったからね。

まあ、彼らが正気を失っていた事はゼクトールさんがその身をもって知っている訳で、損傷の激しさに関しては、いたぶる事で正気に戻そうとしたと公的には説明させて

貰った。

だが、それだけでは説明出来ない傷も多々あり、シヤリアちゃんが空腹で倒れそうな俺を見かねて死体を食べさせた事を、ゼクトールさんにだけは正直に報告した。

人間を食べるなんて、この世界だつて禁忌も禁忌なんだがゼクトールさんは受け入れてくれた。むしろ、まんまと洗脳された戦友に憤りを隠せない様子で「神聖不可侵たるユマ姫に、よしまな邪な感情を抱くから足元を掬われるのだ」と遺品を前に悔し涙を流していた。

……なるほど、神聖不可侵か。ちよつと愛が重たいぞ？

なぜゼクトールさんだけ洗脳されなかったのか不思議だったのだが、近衛兵の他のメンバーには「あわよくば俺がユマ姫と……」と言う欲があり、そこを付け込まれたと、ゼクトールさんは言っていた。

なるほど、そう言う意味では確かにゼクトールさんは妻子もある身。……いやいや、死んだメンバーも妻子は居たりするんだが？

どう言う事かとゼクトールさんに尋ねれば、妻子など関係無く虜にする程の魅力が俺にはあるのだと力説されてしまった。ユマ姫は無自覚過ぎると。

じゃあゼクトールさんが洗脳されなかった理由は何かと問うと「私ではユマ姫と釣り合わないですから」と言う謎の信仰心だったので、もう恐い。

他に被害と言えば、俺達が遺跡に入っている間も魔獣の襲撃があつたらしく、軍には少なくない被害が出ていた。

とは言えそれらは魔獣退治の訓練だとも思えば、ある程度仕方無いモノだろう。

他には……ああ、ゼクトールさんの怪我はあつさり回復魔法で治つたので、被害の内に入らない。

そうそう、俺の魔力値は徐々に回復している。回復魔法ぐらい使える程度には。

ただし、今の俺は肉体的に非常に不安定。健康値も一桁から二桁後半まで、測るタイミングで数字がメチャメチャに荒ぶる始末。

精神的にも不安定で、攻撃的になったり、無気力にボーツとしたり、全く落ち着かない。

恐らくは一度死んで凶化した事が原因だ。この不安定さと『偶然』が組み合わさると酷い事になりそうではばらく大人しくするしかないだろう。

そしていよいよ今回の成果なのだが……失ったモノを補って余りある。

まずは俺の片目、片腕、味覚の復活だ。正直メチャクチャ不便だったので素直に嬉しい。

そして、なんと言つても生きた遺跡を手に入れられたのも大きい。

しかも、その遺跡を十全に使いこなす知識もある。体が安定するまではこの遺跡を拠点にした方が良さそうだ。

更に更に、相手へ与えた被害と言う意味ではどうだ？

敵の特殊部隊を壊滅させ、敵軍のキーマンと覚しき怪しい男、ノエルの打倒が叶った。もつと言えばシヤリアちゃんの働きで、クロミーネにも手傷を負わせることが出来たとか？ こりゃあ相手の被害は甚大だろう。

田中と出会えたのも収穫と言えば収穫だが、アイツはノーカンで良いだろう。ウザイからプライゼロまである。

総括すると悪くない。いや、大戦果と言えるのでは？

……思えば、俺の『偶然』は今回は控えめ……とは言えないな。焼け死んでるし。

それでも、なんだかんだピンチの度に都合良く打開策を発見出来たのは幸運としか言い様がない。『偶然』は俺に味方しないハズが、どうしてか？

これには俺に心酔する集団が、数千と言う単位でそばに居た事が影響してそんな気がしてならない。

そう考えれば、一見無駄に見えた大軍勢を組織しての進軍も、全くの無駄では無かったと言えるのでは無いだろうか？

以上、総括終わり!!!

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「いや、無駄も無駄。大赤字でしょーよ」

そうやって冷たい事を言うのは誰だ！　ヨルミちゃんである。あ、女王ヨルミ様って言った方が良いですか？

体調不良でゆつくりと魔導車の中で寝込んでいた俺は、気が付けば王都に帰還していた。俗に言うところの気絶ワープである。

そんな有り様なので、王都に帰ってから俺は療養に数日を要した。

そしてようやく女王であるヨルミちゃんに成果を報告。体が治ったことには素直に喜んで貰えたが、軍の被害を報告すると顔を蒼くした、と言う訳だ。

ここはガラスを多用した天窓からの大胆な採光で知られるサロンの一室。お洒落な白いテーブルセットに腰掛けて、女の子二人でお茶をしながらおしゃべり

……と言うには少しばかり深刻なお話となってしまった。

「ヨルミちゃん দিয়েই য়ো, それよりさー、兵の損耗が激しすぎるよ。戦争でも無いのに傷病者多過ぎ、もう魔力が濃い場所に進軍するのは止めてね」

そんない。

とかおちやらけてる場合じゃ無いな。うーん、エルフと交易をしたいのだが、このザマじゃどうにもならない。道路の整備とかもしたいのだから、兵士の徴用禁止令は厳し

い、なんとか説得しなければ。

「ですが、今回の出兵で兵士達にも魔獣を退治したと言う自信がついたでしょう？ カ
ディナルの不祥事で揺らいだ王国の威信も回復したのでは？」

ザルギルゴール
大牙猪の巨大な死体をわざわざ王都まで運んだのも、威信回復が狙いだ。俺は出てな
いけど、凱旋パレードは盛り上がったハズ……コレぐらい宣伝費と割り切って欲しい。

だが、ヨルミちゃんはジト目でコチラに圧をかけてくる。

「なーにが威信回復ダヨー、兵士達の武勇伝はユマ姫の魔法で巨大な魔獣を屠った話題
で持ちきりダヨー？ 騎士とか役に立たない位に言われてるんだケド？ むしろ威信
が危篤で息してないんだケド？」

「……………」

一理、ある。

ザルギルゴール
大牙猪は固いからね。兵士が槍をヤーと突き出しても刺さらない、もちろん突進なん
て止められない。景気よくポーンと打ち上げられるだけ。

仕方無いから、道中の大半は俺が倒していた。コレでは兵士の自信に繋がる筈も無
い。

騎士団は重装備を固めて突進を止めたりもしてくれただけで、これ幸いと俺がトド
メを刺してしまったから、被害の割に全く目立っていないんだよ。

ん？ でも帰りはどうだったんだ？ 俺は寝込んで何もしてないぞ？

それを聞いてみれば、呆れた顔をされてしまった。

「タナカさんでしょーよ。バスバス魔獣を切り裂いたって話題を攫ってますー、劇もますます大人気だつて」

拗ねた様子でヨルミちゃんがぐでーっと机に手を伸ばす。

うーん困った。アイツが目立てば目立つほど、破天荒で無茶苦茶やらかした時の反動がデカくなる。

田中が拾い食いとかして、市民の顰蹙を買う姿をまざまざと想像してしまう。アイツならそれぐらいやりかねないよ？（偏見）

とかく、いきなり上がった名声など脆いモノ。そう言う意味では下がった威信だつて同じコト。

俺はヨルミちゃんへと穏やかに微笑みかける。

「ですが、王国の威信など地道な活動で回復するしかないでしょう？」

「ムニャー！ 眠たい事言ってる間に財政が傾くニャー」

メチャクチャだろ、この人。

だけど、貴族達の寄進が少なくなっているのも事実で。

なにかしようにも先立つものが必要なのは絶対だ。

「今、心配なのはニヤ？　実は王国はキイムラ商会からかなりお金を借りてるにや」

「……そうなのですね」

アイツ、ヤバいぐらい金持つてるみたいだな。

「でね、キイムラ男爵、あ、こんど陞しょうしやく爵するから子爵かな？　からの援助が減ると激痛にやのよ。でもね、タナカさんが現れて、その……」

「……？」

ヨルミちゃんは珍しく言い淀む。

……いや？　何を心配してるんだ？　俺はコテンと首を傾げる。

「にやーにを不思議そうな顔してるかなー！　アンタがタナカさんとくつついちゃったら融資が止まっちゃうじゃないの！」

「にやに？」

「にやに？　じゃないにいー！」

俺が？　拾い食いするような奴と？（偏見↓確信）

いやーナイナイ。そんで、それとキイムラの融資に何の関係が？

「むう、本気で言ってるう？　キイムラさんはアンタに惚れ込んでお金を出してるんでしょーよ」

「そうですか？　王国の中枢に食い込む事で、今まで以上に利益を得ている様に思いま

すが?」

「それはそれ! でも、好いた女が他の男とイチヤイチャしてるのに、同じように融資は出来ないでしょーよ」

うーん誤解。

「それにね……今、結婚とかになると王国としても贈り物のひとつやふたつしないといけないけど、予算がね……だからね」

ヨルミちゃんと言うには、俺には田中か木村かハッキリさせずにフラフラと悪い女として立ち回って欲しいらしい。

うーん。

「お断りします」

「ふにやーだめえ?」

ダメと言うか、前提が間違っている。

と、ソコにシノニムさんから御注進が。どうやらその木村が来ているらしい。

「通して下さい」

「ふにや? 説得してくれる?」

継るような目で見てくるが、説得も何も融資を引き上げるとは言っていないんですよ? しばらくして木村が登場した訳だが……

「……と言う訳で、融資の急な引き上げは容赦して頂きたいと言う事ですが」

「にや！ ストレートに言い過ぎ！」

「……その前に確認したいのですが」

「なんですか？」

木村が俺に？ 何だ？

「ユマ姫はタナカ氏と結婚の意思があるのですか？ 当商会としても盛大にお祝いをし

たいと思ひまして」

「……ブヘツ」

思わず「テメエ頭オカシイのか！」って言いかけたじゃねーか！

で、木村の顔を見れば、クツソ！ メチャクチャにニヤニヤしてる！ ヨルミちゃんがいなければぶん殴ってるよ？

「ふにやー？ キイムラ様はユマ姫が好きだったんじゃないんです？」

「勿論、愛しておりますが、御身の幸せこそが私の幸せですから」

「ふーん、愛だねー……………実はホモだったり？」

「違います！」

良いぞ！ ヨルミちゃん！ 木村は即座に否定するが、実際怪しいよな。あれだけお金があつたら俺なら奴隷を並べて毎晩お楽しみだよ。

俺も追撃して良いか？

「木村様、同性愛は不毛ですよ」

「誓つて、違いますから！」

「にやー女つ気が無くて怪しいよん、興味ないんじゃないの？」

怪しむヨルミちゃん、だがそれに言いつくろう木村の一言で場が凍り付いた。

「いえ、今も王国を代表する美女二人に囲まれ、光榮に思っている位ですから」

「マズイ！ なんでもない様に吐いたキザなセリフ。通常問題になるモノでは無いが、

今、容姿の事をヨルミちゃんに言うのは地雷なのだ。

「……………」

あー機嫌を損ねちゃったよ……、露骨に顔を顰めてカリカリとテーブルを引つ掻いている。

「キムムラ様、余り容姿の事を女性に言うモノでは……」

「どうしてでしょう？ 美しいモノを美しいと言うのは罪なのでしょうか？」

「美しくないモノを美しいって言うのは罪なによよ！」

あ、ヨルミちゃんがキレた。一方で木村は困惑顔だ。何事もそつなくこなすのに珍しい。

『ちよ、ちよつちよ？ なんでヨルミちゃん怒ってるの？』

慌てて俺に近づくと、なんと空気を讀まず日本語で質問してきやがった。

『いや、俺と容姿を比べられるのを心底嫌がつてるんだよ。俺と違ってソコまで可愛く無いじゃん?』

チラリとヨルミちゃんを見やる。可愛く無いと言うか華が無い。非常に地味な顔なのである、よほど権力者に向かない押し出しの弱い容貌であった。

普段は飄々としたつかみ所の無い彼女も、ここ数ヶ月、散々に俺と容姿を比較されて参ってしまったているらしいのだ。

実際に、二人で並ぶと人気の差は歴然。エルフへの恐れが憧れにすり替わり、人間なんて、王族なんて、と言う声までがチラホラと。

「……うう、ホントは解つてるにやー。王国の威信が落ちつばなしなのはワタシが可愛く無いのが原因なのにやー!」

あつ! とうとう拳を握り締め、悔しげに泣き始めてしまった! 普段つかみ所の無い女の子がガチ無きしてると、なんとというかコツチも悲しい気分になる。

「ヨルミ様、王に必要なのは容姿ではありません。ビルダール王国の主として、ヨルミ様は立派に仕事をしています」

「でも、でもおーわたしだって頑張つてるけど、ぶさいくだと頑張りが認められにやいのにやー」

「解ってます、私は解ってますからー」

「ユマちゃん」

二人でガシツと抱きしめ合う。そんな光景を楽しげに見つめるのが木村だ。

『あら、』

アラーじゃねーよ！ イスラム教徒か？ 改宗しろ！

俺が苛立ちに顔を顰めると、チヨイチヨイと肩をつつく。

『あ、あのさ、聞きにくいんだけどさ、マジでヨルミ様が可愛く無いと思ってる？』

ん？

『俺はてつきりお前を目立たせるために敢えて地味なメイクをしてると思ってたんだけ

ど……』

『いやいや、最近はどうやってヨルミちゃんに花を持たせるかで頭を悩ませてるんだけ

どっ』

『マジかよ、ちよつと俺に任せてよ』

『……良いけど？』

「あーもう、知らない言葉でわたしの悪口言ってるー」

言っていない言っていない！ さしものヨルミちゃんもスツカリ拗ねてしまっている。

ってか、幼い口調だけど本当は頭は良いし、歳もそれなりに行ってるんだよね。幾つ

だっけ？ 全然年上だったと思うが……

そんなヨルミちゃんの手をとって木村が囁く。

「いえ、ヨルミさまは掛け値無し、王国でユマ姫と並び立つ美人だと話していた所です」

おお？ 言うじゃ無いの。マジ？

「また、お前までそう言う見え透いたお世辞を言う」

ヨルミちゃん、融資がどうこう心配していたのにお前呼ばわりである。大丈夫か、この子？

「宜しければ、私に化粧をお任せ頂きたい」

自信満々にそう言うので、木村が化粧品を用意してヨルミちゃんのメイクをする事になったのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、大鏡の前にヨルミちゃんお化粧大作戦が始まったのだった。

木村、俺、ヨルミちゃんは勿論、フィーゴ少年、シノニムさんにネルネ、後はヨルミちゃんの侍女が4人。

結構な大所帯である。

『大体ね、顔なんてもんは骨格とパーツの配置のバランスが九割なんよ』

日本語で言いながら、ペタペタと化粧をヨルミちゃんの顔に施していく木村。

「ヨルミ様は骨格のラインも流麗で、鼻筋も通っていますし、目の配置も素晴らしい」
木村がそういつて褒めると、ヨルミちゃんは益々機嫌を悪くした。

「目と鼻が揃ってるから美人ってぐらいに聞こえるんだけどー？」

「いえ、配置と大きさのバランスが素晴らしいのです」

「でもおー」

言いながら隣に映った俺を見る。

比べると華やかさの差が一目瞭然。俺は特に美容を頑張ってる訳でも無いので、なんというか……申し訳無いね。

「ユマ様の顔は華やかであらせられるので、手を入れる部分は少ないのですが……」

言いながら取り出したのは付け睫毛？ そんなモノあるのか！ 多分手作りだろうな。

「コレで睫毛を増やし、メイクでアイラインを強調、アイシャドーも使い、ファンデーシオンで顔色を調整。あー肌のキメが細かいので化粧のノリが良いですねー」

手慣れた様子で化粧を施していく。そう言えばコイツ、化粧品も作っていたな。

「確かにヨルミ様の顔に派手な部分はありませんが、その分、お化粧次第で好きな様に印象を変えられるのです。まるで真つ白なキャンパスの様にどんな女性にも変身できるのです。それが出来るのも顔のパーツが整っていて、肌のキメが細かく、主張するパー

ツが無いからこそ」

メツチャ早口で言ってます。

だが、そうじゃなくても誰も木村の口上を止められなかっただろう。それぐらいヨルミちゃんの容姿が衝撃的に変わっていくのだ。

「それだけに、幾らでも美しく仕上げる事が可能なのです」

「これが……わたし？」

鏡に映ったヨルミちゃんは最早別人。

いや、コレ凄いな。全く原型を保ってないのだが？

そう言えば前世でもよく見た化粧でのピフォアアフター。アレで劇的に美人になる人の顔とヨルミちゃんって似てるかも知れない。

目が小さくて印象が薄いんだけど、パーツのバランスが整っている。

「これなら！ コレならユマ姫と一緒に登壇しても見劣りしないにやー」

ヨルミちゃんが自信を取り戻して一件落着……なのだが、木村がとんでもない事を言い始めた。

「勿論です、それどころかユマ姫様の様に、舞台上で歌や演劇を披露しても良いのでは？」

「え、？」

そんな話、聞いてないんだけど？ それひよつとして俺も付き合わされるんじゃない

?

だが人気が欲しいヨルミちゃんは食いついた。

「おー！ それで、キムラ子爵は毎回わたしにメイクしてくれるかにや？」

「勿論、我が商会での公演となればバックアップさせて頂きます」

「それ以外だと、ダメ？ 公式行事とか」

「それは……私も忙しい身でして、それに今回の化粧品も最高級品なのでお値段が……」

「にや？ どんぐらい？」

そう言われて木村が提示した金額は……いやー恐ろしいね。貴族向けの化粧品ってヤバイ値段ですわ。

それを見たヨルミちゃんなんて魂抜けかけてるし、マジでお金無いんだな。カディナール王子のやらかした後の火消しにお金を使いすぎたね。

それにヨルミちゃんには支持者も少なくって最高権力者とは名ばかりで収入が少ないらしいから……

放心していたヨルミちゃんだけど、美人になつたのは間違い無い。ヨルミちゃんの侍女なんて途中ですり替えたのかと心配しているぐらいである。

真顔で「魔法ですか？」と問われてしまった。

なににせよコレで問題解決かな？ 王族の人気も盛り返す事だろう。

うんうんと頷いているとヨルミちゃんから抗議が上がった。

「にやー寧ろ予算の問題は悪化してるにやー」

チツ気付かれたか！

「こうなったら木村サンの提案に乗つかるヨ！ ユマ姫と一緒に、二人で歌でも歌ってお金を稼ぐー！」

「え？ 私もですか？」

「やっぱりかよー！ 俺はもう人気取りは十分。もう恥ずかしいので勘弁して欲しいのだが？」

動揺する俺に、木村がそつと囁いた。

『世界初の百合アイドル営業でお願いします』

コイツメチャクチャ言いよる。

『ど、同性愛は不毛ですよ』

『不毛で結構。ツルツル幼女の百合アイドル。良いと思います』

コイツ拗らせまくってるじゃねーか！

エピソード3「戦力外通告」

頭がおかしくなりそうだから、前回までのあらすじってヤツをおさらいだ。

女王ヨルミちゃんとアイドルユニットを組むことになってしまったユマ姫の運命は如何に？

……メチャクチャだな、正気を疑うわ。

大体にして、君主制だつてのに君主自身がアイドル活動とか聞いたことも無い。

ヨルミちゃんはいつから承認欲求の獣になったのか？ 化粧はここまで女を変えるのか？

どうやら、問題の本質はヨルミちゃんに権力も予算も全く無い所にありそうだ。

「貴族院の連中に食い物にされてるんだヨ」

ヨルミちゃんの言によると、カデイナル王子やボルドー王子、ましてや第一王女や第二王女達と違い、政治の表舞台から距離をとっていたヨルミちゃんは後ろ盾が皆無。

旧ボルドー王子派の一部から支援を受けて食いつないでいる状態との事。

それに目を付けた貴族達が「政治に不慣れた女王を補佐しなくては」とか都合の良いことを言つて、王の権利を奪っていくのだそうだ。

「いっそ、それでも良いと思つてただけどねー、アイツら想像以上にメチャクチャなんだよ！」

ひょうひょう
飄々としたヨルミちゃんには珍しく、齒を剥き出しに怒っている。

聞けば、貴族達は我が世の春とばかりに無茶苦茶な法律を作ったり、好き放題に利権を振り回していると言うのだ。

その割に、王都が大変な事態に陥っていないのは、水際でヨルミちゃんが横暴を食い止めているからとの事。

「そうやって、皆の為に頑張つても、民の人氣つてのが無いとどうにもねー、市民の中にはユマちゃんが女王だと思つてる人も居るし……」

資料を見ると、想像以上に酷い。

ゴミや下水処理の予算を減らしたりは現代でもあるが、平民の女性を拉致ったり、勝手に建物を占拠したりと凄惨な事になっている。

市民を害するのは貴族にあるまじき行いとされるのだが、カディナール王子の行いが明らかに悪くなった今、タガが外れてしまった感があるようだ。

治安維持のために徴発する。みたいな謎の屁理屈も付け放題になってしまつていゝとの事。

「一番惨めだったのはね……強硬な地上げに対抗するために軍を動かしたんだけど、ど

うやつて軍部を動かしたんだと思う？」

「え、？」

ふむふむと相づちを打っていた俺に、突然のクイズが襲いかかる。

ハッキリいってヨルミちゃんは頭が良い。そんな彼女に政治音痴のお姫様と侮られてしまつては困る。

だが心配無用。政治に関しても、俺はキッチリ学習している。参照権から政治知識を披露するだけだな。

「え、と？ 非常事態宣言の後に、君主緊急権を発動したのですか？」

一時的に戦時下とする事で、王の一存で軍を動かせる！ コレだ！

「違う！ 私はユマちゃんの友達だぞ！ って言つて軍を動かしたの！ 普通逆でしょ！ 何で王が自軍を動かすのに、他国の姫の名前を使うんだつての！」

「まあ！」

俺は目をまん丸に驚いて見せる。

正直、知っていた。だって、聞きたくないのに軍部の人、確認を取ってくるし。

マジで俺の方が彼らにとつて上位にあるみたい。意味不明だね。

思えば、実権は貴族に取られても、天皇よろしく象徴としての役割や人気ぐらいは普通は王様に残るモノ。

なのに、その国の象徴としての人気も俺が奪ってしまったので、ヨルミちゃんは出廻らしになってしまった。

俺が死にたく無いあまり人気取りに奔走した結果である。責任がないとは言えず、この茶番からも逃げられそうにない。

「と、言う訳でレッスンだよ！」

ヨルミちゃんが叫ぶ。

舞台は変わらず大鏡がある王族の化粧部屋。ココには楽器は勿論、楽士だつてダンス単位で揃っているのだ。

貴族のご婦人は化粧が長いってのが常ではあるが、その間に暇を持て余さない様、楽団まで雇っているお屋敷は限られる。

君主の住居たる王宮は、当然その限られた少数の方である。

「みんな休暇に出て貰つてるよ！ 予算削減だよ！」
「すいません。多数の方でした。」

王の暇を潰す人が暇を出される。それぐらいヨルミちゃんは貧乏暇無しと言う事か。
「とつとつ、持ち場について！」

「え、コレからですか？」

「私は一応弾けるだけで……」

木村は勿論、何故かシノニムさんまで巻き込まれる。ギターとピアノ風の鍵盤楽器をそれぞれ担当だ。

俺もエルフの国では弦楽器を習っていたのだが、この場に無いから仕方が無い。ヨルミちゃんと一緒にボーカル担当だ。

それで全員持ち場について、さあ始めるかって段になって突然アイツが現れた。

「おーい、良いかー?」

田中である。

王宮の最深部だと言うのに英雄タナカはフリーパスで入ってきた。

コイツの身のこなしがあれば普通に潜り込めるのだろう。しかし、褒められた事じゃない。

なのに、ズラリと揃った面々を見渡し、戯けた調子で驚いてみせる。

「オイオイ、みんな揃ってんじやん、何やってんだよ?」

「アナタがフラフラしているので連絡が付かなかっただけでしょう?」

まーじで苛立つから、俺の声も険がある。

「悪かったって、だから連絡しとこうと思ってな、数日は海辺でトレーニングしようと思っただよ」

海? まだ寒いのに? コイツは剣に関しては何に真面目だな。だけど気配を讀

むより空気を読んで欲しい。

流石の木村も手に負えないのか、苦笑している。

「タナカ様も参加なさいますか？ 英雄と美姫達との共演となれば話題に事欠きませんが」

俺も木村も女王の手前、田中が相手だとしても慇懃に振る舞わざるを得ない。だが、田中にしてみればそれが面白く無いようだ。

「ふうん？ その喋り方かよ、慣れねえなあ！ どんなお偉様か、かわいいこちゃんが居るかしらねーがズイブン気取ってくれるじゃん」

「タナカ！ 控えなさい！」

俺は努めて硬質な声で田中を叱責する。

「どんなお偉様って、コツチは王様なんだが？ あ、コイツ、ヨルミちゃんの顔とか知らないわ。」

王宮を歩いていけば一度や二度、見たことはあるハズなんだけど、ヨルミちゃんってば貴族としてのオーラのアレが皆無だからね。

普段だったら、オイオイ王様だよ？ ぐらいのノリで許してやらない事も無いが、ヨルミちゃんが権威を気にしているタイミングだから見逃せない。

傷ついてやしないかとヨルミちゃんを窺うと、何故か顔を扇子で隠している。

「アラ、私が偉くて可愛かったら敬語を使って下さるのかしら？」
「お、おう……」

なんか言い始めたぞ？ ヨルミちゃんも控えめに言つてネジが外れてるから困る。
流石の田中も困惑しているから凄い。

ヨルミちゃんは一息に扇子を畳み、ピツつと田中へ突きつける。

「言いましたね？ 控えなさい！ 私こそがビルダール王国の女王ヨルミです」

……なんだコレ？ 狂ったか？ コレで可愛く無いから控えませんかと言われたら
どうすんの？

一方で田中とは言えば、呆然と立ち尽くしている。

あ、可愛いさは合格みたいですな。

「お、おう……？」

おう……じゃない！ 王だよ！ 王！ 繰り返すな！

「控えなさいと言っています！」

更にヨルミちゃんが言い募ると、さしもの田中も膝を折った。

「これはご無礼を、私はタナカ。一介の剣士に過ぎない身なれど、ユマ様を護衛つかまつる任を受けております。以後お見知りおきを」

田中は流れの剣士らしい武張った挨拶をこなした。

前は護衛任務もこなしていたらしいし、これぐらいは出来て当然なのだ。つまり普段の我々（俺と木村）は舐められている！

白ける俺とは対照的に、イタズラが成功したヨルミちゃんはご機嫌である。

「許す。ユマ姫は妾にとつても無二の友である。励みなさい」

「ハッ！」

礼をする、田中は護衛らしく俺を守る位置に控えた。

なんやねん、この空間。誰やねん、お前ら。俺にも控えろや。コツチも姫やぞ？

良く考えれば、田中はヨルミちゃんを知らないし、王国に来たばかり。この反応も当然だ。

『お、オイ。聞いていたヨルミ女王の特徴と一致しないんだが？』

田中が俺の背後で慌てた声を出すが無視。

だけど無視出来ないのがヨルミちゃんの暴走だ。

「じゃあいつくよー！ 3・2・1 ミュージックスタート！」

ノリノリだ。振り返れば意味がワカランと田中が微妙な顔をしていらつしやる。コレが女王ヨルミやぞ！ 雑魚は控えてろ！

で、木村のギターと、慌てた感じのシノニムさんの伴奏が続く。

いよいよヨルミちゃんの歌唱力が試される時。

「ああーピルタ山脈に夕日が沈む。我らが故郷ビルダール」

はい、国歌です。色気ゼロ！

でもね、イキナリ歌え！ 演奏しろ！ っって言われても皆が知ってる歌なんて他に無い。

嬉しい誤算だったのはヨルミちゃんの歌唱力。見た目も可愛いのでアイドル路線も問題なさそうだ。

そしていよいよ俺のパートだ。国歌なのにデュエット曲。斬新だよな。

——行くぞ！

「ボエー」

「ストップ！ ストップ！」

慌てたヨルミちゃんの停止が入る。

ん？ どうした？

「え？ マジ？ ユマたん、それマジで歌ってる？」

女王に問われて、首を傾げる？

「お目々パチパチさせてもダメ！ 睫毛長いなー！ 良いから真面目に歌って！」

いや、大真面目なんだけど？

ソコに、おずおずと田中が手を上げた。

「ユマ姫様は以前より独創的な歌唱力をお持ちでいらつしやるのでブフウー」

ブフウーじゃねーよ！ せめて最後まで言え！ 笑うな！ 控えろ！

ああ、そうだよ！ 俺は音痴だよ！ でも、それは前世まで。数多の記憶を回収し、とつくに治つてると思うじゃん？ 思うじゃん？

駄目みたいですネ。

思えばセレナが歌ったラジオ体操。アレも音程が外れていた。

ひよつとして、我が家系が音痴揃いなのかも知れん。

あ、良く考えれば俺の真似したから音痴になるのは当然で、俺だけ音痴の可能性が高そうです。

木村も頭を抱えている。

「そう言えば、弾き語りの時も歌は歌ってませんでしたね」

まーね、音痴かもって気付いてましたよ。

今の空気が凍る感じ、控えめに言つて死にたくなっただけど？ もう一度、頭をシヨットガンで吹つ飛ばして、どうぞ。

俺は縋るように木村を見上げる。

「キイムラ子爵。あの、歌唱力を上げる方法ありませんか？」

「……その願いは、わたしの力を大きく超えています」

オメーはシエンロンか！ 俺はどんだけ音痴なんだよ！

ヨルミちゃんにはニヤニヤとコチヲを見てくるし。

「ユマ姫にこんな弱点があつたなんてねー」

急に自信満々にマウント取ってくるし！

大体にして、美人になった以上、さつきみたいに普通にすれば人気も回復しますよ
ね？ 俺要る？ それに俺は歌だけじゃ無いよ！

「我が国の弦楽器、ティアンスがあれば演奏は出来ますよ！」

「ですが、ユマ姫の歌声が聞きたいという声は上がると思いますよ」

シノニムさんまで退路を断ってくるし！ どうすりゃええねん。

頭を抱える俺に、田中は面白そうに笑いかける。

「失礼ながらユマ様は神の御技をお持ちなのですから、歌が上手い人物の記憶を回収すれば良いのではないのでしょうか？」

「それです！」

田中の敬語が気持ち悪いが、グッドアイデアだ。神は砂漠の歌姫の前世があると言っていた。

砂漠の街と言えよ？ 南方の都市プラヴァスしか無い！

「タナカさん、アナタは海に修行に行くと行ってましたね？ どうしてですか？」

「ハッ！ 海での修行は負荷の割に怪我がしにくいのです」

「それは、浜辺での走り込みなどですか？」

「？ そうですね、それが？」

はい、決定。

「では、もっと広い砂地があります。プラヴァスで悲劇の歌姫の情報を集めて来て下さい」

「え？」

え？ じゃない！ 言ったことに責任を持って！

木村からもなんか言ってるので原因を探ってきてくれると助かります。

「最近、極端にスパイスが値上がりしているので原因を探ってきてくれると助かります。」

このままではカレーが食べられなくなりそうです」

「その大役、非才なる身なれど拜命させて頂きます」

「なんで素直なんだよ！」

「カレー　〽〽超えられない壁〽〽　俺なのか？」

「まあ、期待しておくよー」

だらけた様子でヨルミちゃんが手を振った。なんかもう飽きてないか？　この子。と、言う訳で砂漠の歌姫の記憶を探る事になったのだが、全く焦る案件では無い。なにせ、ヨルミちゃんの不人気と財政不安は程なくして一服したからだ。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「……なんか、キイムラ商会の化粧品。馬鹿売れしてるみたいだねー」

「はい、お陰様で」

「なんでかなー？　ひよつとしてモデルが良いからじゃ無い？」

「さ、左様ですね」

木村は引き攣った笑みを浮かべている。どうもふっかけられたらしい。

実際、様変わりしたヨルミ女王の美貌は世の女性達を狂乱させた。木村の商会で美容品が飛ぶように売れ、ヨルミちゃんも儲かった。

木村も事ある毎にヨルミちゃんを引っ張り出すので、人気もうなぎ登りである。

……実は、俺も魔法でシミそばかすを取る高額オプションの担当だったりして。

それ以外にも、ヨルミちゃんと一緒に舞台に引っ張り出されたりして、忙しくて困ってしまおう。

それに、ヨルミちゃんは普通に歌を披露しているので、いよいよユマ姫も歌えという圧力が強まっている。

はあ……どうしてこうなった？

閑話―時間停止者は九割やらせ

ココは王宮の一室。俺の私室の一つであり、寝室でもある。更に言うと木村に殺してくれと迫った部屋でもあった。

つまり、俺にとって最もプライベートな部屋と言えるだろう。

こんな場所で、またしても木村と二人きり。不貞を疑われても仕方が無いが、これは理由があつた。

「カレーですね……」

目の前に鎮座するカレーライスである。

「ええ、米と合うように改良を加えました。ご賞味下さい」

何を隠そう久しぶりに味覚が戻って以来、俺は美味しいモノを食べる度に安心してしまつてしまった。

それに気が付いたのは、この前発見したチョコレートを食べた時。

正に幸せの暴力。染みたね、臓腑に。

で、気が付いたら夜だったから驚きだ。一服盛られたかと思つたね。

このままではいけない、いざと言う時に大変な弱点となつてしまう。音痴なんてこれ

に比べれば小事に過ぎない。

毎回毎回、美味しいモノを食べるだけでポンコツになる姫なんて、社交界にも出せないだろう。

俺には政敵だって多いし、何より気を抜けば『偶然』が殺しに来る。

だからコレは特訓なのだ！ 秘密を知らぬ様、美味しいモノは私室でコツソリ食べる必要があつた。

俺はこの弱点を人知れず克服せねばならない。

絶対に、カレーライスになんて負けたりしない！

「では・・ 行きます」

暴力的に食欲を刺激する香り。とろける様な飴色のルー。

一匙スプーンに掬うも、口に運ぶのが怖い。

厳しい戦いになりそうだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ご飯が手に入ったら是非作りたかったのが、このカレーライス。

自分でも会心の出来ではあつたが、食べたユマ姫の反応は想像以上だった。

——カチャカチャカチャ

二人っきりの寝室に、静かに食器の音だけが響く。

ユマ姫がカレーをかつ込む音であった。ワイルド感溢れる感じが最高に可愛い。ただど虚ろな瞳には光は無く、意志の力を感じない。

その姿、完全にキマっていた。

……カレーでトリップするヤツ、初めて見た。

嬉しいを通り越して、若干怖いまである。

キレイに食べ終わると同時、「ほげー」と音がしそうな程に放心した。

コレだ！ 最近のユマ姫は美味しいものを食べると意識を飛ばし、無防備な姿を晒してしまう。

この場で食べるように提案したのは俺。余人に見せられない顔であるので仕方が無い。コレを見るのも楽しみの一つであった。

だが、今回はコレに終わらない！ 全ては計画通りであった。

俺は焦点の合わぬユマ姫の眼前でパタパタと手を振る。しかし無反応！

キュツキュツ！

カレーの付いた口をハンカチで拭き取る！ しかし無反応！ ほつぺた柔らかーい

！

再度目の前で手を振るも、やはり意識は無い。

いよいよだな、始めるか！
宴の時間だ！

俺はユマ姫の背後に回り込むや、ウェーブが掛かったピンク髪を掻き分ける。

「これがユマ姫のうなじ！」

まだ幼い少女の細い首筋が露わになった。ロングヘアだから中々見られないポイントである。

ユマ姫の香り！ ラクトン！ 桃の香り！ たまんねー

髪がピンクになった影響か、最近はゴスロリっぽいフリフリの衣装を着ることも多いユマ姫。

オラ、ワクワクすつぞぞ！

次は正面に戻る。まだ光の戻らぬ眼差しを指差し確認すると、フリフリのスカートを大胆にめくり上げる。

するとどうだ？ 同じくフリルの入ったパンツとご対面！

どぎついカラーリングの縞々タイツが作る絶対領域がアクセント！ ゴスロリ感いいね！

ちなみに、タイツもスカートもパンツだって、全部俺の商会から送ったモノだ。自分

で作って自分でご対面！とか喜んでるの、正直キチガイ感ある。

ただけどな、こう言うのは履かれているのが良いんだよ！俺が作ったのはタダの布！履かれた時に初めてパンツへと進化するのだ！かといって『ユマ姫（下半身だけの姿）』はNGな！

しかし、この聖域に手を出すのは早計だ。コイツの言う『偶然』は神のお墨付き。面と向かって逆らうには危険に過ぎる。決して安易に踏み込んでほならない！

俺は再び背後に戻ると、髪の間顔に埋めた。

あーユマ姫の匂い！たまらないんじやー！クンカクンカ！

と、その時俺に、電流走る。

いや、待て！後ろから密着したこの体勢！胸を揉めるのでは？

いつもいつも、揉みたい揉ませると冗談めかして言っでは居るが、実のところ心底揉みたい。

このチャンス、逃して良いのか？

良くない！俺はやるぞ！

おずおずと脇の下に手を入れる。ここも柔らかい！脇を舐めたい！

だが、目的地は先、小ぶりで控えめなふくらみだ。それが、いよいよ射程に収まった。包み込む様に手に収まる。それだけで堪らない背徳感があった。

——むにつつ！

揉んだ！ 揉んじやった！ 堪らん弾力。

乳首！ 乳首はどこだ！ ココか？

「ンツ！」

あ！ 声が出た！ ユマ姫の！ 覚醒した？

俺は思わずフリーズしてしまった。こうなれば何事も無かったかの様に離れ、誤魔化するのが正解なのだが……

「……………」

だが、姫の体が反応しただけで意識は戻ってないらしい。

まだ？ まだイケるか？ よーし今度は乳首をコネコネと……

「……………なにしてんのお前？」

「フアツ！」

田中だった。

「え？ お前、プラヴァスに行ったはずじゃ？」

「いや、何の用意も無しに行けるかよ。細かい要件を詰めてくれや」

確かに、歌姫もカレーのスパイスも詳細を詰めていない。コイツの足ならどうか知ら

ないが、通常は片道で二ヶ月は掛かる道のりを適当な情報で出発したくは無いだろう。
「で、何やってんの？」

「……………」

うなじに顔をつっ込んで、後ろからおっぱい揉んでます！ 見ての通りです。

仕方無く俺は、田中に事情を説明することにした。

「え？ 放心してる相手に？ セクハラ？ もう半分レイプだろ？ そもそも、真剣に頼めばコイツそれぐらいやらせてくれるんじゃないの？」

「それじゃ意味が無いんだよ！」

絞り出すような俺の絶叫が木霊する。

やはり、田中は全く解っていないかった。セクハラの醍醐味ってヤツを。

「いや、解りたくないんだけど？ なんなの？」

胡散臭い顔で見つめる田中に、俺は元気良く宣言した。

「時間停止モノのAVみたいで興奮します！」

「刑務所でも元気だな」

俺の一世二代のカミングアウトは、しかし完全にスルーされた。

肩を叩くの止めてくれ！

「いい、いやあ？ 殆ど同性の友達みたいなモンだし！」

「どう見ても未成年者略取です、ありがとうございます」

「待て待て? この世界では成人している扱いらしいよ?」

「一応、姫だぞ? この世界では断頭台一直線に決まってるだろ!」

ですよねー。だが、俺だって聞きたいことがあるよ?」

「お前だってどうしてココまで入ってくるんだよ! 姫の寝室だぞ?」

「そりゃ、無防備な姫を護衛しろってシノニム嬢に言われてだが?」

はい、そうですね。完全に筋が通っている。コレは非常にマズイ。許して貰っても俺の立場がマズイ。

悩んでいると、呆れた様子の田中が気になる事になり始めた。

「ま、護衛は要らなかつたみたいだけどな、乳繰り合うにしても仕事の話を中心にしてくれ」

「ん?」

あ、あれ? 護衛は要らない? まさか、ひよつとして、ユマ姫は既に意識があつた
り? 俺ってば、気を使って貰っていた? だとすると気まずさの断頭台一直線。

俺は慌ててユマ姫の正面に回り込む。

「あー違えよ、オイ! そろそろ出て来てくれ!」

田中が叫ぶと同時に、顔を真っ赤にした女性がクローゼットから飛び出して来た。豪華な金髪をブンブンと振り回している。

「どうして！ どうして？ いつもいつも！ 良いところで邪魔をするの！」

シャルティア嬢改め、シヤリアちゃんだった。メイド服に身を包み、手には魔剣。

マーロウ少年からのお下がりであるが、キチガイに刃物を超えた危険な取り合わせ。

「ってか、なんで居るの？ 護衛？ ずっと見てた!？」

「良いところだったのに！ どうして！ どうして！」

「うわっ！ ふざけんな！ 落ち着け！」

シヤリアちゃんは泣きながら魔剣を振り回す。

遺跡の硬質な壁を削った魔剣は折れて、短剣のサイズになってしまった。

それが却ってシャルティア嬢の手に馴染んだようで、素早い剣筋は田中ですら不格好

に身を仰け反らせる程のモノだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「うひゃひゃ、コイツら！ バカでしょ！」

俺は『参照権』で放心していた時の顛末を確認していた。

木村は気付いてなかったみたいだが、目で見たモノは、たとえ放心していようが後か

ら参照権で確認可能だ。

だからチョコを食べた時は勿論、お米ごと木村の手を舐め、抱える様に寝た時だって、俺は何が起こったか知って居るのだ。

俺がチョコレートを食べたときは、もうちよつと控え目だった。

なんかソワソワした様子の木村。髪を触ったりお尻を撫でたりの軽いセクハラ。

それが解っていて、敢えて私室で二人つきりになった。

……別に、俺の体に何をしたって良いし、胸ぐらい揉もうが、うなじに顔を突っ込もうが、いっそ、手酷く犯そうが構わない。

殺してくれと頼むぐらいなのだから、覚悟があれば何をしても構わないのだ。俺だって二人きり、それぐらいの気持ちでカレーを食べたのだから……

「それにしても時間停止モノのAVはねーだろー!」

想像以上に楽しそうなんだけど？ 俺も時間停止する女の子が欲しいです。

アイツの性癖拗らせもここまで来たのかと感無量。俺も見習っていききたいね。

それにしても誤算だったのはシャリアちゃんか俺と木村がイチヤイチャ？ 楽しそうにしているのを覗く趣味があつたことだ。

護衛としては頼もしいが、危険人物過ぎて恐い。

田中と木村、シャリアちゃんの乱痴気騒ぎを確認しながら、俺はケタケタと笑うのであつた。

七章 砂漠の歌姫の涙

紛争の始まり

銀の穂先がズラリと並び、夏の陽光をギラギラと反射する。

長大な槍、抱え並ぶは鎧姿の男達。その数は千にも届かんばかりだった。

それだけではない。背後には彼ら以上に勇壮な重装騎兵が百も控えている。

彼らこそ、王国南東部、テンタクール領のデルタ騎士団。そのほぼ全軍だ。

暴力の権化たる騎士団の威容。この世界の人間であれば、誰でも心がざわつくに違いない。

更には言えば、彼らは自領を守る為に出陣したのではない。

彼らが陣を構えるはゼスリード平原の中心部、国境線である大河フィーナスを望まんとする場所だった。

ゼスリード平原はユマ姫が恐鳥リコイに追い回され、霧ギユルドスの悪魔が暴発した場所としても記憶に新しい。

ここに再び帝国の魔の手が迫ろうとしている。その救援の為、遠路はるばる加勢に駆けつけたのだった。

「コレを見て攻めて来るといふなら、遠慮せず来るが良い」

自信たっぷりと言い放つのは白髪の老人。一癖も二癖もある笑顔を顔に貼り付け、馬上から陣容を見下ろしていた。

この老人こそがテンタクル領主、ルメルド伯その人である。

独立独歩で生きてきた偏屈老人、そんな彼に苦言を呈することが出来る人間は少ない。

「ルメルド伯、敵の策が読めません。コレほどの大軍で挑まず、まずは小勢で一当てするべきでしょう」

「くだい！ その様な小細工、デルタ騎士団には不要！」

ルメルド伯は素気なく一蹴するが、彼に進言したのは同格である伯爵。それも今回救援を求めたオーズド伯だった。

口には出さないが、ルメルド伯はソレが気に入らないのだ。

ルメルド伯はカディナル王子の熱心な支持者の一人だった。

人間を剥製にする凶行で失脚……いや『処理』されたカディナルだが、見た目は美しくありながら、非情な決断も下せる人間として、王の資質は一定以上あったのだ。

少なくとも庭に芋を植えるポルドー第二王子よりも華があり、貴族受けは良かったのは確かである。

最大派閥の幹部として隆盛を誇っていたルメルド伯だが、ユマ姫の登場から全てが変わってしまった。

現在、カデイナー派の落日は目に余る程。狂人の片棒を担いだとして、ルメルド伯には王を暗殺した首謀者の疑いまでついて回る。

偏屈なルメルド伯にとって唯一の親友であったルワンス伯など、ユマ姫を嘘発見器にかけたしばらく後に不審死を遂げている。

一方で気に食わぬ若造である、このオーズド伯はどうだ？

スフィールを帝国へ委譲せんと企むグプロス卿を成敗し、ユマ姫を救った立役者として市井での評判もうなぎ登り。

王国にこの人ありと言う名声まで手に入れてしまった。

何事も如才じよさいなくこなすが慎重でつまらない男、と言うのがオーズド伯の印象だっただけに、ルメルド伯はこの英雄扱いが面白く無い。

自分達の権勢をオーズド伯に奪われたかのような、理不尽な苛立ちすらも感じていた。そんな彼にとつて、『帝国に侵略の気配あり』の報はかつての地位を取り戻す為の一步として願ってもない物だった。

搦め手でスフィールを手に入れたオーズドなどより、優れた武力を誇り、堂々とスフィールを防衛した我こそが真の防人であると国中に知らしめる。

その為には派手で大きな勝利を必要としていたのだ。

だが、コレから侵略しますなど、そんな解りやすい侵略戦争などあり得るのだろうか？ 少なくとも今までの帝国の手口から考えると、余りにも正々堂々としている。

まるで、こちらの迎撃準備が整うまで待ち構えていた様な印象すらあった。

それがオーズドには不安で仕方ない。だからこそ必死でこの老人を止めているのだ。

「コレは罠です、ルメルド伯！ 遮蔽物の無いゼスリード平原。銃撃に曝さらされれば命はありません」

オーズド伯の訴えは正しい。既に戦争の形は一変しているのだ。

今までの様に弓で牽制し、槍で突撃、満を持しての騎兵隊。そんな戦争は終わってしまった。

銃がこの世界に現れてしまった時点で、平和な戦争は終わりを告げた。しかしソレが老人には解らない。

「情弱だじやくな！ 我らが重騎士が鉄の欠片に後れを取ると思ってたか！」

唾を飛ばして大喝する。

この老人も当然に鹵獲した火縄銃の試射を見ているが、本質的にその能力を理解していなかった。

「あんな物、何の脅威であるか！ 一射するのに四十秒、その間ワシのロングボウなら

五、いや六発撃てる」

老人の言うとおおり、火縄銃の欠点の一つがその連射性の低さにあるのは異論の余地が無い。

弓の名手であれば、火縄銃を撃つ間に三、四発撃てるとしても驚きではない。

……それでもだ、それでも、火縄銃は戦国時代を大きく変える兵器であった。

銃の数は少なく、精度も劣悪、火薬の製造もままならなかった時代であつてもだ。

和弓は決して弱い弓では無かつたはずだ、竹を貼り合わせ、向きを変え焼きも入れ。

一種のコンポジットボウの様な効果を持つていた。更に言えば馬上ですら使える大型弓は世界でも例が無い。

それでも、銃の時代の到来を止めることは不可能だった。

「その鉄の欠片で、自慢の重装騎士が倒れる事になるとしてもですか!」

オーズドが叫ぶ。

彼は銃の恐ろしさを正確に把握していた。まずは威力が高い。そしてなにより弾速が早い。

弾速が早いとどうなるか？ 曲射の必要が無いのだ。コレが大問題だった。

通常の弓であれば、遠距離となれば角度を付けて射るしか無い。そのため、密集陣形のだ真ん中を狙つたとして、それでも矢の大半は地面に突き刺さる事になる。

戦端が開かれる際は、それぞれ最も優れた兵士を一人選び、両雄の決闘を合図に戦いが始まると言うのが千年続くお約束であった。

しかし、その約束は乾いた発砲音で無惨にも引き裂かれた。

「卑怯なり！ 武人として恥を知れ！」

顔を赤くして叫ぶルメルド伯。

無理も無い。橋で名乗りを上げたのは伯が自慢とする音に聞こえた豪傑だった。

それが名乗りを上げることすら叶わずに、無粋な弾丸に引き裂かれた。

コレで怒らぬ者は居ないだろう。

「突撃イイ！」

ルメルド伯の顔は赤を過ぎてどす黒く染まり、青筋を幾つも立てての絶叫だった。

ゲイル大橋目掛け、伯が自慢とする精兵たちが殺到して行く。長槍を掲げ一目散に突

撃する迫力は、魔獣であつてもギョツと目を剥くに違いない。

目の前で仲間が卑怯な手で討ち取られた。その怒りは一兵卒まで伝染する。全軍が

一匹の怪物と化しての突撃であつた。

一方で帝国兵の士気は上がらない。誰が見ても卑怯な行い、無粋な新兵器で堂々名乗りを上げる兵士を打ち抜いたのだから当然の事。

戦争と言うのは命の削り合い。通常の心理状態では行えるモノでは無い。

ならばまずは両雄の一騎打ちで、その気分を盛り上げてから始めると言うのは理に適っている。現代人から見ると愚かなお約束に見えるかも知れないが、決して馬鹿にして良い行いでは無い。

決闘を踏みにした帝国の士気の低下は明らか。両軍がぶつかった時にその勢いの差はそのまま戦果となって現れる……ハズであった。

……だが、そもそもが、ぶつからないのだ。

——パアアアン！

その斉射で十人の兵士が死んだ。それも、一瞬で。

トリガーを引くだけ。特別な覚悟が要らず、特別な技術も要らない。

橋に殺到した兵士、外す方がよほど難しい。矢と違い、守ることも不可能な不可視の弾丸が兵士を襲った。

先頭の兵士達が死に、つかえて動けなくなつたところを横あいから打ち抜かれる。

橋の上で動けない彼らは、対岸で扇状に広がって銃を撃つ帝国軍にとつて的でしか無い。

——パアアアン！

怒りに染まつた兵士は味方の死体を掻き分けてでも前進するが、すぐに銃弾に倒れ、自分が新たな障害物として後続の進行を妨害してしまう。

しかも、帝国は三百人の鉄砲隊を三つに分けての三段撃ちを行っている。その銃弾が途切れることは無かった。

ルメルド伯は四十秒と言ったが、慣れれば二十秒ほどでの発射が可能。

全員のタイミングを待っても、三十秒もあれば二発目が撃てる。つまり、三交代であれば十秒ごとの斉射が可能であった。

——パアアアン！

「クソッ！ 駄目だ！」

「逃げッ、頼む」

そうして無為に死に続ければ、止まらぬ一匹の獣とて、ただの群衆に成り果てるのも時間の問題。

「引けッ！ 引くんのだ！」

コレは現場指揮官の判断。

だが、引く時は攻める時より悲惨な行軍となった。死んだ人間を踏みつけて深く進化した兵は、今度は生きている人間を踏みつけて我先にと陣地へ戻ろうとした。

このとき足蹴にされて死んだ兵士の数は十では効かない。

「卑怯な！ 卑怯なり！」

叫び続けるルメルド伯だが、戦争の変化の被害者とも言える。指先で人を殺せる銃で

あれば戦争にまつわる儀式は不要なのだから。

しかし、アレだけ虚仮にされ、一当てすることも叶わず敗走したとなれば、一転、士気は地に落ちる。

そこで動いたのはオーズド伯。

「私にお任せ下さい！」

「小僧が！ やれると言うか！」

「と渡河だけならば問題はありますまい。そこからはルメルド伯にかかっておりませう」

「ふん、河さえ渡れば騎士団は無敵よ！」

「では」

彼が連れ立ったのは小勢、それもとてもじゃないが戦いが出来ると思えない程にとんちきな兵だった。

武器を持たず、巨大な手押し車一杯に藁を積み上げている。

「何じゃアレは！」

「工兵です」

「工兵だとお？」

この世界、まだ戦場を自分達に有利に整形すると言う発想は一般的ではなかった。なので工兵と言うのは、橋を作ったり、陣地を整形する為の兵科であり、前線に出てくる

モノでは無かった。

「アレでどうするのだ？」

「突っ込みます」

「ハア？」

手押し車達がゲイル大橋へと殺到する。

しかし、その大きな姿は火縄銃の的であった。

——パアアアアン！

一斉掃射。……だが、濡れた藁を積み上げた手押し車は貫通出来なかつた。

火縄銃の威力は現代のライフルには遠く及ばない上、柔らかい鉛の丸玉は貫通力に乏しいからだ。

不安定な手押し車で、死体を避けながらフラフラとした前進。通常ならば槍の一突きで粉々に粉碎される脆いモノだが、火縄銃には高い防御力を有していた。

そして、積み上げられた藁を盾にして弓兵が前進する。

「グアアア」

悲鳴を上げたのは火縄銃を持つ帝国兵。ココに初めて帝国側に被害が出た。

弓兵が放った矢が砲兵に突き刺さったのだ。

弓は曲射であるが故、積み上げた藁の上を飛び越えて射撃が可能。当然、めくら撃ち

になるので命中率は劣るが、足を止めて三段撃ちを行う相手であれば多少は当たる。

そして、今まで一方的に撃っていた側が一転、撃たれ始めれば案外脆いのは良くある話。

規律正しい動きでの三段撃ち、その間隔が徐々に広くなっていく。

「荷を降ろせ！」

そして、とうとう対岸に辿り付くや、手押し車は荷であった濡れ藁を投げ捨てた。言わば土嚢の様なもの、身を隠しながら矢での牽制を行えば、いよいよ渡河の準備が整った。

「良くやった！ 行けエ！ 騎士団の突撃じゃ！」

ココでとっておきの重騎士団を投入する。積み上げた藁など、馬にしてみれば飛びごろのオモチャでしか無い。

戦況に歯噛みしていたのは騎士達も一緒。接近さえすれば、鉄砲隊を馬上から散々に蹂躪出来るに違いなかった。

「……お待ち下さい！」

しかし、ソレを止める者が居る。それもまた射撃を封じた功労者である、オーズドだった。

「何じゃ！ 絶好の好機じゃぞ！」

散々お預けを食らって、いざと言う場面でもたも止められた老人の苛立ちはピーク。だが、ルメルド伯はオーズドの次の言葉に顔を青くした。

「伏兵です、ソレも挟まれていきます」

「馬鹿な！」

見れば左右から別の鉄砲隊が迫っている。その数はいずれも五百。これで兵数的にも完全に逆転された。

「奴らどうやって！」

コレはオーズドと言えど予想外。

ゼスリード平原は急流のフィーナス川で隔てられ、このゲイル大橋以外から兵を通すのは難しいハズであった。

二人はあずかり知らぬ所だが、帝国はこの日のために準備を重ねていた。

そのタネは竹。実は大森林で禁忌の植物とされているのが竹だ。

竹は地球でも成長が早い植物。無数の節から一斉に樹高を伸ばすのである。しかもこの世界の竹は節が倍があり、魔力を糧に成長するので更に早い。

その幼木を河の兩岸に植えれば、三日程度で成長し、根はびくともしないほどに固定される。

兩岸の竹同士を縄で結び、間に板を通す。これだけで人間一人ぐらゐは渡れる橋が完

成する。

ただし、これでは馬は無理だし、軍の進軍など絶対に不可能。

そこで、縄にフウセンカズラの様なつる性の植物を巻き付け成長させておく。

数日で巨大な風船状の実を幾つも付けるのだが、この実は浮力が強く、決して沈まない。

この縄に板を通せば、浮力で浮き上がり、竹に結んであるために流されることも無い。長く使えるモノでは無いが、一時であれば軍用にも耐える橋が完成する。

コレは当然、帝国の技術では無い。エルフを裏切った植物学者、ドネルホーンの策であつた。

「撤退ッ！ 撤退だッ！」

強力な射撃武器を持つ相手に包囲されれば命は無い。ソレが理解出来ぬ程の無能は居なかつた。

全軍は尻に火を付け逃げに入る。

「ワシが殿しんがりを務める！」

「武運を！」

ルメルド伯は頭が固過ぎただけで、決して懦弱な将ではない。数名の騎馬と共に殿についた。

オーズドとしてもコレを止める気は無い。ここまで急激に戦況が悪化するとは夢にも思わず、ただ忠告をするだけのつもりで来たので供も少数、打てる手は全く無かった。「マズイぞー！」

しかし、逃げるよりも追う方が早い。さらに、ゼスリード平原は遮蔽物が無く良いのだ。

——パアアアン

銃声が響く、その度に多くの兵士が地に伏せた。

だが、兵が転がる理由は銃弾だけじゃない。

「ぐわっー！」

「足がー！」

足を取られ、転がる兵士が続出する。

去年に大量の恐鳥リコイが死んだゼスリード平原、その大きな死体は腐り果て、所々で柔らかな腐葉土を作っていた。

足を取られれば助けるために数人の足が止まり、行軍速度は上がらない。

「コレは……マズいぞー！」

オーズドは汚名を被るのも構わず、軍を見捨て単騎での逃亡すら視野に入れる。

——パアアアアン！

また銃声がゼスリード平原に響いた。

「ウグッ！」

いよいよ、オーズドの従者までもが弾丸を身に受けた。最早これまで、散り散りに逃げて命を繋ぐしか無い。

オーズドが散開の命令を出そうとした、その時だ。

その時、兵の一人が空を見上げて祈った。

「天使サマ……」

天使……違う、空には一人の少女が舞っていた。

「アレは……」

すわ、帝国の新手かと身を固くしたオーズドだが、よく見ればその姿には見覚えがあった。

「ユマ姫……」

まさか、空を飛ぶとは……だが、一体何の為に現れたのか。

「おおっ！ アレは！」

「姫様！」

確かに士気は上がった。だが、それならもつと早く現れてくれれば……そうオーズドが思った瞬間、ユマ姫は急降下してくる。

その着地点は？ 敵と味方の丁度中間。

言うまでも無く、銃弾飛び交う危険地帯だ。

「なにを……」

その言葉を継ぐ事は、オーズドには出来なかった。

——ドゴオオオオ！

ユマ姫の着陸とほぼ同時。平原のただ中に、突如せり上がったのは巨大な土壁。高さは二メートル、幅は十メートル以上もあった。

……これが、魔法かとオーズドは言葉が無い。

しかし、これで逃げられる。自分の指揮下でスフィールの兵と城壁を使えば幾らでも籠城出来る。

そう思ったオーズドだが、ユマ姫が発した言葉は耳を疑うモノだった。

「さあ、皆さん、反撃開始と行きましよう」

夏の日差しも届かぬ土壁の影の中にあつて、ユマ姫の姿だけが後光を帯び、不気味に輝いて見えた。

錯覚だ……そう思うが、現実には光は目に突き刺さる程。

殺戮の天使がついに地上に舞い降りた。

晴れときどき姫

——バチユン!

湿った破砕音。

またひとつ、帝国兵の頭が吹き飛んだ。

空から見ると、人間が蟻のように見える。

「クソツ怯むな! 仰角に構え! 目標は敵飛行物体。三、二——」

——バチユン

音頭を取っていた下士官が、旗を振り下ろせずに首無し死体と化していく。

「ハイ、次♪」

俺は楽しくつて堪らない。

鴨撃ちとばかりに撃ちまくっていた側が一転、撃たれる側に回るつてのは傍目にも愉快なモノ、それが憎き帝国兵ともなれば格別だ。

銃を持ち、横に広がって歩く戦列歩兵。

俺は馬上で叫び続ける上級士官を無視して、旗振り役の下級士官を狙い続けた。

——パ、パ、パン、パパン

するとどうだ？ この腑抜けた音。兵士達は斉射が出来なくなる。ポスポスと散発的な破裂音が連続する。単発で規則無く撃つだけでは、面で圧する弾幕とならない。

「撃てえー 撃ち落とせえー」

上級士官はあえて殺さない。

何故か？ 彼は俺が下級士官を取って狙っていることを知らない。だから次は自分かと怯え、半狂乱に陥っている。

自分の番が来るまでに何としても撃ち落とそうと、当たらない弾丸をひたすら宙にばらまくだけ。周囲の警戒も疎かだ。

「そーおー 旗を拾わんかー」

上級士官は落ちた旗を指差し絶叫する。

下級士官は前線での旗振り役。当然に死ぬ事も計算の内で、次の旗振り役も決まってるようだ。

今も一人の兵士が旗を拾おうと手を伸ばし――

――バチユン

俺に頭を吹き飛ばされた。

これを何度か続ければ、もう誰も旗を拾わない。

指揮系統はグチャグチャだ。

「撃てエー」

——パアアアアン！

久しぶりに纏まった数の斉射がなされる。

だが、その全てが俺へ届かない。バシユツと音をたて、不可視の膜に阻まれる。

防御結界の魔法だ。矢を加速させる逆、全てがこの膜で静止する。

今、俺は空を飛んでいる。魔法で……と言うのは半分だけ正解。

使っているのは白いグライダー。天使の羽に見えるのか、俺を目にした兵士達が祈り始めるのだから堪らない。

調子にのって後光まで演出してしまっただから、俺もだいぶ神だなんだと持ち上げられるのが癖になっている、癖になる前に自重したい。

で、魔法の風をグライダーに受け空高く飛ぶ、コレだけで火縄銃なんぞ滅多に当たるモノでは無いのだが、オマケとばかり防御魔法を展開。

これで万が一、弾丸が直撃しても数発なら問題は無い。

そして矢の魔法で空中から狙撃を行えば、あたかも戦闘へりに乗って戦国時代に現れたかの様な圧倒的な戦果が得られるって寸法だ。

お気づきだろうか？ 俺は複数の高度な魔法を同時に使用している。

魔法は通常、一人の人間が同時に二つは展開出来ない。ソレは絶対のルールである。ところが俺は、精神的なシヨックから複数の人格を同時に制御出来る様になり、おかげで複数の魔法を同時に展開可能となる。

コレは俺だけに許された唯一無二の力と言える。

だが今までは魔力の問題で、ごく簡単な魔法を二つ同時に使うのが精一杯だった。

それがどうだ？ 今の俺はかなり高度な魔法を二つ、簡単なものなら三つ同時に起動できる。

これは途轍もないことで、例えば大牙猪ザルギルゴールを倒すするには、囹役と攻撃役に別れての緻密な連携が必要である。

それが移動の魔法で逃げながら魔法の矢を放てるならば、どんな魔獣も一人で討伐可能な無敵の兵士となってしまう。

実際、今の俺は無敵に近い。だが悲しいかな俺には『偶然』がある。

今も俺を殺すのにフル回転で、確率的にあり得ない量の銃弾が俺の防御結界に命中してるのだ。これでは流石に防御に専念せざるを得ない。

だが、そんなに上げばかりにかまけて良いのかな？

「オオオオオ——」

重騎士が一塊となって敵陣に突っ込んで行く。溜まりに溜まった鬱憤を晴らすべく、

散々に蹴散らし回っている。

勿論、槍兵も一斉に突っ込んで行くし、弓兵も俺が作った土壁から矢を斉射する。

おーおー、さっきまで逃げ惑っていたと言うのに、みんなの士気が高いこと高いこと。

天使なんだかデコトラなんだか解らんぐらいにピカピカ光った甲斐があるというモノ。

そして、一旦陣地に入り込まれると、今度は射撃兵器の弱さが出た。

同士討ちを恐れて銃弾が撃てなくなる。帝国兵はすっかり訓練を積んでいた模様だが、ここまで近づかれ、乱戦となった時のマニュアルは無さそうだ。

そうで無くても、現場指揮官が不在で現場は混乱している。正しい対処は難しからう。

この劣勢には茹で上がった指揮官の頭も冷えた様子。

「立て直すぞー！ ゲイル大橋まで退却するー！ 号令の笛を吹——」

——バチユン

ココで初めて上級士官を狙撃。冷え切った頭が転がり落ちる。

——逃がしはしない。おまえらは、全員、ココで死ぬね！！

自然と口の端がつり上がるのが解った。

ああ、楽しい、楽しいなあ。

コレが終わっても、敵の本陣には輜重隊しちゆうたいなどの兵士が残っている。まだまだ獲物には困らない。

——パアアアン

だが、俺の楽しい時間を邪魔する無粋な弾丸。

それは苦し紛れに撃たれただけのモノ。斉射でもなく、でたらめに撃つただけに違いない一発だった。

だが『偶然』がソレを凶弾にする。

砂粒一つ通さぬ俺の防御結界。俺が気を良くして戦場から目を切ったのはほんの一瞬、そこに開いたちようど弾丸一発分の小さな結界の穴。

ソレを見事にすり抜けて、一発の鉛玉が俺の柔らかなお腹に直撃する。

「ぐっ……」

ゴスロリつぽく魔改造した白い軍服が、みるみる赤く染まっていく。重力に逆らって命中した弾丸に威力は無く、悪い事に鉛玉は貫通せずに腹の中に留まってしまった。

このままでは回復魔法が使えない。

「仕方無い」

俺はハンカチと、ブーツに仕込んだナイフを取り出す。

「グッツ」

ハンカチを口に挟んでキツく噛みしめると、腹の大穴にナイフを突っ込んだ。

銃創をグリグリとこじ開け、傷口の底をほじくる。

ナイフの先端に歪んだ鉛玉が引っ掛かる。食い込んだ肉の線維をブチブチと引き千切りながらなんとか弾丸の摘出に成功。

……想像よりも痛くない。その証拠にこの間も俺の防御魔法は揺らいでいないし、グライダーの制御も完璧だ。

こんな事なら、弾の摘出も魔法でやれば良かったと思うほど。

だが、体のダメージが少ない訳じゃ無いだろう。

その証拠にナイフを持つ手は汗でヌルヌルと滑るし、顔は拭き出した脂汗でベチャベチャだ。

失われた血で体が冷えて、指先は震えるし、目も霞む。

余りに痛い目に遭いすぎて、俺はスツカリ酷い目に遭うことに慣れてしまったのだろう。

ちよつとやさつとの痛みでは、泣き叫ぶような事も無い。

グライダーの進行は天然の風に任せて、防御結界を張りながら回復魔法を唱える。

『我、望む、命の輝きと生の息吹よ、傷付く体を癒し給え』

ゆっくりと傷口が塞がっていく。怪我は癒えたが飛ぶのはココまでにしておこう。それでも戦争自体には、まだ参加出来るはずだ。なんせ俺の健康値はかなり高い。

健康値：58

魔力値：890

かなり凄い数字じゃないか？ かつて一桁だった時が懐かしい。

……本当に懐かしい。セレナ、母様、兄さん。

そして、父様……最後に残った……家族。

少しだけ、ブーツとしてしまったな。風任せにしたら、いつの間にか戦場から離れてしまった。

魔法で風を制御して急旋回。再び向かった戦場は戦況が大きく動いていた。ソレも悪い方に。

——ドゴオオオン！

「ぐあああああああ」

俺の作った土壁ごと、弓兵達が吹き飛ばされる。

なんだ？ なにが……

戦場を見回せば、車輪が付いた鉄の大筒が登場していた。

野戦砲か！ アイツらあんなモノまで！

しかも、戦場に登場した新兵器はそれだけじゃない。

——バアアアアン！

——ヒヒイイイイン

見れば馬が棹立ちになり、重騎士が投げ出される所だった。

戦場に巻き上がる土煙に炸裂音。投げ込まれたのは爆弾？ そんなモノまで！

更によく見れば、もつとヤバいモノが！ アレは？ 手回し式のカトリングガン？

アレはヤバい！

『我、望む、放たれたる矢に風の祝福を』

俺は慌てて矢の魔法を唱え、カトリングガンを狙う。コレを止めなければ、兵士達が

穴だらけになってしまう！

——シュツ——ガンツ！

魔法の矢が命中、射撃を遅らせる事には成功するが、カトリングガンは健在。

？ おかしい。俺の矢はアサルトライフルぐらいの威力がある。木製の車輪を破壊

する位の威力はあるはずなんだが……

……よく見れば、地上は白っぽく靄がかかっている。帝国がバンバン火薬を使うモノ

だから、てつきり硝煙だと思ひ込んでいたが違う。

コレは……霧ギョルドスの悪魔の霧！

薄く地上を覆うだけの量だが、これでは着陸したら最後、二度と空へと飛び上がれない。

俺はギリリと奥歯を噛みしめる。今回は小競り合いだろうと油断した。帝国がココまで本気とは、まさか夢にも思っていないかった。

残念だがココは引くしか無さそうだ。

俺が撤退の無念さに目を瞑った時だった、ポタリと睨まぶたに冷たい雫。

え？ と見上げれば、日は陰り、分厚い雨雲が空を覆っていた。

……いつの間に！ 下を見過ぎて空を見ていなかった。

雨！ と思った次の瞬間には、ザアツと強烈な夕立に見舞われた。

いや、コレはチャンスかも……

そう思った矢先、目を開けられぬ程の閃光が迸った。

——ゴロゴロゴロゴロ

雷鳴！ 音が近い！ 稲妻が落下したのはそう遠くない樹上！

マズイ！ 俺の『偶然』は死をもたらず。隕石だつて落とすのだ。

俺が死んだのは十五歳、俺は既に十三歳、死はより濃厚に、理不尽に迫っていた。

ましてや高い所に雷は落ちる。そんなのは当たり前前に過ぎること。俺は慌てて高度

を落とそうとグライダーを操作した

……だが。

——ピシャアアア

——視界が、ホワイトアウトした。

稲妻に撃たれたと解った瞬間、強烈な痛みが全身を襲った。

痛い痛い痛いイタイ痛いイタイ痛い痛い痛い痛い！痛い！！イタイ痛い！

イタイ痛い痛い痛い痛い！！！！

体が……灼ける！

！！！！

ぶずぶすと体とグライダーを燻らせながら、殆ど自由落下のままに落ちていく。

——ああ、なんて、なんて終わり方だよ。

せめて、パパは救いたかったのに……

痛みで狂いながらも、思い出すのは洗脳された父の姿だった。

……悔しい、なんで、どうして？　こんな突然？　あっけなく？

考える間もなく、俺の体は無惨にも地面へと突っ込んで……潰れた。

——グチャア

「グエツ！」

大切な内臓が幾つも潰れて、喉からカエルみたいな声が出た。

……なんで？　なんで、即死じゃ無いの？　どこまで神様は意地悪なの？

黒焦げに焼け果てて、これ以上無いと思った痛み。その更に上の苦しみが脳に直接突き刺さるようだった。

なんで？　なんで？　痛いよ！　苦しいよ。なんで私がこんな……

見回せば戦場のど真ん中。

とつくに目は見えない。でも俺には運命視がある。

幾人もの兵士が、恐らくは布を広げて俺の体を受け止めたのだと解った。

どうして……殺してくれないの……

戦場の真ん中で悠長に布を広げて……そんな事をしていればどうなるか？　受け止

めた兵達は次々と銃弾に倒れていく。

それでも、俺を庇うように体で射線を遮り、一人、また一人と倒れ果てていく。

俺を抱えて走っているのだ？　どこに？

俺を抱えてひたすらに、走る、走る。倒れたら代わりの者が俺を抱えて、それでも走る。

そうして最後の一人がようやく辿り付いたのは

……この運命光は？　シノニム？

「ンガッ！」

口に突っ込まれたのは……そうか！ ポーション！

「姫様！ 気を確かに！」

「あり、がとう」

喉が復活した。コレなら！

『我、望む、命の輝きと生の息吹よ、傷付く体を癒し給え』

本日二回目の回復魔法。体中が焼け焦げているが欠損ではないので、なんとか生命活動の維持は問題なさそうだ。

だが、皮膚は赤く腫れているし、髪の毛は焼け焦げている。

見るも無惨な姿になり果てているに違いない。

……それでも、俺をココまで決死の覚悟で運んでくれた兵士には感謝しか無い。

見てみれば、その兵士が部屋の片隅で蹲っている。

その運命光が……消えた。

シノニムさんがふるふると首を振る。……そうか。『偶然』に巻き込んでしまったか。

……それにしても、本陣の中、ココまでは霧が来ていないのか？ ポーションもそう

だが、回復魔法も普通に使えた。

違う！ 耳を澄ませば、まだザアザアと雨の音。

雨が霧を落としたのだ！

これなら！ 戦える!?

「戦況は？」

「壊滅寸前、なのですが、帝国側の攻撃が突然止まり、膠着状態です」

「!？」

そうだ！ 無効になるのは霧だけじゃない！ 雨で濡れば帝国の主力である銃は？ 大砲は？

所詮は黒色火薬。湿気ってしまえば使えない！

「打って出ます！」

「無茶です！ その体で！」

シノニムさんに止められる。そりやそうだ、俺はボロボロ。内臓だって悲鳴を上げている。

でも俺の体はカプセルで治せば良い。

だけどこレは千載一遇のチャンス！

「今しか！ 今しか無いのです！」

ゼスリード平原はさながら帝国新兵器の見本市。

実際にそうなのだろう、新しい兵器の実験をしようという算段なのだ。これを逃せ

ば、危険なデータが敵の手に渡る。

雨が降っている今こそ千載一遇のチャンス。

——そうして俺は、火薬も、霧ギユルドスの悪魔の影響も無いのを良いことに、帝国の新兵器を破壊し尽くした。

だが、その代償として、無茶をした俺の体は崩壊の危機を迎えてしまう。結局俺は、カプセルの中で長期間の静養を余儀なくされるのだった。

男同士、砂漠、二ケツ、何も起こる訳はなく

ブロロロロロオオ!

見渡す限りの砂、砂、砂。ここは大陸南部に広がるゾツテム砂漠。

その砂漠地帯を爆走するのは、ファンタジー世界に似つかわしくない三輪バイク。

「砂ぼっかりだな」

「そりゃ、砂漠だからな」

木村と田中の二人であつた。

これは田中がエルフから貰つたバイク。木村が田中の背に張り付いての二人乗りであつた。

「男と二ケツでツーリングとは悪夢だぜ」

「俺だつて好きで張り付いてるんじゃないやねーよ」

季節は春。それでも茹だるような暑さが身を焼くのが、このゾツテム砂漠である。

「アイツはどうなんだ?」

「アイツ? ああユマ^{アイツ}姫か」

丁度、去年の今頃、ユマ姫は遺跡の中で一度死んで、復活した。

それ以来、凶化と言われる不安定な体となったユマ姫は、遺跡での調整を度々必要と
していたのだった。

「アイツ、そんな中、戦争に飛び出して雷に打たれたんだよな？」

「完全にアホだわ、オーズド伯の為にとポジションを持って待機していたシノニムさん
が居なきゃ終わってたぜ」

「ハア……」

二人が話すのは共通の親友にして、転生して転性した『高橋敬一』ことユマ姫の事。

「まだ治らねーのか？」

「縛り付けてでも経過観察中だよ」

元々、不安定だった体で無理をしたお陰で、ユマ姫はカプセルの中で過ごさざるを得
なくなっていた。

「だけど、そろそろ大丈夫……なんだが」

「まあーた、戦争に飛び出していったら元も子もねえよな」

「ハア……」

二人で息の合ったため息を零すのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ヒュー♪

砂煙りに向こうに石造りの街並みを見た木村は、後部座席から口笛を吹き、快哉を叫ぶ。

「もう着いたのかよ？ オイオイマジじゃん、流石に早いな」

二人はゾツデム砂漠最大の都市、プラヴァスを望む場所まで到着した。

砂漠を渡るのに掛かった時間は僅か二日。二日で500km以上の砂漠を越えた事になる。

この世界に於いて、全く常識外の速さであった。

「ま、俺一人なら一日の距離なんだけどな」

「無茶言うな！ ケツが死ぬ」

自慢げな田中へ木村は毒づく。飲まず食わず、休憩無しの強行軍など冗談では無い。

「じゃあ、会いに行こうぜ。ここの王様によ」

「オイ、嘘だろ？」

木村は慌てる。たった二日の旅程とは言え、砂漠のど真ん中を突っ切った服は砂にまみれ、体は汗だくに汚れている。

「そう言うの気にするヤツじゃネーんだよ」

田中は構わずバイクのままにプラヴァスへと乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

砂漠の都プラヴァス。ゾツテム砂漠の中にあつて、砂岩を積み上げて人類の拠点とした街である。

「砂埃が舞う街中は強烈な日光で焼かれ、白と黒以外の色が蒸発したかの様だ。麻のターバンを巻いた男達が牽いているのはラクダだろうか？」

砂漠の都と聞いてイメージしていた中東の町並みと大差が無いことに、木村は人知れず安堵していた。

田中と木村、二人は並んでプラヴァスの中央通りを歩む。

流石に街中でバイクを乗り回す訳にも行かず、手で牽いての移動となつたのだが、子供達にワラワラと囲まれて中々進めない。

「大人気だな」

「ココに来るといつつもこうだ、コラー！ ペタペタ触るんじゃネーよー」

田中が叱るものの、子供達は止まらない。勝手に跨がろうとする者まで居る。

王都ではコレほどにワンパクな子供は少ない、身分制度が厳格で下手に貴族の馬車に触ろうものなら、その場で無礼打ちとなりかねないからだ。

ある程度ゆるい身分制度が見て取れる。同時に心配なのは、子供達が様に痩せていることだ。

「飢饉は深刻みたいだな」

「そりゃあ、雨が降らねえからな。それできつとお前を呼んだのよ」
「つて、言つてもよお」

木村は頭を掻くしかない。雨が降らずに不作と言われても、自分は神ではないのだから。

「ソコをお得意の柔軟な発想で何とかすんだよ！」

「何ともならねーよ」

雨を降らせる事は出来ないが、何か食べるものを開発する事は可能かも知れない。

そう思つて、少し遠回りして市場に寄つたのだが、並んでいるのはトカゲや虫など食欲をそそられないモノばかりであつた。

「俺はココでの生活が猛烈に不安になつたぜ？」

「大丈夫だ、喰えばすぐ慣れるさ」

無敵の胃袋を持つ人間に言われても安心出来ない。木村が恐る恐る干されたトカゲを眺めていると、正体不明の物体に目が行つた。

「コレは……」

「ああ、フォツガだな。砂漠の芋だ」

「芋お？」

……木村はしげしげとフォツガと呼ばれた物体を見つめる。

色はベージュでサイズはピンポン球ぐらい。ヤシの皮で作られた籠の中、山盛りに積まれている姿は確かにジャガイモの様にも見える。

「手に取っても?」

店主に尋ねれば、「構わんよ」と許可が出た。ターバンを巻いた顔はくたびれた様子で、どうにも覇気が無い。

辛気くさいな思いながらも、木村はフォツガを調べる。

……芋? その割には芽が生える様には見えない。

良く解らないが、一籠買っていく事にした。

「結構美味いんだぜ? 焼くと栗みたいだよ。なにしろ香りが良い」

「香り? 芋に?」

手に取って匂いを嗅げば、確かに独特の香りがある。

「でもよ、ホントはもつとデツカインだ、人間の頭ぐらいにな。それをこんな小さい内にとちまう位には食料が無いって事よ」

「いや、それよりな」

「……なんだよ?」

疑問顔の田中へ、木村はフォツガを投げつけ答える。

「コレ、キノコだぜ?」

「……マジかよ」

ずんぐりとした形状。地面の中に埋まっていると言う特性。確かに芋の様ではある。

だが、地面に埋まっているキノコもあるのだ、そう言った種類は大抵こうしたずんぐりとした形をしている。

「有名なのはトリユフだな」

「喰ったことねーからなあ、木村お坊ちやまと違つてよ」

「俺も、トリユフそのものを見たことは無いっての」

トリユフの代わりになるとすれば、面白い料理が作れるかも知れない。

思いを巡らせる木村だが、田中から待ったが掛かった。

「オイオイ、食料を輸出する事を考えてどうするよ？ プラヴァスで食うもんがねーつてのに」

「ばっか、代わりに王国から小麦でも輸出すれば良いじゃん？」

「あの砂漠をか？」

「……………」

確かに、たったの二日で抜けたので大した事が無いように思ってしまったが、徒歩ではどれだけ金を積まれても御免な程に過酷な土地だった。

「だろ？ スパイスマミみたいな貴重品ならともかく、大量に小麦を運ぶなんて出来っこ

ねえ」

田中は呆れた調子で言いながら、フオツガを囁った。

「ペツ！ やつぱり焼かねーと美味しくねーな」

「馬鹿でしょ」

「違いねえ」

笑い合いながら、二人は市場を抜け、いよいよ砂漠の太守であるブラッドの屋敷まで辿り着いた。

プラヴァスの建物の大半は砂岩で出来たモノで、ページユ一色の地味な佇まいばかりであったが、太守であるブラッド邸は石膏の白い壁にエメラルドの屋根と言う鮮やかな姿を誇示していた。

「オイオイ、こんなみすぼらしい姿で良いのか？」

木村は焦る、とても有力者に顔を合わせる姿では無い。

「アイツはそんな事気にしねーっての」

田中はプラプラと手を振りながら、ズカズカと庭先に侵入していく。

「オイ、待ってって」

木村は慌ててソレを追いかけるのだった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「おお！ そなたがキイムラ子爵か！ 話は良く聞いている」

通されたのは天井が高い大広間。現れた太守は快活に笑った。砂漠を越えてきた二人の様子を気にする素振りも一切無い。

話には聞いていたが……若い。恐らくは二十代の中頃、浅黒い健康的な肌に黒髪黒目。身長は175cm前後とこの世界では高い方で、体つきは細身であるが引き絞った筋肉がみっしりと載っている。

格式張った口調を心がけている様だが、若さから威厳があるとは言えない。

だが恐ろしい程に整った顔は、女性的な美しさと同時に、黒豹を思わせる野生の美も感じさせた。

木村はズイブンと女を泣かせてそうだな……と嫉妬心を煽らせながらも、無難な挨拶を返す。

「ええ、キイムラと申します、貴族位は持っていますが一介の商人に過ぎません。以後お見知り置きを」

「ハハ！ 一介の商人か！ 王国一の商人にそう言われれば形無しだな、そなたが一日に動かす金額はプラヴァスの月間予算にも匹敵すると聞くぞ？」

「まさか！ 流石に大きく言い過ぎでしょう」

キイムラはそう答えるが事実に近い。元来、物々交換が主流で貨幣取引の少ないプラ

ヴァスの予算は多くない。

特に最近の王国では現金での取引が活発で、経済の活性化も目覚ましく木村が動かす金額も倍々ゲームで増えている。

子爵位でありながら、伯爵家や侯爵家でも木村の顔色を窺うほどであった。

ただし、そうであっても下手に出しておく。商談の場では当たり前前の探り合い。

しかし、そんなモノに耐えられないのが田中だ。

「オイオイ、面倒くせー事は止めようぜ？ プラヴァスの太守だかなんだかシラネーが、コイツは畏まる程偉くはネーよ」

「タナカ殿の言うとおりだ、太守など形だけに過ぎんよ、今日は泊まっていくのだろうか？

湯も用意している」

「ああ、頼むぜー」

田中は馴れ馴れしくも太守と肩を抱き合つて、バンバンと背中を叩いたりしている。

仲が良いと言うのは本当の様だ。

リヨンIIブラッド。

若くしてブラッド家を継いだ、プラヴァスの黒豹。型破りな政策は賛否が分かれるが、即断即決の人物として知られる。

タナカをプラヴァスに送り込んでから丁度一年ほどであるが、スツカリと打ち解けて

いる様だ。屋敷にはバイクを停める専用のスペースまであったほど。

当初の予定であった砂漠の歌姫の情報収集は遅々として進んで居ないのだが、リヨンと顔が繋がって、スパイスの流通では一定の成果があった。

ただし、それも最近の不作で目に見えて輸用量が減っているのが実情だ。

そんな時、田中からプラヴァスがきな臭くなってきたので太守が助けを求めていると連絡があったのだ。

雨を降らせると言われても困るのだが……悩みながらもひとつ風呂浴びた。

水が無いのに風呂とは？　と思ったが、大河フィーナスのお陰で、砂漠の割に飲み水はソコソコあるらしいのだ。

そうで無ければ砂漠の都とは言え、住民は早々に干上がっている。

ただし、植物を育てる為に水を引いて畑を作る範囲は限られている。それ以外での収穫が無ければとても立ちゆかない。

雨期にまとまった雨が降り、広大なサバンナが現れる。それが乾期になると、再び砂漠に戻る。

そのサイクルで成り立っていた砂漠の生態系が、雨期の降雨量が減って成り立たなくなっていると言うのだ。

現に今もすでに雨期だと言うのに、全く雨が降る気配が無い。

だとしても、雨乞いは木村も専門外。エルフの魔法使いにでもお願いしたいものだが大森林から遠く離れ、魔力が極端に薄い土地とあれば援護は期待出来ない。

気が進まないまま、風呂上がりのガウン姿で太守の私室に招かれ、木村は田中とリョンの三人で飲むことに。

ソファーに背を預け、美しい大理石のテーブルにグラスが三つ。

注がれた蒸留酒の味わいは素晴らしいモノだが、わざわざお願いなどロクな予感がせず、木村は味わう余裕も無かった。

無礼講と言う事なので、遠慮している余裕も無い。

「所で、なにか私に相談事と言う事ですが？」

率直に切り出す。雨乞いは専門外と伝えるつもりだった、一方で農業技術や植林について幾つかの提案を持ってきたのだが……

太守の相談はそんな次元の話では無かった。砕けた調子でトンでも無いことを言い始めた。

「実は、太守である我らブラッド家に逆らうポンザル家を潰して欲しいのです」「ハア？」

全くの予想外、聞けばポンザル家は太守の座を狙う万年の二番手であり、それが今や勢力を拡大していると言うのだった。

「いや、申し訳無いのですが内部の紛争に加担するには……」

プラヴァスは遠すぎる。隔てる砂漠が余人の侵入を妨げ、とても統治しきれない。だからこそ、プラヴァスは帝国にも王国にも属さない自由都市として存在できたのだ。

だが、太守であるリオンはグツと酒を呷ると、吐き捨てる様に言った。

「ポンザル家の背後に帝国があると云ってもでしようか？」

「なにつ？」

田中が腰を浮かせる。

プラヴァスには帝国の影は無いと聞いていたからだ。

「お言葉ですが、帝国とは言え軍事力でプラヴァスに影響を及ぼすのは並大抵ではないでしょう」

そう言つて木村は洗面を作る。やってやれない事は無いが、ソコまでしても統治するリターンが合わないのだ。

「帝国軍ではないのです、やって来たのはたった一人」

「一人？」

リオンの意味が解らぬ言葉に首を傾げる木村。しかしリオンは答えず、目を瞑り首を横に振るのみ。

そうして取り出したのは革袋。中に入った粉末をテーブルにぶちまける。

「コレは？」

訳が解らないと覗き込む二人を前にして、リヨンはペロリと粉を舐めてみせる。

「ケシです」

「なっ！ まさか！」

今度は木村が腰を浮かせる版だった。聞きたくなかった事実、ならばやって来たのは？

「黒き魔女、クロミーネがこの街を支配しようとしています」

告げられた事実には、木村は頭を抱えるのだった。

境界地

ケシの粉末。早い話がアヘンである。

ケシの実はお菓子などにも使われる無害なモノ。アヘンの原料となるのはケシ坊主と言われる果実に傷を付け、染み出した樹液を乾燥させたものだ。

帝国の商人はアヘンを手に堂々と商売をしているらしい。小麦を運ぶには非効率だが少量のアヘンを運ぶぐらいなら何でもない。

戦争と言えば偽金と麻薬。どちらも厳しく取り締まっているモノの、より深刻なのが麻薬の被害だ。

帝国に放ったスパイによると、麻薬の質が良くなり、生産量も桁違いに増えていると言うのだ。

その原因は、植物学者のドネルホーンと言うエルフが帝国側についたからに他ならない。

植物の扱いに長けたエルフの中でも、最も植物に精通した狂人。恐らくはケシの品種改良などお手のものだろう、火薬だけに留まらずドコまでも危険な男を敵に回してしまつたモノだ。

何よりアヘンとクロミーネの洗脳術の組み合わせがヤバイ。意志が強い近衛兵達ですら洗脳が可能とあつては、今後誰も信用出来なくなる。

黒峰さんも厄介なチート能力を貰ったモノだ。完全に世界を滅ぼす気にいる。

「なーに辛気くせえ顔してんだ」

「そうですね、頼んでおいて何ですがアイデア一つで解決する問題とは思っていません」
田中もリヨンも既にご機嫌。本日は、ラクダに乗ったりリヨンに案内されて、三人で視察に来たのはプラヴァスの更に南。境界地という場所だ。

ラクダとバイクと言う違いがあれど、男三人。気軽なツーリングと言う風情である。

正直、俺はまだ頭が痛い。昨夜は遅くまで酒盛りをして、仕舞いにや露出の激しい女の子まで呼んで、ひたすらにどんちゃん騒ぎ。冗談半分で押収したアヘンまでキメそうになつていたから始末が悪い。

あ、もちろんアヘンはちゃんとしたよ。

ズキズキと痛む頭を抱えて砂漠をひた走る。田中の背中に張り付くのもスツカリ慣れてきた頃だ。

「なんだよ、アレー！」

思わず叫んじまった。目の前に広がるは砂漠のただ中に一直線に並ぶ木々、帯状にオアシスが広がっている光景だ。

「コレは一体？」

「アレこそが境界地、帯状に広がる魔の及ばぬ土地です」

「魔の……及ばぬ？」

リヨンによれば、あの木が生えている場所では魔道具が一切使用不可能と言う。

「あの中では、他では育つことの無い特殊な植物も多く見られます、王国に輸出しているスパイスの幾つかはあそこでしか取れません」

「お陰でココじや聖地扱いよ」

なるほど、しかし魔道具が使えないってソレじやまるで……

「霧ギョルドスの悪魔みてえだよな？」

「ああ……」

田中に言われるまでも無い、魔力を掻き消す霧と全く同じ特徴だ。

「実際に入ってみようぜ。ゴタゴタしていて実は俺も入ったことがネーんだ」

「ゴタゴタ？」

「ソレについては私から説明しますよ」

そう言うと同時に、リヨンがラクダを思い切り走らせる。ラクダとは言っても、地球のラクダとは隔絶する大きさだ、そのスピードもかなりのもの。

「競争ですよ、タナカさん。ソチラは二人乗り。今日こそ勝たせて貰います」

「言うじやネーか。吠え面かくなよー！」

叫ぶと同時に、田中はフルスロットルで……つてオイ！ ふざけんな！

「ヤメロオオオオ！」

俺は涙目で田中の背中に縋り付くのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「今回は私の勝ちですね」

「クツソー、ケツに重しが張り付いて無きやーよー」

「オロロロロロ」

コイツなんて運転しやがる！ 文句を言いたいのには朝飲んだココナッツミルクがせり上がって来て何も言えねーと来た。

「しかし、ちっちゃえ『ジャングル』だな」

「『じゃんぐる』とは？」

「あー、植物が生え茂っている事を表す方言ですよ」

俺は田中の日本語をリヨンにフォローする。俺達は同郷だと伝えているので大丈夫だろう。

田中の迂闊な発言には苛立つが、内容には同意だ。南米のジャングルの様な雑多な雰囲気がある。何より砂漠と異なるのは湿度の高さ。

「暑いなあ」

「俺なんざプロテクターを着てるからもつとだぜ」

砂漠を想定したターバンと長衣が暑苦しいのなんのって、日差しと砂の侵入を防ぐには良いが、湿度が高いと地獄である。

「ターバンの巻き方で調整出来るんですよ」

「マジスカ!？」

ソレは知らなんだ。リヨンさんにターバンを巻き直して貰うと、なるほど大分涼しくなった。

「俺はヤベーんだけど?」

しかし、田中はグロツキー。実は田中が着ているプロテクターには空調機能が付いていて、外気を取り込める機能が付いているのだが……

「作動しねえ……魔道具が起動しないってのはガチみてえだな」

だとすれば、この中では当然魔法が使えないだろう。まして、魔力が必要なエルフにとつては地獄の場所だ。

「さっさと出ようぜ? 楽しい場所じゃねーよ」

「まあ待てよ」

プロテクターを脱ぎ捨て、手に持って歩く田中がグズり出すが俺はココを調査した

い。気になる事が幾つもあるのだ。

「植物が緑色だな……」

「それが……当たり前では？」

リヨンさんに聞かれてしまう。そりゃ、俺だって地球に居た頃は植物が緑って当たり前だと思っていた。

だが、この世界の植物はほんのりと青みがかって居るのが普通。しかし、境界地に生える植物にはソレが無い。

「魔力、か」

日光を吸収する葉緑素が緑色、そして、恐らくは魔力を取り込む魔素が青色なのだ。

そして、この場所に植物が生い茂る理由もまた魔力。

「魔力が多ければ植物が生える。それは俺の思い違いだつたみたいだな」

「どーいうこつた？」

「お聞かせ願えますか？」

「それは……」

俺はあくまで仮説としながらも田中とリヨンに魔力と健康値、いや、生命力について説明していく。

「魔力ってのは上手く使えば途轍もないエネルギーだ、エルフみたいにバンバン魔法

を使えるし、魔獣は巨大だろ？」

「まーそうだな……」

「この辺りに魔獣と恐れられる存在は居ないのですが……」

魔獣を知らないリヨン氏が残念そうにぼやく、きつと巨大生物が見たいのだろう、心は男の子つてタイプと見たね。俺としては二度と見たいモノじゃ無い。

話が逸れた、リヨン氏が言うように砂漠地帯には魔獣が居ない。食糧事情が厳しい砂漠に人類がしがみついている理由の一つだ。

もう一つの理由がこの境界地の豊かな植生。だが、魔力が無いこんな場所になぜジャングルが発生するのか？

「きつと、植物にとつても魔力は毒なんだ」

「そうか、魔力を使ってエネルギーにしてるが、魔力に抵抗する為に生命力も犠牲にしてるって訳か」

「……………そう、なのですな」

流星に田中は理解が早い。リヨン氏について行けない様だが、取り敢えず口を挟むつもりは無いらしい。

俺は話を続ける。

「太陽光を取り込む葉緑素、魔力を取り込む魔素、魔力に抵抗する健康値、大森林の植物

はコレだけの機能を必要としてる訳だ、それでも魔力が濃い場所では費用対効果が高いから大森林ではアレだけ繁殖している訳だが……」

俺の言葉に合点が言ったと田中が続く。

「この辺りじゃ、魔力が薄くて取り込むメリットが少なく、魔力に抵抗するので手一杯お前が言うところの費用対効果が合わないからココらは砂漠が広がってるワケか」

「その通り、でもよ、ココ境界地には魔力が全く無い。魔力のことを考えず、丁度南米ぐらしいの気候で植物には最適だ」

「そう考えるとよ、魔力つてヤツが俺等の体にどれだけ毒かっつてのがコエーよな」
「……そうだな」

エルフはともかく、人間にはそれなりに魔力は毒なのだろう。その証拠に魔力に相殺されない健康値はプラヴァスでかなり高くなっている。

ちなみに、健康値を計る魔道具と言えばユマ姫の秘宝を思い出すが、なんとエルフの国では健康値を計る機械は体重計レベルで普及しているらしい。

安価な割りに珍しいからと田中に持たせた献上品がブラッド家に常設されていて、俺も毎日計らせて貰っている。

だから、プラヴァスでの健康値が高いのは確実なのだが、田中はそれに納得が行かないらしい。

「でもよ、俺は全然体調が良くないぜ？　健康値は100を超える数字だが、大森林で50以下の数字の時ののが遙かに快調だった」

「それはな……」

俺は更にもう一つの仮説を披露する。

「人間はエルフと違つて魔法は使えない、でもな、魔力を全く使つてないワケじゃないと思うんだわ、俺達も費用対効果が釣り合つてる場所で生活しているワケ」

「じゃあ、俺達もエルフほどじゃないにしろ魔力を必要としているつて事か？」

「そうだな、現にお前、霧の中で過こしている帝国兵が弱かつたつて言つてただろ？」

「……そうだな」

「それにお前のバケモノ染みた膂力は神の奇跡つてだけじゃ説明がつかねえ、そのタネは魔力による補助じゃねーかと思つてる」

「確かに大森林や遺跡の中で、俺の剣はかえつて冴えてた」

「そう言うこつた」

つまり、健康値が許す限りは魔力が濃い方がポテンシャルを引き出せると言う事。

と、そこまで話しているといよいよ目的の場所まで到着したらしい。

リヨンが足を止め、先の様子を見る様に促した。

「着きました、ここが『世界の果て』です」

そう言われた先では、森がパツツリと切り取られた様に途切れていた。

その先にあるのは果てしない荒野。

「コレが……世界の果て……」

「何故ココで世界が途切れているのか、我々には解らないのです、神に見捨てられた土地と言われているのですが……」

呆然とする俺に、リヨンが誰とでも無く呟く。

……だが、コレにも俺には仮説があつた。

「この先の荒野に出た人間はどうなります?」

「……それは」

リヨンは言い淀む、余り言いたい事では無いらしい。

「体中が焼けただれ、数日と生きられないのでは?」

「ご存じでしたか」

リヨンはそう言うが知って居た訳じゃ無い、聞けば境界地の外に出るのは砂漠の民にとって禁忌も禁忌だと言うのだ。来たばかりの俺が知るはずが無い。

許されない罪を背負った人間を追放する流刑地。それが境界地の外、踏み入れた人間は決して戻る事を許されない。

「とは言え、黒いターバンを付けていれば数日は大丈夫なのです、黒いターバンこそ神に

愛された者の証であるが故だと」

「なるほど……」

「我々は神の裁きと呼んでいます、追放された罪人は神の光に焼かれるのだと言われています」

……そんな訳は無い。それは神の光じゃ無い。

その正体は、紫外線だ。

魔力が毒だから、魔力が無い境界地には植物が生い茂る。

だったら、もつと大森林から離れた場所ならば？ もつと植物が生えるのか？

だとしたら世界の外側に向けてひたすらにジャングルが広がっていなければオカシイ。

だけど実際には、切り取られたかのように不毛の荒野が広がるのみ。

その事実が俺の脳みそを刺激し、あらゆる可能性が渦巻いていく。

「ひよつとして、この世界には無いのか？ 確かに方位磁石を見たことが無い！」

「オイ、俺にも解るように説明してくれよ」

思考の海に沈む俺に、田中の不快な声が掛かる。

「そうだな、この世界は恐らく巨大なビニールハウスなんだ」

「『びにーるはうす』とはなんですか？」

うーん、リヨンさんには通じないか。どうする？

「つまり、この世界の大半はこう言った不毛の大地が連続している。境界地の内側だけが神に人間が生きることとを許された領域なのです」

「ええ、聖書にもそうかいてありますね」

「……そうだ、この世界の宗教に興味は無かったが基本ぐらいは押さえている。たしかに似たような事が……世界は神のゆりかごだと言う記述がある。」

「だが、我々が生まれた星、地球なら人間はドコでも生きて行けたのです」
「?? ……そうなのですね」

「その理由は磁気シールドにあります」

「申し訳無いが『じきしているぞ』と言うモノが……」

「ココからはどうやったってリヨンさんには通じないだろう。申し訳無いと断って、田中に向けて説明する。」

「方位磁石は知ってるな？」

「ああ、北を向くやつだろ？」

「この世界で見たことあるか？」

「あるぜ？ 常に決まった方角を向く魔道具がな」

「ちげーよ、アレは大森林の中央部、魔力が吹き出す土地を指し示すんだ」

「じゃあ？」

「そう、ねーんだよ、磁石はあっても北を向かない」

「それがなんだってーんだよ？　回りくどいぜ」

「磁気が無い、つまり電磁波から星を守る壁が無いんだ」

俺は地面に磁石と磁場の絵を描いていく。磁石の回りの砂鉄が磁場に沿って、バリアみたいに広がる絵を田中だっけ見たことがあるはずだ。

「地球はデツカイ磁石だ、そこでこの磁場つてのは見た目だけじゃなくてマジでバリアなんだよ、太陽の放射線や太陽風から地球を守ってる」

「それがこの世界に無いってか？」

「そうだ、コイツが無ければ大気が吹き飛んでしまっけ空気も無いのが普通なんだよ、現に火星とか大気が殆どねーだろ？」

「いや、火星の事は知らんが……」

「代わりにココには魔力がある、それが大気を支える役割をしてるんだ。そして魔力を狭い空間に押しとどめているのが境界地にある魔力を掻き消す膜だ」

「境界地はその膜の中にあるって事か？」

「そうだよ、膜の正体は、解るか？」

意地悪な質問かと思っけ、田中はこう見えて馬鹿じゃ無い、自分で結論を出して見

せた。

「健康値……そうだろ？」

「そうだ、健康値の膜が魔力を一カ所に押しとどめている、それだけじゃ無い。恐らくは放射線や紫外線といった、太陽からの有害物質を根こそぎブロックしてるに違いない」
「確かにな、あの太陽はクソデケえ」

田中が見上げる先、この世界の太陽は俺等が知ってる太陽の四倍程の大きさに見える。もしその膜が無ければ、どれだけの時間、俺達は生きられるのだろうか？ 考えたくも無い。

そうやって考えると、この境界地の有用性が途轍もなく高いことが解る。

「境界地は、太陽の害も魔力の毒からも守られた奇跡の場所だ。代わりは利かない。ココを大事に守らないと砂漠は立ちゆかないな」

俺が出した結論。それに苦虫を嘔み潰した様に反応したのがリヨンだ。

「おっしやる通り、境界地は神聖な場所として代々プラヴァスの代表である我らブラッド家が管理し、皆に利益を分配しています。ですが、ポンザル家はその権利の一部を主張し始めたのです」

また、ポンザル家……ケシだけじゃ無く、どうやらマジで帝国とやり合わなければいけないようだ。

「ハア、つれーわ」

俺はへなへなと倒れ込むのだった。

ポンザル家と境界地の権利書

「ポンザル家は不当に境界地の権利を主張している訳では無いのです、それこそが問題をややこしくしています」

リヨン氏が褐色肌の端整な顔を歪ませて語るのは、プラヴァスを取り巻く情勢だった。

俺達は湿度が不快な境界地を後にして、再びブラッド家のお世話になっていた。またしても風呂に入ってから私室で三人、顔を合わせる。

と、なると酒が出るのが当たり前。度数の高いアルコールに喉を焼き、スパイスが利いたつまみを流し込む。正体不明の食べ物だが悪くない。強烈な刺激が暑さを吹き飛ばすような爽快感をもたらしてくれる。

だが、問題なのは飲み始めると全く話が進まない事だった。それにしてもコイツら毎日ひたすら飲みまくってるな、どう言う肝臓してんだろ。

「ひゃー、酒がうめえ、リヨンつちさあ？ わりいけど難しい話は木村にたのまあ」
田中は度数がキツイアルコールをガバガバ飲んで、早くも出来上がってる。

「タナカどん、ワイだってこんな話したかないでござつ、ばつてん言わずにはおれんと」

それにつきあうリヨン氏も謎の方言が出まくりな上、それとも回つてないから何言つてるか全くワカラネー。

「うひゃー女の子呼ぼうぜ、女の子」

「毎晩はまずか、十日、いや五日に一遍ぐらいにしてくんろ」

「しゃーねーなー、俺が金出すから呼ぼうぜー」

「げんにやあ？ そげなせんあつど？ 頼んみやげもんど」

リヨンさんは最早、本当に何言つてるかマジでワカラネー。

それにしても、あんなどんちゃん騒ぎを毎晩やられちゃ堪らねーよ。それより話の続きを頼むよポンザル家の話をよ！

「キムラどんの口には合わんど？ 都会にはもつとよか酒や女があつちな？」

「ダメダメ、こいつはロリコンだから、ユマ姫にぞつこんよ」

「ほんのこつな？ がつつい、私の姪が今、十三歳なんですが会つてみませんか？」

オイ！ リヨン！ お前本当は酔つてねーだろ！ 突然真顔になるのヤメロ！

「いや、それよりポンザル家の事をお願いします……」

「……そうですね」

やつぱりロクに酔つてなかったリヨン氏から、ポンザル家の主張を聞き出す。

当時のポンザル家はまだ名を知る者も少ない、ただ一介の地主に過ぎなかった。

しかし、ポンザル家は二百年前にちよつとした功績を挙げ、ブラッド家や議会から恩賞を受け取る事になる。

当然、議会で正式に認められた権利として間違いの無い書類が作られた。その拘束力は強く、通常の土地の権利書の比では無い。

「オイオイ、それが境界地の権利書だったら悪いのは当時のブラッド家と議会だろうが」
田中が呆れるのも当然、だがリヨンが言うにはそうじゃ無かった。

「いえ、ポンザル家が褒美として求めたのは境界地の外、不毛の大地だったのです」
「なに？」

「だからこそ、広大な土地の所有が認められた、誰の土地でも無いのですから当時は誰も反対しませんでした」

「オカシイじゃねーか！　じゃあどうして？」
「おいよせよ」

憤る田中を俺は片手で制した、話の続きが読めたからだ。
「境界地の場所が移動した。違うか？」

俺が問いかければ、リヨンは堪らず顔色を変えた。

「何故？　それを？」

「簡単なことさ」

俺は簡単な凶解をする、半球状の膜が境界地で、膜の中に詰まっているのは魔力だ。魔力の量が増えれば、膜は膨張する。

「この世界の魔力は増大し続けている、エルフの都は遷都を余儀なくされたし、大森林は拡大している」

「境界地が外側に移動するのも当然って事か」

納得する俺達に対し、顔を蒼くするのがリヨンだ。

「では、ソレを知っていたポンザル家が境界外の土地を欲したと言う事でしょうか？」

「……どうかな」

解らない。百年以上先の事を考えて、境界の外の不毛な大地を欲しがったと言うのは解せないモノがある。

「何にせよ、土地の権利は本物。効力も強いってワケだ」

「ええ、専用の石版に領有を認める署名が連名でされています。コレを無効と断ずれば、我らブラッド家の支配権も揺らいでしまう事になる」

「どん詰まりじゃねーか」

田中とリヨンが言うように、打つ手が無いのが現状だ。だったら別の手段で追い詰め
ていくしかない。

「ケシはどうなんです？ ソチラで追い込むのは？」

「それが……」

言い淀むリヨン。語る所は危険な事態だった。

「麻薬が犯罪じゃないだと？」

「ええ、正確にはケシの流通を制限する法律が無いのです、新しい麻薬に法律が追いついていない」

「確かに無理も無いですね……」

王国ではヨルミちゃんも抱き込み、早々に違法化に踏み切った。ケシに既に幻覚作用があることが知られていた事も奏功した。

だが、そうで無い場所では、日本で脱法ハーブが長らく規制を逃れていた様に法整備が追いつかないのは当然だ。

「それに、ポンザル家が早々に商売を始めた事でライバルであるブラッド家が待ったを掛けづらい状況が出来てしまいました。王国や帝国でも一般での使用が禁じられている事から、広く流通する事は防ぐことが出来ているのですが」

「裏では流通してしまっている？」

俺の問いに対し、リヨンは苛立たしげに机を叩く。

「いえ、痛み止めの薬として堂々と軍や警ら隊に納品されています。横流しや私的利用を罰しては居ますが……」

……最悪だ。悪を取り締まる警察に麻薬が蔓延してしまえば、麻薬を握らせればどんな罪でも見逃されてしまう。

「痛いのは、あなた方が主張する程はケシが危険な薬では無いと言う点です……」
「ソレは……」

確かに、現在帝国が扱うアヘンは痛み止めとしての効果が高く、幻覚作用も控えめで、ほんのり気持ちよくなる程度。中毒性すらも抑えられている。

質が高い故にバッドトリップに陥る事も少なく、混ぜ物で体調を崩すことも無い。ひよつとしたらドネルホーンが作るアヘンは地球の最新ドラッグよりも安全で、快適なモノである可能性は高い。

……だからこそ、危険なのだ。

タバコ感覚で楽しんでいた人間が、帝国のさじ加減一つでジャンキーに早変わり。実質帝国に牛耳られてるも同然となってしまう。

「煙草もそうですが、中毒性がある薬品を他国からの輸入に頼るのは自殺行為です」
「おっしゃる通りです、私も一応実験をしてみました」

実験？ その言葉に引っ掛かって顔を見れば、リオンは昏い目で卓上のグラスを見つめていた。

手に取って琥珀の液体を一息に嚙下すると、実験の内容を語り出した。

「犯罪者に対して、大量に摂取させたのです。アレは……正気ではありませんでした」

語るリヨンの様子に、気が良いだけの若者では無い部分を初めて見た気がした。

とにかく、アヘンの危険性を解っているならコチラからはこれ以上言う事は無い。

俺はヤレヤレとソフアーに沈み込む。

「しかし、こうなると俺の頭脳でもどうにもならないっての、どっちかって言うのと適任者が他にいるだろ？」

「誰だよ？」

誰って？ 決まってるじゃんか。俺はパタパタと手を振る。

「シャルティア嬢だよ、潜入と暗殺の専門家ね」

「シヤリアちゃんかあ？ 可愛い女の子に見えるが、アイツってそんなに凄腕なのかよ？」

あー、アレを可愛いって言うのは田中だけだと思っぜ？ 俺は何故か気に入られてるだけだし、斬りかかれても平然としてる田中は心底ネジが外れてる。

「まー念願の女の子との二ケツだ、楽しんで来てくれよ」

「オイオイ、到着早々として返すのかよ、そんでお前はココでどうすんだ？」

不満そうに尖らせた田中の口を、俺は片手でギユツつと掴んだ。

「そりゃ、砂漠の歌姫の情報集めに決まってるんだろ、オマエの成果が全くねーからな！」

「おおい！ 俺には向いてねえんだよ、そう言うのは！」

田中は俺の手を払うと、開き直ってふんぞり返った。

マジで頭脳労働に向かないヤツだな……。

「そう言えば……」

そこにリヨンが突然に割って入った。

「そもそも、ポンザル家はなんで恩賞を賜ったのか？ 秘匿された内容を徹底的に調べ上げたのです、恩賞を無効にする事が出来ないのかとね」

「それが……何だっつんだよ？」

訝しむ田中。俺も思いは同じだが……まさか？

「どうも、砂漠の歌姫と謳われたリネージュと言う少女を発見した功績、と言う事なのですが……」

……嫌な予感的中する、またもポンザル家かよ！ それに発見した功績とは？

「オイオイオイ、ポンザル家は歌姫発掘オーディションでも開催してたのかよ」

「いえ、それも歌姫リネージュの死体を発見した功績で……と言う事らしいのです、それ以上の意味は解りませんでした」

「ああ〜」

田中と二人で盛大にズッコケる。

「どうしました？ 死体を見つけた事が重要なのですか？」

リヨンは不思議そうに尋ねるが……その発見場所こそが何よりも重要なのだった。

歌姫の足跡

田中が王都へととって返した翌日、俺はリヨン氏に一人の人物を紹介された。

「あの、よろしくお願いします！」

そう言つて片手で胸を押さえ元気良く頭を下げたのは、まだ十三歳の女の子カラミティ。

「私の姪です、可愛いモノでしょう？」

「いや、リヨンさん、俺、本当にロリコンつてワケじゃ……」

無いよな？ いや、そうかも？ 実際にはカラミティちゃんはメチャクチャ可愛い。

「良かったな、カラミティ。キムラ様はおまえの事を気に入ったらしいぞ」

「ホント？ やったー」

いやいや、やってないやつてない。いや、でも可愛いなあ。褐色で黒髪なのはリヨン氏と同じであるが、眼は赤く、キラキラと輝いていて可愛らしい。

カラミティが着ているのは赤とモスグリーンのワンピース。地球で言うならばカフタンと言う民族衣装が一番近いだろうか？

長袖で丈が長いのだが首元は襟が無くザックリと空いている。その分、ネックライン

には緻密な刺繍がされているのだが、それが剥き出しの鎖骨を強調していて、身長差から見下ろす形になるのだから結構エロス。

「……本当に注意してね、何かされたらおじちゃんに相談するんだぞ？」

「わかったー」

やべー相談されちゃう！ 洒落にならない。

ソレにしたって、こんな女の子を紹介されたって手を出すのは危険過ぎるし、俺にはやることがあるのだ。

「あの、僕は砂漠の歌姫絡みで遅くまで調べ回るつもりなので、遊んでいるワケには……」

「だからこそです、キイムラ様は土地勘が無いでしょう？ かといって私は公務がありお付き合いできません、案内役はいた方が良くと思いますよ」

「……それは、そうですが」

ちなみに護衛は別に付けて貰える。本当はコッチで雇おうと思っていたのだが、リヨン氏に強く言われれば面子を潰す訳にも行かない。案内役としてはソレで十分すぎると思っていたのだが……

「解りました、ですが邪魔になるようならば帰らせる。それで良いですね？」

「勿論ですとも、カラミティ。しっかり街を案内なさい」

「わかりました。しっかりお供します」

可愛らしくピコツツと手を挙げたカラミティ。

英語だと災厄だが、コチラの言葉にそんな物騒な意味は無いハズだ。果たしてどうなることやら。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「え、ラミちゃんのお婿さんってこの人なの？」

「うそー年上過ぎない？」

「ラミちゃんブラッド家の人だもん、いろいろあるんだよ」

「政略結婚かあ、お金持ちなの？」

「ちよつと頼り無い感じだよね」

はい、頼り無い感じの木村です。

俺達は女学生の軍団に取り囲まれてしまっている。

プラヴァスで最大の図書館にやって来たのだが、図書館は学校の敷地内にあつたのだ。

早速、入場するにあたって学生であるカラミティが役に立ったのだが、カラミティの友達に見つかってしまったと言う訳だ。

「や、やめてよーそんなんじゃないの！ キイムラさん、ごめんなさい」

「いや、構わないよ、友達が多いんだね」

「あ、いえ、あのー」

「「「ラミちゃん照れてるー！」「」」

「もーウルサイー！」

図書館の中だというのに元気に走り回っている。

とは言え、図書館は英知の結晶。俺が入る時は歓迎ムードでは無かった。

外国の商人と言う事で司書や衛兵達には緊張をもって迎えられたが、探している本が歴史や民俗学の本だと伝えた途端に当たりが柔らくなつたのが印象的だ。

彼らは情報の価値を正しく理解しているのだろう、国力や軍事力、地理や地形を調べられては勝てる戦争にも勝てなくなる。ソレを知っている人材が揃っているのは良いことだ。

そして、歴史と文化に興味がある人間には最大限の敬意を払う。

素晴らしい事だが、俺はプラヴァスの歴史を学びに来た訳じゃ無いのが心苦しい。

当時の伝承や言い伝えをまとめた書物をペラペラとめくる。

紙は恐らくパピルスのようなモノだが、ほつれた様子も無くしつかりと読める代物だ。

そして何より驚くのはその蔵書量。製本されていない巻物や紙の束が多いとは言え十方に迫る数があると言うから驚きだ。この量は王都の図書館を大きく上回る。

そしてカラミティ達が上流階級の子女である事を差し引いても、それなりに一般に開放されている事も特筆に値する。

ゆるい身分制度で文明レベルも低いと侮ったが違った。人口や経済規模から考える
と学術レベルは図抜けて高い。

恐らくは、乾燥した気候が紙の保存に適していたのと、古くからパピルスが普及して
いた事で知識の積み上げが可能だった事に由来する。

二百年前に授与された土地の権利など破棄してしまえば良いじゃないかと、うつすら
思っていた自分を恥じる。

そんな無理が通るような未開の地では無いと言うことだ。

そう考えれば、女学生つても文明レベルが高い証拠。俺は王国で学校などに投資し
て次代の経営者を育てようとした。

ワンチャン女子生徒でハーレムルートも考えるぐらいには、当時の俺は性欲滾るお年
頃だったのだが、結局は男の子だけしか集まらなかった。

それがココでは女学生が和気藹々と勉強している。それだけで先進的な場所だと判
断するに十分だ。

「あの、見つかりました？」

と、カラミティちゃんが首を突き出して来たので、見ていたページを開いてみせる。

「歌姫と言う二つ名は一般的過ぎるからね、中々絞ることは難しかったんだけど……」
「そうですね、プラヴァスはみんな歌が大好きですから、リーリッドって酒場にも歌姫って言われている女の子が居ますよ?」

「へー、行ってみたいね。だけど今回探している歌姫はリネージュ、彼女一人に絞った」
「えっと、リヨン叔父さんの言っていたボンザル家の恩賞と関係があるんですか?」

「そうだね、都合良く名前が出ただけで偶然かとも思ったけど……」

調べると、彼女は当時の帝国からも王国からも招聘されていた。政治的にプラヴァスは板挟みに合った訳だ。

政治の犠牲者。ユマ姫が言っていた特徴と一致する。

その人気は凄まじく、伊達に大同同士で誘致合戦をするだけの事はある。だが、それ以外にも胡散臭い逸話が山盛りなのだ。

資料を読んでいくカラミティちゃんが、ポカンと口を開けっぱなしにする。

「赤ん坊が泣き止んだとか、動物も歌に聴き惚れたとか、歌で果物が色づいたとか、天が感動で涙して大雨が降ったとか……これメチャクチャですね」

そうなのだ、トンでも無い逸話が多過ぎて何が本当か解らない。

「雨は良いなあ……私が歌っても雨、降らないかなあ」

カラミティちゃんは残念そうに言うけれど、雨は無いだろう。

赤ん坊や動物も歌に聴き惚れる可能性はあるし、果物に影響を与える可能性だってゼロじゃ無い、だけど雨は難しい。もしも降るならば、対帝国に軍事利用したいものだ。

一応は超音波で——とかあらゆる科学的可能性を考慮したけど、無理。

「それよりも人となりを調べていこう、更に言えば死んだ場所が解れば一番良い」

「死んだ場所？　ですか？」

意味が解らないよなあ、そんなの。

でも、ユマ姫の記憶の回収にはそれが一番重要なのだ。

そうしてリネージュの記録を集めまくったのだが……

「プラヴァス南部の生まれ、ラクダ使いの両親の子供で、境界地で遊ぶのが好きなヤンチャな女の子。趣味は凧揚げで小さい頃から歌が好き、何でもよく食べるけど甘い物が好き……意味ないですよ？　コレ」

「うーん」

生まれも育ちも平凡。神懸かった力を持っているようには思えない。

……だけど。

「参ったな、本物みたいだぞ」

「ええ？」

雨を降らせたと言う伝説はその数が多かった。彼女が歌った次の日には雨が降ると

言うジnkクスがあつたというのだ。

「なんだ、それってタダの偶然ですよね？」

「まあ……そうなんだけどね」

そう言い切れないのが確率だ、彼女が大舞台で雨乞いの歌を歌った翌日の降水確率、資料にあるモノだけで計算すると、何と……72%

ビックリするほどでは無い、と思うかも知れないがココは砂漠の都プラヴァスだ。驚異的である。

「訳が解らないな……」

凧揚げが趣味だと言うし、空を見る力に長けていたのかも知れない。翌日雨が降りそうな時にだけ歌を歌う。

そうして雨が降れば、縁起が良いと引つ張りだこになることは間違い無い。

実際に、リネージュが歌えば雨が降るといふ噂は広く伝わり、干ばつにあえいでいた当時の帝国や王国もジnkクスにあやかつての招聘だつたと資料にはある。

「だとしたら、抜群に歌が上手かつたワケじゃないのか……いや」

資料を読めば、非常に高い声を出すことが出来て、犬が逃げ出したとある。

犬笛みたいな可聴域を超える声を出すことが出来れば……動物を操つて天気を？

無茶だな。

「あの、そろそろ閉館時間ですよ？」

カラミティちゃんに言われて気が付いた、もう日が陰っている。

「じゃあ帰ろつか？」

「ハイ！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

二人で（もちろん護衛は居る）ブラッド邸へと帰路につく。

カラミティちゃんも俺が居る間はブラッド邸で寝泊まりするらしいのだ。これアレかな？　なんかマジで押しつけられようとしてるのかな？

「なんですか？」

見下ろせば小首を傾げるカラミティちゃん。どうしたって首筋と鎖骨が眼に入る。コレマジで狙った衣装に思えるの、俺だけか？

「あ〜いや……」

思わず口ごもる。

カラミティちゃんのだげけない赤い瞳。暗い夜道で光っている様にも感じて、不埒な心根を見透かされたかのようにあつた。

三十のオッサンが十三の女の子に照れ照れするのはバツが悪い。

ソコへ更なる追撃が入る。

「あの……手を握っても良いですか？ 暗いですから……」

「ああ……良いけど……」

握った手は小さくて、熱いぐらいに体温が高かった。

遅れてきた青春を取り戻す様で、気まずいつたらありやしない。

だけど、俺の青春ってヤツはいつだって邪魔が入るのだ。

「オイ、そのガキは俺様が眼を付けてたんだ」

まだ日が落ちて間もない大通り、街の明かりに照らされて、俺達に立ち塞がって見せたのは黒いターバンの男衆だった。

どうやら、ガキと言うのはカラミテイちゃんの仕事みたい。

「アイツらは？」

「えっと、ポンザル家の四男のボーザン様……です」

「俺様が目を付けてるってのは？」

「あの、婚約を持ちかけられていて……」

「あー」

ポンザル家の四男とブラッド家当主の姪っ子。

身分的には妾腹の兄の子であるカラミテイちゃんの方が低いと言えるし、仲違いしている現状で、コレを断ればブラッド家には矛を収める気が無いと喧伝されてしまう。

……だけど、アレは。

「汚えなあ……」

しみじみと呟いてしまう。

酒焼けた顔に、前歯も抜けている。不摂生で腹はでつぶりと膨らみ、顔からは下品さがにじみ出ている。歳は四十に近いんじゃないだろうか？ 判然としない。

コレと結婚したいと思う女は居ないだろう。動きまでいちいちキモい。

「悪いけど、リヨン＝ブラッドに正式に案内役として借りているんだ。話はそちらに通して貰えるかな？」

「案内だったら俺がしてやるさ」

「あんたが？ やめてくれ気が滅入りそうだ」

「なあんだとお？」

「あわわ！」

ボイザンは下品な顔を更に歪めるし、カラミティちゃんも可哀想に慌てまくりだ。帰ってひとつ風呂浴びて寝ようかって時にズイブンと祟つてくれる。

「よそ者が偉そうにしゃがって、王国一の商人だか知らねえがロクに護衛も連れてねえ、こりゃあ騙りじゃねえのか？」

ボイザンの煽りに怒ったのか、俺達の護衛がサツと前に出る。だが俺はそれを押し止

めた。

「お前らみたいな雑魚に護衛なんて要らないだろ？」

「テメエ！ 言ったな？ 後悔させてやる、手え出すなよ！ 俺がやる」

ボイザンというデブが直々に俺の相手をしてくれるらしい。助かるね。

でも、カラミティちゃんには心配させてしまっているのが辛いところ。

「そんな！ キムラさん必要無いですよ」

「逃げてても良いんだけどさ、コイツをぶん殴った方が早いしね」

「殺すぞテメエ！ さっさと抜け！」

シャランと音をさせ、ボイザンが抜き放ったのはシャムシール。反りが強い曲刀だ。

対して俺が取り出したのは、小ぶりなナイフ。

「オイ冗談だよなあ？ そんなオモチャでどうするつもりだ？」

ガツハツハと仲間一同笑ってみせる。典型的な悪役ってツラだ。

それにしても、俺は目の前で視線を切っても良いぐらいには弱そうにみえるらしいな。

確かに体捌きは素人だし、体格はひよろいが、身長はそれなりにあるんだが……

悲しくなってくるね、面倒だから早くして欲しい。

「ごたくは良いから早く来いよ」

「ソツチこそしつかり構えやがれ」

「必要ねえよ」

俺は散歩するかの様に、無防備にスタスタとボイザンへと歩みを進める。

「テメエ！」

慌てたボイザンがシャムシールを振りかぶった——その瞬間。

「斬つて良いか？」

「なっ！」

俺のナイフがボイザンの首筋へと到達していた。

「テメエ！　どんな手妻を使いやがった！　まだ距離は十分にあつたはず」

「オイオイ、ソツチから近づいてきたんだろ？」

「馬鹿なっ！　オイ、お前等なんでそんなに遠くにいる！」

振り返つたボイザンは存外遠い仲間との距離に顔色を変える。しかし、問われた仲間

達にはワケが解らないと言つた風情だ。

「違いやす、ボイザン様があつし等から離れていったんでさあ」

「馬鹿言え！　俺は動いちゃ居ねえ！」

そりやそうだ、ボイザンは俺が引き寄せた。

右手にナイフをチラつかせながら、左手で自在金腕ルー・テルオンを闇夜に紛れて足元に忍ばせ、踏

ませる。

後は間合いに入るや否やで引き寄せれば、体勢が崩れて剣は振れないし、ナイフの前に首筋を晒すつてワケだ。

まあそれでも危ない事は危ないぜ？ だけどこう言うのはタネを見せず、とことん余裕ぶつてやるのがコツだ。

俺は正体不明の異邦人。その有利は徹底的に使うに限る。

「なあ？ 斬つて良いか？」

「ぐうう」

ナイフを押しつけ改めて俺が問いかければ、脂汗を浮かべて唸るばかりのボーザン。

「やれえ！ スレイヤ！ オメエの実力見せてやれ」

破れかぶれで用心棒っぽいヤツに叫びやがる。

「良いのか？ 本当に斬るぜ？」

俺はより強く首筋にナイフを押しつける。

「出来るかよ？ ポンザル家を敵に回してプラヴァスで生きていけるのか？」

「別にプラヴァスで生きないし？ 忘れたか？ 俺はよそ者だぜ」

「くそお……」

くそお……つて、コイツ本当に馬鹿だなあ。自分で言っておきながらマジで忘れてやがった。

「カラミティはどうする？ テメエが俺を殺したら報復されても文句は言えんぜ？」

そんな道理は無いと思うが、責任は取れとリヨンに押しつけられそうではある。

困ったな。

「じゃあ、オマエが頼みにしているスレイヤつてヤツを殺させてくれれば手打ちで良いぜ？」

「ハッ！ スレイヤを甘く見るなよ。プラヴァアスの剣士なんだ」

いや、プラヴァアスの剣士だか知らないが、オマエのケツ持ちとして無条件に殺されろつて要求なんだけど？ なんで勝負するつて話にすり替わってるんだ？ まあ良いけど。

で、呆れていたら黒いターバンの大男が一人、音もなく飛び出して来た。

「オイ、貴様。ボイザン様を解放しろ」

「いやいや、殺すけど？ オマエがスレイヤか？ 武器を捨てろよ」

「ふん、殺さば殺せ！ その時はお前も道連れだ」

いやーマジでコイツら話を通じないね。コレがプラヴァアス流なんだろうか？

きつとそうなのだろう、味方側もおバカに飛び出して来た。

「キイムラ殿、こやつのは相手は私が」

「ほう、カーリーお前か」

「そうだ、俺が勝つたらお前等には引いて貰う」

「私が勝つたらボイザン様は解放しろ」

「ああ」

と、スレイヤとか言うボイザン側の用心棒が二本のシャムシールを抜き放つ。

一方でコチラの護衛は巨大な曲刀を構えると、気合いの叫びを上げながら打って出る。

なんか互いの護衛が勝手に出て来て、勝手に約束して、勝手に戦いが始まってしまった。

俺はその間、このボイザンとか言うデブと密着してはなくてはならないらしい。勘弁なんだけど？

俺の困惑を無視して護衛同士で激しい剣戟が始まった。剣を翻しながらキンキンと打ち合うチャンバラは、アラビアンナイトの戦闘シーンを見ているようで見応え十分。

しかし、チャンバラと違うのはこんな全力の剣戟が長く続くハズが無いと言うことだ。

流星はプラヴァス一の剣士を名乗るだけある。一瞬の隙を突いてスレイヤの二刀が

コチラの護衛の首筋を切り裂いた。

「キヤアアアア！」

カラミティちゃんの悲鳴が上がり、護衛の首からはピューピューと血が噴き出す。派手だね、どうも。

「約束だ、ボイザン様を離して貰おうか？」

「えー」

俺はそんな約束していないのだが？

だけど、敵側のマヌケつてのは時として味方の名将よりも得がたい財産だ。ココで殺してしまうのは惜しい。

「解ったよ」

俺が解放するなり、ボイザンは醜く叫びやがる。

「ゴホツゲホツ！ おいコイツを殺せ！ 馬鹿にしやがって！ 生かして帰すな」

「そう言う事なので悪いな旅の者、ココで死んで貰う」

スレイヤは堂々と二刀を俺に向けてくる。はークソ。コイツら俺ルールしか無いのかよ。

何でも決闘で解決ってか？ じゃあ俺も乗ってやるよ！

「オイオイ、俺とは決闘してくれないの？」

「ご所望なら」

言うなりブンブンと二刀を振り回しポーズまで決めてくる。

え？ これどうするの？ 訳が解らずに待っていると、苛立ったスレイヤの声。

「構えろ！」

あ、そう言う感じだ？

「構えたら戦闘開始？」

「そうだ！ 早くしろ」

「あいよ！」

——パァン！

取り出したのはリボルバー。外すハズが無い距離。放たれた弾丸はカツコイイポーズを決めるスレイヤの眉間を正確にぶち抜いた。

男の巨体がバタリと倒れ、一瞬の静寂が訪れる。

「なつなあ？！」

「なにが起こった？」

「嘘だろ！ スレイヤの兄貴イ！」

仰天する一同。だけど俺にとつては驚く事じゃ全く無い。それどころか……

恥ずかしいなオイ！ インディージョーンズかよ！

「まだやる？」

「引け！ 引くんだ！」

尋ねればボイザン達は蜘蛛の子を散らす様に去って行った。

「さーて」

「わ、あわわ」

護衛の死体を前にへたり込むカラミテイちゃんを抱き上げ、背中をさする。

「大丈夫、恐くないからね」

「あ、あああ」

いやいや、流石に目の前で人が死ぬのはショックだったらしい。

護衛の人、派手に血を噴き出してたからなあ。シャルティア嬢に鍛えられてなかったら俺でも血が引いただろうね。

シャルティア嬢は生きたまま人間を分解して、見せつけてくるから凄い。猫が雀とか捕まえて来るヤツだよってユマ姫は言ってたけど、絶対に違うと思うんだ。

「ううう、腰が抜けちゃって」

「じゃあ運ぶよ」

「はわわっ！」

護衛も居ないからね。俺がカラミテイちゃんをお姫様抱っこで抱き上げて、ブラッド

邸までエスコートする事になるのだった。

カラミティちゃんマジカラミティ

インディージョーンズごっこが終わった後、カラミティちゃんを抱えた俺は、何事も無くブラッド邸まで辿り付いた。

道中で襲撃の話聞きつけ心配する衛士達にワラワラと囲まれたが、報告はリヨン氏にすると突っぱねた。

門と扉を開けて貰って、ようやくとブラッド邸に上がり込む。

コレでほっと一安心。

「えつと？ 大丈夫かな」

格好つけてココまでお姫様抱っこで来たが、そろそろ腕が限界だ。

「あ、えと……もうちよつと、このままでも良いですか？」

「……勿論だよ」

うぐぐ、流石にここで泣きを入れるのはナシだよな。無理をして頑張る。

そうして、リビングのソファーにカラミティちゃんを降ろすと、待機していた女中さんにお茶をお願いし、カラミティちゃんの様子を確認。

「怪我は無かったかな？」

「はい、大丈夫です」

恥ずかしそうにお茶を啜るカラミティちゃんを見てるとほっこりする。

と、そこにリヨン氏が飛び込んで来た。

「キムラ殿が襲撃を受けたというのは本当か!」

「別にどうと言う事は無いですよ」

俺がお茶を片手にそう言えば、カラミティちゃんから非難の声が挙がる。

「そんな! キムラ様は私の為に……」

「カーリーは? 護衛はどうしたのだ!」

「あ、そうだ!」

別に、とか格好つけたけど護衛は死んでしまったのだ。俺もこの世界で、命の価値つてのを低く感じるようになってしまった。

「リヨン殿申し訳無い、借りていた護衛ですが我々を庇ってスレイヤと言う男に討たれました」

「スレイヤ! あの男がポンザル家についているのか!」

リヨン氏が血相を変えることから、プラヴァスいちってのはともかく、名の知れた剣士ではあったようだ。

ま、俺としてはあまりコチラの功績を大きく語りたいた訳じゃない。正真正銘ただ武器

の差で勝ただけだから自慢にもならないし、変にアテにされても困る。

しかし、俺の言葉に納得しないのがカラミティちゃんだった。

「違います！」

「お前は黙ってる！ 私は今キイムラ様と話をしているんだ！」

リヨン氏の叱責に一步も引かず、更に言い募る。

「黙りません！ カーリーは勝手に決闘で負けたのです、私を守ってくれたのはキイムラ様です」

カラミティの言葉を受けて、リヨン氏もチラリとこちらを見る。

うーん、弱そうだって思われているんだろうね。信じられないと顔に書いてある。

実際とぼけることは難しくないが、カラミティちゃんを道化にするのは憚られた。

「まあ、間違つては居ませんが……」

「リヨン叔父様、良いですか？」

俺の言葉はカラミティちゃんに遮られてしまう。結局カラミティちゃんの解説に相づちを打つ形で、状況を説明していくのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「キイムラ殿、私は貴方のことを見くびっていた様だ、申し訳無い」

「いえいえ、運が良かったんですよ」

状況説明が終わった後、夜も遅いとカラミティちゃんを下がらせて、俺はひとまず風呂に入った。そうして、風呂上がりにもたまたりヨン氏の私室で膝を突き合わせている。

「スレイヤと言えばプラヴァスでは名が通った剣士、タナカさんなら或いはと思ったが、貴方が勝って見せるとは夢にも思っていなかった」

「褒めすぎですよ……私なんて大した事はありません……ただし」

俺は得意の薄笑いを引つ込めて、リヨンの瞳を見つめ返す。

「田中の事を見くびるのは止めて貰っていいですか？ アイツが本気を出したらブラッド家の人間を皆殺しにするぐらいはワケ無いですよ？」

「……まさかー」

リオン氏は驚くが、アイツの名誉の為にもね。流石にカツコイイポーズ決めて死んでいったヤツと同等つてのは甘く見られすぎ。

「スレイヤとか言う奴なら二、三人居ようが俺一人で倒せます。そんな俺がアイツを護衛に雇っている、その意味が解りますか？」

「……………」

リオン氏は押し黙った。実際に田中の剣と防具があればシャムシールでえいえい斬り合うなんざ無理筋だし、俺と違って弾数制限も無い。加えてアイツが相手じゃ部屋に

立て籠もっても一切の意味が無い。

「それでは、たった一人でポンザル家を壊滅させることも可能なのでは？」

「どっこい、アツチの背後には帝国が居る。何が出てくるか解らない、危険過ぎてやる気はないですよ」

「……そうなのか？」

呆然とするリヨン氏に俺はコクリと頷いた。去年の戦争で登場したガトリングガンや手榴弾。

そう言った物が配備されていれば、田中とて無駄死になりにかねない。

ソレを伝えるとリヨン氏は無念そうに膝を握り締めた。

「ここ数年で帝国や王国にココまでの差を付けられて居るとは」

俺は肩をすくめてみせる。実際、俺達の様な異邦人が好き勝手に技術革新をしているのだ。

プラヴァスの人にしてみれば、目を離れた隙に世界が変わってしまったと錯覚するに違いない。

「もしも帝国とやり合うならば北方には無い、南方プラヴァスならではの戦法が有効だと思えます。毒を使った吹き矢や地形を活かした戦法を考える必要がありますね」

「毒か……こちらでは酷く嫌われる手段なのだが」

そりゃ、好かれる所はないだろうが、帝国は気にせず使うだろうし有効でもある。

田中がブラッド邸を一人で殲滅可能と言うのも、俺等にとつて未知の技術が無い前提。

砂漠らしく、サソリやコブラみたいな毒があつても不思議じゃ無い。更に言えば境界地みたいな物がある場所で、常識通りに戦いが進むと思うほど油断はしていない。

「解りました、検討しておきます。それにしても早速ポンザル家との抗争に巻き込んでしまうとは……」

「狙つて巻き込んだのでは？」

白々しいとばかり、俺はつまみを口に放り込む。

どうもこれ、スパイスを利かせた『幼虫』らしい。聞きたく無かつた事実だが美味しいのでスツカリ気にならなくなった。

噛むとトロリと甘く、ソイツをキツメの蒸留酒で流し込む。

クウー！ 堪らねえ。

スパイスが鼻に抜け、爽快感が凄いのだ。コレ変な成分とか無いよな？

ゴキゲンな俺に対して、リヨン氏は必死だ。

「誤解です、確かにカラミティはボイザンから求婚を受けていましたが。ポンザル家と揉めるのを期待して案内役に頼んだのではありません」

……そうなのか。だとしたら？

「じゃあ、アイツにくれてやるのが癪だから、私に押しつけようとしたってワケですか？」

「……その通りです」

だよな、この国に居たら揉め事の元になる。だからこそ異邦人の俺に押しつけようとした。

ボイザンは傍目にも小汚いクソ野郎だった。俺がリヨンさんでも同じ事をしたかも知れない。だけどなあ。

「確かにカラミティさんは可愛いし、頭も良い。ですが、はいそうですかと貰う訳にも行きませんよ」

「本妻にとは言いません、妾としてでもどうでしょうか？」

「うーん……」

そうは言われても、こちとら少年好きの容疑と、ユマ姫にぞつこんって容疑？ を掛けられている。

少年好きはともかく、ユマ姫にぞつこんで全てを捧げる覚悟だと言う噂は悪くない。ダシや調味料、スパイスを独占しての商売はとかく嫌われる。

丁度、コンビニミみたいなチェーン店制度で、セントラルキッチンで作った肉まんを大

量納入みたいな事にも手を出している。

何より、うま味や出汁の概念が無い世界だったので、豚骨や昆布が激安な世界だった。それらを圧力鍋で煮だしてスープの素として売り出しているのだ。

ウチの傘下から離れようものなら、料理はつまらない味になるし品数も大きく減ってしまう、オーナーは高い加盟店料を払い続けるしかない。

働いても働いても、利益ばかりをウチの商会在吸い取つていると言われている状態なのだ。

そんな商会在が、ギリギリの所で庶民の敵だと突き上げを食らわない理由は、その回収した利益の大半を恋に狂った俺がユマ姫へとつぎ込んでいる。と思われているからだ。

実際、ユマ姫関連は採算度外視でバンバン金を出しているから間違いないや無い。

巡り巡って可哀想なユマ姫に金が行っている事、そして俺の一途なイメージが苛立ちを抑えている格好だ。

それが、南方で妾を貰いましたと言ったらどうなるか？

「妾……願つてもないお話ですが、コチラにも事情がありました」

お断りするしかないだろう。この歳で妻も妾も取らないとなれば、ソレこそ変な疑いを掛けられるがソレでも良い。

少なくとも、リヨン氏はコツチに深い事情があることぐらいは汲んでくれるだろう

……そう思ったのだが。

それでもリヨン氏は引かないどころか、過激に攻めてきた。

「妾でも駄目なら、奴隷としてでも構いません！」

「奴隷!!」

やっべ！ 思わず身を乗り出してしまった。

「……………」

リヨンさんに「え？ 嘘でしょ？ ソコで食いつくの？」って顔をさせてしまつて恥ずかしい。

だけどコレに限つては高橋が悪い！ アイツが貸してくれた小説で、奴隷の女の子を買つて、ハーレムでウハウハみたいなのを読み過ぎたのが原因だ。

もう一つ言うと、それなりに知識があつて絶対に裏切らない労働力は喉から手が出るほど欲しい。

今だつて商會に残したフィーゴ少年に負担を掛けている。

しつかし、コレでは女の子を嫁にするのは嫌、妾として迎えるのも嫌。だけど、奴隷として酷いことをして弄ぶのは好き。

そんな超絶鬼畜野郎みたいに思われちゃつたんじゃないか？

……いや、良いけどさ。俺は気まずくて話を逸らす。

「私などより、田中も独り身なので薦めてみてはどうですか？」

「タナカさんか……また、見くびつていられると言われてしまうかも知れませんが、あの方には女性を幸せに出来るとは思えません」

うーん、正解！

「そいつは間違い無いですね！」

「でしよう？」

「です」

スリルが大好き、殺し合い大好きみたいなヤツだ。危険な男が好きだって娘も居るだろうけどモノには限度がある。

そう言えば、シャルティア嬢も来るんだったな、彼女を後見人として侍女として……カラミティちゃん分解されちゃいそう。

うーん、だとしたら俺が責任をもって連れ出すしか無いのか？

「とにかく、少しでも考えて頂ければと」

「……わかりました」

そうして酒もそこそこに解散となった訳だが……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ、寝るかあ、さっすがに疲れたぜ」

宛がわれた自室。白を基調に爽やかな内装に仕上がっているのだが、帰って寝るぐら
いしかやることは無い。

この部屋で一番お世話になっている家具はベッド。

木が編み込まれた床板は通気性が良く、敷き布は毛布が一枚引いてあるだけ。それで
も弾性があつて十分に柔らかい。

簡素な見た目ながら、支柱はさりげなく輝く金属で補強されている。

そして、なにより羽毛布団。

暑い場所で羽毛布団なんて思ったが、羽毛は体温を自然と調整してくれる。

飲んで一服後、一気に冷えがちな体には中々嬉しい。それも王国には中々無いレベル
の高級羽毛がギツシリだ。

まずは飛び込んでふかふか具合を堪能する——「キヤツ！」

キヤツ？

あー……布団をめくってみれば案の定。

「カラミティさん？」

「あの、わたし……」

来ちゃった！ っつて奴だ。いやあ……どうして来ちゃったのかなあ。

「どうしても、どうしても嫌なんですボイザンと婚約するのは——」

そりやそうだろうけど……流石に押しかけられて来られても。

そんな俺を見て、益々思い詰めた様子でカラミティは詰め寄ってきた。

「妾でも、いえ、奴隷でも構いません。わたしを外の世界に連れ出して下さい！」

自分から奴隷になりに来るのかあ……

リヨンさんもそうだけど、本当に追い詰められているな。

「えーつと、奴隷だなんて、自分の事を大切に……」

「奴隷でも……家畜でも構いません」

いや、逆オークションじゃないんだから下げられても！

「家畜でも……ペットでも……」

「いや……」

「ペットでも……玩具でも！」

「え？」

「え？」

最後が玩具なんだ……つて、玩具で反応したからかカラミティちゃんが青い顔でこちらを見てる。

リヨンさんと一緒だなあ……血は争えないって言うか。

「ぶっ、ハッアハハハ」

「え？ あの……」

笑えてきてしまった。

「ボイザンと婚約するのはそんなに嫌？」

「無理なんです！ 生理的に！ 死んだ方がマシなほど！」

いやー、解る。

「でも、今日はね？」

俺の覚悟が決まらなさと布団から追い出そうとしたのだが。

「あつー！」

「えっ？！」

まっ裸はでやんの。健康的な褐色肌が目に眩しい。だけど、えと、思ったよりもピンク的な？

部分的に肌が真っ白なのだ。性的な部分を中心に。

「それは？」

「えーつと、ネイタルの跡ですか？」

聞けばネイタルと言う儀式。女の子は生まれた時から、黒いサラシを胸や股間に下着代わりに巻き付けると言うのだ。

「そうすると、ソコだけ白くなって。結婚する人にだけ白い部分を見せるのです」

「なるほどね……」

ソレを堂々と見せてくれちゃってる訳か。

っていうか、日焼け跡萌えを民族単位でやってる感じで、まだまだ俺はプラヴァスの文明を甘く見ていたね。

ハイ、中々のエロスです。つるペタだけどそれも良い。俺ロリコンかもしれない。でもな！

「今日は疲れてるんだ、ごめんね？」

「そんな！」

もう三十。無理も崇ってクタクタなんだよ！ 性欲だけで動ける歳じゃない。

「ここままでして、部屋になんて帰れません」

「うーん」

そこまで言われて……流石の俺も腹は決まった。

半端にね。

「解ったよ、とにかく君の事は預かるから、今日は添い寝で良いかな？」

「は、ハイ！」

そうして十三の女の子と添い寝してその日は終わった。終わらせた。

まあ、だけど。結構ヤバイよなあ、どうしよう……

水不足と砂漠の掟

「え？ 風呂入れないの？」

「申し訳ありません」

翌朝、朝風呂でも入っちゃおうかな、と思つたらコレである。ちなみにカラミティちゃんが背中を流そうとついで来たけどご遠慮願つた。

「実は昨日から水が……」

「えっ？」

頭を下げ続ける侍女の言葉に絶句する。

プラヴァスはファイナス川のお陰で水不足とは無縁では無かつたのか？

しかし、良く考えれば川があるうと水不足になるときはなる。ここ最近プラヴァスでは雨に恵まれなかつたと聞くし……いや、オカシイ。

スフィールでは雨が降らないなんて話は一切無かつた。上流での雨量が十分であれば、川が涸れるなんて事は無いのでは？

整理しよう。ファイナス川はこの大陸のど真ん中を南北に通っている。

だが、ゾツテム砂漠に入った途端、水はけが良すぎる砂の地層に潜り込んで地下水脈

を形成している……と言うのが定説だ。

普通に川が続いてくれていれば、小型船でも作って小麦の輸出でもなんでも可能だったのだが、地下に潜ってしまっただけはお手上げだ。

砂漠の地下には網の目の様に水脈が通っていると説もある。それが湧き出した場所がオアシスなのだ。

そう言う意味では、プラヴァスも巨大なオアシスの一種と言っても良いだろう。湧き出した水が川を作り、その周囲に出来たのがプラヴァスなのだから。

その水が湧いてこなくなったと言うのだから、プラヴァス存亡の機と言っても過言では無い。

「リヨンさんは？」

「昨日から原因究明に走り回っております」

そうだったのか、言ってくれれば……いや、昨日はそんな話が出来る状態では無かったか。

と、そこで別の侍女が駆け込んでくる。応接間でリヨン氏が呼んでいるというのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「申し訳無いが、昨日の話は無かったことにして頂きたい」

澁面を作ったリヨンの開口一番がそれだった。

「昨日の話とはカラミティちゃんを国外に連れ出すという話ですよね？」

「ああ」

「ええっ！」

隣でカラミティちゃんが飛び跳ねる。だが、ちよつと待つて欲しい。

「ええつと、ソレと水不足に何の関係が？」

「実はですね……」

リヨン氏が言うにはポンザル家の井戸にはまだ水が湧いていて、水を周囲に提供し始めたと言うのだ。ポンザル家の井戸には別の水脈が通じているとか。

「砂漠の民の不文律として水の独占は許されないこと。そのため今のところポンザル家が何か要求してきた訳ではないのですが、それでもポンザル家の立場が強まるのは避けられません。最悪、太守の座を譲らざるを得ない事態にも発展します」

「そ、そんな！」

カラミティちゃんが絶望の表情でへなへなとソファアールへと沈み込む。ハイライトが消えたレイプ目って奴は本当にあるんだな……

だけどな、高橋と違って俺には絶望した女の子を見て楽しむ趣味は無い。

こんな事なら昨日の内に手を出しておけば良かったか？ いや、後の祭りっばいな。

同じ事を考えたのか、カラミティちゃんが据わった目で立ち上がる。

「わ、私！ 昨日はキイムラ様と二人で、その……」

「何も無かったと聞いている、キイムラ様が紳士で助かった」

「やっぱり筒抜けなのね、手を出していたらどうなっただろう？」

「どちらにせよ俺のやることは決まっている。」

「ポンザル家が力を持ち始めた矢先、ポンザル家以外の井戸や川が干上がる。あまりにも出来すぎては居ませんか？」

「いや、そうは言うが、だとしたら何故もつと早く動かなかった？ 水を支配するのはブラヴァスを支配するのも同然なのだぞ」

「動いたのがポンザル家で無いとしたら？」

「問いの意味を理解したりヨン氏が大理石のテーブルを悔しげに叩く。」

「帝国か！ しかしどうやって？」

「奴らは古代遺跡を熟知している」

「それと、井戸にどんな関係が？」

訝しむリヨン氏に俺は自説を披露する。

「昨日は図書館でブラヴァスの歴史や地理も勉強したのですが、フィーナス川は少し不自然な気がします」

「不自然とは？」

この世界に砂漠は一つだけ、極めて狭い閉鎖世界だからこそ、他との比較が成り立たない。

だが、俺は地球の砂漠も知っている。そこから行くとプラヴァスで湧き出すフイーナス川は少し都合が良すぎる気がする。

地球でも砂漠の街は存在する。空気は乾いており川などはあつという間に干上がったため、地下水路を引いて街まで水を引いている訳だ。

カナートと呼ばれるイランの地下水路が最も有名だが、同様の物は世界各地に存在する。

大半がそれはもう、気が遠くなる程の労力を掛けて作成されているのだ。ただ地下にトンネルを掘るだけと思つて貰つては困る。掘つた後の土はどうやって掻き出すのか？ 通気口はどうするのか？

それらの問題を解決するために、数十メートル毎に縦穴を掘る必要があるのだ。

そこまでしてようやく完成するハズの用水路が、プラヴァスには自然と備わっている。それに違和感を覚えて仕方が無い。

「水路を整備したのが古代人だと言いたい訳ですな？」

「その通りです、帝国にしてみれば用水路の経路を少し変えてやれば良い。カラミティ

ちゃんの扱いに察するに、昨日の今日で全く状況が変わってしまったのではないですか？」

「おっしゃる通りです、水不足で水量は減っていましたが、突然干上がるとは思ってもいませんでした」

「帝国のやり口は単純、水路を切り替えポンザル家だけが水利を得る。その上でポンザル家に麻薬を流す」

「ポンザル家に権力を集中させ、交渉をやりやすくすると言う事ですか？」

リヨン氏は絞り出す様に言うが、まだ麻薬の力を甘く見ている。

「恐らく、最小の麻薬で最大の効果を生もうとしています。私の推測が正しければポンザル家すらも被害者ではない」

「それは、どういう？」

「砂漠の不文律と言いましたが、そんな物は関係無しに、ポンザル家は金銭を要求するようになるでしょう」

「まさか！ 外の人には解らないでしょうが、砂漠の水は命と一緒に。コレで儲けようとする人間は誰にも信用されなくなる」

「信用よりも麻薬なのですよ」

水売ってプラヴァス中から利益を吸い上げたポンザル家から、麻薬の力で帝国が利

益を吸い取る。

これならば少量の麻薬しか運送出来ない欠点も吹き飛ぶ。悪魔の策だ。

「いやいや、水を売るなどと言い出したら他の貴族家だって黙っていませんよ、土地ごと井戸を取り上げるに違いありません」

「武力で、ですか？」

「そりゃ、勿論ですが……」

そこまで言つてリヨン氏も気が付いたようだ。

「帝国は武器も売ると、そう言う事ですか？」

「間違い無いでしょう」

「馬鹿な、奴隷に武器を渡す様なモノだ。そんな事をすればポンザル家が帝国に噛み付く危険もあるでしょう？」

なるほど、武器商人だつて自分達に向けられる武器は売らないのが道理。

権力を集中させた上、武器まで与えては逆らつてくれと言うようなモノ。だがリヨン氏は銃の事を理解していない。

「帝国が使う武器は、火薬と言う消耗品が無くては機能しません。帝国の支援なく継戦能力は得られないのです」

「武器も麻薬も両方を帝国に押さえられるのか！」

「それも自分達は一滴の血も流さずに、利益だけをかつさらうつもりでしょうね」

黒峰さんが考えた策だとすれば、余りにも悪辣だ。アヘン戦争が可愛く見えてしまう程の鬼畜。麻薬と武器だけ運び込めば良いのだからゾツテム砂漠に出兵して損耗するリスクを抑えられる。

「我々はどうすれば……」

「水路の切り替えが本当に出来るとするならば、帝国が動いた痕跡があるはずです」

「なるほど、調べてみます。キムラさんは？」

「図書館へ、詳しく地理を調べれば場所を特定出来るかも知れません」

「助かります」

そんな訳で、今日も図書館通いが確定した訳だが……

「わ、私も！」

「ならん！ お前は普段通り学校に通うのだ」

リヨン氏の言うとおり、流石にカラミティちゃんを連れて行く訳には行かない。カラミティちゃんには悪いが、このまま水が出なければポンザル家との婚約はブラッド家の命綱になりかねない。

「うう……」

「そう落ち込まないで、頑張ってみるから」

「……お願いします」

悲しそうに俯くカラミティちゃんを励ましてみるものの、恨めしげな顔で睨まれてしまった。

これは、頑張らないといけないな……

と、思ったのだが……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ロクに手掛かりも無く、五日も過ぎてしまった。

いや、俺だって頑張ったんだよ？　しかし、正に砂漠で一本の針を探すようなモノ。

ポンザル家が代々持つ土地と周辺の地形を分析し、遺跡がありそうな場所を予想してリヨン氏の部下に探つて貰つてはいるのだが……

残念ながら砂漠が広すぎる。行つて戻つても数日経つてしまうのだから、たった五日で何か成果がある方がおかしい。

この五日の間にも水を提供しているポンザル家の力は強まるばかり。そして、水不足にあえぐ街からはスツカリ活気が失われていた。

そんな折、俺はリヨン氏から相談を受ける。私室で膝を突き合わせるのはいつもの事だが、その報告には驚かされた。

「帝国の商人がやって来たのですか？」

「その通りです、最初に麻薬の流通を断つて以来、顔を見せる事も無かったのですが……」

「それで、奴らはなんて?」

「それが……」

聞けば帝国の商人は麻薬だけではなく、銃を買わないかとも持ちかけて来たという。

「しかし、高すぎる。ケシは最初に来たときの十倍の値段をふっかけて来るし、銃に至っては同量の金と交換とは、売る気があるとは思えませんでした」

「当て馬なのでしようね」

「キムラさんもそう思いますか?」

「ええ、本命のポンザル家に売りに行く前にブラッド家に顔を出した、他にも買い手は居るんだぞと言うプレッシャーのつもりでしょう」

「やはりですか……」

商売の基本とも言える。そして、麻薬の値段が十倍とは、いよいよ金をむしり取る段階に入ったと見て良い。

……いや? 逆に言えば、今までだって太守であるブラッド家に寄つても罰は当たらなかつたに違いない。どうして水が涸れたこのタイミングで、奴らはブラッド家に来たのだろうか? 敵情視察のつもりだったのだろうか?

ソレを聞いてみると、リヨン氏はふむと考え込んだ。

「実は帝国の馬車がプラヴァスに来る事自体が珍しいのです。どうやらポンザル家側が帝国が指定した場所に向いている様でして」

「それは……どうして？」

「ああ、ゾツテム砂漠は外の人には厳しい土地ですから。砂漠に慣れた我々が人を出すのは珍しい事ではありません」

「なるほど、そうですか」

言いながら、何か違和感を感じた。だとしたら何故このタイミングでやって来るのか？ 水不足にあえぐプラヴァスで何か事件にでも巻き込まれたらコトだ。外のオアシスで商談を纏めた方がマシ。

逆に考えてみよう、奴らはどうしても今回だけはプラヴァスに来る必要があったとしたら？

ちゃんと水が涸れたか偵察？ だったら一人で十分だ。ブラッド家の財力調査？
ポンザル家への当て馬？

理由は幾つも考えつくが、敢えてブラッド家の力が落ちた時にやって来る理由がない。

いや、相手は麻薬だ。流通量を知られるだけでも面倒。と、なれば今までも密かにプ

ラヴアスに入ってきていたのでは？

つまり、このタイミングを狙ってやってきたのでは無い、このタイミングで密輸ルートが使えなくなったとしたら？

「ああ！」

俺はその可能性に思い至り、叫ぶ。

「なんです？！」

「帝国の商人の跡をつけて下さい！ 尾行に慣れた人間で！」

俺の叫びにリヨン氏は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから更に五日後、俺とリヨンさんはラクダに乗って砂漠を駆けていた。

「この辺りか？ 帝国の商人が消えたと言うのは」

「はい、砂漠の真ん中で忽然と」

リヨン氏の問いに答えたのは、商人を尾行したと言う凄腕の間者。クソ暑い砂漠だと言うのに黒い装束で固めているのは恐れ入る。ラクダに至っては砂漠迷彩柄と来た。

一方でリヨンさんのラクダは白く、巨大だ。

俺はと言うと、今度はリヨンさんのケツに張り付いてるってワケ。ラクダなんぞ乗ったことがないからな。

危険な任務なのにリヨン氏自らご出陣かと呆れはしたが、このデカイラクダで無ければコレほど早く辿り着くのは不可能だっただろう。それだけ一刻一秒を争う事態と言ふ訳だ。

ここはゾツテム砂漠のど真ん中、プラヴァスからはだいぶ距離がある。

「本当にこんな所に水路があるのですかな？ キイムラ殿」

「間違いありません」

水路って奴は人も通れる様に作る物。そうでないとメンテが出来ない。

だとすれば、商人は危険な砂漠ではなく水路を通って来たのでは無いか？ それが使えなくなったらからプラヴァスにやって来たのでは？

「全て推測でしよう？」

「ですが、他に打つ手も無い、違いますか？」

「……………」

リヨン氏が焦るのも無理は無い、ポンザル家は結局、法外な値段でケシを購入したのだ。

これでポンザル家にケシが蔓延している事は確定。そして恐らくは武器も一緒に購入している。俺の銃を目の当たりにしたボイザン辺りは、必ず買うに違いないのだ。

その証拠にポンザル家は商人が去った翌日から水の販売を始めた。曰く水を汲むの

だって楽じゃない、こちらの水だって残りが少ない。そんな理由だ。

勿論、他の貴族家は猛反発。汲めないと言うなら我らが汲む、水量が少ないと言うなら見せてみるという声を「他人の井戸には手を出さないのが砂漠の掟」と都合が良い時だけ砂漠の不文律を持ち出すありさま。

ブラッド家にはポンザル家に対する陳情が引つ切り無しに届くが、帝国の武器がチラつく現在では手が出せない。

陳情を出す方は良いが、武器のデモンストレーションにされる方の身にもなってみると言いたいのだが、そうとは知らない民衆はブラッド家の弱腰を叩くばかり。

実際、水が無ければ死ぬしか無いのだ。見えない脅威よりも渴きが砂漠での生死に直結する。

民衆の暴動を恐れ、リヨン氏が焦るのも無理は無かった。

「ココです」

「なんと！ こんな所でか？」

全身黒ずくめの間者が指定する場所には文字通り何も無かった。この辺りと言われなくても探しようが無い。

「井戸があるのなら、蟻塚もあるのではないか？」

リヨン氏が言う蟻塚とは、井戸を掘ったときに掘り返した砂が周囲に堆積している様

子を指すモノ。だが、そんな事を言う辺りリヨン氏は勘違いしている。

「恐らくは、地下から蓋を開けたのです、砂は地下に雪崩れ込み、蟻塚は発生しません」

俺の言葉にリヨン氏は頭を掻きむしる。

「それでは発見不可能では無いか！ 肝心な所で見失うとは！」

「ハッ、申し訳ありません」

間者を叱るリヨン氏だが、一方で俺には気になる事が一つ。

「スイマセンが、その格好、却って砂漠で目立つのでは？」

「？」

俺は間者の男に尋ねる。真つ黒な衣装は隠れるときの定番ではあるが、太陽がギラつきあらゆるモノから色を奪う砂漠では、目立って仕方が無い様に思えるのだ。

「心配ご無用。リバーシブルとなっていて裏地は砂色です」

そう言つて裏返した長衣は確かに白っぽかった。むしろ表が砂色で、黒いのは裏地。ひっくり返して使つていたと言う事。

商人を見失つてからは、表に戻すのも忘れていたらしい。

「つまり、商人を見失つたのは夜ですか？」

「まさしく、夜の間に忽然と消え失せていたのです」

「……なるほど」

だとすれば、既に時刻は夕暮れ時。夜を待つべきだろう。俺がそう言うのと、問者もリヨン氏も揃って首を横に振った。

「砂漠の夜は過酷です、捜し物には向きません」

「今夜は新月、月明かりも無く、何も見えません」

新月か、いつそ都合が良い。俺がそう言つて笑うと、二人は訝しげに肩を竦めていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

砂漠の夕暮れは一瞬。間もなく辺りは暗闇に変じた。

「この一刻が勝負です、ココで見つけなければ勝機はありません」

俺がそう言うのと、リヨン氏は苛立たしげにランプを掲げる。

「広い砂漠をこんなランプ一つでは……」

「そのランプを消すのです」

「？」

今度こそ、面食らった様子のリヨン氏だったが、問者の方は思い当たる節があつたらしい。皆で野営地のたき火も含め全ての明かりを消す。

周囲には星明かりのみ、砂漠は深い闇に閉ざされる。

……いや、違った。

暗闇に染まった砂漠の中で、ボンヤリと光る緑の光。それは野営地からそう離れてい

ない場所から放たれていた。

「あの光は？」

「行ってみましょう」

駆けつけた一同が見つけたのは砂漠では珍しくもない砂岩だ。それがボンヤリと緑光を放っている。

「コレは？」

「蛍光塗料、昼間の光を吸収し、夜になると光る塗料です。目印の無い砂漠で、土地勘の無い商人達が姿を眩ませた。こう言う仕掛けが無くては不可能でしょう」

「では、この近くに？」

「ええ、水脈があると思って間違い無いでしょう」

自信満々に言い切ったが、内心では不安で心臓バクバクだった。それぐらい最近のリヨン氏は殺気立っている。

だがその心配は杞憂であった、岩の近くの砂を払いのけると、布で隠された井戸が見つかった。それも最近、突貫工事で作られた事がありありと解る。

「ココが……」

「地下水路でしようね」

俺達は井戸の中へと滑り込んだ。

地下水路

突貫で作ったであろうレンガの井戸を過ぎると、近代的なマンホールが現れた。こじ開ければコンクリートで舗装され、鉄の足場から降りることが出来た。

地下は当然真つ暗で、俺は魔導カントラの明かりを付けた。エルフ製の逸品、LEDライトみたいな強烈な明かりが地下水路の全容を照らし出す。

「素晴らしい魔道具をお持ちですな」

羨ましがるリヨン氏の言葉も耳に入らない。水路の全容が余りにショッキングだったからだ。

「地下鉄か！」

そこは地下鉄のホームに似ていた。ホームの下には朽ち果てた線路の残骸まで見て取れる。

てつきり古代人が整備した水路があるモノと思っていたが、古代人が整備した路線に水が入り込み、水路になってしまったと言うのが正解か？

帝国の商人はココを通じてやって来たに違いない。

それから俺達は三人で地下鉄の構内を歩き回った。音を頼りに天井から水が湧き出

す場所を見つけたが、肝心なのはその水がどこに行き、どこに行かないように帝国がイジったかだ。

魔導コンパスを使いプラヴァスの方角に水の行方を探ると、崩落したトンネルに行き着いた。

最近の崩落には見えない。崩落自体はかなり昔に起こったのだろう。

だが、積もった瓦礫の隙間を埋めるように、真新しい土嚢が積んであるのはいただけない。

「コイツだ、コレで水路を塞いだに違いありません」

「帝国め、オイ、コイツをどかさぞ」

リヨンさんの号令で俺達三人は靴を脱ぎ、ズボンをまくり上げ、腰まである水位にずぶ濡れになりながらも、土嚢をバケツリレーで取り除く。

「コレで本当に水が戻るのか？」

「その可能性は高いでしょう」

土嚢を取り除けば、瓦礫の隙間へと水が入り込み、水位は膝下まで下がっていった。

もつとこう、ゲームみたいにバルブとかがあって水路を切り替えてるのかと思つたが、想像以上にアナログで笑えてくる。

と、水位が下がった事で、もう一つ通路があることに気が付いた。

「きつとこの道はポンザル家へと通じています」

俺は魔導コンパスを片手に報告する。

「つまり、この道を伝つて奴らは麻薬を運んでいたワケか」

「そうなりますね」

プラヴァスへの水脈を塞いだら水位が上がり、ポンザル家に乗り込むことが不可能になったのだろう。

だからこそ、奴らは表からプラヴァスにやつて来ざるを得なかった。そのついでにブラッド家に顔を出したに過ぎなかったと言う訳だ。

このまま地下通路を泳いでポンザル家に乗り込んでやりたい気もするが、それは今やる事ではない。

「プラヴァスに帰るぞー！」

「ええ」

水を確認する為にも、一刻も早くプラヴァスに戻るべき。

気が急いで仕方が無いとばかり、早足のリヨンさんがバチャバチャと水を掻き分け先頭を歩む。その背中を見ながら、俺は今後のポンザル家の動きを考えていた。

水でプラヴァスを支配する先は失敗、麻薬はリヨンさんが危険を啓蒙している。しかし一方で帝国から買った武器はある状況。

もつと過激にブラッド家を攻めてくる可能性に頭を巡らせる。

その所为か、突然歩みを止めたリヨン氏の背中に俺は衝突するハメになる。

「つとと、リヨンさん？」

「何だ？ アレは？」

リヨン氏が指差す先、俺はライトを当てる。浅くなつた水位から顔を覗かせていたのは……

「ワニ？」

思わず叫んでしまった、前世で言う所のワニに近い。しかし、退化した目は地下水路の生物である事を示していた。

そして、口内にギツシリと生えた牙は肉食である事を示している。

リヨン氏が慌てて腰のシヤムシールを抜き放つ。

「来るぞー！」

やはりワニとは大きく異なる。バカリと横に大きく開かれた口は、水深の浅い部分を根こそぎ噛み砕くだろう。

コレなら目が退化しても獲物を逃さない。足場が悪い中、回避不能の攻撃に思われた。

——ドスツ

が、リヨン氏は逃げずに踏み込んだ。ハサミみたいに開かれた口の付け根に、肉厚のシヤムシールを突き立てる。

流石！ だが俺の背後から悲鳴が上がる。

「ぐああああ！」

間者の男性が足を噛み砕かれ、水中へと引き摺り込まれた。俺は助けようとライトを向けるも、そこに浮かび上がったのは無数のワニが群がる姿。

その余りにも悍ましい光景に一瞬、思考が飛んだ。

「クソツ、手遅れだ！ 早く上がるぞ！」

リヨン氏の言葉にハツとする。浅瀬でワニと戦うのは自殺行為。間者の人には悪いが俺達は一段高い駅のホームへと駆け上がった。

慌ててブーツを履き直しながら、部下を失ったリヨン氏が悔しげに唸る。

「何だ、アレは！ 何故、急にあんなのが出て来た？」

「解りません……ですが」

あんなのが水中に居ては、帝国だって悠長に土囊など積めるハズが無い。しかし現に土囊は積まれていたし、商隊はこの水路を使っている。

「霧ギョルドスの悪魔を使っているのでしょうか」

「それは……？」

太陽の光も無い場所、エサだつて少ないに違いない。なのに大型生物が生きていける理由は何か？ 恐らく魔力に違いない。地下水路には魔力が満ちているのだ。

他の魔獣がそうであつたように、霧を嫌がり魔獣達は近寄らなかつた。

「その効果が切れた途端にアイツらが来たワケか」

「加えて、土嚢を取り除いた事で水位が変わり、一気に霧が換気されたのでしよう」

ポンザル家の地下まで水路が続いて居るにも関わらず、今までポンザル家の人間が遺跡を活用しなかつた事が不思議であつたが、あんなのがウジャウジャ居たならば探索など出来なかつたに違いない。

足早に出口へと戻りながら、リヨン氏がぼやく。

「魔獣が見たいなど、言うモノでは無かつたですな」

そう言えば確かにリヨン氏はそんな事を言つていた。

口は災いの元と反省している様子だが、さっきのワニなど魔獣の中では弱い方、数で押すばかりが魔獣では無いのだ。

「いえいえ、魔獣を甘く見て貰つては困りますよ。デカイのは家ぐらいのサイズがありますから」

実際には、そこまでの魔獣は大森林の中でも無ければ出会えない。

俺は意地悪半分、やや誇張して話したつもりだったのだが……リヨン氏の反応は想像

したモノと異なつた。

「知つてるさ、丁度あんなのだろう?」

「え?」

リヨン氏が顎で指し示す先、俺達が入つてきたマンホールの前に、緑色の巨体がつそりと鎮座していた。

先ほどのワニ! 但しサイズが全く違う! 本当に、俺が言つたとおり、丁度小屋ぐらしいの大きさがあつた。

「本当に迂闊な事を言うモノでは無いな」

「……全くです」

「どうする?」

「逃げ場は無いですね……」

地下鉄みたいとは言つたが、上への階段は見当たらないし、下への階段は埋まつていゝる。他のホームに行くには水浸しの線路に入る必要があり、無数のワニに狙われる。

「少々デカいが、水の中よりマシだろうな」

「少々じや済まないですけどね」

言いつつも、俺には勝算があつた。出口がソコしか無い事を知つてゐるかの様に、敵はそこから動かない。

だったら俺は確実にファーストヒットを取れるわけだ。

「それは？」

「銃ですよ、帝国が持っているヤツよりも高性能ですが、一点物です。弾も少ない」
抜いたのは拳銃。研究が進み、ライフリングの掘り方も進化して精度も上がっている。帝国のマスケット銃よりは遙かに強いだろう。

——パアン、パアン、パアン！

乾いた音が三発。退化した目の代わり、狙ったのは鼻。だが、その巨体の前には豆鉄砲に過ぎない。

——ボオオオオオオオン

喉を揺すり低音の鳴き声を響かせ、ワニみたいな生物がコチラへの突進を開始する。

——パアン、パアン！

更に二連射、コレで鼻を潰せたら良かったのだが……

ドスンドスンと地響きと共に歩む先には、俺をしっかりと捉えていた。

耳か？ この音が響く地下で？ まさか？ ひよつとして熱を感じているのか？

一部の蛇が持つピット器官。赤外線感知を持っているならば、赤熱する銃身を捉える

のは当たり前だ。

俺達はいよいよホームの端へと追い詰められた。ワニの口がバカリと左右に大きく開いた。既にホームの上に逃げ場は無い。

口内にビツシリと並ぶ牙は、あたかもホラーゲームのトラップ。針山の壁に左右から押しつぶされる様な圧迫感があった。

「前菜だ！ 奢るぜ！」

そこに俺が投げ込んだのは爆弾。貴重な火薬を使った虎の子の一発だ。そして――

「リヨンさん！」

「解ってます」

二人で一斉にホームの下へと逃れる。

――バグン！

壁の如く巨大な両顎が、ホームの下で屈んだ俺達の頭上で閉じられた。

そのまま、口内での爆発を待つだけでも十分な威力があるだろうが。俺達の狙いはソレに留まらない。口が閉じられると同時に、飛び出した俺とリヨン氏は、大型ワニが君臨するホームに再び戻った。

「押して下さい！ め一杯！」

「こんな事で大丈夫なのか？」

俺達がやったのは壁の様な両顎を左右から押し込むだけ。ワニと同じ特徴があるのなら、顎を開く力は極めて弱いはず。

加えて、俺とリヨン氏は腰のサーベルとシャムシール、それぞれの剣で刺し貫き、両顎を縫い止めた。

こうすれば、爆発の威力はドコにも逃げようが無い！

——ポオオン！

くぐもった粘性の爆発音。同時に怪物の耳や鼻からドロリと体液が噴き出した。

「終わったのか？」

「流石に。コレで死んでなければ本当のバケモノですが……」

爆弾の一発や二発で死なない王蜘蛛バウギユリヅアルなんてバケモノも居たが、そんな魔獣は稀。

実際、巨大ワニはそれ以上動かず、俺達は地上への帰還を果たす。ほうほうの体で井戸から這い出した。

まだ夜明け前、地下に居たのは三、四時間ほどか？

「しかし、これでは調査もままなりません」

「そうですね……水が戻っているのを願うばかりです」

もし水が戻っていないければ、俺達は再び地下水路に降りなくてはならない。

人を使えば良いのかも知れないが、どれだけの被害が出るのか解った物では無い。こ

んな所に飛び込めるヤツが居るとすれば俺には一人しか心当たりは無い。

「田中が来たら入って貰いましょう。そうしましょう」

「……タナカさんは、それ程までに強いのですか？」

あんな化け物を見た直後だけに、疑わしげにリヨン氏は言うが……まあ大丈夫だろう。多分、きっと。魔獣退治の専門家みたいなところがあるしな。

さっきの巨大ワニだってサククリと切り刻むに違いない。

俺がそう言うのと、信じていないのかりリヨン氏はため息を一つ漏らすだけだった。

とにかく、俺とリヨン氏は水路を後にする。目指すはプラヴァスの北部。水が湧き出すハズの土地。

一睡もしないまま砂漠を渡るのは危険だと、休憩を挟みながらも翌日の太陽が沈む前に辿り付いた。

そこはプラヴァスにとって聖地とも言える場所らしく、宗教をモチーフにした彫刻や、キツチリと舗装された小道などが整然と並ぶ場所であった。

水が湧き出る土地と言うと、単なる岩場の様な想像をしていたが、ここがプラヴァスの要なのだと一目で理解出来る様に仕上がっている。ココに毒など撒けば、プラヴァスは全滅なのだから、警備の兵士だって立っているワケだ。慌てて駆け寄ってくるのも当然である。

「リヨン様！ 良いところに！」

「水は？ 湧いたのか？」

「は、ハイ！ ですが、なぜそれを？」

我々が力仕事で土嚢をどかして来たワケなのだが、ソレを言っても仕方が無い。

とにかく、湧き水が出る場所へ駆けつけた俺達は、轟々と水を吐き出すトカゲの怪物を目の当たりにする。

「えっ？」

また魔獣？ と構えるも、良く見ると石膏の彫像。言うならばマールイオンみたいなモノなのだが。コレは？

「我々の間で、水の守り神と呼ばれる精霊の彫像……なのだが」

「似てますね、さっきの怪物と……」

……気まずい。

確かに、アイツらは水場を守っていると見える。ただ、帝国には役に立たなかったと言っただけで、実際にプラヴァスの水脈を守り続けてきたと言えないことも無い。

それを知った先人がアイツらを精霊と言ったとしても不思議じゃ無い。

……殺しちゃったけど、まあ不可抗力だ。水場の守りをサボったアイツらが悪いだろう。

とにかく、水は湧いた。ポンザル家の増長は押さえられる事だろう。それどころか、麻薬と武器を買った金で首が回らなくなるのは時間の問題か？

とにかく一安心。

コレで風呂にも入れるし、しばらくはゆったり出来るとリヨン氏と談笑しながら自宅に帰る途中だった。

「リヨン様！　こんな所に！」

駆け込んできた人物に心当たりは無かったが、リヨン氏の部下の一人であるらしい。「パノツサ、丁度良い。カーリーに続いて私のミスでズイーガーまで殺してしまった。葬儀の準備と、残された者には私が謝罪に向かう。準備を任せられるか？」

リヨン氏の言葉に思い出す。そう言えば、さつき死んだ間者の人だけでなく、護衛の男性も死んでいたんだった。本当にブラックな職場だわ。

俺の責任はないよね？　……あるか。

ブルーになる我々だが、パノツサさんは気にも止めない。

「いえ、それどころではありません！」

「それどころとはなんだ！」

リヨン氏が本気で怒るのも無理は無い。だが、パノツサがそう言うのもまた、無理は無かった。

「カラミティ様が！ 行方不明です」

「なんだと！」

リヨン氏の絶叫が、落ち始めた夕日に溶けていく。

うぐぐ、寝不足だって言うのに、今日もまた風呂はお預けとなりそうだった。

家出少女を探せ

リヨン氏の部下、パノツサは慚愧に堪えない様子で言葉を漏らす。

「カラミティ様は思い詰めた様子でした、私がつと良く見ていれば」

「いや、厳しく言った私にも責任がある。学友の家や、行きそうな場所を洗い出せ」

「解りました。平行して水が湧いた事を大々的に喧伝すれば、ポンザル家も大人しくなるでしょう。カラミティ様も出てくるかも知れません」

「……ちよ、ちよつと待つて下さい！」

俺は慌てて割り込んだ。

「カラミティちゃんが家出したって前提で話が進んでいますが、書き置きとかは？」

その問いに、ため息と共に答えたのがパノツサさんだった。

「いえ、お恥ずかしながら、家出は今までも何度かありまして」

「あれで、お転婆なのだ、アイツは」

リヨン氏によれば、望まぬ婚約などを命じれば家出するのは目に見えていたと言うのだ。

だが、俺に言わせれば違う。カラミティちゃんは確かにお転婆な所があるだろうが、

家の為に必要だと言う婚約を無下にできる様な娘ではない。

でなければ澆刺はっらとした若さを無鉄砲さに置き換えて、とつくに彼女は家を出ている。

更に言えば、俺と共にカラミティちゃんちゃんが襲われたのはつい最近だ。家出と断じる方がどうかしているだろう。

俺がそう言うと、リヨン氏は考え込んだ。

「黙って居てもアイツはボイザンの元に嫁ぐことになっていたハズ、襲われた時とは状況が違うのでは？ 今となつては状況が異なるが、水が出たのは今日。アイツが消えたのは昨日、辻褄が合わない」

「でしたら二人は家出の線で洗つて下さい。俺は誘拐の線でポンザル家を洗います。異邦人の俺が疑うなら角が立たない。そうでしょう？」

俺は一息に言い切つて、死んでしまった問者のズイーガー氏が乗っていたラクダに飛び乗った。

「待つんだ！ ラクダは外の者が簡単に操れるモノでは無い！」

「馬とはコツが違う、落ちたら踏み潰されますぞ！」

揃つて止める二人だが、俺には勝算があつた。

「ヨシ、良い子だ」

初めはムズがったラクダだが、たてがみを撫でると途端に大人しくなつた。

「ここ数日、ラクダの乗り方は特等席でたっぷり観察させて貰いましたから」

俺が得意気にそう言うのと、二人はあんぐりと口を開いた。

まあ自慢だけど、俺は見ただけで大抵の事はマネできる。

品の無い笑顔を見られまいと、俺は手早くポンザル家へと馬首をめぐらす。

「行つてきます！」

俺がラクダを蹴つてプラヴァスへと走らせると、「器用な男だ」とリヨン氏の感心半分、呆れ半分の呟きが聞こえた。

それに対し、アイツが好きだった小説になぞらえ「それが俺のチート能力だからな！」と内心で笑うのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、ラクダの操縦が難しいと言っても、実は速度を出すのは鞭を叩くだけ、子供でも出来るぐらいに簡単なのだ。

問題なのはむしろ止め方。そしてコブを意識した重心移動だ。

あと、実はコブは脂肪のカタマリで、案外柔らかい。

……どうでも良いな。取り敢えず俺が向かったのはカラミティちゃんと共に、ボイザンに襲われた通学路。

並の馬鹿なら同じ場所で二度襲うなんて事はあり得ないが、ボイザンと言うのはすこ

ぶる付きの糞馬鹿だった。俺の常識で測るのは危険と見た。

が、まだ日暮れ前。通学路の様子は人影もまばらだったあの時とは随分と違う。

学生の姿も見かけるし、店じまい寸前とは言え屋台もまだ開いている。俺も空腹だ、腹ごしらえを済ませることに。

と、そんな折り、トカゲの串焼きを頬張る俺の視界をフラフラとした足取りの男が横切った。

人がごった返す中だって、フラつく足取りは存外目立つ。男はフラフラしたままに酒場へと吸い込まれていった。

通学路だつてのに酒場があるつてのは頂けないな。

そんな事を思いながら焦げたトカゲを飲み込んだのだが……良く考えればおかしくないか？

まだ夕暮れ時だ、ベロンベロンになるにはフライングが過ぎる。

俺は男の後を追って酒場へと飛び込む。まだ人はまばらな酒場、むしろ夕食をつまむ客が大半だ。

男は？ ……居た！

俺が自然な仕草で男の顔が見える席に陣取れば、すかさずおばちゃんがやって来た。

「(注)注文は？」

「リムガとニユーノス、それにフォツガだっけか？ 芋も頼む」

蒸留酒にスパイスの利いた幼虫は俺のお気に入り、芋に見えるキノコのフォツガは田中のお薦めだ。

「あいよ、フォツガは焼きで良いね？」

「焼く以外にあるのか？」

「蒸しても美味しいよ」

「いや、焼きで頼む。それにしても太陽が隠れる前に出来上がってるお大臣が居るんだな」

俺がベロベロの男を指し示せば、おばちゃんは苛立った様子で男を睨んだ。

「嫌になっちゃうよ、ウチで酔うならお大臣だが、余所でベロベロになった後にやってこられちゃ迷惑なだけさ」

「へえ、昼間から飲める場所なんざあるんだな」

「この辺には無いねえ、家で飲んだんじやないのかい？ ああ見えてポンザル家のラクダ番らしいからね、つまみ出せない分タチが悪いよ」

「へえ？」

思った通りだ。アレはきつと酒酔いじゃない。

フラフラの割に顔はそこまで赤くない。なのに多幸福感に包まれた顔は弛み切ってい

る。

——麻薬だ。

「まだアイツは注文していないのか？」

「いつもエール一杯で粘られちゃって、迷惑つたらないよ」

「そりゃ災難だな、しかしそんだけ金が無い奴でも酔える所があるとは興味があるね、一杯奢れば教えてくれるかな？」

「さあね、ウチとしちゃ代わりに頼んでくれるなら大歓迎だけどさ」

「よしきた」

おかみさんの了承を得た俺は、男の卓に相席する。

「よお、こんな時間から出来上がつてるとは景気が良いじゃネーか」

「ああん？」

男の目は焦点が合っていない、そして、酒臭さも全く無い。——確定だ。^{キマリ}

突然話し掛けられた男は大きな程にビクリと肩をふるわせた。こういうセリフは絡まれる時のお約束、一瞬警戒するも、相手がひよるひよるの優男^{オレ}だと見るや、安心したのか脂下^{やに}がった。

そう言えば、脂下がるの語源はタバコをキセルで吸う仕草だったな……

突然こんな事を思った理由は、男が虚空に見えないキセルを握った様が、まさに脂下

がった仕草だったからだ。

日頃から相当にキメているに違いない。

「オイオイ、なんだあ？ 俺に話かあ？」

「ああ、金が無くても酔える方法があるって聞いてさ」

「ほほー、良いぜ？ ただし、無料って訳にはいかねーや」

「勿論だ、一杯奢るぜ」

「リムガでもか？」

「勿論！ 俺もリムガを頼んだ所だ、乾杯と行こうぜ」

リムガは蒸留酒。ブラッド邸で出るだけあって、ここらで一番の高級品だ。

「んだよオメー！ 見所あるじゃねーか！」

高級酒をポンと奢れる奴が、安い酔い方を求めて絡む。

冷静に考えれば矛盾だらけだが、男には不審に思えるだけの注意力が残されていないな
かった。

男をベロベロに酔わせると、事態は思った以上に悪かった。

「ボイザンが薬を持って逃げた？」

「そーなんだよ、プラヴァスに逃げ場なんてねーのによお」

オイオイオイ！

「そんで、いま奴らはドコに居る？」

「あー女を攫つてな、今頃ヨロシクやつてるんじゃないか？ 追い出されちまったよ」

——ガタツ！

俺は思わず席を立った。

ギョツとした様子で男が見上げる。

「どおしたあ？」

「ああ、スマン、女と聞いて興奮しちまった、ずっと女日照りだよ」

スグにでも飛び出して行きたいと思うが、場所を聞き出すのが先。深呼吸をひとつ、冷静に頭を働かせる。

「変な奴だぜ、酒を買う金があるなら女を買えよ」

「馬鹿言え、素人女だから良いんじゃないやねえか、オイ、俺にもひとつ囁ませてくれよ」

「それが、攫つたのはガキなんだよ、何考えてやがるんだか」

「益々羨ましいや、ガキはスラムの汚えのしか買えないからな、ウロついている女学生を見る度にぶち込みてえと思つてたんだ」

俺は下卑た笑いを浮かべながら、運ばれて来たりムガを注ぐ。

ゴキゲンになった男が、売り言葉に買い言葉で案内すると言うまでさしたる時間は掛からなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
案内されたのは町外れのうらぶれた一軒家。

「オイ、お前はソコで待つてろよ、俺がナシ付けてくる」

「おおよ、頼んだぜ」

男にはリムガの瓶を四本も持たせている。足取りはフラフラでも、酒だけは絶対に落とさないと言語していた。

俺の覚えを良くするために、護衛に瓶ごと渡してくれと強く言い含めてある。俺の狙いは瓶を持たせて手を塞ごうと言うモノ。

……だが、そんな策すら無用であった。

——パアン！ パアン！ パアン！

しばらく待つてから部屋に踏み込むなり、リボルバーで三連射。ソレで三人が死んだ。

護衛とは名ばかり、完全にアヘン窟と化していた。護衛だったであろう男達は床やソファーに寝そべり、ひたすらにアヘンを食っていた。

そこに蒸留酒まで飲んだとあっては、最期の瞬間まで幸せ気分だったに違いない。俺をココまで案内した男だけは、銃床でぶっ叩くに止めておいた。情けである。

しかし、本当にコイツらは麻薬を持ち逃げしたボンザル家の一員なのか？ 総じて危

機感が無い。

銃声を聞きつけて飛び込んでくる奴が居ると身構えたが、来ない。

狭い部屋では銃のアドバンテージが生かせない。広い一階のリビングでカタを付けたかったが仕方が無い。

俺は二階への階段を上がる。

二階に上がるや、更にキツイアヘンの匂いがした。アヘンは基本無臭だったと思うが、この世界では少し甘い、お香の様な匂いがする。

正直言うとなんな臭いでは無いのだが、ココまで濃いと気持ちが悪くなる。

……ココまで吸ったら急性中毒一直線じゃないか？

俺の疑問は二階に上がってスグの扉を開けた時点で氷解した。

——最悪の方向に。

「アイツらー！」

敵地のただ中であると言うのに、怒りを抑えられない。思いきり壁をぶん殴るが、痛みよりも尚、憎しみが勝った。

汚いベッドに縛られていたのはカラミテイちゃんだった。

着衣が乱れ、乱暴に外されたカフタンの布が散らばるのは良い。攫われたんだ、覚悟はしていた。

だが、焦点が合わない瞳と、収縮する瞳孔。囁まされた猿ぐつわを外しても安定しない呼吸。

——中毒症状だ！

全く麻薬を知らない生娘に、コレだけ強烈なアヘンを嗅がせれば無理も無い。アイツら！攫うだけじゃ飽き足らず、薬漬けにして手懐けようとしたのか！

……違うな、カラミティちゃんには中毒症状で死にかけている。そんな繊細なコントロールを試みたとは思えない。単純に女を薬漬けにして、行為を楽しんだだけだ。

ぶっ殺してやる！

俺の中でらしくない純粋な殺意が渦巻くと、それに答える様に目当ての男が現れた。

「てえめーどっから入って来やがったー！」

部屋に入ってきた薄汚い男には見覚えがあった。

間延びした口調、青白い肌。たった数日で見違える程に痩せた体。

前とはまるで印象が違う。それでもコイツはボイザンだ！二人と居ねえ間抜けな面、見間違うハズが無い！

俺は、コイツを殺す！だが、薬には殺さねえ！

「そうかよ、俺はお前に会いたかったぜッ！」

——パァン！

言うと同時に一発、ボイザンの肩を打ち抜いた。

頭を打ち抜かなかつたのは痛みを味わわせる為、そして雑魚に過ぎないコイツに対して、少なからず余裕があつたから。

「ンだ！ てつめえ！」

……だが、俺の目論みは外れた。

ボイザンは肩に空いた大穴をポカンと見たが、痛がりもしない。そのまま苛立ち紛れに腰のシヤムシールを抜き放つ。

完全にキマっている。

俺は苛立ちながら更に一発、乾いた炸裂音と共に今度は足を打ち抜く。

「おらあー！」

しかし、止まらない！

「グッ！」

振り下ろされたシヤムシールの一撃を紙一重で躲した。人の命を奪う一振りだが、ここには一切の躊躇が見られない。

余裕カマしてる場合じゃ無い！ とつとつカタをつける！ 腹に向かつて二連射、だが、それでも止まらない！

何故だ？ 痛みに鈍かつたとしても、銃弾をコレ程受けて動けるモノか？

そうか！ ストツピングパワーが足りないんだ！

ストツピングパワーとは銃弾が命中時、行動不能にするための力を指す。

地球で初めてストツピングパワーが問題になったのは、フィリピンⅡアメリカ戦争の時。

アメリカ軍が銃弾を当てても、フィリピンの原住民は構わず突っ込んで来たと言う。

当時の弾は黒色火薬を使った小口径、原住民は麻薬で痛みを飛ばしていた。

まるでこの状況の再現じゃ無いか！ 間抜けな雑魚と、甘く見すぎた！

「オラア！」

ボイザンの躊躇無い突きが、俺の肩を掠る。

この躊躇の無さも麻薬のお陰だ、素人は瞬時に覚悟を決められない。そうで無くても剣先に迷いが出るハズ、ソレが無い！

クソツ！ 無敵にも思っていたのに拳銃が、突然オモチャに変わってしまったみたいに感じる。

元来、拳銃で撃たれた時の衝撃は大した物では無いらしい。それでも俺が今まで撃つた相手は、たった一発の弾丸でも動きを止めてきた。

撃たれた事実と、体に穴が空いたと言う心理的プレッシャーが、人間を行動不能に至らせると聞いたことがある。

コイツは、体ていに穴あなが開あいていいると言う事実すら、正しく認識にんしきしていない。

残のこるは二発、至近距離しじんきりょだが銃じゆうの方が早い。狙ねらうは頭あたま！ これならストツピングパワーもクソも無い！

——パァン！

だが……当たらない！ 酷ひどく頼たのり無い炸裂音さつれつおんと共に、弾丸だんがんは壁かべへと吸すい込まれた。

正気せいきを失うつたボイザンは頭部あたまぶを意味いみも無くフラつかせていた。ただでさえ頭部あたまぶは案外あんがいに当あてにくい場所ばしょ、首くびを傾かげるだけで躲かげられてしまう。

最後さいごの一発いっぱつ！ 狙ねらうのは股間こかんだ。

土壇場どだんばで思おもい出でした！ ストツピングパワーが無い場合ばい、股間こかんを狙ねらうべきだと聞いたことがある。

多少外すくしても太おい血管けっかんに当あたる場所。

——パァン！

最後の弾丸だんがんは、ボイザンの股間こかんを正確せうかくに撃うち抜ぬいた。

……だが思おもい出ですのが少々遅おそかった。

大量たうりやうの出血しゅつけつ。それでもボイザンは引ひかなかつたのだ。撃うたれた事をことにしる様子ようすも無く、シャムシールを振ふり上げる。

体が動うかない！ 気きが付つけば部屋へやの隅すみ、逃にげ場ばが……無い！

薄暗い部屋、逆光に浮かび上がるのはシヤムシールを振りかぶるボイザンのシルエツト。俺は死ぬ寸前だと言うのに、部屋の埃がキレイとか、ボイザンの髪型が変だとか、いつそ笑える程に間延びした時間を感じていた。

コレが……走馬灯！ 脳のシナプスが爆発的に暴れ回り、助かる方法を探す。

だが、手は無い！ ナイフもサーベルも間に合わない！

俺はただ、振り下ろされるシヤムシールの動きから目が離せない。

——死が、迫っていた。

呼吸が止まり、汗はピタリと引いていた。

俺は死ぬのか？ こんな雑魚相手に？

悔しさ以上に、恐かった。コイツに殺されるなど、夢にも思っていなかった。まるで覚悟が足りていなかった。完全にこの世界を甘く見ていた俺のミス！

ゆっくりとした世界の中、シヤムシールが俺の顔面に到達し、

——そのまま通り抜けた。

は？

斬られたのか？ こんなにも、何の衝撃も無いモノか？

困惑する俺の耳に聞こえたのは、カランと金属が転がる音。

それが、切り取られたシャムシールの剣先だと気が付くのに、しばらく時間を必要とした。

「あ、ゲッ！」

今度こそ剣閃が通り抜け、体を真つ二つに切り裂いた。

しかし、ソレは俺の体では無い。逆光で真つ黒なボイザンのシルエットが、ズルリと音を立ててズレて行く。

得体が知れない事態、パニックに陥る俺に艶やかな声が掛けられた。

「何を遊んでいるのかしら？」

バラバラに崩れたボイザンのシルエットの向こう側、現れたのは縦ロールのお嬢様。

「アナタの魔力を追ってきたら、つまらないことしてるのね」

呆れた目で、シャルティア嬢が俺を見ていた。

舞台の上で

「シヤ、シヤリアちゃん？」

「……アナタにそう呼ばれても嬉しくないわ」

シヤリアちゃんは拗ねた様子で巻き毛の先を弄んでいる。

何故ココに？ そうだ、確か田中に呼びに行つて貰つたんだつた。

彼女は諜報と暗殺のスペシャリスト。陰謀渦巻く今のプラヴァスに必要な人材だったから。

それにしても、早い。

あれから十日かそこらだぞ？ 本気でかつ飛ばせばバイクは五日程度で王国まで行けるワケか。

「ボーツとしてて良いの？ この娘、死にかけてるケド」

「え？」

そうだ！ カラミティちゃん！ 中毒症状の青白い顔は危険な兆候だ。

俺は縋り付く様にベッドに這い寄ると、その様子を窺う。

「クソツ呼吸が弱い！」

呼吸麻痺を起こしている。コレでは長くない。ど、どうする？ 人工呼吸！

俺が？ カラミティちゃんど？ だが、経験が無い！

「無様ね、見てもらえないわ」

悩んでいる間に、シャルティアはカラミティちゃんに口付けた。

「えっ？」

当たり前と思うかも知れないが、その仕草に俺は密かに衝撃を受けた。

この世界に人工呼吸なんて概念は無いのだ。時として鞭を打つことで覚醒を促す事すらある。

そんな中、彼女のやり方は俺の知るモノと大差が無い。鼻を押さえて口から呼吸を送り込んでいる。

そんな場合じゃないのだが、俺は美女と美少女の口付けに目を奪われる。目を引く程の美しさがソコにはあった。

「見ていないで手伝いなさい」

「な、なにを？」

何を？ じゃない、胸を押すのだ。コレばかりは力のある男の方が有利。

……そう思ったのだが。

「背中に腕を入れて、持ち上げるの。海老反りに」

「え？ あ？ っ、こっう？」

「そう、そのまま持ち上げて」

シャルティア嬢の方法は俺の知ってるやり方とは違った。

海老反りにさせた時に呼吸を送り込み、吐き出させる時には頭を上げる。

コレ、効果あるのか？

「呼吸は戻ったわ」

「本当か！」

「だけど、後遺症が残るかもしれない……完全な中毒症状ね」

麻薬の中毒症状を知っている。つまり麻薬をずっと前から知っていると言っていること。暗殺を生業にするだけあって、あらゆる薬物に通じている。或いは一般的な医者以上に。

「さっきの呼吸方法だけど、あまり言いふらさないでくれる？ いちおう秘伝のワザなの？」

「口付けで呼吸を促すのは知っていたが、背中に手を回すのは知らなかった……アレは？」

「仰け反ると自然と息を吸うでしょう？ 俯くと逆に息が漏れる。アナタの世界ではどうするの？」

「……そりゃ」

ひたすらに胸骨をリズミカルに押しまくると伝えると、シャルティア嬢は微妙な顔をした。痛そうと思つたのかも知れない。実際、骨が折れる事もあると聞く。

「信じられないかもしれないが、ソレが一番効率的と言われているんだ」

「信じるわ、胸骨を押しして呼吸を止める技があるのだけれど、止まっている相手に使うなんて想像もしてなかっただけよ」

……思つたよりも物騒な事を考えていた。

しかし、あるのか、胸骨を押し込んで無力化する方法が。恐いね、暗殺拳かな？

……暗殺拳だな。

とにかく、カラミティちゃんは一命を取り留めた。

どうなることやら……後遺症が無いと良いのだが。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

あの後、ブラッド邸に連絡を入れ、カラミティちゃんを運び出し、パノツサさんに事情を説明すれば、俺の体力は限界を迎え、倒れるように眠ってしまった。

そして翌日、起きると同時に俺はリヨン氏に呼び出されていた。

「ポンザル家に討ち入りを掛けます」

深刻な顔で、リヨン氏は俺達に打ち明けた。

いつものリヨン氏の私室で、戻つて来たばかりの田中を交え、久しぶりに三人が揃つた。だが今日はドンチャン騒ぎを出来る雰囲気では無い。

可愛い姪御さんがあんな目に遭えば当然。

カラミティちゃんは今をもつて目を覚まさない。目を覚まして後遺症に苦しむ可能性は高く、ベッドに縛り付けておくしかないのだ。

「俺も協力するぜ」

「おおつ！ 本当ですか！ タナカさん！」

暴力沙汰とくれば黙つてられないと、田中はやる気満々。

リヨン氏は手を取つて喜ぶが、俺には幾つか気になつて仕方が無い事が。

「リヨンさん、ちよつと待つては貰えませんか？」

「なにをです？ 奴らは水の独占を企み、カラミティを傷物にしました」

「ボイザンはポンザル家から麻薬を持ち逃げしたのです、誘拐はポンザル家ぐるみの犯行ではありません」

「だから許せと？ ボイザンはポンザル家の四男。そんな言い訳はききません」

「気になるのは麻薬を持ち逃げする程に、ボイザンが追い詰められていたと言う事実です」

「それは？」

「恐らく、中毒者は我々が想像しているより多く、麻薬の需要は高まっている」
「何が言いたいのです?」

「下手をすれば、軍や警察が敵に回りますよ、部下すらも危うい」
「言うに事欠いて!」

リヨン氏はあり得ないと激昂するが、それ程恐ろしいのが麻薬だ。

完全なジャンキーで無くとも、麻薬がチラつけば少しだけ判断をポンザル家に寄せる程度は十分にあり得る。

今回はボイザンの暴走。そのボイザンも死んでいる以上、過激な反撃に理解が得られるとは限らない……

それは勿論、ポンザル家の出方次第ではあるのだが……

と言う事を話している最中、来客の報せが入った。

ポンザル家から謝罪を伝えたいと使者が来たそうだが……

叩つ切つてやる、とシヤムシル片手に玄関に走り込んだリヨン氏。

出迎えたのは深々と頭を下げる男。なんと、ポンザル家の長男らしい。

「ボイザンの不始末、申し訳無い」

名は確かバイロン、だが、その男、下げる頭はひとつでは無かった。

その手に抱えるは……生首!

「ガーラツシユ！」

「ああ、ボイザンの馬鹿に持ち逃げなんて出来るハズがねえ、調べ上げたらコイツが絵図を描いてやがった」

生首の正体はポンザル家の三男。物品の管理をしていた男で、水の販売を計画したのもこの男と言う。

長男、次男は奪われた麻薬捜しに躍起になって気が付かなかつたとか……

全面的に信用するわけでは無いが、あり得ない話じゃ無い。

通常であれば麻薬を吸っていけば他の欲求は引つ込み、食うモノも食わずにガリガリになるまで部屋で麻薬を摂取し続ける。

足取りを掴むのは難しかったのだろう。

そうして全部の罪をボイザンに被せて、裏で麻薬を捌く。生首くんにしてみれば一世一代のチャンスだったに違いない。麻薬は金銭面でも人を狂わせる。

誤算だったのはボイザンが麻薬に飽き足らずカラミテイちゃんまで誘拐したこと。底抜けの馬鹿は存在が災害みないなモノ。ある意味で麻薬よりも恐ろしい。

なんにせよ、ケジメとして三男の首まで持参されてはポンザル家をこれ以上責めるのは難しくなる。

加えてバイロンは驚く程の金額も賠償金として提示してきた。

「代わりといつちや何だが、ボイザンが持っていた麻薬は引き取らせちやくれないか？
元々はコチラのモノだ」

「断る！ 金も受け取らん！」

「ウチの商売品だ、文句は付けません」

リヨン氏とバイロン、睨み合う二人に俺は一つの提案を出した。

「境界地の権利と交換ならば、良いのではないですか？」

「……境界地の、それなら確かに」

リヨン氏も頷くが、今度はバイロンが黙つちや居ない。

「馬鹿言つちやならん、アレは我々の生命線だ、全く金額が釣り合わん！」

「差額は私が出すと言つても？」

「なんだと!？」

「キイムラさん？」

驚く二人を余所に、俺は田中に持ってこさせた小箱を持参する。

「コレは？」

二人が覗き込む箱の中には、赤い宝石がゴロゴロと転がっている。

「ルビーです」

「まさか！ こんな巨大な！」

「帝国にも売れると思いますよ、高値で」

プラヴァスでは赤いルビーが最も人気と聞いて、田中を買って来るようにお願いしていた。

エルフの国が滅亡して以来、宝石は一時的に暴落している。投資の対象としても筋が良い。

今回はあろう事か、自慢の劇場を担保にしてしまった。返せなければ大変な事になる。

つまり、見せ金だ。本当に売るのは勘弁したい。

なぜ、ソコまでするのか？

調査の結果、ユマ姫の求める記憶がソコにある可能性が極めて高いからだ。更に言うと、アイツの厄介事体質を考慮すれば、一番面倒臭い場所にあるに違いない。

だから、俺が提示する金額はスパイスの利権を考えても常識外れのモノ。

コレだけあれば麻薬を帝国から買い付ける事も出来るだろう。流石のバイロンも考え込む素振りを見せた。

「少し考えさせてくれないか？ 私の一存では決められない」

「構いませんよ」

俺がそう言うと、バイロンは帰って行った。

生首を置いて。

「さて、コレはどうしますか？」

「捨てておけ」

リヨン氏は苛立ちも露わに言い放つ。そりや太守である自分を差し置いて、勝手に話を決められてはね。

「悪いが、境界地の利用に関してはヨソ者に自由にさせる訳には行きませんが、アナタの金で買ったとしても、一定の制限を設けます」

「構いませんよ、むしろ管理も丸投げしたい。私としては立ち入りの自由と、収穫物の融通さえしてくれば十分です」

「……そうか」

割合にも依るが、これは破格の条件であろう。しかし、リヨン氏は喜ばなかった。

「カラミティの事、大切に思ってくれていると思っただが、所詮は商人か」

不機嫌に言い捨てて立ち去ってしまった。

……俺がカラミティちゃんの事を怒っていない様に見えるのが不満か。

確かに淡白な態度に見えるだろうが、怒ったって仕方が無いのだから怒らないだけだ、俺だつて腸が煮えくり返っている。

それに、ポンザル家だつて俺に言わせれば被害者。怒りは帝国に向け、取っておかな

くは。

「それで、どうするよ?」

「そうだな……」

様子を窺っていた田中に問われ、俺はニヤリと笑い返した。

「美人なネーチャンが居る店を予約しようぜ?」

「なに?」

ポカンとする田中に、してやったりと笑うのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

プラヴァスの酒場で最も有名なお店と言えば、誰もがリーリッドと答える。

あれから三日後。それ程の名店を、俺は貸し切りになっていた。

「交渉にオネーチャンの居る店つてのは、悪い大人になつたつて気がするな」

田中が黒い笑いを浮かべるが、リーリッドはなにも怪しげな風俗店では無い。歴史がある名店で、当代の歌姫も在籍しているので、俺は前から気になっていたのだ。

「ステージでも見ながら和やかに商談と行きたいんだけどな」

酒場には巨大なステージが用意されている。歌だけで無く、際どい格好をしたオネーチャンのエッチなダンスも楽しめるとか。

歴史ある名店ながらに、かなりのエロス。むしろ大つぴらに風俗店が無いプラヴァス

だからこそ、こう言うお店が大きくなりがちみたい。

こんな所で取引とは、我ながら良いご身分だわ。

「マトモに取引する気もねえくせによ」

「オイ！」

誰に聞かれているかも知解らないのだ、俺は田中を黙らせる。

確かに、みすみすルビーを渡す気は無い。それで、ユマ姫の記憶やら境界地が手に入るならそれ自体は悪い取引では無いのだが、問題はその資金が麻薬となって帝国の利益になることだ。

もし取引成立したならば、ルビーをシャリアちゃんに奪い返して貰いたい。もつと言えば権利書そのものを盗んで欲しかった。

「そう上手く行くワケねえだろ？」

「そうなんだよな」

場所のあたりはついたと言うが、重厚な鍵付きの金属ケースに収まっている上に、しかも相手は石版。重量を考えると盗み出すのは難しいと言われてしまった。

盗むとすれば、今、交渉の席しか無い。

「んな事、余計に無理じゃねえか？」

「ソレがそうでも無い」

秘策は手にはめた自在金腕ルー・デルオン。か細いワイヤーを自在に動かせる俺は、この世界の鍵ならばフリーパスも同然。いや、現代の鍵だってイけるんじゃないか？ なにせ究極のピッキングツール。

交渉の途中で、全員の気を逸らす事が出来るならば、その間に鍵を開け、石版をすり替える事も容易い。

「それで駄目そうなら？」

「ルビーを売って、売ったルビーをシャリアちゃんに盗んでもらう」

「あくどいねえ」

と話していれば、ポンザル家のバイロンが来た。隣に居るのは？

「次男のドネイルです、お見知り置きを」

「私はキイムラ、そしてコイツが護衛のタナカです」

「今日はお二人で？」

護衛が一人しか居ない事に、ドネイルは驚いていてみせた。たしかに先方は護衛を五人も連れてきている。権利書以上に、奪われればおしまいのルビーを抱えるにしては、護衛が少なく見えるだろうな。

「大抵の相手なら、タナカ一人で十分ですよ」

俺が五人の護衛をチラリと見て笑えば、後ろに控える彼らは露骨に不機嫌になった。

勿論ドネイル氏もだが、それを諫めたのがバイロン氏だった。

「止めておけ、タナカ氏の伝説はプラヴァスまで聞こえている」

「そりやどうも、感激だね」

ちつとも嬉しくなさそうに田中がおどければ、流石のバイロン氏も眉をひそめた。

交渉前にコレはマズイ。

「オイ、失礼だろ」

「ハイハイ」

「いや、良いのだ、腕に自信がある剣士とはそう言うモノ」

言い聞かせる様子のバイロン氏だが、ソレよりも気になるのが護衛の一人が持つ武器。

——銃だ。

しかも火縄銃ではなく、火打ち石を使ったフリントロック式。てつきり旧式になった火縄銃を払い下げているのかと思えば、帝国は新しい銃まで輸出しているのか？

いや、特別な一丁である可能性が高い。帝国内で旧式の火縄銃がだぶついている事は、諜報の結果ハッキリしているからだ。

「なにか？」

「いえ、銃をお持ちなようぞ」

「ああ、帝国から頂いたモノだ。使い慣れたとは言えないが、逃げる相手を撃つには良い」

「ええ、おつしやる通りです」

持ち逃げなどしようものなら後ろからズドン。

銃を持つているのはお前だけじゃ無いぞと言うアピールか……コッチは連射が可能だが、火薬の量的にもキメてるジャンキーに無力と言うのは痛い程身に染みた。

コレを使うのは最後の手段としたい。

いよいよ交渉開始。と、思いきやバイロンは再び頭を下げた。

「いきなりで申し訳無いが、この話は無かったモノとして頂きたい」

「それは？」

直前まで色よい返事を貰っていたのだ。だからこそ交渉の場に現れた。なのに何故？

「帝国から商人が来てな、この交渉を伝えれば、彼らも境界地を欲していたのだ」

「帝国が？」

国境や井戸はリヨン氏が抑えているハズだが？ ああ、地下水脈から直接ポンザル家へ入れるのか。

地下道は危険で、封鎖は不可能だった。田中でも連れて行けば別だがそれも行かな

い。

「と言うわけで、倍の量のルビーでも提示されない限り、土地を売るわけには行かなくなつた。交渉はココまでとさせて頂きたい」

「気のある返事をして悪かつた。我々が直接来たのも誠意の表れだと思つて欲しい」

バイロンとドネイルはそう言うが……帝国がそれ程の宝石を提示したのか？

違う！ 奴らが提示したのは麻薬の供給だ、麻薬ドツサリ一年分とかか？ 途中で死ぬ奴も出るだろうし、言つたモノ勝ちだ。

ソレを理解した田中も苦々しい顔をする。

「テメエら、あんな薬に頼つて情けなくねえのか？」

「どうとでも言え、我らにはあの薬が必要なのだ」

バイロン氏の顔色は悪い。思えば最初から良くなかつた。そして、当主である爺さんはコレだけの交渉だと言うのに、今をもつて顔を出さない。

……噂は本当なのか。コイツらは、病魔に侵されている！

忍び込んだシャリアちゃん曰く、皆が不調を訴えている。それをリヨン氏の部下であるパノツサ氏にさりげなく訊ねたら、当主は以前から関節痛に悩んでいると有名だつた。

ひよつとして……重金属中毒か？

ポイザン家へ至る水路を狙って、帝国が水銀や鉛を流すのは難しく無いだろう。

イタイイタイ病はカドミウムだったか？ 病名から解ると思うが、重金属中毒の痛みは想像を絶すると聞く。麻薬だけがソレを忘れさせてくれるとすれば、縋るのも無理は無い。

……ドコまで外道なんだ！ 帝国は！

当然、麻薬が死への片道切符だと言う事は奴らも薄々気が付いている。しかし、ソレを拒否する事が出来ないのだ。

水路の封鎖を急がなくては。

いや、今は交渉の話。そそくさと帰ろうとするバイロン氏を引き留める。

「お待ち下さい、ルビーは十日もあれば倍の量が用意出来ます」

「本当か？ プラヴァスの年間予算の十倍の金額になるぞ」

「本当だ！ 金など商会ごと売り払えば良いだけの話。だが、それ程の宝石を用意するのは権利書がホンモノで、確実に買えるのが大前提。」

「宜しければ、権利書を見せて貰えますか？」

「兄貴……」

「ああ」

二人は護衛が持っていた金属ケースを机の上に上げさせた。

俺の言葉を信じた訳ではないだろうが、少なくとも値段をつり上げる材料にはなる。無下には出来ないと言う訳だ。

バイロンは金属ケースを開くと、俺に中身を検める様に促してくる。

俺もここ数日で権利書の鑑定は覚えた。身を乗り出して確認すると、困惑した様子で質問が飛んだ。

「しかし、あの土地には一体何があるのです?」

「それは……言えません」

言える訳が無い、知らないのだから。俺らが欲する理由はユマ姫の記憶だ（スパイスの調達にはもはやコストが見合わない）だが、帝国の目的はなんだ?

帝国がそれ程の手間を掛けてあの土地を欲する理由は?

まさか? あるのか? 古代遺跡が。

——カマを掛けてみるか。

「本物の様ですな」

「無論だ」

「ソレにしても羨ましい、先祖伝来の土地にアレだけの遺産があるのですから」

「遺産?」

バイロン氏は首を傾げる。違うのか?

いや、バイロン氏は無反応でも、弟のドネイルは僅かに反応した。
やはりあの土地には何かある。

「兄貴、やっぱり調べ直した方が」

「馬鹿が！」

調べ直す、遺跡で間違い無い！

不安そうに小声で語るが筒抜けだ！ エルフ謹製の集音機。魔法ほどの精度は無いが、目の前で囁く声ぐらいは拾える。

こりや、益々帝国には渡せない。一体、何かがある？ 古代兵器か？ 健康値で守られた境界地の下。何があっても不思議じゃ無い。

……違うな、以前は境界地の外だった場所。なぜそんな場所に？ 古代人とはいったい？

ユマ^{アイツ}姫も多くを語らないんだよな……一体古代に何があったのか？

とにかく交渉だ。

「本物なのは確認しました。ですが商會を畳む覚悟で財産を売り払い、やはり土地は売れませんでは話になりません。倍のルビーを積みれば権利書を渡すと確約して頂けなければ」

これはもつともな提案だろう。嫌とは言わせない。

「……それは帝国の態度次第ですな、そちらの上限は？」

「この倍の量のルビー。それ以上はどうやっても出せません」

「ふむ」

金額はどうでも良い、時間稼ぎが肝要なのだ。

「では、帝国側が倍以上の金額を提示したならば諦めると言う事で宜しいか？」

「……仕方ありません」

心底悔しそうに俯く。

「では、この度はこれ以上の交渉は無用でしょうな。次の機会に帝国の商人に尋ねておきます」

「……お願いします」

歯ぎしりをしながら、絞り出す様に声を出す。我ながら名演だろうか？

コイツらだって時間は欲しいのだ。相手が自分の持つ財産に破格の値を付けるなら、何かあると疑心暗鬼に陥ると言うモノ。

誰だって『金のガチヨウを売り払うマヌケ』にはなりたくない。

タネが遺跡ならば、徹底的に発掘、いや破壊をしてから受け渡す事だって視野に入らう。

破壊されても俺は困らない。必要なのは記憶の残滓なのだから。

——さて、コレで帝国はどう出る？ 倍の金額が出せないならば強硬手段に出る可能性もある。

いや、やはり理想はその前にこの場で石版を奪うこと。

俺は和やかに会食を促す。

「交渉はココまで、今日は特別な夕食を用意しました。皆さんで楽しんで頂ければ」

「いや、結構だ」

確かに、お宝を抱いた危険な状況。相手が出す飯を食べるのは不安だろう。

——しかし、この暴力的な香りを前に我慢が出来るかな？

「見るだけでも、プラヴァス産の香辛料をふんだんに使った料理です」

「コレは？」

大鍋にたっぷり作られたコイツ、知ってるか？

「これは、カレーです！」

薬として扱われる香辛料。原産地のプラヴァスとは言え、ここまで贅沢な使い方は絶対にしない。

「コレが？ 噂では王族が食べるために、我らの香辛料を大量に欲していると聞くが？」

「よくご存知で」

「兄貴……スゲエ匂いだぜ？」

「あ、ああ……」

動揺する二人、何せ大鍋料理だ。相手の分だけ毒を盛るのは不可能。

「だったら皿に、と思うだろうが、貴族って奴は自分用の食器ぐらいは持ち運ばせている。」

「オイ、カトラリーと皿を用意させろ」

食いついた！

……だが、護衛の男達は金属ケースから目を離さない。

「コレに付けて食べて下さい」

「コレは？」

「小麦を焼いたモノです」

発酵が足りないのでナンと言うよりチャパティか？ 一応ヨーグルトと混ぜたけど百点満点のナンは作れなかった。でもコレはコレでアリな感じ。

「コレは旨いな！ 香辛料がコレ程の味になるのか！」

「我らでも商売に出来るのでは？」

「馬鹿言え、元が取れない」

「帝国へ対する接待や、特別な祭りで供すると言う手もあるだろう？」

「確かに……それに、薬として売るから希少性を維持しているんだ。食品ならば作れば

作るだけ売れる。境界地以外で育てる方法を探っても良いな」

色めき立つ二人にレシピの提供を申し出れば、笑えるぐらいに食いついた。

香辛料をガンガン作ってくれるなら是非も無い。

しかし、護衛の人は警戒してカレーに手を付けないし、石版から目も離さない。

これは想定内だ、出た料理をバクバク食ったら護衛の意味が無い。

デザートにはアイスを用意したかったが、流石に無理。だったらと用意したのはラツシー。ヨーグルトはプラヴァスにもあったので提供してみた所、コレも好評だった。

食後にはチャイ。王国原産のシナモン風のスパイスやバナラも使い、独特の風味に仕上げれば絶賛された。

と、ココで第二の策。

「オイ！ アレ？」

慌てる田中をドツいて黙らせる。

表れたのはド派手な美人ウエイトレス。

「カップをお下げしますね」

「そ、そなたは？」

「シャリアです、王国の生まれですわ」

……シャリアちゃんだった。

この辺では見慣れない白い肌と金髪の美しすぎる女性。目を奪われたドネイルが名前を尋ねるのも当然と言えた。

ニツコリと笑う、その笑顔が眩しい。流石の演技力。そして仄かに漏れる『危険性』を本能が感じとり、目を離すことも難しい。

それは魔性の魅力と言えた。

しかも、今回、男の目を引く格好と言うリクエストをしたら、どうやって居るのか五割程胸を盛っている。男の視線は釘付けだ。

彼女にはトレイに隠して、密かにダミーの石版を俺の元へ運んで貰う役目も担って貰った。

準備は整った。護衛もチラチラとシヤリアちゃんの胸を見ている、一気にカタをつける！

……ダメだ。一人だけ、興味が無いとばかりに視線を切らない。

ホモか？ 田中でも見てろよ！

いやいや、そうと決まったわけじゃ無いよな。単に興味じゃなかったのかも。

それに、皆が見とれたのはホンの一瞬、それでは俺だって盗むのは無理。

次だ！

「バイロン氏、この後はシヨアの準備もございます。何を隠そう、リーリッドにはプラ

ヴアスが誇る歌姫、シエラハが居ると聞き予約したのです。プラヴアスのショーを見るのが楽しみです」

「シエヘラだ。キイムラ殿」

「いや、コレはお恥ずかしい」

ワザと無知を晒し、バイロン氏に解説を促す。男なら誰もがちよつとは語れる程に歌姫シエヘラは有名人。氏には解説役をお願いしようじゃないか。

「シエヘラは幼少から天才歌手としてプラヴアスでは名を馳せていてな、ここでは歌姫と言うのは特別な称号なのだ」

「それはそれは！ 期待が高まりますなあ」

揉み手でウンチクを促すが、思った以上に準備の時間が長かったりして困ってしまった。

たつぷり待たされた後、バイロン氏のウンチクもタネ切れと言う辺りでようやく幕が上がる。

表れたのは赤毛の美人。キツそうな容貌は化粧から来るモノか？ プラヴアスの人はキツめな美人が好きなのかも知れない。シャリアちゃんも恐い系だし。

背後には目のやり場に困るバックダンサーがズラリ。華やかなステージを演出している。

舞台脇に揃った楽士達が、エキゾチックな音楽を奏でると、ダンサーは悩ましげに腰をくねらせる。

「エロいなオイ」

田中が身を乗り出す。オイ！ お前への接待じや無いんだぞ！

とは言え、プラヴァスの文化を褒められ、バイロン氏も悪い気はしない様だ。

「どうです？ プラヴァスの曲と踊りは？」

「いや、中々、刺激的ですな……」

俺はしどろもどろに初心な所を見せておく。いや、実際にクオリティは高いし、目のやり場に困る程にエロティックだ。

……これで、俺がルビーを盗られたら笑えないな。そんな考えが脳裏に過ぎる。

「目を離せるのも今だけですぞ？」

「おっ？」

前奏が終わり、いよいよ赤髪のシエヘラさんの歌が始まる。

——砂漠の太陽が月へと変わり、わたしの夜がはじまる。

乾いた大地を癒やすのは、わたしの歌だけ——

しつとりとした歌だ、流石に圧倒的な歌唱力。ココまでの歌を聞くのは今世で初め

て。

「コレが、雨乞いの?」

「ええ、今一番求められている歌です」

歌姫リネージュが歌えば雨が降った。

その伝説の再現を誰もが期待している。しかし、歌で雨乞いと言うのは、俺に言わせれば神頼みでしかない。

それでも、プラヴァスの人にしてみれば、祈らずには居られないほど切実な問題だ。と、全員がウツトリと聴き入っているかと思えば、護衛達は常に箱から目を切らない。なんとも、良く教育されてるじゃないの……

俺だつてチラチラと箱の様子ばかりを気にしてはいられない。盗みますと言っている様なモノだからだ。鏡を使ったり小細工はしているが、限度はある。

仕方無く、シエヘラの歌に聴き入るフリをした。そんな中でも必死に考えを巡らせる。

……やはり最後の手段に出るしか無いな。

お店に演奏を頼んだのは三曲。俺が仕掛けたのは、その三曲目もそろそろ終わりと言う場面。

ハンドサインで指示を出す。

するとシャリアちゃんがカクテルを運んで来るのだが。

——パリンツ！

ガラスが弾ける音。

「キャツ！ ヽ、ヽめんなさい」

シャリアちゃんは護衛にぶつかり、グラスを落としてしまう。

勿論ワザとだ！ 甲高い破砕音に瞬間、視線が集まる！

今だ！

俺は机の下から自在ルー・テルオン金腕を伸ばす、だが。

隙が無い！ 気を取られているのはバイロン氏やドネイル氏、それとカクテルをぶつ

けられた護衛の一人だけ。

「嫌だわ、落ちない」

シャリアちゃんの胸元はカクテルで濡れ、透けている。

ドネイル氏の視線は釘付けだし、護衛も二人ほど目が離せなくなつたみたいだが、それだけだ。

いやはや、過激な衣装の踊り子さんから視線を奪うだけでも、シャリアちゃんの魅力が凄いのは間違いない。だが流石にダンサー達のおっぱいに見慣れた後、ソレで目を奪うのは限界があつた。

ひとつでは駄目、ならば畳みかける！

——プーン

軽やかな音が間近で鳴った。

プラヴァス伝統のアコーディオンみたいな鍵盤楽器の音である。楽士の一人、陽気なおじさんが感極まって舞台袖から飛び出し、客席の間近で演奏を披露し始めたのだ。

なんと言うサプライズ！……無論、仕込みだ。

いつの間に近づいたオジサンに護衛達は慌てる。

だが、それでも、二人ほど目を離さない。

トドメだ！

「あら、わたしの歌がお気に召さない？」

間奏の時、舞台から降りてきてしまったのはシェヘラさん。歌姫自身だ。

コチラを見ていない観客にご立腹で、客席まで降りてきてしまった！

「えっ？ 近いっ！」

「アラ？ やつとコツチを見てくれたのね」

歌姫はドネイル氏の視線をシャリアちゃんから強制的に引っぺがしただけでなく、間奏が終わった後も、俺達の席から離れなかった。

「さあ一緒に！——蜃気楼みたいねとアナタは言うけど、本当は傍に居たいの——」

「居たいノー」

ドネイル氏は調子つばずれの合唱を重ねる。

はい、勿論コレも仕込み！ 護衛対象の周りに不確定要素がうるちよる。護衛は気が抜けないだろう。

その慌て振りを見て、俺は密かにニヤリと笑う。

チャンス……のハズだったのだが

「ホラ！ アナタも！ 熱いキスが欲しいのー」

え？ 俺？

「熱いキスがー」

断つたら興ざめ。だけど、俺が歌っちゃったら意味ないじゃないですか！ シエヘラ

さん！

そう言えば、注意を逸らしてくれ、としかオーダーしていない。

コレは失敗でしたね。

しかも歌が恥ずかしいんだけど？

……ぐう。

策に策を重ねたモノの、ネタ切れ。

間近で行われるコンサートは終わり、予定の三曲が終了する。

シエヘラさんはニコニコ顔で俺にお酌までしてくれるのだが、気分は全く上がらない。

「アラ？ あたしにお酌までさせて、不景気な顔ね」

「コチラまで歌うのは聞いていませんよ」

「上手く行かなかった？」

「そりゃ……」

目線の先には護衛達。実は、シエヘラさんが悪いとは言えない。実はここまでやつても結局は護衛全員の視線は集められなかったのだ、どっちにしても作戦は失敗だったのだ。

全ては俺の八つ当たり。だけど、シエヘラさんは笑みを崩さない。

「大丈夫よ、とっておきがあるから」

「とっておき？」

プログラムはコレで終了のハズ。万策尽きたのだが？

「もう一曲歌うわ」

「いや、もう十分ですよ」

「違うの。新人ダンサーのデビューなのよ、わたしはおまけ」

そんな素人に毛が生えただけのモノ。今更見せられたって……

「不思議なコなのよ。綺麗で、可愛くて、品があつて、初心なのに度胸があつて」

「……だからって！」

「何より、

——誰も彼女から目を離せない。アレは、呪いよ」

「……………」

……嫌な、予感がする。

それ以上聞き出そうにも、シエヘラさんは舞台袖へ引っ込んでしまう。同時に幕が閉じ、辺りは一気に暗くなる。

「コレでお開きですか？」

バイロン氏が言うとおりに、通常は接待で曲を披露と言つてもこの位が相場だろう。

だが、もう一度幕は上がっていく。

「まだありますか。どれほどの金額を払えばココまでサービスを受けられるのか、興味がありますな」

「いや、その……」

いやいや、歌姫はあんなこと言つてたけど、俺はここまで頼んでないぞ？ 実は田中

の仕込みだったたり？

と、何気なく窺った二人の様子に、背筋がゾツとした。

シヤリアちゃんも、田中も、ポカンと幕の向こうから目を離さない。

その間抜けな表情は、凄腕の暗殺者とも、剣士とも見て取れない。

コイツらには、何が見えているんだ？

舞台に向き直れば、上がり行く幕の隙間、徐々に足先から見えてくるのは少女の姿。

何故か彼女はスパンコールがキラキラ光るド派手なロングコート姿で、その身の一切を隠していた。体型すらも解らない。

いよいよ幕が上がりきる。中央に立つダンサーの顔がようやく見えた。

小さい。

150センチ弱。柔らかな表情に、異常に大きい瞳、尖った耳。そしてなにより印象的なのは銀と朱のオツドアイ。

髪はピンクでキラキラと煌めき、仕草の一つ一つに至るまで、この世のモノとは思えないあどけなさや妖艶さを兼ね備えていた。

——ユマ姫じゃねーか！

知ってた！ そんな気はした。だけど、俺達以外は彼女を知らない。お姫様だとは夢にも思っていないのだ。

ゴクリと誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

この娘が踊るのか？ そんな期待感が徐々に広がるのが解る。

だけどユマ姫は決して踊るような格好じゃ無い。ダボついたロングコート。

ソレを。パサリと脱ぎ捨てた。

「エツツツ！」

口ろまで言えよ、田中！

だけど、言葉を失ったのは俺も同じ。ドチャクソな露出度、露出狂か？ マイクロビ

キニみたいじゃねーか！

そりや、さっきのダンサーだって露出は激しかったが、それ以上。

それを、まだあどけなさも残るユマ姫が着れば、犯罪に過ぎる背徳感がある。

あーでも、良く考えたらこの世界。児童ポルノもクソも無い。

スラムに行けば、素っ裸の幼女が走り回って客を取っている。むしろ成人女性より

よっぽどお安い。

こりや効果ナシかと横目に見れば、ポカンと見つめるのはポンザル家の二人も同じ

だった。

何故か？ 良く考えれば体を売る少女などマトモな教育も受けていない。

逆に、良いところの少女の貞操観念は地球より固く、品があつてキラキラと輝く様な

少女が、あどけなさだけでなく妖艶さまで纏っているのは異様に過ぎる。

グダグダと言い過ぎたが。理屈じゃ無いな。コレはユマ姫の持つ魅力だ。

行き過ぎた魅力は殆ど暴力に近い。確かに呪いだ、誰も目を離せないのだから。

楽士達は勿論、同性のダンサーやシエヘラさんまでもが陶然とその姿を眺めているのだから恐ろしい。

俺だって、そんな彼女が身をくねらせて躍り始める瞬間、敢えて目を切るのは異様な集中力を必要とした。

なぜそんな事が可能だったかって？ そりゃ俺は『揉んだ』事があるからな！

それが無けりゃ、絶対に目を逸らすなんて無理だった。

絡まった粘性の糸を引き千切るような思いで、無理矢理後ろを向く。金属ケースはどうした？ 護衛はどうしている？

皆がポカンとユマ姫を見ていた、シャリアちゃんなど、よだれまで垂らしている。

しかし、あろう事か護衛の一人が箱に座り込んでいる。こりゃ駄目か？

その護衛は唯一、それまでシャリアちゃんにも歌姫にもノールックだった男。

一瞬、血の気が引いたが、それもソイツの顔を見るまでだった。表情筋をなくしたみたいに弛み切っている。

ホモかと思えば、ガチのロリコンだったに違いない。完全に魂が抜けた様子でユマ姫

を見ていた。

その顔には書いてある「神はココに居た」と。

これなら！ イケる！

鍵穴に自在金属腕ルーデルオンを差し込み、鍵を開ける。そのままそつと蓋を開けて行くが、護衛は浮き上がるケツに構わず舞台を見続ける。

むしろ、足の怪我で立ち上がる事が出来なかつた男が、助けを借りてようやく立てた瞬間と言われた方がシツクリ来る。

そのまま二歩三歩とステージヘゾンビみたいに歩いて行くじやないか。

そのまま俺は金属ケースを開け、そつと石版をすり替える。

緊張でゴソゴソと音がしてしまつたが、それでも誰も見ていないっ！

左手の自在金属腕ルーデルオンで石版を回収。一番苦労するかと思つたが、何のことは無かつた。問題となつたのは右手で鍵を閉めるとき。

どうしたつてガチャリと高い音が鳴る。曲も後半、静かな調べは金属音を隠すのに向かない。

いよいよ曲が終わつてしまつた。
だが。

——パチパチパチパチ

一斉のスタンディングオーバーシヨン。ポンザル家の二人も護衛も田中もシヤリアちゃんも楽士もダンスサーも歌姫も。

俺はガチャリと鍵を閉めると、自在ルー・デル・オン金腕を引つ込めた。

皆に習つて手を叩く。

ああ、結局ユマ姫のダンスを全然見られなかった。

後で個人的に頼もう、そうしよう！

★露出狂か？

雷の直撃で死にかけた俺こと、ユマ・ガーシエント姫はこの世の理不尽と戦っていた。「だーれも居ないのかよお」

一年掛かりの療養が明けたと言うのに、お迎えが無いどころか、部屋まで無人とはこれ如何に？

田中と木村は砂漠の方へ出張と聞いていたけど、シャリアちゃんまで居ないし！ シノムさんはネルダリア領に戻ったまま。

挙げ句の果てにネルネはヨルミ女王と遊びに行ってる。ハーフエルフのネルネに「美しい女王陛下！」と言わせると気持ちが良いとか。

そのコンプレックスの解消方法はどうかと思うが、ヨルミちゃんがソレで満足なら俺は何も言わないよ。

ヨルミちゃんは内政をずいぶん頑張っていて、木村から経済的な知識をドンドン吸収しているらしいからね。

「皆、砂漠に行ってるのかあ」

独り言にも磨きが掛かる。プラヴァスは帝国や王国の管理下に無い、唯一の自治領

域。ここを味方に付けることは王国の正当性を主張するのに随分と助けになるに違いない。

「じゃあ、行きますか！」

髪を纏めて、革のジャケットに、リュックにブーツ。お姫様らしからぬ格好で準備万端。取り出したのは巨大なハングライダーだ。

「さあていつちよ取つてきますか、記憶を！」

鼻息も荒く、俺は王宮の窓から飛び出したのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、どうなったかというところ……そうなんです！ 遭難しました。

いやー、思ったよりも砂漠って暑かったな。砂嵐も襲ってくるわでライダーがおシヤカになってしまえば、水が全く足りなくなつた。

歩こうにも目印が皆無。その上、砂地がメチャクチャに歩きづらいのなんのって！

ようやく人が居る場所に辿り付いた俺は、安堵のあまり、そのまま眠りについてしまったのだ。

で、その後は酷い物だった。

まず、誘拐されて、犯されそうになった。その途端、不思議と始まる、人攫い同士の斬つた張つたの殺し合い。

ド深夜だと言うのに、大の男達が大騒ぎした結果。何事かと踏み込んでくる衛兵。助かった！ と思つたのに何故か衛兵にまで犯されそうになる俺。下着姿で逃げ出す俺。時間が時間だけど、ここにならヒーロー気取りの男が一人ぐらい居るだろうって飛び込んだ酒場は営業時間外。

最早これまで……と思つたら、女の子達に取り囲まれて、何故だかダンサーになることが決まっていた。

「まあ！　なんてキレイなの！」

俺の肩を掴んで大喜びなのはシエヘラさん。赤髪の気の強そうな美人なのだが、彼女は歌姫と呼ばれるこの地域の有力者の一人だとか。彼女のお陰で衛兵も引き下がっていったのだから感謝だろう。かなりの力があるに違いない。

「そうは言つても娼婦に毛が生えた様なモノよ」

いやいや、それでも彼女が特別なのは明らか。実際に彼女は美しいだけでなく歌も物凄く上手かった。

教えてくれと言つたら大層喜んだのだけど……

「うーん、諦めた方がいいかな……」

はい、ダメでした。筋金入りの音痴。どうも、小さい頃にトレーニングしないとどうにもならないとかどうとか。

ウソかホントかは知らないが、とにかく俺はルックスを生かしてダンサーになることが決定してしまう。

しかし、俺はプラヴァアスのダンスなど何も知らない。プラヴァアス最大の盛り場と言う事で、流石に大きなダンスの練習場が完備されていたのだが……

「……あんまりキレイな鏡じゃ無いですね」

「えっ!？」

俺が練習場に設置されていた大鏡をそう評したら、歌姫が素っ頓狂な声を上げた。

「こんな大鏡、ブラッド家のお屋敷にも無いって評判なのよ？」

「……そうなのですね」

俺は生まれた頃から大鏡で健康値を測っていたから、つい口を衝いてしまったのだが、一般的に鏡があるだけで上流階級。こんな大鏡があれば大富豪と言うのがこの世界の常識だ。

俺は王国でもそれなりにキレイな鏡を見ていたので、あれが普通という気がしてしまっていた。

マズったなど見上げれば、鏡の向こうに神妙な顔をした歌姫シエヘラが居た。

「あなた、やっぱり凄い所の生まれなのね？」

「それを聞きますか？ 聞かない方が良いと思えますけど？」

脅しのつもりで振り返ってシエヘラさんの目をジッと見つめれば、気圧されたかの様に怯んだのも一瞬。逆に彼女は俺の肩を掴んで正面からグイッと俺を見つめ返してきた。

「凄い目力、いえ、美しさと可愛さと、儂さの暴力ね」

「どういたしまして」

俺がニッコリと微笑めば、降参の仕草で天を仰いだ。

「これはダメね、私達の手に余る。でもね、私はどうしても舞台で踊るあなたの姿を見たいのよー」

「それは構いませんが、この衣装は……」

見つめる先、鏡の向こうで羞恥に頬を染める俺の姿はくすみ、歪んでいたが、それでもハッキリと解る程の露出の酷さだった。下着同然なのだ。

「あら？ もっと凄いのもあるんだけど？」

そういつて彼女が取り出したのは……マイクロビキニ？ 大事な所がギリギリ隠れる程度のヤベーやつ。

「そんなモノ！ 絶対に着ません！」

「そお？」

怒鳴る様に宣言した俺に、残念がるシエヘラさん。

その後が始まったダンス練習では、歌と違ってダンスはスジが良いとベタ褒めされた。

「コレならどんな相手の注目も集められるわ。実はこれから大きな仕事が入っているの！　そこで大々的にデビューするのよ！」

「大きな仕事？」

嫌な予感に訊ねてみれば、木村達が何事か企んで舞台に注意を集めたいのだとか。どうやらプラヴァスの存亡に関わるとか、木村は商会を担保に入れてるとか、そんな事まで言われてしまう。

「ぐぬぬ……」

俺は仕方無くマイクロビキニを着るハメになるのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ソコまでして、俺はポンザル家の奴らの視線を集め。結果、作戦は大成功。俺は木村の商会を救った立役者。

なのに、木村の第一声はコレであった。

「露出狂なの？」

「違うわッ！」

当然、俺はブチ切れた。でも、マイクロビキニを着たままなので暴れることも出来ない

い。元々の意識は男とは言え、今生ではすっかりと女の子。

それに元クラスメイトで親友の男に、体をジロジロと見られるのは落ち着かない。何も俺だつて好きで半裸な訳じゃ無いのだ。

「着替えるタイミング、無かつただろうが！」

そう、あの後、大変だつたのだ。お客さんは楽屋に殺到するし、シャリアちゃんなんて楽屋に忍び込んだ上、興奮状態で迫ってくる。

で、混乱する劇場の裏口から着の身着のまま脱出。

その後はシャリアちゃんの手引きで、木村達のねぐらに転がり込んだと言うわけ。

着替えるどころか、カーテンみたいな体を隠せる布すら纏えなかった。それなのに、ニヤニヤと木村はイヤらしい目で見ってくるから、いつそ殺したい。

「で、なんで踊り子なんてやってんの？」

「それな！」

俺はケロイド化した頑固な火傷跡がやっと完治して、ようやく王宮に戻つたのに、誰の出迎えも無かつたと涙ながらに訴える。

悲しみはやがて怒りに変わり、文句の一つも言わなきや気が済まないぞと思いつめる。

「そりゃ追うでしょ」

「追うかなあ？」

「追う！」

疑うな！ 感じろ！

「雷で死にかけたのにな？」

「雨雲が出たら、着陸すりゃ良いんだよ」

馬鹿だなあ、死にかける度にトラウマ作ってたなら、ベッドの上で震えてるしか出来ないぞ？ 同じレベルの不幸になってみたら解る。基本、『偶然』は何をしても防げない。

むしろ、ベッドの上が一番トラウマが多いからヤバイ。プラヴァスで襲われた人数とか、下手したらご飯食べた回数より多いぞ。全員死んだけど。

「で、二日もあればひとつ飛びと、リュック一つで飛んで来たんだけど……」

「来たんだけど？」

「水が足りなくなつて、遭難した！」

「……………」

オーバーアクションで肩を竦めるのヤメロ！ お前も殺すぞ！ ベッドで！

まあ良い、続きだ。

「で、ケンシロウリスペクトで、み…水…つて言いながら迷ってたなら、劇場に拾われ
たつてワケ」

まあ物騒な所は丸ごと端折って、水と助けを求めて劇場に飛び込んだ所から説明する。

「何日前？」

「四日前」

俺がそういうと、ふうむと木村は首を捻った。確かに俺がその間ずっと劇場に居るのは不思議だろう。実際に逃げる手段は幾らでもあった、何故か？

「いや、歌姫が居るって言うから歌を覚えようかなって」

「成果は？」

「なにも！」

切れ気味に答える。どうやら俺はワールドレベルの音痴だったみたいです。

「でも、顔は良いから踊りを覚えてねって言われて、結構楽しんだ。コッチは筋が良いって」

「そりゃ……」

「そんなとき、お前ら交渉の時に注意を逸らしたいって歌姫に注文出しただろ？ それを聞いて俺も、文字通り一肌脱いだってワケ、上手く行ったんだろ？」

「うん、まあ」

うん、まあ……じゃねーだろうが！ 感動してむせび泣いて土下座して足を舐めろ！

いや、本当に舐めてきそうだからソレは良いや、それよりも。

「でさ、着替え、ないか？」

恥ずかしがるから却ってエロいのだと頭では解っているが、それでも恥ずかしいのだから仕方が無い。俺はモジモジと服を要求する。

木村も気まずいのか赤くなって目を逸らすんだけど、その返事には慈悲が無い。

「いや……丁度良いサイズがなくてさ」

「ええ〜？」

絶対ウソだろー、俺のエッチな姿見たいだけだろー、その辺のカーテンでも良いんだぞ！

あーでも動きにくいとソレが原因で死にそう。なにになに？ シヤリアちゃんの服は胸部が合わない？ うるせーぞ！

赤くなってモジモジする俺を見て興奮したのか、木村のヤツ「ゴクリ！」とか口で眩きながらとんでもない事を要求してきた。

「折角だし、もう一回踊ってよ、俺、見てないんだよ必死で」

「何でだよ！ 馬鹿かよ！」

断れば露骨にガツカリする木村。コイツが俺を襲って死ぬのも時間の問題かもな。と、その時だった。

「俺からも頼むぜ、もう一度見たい」

田中が帰ってきた。どうやら権力者であるブラッド家まで首尾の報告に行つてたらしい。ただ、その話をする前に、俺のダンスをねだる始末。

「じゃあ、シヤリアちゃんが衣装を買つて来るまでつて事で」

「ヤンヤンヤ」

木村はさつきから擬音を声に出し過ぎでは？

「ヤンヤンヤンヤじゃねーだろ！ 恥ずかしいつての！ 露出狂じゃないんだから」

「恥ずかしがる事ないだろー、俺とお前の仲だし」

「どんな仲だよ！ じゃあお前が着てみる」

俺がそう言うと、木村は「え？」つとと言う顔をした後。

「嫌だよ、恥ずかしいし」

とかのたまつた。

「ぶっ殺！」

コレは殺しても合法なのでは？ 恥ずかしさも忘れ、のし掛かり、首を絞める。

マジでコイツは最近調子に乗りすぎなので締めなくてはならない！ ガチでイラついて、本気で締め掛かる。

体を密着させ、腕を交差させ喉に押しつける様に締め上げる。軽い俺だからこそ、手

加減は無し。全体重を預ければ、みるみる顔色が赤く染まる。

なのに、木村は懲りずに妄言を紡ぐ。

「いや、だって、俺が着たつて見苦しいだけだし！ ユマ姫は似合ってる。可愛いよ」

うぐぐ……それで、褒めてるつもりか！

「……あう、いやいや、コレマイクロービキニが似合ってるって言われても嬉しくないし！」

気がつけば、リクライニングさせた木村の膝の上。抱きつく様な格好で、我ながら痴女である。

「戻ったわ、……私が居ないときに、楽しそうなコトしてるのね」

ソコにシヤリアちゃんが帰ってきてしまうから、さあ大変。でも彼女は街を探し回ってお疲れの様子だった。

「良い服が無かったのよ。そもそも貴族が着るような服が、その辺に売っている訳無いわ」

「それもそうだな」

田中が頷けば、シヤリアちゃんはコチラをチラリと見つめる。

「それに、その格好より可愛いってのは無理よ」

え？ この格好が可愛い？ エロいの間違いだろ？ と、問う前に。彼女は飛び掛かる様に抱きついてきた。

「止めッ！ ああ、もう！」

「スンスン」

ピンクの髪を掻き分け、うなじへと顔を埋めて匂いを嗅いでくる。ムカつくのがソレを幸せそうな顔で見ている、木村と田中だ。

文句を言つてやろうかと口を開く前、シヤリアちゃんが荷物を取り出した。

「でね、どうせなら突拍子も無い格好の方が良いと思つたのよ」

「コレはなんですか？」

シヤリアちゃんが用意したのは、ベルトやカフス、チェーンなどだ。どれもゴテゴテした意匠で、中二病のお洒落アイテムの数々だった。

「コレらを、このコートと合わせるの？」

「はあ？」

コテンと首を傾げた俺の姿が可愛かったのか、いよいよシヤリアちゃんに押し倒されてしまった。

「ハアハア、コレ！ コレが似合うわ！」

そのまま着せられたのはコート。舞台で着ていたスパンコールのド派手なコートである。ソレをベルトとか金属でゴテゴテと彩れば……

「……怪しいな」

「怪しいぐらいで丁度良いのよ、この子には」

「ヒドイー！」

可愛いはともかく、怪しいは確実にお姫様に言うべき言葉では無いと思うが？

「……コレ、どうなの？」

くるりと一回転すれば、ジャラジャラと音がする。なんと言うかラスボス感がある。スパンコールのロングコートにゴテゴテとベルトを巻き、右腰に佩いたサーベルも彫金が眩しい程。一方で無骨な左腰のリボルバーがいつそ異様に映る。

カフスやチェーンもゴテゴテと盛られ、紅白歌合戦に出るのかと言う感じ。でもシヤリアちゃんは出来映えに満足そうだ。

「ココでは遠い異国のお姫様なんだから、コレぐらいで丁度良いわ」

「派手だな、オイ、宇宙世紀かよ」

「じゃあ、コレでリヨン氏に会いに行こう」

田中が楽しそうに笑うのは苛立つが、木村まで、いつそこの位はつちやけた方が良い、今すぐに会いに行こうとか言い出した。相手は相当な変人か？

まあ、プラヴァスでの戦略は任せたから良いよ？ 良いけどこの衣装はダメ！

「暑いんだけど？ 重いしー！」

そう訴えたのだけど、何故だか俺の意見は無視されて権力者の家にまで行くことに。

みんなして面白がってるだけでは無かるうか？

そんな疑問が頭をもたげるのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして案内されたブラッド家の応接間。だけど慌ただしい家の中で俺達は長い間放置されてしまう。

「で、俺は何すりゃ良いわけ？」

ソファーで足をブラブラさせながら、手持ち無沙汰に木村を見上げる。

「あーそうだな」

困惑する木村の様子をみるに、思った以上に状況は悪いらしい。そんなところにこんなふざけた格好で現れて良かったのだろうか？ 不安が募る俺に、案の定、まずは最高責任者のリヨンと言う男を宥なだめる様にと言ってくる。

「とにかく、リヨン氏のご機嫌をとってください、頼めますか？」

「ああ、姪のカラミティって娘が麻薬で廃人になっちまってから、どうにもピリピリしてんだ」

木村はともかく、田中までもが珍しく心配そうに気を揉んでいる。聞けば二人にとつてそのリヨンと言う男は友達だと言うじゃ無いか。

なんて言うか親友二人に知らない共通の友人を作られると、コッチはどうにも据わり

が悪いと言うか、自分の居場所が無くなりそうで怖い感じ、解るだろうか？

だが心配ご無用。コイツらは変人だ。一緒にいるのは中々に大変。

どれほどの奴か俺が確かめてやろうじゃ無いか！俺の魅力で丸裸にしてやろう。

「私を誰だと思っているのです？ 王国の至宝、硝子の薔薇に例えられる私であれば骨抜きにすることだって造作ありません」

堂々宣言する俺を、二人は何故だか目を細めて見てくるではないか！

「いや、口説いて欲しいワケじゃねえんだけど……」

「変に刺激されちゃ堪りませんよ」

さては信じていないな？ 俺を巡って人攫いと衛兵が戦う程なんだぞ！ ……ん？

普通か？

「信じていませんね？ 私にはとっておきがありますから」

俺には男を口説く才能の塊だった少女。プリルラの記憶がある。恋多き少女だったプリルラには相手の好み性癖を瞬時に見抜く力があるのだ。遠い昔の事の様に思えるが、強弓使いだったラザルドさんにお姉さんプレイを披露し、陥落したのも良い思い出。

この能力には、実は何度も助けられている。だと言うのに木村は俺を信用していない。

「逆に、骨抜きにならないで下さいね」

「そうだけ、リオンは男の俺が見ても惚れ惚れするような色男だからな？」

木村は恋多き少女だったプリルラの人格を心配するし、田中なんてリオンってヤツがどんなにいい男か懇々と説いてくる。

コレには俺も嫉妬心を爆発……するかと思つたのだが、いい男と聞いて俺が真つ先に思ひ出してしまったのは別の男……思わずギユツと膝を握つた。

「……兄様よりカツコイイ男なんて居ませんから」

私を守つて、死んだ兄。最後には血風と共に霧が散つて、セレナの魔法と共に守つてくれたっけ。

と、俺はよっぽど思い詰めた目をしていたのだろうか。話を変えるように、田中がリオン氏の情報を付け加えた。

「でもな、性格だつて気取らない気持ちが良い奴なんだぜ？　俺のバイクに張り合つてラクダで砂漠を競争してな、気が付けば帰つて来れない程の砂漠のど真ん中。二人で星を見上げてゲラゲラ笑い合つたもんだ」

……なんだよ、その爽やかエピソード！　俺もそういう青春したいんだけどお？　いや俺も湖の前で愛を語つたりした青春があつた。

「気取らない性格だつたら、ボルドー王子の方が上ですから！」

……相手は死んでるけどな！　恨みがましくそう言えば、お手上げとばかり田中と木

村が目を逸らした。

と、その時、爽やかな声と共に扉が開けられた。

「境界地の権利書を奪ったと言うのは本当ですか？」

浅黒い肌に引き締まった体。コイツが、リヨンか！

ホントにカッコイイね……

★露出狂だ！

「初めまして、私がエルフの国、エンディアンの王女、ユマです。以後お見知り置きを」
 「こ、これはこれは、プラヴァスの太守を務めるブラッド家の当主リオンです。お噂はかねがね」

胸に手を置き、お上品なご挨拶。だけど右手に感じるのはドキドキと五月蠅い鼓動。
 いやーイケメンですわ。少女漫画に出てくる砂漠の王子様かな？ ……砂漠の王子様だったわ。

しかし、そのリオンさんは目をまん丸にして明らかに動揺している？ 何故？
 んなモン！ ちんどん屋みてえな格好が原因に決まってるだろうが！ うう、シヤリアちゃんやり過ぎだよ。普通に恥ずかしい。

スパンコールでキラキラ光るロングコートを、無数のベルトやチエーン、カフスや金属ボタンでゴテゴテと飾り、襟にはワイヤーまで入れてピンと立たせている。

こんなトンチキな衣装。似合ってるのと褒められても嬉しくない。

捕まった宇宙人じゃないんだぞ！ クソツ顔が熱い、恥ずかしい。それもコレもリオンさんが想ったよりイケメンなのが悪い。まるで初心うぶな女子おなごみたいに言葉が出てこな

いー!

このままじゃ会話の主導権を取られてしまう。アレだけデカイこと言ったのに！
焦った俺は控え目に手を挙げて、ジッと上目遣いでリヨンさんを見つめる。

「え、ええつと……はじめに一つ質問していいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

鷹揚に応え、優しく微笑むリヨンさんの視線に、どうにもムズムズしてしまう。

えーつと？ なにを？ 何を聞けば主導権を？ 何を聞きたい？ そうだ！

「あ、あの、リヨンさんって……独身なんですか？」

「……そうですが？」

「そう、なのでですね……」

「……………」

「……………」

良かった。独身か。うん、良かった！ 満足して頷くが、顔が真っ赤に染まるのが自分でも解るほど。

うわあああああああ！

手玉に取るどころか、開幕で手玉に取られてるじゃねーか！

クソッ！ イケメンめ！ イケメンは敵！

おれは『高橋敬一』の記憶を呼び覚まし、必死に抵抗を試みる。

恋多き乙女であるプリルラちゃんの人格を出したのが失敗だった。何が『相手の好みを完璧に見切つて、演じる事が出来る』だ！

良く考えたら『恋多き乙女』つて、惚れっぽいだけじゃネーか!! 決めゼリフ「恋は戦争!」じゃねーぞ! イケメン限定で無抵抗主義じゃねーか! 戦え! 侵略戦争しろ!

と、高橋敬一の精神でリヨンさんを見つめ直すのだが、男から見てもありがたい男。

田中や木村が惚れ込むのも解る。ナヨナヨした所はなく、黒豹に喩えられる危険さと、理知的な目が同居しているのだ。

いま、ポンザル家に追い詰められているせいか手負いの豹の風情で、影のある危険さには妙な色気を感じさせる。

そうか……独身かあ。うーんなるほどね。

「それなら良いのです、ココからは危険な戦いになります、家族を悲しませる事があつてはいけません」

「え、ええ……」

よおし、誤魔化せた! 独身かどうかを気にしたのは家族を心配したから! それだけ、他意は無い。

「ふふっ」

無理です！ 誤魔化させません。リヨンさんは苦笑いしてまーす。

恥ずかしいいいいい！！

クソッ！ 澄ましやがって！

女の子に惚れられる事にも慣れっこなのだろう。俺が骨抜きになったと見るや、リヨンさんは取り戻した余裕で柔らかに微笑む。

「しかし、ユマ様に戦いの覚悟があると言うなら頼もしい、後ろの二人も協力して貰えると考えても？」

あ！ まずい！ 誤魔化したどころか、ポンザル家と戦う方向へと舵が取られて、木村が大波に巻き込まれた。

「いいえ、ソレには及びません。権利書である石版は奪取しました。我々が争う必要は無くなった」

「それは誤解です、石版を盗まれた事を知ったポンザル家はあなた達を狙うでしょう。石版を盗めた今こそが好機なのです。これで石版を持ち逃げされたり、粉砕されることで所有権が有耶無耶になるリスクが無くなりました、感謝しています」

「……そ、それは」

そうだよな、盗まれたなら仕方無いとはならない。誰が盗んだかなどバレバレな状

況。向こうから仕掛けてくる可能性も高い。木村の馬鹿が！ さては何も考えて無かったな？

知恵者を自称する木村がこの体たらく。コレは終わったか？

「ちよつと良いか？」

そこに踏み込んだのはなんと田中。信じて……良いのか？

「結局、やるしか無えつてンなら構わねえケドよ、ホントの敵を見誤ると相手の思うツボだぜ？」

「解っています。討つべきは帝国。ですが、その前に傀儡となっているボンザル家を叩かなくては」

「プラヴァスで、プラヴァス人同士、内戦になるんだぜ？」

「覚悟の上です」

「ま、ソコまで覚悟が決まつてるなら、俺は乗つても良いぜ」

ハイ、無能！ コイツ戦いたいだけじゃネーか！

苛立つたのは木村も一緒か？ 名誉挽回と割り込んだ。

「私としても、それ程の覚悟と言うなら応援はしたいのですが、そこに私怨は含まれていませんか？」

「それは……」

「失礼ながら、今のリヨン氏は冷静とは思えません。後は地下水脈に網を張り、ノコノコと現れた帝国を血祭りに上げれば済む話。カラミティさんの事が悔しいのは私も同じですが、主犯が死んでいる以上、ココから先は復讐の連鎖が止まらなくなる」

「ソレは違います。アイツを殺したのはボイザンじゃない、麻薬です。違いますか?」

「え? カラミティさんは死んだ……んですか?」

木村が間の抜けた顔で立ち尽くす。
カラミティ? 知らない名前だが、その死を告げられた途端。木村は激しく動揺した。

何時もは飄々としている木村がブルブルと震え、顔面は蒼白。

ソレを見て……俺は自分でも性格が悪いとは思うんだけど、何故だか嬉しい気持ちになっっているのを自覚しなくちゃならなかった。

俺ばっかり大切な人を次々失って、コイツらも同じ様な痛みを味わって欲しい。苦しみを分かち合いたい。そんな身勝手な事を秘かに想っていたに違いない。

だからこそ、カラミティと言う人物が無事と知らされると、落胆と嫌悪感。二つの感情に同時に襲われた。

「いえ、死んでは居ないのですが、死んだようなモノです。麻薬を求めて発作を起こしました。今はベッドに縛り付けているのですが、酷く辛そうで……」

「……そうでしたか」

木村はガツクリと項垂れる。

気落ちした木村の仕草が胸に刺さる思いだったが、コイツは突然に立ち上がって俺を見た。

「そうです！　実はユマ姫は魔法の使い手なのです、彼女が起こしてきた数々の奇跡たるや。魔法の力であれば重篤患者であつても治せる可能性があります！」

「え？」

どうしたの？　突然？　いや、麻薬中毒なんて治したことないけど？

「……ユマ様の方は、そうは思つて居ないようですが？」

ホラ！　リヨンさんに胡散臭げに見られたじゃないか！

クソツッ！　こうなつたらどうやつても治してやろうじゃないか。

麻薬……精神系の魔法で行けるかも？　取り敢えず診せて貰いたい。

「確約は出来ませんが、一度どんな状態か見せて頂くことは出来ませんか？　私であれば治せる可能性は確かにあるのです」

「いえ、アイツも今の姿を皆様に見せたくはないでしょう」

「……そうですか」

木村は再び項垂れる。

うーん? 無理矢理攫つちやダメ? 面倒臭いなあ。どうしてそんなにカラミテイって人の事気にするのかワカラン。

その後も木村は何とか穏便に済まないか、せめてポンザル家の当主の首だけで収まらないかと提案していく。

「いえ、やはり私は自分の手で片をつけたいのです」

だが、リヨン氏の決意は固かった。頑なにポンザル家への討ち入りで決着を付けたいらしい。

俺は、その様子を必死に観察していた。

正直に白状しよう。プリルラちゃんの人格を呼び出して、楽しくイケメンを観察していた。

そうしたら気がついてしまったのだ。リヨンさんの『性癖』を。
ウソだろ!?

それが俺の偽りざる想い。だけどプリルラちゃんは確信している。間違い無いと。

……じゃあ、その性癖で口説けば良いじゃ無いか? そう思うだろうが、当のプリルラちゃんは嫌がった。抵抗した。

イケメンにそんな事は出来ない。そんなやり方も知らない。

一方で俺には知識があった。上っ面の浅い知識だけど、そういう商売がある事も。そ

のやり方も。

でも、失敗したら？ 俺は社会的に死ぬ。ただのキチガイの痴女姫だ。

そうでなくても、きつと死ぬ程恥ずかしい。

だけど、だけどだ。さっきの苦しそうな木村の表情と、ソレを喜んでしまった俺。そしてやっぱり同じ苦しみは味わって欲しくないなって、思い直した事で俺はどうしても勝負に出ざるを得なかった。

殆どヤケクソ、完全に意地。良く考えれば、俺はリヨンさんを骨抜きにしてみせると啖呵を切ったのだ。ソレを今、見せつける!!!

俺はスツクと立ち上がると、グルグルと焦点の定まらぬ目、真っ赤に染まった顔のまま無理をおして口上を上げる。

「あらあら、聞き分けの無い犬には躰が必要ね」

口の端を吊り上げ、上から目線でリヨンさんを見下ろす。その瞬間、皆のポカンとした顔たるや。俺は一生忘れることが出来ないだろう。

頭の中では不可解なラップ音が鳴り響き、耳の血管に流れる血流の音が聞こえる程の興奮状態。俺はコートのボタンを外していく。

「まっー」

止めようとする木村を無視。

「この私が治すと言っているのに、何が不満なのかしら」

コートを脱ぎ捨てた俺の姿は……痴女だった。

そう、スパンコールのコートの下。着ているのはマイクロビキニ！ それだけ！ 丁度良い下着なんて無かったからね！ 仕方無いね！

「……………」

これにはリヨンさんも言葉が無い。ポカンと俺を見上げている。

木村はと言うと、俺が気が狂ったとも思ったのか止めに掛かってきた。

……………」

「……………」

俺は涙目のアイコンタクトで必死に木村を睨む。

俺は『高橋敬一』だ！ 考えがあつてのこと！ 任せてくれよ！

何が悲しくて、俺は親友二人の前でこんな、こんな事を!!!

泣きそうにながらも俺はコートのベルトをシュツツと引き抜き、そのままソファアーム掛けて振り抜いた。

「何とか言いなさい!」

ぴしやりとリヨンさんが座るソファアームが鳴る。一歩間違えば王子を鞭で打つと言う蛮行、いや、当てなかつたとて許される事では無い。処刑でも不思議ではない程に不敬

な行い。

さしものリヨンさんの余裕だって、たちまち吹き飛んだ！

「い、いや、今のカラミティは微妙な状態なのだ、とても客人に見せられるような姿では……」

「黙りなさい！」

再びびしやりとベルトを打つ。するとどうだ？ リヨンさんの体がビクリと跳ねた。

木村と田中はまだ事態が飲み込めないのか、馬鹿面をぶら下げよだれを垂らしている。

まあ見てろ！ ……突然やって来たお姫様が露出して、皮のベルトで威嚇してきたらそりやビビる。誰だってそうなる。俺だってそうなる。

だけど、それでもリヨンさんの今の反応を果たしてみたか？ ビクリと大きく跳ねたんだぜ？

痛いのが苦手？ そうじゃない。鍛え抜かれた筋肉を見れば、実戦でも相当やるのは間違い無い。近衛兵相手でも張り合うハズだ。

そんな男が、年端もいかない少女の革ベルトにびびると思うか？

ちがう。コイツは今、期待していたんだぜ？

イケル！ 俺は、通用している！

嬉しくなった俺は、座ったまま腰が引けるリヨンさんに近寄って、顎を掴んでクイと上げ、上から真っ直ぐにその瞳を覗き込んだ。

「キャンキャン吠えて、アナタ本当は恐いのではなくて?」

「そ、そんなバカな! 私は恐くなど無い、だからこそポンザル家に!」

「違うでしょう? アナタが恐いのは周りの評価。ポンザル家にここまで良いようにやられて、腰が引けると言われたく無かった。違う?」

「それは……」

やっぱりそうだ。コイツは、自分を何とか大きく見せようと気を張っている。だからこそ、脆い!

「カラミティさんを見せたくないのも同じ、変わり果てた彼女を見られて、責任を追及されるのが怖いから」

「そんな事は!」

「あるんだよ!」

——パァン!

俺はどうとうベルトでリヨンさんの体を打ちつけた。

「ぐっ!」

やっっちゃった! どうとうやっっちゃった! いくらお姫サマだからって、プラヴァス

の最高権力者に鞭打つて、ただで済むハズが無い。

普通なら真つ青になつて震え上がるべき所。だけど俺は何故だか楽しくなつてきた！

「言い訳するんじゃない！ アンタが本当に守るべきはプラヴァスの皆の幸せ！ アンタのメンツじゃ無い！」

「ち、ちが」

「違わない！ 麻薬に対して弱腰で、カラミティを守れなかつた罪悪感を雪ぐ^{そそ}ために命を賭ける。ご立派だけど、突き合わされる方の身になりなさい！」

まー俺は安全な所に引つ込むから、命を賭けるのは主に田中だけだね。

でも決死の討ち入りをただの自己満足と言われれば、リヨンさんも流石に反論してきた。

「私は！ 私だつて、色々と！」

「解つてる、アンタなりに頑張つてるんだらう？」

それを遮り、今度は一転。あやすような仕草に変調する！ きつとこんな感じで良いハズだ。

リヨンさんの顎を撫で、なるたけ婀娜^{あだ}つぽく笑う。ココは演技力の見せ所。

「でもねえ、頑張りすぎなんだ、よッ！」

今度は踏みつける。サンダルのヒールっぽい尖った部分で思いつきり!

「ぐふっ!」

それも! 踏んだのは! ……股間だあああ!

すると、リヨンさんはいよいよマタタビ食らったネコみたいにふにやんとなった!

「ふああ」

その様子を見つめる、田中と木村の顔ったら。もうFXで有り金溶かした感じになつとる!

まあな、親友が親友にSMプレイを仕掛けられトロトロになっているところ、見たくは無かったよな?

俺も見せたくなかったよ! チクシヨウ!

俺はヤケクソとばかり、リヨンさんの股間をぐりぐりと踏みこむ。

「アンタみたいな半人前が、一人で頑張ろうとするからそーなる」

「だ、だけど!」

「格好つけないで、助けて下さいって言いな! 他ならぬ、私が助けてやるからさ」

「え、そ、そんな!」

「つべこべ言わない!」

俺はバチンとリヨン氏の頬を叩く。するといいよりリヨンさんの様子が一変した。

「た、助けて！ 助けて下さい！」

「もつと犬みたいに！ 鳴きな！ ソレが似合いだよ！」

「ワ、ワン！」

決まったな！ 完勝です！ 我、勝ち申した！

ふと、もう一度木村と田中を確認すると、木村は菩薩の様な顔で全てを受け入れ、田中は変顔を披露しながら、棒読み音声で呟いた。

「リヨンってDMだったのかー」

「そうだね……」

相づちを打つ木村の声にも気が無い。田中は次々と変な顔を披露していく。

「確かに、プラヴァスのお店に女王様が居る店は無かったな、俺調べ」

「あの、外交予算をオネーチャンが居るお店捜しに費やすのは止めてくれない？」

「正しい使い方では？」

「絶対違うわ！」

まあコイツらの漫才を聞いている暇は無い。疲れた俺はそろそろ座りたくなつた。

「頭が高いんだよお！」

「は、はい」

俺はリヨンさんの髪の毛をフン掴み。そのままソファーから引き倒す。そうして代

わりにドツカリと座り込んだ。

空いたソファアに? 違う! 四つん這いになつたりヨンさんにだ!

「ポンザル家の事も、カラミティの事も、私が何とかしてやるよ」

「ハイ! ありがとうございますユマ様」

その光景を見つめる木村。

……心の無しか、罪悪感を抱いたカラミティさんの死を聞かされた時よりも悲しそう
なんだけど?

まあ、プラスマイナスゼロつて事でオールオーケーだよな? 恥ずかしさから目を逸
らし、ふと嫌な予感が頭を過ぎつた。

いや? まさか、木村? お前も踏まれたのか?

だとしたら……その、何というか? 気持ち悪いんだけど?

★性癖の危機

で、カラミティちゃんの治療許可を貰ったので、早速診せて貰う事になったのだが

……

「きりきり案内なさい！」

「わんっ！」

あろう事か、許可を出した人が犬になってしまったではないか！

この世界、カボチャは馬車にならないけれど、人間は犬になる。流石は剣と魔法のファンタジー世界。この世界ではごく普通の出来事。全く恥ずかしいコトではない。

「くう……」

……ウソだ。滅茶苦茶に恥ずかしい。

取り敢えず、SMは首輪だよね！ つてゴテゴテ飾り付けられたコートから一本のベルトを外し、リヨンさんに嵌めたのが良くなかった。

リヨンさんは首輪を付けたまま、四つん這いで歩き出そうとするではないか。

なんとか必死に押し止め、リードまで付けて引つ張り上げる事で、なんとか二足歩行の人間に戻すことに成功。

そのままカラミティちゃんの部屋まで案内を頼んだのだが……

「なっ?」

「ええっ?」

当然、ビビリまくる使用人やメイドさん達。

そりゃ、さっきまでピリピリしていた若旦那がゴキゲンで首輪にリードのお散歩スタイルで出歩いていれば目を疑う。

「……………」

誰もが二度見、三度見した後には、チラツと俺を見て、スツツと目を逸らす。

因みに……俺はマイクロビキニのエロエロ姿でリヨンさんのリードを握っているワケだ。

「……………」

真つ赤な顔で見なかったことにするメイドさん。

コレ、逆に俺の方が恥ずかしいんだが? いっそ、四つん這いのままの方が良かったまである。

『異国のお姫様がお馬さんごっこで遊ぶのに付き合っただけであげる若旦那』

ひよつとしたらほのぼのの空間になったのでは? 実際は、エロい格好の幼女がリードを握って、首輪をつけた若旦那を歩かせてるのだから言い訳が効かない。

「つか、さつきから何も言わないけれど、田中が白目で見てくるのがウザイ。

『何か言えよ!』

『友達が、別の友達とSMプレイに興じてるのを目撃したらどうなる?』

「……混ざろうとは思わないですね。そつと距離を置きます。でも、俺にも言い分はあるよ?」

『豚はともかく、犬になれとは頼んでないんだけど?』

『豚の方が酷いんだが?』

「……なるほどね、一理ある。」

『豚や犬より、お馬さんごっこの方がマシかな? 今から軌道修正できない?』

「涙目で訴えれば、笑顔で木村が一步踏み出す。」

『そういうことなら一肌脱ぐぞ! 一匹だから犬の散歩に見えるんだ。俺にも首輪を付けてよ、馬車が二頭立てにパワーアップだワンツ!』

『犬になる気が満々じゃねーか! (服を) 脱ぐな! 着とけ!』

「上着を脱ぎ捨てた木村が貧相な体を見せつけてくる。この流れなら好きなこと言つて良いみたいになつてるけどさ、ココは他人のお屋敷だぞ?」

「リヨン様ツ!」

「行くな! 若も……お疲れなのだ」

物陰からはメイドさんの悲鳴とか、ソレを必死に宥める家臣の声とかが聞こえてくる。

……端的に言つて、大惨事なのだが？

ここはプラヴァスに来て長い田中が、場を収めてくれる事に期待するしか！

『エルフの王女サマが女王様とは恐れ入ったぜ……ン？ 普通か？』

普通じゃネーし。女王様じゃ無いんだが？ 俺はお姫様だよ？ はい、カワイイ！

「痴女かな？」

あろうことか、カッコイイポーズをキメた俺に対してこの言い草である。やはり田中は安定のクソ馬鹿で、一切役に立ちそうに無い。マジでコイツ本当にゴミ。

『何の為に公費で長年プラヴァスに通わせて、現地にパイプを作らせたと思ってるんだよ？ こんな時の為だろうがッ！』

大喝する俺に、木村が頭を抱えていた。

『こんな時は、宇宙の誰も想定してないんだが？』

『じゃあ、どうすんだよ？ これ！』

『どうにもならないでしょこんなん、初対面の王子様にSMプレイを仕掛ける方が悪い！』

『違うっ！ プリルラの人格で、リヨンさんの趣味が解ったから……』

『ソレがSMの女王様だったと?』

『つてか、ドMだつて解つたけど、プリルラちゃんじゃ、どうして良いか解らないつて、そこで俺が一肌脱いだのよ!』

『なるほどね、脱ぎ過ぎでは?』

しょうがねーだろ! コートの下はコレ(マイクロピキニ)なんだから!

俺の女王様のイメージではコレが限界。

幾らプリルラちゃんが百戦錬磨の恋の達人であろうとも、まだ少女だった彼女にドMのあしらい方など解ろうハズが無かった。この世界にそういうお店は無さそうだしね。

それで仕方無く、不肖『高橋敬一』が男の人格のまま、必死で女王様を務めあげているワケだ。

しかも親友二人の前でだぞ? コレが恥ずかしくない訳ない。ドチャクソ露出した肌を真っ赤に染めて、鞭の代わりにベルトを振り回して頑張っているのである。

精神的に極限まで追い詰められている俺へねぎらいの言葉一つあつてしかるべきなのに、親友である男二人は白目でコッチを見るばかり! なんとか言つたらどうなの?

『極限まで追い詰められてるのは、コッチの性癖なんだけど?』

『ンなもん、知るかあ!』

俺は涙目で絶叫するのであつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「コレが、今のカラミティです……」

辿り付いた一室、リヨンさんが苦虫を噛み潰した表情で窓辺のベッドを指差す。そこでカラミティと呼ばれた少女が虚ろな瞳で外を見ていた。

カラミティ。どんな人かと思えば可愛い少女である。黒髪に褐色肌、でも瞳だけは赤い。

顔立ちからは澆刺としたエネルギーを感じるのだが、その瞳にはなにも映っていないのが痛々しい。

一目で解った。彼女は心に深い傷を負っている。まるで昔の俺だ。

「リヨン様ッ！ コレは？」

看病していた侍女がリヨンさんに説明を求める。当然だ、絶対的に怪しい集団が病室に押し入ったのだから。

「この方はユマ姫、森に棲む者^ザいや、エルフと呼ばれる魔法使いの種族の姫であらせられる」

「それは？ カラミティ様にどんな関係が？」

「……それは、だな」

魔法が解けて人間に戻ったりリヨンさんが必死に俺の魔法について説明してくれる。

だけど、リヨンさんだつて見たことも無いのだから、どうにもふわふわしたモノになる。当然、侍女達は信じない。

なにせリヨンさんが説明する中には尾ひれが付いた噂話まで含まれている。俺としては他国に俺の事がどんな風に伝わっているか興味津々だったのだが。

曰く、彼女に惚れた王子二人で王国が真つ二つに割れた。

曰く、死の淵から不死鳥の様に復活した。

曰く、ゼスリード平原に集結した帝国兵をたつた一人でバツタバツタと打ち倒した。

……いや、あながちウソじゃないな。

ウソじゃないんだけど、実際に視線の先に居るのは堂々たる半裸の少女である。

侍女達がコチラをみる視線の痛いこと痛いこと。赤く染まった肌から血の気が引く思いである。それどころか彼女達は別の疑念を持った様だ。

「あの、失礼ですが、リヨン様は麻薬を試してはいませんか？」

「違うっ！ 断じて！」

当然の反応であつた。

聞けばカラミティちゃんは麻薬中毒でこうなつたらしい。となれば看病のため、侍女達は麻薬について勉強している。

麻薬でもキメてないと、マイクロピキニの少女を魔法使いとは言い出さないわな。

侍女達は互いに目を見合わせる。その目には不安や覚悟がない交ぜになっていた。

「リヨン様、麻薬と言うのは本当に恐ろしいモノです、実は私達も少し試してみたのですが……」

「何だと！」

「全ての欲求に麻薬が勝ってしまうのです、自分の意志で麻薬を止めるのは不可能でした」

「お前がソレを言うのか……」

「はい」

真つ直ぐにリヨンさんを見つめるオバサン侍女。初めて会ったけど、風貌から真面目を絵に描いたような鋼鉄の意志を感じるほど。

そんな彼女が自分の意志で麻薬を絶てなかったと言うなら、俺なんて一度キメたが最後、アヘアへになるに違いない。

「まさか……それ程とは」

リヨンさんだつて自分だけは大丈夫と信じられなくなったのだろう、言葉に詰まった。

侍女はさらに言い募る。

「急に麻薬を絶つのは危険かも知れません。それ以外の何も考えられなくなり、自傷行

為に走ります、カラミティ様をベッドに縛り付けましたが、骨が折れるほどに暴れるのです」

そうなんだ……ヤベエな麻薬。俺も気持ちよくなつて家族の夢でも見ながらそのまま死のうかな？

いや、嘘だけだね。気持ちいいのは興味があるけど、帝国を滅ぼして、皇族だかを根絶やしにして、帝都を火の海にして地図上から消すまでは我慢。

と、そんな麻薬でリヨンさんが俺に操られていると侍女は疑っている様だ。

他人に使うぐらいなら俺が現実逃避に使いたいぐらいなんだが、まあ疑うのは当然。説得を繰り返し、おかしくなったのは頭じやなくて性癖の方だと理解して貰った。

確かに冷静に会話が出来ると、暴れ出さない。麻薬を見ても目の色を変えないから中毒じやなさそうだと。

と、ソレだけ麻薬が恐ろしいならば、カラミティちゃんが安静にしてるのが気になつてくる。リヨンさんが訊ねると、侍女は悲痛な表情で声を絞り出した。

「カラミティ様には少量の麻薬を摂取させています。自傷行為に至らぬ様に、少しずつ量を減らして寛解を目指すのが宜しいかと。まだ自分の名前さえ言えませんが、食事は摂って下さるようになりました」

「そ、そんな……ソレでは」

よほどシヨックだったのか、リヨンさんはガツクリと膝をつく。

……一方で俺は麻薬に興味津々と言うか、正直なところカラミティちゃんの事も知らないしイマイチ話にノリ切れない。

なんなら殺しちやえば良いじゃんぐらゐの気持ちがある。

とは言え、相手はまだ幼く可愛い女の子である。男としてはなんとか守ってやりたい気持ちがないではない。

実はマイクロビキニを着ていると他の人格が出て来ようとしないので、男『高橋敬一』が出ずっぱり。一肌脱ごうではないか！

「フンッ！ 何を言ってるんだか！ その為に、わたくしが居るのでしよう？」

堂々宣言するも、自分でも何を言っているか解らないし、ブレ放題のキャラ崩壊。

だけどね、こう言うのは不安そうにやると却って恥ずかしいモノ。控え目な胸を張って自信満々に躍り出た。

荷物になっていたコートを、さつきからハアハア言いながらうなじの臭いを嗅ぎに来てウザったかったシャリアちゃんに手渡すと、ズイツとカラミティちゃんの居るベッドに上がりこむ。

止めようとする侍女をキツと睨む。自信満々の俺の態度に、さしものベテラン侍女もたじろいだ。

「リヨン様？ 彼女も麻薬を？」

違った。完全にキマツてると思われドン引かれていた。まあコレはコレで好都合。さつさと魔法を使つてしまおう。

俺はベッドの上で、カラミティちゃんにマウントポジションをとり万全の構え。虚ろな瞳を覗き込む。

「我、望む、揺蕩う海の寄る辺なき魂よ、我指し示す先に安寧あれ。

一つ、母なる命脈に身を委ねん。

二つ、……」

催眠魔法だ、コレでカラミティちゃんの深層に入り込み、回復を促す。

魔法を使つてしばらく、彼女の瞳孔が揺らめき徐々に意志の光が戻り始める。

しかし……

——アアアアアアア！

カラミティちゃんは、廃人同然の魂が抜けた状態から一転。狂った様に喚き、暴れ出したのだ。その力はとて小柄な少女のソレではない。

「痛あー！」

非力な俺はアツサリと押しつけられて、ベットからゴロンと転がり落ちた。

——アアアアアア！

「鎮まって！ 鎮まって下さい！」

なんとか這い上がった時には、侍女が三人掛かりでカラミティちゃんを押さえつけているトコだった。慌てて木村が駆け寄ってくる。

「コレは？ 何がありました？」

コイツ、よつぽどこの女の子が心配なのか、さつきからソワソワと落ち着かない。カラミティちゃんってどんな人かと思えばこんな可愛い女の子なら心配するのは当然って思いがある。だけど、アレだよ？

俺が必死で治療に励んでいる間も、異国の地でこんな可愛い子とお楽しみとはね。少し意地悪したい気持ちが目覚めてしまう。

『正直、だめぽ』

『え？』

お手上げとばかり肩を竦めれば、いつも余裕を絶やさない木村の顔が蒼白になる。俺にはソレが面白くて、更に詳しく容体を説明する。

『いやさ、よつぽど酷い目に遭ったみたいで、自分で意識を封じているんだ。無理矢理引つ張り上げたなら完全に壊れてしまう可能性あるよ？』

『そんな……』

ま、嘘は言っていない。実際にカラミティちゃんは自分で自分の記憶を封じてるのだ。

無理に起こす必要を、俺は感じて居なかった。

『具体的に言うとき、脳だつて損傷してるから治さないとならない。だけど雑に治したら記憶と馴染まずに赤ん坊同然になっちゃう。でも、意識を浮上させながら治療すれば、抵抗されて健康値が魔力ですり切れちゃう。結果、魔法で脳をズタズタに引き裂いて殺しかねない』

『……………』

木村は頭が良いので俺の説明に嘘が無いのが解るのだろう。悔しげにほぞを噛んだ。実際、普通に治療すればそうなる可能性は高いワケだ。

『俺のオススメはさ、取り敢えず体だけ治しちゃうコト。コレで俺の魔法はホンモノと信じて貰えるし、記憶は徐々に取り戻しましょうって言えば良いだろ』

『だけど、ソレじゃ…………』

木村は洩る。なぜならそうなればカラミティちゃんも死んだも同然。新しい体に、新しい人格が宿るだけ。

でも、政治的な事を考えればソレで十分なのだ。それが嫌と言う事は木村としては彼女との思い出が大切だと言う事。

こんな美少女とどんなロマンスがあつたのか…………嫉妬が止まない俺は、ニヤリと露悪的に笑つて囁く。

『別に良いじゃん？ 精々が十年ちよつとの記憶だろ？ 若いんだし、また新しくやり直せるって』

『ダメエ！』

カラミティちゃんの人格を軽視する俺の言葉。温厚な木村が柄にもなく怒りに沸いていた。

『そんなんで生きてるって言えるのかよ！』

俺の髪をひつ掴み、強引に掴み上げ、正面から俺を睨む。

怒り狂った木村の顔が間近にあった。コイツがこんなに怒るところを初めて見たかもしれない。

だが、俺にも言いたい事はある。

『解ってるよ、けどな、それが他人だとしても、そんな形であっても、生きてるだけでマシなんだよ』

大切な人が死ぬなんてこの世界ではありふれているんだよ！ お前は死ぬ覚悟はあるかもしれないが、死なれる覚悟が足りないだろ？

良い機会じゃないか。死なせてみようぜ？ 俺はな、例え人形だとしてもセレナに生きていて欲しかった。

ソレを作れる可能性はあったのだ。なんせ細胞一つからでも培養できる。俺が馬鹿

な事をして、家ごと燃やさなければそんな可能性もあったのだ。

今はもう、セレナは灰も残っていない。お前だって、欲してるのは心を癒やす人形じゃないのか？ だったら記憶なんて要らないはずだろ？ まして政治的にはソレで正しいハズだ。

『実際、リスクをとって万が一にも殺しちまったらどうなんだよ？ この国に居られなくなるぞ？ 第一、ソコまで説明すりゃきつと治療を止められるぜ？』

『そうだな……だけど、それでも』

可能性があるなら治して欲しい。木村が涙目で必死に俺に縋りつく。

いつもは俺ばかり必死なだけに、余裕のないコイツを見るのは、何とか気持ちが良いね。

ふむふむ、そこまで言うなら仕方無い。いっちょ頑張りますか……しかし、いよいよ彼女がコイツの何なのか、俺にもだいぶ気になってきた。

『良いケドさ、大体にして、お前にとってこの娘はナンなんだよ？』

『あーそうだな……』

柄にもなく、なんだか言い辛そうにモジモジと。

なんなの？ オッサンの癖にピュアっ娘なの？ 決心固めて言う事？ ホラ言つて

みろ？ 彼女か？ 妹代わりか？ どうなんだ？

『奴隷かな?』

『ヒヤアツ?』

自分でもビツクリする様な声が出た! え? 奴隷?

聞き間違い? 奴隷? ココまで引つ張つて奴隷? 意味が解らんのだが?

『なんで? なんなの? お前がどうやって彼女の奴隷だつて証拠だよ?』

俺は、激しく動揺していた。

コイツに先に脱童貞されるのは良い。まあ良い。

彼女が出来るのだつて良い。年齢的に、結婚しても驚かない。

でもな! 奴隷ハーレムでウハウハつてのはナシじゃん? なるう主人公じゃない

んだよ? 俺のやりたかった異世界転生を横取りするな!

いや、まだコイツが勝手に奴隷つて言つてるだけの可能性は高い。こんな良家の令嬢

を奴隷とか天が許しても俺が許さないし、リヨンはもつと許さない。

今度は俺が怒りに震えていると、奴隷奴隷とブツブツ呟いていた木村がハツつとした

表情でリヨンさんに向き直った。

「リヨンさん!」

「いや、その前に何が起こつたのです? コレは?」

リヨンさんはカラミティちゃんの内容体が気になるのだろう。当然に説明を求めてき

た。会話する俺達に遠慮して機会を窺っていたに違いない。

「コレは彼女が大切な証拠。きつと奴隷宣言を否定してくれるし、全ては木村の吹かしに違いない。」

必死に説明する木村だけど、リヨンさんが危険な治療に納得するかな？

「カラミティちゃんの容態が解りました、先ほどのユマ姫の検査の魔法です」

「その割に、急に暴れ出した様ですが？」

「そうなのです、心を調べようとすれば、カラミティちゃんは自分を取り戻したくないと抵抗をしました、それ程の悪夢にうなされ、自分から記憶を封じています」

「では、どうすれば？」

「一つは、体だけを治し、物言わぬ廃人とすること。もう一つは……」

「もう一つは？」

「体と心を同時に治します。コレは死ぬ危険もあるイチかバチかの施術。ですが俺はコレに賭けたい」

「そんな事は！」

「させないとは言わせません、彼女は俺の『奴隷』です。そうでしょう？」

なんと、自信満々に木村が言い切る。

勿論、キレたりリヨンさんにぶん殴られる……かと思いきや、リヨンさんは悔しげに言

葉を濁らせた。

「いや、ソレは……」

「言葉の綯だど？ でも、彼女が私に命を預けてくれた事に変わりは無い。アレはこのための運命だったと、私は思いたいのです」

木村がそう言い切ると、リヨンさんは「わかりました」と治療の許可を出すではないか！

は？ マジでこの美少女が木村の奴隷な訳？ どんな魔法なの？ 俺にもその魔法教えて！ いや、嘘だろ？ もう一度だけ確認しよう。

俺は涙目の上目遣いで木村のズボンを掴んで訊ねる。

「うう……本当に、本当に彼女はお前の奴隷なんだな？」

「ええ、コレで万が一失敗したとしても、ユマ姫の責任とは言わせません」

自信満々の木村を殴りたい。コイツがこんな美少女を奴隷？

くうう、悔しい。泣けてくる。ズルい！ 俺ばかりがこの世界で苦労している。

俺は木村のズボンに縋りつき、ポカポカと必死に殴る。強気に文句を言おうにも出てくるのは涙声だけ。

「なんで？ なんでなんだよう、奴隷だなんて、俺だって、お前が、俺が頑張ってる間に、俺が居ないところで！ どうしてだよ」

いよいよ堪えきれず、頬を涙が伝った。この世界は余りに理不尽過ぎるでしょう？俺の涙をどう受け取ったのか、ハツとした木村が目を瞑って、何か変な覚悟をキメていた。

「そうですか、こんな少女を奴隷として貰った事でアナタを不安にさせてしまったのですね」

一人で納得して、ウンウンと頷いている。

いや？ 不安じゃなくて不満なんだけど？ コイツ、何か勘違いしてないか??

いよいよ木村が俺の前で膝を折って向き直る。何を言い出すつもりだ？ まさか？ いや、まさかだよな？ 聞きたく無いぞ？

「結婚しよう！」

「死ねッ！」

ノータイムでお断りだっ！

クソプロポーズ止めろ！ 俺はお前を巡ってカラミティちゃんに嫉妬してるんじゃないの！ お前のクソなるうムーブに嫉妬してるの!!!

力一杯力説すると。ポカンと木村は俺を見て首を傾げているじゃないか!!

俺はもう、悔しいやら悲しいやらで地面を転げ回るハメになる。

『どうして、俺が居ないところで、いつの間にか奴隷ちゃんとか、こきえてるんだよ！俺が欲しいんだよ！ 誰よりも欲しいんだよ！ 誰よりも！ 異世界モノを愛してるんだよ！ 夢なんだよ！ 内政チートだってやりたかった、剣一本で無双だってしたかった、それが股間の一本も無いんだよ！ 奴隷ちゃんぐらい俺にくれよお！』
転げ回った、それはもう見苦しく転げ回った。暴れるカラミティちゃんよりも転げ回った。

端的に部屋の中は地獄絵図だった。そこに追い打ちを掛けたのが田中だった。

「まったく。俺が一時外した途端、奴隷をゲットとかズルいぞ！」

なんで参戦した!? お前は剣で無双してろ！ もしくは夢精してろ！ 暑苦しいから近寄るな！

そんな田中に斬り掛かるシャリアちゃんまで現れて、カオス空間が爆誕！ もう摘まみ出される一步手間である。

コレはマズイ、場の誰もが思った刹那。いつの間に近寄ってきた木村が耳元でコツンリと囁いた言葉に、俺は耳を疑った。

『元気に治ったら、カラミティちゃん。あげても……良いけど?』

『ほんとお?』

我ながら、メチャメチャに食いついた。それはもう、俄然やる気になった。

俺は子供みたいに泣き叫んでいたのを一変。キリツとしたお姫様の貌を取り戻し、治療の為に動き出す。

「ケルタオイルを用意して下さい」

「おい、お前達、ケルタオイルを用意しろ」

「リヨン様？ 彼らを信用するのですか？」

侍女達は抵抗するが、リヨンさんの決心は固かった。

「カラミテイの命は、既に彼らの物だ。疑うならパノツサ辺りにでも聞いてくれ」

「承知しました」

渋々と引き上げて行く侍女達、そして代わりにタツプリの油が届けられた。

一方で俺はカラミテイちゃんに再びのマウントポジション。

違うのはその傍らに油がある事だけ。

「一体ユマ姫は何をするのです？」

「それは……」

不安げに訊ねるリヨンさん。それに応えようとする木村だがコイツだって魔法には詳しくないからね。

それでも自信満々の木村はリヨンさんに熟知り顔で予想を披露している。

「治療の為に油を用意するのは、それ程イレギュラーではないでしょう？」

「それはそうだな、薬効は油にしか溶けないことも多い」

「まさにソレです。我々が住んでいた場所でもアーユルヴェーダと言われる、油に薬草を溶かし、体に塗り込む治療方法は知られていました。エルフの秘術としてはその更に先があつても不思議ではありません」

「なんと！ それは期待出来ませぬ。しかし肝心の薬草が見当たりませんか？」

「貴重な薬草をエルフは決して手放さないと聞きます。ひよつとしてどこかに隠しているのでは？」

隠せるかあ！ コツチはマイクロピキニじゃ！

「……………」

俺を見てソレを思い出したのか、木村は目を泳がせると、謎の可能性に思い至つてしまった様子。

「いや、ひよつとして？」

「キイムラさん、なにか心当たりが？」

「アーユルヴェーダには鼻洗浄という施術があります。油を鼻から入れて一緒に毒素を出すのですが……恐らくは、今回も同じ。油を体内に通し、麻薬の成分を溶かし込んで体外に排出するのです」

「おおっ！ そんな技が！」

その解説にリヨンさんは快哉を叫んだ。

木村の方も自信が有るのだろう、声が弾んでいるし、よせば良いのにコチラに答え合わせまで求めてくる。

「どうですかユマ姫、違いますか?」

背後だから見えないけれど、とんでもないドヤ声である。

「違いますけど?」

「違うの?」

「違います!」

「……………」

「……………」

この空気どうしてくれんの?

滅茶苦茶にやりづらいんだけど????

俺は一旦振り返り、キツと皆を睨んだ。

俺の肌は髪と同じ、真ピンクに染まっているに違いない。コレから起こることは……出来ればやりたくなかったぐらいに恥ずかしいのだ。

俺だつてさ、ただの意地悪で見捨てようつて言った訳じゃないのよ。

「えっと、皆さまには席を外して頂く訳には……エルフの秘術なので」

「いえ、そういうわけには」

俺の必死のお願いだと言うのに！ 豚宣言まで飛び出したりヨンさんなら、きつと聞き入れて貰えると思ったのに！ コイツはこんな時だけ素で俺の言う事を聞こうとしない！

勿論木村も、田中も！ シヤリアちゃんも出て行かないし！

ぐ、ぐぬぬぬぬぬ！

覚悟を決めるしかないのか……俺はマウントポジションの下、少女の虚ろな瞳を見る。彼女は俺の奴隷。俺の魔法に彼女の生死が懸かっているとくれば、俺が恥ずかしいぐらいなんだと言うのだ。俺は歯を食いしばって覚悟を決めた。

「奴隷、奴隷、俺の奴隷」

必死で自分に言い聞かせる。

そうして油をすくい取ると……自分の体に塗りつけた。

「エツ？」

木村の意外そうな声！ お前のクソ予想のおかげで、倍ぐらい恥ずかしいのだが？

「ううっ……」

俺は半ベそで、そのままカラミティちゃんの服を剥ぎ取った！

「エツ？」

「いや、服を脱がすのは普通では？」

「あ、ああ……そうだな」

田中サン？　いまのエツは驚きの「え？」ですか？　違う「エツツツ！」じゃないでしょうね？　問い詰めたけれど、今はその時じゃない。

俺の体に馴染んだ油が、ランプの明かりをテラテラと跳ね返している状態だからだ。うむ、酷く淫靡な絵面である。

カラミティちゃんは裸、マウンツする俺もほぼ裸。そして体は油に濡れている。

この状況で変な想像をしない方がおかしいし……その想像は残念ながら当たっている。

ヌラヌラと滑る体を、俺はそつとカラミティちゃんに重ねていく。

「エツツツツ！」

木村ツ！　田中ツ！　お前らあああ！

言うなよ？　それ以上いうなよ？

「ローションプレイかよ」

田中ア！　ソレは言うな！　空気を読め！　ソレだけは言うな！　殺すぞ！　違うのだ！　コレは神聖な治療方法なのだ！　俺はもう、真つ赤になって反論した。

「違います！　コレは体の接触を密にして、より深く魔力を循環させるための……」

俺が必死で言い募ると、ベガ立ち勢（木村）の解説が始まった。

「なるほどな」

「どう言う事だ木村？　俺にはレスプレイにしか見えんぞ！　リヨンの奴なんか固まってるし」

「わからんのか？」

「解るかあ！」

「丁度CPUにつける 그리스 に近いんだ。より密着して魔力の通りを良くすると言うワケ、密着で魔力の制御を密にして、魔力の損失と健康値の抵抗を最小限にするつもりだろう」

……悔しいが、今度の解説はドンピシャで当たっていた。

当たってはいるのだが、だからこそ言いたい事がある。

「ソコまで解っているなら、よこしま 邪な目で見ないで下さい！」

「ダメだ、俺はこの戦いを見届けないと故郷に帰れない！」

「タナカア！　鬼め！　お前の故郷は地獄だ！」

「俺に出来るのはこの光景を後世に伝えるべく、薄い本を厚くすることのみ」

「キムラア！　そんなの没収！　いや、こんど見せて」

自分でも、何を言っているか解らない。

今日は親友二人の前でS Mプレイを披露した直後、S Mプレイをした相手まで加えてのローションズプレイの披露までしているのだから世の中わからない。

……わかつてたまるかと言いたい。

しかし、精神の魔法は一時も気を抜けるモノでは無いのが困りものだ。

俺はさらにカラミティちゃんを密に絡めていく。カラミティちゃんだけに体を擽めていく。

もうヤケクソであった。

魔力が浸透すると健康値が削られて苦しいのか、それとも気持ちが良いのか、カラミティちゃんが「ああっ」と悩ましげな声を上げるのがまたエロくて困る。

しかし、余分な健康値を取り除くには魔力が足りなかった。なにしろこの土地は魔力が少ないから当然。

そこで、俺が取り出し、掲げたのは秘密兵器だった。

「魔石を、食べます！」

魔石を食べる。凶化した事で可能になった魔力の回復方法だが、狂気の怪物に成り果てたグリフォンの最期を聞けば危険過ぎる手段ではあった。

だけど、『参照権』を持ち記憶を上書きされない俺であれば、記憶を失うリスク無く凶化のメリットだけを享受出来る。ちよつと体が変形しても千切つて治せば大丈夫！

俺は何というか、いよいよ吹っ切れてきた。体は羞恥に赤く染まっているし、そもそも

裸同然で友達に見られている現状で恥ずかしさはMAX。

更に言うときまでSMしてた相手にも見られてるし、それは王子様だし、相手の女の子の保護者でもある。

完全に狂気のありさまだ。ここから更に狂気が上乘せされても変わらんだろう！

腰をグラインドさせながら油を馴染ませ、体を更に密着させる。

俺は魔石を飲み込んで、いよいよ魔法を使い始めた。

『我、望む、揺蕩う海の寄る辺なき魂よ、私の命に導かれ、息吹を感じよ、鼓動に耳を澄ませよ、私の命の先に安寧あれ、一つの大きい流れとなりて、傷付く体を癒し給え』
 そうして、呪文を唱えると同時――

——カラミティちゃんと濃厚なディープキス！

「「エッツツツ！」」

もう、お前等はそれしか言えないのか!! 知ったことか! 無視だ無視! ココからは魔法に一切の油断が出来ない。

なにせ相手の脳みそをイじる大手術!

……まあ、端から見ると、ブツブツ呟きながらキスして、ヌルヌル体を絡め合って、た

まに激しく抵抗するカラミティちゃんを押しさえ込んで——をひたすら繰り返してるだけに見えるのが困りもの。

もう、見た目は完全にセクロス。（*ファミコン用ゲームソフトです）

ソレを延々と皆が見守るなかでやらされるのだから、邪神降臨の儀式かつてぐらいに奇妙な空気になってしまった。

途中で発狂した木村が「間に挟まりたい」とか叫んで体にオイルを塗り始めるぐらいには、場には狂気が満ちていた。

ちなみに、シヤリアちゃんが止めてくれたので一安心。俺だけの黒歴史にしない様気を使ってくれたのかな？ マジで余計なお節介なのだが？

と、そんな地獄の儀式が休み休み、四時間以上も続いてしまったのだから記憶も封印したい。

歴史的に初めてレベルの魔力を使った脳の大手術なのだが、これこそ歴史の闇に葬って欲しいレベルのアレ。

そんなこんなで、「多分、治ったと思う」と宣言したときには、既に朝日が昇ろうかという時間だったのだ。

一夜明けて

ローションレズプレイを披露してしまった翌日。俺は待望のパンツと対面していた。勘違いしないで欲しいのは、俺だつてこんな姿（マイクロビキニ）でここまで飛んで来たわけじゃ無い。グライダーにたいした物は載せられないが、いくらなんでも着替えぐらいいはリュックに詰めてきた。これはその一つである。

だけど歌姫に弟子入りするにあたって、そう言つた私物は取り上げられてしまったのだ。

拾つて貰つた恩があるとは言え、用意された契約書を見た段階で体のいい奴隷契約だとは気付いていた。でも、身請け金は精々が数百万。一介の踊り子が働きながら返すのは厳しくとも、木村にとつては大した金額じゃ無い。

実際、劇場の協力もあつて契約書の奪還作戦が成功したこともあり、木村は気前よく俺の身請け金を劇場に払おうとした。

なのに身請けに関して劇場側は強情だった。俺を金の卵とそれはもう、期待していたらしいのだ。

結局、ブラッド家の圧力でなんとか着替えを取り返す事に成功したと言う訳だ。

で、下着以外の着替えも奪還したのだが、そちらは氣候に合わず蒸し暑かった。

そうなると、コチラで衣装を整える必要がある。下着と違つて入手は容易と思われたのだがコレが難航する。

マズはカラミティちゃんの普段着、素朴な民族衣装を貰つたのだが、これがもうピッタリするほど似合わない。

そこで、木村が急遽用意したのがこの服。

「アラビアンなドレスか」

ニツカポツカみたいな裾のすぼまったズボンに、キラキラとスパンコールな上着、そしてやたらとフワフワしたベール。

アラビアンナイトなイメージそのままだが、色が純白なのが珍しいかも。

暑そうに見えたけど生地が透けそうな程に薄く、ゆつたりと作られていてわりと涼しい。

意外なことに、こう言う衣装はプラヴァスには無いんだと。カーテン用の生地から木村が一晩で縫い上げて完成した。

着替えが終わつて皆の前に姿を現せば、それはもう大好評であつた。

「おおっ！ 何と神々しい。踊り子の姿も美しかったが負けていませんね」

特に褒めてくれるのはブラッド家の当主、リヨン氏。

なのだが。ソレを素直に喜ぶことが俺には許されない。

……他ならぬリヨンさんの為に、だ。

「ええ？ 誰が勝手に喋って良いって言ったのー？」

「す、すみません！」

俺は這いつくばるリヨン氏を尊大な態度で見下ろすと、四つん這いになったその背中にどつかりと座り込む。

……うん、まだなんだ。すまない。

俺の女王様プレイは継続中……どころか、女王様は年齢的に無理があつたので、なぜか不遜なメスガキプレイに着陸した感じ。いやー不思議不思議。

口調とかブレブレで苦しかったからね、仕方無いね。

薄い本ならそろそろ一転攻勢に出たりリヨン氏に催眠術でエロいことされる頃合いなのだが、その兆しは一向に見えない。

どうやらリヨン氏は根っからのDMな模様。

これには木村も困り顔だ。

「あの、そろそろポンザル家への対策を話し合いたいのですが」

「私はこのままで良いので、どうぞ進めて下さい」

「あらあ、勝手に偉そうなコト言うのはこの口い？」

俺は背中に乗ったままりヨン氏の首筋を撫で、ケツをピシャリと打ちすえる。

「あひいん！」

「きやはは、変な鳴き声。私みたいな女の子にいいように言われて悔しくないのお？」

「悔しく、ありません！」

「もー根つからのぶたさんなのね♪」

「ぶ、ぶひー」

「……………」

因みにこの場には俺達以外にも木村、田中、シヤリアちゃんが揃っている。

「……………」

沈黙が苦しい。皆の視線も厳しい。

木村とシヤリアちゃんなど羨ましいのか何なのか良く解らない目で見てくるし、田中に至っては心底悲しそうな目でリヨン氏を見ているのが居たたまれない。

いつそゲラゲラと笑ってくれば救われるのだが、改めて聞けば田中にとってリヨンさんはこちらで出来た初めての親友とのこと。

それが文字通り俺の尻に敷かれているのだから無理もない。

俺とリヨンさんを見比べて、諦めた様にため息をひとつ。

『お前、なんだかんだ楽しんでない？』

『楽しんでねえよ！』

俺だってやりたくないの！ でも、リヨンさんがプラヴァスの実力者だから無理してんの！ 恥ずかしいに決まってるだろ！

と、そのとき、部屋に一人の少女が駆け込んできた。

「キムラ様！ リヨン叔父さま！ 私、今までどうし……リヨンおじ……さま？」

カラミティちゃんだった。俺の魔法が早速効いたと見える。元気に部屋へと飛び込んで来たではないか。

だけど、部屋のと真ん中には見知らぬ俺が居る訳だ。

「え？ なに？ あの？ 誰？」

「私がアナタを治療したエルフの姫、ユマ・ガーシエントです、お見知り置きを」

俺は艶然と微笑んで、アラビアンドレスのベールを翻しながら悠然と足を組み直す。

——もちろん、リヨンさんに座ったまま。

全てが静止した部屋の中、カラミティちゃんの口元だけがヒクヒクと引き攣っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「え？ ええええ？ わたしっ、この娘の奴隷なんですか？」

「ご、ゴメンね。君を治すにはそれしか無くて……」

カラミティちゃんは涙目で木村へ詰め寄るが、木村は謝り倒すしかない。

ソコは重要だからね、譲らないよ。まあどうしてもって言うなら考えるが、木村が美少女奴隷を従えてブイブイ言わすのだけは何としても防ぐ所存。

まあ、目覚めたら突然知らない女の奴隷になってたら不安よな。フォローはする。

「安心して下さい、決して悪いようにはしませんから」

「既に信じられないぐらい、悪いようになってるじゃないですか!」

カラミティちゃんが椅子となつたりリヨンさんを指さして叫ぶ。

うん、そうだね。それに関しては何も言えないぞ。

更に更に、彼女は屈んでリヨンさんの顔を覗き込み言い募る。

「え? リヨン叔父さまですよ? ソックリさんじゃないですよ? あのプライドの高いリヨン叔父さまですよ? 私と歳も変わらぬ女の子に椅子代わりにされて、ブラッド家当主として恥ずかしくはないんですか!」

「うぐつ!」

おうおうおうw

ナチュラルに煽りおるわ。ひよつとして俺より才能あるんじゃないか?

このままでは女王様としての地位を奪われかねないぞ?

「控えなさい! この男はアナタを助ける為に私の椅子を買って出たのです」

「ええっ？ そうなんですか？」

俺は踵でリヨンさんの鳩尾を蹴り上げる。

「ぐっ！ そ、そうだ！」

「そんな！」

そう言う事にして貰わないと話が遅くて困る。だけどカラミティちゃんには余計に混乱したようだ。

「大体！ わたし、一体全体、何があつたかちつとも覚えていないのですけど！」

そりゃ、記憶を封印したからね。当たり前だよ。変に思いだしたら廃人に逆戻りだ。

細かい傷はおろか、膜だつて治しちゃったから、悪い夢でも見たと言うことにして誤魔化しに行く！

「アナタはボイザンに捕まり、健気に抵抗した結果、生死の境を彷徨う大怪我をしたのです。それを私だけが治すことが出来た。私はその代価にアナタを貰い、この男を言いなりにする権利も得た、それだけの事です」

「信じられません！ それこそ魔法とか言う力で叔父様を操っているだけでしょう！」
「違います、これはこの男の意志です」

俺は再度、リヨンさんの腹を蹴る。

「ぶ、ぶひい！」

「ぶひいつて！ 今、ぶひいつて言いました！ 叔父様は絶対そんな事言わないですもん！ 嘘です！ オカシイです！ 魔法を使ったに違いありません」

「そんな事言われても」

俺だつて困つてるんだが？ 誰ぞコイツのドMを破れる者はおらんのか？

「じゃあ、精神を操るような魔法を使つていないと神様に誓えますか？」

カラミティちゃんに問われ、俺はフイツと視線を逸らす。

「あつ！ ホラ！ やっぱり！」

「いえ、違うのです精神に影響を及ぼす魔法は使っているけど、この男には使っていないのです」

「じゃあ誰に？」

「それは……」

お前に！ 死にたくなるような記憶を封印するのに使つたんだが？ でもそれを言えるワケも無い。

結局、それからなんとか落ち着いて貰うまでに、大変長い時間を必要とするのだった。それでも俺は信用して貰えず、結局カラミティちゃんの身柄は木村の預かりになってしまった。

でも、勝手に傷ものにしたら所有権を持つ俺が許さない。って念を押ししたのでウハウハハーレムルートは阻止できた。ほっと一安心である。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「境界地の土地の権利を示す石版はこちらにある事、そしてボイザンに大怪我を負わされたカラミティを異国から来た聖女、ユマ姫が治療したことを大々的に公布しました」椅子から人間に戻ったりヨン氏が作戦の進捗を語る。

まず、カラミティちゃんが攫われた事は知られていたものの、事の顛末までは世間に公表されていなかった。

ポンザル家にとつてみれば恥であるし、ブラッド家としてもカラミティちゃんの今後を考えると公にするのは憚れたからである。

それを大々的に公表すると同時、境界地の権利がブラッド家に移った事を発表すれば、当然その補償として支払ったのだと思われる。

盗まれたモノだ！ とポンザル家が騒ぎ立てても、怪我が治つたとみるや手の平を返したと思われるって訳。

加えて俺の名前はプラヴァスでもそこそこ知られている。

魔法で怪我を癒やす聖女にして、悲劇の姫。他にも物騒な噂が幾つか……。

そんな人物がブラッド家についた。そして麻薬撲滅を大々的に訴える状況は、ポンザ

ル家にダメージを与えるに違いない。

「じゃあ、後は相手の出方待ちってトコか？」

「いや、聖女と言ってはみたモノの、怪しげな異種族の姫と警戒する人間も少なくない。ユマ姫の名声を高める事が重要になる」

あからさまに気が抜けた田中の態度に木村が釘を刺すが、俺は俺でクソ暑い中ドサ回りなどゴメンと釘を刺す。

「名声と言ってもプラヴァスは王都以上に魔力が薄いです。大々的に魔法を使って怪我を治す訳には行きませんよ」

やあやあ聖女ですと出て行つた先、我も我もと集られては魔力が保たない。大混乱に陥るのは必至だ。

ただでさえプラヴァスは魔力が薄く、俺には辛い場所。魔石を食べるのも体に大きな負担となるし、数人を治してギブアップでは不公平感が増すばかりだろう。

「麻薬の撲滅運動に寄付を募り、その額に応じて治療を行うしかないでしょうな」
リヨンさんの提案は現実的なモノであるが、それでは庶民から巻き起こるユマ姫大フィーバーとはならない。

王都と違い、大劇場も無いので演劇って線も無理。小劇場は歌が中心なので音痴の俺には無理と来た。

俺の好感度を上げることでプラヴァスの国民を王国寄りにしつつ、麻薬に対する啓蒙まで同時に行う一挙兩得作戦は暗礁に乗り上げた。

取り敢えずは麻薬に対する啓蒙は後回し……と思ったのだが。

「でも麻薬のせいで学校にも通えない子が増えているので心配です」

そう訴えるのはカラミティちゃん。彼女がボイザンに酷い乱暴を受けたと発表してしまつた手前、今後の活動次第で彼女の名誉にも関わる問題になると、この場に同席して貰っていたのだ。

聞けば、最近は麻薬欲しさにドロップアウトする学生も少なくなるとか。本人にその気が無くても親が薬漬けになつてしまえば学業を続けるのも難しくなる。

「なるほど、若年層へ広がっているのは問題だな」

「啓蒙活動をするにしても、子供相手なら情報の伝達が早いかも知れません。偏見も無い分、ユマ姫の人気に火がつくのも早い」

「ガキつてのは、暇さえあればおしゃべりしてるからな、良いんじゃないか？」

そんなこんなで、俺は学校に講演に行くことになつてしまつた。

アレだ、たまに警察署の偉いさんが交通安全集会に来る感じに近いだろう。楽な仕事だし、俺としても否やはない。

「では、カラミティ。お前がしっかり案内するのだぞ」

「え、えええ？ わ、私がですか？ キイムラさんじゃなくて？」

だが、否を訴えたのはカラミティちゃんだった。リヨンさんの言葉にイヤイヤと首を振る。

「当たり前だろう、学校ならお前が詳しいし、何より魔法で助けられたのはお前だ。ユマ姫の奇跡を語るのにお前程の適任はいないだろう」

「ぜ、全然記憶がないんですけど……」

狼狽えるカラミティちゃんだが、俺が自分で自分を凄いと云ってもコントにしかならないから仕方が無い。

「うう、やってみます」

何とか了承して貰えたモノの、どうにも乗り気じゃない様だった。

麻薬ダメ、ぜったい!

「それでは、聖女様の魔法で奇跡の復活を果たしたカラミティさんのスピーチです」
名前を呼ばれ壇上に上がった私は、ヤケクソ気味に原稿を読み上げる。

「ご紹介に預かりました、カラミティです。私は、この春、麻薬にまつわる恐ろしい犯罪に巻き込まれてしまったのです」

ここは学校の講堂。眼下にはクラスメイトをはじめ、全校生徒が揃ってる。

表彰されることは何度もあったし、代表でスピーチする事だつてあったけど、こんなに気が乗らないスピーチは初めて。

でも、名門と言われるブラッド家の末席に連なる者として、無様な姿は見せられないよね……

「……そうして麻薬で体調を崩していた私はユマ姫様に救われたのです」

——パチパチパチパチ!

万雷の拍手。中には泣いている生徒までいる。結局、私は澆刺とスピーチをこなした。こなしてしまった……

偉そうに色々言っただけど、私は全く記憶に無いの。全く身に覚えがない事をスピーチ

するのは初めてで……

正直言つて、すつごく罪悪感。

だけどやらない訳には行かないよね。なにしろ最近の我が家はまるつきり様子が変わつちやつたんだもん。

以前はポンザル家の攻勢に、みんながイライラと不安を抱えてた。それが私には嫌で嫌で仕方無くて、ここから連れ出してくれそうなキムラさんがホントに王子様に見えるんだ。

だつて、このままじゃ豚みたいな男に嫁がなくつちやいけないんだもん、まともな顔だつたら付いてるだけで上等だよ。

だけど、水不足からポンザル家の力が一層強まると、状況は一変。やつぱり豚の嫁にならなきゃで毎日が死にたいほどに憂鬱で、非行少女みたいに遅くまで遊び歩いたりした。

……そんな事をしていたからかな？ 罰が当たつたのは。

ある朝目覚めると皆が皆、ニコニコと笑顔が絶えず気持ちが悪いくらい。いつも難しい顔をしているリヨン叔父さまなんて、私と同じぐらいの女の子の椅子にされ、それでも笑顔を振りまく始末。

その女の子こそ、あのユマ姫だったの！

それだけじゃない。あんなに頼りになると思っていたキイムラさんまで、ユマ姫に完全に骨抜きになってるし!

きっと、みんな、あの魔女に操られてる!　なのにそんな魔女を私は聖女として紹介しないとイケないなんて!

「それではいよいよユマ姫様に登壇して頂きましょう。皆さん拍手でお出迎え下さい」
ユマ姫を呼び出す私の笑顔。引き攣ってなかったかな?

大の男が三人揃って、ユマ姫をどうやって人気者に出来るのか……なんて事を大真面目に話してるんだもん。みんな絶対におかしくなってるし、口を挟むなんて出来っこない!

我が家で正気なのは私だけ。でもそれだって、いつまで保つか自信が無いよう……
なんせ、私だってユマ姫を見るとドキドキが止まらなくて、ちつとも冷静じゃ居られない。

「皆さんありがとう、ユマ・ガーシエントです。今日は麻薬の危険性についてお話しに来ました」

私は壇上で生徒達の歓声に応えるユマ姫の様子をジッと見つめた。

見たこともない桃色の髪に、これまた見たこともないキラキラ光る純白の衣装。男子達が熱狂するのは当然と思う。

だけど、女の子である私まで、ドキドキするのは異常だよ！　ウソみたいだけど夜にはユマ姫とキスする夢まで見るんだよ？

欲求不満の男の子ならいざ知らず、私にそんな趣味はないのに！　きつとコレもユマ姫の魔法に違いないんだ！

私はそつと夢の内容を思い出す。

眼前に迫るユマ姫の恥ずかしそうな瞳、上気する頬、芳しく甘い体臭、そして蕩けるような舌と唇の感触まで、全てが夢と思えぬリアリテイでいつも私を追い詰める。

うう、頭がおかしくなりそうだよ……誰か助けて。

そして、唯一の安らぎの場所だった学校まで、魔女の手が伸びている。しかもそれを手引きしているのが私自身なんだから堪らないよ。

ユマ姫のスピーチを聞きながら、恐るべき魔法の対策を考えていた時だった。

——キャー——！

響いたのは甲高い悲鳴。

「刺されたぞー！」

「取り押さえろー！」

壇上に居たから、その様子はハッキリと見えた。一人の男子生徒が血塗れのナイフを持っている。

最近、学校に来ていなかった不良の男子生徒。すぐさま大人達に組み伏せられたけど、刺された女生徒は大怪我。

……そして、刺されたのは。

「フィナちゃん」

嘘だと思いつつも、フィナンテイちゃんの名前を叫んでいた。一番の親友で、図書館でキムラ様との事をからかわれたつけ。

だけど、まさか……

慌てて駆け寄ると、私の友達ばかりが集まっていて、中心で倒れているのはやっぱりフィナちゃん。

「……そんなー!」

腹が裂け、腸がはみ出す程の大怪我。コレではお医者様が来るまで、命が保つかどうかもわからない!

打つ手が無い……友達こそが今の私の支えなのに、それさえも失うなんて……目の前が真っ暗になり、吐き気までこみ上げる。

そんな私に、なんでか他の友達が縋りついて来た。

「ラミちゃん!」

「フィナちゃんが!」

「助けてあげて！」

「え？」

そう言われても、私にはどうしようもないよお！

「早く、ユマ姫さまにお願いして！」

「聖女様の奇跡を！」

「ラミちゃんの時みたいに」

「……それは」

私は歯噛みした。仕方無くついた嘘が、こころも早く自分に牙を剥くなんて！

こんな大怪我を治す方法などあるはずないよ。きつとみんな麻薬みたいな薬で騙されているだけ……

そうだ、フィナちゃんはこんなにも苦しそうなだから、せめて麻薬で……

「ツ!!」

その時、ドクンと胸が高鳴りました。そうだ、麻薬は素晴らしいモノ。早くフィナちゃんにあげないと！

麻薬は素晴らしい？ どうして？ うっ！

突然の頭痛に踞る私を無視して、皆は壇上のユマ姫の前にフィナちゃんを運んでしまった。

なんで? どうして? そんな事したら、怪しげな術で奴隷にされちゃう!

「止め! 止めて! お願い!」

慌ててそれを遮ると、皆が必死に私を責めるのです!

「なんで? ラミちゃん! このままじゃフィナちゃんが!」

「だ、だつて!」

助かつても、それじゃフィナちゃんが! フィナちゃんまでおかしくなっちゃう!

「うう、だつて、それじゃユマ姫に! ユマ姫が! せめて、せめて私で!」

私はユマ姫に必死にお願いする。フィナちゃんまで変になるのが怖かったから、せめて私だけでと言う思いだった。

「そ、そっか!」

「ユマ姫様!」

「私達の命も使つて下さい!」

?? 皆の言っている意味が全然解らない。だけど、思い出した。ユマ姫の魔法は、生命力を削つて発現するという『設定』なんだつた。

そうしないと怪我人が引きも切らないから……つて事だけど、体の良い言い訳に決まっている。

そのハズなんだけど……

「皆さんのお気持ちは、ハッキリと伝わりました。それだけで十分です」

ユマ姫は自信満々に出血が激しいフィナちゃんの前に進み出してしまう。

そして……

「大丈夫？ ゆっくりと息をして」

「ハア、ハア……」

フィナちゃんになにかを嗅がせてる！ 私には解る、アレは！ 麻薬！

……どうして麻薬だと解ったのか。それは不思議な感覚だったけど、それでも絶対に間違いない！

やっぱり魔法なんて嘘っぱち。変な薬を嗅がせて、みんなを騙してるんだ！

『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給

え』

「え？」

なんでなんで？ フィナちゃんの傷がみるみる塞がって行くんだもん。

ま、まさか本当に？

ウソみたいに静まり返っていた講堂が、塞がった傷口を見て一転、ワツつと沸いた。ユマ姫と叫ぶみんなの声が収まらないほど。

「やった！ やったよラミちゃん！」

友達が次々と抱きついてくるんだけど、何が何だか……
 だけどその時、悲痛な声が喜びに沸く空気を引き裂いた。

「ああっ！ 髪が！」

なんてこと！ ユマ姫の髪色が桃色から白銀に変わっちゃったの！

それでもやつぱり美しいけど、色素の抜けた髪色は病的で、なんだか儂げに見える。
 まさか、本当に命を削って？

混乱する私を余所にユマ姫はひと言。

「麻薬は人を狂わせます。あの男子生徒もそうでした。麻薬は自分だけでなく周りの友人を傷つけるのです。もちろん私だつて傷つきます。ですから麻薬だけは絶対に許さないで下さい」

どの口が！ と苛立ったけど……フィナちゃんが助かったのは事実。

ユマ姫の真実が、私には解らなくなったのです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

結局、ユマ姫の魔法は本当と言う事なのでしょう。

だったらあの麻薬は？ それに皆の様子は？

私には解らない事ですが、学校の皆が一遍にユマ姫のファンになってしまったことだけは間違いありませんでした。

「今、ユマ姫様って何をしてらっしやるの?」

「ねえ、ブラッド家に行っても良い?」

翌日から、皆は口を開くなりこんな様子。コレじやあまるで家と大差がないよ。

なにより怖いのが、怪我を治して貰ったフィナちゃんの入れ込みよう。

「私、ユマ姫様の侍女になりたいの! 姫様の傍には強そうな剣士様は居たけれど、女性
は居なかつたでしょう? アレではユマ姫様が可哀想よ!」

そんな事まで言い出して、やる気満々。もう見ていられない。

「だ、大丈夫だよ。怖そうな侍女のお姉さんが居たから……」

「そうなの? でも、私絶対に負けないわ!」

うう、アレは絶対に戦っちゃいけない人だよ……目を覚まして、フィナちゃん!

侍女のシヤリアさん。彼女の蛇みたいな目を思い出すだけで、私は震えが止まらなくなるぐらい怖いんだよ。

でも、なぜかシヤリアさんとキスする夢まで見るんだよね、ひよつとして私ヘンタイ
になっちゃったのかな……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

渾身のスピーチに飽き足らず、回復魔法まで披露した俺は、久々の『学校』の空気に
感動していた。

どうしたって前世の事を思い出してしまふ。

あるいはニヤニヤ顔で相席する、黒衣の男が原因かも知れないが。

『そういやさ、あの暴れ出した生徒はお前の仕込み?』

『失敬な! 俺はそんな悪辣じゃネーよ』

学食にお邪魔し昼食としてトカゲ料理をお淑やかにつついていたら、田中が俺に尋ねてきた。

『にしても、都合が良すぎねえか?』

『まーあからさまにキメてる奴が居たからな、運命光も薄いし、様子をみたシャリアちゃんも間違い無いって言うんでさ』

『そんで?』

『ゼスリード平原を覚えてないか? 俺が魔力を込めてひと睨みすりゃ、意志が薄弱な

奴なんてイチコロよ』

『ハチャメチャに悪辣じゃネーか!』

そう言われても困る。恐怖に駆られて暴れ出したアイツが悪い。弓矢があつたら俺に射かけたんだろうが、ナイフで関係無い奴を刺すとは流石に想定外。

正気を失う麻薬の怖さを実演したかっただけなんだが、結果最高のデモンストレーションになった訳だ。

『その髪、大丈夫なのか？』

『ああ、魔力が抜けただけだよ』

魔力が薄い土地で、魔法を使えばこうなる。単なる魔力欠乏状態だが、寿命を削つたと見てくれるなら都合が良い。

『無理してねえか？』

『そうでもない。確かに回復魔法はすり減るんだけどさ、麻薬で痛みを飛ばせば通りが良いんだ。やっぱ痛み止めとしての効果は凄いで』

『使いよう、ってことか』

『だな』

痛みで苦しんでる状態では、回復魔法は中々通らない。治療の為にぶん殴って昏倒させる事もままあるほど。

それぐらいなら麻薬の方がなんぼかスマートだ。昏倒させても無意識の抵抗はあつたりするが、幸せにマツタリしてくれる麻薬の方が更に都合が良い。

『麻薬欲しいな、マジで』

あの麻薬は男子生徒のポケットから拝借しただけ、俺は麻薬を一切持つて居ないのだ。

『いや、駄目だろ。シャリアちゃんに持たせるから我慢しろ』

『えー俺も使いたいよ。誰よりも辛い目に遭ってるんだけど?』

『やっぱり自分に使うんじゃないか! クソロクでも無い未来しか見えねえよ! 自重しろ!』

うーん、まだまだお薬に逃げる事は許されそうにない。精々、帝国を打倒してから楽しみたいと思います。

お家騒動

「ポンザル家で騒ぎが起きた。どうやら、バイロンとドネイルは放逐されたらしい」

リヨンさんのシヨッキングな報告からその日の会議はスタートした。

ドMがやつと鳴りを潜めたと思つた途端にコレ！ 全く驚かせてくれる。ドSにジヨブチエンジしたんじゃあるまいな？ 話が全然掴めんぞ！

疑わしげに眉根を寄せる俺の頭を田中が雑にかき混ぜながら尋ねる。

「そんで……どうなるんだ？ 一件落着か？」

「逆だな、麻薬撲滅が広く叫ばれるようになるや、バイロンとドネイルは帝国と手を切ろうとしていた」

「で、クーデターを起こされたってワケか」

「そうだ、ポンザル家は薬が手放せない人間が大半だったと言う訳だ。そう言う意味では私も危なかった。麻薬への啓蒙が進まぬ内に強硬に禁止を訴えていたら、私の立場も危うかったかも知れぬな」

悩ましげに眉根を揉むリヨンさんの横顔は、なんともカツコイイ。

……これでドMでさえ無ければなあ。

とか思ってたなら、キリツとした顔でコツチに向き直った。ドキツとするので止めて欲しい。

「それもコレも、ユマ様が麻薬の危険性を訴えてくれたお陰です。本当に感謝します」「良いのです、本当に憎むべきは帝国。その為には労を厭いません」

「ありがたき幸せ」

軽々しく頭を下げちゃう感じ、まだちよつとドMが抜けてない気がするな。まあこの程度は好都合。

「と、なれば後は慎重さが欠け、過激になったポンザル家を堂々と叩けば良いだけでしょうか？」

「ポンザル家と改め、今はルードフ家ですな、ですが側近のルードフがバイロン達をほぼ無傷で追い出せたのが気に掛かる」

「何か裏があると」

「恐らく帝国でしょうな、奴らが協力して首をすげ替えた可能性がある」「なるほど……」

うーん困ったな。あのオツサン達の首で解決と思っていたのだが、首にする前に首にされた感。

ん？ そう言えば？

「放逐？ バイロンとドネイルは生きていますか？」

「それが……今朝、バイロンからの手紙が届いたのです。伝説の聖女様には是非会いた
と」

「罨でしようか……」

「そうかも知れません」

などと悩んでいたのだが。

「違うと思いますね」

手を上げたのは木村。

「恐らく二人はカラミティちゃんの回復を聞き、聖女の魔法に希望を見出したのでし
う。だからこそ行動を起こしたとすれば辻褄が合う」

なるほどな、あり得る話だ。やつらは麻薬だけじゃなく重金属中毒にも苦しんでい
らしいから、その苦しみは相当なものだろう。

俺達はバイロン達に会いに行く事にしたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

手紙に記されていたのはプラヴァスの端。寂しい場所にポツンと建ったおんぼろ小
屋だった。

「随分と、うらぶれてますね」

言いながら、俺は髪に張り付く砂埃を払うのに必死。その髪色は綺麗なピンク。

万が一を考えて、魔石を使って魔力を補充しておいた。

そんな俺を眩しそうに見つめるリヨンさんが、恭しくも報告してくる。

「着の身着のまままで逃げ込んだ様ですから、こんなものでしょう。奴らに敵意がないことは確認済みです」

「でしたら、入りましょう」

そうして小屋の中へとお邪魔した。もちろんリヨンさん率いるブラッド家の皆さんで身体検査は済んでいる。中にはナイフ一本無いとの事。

「良く来たな……」

出迎えたのは、バイロン。劇場で見た時はオラオラ系のスケベ親父って風情だったが、脂ぎった押し強さはスツカリしなびていた。

「ああ、やはり美しい」

へたり込んだまま、陶然と見上げてくるのはドネイル。コイツはゴキゲンに歌ってた方の冴えないオツサンだが、やつれてしまつて見る影も無い有様だ。

二人とも生命力を感じないし、運命光も弱い。麻薬の影響だろう。

そして、そんな二人に輪を掛けて酷い状態なのがベッドの上の老人だ。

「あ、ぐうううう!!!」

枯れ木のような体のドコにそんな力が？　と思うほどに大声で呻き、暴れようとする体はベルトでベッドに固定されている。

舌打ちを漏らした田中が顎でしゃくった。

「コイツは？」

「親父だ、死にかけてる。治せるか？」

応えつつも、バイロンは真つ直ぐに俺だけを見つめる。よせやい、照れるぜ。

「少し、難しいかも知れません」

「……そうか」

うなされている人間は、健康値を振り絞っている状態だ。魔法は中々通らないし、下手に通せば健康値を大きく削って殺してしまうことになる。

俺の言葉は半ば予想通りだったのか、二人に諦めムードが広がった。実際、どんな医者に診せたって、こうも暴れる患者に処置を施すのは難しいだろう。

でも、そういう時の為にアレがあるのでは？

「ですが麻薬を少量処方するか、睡眠薬を使って大人しくすることが出来れば或いは……」

「駄目なんだ、親父はケシを食い過ぎて殆ど効かない、効くほど飲めば命が危ない」

眩くドネイルは力なくうなだれていた。

「それに、そんなんじや麻薬依存はどうにもならねえ。違うか？」

そして、苦々しげにバイロンが問う。

実際、その通りかも知れない。カラミティちゃんには攫われたコト自体を残らず忘れて貰った訳だが、麻薬を常習していた人間にソレは叶わない。

麻薬の記憶が残る限り、依存症は治せない。

……いや、或いは。

「より、強烈な刺激があれば……」

「馬鹿言うな、ケシより強い刺激なんてある訳ねえ」

……確かに。うーん、まあソレは置いといて。

「でしたら、お二人の体の痛みだけでも取り除けるかも知れませんか？」

「本当か？」

「ええ、確約は出来ませんが」

事前に聞いていたとおり、ポンザル家は体の痛みに苦しんでいた様子、二人は腰を浮かせて食いついてきた。

コレが木村の予想通り重金属中毒ならやりようはある。そうでは無く他の重病だとしても、寛解かんかいさせる程度なら可能だ。

コレもまた、俺を受け入れてくれなければ魔法が通らないので絶対じゃ無いのだが

……

と、ソコに木村が割り込んだ。

「おっと、その前にポンザル家について話してからにして下さいませんか？」

「オイオイ、効くか効かないか解らんのに、ペラペラ喋れるか」

「交渉出来る立場と思っているのか？」

リヨンさんが凄むと、舌打ち一つ、バイロンは細々と語り出した。

数年前から、体の不調を訴える者が続出したこと。

地下水路から帝国が現れた事、麻薬を売りつけ武器も渡された事、奴らが境界地を欲している事。

全てが俺達の予想通りであった。

こうして聞くと全てが怪しい。呆れた様に田中が吐き捨てる。

「まんまと騙されやがって」

「俺だって、奴らが地下水路に何か混ぜたって事は考えたさ。だが奴らコツチの地下水だつて気にせず飲むしな」

……少量飲む程度なら問題ないのだろう。或いは対策があるのかも知れない。

「だいたい、麻薬で商売するために毒まで撒く必要はないだろ？」

ドネイルは苛立たしげに付け加えるが、ソレは彼らが砂漠の民であり、井戸に毒を撒

くなど神に唾吐く所業だと思ひ込んでゐるからだ。

だが、奴らにしてみれば井戸どころかプラヴァス自体を滅茶苦茶にしても構わない。「奴らが境界地を狙っている理由は？」

苛立たしげにリヨンさんが訊ねると、二人はきよとんとした顔をした。

「そりや、おまえさんの方が知ってるんじゃないのか？」

「俺達はてつきり、ケシより強力な麻薬でも作るために王国と奪い合ってるんだと思つてたんだが」

「なに？」

コレにはリヨンさんも目を剥いた。ポンザル家がこの後に及んで何も知らない？

いや、知らないどころか……

「何も無い……のか？」

遺跡の一つや二つ、あるのだろうと思つたが……じゃあ奴らは何の為に？ 静まり返る一同はいつの間にか一人の男の言葉を待っていた。

木村である。

コイツだけは思うところがあるのか一人考え込んでいた。

「ひよつとして……」

ぼつりぼつりと語る所は、意外なモノ。

「霧の悪魔の補充？」

「ああ、使えるのかも知れない」

曰く、境界地に満ちるのは地球の健康値。だったら人間の健康値を削りながら霧の悪魔の霧を補充するよりも、ずっと大量の健康値を幾らでも補充可能かも知れない。

「帝国では最近、流行り病で全滅する村が多いと聞きます」

「そりゃあ……」

間違いない、帝国が霧の悪魔の補充をしているのだ。

エルフの王国奪還時に、多くの霧の悪魔を俺達は奪取した。あんなモノが現代の技術で作成可能なハズも無く、どこかの遺跡で出土したモノだろう。大きく増えることは無いだろう。

だとすると、残り少ない霧の悪魔はより多くの健康値を吸収せねばならないハズだ。

そして、全開で稼働する事になった霧の悪魔はどうなるか？ 村ごと滅ぼす程の災厄になるに違いない。

「胸くそ悪いぜ」

苛立った田中が思いきり床を蹴つ飛ばすと、安普請なのか床材は甲高い悲鳴を上げた。

「ソレにしたって、境界地は広い。ドコでも良いのなら、それこそ他の場所でも良かったはずだ」

リヨンさん曰く、木村が用意したルビーの十分の一の金額でも、境界地の権利を貸す程度なら断ることは無かつたと言う。

「いや、そうなるも今度は輸送が問題になるでしょう」

そう言うのは他ならぬ木村。霧ギョルドスの悪魔は言わば精密機器である。整備する事も難しい現代で、砂漠を渡ってくるのは難しい。

「結局、ポンザル家の協力が必要ならば、ポンザル家の持つ境界地を買った方が早いってか？」

「それに、境界地の健康値を吸い取ってどんな影響があるかも解らない。万が一健康値の膜が壊れて、呪いと恐れられる紫外線がプラヴァスにまで降り注いだらどうなりますか？」

問われたリヨンさんは音がするほど食いしぼり、苦しげに呻いた。

「即刻叩き出すだろうな、金は全額返金する」

「でもよ、土地を買い取っていたとしても、市民の反発は間違いないねえぜ？ ああ、そうかよ！ だからプラヴァスは麻薬で滅んでくれた方が、いつそ都合が良かったってオチか」

呆れた様に田中が天を仰ぐ。皆が事の重要さを理解し、空気が重くなる。

だが、肝心のポンザル家の二人には意味が解らない様だった。

「ちよつと待てよお、プラヴァスが滅ぶ？ どう言う事？」

「アイツら、何を企んでやがった!？」

そう言われても俺達に説明は困難。代わりにリヨンさんをお願いした。

曰く、プラヴァスでは境界地は神の領域で、その結界が外の呪いを防いでいると解釈しているらしい。それを吸収するのが帝国の狙いだったと噛み砕いて説明していた。

「ウソだろオイ？ そんな事が可能なのか？」

信用出来ないと言うボーザンだが、別に信用して貰わなくても構わない。

それを横目に見ながらも貧相な椅子に腰掛けて、俺はホツと息を吐く。

「何にせよ、一旦危機は回避されたと見て良いのでは無いですか？」

「そうですね……」

皆からも異論は出ない。

なにせ、境界地の権利書である石版は抑えた。麻薬への忌避感も広がって、プラヴァスが混乱する予兆も無い。地下通路のタネも割れた。

こうなれば繊細な霧の悪魔をノコノコ運んでくることなど出来ないだろう。

境界地に霧の悪魔を並べ始めた時点で、違法占拠だとリヨンさんは堂々と軍隊を動か

せる。霧ギョルドスの悪魔が戦闘に巻き込まれるのは必至だ。

少なくとも、ゆっくりと健康値の吸収などさせないだろう。大量の兵士に守らせようにも、その兵士達の健康値だって吸い取られてしまうのだから配備も出来ない。

こりや八割方解決と見て良いのかな？

ホツと息をつく俺をドネイルが焦れたように急かした。

「もう良いのか？ だったら治してくれよ」

「……まあ、良いでしょう」

結局、大した情報は聞けなかったが『何も無い』と言うのも大事な証言か。

「では……失礼して」

俺はいそいそとドネイルに近づくと、彼の膝上にちよこんと腰掛けた。俺の背中がドネイルへと密着する。

「なっ？ え？」

「だめ？」

お姫様らしい威厳を引っ込めて、グイツつと背中を反らせれば、俺を見下ろすドネイルと目があつた。

俺はそのまま、上目遣いに小首を傾げる。

あまりに幼い仕草だが、俺はまだ十四歳。似合わないってコトは無いだろう？

その証拠にドネイルはドギマギとしつつも嫌そうでは無い。

「ダメじゃ無い、けど……」

「よかったー、へへ」

「うあつ！」

有無を言わず背中にも体重を預ける。するとドネイルの奴、後ろから抱きしめてくるではないか！

いや、そういうサービスはやってないんですよー！

「もう、パパのエッチー！ 触らないでよー！」

「ば、パパー！ パパ？ パ・パ・パ・パ・パア」

茫然自失、壊れてしまったドネイルさん。

恐らくは三十の後半。俺ぐらいの娘が居ても全く不思議では無い年齢だが、どうやら独身。愛人、子供も一切ナシの仕事人間だとか。

そういう人間にこそ、『コレ』は効く！

「エッチなのは大きくなつてからだよ！ おつきくなつたらパパのお嫁さんにしてくれる？」

「も・も・も・も！ モロチン！」

などと、意味不明の供述をしている所に追撃を入れる。

「良かった！ 私のコト受け入れてね！」

「!!」

既に言葉も無く、真つ赤な顔をひたすらに縦に振る玩具みたいになってしまった。

こうなればしめたもの、魔法がメチャメチャ良く通る。

『我、望む、この手に引き寄せられる、体を蝕む青金あわがねよ』

思い出すのはセレナに埋まった銃弾を摘出するとき。あの時は鉄だとハッキリ解つたが、今回は微細な重金属。その正体は鉛か水銀か、はたまたカドミウムか？ なんにせよ重金属は青い金属に分類される。この魔法で良いはずだ。

エルフは鏡を見るのが好きなのだが、工房ではたまに水銀中毒になる職人が出るのだとか。コレはその対策魔法である。

「あつグエツ！」

体中から害になる重金属を寄せ集めると、どうやら苦しいらしくドネイルは激しく嘔吐えずいた。そー言えばこの魔法はメチャメチャ痛いつて本に記載があつたつけ。

でも、このままでは抵抗が増してしまう。うーん困つた。どうする？

「パパッ！ 大丈夫？ 頑張つて！」

手を握つて必死に応援だ！ すると、ドネイルは弱々しくも笑つて見せた。

「さ、こんなのへっちゃらさ」

はい、チヨロい。

一気に魔力を流すことに。

「ぐわああああ！」

なんかのたうち回ってるけど、大丈夫！ 必死に俺の魔法を受け入れてくれている。

「ぐええええ」

胃に集めた重金属を胃液と一緒に一気に引き上げる。汚いね。

蹴飛ばし部屋から追い出すと、外からゲロゲロ音がする。

「ふう、一仕事終わりました」

「お嬢ちゃん、ヒデえな」

バイロン氏はそう言うが、アレが一番文化的なやり方だ。

一般的にはぶん殴って昏倒させたり、勝手に一服盛って衰弱させてから治療したりするんだぞ？

それ以外で言うと、カラミティちゃんにやったみたいな魔力での飽和だが、こんなオツサンとローションプレイは御免である。

それぐらい、魔力を体の隅々まで通すのは難しいのだ。

おんなじコトを鉄分に対してやってしまったら、血液はその役割を果たせなくなるばかりか、血栓だらけになってあつという間に死ぬだろう。

相手に殺されても構わないと思わせて始めて、コレほど深く魔法を通せる。そう言う意味ではドネイルは何というか、性癖？　が解りやすくて良かった。

そして俺はジツとバイロンを観察する。

「……………」

「……………んだよ！」

その点、このスレたオッサンは面倒臭そうだ。可愛い妻子だつて普通に居るらしいし、さっきの手は通用しないだろう。

そうなるとアレか、殴つて昏倒コースしかないか？

「手を」

「？　ああ」

俺はバイロンに握手を求める。この世界にも一応は握手みたいな習慣はあるし、手相を見て治療を決めるのも珍しく無い。素直に手を出してきた。

で、その手を思い切り捻る！

「グハッ！　オイ！　何をする！」

苦情は無視、シヤリアちゃん直伝の暗殺テク。合気道みたいな技でバイロンを地面に転がせば、ピン止めされた虫みたいに動けない。護身用にもなるから必死で覚えた技の一つ。

「クソツタレエー！」

しかし悲しいかな乙女の細腕。鍛えたオッサンの馬鹿力に長時間抗えるハズも無い。バイロンは無理矢理立ち上がってしまう。

そうして振りほどかれる瞬間、今度は無防備な首筋に足を搦めて背後から締め上げる。

「ぐおおおお、テメエー！ なにをー！」

無視！ そのまま海老反りに反動を付けて、再び地面へと引き倒す。ぐちゃりと潰れて失敗したフランケンシュタイナーみたいな感じになった。

「いい加減にー！ グウツ」

「……………」

呻くバイロンを無視して脚力で必死に締め上げる。

威張り腐っけていても所詮は素人。シャリアちゃんの暗殺術を習っている俺に隙は無い。暗殺術には胸を叩いて相手を心肺停止にしたり、逆に心肺を回復させる秘技もあつたりで色々とお奥が深いのだ。カラミティちゃんもそれで助かったんだつてさ。便利だね。

体格差がある以上、下手に抵抗されると厄介だ、このまま一気に締め落とす。

「オガアー！」

だがこのオッサンも中々やる！ 俺のアラビアンっぽいダボダボのズボンを掴んで強引に締めを外そうとしている。

「がああ！」

「あう……」

咆哮と同時。ビリビリとズボンが破け、木村の短い悲鳴が上がるが、どちらも無視！ このままじゃ逆に投げ飛ばされる。俺はとつさにズボンを脱ぎ捨て、回り込んでマウントポジションを確保した。

「何のつもりだあ！」

地面からコチラを見上げつつも、吠えるバイロン。だけど今度は無視しない。

俺は陶然とした笑みを浮かべ、舌舐めずりさえ見せつける。

「もちろん、殴るつもりですけど？」

「なにっ？ グッ！」

オラア！ ポカンとした顔面に火の玉右ストレート！ 鼻が折れる感触と同時、柔らかな俺の拳もひしやげる痛み。

「けど、無視！」

「ぐへえ！」

今度は渾身の左ストレート。折れた歯が刺さって痛い！ コレも無視！

「テメエ！」

マウントポジションは圧倒的に有利と言える程では無い。特にこれほどまでに体格差がある場合は、一瞬にしてひっくり返される事も珍しくは無い。

「クソツッ！ クソツッ！」

だけど脱ぎ捨てたズボンが両手に絡まり、逆転を許さない。俺はドサクサに紛れてその両手を縛っていた。

「今からアナタをボコボコに殴りまーす、何か言いたいことはなあい？」

「テメエ、俺を治すんじや！」

「ふふふ、それが遺言？」

無邪気に笑って、ワンツーワンツー。容赦なく顔面を強打する。

「……………」

周りにはあらかじめ、こういう事もあるかもと伝えていたので一切の手出しを禁止している。

そう、これは殴って昏倒コースでは無い。

ズバリ、『苛めて屈服コース』。

コチラが上だと体に教え込み、魔法の通りを良くする方法だ。

……それにしても皆、揃いも揃って微妙な顔で見てくるのな。

田中は真顔だし、木村の笑顔は引き攣っている。リヨンさんに至ってはかぶりつきで、剥き出しのドMを隠そうともしていない。

羨ましいと顔に書いてあるワケだが、コレは実力で相手を屈服させることに意味がある行為。小娘に負けちゃうなんて！と思わせるプライド破壊技である。

だけど俺の見立てでは、どんなに不意を突いたところで本気になつたりリヨンさんに組み打ちでは敵わない。

それではただのプレイの一環でしかなく……いや、ソレで良いのか？

とにかくこの場合。自分が小娘にも負けれるクソ雑魚だと、心を折る事に意義がある。

そのままひたすら殴り続け、俺の両手が鮮血で真っ赤に染まる頃には、バイロンの悲鳴もだいぶ大人しくなっていた。

「あ、ぐう……」

汗にまみれ、興も乗って来た俺は、ズボンに続いて上着も脱ぎ捨てる。

「ふう……」

鮮やかに色付き火照つた肌に、輝くピンクの髪が張り付く。肌と髪、同色でありながら異なる質感を持つ二つのピンクの共演がもたらすグラデーションは、自分で見てもなんだかエロティック。

「おおー！」

「うへえー！」

そして外野も絶好調。リヨンさんと木村が歓声を上げる。その原因は俺の下着。「まだそれ着てんのかよ、お気に入りに入りか？」

田中が呆れるのも無理は無い。またまたマイクロピキニの登場だ。

いや、だって俺達の初対面はあの舞台。二人にしてみれば俺は聖女と言うより痴女なワケじゃない？ ああ時の印象が強烈で会いたいわって言うなら、そういう機会もあると思つてさ。

なんか俺自身、癖になつてきてる感じも無くは無い。なんだかニヤニヤと笑みが止まらない。

「ぎーこー！ 女の子に負けちゃつて！ もっと抵抗したら？」

「ぐつ、ぐううう！」

最後の一欠片まで抵抗を引き出して、ソレをへし折る。

これはその為の手段だから誤解しないで欲しい。断じて！

顔面だけでなく鳩尾も抉り、動かなくなるや金的を踏みつける。

「グゲッ！」

丸まってしまったバイロンを無理矢理に引つpegがして仰向けに寝かせると、俺はその

顔を足でグリグリと踏みながら訊ねる。

「ホラ、降参は？」

「わ、わがったあ、こ、ここうき……ふぐう！」

言わせない！ 俺はバイロンの顔面にどっかりと腰を下ろす。ケツで思い切り口を塞げばモゴモゴとしか喋れない。

「アハハッ！ 何言ってるかワカンナイんだけどお！」

「ぐう……」

もうスツカリ抵抗を無くしたバイロンにトドメを刺すべく、俺はオッサンの頭を太ももでギユツと締め上げる。

顔面には俺のケツ、側頭部には俺の太もも。嬉しいだろ？

嬉しいのか、悲しいのか、それとも血が上って苦しいのか。バイロンの顔が赤黒く染まり、気味が悪い程に血管が浮き出ている。

このまま幸せに締め落としてやろーっと。

「あの？」

ソコに突然、木村から肩を叩かれた。

「え？」

突然のおさわりにビククリしていると、怪訝な様子でバイロンを指差す。

「もう、十分じゃ無いですか？」

「……………」

一理、ある。

見ればバイロンはスツカリと俺に屈服しているようだ。

俺の沈黙を否定と受け取ったのか、木村は首を傾げる。

「ひよつとして、まだ？」

「……………いえ」

十分ですね。そうですね。

ちよつと調子に乗りすぎたみたいです。

こんな事ばかりしていると、いつどんな切っ掛けで、一転攻勢の催眠アプリでチンポ中毒にされるか解ったモノじゃ無いからね。よい子の皆は真似しないように。

そうして、俺はバイロンの重金属中毒を治療し、ついでに俺が傷つけた怪我も治療したのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、皆の容体が落ち着いた。俺はお姫様スマイルでニツコリと微笑む。

対して、毒が抜けたハズのバイロンは、むしろその毒っ気を取り戻した様だった。

「しかし、ヒデエ変わり様だな」

バカにしたような表情で、お澄まし顔の俺を笑うじゃないか！

コイツは！ まだ躰が足りんか？

「お嫌いでしたか？」

「……………」

艶然と微笑んでやれば、顔を赤くして言葉を失した。

再び意地悪な部分に火が付いた俺は、わざとらしく首を傾げて覗き込む。

「もう一度、体に教えてさしあげましょうか？」

「わかった、降参だ」

諸手を挙げて無抵抗を表明してくれたので勘弁してやる事にする。

「重金属中毒は良くなったと思いますが、麻薬に関してはどうしようもありません。耐えて下さい」

「ああ、麻薬なんて有ったなって位に頭の中からぶっ飛んだ、安心してくれ」

「僕もだよ」

バイロンとドネイル、二人には強烈な刺激となったようで、一時麻薬を忘れるぐらいは出来ているらしい。

「全く、もうちよつと早けりや親父も助けられたのにな」

バイロンが愚痴る所によると、親父さんはもう目が見えないらしいのだ。

俺がどんなに可愛くたって、目が見えないのなら仕方が無いだろ？

「それでも無いぜ？ お前さんの声は可愛いからな、歌でも歌ってくれりやあ親父だつて正気に戻るかも」

「苦手です！」

「……そうか」

名案だとも思っていたのか、バイロンは俺の強い否定にしよんぼりと項垂れた。

「ハッ、ポンザル家のバイロンともあろう男が形無しだな」

それを鼻で笑って見せるリヨンさんだが。椅子の背もたれを千切らんばかりの勢いで握っているのが怖い。どうやらバイロンへの仕打ちが羨ましいみたいです。

そんな和気あいあいとした空気を壊したのは木村だ。

「一つ気になる事があります」

「なんだ？」

「ポンザル家は どうして境界地の権利を手に入れたのですか？ 遙か以前は境界地でも何でも無かったと聞きますが」

「ああ……」

つまらなそうにバイロンが肩を竦める。

「何代か前の当主がな、当代の歌姫にズイブンと入れあげたみたいだよ。帝国と王国が

綱引きするのも構わず自分の屋敷に匿ったんだ」

「そのの褒美に土地か？ 逆だろう？」

鼻を鳴らす田中に、バイロンは舌打ちを返す。

「チツ、それなんだがな、どうも執事が裏切ったとかで家捜しが入ったワケだ。だけど歌姫は見つからなかった、何故だと思う？」

「地下水路か……」

答えたのは木村。

「どうやら潜ったこともあるらしい、トカゲ天国のロクでも無い場所だとか。」

「その時のポンザル家当主はよ、地下水路を知り尽くしてたとかで地下水路から歌姫を境界地の外に連れ出したのよ」

「それは？」

「知ってんだろ？ 境界地の外は治外法権。罪人が追放される場所。逆に言えばソコに居る分には誰もソイツを裁けない」

馬鹿馬鹿しい理屈だがな、とバイロンは吐き捨てた。

だが、聞き捨てならないとばかりに木村が叫んだ。

「オイ！ それじゃ境界地の真下にまで地下水路が続いてるって事じゃないか！」

「まあ聞けよ、当然そこにはいくつかの魔道具があったらしいがよ、当主は全部売っち

まったってワケ、歌姫を殺した遺跡のモノは何にも見たくないってさ」

「死んだのか？」

「そりやな、ソレで死体を抱えて懺悔しに当時の行政府に駆け込んだら、逆に喜ばれたらしいぜ？」

「……何故？」と問えば、当時のプラヴァスは帝国と王国の綱引きに参っていたらしいのだ。

どちらを取る訳にも行かず、いつそ支配地域の外で死んでいた方が面倒が無い。それも事故死なのだから百点満点と言う訳だ。

「それでも全くの無実ってワケにも行かず、賠償として地下通路に残された貴重な魔道具は残らず手放す事にしたんだと、境界地外の土地の権利はむしろ罰なのよ、その一帯の土地をやるからその場所の魔道具を探して、残らず売ってお金を作りなさいってな、ご先祖様は地下通路に詳しかったから大量に見つけたらしいぜ？ ブラッド家も随分潤ったらしいぜ」

「そう……か、確かに一時は魔道具の販売で好況だったと聞いていたが」

「それよ！ 堪らねえよなあ。手放すだけならともかく、地下通路から運び出せない分は地上から運び出したらしいぜ？」

「地上から？」

「そうよ、水源で使われてる浄化装置なんかはどうやっても通路に出ないからな。地上から男衆が呪いに苦しみながらも運び出したんだ。黒いターバンはその時の名残よ」

呪いに苦しんだバイロンのご先祖にはご愁傷様と言うしか無いが、それはつまり、結局の所境界地の下にはやっぱり遺跡があるってことじゃないか！

皆が話が違うと食ってかかると、バイロンは鼻で笑った。

「だから、百年からの時間を掛けて全部運び出しちまったよ！ あるいはがらんどうの空間だけさ」

そうは言うモノの、奴らは誰よりも遺跡に通じている。そう言ってもバイロンはソレこそ面倒とばかりに頭を掻いた。

「んな事言ったらよ、アイツらは帝国からコツチまで地下から来たんだろ？ アイツらの方がよっぽど遺跡を知り尽くしてるじゃねえか、掘り尽くした後の、んな小さい範囲に何かあるって言うんだよ？ それに一回境界地まで地下から案内したけどよ。あいつら道幅しか気にしてなかったぜ？ それこそお前達が言うギョルトス？ だかなんだかを運ぶつもりだったのかもな」

……なるほど、帝国から表に出さずに一気に境界地まで運べるならば奴らにとって都合が良い。

話の辻褄は合う。だとすれば地下通路をキツチリと封鎖しないとマズイ。その為に

どうするかを話していたら、何か思い出したのかバイロンが声を上げた。

「ヒデエ変わり者と言えば、帝国の魔女もなんか変だったな」

「クロミーネに会ったのか？」

「あたりめえだろ？」

身を乗り出す田中をバイロンは手で制した。

「ソレまでは、それこそ道幅とかを気にしてたんだが、アレを見てから様子がおかしかったな」

バイロンが言うには、子供が遊ぶ迷路のデカイのが壁一面に掘られている場所を見てから様子が一変したとの事。

「まさか地図か？」

「設計図かもしれません」

リヨンさんの疑念に、木村が別の可能性を付け加える。

一方で田中はつまらなそうにあくびをした。

「単純に珍しい壁だったのかも知れないぜ？」

そんな彼らを見無視してバイロンは続ける。

「とにかく奴らは急にせっかちになつてな、麻薬を大量に融通するからしばらく自分達に従ってくれと言ひ出してな、麻薬なんかより薬をくれと突っぱねたらこのザマよ」

「待てよ！ それじゃヤベェんじゃねえか！」

「慌てんなって、奴らは数人しか居なかった。帝国から応援を呼ぶにしろどんなに急いだってコトを起こすのに一月は掛かるだろ？」

「バカが！」

田中が声を荒らげ激昂した。まあ田中自身がモノの数日で往復しているワケだし無知なバイロンに怒るのも無理も無い。地下道があつて、魔導車もあるのだから、もつと早い移動手段があつても驚かない。

しかし、田中の懸念は別にあつた。

「大人数なんざ要らねえんだよ、アイツさえ居れば！」

父様……そうだ！ 私のお父様なら一騎当千。遺跡をひつくり返す事ぐらい出来るハズ。

だけど、父様は純エルフ。魔力が少ないプラヴァスで活動するには魔力が足りないはず……

そう言う意味では、生きている遺跡があつたとしても、どの程度稼働しているかは怪しい。

その時だ、リヨンさんの部下の一人。パノツサとかいう人が部屋のなかに転がり込んできた。

「大変です！ ルードフの奴ら、街で魔石商を襲っています！」
既に事態は動き出していた。

クーデター

追い出されたポンザル家の二人から話を聞いた後、魔石商が襲われているとの一報が入った。

プラヴァスは魔道具が少ない。だから魔石商も僅か一件しかないと言う。その原因は魔石自体の少なさから来るモノ。

魔獣は居ないし、地中から産出される事も稀。加えて魔力が空气中に溶け出し、魔石が目減りしやすいのだから普及しようがないワケだ。

だが、それでも命綱とも言える浄水器や、防犯用のライトなど、魔石の需要は幾らでもある。

なにせ魔道具自体は遺跡から発掘されるのだ。多くは輸出されてしまうが、有用な魔道具は貴族が確保している状態だ。

そうなると、数少ない魔石は貴重品。多くは政府が管理しているし、それ以外は貴族向けに認可された唯一の専門店が厳重に管理していると言う訳だ。

その魔石商が攻撃を受けている。生半な戦力ではあり得ない。なまなか

ポンザル家改め、ルードフ家は魔石を得るために相応の戦力を集めたに違いない。コ

レを鎮めたらこの騒動は仕舞いだらう。

「どこここはプラヴァスの端、中央に構える魔石商からはかなり距離がある。

狙われたのだろうか？ 俺達全員が中央を離れるこのタイミング。」

「いや、なにも旅に出た訳では無い。街の端から駆けつける程度、一瞬だ。なにせコチラにはバイクがある。」

「行くぜ！ 乗りな！」

「おう！」

『お、俺も！』

と、言ってる傍から田中がバイクを吹かせ、木村が後ろに跨がった。

「こうしちゃ居られない、俺も慌てて続こうとするのだが……田中は俺を乗せようとはしなかった。」

『わりいなのがび太、このバイクは二人乗りなんだ』

「いや、確かに二人乗りだけど！」

『だーれがのび太だ！ 余裕で乗れんじゃねーか！』

「こんな可愛こちゃんを捕まえてのび太とか！ それ以前に細身の木村に張り付けば、俺が乗れるスペースは十分ある。」

「チツ、自分の格好を良く見ろよ」

「……………」

うーん、押しも押されるマイクロビキニ。この格好で市街戦は無理ですね。露出狂にも限度がある。

俺は照れ隠しに王国軍が定める敬礼を決める。

「解りました、帝国の野望を挫き、プラヴァスに安寧を、そして私達に勝利を！」

我ながら決まったな、ビシツとしたポーズのまま答礼を待つ。

なのに、あろうことか田中は俺の敬礼を無視！ 不敬にもカラカラと笑うじゃ無いか。

「そんなエロい格好でなに格好つけてんだ！ コレでも着てろ！」

「きゃっ！ なんです？」

顔面にぶつけられたのは田中のコート。スパンコールでキラキラ光るアレとは違い、実用一辺倒の黒のロングコートであった。

俺の脳みそで汚れ、シヤリアちゃんにマントをしゃぶられた一件から、田中はたびたびコレを着ている。

ロングコートで未来的なバイクに跨がる姿は、SFチックで羨ましかったモノだ。

「完全に露出狂ですね」

俺が袖を通すとブカブカ。下にはマイクロビキニしか着ていないのだから、コレでは

ホンモノの露出狂だ。

「だけど正直、強い直射日光が肌に痛かったのでありがたい。ボロボロになってしまったアラビアン衣装では歩くのも難儀するありさまで、着るに着れなくなってしまうのだ。」

「じゃあ行くぜ」

「そう言い残してバイクは街へ猛然と駆けていく。そのスピードに木村が慌てるが、決してバイクは止まらなかった。」

「お、オイ、良く考えたら俺が行く必要ある？」

「バカ、俺だけじゃ魔石商の場所なんて解るハズねーだろう？」

「ハア、一年もプラヴァスに通ってその位も知らねーのかよー」

去り際まで騒がしい二人だが、俺にはソレが羨ましくて仕方無かった。

「なんだか精神的にも置いてきぼりにされたみたいで悲しい。そりゃ俺の『偶然』は死を呼び込むが、邪魔者扱いしなくたって良いではないか。」

切なげにため息を吐く俺を見たらからか、申し訳無さそうにリヨンさんが続く。

「ユマ様、私も万が一に備え国庫に向かいます、後の事はこのパノツサに」

「ユマ姫様、わたくしめが責任を持つて本邸までお送りいたします」

そりゃそうだ、国の大事だと言うのにリヨンさんが見物とは行かないだろう。完全に

部外者である俺にできる事は少ない、精々励ましの言葉を贈るぐらいだ。

「ご武運を、追詰められたとなれば相手はどんな卑劣な手に出るかわかりません、水源に注意し、風下にはなるべく立たない事をお勧めします」

「気をつけるべきは毒、そう言う事ですね？」

「ええ、ソレと魔女の目を決して見ない様に」

「……それは、貴女に言われたので無ければお伽噺と笑い飛ばす所ですが」

「彼女の力は私にも解らない事だらけなのです、決して油断しないように」

「承知しました」

言うなり大きなラクダに乗って颯爽と駆けていく。

一方で俺はパノツサと言うオツサンの後ろ、老成した大人しいラクダに乗せられた。

「スグに着きますからね」

そうは言うが、その歩みはあくびが出るほど遅い。

因みに行きはリヨンさんの後ろに乗ったのだが、同じラクダでもスピードが全く違う。

個体差を疑ったが、どうも敢えて遅く歩いている節が有る。なみあし常歩で時速5kmぐらいか？ このままでは二時間程度は掛かるだろう。

俺達が中心部に着く前に、全て終わらせる算段と見たね。

逃げ出しても良いが、パノツサさん以外に歩兵も四人、護衛としてつけてもらっている。振り切った上で毎度よろしくピンチにでも陥ろうモノなら、キチキチプリンセスの名を欲しいままにしてしまおうだろう。

こうなればやれることはまるで無い。退屈な砂漠をただ散歩するしか無さそうだ。

それにしてもココがプラヴァスの一部だと思えぬ程に、この辺りには何も無い。

逆に民家が点在するのが不思議なぐらい。畑でもあれば農場かと思うのだが広がるのは一面の砂漠だ。

「一体こんな所でどうやって暮らしているのでしょうか？」

「それはですね……」

パノツサさんが語るに、ここではフォツガと言う芋が採れると言うのだ。

「畑なのですか？」

「いえいえ、フォツガなど誰も育てませんよ、アレは勝手に生えてくるのです」

「勝手に？」

「ええ」

芋が勝手に生えてくる事などあるのだろうか？　しかし実際生えてくると言うのだから仕方が無い。なにせ世界中の動植物を集めた施設で育ったポーネリアの知識を『参照』しても出てこないのだから、全くの新種に違いないのだ。

「それにしてもユマ姫様は美しい。リヨン様が入れ込むのも解ります」

そんな事を考えていたら、パノツサさんが突然に危険球を投げ込んできた。

コレは探りを入れていなのだ。怪しいヤツを近づけさせないぞと言う意志を感じる。この返答は重要だ。

「そ、そんな！ 入れ込むだなんて。私なんてでんで子供扱いで、タナカさんやキムラさんの前だからってリヨンさんからかわれているだけです。む、むしろ私が……あ、あの！ リ、リヨンさんってカツコイイですよ？ 女の子から人気があるんじゃないですか？」

俺はとてども早口で、取り繕う様にまくし立てた。

「ええ、ええ。そうですね。カラミティ様の通う学校でも憧れる子が多いですよ」「やっぱり！」

こんなモンでどうだろう？

実際のところリヨンさんは俺に骨抜き？ なのだが、自分達のボスが一方的に他国の姫に惚れているとなるとどうだろう？ 恐ろしいのでは無いだろうか？

だからコツチも惚れている素振りを見せれば、警戒感は薄れるハズだ。

それで無理矢理くつつけようとして来るなら、種族の壁とかなんとか誤魔化せば良い話。

……つてか、實際問題カツコイイしな。

思い出すとちよつとドキドキするぐらいには。

俺がりヨンさんを思つてモジモジしていると、突然に背後からキツイ言葉を掛けられた。

「森に棲む者の姫、我らの主を誑かそうとしているのではないか？」

「そんな！」

顔を蒼白にして振り返れば、気の強そうな短髪の兵士が澄んだ瞳で馬上の俺を見上げていた。

俺は悲しげに顔を歪ませる。

「くっ！」

俺の顔をまともに見た兵士は二の句を引つ込め、続く言葉を飲み込んだ。

ヨシッ！ 俺は心の中でにんまりと笑う。

今の俺は目に涙を湛え、顔色も悪く、僅かに震えている。

演技だと疑つても、この位の歳の女の子がココまで出来るハズがないと常識が否定するのだ。

国を案じるまともな人であればある程、泣きそうな少女をそれ以上なじることなど出来はしない。

……だが、気になるのは兵士の声が高かったこと。

と、ここで我に返ったパノツサさんが、人の良さそうな笑顔をかなぐり捨てて兵士に怒鳴る。

「何を言うか！ ガネシャ！ ユマ様に謝りなさい！」

「……申し訳ありませんユマ姫」

「いえ、良いのです。その様に言われるのは慣れていきますから」

「ツ！」

俺が儂げな笑顔でそう返せば、ガネシャさんは口を引き結んだ。

……うん、コイツ女性だ。

だったら憧れのリヨン様がどこぞの小娘にメロメロな現状は面白く無いのも納得。

「でも、私はともかく彼らがリヨンさんの側に居ることはどうか許して欲しいのです。

タナカさんやキムラ様とあのようには話せる人など、他には誰も居ないのですから」

「滅相ありません、ユマ様」

慌ててパノツサさんが弁解するが、俺の興味はガネシャと呼ばれる女性に移っていた。

暇な道中、この女性の好感度を上げられるだけ上げてみよう。

最近、男相手に、それも斜め上の方法で媚びてばっかりだったからな。それで女性に

嫌われるようになっては堪らない。男よりも難易度は高いだろうし、暇潰しにも丁度良い。

と、そんなつもりで小一時間ほどガネシヤと話してみたのだが……どうも様子がおかしい。

うーん、気になる。ここはじっくり話したい所。

「あの、私、先程からお尻が痛くて……ココで少し休みませんか？」

「いいですよ、皆の者ココでしばらく休息を取る」

適当な理由を付けて日陰を作る大岩で休憩を願えば、到着を遅らせたパノツサさんも渡りに船と食いついた。

休憩がてら、いよいよガネシヤへとガンガン話を振ったのだが……

「リヨンさんカツコイですよね、昔からモテたのですか？」

「いえ、私はその様な事は存じておりません」

あんまり乗ってこないのだ。女性つてのは好きな男の話題とくれば嬉々として乗ってくるのが普通のハズ。照れているワケでも、俺に敵愾心があつて距離をとっている訳でもなさそう。

ひよつとして、まるで相手にされていない？

シヨックを隠さずシユンとした様子で俯くが、ガネシヤはコチラを見ようともせず、

プイツと顔を逸らす始末。

うーん、何だコレ？

策が無く爪を噛んでいると、俯いた顔に汗が伝い目に入った。痛みで慌てて顔を拭く。

気がつけば汗だくである。ソレもコレも田中のコートがクソ暑いのが悪い。この砂漠で真つ黒なコートは自殺行為だ。

一度気になるともう辛抱堪らない程に暑く感じる。

「あの、そちらに寄っても大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

四方を兵士が守っているのだが、ど真ん中でストリップを披露する気は流石に無い。

大岩で影になっているガネシヤの近くでコートを脱いだ。ついでに広げたコートを木に吊して視線を遮る。

「なにを？」

「余りに暑くて……コートを脱ぎたかったのです。でも下はこの格好、護衛の前で脱ぐ訳にも行かず……ですがガネシヤさんも女性でしょう？ だったらと思つて」

「それは……そうですが」

そう言えば、この怪しげなコートこそが好感度が上がらない原因では無かろうか？

となれば、裸一貫、無垢な少女としてのユマ姫を感じて貰うまで。

俺はガネシヤに寄り添って、当たり前障りの無い言葉を紡ぐ。

「この辺りは何時も暑いのですか？」

「ええ、ですが夏中月ともなればもつと暑いですよ。この程度は過ごしやすいくらいです」

「まあ！」

やった！ 会話が繋がる様になった。いよいよ本命に入ろうじや無いか。

「あのひよつとしてガネシヤさんもリヨンさんの事が好き……なのですか？」

これはガネシヤがりヨンさんを好きでも嫌いでも構わないのだ。

嫌いだったとしても、俺が照れ照れと顔を赤くして、モジモジと指を絡めるのを見れば、何かしら乗ってくるだろう。

……年上の女性ってヤツは、恋する少女に上からアドバイスを贈りたがるモノ。

その筈だったのだが……思いの外、強い力でガネシヤに肩を掴まれた。

「痛ッ！ 痛いです！」

「何故、何故だ！」

「ご、ごめんなさい！ 変な事を聞いてしまつて」

どうやら怒らせてしまった。失敗だ。そう思った矢先……

「何故、私の前で他の男の話をする！」

「えっ?」

まさか、この人、ソツチの人?

「私のコトが好きだから、話し掛けて来たんじゃないのか? なのに、どうして」

「いえ、ただ女性同士、友達になりたくて……」

「なんで!」

「きやつ」

俺はガネシヤに強引に押し倒された。

オイオイオイ、ヤバいですよ。

森に棲む者だ何だとキツイ言葉を掛けてきたのも、好きな女の子に意地悪を言いたくなるようなアレだったつばい。

上げるまでもなく、初めっから好感度はMAXだったつてワケ。

だとすると、そんな気も知らず俺は延々と他の男の話題をウツトリと彼女に振った訳だ。

うーん、参った。俺が頭を抱えていると、いよいよガネシヤは強引に俺に覆い被さる。

馬鹿か! ココまでしたら護衛をクビじや済まんぞ!

「んんっ!」

俺はくぐもつた悲鳴を上げる。誰か気付かないモンかね？

「ユマツ、姫え！」

「ふっ？」

啄むようなキス。ガネシヤは男っぽい外見で、コツチのどんな人格でも面白いモノじゃ無かった。

だけど、もつと面白く無いモノが他にある。

俺は急激に頭が冷えていくのを感じた。どうする？ そうだな……

「ガネシヤさん、私のコト、受け入れてくれますか」

「も、もちろん！」

俺が頬を赤らめ、恥ずかしげに身をくねらせれば、ガネシヤは即座にOKをしてくれた。

では、お言葉に甘えて。

『我、望む、揺蕩う海の寄る辺なき魂よ、我指し示す先に安寧あれ』

「は、ふう……」

禁術を使い、とつと眠らせる。コレほど受け入れてくれているなら眠らせる程度は造作も無い。

俺は手早くコートを羽織ると、ガネシヤをパノツサに突き出した。

「これ……は？ まさか！」

「そのまさかです、彼女に襲われました」

「そんな！　口は悪いが彼女は真面目で職務には忠実なのですが……」

確かにそんな雰囲気はあった。だけど彼女は自制が利かなくなっていた。

そもそもが最初からおかしかったのだ。彼女はエリート兵士、幾ら俺が好きだからって、護衛対象にあんな風に嫌味を言うハズが無い。

加えて言えば、魔法の通りも異常に良すぎた。

それは何故か？

「彼女から微かにケシの匂いがしました」

「あり得ない！　兵士には決して手を出さない様にキツク命じています」

「彼女が薬を飲んでいる所は？　誰も見ていないのですか？」

「それどころか、丈夫で風邪薬一つ飲まない娘です。薬など話にも……いや、そう言えば

新しい生理痛緩和薬が良く効くとか」

「……それです」

帝国は麻薬として高額で流通させるかたわら、採算度外視でばらまいてもいたワケだ

！

想像以上に麻薬はプラヴァスに広がっているようだ。

「急ぎましょう、思ったよりマズイかも知れません」

俺達は早足でプラヴァスまで駆ける事にした。
漠然とした不安だけが、胸の中に渦巻いていた。

クーデター 2

バイクに乗った田中と木村、二人は砂漠を駆け市街地を抜け、モノの数分で魔石商まで辿り付いていた。

その速度はこの世界の常識を大きく逸脱するものである。

「おええええ」

「汚えなあ……」

ただし、木村の朝食も口から盛大に逸脱していた。田中はソレを見ないように前を向く。

「このまま突っ込むぞ！」

「マジかよ！」

魔石商は既にルードフ家に占拠されている事が見て取れた。

多くの死体が転がり、火縄銃を抱えた男達が警戒にあたっている。戦闘の痕跡は色濃く、100メートル以上離れたココまで血と硝煙の匂いが漂うほど。

「味方を待った方が……」

「遅えよ！」

アクセル全開！ 及び腰の木村を無視して田中は正面からの突撃を選択。

応援が来たところで、それは弾よけに使うと同義であるからだ。それに血と硝煙の匂いが色濃いと言う事は決着からさほど経っていない事を意味する。

体勢が整わない今が攻め時と本能が告げていた。

「何だアイツらは！」

「アイツがタナカだ！ 止めろ！」

突っ込んで来る漆黒の異形に、通りを封鎖していた男達が慌てふためく。中には迎撃を試みる者も居るのだが、それを見逃す田中では無い。

「オラッ！」

——漆黒の機体が駆け抜ける。

「グヘッ！」

「ガアッ！」

一切の減速をせず二人を跳ね飛ばすと同時、駆け抜けざまに剣閃が瞬く。

「えっ？ アー！」

「なんで？ なんでなんで？」

剣の通り道に居たのは四人。一切の衝撃も、ひとかけらの痛みすら無く、全てが分割されていた。

四人は突如言う事を聞かなくなった体にパニックに陥る。

胴を断たれ、首を落とされた事にすら、彼らは気付けなかつたのだ。……最期まで。ドチャリと体がズリ落ち血の池を作る頃には、漆黒の機体はどうに過ぎ去っていた。

「クソツ、撃てツ！」

生き残つた男達は慌ててその背中へと銃口を向ける。時刻は白昼、太陽があらゆる物から色を奪う時刻、漆黒の機体は良い的に見えた。

「——ッ！」

しかし、突如その太陽が陰る。銃を構える男達を覆う影。天を見上げる彼らが見たモノは？

「——シッ！」

田中であつた。

彼は駆け抜けざまにバイクを乗り捨て、跳ねた。

勢いのままに壁を駆け上がり、一息で邸内まで押し入ろうとする寸前、バイクへと置き去りにした木村の背中を狙う男達に気が付き、頭上より飛び掛かつたのである。

「あ？」

男達と言えたのはたつたそれだけ。

予想もしていない襲撃に晒され、声も少なに分割される。

僅か数秒の出来事、コレだけで男達は残らず地面の血溜まりに沈む。

「クソが！ ふざけやがって！」

しかし、一部始終を見ていた者達が居た。屋上で警備にあたる男共である。

近すぎた故に最期まで何が起こったのか解らなかつた連中とは違い、彼らは高所より起こった全てをつぶさに見た。

なので、その速度、手際に戦慄はしたモノの、田中が剣を振るつて着地した隙を見逃すほどに呆けては居なかつた。

「死ねエー！」

照星に田中を捉え、トリガーを絞る。

——パァン！

頭上から乾いた破裂音。

田中は慌てて物陰へ転がるが、銃弾が落ちる気配は無い。

——ドサツ！

代わりとばかりに落ちてきたのは死体であつた。

「オイイ、急に飛び降りるんじゃないよ」

破裂音の正体は木村のリボルバー。屋上で銃を構える男達を間近から撃ち抜いたのだ。

「何時見ても気持ち悪いなソレ」

「ほっとけ」

そのタネは自在金腕ルー・デルオン。数メートルもの長さを誇る金属の指が触手の様にうねる。

ソレを両手にはめる木村は、田中が乗り捨てたバイクを後部から操りながら頭上の掃除まで成功させていた。

「ズリイよなあ」

田中が見上げた先、宙に浮かぶ三つのリボルバーが揃って硝煙を吹いていた。

自在金腕ルー・デルオンを銃に巻き付け、屋上で待ち伏せる彼らの頭を真横から同時に撃ち抜いたのだ。

高所の有利を台無しにする力技と言えた。

「使うか？」

「イラね」

しかし、自在金腕ルー・デルオンを田中は使おうとはしない。

いや、使えない。

自在金腕ルー・デルオンを自在に扱う木村を見ていると錯覚するが、そこに神経が通っている訳でも、目がある訳でも無いのである。

撃つだけは出来ても正確な射撃など人間技では無い事ぐらい、前の持ち主である田中

は良く知っていた。ましてや三丁を片手で操作する様はこの目で見ても信じ難い。もちろん木村だつてソレを承知で聞いたに過ぎない。複雑怪奇な軌道で自在金腕ルーテルオンを振り回しながら、あきれ顔で舌を出す。

「ハイハイ、言うと思つた」

「片方は元々俺のだから使用料とか貰えない？」

「ネーよ」

軽口さえ叩きながら二人は魔石商へと足を踏み入れる。そこは一見するとホテルのロビー然としていた。

違いはフロントに天秤が並ぶ事、普段はここで魔石を量り売りしているに違いなかった。

ただし今の室内は薄暗く、人の気配はまるで無い。

「金庫つて言えば、地下か？」

田中はドンドンと床を踏み鳴らす、ソレで地下室の有無が解るハズがない。

一方で木村は地下だと確信していた。

「お前にしちゃ賢いな。多分そうだぜ？」

「オイ！ どう言う意味だよ？」

「まあ、自明だろ？」

「かったりいな、言えよ！」

「魔石商だからな。魔石つてのは空気に溶けて目減りするんだよ、自然とな。だったら地下で密閉する方が賢い」

「なるほどな」

田中が思い出すのは霧ギユルドスの悪魔に晒され、魔力を失い砂に還った魔石だった。

「逆に言えば業務に使っているんだから、隠し通路みたいにはなっていないはずだ」

「オーケー、従業員用のフロアにある訳ね」

田中はフロントを飛び越えるや、奥へと続く従業員用のドアを思い切り蹴飛ばした。

——ガアン！ と派手な音を立て、蝶ちようつがい番ごとドアが吹き飛ぶ。

「安普請やすぶしんだな」

「せめて普通に開くかどうか試せよ！」

呆れながらも木村は不格好にフロントに乗り上げて銃を構え、扉の奥へと銃口を向け
る。

「居ねえよ」

だが、田中はあまりにも無造作に奥へと足を踏み入れた。

「気配、つてヤツか？」

「だな、聞けばユマア姫イの運命光つてヤツとタネは変わらねえ」

「死から遠い程、運命が強い……か、信じらんねえケド、マジなんだな？」

「マジだぜ」

「そつちのがよつぽどズリイだろ」

木村は面白く無い。彼はゲームでも自分だけ取り逃したスキルがある事に我慢がならないタイプだ。

「ソコまで便利じゃねえよ、死に確のヤツはまるで見えねえ、現にさつき屋上の奴らは見えなかった」

「全然ダメじゃねえか！」

「だけどな、今度は俺の気配って言うのか？　それが目減りするヤベエ感じが全然無い。アイツらは俺達の脅威じゃ無かったって事だ」

「そういうモンかね」

木村はイマイチ納得が行かない。ソレこそ無敵の能力に聞こえるからだ。

事実、田中にとって自分の気配を意識することは難しいのが実情だった。それは丁度自分の体臭を感じにくいのと同じ、当たり前過ぎて解らないのだ。

それを何となく『嫌な感じ』として受け取れる様になったのはホンの最近。その精度もまだ高くない。

実は、田中の本当の強みは超人的な聴力で、呼吸や心音で生物の存在を無意識に感じ

ているのだが……当の本人にその認識がない。

なにせ、体調や環境、まして相手が虫の魔獣だったりすると殆ど役に立たない故に、今まで肝心な場面で役に立っていないからだ。

だが、砂漠にはここ一年、十分に適応している。

「そう言うモンさ、当たり前だな地下への階段だ」

「おう、明かり要るか？」

「要らねえ……つと、今度の扉は丈夫そうだけ」

だからこそ、地下への階段の終点。鉄で補強された分厚い扉の先からでも、息を潜める無数の気配を感じ取っていた。

田中の感じる気配は『五感+魂の情報』から統合された直感と言うのが正しい。

ある意味でその精度はユマ姫の運命光を上回っている。

「奴ら、中で引き籠もってるぜ？」

「じゃあ、コイツの出番かな？」

木村が取り出したのはお手製の手榴弾。

「良いねえ、俺がこじ開けるから隙間から投げ込んでくれ」

「りよーかい」

田中は敢えてドカドカと階段を下りる、相手にプレッシャーを掛けたのだ。

今度は念のためノブを捻るが……開かない。

「このタイプはかんぬきだ、ノブの辺りを縦に斬っちまえ」

「おう」

木村に言われるまでも無い、田中は突き刺すべく刀を引き絞る。

スウつと大きく息を吸う。その様子を木村は階段上から固唾を飲んで見守っていた。
自在ルー・デルオン金腕に爆弾を構え、その時を待つ。

——スウウウウ！

呼吸がピタリと止まり、田中がカツと目を見開く。木村も大きく身を乗り出した。

……だが。

——!?

消えていた……アレだけあった敵の気配！

その時、ゾクリと首筋に冷たい感覚。これこそ例の『嫌な感じ』だった。

「ヤベエー！」

「!？」

血相を変えた田中が階段を引き返す。突然の事に木村は反応出来ない。

「邪魔だ！」

「オイ？」

木村を肩に担いで階段から転がり出た。その刹那。

——ゴガアアーン！

轟音と共に二人が立っていた場所を重厚な金属板が通過した。地面にひっくり返った木村が見たのは壁に突き刺さるドアだった。

「なっ?」

「アイツだ!」

奇跡的な回避を演じた田中は既に向き直り、階下に刀を構えていた。

しかし木村として並の男では無い。倒れ込んだままの情けなくも見える姿だが、彼にとつて姿勢など何の意味もない。

「ふざけやがって」

倒れたまま自在ルーデルオン金腕で爆弾を投げつける。それだけではない、投げつけた爆弾をリボルバーで撃ち抜くことで、即時起爆を成功させた。

バアンと派手な爆発音。部屋を一つ吹き飛ばすつもり炸薬だ。決して威力は低くない。

だからこそ、無理だろうなと思いつつもお約束は忘れない。

「やったか?」

あからさまなフラグ立てに田中は舌打ち。

「それ、面白くねえよ！」

冗談を抜きにしてもコレで終わるハズが無いと田中は確信していた。コレはアイツの気配だからだ。

あの時、刀を構え、扉に突き込む直前。田中はハッキリとソレを感じた。

待ち構えて居たハズの、無数の気配が突然消えた。その後、入れ替わる様に突如として現れた危険な気配。

それは間違えようが無い、田中にとって最も手強い相手。

立ちこめる硝煙の中、ボールで顔を隠した長身のエルフが現れる。

「エリプス王、いや今はエスプリ、か……」

ユマ姫の父、エルフの王の変わり果てた姿だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時を同じくして、リオン達は魔石の保管場所たる国庫に辿り付いていた。

この早さはリオンが乗るラクダの健脚もさることながら、郊外に構える国庫が近かった事が大きい。

「無事か……」

国庫周辺には元より人の気配が少ないのだが、それにしても物静かな様子にリオンは胸をなで下ろしていた。

「これはこれはリヨン様、本日はどうなさいました？」

一方で慌てたのは国庫の管理者たる老年の男性。地球で言うカンドウーラに似たブラヴァスの伝統衣装をキツチリと着こなす老紳士だが、突然のトップ来訪には驚きを隠せなかった。

「詳しくは後で話すが、魔石商が襲撃されているらしい。敵は帝国。と、なればココも襲撃される可能性が高い」

「なんとー！」

老紳士は即座に部下へ厳戒態勢への移行を命じる。軍部の要人として名を馳せたかつての老将の手にリヨンは感じ入った。

「流星は、と言ったところか」

「ハッ、詳しい話は奥で」

「ああ、ドコで誰が聞いているかも知れないからな。お前達も警備に回れ」

「宜しいので？」

「構わん」

リヨンは連れてきた兵士の大半を国庫の警備に回してしまう。魔石商への援護に向かうと思っていただけに、兵士達は素直に従えなかった。

「ですが、魔石商はどうなるのです？」

「大丈夫だ、きつとな……」

リオンは田中が直接戦う所を見ていない。だが共に砂漠を駆けただけで途轍もない実力の一端を感じていた。

なにより、地下水路で望外の實力を見せつけた木村が『ブラッド家の護衛を皆殺しに出来る』と豪語したのだ、連中に後れを取るとは思えなかった。

「と、なれば敵の出方を読まなくてはなりませんな」

「出来るか？」

応接間に通されたリオンは早速作戦を詰めにかかる。

「無論です、奴らとて魔石を集めて終わりではありませんまい」

「ああ、ソレを使うアテがあると云う事、そしてプラヴァスをかき回す策の前哨戦である可能性が高い」

「それで魔石も手に入れば一石に二丁ということですか」

「ああ」

リオンは一息にラウ茶を飲み干し、砂漠で渴いた喉を潤す。

(……なんだ？ 違和感がある)

お茶の香りで落ち着きを取り戻したりリオンの頭に疑問が湧いた。

(敵の主力が動くのに魔石が必要と云う事は聞いた。加えて敵の狙いが古代遺跡とすれ

ば稼働に魔石が要るのも当然)

しかし、リヨンの脳裏に浮かぶのは巨大な地下通路。

(アレほどの地下通路を知り尽くしているのなら、魔石の搬入など造作も無い。わざわざギブラヴァスで魔石を調達する必要がドコにある?)

——ガシャン!

その時、どこかでカップが割れる音がした。

ドコから?

ソレは足元だった。それも、自分が落としたカップが割れる音。

なのにごどこか遠い世界の音としてリヨンには聞こえた。

「なっ?」

ぐにやりと視界が歪んでいく。何故? 決まっている、一服盛られたのだ。このラウ茶に!

(あり得ない、俺は太守となるべく育てられた。あらゆる毒を知っている。それどころかあのラウ茶は見事な味だった)

本当にそうなのだろうかとリヨンは自問する。

思えば、先ほどのラウ茶は美味過ぎた。砂漠で渴いた喉を差し引いたとしても。

(帝国には植物を操るエルフが居る。その意味を甘く見ていた！)

歪んだ視界の中、老紳士がにこやかに微笑んでいた。彼は先代からの忠臣、絶対に裏切ることがないと信じていた人物。

だとしたら？ ココにはアイツが居る。

「あら、聞きしに勝るいい男じゃない！」

奥の扉から現れたのは一人の女性。

喜色を浮かべ、体に張り付く扇情的な黒のドレスを纏った姿。だがそんなモノはどうでも良いと思える程、禍々しい気配も纏っていた。

(魔女ッ！)

「ふふふ、いい男を操れると思うと興奮しちゃうわね」

不気味に笑う顔、その右目には異形の機械が埋め込まれていた。

ウイイイイと高いモーター音、右目のレンズが僅かに伸びる。リヨンの顔を隅々まで観察しているのだ。

コレは魔道具の義眼。古代文明の遺産のひとつ。

「書き換えてあげる、アナタのココロ」

機械の右目と、生身の左目がリヨンの目を覗き込む。

(ダメだ……見ては、しかし)

ぼんやりと頭が働かない。不気味で美しいアシンメトリーに目が離せない。

(ユマ姫、来ては駄目だ。魔石を狙う理由は魔石が欲しいからではない)

では、何が狙いなのか？ リヨンは土壇場で敵の狙いによろやく気がついた。

(アナタに、魔石を、使わせない為だ！)

霞が掛かる頭の中で必死に吠える。だが、リヨンの体は力なくソファアールへと沈み込んだ。

★クーデター3

「思ったよりも静かですね」

俺はポツリと呟いた。ラクダの上、パノツサさんの背中にしがみついた状態である。

そろそろプラヴァスの市街地も近い。事実上のクーデターと聞いて銃撃戦でも始まっているかと思えば、街は静まり返っていた。

拍子抜けした俺の声に、不安げに髭を弄り回すのはパノツサさん

「いえ、オカシイ。静か過ぎる」
「でしようね」

俺だつてその位は気付いている。街の喧騒がココまで無いのは異常だ。

だが、悲鳴と呻き声が重奏するよりはずっとマシだろう？ アレは二度と聞きたいモノじゃない。今でも夢に見る。

そんな俺の思いを知つてか知らずか……いや、知らないんだろうな。世間知らずな女の子の軽口と思つているのだろう。パノツサさんは露骨に苛立った声になる。

「リヨン様はとつくに着いてるハズ。コチラには姫様がいるのですから、そろそろ迎えが来ても良さそうなモノですが……」

「ブラッド家も手が足りないのかも知れません……もしくは既に制圧されている」

「馬鹿な！ 報告から二時間と経っていません」

「目を切るな！」

俺はパノツサを怒鳴りつける。世間知らずはどっちだと言いたい。

ココはもう戦場なのだ。気軽に後ろを見て良い場面じゃ無い。

「前を向け！ 狙撃を警戒しろ」

低く冷たい声で命じれば、パノツサさんは慌てて前に向き直ってくれた。

俺はその事実ホッと胸をなで下ろした。

偉い人の声には、人を従えて当然と言うだけの自尊心と強制力が詰まっている。俺も

なんとか会得したいモノだが、幼い体は威厳とは無縁で中々上手く行かない。

いや、違うな。単純にお姫様が板に付いていないのだ。

だから俺の事を信じ切れず、パノツサさんはまだ不安げにチラチラとコチラを振り返る。

「考え過ぎです、こんな所で射かけた所で……」

「矢じゃない、銃だ！ 知っているか？」

だからこそ理屈で武装した上で、キョトンとしたマヌケ面に、噛んで含める様に言い聞かせる必要がある訳だ。面倒臭いことこの上ないが、至らぬ自分の所為だから諦める

より他ないだろう。

「小さな鉄球が音と同じ速度で突き刺さる。防ぐことも躲す事も不可能。それが銃です」

「そんな訳が、そんなものに狙われたらどうすれば……」

信じてくれた、その上で悩んでくれた。こんな少女の言葉をマジに受け取ってくれる。辺り、俺のお姫様力も中々捨てたもんじゃ無い。

お姫様力？ 今の俺にお姫様力とかあるか？ 今一度、自分の姿を再確認。

余りに暑苦しいロングコートは前を大胆にはだけている。だから、俺のマイクロビキニ姿は振り向いたパノツサさんからは丸見えだ。

ぶにぶにのお腹に、浮き出る肋骨。局部だけをギリギリ隠した破廉恥な姿。その上、ロングコートでラクダに跨がっている訳だ。

……いや、ひよっとしてコレお姫様力じゃ無いぞ？ 痴女変態力とかだろ！ そりゃ、こんなヤベー奴が血走った目で囁くなら、刺激しちやマズいと従うも道理。全く本気にはしていない可能性がチラリ。

ただど命に関わる問題だから、俺としては引くに引けない。恥ずかしさと気まずさがない交ぜになり、泣き笑いの表情で凍える声で命令する。

「防げないし、躲せない。だから私が狙われたら、代わりにお前が死ね！」

「そんなっ!」

あんまりだと振り返るパノツサさん。そりやそうだろう。でも、守って欲しいんだよ。幾ら何でもこんな姿で死にたく無い。死ぬ気で守って欲しいんだよ。

だからもう、キチ○イだと思われても構わない。思い切り目を剥いて、渾身の目力で訴えかけるしか無いでは無いか!

「骨は拾ってやる」

「……………」

これぞ最後の手段。脅し文句である。

しっかり守らないと、この場で殺すぞ的な意味で取って貰って構わない。

いや、実際。骨ぐらいバンバン拾ってやる。なんならしゃぶってやる。こんな美少女に吊って貰うなら嬉しいだろ? ぶっちゃけロリコンだろ? 汝、ロリコンであれ!

むしろロリコンじゃないと困る。駄目? 聞いてみよう。

「不満か?」

「いえ、身に余る光栄にございます」

やったぜ! ロリコンだった。

いや、ロリコンかどうか知らんし、普通に他国のお姫様だと思っただけかも知れないが、とにかく覚悟が決まった顔をした。

こうなると俺の『偶然』はまずはコイツを殺してから俺を狙うに違いない。なんて言うかライフが増えた感がある。

「ありがとう」

耳元で囁けば、少し耳が赤く染まったのでやつぱりロリコンなんじゃないか？ 貞操の危機とか無いよな？ 別の不安が出て来たぞ？

とそんな事を考えていたら、いよいよブラッド家の本邸に辿り付いた。

ここは流石に慌ただしいかと思つたら、どうにも平和そのもの。

屋敷の門兵達がパノツサの姿を認めると、待ちわびたとばかりに駆けつけてきた。

「パノツサ様、リヨン様が！」

「なに？ 若が？」

パノツサさんが驚くのも無理は無い。リヨンさんは魔石商での戦闘で負傷。田中と木村の二人は敵を追って地下遺跡に入ったままと言うでは無いか。

「して、若はドコに？」

「それが……」

「学校、か……」

ルードフ家だけでなく、帝国兵の姿もチラつく状況で人々は学校に避難しているらしい。

良くそんなに手際良く避難できるな、と思つたらどうも砂嵐とかで避難に慣れていてるっぽい。

「若はブラッド邸まで運べば良いでは無いか！ 何故学校に？」

「戦力を全て学校に集中させているのです、今やここに居るのは火事場泥棒の警戒と伝言のために残っている我々だけ」

「そうか……すまないがユマ姫様」

「なんででしょう？」

俺はキョトンと首を傾げる。暑いけどロングコートの前は閉めて、お姫様のお澄まし顔で無言の圧力。

いや俺だつて言いたい事は解るぞ？ リヨンさんの怪我を治せと言うのだろう？ タダ働きは嫌だぞとしらばっくれて、お願いを待つ。

「リヨン様は怪我をしてらつしやる。この通りだ、ユマ様の奇跡の力をリヨン様の為に使つてはくれないか？」

よしよし良いぞ！ 合格だ！ 俺は華がほころぶ様な笑顔で応えた。

「もちろんです！ 行きましよう。学校に！」

「ハッ！」

そうして再びラクダを駆る事30分。市街地の端にある学校までやってきた。

「コチラは流石に人が多いですね」

「プラヴァスの人口の大半が集まっている様ですな」

パノツサは住宅地が閑散としていた理由を思い知った。本当にプラヴァス中から人々が集まっているらしく、炊き出しに並ぶ列が延々と続いている。

流石に全ての人間は学内に収まらなかつたのだろう。学校前の通りまで人が溢れ、屋台まで出ている。雑然とした活気に溢れていた。

コレだけ居れば狙撃の心配は少ないだろう。だけど代わりに別のリスクがある。

「……………」

俺が不安げにキョロキョロと周囲を窺うと、心外とばかりにパノツサさんが胸を張る。

「ご安心を、姫様はこのパノツサ、命を懸けてお守りします」

うーん、そう言えば魔法の欠点を言つてなかつた。説明しておく必要があるだろう。

「いえ、そうでは無いのです、実は……」

「……………なんと!」

魔法の弱点を話すと、パノツサさんはとても驚いていた。ただ近くに寄るだけで健康値に阻害されて、魔法は使えなくなるのだと知る人間は少ない。

魔法を使うときには人払いを徹底していたのは、何も技術を秘匿するためじゃない。

むしろ真似なんて出来ないから見ても構わない。単純に健康値が邪魔なのだ。

そして、コレだけの人混みだと魔法はどこに居ても使えないと説明する。

「これでは咄嗟に身を守る魔法すら使えません、それに回復魔法も多用出来ない以上、あまり見せびらかすのは得策では無いでしょう……」

「いえ、それは杞憂でしょう、幾らなんでもリヨン様が他の民と雑魚寝と言う事はありませんまい」

パノツサさんはそう言うが、なーんか嫌な感じがしてしょうがない。特別扱いしてくれたとして、ソレが良い特別扱いとは限らないのだ。

現に、俺とパノツサさんを迎えに現れたのは偉そうだけどなんか変な感じのオッサンだった。

「ユマ姫様！ 良く来てくれましたリヨン様の所までご案内します」

「おおっ！ デネシス殿！」

パノツサさんは嬉しそうにそのオッサンの手を握る。聞けばかなり偉い人。デネシスは学園の長にして、プラヴァスの国教であるセイリン教の司祭でもあるらしい。

パノツサさんと親しいらしく、肩をパンパンと叩いている。

「パノツサ様も！ ご無事でしたか！ 奴らは未知の武装をしています、怪我人も多く心配しておりました」

「それ程に激しい戦闘が？ 街は静まり返ってりましたが……」

「ええ、奴らは街で暴れるだけ暴れた後、地下に引き上げて行きました。勿論追いかけたのですが、それこそが奴らの狙いだっただのやも知れませんが、追撃戦で多くの被害が出たようです」

「なんと！」

当初は優勢に進めたモノの地下では銃撃を躲す術も無い。一行はリヨンの怪我と共に引き上げたと言う。

「目を離すと血気盛んな若い衆が敵討ちだと飛び出して行くこうとするので、止めるのに難儀しております、私も許せない気持ちは同じなのですが……」

「これだけの人数です、守りの手が足りませんか……」

「ええ、パノツサ様、引き締めの方お願いできますか？」

「仕方ありません」

「助かります、ユマ姫様はリヨン殿の治療をお願い出来ますか？」

「……良いでしょう」

俺の身はこのデネシスとか言うオッサンの手に委ねられてしまった。

知らない人について行っちゃいけないって言われてるんだが、背に腹は代えられない。

いや、パノツサさんにも同行して貰った方が良いか？

しかし、彼には彼で、学園の警備を強化する任務があるらしい。リヨンさんの片腕として知られていると言うのは嘘じゃ無いらしく、既に兵士に囲まれてアレコレ聞かれています。

諦めるしか無さそうだな。

「ではユマ姫、コチラへ。リヨン様がお待ちです」

「よろしくお願ひ致します」

俺はデネシスとか言う脂っこいオッサンの手を取るしか無い訳だ。

そして、案内されたのは保健室だった。

いや、葦の衝立が並び、ゴザが敷かれているあたり前世の保健室とは似ても似つかないが、仄かに香るアルコールの匂いでそこが保健室だと何となく察せられた。

まあ、リヨンさんが怪我をしていると言うのなら保健室に案内されるのは当たり前。

しかし、そこで待っていたのはリヨンさんではなくカラミティちゃんだったのだ。

「カラミティさん、どうしてココに？」

「リヨン叔父様の一大事に私が居ては変ですか？」

変じゃない。だが、下手すれば戦闘になると思っていただけに気が抜けた。彼女は彼女の友達共々、魔法で助けているのだし、信用して良いだろう。

受け答えにも変な部分は無い、目つきも正常だ。

「リヨン叔父様は、今、お医者様に診て貰っています」

「でも、早いほうが良いでしょう?」

「お医者様の都合もありますから、これを飲んでまずは落ち着いて下さい」

「それはそうですね、頂きます」

だから俺は全く疑わずソレを口にしたので……

「カラミティさん、コレは?」

「お茶、ですが?」

「いいえ、コレは……悪魔の薬よ!」

麻薬! ソレに睡眠薬。俺が糾弾すれば、カラミティちゃんは静かに言った。

「悪魔は……どちらですか? 叔父様を魔法で操って!」

「え?」

酷い誤解だ、認識をズラされている!! 誰に? そんなの決まっている。黒き魔女。

黒峰さんだ!

どこに居る? 見回す俺の視界に入るのはデネシスと言うオツサン。

「おや、神聖な神酒を否定するとは、流石は邪神の使いだ」

「なにが! 神酒なものか! 誰が! 邪神だ!」

叫ぶ声に力が出ない。即効性の睡眠薬だ。フラつく足元に、危険な霧が迫っていた。
 「霧ギョルドスの悪魔!! あなた達、やっぱり」

「コレは神との対話に必要なのです、決して奪わせはしません」

なにが! 神との対話だ! ヤクがキマって幻覚が見えてるだけでは無いか!

だが、そうか! 宗教か! 宗教と麻薬は切っても切れない。幻覚を見せて神との会話が可能な薬と嘯うそぶけば、麻薬は飛ぶ様に売れると言う事か。

ポンザル家だけじゃない、ココにも販路を持っていた!

そして、俺は神との対話を否定する神敵と化す! 帝国め! やりやがった!

「カラミティ! どうして!」

俺は彼女の肩を抱く。洗脳は強く否定すれば決して通らないハズなのだ。どうして彼女に? そうか! 麻薬! でも、彼女の目は澄んでいる。

「どうしてって……」

目の前に顔を突きつければ、頬を染めて彼女は目を背けた。

コレは?

「さあ、眠って頂きましょう」

ボイザンの声。口に液体を突っ込まれた。そして混乱の中、俺は意識を手放した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一時間後、関係各署からの物資の要求書類を見ていたパノツサは、突如入った報告書を見るや、机を蹴飛ばし怒号を上げる。

「馬鹿な！」

それはユマ姫が邪神ギユアルの手下として拘束されたと言う報せだった。

パノツサが血相を変えて駆けつけたのは学園の講堂。ここでユマ姫を断罪するとセイリン教の信徒が学園中をふれ回っていた。

その報せをまさかと思つたのはパノツサだけではない、ユマ姫の奇跡を間近で見た学生達も信じられぬと講堂に詰めかけていた。

結果、人がすし詰めになつており講堂は異様な熱気に包まれていた。

通常は司祭が祈りを捧げ聖句を読み上げる壇上、そこで十字架に縛り付けられ掲げられていた少女こそ、つい先程に別れたばかりのユマ姫であった。

タナカの黒いコートを着たまま礫はりつけにされたユマ姫は髪色が銀に戻っていた。

ソレこそが魔力が抜けてしまった証拠。しかし黒のコートと銀の髪を取り合わせは神々しく、背徳的な程に様々な感情を呼び起こし、直接に脳を灼く劇物として機能した。いつそ異様なまでの熱気が辺りを支配する。

「これではまるで生贄では無いか！ 裁判も無しに公開処刑？ 野蛮な！ なぜ誰も止めない！」

怒声を上げながら人を掻き分け突き進むパノツサだが、周囲の反応は鈍い。

構内を埋め尽くす大半はセイリン教の信徒達であるらしく、熱気に浮かされ正気を失っているかに見えた。彼らはパノツサの存在を意に介さず、壇上にいるデネシスの言葉に聞き入っていた。

「回復魔法こそがこの者が邪神ギユアルの使徒である証拠。人が人を癒やす術など使えるはずがない」

縛り付けられたユマ姫を前にして滔々と語ってみせるデネシス。ただし要人は彼だけでは無い、退役軍人や水質管理の技術者など、ブラッド家と繋がりが深く、国政の要職に就く人間が幾人も壇上に揃っていた。

「クソツッ！ どけ、これはなんたることだ!?!」

パノツサは人混みを掻き分け、転がるように壇上上がる。血の通わないぼんやりとした目がコチラを睨みつけてくる、それに恐怖を感じながらも声を張り上げる。

「デネシス卿！ 説明を!」

「おやおや、パノツサ様もこの邪教徒にご用ですか?」

だが、会話が噛み合わない。芝居がかった口調のデネシス卿も正気を失っている様パノツサには思えた。

「何故! 如何なる理由で彼女が邪教徒だと?」

「彼女は我らの教義を否定した、そして魔法などと言う邪法。これが邪教徒である証拠でないならなんとする！」

邪法。ユマ姫の魔法は確かに不可思議な奇跡と言える。一部の教会関係者が面白く思っていない事も知っていた。

しかし、だからと言って暴力で排除すると言うのは、神の敗北を認めるのと同義。

「教義の否定とはどう言う事だ？」

「神酒を口にせず、存在すらも否定したのだ！　それが神への冒瀆でないとすればなんとする！」

「神酒？」

デネシスが掲げるグラスには血の様に赤いワインがなみなみと注がれていた。パノッサは神酒と呼ばれるソレが、ワインにラウの葉を漬け込んだだけのモノだと知っていた。

神聖なラウの葉を神聖なワインに漬け込む事で、神に捧げる神酒を作る。

だが、ラウの葉を漬ける行為に意味は無い。宗教儀式の一環に過ぎない飲み物……そう、パノッサは思っていた。

「ユマ姫は幼い！　神酒を飲めないぐらいで馬鹿な！」

「違うのだ、ユマ姫が否定したのは神との対話」

「なにを……なにを言つて？」

パノツサはそこで檀上のお歴々が揃つて異常な興奮状態である事に気が付いた。その様子は異常の一言。

その原因が彼らが手に持つ神酒にあるのか？ まさか！ ワインにもラウの葉にも害など無いハズ、どんな仕掛けがあるのかとパノツサは辺りを見回す。

しかし違う。神が愛したと言われる植物ラウ。セイリン教の象徴にして、この世界に広く分布し、王国も帝国も貴族も平民も分け隔てなくお茶として常飲する、なんの変哲もない植物ラウ。

だが、その何の変哲もないはずの植物は、地球で最も危険な植物であつた。

その名は『コカ』。

言わずと知れたコカインの原料であり、その葉には微量のコカインが含まれている。微量とは言え口に入れて嘔み続ければコカインの効果はある。

とは言え、そもそもが南米原産のコカと同じ特性を持つているのはプラヴァスの境界地に自生するラウのみ。

王国などで収穫されるラウにはコカインが殆ど含まれていなかったため、木村はラウ茶の危険性に気が付く事が出来なかつた。

更に言うところ危険だと思われるコカの葉だが、地球に於いても葉に含まれるコカインの

濃度は高くない。

原産地である南米ではお茶として飲んだり、葉を齧って嘔む程度は違法では無い。だが抽出してコカインを取り出してしまえば話は別だ。

コカインはアルコールに溶け抽出される。コカの葉を漬けたワインにはそれなりのコカインが溶けていた。

それこそが司祭が行う、神との対話と言う奇跡のタネ。境界地で育った特別なラウの葉を度数の高い特別なワインに漬けた成果と言えた。

そして、その成果を更に改悪したのがエルフの植物学者、ドネルホーンだった。

元々、境界地に土地を持ち、罪を償う存在として黒いターバンを許されたポンザル家は教会との繋がりも強かった。

教会に供出するラウの葉に魔女クロミーネが目をつけたのは必然と言えた。

斯くして魔改造されたラウが境界地に生える事となる。コカインを従来の数倍も蓄えたラウの葉は教会関係者を熱狂させた。

ポンザル家の二人が、帝国や王国が境界地の権利を欲する理由を新種の麻薬を栽培する為だと言ったのは、勘違いでも何でも無い。実際には既に精製さえしていたと言うワケだ。

ポンザル家は知らなかったが、彼らが軍に普及させた鎮痛剤もコカインを多量に含ん

でいる。

そもそも兵士が使う鎮痛剤としては、アヘンより興奮作用のあるコカインが向いている。

麻薬には大きく分けてアツパー系とダウンナー系があり、コカインはアツパー系の代表格である。

そして、その効果をより高める方法が存在した。その痕跡をパノツサは発見する。

「この煙！ デネシス、貴様！」

「おや、神へ捧げる供香くぐさうが気に入らないと？」

「当然だ！ これは、これは！ ケシの香りではないか！」

アヘンはダウンナー系の麻薬。コカインと同時に摂取すれば、スピードボールと言われる最高にキマる方法となる。

帝国はポンザル家を矢面に立たせアヘンを広める一方、コカインと言う第二の矢を宗教を介して広めていた。

供香としてアヘンを焚いた中であれば、多くの信徒が神酒に溶けたコカインの魅力に取り憑かれた。

神酒と供香。

アツパーとダウンナー。

その両方を同時に使えば効果は何倍にも跳ね上がる。

「行けませんなあ、神への供香をその様なモノと一緒にされては」

「馬鹿な！ そうだ！ リオン様は？ リオン様をどうした？」

「おお、そうであった、リオン殿も我らが同志、彼の言葉であればパノツサ殿も理解出来るよう」

「なんと？」

「デネシスの合図で舞台袖から一人の男が姿を現す。それこそがパノツサの上司にしてブラッド家の当主リオンだった。

「苦労を掛けたなデネシス。それにパノツサも無事でなにより」

現れたのは変わらぬ様子のリオンの姿。アツパー系でキマった人々の中で随分と落ち着いて見える姿であった。

「リオン様！ 〴〵無事で！」

「ああ、元より怪我など敵を釣るための欺瞞に過ぎない」

「欺瞞？ 何故……その様な奇策を？」

言いながらもパノツサはリオンの様子をつぶさに観察した。だが、そこにデネシスらに見られる不自然なまでの興奮は見られない。

それどころか、どっしりと落ち着いた様子のリオンはその言葉に一切の淀みが無い。

熱に浮かされてペラペラと口走るデネシスとは全く様子が違った。

……それはダウナー系の麻薬のみ摂取したからなのだが、そこまではパノツサに解らない。

自らの主人が『正常』に見えてしまう事が、パノツサにとって何より衝撃だった。

「無論、全てはこの売女を罠に掛けるため。見事なまでに釣れてくれたわ」

「そんなまさか！ リヨン様はずっとユマ様と打ち解けて……」

「それこそがこの娘の恐ろしさよ、我がこの様な小娘に良いように使われていた。それこそがこの娘が邪法を使う証拠と言えよう。我らは操られていたのだ」

「まさか!？」

「あり得ない!? ここに送ってくるまでに思い当たる節はひとつも無いか?」

ある。あり過ぎるほど。

パノツサはいつの間にかユマ姫の代わりに死ぬ覚悟すら決めていた。よくよく考えればそれは異常で、今にして思えば恐ろしくもあった。

そうだ、こんな小娘に我らが主人が骨抜きになっていた事が邪法である何よりの証拠。我々は良いように騙されていたのではないか？

「そんな、だとしたら私はなにを信じたなら、ユマ姫に何をさせられていたのか……」

「いんや、パノツサよ、気にすることはなか」

「??」

今喋ったのは？ リオンに間違いは無い。間違いは無いのだが？

「操られたのはワイもいっしょじゃ」

「……………」

リオンの口から出たのは、リオンの母方の少数部族が使う方言。本当にリラックスしている場面で方言が口を衝くことをパノツサも知っていた。

だからこそ、これは間違い無くリオンである。偽物では知り得ない事。そうパノツサは確信した。

「そうでしたか……………邪教徒め！ よくも！」

パノツサはユマ姫に向き直ると懐のナイフを取り出し、礫にされたユマ姫に襲いかかった。

「何をする！」

パノツサの突然の凶行に目を剥くリオン。これでは折角の見せしめを殺しかねない。……………だが、パノツサが斬り裂いたのはユマ姫を縛る縄だった。

「起きて！ 起きて下さい！」

ユマ姫を解放したパノツサは、デネシスから奪った神酒を少量ユマ姫の口に含ませた。

アルコールとコカインの作用は、少量であれば気付けに強力な効果を発揮する。もちろんパノツサがそれを知っていた訳では無いのだが……

「ユマ様！ お願いです！ 若を！ リヨン様を救って下さい！」

「……あ、うう」

「パノツサ！ おめどなつもりで！」

「リヨン様は、正気であれば人前で方言など決して使わない！」

リヨンは周囲から若輩だ、田舎者だと下に見られがちな支配者だ。当然だが言葉遣いに人一倍気を使う。それがこんな衆人環視の中で方言を使うなど、正気ではあり得ない。

浴びるように酒を飲んだときに漏れる程度。それを腹心の部下パノツサは知っていた。

だからこそ、今のリヨンは強制的にリラックスさせられている。何の為に？ どうやって？

麻薬、そして洗脳！ それ以外に無い。

そして、それを救える手段がたったひとつしか無いことも。

「ユマ様！ どうか！」

「ハア……ハア……」

だが、ユマ姫は目を覚まさない。念入りに睡眠薬でも盛られているようだった。彼女だけが全てを覆すカードになるハズ。だが、そんな事は相手も知っていた。彼女こそが最も危険なカード。それでも大変な人気を誇るユマ姫をただ殺してしまつては禍根を残す。

そう判断しての見せしめであつたが、少しでも状況が悪化したらすぐさま手を打つべく、帝国で最も危険な女が待機していた。

「もう！ 上手く行かないモノね」

舞台袖からゆらりと現れたのは黒髪黒目、黒い眼帯に黒いドレスの不気味な女。

この女こそが魔女クロミーネ！ パノツサは即座にその正体を悟り、そして彼女の手握られた金属塊に目が行つた。

ソレが何か、理解出来る人間はその場に三人程。取り出した魔女と、リヨン、そしてパノツサ。

パノツサはキイムラ子爵が使う武器を見ていた。故に魔女が取り出したソレがよく似ている事に気がついた。

——パーン、パーン！ パーン！

リボルバー。魔女は知りうる中で最高の鍛冶士に特注し、ユマ姫から奪つた銃をたった一丁だけ形にしていた。

それでも不完全なりボルバーは薬莖では無く、雷管を埋め込むパーカッション式。そしてたつた五発しか装填出来なかった。

すぐさま装填出来ない以上、打ち切る事は出来ない。それでも躲す事も防ぐことも出来ない弾丸。動けない少女一人を撃ち抜く事になんの問題もない。

「ぐう……」

だが、ソレは誰かが代わりに死ななければの話。

パノツサは自らの体を盾にして、ユマ姫を弾丸から守り切った。黒色火薬の拳銃弾に人間を貫通するほどの火力は無い。

「ユマ様！　どうか！」

腕の中、抱きしめた体は細身で、なのに柔らかで、うっとりとした甘い匂いが漂う。喋らなければ誰よりもか弱い少女。

だけど彼女に祈らざるを得ない。どんな神よりも愛おしい存在なのだから。

パノツサはユマ姫に命を捧げられる事に喜びすら感じていた。

「あ、ああ……」

そして、皮肉な事に銃声と硝煙の匂い。そして誰かに守られる記憶はユマ姫のトラウマを刺激した。

それは、普通の少女ならすぐさま壊れてしまうほどの強烈な記憶。

「セレ……ナ！」

自分を守ってくれた妹が目の前で凶弾に晒された記憶。その強烈な後悔と絶望がフラッシュバックし、パノツサに重なる。

両手両足の爪に針を刺された上、強烈な電流を流されればコレほどの痛みとなるだろうか？ それだけの衝撃が少女の脳を灼いた。

「ぐッ！」

その強烈な刺激は、今度こそアヘンでぼんやりとしていたユマ姫の脳を揺り動かし、

「ガッ！」

——また、殺された！ 守ってくれた人が、目の前で、無惨に死んだ！

ユマ姫の空っぽの心に、どす黒い殺意だけが満ちていく。

その時だ。死に際のパノツサが最期の言葉を紡ぐ。

「ユマ姫様、骨を……」

——骨を、そうだ骨を拾うと約束した！

魔女を殺して自分も死ぬ事を考えていたユマ姫に冷静さが戻る。しかしその隙を見逃すような魔女では無い。

「デネシス！ 引っ張り出しなさい！」

「この！ 邪神の使徒め！」

デネシスがユマ姫の腕を取り、魔女クロミーネの前にまで幼い体を引っ張り出した。「そのまま押さえなさい！」

「こら、暴れるな！」

——パーン！

虎の子の四発目、しかし当たったのはデネシスの首筋。

ユマ姫はリミッターを解除した力で体を捻り、デネシスの体を盾にしたのだ。

「ハアッ！ ハアッ！」

「グッ！ 化け物め！」

だが、代償はいつもの様に軽くない。ユマ姫の肩は外れ、冷たい汗が体中から噴き出していた。

ぼんやりしようとする頭へと、四肢からひっきりなしに刺すような痛みが送られる。

致死量に近い睡眠薬と気絶する様な強烈な痛み、二つが危険なバランスを保ち、なんとか意識を保っている様な有様だった。

そんなユマ姫に立ち塞がるのはプラヴァスの黒豹とも言われるリヨン。

魔女が大声で指示を飛ばす。

「リヨン！ さっさと殺しなさい！」

「観念するんだなユマ姫……こげな抵抗は何の意味もない」
「……………」

ユマ姫はボロボロ、周りには洗脳済みの人間が詰めている。

この状況にクロミーネは自らの勝利を確信した。

撃たれたデネシスは麻薬に蝕まれたヒョロヒョロの司祭に過ぎなかった。対してリヨンの鍛え抜かれた肉体は、ユマ姫の力ではどう足掻いても小揺るぎもしないだろう。

加えてリヨンだけはクロミーネが完全な形で操っている。ダウン系のアヘンを吸わせた上で念入りに施された洗脳は、生半可では抜けない。

魔法とか言う力を使えば別かも知れないが、ユマ姫には健康値の霧を嗅がせ魔力を奪い。隠し持っていた魔石は既に取り上げている。

元々、魔石が少ないプラヴァスに於いて魔力濃度を確保するほどの魔石粉末を手に入れるのは並大抵では無い。

それが可能だった魔石商も国庫も既にクロミーネは押さえている。

それでも万が一、魔法を使わずにユマ姫がリヨンを殺したなら、それこそユマ姫がプラヴァスの太守を殺したと喧伝すれば良い。

さあ、どうする？ と、冷静さを取り戻したクロミーネはユマ姫の顔色を覗く。

パノッサとか言う人間が乱入した事で混乱した構内は、今や魔女の心を映すかの如く

静まり返っていた。

そんな中。

「ふふっ」

笑った。ユマ姫は、笑った。

妖艶な微笑みを浮かべ、身に纏うのは無粋にも見えるタナカが贈ったブカブカのコー
ト、そのボタンを外していく。

「何してるの？ 押さえなさい！」

不吉な予感にクロミーネは叫ぶ。しかし、その場にいた男達は誰一人動かない。動け
ない。

少女が服を脱ぐ。ただそれだけ、その仕草に魅入られていた。

いよいよ全てのボタンとベルトが外され、ユマ姫は前合わせのコートを手で開い
た。

「バァー！」

当然、コートの下は裸……ではない。

だがある意味で、下着より、裸より、なお恥ずかしいマイクロピキニの艶姿。
ほんのりと上気し、汗ばんだ体は人の視線を掴んで離さない。

「アンタ、変態なの？ 頭オカシインじゃないの？ 死になさい！」

ただ一人、呆れたのはクロミーネ。彼女はユマ姫の身体検査をしたために、コートの下が裸同然だと知っていた。

知ってはいたが、まさか自分から脱ぐなど夢にも思っていなかった。

恥知らずで不可解な行動に苛立ち、銃を構え、ユマ姫に照準を合わせる。しかし……
「なっ?」

今更にクロミーネの命令が届いたのか、男達がワラワラとユマ姫に接近する。いや、それは誘蛾灯に惹かれる虫のようであった。ユマ姫のカラダに目を奪われている。

そしてユマ姫よりずっと大きい男達を取り囲めば、なかなか射線が通らない。残るは一発。クロミーネも無駄撃ちは出来ない。

だけど悪くないと魔女は思い直す。取り囲まればユマ姫は魔法を使えない。手詰まりには違いないのだ。

無数の男に翻られるユマ姫の姿は、魔女の溜飲を下げさせるに違いなかった。

一方で男達に囲まれたユマ姫は、リオンへと無防備に近づいた。

これはユマ姫にとって賭けではあったが、リオンはユマ姫のカラダから目が離せない。
い。

「頭が高い!」

そうして歩んだりリオンの元、ユマ姫は垂れ下がったターバンを思い切り引つ張った。

リヨンの体がくの字に曲がり、頭の高さがユマ姫と釣り合う。

言うまでも無く失礼極まる行動なのだが、リヨンはいよいよ指一本動かせぬ程に硬直した。

それは間近に見るユマ姫の顔が美しすぎたから。

リヨンの脳をユマ姫の顔とカラダが支配し、目と目がぶつかる。

リヨンの剥き出しで無防備な意識が晒される。この瞬間こそユマ姫は待っていた。

ユマ姫はポケットから取り出した極小の魔石を嚙る。

「嘘ッ！」

漏れたのは魔女の悲鳴。これは二つの意味でクロミーネにとって誤算であった。

一つは凶化したユマ姫にとって、魔力の補充は魔石を撒かずとも、ただ食べることでずつと効率良く行えるようになっていたこと。

そして、身体検査を重ねたユマ姫が魔石を隠し持っていたこと。

いや、隠し持っていた訳では無い。身体検査した瞬間は確かに持っていなかった。

——骨じゃ無いけど、拾ったぞ。

ユマ姫は抉り出したのだ、パノツサの体から。

この世界の人間は大なり小なり魔力に対して耐性を持ち、魔力を利用して生きていく。

だからこそ、エルフでも魔獣でも無い生き物であっても体内に魔石を持っている。

極小の魔石は利用価値も皆無。存在すら余り知られてはいないのだが、魔力に敏感なユマ姫は銃痕から覗いた魔石の姿を見るや、指を突つ込み抉り出していた。

『我、望む、揺蕩う海の寄る辺なき魂よ、我指し示す先に安寧あれ』

しかし、極小の魔石ではうつつすらとしか魔法が使えない。高度な精神魔術など望むべくもない。

アヘンでダル状態になっている相手に、カラダまで披露して強引に心の隙間を空けさせた。そうして作り上げた極限の魔力抵抗ゼロ状態。

それだけやっても、一瞬の完全な脱力状態を作るだけが関の山。

ただソレだけの魔法。

だがユマ姫にとってソレで十分だった。

一気にターバンを引っ張れば、リオンはベシヤリと地面に突つ伏した。隙だらけで耐性スカスカになった心に土足で踏み込む。

いや、文字通り物理的に、土足で踏みにじる。突つ伏した、その頭を！

「だらしなく洗脳されやがって」

グリグリと頭を踏むと同時、シュツと引き抜いたのはコートノベルト。

振りかぶり、勢い良く叩きつければ、リオンのケツがピシヤリと鳴った。

「いい加減目を覚ませ！
このブタ！」

オバサン？

「いい加減目を覚ませ！ このブター！」

俺はグリグリとブタもとい、リヨンさんの頭を踏みつける。

気がついたら怪しい教団の生贄みたいにされてた件。

どうして俺は毎回、敵に先回りされてしまうのか？ 今回だって殺そうと思えば幾らでも俺を殺せたハズ。

そうしなかったのは恐らくクーデターのどさくさに殺してしまえば、卑怯なりと世界中で反帝国が巻き起こってしまうから。

それが、プラヴァスで観衆の前で処刑されたとなれば、王国民の怒りはプラヴァスに向かう。ソレを狙つての行動だろう。

……もしくは田中と木村を釣る為の策だったのかも知れないが、釣れたのはパノツサつてオツサンが一人。

ソレで見事に殺してしまった。家庭もあるオツサンを一人。

いやー良く知らないオツサンの命一つで助かった。ラッキー！

……つて笑えば良いのか？

笑って欲しいならもつと面白い感じで死んでくれよ、最後まで年甲斐も無く格好つけてやがって。

ソレもコレもまんまとコイツが洗脳されてるのが悪い。

怒りの全てを最近知り合ったばかりのイケメンにぶつける。

振りかぶったベルトを鞭のようにしならせて、ケツや背中をピシヤリピシヤリ。

「うう……」

「おはよう、良い夢見れたあ？」

突っ伏したりリヨンもといブタの頭を引つ張り上げて、凜々しいお顔を覗き込む。

するとどうだろう？ お目々をばちくり。

「わ、私は……？」

どうやらぼんやりして今の自分が何なのかも解っていない様子。

「アナタはあ？」

「あ……」

コレは体に教え込まねばなるまいと妖艶に微笑んでやれば、ブタめ！ こんな状況に関わらず俺の笑顔に見とれているではないか。完全に麻薬の上からメスガキがキマっている。コレなら大丈夫だ！ いや駄目かも？

「リヨン！ 早くソイツを殺しなさい！」

叫んでみせるのは魔女クロミーネ。いや、黒峰さん。久しぶりに見る彼女は妖しげな色気ふりまく淑女になっていた。

眼帯に黒いドレス、誰がどう見たってアツチが魔女でコツチが聖女だろうが！あの風体で良くも人の事を邪教徒など言ってくれる！

「リヨン！ 早くなさい！」

「違う！」

魔女が更にリヨンの名を言い募るも、当の本人はコレを拒否！ キツと鋭い目つきで、魔女に堂々と言い返す。

「私は、リヨンじゃない！」

「？ 何なの？ リヨン＝ブラッドでしょう？ プラヴァスの！」

「違う！」

再びの叫びを受けて、眉根を寄せる黒峰さん。

「じゃあ、何なのよ！」

「そうよね、アナタはなあに？」

黒峰さんと俺、二人同時の問いかけに、堂々と胸を張るのはプラヴァスの若き太守。

「私か？ 私は……………」

「……………ブタだッ!!!」

はい、勝った！ ブタは地球を救う。

「……………ぶた？」

突然の豚さん宣言にさしもの魔女も嘖然呆然。対して俺はニンマリと笑う。

「彼は私のよ、返して貰うわ」

「チツ！」

俺の勝利宣言を受けて、魔女は大きめの舌打ちをひとつ。

「リヨンは呪術に操られているわ！ 取り押さえなさい！」

魔女の命令で信者はゆっくりと包围を縮める。これはマズイ、渾身のメスガキ系女王様プレイで状況が好転したかに見えたのも一瞬。

魔女には下僕が一杯、コチラ聖女にはブタが一匹。リヨンは俺を必死に守ってくれるが多勢に無勢はどうしようも無い。

「クソツ！ 貴様ら！ 手を離せ！ ユマ様の肌に触れるな！」

「おいたわしやリヨン様、どうか正気に戻って下さい」

「リヨンじゃない！ ブタだ！」

……………これ、傍目にはどう見ても操られてるのリヨンさんだよな。

だけど、先ほどの様子を考えれば名前を呼ぶことが洗脳のキーである可能性は高い。しばらくはリヨンさんをブタさんにするしか無いだろう。

「ハアツ！」

「ぐう！」

そしてこのブタさんの強いこと。少々歳のいったオジサン達が多いとは言え、鍛えられた軍人っぽい男達を相手に一步も引かない。

「オイ、何だ？ リヨンさんが……」

そうした中で動揺が広がるのが講堂だ。先ほどまでは熱烈な信者で固められていた同所だが、若さと野次馬根性を爆発させた学生達が次々と乗り込んで来た様だ。

皆の前で回復魔法を披露して以来、俺は学内、それも男子生徒に人気が高い。

じゃあ女生徒に人気があるのは誰？ と問われれば押しも押されもせぬブタ、もとい

リヨン様の一強だった。

そのリヨン様が邪悪な儀式の真っ只中、大勢の信者を前に俺を守って大立ち回りをしているとあらば、生徒達からどう見えるか？

「ユマ姫が邪教徒だつて聞いて来てみれば！ リヨンさんが守ってるじゃないか！」

「リヨンさん！ クソツ俺達もユマ姫を守るぞ！」

「裏口！ 裏口から入れるはずだよっ！」

学生達が味方に付いた！ だけど黒峰さんはきつと裏に銃を装備した兵士を何人も忍ばせているだろう。このままでは『偶然』に巻き込んで学生達を殺してしまう。

そのドサクサに逃げると言うのも一つの手。だけど俺にはもう一つ逃げられない理由があった。

「やめて！ 叔父様！ 正気に戻って！」

カラミティちゃんだった。彼女は一人、舞台袖から壇上と滑り込んでくる。

「カラミティ！ お前！」

「ブタ、耳を貸しなさい！」

「はい！」

素直！

「彼女は洗脳されてるわ」

「それは……そうか、アイツも」

そう、そもそも叔父様の元へ案内するとカラミティちゃんが出て来たモノだから、デネシスとか言うオッサンを怪しいなーって警戒していた俺も油断した次第。

「彼女はむしろ私が魔法で皆を操っていると、そう洗脳されているのです」

「クツ！ 恥ずかしながら、これはブラッド家の不始末。私が命に代えてもアナタを逃がすので、アイツの事はどうか気にせず」

「そういう訳にも行かないでしょう」

相手が黒峰さんと来れば俺達の問題に彼女を巻き込んでしまった様なモノ。加えて

カラミティちゃんは木村の奴隷である。

ソレに何より褐色肌の可愛い女の子、どうにか助けてあげたい。

「では、何か手が？」

「……それは」

無い！ サツパリ無い！ そんな俺の焦りを見て、リヨンさんも謎に覚悟を決めていた。

「先ほど口にした魔石、パノツサの体から取った物では？」

「そうですね？」

「私が道を開きます、死んだら私の魔石でアイツを正気に戻して下さい」

「そんな事！」

出来ない。精神的にとかじゃなくて物理的に出来ない！

リヨンさんはブタだったから心の隙間に入り込めただけ、カラミティちゃんじゃそうは行かない。

と、二人で押し問答をしていけば、そのカラミティちゃんが必死の形相でやって来た。

「悪魔め！ 叔父様を戻しなさい！ コノ！」

「きゃっ！」

箒を片手に殴りかかる勢いはパワフルそのもの。本当に俺を悪魔だと信じている、洗

脳はかなり深そうだ。

暴れるカラミティちゃんをリヨンさんは慌てて取り押さえる。

「やめなさい！」

「やめません！ 皆さん！ 叔父のリヨンはこの悪魔に操られているのです！」

カラミティちゃんは学生達に向け、声高に語ってみせる。するとどうだろう？ コチ

ラ側に傾きかけた天秤がグツとアチラに寄ってしまう。

「まさか、本当にユマ姫が？」

「邪神の手先どころか悪魔だって？」

「洗脳なんてまさか、でも家族が言うのなら」

マズイ、コレじゃあ本格的に吊られてしまう。でも俺が何か言うのは逆効果。ブタさ

んにお任せだ！

「カラミティ！ 馬鹿な事を言うんじゃない！」

「だって！ 叔父様、私とロクに歳も変わらない女の子の言いなりなんて、変じゃない

！」

……変ですね。集団心理の中であつても俺がブタと罵り鞭で打つた一部始終を見て

しまった人ならば誰しも思うハズ。

会場は益々ヒソヒソと、気がつけば囲んでいた黒峰の配下達も停止して、カラミティ

ちゃんが喋るに任せている。二人の会話に状況は悪くなるばかり。

「それはだな……」

「言い訳なんて聞きたくない！ 叔父さんは操られてるの！」

「違う！ 私は、好きなんだ！」

「だから！ それが悪魔に魂を奪われてる証拠なんだよ！ 正気に戻って！」

カラミティちゃんの涙ながらの訴えは聴衆の心を動かした様で、俺の破廉恥な格好も相まってどんどんとコチラを見る目が厳しくなっていく。

一方で目が泳いでるのがリヨンさん、姪に対して必死の弁明を繰り返す。

「違う、ユマ姫の事は好きだがそれは個人的な事で、決して操られてる訳じゃ」

「じゃあ、ドコが好きなの！ この娘、まだ全然子供じゃ無い！」

「ソレはだな……」

ウグツ！ 言い淀まれると俺としても悲しい。いや、その……ドコなんでしよう？

「私は、いや俺は好きなんだ」

「ソレはもう聞い——」

「違うんだ、俺が好きなのは年端もいかない女の子になじられる事なんだ」

「……え？」

「……………」

突然のカミングアウトである。言った本人も流石に恥ずかしくなったのか、浅黒い肌でも紅潮しているのがわかる程。

「叔父さんな、若くして太守になったから人前ではずっと威厳を保とうと偉そうにしてるんだ。お前にだつて父親代わりとして立派に見える様、気を張ってきた」

「え？ でも叔父さんはずっと立派で」

「だけどな、ずっと偉そうに立派なフリをしてると、偉ぶってる自分を本当の自分が責めるんだ。お前ごときが何を偉そうにつてな」

「そんな事無い！」

「実際、お前一人、守ることも治す事も出来ず、それでも虚勢を張っていた。それを叱つてお前を治してくれたのがユマ姫なんだ、だから彼女だけは弱いところを見せても許されるんじゃないかって」

「じゃ、じゃあ私のせいで……」

「むしろ、お前のお陰で本当の自分を知れたんだ、俺は誰かに本当の自分を見て貰いたかった」

「……え？ じゃあブタつて呼ばれてるのが本当の叔父様？」

「……そうなるな」

なるかボケ！ 正気に戻つて！ いや、正気だった！ ぐぬぬ、コレはどうだ？ 聴

衆も何か変な空気になっている。

どうすれば！ どうすれば？ 頭を抱えてもカラミティちゃんは待つてくれない。

「女の子になじられて喜ぶなんて変だよ！ やっぱり洗脳されてるんだよ」

その言葉に……圧倒的な閃き。

カラミティちゃんの訴えはご尤も、だけど逆に言えば変で無ければ良いのだ。

「ブタ！ 這いつくばれ！」

「ぶひい！」

「ええ？」

俺は四つん這いになったりヨンさんの背に腰掛け、聴衆に問う。

「女の子になじられて喜ぶなんて変？ そうかしら？ 今なら皆もブタにしてあげるけ

どっ？」

「……………」

堂々と問いかけるも、ザワつくばかりで明確な反応は無い。流石に公衆の面前でドMのカミングアウトは荷が重かったか。

嘲るように魔女が笑う。

「アナタ、変態かと思ったら、変態で馬鹿なのね。邪神の手先らしいわ」

「ぐっ」

何人か居るかと思ったんだけどなー、これじゃ変態を披露しただけじゃねーか。普通に恥ずかしいんだけど？

やっぱり変だよと苛立ちMAXに呟くカラミティちゃん。俺の背筋にも冷や汗が伝う。

「ブタに！ ブタにして下さい！」

そんな空気を斬り裂いたのが一人の少女の言葉だった。

「フィナちゃん!？」

「違います！ ブタです！ そして、あの、踏んで下さい！」

最前列に居た少女、フィナちゃんって？ ああ、確か俺が怪我を治した女の子だ。まさか同性からのカミングアウトは意外性の塊。

「私、ユマ様を助けるために駆けつけて、最前列に居たのに、怖くて一步も動けなかった、私は助けて貰ったのに！ 駄目な子です！ 踏んで！ 踏んで下さい！」

壇上に上がって、這いつくばったままじわりじわりと近づいてくる。

ドMの一人か二人居たら良いなと思ったけど、この展開は予想外。ええい、やっつたれ！

「本当にとろくさいのね、いいわ踏んであげる」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ あの、足を舐めても良いですか

「？」

「ブタだもの、仕方無いわね」

「ありがとうございますうー」

何だコレ！ 自分でも何がなんだか？

因みに、今の俺は素足である。靴は逃げられない様に奪われていた。

だったらコートも剥かれそうなモノだが、まさか講堂をストリップ小屋にする訳には行かないと待ったが掛かったのだろう。そう考えると敵に脱がされない裸にコートも悪くない。

いや、悪いな。結局、自分で脱いでるし。

とにかく、半裸の俺に這いつくばって足をペロペロする女子生徒。意味不明な状況に異様な空気が漂い始める。

「なに、なんだコレ？」

「ちよつと羨ましいかも……」

「変態かよ。いや、でも、こんなの一生涯に一度のチャンスだし」

コレは……風？ なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、俺たちのほうに。

勢いでドサクサに紛れれば、パンツ以下の面積だってパンツじゃないから恥ずかしくない。

俗に言うトコロの『この速さなら言える』である。

「俺も……」

「俺もだ!」

「舐めたい、ブタにして下さい」

「踏んでください! 踏んで下さい!」

すごい一体感を感じる。今までにない何か熱い一体感を。

沸き立つブタコール。そして謎の熱気におの慄くのはカラミティちゃん。

「嘘ッ! 嘘よお」

今も足を舐め続ける友人の痴態に戦慄している。

大逆転! 世の中はブタこそがスタンダードなのだよ! 豚人間時代の幕開けである。人間は猿から進化し豚へと到る。全ては豚になる。やがて豚になる。

前世の俺だってユマ姫みたいな美少女が踏んでくれるなら、列に並んだに違いない。言っておくケド、俺は断じてDMではない。むしろDSだった。

そんな俺でも、美少女とお近づきになれるなら踏まれたって構わない、むしろ踏まれたい。そんな悲しき男の性。

取り敢えず、リヨンさんが史上稀にみる変態ではないと理解して貰ったトコロで、改めて彼女に問いかける。

「カラミティさん、アナタも踏んであげましょうか？」

「結構です！」

「ふうん？　じゃあアナタだけは特別、キスしても良いのよ？　もう一度」

「ッ!？」

カラミティちゃんはビクリと体を震わせ、唇を押さえた。その顔はハッキリ赤いてつきり忘れているモノと思つたが反応を見るにうつすら記憶にあるのだろう。

……ん？

なんだか俺はそれに違和感を覚えた。

だけど、その前にブタから人間に戻ったりヨンさんが彼女を諭す。

「カラミティ、俺はこの通り正常だ。いや、異常なのかも知れないが洗脳などされてない。お前こそどうなんだ？」

「私？　私は洗脳なんて」

「どうしてユマ姫を悪魔などと決めつけた！　他国の、それも異種族の姫だぞ！　外交問題だし、民族問題にもなる」

「だ、だつてみんなオカシイから」

「オカシイのはお前だ、良く考えろ！」

とソコでいよいよ異様な空気に耐えられなくなったのか魔女が再び指令を下す。

「みんな！ 全員でユマ姫とリオンを捕まえなさい！ 抵抗するなら二人とも殺して構わない」

「そんな！」

それに悲鳴を上げたのはカラミティちゃんだった。魔女は彼女に優しく語りかける。「解つて頂戴、あなたの叔父は完全に魅入られているわ。殺す事では救えないかも知れないの」

「で、でも！」

「コツチに来なさい」

「い、いや」

「従いなさい、カラミティ！」

名前での呼びかけに、ビクリと肩をふるわすカラミティちゃん。

マズイ！ ココで彼女を確保されては手が出せなくなる。

「カラミティ！ コチラに来るんだ」

リオンさんが必死に叫ぶが、洗脳が相手じや情に訴えかけても分が悪い。職務に忠実な近衛騎士に犯されそうになったのも最近の話。まさか何の変哲も無い少女が自力で破れるハズも無い。

「いや！ 叔父様やつぱり変よ！」

「コチラに來なくても良い！　せめて逃げるんだ」

「來るのよ、カラミティ！」

「は、はい……」

リヨンさんの必死に訴えは無視されて、一方で魔女の言葉は染みていく。

「聞くな！　お前は洗脳されているんだカラミティ！」

「……違う、洗脳なんてされてない」

リヨン涙の訴えにチラリと少女が振り返る。それが戸惑いだと俺には見えた。

洗脳が甘いのか？　だったら！

「人のコト悪魔だ何だと言うのに、アンタもその魔女のブタなんじゃない」

「ブ、ブタ？　違うっ、別に私は従ってる訳じゃ！」

「でも、その女の言葉でアンタは家族を見捨てようとしてるじゃない、ブタだってソコま

でしないわよ？　リヨン、アナタ、私の命令でその子を殺せる？」

「ソレは、出来ません」

「そうでしょ？　カラミティ、アンタは家畜ブタ以下の玩具よ」

「玩具ッ！　違うッ！　別に私は！」

「カラミティ！　来なさい！」

いよいよ焦れたのか、魔女が語気を強めて命令し、強烈な眼光で睨んできた。

——えっ？ なにこれ？

同時に頭を掴まれたかの様な強制力で俺の体までグラリと向きを変えてしまう。命令されてない別の下僕も一斉に魔女へと向き直る。

コレが魔女の本気なのか？ コレを心の隙間に打ちつけられたとても逆らえない！
ただの少女などひとたまりも……

耐えかねた様に少女が叫んだ。

「違う！ 私は玩具なんかじゃないよ！ 何で、私が、こんなオバサンに！」

「おぼ？」

「……………」

「……………」

強制力がピタリと止んだ。

「オ・バ・サ・ン!!」

俺は笑った！ いやもう、コレは笑うしか無いでしょ。ゲラゲラと笑う俺をキツと睨んだ魔女であったが、すぐさまカラミティイに向き直る。

「来るのよ！ カラミティイ」

恐らくはより強い洗脳を掛けている。なのに、いよいよ喧嘩腰で逆らい始めたのがカラミティイちゃんだった。

「嫌よ！ リヨン叔父様を悪魔の手から救ってくれるって言ったのに、殺しちゃったら意味無いじゃない！ 嘘つきオバサン！」

「アナタ！ まさか！」

「これ、ひよつとして……」

皆の視線が少女に刺さり、呆然とリヨンさんが呟く。

「カラミティ、お前、まさか洗脳されてないのか？」

「だから！ 初めからそう言ってるじゃない！」

「なんで？」

魔女が叫ぶが、聞きたいのはコツチである。

そう言えば、黒峰さんの洗脳が俺の魔法に近いのだとしたら、アヘンで脱力させて精神力を削るのが効果的。

だけど、死ぬ程のアヘンを吸った今のカラミティちゃんに適量のアヘンなど効くのだろうか？ 気持ちいいなって位のモノではないか？

そして気持ちいいだけのカラミティちゃんに、魔女は俺への猜疑心を植え付けた……つもりだったに違いない。

実際には俺への猜疑心は元々埋まっていた。それもガツチリと。

そう言う事だろう。

そう言えば、彼女は俺を邪神ではなく悪魔と呼んでいる。

これっぽっちも洗脳なんて効いておらず、普通に俺が悪魔だと思っていた？　なんで？　おかしくない？　カラミティちゃんとその友達の子ナちゃん。都合二人の命を救って悪魔扱って報われないにも程がないか？

……まあ、代わりと言っちゃアレだけどリヨンさんはブタになってるし、子ナちゃんもついでにブタにしちゃったけど、命の前では誤差みたいなモンだろ？

あ、そう言えばカラミティちゃんの記憶はまるっと消してるんだった。起きたら叔父が変態になっていた感じ？

なるほどね、理解理解。俺、悪魔じゃん。

だったら精々悪魔らしくやりますか！

『黒峰さん』

「ツッ…」

俺は初めて魔女に日本語で話し掛けた。どうせ俺の正体には気がついていただろう？　それでも、俺は、俺だけは、三人と違って見た目が前世と違い過ぎる。

きつと、自分の目で見ても確信は持てなかったに違いない。だから煽る、この瞬間に！

『年増の言う事は聞けないってよ。オ・バ・サ・ン』

「この！ アンタやっぱり！」

いよいよ黒峰さんがヤケクソの絶叫を上げる。

「殺しなさい！ 全員！ 皆殺しよ！」

「仰せのままに！」

信者が一斉に向かつてくる！

俺も対抗してブタ共に命ずる。

「ブタ共！ 戦え！ 帝国の魔女を許すな！」

「ブヒー」

そうして入り乱れるブタとヤク中。この世の地獄かな？

だけど流石はヤク中のジャンキーパワー。裏手から帝国兵つばいのも飛び出して、形勢は不利。

なにより俺の体はフラフラで戦闘にはついて行けそうにない。うーんどうしよう？

「逃げましょう！」

「え？」

俺はリヨンさんに摘まみ上げられ、お姫様抱っこで抱えられる。靴がないから仕方無いのだが、俺はまだマイクロビキニ。コレは相当恥ずかしい。

「カラミティ！ 裏口は？」

「コッチ！ だけど兵士が一杯いるよ！」

「マズいな、このままじゃ」

——パーン

銃声が響き、弾丸は俺の間近を通過する。銃を構えていたのはプラヴァスの正規兵に見えた。

帝国の人間が衛兵に紛れている。持っているのは火縄銃？ いや違う、最新のフリントロック式。コレでは下手に動くのは自殺行為だ！

「今、動いたら危険です。皆に紛れないと！」

「ですが！」

……渋るリヨンさん、民の安全を考えてのことだろう。だけど、俺にはとっておきがある。

——パーン

新たな破裂音。しかし湧き出す煙は硝煙どころではない、モクモクと大量の白煙が上がる。

「なんだ？ 何も見えないぞ！」

「クソッ！ 換気しろ！」

煙幕だ！ 人で押し合う講堂で煙幕とは！ でも、こう言うのが大好きな味方が一人

居る。

「また無茶な事してるのね」

「シヤリアア！ ずいぶん遅いのね」

俺だけには見えていた、窓裏に隠れていた彼女の運命光が。

「隙あらば、と思ったのだけれど無理ね。何故だかアイツも私に気付いていた」

「そうみたいね」

俺やシヤリアちゃんにとつて煙幕は有利。そのはずが魔女もシヤリアちゃんに気が既に動きを警戒していた。隙が無い。

「口惜しいけど、殺せたとしてもコチラも逃げ損なうわ。今のうちに逃げましょう」

「わかったわ」

シヤリアちゃんが侵入してきたのは二階部分の巨大な採光窓。とてもじゃないが手は届かないのだが脱出用にロープが掛けられていた。

「コレを？」

「ええ、上れる？」

「……………」

ところで皆さん。ロープを掴んで垂直に上る事が出来るでしょうか？

映画やゲームじゃ当たり前の様にスルスルとロープを上っていくけど、俺の腕力じゃ

登り棒だって上がれない。

そこで気合いを入れたのはリヨンさん。しゃがみ込み、大きな背中を突き出してくる。

「そう言う事なら私の出番だな、さあ背負います!」

「拒否します!」

「どうして?」

死ぬからだよ!

「背後から撃たれる可能性が高いでしょう? 抱っこして下さい!」

「何言ってるの! 悪魔! そしたらリヨン叔父さんが死ぬじゃない!」

大丈夫だって、距離もあるし一発ぐらいなら何とかなる!

「良いんだ、お前は先に行きなさい!」

「ええ! うう……悪魔め」

恨み節を残してスルスルとロープを上るカラミティちゃん。なんとパワフル。

「じゃあ、お願いします」

「あ、ああ」

そしてリヨンさんに真っ正面から抱きついての大しゆきホールド。誰にでも股を開くビッチでごめんな。

「私は最後に良いわ」

「ああ、先に上らせて貰う」

シャリアちゃんを残してリヨンさんが腕力のみでロープを上る。伊達にプラヴァスの黒豹と呼ばれていない、キュンキュンしちゃうね。

「ぐっ！」

「どうしました？」

「いや、なんでもない」

……ひよつとして汗臭いだろうか？ 砂漠を渡ってきたし多少はね？ それに汗臭いのはお互い様じゃない？ リヨンさんから漂う男の匂いに少しドキドキ。

そんな、甘酸っぱい空気を壊すのがオバサンのヒステリーだ。

「あそこよ！ 撃ちなさい！」

帝国兵達が銃を構える、恐らくはロクに見えていないが、魔女が指差すままに狙いを定める。

——パーン！

「グッ！」

「当たりました？」

「かすり傷です」

そうは言うけどマズい、もうすぐなのに！　と思つていたら俺だけグイッと引つ張り上げられた。

「早くしてよお！」

窓際のバルコニーで待つていたのはカラミティちゃん！　やだ、パワフル！

「さっさと逃げて！」

グイグイと背中を押され、後は窓から外に飛び降りるだけ、死ぬ様な高さじゃない。

だけど、このまま逃げたらどうなる？　リヨンさんは銃に撃たれまくるし、構内の騒動も収まらない。

俺は煙の中、魔女が居る場所に大声で煽る。

『じゃあね、また会いましょう。オ・バ・サ・ン！』

「このっ！」

魔女の声！　そして。

——パン！

他よりも軽い拳銃の炸裂音。だけど弾丸はパリンと窓を割っただけ。

撃つて来ると解つていれば伏せるだけで避けられる！

これで何発撃つた？　鹵獲した武器からお前等が弾丸を作るに至らないのは知つて

いる。さあ、どうだ？

「もうっ！ 何なの！」

案の定、黒峰さんは逃げに入る。

「追うわ！」

「やめなさい！」

仕留めようとするシヤリアちゃんを止める。追ったらみんな死ぬ。そう視えた。きつと爆弾の一つや二つ持っているのだ。

そうこうしていると、身軽になったリヨンさんがバルコニーに上がるや、サツと俺を抱きかかえた。

「え？」

「ユマ姫は俺が預かった！ 文句がある奴は追って来い！」

お姫様だつこで堂々の宣言。

俺は裸みたいな格好だし、凄まじく恥ずかしいんだけど？

あんまりの宣言に、ブタとヤク中の戦いがピタリと収まる……こうなればヤケだ。

「ブタさん達、またね♪」

投げキッスを一つ、同時にリヨンさんが外へと飛びして俺達は地面に着地した。

それと同時に蜂の巣を突いた様な騒ぎが構内から聞こえて来る。

「追え、逃がすな！」

「待って！ ユマ様あ」

ああ、もう滅茶苦茶だよ。でもコレで奴らが争う理由はなくなつた。

「大丈夫なの？」

「叔父さん、平気？」

追いかける様に飛び降りてきたのはシャリアちゃんとカラミティちゃん。二メートルぐらいの高さがあつたのに、二人とも凄いのな。

「肩を撃たれたが死ぬ様な怪我じゃない、ユマ姫を背負つていなくて良かった」

「でも！」

「良いから逃げましょう！」

「そうは言つても、どこに！」

学内は敵と味方が入り交じり、俺の『偶然』を考えれば油断がならない。ソレに魔石がないから、リヨンさんの怪我だつて治せない。

「魔石商も国庫も敵に押さえられている。他に魔石があるとすれば浄水場か」

「遠いし、危ないよ！」

土地勘のある二人でも、良い場所は思いつかないみたいだ。

「魔力があれば、良いのよね？」

なのに、心当たりがあるのはプラヴァスに来たばかりのシャリアちゃんだった。

そう言えば、彼女は魔力が視えるのだ。

「プラヴァスに魔力が満ちる場所があったの？」

「ええ、アナタが探れと言ったのでしょうか？」

「まさか！」

「そうよ、敵の真つ只中、ポンザル家の地下遺跡。今なら誰も居ないから呼びに来たのよ」

なるほどね。遺跡を操作出来るとしたら俺しか居ない。

「行きましょう！」

「危険では？」

「元々乗り込むつもりだったのです、少し予定とは違いますが……」

なるほどね、たった四人で敵のお膝元に乗り込む訳だ……

……田中アイツと木村らどこで遊んでいるんだよお！

やったか？

場所は魔石商のバックヤード。魔石の保管庫へ続く地下への階段を前にして、俺と木村は厄介な敵の襲撃を受けていた。

ルードフ家に占拠された魔石商に乗り込むまでは順調だった。しかし、魔石の保管庫には一番厄介な相手が待ち受けていたワケだ。

奴の姿を見て、たまらず木村は虎の子の爆弾を投げつけた。

「やったか？」

悪趣味に、やってないと解っていないながら煙の中に問いかけやがる。当然だが、煙が散った後には平然と佇むエスプリの姿が現れた。

「やっぱ効かねえか」

木村が投げた爆弾なんざまるで効いちやいない。オドロキの手品のタネは、大森林でセーラが見せた結界魔法に違いない。

魔力が薄いプラヴァスでも魔法が使えやがんのか……

王様専用にあつらえた魔導衣は隔絶した性能とは聞いていたが、ソレにしたって強過ぎる。魔石を食って魔力を一時的に上げられるユマ^{アイツ}姫だつてこうは行かないだろう。

……いや、ひよつとして？

「どうした？ 来ねえのか？」

「……………」

やっぱりか、突然の襲撃に姿勢が崩れたままの俺と木村。

なのにエスプリは追撃に来ない。何故か？

「来れねえんだろ？ 地上は魔力が薄いからな」
コッチ

考えて見りや当然だわな。相手はエルフ、魔力が薄いプラヴァスでは殆ど活動出来ないのが道理。活動出来る唯一の場所と言えば、魔石の魔力に満ちる保管庫。

つまりヤツがココで襲ってくるのは必然だったってワケだ。

つまりアイツはココから出られない！

さあ、どう出る？ エスプリ！

「オイオイ、地下でしか戦えないとかモグラかあ？ かかって来いよ！」

何故か木村が出て来た。

決め顔で気合を入れたのに、横からイキリ散らすのは止めて欲しい。

「……………」

「ビビってるのかあ？ そんなところで引き籠もつてないで表に出ろよ！」

「……………」 あのか？ 木村サン？ ちよつと？」

「……なんですか?」

「因縁の対決なのに安っぽい挑発、恥ずかしくないの?」

「二人の門出をモブらしい発言で盛り上げてるんだが?」

「いらぬです」

「……はい」

示し合わせた様な木村との漫才。

なのに好機と攻めてくるどころか、付き合つてられないとばかり、アイツは地下へと引つ込んじまった。

「来ねえな」

「来ないねえ……」

コチラは隙だらけなのだが、それでもエスプリは仕掛けてこない。

「爆弾は残り二つ。取り敢えず投げ込んで良い?」

「無駄無駄、やめとけよ、チツ。長期戦になりそうだけ。応援は来ねえのか?」

「来ないんじや無い? ま、ココを押さえておけば十分だろ」

「面倒くせえ」

相手が待つてる所に踏み込むのは相当な実力差が必要だ。ただでさえ俺達の剣はお互いに一撃必殺。不格好でも死角から一撃決めればお終いなものだから、待ち伏せは決ま

りやすい。単純な奇襲なら気配を頼りに防ぐ自信はあるが、相手が相手だ。

「何かねえのかよ？ 木村ア！」

「近代戦ならこんな待ち伏せは悪手なんだけどなあ……」

「そりや、強力な爆弾がイヤって程あるからか？」

「まーな、毒ガスやフラツシユバンもあるし、最悪建物ごと吹っ飛ばす兵器まである」

「そんな無いモノねだりしてもしゃーねーだろ」

参つたな、こんな所で睨み合いとは。いつそ放置するのも手か？ アイツを？ 冗談

じゃねえ。敵は最大戦力をぶっ込んで来た、ココが一番重要つてコトだ。

苛立ちにゴツゴツと床を踏み鳴らす。ストレス解消兼、階下に対して今にも踏み込む

ぞとプレツシヤーを掛けているのだが、こんな手が効く相手とは思えない。

「苛立つぜ」

「……なあ」

「外はどうなつてんだよ」

「……なあつて！」

「ンだよ？」

今は木村と漫才する気分じゃねえ、そりや名案があるつてんなら話は別だが、どうにも楽しそうな雰囲気じゃねえ。

……きつと悪い報せだ。そんなの聞きたくねえぞ！

「あのよ、フラッシュバンは兎も角、ガスはあつただろ？」

「聞きたくねえ！」

「お前とユマ^{アイツ}姫の恋愛小説書いて良い？」

「だめ！ くだらねーコト聞くなよ。二人してガスで眠っちまって大ピンチだったろ？」

「んでよ、あの地下施設を思い出せよ。地下何階だったか？ アレ」

「三十階近かったな、ガキ二人担いで上り下りしてみろ、足がパンパンに——」

「ソレは良いっての、でよ、なんで古代人はあんなに深く掘ったと思う？」

何故って？ そう言われるとアレだな。ナニが怖くてあんなに深く穴を掘ったんだろうな？ アレ……？

「……オイオイ、マジで言ってる？」

「マジだつての、あるんじゃないの？ 『建物ごと吹っ飛ばす兵器』って奴がさ」

「お前、アレが核シェルターだったって言うのかよ？」

「核かは知らないけど、古代には近いモノがあるんだろうよ」

「マジかよ」

魔力から守る為の施設だとアイツは言っていたが、それにしちやあ過剰。あの施設自

体、核戦争にも対応していますって感じは確かにあった。

「そんでよ、その兵器を起動するために魔石を集めてる。つてのは考え過ぎ？」

「面倒くせー!!」

あり得ねえ！ 考え過ぎだ！ と言いたい所だが、ユマ^{アイツ}姫が絡んでるコトで悪い予感が裏切られたコトは一度も無い。

「悪い妄想するの禁止でヨロ」

「冤罪だつての、最悪のその上を飛んでいくから。頭が吹っ飛んでるとか考えてもなかったよ？」

「だよな……ぜんぶアイツが悪い」

結論が出てみると、このまま様子見は怖くなる。そう考えると敵の動きも時間稼ぎに見えるてくる。

「仕方ねえ、イチかバチかで行くしかねえか！」

「爆弾放り込んでからで良い？」

「崩れたら厄介だから駄目だろ」

「ぐへえー」

覚悟を決めて、階下に踏み込む。

……そこで俺達が見たモノは？

「まあ、こうなるよな」

何も無い地下室。そこにドンと開けられた大穴だった。

「向こう側、遺跡っぽくなってるんだけど……」

木村に言われるまでも無い、向こうには近代的なコンクリートが見え隠れ。

「まあーた、地下でネズミみたいに追いかけてっかよー！」

俺の叫びは地下の奥深くまで響いていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——パーン！パーン！パーン！

「アイツら好き放題撃ちやがって！」

地下に降りた俺達は見晴らしの良い通路で帝国兵による熱烈歓迎を受けていた。

「駄目です、踏み込めません！」

律儀に報告してくるのはプラヴァスの衛兵や軍人達。彼らは突如街中に現れた帝国

兵を追って、地下まで入り込んで来たらしい。

俺達が辿り着いた時には、既に大勢の死体が山の様に転がる有様だった。

「奴らココをキルゾーンに定めたみたいだな」

「おせーぞ、木村ア！ 何やってた！」

「そう言うなつての、コレを取ってきたんだよ」

そう言つて木村が取り出したのは火繩銃だった。

「どうしたんだよコレ？」

「魔石商でお前が切り倒した奴が持つてたんだつて」

なるほどな、コイツを取りにわざわざ戻つてたのか。

早速木村は左手の自在金腕ルーデルオンから伸びる五本のワイヤーに、五丁の銃を絡ませる。

「何時見てもキモいなソレ」

「言うんじゃねーよ、ただでさえ手が痛いんだつてのに」

文句を言いながらも壁に隠れたまま、五丁の銃が帝国兵を狙う。その異様な光景に敵味方双方から驚愕の聲が響いた。

「何だあれは！」

「銃か？」

「面妖な！」

——パーン!!!!

しかし、誰何の聲は五丁の火繩銃による一斉掃射で掻き消された。

タイミングは完璧。……だと言うのに姿勢を低くした帝国兵には全く損害が見られない。

まー銃がワラワラと宙に浮かんでいれば、やな予感がして誰だつて伏せますわ。

「やったか!？」

「やってないのを確認してから言うのはマナー違反だろ!」

マナー本村講師は怒るが、アレだけ期待させておいて一発も当たらねえのも立派なマナー違反だろうが。

「ありや弾幕だよ、本命はコッチ」

言いながら懐から取り出したのはリボルバー。ソレを素手で構えている。

「ンだよ? 自在ルー・デルオン金腕を使って近くから撃つた方が当たるんじやねえか?」

「奇襲なら兎も角、正面からだど警戒されちまうし、銃の方を狙われちまう」

——パン!パン!

言いながらも、二連射。それで二人が沈む。流石の精度だ。だけどさあ……

「それ、最初の火縄銃、意味あんの?」

「バンバン撃ってきてる所、顔出して撃たれたらどうすんだよ? 俺だつて見えなきや

狙えねえよ」

「つまり、最初のは当ててる必要は無い訳か」

「当てれるモンなら当てて見ろよ、ライフリングもない丸玉なんて狙った所に飛ばないからな」

「ンじやあさ、お前が左手痛めてまで撃つ必要無くない?」

「……そりや、無いけど」

……ま、実際の所、アイツが自在ルーデルオン金腕で撃ってる理由は、最も安全に牽制出来るからだろう。しかし、コレでは木村しか仕事が出来ない。

「つーか、暇!」

「ソレが本音かよ、ただ銃に触りたいだけじゃねーか」

「まーな、でも俺だけじゃネーゾ? ホラ」

俺の後ろには銃に興味津々な兵士達が、目をキラキラさせて控えて居た。

流石に木村も彼らを見殺しは出来ないらしい。

「……撃ってみる?」

「よろしくお願いします!」

兵士達から一斉に敬礼が返る。

そんな訳で木村に銃の扱いを習いながら俺達は細々と前進していく事になったのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、木村の射撃を軸に進軍。撃破した部隊から次々と火薬と銃を奪いながら地下遺跡を行軍していた俺達だったのだが……

「ヤベエ、銃弾が残り少ない」

木村がぼやく。それもそのはず、敵は思いのほか数が多く、地下道もぐねぐねと長かった。地元の人間さえココまで地下道が長いとは！と驚く始末。

地下道は数メートルおきにシャッターが下りていた。プラヴァスの人々はソレをただの行き止まりだとしか思っていなかったのだ。

しかし、今、目の前のシャッターには大穴が開いていた。

エスプリが魔剣で斬り裂いているのだ。綺麗な切り口を観察しながら、干し肉をビールで流し込む。

「モグモグ、流石にソロソロ打ち止めだろ？」

「食べながら喋るなよ」

「気にすんな、折角食いモンを分けて貰ったんだ、食うだろ？」

「まあ食うけどな」

返事を待たずに木村へ干し肉を投げる。嫌がらせの悪球だったが、一步も動かず自在ルー・デルオン金腕でキャッチする辺り、集中力は鈍っていない。

「中々美味しいな、何の肉かは考えたくないけど」

「ドーセトカゲだろ？」

「折角なら幼虫が食べたんだけどなあー」

「馴染んでるねー、プラヴァスに」

しばらく見ない内に、プラヴァス料理でも上級者向けのヤツにハマってやがる。

それにしても昼飯を食ってなかったから、兵士から貰う非常食には助かった。毒かも解らないから、コレばかりは敵から奪う気もしない。

そんな事を思えば、何故だか笑いがこみ上げてきた。

「ふへっ」

「どつたの？」

「いや、ユマ^{アイツ}姫がよ。俺にその辺で拾い食いとかするなって言い始めやがってさ」

「アイツこそ変なモン食べて死にそうだけどな」

「違いねえ」

二人で笑い合う。アイツのネタは鉄板だ。と、そこに兵士が一人駆け込んできた。

「この先で足止めを食らっています、ご助力下さい」

「どれぐらい居るんだ？」

木村が残弾を数えながら問う。すると兵士は口ごもった。

「それが……」

曰く、敵はたった一人。

敵を追っていった先、地下にこんな場所が？ と驚く様な大広間で一人の男が待ち構

えていたと言う。

木村に教えて貰った銃を撃つてもまるで効かず、大剣の一振りですの人間が両断された、語る兵士は震えていた。

「やつと鬼ごっこは終わりか……」

「俺も手伝うことある？」

半笑いで木村が茶々を入れるが、俺の答えは決まっていた。

「わざわざ俺を待つてるんだろ？ サシでケリを付けるさ」

「ビューかっ！こいー」

木村の声援を無視して、俺はヤツが待つ広場へと駆けていく。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「待たせたな！ エスプリ！」

「……………」

兵士の案内で辿り付いた広間、地下なのにLEDみたいなギラついた照明が辺りを強烈に照らしていた。

その中心に佇むのは顔をベールで隠した一人の男。エリプス王もといエスプリの姿がそこにはあった。

「こう言う時は、今来た所だつて言うのがマナーだぜ？」

「……………」

返事は無い、当然だ。コイツは洗脳されている。誰よりも深く。巨大な大剣を言葉も無く構える。

集中が極限に至り、空気がザワめく。大気がキイインと高音を発している様に錯覚する。それ程の殺意と緊張が場に満ちていく。

雑音が消え去り、体の芯だけが冷える。

認めたかないが、俺は、この空気が溜まらなく……好きだ。

冴えていく頭で、相手の構えを観察する。

……妙な構えだ。大剣を片手で持つのは良い。剣を持つ右手を後ろに構え、何も持たない左拳を突き出す姿勢もまだ許せる。

だが、気に入らないのは決定的に斬る気が見えねえトコだ。パンパンに張り詰めた殺意と釣り合わねえ！

『我、望む、放たれたる珠に風の祝福を』

「!？」

呪文？ 魔法の矢？ エスプリが握り締めた左手を開く！

暗器？ 爆弾？ 何も、持っていない???

違う！ 小さい！ 鉄球！ 弾だ！

弾丸を手に持って、お前は何を？ 投げた？

ふんわりと投げられた弾丸、たった一粒。きつとコチラに届きもしない。

……まさか！

「逃げろお！ 木村ア！」

振りかぶった剣をラケットにして、宙の弾丸へと振り抜いた。

カアンと高い音、大した速度は出ないだろう。……通常ならば。

しかし、弾丸は魔法の力で加速され、通路の影に隠れた木村へ向かう。

俺の叫びと同時に、パアンと乾いた炸裂音。音の主は木村の拳銃だ。

アイツは通路から虎視眈々とエスプリの隙を窺っていた。俺の剣士としてのプライドなんてモンに頓着しないのがアイツだ。横やりを狙っていたいやがった。

言っても聞かねえと放置していたが、エスプリは真つ先にアイツを狙った。

二つの弾丸が交錯したが、エスプリは無傷。剣を振り抜いた勢いで、木村の弾丸を弾いて見せた。

一方で、アイツはどうだ？ 決死の覚悟でおまじないを唱える。

「やったか？」

「マズった！」

「死んだか？」

「生きてるけど、右手がイタイイタイ」

「ママに治して貰え！」

「うん！ ママー!!」

バタバタと足音が遠ざかる。

締まらねえなあオイ！ こんな時まで笑わせようとしてくるんじやねえよ。

ニヤケそうになる顔を精一杯取り繕って、剣を構え、獰猛に笑う。

「お望みの一対一だ、トコトンやろうぜ」

「……………」

こんな場面でもひと言も喋らねえとは、敵も締まらねえヤツだぜ。

フォツガ

靴も無い、服も無い。

気絶して、磔に晒された際、俺は全てを奪われてしまった。

だからリヨンさんと共に講堂を抜け出し、いざ脱出と言う場面にも関わらず、俺は自分の足で歩く事すらままならなかった。プラヴアスにおいて素足で歩こうモノなら、あつという間に火傷してしまう。

では、どうするか？

「肩は……大丈夫ですか？」

「何とも無いですよ、銃と言えどもこんなモノですか？」

リヨンさんが俺の背中と膝裏を支え、抱きかかえる。黒豹に喻えられる青年の、端正な横顔がとてに近い。

つまりアレだ、お姫様抱っこで運ばれているワケだ。

リヨンさんも本当は痛いに違いない。その証拠に顔には珠の汗を浮かべている。それでも筋肉が厚い肩で銃弾を受けたので、軽傷と言えるのもまた事実。

俺と言えば、足が痛いだけなら普段だったら我慢も出来る。だが、今はその我慢す

ら効かない状態なのだから仕方が無い。

寝てる間に何を嗅がされたのか解らないが、恐らくは睡眠薬かアヘン、魔力が抜けている事から霧もだろう。そうなると体は殆ど動かない。

強烈な痛みが刺激となって、今までなんとか動いていたに過ぎないのだ。つまりリヨンさんに打ち捨てられたら詰みである。氣遣う姿勢の一つも見せねばなるまい。

「無理はしないで下さいね」

「無理のしどころですよ、アナタの為ならばこの腕が二度と動かなくても構いません」

「まあー」

照れるね、どうも。こんなコトを言われれば、女の子はみんなイチコロだろうよ。しかも相手は砂漠の国の王子さま。これ以上は無いシチュエーションだ。

コレには俺も正統派お姫様ムーブでご返礼。感激に口を押さえ、涙ぐむ。正に今、お姫様としての本懐を全う中。

リヨンさんもまんざらではないのか、照れくさそうに頬を紅潮させる。まるで物語の一節……なのだが。

「……………」

「……………」

うん、そうなんだ、何もこの場に二人きりと言う訳じゃ無い。

カラミティちゃんとシャリアちゃんは二人してジツトリとした目をこちらに向けてくる。そんな目で見られても、君達に俺を担ぐ力は無いのだから致し方なし。

いいじゃん、いいじゃん！ こちとら押しも押されぬお姫様だよ？

「魔法での洗脳なんて必要ないって言うの……」

ブツブツと呟くカラミティちゃんは、どう見てもまだ俺のコトを疑ってるし……

「いつか刺しますよ？」

シャリアちゃんに至っては意味が解らない。ソレを言うならいつか刺されますよ？
じゃないの？ その点、彼女はホントに刺してくるから凄い。

更に言うと、俺達を見てるのは二人だけでも無い。

「なんだ？ ユマ姫？」

「は、裸じゃ無いか！」

「美しい……」

そう、敵が銃を持っているのだから人混みに紛れるのが一番と、俺達は人が溢れる校庭の炊き出しスペースに飛び込んだのだ。

なんだけど、砂漠の人々の前に出るには俺の格好は刺激的に過ぎた。白いマイクロビキニなど遠目には裸に見えるに違いない。

そのせいか俺を見て声を出せたのはむしろ少数。大半の男は真っ赤になって恥ずか

しそうに目を逸らすばかり。

その初心^{うぶ}で紳士な態度が、却ってコツチには恥ずかしい。

「うう……」

「もう少し辛抱下さい。おい、ラクダを貸せ！」

リヨンさんは兵士からラクダを奪い、背に跨がる。すぐさま撃たれた方とは逆の腕で俺を引き上げると、そのまま前に座らせた。俺の体はリヨンさんの腕にスッポリと収まる格好だ。

「どけーどくんだー」

人混みを掻き分け門を抜け、ボンザル家へと走らせる。

だけど、門を抜けても人が少ない訳じゃない。むしろ学園に入りきらなかった人々で、学園前通りはお祭りみたいな騒ぎになっていた。

らくだ上で晒される俺の半裸に、皆の視線が突き刺さる。ただでさえ目立つリヨンさんの腕の中だ。

撃たれる可能性を考えたらこの方が安全だし、俺にはもうしがみつく力も無いからコレしか無い……んだけど、

リヨンさんの腕の中で真っ赤に茹で上がった俺の姿が更に多くの衆目に晒される事になるのだった。

「おおつユマ姫だ！」

「裸じゃないか！」

「なんと破廉恥な！」

「天使だ！」

……正直、メチャクチャ恥ずかしい。

寿司詰めめの講堂でSMショーを披露したヤツが何を気にしてるんだ、と言われればそうなんだけど。熱狂状態の構内と開放的な屋外じゃ恥ずかしさの質が違う。

……ともかく、俺達はらくだを走らせ、ポンザル家。今はルードフ家だっけ？ に辿り付いた。

カラミティちゃんとシヤリアちゃんも、どつからか調達したラクダに乗って追いついた。

ココは敵地のど真ん中。混乱に乗じてやって来てしまったが、急に心配になってきた。

「でも良かったんですか？」

「何がですか？」

「こんな所にリヨンさんが来てしまった」

「ああ……なるほど」

そんな事ですか、トリヨンさんは戯けた様子で笑う。

「学園は敵の手の内、一刻も早く脱出したい所ですが、私一人がどこかに逃げ出したとあつては沽券に関わりません。その点、囚われの姫を奪還して逃げるのを大勢の市民が見ている訳ですから、私の株は寧ろ上がったことでしょう。大助かりですよ」

「……いえ、そう言う意味ではなく——」

「市民の安全ですか？ 信頼出来る者に指揮は任せて来ました。市民から義勇兵を募つて帝国に立ち向かえば、帝国が幾ら武装に優れていても多勢に無勢です。心配は要りません」

「だからって……」

露悪的な言い訳で誤魔化される俺じゃ無い。なんだかんだ俺を心配して付いて来てくれているに違いないのだ。

だけどリヨンさんはプラヴァスの太守。こんな所まで来るのは自殺行為だ。俺はもう、敵のど真ん中で踊り狂うのが仕事みたいなモノだが、このままではリヨンさんまで『偶然』に巻き込んで殺してしまふ。

「大丈夫ですわ、ユマ様。もうココには傷病者しか居ません」

「シャルティア……」

「あのままあそこに居たら、ドサクサに紛れて殺される可能性は高かった。死ぬに構わ

「ず殺しに来るヤク中が混じってる中、守り切るのは不可能です。それぐらいなら敵陣に乗り込んだ方がマシだと思えますわ」

「だからってココに来なくても」

「地下には濃厚な魔力が溜まっています、魔法で体調を整え、リヨン様の肩も治して差し上げないと行けない。違いますか?」

「そうですね……」

「肩の怪我もこつちに責任がある。……と、そう言う意味では、完全に必要が無い人物が一人、混じっているではないだろうか?」

「……あの」

「なに? これ以上、叔父様に変な事をするつもりなら許さない!」

カラミティちゃんだ。

「……いや、言わせて貰えば公開SMPプレイ以上に変な事があるなら教えて欲しい。どうにも彼女はまだ俺を疑っているみたい。」

と、リヨンさんもカラミティちゃん存在をようやく思い出した様子で、取り繕った顔で命じた。

「そうだ、丁度良いカラミティ。お前、服を脱げ!」

「叔父様!」

「どうした？ 早くするんだ」

「叔父様、やっぱり！」

「やっぱりとはどう言う意味だ！」

苛立ちも露わ。リヨンさんはカラミティちゃんを強引に脱がしに掛かる。

エロいんだけど？ 近親相姦じゃん。見てて良いのかな？

「叔父様やめて！ 正気に戻って！」

「お前こそどう言うつもりだ！ ユマ姫にいつまでこんな格好をさせるつもりだ！」

あ、そう言う事ね。俺はいまだにマイクロビキニ。なんだか麻痺してきた。これでは露出狂姫である。

一方でカラミティちゃんは襟ぐりが広い、ゆったりしたワンピースを可愛く着こなしている。

そのスカートを捲り上げ脱がそうとするリヨンさんと、裾を必死で押さえるカラミティちゃん。二人の攻防が続いている。

「叔父様！ でも、私だつて下には何も！ 服なら叔父様ので良いじゃないですか！」

「ちまみ血塗れだし、サイズも違う。その点お前は下にネイタルを着ているだろうが！ 布だけの姿でも今のユマ様よりずっとマシだ」

そう言つて襟ぐりの広いワンピースを勢い良く捲り上げるのだが……

「キヤッ!」

「お前……なぜ?」

「ううう、いざとなつたら私の色仕掛けでユマ姫の呪いを解こうと思つて……」

なんと、カラミティちゃんはワンピースの下には何も着ていなかった。真つ裸である。

褐色肌と、今まで誰にも晒さなかつたのだらう白い素肌の境界線がハッキリ見えた。……ぶっちゃけ他にも色々見えてしまった。

ネイタルと言うのは日焼け跡を作る儀式であり、体に巻く黒い布地と木村から聞いていたが、中々どうして破壊力十分な萌え属性である。

「馬鹿な事を!」

「だって、だって!」

「はあ、仕方無いユマ姫。汚くて申し訳ないですがコレを」

「……はい」

そうして渡されたのはリヨンさんのターバンだ。汚いなんてとんでもない、髪を巻いていたにしてはキレイなモノだし、良く見ると凝った刺繍が入っていて中々お洒落。

だけど、そんな事よりも目を引いたのはリヨンさんの黒髪。ターバンを脱いだ後、少しウェーブ掛かった長髪がサラリと流れる様子は正統派の色男と言った風情で、本当に

カッコイイ。

「そんなに叔父様をじろじろ見ないで！」

カラミティちゃんが割り込んで来てしまった。うーん？

「だったら、アナタの体を見ても良いですか？」

「え？ 私の？ なんで！」

「うふふ、だつてさつき見えたのが可愛かつたのですもの」

「う、うう……」

意地悪のつもりだったのだが、何故だろう？ 俺が顔を突きつけてお願いすれば、彼女は真つ赤になりながらもワンピースを自ら捲り上げ、素肌の白い部分を見せてくれた。

おおエロいエロい。なんだろう？ 俺はもう男でも女でもイケルのかな？

そんな事を考えていたら、背後から冷たい声が掛けられた。

「楽しそうな事をしていきますね？ 私は姫様の体にそのターバンを巻いても宜しいですか？」

ヒエツッ！ シヤリアちゃん！ 怖い！

俺はターバンを巻かれつつ、地下への入り口へと案内されるのだった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

露出気味のミイラみたいな、コレはコレでエロい格好になってしまった俺は、ポンザル家の玄関で小さめのサンダルをゲット！ そのまま堂々と屋敷に入ると、中庭の井戸から地下へと侵入した。その間、人の気配は一切無し。

「一体どう言う事でしょう？」

「クーデターは失敗が前提、踏み込まれるのを考慮してココには傷病者しか残して居ないようですわ」

「シャリアちゃんが言うには、重金属中毒の重傷患者が数名残っているだけだとか。今では却ってプラヴァスで一番安全な場所かも知れないとまで。」

「しかし、ポンザル家の地下にこんな場所があったとはな」

「リヨンさんが感心するのも解る。井戸を下りた先はちよつとしたスペースで、シャリアちゃんの魔道具が照らす範囲だけでも結構広い。」

「どうやら、最近までは水没していたみたいなの」

「そうか！ 最近の水不足で」

「そう言う事ね」

「待てよ、ひよつとしてこの日照り自体が帝国の策つて事は……」

「考え過ぎよ、だとしたらもつと早くからプラヴァスにちよつかい掛けてたと思うわ」

「……そうか」

すうーはあー。

二人の会話を横目に、俺はゆっくりと深呼吸を繰り返していた。確かにココは魔力が濃い。しばらくすれば簡単な魔法ぐらいは使えそうだ。

「どうも空気が薄いのか目眩がするな……」

「私も……」

一方でプラヴァス生まれのリヨンさん、カラミティちゃんの二人には、この魔力は毒だろう。そう説明しても、兩人とも引く気は無さそうだ。

「外が安全とも限らぬからな」

「死ぬ様な事は無いんですよね？ ……だったら」

少し怠そうな二人に構わず、シャリアちゃんは俺だけしか視界に入らないとばかりさっさと先に進んでしまう。

「コチラに出入りした痕跡がありますわ」

「解りました、行きましょう」

体力的に辛いのは俺も同じ、気力を振り絞って続けたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

浸水した地下道をジャブジャブ歩くのは想像以上に体力を奪われた。なんとか水が無い通路に出た後、ハシゴを登った先、目星を付けたらしい場所へと案内される。その

根拠とは？

「この辺りは特に魔力が濃い様なので」

「確かにそのようですね」

俺は体力も戻り絶好調。一方で二人は息も絶え絶えだった。

「す、少し休憩しましょうよ！」

「私はまだ、行ける」

全然行けそうにないリヨンさんを見るに、二人はこの辺りが限界。

魔力も戻ったし、怪我を治療したら来た道に戻って貰おう。腰を落ち着けるため、直感を信じてピンと来た場所へと足を踏み入れる。

どうもこの辺りは地下鉄の駅っぽい雰囲気、何となく馴染みがある。ここは駅員室みたいな場所じゃなからうか？

「ここで魔法を使います。楽にして下さい」

「ああ……」

肩を出させると、太い血管から外れていたのだろう。思ったよりも出血が少ない。コレなら簡単に治りそう。それよりも、鍛えられた背中にキunksンキunksンしちゃうね。

そんな俺の様子に何を感じたのか、なんだか不安そうなりリヨンさん。魔法は初めてか？ 力抜けよ！ そうじゃなきゃ、無駄に健康値を削ってしまう。

「行きます。『我、望む、この手に引き寄せられる、肉に埋まりし鉄塊よ』」
「グツ！」

まずは肩に埋まった鉄球を取り出す。肩の肉をミチミチと引き剥がしながら、俺の手にはスツポリと鉄球が収まった。

魔法は成功。だけどりヨンさんは苦しげに呻く。

「ハア、ハア……」

思ったよりも痛そうだ。それに魔力も無駄に消費した。コレだけ俺に心酔してるのだから抵抗などゼロに近いだろうと思ったのだけれど、甘い考えだったかも知れない。

コレはアレだな、肉から弾丸を取り出すって普通は結構痛いつて事だな。俺は最近、他人の痛みが解らない系女子になりかけている。

「うう痛そう……」

「だい、じょうぶだ」

カラミティちゃんはりヨンさんの傷口に眉を顰めるし、りヨンさんも汗だくで一杯一杯なのけれど、俺としてはこの程度、死とは程遠い怪我だよなって感覚だったりする。

アレだな、女の子の方が痛みが強いつてヤツ。あれはマジかも知れないな。武器を取って戦う男の方が痛みが弱いなんて、嘘ばかりだと思っていたけど違った。実際に生きるか死ぬかの戦いを何度かやってみただけど、戦闘中は興奮で痛みも感じないっての

が正解だ。

じゃあ、戦闘以外で、男が痛みを忘れるのはどんな時？ そんなの決まっている。女の子に抱きつかれた時だろう。

俺は後ろから抱きついて、逞しい背中に控え目な胸を押しつけるばかりか、耳元で囁いて耳朵を震わせる。

「痛かった？ でも、あなたなら大丈夫。落ち着いて、私のコトを受け入れて下さい」

「あ、いえ……」

「もー、またリヨン叔父様を困らせてる！」

ベリツとカラミティちゃんに引き剥がされてしまった。でも、確かにリヨンさんは戸惑うばかりで反応は悪かった。この手は駄目だ。

うーん。困ったな。

いや、何をしたら良いかは解るんだよ？ 解るんだけど、納得が行かないというか……俺は傷を治そうとしてるのに、真逆の事をしなきゃイケないワケだ。

……まあやるけど。

俺はピツつと人差し指をおっ立てて、狙い澄まして研ぎ澄まし、結構な勢いで突っ込んだ。

どこへって？ そりゃ、銃弾を取り出したばかり、血が滲む傷口にだよ。

「ぐあつ！」

「え？ なに？　なんでそんな頭がオカシ——」

たちまち悲鳴を上げるリヨンさん。そこでカラミティちゃんは無視！

俺がやるべきは相手を気遣う事じゃない。むしろ徹底的に痛みを知らぬ幼女へとな
りきることに。

「えー？　こんなちっちゃな穴が空いた位で泣いちゃいそうなお？　ざあこ♪　ザコ
ザコザコ！　こんじよーない！」

今度は背中に胸を当てるところか、首を絞めてしまう。後ろからなのでリヨンさんの
顔色こそ見えないが、首筋や耳たぶは赤く染まって苦しそうである。

「カハッ！　ゲッ」

「よわーい！　ねえ、ゴメンナサイ、負けましたって言えば許してあげるけど？」

「馬鹿馬鹿ッ！　なにしてるの！」

カラミティちゃんはそう言うけどさ、俺だって馬鹿な事だと思ってるんだよ？　ソレ
に片手で大の男の首を絞める為に、リミッターを解除した力まで使ってるからね？
コツチだって必死も必死。

そうして余った右手で傷口を抉ってるんだから、治すとは真逆だよね。でもコレでリ
ヨンさんは大満足なのだった。

「ゴメンナサイ！ 許して下さい！ 負けました」

「えー?? ブタの癖に言葉を話すなんて、生意氣いー」

「ブヒー！ ブヒブヒブヒー」

「キャハハ！ 惨めえ、でも、わたしブタの言葉わかんないー！」

「……………」

ついにはカラミティちゃんも黙った。こつちから見えないけれど、きつとりヨンさんは嬉しそうな顔をしてるに違いない。

でも、あまり痛めつけては流石にリヨンさん体力が限界かも。魔力も濃いからね。情けない悲鳴を上げている。

「ゆる、ゆるしてえー！」

「ザコすぎて可哀想だから許してあ・げ・る♪」

とっておきのメスガキボイスで耳朶を打つ……どころか、俺は耳たぶへカプリと噛み付いた。瞬間、リヨンさんは体を震わせ、感極まって、鳴いた。

「ふわわわっっ！」

おおっ！ 抵抗がなくなった！ やっぱリアルなんだよな、痛くない平気だぞと頑張ってる内は抵抗があるんだよ。プライドの高いリヨンさんなんて、健康値のガードが堅すぎて困る。

回復魔法なんぞ相手にケツ毛まで見せる信頼関係が前提。いっそ、痛いです！ 許して下さい！ つて臆面もなく泣けるぐらいじゃ無いと魔法が通らず却って健康を害してしまう。

その点、木村なんて指先に豆が出来ただけで「ユマえもーん！」とか泣きついてくるから凄い。いや、全然凄くないな。死んだ方が良い。

と、下らないこと考えてる場合じゃ無いな。

『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給え』

得意の他者回復がリヨンさんの体に染みていくと、みるみる肩の傷は塞がった。

「凄い！ まるで痛みがない！」

肩の動きを確認するリヨンさんがあまりに素直に感嘆の声を上げるので、メスガキモードが抜けない俺は、つい意地悪を口にしてしまう。

「違うでしょ？ ユマ様、ありがとうございます、は？」

リヨンさんが地面に座っているのを良いことに、治ったばかりの肩に腰掛け、上から目線でお礼の言葉を要求する。

メスガキを發揮して、平身低頭するリヨンさんを期待してしまったのだが……

「ブヒー！ ブヒブヒブヒ」

「……もう、ブタ語は良いです」

……期待とはちよつと違つたが、まあ良い。気を取り直して俺は二人に宣言する。

「怪我也治つたのですし、二人は元来た道を撤退して下さい」

決定事項だとばかり断言したのに、ブタ語を喋るまでに屈服していたハズのリヨンさんが人間の言葉で反抗してきた。

「まさか！ ココまで来てですか？ 怪我まで治して貰つたと言うのに！」

「足手まといだと言っているのです、このまま魔力が濃い場所で戦闘となれば、庇うことは出来ません。碌な武器も持っていないのでしよう？」

「ですが……」

尚も食い下がるうとするリヨンさんを止めたのはカラミティちゃんだった。正確にはカラミティちゃんのお腹だった。

きゆうー、と可愛い腹の虫。

「うう、お昼ご飯を食べていないからお腹が減つたよお！」

「お前は帰れ！ 私はユマ姫を守らなくては……」

「リヨンさん、彼女を一人で帰すのですか？」

俺がそう訊ねると、リヨンさんは苦虫を噛み潰した様にカラミティちゃんを睨む。

「睨んでもダメです、魔力が満ちている場所なら魔法戦になるかもしれませぬ。そんな

ればあなたでは足手まといでしか無い」

「それは……タナカさん達なら足手まといでは無いと?」

「ええ、彼ならば」

リヨンさんが弱いと言うより、アイツが異常なのだ。たとえ王国指折りの騎士であるゼクトールさんだつて、アイツが相手なら寸毫すんこうも保たないだろう。

でもあんまりキツパリと断言するものだから、今度こそリヨンは泣きそうな顔で拳を握る。

「……それは、悔しいですね」

「あんな危険人物と張り合うのはおよしなさい。リヨン様はリヨン様の私は私のすべき事をするべきです」

「では……姫様のなさるべき事とは?」

「勿論、魔女に操られている我が父、エリプス王を……殺す事です」

色々とボカした言い方は出来るが、覚悟が萎えそうなので、敢えて殺すと言い切った。魔女がいたなら、父様もプラヴァスのどこかにいるに違いない。

俺の壮絶な覚悟を目の当たりにしたりリヨンは「そんな……」と俯き、齒噛みする。俺はもう、泣かない。コレが運命なのだ。

——きゆううー!

代わりに腹の虫が鳴いた。それも、盛大に。

悲壮な覚悟を決めるお姫様。

良いシーンが台無し。

「ちよつと！ カラミティさん？」

「え、？ うそ！ 違う！ ズルい！ 人の所為にして！」

「……………」

なすりつけ、失敗であった。

俺だよ！ 俺だってお昼ご飯を食べていない。凶化してからの俺は食欲旺盛。魔力不足と麻薬過多の体調不良から解放され、いよいよお腹が減っていた。

赤くなる俺を見かねたりヨンさんが、控え目に声を掛けてくる。

「あの、特に何も見つかからない様なら、一度皆で戻るといっただけでしようか？」

そんな提案に乗っかるのは、あろう事かここまで案内してきたシャリアちゃんだった。た。

「そうね……残念だけど、ここじゃ無かったのかも。頻繁に出入りしていたみたいだけど。ここまで、つい最近入ってきたみたいないな痕跡は無かったわ。目的だった魔力の補充と回復は出来たのだから、引き際かもね」

……………うぐぐぐ。ここまで来たのに無駄足とか！ でも仕方が無い。

「解りました。皆で周囲を調べた後、何も無い様なら撤退しましょう」

「お任せ下さい」

そう言つて笑うリヨンさんのイケメンなこと。若干腹立たしいまでであるのだった。

……と言う訳で、少し休憩した後。軽い気持ちで周囲の調査を始めたのだが、調べる所など殆ど無い。地下鉄の駅を想像して欲しいのだが、駅員室以外にドコを？　と言う感じ。

仕方無いので裏手を調べてみるが、あつたのは宿直室。その奥にあるのは落とし物保管庫らしいが、大した物はないだろう。

まあ念のため、と扉を開けたら、そこは大昔に天井が崩落したらしく、土砂が部屋を覆っていた。

見るなりシャリアちゃんはため息を残して回れ右。

「コレはダメね、私は向こうの金庫をなんとかしてみるわ」

「お願いします」

施錠された扉を開けられそうなのはシャリアちゃんぐらいである。

俺だつて、魔法を使えば何とかかなるが、中身も壊してしまう可能性は高い。

碌なモノは無いだろうから照明の魔法も控え目に、土砂に何か埋まつてないかをチラ

見していく。何か掘り損ねた遺物でもあればめつけもの。

……と、そこで目当てとは違うけど、土砂の中から嬉しい物を発見した。

「フォツガですね」

「ほう、大きいですね。近年では早く採られてしまうので珍しいサイズです」

「そうなのですね」

リヨンさんはそう言うが、どう見ても普通サイズに思える。フォツガは私の大好物。煮ても蒸しても美味しいが、特に焼いたフォツガが絶品なのだ。

「あ、フォツガ！ でも生じや美味しくないよ……」

「大丈夫ですよ」

カラミティちゃん心の心配は杞憂だ。なにせ石だけはそこら中に落ちている。魔法で加熱した石の上で焼けば、すぐに食べられる。

「凄い温度、コレも魔法？」

「ええ」

魔法つてヤツは、動物相手でなければトコトン便利。火が通りやすいのもフォツガの魅力。程なくして仄かに甘い香りが漂ってくる。

ホクホクお芋の独特の食感を思い出し、生唾がこみ上げてくる。

お芋。お芋かあ……

思い出すのは……そう俺の婚約者だったボルドー王子の事。あの王子はリヨンさんみたいにイケメンでもないし、気の利いた所も無かった。

それどころか服装は地味な上、お屋敷は要塞みたいだったし、極めつけとばかり庭園には芋を植えていたんだった。

あの芋は、結局二人で食べることは叶わなかったが……

そうだ、俺は、こんな所で一人、芋を食べて良いんだろうか？

串で刺したフォッガをジツと見つめる。

「食べないんです？」

……いつまでそうしていたのだろう？ 私はカラミティちゃんに問われてようやく

我に返った。

そうだ、感傷に浸っても腹は膨れない。早く食べて元気になった方が何倍もマシだろう。

そう思い直した時、誰かが部屋に入ってきた。

「金庫が開きましたが、紙しか入っていませんでした。一応読みますか？」

紙の束を手にシヤリアちゃんが戻って来た。彼女が持つ強烈な魔道具の明かりと共に。

その光で、正に今、齧り付いた口の中のフォッガの姿が目焼き付く。

— !?!

「あ？ えっ！」

「姫様？」

俺は齧り付いたフォツガを慌てて吐き出す！ なんだ？ コレ!?

いや、そもそも俺はフォツガなど知らない。名前だけはパノツサさんから聞いたけど、見たことなんて一度も無い。好物どころか、一度も食べたことが無い。

でも、俺はコレを知っている。コレは芋なんかじゃない。何度もコイツについて学んで来た。コレは……

「死苔茸！」
チリアム

俺とシャリアちゃんの声が重なった。

「え？ 勿体ない、どうしたの？」

「ユマ様？ どうしてこんなモノを食べようど？」

カラミティちゃんはまだコレをフォツガだと思っている。だけど、こんなモノは食べられるはずがない。食べたなら30分以内に死ぬ。魔力を狂わされるので、食べた本人では治す事も難しい。

躊躇無く食べていたら、俺はきつと死んでいた。

それなのに、俺はまだ名残惜しいのか、落としたフォツガから目を離せない。

「姫様？ ユマ姫様!？」

「シャリアちゃんが必死に呼びかけるが、私には意味が解らない。それよりもフォツガが食べたくて……」

「呆然とする私に、彼女は必死に話し掛けてくる。」

「どうしたのです？ ユマ姫さ……違う、お前は誰だ？」

「そうだ、皆さんに自己紹介しないと。私は舞台の上みたいに丁寧なお辞儀をひとつ。」

「私の名前はリネージュ、プラヴァスの歌姫です」

砂漠の歌姫

歌が好きだった。

小さい頃は貧乏で、お金も無いから風揚げだけが唯一の娯楽。

果て無き空を飛ぶ風を見つめて、喉が哽かれるまで歌っていたっけ。

誰にも聞かせるでも無かった歌。だけど、ラクダ使いの男の子が聴いていた。スゴイスゴイと褒めてくれて、いつの間にか大勢の大人の前で歌う事になっていた。

……それからはもう、目の回る様な日々だった。歌の評判はどんどん広がって、いつの間にか歌姫なんて呼ばれる様になっていたっけ。

それまでは歌を褒められて嬉しい嬉しいうって、ソレだけだったのに、歌姫になったらみんなの期待がのし掛かる。

「雨を呼ぶ歌？」

自分でも聞いたことが無い、素つ頓狂な声が出た。ある日、私が歌う様に頼まれたのは雨乞いのための歌だった。

日に日に悪化する日照りに困った人々は、神頼みでは飽き足らず、歌姫にまで祈りの聖句を詠ませることを思いついたらしいのだ。

面白い冗談だと、笑って引き受けたのだけど、冗談で済ませるには私の評判は大きくなり過ぎていたみたい。何故だか、私が歌えば雨が降るのでは？　なんて期待の声が広がってしまった。

作詞、作曲に名うての大人物が手を挙げて、バックダンサーや楽士達まで思いつく最高のメンバーが揃ってしまった。それどころか、私が歌うためのステージを聖域に作るうと言う話まで。

私は、慌てた。

ちよつとした冗談。悪乗りみたいなモノだと思っていたからだ。だけど、皆はコレで水不足は解決つてぐらいに騒いでいる。

お母さんは「皆、辛い現実を忘れてたくて騒いでいるだけよ」って笑うんだけど、まだ幼かった私はそんなコト解らなくて、真に受けて、毎日本気で悩んでいた。

そんな私に出来たのは、神様に祈るだけ。

それだつて高名な神官様が何人も祈りを捧げて、それでも無理なんだから、私なんか祈つてもダメだよねって思えてしまつて……辛くて辛くて仕方が無かった。

だからね、私にしか出来ないやり方で祈ろうつて、そう思つたんだ。

でも、私に出来たのはなるべく神様に近い所に、私が大好きなモノを捧げる。それだけ。

自分でも、どうにかなると思って無かった。肝心の歌だつて、緊張で声が震えてちやんと歌えなかつたぐらいだもの。

……そしたら、本当に雨が降ってしまったの。

街はお祭り騒ぎ。私はほっと一安心。

それで全部おしまい。そのハズだった。

だけど、それから状況は一変してしまったの。私の歌には神気が宿るとか言われて、人前で軽々に歌うなつて。

特に雨乞いの歌を歌うとご利益が落ちて、肝心な時に雨が降らないつて……それで中々歌えない。

大好きだった歌が歌えない。ソレはソレで辛かったけど、これでもう歌姫とあがめられるのはお終いかつて、勝手に思っていたのだけれど、結果は真逆。

私が入前に出なければ出ない程、私のコトは神聖視されて神様みたいにあがめられてしまったの。

そうしたら、どんどん入前にも出られなくなつて、年に数回歌うだけ。気が狂いそうな程退屈な日々だった。

いつしか本当に神様みたいな扱いになつていて、私が登場したただけでおじいちゃんおばあちゃん達が泣き出す始末。

こんなのオカシイって、きつと罰が当たるんだって、ずっとそんな予感がしてた。それで、いよいよ私が十五歳になったとき、恐ろしい事が起きたの。

私を匿っていた人達が「歌姫こそがプラヴァスの最高指導者に相応しい」って言い出して、私を政治の世界に担ぎ出そうと動き出した。

それだけじゃない、水不足だった帝国や王国からも遙々使者が来て、歌姫リネージュの歌を是非とも都でと言いつ出した。

両国とも目が眩む様な宝石を取り出して迫るモノだから、益々私がプラヴァスの代表になるべきだって、形だけでもその方が良くいんだって。

太守のブラッド家には睨まれるし、王国も帝国もお互いを出し抜いて恥を掻かせるべく私の身柄を狙っている。

もうどこにも、私の居場所が残っていないかった。

そんな時に助けてくれたのが、あのラクダ使いの少年と、その父親だった。

彼の家には特殊な井戸があって、水不足でも水が絶えない。

だからこそ、雨を降らせる私とはずっと疎遠になっていたのだけれど、それが良かった。だれも彼の家を疑わなかったの。

騙されてる、危ない、つてお母さんは止めたけど、彼のお陰で有名になったんだもん、彼に殺されるなら構わないって、そう思えた。

それを少年に伝えたら、泣きながら「絶対に守るんだ」って。ああ、もう少年じゃないよね、立派な男の人になってたんだ……

それでもね、最後には彼の家にもついに兵隊が踏み込んできて、それで私は彼と一緒に逃げ出したんだ。

どこについて？ それはドコの国でも無い所。あの風の様に、どこまでも自由に……つて逃げられたら良かったんだけど、私は人間。地面の中をモグラみたいに歩くのが一杯。井戸の中の通路を必死に逃げた。

それでね、境界地の外にまでたどり着いたの。

ここならば、どの国でも無い。この住人ならば誰も裁けないって彼は言うけれど……誰も居ないって事は、誰も食べ物を作っていないって事だよ。

だからスグにお腹が減って。それでも大丈夫。

地下には一杯、大好きなお芋が埋まっていたのだから……

それで、私は……

それから先の事は、覚えてないの。

……俺の口から、他人事みたいにポツポツと言葉が出る。

それを皆、黙って聞いていた。シャリアちゃんなんて、今まで俺には見せたことが無

い笑顔でうんうんと頷くと、言った。

「あなたは、死んだのよ」

「死んだ？　なんで？」

「コレを食べたから」

彼女が拾い上げたのは死苔茸だ。こんなモノを嚙れば、大牙猪だザルギルゴールってイチコロな分

量。

「だ、だってフォツガだよ？　私の好物だもん！」

「違うわ。フォツガじゃ無い、コレは死苔茸チリアム」

「なにそれ！」

二つの声が重なった、俺と……カラミティちゃんの声だった。

「コレは殺し屋が確実に相手を殺すときに使う毒よ。エルフの中では陳腐なモノで、子供だって解毒出来るぐらいのシロモノらしいけど、人間には解毒出来ない必殺の毒である事には変わりはない」

「嘘だあ！　どう見てもフォツガだよ？　ただのお芋！」

「いいえ、コレは……キノコよ！」

シヤリアちゃんがそう言うのと、いよいよカラミティちゃんは棒でも飲み込んだ様な顔をした。

「え？　だって、食べた事ないの？　どう考えてもお芋だし！」

「食べたことなどある訳ないでしょう？　食べたら死ぬのだから、毒として少しでも体内に入っただけで即死なのよ」

「だ・か・ら！　全然別のモノって事じゃないの！」

そうカラミティちゃんは言うけれど、シャリアちゃんがコト毒に掛けて、見間違うなんてことはあり得ないのだ。

一方で、カラミティちゃんも毎日見てる芋と違いが無いと主張を曲げない。

ソレは本当なのか？　リヨンさんがフォツガを手にしげしげと見つめる。

「良く見ろ、我らが知っているフォツガと違って青みがかつて無いか？」

「……そうかもだけど、それって明かりが青っぽいからじゃないの？」

カラミティちゃんが言うとおおり、魔力の明かりはそもそも青い。それを何とか白っぽい光に変換しているのだけれど、どうしても青みが残るのだ。太陽下での見え方とは大分異なる。特に全ての色を奪う様なブラヴァスの強烈な太陽とは比べようも無い。

「ソレにしたって青いだろう。いや、良く見るとうっすら光ってないか？」

リヨンさんが言うとおおり、それはうっすらと光っていた。死苔茸チリアムの中でも毒性が強い物は蛍光色を発している場合がある。それは魔力が濃い場所で良く見られる現象なのだ……

「シャリアさん。魔力が薄い所で育った死苔茸チリアムを見たことはありませんか？」

「……死苔茸チリアムは大森林の中でしか自生しないって聞いてるわ。実際、色々な毒キノコを扱っているけれど、大森林でしか採れない死苔茸チリアムは抜群に貴重なの。私達の切り札よ」

「……そうなのですね」

魔力が少ない場所で育てれば無毒な死苔茸チリアムが出来るのかと思っただが違うのか？

ひよつとしたらよく似た亜種なのかもしれない。

ただ、亜種なのだとしたら、どこから死苔茸チリアムが入り込んだのかが謎になる。

俺が悩んでいると、なぜカリヨンさんが領いた。

「……なるほど、これが費用対効果が合わないと言う事か」

「費用対効果？」

「キムラさんが言っていました。魔力がある土地に育つモノは、何らかの形で魔力を使用していると、だけど魔力が余りに薄いと使用するうま味が少なく、もはやただの毒になる。だから魔力が薄いプラヴァスは砂漠で、魔力が全く無い境界地には豊かな実りがあるのだと、そう説明して貰いました」

……それは、知っている。ポーネリアの記憶にある魔力と体の関係。

彼女が絶望したのは、濃厚な魔力を体力に変える器官を備えた新しい人類が、既にこの星に蔓延していたこと。

それでは、カプセルの中で保存された命の数々は、全て不要なモノになってしまふ。それが何より彼女にとつて怖かったのだ。魔力を食べて取り込まなくてはいけない改造人間である自分と違って、とても自然で健康的な生き物の形がそこにはあった。それぞれの生き物には、生存可能な魔力濃度が決まっている。エルフは魔力が濃い場所、人間は魔力が薄い場所でしか生きられない。

でも、その範囲が二つある生物がいても、不思議じゃ無いのでは？

魔力が濃い場所では魔力を毒に変換して生き延び、魔力が薄い場所ではその器官を停止して普通のキノコとして繁殖する。

魔力が極端に濃い場所と、極端に薄い場所、どちらかではしか生きられない。

ソレが死苔茸である可能性は？

「死苔茸^{チリアム}を魔力が薄い場所で育てれば、毒が無いフォツガとなる？」

「死苔茸^{チリアム}なんて知っているのは、私達殺し屋か、エルフぐらい。プラヴァスの人が知らないのも当然よね」

シヤリアちゃんの言うとおり、現地の住民は勿論、プラヴァスに行商に来た王国や帝国の商人だって、大森林の毒キノコに詳しい人なんて居なかったに違いない。

気になって『参照権』で死苔茸^{チリアム}の毒について引き出せば、面白い記述があった。

死苔茸^{チリアム}は魔力を取り込んで、死苔茸^{チリアム}にとつてだけ無害な魔力に変えてしまふ。その変

換物質こそが人間に毒なのだ。

「コレを食べたが最後、自分の魔力で自分の健康値が削られてしまうのです」

「じゃ、じゃあこのフォツガを食べたら？」

「死にます、すぐにでも」

「ヒッ！」

カラミテイちゃんが落としたフォツガ、いや死苔茸チリアムがコロコロと転がって、壁の穴へと吸い込まれた。

「光ってる……不気味」

そう、穴の中ではつきり死苔茸チリアムは光っていた。コレこそ、コイツが毒である証。

ああ、ボルドーあ王子人を思い出さず、躊躇なく齧り付いていたならば。俺はきつと死んでいた。

彼に守られた。ソレがなんだか嬉しくて、目先のイケメンに流されていた最近の失態を少し反省。

「それにしても、どうしてココの魔力はここまで濃いのでしょうか？」

リネージュの記憶が確かならば、ここは境界地の真っ只中。普通に考えたら魔力が薄くて当たり前。

ソレがどうして？

その答えはシャリアちゃんが持ってきた資料の中にありそうだった。

書類は石灰を固めた石灰紙とでも言うべき超科学のシロモノで出来ていた。百年単位の保存が可能で、何年も前の書類が新品同然。

言語は殆ど変わっていないが、それでも科学分野の専門用語が多い資料を理解出来るのは俺だけだろう。

俺はペラペラと資料をめくる。

「ここには圧縮魔力を保管していたのね……でも、どうして？」

古代人は、星から魔力を抽出する魔力炉を建造した。だけど、ここは魔力炉じゃない。どこからか魔力を持ってきたのだ。ボンベに圧縮して。

古代人は魔力に弱いが、魔力をガンガン利用していた。地球人だって石油をガンガン利用しているけど、石油を飲める訳じゃないのと一緒だ。

もし石油を飲んで魔法を使う新人類が出て来たら驚くだろう？ 古代人が人間に抱く感情もソレに近かった。

そして、ガソリンを長期間保存することが難しいのと同様に、魔力も長期保存は難しいハズ。コレ程の魔力が維持されている理由が思い当たらない。

ポーネリアが作られた研究所は、遺伝子の保護を目的としたいわば箱船として作られ、何百年もの維持が可能な膨大な魔力が保存されていたが、それでも最後には足りな

なくなった。

箱船として作られたからこそ、汚染された世界から魔力を取り込む仕掛けがあつて、ソレで最小限の稼働をしていたのだが……圧縮魔力が必要な設備は殆ど死んでいた。

だから、人を生き返らせるようなマネはもう出来ない。

そうだ、もしも圧縮魔力ボンベが残っているなら、ひよつとしてボルドー王子も復活させられるかも！

……いや、止めよう。感傷に浸つて人形遊びをするのは惨めだ。

そんなコトより、どうして魔力が無事なのか。それは資料を読み進めればスグに解つた。異常な量の魔力ボンベが、保管庫には保存されている計算なのだ。

魔力の保存が難しい理由は、どうしたつて漏れて外へと散つてしまうから。

でも、頑丈に施錠された地下。分厚い壁を何層も重ね、大量の魔力ボンベを保管したらどうなるか？

経年劣化で徐々に目減りしても、幾らかは圧縮魔力がそのまま残る事になる。

「どうしてここにまで大量の魔力ボンベが保管されているの？」

詰まるところ、俺の疑問はソコだった。古代の都市についての歴史的な知識もあるが、ここは僻地。こんな場所に、これだけ嚴重な魔力保管庫がある理由が解らない。

「軍事施設？ 前線基地 ところが？」

かつては古代人同士でも頻繁に戦争もあつたとされる。ここはその国境だつたと言
う。

「まさか!」

俺は慌てて部屋を飛び出し、駅員室まで戻る。恐らくは古代の輸送路。どこかに地図
があるはず!

無い! あつたのに無くなっている。リネージュの記憶ではここに大きな地図が
貼つてあつた。だけど、その秘密に気がついた誰かが持つていった。

「魔女! だけど俺には!」

参照権がある。リネージュにとっては意味も解らず、チラリと視界に収めただけの地
図、それでもハッキリと思ひ出せる。

地上の地図と地下の地図。二つが脳内で重なつていく。

……そうか! あそこか!

とその時、扉がバアンと大きな音と共に開け放たれた。

「シッ!」

「あぶねっ!」

同時にシヤリアちゃんが投げつけたナイフ。刃に毒が塗られたソレを、侵入者は平然
と柄の部分を掴んで防いだ。

そんなコトが可能なヤツは一人しか居ない。

「ユマえもーん。腕がイタイイタイなのお！ 助けてえ」

木村はじつに馬鹿だな。

詩

「一体、何しに来たのです?」

「酷いなあ、探したんですよ?」

木村の奴め、ヤレヤレと肩を竦めるが……。

「怪我をしてるのですか?」

「良く解りましたね」

なにか良く解りましたね、だよ。「ユマエもーん。腕がイタイイタイなお! 助け

てえ」つて入ってきたじゃねーか! まあ良いけどさ。

「治します、座って下さい」

「ご厚意、痛み入ります」

と、言う訳で、診てみる。

うーん、普通の弾痕。しかし威力が弱めなのかあまり肉にめり込んではいなかった。

鉄球を抜いて、とつとと治してしまおう。

と魔法を唱えようとしたら、木村が囁く。

『なんでリヨン氏はともかくカラミティちゃんまで居るワケ?』

『あ？ ああ……付いて来たんだよね』

『それにお前、そのカツコ、誰の趣味なの？ エロいぞ？』

……確かにターバンを巻いただけのスタイルは、ビキニほどじゃないけど結構アレ。

『色々あつたんだよ』

『俺、てつきりシヤリアちゃんしか居ないと思つて、ノリノリで入つて来ちゃったじゃん。恥ずかしいんだけど？』

『知らんがな』

それ以上は無視して回復魔法を掛ける。魔力抵抗は薄い、まあコイツは魔力が濃い場所でも平気だから健康値を削つても構わないんだけど。

「しかし、この怪我はどこで？ いえ、どうしてこの場所が？」

てつきり騒動を聞きつけ追つて来たのだと思つた。しかし、だとしたらカラミティちゃんが一緒なのを知らないと言うのはおかしい。

問い正せば、一転、真面目な顔で木村が向き直る。

「落ち着いて聞いて下さい。今、お父上と田中が戦闘中です。怪我はその時に」

「それは！ どこで？」

「どこと一口で言うのは難しいのですが……父君は時間稼ぎをしている節がありました。それで敵の本当の狙いはなにか？ ソレを捜しに境界地の真下に来たのです」

「ここが？ 境界地の真下？」

そうか、だからこそリネージュの記憶があつたのか……だけど、ここにあるのは駅だけだ。本当の狙いは別にある。

「敵の狙いは、ここではありません」

「!? それは？」

「ですが、まずは父を止めます。案内して下さい」

「……承知しました。直ちに向かいましょう、少し急ぎますが良いですね？」

「ええ、構いませんよ」

木村は何も聞かずに部屋を出て、振り返りもせず走った。

早い!! 魔法を使って、追いつくのがやつと。コイツこんなに足が速かったか? この速度ではとてもじゃないがリヨンさん達は追いつけないだろう。

二人の事はシャリアちゃんに任せよう。

木村は階段を上り、シャッターの隙間を潜って、崩落した瓦礫を飛び越えていく。

「飛びますー!」

極めつけとばかり木村が飛び込んだのは、こじ開けられたエレベーターの昇降路。

真つ暗な吹き抜けをたつぷり三階分は落下すれば、不思議な空間に辿り付いた。

「ハハハハハ」

目の前に広がっていたのは、宙に浮かぶ高速道路が交差する、まさにコンクリートジャングルと言える光景だった。

しかし、そのジャングルに一切の音はなかった。

その正体は……言ってしまうばただのインターチェンジなのだが、人が居ない道路が闇の中、無数に浮かび上がる光景はなんとも言えない恐怖を感じさせた。

「何してるんです？　急ぎますよ」

……全く、自分はユマエもーんとか言ってた癖に、急かしてくれる。

「今、行きますよー」

言いつつも、俺は木村が向かう先とは違う方角へ伸びていく道路を見つめる。

この方向にはアレがある。今から目指す場所とは距離がある。

今すぐ飛んでいつて止めた方が良いはずだ。

それどころか二人の決闘に、今更に飛び込んでいつたって、ただ邪魔するだけになるかも知れない。

でも、俺は聞いて欲しかったんだ。最後に残った家族に、俺の歌を。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

全てを斬り裂く剣閃が嵐の様に吹き荒れる。

田中はその全てを躲していた。紙一重で。

木村と別れた後も田中とエスプリ。二人の死闘は続いていた。しかし、田中はエスプリが持つ大剣のリーチに対して打つ手がなく、回避に専念せざるを得ない状況が続いていた。

いや、回避できる事がそもそも人間技ではない。それどころか田中は躲した先で反撃に転じる踏み込みさえも、何度か見せていた。

だが、田中が間合いに入る前に、返すエスプリの剣閃が迫ってくる。

その繰り返しだった。

(前から思っていたが、どう言うカラクリだ?)

常識外れの巨大な大剣ながら、その剣速は通常の剣に劣らないどころか、むしろ速い。その上、エスプリの体格は剣士としてはむしろ細身に見える。

田中が訝しむのも当然と言えた。

そのタネは勿論、エスプリが振るう王剣ザルディアにあった。

元来、魔剣は表面の粒子がチェーンソーの様に回転する事で尋常ならざる切れ味を実現している。

王剣ザルディアも例外では無い。ただし、違うのはその機構の数。

想像して欲しいのはシュレッダーの刃だ。回転する刃が食らいついていたが最後、紙はスルスルと飲み込まれ細断されていく。

対して王剣ザルディアは全くの逆回転。一度肉にめり込んだが最後、力を入れずとも刃は肉を掻き分け、加速していく。

空気の中でもそれは同じ、振るう度に加速する剣を、使い手は方向転換するだけで良い。

とは言え、王剣ザルディアを使うと言う事は、その構造上、無数の魔剣を振るうのと同じ。その制御だけでも超人技であり、精神を削って行く。

しかし、田中はそんな事を知る由が無い。

(クソツッ！ 武器の差がなけりや……)

そんな風に思ってしまうのも無理は無い。ジツと見つめる先、手の中にあるのはただの日本刀なのだ。

(……何を弱気になってるんだ！ 俺は！)

しかし、同時に思い出したのはソレを作った爺さん二人。魔法万能な世界で、頑固に自分の仕事を貫いていた。曰く、ただの鉄の剣でも魔剣に負けたくないところを見せたい。その一心で地味な仕事を続けていた。

そこに田中は、科学万能な世界で剣の修行を続けてきた自分の姿を重ねていた。

(負けられねえ！ 絶対に！)

気合いを入れ直すと同時、絶対に剣の性能は負けていないのだ、と思い込む。信頼と

いうより盲信だが、目を瞑る事で逆に見えてくる事もある。

(重さを感じねえ速度の割りに、剣に振り回されてやがる。扱いが難しいのか?)

王剣ザルディアは空気を斬り裂き加速する。それ故、一度加速を始めると止めることが難しい。圧倒的な体積と切断力に隠れていたが、正確な剣捌きが難しいのが見て取れた。

(完璧なキャラは居ない。か……)

田中は、木村達と遊んだ対戦ゲームを思い出していた。

キャラの個性をぶつけ合う対戦ゲームだからこそ、相手の良いところばかりが目につき理不尽に感じる。

自分の強みは何か? ソレを突き詰めて、相手の弱点にぶつける。

(俺の剣は最強! ソレを証明するために俺は、この世界に生きている! 俺の剣は揺るがない。お前はどうか?)

結果、田中は、より深く踏み込む。

「ハッ!」

振り抜かれた大剣を首の皮一枚で躲す。それは仰け反った先、本当の意味で首の皮一枚だけ斬らせるギリギリの回避だった。一筋の刀傷から血が零れるよりも早く、一転、前のめりに反撃に出る。

だが、今までも散々にギリギリの回避は試みた。それでも届かなかつたのだ。しかし今回違うのは、狙うのが今し方通り過ぎた大剣そのものと言う事。

（絶対に刀の方が強え！ 絶対に！ 絶対だ！）

ソレは刀に対する盲信。だが、武器と言うのは信じ込まなければ応えてはくれない。

「シッ！」

今まさに方向転換を始めた大剣に向け、下からすくい上げる様に斬り上げた。渾身の一刀。だが……

——ギイイイーン！

無情にも刀は弾かれた。老人と田中。二人の妄執の集大成たる刀と剣術であるが、王剣ザルディアもまた、エルフ達が長年積み上げた研究と王家への畏敬。そして惜しみなく豪華な素材を選りすぐり作成した一振りであった。

エルフの国エンディアンを代表する王剣。まさか執念で勝る物などこの世にあるはずが無い。

なにより、使うのはその象徴であり頂点に立つ王、その人なのだから。

……しかし。

（チャンスだ！）

笑ったのは田中。すくい上げた大剣は見当違いの方向へと加速を初め、一方で田中の

劍は制御を失っていない。コレこそが田中が見出した勝機。制御が難しいなら制御し切れない状況を作れば良いのだ。一方で田中は刀の制御に絶対の自信を持っている。

その結果がコレ。後は、すくい上げた刀を踏み込みざまに振り下ろす。それで決着。

……しかし、その目論見は脆くも崩れ去る。

(ウソだろー！)

エスプリは既に田中の懐に踏み込んでいた。全くの無手。大劍を捨てて、身一つで飛び込んで来た。

もはや振り上げた刀を振り下ろすのも難しい距離。しかし、劍術にはこの間合いでの技も存在し、田中の体は染みこんだ動きを再現した。

すなわち、柄頭つかがしらでの打ち下ろし。

「グッー」

お互いの攻撃が交錯し、果たして思いがけぬ深手に呻きを上げたのは田中であつた。

エスプリはいつの間に取り出したのか、田中の脇腹から肺へ、極細の短劍を深々と突き刺していた。

残念ながら田中が放つた柄頭での打撃は致命打とはならなかつた。その理由の一つ、田中が持つエルフ謹製の刀と本当の日本刀では、当然ながら違いがある。

その代表的なモノが柄。鮫皮も柄糸も無いのだから当然なのだが、エルフの柄は手に

吸い付くゴム製である。もちろん持ち手としての性能で言えば、握りやすさはゴムが遙かに上。

だが、柄頭にあしらわれた金属が無く、柔らかなゴムでは打撃で大きなダメージとなり得なかった。

(……いや、言い訳だな。俺には覚悟が無かった)

しかしそんな物は小さな差。一番の違いは何か？ 田中は既に気が付いていた。それは脇に残された傷跡が物語っている。

(あんなオモチャまで魔剣か……)

エルフ謹製のカーボン鎧を豆腐みたいに貫通していた。剣を振る上で重要なわき腹を正確に狙った一刺し。重要な可動部であるが故、この鎧の最も薄い部分でもあった。

(なぜッ!! 俺は！ 鎧など着こんで勝負に出た？ らしくねえ！)

エルフの鎧は軽く、重量を感じさせない上、防御力も高い。田中は今までこの鎧に何度も命を救われてきた。

それ故に過信した。どんなに軽くとも、動きを妨げない訳じゃ無い。一対一の戦い、それもお互いが防御力を無視する剣を持つての決闘ならば、鎧は邪魔にしかならないのだ。

まして相手はエルフの鎧の弱点など、知り尽くしているに違いない。

(なんだかんだ言つて、死合う覚悟が無かつた。これがその差か！)

武士の決闘。一対一ともなれば、鎧など邪魔なだけ。それは地球でも常識であつたのに、田中は最後の所で劍士としての矜恃を徹底出来ず、ファンタジーの力に頼つてしまつた己を恥じた。

ゴムの柄頭でも、綺麗に入ればダメージになつたのだ。しかし、鎧を着た事での僅かな動作の遅れは極至近での戦いに於いて、致命的な差を分かつ。

(だが、まだ死ぬわけには行かねえな！)

ここに至れば、何とか逃げるしかない。田中は機を窺つた。

「ガツ、ゴフー！」

しかし、呼吸がままならない。気合を入れ、叫ぼうとしたが、出たのは吐血だけだつた。一方でエスプリは投げ捨てた大劍を既に回収し終わり、油断無く間合いを詰めてくる。

なにより、切られたのが脇腹と言うのがマズイ。劍の冴えに如実に影響する部位。これでは一合と保たないだろう。

(ちつ、負けたのは劍の腕でも、劍の性能でもねえ。覚悟が足りず負けた。この敗因なら納得するしかねえか。高橋、木村。わりいが先に逝く事になりそうだぜ)

田中はゆつくりと目を瞑る。辞世の句を詠もうにも、理解する者はここには居ない。

——♪

しかし、その時間こえて来たのは句ではなく、詩だった。

「咲き誇る花の中、私は一輪のクチナシで、巡り往く星の中、アナタの姿を見つけるの」
綺麗な歌だ。初めて聴く歌。だけど、この声を聴くのは初めてじゃ無い。

「枯れ果てた花壇の中、私だけが残されて。巡り着いたアナタ。飛び立つ鳥を求めて、いつか空を目指すのね♪」

目を開けば、エスプリも動きを止め、歌がする方角をジッと見ていた。ボールに遮られ視線は追えないが、洗脳された者らしくない動揺が見て取れた。

「飛べない自分を恨んだけれど、アナタを待つクチナシを忘れないで、私は、私だけはずっとココに居るから♪」

「ウソだッ!」

その声は……エスプリの、いや、エリプス王の声だと、田中が理解するのに一瞬間の間が必要だった。

魔法を唱えていたのだから声が出せるのは知っている。けれど感情が籠もった声を聞くのはコレが初めて。

「お前はッ! もう、居ない! 死んだ! 死んだんだ!」

明らかに、動揺していた。頭を掻きむしる仕草を見せる。

(コレなら殺れるか? いや、ダメだ。きつと殺意に反応して、殺される)

アイツが作ってくれたこのチャンス、どうやって逃げるか? 田中がソレだけを考えた時。

「私は居るわ、ココに居るわ。ずっとずっと♪」

(馬鹿な! 何故ツ出て来た?)

声の主。それはもちろんユマ姫だった。

彼女は泣いていた。泣きながら、歌っていた。

きつと思いつきの歌なのだろう。単純に田中はそう考えたが、実際にはユマ姫がずっと苦手にしていた詩だった。

彼女の母、パルメが夫を思つて紡いだ詩。その中で、コレは比較的解りやすい詩ではあったが、自分を花に、相手を星に例えるセンスには相容れない物をユマはずっと感じていた。

これは妹のセレナが生誕の儀でも披露した一曲。でも、その時は、その真意にユマは気がつかなかつた。

だけど、今なら本当の意味が解る。エリプス王は出て行つたゼナの事をずっと気にしていた。外の世界に出るための魔導衣まで準備して。

そんな王の気持ちに気が付かぬ程、パルメは愚かでは無かつた。だけど、止められな

い、止めたくない。

花よ星よと言いつつ、結局、ソレだけの歌なのだ。ユマが気がついたのはつい最近。

それ故に、泣いていた。飛び立つ事も出来ず、最果ての砂漠で命を削られる父の姿に。

「一緒に空は飛べないけれど、一緒に星を眺めたい。でも、それも無理なのね♪」

エスプリ、いや洗脳されたエリプス王へと、ユマ姫は歌いながら、無防備に近づいた。

（今のエスプリは言われた事に従い、あとは殺意に反応する人形。殺意を抱かずに攻撃

出来るなら！ だが……）

そんな攻撃じゃ届かない。殺意がない少女の非力な一撃では、人間を行動不能にする

事など出来はしない。何か武器が無ければ。

「アナタは星に還るの。私は空へと祈るわ♪」

しかし、ユマ姫は寸鉄帯びて居なかった。それどころか、どこかに武器を隠す余地の

ない、ターバンを体に巻いただけの姿。

「あ……う、が」

それ故に、エスプリはユマ姫が目前に近づいても反応する事が出来なかった。理解に

苦しみ、唸るだけ。

（どうするつもりだ？）

とうとう、エスプリの目の前に辿り付いたユマ姫。だけど、少女の腕力では殴ったと

ところで腕の方が折れるだけだろう。

「でも、少しだけ。少しだけアナタの胸で泣かせて、たとえばアナタがあの人を想つていても♪」

そう言つて、飛び込んだ先。ユマ姫はトンっと、エスプリの胸を叩いた。

それは、じやれて叩いただけにしか見えない非力な一撃。だけど、実際はか弱いユマ姫の全力で、そんな力では何も起こせないハズの一打だった。

だが、息をするのも忘れ。ユマ姫の姿を見つめていたエスプリにとつては別だった。

「カハッ」

胸骨の間、呼吸に合わせ、思い切り押し込めば。呼吸を止める一打となる。侍女から教えて貰つた決死の一撃。

肺から酸素を残らず放出し、動きを止めたのは僅かに一瞬。

だが、ソレでユマ姫には十分だった。王の衣服、決められた魔導衣を着ている以上は大きく変えられない。

だとしたら、剣を帯びるその位置も変わらず以前と一緒と言う事だ。

そして、胸の内、飛び込むと同時に最後の詩を詠み上げる。

「だからせめて、わたしの姿を、声を、匂いを、ぬくもりをあなたの心に刻ませて♪」

結局の所、パルメの詩はどれも最後にコレを詠うためだけの詩だった。

何度も消した跡が残る。ポエム帳の最後はいつもインクで薄汚れていた。そんな消された言葉の正体がわかったのもつい最近。

だからこそ、ユマ姫は詠いたかった。

生誕の儀。詠うことが出来なかった。パルメの詩を。

……やつと詠えた。最期に。

「パパ、ごめんね」

そして、王の懐から引き抜いた短剣を、胸へ目掛け突き刺した。

引導

「パルメ……パルメー！」

肺を貫かれ、仰向けに倒れた父はうわごとの様に母の名前を呼んだ。俺は引導を渡すべく、倒れた父へのし掛かる。

「違うわ。私よ父様」

「あ、ああ……ゼナ！ 会いたかった」

「……………」

俺と実の母ゼナ、果たして似ているのだろうか？ そんな気はしないのだが……傾げた首筋から、はらりと一房、髪がこぼれた。

……赤い。

霧に魔力を抜かれ、銀に戻った髪色に、再び赤みが差していた。

ソレはピンクを通り越し、以前よりも赤みが増している。凶化して以来、魔力が特に濃い場所ではこうなることが多かった。

「パパ、目が……」

きつと輪郭と色ぐらいいしか見えていない。だから赤髪のゼナと間違えたのだ。

俺が刺したから？ いや、ずっと前からそうだったに違いない。

前に見た、あの瞬間に、既に父の運命光はもって数年の大きさを固定されていた。

エルフは森の外、魔力の低い場所では生きられない。そう出来ているのだ。

魔導衣を着ようと、魔力が薄い場所で何年も暮らすのは自殺行為だ。ずっと命を削っていたに違いない。

普通なら節々の痛みに悲鳴を上げている状況。麻薬漬けにされ、薬で研ぎ澄まされた反射神経だけで田中と切り結んでいたに違いない。

これ以上は、もう……。

覚悟を決めて、短剣を構える。

「治せないのか？」

「無理！」

聞いて来たのは田中か木村か、それすらも解らない。切羽詰まっていた俺は、一瞥もくれずに叫び返した。

麻薬で体は限界まで蝕まれている。治そうにも健康値が保たない。

保ったとしても、母も妹も、守るべき国もない世界。そんな場所で父を生かしておくのは拷問に等しいと解ってしまう。

俺は、ギョツと短剣を握り締めた。

「お前の気持ちはどうなんだ？　生きていて欲しくないのか？」

「私は……」

俺の覚悟を察して、それでも止めてきたのは田中の声だった。父がどうでは無く、俺がどうしたいのか？

「お前は良くやったよ。少しぐらい我が儘を通して良いはずだ」

くぐもった声だ。きつと田中も重傷。それでも治せと言わず、俺の決心を聞いてくる。ソレで良いのかと。

止める声は田中だけじゃない。

「そうだ、俺に言つたじゃないか。人形でも家族にそばに居て欲しいって。アレは嘘だったのかよ」

木村も俺に聞いてくる。確かに俺はカラミティちゃんを治す時、人形でもいいからセレナが欲しいと言った。

奇しくも同じマウントポジション、違うのは覆い被さる相手が実の父だと言う事。

……俺は、父にどうして欲しいのか？

「私は……父様には待っていて欲しい。私が帰る場所で」

「だったら——」

言い募る田中の声を遮り、俺は、呟く。

「皆と一緒にの場所で、待っていて欲しいから」

「そうか……」

私が帰る場所は、セレナも、母も、兄も居る場所で、そこには父も居て欲しい。

俺は、きつと、もうすぐ死ぬ。

ただでさえ一萬回も十六歳になる前に死んでいる魂なのに、私はもう、長生きしたいとさえ思っていない。

運命すらもねじ曲げる『偶然』は確実に存在している。それに帝国を巻き込んで、一緒に滅びる事が出来るなら、思い残すことはなにも無い。

ただ、それでも、魂がIPアドレスみたいな記号に過ぎないとしても、それでも神が気を利かせてくれれば、また皆で過ごせそうな気がして。

……いや、コレは感傷か。自分でも信じちや居ない。

本当は、壊れていく自分の姿を父に見せたくないだけだ。

それとも、壊れてしまった父を自分が見たくないだけかも知れない。

なにより、壊れてしまう世界を父に見せたくないだけかも知れない。

きつと、この世界はろくでもない終末に向かっているのだから。

奥歯が割れそうな程に歯を食いしぼり、私は短剣を父へと突きつける。

「いめんね……パパ」

何せ魔剣だ。俺の力でも斬れる。だからこそ、ホントは脳髓を一突きするのが正解で、それが一番楽に逝ける方法だ。

だけど、私は……いや、俺は。敢えて苦しむ様に胸を突いた。

「ガッ！ グッ！」

当然、父は悶え苦しむ。

なんの事はない。コレは初めから、俺の、私だけの我が儘だ。

父の苦しみを、父の憎しみを、最後まで共有したかった。復讐の糧にしたかった。

でも、苦しむ父の顔を見て、私はいつの間にかポロポロと泣いていた。

「ごめん……ごめんね……パパ」

嘘だ。

復讐の糧だとか、そんな高尚な理由じゃあり得ない。

本当は、痛めつけられれば、最後には正気に戻るんじゃないかって……そんな期待があった。最期ぐらい、名前を呼んで欲しいって、優しく頭を撫でて欲しいって。

そんな欲があった。

だけど、実際は苦しむ父の姿を見ていられない。復讐の糧にする事すら出来そうになり。い。

だからこそ、俺は幻聴を聞いたのかも知れない。

「……ユマ」

ハツとして顔を上げた先、優しく笑う父の姿があつた。

「大きくなつたな……」

「あ、う……」

声が出なかつた。

幻覚でも、幻聴でも、それでも言いたい事が一杯あつたのに、まともな言葉は一つも出てこなかつた。

「パパ、パパッ！」

子供みたいに、泣きじやくるだけ。父様と言わないと叱られるのに。立派になつたと
思われたいのに。

だけど、父様は私のことを叱らなかつた。

「本当は、パパと呼ばれるのが、ずっと、ずっと……嬉しかった……」

父様は軽く右手を上げて。そつと髪を撫でてくれた。

きつと幻だ。こんな事はあり得ない。

解つていても、私は泣き続けた。泣きじやくつた。何も言えず父を直視することすら
出来なかつた。

「パパ……」

……それでも、どうにか呼吸が整って、何とか顔を上げた時。

父はもう、冷たくなっていた。

こぼれる涙がピタリと止んだ。

気がつけば、俺は必死に、短剣で父の胸を抉り続けていたのだから。

私がやった、俺が父を殺したのだ。

「ハッ、ハッ」

ままならない呼吸を何とか整えようとする。必死に胸を押さえる。でも、グラグラと世界が揺れて、明滅する。

「ああ、ああああ……」

俺の復讐に、復讐するべき対象に、私自身も入ってしまった様な気がして、殺意が自分の内側へと向かっていく。

「あ、あああああー」

必死に、叫んだ。体の周りを黒い靄のような悪意が渦巻いて包み込んでくる。まるで『偶然』が具現化したような悪意の塊に飲み込まれていた。

払っても、払っても纏わり付いてくる悪意に、声を上げて、狂った様に私は暴れた。

それでも悪意は少しも晴れなかった。

気がつくのと、私は黒い靄にすつかりと包み込まれていた。

……だけど。

「しつかりしろって」

「とち狂ってるんじゃないよ」

私の腕を掴む手があった。

「あ……」

木村と田中だった。彼らは発狂した私を恐れず、手を伸ばしてくる。

「あ、ありがと……」

私は気恥ずかしくて、それでも何とかお礼を言った。

「ンだよ、それ」

「お前、なんか変わったか？」

いや、変わっていない。俺はまだ『高橋敬一』だ。きっとそのハズ。

『いや、何でもない。もう大丈夫だ』

『そうかよ、立てるか？』

『ああ……だいじょぶ』

『良かった、それにしても、敵の狙いは結局何だったんだ？』

得体の知れない焦燥感に苛さいなまれているとばかり、木村が油断無く辺りを見回す。その予感はずっと正しい。

「敵の狙いは解ります。付いて来てくれますか？」

「当然だろ？ お姫様」

普段は慎重な木村が即答する。だが、一方普段はイケイケの田中が今回ばかりは俺を止めた。

「待てよ、まだ行くべきじゃない。少しは体をいたわってくれ」

「ですが！」

「カハッ！」

反論しようと振り向いた俺の顔面。田中の口から飛び散った喀血かっけつが俺の顔面に直撃した。

「メンゴメンゴ、でもホラ、少しは俺の体をいたわってくんない？　そこで……あの、短剣仕舞ってくれる？」

うーん、コイツも始末しておくか……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「で、アイツはドコに居る？」

「アイツとは誰です？」

怪我が治るなり、田中はまだ見ぬ敵へと鼻を鳴らした。

「ハツ、あのもやし野郎、ソルンだよ！ 魔女のそばにも居なかつたんだろ？ なら主犯はアイツで決まりだ」

「そうですね……」

「どこだよ？ 見当ついてんだろ？」

「二人は見ましたか？」

「ん？」

俺は逆に訊ねる。コイツらも見ただであろう、今朝の光景を。

ポンザル家の三人を見舞った後、プラヴァスにほど近い場所に広大な空き地があった。聞けばガタガタの地面は荒れ果て、整地もままならない場所だとか。

「だから何だつてんだよ？」

「あの下です」

「解る様に言えよ、オイ、どういうことだ？」

急かす田中だが、俺としても絶対の自信は無い。なにせ敵は動くからだ。自分の推理に答え合わせをするように、慎重に言葉を選ぶ。

「あそこはフォツガの産出地だとか。フォツガはキノコ。胞子は地下道を伝って繁殖している。だとしたら、あそこにはとびきり巨大な遺物があるはずです。整地出来ないガ

タガタ地面もその証拠でしょう」

フオツガが好きだったリネージュの記憶を照らし合わせると、アレはあそこにあるはずだ。

思わせぶりは俺の言葉に、焦れた木村が先を促す。

「なるほど……それは解りましたが、その遺物とは一体なんですか？」

「……………」

木村の問いに、俺は言葉に詰まった。なんと言えば良いのか悩んだからだ、近いモノなら思いつくのだが、少なくともコチラの言葉で表現出来ない。

日本語で言うしかなさそうだ。

悩んでいると、いよいよ田中が先を急かした。

「勿体ぶらず、早く言えって」

『じゃあ、言うけど』

『はよ』

『敢えて言うなら…………』

『言うなら？』

「……………」

言いたくはない。言いたくは無いのだが、敢えて言うなら……

『メ、メタ○ギア』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

メタ○ギア。

言わずと知れたステルスアクションゲームの金字塔なワケだが。その意味は、作中に登場する核搭載二足歩行型戦車の総称である。

「ちよつと待てよ？ まさかあるのか？ 『核』が」

「元々さ、魔法つてのは物質を変質させる技術が多いんだよ」

そう言つて俺が指差したのは田中の鎧だ。大牙猪の毛皮をカーボンファイバーみたいに加工している。

火薬だつて空気中の窒素から固定して作っている。魔力という存在が物質から要素を抽出、分解する事に向いているのだろう。

「だとしたら、核なんて簡単に作れるつて訳か……」

「簡単じゃないけどね、作る以上に安全を確保するのが何より難しかったみたいだし」
簡単に作れるからこそ、うっかり放射性物質を生成してしまつて大惨事……つてのは多かつたみたいだ。

「じゃあ、古代人は核戦争で滅んだのか？」

「んーそうじゃないな、そつちは魔力の変化が原因と言うか……それに核兵器はメ

ジャーなモノにはならなかった」

「なんでよう？」

「そりゃ」

魔力には弱点がある。健康値に掻き消されると言う点だ。

古代人の動力の大半は、化石燃料ではなく魔力だった。なにせ核よりも制御しやすく身近だったから。

「だから、大陸間弾道ミサイルが作れなかった。核の威力は過剰だったみたい」

「なんでよ？ 地球以上の技術があつたのに、あ！」

木村は氣付いた様だ。

「そうか！ 境界地だ！ 健康値の膜がこの世界を覆っているんだから、魔力を使った兵器は大気圏まで出て行けない、違うか？」

「違わない。だからこそ、アレを作った。健康値の膜で魔力が掻き消されて制御が出来なくなるなら、膜の内側に入ってから攻撃すればいい」

「膜の……内側に？ ん？ 色々気になる事があるんだが？」

木村は首を捻っているが、コイツに納得させようとすれば何時間でも掛かってしまう。

俺は父の形見である王剣を拾って、立ち上がる。

「説明は道すがらするよ、目指すは『戦車型機動要塞ラーガイン』」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

古代人は古代に滅びたと言われている人類種だ。

その痕跡は遺跡だけに残されていて、出会った人は誰も居ない。

「でも、彼らは恐らく今も生きている。境界地の外で」

「いやいや、境界地の外は見渡す限りの荒野だろ？　なんだっけ？　紫外線とかが降り

注いでるって木村は言ってるけどよ？」

「多分、合ってるよ。だけど彼らは元々、地上でなんて生活していない」

「つまり、古代人は地下に生きている？」

「そ、なにも核戦争を警戒して地下深くまで遺跡を作っていたんじゃない。初めから地下が彼らの生活の場なんだよ」

語りながらも王剣を抱え、魔法を使い、俺は飛ぶ様に遺跡の道を進む。

「エルフや魔獣だけじゃなく、人間だって魔力をエネルギーに生きているのは知ってるよな？　でもさ、魔力じゃなく健康値をエネルギーにしてる生物もかつては存在したんだ」

「それが古代人なのか？」

田中の問いに「まあね」とだけ返すと、木村が息も絶え絶えに呻いた。

「そっか、危険な魔力じゃなく、健康値をエネルギーに出来るならこれ以上は無いかなんだかんだ、俺達の移動速度に付いてくる木村は流石だ。かなり辛そうだが。」

「でもよお、健康値の中で生活してんなら、魔力文明なんて発展しようが無えだろ?」

田中の奴め、馬鹿と見せ掛けて中々鋭い質問をしてくるから侮れない。

「確かに、魔力は健康値に削られる。だけどソレは他人の魔力の場合だけ。星の魔力を汲み上げて星の健康値には阻害されないのは当然だろ? 古代人は星の魔力で発展していたんだ」

「んんん? さっきの話と矛盾しない? 大気圏がどうか」

「まあ待つてよ、とにかく健康値を糧に生きていた古代人だけど、そもそも健康値つてのは異物に対応する免疫力そのもの。古代人はがん細胞よろしく、異物と認識されないように進化しただけ……でもソレがある日突然」

「星から異物として認識される様になった?」

応えつつも納得していない木村。だけど、ソレが正解なのだ。

「そう、魔力を丸ごと奪われて文明はしっちゃかめっちゃか。古代人は健康値の無い地表まで逃げたりして、紫外線に焼かれたり酷い目にあつたらしいよ」

俺は肩を竦めた。その時に何人死んだのか、正確な記録はドコにも無いだろう。

なにせ通信すら遮断されてしまったのだから。

古代人はその惨事の原因を調べた。いや、調べるまでも無く明らかだった。

「大森林のど真ん中、そこには大昔、星の魔力を汲み上げる魔力炉があって、ある日ソレが暴走したらしい」

「それで？」

「暴走した魔力炉は無限に魔力を汲み上げて、同時に魔力を包む健康値も押し出されて膜となって俺達の世界を切り取った」

前代未聞の重大故と同時に、健康値の変質が起こったわけだ。

だから古代人は全ての原因を炉の暴走に求めた。炉を破壊したい。でも、炉は分厚い健康値に守られて爆撃出来ない。

古代人達はだからこそ、移動要塞で膜の内側に入り込んでから砲撃するプランを立てた。そのための巨大兵器まで作った。

でも、全ては失敗に終わってしまう。

残ったのは神話めいた記録だけ。

まさかそんなラーガインが現存するとは……俺は夢にも思っていなかった。

失敗の理由は解らない。少なくとも、大森林に核兵器で爆撃された痕跡など聞いたことも無い。あったとしたら、エルフの科学者は見逃さないはずだ。

ひよっとして、ブラヴァス一帯がゾツデム砂漠に囲まれている原因は……

いや、考えても仕方が無い。今は千年以上前の遺物、核発射可能な要塞を破壊しなくては。

……参照権で記憶した地図を頼りに道を進む。なにせ超巨大な戦車だ。幹線道路沿いを侵攻したに違いない。

下りたシャッターは田中の剣で切り裂き、道無き道を進んでいく。すると、全てのシャッターが上がった通路に行くわした。

「案内してくれているようで結構じゃ無いか」

「いや、待てよ体が……」

最初に不調を訴えたのは木村だった。

「クソツ、キツいな」

気がつけば田中の顔色も悪い。そうだココは魔力が余りにも濃いのだ。

奥から濃厚過ぎる魔力がにじみ出している。牽制の為にソルンがシャッターを開け放ったのだ。

「オカシイじゃねえか、古代人は魔力に弱いんだろ？ アイツも、ソルンも古代人なんだから？ 違うか？ だったらどうして」

田中が叫ぶ。まあ、幾ら馬鹿でも流星にソルン達の正体に気がつくよね……彼らは古代人だろう。

古代人の多くはコールドスリープで永い眠りについたみたいだ。

環境が戻ることに期待したのがひとつ、そしてもう一つが魔力に耐えられる体を作り替える方法を探っていた。

AIを使って遺伝子から無数のパターンを試行錯誤させながら眠りについた。凶化だってその産物の一つに過ぎない。

千年も完成しなかった技術。文明も分断され、絶望的だとポーネリアも諦めていた技術。

だけど彼らの執念はきつと結実したのだ。だからこそ、この魔力の渦の中心にアイツは居る。

「私がソルンを止めます、二人は……帰還してください」

「馬鹿ツテメエ！」

「行くなつて！ 死ぬぞ！」

田中の剣を逃れ、木村の自在金腕ルーデルオンを振り切ると、俺はラーガインの中心部へと侵入する。

ますます強くなる魔力。こんな中で生きられるのは凶化した俺か、魔力に抵抗をもつたソルン達だけだろう。

目指すはロケット発射カタパルト。その『中身』だ。

ロケットは有人。ソルンは乗っているハズだ。

通信が不安定になった世界、ギリギリまで制御して目標にぶつける。もしくはそのまま特攻する兵器なのだから。

「ソルン……どうせなら、一緒に汚い花火になろうぜ」

俺は笑った。俺の『偶然』に巻き込んで、帝国ごと滅びる絶好のチャンスに思えたからだ。

カタパルト

『魔法の矢』は弓で撃ち出した矢を加速する魔法である。
わざわざ弓で撃ち出してから加速させるのは何故か？

実は『魔法の矢』は結界魔法の一種。結界に飛び込んで来た物体に魔力を巻き付けて加速する魔法だったりする。

そして、加速結界の性質は蜘蛛の巣に近い。

なので強力過ぎる魔力で結界を作れば、矢は囚われた蝶の様に結界に阻まれて停止してしまおうし、逆に結界に対して強過ぎる矢を放てば結界は千切れ穴が空くだけに終わってしまう。

だからこそ、弾丸は加速結界との相性が悪い。

威力が強すぎる上、小さく重い鉄の弾には魔力が中々巻き付かないのだ。

話は逸れたが、とにかく矢を加速するには細かいバランス調整が必要と言う話。

加速に成功すれば平均で五倍、ベストバランスならば十倍前後まで矢を加速させる事が出来るが、失敗すれば矢は飛びもしないのだ。

だからこそ、エルフの戦士には高い技量が求められる。

戦闘の最中、力一杯に弓を引き、繊細な魔法制御まで行いながら、矢の威力を底上げする。

どう考えても難しい。俺は魔法制御には自信があったが、力が弱く、威力を十倍にしてもそれなりの威力しか生み出せなかった。

逆に、力自慢のエルフが顔を真つ赤に弓を引いても、今度は魔法制御に失敗する訳だ。しかし、実はもつと簡単に、圧倒的な加速を得る方法が存在する。

結界を二重にすれば良いのだ。

一つでは五倍速度程度の加速でも、二重にすれば二十五倍。どんな魔法使いでも不可能な速度が得られる事になる。

……ただし、魔法を複数同時に使える魔法使いなど例が無いし、二人で協力して使うにもお互いの健康値が干渉する。

だから、この世界でそんな事が可能なのは唯一、機械だけなのだ。

戦車型機動要塞ラーガインには超巨大な砲身が取り付けられている。

まず、風の魔法を使い、空気圧により砲塔内で単純加速を行う。その加速を元に『魔法の矢』と同様の結界に衝突。五倍に加速された砲弾は二つ目の結界で、二十五倍にまで加速する。

最終的には何百トンもの巨大な砲弾が、音速を遙かに凌ぐ加速を得る寸法。

但し、今回発射するのは砲弾ではなく、人が乗ったロケットなので砲身と言うよりカタパルトと呼んだ方が多分正しい。

恐らくソコまで急激な加速は行わない……と良いなーと、祈るしかないだろう。

流石に音速で吹き飛ぶロケットを破壊することなど不可能だ。

そんな事を考えていると、地の底から重低音が響いてきた。

——グゴゴゴゴゴ！

先程から耳が痛い程の地鳴りが続いている。地面はグラグラと揺れ続け、魔法を使わなければ立っている事すら不可能だった。

俺の装備は父の形見の王剣。そしてボンザル家で盗ってきたサンダルに、ミイラみたいな姿に見かねた木村が貸してくれた緑色のマントだけ。

とても戦う様な姿では無いが、仕方が無い。木村のマントに秘密道具でも入っていないか漁りながら歩いて行く。

そうして辿り付いたのは、徐々に濃くなる魔力の中心地。何度も扉を越えた先にソレはあった。

運命光に導かれ、辿り付いた場所は呆れる程に巨大な格納庫の中。そして目の前には遠近感が壊れる位に巨大な砲身が伸びていた。

コレが！ ラーガインの？ デカすぎる！ この中にソルンが！ だけど、もう止め

る術が無い！

地鳴りと振動の原因は、発射態勢に入った要塞全体が動いているからに違いなかった。現に格納庫はまともにも立てない程に大きく傾いている。発射態勢に入ったのだ。こうなると、今からどんなに急いでロケットに向かっても間に合わない。

ゴウンと音がした先を見上げると、外へのハッチが開き、太陽の光が差し込んでくる所だった。巨大な砲身が地鳴りを上げ、空へと向け伸びていく姿を、俺は呆然と見つめるしか出来ない。

「もう、撃つと言うの？」

独り言のつもりだった。だけど、思いがけず返事がある。

『そんなにカタパルトの近くに居て良いのかい？ 言っておくけど魔力の漏洩防止作業は省略しているんだ』

格納庫のスピーカーからソルンの声。マイクと、恐らくはカメラもある。

「あら？ まだ作業員が残ってるのに。指差し確認が足りないんじゃないじゃない？」

『それは申し訳ない……でも無断で入ってきた君の責任さ』

砲身へ魔力が満ちて根元から順番に青く燐光を放ち始める。そして、凶化した俺にして尚、目がチカチカする程の高濃度の魔力が満ちて来る。

電気で動く機械が静電気に弱い様に、魔力で動く機械も魔力で誤動作を起こすモノな

のだが……そんな常識はロケット発射装置には通用しないらしい。強力な魔力防護が働いている。

むしろ、敢えて魔力を放出する事で俺達の接近を阻んでいる。

だが……甘く見たなソルン！ 凶化した俺は魔力が濃い程に力を増す！

『我、望む、足運ぶ先に風の祝福を』

俺は風を制御して飛ぶ様に移動した。

「はあああああ！」

父の王剣を構えたまま飛び上がり、馬鹿げた大きさの砲身へと斬りつける。……だが。

——ギイイイイン！

固い！ 鉄よりも遙かに！ それだけじゃない、砲身自体が結界を張る機械だけあって、装置自身も熱や摩耗を防止する機構に満ちていた。

魔剣の力をもってしても、とてもバターの様には斬り裂けない。

時間を掛ければ切れるだろうが、巨大なロケットがスッポリ収まるサイズの砲身に多少傷が入ったところでどうだというのか？

どうする？ どうすれば？ 何も……思いつかない。

ソルンはあれから何もしゃべり掛けてこない。きつともう加速が始まったのだ。

何せカタパルトの中で音速に近い速度まで到達するのだ。Gを軽減する装置があっても体への負担はかなりのモノ。

——ブオオオン

腹に響く重低音。同時にシヤレにならない程の魔力が場を満たす。いよいよ結界が展開され始めたのだ。

スピーカーが異音を発し、破裂した魔力のバッテリー缶が目の前に転がった。

マズイ、もう時間が！

焦りに動転して缶を蹴飛ばすと同時、更に巨大な魔力反応が現れる。

「何……アレ？」

それはハツチの外、空を覆い尽くす程に巨大な結界が展開されていた。

「まさか？ そうか！」

この巨大なカタパルトは『魔法の矢』で言う弓の代わりだ。空気圧と結界を用いて圧倒的な初速を得た上で、本命はカタパルトの外に張った二個目の超巨大な結界。

アレさえ無くなれば推進力は大きく弱まる！

俺はハツチへと駆け出した。砲身が伸びる先、光差す切り取られた空へ駆ける。魔法で一息に飛び出せば、その光景に俺は言葉を失った。

見つめる先、眼下にはプラヴァスが一望出来た。それ程の高さだったのだ。

地下に居たつもりが……あの振動はコレか。いつの間にか砲身と共に格納庫全体が遙か高くせり上がっていたワケだ。

吹きすさぶ風に、木村のマントがバサバサとはためく。

「やれるか？ やるしか無いよな！」

深呼吸を一つ、覚悟を決める。ロケットが到達する前に、あの結界をぶち破るしか無い。

それには多少の威力じゃ不可能。ただ結界に止められて終わるだろう。

最低でも、穴の一つも空けなければいけない。

だが、俺ならやれる、俺なら出来る！ 信じるしか無い。なぜならここから先は一発勝負、運うんぶてんぶ否天賦の博打に過ぎないからだ。

俺は決して運が悪いんじゃない。俺を殺そうとする『偶然』があるだけだ。むしろ運良くやって来たからこそ、今も俺は生きている。

『我、望む、放たれたる石に風の祝福を』

『我、望む、放たれたる石に風の祝福を』

呪文を唱える。それも、二重に！

俺は、俺だけは、魔法を二つ、同時に使える！ 機械に頼らず、結界を二重に展開出

来る！

さらに俺は破裂したバッテリー缶を掴み、高く放り投げる。同時に王剣を握り締め、バットみたいに振りかぶった。

俺は魔法の制御にも自信が有るし、魔法だって二つ同時に展開出来る。

だから唯一の不安はこのフルスイング！ 昔、父様に見せて貰った小石を打ち飛ばして加速させる大道芸。

——ギイン！

当たった！ ノックなんて未経験。まるで自信が無かったけれど、思いの外軽い王剣が、予想外に加速して見事に缶に命中した。

——シユウウウ！

缶がまず一つ目の結界に衝突する。だが、いつも弓でやつてる感覚で強力な結界を張ってしまった。缶の衝撃は殆ど結界に受け止められ静止する直前……

——バシュ！

ギリギリで抜けた！ 絡みついた魔力を推進力にして、次はより強い結界にぶち当たる。

——ジユウウウウウ！

今度は灼ける様な強い音。俺だってこれ程分厚くて巨大な『魔法の矢』の結界を張ったことなど一度も無い。

いや、張れない。異常な濃度魔力であるこの場所ではか再現不可能な結界。それだけの結界が、撃ちだした缶の威力とせめぎ合っている。

——バシユウウウウウ!!!

抜けた！ もはや光の筋となった缶の軌跡が、大空に張られた巨大な結界へと……
今、ぶつかる！

——ピシイ

遙か遠く、聞こえる筈が無い音がした。

幻聴だったのだろうか？ ソレほどに、軋む音が聞こえて来そうな光景だった。

俺がノックで飛ばした缶は百倍にまで加速され、大空にヒビを入れたのだ。見えはしないが、その中心には空き缶がブチ空けた、小さな穴が空いているだろう。

ロケットを加速する結界だ、見ての通り馬鹿デカいし、とんでもない質量でも受け止められる。

だけど極小さい一点を、常識外れの威力で撃ち抜けば貫通することは可能。その読みは正しかった。

………だけど。

「駄目なの？」

結界に空けた穴は余りにも小さい。これでは無効化させたとは言い難かった。

——パァン

その時、結界の中心で何か弾けた。

アレは……缶の中に詰めた爆弾だ。木村のマントの中に入っていた。

ちよつとした保険のつもり。殆ど冗談で缶の中に詰めて置いたヤツが上手いこと結界の中で破裂した。

……そして、缶に詰めていたのはもう一つ。

——パリイイイイン

結界が破裂する。穴が空いた結界の中で火薬が爆発し、ばらまかれたのは一緒に詰め込んだ死苔茸だ。

魔力をかき乱す死苔茸チリアムが結界の穴から入り込むと、結界を丸ごと機能不全に陥らせる。

「やってみるもんだなあ」

自分でも驚くぐらい出来過ぎている。呆然と呟いたと同時に。元々濃かった魔力濃度が、輪を掛けて膨れ上がった。

——ゴオオオオオオン！

衝撃と音が同時に来た。視界が魔力の燐光で真っ青に染まる。

カタパルトからロケットが発射されたのだ。

「きゃつー！」

ハツチから吹き飛ばされて、傾斜が付いた格納庫を転がり落ちる。危なく落下死の場面、床に王剣を突き刺して何とか踏み止まった。

剣に縋りついて見上げれば、やはりロケットは最後の加速を失敗していた。

……とは言え、普通の飛行機ぐらいの速度は出ている。

プラヴァスから王都まで、遠い様に見えてバイクで数日で行って帰れる程度の距離だ。あつという間に着弾するに違いない。

……

「アレなら、追えるー！」

俺はスウつと空気を吸い込んだ。飽和した魔力が健康値を削るが、引き換えに大量の魔力が体内へともたらされる。

『我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を』

かつてセレナは私を抱えて空を飛んだ。グライダーも持たず、その身一つで遙か高度をジェット機みたいに飛んで見せた。

今だけだったら……これ程の魔力があれば、きっと出来る！

俺は空へと飛び上がった。

空中戦

ラーガイン要塞はソルンにとって神話の中の存在だった。

一つの都市が丸ごと詰め込まれた移動要塞に、星を破壊すると言われた無数のカタパルト。設計時には何と戦うつもりだと笑われた化け物は、いつしか人類の希望となった。

魔力の変質に大きな打撃を受けた人類は、原因の全てを暴走した魔力炉に定め、その破壊こそに希望を見出したのだ。

科学者の暴走だとか、反乱した奴隷のテロだとか、判然としない魔力変質の原因だが、その中心にある魔力炉が全くの無関係と言うのはあり得ない。

魔力炉を破壊しうる唯一の希望。そんな触れ込みで国家は団結。残った数少ない資源をかき集め建設されたラーガインは、人類の希望と持て囃されて、多くの兵士、多くの物資を乗せて出発した。

そして、何の成果も得られず、誰一人戻る事も無かった訳だ。

その顛末が一般に知られることは無かったが、その後の人類の分断は目を覆うばかり。顛末の全ては黒歴史と成り果てた。

だからラーガインの神話は人類が作り出した愚かな巨大建造物に対する教訓の神話となった。

ソルンは知らない事だが、それはバベルの塔に酷似していた。

余りにも巨大で過剰なモノを作成し、神の怒りを買ってしまった。そんな神話。そんな教訓。だからこそ、ラーガインなど実在しないハズのモノ。

だが、神話は死んでいなかった。

ラーガインは砂漠の片隅に眠っていた。経年劣化を除けば、システムの大半が無事なまま。

きつと、健康値の膜に阻まれシステムが停止し、一步も動かなくなったに違いない。

だが、千年の時がラーガインを膜の内側に取り込んだ。

千年の時を越え、ラーガインが侵攻を再開する。

「皮肉じゃないか、人類分断の原因が、新しい人類の歴史を作るといふのは」

コックピットの中でソルンは自嘲気味に笑った。

時はユマ姫が格納庫にやってきた直後。既にロケットは発射シークエンスに入っていた。

ソルンはココに至る前、嚴重に封印された魔導金庫をプラヴァス中から集めた魔石で稼働させ、解錠に成功していた。

中であつたのは異様な量の圧縮魔力タンク。

これ自体もお宝だが、更に嬉しい誤算があつた。潤沢な魔力でシステムを起動したところ、稼働可能なカタパルトがたった一門、残っていたのだ。

「狙うのは地下深くの魔力炉じゃない。ヒトなど、ただの一撃でお釣りが来る」

そう、今回ラーガインで狙うのは魔力炉ではない。ビルダールの王都だ。

ソルンにしてみれば、敵対勢力を根絶やしにしてしまえば、後のアレコレなどどうでもなる。

いまだに剣でえいやと戦っている連中など、核の一撃で全て片付く。

そこにユマ姫が現れた。この魔力でも動ける唯一の敵。しかしその時、ソルンは軽口を叩く余裕するあつた。

なにせ神話に語られるラーガイン。発射段階に入った今、少女一人に止められるモノでは無い。

……そのはずであつた。そう信じて疑わなかつた。

だからロケットに乗り込んだソルンは、静かに発射の瞬間を待っていた。

「ぐう……」

いよいよカタパルトの加速が始まり、ソルンは強烈なGに押しつぶされそうになる。

(これで全てにカタがつく)

そんな希望を胸に抱いて。

カタパルトの加速を抜けた後、大空に展開された巨大結界の魔力を使い、僅か数秒で王都に着弾する予定。

超音速の弾丸を阻むモノなど存在しない。照準を定めた後、ソルンはロケットから脱出する算段をつけていた。

——だが。

（結界が無い？ 何故だ？）

薄暗い地下から、抜ける様な青空への脱出。それ自体は望ましい事だったが、結界へ突入する衝撃がまるで無かった事に眉をひそめる。

現に魔力量は一切上昇していない。魔法の加速は失敗していた。

（故障？ いや直前まで展開していたのは間違いない。まさか？）

思い出したのは、発射の直前に現れた少女の姿。

（ユマ姫！ あの娘が何かしたのか？）

元より人間では近づけぬほどの魔力が渦巻くカタパルト。今回の作戦で脅威になり得るとすればユマ姫しか居ないと考えていた。

その予感は当たり、確かに彼女は姿を現した。

だが、全ては手遅れのタイミング。何も出来ない和高を括った。

しかし、結果はコレだ！ 不思議と彼女は全ての計画を台無しにしてしまう。

(やはり、ユマ姫はなにかおかしい。クロミーネ様や、あのタナカも異常な力を持っているが、輪をかけて異質)

魔法が使えることも、人間の住む場所でも生きていけるのも、ハーフと言う事で説明はつく。つくのだが、人格も能力も、何もかもチグハグで予想が付かない。

歩く厄災。それがユマ姫だった。

予想が付かないと言えば、死んだ人間が生き返ることが最もあり得ない事である。しかし、それらの異質さの正体にソルンでは決して辿りつけない。

だからこそ、考えても仕方が無い事とソルンは早々に割り切った。推進力は減ったが王都まで片道で飛ばすには十分な魔力がある。王国を吹っ飛ばせばユマ姫一人などどうともなる。

超音速で弾頭を飛ばすことが出来ずとも、ゆっくり王都まで飛んで行けば良いだけだ。

それでも脳裏にチラつくユマ姫の姿。悪夢とばかり、振り払う様にソルンは頭を振った。その時だった。

——ピーン

甲高い電子音。それはレーダー装置が放つマイクロ波がナニカの接近を知らせる音

だった。

「まさか!？」

思わず振り返る。

コクピットに備わった全周囲モニターシステムは、追尾してくる高速飛行物体を捉え、拡大し、目の前に映し出す。

「ユマ姫!？」

(あり得ない。こんな速度で飛行が可能なのか?)

森に棲む者の魔法について研究していたソルンにとつては信じられない光景。本来は浮くだけでも一流と称えられ、英雄とうたわれたエリプス王ですら低速での飛行がやっとだったのだから、ロケットに迫る速度は完全に埒外。

(どうやって? ひよつとして……発射時の魔力を利用して?)

それしか考えられない。だが、森に棲む者であっても命を落としかねない高濃度の魔力。それを利用することなど可能なのか?

「まさか? 凶化してるのか?」

ありえない。いずれ人としての理性も形も保てなくなる。しかし、それしか説明がつかない。

だとしても、コチラはロケット。生身では何も出来ない……と楽観出来る余裕は既に

無かった。

(まさかコチヲを落とす方法が有るのか？ 飛びながら?)

森に棲む者は二つの魔法を同時に行使出来ない。これもまた常識だった。

しかし、相手が凶化しているのならそんな常識は何の役にも立たなくなる。

だから、ユマ姫がマントの内ポケットから取り出したのが銃であったのを見て、ソルンはむしろホツとした。

(銃！ 弓ではない！ やはり魔法の同時起動は不可能か……だが、そんな豆鉄砲でどうにかなるはずが……)

——ガアアン！ ビー——ッ！

衝撃と同時、警告灯の赤に染まるコックピット。

(嘘だ！ あり得ない！)

ソルンは驚愕する。なぜなら弾丸を加速させる事はソルンの常識では不可能なのだから。

弾丸は小さすぎて、結界に穴を空けるだけに終わってしまう。形状的にも魔法を巻き付けるのは向かず、威力を減ずるばかりのハズだった。

かと言って、ただの拳銃弾でロケットにダメージを与える事など出来はしない。

だから、ユマ姫がやっているのは結界魔法での加速では無く。風で押し出すだけの原

始的な加速だ。

魔力をコイルの様にグルグル巻きに流すと、内部に気流が発生する。この最も単純な理屈だけでユマ姫は銃弾加速していた。

とは言え、他のエルフが同様の理屈で銃弾を加速する魔法を試みたところで必ず失敗するだろう。

なぜなら何百万と巻かれたコイルの姿を詳細に想像する事など出来ないからだ。

だがユマ姫だけは可能だった。

『参照権』で空中に長大なコイルの姿を浮かび上がらせ、そこに沿って魔力を流すだけ。その中に放たれた弾丸は異常な加速と運動エネルギーを得る。

その結果、四つのブースターの内の一つを破壊することに成功した。

「クソッ！ 開け！」

ソルンは瞬時に折り畳まれた主翼を展開する。

主翼を展開すればロケットは飛行機に変じ、速度は更に大きく落ちる。だが、このままでは飛ぶための推進力が不足する。爆発的な速度を犠牲にしても揚力を得る必要があったのだ。

しかし、こうなっては破壊されるのも時間の問題。

ソルンがそう覚悟した時だった。

（減速した？ 何故だ？ そうか！ 魔力が！）

ユマ姫は急激に速度を減じ、ロケットとの距離が開いていく。ラーガインの格納庫には魔力が満ちていた。だが、外はプラヴァス。魔力は極めて薄い土地だ。

これだけ魔力を蓄えたロケットでもたちまちガス欠になるのだから、無理やり飛んでいる人間などひとたまりもない。

小さくなっていくユマ姫の姿に、ソルンは胸をなで下ろす。

——ピーン！

しかし、再びの警告音。

「なぜだ？ なぜ加速する？」

ユマ姫は再びの加速。

瞬く間に、ブースターの放つ青い燐光を被る程の至近まで迫っていた。

「そうか！」

その光景で気がついた。ブースターが一つ破壊されたことで、魔力が漏れている。それ自体は覚悟していたが、その漏れた魔力を糧にしてユマ姫が再びの加速を得る事は全くの想定外。

「このっ！ 化け物が！」

魔力の漏洩防止処理を省略した事がこんな形で牙を剥くとは……呪詛を吐きながらも、ソルンの頭脳はあらゆる可能性を探った。しかし、残る魔力が少ない上に、相手はこちらの魔力を吸収出来るなら、振り切る事は不可能。王都に行くまでに何が起こるか想像もつかない。

相手はあの厄災のユマ姫で、こちらは危険な爆弾を抱えている。無事で済むとはとても思えない。

吹き出す冷や汗をソルンが自覚した時。全周囲モニターの開けた視界に、都市の姿が映し出される。

「スフィール！」

(そうだ！ なにも王都に拘る必要はない。前線を支える王国指折りの大都市を核の一撃をもって亡きモノにすれば、戦意を挫くに十分なショーとなる)

思い立ったソルンの行動は早かった。制御システムや全周囲モニターの電源を切り、全ての魔力を核弾頭へと集中させていく。吸収されるぐらいなら全てを推進力にした方がマシだった。

この距離ならば既に細かい制御は不要。あとは弾頭を圧倒的な魔力で押し出せば良い。

10%……20%……30%……

徐々に魔力が弾頭へ充填されていくのを、赤い非常ライトのみが光源となった薄暗いコクピットでもどかしく見つめる。

だが、悪夢^{ユマ}は待つてはくれないのだ。

——ガアアアアアア！

——ビィィーッ！

衝撃、そして再び響く非常ブザーが危機的状况を知らせてくる。

(またブースターがやられた?)

慌てて計器類を確認。違う！ 残ったブースターは全て無事。

——ガアアアアアア！

間髪入れず二度目の衝撃。そしてブザーは鳴り止む気配を見せない。

(まさか?)

再び計器類を確認。見れば機体のたった一カ所にダメージが集中している。

それは、何処か？ 何が狙いか？ 魔力タンクでも弾頭の格納場所でも無い。

何も重要なパーツが無い場所だった。その狙いがソルンには解らない。

——ギィィーン！ ガアアアアアアアア！

絶え間なく、衝撃と金属音が鳴り響き、そのペースを上げていく。

計器類が赤く染まり局地的なダメージを知らせる。その位置は？

(まさか? ……真上! 馬鹿な! 機体に取り付いている!?)

気がついたと同時に、金属がひしゃげる音が間近で起こった。

ソルンはギギギと軋む音が、まるで自分の首から鳴っている錯覚を覚えていた。

見上げた先、金属の隙間から外光が漏れている。

裂け目からコチラを爛々と見つめる瞳と目が合った。

「ミツケター!」

彼女は嗤った。

悪魔が居た。

(狂っている!)

ソルンはこれまでの邂逅でユマ姫の姿をモニター越しに確認してきた。

少なくとも姿だけなら可愛い少女だと、そう認識していた。だが、実際に目になると

全く違う。

爛々と光る瞳には殺意と狂気だけが輝いている。ただただ、それだけを燃料に動いて

いる少女の形をした歪な生き物。

だが、何よりも恐ろしいのは不気味さでは無い。

美しいのだ。

恐怖で神経がすり切れて、警告ブザーが耳を灼き、脳も最大限の警戒を発しているに

も関わらず、それでもユマ姫の美しさに生唾を飲み込む喉を自覚した。

(なんだこれは？　なんだこれは？)

極限の混乱は、いつそソルンを冷静にさせた。

——ピー

100%！　甲高いブザーは弾頭に魔力が満ちたことを伝えて来た。

ソルンは保護カバーを跳ね上げ、赤いボタンを叩いた。叩いてしまった。

——シュツ！　ズバアアアツ！

弾頭は発射された。スフィールに向けて、超音速で。

一方で全てのエネルギーを失ったロケットはゆっくりと落下して行く。

ソルンとユマ姫を乗せたまま。

「お前はここで僕と死ぬんだ。悪魔め！」

彼女を道連れに死ぬるなら悪くない。

そう思わせてしまうことが、ユマ姫最大の欠点かも知れない。ソルンはロケットから

過剰なまでに魔力を抜いた。

それどころかコックピットに持ち込んだ、小型の霧ギユルドスの悪魔を起動し、少量の霧をふり

まきもした。

これで脱出装置も含めた全てのシステムが停止。不時着など不可能。墜落を逃れる

術は無い。

だが、魔力を吸収し、霧を苦手とするユマ姫にとつても致命の攻撃となる筈だった。

「あら？　素敵なお誘いね」

それでもユマ姫は嗤っていた。

——ギヤリギヤリギヤリ！

「でも、折角なら二人きりが良いでしょう？」

王剣を振るいコックピットに大穴を空ければ、吹き荒れる突風で霧はあつという間に散ってしまう。

（それでも霧はお前の魔力を奪ったはずだ！　もう飛ぶことは出来ない！　違うか？）
違わない。そもそもロケットに取り付くまでユマ姫は魔力の大半を使い果たしていた。その最後の一欠片が、霧を吸うことで消失した。

ユマ姫の整った眉根が歪むのを確認すると、ソルンはオープンカーの様に変じたコックピットで風に煽られながらも、遙か彼方へ飛んでいく弾頭を見上げて笑った。

全ては手遅れだった。

ロケットが墜落し、ユマ姫と共に死ぬのが先か、核がスフィールを焼き尽くすのが先か。
スフィールが先であってくれとソルンは願った。

ど派手な花火と、美しくも恐ろしい少女が悔しがる様子を見つめながら死んでいったなら、最高の最期じゃないかとソルンは笑った。

だが、少女もまた笑っていた。

笑っていたのだ。

その時、少女がどこから取り出したのは、信じられない位大きく、純度の高い魔石だった。

(なんで? どこから?)

あり得ない事だった。プラヴァスの魔石は全て帝国の手中にあったのだから。持ち込もうにも砂漠を越える時にすり減って、殆どの魔石は消失してしまう。

ソルンが呆然と見つめる中、美しい少女は神々しくも輝く魔石へ、祈る様に口付けた。

「お願い、父様」

それは、エリプス王の魔石だった。

無心に胸を抉り、取り出した魔石だった。彼女の父親が王剣と共に残した唯一の遺産。

それを少女は、飲み込んだ!

「何を!」

——ギイイイイイン!

驚愕するソルンを余所に、少女は落下して行くロケットへと一際深く、王剣を突き刺した。

そしてあろうことかユマ姫は突風吹き荒れる上空で、体を支えるための最低限の魔法の制御すら手放してしまう。

落下するロケットの外壁に人力でへばりついている状態。当然、吹きすさぶ突風は守りを失った少女の軽い体を吹き飛ばそうと殺到する。

ユマ姫は突き刺した剣へ取り縋り、吹き飛ばされまいと跪く。

「父様、お願い。私を守って」

跪いた姿勢で、少女は祈った。今は亡き父親へ。

すると、不思議とその瞬間。吹き荒れていた突風がピタリと止んだ。

少なくとも少女自身はそう感じた。

「父様、お願い。みんなを守って」

そう言って、取り出したのは木村がコートに忍ばせていた拳銃。

ユマ姫を思つて木村が託したモノとは言え、帝国兵との絶え間ない激戦によりシリンドーに残されていた銃弾はたったの二発。

しかも一発はブースターを撃ち抜くのに使ってしまった。

だから正真正銘、これは最後の一発。

狙うは高速で飛翔する、小さな弾頭。

外せば戦争にはきつと勝てない。スフィールには軍の多くが、そしてシノニムさんも待機している。

だと言うのに……ユマ姫はズキリと痛む胸の痛みに顔を顰める。

当然だ。今日のユマ姫は魔石を食べてポンザル家の二人を治療し、その後は魔女に魔力を抜かれ、エルフでも参つてしまう様な要塞の強烈な魔力に曝された後、ソルンに霧で魔力を抜かれた。

まるで深海と高地を往復する様なモノ。たとえ凶化した体でも強烈な負担であった。今の彼女の健康値はたったの8。

それは何かと死にかけていた幼小期と同じ。ちよつとした怪我や病気で即座に死に至る極限状態と同じ。

そんな状態で魔石を食べればどうなるか？

普通は死ぬ。凶化していようと、間違い無く死ぬはずだった。

だが……

「ありがとう、父様」

その魔石は、彼女の健康値を些いさかも傷つけなかった。それどころか彼女を守る力がゆつくりと満ちて行く。

幼少から変わららず彼女を見守っていた父の力が、彼女の中に取り込まれていく。
「行きます」

膝を折り、祈る様に銃を構える。

狙うのは飛行機雲を残して飛んでいく飛翔物体。

夏の日を思わせる爽やかな光景だが、その正体は核弾頭。先にあるのはスフィールだ。

思い描くのは何重にも巻かれたコイルの様な魔力回路。そこに全ての魔力を流し込む。

魔力の青い燐光がユマ姫の姿を照らし出していた。

（何だこの魔力は！）

ソルンは信じられぬ程に神々しい光景に目を奪われる。

実は驚いていたのはユマ姫も同じ、通常は半分も吸収出来れば上出来の魔石の魔力。今回に限ってその全てが彼女の力となっていた。

それでもユマ姫には自信が無かった。落下しながら、超音速で飛ぶ弾頭を狙うなど神業に他ならない。魔法の矢と違い、後からの制御が殆ど出来ないからだ。

「パパ、お願い」

だから祈った。左手で王剣を握り、右手の銃を祈る様に掲げる。

飛行機雲の先の点の様な弾頭を必死で狙った。

……そして、トリガーは引かれた。

——パァン！

思いの外、軽い音。

だけど魔力の渦で加速された弾丸はみるみるうちに加速していく。

魔力で巻かれたコイルは『参照権』の力を借りて、飛行機雲をなぞる様にひたすらに伸びていく。

長く、長く。

音速を遙かに超えた弾丸は奇跡の様に吸い込まれた。小さな小さな弾頭へ。

——そして。

——!!!

閃光！ 僅かに後れて衝撃。音を感じる事が出来たのは最初だけ。

瞬間、鼓膜が引き裂かれ。静寂の世界が訪れた。

熱い。世界の全てが灼けてしまいそうな程。

ロケットは嵐の中の小舟よりも尚、揺れている。ユマ姫は突き刺した王剣に必死に縋りながら、爆心地を見ようとする気持ちで必死で押し止めていた。

見てしまえば目が灼けてしまうに違いない。それほどの閃光だった。

それはソルンも同じ、作戦の首尾を確認するべきなのだから見たいに決まっている。ただ、ソルンはそれほど苦労せず、爆心地を見ずに済んでいた。他にもっと目が離せないモノがあつたから。

ゾツとする程に美しかったのだ。

青の魔力光に代わり、今度は赤い閃光に彩られたユマ姫が。

生と死の狭間で笑う死神、いや魔王に見えた。

音が無くなり、太陽よりも強烈な破壊の光に曝された世界。

艶然と少女は笑って、何かを言った。

音が無くても、形の良い唇の動きで、意味は解った。

「さあ、死にましよう」

彼女は、笑っていた。

灼熱の空

抜ける様な青空が一転、夕暮れみたいに赤く変ずる。

雲一つ無かった空に分厚い雷雲が立ちこめて、太陽が二つに増えていた。

真つ赤に染まった世界で、あなたとわたし。

大空で、世界を揺るがす追いかけっこ。

お互いを意識する男女には最高のシチュエーションだ。

暴風に舞う木の葉のように揺れる機体にしがみついて、向き合う先にソルンが居た。

「やっぱりお前は危険だ」

「奇遇ですね、私も同じ事を思っていました」

こんな美少女を掴まえて何が危険だ！ 核をぶつ放す奴にだけは言われたくない。

コイツだけはココで始末する。その気持ちだけはきつと相思相愛だ。

だけど、俺達を殺そうとするのは人間だけに限らない。

——ゴオオオオオ

「うあー！」

「ぐっー！」

その時、突風が吹いて機体が反転。天地が逆さまになり、機体の上に立っていた俺は重力のままに落下しそうになる。

それを救ったのが銃を撃つために突き刺したままの王剣。抱きかかえる様にしがみついて重力に必死に堪えた。

踏ん張る必要に駆られたのは俺だけじゃない、天井を切り裂かれたコックピットでソルンもまた操縦桿にしがみついていた。

おまけに機体は雷雲に飲まれてしまう。湿り気のある風が頬を打ちつけ、雨粒を吸い込んだ木村のマントがバサバサと暴れる。

こんな状況では命を守る行動で精一杯。だと言うのにソルンは片手で何やらコックピットを漁っていた。

「死ね！」

取り出したのは……銃！ 小型の拳銃だった。それを見た俺は咄嗟に構える。

「あなたこそ！」

こちらも銃。左手は王剣を握り締めたまま、右手で眼前に突きつけた。

反転した世界で雷雲の中、至近からお互いの銃口を突き付ける。

人の及ばぬ天空で突然の静寂。

「ぐっ！」

ソルンは唸るが、俺のはハツタリ。シリンドーの中に銃弾は残されていないのだ。

とは言え、ソルンの銃だつて撃てるかどうかは怪しいモノだ。なんせコイツらの持つ銃は全てマスケット銃。

雨に濡れる雲の中、撃つことなど出来るのか？

……いや。

——ペアアン！

撃てるに決まっている！ 俺の『偶然』はそういう所に余念が無いのだ。

そう確信があつたからこそ、俺は思いきり体を捻つて回避に成功。それでも銃弾は俺の頭を掠つていった。額に血がドロリと垂れて、銀色の髪が散つていく。

……そう、銀色だ。魔力はさっきの一発で使い果たしてしまった。

そしてなにより頭が痛い。銃弾は痛みを自覚する切っ掛けに過ぎない、むしろ内からの痛みがズキズキと強烈だ。

ここに至るまで無理をし過ぎた。意識がぼんやりと混濁していく。

この感覚、昔と一緒だ。いつの間にか気絶して、気がつくとベッドの上。微睡む意識の中、父様に叱られる夢を見て、何度もベッドで飛び起きた。

夢の中でも怒鳴られて、全てが夢だったと気付くのだ。今回も、そうだった。

「い、い、い……あつー！」

気がつけば左手一本で王剣にぶら下がっていた。一瞬、意識を失っていたのだ。左手を手放さなかったのが奇跡。冷や汗が体中から噴き出す。

そうだ、もう、俺をベッドまで運んでくれる人はどこにも居ない。

ギリギリと歯を食いしばり、左手の王剣を強く握り締める。そして右手に握った拳銃は、俺を蹴落とさんとするソルンへと投げつけた。

「痛ッ！」

命中！ 俺はその隙に空いた右手も使って、両手で王剣を握り締める。それでもまだ宙ぶりの状態で、風に煽られた俺の体は、みの虫みたいに揺れていた。

「この！ 落ちろ！」

そこにソルンの追撃が入る。コックピットの淵に手を掛け身を乗り出し、王剣を握る俺の手を蹴飛ばしたのだ。

「うっ！」

か細い指の関節が外れ、左手の人差し指に力が入らなくなる。クソッ！ このまま何もせずとも二人仲良く墜落死だつてのに、随分と念入りにやってくれる！

苛立って見上げれば、俺が投げつけた拳銃が額にぶつかったのだろう。ソルンもまた、俺と同じく額から血を流していた。

「ふっふっ」

ソレを見て、思わず笑ってしまった。俺の『偶然』は今日も絶好調だ。俺だけじゃない、ソルンだって死へ誘おうと手ぐすね引いているってワケだ。

このまま一緒に墜落死か？ それとも雷に打たれて二人で仲良く感電死か？ 良いじゃないか！ 予定通りだ。予定通り！ お前も道連れだ、ソルン！

「なにを！ 笑っている！」

ソルンが俺を見ておの慄き、固まる。

その時だった。

——ゴオオオオオ

再び強烈な風が吹き、機体がぐるりと回転する。

「そんなんっ！」

強烈な遠心力が俺の体を振り回し、たまらず王剣を手放してしまう。そのまま俺の体は中空へと投げ出されてしまう。

終わっつ——！

——ガコン！

落下を始める瞬間。俺の体は回転する主翼に掬い上げられる様に着地した。

「なんっ？」

声を上げるソルンだが、驚いたのは俺の方。再び反転した機体の主翼に俺は立ってい

た。

曲芸じみた一発芸。もう一度やれと言われても絶対に御免だ。

でも、これは千載一遇のチャンス。俺は着ていたマントを脱ぎ捨てる。

木村には悪いが、雨を吸ったマントはかなりの重量になっていた。ターバンを巻いただけのあられも無い姿になってしまいが、文句を言う奴は誰も居ない。

淑女たれと口うるさかった父を思い出し少しだけ胸が痛んだが、許して貰うよりないだろう。

そのまま主翼を駆け、ロケットの胴体に刺さった王剣へと飛びつくと同時に。

「どりゃー！」

「ぐあつー！」

勢いのまま、しがみつくとソルンの顔面を蹴飛ばした。もちろん素足でだ。サンダルなどどうの昔に脱げてしまった。

コックピットの縁を掴んでいたソルンはたまらずコックピットから零れ落ちる。だが、惜しい。ソルンの体は主翼の上を転がるも、ギリギリの所で落下しなかった。

しぶとい！ もやしみたいないな体の癖に随分と粘る。どうやっても生き残れないこの状況で、まだ折れていない。血まみれになった顔で俺を睨んでいる。

「このっ！ 魔王め！」

魔王と来たか！ 悪魔とか、聖女とか、みんなして好き勝手呼んでくれる。俺はな、エリプス・ガーシエント・エンディアンの娘、ユマ・ガーシエントだ。

「勝手な呼び名で私を呼ぶな！」

「ぐぬー！」

王剣にしがみついたまま、にじり寄ってくるソルンを再び蹴飛ばす。しかし、非力な少女の脚力だ。あつさりとしてソルンはコックピットに手が掛かる位置まで戻って来た。

その時だ。

——ゴオオオオオオ

みたび
三度突風に煽られ、再び機体が反転する。

「きゃあー！」

「うわっ！ クソッ！」

俺は王剣を手に宙吊りに、ソルンはコックピットの縁を掴んで宙吊りに。お互いぶら下がって見つめ合う、間抜けな絵面になってしまった。

だけど、お互いに大真面目。俺はソルンを蹴飛ばそうと足を伸ばすが……届かない。一方でソルンは動く元気もないのか歯を食いしばっている。放つておいても落ちそうな勢い……と、俺達二人にパラパラと何かが降ってきた。

金属片。機体のパーツだろうか？

違う。見慣れたフォルムのコイツは!?

それに気が付いた時、お互いの顔が驚愕に染まる。俺は絶望に、相手は喜色に。

——弾丸だ。

もちろん俺のじゃない。ソルンがコックピットに持ち込んだモノだろう。

コイツら! 既に弾丸を作っていた。雨に濡れても撃てる訳だ。それ自体が絶望に値するバッドニュースだが、それよりもヤバいのはソルンが零れ落ちる弾丸の一つを口に含む事に成功した事。

左手一本で体を支え、右手で腰のホルスターから銃を引き抜くと、パカリと真ん中から折れたたむ。

中折れ式! シリンダーじゃないのか? そうか! 銃弾が妙に大きい。まだ小型化が出来ないのだろう。

だからショットガンみたいな機構にしか出来ていないのだ。

ならば同時に撃てるのはたったの一発。でも、その一発を躲す術が無い。

「終わりだ!」

ソルンが銃を突きつける。俺は宙吊りの状態で、柔らかなお腹を無防備に晒している。正直、もう指の力も限界で、少しも動けそうになかったのだ。

弾丸は『偶然』に俺を外すことはないし、不発と言うのもあり得ない。だから何かし

ないと必ず死ぬ……でも打つ手がない。

……いや、たった一つ手があった。

王剣から手を離せば良い。

もちろん真つ逆さまに落ちて死ぬが、コイツに殺されるよりマシじゃないか？

「……………」

でも、俺は手を離さなかった。

どうせ死ぬなら、父と一緒に良かったから。

死ぬときは、父の形見と一緒にだと決めていた。

俺は覚悟を決めて、ギョツと目を瞑った。すると予期せぬ事が起こってしまう。

——パアアン

ソルンの銃が硝煙を吹き、俺の体は宙を舞っていた。

撃たれたからではない。

王剣が起動したのだ。

覚悟を込めて集中した精神は、最後の最後、胸の奥底で僅かに残った魔力をかき集めた。思いがけず、かき集めてしまった。

そうして埋まったままに起動した王剣は本来の力で機体を切り裂き、当然の様にすっぽ抜けた。

落下する俺を苦々しく見つめるソルンと目が合ったのもまた、一瞬。

ソルンの姿は雷雲の中に消え、俺の体は急速に落下して行く。

これで、良かったんだ。結果的にソルンに撃たれることもなく父様と共に逝ける。

心残りは復讐が中途半端に終わってしまった事だろうか？ 何度か見た気がする走

馬灯。前見たときよりも少しだけセレナも優しい顔をしている。

ああ、今回は父様も居る。みんなみんな待っている。そうだ、帰らないと……

今回は？

前回こんな感じの走馬灯を見たのは何時だったか、同じ様なシチュエーションがあったハズ。

ゼスリード平原でグリフォンに捕まったときだ！ 霧に飲まれて俺は無惨に墜落した。

あの時、田中が落下する俺の体をキャッチした。

でも今回、田中はプラヴァスに居る。随分と距離があるし、高さだってあの時よりずっと高い。

乙女チックな夢を見てしまったな。自嘲気味に笑い、目を瞑る。

暗闇の中。俺の胸には輝く光。

……おかしい、俺の運命光はまだ消えていない。
何故だ？

と、その時、俺の耳に音が戻った。

音が戻った事でやっと気がついた。

先ほどまで音だと思っていた『モノ』。たとえばソルンと交わした会話、機体が軋む音、悲鳴、それら全ては極限状態の脳が相手の唇の動きなど、映像から作り出した幻聴だったのだ。

実際には爆発の衝撃で耳が馬鹿になり、殆ど聞こえていなかった。

それが回復した途端。伝えてきたのはプロペラの風切り音。

……これは？ それに、この運命光は！

と、疑問に思うと同時に衝撃。

「ぐえっ！」

『ユマ姫ゲット！』

呑気な木村の声でした。

「な、に？」

落下するには早い、まだ地面は遠い。なのに木村は俺を受け止めた。どうやって？

『凄いつしよコレ！ 格納庫で見つけちゃった！ ホバーバイク』

木村が乗っていたのは、タイヤの代わりにプロペラで浮き上がるドローンみたいなバイク。四つのプロペラで浮力を得るのは前世で見たドローンそっくりだ。

『ただドローンに座席を付けただけじゃない。折りたたみで横向けのプロペラもあるから結構な速度が出るんだぜ？』

『いやいや、それよりお前、どうやって？』

俺とソルンが戦っていたロケットは、雷雲に飲み込まれて外からは見えない。田中と違って木村には気配とか言う謎の能力も無いはずだ。

『俺のマントが雨雲の中から落ちるのが見えたからさ』

『あっ！』

飛行機の上で脱ぎ捨てたマント。アレを目印に飛んで来たのか。完全に奇跡じゃないか！

つと、そんな事より。

『あの、雷雲の中！ 突っ込んでくれ！』

『え？ 嫌だよ壊れちゃう』

『良いから！』

『なんでだよ？ まさかソルンが居るのか？』

『ああ、居る！』

魔力が抜けて、後は墜落するのを待つばかりの機体だ。殺るなら絶好のチャンス！

『んなの放っておいても死ぬじゃん！』

『それでも！』

『ナンでよ!?! 意味がワカラン』

『そりや……』

俺は雷雲を見上げ、目を瞑る。

運命光が、消えていない。死なないかも知れない。

『どっちにしろ無理だわ、諦めろって』

『どうして?』

『そりや……』

『なにさ?』

『ガス欠だし』

『え?』

木村が指差したのは魔力の充填率を示すメーター。殆ど残ってないではないか！

『スツカラカンじゃん!』

『でしょ? 飛び上がって雲の中突っ込むどころかプラヴァスに戻るのも厳しいぜ』

『え？ どうすんの？ 砂漠の中帰れるの？』

『無理かも。水も食料もなんも持ってない！ スツカラカン』

『死ぬじゃん！』

どおりで！ 消えてはいないが、すり減った俺の運命光は大きく戻ったとは言いがたい。

『ま、なんとかなるでしょ、ホラ』

ゆつくりと高度を落としていくホバーバイクからは、遙か遠くの地平線まで一望出来た。木村が指差す先にあったのは砂煙を上げる漆黒の機体。

『アレは？ 田中の？』

『バイクだな。帰ろうぜ、プラヴァスへ』

と、その時だ。

『雨？』

ポツポツと上空の雨雲から雨が降り注ぐ。気がつけば雨雲は大きく成長し、砂漠全体に広がっていた。

『ヤベエな』

眩いたのは木村。俺は首を傾げる。

『なんで？ やつとプラヴァスに雨が降ったワケじゃん』

『核爆発に雨。黒い雨って知らないか?』

言いながら、雨に濡れまいと必死で手を翳している。俺も……と、俺に関してはそれ以前の問題だ。

『放射能汚染された雨だった事? 全然色は黒くないけど? そう言えば俺、メチャクチャ光とか浴びただけだ』

『マズいな……そう言えば、ドコでどうやって爆発したの?』

『あー……』

俺は魔力で超絶加速した銃弾で、超音速で吹っ飛ぶ核弾頭を空中で撃ち抜いたことを説明する。

ソレを聞いた木村は考え込んだ。

『それなりの至近距離、思ったより爆発が小さい。戦術核か?』

『わからんけど、元々は暴走した魔力炉を潰す為の核っばい』

『そっか、やっぱり戦術核。規模は小さいか。それにしても衝撃が少ない。まさか高高度で爆発してEMPに? だとしても機械が無事だし……あ』

木村は思い出した様に見上げるが、俺には話が見えないので苛立ちが募る。

『何よ? 端的に説明せーや』

『弾丸でベクトルが変わって高度が上がったとして、大気が無くなる様な高度に達する

前にこの世界特有のモノにぶつかるとわかるわけだな』

『それって、健康値？』

『そう、そうなりや魔力は空になって、そこで核爆発を起こしたのかも。だったらきつと放射能の害は大して無いぜ』

木村は自信満々だ。曰く、この世界を覆う健康値の膜は俺達の世界の電磁の膜よりよっぽど強力なのだと言う。

『地球に電磁場の膜？ 知らないけど？』

『まー見えないし、でも無かったら地球だって宇宙からの放射線まみれだぜ、この世界では健康値がその代わりをしてるんだ』

『へーでも、それがどうして地球より強力だって言える訳？』

『そうじゃなきゃ、あんな要塞作らずにバンバンミサイル撃つだろ？ 健康値の膜は俺達が思ってるよりもヤバいんだ。多分な。放射能の心配は要らないと思うぜ』

『はあ……なるほど』

やっぱり良く解らなかつたのだが、木村が納得したならそれでいいや。話が長そうだし。

『それにしても、どうして雨が降つたんだろうな』

と、木村が妙な事を言い出した。堂々巡りの会話に苛立って、俺は木村の脛を蹴る。

『お前、核の後には黒い雨が降るって自分で言ったじゃん』

『うーん、今回はそれなりの高度で爆発してるから上昇気流も発達しないし、キノコ雲だって無い。高度から言えば、逆に雲を散らせてしまっても不思議じゃ無いんだな』

『ふーん』

『そういやさ……歌姫の秘密って結局なんだったの?』

雨を降らせる歌姫の秘密を木村はプラヴァスですつと探していたというのだ。答え合わせが出来なければ納得しないと顔に書いてある。だが、申し訳ないが期待に添える様な秘密は無いのだ。

『ただのおまじないだよ。女の子特有のさ。ああつ!』

『どつたの?』

『そう言えば、俺やってるわ。おまじない』

『?? なにを?』

『フォツガ!! 死苔茸チリアムをさ、凧に結んで大空にお供えするんだって、俺の場合はもつと豪快に爆弾でドーンって』

『爆弾で? なにやって……そうか! そうだったのか!』

突然膝を叩いた木村は、ホバーバイクを乱暴に着陸させる。そのまま転がる様に砂漠に飛び出すと、砂まみれになりながら地面に転がった。

『え？ 頭が壊れた？』

『これだ！ フォツガ！』

心配をよそに木村が砂漠から掘り当てたのは死苔茸^{チリアム}、ここではフォツガとか呼ばれるキノコだった。

嫌な思い出ばかりのキノコを俺の目の前に突きつけながら、興奮気味にまくし立てる。

『バイオエアロゾル！』

『なにそれ？』

『キノコの胞子とか。微細な生命の粒子が高高度で凍って雲の核を作る』

『だから？』

『最近のプラヴァスはフォツガを小さい内からとってしまおうようになっていた。だから雨が降らなかつたんだ。で、リネージュは胞子を風で空にばらまいていた』

『そんなんで、雨が降るの？』

『降る！ 事も、ある』

『なんだ』

思わず顔を顰めるけれど、木村は首を振った。

『降る確率が上がるだけで全然違うって。雨が降れば霧^{ギョルドス}の悪魔や火薬だつて無効にな

る』

『それがさあ……』

もう雨で銃を止められない。奴らが不格好ながら弾丸を作り始めている事を伝えると、木村はニヤリと笑った。

『そりゃ、逆に量産に苦戦してる証拠だつて。超科学で作れるならとつくに俺より良いのを量産してる。俺でも量産は苦しいんだ。逆に安心したわ』

『そういうもんかね』

『そうだったの』

笑いながら砂漠に寝そべって、二人で田中を待つ。

地平線から漆黒のバイクが何も無い砂漠を駆けてくる。

『つと、アイツを待つ間、歌つてよ』

ん？

『アレでしょ？ 音痴は治ったんでしょ？ 歌つてよ一曲』

謎のリクエストをする木村に、俺はニヤリと笑って見せる。

『どうせなら、ライブでもやろうぜ』

プラヴァースの空模様

「囲まれてるわね」

シャルティア、いや、シャリアは油断無く辺りを見回した。

「私は何も感じな……いや、居るな」

「え？　ええっ？」

気配を探る技能など無いリヨンでも感じられる程、周囲の敵はあからさまだった。不穏な空気にカラミティは冷静さを保てない。

リヨンとカラミティの二人は、田中の元へと駆けていく木村とユマ姫に、ついて行くことが出来なかった。

ユマ姫を守りたいリヨンにとって苦渋の決断であったが、これ以上無理をしても足手まといになるだけと、他ならぬユマ姫の侍女シャリアに断じられれば、頷かざるを得なかった。

それほどに、濃すぎる魔力が彼らの体を蝕んでいたのだ。

そうしてシャリアの案内の下で、地上への脱出を果たした彼らを待ち受けていたのは、ルードフ家の残党だった。

ルードフ家は田中と木村の執拗な攻撃と、なによりソルンが放った強力な魔力によって、いよいよ地下から追い出されていた。

そして、勝手知ったる地下への出入り口が多い場所で再集結。再起を賭けて動き出す直前だった。

それは当然、旧ポンザル家、現ルードフ家の地下の近く。シャリア達が地上へ脱出を果たした場所と重なる事になる。

「焦って地上に出たのが裏目に出たわ。私の失態ね」

「いや、あれ以上地下に居てもジリ貧だった。恥ずかしながら私の体力が保たなかっただろう」

「……そうね」

シャリアは否定しなかった。実際、肩に怪我をし、健康値を削って回復魔法を通したリヨンの体調は限界。勿論、ただの少女に過ぎないカラミティの体力も限界に迫っていた。

「うう……死んじゃうの?」

逃げ込んだ薄っぺらな廃屋の中、膝を抱えて震えるカラミティへ、シャリアは微笑む。

「そんな事無いわ」

「え? は……はい」

艶やかに笑うシャリアの美貌に、カラミティは思わず見惚れてしまった。

「ううー！」

「？ 変な子ね」

不思議と脳裏に浮かぶのはシャリアの唇。妄想を振り払うべく頭を振る様子を見て、シャリアはため息を漏らす。その姿がまた艶めかしく見えて、カラミティにはたまらないのだが……

「来るぞー！」

リヨンが叫ぶ。相手は徐々に包囲を縮めていた。

だけどシャリアは慌てない。彼女には必殺の武器がある。

「これを使うわ」

取り出したのは紙製で手の平サイズのくす玉。

煙幕だ。

視界がきかない世界であれば、彼女は無敵。

元々は闇の世界こそ主戦場と定め、生きていた少女だ。今でこそ侍女などやっているが、暗殺一家の秘術を欲しいままにした彼女は、音や気配で相手を探るのはお手のもの。更に言えば、彼女だけの技能、魔力を目で見える力もある。煙幕の中でも戦うのにまるで支障が無い。一方的な虐殺になるはずだった。

しかし。

「マズイわ。湿気ってる！」

「オイ、どうした？」

「今までジメついた地下水路を歩き来し過ぎたわ」

端整な顔が恥辱と後悔に歪む。こればかりは彼女らしくも無いミスだった。事前に装備の確認を怠った。

ただ、彼女に代わって言い訳をするならば、火薬は余りにも最近手に入れた新兵器。貴重に過ぎてシャリア自身、細かいテストが出来ていないのだ。

従来型の風上であればらまいて視界を奪うタイプの煙幕と違い、場所を選ばない代わりこう言ったトラプルは避けられない。

元来、火薬だけの爆弾以上に、一度湿気ってしまうと着火し辛い傾向にあったのだ。

「仕方無いわね、少しずつでも掃除してくるわ」

「お、オイ！」

リヨンの制止も聞かず、ぬるりと廃屋から外に出ていくシャリア。その姿にリオンは驚きを禁じ得ない。出て行く際に全く音がしなかったことが一つ。監視している敵が一切発砲しなかった事が二つ。

太陽が全てを照らし出すプラヴァスの日中、完全に囲まれた廃屋から彼女は敵に気が

つかれずに脱出したのだ。

これでは自分達が足手まといと言うのはなんの誇張でも無い。リオンは深く息を吸い、覚悟を決めた。

「カラミティ、私も出る」

「そんな！ 危険です」

「このままでは圧殺されるだけだ。私が人質になれば彼女に迷惑が掛かる」

「……わかり、ました」

カラミティは続く言葉をぐつと堪えた。気を抜くと、私を見捨てる気なのかと文句を言いそうになってしまうから。

彼女は彼女なりに反省していた。変な勘違いで暴走し、学校では迷惑を掛けてしまった。それまでだつて政略結婚を嫌がって逃げ回つて……その上最近では女の子に興奮している変態な自分に嫌気が差していたのだから、見捨てられるのが何より怖かったのだ。

彼女はずっと自分に自信が無かった。だからこそ、奴隷だなんだと自分の価値を貶めてでも誰かに必要とされたかった。

でも、この状況。暴力だけが支配するこの場面で自分が何か行動を起こして、物事が好転するとはとても思えない。

こんなとき、貴族の子女として教えられる事は一つ。
自害だ。

小屋から出て行くリオンを涙目で見つめる。辱められる前に潔く死ねと、その背中が言っている様に感じてしまう。

実際は、リオンにそのつもりは無い。

むしろ、カラミティをなんとか守る為に行動に出たのだ。

リオンは木村から言い含められる様に何度も毒に気をつけろと言われていた。決して風下に立つなども。

周囲を包围され、廃屋に追い詰められたこの状況。二人纏めて毒で始末するには絶好の機会に思われた。

だからこそ、打って出た。間違った選択では無い。実際に爆弾でも投げ込まれたら二人纏めて死んでいただろう。

「行っていくる」

それだけ言って、意を決したりオンが廃屋を飛び出す。

今度はリオンを狙い、幾つもの火線が走った。幾つかを掠り、今度は左肩に一撃を貰いながらもリオンは必死で走った。

しかし、隠れようとした物陰に先客がいた。リオンを撃った男の一人、モタモタと弾

を込めていた。

「よくも！」

一息で締め上げる。ナイフや火薬、もちろん銃と弾丸も取り上げる。

「よし、わかるぞー！」

リオンは元の持ち主より、よほど手際よく火薬を詰め、弾を込めた。銃という兵器について、木村からみっちりレクチャーを受けていたからだ。

——パァン！

そして、リオンは目が良く、器用だった。屋根の上からコチラを狙う狙撃手を逆に撃ち抜いてみせたのだ。

「いかんー！」

それと同時に、カラミティが残る廃屋に踏み込もうとした男が目に入る。慌てたりオンはナイフを引き抜き、投げる。

「イヂツ、グベツ！」

太ももに命中。これだけでも大した物なのだが、それでは致命には至らない。しかし、ナイフを受けた男が体勢を崩した所、どこからか飛来した別のナイフが男のこめかみを貫いた。

(シヤリア殿、かたじけない！)

心の中で頭を下げながら、リオンは銃を抱えて走って逃げた。姿を見せないシャリアと違い、リオンを狙って火線が集中していたからだ。

再び攻撃するにも、同じ狙撃ポイントは厳禁と言うのが木村の教え。なるべく守りやすく、逃げやすい、それでいて要所が一望出来る場所と無理難題だが、ここぞと思える民家に転がり込んだ。

しかし、そこまでだった。

「キヤー！ 止め、止めなさい！」

カラミティだった。彼女は自害することは出来なかった。と、言うより寸鉄帯びて居ないのだから喉を突く事も出来はしない。

リオンとシャリアの二人でなんとか一人目の男は始末したが、中に居るのが非力な少女一人とバレてしまえば、二人三人と続く男を止める術が無い。

「これだから……」

人知れず屋根の上で様子を探っていたシャリアは息を吐いた。廃屋の中で守っていかなくてはとリオンに愚痴らずに居られない。

だが、これは正しくない。もしもリオンが籠城を選んだら、ルードフ家の連中は迷わず毒や爆弾を投げ込んだのだから、正しい判断をしたと言える。

ただし、それに気がついていないのはリオンも一緒だった。

「クソツ！ カラミティ！」

血が出るほど唇を噛みしめ、外に連れ出されたカラミティを見つめる。

もしも、ただの叔父と姪と言う立場なら、彼は迷わず我が身を省みず飛び出したであろう。だが、彼はプラヴァスの太守であり、ユマ姫から預かった侍女の正体は、凄腕の護衛であった。

ユマ姫を守るつもりが、逆に守られていたのだ。

対してリヨンが木村へ貸し出した護衛たちは二度も成果無く死んでいる。そればかりかプラヴァスの民の裏切りでユマ姫を危険に晒してしまった。更に言えば、リヨンだつて麻薬と洗脳で操られたりと散々であった。

そこへ来てコチラのミスでユマ姫の護衛を殺してしまう事があれば、自分の命一つではとても顔向け出来ない。

今、自分が飛び出してルードフ家の人質になれば、その可能性は極めて高くなる。

「スマン……スマン、カラミティ」

ボロボロと泣きながら銃弾をこめる。それだけしか出来ない。

せめてカラミティを殺した相手を即座に葬る事だけが手向けだと思われた。

そんなリヨンへと、無慈悲な声が追い打ちを掛ける。

「殺して！ 殺しなさい！」

「オイオイ、健気じゃないかカラミティちゃん。リヨン坊ちゃんよりもよっぽど肝が据わってるぜ」

「ちげえねえ！」

組み伏せられたカラミティの周りで、やんやと男達が囃し立てる。

これは罠だと思つても、怒りで手が震えるのが止められなかった。リオンはプラヴァスの太守という責任感だけで耐えていた。

「オイ、いい加減に出てこいや。玉無し野郎！ 正々堂々と勝負しようぜ？」

この胸間声はルードフ！ ポンザル家の中でも荒つぽく下品な男とリオンは記憶していたが、よりよつてコイツが反乱軍のトップと言う事になる。

正々堂々と勝負だと！ 思わず出て行きそうになるが、当たり前前に罠だろう。勝負にもならず撃ち抜かれるのがオチ。耐えるしかない。

リオンが再び歯を食いしばった時だった。

「あら、一騎打ちとは中々度胸があるのね」

上から声がした、とても澄んだ声。シャリアの声だった。

彼女は堂々と見晴らしの良い屋上に立ち、名乗りを上げた。それは自分に注目を集め、リオンによるカラミティ救出の機会を作る為。

「なんだお前は！ オイ！ 撃つちまえ」

「へえ」

パーンと散発的な銃声上がる。しかしシャリアは飛び降りる事でその全てを回避した。

彼女の狙いはこれ。派手に登場し射撃のタイミングを作りながら飛び降りて回避かなりの賭けだったが彼女は勝った。

それを見てリオンは祈り、感謝した。ユマ姫の護衛は政治的な価値のないカラミティを最後の最後まで見捨てなかった。それが涙が出るほどに嬉しかった。

「神よー プラヴァースに栄光をー ユマ姫に感謝を」

——パーン！

すかさず、カラミティを押し倒していた男を殺す。それでも皆の注目はシャリアに集まっていた。

一方でシャリアにしてみれば、ココまで終始、何かの指示で動いたわけではない。

ましてや、人質に取られたのがリオンだったとしたら、ココまでして助けていない。なぜなら、今の彼女は相手の地位や立場に忖度する様な精神は、微塵も持ち合わせて居ないから。

ユマ姫が必死に治療した女の子。だからココで死なせたくなかった。それだけ。

そして、この行動に勘違いしたのはリオンだけではなかった。

「お姉様……」

「？」

押さえつける者が死んだと言うのに、伏せたまま、カラミティは陶然とシャリアを見上げていた。

それに毒気を抜かれたシャリアは高所からの着地の衝撃も相まって、一瞬硬直してしまふ。

「死ねー！」

そこへルードフが引き金を引く。意識の隙間を突いた絶好のタイミング。

こう言う時の弾は当たる。達人の強弓を躲けてみせる軽業師が、無邪気な子供が投げ入れたおひねりで、思ってもみない怪我をすることだつてあるのだ。

厭らしく拗ねた男であるルードフは、そういう間隙を突くことに長けていた。

引き金を引かれたことに気がついたシャリアは焦り、顔色を変える。全ては手遅れのタイミングだった。

しかし、シャリアに痛みは訪れない。

「クソツ出ねえー！」

当たるハズの弾丸は、しかし不発に終わってしまう。マスケット銃では良くある事だが、どうしてこのタイミングで？

その時、ポツリとシャリアの頬を打つモノがあつた。

——雨だ。

「おい、久しぶりに降つて来やがった」

「ありがてえ」

プラヴァスの民として、砂漠の男として、当然に雨は嬉しい。

だけど彼らは知らないのだ。与えられたオモチヤに致命的な弱点がある事を。

「本当に、良い天気よね」

土砂降りに降つてきた雨の中、逃げ回る動きから一転。シャリアは悠々と歩いていく。その先に立ち尽くすのはルードフ。

「なんだてめえ！ オイ、早く撃て」

「で、ですが！」

撃てない、発射されない。火打ち石で着火するフrintトロック式のマスケットはこんな雨では撃つことが出来ない。

「クソ、女一人が舐めやがって！」

それでもルードフは余裕だった。相手が細腕の女一人だったから、絶対に自分を傷つけられないと確信していた。

その理由は彼が着ている鎧。表通りに堂々と大将首が顔を出した理由がソレ、帝国か

ら特別に渡されたエルフの加工が施された軽金属の鎧であった。

田中の鎧とは比べるべくも無い安物で、重量も嵩む三級品だが、それでも多少の銃弾は弾いてみせる防御力があつた。

よもや女性の力では傷一つ付けられるハズが無い。

敢えて一太刀受けてやって、絶望に歪んだ顔を使い慣れたシャムシールでかち割つてやろう。

そう思つて良く見ると、間近まで近づいた女の顔は想像以上に整っていた。

これは組み敷いて楽しんで良いなど、愉快な妄想に浸つて相手の攻撃を待つルードフ。シャリアはその鎧を目掛けて殊更にゆつくりと、丁寧な、ケーキでも切る様に刃を滑らせた。

あまりにゆつくりで、裸でも傷一つ付けられないぞと笑っていたルードフは、刃が速度を変えずに自分の体を通した所で初めて顔が引き攣つた。

そして、その表情のまま、ずるりと地面へと落ちていった。自慢の鎧の断面を残して。「やっぱりイケないわ、魔剣つて手応えがなさ過ぎる。でも刃こぼれしないのは良いわね。全員殺せる」

銃の登場でフラストレーションが溜まっていたのは、何も田中だけじゃ無い。確かに一流の騎士が相手では見劣りすることももあるシャルティアだが、頼みの銃が突然使えな

くなつた男達、ましてや彼らは重金属アレルギーを患っている。その上、今の彼女には魔剣がある。

負ける要素は微塵もしなかつた。

「皆、死になさい」

彼女の表情は、雨と喜悦に濡れている。

「あ、ああっ！」

そして、とびきりの笑顔に見とれ、カラミティは卒倒しそうになっていた。

エピローグ1 古代の記録

雷雲の中、ユマ姫を落とす事に成功したソルンは、落下する機体にギリギリの所でしがみついていた。

これで不確定要素の魔王を始末出来たぞ！ と達成感を味わうのも一瞬。自らにも死が迫っていた。

突風に巻き上げられた機体はいつ墜落してもおかしくは無い。それどころか、体力が尽きて機体から振り落とされる可能性も高かった。

蹴られた頬の内側は出血し、血の味が滲む。握力も残されておらず、吹きすさぶ雨に体温を奪われたソルンはガクガクと震えていた。

「クソッ！ こんな認めないぞ！」

雲の合間から見えたのは全く無事なスフィールの姿。今回もまた、何もかもあのお姫様に台無しにされたのだ。

冷静に考えれば、あの少女には魔法がある。この高度から落下したとして、死んだとは限らないでは無いか。

そう考えると、いよいよ今回の作戦に何の成果も無い事になる。

ソルンは悔しさに歯を食いしばる。だが、いよいよ機体は急速に落下を始め、雲海の下に出てしまう。こうなれば墜落まであと僅か。

覚悟を決めて目を瞑ったときだった。

「迎えに来たわよ」

その声にガバツと身を起こしたソルンが見たモノは？ 宙に浮かぶ黒い球体。クロ

ミーネが乗る飛行ドローン。ザルザカートだった。

「どうして？」

この場所が？ 飲み込んだ次の言葉を待たずに魔女は口紅で彩られた真つ赤な唇を

歪めて笑う。

「これよー！」

指差したのは抉り出された右目。そして代わりにと嵌め込まれた古代の義眼。内蔵

された赤外線センサーが落下して行くソルンの体温を捉えたのだ。

「ですが！」

それにしても早い。ザルザカートではとても追いつけない速度。

「良いから、乗りなさい」

しかし、それ以上は聞く時間が無かった。最後の気力を振り絞りザルザカートのフ

レームにしがみつく。

「行くわよ」

そしてザルザカートは急速に高度を落としていく。ザルザカートはスピードだけで無く、それほど高度も上げ続けられないのだ。だからこそ、この救出劇がソルンには理解出来ない。

どうにも不思議に思っていると、魔女は詰まらなそうに肩を竦めた。

「負けたわね」

「スミマセン……」

「負けたのは私もよ、ちよほど逃げ帰るトコだったの」

「それは……」

やっと間尺に合った。帝国に戻る途中だったからこそ、ソルンを拾うことが出来たのだ。完全なる敗北、なのに魔女は楽しそうに笑っていた。

「でもね……」

取り出したのは、小さな輝く立方体。記録媒体の一種だった。

「色々なデータが見つかったわ。ねえ？ 知ってる？ 星獣って」

「星獣……」

聞いたことがある。魔力を利用して生きる魔獣やヒトと言った膜の内側の生物は、なにも全く新しい生態系と言う訳ではない。

昔から魔力を糧にする生き物は居るのだ。それどころか、古代人類よりさらに太古からこの星と共にあった。

超高濃度の魔力を糧にして生きる、超巨大生物。彼らの生息域は当然に魔力が最も濃いつころ、地下深く、星の中心に近い場所だ。

だからこそ、誰もその生態を詳しく知らない。超科学を持った古代人でも及ばぬ未知の領域が星の最深部にあった。

魔女は輝くキューブを転がしながら、中身について諳そらんじる。

「魔力の変質を前にして、星獣の活動が活発になっていたとか。それで星獣の研究を必死にやったらしいのよ。最終的には星獣を操れないかって研究もあつたみたい」

「聞いたことが……ありません」

なにせ自然災害と同種の化け物だ。操ることが出来たらソレこそ戦力としては途轍もないが……成功したのならもう少し文献に残るはず。

「そうね、無惨に失敗したみたい。でもね、私だったらどうだと思おう？」

「ソレは……」

ソルンは息を飲む。魔女の右目が不気味に紅く光っていた。

エピローグ2 アイドル活動

「みんなー！ 聞っこえってるー？」

「イエーイ！」

俺が叫ぶと、地を揺るがすようなコールが返る。人々の熱気がプラヴァスの太陽よりもギラギラと照り返していた。

俺は今、プラヴァスの北部、水が湧き出す聖地に居た。

何故かって？ 野外ライブを行うためだ。

プラヴァスには巨大なライブハウスなんて奴は無い。学校の講堂や俺が身請けさせられていた酒場こそソコソコの広さはあるが、それでも精々が体育館レベル。俺達が欲していたのはオペラハウスや、スタジアムぐらいにお客が入れられるスペースだった。

そうなればもう、野外ライブしか選択肢が無かったわけだ。

「みんなー今日は楽しんでいってねー♪」

「おー」

ノリノリだ。ノリノリのアイドルスマイルだ。なんか変なポーズまでキメている。

何もヤバイ薬をキメてるワケじゃない。仕方無くだ、仕方無く俺はアイドル活動をし

ていた。

俺は確かに木村に「ライブでもやろうぜ！」とは言った。言ったは言ったがアレは歌姫として、それこそ当代の歌姫シエヘラさんみたいにしつとりと歌いたいと言う事だった。

それがなぜ？ アイドルみたいにキャピキャピで歌わなくてはいけないのか？

それは、帝国が手引きしたクーデターがスツカリ沈静化して、一週間ぐらい経った日の事だった。

それまでは事後処理や遺跡での資料集めに奔走し、それが終わってようやく一息ついたタイミングの出来事であった。

「実は……皆の不安が抜けないのです」

悲しそうに打ち明けたのはリヨンさん。話があると俺、田中、木村の三人で私室に呼び出されての第一声がソレだった。

「そりゃーな」

真つ先に応えたのは田中。大きくノビをして、あくびを噛み殺しながら片目でチラリとコツチを見てくる。

「なにが言いたいのです？」

「それはですね……」

まるで俺の責任みたいに言うではないか！ キリリと眉を吊り上げて怒ってみせた
が、木村が言い含める様に解説を始めた。

つまり、プラヴァアスの国教であるセイリン教の司祭が俺を邪神の手先と断じ、それ
対して俺に操られたブタ共？ が宗教指導者に殴りかかるシヨッキングな事件が起き
たと言うのだ。

いやー、世界面白ニュースかな？

「正直、見逃したのがマジで悔しいぐらいには面白えよ」

「止めて下さい、思い出したくない」

しみじみと残念がる田中に対して、リヨンさんは頭を抱えている。SMプレイを見ら
れたのがそんなに恥ずかしいかあ？ ……普通に恥ずかしいよな。

正直、際どい格好で暴れた俺が一番思い出したくない出来事だ。だがリヨンさんに
とっては恥ずかしさとは、また別の問題がありそうだった。

「セイリン教の熱心な信徒の中には、未だにユマ姫を邪神の手先と言って憚らない連中
も居るのです。もちろん侮辱的な物言いには対処していますが……」

「押さえつける度に、裏ではカルト化が進んでいるということですね？」

「恥ずかしながら……」

俺の指摘に、端正なりヨンさんの顔が苦渋に歪む。

うーん、そう言えばセイリン教と言えば王都でもかなりの勢力を持っている。アレが役に立たないだろうか？

「私はセイリン教の聖者に認定され、洗礼名も授かっていますが？」

「音に聞こえておりますが……失礼ながら悪魔の様な邪悪な名も帝国から入っています。それに洗礼名や聖名に関しては、ユマ姫様はあらゆる宗派から授かっている様ですが……それが益々」

「……怪しい、と言う事ですか」

自分でもそう思う。例えば、仏教でもキリスト教でもイスラム教でも聖人認定を受けましたみたいな少女が現れたら、それこそ終末思想でも唱えたくなる。

「ここは一つ、皆の前で聖句でも唱えて見せるしかないのでは、とお願いに……」

「それはつまり、あの講堂で私にライブをしろ、と？」

「らいぶ？ とは……」

俺の言葉に首を傾げるリヨンさんは無視して、木村は身を乗り出して提案してきた。

「どうせなら野外ライブで派手にやりましょう！」と。

で、よりによってプラヴァアの聖地で野外ライブと相成った訳だ。

時間は朝もかなり早い時刻。夏に近いプラヴァスであつても少々肌寒い。

それでも砂漠の都プラヴァスで野外イベントをするとしたら、この時間しか無いと言われてしまった。それだけ昼間は茹だる程に暑いし、日光が危険なレベルだと言う事。

真横から照りつける、神秘的な太陽に目を細める。

紫色の空は澄んでいて、赤い砂漠がグラデーシオンを描く。砂混じりの冷たい風が頬を撫でた。

ココは聖域。元より水が湧き出す場所として、すり鉢状のステージ構造が出来ている。歴史のある謎の石柱や、ど真ん中の湖が少々邪魔だが、そういう部分も舞台演出と思えば悪くない。

だが、この天然のステージは、とにかく馬鹿みたいに広いのだ。

後ろの席にはとてもじゃないが声が届かないのでは？　と言うのがリヨンさんが口にした不安要素。確かに、ただでさえ屋外では屋内より声が遠くまで届かない。

だから当然、やって来たお客だつて半信半疑、不安そうな表情が見て取れた。

舞台袖からこつそり集音魔法で探っていると、こんな声まで聞こえて来た。

「オイ全然見えないぞ?」

「これじゃあ、ちっちゃい子の声なんて届かないでしょう?　帰りましょう!」

夫婦なのだろう、オジサンとオバサンの二人組。若者に人気のユマ姫を見に来たが、

余りの人出に辟易と顔に書いてある。

「声は聞こえるはずですよ」

そんな彼らの耳元で、俺は囁いた。

「お前、何か言ったか？」

「ワタシは、何も！」

キョロキョロと周囲を見回す。

今のは俺のイタズラ、魔法で音を耳元まで飛ばしたのだ。イタズラが成功した快感に笑みが漏れる。老夫婦は首を傾げながらも席に着いた。そのまま観劇するようだ。

そんなこんなで客入りは超満員。大半はお祭り好きの冷やかしかだが、ソレで十分だ。すぐに目が離せなくなるのだから。

そうこうしているうちに、いよいよステージが始まった。時間は朝一のまだ寒い時間である。

さて、観客が最初に驚いたのは、意外かも知れないがリヨンさんの挨拶だった。

「本日はようこそお集まり下さいました」

ただの定型文句。だから驚いたのはその内容では無い。

「なんて大音量だ！」

「ココまで声がハッキリ聞こえるぞ！」

そう、それこそが歌好きで国民で知られるプラヴァスに、大きなステージが無かった理由。

多大な魔力を使う大出力の拡声器がプラヴァスには無かったのだ。

今回、遺跡から大量の魔力タンクを発見してるし、マイクとスピーカーはエルフの国で簡単に作れる。その技術力を見せつける良い機会でもあった。

これはただ事じゃないぞと、この時点で観客は舞台に夢中。巨大なスピーカーを指差したりと、途端に落ち着きが無くなった。

続く紹介は木村のギター。これもプラヴァスの人には見慣れぬ楽器である。流石にエレキではないのでしっかりとマイクも準備してある。

まずは小手調べと演奏したフレーズの数々に、プラヴァスの人々は驚いていた。

他にはアコーディオンのオッサンや、ダンサー達の紹介が入る。

彼らは名店リーリッドのメンバーだ。格式高い紳士の社交場でのみ楽しめる彼らの音楽が無料で楽しめると言うだけで、会場のボルテージは否が応でも上がっていく。

このメンバーが揃うなら当然、この人も！歌姫シエヘラだ。

「おおおおお！」

手を振りながらの登場に、会場が一気に湧き上がる。

政治的に中立を求められる彼女がこう言った場に現れるのは極めて稀……らしい。

そして大トリは勿論、俺だ。

「姫にして聖女、奇跡の魔法使いにして天よりの使者。ユマ・ガーシエント姫の登場です」

湧き上がる大声援に笑顔で応える。今日の俺は魔力も控え目の銀髪で、銀とピンクのオツドアイ。衣装は木村が用意したアラビアンな白銀の踊り子衣装だ。

とは言え、露出度はそんなでもない。精々が薄衣でおへそがちよっぴり透けて見えるのがエチエチなぐらいだろうか？

それでもプラヴァスでは過激な衣装らしく、会場のどよめきは止まらない。

まあこの位は良いだろう。異文化と諦めて貰おうか。俺はマイクの前で最初の曲目を囁いた。

「それでは一曲目、砂漠の奇跡」

それは紛れも無く聖句。本来は詩であって歌では無いのだが、木村が即興で音楽を付けて歌へと仕上げたのだった。

どうやらアニソンのアレンジっぽい。俺もそのアニメを見ていたがリユーナってエルフの女の子が可愛いだけのクソアニメだった記憶。

エルフの女の子……当てつけか？

ギターで奏でるバラードのしっとりとした音色が、神秘的な朝の砂漠の光景に溶けて

いく。

いよいよ明るさを取り戻した太陽が、俺の小さな体を照らし、影を大きく伸ばしていく。

砂漠の聖域で、静かに祈りを捧げる少女。

自分で言うのもアレだが、中々に神秘的な光景だろう？

会場は静まり返っている。これはきつと、皆が聞き入ってる証拠だ。

——静かな朝、死の時間が終わり、命の息吹が吹き込まれるの♪

これはプラヴァアスの建国神話。プラヴァアスオリジナルの聖句である。

かつて砂漠を渡った建国王が巨大なオアシスを発見すると言う内容だ。プラヴァアスの国民なら皆知ってる聖句らしいが、今は初めて聞くみたいに聞き入っている。

木村のギターの目新しさもさることながら、今の俺はリネージュの記憶を吸収し、歌の達人になっているのだから当然だ。

自分で言うのもアレだが、中々の美声。神秘的で美しい歌声だ。

……だけど、一カ所だけ、音が外れてしまった箇所がある。但し、外れたのは演奏の方。

——遙かなる理想郷、聖なる竜に導かれ辿り付いた湖♪

ここで何故か木村が手を滑らせた。珍しい事もあるもんだ。

聖句は短い。二つ三つと続けて歌った所で小休止。俺達は一旦舞台袖に引つ込んだ。「おおおおお！」

その途端、ドツと会場が湧き上がる。

良かった。余りに静かで、流石に途中から不安だったのだ。どうも感動の余り固まっていたらしい。聖句のノルマはココで終了、後は楽しいライブの始まりだ。

そうして第二幕が始まった。

「みんなー！ 聞っこえってるー？」

「イエーイー！」

「みんなー今日は楽しんでいってねー♪」

「おー」

と、まあそれでこうなるワケだ。

キャピキャピの俺に、ノリノリのお客。実の所アレだ、仕込みだ。

最前列にズラリと配置したのは講堂の一件で生まれた俺のシンパ、子ブタ隊である。

その中でも一等目立つ場所でキラキラのうちわを振っているのは……カラミティちゃんの友達、フィナンティちゃんだ。俺が怪我を治した女の子でもある。どうしてこうなったのかは不思議だが、とにかく本人の強い希望で協力してくれている。

仕込みはソレだけに止まらない。俺が魔石を飲み込むと同時に。舞台袖で田中が遺跡

にあったボンベから大量の魔力を垂れ流す。

そして俺は片手をスツと上げると同時、背後に光の魔法を全開で展開させる。

「うわっ！」

「眩しい！」

元々、朝の太陽で逆光気味のロケーション。加えて俺の魔力で思いつきり光らせれば、舞台は誰も見通せなくなる。

その隙に田中とリヨンさんが薄い幕を俺の前に広げる。薄衣に遮られて俺のシルエツトだけが観客に見えるという算段だ。

このチャンスに早着替え。俺はよりによって魔法少女みたいなフリフリ衣装に着替えさせられた。

着替えが終わると、薄い幕を容赦なく魔法で粉々に引き千切る。

——バシユツ！

音と共に幕が千々に飛び散り、光と共に俺は再び観客の前に姿を現した。

「変 ☆ 身！」

魔法少女の姿で豪快にキメポーズ。更に言えば、変わったのは衣装だけじゃ無い。

「髪の色が！」

「び、ピンクになった！」

ザワザワと観客のどよめきが広がる。

俺の髪色が、みるみるピンク色に変わっていくのだ。こんな地球でやってもニュースになるに違いない。

「いっくよー♪」

それからは、もうやりたい放題やってしまった。

光と音のスペクタクル。潤沢な魔力を使って光ったり浮かんたり。上から、後ろから音を飛ばしてみたり。

観客は大興奮でかぶりつきだ。

こんなショーがもしもあつたなら、娯楽に満ちた地球であつても社会現象間違い無し。そんなライブを中世レベルの砂漠の都市で披露しているのだから、そりゃ皆ぶつたまげる。

なんとなく沈んでいたプラヴァスの民衆の心が、パアーツと晴れていくのが手に取る様に解つた。

そしてトドメがコレだ。

——砂漠の太陽が月へと変わり、わたしの夜がはじまる。

乾いた大地を癒やすのは、わたしの歌だけ——

雨乞いの歌。

プラヴァスでは歌姫が歌うことで、雨を降らせると言う伝説の歌だ。

歌いながら、俺は風の魔法でフォツガの胞子を遙か上空まで巻き上げる。

それは丁度歌い終わるといふタイミングだった。

「嘘だろ！ 雨雲が」

「歌姫だ！ ユマ姫は歌姫だったんだ！」

狙い通りに雨雲が発達した。

実は仕込みとして水を炊き出して、大量の水蒸気を散布していたのはご愛敬。

しかし、想像以上に上手く行った。完璧なタイミング。

こうなったらもういつちよサービス行つとくか！

「嘘だろ！」

「空に！ ユマ姫が！」

俺は雨で出来た霧のスクリーンに、俺の姿を大写しに映し出した。

鏡と光の魔法を組み合わせた天然の映写機である。

「聖女だ！」

「聖女サマだ！」

最後には雨の中でプラヴァスの民は揃って跪き、俺に祈りを捧げていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【とあるブタの日記】

「合言葉は？」

「ブタのしっぽ」

「入れ」

休日の午後だと言うのに、学生の僕は学校の講堂にやって来ていた。

もちろん勉強や部活動ではない。今日はユマ姫のシークレットライブが行われるのだ。

ホンモノのブタの為の一日限りの限定公演。

緊張に手汗が噴き出す。ここに紛れ込む為に、生徒会長としてのコネは勿論。麻葉撲滅のために連日連夜駆け回ったのだから。感慨深いモノがある。

そうしてやっと入り込んだ講堂。そこは異様な熱気で満ちていた。

「ブー！ ブー！ ブー！」

響き渡るブタの鳴き声コールは勿論だけど人間のモノ。ユマ姫の為に人間を止めた、親衛隊のコールであった。

ただ、彼らが居るのは解る。親衛隊はユマ姫のファンの中のファンだ。今もユマ姫に命を救われたフィナンティさんが、始まる前から盛り上がりすぎてステージに飛び込んでいる最中であつた。

一方で謎なのは、神父やシスター、そして顔色が悪い女性や子供。数少ないが男達の姿もある。

見るからに具合が悪そうな……まさか、病人??

いや……違う！ このところ、街中を麻薬撲滅運動で駆け回ったからこそ察する事が出来た。

彼らは麻薬中毒者だ！ 間違い無い。

彼らを治すには、ベッドに縛り付けるしか無い。隔離しないと狂った様に犯罪を起す者が後を絶たないからだ。

神父やシスターには望まない形で麻薬に関わってしまったが故に、中毒になってしまった者が少なくないと聞いている。

それどころか、ポンザル家の人々は重金属アレルギーまで患っていて、痛みに麻薬が手放せない事情があったと聞いた。

きつと、彼らの事だ。無実と言うのに、後は死を待つばかりの人々。しかし、何故この場所に集まっている？ ユマ姫のシークレットライブじゃないのか？

ッ！ そうか！ 解つたぞ！ ユマ姫は死の淵にある彼らの手向けとして、最期にとびきりのライブを披露しようとしているのだ。

なんと慈悲深い……僕は感動で視界が滲むほどに泣いていた。

しかし、その涙は即座に引っ込むことになる。

「ブタ共ー！ 覚悟は出来たか！」

壇上に現れたユマ姫は、いきなり暴言を吐きながら登場したのだ。

僕はてつきり、あの聖域でのライブと同じモノを想像していた。それだけに、あの開幕には完全に面食らってしまった。

しかもゴテゴテと飾り付けられたスパンコールのコート姿は、とてもじゃないが正気の沙汰には見えない。

「ブー!!!」

しかし、ソレに一切動揺を見せない親衛隊の息の揃ったコール。

「いっくぞー!!」

そしてユマ姫は、スパンコールのコートを投げ捨てた。

え？ なんだ？ あの格好！ 裸じゃ無いか！

ソレは極小の布を僅かに纏っただけの姿。

「おお！ 神々しい！」

「アレこそが聖衣マイクロビキニー！」

え？ 親衛隊はあの格好を知っている？ 聖衣って、正気か？ あんな下品な……い

や、アレだけの極小の布面積だと言うのに、少しも下品では無い。

浮き出る肋骨や、控え目な胸。柔らかかそうなお腹。完璧な美だ。正に聖衣。見ているだけで血が滾ってくる。

そして、奏でる音楽も聴いたことがない程にハードで刺激的だった。

「コレこそがロック！」

「止まらねえ！」

親衛隊が叫ぶ。これがロック？ 麻薬よりも刺激的と、そう呼ばれていた音楽は、テンポが速く、体がリズムを刻むのを止められない！

「ブー！」

気がつけば僕もノリノリでブタの様に叫んでいた。

ライブが佳境に向かうにしたがって、恐るべき変化が起きていた。

真つ青な顔をしていた中毒者達、彼らも全てを忘れ、ステージの熱狂に飲み込まれていたので。

一時でも麻薬を超える刺激を提供し、ライブの間だけでもその呪縛から解放する！

コレが、コレこそがユマ姫がライブを行った本当の狙い！

そう思ってしまった僕は本当に浅はかで、ユマ姫が神の使者だと言う言葉を根っから信じていなかった証拠と言えよう。

本当の奇跡はココからだったのだ。

「え？ なに？ なんなの？」

「うわあああ！」

熱狂のままに次々と親衛隊クラウツドサーフィンゲが作る波でステージに打ち上げられる患者達。

ステージで震えるばかりの彼らを、ユマ姫は容赦なく踏みつけて行く。

そう、よりによつて病人を、土足で、なじるように踏みつけたのだ。

「ブタはブタらしく、鳴きな！」

普段のユマ姫は決して見せない表情。そして言葉。だけどなぜか不思議と頭の芯が蕩ける程に魅力的に見えた。

「う、羨ましい！」

少女に踏まれて蔑まれると言う屈辱が、なぜか無性に羨ましい。

きつと死が近い彼らの為の儀式と知りながら、それでも許されるならば僕も踏まれたいと願うほどに強烈な景色。

だからこそ、彼らも必死に鳴き声を上げる。

「ぶー！」

病人らしからぬ威勢が良い声、だが、奇跡はココからなのだ。

「さあ！ 立ち上がれブタ共！ 人間に戻れ！」

「か、体が！」

「痛くないー！」

次々と患者達が生氣を取り戻し、痛みを忘れて立ち上がるではないか。

だけどその時の僕は、不敬にもユマ姫の奇跡を信じず、きつと彼らの錯覚なのだと疑っていた。

ブタとする事で人間としての全ての苦しみから解放されたと一時的に錯覚させる手法だと。それだけのために、恥ずかしい格好を厭わず頑張るユマ姫は凄いと、そんな事を思っていた。

だが、違った。みるみる彼らの顔に、すっかり生氣が戻っていくではないか！

現にこのライブから数日後、奇跡の回復を果たした麻薬中毒者達が、街で元気な姿を見せ始める。

その時、僕はユマ姫が本当に神の使いなのだ と確信に至り、彼女を女神と崇め信じる事にした。

ユマ姫の奇跡として長らく語られることになるこのライブだが、僕を含めその詳細については誰も口外しないまま、秘匿される事になった。

あのライブを口に出し、説明する事など出来はしない。それほどに過激で、胸を灼く様なライブだったのだ。

一人一人の思い出として、大切に魂に刻むのがブタの定めと言えよう。僕は僕の神に誓うのだった。新しい女神へと。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【バイロンとドネイル】

ポンザル家の代表に戻る事になったバイロンとドネイル。

彼らは水路を広く知っている事から、魔力に満ちた遺跡の調査と言う危険な作業を義務づけられた。

命を削る危険な作業。だけどそれは丁度かつてのポンザル家に課せられた罰に近い。だからこそ、二人は絶望などしていなかった。

……なにより。

「良い笑顔だったな親父」

「そうだね」

引き払うために、かつてユマ姫に散々やり込められたおんぼろ小屋で思う。

そこには既に無人となったベッドがあった。

ポンザル家の主人だった彼らの父は、数日前に息を引き取ったのだ。

「良い歌だったな」

「歌姫級だよね」

「馬鹿言え、もつとさ」

父が死ぬ数日前、突然ユマ姫がやってきた。

そして、病に苦しむ父の枕元で静かに歌い始めたのだ。

「女神だ」とむせび泣く父に、ユマ姫は魔法を掛けた。体に溜まった重金属も麻薬も全て取り除いてみせたのだ。

……だが、長年蝕まれた体は既に限界だった。もう長くないと告げるユマ姫は酷く悲しそうだったのだ。

「どうしてあそこまでしてくれたんだろう……」

「それがな」

ドネイルと違い、バイロンは直接ユマ姫に尋ねた。なにかの思惑があるのかと気になっっていたからだ。

「死んだ父親の代わり、気まぐれだっつき。なんかよ、悲しいよな」

「そうか……そうなんだね」

彼らはおんぼろ小屋の窓から外を眺める。

そこには動かなくなったラーガイン要塞が、神話のままの勇姿を朝日に浮かび上がらせていた。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

【歌姫シエヘラ】

歌姫は、かつてユマ姫とレツスを重ねた部屋で微笑む。

そこには、透き通る様な美しい鏡が何枚も並んでいた。

「綺麗だったわよね」

それは鏡の事でも、鏡に映った自分の姿の事でも無い。

かつて、彼女が教えた一人の踊り子を思い出しての賛美。

「まさか、本当にお姫様だったなんて」

今思えば、余りにも美しく、常識外れの少女だった。なにせこのレツスルームの大鏡をぼやけていて汚いと言ったのだ。

こんなに大きくて美しい鏡なんてこの世に無いのに！なんて口の減らない子！

そう思ったシエヘラだったが、今、かつての鏡と入れ替わり、レツスルームにズラリと並ぶ大鏡を見れば、彼女の言葉が真実だったのだとわかる。

「コレが……エルフの技術なのね」

ココまで透明度の高い鏡など、手鏡サイズでも見たことは無い。

それが一点の曇りもゆがみも無く、全身が映る大ききで、レツスルームの壁を覆い尽くす様に何枚も並んでいるのだ。

「こんなに送ってくるなんて、律儀よね」

時はユマ姫がプラヴァスを離れて数ヶ月後の事。突然に大鏡が何枚も送られてきたのだ。

運んできたのは漆黒に身を包んだ巨漢の戦士。前も見たが、超重量の大鏡を何枚も肩に担ぐ怪力は並では無い。

「素敵だったな……でも、とても敵わないわね」

プラヴァスの女はどうしても強い男に惚れ込む性質があつた。シエヘラはプラヴァス一の歌姫。だけどあのお姫様に挑もうとはとても思えない。

今度の大鏡は、曇りが無いからこそ全てを正確に映してしまう。

この鏡の前で、ユマ姫の横に立てるか自信を持ってないシエヘラであつた。

★七章の設定語り

〔フォツガ〕

砂漠のトリユフと呼ばれるファツガを元にしています。まんまです。

雨が降るとファツガが地上にボコボコ出てくるらしいのですが、胞子が雨を降らせているって話はないです。なのでフォツガと名前を変えて、異世界バージョンとしています。

もちろん、毒は無い。

〔バイオエアロゾル〕

NHKで聞きかじった知識で小説を書く！

なんかキノコの胞子が雨を降らせるんですって！ 驚いたので参考にしました。詳しくは検索して下さい。

元々は記憶で歌が上手くなるぞ！ ぐらいに考えていたのですが、砂漠だし雨を降らせる能力にすたくなったのです。雨が降ると火薬と霧を無効化出来るので、ココでの知識が砂漠編以降も無駄にならない。

でも、雨を降らせる能力ってファンタジーに過ぎるし、理屈が無いぞと悩んでいたの

で、七章前に番組をやってくれてNHKには頭が上がりません。

七章開幕の戦争は、雨が降ると戦争に有利だぞつてのを表現しなかったのですが、ユマ姫がなんか暴れてたつて事しか印象に残らないのは失敗ですね。

【パノツサさん】

リヨンさんの部下だけが何人も死んだ七章ですが、パノツサさんはハーメルン版だとはたのロリコン扱いで可哀想なので、そうじゃないとだけ言いたかった。

本当はユマ姫の壮絶な人生を言葉の端々に感じ取つて、説得された格好なのです。

【マイクロビキニ】

聖衣と書いてクロスと読まない。

やり過ぎました。

ロリ+マイクロビキニ=最強。この組み合わせを考えた人はかなりのコスモ。

ヌルヌルプレイを一人称で書くのは「小説家になろう」では木村視点になっています。

R18怖いからね……

結果的に、ハーメルン版の方が面白くなりました。

【リヨンさん】

褐色のイケメン。

田中と木村、ふたりの共通の友人でイケメンのキャラクターとして登場して貰いまし

た。

彼の役割として、田中と木村の目の前で、女の子としての魅力を使ってユマ姫がリオンさんを籠絡しなくてはいけない。と言うのが七章で最も書きたかった部分なのです。なのに、SMとマイクロピキニでメチャクチャになっちゃった疑惑がある。

七章前半のじっくりとした進行は、木村とリオンさんを仲良しにさせつつ、リオンさんの人となりを紹介するターンでもあったのです。

あそこまでじっくり進行してアツサリ籠絡させたのは、どうにも勿体ない。

親友が徐々に籠絡される様子を見せつけられる田中と木村の微妙な気持ちや、二人の前で口説かなくてはならないユマ姫の葛藤を書きたかったなあ。

リオンさんのために、チョコレートやアイスクリームを作るみたいな小話。

でも、討ち入りじゃーみたいなのな空気でそんな暇が無くなっちゃった。

今から考えると、聖域を掘り返して記憶を取り戻したいけど許可が出ない、ぐらいの緩い展開の方が書けたよねって後悔がある。

でも、あのユマ姫が大人しくじっくりと口説こうとするかと言うと、あり得ない気がするので、コレで良かったかも。

それに、王子サマを口説こうって展開自体は四章でやってるのですよね。

アレも今考えると口説いたと言うより狂気に飲み込んだだけって気がしてしまうの

ですが。

【カラミティちゃん】

章の前半に、あまりにも男だけでワイワイやり過ぎるので華が欲しくて登場させたのですが、自然に退場させる事も出来ないまま、思った以上にキーパーソンになりました。今後もユマ姫の侍女だったり、木村の商会の一員だったり色々な立場でたまに出てくると思います。

【メタ〇ギア】

タイトルだから、名前を出しても大丈夫じゃ無いか？ って謎の理屈で名前を出してしまっただけれど、なんかアレだし伏せ字にしました。

【核】

いつも思うのですが、核のせいでSFとか書きにくくなっている気がする。

水爆とか威力が凄まじすぎるので、水爆で倒せない怪獣を出してしまうと、ロボットで倒せそうな気がしないの！

【シャルティア】

なんかカラミティちゃんに懐かれた。

あと、彼女は人間の中では図抜けて魔力が高いので長時間魔剣を使えます。

木村も魔力は高いのですが剣を体の一部と認識出来ないので、斬り掛かると健康値で

動かなくなるので使えません。自在金腕ルー・デルオンも敵に触られると動かなくなります。

実は、五章で田中に切られたフェノム隊長は天才で、自在金腕ルー・デルオンで魔剣を使える唯一の人間でした。マジックハンドに持たせた剣まで自分の体の一部だと認識出来るって考えると凄過ぎない？

なんでアツサリ殺してしまったんだろう……

以下のキャラクターは次章に再登場します。おさらい。

【キュリアナ元王妃】

ボルドー王子の母。湖のそばで隠居している。

【ヨルミ女王（ヨルミ・ラ・ガードナー）】

他の王子王女が死んだり、失脚した事で消去法的に女王の座についた。

非常に頭が良く、先進的な考えが出来る人物。陰キャ女子だったが化粧映える顔立ちに気が付いてから、派手な舞台にも立つ様になった。

【マーロウ君】

ユマ姫の二つ年上なので十六歳。エルフは早熟、かつ高身長なので人間からは少年と
言うより青年に見える。（田中は少年扱いする）

一章で子役としてユマ姫と共演。それ以来ユマ姫に憧れ、守る為に戦士になった。

魔剣の使い手で、剣で田中に負けてから兄貴と慕っている。

ユマの兄であるステフの秘宝、フェアルファリツサ双聖剣を使う。

【ゼクトールさん】

ユマ姫の婚約者だったボルドー第二王子の近衛兵。

本編に説明は無いのだけど、王族には近衛兵が与えられています。

ただし、みそつかすのヨルミ女王には与えられてませんでした。仕方無いね、本人にやる気が無かったからね。

【シノニム】

ユマ姫の侍女。ネルダリア領の特殊工作員として、帝国に裏切りそうなスフィールに潜伏していた。その後はユマ姫の侍女として協力したり監視したりしている。

【オーズド・ガル・ネルダリア】

オーズド伯。ネルダリア領の領主でシノニムさんの上司。

常識人。

八章 沼地の星獣

王都凱旋

プラヴァスの一件も片付き、俺達は王都に凱旋した。

凱旋と言っても誇れる成果がある訳じゃない。

中立都市プラヴァスの恭順を勝ち取った。と言うのは大きい成果に聞こえるが、隔てるゾツテム砂漠が広大でそもそもプラヴァスの知名度が低いのだ。

「で、用意したのがコレさ」

『なにこれ?』

ここは王都郊外の空き地、木村が並べて見せたのは、巨大な白骨死体であった。

『プラヴァスから小分けにしてラクダで運んで貰うのは骨が折れたぜ、骨だけに』

「面白くありませんよ?」

「あ、ハイ」

お姫様口調に切り替えてでも、つまらないギャグは切って捨てる。

「で、コレはなんですか?」

「竜です!」

ん？ 竜？ プラヴァスにこんなデカイ魔獣が居るハズ……あー。

「コレが、リヨンさんと一緒に倒したと何度も自慢していた、地下水道のワニですか？」
「こそ、その骨を貰ってきた」

「これこそ、リヨンさんの手柄としてプラヴァスに残すべきだったのではないですか？」
「だってさ、リヨンは腹心のパノツサさんも失って、プラヴァスを纏めるのに一杯一杯。」

最後には俺がリヨンさんを持ち上げる歌まで歌って、なんとか求心力を維持していた感。

「いや、ソレはユマ姫がブタ扱いしたことが原因だと思いますが？」

「何か言いました？」

「いえ、あの実はコレ、プラヴァスを守る聖竜疑惑がありまして……」

「あー」

聖句にあつたね、水域を守る竜に導かれて、プラヴァスを建国したって。

「隠蔽するために持ち帰ってくれて、むしろリヨンさんから頼まれたんですよ」

「……なるほど、それでどうするのです？」

「そりゃあ……」

木村が適当なストーリーをでっち上げる。

曰く、帝国は王都を焼き尽くす古代兵器をプラヴァスで発見。その起動にはユマ姫の力が必要であり、帝国が使役する悪竜にユマ姫は攫われてしまう。

それを追いかけた英雄タナカがプラヴァスで竜を撃退。しかし既に古代兵器は起動していた。スフィールに向けて古代兵器が発射されてしまう。

最後はユマ姫の祈りが天に届いて、古代兵器はスフィール上空で爆発してハッピーエンド。

「帰り道でもスフィール上空での大爆発は噂になってましたから、真実味はあるでしょう」

なるほど、全部が嘘じゃないし、見たこともない竜の骨があればインパクトもある。

だけど、たった一つ問題が。

『アイツ嫌がりそうじゃない?』

『まーしゃーないっしょ』

なんでもない風にパタパタ手を振る木村だが、ヘソを曲げると面倒だぞ。

田中だ。アイツはプラヴァスでイマイチ活躍出来なかつた事にフラストレーションを溜めていた。

そこに持ってきて竜退治の功績を押し付けられるとあつては、面白いハズも無い。

押し付ける側の木村は頭を掻いた。

『そう言や、アイツ、どうしてんの？』

『また、魔獣狩りの依頼があつてさ』

『ほーん、イライラしてたから丁度良いじゃん』

『まーね』

数日前、マールロウ君が田中を呼びに来たのだ。曰く、結構な数の魔獣が溜まつてるから助けてくれと。

数日前、つまり、俺はかなり前にプラヴァスに着いている。

何故かというと、プラヴァスからコツチに帰るのは三人ともバラバラだったからだ。

俺は魔法で飛んだし、田中はバイク。木村だけが商隊を率いて帰ったから、一番最後の帰還となった。

馬車は余りにも遅い。一ヶ月ぐらい余計に掛かっている。

なんでわざわざざわざと思つたら、こんなゴミを運ぶために帰還が遅れたとは笑えないな。俺の冷たい目線が伝わったのか、木村は大きな麻袋を指差した。

『んだよその目は！ カレー用の香辛料もタツプリ持ってきたんだけど？ 要らんの？』

『食べたいニヤン♪』

『……………』

『……………』

『……恥ずかしいなら止めろよ』

「はぐ」

そんなこんなで木村はこのまま郊外の空き地で骨をプラモみたいに組み立てるらしい。

その間に、さつき考えたストーリーを商会を通して広めるからそのつもりでと念を押しされた。

果たして、物語はあつという間に広まった。

なぜなら、木村の商会は、豚や鳥の骨を王都中の料理店から二束三文で回収。圧力鍋で煮込んで出汁を販売している。

他にはパンの酵母菌や乾物、香辛料などを扱っているので、今やほぼ全ての飲食店が木村の商会と関係があるわけだ。

そんな商会が痛快な物語と共に、凱旋パレードの日取りを流したらあつという間に広まるのは当然だった。

いよいよ当日、組み立てが終わったワニの骨が、巨大な山車だしに乗せられ、ゆつくりと大通りを進んでいく。待ってましたとばかり、王都は活気づき見物人で溢れかえっていた。

「想定通り、盛り上がっていますね」

その熱狂を、俺は三階建ての宿屋の屋根から見下ろしていた。楽しいな雰囲気を楽しめる特等席である。

朝も早くから王都に入った山車だが、余りの人出のためにその速度は遅かった。山車がいよいよ中央広場に入ったとき、既に日は大きく傾いていたのだ。そして、ここから俺の仕事となる。

オルティナ姫の記憶を授かったり、公開処刑の憂き目にあったり、中央広場では散々な目に遭ってきたが、ココが一番人が集まるのだから仕方が無い。

俺は魔法を制御して、山車の上に飛び乗った。

——ワアアアアア！

歓声が大きくなうねりとなって、広場を埋め尽くす。

「嘘だろ！ 飛んで来たぞ!?!」

「ユマ姫！ なんて神々しい!」

祈りを捧げる人まで現れる始末。何だかんだで気分が良い。

「お姿が輝いて見える！ これが聖女！ 神の使者なのか!」

……言うまでも無いが、魔法で光らせています。

本日の俺はアラビアンドレス。異国帰りと言う体^デだが、実は一ヶ月前に王都に到着し

てひっそり隠れていたのはご愛敬。

ピカピカと光る自分の体に眩しきを感じながら、俺は大きく開いたワニの下顎の骨へと腰掛ける。

本当は横に開くらしいのだが、見栄えが悪いと縦に開いた状態で骨をくつつけたらしい。だからなのか、いよいよデツカイワニの骨にしか見えなくなつた。

ゴツゴツした骨に腰掛け、取り出したのは弦楽器^{リフレックス}。エルフの国で散々に学んだ楽器である。

俺は慣れた手つきで弓を引き、演奏を始めた。

——一緒に空は飛べないけれど、一緒に星を眺めたい。でも、それも無理なのね。

歌うのは、亡き母の詩。そして、私が殺した父への歌だ。

俺は、一ヶ月前に王都に帰り、秘かにこの曲を練習していたのだ。父の前では仕方無くアカペラで歌つたこの曲を、どうしても自分の手で演奏したかつたのだ。

歌いながらの演奏は思つていた以上に難易度が高い。実は木村の帰還が後れて助かつた面がある。

——アナタは星に還るの。私は空へと祈るわ。

しつとりした悲恋の歌。魔法で拡声し、広場全体に音を届ければ、辺りはシンと静まり返つた。

迂遠で解りづらくとも、悲しい雰囲気は何となく伝わるモノ。

なにより、演奏している俺自身が父へのレクイエムとして歌っている。次から次へ、幼少期の思い出が脳裏を過ぎり、父への思い出が夕焼けの街へ溶けていく。

知らず知らず、俺の目には涙が溢れていた。

頬からこぼれる涙と共に、やっと歌い終わったその時だった。

——ワアアアアア！

熱狂する観客が一斉に山車へと詰めかけたのだ。

グラグラと山車が揺れ、不安定な顎骨に腰掛けていた俺はバランスを失い転がった。

「危ないー！」

誰かの叫び声、そして俺に大きな影が差す。

ワニの骨！

開かれたままに固定した顎の関節が壊れ、大質量の上顎が俺を押し潰さんと迫っていた。

化石に食べられる！俺は自分の運の悪さをスツカリ忘れていた！

血の気が引き、冷や汗が噴き出す。

その時だ。

——バツン！

落ちてきた上顎は両断され、山車の上から転がり落ちていく。

そこに立っていたのは？

「タナカだ！ 英雄の帰還だ！」

見慣れた黒衣の剣士がソコに居た。

英雄の登場に、広場の熱狂は更に大きく膨れ上がって行くのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「マジで死ぬかと思った」

もう、クタクタ。俺はぐでつとソフアアで溶けていた。

場所は王宮の応接間。熱狂渦巻く広場をなんとか脱出した俺達は、なんとか王宮で落ち合うことに成功した。

あの後、それはもう酷い事になったのだ。

薄暗い王都で、田中と俺のツーショットをなんとかしてでも見たいと人が殺到。

太い丸太で汲み上げた山車が、ギリギリと悲鳴を上げ始める始末。

俺の『偶然』も手伝い、破滅の足音がヒシヒシと。

そこで俺がやったのが、いつかゼスリード平原でやった大ジャンプ。田中の膂力と魔法の併用で、天高く舞い上がった俺の姿。王都の人々の目に焼き付いたに違いない。

その後のドサクサで田中も離脱、なんとか王宮に転がり込んだ次第である。

「んじゃ、チキチキ近況報告会と行きますか!」

と、木村が音頭を取って三人での近況報告会が始まった……のだが。

「ングング、いいぜー」

全く緊張感が無いヤツが一名。田中ア! スプーンを構えて点呼の代わりとは、食いしん坊か?

いい加減にしろよ! 帝国は核まで持ち出してきてるんだぞ? なにより俺ももう十四歳、打倒帝国に待った無しなんだが? この状況でおまえ、ナニ食ってんの?

「ナニって? カレーだよ。見てワカンネーか?」

「解るわ! 解りまくるわ! 俺だつて食いてえよ! 今日、昼飯食ってないんだよ!」

俺が叫べば、田中は苛立ちを隠さず舌打ちをひとつ。

「チツ! コツチなんて朝からなんも食べてねーよ。大急ぎで帰ってきたからな、モグモグ。んで、帰ってきたら王宮には誰も居ねーし、王都はお祭り騒ぎ。挙げ句の果てに、誰かサンは馬鹿な真似して勝手に死にそうになつてるじゃネーか! 文句を言う前に、お礼のひとつもあつてしかるべきじゃネーか?」

一理、ある。

ぐぬぬ、会議でカレー食ってるヤツに常識を問われるとはね。

しかし、コイツが良いところで助けてくれなかつたら、今度は足を失うところだった。

流石の俺も、お礼を言うぐらいはやぶさかでは無い。

『ありがとニヤン♪』

「……………」

「……………」

『…………きちいわ』

『フザケンナ!』

コツチのが十倍きちいわ!! しょーがないだろ! ギャグにするしかネーだろ!
カレー食ってるヤツに神妙に謝る方法、あるって言うなら教えて欲しい。

「助けられた癖に、生意気だなオイ」

「正直、油断していた」

真面目に油断してた。いやはや、ちよつと俺の『偶然』の怖さ、最近忘れて来てたかな?
木村が組み立てたなら大丈夫って思ってしまった。

ん? 良く考えたら、それもこれも、組み立てた木村が悪いんじゃない? どうなの?
「スマンスマン、メツチャクチャに気をつけて顎を固定したんだけど、金属ネジが一斉に抜けてた。奇跡に近いよ? コレ」

テヘペロ……つてそれで謝ってるつもりか? 木村ア! 誠意を見せろ!

椅子を蹴飛ばし恫喝すれば、いよいよ木村から謝罪の言葉が……。

『許してニヤン♪』

「うわっ……」

カレーを食ってた田中の手が止まる。コイツの食欲を減ずるって相当だぞ？

奇妙なポーズで固まった木村へ、俺は渾身の火の玉ストレートを投げ込んだ。

「歳を考えろよオッサン」

「ふっざけ！ そんなぐでつとしたポーズのヤツに謝れるか！」

一理、ある。

いよいよ空腹が限界で、俺はソファーに沈んでいる。ソファーと一体化するのも時間の問題だ。

「それにしても、マジで呪われてるわな」

田中はなんだよ！ 俺が悪いみたいに言うな！ いや、悪いのか？ 悪くない！！

と、色々感情をぶちまけた所為かは知らないが、いよいよ俺のぷにぷにのお腹が『きゅ』と可愛い音で鳴くではないか。

それもこれも、狭い応接間にカレーの匂いが充満するのが悪い。俺も早く食べたい。

「なあ、俺もカレー……」

「いや、待つてよ。どう考えてもこれ以上グダグダになるのはマズイ」

木村が止めるが、もう既にこれ以上ないぐらいグダグダでは？

「田中は、マジで食うモノも食わず帰ってくれたんだからそれを無駄にしたくねーし、食わなきゃマトモに報告出来ないだろうから、マズは食って貰ってるんだって」

むう……確かに、朝から飲まず食わずで駆けつけたと言われれば、仕方が無いか。

じゃあ早く、話す事話してよ！ と、田中に水を向ければ、俺を無視して田中は木村に向き直る。

「いやな、マールロウとの魔獣討伐は即行で終わらせたんだがな、ソコで思いがけず頼まれてたモノが見つかったんだわ。ソで、食うモノも食わず駆けつけてみりや、勝手に竜殺しの英雄になって参ったぜ」

「それは謝る。んで、頼みのモノってまさか？」

全然悪いと思っていない木村の軽い態度に舌打ちを返しながらも、田中が懐から取り出したのは真つ白い石だった。

どこにでもありそうな小汚い石である。俺は胡乱げな目で見つめる。

「コレは？ なによ？」

手に取って見ても、汚い石。全然価値は無さそうに見える。少なくとも俺は欲しく無い。

「貸せよ！」

つまんなそうに手の上で転がしていたせいか、木村に筆り取る様に奪われてしまっ

た。そのまま血走った目で石を観察した末に、木村は口の端を大きく歪める。

「間違い無い、イケるってコレ！ 量は？ どれくらいある？」

「見渡す限りさ、十年は採れるぜ」

「マジか！」

なんか盛り上がっている。どうも木村が田中に頼んでいたシロモノみtaiである。

うーん、この石がなんだってんだ？ ひよつとして石灰？ 俺は手にとつて見つめるが何度見てもゴミ。

ちゃんとした石なら石材として使えるが、コレは土と石の中間ぐらいに脆い。

匂いも……殆ど無いな、若干かび臭い。

「コレなんなの？ そろそろ教えてよ、俺にはウンコ以下のゴミに見えるんだけど？」
俺がすすすんと白っぽい石の匂いを嗅いで訊ねれば、穏やかな顔で木村が微笑む。

「うんこ以下だなんてとんでもない！」

「じゃあ何だよ？」

「ナニって？ うんこだよ！」

「死ねッ！」

俺はうんこを投げつけた。木村ヘーのダメージ。

「オイ、やめろ」

木村は必死にウンコを拾っている。

「なんでウンコ探してたんだよ！」

「ウンコじゃない！ 厳密に言えばグアノだ」

「グアノってなんだよ？ 日本語？」

「インカ帝国の言葉だな」

「意味は？」

「うんこ!!!」

「やっぱりウンコじゃないかー」

話がちつとも進まない。まあいつもの事である。

しかし、今日だけは、俺と木村の会話に歯を剥き出しに怒る男が居た。

「ふざけんじゃねーよ！」

田中だ、珍しく本気の怒号である。

それもそのはず、木村たつての願いで探していたモノの正体がウンコ。それも危険な大森林で探し回った末、命懸けの強行軍で急いで報告に来たと言うのにウンコ。

そりゃ怒るのも当然である。

「カレー食つてるときにウンコの話するんじゃねーよ！」

違った、カレーの邪魔が嫌だったらしい。

「ウンコの話してる時ぐらい、カレーを食うな！」

そして、何故か木村が逆ギレしだした。もうメチャクチャだよ。ウンコで喧嘩とか、おまえら小学生か？

「すまん……」

しかもなんで田中が謝るんだよ！ デカい図体でシユンとするな！ カレー食ってる所でウンコの話するほうがオカシイからね？

メチャクチャになったところで、いよいよ木村の解説が始まった。

「ずっと前から探してたんだよ、それこそお前等から、恐鳥リコイのウンコで白く染まったハーフェルフの村の話を聞いたときからさ」

木村が勿体ぶって指先でウンコを転がす。

なるほど、確かにコレは白くて固まった鳥のフンに近い。あの時見た光景にソックリだ。

「もつとズーツと長い年月で固まって、濃縮されてるヤツだけだな。鳥のフンが肥料に良いって知ってるか？」

「聞いたこと……あつたな」

そう言えば、農家のサンドラさんがそんな事を言っていたような？ ひよつとしたらハーフェルフのピルテ村は今頃豊作に湧いているかもしれない。

「で、肥料を作る魔法が火薬も作れるって言ったけど、逆もまたしかり、肥料になるフンからも火薬が作れるって訳よ」

「マジで？」

「マジ」

例によつて木村の長いウンチクが始まった。ウンチだけに。

曰く、硝酸は水に溶けてしまうので乾燥地帯で採れる事が多いらしい。逆に湿潤な日本ではまるで採れない。

元寇で火薬の脅威に苦しんだ後も、火薬が広まらなかつたのは日本に硝石がないから。とかそんな事を生き生き語ってみせる。

で、乾燥地帯ならとプラヴァスには期待していたらしいが、それらしい資料はまるで発見出来なかつたという。

『そこで、次に目を付けたのは南米のコウモリの洞窟』

湿潤な地域でも、洞窟の中ならばウンコが溜まつて雨風にも晒されない。ウンコが堆積して固まる事が多いそうだ。

「空を埋め尽くす程の恐鳥^{リコイ}。まるでコウモリみたいだし、巨大な恐鳥^{リコイ}が止まれる木なんてそうそう無い。ひよつとして洞窟を巣にした可能性は結構あるなって見つけたら中を調べる様に言つてたのよ」

それで田中は見つけたのだ。恐鳥リコイの巣であった洞窟を。

それも大森林と王国の中間、ピルタ山脈に目当ての洞窟が無数にあるらしい。

「お前が頭を吹っ飛ばされた遺跡からなら目と鼻の先だぜ?」

「何度も通つたのに、気がつかなかつたなあ」

「そりゃ、肝心の恐鳥リコイはゼスリード平原で死にまくつたからだろ? 今は廃墟よ。その

代わりに大森林じゃ今、虫の魔獣が大量発生してるって言うぜ?」

「あー、考えたくない」

カマキリの魔獣、大岩蠟螂ザルディネフエロの大群だつて、恐鳥リコイがいなけりやエサになつていたのは俺

達の方だ。

今回、マーロウ君からヘルプが入つた魔獣退治も、虫の魔獣の大量発生だったらしい。

しかし、火薬の供給にメドが付いたのは朗報だ。火薬さえ揃えば、プラヴァスで鹵獲

した火縄銃と合わせて、それなりの銃が運用可能になるだろう。

俺は白いウンコを転がしながら、ニマニマと笑みが止まらない。

『これに木村が作つてるボウガンを組み合わせれば、遠距離攻撃力は十分だな』

木村も悪い顔で目を細める。

「ああ、ボウガンね、アレ、失敗したから」

「ふざけんな!」

「痛いッ！」

俺はうんこを投げつけた。木村へーのダメージ。

「いやさー、全っ然量産出来ない」

「んはー情けねー」

「だつてさーボウガンつてのは鉄の弓。弓にするには竹みたいにしなやかな鉄が必要なんだわ。粘り気があって割れない鉄なんて、かなりの上物よ？ 全然足りない」

「そんなの、初めっから解りそうなモンじゃん」

「いやさ、ルールも引きたいし、根本的に鉄が足りないのよ」

「うへえ」

「クロスボウには工作精度も必要で、銃作る方がよっぽど楽だね。マジ」

「えー？」

木村の言葉を信じるなら、かなり状況は良くないだろう。火薬のメドがたつても、昔から銃に絞つて揃えていた帝国には、既に相当な数が出回っている。

遠距離武器と言うのは数を揃えてナンボの世界だけに、今からじゃ間に合わない。

「ま、そこは色々考えてるからさ」

木村は悪い笑みを浮かべたまま、何かアイデアがありそうだ。ならば俺にはこれ以上何も聞くことは無い。

と、一方で田中にはまだ聞きたいことがあるらしく、スプーンを掲げ質問の構え。
「なあ？ カレーおかわりしていい？」

食いしん坊か！ 駄目！ 俺の分が無くなる！

腋

「おい、この衣装、ただのお前の趣味だろー！」

木村が持ってきた衣装を広げ、俺は唸り声で威嚇する。

ファッションリーダーたる俺の衣服は木村の担当である。

と言うより、木村のお人形さんになって好きな衣装を着てやるって感じだな。前世のアニメで鍛えたセンスはこの世界では斬新。奇抜と眉をひそめる向きもあるが、一部からは根強い人気がある。なにより、俺の嗜好とも合うからなんだ楽しみだったりする。

だけど、こっちの常識にも合わせて貰わなくては駄目なのだ。痴女呼ばわりはマイクロビキニでウンザリなのだよ。

なのに木村はどこ吹く風だ。

「マイクロビキニは聖衣と呼ばれ、プラヴァスで大好評だったと思いますか？」

「その聖衣は、おまえのコスモが高まるだけだろうが！」

歯を剥き出しに文句を言いながらも更衣室に飛び込んで、木村が持ってきた衣装に袖を通してしまおう俺。

べつにエロ衣装だつて着るだけならやぶさかではないのだ。

問題の衣装はミニのプリーツスカートに、ニーハイソックス。絶対領域を楽しみたいと言う鋼の意志を感じるが、実のところコチラは別に問題ない。

問題なのはレースがタツプリ入ったフリフリブラウスの方。

「うわっ、凄く過激じゃないですか？」

着替えを手伝ってくれたネルネが赤面している。それぐらいこのブラウスがエッチなのだ。

だけどこのブラウス、別にスケスケだとか変な所に穴が空いてるってワケじゃない。

「ノースリーブですな」

「のーすりーぶ？」

袖が無い。肩丸出しなのだ。この世界では肩を出すのはかなり過激な衣装である。肩のラインのエロ度たるや、おっぱい並だと言って良い。

とは言え多少の地域差はあつて、プラヴァスでは襟ぐりの空いた服が普通だったりするのだが、そんなプラヴァスでも着崩して肩を見せつけるのは誘っているとみなされる。

つまり、初めから肩を剥き出しでフリフリレースのノースリーブブラウスは、可愛い顔して何時でもウエルカム。小悪魔系と言うより大悪魔系なのだ。

とは言え、木村には聖衣を纏ったセイントな姿まで見せているのだから、今更に出し惜しみする必要は無い。更衣室から出て堂々と木村の前に舞い戻った。

「ど、どうです？」

ちよつと恥じらい、もじもじと。ノースリーブブラウスのお披露目だ。細めのリボンタイがお嬢様感を狙い澄ましている。

なにせ、俺だつてこの世界の貞操感に馴染んで長い。ちよつと恥ずかしくて、抱きかかえる様に肩を隠しての出し惜しみ。

でもこれが、却つてエロいではなからうか？

と、その仕草に目を細め、木村は満足げに頷いた。

「メツチャエロいね。ホント」

「うう……」

「腋が」

「腋？」

え？ 肩じゃなくて腋？

「オイオイ『高橋敬一』よ、こつちの世界に馴染みすぎじゃ無いか？ 俺達の世界では肩よりも断然、腋だつただらう？」

「そうだったかなあ？」

諸説ある。ぶっちゃけ人による。しかし木村は納得しない。

「間違い無いって、腋の下なんて四捨五入したら性器みたいなモンでしょ」

「いや、それはかなりマニアックなプレイだと思うが？」

伝説として聞いたことはある。腋でゴシゴシするジャンル。だけど俺のエロライブ
ラリには入ってませんね。結構な特殊性癖ではないですか？

「そこまで行かなくても、見るだけで結構エロいハズだつての！ 自分の腋を良く見て
みるー！」

『なんだよそれ』

言いながらも腕を上げて腋を確認。

うーん、腋だね。ちなみにムダ毛一本無い。つるつるだ。全然生えてくる様子が見え
ない。

「ネルネさん、腋と言うのは、王国の女性にとつてどう言う扱いなのです？」

「ええっ？ どうと言われても……強いて言えば、汚いです」

「汚い？」

エロいではなく、汚いとは？

「汗をかきますし、大人なら毛も生えて不潔な部分と言う印象です。匂いもありますし」
「なるほど」

一理ある。腋の下は分泌物が多いから、汚いと言うのは素直な感想かも知れない。

あたりまえだが、肩を出さないのだから腋を晒すのも一般的な事では無い。だけど肩と違つてエツチな場所扱いでは無さそうだ。

地球で言うなら……うーん。足の裏みたいなモノ？ 汚いけれど晒すべきでもないみたい。まあ足の裏だつて舐めたいつて人は大勢居るけどね。

「確かに……ユマ姫様の腋でしたら、不潔ではないと感じます」

「ちよつと、揉まないで」

ネルネにムニムニと触られてしまった。なんだか恥ずかしい。ノースリーブだから腋も丸出しなのだ。エロいエロいと言われれば、そんな気もしてきってしまった。

腋を強調するためにノースリーブ。それは解つたが、結局この服は着れない。

「結局、ノースリーブでは肩が破廉恥だと怒られてしまいますよ？」

「そこでコレです」

「コレは？」

木村が取り出したのはケープ？ いや短いマントか？ 羽織ると肩周りだけが見事に隠れた。

「でも、これだと腋だつて全然見えませんよね？」

「ちよつと腕を上げて貰つて良いですか？」

「なるほど……」

腕を上げると、鏡の中で俺の腋がチラリと見える。そして肩は見えない。コレが言いたいのか。

「マニアック過ぎませんか？」

「解ってませんね」

木村が言うには、肩フエチが多いからこそ、腋が見える事が通常の倍の勢いで刺さるのだと言う。

『高橋敬一』よ、君はスリットの深いチャイナドレスを見たらどう思う？」

「どうって？ エロいけど？」

「そうだ、何がエロい？」

「ふともも？ 違うな、捲ってみたい」

「いい線行ってるが違う。スリットが深いと、例えばヘソまでスリットが空いていれば、パンツの紐とかが見えるハズ。だけど紐すら見えなかつたら？」

「ノーパンですよね？」

「それ！ それだよ！」

「嫌だよ俺、ノーパンで人前に出るの」

「違う！ ドサクサに何を言ってるんだ！ この木村、言いたい事は想像力。ノーパン

だと思う、だから深いスリットはエロい」

「頭腐つてんのか？」

「つまり、マントの下、剥き出しの腋が見える。それでマントの下は肩丸出しが容易に想像付いてしまう、だからこそ腋が俺達の感覚以上にエロく感じる、ハズ！」

「なるほどなあ……」

俺つて奴は、エロへの追究心では木村にいつも及ばない。性差があるとは言え、男の時だつてエロに対してこれほどに情熱の泉を湛^たえていただろうか？

下らな過ぎて一周回つて感心してしまった。だがしかし！ 良く考えると全然凄くないんだが？

煩惱の泉で溺れている癖に、木村は菩薩みたいな微笑みを湛えている。

「つーか、もう真面目にユマ姫の腋がエロい。流行らせたい」

「メチャクチャだろお前」

流行らせてどうしようというのか？ それが解らない。

まあ、痴女呼ばわりされれない程度に過激なファッションだけど、コレは確かに人気が出そうな気がする。

俺はノースリーブにショートマントのスタイルで、劇場に立つことになったのである。

木村はホクホク。想像以上の売り上げだとか。

それもそのはず、この世界、公序良俗に違反する様なエロポスターやエロフィギュアには非常にウルサイ。もし販売しようモノなら品性を疑われてしまおうし、俺の名声にも傷が付く。

前世で良く見たパンチラが拝めるポスターや全身フィギュアなどは論外だ。

その点、今までエロいと思われていなかった部位なら大丈夫と言う事で、腋の出番と
言う訳。

もちろん絶対領域の信望者も増えてるとかなんとか。

そう言えば、俺がサーベル刺したポスター(王子に鞭を打たれるの図)とかもエロかった気がするが、アレも鞭打つのはエロじゃ無いし、王子の非道を訴える為だからノーカ
ンとか、そういう理屈らしい。

つまり、あの時点で王都の民へ向け、性癖発掘作業は始まっていた訳だ。

木村はこの世界をどうしたいのか？ それが解らない。

「それにしても、この世界のエロコンテンツはレベルが低い。俺が何とかしないと」

嘆かわしいと難しい顔で頷いているが、コイツを何とかするべきじゃないか？

「まあ、良いですけどね」

俺は木村が用意したラーメンを啜りながら応える。この国の性癖がどれだけ歪もう

が俺の知った事じゃない。儲かるならソレでいいや。

美味いモノ食わして貰ってるし、俺の活動はコイツの資金で成り立ってる部分も大きい。

俺の評判を著しく落とさないなら、どんな商売をしても構わない。

と、お澄まし顔でいたのだが。スープの味に驚いて、ジツとドンブリを見る。

……このスープ。……豚骨だけじゃない。魚介系のうま味に、キノコか？ いや謎の香辛料も利いている。

「気がつきましたか？ 豚骨と魚介のWスープに、プラヴァスの貴重なスパイスも加えて刺激的な味わいに仕上げています」

「えと、何を指摘しているのです？」

思わず真顔で聞いてしまった。コレ、前世の有名店のレベルを超えているだろ！

この世界の食材には地球よりも美味しいモノだつて結構ある。

品種改良された地球の食べ物より美味しいとは……古代人が品種改良したのか、それとも魔力が味わいを深めるのか。

いや、なにより木村の料理センスがただ事では無い。流石は器用さチートである。

そう言えば、プラヴァスでは久しぶりに木村が関わってない料理を食べたが、かなりキツかった。

……今更だけど、俺、完全に餌付けされてるな。

「何が狙いです?」

「え?」

「とぼけないで下さい! 私にわたくし恥ずかしい事をさせるつもりでしょう?」

「……恥ずかしい事はプラヴァスで大体こなしたと思えますが?」

「……………」

たし蟹。SMプレイとかヌルヌルプレイとか色々ね。その辺りは思い出したくない。

蟹鍋食べたい。

駄目だな、食べることばかり考えてしまう。

「でも、そうですね。願わくば姫の手料理なぞ頂けるのならば、恐悦至極に存じますが

?」

「手料理ですか?」

そんな事言われても、俺に家庭的な素養はゼロ。料理なんて教育は受けていない。

強いて言うなら、鳥の丸焼きを作って、食べたらひっくり返った記憶がある。アレは

ノーカン。

あ、一応アレがあつたな。

「そろそろアイスクリームの季節ですね」

「いえ、そう言うのではなく……」

駄目か……アレって俺は魔法で冷やしてるだけだしな。
ちゆるるとラーメンを啜りながら考える。

女の子の手料理。憧れる木村の気持ちも解るが、そう言うのって味じゃなくて気持ちの問題じゃん？ 俺の気持ちって実質『高橋敬一』じゃん？

もつとこう、女の子を生かせる料理ってないか？

女体盛り……は論外として、女の子のぬくもりを感じて難易度が低いモノと言えば？

「おにぎりとか、どうですか？」

「それは手料理、ですか？」

「手でしよう？ これ以上なく！」

手を振ってアピールするが、木村の反応は悪い。

アレなんだよね、木村の事を想ってルンルンと愛情込めて料理するのがキツイ。その点、おにぎりなら可愛いユマ姫の手汗が染みこんでるから、どこに出しても恥ずかしくないプリンセス品質である。

「もし手が嫌と言うなら、腋で握りましょうか？」

冗談めかして言ってみた、たまにはセクハラ返しをしたい。

「では、それで」

「え？」

嘘だろお前？ 俺に作れというのか？ 伝説の『腋おにぎり』を。

「戦場で、私の献策が生きた場合には是非お願いします」

「え？ 戦場で？」

それなんて公開羞恥プレイ？ ってか、クソみたいな事を真顔で言うの止めて欲しい。

なあ、嘘だよな？ 冗談だよな？

「期待してきますよ、姫の腋おにぎり」

めっちゃニヤニヤしてる！

結局、恥ずかしい事させる気満々じゃねーか!!

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「それではおにぎりの試作を行います」

「オニギリって何ですか？」

戸惑いがちに聞いてくるのはカラミティちゃん。彼女を木村から貰ってから、侍女として働いている一方で、高い教育レベルを生かして木村の商会と王宮の折衝とかを担当して貰っている。

「オニギリは聞いたことがありますけど……確か、コメと言う作物を握ったモノですよ

ね?」

コレはネルネ。彼女は木村が作ったおにぎりを見ている。

ついでに言うとおにぎりを木村の手ごとペロペロ舐めてた俺の痴態も見ている。早く忘れて欲しい。

「コメと言うのは冷えると固くなります、熱い内に整形する必要がありますね」

これはシヤリアちゃんだ、慣れた手つきでまだ熱々のシヤリを握って、小さなおにぎりを作ってしまう。

「どござー!」

と皿の上のおむすびを勧めてくるが、俺はラーメンを食べたばかり。ぶくぶくプリンセスにはなりたくないの、ここはやんわり断った。

「あ、私食べたいです!」

代わりに手を挙げたのはカラミティちゃん。確かに彼女にとってコメは初見の食べ物。と言うか木村がちよっと栽培を始めた程度なので、見たことある人は殆ど居ない。好奇心が刺激されるのは当然か。

「ハアハア、お姉様の手の味」

……違った。なんだかカラミティちゃんは危ない進化を遂げている。

シヤリアちゃんと何があったのだろうか? 彼女も迷惑そうな顔をしてるし、気にし

ない方が良さそうだ。

「美味しいですね！」

カラムティちゃん喜んでるけど、それは手汗が美味しかった言う事だろうか？
突っ込まない方が良さだろう。

取り敢えず、全員がおにぎりと言うモノが何か解った所で次に進もう。

「この様に、おにぎりとはコメを手で握って作るモノなのですが……」

……コレを腋で握ってくれと言うのがキムラ子爵からのリクエストです」

「……は？」

皆の目がテンになった。

気持ち解る。痛いほど解る。

俺だつてこんなキチつた事など言いたくなかった。言いたくなかったが、なんか最近の木村の商会は利益はエグい額になってるので、木村に拗ねられると困る。

なんなら腋を押し過ぎて変な流行がおきているから、ひよつとしたら「ユマ姫の腋おにぎりを食べたぞ！」とか言えば、貴族社会でマウント取れるのかも知れない。

んなワケ無いな、完全に俺への嫌がらせだ。

そうだとしても、完璧超人プリンセスとしてああまで言われれば手は抜けない。いや、手は抜いて腋で握るのが。

ってか、実際に腋で作れるモノなのか？

「取り敢えず、試してみましよう」

と、米を腋に押し付けてニギニギと。

「熱っ！」

熱い！ 痛い！ 慌てて米を引つpegす。くつついたお米粒も必死に除去。

良く考えたら当たり前。手で触つても熱いお米を腋に押し付け、ニギニギ。そりや熱い。

普通に腋つて急所じゃない？ 皮膚も薄いし、アチアチの予熱がダイレクトダメー
ジ。

そうこうしている内にお米は冷えてきたが、これ以上待つと今度は固まってしまう。

左腋はまだ痛いから、次は綺麗な右腋でニギニギ。熱ッ！ まだ熱いッ！

そんな感じでワチャワチャしてる俺の痴態を、唇を噛みしめ、顔をしかめて見つめて来るのがカラミティちゃんだった。

「頭オカシイ！ 汚い！ 気持ち悪い！」

ビンビンに尖つた言葉の暴力。火の玉ストレートが顔面にストライク。

そう言えば、木村は彼女のことを「言いにくいことをズバツと言ってくれて、角が立たない貴重な人材」とか言っていた。

組織も大きくなればそういう人間も必要なのは解る。

解るは解るが、ズバツと一刀両断にされた方の事も考えて欲しい。俺だつてこんな事やりたくねえよ……

半べそで、腋で米を固めていく。

「……できませんでした」

トンツつと皿に置いたのは不格好なおにぎり風のナニか。

「こんなの誰が食べるんです？ 勿体ない！」

カラミティちゃんには心底気持ち悪いモノを見る目で言われてしまった。俺もそう思うだけに何も言い返せない。練習で作っただけだから肝心の木村も居ないし。単純にゴミである。

コレ、自分で食べなきやダメかな？ 匂いを嗅いでみる……なんか甘い匂いがする気がする。コレ俺の体臭なのか？ 普通に気持ち悪いな。ドン引きである。

俺の事食べたいとか、足とか舐めたりするシャリアちゃんでも駄目？ 助けを求める様に彼女をチラリと見つめれば、ニツコリと笑顔を向けてきた。

「どうぞ、ご自分でお召し上がり下さい」

神は居なかった。米は超貴重品。捨てるのは勿体ない。どうしよう？

いやいや、シャリアちゃんは俺の足をニコニコで舐めるぐらいなのに、コレを食べら

れないってのは嘘でしょ？ ねえ！

「私は姫様を綺麗にする仕事があるから」

「え？ ひやう！」

腋を！ 舐められた！ 気持ち悪い！

「止め、止めなさい！」

「カラミティさん、アナタもやりなさい」

え？ シヤリアちゃん？ 何言ってるの？

当然だけど命じられたカラミティちゃんは激しく動揺した。

「そ、そんなの、汚いし、出来ません！」

「何言ってるの？ アナタは奴隷として売られたのでしよう？ 汚れた姫様を綺麗に出

来なくて侍女など務まらないわ」

いや？ 務まるんだが？ ネルネもビククリしてるし、嘘は止めて欲しい。

カラミティちゃんはいよいよ追い詰められていた。

「そんな！ 嫌ッ！ でも……」

そりや他人の腋を舐めるとか、死んでも嫌だよな。それにカラミティちゃんは俺の事嫌いみたいだし……

何か考えがあつて言ってるのだろうと様子を見てたけど、俺としても普通に迷惑なん

だが？

「あの、カラミティさん？ 彼女の言う事は気にしないで……」

「うう………な、舐めます！」

い、いや？ こちとら舐めて欲しくないんだけど？

「仕方無い、これは仕方が無いこと。私は変態じゃない。奴隷だから！ 命令だから！」

「……………」

なにコレ？ 彼女は俺の左脇をペロペロと。意味が解らない！

俺が右腋のシャリアちゃんに助けを求めると、彼女は耳元で囁いた。

「あんな風に魔法を使ったおかげで、あの子の脳にはユマ様や私の姿が染みついているみたいなの」

「………それが、ひゃん！ なんで腋を舐めさせる事になるのです？」

「ユマ様のことを脳から追い出そうと、過剰に反発してますから。荒療治が必要ですわ」
完全に、俺の荒療治になってるんだが？ 両脇からペロペロするのやめて！

ってか、結構な勢いでカラミティちゃん、ペロペロしていらっしやる。

「嫌い！ 汚い！ でも、命令だから……可愛い、好き！」

「ふふっ、アレだけ嫌がるのは才能がある証よね、舐めるなら私より姫の方が素敵よ」

クソツッ！ これ完全に押し付けられた！ シャリアちゃんをお姉様と呼んでるカラ

ミテイちゃん、密かに好きだったのに!!

もうやだ、わたしおにぎり食べる!!

あ、変に甘い匂い……モグモグ。

両脇を侍女二人に舐められ、俺は自作の腋オニギリをもつしやもつしや食べるハメに……。

「これ、何の儀式なの?」

困惑したネルネは次の日から三日間、休暇をとって実家に帰っていった。

墓参り

「あらあら、今年も来たのかい？」

「ええ、よろしくお願いしますわ」

馬車から降りた俺は、左手を胸に、右手で優雅にスカートをつまんで会釈する。目上への格式張った挨拶だ。

「良いんだよ、そんなの。もうあたしはただのおばちゃんだからさ」

「そんな訳にはいきませんわ……本来なら王太后様なのですから」

やって来たのは湖からほど近い、こぢんまりとしたお屋敷だった。

俺は今年も会いに来たのだ、ボルドー王子の母、キュリアナ元王妃に。

「まったく……もう、良いんだよ。あの子の事なんざ忘れてさ……」

「……それは、自分だけが憶えて居れば良いと言う意味ですか？」

俺はキュリアナさんの服をジッと見つめる。

彼女が来ていたのは園^{えんてい}丁服、決しておしやれ着ではないし、以前王子と二人で訪ねたときも、同じ様な野^{のらぎ}良着を着ていた。

「……まあ、あたしが一番忘れられないのはホントだね」

キュリアナさんは自分の服をつまんで自嘲気味に笑う。貴族らしくない野良着姿、だ
けど以前と決定的に違うのは、その生地の色だった。

茶と黒で彩られた園丁服。

あれから二年が経とうとしているが、彼女はまだ喪に服している。

「忘れられないのは、私もです」

言いながら、俺は風にたなびくフリフリのレースを手で押さえる。

俺が着ているのはゴスゴスロリロリしたドレスである。白を基調に差し色の赤と黒
がド派手に映えて、キュリアナさんの喪服とは対照的。極めつけは締め付けて体
にフィットする腰回りには、フェティッシュなエロ味がある。

田舎には場違いなドレス姿であった。流石におかしいと思ったのかキュリアナさん
は俺のドレスをジロジロ見てくる。

「そういや、去年もその服を着ていたね」

「ええ、婚約披露宴で着たドレスですから」

「ッ！」

キュリアナさんはハツとした表情で息を飲んだ。去年は特に聞かれなかったので説
明しなかったが、場違いな女と思われてしまっていたかな？

「彼との思い出の一着ですから」

ニツコリと微笑んでみせると、キュリアさんは切なげに俯いた。哀れな女と思われたかも知れないが、知ったことか。

自分が一番、ボルドー王子を忘れられないか思つて貫つちや困る。なにせ、俺は、初めから忘れる事など不可能なのだから。

俺は、俺だけは、彼との思い出を、少しも色褪せないままに思い出せる。

俺の思いに気圧されたキュリアさんを、ジツと見つめて誘い出す。

「行きましょう。彼が本当に眠る場所へ」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

湖が望めるちよつとした丘。未遂で終わった王子とのキス。そこに小さなお墓があった。

俺は二年前、ボルドー王子の死体を冷凍し、ココまで運び、埋めたのだ。

王子の死を国民に知らせる訳に行かなかつた当時の俺達は、王子が死んだ事を伏せ、冷凍した王子の死体を保存した。

無惨に腐らせる訳にも行かず、俺は何度も王子の死体を冷凍した。

そして、俺がカダイナル王子に誘拐され、左手を失い気絶していた間も、王子の死体は腐らなかつた。

何故なら当時、大量に製造していたアイスと共に、専用の地下室に貯蔵されていたか

ら。

そして、目覚めた俺が真っ先に行ったのは王子の死体を王墓ではなく、二人の思い出の場所である静かな湖畔に運び込むことだった。

「あの時は驚いたよ」

キュリアナさんは焼きたてのトルテをお供えして、ため息をついた。

「なにせ、あの子の死体を持って、ずぶ濡れのあんたが家の前に居るんだからね」

あの日は土砂降りの雨だった。お陰で涙でグズグズになった顔が目立たず済んだ。

「泣きながら、ごめんなさいって繰り返して。……驚いたし悲しかったけど、数日前から胸騒ぎがあったんだ」

プリンとアイスをお供えする俺をチラリと見ながら、キュリアナさんは続けた。

「あの子はね、なるたけ目立たない様に生きていた。あの子なりの処世術だったんだろ
うねえ、なにせ第二王子で母親は名ばかり貴族。その方が安心さ」

ぼやきながらもキュリアナさんは俺が持参したプリンに口をつけると……

……途端に目を丸くした。

「なんだいこりや？ 卵焼き？ 混ぜてあるのはクリームかい？ 随分と贅沢だねえ」

「口に合いませんか？」

「いいや、地味に見えてコイツはとんだぐ馳走さ」

キュリアナさんの言うとおり、プリンは黄色一色でこの世界のお菓子と比べても派手さは無いかも知れない。

この世界でもデザートは色味豊かな方が好まれる。例えば砂糖漬けのフルーツをふんだんに盛り付けたタルトが代表だろう。

でも、このプリンはソレまで王都にあつた、どんなお菓子よりも美味しいのだ。

「ええ、まるでポルドー王子の様に。彼もプリンは気に入っていました」

「そうかい、だったらあんたはこのアイスかね。うん、相性も悪くないよ」

キュリアナさんはアイスも同時に頬張って力なく笑った。

何と返したら良いのか困った俺は、目線で侍女に合図する。侍女が丸めたレジャーシートを広げると皆が揃って座れる程のスペースが出来上がる。

「積もる話はゆっくりしましょう。彼を交えて」

「そうだねえ」

プラヴァスで仕入れた葦で編まれたレジャーシートに、侍女や護衛の兵士も含めて座って貰った。

「見たことない敷物だね？」

「プラヴァスで購入しました。彼の地で私が絶体絶命のピンチに陥ったとき、彼が、ポルドー王子が九死に一生を救ってくれました。彼との思い出が私を守ってくれたのです」

「そりゃあ……」

妄想癖のある可哀想な女の子を見る目で見られてしまった。でも、アレは気のせいじゃない。

「誤って毒キノコを食べようとした時です。お芋みたいなキノコの姿に、私が思い出したのは庭一杯に埋められたイモ畑と王子の姿でした。そうして思い出に浸る中。口にする直前に、それが毒キノコだと判明したのです」

「ハハッ！ なんだい、そりゃあ？」

キュリアナさんは今日初めて、快活に笑った気がした。

……呆れられてしまっただろうか？ 良く考えたらあんまりカッコイイエピソードでは無い。

「そりゃあ……なんともあの子らしいね。そうかい、死んでもあんたを守ったか……」

キュリアナさんは泣いていた。泣きながらプリンを頬張っていた。

言葉を失くし、俺もつられてキュリアナさんが焼いたタルトを口にした。

「ンッ!？」

「ふはっ！ 気付いたかい？」

「うう……」

涙目で呻く。口の中に広がる強烈な刺激。

「山椒が、キツイです」

「あんた、左手だけじゃなく、味覚も戻ったんだね。山椒フィクサの量は前と同じだよ」おんな

いたずらに成功したみたいに笑うキュリアナさん。

「だけど、嫌がらせだけのお菓子じゃない。癖のあるチーズタルトに強烈な山椒の刺激は中々に癖になる。」

覚悟しながら食べれば、決して悪いモノじゃない。そんな俺を見て彼女は微笑む。

「良かったよ。少しだけ思い詰めた所が減ったじゃないか」

「そう……でしようか？」

俺は、プラヴァスで実の父を殺した。

だから、魔力欠乏に苦しんでいる父や、同胞に手を掛けている父の姿を想像せずに良くなった。

殺しておいて、そんな事に救われている自分は何と卑しいのだろうかとも思う。でも、コレで後は自分の復讐だけを考えて戦えば良い。

吹っ切れた様子の俺に、キュリアナさんは微笑んだ。

「プラヴァスで何かあったのかい？」

「ええ、とても大切なことが」

「そうかね。あの子がその助けになったなら良かったよ。そう言えば、今の女王様も南

方の血が入ってるんだっけね」

「ッ！ え、 ええ」

ヨルミ女王の話題を振られ、俺は密かに息を飲んだ。

なぜならキュリアナさんは第一王妃の嫌がらせに嫌気が差してこんな田舎まで引越してしまった人物だ。人付き合いが得意ではない。

気難しくヨルミちゃんの悪口でも並べられたら、俺の立場じゃ反応に困る。

「昔にチラツと話をした程度だけど、とんでもなく賢い子だったよ」

「そうですね、私もそう思いますわ」

良かった。俺はホッと息をつく。

「器量はあんたほど良くなかったけどね」

でも、茶目つ気たつぷりに付け加えたひと言は余計だった。

俺の後ろに控えていた侍女が一人、身を乗り出してキュリアナさんをたしなめる。

「ヨルミ女王にその様な口を利くとは、聞き捨てなりませんね」

王国の民としてはもつともな諫言かんげんだ。だが、砕けた場には相応しくない物言いだ。堅苦

しいのが大嫌いなキュリアナさんは露骨に鼻白んだ。

「なんだいあんた？ こんな山ん中だ。誰も聞いちやいないよ」

「いいえ、私は聞いています」

「あんたが聞いたからって……アンタ！」

侍女がニツコリと微笑む。

彼女は……ヨルミちゃんだ。

化粧をして、一見それと解らない。昔の姿しか知らないキュリアナさんは余計だろう。だけど腹に一物含んでそうな、怪しい笑みは誤魔化せない。

「なん……で？」

「妹が、兄の墓前に挨拶がしたいと思うのは変です？」

ヨルミちゃんは笑顔だが、キュリアナさんは権力に激しい嫌悪がある。ジツトリと汗を掻き、腰が引けていた。

「こんなの、人が悪いじゃないかい」

「ごめんなさい、説明する暇がなくて」

俺は殊勝に謝った。

王女ともなれば、こうでもしないと第二王子の母に会いに行くなど出来ない、呼び出すべきだと言われてしまう。ましてやボルドー王子の本当の墓があるなどもつと言えない。王子の死体は王墓にあるとされているからだ。

別にドツキリ大成功とか思っていない。……ホントダヨ？

「どうする気だい。こんなおばちゃんを」

「なにもー？　ただ久しぶりにお兄の事が話したくてねー」

何でもない様にヨルミちゃんは笑った。

「お兄はねー、昔っから居場所が無かった私を氣遣つてくれてね」

王宮の隅っこで所在なさげにしていた彼女に、王子は居場所をくれたらしい。

「不細工な王女と馬鹿にされるなら、誰よりも知識を身に付けろつて。女の子にハッキリそんな事いうのは酷いよね。でも、お陰で今は助かつてる。いまだにお作法はサツパリだけどね」

さみしげに語るヨルミは、ちつとも不細工には見えない。

化粧だけじゃない、見られる事を意識してから彼女の見栄えは大きく変わった。女の子の不思議である。

「私ね、お兄だけじゃなく、ううん、お兄よりもずっとガルダさんのお世話になつてたんだ。街の事とか、法律の不備とか、貴族の横暴とか、色んな事を教えてくれた」

ヨルミちゃんは泣いていた。こんな風に泣く彼女は初めて見たかも知れない。

「だからね、ガルダさんが本気でお兄を想つていたのも知つてる。何となく解つてた。だから、それを利用してお兄を殺させた魔女を絶対許せない」

……そうか、そうだったのか。彼女はひよつとしたらガルダさんに憧れていたのかも。

だからこそ、誰よりも魔女を許せない。

遺跡やプラヴァスの顛末を話すとき、彼女が魔女の事を何度も問い詰めて来るのはそれが理由か。

帝国を、魔女を恨むのは俺だけじゃない。

「倒そー！ 帝国を。魔女クロミーネを！」

「ええ、倒しましょう！」

俺はヨルミちゃんの手を取って頷いた。

俺の戦争に王国を巻き込む罪悪感が、少しだけ和らいだ。

コレはもう俺だけの戦争じゃない。俺はキュリアさんに向き合った。

「もうすぐ大きな戦が始まります」

帝国の物資集積量や人の動きからも間違い無い。

女王ヨルミも静かに命じた。

「たとえ王国が亡くなっても、兄の愛した景色を守って下さい」

間延びした口調を引っ込めた、彼女の真剣な願いだった。

「ああ、若いつて良いねえ。おばちゃんはココで墓を守るよ」

キュリアナさんはそんな様子を眩しそうに見つめていた。

「………そうですねあ」

そして、護衛として付いて来たゼクトールさんは、ボルドー王子が好きだったらしい酒をチビチビ飲んで泣いていた。
護衛する気あるのだろうか？

開戦前

陣内は人いきれでむせかえるようだった。

カチャカチャと鳴る鎧、馬の嘶き、転がる荷車、駆け出す兵士の足元で跳ねる泥、無数の音が幾重にも重なる。

ガヤガヤと雑然とした中に、確かに漂う緊張感。

——戦争が近い。

誰もが激しい戦を予感いっくましていた。

そんなピリつく男達のご真ん中、一際派手な馬車が乗り付けた。

皆の視線が集まる中、ガチャリとドアが倒れてタラップに変じる。

居合わせた兵にとつては見たこともない最新の馬車。どんなお貴族様かと見守る中、その少女が姿を現した瞬間、むくつけき戦場が一転し、華やいだ。

「ユマ姫だ！」

誰かが叫んだ。渦中の美姫が開戦直前の陣中へ突然の来訪。快哉に沸くのが必然。しかし、声が出せたのはホンの僅かだった。

大半の兵士は言葉無く、ただ固唾を飲んだ。

……いや、飲んだのでは無い、飲まれたのだ。現実離れた少女の美しさがそうさせた。

「こんにちは、皆さんの戦いを間近で見ると、参りました」

鈴を転がす様な声と柔らかな微笑み。それだけで大の男が揃って頬を染めたほど。

だが、言動とは裏腹に、ユマ姫は見るだけに止めるつもりは毛頭無かった。見た目と違い、彼女は非力なだけの少女では無い。

そして、今となつてはこの場の全てがソレを知っている。

ユマ姫がお飾りの姫だとは、もう誰も思つて居ないのだ。

彼女が去年、ゼスリード平原でどれだけ暴れたのかは兵士達の語り草だった。

幼く見える儂げな、絵に描いた様なお姫様。しかも彼女は既に十四。その体は確かな色気すら獲得し始めている。

それも、奇跡的なバランスで少女特有の魅力の一切を損なわないままに。

そんな彼女について回るのは、鬼神の如き武勇伝。雷に打たれながらも、悪鬼の様に帝国兵を殺して回った。

ユマ姫は神か悪魔か？ 果たしてその両方か？ 兵士達はユマ姫に畏怖すら感じていた。

灰色の戦場がユマ姫の周囲だけ色づいて見える。そんな異様な存在感に、陣内が静ま

り返る。

一方で彼女は笑顔を振りまき、そそくさと陣中のログハウスへと入り込んだ。そこは急遽しゅう設えた作戦本部。

そうだ、少女は今回も戦争をする為にこの場所に、ゼスリード平原に帰ってきた。

ココはゼスリード平原の入り口。王国が対帝国を見据えて設営した陣の中。

ゼスリード平原は恐鳥リコイが飛来する危険地帯。両国を結ぶゲイル大橋の両端には両国が管理する砦がそれぞれあるが、その規模は決して大きくない。単純に、維持が難しいからだ。

全軍が入れない砦を本陣に出来ないし、前回同様に橋を挟んでお見合いなど、もつての外だった。

前回の様に、謎の植物で想定外の場所から渡河とされてしまえば、遮るモノの無い平原は敵の主力たるマスケット銃の独擅場とくせんじょう。

敵は万に届く数の銃を揃えているとも言われている。対してコチラは千丁がやっと。とても平原では戦えない。

だからこそ、平原手前の狭い場所に陣取る事を余儀なくされていた。

考えようによつては初めから平原を放棄した布陣。

ひとつ失敗すれば、敵はそのままスフィールまで雪崩れ込んでくる。

薄暗いログハウスの中、先ほどまでの柔らかな笑顔が嘘のように、鋭い視線のユマ姫が問う。

「敵は？」

端的にソレだけ訪ねれば、シノニムは無言でテーブル上に資料を並べた。

「これは？」

「今までに集めた敵の陣容です」

「そう」

手に取って一つ一つ、ユマ姫は真剣に資料を吟味する。

「魔女は居ないのですね？」

「いまだ、確認出来ておりません」

「……ひよつとして、左遷されたのでしょうか？」

少女に似つかわしくない皮肉げな笑みにシノニムは戸惑った。

「かも、知れませんが」

「なら良いのだけど……」

言葉と裏腹にユマ姫はつまらなそうに資料を投げた。その仕草にシノニムは息を吐く。

目当ての敵が居ないと知るなり、興味を失った姫の態度に呆れたのがひとつ。そし

て、コレなら無茶をしないだろうと安心したのがもうひとつ。

それでもシノニムは油断していなかった。全てはユマ姫のフェイクかも知れない。彼女が冷静でいられる保証が無い。なにしろ敵の総大将は……

「良いのですか？ 敵はテムザン将軍ですよ？」

「それが？」

それが？ とは？

本当に知らないのだろうか？ テムザン将軍は大森林を侵略した遠征軍でも総大将だった人物。

彼女の故郷を焼いた張本人。怨敵と言える存在のハズ。

「名ばかりの将軍でしょう？ 実際に指揮をとったかも怪しいモノです」

「ソレが解つてらっしゃるなら構いませんが」

ユマ姫はテムザン大將軍の名に何の感慨も無さそうに見えた。それどころか、時代錯誤の老人とまで言つてみせた。

「魔女が居ないことで、いつそ銃が出てこない可能性は？」

「残念ながら、銃は大量に配備されている様でした」

「……そう。でも、去年みたいな不可思議な兵器は考え無くても良さそうね」

冷静に戦力を分析するユマ姫。それに安心するシノニムだが、彼女には言わねばなら

ぬ事がまだあった。

「実は折り入つてご相談が」

「なあに？」

ユマ姫は資料を読みながら、片目だけでシノニムを見つめた。

その仕草に胸騒ぎを憶えながら、シノニムは要点を伝える。

曰く、ユマ姫は既に味方からも恐怖の対象だと。

……エルフであるユマ姫が、人間同士のつぶし合いを狙っている。

そんな流言をシノニムは信じたく無かったが、信じ切れない部分もあった。

ソレほどに、去年見た戦場のユマ姫には狂気が満ちていたのだ。

帝国兵を殺せるなら、全てを投げ打つても構わない。ありありと顔に書いてあった。

しかし、シノニムは知らない。ユマ姫の狂気は更にその先にあるのだ。

最も憎いのは帝国だとしても、殺してしまいたいのは帝国に止まらない。王国も、南方の国々も、更にはエルフの民ですら、いつそみんな死んでしまえば良いとまで思っている。

もし、核がスフィールではなく、世界の全てを焼き尽くす威力だったなら。

もし、ラーガインのカタパルトが全て稼働していたのなら。

発射ボタンを押したのはユマ姫だったかも知れない。それほどに彼女は世界の全て

を憎んでいた。

「……へえ、私の事を恐れていると？ 誰が？」

ユマ姫の冗談交じりの声。だが半眼の瞳には笑みが無い。

シノニムの額に汗が浮かぶ。

「皆が、です。特に貴族は皆、あなたを警戒しています」

「具体的には？ 誰？」

「……………オーズド様です」

ソレを聞いたユマ姫は、今度こそ楽しげに片眉を跳ね上げた。

「ソレ、話しても良かったの？」

「良くはありません。ここだけに願います」

「ふうん」

オーズドはシノニムの雇い主。ネルダリア領の領主である。

シノニムは表向きユマ姫の侍女であるが、実際はネルダリアの特務部隊の人間。これは明らかにオーズドへの背信行為と言えた。

ユマ姫として、その事に何も思わない人間ではない。

「ありがとう」

「いえ……………ですから、今回ばかりは大人しくして下さい」

「……わかりました」

ユマ姫はふうつと息を吐き、虚空を見つめる。

コレだ。たまにユマ姫はこうして何も無い所を目で追っている。常に見えないナニかを彼女は見ている。

そのたびにシノニムは強烈な不安に駆られるのだった。

何が楽しいのか、ナニかを見てユマ姫は大きく笑った。その切なげな笑顔に胸が搔きむしられそうになる。

諜報員として、男を籠絡する手管を知り尽くしたシノニムにして、息を飲む美しき。

「ならば私は戦場には出ません。魔法は兵士の回復に使います。それなら構わないでしょう？」

「え、ええ。それならば……」

応えながらもシノニムは震えが止まらなかつた。

彼女は嘘など付いていない。付いたつもりも無いに違いない。

でも、ソレが真実となる気が少しもしなかつたから。

シノニムはただ怖かつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【帝国軍 野営地にて】

一方で、帝国はゼスリード平原のただ中に堂々と陣を構えていた。ソレが許される理由は、圧倒的な火器の数。

「コレだけ揃えば恐鳥リコイなど恐るるに足らずよな」

モンゴルのゲルに似た移動式テント。なかでも一際巨大なテントが陣の中心に張られ、その中で豪華なウッドデスクを前に笑う禿頭とくとうの老人がいた。

それこそが、帝国軍の生きる伝説。名将の名を欲しいままにするテムザン大將軍だった。

彼の目の前。デスクに広げられたのは今回用意したマスケツト銃の数と種類を記した書類。

コレだけ銃が揃えば恐鳥リコイの撃墜は容易。王国に後れをとる可能性も無い。だからこそ、堂々と陣を構えられるのだ。

「しかし良かったのですか？ 將軍自慢の騎士団を完全な後詰めとしてしまつて不安げに尋ねたのは、金髪を短く刈り上げた騎士。

端整な顔立ちと線の細い体つきは、女性なら目の色を変える大変な美少年。……いや、違う。

「ふん、いいんじゃないよ。そんな事よりミニエール。またお主はそんな色気の無い格好をしおつて。士気を上げようとする気持ちはないのかの」

「格好で上げようとは思っておりません」

テムザンのぼやきに、ミニエールと呼ばれた騎士が憤然と言り返す。

そう、ミニエールは女性、女騎士だ。帝国でも極めて珍しい。

帝国と王国は、常にゼスリード平原のただ中でぶつかり合ってきた。

近年は大きな戦争こそ無かったが、それでも兵士の育成は怠っていない。

なかでも平原を縦横無尽に駆け巡る騎士は、我こそが戦場の主役と憚らない存在だ。

そして勿論、騎士には男しか居なかった。重騎士として大きな馬を操るにも、重い鎧

で動くにも男である事が圧倒的に有利。

だが、そんな状況を大きく変えたモノがある。

銃だ。

銃は男だろうが女だろうが、威力は変わらない。そして、全身鎧の薄い鉄板など容易

く貫通する。大きい馬などのでしか無い。

戦場の主役は騎士から銃へと交代しようとしていた。そんな中、騎士もマスケツト銃

を持てば良いのだと宣言した人物がいた。

それこそがミニエールだった。

彼女は名馬の産出地、ロアンヌ領主の一人娘。だからこそ、馬など時代遅れと嘯く魔

女に激しく抵抗した。

魔女がもたらした銃の有効性は認めながらも、ならば馬上で銃を撃てば良いのだと言
い放つ。

……しかし、誰もそんな事は出来なかったのだ。

そう、彼女以外には。

おてんば姫と呼ばれた彼女は馬上で弾を込め、駆け足で走らせながらも正確な射撃を
行えた。

だからこそ、史上初めて女性として、完全に実力のみで騎士と認められたのだ。

その名は帝国は勿論、王国にも通っていて人気も極めて高い。

「ふむ、そんな、ロアンヌの姫騎士と呼ばれた嬢ちゃんに頼みがあるのだがの」

「なんです?」

「コレを届けて欲しいのじゃ」

「コレは!」

ミニエールは一目見て解った。これは宣戦の詔書だ。しやうしよ

帝国が王国への宣戦を告げる最後通牒。これを届けるのは、言わずと知れた大変危険
を伴う任務。

「これを、私が?」

「ああ、悪いがの。お主が適任じゃ。まさか单身乗り込んだ女子おなごの首級しるしを掲げるような

真似は出来んじやろ」

「なるほど、謹んでお受け致します」

大変に危険な任務だが、同時にもっとも名誉な任務でもあった。

単身で敵の陣中に飛び込む宣戦の使者は、騎士としての誉れ。大勢の兵士に見送られる軍の象徴でもある。

女性として宣戦の使者となれば、当然に史上初めての快挙となる。

「だからこそ、見栄えがの」

テムザンが指差したのはミニエールの髪。

宣戦の使者は華々しい出発で、士気を上げる役目も担う。

そこで遠目には女性にも見えないミニエールの刈り上げた金髪は、大きなマイナスと
言うわけだ。

「そこで、コレじゃ」

年甲斐の無いおちやらかな笑顔で取り出し、被って見せたのは金髪のカツラ。

「ソレは？」

「最近手に入れた『お気に入り』じゃ。綺麗じやろ？」

「はい！」

それは、透き通る様な美しい金の髪。

この御髪おぐしの主はどんな人物だったのだろうかと考えずには居られない。手入れされた髪はきつと名の知れた貴族の物だ。大変高価なカツラに違いない。

「コレを付けて、白馬に跨がり出陣となればそれはもう目立つじやろうな」
「そうですね」

基本的には女性だからと見世物になるのは大嫌いなミニエールだ。

だけど今回ばかりは目立つのも悪くないと思える。それほどに華々しい任務。そして美しいカツラ。

これがあれば周りの評価と裏腹に、自分の外見に自信が持てない彼女でも、なかなか見栄えがするだろうと思えたからだ。

「謹んで拜命致します」

そうして、同時刻、帝国の使者が決まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【数日後、帝国陣地にて】

その日は快晴。抜ける様な青空に、入道雲が遠くに漂う。

心配したほどに気温は高くない、馬を走らせばうっすらと汗ばむかと言う程度。

そんな中、大勢の兵士に見守られ、一人の女騎士が華々しく出立する。

美しい金髪に、豪華なマントをたなびかせ、巨大な帝国旗を振りかざす。まさに勝利

の女神の如き、白馬に跨がる姿は一枚の絵画のようだった。

否が応でも帝国兵のボルテージは上がっていく。

熱狂の中、ミニエールはゼスリード平原を駆けていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【王国軍、野営地】

「帝国の使者が面会を求めています」

作戦司令部の中、注進に駆け込んだ兵士がオーズドに頭を下げる。

ユマ姫から遅れること数日、オーズドはスフィールで兵站を整え、いよいよ入陣を果たしていた。

「構わん、すぐ通せ」

「ハッ！」

敬礼をこなし踵を返す。兵士のそんな当たり前の動きがどこかぎこちない。

名残惜しげな視線の先、振り返れば微笑むユマ姫が居た。当たり前の様にユマ姫は司令部に居座っている。

「……………」

その笑顔に、オーズドは内心焦りを感じていた。戦争が始まるというのにまるで緊張していない。

そして、異様なまでに美しい。手練れの兵士が彼女の前ではまるで新兵。一年ぶりに会うユマ姫は怖気がする程に美しくなっていた。

「宣戦布告の瞬間には、私も同席して宜しいですか？」

控え目に、穏やかに、小首を傾げて聞いてはいるが、駄目と断じても頑として動かないと目が語っている。

「構いません、しかし口出しはなさらぬよう」

「勿論です、ありがとうございます」

上品に頷くと、部屋の隅に控える様だ。

「帝国軍、竜騎兵ミニエール様がおいでになりました」

「すぐ通せ！」

先触れの声に応えながらも、オーズドは大人しいユマ姫に不安を拭えなかった。

しかし、それも帝国の使者の姿を見るまで。

「お初にお目に掛かる。私は帝国軍、竜騎兵部隊の隊長、騎士ミニエールだ」

「これはご丁寧に。私がネルダリア領主にして本陣の指揮を執るオーズド・ガル・ネルダリアだ。お見知り置きを」

鷹揚に頷きながらも、オーズドには幾つか疑問があった。

「しかし驚いた。まさか帝国の使者が女性とは……それに、竜騎兵とは？」

「竜騎兵とは馬上で銃を撃つ新しい兵科です。女性であつても銃であれば戦える」
「なるほど」

ミニエールは美しい騎士だった。通つた鼻筋に薄い唇。意志が強そうな瞳は澄んでいて、なにより長い金髪がキラキラと華やいでいる。

オーズドも当然、女騎士ミニエールの事は知っていた。しかし会つたのは始めて。まさかコレほど美しいとは聞いていなかった。

なにより宣戦の使者に女騎士を寄越すとは。それに竜騎兵など聞いたことも無い。実は戦争前に決まつた兵科なので知る由も無いのだが、オーズドは出鼻を挫かれた思ひだった。

「まさか、使者がこんな美しいお嬢さんだと思わず、こんな殺風景な陣で申し訳無い」
「いえ、私など」

謙遜したミニエールがチラリと見たのは部屋の隅のユマ姫だ。

部屋に入るなり、僅かに息を飲むのがオーズドにも見えていた。噂のユマ姫がココまで美しいとは思つてもみなかったのだろう。驚かせる事に成功した様だった。

交渉は最初のインパクトも大切。ユマ姫が居て良かったと、オーズドはこの時までには本気で思っていた。

敵も味方も、開戦前の主役が女性とは。

オーズドは少し老け込んだ心持ちで、考えを改めた。

理由のないユマ姫への恐怖も、全ては自分の考えが古かつただけ、ただの老人の焦りと自嘲する。

そんなオーズドにミニエールは首を傾げる。

「何か？」

「いえ、こちらの事です。それよりもおかけ下さい。上等な椅子ではありませんが」

「結構です。そのまま宣誓させて頂きます」

「そうですか。ではその様に願います」

詔書しゅうしょを広げ、ミニエールが読み上げる。

その内容は決まりきった慣例の言葉が大半。帝国の歴史の偉大さから始まり、皇帝の正当性を説く決まり文句が長いのだ。

そして、戦端を開く理由。

森ザに棲バむ者であるユマ姫を匿カっている王国への憤り。そして、昨年の戦争での被害の数々を訴えてくる。

突きつけてきた要求は大きく二つ。

森ザに棲バむ者と手を切り、ユマ姫を差し出すこと。

賠償金として二千万枚の金貨を譲渡すること。

他には細かい関税や犯罪者引き渡しと言った細々とした要求が並ぶが、誰も真面目に聞いていない。

完全に茶番だ。ここまで来て、戦意を翻した例は歴史上一度も無い。

「残念ながら、我々は戦で決着をつけるしかなさそうだ」

「残念です」

ちつとも残念に見えないが、仕事は終わった。

オーズドとミニエール。立場は違えど二人はホツとした様子で息を吐く。

「ッ!？」

だが、ミニエールは吐き出した息を吸い直すハメになる。見つめる先はユマ姫。

「!？」

振り向いたオーズドもユマ姫の様子に目を瞠る。なんら変わらぬ姿勢で佇んでいるユマ姫だが、目だけが違った。

ギラギラと、狂気に塗れた瞳でミニエールを睨みつけている。

「どういふことだ? と彼女の横に控えるシノニムに目で尋ねるも、シノニムもユマ姫の尋常では無い様子に混乱しているのが見て取れた。

「可哀想に最も狼狽えたのはミニエールだ。掠れた声でオーズドに尋ねる。

「彼女は?」

「あ、ああ。紹介していなかったな。彼女こそが詔書しやうしよにもあつた森みに棲すむ者、いやエルフの姫君、ユマ姫だ」

「やはり。どうか、彼女と少し話が出来ますでしょうか？」

「……どうぞ」

オーズドとしては話して欲しくなかったが、戦争の切っ掛けとされるユマ姫に会話もさせない様では、要らぬ疑いを掛けられる可能性もあつた。

「ユマ・ガーシエント姫！」

「なんででしょう?」

呼ばれたユマ姫がしずしずと部屋の中央へ進み出る。

しかし、目だけはまだ尋常のそれではない。肉食獣の前に立った様な不安が胸を焼く。

「使者のミニエール殿がが対話を望んでいる。今回貴女あなたは我らの客将かくしやうとして参じて頂いている。あまり過分な事を言わぬよう注意して頂きたい」

「承知しました」

穏やかに頷くが、オーズドとしては不安を隠しきれなかった。

狂気は既に空間が歪んで見えるほど。

一体全体、ユマ姫とミニエールに何があるのか? 帝国兵としてエルフを殺し回った

過去でもあるのだろうか？ 訝しむオーズドだが、ミニエールの方は尋常では無いユマ姫の様子に混乱するばかり、何の思い当たりも無いようだった。

「ご紹介にあずかりました。ミニエールです」

「……………どうも」

ユマ姫の声は、僅かに震えていた。

ミニエールは緊張しながらも言葉を紡ぐ。

「テムザン將軍がユマ姫に会えたなら、言伝と。

まず、大森林への侵攻があのような惨事になったのは、本意では無いと」

「ツツ！」

今更な言葉、ギリリとユマ姫が歯を食いしばる音が少し離れたオーズドまで聞こえそうな程だった。

明らかな挑発。耐えてくれとオーズドは祈った。

「そして、あのような悲劇を繰り返さないためにも早期の降伏を望むと」

「……………」

次の言葉にユマ姫は無反応。下らないと鼻を鳴らした。

「それだけですか？」

「え、ええ」

最後だったハズ。ミニエールがそう思いながらメモを確認すると、小さな文字で追記があった。

ミニエールはこの時まで忘れていた。

テムザンが最後、思い出した様に付け加えたひと言を。

「ああ、そうだ。最後に一つ。テムザン将軍が言っていました

ユマ姫殿、貴女の髪を結える日を待ち望んでいると……」

好々爺こうこうやが孫に語りかける様なメツセージ。

だと言うのに、ユマ姫の反応は激烈だった。

俯いて震えていたユマ姫が、突然に顔を上げた。

そのまま、射殺す様な目でミニエールを睨む。

その目には涙。

ユマ姫は泣いていた。ボロボロと泣きながら、正気を失った瞳で睨んでいた。

「ツ!?!」

息を飲むミニエール。溢れる強烈な殺気に体が強張る。

対するユマ姫はたった一言。

「死ね!」

それだけ、それだけのひと言で、ホルスターの銃を引き抜いた。血相を変えて止めに掛かるシノニム。だが、間に合わない。

——パアアアン！

銃声が響く。

眉間を撃ち抜かれたミニエールがドサリと倒れた。

死んでいる。確認するまでも無い。

「何を……？ 何をしているッ！ ユマ・ガーシエント！ 答えろ！」

我に返ったオーズドは、即座にユマ姫を押し倒す。

その手から銃を奪おうとするが、ユマ姫はガツチリと握って離さない。

ユマ姫の手はガクガクと震えていた。それでも銃を手放さない。

ただ、ひたすらに死んだミニエールの髪を睨みつけている。

髪はカツラだった。持ち主の頭部からズリ落ちても尚、透き通る金の髪は美しい。

震える声で、ユマが叫んだ。

「それは、ママのだ！ 母様の髪だ！ 汚い手で触るな！」

恥辱

殺っちゃったぜ☆ てへぺろ♪

なんと、ユマ姫は敵国の使者を殺してしまいました。

いやー、まさか殺っちゃうとはなー、我慢出来なかつたなー。もーしわけ……

まーじかー!!

まさか殺しちゃうとはなー、折角シノニムさんが余計な事すんなって忠告してくれてたのになー。

うわー、悔しいこれ、めっちゃ悔しい。

これじゃ、ユマ姫は戦争したいだけってのに反論出来ないわ。

コレで終わりたくないな……戦争、参加したかったな。

今回はちよつと反省するわ。

「どうして……どうして笑っているんです!」

ヒステリックな声が冷たい牢獄に響いた。シノニムさんの声だ。

「どうして? どうしてって」俺は手の中のカツラをクシヤリと握る。「あなたは母親を

こんな風にされて、笑う以外に出来ますか？」

血走った目で叫びながらも、脳の冷静な部分が冷たく笑っていた。

本当は覚悟はしていた。

帝国は俺の暴発を狙っている。だったら俺の家族の死体を使えば良い。

死体を晒し者にしたたり、遺骨をオモチヤにしたたり。

そう言う事を覚悟していた。

いや、むしろ期待していたと言って良い。敵がそうしてくれる事で、俺の殺意を高め

てくれる事を願ってすらいいた。

そして、そんな外道を働けば、敵の戦意は挫け、味方の戦意は上がる。帝国は自滅す

る。

そんな事を夢見ていた。

「だけど、あの女は、なんの悪気も無かった。ただ、有効活用していた！」

あいつらは露悪的に振る舞わず。ひたすら死体を利用した。ただ素材として扱った。

美しいカツラが手に入ったぞと、ただソレだけ。何食わぬ顔で挨拶をしてきた。

それが許せなかった。

「そんな……」シノニムさんの瞳が揺れる。「気のせいでは？ 髪の毛など見分けが付く

はずが無いでしょう？」

それはそうだ、『普通なら』髪の毛なんて見分けが付かない。

だけど、母様は、パルメの髪は特別に美しかった。そして俺には『参照権』がある。見間違う事はあり得ない。

「私には解るのです。そして相手も、テムザンも解っているからこそ言付けをした『ユマ姫の髪を結いたい』と」

「そんなー！」

俺の言葉にシノニムさんは顔を蒼白に食いしぼる。ココに至るまで、放心状態の俺は言い訳ひとつしなかったからだ。

いや、出来なかった。

あの後、俺はオーズドの部下に押さえ込まれて、昂ぶった状態で魔法を暴発させてしまった。

そのままズルズルとスフィールまで護送され、牢屋に押し込まれた。

あれから二日、俺は何も口にしていない。憔悴して何も口にする気がしなかった。魔力も目減りして髪は銀に変じている。

今の俺は痩せこけて、幽鬼の様に不気味な姿をしているに違いない。

俺をこれだけ追い込んで、奴らはさぞかし笑っているだろう。想像するだけで、悔しさに頭の血管が弾けそうになる。

今すぐ飛んでいって、テムザンを血祭りに上げたい。だけど……

「今、姫様が動けばきつと貴族達は姫様を殺すために、なりふり構わなくなりませう」
「それぐらい！ 解っています！」

今、俺が魔法の力でテムザン将軍を暗殺したとしても、ユマ姫は戦争の激化を狙い、人間同士を殺し合わせる危険な存在と宣言する様なモノ。そうなれば俺は孤立する。それこそが帝国の狙い。

でもこれ以上、一秒でもアイツらに生きて呼吸をさせたくない。だけど、今飛び出したら今までの全てが台無しになってしまう。

ボルドー王子の墓前に復讐を誓ったばかり、彼が育てた軍部とのパイプも、俺の暴発で全てが台無しになる。

俺はギョツと自分の肩を抱き、煮えたぎる殺意をどうにか抑えようと、蹲って必死に耐えていた。

見かねたシノニムさんが鉄格子越しに必死に縋る。

「姫様の言う事が本当だとして、何か証拠がありますか？」

「……ありません」

羅生門の老婆じゃないけれど、この世界でも死体から髪の毛を抜きカツラを作るのはままある。

だけど、貴人の死体にそんな事をするのは外道な行いだ。褒められたモノじゃない。証拠があれば俺の行為も言い訳が立つ。

そうで無くとも、帝国は徹頭徹尾エルフを人間と扱わなかった。貴人だろうと、子供だろうと、構わず殺して積み上げて焼いたと聞く。その暴虐もいつか白日の下に晒したものだ。

むしろそんな中、よく母の死体など見つけたモノだと感心する。

……ひよつとして、エルフの髪の毛で作ったカツラだと俺が気が付けば、テムザンにとつては十分だったのかもしれない。それだけで、子供が激情に駆られるには十分な理由になる。

奴らはただ、エルフの髪で一番綺麗なカツラを選んだだけ。

だとしたら、証拠などあるはずも無い……母の髪が美し過ぎたのか。

皮肉だな……思わず笑ってしまう。

そんな俺の様子を見たせいとか、シノニムさんが鉄格子を悔しげに叩いた。

「味方は混乱しています。ユマ姫が敵の使者を、それも無抵抗な女性を殺した事で、あなたを疑う声が兵士からも出ています」

「解って……います」

俺は三角座りのまま俯いて泣いた。

平気なフリをしているが、俺だつてまんまと罠に嵌まった自覚はある。

俺が誰彼構わず殺したいと思つて居るのは事実。だから噂にも真実味が出てしまつた。

そこに俺が敵の使者を問答無用に殺してしまえば、ユマ姫は人間を潰し合いたいだけと言われるのも当然。

そんな状態で、戦端が開かれてしまった。

帝国にしてみれば、無抵抗な女騎士を殺されたのだ。兵の憤怒は凄まじく、王国の兵を一兵残らず血祭りに上げてやると、俺を殺さぬまで止まらぬ覚悟だと聞く。

対する王国は兵の士気が落ち、混乱したまま。兵士達はゼスリード平原で散々に追いつけられたい。

「今、オースド様が必死で立て直しをしています。ゼスリード平原に至る山間部で奇襲を繰り返し、遅滞戦術で凌いでおりますが……そこを抜ければ」

「ここ、スフィールが包囲されるのも時間の問題、ですか」

ゼスリード平原の麓にある砦を落とされれば、そこから先に守りやすい地形は無い。

更には言えば、スフィールの城はここ二十年で戦闘に向かない城に改造されてしまつて

いる。
スフィールが落ちる。

ここ数百年無かった事だ。たしかオルティナ姫の時代まで遡る。

そうなれば、俺が生きている間に帝国をどうこうするなど夢のまた夢。

悔しさと、やるせなさで何もかもが嫌になる。

王子の事も全て忘れて。もう苛立ちに任せて、好き勝手に暴れてしまおうか……

そんな事すら思つた時だ。

「いやあ、美人が二人揃つていながら。どうにも辛気くさいですね」

現れたのは特徴的な緑のコートの優男。シノニムさんはハツとした様子で立ち上がる。

「あなたは……キイムラ様！」

そう、現れたのは木村だ。だが、コイツ一人だけじゃない。俺には意外な人物の運命光が見えていた。

勿体ぶつて、木村が慇懃な挨拶を返す。

「私なぞおまけです、この状況を打破出来る唯一の人物をお連れしましたよ」

「この状況を？」

信じられないと立ち尽くすシノニムさんを余所に、木村の後ろ、暗がりから一人の人物が姿を現す。

「ふふーん、どうやらあたしの出番みたいねー」

「あなたは!!」

現れたのは冷たい牢獄に似合わぬ、華美なドレスの女の子。

ヨルミちゃんだった。

押しも押されもせぬビルダール王国の女王が、あろうことか最前線のスフィールにやって来た。

——ピシヤリ!

「張り切って行っちゃようよー♪」

「……………」

そして、なぜか手には鞭を持っていた……

嫌な……予感がする。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから半刻後。俺は馬に乗せられて、スフィールを歩いていった。

しかし、手綱は握っていない。握れない。

なぜならば、俺の両手は後ろ手に縛られているからだ。

「お、おい……アレ!」

「ユマ姫じゃないか!」

「み、見ないで下さい」

道行く人に指差され、恥ずかしさに身をよじる。だけど、あぶみ鐙に足を掛け太ももで馬体を挟み込むだけで何とか馬に跨がっている状態なので、殆ど動けない。

馬を引いてるのはプラヴァスの衛兵だ。乗っているのではなく、乗せられている。俺は馬上で晒し者にされていた。

ココはスフィールの中心市街地。戦時下とは言え、人通りは引きも切らない。

馬上の俺は人混みの中にあつて大変に目立っている。行き交う人全ての視線に晒されていた。

ギラつく民衆の視線が、俺の肩へと突き刺さる。

「なんだ？ あの格好は！」

「なんと破廉恥な」

「どうやら、とんでもない事をしでかしたらしいぜ」

「うう……」

恥ずかしさに俯く。俺はきつと耳まで真っ赤に染まっているだろう。

そう、俺の肩は剥き出しに曝け出されている。この世界の貴婦人にはあるまじき、ふしだらな格好だった。

ドレスこそ舞台上で何度か使ったオフショルダーのデザインだが、いつもは肩に掛けていたショートマントが取り上げられて、肩も首筋も無防備にまるっと晒されている。

いや、違う。首には無骨で大きな鉄枷が嵌められていた。コレでは丸つきり罪人だ。繊細なドレスとは不釣り合いで、酷く目立つ。

そして、下半身はミニスカート。それで馬に跨がってるものだから下半身も酷く不安だった。一応、白タイツをガーターベルトで固定しているが、ただエロくしているだけ。言うまでも無く、この格好は木村の趣味だ。

提案された時は恥ずかしいと抵抗したが、この位は必要と説得されてしまった。

所詮、肩を出しているだけ。前世の基準じゃエロく無い。そう言われても、やっぱり恥ずかしい。

俺はもう十四年もこの世界に生きている。なにより女の子としてのキャリアは丸ごとコツチの世界のモノ。

肩を出して歩くなんて、酷くふしだらで、みだらな行為だとすり込まれている。

そりゃ、プラヴァスではマイクロピキニで晒されたりもしたが、あれはもう裸みたいなモノ。却って恥ずかしくなかったし、こんな風にじっくり街中を引き回される事も無かった。

そうして晒し者にされながら、俺は中央広場まで連行された。

スフィールの広場、中央には噴水が設けられ、芸術的なオブジェも並ぶ市民の憩いの場。

かつては霧ギョルドの悪魔までも混じっていた曰く付きのアーティストスペースだが、本日はばかりは全部撤去されて、代わりに急造の舞台が設えられていた。

……俺はいつつもこう言う舞台で晒し者にされてるな。

そんな事を思ってたなら、馬を降ろされ、首輪を引かれ、舞台の中央まで引つ張り出されてしまう。

眼下には何事と息を飲むスフィールの民がズラリと揃っていた。

不本意ながら、かつて何度も見た光景だ。こんな事に慣れたくは無いのだが。

唯一、今までと違うのは舞台の中央にドンと構えるのが簡素な絞首台だと言う事。ぶらんと輪繩が一本垂れ下がっている。

まさか首を吊られるんじゃないかな？

打ち合わせで違うとは聞いているが、今まで何人も吊ってきた伝統モノと言うのも納得の迫力で、実物を見ると途端に不安になる。

執行官を兼ねる兵士が、舞台上でうちひしがれる俺の前にやってくる。本気で吊る気か？

「手を」

「……はい」

しかし違った。後ろ手に縛られた拘束が外される。しかし、再び両手は頭上の輪繩で

縛られ、そのまま吊し上げられた。

——ギリリッ

縄が擦過音を上げ、俺の手首を締め上げる。ブーツのつま先だけが地面に辛うじて届く苦しい体勢。

俺は吊された状態で広場に晒し者にされていた。

「おいおい、なんだよあの格好は」

「腋が丸出しじゃないか！」

「うう……」

両腕を吊されれば、当然腋が丸見え。それどころか思い切り伸ばされた上体に引つ張られ、短いスカートが余計に際どい。

ひよつとして、下からは丸見えなんじゃないか？ 少なくともガーターベルトは思い切り見えている。

俺が恥ずかしさに喘いでいると、兵士が罪状を読み上げる。

「この者、ユマ・ガーシエントは無抵抗な宣戦の使者を悪意を持って弑した罪で、厳罰に処す」

兵士の宣言に、市民がざわめく。

「オイ、使者を殺したってマジかよ」

「勝手にか？」

「その所為で大変な負け戦になりそうだって聞くぜ？」

「なんでそんな事を……」

動揺が広がる中で、一際甲高い声で一人の少女が叫んだ。

「この！ 森に棲む者め！ 人間同士を戦わせて喜んでいるのね！」

叫びと共に投げられたのは瓜。俺に命中せず舞台上に黄色いシミを作るに終わるが、貴族にこんな行いをするのは大変な暴挙である。

だが周りの市民からも、呼応する様に声が挙がった。

「そうだ！ 化け物め、人間を潰し合わせる気だな！」

「俺達の街から出て行け！」

「化け物に騙されるな！」

余りの熱狂に、周囲の市民は困惑している。

だが、止めようとはしない。彼らの家族が戦争で死んだのかもと思えば、暴挙に出るのも無理は無いと微妙な表情で見守るばかり。

しかし、彼らの家族が徴兵されたわけじゃ無い。

今回の戦争ではスフィールで徴兵していないからだ。

……なるほどな。コイツらが帝国派の市民団体か。

スフィールは長年の平和の中、帝国やプラヴァスとの交易で栄えてきた。

だから、帝国に資金を貰って活動している団体が、市内には好き勝手に蔓延っている。そして帝国かぶれの連中も、悪気無くそんな団体に所属していたりする。

曰く、帝国のやり方が正しいのではないか？ 王国の誤りを正す必要があるのでは？ そんな事を囁いて市井へ広めていく。毒の様に広がる、帝国の内部工作だ。

ずっと以前から、エルフとの同盟は悪だと喧伝していたに違いない。表だつて行動しなかった奴らが、ココで動いてきた。

市民に紛れた木村の部下が、そつと彼らを確保していくが、一度火が付いた市民は止まらない。

「エルフは人間同士の戦争を目論んでるんじゃない？」

「大丈夫なのか？ ユマ姫は！」

そんな声が聞こえてくる。

だが、そんな声も兵士が刑罰の内容を読み上げるまでだった。

「ユマ姫は鞭打ち刑に処す」

宣言と同時に、市民のざわめきは一層に大きくなった。

貴族の、それも婦女子へ鞭打ち刑など前代未聞だ。鞭打ちは酷く跡が残る。貴族の女性としては処刑に等しい刑罰だからだ。

「嘘だろ？」

「ユマ姫に鞭打つてのによー！」

今まで静観していた市民も流石に酷いと声を上げ始める。

コレこそが狙いだつた。余りに酷い刑に処されれば、誰もこれ以上は言い辛い。鞭を撃たれた少女を前に、エルフの事を悪く言う事も憚られるだろう。

そういう空気を作るべく、なるべく酷い罰を受けると木村に言われたのだ。

おまえがソコまでサディストだとは思わなかつた。と言つてやったのだが、とち狂つて敵の使者を撃ち殺したヤツが、何の罰も受けずに戦場に居たら恐いぞ。つて言い返されてしまった。

辱めを受け、鞭でも打たれて戦線に復帰するか、このまま大人しくスフィールで待機するか。

どっちを選ぶと言うなら、俺はテムザン將軍をヌツ殺したい。

……いや、痛いのも恥ずかしいのも嫌だけどね。

でも、回復魔法で跡も残らず治せるし、俺は痛みにも大分慣れた。

今回は全面的に俺が悪いので、残念だけど我慢しよう。

しかし、もう一つ問題が。

ザワつく市民の声が響いた。

「しかし、誰が鞭を打つんだ？ 相手はエルフとは言え王族なんだろう？」

そう、鞭を打つには上位の者という決まりがある。

子供なら親が、学生なら学長が、市民なら貴族が、貴族ならより位が高い者がその役目を担う。

しかし、俺は他国の者とは言え、曲がりなりとも王族。お姫様である。

だとすれば……

——プオオオオオオ——

特徴的なラツパの音が鳴り、まさかと市民の顔が強張る。

ビルダール王国民なら誰もが知るラツパの音。

このラツパを鳴らして良い場面は三つだけ。

建国記念日に国旗を掲揚するとき。

王の親書を読み上げるとき。

そして、王が登場するとき。

この三つだけだ。今回は勿論、決まっていた。

儀礼服を着た男が突然に現れて、高々と宣言する。

「四十二代目ビルダール王 ヨルミ・ラ・ガードナー様の御前である！ 頭が高いぞ皆の者！」

広場の皆が、揃ってその場に跪いた。

そこへ着飾った女王ヨルミが進み出ると、皆が一斉に息を飲んだ。

事あるごとに威厳が無いと悩んでいた女王であるが、王都から遠いスフィールで、王の看板は王都以上に強力であった。

「本物だ！ 姿絵の通り」

「なんて美しいんだ。ユマ姫に見劣りしないぞ！」

そして、木村の魔改造メイクを受けて、地味顔ヨルミちゃんは変貌を遂げていた。

なにより、俺がやつれて痛々しい姿なので、輝くばかりに健康的な女王の美しさが一層映えると言うモノ。

純白にレースがあしらわれた、前世の感覚で言うとうエディングドレスに近い姿。

だが、手に持った籐とうの鞭だけが異彩を放っていた。

そう、女王ヨルミちゃんに鞭を打たせようって魂胆である。

女王が直接刑罰に処せば、誰もそれ以上は文句を言えない。女王の前に懺悔して従順な事を示せば、ユマ姫を不安視する声も一服するだろうという狙いもあった。

手には籐の鞭。比較的安全で、シンガポールなどでは今でも刑罰に用いられるぐらいだと木村は言っていた。

しかし、痛くない訳では無く、一回で気絶することも珍しくないらしい。

まあでも、俺は生きたまま燃やされたり、雷に打たれたり。酷い目に遭いまくっている。痛いだけで解決するなら楽な物だ。

子供でも打たれる事もある籐の鞭。なんてことも無いだろう。早くやつちやつてよ……

俺は退屈で興味も無く、反省してますって体で、悲しげな顔で俯いていた。すると、俺の顎を鞭の柄でクイツつと持ち上げヨルミちゃんが詰問する。

「どうして使者を殺した！ 答えろ！」

「それは……言えません」

殺した理由は牢屋で全て話した。だからコレは茶番である。

「何故だ！」

「どうしてもです」

俺が突っぱねれば、女王も本当は鞭など打ちたく無いのだとばかり、苦しそうに歯を食いしぼる。

……ヨルミちゃんも中々に演技派だ。伊達に王都ではステージに立っていない。

「では、もう二度とこのような事をしないと誓うか！」

「誓いません!!」

「(っ)のっ！」

い。

だけど、俺も流石にプライドがある。ギリリと歯を食いしばり、思い出す。

『参照権』など使うまでも無い、妹の事、父の最期、そして優しかった母との思い出。殺してやる。

ふうー。

アドレナリンが湧き出てくる。帝国の兵を皆殺しにしたい。それだけが望みだ。爛々と目に光が灯る。ココでダウンしては戦争に参加出来ない。

「何も！」気丈に言い放つ。「好きなだけ鞭を打ちなさい！ 私は何度でも同じ事をする！」

「このっー」ヨルミちゃんは激情に駆られ、鞭を振り上げる。「強情な!!」

——ピシャツ！ ピシャツツ！

二回、余りの痛みに背中が仰け反り、つま先が浮く。それでも気絶しないで耐えた。神経が痛みに支配されて全身の感覚が痺れる。

体中から変な汗が染み出し、体の感覚がなくなる。

それでも、意識は昂ぶり。目だけは爛々と輝いているのを自覚した。

「そんなモノですか？ 寝てしまいそうです」

そして、キツつと気丈にヨルミちゃんを睨みつける……予定通り。

全て予定通りなのだが……ヨルミちゃんの表情はどうにも俺が思ってたのと違った。
「……そう、どうしても言わないというのね」

薄く、笑っていた。その笑みは何というか、サデイスティックであった。

……あの、ヨルミさん？　なんだか楽しんでやしませんか？

「あなたがその気なら、コツチにも考えがあります」

そう言って取り出したのは水牛の革で出来た鞭。

メチャクチャに痛いヤツである。下手したら死ぬヤツね。

「……………」

あの？　ヨルミさん？　いや確かに言いましたよ？　どうせなら子供に振るう様な

籐の鞭じゃなくて、革の鞭で打てばって。

でも、今そういう流れじゃ無かったでしょ？　誰も求めて無いでしょ？　ソレ。

気になって市民を見ると、まさかと言う顔でドン引きしてるじゃないですか！

ソレ引つ込めよ、ね。

その鞭は難しくて、失敗すると自分を打っちゃうらしいよ？　危ないよ？

——ピッツツシヤアアアアアアアア!!

「! # \$ % & & ☒ ! ! * + ! !」

ツツ!!　ぐるんと瞳が裏返る感触を確かに憶えている。

途端に視界はホワイトアウト。

その直後。

——ピッツツツシヤアアアアアア!!

二回目の鞭。

いや、直後じゃないわ。完全に気絶してる所に二回目を打たれて、余りの痛みに意識を取り戻したんだわ。

「……#%&&☒!」

強烈な痛み。呼吸すらままならず、酸素を求めて口だけが魚みたいにパクパクするが、一向に酸素を取り込めない。

コレ、耐えるとかそう言うのじゃ無いね。

強制的に電源を落とされる感じ。ぶたれた時より、体に強烈な電気を流された時の感覚に近い。

「あつ、ぐ、げっ」

「どうです？　素直になりました？」

「ヒッ!」

動けないハズの体が、鞭を見せられた瞬間にビクンと跳ねた。放心した精神の中で、他人事みたいに人体の神秘に驚く自分が居た。

「ここ二日、一滴も水を飲んでいないのに冷や汗が全身を濡らしていた。大粒の涙で視界はゆがみ、長い睫毛に乗った涙で目が重く感じる程。」

「ハッ！ ハッ！ ハッ！」

ようやく吸い込めた酸素を必死に取り込む。それも引き攣ってなかなか上手く行かない。心より先に体が恐怖に支配されていた。

「ねえ、なんで使者を殺したの？」

再び問い詰めるヨルミちゃん。顔は紅潮し、サディスティックな笑みを浮かべている。

そう言うのは勘弁して貰いたい。もう、何もかも投げ出して、田舎でゆっくり暮らしたくなってきた。

……だけど。

ヨルミちゃんが俺の眼前に手をかざす。

「ねえ、どうして使者を。ミニエールを殺したの？」

彼女の手には、母・パルメの髪が、ミニエールが無邪気に付けていたカツラがあった。カツつと体に火が灯る。ヨルミちゃんのカツラを啜え、奪い取ると声高に叫んだ。

「母の形見に触るな！」

指一本動かないはずの体。呼吸もままならないハズの体。

だけど、良く通る声が出た。

俺の声は鉄枷に忍ばせた拡声の魔道具で広場中に広がった。全ては狙い通りだ。

「形見？」ヨルミちゃんが眉根を寄せる。「どう言う事です？ 説明なさい！」

吊り上げられた俺は拘束を解かれ、ベシヤリと地面に突っ伏した。

そのまま、涙ながらに訴える。

帝国の使者が母の髪で作ったカツラを付けていたこと、そして『ユマ姫の髪も結いた』とテムザン將軍が言付けた事。

広場はすっかり静まり返り、すすり泣く声が聞こえるほど。

「証拠など何もありません、だけどコレは確かに母の髪なのです」

俺が涙ながらに訴えれば、ヨルミちゃんが堪らずといった風に俺を抱きしめた。

「ああ、どうしてユマ？ どうして早くに教えてくれなかったの？」

「言っても、信じてはくれなかったでしょう？」

「信じる。信じるわ」

お涙頂戴の寸劇だが、二人して舞台に立つこともあったので中々サマになつてはす
だ。

お互いに抱き合つて、涙ながらに許し合う感動的な光景。俺が女王に忠誠を誓えば皆
が安心するに違いないのだ。

この世界、証拠なんぞ何の役にも立たない。こうやってごり押しするのが正解だと木村は言っていたが、その通りだろう。

広場の空気を見る限り、狙い通りの大成功。俺は密かにほくそ笑む。
しかし。

「！＼＼＼＼＼＼！！！！」

突然の激痛。俺は漏れそうな悲鳴を必死に堪えた。

抱きしめるヨルミちゃんが、鞭で腫れた俺の背中を抓ったのだ。何事とヨルミちゃんを睨むと、陶然とした顔で俺を見ていた。

「ハアハア、ユマちゃん可愛い。可愛すぎる。痛がるの可愛い、たまんない」
……駄目だ。サデイストだ。

痛めつけるなら他の人にお願ひ出来ませんか？

あの……プラヴァスにリヨンさんってイケメンが居るんだけど……どう？

★苛めたくなるお姫様

「ギエピー」

俺はピンクの妖精みたいな悲鳴をあげて、海老反りに飛び起きた。

「?? ー(ー)は？」

どうやら俺は、ベッドにうつ伏せに寝ていた様だった。

既に広場ではないだろう。品が良い調度品と無骨な石壁のミスマッチ。ここは？

「スフィール城です」

シノニムさんの声。振り向こうとした瞬間、捻った背中に激痛が走った。

「ふぎいーいー」

今度は尻尾を踏まれた猫みたいな悲鳴が漏れた。俺は背中を斬り裂かれたような激

痛にのたうち回る。

いや、思い出したぞ！ 実際に俺の背中は、凶悪な黒光りするぶつとい水牛の鞭に引

き裂かれたのだ。

だが、思い出すのが少しばかり遅かった。

——ベリリツツ

何か剥がれる凶悪な音が、俺の背中から聞こえたのだ。のたうち回る衝撃で、背中に張り付いた包帯が剥がれ落ちたのだと、後で解った。

生々しい傷跡に癒着した包帯を引つpegが痛み。正直、どうやって表現して良いかわからない。

「カッ！ ハッ」

人間、本当に痛いときは悲鳴すら出ない。コレ豆な。

呼吸もままならず、何とか酸素を取り込もうと口だけがパクパク動く。時折、酸素の取り込みに成功した喉から掠れた悲鳴が漏れるのみ。

全身が痺れて、打ち上げられた魚の様に手足がピクピクと痙攣する。

「ヒツヒツヒツ、ハッハッハッ」

「いけない、ひきつけを起こしているわ」

「シヤリアちゃんの声だ。木村の声もする。」

「横向きに寝かせるんだ。舌を巻き込まない様に何かを噛ませよう」

「わ、わわ、わかりました」

パニックになったシノニムさんの声は結構珍しい。そんな事をぼんやりした意識の中で思ったりした。

で、次に起きたときは、口枷を啜えさせられ。両手両足をベッドに縛り付けられた惨めな姿になっていた。うつ伏せではあるが、解剖されるカエルを思い出す。

「ごめん、ごめんねえ〜」

背後から聞こえて来たのはヨルミちゃんの声。

ビルダールを統べる女王たる絶対権力者の彼女が、俺に平謝りしているようだ。

「フウ〜！ フウ〜!!」

だが許さん。許さんぞー！ 俺に鞭を打ったのは他ならぬこの女王なのだ。

俺は革製の口枷をギリリと噛みしめる。痛みの余り、汗が吹き出してダラダラと流れた。

そんな俺に、スツと影が差す。脇に立ったのはシノニムさんだ。

何をするつもりだ？ その手には、柔らかな布。え？ まさか？

「んう!? ！ # \$ % & !! ングウウウ!!」

背中を拭かれた。ソレだけで、メチャクチャに痛い!! 口枷に邪魔されて、獣みたいなの唸り声しか出なかった。

ビクンと背中が仰け反るが、今度はのたうち回る事も出来ない。縛られた手足は俺を締め上げ、ベッドも軋んで悲鳴をあげていた。

目がチカチカして、またも視界がホワイトアウト。

「ん〜〜!!」

それでも口枷を噛みしめ、今度は必死に耐える。汗だくで目に涙を浮かべ、汗まみれの俺がキツと睨みつけた相手は、木村だ。

コイツが変なアイデア出さなきやこうはなつてなかつた。

良く見ると、ズタボロの俺を見て、ゴクリと生唾を飲み込んでやがる。

絶対に楽しんでるだろ！ いい加減にしろ！

客観的に自分を見れば、手足を縛られ、口枷まで噛まされた美少女が、鞭を打たれた背中を曝け出し、汗だくで痛みと闘っているのだ。

更によくと、部屋には俺の甘い体臭が充満している。

自分で言うのもアレだが、かなりエロインじゃないか？ 木村め、コレが見たかっただけじゃあるまいな？ 殺すぞ！

つてか、鞭の傷つて打たれた時よりも打たれた後の方が痛いらしい。

そう言うの、後から言うの止めて貰って良いですか？

まあ、男の子だからね、気持ちは解るよ？ ぶん殴るけど。

そんな風に思っていた俺だったのだが、変な気持ちになつていたのは木村だけではなかつた。

「う、うー、エロいよう。見てると変な気分になつちゃう。私ね、そのケは無いのよ？」

本当よ？ ヒステリーで侍女を鞭打つ貴婦人も居ると言うけど、そう言うの私は軽蔑してるのよ？」

鞭を打った張本人、ヨルミ女王だった。爛々とした目で俺を見ながら、イヤイヤと言いつつ繰り返す。

良く考えたら、鞭を打つのは木村の案だが、死にかなない水牛の鞭で打ちすえるのは、流石にヨルミ女王の暴走だ。

背中の肉が裂け、肉がめくり上がるような傷は水牛の鞭が無ければココまで痛くなかつただろう。

思い出したら、また痛みがぶり返してきた。

「んんんんんん!!!」

革の口枷を食いしぼり。ギョツと目を瞑って耐える。

密かに自慢にしている長い睫毛が涙に濡れて、しんと力なく垂れ下がっていた。だが、俺の心まではしんなりしないぞ！

「うゝゝ!!」

奮い立たせるように唸り声をあげ、再び木村を睨む。

そもそもコイツが変な事考えなければこんな目に遭わなかつたのだ。

人の事をサディストとか言っておきながら、お前だつて鞭で打たれる女の子に興奮す

る変態じゃないか！

つてか、良く見れば、ココに居る全員が苦しむ俺を見て、熱に浮かされた顔をしている。

え？ ヨルミちゃん？ なんて腰の鞭に手を伸ばすの？ なんてピシッと伸ばして俺の前に晒してくるの？

「ツツ！」

怖くないと思っても、体は正直だった。ビクンと体が跳ね、涙が滲む。視界は歪み、顔からサツと血の気が引くのを感じた。歯の根が合わず、ガタガタと震える。

そんな怯えるオレの様子を見て、ヨルミちゃんはニンマリと笑っているではないか！ あ、遊ばれている!! く、悔しい。

プライドが踏みにじられた俺は、余計に悔しいやら悲しいやらで、もう。精々笑って楽しめとヨルミちゃんを睨むのだが……

当のヨルミちゃんは何故か頭を抱えて悶えていた。

「ううう、絶対におかしいのよ。どうしようもなく苛めたくなるの」

ウンウンと木村が頷いている。シャリアちゃんなんて鼻血を出して部屋の隅でひっそりと昇天している。

……これ、俺が悪いの？

良く考えると、俺は、俺なりに、俺にとって理想の女の子を追及してきた。

前世でやってたエロゲーを思い出す。ゲームを彩る美少女達を。

うーん、ロクなエロゲーがない。女の子に酷い事するゲームばかりだ。どんな酷い目に遭っても挫けない女騎士とか、可憐さを失わないお姫様とか。

なるほどな、そう言うのを参考にしてしまったか。虐め甲斐しかないぞ。

いや、参った。許して。取り敢えず辛い。汗をかき過ぎた。喉渴いた。

気持ちが悪わったのか、シヨンボリする俺に木村から助け船が出る。

「取り敢えず、口枷を外して下さい。脱水症状の恐れがあります」

「大丈夫でしょうか？ 魔法で暴れませんか？」

だと言うのに、要らない心配をする薄情なシノニムさん。

「大丈夫でしょう、首根っこを押さえておけば健康値で魔法は発動出来ません」

「承知しました」

それで納得するのかよ！ っつか俺の扱いが酷い！ 木村め、噛み付いてやる！

シノニムさんが口枷を外すや、俺は近づいてきた木村に牙を向ける。

「ヤシの実際のジューズです」

そんな俺の眼前に突きつけられた大麦のストロー。俺はキツと木村を睨むが、ジューズの誘惑に抗えない。

悔しい、でも、な女騎士の気持ちを感じする事になろうとは。

——ズツ——

一心不乱に大麦の茎からジュースを吸い上げた。

「ハアハアハア……」

呼吸を忘れて一気にジュースを飲みきると、苦しい呼吸を整える。

ふう、よおし、良いか？ 俺はひと言、木村に言わなきや気が済まない。

『んだよコレ！ 痛てえよ！ 痛えんだよ！』

俺は日本語で、木村に苦情を訴えた。

『仕方無いだろ？ 鞭ってそういうモノだし。知らなかった？』

『知らねえ！ 回復魔法で治すから！ どけて』

『ダメ、鞭で打たれた跡を兵士に見せなきや意味無いじゃん』

『え？』

ん？ え？ うそ、治しちゃだめ？

『いつまで？ いつまで我慢しなきや行けないんだよ！』

『そうだな、大体一週間ぐらいは痛いみたい』

『いっしゆうかん……』

いや、嘘でしょ。んっ、ぶり返した痛みにシートを噛みしめて耐える。

そんな俺をあざ笑うかの様に、木村の軽い声が掛かった。

『痛みが引いても、今度は死ぬ程痒かゆいらしいからガンバレ！』

『なっ!! そんなの! 戦争終わっちゃうじゃん!』

『んー? そうかなー?』

『クソツ!!』

は、ハメられた!! コイツ、痛みで俺を封じ込めるつもりで、最初から!

『戦争出来ないなら! 鞭の打たれ損だろ!』

『それでもないよ』

木村が言うには、あのまま引つ込んだら戦況が悪化しても、好転しても、俺が殺される可能性は高いとか。

確かに、敵の使者を殺して引つかき回すだけ引つかき回して、満足して引つ込んだ様にも見えてしまうか?

『まあ取り敢えず、食うもん食って英気を養ってよ』

『またお前は! 食べ物で、誤魔化してえ!』

『好きでしょ? カレー。食べない?』

『……………』

カレーを出されると弱い。ひもじいお腹がキュウと鳴いた。

その様子が満足したのか（根っからのサディスト）木村が手を叩くと、知らないお姉さんがカレーの匂いにするカートを運んできた。

独特の匂いに生唾を飲み込む。しかし、この匂いを知らない人間が居た。

「キムラ子爵、ソレは？」

恐る恐る、ヨルミちゃんが鍋を指差す。

「ええ、コレをユマ姫に食べて貰お……」

「ええっ！」

大げさなりアクションでヨルミちゃんが後ずさる。

「そんな、汚物を!?!」

汚物じゃない!?! 知らない人がカレーを見た時の定番リアクション止めて! 茶番

は良いから早く食べさせて!

気持ち伝わったのか、木村が俺の目の前にカレー皿を突き出してくるんだけど。

アレ? あのか? 両手が縛られたままなんですが?

「ご飯も用意してますよ〜!」

助けて、と木村を見れば、なんかご飯まで出て来た。

「ええっ! まさか? 茹でた蛆?」

あの、ヨルミさん? いちいち食欲が失せる事言わないで。ちよつと細長い米だから

マジでウジみたいに見えるから！

ってか、違うだろ！ 手を自由にしろ！

「食べるので、コレを外して頂けますか？」

「……食べる？ まさか、食べるの？」

ハアハアと息を荒くするヨルミちゃん。

あの、うんこでもウジでも無いので！ 普通においしいので。変な期待をしないで貰えますか？ SM好きからスカトロ好きまでの進化が早過ぎませんか？

「手の拘束を外すと暴れるので外しません、そのまま食べて下さい」

「ええっ？」

ええつつて驚いたのはヨルミちゃんだった。俺はもう（千年に一度のサディスト）木村が犬の様にカレーを食う俺を期待してるのにうつすら気が付いていた。

「クッ！」

悔しい、でも（本日二回目）カレーの魔力に抗えない！

手足を縛られたままベッドの上、半泣きで皿に盛られたカレーへと直接口を付ける。

「まさか！ そんな！ 茹でた蛆に汚物を掛けたモノを犬みたいに食べさせるなんて！

酷すぎる！ 酷すぎるよお！」

酷すぎると言いながら、なんか興奮しているヨルミちゃんの声が響いていた。

また一人、変態を作ってしまった気がする。

今日のカレーは普段よりスパイスが利いていて、目に染みた。

反撃

翌日、晴れ渡った空の下であぜ道を駆ける騎馬の軍団がいた。ゼクトール率いる近衛兵達である。

いや、もう近衛兵と言うべきではない。再編され、ユマ姫親衛隊と言うべき存在になつていた。

ボルドー王子の近衛兵は遺跡でゼクトール以外の精鋭をゴツソリと失った。

その穴を埋めるべく、第一王子カデインールの近衛だった騎士から、実力が確かでユマ姫に心酔する者を選抜し編入したのだ。

その中から今回出動したのは僅かに五十。精鋭中の精鋭を選りすぐったので、数は余りにも少ない。

しかし、その顔には余裕があつた。繰り上がりで副長となつたグリードなど、軽い調子で口を開く。

「ゼクトール隊長お、奴らノコノコ現れますかね？ ビビって逃げちまつたんじゃ？」
「来ないなら来ないで構わんさ」

ヤレヤレと思ひながらもゼクトールは注意をしない。敢えて気の抜けた素振りでは相

手の油断を誘うのは、グリードの得意技。

だが、グリードは本当に抜けた所もある。策に溺れて油断をしなければ良いのだが……。

「いや、いましたよ隊長。奴ら、好き放題荒らしてやがる」

「ほう」

ゼクトールからは見えないがグリードは抜群に目が良い。振り返って皆に吠えた。

「行くぞ！ 帝国の奴らにユマ姫の痛みを教えてやれ」

「おおおー！」

騎馬が一齐にあぜ道を下り、麦畑へと飛び込んだ。

「この時期の畑を荒らすのは心が痛みます」

「言うな、スフィールが占領されたらこんなモノでは済まんぞ」

青々とした麦を踏みしめ騎馬が駆けていく。揃いのマントと馬衣を纏った一団はあつという間に距離を詰めた。

敵は三人。良く見ると、松明を手に油壺まで持っている。

「奴ら！ 麦を焼こうとしてやがる」

「向こうもこちらを誘い出すつもりだったか……どうやらお待たせしたようだ、タップりもてなしてやれ」

親衛隊が吠え、駿馬の快速で一息に距離を詰める。

しかし、敵も馬持ち。コチラを確認するなり、松明を捨て飛び乗った。しかも酷く軽装だ。

彼らは騎士と言うより騎兵。馬も騎手も鎧を一切纏っていない。

代わりに背中に担いでいるのはマスケツト銃だった。

「アレが、竜騎兵」

「お手並み拝見と行こうじゃないか」

親衛隊は溜めに溜めた鞭を入れ、ゼクトールを先頭に襲歩ギヤロツパで駆けた。恐るべきスピードで竜騎兵を追撃する。

竜騎兵。地球でも近世ヨーロッパにあつた兵科だ。勿論、竜に乗っている訳じゃない。火器で武装した騎兵を指す。火を噴く竜になぞらえて名付けられた。

「チツ！ やはり逃げるか」

だが、彼らは銃での反撃を試みず。尻に帆を掛けゼクトール達から逃げる一方。これは聞いていた通りのやり口だった。

「来ました。ワラワラ集まって来やがった」

「構わん、このまま挽き潰せ！」

どこからか、竜騎兵が続々と集結してくる。

彼らはそう信じていた。

「なんだと? 何故止まらん!」

眩きは竜騎兵の中でもベテランと知られる男のモノ。

そう、ゼクトール達親衛隊は一切その歩みを止めなかった。

何故か?

その秘密は、彼らのマントと馬衣にあつた。

エルフの武器はアサルトライフル並の威力を誇る魔法の矢。だからこそ、弾丸の防御方法も長年研究されてきた。

筆頭は防御用の結界魔法。しかし常に魔法を張り続けるのは難しい。そこで開発されたのが蜘蛛の魔獣の糸で作られた防弾チョッキだつた。

地球で防弾チョッキによく使われるのはアラミド繊維だが、その十倍の強度を誇るのが蜘蛛の糸だ。夢の繊維として現在競う様に開発されているが、魔獣素材の利用に長けたエルフは当然の様に実用化していた。

だが、難点があつた。高価な上に動けない程に厚くしない限り、アサルトライフル並の威力を持つ魔法の矢は防げない。

余り実用的とは言えなかつた。式典の緞帳などに仕込むのが精々。

しかし、マスケツト銃が相手なら薄いマントでも十分。しかも馬衣とマントですつぱ

り全身を覆つても、逃げる騎兵を追える程に軽い。

「クソツ奴ら！ 止まらねえ」

ひたすらに追われ続けるハメになった竜騎兵の三人は焦つた。貴重な銃すら投げ捨て、逃げに徹するが振り切れない。

しかし、それでも希望を失つてはいなかった。

「必死こいて走らせろ！ 走つてさえいれば絶対にやらねえ！」

そう、例えば2メートルの槍を持つて敵を追いかけたとして、逃げる相手にその距離まで馬体を寄せるのは困難だ。

通常、逃げる軽騎兵は無理に追わないのが戦場の鉄則である。しかし、竜騎兵は言わば全員が軽騎兵。そして無視出来ない火力まで持っている。そう言う意味で、極めて厄介な兵科と言える。

だつたらどうするか？

「グハア！」

三人の内、一人が突然、落馬する。

「なんだ？ どうした？ グッ！」

残つた一人も気になつて後ろを振り向いてしまう。当然速度は緩まり、結果、良い的になつた。

放たれたのは小さな鉄球だった。頭に命中すれば兜も着けていない竜騎兵。堪らず落馬するしか無い。

「命中つとー！」

当てたのはグリード、親衛隊の副長だ。手に持っているのはいわゆるパチンコ。正しくはスリングショットだった。

魔導車のタイヤにゴムが使われているのを見た木村が開発したものだ。なにせ馬上で弓や銃を扱うのは難しい。馬体に干渉するからだ。和弓の様に馬上で扱える弓も存在するが、恐るべき練度を要求されるのは言うまでも無い。

そして、クロスボウは高価な上、馬を走らせながらの装填は難しい。

その点、スリングショットなら馬上でも比較的簡単に扱えた。扱いも簡単で射程も10メートルは優にある。しかも軽くてかさばらない。

騎士が相手では威力不足だが、軽騎兵が相手であれば刺さる兵器である。

「グハッ！」

残る一人も程なく撃ち落とされた。機動力を重視した軽装が災いした格好だった。三人を始末した親衛隊は、他の竜騎兵も散々に追い回していく。

ココまで圧倒的な勝負になった理由は武装の相性にある。

竜騎兵のマスケット銃は馬上での取り回しを考えて、砲身を短く切つてある。威力は

低く、単純な運動エネルギーに換算すると200ジュール前後。

ソレでは防弾チョッキを着た親衛隊を傷つける術が無い。そして、竜騎兵は銃以外の武器を一切持っていなかった。

今回、親衛隊は鎧を着ていない。防弾に特化したマントだけを羽織っている為、普通の騎士の突進なら親衛隊に大きなダメージを与えられただろう。

そんな光景を遙か遠く、小高い丘から望遠鏡で観察している男がいた。

竜騎兵は面白い兵科だが、コチラには何でもある。対策は簡単と豪語した男だった。

「はえ〜！ エルフのアイテムつええええ!!」

木村である。お手製のサンドイッチなどパクつきながら呑気に戦況を見守っている。しかし横合いから手が伸びて、望遠鏡は取り上げられた。

「コレだけの装備があつて、どうしてエルフは負けたのでしょうか?」

望遠鏡を覗きながら訊ねたのはシノニム。ユマ姫の看病はシャルティアに任せている。……少し不安だが仕方が無い。

「何より霧ギユルドスの悪魔ですね。エルフにだけ効く毒ガスみたいなモノですから。その上エルフは全く戦う覚悟がなかった」

「覚悟……」

シノニムの脳裏に浮かぶのは、覚悟だけで生きているようなエルフの姫だった。

「今はエルフも本気ですよ。ですが、当時は酷く油断していたようです」

「……そうですか」

言いながらも、シノニムは晴れない表情で俯いた。それがどうにも木村には気になった。

「どうしました?」

「いえ……エルフは人間を憎んでいるのでは……と」

ユマ姫は帝国がエルフの都でどんな非道を働いたかを声高に語っている。民間人も構わず殺し、積み上げた死体を燃やしたと。

大げさに言っているのかと思えば、田中まで何でもない様に言うのだ。「アイツらはエルフを魔獣の生き餌にしてたぜ」と。

だから怖くなる。エルフの優れた技術を見る度に、ソレがコチラの喉元を狙わないとは限らないのではと。

「そりゃ、憎んでいるでしょうね」

「そんな!」

だからこそ、何でもない調子で語る木村に顔を蒼くした。

「でも、人間を憎んでいるのはエルフだけじゃない」

「? それは何?」

「まずは魔女クロミーネ」木村は革袋からナッツを取り出し口の中に放り込む。バリバリと咀嚼しながら獐猛な顔で言った。「そして、古代人」

「え？」

魔女はともかく、古代人とは？ 腰が引けたシノニムを脅かす様に木村は歪んだ笑みを見せつける。

「彼らはエルフよりも、更に進んだ技術を持っていた。だけど滅んだ。そう思われていた。だけど違った。奴らは明らかに人間の敵だ」

「そんな!？」

シノニムでも各地に朽ちた地下遺跡がある事は知っていた。けどお伽噺の中の世界の様に思っていたのだ、その力でユマ姫の腕や目が治ったと聞かされても、ユマ姫の神秘性と併せて現実感がなかった。

「そうじゃなきや、人間よりも優れたエルフを帝国程度が落とせる訳が無い。ユマ姫の見立てでは霧ギユルドスの悪魔だつて奴らのモノ。私も同意見です」

それどころか、木村達はソルンと言う古代人らしき人物の姿を実際に目にしている。だが、あまり公にしていけないのだ。敵は帝国。その話をブレさせたくなかった。

「スフィールに居たならシノニムさんも見たでしょう？ 空が灼ける爆発を。別に適当に吹かしているんじゃないんです。アレは本当に、誇張無く、世界を一瞬で灼ける兵器

だ」

「そんな……」

常識的なシノニムは、自然現象みたいなモノをユマ姫の宣伝に使っているのだと思っていた。

天変地異が起きたときに、権力者が何度となく使つて来た手だ。

だけど、違った。木村は一切嘘を言っていない。シノニムにだって、それぐらいは解るつもりだった。世界を丸ごと灼いてしまう兵器など、全く想像出来なかつたから。

だとすると、とても怖くなつた。昨日も、今日も、明日もずっと同じように続くと思つていた。王国が勝とうが、帝国が勝とうが、人間は変わらず暮らしてきた。それが当たり前だと思つていた。

何百年も続いてきた世界が突然に世界に現れた異物、ユマ姫、キイムラ子爵、黒衣の剣士タナカ、黒き魔女クロミーネ。彼らの登場で波間に浮かぶ小舟の様に不安定なモノに変わってしまった。

青い顔でガクガクと震えるシノニムを見て、木村はユマ姫がシノニムに細かく事情を説明していない理由を悟つた。

オーズド伯の部下だからだと思つていたが違う。頭が良いだけに、世界の危機をリアルに認識出来てしまう。それは常識的な彼女にとって、物凄く負担となつていた。

自らの失敗を悟った木村は殊更に明るく言った。

「まあ、考え方を変えましょう」

「考え方を？」

「ええ、エルフが帝国と王国の潰し合いを望むなら、我々はエルフと古代人の潰し合いを望みましょう」

「そんな！」

「敵の敵は味方。この戦い、味方を信じられない方が負けです」

木村が震えるシノニムの手から望遠鏡を取り返すと、丁度半壊した竜騎兵が逃げて行く所だった。

望遠鏡を手渡しながら木村は語る。

「テムザン大將軍は優れた武将です。ユマ姫を挑発した手管はお見事。だけどそれだけ、所詮は前時代の遺物です。仕組みが理解出来て、人間でも作れる銃までしか信じられない」

そう語る自信ありげな木村の顔。この戦いに負ける気が微塵も無いと物語っていた。

どうして？　と思うシノニムの耳にゴトゴトと鳴るタイヤの音。そして機械の駆動音が届いた。

彼らの背後、丘の向こうから現れたソレの影で、丘の上は急に暗くなった。それほど

に巨大な物体だった。

シノニムはコレに似たものを見たことがある。

「コレは……魔導車？」

しかし、以前見た姿とは異なる。もっと禍々しい姿をしていた。

木村は「ん？」と悩み、勿体ぶってから言った。

「敢えて言うなら『装甲車』ですね」

★拠点奪還

「うっ、ううー！」

俺はスフィール城のベッドで猿ぐつわを噛み締めていた。

鞭を撃たれた傷跡が、あまりにも痛いからだ。

いや、痛いだけならまだ耐えられるんだけど。籐の鞭の傷は、時たま猛烈に痒くなる。すると、夜中、ウトウトと寝た際に、無意識の内に猛烈に掻きむしり、水牛の鞭で付けられた傷跡に触れてしまう。

するとまあ、飛び起きるほどに痛くて目を覚ます。

眠る事も許されず、痛みと痒みで延々と苦しめられる。そんな地獄の無限ループに嵌まり込んでいた。

なのでここ数日、睡眠時には引つ搔かない様にと俺の四肢は縄でベッドに固定され、舌を噛まない様にと口には猿ぐつわが噛まされている。

早い話が、鞭を打たれた翌日から全然変わってないワケだけど、俺の為だからココまでは我慢は出来る。

「でもー、コレはないでしょう!! 何の真似です?」

「だけど、流石にもう目隠しされる理由は一切無いはずだ！」

鞭の痛みにまんじりと寝れない夜を過ごしていたら、急に暗転した視界に、俺はパニックに陥った。

「シノニム？ ヨルミちゃん？ 何なの？」

助けを求めるも返事がない。そう言えば、今日は敵を押し返す策があるとかで、木村と連れ立ってシノニムさんはスフィールの外に出かけたままだ。

そういえば、ボルドー王子の近衛兵だったゼクトールさんが『ユマ姫親衛隊』とか言う謎の役職に就いたらしい。

親衛隊と言う割に、俺の大ピンチに現れる様子が無いのだが？

今日から彼らと木村で、帝国自慢の竜騎兵を一網打尽にする作戦らしい。

「ナニそれ！ 見たい！」と身を乗り出そうとしたのだが、俺はベッドに縛られたまま放置された。

「じゃあ、誰が俺のお世話をしているのか？ 消去法で言えば明らかだろう。」

「ふふっ、綺麗よ」

「シヤリアちゃんだった。俺は身の危険を感じてゾクリと背筋が震える。」

「この娘の場合、物理的に美味しく頂かれてしまう可能性があるから怖い。」

「えっと、どうして？」

「だって、目隠しをした方が敏感になるって言うでしょう?」

いや?? 鞭が痛くて鈍感になりたいのだが??

「痒いけど、強く掻きむしると痛い。だったら優しく掻いてあげるわ」

そう言つてシャリアちゃんは、四肢を縛られ大の字に曝け出された俺の背中をゆつくりと、焦らす様に掻き始めた。

「んっ! ああん」

思わず声が漏れる。

ソレほどに気持ちが良い。

「視覚を塞ぐと、感度が高まるでしょう?」

確かに気持ちいいけど、俺をヨガらせる理由がなくなる?

あう気持ちいい、もっど!

「ハア、ハア、切ないでしょう? もっと掻いて欲しい? ふふっ」

コイツ! 縛られて動けない俺を焦らして楽しむつもりだ!!

「んんんんん!」

「ハアハアハア、可愛い!」

シャリアちゃんは身もだえする俺を見て、存分にお楽しみ。

痛みと痒みに、全身から汗が噴き出す。

「ハアハア、美味しい！」

で、背中に滴る汗を、ペロペロと舐めるのがシャリアちゃんです。

「んんっ！」

それがまた、なんていうか痒いのか気持ち良いのか良く解らん感じ。

駄目だこれ、こんな所に居たら頭がおかしくなって死ぬ！

俺は隙を見つけて魔法を使い、拘束を抜ける事に成功。

グライダーに飛び乗って、風を操り戦場へと舞い戻る。

上空から観察すると、装甲車がゼスリード平原へ至る山道をゴリゴリと攻略している所だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「で、どうして来たのです？」

そんな貞操の危機？ を乗り越えて駆けつけた俺に浴びせられたのは、木村の冷たいひと言だった。

「どうしてって？」 キッと俺は木村を睨み付ける。「私が居なければ始まらないでしょう？」

俺あつての戦争だろうが？ 違うか？

……どうやら違うみたいです。

俺の宣言に、木村は心底嫌そうな顔をした。

ココはドコか？ 嬉し恥ずかし、俺が帝国の使者ミニエールの頭を撃ち抜いた懐かしの味方陣地である。

俺が鞭で打たれてからまだ三日。あつと言う間にココまで盛り返したと言う訳だ。

「姫様はろくにお休みになってません」

シノニムさんが木村へ囁く。言つてやつて！ 俺は寝ずに頑張つてコツチに来たんやぞ！

陣地にたどり着くや、俺はシノニムさんに事情を説明し助けを求めた。正直、眠いわ痛いわで、どうにもならないから、少しばかり休ませて貰った格好だ。

そんなギリギリで、それでも軍を支援したいと言う俺の献身。しかし、感動するどころか、総司令官であるオーズド伯まで俺にいい顔をしなかった。

「ココは我らに任せて城に帰って貰うわけには行きませんか？」
ダンディーな顔で穏やかに、言い含める様に語りかけてくる。

しかし、そんな言葉で誤魔化される俺じゃない。

「本格的な開戦を前に、皆に私の不手際をお詫びしたいと思つて参りました。それだけです」

自分の言葉で説明し、皆に解つて欲しい。そんな少女の言葉を無視するとか、ありえ

ませんよね？

ここからが本当の勝負。ココまでは水に流してノーカンって事でひとつヨロシク。しかし、木村が割って入った。

「姫様がおらずとも心配は無用です。こちら側の準備が整った以上、奴らの好きにはさせません。ココまでの流れ、全て私の思惑の通り進んでいますから」

「思惑通り？」

いや、俺が使者をぶつ殺すのまで思惑通りつか？ ンな訳あるか！ エスパークか？ 疑わしい目を向けるとどうやら、スフィールまで引くのが作戦通りなんだとか。

山道で遅滞戦術を行うのも、スフィールの前まで引くのも全ては予定通り。唯一の誤算は、ひと当てもせずただ逃げるのは体面が悪いからと軽く戦うだけの予定が、俺の暴走で混乱したことにより、想定以上にボコボコにされてしまったとかなんとか。

つまり、押し込まれる事も含めて、ココまで想定内とか吹かしおる。じゃあ何か？ 俺が空回ってただけ？ 反省し損的なアレか？

俺が頭を抱えていると、オーズド伯はにこやかに俺を追い返そうとする。

「では、翌朝、皆の前で謝罪をして頂き、それから帰城して頂きます。良いですね？」
帰るか！ あんな所に居たら、体中ペロペロなめ回されるだろうが！

と、言ってしまうえば、すぐさま摘まみ出されそう。

「ええ、もちろんです」

ニツコリ笑って誤魔化せば、オーズド伯は露骨に胸をなで下ろしてみせる。

……なんて言うか、俺ってメチャクチャに邪魔者扱いされてない？ こちとら姫だぞ

？

しかし、明日の俺の姿を見れば、誰も俺を追い返そうとはしなくなるだろう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌日、例によってロクに眠れず、朝も早くから俺は陣内を練り歩いていた。

さて、今日のユマ姫のフアツションは？ 例によつて肩丸出しのドレス姿、しかし今度は肩どころか他の露出度もアップしている。

タイツは破れて痛々しく、ミニスカートは千切れ、大きく入ったスリットからは、ガーターベルトを覗かせている。

更に更に、黒い目隠しに口枷まで装備。おまけに両手は荒縄で縛つて、トドメは犬の首輪だ!!

首輪は鎖に繋がれ、モブっぽい兵士を捕まえて引つ張らせている念の入れよう。

今回、再現に拘らせて頂いた。必死に取り縋つて止めようとするシノニムさんを脅して、縛り付けてでも、この格好を強行するほどに俺の思い入れは強い。

何故かって？ コレは俺が夢にまで見た……違うな、エロゲーで見た、由緒正しきお

姫様陵辱スタイルである。

まだ幼さの残る少女が、ボロボロの姿で陣内を引き回されている。

コレだけでも胸を搔きむしりたくなるほどにエグい光景だが、破れたドレスから覗く背中には痛々しい鞭の跡。痩せ細った体にフラつく足取り。

こんな俺の姿を見れば、兵士達の気持ちはひとつだ。

「なんと、無体な！」

「何を考えているのだ！ 上の連中は！」

ん？ 野獣の様なギラギラとした目で見られると思つたら、ちよつと違う。

真つ正面から同情されてしまった。まあコレはコレで……。

そうして辿り付いた陣のど真ん中。皆の前で跪き、口枷を外してさめざめと泣いてみせる。

「皆さん……申し訳ありません……私の軽挙で、多くの人命を失ってしまいました」

で、どうよ？ 俺の事をみんなして犯すとか？ そこまでエロゲー化しないよね？

姫様をここまで追詰めた帝国、許すまじ！ って燃え上がって欲しいんだけど？

「そんな！ 姫の所為ではありません！ 許せないのは帝国の鬼畜よ」

「元々こんな端ついで陣を張るのが悪かったんだ」

なんか、思った以上に事情が知れ渡っているみたいだな。同情の声が強い。

「我らが弱かったのが原因。姫様のせいでは負けたと言われるのはむしろ心外ですな」
「そうぞぞ！ もっとちゃんと戦え！ そしてお前は武人風の喋りで誤魔化すな。」

しかし、全員が全員、俺に同情的な訳では無い。

「どうして武器も持たない使者を殺した！」

「卑怯だぞ!!」

「そうそう、こう言うのを待っていたんだ。」

可哀想な俺の顔面に、潰れた野菜が投げつけられて、更に無惨な姿に変わった。

「……まあ、仕込みなんだけども。」

待ってましたと俺は涙ながらに訴える。我ながら演技派。

「それは……使者がつけていた、このカツラが原因なのです」

ぼつりぼつり語ってみせる母の思ひ出、はらりはらりと泣いてみせる薄幸の美少女。

コレで燃えない男なんて居ないわな。

場の空気がドンドンと帝国への怒りに支配されてくる。いいぞいいぞ♪

「殺せ！ 帝国を！」

「全員血祭りにしてやる！」

「命燃え尽きるまで徹底的にやってやる！」

はい、皆で突っ込んで、ぐつちゃんぐつちゃん、血みどろの殺し合いをしようじゃな

いか♪

背中 of 痛みも、痒みも！ 復讐も、恐怖も！

その時だけは全部忘れられるんだ。

殺して、殺されて、ソレだけで、他に、ナニも、要らない！

「皆の覚悟、しかと受け止めました。私も命懸けで戦いを見守る覚悟です」

そこで俺は目隠しを外し、集まった皆の顔を一人一人確認する。

言つたな？ 言つたな？ 言つたな？

命を賭けると。俺の為に死ぬまで戦うと。嘘じゃないな？ 嘘でも取り消させない

ぞ。

死ぬまで、いや、死んでも回復魔法で治してやる。

千切れ飛んで肉塊に変わるまで、ソレまで戦い続ける。俺の為に、帝国を滅ぼすため

に、俺と一緒に、寝ないで、食べないで、小さくなって消えるまで、それまで戦い続け

ろ！

俺がギラギラと周りを見回すと、千の兵士が揃って後ずさる。

コイツら、根性ないな。

姫と一緒に死にますって奴はおらんのか？ もつとこう、亡国のお姫様を命懸けで守

ろうって勇士が続々と集まるシーンじゃないの？

なんか、ココでも邪魔者扱いじゃない？ 静まり返った変な空気になってしまふ。そんな雰囲気を取り裂いたのが、澄んだ女性の鶴の一声だ。

「よくぞ言いました。あなたも死んだ兵達の苦しみを知るべきでしょう」

ヨルミちゃんだった。え？ なんで？ ナンデここに？

ここは危険渦巻く最前線。まさかの女王の登場に、陣内は大きくざわめいた。

なんか、良く見ると今日は庶民的な姿である、町娘の様な質素なワンピース。露骨にお忍びですって感じである。

だけど化粧はバツチリで、ちよつとキツメの……女王様スタイル？

ヨルミちゃんは笑顔でコチラににじり寄つて来る。

「あなたは、その覚悟を兵達に見せるべきです。いいですね？」

そう言つて、ヨルミちゃんを取り出したのは、……鞭だった。

「え？ あ、……え？」

うそ、ウソ、嘘、え？ まさか？ エロゲーでもソコまでやらんよ？ まだ前回の鞭の傷跡が癒えてないんだよ？

絶望に足の力が抜けて、その場にぺたんとは尻もちをついた。カチカチと奥歯が鳴つて、サツと顔から血の気が引いていく。

「いいですね？」

ダメ押しに、ヨルミちゃんが鞭を掲げて微笑む。

え、嫌だ！ 俺はもう鞭の痛みを知ってしまった。知らなかった時の、好きに鞭打てと強気に笑ったときとは違う。

だけど、だけど、俺はアレだけ覚悟を迫った。ココで駄目と言ったらもう二度と兵士達は俺の言う事を聞かないかも知れない。

少なくとも俺なら期待する。憧れのお姫様が、目の前で鞭に打たれて泣く姿。痛いからと逃げ出して、ソレで兵士が俺の為に死んでくれるだろうか？

見回すと、コチラを見つめる兵士の瞳が俺の痴態を期待して、ギラギラと輝いている様に見えて仕方が無かった。

うぐぐつ、俺は歯を食いしばり、高らかに宣言する。

「ええ、か、覚悟を見せましょう！」

強気に言い放ったつもりが、やや上ずった声になり語尾はか細く消えてしまった。

いや、語尾が消えたと言うよりは、言うなりヨルミちゃんの鞭で打ちすえられたのだ。

——ピツツツシヤアアアアアア!!

「! # \$ % & * + !!」

悲鳴も出ず、パバパバと口だけが酸素を求めて動くが、痛みで痙攣して呼吸もままならない。

打たれたのは籐の鞭だが、水牛の鞭の深い傷口を扶る一撃は、最初に鞭を撃たれたときの何倍も痛かった。

目の前に火花が散り、視界が激しく明滅する。

後から聞いた話だが、俺は鞭を一回打たれる度に、何十回もビクンビクンと背を仰げ反らせて痙攣し、その数だけ失神と気絶を繰り返して、か細い悲鳴をあげ続けたらしい。

幾度となく明滅した視界は、その数だけ気絶したと言う事だろう。

で、その鞭をタップリと十発以上は打たれたらしい。

その度に何十回も痙攣し、手足はピーンと電気を流されたカエルみたいに突っ張って、惨めな姿を晒したようだ。

たった数時間で、俺は百回以上、気絶と、痛みによる強制的な覚醒を繰り返したワケだ。

普通は死ぬんじゃないかな？

さしもの俺も、その日はPTSDになって、部屋の隅でガチガチと泣きながら「あー」とか「うー」とか言えない精神状態に追い込まれる事となる。

まあ、それは数日で治った訳だけど、その後も鞭を見るだけで、エへへと媚びへつらった作り笑いを浮かべる様になってしまった。

そして、その媚びた笑顔が嗜虐心を煽ると、更にヨルミちゃんに鞭打たれる事となる

のだが。

俺が何しても嗜虐心が刺激されてるじゃねーかと文句を言いたいね。

在庫処分

ヨルミ女王の活躍により、ユマ姫の暴走を未然に防ぐことに成功した我々は、作戦本部となったログハウスで朝食をとることとなった。

メンバーはいつもの通り、キムラ商会の会長である俺と、総司令のオーズド伯。そこに当たり前の顔で現れたのがヨルミ女王だった。俺は頭を抱える。

「あの?」

「お気になさらず、今は一介の侍女ですから」

一介の侍女は、司令部でメシを食わないんですか?」

言つてやつて下さいよと作戦総指揮であるオーズド伯にアイコンタクトを試みるも、スイツつと目線を外されてしまう。

ぐぬぬ、ヨルミちゃんにはユマ姫の暴発を止めるために、大急ぎで前線まで来て貰つただけに強くは言えない。

覚悟を決めたのはオーズド伯だった。

「女王、いえ、ヨルミさん。ここは戦場だ。危険なのは勿論、食事だって固いパンや濁いた保存食ばかり。司令官である私すら兵士と同じ物を口にする習わしです。長居して

も楽しい場所ではありません」

「私も戦場の食事が美味しいなどとは思っていません。だからこそ戦場の現実を知っておくべきだと考えました」

「そうでしたか。このオーズド、お見逸れいたしました」

「いいのです」

「……………」

マズイ、コレは良くない流れだぞ！ 嫌な予感に冷や汗が止まらない。なにしろ今まではどうか知らないが、今日からの食事はウチの商会で用意した物だからだ。

しかし、無情にも本物の侍女達が俺達の分の食事を給仕してくる。

まずは平皿に注がれたスープ。

「ほう！ これは！」

「温かいモノが出るのですね……………」

「え、ええ、戦場とは言え湯を沸かすぐらいは可能です……………しかし」

オーズド伯はジツとコチラを見てくる。逃げられそうにはなかった。

「私の商会で作っている乾燥スープの素を入れていきます、タツプリの豆と乾燥した野菜も入っていて栄養豊富になっています」

「ほう！ ソレでこの滋味溢れる味わいか」

「美味しい！」

とても好評だ。しかし、参ったぞ……と、次々料理が運ばれてくる。

「ぬ、柔らかいぞ！ 焼き締めたパンじゃないのか？」

「実は、ダッチオーブン、あー何というか、鉄の鍋でパンを焼いています」

「あの……このお肉、異常に美味しいんですけど……」

「コンビーフですね、香味野菜と炒めてあります」

「まさか!? 目玉焼きだと！」

「卵は案外日持ちするのです。ああ、私の商会では養鶏場を経営しています……」

この戦場メシは俺の商会のテスト販売も兼ねている。マズイモノなど一切出す気はないし、何より俺がマズイメシなど食いたくないのだ。

しかし、滑らかに回る俺の舌もココまでだった。

俯いたヨルミちゃんが感情の籠もらぬ声を出す。

「あの、キムトラさん？」

「何でしょう、侍女のヨルミさん？」

「コレ……私が普段食べてるものより、ずっと美味しいんですけど……?」

……コレは、痛い所を突かれてしまったな。

「残念ながら、私は侍女のヨルミさんが普段どんなものを食べているか存じ上げないの

で」

「来たでしよ？ 一緒に！ ココまで！ 同じ車に乗って！」

「はて？ 侍女ヨルミ……そんな者が居たかどうか？」

「ふツぎけんな！」

ヨルミ女王が、キレた。

口元にコンビーフを付けたままの姿で、目を吊り上げて俺に掴み掛かってくる。

「旅の間、私だけ別に食事してたけど、皆はこんな美味しいモノ食べてたのお？」

「そうですね、殆どこんな感じのメニューでしたね」

「味がしないパンとか、乾物ばかり食べさせられて飽き飽きしてたのにい！」

「いえ、女王の食事は皆よりずっと手が込んでるんですよ。あの……王の食事は色々と規定がございますので……」

そうなのだ、アレは毒とかコレはダメとか。良く解らない謎ルールが多いのだ。

第二王子はガン無視してプリンとか食ってた気がするけど、あんな生菓子はもつての外で、使つて良いのは火がみつちり入ったりスト上の許された食材のみ。その上、毒味をしている間に冷えてしまう。

俺の商会の新しい食材とかはダメだし、肉も徹底的に加熱したり茹でるのでうま味が抜けてしまう。

コンビーフなんてガツチリ加熱してるから良さそうだけど、今度は調理法とかが特殊だとNGを食らってしまった。

「おかしいでしょ、なんで王が兵士よりマズイ物食べさせられてるの!」

ヨルミちゃんが激昂するが、ひとつ勘違いしている。俺が行った食料革命はずっと昔に始まっているのだ。

「王都の市民も同じか、もっと良い物を食べてますが?」

「ふぎやー!」

猫の様に毛を逆立てて威嚇してくるが……仕方無くない?

「いや、しかし、王としての責務、しきたりです!」

「関係無いツ! 私だってユマ姫みたいにエルフのお菓子を毎日食べたい!」

「え?」

エルフのお菓子って、なんだ?

「あの、黄色くて甘い、プリンって言うヤツ!」

ああ〜! ユマ姫絡みのパーティーでしか出してないから、そう思ってたのかあ。

「あれは私の商会で作ったお菓子ですが?」

「嘘ツ!? じゃあ、アレをみんな普通に食べてるの?」

「流石に普通に、では……かなり高い物なので」

具体的に言うとは、ちよつと奮発したディナーぐらい。現代人と言うと一個五千円ぐらいの感覚だ。勿論、王都の中流以上の市民の感覚なので、物々交換が主体の農家だと一週間の食費とかになつちやうけど。

……それでも、王族なら余裕で毎日食べられる金額だ。たとえ緊縮財政だと言ってもね。

「なんで？　じゃあ、あの高級料理って言つてたラーメンってヤツは？」

「高級？」

思わず首を捻つてしまった。

そう言えば、婚約披露宴が終わつた後の食事会では、新しい料理として食べて貰つたんだつた。

クセのある豚骨スープをコチラの人の口にあう様に臭みを抜いて、味を洗練させるのに苦労したんだよな！。

「ラーメンは既に大衆食として、貴族から肉体労働者まで、幅広く食べられていますか？」

「なあああー！」

余りにシヨックだったのかヨルミちゃんはプルプルと震えている。

正直、これは解つていた。

王様の専属料理人が作る料理を観察して、ヨルミ女王あんまり良い物食べさせて貰って無いなって、薄々じゃなくてハッキリ認識していた。

でも、俺の肝いりの食材が全部使えないし、変に首を突っ込んで王族専用の料理人と波風を立てるだけなので、放置していたのだ。

そもそも、ヨルミちゃんはある程度食べ物に拘らないタイプだ。だからまあ良いかって。けどアレだよな、食べ物に拘らないタイプだろうが、流石にコレだけ差があると気が付いちやうよな。

旅の間はコッチの食事を見られない様に注意していたけど、ココに来てバレてしまった。

ヨルミ女王はお怒りだ。

「なんで？　王なのよ？　私、王様なのよ？　なのに！　なんで？　みんなよりマズイ物食べさせられてるの？」

激昂した女王の問いかけに、俺は神妙な面持ちで弁明する。

「いえ、ヨルミ女王、誤解です。そうではありません」

「じゃあ、なに？」

詰め寄る女王。だが、勘違いをしている。王様の食事は手抜きではない。ずっと手が込んでいるのだ。ただし、無駄な努力でうま味が抜ける方向に。

なんでそんな進化を遂げたかと言うと、あくまで予想になるが、連日パーティー漬けだった歴代の王様達は、きつと糖尿病になったのだ。

で、寿命をすり減らす王族をどうにか長生きさせるため、普段の食事向けとして、塩分と油分を徹底的に抜く料理が開発され、ソレだけを食べる様に徹底された。

それも、うま味概念も無い世界で、だ。味なんてどうなるか推して知るべし。

ヨルミちゃんは日々、そんなモノを食べさせられているってワケだ。

だから、市民よりもマズイ物食べていると言う表現は全く正しくない。

「市民どころか、犬よりマズイ物を食べさせられていますよ」

「殺す！ 殺してやる！」

ヨルミ女王、キレる。

マジギレである。なんか、鞭とか持つてる。

「いや、女王。落ち着いて下さい」

「犬以下のモノを食べさせられてるって言われて落ち着けるかあ！」

一理ある。だが、ソレを言ったのは俺では無い。

「ヨルミ女王、落ち着いて下さい。食事に関して悲しい思いをしているのは女王だけではないのです、もっと悲しい思いをしている者も居るのです」

「なんのハナシ？」

望遠鏡を覗く先では、豪華な鎧に身を包んだ騎士達がチャンチャンバラバラ斬り合っている。

「どう思います?」

装甲車に乗った俺は、隣に座る男へ訊ねた。

「在庫処分だろうな」

オーズド伯である。今日は彼も装甲車に乗り込んでいた。

「ですよね……」

見物としては上等だが、それ以上にはなり得ない。

騎士というのは身分が高い。そんな彼らに『騎士なんて時代遅れッスよ』って説明しても納得するハズが無い。コツチもそうだが、向こうにだって急に変わった世界に適應出来ない者が大勢居たと言う事か。

コチラの騎士を圧倒する程の数と練度を誇る帝国騎士達が、ゼスリード平原であらぶっていた。

「彼らはロアンヌの騎士だ」

「ああ、それで」

合点がいった。ユマ姫がド頭たまを撃ち抜いた女騎士ミニエールの故郷だ。怒り狂うのも無理はない。

狂った様な敵の戦意に、コチラの騎士は押し込まれている。

「もう良いだろう。コチラの在庫処分も済んだ」オーズドは角笛を吹く。「滑稽に思うであらうが、コイツじゃないと従わんのだ」

「心中お察しします」

この平原、角笛など無くても命令は伝わる。エルフの拡声器は大変に高性能だからだ。魔道具を使うことに抵抗のないオーズド伯にしてみれば苛立たしいのだろう。

しかし、ふと思いつく。魔道具に頼りすぎるのも危険だ。

「ですが、昔のやり方を全て捨ててしまう事はありません。敵は霧の悪魔ギユルドスを使います」
魔道具は霧の悪魔ギユルドスの前に無力。俺がそれを伝えるとオーズドは歯噛みした。

「……そうか、クソッ！ 敵に戦場を変えられるのは厄介だな」

「そうは言っても、既に霧の悪魔ギユルドスは貴重品。そして、テムザン将軍は正体不明の道具には頼らないでしょう」

「しかし銃は使う。やはり、銃は古代の遺物やエルフの魔道具では無いのだな？」

「ええ、現に魔石を使わないでしょう？ それにエルフの助けがなくても銃は作れる。私の商会でも生産に入っています」

「うむ……」

オーズド伯は不安げに顎を摘まむ。伯にしてみれば、突然に発展した技術の切り分け

が出来ないだろう。

エルフ、古代人、そして俺達異世界の技術。何百年も安定した世界が、突然三つの異文化に浸食されているのだ。

一目でそれらを識別出来るのは、ひよつとしたら全てに詳しいユマ姫だけかも知れない。

そして、どう転んでも結局、騎士の活躍する時代には戻らない。

「撃てえー！」

オーズドが拡声器で号令を出せば、俺の商会のマスケット銃が一斉に火を噴いた。

味方を追撃してきた敵の騎士がバタバタと倒れる。火薬に驚いた馬が暴れ、敵だけじゃなく、味方の騎士まで次々と落馬した。

しかし、悲劇はソレに止まらない。

——ドオオオオン！

トドメとばかり、戦場に響いたのは火薬のもたらす重低音。

巨大パチンコみたいな昔ながらの投石機で、巨大な爆弾を敵陣に投げ込んだのだ。強烈な音と衝撃で騎士達が次々と落馬する。モクモクと立ちこめる硝煙が、遠くコチラまで漂ってきた。

鼻につく火薬の匂い。平原にぽっかり大穴が空いてしまった。

あまりにあまりな光景に、オーズド伯は拡声器を取り落とし、馬車の中で腰を抜かしてしまふ。

「なんだ？ アレは」

「私がお用意した爆弾です。火薬を丸めてそのまま投げ込んだのです」

「火薬は貴重なのは？」

「最近、大量生産にメドがたちまして」

「……恐ろしいな。それこそ魔法と見分けが付かない」

「そうだよな……、しかし古代技術や魔法はこれ以上に危険だ。」

「ですが、使わなければ負ける。これ以上に厄介な兵器が次々出てくるでしょう」

俺がそう言うと、オーズド伯は頭痛が止まらないと頭を押さえた。

「嫌な時代だ。ネルダリア領だつて自慢の騎士団が居たのだが」

ダンディなおじ様といった風情のオーズド伯の横顔は、少し寂しそうにも見えた。リストで知られる彼ですら、この変化を受け入れられてはいないのだ。

ならば、幾ら名将と呼ばれようと七十過ぎのテムザン大將軍が世界の変化について行くはずが無い。

古代人や魔女、エルフの不思議な力さえ無ければ負ける事はありません。

★ミニスカナース

「ふわっ!」

夢を見ていた。

ジュウジュウと音をたてる焼きごてを背中に押し付けられて、痛みにのたうつ。そうして焼き上がった背中の肉へ、シヤリアちゃんがガブリとかぶりつくのだ。酷い夢だ。夢の中で夢だと解っていたけれど、それでも酷い夢だった。

「ふえっ?」

背中を噛まれた! まさか、正夢? 俺はまどろみから一気に覚醒する。シヤリアちゃんならあり得ないとは言い切れない。

「あら、起きたのね?」

涼しい声。あの、シヤリアさん??

「どうひて?」

口には猿ぐつわが噛まされていた。上手く喋れない。

「どうしてって、傷口が炎症を起こしているから舐めてたのよ」

「んむんう〜!」

いや、それ、舐めただけだろ！ ソレどころか甘噛みしてただろ！
なんにしても、背中がジクジクと痛む。酷い傷だ。

「ふあふあみを」

「鏡をとって下さる？ 背中中の傷を見せたいわ」

どうして通じるんだ？ シャリアちゃんの声に応じて、嫌そうな顔のシノニムさんが鏡を持って現れた。

ウキウキのシャリアちゃんも嫌だが、嫌そうな顔で来られるとソレはソレで辛いな。

「どうぞ」

二人で合わせ鏡にして、俺の背中を見せてくれる。その生々しい傷跡に俺は顔を顰めた。そして顰めた顔もやつれて目の下には隈と、見るからに憔悴していて、髪の毛は乱れボサボサだ。

絵に描いた様なボロボロ具合。拷問を受けたお姫様といった風情である。

……いや、そのまんま拷問を受けたお姫様だわ。

猿ぐつわの上、両手まで縛られて、我ながら不健康なエロさがある。

発狂しそうな程に痛くて、痒い。でも、このエロさを見せびらかして、悪用してやりたい気持ちこそがソレに勝った。

「はいしてくらくはこ」

「何事です?」

中に居た木村の使用人が焦るが無視。フィーゴ少年やカラミティちゃんは王都で留守番してるから、こんな奴らに止められる俺じゃ無い。

勝手に上がりこんで木箱を漁る。あんな約束脇おにぎりしたんだから、業の深いエロ衣装の一つや二つ持ってきてるだろう?

骨抜きにするには今のポロポロのドレス姿じゃちよつとな、可哀想しか感情が湧かないだろ。

最初は『可愛い女の子』だなって所から始めて、後から背中 of 酷い傷跡が発覚するのが理想。

その為の衣装が何か無いか? 肩を最初から曝け出すのは刺激が強すぎて駄目。それでいてエロい奴。

「何か無いかなー」

鼻歌交じりに、木村の持ってきたテントを勝手に漁る。おつ、あからさまに隠された木箱。コイツで間違いない!

「ご開帳! 中身は?」

「ハ、コレは?」

いつか見た、白のバニーガール衣装! しかも、俺の成長に合わせて微妙に手直しさ

れている！

！
お前、散々偉そうな事言っておいて、俺を性的搾取する気満々じゃないかよ、コノツ

いやいや、怒ってないよ。ゲスな他人の性癖暴くのとて楽しいよな。

まだある。次！

ナース！ しかも、ミニスカ！ ニーハイソックス！ ナースキャップ付き!!

ほほう？ コレは新作か？ そもそも、この世界にナース服なんて無いハズ。実は四
章、思惑を探ってで登場済み

って言うか、地球でもミニスカに、ニーハイのナースなんてAVにしか居ませんわ。

しかも色はピンク。

これは騎士達を看病するのにピッタリの姿。それに、憔悴し病的な今の俺には絶対に
よく似合う。

早速、着替える。

「何をしてらっしや……ぐ、ふう」

木村の使用人（男）を眠らせる。乙女の着替えを覗くのは許されない。

あ、留守に男の寝室で勝手に着替えてるのはもつと駄目かもワカランね。

そうしてドレスを脱ぎ捨てて、ナース服に着替える。

ふむ、俺は侍女の二人を呼び寄せてクルリと一回転。どうよ？

「なんです？ その格好は？」

なぜか？ シノニムさんがドン引きしている。

差し出された鏡の中には……なんと！ 一匹のメンヘラが居た。

凄いな、メンヘラ臭がトンでも無い。やつれているのと目の隈がよろしくないのかも。

ま、まあ？ 可愛い事は猛烈に可愛いよ？ 精一杯の笑顔で微笑めば、無理がみえみえの痛々しい感じ。

実際に、滅茶苦茶に痛いしな、背中への痛みは継続中。

でも、幸薄くて守ってあげたい感じはあるはず。俺は意気揚々と木村のテントを出て、真っ直ぐに捕虜のテントに向かったのだが。

「何をしでかすつもりですか?！」

両手を目一杯に広げたシノニムさんに行く手を塞がれた。え？ 俺、別に物騒な事をするつもり無いけど？

「その衣装はなんです？ 呪い殺そうと言うのですか?！」

いやいや、コレはナース服。看病のために作られた、伝統的な衣装ですって！ 殺すなんてとんでも無い。ただ、ちよつとだけA V仕様。

「治療する為の衣装ですよ？ それ以上の意味はありません」

「その衣装と、治療の何が関係あるのですか？」

「いやはや、全く信じて貰えない。それを言うなら呪うのにも関係無いよ？ むしろ下

半身は確定で元気になるはず。」

「私がユマ姫だと解る格好では、捕虜を無駄に刺激するでしょう？」

「そもそも勝手に治療する必要が無いのでは？」

「うぐつ」

ど正論で撃ち抜かれた。コイツは参ったね。どうしよう？

と、その時だった。

「ブルルツ」

「キャツ！」

シノニムさんと俺の間に真っ白の巨体が割り込んだ。

言葉に詰まる俺を援護してくれたのは、真っ白な白馬だった。シノニムさんは突然の事態に慌てる。暴れ馬は人間なんて難なく踏み潰すのだから当然だ。

「何ツ？ 衛兵！」

「ああ、帝国の使者が乗ってきた白馬ですね」

一方でシャリアちゃんは冷静な反応を見せた。

そう、コイツは帝国の使者ミニエールが乗って来た馬。俺がミニエールを銃でぶつ殺してから、暴れ馬として手がつけれなくなっていた……らしい。

じゃあいつそ、馬もぶつ殺そうぜ！ 俺が責任とんなきやな！ って俺が馬房に乗り込んだらまあ、何とか大人しくて賢い馬なのよ。

誰だよコイツを暴れ馬って言った奴は。今も俺に鼻先を押し付けて懐いてくる。

「どうしたの？ ふふっ」

動物と戯れる美少女。絵になるのではないだろうか？

「そんな！ 危険な暴れ馬だったのに！」

シノニムさんが呆然とへたり込む、シノニムさんが風評被害の大元か。白馬は俺の目の前に張り付いて、空の鞍を見せつけて来た。

「乗れと言うのですか？ 良いでしょう」

数千単位が生活する陣内だ、移動するのだから一苦労。調度、足が欲しかった。

ミニスカナース服で白馬に乗っちゃうのどうだろう？ 絵になるを通り越して、ファンタジーが壊れるな。それよりパンツ見えちゃうか？ まあ今、陣内は空っぽだし良いだろう。

で、白馬に跨がると、このクソ馬。勝手に走り出した。

「ええ？」

やっべ、暴走？ 落馬したら死ぬじゃん。いや、タダでは死なんぞ！ その時はお前も道連れだ！

俺は手綱を手放し、白馬のたてがみを握り締める。

「ブルルルルルウ」

なんか嘶いひないて、大人しくなった。そうして連れて来られたのは、先程も訪れた捕虜の傷病者テント。

「あなたもここに来たかったのですね」

「ブルルツ」

考えて見れば、コイツも、アイツらも、ロアンヌとか言う地方の生まれ。シンパシーでも感じてるのかも知れない。

そしてシンパシーを感じているのは騎士達も同じだった。

「サファイア！ 生きていたのか」

サファイア？ 誰だよ？ バケツを持った騎士が泣き笑いの表情で白馬へと駆け寄った。

短髪赤毛のモブっぽい騎士である。

「アナタは？」

「お前こそ、何者だ！ この馬はミニエール様の馬だぞ！」

なるほどね、特徴的な白馬だ。自分の所のお姫様が乗っていた馬だと解った訳だ。

「まず、アナタが名乗りなさい、女性から名乗らせるつもりですか？」

「ぐっ、私はラグノフ。ロアンヌ聖騎士の副団長だ」

へえモブと思いきや副団長とは。そう言えば、さつき茶番が聞こえたな。

比較的怪我が軽かった副団長自ら、他の団員の世話を焼いていると言う事か、威張り腐った貴族みたいな騎士団よりも、よっぽど骨がある。

「今度はお前の番だ、答えろ！ どうしてミニエル様の白馬に乗っている」

ほう？ 名乗れと言うなら答えて進ぜよう。

ホントは名乗らずに治療してから、実は……と言う展開を考えていたが、嘘を言ったらいメージは最悪だ。

「私は……ああっ」

その時、突然に白馬が駆け出して、テントの中へと押し入った。

勝手気ままにテントに乗り込む白馬。病院に獣って普通に細菌とか怖いよな。コイツらが死んだって全然困らんから良いのだが。

「貴様ツ！ どういうつもりだ！」

勿論モブっぽい副団長も凄い勢いで追って来た。

「名を名乗れ！」

武器の代わりに、モップを突きつけて誰何してくる。良いだろう！

「私はユマー！ ユマー・ガーシエント・エンディアン。ユマーと呼ばれています」

俺が名乗った途端、空気がザワリと震え、部屋の温度が一気に下がった気がした。

それもそのはず。テントの中は簡易ベッドでギュウギュウ詰め、全員が怪我をしたロアンヌの騎士だ。

俺は彼らの仕える領主の娘、言わばその地方のお姫様を殺した仇である。

——ブルルルッウ！

その時、白馬が突然に暴れ出し、俺はベッドの上に投げ出された。

そのベッドには先客が、死にかけの騎士が一人。

ロン毛で、端正な顔。如何にも立派な騎士様と言った風情。だけど、銃創が痛々しく、死の淵に立っているのは明らかだった。

「フフツ、サファイアよ、死に際に俺に仇を討たせてくれると言うのだな？」

「マークス隊長！」

ラグノフが叫ぶ。 え？ 隊長？ と思つた瞬間。俺はマークス隊長とやらのぶつ

とい腕に囚われ、首を絞められた。

「止めッ、カハッ！」

「ミニエール様のカタキ！」

しかし、止まらない。止まるはずがない。コイツがロアンヌ騎士の隊長ならば、俺は喉から手が出るほどに殺したかった仇なのだから。

なんだコノ超展開！ 意味が解らない。

クソツ、馬にまんまとハメられた！ コイツ大人しいフリをして、俺をコイツに殺させる気で運んで来たのかよ！

視界が酸素不足で、ゆっくりと暗転する。こんな、クソツ！

こんな死に方???

……??

しかし、ふと、マークス隊長の腕の力が緩んだ。

「コレは?..」

隊長は俺の首に嵌められた首輪を掴む。ああ、ソレ？ 俺が嗜虐心を煽るアイテムとして自分から身に付けてるヤツです。

どう？ エロいでしょ？

「こんなモノを付けられて居るのか、それに……酷い傷だ」

俺のナース服ははだけてしまい、背中の傷跡が見えたに違いない。

「何より、死にかけの俺でも絞め殺せそうなほど、細い首。か弱い力。俺は、何を？」

隊長は、自らの腕を見つめ、ワナワナと震えて自戒する。

そうね、俺みたいな女の子を絞め殺すのは騎士の規範とはならないだろう。

隊長は殺意を失ったのか、ガツクリと項垂れた。きつと俺が悪魔みたいな女だったら気持ちよく殺せたのだろう。

でも、俺はどう見ても天使寄りの存在だ。隊長が躊躇するのは当然だろう。

「グハッ！」

しかし、俺を殺そうとして躊躇うならば、俺の『偶然』はコイツを蝕む。力を入れて傷口が開いたのか、マークス隊長は血を吐いて顔を蒼く変じさせた。

「隊長！」

ラグノフが駆けつけるが、今にも死にそうなのは明らかだ。

しかし、その様子を見つめて、俺はなんだか面白くない気持ちで一杯になる。

……コイツ、勝手に盛り上がって勝手に死ぬ気か？ 許さんぞ！

俺はベッドの上のマークス隊長に馬乗りにもウントを取る。スリットが深く入ったミニスカのナース服、きつとパンツはモロ見えだろうが気にしている場合は無いはずだ。

「アナター！」

「ッ!?!」

「私と一緒に、死んでくれるのではなかったのですか？」

間近に顔を突き合わせて、迫る。

生かすも、殺すも、俺の自由だ！ 違うか？

「あつ、ぐつ！」

すると、隊長は死神に魅入られたみたいな顔で、おののいた。

畳みかける!!

「アナタの命は私のモノ」

「やめろ！ 隊長から離れろ！」

慌てて肩を掴むラグノフ。振り向いた俺は、血走った目で睨んだ。

「止めたいなら殺せば良い！ この細い首、軽く握れば砕けます！」

「何を言っている!？」

動揺するラグノフを無視して、俺は隊長へ向き直る。

「アナタは、私を殺してくれますか？」

「ぐあつ……」

蒼い顔の隊長は答えない。

キザで整った顔が苦痛に歪むのを見るのは案外に楽しいが、仇を憎む目から、俺に心酔する目が変わるのを眺めるのは、もっと気持ちが良いだろう。

助けてやろうじゃないか。

「我、望む、この手に引き寄せられる、肉に埋まりし鉄塊よ」

セレナにも使った、でも助けられなかった、銃弾を取り除く魔法。俺に敵意を持つていた騎士だと言うのに、そこそこの抵抗で魔法は成功した。

コイツ、俺に惚れたか？

「この美少女にならば、殺されるのも悪くない」

もしも、そう思わせる事に成功したならば、魔法は通り放題だ。

「ぐうっ！ ガアッ！」

しかし、体に埋まった銃弾を取り出したのだ。当然に痛い。ロアン又騎士隊長は痛みに暴れて、俺のマウントが外れそうになる。

俺はそれを太ももでガツチリと挟んで、目の前に手をかざし、抜き取った銃弾をパラパラと零して見せつける。

「アナタを蝕んでいた銃弾は抜き取りました。コレから治療に入ります」

「嘘だっ！」

ラグノフが驚愕の声をあげる、

この世界、外科手術など発展していない。ましてや戦場。肉にめり込んだ銃弾など取り出す術も無く、患部が腐るに任せるままだろう。それを俺はアツサリと取り除いた。

「我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給

え」

俺は、回復魔法を唱えた。

斯くして、ロアンヌの騎士団長。マークスは一命を取り留める事になる。

「ブルルウウ」

その様子を後ろからジツと見ていたのが白馬だった。

コイツは、俺を殺そうとしたのか。それとも、マークスを助けさせたかったのか？
獣の考えはサツパリ解らない。

★フラグ回収

なんか、木村率いる王国軍が、尻尾を巻いて逃げ帰ってきたらしい。

まあそうだよな、俺が居なくちゃ苦戦するのも止むなしだ。

話によれば、木村ご自慢の、魔獣の外皮を貼り付けた装甲車が、大砲を貰ってひっくり返ったらしいのだ。

大砲。

そりゃ、銃があるんだから大砲だってあるよな。コレばかりは木村の考えが甘かったと言うべきだろう。

俺の出番も近いハズ。

そうなれば、俺と共に敵に突っ込む戦力が必要不可欠だ！

そんな思いで、今日も今日とて捕虜になった騎士達の元へと足繁く通う。

「ぶんぶん」

そして、俺の後ろを白馬がゆっくりとついてくる。

周りの兵士達は、白馬とお姫様の絵本みたいな組み合わせに、ウツトリと目を細めるのだが、俺としてはコイツに殺されかけただけに複雑だ。

コイツの暴走で、俺を恨むロアンヌ騎士の元に放り込まれたからな。でも、流石にそんなに賢い馬とか居ないよな？ 俺はジツと白馬に向き直る。

「はむっ〜」

小首を傾げたカワイイ姿には邪気を感じない。

そうだよな、偶然だよな。コイツにとつて馴染みのロアンヌ騎士に俺が会いに行く時、たまたま付いて来ているだけだ。

……俺を監視してるワケじゃないよな？

動物は人間の本质を見極めると言う。では、今の俺はどうだ？

お馴染みとなったピンクのナース服に、今日は白いガーターベルトとストッキング。

ドコからどう見ても、天使と言うほか無いだろう。

満足した俺は、野戦病院と化したテントの中へと乗り込んだ。

「お、おおっ！ ユマ姫、今日も愛らしい」

声を上げて歓迎してくれたのは、ロアンヌ騎士の隊長である、えーと？ なんだっけ

？ 『参照権』だ！ そう、マークス！

「マークス様、怪我の方は宜しいのですか？」

「ああ、もうすっかり大丈夫だ！ グッ！」

「無理しないで、まだ治りきつては居ないのですから」

「ぐ、その様だ。我ながら情けない」

そりや、治しきつてないからね。回復魔法を使った俺が一番良く知っている。

一気に治したのでは有り難みがない。ゆっくりじっくり、治しながらコイツらを籠絡してやろうつてのが俺の計画だ。

あとちよつとで、俺の号令ひとつで帝国兵と戦い抜く、立派な戦力になるだろう。

しかし、もう一押し欲しいな。もつと同情を集め、強制的に俺の味方をしたくなるようなフアクターが要る！

そう思った時、病院テントの幕を開け、コチラを窺う人物と目が合った。

木村だった。

俺は内心でニヤリと笑うと、外面だけは可愛らしく微笑んで、小首を傾げて尋ねてみせる。

「どうしたのですか？ キームラ子爵さま」

そう言うのと、木村は苦虫を噛み潰した様な顔をした。

そりやあね、秘蔵のナース服を勝手に着て、野戦病院で俺が看病してるのだからドデカイ感情に支配されるのも無理はない。

しかし、こんな衣装を戦場に持ち込む方にも責任があるだろうが！

頭にはナースキャップ。控え目なボディにはミニスカナース服である。日本男児な

ら性欲を持って余して当然だ。

しかも、このナース服。性欲と言うか、性癖が山盛りなのである。

ただでさえ危険な程に短いナース服なのに、前合わせがスリットみたいに太ももを露わにしている。薄いピンクのコスプレみたいなナース服。

軽く足を上げ、スリットから覗く生足を見せつけちゃったりなんかして。

すると、すっかり魂が抜けた様子で、木村はなんとか声を絞り出した。

「その格好は？」

「あの……ドレスがボロボロになってしまい、勝手にお借りしました」

モジモジと恥ずかしそうに述懐する。はにかみながら答える、あざとい姿。

勿論大嘘だ！ スリットからガーターベルトをチラリチラリ。悩殺という言葉は俺の為にあると言って良いだろう。

今度こそ木村の顔が絶望に歪む。俺は内心、愉しくなってきたのだが、そこに別の声
が割り込んだ。

「あの、そのお方は？」

マークス隊長だ。疎外感を感じたのか割り込んで来た。

よしよし、しっかりと嫉妬しているな。俺はその事実にはくそ笑む。

しかし……参ったぞ。

実はこの所、俺は騎士達にある事ない事を吹き込んでしまったのだ。

やれ、意地悪な商人に性的な欲求をされてるとか、総司令官には煙たがられてるとか、いじわるな女王には何度も鞭を打たれているとか。

……アレ？ 事実じゃないか？

とにかく、同情を買おうとして、周囲が悪人ばかりで苛められていると言ってしまったのだ。だから、木村にフレンドリーに話し掛けられると困る。

木村がこれ以上口を開く前に、俺が気の利いた説明をしてしまおう。

「この人はその、えつと……」

しかし、言葉が出てこない！ 土台無理があるのだ。オマエの事、エロい悪徳商人だつて言ってるから話を合わせろ、なんて伝えるのは。

しかし、しかし、木村はやつてのけた。

「なあーにを勝手な事をしてるんですかなあ？」

嫌らしく顔を歪めて近づくと、俯く俺の顎を持ち上げる。今まで一度もされた事のない嫌らしい動作。

マジか！ コイツ！ スゲエ！

俺も咄嗟に演技を合わせる。嫌らしく歪む木村の目線と、恐怖に揺れる俺の瞳が重なった。

「あ、あの……」

「勝手に治療なぞするんじゃない！ どうせ治すなら、味方を治せば良いモノを！」

「きやつ！」

殴ったね？ 親父にも殴られた事ないのに！ しかし、恐る恐る殴るのは減点だよ木村君。俺は怖くないよ？ スマイルスマイル！

しかし、そこは俺の演技力でカバー。

すこし大きさに吹っ飛んで、地面に倒れ伏す。だけど健気に立ち直ると、目に涙を浮かべて訴えた。

「で、でも！ この人達は私が殺してしまった人の身内だから」

「だからなんだ！ 使者に女なぞ寄越しおつて。おまけにお前のようなガキに殺されるとは、どれほど貧弱なのだ。あんなのが騎士を名乗るとは、帝国はよほど人材不足らしい！」

なるほど、嫌な商人だ。木村は俺の意図を完全に汲んでいる。

「なんだと！」

しかし、それをこの場で言うのは、明らかに火に油。マークス以下、騎士達が青筋を浮かべ、空になった腰をまさぐる。

剣が有ったら確実に抜いていた。間違い無く臨戦態勢だ。俺は何も、お互いに喧嘩し

て欲しいワケじゃない。

「ち、違うの！ 魔法が暴走して、それをミニエールさんが……」

吹き込んでいた雑な設定を披露する。俺の魔力が暴走してミニエールさんを殺してしまった。アレは不慮の事故だってヤツ。

余りにも超展開、超設定。流石の木村も一瞬情けない顔を見せるも、何とか踏み止まってくれた。

「フン！ なんにせよお陰で戦果は散々だ。コレでは一銭も儲からん」

金にしか興味が無い商人を演じている。木村のヤツもなんだか愉しくなったに違いない、俺の首についたままの首輪を握り、強引に外へ引き摺るじゃないか。

「来い！ コイツらじゃなく、味方の兵士を治療するんだ！ 途中で眠るんじゃないぞ、また鞭をくれてやるからな」

「そんな！」

「よせ！ 止めるんだ！ グツ！」

手を伸ばす俺とマークス隊長。俺は良い感じに囚われのお姫様気分が味わえている。

木村は木村で、悪人らしく、更に顔を醜悪に歪めていた。

「あなた達はゆつくり休んで下さい。身代金をタツプリせしめなくてはなりませんのでな」

「クソツッ！ 外道が！」

金にしか興味がない商人らしく、騎士達を挑発する木村。

いやー驚きのアドリブ力だわ。俺が感心していると、テントの外に出るなり、今までより数段マジな態度で首輪をキツく締められた。

ぐべべ、喉から変な声が漏れる。しかし、コチラを見る木村の目線はマジのガチ。

「なんのつもりなワケ？」

「ゲホツッ！ いや、だつてゼクトールさん達、俺の親衛隊なのに、俺に指揮権が無いじゃん？」

どうも、親衛隊つてのは俺の安全を第一に、俺の暴走を止める隊らしいのだ。木村が肩を竦める。

「そりゃーね」

「だから、『ユマ姫と一緒にぶっ込み隊』の編成が急務だと思つてさ」

「解散して、どうぞで」

「酷い！」

涙目である。折角、長時間掛けて仕込んでいるのに！

「アイツらは騎士なんだから、身代金を巻き上げたら、解放だから！」

「ちえっ！」

俺がふて腐れると、木村は痛い所を突いてきた。

「あの様子、どんなことを吹き込んだらあなるの？」

「あーソレね、嘘はついてないよ」

「ソレが既に嘘だろ？」

「果たしてどうかな？」

自信満々に、俺は彼らへ吹き込んだ内容を披露する。

・大森林でお姫様として暮らしていた所、帝国の襲撃で国を追われた。

・王国に庇護を求めるもスフィールでは奴隷にされそうになった。

・王都では継承争いに巻き込まれた。

・今も多くの貴族に命を狙われて、味方が少ない。

・しかし、民衆の支持は厚い。

完全に事実。木村はぐぬぬと唸った。更に更に！

・エルフが魔獣を操ると言うのは誤解。

・むしろ魔獣を操るのはクロミーネの魔術。

・帝国の皇帝は魔女に操られていて、エルフや王国に戦争を挑んだ。

・魔女は古代文明を復活させて、世界を支配しようとしている。

当たらずも遠からずだろう？ え？ 他に？ 別に何も？

ぐべえ！ 首締めるな！ 解った！ 言うよ

・ミニエールのカツラも魔女クロミーネの仕込み。

・カツラだけでなく、ミニエールは魔力に反応し大爆発を起こすペンダントまで持たされていた。

・カツラに激昂した俺の魔力に反応して、ミニエールの生命力はドンドン火薬に変わっていく。

・このままでは大爆発となる間際、ミニエールは自決することで爆発を防いだ。

以上、説明すると木村が叫んだ。

「嘘ばかりじゃねーか！」

……はい、大嘘です。！

でもさ、コレでミニエールさんは立派な死になるし、俺だって悪気のないミスをしただけになるじゃない？ 誰も損をしていない。

「嘘つてのはスパイスみたいに、望むモノを少しだけ混ぜるのが肝心。お前が言つてた事だよ？」

「混ぜたのはスパイスじゃなくて猛毒だよ？ 奴らを殺す気か？」

「殺す気だけど？」

悪気も無く言い切ってみせると、木村は頭を抱えてしまう。

「アイツらは身代金をふんだくる為に必要だから！ 殺さないで！」

「いやいや、返品するからこそ、魔女への不信感を植え付けて、評判を落とすのが重要ですよ。」

「その場合、俺は幼気なお姫様を利用する悪徳商人の評判が根付くんですけど？」

「それは勝手にやったんじゃない！」

俺はすまし顔で答える。木村の苦情は受け付けけない！

それに、俺が一方的にどうこう言われる筋合いはないはずだ。ニヤリと笑って問い詰めた。

「それよりもさー、砦に攻め込んだらポコポコにされたらしいじゃん？ このユマ姫様に全て任せてみない？ 丁度、良い感じに弾よけの騎士が揃ってるし」

「ただ、木村は強がって見せる。」

「いらねーって、秘策があるから」

「ほんとー？ 俺の弓で大砲、壊した方が早くない？」

「不要です、とっておきがありますから」

「ふうーん。じゃあ明日は俺も装甲車に乗って良い？」

「良いワケねーだろ！ と顔に書いてあるが、俺から目を離したくないと、結局同行を許可してくれた。」

見せて貰おうか！ 君の新兵器の性能とやらを。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

本日は。晴天なり。

俺は装甲車の助手席から、砦の様子を遠くに眺める。久しぶりの戦場、それも車の中から、あたかもピクニック気分である。

アレが？ ほおーう？ 渡された望遠鏡でみると、砦には確かに大砲が一つ、いや二つ有る。

後ろでは、オーズド伯が木村へ作戦を尋ねている。総司令にも秘密なのかよ。

「キムラ子爵が言っていた秘策とは、彼女の事ですか？」

オーズド伯が顎で俺を差す。……どうも、良く思われてないな。可愛い女の子じゃんね？

サービスで助手席から振り向き、ニコニコと笑顔を見せるも、二人揃って微妙な顔をされてしまった。木村が嫌そうに声を絞り出す。

「いえ、彼女が戦場を見届けたいと言うので連れてきました」

「なるほど、ですが戦場でパニックを起こされては困りますが？」

え？ 俺の事、何だと思ってるの？

「あの、決して足手まといにはなりません。正直に言うと戦争は怖いですが、だけど、だか

「からこそ私が見届けないといけないんです」

ぐっと、両手を構えてファイティングポーズで意思表示。

内心じや怖くて堪らず、蒼い顔でガタガタと震えながらも、気丈に振る舞う少女。

我ながら名演だ。

どうよ？ 感動したか？ 木村と二人、恐る恐るオーズド伯の様子を見る。

……なんか、思い切り腰が引けていた。

早い話がドン引きしていた。

ぜ、全然効いていない！ コレはショックだ。

本心から顔が蒼くなる。ココまでオーズド伯に効果が無いとは……どうして？

取り繕う為にも、小首を傾げて可愛さアピール。

あ、マズった！ 切り替えが早過ぎた！ 余計にオーズド伯はドン引きしている。

……そう言えば、オーズド伯はシノニムさんから今までのアレコレを逐一報告されてるんだよな。

それに、戦争で俺が戦う所も生で見ている。

そりゃあかんわ。失敗だ、失敗！

衣装がちよっと控え目なのも駄目だな、戦場だからってわきまえ過ぎた。

地味な紺のワンピースドレス。個人的には好きなのだが、オーズド伯には刺さらな

かったか！

ドン引きのオズド伯に、木村が必死にフォローしている。

「あの、今日は絶対に手を出さないと、約束して貰っているの」

「うむ……そ、そうか」

いや、そのフォローは困る！ 俺の出番が無いでは無いか！

「怖いですが、今日も敵にやられる様ならば、私だつて戦いますよ！」

「……………頼みましたぞ、キムラ殿」

「ええー！ 任せて下さい」

二人して、ガン無視であった。こちとら、お姫様だぞ♪

ただ、無言で装甲車が走っていく。作戦決行地点まではすぐソコだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

装甲車を走らせ大砲に近づくと、いよいよ砦が慌ただしくなってきた。

望遠鏡で見つめる先、大砲の近くには、特徴的な制服の兵士が居た。

アレは、帝国情報部！ アイツらまあーだ居たのか。

遺跡で俺を火だるまにした連中のお仲間である。

えと、俺、殺つていい？ 権利あるよね？ そう目で訴えたのだが、木村は無視して

トランクから細長い包みを取り出した。

「では、始めます！」

「それは？」

尋ねると、俺の目の前で木村は包みを引っぺがす。

「これは………ライフルです」

「んなっ！」

戦国時代レベルの世界でライフルとな？

ニヤニヤとする木村が言うには、一丁だけ作ったボルトアクションライフルらしい。

原始的な構造ながら信頼性が高く、現代モノFPSとかでも普通に出てくるヤツだ！

余りにもチート。

性能は普通に大きく劣るらしいが、他の銃とは別次元の精密射撃が可能らしい。

しかし、そんなんで大砲に勝てるのか？

木村が言うには大砲を撃てるのは僅かな人間しか居ないと言うのだ。

確かに、大砲の訓練など、めったやたらに出来るハズが無い。テムザンが動かせる戦

力となると余計にだ。

大砲は引き金を引いてホイットと撃てるわけじゃない。

タダの鉄の玉を打ち出すのだから、でかい装甲車を撃つにでも、200メートルぐら

いは引きつけて撃つてくると言う。前回は200メートル地点でひっくり返されたと

か。

だからこそ、ココ大体300メートル地点に陣取ると言う。

300メートルともなると、人間なんて点みたいにしが見えない距離だった。

肝心の砦だつて望遠鏡ナシではちっちゃい石みたいな大きさ。

東京タワーの天辺に居る人間を見上げるみたいなものだもんな。

本当に当てられるのか？ 固唾を飲んで見守る中、木村はハシゴで装甲車の上に登った。

うーん、流石に狙撃は邪魔出来ない。ゲーマーとしては当然の事。

と、その時、ピリリと首筋に痛み。そして、砦から白煙が上がる。

来る！ 俺の『偶然』は確実に俺を狙う！

懐から銃を引き抜き、トリガーを引くのと、大砲の音が遅れて届くのは、ほぼ同時

！

——ドン！ ドオオン！

発砲音から僅かに遅れ、鉄球が地面を跳ねる音が間近で響いた。

鉄球は装甲車2メートル横に着弾。

やつべえええ！ 確実に、俺の銃弾で弾かなければ、直撃していた。

オイ！ 300メートルは安全圏じゃなかったのかよ！ 木村ア！

いや、今のは俺の『偶然』が悪いか？

望遠鏡で見れば、さっきの帝国情報部のヤツが撃つたみたい。

奴はまだ諦めず、兵士に指示を飛ばして次弾を装填させていた。木村サン？ 早く撃ち殺して下さいよ！

俺は必死に祈った。そして、渴いた音が鳴る。

——パァン！

頭上からの発砲音！ しかし、当たってない！！ 情報部のヤツは無事！ 外した！

木村サン？ さっきの大口はなんだい？

しかし、ライフルなら装弾は早いはず。

と、望遠鏡を見つめると……あ、情報部のヤツが引つ込んでしまう。

あの？ 木村サン？ コレ、作戦失敗ですよね？

オーズド伯と、運転手のエルフ、そして俺、車内に残された三人に微妙な空気が漂う。

ガツカリだよ。ハアと息を吐く。すると……再び首筋に痛み！

え？ 砦を見つめると、もう一個の大砲に何やら動きが！。

……そうか！ 木村が言うとおり、アイツしか大砲が撃てないんだ！ だったらどう

するか？ 二門の大砲で交互に撃つ！

俺はもう一門の大砲をスコープで観察。居た！

やっぱりそうだ、二門の大砲を二人で撃つんじゃない！ アイツが一人で廻し撃ちする為の、二門の大砲だ！

え？ マジ？ さつきみたいな大道芸。二回は絶対に出来ないぞ？

俺は目を瞑り、必死に祈る！ 木村！ 当ててくれ！ 暗闇の中、俺の運命光が一気に減じる。

——パァン！

渴いた発砲音。木村だ！ そして、俺の運命光が急速に膨らんだ！

勝った！ 殺りやがった！ 慌てて望遠拳を覗くと、砦は大騒ぎ。誰も大砲を撃とうとはしていない！

そこに木村が叫んだ。

「やりました！ 進んで下さい！」

「了解です！」

すぐさま装甲車は砦まで突っ込んだ。ガタつくが、それでも馬車よりはずっと速い。

装甲車に身を隠し、ゼクトールさん以下、親衛隊もついてきている。

そこで、ダウンと大砲が撃たれる音。しかし見当違いな方角に放たれる。やはり、他のヤツはド下手らしい。全く当たる気がしない。

砦からは散発的に銃声が響くが、装甲車に弾かれている。

ソコから先は早かった、砦に近づくや、木村が木製の大扉目掛けて火薬を投げつけた。バンツつと派手な音を立て大扉が崩れると、ゼクトールさんたち騎士が乗り込んでいく。

混乱に乗じて、他の騎士も次々と砦に雪崩れ込んだ。基本的に小さな砦だ、これだけで落としたも同然だろう。

戦場の雰囲気血が騒いだのか、装甲車を飛び出して愛馬に跨がったオーズド伯がニヤリと笑った。

「やりましたな、私も中を見えます」

テンション高めオーズド伯へ木村が釘を刺している。

「ええ、しかし油断なさらぬ様。勝ってるようでも開戦前に戻しただけです」

「コレで手打ちにはしたくないと?」

「総司令であるオーズド伯の判断には従いますが……毎年、新兵器の実験に付き合う道理は無いでしょうか?」

「ふむ……」

オーズド伯め、悩む事ないだろう! いや、マジで! 時間が経つほどに相手は強力

になり、俺は死ぬ可能性が高いのだ。

木村の説得を必死に見守る。俺が余計な事を言うとな余計にこじれるに違いないからだ。

「テムザンは帝国を代表する将軍……ですが私は彼らが最高戦力だと思つていません」
「どう言う事ですか？」

「もつと厄介な連中が、牙を研いでいる段階に思えてならないのです」

「馬鹿な、敵兵は万の単位で動員されている。テムザン将軍以外にコレほどの兵力は集められんよ」

オーズド伯は笑つて否定する。確かに諜報活動で得た情報では、テムザン将軍以上の戦力は無いのだろうが、それは今までの常識だ。

本当に怖いのは魔女、それに古代兵器。木村はそれを強調する。

「恐らく、在庫処分をしたテムザン将軍ですら、在庫処分される側なのです。決して油断なさらぬ様」

「ご忠告痛み入るが、とにかく敵の様子を見て決める」

オーズド伯は愛馬に乗つて、占領中の砦へと飛び込んでいく。うーん解つて貰えたのかな？

とにかく、今回は勝つたと言う事で良いだろう。気が抜けてしまった。

「ふわあぁ」

大きくあくびをした所を、木村に見られた！
見るんじやない！ 乙女だぞ！

★アポカプリンセス

翌日、まだ戦勝ムード冷めやらぬ陣内で、俺は当然の権利と司令部に入り込んでいた。ちやうど朝食時、勝手に椅子を用意して、何食わぬ顔でお邪魔する。

俺は本日も肩丸出しのドレス姿。なにせ陣内には潤いが足りてない。これでは勝ち戦に盛り上がるハズが、むさ苦しいばかりではないか。

だから俺が殺風景な朝食に、一花添えてやろうと考えたワケだ。いただきますもソコソコに、柔らかなトーストに齧り付く。

おいしい。ログハウスの木の香りが食欲を刺激する。こんな環境で美少女と朝ご飯とは、コイツらはなんて幸せなんだろう。

「……………」

「……………」

だと言うのに、食卓に同席した木村とオーズド伯は冷たい目で俺を睨んだ。

どうした？ 二人して黙り込んで。リラックスしたまえ。

「……………」

「……………」

何だコイツ？　って顔でジロジロ見られるが、気にしない。俺は鼻歌まじりにトーストにジャムを塗りたいくる。焼きたてパンが食べられる希有な戦場だが、流石にジャムは出ない。自ら持ち込んだとっておきである。

ゴキゲンな朝食。なのに、不景気な顔で木村が手を挙げる。

「あの？」

「なんです？　ジャムなら貸しますよ？」

「ウチの商会のジャムですが!?!　ああもう、何故ココに？」

「捕虜の交渉結果が出ると聞いて」

「……なるほど」

王国軍はロアンヌの騎士を百人程捕虜にしている。治療がてら話して解ったのだが、皆それなりの身分らしく、捕虜の交換や身代金の支払いには、家族が応じるだろうと樂觀している者が多かった。

ソレを知ったオーズド伯も交渉には乗り気で、早速使者を送ったワケだ。まだ砦を一つ奪還したに過ぎないのに、余りにも気が早い。

それは、何故か？

……この戦争を手仕舞いにする気満々なのだ。オーズド伯は。

そうで無くとも、捕虜交換が始まると厭戦えんせん気分が高まるモノらしい。そうやって戦争

を終わらせる切っ掛けとして、長年使われてきたのが捕虜交換だ。

だが、今回の場合、果たしてどうかな？

「オ、オーズド伯！」

息せき切つて、一人の文官が走り込んでくる。オーズド伯の腹心だったハズ。

「今は司令と呼べ」

「は、ハイ！ オーズド司令、実は先ほど帝国兵がこの様なモノを置いていつて」

「なんだ？」

「そ、それは……」

文官はチラリとコチラを見て言い淀む。なるほどな、女の子の前で披露したくないプレゼントと言えば、相場が決まっている。目当てのお土産が届いた様だ。

「使者の首でしよう？」

俺はそう言つて、文官の前に躍り出た。

顔の筋肉を総動員して無表情を努めるが、自然と笑みが漏れてしまう。

「馬鹿な、捕虜交換の使者を殺すなど……」

オーズド伯は一笑に付そうとするが、自信なく語尾がすぼまった。文官の表情を見たからだ。

「ユ、ユマ姫様ッ！ な、何故、ソレを？」

優しく微笑む俺を見て、文官の男は恐怖に腰を抜かしてしまふ。

失礼な！ 我ながら可愛い笑顔だと思っただけ？ しかしまあ、何故と言うなら答えてやろう。俺は今度こそニヤリと笑って口を開いた。

「在庫処分ですから」

「在庫処分だから、ですよね？」

決めゼリフだと言うのに、声を被せる無粋者。苛立ちに睨んでやると、肩を竦めて語り出す。

「コレは、恐らくコチラが使者を殺してしまった瞬間から、決まっていた流れです」

木村だ。安定の解説好き。まだ飲み込めていないオーズド伯へ、滔々と語り出す。

「今回、捕虜になったのはロアンヌの騎士。殺してしまったミニエールさんの故郷の騎士だ。だからこそ、身代金を持ちかけるコチラの使者を殺した所で、やり返したただけだと言えどロアンヌからは文句が言い出せない」

どうです？ と確認を求める木村に、俺は苦々しく頷いた。

時代遅れの騎士を在庫処分しつつ、身代金も払わずに済む妙手。しかも、それを見た他の騎士だって、無茶な飛び出しが出来なくなるって寸法だ。

母様のカツラと良い、敵のテムザン將軍は陰険ジジイに違いない。

ソコまでは俺も解っていたのだが、木村の話には続きがあった。

「このままではコチラは捕虜の扱いにも頭を悩ませる事になるでしょう。みせしめとして殺してしまえば、敵の戦意を煽ってしまい、味方の士気だつて下がってしまう」

うわ、面倒臭え！ となると益々俺がロアンヌの騎士達を口説いてやらないと、タダ飯を食わせる羽目になるわけだな。

そう思つて一人気合いを入れてみると、ふと木桶に入った生首が気になった。

正直、こうなる気はしていたのだ。なのに、みすみす殺してしまった。それが俺の暴走で向こうの使者を殺した事に端を発すると思えば、尚更である。

俺は腰が引けた文官の手から木桶を奪うと、蓋を開けた。

「……………」

夏場だからな、既に見るに堪えない姿になり果てていた。

そんな生首を取り出し、そつと抱きしめる。

「ごめんなさい」

それだけ、言つた。

申し訳無い気持ちだが九割だが、こんな時でも『生首を抱えた美少女つてどうよ？』みたいな事をチラリと考へてしまうのだから、我ながら業が深い。

しかし、コチラを見て興奮気味の木村は変態として、肝心の文官はポカンとドン引きしてるから、この世界には早過ぎた感性かも知れぬ。

一方でオーズド伯は冷静に俺を見ていた。

「あなたにはこの展開が読めていたと?」

「ええ、母のカツラを使者に被らせる相手です。この程度はするでしょう。それに、ロアンヌの騎士たちはテムザン將軍に『作成司令部としては止めたいが、個人の心情的には行って欲しい。ミニエールの仇を討って欲しい』と打ち明けられたと言っていました」

敵だつてコツチにも銃ぐらいある事は知っているのだ。なのに騎士を突撃させるんだから、見殺しも同然だろう。可哀想に捨て駒なのだ、アイツらは。

俺は生首を木桶に戻し、オーズド伯の前にそつと置いた。

「丁寧に吊つてあげて下さい」

そう言っただけで、オーズド伯が「お任せ下さい」と神妙に頭を下げるではないか。終始迷惑そうに俺を扱うオーズド伯が、だ。

オーズド伯は俺を人間嫌いだと思ひ込んでる節が有る。

そりや、祖国を人間に滅ぼされたエルフのお姫様だ。恨んでない、と言えば嘘になる。だけど、死んだ人間まで恨む程に狭量ではない。死んだ人間は良い人間だ。

なににせよ、俺には次の仕事があるのだ。ルンルンで外へ向かう俺の背に、木村の掠れた声が掛かった。

「ビィン……行くのです?」

「勿論、捕虜達の所です。キイムラ子爵、手伝って頂けますか？」

俺の問いに、木村は苦虫を噛み潰した様な顔をしながら、それでも頷いた。

そんな顔をして、乗リかかった船だ。手伝って貰うぞ！

また、俺が変な事をしでかすんじゃないかと心配しているみたいだが……

その通りだ！ 参ったか！

しかし、アレだな。オーズド伯が俺を危険視し、警戒していると聞いていたのだが、木村の方がよっぽど俺を警戒してないか？

解せぬ……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

司令部を出た俺が最初にやったのは、ミニスカナース服に着替える事だった。

今度は薄いブルー。木村め、色違いで二着も作って居やがった！

銀髪にブルーのナース服もクールな印象で良いですね。我ながら納得の仕上がりだ。

準備万端整った俺は、満を持して捕虜を収容した陣幕に飛び込んだ。

「み、皆さん！ 逃げて下さい！」

「に、逃げろと言われましても……鍵が」

捕虜の騎士達が困惑するのも当然、ベッドで寝ていても彼らは捕虜。枷を嵌められベッドに繋がれているから逃げようもない。騎士として、あんまりな扱いと言えた。

なぜ、こんな扱いのまま彼らが放置されているのか？

通常ならばスフィールルまで移送するのが筋。だけど、食料を運び終わった輜重隊しちようたいの馬車に詰め込む事が今回ばかりは出来なかったのだ。

魔導車でのピストン輸送が裏目に出た。一応機密扱いなので、魔導車に捕虜を乗せる訳には行かなかったからだ。

それもあつて、オーズド伯は捕虜の解放を急いだのかも知れないな。俺にとつては都合が良かった訳だけど。

今やすっかり懐いた騎士達、俺は見せつける様に太ももをまさぐると、ストツキングに挟んだ鍵を取り出した。

「鍵なら持つてきました」

「な、なんと!? 大丈夫……なのですか?」

「何も聞かずに、今は逃げて!」

俺は慌てた様子で鍵を開けにかかると、焦りのあまり手つきが定まらず上手く行かない。

……そういう演技であつた。

必死のあまり、鋼みたいに鍛え上げた騎士の胸上に無自覚に乗り上がり、体を密着させてる。

……そういう演技である。

のし掛かられた騎士は顔を真つ赤に口をパクパクしてるし、周りの騎士達からも無防備にミニスカートから覗く太ももと、見えそうで見えない下半身に突き刺さる視線を感じる。

……言うまでも無いが、そういう演技である。

解つては居たが、ミニスカナースの破壊力は凄い。ナース服とか概念が無くても普通にエロい。

つてか、この様子を木村達が外から覗いてるんだよな。

なんて言うか、そっちの方がよっぽど恥ずかしい。

NTRが性癖か？ 楽しんでないで早く出てこい！ いやいよ焦れた所で木村が動いた。

「おやおや、勝手な真似は行けませんなあー」

「なっ！ キムラ子爵！ どうしてココへ？」

安定の悪徳商人ムーブ。俺は顔を蒼白に後ずさる。

「なんでとは、面白い事を言いますなあ？ 私の資産になるべき捕虜なのですから私が監視するのは当然では？ ユマ姫様こそどうしてこんな所に？ 今すぐ治療しなければならぬ兵士は居ないハズですが？」

「そ、それは……」

「ユマ姫、下がって下さい!」

俺を庇って、鍵を外した捕虜の騎士が木村に立ち塞がる。俺ってばお姫様みたいじゃないか。

いや、お姫様だわ。だから、俺には親衛隊がいる。その親衛隊が木村の後ろから出て来て、立ち塞がる捕虜をぶん殴った。

「邪魔だ!」

「ぐあつ」

全ては手はず通り。だけど流石に思いつきり殴りすぎじゃない? 治すの俺なんだから? 普段は温厚な皆が、妙にトゲトゲと苛立っている。演技だけでは無いだろう。

ひよつとして、俺のナース服のエロ看護を覗き見たからか? イライラし過ぎでは? コイツらNTRの才能無限大かよ。

謎なのは、何故か木村まで本気で苛立って見える事。俺の髪の毛を掴んで醜悪に叫んだ。

「こいつめ! 勝手に捕虜を逃がそうとしたな! どういうつもりだ!」

「だ、だって、このままじゃ騎士さん達を殺すって」

俺が涙ながらに訴えると、捕虜達に動揺が走った。思わず不安を口にする。

「まさか！」

「嘘だろ？ 領主様が俺達を見捨てるハズが」

「どんだけふっかけやがったんだ？」

呑気な騎士達。見捨てられるとはまるで思っていなかった様子。そこで木村の苛立ちが爆発する。

「まさかも、クソも、あるかあ！」

「きゃッ！」

髪の毛を掴まれた俺は振り回され、木村に地面に投げ飛ばされた。折角のナース服が汚れちゃうじゃん……。

しかし、着崩れた感じも悪くない、か？

見上げると、苛立った演技の木村が俺を杖で突いた。

「コイツが悪いんだ！」

「どういう、事だ？」

事態の急変に、捕虜の騎士達が呆然と眩く。

「コイツが、開戦の使者を殺したもんだから、相手もコッチの使者を殺しやがった。身代金がおじゃんだ！」

「そ、そんな！ 嘘だろ？」

「嘘なら良かったがなあ！ お陰でコッチは大損だ！」

使者の殺害は、当然ながら捕虜の死を意味する。捕虜は激しく動揺した。

ソコにすかさず、親衛隊の一人が木桶を持ってくる。例の生首だ。丁寧に吊えつて言ったのに再登場願ってしまった。

木村が木桶から生首を取り出し、真っ青に震える俺へと突きつける。

「お前のせいだ、お前のせいでコイツは死んだんだぞ！ 解ってるのか！ お陰で俺も大損だ！」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ」

グロテスクな生首を直視出来ず、俺は小さくなつて震えた。生首さんゴメンは掛け値なしの本心だ。

「せめてもの腹いせに、コイツらの首を送り返してやろうかと話していた所よ」

木村が周囲に言い放つと、捕虜達は呻いて後ずさる。しかし、ソレを聞いた俺は今までの恐怖から一転、勇気を振り絞つて悪徳商人木村に立ち向かう。

「やめて！ お願い！ 私が！ 私が悪いんです、責任なら私が、私が死にます！」

「お前が死んだ所で一銭にもならんわ！」

「キャッ！」

俺は木村に蹴つ飛ばされて地面を転がる。あの？ 本気で痛いんですが？ 木村サ

ン？

「オイ、さつさとコイツらを縛り付けておけ」

「ハッ！ 了解です！」

「クソツ、勝手な真似を！」

親衛隊にキツく縛られる捕虜達。抵抗する者は容赦なくぶん殴る様は、私怨を感じずには居られない。

私怨を感じるのは木村もだ。

「姫様も二度とこのような真似はしない様に、次はコイツらと一緒に生首になって貰いますよ」

「わかり、ました……」

力なく項垂れる俺に、嫌らしく笑みを浮かべて言い聞かせてくる。

実は、コレが茶番の狙いだった。

捕虜の兵士をずっとベッドに縛り付けておくのは限界。かといって、戦場にちゃんとした牢屋はない。

ソコで、脱出したら俺が死ぬんだぞって刷り込んでおけば、まさか勝手に逃げたりはしないだろう。

……もし、勝手に脱出するなら、俺が直々にぶつ殺してやるからな。木村に蹴られた

場所が普通に痛い。蹴られ損は嫌だ。

「ってか、強く蹴り過ぎ！ 木村を睨むと、醜悪な瞳と目が合った。

「今日の分はしつかりと罰を受けて貰いますからな」

「は、ハイ……」

罰と言われてて、ビクンと体が跳ねる。完全に無意識。我ながら相当にヨルミちゃん
の鞭がトラウマになってる。俺は、泣きそうになりながらも領いた。

我ながら痛々しいまでの名演。なのに木村はノロノロと立ち上がる俺の襟首を乱暴
に掴み、天幕の外まで引きずった。

「モタモタするな！ 気絶するまで鞭打ってやるからな！」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイッ！」

襟首を掴まれた事でナース服の上着が捲れ、俺の背中の一部が露わになる。

「なっ！」

「嘘だろ！」

ソコには痛々しい鞭の跡がハッキリと……捕虜の騎士達はぶん殴られたみたいな顔
でシヨックを受けていた。これぞ、俺が大事に扱われていない証拠。ダメ押しである。

捕虜が逃げたらユマ姫は処刑されかねないと、彼らは思い込んだはず。

しかし、捕虜の怒りは俺の想像を超えていた。痛い目に遭う事も厭わず、木村に罵声

を浴びせる。

「外道な！ このような幼い少女にこのような！」

「ふん！ 帝国の使者、あなた達の主の娘を殺した罰として躰けてやったのです。お礼を言つて頂きたいぐらいですがなあ」

「言わせておけば！」

「黙れ！」

無理矢理立ち上がりとうとする騎士を、親衛隊が打ちすえる。

「グッ！」

「ふん、あなた達が逃げればこの少女が苦しむ事になる。ゆめゆめソレを忘れぬ様にお願ひしますよ」

言い放つた木村は俺を引きずつて外へ出る。親衛隊も一緒にだ。

で、俺達は陣幕の外にへばりつき、中の様子を聞く事にする。

「クソツ！ なんで！ 俺達は！」

「マークス隊長、俺達本当に助からないんですか？」

「何とか、逃げないと！」

「待てっ！ 我々が逃げたら、あの少女が苦しむことになる」

しめしめ、狙い通り。俺はマークス隊長の言葉にほくそ笑む。

「ですが!」

「お前等も見たよな? あの子の背中」

「ヒデエ鞭の跡だった。アレは生半可な傷じゃねえ、水牛の革の鞭の傷だった。大罪人にしか打たない鞭だ。あんなのを少女に打つなんて、許せねえ」

……なんでそんな鞭をヨルミちゃんは持っていたのか? 今更に苛立ってきた。尚も捕虜達の話は続く。

「それに、騎士達がユマ姫を見る目、異様だったぜ」

「酷く冷たい目だったな」

親衛隊もアレだよな、NTRの才能があり過ぎたわ。

「チャンスを待つんだ。腐らなければチャンスは来る」

マークス隊長はそう言つて団員を諫める。まあ、コレなら勝手に逃げる事は無いだろう。

徐々に拘束を解いても良いはずだ。早く『ユマ姫の為に敵にぶつ込み隊』を作らないとな。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

……と言う訳で、当面彼らが強引に逃げ出すことは無いだろう。

コレからは頑張つて捕虜の待遇改善を勝ち取つた、と言いながら一層増えた鞭や痣の

跡をさりげなく見せつけて、お見舞いを重ねていく。

自分達の為に、日々少女がボロボロに傷ついていく。ソレに回復魔法での治療も加われば、彼らが俺の言う事をなんでも聞く人形ようになるのも時間の問題だろう。

ソレを自信満々に説明すると、木村はドン引きしていた。

あんまりドン引きするものだから、実はまだ親衛隊には説明していなかった。

説明するのは捕虜の陣幕とは別の、少し大きめな陣幕の中である。先ほどは横柄な態度で演技をしていた親衛隊が、今は俺に跪いている。

居るのは俺と木村、そして親衛隊の精鋭五十名。後で説明するから、と無理矢理協力して貰ったので、こう言う場が必要だったわけ。

説明すると、質問が待っていた。

「彼らを戦力として取り込もうと考えているのですか？」

流石ゼクトールさん、話が早い。俺はコクリと頷いた。

「それもありませんが、彼らには帝国のやり方が、エルフが本当に悪だったのかすら疑って欲しいのです。本当の敵は魔女ではないか？ そんな疑心暗鬼を帝国に広めてくれればと私は願っています」

しかし、親衛隊からは不満の声があがる。伊達にNTRの才能を爆発させていない。

「しかし、彼らは信用出来るのですか？ わざわざユマ姫が御身を危険に晒す必要があ

るとは思えません」

そう言えばコイツら、『危険に飛び込もうとするユマ姫の首根っこを掴む隊』だった。また俺が危ない橋を渡ろうと、体を張ってる様に見えてしまうようだ。

言い含める様に説得しよう。

「私のやり方が気に食いませんか？」

「そ、それは……」

自信満々の俺に、親衛隊が言い淀む。

確かに相手も忠誠心が厚い帝国騎士のエリート。そう簡単に骨抜きにして取り込む事など出来るのだろうか？ と疑問に思うのも当然。

しかしだよ？ 俺も前世の『高橋敬一』の精神で鏡の中の自分を見るけれど。余りにもエグイ可愛さと憐みの暴力。コレで迫られて落ちない男とか居ないだろ。

——疑うと言うのなら、その身で味わってみるか？

俺はしやなりと近づくと、親衛隊の肩に手をかけ、耳元で囁く。

「私を止めたいのですか？」

「違っ……いえ、そうです！ 無茶をするあなたを止めたいのです」

理性が勝ったか。しかし、コイツはどうだ？

「そう、じゃあ……コレを」

「そ、ソレは？」

俺は隠し持っていた籐とうの鞭を差し出した。

「私を止めたければ、ソレで私を打ちすえなさい。女王の様に」

「そんな！ で、出来ません」

「では、私は止まりませんか？ 本当に私を思つて止めたいと思うのなら、打ちすえな

さい！」

鞭を口元に、俺はニツコリと笑いかける。親衛隊は茫然自失に鞭を見ていた。

引き攣ひきこつた顔で木村がコチラを見てくるが、アイツは好奇心を止められない。そういうヤツだ。

俺を鞭打ち、泣かせてみたい。

みんな本当はそう思つてるんだろ？ 女王に鞭打たれる俺を見て、何だかんだオマエ
らも楽しんでいただろう???

俺が良いと言っているんだ、欲望を解放して見せると、俺は迫つた。

「あ、う……」

堪えきれず、親衛隊が鞭に手を伸ばす。その瞬間に囁いた。

「それも、一度や二度では止まりませんか？ 親衛隊五十人で代わる代わる、夜も昼も無

く私を打ちすえなさい。そうしなければ諦めませんかよ？」

「そ、そんな、出来ません」

親衛隊の男は。パツと鞭を落としてしまう。ふざけるよ。

ちよつとしたSMプレイなんてのは許さない。殺す気で、死ぬ寸前まで、ズタボロのボロ雑巾になるまで追い込んでみせろ。それぐらいの覚悟もなく、俺を止めるのか？

俺は鞭を拾い、親衛隊の男に握らせて、耳元で囁く。

「良いのですか？ 私はとても甘い声で鳴きますよ？」

「あ、う」

親衛隊の男は顔を真っ赤に、二の句が継げなくなってしまう。渡された鞭を握り締め、手がプルプル震えている。

もう一押ししてやろう。

「打ちますか？」

俺は跪いて背中を見せつける。ナース服のボタンを外し、はだけさせると、うなじから背中まで丸見えになった。

鏡で見た俺は知っている。うなじと鞭の傷跡が生々しい背中 of 破壊力を。

さあ、鞭を打て、打ってみろ！

しかし、幾ら待っても衝撃は来ない。

不思議に思つて振り向けば、既に男の脳はオーバーヒートして壊れかけていた。顔は

赤く、目はグルグルと焦点が定まらない。とても鞭が打てる精神状態ではないだろう。白けた俺はナース服を着直して、男の耳元で囁いた。

「いくじなし」

「あつー！ うっ」

なじってやれば、男は堪りかねて呻きをあげる。股間はこれ以上なく膨らんでいた。才能あり過ぎだろ。正直あきれてしまう。

俺までDSに目覚めそうだわ。こんな変態の巣窟には居られないと踵を返す。

「じゃあ、さよなら」

艶やかに、それだけ言い残してクールに去った。

……つもりだったのに、凄いい形相で追いかけてきた木村に掴まった。首根っこを掴まれ、オーズド伯が居なくなった司令部に引き摺り込まれる。

え？ 木村サン？ まさかレイプか？ 俺はイヤンと体をくねらせる。

『え？ 何？ 襲おうつての？ このタイミングで？』

『ンだよアレ!!? どこで覚えてくんのか？ 無闇に兵士を刺激するのは止めてくれよ』

しかし、真面目に怒っている。締め上げられた首が苦しい。

『いや、誤解だつて』

『マジで皆で鞭を打たれたらどうすんだよ？ 死ぬでしよ普通に』

『まあ、打たないでしょ。言いくるめる自信は有ったって』
『なんでよ?』

怪訝な顔をする木村だが、なにせ俺は刺激的なセリフのラインナップには自信がある。

『ソレに関しちやお前の商売と同じ、知識チートってヤツだな』

オマエが料理のラインナップを誇っているのと一緒だ。

そう言っても、木村は困惑するばかり。

『お忘れか? 俺には何十本にも及ぶエロゲーの知識があるんだぜ?』

『思いつきで、陵辱エロゲーのセリフを試すな!!』

なんか、怒られた。解せぬ。

一騎打ち

前回までのあらすじ、エロゲーを参考にするユマ姫で戦場が危ない。

ユマ^{コイツ}姫はそれで良いかも知れないが、エロゲーのセリフで挑発される方は堪ったものじゃない。どうにか釘は刺しておきたい。

「コツチも悪徳商人らしく、姫の体を弄んでも良いんだけど？」

苛立つてそう言えば、ユマ姫は妖艶に笑った。

「意気地無く、あの日一緒に死んでくれなかったアナタが、私にソレを言うのですか？」
なんなんだよマジでさー。コレで本人は知識チートのつもりなんだから端的に言うって地獄だろ。

童貞どころか、全てを無差別に殺す致死チート。それを言うと、本人は白けた顔をして口を尖らせた。何故だか拗ねているらしい。

俺はビキビキと痙攣する額の血管を自覚した。

「さっきの、親衛隊五十人で夜も昼も無く鞭を打ってさ、挑発するにしても、マジでやられたらどうすんの？」

あり得ない、とは言い切れないからね？ 鞭を打たれるユマ姫を思い出し、皆が茹だ

るほどに興奮していた。恐れ多い、しかし、だからこそ、灼ける程に惹かれていた。

それでも彼らがユマ姫を鞭打つ事が出来なかつたのは、恐らくユマ姫を案じてではない。

もしも守るべきユマ姫を傷つけてしまえば、騎士としての彼らの根っこが崩れてしまうからだ。

規律や倫理を捨ててしまえば、騎士など野盗と変わらない。ただの一瞬で、世界の全てが反転してしまう。それをハッキリと自覚したに違いないのだ。

それほどにユマ姫の狂気は破滅を予感させ、それでも危うい程の美しさが欲望を刺激する。

そんな均衡が崩れたら、何が起こるか解らない。

だと言うのに、ユマ姫は挑発するように目を細めた。

「心配してくれるのですか?」

「ココまで来て、味方に殺される気ですか? 今までの備え全てを無駄にして、一銭の得にもならない」

あくまでお姫様として振る舞うなら、俺もお抱え商人に徹しよう。

そんな気持ちをあざ笑う様に、ユマ姫は笑顔だ。

「敵に殺されてやるよりは、味方に殺されてあげた方がずっと良いでしょう?」

「なんでそうなるの?」

一瞬でお抱え商人の仮面は破壊された。意味が解らない。

頭を抱える俺だが、一方でユマ姫も困惑していた。キョトンとした『高橋敬一』の顔で俺に尋ねる。

『ん? でもさ、正直さ、俺みたいな可愛い女の子を苛めてみたくならない?』

『ならんけど?』

『ええ?』

『いや、俺以外は解らんけどね』

……言い返しつつも、100%否定し難い部分はあった。言い淀む俺にユマ姫は口の端を吊り上げる。

『ほんとか?』 皆、俺が鞭で打たれる様を、固唾を飲んで見てたじゃないか』

『そりゃ……』

お前があんまり色っぽく鳴くからじゃない? とは言い辛い。口ごもる内に話は続いた。

『俺、ちょっと安心したんだよね。女の子が痛い目にあって喜ぶのって俺だけなのかなって不安がさ』

『いや? それはどうなの?』

『まあ、んな訳ないんだけどさ、いや皆もやっぱ好きなんだなって』

ウンウンと頷きながらチラリとコチラを見てくるが、あいにく俺にそんな趣味は無い……ハズ。

なのにコイツは狂気が宿る瞳でジッと見て来る。

『夜な夜な鞭を打たれたトコが痛んでさ、のたうち回る自分を鏡で見たら、思いの外エロいじゃん?』

『確かに、ベッドで悲鳴をあげてるのはエロかったかも』

『だろ? 男つてのは嫌がる女の子を暴力で組みしだいて、泣かせたい生き物なんだよ』
『流石に特殊な性癖じゃね?』

『違うね、戦争なんて何時だってそんなモノだろ?』

『……………』

……なるほどな、それがコイツの狙いか。良く見ればユマ姫の額には珠の汗が浮かんでる。

きつと鞭の傷が痛むのだ。それでも戦場から引つ込もうとしない理由は何か?

『まさか、敵を釣り出そうつての?』

『まあ、エルフのお姫様が敵陣で待ってるんだ。誰だつて制圧して陵辱したいと思うだろうが』

……コイツマジでエロゲー脳じゃん。

『敵の士気が上がるだけじゃねーか!』

『でもさ、このままじゃ橋を挟んで膠着しょうちやくするだろ? 銃を構えた敵陣に真っ直ぐ突っ込

んで行くのかよ?』

『まー確かにしんどい』

痛い所を突かれた。当初は装甲車を盾に橋を渡るつもりだったが、大砲でひっくり返されればどん詰まって良いのだ。

『そう言う意味じゃ、結果的には俺が使者を殺したのも悪くなかったかもな。少なくとも引き込んだ敵は倒すことが出来たじゃん?』

『調子に乗りすぎだろ!』

『そうは言っても、俺には時間が無いからさ、早く決めたい』

『無理じゃね?』

この世界、大国と言えるのは王国と帝国だけだ。

エルフの国が緩衝体となっていたのを差し引いても、二つの大国が長年共存している理由は幾つかある。

第一にフィーナス川。コイツに遮られて補給がままならない。

第二に魔獣の脅威。冬が近づけば恐鳥リコイの大群が北の大森林から飛来する。恐鳥リコイに

とつてみれば、隊列を組む人間などエサだ。

……いや、エサだった。

『今は無理じゃないだろ?』

『……そうだな』

認めざるを得ない。恐鳥リコイは一昨年、猛烈に数を減らした。加えて今の人類には銃がある。

『更に言うと、帝国はゼスリード平原に農地を作ってるぜ?』

『どこでそれを?』

『空から見えた』

……そうかよ。その情報は司令部も掴んでいる。堂々とやってるのだから当然だ。

恐鳥リコイの脅威がなくなれば、ゼスリード平原は肥沃な平地に他ならない。平原を巨大な農地にしてしまえば、補給の問題だけでなく、農民を秋の収穫シーズンギリギリまで徴兵出来る。戦場と農地がスグそばだからだ。

帝国はコチラに深く切り込む準備が出来ている。

だからこそ、捕虜交換から停戦など不可能と俺も思っていたのだ。ユマ姫は美しい顔に似合わない獰猛な笑みを浮かべる。

『逆に考えようぜ? ゼスリード平原さえ落とせば、食料の心配なく帝都まで攻められ

るだろう?』

『どうやって無傷で手に入れるんだよ? ゲイル大橋の前で裸踊りでもしてみせるつて
のか?』

『馬鹿かよ。お前、裸踊りするお姫様に萌えるワケ?』

『萌えるとか萌えないって以前の問題じゃね?』

『じゃあ、いつそ、お前が敵の前で俺に鞭を打ってみるか?』

ユマ姫が獰猛に笑って挑発するが……何だか話がしつこい。

『え? そんなに鞭で打たれたいの? マゾなの?』

『……………』

ユマ姫は黙って下を向く。え? マジでマゾなの? 鞭で打たれるのが癖になった

感じ?

『いや、違うんだ。ただただ、痒いんだよ』

ユマ姫は辛そうにそう言った。

「あー」

そう言えば、傷跡が炎症を起こして痒くなるらしいね。

ユマ姫は居住まいを正して、お姫様らしくスカートの裾を握る。

「痒すぎて強く引っ掻いたり、熱湯を掛けると気持ちが良いのです、いつそアナタに鞭で

叩かれた方がスッキリするのではないかと思うほどに」

漂う甘い体臭とユマ姫を鞭打つ大義名分に、クラリと脳が蕩ける感覚。しかし、コレに飲まれてはいけない。

「でしたら、患部を見せて貰っても良いですか？」

「わかりました」

ユマ姫は惜しげもなく背中を向けて、髪を纏めて前にもってくる。

白いうなじがそそるが、煩惱を振り払い上着をめくる。

「どうですか？」

肩を抱える様に前を隠して、恥ずかしそうに聞いてくる。

……そう言うの止めて欲しい、エロイから。

しかし、傷跡は結構グロかった。かなりケロイド化している。これでは痒いワケだ。

「これは、治るのですか？」

「一生治らなかつたとして、私の一生があとどのぐらいあるのかも解りません」

「そう言われると……」

「なんなら、今すぐ回復魔法を試しても良いですか？ 私なら魔法が使えますよ？」

「うーん、止めておきましょう」

回復魔法で治して貰って傷跡はメイクで誤魔化す手もあるが、それはユマ姫を戦場に

野放しにするのも同義だ。ユマ姫が元気になったらグライダーで空から帝国陣地を狙いかねない。

せつかく勝手に使者を殺した責任で、傷を治さないと約束させたのだ。モノにした千載一遇のチャンス。台無しにする手は無い。

炎症を止める薬を塗っておく程度にした方が良さだろう。

俺は持ち歩いてる常備薬をタップリ掬って、小さなユマ姫の背中にそつと塗りつけた。

「あんっー！」

「……………」

変な声を出すの止めて欲しいのだが、ユマ姫は体をよじって懇願してきた。

「そのまま掻いてくれませんか？　あまりに辛くて」

「わかりました」

で、仕方無く、優しく掻いてあげるのだが。

「んっー！　アッー！」

『やたらと悩ましい声出すの止めろ!!』

堪らず日本語で叫んでしまった。コイツ、嫌がらせか？

『いや、ホントに声出るから、異常に気持ちが良い。痒みが凄い』

『掻くの止めて良い？』

「そんな、体が切ないのでお願いします」

「ええ？」

マジなトーンでお姫様スタイルも厭わず、本気で懇願されてしまった。

で、ちよつと強めに掻き掻きするのだが。

「んっ！ ああっ！ もつと激しく！」

「……………」

「あつ！ ああつ！ ソコツもつと！」

「ギブアーツプ！ シヤリアちゃん！ 助けて！」

「姫様、私が代わります」

「お、お願い」

やだ、この娘ホントに居た！ ずっと影から観察してたに違いない。凄く自然にヌルリと現れた。

そんなシヤリアちゃんがすれ違いざま、俺の耳元で囁いた。

「いくじなし」

クソツ！ お前もか！ 苛められてるの俺じゃねーか！

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

それから数日、案の定だが膠着状態が続いてしまう。

橋を渡ろうとすれば銃の良的。橋以外からノロノロと渡河すれば絶好の良的だった。

これでは埒が明かない。

銃が出る前、弓矢の時代からもそんな傾向はあったようで、それを打開してマトモに平原で戦う為に生み出された作法があった。

「一騎打ちをしようなどと、奴らはふざけてるのか!」

帝国からの矢文に、オーズド伯は激昂する。

それもその筈、去年の戦争で名乗り出たコチラの騎士を、一方的に撃ち殺したのが帝国だった。現場で目の当たりにしたオーズド伯が怒るのは当然。

しかし、このまま膠着が続くなら農地が近い彼らの方が有利になる。

俺はオーズド伯をジツと見つめる。

「乗ってみても良いのでは無いですか?」

「なぜだ? 優秀な兵士を失うだけだぞ? 今回も銃で殺されてみる。今だって飛び出そうとする兵士を宥めるのに苦労しているのだ!」

しかし、去年は魔女に近い人物が指揮していたと思われる軍隊だった。開戦の使者もまともに出さず、異様な兵器の博覧会の様な戦場だったと言う。

今回、テムザン將軍は少なくとも形式や作法は守る人物だ。

一騎打ち。やるとしたら誰が出るべきか？

こう言う時こそ田中の出番なのだが、アイツは魔獣退治にかかり切りだ。

今回、エルフから多くの協力を得られているのも、アイツの頑張りが大きい。アイツはエルフの英雄扱いを受けている。それに多くの戦士を失ったエルフは、慢性的に戦力が不足している。余裕があれば駆けつけると言っていたが期待は出来ない。

だが、田中に頼らずともコチラにだって腕自慢は少なくない。なにより、親衛隊は防弾マントを着ているのだ。

「どうやら、私の出番が回ってきたようですね」

「ゼクトールさん！」

一騎打ちと聞いて司令部に入ってきたのは、ユマ姫親衛隊、隊長であるゼクトールさん。元々は第二王子の近衛兵長だっただけに、王国随一の槍の使い手である。

「僕にもやらせて下さい！」

「マールロウ君！」

エルフの戦士である彼は、王国の秘宝である双聖剣ファルフアリツサの使い手だ。エルフは魔力が薄い戦場では長時間戦えないと言うが、こう言った一騎打ちならこれ以上頼もしい戦力は無い。

俺はオーズド伯に向き直る。

「彼らが出る分には構わないでしょう？ オーズド伯の兵は傷つきません」
「そういうわけにもいかんだろう、ネルダリアにも優れた騎士は大勢居る。帝国は三人を一人ずつ出す形式がご指名だ、ウチからも一人出そう」
そうして、橋での一騎打ちが決定したのだった。

一騎打ち2

長大な石橋を挟んで睨み合う帝国と王国。兵達の熱気は夏の暑さを上回り、人いきりは立ちこめていた夏草の芳香を打ち消した。

橋の上には両軍の英雄。無数の軍旗が川辺で翻り、兵士達は声を嗄らして檄を飛ばす。

いよいよ、両国の代表者三人ずつ、勝ち抜き形式での一騎打ちが始まろうとしていた。そんな光景を見て、名将テムザン將軍は屋形テントで息を吐く。

「茶番だの」

勇ましい兵達と裏腹に、老将の口から出たのは気炎ではなく愚痴だった。

一騎打ちなど、テムザンにとっても全くの予定外。

そうは言っても、この光景は二国間の戦争では長年お馴染みとなっている。戦争がこうして、ある種のスポーツとなつて久しい。言わば、何百年も続く腐れ縁。

だがテムザンにしてみれば、そんな関係を終わりにするつもりの開戦だっただけに、忸怩たる思いでこの光景を見つめていた。

気の抜けた老将のひと言に、参謀の一人が眉を顰める。

「ならば何故？　一騎打ちなど？」

「だって、埒が明かないんじゃないもの」

テムザンの回答はシンプルだった。拗ねた様子で髭を撫でる。

そもそも、橋を挟んだ地形は銃を揃える帝国に有利。去年は橋に殺到した王国兵を鳴撃ちに行っている。

だからこそ、相手が後退した際もあえて本陣は向こう岸まで移動させなかったのだ。

しかし、開戦時こそ良かったものの、敵はどこからか大量の銃と、馬も無く走る固い馬車までも調達してきた。強烈な威力を誇る爆薬もだ。

こうなれば、他の隠し球だってあるかも知れぬ。

現に大砲と大量の銃で占領した砦は、アツサリと奪還されてしまった。様子見で正解だったとテムザンは思う。

射程兵器と展開速度が合わさり、もはやどこからも渡河が出来なくなった。なにしろ火薬は湿気に弱い、無理な渡河など論外だった。

それは王国側として同じ事。帝国が誇る圧倒的な量の鉄砲隊と大砲が、無謀な渡河を許さない。

「このままでは、攻めた方ばかりが損をするじゃろ？」

「では、敵を引き込んでから勝負を決すと言うのは？」

「乗ってこんじゃろうな、盛り返した時点で捕虜交換を持ちかける相手じゃぞ？ 好戦的とは言えんわな」

「ならば、多少の犠牲を覚悟してでも押し切るべきでは？」

参謀が提案したのは、農奴を死兵として送り込み、使い潰す戦略だ。

参謀の男がこうも前のめりに献策するのには理由があった。テムザンはここ数日、部屋に籠もりきりで作戦会議にも顔を出さない。帝国中枢から派遣され、最近になって戦場へ到着した彼は、なによりアピールの機会を欲していた。

その鼻息に、テムザンは鼻白む。

「多少で済めば良いがお？」

馬鹿にしたようなテムザンの言葉に、今度は参謀が青筋を浮かべる。

参謀に言わせれば、農奴など戦場で使い潰すモノ。大つぴらには言わないが、むしろ農奴の口減らしに戦争を仕掛ける事すらあるのだから、この世界ではありふれた考え方である。

しかし、テムザンは戦争が変わったことの本質を正しく理解していた。

すなわち、質より量。銃は引き金を引けば真つ直ぐ飛ぶし、弾速が速く偏差射撃も不要なので、弓のような長い訓練を必要としない。なにより、従来の武器より遙かに強力だ。

恐るべき事に、テムザンは銃撃戦における逐次投入の愚かさを、直感的に理解していた。

地球人にとっては常識でも、精強な騎士団が数倍の農兵を蹴散らすこの世界では、並外れた戦術センスと言うべきだろう。

だからこそ、攻め手が橋しか無いこの地形は最悪だった。

「ですが、一騎打ちに勝ったとして、何か変わる訳では無いでしょう？」

しかし、苛立つ参謀のこの言葉こそ、まさしく居並ぶ参謀や文官達の共通の思いだった。

これまでは一騎打ちで勝った陣営が、意気揚々と相手の領土へと乗り込んで行くのが通例。

だが、今回ばかりは勝ったとしても、鉄砲隊が待ち受ける対岸に乗り込んでいけるのか？

へつぴり腰で撃ったとしても、銃の威力は変わらない。生身の人間を斬りつける罪悪感が消えた戦場は、以前ほどに士気は重要で無いのだ。

だと言うのに、その疑問をテムザンは投げやりな言葉ではぐらかす。

「何も変わらんかもしれないが、何か変わるかもしれないじゃろ？ ほれほれ、試合がはじまるぞい。退屈な戦場じゃ、せめて皆で楽しもうではないか」

「なにをー」

命懸けの決闘を試合とは、いよいよ参謀が怒りに顔を紅潮させた。

「ッ！」

しかし、すぐさま言葉を失う。向けられたテムザンの眼光が余りにも冷たかったからだ。実際、テムザンはこのまま男が喋り続けるならば、処分するつもりでいた。

噂と違い好々爺然とした姿を見せるテムザンだが、やはりこの目こそが本性なのだ。瞬時に男は理解した。

冷や汗を垂れ流す参謀が見つめる先、いよいよ一騎打ちが始まろうとしていた。

黙った参謀の代わりに、侍従の男が尋ねる。

「伝統の一騎打ちですが、今回は三人での勝ち抜き戦としたのはどうしてですか？」
見つめる先には帝国側が用意した三人の男達。

まさしく、一騎打ちが試合の様になってしまった理由であった。

「はあー、大人の世界には色々あるんじゃないよ」

ため息混じりにテムザンが先方の大男を指差す。

「例えばアレは魔女の推薦じゃ、ゴリ押しとも言おうの」

身の丈二メートルは達しようかという大男は、魔女に連れて来られたと言うのも納得の異様な雰囲気を感じていた。

一方で王国側はどうか？

「相手は森に棲む者の小僧か、同盟と言うだけあって、相手にも色々あるようじゃの」
望遠鏡で覗いた先、テムザンには橋の向こうから走ってくるマールロウが見えていた。

「初戦が色物対決とはのう」

「色物ですか？」

侍従が不思議がったのは、魔女が推薦した大男は屈強な戦士に見える事。どこにも色物要素は無いからだ。長大なランスを徒で扱うのは異色だが、アレだけの体格なら納得もいく。

「じゃが、アレは騎士では無い」

「では、どこかの傭兵でしょうか？」

「違うの、恐らくアレはもう、自分がナニかも解つとらん」

「??」

侍従の男は首を傾げるが、テムザンの言葉はそのままの意味だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

橋の上、マールロウの姿を認めた大男は、それまでのゆったりした動きが嘘の様に、途轍もない速度で突進した。

「オ、オオオオオ!!」

獣染みた方向が響く。いや、男は正に獣だった。

男はロクに話す事すら出来ない。筋力増強剤の投与により手に入れた肥大化した筋肉と引き換えに、男は正気を失っていた。

鎧に見えるのは男の新たな皮膚だ。肥大化した筋肉がそれまでの表皮を突き破り、代わりに金属片を貼り付けている。

絶え間ない苦痛を麻薬で押さえ込み、失った精神は洗脳で上書きした。

そうして手に入れた膂力は、常識を遙かに超える暴威を誇る。

「グオオオオ!!」

馬よりも尚速く、身の丈が二メートルを超える筋肉の塊がランスを構えて突進する。

人の身でコレを止める術など存在しない。

——シュルン。

だから、マーロウは止めようとしなかった。鋭い突き込みをヒラリと躲すと、そのまま橋の欄干に着地する。

——カラン。

同時に響いたのは、バラバラに斬り裂かれたランスが橋に落ちる音。

——ドチャリ!

そして、男の両腕が落ちる湿った音だ。

「つまねーの」

双聖劍ファルフアリツサの切れ味は魔劍の中でも群を抜いている。マーロウには手応えすらもなかつた筈だ。

欄干から橋上に降り立ったマーロウは、速やかにトドメを刺すべく、大男の前に進み出る。

「オ、オ、オ、オ、オオオオ」

「ぐあつー」

そこに強烈な蹴りが突き刺さった。大男が蹴ったのだ。

切り落とされたのは両腕。足は無事。だから蹴れる。

当然に思うなら、あまりに人体を馬鹿にしている。両腕を切断されて、即座に蹴りをくり出せる人間など正気では無い。

しかし、男はまさしく正気では無かつたのだ。失った両腕のバランスすら考慮しない不格好な蹴り。蹴った方も一緒に転がる無様な蹴り。

「ガッ、ハア！」

しかし、それでもマーロウは肋骨が折れる程の怪我を負った。男の脚力は常識の外にあつたからだ。

そして、男は殺戮の本能だけで生かされている存在だ。

「グアアガアア!!」

声にならない咆哮と共に立ち上がり、真っ直ぐにマーロウへと突っ込んでいく。

——シユルン。

そこに再び、ファルファリツサが金属を引き裂く音がした。マーロウは慮外の攻撃で這いつくばりながらも、剣の冴えにはいささかも曇りが無かった。

——ベチャ。

今度こそ男の首が飛び、胴体は輪切りになった。しかし、飛び込んで来た肉の質量は減衰なしにマーロウへとぶつかった。

「グベツ！ い、痛え！」

再び橋上を転がり、全身を返り血に汚しながら、それでもなんとか立ち上がろうとするマーロウは、眼前に恐るべきモノを見てしまう。

ソレは何か？ 今まさに突き込まれる槍だった。

——ギイン！

マーロウの顔面に槍が突き刺さる直前、割り込んだもう一本の槍が弾いた。

「邪魔をするな！ 神聖な一騎打ちだぞ！」

叫んだのはマーロウへ突き込んだ老騎士。帝国側の次鋒だった。

「名乗りを上げてから戦うのが一騎打ちでしょう」

マーロウを守ったのは王国側の次鋒。訳も解らずマーロウはその男を見上げる。

「あ、あんたは？」

「ゼクトールだ。一戦目は両者相討ち、それで良いですね？」

マーロウを救ったのは、ゼクトール。今でこそユマ姫親衛隊などと言う、ふざけた職に就いてしまっているが、彼は元々王族を守る近衛兵として知らぬ者は居ない存在なのだ。

今回も大将として出る予定だったのだが、ユマ姫と同族であるマーロウのピンチに、堪らず割って入った格好だ。

一方でマーロウは人間の戦士など、モノの数にも無いと名前すら把握していなかった。

当然の様に一人で三人を片付ける腹づもり。しかし、もはや肋骨の痛みは強く。立ち上がるのも難儀する有様。次鋒のゼクトールに託す他ないと歯噛みする。

「す、すいません、お願いします」

「あなたもそれで良いですね？ タリオン殿」

「フン、森に棲む者を庇うなど落ちたなゼクトール」

答えたのは、帝国側の次鋒。五十過ぎの老騎士だった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「何故、タリオン伯の暴走を止めなかったのです」

恐怖から息を吹き返した参謀が不満を口にしても、テムザンはどこ吹く風だ。

「止められなかったのよ。止むなしじやな、愛娘を殺され、自慢の騎士達を捕虜に取られた状況ではな」

「しかし、タリオン伯は今年で五十二、死に行かせるようなモノでは？」

「そうとも限らんじやろ、あやつも若い頃は帝国一の騎士として名を馳せておったのじゃぞ？」

「何年前のお話ですか!？」

参謀は悲鳴をあげるが、テムザンは掛け値無しの本音であった。

「あやつは儂と違って地道な訓練を怠っておらん。それどころか長年研ぎ澄まされた技は円熟の域に達しておるぞ」

言葉の通り、指差す先では王国最強とも名高いゼクトールと互角に渡り合う老騎士の姿があった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「フツ、ハッ！」

正確に無駄の無い動きで突き込まれる槍に、ゼクトールは攻め込む機会を見出せずに居た。

身長が190センチ弱もあるゼクトールは、王国では田中に次ぐ身長を誇る。リーチも当然、老騎士を大きく上回っていた。

そんな王国随一の体格を誇る近衛兵が、一回りは小さい老兵に苦戦する光景は異様のひと言。それもこれも、タリオンの隙の無い技のキレがもたらすもの。

「元気なモノですな」

「フン、余裕腐りおって」

しかし、タリオン伯が言う通り、連撃を受けながらゼクトールにはまだまだ余裕があった。攻め手が無くとも、若さに勝るゼクトールに体力勝負は望む所だ。

それに、攻めて勝とうとすれば、どうしても攻めに転ずる瞬間に隙を曝す事になる。守って勝てる程度の相手であれば、それこそが最も安全に勝つ方法となる。

だが油断という言葉は、安全に勝とうとする、その瞬間にこそ忍び込む。

「フツ、ハッ！」

無駄は無くとも基本通りの突き込み。ゼクトールにとって捌くに容易い攻撃であったのだが……。

「フツ、ハッ、フツ、ハッ！」

同じに見えて、そのリズムは不協和音の様に少しずつズレを作り出していた。

そしてリズムが生まれれば、そこには決して見切れぬ意識の間隙が発生する。

「シャッ！」

異質な掛け声と共に、老兵が作り出した隙間こそがソレだった。

隠し続けた一突きが、ゼクトールの鉄壁の守りを魔法の様にするりと抜けた。

……だが。

「良い突きでした」

ゼクトールにダメージは無い。

言うまでも無く、タネは蜘蛛の糸で編み込んだエルフ製のマント。こちらは真正正銘の魔法と言える。

銃弾すらも防いでみせるマントの前では、老兵渾身の突き込みでも、穴一つ開けられはしなかった。

「ご無礼！」

「グハッ！」

お返しとばかり返した一撃は、老騎士が着る昔ながらの薄い鉄鎧を貫いた。矢なら兎も角、ゼクトールの様な大男が繰り出す突きの前には、鉄鎧など紙も同然。

「ぐう、殺すが良い。我が一族が地獄で呪い殺してくれる」

「死ぬかどうかはご自分で決めて頂きましょう」

ゼクトールは槍に老騎士を引っ掛けたまま、全力で槍を振り抜いた。

「なにを？　ぐおおおお！」

何という力業。振り回された老騎士は、橋の下へと落とされ水音が響く。

元々、欄干の近くで戦っていた二人。体格差があればこそその離れ業だが、言うまでも無く、ゼクトールの強力ちゆうりきがあつてこそだ。

「生きるか死ぬかはご自分で選んで頂きましょう」

ゼクトールは呟く。

逃すような真似をしたのはマールロウを助けに割つて入った罪悪感と、ロアンヌの領主であるタリオンを生かしておいた方が今後都合が良いとの計算だ。

見捨てられた騎士達の扱いを考えれば、血気に逸り決闘に出て来たタリオンもまた、体の良い在庫処分に他ならない。

つまり、何だかんだこの戦い。ゼクトールには先の事を考える程の余裕があつた。

しかし、次はそうは行かない事をゼクトールは直感する。

「さて、次の相手は？　失礼ですが、お名前は？」

「ああ、俺はバーリアン・ローグウッド。よろしくな、ゼクトール」

「ほうー！」

ゼクトールが息を飲んだのは、ローグウッドの名前にソレだけの意味があるからだつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「あの若造は誰です?」

帝国陣で、参謀は再びテムザンに詰め寄った。

「ウチの騎士団の新入りじゃの」

「何故そんなヤツに大将を任せるのです!」

「そりゃ、強いんだもの」

テムザンの回答は今回もまた、シンプルだった。

「自慢の騎士団だったのじゃが、新入りのあやつより強いのは一人もおらん。ソレほどに強いのは、バーリアンは」

悪びれないテムザンの言葉。反応したのは侍従の男だった。

「バーリアン! まさか、バーリアン・ローグウッドですか?」

「さよう、知っておったか?」

「知ってるも何も、剣聖で知られるローグウッド家の鬼っ子ですよ。十歳で熊を倒したとか、十四で盗賊団を壊滅させたとか」

「それは違うの」

テムザンに否定され、侍従の男は面食らった。それぐらい広く知られた話だったのだ。

「壊滅したのは盗賊団じゃあない、騎士団じゃ」

「まさか！」

「本当じゃよ、正確には元騎士団じゃがな」

帝国領の端にあるスールーン。そこではかつて霧の悪魔ギユルドスの健康値取得実験が積極的に行われていた。

そのため流行り病が流行し、街は荒れ果て、人心は千々に乱れた。魔獣から民を守るべき騎士団は仕事を放棄して、それでも給金を要求して憚らなかつた。

そんな土地だからこそ、田中がマンティコアを退治する榮譽に預かれたのだが、一方で、仕事をしない騎士団を誅する役目を負ったのが、実家を勘当され宛ても無い旅を続けていた、当時十四歳のバーリアンであった。

「それにの、勘当されたと言うのも、ローグウッド卿でも手に負えない程強かつたから、放り出されたと言うのが本当じゃの」

「いや、その……嘘でしょう？」

ローグウッド家と言えば、一代で成り上がった武闘派。殆ど盗賊に毛が生えた様なモノだと貴族に揶揄される存在である。

「本当じゃ。殺人卿と恐れられ、一代で成り上がったローグウッド男爵すらも恐れた才能があやつじゃよ」

「おおっ！」

参謀や侍従達が色めき立つ。ソレほどのブランドがローグウツドの名前にはあった。だが、そのローグウツド男爵を殺した男が王国には居る。

「英雄タナカは出てこんか」

テムザンが望遠鏡で望むのは橋の先。オーズド伯肝いり騎士が大将として、煌びやかな鎧を誇っていた。

「残念じゃな、これ以上ない戦いが見られると思ったのじゃが」

コレは本心。騎士団に取り込んだモノの、バーリアンは上官に逆らうばかりで、テムザンにとつても扱いにくい存在だった。

それでも惜しいと思わせるだけの圧倒的な槍の腕前に、ようやつと使い道が見つかったのだ。

「それも、最強の槍が手に入ったタイミングでこの機会がやつて来おつた。銃などなければ、あやつだけで千の軍隊を相手取れたモノを。惜しい時代に生まれたモノじゃ」

テムザンは望遠鏡を臨む先、魔女から貰った穂先が輝く美しい槍を見て、唸るように息を吐いた。

魔剣、ならぬ魔槍。

一時は誰も使えぬガラクタに思われたが、バーリアンならばと魔女が送ってきた槍

だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
『マジイな……』

呟いたのはユマ姫、ココは対岸の王国側、装甲車中である。

身を乗り出して、双眼鏡でゼクトールの勇姿を観戦していたユマ姫は顔面を蒼白に染めていた。

『マジイって何が?』

日本語で呟くユマ姫に、日本語で返したのは木村。ふたりは隣同士に座ってヤンヤと観戦していたのだ。観戦用の双眼鏡を奪われ、木村は望遠鏡で戦いを見守っていた

『あの槍だよ。神槍アイフェル。まず、槍の魔剣つてのは唯一アレだけ。何故か解るか?』

『ん〜森で使いにくいから?』

『あ! それもあるかも』

ノリノリで解説しようと思ったのに、出鼻を挫かれユマ姫はションボリしてしまう。

『良いから続けてよ』

『うん。でさ、槍みたいなが長物だと、槍の穂先まで自分の腕の延長と感ずるのは難しいんだ』

『なるほどね、自分の健康値で保護出来ないから、敵の健康値で魔力が消されて機能しない……』

『そう、そもそも魔剣使いは小さい頃から同じ魔剣で訓練して、腕と錯覚する位に馴染ませるんだよ。そう言う意味で、いきなりフルファリツサが使えたマーロウだって立派な天才なんだ』

『ふーん』

たつた今、激戦を制して見せたエルフのイケメンの名前が出た事が、木村は何となく面白く無かった。

そんな事に気付かず、ユマ姫は話を続ける。

『んでさ、扱い辛い槍の魔剣をアイツは長くとも二年で使いこなしている。ソレだけでヤバいのよ』

実際は、バリアンはつい最近に魔槍を下賜されたばかり。ヤバいなんて言葉では収まりつかない鬼才であった。

とはいえ、木村には魔槍の怖さがピンと来ない。

『だけどさ、槍の戦いなんてそもそも先に刺さった方が勝ち。魔獣ならともかく、人間は槍の質量で刺されりや関係なく——』

『それがさ』

ユマ姫は戦いを見てられないと、目を瞑る。

『アイツが着てる鎧も、特別製なんだわ』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

槍を構えて向かい合っただけで、ゼクトールは相手が格上だと理解してしまった。

「ゼイツ！ やあー！」

だからこそ、今度は自分から打って出た。何度も突きを繰り返すが、全てを見切られ躲される。

相手が攻めてこないのは、さっきの自分と同じ理由。万が一を潰す為だと理解していた。

しかしバーリアンは若かった。実力を見切るや否や、ゼクトールの攻撃を倍の数で返していく。

「ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハアッ！」

とは言えその攻撃は速度重視、腰の入っていない軽い連撃だ。ましてやゼクトールには魔法のマントがある。これでは受けてもダメージは無いはずだ。だのにゼクトールは嫌な予感が拭えず、大きく飛び退き回避した。

それがゼクトールの命を救う事となる

ゼクトールのマントの前面には、しっかりと四つの穴が空いていた。

「なんだと?」

銃弾をも防ぐ魔法のマントが紙の如く。

驚愕するゼクトールに、つまらなそうにバーリアンが鼻を鳴らす。

「こりやあな、魔剣、いや魔槍つてヤツだ」

「そんなモノも存在するのか?」

「降参するなら、自分から川に飛び込みな。俺だつて弱い者虐めは好きじゃない」

「弱いかどうかは、コレから確かめて貰おうか」

「いいからさ、タナカつて剣士を出せよ」

不機嫌にバーリアンが言い放つ。彼も、父ローグウッドを殺した男に大変な興味を抱いていた。もちろん父の仇としてではない。

彼は槍使いとして完成した暁に、正々堂々と父を倒すつもりだったのだ。

剣などより、槍の方が何倍も強い。リーチこそが正義。実際、戦争となれば剣よりも槍こそが主役だ。

それを証明する一心で、槍を振るってきたと言つて良い。

そんな彼の新しい目標が父を殺した剣士、タナカだった。

しかし、田中は魔獣退治にフラフラしている。それにゼクトールにしてみれば、ユマ姫の思い人と噂される田中に対して思う所があった。

「あの人は、忙しいのでね。挑むなら、私の実力を見てからにして貰いましょう」
「ふん、じゃあお前を殺して引き摺り出してやるよ！」

今までの様子見とは異なる、バリーアンの腰の入った鋭い一撃が繰り出される。

魔槍でなくとも十分に致命傷となる一撃を、ゼクトールはヒラリと躲した。そして空中で槍の口金を弾いて隙を作りつつ、衝撃を利用して欄干の上へと着地する。

まるでマールロウが見せた一戦目の再現。ゼクトールは単調な突き込みを繰り返し、このチャンスを作り出したのだ。コレは二戦目でタリオンが見せた技の応用でもある。

ゼクトールもまた、王国では若い頃から天才の名を欲しいままにする槍の名手。四十を前に、その腕は超常の域に達している。この戦いの中でも成長を続けていた。

「ハアッ！」

欄干の上の不安定な姿勢、ソレでも相手は槍を突き出した後。曝け出された半身の胸は、横合いからは絶好の的。

——ギイン！

しかし、固い金属音で弾かれる。

「なっ?」

あり得ない手応え。胴に命中した穂先は僅かな傷もつけられなかった。

「わりいな、先が長いんでよ」

ゼクトールが作ったつもりの隙は、バーリアンが見せかけた罠だった。

彼が身に付けているのはカーボンの鎧の表面に特殊合金を貼り付けた特別製だ。カーボンは固いが割れる。銃弾や槍が相手では不安が残る防具だ。

魔獣の突進や斬撃を防ぐには有効だが、魔法の矢を放つテロリストを想定すれば、こうした鎧の必要性もエルフにはあつたのだ。勿論、数は多くない。

「あばよ」

会心の突きを防がれた後の隙。突き込まればもはや躲す術は無い。これもまた二戦目と同じ決着の仕方であるが、ひとつだけ大きく違う所があつた。

——バシャン！

水音が響く。欄干に立っていたゼクトールは、自分から川に飛び込んだのだ。

「ンだよ、偉そうに実力を見ろって言ってソレか」

つまらなそうに頭を掻いた。そこそこやる奴だと期待したが、結局命が惜しいだけの人間だった。川に飛び込む直後、ゼクトールがホツとした顔を浮かべた事に、バーリアンは内心落胆していた。

バーリアンは命など惜しいと想っていない。

なにせ、バーリアンは三人と言わず、このまま敵陣に突っ込み、殺せる限りの敵兵を殺すつもりでここに居る。

強者を求め、確固たる意志で殺戮を求める狂人。ある意味で、魔女の手下だった意識の無い狂人よりもよほど恐ろしい。強烈な意志に裏打ちされた殺意。

そう言う意味で、三人だけ相手をする覚悟だった他の者達とは、初めから見ているモノが違っていた。

敢えてゼクトールの勝ち筋をなぞって、余裕を見せつつ勝ってみせたのもソレが理由だ。

「オラ来いよー！」

だから、最後の騎士へ向けても無造作にそう言った。

「オッ！ おおおおおお！」

オーズド自慢の騎士である彼は、内心の怖気を振り払う様に叫び、突撃した。

そして、叫び声のままに会敵し、そのまますれ違う。

「なんだこりゃ？」

気が抜けた様にバーリアンが肩を竦める。

「一番最後に出て来たヤツが一番弱いつて何の冗談だ？」

頭部を失った胴体が、ベチャリと橋に倒れ伏す。

その瞬間、固唾呑んで戦いを見守っていた両軍は、初めて本当の意味でバーリアンの実力を正しく把握した。

天才ゼクトールが相手だからこそ、数合は保ったのだ。腕自慢の騎士が相手でも、まるで勝負にならない。時代さえ許せば、彼一人で国が滅びる程の超人なのだ。

言葉を失ったのは王国陣営だけではない。

帝国ですらも、大半の兵士は呆然としていた。固唾を飲んで見守ってきた一騎打ちが、帝国側の勝利に決まったというのにだ。

本来は勝ち鬨をあげ、敵陣へと雪崩れ込む所。しかし、誰も後に続こうとはしない。

「オラ、行くぞー！」

だから、バーリアンは単身でそのまま橋を渡る。敵が待つ対岸へ。

それは異様な光景だった。

数千の敵が待つ場所へ、たった一人で堂々と歩いてくる男がいる。

「ヒッ、ヒッ！」

パニックになったのは王国側だ。特に普段はネルダリアの農夫で、この戦いに徴兵された兵士達の混乱は顕著だった。アレほど頼もしいと思っていた銃が、オモチャのように感じてしまう。

銃の扱い方を根こそぎ忘れ、腰が抜けたままに後ずさる。

それだけならまだ良い。恐怖のあまり、バーリアンに向け、訳も解らず銃を構える兵士まで居た。何人も。

「あ、あああああああ！」

——パァン！

渴いた音がした。恐怖のあまり、ロクに狙いも定まらぬ銃弾だったのだが、それでも幾つかがバァリアンへと着弾する。

「痛えなあー！」

しかし、効かない！ ライフル並の威力を誇る魔法の矢ですら数発は耐える特別な鎧だ。有効射程外から撃たれた火縄銃など、豆鉄砲と変わらない。

「ヒッーば、バケモンだあー！」

彼らは、銃さえあれば騎士だろうとモノの数では無いと信じ込まされていた。

そうでなければ、突撃してくる騎士に対して、引きつけて銃を撃つのは、やはり怖い。

その洗脳を補強するように、鎧を着た罪人を撃たせた事もあったし、この戦いでも率先して大きな戦果をあげさせた。

だからこそ、銃が効かない相手を前に。一瞬でパニツクは広がった。

「今じゃー！」

そして、その光景に猛つたのはテムザンだった。勿論、帝国の一般兵もだ。

一騎打ちの勝者たる英雄に、無粋な銃弾をぶつけたのだ。去年は帝国がやった事だが、ここまで盛り上がった決闘を汚した罪はやはり重い。

「うおおおおおー！」

全軍で、雄叫びがあがった。空気がビリビリと震え、バラバラの軍勢が一匹の魔獣へと変ずる。

怒りはあらゆる恐怖を打ち消し、同時に相手へ恐怖を植え付ける。

銃弾が効かないのは、バーリアンだけでは無いかも知れない。

恐怖を忘れ突撃してくる騎士にそう思ってしまったえば、隊列は即座に瓦解するだろう。長大な橋、こう言う時は速度と突破力がある兵が望ましい。

「行くんじゃー！ お前達ー！」

テムザンが檄を飛ばしたのは、彼が持つ虎の子の騎士団の一つ、重装騎士隊だ。

僅か十騎だが、全員が特殊合金の鎧を着ている。カーボンと金属を組み合わせたバーリアンの鎧ほどでは無いが、マスケット銃が相手なら無類の強さを発揮する。

こちらの騎士には銃が効かないと言う印象を付ける狙い。

本来、敵の市街地を制圧するために取っておく予定の騎士達だったが、ここで切るべき最良のカードでもあった。

「おおおおおー！」

地鳴りの様な雄叫びと、馬たちが奏でる蹄の音が重奏する。

騎士達が一齐に橋へと殺到し、腹に響く低音は、大きな恐怖を王国の兵に植え付けた。

スツカリ逃げ腰になった兵を拡声器で鼓舞するオーズドだが、誰も銃を構えようとしていない。

敵の騎士が真つ直ぐ駆け込む絶好の好機に、誰も弾丸を発射しないのだ。

このまま辿り付かれれば、散々に蹂躪される。そうなれば、まるで去年の焼き直し。何も無い平原をひたすら追い回されるだろう。

前回その危機を救ったのはユマ姫であったが、助けを求めようにも彼女はノンビリと観戦に徹していた。

『アレ？ ヤバくね？』

双眼鏡を構え、変わらず呑気に戦いを見物してる。

一方で木村は苛立ちを隠せない。

『んだよ、あの鎧はよお！』

『エルフすごーい』

『死ねよマジ、あんなのあつたら無敵じゃねーか』

『それでも無いって、魔法の矢なら数発で死ぬよ』

『火縄銃で何発掛かるんだよ！』

木村は頭を抱える、あんな鎧があるとは聞いていなかった。金属とカーボンを組み合わせ、衝撃にも刺突にも無類の強さを誇っている。

『いや、でも結構重いよ？ 全身を守るなんて出来ない程度に』

『魔法の矢みたいに、誘導出来ねえから十分なんだよ』

それでもゼクトール達親衛隊は馬体を含め、全身を蜘蛛の糸のマントで防御出来ている。どちらも一長一短があると言う事。

しかし、急所への銃弾だけでも鎧で防げれば十分に強力だ。それが解っていないながら、エルフがそんな鎧を用意出来ないのは理由がある。

『ま、金属も勿論、鎧も貴重品だから数は揃わないよ』

『やっぱそうか』

『倉庫にも全く残っていないと思う、奴らは根こそぎ奪つただろうからな』

突然に、ユマ姫はゾツとするような声で囁き、敵陣を見つめた。やはり彼女の殺意は些かも鎮まって居ないのだ。

『そろそろ俺の出番かな』

ましてや勢いに任せ、そんな事を言うのだから木村は必死にユマ姫を止めた。

『いやいや、まだだから！ お前は陣地に戻ってろよ』

『ふうーん？ で、お前は どうするの？』

『俺？ 俺は、ちよつとやることがあるからさ』

そう言つて木村は愛用のスナイパーライフルを取り出した。ソレを見て、ユマ姫は二

ヤニヤと笑うのみ。

『ま、出番があるかは怪しいけどね』

『え？ どう言う意味よ？』

木村が尋ねれば、ユマ姫はそつと窓の外を指差した。そこには高速でこちらへ向かう砂煙が上がっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

バーリアンは重奏する蹄の音をバツクに、意気揚々と走り始めた。

散発的に銃弾は飛んでくるが、少しも怖くない。鎧の前では豆鉄砲の様なモノ。

それだけでなく、驚異的な動体視力を誇るバーリアンの目には、銃弾すらも見えていた。最低限、鎧に守られていない場所を防ぐ程度には。

遂に彼は橋を渡りきり、対岸にたどり着く。

彼の進路を妨害する者は、もう誰も居ない。

「よお、ゴキゲンじゃねえか」

いや、たった一人、居た。

異常な速度で走り込んだ漆黒の機体が、橋の出口に堂々とすべり込んだ。

「俺も混ぜろよ」

田中だった。

「テメエは？」

バーリアンにはハッキリと予感があった。それでも敢えて名前を聞いた。

「田中だ」

「お前が！ お前が親父を殺したんだな？」

「親父？ お前、名前は？」

「ローグウッド！ バーリアン・ローグウッドだ」

勘当同然で追い出された生家だが、この名前には誇りがあった。

「ああ、アイツか？ 殺ったぜ？ 悪いか？」

「悪かねえよ！ じゃあ兄を、テスト兄をやったのもお前だな？」

「テスト？ 誰だ？」

「スフィールの騎士団の団長だ！ 知らねえとは言わせねえ！」

バーリアンには唯一尊敬する従兄弟が居た。自分より先に家を飛び出したその従兄弟こそ、テスト。いや、スフィールの破戒騎士団のローグだった。

テストはローグウッドの名前を捨て、ただ『ローグ』と名乗っていた。

バーリアンが、まだほんの幼い頃の臆気な記憶だが、ローグにだけは自分と同レベルの才能を感じていた。

スフィールで騎士団に入り、混乱の中で死んだと言うが、あの従兄弟が生半可に死ぬ

ハズが無い。まして、事件に田中が絡んで居ると聞けば、バーリアンが犯人を確信するのは自明であった。

しかし、実際はローグはユマ姫に、正確にはユマ姫の『偶然』に殺されている。その実力は、マトモに戦えば、刀も持たない当時の田中では勝てなかつただろう。当時、地下室でローグと出会った田中は、相手の実力を正しく見抜き、戦慄している。

しかし、結局、立ち合つて居ないだけに、田中はスツカリ忘れていた。

「マジで知らねえよ」

「嘘つけ！ いや、お前を殺せば十分だ」

そんな事は知らないバーリアンは気色けしきばむ。唯一尊敬していた従兄弟が、名も覚えられて居なかつた事に激昂したのだ。

だからこそ、宣言する。

「俺の名は、バーリアン・ローグウッド。天国まで覚えておけよ」

「自信ねえな」

田中は気が抜けたまま、ふらりとした足取りで槍の間合いに踏み込んだ。

まだ剣を抜いてもいない。

「馬鹿かよー！」

その無造作な隙だらけの踏み込みに、苛立ちながらもバーリアンは完璧な突きを合わ

せる。

いや、合わせられた。

「もう一々覚えてらんねえんだよ、あんまり頭は良くねーからよ」

声が出た。どこからだ？

後ろからだ。何故だ？

バーリアンは慌てて振り返った。

「あつ」

自分の体が、視界が、世界の全てが、バラバラに崩れるのを自覚した。

それが彼の最期だった。

「百人ぐらいが俺の覚えてられる限界なんだわ」

——チン。

田中はどこで抜いたのか、静かに刀を納刀する。

特徴的な歩法で相手の間合いを狂わせ、すれ違いざまに勝負を決める。

彼の剣技は遠い異界の島国で、何百年もの時を経て、ひたすら人間同士の殺し合いを続けた時代の遺物だ。魔獣との戦闘ではなく対人戦だけに研ぎ澄まされた、彼らにとつては異質の剣だ。

突然変異で生まれた剣の天才の家系から、その天才すらも手を焼く、更に突然変異で

生まてしまった鬼才であつたとしても、狂気の歴史に裏打ちされた異界の剣術を見切る術などあるはずが無かつた。

「馬鹿はお前だよ、クソツッ！ 鎧の性能に溺れやがって」

更によれば、鎧など魔剣同士の戦いではただの重りだ。

まるで過去の自分を見せつけられた様で、田中は盛大に毒づいた。

今回、田中は甚平みたいな簡素な上着だけを纏つた姿。ユマ姫の父、エリプス王との死闘を越えて、速度こそが最も重要と剣士の本質を思い出したのだ。

一方で立派な鎧を着たバーリアンは、無防備な田中の姿にどこか油断をしていたに違いない。

「おおおおおおおー！」

勿論ソレは、後続に続く騎士達も同じだ。相手はたった一人、圧倒的な質量で踏み潰せば終わりと思つて疑わなかつた。

勢いに任せて、愚直なまでに突進する。

——??

だが、騎馬の群れは田中を踏み潰す事無く、全てが素通りしてしまふ。

「躲しおつたか！ 運が良い」

確実に踏み潰すコースであつたが、何の衝撃も無く通り過ぎてしまった。だが、稀に

そう言う事もある。

しかし、後続の馬全てが、か？ 天文学的な確率で？ 騎士達は顔を見合わせるが、そう言う事もあるかと納得するしかなかった。

手綱を引いて、毒づきながらも方向転換を試みる。

——ドチャリ。

そして、その姿勢のまま落馬した。

「なっ、え？」

軍馬の足が、ワイヤーカッターに飛び込んだようにスッパリと斬られていた。

違う、斬られていたのは馬の脚だけでは無い。人間の足も、田中の目線にぶら下がっていたモノは、全て、等しく、切断されていた。

「馬鹿、馬鹿なあああ！」

足を斬られた騎士達が、揃ってパニックを起こし這い回る地獄。ソレを見た田中は焦った様子で踵を返し、そのままの勢いで踏み荒らす。

「ヤベエヤベエ、バイクが壊れるトコだった。馬に踏み潰されちゃ堪らねえよ」

田中は人を殺しすぎて、既に何処か壊れていた。

ある意味ではユマ姫以上に。

「グッ、があああああ！」

騎士達の悲鳴が聞こえるが、田中はまるで気にしない。

血のカーペットを踏み荒らしバイクの元に戻った田中は、そのままバイクに跨がり、帝国に向け、堂々橋を渡っていく。倒れ伏す騎士を轢きながら。

そんな悍ましい光景を、呆然と眺めるテムザン将軍。川縁まで乗り出し、勝利の間を待っていたのだ。

「これほどの化け物とは……」

正に言葉が無い。虎の子の騎士団を壊滅させられ、ガックリと膝をつく。それがテムザンの命を救った。

——ピシユン

風切り音と共に、テムザンの後ろに控えていた参謀の頭部に弾丸がめり込んだ。

「なんだ？」

「銃撃？」

「將軍の御身を守れ！」

テムザンはこれでも人望がある。部下達が身を挺して射線を塞ぐ中、揉みくちやにされながらもテムザンは対岸を睨んだ。

信じられない距離。だが、確実にあそこから撃たれたのだ。

「貴様かああ!!」

対岸では銃を構える木村が居た。

しかし、テムザンは狂った様な笑顔を見せる。

「手が届くのが、自分だけだと思ふなよ」

それだけ呟き、揉みくちやにされながらもテムザンは撤退の指示を出していく。

息を吹き返した王国軍が、田中を先頭に突撃してくるのが見えたからだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「失敗か」

一方で対岸。スコープを見つめる木村は、あと一步の所で外したと地団駄を踏んでいた。

テムザンが前のめりに対岸のギリギリまで寄って来た、絶好の狙撃タイミング。田中に台無しにされてしまったと、内心で八つ当たり。

木村もまた、田中の剣技に見惚れ、数瞬反応が遅れてしまったのだ。

今回は諦めるしか無い。ライフルを片手に振り返った木村の前に。おかしな雰囲気
の兵士がいた。

装備は徴兵された一般兵と同じモノ。だけどどこか違和感がある。何というか農夫
の癖にできる雰囲気があるのだ。

無害に見えて、殺し慣れている。こんな奇妙な人間を木村はどこかで知っていた。一人の女性の顔がチラついた瞬間、躊躇無く拳銃を抜く。

——ギイン

ナイフが右手の拳銃を弾いた。左手に持つライフルには次弾を装填していない。銃を拾うより、男がナイフを投げける方がきつと速い。外れようのない距離。

詰み。木村の顔が歪んだ瞬間。

「油断し過ぎだよね」

思い描いた女性の声でした。

どこから？ 倒れ伏す男の向こうからだ。小型ボウガンを構えるシャルティアが姿を見せた。

うつ伏せに倒れた男の延髄には、深々とボルトが突き刺さっている。

「どうしてここに？」

木村が掠れた声でシャルティアに聞けば、ユマ姫に命じられたと答えがあった。

「嫌な予感がするからって、あの子の勘って嫌な予感だけは当たるわね」

肩を竦めるシャルティアだが、木村には更に別の嫌な予感があった。

何の為の一騎打ちか？ 全軍の目を橋に集めて、裏から暗殺者を送り込む為の策ではないのか？

「それで？ 姫は！」

「さあ？ 本陣へ帰ったみたいだけど？」

「チツ！」

舌打ちをひとつ、木村は装甲車を全開で走らせる。シャフトの歪みで速度が出ないのが恨めしい。

オーズドには何も言わずに出てしまった。今頃は田中の後に続いて帝国を追っているだろう、進撃する兵の流れに逆らって、木村は自陣へととって返す。

ユマ姫は親衛隊に護衛されながら、例の白馬に乗って帰還した。

しかし、どうにも嫌な予感がする。

その予感を裏打ちするように、伝令の騎馬が平原の向こうから大急ぎで駆けてくる。

「何があった！」

柄にも無く、精一杯の大声で尋ねれば、最悪の言葉が返る。

「捕虜が脱走！ ユマ姫が誘拐されました！」

馬「やだ、この娘怖い！」

さて、田中がやって来たなら、全部アイツ任せで良いだろう。

律儀にアイツの戦いを見守ろうものなら、脳の血管がプチツと弾ける。最近では折角のエルフの鎧すら脱ぎ捨てて「身軽になった」とか言い始めるキ印だ。

あんな馬鹿な真似をしてりやあ、いつかポツクリ死んでしまうに違いない。でも、まあ、もう良いよな。

アイツも、俺も、人を殺し過ぎた。

『偶然』に巻き込まってしまったアイツの仇討ちだって転生した俺だけど、今のアイツに俺が責任を感じるのも変な話だ。

つてか、ずっと見てると心臓がキュンキュンしてくる。強制的な吊り橋効果、狙ってやっているとしたらアイツは俺を惚れさせたいに違いない。

ピンチの時だけ現れて、アイツが現れる度にドキドキしてるから、パブロフの犬みたいに見るだけで緊張するようになってしまった。

全く忌々しい。視界に入れるのも照れくさい。

なので、田中が戦い始める前に俺は前線を離脱。今日も元気に捕虜をからかってやる

うと本陣への道をとって返した。

護衛にはユマ姫親衛隊のメンバーが二人。親衛隊と言いつつ、俺が敵陣に一人で突っ込まないかの監視役だ。全く洒落臭い。俺は親衛隊を横目に、ミニエールが乗って来た白馬に跨がる。

この白馬、俺を乗せたまま暴走して、俺を恨むロアンヌの騎士の元までデリバリーしたときはいつそ殺してやろうかと思つたが。

良く考えれば、この馬だつてミニエールと同じロアンヌの生まれ。久しぶりの知つた顔に、我を忘れたに違いない。そう考えると、この馬は酷く人見知りで臆病なのだ。

そんな馬を「気性が荒くて素人が乗るには適さない」とか言うんだから、みんな信用出来ない。

実際は気性が荒いどころか酷く臆病で、最近では俺を見るだけで震え上がって自分から馬首を下げて迎え入れる始末。

親衛隊の連中め、俺が白馬に跨がつて現れたら、途端に手の平を返して凄いか奇跡とか大げさに褒めそやして来たが、どうせ俺を暴れさせないために初めから嘘をついていたに違いない。

なんせ、俺は前々から派手な白馬が宣伝用に欲しかったのだ。それを知っていてそんな事を言うのだから、酷く意地悪としか言い様が無いだろう。

今では調子に乗って、白馬に跨がり旗を振ったりもしている。我ながら絵になる戦乙女ではなからうか？

そんな事を考えていたら、親衛隊への苛立ちが急速に引つ込んだ。

真夏日だが馬上では涼しい風が吹いて、引つ掛けたショートマントがバサバサとなびく程。賢い白馬は手綱が適当でも思つた通りに動いてくれるし、ご機嫌な乗馬日和と言えそうだ。

良く考えれば、親衛隊だつて騎士のはしくれ。一騎討ちは最後まで見たかつたに違いない。それが俺のわがままで、いよいよ田中が現れた所で離脱してしまったのだ。こんな殺生な事は無いだろう。

「良かったのですか？　最後まで戦いを見たかつたのでは？」

そう水を向けると、親衛隊は何のこともないと胸を叩いた。

「姫様が見るまでも無いと信じているのです。私も英雄の勝利を疑っていません」
「まあ！」

ギョツと口から飛び出る悲鳴、なんとか両手で抑えこむ。

そうくるかあ……酷い誤解に顔が熱くなり、むず痒さに身悶える。

こんな仕草も、恋する乙女と勘違いを生むのだろうが、もう知つた事じゃない。全てがやぶ蛇になるのだろう。

親衛隊の二人は、そんな俺の様子を楽しげに見つめていた。

そうやって平原をポクポクと走らせれば、背後から地を揺るがすような勝ち鬨が上
がった。どうやら田中が勝ったみたいだ。

「良く考えたら、三人やられた時点で、一騎打ちとしては負けですよな？」
「誰も気にして居ないのでは？」

まあそうか。汗臭い戦いを頭から追い出し平原の風を楽しんでいると、遙か遠く、こ
ちらに駆けてくる騎馬軍団を目撃する。

……あの運命光は？

なるほどな、俺は密かにほくそ笑み、肩に掛けていたショートマントを脱ぎ捨てる。

マントの下の俺の姿は？ 肩丸出しのノースリーブだ！

「なっー！」

「姫様、些かそのお姿は刺激が強すぎますー！」

「いえ、皆が命を賭けて戦っているのです。私も臨戦態勢でありたいのです。こんなマ
ントを付けていては弓も引けません」

「いや、しかしー！」

必死に止めつつも、彼らの視線は剥き出しの俺の肩に釘付けだ。

この世界では女性の肩にエロスを感ずるらしい。ジロジロ見られると、俺も恥ずかし

いので勘弁して欲しい。

と、そんな事をしていたら、遅まきながら親衛隊の二人も接近してくる一団の異様に気が付いたようだ。

「なんだ？ あんな騎士団、聞いてないぞ？」

「姫様！ 逃げましょう！」

親衛隊が慌てるが、俺にとっては公然と暴れる絶好のチャンス。

「ごめんなさい、急に！ 馬が動いてくれないんです！」

嘘だ。俺は動いて欲しいと思っていない。

「クソッ！」

「こんな時に！」

俺は慌てた様子で馬体を蹴ったり、鞭を打ったりするが、それでも馬は俺の意を汲んで動こうとしない。

この馬、余りにも賢過ぎないか？ どこが暴れ馬なのか問い詰めたい。

「姫様、こちらにお乗り下さい！」

「そんな！ む、無理です！」

イヤイヤと首を振る。なにせ馬から馬に飛び乗るなどかなりの軽業だ。か弱い女の子にやれと言うのは無理がある。そして馬に密着してる状態では魔法も使えない。

ま、リミッターを解除した膂力があればやれなくもないけどな。

やる必要がないのだから、やらないだけだ。

モタモタしている内にあつという間に謎の騎士団にすっかり取り囲まれてしまう。

「ユマ姫を渡せ!」

謎の騎士団の要求はソレだった。いや、謎でも何でも無い。コイツらは捕虜として口説いてたロアンヌの騎士達だ。

「マークス様!」

ひたすら興味が無いので、毎回『参照権』で名前を調べてから呼んでるのは秘密だ。

「ユマ姫、良かった! 見つからなかったら脱出は叶わなかった」

ロアンヌの騎士団長、マークスはホツと胸をなで下ろす。

何故か? コイツらは自分達が脱出する事で俺が罰せられると信じているからだ。

なにせ俺は周囲の反対を押し切り、コツソリ捕虜の治療をってしまったと言う事になっているからな。

「ユマ姫、我々に付いて来て下さい。今よりもマシな生活をお約束します!」

マークス(25)さんはキザな仕草で俺に手を差し伸べる。

ソレに異を唱えたのは当然ながら俺の親衛隊だ。

「何がマシな生活だ! お前等はロアンヌの騎士、ミニエールの仇としてユマ姫を殺す

気だろうか！」

いや、多分殺しに来た訳じゃないと思うよ？ コイツら俺にメロメロだし。

「どうやって牢を抜けた！ 卑怯な真似を！」

うーん、大方、一騎打ちに乗じて放たれた細作に助けられたってトコじゃない？

口々上がる非難の声をマークスは聞くに及ばずと一喝した。

「黙れ、下衆共め！ ユマ姫になんてモノを着せているんだ！」

俺の肩を指差さされれば、親衛隊はバツが悪そうに口を噤んだ。「いや、姫様がはっちゃけて自分から脱いだんですよ」とは言い辛いのだろう。

だったら、好都合である。

「良いのです、マークス様。私にはこの様な姿が似合いでしょう」

「そんな事は、ありません！」

そして、突然に始まった三文芝居に、親衛隊の二人はまさかと目を剥いた。

「いや、そんな！ ご自分で……」

「黙れ！ 誰が好き好んでこのような破廉恥な服を着るか！」

マークスが怒る通り、これはこの世界ではどうにもエチエチな姿。

テカテカと光沢のある白い革製のロンググローブは俺の二の腕までを覆っているし、ハイネックトリポンタイが俺の首筋を隠している。極めつけに、大きく切り取られた肩

口は曝け出された肩周りを強調するようなレースまであしらわれているワケだ。

つまり、肩以外の露出を抑える事で、ドーンと肩の露出を強調している状態。

だからだろうか、俺を取り囲む百人の騎士達の視線が俺の肩へと突き刺さる。

俺はそんな不躰な視線に居心地の悪さを感じながら、一方でゾクゾクするような快感も味わっていた。

正直、露出狂かも知れん。

そうやって、俺が顔を赤くして震えていたのが良くなかったのか。許せんとばかり、槍の石突きで親衛隊の二人が滅多打ちにされている。

精鋭中の精鋭らしい親衛隊だが、二対百では多勢に無勢。馬から引きずり下ろされた上に、散々に転がされている。

やべやべ、このままじゃ見殺しにしてしまう。歪んだ愛情で俺の邪魔ばかりする親衛隊だが、こんなんでも俺を好きっぽいのは間違いないし。

「止めて下さい！ 酷い事しないで！」

俺は馬を下りて親衛隊の前に飛び出し、両手を広げて割って入った。

「何故です？ コイツらはアナタに！」

「それでも！ それでも、私の為に人を傷つけるのは止めて下さい！」

涙を流して訴える。正統派お姫様ムーブである。

そうして皆の攻撃が止まると、俺は地面に転がる親衛隊の二人の前に蹲る。

「私は彼らと共にいきます」

涙を流して感動の別れ。なのだが、親衛隊は何言ってるんだコイツ、つて顔をしてるので全く締まらない。

「あの、無茶は、無茶だけは止めて下さい」

「命を軽々しく扱わないで！」

「ふん、この後に及んで、言う事が命乞いとはな！」

親衛隊が心配しているのは俺の命なのだが、マークスの言葉にロアン又騎士達の失笑が漏れる。

緩んだ雰囲気をつしなめる様に、副官の男がマークスへ囁く。

「マークス様、そろそろ行きませんか。追っ手に捕まります」

「ふん、こんな奴らモノの数ではないが、鎧もない今は厄介だな。ユマ姫、私の馬にお乗り下さい」

「いいえ、私にはこの子がいます」

そう言つて、俺は白馬の背を叩いた。

「まさか！ これはサファイア!?」

「ミニエール様以外、誰も乗せようとしなかったのに！」

ロアンヌの騎士達がざわめく。

……え? やっぱロイツ、暴れ馬なの? 今更に怖くなってきた。ホントに?

ロイツらの前で乗ってた事なかったっけ? あ、暴走した時だけかも知れん。

「あの、マークス様? この子はとっても良い子ですよ?」

「そうか、お前もこの方がミニエール様の遺志を継いでいると言うのだな」

マークスは感慨深げに白馬を撫でるが、白馬のサファイアはブルブルと首を振り、怯えた目で俺を見るばかり。

何でかマークスは一人で納得しているが、きつとその馬は主人が死んで不安で仕方無いだけだと思うんだ。

まあ良いや、お姫様らしく笑っておこう。それよりも親衛隊二人の安全だけは確保しておこう。流石に俺にも罪悪感がある。

「あの、彼らは?」

「縄で縛っておきます。命拾いしたなお前達、ユマ姫の優しさに感謝するが良い」

縛り上げられる中、親衛隊は理不尽だと目で訴えてくる。

こうなってしまうと、親衛隊だって騎士団に「その女、アンタを利用してまずぜ!」なんて言えるハズが無い。余計に俺をピンチにするだけだ。

だから、言える事は非常に限定される。

「アナタの命を、アナタだけのモノと思わないで頂きたい」

「チツ、本当に最後まで不愉快な野郎だな。自分の命は自分のモンだ！ 誰の指図を受ける謂われはない！」

「だから、こんな言い方しか出来ず、トドメとばかりにマークスにボコボコに殴られている。」

「俺の方はどうしよう？ そうだな、初めて自由とは何かを知ったお姫様みたいにやろうか。」

「ッ！ マークス様！ 私は自由に生きて良いのですか？」

「勿論です、この空の下、アナタを縛るモノはもう何も無い！」

「この空に！」

二人で夏の青空を眺める。

自由か……。

俺は戦争が始まって以来、この空をブンブン飛び回って、魔法の矢でテムザンを射殺したくてずーっと我慢してきたんだ。

何故我慢したか？ そんな事したら世界の全てが俺の敵に回るからだ。

帝国の使者を殺し、王国の女王を良い様に操って、帝国の將軍までも暗殺する。

誰がどう見ても、俺こそが人間を殺し合わせる悪役だ。まして空を舞い、魔法の矢を

撃つ俺を見れば、誰も安全圏には居られないと悟るだろう。

ついでに言えば、今まで変死した貴族殺しの犯人も俺だとバレる。

だからこそ、俺は表立っては動けなかった。

だけど、ユマ姫が誘拐された悲劇のお姫様だったらどうだ？

見捨てられたロアンヌの騎士と一緒に、帝国を内部から切り崩したとしたら？ 運命

に翻弄されたお姫様ってトコに収まらないか？

ロクに魔法を知らない真面目な騎士様が相手だ。適当に殺し回って神の裁きと嘯いてもどうせバレない。

この空の下、俺を縛るモノはもう、何も無い。

獅子身中の姫1

王国陣地から脱出したロアンヌの騎士達は、堂々と帝国に向けて馬を走らせた。

夏草を踏みしめ、百の騎兵が堂々と駆けていく。

いや、余りにも堂々とし過ぎていて。なにせ、彼らは数千の王国兵に混じって馬を走らせているのだ。

言うまでもないがコレは余りにも大胆な行動。一度見咎められれば、あつという間に

槍袂に囲まれるだろう。

しかし、橋での決闘に打ち勝った高揚の中、彼らを気にする者は誰も居ない。

「お、驚いた。本当に誰も気にしない」

マークスは呆然と呟く。なぜなら、この無謀な行軍は道半ばで救出したユマ姫の発案だったからだ。

馬こそ取り戻したモノの、鎧までは手が回らず、一般兵の装備を奪っただけ。ならばいつそ、混じってしまったええ気が付かれない。ユマ姫は大胆にもそう言っただけ。

今もケロリとしたユマ姫とは反対に、マークスにとつては殆どヤケクソの行軍だった。なにせ真つ直ぐ帝国に帰るルートは王国軍が塞いでいる、しかし、迂回してこの混

乱を逃せば渡河の際に味方から撃たれかねない状況だった。

だからこそ危険な賭けに出たのだが、マークス達は賭けに勝った。

なにせ王国軍で馬に乗っているのは騎士だけではない、我先にと突撃していく騎士に遅れて、身分の低い従者が主人の荷物を担いで馬で後を追ったりしている。

「俺は見たぜ？ 英雄タナカの勇姿をこの目で！」

「マジで鳥肌が止まらねえよな」

気楽な従者達が方々で、興奮冷めやらぬと戦いの感想を語らっている。

「なにシケたツラしてんだよ？ まさか見逃したのか？ あの戦いを」

「あ、ああ……」

突然、隣を走らせる従者に話を振られ、マークスは言い淀む。こう言った雰囲気には不慣れな男だった。

そこに、底抜けに明るい声が割って入る。

「キャハハ、コイツさあ、タナカが現れる前にブルってケツ抱えて逃げやがったのよ、だから肝心のトコを見てねえの」

なんと、その声の主はユマ姫だった。今の彼女は目立つドレスを隠すべく、ボロ雑巾のようなコートを羽織った姿。姫らしくない下品な喋りで偽装してるとは言え、これは余りにも豪胆な振る舞い。

ギョツとしてマークスはユマ姫を見つめるが、そこでイタズラっぽく笑うユマ姫と目が合った。

マークスはアレだけ錯乱していた頭が、急に冴え渡る思いだった。

「あ、ああ、恥ずかしいぜ、お前もあんまり大声で言わんでくれ、叱られちまう」

「どうしようかなあ?」

必死で取り繕うマークスをユマ姫は軽薄な声で笑うが、ボロボロのコートで全身を隠すその姿は、従者の中にあっても異様に映った。

「おい、お前、その格好は何だよ?」

ユマ姫への当然の疑問にマークスは内心舌打つが、ユマ姫は淀みなく答える。

「ああ、俺はコイツみたいに早とちりしたバカのケツを蹴つ飛ばす役よ、ワリいけど仕事柄、顔は見せられない」

「へえ、そんな役目もあるのか」

「まあな、勝ち戦でも臆病風に吹かれて逃げ出すヤツは少なくないんだ、この馬だつて拾いモンよ、こう言うのを戦場に戻してやるのが俺の仕事つてワケ」

「へえー、確かに立派な白馬だなあ!」

「ユマ姫のじゃねえかって思ったが、ハズレだ。姫は馬車でお帰りさ」

「ちえツ、姫には俺の勇姿を見て貰いたかったんだが」

「ぶつくさ言っていないで早く進めよ。あんまりサボられると、名前を聞かなきゃならんくなるぜ?」

「げえ、勘弁してくれ」

そう言つて従者は勢い良く馬を走らせた。その姿を呆然と見送つたマークスは、白馬に乗つた少女に尋ねる。

「今の男は、知り合いで?」

「まさか! 初めて見た顔です」

「いや、そ、そうですか……」

マークスは隣を歩むユマ姫が、急に恐ろしく思えてしまう。深窓の姫君と思つたが、これでは話が違ふではないか。

そんな疑惑の瞳を受けて、ユマ姫は馬体を寄せて耳元で囁く。

「私が今、帝国兵が居るぞと大声を出したら、どうなるでしょう?」

「なっ!」

ギョツとしてマークスは首を巡らせる。確認するまでも無く、周囲は王国兵だらけ。他の団員は散り散りになっている。

マークスの背筋に冷や汗が噴き出し、口内は瞬時にカラカラに渴いた。

ハメられたのかと息を飲む瞬間、ユマ姫はイタズラっぽく笑つて、可愛らしく舌を出

す。

「冗談ですよ。私の事を守って頂けるんでしょう？」

「え、ええ、勿論ですとも」

良かった、ユマ姫のイタズラだったとマークスは胸をなで下ろす。大人びて見えたユマ姫も子供らしいイタズラをするのだと、むしろ安心してしまう。

だが、確かにマークスは、この瞬間にハメられたのだ。

もしもユマ姫が裏切るつもりなら、あそこで声を上げていれば難なく自分達を葬れた。そう考えるほどに、ユマ姫を疑うという選択肢が頭の中から消えていく。

少しずつ、でも確かに、今までの捕虜と看護婦と言う関係とは異なる毒をマークスに流し込みながら、ユマ姫一行はゲイル大橋にまで戻ってきた。

白馬を目印に再び集合した騎士団は、決闘の熱気が冷めやらぬ橋上を避け、人気の無い橋の下に潜り込んでいた。

「このまま真つ直ぐ川を渡りましょう」

なんと、ユマ姫は橋の下を渡河すると宣言する。

「いっそ、橋を渡ってしまふのはどうです？」

副官のラグノフは油断しきった王国兵を見て更に大胆な提案をするが、ユマ姫は首を振る。

「恐らく、橋の出口では案内役の伝令や将校が居るでしょう。橋は混雑してますし、どこにどんな目があるとも限りません」

「なるほど」

ラグノフは然りと頷いた。良く見れば、橋を避けて渡河を試みる騎馬は、少ないながらも他にも数騎居るようだ。逃げ場の無い橋を寿司詰めで渡るより、川を渡った方が安全と考えるのは特別不自然ではない。

「お前達、馬筏うまいかだの訓練は忘れてないな？」

「勿論ですよ、隊長」

「馬筏とは、何です？」

ただ一人、解っていないユマ姫が尋ねる。

「渡河の際には、密集して支え合いながら馬を泳がせるのが鉄則です。その訓練を日々、我々は積んでいるのです」

「まあ！ そんな技術が必要なんですか？ 私、馬術はあんまり得意ではないのです

……」

項垂れるユマ姫の肩を叩いて、マークスは励ます。

「心配は無用です、ユマ姫には馬筏の中心を進んで貰います。水流の影響を受けず、最も安全に渡河出来る位置ですから、ユマ様なら問題無いでしょう」

「あ、ありがとうございます！　お願いします」

ユマ姫は目を輝かせてお礼を言った。フードに隠れて独占したあどけない笑顔に、マークスは年甲斐もない照れ笑いを隠せない。

そうして、一行はユマ姫を中心に密集隊形で橋の下から渡河を試みる。

「本当は川の流れに乗ってナナメに渡るのですが、橋脚を支えに垂直に渡ります」
「わかりました！」

やる気満々の微笑ましいユマ姫の仕草に、騎士達は大いに癒やされた。

橋の下を渡るなら橋桁が彼らの姿を隠してくれるし、不測の事態には橋脚にしがみつき耐える事も可能。ココまで来れば帝国兵とバレてもどうと言う事は無い。

何事も無く橋を渡りきるかと思われた。

しかし、渡河を試みる一行は進み行く先、橋脚にしがみつく老人を発見する。

「まさか、タリオン様！」

「どうしてココに！」

騎士達が叫ぶのも無理は無い。この老人こそ、彼らが主君タリオン伯なのだった。今すぐに助け出そうと気が逸る騎士達を、マークスは必死に押し止める。

「陣形を崩すな！　流されるぞ！」

馬筏は比較的安全な渡河の手段だが、それも無理のない進行で足並みが揃ってこそ。

ひとたび足並みが崩れれば、一人で渡るよりもむしろ危ない。

「そのままお待ちを！ タリオン様！」

「お、おとお前たち！ ああ、ワシにもお迎えが……」

「違います！ 気をしっかり！ タリオン様！」

タリオン伯はギリギリの所で踏み止まっていた。そこに愛する騎士団を目の当たりにした事で最後の糸が切れようとしていた。

切羽詰まった声で、ユマ姫が叫ぶ。

「マークス様、タリオン様は一騎打ちで怪我を負っています」

「なんと！ いや、そうか」

マークスの知るタリオンは、領主ながら並の騎士より遙かに強かった。実戦で磨かれた初見殺しの妙技を考えれば、この老人よりも一騎打ちに強い人間はそうは居ない。

しかし、そんなタリオンが橋下で惨めな姿を晒しているのだ、王国にも猛者が居るのだとマークスは気を引き締める。

ちなみに、その猛者、ゼクトールはさっさと川を泳ぎ切って自陣に引き上げている。川に飛び込む寸前、遠目にタナカの姿を認めたゼクトールは、その後の展開を何も心配していなかったのだ。

一方で、愛娘だけでなく、自慢の騎士団すらも失い、一騎打ちでも不覚をとったタリ

オンは生きる希望を失いかけていた。ゼクトールに突かれた腹の傷は水の中で塞がる事も無く、いまだに血を流し続けている。

「クツッ！ タリオン様！ 私です！ マークスです！」

「おおっマークス！ 帰ってきた、無敵の騎士団が私の下に……」

しかし、騎士団の顔を見て安心し、もはや天国なのだと思解した事が、復讐を糧にギリギリで張り詰めていた心の糸を断ち切ってしまう。

「タリオン様ッー！」

辛うじて橋脚に引つ掛かっていたタリオン伯の体が、力を失い流され始める。このままではスフィールへと下る急流に巻き込まれ、命を落とすに違いなかった。

「私が出ます」

そこに飛び出したのがユマ姫だった。コートを脱ぎ捨て、馬上を抜けだし、他の馬を飛び石の様に渡りながら先頭に躍り出ると、呆然とする騎士達を尻目にそのまま急流へと飛び込んだ。

「ユマ姫！ クソツツ私も出る！」

団員の命を預かるマークスも、堪らず水中へと飛び込んだ。

無謀に思えるユマ姫の行動の理由だが、彼女は元より運命光を確認し、タリオンを助けるつもりで渡河を提案しているのだ。ここで助けられなければ面白く無いと少し

焦っていた。

「お願い！　目を覚まして！」

訴えながらもすっかりとした泳ぎでタリオン伯に迫る。この世界には水泳の授業など無い。前世の記憶があるユマ姫の泳ぎは、この世界の標準から見ればかなり立派な方だと言えた。

更に言えば、騎士団から十分な距離を取れば、健康値の範囲を逃れたユマ姫は魔法を使う事も出来る。

『我、望む、進み行く先に水の奔流を』

風の魔法を応用すれば水流を作り出す事も可能だった。そうしてタリオン伯の元へと泳ぎ着いたユマ姫だったが、タリオン伯の運命光は消えかけていた。

水流は容易く人間の体力を奪う。怪我を負った体は、年齢的にも限界だった。

「ああ、ミニエール……今、会いに行く」

しかし、それ以上にタリオン伯の精神が生命力を手放そうとしている。

少女らしくない舌打ちをひとつ。水流に揉まれながらユマ姫は覚悟を決め、イチカバチかの賭けに出た。

歯を剥き出して、狂暴な顔で口の端を吊り上げる。

「ミニエール？　来るわけが無いだろう」

「な、に？ 何故だ？」

弱々しく問いかけるタリオンに、邪悪な顔でユマ姫は宣言する。

「私が殺した。森に棲む者の私^ザがな、もう二度と会う事は叶わない」

「そうか！ 貴様が！」

カツつと目を見開き、ユマ姫の剥き出しの肩を掴むタリオン伯の指先に、騎士らしい力が戻っていた。

一方で、急に元気になったタリオン伯を持って余したのがユマ姫だ。暴れる上に、健康値が阻害して魔法が使えない。岸まで泳ぎ着いてからにすべきだったと後悔する。

このままでは水流に飲まれて共に死に兼ねない。地味にピンチであった。

——ヒヒイイーン！

そこに馬の嘶きが割って入る。ココまで乗って来たミニエールの白馬、サファイアだ。そのままタリオン伯の襟元を啜えて、悠々と川を渡っていく。

「サファイア！ 生きていたのか」

タリオン伯は馴染みの白馬の献身に感極まった様子だが、ユマ姫はいよいよ余りに頭が良すぎるサファイアを「馬かコイツ？」と恐怖し始めていた。

「……………」

「……………」

お互いに気まずい思いで見つめ合う、白馬と姫。

お伽噺から飛び出したような二人だが、そこに甘やかな空気は一切無い。

いつそのまま殺すことすらお互いの脳裏を掠めているのだが、両者ともまさかと考え直し、ひとまず生き残る為に川を渡る。

しかし、フィーナス川は急流だ。小さい体のユマ姫はそろそろ体力の限界が迫っていた。

「ぐっ、『我望む……』あぶっ」

呪文を唱える度、丁度良く波打つ水面に飲み込まれて詠唱を阻害される。これが『偶然』の力かと歯噛みするも、水流はあつという間に少女の体温を奪っていく。

これはマズいか？ と、いよいよ水流の怖さに気が付いたユマ姫だったが、少しばかり遅かった。

「ぐっー」

最悪のタイミングで足が攀ってしまったのだ。パニックに陥ると同時、ぼちやんと頭まで水に沈んでいく。キラキラと輝く水面に向けてユマ姫は必死に手を伸ばした。

「掴まって下さいー！」

ユマ姫が水に沈んだ直後、ようやく追いついたマークスがなんとかその手を掴み、抱き上げた。

「ゲホツ、あ、ありがとうございます」

「良いから黙って下さい、それにしても無茶をする！」

気が付けばマークスだけではない、騎士団の全員がユマ姫を守るように陣形を組んでいた。主君であるタリオンそつちのけで。

それからは問題無く渡河を成功させ、ついに一行は帝国領へと踏み込んだ。しかし、サファイアに運ばれたタリオン伯は、いよいよ意識が混濁していた。まだ出血が止まらないからだ。

ユマ姫は蹲り、病状を診て表情を引き締める。

「傷を塞ぎます」

「お願いします。タリオン伯は我らの主人。助けて頂ければ貴女への誤解も、説得してみせます」

「いいえ、私がミニエール様を殺した事は事実ですから」

「ですが！」

「まずは治療です」

「……はい」

濡れそぼったユマ姫が呪文を唱えると、魔力の光が立ちこめて、みるみるタリオン伯の傷が塞がっていく。

騎士団はその光景を奇跡と眩くが、それもそのはず、ユマ姫は騎士団を治療するときには効果を絞って少しずつ治療していた。騎士団を籠絡するために、敢えて時間を掛けたのだ。

それに引き換え、タリオン伯には容赦なく全力の回復魔法。効果の程が全く違う。しかし、そんな細かい事を騎士団は気にしない。

水に濡れ、必死で呪文を唱え、魔法の光で輝くユマ姫の姿が、見とれるほどに美しかったからだった。

獅子身中の姫2

俺はロアンヌの騎士達と帝国領に侵入した。でも川を渡るときに拾ったタリオン伯が重傷で、中々速度が出せなくなった。

まあ、でも、いいけどな。どうせいきなり帝国陣地に飛び込む事など出来はしない。王国も帝国も絶賛戦闘中だ。まさかロクに装備も無いままに割って入るワケにも行かない。

で、仕方無く平原の端っここで野営を営む事となった。

しかし、コイツら全く野営に慣れていない。火を熾すのも苦戦している。多分だが、そう言った細々とした事は従者にでもやらせていたのだろう。

そして、逃げ出した百人の中に従者は殆ど居なかった。たぶん、身代金にもならない従者はさっさと殺されてしまったのだろう。げに恐ろしき階級社会よ。

火も熾せず、原始人みたいに木の棒をグリグリやつてる連中に、俺は見かねて声を掛けた。

「私が火を付けます」

「アナタが？」

驚かれました。いや、その位。パツと……やってしまったら、ありがたみがないな。

「貸して下さい」

俺は火が付かないまま積み上がったおがくずを両手に包み、祈るような姿勢で着火の魔法を起動する。

——シャララララララ

ついでに、ソレっほい効果音とピカピカ光るエフェクトも追加だ。言うまでもなく、着火よりもこう言った演出の方に、百倍ぐらい魔力を込めた。

「あつ、つきま、熱ッ！」

で、んなバカな事をしてるから火傷したのだ。おがくずを手に乗せて、そのまま火を付けると火傷する。コレ当然ね。

マヌケな俺に、慌てて騎士達が飛んでくる。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ、ソレよりも火が」

俺は、地面に落としてしまったおがくずを指差す。

実は火なんて幾らでも熾せるが、次にエフェクトを省略して火を熾したら、さっきのナニ？ って恥ずかしい思いをするに違いない。頼むから火を付けてくれよー。

「は、ハイ！」

慌てて種火を回収した騎士は、どうやら火を育てる事に成功したようだ。

そうなれば後は早い。パチパチと爆ぜるたき火を囲んで、みんなでお喋りだ。

マークスが俺の隣に座って頭を下げてくる。

「ありがとうございます。火打ち石さえあれば、すぐに熾せたのですが……」

「いえ、良いのです」

「我ながら情けない、野営の訓練はみっちり積んだつもりでしたが、装備が無ければ戦闘はおろか、火すら熾せないとは」

あー、別に不慣れなワケじゃなくて、人間は道具が無いと火も付けられないのか。

我ながら、そんな事すら忘れていた。

いやさ、エルフは戦士じゃなくても着火の魔法ぐらいは出来る人が大半なのよ。

俺は悔しげに歯噛みするマークスの手を取って励ます。

「そんな、貴方は確かに溺れそうな私を守って下さいました」

「いえ、ソレこそタリオン伯を助けるための事。貴女が我らが主を救ってくれたのだ」

「そう、ですか？ ふふっ、じゃあ、その件はおあいこですね」

「おあいこ……」

「はい！ だから、こんど私が火が熾せない程度の事で困っていたら、助けて下さいね。」

約束ですよ?」

「承りました!」

マークスの顔がパアッと晴れる。はあ……めんどくせ。

シラけた気持ちを顔に出さない様に、俺はジツと手の平の火傷を見つめる。

「火傷、やはりご自分の怪我は治せないのですね」

「ええ、そうなのです(大嘘)」

正直、その設定がマジで邪魔です。ただ、この設定が無いと怪我してもどうせ治るっしょ? みたいな雑な扱いを受けかねない。

いやさ、最近みんながさ、そんな感じなのよ。

ヨルミちゃんやんは鞭打ってくるし、シヤリアちゃんなんて「食べちゃいたい(物理)」だし。実際、片目食われてるだけに、怖いわ。

因みに、完全に欠損すると、今の俺の魔法でも治せない。

欠損はポーシヨン、もといナノマシンの薬剤が必要だ。それだって、ある程度は振りかけただけで自動で補ってくれるが、腕ごととかになれば回復に指向性を持たせる為に、カプセルに入らなくてはならない。

そして、もうカプセルを満たす程の薬剤は無いのだ。だから、胴体だけの状態から復活と言うのは二度と無理だ。

そうじゃなくても、こんな遠い土地で死んだら、どうやっても間に合わないんだだけだな。

考え事で誤魔化そうとしたが、ちよつとした火傷は却ってジクジクと痛んだ。手の平だと物を掴んだ拍子にいちいち自覚させられる。下らないミスだけに、軽く鬱だ。

俺は力なくうなだれた。

「大丈夫です、私が貴女を絶対に守ります」

「ほんとう、ですか？」

頼むよ頼むよー、命懸けで守ってくれよー。自分の怪我が治せないって設定だところ言うのが良いよな。

「怪我ひとつ負わせない！」そんな覚悟で守ってくれ。

で、安心したらもう一つ、なんとかしたい事が有る。俺はモジモジと肩を揺すらせた。

目聡く気が付いたマークスが、俯く俺の顔を覗き込む。

「どうしたのです？」

「あ、あの……か、痒いのです」

俺は目に涙を溜めて、切なげにマークスを見上げた。

「か、痒い、とは？」

「鞭を打たれた跡が、ジクジクと痒むのです。お願いします、マークス様、背中を搔いて

下さい」

「そ、それは？」

「掻いて下さい、お願いします」

俺はたき火の側に膝をつき、背中のファスナーを開けて痛々しい鞭の傷跡を曝け出す。

騎士達が息を飲む音がハッキリと聞こえた。

……言うまでも無いけれど、女性の背中だつて十分に性的だ。俺なんてバニーガールの一番の見せ場は背中だと思っっているよ。

それが、こんな野っ原のど真ん中、皆が見守る前でご開帳だ。痴女と思われても仕方が無い。

じゃあ、俺が騎士を籠絡するために色仕掛けに出ているのかつて言うと、違う！

マジで痒いんだよ!! 痛いのは我慢出来るの、痒いのはマジで無理。

しかも背中だから、自分で掻くのも難しい、今すぐ転げ回って背中を擦りたいぐらい。そして、痴女と思われなかったために、一応保険もある。

「見苦しいモノを見せてしまつて、申し訳ありません」

「いえ、そんな事は……」

鞭の跡だらけの背中など、エロく無いと思ひ込んでる少女つて事でひとつ頼む。

実際は、エロいよ？ 儂げな少女がさ、痒みに苦しみながら痛々しい背中をみせて掻いてくれて言ってるんだもん。そりゃエロいよ？

エロいのは解るけど、幾らなんでも皆してガン見し過ぎじゃないか？ あの？ 流石の俺も、ちよつと……恥ずかしい。

俺は顔を真つ赤に、涙ながらに訴える。

「あんまり……見ないで……」

「あ、う……」

マアークス！ お前、地藏か？ うーうー言うのを止めろ！

女の子に恥を掻かせず、背中を掻け！ 周りの奴らもだ！ いちいち前屈みになるな！ 男の生理現象を知ってるだけに、辛い！

そんな茶番で盛り上がっていた？ 時だった。

「くっ、邪悪な魔王め、我が娘の恨み」

「タリオン様！」

気絶したまま馬で運ばれていたジジイが目を覚まし、変な空気になった場に乱入してきたのだ。

腰の剣を杖代わりに、ヨロヨロと近づくや抜き放つ。

「成敗してくれる！」

「タリオン様、お止め下さい！」

えと？ 俺、このまま座つてて良いよな？ アレだけ守りますって言つて、俺が首を斬られるまで前屈みで見守つてたら笑うよ？

「ユマ姫は王国に利用されているのです」

「それがワシの娘を殺した理由になるか！」

「利用されているのは我々も一緒です、帝国は魔女に操られている。覚えはありませんか」

「そんな事関係あるか！」

なんか、言い争っている。俺は不安げに両者を見守るばかり。早く背中搔いて、どうぞ。

「ワシはコイツを叩つ斬らねば……」

と、そこで、ジジイは俺の様子に気が付いたようだ。たき火の側で蹲り、ぶるぶると震える俺の演技にな。

どうよ？ この保護欲を掻き立てる姿は！

「こ、コレは、酷い傷だの」

……まあ、演技以前にソコだよな。早く背中を搔いて下さい、お願いします。

「そうです、タリオン様、ユマ姫はこのように王国で酷い扱いを受けていました。魔女が

言うように、魔王として王国を裏から操り、世界の支配を企んでいるとはとても考えられません」

「嬢ちゃん、コレは誰にやられたんじや?」

急に優しくなったなジジイめ。聞いて驚けよ。

「ヨルミ、女王です。女王は事あるごとに私を鞭で……」

「そんな! まさか、王と言う立場でその様な外道を!」

「腐っておるの……」

腐ってるのは間違い無いですね。メチャクチャに楽しんでましたよアイツ。

「女王は罰を与えると、言いがかりで何度も私に鞭を」

「確かに、酷い傷だ、繰り返し鞭で打たれておる」

……ホントはね、我慢出来ずに一回軽く治しちやったの。で、シヤリアちゃんが偽装のためと鞭を打ちやがってね。もうね、痒いからいつそOK出したんだけど、結局後から痒いって言うね。当たり前なんだよなあ……

そうやって、回復と鞭打ちを繰り返し返したから、歴戦の傷跡みたいになっちゃった。

治るかな? コレ?

「信じて下さい、私は魔女が世界を壊そうとするのを止めなくてはならないのです、その為ならこんな傷」

「無理をするんじゃない、こんなに鞭を打たれば激痛で動けるハズが無いのだ」

「……タリオン様、ソレは本当ですか？」

「マークスには話した事が無かったか。ワシは若い頃、父が大切にしていた駿馬を無理な遠乗りで潰してしまったのよ。激怒した父はワシを鞭で打った。たったの三発、それで一ヶ月も馬に乗る事も出来ん程に痛かった。馬の上で育ったワシがだぞ？」

「タリオン様が？ 一ヶ月も？」

「ああ、それまで鞭打たれ悲鳴をあげる罪人を軟弱と思っていたワシだが、実際に鞭を打たれば考えを改めざるを得なかった。ソレほどの激痛だ」

「そんな！ たった三発で？ ならユマ姫は」

「マークスが絶望的な顔でコツチを見てくるが、俺だつて絶望する程にジジイの話が長い。」

「それで騎士達は揃いも揃って止めもせず、固唾を飲んで俺の背中を見てくるだけ。」

「早く掻いてくれよ。」

「見ないで、下さい……」

「涙目で訴えれば、ジジイは小さくなって蹲る俺の横で膝を折った。」

「辛かろう。ぼさつとするなマークス！ 毛布を！」

「申し訳ありません、毛布はありません」

「馬鹿モン！ マントでも何でも良いから持つて来い、お嬢ちゃんに惨めな思いをさせるでない！」

「ハイッ！」

そうして持つてこられたボロボロのマントが俺に掛けられる。

「大丈夫か？ 痛かろう」

「痛みは、慣れました」

「馬鹿言っちゃいかん、罪人でもコレほど鞭を打たれる事は稀だ、その前にシヨック死するからの、立つて歩けるのが不思議な位の傷、馬に乗つて来たと言うのが信じられん」

「この程度、なんの事もありますん」

「嘘じゃな、これ以上に痛い事などありませんよ」
「いやいや、全身に灯油をまぶして、炭化するまでこんがり焼かれた時はもつと痛かつたよ？ ジジイも試してみる？」

「平気です、ただ、ちよつと痒くて……」

「いい加減ブチ切れそうです。ちよつと余裕が無くなつて来た。気が付けば額には汗が流れ、背中には珠の汗が浮かんでるだろう。」

「俺はタリオンジジイの目を見て、無言のプレッシャーを掛けた。」

「お、おお……」

「いいから！早く！掻いて下さい」

何故かジジイは腰が引けている。コイツら使えないわ。イライラして美少女の仮面がハゲそう。

「早く！掻け！」

ギリリと食いしぼり、睨みつけると。「わかった」とカタコトで呟いた。

「んんっ、もうちよつと優しく」

「う、あ……」

コイツまで、うーうー言うのかよ。しかもジジイは不器用。

「ん、痛くしないで」

「わ、わかった」

「はあ、き、気持ちいいです。お願い。その調子で」

「……………」

結局、皆が見つめる中、変な空気になってしまった。

その後、戦況が落ち着いたのを見計らって、俺達は帝国陣地へと侵入する。

獅子身中の姫3

「本当にその格好で宜しいのですか？」

帝国陣内へ向かう途中、マークスに声を掛けられた。

メンツはタリオン伯、俺、マークス以下騎士団の皆様だ。

「くどいぞマークス、姫の意志は固い」

「これで良いのです、マークス様」

「ですが……」

まあ、止める気持ちも解る。俺は例によつて肩丸出しのドレス姿。この世界では刺激の強い格好だ。

つていうか、痴女同然である。

「私は、魔法で何人も帝国兵を殺害しています。戦場いくさばでの事とは言え、私を恨み、警戒する者は多いでしょう。まずは捕虜として惨めな姿を晒した方が、いたずらに兵を刺激せずに済むでしょう」

すまし顔で当然の様に宣言する。我ながらクソほど無理筋だ。

なのに、マークスは「なるほど、そうですね」つて納得し始めたんだけど？

んな訳あるか！ こちとら刺激しかねえよ！

そんな感じで堂々歩いていたら、もちろん帝国の本陣から早馬が飛んで来た。

「待て！ お前らは何者だ？ 所属は？ 答えろ！」

非武装とは言え、謎の騎馬隊が本陣に近づいたのだから当然である。

ソコにずずいと進み出たのはジジイ。

「ロアンヌの領主、タリオンを知らぬと申すか？」

「タリオン様？ それに後ろにおわすはマークス様に、騎士団も？ ご無事でしたか！」

「無論だ、それより敵陣からユマ姫を拉致してきた。テムザン將軍にお目通り願いたい」

なーにが「無論だ」だ、このジジイ！ お前、死にかけてただろうが。

苛立ちながらも、俺達は早馬の案内で帝国陣内へと侵入する。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、テムザン將軍率いる、帝国の本陣へと案内されたのだが……万からなる軍勢の前線基地、流石にかなり広い。

その大きさだけで、王国軍よりもずっと規模が大きいと感じた。

だけど驚いたのはソコではない、なんと陣全体が少し低い、盆地みたいに作られていたのだ。

「()は？ ()は？」

跨がった白馬の上で、呆然としてしまふ。

ゼスリード平原に、こんなに巨大な盆地があるとは聞いていない。

「泥^ぬ潭^かんでいます、お気を付けて」

「マークス様、敬語はナシでお願いします」

ホント、コイツは脳みそ溶けてるのか？ その点、ジジイの方がマシだった。

「元々は農業用のため池や用水路として造成したのだが、テムザン将軍が陣地へと改造したのだ」

「そうだったのですね」

コレはあまり良いニュースではない。

所詮は平原の中の急造陣地。一度勝負の天秤が傾けば、即座に決着するかと思つたが、違う。

コレは言わば、塹壕だ。銃で打ち合う戦いならば、中々厄介に違いない。現代戦を知らない爺さんだと高を括っていたが、想像以上に頭が切れる。

そんな俺達が案内されたのは、盆地の中で更に一段低い、すり鉢状の場所だった。

馬上から見下ろす景色は、まるでスタジアム。ソコには既に大勢の兵士がギユウギユウに集まっていた。

ガヤガヤと血気逸る兵士達の熱気がムンムンと伝わる。そんな場面に乗り込むハメ

に。

伝令が大声を張り、兵達を割って道を作る。さあどうぞ、と言う事なのだろうが……怖い。

なんせ、俺にとつては見渡す限り、全員敵だ。万にも及ぶ、むくつけき男達の視線が、大胆に肩を晒した俺に突き刺さる。

帝国兵など恐るるに足らず。そう気を張っていた俺だが、猥染みた男達を前に、本能的な恐怖が勝った。

思わずたじろぎ、身が竦む。

そんな俺を庇うように、マークス達騎士団が隊列を組んで、堂々と歩みを進めた。

何事と兵士達が群がるが、騎士達は見事な陣形で俺を囲み、そんな無粋な視線を遮つてみせた。

中々に気が利いている。ちよつと前、王国兵に混じっていた時と、まるきり立場が逆転していた。だけでも、騎士達に守られるお姫様みたいで、正直悪い気はしない。

守るべきお姫様としては、我ながら少しばかり狂暴だがな。

魔道具で拡声された声が聞こえて来る。どうやら、テムザン将軍が演説などを行っているようだ。ゲイル大橋での敗戦は、かの名将にとつても計算外だったに違いない。立て直しに躍起なのだ。

まあ田中の行動など、誰にも予想が付くはずないよな。そう考えると、いい気味と笑みがかぼれる。

「いよいよ拡声魔道具を手に、壇上で演説するテムザン將軍の姿が見える所までやつて来た。」

「我々は負けたのではない、負けたフリをして敵を誘い込む事に成功したのじゃ。その証拠に我々は先の戦場で大きな勝利を手にしておる」

そのタイミングで、案内人からどうぞと声が掛けられた。演説の最中に、進み出ると言う事らしい。

すり鉢状のど真ん中、騎士団に囲まれた俺は、いよいよ櫓の上のテムザン將軍を間近に見上げる位置にまで通された。

聞いていたが、かなりの年齢だ。七十過ぎに見える。ハゲ頭に真つ白な髭を蓄えた老人である。皺だらけの人相は如何にも人が悪そうだ。

なるほどな、コイツが使者に、母様のカツラを被せたか。
ギツつと睨めば、壇上のテムザンと目があつた。

「ロアンヌの騎士団は敵陣に乗り込んだ挙げ句、捕虜となつた？ 違う！ タリオン伯は無様に一騎打ちに負けて命を落とした？ 違う！ 彼らは敵陣に潜り込む事で、憎つきユマ姫を捉える事に成功したのじゃ！」

言ってくれる！ 全ては偶然。タリオン爺さんなんて、俺が居なけりや死んでいただけろうに。

しかも、その無事を伝令に報せたのはついさつき。てつきり俺達を迎える為の集会だと思っていたが、ココまでの規模だと無理がある。

恐らくは士気を立て直す集会のさなかに、突如入ったビッグニュースだったに違いない。

なのに、これ幸いとアドリブで筋書きを作つて、全ては戦略とぶち上げてみせるとは、噂以上にやり手のジジイだ。

それこそ罫の可能性だつてあるだろうに。とんでもないクソ度胸。

……いや、ソレほど追い詰められていると喜ぶべきか？

俺の考えを余所に、会場のボルテージは上がり続ける。

「おおっ！」

「本当だ！」

「と、言う事は、あの、中心に居るのがユマ姫か？」

「子供じゃないか！」

「しかし、美しい！」

すり鉢状になった広場のど真ん中。白馬に乗った俺の姿は、流石にもう、隠しようも

なかった。

正規に雇われた兵が大半と聞いたが、コレだけの人数だ、下品な声も少くない。

「何だあの格好、丸出しカヨ！ たまんねー！」

「おいおい、まるつきり痴女じゃねーかよお」

万に届こうかと言う兵士達の視線が一斉に突き刺さる。スフィールでも肩を晒し、背中を鞭で打たれたが、あの時とは視線の種類がまるで違った。

アレは憧れのお姫様がおイタをして、罰せられる場面だった。誰もが堕ちた姫君が罰せられる姿を期待していたとは言え、そこには最低限の節度があったように思う。

だけど、ココでの俺は、何人もの帝国兵を殺した憎き敵だ。

ある意味で、盗賊が捉えた女を品定めする視線よりもずっと野蛮だろう。なにしろコイツらは正義の名の下に堂々と、衆人環視の場で俺を戮りかねない。

それだけじゃない、俺はこの世界で生まれ変わり、お姫様として常識や品性を叩き込まれてきた。肩を丸出しに晒されるのは、今更だが、やはり恥ずかしい。

それが、万の野蛮な視線に晒されているのだ、流石に顔も赤くなる。

いや、普通に考えたら赤くなる前に、身の危険に蒼くなつて震える場面だろうか？

だが、もう恐怖のネジは外れてしまった。ココまで来れば、ジタバタしても仕方が無い。

染みついたエロゲー脳は、万もの兵士に代わる代わる陵辱されるお姫様を想像して興奮すらしていた。

ドMかな？ 知らんがな。なんと言われようが、ゾクゾクする程に興奮する自分を隠しようがない。

なんせ、敵なんて、野蛮であれば、ある程良い。殺すのも殺されるのも、躊躇しないで済むだろう？

犯したいなら、犯せば良い。

コレだけの人数を『偶然』に巻き込んで殺せるなら、上等じゃ無いか。

歯を剥き出して笑いそうになるのを口を押さえて必死に耐えるも、肩がプルプルと震えてしまった。

「大丈夫です、私が必ず守ります」

なんかマークスに心配された。恐怖に耐えていた訳では無いのだが。

俺は零れ落ちそうな涙を指先で拭って、微笑む。

「大丈夫です、マークス様の事、信じていますから」

「あ、ああつ！ 勿論だ」

ナニが勿論なのか、全くワカランのだが？ 一方で演説はクライマックスだ。

「勝利は近い、後は迷惑な客人を追い返せば終しまいじやー！」

——オオツ!

勇ましいテムザン將軍の演説と、ソレに答えるときの声が、俺の笑い声を隠してくれた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その夜、テムザン將軍の幕舎には、湯気を出す程に怒り心頭の客人が訪れた。

「なんだと言うのだ! ユマ姫のあの扱いは!」

「落ち着くんじゃタリオン。アレはユマ姫を守る為でもある」

タリオン伯だった。

名うての老騎士もテムザンにとっては年下、とは言え貴族としても軍人としても重鎮である事には変わりはない。テムザンとて無下に扱う事は出来ない相手だった。

「守るだど? 捕虜の姫君を檻に閉じ込めるなど! 我々の品位をこれ以上なく貶めて、それで守られるモノとは何だ!」

そう、捕虜として捉えたユマ姫を、テムザンは移動式の鉄格子に閉じ込めた。通常は木っ端の兵士を閉じ込めておく檻である。

貴人を捕虜にする扱いとして、まして女性の扱いとしては、前代未聞であった。

「姫と言つても、森に棲む者ではないか! あまり大事にするのは却つて危ないぞい」

「危ない事など何も無い、ユマ姫は今も騎士団が守つておる」

タリオンの言葉に、テムザンは内心舌打つ。ロアンヌの連中は、年端もいかない少女に完全に参加しているではないか。

上手く行けばひと騒動起こせると、チャンスがあれば騎士団を逃がすように暗部に命じていたのは、他ならぬテムザンだ。

だが、余りにもすんなり脱出して、おまけにユマ姫まで攫ってきた。出来過ぎた話を鵜呑みにするほど、老将は素直ではない。

もはやロアンヌの騎士達は、ユマ姫に籠絡されていると判断する。

そして、ソレを真つ正面から指摘する程、愚かでもなかった。

「騎士団に四六時中見張らせる気か？ そりゃあ却つて姫が可哀想じゃろ」

「だが！」

「それに、檻で囲っておけば、他の兵士には手が出せまい」

「そうは言っても、檻の中で姫は手洗いや湯浴みにも難儀しておるのだ」

ナニが湯浴みだと一喝してやりたい気持ちを押し止め、テムザンはユマ姫の危険性を

問う。

「森に棲む者には魔法がある、ソレはお主も知つとろうが」

「だが、姫は武器も何も持つておらんのだ」

「魔法じゃぞ？ 武器など要らぬ。ソレこそお主の怪我を治す程の魔法がある」

「そんな危険な魔法は一度も見ておらん。何より、陣内で取り囲んだ女子一人に怯えるのは帝国軍人の名折れ」

ソレを言われるとテムザンも痛い。ユマ姫の魔法の実力は、テムザンも正しく把握出来ていなかった。ユマ姫の魔法は余りにも尾ひれが付いて広がっていて、信憑性が薄いと言うのが大方の見方。総大将が過剰に恐れては、兵に舐められかねない。

「解った。ユマ姫の扱いは考えておく。だが、今は森に棲む者の魔法を怖がる兵士が多く、自由にさせるのは却って危険なんじゃ。解つてくれ」

「必ずですぞー」

憤懣やるかたない様子で、タリオン伯は踵を返した。

しかし、苛立ちに歯噛みしていたのはテムザン將軍も同じ。時刻は既に夜半過ぎ。戦場の朝の早さを考えれば、既に寝るには遅すぎる時刻である。

だが、テムザン將軍にはまだ仕事があった。

密かに放っていた暗部の細作から、敵陣の様子を聞かなくてはならない。

テムザンは戦況が膠着してから、多くの細作を放っていた。マークス達騎士団の救出もその成果だが、名声を欲しいままにする將軍にとって大つぴらに出来る事ではなかった。

燭台の明かりを落とし、小さなランプの頼り無い炎だけになった幕舎。モンゴルのゲ

ルに近い様式は、この世界であつても遊牧民が好んで使うタイプに住居だ。

騎士団での強襲、高速機動戦を好んだテムザンの若い頃からの、唯一の名残と言つて良い。

ゲルの天井、その真ん中は天窓代わりの通気口が大きく空いている。そこから音もなく入ってくる暗部の人間の技量に、テムザンは大いに満足していた。

この瞬間までは。

——ドサツ

らしくない潰れるような着地音。

実のところ、天窓から落ちてきたのは、まさしく潰れた死体だった。

「誰じゃ?」

半信半疑で夜の帳に尋ねる。いつの間にか、頼り無いランプの明かりも掻き消えていた。

その時、ちょうど天窓の真上に月が架かり、死体を踏みつけて佇む少女の姿を照らし出す。

「あつ、うー!」

美しい。どんな絵画よりも。

月明かりに銀の髪が反射して、闇の中に輝く。まるで月の妖精。優しい微笑みでコチ

ラを穏やかに見つめている。

しかし、美しい妖精は死体を踏みつけに笑っているのだ。

「来ちゃった!」

「ユマ姫か!」

その正体を看破したテムザンは、やはり流石と言うしかない。それほどに、目の前の存在の美しさは幻想に近く、実在の誰かに紐付ける事は難しかった。

なにより、この惨状で穏やかに笑うその姿は、尋常の存在からかけ離れていた。

上機嫌で、鼻歌交じりにテムザンに近づいてくる。まるで散歩道の様に。

「逃げないで」

「ぐあ!」

ユマ姫はテムザンが取り出そうとしたナイフを奪うや、そのまま右手を貫き、執務机へと縫い付けた。

「おぬしッ!　ぐう!」

叫ぼうとする瞬間、喉を押さえられる。

流れる様なユマ姫の動き。技術もそうだが、力だつてテムザンを大きく上回っていた。見た目通りの少女ではない。ユマ姫の噂を話半分に思っていたが、半分どころか倍に

しても足りないよ、この時ようやくテムザンは気が付いた。

「母様のカツラを届けてくれてありがとう。わたし、本当に感謝してるのよ」
にこやかに語る少女に、テムザンの背筋が凍る。

テムザンは正直な所、アレが王妃のモノだという確信があった訳では無い。なにしろ森に棲む者の王妃の姿すら、帝国は正しく把握していなかったのだから。

ただ、証言と状況的に、その可能性もあると考えていた。特徴的なまでに美しい髪に、ユマ姫が何らかの反応を示せば儲け物と言う程度。

だが、そんな事をおくびにも出さず笑って見せるのだから、この老人も傑物だった。
「そうかそうか、気に入ってくれて何よりじゃ。お代を払いに来てくれたのかな」

「その通りです」

何時でも殺せるとテムザンの首筋を撫でながら、ユマ姫は微笑む。

「魔女は今、何をやってるの?」

「魔女? いや、知らない」

テムザンは本当に知らなかった。興味がなかったと言っても良い。

エルフの国を陥落させたのは魔女の大きな手柄となったが、以降の作戦は大きく外れ、軍部での魔女の評価も下降の一途を辿っていた。

それでも、魔女は皇帝の覚えが良く、端的に言ってテムザンは魔女の事が気にくわな

いとまで思っていた。

「ふうん。でも、アイツは危険よ。アイツが魔獣を操って世界の脅威になっている」

「そうか……ご忠告痛み入るぞい」

テムザンとてその話は聞いていた。森に棲む者ではなく、魔女こそが魔獣を操る災厄だと。

しかし、それで構わない。味方であるならばどんな脅威でも受け入れようと考えていたのだ。

「解ってくれて嬉しいわ。私は魔獣を討つために、神に使わされた存在だから。アイツを殺せればそれで良いの」

「……………」

テムザンは、魔女を知っている。アレもまた、超常の存在だ。そんな奴らに国を良い様に操られている。根っからの軍人である老将にとっても面白いハズが無い。

「私が言いたかったのはそんだけ。じゃあね。サヨナラ」

「なに?」

ユマ姫の言葉を最後に、テムザンは意識を失った。

……翌朝、執務机に突っ伏した格好で、テムザンは目を覚ます。

「ぬう!」

確認したのはナイフで貫かれたハズの右手。なのに、そこには怪我ひとつない手があった。握っても、開いても、痛みはない。

「夢……か？」

昨夜はタリオン伯のせいで、寝るのも遅くなりすぎた。暗部の人間を待つ間に、どうやら居眠りしてしまったらしい。

「老いたの……」

そう呟いた直後。テムザン將軍は執務机につけられた、真新しい傷跡を目にしてしまう。

「……………」

丁度そこは、昨夜、夢の中でテムザンが右手を縫い付けられた場所だった。ぶわりと汗が噴き出す。前線での戦いを離れて以来、初めての事だった。

夢か、現実か？ 錯乱したテムザンだが、思い至る。

暗部の人間。アレが夢でないならば、あの者はユマ姫に殺されたハズ。

調査依頼をしたためようと、机の中の便せんに手を伸ばす……瞬間。テムザンは机の一番下の大きな引き出しが、閉まりかけである事に気が付いた。

嫌な予感に、ゆっくりと引き出しを開ける。

「ぐうっ！」

戦場の悲惨さを、嫌と言うほど見てきたテムザンすらも目を背ける。

引き出しに、ギウウギウウに詰め込まれていたのは、四角くなつた人間だつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ユマ姫はどうした!」

テムザンは、即座にユマ姫を捉えた牢屋へと飛び出した。それをめざとく見つけたのは昨夜も顔を合わせたタリオン伯。

「テムザン將軍、ユマ姫を牢から出す気になりましたかな?」

「何を!」

世迷い言を! と一喝しようとして、様子のおかしさに気が付く。ユマ姫は脱走して
いない?」

「昨夜のユマ姫は? 何をしておつた?」

「何とは? 檻の中、何か出来ようハズも無いではないか!」

閉じ込めておいてどの口でと、タリオンは不快感を露わに、逆に一喝してくる。

「檻からは出ていないのじゃな?」

「アナタが出そうとしなかつたからでしょう!」

「……………ユマ姫は、昨夜、騎士団がずっと監視していたのかの?」

「そうですね?」

「時刻は？ 夜半頃はどうか？」

「夜半？ 私が將軍の幕舎を引き上げたとき、姫は騎士団の協力で湯浴みを行っていました」

「湯浴み？ その様子、誰ぞ見ているのかの？」

「何を言っておるのです？」

湯浴みを見る？ あまりにあまりな言動に、ココに来て、タリオン伯はテムザン將軍の異様な様子が気になった。

「流石に貴婦人の肌を見世物には出来ません。檻を天幕で覆わせて頂きました」

それを聞いて、ぬうとテムザンは唸るが、それを見たタリオン伯は不満げに鼻を鳴らした。

「まさか、少女に湯浴みすら許さないとおっしゃるのですかな？ 帝国の誇る大將軍殿が」

「時間は？ どれぐらい天幕は掛けられていた？」

「さあ？ 精々が四半刻程でしょうな」

四半刻。たったそれだけで？ テムザンは昨夜の凶行を思い出す。

だとしたら、準備時間などまるで無かった事になる。

「ユマ姫と話がしたいのお。宜しいか？」

「勿論です、テムザン將軍も一度ユマ姫と会話するべきでしょうな」
「ふん」

テムザンは自慢の髭をなでて平静を装うが、隠しようも無いほどに緊張していた。

一方で魔法使いだからと、少女一人を恐れるテムザンに、タリオン伯は失望の色を隠さなかつた。

「警戒しすぎでしょう。見ての通り、子供ですが？」

「どうかの？ 昨夜、暗部の人間が殺された」

「それがユマ姫の犯行だと？ 馬鹿らしい」

「朝起きたら、ワシの机には人間だった四角い肉塊が詰め込まれておつたよ。他に、誰に出来る？」

「それは？ 誰かに？」

「話したのは、暗部の人間だけじゃ。だが、間違い無く、仲間の死体だと。闇に生きる連中が、ハッキリと怯えておつた。それほどの異様。お主も後で見せて貰うと良い。しばらく肉を食わんで済む」

「まさか!!」

タリオンにしてみれば、陣のただ中。指揮官の寝所に入り込み、死体を机に押し込むなどあり得ない行動だ。仮に出来たとしても、支離滅裂で意味が解らない。

まして、それをやったのが檻に囚われた年端もいかぬ姫と言われれば、正気を疑う他ない。

「馬鹿らしいではないですか。そんな事が出来るなら、開戦と同時にアナタは死んでい

る」

「ワシなど眼中に無いのだろう。お主も来るか？」

「ええ。下らぬ勘違いを正してみせましょう」

二人は牢の鍵を受け取り、陣中に設えた牢の扉を開ける。

タリオンは兎も角、昨夜の事を考えれば、テムザンには神経がすり減る思いだった。だが、総大将が敵の姫を恐れ、鉄格子越しに話を聞くのは余りに体面が悪い。

「まあ、大勢で、私に何用でしょうか？」

そこで目にしたユマ姫は、昨夜の様子とは全く違っていた。

少しやつれ、思い詰めた瞳には、亡国の姫の悲哀と決意が込められている。遊び半分に人を殺しそうな、殺戮妖精の如く、危険な化生の雰囲気は微塵も無い。

「何か困っている事は無いかと思つての」

言いながら、テムザンは必死にユマ姫の目を覗き込む。

長く生きて、必死に人間観察を続けた老将の目から見て、ユマ姫は貴人そのものだった。

「何も！ 私には勿体ないぐらい、良くして頂いておりますので」

そう言つて、恨みがましく無骨な鉄格子を見つめる。よくもこんな所に閉じ込めておけるなど、皮肉つて見せたのだ。

「コレは手厳しいの。それで、昨夜の事じゃが……」

テムザンは幾つかの質問をするが、全く淀みなくユマ姫は答える。

テムザンの出した結論は、白。

昨夜見たのはユマ姫では無い。そう言う事になる。

「満足しましたかな？」

「うむ、うむ……」

納得行かないが、コレはいよいよ何かに化かされたかと牢を後にしようとしたテムザンだが、見上げた牢の一部が少し歪んでいる事に気が付いた。

「アレは？ なんじゃ？」

「古い牢ですからな、錆も出てます。マークス達も、流石にココまで酷いオンボロに監禁されていた訳ではありません。まして姫を泊める場所では無いと申し上げたでしょう」

タリオン伯は勢い込み、オンボロの牢を強調するが……アレは、テムザンには、切斷した後、溶接した跡にも見えるのだ。

しかし、まだテムザンには迷いがあつた。

まさか、素手で鉄の格子を切断出来るのか？ 魔法とはそんな事も可能なのか？ そんな化け物とどうやって戦えというのだ。ましてや、溶接すらこなして元通りに戻して四半刻で戻るなど、そんな化け物が居るはずが無い。

それこそ、妖魔にでも化かされたのかと牢を出て、鍵をかけ直す瞬間。テムザンは見
てしまう。

——フフッ

ニヤリと笑うユマ姫が、一瞬だけコチラに向けた笑顔。
間違い無く、昨夜の怪物の姿であった。

獅子身中の姫4

ユマ姫が到着したその日から、帝国陣地は日が暮れた後も興奮とざわめきが途切れる事が無くなった。

勝ち戦から一転、王国軍に領内まで押し込まれる事態だと言うのに、そわそわと落ち着かない兵達は初デートを控えた少年の様だった。

「おい、そろそろ行くこうぜ？」

「ああつ」

時刻は夜半前。見張りを終えた兵士達が夕食もそこそこに、連れ立って訪れたのは陣の中心地。すり鉢状の窪地になった場所だった。

元々は、ため池の水を雨の少ない乾季でもくみ出せるようにと作った二段底。そこを改造し、軍の訓示を行う演説場へと作り替えた。

しかし、現在その中心に陣取るのは、熱弁を振るうテムザン將軍ではなく、無骨な檻。間に合ったみたいだな

「前の方は埋まつてるけどな」

「そりゃ、仕方ねえよ」

彼らのお目当ては、檻に囚われたユマ姫。森に棲む者と
言う異種族の姫ながら、人間の目から見ても驚く程に美しい。

すっかり日も暮れた時刻と言うのに、ユマ姫の姿は大量の篝火に照らし出され、夜闇に浮かび上がる様だった。

人間離れた長い耳と瞳の大きさは、憧れはすれど忌諱するようなものではない。むしろ非現実的な少女の美しさを強調するものだ。

見た事もない煌めくような銀髪が、キラキラと周囲の篝火を反射している。手入れの行き届いたストレートヘアは、とても虜囚のモノではない。

それだけでユマ姫が如何に彼らに大切に扱われているか、察せようと言うモノ。

「綺麗だな」

「ああつ」

「しかし、あの肩だけは目に毒だぜ」

「違いねえ」

ユマ姫は肩を曝け出す衣装を好んで着ている。文化の違いかも知れないが、彼らには余りに刺激的だった。

女性の肌は白磁や大理石、果ては象牙や真珠に例えられるが、ユマ姫の肩の美しさを例えるには少々硬質に感じる。

ユマ姫の肩のつるんとした滑らかさは、ゆで卵の様な弾力を感じさせ、華奢な肩幅も相まって抱きしめてみたいと思わせる。

ユマ姫の肩を抱き寄せる想像で、周囲で眺める兵士達の手指が、わきわきと空を掴む光景がお馴染みとなりつつあった。

そんな姫君が、夕食も終わった時刻に殊更に注目を浴びるのは何故か？

「遠い故郷を、月を見て思うの——」

歌だった。

歌うのはフィーンナス川で国境警備する帝国兵にはお馴染みとなった、防人さきもりの歌である。

しかし、その歌声からは防人の歌らしい勇壮さは鳴りを潜め、故郷への郷愁や悲哀が強く表に出ている。

「クソツ、涙が」

「みつともねえなあ」

「オメエも泣いてるじゃねえか！」

「だってよお、あんな小さな娘が、檻に閉じ込められて、故郷を想って歌ってるんだぜ？

泣かせるじゃねえか」

「あの檻、どうにかならねえのかな？」

「檻の中の姫様を見世物にしてる俺達と言える事じゃねえだろ」

「にしたって、あの扱いはあんまりだろ」

その通りだった。

テムザン將軍はユマ姫の待遇を改善するどころか、昼夜を置かずに人目につく、すり鉢状の講演場の真ん中で晒し者にしたのだ。

これには、ユマ姫を捕らえたロアンヌの騎士達が激しく抵抗した。自分達が捕らえた捕虜が粗悪な扱いを受ける事を良しとしない騎士は多いので、それ自体は珍しい事では無い。

しかし、それを抜きにしても過剰な入れ込み様ではあるのだが、姫の美しさを考えれば無理はないと思われる。

なので、テムザン將軍の姫への扱いは顰蹙を買い、大きな騒動となった。

それでも姫が檻の中で過ごしている理由は、姫自身がそれで構わないと言い切ったからだ。

「見世物で結構。それで魔女が大森林で引き起こした虐殺を知らしめる事が出来るならば、多少の恥は厭いません」

これには名将テムザンも形無しと、失笑される事となったが、それでもテムザンは姫を衆人環視のただ中に置く事を選んだ。

このあまりに強硬な將軍の姿勢が、笑っていた兵士たちの言葉を飲み込ませた。軽々に口に出来ない空気を感じ取ったのだ。

そうなれば、自然と愚痴の対象はユマ姫が恨む魔女の話となる。

「しかし、魔女はそんなに外道なのかよ？」

「いやさ、俺の知り合いには遠征に参加した奴も多いが、ひでえモンだつて言うぜ？」

「森に棲む者^ザとは言え、生きたまま焼くなんて、動物にだつてやらねえぞ」

テムザン將軍の兵達は、元來魔女の事を良く思っていない。ぽつと出の女が帝国の中枢に顔を出す事が、生粋の軍人にとって面白いハズが無いのだ。

「テムザン將軍は何を考えてるのやら」

「魔女を掴まえる前準備つて噂もあるぜ？　それで王国と手打ちに出来ないか探つてるとか」

これは全くのデマ。

実際にはユマ姫を恐れて全軍に監視させているに過ぎないのだが、軍のど真ん中に据えて、自由に歌や話しをさせる行為が、ユマ姫に魔女の悪評を広めさせている様に見えるわけだ。

だからこそ、魔女とテムザンの対立が公然と語られる事となる。

一方で、事情通が仕入れた真逆の話は、誰にも相手にされなかった。

「いや、むしろテムザン將軍は魔女の元にユマ姫を送るつもりらしいぜ？」

「冗談だろ？ 折角捕まえた姫を魔女に譲って、何の得になるんだよ」

信じた兵士は居なかつたが、実のところ、コチラこそが真実であつた。

テムザン將軍は明らかにユマ姫を持て余していた。嫌いな魔女の下に送つてしまおうと画策するほどに。

折角の捕虜ではあるが、王国へ身代金を求めても突つぱねられてしまったのだ。

そもそもが真つ当な戦働きで手にした捕虜ではない。王国の使者はツバを飛ばして帝国の所業を非難した。

曰く、捕虜にしたロアンヌ騎士への身代金も払わない帝国。あまりに騎士達が哀れと恩情として、敢えて緩い監視にしていたと言うのに、見事に裏切られた上に、姫の身柄まで攫われた。

これは如何なる仕打ちと、騎士道どころか人の道にもとる所業だと散々に罵つて見せた訳だ。

コレに黙つて居られなかつたのが、テムザンの横で使者の弁を聞いていたタリオン伯だ。

「貴様らが！ ユマ姫に鞭打つ外道を働いていたからだろうが！」

この大喝は陣の中に大きく響いた。そして、ユマ姫は自らの背中傷を披露する事に一

切躡躡しなかった。

結果、ユマ姫の背中への傷と王国の非道は、帝国陣内で広く知られる事となる。

これにより、ユマ姫は敵国に味方する姫君ではなく、寄る辺もなく他種族の中で奮闘する姫君といつそうの同情を引いていく。

「全く可哀想なお姫様だぜ」

「ああ」

そんな訳で、帝国陣内でユマ姫を見守る兵達が引きも切らない程の人気となっていた。

こうなれば、身代金どころか、なにか理由を付けて王国軍へ返還すら難しい。テムザンは全軍でユマ姫を監視させ続けるしなくなってしまったのだ。

そうしてユマ姫は、夜は歌を、昼は国を追われてからの冒険を語ってみせる。

昼も夜も、暇を見つけてはユマ姫の檻の前に集まる兵の姿が陣内で当たり前になるまで、さして時間は掛からなかった。

「それにしても、ユマ姫の歌は勿論だが、吟遊詩人の演奏の方も、負けないぐらいに見事だな」

「確かに。騎士達まで舌を巻く程だ、帝都の奏者に引けを取らない実力らしいぜ」

ユマ姫が歌うときには、一人の吟遊詩人が隣で楽器を奏でるのが、いつしかお決まり

となっていた。

「流れの吟遊詩人らしいが、訳ありだろうな」

『訳アリ』

そんな言葉は、この男を評するには控え目に過ぎる。

ユマ姫の歌の後、演奏を終えた吟遊詩人の帽子には惜しげもなくおひねりが投げ込まれるのだが、この男にとってそんなモノは小銭に過ぎない。

帽子とお揃い、緑のコートを着た不思議な雰囲気の男であった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

檻の中の俺は、正直頭を抱えていた。

『ユマ姫の私生活、24時間生配信』

テムザン将軍め、時代を先取りし過ぎじゃないか???

事の始まりは、帝国陣内にやって来た当日。捕虜として無骨な牢に囚われた瞬間、俺はむしろラッキーだなんて思ったのよ。

なんせ、これならテムザンが死のうが、俺は犯人と疑われないだろうって。で、湯浴みを要求して、幕で目隠しされた瞬間。俺は牢屋を飛び出し、テムザンの幕舎に突撃した。

行きがけの駄賃に、同じく幕舎に入ろうとしていた黒ずくめのオッサンを挽き肉に変

え、突入。

思わせぶりな不思議な娘ムーブで混乱させつつ、さあ殺すぞって瞬間、気が付いた。……いや、俺が到着したその日の内に暗殺されたら、流石に怪しいだろ。背中が痒すぎて冷静じゃなかった。

で、すぐすごと帰った俺は、風魔法で切った鉄棒を溶接。コレにはセレナとの思い出の熱線の魔法が役に立った。今の千にも届く俺の魔力なら造作も無い。雑な完全犯罪の完成である。

それでもユマ姫を殺せとテムザンが命じるならば、ロアンヌの騎士は抵抗するだろうし、折角の捕虜を殺そうとするテムザンの奇行に、帝国軍の内部分裂は必至。誰も俺の危険性を信じて貰えないテムザンが、追い詰められ、疎まれる様を、間近で見られると期待していた。

だがテムザンは、ひたすらに俺を晒しモノにする作戦に出やがった。

なんて言うか、その……、四六時中、野獣の様な帝国兵の視線に晒されるってのは、ちよつとドキドキするな。

初日から風呂の時間に脱出して、テムザンを脅しに行ったからか知らないが、今では風呂の時までシルエットが浮かび上がるような、薄衣で囲う事しか許されなくなったのは想定外。

なんか俺もノリノリになって、内側から魔法の光でシルエツトを強調したり、鼻歌や湯浴みの音を大音量でお届けしたら、皆が食い入る様に見つめているのを肌で感じてニヤニヤしてしまった。

檻の中に閉じ込めた女の子を24時間監視するって、現代でも通用するコンテンツだよな。

とは言え、流石に用を足す時はしっかり隠して貰っている。コレに興奮するようになってしまったら人間として終わった感あるよな。

で、そんな生活が数日続いたある日、ふらりと現れた男が居た。

『何しに来たのよ?』

『いや、どうしてるかと思って』

木村だった。

いつも通りの緑のコートとトンがり帽子のスナ○キンスタイル。

あ、いや、最近は貴族としても偉くなってしまうって、こんな吟遊詩人みたいな格好は懐かしい。

意味が解らず、俺は檻の中で首を傾げる。

『どうもこうも、見ての通りだけど? 完璧な囚われのお姫様スタイル』

『脱出出来ないわけ?』

『余裕だが?』

『はあ……』

そういうため息、傷つくんだよなあ。

で、俺がロアンヌの騎士団に木村を専属の奏者にして欲しいと依頼したら、あっさり通つて、木村までもが俺の生活を監視する側に回ってしまった。

……なんて言うか、騎士団と木村は一度顔合わせしているのだが、あの時は悪役商人としてブイブイ言わせていた訳で、しがない吟遊詩人として現れた木村の正体にアイツらが気が付く事はついぞなかった。

そうして帝国兵だけでなく、友達にまで四六時中監視される生活が始まったのだが……なんて言うか、ちよつと恥ずかしいな。

コイツの事だ、何か狙いがあつての事と数日様子を見たのだが……コイツ、まるで動く素振りを見せない。ただただ俺の様子を観察しているだけに見える。

つてか、どうしてお前が最前列かぶりつきで見てるワケ? 俺の姿とか見飽きたレベルだろうか!

『いや、なんかメチャクチャエロいぞ。一生見てられる』

『もう帰れば?』

コイツ、わざわざ敵陣に来て、暇なのか??

『まあ、もう少しこのまま様子をみようぜ』

『お前、完全に楽しんでない?』

なにせ娯楽のない戦場。俺の歌と木村の演奏は異常な程にウケまくっている。

……ちなみに投げ銭は殆ど木村の懐に収まっている状態だ。差し詰め俺は鵜飼いの鵜。いや、鵜飼いの姫である。

お姫様は待遇改善を要求します。運営の横暴を許すな!

本来なら絶好のお姫様ポイント。捕らわれて、敵陣の檻の中、晒し者にされている薄幸の姫君。

ここから何が始まるか?? 英雄譚なら胸が高鳴り、エロゲー感なら下腹部が高まる展開。

なのになんか、助けに現れた親友が俺を肴に一杯飲んで、ゴキゲンに演奏を披露してお金を巻き上げ、楽しそうにゲラゲラ笑っているのは流石に???

『楽しいのは否定しないけどさあ、お前だつて別に辛くはなさそうじゃん?』

『いや、俺はそろそろ飽きてきたんだよね。運動不足だし』

俺が不満げに訴えれば、木村はニヤリと笑つてみせた。

『まあまあ、故郷を思うユマ姫様の頑張りで、テムザン將軍もいよいよ追い詰められてるみたいでさ、面白いモノが見られるかも知れないぜ?』

?????
俺は初日以降、エロ生配信をしてただけなんだけど？

『ふうーん、ナニよ？』

『数日前、テムザン將軍肝いりの騎士団が西に向けて旅立った。その任務は何だと思う？』

唐突にクイズが始まった。コイツ、よっぽど暇らしいな。

鉄格子越しに話し掛けてきてるワケで、少々目立つから止めて欲しい。解答を急かす。

『わかんないかー、正解は、魔女狩りだよ』

『ナニそれ？』

『折角手に入れたユマ姫を、それも騎士団に相当な被害まで出して、それらが捨て石で全てはユマ姫を手に入れる戦略の一環だったと言うならば、魔女に無料で引き渡すつてのは騎士団からも反発が大きかったワケだ』

『なるほど、それで？』

『元々、ユマ姫の身柄を欲していたのは魔女側だ。開戦前の要求、覚えてるか？ 折角手に入れたんだから、そっちから取りに來いと、堂々宣言しに向かったワケ』

『へえ、來るかな？』

來たらくびり殺してやる。その想像をするだけで、心から笑顔になれる自分が居た。

すると、木村はギョツとした様子で後ずさる。

『檻の中でも、ゾクゾクするほど怖くて、美しいな。それがまたエロ可愛い』

意味不明な所を褒め……てるのか？ コツチとしても、不思議とむず痒いんだけど？

「で、魔女は来そうなのですか？」

「さあね、だけど魔女を迎えに行くのに、テムザンは肝いりの騎士団を五十人も送り込んだ、表向きは礼を尽くす為との事だが……」

『力尽くで連れてくるつもりだったってか？』

退屈だった監禁生活。俄然、面白くなってきた。

揭示板回??? ユマ姫観察日誌

ユマ姫が晒し者にされる帝国陣内。

幻想的な美しさを誇る美姫の生活を一部始終見ていられる環境は、兵士達を浮き足立たせるのに十分だった。

そんな落ち着かない陣内で、人一倍落ち着きが無い男が居た。下級士官のデルトンである。彼はユマ姫に首ったけ。非番となればいつも牢の周りでユマ姫を見ていると噂になるほどだった。

ある日デルトンは、糧食の在庫チェックの最中、上官に呼び止められる。

「オイお前」

「なんです?」

かったるい様子を隠そうともしない上官から、デルトンは一冊のノートを手渡される。

しかし、こんなモノを渡されてもどうして良いか解らない。

「コレは?」

「日誌だ、つけておけ」

「はあ……」

上官を前にして、気の抜けた声が漏れた。

不満な訳では無い。デルトンはこう言う仕事があるのも知っているし、下士官として書くための教育だってちゃんと受けている。

しかし、こう言ったモノは進軍する時から同じ人物が一貫して書くのが常識だ。そうで無くては記述にブレが生じてしまう。

現在、帝国軍は領内に侵略してきた王国軍とにらみ合いを続けている。一時は王国内に切り込んだモノの、橋での決闘に敗れ押し込まれている。

しかし、そのドサクサに敵陣からユマ姫を奪取、王国は人質を前に攻めあぐねている。……早い話、戦況は二転三転し、もはや終盤に差し掛かっている。この期に及んで記録者の交代など、間尺に合わない。

「勘違いするな、お前が書くのは普通の従軍日誌ではない」

「と、言うこと?」

デルトンが首を捻ると、上官は何も言わずにノート of 表紙を指差した。

「ユマ姫観察記録? なんですかコレ?」

「さあな、テムザン將軍からのお達しだ。將軍はユマ姫の魔法の力と森に棲む者の習性に興味があるようだ。余すところなくユマ姫の行動を監視し、怪しい動きがあれば逐一

記述しろ」

「それは？　ずっとユマ姫を見ていて良いと言う事ですか？」

大好きなユマ姫の事。デルトンは前のめりに上官に詰め寄った。

軍の中心にデンと据えられたユマ姫を捕らえた檻。少女の一挙手一投足を観察する事は、男だらけの軍の中で数少ない癒やしである。それが大手を振って、ずっと見ていられると言うのなら、これ以上楽しい仕事はないだろう。

しかし、上官の命令は無慈悲だった。

「勘違いするな。記述は交代制。休憩時間などを利用して記述する。手当は出ない。以上だ」

「それじゃあ余計な仕事が増えただけじゃないですか」

「そう言うな、今だって四六時中ユマ姫を見てるだろうが」

「そりゃ、そうですが」

好きでやってるのと、仕事でやるのでは違う。そう言うと、上官も納得した。

「なあに、最初に『フォーマット』を作るだけだ。その分の評価はする。後はユマ姫を好きな奴が交代で、気になった事を書いていけば良い。真面目な仕事って程でも無いさ」

「そんなモンですか……」

納得が行かなかったが、デルトンはしぶしぶノートを受け取った。

良く見ると、ユマ姫の周り。机を並べてお行儀良く食事を摂っている一団がいる。

ロアンヌの騎士達だ。

恐れ多いが事情を説明し、騎士にも話を聞く事にする。

答えてくれたのはラグノフ。騎士団の副長を務める人物だった。

どうも、彼らはユマ姫と共に食事をして、マナーの美しさに感銘を受けたと言うのだ。

——いえね、我々は騎士として最低限のマナーは身に付けていますが、何処かそんな物よりは剣の腕を磨くのが本道と、礼儀作法にうるさい連中を馬鹿にしてさえいました。何の役に立つのかとね。

しかし、こうして食事を摂るユマ姫を見てみると、その所作の美しさに息を飲みましたよ。なるほど、マナーって奴は美しいのだとね。それで、マナーを勉強するために、こうして机を並べていると言う訳です。

つまり、彼らはユマ姫を参考にマナーの勉強会をしている訳だ。

良く見れば、ロアンヌ以外の騎士や士官、本国からの文官も混じって机を並べて食事をしている。

文官に言わせれば、帝国式のマナーを披露して、騎士団に顔を売る絶好のチャンスと言う訳だ。考えたモノである。

そこで、ユマ姫の食事がやたらと豪華な理由も判明した。

出入りの商會が、最高級の食事を無償で提供しているのだ。

なにせ千人も観察している。ユマ姫と同じモノを食べたいと考える人間も少なく無い。十分に元が取れると言う訳だ。

そうでも無くても、マナーを学んでいる騎士達は揃って同じ物を食べる必要がある。それだけでも利益は十分と語っていた。

私もユマ姫と同じ食事を貰ったが、銀貨が飛んでいく値段だった。上官には補填をお願いしたい。

「この締めはなんだね？」

記録を見せると、上官は最後の一文にうんざりした様子だった。

「そんぐらいは出して下さいよ」

「銀貨だと？ クソツ仕方無い。しかし、フォーマットは出来た。コレを参考に他の兵士にも書いて貰おう。檻のそばに記録スペースを作り、ノートを設置するんだ」

「大丈夫ですかね？ 私が言うのも何ですが、ユマ姫が好きな奴が何を書くか……」

「まさか？ 扱いは従軍日誌の一種だ、余計な事は書かないだろうよ」

しかし、上官の狙いは大きく外れる事となる。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 五の半刻 ホフダス・ラーティン伍長◇
ユマ姫が檻の中で運動を始めた。

体を鈍らせない為と言い、肩を丸出しの姿で腹筋や屈伸運動を繰り返すと、肌には汗が浮かんで非常に色っぽい。

子供と思つたが、不思議な色気がある。もつと間近で見ようと近づいても、騎士達に阻まれて近づけない。

やつら汗を浴びようかって距離を独占してやがる。

ロアンヌの騎士達はいつもユマ姫の周囲に集り、職務を遂行していないのではないかと愚考します。上官殿、奴らの処遇について御一考を。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 五の半刻 オタヌ・ピッグス伍長◇
僕は近づく事に成功しました。

ユマ姫の汗の匂い。少し甘い香りがしました。研究対象にするべきと愚考します。汗の滴る脇。舐めたいと言う気持ちを抑えられません。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 八刻 クオンザ・ブルーノ軍曹◇
夕食を食べるユマ姫の姿に癒やされる。

張り詰めた瞳が、美味しそうなお菓子を口にした瞬間。僅かにほころぶ。

その瞬間を見たくて、自分の食事そつちのけですつと観察してしまった。ユマ姫が食

「人ごとと思つて……」

「ぼやく上官を見送つたデルトンだったが……」

「コレで良いそうだな」

「本当ですかい？」

「ああ、まあ鼻で笑つておられたが、恐縮して漏れがあるよりマシだと」

「へええ、好きに書けつて？ 紙とインクも安くないだろうに」

「それぐらいは出すから、好きに書けと。ロクに賃金も出さないのだから、内容に無理は言わぬと仰せだ」

「話せますねえ、そんなんで良いのなら書きたがる人間は大勢居ますよ」

「そういう物か？」

上官は首を捻るが、ダルトンにしてみれば観察記録をつけたと言っただけで、見せろと周囲の催促が凄かったのは経験済み。

（それにしても書かせるとうるさかったオタヌに渡したのは失敗だったが）

皆も見回りや訓練の時間、ユマ姫がどうしていたか知りたくて仕方が無かつたのだ。

ちなみにテムザンが許可した理由だが、テムザンはユマ姫に洗脳能力があるのではと疑つてた。

魔女にその様な力があると言う事はうっすらと気が付いていて、ユマ姫も同類とする

ならば、ロアンヌ騎士の入れ込み様も説明がつく。

そして、洗脳する過程や方法を探るには、熟考した上の文章よりも書き殴った様な乱文の方が向いていると考えたのだ。

斯くして、ユマ姫観察記録は同好の士による情報交換日誌と変貌する。

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 三の半刻 デルトン・グスマン軍曹◇

今日の朝食はサラダ？ ドコから手に入れたのだろうか？ 商人に問い詰めても、出所は教えて貰えなかった。

パンケーキにシロップ。こんなもの、帝都だって中々手に入らないのだが……流石にこいつはオカシイぞ？

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 五刻 グルタ・ボンズ伍長◇

ユマ姫が昼も歌を歌ってくれた。

一般的な聖歌だったけど、歌うときに後光が差して見えた。きつと天使の生まれ変わりだ。

そして、商人がなんと楽器を売っていた。私には弾けないので断ったが、講習もしているみたいだ。しかし、お金が足りない。

一緒に演奏したいな……私も楽器を習いたい。

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 六の半刻 ナリクム従軍絵師◇

ユマ姫が兵士達に語りかけている場面をスケッチしました。

<<ページが破られている>>

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 八刻 クオンザ・ブルーノ軍曹◇

今日もユマ姫可愛い。また酒を買うお金で、お菓子を買ってしまった。

私のようなオジサンが食べても仕方が無いのでプレゼントしたいと大声を出したら騎士団に睨まれた。

猛烈に恥ずかしくなったが、ユマ姫は笑わなかった。食べたいけれど、お菓子ばかりを食べると豚になっちゃいます。と顔を赤らめて拒否されたけど、その仕草も可愛かった。

ユマ姫ならブタでも良いのに。近寄ると花のような香りがした。

可憐だ。

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 九刻 オタヌ・ピッグス伍長◇

今日も！ ユマ姫のお風呂！ このために生きてる！

ナリクム殿オ！ お風呂の絵を描いて！

◇帝国暦1028年 前夏月二十二日 九刻 クオンザ・ブルーノ軍曹◇

おらよ、ブタ！

<<ページが破られている>>

「しかし、暴走してページを千切る者が現れるのは問題だな」

「日誌を傷つけたのですから、三日はメシ抜きでその辺に転がしておきますよ。普通の従軍日誌なら吊られても仕方が無い所です」

「それもそうか、馬鹿は最悪殺しても構わん。ふざけて見えてもテムザン將軍も目にする日誌なのぞ」

「それなんです、ユマ姫の記録を付けたい者が多すぎて、いつそ従来通り真面目に書いた日誌の他に、誰でも自由に書ける日誌と二冊用意しても良いのではないですか？」

「まあ、書きたい奴に書かせるに限るか。そうすれば本当の日誌から乱文も減るだろう」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 帝国暦1028年 前夏月23日 二の半刻

寝起きのユマ姫の顔を見る事に成功！ お目々擦ってるの可愛いぞお！

◇ 帝国暦1028年 前夏月23日 二の半刻

顔を洗つてるとき、まだブーツとしてるのな。

◇ 帝国暦1028年 前夏月23日 二の半刻

キリツつとした顔になった。気品溢れる横顔をスケッチ。

<<ミミズがのたくった様な絵が描かれている>>

◇ 帝国暦1028年 前夏月23日 二の三四半刻

下手くそな絵を載せるな!

◇帝国暦1028年 前夏月23日 三刻

上の奴、細かい事言うなよ

◇帝国暦1028年 前夏月23日 三刻

可愛いのを可愛いと言ってナニが悪い! 今日の朝食はバゲットにソーセージを挟んでチリソース? 辛いソースらしいんだけど見た事が無い料理。お金出し合って食べないか?

◇帝国暦1028年 前夏月23日 三刻

上の奴、お前に文句言ったんじゃないやなくて、下手くそな絵って言う奴に文句言ったの。好きに描けよ、小さい絵なんだし。

◇帝国暦1028年 前夏月23日 三刻

俺も味があって好き。絵の事ね。

9. 帝国暦1028年 前夏月23日 三刻

誰に何を言ってるか解る様に、通番を付けようぜ。

10. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の四半刻

>>9 いいね、コレ。

11. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の半刻

チリドックって料理らしい。三人で分けたから一口だけだけど、辛いけどスゲー旨い！ 食べなきゃ損ってレベル。安くならんかなあ。

12. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の半刻

千個単位で一括購入すれば安くなるらしい。四半銀貨以下になるとか。

13. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の半刻

>>12 千とか無理だー

14. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の三四半刻

>>13 そうでもない、ウチの隊。共同で一括購入狙ってる。

15. 帝国暦1028年 前夏月23日 三の四半刻

>>14 マジかよスゲー！ スナフキーン商会ってとこやり手だなあ。

16. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻

スナフキーンのメシ、見た事無いレベルでウメエもん。

17. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻 14

なんか、メシだけじゃなくて今日からウチの隊はユマ姫の周りで訓練するとか。

18. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻

>>17 お前の隊ドコよ？

19. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻

>>18 多分グリダムスのトコ。二百人ぐらいの隊だけど、グリダムスは新し物好きだし。ロアンヌとも仲が良いんだよ。

20. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻

訓練って何するんだ？

21. 帝国暦1028年 前夏月23日 四刻

本日から騎士団の素振り型の確認の訓練にユマ姫が参加する事になりました。グリムダス隊も檻の周囲で素振り千本と、腕立てをするらしいです。

>>19 グリムダス隊です。間違えない様に。

21. 帝国暦1028年 前夏月23日 五刻

ユマ姫とのくんれんうらやまし。

23. 帝国暦1028年 前夏月23日 五の半刻

>>22 通番間違ってるぞ、文字も怪しい。士官じゃないだろお前。士官以外は閲覧書き込み禁止だから。

22. 帝国暦1028年 前夏月23日 五の三四半刻

訓練終わったけど、良いもんじゃないぜ。

すり鉢状の場所で、頭を下にして腕立てするの負荷が凄い。ユマ姫にかっこ悪い所見せられないからサボれないし。

でも、拡声の魔法でガンバレガンバレって、大声で応援されると燃えるよなあ。

24. 帝国暦1028年 前夏月23日 五刻

>>22 お前も通番間違ってるぞ。

ユマ姫は素振りも腕立てもすぐに音を上上げてたな。皆さん凄いですね！ って言われて、張りきっちゃったよ。あんなに腕立てしたの初めて。

25. 帝国暦1028年 前夏月23日 六刻

>>23と24

死ぬ程羨ましいんだけど？ あと>>24は時刻を間違えてる。通番はともかく時刻は絶対に間違えないでくれ、情報が錯綜する。

26. 帝国暦1028年 前夏月23日 六刻

それより知ってるか、訓練の後、背中が痒いってユマ姫が侍女に背中を掻かせてただけど、見た人居る？

27. 帝国暦1028年 前夏月23日 六刻

人払いされてたけど、ユマ姫が背中の中の痛々しい鞭の跡を晒してたよ。ユマ姫は見せて良いって言うてるけど、騎士達が見せたくないらしい。

28. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻

声だけでも聴いとけ、すり鉢全体に届く声だぞ。喘ぎ声にしか聞こえない。

29. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
想像で絵を描きました。

<<やたらと上手い絵が描かれている>>

30. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
>>29 上手え!

31. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
スゲエな、絵が描けるの羨ましい。

32. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
侍女も可愛く無い? なんか巻き髪でキツそうな見た目だけど。

33. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
誰だろうね。

34. 帝国暦1028年 前夏月23日 六の四半刻
スゲエな、絵が描けるの羨ましい。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 七の刻 デルトン・グスマン軍曹◇
ちよつと待て、お前等!

コッチは本誌だ。情報交換は別紙でやれと言っただろうが!!
フォーマツトを滅茶苦茶にするな!

書き込むのは一旦止めてくれ、上官を呼んでくる。

35・帝国暦1028年 前夏月23日 七刻

アッチは別の隊が使ってるぞ。後で見せ合う予定。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 七の半刻 デルトン・グスマン軍曹◇

馬鹿が！ と言いたい所だが、テムザン将軍に確認をとったが、コレでも問題ないらしい。

37・帝国暦1028年 前夏月23日 八刻

>>36 勝手に自分のフォーマットで書くなよ。

◇帝国暦1028年 前夏月二十一日 八刻 デルトン・グスマン軍曹◇

もういいや、好きにして。俺は知らん。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ゲルの様な幕舎の中で、日誌をめくるテムザンが居た。

「ほう、そうかそうか……」

デルトンが放棄したユマ姫観察日誌であるが、テムザンは、これはこれで軍隊の生の声が聞けると嬉しく思っていた。

そればかりか、ユマ姫の洗脳能力についても日誌の記述からアタリが付いたとほくそ笑んで居た。

その過程で最も重要視したのが、デルトンや上官が困惑した、オタヌと言う男の気持ち悪い記述なのだから、何が起こるか解らない。

「汗、香り。コレが肝じやろうな」

テムザンが洗脳の鍵として注目したのはズバリ、体臭。汗の臭いを切掛にユマ姫は周囲を洗脳している。だから、訓練を行い汗の臭いが届く範囲に騎士団を留めているのだと判断する。そう考えると、最初の湯浴みを抜け出したのも怪しいと思える。

ユマ姫は自らの体臭を維持しようとしているとテムザンは考えた。

そして、テムザンの命でユマ姫の湯浴みの回数が増えた。信頼出来る侍女を派遣して、一日二回のお風呂タイム。

言うまでもないが、ユマ姫の信者が増えただけに終わった。

ユマ姫観察記録2

23. 帝国暦1028年 夏中月4日 6刻

最近平和だな、こんな平和がずっと続けば良いのに、

とユマ姫を見ながら綴る。今日は物憂げな表情が可愛い。

24. 帝国暦1028年 夏中月4日 6刻

>>23 平和になったらユマ姫ともお別れだな。

25. 帝国暦1028年 夏中月4日 6刻

>>24 そんな事言うなよ。でも、戦場でこんなのおかしいよな。

王国だって人質のユマ姫が居るから動けないだけだろうし。

26. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 四半刻

>>25 そう言えば、コツチから王国に仕掛けない理由ってなんなの？

27. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 四半刻

テムザン将軍がユマ姫を恐れてるから？

28. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 四半刻

>>27 ンな馬鹿な。

落とし所を探ってるんだろ？ 將軍も。

29. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 半刻

なあ、テムザン將軍の騎士団を最近見ないけど、ドコ行った？

30. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 半刻

魔女を捕まえに行ったらしい。

31. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 三四半刻

>>>30 マジか！ やっぱりアイツが全ての元凶なんだな。

32. 帝国暦1028年 夏中月4日 6. 三四半刻

まさか魔女を処刑つてのは無いよな？ 皇帝のお気に入りなんだろ？

何にせよ、そろそろ終わるな、つかの間の平和が。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『俺、一旦帰るわ』

檻の中、『参照権』で本をぼんやり読んでいた俺に、木村が別れを告げに来た。

あっけらかんと話し掛けて来るが、衆人環視のど真ん中。俺は囚われのお姫様らしい、憂いを帯びた流し目で一瞥し、お上品な仕草で言葉を紡ぐ。ただし、粗野な日本語で。

『そもそも、何で来たかもワカランが？』

『心配で来たんだよ、言わせんな。で、どうやらテムザンの騎士団が戻ってくるらしい』
『へえ？』

テムザン直属の騎士団は、持て余した俺を引き取らせる為に、魔女を探しに出発したハズだ。それが戻ってくるという事は、魔女が一緒に来ると言う事。

『魔女を、黒峰を捕まえたわけ？』

『どうやらそうらしい、先行して早馬が来た。黒峰さんも終わりだな』

木村は椅子に座ったまま、大仰に肩を竦めるが……嘘くさい。

『信じられないんだが？』

『だよね、俺も信じてない』

白けた様子で、帽子を目深に被ってみせる。なにせこの世界で、情報機関に誰よりも投資してきたのが木村だ。

なのにプラヴァスで逃がしてから、魔女の足取りはまるで掴めていない。素人の騎士団に見つけられるとはとても思えなかった。

それでも魔女が来るならば、俺を殺す算段でも付いたのか？ 悩む俺を見て、木村は立ち上がる。

『何にせよ、応援を頼みに行くから』

『頼むわ、実は俺、結構不安よ』

『散々好き勝手してどの口で言うんだよ。一応、少数精鋭の潜入部隊は確定で、全軍での突撃準備もオーズド様をお願いしてみる』

『うむ、苦しゆうない』

『はあ……』

露骨なため息を残して去って行く木村を涼しい顔で見送って。その裏で俺は戦いの予感に血が沸き立つのを抑えるのに必死だった。

すり鉢状の土地の底、檻の中から見回すと、俺を観察する帝国兵がズラリと並ぶ光景が目に入った。

コレで、全員殺せる。全部メチャクチャに出来る。

いやいや、憎いのは魔女。俺だってなにも、帝国兵を皆殺しにしたいワケじゃ無い。

何故って、俺は別に快樂殺人者じゃないからな。

そんな風に思い込もうと努力したが、どうにも上手く行かなかった。

俺を眺めてズラリと並ぶ、鼻下伸ばした馬鹿面を、残さず胴体から斬り裂きたくて堪らない。

帝国兵と触れ合って、コイツらだって何も変わらぬ同じ人間と理解出来た。俺の事を可愛いと好意的に観察してるのも知っている。

だけど、憎い。

俺の家族が皆殺しになって、なんでッ！ お前等が！ 温々と楽しそうに俺の事を観察してるんだ！ 全員まとめてぶち殺してやりたくなる。

帝国兵だけじゃない。本当は王国の奴らも、むぎむぎ生き残ったエルフだつて憎い。どうして俺たちを守ってくれなかったんだ。いつそ全部壊れてしまえと思うほどに。

『はあ……駄目だな』

ただの八つ当たりだ。俺がロクな目に遭わないのも納得だろう。

そう考えると、ジクジクと痛み、痒みを訴える背中の中の傷も正当な物に思える。

……いや、コレは流石にオカシイだろ！ 良く考えりや、なんで俺はヨルミ女王に鞭を打たれたんだっけ？ 捕虜になって鞭を打たれるなら納得だけど、味方を蹴るのはただの趣味だろ。お姫様としては外道極まる衆人環視の今の環境のが、よつぽどマシつてのがどうかしてる。

自嘲気味に笑った後、ゆっくりと息を吐き、俺は戦いの予感に精神を研ぎ澄ませる。

魔女、いや黒峰。

待つてるぞ、ぶっ殺してやる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

これは終戦後に奇跡的に見つかったユマ姫観察日記の最後のページである。

1. 帝国暦1028年 夏中月5日 1刻

騎士団が到着したみたい。

2. 帝国暦1028年 夏中月5日 1刻

嘘だろ？ ド深夜だぞ？

3. 帝国暦1028年 夏中月5日 1刻

マジだ！ 召集掛かった。

4. 帝国暦1028年 夏中月5日 1. 半刻

第三部隊のロンです。

補給担当の僕以外全員が召集されたので、良く解らないけど、逐一記録します。

眠っているユマ姫が叩き起こされました。可哀想。

篝火が大量に焚かれています。何事でしょうか？ 解りません。

すり鉢状の底、ユマ姫を囲んで全軍が召集されています。

魔女クロミーネが来ているらしいです。魔女はユマ姫がバケモノだと言っているらしいです。

しいです。

発表があつた瞬間にブーイングが起きました。ユマ姫の人氣が凄いです。

魔女とユマ姫、真実をハッキリさせると言っています。テムザン将軍です。

4. 帝国暦1028年 夏中月5日 1. 三四半刻

第三部隊のロンです。

す。　　いよいよ魔女が出てくるみたいですが、皆、魔女が嫌いみたいで場がピリピリしています。

テムザン將軍の直属騎士団が大きな木箱を運んできました。

魔女が中に詰め込まれているみたいです。魔法の対策らしいです。

箱が開封されました。

でも煙ばかりで魔女の姿が見えません。

ユマ姫が叫んでいます。聞き取れません。ロアンヌの騎士達が抜刀しました。

見間違いかも知れませんが、魔女を運んできた直属騎士達の体が大きく見えます。

爆発しました。パニックです、逃げます。

何が起こったか解りません。

4．帝国暦1028年　夏中月5日　3半刻

第三部隊のロンです。

大変な事になりました。みんな、みんな死んでしまった。

死体がそこら中に転がっています。

……ああ、でも。

血まみれのユマ姫も、美しい。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

真夜中に叩き起こされた。

テムザンの直属騎士が魔女を連れて戻ったとの事。

マズイ。予定よりずっと早い。きっと木村だつて王国陣地へ戻ったばかりのタイムラグ。

まさか真夜中に叩き起こされるとは……

「テムザンめ、真夜中に何を考えているのだ！」

タリオン伯、言つてやつて、言つてやつて！ コレはあまりに非常識。あれよあれよと言う間に、俺の周囲、すり鉢の底にはほぼ全軍が集められ、煌々と篝火が焚かれていく。

これじゃ明日は全員寝不足確定だ、戦争の真つ只中にこんな采配は正気じゃ無い。

「どうやら、魔女は真実を話したいと言つているとか」

「そんな事で全軍を召集するとは良いご身分だな。それに従う將軍も何を考えておられるのか」

ロアンヌの騎士達もザワついている。誰も詳細を知らないみたいだ。

そうこうしていると、本当に全員を招集したらしく、ザワザワと喧噪が大きくなってくる。

篝火がバンバン焚かれ、反射する甲冑がキラキラと輝いて昼間の様な明るさになって

いた。

落ち着かない。肌がザワザワと粟立つ。一体何が起こるのか？

痛ッ！

首筋に、チリチリとした痛み。俺の運命が、削られている！

「將軍と騎士団が来たぞ！」

誰かが叫んだ。すり鉢の淵、見上げる高い場所に、テムザンとその直属騎士が並んでいる。

「皆の者、こんな時間に良く集まってくれた。今日は皆に重大発表がある」

テムザン將軍が拡声器で叫ぶと、いよいよ夜とは思えぬ騒がしさになった。

背筋がぐっしよりする程の冷や汗を俺は自覚する。なにせ見てしまったのだ、目を瞑った時、真つ暗な世界を。

当たり前に聞こえるだろうが、違う！俺は目を瞑っても人間の気配が、運命光が見えるんだ。

なのに、このすり鉢は暗かった。つい先日まで、花畑みたいに多くの運命光が見えたのに。

「ユマ姫、どうしたのです？ 大丈夫ですか？」

ロアンヌの騎士団長、マークスが心配そうに尋ねる。

馬鹿のくせにこういう所は目ざといな、流星はイケメン騎士団長サマか。

「嫌な……予感がします」

「私もです」

そりやそうか、誰が見たって尋常じゃ無い。

見上げれば、テムザン将軍の指示の元、すり鉢の淵には大きな木箱が運ばれて来た。

あの箱は、一体なんだ？

「皆の者、見えるか？ コレが、魔女じゃ」

え？ あの箱が魔女？ 箱の中に魔女が居るのか???

違う！ 運命光は、箱の中に生物は居ないと言っている。俺はマークスに囁く。

「あの箱からは人の気配がしません！ 爆弾かも！ 気をつけて！」

「ツ！ 解りました」

マークスは俺を庇う様に牢屋の前に立った。前が見えないが仕方がない、いま頼れるのはコイツらだけだ。

「我々は、魔女を捕獲するために西に向かった」

テムザンに続いて、語り出したのはテムザン直属騎士の騎士団長を名乗る男だった。凶抜けた巨漢で田中より大きいかも知れない。全身鎧に身を包んでいる。

威圧感のある大きな鎧姿、対するは極小の運命光。つまり、ああ見えて、アイツは既

に死にかけている！

「魔女は怪しげな施設に我々をおびき寄せた。卑怯な罠に掛かったが、そんな物ハ我ラニはキカナイ。ワレラハ魔女の捕獲に成功する」

叫ぶ直属騎士の様子がおかしい。落ち着きがなく、声も震えて聞きづらい。滑舌の悪さに苛立ったテムザンが拡声器を奪う。

「結果、魔女は人に化けるバケモノだと判明した。そして、魔女はこうも言ったそうじゃ、ユマ姫も同類のバケモノとな」

テムザンの言葉はあまりにも荒唐無稽。兵達は一斉に怒号を挙げて抵抗を示した。そりやそうだ。人に化けるバケモノってなんだよ？　んなモン有るワケ無い。

かつて俺は『ルイーンの宝飾』という、姿を変える宝石のレプリカでカディナル王子を釣り上げた。

あんなのは、あくまでお伽噺のアイテムだ。そんなモンが無い事は子供だって知ってるし、古代文明にだってそんな便利アイテムは存在しないのだから。

「鎮まれえい！　このテムザン。実はユマ姫に一度殺されかけておる」

ギョツとした兵の視線が、一斉に俺に集中する。まさかと言う空気だが……ソツチは本当。

しかし、俺は檻の中でふるふると首を振るだけ。

そんな姿を見たロアンヌの騎士達は、ギリリと奥歯を噛み締めた。難癖をつけられたお姫さまを心底心配している感じ。

しかし、テムザンは空気を読まずに叫び続ける。

「陣地にやって来て、檻に閉じ込めた夜、当日じゃ！ 皆がユマ姫から目を離れたのは湯浴みのときの僅か四半刻。あり得ぬハズの凶行じやが、夢では無い。現に諜報員が無惨な姿になり果てていた」

ザワザワと混乱する兵士の声が聞こえる。荒唐無稽に聞こえても、なにせ相手は歴戦の大將軍様。信じる者も少なくない。

それでも俺の人気も大した物で、何を馬鹿など鼻で笑う声の方が若干だが多そうに聞こえた。

ここ数日の頑張りもムダじゃなかった。暗殺を恐れるあまり、兵達に俺を監視させ続けたテムザンの策が、見事に裏目に出ている証拠。

白けた空気を感じただろうに、それでもテムザンは唾を飛ばして叫ぶ。

「確かに、我が陣内でそんな事は不可能！ だが、その不可能も。姿が変えられるなら可能となる！ 檻も幕も全ては無意味。それを証明する為に、今日はツボに閉じ込めたクロミーネ殿の変わり果てた姿をご覧に入れよう」

そう言って、テムザンはすり鉢の底、俺が居る檻の前まで箱を運ばせた。

近くで見ると、思ったよりも小さい。芋とかを入れる大きめな木箱。それが……………開いた。

「この小さなツボの中に、クロミーネが入っておる！ 挨拶せい！」

中にあつたのは……………小さな黒い球体。コレは？ まさか小型の…………

「霧ギョルドスの悪魔!!」

『私はクロミーネ、皆さんにユマ姫の正体についてお話しますわ』

俺の叫びに反応したみたいに、小さくて黒い球体からは、黒峰の声がした。

そして……………真つ白な霧が噴き出す。

やられた！ コレはタダの録音！ スピーカーが鳴っているだけ！

『私はクロミーネ、皆さんにユマ姫の正体についてお話しますわ』

だから、馬鹿みたいに同じセリフを繰り返す！ しかしテムザンは録音もスピーカー

も理解が出来ない！

こんな小さな球体から声がすれば、中に黒峰が居るのだと信じてしまった。

不定形のバケモノをツボに捕まえたど？ クソ馬鹿ジジイが！

後はそうだな、バケモノが逃げたら大変だと言って、フタを開けさせなければ良いだ

けだ。

その証拠に、同じ言葉を繰り返す球体の異変に、サツとテムザンの顔色が変わる。

今更に、騙されたのだと気が付いたのだ！ ボケジジイが！

「何じゃコレは？」

噴き出す霧の中。呆然と呟くテムザンに応える声は無い。代わりにとばかりに聞こえて来たのは、メキメキと騎士団が『変形』する音だった。

さつきは変身するバケモノなど居ないと言ったが、居た。

但し、美しい姫に化けるバケモノではなく、バケモノに変わる元人間だ。

「オオオオオ!!!」

全身鎧だったモノの下から肥大化した筋肉が姿を現し、体高までもが二割増しのサイズになった。

凶化に近い、歪んだ生物兵器。

俺はコレを見た事がある。

橋での一騎打ち、その先鋒だ！ 巨漢の兵士かと思ったが、普通の男を改造しただけ。その証拠に、一流の騎士を元に作った怪物は、橋で見たソレよりも更に大きい！

「ユマ姫！ 早く！」

マークスに手を引かれてハツとした。

呆然としていた俺に引き替え、騎士団は瞬時に抜刀し、変わり果てた直属騎士に向き直っている。

そして、マークス達は剣をパール代わりに鉄格子をねじ曲げて、俺が出られる程にこじ開けていた。

勿論、牢を開けるのも忘れない。

「出て下さい！ 早く！」

「は、ハイッ」

伸ばされた手を取り、引つ張り出される。

うう、我ながら情けない。マークスに助けられるとは。

檻の中、すり鉢の底に居た俺は、霧を思い切り吸い込んでしまっている。魔法が使えない俺は、もはや普通の女の子。

凶化して、多少はマシになったがソレでも魔力を奪う霧は辛い。蒼い顔でフラつく俺は、マークスに抱き寄せられた。

見つめる先、ロアンヌの騎士達が次々とバケモノに轢き殺されている。

りよりよく 臂力が違う！ アレは人間と言うよりも魔獣だ。

俺は、マークスの腕の中、殺されるロアンヌの騎士を見て、胸が押しつぶされる様な気持ちになった。

それが、なんとも情けない。

残らず殺したいとか威勢が良い事言っておきながら、内心じやすつかり絆ほどされて居た

のかよ。

余りにも身勝手で、意志が弱い。

戦わずに逃げてと叫びたくなる。でも、俺が言うべき言葉はソレではない。

俺が鳴らすべきは、皆殺しの号笛だ。今更後に引くなど許されない。

ギリツつと奥歯を噛み締めて、命を削って魔法を練る。

霧の影響はあるが、昔セレナがやったのと一緒。元の魔力が高いからちよつとした魔法なら使える。

セレナと違って、人間を切り飛ばすような派手なのは無理だけど。俺にだけ使える魔法がある。

驚いたのは、抱きしめるマークスも、周りで俺を守るロアンヌの騎士達も。まるで俺の魔力を阻害しなかった事。

コイツらは、正真正銘、俺に殺されても構わないと思っっているのだ。

そうして、ようやく練り上げた魔法が完成する。

ひどく簡単な魔法だ。詠唱だつて必要無い。

「みんな！ お願ひ！ 私を、守つて！」

大声でそう言った。使つたのは拡声の魔法。

声を大きくする、ただソレだけ。

たったのひと言。涙声で、心の底から助けを求めた。俺の声はすり鉢状の土地で、集まった帝国軍に隔々まで響いた。

だつてさ、俺の為に戦っているのに、逃げろだなんて余りに野暮だ。

だからせめて、お姫様らしく「助けて」と言いたかった。

そして、俺は本心から助けて欲しいと願っていた。

俺にしては何の嘘も無い、ただ助けてと願うだけのひと言が、その場の空気を一変させる。

「オオオオツツー！」

一斉に雄叫びが上がった。

ロアンヌの騎士だけで無く、呆然としていた兵士達が一転、直属騎士だったバケモノに突っ込んで行く。

一方で、虎の子だった騎士団の変貌に、正気を保てなかったジジイが居た。

「殺すな！ 操られておるだけじゃ！ 押さえ込め！」

霧キユルドスの悪魔で壊れた拡声の魔道具を片手に、テムザンが怒鳴っている。にも関わらず、兵士達は誰もが抜刀して、殺す気でバケモノへと斬り掛かっていた。

「やめろ、殺すな！ ワシの、ワシの騎士じゃ」

ぐったりとするテムザン將軍を、もう誰も見ていない。

「グオオオオオオ！」

しかし、それでもバケモノと化した直属騎士は強かった。

三人で囲んでも、平気で押し返す膂力がある。

三人で駄目なら四人、四人で駄目なら五人で掛かる。

直属騎士達はたったの五十人。万にも届く帝国軍全員で当たれば、対処は難しくないと思われた。

……その瞬間。

——ドオオオオオオオオン！

突然の爆発。それも、砂で固めたすり鉢が崩れる程の大爆発。

コレは？ 去年見た迫撃砲もどき！

いや、威力はもつと高い！ 完成してたのか！

「グオオオオオオオオオオ！」

そして、次々着弾する迫撃砲はバケモノもろとも兵士達を吹き飛ばした。

全くの無差別爆撃。しかし、無差別なら俺の『偶然』は確実に俺を狙うのだ。俺を守って取り囲む、ロアンヌの騎士をも巻き込んで！

「ここから、逃げて！」

「!? はいッ！」

——ドオオオオオン!!!

爆音、そして衝撃波、少し遅れて砂粒が雨の様にパラパラと降り注いだ。

俺を守っていた騎士はマークスを入れて四人。

そのうち、俺が叫ぶと同時に駆け出したマークスだけが生き残った。もちろん、マークスに抱きしめられた俺も無事だった。

でも、さつきまで居た場所を見れば、無惨な挽き肉が三つ転がっていた。

俺は歯を食いしばり、その死体を目に焼き付ける。だけど、マークスはそれを遮った。

「ありがとう、姫のお陰でこのマークス。一命を取り留めました」

「そんな!」

「我々は騎士です。こんなモノは何でもありません」

違う! 本当は俺が殺したも同然なんだ。

いや、この状況を魔女に作らせた原因が俺だと言って良いだろう。

兵士は逃げ惑い混乱を生み、バケモノは恐れを抱かずに暴れ回る。おまけに爆弾を適当に放って混乱を加速させれば完成だ。

コレは『偶然』で殺す為の、俺専用のキルゾーン!

俺は怒りと悔しさに、思い切り奥歯を食いしばる。

「気に病む必要はありません。これが我々の仕事です」

「ですがー！」

俺は敵国の姫だろうがッ！ そんな騎士の誉れがあるかよ。

「こんなもの、火が熾せない程度の事です。あの時のお礼で十分です。ああ、どうやら私の仕事のようです。姫はお逃げ下さい」

「なっ？」

俺はマークスに投げ捨てられた。

覆い被さる巨大な影。変わり果てた直属騎士が『偶然』にコチラに突っ込んで来たのだ。

「早くー！ お逃げ下さいー！」

叫ぶマークスを背に、俺は走った。一瞬だけ振り返ると、マークスは襲いかかるバケモノを必死に押し止めていた。

奥歯を噛み締め、すり鉢状の砂地を必死に駆け上がる。しかし、か弱い女の子でしか無くなった俺にはただの急な斜面が辛い。少し駆けただけですぐに息が上がってしまう。

単純に運動不足だ。なんとか鍛えていたつもりだったが、囚われの身で運動するのは案外難しい。

と、そんな俺の目の前に、バケモノ以上に大きい影が差す。

「サファイア!?」

それは、あの不気味なまでに賢い馬だった。

「助けてくれるの?」

これぞ、渡りに船。俺は嬉々として近寄ったのだが……

首筋にチリリと痛み。

——クシャツ!

飛び退いた瞬間、俺が居た場所を蹄が思い切り踏みしめていた。

間一髪! お前! 俺を殺そうと!! この期に及んで!

見上げるほどに大きな白馬と睨み合う。コイツ、俺が弱つてると見て、勝負に出や

がった!

と、急にサファイアは踵を返して、お尻を見せる。

逃げるのか? 違うツ!

俺は慌ててその場にしゃがむ。直後、恐るべき獣の脚力が頭上を切り裂いたのが、ボツつと弾げる空気の中でハッキリ解った。

立っていたら、死んでいた。この馬、どうやっても俺を殺す気か!

しかし、弾けたのは空気だけでは無かったのだ。

——グチャ!

振り返ると、黒ずくめの男が死んでいた。テムザンが雇っていた暗部の人間に違いなかった。背後から俺を殺そうとしたのだろう。

そうなる、さっきの後ろ蹴りも意味が変わってくる。

……実は、ひよつとして、この馬サファイア。俺を守ってくれた？

期待を込めて見つめると、サファイアは小首を傾げて可愛らしく、媚びた瞳でコチラを見ていた。

……わざとらしい！ コイツ、変に賢い！

怖いんだが？ 本当に馬かコレ？

でも、まあ、死ぬならお前も道連れだ！ コレぐらい調子が良い方が、巻き込むのに丁度良いだろう。

俺が不格好に馬上によじ登ると、手綱を握る前にサファイアは駆け出した。暗闇の中、爆発の砂塵を避け、飛び掛かるバケモノをヒラリと躲す。

サファイアはあつという間にすり鉢を脱出した。

「えっ?」

すり鉢を脱出した俺が見たモノは、大量の篝火だった。

「何??! なんぞ?」

呆然と呟く。コレは一体?

虚空に消えるハズの眩きは、しかし、暗闇の中からの返答を受ける。

「そりや、真夜中に敵が集会を開くんだ。夜襲でもあるのかと警戒もするだろ？」

『田中！』

驚く程に、近くに居た。黒ずくめだから気付かなかつた。今日は鎧も着ている。

「助けて！ 早く！」

俺は今もバケモノと戦うロアンヌの騎士を指差し、頼んだ。

利用するだけのハズの在庫処分に、何を入れ込んでいるのかと笑われるかも知れない。でも、助けない。

そんな俺を見て、やっぱり田中は笑った。

「へえ、良いじゃねえか」

「何を？」

「悪ぶってるよりマシだつてんだよ。殺したい奴が殺せば良いんだ。俺みたいにな」

そう言い捨てて、田中はすり鉢状の砂地を駆け下りていく。行く手を遮るバケモノが『分割』されたのが、弱々しい篝火の明かりでもハッキリと見えた。

「俺も！」

回復魔法は早めの処置が大事なんだ。そう思つて馬を走らせようとした俺は、背後から抱えられて、馬から引きずり下ろされた。

「なっ!？」

……暗部の殺し屋？　しかし、その体は柔らかい。

「駄目よ、行つては駄目。ソレはアナタの仕事じゃ無い」

シヤリアちゃんだった。俺は口元を押さええられ、声が出せない。

「アナタの仕事は、ここで皆の戦いを見守る事よ」

でも！　ああっ、マークスの背骨が変な方向に曲がっている。

今ならまだ間に合うかも！　なのに！

「駄目よ、死んでる」

目の前で、人が死ぬ。コレが戦争の現実だと、目の前で見せつけられた。

結局、俺は、夜が明けるまで、戦場を見守るしか出来なかった。

最後には到着した王国軍が取り囲み、すり鉢の淵から打ち下ろす格好でマスケット銃を斉射する。

帝国軍は混乱し、ロクに反撃も出来ないままに敗北を喫する事となった。

結局の所、俺は疫病神としての本領を遺憾なく発揮したと言う訳だ。

朝焼けの中、俺は血まみれのマークスを抱きしめ鎮魂歌を歌う。

涙を流す兵士をよそに、俺はクロミーネへの殺意を新たにしていた。

ユマ姫暴走記録

夜更かしして昼に目覚めた心地よい微睡眠、俺はベッドで大きくノビをした。戦争に勝った。これ以上無く勝った。

そして、ユマ姫も、田中も、そして俺、木村だつて死ななかつた。

昨夜は酷かつた。テムザン直属の騎士達が想定よりもずっと早く到着し、夜中の内に招集を掛けたと聞いたときは、正直我を失った。ユマ姫を置いてきた判断を気が狂いそうな程に後悔したワケだ。

一歩間違えばまんまと魔女にユマ姫を殺されていた。そうならなかつたのは殆ど奇跡だつたと思う。それぐらいに、ユマ姫の居たすり鉢状の集会場は混沌に飲まれていた。

ギユルドス霧の悪魔、改造された騎士、そして撃ち込まれる迫撃砲。

全てが『偶然』を利用してユマ姫を殺すべく、緻密に練られた魔女の罠。

しかし、ユマ姫は全ての危険を撥ね除け、生還して見せた。

そこには、俺が在庫処分と侮ったロアンヌ騎士の奮闘があるらしい。

彼らの評価を改めると同時、その冥福を祈る。

しかし、敵側の、それも主君の姫君の仇であるハズのユマ姫を、騎士が命懸けで守るのは意味が解らないんだけど？

アレはもう、呪いみたいなモノだろう。魔女の洗脳能力と、もはやドコがどう違うのか説明が難しい。

でも、バケモノと化し、苦しんで死んだ直属騎士と、満足げに死んでいったロアンヌ騎士の死に顔を見比べれば、違いは明らかだ。

そうして、すり鉢状の土地に囚われた帝国軍の主力は壊滅した。

俺としては反省しきりだ。アレだけ派手に戦争に勝たせてやると宣言した割りに、結局全部ユマ姫と田中が持っていった格好だ。

でもさ、田中だけでなく、俺だつて結構活躍したんだぞ？ 派手な音が出る爆弾を投げ込んで、帝国兵の戦意を折ったのだ。

騎兵を落馬させる為に用意したモノだが、ハツタリとしてはこれ以上ない効果があった。すり鉢の中へと爆弾を投げ込むだけで良いのだから楽なモノ。

あのすり鉢の地形、テムザン將軍はユマ姫を閉じ込める為の巨大な檻のつもりだったのだろうか、実際にユマ姫に囚われていたのは帝国兵だったワケだ。

とは言え、無傷で近寄れたからそんな事が出来ただけ。あそこに籠もられ、隠れながらマスケツト銃を撃たれたら、コチラも大変な被害が出ていただろう。

俺達は、ユマ姫がもたらす混沌に賭けたと言っても良い。……本当は焦って全軍を突撃させただけなんだけどさ。

しかし、それでも全てが上手く行ったワケでは無い。
心残りは二つ。

まずは黒峰さん、いや、魔女クロミーネの行方。

現在、迫撃砲の発射地点から逃げ出す馬車を発見し、斥候に追わせている最中だ。報告待ちである。

しかし、今回で魔女は帝国からも追われる身になったはずだ。補給もままならないとなれば、程なく足取りは掴めるだろう。

そして二つ目が、逃亡したテムザン將軍だ。

そう、王国軍がすり鉢を包围する直前。テムザン將軍は見事な脱出を遂げていた。現在は少数の部下を連れ立って、近くの街まで逃げ延びているらしい。

……いつそ魔女への復讐心を滾らせて、魔女討伐隊でも出してくれればいいのだが。
いや、駄目だな。良い様に利用されるのがオチだろう。

名将テムザン將軍ですら、ユマ姫と魔女の前では玩具でしかなかった。名将もネジの外れた狂人の戦いに巻き込まれれば、哀れな道化になるしかない。肝に銘じておくべきだろう。

テムザンは魔女だけでなく、ユマ姫も恨んでいるはずだ。役者の違いを理解出来ない演者がどんな『偶然』を引き起こすか知れない。そろそろ退場願うべきだ。

その点、俺はどうだつて？ 対策済みさ！

あらかじめコチラもネジを外しておけば良いんだよ！

どうするか？

まず、米を炊く。それで？

約束の脇おにぎりを作って貰うぞ！ おひつを持って突撃だ！

このとき、俺は自分なりに精一杯のネジが外れた行動をしたつもりでいた。様々なストレスが俺を奇行に走らせたと言つても良いだろう。そうしなければ精神が保たなかったのだ。

……しかし、ネジが外れきつたお姫様（ホンモ）の行動は俺の予想をブチ越えていく。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ナニアレ？」

騒ぎを聞きつけ、すり鉢状の土地に再びやって来た俺は絶句した。ビックリし過ぎておひつも忘れてしまった。

「何って、吹っ切れたんだろ？」

隣に腰掛け、何がおかしいのかゲラゲラ笑っているのは田中。

「いやいや、アレはそういうレベルじゃない。怒りを込めて指差す。」

「アレは脳みそゴト吹っ切れてるだろ！」

指差す先、もはや定位置になったすり鉢の底に、今日もユマ姫は居た。

しかし、檻の中にはない。檻は爆撃で粉々に砕け散った。

代わりとばかりにユマ姫は堂々と腰掛けている。

四つん這いにさせたメイドさんの背中の上、どっかりと腰を下ろして、乗馬鞭でペチとお尻を叩いている。

良く見ればシャルティア嬢！ いや、シャリアちゃんだ！ シャリアちゃんを四つん

這いにさせて背中に座っている！

鞭で打たれる度に、悩ましげに体をくねらせるシャリアちゃん。

それだけでも異様な光景だが、その背中に腰掛けるユマ姫の姿もまた異様。

「バニーガールじゃねーか！」

俺の！ 秘蔵の！ なんで？

白のバニースーツに網タイツ、カフスに付け襟、蝶ネクタイ、ご丁寧に白いハイヒールまで、もちろんウサギ耳も完備。

「悪くネーな、楽しそうじゃん？」

「いや、馬鹿なの?」

姿もそうだが、ユマ姫が居るすり鉢の底、その場所こそが大問題なのだ。

帝国軍の総数は方に届く数であった。その多くを捕虜としたのだ。王国軍の倍以上。捕虜として管理出来る限度を優に超えていた。

だからこそ、武装解除して両手を縛った帝国兵をすり鉢に集め、不穏な動きをするならば、すぐさま銃殺するか、爆弾を投げ込むぞと、脅して何とか制御しているのが現状であった。

俺がスヤスヤと陣内で眠ったり、お米を炊いたりしたのも、言わば現実逃避の一種。殺すか? 解放するか?

俺達は決断を迫られていた。

今までのヌルい戦争では、民兵は見逃し、騎士だけを捕虜として身代金で解放していた。しかし、今回はどうだ?

身代金は取れるかどうか怪しく、駆り出された民兵も銃を手にしただけで、厄介な兵に変身する。

戦争が変わってしまった。それ故に、民兵ですら油断出来ず、騎士からは身代金を取れない。

端的に言って俺達は捕虜を持って余していた。

ひとたび彼らが暴発すれば、数に劣る俺達じゃ抑えきれない。ならどうするかと問われれば俺達に出来そうなのは『虐殺』しか残されて居ないのだ。

古代中国、長平の戦いでは捕虜20万が生き埋めにされたと言うが、おあつらえ向けに埋め立てやすい場所に捕虜を集めてあるのが笑えない。

集められた捕虜達もそんな空気を敏感に感じ取り、そわそわと落ち着かない。俺は彼らが短気を起こさない事をひたすらに祈っていた。

そんな暴発寸前の兵達の中にユマ姫は飛び込んだってワケだ。

虜囚の頃と変わらず、すり鉢の底に君臨し、多くの視線に晒されていた。しかし、今度は立場が全く逆、ユマ姫が居並ぶ帝国兵を睥睨している。

あたかも動物園の動物と観客、檻の中と外が、ソツクリ入れ替わった様だった。

しかし！ 思い出して欲しい。そこにもう『檻』は無いのだ。

ましてバニー姿など、極上の霜降り肉を猛獣の群れへと投げ込むに等しい。斬新な自殺方法にしか思えなかった。

だのに、田中は不敵に笑った。

「良い顔してるじゃねえか！ アイツ、復讐だなんだ言いながらどこまで殺して良いか、悩んでいる節が有ったろう？」

「あつたつけ？ 常にメチャメチャ殺意に溢れていたが？」

でも、俺を好きな人間まで殺したくは無かったんだ、ソレほどにアイツらは俺の為に頑張ってくれたんだ。

アイツらにも殺意を向けようとして、でも出来なくて、俺はいつしか、苦しくて、らしくない程に帝国への殺意を丸めていた。

復讐が俺の全てなのに！俺が、俺を！殺しそうになっていた。

思えば、昔、ゼスリード平原で俺に怯えた帝国兵を一人、ぶっ殺した事がある。

アイツは俺に弓を引いた。いや、俺の殺意で弓を引かせたのだ。一番臆病なアイツは混乱して俺に矢を放った。

そして、正当防衛だと、俺は喜んでアイツの脳みそを吹っ飛ばした。

その時は気持ち良かった。でも、後からなんだか胸に小骨の様につつかえた。

果たして、アイツは俺を殺したかったのか？

俺が可愛く微笑めば、アイツだって俺を好きになったかも知れないのに。

現に帝国の陣内で乗り込んで、俺が檻の中で可愛くしていれば、帝国兵もたちまち俺の虜になった。

そんな奴らまで殺す必要はないじゃないか。

じゃあ、俺が殺したいのは？俺が殺さなくてはいけないのは？

まず、俺を嫌いな人間だ！

俺が可愛くしていても、それでも俺に仇なすならば、気持ちよく殺せる！　今までもそうだった。

それと、俺に殺されたい人間だ。俺みたいな美少女に殺されたいって言うならば、俺が引導を渡してやる。

俺が始めた戦争だ、その位の責任は取るつもりだ。

もつとシンプルに言おう。

死にたくないなら俺に傳かすけけ！　服従しろ！　ならば生かしておいてやる。

死にたいなら俺に言え、楽に死なせてやる！　ただし、苦しんで死にたいと言うのなら多少はサービスしようじゃないか！

服従か、死か！　選ぶ権利をくれてやる。

しかし、捕虜になった帝国兵は数千人規模だ、悠長に選ばせるには余りにも時間が足りない。決断の時は、すぐソコまで迫っている。

悩んだ末に、俺は一つの結論に達する。

どうせなら選びやすい様にしてやろう！

俺はとっておきの衣装、木村からパクったバニー衣装に袖を通す。いや、通す袖は無いが。

肩はもちろん、鞭の傷跡だらけの背中も丸出し。どの世界でも、どの宇宙でも、どの

次元でも、無条件にドエロいファツションだ。

我ながら完璧な出来映え。覗いた鏡の中には、幼くも儂げで、恐ろしくも美しい、狂気に満ちた一匹のウサギさんが居た。

乗馬鞭を手に、艶然と微笑む。

「行きましょう！」

「はい」

陶然とシャリアちゃんが答え、後ろに控えて付いてくる。

しかし、俺達の行く手を遮る者が居た。

「正気ですか？ その姿！」

シノニムさんだった。興ざめとシャリアちゃんが鼻を鳴らすも、無視してコチラに詰め寄って来る。

「はしたないと言う次元ではありません！ 今まで酷かったです、もはや娼婦でもない格好です！」

言ってくれる！ だが俺は凶暴な笑みを見せつけた。

「娼婦でもない格好？ 結構じゃないですか？」

「なっ？」

真っ向から言い返し、俺は口の端を釣り上げてギラついた目で睨んだ。

「私を買うか、私に買われるか？ 服従か、死か？ 彼らにはキツチリ選ばせませす」

「何を言っているのですか？」

意味がわからんか？ 俺にも解らん！

しかし、コレほどに可愛いのだ。それはもう、男の意識で見ていると脳みそがトロける程に。

それでも尚、俺に逆らうと言うなら、もう『敵』で良いだろう？

俺はシノニムさんに乗馬鞭を突きつける。

「アナタは私の敵ですか？ 味方ですか？」

「そ、それは……」

シノニムさんは言い淀む。

言えないのなら、死ぬか?? 俺はもう帝国かどうかに拘らない。笑顔でシノニムに一歩近寄る。

「み、味方です。当たり前でしょう！」

「そう」

俺はニツコリと微笑んだ。

「ならば、行く先へ、私の元に、アレを届けて下さい」

「アレ？ アレとは、まさか？」

「頼みましたよ」

それだけ言って、俺はすり鉢の底へと歩き出す。

この世界の基準では、キチガイ染みたエロさのバニーガールで、俺は堂々と陣内を練り歩いた。

それにしても、娼婦でもしない姿とは参ったね。

裸同然な娼婦も居ると聞く。つまりコレは裸よりもずっとエロいと？　そうかそうか。

言ってしまうえば、バニーガールは地球人類の英知の結晶。いや、言い過ぎたか？　とにかくエロく見せるために、考え抜かれたデザインだ。

俺みたいな、胸が控え目なタイプの美少女には似合わないかと思つたが、背伸びしたエロスが、余計に犯罪臭を放つて脳を溶かす。

ほら、荷物を運んでいた小僧が荷物を取り落とし、現場主任にドヤされるが、その主任だつて俺を見て固まつた。

小僧は慌ててスケッチを手に、俺の事を絵に描こうとしている。

うむうむ、薄い本かね？　違うわな。アレはちよくちよく兵士が書いていた記録だろうか？

まあ良いや、固まる兵士や商人を余所に、俺は囚われた帝国兵が吹き溜まる、すり鉢

の底へと乗り込んだ。

揉みくちやになるかと思つたら、呆然とした兵士達は俺をただ見ていた。

死を覚悟した者、決死の暴動を計画する者、僅かなチャンスを探し周囲を窺う者。それらが俺を見るなり脳みそとろけた馬鹿面を晒し、鞭で叩けば文句の一つも言えずに道を開けて見送つた。

そうして俺は早々にすり鉢の底に到着する。実家のような安心感。ここ数日晒し者にされて居ただけに、ジロジロ見られるのも慣れている。

いや、今は馬鹿面を晒す帝国兵を俺が観察する番か？　ぐるりと見渡せば、揃いも揃つて口を開けて涎まで垂らしているからケタケタと笑えてしまう。

定位置に到着した俺は、シヤリアちゃんを四つん這いにさせ、その背中にドツカリと座つた。そして拡声の魔法を使って大喝する。

「各部隊の責任者、前へ！」

叫ぶと同時、すり鉢の中は蜂の巣を突いた様な騒ぎになった。

「何だアレ？　何だアレ！　何だアレ!？」

「痴女か？　ユマ姫なのか？　ホント？」

「夢でも見てるのか？　もう死んでるのか？　俺」

そりやそうか、エロに特化したバニー姿だけじゃない。俺は囚われていた時の深窓の

姫君の擬態を容赦なくぶん投げている。

なにせ、今日は死ぬか生きるかを選ばせに來たのだ、気弱な姿は見せられない。

「前へ！ 死にたいなら、今すぐ兵に銃を撃たせる！」

再度叫べば、混乱の末に、俺の目の前には六人の隊長が出そろった。

これだけの軍隊だ。同じ隊長でもその姿には個性があった。

六人の内、四人こそ武闘派っぽいゴリゴリの騎士姿だが、一人は汚いオッサンで、もう一人は小綺麗な若い将校だ。

「跪け！」

メイドの背に腰掛けたまま、俺は端的に、彼らにソレだけを命令する。

「……………」

しかし、誰も従わない。

「跪くか、死か！ 選べ！」

宣言と同時に、俺は大げさに右足を高く上げた。すると、六人の目が、一齐に俺の足を追いかける。

白いハイヒールを履いた、網タイツの足だ。全員にとって未知の体験に違いない。

「選べ！ 跪くか？ それとも死ぬか！」

再び宣言し、俺は上げた右足を左足へと絡ませる。

なんの事は無い、足を組んだ。ただソレだけ。

ソレだけで、小汚いオッサンの隊長は立ってられなくなった。両腕は縛られているために、不格好に前屈みになって、そのまま跪く。

俺には解る。立ってしまっただが故、立って居られなくなったのだ。

「跪いたな？ 下から見上げる私の姿はどうだ？」

「いや、それは……」

言えないか？ でも、言わなくても解る。存分に俺の股間、バニースーツが作るVラインばかりをギラギラと凝視してるじゃないか。

見た目通りの下品なオッサンに、ある意味で安心する。

「座っただけか？ 跪いたのではないのか？」

俺は、立ち上がりオッサンのまん前に移動するや、仁王立ちに問い詰める。

「あの、その」

オッサンはモゴモゴと口ごもる。しかし、泳いだ目線は俺の体を彷徨っていた。

どうだ？ 間近から見上げるロリ系バニー少女の股間は！

「ジロジロ見るな！」

しかし、許さん！ 俺は見上げるオッサンの顔面をハイヒールで踏み潰す。

「あげっつー！」

そして、仰向けに転がり、曝け出されたオッサンの汚い股間へ目掛けて鞭を振るつた。
「ぐべえええ」

「他に、跪く者は？」

俺はのたうつオッサンを無視して、鞭先を弾いて弄ぶ。

そんな俺に鋭い視線を向けた人物が居た。

「わ、私は悪魔には屈しない！ 絶対にだ！」

意外にも、気丈にそう言つてのけたのは、小綺麗な若い将校だった。

恐らくは中央から出向の官僚で、この中では一番偉い人物。そんな武闘派でもない文官が必死に抵抗したものだから、残る四人の騎士隊長にも火を付いてしまった。勢いに飲まれていた彼らから、ボケつとした部分が消えてしまう。

「我々を馬鹿にしているのかな？」

「甘く見られたモノだ」

「破廉恥な格好を！ 恥を知れ！」

「その俗物、グリダムスと我々は違う！」

さつきはポカンとしていた癖に良く言う。

しかし、上手く行かないモノだ。これも全て優男風の官僚のおかげ、気弱な外見ながら妙な男気を見せてくれる。

……と、よくよくその将校を見てみると、頬は上気し、瞳は期待に潤んでいるではないか。

え？ 何コイツ？ あ、そうか、コイツは！

……死にたい側か！

「ほう、良く言った！」

「ぐえっ！」

俺は将校のネクタイを引っ掴むと、リミッターを外した力で強引に引っ張った。首が締まった将校は、前屈みに地面へ突っ伏すハメになる。

俺は、その後頭部をハイヒールで踏みつけ、尋ねる。

「ゆっくり廻り殺しにされるのと、楽に死ぬのとどっちが良い！」

「あ、え？」

地面とキスしながら、混乱した将校は選べない。ならばと俺は、頭から突っ伏した将校の、突き出された尻へと鞭を走らせた。

——ピシイイ

「あうっ！」

思いの外、いい音がしたな。そして、良い声で鳴いた。

「選べ！ 早く！ すぐさま死ぬか、それともこのまま廻りたいか！」

「翩りたいです！」

将校が情けなく『おねだり』すれば、先ほどの男氣にあてられ凜々しい表情をしていた隊長達が一転、「え？ 何言ってるの？」と顔を呆けさせた。

そうだよ！ コイツは、いけ好かないエリートながらに、必死に意地を見せたワケじゃない！

ただの！ ヘンタイだ！

——ピシイ！ ピシイ！

俺は乗馬鞭で鞭打つ。こんな事なら、女王から水牛の鞭を借りておけば良かったか？ いや、バニーちゃんには乗馬鞭ぐらいのが似合うよね。正直、水牛の鞭はトラウマだし。

「あううう」

それにしても、コイツ、幸せそうに良い声で鳴くじゃないか！

周りの隊長もすつかり、「あつ察し」みたいな顔に変わってしまった。

しかし、時間は有限だ。そろそろこんなモンで良いだろう。

「シノニム！」

「は、はいっ」

恐る恐ると言った感じで、すり鉢の底にやってきたのはシノニムさん。

その手には巨大な剣があった。それも、信じられない位の大きさである。

「な、なんだ？ あの剣は」

「デカすぎる！」

「人間に扱えるのか？」

中は空洞なんだけどね。それでも5kg以上はあるので、余裕で持ってきたシノニムさんは結構力持ち。

父の形見、王剣パウ・ラ・ザルディアだ。こんな時の為に、木村に運んで貰っていた。俺は魔力を流し、噴出する空気のを借りつつ、それを高く掲げ、将校に最後通牒を突きつける。

「私に従うのを良しとしない、骨のある男よ。立て！ そして選べ！ 戦士らしく、首を刎ねられ死ぬか！ この剣で頭からかち割られ、無惨な挽き肉に成り果てるか！」

俺の言葉に、その場に居た殆どの人間は首を傾げた。

意味のない二択。苦しみながらプライドも保てない挽き肉に意味はあるのかと。

しかし、将校は立ち上がり、叫ぶ。

「挽き肉に！ 挽き肉にして下さい！」

「良く言った！」

そして、俺は王剣を振り下ろす。

——グチャア!

人間が、立つたまま真つ二つに分割される。その異様に皆が息を飲む音がハッキリ聞こえた。

でも、斬られる瞬間まで、コイツは何だかんだ満足そうにしてたから、俺も悪い気持ちはない。

しかし、失敗したな。返り血を浴びてしまった。真つ白なバニースーツが血に染まる。

いや、コレはコレで?

「う、美しい」

くたびれたオツサン隊長が呆然と呟く。そうか、そうか? そうか! 実は俺もそう思っていた。

「さて」

俺は再び、シャリアちゃんに腰掛け、足を組み直し、尋ねる。

「跪くか、死ぬか、選べ!」

「は、ハイッ!」

今度は、残った四人全員が跪いた。あと、腰掛けたシャリアちゃんの息が荒い。血まみれの俺がそんなに可愛いかな?

やっと座った騎士風の四人の隊長はどうだ？　ビビってるだけかも知れない。確認するべきだろう。

「お前等は全員、私に、従う。それで良いんだな？」

死にたいなら、今すぐ選べ！　俺は血に塗れた大剣を弄び、見せつける。

「あ、う……」

しかし、誰も剣など見ていないのだ。

コイツら、ドコを見ている？　マヌケ面で、必死に何かを目で追っている。

俺は立ち上がって問い詰めようと、組んだ右足を上げる。

？　すると、皆の視線が大きく動いた。

その先には俺の足。なんだ？　俺の足を見てるのか？

ああ、なんだ。オッサンや将校を踏みつけた事で、右のハイヒールが壊れて脱げかけている。

組んだ足の先、俺のつま先で、プラプラと踊るハイヒール。それを大の男が目で追っているのだ。

俺はなんだかおかしくなって、足を上げ、つま先でプラプラとハイヒールを遊ばせながら、右へ左へ振ってやる。

すると、オッサンと四人の騎士が、口を開けっぱなしの呆けた顔で、必死でハイヒール

ルを目で追うのだから笑ってしまう。

愉しい！

俺の背筋がゾクゾクと震える。奇妙な快感が確かにあった。

コイツらは間近に死が迫っているのに、それでも俺の足に夢中か！

俺は大仰に右足を上げ、下ろす。そして今度は左足をあげた。そうしてゆつくりと、

ゆつくりと、足を組み替えた。

「ハウッ！」

すると、五人は変な声をあげ、口を半開きに涎を零す。

先ほどと同じく足を組んだだけ。しかし、跪いた姿勢から見上げる姿は、どうにも刺

激が強かったらしい。

今度は彼らに、壊れていない左足のハイヒールをプラプラと見せつける。

「踏んで欲しいのか？　しかし、見ての通り、この靴は壊れやすい。先着順だ！」

いや、一応ね、言い訳しておくが。半分以上は冗談で言ったのだ。

なのに、オッサンを含む五人の隊長が、前のめりに足元へ縋りついてきた。

「わ、私を！」

「いや、私を」

「俺だろ！」

「何を！ これ以上グリダムス殿に良い思い、いや無様をさせる訳には！ この私に」
……いや、コイツら揃いも揃って変態過ぎるだろ。

圧倒的な迫力とエロい格好で、腰を引かせ選ばせるつもりが、俺の腰が引けてしまった。

身の危険を感じ、蒼い顔で仰け反ると、可愛いと逆に興奮する始末。

ヤベエなコイツら……だけど、こう言う変態に、俺は慣れてるけどね。

「ハアハア、姫様、私も踏んで下さい」

ケツの下で、興奮した侍女の声がしていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ユマ姫の痴態？ をすり鉢の上で一部始終観察していた田中と俺。しかし全く理解が及ばない。

「え？ 意味解らないんだけど？」

暴発寸前の帝国兵を、なんだかんだ手懐け？ たのか？ なんか、屈服させた様にも

見える。

現に、すり鉢の底では地に伏せた騎士隊長の頭をグリグリと踏みつけているでは無いか。

騎士にあるまじき、屈辱のポーズ。と言うか、SMプレイだな。バニーガール姿だし。

言葉を失した俺を見て、田中が言った。

「楽しそうじゃん、お前も踏まれて来いよ」

「いや、遠慮しておくわ」

なんだよあの集いは。

いつ殺されるんだってピリピリした空気が、謎の熱狂に変わってしまった。

「どうせ死ぬなら、この娘に殺されたい」そんな声が聞こえてくる。

魔女の洗脳よりは可愛いモノと思って居たユマ姫の魅力だが、ある意味もつと恐ろしいモノなのかも知れない。

「いや、それにしても吹っ切れすぎだろ。恥とかないのかよ」

バニーガールとか、この世界ではお嫁に行けなくなるような格好よ？ お姫様にアレで良いのか？ そんな俺の言葉を受けて、ゲラゲラ笑う田中が指差す。

「いや、それでも無いみたいだぜ。ああ見えて、結構照れてる」

田中が指差した先、ようやく俺達の存在に気が付いたユマ姫と目が合う。

足元に寝そべる騎士を無視して、痴態を見つめる俺達に、嫌そうな顔をチラリと見せる。

そして、プイッと顔を逸らした。

確かに、その顔はハッキリと赤かった。

アポカプリンセス2

帝国陣地に設えられた馬房の中、死んでしまった馬丁ばていに代わり、今は一人の老人が馬の世話をしていた。

「よしよし、お前も一人なのか？ ワシもだ」

たてがみをかき混ぜ、悲哀の籠もった声で干し草を与える老人の体格。とても一介の馬丁には見えない。

タリオン伯だった。

老騎士はあの日、嫌な予感を訴えるユマ姫の願いもあつて事態が急変する直前、すり鉢の外へと警備に出ていた。

全軍の収集が掛けられる中、許されぬ専横であつたが、テムザン將軍にも煙たがられる頑固な老騎士故に許された。

しかし、老騎士が王国軍の動きを察知すると、すり鉢から爆音が響いたのはほぼ同時。慌てて戻ろうにも戻れぬタイミングで、タリオン伯は混乱のまま捕虜の身となってしまう。

「結局、この老いぼれだけが生き残ってしもうた」

そうして、タリオン伯は目に入れても痛くない愛娘だけでなく、虎の子の騎士団までこの戦場で失う事となった。

しかし、胸を締め付けるのは彼らを思つての無念ではない。

娘のミニエールは魔女の罠を潰すために自害し、マークス以下、ロアンヌの騎士達は最期までユマ姫を守り抜いた。

だのに、自分はどうか？

「ヒヒイイーン」

一匹の白馬が、老兵を慰める様に嘶く。

「おお、サファイア。お前が居たか！」

それは死んだミニエールの愛馬にして、今はユマ姫の愛馬となった、ロアンヌでも名の知れた血統の駿馬であった。

手塩に掛けたこの白馬が、地獄となったすり鉢からユマ姫を救い出したと言うのだから、老騎士としても鼻が高い。

「そうだな、ワシにもやらねばならぬ仕事があるか」

タリオンはユマ姫が破廉恥な格好を披露したあの日、捕虜としてすり鉢に居た。なのに、呆然と見ている事しか出来なかつた。

ミニエールに代わり、実の娘同様に案じていたユマ姫、それがあられも無い姿を晒し

ていたのだ。平時なら殴つても止めるのがタリオン伯である。

しかし、突飛に見えるユマ姫の意図をタリオン伯は察してしまふ。暴発寸前の兵達
が、あつという間に別の熱狂に飲まれていったからだ。

見事、と言うしかないだろう。白馬の背中を叩き、タリオン伯は呟く。

「しかし、止めねばな」

ユマ姫は、今もあの破廉恥な格好で陣内をウロついている。人の耳目を集め、巧みに
兵の心情をコントロールしているのだ。

しかし、そんな身を切る献身は、まだ幼く見えるユマ姫にやらせるべきでは決して無
い。まして、兵を諫めるのは本来ならば自分の様な老兵の仕事と言う自負がタリオン伯
にはあつた。

「ヨシッ！ やるぞー！」

失意の中、すっかり牙が抜け、覇気を失っていた自分を叱咤する。

その時、決意を新たにした老兵へ思いがけず声かけられた。

「何をやるのです？」

「ユマ姫！」

正に、意中のユマ姫だった。いまだにあの破廉恥な衣装を着ている。

薄暗く、人気の無い馬房の中。幼いながらに匂い立つ色香を放つ体に、伸びそうにな

る鼻の下を必死に抑える。それほどに人心をかき乱す姿だが、今日のタリオン伯はユマ姫がもたらす狂乱に耐えてみせた。

タリオン伯はこれ幸いと、キツイ説教と力尽くをもつてして、破廉恥な格好をやめさせる事を決意する。人目の少ないこの馬房は、これ以上ない舞台に思えた。

なのに、そのタリオン伯を必死に止めるモノが居た。

「ブルルルウウウー！」

自慢の白馬、サファアアだった。

それがタリオン伯の襟を噛み付き、背後から必死に邪魔をする。何事と振り返った老騎士は、白馬の様子に眉を顰めた。

「ブルルルウウ……」

怯えているのだ。名馬の産地の主として、長年に渡り馬と寄り添ってきたタリオン伯だけに、白馬の心情は手に取る様に解った。

気が強く、ミニエール以外の何者も乗せる事が無かった白馬。それがユマ姫だけは背に乗せる事から、彼女もまた清廉潔白な人物なのだと思い込んでいた。

しかし、それがユマ姫が図抜けて恐ろしい存在だからだとしたら、どうだ？

タリオン伯がその可能性に思い至ったとき、背後からの声は全く違って聞こえてしま
う。

「どうしました?」

澄んだ声だ、ずつと聞いていた程。そして脳を揺さぶる程に妖艶な姿は、この世ならざるほどに美しい。

よくよく考えれば、孫の様な年齢の少女である。なのに、半ば本気で入れあげている自分を自覚して、今更に違和感が勝った。

「お、オマエは……」

何者だ! その言葉を既の所で飲み込んだ。そんな事は知れている。ユマ姫だ。なのに、その当たり前が信じられなくなっていた。

「ひよつとして……」

一方で、可愛らしく小首を傾げるユマ姫、そこに動揺は見られない。

「私を恨んでらっしゃるのでしょうか? ロアンヌの騎士は私を守る為に死んでしまったのですから」

「いや……」

そんな事は無い。むしろ立派に戦ったのだと誇りに思い、羨ましかった程だ。

……つい、先程までは!

「良いのですよ。恨んでいても」

「違う、違うのだ!」

「でも、私は死んであげる訳には行きません。祖国の為に果たさねばならぬ事があるのです」

立派な言葉だ。だけど、祖国の為と言う言葉が違うのだ。誰よりも、祖国の為に戦ってきたタリオン伯だから感じる違和感。

「アナタは……」

「ヒツ」

気が付けば、胸元に見下ろす場所にユマ姫は立っていた。タリオン伯は騎士として大きくは無いが、それでも170cm程はある。なのに、150cm弱のユマ姫に見上げられ、恐ろしさに腰が引けていた。

タリオン伯は、三日月の様に釣り上がったユマ姫の口元から目が離せない。

可愛らしい唇がほころび、呪いの言葉が紡がれる。

「私を殺したいのですか？ それとも、……私に殺されたいのですか？」

意味が解らない二択だった。

意味が解らないハズの二択だった。

息子同然の騎士達が守ったユマ姫だ。まさか殺したいハズが無い。

まして、殺されたいハズはもつと無い。

しかし、怖いと思ってしまった。もう、同じように守れる自信が無い。捕虜として、た

だ従えるほど愚かにもなれない。

どうして良いか解らないまま、見下ろすユマ姫の瞳に、鎖骨に、脇に、首筋に、目線が彷徨い。どうしようも無く惹きつけられて行く。

知りたく無かった。

守るべきモノが、守ってきたモノが、ハッキリ悪魔なのだと解ってしまった。

「殺して、くれ……」

だからなのか。

意味不明だったはずの二択、その中でも、何よりあり得ないハズの選択肢。なのにタリオン伯は選んでしまう。

「そうですね……」

ユマ姫が手を伸ばす。その小さい手の平まで、美しい。

首に手が掛けられ、タリオン伯は干し草の上へと押し倒された。

——ゴキユツ!

首の骨が折れる音。その怪力は、普通の少女ではあり得ない。不可思議なユマ姫の正体、その答え合わせと言って良い。

なのに、首の骨が折れる苦しみと、裏切られた悲しみの中であっても……

それでもユマ姫は美しかった。

一矢報いる事も、助けを求める事も思い至らない。ただ幸せを感じている自分に愕然とする。

陶然とする痛みの中、眼前にユマ姫の顔が迫る。手向けにと接吻されるのかと、タリオンは期待してしまった。

しかし、コツンと額ひたい同士がぶつかり、慈しむ様なユマ姫の目だけが視界一杯に広がった。

「さよなら」

可愛い声がして。不可思議な力で脳みそがかき混ぜられる感触。タリオンは最期まで、欠片もユマ姫を恨む事が出来ずに逝った。

「ヒヒイイーン！」

馬房の中、悲しげな白馬の嘶なげきが響いた。

賢かしこ過ぎる白馬は、育ての親とも言える老兵を止める事が出来なかった。

それは、不気味なユマ姫を殺す、最初で最後のチャンスであった。

きつと、振り上げた蹄をユマ姫の小さな頭部に振り下ろすだけで、全ては終わったはずなのだ。

なのに、幸せな老人の笑顔に、最後までソレが出来なかった。

終末世界の創造者

スイングドアの扉が並び、オープンテラスを備えた店舗が軒を連ねる。街路は複数の馬車がすれ違える程に大きく、空気はカラリと乾いている。

そんな西部劇を思わせる街並みの中、役場の前の広場では女性と子供達ばかりが寄り添う様に集まっていた。

ここは、テムザン将軍が逃げ込んだ街、クーリオン。

帝国側で国境に最も近い街であり、スフィールへ至る小さな宿場町でもある。

王国との戦争とあらば、物資の供給地点としてクーリオンはちよつとした好景気に沸く。今回もそうだった。

だけど、国境に近いのは良い事ばかりではない。勝っている時は良いけれど、負け戦となれば略奪に遭う恐れもある。街の人々だってそれは覚悟の上。いざとなれば皆で戦うのだと教え込まされ育つのだ。

でも、それだって昔の話。ここ百年クーリオンが攻め込まれる事は一度も無かった。

騎士達がゼスリード平原で鎬を削り、その結果で身代金やら賠償金が出たり入ったりして、それで終わり。そんな平和な戦争がここ百年続いていた。

た！

「きやああああああ！」

狂乱はあつという間に広がった。他の者まで次々と人間に齧り付いたからだ。

「な、何だコレは……」

呟いたのはテムザン將軍直属の騎士。村人の護衛に駆り出され、退屈な仕事と思いがらも決して油断してはいなかった。だが警戒していたのは敵兵だ、守るべき市民が暴れ出すとは夢想だにしていけない。

まさに地獄絵図。我が目を疑う光景に、歴戦の猛者と言えども数瞬、呆然としてしまったのは責められぬ事だろう。

だが、その瞬間を見逃さない生き物がいた。

——ガルルル！

犬だ、引退した狩人の狩猟犬。既にペット同然で野生を忘れかけていた犬が、狂った様に飛び掛かり、一瞬の内に騎士の首筋を噛み砕いたのだ。

「ぐがっ」

血を吐き、倒れる。伸ばした手は剣を掴む間も無くだらんと垂れた。

この騎士は、あの、すり鉢状の帝国陣地から命からがら逃げ出した騎士の一人。実力以上に、人一倍運が良い事で鳴らした男だった。

現に迫撃砲と狂戦士が暴れ回り、ユマ姫が踊る地獄同然の戦場。生き延びてテムザン將軍と脱出してみせたのだから、流石の剛運と言うべきだろう。

だが、抜け出した先には、更なる地獄が待っていたのだから、さしもの剛運もネタ切れとなるのは無理もない。

這々の体で逃げ帰った騎士達を温かく迎えてくれた活気溢れる街。

その街が、あつという間に人肉を食うバケモノ達の巣窟と化していた。

もし、地球の現代人がこの光景を見たらこう言うだろう。

まるでゾンビ映画みたいだね……と。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「敵はクーリオンにあり！」

鈴を転がす可愛らしい声ながら、少女の言葉は勇ましい。

拡声器で響いた声を聴くだけで、士官も農兵も区別無く色めき立ち、熱に浮かされ声のする方を目指し駆けていく。

少女の姿が見える場所は、より顕著だ。

白馬に乗った麗しき少女は、しかし、目を疑う程に破廉恥な姿を晒していた。

扇情的な網タイツに、股間に食い込むハイレグ、隠す気の無い滑らかな肩、どれもが脳を揺さぶる程に過激である。

なにより凄いのが、丸ごと曝け出された背中だ。鞭の傷跡が痛々しく、後ろに続く兵達の視線を釘付けにして同情心と嗜虐心を煽った。

それでいて、見た事も無い構造の少女の靴は、鋭く尖った踵に踏まれてみたいと被虐心まで煽るのだ。

少女は叫ぶ。

「我に続け！ 我は神の代弁者なり！」

ユマ姫だった。

白のバニー姿は兵士のまともな思考能力を根こそぎ奪ってしまった。万を超える兵達がテムザン將軍の首を求めて駆けていく。

そもそもが、素肌を晒すのが破廉恥と言われる世界である。暑さが厳しいプラヴァス以外では、首元や手首ですら隠すのが貴婦人の嗜み。だからこそ、フォーマルな襟や袖口は貞淑の象徴であった。

なのに、バニースーツはその襟と袖口だけを挑発的に素肌にぶら下げて、腕や背中、この世界でエロスの象徴たる肩すらも丸出し。

意味不明なギャップはこの世界で、より強烈に作用した。

ピンヒールや網タイツ、うさぎの付け耳に至っては、そもそも存在すらしていない。それだけではない。エルフ特有の長い耳に大きな瞳、華奢な体に鞭の傷跡。更には見

た事も無い大剣を振り回し、人を両断して、返り血に染まったままに微笑んでみせる白馬に乗ったお姫様。

ココまで来ると、刺激に満ちた地球でもお目にかかれない。映画もない世界とあらば尚更である。

訳が解らない程に強烈な刺激を突きつけられた上で『我は神の使い也』と言われれば、持て余した感情に逆らう術を持つ者は殆ど居なかつた。

今だつてそうだ、白馬に乗った白バニーガール姿の銀髪の少女が、透き通る様な大剣を掲げ、軍の先頭を駆けている。

フィクションでも外連味けれんみが過ぎる光景を目にすれば、夢と現うつの判断がつかなくなるのも当然である。

しかし、こんな熱に浮かされたような行軍は危険だ。当然、司令官であるオーズド伯は止めようとした。

いや、今もしている。

なれど、オーズド伯がいくら叫んでも誰も止まらない。軍全体が狂った獣に成り果てていた。

移動司令部となっている装甲車の中で声を張るオーズドを横目に、シノニムが訴える。

「止められないのですか？ キイムラ様」

「そう言われましても……」

「こんな専横を許しては、姫様は本格的に王国で居場所を失います」

「……その事なんですが」

木村はポリポリと頭を掻いて、説明する。……手遅れだ、と。

当然、シノニムは食って掛かった。

「手遅れとはどう言う意味ですか？ キイムラ子爵！」

「そもそもが、ユマ姫はやろうと思えば一人で敵の大將首を取って帰る实力がある。その事はご存知ですね？」

「……はい」

シノニムは昨年の戦にも参加して、雷に打たれたユマ姫を看病している。

では、何故ユマ姫は雷に打たれたか？ 空を飛んで、魔法の矢を撃っていたからだ。天氣にさええ気をつければ無敵の戦法と言える。

「しかし、無敵であるが故に、王国貴族も明日は我が身と冷静では居られなくなった」

「その通りです！」

シノニムは力強く頷く。

ユマ姫が王国に来てからと言うもの、貴族の変死が相次いでいる。例えばユマ姫を嘘

発見器に掛けたルワンズ伯だ。

ルワンズ伯は、パーティーの最中に見せしめの如く撃ち殺された。

勿論犯人はユマ姫だ。しかし、氷の矢を使った完全犯罪。疑えど、証拠など何も無い。

しかし、魔法の矢の存在が明るみになるにつれ、誰もが犯人に気が付いてしまった。

それでも、圧倒的な人気を誇るユマ姫に、表立って文句が言えないだけなのだ。

「まして、司令官の首だけ刈り取る戦法は、戦争の止め時を失わせる。人間同士を潰し合わせるつもりなのだ」と不信感が強くなる。それがユマ姫を戦争に参加させない理由でした」

「ですから！ 軍の先頭を駆けるなど！」

「しかし、手遅れなんですよ」

「どうして……?」

「アレだけの兵を操ってみせたからです。オーズド伯の声すら届かぬ程にね」
「うっ！」

魅力のみで幾千の兵を寝返らせる存在など、危険にも程がある。

まして敵だけでは無く、味方さえも冷静さを失い、叫び続けるオーズド伯を無視している。

「しかし、姫がそうしなければ、我々は捕虜の兵士を虐殺する必要があった。私には、そ

して、恐らくはオーズド伯にもその覚悟が無く、結局はユマ姫がもたらす奇跡に縋ってしまった。その時点で何も言う資格がありません」

「……………」

シノニムはやるせなさに膝を握って俯いた。

思い詰めた侍女の肩を叩いて、木村は励ます。

「こうなったら、行く所まで行くしかありません。私の優柔不断が原因ですから、必死でフオローしますよ」

「ですが……………」

シノニムは不安げに外を見る。熱に浮かされた軍勢は一体トコへ向かうと言うのか？

このまま皆、世界の果てまで死の行軍を続けそうな予感に、不安ばかりが胸を締め付ける。

「安心して下さい、クーリオンは先行した田中が探っていますから」

木村がそう励ました途端、コンコンと外から装甲車のドアを叩く音。

「オイ、ヤバえぞぞ?」

「田中? なんでココに居んの?」

いつの間に、窓の外にはバイクで併走する田中が居た。

「んな事より、ヤベエ」

「何がよ？」

「クーリオン、ゾンビだらけになってっぞ！」

「マジかよ……」

必死でフォローすると言った事、木村は早くも後悔していた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺はクールな美少女を演じていた。

クールなフリして、コレが当たり前ですって顔して、恥ずかしいバニー衣装をノリと勢いで誤魔化そうとしていたってのが正しいか？

しかし、そのクール系美少女の仮面が剥がれようとしていた。衝撃のあまりあんぐりと口が半開き、見間違いを願ってムムムツと眉根を寄せて目を凝らす、どう見ても現実！

「なにこれ……」

そこには元気に走り回るゾンビ達の姿が！

なんでだよ！ ファンタジー世界だろうが！

「人間が、人間を……喰ってやがる！」

隣でしょぼくれた中年が苦々しく呟く。このオッサンはグリダムス。俺に踏まれて

寝返った帝国の将兵だ。

こんな顔してかなりのやり手らしく、コイツが率いるグリダムス隊はあらゆる状況で戦果を出す事で知られているんだと。見た目は完全にエロ親父って感じなのにな。

いや……本当に寝返ってくれたのかな？ スケベなオツサンキャラってヤツは食わせ者って相場が決まっているんだ。それがSM紛いのアレで俺に心酔するかって言う
と怪しい様な……

「あ、う、ああア、！」

なんて事を考えて、現実逃避してる場合じゃないな。ゾンビ達の声は悍ましい。

目の前には、実の母親だろう女性に、一心不乱に齧り付く少年の姿。帝国の人間などみんな死んでしまえば良い、と世界を呪った俺にしたって気持ちが良いモノじゃない。

「どうなってやがる……」

呆然とするグリダムスのオツサンを放置して、俺はスタスタと歩みを進める。

「おい！ 待て！」

後ろから必死に呼び止めるオツサン。ひよっとして肩を掴まれ止められると思ったが、俺の肩に触ろうとして、空を切ったのが気配で解った。

まあ、アレだよな。バニーガールの剥き出しの肩って触るの躊躇するよな。

そんな隙を突いて、俺は母親を食う少年の背後に立った。

「ごめんなさい」

なんとなく謝って、一突きに少年の頭を破壊した。お父様譲りの王剣は流石の破壊力。

パタリと倒れた少年はもう動かない。

正直、スツキリした。目を覆うような光景に心を痛めたので、自分が優しくなり過ぎたのかと、復讐を忘れたのかと思つたがそうでもないようだ。

そうだよな、やっぱり殺すにしたつて自分の手で殺つた方が良い。病で苦しんで死んだとしても、俺の心が晴れる訳じゃない。

俺はジツと少年の死体を見つめる。

「無茶をするんじゃないやねえ、そんなのは俺達でやる」

そしたら、肩を掴んで下がらせられた。オッサン、やっぱり俺の肩を掴みたかつた模様。

しかし、オッサンの顔は苦り切っていた。人の肩を鷲掴みにしてその顔はなんだ、もつと嬉しそうにしろ！

……まあ、どうせ俺に嫌な役をさせたとか思っているのだろう。俺が考えていたのはもつと重要な事だ。

無造作に少年に近づくとオッサンに警告する。

「気をつけて下さい、動くかも知れません」

「馬鹿言うんじゃない！ 頭を割られて動けるかよ！ クソッ！」

今さら恥ずかしくなったのか、オッサンの顔は赤い。頭を掻きむしり、声を荒らげて反論してくる。

この過剰反応、コイツ童貞か？ 照れ隠しにしても度を超している。俺は呆れて指差した。

「いえ、そつちでは無く……」

「ガアアアアツ」

「ソチラの女性です」

「なっ？」

立ち上がったのは少年に囁られていた母親だ。鼻も、頬肉も、胸も欠損し、腹からは内臓が零れる有様で、それでもグリダムスへ牙を剥いた。

「な、何だこりゃ！」

言わんこつちやない。ゾンビらしく組み付いて齧り付こうとする女性をグリダムスは必死に引き剥がそうとして……剥がせなかった。

「なんて力だ！」

ゾンビだからね、力も強そうだ。

抱きつく女性は欠けた体を引き摺りながら、それでも軍人であるグリダムスの脅力を上回る。

下手に助けるとまたオツサンのプライドを刺激するかと静観していたが、そろそろ助けた方がよさそうか？

「クソツッ！」

しかし、オツサンも然る者。腰のナイフを引き抜いて、ゾンビの首筋から脳髓までを突き刺して、事なきを得た。評判通り、ソコソコやるね。

「ハアハアハア」

しかし、汗だく。必死も必死だ。やっぱりゾンビは力が強い。

そう、コレはもうハッキリとゾンビだろう。だったら対処は決まっている。

「ゾンビは頭を壊せば動かなくなります」

「ゾンビってのは？ アンタ、なんか知ってるのか？」

クール演技の続きで、さも知ってる風に言ってみただけ、真顔で知ってるかと聞かれるとあら大変。全く知りませんね。

かといつて、今さら何も知らないとか言うとか台無しである。ここはお得意の小首を傾げる可愛い仕草で押し通るツッ!!

「さあ？」

「さあつて……」

「大体、そういうモノです、見ての通り力が強く、痛みを感じない。そして、その体液、危ないですよ。口に入ったりするとアナタもゾンビになるかも」

無邪気な様子でつらつらと語ってみせる。俺はただゾンビについて聞かれたから、前世のゾンビ知識を披露しただけ。いいね？

自信満々の俺の様子に、オッサンは顔が引き攣る。

「冗談だろ？」

いいえ、映画の話です。俺は自信満々に宣言する。

「それに、噛まれば、噛まれた人間もゾンビ化します」

「何だそれ、説明してくれ」

コッチが説明して欲しいが、ココは押し切るしかない。

激昂するグリダムスを見無視して、俺は背後に向けて号令した。

「総員、戦闘準備！」

「ハッ！」

号令ひとつで、控えていた『ユマ姫親衛隊』が一糸乱れず整列する。誰も俺に疑問など口にしなない。

……コイツら、流石に良く調教されてるな。今まで無茶に付き合わせ過ぎたとも言え

るが。

皆ココで言う通りにしないと、俺が好き勝手に暴れると知っている顔だ。本気で俺の身を案じている。

いや、……良く見ると案じているのは俺の身と言うか、体か？ やたらチラチラと見て来るじゃないか。

何と言うか、表向きには大した権力もない俺の親衛隊に志願したとか言う時点でどうかと思っていたが、いい歳して全員が俺に夢中である。

元々そんな傾向はあったが、何と言うかバニー衣装を着てから若干目が怖いまであるんだよ。

特に隊長のゼクトールさんとか。真面目な顔をしてガン見しているの、とつくに気が付いているからね。

「敵はいずこに？」

「間もなく」

その視線、クール演技の途中でなければドン引きしている所だ。

なんか勢いで「間もなく！」とかクールに言い切ったら、ゾンビはホントに街中からワラワラと沸いてきたので助かった感ある。

でも、現れたゾンビは街の住人の姿じゃないのが気になった。重装備である。

「テムザン將軍の親衛隊。コイツらもかよ」

吐き捨てる様にオツサンが毒づく。かつての同僚、エリート騎士の変わり果てた姿にシヨックを隠せていない。

彼らはボロボロの体を引き摺り、武器も持たず、フラフラとコチラに近寄ってくる。しかし、防具は着けているので倒すに厄介だ。力は強いので組み合ったら危ない、俺はゼクトールさんに宣言する。

「近寄らせるな！ 槍で押し止め！ 頭を狙いなさい！」

「ハッ！ 総員、聞いたな！ 傷ひとつ負うな！ 数人掛かりで刺し殺せ！」

「オイ、正気かよ！」

グリダムスは慌てるが、まさか助けようとか眠い事言う気か？ お前も殺すぞ？

俺はグリダムの瞳を覗き込む。

「何か？」

「何って、噛まれたら伝染るんだろ？ 治せんのかよ？」

なるほどね、同僚を殺すのが嫌なのではなく、正体不明の怪物と戦って、自分もゾンビになるのが嫌だ？ 思ったよりもマトモだが、マトモだったら戦場に来ないで家で寝てろ。

「治せません、見た事もない症例ですから」

「なっんだと!？」

「ですから、もしも正気を失ったなら……私が殺して差し上げます」

「はっ? オイツ! ふざけんじゃねえ」

グリダムスは食って掛かる。

コイツ面倒くせえな。俺に殺されるのと、槍に突かれて死ぬのとどっちが良い? どう考えても俺に殺された方が良いだろ!

「嫌ですか?」

「……………」

真っ正面から問えば、グリダムスは言葉に詰まった。初心なオツサンなど俺にかかればこの通りよ! ヤケクソにグリダムスは部下達にハツパを掛ける。

「ちつくしよう! やるぞ! おまえら!」

「銃だ! 距離を取って攻撃しろ! 頭を狙え!」

「槍だ! 絶対に近寄らせるな!」

そうして、地獄での戦闘が始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

圧巻である。一時間後、街の広場には頭が潰れた死体が山のように連なっていた。

変わり果てたとは言え市民に武器を向けられない者が多い中、親衛隊はもちろん、グ

リダムス隊も結構活躍した。大した被害も出していない。

流石は帝国騎士と言ったトコロか。多少は力が強くても、武器も持たないゾンビでは、訓練した兵の連携に敵うはずもなかったって訳だ。

しかし、どんなに怪我を負っても動き続ける亡者の姿は兵達の心に少なく無い衝撃を与えた様だ、雰囲気が悪くて仕方が無い。

「……………」

特に陽気なエロ親父だったグリダムスがこの街に来てからシリアス一辺倒。昨日、俺に踏まれて喜んでたとは思えない。

暗い顔をしていたので、お尻と耳をフリフリしていたら声を掛けられた。

「おい嬢ちゃん。噛まれちゃったんだが、アンタは俺を殺すのかよ?」

あー噛まれてたかー。そりゃシリアスにもなるわ。仕方無いね。で、どうなの?

「それで……………」

ずずいと近づいて問いかける。

「アナタは死にたいのですか?」

ニツコリと微笑む。すると気圧されたのか本心を絞り出してきた。

「いや、俺は生きてえ」

「そうですか、では……………」

俺は呪文を唱え、傷ついた患部に手をかぎす。するとみるみる傷が塞がった。

「オイ、マジかよ」

「ええ、あなたはまだ、死なない」

運命光がまだある、噛まれただけでゾンビ化するなら、コイツはもう詰んでいるはずだ。それが消えてないのだから、多分ゾンビにはならない。……多分な。

「本当、かよ……」

でも、自信満々に断言する俺にグリダムスは涙目で喜んでいる。

「噛まれただけでは感染しないと言う事でしょうか……」

一方で、俺はそんな事を気持ち大きめに呟いて誤魔化した。

「噛まれたら感染するって嘘じゃねーか！」と冷静に文句を言われたら困るからだ。俺の知っているケースとちよつと違うな空気だけむに巻く作戦であった。

誤魔化す様に視線をフラフラと彷徨わせる。

そこで俺は待望の捜し物を発見する。特徴的な運命の輝き、それが今や消えかけている。

「良かった……コレで晴らせる」

ルンルン気分で俺は街中に踏み込んだ。

「彼らの無念を」

呟いて、俺は母。パルメのカツラを取り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何故じゃ、何故こんな事に……」

テムザンは小さな物置の中に逃げ込んでいた。

「突然、バケモノになるなど……アレが魔女の力なのか？」

食事を終えてしばらくした後、突然に兵達が苦しみだした。毒を疑い安静を命じたが、彼らは目を覚ますと同時に輜重隊しちょうたいを襲撃したのだ。

獣の様に糧りょう食しょくを喰い漁ると、次は人間の番だった。

見た事も無い悪夢……いや。

「魔力の崩壊か……」

大森林に攻め入っては大損害を出し続けた帝国故に、テムザンには知見があった。

人間が魔力が濃い場所に行くと、体調を崩す。腹を壊したり、集中力を欠いたり様々だが、その症状のひとつが異常食欲だった。

テムザンも若い頃、食欲に我を忘れた同僚を見た事がある。

「食事に何か混ぜられた？ いや、霧か？」

食事の前に、この地方では珍しい霧が立ちこめていた。アレはひよつとして霧ギユルドスの悪魔の霧ではなかったか？

霧ギユルドスの悪魔の霧は人間には無害と思っていたが、そうでは無いのかも知れない……
「今更か……」

部下も死に絶え、生き残る術が無い。

「しかし、ココで生き残れば……」

却つて良かったかも知れない。無惨な敗戦の顛末を知る者は誰も居なくなつた。

ユマ姫に怯えた末に、魔女の罠に嵌まつた事はテムザンの不覚である。

まだテムザンの知名度を使えば巻き返せる。まずは魔女を討伐し、その首で王国と一時的に和平を結ぶ。

その立役者になれるのは自分だけなのだ、テムザンは自らに活を入れた。

その時、小さな扉が開かれ、物置に強烈な光が差し込んだ。

「生きていましたか、テムザン將軍」

「お主は！」

輝く金髪のカツラに、彼女しか乗る事が出来ない輝く毛艶の白馬。見事に着こなした帝国の軍服が、逆光の中でも優美に輝く。

使者として見送つた、あの日のままの姿であつた。

「ミニエール！ 生きていたのか」

「勿論です、仇を討つまでは地獄には行けません」

勇壮な物言いもそのままに、颯爽とコチラに手を伸ばす。

「おおっ」

テムザンは伸ばされた手を取る。逆光で顔が見えないが、まさしくミニエールの声、姿であった。

その手にはロアンヌ地方独特の、シンプルな鉄の槍。

「そうだ、一緒に討とうではないか！　しかし敵は多いぞ、まずは魔女、そしてユマ姫」
「その前に、ひとり」

「なに？　誰じゃ？」

ミニエールは首を傾げるテムザンを左手一本で引き上げる。

そして、右手には鉄の槍。

「あなただ、テムザン」

「ガッ！」

鉄の槍がテムザンの胴体を貫く。

目の前に迫ったその顔は、果たしてミニエールのモノでは無かった。

「ユマ姫！　どうして！」

ユマ姫は帝国の軍服に身を包み、ロアンヌの槍を持っていた。

「オマエはアイツらの仇だろっ？」

その為だけに着替えてきた。光の位置を調整し、魔法で空気を震わせ、声まで偽装した。追い詰められた老人が相手、それらはユマ姫が期待した以上に上手くハマった。

貫かれたテムザンが良く見れば、その槍はまさしくタリオン伯が愛用していたモノだった。

「ゴホッ！」

盛大に血を吐く。年老いたテムザンに、腹を貫く槍傷は間違い無く致命傷。しかし、それでも諦めず生き足掻く。

「お主は怪我を治せるそうだな！」

「だから、何です？」

「治せ！ 教えてやろうではないか！ 今起こつてる現象を！」

「ええ、教えて貰いましょう」

「ならば！」

「アナタの、体に！」

「なに!?!」

テムザンは勘違いをしていた。ユマ姫は既に回復魔法を使っているのだ。

槍で、腹を、貫きながら！

そして、同時にテムザンの体内の魔石を砕いた。

「ぐ、が、げああああ」

テムザンの体が跳ねる、痛みと苦しみ、それ以上の食欲に。

「喰わせろおお」

ましてや、目の前には極上の肉がある。柔らかな肉のウサギが踊っている。

ユマ姫は既に軍服を脱ぎ捨てて、挑発的に目の前でくるりと回って見せた。

「やっぱり、魔力を奪ってから、魔石を砕く。すると魔力が欠乏して、食欲が暴走するのですね」

ユマ姫はその身をもって、魔力のバランスが崩れると異様なまでに食欲が増す事を知っていた。

魔力過多の幼少期は常に肉を求め、魔力不足の王国ではお菓子を食べ漁った。

霧ギユルドスの悪魔に魔力を奪われた大牙猪ザルギルゴールは食料を求めてユマ姫の乗った馬車を追いかけて

し、恐鳥リコイは村で、ゼスリード平原で、ユマ姫を再三襲った。

良く考えれば、それらは余りに不自然。一度なら兎も角、回数が多すぎる。全ては食欲に支配された行動だった。

全ては魔力の体内バランスが崩れたのが原因だ。

元々、魔獣やエルフはエネルギーの一部を魔力に依存している。

人間は魔力が無くても動けるが、それでも魔力を利用する事で地球よりも少ない食料

で生きているのだ。

だが、魔力を奪われた上で、体内の魔力結晶すら砕かれればそうも行かない。

まずは霧で魔力を奪って、食事に魔石でも混ぜれば、急な魔力の緩急に体調を崩し、下手をすれば魔石が破壊される。

そうなれば、魔力が溜めておけず、ひたすらに食事と魔力を求め、人間はゾンビと化す。

「でも、何が狙いなのかしら。戦力にするなら麻薬でドーピングした方が強いのに。どう思います？」

「がああああああ」

ユマ姫が尋ねても、既に正気を失ったテムザンは答えない。

腹を貫かれても、ゾンビ化すると中々死ねない事は確認済みだ。

「じゃあ、そこでゆっくり腐っていつてね♪」

「ぐがあああ」

槍で地面に縫い付けられたテムザン。槍の石突にユマ姫が引つ掛けたのはマークスの兜だった。

「ぐゆっくり」

そう言つて、ユマ姫は物置の扉を閉めた。

そうして小さな暗い物置が、帝国の大將軍テムザン最期の場所となる。

姫の決意（嘘）

クーリオンを制圧した。ゾンビには油断が出来ないが、そこまで心配する必要は無いだろう。

奴らは暴走した食欲で動いている。ゲームみたいなのに、タンスにジツと隠れるなんて出来るハズもないのだから。

夕暮れ時、夏と言えども肌寒くなり、俺はバニースーツの上にマントを羽織った。

「何か解るでしようか？」

尋ねたのはマントを持ってきてくれたシノニムさん。視線の先には木村、それに軍医やオーズド伯の姿もあった。

彼らはクーリオンの中央にある井戸に集まり、水の安全性やゾンビ化の原因を確かめているのだ。

「何も解らないでしようね」

「そうですか……」

俺が肩を竦めると、シノニムさんは顔を曇らせた。……最近、どうにもシノニムさんの顔が暗い。大人の女性には色々と悩みが多いのだろうか。

一方で悩みとは無縁の女性も居る。

その女性の見つめる先には、あの井戸から汲んだばかりの水。マジマジと見つめたかと思えば、なんと、そのまま飲み干した。

このゾンビが溢れる街の水を！ 頭オカシイわ。

「どうです？」

気になって尋ねれば、ほう……つと吐息混じりに色つぽく、不敵な笑みでコチラを見
てくる。

シャリアちゃんだ。

「かなりの量ね」

「そうですか……」

何がつて？ 魔力の量だ。

この水には多量の魔力が溶け出している。シャリアちゃんの魔力が視える体質が大
活躍である。

そうは言っても水に溶ける程度、俺にとっては美味しいぐらいだ。人間だって寝込む
程ではないだろう。

しかし、霧ギョルドスの悪魔で魔力を奪われた後、この水を飲むとどうなるか？

体内の魔力バランスが崩れて、食欲が暴走。ゾンビ化する。

そんなトコロが正解じゃないかな？

魔力バランスが崩壊しなかった人でも、嘔まれたショックで暴走したりもするのだから。

片方だけでは毒と判断出来ないハズで、まして魔力が原因となれば木村の地球知識も無力だろう。

頼れるとしたら、ここに居るシャリアちゃん。この世界の毒のプロフェッショナルだ。

「合わせ毒の一種よね」

「合わせ毒とは？」

「金属杯に、酸性の果実ジュースを注ぐ。単体では毒で無くとも、溶け出した重金属が体を蝕むの。ビルダールの王様もソレで体を壊したわ」

「……そうですか」

サラツとトンでも無い事言ってくれるじゃん……我々は何も聞かなかった。良いね？

「ソレで……普通の毒を使わなかった理由はなんでしよう？」

無視して話を続ける辺り、シノニムさんも強過ぎませんかね。

「合わせ毒を使う時は、犯人もその毒を飲む必要がある場合。つまり、このクーリオンに

住んでいた可能性があるわ」

……嫌な予感してきたな。

皆で顔を顰めていると、不意に声を掛けられた。

「姫様、ココに居たのですか」

「アナタは……」

同じエルフの……誰だっけ？ ああ、マールロウ君だ。兄の形見の双剣ファルフアリッ

サを使う美少年、いや、もう美男子である。

そりゃ、俺だって兄の形見をそばに置いておきたい気持ちはある。

だけど、ファルフアリッサは強力な魔剣だ。使える奴が使った方が良いし、そうして

兄の無念を代わりに晴らして欲しいのだ。

それに、マールロウが使うならさぞ絵になるだろうなと思っている。まあ、ステフ兄ほ

どじゃないけどな。

話が逸れた。感傷的になっている時に、寄ってくるからである。

「何用ですか？」

「ユマ姫、いや、ユマ女王。一度、大森林へお帰り願えませんか？」

「何を言っているのです？」

いや、ホントに何を言ってるんだ？ ツツコミ所が多過ぎてリアクションも取れない

ぞ。

……しかし、大マジみたいだ。俺が女王？ それに大森林に戻って事は、即位しろって意味である。

マローウは俺の前に跪き、両肘を握って腕を組む、この世界での臣下の礼だ。

「戦の趨勢は決まったモノとお見受けします。これ以上、御身を危険に晒す必要はありません。ソレに……」

ソレに？ 跪いたマローウ君の視線は、マントからはみ出た俺の網タイツとハイヒールを彷徨う。いやん。

「その……今の女王のお召し物は余りにも卑猥。下賤の者を喜ばせる為とは言え、女王がその様な姿を余儀なくされている事が許せないのです」

顔を真っ赤に言い募る。

ま、止めるよな。自分の所の王族が娼婦でもない様な格好で、男だらけの軍隊の中を練り歩いてるのだ。

性に奔放な地球だって、皇族がバニー姿で前線視察なんて大スキャンダル。

まして、俺は軍の先頭を白馬で駆けてるからな。我ながら正気ではない。

でもね……。

「ソレは出来ません」

「何故です?」

「この軍に私が必要だからです」

だって、俺のエロ可愛さで無理矢理まとめている様な軍隊なのだ。

俺が居なくなれば、途端に空中分解してしまう。

「軍はココで解散するべきではないですか?」

シノニムさんまでそんな事を!

「このチャンスを逃す訳には参りません。このまま一気に帝国の中央まで切り込みます」

「無茶です。糧食も続きません」

「ゼスリード平原の穀物を徴発すれば良いでしょう!」

「何故、ソコまで急ぐのです!」

「神の意志です、我々に残された時間は多くありません」

そう叫ぶと、シノニムさんは「また神かよ」と言う顔をした。

まあ……全然信じてないよね。神に会ったのはガチのマジなんだけど、神が告げたのは何とか生き延びて、死の原因を探る事。

自殺紛いの無茶な行動は、実質、神への反逆だ。その自覚があるだけに、俺が語る神の言葉に軽さが出ている。

どうにもならずヤキモキしていると、再びマールウから声を掛けられた。

「このまま人間の手で帝国を討つたとして、我らの、エルフの復讐が成つたと言えるでしょうか？」

「……………」

ソレを言われると痛い。

「姫様の武功は既に十分。タナカ様の武勇伝に至つては、失礼ながらお父上、エリプス王の英雄譚すら超えています。語るには数日を要する程でしょう」

「そう、ですね……………」

父様を越えたと言われてムツとしたが、エルフから見ると実際、田中の功績はクソほど大きい。

フラリと大森林に現れて、剣一本で国を救つた。その上、魔獣の間引きに関しては、死んだ戦士達の穴をたつた一人で埋める勢いだとか。

エルフは魔獣を討てる者が一番モテるのだ。田中の討伐スコアは群を抜いている。武勇伝と言えば、この前の一騎打ちもだ。マールウが破れた後、攻め込んできた精鋭

達を田中は一人で屠つて見せた。

剣にひたむきな少年が、スツカリ田中に惚れ込むのも無理はない。

…………いや？ それにしたって。

「どうしてソコで田中が出てくるのです？」

「それは勿論。お二人で大森林に戻り、母国を、我らがエンディアンを再興して頂きたく
!!」

……え？ 二人で？ それって。

「な、何を言うのです！」

気持ち悪さとなぜの、良く解らない恥ずかしさ。

少女みたいに照れて、しまった。

その話、まだ生きてたのかよ。

「タナカ様が人間で、ユマ様は人間とのハーフである事は承知しています。ですが、二人が王と成る事に異論を唱える者は居ないでしょう。二人が居なければ、今頃はエルフ自体が減んでいたのですから」

「いえ、そういう話では無く……」

どうして俺がアイツのお嫁さんにならねばならんのだ！

他の誰でも良い。なんならマールウ、オマエでも良い。

田中とだけはキツイだろ。

俺が本気で迷惑そうな顔を見ると、マールウは少し慌てて意外そうな顔をした。

「アニキ、いや、タナカ様からも、ユマ姫の話を良く聞きます。仲は良いと思っていたの

ですが……」

「私もソレは不思議でした。あの日、タナカ様が身を投げた崖下を決死の覚悟で探す様を見た時から、二人はてつきりそう言う仲だと……」

マーロウだけでなく、シノニムさんまで！ いや、そう思うのも当然か。

俺と田中が出会ってから、深い友情を育む時間は無かったからな。

それが、男女の仲だとそう言う話にも説得力が出るらしい。

「私は私の使命を全うするために行動しています。この格好にも意味があるのです」

「しかし、それではタナカ様が何と思うか」

「え？」

……それって、あんまりエロい格好していると田中に嫌われちゃうぞって、そういう心配??」

俺が捨てられる方を心配してるの？

……なんかムカつくな、ソレ。

いつそ、既にフラれたと言う事にしてしまうか？ いや、何かプライドが傷つく。

ってか、エロい格好で嫌われるってどうなの？ マーロウ、オマエもどうせ好きだろ

? エロい格好が！

他人事みたいに賢い事を言ってるが、気取るんじゃないやねえよ。

「マーロウー」

「ツッ… 何でしょう」

伏せていた顔を上げ、コチラを向いたマーロウが、慌てて再び目を逸らす。

俺が、マーロウに向けて両手を伸ばしていたからだ。

思い出して欲しいのだが、俺はバニースーツの上にマントを着ている。

そして、マントには袖が無い。手を伸ばして搔き分けられた隙間から、ドエロいボデイが御開帳。

ひよつとしたら曝け出した普段の俺より、マントの隙間からチラリと覗くバニー衣装の方が却ってエロいかもしれん。

現に、俺がマーロウの顔を両手に挟み、無理矢理コチラを向かせると、マーロウは滑稽な程に顔を赤くし狼狽した。まして跪いた体勢では俺の下半身をマジマジと見てしまふ、マーロウは慌てて立ち上がった。

それでも、俺は両手を高く上げ、マーロウの顔を離さない。手を伸ばして端正な顔を見つめる。

こうしてみると、思い出す。

俺とマーロウでは、頭一つ分ぐらいは身長差がある。

……あの時も、そうだった。

「大きくなりましたね。マールウ」

しみじみとそう言った。

あの日、生誕の儀で、俺とマールウは共演した。

大多数の人にしてみれば、子供同士のなんて事の無いお遊戯だったろう。だけど、あの時の俺には命懸けの大冒険だった。

それでも、あの時の戦いは幸せだった。幸せを守る為の戦いだった。

今はもう、あの時の俺を知る者は、殆ど居ない。そう思うと、何だか悲しくて少しだけ泣けてきた。

「……姫様」

目が涙に滲むと、マールウに心配されてしまった。

別に心配する様な事は無い。ただ、懐かしくて、少し昔の話がしたくなっただけだ。幸せだった、あの時の。

「少し、昔の事を思い出しました。あの時とは、何もかも、変わってしまいましたね」
「いいえ」

いきなり否定されたんだけど？

ムツとして睨むと、真剣なマールウの瞳とぶつかった。

「私は、ずっと変わらず、姫様を愛しています」

「……………」

真つ正面から言われると思わなかった。どう返せば良いか解らず、言葉に詰まる。

「姫様を守る為に、舞台を降り、剣を取りました。私が願うのはユマ姫の安全と、幸せだけです」

「私の幸せ、ですか……」

段々とイライラしてきた。

俺の幸せなんて、俺にも解らんモノを、一方的に押し付けるな！

「まず、私は王になるつもりはありません」

「なぜですか？ 皆、ソレを望んでいます」

「それは皆の望みです。私の望みではありません」

「一体、何がお望みなのですか？」

「帝国への復讐、ソレだけです」

「そんな……」

マーロウだけでなく、シノニムさんまで悲しそうな顔をした。

痛々しいとか、全部忘れて楽しく暮らせば良いのとか、そんな事を思っているのだろうか。

でもな、そんな事が出来るモノか！

「マールロウ、もし私が誰かに討たれたら、アナタはその犯人を探し出し、殺してくださいませんか？」

「必ずや！」

胸を張って即答する。

ならば。

「では、全てを忘れて、役者に戻って楽しく過ごしてくれと言われたら、その通りに出来ますか？」

「……それは」

「出来ないでしょう？」

殺した犯人がぬくぬく楽しく生きていると思うだけで、血が沸騰する様な怒りに駆られるハズだ。

「だから私は帝国が滅びるまで、落ち着くつもりはありません」

「な、ならば、帝国打倒が叶った暁には！」

……そう思うよな、でも、俺には未来など無いのだ。

どうせ『偶然』に死ぬ！ ならば！

「多くの人間を殺戮し、帝国を滅ぼして、私の復讐が叶ったとして、私の様に家族を殺された者は、一体、何を恨むでしょうか？」

「それは、王国や、我々エルフを……まさか」

「ええ、それでは復讐が終わりません」

「いや、しかし、それは！」

「その者にはエルフではなく、私を恨んで貰いましょう。憎しみの連鎖は私で終わらせ無くてはなりません」

「そんな……なぜ、そこまで」

俺の言葉の意味を悟ったマールロウは、ガツクリと膝をつく。

シノニムさんも蒼い顔で震えていたし、騒ぎを聞いていた周りの兵士達も、シンと静まり返っていく。

俺はその様子に内心で満足していた。

だが一方で、シヤリアちゃんだけは白けた顔で肩を竦めていた。

……演技には自信が有ったのだけど、本当にこの狂人だけは油断がならない。

そもそも、俺が帝国を滅ぼした後、誰が誰を恨もうが知ったこっちゃやない。世界が無くなったとしても、全く構わない。人間が全滅してもオツケーだ。

俺の願いはただただ殺したいだけだ。

帝国の、少なくともエルフの国エンディアンへの進軍に関わった連中は、根絶やしにせねば気が済まない。

ただ、それには時間が無い。『偶然』に巻き込めるなら。いつそ帝都に捕虜としてお邪魔したいぐらいだ。

しかし、それではアツサリ殺される可能性もある。俺の厄介さを知ってる魔女ならやるだろう。

生きて復讐を果たす時間を延ばすには、皆が俺の事を想って、監視し、『偶然』の関与を減らすのが重要だ。

その為に、敢えてドエロい格好をしてるのだが……ソレだけでは足りない。

エロだけでは、一度スコスコして、スツキリしたら忘れてしまう。

もっと強烈なインパクトが必要だ。それは気持ちが良いだけで無く、後味が悪い罪の意識とない交ぜになったモノが望ましい。

『悲劇』だ。

まだ幼い少女が、その身を賭けて復讐を果たした後、皆の悪意を背負って生贄みたいに死のうとしている。

その決意を知れば、助けられるエルフは冷静で居られず、何をおいても俺をサポートするだろう。

ひよつとしたら、エルフ達は生活に必要なレベルの魔石や魔道具すら戦場に送ってくれるかもしれない。

人間側だって、ソレは同じだ。

俺の物語を知っている王都の人々は、そのラストシーンを想像するだけで涙が止まらないに違いない。

現に、静まり返ったクーリオオンに、今は鼻をすする泣き声が混じっていた。

内心で、良いデモンストレーションになったなと満足して、周囲を見回すと。ふらりとマールウが立ち上がる所だった。

「えっ?」

ガシツつと肩を掴まれる。繰り返すが肩は女性のエロい部分だ、普段のマールウなら絶対にしない行為である。

顔を間近にマールウは叫んだ。

「守りま^ず！ 俺が[！] がならず[！] ひめぎまを[！]」

泣いていた。ボロボロと。鼻水すら出しながら。

折角のイケメンが台無しだが、不思議と、悪く無いなと思った。

「頼みましたよ……」

穏やかにそう言うと、マールウは言葉もなく何度も頷いた。

周囲にも、なんだか優しい穏やかな空気が流れる。

その時だった。

「おーい」

闇夜を切り裂く、間の抜けた声。

田中のモノだ。

「んだよ？ どつたの？」

いつの間に、俺の近くで先ほどの寸劇を聞いていた木村が尋ねる。

「いや、普通に敵が来てるってだけなんだけど？」

「オオゴトじゃねーか！ あの、召集をお願いします」

木村に頼まれ、オーズド伯が苦々しく頷く。

クーリオンに到着したオーズド伯は、軍を暴走させた俺を叱り、指揮権を取り戻した。俺からもオーズド伯に従う様にお願ひしたので、帝国の軍勢も従ってはくれるだろう。

しかし、もはや半分以上が帝国軍となった軍勢に、オーズド伯自身がやりにくそうにしている。

「総員！ 戦闘配置につけ！」

号令するも、兵の動きが悪い。

原因はオーズド伯ではなく、俺が作った悲劇的な空気だ。

怒りは無謀と共に活力を生むが、悲しみは行動を鈍らせる。

仕方無い、俺は拡声の魔法すら使い、澄んだ声で叫ぶ。

「みんな、お願い！ 私を、守って！」

するとまあ。

—— おおおおお！

と、地響きみたいな鬨の聲が各所で上がった！ 皆が血走った目で駆けていく。

元気があつて大変ヨロシイ！

一方で元気が無いのがオーズド伯だが、めげずに田中に尋ねる。

「敵の数は？」

「大体、三千ぐらいすわ」

「そうか、少ないな」

いや、全然少なく無いぞ？ しかしオーズド伯の気持ちも解る。コチラは方に近い数が揃っている。これでも足が極端に遅い補給部隊などを除いた数だ。

今の戦争が、銃と兵の数で決まる事を知っているなら、コレは無謀な進軍だ。木村も首を捻る。

しかし、田中はもっと重要な情報を持っていた。

「やつら、物々しい兵器を持つてるぜ。ガトリングガンみたいなのとか」

「出してきたか！」

木村が開戦から心配していた、魔女の本隊の可能性が高そうだった。

「いや、しかし、三倍以上の兵なのだぞ？」

オーズド伯は納得が行かないみたいだ。数こそ大事という、今までの話と矛盾するの
で無理はない。

木村がバツが悪そうに答える。

「それは武器が同じ場合です。コチラが一発撃つ間に、百発撃てる武器を相手が持つ
のならば三倍の兵など意味がありません」

「なんだとー！」

「その為の装甲車なのですが……」

木村が広場の中央に止めた装甲車をチラリと見る。

……嫌な予感、するよな。

——ドウン！

その時、一件の家が突如爆発する。

皆が白煙をまき散らす家を呆然と見つめた瞬間、連鎖的に爆発が起こった。

周囲はあつという間に白煙に包まれる。

「煙幕爆弾ねー！」

シヤリアちゃんが叫ぶ声。

なるほど、彼女がよく使う、煙幕を火薬の爆発で一気に広める爆弾とよく似ている。

しかし、違うのだ。

全身から力が抜けて、俺は地面へとへたり込んでいた。

気力を振り絞り、バニー衣装のカフスボタンを食いちぎり、飲み込む。

トチ狂ったワケじゃない。このボタンは魔石で出来ている。

「違います！ 霧ギョルドスの悪魔爆弾！ 敵は霧を爆風で一気に拡散しました！」

通常の霧なら、装甲車の速度で、俺達エルフは逃げ切れる算段だったのだ。

俺の魔法も、兵力差も、埋める方法を敵は用意していた。

俺だけじゃない、魔女もココで一気に勝負を決める気だ。

魔女の軍勢

噛み砕いた魔石を口の中で転がしながら、俺は戦いの予感にテンションを上げていた。

霧の悪魔の罫、三千の軍勢。恐らく魔女の本隊だ。コソコソ暗躍するクソ黒峰を、いよいよぶち殺せる。

邪魔なマントを脱ぎ捨ててバニーちゃんになった俺は、霧の中へたり込むマローウの襟を掴んだ。

「守ると言っただのに、その体たらくはなんです！」

「ハアハア……」

活を入れても息も絶え絶え。純エルフは魔力が無くなればこんなモンだとは知っていたが、それでも情けない。俺は装甲車までマローウを引き摺った。

タダでさえ薄暗い時間。ホワイトアウトした世界では、ドコから銃弾が飛んできても不思議じゃ無い。安全なのは装甲車の中だろう。

装甲車にマローウを押し込むと、代わりに取り出したのは木村が作った爆薬だ。手に取るや否や、思い切り地面へと叩きつける。

——パアアアン

爆風に燐光が無い、軽くなった空気に深呼吸。

コレは言うなれば魔石爆弾。タネは単純で、細かく砕いた魔石を爆風で拡散し、魔力を奪う霧と中和させるのだ。

このアイデアを出したのは、なんと田中。どうも同じ事をしてくる敵が居たらしい。コレで魔道具や魔剣を霧の中で無理矢理使う強敵が居たらしい。

しかし、コレが霧に苦しむエルフの特攻薬かと言うと、そうでは無い。

霧に負けず劣らず、魔石の魔力なんて、エルフにとつても毒なのだ。魔石の魔力は言わば他人の魔力だ。吸い込めば健康値が削れ、健康値が削れると生命力も失われる。

自分と波長が合う魔石なら大丈夫だが、そんなモノが大量にあるなら、分厚い魔導衣でも仕立てた方がマシだ。

ただ、俺は大丈夫。なぜなら凶化しているから。体の免疫が崩れ、あらゆる魔力を吸収可能。だから、この爆弾は完全に俺専用だ。

「姫……さま」

マールロウが装甲車の中から苦しげに手を伸ばす。どうやら意識を取り戻したようだ。

なるほど、魔力を奪う霧と、健康値を奪う魔石の粒子。エルフにとつてどちらが毒かがハッキリしたな。まだ魔石の方がマシらしい。

「乗って下さい、私が、守っ……」

「黙っていて下さい、ゾンビ化したら目も当てられません」

俺が恐れていたのはソレだ。

魔力を奪われた上で、急激な魔力回復。ゾンビ化する条件が揃ってしまった。

……いや、それにしてもエルフがゾンビ化したなんて聞かないな。

霧と大森林の濃厚な魔力に度々曝されて来たハズなのだが……

違和感を覚えながらも、俺は叫んだ。

「木村ッ！」

「はいよ〜」

霧の中から間の抜けた声、そして、次に響いたのは気の抜けた爆発音。

——シユルルルル、パアアアン！

花火、いや、信号弾だ。

全軍に招集を掛けたのだ。『姫はココに居るぞ！』と。

「しかし、良いのですか？ 敵にも位置が丸わかりですよ」

「構いません。ケリをつけましょう」

確かに、ココまで濃い霧があつては魔法で戦う事など出来ない。

だが、同時に視界だつてきかないのだ。すぐソコに居る木村の顔も見えない程に。な

らば、敵が揃えた自慢の射程兵器もロクに活用出来ないハズ。

そうなれば、数で勝るコチラにも分がある。

まさか、帝国兵が俺の魅力でソックリ寝返るとは、魔女にしたって夢にも思っていないハズだ。そこに勝機が必ずある。

「乱戦になります！ 皆で！ 私を！ 守りなさい！」

「オオッ！」

拡声の魔道具で叫べば、雄々しい雄叫びがそこかしこから返った。この非常時でも士気は高い。

「後は爆撃対策ですが……」

「ご安心を、周囲に爆撃陣地はありません」

木村が言うには、迫撃砲もそこまで射程がある訳では無く、設営にも時間が掛かり、精度もイマイチで威力もソコソコ。前回はすり鉢状の地形にピッシリ人が密集してたから効果があったのだと言う。こんな場所で使っても効果は限定的だとか。

「まして装甲車は絶対に破壊不可能です、どうぞお乗り下さい」

「……………」

どうやら中で大人しくしてると言いたいらしい。

まあ、霧が出てる間は俺に出来る事は殆ど無い。お姫様らしく、しっかり守って貰お

うじやないか。

マールロウと一緒に装甲車に乗り込む。

しかし、広場のど真ん中と言うのは頂けない。

「取り敢えず、脇に寄せます」

「運転出来ます?」

「ある程度なら……」

俺はグロツキーしてるエルフの運転手を蹴飛ばすと、代わりにハンドルを握った。

先ほど魔石を撒いたお陰で、エンジンが掛かる。アクセルを踏めばノロノロと動き出した。

「役場の脇に止めます」

「誘導します!」

木村が振るライトを頼りに、司令部にするつもりだった役場へ横付けする。

これで、遠距離から大砲の直撃を『偶然』食らう可能性も無くなった。

だが、こうなると敵の狙いが解らないのが気持ち悪い。装甲車に乗り込んだ木村に尋ねる。

「どう思いますか?」

「敵は貴重な霧の悪魔ギェルドスを使い潰して爆破しています。ソレほどに姫の魔法を恐れている

証拠」

確かに、奴らは建物に霧ギョルドスの悪魔と爆弾を隠して一気に拡散。俺を霧に飲ませる事に成功した。

「逆に言えば、霧の中に姫を捕らえるには、この街しか無かった。そして、敵は霧が晴れる前にと、勝負を焦るに違いありません」

「敵が攻めてくると言うのですね？ 敵の主力兵器は台車に乗ったガトリングガンと聞きましたか？」

「ガトリングと言つても、マスケット銃を束ねた程度のモノです。今度はコッチが建物を利用して、霧が晴れるまで守れるでしょう」

木村は自信満々だ。じゃあ俺の役目は霧が晴れるまで守られる事。

いや、何も完全に晴れるまで待つまでもない。多少薄くなってくれば十分。魔石で霧を散らして、後はコイツの出番だ。

「グライダーです。霧が薄くなったらコレで飛んで、敵を討ちます」

霧は重く、地上付近にだけ漂う。離陸さえ出来れば、上空から敵を狙い撃ちにしてやる！

俺が覚悟を決めた声で宣言すれば、木村の舌打ちが返った。

「死にますよ？」

「死にません！ 帝国を滅ぼすまでは」

「でしたら、精々霧が晴れるまではソコでジツとしていて下さいー！」

バタンと音をさせ、木村は力任せに装甲車のドアを閉めて出て行つた。

怒らせちまつたな。

狭い装甲車の中。俺は畳んだグライダーを手慰みにギュツと抱きしめて、静寂を噛み締めた。視界が効かないこの状況に少しの混乱も無く、皆が息を潜めて敵を待ち構えている証拠だ。

声が無くても、目を瞑れば俺を守る兵士の運命光が花畑の様に輝いているのが解る。その事に笑みを深めていると、ふと気になった。

「田中はドコに行きました？」

窓を開け霧に問えば、遠くから木村の声。

「アイツなら、霧でバイクが心配だつて見に行きました」

……全く、お姫様を放置してバイクとは、一切アイツにその気はねーな。

オモチャが大事な子供のまんまで、いつそ安心するわ。

しかし、苦笑する俺と違って、マールロウは本当に悲しそうな顔をしているのが何とも。「そんな顔にしても、あの方は元々そういう人ですよ」

「……ですが」

しよげるマーロウ。なんで俺がアイツのフォローしてるんだか。肩を竦めると、その田中の切羽詰まった叫び声。

「ゾンビだ！　ゾンビが紛れてやがる！」

その言葉にハツとする、隣の人間の顔も解らぬこの霧の中、ゾンビが紛れ込んだらどうなるか？

そんな俺の心配は、いつそ生ぬるいモノだった。

「ヤバえぞ！　奴ら、ゾンビに、爆弾を括りつけてる！」

田中の声と同時！

ドオオオオオン！

爆音！　そして衝撃。装甲車が横転する。

「くっ！」

衝撃に耐え、ひっくり返った視界の中で盛大に舌打つ。奴ら本当に命をゴミの様に使う！

しかし、有効だ。無差別に爆弾を投げ込むよりも、ずっと効率的だろう。吐き気がするほどに！

動かない装甲車に止まるのは危険。爆弾を括りつけたゾンビが相手なら、ドアを開けて中に入って来てもおかしくない。そうならば一巻の終わりだ。

そして、俺の嫌な予感は当たりがち。

横転した装甲車の天井。助手席側のドアが開け放たれる。逆光と霧で、真つ黒いシルエツトが俺を覗き込む。

「オイ、居るんだろ？ 出てこいよ」

いや、ゾンビじゃ無い。田中だった。

伸ばした俺の手を二回りは大きい手で掴むと、ティツシユみたいに引き抜いた。俺だけで無く、マールロウや伸びていた運転手も抱え、軽々と隣の役場に運んでしまう。

その足取りは、ホワイトアウトした視界の中でも一切の迷いが無かった。

「ソコでジツとしてろ！」

俺達を役場に押し込むと、ソレだけ言い残して出て行こうとする。

「ドコへ、行くのです!？」

「ドコにも行かねえよ！ お前を守んなきやいけねえだろうが！」

呆れた様な田中の言葉に、足手まといになっている事を自覚させられる。マールロウの事を何も言えない。

歯がゆい思いに悩んでいると、扉の外から一つの影が割り込んだ。

「そうだ！ 守るのがおたくの仕事。攻めるのは俺の仕事だ」

「アンタは……?」

霧の中から現れた不審な人影。田中は警戒を崩さない。だけど俺にはコイツに見覚えがある。

「あなたは、グリダムス……さん？」

コイツは、こう見えて帝国軍の隊長の一人だ。立派な騎士に混じって、しよぼくれたオッサンだったからよく覚えている。

しかし何故か、今は渋い男の色気さえ漂っている。覚悟を決めた男の目がそう見せた。

「ああ、このままジツとしてもジリ貧だろ。グリダムス隊は敵へと突っ込む！」
「待つて下さい！」

必死に取り縋って止める。余りにも無謀だ。霧を抜けた所で蜂の巣にされるに違いない。

ヤケになるのも解るが、霧さえ晴ればコッチに分がある。何も焦る必要は無い。
「いやあねえ、時間が無いのはコッチも一緒でしてね」

ぼやきながらも、グリダムスは苦しげに何かに耐えている。良く見れば、顔を伝う汗の量は尋常では無かった。

「どうしたのです？」

「実は、さつきから食欲に負けて意識が飛びそうなんですわ。やっぱり姫様に言われた

とおり、奴らに噛まれたのがマズかったみたいでしてね。噛まれた奴らがみんなおかしくなっております」

「そんなー！」

魔力を奪う霧と、魔力が含まれた水。二つの魔力差でバランスが崩れてゾンビ化するんじゃないのか？

いや、ソレは間違い無いはずだ。身をもって知っている。だが、魔力バランスが崩れるには早過ぎる。霧が撒かれてまだ数十分だ。

ひよつとして、突然の魔力差で健康値が大きく崩れた所に、体内のウイルスが活性化した？

二つでなく、三つの合わせ毒だったのか？

健康値のお陰でこの世界には寄生虫が居ない。病気も少ない。しかし、だからこそ、健康値が極限まで削られた時、免疫能力は極端に無くなる可能性はずっと考えていた。

現に、幼い俺はよく熱を出して倒れていたのだから。

だとしたらこの状況でウイルスに冒され、ゾンビになりかけてる彼らは……。

「自らを縄で縛って、耐える事は？」

「無茶あ言わんで下さい。今もアンタの美味しそうな肩にかぶり付きたくて仕方ねえんだ。味方を襲うぐらいなら、いつそ敵を囓りに行こうかって、噛まれた奴らで話し合っ

たところでした」

「……………」

クソツ、どうしようもないのか！　ギリリと奥歯を噛むが、打つ手はない。

大きく深呼吸して、グリダムスの目を見る。

「わかりました。ご武運を」

「ああ、ゲスな魔女に噛みつけると思うと楽しみで仕方ねえ」

俺は強がるグリダムスの手を取ると、バニー姿で曝け出された俺の首と肩を触らせた。

「なつにを？」

大の男がビクリと跳ねて、滑稽な程に狼狽する。

良い反応するじゃないか！　グリダムスが食欲すら忘れて顔を赤くした瞬間を見逃さず、俺は妖艶に微笑んだ。

「魔女など美味しくないですよ。帰ったら口直しに、私の肩に好きなだけ齧り付いて下

さい」

「ソイツは楽しみだ！　行くぞ！　お前等！」

「ハッ！」

グリダムスは同じように、ゾンビに噛まれた百人前後の兵を引き連れ、敵へと突っ込

むらしい。

俺はそんな男達の背中を見送るだけしか出来ない。

やがて、遠くからバラバラララと雨の様な銃撃音が響く。そして近くからは断続的な爆発音。

音と共に、運命光が消えていく。

銃弾に晒され、ゾンビに爆破され、皆の命が消えていく。

こんな、馬鹿らしい死に方で！

俺は、役場の隅っこで頭を抱えへたり込む。

「誰か！　お願い！　霧を消して！」

今も外ではガトリングの音が響いて、皆の悲鳴が木霊している。

バラバラと、雨音の様な発射音は激しくなるばかり。木村め！　何がマスケツト銃を

一杯くつつただけだ！

連続する発射音が衝撃波となり、ひたすらに戸板を叩いた。鳴り止む気配は一切無い。

驚異的な火薬量を誇るかの様に、敵は弾丸を乱射する。

——バラバララララララ！

「……………」

まだ止まらないのか!!

——パラパラパラパラ!

まだか!

——パラパラパラパラ!

……いや、流石に激し過ぎる! 止まらない弾丸などあり得ない。

コレは? 立ち上がって、木窓を開けて外を見る。

「雨! この時期のゼスリード平原で?」

去年は俺を殺す為の『偶然』だった。なのに今回は俺を救うべく、激しい雨が降っている。

それを見て、俺は役場の外へと飛び出した。

「霧が、消えた!」

これで、魔法が、使える!

ソレだけじゃない、この雨で、火薬兵器の運用は大きく制限される。

現に、もうドコからも爆発音が響いてこない。

「でも、どうして?」

この季節、この地方で雨が降る事は稀だ。まして霧が出る前、夕暮れの夏空には、ドコにも雲なんてなかったはず。

なのに今は曇り空から大粒の雨が絶え間なく降り注ぎ、真つ白な霧をスツカリ流し落としていた。

何だか解らないが、今しか、ない！

横転した装甲車に駆け寄り、王剣とライダー、そしてスキットルに入った濃縮魔力を取り出した。

遺跡で発見した液化した純魔力！ 一息に嚙下すると、体の中から燃え上がる様な力が湧いた。

絶対に体に悪い奴だコレ！ しかし、今はソレで良い！

畳まれたグライダーを手早く広げ、魔法を紡ぐ。

「我、望む、疾く我が身を風に運ばん、指差す先に風の奔流を」

強烈な浮遊感。絶好調の魔法は俺と王剣の重量を空へと運んだ。魔力でピンクに染まった髪がたなびく。雨粒が頬を叩き、体を濡らした。

高く舞い上がると同時、そこかしこから強烈な視線が俺の体へ突き刺さるのを感じる。

そう言えば、俺はまだバニーちゃんのまま。ドエロい格好のお姫様が空を飛ぶ。冷静に考えるといつそ冗談みたいな光景だろう。

遠くに見えるのが敵陣か。コツチから見えると言う事は相手からも俺の姿は丸見え

に違いない。

多少は恥ずかしいが、いつそ都合が良い！ 拡声の魔法で叫ぶと、俺は王剣を敵陣に向けて振りかざす。

「全軍！ 突撃！ 私に続け！」

街中から雄叫びが上がり、俺を目掛けて兵士達が駆ける地響きみたいな音がした。

無謀な突撃だが、ソレで良い。銃口はズラリと揃えて効果を発揮する。銃を手に敵は俺を撃つか、兵を撃つかで悩むハズ。

夕暮れの雨模様、薄暗い闇に染まる直前の世界で、俺は眼下に敵陣を睨む。

——撃つてこい!! 魔法で受け止めてやる!

俺は前方に結界を張って待っていた。

「……………??」

だが、敵は一向に俺へ発砲してこなかった。それどころか戦場から殆ど銃声がしない。

確かに雨は降っている。しかし、それでも撃てる銃だつてあるだろうに。舐められたモノだ。

しかし、よくよく見れば。敵陣は大混乱に陥っていた。

コチラの陣地から、眼下に点々と転がるグリダムス隊の死体。その死体の列を辿る

と、その先頭は見事に敵の本隊へと食らいついていた。

ソレに気が付いた時、言葉に出来ない感情が胸を締め付けた。彼らは最期の最期まで戦い抜いたのだ。

いや違う！ まだ戦っていた！

視線の先、最後まで残ったグリダムスは敵に囲まれ、剣を振るい、猛犬の如く敵へと食らいつく。

助けたい。でも、助けられない。多勢に無勢だ。見守る中、グリダムスの最期は剣すらも手放し、本能だけで敵兵に噛み付いていた。

良く見れば、グリダムスはすっかりゾンビに成り果て、ソレでも戦い続けていた。その首が俺の眼下で刎ねられ、転がる。彼に噛まれた兵士から、更に混乱が広がる。

「良くやりました」

地獄で待っている。肩でもなんでも、好きなだけねぶって良いぞ！ 俺も、じきに、ソツチへ行く！

風の出力を上げ、更に加速。敵陣全てを見渡せる所まで来ると、敵が混乱するもう一つの理由が見えてきた。

「アレは？ ……まさか！」

ラクダに乗った一隊が、敵陣を真横から食い破っているのだ。

その中心に居るのは、一際大きい白いラクダに乗った浅黒い肌の貴公子。
リヨンさんだった。

「まさか、この雨も？」

きつと、そうだ。無害化した死苔茸^{チリアム}、フォツガを大量にばらまいて、コレだけの雨を呼べるのは、彼しか居ない！

後ろからは、いよいよ味方の先陣が敵と衝突し、激しい戦闘の音が聞こえてきた。敵は射程兵器が中心。勿論、コチラだって銃は大量に持っているが、元々は銃より剣に馴染んだテムザン將軍の軍隊だ。近づけば絶対にコチラが有利！

そうこうしている内に、俺はいよいよ敵陣のど真ん中、その真上まで辿り付いた。

しかし、魔女の姿が見えない。立派な鎧の知らない男が指揮を執っている。

「まだコソコソと隠れるか」

ココで負けたら終わりだろうに、それでも自分が戦おうとしないとは、筋金入りのゴミ女である。ならば！

首筋にチリチリと痛む『偶然』の予感。しかし、今だけは心地よい。

その時、薄暗い世界を強烈な光が切り裂いた。一拍の間を置いて、爆音。

——ドオオオン！

爆弾？ 違う！ 雷だ！

強烈に空が輝き、瞬間、視界から色を奪った。音の衝撃がグライダーを打ち、ビリビリと震える。

ゴロゴロと遠くから雷鳴が轟き、丸焦げになったトラウマを刺激する。

怖じ気を振り払い、俺は敵のど真ん中、指揮を執る男へ目掛け、グライダーの舵をとつた。

「一緒に、死のうぜー！」

敵の真上でグライダーから飛び降りる。そのまま王剣が生み出す気流を頼りに、俺は空を駆る。

——ピシヤアアア！

その時、再び視界が白に染まった。落雷が、『偶然』に、俺へ直撃したのだ。

「お前等も、道連れだ！」

だけど今回は無傷。王剣は言わばダイヤの塊。完全な絶縁体だ。

「父様、ありがとう」

——バシユツ！

眩しさに目を瞑った司令官を、俺は上空から真つ二つに引き裂いた。

——ポッ！

何の作用か、斬り裂かれた司令官の死体が燃え上がる。王剣の内部に電気が残ってい

たのだろう。想像以上に派手な事になった。

「ふう……」

敵のど真ん中。俺はホツと息を吐く。

殺つちやつた♪ テンションが上がって、敵のど真ん中に降り立つちやつた。

「どうした!?! 何が起こった? 報告しろ!」

「解りません! 雷が! 少女に!」

帝国兵は目の前の光景が信じられないと、すっかり錯乱していた。

まあ、そうだよな。空からお姫様が落ちてきて、司令官を真つ二つに分割し、ボウボウと燃やしてるんだから。

自分で言っても意味不明だから困る。だが、敵にしてみれば俺が恐ろしいに違いない。

いよいよ日が沈み、闇に染まって行く世界。不気味な炎をバツクにニツコリと微笑む。

「いきげんよう」

そして、死ね!

俺は王剣で敵兵をまとめてなぎ倒す。景気よく首が飛び、混乱が広がった。

「何をしている! 敵は一人だ! 押し込め!」

だが、指令系統は一つではなかった様だ。或いは俺が殺したのはフェイクだったのか。敵兵に指示が飛び交い、じわりと俺を包囲する。

……どうしよう？ 王剣で飛んで逃げられないかな？

やり過ぎた。このままじゃド派手な自殺だ。正直、後悔し始めた。

いや、悪くない。思い直したのは、ビリビリと刺激する首筋の痛みが心地よいからだ。

『偶然』は、まだ俺に踊れと言っている。

「神の裁きを恐れぬモノは、前に出なさい！」

王剣を掲げ、宣言する。

あまりに堂々とした俺の態度に、居並ぶ敵兵の顔は恐怖に歪んでいた。

恐怖の表情だ。薄暗い夕闇の中にあっても、敵兵の顔がハッキリ見えたのは何故か？

——ピシヤアアアア！

再び雷光が迸り、掲げた剣へと突き刺さったからだ。

俺がそのまま剣を振るうと、斬り裂かれた兵士が千切れ、燃えさかる。ただの『偶然』

なんだが、二回も続くとそう言う攻撃にしか思えない。

「神だ！ 神の化身だ！」

「いかづちを操るぞ！ 逃げろ！」

魔女の軍勢はたちまち恐怖に囚われた。

意味不明にドエロい格好をした女の子が雷鳴と共に降ってきて、雷を纏った剣でバリバリ攻撃してきたら、神に見えるのも当然だろうな。

実際は俺目掛けて飛んでくる雷を、何とか防いでるだけだ。

「神罰を恐れぬ者達よ！ 神の怒りを知れ！」

でも、ノリノリで暴れちゃう。気持ちが良いから。

蜘蛛の子を散らす様に敵兵が逃げて行く。

「愚か者どもめ！ 恥を知れ！」

本当に神の代行者になったつもりで敵を追いかけていたのだが……

「痛っ！」

足を取られて無様に転がった。

スツカリ忘れていたが、俺はバニーガール姿。決して戦場に繰り出す格好ではない。転がった鎧の隙間にヒールが挟まって、足からすっぽ抜けたのだ。

「アガツ！」

その上、転がった先の鎧は雷で帯電していた。すっかり油断していた所に、激しい電撃が体を駆け巡る。トラウマモノの刺激に、目がチカチカとして、一瞬遅れて強烈な痛み。

「イギギギギ！」

鉄板みたいな鎧の上で、神経を灼かれ、バニー姿のままピクピクと痙攣する。焼き肉にでもなったみたいだ。

惨めにのたうって、飛びそうになる意識をつなぎ止める。

「おい、何かコケたぞ？」

「チャンスじゃないか？」

敵兵の声が頭上から聞こえる。しかし、体は動かない。

「おい、今のうちだ！ やるぞ！」

いよいよ敵兵が殺到するが、体に力が入らず、転がったまま突き刺さる槍を見つめる事しか出来ない。

何だコレ！ 間抜けすぎるだろ！ 『偶然』の理不尽な攻撃に、俺は悔しくて涙する。

悔しくて、ギョツと目を瞑るが、何時までも痛みはない。どうした？

「オイ、何だか色っぽいな」

「速く殺せよ」

「いやでも、勿体ねえだろ」

頭上では、兵士達が間抜けな議論をしているじゃないか。

良いのか？ そんな事していると『偶然』に飲まれるぞ？

案の定、次の瞬間彼らはバラバラの肉塊に成り果てて、俺の上へと降り注ぐ。

「生きてるか？ オイ！」

間拔けな声。

田中だ！ コイツも敵中に単身切り込んでいた。しかし、俺のピンチはまだ続いていた。

「アグツ！ ゴホツ！」

肉塊と血に埋もれて、溺れる！ コッチは指一本動かせないんだぞ！ 助けるならもつと優しく頼む！

「オイオイ！ 完全に自業自得だろうが馬鹿が！」

田中は血まみれの俺を抱きかかえ、バイクに乗せる。

「逃げるぞ！ ってか、勝ち戦だ！ 無理する理由はビタイチなかつただけど？」

「ココまでやられて、黙って居られないでしょう？」

「やり過ぎなんだよ！ ボロボロじゃねえか！」

いや？ 血まみれなのはオマエの所為なんだが？ 血まみれで睨むが、まるで相手にしてくれない。

オイオイオイ、俺を無視する気か？

さあ、最後の仕上げをしようじゃないか。

「飛ばして下さい！」

「オイ、何するんだよ？ ふざけんな！」

田中の苦情は無視して、俺は呪文を唱える。

『我、望む、この手より放たれたる、強く大きく熱く疾い、炎と風の鋭き刃よ』

コレはセレナが使っていた魔法だ。

成人の儀に付いて来てくれたセレナが、大牙猪を両断した魔法。

セレナほどじゃないが、生き物に放つんじゃないかなければ俺でも十分使える。

「オイ、何してんだオイ！」

田中が強烈な魔法の圧力に焦るが、無視。俺が魔法を放った先は、異様に嚴重に梱包された帝国軍の貨物。

炎と風の刃が、その貨物を切り裂き、火炎をまき散らす。

ハズレか？ 眉を顰めた瞬間。

——グガアアアアアアン！

耳をつんざく大・爆・発！

思った通り、中身は火薬。しかし思っても居なかつたのが、その爆風の凄まじさよ！

「ふつぎげんな！ ○×△*#@＼#\$!!」

田中の苦情も、聞こえない。

タイヤが轍に乗り上げ跳ねるや否や、爆風に煽られ空を飛ぶ。

「テメエなんとかしや○×△*@"#\$!!」

解った解った。うるせーな。

「我、望む、足運ぶ先に風の祝福を」

移動の魔法の風を応用して空中制御。バイクは華麗に着地した。

『いちいち爆発させねーと気が済まねーのかテメーは!』

『いやいや、こんな緊迫の脱出シーン。一生に一度あるかないかだよ?』

『オメーが爆破しなけりや、一度もなくて済んだんだけどな!』

いやーマジギレである。

『怒るなよ。美女を片手に間一髪の大脱出。男なら憧れるシチュエーションだろうが』

『美女って言うには、イチイチ小せーし、ドロドロに血まみれじゃねーか』

『チューする? チュー!』

『しねーよ、ぶつ殺すぞマジ。バイク壊れたら弁償して下さいね』

急な敬語やめろ! ソツチがその気なら、コツチにも考えがあるよ?

『大丈夫大丈夫! エルフの王様になればバイクのパーツなんて幾らでも手に入るつて』

て』

『……………』

『結婚ちゆる?』

『その辺に埋めていい?』

『まーまーまー』

ゲラゲラと笑いながら、俺達は闇の中を二人、バイクで走っていく。

もう、戦争は終わったと思いつながら。

事実、戦争は殆どココで終わった。

ココからの戦いは、戦争以外のナニカになった。

地獄の痕

一夜明け、決戦の地となったクーリオン周辺には夥おびただしい数の死体が転がっていた。

戦争なんてそんなモノ。そう思いながら戦場を散策していたら、膝をつき、呆然と周囲を見回すオーズド伯を見つけてしまった。

「何だコレは？　これでは、まるで地獄ではないか！」

ボサボサの髪に、濃い目の隈。一気に老け込んだ総司令官の姿が戦場の異常性を物語る。

……なるほど、どうやらコレは普通でないらしい。

黒焦げの死体が折り重なり、千切れた手足が地面から生えている。それだけでも地獄だが、極めつけは死にかけの虫みたいにピクピクのたうつ遺体の数々。

すわつ生存者かと近づくと、正気を亡くした呻きが返された。

……また、ゾンビだ。

コレだけの重傷であるのに、意識を失う事も出来ず、曲がった手足をバタつかせ藻掻いている。命を冒瀆する姿に吐き気がする。

「せよなら」

健康値を亡くした哀れな化け物の頭を、俺は魔法でグチャリと潰した。

重傷にも拘わらず元気に動くのはゾンビの証拠だ。だからまあ、十中八九ゾンビと解つて近づいているのだが、生存者の可能性もあるので捨て置けない。

或いは、俺を助けるために敵中に突っ込んだグリダムス。彼のゾンビが居たら看取つてあげたい思いがあつた。

今日の俺はひらひらのベビードールみたいな服を着ている。バニーでは無いが、どちらにせよ場違いな衣装である事に違いは無い。

地獄みたいな戦場跡をエロ衣装でテクテク歩く。

「民衆を導く自由の女神」みたいな絵になるかなつて、ちよつと過激な衣装を着てみたのだが、エロい衣装で先導するにはあまりに悲惨な光景だった。

ゾンビと、ゾンビに噛まれた死体、火薬で焦げた死体、踏み潰された死体、味方に撃たれた穴だらけの死体。死体ばかりが延々と積み重なつて、雨と泥に混じつてグチャグチャになっている。

それらは、言つてしまえば全員が俺の『偶然』の被害者だ。

味方が二千、敵は三千。総計五千近い人間が、真つ当な最期を遂げられなかった。

俺は、この光景を目に焼き付けておきたかつた。

人間同士が、グチャグチャになるまで潰し合う地獄。コレがオマエが望んだ光景だぞ

と、自罰的に眺めて回った。

積み上がる死体の山に腰掛け、灰色の地上を見下ろす。娼婦みたいなベビードールを着た少女が死体に腰掛ける様は、絵画と言うより前世の俺が好きだった悪趣味な漫画に近いだろう。

コレこそが、あの日、帝国の侵略で家族を失い、同胞をゴミみたいに殺された俺が望んだモノの姿だ。

後悔はない。それどころか、機会があれば、何回でも繰り返す。もし核ミサイルのボタンを渡されたら、俺は全人類が死滅するまで連打するに違いない。

だとすれば、一体俺は何がこんなにも気に入らないのか？

決まってる、破滅のスイッチを押したのが俺だけではないからだ。

人類が絶滅する核のスイッチがあったとして、ソレを押すのは俺じゃなければ気が済まない。誰かが押したスイッチに殺されるなんて真つ平だ。

「クロミーネ……」

何より、破滅のスイッチを押しながら、安全な所でのほほんとしている奴を思うと、虫唾が走る。

破滅をばらまいているのは俺も魔女も同じだ。

だけど、俺は常に地獄の中心で踊ってきた。核ミサイルを起爆するなら爆心地は俺

だ。安全圏から誰かが死ぬのを見るのが楽しい訳じゃない。

ソコに何の意味が、違いがあるかと問われれば、まるで無いだろう。

核ミサイルで自分一人生き残っても、その後は孤独に死ぬだけだ。魔女だってコレだけの破壊をばらまいて、長生きを望んでいるとは思えない。

でも、その精神性が俺とアイツでは大きく違う。

……いや、結局は近親憎悪か。

とにかくクロミーネは殺す。絶対だ。

俺が決意を新たにしていると、背後から声を掛けられた。

「ここに居ましたか」

「リヨンさん！」

白く巨大なラクダからヒラリと飛び降りて、リヨンさんが跪く。

「遅ればせながら、求めに応じ馳せ参じました」

「遠路遙々、はるばる大儀でありました」

俺も、死体の山から飛び降り、そばに降り立ち、偉そうに手をあげてねぎらっておく。

完璧なタイミングでの救援だった。まさかりリヨンさんの独断なのだろうか？

「良かったのですか？ 中立を保っていたプラヴァスがこうも派手に参戦して」

「なにを仰る。アレだけかき回されて、プラヴァスとして帝国に一泡吹かせねば収まり

がつきません」

……それもそうか。麻薬の流通など、宣戦布告と同義である。

「それに、木村殿から火薬や銃の製法を頂ける約束です。悪い取引ではありません」

「細々とした取引には興味がありません、私の味方であると言うならそれで構いません」
すまし顔で宣言するが。木村め、勝手に約束しまくって破滅してもしらんぞ。

そうやって他人事みたいに思っていたら、リヨンさんの矛先はコツチに向いていた。

「我々はエルフの国とも取引をしたい。魔力が薄いプラヴァスでは魔石の安定供給は喫緊の課題。遺跡から発見した液化魔力はあまりにも純度が高く、むしろ使い方に困るのです」

「それだけでなく、エルフの技術も欲している。そうでしょう?」

「勿論です。水路の発見でプラヴァスの流通は劇的に改善されました。一方で、もはや砂漠に守られた陸の孤島ではなくなつたのです。中央の技術を取りこぼせば早晚滅ぶ事になるでしょう」

言い切るリヨンさんが目を向けた先には、泥を掻き分け向かってくる装甲車の姿があつた。

「姫様っ! こんな所に!」

叫びながら転がり出て来たのは、今回まるで活躍しなかつたマーロウ君である。

「マーロウ、客人の前ですよ」

「しつ失礼しました！」

言われて気付いたのか、リヨンさんに向き直る。

「姫様、この方は？」

「私はプラヴァスの太守リヨン・ブラッド。ユマ姫様への約束を果たすために馳せ参じました」

爽やかな自己紹介を繰り出すリヨンさんに、マーロウはたじろぐ。

「私は、マーロウ。姫様の護衛です」

なんとか挨拶を返すが、その目は敵意に満ちていた。

まーあれだよな、リヨンさんは数少ないマーロウに匹敵するイケメンだ。警戒するの
も無理はない。

「ところで、約束とは何です？ 姫様！」

「それはプラヴァスの代表たる私とユマ姫との話。護衛が口を出すべきではないでしょう」

両者がバチバチと睨み合う。

タイプの異なる美形二人が俺を巡って争う様は、お姫様冥利に尽きる……だろうか？
死体に囲まれてこんな事を思うのはどうかしてるが、正直悪い気はしない。

お姫様らしいお澄まし顔で両者を見ていたのだが、何故だか話は変な方に転がって行く。

「姫様は国の再建に必要なお方。タナカ様と新しい王家を作る使命があります。不埒な要求は許すわけには……」

「なんと、タナカ殿と？　そうでありましたか、それならば……」

「え？」

俺は慌てた。なんせ、マーロウには張り合ったりヨンさんが、田中と聞いた途端に一歩引いたのだ。

「プラヴァスで事後処理を行ったのですが、タナカ殿の功績は人間離れしていました。名の知れた剣士をまとめて一刀に伏していたのです。それも敵の防衛拠点に乗り込んで」

「なんと！　アニキ、いえ、タナカ様はプラヴァスでもそんな活躍を？」

「たった一人で我がブラッド家を制圧可能とキムラ様より聞いた時は、誇張が過ぎると半信半疑でしたが……」

「掛け値無しに事実です。その証拠に、大森林を占領していた数千の帝国軍を撤退させたのは、タナカ様一人の功績と言っても過言ではない」

「まさか……本当ですか？」

「ええ、エルフの戦士の誇りに賭けて」

……なんか二人で最悪の方向に盛り上がりだした。

そう言えば、リヨンさんと田中の付き合いはそれなりに長いんだっけ？

俺が苦虫を噛み潰した顔をしていると、甲高いモーター音が近づいてきた。

「噂をすれば、やって来ましたね」

「アニキ！」

地平線を切り裂く漆黒の前方二輪バイク。

だが、俺には解る。アレは田中じゃない。

「いいえ、アレは木村ですね」

「なんと！ タナカ殿はあの乗り物を何より大事にしているとお見受けしましたが？」

「アレは、国を救った功績に送られた、我らが秘宝なのですが……」

信じない二人を余所に、近づけば木村の姿は疑いようも無い。

「あの距離で見極めるなんて」

「よほどお二人の姿を熟知しているのでしょうか」

二人は俺を振り返り、感心する。いや？ 運命光で見ただけだよ。

その木村は、どうやら偵察に出ていたみたいで、バイクに跨がったまま停車し、重要な情報を伝えてきた。

「魔女の居場所が分かりました。いつもの様に地下道に立て籠もっている様です」
「そうですか……」

いつもいつも、モグラみたいに籠もりやがって。忌々しい。

「しかし、どうも遺跡ではありません。スールーンの沼地に掘られたタダの地下坑道。逃げ場もなく、そこを決戦の地と定めた様です。私はこの事を本陣に伝えて来ます」

ソレだけ言い残して、バイクを吹かして去って行く。

背中を見送つてる途中で気が付いたんだけど、オーズド伯もその辺りでよためいてるから、本陣には今誰も居ないんだけどね。

そんな事より、マーロウとリヨンさん。イケメン二人の会話は益々ありがたく無い方向に偏っていた。

「まさか、アニキがハンドルを預ける程に信用しているとは……」

……そりゃ、操縦だけなら木村が一番上手いからね。

「プラヴァスの調査ですが、キムラさまの戦果も尋常ではありませんでした。地下道では敵を一方的に撃ち殺しています」

……そりゃ自在ルーデルオン金腕で隠れながら一方的に撃つたんだらうね。

「エルフの国との取引は殆どがあの方が取り仕切っています」

「プラヴァスもです、更には王国軍にも多大な影響力を持っているとか」

今度は突然の木村 a g e である。しみじみと語り合つたと思つたら、二人は同時にコチラへと目を向ける。

「姫様は、一体どちらが本命なのですか？」

「それは私も聞きしたい。下手をしたら国が割れますぞ」

……なんで二人のイケメンに、二人の馬鹿を押し売りされねばならんのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その日の午後。

魔女の居場所こそ解つたモノの、夜通し戦つた軍は疲弊し、動かす事が出来なくなつた。出発は明日。となれば死体まみれの戦場で一泊過ごす必要がある。

ユマ姫達は、危険が無い事を念入りに確認し、クーリオンの役場を本陣に設定する。

ここはユマ姫の部屋として宛がわれた最上階の町長室。軍の象徴たる姫のプライベート空間に、今は奇妙な来訪者が寝そべっていた。

「んはあー、たまんねー」

木村である。そして、バニーガール姿の少女がその顔を踏み踏みしていた。

『ハイヒールを治すのに、何でこの格好せにやならんのよ？』

「俺の趣味」

私情のみの返答に、ユマ姫はこめかみを押さえて怒りを堪える。

『いっそ鉄で作るか？ 壊れないし、踏み潰して変態を殺せる』

『いや、幾らナンでも壊しすぎでしょ、ハイヒール。修理するの何回目よ？』

『脆すぎるんだって、スグぶっ壊れる』

『仕方無いじゃん。そう言うモンだよ。ハイヒールって』

寝そべった姿勢で、下からのアングルを楽しみながら、木村は器用に折れたヒールを直していく。その新たな訪問者が。

「オイ、忘れてない？ 俺の怪我治してくれーい」

田中であつた。言葉の通り、体は血と包帯でまみれている。

田中の鎧は特別製だが、動きを阻害しないために急所以外の守りは最低限。するとユマ姫を乗せた時には『偶然』が牙を剥く。

結果として、田中はかなりの銃撃を被弾していた。なのに、瀕死の田中を放置して、ユマ姫は戦場をぶらついていたのである。

「治さねえで、どっか行つちやうの酷くない？」

それでも、軽口すら叩いて見せるのは流石の生命力と言える。普通なら瀕死の重傷であるのだ。

『最低限、弾丸は取り除いたから良いだろ？』

『良くねーよ！ 遊んでる暇あるなら治せよ！』

『忘れてたんじゃないって。死にそんな人が居るならソツチ優先かなって、見て回った』

『あの戦場で？ 居たんかよ？』

『居なかったねー、ゾンビになつてた』

『それなのに、俺はなんでまだ放置されてんの？ 木村と遊んでるのに』

『いやさ、回復魔法で治しても無理は出来ないんだって』

実際その通り。肉を無理矢理膨らまして傷口を塞いでも、密度を失った体は却って虚弱になる事すらある。

なので、無茶をさせぬためにユマ姫は治療せずに田中を放置、代わりに木村がバイクで偵察に出っていたのだった。

『にしても、もう良いだろ！ そろそろ治しに来るかなって膝を抱えて待つてただけどっ？』

『そうか、実は忘れてた』

『結局忘れてるンじゃネーか！』

田中が本気で怒っているの、ユマ姫は木村へのサービスを中断し、田中を寝かせて包帯を剥ぎ取る。

そして、仰向けに寝そべった田中に、ユマ姫はバニー姿のまま跨がった。

『え？ 何してんの？』

『治療だが？』

田中は「コレ、完全にそういうお店みたいだな」と思いつつも前世の高橋を思い出して、冷静さを保つ。

……だがそんな田中の強がりも、回復魔法を掛けられるまでだった。

「んっ、ハア〜」

気持ち良いのだ！ 男として割とみっともない声が漏れる。温かい力が体を癒やす心地良さは、痛みになれた田中であつても耐えられなかった。

しかし、バニー姿の少女は冷たい目で言い放つ。

『はあ？ 気持ち悪い声出すなよ』

「だったら気持ち良くするんじゃねエよ」

エルフの治療を何度も受けてきた田中であつたが、ユマ姫の回復魔法は特別だった。

他のエルフの回復魔法は、傷口を引っ張る様な痛みが勝っていたが、ユマ姫の魔法は体をほぐす心地よさ。

ユマ姫の魔力制御の精密さ故に可能な事。細胞の一つ一つを緻密に繋ぐ、気の遠くなる作業を瞬く間に行い、元々あつた傷跡すら綺麗に修復してみせる。

見る人が見れば、なんと献身的な治療と感動するだろう。ただし、本人としては魔法

の実験みたいなモノなのだ。

男として憧れる田中の体をペタペタと触り、元々あつた古傷すらも消してしまふ。

『歴戦の傷跡つぼいのが消えて、ツルツルの新人みたいな体になるのオモシレー』

『遊ぶな！ んふう、あふん』

「気持ち悪い声を出さないで頂けますか？ 治療がしにくいです」

「ふざける！ クソツ！ 頼む、止めて！ あの、止めて頂けますか？ 汚物を見る目

で、優しく治療すんな！」

バニー姿で跨がられて、気持ちが良い治療と共に、蔑む瞳で罵られれば、田中であつても冷静でいられない。

そして、そんな二人を見て冷静で居られないもう一人の男。

「なるほどな……」

木村は大きめの財布を取り出した。

『あの……そのプレイ幾らです？』

『プレイじゃねえよ！ 助けて！ 壊れる！ 俺の性癖が壊れちゃう！』

田中の悲鳴を無視して、ユマ姫は満面の笑顔で木村に振り返り、リボルバーを突きつけた。

「銃弾六発分です」

「SMはちよつと……」

「止めろ！ 俺がプレイの為に撃たれたみたいになるだろ！ 守つただろ！ 感謝しろ！」

なんやかんやガヤガヤと仲良くじやれあう三人。

しかし、時折聞こえる男二人の喘ぎ声は、あらぬ誤解を強固なモノに変えていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一方その頃、真つ暗な部屋で憔悴したオーズド伯はシノニムと向かい合っていた。

「どうしてだ？ 人がそれこそゴミの様に。私は止められなかった」

「仕方ありません。オーズド様ではどうすることも出来ませんでした」

「それだよ、私は総司令なのだぞ？ すでに軍は制御不能に陥っている。これからも無惨な死体が増えるだろう」

「そんな！ しかしユマ様があししなければ、それこそ皆が生き埋めに……」

シノニムは必死にユマ姫を信じようとしていた。しかし、最近は恐ろしさが勝つていて、なんとか信じたいと思っていた。

しかし、オーズドはかぶりを振る。

「違う。そもそも、ユマ姫が居なければアレほどの捕虜を取る事無く、どちらかの勝利で戦争は終わっていた」

「そんな、大勝した事が悪いみたいではないですか！」

「実際、その通りだ。このままでは人類が掃り潰されるまで、戦争が終わらない」

「まさか……」

しかし、否定出来ない思いがシノニムにあった。舌に針を刺すユマ姫の凶行を思い出していたからだ。

アレだけの覚悟があれば、その覚悟は、憎しみは、どれほどのモノなのか。シノニムには底知れない。

お転婆な少女時代のシノニムは、実家を騙した婚約者の陰謀を暴こうと、無謀な探偵ごっこで窮地に陥った。

そんなかつての自分と、無謀な戦いに挑むユマ姫をなんとなく重ねていたが……本当

に恐ろしいのは帝国の魔女なのか、それともユマ姫なのか……時々解らなくなる。

「私は自軍と領地へ引き上げる。……どれ程付いて来てくれるか解らんがな」

「そんな事は……」

言いつつも、シノニムはオズドの自嘲を否定出来なかつた。

それほどに、軍部にユマ姫のシンパは多い。神秘的な色気と、英雄的な戦果、なにより怪我すら治してしまうのだから、ユマ姫が居ればドコまででも進軍出来ると錯覚するに十分だった。

そして、そんな危険な行軍の末路は見えているとオーズドは語る。

「シノニム。オマエもネルダリアに帰るんだ」

「な、何故です？」

「このままでは皆、死ぬ。これ以上はもう戻れない」

「……………」

「オマエは、私に付いて来てくれるな？」

「私は……………」

オーズドに仄かな恋心を抱き続けていたシノニムだ。以前なら、オーズドの命令とあれば何でも聞いただろう。

……………しかし。

「私は、ユマ姫と行きます」

「……………そうか、おまえもか」

答えを聞いたオーズドは、いつそう老け込んだようだった。

「どんな結末が待っているかというと、私は見届けなければ……………間違った方向に進むなら、私が止めます」

シノニムはオーズドに宣言し、部屋を出て行く。

暗い部屋に残されたオーズドは、一人呟く。

「止まらんよ、軍勢は一匹の魔獣と同じだ、暴走すれば手が付けられない」
或いは、既に我々は魔獣の腹の中かも知れないとオーズドは一人、酒を呷った。

ダンジョン??

俺達は魔女の痕跡を追って、帝国の奥深く、スールン地方まで入り込んでいた。

コレは勿論、俺達の独断専行。オーズド伯はもう戦争などやれぬと領地に引き上げてしまっている。

当然、オーズド伯の私兵は解散してしまったし、ついでに捕虜の農兵もそのまま解放してしまった。

ん？ 反乱を恐れて解放出来ずに居たのに、良いのかつて？

良いんだよ。アレだけ悲惨な戦場を見て、まだ戦おうって奴は本職でもない農兵には少ないだろう。なにより彼らの恨みはもう魔女に向かっている、なにせゾンビにされた自国民を目の当たりにしているんだ。

一方で、呪われた軍勢を相手にピカピカ光りながら戦った俺は、彼らの信仰の対象となってしまうた。

俺が話し掛けるだけで神への祈りが飛び出すし、滂沱の涙を流して従ってくれる。

むさい男達が揃って木村が用意した女神像、もとい俺の美少女フィギュアに祈りを捧げるビジュアルだけは頂けないが。とにかく解放しても問題は無いと言い切れる。

それに、ココからはスピード勝負。馬を持ち、地の果てまで共にしてくれそうな奴らだけを連れて来た。

まさに少数精鋭。ゾンビ対策にも下手に兵士を大勢連れない方が良い。

さあ、いよいよ魔女をぶつ殺してやるぞ、と気合い十分、勢い込んだ俺が案内されたのは酷く簡素な縦穴だった。

「本当にこんな所に魔女が隠れているのですか？」

疑わしげに聞いてしまったのも無理はないだろう。

最終決戦の舞台として期待したのは、巨大な地下遺跡とか、底の見えない神秘的な巨大洞穴。こんなしよぼい縦穴じゃガツカリ感がハンパない。コレじゃまるで古井戸だ。

「聞いたところ、放棄された涸れ井戸の様です」

本当に古井戸だった。

容赦ない木村の言葉に、俺は眉を顰める。

何と言うか、宿敵が待つラストダンジョンとしての風格がまるで無い。何かのフェイクや罠、良くて遅滞戦術の一種にしか思えなかった。

しかし、木村は調査に自信があるらしい。

「こんな見た目ですが、中は広く、かつての坑道と繋がっています」

「坑道?」

この辺りはグズグズとした湿地帯で、地獄沼と呼ばれているのは本で読んだ。なんでも泥炭がときおり自然発火する様子が地獄を思わせるとかなんとか。

しかし、こんなグズグズの土地に坑道を掘るか? きつとすぐに崩れてしまうだろうに。

それに、炭が取れる場所は鉱石は採れないんじゃないやなかったか? 理由は知らんが、確かそうだった気がする。

『参照権』で紐解いてもスールーンは、炎が舞い危険な魔獣が闊歩する、この世の地獄、そんなおどろおどろしい記述ばかりで鉱石など……

……魔獣? 大森林から遠く、魔力が薄いスールーンで?

「まさか? 魔石が取れるのですか?」

「その通り。魔石は軍需物資なので、表向きには知られて居ませんが」

「そうでしたか……」

俺はふうと息を吐く。

大森林ならともかく、たまに出没する魔獣からとれる魔石だけでは、都市で使う魔道具の需要を満たせない。

不思議に思つて調べると、比較的若く柔らかい地層で、噴き出す魔力が圧縮されて魔

石として発掘されるらしいのだ。

魔石が採れるなら、坑道を掘るのも納得がいく。魔石は人間にとって重要な戦略物資だからだ。拡声の魔道具ですら、戦場での価値は計り知れない。

しかし、だとすればこの寂れようはどうだ？

「魔石が過剰供給され廃坑したようですね。正式な入り口は閉ざされて入る事が出来ません。なので、ココから入るしかないのです」

木村の補足に「ああ」と唸る。そう言えば、奴らはエルフの王国から大量の魔石を手に入れたばかり。その上、魔力炉で魔石を精製する方法まで手に入れている。

「では、スールーンはかなりの不景気に陥っているのでしょうかね」

「だがよ、住民は却って喜んでると思うぜ」

ザマアと思っていると、ポンっと俺の頭に手を置く男が。

「ココは、俺がコツチに転移して、散々お世話になった場所よ」

田中だ。どや顔で語るほどには、ここらに詳しいらしい。

「魔獣駆除を生業にする荒くれ者も多いし、流れの抗夫だつてやってくる。おまけに領主は無能で、騎士団は盗賊と見分けがつかねえ有様だ」

「地獄の様ではないですか」

聞いただけでゲンナリする。転生したての虚弱な俺なら、三日と生きられないだろ

う。

「だが、閉鎖的なこの世界で、言葉もロクに喋れねえ流れ者がよ、腕っ節一本で喰っていくなら最高の場所でもあつたワケだ」

なるほどな、そう言う考え方もあるか。

「では、この坑道も知っていますか?」

「いんや、俺は泥炭掘りをやったぐらいで魔石は掘ってねえ」

「役立たずではないですか」

今までの流れ、何だつたんだよ……

「だがよ、解る事もあるぜ? 俺だつたらスールーンの洞穴には、頼まれたつて入ら

ねえ」

「それはそうでしょう……」

こんなグズグズの土地のしよぼい洞窟。俺が入ったら即座に生き埋めになるに違いない。

「ソレだけじゃねえよ。泥炭は爆発するわ、魔獣は出るわで人間が居られる場所じゃねえ。しかも掘ってるのが軍需品の魔石とくれば、働いてるのは犯罪奴隷ばかりになる。ソレでも人出が足んなくて、騎士団が奴隷狩りみたいに変わっちまったんだけだな」

「益々、地獄ではないですか……」

「だからまあ、坑道の閉鎖は地元にとつて悪い事ばかりじゃねーのよ、騎士団も討伐されたしな」

「……この世の地獄ですね」

騎士団が討伐されるって言葉の響きがエグい。

泥炭や魔獣以上に、人間が作り出す地獄にウンザリする。帝国のお偉いさんは地獄を作り出すスペシャリストかよ。じっくり炭火で焼いてやりたいね。

物騒な笑みを浮かべる俺の頭を田中がペチリと叩いた。

「つーワケで、オマエが乗り込むってんなら、俺は全力で止めるぜ？」

「勿論、私だつて単身乗り込もうとは思っていません」

「なら良いけどよ」

……コイツ、信じてないな。今にも首根っこを掴まれそうだ。

だが、俺だつて今話を聞いて突っ込んで行くワケないだろ？

可愛さつてのは、こう言う時の為にあるのだ。俺はよそ行きの笑顔で田中を見つめた。

「では、代わりに探索してくれるのですね？」

「俺の話聞いてた？ 行く訳ねえだろ！」

今までの流れ、何だったんだよ……

いや、行かない流れだったかも？ でも、このまま手をこまねいてるのもマズイ。足止めの策なら、既にかなり時間を無駄にしている。

焦っていると、ドヤ顔の田中が親指で背後の木村を指差す。

「忘れてやしないか？ こう言う時の知恵袋が居るじゃねえか！ 木村サンよお！ そろそろ聞かせちゃくれねえか？ このダンジョンの攻略方法をよ」

「なんもねえよ！」

「無いの？」

「無いね……」

「てへっ！」

てへっじゃねえよ！

田中みたいな大男が可愛こぶつても、ひたすら痛々しいだけ。全く誤魔化せてないぞ。

二人はどうにも緊張感なく、いつもの漫才を繰り広げている。

「用意する時間なんて、ドコにも無かっただろ、マジ」

「そこを何とか」

「狸口ポットじゃないからね？ ムリのムリムリかたつむり」

「えー！」

「えー！　　つて言われても」

じやれ合う二人にイラつきながら、俺は覚悟を決めた。

カツつと目を見開き……気合い一発！

……そこで、何故か俺は田中に首根つこを掴まれた。

「……行くなよ？」

……いや、行かんで。

だって、今の俺には心強い味方がいるのだから。

俺は田中の手をペチリと払いのけるや、拡声の魔法を使い、背後に問う。

「皆さん！　ココが決戦の地！　魔女を討つために。」

——いいえ、ただ私の為だけに！　死地へと飛び込んでくれますか？」

今の俺は魔力値が千を超える。そんな俺の精一杯の拡声の魔法は、地平線まで届きそうなる大音量。

だが、そんな魔法の声も、さらに大きい咆哮に押し流される。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

大地が揺れた。千を越す騎士の、力の限りの叫びが返る。

少数精鋭と言ったな？　アレは嘘だ！

ぶっっちゃけ、なんか千人ぐらい付いて来た！ でも仕方が無いだろう？

「馬を持ち、地獄まで共にする覚悟がある奴だけ」って条件なのに、馬持ちの騎士が全員がついて来ちゃったんだもん。

馬を持たないヤツだって、輜重隊として後から付いてくると豪語してたから、これでも立派な少数精鋭なんだよ。

「こりや、スゲエ」

田中がゲラゲラと笑う。

「こんな人数でお邪魔して、ご迷惑じゃないかな？」

木村のジョークはセンスが無い。

……じゃあ、千人でのダンジョンアタック、始めるか。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

千人でのダンジョンアタック。その中で、魔法が使える俺だけの役割とは？

俺は洞穴、と言うか古井戸の前で魔法を発動する。

たちまちビューツと音がして、勢い良く突風が井戸の中に吹き込んでいく。

『地味過ぎない？』

風を吹かすだけ。どう見ても主役がやる事では無い。

こうやって風を送り込めば、酸欠とか毒にやられる可能性が減るとかなんとか。

「泥炭があるから発火や爆発は怖いけどね、毒や酸欠と違って防ぎようもないから魔女も罠としては使いづらいいと思うんだ」

とは木村の弁だ。

それで、その木村はと言うと、井戸の底でひたすら糸を引っ張っている。糸の先つぽには坑道に飛び込んだ兵達が居るハズだ。

そう、ミノタウロス以来伝統のダンジョン攻略方法。毛糸を持たせての突撃である。

五人一組で、毛糸を持って出発。定期的に引っ張って、反応を返してもらう。

苦肉の策であり、ドコまでもゴリ押しだ。

「あ、戦闘になった。田中、行けっ！」

そして、強く引っ張られた時は魔獣と戦闘になった証。そこで、コチラの最大戦力である、黒ずくめのオッサンが出撃する完璧な戦略だ。

「えー危ないし、嫌だよ」

「行けって、ヤバいから」

「いつそオマエが行こうぜ？」

「いや、俺は糸を見てるから」

「じゃあ俺が糸持ちますよ、木村先生」

「ダメダメ、これは微妙な操作が必要なんだって」

オッサン同士の醜い押し付け合いが始まった。

ちなみに、この二人にオッサンと言うと、どちらも死ぬ程嫌がる。

十四歳のピチピチ少女から見たら、三十の男なんてオッサンで良いだろうに。

この際、中身は同じ歳である事は問わない事とする。

それどころか、記憶の中の年齢を全部合計すればこちとら立派なおばあちゃんだしな。

ソレはソレで、子供扱いしてやれば、コイツらどんな反応するか……

「何を笑っているのです？ アナタの為に皆が命懸けで戦っているのですよ」

と、そんな事を考えていたら、シノニムさんに怒られた。

なんと、彼女は上司であるオーズド伯ではなく、心配して俺に付いて来てくれたのだ。

有難いような……ちよつとおかんな面倒さもあるような……。勉強してない言い

訳みたいに反発しちゃうぞ！

「そう言われても、乗り込んで行くとすれば、シノニム。アナタは止めるでしょう？」

「勿論です」

「では、ココで微笑みながら待つしか無いではないでしょうか？」

「……せめて、もつと真面目に出来ませんか？」

そう言つて、井戸の下でじゃれ合う二人を覗き込むが……苦情は当人に直接言つて欲

しい。田中はマジで狭い所が苦手なのか、全然洞窟に入ろうとしないし。

「どうやら、やつつけたみたいだぜ」

それどころか、戻って来た先遣隊を自慢げに指差す。彼らはネズミの魔獣を引き摺って来た。

潜ってるのは腕自慢の騎士ばかり、狭い坑道とは言え小さい魔獣相手なら余裕みたいだ。

ソレを見て、木村は田中を睨む。

「アレ？ お前、要らなくない？」

「要らないならソレに越した事ねーだろ？ 他の奴らにも出番をやらねーとな」

「良く言うぜ」

そんなこんなで、次々と魔獣の死体が井戸の上へと引き上げられて、山の様に積み上がっていく。

……俺、何もしてないけどこんなんで良いのかな？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

結局、その日は魔女、もとい黒峰を見つけられず、外でキャンプをする事になった。

幸い、掘れば泥炭が採れる土地だ。しかも今は乾季、渴いた泥炭に火を付ければ明かりには困らない。

たき火が煌々と輝き、山と積み上がった魔獣の死骸が浮かび上がる。そしてソレをサカナに武勇伝で盛り上がる兵士達の笑い声。

そんな中で、兵士達の証言を集め、メモを取る木村の姿。どうやら糸の長さと併せて地図を作ろうとしているらしい。

俺は制作中の地図を覗き込む。……随分と複雑だ。

「中は想像以上に広いようですね」

「ええ、それに、深く潜るとネズミより強い魔獣が出ました」

「まるでダンジョンではないですか」

なんだそのゲーム的なファンタジー空間は。

「アレです、大きいでしょう?」

真面目モードの木村が指し示すのは、ネズミの魔獣に混じった猫型魔獣だった。

大森林には四つ目の虎みたいな魔獣が居るのだが、形はソレに近い。

但し、目はひとつだけ。その代わり極めて大きい。

坑道内で、ヒカリ苔の僅かな光を最大限に生かすため、大きな眼を獲得したのでらう。

餌は言うまでも無く、デカイネズミだ。

「つまり、人間が坑道を掘る前から、生態系があつたと言う事ですね?」

だとしたら、穴はどこまで深いか想像がつかない。

「その通りです。そしてネズミはともかく、猫の方は普通の騎士では歯が立ちません」
「じゃあ誰が？ 俺が木村に目で問うと、田中がふらりと現れて、ニヤニヤしながら頭をポンポンと叩いてくる。」

「お前かよ！ イラつく笑顔するじゃん、オイ！」

「気安く触らないで頂けますか？」

ムカつく。血が沸騰して顔が赤く染まるのを自覚する。

撫でポならぬ、撫でポツポである。しかし、魔獣を倒したのは田中ではなかった。

「姫様よお、褒めてやってくれよ。このデカ猫。やったのはコイツよ」

そう言つて、グイグイとマーロウ君を推してイチヤイチャしてるんだが……何なの？

「止めて下さいよアニキ、こんなザコ、アニキが今まで倒した魔獣に比べれば……」

「いやいや、このタイプと狭い場所でやり合うのが難しいのは良く知ってるぜ、やるよう

になったじゃネーか」

「そう言つて貰えると。オレ、嬉しいッス」

「稽古つけた俺も、鼻が高いぜ」

……ビュービュー先輩風吹かすじゃん。でも確かに、暗い中、この手の魔獣とやり合える戦力は貴重だ。田中よりよっぽど使える。

「マーロウ、頑張りましたね」

「あ、ありがとうございます！ 勿体ないお言葉です！」

ふむふむ、確かにスレたオッサン二人と違って素直で可愛いね。この前、全く役に立たなかったのは忘れてやるか。

……ん、マーロウが活躍したと言う事は？

「マーロウ、坑道の中、魔力は濃いのですか？」

「ハイ！ お陰で絶好調。中で寝たいぐらいです」

……だとすると、何日もダンジョンに籠もるのは難しいな。ゾンビ化したら目も当てられない。

とか、考えてると。田中は尚もマーロウをグイグイと推していた。

「いやーココまで成長しているとは、君こそエルフのリーダーに相応しい」

「待って下さいよ、俺なんて！」

「いや、大森林を任せられるのは君しか居ない！ お前ならユマ姫だって幸せに出来る

！ 間違い無い！」

……コイツ！ 俺をマーロウに押し付けようとしているツツ!!

マーロウも当然だがまんざらでもなく、顔を真っ赤に照れている。

「なっ！ なんて事言うんですか！ 魔獣退治なら、俺よりもアニキの方が！」

「いやいや、遠慮する事は無いよ。うん」

遠慮するな、じゃねーよ！ そんな決定権一切無いだろうが！ お前が遠慮しろ！

こちらら美少女だよ？ 腫れ物みたいに扱いやがつて！ コイツに口説かれるのも死ぬ程嫌だが、かといって迷惑物件みたいに扱われるのは許せない。

ビキビキと額に浮かぶ血管を必死に抑え。脳内で可愛い動きをシミュレーション。

俺は思わず、と言った感じで、田中のジャケットの裾に手を伸ばす。

「あなたは……」

俺はしかとジャケットの端を掴み、上目遣いの潤んだ瞳で田中を見つめる。

田中がギョツとしてコチラを見ると、俺は、泣きそうな顔で尋ねる。

「あなたは、私を、幸せにはしてくれないのですか？」

突然に喧噪が途絶え、不思議と辺りは静まり返った。

なるほど、やつちまったな。

なんで皆してこのタイミングでコツチを注目してるのか。

田中は、え？ つて顔で絶句してるし、マーロウは寂しそうな、それでいてサツパリした顔で頷いていた。

いやー、これもマジに取られると参るね。

「わ、私は、皆で幸せになりたいのです！」

必死でフオローするが、なんか空振った感じになつてる。照れ隠しと思われてしまっ

たみたいだ。

微笑ましいモノを見る目で見つめる熟練兵のオジサマや、田中に嫉妬の目を向ける若い騎士など、反応は様々。

「あ、ウチの商会でコンドーム作ったんで、ご祝儀代わりに渡しておきますね」
取り敢えず、木村は殴った。

発見、そして突入

次の日も魔法で古井戸に風を送り込む単純作業が続いた。

突入組も慣れてきたのか、ネズミや化け猫の死体がうずたかく積み上がっていく。かなりのペースで中の制圧は進んでいるようだ。

それもそのはず、濃厚な魔力漂う坑道内に、今も三百人以上の兵士が乗り込んでいる。かつて軍を引き連れ古代遺跡に向かった俺達だが、結局、僅かな精鋭しか遺跡の中に立ち入れなかった。

それはピルタ山脈周辺にも濃厚な魔力が漂い、遺跡にたどり着いた際には既に軍が疲弊していたからだ。

今回は井戸の外なら魔力が薄い。十分に元気なら健康値が地下の濃厚な魔力から体を守ってくれるのだ。その為に三百人が三交代、バックアップが百人で、総勢千人のゴリ押し攻略が進んでいた。

そうでなくても薄暗い地下で、ドコから攻撃されるか解らない恐怖は精神をすり減らす。魔力の事を抜きにしても、交代制は理に適っていた。

しかし、そんな地獄で却ってイキイキとする者が居た。

「見て下さい！　また一匹、一目大猫モルガンザルデンを殺りました」

そう言つて、井戸の奥から煤にまみれた顔を覗かせたのはマールロウ君だ。頑張つてる男の子は褒めるに限る。俺はお姫様らしく労つた。

「やりましたね。でも、無茶はダメですよ」

「当然です。自分の限界を知らない程、子供じやないですよ」

そう言いながらも、屈託ない笑顔は子供そのもの。

良く考えればコイツもまだ十代。今まで何だかんだ無理をしていたのだろう。吹っ切れた様子は、良い意味で力みが抜けている。

ユマ姫にとつちや年上の男の子なんだが、ソレでも可愛いと思つてしまうのは俺の精神年齢が田中や木村と同じ年だからだろうか？

いや、このマールロウ君の笑顔は誰が見たって可愛いと思うはずだ。

その吹っ切れた原因が、俺の田中への思いを勘違いした事にあるのだけは頂けないが……

まあ、良いか。

どうせ、もうすぐ、全ては終わる。

俺の『偶然』は間違い無く、魔女や帝国を道連れに、全てを殺すだろう。

一番の目当てはもうすぐだ、やっと殺せる。

確かな予感が嬉しくて、鼻歌が出そうな程にゴキゲンだった。

「あ、う……」

すると、途端にマーロウ君が狼狽えた。

「どうしました?」

「あの、その……あんまり姫様がお綺麗で」

「まあ!」

言うじゃないか。

しかし、お世辞ではないだろう。自分でもキラキラ輝く笑顔を自覚するほど。

俺はジツと井戸の底、その更に奥で待つ、女の姿を夢想する。

ああ、魔女よ! お前だけは、この手で、引き裂いてやるからな。

そうやって笑顔を振りまいていると、待機中の騎士達がガヤガヤと騒ぎ出した。

「何事です?」

七百人も居るから相当に騒がしい。皆が指差す方を見ると、煤が舞う地獄の中をラクダの一群が駆けてくる。

あー……見覚えあるわ。

「リヨンさん! 来てしまったのですね」

ソレを見つめて。ちよつと困った感じで微笑んだ。正直、リアクションに困るのだ。

いや、ゾンビまみれのクーリオンでは大助かりだったよ？

でも、プラヴァスの王子サマ的存在の彼が、コツチの戦争に長く首を突っ込むのはどうなんだ？

政治的にも微妙な時期だ。クーデターの原因を取らされそうだったリヨンさんを太守として推しまくって、王国から予算も割いたのに、またクーデターでひっくり返ったら凄く困る。

ラクダが俺の目の前に止まる。リヨンさんの白いラクダは泥炭で薄汚れていた。

「恥ずかしながら、遅れ馳せ参じました」

ラクダを飛び降りる姿にも、疲れが見える。

ラクダは帝国の気候にあわず、馬と比べると足並みが遅れる。

それに、クーリオンに駆けつけたのだから、既に強行軍だったのだ。スールンには来ないと思っていたが、少数だけ連れ立って来てしまった。ボロボロの姿で。

「ここは敵中。危険です。プラヴァスはどうするおつもりですか！」

「ですが、魔女はプラヴァスにとっても仇敵。その最期を見届ける義務があります」

前もそんな事言ってたが借りはクーリオンで返したと言えるのでプラヴァスのメンツは立つし、王国や木村に技術供与をたかるにしても、先の一戦の功績でお釣りが来る。

なにより王国の正規軍としては、既に解散しているのだ。ココまで付いて来る義理は

無い。

他に何か狙いが有るとみた。

「本当に、それだけですか？」

そう言つてジツと見つめると、リヨンさんはたじろいだ。

「いえ、ユマ姫様の美しいお姿を、少しでも見ていたいと言う浅ましが故の進軍です」

「もう……」

俺は頬を膨らませて怒つてみせる。流石に本心は明かしてくれないらしい。茶化されてしまった。

俺も俺とで、からかわれた女の子としては、こう言うリアクションが可愛いかな？

と、ぶりっこして、リヨンさんの出方を窺つたつもりだったのだが……。

「……………」

澄み切つた真剣な目で見つめてくるんだが？

……この目はガチのマジだ。本当に俺と居るために来ちやつた感じだ。

正直、扱いに困る。

足手まといになつても困るが、下手に活躍されるともつと困る。

大して報酬も出せないし、報いる手段がない。

……いや、ある。

リヨンさんはドM。この前開発された？ バニー姿のハイヒールでグリグリと踏みつける技に加え、最近扱いに慣れてきた籐の鞭でペシリペシリと打ってやれば大満足に違いない。

……いや、しかしマズいだろ。王子を踏みつけて、鞭で打ったら。

よしんば、リヨンさんが良くても俺が良くない。

コレでも何だかんだ十年以上は女の子なんだ。前にリヨンさんをベルトでペシペシ叩いた時ですら、変な扉が開きかけた。

それを軍のただ中で、バニー姿でやるなんて、TNTで性癖の扉を爆破するようなモノ。

女の子なら誰だって正気でいられないだろう。

つてか、俺も俺もと皆が名乗り出て、変な儀式に発展する可能性が極めて高い。

ただでさえ、最近変態が板に付いてるからな、これ以上はマズイ。

「私は、王国とエルフの同盟を支える人質です。どんなに想われても、応える事は出来ません」

「いえ、私はただ、アナタのお姿を目に焼き付ける。それだけで幸せなのです」

真剣な目でコチラを見つめるリヨンさんは大マジだし、後ろでウンウンと騎士達も領いている。

我ながら罪作りな女だが、リヨンさんの端整な顔も中々に罪作り。

プラヴァスでは旅行先補正かと想ったが、ここでもリヨンさんはカツコイイ。ゆつたりした長衣ではなく、革鎧を着ているので、しなやかな体軀が見て取れる。

「足手まといにはならないつもりです。我々が遅れるなら、今回の様に置き去りにされても構いません。プラヴァスの精鋭を連れてきました。腕っ節では負けません」

いや腕っ節って……。もうそんなに荒っぽい事もないと思ってるんだけど。

どうやってお帰り願おうか考えていると、軽薄な男がどや顔で話し掛けて来た。

「姫様、コイツ等やりませよ。俺が保証します」

「グリード殿ー」

いや、お前誰だよ……。『参照権』！ あ、俺の親衛隊の副長らしいです。輜重隊の護衛として残ったハズが、リヨンさんの道案内に回ったようだ。

お調子者のグリードだが、腕は良いと聞いている。きつと二人になんかあったんだろ
うな、お前なんかが姫様について行ってなんとする！ 私はそれでも姫の助けに！
みたいなやりとりが。

で、なんか男の友情とか芽生えちゃって、俺の事そつちのけで盛り上がったに違いない。
い。

今では手に入らない類の友情に羨ましいやら、寂しい感じもする。

いや？ 俺と木村、田中にはまだあるかな？ あるよな？ 大分歪んで来た気もするが。

俺がリヨンさんの対処に困っていると、更に面倒な奴が出て来てしまふ。

「またお前か！ 姫様を惑わす間男が！」

「マーロウ！ なんて事言うのです！」

君、プラヴァアスの王子に凄い事言うね。いや、正直感ってましたが。

「今の姫様は大切な身、危険な輩をそばには……」

「私が誘惑されたとしても、悪いのは私でしょう？ リヨンさんに失礼な事を言わない

で下さい！」

「もしも誘惑されて頂けるなら光栄です」

「このっ！ 痴れ者が！」

……リヨンさんもマーロウには妙に煽るね。ホントは仲良しなんじゃないか？

そんなこんなで、ワイワイとしながら一日が過ぎていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その夜には輜重隊も合流を果たし、当面は物資の心配もなくなった。

さあ、何日だって籠もってやるぞと覚悟を決めた次の日、待望の報告があった。

「魔女を発見しました」

「本当ですか？」

俺は椅子を蹴飛ばし立ち上がる。また変な罫でも仕掛けて、遠くで様子を窺っている事すら覚悟していたからだ。

「間違いありません。この目で確認しました」

報告はゼクトールさん。魔女を見た事もあるだけに、間違い無いだろう。

だとすると？ なぜ引つ立てて来ないのか？

「奴め、大量の火薬を埋めていて、合図一つで一帯を爆破すると言っています。どうしてもユマ姫や木村様、田中殿と会話がしたいと」

「……まさか、それを信じたのですか？」

「嘘だとしても、自害の可能性は十分にあると判断しました」

「なるほど……」

それほどに、黒峰さんだつて追い詰められていると。俺はなにより自らの手での仇討ちに執着していた。だからこそ、判断を仰ぎに来たか。

しかし、どうだろう？ あまり深い付き合いはなかったが、黒峰さんは世界を滅ぼす核のボタンを持ったとしても、自分から遠いところで爆発させるタイプに思う。

たとえ、結局は一人、核で滅びた世界で寂しく死んでいくとしても。

だとすれば火薬と言うのはフェイクでは？ まして魔女は焼け死んだ俺が復活した

のを知っている。爆発に巻き込んで、心中する気になるだろうか？

しかし、木村の見立ては違うようだ。

「奴らは窒素化合物を大量に作れます。そしてココには泥炭が大量に、更には坑道が地下深くになるごとに、徐々に地下の温度が上がっています」

「それが？」

「火山性ガスで硫黄が採れるなら、火薬に必要なモノは揃うのです。地脈に泥炭と窒素化合物を混ぜ込んで、辺り一面を破壊する可能性は十分ある。そうだとすれば、ココに立て籠もった理由にもなるでしょう」

積み上げた罫も、自慢の軍隊も打ち破られて、魔女が自棄になって周囲を巻き込み自爆しようとしている？ そんなタマかね？

「とにかく、私が行けば良いのでしょうか？」

「馬鹿な！ 聞いていましたか？ 危険です！」

……ゼクトールさんにまで馬鹿って言われるとクルものがあるね。

「しかし、罫が明かないのでしょうか？」

「私は、突入の許可と、姫様の退避を提案したつもりですが？」

そうか、聞いてなかった。聞く気もないしな。

「なりません」

「何故です!」

ゼクトールさんは本気で怒っている。

しかし、魔女を殺す絶好の機会だ。アイツは俺の『偶然』に巻き込まない限り絶対に殺せない。

そんな気がする。

そして魔女はきつと、俺が来ようが来まいが、どっちでも良いのだ。

会って嫌味の一つでも言いたいだけで、来ないなら来ないで、それでも俺を殺す算段を立てているだろう。

ならば、行った方が面白い。訳も解らず死ぬよりはずっと良い。

「魔女は強敵です。私より、不測の事態に対応可能な者は居ますか?」

「無論です、親衛隊は様々な訓練を重ねています」

「……言い換えましょう。私より、強い者は居ますか?」

「それは……」

居ないんだよ! この世界で、唯一、好きに魔法を使える俺よりも、強い奴なんて。

相手が田中だって、俺が魔法で高速移動しながら魔法の矢を放てば、一方的に殺せる。

「しかし、霧ギョルドスの悪魔は? アレで魔法を封じられれば……」

「その時は、敵だって魔道具を使えません。我々の勝利は揺るがないでしょう」

「そもそも、そんなリスクを冒す必要がありません」

喧々諤々の議論になったが、結局は折れて貰った。

日が昇れば、魔女との対面が始まる。

いや、決戦と言うべきか。少なくとも、俺はすんなり事が運ぶとは思っていない。

いつもアイツは安全圏から一方的に攻撃してきた。今回ばかりは、一緒に踊って貰うぞ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

明朝、俺達は井戸の前に集合していた。

「結局、俺達でカタを付けてえって気持ちはあるよな。知らねえ仲でもないし」

あんなに遺跡に入りたがらなかった田中も、流星にやる気だ。抜き放ち、刀身の確認に余念が無い。

「いや、行きたくないけどね。でもまあコレが今生の別れになるなら、そりや行くよ」

木村も覚悟を決めたようだ。

「僕も行きますよ」

そりや、マールロウ君は俺の護衛だしね。

他にはゼクトールさんなど、親衛隊の面々から数名を選抜し、魔女との面会に同行させる。

残念ながらリヨンさんはお留守番だ。流石に危険過ぎるし、突然やってきて特別扱いは難しい。

じゃあ、千人からなる他の騎士はお留守番かと言うと、違う。

魔女が待つ広めの洞穴。そこに入るのは数名として、そこまでの通路にズラリと三百人。待機してもらおう。

「あんまり大人数で詰めかけないでね、話し合いにならないから」とは魔女のセリフと
言うが、ならば魔女の部屋までは何人でお邪魔しても良いって事だろう。

現実的に、ゼクトールさんや他の騎士を説得する最低ラインだった。

三百人の騎士達が朝一で古井戸に入り込み、魔女が待つ洞穴までの道を固めている。
俺達は、安全な道を堂々と降りていくだけ。

ココまでやられて、魔女はどうやって逆転するつもりなのか？ もはや楽しみですら
あった。

俺は笑顔で皆に問いかける。

「準備は良いですね？」

笑顔の俺に、皆がココリと頷く。マールウは見惚れているし、待機に回った兵士達な
んて俺の姿に陶然としている。

今日の俺は、白い軍服っぽいジャケットに、ミニスカートと言う出で立ちだ。

軍服には所々紫のリボンと黒いラインがあざとくあしらわれていて、言うまでも無く木村の趣味。

今日の俺は魔力を大量に摂取したので、髪はド派手にローズピンクに染まっている。鏡で見たけど、衣装もあつてコスプレっぽさが凄い。本格的な中世ファンタジー世界にアニメキャラが居るみたいな違和感だった。

だが、何も趣味だけの装備じゃない。下半身は動きやすいミニスカートに厚手の白いタイツで防御力も十分。コルセットドレスは固い革でお腹をカバーしているし、ジャケットは例の蜘蛛の糸で織られていて、銃弾も通さない。胸元を飾る糞デカリボンだつてお洒落の為ではなく、練り込んだ魔石で霧の悪魔ギョルドスの霧を中和するものだ。

アニメっぽいけど、可愛さと実用性の両立に気を使った素晴らしい装備だ。だが、そこにちよい足しされたメイド喫茶みたいなフリフリエプロンが全てを台無しにした

加工しにくい魔導衣をどうにかしたモノらしいのだが。軍服にミニスカートってだけでリアリティが限界を迎えていた所に、メイドさん要素でトドメを刺したみたいな。やけくそな節操の無さが、レア度を上げるために足せるだけ足してみたソシヤゲヒロインっぽい胡散臭さを醸し出す。

いや、嫌いではないのだが。なんて言うか、もはや本格ファンタジーの風格は一切無

い。

まあ命には代えられない。それに魔導衣は田中の戦いの成果でもある訳だし。
「では、行きましょう」

そうして俺は、古井戸に飛び込んだ。

もしも、世界と心中出来るなら

「案外、明るいのですね」

真つ暗な坑道と聞いていたが、岩壁は所々光っていた。俺の疑問に前を歩くゼクトールさんが答える。

「これこそ魔力が濃い証。魔力で光る苔類です」

「魔石自体も少しは光るのですが、この石はそれほどの純度はないようです」
「そうなのですね」

考えてみれば、マールウが何匹も狩った猫型魔獣は大きな一つ目に進化していた。

もし、真つ暗な地下ならば、むしろ目は小さく退化していただろう。

「ですが、足元を照らす程ではありません。お気を付けて」

「解っています」

ゼクトールさんは心配性だ。俺はもう、転んだ拍子に死んでしまうような病弱な少女ではないのに。

……良く考えたら、ゼクトールさんは俺が病弱な時代を知らないし、俺は病弱じゃなくても何かの拍子に死に掛けているな。

「大丈夫です。僕が守りますから」

病弱な俺を知ってる少年に至っては、魔女に会う前からナイト気取りで周囲を警戒している。

良く考えたら、ナイト気取りって言うかみんなナイトだわ。俺はお姫様だし。

……そんな下らない事を考えながらも、俺達はどんだん地下に降りていく。

「姫様、お気を付けて！」

「応援してます」

「一緒に行けないのが悔しいですよ」

道なりに待機する騎士達が、次々と声を掛けてくる。手を挙げて彼らの声援に応え、笑顔で労うのも一苦勞。兵士の数が多いので、これが結構な重労働だ。

まるで重役出勤。敵の気配はまるで無いし、単調な地下道が続くと飽きてくる。

「……………長いですね」

いや、長すぎる。どんだけ広いんだこの坑道。

「そりゃ、十メートル間隔で騎士を二人配置して、三百人ですからね」

ぼやきながら地図を確認する木村を信じるなら、1.5キロの道のりか。

「分かれ道や高低差が激しい場所はもつと人数を割いてるので、大体一キロですかね？」

「それでも広いぜ。コレが人間が掘ったモノかよ？ 魔石を掘ってた抗夫は何人も知っ

てたが、こんなのを掘れるような奴らじゃなかったぜ」

吐き捨てる田中は、いつもの余裕が見られない。転移した場所がスールンだっただけに、坑道や抗夫には詳しいと言う。

「ロクでもない犯罪者か、ロクに頭が回らず、騙されて売られてきた馬鹿ばかりだったぜ。いけ好かねえのはガキが多かったって事だ」

そして、一度見た抗夫を二度見かける事は稀だったと、それだけポコポコ死ぬと言う事だ。

そんな彼らが、こんな坑道を掘れるハズが無いと言う。

「アイツらの死因は生き埋めか、酸欠、泥炭が燃えて火だるまつてのものもあるな。ロクな知識も道具もなく、穴蔵に押し込められるのよ。こんな深く坑道を掘れるハズがねえ」

なるほど田中がアレだけ坑道に入るのを嫌がるワケだ。どう言う事だと振り向けば、あつけらかんと木村は言う。

「そりやそうだ、今更っしょ？ 人間が掘った坑道なら、環境に適応した魔獣が住み着いてるハズないわな。きつと百年以上前からあったんだろね」

何気ない風に言うが、木村サン？ そう言う事は早く言っただけいいね。俺が何か言う前に、田中が嘔み付いた。

「じゃあナニかよ？ コレも古代遺跡だったのか？」

「それが解んないのよ。だったらコンクリみたいな建材を使うだろ？」
 「そりやそうだが……」

「元抗夫にも話を聞いたけど、あんまり深くは潜らないって。魔獣に喰われるからね。彼らにとつては大きい鼠だつて無敵の魔獣。一目大猫モルガンザルデンなんて語り継がれる伝説扱いだつたよ。出会つたら必ず死ぬってさ。死骸を見せたらブルつてたし」

「おいおい、じゃあ人間は、この洞窟の表層を引つ掻いてただけつてか？」

「そうなるね、嫌な予感するだろ？」

「……帰つて良い？」

駄目だ！ 逃さんぞ！ 俺は田中のズボンをギョツと掴む。

『俺達、親友だろ？』

『いや、もうお前、女の子だし』

ほう！ ソツチがその気なら。

「この戦争が終わつたら私達……」

「ヤメロ！ 濃厚なフラグを立てようとするんじゃないやねえよ！」

「姫様！ ついにその気になつたんですね！」

……フラグとか解らんマローウ君に食いつかれてしまった。まあ良いか。放置で。

しかし、この道。巨大なサンドワームがのたうった跡の様にも見える。ゲームと違つ

てそんな生物は記録にないが、絶対に居ないと言い切れるかどうか？

なにせ、部屋と部屋とを細道が繋ぐ構造は……まるでアリの巣だ。

「ひよつとして、何かの巣だったのかも知れませんが」

「馬鹿言え、こんなデカイ穴掘るなんて、大牙猪ザルギルゴールでも無理だろ」

「そうですね……」

田中の文句に答えながらも、本当は思い当たる節があった。

かつて俺が飛び込んだ遺跡にポツカリと空いていた大穴は、経年劣化で開いたモノじゃない。ポーネリアの記憶では僅かな時間で何者かに開けられたモノだった。

たしかアレは……。

「到着しました。皆さん準備は宜しいですか？」

ゼクトールさんの言葉にハツとする。

考え事をしていたら、何だかんだ魔女の待つ部屋の手前まで辿り付いてしまった。

「お待ちしてました、魔女はこの先です。奴め、堂々としてますよ」

魔女の待つ場所へ至る唯一の通路、そこに陣取っていたのは親衛隊副長のグリードさんだった。リヨンさんを案内した昨日の今日で、ご苦労な事である。

グリードさんが指差す薄暗い小道はなだらかな下り坂。ココを降りると正真正銘、この坑道の最深部になっており、驚く程広いスペースが広がってるらしい。ソコに魔女が

居るんだとか。

「殺風景な何も無い場所ですが、通路が傾斜になってるので一度入ると出てくるのはちよつと骨ですね。魔女は足元に大量の火薬を仕込んでるって言うて……本当に行くんですか？」

そりゃ、行くだろ。

最悪、火薬を爆破したって、俺の魔法があれば生き残れる。

でも、まあ、一人で真つ先に突つ込むつてのはナシだよな。一人でカタを付けたい気持ちもあるが、言い出せそうな雰囲気では無い。

……そんな事を考えてる時点で、復讐の気持ち薄まっているんだらうか？ 絶対にこの手で八つ裂きにしたいと思つていたのに。いまは自分で殺す事に、それほど執着してない自分が居た。

ずっと欲しかったゲームがいき発売された時、なんだか箱から開けるのが惜しくなつてなかなか始められない感じに近い。

勝手に開けられて遊ばれるのは癪だけど、誰かに遊ばせて様子を見たくなくなったりしたもんだ。

「取り敢えず、俺が行けば良いんだよな？」

田中が通路、というか薄暗い洞穴を覗き込む。

そうだな、ゲームもそうやって田中にやらせる事が何度かあった。なんせ木村だと上手すぎて参考にならないし。

俺は祈るように、声を掛ける。

「気をつけて」

「……いや、やめろよ気色ワリい」

酷え言い様だな。まあ、そうか。この場面で言うとしたら、そうだな。

『いのちをだいに』

『めいれいするな』

そんなコマンドないだろ。吐き捨てる様に言い捨てて、滑る様に洞穴を下っていった。

そんな俺達をみて、しみじみとゼクトールさんが呟く。

「神の国の言葉、解らない事が悔しくて仕方有りません」

マローウ君もウンウンと頷くが、内容を知られると幻滅されそうなので解読するのは止めて欲しい。

「どうでも良い事しか話していませんよ。そんな事より、魔法を使います」

俺は集音の魔法を発動する。

まずはサシで田中と魔女で話をさせて、引き出せる情報を引き出す。危険だと思った

ら田中には悪いが全力で退避。

ココまでは事前に決めた流れだ。早速、魔女の声がほの暗い洞穴から響いてくる。

『よお、久しぶりだな』

『……あら？ 一人なの？』

間違い無い、黒峰の声だ。

『いきなり大勢で押しかけちゃ失礼だろ？ 遠慮したんだよ』

『そんなの、私とアナタの仲じゃない』

田中は油断を誘うために日本語で話し掛けている。

だから、内容を理解出来るのは、俺と木村だけ。

『こんなトコで引き籠もって、どうするつもりだよ？ 外は兵士がギユウギユウ詰めだ

ぜ？』

『兵士、ね。そんなモノ、幾ら集めても無駄なのに』

『へえ？ 一人で全員始末出来るってのか？』

『そんなの、無理に決まってるじゃない。私ふつうの女の子よ』

『女の子って歳かよ、俺も良いオッサンだ』

『言う割りにギラついてるじゃない』

『まあーな。コッチに来てから今が一番滾ってやがる。そろそろ教えろよ。何をしで

かすつもりなんだ』

『そうね、話しても良いけど。どうせなら皆に見せたいわ。ねえ？ どうせ、聞いてるんでしょ？』

ご指名だ！

しかし、飛び込もうとした俺の肩を木村に掴まれる。

「いや、まずは我々が行きますから」

「そうツスよ！ 姫は待ってて下さい」

マールウ君まで話し方が素になるほど焦ってるし、俺はどうにも信用がないね。

「私が行かなければ始まらないでしょう！ 安心して下さい、行くのは皆さんと一緒に」

「それなら……」

どうにも仕方無いと言う空気になった。止めても駄目ならその方が安心と目で語り合っている。

結局折れて貰い、マールウ君が真っ先に飛び込み、ゼクトールさんとユマ姫親衛隊が続く、次に俺、ケツには木村。守られながら、俺は洞穴に飛び込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

滑る様に降りた先は、聞いていた通り殺風景な岩の空間だ。

ちよつとしたダンスホールぐらいの大きさと聞いていたが、プールが二つスツポリと収まつてしまふ程に広い。

ゴツゴツとした岩肌は削つたままと言つた風情だが、地面だけは平坦で、一直線に黒つぽくなつている部分がある。これでは火薬を埋めたつてもあながち嘘とは思えない。

とてもこの上を歩く気はしないな。ちよつど火薬の川に遮られ、その対岸に黒峰が居るような格好だ。

「それで全員なの？ 思ったより少ないのね」

田中に木村、俺、マローウにゼクトールさんを筆頭に、親衛隊の騎士が四名。

全員が何らかの達人だ、女をひとり捕まえるには過剰戦力だが、黒峰は余裕を崩さない。不穏だが、飲まれたら負けだ。

「これ以上でお邪魔したら、流石に迷惑でしょう？」

「そうね、気を使って貰つて嬉しいわ」

俺が堂々と姿を現し話し掛けたというのに。まだ余裕だ。火薬を爆破しようが、ミスイルを撃とうが、ココからの逆転など不可能だと言うのに。

「今日、皆に集まつて貰つたのは、世界の終わりを見届けるのが私ひとりじゃ寂しいからよ」

「何を言っているのです?」

嫌な、予感がする。

先程から、首筋がピリリと痺れるような痛みを贈り続けている。俺の運命が削れる痛みだ。

ホルスターからリボルバーを抜いて、銃弾で撃ち抜いてしまおうか?

魔法で補正すれば、決して外さない。魔女に洗脳能力しか無いのなら、防ぐ手段は無いはずだ。

しかし、そんな俺の考えを見透かした様に、魔女は笑う。

「殺しても良いのよ? 憎いのでしょう? 私が」

両手を広げ、俺を挑発する。

コレ、撃つて良いのかな? 駄目な流れだけど、良いって言ってるし……、でもコレが罠で、まんまと反撃で大ダメージを食らったりしたら、馬鹿丸出しって笑われそう。俺は見え透いた罠に掛かる間抜けなモブキャラが大っ嫌いなのだ。

……でも、一応ね? 撃つておこうかな。

こう言うのは変に躊躇して、あそこで撃つておけば! みたいになるのだったって腹立つからね。

多分、なんか防ぐ方法が有るんだろうけど、黒峰さんだって俺が「馬鹿なツ!」みた

いなセリフで驚くのを期待してるだろうし、一発だけなら良いよね？

ヨシツやるぞ！　つとりボルバーを引き抜こうと思ったら、いつの間にか木村のルーデルオン自在金腕が伸びてきて、俺のホルスターをガツチリ押さえつけている。

……そう言うの、駄目じゃない？

キツつと木村を睨むが、ガン無視されてしまう。

イベントシーンだつてのに、ボスよりも俺を警戒してるのはマナー違反だろ。

しかし、マナー違反なのは田中も同じ。相手の口上を待つ気は無いらしい。

「まどろっこしいぜ、早く見せろよ」

「せっかちなのね、モテないわよ」

「大きなお世話だ」

「良いわ、始めましょう」

言葉と同時に、魔女がパチンと指を鳴らした。その途端、真つ白な煙が地面から噴き出す。

ギユルドス霧の悪魔の霧！　しかし、コレは対策済み。

「馬鹿の一つ覚えですね、マーロウ！」

「ハイ！」

タツプリと持たせた魔石をばら撒かせる。

なにせ、魔獣を倒して大量の魔石が手に入った。景気よく周囲にばらまけば、霧は魔力と中和されて効果が無い。

立ちこめた霧で見通しが悪いので、魔法の光で周囲を照らす。

……思ったより暗いな、ドンドンと出力を上げていく。

「なっ?」

「驚いた? コレが真正正銘、私の持っている最後の霧ギユルドスの悪魔よ」

いつの間に、それこそ五十メートルプールぐらいの穴が空いていた。

そして、ソコにビッシリと詰まっていたのが無数の霧ギユルドスの悪魔。何十個? いや百個以上はある。

埋めていたのは火薬じゃ無い、超大量の霧ギユルドスの悪魔。

「濃厚でしょ? 人間でも、気を失う程の濃い霧よ」

「皆さん、魔石を!」

「ハイッ!」

俺とマールロウ以外も魔石を砕き、撒く。なにしろ潤沢に魔石はある。ゾンビ対策に、上層の兵士だって魔石を大量に持たせている。

霧ギユルドスの悪魔の量にはビビったが、こんなモンでどうにかなるワケは……

すると、護衛として連れてきた親衛隊が騒ぎ出す。

「クソツ噛まれた！」

「ネズミだ！ 魔獣が居るぞ！」

嘘だろ？ ンな訳無い。

「あり得ません。魔獣は魔力が無くては、霧の中では動けません」

「しかし現に！」

確かに、薄暗い中をブタぐらいのサイズのデカイネズミが動き回っている。

暗い中、黒峰の声が聞こえて来た。

「ハダカデバネズミって知ってる？ 地球の生き物なんだけど」

知らねえ！ 木村を見ると、コイツは知ってるようだ。しかし、ネズミ退治に余裕が

無い。

楽しそうな黒峰の声だけが暗闇に響く。

「よく似てるのよ、そいつらと。ネズミなのに変温動物で、寿命は十倍は下らない。地球でも有名な特殊な生き物よ。この世界でその秘密の正体を知る事になるとは思わなかったけど」

「ごたくは結構です！」

面倒臭い。もう撃つてしまおう。リボルバーを構え……しかし、足元のネズミが邪魔。

コレでは魔石で霧の侵入を防いでも、魔獣の健康値で魔法を阻害されかねな……いや、このネズミ!

「健康値が無い!」

「そうなのよ、健康値がないの。魔力を含んだ苔を食べるために進化したのね」

でも魔獣だろう? 魔力が無くては……いや、そう言えば、ネズミの体内から取った

魔石は、全て胃の中に有った。

普通は、心臓や肺に魔石を癒着させ、全身に魔力を行き渡させる。

コイツは、きつと食べた魔石や苔に含んだ魔力をそのまま使うのだ。魔力を使って動いているが、肉体と魔力が切り離されている。

ならば、大量に魔石を喰わせておけば動けるか?

俺の考えを肯定するように、黒峰がさえずる。

「霧ギョルドスの悪魔で魔力を削ってもしばらく動くし、動けなくなっても仮死状態で生き延びるのよね。この世界、あらゆる生き物は健康値が減少して寿命を迎えるのに、そもその健康値が無いんだもの。そりゃ長生きするわよね。きつと地球のハダカデバネズミも一緒だわ。初めから半分死んでるの」

生き物として鈍いのだと、黒峰は言う。

人間だって酸素が無くても数分は動けるハズだが、吸った空気に思いがけず酸素が無

ければ、いきなり失神したり、動けなくなる。

魔獣やエルフも体内に魔石を持っているのに、霧を吸うと動けなくなるのはそれが理由だ。ショック症状を起こしてしまふ。

その点、この不細工なネズミは魔力の体内外の差など気にしない。鈍感だからこそ、しばらく動ける。

しかし、健康値がないなら気兼ねなく魔法を撃てる！ 長々と説明してくれたが、それが何だと言うのか。

『我、望む、この手より放たれたる風の刃を』

俺の手から無数の風の刃が生み出され、地面ごとネズミを切り裂いて行く。

魔石を巻き上げて飛ぶので、超濃厚な魔力の中でも数メートルは飛ぶし、健康値の無いネズミが相手なら、いつそゼリーを切るようなモンだ。

今朝測った俺の魔力値は1241、エルフでも百年に一人居るか居ないかの天才クラス。こんなネズミ程度、幾らでも斬り裂いてやる！

しかし、首筋に激しい痛み！

——パアアン！

そして、銃声！ 黒峰の銃だ。闇にマズルフラツシユが光る。コチラを正確に狙っている。

しかし、今の俺には味方がいる。その程度で死ぬハズが無い。

——ギイイイン

受け止めたのはマーロウ。

聖双剣フアルファリツサに触れた銃弾は、甲高い音と共に、無数の火花に分解されて消えていく。

「無様な！ 無駄な抵抗を！」

俺も銃を構える。ネズミに健康値が無いのなら好都合。邪魔をされずに殺せる。俺は霧の中へ目を凝らす。

「クッ！」

……しかし、暗い！ とても狙えない。余りにも霧が濃いのだ。光を強くしても物理的に通らない。

運命光は見えるが、若干のラグがあり、動いている相手を狙うのは難しい。

しかし、何故こいつも暗いんだ？ 霧も原因だが、それにしたつてもっと洞窟は明るかったハズ……

——パァン！

再度、黒峰の銃撃。

魔法で難なく受け止めたが、動いているにも拘わらず、狙いは正確。

一度でも、ネズミに噛まれたら終わりのデスゲーム。『偶然』に晒される俺に、余りにも不利だった。

「撒いた魔石から出ます。マーロウ！ 掴まって！」

「うっ 済みません」

うっすらと光る、魔石の範囲内に居るのは危険だ。

苔があると勘違いしたネズミに群がられてしまっし、何匹倒してもキリが無い。その隙に銃弾を撃ち込まれれば、どこかで防ぎきれないだろう。

しかし、そうすると霧を吸い込んでマーロウは完全なお荷物になる。

「うっ！」

俺だって体が重いし、魔法も使えなくなる。真つ暗の部屋で息を潜めて様子を窺うしかない。

こりや長期戦になるぞ。サクツと魔女を殺すつもりだったのに、想像以上に粘つてくれる。

暗い部屋の中はネズミが這い回る音と、ゾンビの呻き声だけ。

助けを呼ぼうにも、俺達が降りてきた洞穴の向こうから、グリードの怒号や、兵士達の悲鳴が聞こえてくる。

霧は上層にも流れ、ネズミに襲われているのだろう。霧の中和を狙って、兵士達に魔

石を持たせたのが裏目に出た。

「あ、あああ」

そして、ココにもゾンビが一人。ゼクトールさんの部下の親衛隊だ。

「コイツは……私が始末します」

「お願いします」

ゼクトールさんが、泣きながら部下の首を断ち斬った。その目には狂おしい程の怒りが燃えている。

そう言えば、ゼクトールさんは俺の婚約者ボルドー王子とも親友で、洗脳されて王子を殺すはめになったガルダとも親しかった。遺跡でも今回みたいに魔女に部下を奪われている。

ゼクトールさんは俺以上に魔女を憎んでいても不思議では無かった。

暗闇の中の魔女へ殺意の籠もった目を向ける。

「魔女め！」

ギリリと鳴る程に奥歯を噛み締めるが、それでも飛び出しては行かない。俺を守る為だ。

ふむ、何だかんだ術中に嵌まって足手まといになってしまったな。まあ、でも、悪くない。俺には他にも頼れる味方がいる。

「俺が行こうか？」

田中はそう言うが、罨があるに決まっている。

「だがよ、罨が明かねえだろ？」

「そうよ、隠れてたらつまらないわ」

——パァン。

魔女の声。そして銃声。

「グッ」

ゼクトールさんが撃たれた。

いや、俺を庇って撃たれたのだ。

俺達は、俺の魔法でめくれ上がった地面を盾に潜んでいた。

にも拘わらず、それを避けて回り込み、正確に俺を狙った一撃。

魔女には俺達の姿が見えている。

魔女の義眼。アレに暗視機能でもあるに違いなかった。

魔道具の一種かと思つたが、他の理屈で動いているらしい。霧で魔力を奪い、ネズミ

で光を奪い。自分に有利な状況を作り出したか。

「来ないの？ 闇の中では私が有利よ？」

安い挑発だ。だが、事実ジツとしているとジリ貧である。

俺はリボルバーを握り締めるが、ゼクトールさんがその手を止める。その肩は血に塗れていた。

「奴の銃は防弾マントを貫通しました。危険です」

「なんなら俺が自在金腕ルー・デルオンで牽制しましょうか？」

木村が宙に銃を浮かべて並べるが、適当に撃つても当たらないだろう。

「大丈夫、私がケリを付けます」

そんな二人を振り切って、俺は宣言と同時に、物陰から飛び出した。

目を瞑り、運命光を確認する。

魔女は俺の動きに反応している。間違い無く、見えている。

しかし、俺だって、瞬く運命光が見えている。

銃を抜き、構える。

「自分だけが、暗闇に強いとは思わないで下さい」

「勝負するのね、いいわ」

闇に向かって撃つ。

——パァン

二つの銃声が交錯し、俺の肩に銃弾が突き刺さる。

「グッ！」

防弾ジャケットを貫通し、衝撃で転がる。

圧倒的な威力。拳銃弾じゃなく、ライフル。リロードも早いから、ちゃんとした銃弾に違いない。

「私の方が、暗闇は得意のようね」

一方の魔女は、無傷。俺の弾丸はかすりもしなかった。

「そのようですね、私よりは得意のようです」

「……なにが言いたいの？」

そうだ、暗闇に強いのは俺じゃない。俺だとは、言っていない。

「キヤツ！」

突然響く、魔女の悲鳴。

「誰？ 何なの？ いつの間に？」

油断した魔女の背後に忍び寄り、一息で地面に押し倒した者が居た。

誰かって？ 俺は高らかに唄う。

「知ってるでしょう？ アナタの目を潰した張本人よ」

「そんな事より、ねえ？ 殺して良いの？ 早く殺しましょう」

空気を読まない発言。流星はシャリアちゃんだ。彼女には部屋の手前で気配を消して待機して貰っていた。

魔力が見えるシャリアちゃんだが、霧で魔力視は役に立たなかったに違いない。それでも、音の反射やマズルフラツシユの僅かな光、それだけで彼女には十分。暗闇で戦う事に掛けて、彼女の右に出る者は居ない。

俺は指を突きつけ、魔女へ命ずる。

「霧を止めなさい！ 早く！」

そうすれば苔が光り。ネズミの暴走は止まる。

「解ったわ。潮時ね、自分の手で殺したかったのだけど、慣れない事はするもんじゃないわね」

魔女がそう言った途端。ドゴンと音がして、地面が揺れた。

仄かな赤い光が暗闇を打ち払い、呼吸が苦しい程の熱気が湧き出した。

そして、一瞬にして、霧が晴れていく。

「何なの？」

思わず、眩く。

不気味な明かりに照らし出された部屋のど真ん中。霧ギユルドスの悪魔がズラリと並んでいた

場所が、今はポツカリと空いていた。

五十メートルプールサイズの空間が丸ごと崩落し、内側から光っている。

「ココはね、地下深く、マグマが見える場所まで直結してるの」

「狙いはなんだー！」

這い出した木村が、組み伏せられる黒峰さんに問う。マグマに赤く光る世界。徐々に温度が上がっていた。

「何がって、霧の悪魔キュルドスを止めるんでしょ？ マグマに落としちゃえば、すぐさま止まるんだから、注文通りにしたつもりだけど？」

「何の為にだって聞いてんだよー！」

珍しく木村が激昂し、魔女に銃を突きつける。既にシャリアちゃんに組み伏せられている黒峰にだ、らしくない程に焦っていた。

でも、確かに嫌な予感がする。俺には魔女の狙いが解らない。アレは残り少ない貴重な霧キュルドスの悪魔だったはずだ。

「そうね、すぐに解ると思うわ」

しかし、魔女は死ぬのも怖くないのか、シャリアちゃんのナイフを首筋にあてられ、木村に銃を突きつけられ、それでも楽しげに笑っていた。

徐々に、揺れが、激しくなる。

ナニカが来ている。見つめる先、トンでも無い大きさの運命光が脈動していた。

今まで、コレほどの大きさの運命光を見た事がない。強烈な光は、他の運命を掻き消し、飲み込んでしまう。

寿命が長ければ、運命光が大きいわけじゃ無い。

木の魔獣なんて、いくら長生きでも他の生命体に干渉する能力は殆ど無く、狩られる時にはアツサリ狩られてしまうから。

つまり、コレだけ強烈な光は圧倒的な強者の証。

しかし、コレが、本当に？ 同じ生き物なのか？

俺の疑問に答える様に、押し倒されたままの黒峰が狂った様に笑っていた。

「見たのよ、文献と、資料映像で。馬鹿みたいに、それこそ馬鹿みたいに、怪獣みたいにデカいのよ。星の魔力を直接食べて生きてるんだって。丁度、さっきのネズミを想像出来ないぐらいにデツカくしたモノよ」

「オイ？ なにを言ってる？」

木村も知らないみたいだが、俺はソレを知っている。

「星獣」

この星のヌシ。

ポーネリアの記憶には、町ごと飲み込む魔獣の姿があった。

それが、この地下に？

「あ、う……」

そして、俺は、覗き込んだ先。穴の底のマグマから目が離せなくなっていた。

「ユマ様？ 何を？」

ゼクトールさんの声が遠くに聞こえる。撃たれた肩の痛みさえ、徐々に鈍く……
「ピイイイイ」(なんで、どうして？ ママ。置いてかないで！)

場違いな声。

いや、それは鳴き声だった。人間では無い、獣の声。

でも、意味が解る。解ってしまう。

「ピイ」(ママ……)

コレは、まさか？ 俺の口から出てるのか？

そう言えば、神は言っていた。

『参照権』の力で、神の言葉が再生される。

一番無茶な所では、魂の規格を無視して土地神の龍子として転生させてみたんじやが……

土地ごと死んで行きおった。何人死んだか数えたくもない程じや。

……そして、俺の意識は混濁した。

竜の記憶

ずっと、ずっと、固い殻の中に閉じ込められていた。

でも、嫌じゃなかった。お母さんが、そばに居てくれたから。

(これは……星獣の、神が言う所の龍子の記憶?)

……俺は混濁した意識の中で目を覚ます。

俺は、『ユマ姫』で、『高橋敬一』だ。ハッキリと意識がある。

『参照権』で記憶を取り込む時、現実と記憶の区別がつかなくなり、意識が朦朧としてしまう。

でも、今回はハッキリと意識があつた。その中で、夢のように星獣の記憶を眺めている。

これは? そう言えば、神は言っていた。『魂の規格を無視して土地神の龍子として転生』と。だとしたら、きつと良い状況じゃない。

全く違う生物の記憶が受け入れられず、意識が弾き飛ばされているんだ。

「ママア!」

「ハイハイ、良い子ね」

夢の中の俺が、トカゲみたいな手を殻へと叩きつける。

殻の中の幼体は目すら開いて居ないのだが、光以外の何かが、周囲の景色を教えてくれた。

(まさか、魔力視！)

思いがけず、侍女にして元公爵令嬢。狂気の殺し屋を思い出す。彼女は暗闇でも構わず動いていた、きつと同じ能力だ。

……彼女？ 彼女は？ 何故か、ぼんやりと記憶に霧が掛かっている。

(ああつ！)

脳裏によぎったのは、俺の目を嘔み潰すシヤリアちゃんの恍惚とした表情。

数々の思い出と同時に、殺し合った記憶まで鮮烈に蘇り、身が竦む。

そして、思い出したと言う事は、今の今まで忘れていたと言う事に他ならない。

(なんで？ なんで俺は、こんな強烈な記憶を忘れていたんだ？)

俺は、夢の中で抜け落ちた記憶に愕然とする。今までは夢で他人の記憶を吸収してきた、だけど今回は違う！

(ひよつとして、自分の記憶が逆に侵食されている？)

夢心地だった世界が、急に恐ろしく、冷たい物になる。

もつと、もつと思ひ出さないと！ 巨大な生物の、大き過ぎる運命と記憶に、自分が

塗り替えられてしまう。

自分の記憶以外は嫌と言うほど思い出せるのに、自分の、ユマ姫として重ねた記憶だけがぼんやりと霞んでいた。自分の存在が喰われているのだ。

「ママ、どうして僕は出られないの？」

「ソレはね……」

この会話は、殻越しに行われている。

これもまた、音でなく、魔力の波長で会話が成立しているのだ。

「坊やがとっても可愛いから。ソコから出たら、すぐにでも攫われてしまうわ」

「ええっ！ ぼく可愛いよ」

星獣は、生まれる前、殻の中で既に意識を持って会話すらも可能なようだ。そして、意識もあると言う事は、勿論、魂だって付与されている。だから生まれる前の、殻の中の記憶を参照出来るのだろう。

意識の中の『坊や』は、人間の基準で言えば、既に立派な知識と自我が有るように思われた。

(コレでも、まだ殻の中から出られないのか?)

……普通の星獣が生後どのぐらいで生まれるのか、俺は知らない。だけど、母親の微妙な反応で何となく察する。

きっと、『坊や』は極めて特殊なケースで、普通はもつと早く殻から生まれる事が出来るに違いない。

『坊や』の母親は、そうやって恐ろしいナニかから『坊や』の存在を隠したのだ。

そして、俺はこの瞬間、『ナニか』の声を聞く事になる。

〈〈〈〈違う！ お前が、忌み子だからだ〉〉〉〉

恐ろしい声があった。冷徹で、無慈悲な魔力の波長が、身を焦がした。

「ああっお許し下さい、○▼※様！」

世界で一番強いと思っていた母親が、情けなく項垂れる。

それが、『坊や』にはシヨックだった。

「ママ、どうしたの？」

「大丈夫よ、坊やはママが、絶対を守るから」

「ほんと？ こわくない？」

「怖くないわ」

「よかった……」

安心する『坊や』とは裏腹に、俺は恐ろしくて堪らなかつた。

何故か？

『坊や』が、忌み子と断ぜられたからだ。

最初は、それこそトカゲなりに、村の掟なんかがあり、子供の『坊や』を殺さなくてはならなくなつたのだらうと単純に考えた。

だが、それはあり得ない！

確かに『偶然』を持つ俺は、忌み子と言うに相応しい存在だ。

しかし、『坊や』が忌み子とやらに選ばれて殺される運命なら、神は初めから俺を『坊や』に転生などさせなかつたに違いない。

『坊や』は殻の中に閉じ込められて、まだ生まれても居ないのだ。何かハマした訳では無いだろう。なのに、『坊や』は忌み子と断じられている。

考えられる可能性は、ただ一つ。

この声の主は、俺の『偶然』を知っているのだ。

だが、あり得ない！ 神も魂も、俺達と違うレベルで存在しているモノだ。

何より魂を作つた神ですら『偶然』の原因はお手上げ。魂はタダの記号に過ぎないのだから。

それが一目見て、いや厳密には見る事もせず、俺が異常だと、忌み子だと断じるならば、この声の主は神すらも超越している事になる。

「大丈夫、大丈夫だからね。でも、もつと静かなトコロに行きましょう？」

「うん、わかつた！」

そして、『坊や』と母親は、声から遠ざかるように、静かな所に逃げて行く。

「ママ、寒いよ」

「ごめんね、我慢してね」

引越した先は、寒かった。たまにボウボウと土を燃やしてくれるけど、それでも寒くて仕方なかった。

（コレは？ きつと、きつきまでの場所はマグマの中。そりゃあ暖かいに決まっている）
星の中心で魔力を食べてる連中だ。高熱高圧のマグマの中こそが、卵のふ化に最適だったに違いない。

それが、こんな冷たい土の中では、生きていけるハズが無いのだ。

「ママ、ぼくさむいよ」

「ああ、ごめんなさい坊や、今温めるからね」

魔力視の視界でも、俺には解る。ママは泥炭に火を付けている。

ココはきつとスールンだ。暖かなマグマの中に居られないなら、泥炭が豊富なこの土地に目を付けるのは悪くない。

「だめだよ、寒いよ」

「ああ坊や、しっかりして」

しかし、マグマに比べれば、そんなモノじゃ全く足りない。

凍える様な世界の中で、『坊や』の意識はゆっくりと閉じて、深い、深い眠りに落ちていく。

この深過ぎる眠りの正体を、俺は知っている。
死だ。『坊や』は死んだのだ。

……しかし、ソコで記憶は終わらない。

『坊や』は生きていた。しかし世界は一変し、地上の景色が目の前に広がった。

「ママ、明るいよ」

「そうね、ここは外界だから、日が差しているの」

しかも『坊や』はふ化していた。まだヌメリの残る表皮を日光の元に晒している。それとも、地下よりもずっと寒いはずの地上で。

「お外は、怖いから駄目だって」

「今は大丈夫。大丈夫になったの」

（!! 俺は、ココを知っている!!）

ココは、ピルタ山脈だ！

「ねえ、ママ。僕が寝ている間に、何があったの?」

「ソレはね……」

なんと、『坊や』が寝ている間に、数百年の月日が流れていた。

その間に、大事件があつて、魔力が地上まで溢れ出した。だから、星獣も地上まで出られるようになったとき。

……魔力炉の事故だ。古代人の失敗が、星獣にすら影響を与えていた。

それだけじゃない、タマゴの中で仮死状態になった『坊や』は、古代人に掘り返され、今の今まで囚われていたのだから。

「あそこにある穴が、坊やが捕まっていた場所よ」

「ええっ！　ほんとに？」

（嘘だろッ!）

示された大穴に、『坊や』とは別の意味で、俺は激しい衝撃を受けた。

遺跡だ。ポーネリアが暮らしていた、あの遺跡。

ポーネリアが絶望し、俺が落下して、田中が侵入した遺跡の大穴。開けたのは『ママ』だった！

（ぐう！）

同時に、俺の脳裏に駆け巡る様々な記憶。ゼクトールさんの部下を食べた事に、ネルネの意外な活躍。マーロウの意地。

全部、忘れていた。やはり、俺の記憶は欠けている。

そう言えば、ポーネリアが住んでいた遺跡は、全ての生き物を保存するノアの箱舟。捕まえた星獣のタマゴを保存していたとしても、不思議じゃない。

そして、それに気が付いたママが俺を救出し、その後で俺がふ化したのだ。つまり、コレはポーネリアが死んだ後。

でも、おかしいだろう？ この通り、『坊や』は死んでいなかった。眠っていただけなのに、その間、俺の魂はポーネリアに宿っている。

死んでも居ないのに、坊やの魂は天に還され、ポーネリアに埋め込まれた事になる。それどころか『坊や』が寝ていた時間は何百年分もありそうだった。オルティナ姫だつて、『坊や』が寝ている間の『俺』だ。

「坊やはね、殻の中で半分死んでいたの」

「ええ？ ぼく死んでたの？」

ママの言葉にハツとする。

そうか、仮死状態。魔力が薄く寒い土地の中で、『坊や』は凍えて仮死状態になったのだ。

(そうだ！ 神は、魂がIPアドレスだと言っていた)

だとしたら、感情が無く、無通信状態が続いた時に、魂が返還されたとしても不思議じゃない。

現に、俺が焼け焦げて死んだ時、もう少しで魂が消えて運命の気配が消えるところだったと、田中は言っていた。

仮死状態の『坊や』から魂が抜けて。蘇ると同時に再び同じ魂が宿ったのか。

だとすれば、最長でも十六年で死ぬ俺の魂だが、仮死状態を挟むと『坊や』は数百年生きた事になる。

上手くすれば、俺も長生き出来るのだろうか？ いや、違うな。結局『坊や』は仮死する前と後、生きている間の合計で十六年間生きていない。魂の呪いからは逃げられないのだ。

そう、『坊や』は間もなく死ぬ。

「ママ、寒いよ」

「まあ、仕方無いわね」

やはり『坊や』に地上は寒いのだ。ピルタ山脈は魔力が濃いが、それだつて星の中心とは比べようも無い。だったら温かい場所の方がマシだ。

結局、『坊や』たちはスールーンに帰ってきた。そして、ここで『坊や』は死ぬのだ。
「ママ、ココも魔力が濃くなったね」

「そうね、ここなら地脈に近いから、ずっと体に良いはずよ」

十やそこらの年齢なんて、星獣にしてみれば首も据わらぬ赤子同然。ママは過保護に

『坊や』を世話した。

でも、そもそもがそんな赤ん坊を、凍える地上で育てようと言うのが無理があった。

「寒い、寒いよ……」

「ごめんね、ごめんね、坊や、我慢して」

それでも、ママは『坊や』を地下深く、マグマが滾るマントルへと運ぼうとしなかった。

そこらじゆうに穴を掘り、泥炭を燃やし、何とか寒さを凌ぐ日々。

数百年の時を超え、それでもママは変わらず『ナニか』に怯えていた。

でも、変わった物もある。たった数百年で魔力が満ちて、地表だって『坊や』にとつてずっと住みやすくなった。

だったら、もう一度冬眠すれば、世界はもつと良くなって『坊や』も生きられるのでは？

そんな風に、ママは思ったのかも知れない。

「ごめんね、坊や、少しだけ、寝ていてくれる？」

「うん、わかった」

「ちよつと待っていてね、魔力とあつたかいのをとつてくるから」

「ありがとう、ママ」

そして、ママが地下深くに潜った後、深く掘られた洞穴に、間が悪く奴らがやって来たのだ。

「コレは……化け物の子供か！」

「早く殺しましょう！ このままでは帝都までどうなるか」

……『坊や』は理解出来なかっただろうが、これは人間の言葉。声の主は帝国の軍人だ。

冬眠している坊やの目の前で、多くの軍人が剣を構える。

……そして、そこで『坊や』の記憶は途切れている。

その後、何が起こったのか。王国中の書物を読み漁った俺は、なんとなく察しがついていた。

時系列に纏めてみよう。

オルティナ姫が非業の死を遂げた王都は、数年にわたって荒廃していた。

追い打ちの様に、ポーネリアの遺跡から、凶化した魔獣が湧き出す。

全ては、ポーネリアを凶化させるための実験体。凶化の成功で生き残ったポーネリアは、責任を果たすために凶化した魔獣を討つ旅に出る。

そして、王子と恋に落ち、畏に嵌まり逃げ帰るも、星獣に荒らされた遺跡に絶望し、死ぬ。

王都の人々は、不気味な吸血鬼が居なくなつたと喜ぶが、彼女が危険な魔獣を退治していた事を知らず、有能な王子も死んで、無能な王族だけが残された。

そんなありさまだから、当時のビルダールの王都は滅亡寸前に追い込まれた。

帝国軍はその隙を見逃さず、王都の眼前まで迫っていた。

それを追い返したのは、王子達が団結して呼び出した建国の神獣とされているが……
勿論嘘だ。

スールーンに向かった星獣を見て、帝国軍が慌てて引き返したに過ぎないだろう。

そして、行軍の果てに星獣の子供を発見し、討伐する。してしまう。

残念ながら、王国にはその時の正確な記録は無い。

解っているのは、王都を包囲していた方も越す軍勢が、スールーンに帰るなりまとめ掻き消えたこと。

一気に不況に陥つた帝都に、恐怖と流言、伝染病が蔓延したこと。

スールーンは、今もロクに草木も生えない呪われた土地になつたこと。

そして、スールーンには巨大なトカゲの伝承が、多く残されたこと。

それ位だ、それぐらいだが……一体何が起こつたか、想像するには十分だった。

「ママァー！」

『坊や』の断末魔が、耳にこびり付いて離れない。

「ママア……」

違う!!

これは……俺の声だ!

俺の眼下で、銀髪の少女がわんわんと泣いている。アレは、俺だ。

不思議な事に、俺は、俺の……ユマ姫の体を、俯瞰して眺めていた。

まるで幽体離脱。意識を弾き飛ばされて、俯瞰して見る自分の姿は、まるで夢の続きに思われた。

「ママ、ぼく、ぼくだよ」

だけどコレは夢じゃない! 銀髪の少女が、薄暗い洞窟を、マグマ滾る大穴へ、ズルズルと歩いていく!

(マズイ!)

コレは、現実だ! なのに、俺の意識が、俺の体に戻らない!

俺は! 『坊や』に、乗っ取られた!

「お待ち下さい!」

怪我をしたゼクトールさんが必死に俺の腕をとる。

「じゃまあ!」

「なっ? ぐう!」

しかし、振り払う。それだけで、田中に匹敵する王国随一の大男が無様に転がった。あり得ない！ たとえ、肉体のリミッターを解除しても、コレほどの膂力はない。しかし、現実だ。コレは、夢じゃない。

俺は『ママ』を求め、マグマの中に飛び込もうとしている！

「寝ぼけてんじゃねーよー！」

駆け込んだ田中が、俺のジャケットの襟を引っ張り、動きを止めた。

「うあああああ、やだよ、ママア」

俺は暴れるが、田中は襟をガッチリ掴んで離さない。

助かった！ 俺はその景色を俯瞰で見て、ホッと胸をなでおろす。

だが、その時、聞き覚えのある魔力の波動が、地中深くから湧き出したのだ。

『ああ、坊や、生きていたの！』

「……ママだ！ ママが、生きてた!？」

俺の中の『坊や』が歓喜する。しかし、馬鹿な！ 数百年は昔の記憶だぞ？

しかし、あり得る。星獣の寿命など、誰も知らない。それこそ、あのネズミの様に健康値も碌にないゾンビのような生物だとすれば、何年生きたとしても、不思議じゃない。

「あつ、うえ……」

そして、田中はその波動を受けるや、みつともなく狼狽し手を離してしまう。

らしくない姿だが、無理もない。コイツも気配とかいう謎能力で、相手の運命が見えるのだ。

きつと見えたに違いない。生物として格が違う『ママ』の気配を！

強敵である程、狂暴に笑うのが田中だが、今回の相手は殆ど自然災害。下手に感覚が鋭敏なだけに、その狼狽は激しかった。

「な、なななんなの？」

そして、それは、魔女を抑える殺戮令嬢も同じ事。

「ヒヒヒ、終わりよ！ 世界が！ 全部！」

そして、何が楽しいのか狂った様に笑い続ける魔女。

そんな中、俺は一步一步、マグマに向かって歩いて行く。

「クソッ！」

正気に戻った田中が手を伸ばすが、遅い。

地中からは、意志を纏った強烈な魔力が吹き付け、田中もシャリアちゃんも、転がったゼクトールさんだって、水中みたいに動きが鈍い。

「ママッ！」

そして、ついに、俺はマグマに向かって身を投げた。

俺はそれを俯瞰して見ながらも、体を通じ、熱気と、頬を打つ風を感じていた。

夢では無い。最後にはあっけなく、足を滑らせる様に洞穴を落ちていく。

これが、俺の死か……

「グエッ！」

まだだ！ 落下した俺の口から、お姫様らしからぬ、潰れた蛙みたいな声が出る。

世界が暗転し、息が詰まる。くるしつ！ 何これ？

良く見れば、俺の首には細い金属が巻き付いて、飛び込んだ体を吊り上げていた。

「カッ！ ハッ！」

しかし、死ぬ！ 死んじゃう！ 誰だか知らないが、よりによって首に巻き付けるの
はないだろう。

本体の意識が飛べば、弾き出された俺の意識もばやけてくる。なにせ、俺は別に幽霊
になつたわけでは無いのだ。

……コレはきつと、魔力視で感じた光景を俺の意識が俯瞰で見せているに過ぎないの
だから。

「ガッ！ グッ！」

暗転する世界で、首が絞まる苦しみだけが、俺の体に叩き込まれる。

（やだあああ！）

嫌がる坊や。苦しいのだから、当たり前前だ。

「あああ……」

「ただ俺にはこの苦しみが、不思議と安らぎを与えてくれた。」

俺は、以前にも、こんな風に、首を絞められた事があったから。

暗闇に落ちた意識の中で、誰かの声が聞こえて来た。

「ねえ、はやく、わたしを、殺して」

俺の、声だ。混濁した意識の中、目の前には泣きながら俺の首を絞める男の姿。

その男は結局、俺にトドメを刺してはくれなかったつけ。

「行くな！ 帰ってきてくれ！」

その泣き顔が、現実にも重なる。冴えない男の顔面が間近に迫る。

そうだ、木村だ！ 巻き付いているのは自在金腕ルーデルオン！

死の間際、ギリギリの所で首に巻き付いた魔法の腕が、マグマに飛び込む寸前の俺を

一本釣りに吊り上げた。

そして、首を絞められた苦しみで、俺は全てを思い出した。欠けていたパーツが揃い、

俺の意識が体に溶ける。

「ハッ！ フウ……」

呼吸が戻る。長い悪夢が、やっと終わった。

「やった、生き返った！」

喜ぶ木村の顔は、妙に近い。

まさかコイツ、意識を取り戻さない俺に人工呼吸をしようとしていた？

……まあ、良いけどな。しかし、重い！ のし掛かるな！

「どいて、下ささい」

「あ、え、ええ」

何とか声を絞り出すと、人工呼吸のためだろう、木村は俺の胸に置いていた手を慌て離して、狼狽えた。

なんでお前が恥ずかしかつてるんだよ、めんどくせえ。

内心で苦笑して、俺は夢の続きを口にした。

『ヘタレが！』

もしも、世界と心中出来るなら2

『へタレが！』

俺は木村に言い放つ。

星獣の『坊や』に取り込まれた俺の意識は、首を絞められたショックで覚醒した。そして目を開ければ目の前に迫る木村のキス顔。

コイツの事だ、人工呼吸をしようにも踏ん切りが付かず、まごついて居たに違いない。本当に気持ち悪いし、へタレた男である。

だが、コイツとの思い出が俺の意識をつなぎ止めてくれたのは事実。意識を取り戻した俺が放った照れ隠しのひと言は、しかし圧倒的な質量に掻き消される。

〈〈〈〈〈 坊やあああああ 〉〉〉〉〉

地下から凄まじい魔力の波動が吹き出して来たからだ。

「ぐっ！」

「ああああー！」

強烈な意志を纏った魔力と云えど、凡人ならば感じもしないだろう。

されど下手に感覚が鋭い田中とシャリアちゃんには重大事となる。二人揃って頭を抱え、蹲る。

一方で俺は大丈夫。魔力の感受性と言う意味で言うなら二人より俺の方がずっと敏感なのだが、俺は『坊や』の記憶から、魔力に込められた意志が理解出来る。だから不快ではない。

日本語の叫びより、理解出来ない外国語の囁きがうるさく感じてしまう現象に近いだろうか？

「あふふふふ」

いや、意味不明なうわごとをあげ苦しんでいるのは、ゼクトールさんと生き残った親衛隊の男も一緒であった。これは？

霧で魔力を奪われた後、突如強烈な魔力を押し付けられた。

寒暖差に体が悲鳴をあげるように、魔力の差も体に毒。どうもコチラの影響の方が大きそうだ。

そう言えば、俺は魔石を嚙ったりして強烈な魔力差に慣れている。

だとしたら、この場で動けるのは俺と、十分に健康で、良い意味で鈍感な木村。そして……

「ヒヒヒ、形勢逆転ね」

狂った様に笑い続ける魔女だけだ。

言うに事欠いて何が形勢逆転だ！ 俺と木村、二人も居ればお前を殺すに戦力十分。凝った口上は不要。俺は無表情にジャケットから銃を抜き撃つ！

——パァン！

「グッ！」

命中！ 魔女は蹲る。だが、恐らくは服が防弾なのだろう、予備の小型拳銃では威力が足りない。弾も一発のみ。

それでも、木村が追撃すればそれで終わり。なのに、木村は動かない。

「マジイぞー！」

「えっ？！」

叫ぶ木村に袖を引かれて、俺の姿勢がよろめき崩れる。

——パァン！

抱き寄せられた先で聞いたのは、乾いた銃声。もちろん俺や木村のモノでは無い。ましてや蹲る黒峰のモノでも。

「シャリア、ちゃん？」

俺に銃口を向けていたのはシャリアちゃん。彼女が銃を俺に、撃った？ なんて？

木村が袖を引っ張ってないければ、俺は死んでいたに違いない。

「うあえ……」

シヤリアちゃんだけじゃない、呻きながらも立ち上がった田中、刀を構える先は……俺だ。

「やつと、隙が出来たわ」

ケラケラと不快な笑い声。薄暗い洞窟で、黒峰の義眼が赤く揺らめく。

洗脳！ コイツ！ この期に及んで！ だけど、黒峰を、魔女を殺せば！

突撃しようとする俺の首に、再び自在金腕ルーデルオンが巻き付いた。

「ぐえっ！」

「待って下さい！ 殺せば洗脳が解けるとは限らない、一旦引きましよう」

何を弱腰な！ キツと睨むが、酷く冷静な木村の瞳とぶつかつた。沸騰した脳みそが少し冷える。木村の判断も一理ある。星獣と、洗脳、ネズミに、ゾンビ化。

こうなればもう、何が起こるか解らない。ならば逃げるのも一つの手。これ以上留まれば、『偶然』をもたらず俺の魂で………ぐちゃぐちゃになって、みんな死ぬ！

それを知つてか知らずか、黒峰は楽しそうに、笑い続ける。

「逃がさないわ！」

声に応じ、回り込んだ田中が俺と木村の退路を塞いだ。

絶望的な状況。背後からは駆け込んだシヤリアちゃんが木村に斬り掛かる。

「クソツ、正気に戻れよおー」

転がるように避けた木村と、離れ離れに。

木村は自在金腕ルー・デルオンを銃に巻き付け、ファンネルみたいに動かすが、四方八方からの銃弾をシャリアアちゃんは踊るように躲けてみせる。

状況は悪くなる一方。俺にはもう守る者もなく、武器すら無い。そんな俺に、刀を構えた田中がゆつくりと歩を進める。

何度も俺の命を救ってくれた最強の剣士が、魔法も使えぬ丸腰の俺に迫っていた。

「殺さずに足を斬りなさい！」

黒峰の言葉に頷いて、田中は刀を低く構える。

足を？ 何故だ？ 何故俺を殺そうとしない？ 俺を生かせば『偶然』に巻き込まれて黒峰だつて死ぬかも知れないのに。コイツだつて神からソレぐらい聞いているはずだ。

「アナタは贄よ、星獣の！」

黒峰の叫びにギョツとする。まさか、アイツ、俺が『坊や』の記憶を手に入れるのすら計画の内。俺を使って星獣を呼び出そうとしているのか？ 全ては魔女の手の平の上だった？

そんな考えを、狂った魔女の笑い声が掻き消した。

「ヒヤヒビ、長かったわ。記録を調べ上げ、星獣の巢を突き止めたのに、あったのはマグマ溜まりだけ。とても手が出せなかったの。それが星獣の住処への入り口だと解つてもね。思いついたのは、霧ギョルドスの悪魔。星獣が魔力を食べるなら、魔力を奪う霧は大敵のはず。だけど、貴重な霧ギョルドスの悪魔をマグマに投げ込むのは賭けだった。ソコでアナタよ。アナタの『偶然』に頼らせて貰ったの。私は、賭けに、勝ったわ」

目を剥いて笑う黒峰は、正気では無かった。計画の内どころか、追い詰められた狂人が、最後の最後に暴れているに過ぎなかった。

『坊や』が居た場所で霧を撒き、刺激すれば『偶然』に星獣が目覚めるんじゃないかと期待した。それだけなのだ。

イチかバチかの賭けと言うより、ただの当てずっぽう。俺の存在はお守り代わりだったに違いない。なのに、俺の『偶然』はその期待に100%応えてみせた。応えてしまった。

俺は知っている。ココは星獣の巢では無い。巢はマントル近くのマグマの中だ。

そのマグマ溜まりとココが繋がっているのも、寒がる『坊や』の為に、ママがマグマを引き込んだから。

そして、星獣が現れた原因も、霧ギョルドスの悪魔をマグマにぶち込んだからじゃない。『坊や』の記憶を取り込んだ、俺の魔力の波長に反応したのだ。

黒峰はそんな不確かな直感に、己の全てを賭けてみせた。星獣を操って、このクソみたいな世界を終わらせるために。

やはり黒峰は俺と同じ。世界の全てを憎んでいる。その上で、俺は黒峰を、黒峰は俺を殺したくて堪らないのだ。

一体コイツに何があつたのか？ 別に大して興味も無いが、その妄執が俺が積み上げて来た全てを壊そうとしている。

だけど、俺も諦めた訳じゃ無い。絶望的な状況には慣れてる。たとえ相手が、何度も俺の危機を救ってくれた親友であろうとも。

「……………」

すり足でじりじりと迫る田中の足取りに隙は無い。ひよつとしたら、洗脳された影響で多少は鈍っているのかも知れないが、その程度、俺を殺すに支障は無い。

後ろに跳ねながら、俺は必死に魔法を唱える。

『我、望む、ッ！ 駄目…………』

唱えきる前に解る。まだ霧の影響で魔力の制御が上手くいかない。

そして、その隙を見逃すはずもなく、刀を構える田中が目の前に。

「シッ！」

裂帛の気合いと共に、剣閃が煌めく。

——キイイン

澄んだ高音が洞窟に響く。

しかし、飛び退いたのは田中。鎧の前面、硬化したカーボンが無惨に斬り裂かれていた。

目の前に飛び込んだ少年が、エルフの秘宝たる双剣を振り抜いたのだ。

「マーロウ！　なんで？」

我ながら、悲鳴みたいな声が出た。何故動ける？　霧を吸い込んだ純エルフは、魔力を奪われたショックでしばらく動けないはずだ。

「姫は、俺が守る。たとえ、相手がアニキでも！」

マーロウは背後に俺を庇い、双剣を田中に構える。肩越しに見える、その顔色は悪い。それで俺も察した。どうして動けるのか？　なぜそんなにも苦しそうなのか？　俺にはハッキリと理由が見えてしまう。なにせ俺は運命光に加え、魔力を視る力まで手に入れたから。

その二つが、マーロウの状況を教えてくれた。

「マーロウ！　あなた！」

「後ろで、見ていて下さい！」

そう言つて、噛み締めた口元からはジャリジャリと砂の音。

魔力視で見るマーロウの胃や肺には、魔力の塊があった。

コイツ！ 魔石を喰ってやがる！

俺だつて良く喰つてるが、それは俺が凶化しているから。あらゆる魔力を受け入れられるからだ。もし普通の人間が魔石なんて喰えば、健康値と魔力が打ち消しあつて、死ぬ。

「どっしって！」

口にしながらかも、解っている。俺を守る為だ。

姫を守ると言う言葉、決して口だけのモノじゃ無かった。体内の霧を消すために、魔石を喰うなんて自殺行為に出る程に。

きつともう、マーロウは長くない。

命懸けで姫を守る、か。

なるほどお姫様冥利に尽きる。嬉しいじゃないか！ だがな、俺だつて守られるだけじゃ居られないんだよ！

視線の先には、やつと見つけた勝利への足掛かり。転がるように飛びついて、リボルバーを拾う。俺が落とした銃だ。

落とした原因、黒峰に撃たれた左肩は、湧き出るアドレナリンでもう痛くない。

「死ねッ！」

俺は黒峰に銃を構え、撃つ。

「きやー！」

当たった。面白いように、二発、三発と。

何故避けない？ 幾らコチラが拳銃弾で、魔女が防弾性能のある服を着ているとしても、まともに食らえば大怪我は免れない。

「ハア、ハア、痛いわね」

トドメと駆け寄れば、黒峰の顔は滝の汗に濡れていた。鼻からは血を流している。グルグルと回る生身の目と義眼。蠢く両目には、田中とシヤリアちゃんが映っていた。

やはり、二人を操るのに精一杯か！

「止めさせなさい！ 早く！」

銃を突きつけ、迫る。絶対に外さない距離。怪我をした黒峰は動けない。

「ケヒヒヒイ」

しかし、それでも、狂った様に魔女は笑った。

何だ？ と眉を顰めた瞬間。首筋にチリリと痛み。咄嗟に飛び退くも、俺の体は空中で横殴りに吹っ飛ばされた。

「あぐっ」

転がる俺に、巨大な影がのし掛かる。それは巨大な……猫？

——ギヤオオオオオン

モルガンザルデン

一目大猫!! 坑道の化け猫! 魔力視で見るとその腹には、尋常じゃない魔力が詰まっている。

無理矢理魔石を喰わせまくって、霧の影響を軽減させたのか!

「コレが真正正銘、私の最後のカードよ」

血を吐きながらもケタケタ笑う魔女の姿が涙に滲む。俺はデカイ猫の魔獣に押さえ付けられ動けない。

このままでは食い殺される……そんな最悪な予感、より最悪な痛みで上書きされた。

「ガッ」

猫の爪が柔肌にめり込み、俺を地面に縫い付ける。

何気ない攻撃、生きたまま甦る猫らしい動き。それがとてつもなく恐ろしい致命傷に至ると、直感的に気が付いた。

強い痛みはない。湧き出すアドレナリンが、打ち消してくれる。その程度の傷だ。

だけど、その爪は恐ろしい毒を秘めていた。

体が動かない。手が震える。頭がぼやける。……そして

食欲が、暴走する!

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
ユマ姫が銃を求めて飛び出した後、残された田中とマーロウは剣を構えて向かい合っていた。

足元で鳴る砂は、魔力が抜けた魔石の残滓。洞窟を彩る蒼い燐光は消え失せ、赤熱するマグマの光に洞窟が揺らめく。

地下より吹き上がる風は徐々にその熱を増していた。なれど、睨み合う両者の額に流れる汗は、暑さだけでは説明がつかない。

「ぐおおうー！」

「アニキ……」

正気を失って、なお黒衣の剣士に隙は無かった。冴え冴えとした刀身がその切れ味を物語る。対するマーロウの双剣は、白く輝き、威圧する。

一人のエルフがその生涯を懸けて鍛えた名刀と、魔法文明の頂点たる双聖剣ファルフアリツサ。

無類の切れ味を誇る二刀の対決は、受けに回る事を許さない。

かつて、魔剣の切れ味に慢心したマーロウは、自慢気に構えた魔剣を田中に叩き切られている。その事を切掛に田中に心酔したマーロウだが。今回ソレを行うのは自分ではなくてはならなかった。

(俺達の、大森林の英雄が、こんな終わりで良いハズは、無いッ！)

愛するユマ姫を救えるのは、この男しか居ないと信じていた。

マーロウは、ユマ姫の事が好きだった。生誕の儀で出会った時から、ずっと好きだった。初恋の相手だった。出会った瞬間に虜になつて、役者を辞めて剣の道に進む。魔剣こそが、護身の武器として最も適していたからだ。全ては姫を守る為。

マーロウは賢く、政治的に微妙なユマ姫の立ち位置を理解していたからだ。そして、天は二物どころか、全てをマーロウに与えたもうた。可愛い子役としてのルックス、歳に見合わぬ演技力、それだけでも驚異的なのに、剣の才能まであった。

ユマ姫を守りたい。ただ、それだけを思つて血の滲むような修行を乗り越えた。気が付けば、エルフの中でも指折りの剣士に育っていた。

勿論、マーロウはモテにモテた。スゴイスゴイと褒められた。

なのに、それでも、心の何処かで、この程度ではユマ姫とは釣り合わないと感じてしまつている自分が居て、それが不思議でならなかった。

自分以上の男など、何処に居ると言うのか？ 思い出すのはユマ姫の兄、ステフ王子。でも彼はもう居ない。死んでしまった。なら残された自分が守らずに、誰がユマ姫を守るのか？

帰る場所を取り戻し、彼女を迎えに行く。マーロウは決意した。

なのに田中は、魔劍ごと、その決意を叩き斬ってしまった。

モノが違う。そう思わざるを得なかった。このレベルの強さがないと、ユマ姫を守れないのだと直感的に理解した。

その予感を証明するように、フラリと現れたその男は、あっさりと占領された都を開放してしまう。帰るべき場所を取り戻してしまう。マーロウの決意をあざ笑う様に。

そして田中は、あれほど美しいユマ姫を、時には『あの馬鹿』と、時には『間抜け』と、気安い調子で腐すのだ。

ユマ姫を神聖視してしまう自分とは違う、ユマ姫と同じ目線で、共に歩める男が居たとびきりの実力を備えて。

きつと、田中ならユマ姫を幸せに出来ると信じられた。

なのに！

「ぐおおおん！」

うわ言を叫び、だらしなく剣を構え、よだれまで垂らす目の前の男に、マーロウは何も託せない。

絶対に無力化し、正氣に戻さねばならなかった。

定まる決意とは裏腹に、視界の中の黒衣の剣士がじわりと滲み、二重に映る。目が霞んでいた。長くは保たない。ギリリと噛み締める口の中の魔石が、痛いほどに尖った魔

力で脳を灼いていた。

いつ倒れても不思議では無い。そして、きつと、倒れたら二度と起き上がれない。長期戦は不可能。ならば、全てが全力。

「ハッ！」

田中が構える刀に、マーロウは双剣で斬り掛かる。

両断剣。双剣でもってハサミのように敵の武器を切断する。ファルファリツサを握つて以来、秘かに温めていた必殺剣だ。

なのに！

「ぐう……」

意味不明な呻きを一つ。田中が刀を振るうと、それだけでマーロウは右手のファルファリツサを巻き上げられた。魔法の如き剣技の冴え。

カランと右の剣が地面に落ちる。これでは切断剣は成り立たない。

武器を奪うつもりが、奪われた。それも利き手の一振り。

（駄目だ、マトモにやってアニキには勝てない）

それを思い知らされた。命を賭けて戦えば、通用すると思つてしまった。命だけではとても足りない。剣士にとって命を賭けるなんて当たり前なのだから。

（オレの、全てを！）

思い出す、思い出す。

何が自分に残っているのか？ 誇れるのは何だ？

天才子役と言われた事？ 違う！ ユマ姫の前では、セリフも出ない大根だった。

魔劍の使い手として、たちまち頭角を現した事？ 違う！ 外から来た黒衣の男

に、まるで通用しなかった。

ならば、何だ？ ハッキリと思い出す。焼かれながら、バウギユリウアル王蜘蛛蛇と戦い、ユマ姫を守つた事だ。

そうして正式に振るう事を許されたファルフアリツサは、今はマーロウの誇りだ。

たとえ二刀が揃っていなくても、本来なら田中の使う鉄の劍に負ける道理はないと、

マーロウは信じている。前に使っていた魔劍とは、モノが違うのだ。

そして、長年磨いた魔獣退治の劍術と、目の前の田中に教わった劍術があった。

それらを全てより合わせ。マーロウが選んだ戦略は？

——チンツ

残った片手劍を、鞘に収めて笑う事。

「アニキ、てんで、なつてませんよ」

「ぐう？」

余裕を見せるマーロウに、ぼんやり顔の田中が首を傾げる。マーロウはその姿に確信

を抱いた。

(鈍いんだ、何もかも)

いつもの田中なら、こんな『ハツタリ』は即座に見破る。なのに目の前のだらしない男からは、恐れすら垣間見えた。

「ミエミエですよ、反射で動いているだけでしよう」

マールロウはいよいよ不規則になる脈と呼吸を整え、無造作に近寄る。

(相手が得体の知れない相手なら、腹を決めて刀を信じるのがアニキの剣)

「うおえ！」

(だけど、どうしても信じ切れない時は、一番防ぎ難い突きに頼る)

——シツ！

マールロウの顔面を目掛け、神速の突きが放たれる。

勿論読んでいる。半身になって躲しながらも、捻る腰の勢いで抜剣。

「ハアツ！」

裂帛の気合いと共に、マールロウは突き込まれた刀に向けて斬り上げた。

田中から教わった居合い斬り。決して生半可なモノではなかった。

だが、ソレを教えたのは田中で、マールロウが狙ったのは、変幻自在のその劍筋。

得体の知れない相手だからこそ、田中は持ち手を広く持ち、剣の動きを広くしていた。

軽く握った左手を押すだけで、テコの原理で刀身が跳ね上がる。

——ッ！

必殺の居合いが外れた隙。正気を失おうとも、見逃す田中ではなかった。

今度こそ、跳ね上げた刀を上段に構え一息に振り抜く。

田中の最も得意とする、攻撃的な型。マーロウはそれを防ぐべく、ファルファリツサを横に構える。

これでは丁度、マーロウが魔剣を斬られた時の焼き直し。

……だが。

——チイイイインツ

甲高い金属音で、地面に転がったのは、魔剣ではなく鉄の刀身であった。

魔剣を使うに力は要らない。

マーロウは、魔剣の師匠が言っていた言葉。その意味がやっと解った。

魔剣に重要なのは、なにをとつてもタイミングである。

どんな体勢であろうとも、魔力を巡らせ、刀身を引き斬るタイミングさえ一致すれば、何でも斬れる。

理屈は尤も。だが魔剣で斬れば相手は死ぬし、魔剣で斬られた時は死ぬ。故に相手は常に初見。

初見の剣筋に完璧にタイミングをあわせるなど不可能なのだ。実戦を知らない、道場剣術の理屈と侮っていた。

だけど、田中の振り下ろす一刀は、あこがれと共にマーロウの脳裏に焼き付いていた。だからこそ、奇跡は起きた。

「やったよ、アニキ」

うわごとの様に呟いて、マーロウは膝をつく。

そして、二度と立ち上がる事は、無かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「うひゃああー！」

木村は跳ねる。シャルティアの魔剣が、足元を払ってきたからだ。

ゆったりとした剣筋であったが、跳ばずに居れば足首から先を地面に残して、転がるハメになったであろう。

しかし、跳び上がってしまったえば隙だらけ。間近に殺戮者が迫っていた。

木村とて油断していた訳では無い。自在金腕ルーデルオンに巻き付けた拳銃を四方八方から放つ

てみせた。

人間ならまず躲せない360度の弾幕。シャルティアは地面に突き刺した魔剣を軸にして、ポールダンスを思わせる奇妙な動きで躲してみせた。

クルクルと回り、背を反らし、柔らかに地面に手を衝くと、逆立ちみたいな奇妙な姿勢。そこからシャルティアは地面スレスレに目の冴えるような一閃を放つてみせたのだ。

習熟に時間を要する魔剣だが、数多の武器を使いこなしてきた殺戮令嬢には障害とならなかつたに違いない。なにせ、今シャルティアが使う剣筋は、覚えたばかりのプラヴァスの奇剣。

シャムシールを想定した砂漠の奇剣を魔剣に置き換え、ここまで使いこなした例は無いだろう。

言わば世紀の初見殺しに、木村が出来る事など殆ど無かつたと言う訳だ。

悲鳴をあげて、慌てて、跳ぶ！ いや、まんまと跳ばされた格好だ。空中で、攻撃を躲す術など存在しないのだから。

死刑宣告にも等しい宙に浮かんだ僅かな瞬間。引き延ばされた時間の中で、木村はシャルティアの踊る様な回避、その余りの美しさに目を奪われてしまった事を自覚した。後悔するも、無理はない。ソレほどに美しい動きだった。

しかし、シャルティアが殺しのプロならば、木村は策謀のプロである。回避手段が存在しないなら、予め作って置けば良いのだ。

「うおおん！」

締まらない悲鳴を残し、体が後ろに引つ張られる。

万が一にと仕込んだ保険が機能した。右の小指一本に巻き付けた自在金腕ルー・デルオン。背後の地面に刺しておいたのだ。

あとはソレを一息に引つ張れば、宙での回避を可能にした。

——ひゅん！

シャルティア必殺の一閃が空を切る。

「グッ！」

勿論、こんな奇策がノーリスクと言う訳はない。

代償は、痺れて動かぬ右手の小指と、無様に転がる自分の体。着地までは不可能だった。

即座に飛び掛かり、追撃するシャルティア。その瞳に、普段ならギラつく意志の輝きが見られない。

木村はその姿に、先ほど見惚れた事を恥じた。こんなのは、ちつとも美しくなかった。(クソオ！ やってやるよ！)

見上げるその姿に、諦めかけた木村の弱気が吹き飛ぶ。剣を構えたシャルティアに押し倒された体勢ながら、とつてみるとばかり、首を突き出した。

とはいえ、勿論木村のコト。自棄だけの無策はありえない。

「ぶっ！」

口に含み、吹き付けたのは地面にばらまかれた魔石だ。勿論、こんなものはただの苦し紛れ。

「えう……」

だが、薄暗い洞窟で魔力視に頼っていたシャルティアには効果絶大だった。操られる事で、魔力視のみを頼りにする不安定な戦闘に危機感が働かなかつたのだ。

千載一遇の好機。しかし転げ回って銃を手放した木村には、殺人鬼を取り押さえる術がない。

木村は操られた彼女を、どうしても殺したくなかった。

きっと自在金腕ルー・デルオンを巻き付けても、即座に魔剣で断ち斬られるに違いない。シャルティア

アだつて織り込み済みだ、隙が無い。

いや、たつた一つ脳裏に閃くモノがあつた。他ならぬ、目の前のシャルティアから教わつた拳法が。

現代の人工呼吸を教えた時。代わりとばかりに呼吸と心肺を止める技を教わつた。あれならば？

木村らしからぬ暴力。だからこそ、裏を搔ける。しかし、あの打撃は息を吐き出した瞬間に狙い澄まし、心肺を殴らなくては意味がない。なれど、相手の呼吸を読む力など、

木村には無かった。

ならば、

「ハアツ！」

ルー・デルオン
自在金腕を放つが、勿論、シャルティアに断ち斬られる。

しかし、避ける方向を限定出来れば、それで良かった。木村は体ごと飛び込んで、揉み合う様に二人は地面を転がった。……そして。

「んっ！」

シャルティアに口付けた。

勿論、百戦錬磨の殺し屋が相手だ。キスをされたからと怯んだり、呼吸を乱す事は無い。

「スウー」

「？」

ただ、人工呼吸の逆。無理矢理に息を吸えば、一瞬だけ酸素を奪える程度の心肺能力は木村にもある。

その瞬間。

——ドンツ！

シャルティアの体が揺れる。木村の不格好な突きは、それでも何とか教えられた場

所。心臓の位置へと突き刺ささり……

「あう……」

一瞬なれど、殺戮令嬢の意識を刈り取ることに成功した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

食欲が、暴走する！ 俺の……意識が、消える。

化け猫に押さえ付けられた危険な状態。でもそんな事よりも、体に入り込むウイルスが怖かった。

俺はやたらめつたら暴れて、のたうつ。

「あ、あああああああ」

「やつぱり、アナタは危険ね。今殺してあげるわ」

ライフルを杖代わりに、ヨロヨロと近づく魔女が、銃口をコチラに向ける。

魔獣に押さえつけられて、ウイルスでゾンビ化までしそうな俺に、魔女は一切の油断を見せない。

その姿は、妖艶で美しい。こんな時でも体に張り付く黒のドレスを着ている。ポデイスーツみたいなものか？ 防弾性能もあるのだろう。

その腹からは、銀に輝く槍の穂先が生えていた。

「え？」

呆然と眩き、自らの腹を見る黒峰。

その背後には、這うような姿勢で不格好に槍を突き出すゼクトールさんの姿があった。

「お前だけはああああ！」

「ぐ」のおー！

怨嗟の声をあげるゼクトールさんの顔面に、黒峰は銃口を突きつける。

——パァン！ グチュツ

乾いた発砲音と、湿った破裂音。

貫通した弾丸がゼクトールさんの後頭部から脳漿のうしょう混じりに飛び出す様まで、見えてしまった。

ゼクトールさんの運命光が消えていく。

——ギヤオオオオオオ

俺に押し掛かる化け猫は、そのシヨックで黒峰の洗脳が解けたようだ。しかし、餓えた魔獣は止まらない。

あらかじめ、コイツは大量の魔石を喰わせられていたのだ。だから、霧の影響からいち早く復活した。そして、爪にはウィルスまで仕込んでいた。

つまり、コイツは既にゾンビ化している。ゾンビ化したのを無理矢理操っていた。洗脳が解けた今、目の前の俺は丁度良いエサだ！　パカリと開いた口からは、尖った牙がズラリと並ぶ。

唸るような獣の鳴き声が、至近から聞こえて来た。

「グウウウウウー！」

だけど、その声の主は目の前の猫じゃない。

俺だ！

混濁する意識の中、俺の口から獣みたいな声が出たのが解った。

だめだ、ちのうがなくなる。いしきが、とんでいく。

〈〈〈〈 アナタは誰？ ドコなの？ 坊やああああ 〉〉〉〉

その時、ママの声がして、再び俺の意識は弾き出された。部屋が突然に暗くなる。マガマの赤い燐光が遮られたからだ。なにか途轍もない巨体で。

俯瞰する意識は、プール大の大穴を塞ぐ巨体を目撃した。

「ママアア！」

一方で小さな俺の体は無邪気な叫びを一つ。そして軽く手を払った。それだけ。

たったそれだけ、それだけで、小さな少女が押し掛かる化け猫の魔獣を押し退けた。

「ママ、お腹すいたよ」

〈〈〈 ああ坊や、そんなに小さく 〉〉〉

ゾンビ化した俺の意識は、再び『坊や』に奪われたのだ。

魔力の波長で、ママは俺が『坊や』だと認識している。

俺の魔力は『坊や』の波長になっているからだ。

……そして、俺の体は異様な食欲が支配している。

「ママ、コイツ、食べて良い？」

〈〈〈 ……ええ、大きくなりなさい 〉〉〉

——キョオオン！

虎ほどに大きい魔獣が、家猫のように大人しくなる。小さな俺に、怯えている。

オイ、まさか？ 嘘だろ？

意識を飛ばされた俺の目の前で、『俺』が化け猫の首筋に噛み付いた。

コイツ！ 魔獣を、喰う気だ！

——ギョオオオオオオ！！

猫が悲鳴をあげ、暴れる。さしもの『坊や』も小さな俺の体では抑えきれない。

〈〈〈 坊やああ 〉〉〉

そこに、穴から冗談みたいに大きなママの足がにゅつと飛び出して、パチンと弾ける

音がした。

それだけで、一目大猫モルガンザルデンの頭部がぺちちゃんこに地面に張り付いた。

「ママありがとう、おいしいよ」

〈〈〈 坊や? 〉〉〉

余りにも異なる『坊や』の姿に、ママは困惑していた。

俺はその光景を俯瞰して、呆然と見ていた。

何だよコレ、滅茶苦茶だ。自分の体なのに、目を背けたい程に悍ましい。零れた脳みそをぺちやぺちやと舐める、銀髪の少女だけが笑っていた。

もしも、世界と心中出来るなら3

洞窟は突然に暗くなり、宙に舞う魔石の僅かな燐光だけが星空みたいに輝いた。幻想的な景色だが、蠢く影は血の気が引くほど不気味で大きい。

星獣の『ママ』が大穴を塞ぎ、マグマの光が遮られたのだ。

人間では決して見通せぬ闇の世界。それでも、魔力視を手に入れた俺は全てを俯瞰して見る事が出来ていた。

馬鹿みたいに大きな『ママ』。正気を取り戻し、ヨロヨロと立ち上がるシャリアちゃん
と田中。何も見えずにキョロキョロと見回す木村、頭を抱えて蹲る親衛隊の男、倒れ伏すマールロウ、死んでしまったゼクトールさん。

そして、のたうち回りながらも、小瓶の中身を腹にぶちまける魔女。

ポーション！ 持ってやがった！

雷で焼け焦げた俺を、動ける程度には治してしまう古代の回復薬だ。腹を刺された位ならワケ無く治すだろう。

今のうちに、殺す！ 絶対！ ぶち殺す！

でも、『坊や』に意識を奪われた俺には、体が無い。ならばどうするか？ 取り戻すし

かないだろう！

意識を強く持て！ 殺意を尖らせろ！ 尖らせて、突き立てろ！ 突き立てて、臍物を、抉ってやる！

魔力視で俯瞰した視線の先、這いつくばってペチャペチャと化け猫の死体を貪る少女を睨んだ。

体を返せ！ それを使って、アイツを殺す！

「ママツ？ 僕の体に何かが入ってくる！」

〈〈〈 坊や？ どうしたのおお 〉〉〉

ママが混乱し、ノイズみたいな魔力を発する。それだけで俺の魔力視が封じられた。魔力に頼った俺の視界がグラつき乱れる。

運命光だつて見えない。ママの強烈な運命の輝きに、ちつぽけな人間の運命など全て飲み込まれてしまうから。

光も、魔力も、運命も見通せず、完全な暗闇の世界が訪れる。それでも俺は、自分の体に取り込んで、荒ぶる殺意を研ぎ澄ます。全ては黒峰を殺す為。

「ぐっ……」

でも、ダメ！ 主導権を握れない！

無限に湧き出るゾンビの食欲、星獣である『坊や』の母への思い。そこに挟まれる格

好の俺。まるでパニック映画に叩き込まれた一般人だ。

まともに考えて、打ち勝てるハズが無かった。

ゾンビの食欲に負け、俺の体は猫の死体を貪り続ける。

すると『ママ』は気が付いた。坊やの意識が薄れ、ゾンビが体を支配している。錯乱する魔力の波動が吹き荒れる。

〈〈〈 坊や？ 違う！ 坊やじゃ、無い！ 〉〉〉

「僕だよ、ママ」

〈〈〈 坊や？ ホントに？ 〉〉〉

『ママ』の呼びかけでゾンビの意識が追いやられ、今度は『坊や』の意識が浮上する。小さな俺の体の中で、ゾンビと怪獣の壮絶な一騎討ちが始まった。

——ママ！ たべたい！ ぜんぶ！ ママも！ 許さない！

強烈な意識が脳が灼けるほどに渦巻く。ただの人間に過ぎない俺の意識は、みるみる内にしぼんでいった。

俺だって、覚悟が足りない訳じゃない。ずっとずっと望んだ首がソコにあるのだ。

悔しい！ 殺したい！ なんで!?! すぐソコに、死にかけの魔女が居るのに！

俺をあざ笑うかのように、魔女の狂った笑い声が聞こえてくる。

「やつと会えたわ。化け物！ コッチを見なさい！」

〈〈〈 うるさい！ 〉〉〉

暗闇の世界でも、巨大な魔力と運命の塊であるママが動いた姿は、ハッキリ視えた。バチンと岩を叩く音。その一振りで巨大な化け猫を挽き肉にしたばかり。魔女に当たれば死体も残らないだろう。

「ヒヒヒッ！ コツチ、コツチよ！」

それでも、魔女は生きていた。動き回って躲したのでだろう、少し息が切れている。それでいて、『ママ』を挑発し、馬鹿みたいに笑って見せた。

〈〈〈 うるさいい 〉〉〉

そして、『ママ』の様子も変だった。魔女なんて、それこそ『ママ』にとつて蚊みみたいな存在。なのに『坊や』そっちのけで、魔女に気を取られている。明らかに尋常ではなかった。

きつと『更新権』を使って注意を引いているのだ。

プラヴァスで一度体験したが、アレは無視しようとしても出来るモノじゃない。

〈〈〈 早く、潰れなさい！ 〉〉〉

「ヒヒッ、当たらないわ」

ママは苛立つて魔力をまき散らしている。そうしてまき散らされた濃厚な魔力は『ママ』自身の視界すらも鈍らせる。

思うように蚊を潰せず、見失って、苛立っている状態。それが今の『ママ』だ。

そんな時、人間ならば耳を澄ませ、目だけでなく音も頼りに蚊を探す。

星獣の場合はどうか？

〈〈〈 ソコかああ 〉〉〉

暗闇に、巨大な瞳が、輝き、浮かぶ。

普段ならマグマの中で決して開かれる事のない星獣の瞳。慣れない器官も総動員し、それでも『ママ』は魔女を探した。

そして、もう魔女は逃げなかった。自分と同じ大きさの瞳を前にして、一步も引かない。

「やっと、コッチを見たわねー！」

その言葉にゾツとした。

そうだ、目を合わせるのが洗脳の内容。魔女の魔力が、『ママ』と同調していく。

「これで、これでえー！ 全部、終わる！」

魔女が歓喜に笑う中、俺の体に奇妙な変化が訪れていた。無限に湧き出る食欲が、ピタリと収まったのだ

治らないゾンビ化が治った？ そうだ、俺は凶化している。喰った生き物の性質を吸

収出来るのだ。そう言えば、食べた化け猫はゾンビウイルスを持ちながら正気を保って

いた。

コレで！ 動ける、殺せる！ 今なら間に合う！ なのにまだ『坊や』の意識が俺の体を支配して、魔女の凶行をぼんやりと見つめる事しか出来ない。

「ヒヒヒッ！ コイツで、全部、壊してやる」

魔女は楽しそうに笑っている。それはそうだろう、俺を使って星獣をおびき寄せ、『更新権』で操る。それこそが魔女の、黒峰の本当の目的なのだから。

「上手く行つた、最後の最後で！ やつと！ やつと……」

魔女は勝ち誇り、高らかに笑う。この世の春とばかり、口の端を吊り上げる。

そして、糸が切れたみたいにな、ぱたりと倒れた。

「あ、グッ、うぎー！」

そうだな、人間がこんな化け物の意識を乗っ取れるはずがないんだよ。現に俺の意識が星獣の赤ちゃんである『坊や』にすらも押し負けている。

暗闇に、魔女の悲鳴が木霊する。

「何で？ 痛い！ 頭が！」

魔女がのたうつ声が聞こえ、その魔力が、徐々に『ママ』と同化してゆく。

『ママ』の意識を乗っ取るどころか、『ママ』の意識に魔女が上書きされている。

〈〈〈 何？ なんなののおお？ 〉〉〉

ココに来て、ママの混乱は極限に達したようだ。混乱した魔力が嵐みたいに吹き荒ぶ。

ママにしてみれば、潰そうとした蚊が自分の姿に変身した様なモノ。そりやあ不気味に違いない。

〈〈まさか！〉〉

その刹那、『ママ』はそれまでの緩慢にも見える動きが嘘の様に、火が付いた勢いで俺の方へと向き直った。

闇に浮かぶ巨大な両の目が俺を睨む。

〈〈坊やじゃ、ない！〉〉

マズい！ 強烈な殺意が魔力に乗って皮膚へ突き刺さる。目で見れば、俺が『坊や』じゃないのは一目瞭然だ。

自分の魔力をコピーした魔女。そして『坊や』と同じ魔力を放つ俺。その二つが、『ママ』の脳内で紐付いてしまった。

『ママ』から殺意が溢れ出し、『坊や』に寄生した害虫みたいに、俺を睨んだ。

「う、え？」

強烈な殺意にあてられて、『坊や』の意識は吹き飛んだ。母親に殺意を向けられて、冷静で居られる子供は居ない。

〈〈〈 よくも！ 坊やを 〉〉〉

ひよつとして、俺が『坊や』を殺して乗っ取ったとも思っているのだろうか？ 残念ながら殺したのは『ママ』だ。『坊や』は、今、死んだのだから。

「フフツ……」

余りにも悲しく、滑稽で……思わず笑ってしまった。化け猫の魔石を舌先で転がしながら、俺はゆつくりと立ち上がる。

〈〈〈 お前は、誰だああああ？ 〉〉〉

「俺か？ 俺はな……」

ガリツと魔石を噛み潰す。

『高橋敬一、どこにでも居る普通の男子中学生で、お姫様だよ』

〈〈〈 何!?! 〉〉〉

日本語で言っても通じないよな。だからわざわざ魔力波で翻訳してやった。

〈〈〈 男子学生で、天才魔法使いで、薬草を摘む少年で、愛される少女で、宿屋の息子で、悲劇の姫で、吸血鬼で、砂漠の歌姫で、坊やで……〉〉〉

〈〈〈 潰れなさい 〉〉〉

話を聞かない『ママ』が手を振りかざす。

〈〈〈 そして、『セレナ』のお姉ちゃん 〉〉〉

「我、望む、大気に潜む燃烧と呼吸を助けるものよ、寄り合わさりて、強き炎を生み出せん」

俺は気が付いていた。『ママ』の健康値は、何故か俺の魔力を阻害しない。

だから唱えていた。魔力波を送りながらも一つの魔法を。

種火の魔法改め、耐火レンガも溶かす、セレナのレーザー。

〈〈〈 熱い！ 〉〉〉

効いた！ 一点集中のレーザーが、『ママ』の体表を僅かに焼いた。

〈〈〈 よくもお！ 〉〉〉

『ママ』の苛立ちはピークに達し、巨大な目がギラギラと俺を睨んでくる。

魔女じゃないが、俺もこの時を待っていた。目を瞑り、もう一つの魔法を解き放つ。

「我、望む、この手より放たれたる強き光の奔流よ」

強烈な光が『ママ』の瞳に刺さり、暗黒の洞窟が一転、まばゆい光に包まれる。

〈〈〈 眩しッ！ 痛い！ 〉〉〉

そりゃ、普段使わない目に、強烈な光を叩き込んだらこうなる。

『ママ』は暴れ、洞窟がグラグラと揺れ始めた。巨大な星獣が暴れ始めたら、こんな坑

道は瞬く間に崩れてしまうだろう。

「ヤベエ！ ブラかるぞ！」

田中の叫びが聞こえる。だがな、アイツを放置して逃げられる訳ないだろう！

真昼のように明るくなった洞窟内、鼻血を出し、ダラダラと汗を流しながら、それでも魔女は生きていた。殺意が、脳を、満たしていく。

「死ねええ!!」

叫んで跳ぶ。たつたの一步で俺の体は宙に跳び上がる。『坊や』を吸収した俺の体は、慮外の力を秘めていた。

あわや天井にぶつかる直前、体を丸めて反転し、今度は天井を蹴飛ばしてミサイルみたいに魔女へと迫る。

ザクリと地面にめり込む俺の両腕を、魔女は転がり躲してみせた。

「化け物め!」

どつちがだ! 今すぐ殺してやると目を向けた瞬間、巨大な横槍が入った。

〈〈死になさい!〉〉

『ママ』だ。慌てて飛び退くと、直前まで居た場所に、電車みたいな凶太い腕が突き刺さる。

それを見た魔女が吠えた。

「そうよ! 殺りなさい!」

〈〈死ねえええ!〉〉

二本の前脚が、俺を狙ってメチャクチャに振り下ろされる。それを横つ飛びに躲し、壁を蹴り、ゴロゴロと転がって何とか躲した。

「やった！　そうよ！　殺りなさい！」

魔女は喜ぶが、決して洗脳に成功した訳じゃない。ただの『偶然』だ。

『ママ』は俺の魔法に反応している。俺は慌てて明かりの魔法を解除する。当然、洞窟は再び暗闇に包まれた。魔力視も運命光すら役に立たない真の暗闇に。

〈〈〈 ドコ！　出て来なさい！ 〉〉〉

だから、『ママ』も俺の姿を見失う。そんな中で魔女の真つ赤な義眼だけが俺を捕らえていた。ライフルを構え、トリガーを引く。

「死になさい！」

そんな殺意の籠もった囁きまで、俺には全てが聞こえていた。そうだ、聞こえている。極限状態で研ぎ澄まされた聴覚が、俺に全てを教えてくれた。

——パアン！

放たれたライフルを伏せて躲すと、獣みたいに四つ足で駆けた。十メートル近い距離が一瞬で縮まり、俺は前足で魔女を押し倒す。

「え？」

何が起こったか理解出来ない魔女の顔。その喉笛に、噛み付いた。

「ぐえー！」

一気に嘔み千切ると、口内に血の味が広がる。潰れた蛙みたいな悲鳴をあげて、魔法が、死んだ。

……アレだけ殺したかったのに、最後はアツサリしたモノだ。でも、油断はしない。絶対に復活など出来ない様に細切れにしてやる！

〈〈〈 ああああああ！ 〉〉〉

その必要はなくなった。チリリと痛む首筋に予感を覚え、俺は地を蹴って宙に跳ぶ。それまで俺が居た眼下で、グチャリと肉が潰れる音。

巨大な顎が俺達が居た場所を根こそぎ嘔み砕いていた。ミンチより酷い。

『ママ』の巨体が、のそりと洞窟に這い出していた。音だけでも、恐ろしい程の巨体である事が解つてしまう。

もはや一刻の猶予も無い。魔法を唱え、俺は天井と真ん中に光を浮かべる。浮かび上がるのは想像以上に大きい、『ママ』の姿。

「逃げて！ 早く！」

力だけで天井に掴まり、叫ぶ。案の定、田中も木村もシャリアちゃんも、誰も逃げてはいなかったからだ。

「置いて行けるかよー！」

「スグに、行くからー」

田中の叫びに応えながらも、再び天井を蹴飛ばし今度は壁へと着地する。力任せの移動だが、魔法を使った立体機動の経験が活きていた。

飛び跳ねる俺の背後で、岩石が爆ぜる音が連続する。光の魔法を使った事で『ママ』に狙われているのだ。壁を歩き、跳ね、四つ足で駆ける。その時、背後から危険な気配。

〈〈燃えなさい！〉〉

『ママ』が口から放つ熱線。『坊や』の記憶では、いつもコレで泥炭を燃やしていた。

「我、望む、風よ！」

詠唱もそこそこに魔力で無理矢理に風を生むと、軌道が逸れた熱線で岩石が赤熱していく。それを横目に、獣みたいにひたすら駆ける。

「早く、来いー」

田中の叫び。見れば洞窟の入り口で俺を待っていた。抱えているのはマールウ。見るからに死に掛けている。シヤリアちゃんと木村は居ない。脱出済みか。

そう言えば……もう一人居たよな？ チラリと視線を巡らせば、生き残っていた親衛隊の最後の一人がグチャグチャのミンチになっていた。

……『ママ』の暴走に巻き込まれたか。

気を取られたのは一瞬、しかしそれが良くなかった。迫り来るは巨大な肉塊。『ママ』

の尻尾だ！ その質量は腕以上！

俺は片足だけで無理矢理に跳ぶ。転がるように着地すると、全身に激しい痛み。

アドレナリンが冷えてくると、自分の体の状態に気が付いた。魔力を無理矢理健康値に変換するみたいなの、メチャクチャな使い方を『坊や』はしていた。

それで手に入れた贅力は、幼気な少女に過ぎない俺の体を激しく傷つけていたのだ。

回復魔法で断裂した筋肉と骨を接ぐ。獣の本能からではなく、痛みに喘ぎ、不格好に四つん這いで移動する。

〈〈〈 潰すう！ 〉〉〉

「ぐううー！」

今度は魔法の力で無理矢理跳ぶ。回復魔法と移動の魔法の並列起動。放った光の魔法もほんの僅か制御しているので脳が滅茶苦茶キツイ。

ボロ雑巾みたいにゴロゴロと転がった先、無理矢理に引っ張りあげられた。

「やっぱり、死にそうになってるじゃねーか！」

『わりい』

田中だ、マールウを抱えながらも空いた手で俺を抱き寄せた。だが、魔法を使っている俺は『ママ』に執拗に狙われている最中。

「やべえ」

二人を抱え無理矢理跳んだ田中のお陰で、間一髪ペしやんこにならずに済んだ。しかし腕から投げ出された俺は、痛みに呻いて振り返る。

ぼんやりとする視界の中で、見えたのは田中の後ろ姿、そして『ママ』の前足にとりついたマーロウだった。

「ヤメロ！ 馬鹿が！」

「姫を、頼みます」

そう言つて、マーロウは『ママ』の前足に両手のファルフアリツサを振り下ろす。

〈〈 痛いッ！ コノッ〉〉

そして、『ママ』の大きな顎が目の前でマーロウを噛み砕いた。歯の隙間からポタポタと血が流れる。

足を縫い付けられた『ママ』は、苦しそうに前足を動かすが、ファルフアリツサはマーロウの怨念が宿ったかの様に、中々抜けずに刺さり続けた。

「カツコ付けるじゃねえか！」

その隙を見逃さず、田中は俺を抱えて出口へ走る。しかし、このチャンスに追撃も入れないのはらしくない。

『田中あ！ 刀はどうした？』

「壊された！ クソッ！ 情けねえ！」

出口に到着、坂道を駆け上がる。お姫様らしく抱っこされ、後ろを見ると『ママ』の顎先が洞穴に差し込まれる所だった。

「追って来てる！」

「わーつてるよ！」

縦穴を抜け、最下層前、連絡通路に到着する。だが、背後からは星獣が迫る。元々は『ママ』が泥炭を掘り進んで出来たのが、この炭坑だ、通つて来れないハズが無い。

ここで見張りをしてりた副長のグリードや騎士達は既に居ない。脱出済みと見るべきだろう。もう何の心配も無い。崩壊するダンジョンから脱出するヤツだ。

だと言うのに、田中は動かない。何故だ？

「オイ！ 道はどつちだ！」

迷子だった。それも、最下層から坑道に出た直後、一巡目から全く道を覚えていない。

「良いから、早く！ 参照権で調べやがれ！」

「いや、でもっ！」

俺も、覚えてない！ つてか、行きと帰りで見た目が違うし、魔法の明かりで照らされた洞窟は全く違つて見えるのだ。『参照権』も役に立たない。

「やべえぞオイ！ お前が覚えてるから木村も引き上げちまった」

「ドコでも良いから早く！」

狭い洞穴をガリガリと削りながら、『ママ』がスグ近くまで迫っていた。

「知らねえぞー!」

田中はがむしやらに走る。そして俺は魔法で周囲を照らす。後ろを振り返れば『参照権』の光景と一致してるかは確認出来る。

「どうだ!?!」

「ダメかも!」

全然、違う! 明らかに迷子! 迷いが生じ、田中の足が止まってしまふ。

——ガチン!

その途端、暗闇から這い出した巨大な口が、田中の背中スレスレで噛み合わさるのを確かに見た!

「うおっ! やべっ」

「走って! 走って!」

まるで大牙猪ザルギルゴールに追いかけられた時の再現だ。ただし、今度の敵は十倍以上に巨大で、全貌すらも見通せない。

「メチャクチャ追って来てるじゃねーか!」

「し、仕方無いでしょう!」

魔法の光を切る訳には行かない。でも魔法を使う俺を『ママ』はドコまでも追ってく

る。

しかも、光を付けるデメリットはそれだけじゃ無かった。

「くそー！ 邪魔だ！」

ネズミにまで集られる。足を嚙られればゾンビ化して一卷の終わりだ。

だが、ネズミは光を纏う俺達など無視し、脇目も振らずに何処かへと駆けていく。

逃がっているんだ！ 『ママ』の衝撃で崩れる坑道の中から！

「ネズミの先に！ 脱出口が！」

「あいよー！」

田中が走る。足捌きには、もう迷いは無かった。俺は振り落とされない様に、田中の首を抱きしめる。

「オイ！ どんな馬鹿力だ！ 苦しいって」

「あ、ごめんなさい」

そうだった、今の俺は星獣の力で腕力が上がっていた。お姫様らしく謝っておく。

ネズミ達の群れは、とうとう終点に辿り付いていた。押し合いへし合い殺到する小さな穴から、外の空気が流れ込んでいる。

魔法でネズミを吹っ飛ばし、俺は小さな穴に転がり込む。余りに小さい穴なので、後に続く田中は巨体を窮屈そうに折りたたんで愚痴った。

「操られて、助けられ、刀を斬られ、泥だらけで穴を這いつくばるとはな！ 良いところがまるで無え」

「まあまあ」

宥めながらも狭い縦穴を魔法で掘り、数十メートルを垂直に駆け上る。

「ぷはあー！」

青い空をこんなに美しく思った事はない。新鮮な酸素をここまで美味しいと思った事も。俺達は遂に明るい地上へと脱出した。

見回せば、俺達が侵入した井戸からは三百メートルも離れていない場所。

「もう地下はこりこりだ、自分が情けねえ」

ぼやく田中を引っ張り出して、なんとか励ます。

「でも、次は地上ですから、頑張ってください」

「？ 何言ってるんだ？」

きよんとする田中を無視し、俺は地面の一点を見つめる。そこからバキバキと地割れが広がり、『ママ』が姿を現した。

意外だったのは、二足歩行で立ち上がった事。太陽の下で見上げる全長は五十メートル以上ある。

「嘘だろオイ！」

呆然と立ち尽くす田中だが、見せ場が出来たのだから喜ぶべきだろう。

『田中クンの、ちよつと良いトコ見てみたい、ヘイ！』

「ぶつ殺すぞー！」

マジに怒られた。首根っこを掴まれ、田中が再び走る。地割れが足元にまで迫っていた。結構ヤバかった。思ったのの何倍もギリギリの脱出。

「殴るぞー！ マジー！」

ブチ切れている。こう言う時は何でも許される魔法の言葉。

『許してニヤン♪』

腕の中で、媚びっ媚びに猫のポーズを取る。

引かれるとは思っていた。しかし、田中の引き方は尋常じゃなかった。

「おまえ、耳が……」

「え？」

慌てて頭を触ると、なんか生えている！

ふざけた事を言った天罰なのか。俺の頭には……猫耳が生えていた！

凶化した生物は、食べた生き物の特徴を吸収する事がある。ゾンビ化した俺は、化け猫を馬鹿みたいに食った。

田中が倒したグリフォンなど、足まで生えたらしいからこの位はあり得るか？

そう言えば、途中から薄暗い洞窟でも不自由せず音を聞き分けられるようになってい
たし、四つ足で駆け、剥き出しの牙で魔女を噛み殺した。

『坊や』を吸収した影響かと思つたが違つたらしい。意識を向ければ頭上でピコピコ
と動く存在をハッキリ感じる。

なんと元々の耳とは別に、猫耳が生えている！ 何だコレ！ 絶対にあり得ない萌え
アイテムを頭上に装備！

いや、どうなんだコレ？ エルフの耳に猫耳をプラス。ちよつと盛り過ぎと言うか邪
道にも程があるのでは？

俺はドキドキしながら、田中に尋ねる。

「に、似合ってますか？」

「あ、ヒゲまで生えてるじゃん！」

「嘘ッ！」

それは、萌えない！ 慌てて確認するが、髭は生えていなかった。特に毛深くなつて
る感じもしない。アニメキャラっぽい都合の良い猫耳である。

「騙しましたね？」

『許してニャン♪』

言われてみると、血管がブチ切れそうなほどに苛立ったので、俺は『ゆるしてニャン

♪の封印を誓った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後、騎士達と合流し、馬やラクダ、装甲車とバイクで俺達は脱出する。足がある騎士だけに限定して本当に良かった。

〈〈 坊やアア！ 〉〉

ママの咆哮を背後に、ケツに帆を掛け必死に逃げた。

高い建物の無いこの世界で『ママ』の姿は遠くからも見通せた。一目散に遠ざかると、見失ったのか、俺を追って来なくなる。

けれど、『ママ』は一向に地下へ帰る様子を見せない。怒りに我を忘れていたのだ。遙か遠いココまで、殺意が魔力に乗ってビリビリと伝わる。

逃げ延びた先で、一時の休憩。ご飯を食べ、猫耳を木村に突っ込まれながら、星獣が向かう先を地図で確認し、田中が唸った。

「行くぞ！ アイツを斬る！」

「オイオイ、帝国領だろ？ 頑張るだけ損だぜ」

木村の言う事も尤も。帝国から寝返った騎士は周囲で悔しそうに俯くが、王国兵としては当然の意見だ。魔女の暴走で、既に多くの兵士が死んでいる。帝国がどうなるうが知ったことではない。

だが、田中は諦めなかった、止めても一人で飛び出す勢いでまくし立てる。

「ヤツが向かっているのはスールーンの寂れた領都、俺がこの世界で始めて巡り着いた町だ」

そう言つて、予備に持っていた魔獣退治用の巨大過ぎる刀を背負う。

「それに、アイツの仇も取らねえとな」

バイクに跨がるその瞳には、マーロウの最期が焼き付いてみえた。

騎士をドン・キホーテにする方法

「いや、やっぱナシだろ」

野外にポツンと机を置いただけの作戦会議、地図を広げた木村が断言する。

「俺らが怪獣退治をしなきゃならない理由が無い。勝ち筋も無い。正義かどうかも疑わしい。オマエ馬鹿かよ」

そこまで言われた田中は、スロットルを吹かし飛び出す寸前だった。恨みがましく振り返る。

「オメーに無くても、俺には義があんだよ、だからこうして一人で行くつつてるだろが！」

「あんなんに斬り掛かっても只の自殺。自己満足だろ？ バイクでスールーンに先回りして避難勧告でもした方がよっぽど為になるって言ってるの！」

「そりやそうだがよ、ここらは治安も悪いし魔獣も間引きされてねえ。そんな所に大勢ほっぴり出したら、皆死ぬぜ？」

「あんな化け物が迫ってるのに、山賊や魔獣だって呑気に襲って来ねえよ！ さっさと行け！」

「そ、それもそうか……」

田中はさすがごと再びバイクに跨がる。星獣退治を諦め、スールーンに避難勧告に向かうんだろう。

やれやれ、やつぱり口の上手さでは木村が上手、まんまと言いくるめられている。

俺は地図を叩いて木村を睨む。

「避難勧告なんてしないでも、あんなモノ、スールーンからも丸見えでしょう?」

指差す先には、体高で五十メートルの怪獣。全長なら尻尾の分だけ更に長い。地下ではひよろ長い印象だったが、服代わりに泥を纏って、ずんぐりと大きくなって見える。つまり威圧感がハンパないのだ。あんな巨大生物、向かってきたら誰だって逃げるに決まってる。

そう言うと、木村は肩を竦めた。

『『正常性バイアス』』と言う言葉がありま——』

「この辺りは星獣に滅ぼされた伝承が残ってます、ぼんやり見ているとは思えません」

「しかし、避難を促すのは無駄とは——」

「その避難先が問題なのです! タナカさん、アナタはドコに民を避難させるつもりですか?」

「オイ? どう言うことだ?」

俺が机を叩くと、田中はバイクを降り、慌てて地図へと駆け戻った。

「そうか！ ココから逃げるなら普通は帝都になっちまう！」

「誰だつて、東に、いつ我々が襲つてくるか解らない戦場へと逃げようとは思わないでしよう？ まだ停戦はしていないのですから」

オーズドは停戦を望んで居たが、停戦出来そうなテムザンは、俺が先んじてぶつ殺したからな。

それでも帝国には敗戦の報ぐらい届いているだろう？ そう水を向けると、木村は渋々頷いた。

「帝国民は、いつ東から王国軍が大挙して現れるか戦々恐々としています。必然的にスールーンの民は北西、帝都に逃げ込むでしょうね」

「そして、それを、星獣が追いかける！」

継いだ俺の言葉に、今度は周りの騎士達がザワついた。

「なんだと！」

「帝都にあの化け物が？」

「そんな！ 嘘だろ！」

動揺するのも無理はない。俺の色気にやられて……なにかどうかは知らんが、俺に付いて来てくれた千人の騎士は、王国より帝国騎士のが多いぐらいだ。王国の正騎士は

オーズドと共に多くが帰ってしまつたからな。

木村としては不可抗力に見せかけて、星獣で帝都を潰したかつたに違いない。ようやくその策謀に気付いた田中は、齒噛みし睨んだ。

「それで俺に避難勧告を出させたかつたってワケかよ……」

「……………」

木村はドスを利かせた田中の声を無視して、ひたすら黙つて俺を見ていた。口先で俺を説得しようと考えているみたいだが、俺も負けじと木村の目を睨む。

木村の瞳に映つた俺は、可愛らしいドレスを着ていた。坑道で着ていた軍服みたいなジャケットとスカートはすり切れて泥まみれ、ボロボロになつてしまつたからな。木村が差し出したドレスに何の疑問も抱かず袖を通した。

いや、袖が無かつた！ 肩も背中も丸出しだ！

なんだこのドレス！ 首から吊り下げただけ、エプロンみたいな構造……ホルターネックって言うらしいが、なんと言うか、色々と酷い。

レースをふんだんにあしらつた純白の意匠は清楚さを感じさせるが、それでいて露出はエグい。肩や背中が丸出しなだけでなく、胸元やヘソ周りなんか透けてるし、ヒラヒラのミニスカートはちよつと動いただけでパンツが丸見えだろう。紫色で花の刺繍が入つた白のガーターストッキングなんて、艶々の透け透けだから却つてエロくしている

だけ。セツトで付いてたロンググローブも、晒された二の腕や肩を強調して止まない。地球だったら華やかなパーティードレスとしてギリギリセーフかもだが、この世界では余裕でアウトだ。

ココに来て木村がエロイドレスを着せて来たのは、趣味が半分、もう半分は俺を暴れさせたくないからだろう。こんな衣装で飛び回ったら、色々丸見えだからな。

だけどさ、今さらそんな事で、俺が大人しくするワケないんだよ！

机の上に土足で立って、ひらひらのスカートを見せびらかすみたいに、俺は広げた地図をブーツで踏みつけ宣言する。

「私は、星獣を討ちます！」

一瞬の静寂。そして、驚愕と歓声が入り交じる。

「無茶だ！ あんなの倒せるワケが無い！」

「逃げましょう！」

「蛮勇です、再考を！」

「アレぞ神敵！ 我らが討つべき！」

「頼む！ 帝都には家族が居るんだ！」

「よくぞ！ よくぞ！」

王国兵と帝国兵で反応が真つ二つに分かれた。そして、もちろん木村は王国側だ。

「何故です？ このままなら勞せず帝都を落とせる！ あんな化け物と戦う理由はどこにもない！」

「私は、祖国を帝国に焼かれました」

「だからこそ！」

「全ては霧の悪魔ギユルドスを用いた魔法の策略です。そして、今度は魔法が呼び出した星獣によつて、帝都が滅ぼされようとしている」

「兵で攻め滅ぼすのも、星獣が滅ぼすのも同じでしょう！」

「違います！」

断言する。俺はこの手で復讐し、馬鹿な真似をしたと、手を出しちやいけないモノに手を出したと、帝国に後悔させる為にココまで戦つて来たのだ。

魔法が呼び出した星獣が全部ぶつ壊して、それでスッキリ終われるか！ それじゃあ帝都まで魔法に体よく滅ぼされたつてだけになる。

よしんば魔法が帝都とその臣民を大切に思つていたならば、滅びる所を見るだけで溜飲が下がるかも知れない。だけど賭けても良いが、アイツは帝都なんてまるで大事に思つちやいなかった。

それどころか、恐らくは滅びれば良いとすら思つていたに違いない。そうじゃなければ帝国のど真ん中、こんな場所で星獣なんて呼び出さない。

なにより、魔女はアツサリ死んだ。アツサリと死に過ぎた。俺はソコに不完全燃焼の思がある。

アイツは内心、もう星獣を呼び出したから十分と思つてたんじゃないか？俺は魔女の事を、世界を滅ぼして、最後の一人になつてもなお生き延びようとするタイプだと思つていたがそんなのは思い込みだ、そう思つて居たかっただけとも言ふ。

俺はアイツの事なんて、何一つ知らないのだから。

そもそも、何としてでも生きたいヤツは、世界を滅ぼそうなんて考えないしな。きつとアイツだつて今まで何度も死線を潜つていた。

……要らない事を考え過ぎたな、机の上に立つたままフウーと息を吐く。

「魔女は死にました。しかし、アレを倒さぬ限り、その野望を打ち砕いた事にはなりません」

星獣をビツと指差せば、オオツつと周囲が沸き立った。皆がやるぞと気炎を吐いている。

良い感じに場の雰囲気に乗せる事に成功した感じ。

「手が！何か、手があるんですか?! あのデカブツ相手に!」

だけど、雰囲気呑まれないのが木村だ。火花が出そうな程に睨んでくる。

いい目をするじゃないか！いつもの軽薄な余裕を引つ込めて、そんなに俺が心配か

?

そろそろ俺も十五歳。今まで一万回もトライして、十六まで生きただけが無いの俺の魂だ。こんな無茶ばかりして、ソコまで生きられる可能性はゼロだろう。俺はそれを覚悟してしまっている。

だから、コイツは恐れているんだ。仇だった魔女を倒し、全てに満足した俺が、自棄になつて星獣に突っ込んで死んでいくのを！

だが、安心しろよ。一人で死のうなんて気は更々無い。机の上で、俺は叫んだ。

「あの星獣を討たんとする命知らずは、寄りなさい。作戦を説明します！」

呼びかけに応じ、オオツつと獣染みた声で、次々とむくつけき男どもがワサワサと集まってくる。

最前列はもちろん木村と、それに俺の親衛隊だ。副長のグリード、生きていたか。見れば飄々としたいつもの様子をかなぐり捨てて、泣きそうな顔をしていた。

「ユマ姫、隊長は……」

「ゼクトールは、魔女に一矢報いて死にました」

「そうですか……、ユマ姫様、私は！」

「その前に！」

何を言うつもりか知らんが、それを止めた。

「頭が高い！ 跪きなさい！」

「え？ あつ、ハイ」

皆が一斉に跪く。だけど俺だつて威張りたい訳じゃない。実は疲労が限界だ、立つて居られず机の上に腰掛ける。

目線が低くなるので、屈んでくれないと後ろの人が見えないじゃないか。

「あつ！ うう」

しかし、跪いたグリードは、俺を見上げると真つ赤になって、顔を逸らした。

……ミニスカートだからね、机に座る俺のスカートを覗き込む感じになってしまっている。

しかもギユウギユウに近寄っているので、蹴れそうな程に距離が近い。あつ顔に足が当たった。

「うっ！」

なんでコイツは嬉しそうなんだよ……

まあ良いや、コレぐらいじゃないと作戦は成功しない。

ミニスカートにも構わず、見せつける様に足を組み替え宣言する。

「私の為に、死ね！ 生きたい者は、今すぐ家に帰りなさい！」

反応は劇的だった。

「勿論だ！ その為に付いて来たんだぞ！」

「殺せ！ 今すぐ俺を殺してくれ！」

意味不明な熱気が渦巻く。揃いも揃って変態である。

言ってる事はメチャクチャだが、あのサイズの化け物を倒すには、千人の騎士全員が揃ってドン・キホーテになる必要がある。星獣は風車なんかよりずっとデカいのだから。

「王国の騎士も、帝国の騎士も、プラヴァスの騎士も、国のためになど戦うな！ 私の為に戦い、私の為に死になさい！」

そして、目的も所属も違う騎士達をまとめるには、こう言うしかないだろう。

おお！ と関の声を上げ、騎士達の興奮は最高潮。そこに意外な声が割り込んだ。

「いよいよ、私達も姫の旗下で戦えるのでしょうか？」

リヨンさん！ ビックリした、メチャクチャ近くに居た。グリードの隣。足元である。

っていうか、さつきからポンポンと小気味良く蹴飛ばしてた頭がリヨンさんだった。

「勿論です、死ぬ覚悟があるのなら」

「構いません」

……いや、良いのかよ？ プラヴァスは？ 知らないよ？

他にも、不躰で獰猛な声が後ろから。

「俺の役目もあんだよなあ？」

「当たり前でしょう？」

田中はダメって言っても強制参加なんだが？ 言い出しつぺだし。

で、脱走無く皆が乗り気だが、当の木村サンはどうかな？

んー？ と、目を向ければ、頭を抱え、唸り、顔は苦悩に塗れている。

どうしたどうした？ 何か心配事かね？ 聞いてやろうじやないか、こつそり唱えた

集音の魔法はバツチりぼやき声を拾ってくれた。

「こんな事なら調子にのって、エロい格好させるんじやなかった……」

今さらそんな事言っても、もう遅い!!

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

装甲車の中、ユマ姫の靴跡が残った地図をじつと眺める。

オズド伯が居ない今、作戦の指揮を執るのは俺だ、少しの見過ごしも許されない。

ユマ姫の作戦は悪くない、むしろそれしか無いと思える。……だが、成立するのか？

俺が不安な顔をしているせいか、対面に座るシノニムさんが不安そうな顔をしてい

る。

「キイムラ様……」

「ああ、いえ、ご心配なく。この装甲車はバックアップ専門です。化け物には近寄りませんよ」

「いえ、そうではなく」

「ユマ姫の身を案じているのですか？ だとしたらあの方の心持ち次第です。今回ばかりは我々の打つ手が無くなるまでは、攻撃しない約束をして頂きましたが……」

「違います、あの、私がキイムラ様に聞きたいのは、この作戦の目的なのです」

うっ！ それを言われると辛い。なにせ、それを一番疑問に思っているのが俺だからだ。

いや、一応意味はある。戦ってあの化け物を倒せば、帝国は抵抗する気も失せるだろう。共に戦った帝国騎士から、ユマ姫の武勇伝はあつという間に広がるからだ。

一方で、戦わない場合は帝国の騎士達は俺達を見放し、帝都に戻った事だろう。するとたとえ帝都が減びても、手が足りず占領が出来ない。進軍はココでストップだ。

まして神の使者という評判も崩れ、化け物で帝都を滅ぼした濡れ衣を着させられる可能性もある。結果的に帝国を征するのが遅くなるが……それでも星獣を倒すよりは、ずっと確実に安全だ。

なにより、抜き身のナイフみたいなユマ姫が生きるには、なにか目標があつた方が良い。斬りつける相手が必要なんだ。帝国を滅ぼすのなんて、ずっと後で良い。だからコ

レは必要の無い戦いだ。

しかし、熱を帯びたシノニムさんの目を見ると、目的なんてありまてーん！ とは言
い辛い。

「あの、それは、我々の軍は既に帝国民も多く……」

「やっぱり！ 人々の為の戦いなのですわね！」

俺が必死に言い訳していると、シノニムさんは食い気味に言葉を被せてきた。

しかし、どうも言葉の意味が解らない。

「あの、えと？」

「オーズド様は、ユマ姫は二カ国を争わせ、共倒れを狙っていると聞いていました。人間
を滅ぼす悪魔とすら。しかし、姫様は敵である帝国の民を救う為に、あんな化け物に立
ち向かおうとしています！」

「ええ、まあ」

民を救おうとしているのは間違いない。ただし、救った上で殺そうとしているのだが
……。

そうとは知らず、シノニムさんはホツと息を吐く。

「私は、ずっと不安だったのです。スフィールで出会った時からユマ姫を信じて来まし
たが、ひよっとして私はとんでもない化け物を導いてしまったのかと……」

「それはそれは……」

言いながら、そつと窓から外を見る。

そこにはエロイドレスで白馬に跨がり、軍の先頭を駆ける少女が居た。

「とんでもない化け物か……」

そんなの、ずつと前からとんでもない化け物だ。

近くに居ると、案外気が付かないモノか。派手な外見も、巨悪と戦うヒーローに見えるかもしれない。

言われてみれば、今までユマ姫は大量虐殺や非道な行いを止める側だった。

それどころか、シノニムさんに寄りかかり寝ているシヤリアちゃんも、ユマ姫の後ろに続く帝国騎士も、血みどろの戦いを繰り返しながら、ユマ姫に許されてココに居る。

シノニムさんからはユマ姫が天使に見えたって不思議じゃない。

でも、あの内面には、ギラつく殺意が満ちている。

願わくば、ずつとシノニムさんがユマ姫を勘違いして居られる様に、俺は祈った。

星獸狩り

腕を組み、眉をハの字に、ぐぬぬと唸る。

『うーむ、不本意』

納得が行かない。星獸を倒すと俺は皆の前で宣言した。

なのに、何故か俺の体は田中の腕の中ですっぽりと収まっているのだから。

『じゃあ乗んじゃねえよ!』

『いやいや、別にバイクが嫌なワケじゃないからね? お前の膝の上が嫌なだけで』

『コツチだつてオマエを乗せたいワケじゃネーからな!』

『またまたあゝ』

こんな美少女を抱きしめてバイクに乗れるなんて役得だろ? ドヤツつと間近に顔を寄せると、田中に鼻で笑われた。益々納得が行かない。

そう、今、俺は田中と一緒にバイクに乗っている。しかも、腕の中で膝に腰掛け、横座り。お姫様だつこのままに乗ってるような感じである。

……本当は田中の腕の中が嫌って事は無い。ただ、前に乗るのは思い出すんだよ。ポルドー王子と湖畔を馬で散歩した時のことをさ。だから何とも具合が悪い。

田中の方も俺の前世を知ってるからか、俺の色気に参る兆しを見せない。むしろ厄介者扱いである。今の俺はエチエチな美少女。肩や背中が丸出しで、ところどころ透けるドレス姿と言うののだ。

……まあ、別に欲情して欲しいワケじゃないけどさ。

『ホントなら、後ろに括りつけたかったんだがな』

『姫を荷物扱いは流石に？』

『荷物のがマシだろ、暴れねえし』

『ハイ、不敬罪』

憎まれ口を叩きながらもこんな座り方で妥協したのは、バイクの周囲を見たいから。普通の二ケツじや田中の背中しか見えないが、これなら後ろも見ることが出来る。

スロットルを握る田中の腕に頭を預けるように、グイツつと背を反らしてそつと背後を窺った。

〈〈〈 許さないいい！ よくも！ 坊やを！ 〉〉〉

星獣の『ママ』がドスンドスンと追って来ている。その高さは体感では五十メートル。ちようど渋谷の109と同じ高さで、ビルがのっしのっしと迫ってくる様なモノ。あくまで体感なので、前世と比べて身長が縮んだ俺だからかも知れないけどな。

現に田中や木村はもう少し小さく感じているらしいが、何メートルだろうがビル並み

にデカイ事には変わりが無い。

呑気に会話などしていたが、現実逃避でもしないと恐ろしくて仕方が無かったワケだ。現在進行形で星獣とバイクで、追いかけてこの真つ最中なのだから。

コレが作戦の第一段階。まずはスールンから星獣を引き離す。

『坊や』の記憶を手に入れた俺は、魔力の波動で『ママ』、もとい、あの星獣と会話が出来る。近くに寄れば、おびき寄せるのは簡単だ。

〈〈〈 ママあ、助けてえ！ 〉〉〉

〈〈〈 坊やを！ 騙るな！ 〉〉〉

大激怒である。地震みたいな振動で、舌を噛まないで喋るのに一苦勞。

田中のバイクは大森林の悪路を想定した強力なサスペンションを備えている。それでも立って歩くのも難しい揺れが相手では流石に分が悪い。

しかも、たまに星獣は倒れ込むように地面を叩き、大きな振動を見舞ってくるのだから堪らない。

「来ます！ 振動！」

〈〈〈 止まりなさいい！ 〉〉〉

「うおっ！」

一際大きな音と共に、バイクが跳ねて宙を舞う。内臓が口から飛び出しそうな、不快

なまでの浮遊感。

「ツツ!!」

声なき悲鳴を嘯み締めて、田中の首に腕を回して抱きついた。小ぶりの胸を押し付けて、来たる振動に備える。

「グッ!」

着地の瞬間、小石を巻き込んだリアタイヤがジャリリと滑り、流れるバイクを田中が力尽くで制御する。

抱きしめられた状態で背中に感じるのは、はち切れそうな程に盛り上がった力こぶ。流れる後輪がピタリと止まり、なんとか機体制御に成功したようだ。

ほっと一息ついた田中が、張り付いた俺にようやく気が付いた。

「うへえ!」

「あまりにも無礼でしょう!」

ンだよその反応は! もっとラッキースケベに照れろ! 顔を赤くしろ!

「ワリいな、喰われるかと思っちゃまった」

「嚙りましようか?」

「勘弁してくれ」

コイツ、俺の事なんだと思ってるんだろ? 人間とか滅多に食べないよ。

そんなラブコメ未遂の間も、『ママ』の攻撃は容赦が無い。

〈〈死ねえ！〉〉

「来ます！」

俺の合図と同時に田中が思いきりスロットルを吹かす。急加速のGで硬い胸板に潰されながら目を凝らせば、今居た場所をぶつとい熱線が貫いていた。

「火まで噴くのかよ！」

火を噴いたと言うより、圧縮した魔力を噴き出したと言うのが正解だ。星獣は体内の温度が高いため、魔力を高圧に吹き出すだけで着火して熱線となる。

コチラはバイクを吹かせて、比喩抜きでケツに火が付きそうな勢いで逃げの一手だ。

「こんなの、何度も保たねえぞ！」

「解っています。森に逃げ込んで！」

唯一の慰めは、バイクの最大速度が星獣の移動速度を上回っている事だ。ココまでも、敢えて鼻先でフラフラすることで誘導して来たのだ。

「面倒くせえからそのまましがみついてろ！」

言われるまでもない。森の中などバイクで飛び込むのは自殺行為。いや普通は不可能だからやろうともしないだろう。

しかし、このバイクなら別だ。甲高いモーター音を響かせて森の中を分け入って行

く。張り出した木の根を飛び越え、転がる石を苦も無く乗り越える。

田中に下賜された古代のバイクは前方二輪タイプ。左右それぞれの前輪に付けられたサスペンションがグングニと動いて、どんな地形でも地面を食らいついて離さない。

だが、バイクは良くても乗ってる俺の方は別だ！ 田中の膝の上でガクガクと飛び跳ねる。

「ぎゅうー！」

「喋んなー！ 舌噛むぞー！」

そう言われても、酷い振動だ。俺は必死に田中にしがみつく。ラツキースケベとか馬鹿な事を考える余裕も無い。

俺としては極々大人しく、ちょこんと膝に座っていたのに、田中からは非情なクレームが入る。

「オイ！ 待て！ ピコピコ耳を動かすな！ 邪魔だ！」

いや？ 動かしてるつもりは無いのだが？ しかし、どうにも俺の頭部に新設された猫耳が意図せず動いているのは間違いなさそうだ、うっすらと感覚がある。

「止められません！」

「前見えねえし、くすぐってえ！」

「ひゃん！」

触られた！ 敏感な所を触られた！

「……変な声出すんじゃないよ！」

そう言われても仕方無いだろ！ 怒りと羞恥をない交ぜに、思わず顔が熱くなる。どうやら、撫でる様に搔き分けられた事で、耳は動かなくなつたようだ。

……どうも、俺がパニックになるとピコピコと動くらしい。不本意な事に田中に撫でられて、安心して動きが止まつたみたいである。

これは良くない。今までクール系美少女キャラで通つたのに、内面がダダ漏れでは格好がつかない。

強気にクールに立ち回らないとな、普通に考えれば猫耳美少女なんて強力な武器以外の何物でもないのだ。

ぐつと拳を握つて、自分に自信をフルチャージ。

『許してニヤン！』

「封印を解くな！」

怒られた。まあ、二度と使わない誓いなんてのは破るためのフラグみたいなモンだしな。

しかし、田中には猫耳属性も無かつたか……そう思つて居たのだが。

「だがよ！ その耳！」

「まだ、邪魔です?」

「暇な時触らせてくれよ、手触り良かった」

「えっ?」

……手触り、だと? コイツまさかもふもふの民か?

解説しよう。もふもふの民とは何をおいても獣の手触りを求めて止まない特殊な性癖の総称である。

多くはストレス社会の荒波に怯え、もふもふが切れると禁断症状で暴れ出す危険な連中である。俺も某小説サイトでは『もふもふ』と『スローライフ』だけは避けていたぐらいだ。あくまで個人の感想です

「タナカさんがそんなにストレスを抱えているとは」

「ンでだよ! 普通だろうが! もふもふしていると触りたくなるだろうが!」

しかも、この勢力はアブノーマルの自覚がまるで無いからタチが悪い。あくまで個人の感想です

この無自覚な危険性こそがもふもふ民の特徴であるあくまで個人の感想です。可愛い女の子より獣が優先って時点で普通じゃ無いんだよなああくまで個人の感想です。

俺は目を細めて田中を見つめる。

『ケモナーかあ……』

『違えよ！ 手慰みに触ると癒やされるだろうが！』

『え？ お姫様を手慰みに？』

『姫つて柄じゃねーだろ！ どちらかと言うと犬に近い』

『ハイ、不敬罪』

『そう言わず触らせてくれよ、ハンドスピナー感覚で』

『え？ お姫様をまわすの？』

『ハンドスピナーだしな』

『ハイ、極刑』

なんて、ふざけていたら森の中の少し開けた場所に到着した。この世界、森の中にぼっかりと木が生えない場所があったりして、妖精が住むと言われたりする。

そこには待機していた仲間が居た。その数十人。いずれも騎馬で真っ黒の服と馬衣で着統一していた。

「散開！」

合図と同時に、田中のバイクを含め、一斉に散らばって森を脱出する。

〈〈 虫けらがあああ！ 〉〉

すると、星獣にはどこに俺が居るかが解らなくなる。星獣は目があまり良くない。そうでなくとも、虫けらみたいなサイズの人間など見分けが付かない。一方で魔力には敏

感だが、俺は『坊や』の魔力波長を出さない事も出来る。そして魔力の強さは魔石でも持っていれば誤魔化せる。

〈〈どこだあああ！〉〉

そして、俺はどの騎馬にも乗って居ない。田中のバイクからも降りている。星獣は黒衣の騎馬を追っていくだろう。

バイクはともかく馬の速度では星獣に狙われたら逃げようが無い。きつと俺の代わりに死んでいくのだ。俺は歯噛みして、散開していく騎士達の背中を見送った。

「気にする必要はありません。これこそ騎士の、いえ男子の誉れ」

「リヨンさんー！」

そして、俺は白っぽいリヨンさんのラクダで脱出する。こうやって先ずは時間を稼ぐ作戦だ。伸ばされた手を握ると、スマートに見える体から想像も付かない力で一気に駝上に引き上げられた。

「よ、よろしくお願いします」

「これは、役得ですな」

なんで前に乗せようとするのか？ まあ良いけどな。俺は小首を傾げてリヨンさんを見上げる。

「騎士の誉れと仰いましたが、あんな化け物と戦うのは騎士の仕事ではないでしょう？」

「そうですか？ 男子なら姫を守って怪物と戦う想像をするものですが」

「ですが、あんなに大きいのは流石に想像の埒外でしょう」

「ですね。流石にアレは大き過ぎる」

そう言つてカラカラと笑つて見せる。白いラクダにターバンと長衣、全てが真っ白の中に端整な顔だけが浅黒い肌を見せていた。久しぶりに間近で見るが、やはりイケメンである。その顔が、今は闘志に燃えていた。

「それでも、私は化け物と戦いたい」

「どうしてです？」

「人間同士、それも同じ故郷の人間同士、争わなければいけないよりはずっと良い」

「……………」

プラヴァスは、魔女の策謀で内戦一步手前まで追い込まれた。水と土地を取り合い神に血を捧げるのが砂漠の民だが、麻薬と銃を求めて流れる血は汚れていた。

「それを貴女は救つてくれた。化け物と戦うなど何とも無い」

そう言つて笑うが、俺はそんなに良いモンじゃない。力なく微笑んだ。

「残念ですが、私のもたらす救済は『死』です。私は操られていた実の父をプラヴァスで殺しました。操られたままならばリヨンさんも殺したでしょう。そうならず済んだのは偶然に過ぎません」

「構いません。貴女を守って死んだパノツサを覚えていますか？ 彼の魔石を口にしたりアナタに私は救われた。彼を誇りに思うと同時に、嫉妬を覚えるのです。私もナイフを突き立てられて、魔石を食べられたいとね」

「そんな！」

ド変態だな。そう言えばリヨンさんドMだった。勿体ないな！折角のイケメンなのになー。しかし、リヨンさんの覚悟はホンモノだった。

「貴女に殺されるなら悪くない。まして、守って死ねるなら上等な部類です」

「そうですか……少し、気が楽になりました」

実際、少し助かった。俺は、騎士達を追っていく星獣の巨大な背中を見つめる。

「だとしたら、あの星獣もまた、魔女の被害者。私は、彼女を殺したい」

「なんと！ 救いたいのは化け物だと？」

リヨンさんは驚くが、俺にとっては『ママ』でもあるのだ。復讐に狂い、ひたすら人間を殺そうとする姿は悲しくも俺と重なる。

ただし、『ママ』はあくまで俺の『偶然』の被害者だ。星獣は地表で活動する様には出ていない、命をすり減らして暴れているのだ。『偶然』を持つ俺が戦わないと、あまりにも悲しい戦いになる。まして魔女や木村の思惑で、帝国を滅ぼす道具にされるのは見ていられない。

そんな事は、幾ら説明しても通じるはずも無いけどな。

「馬鹿な事だとは思いますが、それでも……」

「ならば、益々頑張らないと行けませんな」

「お願いします。アレを倒すのにプラヴァスの協力は欠かせませんから」

「お任せを！」

胸を張るリヨンさんがおかしくて思わずと微笑めば、少しだけ顔を赤くして目を逸らされた。

ラクダの上、見つめる先では一本の狼煙が上がっていた。

あれこそが集合地点。あそこまで星獣をおびき寄せねば始まらない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

やがて日が暮れて、それでも数名の騎士が星獣を連れ回し、何人もの人間が帰らぬ人となった。

そんな死闘を強いておきながら、俺は明日の決戦に向けてスヤスヤと眠っていた。我ながら凶太くなつたものだ。

そして、目が覚めて朝が来る。

「準備は宜しいですか？」

「出来てますが……良くこんな場所を知ってましたね」

木村が呆れるが、俺の『参照権』は目にした書物を完全に覚えている。かつての星獣は一通り人々の居る町や村を破壊した後、ココから地底に戻ったのだ。

当時は長雨でぬかるみ、底なし沼になったこの場所に、星獣は沈んでいったと記録がある。それ以来、死の沼と言われる一帯には普段はだれも近寄ろうとしない。

そこに今、土木作業をする無数の人間が群がっている。乾季であるこの季節、沼は涸れ果て柔らかな地面となつている。そこに巨大な落とし穴を掘つたのだ。もちろん五十メートルの全身が埋まる大きさは到底無理。あのデカブツの足を引っ掛け、転がす程度が精々だが、それさえ出来ればチャンスはある。

「おいおい！　そう上手く行くかよ？」

田中が悪態をつくが、そう言われても困る。

「怖いなら、今すぐ逃げますか？　どうします？」

隣で土木作業を見守る木村にも聞いてやる。

「ここまでやつたんです。やりますけどね」

「他に手もねえしな」

面倒な奴らだな、ヤレヤレ系か？　俺は日本語でハツパを掛ける。

『リヨンさん曰く、女の子を守って怪獣と戦えるのは男子の誉れらしいよ？』

『アイツは格好付けだからな』

『格好付けても似合うしなあ……』

『そして、変態だしな』

『変態だったなあ……』

二人して辛辣だ。イケメン叩きに余念が無い。しかし、何だかんだあんな化け物と戦おうとする辺り同類だろう。俺も美少女になった甲斐があると言うモノ。

『またまたあく俺、前世で聞いたよね？ 怪獣に襲われてたら助けてくれるかってさ、そしたら流石に無理って素気なく断られたからね』

『全然覚えてねえ』

『俺のログには何も無いが？』

『覚えとらんかあ〜』

俺は柔らかい地面に怪獣の絵を描いていく。隕石が落ちたあの日、木村が描いた絵なのだが、今見るとちよつと星獣に似ているか？ いや、似てないな。

しかし、二人とも全然覚えていなかった。木村が呆れた様子で絵を指差す。

『下手くそな絵だなあ』

『お前の絵だよ！』

言っておくケド、参照権でなぞつたから再現度100%だからな？ そう言うと、二人して顔を見合わせ笑ってやがる。

素直に殺したい。あの日の雰囲気そのままじゃねーか！

……などとふざけていたら、ドスンドスンと地響きが近づいてくる。

横から照りつける朝日とその巨体でスッポリ隠れ、途轍もなく長大な影が馬鹿みたいに笑う俺達を覆っていた。

その巨体を見て、それでも尚、二人は笑う。

『キングゴキブリよりは小さいんじゃない？』

『破壊光線も出さねーしな』

H A H A H Aと肩を竦め、二人で笑い合っている。普通に覚えてるじゃねーか！

星獸狩り2

昇る太陽を背にズシリズシリと星獸がコチラに迫る。あまりに非現実的な光景だ。それを高台から見つめる男が一人。覗いたオペラグラスをポケットに仕舞うと、苦惱に塗れた表情が現れた。

木村だった。見間違いを願って目元をほぐすが、迫る星獸は消えてくれない。木村は逃げ出したいたい気持ちで一杯だった。まだ星獸は数キロ先のハズなのだが自信が持てない、なにせ朝日に引き延ばされた影は、既に辺りを覆っているのだ。それほどに星獸が巨大で、遠近感がおかしくなっていた。

あんなのに、勝てるのか？

ユマ姫の手前バカ騒ぎしたモノの、木村には自信が持てなかった。作戦開始を目前に覚悟が鈍る。

作戦を立てたのはユマ姫だが、実際に指揮を執るのは木村の仕事だ。司令官が不安では士気に関わる。それが解っていないながら、引き攣る顔を隠せずに居た。

『木村よお、ビビってるのか？』

『ビビるだらアレはー！』

『まあな』

ゲラゲラと笑うのは田中だ。既にバイクに跨がり臨戦態勢。伶俐な商人として知られる木村も、前世からの親友には弱音を隠せない。

『でも、俺がビビっちゃ他の兵士が……』

『大丈夫みたいだぜ?』

田中が顎で差す先、黒山の人だかりに謎の熱狂が渦巻いていた。

……しかもノリが軽い。死を覚悟して怪獣を待ち受ける兵とは思えない。ウエイと馬鹿騒ぎ。まるで地下アイドルコンサートの如く。

木村は見間違えを願って三度見するが、コレも現実。消え失せはしない。

『何アレ?』

『戦意高揚のため、ユマ^{アイツ}姫が唄って来るって出てったな』

『いや、それでどうしてああなるんだよ!』

綺麗に盛られた土をステージに、キャピキャピと帝国軍歌を歌う姿は常軌を逸している。

「うなれ〜我らの鬨の声、鉄の大地を守るのだ〜いえい♪」

「「いえい♪」」

「……………」

木村は言葉を失う。

『何アレえ?』

『え? お前が編曲したって聞いたけど?』

確かにした。ただし木村に言わせれば、すり鉢の底に囚われていた時に、戯れに奏でた曲であつた。

「いえい♪」

「「いえい♪」」

そして、合いの手でユマ姫が足を高く上げ健康的な太ももを晒す度に、騎士達が変なポーズをキメている。

オタ芸であつた。

『何アレ?』

『しつけれえな! 知らねえよ! お前が仕込んだんじゃねえの?』

『オットセイじゃないからな? 俺を何だと思つてんの?』

『いや、ユマ^{アイツ}姫がお前のアイデアだつて言つてただけど……』

『ええ……(困惑)』

そしてドン引き。木村にはそんな事を言つた覚えは……

しかし木村には思い当たる節が有つた。提案したのはシユプレヒコール。演説で一

体感を出すために、猪木よろしく1、2、3、ダーとやるようなお約束があっても良いのではとユマ姫に提案していた。

だが決して、騎士の皆でオタ芸を練習しようと言う話では無かったはずだ。しかしコレは、確かに恐怖心を飛ばすには有効かも知れない。だが、幾ら何でも。

呆然とする木村、ソレを見てゲラゲラと笑う田中。

『ビビってるなら、いつそアレに混ざって来いよ』

『笑い事じゃないだろ、良く見ろよアレ!』

『ん?』

馬鹿笑いしていた田中だったが、言われてみればポーズをキメる騎士達の視線は壇上のユマ姫の下半身に釘付けだった。

いい歳したむくつき騎士達が、年若いユマ姫のパンチラを覗こうとポーズの度に揃って首を傾げる光景は異様のひと言。田中の笑いも引つ込むほどだ。

『何アレ?』

『さつきから俺が聞いてんだけど?』

『俺が知るかよ!』

『俺も知らねえよ!』

木村は頭を抱えるが、騎士達は悪くない。誰かが悪いとすれば、あんな短いスカート

を持ってきた木村自身だろう。

なにせ、着せた当人である木村すらスカートがヒラヒラする度に気になって仕方が無いほどのものだから、見せられる騎士達は堪らない。強要されるポーズのせいで視線を逸らす事も隠す事もままならない。

今も木村はチラチラと目が離せなくなってしまうている。これにはさしもの田中も本気で困惑した。

『えええ……』

『いや、なんかホラ、見えそうで見えないから気になって……』

そう、ユマ姫のパンツはギリギリのラインで隠されて、皆の耳目を集めて離さない。極限まで短いスカートだと言うのに、不思議な力が働いたかの様にその中が見通せない。

木村はフラフラとユマ姫の元に吸い込まれそうになって……田中に引き留められた。

『本気でお前まで遊んでる場合じゃ無いだろ、つてか今更アイツのパンツ見てどうすんだよ！』

『いや、待ってくれ、俺は別にパンツが見たい訳じゃ無いんだ。なんならパンツを作ったのも俺』

『その情報は聞きたく無かった』

『いや聞いてくれ』

『拷問かよ』

『なんならデザインしたのも俺、縫ったのも俺、手渡したのも俺だからハットトリック』

『スリーアウトだろ』

『ドレスに合わせたツヤツヤのシルク。大きくレースをあしらいながら清純さを損なわない絶妙なデザイン、時代を無視した立体縫製』

『あのさあ……』

『この芸術の完成を見届けるべく、俺は履いている所も見たいと願った』

『正気かよ?』

『それで、ダメ元で見せてくれって頼んだら見せてくれたんだわ』

『え?』

正直、笑えない。

田中が急に真顔になってしまったのも無理はないだろう。

『オマエ、何を……言ってるんだ?』

『テントの中でさ、心底見下した目で、スカートを捲り上げて……』

『それ、私が聞かなきや駄目なんでしょうか? 素直に気持ち悪いです』

『急に敬語になるなよ……』

『なるだろ、普通に』

親友が突然未知の化け物に置き換わったような落ち着かないモノを、田中は感じて居た。

三人の友情はコチラの世界でも変わらない！ とまでは思ってたが、姿の変化に囚われない友情を感じていただけに、ジョークを越えたセクハラに田中は引いていった。

『だってユマ^{アイツ}姫、中身は高橋^{アレ}だぜ？』

『中身とか関係ない！ 俺は美少女フィギュアだってパンツの確認は怠らない男だよ？』

『知らねえし、知りたくねえ』

『いや、まあ、ゴミを見る目でパンツを見せてくれたのはそれはそれで最高だったんだが』

『最低だろ』

『最高だったんだが！ やはりそれはパンモロ。パンチラとはまたジャンルが違うんだよ』

『その話、まだ続くか？ そろそろ行くぜ』

呆れた田中がバイクに跨がりスロットルを吹かすが……その後ろに木村が飛び乗っ

た。まるで、まだ話し足りないと思はるに。

『おい?』

『俺も、ガチでぶつかる前に全容を見ておくべきだと思つてな』

『そーかよ!』

すつかり吹っ切れた様子の親友に、田中は今度こそ笑いが止まらなかつた。

『ちつと行つてくる』

バイクを走らせユマ姫のステージを横切るとき、田中は大声で叫んだ。するとユマ姫はピツと立てた親指を横に倒し、拳を突き立てる謎のポーズ。ワケもわからず田中もそれを返した。

満足そうにウインクしてくるユマ姫の姿に心がざわめき、田中には居心地が悪かつた。木村の事を笑えない気がしたので。

それを誤魔化すようにバイクを加速、後ろに張り付く木村に尋ねる。

『さつきの拳を横にする奴、アレなんだっけ? 忘れちまつた』

『え? 何? 見てない?』

『はあ?』

しかし、木村は全く見ていなかった。近くに寄ると、いよいよパンツを見るべく目線は下に下にと吸い寄せられていたらしい。

『ええ……(困惑)』

『いや、だつてさ、見ちゃうじゃん。無理だわあんなん』

『大事な場面だつたらー！　なんでソコでパンツ見ようと必死なんだよ、何の合図だか忘れてる俺も大概だよ！』

『知らねーよ、そんなん！　見てえんだもん！　変なのは俺じゃない！　むしろお前が少数派だからね？　みんな見ようと必死だつたからね？』

『お前さあ？　さつきまでの真面目な感じはどこ行つたんだよ！』

『そんなのとつくにログアウトして行つたわ！　おまえ良くアレを見せられてシリアス保てるね、ひよつとしておまえ、鉄でできてるんじゃないのか？』

『オイ！　名作のセリフを汚すな』

それは田中が好きな漫画のセリフだった。好きな作品だけに変なモノに例えてくれるなどゲラゲラ笑いながら突っ込んだのだが……

『いや、わりい知らねえ。……アレ？　なんかのセリフだつたっけ？』
『オイオイ』

しかし、木村は憶えていなかった。ハシゴを外された様な気がして、田中は面食らう。木村なら絶対に覚えていると思つていたからだ。

だが、良く考えれば地球を離れてもう何年も経つ。よっぽど好きな漫画でなくては憶

えているには無理がある。田中だつて当時のクラスメイトの名前が何人も思い出せない。
い。

楽しい事も、辛い事も、隔てなく時間は少しずつ思い出を削つて行く、それが人間だ。それを田中は思い知らされた。

一方で、何も忘れられないのがあのお姫様。その精神はどうなっているのか？

中身は関係ないと断言した木村だが、田中はそうは思えない。

気配やらなにやらで、人より遙かに本質を見る事に長けた田中にとって、ユマ姫の本質はハッキリと人間の枠を越えていた。頭に生えた耳など、その発露として控え目に過ぎる。

田中に言わせれば、アレのパンツを見たいと思う方が、よつぽど正気とは思えない。

『あんたらあれが、人間の形に見えたのか？』

『何か言つたか？』

『いや』

誰にも聞かせるつもりがなかったひと言は、バイクのモーター音に消えていった。

そして、そんな彼らの後ろ姿を見送つたユマ姫も動き出す。

「それじゃあ、コレで終わり。みんなでトカゲ退治と行きましょう」

「「おおっ！」」

何でもない様に言い放ち、騎士達も当然とばかり息巻く。数刻前は内心の怖じ気を隠しきれず、顔を蒼くしていた騎士達だ。

その様子に満足そうに微笑むと、ユマ姫はスキットルの封を開け豪快に煽った。おっさん臭い動作だが、中身は酒では無い。もっと体に悪いモノだ。

プラヴァスの古代兵器内で見つけた液化圧縮魔力。人間が吞めば即座に健康値が削れ死に至る劇薬だが、凶化したユマ姫には気付け薬のようなもの。勿論あの二人が見ていれば吞ませてはくれないので、やっと訪れたチャンスと言えた。

濃厚な魔力でユマ姫の髪がピンクに転じた。霧ギユルドスの悪魔に奪われた魔力が回復していく。

「おおっ！」

ユマ姫の変身に皆が沸く。体に悪いなどは露と知らないからだ。

「んんっ！」

引き替えに強烈な酩酊感に加え、刺激された視神経が明滅するが、同時に謎の全能感をユマ姫にもたらした。

……実は、幼少期のユマ姫が度々やらかしていたのは、この魔力過剰による高揚感が原因なのだが、それを本人も知らない。

とにかく、得意になったユマ姫は土で固めたステージを掻き消した。そう、踊っていたステージもユマ姫の自作。土を盛り上げ整地するなど、今のユマ姫には造作も無い。「では、成果を見せて頂けますか？」

ユマ姫が見たがったのは、星獣を嵌める落とし穴。騎士達だけでなく近隣の農民も動員し、一晩で掘れるだけ掘ったのだ。

「なるほど、()ですか」

ユマ姫が見つめる先、深さが五メートル程の堀が出来上がっていた。僅か一日で五メートルの堀を作るのは途轍もない早業だ。もちろん、雨期になれば底なし沼となるこの場所特有の柔らかかな土のお陰ではあるのだが、それにしても早い。

自慢気に堀を披露する土木担当者だが、ユマ姫は考え込んだ。

なにせ星獣は五十メートル。五メートルでは身長の十分の一程度、階段の段差のようなモノだ。木村としては足を引っ掛け転ばせるには十分な高さと考えたのだが、ユマ姫は納得しなかった。

「下を見てください」

「!? お待ちください!」

慌てて担当者が引き留めるが遅い、重力を感じさせぬゆつたりとした軌道でユマ姫は堀の下へと降り立った。

そう、降り立ったのだ。それが担当者には信じられない。

「馬鹿な！ 立つことなど……」

雨期には沼となる場所である、五メートルも掘れば湿った地層にぶつかり、ズブズブと体が埋もれていく。これ以上掘るならば補強が必要なまでになつていた。

なのにユマ姫は何事も無かつたかの様に立っている。それが、神秘的に映つた。

実際、魔法で浮いているのだから神秘の塊と言つて良い。だが、本当の神秘はコレからだ。

——ズリユツ！

「えっ?」

堀の底が裂け、深さが増していく。ユマ姫が歩く度に、その軌跡に奇跡が起こる。

「コレが！ 魔法！」

見物していた兵士が呆然と見守る先で、ユマ姫は堀の深さを倍にしてみせた。ユマ姫の親衛隊でもここまでの魔法を平時にまじまじと見たのは初めて。

なにせ地を裂く魔法はかなり燃費が悪い。かつて地を裂き^{ザルギルゴール}大牙猪を穴に閉じ込めたユマ姫だが、当時は数メートルの幅でも決死の覚悟を要する大仕事だった。

しかし、今のユマ姫なら鼻歌まじり、魔法で体を浮かせながらも何でも無い。それに、柔らかな泥を掻き分け穴を掘るのは人力では困難でも、魔法を使うなら硬い土を掘

るよりもよほど楽なのだ。

「そんな、あつという間に」

「いいえ、あなた達の献身があつてこそです」

だから、自分達の苦勞は何だったのかと呆然とする担当者をユマ姫は労った。数十メートル歩みを進め、堀全体の深さを倍にして、するりと元の場所に舞い戻っていた。

そうして堀の深さは十メートル。五十メートルの星獣にして五分の一、人間で例えるなら脛を越え膝に近い、足が嵌まるに十分な深さとなった。

「さて……」

「そ、それはドコから？ お止め下さい！」

次にユマ姫が手に取ったのはお馴染みのグライダー。親衛隊一同、決してユマ姫に渡してはならないと厳命されていたモノのだが……彼女が擁する侍女に隠し事など不可能だった。

「少し鼻先を飛んで来ます」

「お待ちを！」

兵達の制止も聞かず、ユマ姫はグライダーで飛び上がる。その姿を呆然と見上げる騎士達はその場から一步も動けずに居た。

強風に煽られ、はためく短いスカートから、誰もが視線を切れなかったのだ。

「ああ、美しい……」

熱に浮かされた様に、誰かが呟いた。

飛び上がる少女を下から見上げる兵士達。だと言うのに短いスカートは鉄壁で、少女の下着を奇跡の如く守り通していたのだから。

一方で、バイクに乗った二人は今まさに星獣へと迫っていた。そこでココまで星獣を誘導してきた命知らずの男と交代する。

「代わるぜー！」

「お願いしますー！」

その男はグリード、ユマ姫親衛隊の副長だ。ゼクトール亡き後、繰り上がりの現場指揮官となった彼が自ら最後の囷として最も危険な役目を買っていた。

しかし、巨大な星獣の囷となる作業は想像を絶するほどに精神をすり減らす。既に何人も騎士が圧死させられていた。体力の限界は近く、早く代わるに越したことは無い。

「オラ、コッチだトカゲ野郎！」

「駄目だ、コッチを見ない」

そして、後半飛躍的に被害が増えた原因がコレだ。

交代の騎士が現れてユマ姫に見せかけた魔石を手渡しても、星獸は疲れた騎馬を狙って諦めなくなつた。星獸の殺意が増している。このままではグリードが死ぬのも時間の問題。

「しゃーねえ、派手に挨拶しておくか！」

「オイ！ 正気かよ！」

木村の制止も聞かず、田中はスロットルを開ける。それはもう星獸が倒れ込むだけでバイクごとペしゅんこになる距離。

「マジかよオイ！」

後部に張り付く木村は悲鳴をあげるしか無い。

質量と言うのは、それがそのまま存在感だ。近すぎて全容が見えずとも、近くに寄れば肌で感じるモノがある。巨像や高層タワーの下に立つだけで圧倒された経験は誰しもあるだろう。

それがまさに生きて歩いてる生物ならば、どれほどのプレッシャーか？ なにせ歩くだけで空気が揺れ、バイクが跳ねるほどに地面が隆起する。

桁違いの生命を前にすれば、誰しも睨まれた蛙のごとく冷たい汗が溢れてくる。そんな状況にあつて、ゲラゲラと馬鹿笑いをあげて、あろう事か田中はハンドルを手放した。「任す！」

「オイオイ！」

後ろに座つていても、自在ルー・デルオン金腕を操る木村ならハンドル捌きなどお手のもの。

そうして空いた両手でもつて、田中は抜刀。

ギリリと輝く刀身は物騒な程に大きい。野太刀だ。人を斬るには大きすぎる刀。坑道に持ち込んだ対人用の刀と違い、コレは魔獣退治専用に作らせたモノ。

思い返せば、グリフォンとの戦いが佳境に迫る時、ギリギリの所でマールロウが運んでくれた刀でもあつた。

「足の間を抜けてくれ！」

「イカレてるだろ！」

悲鳴をあげながらも木村はハンドルを切り、進路を星獣の真つ正面にスロットルを吹かす。田中は仁王立ちに構え、激しい揺れでもピクリとも動かない。木村の運転を信用しているのだ。

巨体が完全に太陽を遮り、辺りは夜かと思う程に薄暗い。巨大な壁が迫つて来るようなモノ。そんな中、星獣の股から抜けてくる一筋の光に向けてバイクが猛然と疾走する。

それでもまだ遠い。遠近感がおかしくなるが、まだアチラも届く距離ではない。本番はコレから。二人ともそんな意識でいた。

……しかし。

——ドオオオオオオン！

強烈な振動、腹に響く地響き。全身を衝撃に打ち付けられ、気が付けばバイクごと二人は虚空に投げ出されていた。

宙に舞いながら、走馬灯の様にくっきりと溶けていく時間の中、木村は僅か数メートルの距離、そこに突如として巨塔がそびえ立っているのに気が付いた。

それは星獣の足だった。目障りなアリを踏み潰そうと踏み込んで、あまりの速度に目測を誤った。そんな所であろうかと分析する。

目測を誤ったのは田中も一緒だ。人間にとつては遙か遠い星獣の姿を前にして、まだ間合いの外だと誤認した、高速で迫る足は壁の如くで却って認識が出来なかった。蹴っ飛ばされなかっただけ運が良かったと言えるだろう。

だが、九死に一生とは喜べない。その衝撃で宙を舞うほどの衝撃を食らい、肉体的にもかなりのダメージを負っているはずだ。

その前に、このままでは地面に叩きつけられて大クラッシュ。死がそこまで迫っている。なのに木の葉のように宙を舞いながら、それでも田中はバイクに仁王立ちに動かない。

木村は田中の背中を黙って見ていた。パニックになった頭がスツと冷える。

まだ、斬る気である。構えをピクリとも崩さないのだ。

ドン・キホーテだってココまでの馬鹿じゃない。吹き飛ばされれば考えを改める。完全にいかれてやがる。

思わず笑った。その背中^{ルーデルオン}の頼もしさに自在金腕を振るい、塔の如き星獣の足に引つけける。それを支えにバイクを姿勢制御すると同時、刀が届く絶好の間合いまで引き寄せた。

言うまでもなく、やけくそだった。

そうして死を間近に停止する世界の住人になった木村は、そこで始めて本当の意味で田中の剣を目撃する。

仁王立ちにピクリとも動かなかった田中が、突如として動き出す。音の無い静止した世界の中にあり、田中だけは当たり前の速度で剣を振るっていた。

一切の無駄のない動き。あまりにも自然で、見えているのに、目に入らない。流れる所作のまま、いつの間にカチリと納刀されていた。

そして、時間が動き出す。

「うべっー」

数メートルを落下して、地面に激突した車体。強力なサスペンションでも抑えきれない衝撃で、後部シートの木村はゴムまりみたいに跳び上がった。

なんとか落車せずに済んだのは、言うまでもなくハンドルに巻き付けた自在金腕ルー・デルオンのお陰だろう。

一方の田中は、ガツチリと太ももに車体を挟んで動かない。納刀の姿勢のままに振り返って狂暴な笑みを見せる。

「斬ったぜ？」

「知ってるよ！」

その返答には田中の方が驚いた。

「見えたのかよ？」

「嫌でも見えるわ！」

「へえ？」

境地へと踏み込んだ親友が、田中には嬉しくて堪らなかった。

〈〈〈 痛いっ！ このおおお！ 〉〉〉

——ギイイイイイイ

星獣が悲鳴をあげる。斬られたのは踏み込んだ右足のほんの表面。ネズミに噛まれた程度の痛みだが、それでも無視は出来なかった。

もちろん星獣の魔力波は二人には理解出来ない。それでも田中には肌で感じるモノがあつたらしい。

ハンドルを木村から奪い、更に加速する。

「よおおし、喜んで貰えたみてえだな！ もっと斬ろうぜ！」

「嘘だろ？」

斬つたのは踏み出された右足。ならばそのまま駆け抜けて、左足も斬る。そんな無謀を田中はアツサリとしてのけた。駆け抜けざまに足を斬り裂き、股を抜け、星獣の背後に回り込む。影から抜け出し、晴れやかな朝日が二人を照らす。

「全然、見えんかった……」

「おいおい」

ただし、今度は木村にその太刀筋を見る事は出来なかつたが。

〈〈〈 許さないい！ 〉〉〉

星獣は背後を振り返り、バイクを狙つて手や足を伸ばすが、掴まるような二人では無い。完全にヘイトを奪つていた。

後はこのまま落とし穴に誘導するだけ、だが一つ問題が。木村は背筋が寒くなる。

「このままじゃ俺達まで穴に落ちちやうんじやね？」

「仕方ねえだろ！」

田中は既に虎の子のバイクをココで捨てる覚悟で居た。バイクごと落とし穴に突っ込み、星獣が嵌まる前に身一つでなんとか穴から這い出す離れ業をしてのけるつもり。

「オマエはそろそろ降りたらどうだ？」

「馬鹿言え、最後まで送って行けよ」

だから木村だけ先に降ろそうとしたが、木村は木村でなんとかバイクも生かせないか思考を巡らせていた。自在金腕次第でなんとかなると思つたのだ。

しかし、それらの覚悟は無駄となる。最初に気が付いたのは田中だ。向けられていた星獣の強烈な殺気がピタリと収まったからだ。

「オイ、アレ！」

振り向き叫ぶ。見上げると蒼穹に浮かぶ大風が目に入った。ユマ姫だ、それは最も恐れていた事態。

「アイツ、やりやがった」

「いや、悪くない」

田中は毒づくが、木村としてはバイクを無駄にしないで済むのはありがたい。それに間近で確認すると、星獣は知能があるし、想定より目も悪くない。

地底生物だからと、東から誘導し逆光を利用して落とし穴を陰に隠蔽する作戦だったが、バイクを追いかけ、下を見ながら歩く星獣を落とし穴に嵌めるのは難しく思えていた。

「だが、目の前を飛び回る蚊が気になれば、足を踏み外す事もある」

「そーかよー！」

なにより、既に相手が空ならば、今さら心配をしても始まらない。

田中はバイクを加速する。そうして、一足先に辿り付いた落とし穴。

そこで一同は、たった一人で星獣の鼻先を飛び回るユマ姫を固唾を飲んで見守る事になる。

〈〈〈 ママ！ 僕だよ！ 〉〉〉

——ギョオオオオオオオオオ！

〈〈〈 オマエだけはあああ!! 〉〉〉

星獣の叫びは勇敢な騎士達にして心胆を寒からしめる。冷たい汗が止めどなく流れる。

だが、一人で戦う少女を思えば逃げ出す事など出来はしない。

いよいよ星獣の巨大な影で、周囲が夜の如く暗くなる。真上に感じる凶悪な存在を目にいれないよう、誰もが足元を見て持ち場についた。

指揮を執る木村を除いては。

「縄を張れ！」

木村の号令で綱引きよろしく星獣の足元にロープが張られた。滑車を利用して二メートルの高さに張られたロープを素早く木の支柱に結びつけていく。

いや、ロープではない。ワイヤーだった。

エルフの技術を利用して、木村は太いワイヤーを手に入れていた。

なにせ決戦の地として当初目論んでいたのはスフィール周辺。ゼスリード平原に至る山道やゲイル大橋など、トラップを仕掛ける場所には事欠かない。

結局、撤退戦を仕掛ける機会が無く、ここまで機会がなかったワイヤーをココで使用している。

足元に突然張られたワイヤー。目の前を飛ぶユマ姫に目を奪われる星獣には、気が付く事が出来なかった。

〈〈 あああ？ 〉〉

星獣の足にワイヤーが掛かった。もつとも懸念していた部分が成功した瞬間。

だが、そのパワーは桁違いだった。万吨単位の質量に全てが倒され引き摺られる。地下深くまで刺さった木の柱も、ワイヤーを結んだ馬も、握る人間も、ゴミの様に引き摺られ、地面に埋められたプラウ（牛馬に牽かせる巨大な鋤の様な耕運機）は地面を根こそぎひっくり返して、それでも星獣の歩みを少しも止められない。

だが、それで十分だった。

人間もそうだが、ちよつとした段差や軽い小物に躓くことがある。それが意識の外ならば、慌ててたたらを踏むハメになる。

そうして踏み込んだ先にこそ、本命の落とし穴が掘つてある。

〈〈〈 ええつ？ 〉〉〉

「やった！ え？」

しかし、驚いたのは星獣だけではない。指揮を執つていた木村もだ。

無様に踏み出された星獣の足は、木村の予想を越えてより深く穴に嵌まった。ユマ姫の仕業である。ズブズブの堀の底に嵌まり、巨体が見るみる沈んで行く。

喜ぶべきかと言うと、そうでもない。小さい段差につまづいて転んでしまう事があつても、膝までであるような段差となればそこで動きが止まってしまう。転がしてから頭を狙う木村の計画は狂つてしまった。

〈〈〈 もおお！ 〉〉〉

嵌まつてしまつた左足を抜くべく、星獣は右足を踏み出した。力を込めた右足に耐えきれず、周囲の地面が陥没していく。

「もういつちよ！」

そこに走り込んでいたのが田中だつた。先ほど斬りつけた場所に、再びの一閃。

〈〈〈 痛ツ！ コノお！ 〉〉〉

星獣は暴れ、体勢を崩し、遂には地面に突つ伏した。それを見た木村が号令を掛ける。

「今だ！ 掛かれ！」

騎士達が槍を手に星獣への突撃を開始した。

星獸狩り3

ユマ姫に目を奪われ、木村が張ったワイヤーに躓き、堀に嵌まった星獸は、トドメとばかりに踏み出した足を田中に斬られ、遂に地に伏し倒れ込む。

五十メートルの巨体が音を立てて大地へと沈んでいく。

「今だ！ 掛かれ！」

木村の号令で星獸へ突撃する騎士達。だが、その数は少ない。

千人近い騎士を擁しながら、突撃部隊に選ばれたのは僅かに百騎のみ。コレはいかに少ないが、選ばなかったのではなく、選ばなかったと言うのが正しい。

馬が星獸へと立ち向かえなかったのだ。

星獸から逃げる時は良かったが、星獸に向かわせようとする多くの馬が動こうとしなかった。訓練された軍馬が、である。

陣を組み一体となつて蠢く軍勢の威容は巨獸にも例えられるが、本物の巨獸に立ち向かえる軍馬は稀だった。檄を飛ばし愛馬をなじった騎士も少なくなかったが、星獸の足元に立たされた今、連れ添った愛馬が正しかったと遅まきに理解した。

生命としての格が違う。たとえ万の軍勢で立ち向かったとしても、どうにかなる相手

とは思えなかった。

だからこそ、そんな星獣に立ち向かえた百騎は人馬一体の猛者ばかり。手が届く所まで降りてきた頭部に、ランスを構えて突撃する。

「オオオオオツツ！」

だが、雄々しい突進は不発に終わった。グチャリとした手応えと、めり込む馬首。泥だ。星獣は泥を纏っている。

体温が高い星獣にとって、保温の為の泥は極めて重要だった。それがそのまま鎧となる。土を抉る空しい手応えに騎士達は顔を顰める。

「そのまま泥を削れ！」

しかし、それで良かった。ここまで木村の読み通り。騎士達は泥に悶える馬をなだめ、槍を突き刺し、泥を剥ぎ取る。

——ギユオオオオオオオオン!! <<<< もおおおお! >>>>
「退避！」

そして、星獣が暴れる直前に一斉に後退する、ここで初めて木村の仕事だ。装甲車の上、導火線に着火する。

——ドオオオオオン!

星獣の咆哮に負けない強烈な発射音。

大砲だ。木村は鹵獲した大砲の一門を装甲車の上に固定していた。今回、その大砲を限界を超えた火薬量でぶつ放す。ここで使い潰すと決めていた。

——ピギヤアアツ！　<<<<　痛いイイ！　>>>>

命中！　強烈な反動で装甲車が音を立て後退する。木村は硝煙の向こうへ叫んだ。

「全軍、追撃！」

言われるまでもない、既に騎士達は動いている。大砲の着弾点は大きく抉れ、真つ赤な血が滴っていた。

そこへ騎士達が槍を手に再びの突撃。今度こそグサリと肉を抉る手応え。

「なにっ?」

しかし、その手が焼き付き、騎士達は槍を手放すハメになる。

無理もない、なにせ星獣の血は摂氏千度にも達する。どこまでが血で、どこまでがマグマなのか区別がつかない。その巨大さだけでなく、根本的に命のあり方が他の生命体と異なるのだ。その本質は凝縮したエネルギーの塊と言った方が近い。

突き刺した槍がひしゃげる程の灼熱が、固く握った手の肉を焼いていた。

「刺せ！　刺すんだ！」

それでも、騎士達は槍を拾った。手が焼けるのも構わず星獣へと突き込んだ。その尋常ならざる執念に、星獣も反応する。

ココに来て、星獸は気が付いた。この人間達は本気で自分を殺そうとしているのだと。星獸の『ママ』は、今の今まで、ただ虫に噛まれたとしか思っていなかった。巢を守る蟻が近づく者を襲うように、ワケも解らず攻撃しているだけだと思っていた。だから無視してきた、狙うべきは『坊や』を騙り、呪われた運命の鍵を握る危険な個体。『ユマ姫』のみ。そう思っていた。

だが、或いは愛する『坊や』もこうやって殺されたのかと思ひ至る。

——ギャピィィ！　　<<< 殺す >>>

今までとは異なる星獸の危険な鳴き声。槍を突き込もうと突進していた騎士の目の前で、ガパリと音を立てて巨大な顎門あぎとが開かれる。飛び込んだ地獄の門の向こう側、広がる光景は当然に地獄だった。

「なっ!?!」

まるで剣山、言葉のまま剣の山だ。星獸は元より岩石を噛み砕き、穴を掘って生きていく。それを可能にするのが炭化ケイ素の牙の群れ。ザルギルゴール大牙猪がカーボンの毛皮を持つように、星獸の体も魔力により炭素化合物の精製を可能としていた。

——ギャリギャリ!

口内に飛び込んでしまった騎士は、瞬時に分解させられた。

炭化ケイ素の歯と、生命の枠を外れた咬合力をもってすれば、金属鎧を着た騎士であ

ろうと鉛玉を潰すに等しい。なにせ古代の研究施設ですら土くれ同様に穿ってみせたのだから。

——ガパッ

「さっ、散開!!」

そして、再び開かれた口内を見せつけられた騎士達は、噛み潰された同胞を目に恐慌に陥った。蜘蛛の子を散らす様に逃げていく。

作戦は失敗に思われた。

「コレを！ 待ってた！」

いや、ここまでが木村の計算だった。目の前にエサがチラつけば噛み付いて来るのは、魔女の死に様で痛いほど目に焼き付いている。

ならばやる事は一つ、ゲームでも敵の弱点は目か口内と相場が決まっている。

「撃てえ！」

——ドオン！

大砲！ 二射目！ しかも、今回発射したのは鉄球ではない。

星獣の口内に着弾するや、二回目の爆発。

——ドガアアン！

炸裂弾。密閉された口内で金属片をばらまき、星獣に致命的なダメージを与える。

……ハズだった。

——ギッ！　　<<<　このおお!!　　>>>
「なんで？」

硝煙の中から現れた星獣は殆ど無傷、コレには木村も悲鳴をあげた。

星獣は地底の高温高压環境で生きている。炸裂弾の熱と衝撃、金属片などモノともしなかつた。特に口内は丈夫に出来ている。

想定外はそれだけではない。

「傷が……埋まっていくな？」

目を疑う回復力。

大砲の初撃、そして決死の突撃で出来た傷跡がみるみる塞がっていく。同じ生き物と思えない常識外れの光景は、騎士達の心を折るに十分だった。

「撤退だ！」

泥まみれの体を引きずって、騎士達の撤退が始まる。さしもの木村も打つ手無くそれを見守るしか無い。

そんな中、ただ一人、諦めていない男が居た。

「オラァー！」

田中だ。

この男は大砲の衝撃を隠れ蓑に、大胆にも星獣の頭上に飛び乗っていた。狙うは何か？ 口内が駄目ならば残るは一つしか無いだろう。

目だ！ 狙うは星獣の右目、それも真上から、刀を真つ直ぐに突き刺した。

——ギユユユイイイイイ！

「よつとー！」

それでいて素早く刀を引き抜き、狂ったように暴れる星獣の背からヒラリと脱出してみせるのだから、一部始終を見ていた木村は笑うしかない。

『出来るうー！』

『たりめーだろ』

かなりの距離だが、昂ぶる田中の耳には木村の歓声が届いていた。一種のゾーン状態。引き延ばされた時間の中で、憎まれ口を叩く余裕すらある。

——ギョオオオオオ！ <<< 殺すう！ >>>

その余裕も、星獣が冷静さを取り戻すまでだった。見開いた目に、傷が無い。

『効かねえのかよー！』

『嘘だろ？』

星獣は瞬膜、もしくはは瞼なのかは判然としないが、斬られた直後は目を閉じて痛みに悶えていた。

しかし、それも数分。再び開かれた目は潰れてはいなかった。充血した瞳を晒すのみ。瞬時に回復してみせたのだ。

「どうやって、倒すんだ……」

そんな誰かの呟きは、その場にいた全員の心の声だった。あまりにも巨大な怪物で、人間はその表面を削ることしか出来ないが、その程度では数刻で回復してしまふ。

まさに、常識外れの無敵の怪物。それが星獣だった。

あまりののでたらめに、田中ですらも声を荒らげる。

「詰んでんじゃないか！ ゲームバランスおかしいだろ」

「一応、理論上は倒せる。古代人は倒したらしいし」

木村は、その方法をユマ姫から聞いていた。

「マジかよ？ どうやって？」

「聞きたいか？」

「早くしろ！」

「核だよ、元々核はその為に作ったらしいぜ」

「クソかよ！」

身も蓋もない暴力だけが突破口。ただし、中世レベルの現人類には手段が無い。

田中は舌打ち、木村は帽子を目深に地面を見つめる。

誰もが絶望に囚われる中、ただ一人ニコニコと笑顔を浮かべる人物が居た。

可愛らしく小首を傾げ、後ろ手にはそれで隠したつもりなのか、小さい体では全く隠せない巨大な大剣を引き摺る。

ユマ姫であった。

「そろそろ、私の出番でしょうか？」

「引っ込んでろ！」

本気でイラついて、田中は声を荒らげる。何をやる気か知らないが、ロクでも無い事なのは間違いないからだ。

かといって、他に突破口は無い。

「もう、保ちません！」

注進して来たのは一人の騎士。星獣拘束部隊の人間だ。馬が従わなかった残りの騎士達も、なにも遊んでいた訳では無い。

バリスタの矢にワイヤーを括りつけ、星獣の体に突き刺し、巻き付け。身を起こすのを妨害していた。隙あらば逃げようとする馬にワイヤーを繋げ、騎士達も綱引きの如く引っ張って、星獣の巨体を泥の地面に縫い付ける。

言うならば九百人の騎士による、ガリバー旅行記の小人役。

立っている状態では相手にもならないが、相手は堀に嵌まって身動きがとれない状

態、更には頭部への攻撃と田中の剣閃が幸いし、一時は星獸を完全に地面へ縫い付ける事に成功していた。だが、それも限界を迎えている。

どうする？ 木村の脳裏に幾つもの作戦が過ぎるが、どれも確度は低い。いつその事、頼つてしまうのもアリか？ 藁にも縋る思いで木村はチラリとユマ姫を窺う。

——ぶんっ！ ぶんっ！

そこには、王剣をバツトみたい振り回すユマ姫が！ ご丁寧にもネクストバツターズサークルまで描いてある。

……アレは、駄目だ。

木村は即座にユマ姫投入を却下。そうなると頼れるのは……爆薬は効かない、罨も致命傷には至らない、毒だってあの高音に焼けてしまう。

悩みに悩む木村はずり落ちた帽子に顔を埋めて熟考する。そのとき、何かポツリと帽子のつばを叩いた。

雨だ！

乾季のスーリーンに雨が降った！ 見上げる先、急造の櫓からモクモクと昇る狼煙が目に入る。死苔茸チリアムの粉が舞い上がり空へと溶けている。

昨日からの仕込みが、今成った。リヨンさん以下、プラヴァスの部隊が雨を降らせる事に成功していた。

雨さえ降れば、この地は沼に変わる。足止めは容易だ。騎士達に活気が戻る。

「もう少し保たせて下さい」

「ハッ！」

そして、いよいよ本降りになった雨音をかき消す星獣の悲鳴。

—— ピイアアア！ <<< 寒いい！ >>>

降りしきる雨は星獣の泥の鎧を溶かし、体温を奪った。数メートルしかなかった堀は、今や呪われた底なし沼に変じている。

これこそが、前回『ママ』が地上から撤退した原因。暴れている内に雨期が来て、沼に嵌まり、体温を奪われて、そのまま地中に戻ったのだ。

当時、帝国の民や兵士の多くが星獣の犠牲になり。最後に残った地元騎士団が全霊を賭けてこの地に誘導。一緒に沼へと沈んだのだった。

ただし、英雄的活躍を果たした騎士達の家族への補償はまるで無かったと言われている。それほどスールーンは壊滅的な被害を受けたからだ。

犠牲になった騎士の悪霊が今でも沼に囚われている。そんな伝承が今でも地元では信じられていたほど。

その悪霊が乗り移ったのか、騎士達は星獣を押さえ込むべく泥に沈んでも掴んだワイヤーを離さない。

一緒に沼へと沈む覚悟でいた。

木村は雨に打たれながら、口角を吊り上げる。

勝った！ このまま粘れば前回同様、星獸を倒す事は叶わずとも、撤退はさせられる。元々、倒す必要など何も無い。なんなら倒したのだと喧伝してしまっても構わない。確かめる術など人間には無いのだ。

「フフツ」

聞こえて来たのはクスクスと鈴を転がす笑い声、ただし、笑みを浮かべる木村自身のモノでは決して無かった。

「終わったつもりで居ますか？ まだですよ」

ユマ姫だった。雨に打たれ、元々過激な衣装が、肌張り付き透けている。

ただし、今はそれに目を奪われる余裕すら木村にはない。言葉の意味を問い直す。

「しかし、今回はそれで帰ったと」

「確かにそう、散々に暴れて、八つ当たりが終わって。スッキリして、寒くなったから帰ったに過ぎません」

「……今回は、違うと？」

『『ママ』は私を殺す為には何があっても止まらない。止まれるハズが無い』

「ママ？ とは？ それは、どういう？」

木村には言葉の意味が解らない。ユマ姫はここまで全てを説明してはこなかった。説明しても意味が解らないだろうから。

『ママ』はずっと、『坊や』が死んだ本当の理由を探していた。『偶然』の正体を探っていた。きつとそれが私だと思っている。だったら、絶対に諦めない。星獣はこんな事では死にません。少しだけ『小さく』なるだけです」

ユマ姫の不気味な予言。木村は言葉をなく立ち尽くす。

いよいよ土砂降りに打ち付ける雨は、嵐の様相を呈していた。

「さあ、踊りましょうー！」

ユマ姫は狂った様に笑い、王剣を構えた。

その先にはゆっくりと立ち上がる星獣が、山の様な巨体を晒していた。

星獸狩り4

さあ、ぶつ殺してやる！

ざあざあと降りしきる雨の中、目の前に立ち塞がる星獸は首が痛くなる程に巨大だ。

前世ではこう言う場面に憧れた。

身一つでドラゴンと向かい合う勇者。ドラゴンと言うより怪獸に近いけど、それでも紛う事無きファンタジーの景色だった。

「フフッ」

その事実がすこし可笑しい。こんな状況で笑うもんだから視界の端にギョツとした顔の木村が映るけど。それがすこしも気にならない。

今なら解る。俺は勇者になれない。困ってる市民とか、女の子とか、そんなモノの為に巨大モンスターと戦えない。

今だって圧倒的な存在感に押しつぶされそうだ。呼吸は浅くなるし、手は震えて力が入らない。どこかフワフワと落ち着かない。

それでも戦いたいと願うのは、理不尽な世界への強烈な怒りがあるからだ。

どうして父も、母も、兄も、それにセレナも、死ななくてはならなかったのか？

『ママ』だって『坊や』を守りたかっただけ、なのになんで『坊や』が死んで何百年も経った今、俺や魔女に振り回されなくてはいけないんだ。

理不尽だ。何もかも上手く行かない。

苛立ちに盤面をひっくり返して癩癩を起こしたくなる。グツグツと怒りが収まらない。

死んだって構わない。むしろ死んだ方がスッキリする。そんな怒りに任せ捨て身の特攻だけが、俺をあんな怪獣へと駆り立てる。

握り締めた父譲りの王剣が軽く感じる。星獣の記憶を回収して、俺の体はまた作り変わった。魔力を腕力へと効率的に変換出来るようになっていく。

細腕をそのままに、力だけが強くなっているのだから、不思議パワーと言うしかない。ブンブンと素振りして木村にアピールしたのは、全くの逆効果だったけどな。

約束では打つ手がなくなった時が俺の出番。それが今だった。

木村は今も苦々しい顔で俺を見つめる。

「何か、作戦があるのですか？」

「何も？」

俺はあつけらかんと言いつつ。

ここまで何をやった？ 穴を掘り、雨を降らし。沼に嵌めた。もう俺の作戦は打ち止

めだ。

提案しておきながらアレだが、解っていた。そんなんじや『ママ』は倒せない。

この世界は、何時だって理不尽に出来ているのだから。

勝ち負けなんてどうでもいい。後はもう、苛立ちのままにこの暴力をぶつけてやりたくて堪らないのだ。

いよいよ飛び出そうと、剣を構えて歯を食いしばった時、ドブネズミみたいになった田中が現れ、泥だらけの顔で笑った。

「骨は拾う、好きにやってこい」

「もちろんです」

答えると同時、垂直に跳び上がる。

今の俺の脚力と、王剣から噴き出す空気圧をもつてすれば。グライダーなど無くても空を飛べる。

飛ぶ、飛ぶ。ビチャビチャと顔面を打つ雨を無視して、高く、高く。

——グガアアアア！

〈〈〈 お前だけは！ 〉〉〉

あつという間に数十メートル。星獣の目の前に躍り出た。突き出された巨大な嘴に、まん丸の目玉。なんとまあ、化け物らしい姿じゃないか！

間近で見れば、『ママ』の体からは大量の湯気が立ち昇っていた。体内の熱がみるみる失われている証拠だ。それでも『ママ』はこの雨が降りしきる中で、俺への殺意を収めない。

刺し違えてでも俺を殺る気だ。これだけの巨大生物が、小さな俺を本気で殺そうとしている。

ああ、光栄じゃないか！

「ぎげんよう」

だから、俺も礼を尽くして挨拶を返す。怒り狂う『ママ』の鼻先に降りたつて、スカートを掴まみ頭を下げる。

——ガアアアアアア！

〈〈死殺殺死 〉〉〉

もはや意味不明な怒りだけが、魔力波に乗って叩きつけられる。怒りに任せて『ママ』が身をよじっただけで、俺はアツサリと宙を舞った。

更に、高く、高く、打ち上がる。手を伸ばせば雨雲に届きそうな程。

クルクルと回る世界の中で、俺は眼下にパカリと開かれた星獣の顎門あごとを認めた。なんとまあ、凶悪に牙が並んで、ピーナツツ感覚で俺を食べようと待ち構えている。

「フフツ、アハハハツ」

俺が、ピーナッツ！ なぜだか笑いが止まらない。

落下する勢いに加え、宙を蹴って、更に加速。落下地点を少しだけズラし、降りしきる雨を追い越して、俺は勢いのままに王剣を星獣の鼻先に突き刺した。

更に、深く、深く、突き刺した。泥を弾き飛ばし、星獣の肉を抉る。

——ウガアアア！

振り落とそうと嘴をブンブンと振り回すが、深く刺さった王剣は星獣の肉にめりこんで、決して獲物を離さない。

「ハハハハハッ！」

笑える。巨大生物に振り回されて、まるでジェットコースターだ。強烈なGは内臓を潰し、視界を暗転させ、耳や、目からダラダラと血が流れた。

でも、それが端から治っていく。俺の体は、とつくに人間を辞めていたらしい。星獣の回復能力すら手に入っていた。

——ギイイイイ！ バチン！

いよいよ『ママ』は怒り狂い、蚊を叩くみたいに俺を殺そうと手を打ち付けてきた。

回復能力があると言っても、ミンチになったら死ぬだろう。俺は王剣を引き抜いて、星獣の体を走り回る。

「掴まえて」覧なさい！」

ケラケラと笑い、命懸けの逃避行。嘴から、肩、肩から胸、胸から胴へと駆け下りる。泥を跳ね飛ばし、垂直に切り立った皮膚の上、笑いながら駆けていく。それが少しも苦しくない、魔法の移動は、いよいよ神懸かった制御を見せた。

右足を踏み込み飛ぶ、今居た場所を『ママ』の右手がグチャリと潰す。スローモーションになる世界で、雨に混じって降り注ぐ泥を踊るように躲した。

今度は胴体を垂直に駆け登り、剣を振り、踊れば、星獣の血が舞った。『ママ』の左手が一带をなぎ倒す様に攫うが、俺は王剣を棒高跳びみたいに叩きつけ、宙へと躲した。降り注ぐ泥も、飛び散る血も、少しも俺を汚す事が出来ない。

土砂降りの雨のなか、真っ赤な血と、真っ黒な泥を掻き分けて、俺のピンクの髪の毛が魚みたい泳いでいく。

そうして回避を続けると、吹き出る水蒸気が一層濃くなる。怒りのあまり『ママ』の体温が上がっているのだ。

体表の泥が赤熱し、マグマの様に変色している。痛いほどに打ち付ける雨の中、コレなのだから、体内はどれだけの温度に達しているか計り知れない。

気が付けば、歩ける場所が減っていき、打ち付ける巨大な手に追い込まれていく。

そうして辿り付いたのは、頭の天辺。世界を見下ろす頭頂部。ぬつと持ち上がった『ママ』の両手。迫り来る両の手は壁みたいで、俺には何処にも逃げ場が無かった。

——ヤバいな。

ココに来て、流石の俺も笑みが引つ込む。大分調子に乗りすぎた。四方を塞がれ、空いている頭上は異。空では急制動で躲せない。すぐに打ち落とされるだろう。

巨大な両手が俺を潰そうとゆっくり迫る、まるで動く壁だ。強烈な圧迫感。組んだ両手に囚われて、さしづめ俺は籠の中の鳥。

——カッ！

その時、強烈な輝きが影を掻き消し、色を奪った。突如として、白と黒だけの世界が訪れる。

——ドオオン！

直後に爆音。雷！ 近い。

そして、首筋にチリチリと強烈な痛み。

ああ、そうだ。こんな時だって俺の『偶然』は容赦しないんだ。だけど、それが却つて心地よい。

来る、来るんだろ？ 来いよ！ 俺は王剣を振り上げ、堂々と構えた。

瞬間、再びの閃光。時間が溶けて、色が無くなる。全てが間延びしたようにゆっくりと蠢き、莫大なエネルギーが掲げた王剣に集まるのを感じる。

色の抜けた白黒の世界で、俺は王剣を振り下ろす。

——ジジジジッ!

雷の直撃で帯電した王剣が、星獣の脳天に突き刺さる。

王剣に内蔵した機構が暴走し、星獣の肉を斬り裂き、暴れ始めた。強化された俺の膂力すら振り払おうと、肉を引き裂き、暴れて唸る。

王剣は言わば巨大なシュレッダーだ。一度肉に噛み付くと、斬り裂くまで止まらない。

そのエネルギーが、雷で暴走していた。星獣の肉を掻き分けながら、俺を引き摺り加速を始める。

間延びした世界でなんとか王剣を握り締めると、強烈な加速度に骨が軋んだ。溶け出した時間をまるきり無視した王剣の加速に、俺の体が振り回される。

——このまま、ぶった斬る!

ギリギリと歯を食いしばり、人外の膂力と魔力を総動員し、王剣の暴走を押さえ込む。肉を掻き分ける王剣を握ったまま、俺は星獣の頭から飛び降りた。

頭頂部から、顔、首、胸、胴、そして、足。全てを垂直に斬り裂いて、一瞬で大地に着地する。

まさに、雷光の一閃。

ドンツと着地した俺は、泥に塗れて中に埋まった。帯電した王剣ごと。

「アガガガッ！」

そして、漏電！ 体が痺れる。

俺の体がグチャリと泥に沈むのと、ズシンと地面が揺れて、星獣がひっくり返るのは殆ど同時だった。

——グギヤアアアアア！

〈〈〈 痛い痛い！ 〉〉〉

『ママ』の悲鳴が心地よい。そう言う俺は、泥に埋まり、呼吸が……ゲエ。

「締まらねえなあ」

そこを引つ張り上げられた。田中だ。

「ガッ、ふう……星獣は？」

「効いてるぜ」

田中が指差す先、ぼんやりと目が霞むけど、それでも倒れ伏す星獣の巨体は見間違えようがない。

「どうです？ 惚れ直しました？」

「まあな」

「え？」

惚れたの？ いやん。

「チツ、剣で怪獣とやりあえるんだ、男なら惚れるだろ」
「ああ」

そうだよな、田中が幾ら強くても、星獣の相手は無理。それだけ今の俺は別格だ。技術以前に魔法とか、回復能力とか、全てが人間の枠の外にいる。

『羨ましいか?』

『そりゃーな』

『ふふん!』

どや顔でいると、鼻を摘ままれた。痛い。

そこに、木村も走り込んでくる。その第一声は？

「おい、やったのか?」

「あああゝ」

言っちゃうか、それ、言っちゃうかよ。

魔法の言葉「やったか?」からの「やってない」

まあ、言おうが言うまいが、結果は変わらないんだけどな。

視線の先には、まさに今、ゆっくりと立ち上がる星獣の姿が。

良く見ると、エネルギーを消耗したのか、体高が30メートルぐらいに縮んでいる。

でも、だからどうしたと言う程度の差だ。

「あれ、ほんとに倒センのかよ?」

「さあ?」

俺だつてここまで不死身とは思つてなかった。呆れるしかない。

こうなれば仕方無い、俺は真面目な顔で木村へと向き直る。

『じゃあ木村、プランBで行こう、プランBは何だ?』

『Bどころか、お前がプランDぐらいなだけ?』

なるほどね、シヤレが通じないヤツだ。プランDつて何だよ、Deathか?

折角の化け物相手なんだし、ゲームの気分には浸らせろよ。まあ無理もない。忘れてしまつて当然か。

前世で一緒に遊んだゲームだが、プランBを尋ねると、『ねえよんなもん!』と言われるのだ。そのセリフが洋画みたいで格好良かったのを覚えている。

田中に至つては、根本的にそのゲームやつてないだろうしな。

『何だよ? プランBつて』

『プランBつてのは次善策つて意味だな』

オイ! 木村、マジレスは止めてくれ。恥ずかしくなるだろ。

『次善策ね、じゃあプランBは何だ?』

『ねえよんなもん!』

二人してゲラゲラ笑ってやがる。完全に覚えてるじゃねえか！
なるほどね、コイツら俺をおちよくってますわ。あと、他人がやってるのを見ると普通に恥ずかしい。

やるだけやったのに『ママ』は倒せないし、俺は急に白けてしまったね。

「取り敢えず、逃げましょう」

「ええ、そうですね」

「ンだな」

慌てて沼を這い出す。すると、俺達が居た場所を熱線が焼くじやありませんか。いやー危ないね。完全に狙われている。

「全軍、撤退ー！」

拡声した俺の声と同時に、沼に埋まった騎士達が蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。

あらかじめ決めていたのだ。作戦が失敗したら全員で散開して方々に逃げ出すと。その方が生存率が高いから。

「行くぞー！」

「……ええ」

田中がバイクを起こし、後部座席に座るように促す。

……しかし、なんだか後ろ髪引かれる思いで背後を振り向いた。沼を脱した星獣が、

小さくなった体を生かし、今まで以上のスピードで迫っていた。

「オイー！」

田中に強引に腕を引っ張られる。でも、何も応えられない。

「グッ、あつー！」

腕を引かれる痛みより、首筋に、今までとはレベルが違う、強烈な痛み。頭までグララと痛くなる、なんだ？ これは？ 今までこんな事は一度も無かった。

これまで首筋のチリチリとする痛みは、迫る危険を教えてくれた。

これは、何を意味するんだ？

俺は空を見上げる。雷じゃない、その証拠に既に雨は止んでいた。もう昼前、雲の隙間から太陽が覗いている。星獣さえ居なければピクニックにでも行きたいぐらい。

でも、その空がおぞましい不吉を運んでくるのが、なぜか解った。

「出来た……」

「はっ？」

「プランBが、今、出来た！」

俺は田中の手を振り払い、フラフラと星獣に向き直る。丸腰で。

王剣は木村に渡ししてしまった。今頃は装甲車の中だ。

「死ぬ気か？」

背後から、田中が訊く。でも、違う。俺は無言で首を振る。泥で薄汚れた顔の田中が、澄み切った目で俺を見ていた。

「手伝える事は？」

「ありません、足手まといです」

「チツ、そうかよ」

「あ！」

いや有ったわ。

「私が星獣を倒したら、さっきみたいに助けて下さい。多分動けないので」

「倒せるのか？」

「間違い無く」

なんせ火力は十分だ。

俺は再び星獣と向かい合う。太陽の下だと、やっぱり小さくなったのが良く解る。

それでも三十メートルあるけどな！

「死ぬなよ！」

そう言い残して、田中はモーター音と共に去って行った。

アイツはこう言う時、湿っぽくならないのが良い。ちゃんと俺を認めてくれている感じがある。

「さて、時間まであと少し、もう一度、私と踊ってくれますか？」
そう言つて、俺は星獣の真下へとすべり込む。踏み潰す足を躲し、転がる体の上を跳んだ。

そして太陽が中天にかかる時、目当てのモノがやって来たのがハッキリ見えた。

俺は深く深く掘った堀の中、魔法で泥を掻き分け飛び込んだ。

その上に『ママ』がのし掛かり、泥を掻き分け俺を探した。地中で暮らす星獣は、穴を掘るなどお手のもの、即座に追いつかれ、泥の中に俺の逃げ場は無い。

俺の小さな体は、星獣の巨大な手に掴まれた。

隕石が『ママ』の背中に落下したのは、その時だった。

終わりの始まり

時は隕石落下の直前、場所はユマ姫が戦う沼から六キロほどの山中。甲冑で固めた兵士がズラリと居並び、たった一人の少女の帰還を今か今かと待っていた。

ここは渓谷の出入り口にあたる場所である。渓谷は道幅が狭く、いざと言う時に巨大な星獣から逃れるには絶好の地形と言えた。

兵士達は、星獣が来たら命懸けで食い止め、少女を守ると決めていた。

そんな中、屈強な男達に混じり、ひよろりと神経質そうな男が一人。真剣な表情で、少女の無事に気を揉んでいた。

木村だ。

木村は散開して逃げた場合の合流地点を前もって定めていた。なれど潰走した後となれば、三分の一も集まらないのが普通。しかし生き残った騎士達は欠ける事無く合流していた。

寄せ集めどころか、敵対する王国と帝国の混成部隊。相対するは無敵の巨獣。それでもユマ姫を案じれば、逃げる事など誰にも出来なかったのだ。

そんな中、一際遅れて到着した男が居た。それも、約束を違え、たった一人で。

激昂した木村は、男の襟を掴む。

「てめえ！　どのツラ下げて一人で来やがった！」

「このツラだけど？」

怒りが収まらない木村に、田中はバイクに乗ったまま飄々とした顔で答える。

「ふざけー！」

「ふざけてねえー！」

「じゃあ、なんで、一人で行かせたんだよ」

木村は震える拳を固め、田中の胸当てを殴った。しかし力が籠もらない。怒りよりも悲しみが勝っていた。

死にたがりのお姫様が、自分達を置いて行ってしまった。そんな感情に支配されてい
たからだ。

だが、田中の見解は違っていた。

「良いか？　アイツは俺を足手まといっって言いやがった、俺が、だぜ？　んな事冗談で
言ってみろ、その場でぶん殴ってる」

「じゃあ！　本気であるの化け物をユマ姫が倒すって言うのかよ！　たった一人で！」

「ああ」

だから平然と言い放つ。澄んだ瞳で真っ直ぐに木村を見つめていた。

「どうやって!」

「知らねえよ、スゲー魔法でもあるんだろ?」

「ンなモンあつたら真つ先に使つてるだろ!」

見ている方が寿命が縮む星獣の体表での追いかけて。あんなモノまで披露して、まだ奥の手を隠しているとはとても考えられない。

食つて掛かる木村に困つて、田中はガリガリと頭を搔く。

「いやさ、オマエはなんで、アイツが死にたがりだつて思つてるワケ?」

「そりや……」

大つびらに言うには恥ずかしいが、木村は以前、ユマ姫と一緒に死のうと持ちかけられた事がある。

だからこそ、ユマ姫がふとした拍子に死んでしまうのでは無いかと怯えているのだ。

それは田中も知っているが、だとしたら言いたい事がある。

「それはよお、お前となら死んでも良いつて事だろ?」

「……そりや」

改めて言われると恥ずかしい。木村は面食らつた。

「で、今回、お前も、俺も、一緒に死のうと誘つてはくれなかつたワケで、そりやどう言う心境の変化だ?」

「……………」

言われてみると、解らない。木村は首を傾げた。

「まして、事が終わったら助けてくれとまで言つて来たんだぜ？」

「ホントか？」

「ホントだよ、ありや死ぬつて感じじゃねえよ。アイツは星獣を倒す気だ。つてか、繰り返すが俺の事を足手まといと言いやがつて、それで只の自殺だったら許さねえ、こつちは死にそうなアイツを何度助けたか数え切れねえんだぞ？」

「まあ確かに……………」

ようやく木村は納得したが、だとすれば、どうやつて倒すのか？

首を傾げた二人は、空に光るモノを見つけてしまう。

それは、前世の三人を殺したモノだ。

「…………クソツ、よりによつてアレが勝ち筋かよ」

「あ、え？ マジで？」

太陽の下、雲の合間から飛び出したのは帚星。光を纏う隕石が迫っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ママ、流れ星！」

「ホントねえ」

隕石は、遠く離れた王都からでもハッキリ見えていた。

最初に気が付いたのは、王都に住むごく普通の親子。小さな女の子が見上げた空に、雲を斬り裂き輝く光が尾を引いていた。

「わたし、ユマ姫様の無事を祈るね」

「まあ！ サーシャは良い子ね」

母親は娘の優しさを喜び、娘は流れ星に姫の無事を祈る。

流れ星に祈るのはこの世界でも一般的だ。但し、願いが叶うなどの俗なモノではなく、旅の無事や、健康を祈るモノ。

なにせ大気圏に覆われた地球と違い、この世界には隕石が多かった。こんな風に真昼でも見える隕石すらも珍しくない。

だから流れ星に気が付いた王都の民は、揃って従軍中のユマ姫の無事を祈る。

「ユマ姫様、どうかご無事で」

「捕虜になつたつて本当かな？」

「俺なんかどうなつても良いから姫だけは助けてくれよ……」

それもそのはず、まだ最新の情報が入らない王都では、戦況は劣勢、姫は捕虜になつたと噂される段階だった。だから民はユマ姫の無事を祈り、こぞつて流れ星に祈る。

なれど星への祈りなどただの願掛け、残念ながら気休めに過ぎないモノだ。

星に祈るとは、元来そう言うモノ。誰だつて、何時だつて、何処だつて、本当は意味など無いと思ひながらも、祈るしか無いから星に祈る。

しかし、今回ばかりは、その祈りは天に届く。

数万の民がユマ姫の事を思つて隕石を観測する時、さしもの『偶然』も不確定要素を混ぜ込めない。観測されない不確定の揺らぎだけが『偶然』の関与する余地なのだから。そうとは知らず、人々は純粹に祈りを捧げる。

「……あの隕石、帝都の方に落ちるんじゃないか？」

「まさか」

まして隕石と言うのは領域の外、人間が住めない土地に落下するモノなのだ。

人間が住む領域は分厚い健康値の膜に守られ、地球の大気圏以上に、外敵の侵入を許さない。

だから『偶然』により因果律を越え、特大の隕石が姫の頭上に落下しているなどとは、誰も夢にも思っていないのだ。

まして、自分達の祈りが姫を救うとは、まして、姫を狙う巨獣を討つなどとは、及びも付かない。

「綺麗！」

だから、皆、ただ特大の流れ星に、ユマ姫の無事を祈るのだ。

……純粹に。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

まず、白が世界を埋め尽くし、次に強烈な爆風と破裂音が襲いかかった。

「うおおお！」

「ぐええええ！」

閃光と爆風の嵐に晒され、木村と田中はひっくり返って痙攣していた。何も二人だけではない、星獣から逃げた全軍がそんなありさまだった。

スタングレネードよろしく、強烈な光と爆音は体の自由を奪う。当たり前の事だが隕石の落下など誰しも初体験だった。

厳密には二人にとっては二度目だが、前回は体感する間もなく肉体が消滅している。

コレだけの衝撃に晒されれば、一日動けないでも不思議では無い。なのに僅かな間で立ち直った男が居た。

「行ってくる！」

田中だ。ひっくり返る木村に大声で叫び、バイクのスロットルを吹かす。

「ンでだよー！」

しかし、不発。強烈な電磁波が入り乱れ、バイクは動かない。

たとえ正常にモーターが回っても、鼓膜が破れた田中にはその音が聞こえなかったで

あろうが。

「装甲車も駄目だ！」

「聞こえねえよ！」

同じく立ち直った木村が装甲車から叫ぶが、みんな耳が潰れている。精一杯叫ぶものの、意思疎通が出来ない。田中はフラつく頭を押さえ、震える足を叩いて活を入れる。

「行つてくる！」

「お、おれも！」

駆け出す田中に木村が追いつがるが、田中はそれを手で制した。

「あ・し・で・ま・と・い・だ！」

「クソッ！」

当てつけで言われた言葉は、音が無くても大げさな口の動きで十分以上に伝わった。田中としては木村には軍を率いて欲しかった。落下地点、何が起きているかなど想像も付かないのだから。

なので田中は一人、走る。健脚を誇る田中だ、次々と景色が後ろに流れていく。神から授かった世界最強の肉体による圧倒的な速度。比肩する者など、この世に居るハズが無い。

——ヒヒイーン！

いや、居た。嘶きと共に、田中を颯爽と追い抜く者が。泥に汚れて居たが、それは紛れもなく白馬だった。

「お前……」

田中は知っていた。これはユマ姫の白馬、サファイアだ。

「乗せてくれんのか？」

半信半疑、なにせ馬はデリケートな生き物。あの爆発で選りすぐりの軍馬すら泡を吹いて倒れていた。なのに、この馬だけが無事な理由が解らない。

ましてこの白馬は気難しく、ユマ姫以外の誰も乗せないと聞いている。

——ブルウ

「そうかよー！」

それでも田中は白馬に飛び乗った。その顔に確かな意志を感じたのだ。

そして、白馬は走り出す。

「おおっ！ 速えええ！」

その速度は圧倒的。日頃、田中は馬など無用、走った方が早いと言つて憚らないが、それは旅先で数十キロを駆ける時の事。数キロの距離ならば、人の身で馬の襲歩ギヤロツブに勝てるハズも無い。

まして田中が知っているのは痩せた農耕馬、訓練された軍馬であるサファイアの足に

瞠目するのは当然と言えた。

そうして、モノの数分で沼へと舞い戻った田中は、地獄の様な光景を目の当たりにする。

辺り一面、肉とも泥ともつかない破片が飛び散り、得体の知れない不快な匂いが充満していた。

シリコンに近い半透明の肉と、アルコールやオゾンめいた血の匂い。通常生命とハッキリ異なる死骸が山のようにそびえている。

今さらながら、コレが一つの生命体だった事が信じられない。自然現象の一種と言われた方が信じられる。

全軍がココに罫を仕掛け、駆けずり回ったのは今朝の事。僅か数刻で景色は一変していた。

得体の知れない肉塊を慎重に避けながら、田中は更に歩みを進める。目指すは隕石の落下地点。

「嘘だろ……」

田中にして、呆然と呟く。それは、あまりにも巨大なクレーターだった。

淵に立って見下ろすと、マグマと化して赤熱する泥と、蒼い魔力光を放つ半透明の肉塊がまだらに飛び散り、悍ましい地獄が現出していた。

クレーターのサイズは丁度ユマ姫が囚われていた帝国陣のすり鉢に近い。万の軍を捕虜に押し込めておける広さは、スタジアムに匹敵するものだった。そんな規模のクレーターが発生している。

爆発の大きさに今更に戦慄する。駆けつけるつもりは裏腹に、自然と手綱を引いてしまった。

そんな懦弱をあざ笑うかの様に、田中を乗せた白馬サファイアは既にクレーターの中心へと駆け出していた。

「お、オイ！ やるじゃねえか！」

コレには馬上で面食らっていた田中も腹が決まった。マグマを避け、魔力の塊に健康値を削られながらも、それでもサファイアに乗ってクレーターの中心へ駆け降りる。

いよいよクレーターの中心、煙吹き出す中心地まで辿り着いた。

「なにも見えねえ！」

クレーターの中心は雨水が溜まり、沸騰する湯気に視界は遮られた。

「熱ちい！」

熱も問題だ。雨水のお陰でマグマは冷やされたが、それでもグツグツと沸騰する湯は行く手を遮る。

「ただ、アイツはココに居る！」

ココは引けない。田中は感じ取っていた、ユマ姫の僅かな気配を、地下深くから。

馬の鞍を外し、スコップ代わりに湯をかき出した。火傷にも構わず、ひたすらに泥を掘り返す。

泥を掘るほどに温度は下がっていく、あまりの惨状に絶望的かと思つたが、コレならば生きていても不思議じゃ無いと思える程に。

そうして二メートルを掘り返したとき、可愛らしいユマ姫の右手が泥から顔を出す。

その時、不思議と安心よりも胸騒ぎが勝つた。

焦燥を振り払う様に、田中はピクリとも動かない手を握つて、ユマ姫を泥から引つ張り出す。

いや、出そうとしたが、出なかった。

引つ張つた右手がぶらんと垂れ下がる。付け根から千切れていた。

流星の田中も血の気が引いた。慌てて泥を掘り返す。

以前にはユマ姫が焼け焦げた焼死体になつたときもあつた。だがあの時、田中は死と遠いユマ姫の巨大な気配を感じていた。だからこそ少しも焦らなかつた。

今回は違う、確実に死が迫っていた。気配が薄い。だからこそ位置が掴みにくい。

次に泥の中から現れたのは左手の指先、田中は一瞬の逡巡をみせる。

細く、たおやかで、ただでさえ握れば潰れてしまいそうである。だが、それでも引つ

張った。丁寧に掘り出している暇など、まるで無いのだ。

「よしっ！」

こんどは繋がっていた。ユマ姫の頭と胸が顔を出す。

——ズルリ！

しかし、ソコまでだった。胴は千切れ、内臓が零れていく。

コレで……生きてるのかよ？

百戦錬磨の田中にして絶望的な容体だった。クレーターの底、泥から引き上げたユマ姫の姿は悲惨のひと言。

ココには不思議な古代の医療カプセルなど無い、現に気配は小さくなり続けている。

田中は内臓が零れない様に気をつけながら、ユマ姫の体を逆さまに、口をこじ開け、背中を叩く。喉に入った泥を吐き出させる為だ。

当たり前だが、欠損した体は赤子のように軽かった。それが不気味に感じる。

泥は吐き出させた、しかし、必死に呼びかけるも反応は無い。呼吸も戻らない。ならばどうするか？ 人工呼吸しかないだろう。

田中はユマ姫の顔をジツと見つめる。怪我は勿論、美しい髪も、顔も、全て泥にまみれて見る影も無い。これがユマ姫だと言って、解る人間がどれだけ居るだろうか？ そんな有様だ。

なれど、ユマ姫は美しかった。地の底の泥から這い出て、地獄の中心にありながら、それでもユマ姫は美しかった。

中天に輝く太陽が地獄の底まで光を届け、銀の髪と愛らしい唇を艶やかに浮かび上がらせる。

まるでユマ姫の美しさを祝福しているようだった。零れるピンクの内臓すらも愛おしく思える。

それが、田中には堪らなく怖かった。

一刻も早く人工呼吸をするべき。頭ではそう思うが、その愛らしい唇が、堪らなく怖かった。

意味不明な感情に振り回され、ゴクリとツバを呑む。

——ヒヒイーン！

その時、背後から殺気を感じる事が出来たのは歴戦の田中にしても奇跡でしかない。

それは、ユマ姫の愛馬、サファイアだった。彼はユマ姫を踏み潰そうと泥の底まで踏み込んでいた。

なんで？ どうした？ 意味わかんねえ！

ユマ姫を抱え、飛び退いた田中には、事態が全く掴めない。

だが、サファイアはずっとユマ姫を殺せる機会を窺っていた。今こそ千載一遇の好

機。

なぜサファイアはユマ姫の命を狙うのか？ 実は彼自身も理解出来ていない。

サファイアは頭が良い。馬にしてはどころか、人間と比較しても圧倒的に頭が回る。突然変異と言える特殊な個体だ。獣の本能と、深い知性を併せ持った存在は並び立つ者が居なかった。

人間の言葉など全て理解しているし、乗せた人間の意図を汲み過ぎて、手綱を無視した先回りで怒られた経験は数え切れない。

それでもサファイアが一流の軍馬と評されるのは、彼が一度も間違えた事が無いからだ。知識と本能を高い次元で融合させ、未来予知にも等しい直感が完成していた。

だからこそ、ユマ姫の事が理解出来ない。

初めこそ、ユマ姫は大切な人達の仇で、危険な存在で、殺したくても殺せない悪魔。そんな認識だった。

主人である女騎士ミニエールを殺したのもユマ姫だし、顔なじみのロアンヌの騎士が死んだ原因もユマ姫にあると確信している。タリオン伯など目の前で殺された。

だけど、サファイアは理解している。ロアンヌの皆はユマ姫を殺しても喜ばない。それどころか、生きていればユマ姫を守る為に何度でも命を懸けるだろう。

だから彼らの為にもサファイアはむしろユマ姫を守ろうと思った。実際に守った事

もある。

驚くべき事にサファイアは人間の社会性まで理解して、理性を持ってそこまでは納得しているのだ。

それほどに賢い馬だった。

なれど、獣の本能は刺し違えてでもユマ^コ姫を殺せと訴えた。

ユマ姫を殺さなくてはとんでもない事になる。予知にも似た直感は、時間が経つにつれて警告を強くした。

サファイアは星獣など怖くなかった。自分の背中に乗るこの人型の生命体こそが、最も恐ろしいと知っていたからだ。

星獣とユマ姫が戦い始めた時、ユマ姫の勝利を微塵も疑わなかった唯一の存在が、彼だ。だからこそ、目を瞑り地に伏せ、決戦の時を待っていた。

全ては確実に息の根を止めるため。

田中に探させて、手負いのユマ姫を殺す。その為に連れて来たのだ。万全の体制を整えて、機会を窺い、それでもサファイアは失敗した。

あまりにユマ姫が美しかったからだ。一瞬の迷いが結果を分けた。

種族の違いすら無視して、サファイアは既にユマ姫に魅了されていた。彼自身も今の今まで、それが解っていないかった。

一方で、乗って来た白馬の暴走に田中は付いていけない。或いは魔女の洗脳すらも疑っていた。

満身創痍のユマ姫を胸に、田中は呆然と白馬を見上げる。

その胸でユマ姫は動き出す。

一人と一匹が確かに感じた不吉がそこに顕現した。大きく口を開けて、田中の顔に迫っていた。

「ッ!？」

それが眼前に迫った時に、初めて田中は動き出したユマ姫に気が付いた。

錯乱した頭は、人工呼吸を躊躇する自分に、ユマ姫がキスをせがんだように感じてしまふ。

冷静に考えればあり得ない、だけど一瞬、体が固まった。

その時二人の意識が白馬から逸れた、やってきた再びのチャンスを見逃さない。一息に踏み潰そうと、棹立ちになって前足を振り下ろす。

——ギシッ!

しかし、その前足は小さな左手に止められてしまう。馬の全体重が乗った一撃がだ。ユマ姫だった。いまだ意識は無く、本能だけの行動だった。だけど、それが、それこそが恐ろしい。

下半身が潰れたユマ姫が、片手一本で馬の足をへし折り、泥の中に白馬を転がしたのだから。

田中の腕を飛び出して、転がる白馬にのし掛かる。

——ガブツ!

そして、そのまま白馬を食べ始める。生きたまま。

体を欠損したユマ姫は、補う血肉を欲していた。投げ出された馬の腹に取り付き、口を真つ赤にさせながら齧り付いていく。

まるで化け物。

なのに美しい。

悍ましい美が、確かにあった。だからこそ田中は胸から這い出した化け物から、目が離せない。

キスなどともんでもない。コレは自分を食べようとしていたのだと、ようやく理解した。

そして、サファイアもまた、生きたまま喰われながら、ようやく理解した。

ああ、コレが、コレこそがロアンヌの騎士達が感じていたモノかと。

生きたまま喰われる激痛を感じながら、それでもユマ姫の為に死ねる事に幸せすらも感じていた。

意味不明なハズだ。こんなモノが頭で理解出来ようはずもなかった。そして、直感で感じる恐ろしさもまた理解出来た。

こんな、命をねじ曲げる存在がまともであるハズが無い。

自分を食らい、みるみる体を再生するユマ姫を見ながら、幸せすら抱いてサファイアは息絶えた。

まるで世界の行く末を見ずに済む事が、なによりの幸福であるかのような、安らかな死に顔だった。

すれ違いの代償

シンと静まり返った野営地。皆が皆、一人の少女の無事を祈っていた。

そんな張り詰めた空気を切り裂いたのは、男達の切羽詰まった声だった。

「ユマ姫だ！ 道を空けろ」

その声を聞いた瞬間、シノニムは装甲車から飛び出した。ザワつく兵士の群れを掻き分け、一人混じった緑マントの男に問い直す。

「姫様は!？」

「重傷ですが、なんとか一命は取り留めました」

木村は何度したか解らない説明を繰り返す。そこに、戸板に乗せられたユマ姫が運ばれてきた。

「ひどい……」

重傷者を見慣れたハズのシノニムが、顔を蒼くして思わず漏らす。少女は^{おびただ}夥しい出血に塗れていた。左手はグチャグチャに折れ、両足は欠損、体中に痛々しい包帯が巻かれている。

「すぐに手当をー」

「ポーションはもう掛けました、これ以上この場で出来る事はありません」
「じゃあー！」

すぐに移動しなくては。あの古代の施設ならもつと良い治療が出来る。ココからは遙か遠いが、装甲車に乗せれば数日で到着する。

シノニムはそう思ったし、木村も同じ考えだった。しかし、その前にやる事がある。軍の解散だ。

戦争は始めるよりも終わらせるのが難しい。今回は特にそうだ、なにせ終わらせるべき人間がどちら側も退場している。

王国はオーズド伯が自領に引っ込んで久しく、帝国はテムザン將軍をユマ姫が殺してしまった。

今の敵司令官は誰なのか？ ソレすら誰も知らないままに、ユマ姫達は帝国深くに踏み込んでしまっていた。

コレでは停戦すらもままならない。

別に、木村達が情報収集を怠った訳では無い。

帝国領に踏み込んだ時点から、帝国地方領主から使者が派遣されたりもするのだが、彼らとて早過ぎる戦況の変化を前に、ロクな情報を持っていなかった。

そして彼らがコチラの情報収集に頼るのは、王国軍に寝返った帝国騎士だ。

彼らも帝国では身分のある人物、何故寝返つたと顛末を問い正せば、聞きしに勝る魔女の非道。そして天使の如きユマ姫の美しさと言う訳だ。

そうなると日和見な領主達は、まさか魔女の仲間と疑われる愚は犯せない。

自領を進むユマ姫達に、手を出してくる領主は皆無であった。

戦おうとする軍がないのだから、誰も帝都へ指示を仰がない。だから司令官も解らない。

停戦する相手も居ないまま、ユマ姫達はズルズルと、魔女を求めてスールンまで来てしまったと言うのが顛末なのである。

だからといって、ユマ姫と言う支柱を失つた今、進軍し続ける事は出来ない。どうか穏便に、一度戦争を終わらせる必要があった。

戦闘こそなかったものの、もはや陣地は遠く、物資に余裕がある状況ではない。大きく戦線を後退させる必要に迫られていた。

敗北もなく軍を後退させるのは難しく、軍の解散を宣言するより道は無かった。

せめて、強固な陣地でもあれば話は違うのだが、騎馬だけで進軍したユマ姫親衛隊に陣地の構築など不可能だった。

「神の使命は果たした、ユマ姫は重篤。我々は解散する」

なので、騎士の目前にユマ姫を晒して、解散を宣言するしかなかった。

決して褒められた行いではない。

意識の無いボロボロの少女を衆目に晒すのはあまりにも無体。シノニムは反対したし、木村だつてやりたくなかった。

それでも、必要だった。なぜか？

「解散つて！」

「我々は、どうすれば良い！」

帝国騎士に居場所が無いからだ。

彼らは裏切り者だ。一刻も早くユマ姫が帝国を征服なりして、代わりに叙勲でもしてくれないと立場が無い。

突然の停戦、そして解散と言われれば、怒りに暴発しかねない。

だから血気逸る騎士の眼前に、ボロボロのユマ姫を晒すしかなかったのだ。

血まみれで、足を失い、包帯にグルグル巻きにされたユマ姫を見れば、騎士達だつて、たまらず二の句を失った。

「なんと！ ああつ！ おいたわしや！」

「ハ、こんな事が……」

絶望する者も少なくない。ココまでの重傷だとそのまま死んでしまうのが普通。

思い出すのはバニー衣装、網タイツに魅せられた騎士は少なく無かった。

なれどコレでは、万にひとつ一命を取り留めても、アレほど綺麗だった足は二度と戻らない。

「いや、戻る。姫には奇跡の力がある」

「馬鹿な事を！」

木村がそう言っても誰も信じず、どんよりとした絶望が広がった。皆が騎士なのだ、治る怪我と治らない怪我を知っている。

こうして戦意が挫けるのは木村にとつても期待通りだが、自棄になって山賊になど身をやつして貰っても困る。

「良く見ろ！ 背中の鞭の跡が消えている！ 神の奇跡が今もユマ姫を癒やしている」

「おおっ！ 本当だ！」

「まさか、足が、生えるのか？」

「その、まさかだ。ただし、こんな所では治療が出来ない。後方で治療に専念する。つまり諸君らには戦線を維持して貰う必要がある」

「おお！」

戦線の維持、つまり騎士達にも仕事がある。

ザワつく騎士達に、木村が声を張る。

「安心しろ！ 遠征軍としては解散と言うだけだ。一度クーリオンまで後退し、体制を

整える。望む者は全て私が責任をもって雇用する！」

「本当か？」

「勿論だ！」

肥沃なゼスリード平原を帝国は開拓していた。騎士に払う俸禄ほうりくぐらいは賄える。

逆に言うと、ゼスリード平原に戦力を裂く以上、クーリオンまでが戦線を維持出来る限界。木村は慎重にそろばんを弾いていた。

……だが。

「その必要はねえよ」

しかし、そこに割り込んだのが田中だった。背後には身ぎれいな男を連れている。

「こいつあスールーン領主の懐刀だ。知った顔だから間違いないねえ」

「これはこれは……」

木村は慌てて使者の手を取る。対する使者は挨拶もそこそこに、結論を急いだ

「スールーンは降伏します、あなた方で我々を守って欲しい」

「なん、ですと？」

それではまるで話が変わってしまふ。スールーンと言う強固な陣地があれば、戦線を下げる必要もない。

使者の話は簡潔だった。スールーンは王国に下る。城塞都市ゆえに守りは堅く、十分

に守り切れるとそう言うのだ。

「悪い話ではないと思いますか?」

使者の言葉に木村は詰まった。魅力的な提案、スールンなら帝都も目と鼻の先。ユマ姫が十六になる前に、帝都を落とすのも現実的になる。

なれど、味方陣地は遠く、もしスールンに裏切られれば恐ろしい被害が出る事が目に見えた。

木村は使者の顔をジッと見つめ、真意を探ろうとするのだが、その肩を叩いて笑って見せるのが田中だった。

「木村、安心しろよ、なんせ使者は俺達コイツよりも近くで、アノ瞬間を見てんだぜ?」

どう言う事かと木村が目で尋ねると、使者はヤレヤレと頭を掻く。

「恥ずかしながら、タナカ殿には気絶していた所を助けられました」

「なあ、木村? お前、あのお姫様を敵に回せるか?」

無理だ。木村は首を振る。なるほど帝国にしてみればユマ姫が隕石を落としたりかと思えない状況。あの威力を前に、城塞など何の意味も無い。スールンの裏切りはありえない。

「決まりだな、騎士や兵士をスールンに回せ。俺達なら守り切れる」

「しかし、ユマ姫はどうする?」

「施設の使い方はシノニムさんや、あのおつかねえ姉ちゃんも知ってるんだろ？俺達がついてる意味がねえ」

「だけだよ……」

言い淀む、木村は今にも死にそうなユマ姫に付き添いたかったのだ。

「アイツは死なねえよ……」

一方で、田中は恐ろしかった。千切れた右腕は繋がり、千切れた胴も塞がっている。尋常じゃ無い生命力。

或いは本当に自分の助けが必要だったのか、そんな事まで考えてしまう。

「キムラ様！」

そこにシノニムさんが駆け込んできた。ユマ姫が目を覚ましたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ココは？ 俺は？

俺は……ユマ姫だ。ぼんやりと、思い出す。

知ってる天井だ。なにせ、遠征中はこの装甲車の中で寝泊まりする事も多かった。

「姫様っ！」

シノニムさんが俺の手を取る。……どうやら地獄じゃないらしい。

「ママ、いえ、星獣は？」

「死にました！ 倒したんですよ！」

「そう……」

嬉しい半分、どこか寂しい。俺の中の『坊や』は『ママ』の死を悲しんでいる。どうして殺したんだと責めたてる。

だけど、俺は死にたい者は全て殺すと誓った。『ママ』はきつと死に場所を探していたんだ。

『ママ』は、どうして『坊や』は死んだのかと、やり切れないモノを抱えて生きていた。だから『坊や』の魔力を持つ俺が、どうしても許せなかった。

だったら俺が殺してやらなくちゃだよな。他の誰かに殺されるなんて許せない。

……思い出すのは、自分の手で父様を殺した時の事。

辛かった、苦しかった。でも、あれで良いんだ。もしも田中に任せていたら、きつと田中すら恨んでいた。自分でケリをつけるべきなんだ。ほろ苦い思いがグルグルと巡る。

だから、嬉しそうなシノニムさんの言葉がわからない。

「どうして、喜ばないのですか？ やつと神の使命を果たしたのに」

「……ええ？」

神の使命？ そう言えば、俺は神の使命を果たすために転生したとか、そんな事を

言ってきたっけ。

ただの嘘だ。ただ生き延びる事だけが、神の唯一のオーダーだった。

しかし客観的に見て、人類を絶滅させかねない星獣の討伐こそが、神の使命にふさわしい。

「……そう、ですね」

「もう！ 悲願を果たしたのですからもつと喜んで良いでしょうか？」

「それよりは今後の事です、キイムラ様を呼んで下さい」

「はい、承知しました」

出て行くシノニムさんを見送り、ジツと足を見る。

無い。

普通なら絶望する所だが、俺にとって苦では無い。施設にポジションの在庫あったかな？ たつぷりとカプセルを満たせる程は無いだろう。だとすると二度と欠損は治らない。

でも、そんな事はどうでも良い。今の俺には。

「キイムラ様をお連れしました」

見ると、後ろには田中も居る。丁度良い、聞こうじゃないか。隕石が落ちた後、何があつたのか。

「……どうも俺が気絶していたのは二日ほど、混乱する軍に解散宣言をしたばかりと言
うから殆ど時間は経っていない。」

「姫の魔法を見たスールーンは降伏を選択しました」

「それは良かった……」

淡々と戦後報告を聞いていると、突然シノニムさんが椅子を蹴飛ばし立ち上がった。

「そんなこともう良いでしょう？ ユマ様は星獣を倒したんですよ！ ユマ様がずっと
仰っていた神の使命とはこの事だったんですよね？」

「……そう、ですね」

「違うと言いだせない雰囲気だ。進軍を停止する理由にもしてしまつたと言うので、引
き返せない。」

「もう姫様は戦う必要が無いんです！ 確かに、こんな姿になってしまいました。だけ
ど、私がユマ様の足になり、腕となります。だから……」

「もう戦うなど？」

「まだ戦うおつもりですか？ その姿で！」

「ええ、私が始めた戦争です。責任を取らないと」

「今のあなたに責任を問う人間など居ません！」

「……………」

そう言われるとな、今の俺を戦場に送ろうって鬼畜は居ないだろうよ。

「姫様は以前おつしやつてましたよね？　帝国に復讐して、帝国からの恨みを一身に背負うと」

言つたつけ？　言つたか？　なんか大森林に戻って即位しない言い訳に使つたかも。

「でも、今のあなたを恨める人間なんて、どこにも居ません！　だから、だから！」
とうとうシノニムさんは泣き崩れてしまった。困つたなコレ。

確かに、こんなになつてまだ戦うって言い続ける女の子って悲痛な感じあるよな。

でも、今の俺の魔力をもつてすれば、まさに足なんて飾りだ。飛んで動ける。片手だつて色々出来るだろう。でも、そんなのシノニムさんには関係無いか。だから俺はキツパリと宣言する。

「解りました。体が動くようになるまで、私は一切戦いません」

体の芯からダメージが蓄積し、どうせしばらく動けない。ならばしばらく休むつてもやぶさかじゃ無い。

だけどシノニムさんは納得しなかった。

「もう戦わないと約束してください！」

「それは出来ません。もしも、走れるようになれば、私はまた戦場に立つでしょう」

「走れるようになれば……ですか」

澁々ながらもシノニムさんは納得してくれた。施設に残された魔力とポーシヨンの残量では足を治しきれないと知っているのだ。去年、雷に打たれたときも魔法と併用して、完治には一年かかった訳だしな。

でも、今の俺なら、義足さえあれば魔力で好きに走れるだろう。シノニムさんにはこの辺で妥協して欲しいが、どうだ？

「キムラ様！」

「なんででしょう？」

「少し外に出ませんか？」

「え、ええ」

思い詰めた様子で、シノニムさんが木村を装甲車から連れ出した。

俺はそつと耳を澄ます、集音の魔法だ。聞こえて来たのは、兵士の会話、薪がはぜる音、虫の鳴き声。そこに混じった木村の声に、ゆっくりとフォーカスを合わせる。

今の俺には見えない場所の音すらも拾える。

「どういった用件で？」

「来年の夏に帝都を陥落させる事は可能ですか？」

「……断言は出来ませんが、敵の戦力は僅かでしょう。無理をすれば可能かと」

「お願いします。姫様が戦えない内に、戦争を終わらせたいのです」
「なるほど、承知しました」

おうおうおう、どうやら俺は一年以内に体を治さなくちゃ復讐を果たせそうにない。まあ良いさ、どうせ俺の『偶然』は二年も待つてくれない。そんな時間制限はあつて無いようなモノだ。

そうして集音魔法を制御しながらぼんやり装甲車の壁を眺めていると、暇してるとでも思ったのか、田中が話し掛けてくる。

『おい、喰うか?』

「え?」

枕元にドンツと置かれたのは生肉だった。生肉つて言うかさつき捌いて内臓抜きましたつて感じの枝肉。肉の塊だ。決して死にかけの女の子にプレゼントするモンじゃない。

コイツ馬鹿だろ? でも俺には解るよ。コイツなりの気遣いなんだろう。なにせ原始人みたいにマンモス追いかけてるのが似合いの男だ。

手足を失つた俺に、せめて美味しいモノを食べて欲しい。美味しいモノとは何だ? 肉!

どうせ、そんな思考回路なんだコイツは、俺には解る。だけど、そろそろ文明つてモ

ンを理解して欲しい。

「私は怪我人ですよ？　生肉はちよつと」

「えっ？」

俺がお姫様モードでやんわりと断ると、ギョツとした様子で後ずさった。

『生きたままじゃないと駄目か？』

『俺の事、何だと思ってるの？』

お姫様やぞー！

『いや、助けた直後のお前は生肉をバリバリ食ってたぞ』

『なにそれ、怖い！』

全然覚えてねえぞ？

『なあ、頼む。食べてくれよ。そうじゃなきゃアイツが浮かばれねえ』

アイツって？　問い正すと、どうもこの肉は俺が乗ってた白馬、サファイアの肉らしい。
い。

うーん、スプラッタ。気絶する俺の横で捌いたって事？　猟奇的過ぎる。混乱する俺に丁寧な説明がされる。

白馬に乗った田中が誰よりも早く現場に辿り付いた事。その白馬が、突然俺を襲った事。そして、無意識の俺の反撃で、生きたまま喰われた事をポツポツと語ってみせた。

『きつとよ、アイツはお前に喰われるためにあそこまで駆けつけたんだ。意識を失ったお前に喰われるためには、殺意をぶつけるのが一番だって、アイツはそこまで知ってたんだ』

……そうかなあ？ 普通に殺そうとしたんだと思うが？

まあ、良いか。丁度腹が減っていた。馬肉なら生でイけるだろ。俺はむんずと肉塊を掴んで豪快に齧り付く。

……美味しいな。

『おう、その右腕も肉を食ったらすぐにくつついたからな。いや、生えたんだっけ？』
『なにそれ怖い！』

ジツと右手を見る。そう言えば右腕が妙につるんと綺麗である。あれだけの大立ち回り。傷の無い右手がとて不気味に感じる。

一体俺の体に何が起こっているのだろうか？

「はふっ！ はふっ！」

シリアスな場面。なのに、俺は食べるのを止められない。ニキ口はある肉塊がするすると俺のお腹に収まった。

「はあ……」

満たされる。何だコレ？ 異常に食えるし、幾らでも食べたい。

『そういや、お前、折角生えた耳、千切れちゃったん？』

『ん？ ああ！』

俺は頭をまさぐる。無理矢理に泥に飛び込んだから千切れてしまったみたいだ。もともと不安定に生えていたからなあ。

『俺のモフモフが……』

いや、お前のじゃないと思うぞ？

そんな話をしていると、シノニムさんが戻って来た。

「戻りました」

「気は済みましたか？」

「ええ、少し取り乱しました。もう大丈夫です」

そうかそうか、長旅だからな、あんまり責められては堪らない。じゃあとつとと帰って、とつとと治そう。

前線に残る木村と田中とはココで一旦お別れ、なんか言う事あるか？

『なあ……』

木村が真剣な目で話し掛けて来た。

『マジで、もう戦わないってのは無理なのか？』

お前までそれかよ、でもさ、なにも俺は戦闘狂じゃない。

『俺は戦いたいなんて言っていないけど?』

『じゃあ!』

『戦いたくないじゃない、一方的に殺したいんだよ。帝国の奴らを! 一匹残らず! 虫けらみたいにな! ちようどアイツらがやったみたいにな!』

俺は歯を剥き出しに、威嚇する。奴らは皆を、大切な家族を殺した。俺がこの手で殺さない気が済まない!

『帝都の人間つてのは、一般人もか? 何にも知らない人達だぞ!』

『一般人だからつて、奴らは容赦しなかつただろ?』

『じゃあ、お前に従つてる帝国騎士達も殺すのか? お前の為に戦つてる奴らも!』

『殺すさ! 逆らうなら殺す! 死にたいなら殺す! 大森林への侵略に参加していたらそりゃ殺すさ!』

俺は、セレナが死んだ時。全員ぶつ殺してやるつて誓つたんだよ。

『それで、本当に満足なのかよ……』

『知らねえよ。殺してから考える』

『お前……』

『どうして俺の家族はあんな目に遭わなくちゃならなかつた? 占領も出来ない癖に、どうして侵略した? 気が狂うほど知りたい反面、どうせクソみたいに下らない理由

だ。想像するだけで頭がおかしくなりそうになる。だからもう、グチャグチャに殺してから考えるさ！』

アイツらを殺してから、目的でもなんでも調べたら良い。

その時は、いつそ下らない理由であればあるほどスツとするだろう。そんな下らない目的のお陰で、お前等はゴミみたいに死んだんだって、地獄まで笑いに言つてやる。

田中の話が本当だったら、怪我だつて大丈夫だ。食った肉が体に吸収されるのをハッキリと感じる。

『今の俺の体は、施設の力が無くてもすぐに治る。そしたらこの手で殺せる』

『そうかよ……勝手にしろ』

吐き捨てる様に言つて、木村は出て行つた。

田中も田中で、面白くなさそうにガリガリと頭を掻く。

『戦う気もねえ住民を殺すなら、俺は手を貸さねえぞ？』

『わかつています』

『なら良い』

それだけ言つて出て行つた。俺はホツと息を吐く。醜い殺意をアイツらに晒すのは、やはり辛い。エロい格好を見られるよりも辛い。

そつちはなんか癖になつてきた疑惑すらある。

自己嫌悪にグルグルと頭が回るが、コレばかりはどうしようもない。セレナが死んだ時から、殺意は少しも冷えていないのだ。

装甲車が酷くゆっくりと動き出した。俺の体を氣遣つての事だろう。この調子なら施設にたどり着くまで随分と時間が掛かることだろう。

どうせ、秋と冬は戦争など出来ない。春も種まきがある。来年の夏までに治せば良い。

満腹になった俺は、心地よい振動も手伝い、すぐに微睡みに落ちていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その夜、昼間寝た事も手伝つて目が覚めてしまった。

……ぼんやりと目を開く。だけど体が動かない。金縛り状態だ。酷使した体と言う事を聞かない。

急に怖くなった。凶化した俺の体は不安定。突然に背骨が歪み、半身不随になったとしても不思議では無いのだ。嫌な予感に背筋が凍り、冷たい汗がじつとりと頬を伝う。

でも、頭は動く。ならば！

俺は体中に魔力を巡らせ、自分の状況を確認する事にした。俺の得意技だ。コレが出るからこそ、俺は他のエルフよりも精密な治療が出来るのだ。

そうして解つたのは、俺の体は大規模なオーバーホール中と言う事。

見た目以上に俺の体はボロボロで、神経や毛細血管は千切れまくっていらしい。それを一旦ドロドロにして、構成し直している真っ最中。

凶化した俺の体に星獣の記憶が反応し、人間を越えた謎の生物に成り果てようとしている。

でも、それは良い、それは良いんだ。思ったより早く動けるようになりそうなので、むしろ大歓迎である。

問題なのは、指一本動かせないこの状況で、ギリギリと首筋の痛みが止まない事。寝違えたのかと思っただが、違う。

これは、俺の運命が削られる痛みだ。それが、過去最大の強さで脳を焼いた。

『過去最大』！ 紛れも無く！ なにせ痛み慣れた俺にして、目の前に星が飛ぶような強烈な痛み。

……もつと解りやすく言おうか？

あの隕石よりもずっと確実な死が、迫っていた。

この状況で？ もし、動けない今、もう一度隕石が降ったら？

俺は死ぬしかない。装甲車だって平気で消し飛ばすだろう。

殺し屋だったらどうだろう？ 運命が削れる以上、ソイツは確実にココに来る。ならば

そいつはシャリアちゃんの警戒すらすり抜ける凄腕である。今の俺にどうする事も

出来ない。

今の俺は魔法も使えない、金縛りで呪文が唱えられないからだ。魔力を魔力のまま漂わせるのが精一杯。

俺の『偶然』は俺を正確に殺しに来る。だからこそ、首筋の痛みを合図に、俺は決まつて逃げを打つ。すると俺が居た場所を次々と死が通り過ぎていった。

言うなれば、それが俺の『偶然』に対する必勝法だったんだ。

でも、体が動かせない今はどうなる？ 俺は死ぬしか無いじゃないか！

そんな！ やつと、やつと帝国が落とせる目前まで来たのに。なんで？ 嫌だ！ 死にたくない！ こんな所で！ 動けずに死ぬなんて！

唯一動く眼球を巡らせて、装甲車の中をキョロキョロと見回す。誰も居ない。だけど、ちよつとした影が怖い。今にも動き出しそうで。

装甲車のバックドアは開け放たれて、外が見える。出入り口はあそこだけ。テントが設置されて、護衛が見張つて居るハズだ。視線を巡らせると、煌々と火が焚かれている。

誰か居る！ 大丈夫だ。

だけど、俺は気が付いた。篝火のそばにユラユラと揺れる影が立っている。

アレは人影？ まさか、殺し屋？ それとも化け物？ いや、違う。きつと違う！

あんな所に怪しい人間が居たら、きつと誰か止めるだろう。

洗濯物かなんかがそう見えるだけ。体さえ動かせれば、ちよつと歩いてすぐ確認出来る。だけど今はそれが出来ない。

影がフラフラと揺れている。動いている。

洗濯物があんな風に揺れるだろうか？ 怖い。動けないのがこんなにも怖いなんて！

俺は、揺れる影から目が離せなくなっていた。深呼吸を繰り返す。ギリギリと、首の痛みは増している。

ストレッチと、乾いた目の痛みに打ちのめされて。俺はそつと目を瞑った。

大丈夫だ、気のせい。首の痛みだつて間違える事もある。なんだつたら原理だつて解っていないのだ。今まで『偶然』が殺しに来る時、決まって首筋が痛んだのはそれこそ偶然だった可能性もある。

そうだ！ そう。いや？ そうか？ 確率的にあり得ない。俺は何度もこの痛みに救われてきた。いや、でも、だとしても、怯えてたつて良い事なんて一つも無い。目を瞑つて居ても解決になどならない。

そうだ、俺は何にビビってるんだ。大きな騎士にも、暴れる魔獣にも、恐ろしい殺し屋にも、伝説の魔獣や、並み居る軍勢にだつて、俺は立ち向かつて来たと言うのに。それが揺らめく影に怯えているなんて、まるで喜劇だ。

自嘲気味に笑つて、俺はゆっくり目を開けた。

——ッ！

影が、消えていた。さつきまであつた、揺らめく影はドコにも無い。

なんで？　なんでだ？　ドクンドクンと早鐘を打つ。いや、違う。洗濯物を取り込んだんだ。この時間に？

人が立つて居ただけ。でも、女の子の部屋の前で、たつた一人で兵士が佇むだろうか？

グルグルと頭に恐怖が巡る。自分の事を命知らずと思つていたのに、今はこんなにも死ぬのが怖い。あやふやな何かが怖い。

恐怖に目を瞑りかけた自分が居て。気合いを込めて目を見開く。
装甲車の入り口で、影がこちらを覗き込んでいた。

全身を、ぐっしよりと汗が濡らした。

コイツだ！　間違い無く。コイツが俺を殺そうとしている！　耳の血管が脈打つ音が、うるさいほどに聞こえて止まない。

誰か！　不安と恐怖に錯乱した脳が、田中、木村、二人の顔を思い出させる。

だけど、別れた時の寂しそうな顔だけしか思い出せない。いつもは助けてくれた二人

だけど、ここには居ない。少しだけ、すれ違ってしまった。

俺がジッと見つめる先、影が揺れる。揺れる。装甲車の前、いや、もう中。風など吹いていないのに！ 揺らめきながら近づいてくる。

装甲車の中、漏れ出した魔力の燐光が、ぼんやりと影を照らし出す。

「姫様……」

シノニムだった。

ホツと息を吐く。文句を言おうにも、舌は痺れて動かない。

良かった、様子を見に來ただけか。安心して目を瞑る。こう言う時は寝直すに限るのだ。

いや？ しかし、なんでこんな時に？

そして、首筋の痛みは止む気配がない。

再び目を開くと、シノニムは更に近づいていた。手に持つナイフが燐光に蒼く輝く。

「どうして……」

そして、構えた。

「どうして？ 使命は終わったのに」

何を？ シノニムさんは何を言ってるんだ？

そして、気が付いた。どうりで影がシノニムさんに思えなかったハズである。

シノニムさんに、運命の光が見えない。

「姫様が帝都を焼き、無関係な人間を殺せば、戦争は、ずっと終わらない」

なんで？ 知って？ 木村との会話は……

「ずっと一緒に居るのです。神の国の言葉でも、いい加減覚えます」

そう言つてシノニムさんは、手に持ったナイフを俺の心臓に突き刺した。

ゆっくりと。

え？ あ？

「私はオーズド様に、オーズド様の為に生きて。だけど、オーズド様はあなたを悪魔と。

それでも私は！ あなたを信じて！」

しんぞうだけでなく、食道もきりさかれて、口の中、血のあじがする。

「きつと、それが世界を救うのだと！ そう信じて！」

ああ、そうか。

シノニムさんが俺の味方をしてくれたのは……俺が何も持たない女の子だった時から、ずっと味方をしてくれたのは……理不尽な悪が許せなかったからだ。か弱い女の子を害する敵を、激しく憎んでいたからだ。

きつと、そこにかつての自分を重ねていたんだ。

それが、か弱い少女に見せかけた悪魔だと知ったなら。それは、こうなるか。

コレが、死？ 前とは違う、熱くない。体が芯からゆっくりと冷えていく。こんな死に方だったら、悪くない。シノニムさんに殺されるなら……。

——でも、お前も死ね。

俺はシノニムさんの首筋を掴んだ。

右腕が動かせた。出来たばかりの右腕だ。

力を込める。ゴキリと鳴った。

シノニムさんは、満足そうな顔をしていた。

俺の意識が遠ざかる。魔力で心臓の代わりに血を……無理だ、力が抜ける。何も考えられない。瞼が重い。

「ッ！ どうしたの？」

シヤリアちゃんの声がした。

「この！ なんで？ お願い！ 置いていかないで！」

無理だよ、ごめんね。

こんな終わり方。あんまりだよね。

「目を開いて！ 開け！」

もう、そんな力も残っていないかった。

「だけど、体に魔力が戻った。なんで？」

「これは、セレナ？ セレナの魔力？ そうだ俺の体には秘宝が埋まって。」

心臓の代わりに、魔力が俺の体に血を巡らせる。だけど、それだって長くは続かない。大きく斬り裂かれて欠損した心臓は、魔法では決して戻らない。

「だったら！ これを！」

「そう言つて、シヤリアちゃんはまだ動いている心臓を取り出した。」

「シノニムさんから。」

「代わりに！」

「そう言つて、俺の千切れた心臓を取り出してぶち込んだ。ミニ四駆のモーターを代えるみたいに。」

「手慣れたモノだ。実際慣れているんだろう。人間剥製作りの第一人者だけはある。」

「ハツ、ぐう」

「ミニ四駆並に単純な俺の体に、血が巡る。でも、足りない。血が足りない。」

「じゅる」

「だから、啜る。シノニムさんの血を。」

「がふっ」

そして、囁る。シノニムさんの肉を。

「ああ、羨ましい」

何故か、シヤリアちゃんはうつとりとそれを見ていた。

そして言つたのだ。

「ユマ姫様、私も」

シヤリアちゃんは、そう言つたのだ。

そこまでは、憶えてる。

★八章のまとめ的なアレ

【八章の登場人物】

・ミニエール

帝国のロアンヌ地方の女騎士。ロアンヌ領主である、タリオン伯の一人娘でもある。

プレートメイルを美しく着こなす。イメージはジャンヌ・ダルク。

儀礼用に綺麗な金髪のカツラを被って、使者として王国軍の陣地に乗り込んだら、母親の髪のもで作ったカツラだったので、ユマ姫が暴走。

その場で撃ち殺されてしまう。かわいそう。

・テムザン将軍

将軍つてのは軍の最高指導者的なポジション。

ハゲた髭のお爺ちゃん。テムジンがモチーフなのかな、若い時は騎馬隊による電撃作戦でブイブイ言わせていたみたいです。

策略家で、ユマ姫の母、パルメのカツラをミニエールに被せ、ユマ姫の暴走を狙った策略家でもある。

しかし、策士策に溺れると言うか、捕虜としたユマ姫を扱いきれず、酷い事になった。

・ヨルミ・ラ・ガードナー（ヨルミちゃん）

我らが女王。不細工がコンプレックスだったが、黒髪で日本人的な地味顔だっただけで、木村のメイクで見違えるほど美人になった。

メイクで印象を変えられるので、鞭を打つ時は真っ赤なりツプで派手目のメイクをしている。

戦場のご飯が思いの外美味しくて、普段食べてるのが犬のエサ以下だった事に気が付き、怒り狂って暴れ回った所を強制送還された。

不摂生や、まずい王様のごはんで痩せすぎだったが、美味しいご飯に目覚め、八章終了時点で肉がのって、ますます色っぽくなっているらしい。

あと、変な覚醒もしてます。

・マークス

ロアンヌの騎士団長。捕虜にされユマ姫に籠絡された。

非常に腕が立ち、若くして騎士に抜擢された。ミニエールとは恋仲にあったみたい。

全てをユマ姫に台無しにされたのに、ユマ姫を好きになってしまっている辺り、もう何と言うかわいそう。

・ラグノフ

ロアンヌ騎士の副長

特にないんだけど、名前は、マークスマンライフルとドラグノフから。

・タリオン

ロアンヌの領主にして、ミニエールの父。

橋の上で戦ったり、実はマークス達よりもむしろ見せ場が多いまであるよな。

ミニエールの仇討ち、そしてマークス達の奪還に気炎を吐いていた。

結局はユマ姫に救われて、最終的にはユマ姫の可愛さにほだされて、邪悪な存在だと気が付いた時には後戻り出来なくなっていた。

馬小屋で、ユマ姫に殺された。

こうして挙げていくと、ユマ姫の被害者が多い。

・バリーアン・ローグウッド

ローグウッド家の鬼子、一騎討ち帝国側三人目の切り札。

三章のスフィールの破戒騎士団の団長ローグや、五章の王宮で戦った魔剣使い、ローグウッド男爵とは血縁がある。

エルフの鎧、しかもカーボンに金属版で防弾性能も加えたモノに加え、魔槍まで装備していた。

しかし、鎧なんて超攻撃力の戦いでは拘束具と変わらない。田中にアツサリと殺された。

・グリダムス

捕虜になった五人の軍団長の一人。エロ親父。グリムダスと名前よく間違える。むしろグリムダスが正しい気がする。何だコレ。

エロ親父ゆえに、ユマ姫のバニー姿に、真っ先にメロメロになって寝返った

に、見せかけて、骨抜きになったフリで、命を繋いだけだったりする。なのに最終的にはやっぱり骨抜きになって、ゾンビに噛まれた後、敵へと突っ込んで行く。

ハーメルン版だと余計に影が薄いかも。なろう版「終末世界の創造者」でユマ姫に声を掛けようとして、肩に手を置いた時に動揺する描写などがあります。★つけてないや。

・オーズド・ガル・ネルダリア

王国軍の総司令官。『だった』

バニーガール姿で暴れ回るユマ姫について行けず、自領に引き上げてしまう。

シノニムさんの直接の上司であり、危険なユマ姫の元から、シノニムを引き剥がそうとして失敗する。

失意のままにネルダリアに引っ込むが、ユマ姫を押さえ込もうと策を練っている。

・リヨンIIブラッド

プラヴァアスの太守。七章に続いて登場。

七章は劇場版的な立ち位置にしているのですが、完全に切り離されたエピソードではなく。雨を降らせる方法が、霧や火薬、星獣狩りにも必要な布石になりました。

本人も強いのですが、雨を降らせて魔女の軍隊に切り込んだ時以外、あんまり見せ場がありませんでした。

実は星獣と戦った時に怪我を負い、仲間も多くを失ったために、八章終了時点でプラヴァスに帰還していません。

ユマ姫に挨拶をしなかったのは、怪我をユマ姫に心配させぬため。あんなユマ姫に、この程度の怪我を心配され、魔法で治す言われたらと思うと、とても顔を出せなかった。

・星獣『ママ』

『偶然』を知る何者かに、『坊や』を忌み子扱いされてしまい、地表近くでたった一人、子育てをしなくてはならなくなった被害者。モチーフはSCP-682（クソトカゲ）体調が50mの巨大なトカゲ。体内の魔力を熱エネルギーにして生きている。そのため泥を纏って熱を逃さぬようにしていた。

雨に弱く、ユマ姫に全身を切り刻まれ、雷を纏った王剣で切られるも、エネルギーが減少するだけで、全然死ぬ予感を見せなかった。

最後には隕石の力で粉々に砕け散って死亡。

隕石で星獣を倒す展開は、物語を書き始めた頃から考えていたのでやっと思書けたぞと

喜びが大きい。

モチーフをSCP682にしたのも、隕石でも降らせないと殺せない敵として、思い浮かんだのがアレしかなかったの。

・サファイア

ロアンヌの白馬。ミニエールの愛馬であった。

異常に賢い馬である。ユマ姫に怯えながらも、ロアンヌの皆の復讐の機会を虎視眈々と狙っていた。

隕石でボロボロになったユマ姫にトドメを刺そうとして馬脚を現し、馬刺しになった。

・マローウ

エルフの青年。ユマ姫の二歳上と、この作品の男性の中では、比較的ユマ姫に近い年齢。

他はみんなロリコンまであるよね。『偶然』の設定的にしかたない。

洗脳された田中を破る見せ場はあったが、洞穴で星獣の足に食らいついて死亡。

・ゼクトール隊長

ユマ姫親衛隊の隊長。

地味な役回りであるが、部下を殺されるなど、魔女への恨みを募らせていた。

ユマ姫と近い歳の息子が居る年齢ながら、アイドルに嵌まる様にユマ姫に入れあげていた。槍の名手で一騎討ちでは大活躍、マーロウを庇ってみせたりと、八章は見せ場も多かった。

最後はユマ姫を守るべく魔女を刺すものの、頭を撃たれて死亡。

・グリード

人員の損耗が激し過ぎるユマ姫親衛隊で、いつの間にか副長に収まり、八章終了時点で隊長になってしまった。

抜けた性格で、頼りなく見えるが、抜群に目が良く、危機察知や回避能力に長けている。

・シノニムさん（本名はカフェル）

ユマ姫の侍女は表の顔、ネルダリア領の諜報特務部隊の隊員。だった。

オーズドと袂を分かち、ユマ姫についていくも、持ち前の正義感が災いしてユマ姫を殺そうとして、心臓を奪われた。

なろう版の82話、「悲しみを重ねて」で彼女の過去があるのだが、ハーメルン版はユマ姫視点でずっとやってるので、ハーメルンで唯一全くフォロー出来ない要素になっちゃった。

反省している。

・シャルティア・フォン・ダックラム（シヤリアちゃん）

生死不明

・魔女クロミーネ

九章の開始は魔女の半生を追います

ハーメルン版の八章は、★ミニスカナースなどでマークス達とのやり取りがなろう版より増量されているのが見所でした。

九章はラストも近く、あんまりそう言うのは控えるかも……。

そろそろ、物語も終わりに近づいています。

いよいよ、化け物じみてるユマ姫に、どうか引かないで付いて来てくれると嬉しい。

九章 皇子の悲願と世界の終わり

黒峰 1

校庭で体育の授業。私はサボってる男子を注意して……それから……

気が付けば、真つ白な世界に浮いていた。体も無く、私が黒峰寧音だと言う自我だけが漂っている。

これは夢だ。ポカポカと暖かい世界で、私は何にも考えられない。

——あなたは死にました。

だから、その言葉が聞こえて来た時はゾツとした。

うそっ？ 誰？ なんで？ 面白い夢だなあ。夢でしょ？ もう！

色んな気持ちグルグル廻って、パチンと弾けた。

わたし、死んだんだ……。

——はい。

ねえ、出て来てよ。神様なんですよ？

私は、異世界転生モノの小説を読んでいた。最近良くある奴だ。だから、コレがそんな現実だと理解した。

——皆さん、順応が早いですね。興味深い。

神様？　とてもそうは見えない。白い世界に現れたのは大学生のお兄さんだった。寝癖が残ったボサボサの長髪に、ぼんやりした童顔。しわしわのリネンシャツとカーゴパンツで素足のままにデッキシューズ。どう見ても神様って感じじゃない。

「実体が有った方が話しやすいって言ってましたから、どうです？」

「……それ、誰が？」

「木村さんですよ」

「ああ……」

あの変人なら、細かい事を気にするだろう。文化祭でも、細かい突っ込みばかりしてきてウザかった。

「私は、いいえ、皆はなんで死んだの？」

私だけでなく木村君も死んだと言うなら、学校の皆も、ひよつとして地球が丸ごと吹っ飛んだのかも。

「いいえ、死んだのは四人。あなたと、木村さん、田中さん、そして高橋さんです」

「え？　なんで？」

たった四人？　校庭には二クラス分の生徒が居たのに！　グラウンドの真ん中で私達だけ死ぬなんてあり得ないよ。

「隕石です、小型の隕石があなたたちを殺しました」

嘘ッ！ そんなの理不尽だよ。隕石が直撃して死んだなんて聞いた事ない。

「事実です、私にも予想外の結末でした」

神の予定外の死で、お詫びとして異世界に行く。そんな小説を幾つも読んできた。だけど、まさか？

「ええ、本当に話が早い。異世界に行く事が可能です」

ええ？ ああ、考えている事も全て見透かされてしまう。

「考えている事も、全て声に出した方が良いですよ。その方が楽だと彼も言っていました」

「それも……木村君？」

「いいえ、田中さんです」

「そっか……」

アイツなら、どこでも生きていけそうな気がする。風来坊で、人懐っこい様に見える、根っからは誰も信じず、見透かした様な目をしていた。

そんな彼に、少しだけ憧れていた。だけど……

「行きますか？ 異世界に？」

流石に、怖い。行かないで良いのなら、行きたくない。

「生き返る事は、出来ないんですよね？」

「ええ」

だったら、そんなの行くしか無いじゃない！ ズルいよ。

「本当に、そうですか？」

「そうだよ！」

生きられる選択肢があれば、誰だってそっちを選んでしまうでしょ。

「本当に？ 今みたいに、ここにゆつたりと漂っているのはそんなにも不快でしょうか？」

……嫌じゃ無い。ずっとお風呂に入っているみたいで気持ちが良い。

わからない。死ぬのは怖かったけど、死んでしまうと、この世界に恐怖は無い。ママやパパにお別れぐらい言いたいけど、異世界に行つたつて無理なんでしょ？

「ええ、地球に言葉を届けるのは不可能でしょう」

「そっか……」

だったら、ここでゆつたりと溶けて行くのも悪くないのかな……

「でも、どうして隕石なんか？」

「それはですね」

話を聞けば、私達が死んだ原因は高橋君の運の無さが原因らしい。確かに彼はいつも

いつも、何をやらせても間が悪かった。あの日だって、そうだった。

神さえも匙を投げる『偶然』に、私達は巻き込まれた。

「そんなの！」

悔しい、でも、高橋君が悪い訳でもないし、でも、なんだか悔しい。イライラして落ち着かない。

文句の一つも言っただけでやりたいけど、かといって異世界に行くのも怖い。だって、言葉も通じない世界にたった一人で投げ出されて、私みたいな現代っ子が生きていけるはずが無いもの。

田中君や木村君なら何とか生きていけるだろうし、高橋君は諸悪の根源だから、死ににくく強い運命で守られるとか。

「……私？ 私は無理だ。」

「どうして？」

「……だって」

私は人よりなんでもこなせる子供だった。だけど、それは努力してるから。私自身は凡人なんだ。それは自分が一番良く知ってる。

パパとママはずっと喧嘩してて、仲良くして欲しくて、私は愛される子供になりたかった。だから、人より優秀でありたかった。だから努力した、それで人並み以上に何

でも出来た。

パパもママも褒めてくれた。だけど、本当に愛されていたのかな？ お前さえ居なければ、世間体も気にせず、とっとと別れるのにつて顔に書いてあったから。

結局、私の頑張りはどこにも届かなかった。

優秀なものも、そこそこレベル。黒峰さんは何でも出来るよねって言われるけれど、でも、そんなんじゃないや本当に好きでやってる子には敵わない。

田中君も、木村君も、尖った力を持っていた。高橋君の事は良く知らないけど、二人の友達なんだから、何か力があっても驚かない。

でも、私には何も無い。

ただ愛されたい。人より優れていると褒められたい。ただ、それだけ。本当の才能なんて何もなかったから。

「そうでしょか？」

そんなの、私が聞きたいよ。私にはどんな才能があったの？

「ただ愛されたいだけ、それで努力出来る事が、既に才能ではないですか？」

「……そんなの」

そんなの、誰だって愛されたいよ。当たり前過ぎるよ。

「でしたら、皆があなたと同じぐらい優秀ではないとおかしい」

「そんなの、屁理屈じゃない?」

「そうでしようか? 田中さまは誰よりも強さを、木村さまは誰よりも知識を求めていました、渴望こそが力になるのです。それこそが根源的欲求」

「どういう、事?」

「簡単です、愛されたいから勉強しても、好きで勉強している者には敵わない」

「そうだよ、そんなんじゃないにも……」

「そもそも、愛されるために勉強をする事が正しいでしょうか?」

「え?」

だって、優秀なら、みんな褒めてくれるから。

「本当に、優秀であれば愛されるのですか?」

そりやそうだよ! そうだよね? あれ? 違いの?

「あなたの身近に居る人で、最も愛されていたのは誰ですか?」

「え、……と」

思い出すのはクラスの鈴音ちゃん。クルクルの巻き毛で、可愛い顔で羨ましかった。

「顔! そうだよ、顔が!」

「その顔は、作られたモノです」

「ええっ! 鈴音ちゃんって整形だったの!」

「違います、メイクで顔の印象など大きく変わります。対象の鈴音さまは自然なメイクと小顔テクニクで顔を作っていました。本当に顔が小さい訳ではありません」

「そんなの……」

そのぐらい、皆やっている。私だって。

「本気でしたか？」

……違うかも。

でも、そんなので愛されたって。

「そうですか？ あなたは優秀さで愛されようとしていました。お陰で両親にしてみれば、手の掛からない子供でした。しかし、いつそ馬鹿なフリをして勉強を教わりながら一緒に時間を過ごした方が両親からずっと愛されていたでしょう」

「そんな！ そんなの……」

私の努力は無駄だった事？

「そんな事はありません、ですが、愛される為の努力としては迂遠でした。そこで、です」
「なに？ どうするの？」

「愛される為に、最適な方法が知りたくないですか？」

前のめりになる神様、差し出されたのは白い世界で尚光る、鈍く輝く珠だった。

適切な愛され方が解る能力。それを私にくれるらしい。

たしかに、魅力的だった。だけど、どうしても手が出なかった。

それって、鈴音ちゃんみたいに必死にお化粧をしたり、ぶりっ子をして生きる事。

そんなの嫌だ。

私は、私の生き方を否定したくなかった。

それが、私の意地だった。可愛くて、馬鹿なフリをして、そうやって愛されるのは耐えられない。

「そんなの……いらない」

「どうしてです？」

だって、愛されるために、自分を偽るなんて嫌だよ。

鈴音ちゃんは、あんまり頭は良くなって、ドジで、しょうがないなあってからかわれながらも皆の人気者だった。

だけど、私は凄いいねって、流石だねって、そう言う人気者になりたかったから。

「理想の自分を愛して欲しいと？」

「そう！ うん！」

そうだよ！ そうじゃなきゃ意味がない。

「なるほど、しかし、理想の自分を曝け出し、それで嫌われた場合はどうするのですか？」

「その時は、その時！ 嫌われて、邪魔をするならやつつける」

誰も自分を知らない世界に行くんだつたら、もう遠慮なんてしない。私らしい私だけを愛してくれる人が欲しい。私を否定する人は視界にだつて入れたくない。

「私は、その為の力が欲しい」

「好かれないのに、排除したい。相反する要素、だからこそ、おもしろい」

「無理かな？」

「いいえ、ですが、その道は霸道ですよ？」

「霸道？」

「逆らう者は殺し、圧倒的なカリスマでねじ伏せるのです。出来ますか」

「やるよ、やらないなら、異世界になんて行かない！」

「ならば、良いでしょう」

「え？」

優しい大学生みたいな神様だつた。今だつて姿はすこしも変わっていない。けどもう、そうは見えない。

ボサボサの長髪は今にも蠢きそうに不気味で、クリクリした愛嬌のある瞳はギョロギョロと全てを見透かした。

こちらを覗き込む神様をこの時初めて怖いと思つた。

コレが、恐怖なんだ。

白い世界に漂う内に、そんな事まで忘れていた。

「私がアナタに授ける力は一つだけ」

「なに……を？」

「更新権です」

「こうしんけん？」

意味が、解らない。

「彼の者に与えるは、異なる体に記憶を保つ為の参照権、ならば、アナタに更新権を授けても問題が無い」

「それは？ なんなの？」

「簡単ですよ、アナタと言う存在は、アナタの中では完結しない」

——アナタを知る無数の人間の中、虚像が重なりあつて、アナタの上に実像を結ぶ。

それが、アナタが望む姿と同じか違うかに拘わらず、それこそが真実になる。

「ならば！ アナタを認識する虚像を書き換えれば、アナタの実像も変貌する」

「私が、私の望む姿になれるって事？」

「それどころか、アナタはアナタの外に理想のアナタを作れる」

「そ、それって？」

「ただし、アナタの本質がアナタの上に留まれなくなるかもしれません。自分を強く持

「つ事が出来ますか？ アナタが望む姿を誰よりも強くアナタの中に刻めますか？」

「それなら！」

きつと、出来る。理想の自分なら。何度も思い描いてきた。

「行くよ、私、異世界に行く」

「ならば」

神様が放つ光に導かれ、私の意識がゆつくりと世界へ落ちていく。

「さあ、新しい世界へ！」と意気込んだのもつかの間、ゾクリと嫌な予感がして、下らない事が気になった。

「聞かせて、田中君は強さを、木村君は知識を望んでいたなら、高橋君は何を望んだの？」
彼は、何も取り柄が無いような男の子だったから。私は最後になって妙な事が気になったんだ。

そして、神様は教えてくれた。

「彼は、高橋さまは、誰よりも普通である事を渴望していました」

「え？」

誰よりも、普通である事を望む???

その選択が理解出来ずに、ゾワリと肌が粟立つ感覚が巡った。

「だって、え？ なんて？」

普通である事を望む、それが既に普通じゃない!!

大病だったり、障害があるならまだ解る。

だけど、彼は少なくとも普通に見えた。なのに、なぜ、普通であろうとするのか？

いや、でも、強い田中君がより強さを望み、色々な事を知っている木村君がより知識を望むなら、普通な高橋君がより普通な事を望んでも……

オカシイよ。

だって、普通である事をそこまで望むのが既に普通じゃない。

だから、その願いは絶対に叶わない。

言い知れない気持ち悪さ。絶対に不可能なパラドックス。

普通じゃないのに、普通になる。

その願いを結実させるには、きつと普通の世界を壊さなくてはならない。

焦る私を見て、考え過ぎと神さまは微笑んだ。

「望みと言うのは単純なモノではありません。知識を渴望する木村さまも、知識を結実させるための器用さを望みました」

「じゃあ、高橋君は？」

「彼は、私の担当ではないので……ひよつとしたらアナタと同じ、誰からも愛される事を

望んだかも知れませんよ？」

「そんなの……」

誰よりも普通であるために、誰からも愛される事を望むなんて、それこそつと矛盾している。

……そうだよね？

でも、誰からも愛されるのが普通になれば良いのかな？ 普通の世界を壊して？ 自分を普通に愛して貰う？ そんなのつて。

「あつ、そうか！」

意地悪なナゾナゾみたいな矛盾、その答えを思いついた瞬間。

私は異世界で目覚めていた。

アレコレと考えたモノが残らず霧散して、その答えは二度と思い出す事が出来なかった。

黒峰 2

私は今、猛烈に後悔している。異世界なんて、来なければ良かった。

転移した先は人気の無い森の中。もうこの時点で、死んでさっきの場所に戻ろうかと思っただけ。

体には怪我ひとつ無い。けど、力が増したとか魔法が使えるとかって気もしない。深い森の中に、中学生の女の子を一人にするなんて酷すぎるよ。

着ていたのはウールで編んだえんじ色のチュニツクと、目の粗い緑のマント。下半身は革製のズボンと、出来の悪いサンダルだけ。下着はナシ。

異世界へ憧れた気持ちがあつという間にしぼんでいく。こんなのちつともお洒落じゃない。

現実的な問題もあつた。この手の転移モノにありがちな、現代の服を売って一財産ルートが取り上げられている。それに、私みたいな現代人がこんなしょぼいサンダルで歩けば、すぐに足が音を上げるだろう。

始まって早々に、終わりが見えていた。

それでも涙目で森を彷徨うこと数分、私は運良く一人の人間と出会う事が出来たの

だ。

「カエフロギ、デイスタ、ガビル！」

でも、全然言葉が解らない。

普通、こう言うのは言葉ぐらいは通じるモノでしょ？　こんなハードな異世界、見た事ないよ。

「えっと、マイネームイズ……」

「ガビル？　ガズネムライダ？」

英語で話してみたけど、通じる訳も無い。でも、この人に見捨てられたら終わりだ。見渡す限りの森で、どこに村があるかも解らないんだもん。

頼れるのは、変な風にヒゲを生やしたこのお兄さん、たつたひとり。

カイズル髭って言うのかな？　この世界で一般的なファッションなのだろうか？

癖が強い。

他は普通の西洋人だ。くすんだ金髪に碧眼、革鎧に、腰には剣。ファンタジーな格好だけど、触れば斬られる様な物騒なオーラがあった。

ただ者じゃ、ないよね。どう見ても獵師じゃない。騎士？　ううん、もつと危険な人だ。言葉も通じない子供に長く構ってくれるタイプじゃない。

「ガビル？」

この繰り返し。ガビルとは何だろう？ 彼の目をジツと見つめる。
え？

彼の瞳の中に、私の姿が見えた。

でも、違う。その『私』は私じゃない。とても粗雑で乱暴者に見えた。今にも人を襲い、金品を巻き上げそうなほど。これって？ まさか!?

「山賊？ 私か？」

「ガビル！」

違う、私は山賊じゃ、ガビルじゃない。

私は必死に村娘の自分をイメージした。

「ラオン？」

彼の中の私が村娘の姿に変わる。ラオンとは村人？ いや、具体的な光景がある。ラオンとは村の名前かも知れない。案内して貰わなくちゃ！

「ラオン！ 私は、黒峰」

「クロミネ？」

髭の兄さんは私を指さす。そう、私の名前がクロミネ！

「うん、クロミネ。お兄さんは？」

すると、面倒臭そうに頭を掻いて、変な髭のお兄さんは自分の顔を指差した。

「ローグウッド」

それが、お兄さんの名前だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

お兄さんは私をラオンの村に届けた後、再び旅に出てしまった。私はたった一人、知る人の居ない村に残されてしまう。

それから一ヶ月、私はラオンの村、村長のお家でお邪魔になっている。

「どうかな？ 調子は？」

「ええ、大分慣れました」

朝食時、心配そうに聞いてくる白髪の村長さんに頭を下げる。

言葉も解つて来た。もう日常会話ぐらいなら問題無い。私は村長さんの目を覗き込み、村長さんの中に居る自分の姿を確認する。

……まただ。

また、彼の中の私は、裏で何か探りを入れようとする、性格の悪い女の子の姿をとっていた。

私は裏表の無い純真で可愛い女の子の姿を想像し、彼の中に焼き付ける。

「良かったよ、初めは妙におどおどしていてこちらも不安だったんだ」

村長さんは穏やかに微笑んでくれた。これで一安心。閉鎖的な村だけあって、よそ者

への警戒感が凄くて困ってしまう。

そして、コレこそが私のチート能力『更新権』だった。

見つけた相手の中の私。その印象を操作出来る。

それだけじゃ無くて、伝えたい事を伝えたり、意識を惹きつけたりも出来る。

言葉を覚えられたのもこの力のお陰が大きかった。私の気持ちも伝えられるんだも

ん。コレがもし、お互いに言葉がわからない状態なら、きつと凄く苦労した。

辞書が揃っている英語だつて覚えるのが大変だったのに、ここではガビルと言う単語が解らない時、ガビルとは何なのか、必死で考えなくてはいけないからだ。

椅子や机みたいに指させる物なら楽だけど、盗賊みたいな言葉だとすごく苦労する。

ところが更新権で盗賊のイメージを伝えると、村長さんがガビルと言葉を返してくれんだ。コレで言葉を覚える事が出来た。付き合ってくれた村長には感謝しかない。

「しかし、不思議な力だな、君のコウシンケイ？ は」

「はい、神様がくれた私の力です。その代わり言葉を奪われてしまいました」
「そう言う事になっている。」

実際、能力を諦めれば、言葉や常識を脳に植え付けて転移する事も出来たらしいから。あながち間違っていないと思う。

でも、それじゃ本当にただの女の子になってしまう。だったらこの更新権の方がずつ

と便利だ。

それに、体は前世の私と一緒にだと思っていたけど、微妙に違う。視力が良くてコンタクトも要らないし、筋力もある。言葉をすぐ覚えた感じ、頭だつてずっと良い。私は私だ、彼と違って、普通である必要なんてどこにもない。

「じゃあ、行つてきます」

「ああ」

私は村で革のなめしを手伝っているのだけど、皮下脂肪を削つたり辛い作業でも手が荒れたりしない。凄く体が丈夫になっている。

「あ、出てくる！」

そして、この村で革なめしはただ燻すだけ。なめしが不十分で腐りやすく、すぐ固くなつてしまうモノだった。

だから、私は石灰につけ込んでから、タンニン液に漬け込んだ。燻すだけである程度なめされてるから解つてたけど、ここの植物にはタンニンが多く含まれていたんだもの。

塩が貴重で水分を抜くのに灰を使ったけど、悪くない。乾燥させた後も革はしなやかさを保っていた。

「おおっ！」

「初めは革で遊んでいると思っていたが、やるじゃないか」

出来上がりを村の皆が喜んでくれる。私もようやくこの村に馴染んできたのかな。村には男の人が多くて、女の子である私を皆がちやほやしてくれる。

まあ、ちよつと皆の印象を操作してらんだけどね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

この辺りはやたらと山賊が多く、村の皆は迷惑しているとか。ローグウッドさんもこの村を拠点に盗賊退治をする、傭兵さんなんだって。

なるほどね、確かに触れれば切れそうな、ちよつと危ない感じがしていた。

今日は村長さんと二人で、山の上から行商の隊列を眺めていた。

「村長様、来てるよー!」

「ああ、そうだな」

行商が来ないと、こんな小さい村はすぐに干からびてしまう。現にもう夕飯の食事に味がなくなつて数日経つ。肉も穀物も自給自足出来るけど、塩だけは絶対に必要だった。

山道を行商の人達がテクテクと登ってくる様を今か今かと二人で見守る。その時だった。

「あつ!」

山賊が現れた！ 横合いから襲われて、矢が刺さった口バがドサリと倒れる。

「助けを、呼ばないと！」

「無理だ……」

村長さんに止められる。それもそのはず、山賊は凄腕だった。矢は一発も外してないように見える。行商人の男達は一人、一人と、確実に仕留められていった。

「酷い！」

皆殺しだった。異世界で良くなった視力が恨めしい。千切れ飛ぶ手足まで見通せてしまうから。

「うっ！」

気持ち悪い。この世界はちつとも優しい世界じゃ無かった。

なにより、コレで塩が手に入らない。塩がないと生きていくのは難しい。これからどうしよう？

その日は村長さんと二人、とほとほと帰宅して、薄いスープを無理矢理飲んで寝床に入った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

寝れない夜を過ごして翌日。朝食の薄いスープは喉を通らなかつた。まだシヨックが抜けない。

革の処理も上手く行かなくて、ひとつ駄目にしてしまった。

「なあ元氣出せよ」

そう言つて麦粥を差し入れてくれた青年の優しさが嬉しい。

「ありがとう」

お礼を言つて、粥を啜る。暖かさが身に染みた。

!?

塩の味がする。それも、かなり濃い。

「これ!?!」

「なんだい?」

青年を振り切つて、私は走つた。村の倉庫へと。

「え? 入つてる!」

甕かめの中には塩がたつぷりと入つていた。良かった、まだ塩はあつたんだ。

でも、なんで?

そう思つた瞬間。私は後頭部を殴られて、意識が闇へと溶けていった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから、私は暗い倉庫の中に閉じ込められた。何日も、何日も。

差し入れには麦と、干し肉。ちゃんと塩の味がした。

訳が解らなかつた。

あれから何日か、現れたのは村長さんだった。やっと助かった。

「モルディンさん、こちらです」

「コイツか」

違った、村長さんは一人の男を連れて来た、齒を剥きだしに笑う顔には、長い耳が生えていた。

「エルフ？」

思わず呟く。ファンタジーのエルフみたいな特徴だったから。着ている服も、村の人よりずっと立派だ。

「エルフ？ とはなんだ？」

「ああ、こやつは変な言葉を喋るんです、気にせんで下さい」

村長さんは、蔑んだ目で私を見た。なに？ なんで？

「殺しますか？」

「ふむ」

エルフの男が私を見る。ゴミを見る目だ。このままじゃ、殺される。嫌だ、死にたくない。

私は、エルフの目に映る私の姿を書き換えた。可愛くて、美しく、殺すのが惜しくな

る美少女に。

——それが、間違いだった。

「なにも殺す事はなからう、良く見ると悪くない」

「え？」

エルフの男に、着ていたチュニツクを捲り上げられた。下には何もつけてない。

うそ？ 嘘でしょ？ こんななの？ こんな所で？ 気持ち悪い！

そして、私は犯された。

駄目だ、嫌われないと。こんなの嫌だ！ 嬲られながら、私は必死で男の目を睨む。

——それも、間違いだった。

「ふん、こんなもんか。おい好きにして良いぞ」

「やった、話が解る」

「ずっとやりてえと思ってたんだ」

何人もの男が、私の体に群がった。

そこからの記憶は曖昧になる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ヒツヒツヒツ」

薄暗い小屋の中、私は声にならない声で笑っていた。

悲鳴をあげ続け、喉は嘔^かれていた。足の健は切られ、きつと二度と歩けない。

散々に戮^つられて、手足の感覚が無い。ドロドロに汚れたまま裸で放置されている。

私はきつと、頭がおかしくなっていた。だけど、おかしくなった自分を冷めた目で俯瞰して見ている自分も居た。

あーあ、私なんか身一つで異世界に来たらこうなるに決まってるのに、と。

村人に、自分を無闇に可愛く見せていたのが却って良くなかった。散々犯されて、なかなか殺してくれない。

犯されている内に解った事だけど、この村が山賊だった。この村に住む全員が山賊だったのだ。

エルフの国に攻め入る為に、この国は森を切り開き道を作っていた。公共事業の一環だと言う。

その最中、補給物資が襲われた。それも、何度も。

だけど、この村に来る商人だけは襲われない。その事を疑われていた。いや、疑われてなどいないのに、疑われているんじゃないかと村人達が疑心暗鬼に嵌まっていた。

そこに現れたのは盗賊退治を生業にする名うての傭兵。ローグウッド。流れの傭兵が見知らぬ少女をこの村に送り届け、面倒を見ると無茶を言う。

村人達は焦った。傭兵が適当な孤児を村に置いて、見張りに仕立てたと考えたからだ。

言葉が喋れないのも、却って怪しい。言葉も話せぬ少女なら秘密をペラペラ打ち明けるだろうと、聾啞ろうあのフリをしているのだと思われた。

音には反応するので、下手な芝居と笑っていたらしい。それがバレるや途端にしゃべり出したのも、心の内に語りかける不思議な力まで持っているのも、益々怪しいと警戒していたとか。

故に、村から遠ざけた隙に行商を襲い、村も盗賊に困っているフリをしようと考えた。塩のない食事も困っているフリの一環だ。

だけど、私は行商人から奪った塩に気が付いてしまった。

やましい事はまだある。村は人間の敵、エルフと通じていた。

エルフは魔法が使える。彼が一人いれば軍事物資の略奪だって苦も無かったと言う。

しかも物資を売り払った利益をエルフの男は受け取らないらしい。村人で山分けで良いと言う。

なぜか？ エルフにしてみれば村を拠点に帝国の侵攻を邪魔出来ればそれで十分なのだ。給料はエルフの国から出ているのだとか。

こんなに都合の良い仲間は居ない。下に置かない扱いで迎え入れ、村は食事と寝床を

エルフの男に提供していた。

しかし、私が居る間はエルフの男は村で過ごせず、仕事も出来ない。利益が減って、村人は切羽詰まって居たらしい。

寝物語に、そんな恨み言を散々聞かされた。

「フヒヒヒ」

暗闇の中で一人笑う。

全部ッ！ 全部が！ 村人達の空回り。

私はただの迷子だし、ローグウッドさんだつて何も考えてない。ひよつとしたら二度とこの村に來ないかも。

勝手に邪推して、勝手に空回りして、私も私で、変に好かれようと色々頑張つて、全てが裏目に出してしまった。

これでは高橋君を笑えない。いや、きっと彼の運の悪さが私に伝染してしまったんだ。

今頃、彼は長生きする為に愛されて、良いところで、ゆつたり過ごしているに違いない。

悔しかった。なんで私はこんな所で苦しんでいるのだろうか？

そんなの決まつてる、こんな地獄に転移させたあの神のせいだ。あんなのは邪神だつ

たに違いないもの。私は初めから騙されていたのだ。

「ヒヒヒヒヒッ」

狂った様に笑う。いや、本当に狂っていた。

そんな時、家畜小屋みたいな場所に囚われている私は、外がにわか騒がしくなったのを肌で感じた。

彼が、ローグウッドが村に来たのだ、私には不思議とそれが解った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その日、男はなんとなく気が向いてラオンの村に足を運んだ。

ローグウッドは数ヶ月前に拾った少女クロミネがどうなったのか気になったのだ。危険な森の中に一人、言葉も知らない少女が居るなどあり得ない。

すわ、盗賊団の子供か、はたまた森に棲む者の出来損ないかと身構えたが、どうにもただの村の子供の様だった。

その日は仕方無く盗賊捜しを切り上げて、ローグウッドは少女を村に届けたのだ。た。

それからも結局、ローグウッドは盗賊の尻尾を掴めずひたすら森の中を彷徨っている。帝国軍も手を焼く山賊を見つけたとなれば恩賞は望みのまま。叙勲も夢でない。飛び出して来た。

しかし何の成果も上がらない。森を彷徨う途中、変なモノを見つけたが、それが精々だった。

流石に潮時と諦め故郷に帰る帰り道。最後に少女の様子を見に立ち寄った。

「よお、久しぶりだな」

「おやおや、何のご用ででしょうか？」

しかし、久しぶりに会った村長はどこか様子がおかしかった。ローグウッドは自慢の髭を捻って思案する。

村人もぎこちなく、落ち着かない。これは、何かある。果たして少女はどうしたのか？ 向こうから振ってくるべき話が、なかなか出ない。

村を出る間際、満を持して少女の行方を聞いても何処かに逃げたと素っ気ない。極めて怪しかった。

貧しい村だ、本当なら少女の飯代でも請求されたって不思議じゃない。なのに、コチラの飯まで用意して歓待の準備があると言う。付近で行商が襲われたばかりだと言うのだ。嫌な予感がしてローグウッドはすぐに村を飛び出した。

そして、夜が更けてから忍び込む。

ローグウッドはただならぬモノを感じていた。村は静まり返っているが、人の気配は途切れない。

この村には何かある。ゴクリとツバを飲み込んだ時、彼の頭には閃くモノがあった。あの小屋だ。確信めいた直感。何かに呼ばれる様な気がして、暗がりにもぎれ、扉を開けた。

「あ?」

下半身を露出した男の間抜け声。その下に、組みしだかれた少女が居た。

考える前に体が動いた。ローグウッドは一息に抜き放ち、男の首を刎ねた。汚れるのも構わず慌てて少女を抱き上げる。

「どうした? 何があった?」

「あう……」

そうだ、少女は喋れない。これでは何の証拠にもならない。やるせない思いにローグウッドは頭を抱えた。

「見て」

「?」

少女が喋った。ハツとして見ると少女は爛々と目を輝かせ、こちらを見ていた。

瞬間、様々な情報がローグウッドの脳内を駆け巡る。山賊だらけの村、森に棲む者の魔法、監禁され犯されたクロミネ。

「これは?」

クロミネの力にローグウッドは困惑する。これは魔法だろうか？

そして、山賊の正体に驚愕する。

全員が山賊、頭に閃く映像でその練度は尋常ではないと知れた。とても敵わない。首を刎ねた若者も、万全ならば強敵だったに違いない。剣士ならば体つきで解るのだ。

まして、森に棲む者の術士など一軍で戦うべき敵。一介の腕自慢ではとても相手にはならない。

「すまんが耐えてくれ、応援を呼ぶ」

退却。それは苦渋の決断。

戻るまで、クロミネは保たないだろう。それが解っていてもローグウッドは命が惜しかった。

「見て」

「あ……」

しかし、少女の目がローグウッドを離さない。ローグウッドは少女の目の中に宇宙を見た。狂気に歪んだ激情が更新権の枠を壊した。

——そうだ、俺は最強の剣士。何を恐れる事がある！

更新権は理想の自分を書き込む力だ。だから、ローグウッドの中のローグウッド自身の認識も、理想のソレに書き換えられる。

ローグウッドは最強の自分を常に夢想していた。その理想と、現実の認識を、入れ替える！

「待ってる、今片付ける」

蛮勇に逸ったローグウッドは荷物をその場に残し、剣を片手に飛び出した。

黒峰はそれを見て、ああ、一人の男を道連れにしたぞと、白濁にまみれ一人ほくそ笑む。

ここでローグウッドは死に、物語はそこでお終い。それが『普通』だ。

だからこそ、普通じゃなかったのは黒峰ではなく、むしろローグウッドの方だった。

「オラッ！ セイツ！」

「クソっ！ 昼間の傭兵が攻めてきやがった！」

「相手は一人だ、囲め！ 囲め！」

「駄目だ、コイツ強い！」

彼は真実、最強の剣士だったのだ。

思えば剣士がお互いの腕を比べる機会など、そうそう無い。

剣士が腰のモノを抜けば、その後は命のやり取りになる。それが粗末な木刀でも、当たり所次第で容易に人は死ぬ。

平和で戦争も少なく、竹刀のように安全に腕を競える武器も無い世界、自分の本当の

実力を把握していない傭兵は、実際ごまんと居た。

大半は自分を勇者と過大評価する夢見がちな若者だが、ローグウッドは数少ない真逆の例外だった。

ローグウッドは酒場でゴロツキ共が大きく吹かすホラ話を信じ込み、周囲を過大評価していた。俺程度の腕前は、世界にゴロゴロ転がっているのだと。

彼の親類も腕自慢ばかりだったのが、良くない誤解を生んでいた。それが今、完全に裏返った。

黒峰が押し付けた夢に見た自分こそが、本当の自分の姿だったのだ。

気が付けば、村人の全てを斬り倒し、立っているのは肩で息をするローグウッド一人となる。

真実、彼は英雄だった。

「おっと、そこまでだ」

しかし、耳元で声がする。ハツとして振り返ると、自慢の剣が矢に弾かれて宙を舞った。

ローグウッドは視界の遙か遠く、弓を構える男を捉えた。音に聞く森に棲む者の魔法戦士の姿で間違いはない。

間近で聞こえた囁きは魔法の力、その身は遙か遠く。剣も飛ばされたローグウッドに

打つ手は無かった。

「この距離ならば外さない、どこに雇われた？ 吐いて貰おうか」

エルフの戦士モルデインは訓練されたエルフの国の工作員である。村人に扮する盗賊とは訳が違う。

聾啞の少女をスパイとして仕込み、ただならぬ剣の腕前を誇るローグウッドをただの傭兵とは信じなかった。

「どこもなにも、雇い主なんざないさ」

「ほう、あくまで口を割らんか」

ギリギリと弓を引く。魔法で誘導する矢は決して外れず。人間から見ると常識外れの威力を誇る。抵抗する手段はまるで無かった。

——パアン！

だから、対抗するには人外の力を使うしか無い。空気が弾ける音がしてエルフの戦士モルデインの命はそこで尽きた。

「ばか、な？」

腹に開いた大穴を呆然と見つめる。

「ヒヒッ」

汚れた少女は馬鹿みたいに笑った。足の健を切られ、這いつくばった姿勢。抱えてい

るのは、未来的なライフルだった。

「撃てた！ やつぱり、銃だった」

黒峰はローグウッドが持っていた荷物を漁り、不可思議な物体を見つめる。それは、ガレット魔力銃。古代人が作った魔力で発射する銃だった。

形状から銃じゃないかと閃けば、黒峰は居ても立ってもいられなくなった。どうしても、どうしても、撃ち殺したくて仕方の無い相手が一人、居た。

這いつくばるように小屋をでて、白濁と泥でグチャグチャになりながら、トリガーを引いたのだ。

「ヒヤヒヤ、フヒヒヒ」

少女は、暗闇でケタケタと笑う。

「ねえ、ローグウッドさん、この銃どこで手に入れたの？」

「いや、それは東の方の大穴に」

「連れて行ってよ、きつともつとおもしろいモノが有るから」

そうして、二人は盗賊村ラオンを討伐した。

村丸ごとの討伐劇。証拠も少なく、むしろコチラが盗賊と疑われる事をローグウッドは覚悟した。

森に棲む者の死体こそあれど、証拠としては弱い。下手すれば無辜の民を切り捨てた

悪党と断罪されるリスクもあった。

だが、不思議と少女の主張は通り、ローグウツドは一躍最強の剣士と帝国で名を知らぬ者は居ない存在へと祭り上げられる。

そして、魔女クロミーネの名も、秘かに知れ始める切掛となった。

その後、約束通り、二人は東の古代遺跡へと足を踏み入れる。それが世界を変える転機となった。

黒峰3

背負子に背負われて山道を進む。

酷く揺れるがもう慣れた。足をプラプラさせながら、搔き分ける草の匂いを思い切り吸い込む。

切られてしまった足の健は治らない。回復魔法に期待したがそんなモノはどこにもないと言う。

「ふふふっ」

まただ、また笑ってしまった。

この世界に来てから絶望するたび笑いが漏れる。いつそ笑うしかないんだもの。それほどあんまりな世界だった。

先頭を歩むローグウッドさんが呆れた様子で振り返る。

「約束したから連れてくけどよ」

迷惑そうに言いながら、一瞥もくれず下草を刈り取っていく。

「ロクなモンがなかったぜ？ ガラクタだらけだ」

「そのガラクタが立派な銃だったでしょう？」

私がニツコリと言い返すと、舌打ちが返った。

「その銃とやらも一発こつきり、ウンともスンとも言わねえじゃねえか」

「それは古いから弾丸が腐つてたの。撃てる弾だつてもつとあるはず」

「チツ、撃つてみるまで撃てるかどうか解らん使い捨ての矢なんぞ、役に立たんと思うがな」

確かにそうだ。でも、この足ならば撃てるかどうかの銃ですら貴重な武器になる。なにより私が見ればもつと面白いモノが、きつと見つかる。

それにしても、道が険しくなってきた。私を背負うポーターが心配で声を掛ける。

「大丈夫？」

「ええ、軽いぐらいです」

「ふふつ、ありがとう」

お礼を言えば、それだけでポーターは耳まで真つ赤だ、すごく好かれているみたい。二人のポーターに交代で背負つて貰っているのだが、荷物を担ぐもう一人のポーターは酷く羨ましそうにコチラを見ていた。

……ああ、書き換えた甲斐があつた。

好かれた分だけ私を運ぶ足にも力が入るに違いない。あんな目にあつたばかりだもの、好かれ過ぎるのは少し怖い。だけどローグウッドさんが居れば彼らだって変な真似

はしないだろう。

ただ好かれるだけじゃなく、状況をコントロールしなくちゃ駄目なんだ。高い授業料を払って私はソレを学んだ。

「そろそろだぞ、オラ」

ローグウッドさんが顎をしゃくる。見下ろす先には落盤でポツカリと空いた穴。

「ふふっ」

ソレを見て、また笑いが漏れた。穴の底にはコンクリートの地面が広がっていたのだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

落盤で穴が空いたのではなく、地下施設の天井が抜けたのだ。そして、ここはきつと武器庫だ。

「じゃあナニか？ コレが全部、銃なのか？」

「そうね」

壁に所狭しと並ぶライフル。だけど、肝心の弾がなかった。

「やっぱり使えねえだろ？ 俺だって一番良さそうなのを拾ってきたんだ」

ローグウッドさんが言うとおりに、銃も弾丸も劣化して使えそうもなかった。むしろ、一発だけでも撃てる弾が残っていたのが奇跡だったと思える程に。全ての弾丸が駄目

になっていた。

「お前がぶっ放したヤツだけは、あそこの箱に入ってたからな」

「そう……」

特殊な保存容器に入ってたモノ以外は全滅みたい。

でも、私は別のモノが気になった。鉄の壁だ。叩けばカンカンと高い音がする。

「ああ、そりゃ駄目だ。俺の剣でもビクともしねえんだ」

「そうかしら？」

私はポーターの男性にお願いして、指さす先の壁を調べて貰った。

案の定、見つかったのはハンドル。そのまま回して貰う。

「あ、開きますぜー！」

「なんとー！」

何も驚く事じゃない、だってココは武器庫なんだから。嚴重な隔壁の役割は外からの侵入を防ぐ事。内側からなら手動で開ける方法があっても不思議じゃない。停電で閉じ込められたら命に係わるのだから。

「行きましょう」

呆然とする男三人に、私は有無を言わさず宣言した。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「失敗したなあ……」

私は金属の壁に囲まれ、呆然と呟く。

「呑気な事言ってるじゃねえ！ 閉じ込められたぞ！ どうするんだ！」

ローグウッドさんは文句を言うが、もうどうにもならない。

アレから私達は施設の奥深くまで潜っていった。そしていよいよ中心部、まだ電気が通う稼働中のエリアを見つけたのだ。

そこで鍵が掛かった扉を強引に開けようとしたらコレだ。指紋認証だかパスワードだか解らないが、前世の感覚で適当に触ってしまった。

何度間違えてもロックが掛かるのが精々だとタカを括った。

まさか隔壁が降りて閉じ込められるなんて……。待っていたら開くだろうか？ コレは侵入者を捕獲するための罠だ。先ほどみたいに内側から開ける仕掛けは期待出来ない。

私は時間経過で隔壁が解放される事をひたすらに祈った。

……それから二日経った。

最悪だ、開かない。

隔壁内は狭く、もはや糞尿に塗れている。何より辛いのが水が尽きそうな事だ。もって数日の命だろう。

誰も彼も冷静で居られない。最初に異常をきたしたのは二人のポーターの片方、私を運んで来た方の男だった。

「もう我慢出来ねえ！」

そう言つて、私にのし掛かる。

なるほど、死ぬ前に気持ちよくなるうつつて考えか。

それも、良いかもしれぬ。そんな下らない事に体力を使つたら、いつそ楽に死ぬから。

だけど、ソレは今じゃない。私は男の顔をゆつくり撫でる。

「うん、いいよ、ねえコッチを見て」

「あ、ああ」

そうして目が合う。そこに映る美しい私の虚像を書き換え、邪悪な魔法の像を瞳の中に結んだ。

「うっ！」

ポーターの男は焦った。急に私が恐ろしく見えたから。

「私を見てくれて嬉しいけれど、後ろに気をつけなくて良いの？」

「え？」

慌てて振り返る。邪悪な魔法は背後から人を襲わせるのが大好きなのだから。振り

返らずには居られない。

でも、ローグウッドさんも、もう一人のポーターも、気が滅入ってしまい、襲われる私を見ても微動だにしていけない。あくまで他人事、冷たいモノだ。

だから、背後から襲うのは私自身。

「えいつ」

よそ見した際に、私は脇に吊り下げたナイフを引き抜き、のし掛かる男の頸動脈を斬り裂いた。

「あ？」

タダでさえ栄養不足。血を流した男はぐるんと白目を剥いて、倒れ込んできた。

血のシャワーを浴びて私の顔が真っ赤に染まる。閉じ込められて血まみれ。水も食料もない中での仲間割れ。とうとう人を殺してしまった。

最悪。最悪のハズだ。だけど極限状態のせいとか、嫌悪感よりも喉の渇きが勝った。

ごくごく喉を鳴らす。私はひたすらに血を飲んだ。

「ふいっ」

まただ、また笑ってしまった。最悪過ぎて、引き攣った笑いが止まらない。自分のどこかが壊れてしまった。

だから、隣で座り込み、呆然とコチラを見つめるローグウッドさんに笑いかける。

「ねえ？ お腹が減らない？」

「なに？」

「お腹が減らないかって聞いてるの！」

「食い物なんざ、ある訳ないだろ」

「あるでしょう？ 一緒に食べましょう」

「まさか……」

「コレよ、ほら」

私は、ポーターの死体を押し退けローグウッドさんの目の前に転がした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、更に数日、いや数ヶ月？ もう一人のポーターも腐った肉塊と成り果てて、私は汚物に埋まる様にローグウッドさんと二人で死を待っていた。

「俺は、喰わねえのか？」

骨ばかりになった剣士がぼんやりと問う。

でも、殺そうにも意志が強く洗脳するのも難しい。それに、殺せたとしても骨と皮しか残っていない、苦しみが数日長引くだけだろう。

「いつそ、アナタが私を食べる？」

上着をめくって骨張った体を見せつける。冗談のつもりだったけど、ローグウッドさ

んは笑った。

「それも良いかもな」

やけくそなのか、意外にもそんな事を言う。だけど、もつと意外だったのが次のひと言だ。

「でもな、見られながら勃つほど元気じゃねえんだよ」

「見られて？」

誰が？ 閉ざされたこの部屋で？ まさか、幽霊？

たしかに腐った肉塊に埋もれた現状。ポーターの幽霊が出たって不思議じゃなかった。

「ああそうだよ。いよいよおかしくなっちゃまった。視線を感じるんだ。誰も居ない壁かならな」

「それって……」

私がこの世界の女の子なら幽霊に怯えただろう。だけど私は知っている。誰も居ない所から一方的に覗く方法を。

それに思い当たった時、私は最後の力を振り絞り、壁に寄りかかり体を起こす。

「なにしている？」

「見られてる！」

「幽霊か、おめえにもいよいよ見えたかよ？ お迎えだな」

「違う！」

私の声は歓喜に震えていただろう。壁の中、レンズが埋まっていたんだもの。

『カメラ！』

思わず叫んだ。そうだ、不審者を閉じ込めたら監視するカメラがあつても不思議じゃなかった。

管理者は醜く殺し合う私達を見て楽しんでいただろう。

「ふふっ」

笑つてしまう。ああ、そうだよ。そんな悪趣味な奴は絶対に引き摺り出してあげないと。

私はカメラを見つめる、その奥の人間を想像して、その瞳に映る血と臓物に塗れた私の姿を美しく感じるように書き換える。

それからしばらくしてからだった、ビクともしなかつた鉄の扉がするすると持ち上がり、一人の男が私達の前に姿を現したのは。

「アナタは、何物だ？」

痩せ型で銀髪の男が私に尋ねる。そんなのコッチが聞きたいけれど、勝手にお邪魔してる立場だから名乗ってあげた。

「私は黒き魔女、クロミーネ。あなたは？」

「私は……ソルン。そう呼ばれている」

それが、彼との出会いだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「歩ける……」

足が、治った。目が覚めたら上等なベッドの上。飛び起きた私の足はしっかりと大地を踏みしめた。全てが夢だった？ ううん、そうじゃない。

私の腕に繋がれたチューブがひとりでに外れる。点滴、ここは病室？

何が起こったのだろうか？ 私は必死に思い出す。

糞尿と血にまみれ、歩く病原菌だった私達は捨て犬みたいに洗われた。でも、覚えているのはそこまで。

歩けないのだから仕方が無いけれど、台車みたいので運ばれる内に、私は意識を失ったのだ。

「目が覚めたか」

現れたのは例の銀髪の男だった。でも、何かが違う。

「お前等は、いやお前は何者だ、言え！」

にじり寄って問い正してくる。その目の奥を見て、私は確信した。

「アナタは誰？ ソルンはどうしたの？」
「ちっ！」

男は舌打ちをひとつ。忌々しげに私を睨んだ。この人は誰だろう？ 悩んでいると、扉からもうひとつ同じ顔が現れた。

「お見通しの様だね」

目の前に、二人が並び立つ。冗談みたいに同じ姿。

「俺とコイツは同じのハズだぜ？ 何故解った？」

「それは僕も興味あるな」

同じ白髪、同じ顔が二つ並ぶ。でも、その目の奥の世界が全く違う。

「だって、全然違うでしょ？」

「チツ、勘の良い奴がたまに居るんだ」

「本当に、それだけかな？ 死にかけの状態で、僕とは僅かに顔を合わせたただだよ？」

覗き込むソルンの瞳は穏やかに凪いでいた。一方でもう一人は言葉も、瞳の奥の世界も、大変に荒っぽい。やっぱり全然違うよ。

「フンツ、俺はノエル。コイツとは同一体さ」

「改めまして、私はソルン。コイツとはまあ、兄弟みたいなもんかな」

「双子なの？」

私は思わず聞いていた。内心で違うと思いつながら。

「チツ、気色ワリい」

「同じ様なモノだね」

微妙な反応、それで私はピンと来た。

二人はクローンだ。

彼らはきつとこの遺跡を作った古代人の末裔、それともホムンクルス？ 中世レベルだった人間の文明を考えれば、クローンなんて説明も出来ないかと判断されて当然だ。

現にソルンは誤魔化す様子を話を変えた。

「それより君の事だよ」

「私？」

「僕に言わせれば、君は人間じゃない」

そんな！ いや、でも、そうかも知れない。

私の体は隕石に破壊され、今の私は神に作られた存在だ。革をなめして解ったけれど、初めに着ていた革のズボンだって、いまだに何の革なのか解らない。

巧妙に偽装され、イノシシ皮に見えたけど、少し違った。だって毛穴がないんだもの。

あれが神が作った合皮としたら辻褄があう。

だったら、私だって合成人間に違いなかった。

だって今の私は、前世の私よりずっと頭が良い。こんな状況でも瞬時に巡る思考に否応なしに自覚させられた。

クローンが作れる程に、科学が発達した彼らなら、私の体の特殊性に気が付くのも当然だった。

後は、どうやって誤魔化すか。

必死に考えを巡らせていた私だけれど、次の言葉に全てが吹き飛ばされた。

「君は神に作られた存在だ。違うかい？」

「えっ！」

なんで？ 何で、ソコまで解るの？ 神様なんて科学では説明が出来ない存在のハズなのに。

「んな訳ねーだろソルン。寝ぼけてんのか？」

「ノエル、君は黙って」

「フン！」

やっぱり、これはソルンの思い込み。私は自分に言い聞かせる。科学が進歩するほどに神なんて信じられなくなるものでしょう？ でもひょっとして、彼らは科学で神の存在を観測するに至ったのだろうか？

続くソルンの言葉に、私は思い当たるフシが有った。

「君の体はとてもシンプルで混じりつげなく完成されているんだ。普通に人間が掛け合
わさって行けば、様々な形質が混じり合い環境に適応するが、同時に無駄も生まれる。
普通の人間の体には進化の過程で不要になった臓器が幾つもある。でも、君にはソレが
無い。こんなにもシンプルで完成された肉体はあり得ないんだ」

「先祖返りみてーなモンだろ？　ありえねー話じゃない」

「違うねノエル。僕らが出来るまでにどれだけの時間が掛かったか知っているだろう？

それに、彼女には僕らと違って混ぜ合わせて試行錯誤した痕跡すらない。ねえクロ
ミーネ。君のお父さん、お母さんは？　居ないだろう？　間違い無く君は作られた存在
だ」

……そこまで解るのか。神の杜撰ずさんさに辟易する。私を無視して二人の会話は続いた。

「ノエル。僕らの祖先もきつと神に作られた存在だ」

「ソルン、お前イカれてるぜ」

「間違い無いさ。僕らのデルタを遡って行くとドンドン純度が上がっていく。他の類人
猿から進化したのなら、あり得ないのさ。僕はこう見えても、前世はデルタ研究者だっ
たんだよ」

「でるた？」

思わず口を衝く。知らない単語。私は街に降りたとき、この世界の単語は殆ど覚えた

ハズなのに。

「ああ、君は知らないか。人間の体の設計図だよ」

遺伝子の事？ 科学レベルが違うから、当然街では使わない単語も出てくる。初めて聞く単語もチラホラあるが、前後の言葉で推察し、必死で話の流れを理解した。

一つ言えるのは、これは私にとって良くない流れだ。神に作られましたと宣言しても、何も知らない少女だと思われれば、きつと私は実験動物にされてしまう。それを避けるには私は、私の知識と能力が、何より有用だと示すしかない。

たまに読む異世界モノの小説では、転生者はみんな正体を隠していた。無用なトラブルを避けるために当然だと思っただけ、ここまで科学が進んだ相手なら隠すなんて無理だ。いっそ、飛びこんで自分を大きく見せた方が良い。

「つまり、あなた達二人はそのデルタを元に複製された人間なのね？」

「デメエー！」

私がクローンである二人の正体を看破すると、ノエルは警戒感を露わにいきり立った。一方ソルンは興味深そうに笑みを深くし見つめてくる。

「その通りさ。それで君は一体誰に作られたんだい？」

面白そうに見つめるソルン。だけどその余裕も、私が答えるまでだった。

「神よ。私は『地球』の神に作られた」

堂々と宣言すれば、ソルンはビクリと跳ねて思い切り私の肩を掴んだ。

「まさか！ 本当に、本当なのかい！」

「ええ、本当よ」

ソルンの瞳の中の私の姿を妖艶に笑う不思議な女に書き換える。

「チキユウと言うのは、何の神なんだ？ それに、君は何の為に？」

「オイ、ソルン、お前この女が言う事を信じるのかよ？」

「そうさ、だってこの子は、いやこの人は、不思議な力を持っている。僕にはそれが解るんだ」

「オイオイ」

「アナタは信用してくれないの？」

私はノエルに向き直り、彼の瞳に映る頼り無い少女の姿を妖艶な魔女に書き換え、微笑む。

「私は使徒よ。あなた達の計画を手伝うよう、神に言われているの」

こうして私は、古代人たちから主導権を握ったのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「それじゃあ、あなた達は魔力が毒に変質してしまった原因を破壊したいのね」

二人の目的をまとめると、そんな所だった。

私が電気で動いていると思つた施設も、火薬で発射されていると思つた弾丸も、全ては魔力で動いていた。私の足を治した薬もそう。

古代人は星から湧き出す魔力で文明を築いてきたと言う。

「正確に言うと、魔力は元々毒なんだ。毒になったのは魔力を押さえ込む健康値、星の生命力とも言うんだけど、そちらまで毒になってしまったのが大問題だったんだ」

ソルンが言うには、魔力と生命力は表裏一体。魔力を中和するのが健康値で、古代人は基本的に星の健康値の中で生きていた。

もちろん、豊富な健康値を取り込んだ古代人の体は魔力だつて押さえ込めた。健康値を使つて膨大なエネルギーである魔力を制御して文明を発達させてきた。

「それがある日突然、星の生命力が僕らを異物として排除し始めたんだ」

その原因が、星から魔力を吸い出すプラントだと言う。

「森に棲む者共さ、やつらがプラントを弄つたんだ」

「森に棲む者?? エルフの事ね」

耳が長いエルフ。アイツには煮え湯を飲まされた。この手で殺したけれど、思い出す度いまだに下腹部に鈍い痛みが走る。

「エルフとはなんだい？」

「『地球』の言葉で、耳が長い森の種族をそう言うのよ」

ソルンの問いにそう答えると、ノエルは鼻を鳴らした。

「アイツらが森の種族？ 違うね。奴らは穴ぐらの住人だ」

「え？」

私の感覚では穴ぐらの住人と言えばドワーフだった。水と油、全く違うモノのだけだ。

「奴らはな、俺達を作ったんだよ」

「そう、なの？」

ノエルの言葉は衝撃だった。

でも、納得出来るフシが有る。ファンタジーだからエルフぐらい居るだろうと思ったけれど、魔法を使う彼らの存在は、調べるほどに異質だった。

「魔力を採掘する作業員が必要だったからな、だが濃厚な魔力は毒だし、そんな場所には厄介な魔獣だって現れる。そこで魔道具なしで魔力をそのまま武器に出来る奴隷をつくったのさ」

「土の魔法で住居を掘らせて、植物プラントでは農作物を作らせた。そして魔導プラントでは魔力を産出させていた」

「それって……」

彼らは人工的に作ったのだ、魔力を直接使える人間を、魔法が使える人類を。それが

エルフ。

「そんな人間を作ったら、それこそ魔力が毒になる古代人なんてすぐに淘汰されてしま
うでしょ?」

「そこはもちろん考えていたさ。彼らは毒である魔力をモノともしない。だけど逆に毒
である魔力が無くては生きていけないんだ」

「健康値の中で生きる俺らには絶対に刃向かえないし、健康値に阻まれて外に出る事も
出来ねーってワケ」

そんな、なんて悲しい生き物。私の同情心は次の言葉で吹き飛んだ。

「だから奴らはプラントを暴走させたんだ」

「やってくれるぜ」

二人の言葉を整理すると、どうも原発事故の様なモノがあつたと言う。

そして、暴走して溢れ出した魔力が地上を覆った。

「それだけなら耐えられたんだけどな、それと同時に俺らを守ってきた健康値が俺らに
とって毒に変じたんだ」

「僕たちは、この世界に居場所がなくなつた」

魔力に覆われた領域の外は細胞を壊す太陽の光(きつと宇宙放射線の事だ)が飛び交
い、地下は毒となる健康値、その更に下の層には毒である魔力が支配する世界になった。

今、僅かに生き残った古代人は健康値と地表の狭間で、エネルギー不足に喘ぎながら細々と生きていくらしい。

「ただ、ココは大森林のど真ん中、人間だって参る程の魔力が漂う場所である。」

「じゃあ、あなた達は？」

「ああ、そりゃこの体だからだな」

ノエルは自らの白髪頭を手で弄ぶ。古代人は長年の研究の末に、魔力も健康値もモノともしない体を遺伝子操作で作り上げたと言うのだ。微妙な遺伝子のいたずらの上に、ギリギリで成り立っているのが彼らの体なのだという。

「そうやって導き出された奇跡の体をクローンで増やした、だから二人は全く同じ姿なのだ。」

「だとすれば、元の体はどうなったのか？ 記憶は？」

「脳移植だよ。僕とノエルは双子なんかじゃない。赤の他人さ。拒絶反応を起こさない様に脳を移植したんだ」

「その分、この体は免疫がなくて風邪を引くけどな」

「生きていくだけで、奇跡なんだけどね」

「ただし、誰もが新しい体に馴染んだワケじゃないらしい。見せてもらった部屋は筆舌に尽くしがたかった。コールドスリープ中の脳が幾つも浮かんでいたのだから。」

「この体に適合しなかった同胞だよ」

「エネルギーが保たねえし、体のスペアだつてまるで無いんだ。もう廃棄だな」

同胞を見殺しにする事に、ノエルもバツが悪そうだった。

「クソが！ 遺伝子シミュレーションに数千年掛かるとはな」

「もつと早くこの体が作れたら話は違ったんだけど」

気が遠くなる年月の間スーパーコンピュータを動かして、ようやく行き着いたのが今の二人の体だと言う。

「でも、間に合った。この体なら濃密な魔力の中、プラントを破壊出来る」

「それでもねえだろ？ プラントに近づこうにも、森に棲む者ども……エルフって言った方が良いか？ 奴らが守ってやがる、手詰まりだよココまで来て」

「近づく事も困難なのに、魔法を使う彼らと戦う術が無いんだ」

エルフの強さは私も知っている。生きている銃があったから倒せただけの奇跡。

「そーだぜ、こんな状況でアンタはどうやって俺等を手伝ってくれるんだ？」

「ノエル！」

「だって、そうだろ？ こんなメスガキが居たからなんだつてんだ？」

「いや、彼女の力があれば何とかなるかも知れない」

私は、私の力を彼らに開示していた。でも、私に何が出来るんだろう？ ハッキリと

敵意を持つ相手を懐柔出来る程、私の力は便利じゃない。

眠らせたり、話術で相手の心の隙間に入り込む必要がある。直接的な戦闘力はまるで無い事が彼らとの実験で解っていた。

「エルフを倒す術はある、霧の悪魔さ」

「馬鹿いつてんなよ、あんなもん健康値がなけりゃ」

「そこで、彼女さ」

「え？」

渡されたのは大きな黒い球体。名前は霧の悪魔。

「それでも小型サイズ、本当はもつと大きいんだ」

「コレ、どうするの？」

「簡単さ、人間の街の中に置いて欲しい」

「どう言う事？」

「そうすれば健康値を吸い込んで、吸い込んだ健康値が魔力を消し去り、エルフ達を殺す武器になる」

「へえ……」

あのエルフ達を殺せるなら、悪くない。私の中に、暗い情熱が宿った。

だけど霧の悪魔をただ置いたら、きつと鉄くず回収に群がられて終わりだ。だからこ

そ、有力者に話を通して、街中に置いて貰う必要があるだろう。

健康値を吸うと言う事は、設置した周囲には病人が増えると言う事だ。慎重に慎重を期さないで、それこそ魔女として火炙りになるだろう。

だけど、面白い。絶対に、この装置を使ってみせる。

そこまで私を駆り立てたのは、むしろ私の凶行を止めようとするノエルの次のひと言だった。

「言つとくけどな、プラントを止めて、どうなるかは俺達にも解らねえんだ。今の人間が残らず全滅して、俺らの時代が来るかも知れねえが、ひよつとしたら今より悪化するかも解らねえ」

何が起こるか解らない！

あんまりなこの世界に、ピツタリな言葉だと思ったから。

私を心配し、止めてくれるノエル。口は悪いが彼は案外優しい。

ノエルは脅すように睨んだけれど、私の答えは決まっている。

「そんなの、望む所よ。全部、全部壊して殺してあげましょう」

ヒューとノエルが口笛を吹く。

だけど彼は気が付いて居ないのだ、その全部の中には、あなたも入っている事に。

黒峰4

私はソルンとノエル、二人の古代人に協力する事にした。

目的は魔力プラントを停止させる事。

——その結果、何が起ころかは誰も知らない。

何千年も準備して、偉そうに語ってみせた彼らでも、魔力プラントを止めたら何が起ころのか知らないし、それどころか本当に魔力プラントが原因だったかどうかすら、確実ではないと言う。

『何が起ころか解らない』

私にとって、その言葉こそが誘惑だった。

果たして古代人の世界に戻るのか、それとも誰も生きられない不毛な世界に変わるのか、結局何も変わらないのか？

なんにせよ、その過程で世界は混沌とするだろう。私達が人間に干渉するからだ。彼らにとっての手段こそが、私にとっての目的だった。

混沌こそ私の求める物だから。

グチャグチャに犯されて、納屋の中で芋虫みたいに転がって、私は誓った。

このゴミ溜めみたいな世界を壊して、私を送り込んだ神の計画をぶっ潰すって。世界を作り運命を見通す神様に、矮小な人間が逆らう方法は？ 悩んだけど、一つだけ手段があつた。

『高橋敬一を殺せば良い』

実験動物が死ねば、実験は終わる。でも、どこに居るかも、どんな姿をしているかも、全く解らない相手をどうやって殺すのか？

今度こそ手詰まりに思えたが、気が付けば簡単な事だった。『偶然』を最大化するだけで良い。

それだけで高橋は神が定めた運命のレールを外れ『偶然』に殺される。

『何が起ころか解らない』世界こそが私が求めるモノだった。

そんな事は露とも知らないソロンとノエルは、私の熱意に絆された。私は彼らの計画の重要な部分を任される事になる。

そして、私とローグウッドさんは解放された。二人で暗い森の中に放り出される。

「んで、何があつたか教えて貰えるか？」

「ねえ、ローグウッドさん、この世界退屈だと思わない？」

帰り道。掛けられた言葉を無視して、私は物騒な剣士に物騒な質問を投げつけた。

彼は今までずっと監禁されていたらしく酷く不機嫌だったが、アレだけの目に遭いな

がらギラつく目は死んでいなかった。

「……お前、雰囲気変わったか？」

「そうかもね」

不思議な魔女を演じるうちに、私の中身が変わってしまった。でも、それで良い。今の自分の方が、ずっと好きでいられる。

「それで、どう？ 退屈でしょう？ 楽しい事とかある？」

「チツ、そりゃ退屈でなけりや山ん中で山賊狩りなんざしてねえよ。二年前の戦争以来、小競り合いすらピタリとなくなっちまった」

聞けば、ローグウッドさんは前の戦争でそれなりに活躍したのだが、上司に手柄を攫われたらしい。

「良くある事さ、だが戦争が続けば恩賞なんざ思うがまま、そう思ってたらピタリと戦争の気配がなくなっちまった」

「それで、山賊狩りな訳ね」

「手柄を横取りする上も居ねえからな」

やはり、燻っていた。平和な世界には生きられない男だと感じていた。

「いつそ、この世界を荒らしてみない？ あなたの剣は乱世でこそ輝くハズよ」

「おいおい……物騒だな」

そう言いながら、まんざらではなさそうだ。私は、彼の中の私を、生意気な少女から、災厄を招く忌み子へと書き換える。

彼に対して妖艶な魔女を演じるには、今の私では色気が足りない。既に彼の中の私が固まってしまっているからだ。

でも、不吉な少女なら簡単だった。なにしろ、既に村を丸ごと潰して、ポーターの生肉を嚼った実績がある。

演じるまでもなく、私はこれ以上ない程に不吉な少女に違いなかった。

「面白い、聞かせろよ？ 何をやる気だ？」

「まずはね……」

私は勿体ぶって宣言する。

「新しい井戸を作りましょう」

私の宣言に、狂暴な剣士は狐につままれた顔をした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なるほどな、こういう事か」

ローグウッドさんの足元に、新しい死体が転がった。

「ええ、そうよ」

私は真新しい井戸の上に腰掛ける。

水利権と言うのは、利権の中でも最たる物だ。だけど領主としては新しい井戸を掘って領地を開拓して欲しい思惑もあって、井戸を掘るのに難しい権利や許可が不要な領地も多かった。

一方の業者としては、井戸だらけになって使用料のたたき合いが始まっては儲からない。

だから、水で儲けるためには同業他社を排除する力が必要になる。

平たく言えば、ヤクザだ。

私が井戸掘りを事業として始めると、すぐさま奴らがちよつかいを掛けてきたと言う訳だ。

「でも解るぜ、三日でこんなもん作られたらお手上げだ」

言いながら、ローグウッドさんは手押しポンプで水を流して血まみれの顔を洗った。

私の武器は三つ、まずは古代人から貰った井戸を掘る魔道具、一点物だし魔石も必要だが、数日で井戸を掘れるのは真似の出来ない武器になる。

次に、言うまでもなくローグウッドさんの武力だ。ヤクザ者が何人来ようが、彼の剣に敵うはずがなかった。

更によえば、彼には親族が多く、その誰もが強かった。食い扶持を稼ぐのに必死だったと言うから、人材はよりどりみどり、武力で負ける心配は無用だった。

最後に私の知識。歴史系の小説や流行りの異世界転生モノで、使いやすい知識チートは網羅している。井戸に設置する手押しポンプはその最たるモノだった。

もちろん古代人の二人も手押しポンプの仕組みぐらゐは理解していたけれど、この世界の工業力で実現させる方法を知らなかった。

ノエルは工具さえ有れば殆どの魔道具を修理出来ると豪語するが、案外単純なポンプの作り方なんかは詳しくないのだ。電気工事士と鉄工所の違いだろうか？

なにより、この程度は木村の奴が広めてしまう可能性が高いもの、出し惜しみする必要はまるで無かった。

古代人の二人は脳移植の影響で免疫力が低下している。不衛生な人間の街で商売を広げるのは私の仕事だ。二人にはあくまでサポートに回って貰う。

「フッフツ」

また、笑いが漏れた。だって、このゴミ溜めみたいな世界で、私はどこまでも自由だったから。そう、私は、本当の意味で、完全に自由なのだ！

好きなモノも、守りたいモノも、しがらみも、倫理的な戸惑いもなく、好きな様にこの世界をかき回せるのだから。

転がる死体をかき混ぜて微笑む私を、ローグウッドさんが呆れた顔で見つめていた。

「だがよ、こんなんで世界が混乱するのによ？」

「でも、退屈はしないでしょ？」

「違いねえ」

そう言つて、二人で笑つた。

商売のネタは幾らでもある、突っかかつて来るヤクザが居ればゴミ掃除に貢献出来るし、面倒な利権が多いなら、私がお偉いさんを書き換えてやれば良い。

ああ、四つだった。言うまでもなくこの力も強力無比。

私達のビジネスは、失敗する道理なく、拡大を続けた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

私のビジネスは飛ぶ鳥を落とす勢いで、帝国の生産力を瞬く間に押し上げた。

「面を上げよ！」

「ハッ！」

遂に私は皇帝の謁見が叶う地位まで上り詰めていた。二十歳はたちを少し越えた時の事だった。

「そ、そなたが、魔女か？」

顔を上げた先、紅顔の美少年と目が合った。まだ、五、六歳の子供。これが、私と皇帝の初めての出会い。

「そうですね、私がクロミーネ。魔女などと不名誉な呼び名を頂いておりますが、普通の

人間です」

「そうか……魔法は使えぬのだな？」

「ええ」

私がそう答えると、左右に並び立つ御家来衆がほつと息を吐くのが見えた。きつと私が魔法を使うのを恐れていたに違いない。

謁見の間は、嘘を見破る仕掛けがあるという。でも、そんなモノは関係無い。コレは魔法ではないのだから。

だからそう、コレはまぎれもなく、神の奇跡だ。

私は、幼帝の澄んだ瞳に映る怪しげな魔女を慈愛に満ちた母の姿に書き換えた。

「そなたのお陰で、平原の開拓も順調と言うではないか。農地の拡大が行き詰まつておったところの此度の功績、大義であった。褒めてつかわす」

「過分なお言葉、身に余る光栄ですわ」

「褒美を取らず——そなたには」

「お待ち下さい」

どうせ、少々の身分とお金を渡して私に首輪を付けようとするのだろう。そんなモノは不要だ。

「無礼だぞ！ 託宣の途中で遮るなど」

「よい、申してみよ」

「ハッ」

託宣か、皇帝ともあればこの世界では現人神の扱い。だけど、瞳を覗いた私は知っている。両親を早くに亡くした彼は人のぬくもりを欲していた。

「私は、皇帝陛下の助けになりたい。僭越ながら、私には様々な問題を解決に導く知恵があります。必ずや皇帝陛下のお力になれるかと」

「差し出がましいぞ、どこの馬の骨もしれない娘が！」

「静かにしておれ」

「グッ」

幼い皇帝を支える宰相。だが子を持たない彼には、子供が欲しいモノが解っていない。

「月に一度、皇帝陛下にお目通り願う機会を頂きたく存じますわ」

「ふむ……許そう。月に一度、茶会に参加する事を許す」

「そんな！」

幼帝の目に映る不安と寂しさ。つけ込む隙は、幾らでもあった。

私はカードゲームやボードゲーム、遺跡に残った簡単な電子ゲームを持って、皇帝の居室に入り浸る事になる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それからあつと言う間。皇帝は色々な悩みを打ち明けてくれる様になった。

私だって、可愛らしい皇帝との時間は苦痛ではなかった。本心からの助言は、次第に利発な皇帝の心を溶かしていった。

事業の方も順調だ。なにせ私は利益の為なら手段を選ばなかったから。

誰でも殺したし、誰とでも寝た。

あんなに嫌いだった鼻の下を伸ばす脂ぎった親父の醜悪さも、死体となって転がる姿を思えば愛らしいものだし。叡智を誇る古代人も、無双の剣を誇る剣士さえも、私の下でだらしなく伸びていた。

「とんだ悪女になったな」となじるローグウッドさんに、小娘でなくなった自分を強く自覚した。

身も心も邪悪な魔女となるのが不思議と心地よかった。

難関と思われた霧ギョルドスの設置も、拍子抜けするほど上手く行った。

帝国も、年々濃くなる魔力と大森林から溢れる魔獣に頭を悩ませていて、その原因がエルフにあると知っていたのだ。

長い歴史の中で、どこからか情報を得たのだろう。

そのため有史以来帝国は何度も大森林への遠征し、手ひどい敗北を重ねて来たらし

い。当然、エルフに對する恨みは深く、霧がエルフに効果があると実証されるや、霧ギユルドスの悪魔ドスの設置は瞬く間に進んだ。

その霧ギユルドスの悪魔だが、私が遺跡で発見した事にしてある。私の事業自体が遺跡での発見を形にしたモノとしてるので、疑われる事はまるでなかった。

いや、正確にはあつたが、書き換えるか処分して対処した。

唯一の失敗と言え、田中君の確保に失敗した事だろう。アレだけは上手く行かなかった。

高橋の行方とは別に、私は田中と木村、二人の行方も追っていた。

想像通り、木村は王国側でキイムラと名乗り商会を立ち上げていた。コレは流石に手を出すのが難しい。

一方で田中は帝国で冒険者として活躍していた。そのままタナカと名乗っていたので間違いようがない。冒険者なんて職業はないのだけれど、魔獣狩りを生業に点々とする様は私にはそうとしか思えなかつた。

根無し草の男を捕まえるのは難しく、連絡がつかないのか、無視されているのか、それすらも解らない。

いや、言い訳だ。本気で捕まえようと思えばもつと早く出来た。私は久しぶりに会つた田中君に、今の自分を何と言われるかが怖かつたんだと思う。

でも遂に無視する事も難しくなった。田中君はある日、獅子の体にコウモリの羽を持つ妖獣を殺した功績を賜り、騎士への叙勲を受けに帝都にまでやってきたのだ。

ついたあだ名は妖獣殺し。それほどにその手の混じったタイプの魔獣は倒すのが困難で、ローグウッドさんでも討伐の経験が無いと言う。

私は彼が泊まる宿屋へと招待状をしたためた。

『黒峰より』日本語で書いた手紙は、果たして無視をされる事もなく、彼は私の屋敷へとやってきた。

間の悪い事に、仕事でローグウッドさんは留守。彼の親類縁者が守る屋敷に田中君は堂々と現れた。

彼も神から何か力を貰ったはず。恐らくは剣の腕、もしくは身体能力だ。

味方に出来たらこれ以上は無い。でも、ひよつとしたら私達の最大の敵になるかも知れない。

不安を抱いた私は、屋敷にソルンを招いていた。賢い彼ならば、何か気が付く事があるかも知れないと思つたから。

私は、ソルンへ田中君について知っている全てを話した。

誰にでも人懐っこい様で、誰にも気を許して居ない猫の様な男だと。

勘が鋭く本質を見抜く力がある癖に主張は控え目で、信じて貰えないと子供っぽく拗

ねる事を。

劍の腕に自信が有り、ローグウッドとは別の鋭い雰囲気を纏う事を。輪に混じれないのか、たまに友達を寂しそうに見つめて居る事を。

それから、それから………そうだ！

彼は稀に、友達へと斬り掛かる様な素振りを見せる事があつた。勿論素手で。初めはふざけてるのかと思つたけれど、相手にも見えない様にやつていた。

これはきつと、私だけが知っている彼の癖。そんな事までソルンには話したつけ。

「そうですか」と面白くなさそうに答えた彼も、田中君が私みたいな力を持っていると伝えれば、食いしばるように気を引き締めた。

私が座る椅子の横、従者に扮して控えて貰つた。

「タナカ様がいらつしやいました」

「通してちょうだい」

私はいつそ滑稽な程に邪悪な魔女を装つた、広い部屋のど真ん中。派手な椅子に腰掛け、ワイングラスを片手に田中君を迎えた。

今思えば、馬鹿らしいし、恥ずかしい。私は今の汚れた自分を見られるのが嫌で、おかしな自分を装つたのだ。

「お前は変わらないな」

だからこそ、そんな風に言われた時に頭に血が上るほど苛立った。

「どう言う意味？」

「それに、変わった奴と一緒に居るな」

「なにを！」

突然、ソルンの事を言われて私は焦った。この世界、銀髪だって大して珍しくない。私達みたいな漆黒の髪色の方がよほど珍しい。

飄々としながら、何を見ているか解らない。だけど突然に本質を突いてくる。私に言わせれば彼こそが、何も変わっていないかった。

彼は呆れた目で私を見て、言った。

「お前さ、程ほどにしとけよ、やり過ぎるとロクな死に方出来ねえぜ」

「キサマア！」

なにより意外だったのは、日頃冷静なソルンが激昂したことだ。私はそれに心底ビツクリした。

よりによつて、レイピアを片手に田中君へ飛び掛かったのだもの。あまりの蛮行に、らしくないを通り越して正気を疑った。

「オイオイ、物騒だな」

だけど、田中君は何事も無かった様に突き出されたレイピアを掴んで止めた。

素人目でも解る。超人的な技量だった。

「歓迎されて無いみたいだから、俺は帰るぜ」

「待って！」

「じゃあな」

そう言つて、逃げる様に帰つてしまふ。取り残された私は呆然とするばかり。

「どうします？」

「いいわ、放つておきましょう」

でも、私は追いかける事も、追わせる事もしなかつた。惨めな気分になるに違ひなかつたからだ。

それに、どうせ騎士として叙勲されるなら、今の私を無視出来るハズが無い。そう言う思いからだつた。

……でも、翌日もぬけの空になつた宿屋で、彼が騎士爵を断り再び旅に出た事を知つた。

この世界で、爵位を放棄するなど正気では無い。やろうと思えば、難癖をつけて昨日の内に始末する事も出来たのだ。それほどに、貴族の身分と言うのは重い。平民が貴族に殺されてもロクな調査は行われぬ。私だつて爵位を取るのは苦勞した。

やはり、あの男は誰の手にも収まらないのだと、私が諦めるには十分な出来事だつた。

思えばアレが大きな失敗だった。あの時思ったよりも、アレはずっと大きな失敗になった。

そして更に月日が流れ、遂に帝国軍を伴ってエルフが住まう大森林へと攻め入った。転移して十三年。私は二十八歳になっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「フフフフフ」

私は火の中で踊る、なんて清々しい気分なんだろう。

エルフの都が燃えている。幻想的な街並みが燃えているのだ。ファンタジックな幻想の世界が崩壊するのは心が躍った。

「ねえ？ どう？ あなた今どんな気持ち」

「あうっ、助けてえ」

複数の兵士に組み敷かれるエルフの女性に、私はにこやかに尋ねていた。

思い返せば、私も正気では無かったのだろう。馬鹿な事をした。

ウキウキで霧に錯乱する街を散策し、気が付けば王宮の中。危険と諫められるのにも構わずに中心部へ向かう中、私はその男と出会った。

「危険です、この男に百人は斬り殺されています」

「へえ、そうなの？」

玉座に寄りかかる様に、無数の銃弾に倒れたエリプス王の姿がそこにはあった。私は朦朧とする王の瞳を見つめる。

「ねえ、私を見て」

「グツ、ガアツ！」

血を吐きかけて最後の抵抗。エリプス王はそれを最後に気を失った。

なんて精神力。この様子では洗脳に時間が掛かるに違いないだろう。

でも、構わない。時間を掛けてゆつくりと仕上げれば良い。時間はたっぷりあった。

しかし、ソレはソレとして、誰かに魔力プラントの案内をさせる必要がある。

「他に王族は？」

「ハッ、王妃、王子は死亡。王女二人は逃走中です」

「なによそれ」

人質として、王族の身柄は重要だった。洗脳すればエルフの支配だって上手く行く。

殺さないように厳命したのに、ここまでお粗末とは。

「なにぶんこの霧です。指揮系統が混乱しているようです」

「だらしないのね」

失敗続きの遠征。正規軍や領主虎の子の騎士団などが派遣されていない。加えて霧は人間にも少しだけ毒だった。元々人間から取得した健康値をばらまいているだけに、

満員電車に閉じ込められた様な不快感があるのだ。

指揮所に戻った私はフウと息を吐く。

「王女二人を追いなさい。私はプラントを探すわ」

「いや、しかし」

「かつての都は別の場所に有ったと言うわ。もつと魔力が濃い所とか」

「まさかお一人で？」

「まさか？」

「では——」

——ゴオオオン！

引き留める兵士の声を遮って、指揮所の壁が吹き飛んだ。大穴からは恐るべき怪物が顔を現す。

「なんだ！ まさか？」

ソレは、竜だった。

エルフの王宮の厩舎には、大きなトカゲが何匹も居て、馬車の代わりに飼われていた。ソレを見た時、なんてファンタジーなのだろうと、この世界に初めて感動したぐらい。

「お下がり下さい」

「大丈夫よ」

「クロミーネ様？ 危険です」

「大丈夫、もう懐いてるから。寂しくて来ちゃったのね。良い子よ」

私が竜の顎を撫でると、気持ちよさそうに頬を寄せてくる。

「まさか……」

「フフツ」

呆然とする兵士。だけど私は、竜の大きな瞳に映る、美しく愛らしい自分の姿に見惚れていた。

私の力は、むしろ魔獣にこそ、その力を発揮した。

魔獣溢れるこの森の中、私は無敵だ。

黒峰5

「なんて所なの」

話と違う。エルフの旧都は聞いていた以上に危険な場所だった。

エルフの住民が揃って「子供でもお使いに行つて帰つて来れる」と言うから油断した。まんまと嵌められたのだった。

あそこを落とすなら相当な準備が必要だ。いつそ王族を人質に、案内を頼んだ方が良いかもれない。

エルフの都に戻つた私は、逃げた二人の王女の行方を尋ねた。

「掴まらない？ 少女が二人、この森の中でしょ？」

信じられない！

声にも險がこもつてしまう。追跡には獵犬を使ったはず。箱入りのお姫様が追跡を逃れられるとは露程も思つていなかった。

「犬は頑張つてますよ、一度は網に掛かりましたし。だが、人間の方が付いていけなかったのです」

「……軟弱なのね」

「略奪であいつらはしやぎ過ぎましたからな。ゴロツキばかりで、こう言う時に歯止めが利きません。私も制止するのに精一杯です。元々そう言うのは不慣れでしてね」

答えるのは帝国情報部、第一特務部隊の隊長だ。名前はたしかフェノム。

何でも器用にこなす情報部だが、基本は裏方。そんな彼らに軍の統制を頼む程に、今は手が足りていない。

なにせ、私達の軍隊に正規兵は僅か、大半が不摂生の傭兵達だ。今回それが裏目に出た。

でも、本当はそれで十分なはずだった。私達の軍隊には、規律も、剣の腕前も、まるで必要ないのだから。

だって霧の悪魔ギョルドスでエルフは動けない。どうしても戦う時は、私が作らせた火縄銃。略奪だつてエルフが相手なら問題にならない。

じゃあ、なにが問題なのか？

健康値だ。

「この魔力に、彼らじゃ耐えられないのね？ お酒？ 煙草？ 女？」

「全部ですな。しかも馬鹿みたいに騒ぐんで、追跡となれば邪魔でしかありません」

質が悪い人材を、数で補うはずだった。目算を誤った。

「あなた達だけでも追えないの？ 得意でしょ？」

「ようやくコツチも収まって、なんとか人を出したんですかね……」

フェノムは面倒そうに頭を掻き、顛末を話した。

「火事？」

「ええ。それで、よりによって炭焼き小屋に身を寄せたみたいで」

「火事、それに炭……そう、匂いが追えないのね？」

「ご名答、アレは匂いを消しますから」

炭は冷蔵庫に入れたりするぐらい、匂いを消す効果が高い。火事に炭焼き小屋とくれば猟犬でも痕跡を追うのは難しい、もちろん偶然ではないだろう。

きちんとした案内役が居るに違いなかった。一度、犬を見られているのが痛い。コチラの手がバレている。

「でも、足跡は一人分、姉が怪我をした妹を背負ってるだけと聞いたんだけど？」

「私らに足跡を見られない程の凄腕か、そのお姉ちゃんが随分と頭が回る可能性もありますな」

……そんな事あるだろうか？

話を聞けば、まだ子供。突然に襲撃を受け、国を追われた少女がそこまで冷静に行動出来るとは思えない……。

それに、国を追われたお姫様なんて、まるで物語のヒロインみたい。

そこまで思い至った時、脳に閃く予感があった。

「ッ!？」

「どうしました？」

「その姉について教えて、なんでも良いから!」

「は、はあ。名前はユマ・ガーシエント。歳は十二。銀髪の少女と言う話ですが、桃色の髪と言う奴も居て、情報が纏まりません」

「十二歳……」

私が転移してきたのが十三年前。考え過ぎ? その時は、そう思った。

「あとは、追跡の途中でこんなモノを見つけました。逃げた姉妹が荷物になる事を嫌って隠したのでしようが、所詮は子供の浅知恵です」

「これは?」

「奴らが魔剣と呼んでいるモノです。それもとびきり上等なヤツですよ。俺はナイフを頂きましたから、コイツは是非大将に使って頂きたいと思ひましてね」

「そう、これが魔剣」

名前は後で知ったのだけど、渡されたのはエルフが国宝とする双聖剣ファルフアリツサだった。

剣を引き抜いた私は、魔力を込めて何気なく机を叩いた。いや、叩くつもりだった。

それだけでズバンと音を立て、お気に入りの机を両断してしまったのだから驚いた。
「凄いのね」

「いや、ココまでとは、ちよいと惜しくなっていましたね」
「ふふつ、きつと彼も喜ぶわ」

天下無双で知られたローグウッドにこの武器を持たせたらどうなるか？ きつと誰も敵わない最強の男になるだろう。私はソレを想像してほくそ笑んだ。

……後になって思う。この時の、呑気な妄想をしていた自分を殴りたい。

私は忠告するべきだった。どんな武器を持つとが、田中君とは決して戦ってはいけな
いと。

「とにかく、姉妹の行方は最優先で追って」

「ハッ」

……その後の調査で、妹は火事で死亡。姉はパラセル村に落ちのび、王国側に助けを
求めるため旅に出たが、馬車が魔獣に襲われ行方知れずになっている事が判明する。

それを聞いた私は、姉妹揃って死んだモノとして頭から外してしまう。

落ちのびたお姫様が馬車で逃げる途中、魔獣に襲われる。まるで物語の冒頭だ。偶然
居合わせた主人公がヒロインを助けるのがお決まりの流れ。

私は、ソレについてもつと真剣に考えるべきだった。私がソレを思い知るの、長年

苦楽をともにしたローグウッドさんが、黒衣の剣士に殺されたと報告を聞いた後なのだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

大森林を支配する中で、私は次々と魔獣を仲間にしていった。

知能の高い人間よりも、獣を支配する方が簡単だ。無能な傭兵よりもよほど扱いやすい。

大森林の魔獣は一匹当千。帝都ですら落とせる程の戦力に、私は興奮した。

世界は私のモノだと、この時本気で思った。

でも、違った。エルフのレジスタンスに魔獣が全滅させられた。次々と村が解放され

ていく。

霧ギョルドスの悪魔での支配が長続きしない事は織り込み済み。ただ、想定よりも早かった。

私は、急に強くなったレジスタンスに困惑する。

時を同じくして、ユマ姫の続報が次々と入った。

スフィールでの騒動、そして王都へと逃げ延びた事まで。

ここに至り、私はユマ姫こそが高橋君の生まれ変わりだとなかば確信する。

なにせ、ユマ姫を助けた協力者が田中君だと判明するのだから。

……だからこそ、この時の私は、レジスタンスに協力しているのが田中君だとは気が

付かなかった。合流した二人が別行動を取るとは思つて居なかつたからだ。

それにしても、黒衣の剣士タナカは帝国でも名が知れた存在のハズ。ひよつとして私に至るまでに情報が止められていたのかも知れない。

とにかく、私は思いがけず手に入れた妖獣グリフォンに乗つて、遙か東、王都へと旅立つた。

高橋君を殺せば、全てを終わらせる事が出来ると信じて。

「君が魔女かい？ 随分と美しい」

「あなたもね」

王都ではかねてから連絡をとつていた第一王子のカディナルと席を持った。お世辞ではなく、三十を過ぎた男だと言うのに、二十代前半にも見える程に若々しく、美しい。

言い換えれば歳の割に幼いとも言えた。実際、我慢が利かない人物に見えた。ただ、私にとってこの手の男のゴキゲンを取るのは簡単だった。

「何か困っている事がありそうね」

「親父の病気がね、良くないんだよ」

「用意してくれれば、新しい薬を届けるわよ？」

「へえ？」

カディナル王子はキラリと目を光らせた。端正な顔が狂気に歪むのが美しい。危険なカリスマを備えていた。

私は、以前から医官の一人を洗脳し、王を弱らせる事に成功していた。もつと強烈な薬に変えるのは朝飯前。

「目的はなんだい？」

「ユマ姫の首よ」

「おいおい、なんでまた」

「やるの？ やらないの？ 報酬はコレよ」

私は持つてきた布の包みを剥がし、カディナルの前に火縄銃を置く。

「同じ物を二十挺用意してるわ」

「ジユウか、前に貰ったのも凄い威力だったよ、しかしどうして？」

「そこまで？」 と言いかけてカディナルは押し黙る。苦虫を噛み締めた顔で質問を変えた。

「あの娘はなんだい？」

「むしろ私が聞きたいわ。何を知ってるの？」

私はカディナルの瞳を覗き込む。

しかし、洗脳はしない。我の強い相手に洗脳は効きづらい。下手をすれば無駄に警戒

されてしまう、なにより利害関係が一致しているのだから、洗脳でぼんやりさせて彼の唯一の武器であるカリスマ性を毀損しては、仲間にする意味がない。

「言われるまでも無く、既に彼女を始末しようとした。しかし、失敗している」

「そうなの？」

「そうさ、何度も！ だからコチラも彼女の情報が知りたかったんだ」

「ふうん」

やはり、ユマ姫こそが高橋君なのだ。

見た目どおりの少女じゃない。扱い難くて当然だ。

木村もユマ姫の味方をしている事を知るにつれ、完全に確定した。

私はカディナルとの接触をなるべく減らす事にした、話が本当なら状況は思ったよりもずっと危険だったから。

遠距離から魔法で暗殺されたなら防ぐ手段が無い。私にとって最も相性の悪い相手と言えた。

ココで確実に仕留める事を念頭に、私は王都に住み込み、ユマ姫を殺すチャンスを探った。カディナルとの連絡は、洗脳した男爵家の少女ルージュ・トリアンをメッセンジャーに使う事に決める。

その間にもユマ姫は第二王子のボルドーの婚約者として発表され、益々力を付けてい

く。一方で勢いを削がれていったのがカディナルだった。

焦燥感が陣営を包む。それでもココはあくまで敵地、私は姿を一切見せない覚悟で、慎重に行動する必要があった。

そうした中でも王子の側近であるガルダの嫉妬心を煽り、ユマ姫の侍女ネルネのユマ姫への心配と恐怖を煽った。

意志が強い相手でも、こうすれば洗脳が可能。

しかし、ガルダは愛するボルドー王子と心中し、侍女ネルネへの仕込みには時間が掛かりすぎて、手駒としては機能しなくなった。

このタイミングで、数日姿を消した侍女を信用するハズが無いからだ。

そうして私がまごついている間に、身を隠していたカディナルが行動を起こす。余計な事と思ったが、うまくユマ姫を確保したと報告が入った。

ほっと胸をなで下ろしたのもつかの間、私にはまだ仕事があった。

カディナルが一人の女性を連れて来て、洗脳しろと突き出してきたのだ。

「何も知らない女に変えてくれ」

「そう言われても……」

私は困ってしまった。なんせこの女、目に怪我を負っている。これでは洗脳が効果を発揮しない。

「何でも良いから！　このままでは危険だ。コレでも一応は公爵家の女、殺すのはマズい」

「解ったわ」

ユマ姫を捕まえ、既に処刑が確定したと聞いて、この時の私は気が大きくなっていた。後で思い返せばコレも大きな間違いだった。

あんな危険な女の前に姿を晒すなんて、大失敗。私はカディナール王子の元婚約者、シャルティア嬢の目に巻かれた包帯を外したのだ。

「ツー……これじゃ……」

目が見えるはずが無い、眼球には太い針を刺した大穴が開いていた。

「いや、全く見えて居ない訳じゃない。そうだよな」

「ええ、そうね」

本人が言うとおり、シャルティア嬢は私の姿を目で追っていた。

それならと彼女を洗脳する事にする。密室で麻薬やハーブを焚き、催眠術も応用して、相手の心に迫っていく。彼女は私の洗脳に協力的だった。嘘発見器を欺くためにも、記憶の抹消が必要だったから。

だけど、それは私の精神に負担を掛けた。それだけシャルティアは理解不能の怪物だったのだから。

「つまり、あなたは人間が好きなのね？」

「ええ、とても」

「なのに、殺すのはどうして？」

「どうして？ 馬車が好きなのはどうするの？ 馬車を分解して調べようとするでしょ？ それと同じよ」

「馬車は組み立て直せるでしょ？ あなたは殺すだけ」

「そうね、私はバラすだけバラして、組み立てられないのだからとんだ二流よね。だから形だけでも作れる様に剥製作りを学んだし、医術だって少しは学んでるのよ？」

「……………」

「ねえ、あなた、魔女なのよね？ もし人間をバラして元に戻せるなら弟子入りしたいわ。それが私の夢なの」

嬉しそうに夢を話す彼女が私は怖かった。とても理解出来ない。その夢が殺しの延長に当たり前にあるからだ。

人間をどうやって分解すると楽に死んで、どうすれば苦しむのか？

そんな事を花を弄ぶ様に嬉しそうに語る一方で、自分の技術で人を救いたいと語ってみせる。

この女が心底恐ろしかった。

「仕事は仕事なのよね、どうやって人知れず殺せるか。殺意に純粹で居られるかが大切で、それって誰が一番人間を好きかってのと同じ事なの。馬車を作るなら、自分こそが一番馬車を好きなんだって思わなきゃダメよね？」

「でも、殺したら終わりでしょ？」

「そう！ そうなのよ。だから私は寸前で、勿体ないと思つてしまった。だから負けたの。でも彼女は純粹に私を殺そうとした」

「よっぽど憎まれていたのね」

「そうでもないわ、きつと彼女は博愛主義者よ。私と一緒に。彼女は全てを殺したいと思つているはず」

話をする度に、頭がおかしくなりそうだった。極めつけがその次のセリフだ。

「それはあなたも一緒でしょ？ 私、解るのよ、お仲間が」

そんなふうには嘯くのだ。

「でも、気に入くないわ。殺すなら自分の手で殺さない。誰かの手で殺させるなんて、命に対する冒瀆だわ。恥を知りなさい」

「黙れ！ 黙りなさい！」

……結局上手く洗脳する事が出来なかった。私に出来たのは精々が全てに向かつていた殺意をユマ姫に偏らせるだけ。それだつて効果があったかどうか疑わしい。

彼女が何も知らない女の子に成り果てたフリをするのを、黙って見ていた。その瞳の奥に佇む狂った自分と、これ以上向かい合いたくなかったから。

……でも、それも、失敗だった。

私は、ユマ姫の処刑に立ち会えなかった。処刑の前日、エルフの都が奪還されたとの報が入ったからだ。

今にして思えば、あの時カディナールを操つてでもユマ姫を殺してしまえば良かった。いや、後からなら何とでも言える。そもそもがユマ姫が高橋君だと言う事すら私の勘でしか無かったのだから。

大森林に戻った私は、長年連れ添ってきたローグウッドさんを田中君、いやもう黒衣の剣士タナカと呼ぼう。彼に殺された事を知る。

信じられない事に、彼は殆ど独力で王都を奪還したと言う。タナカは私が考える以上の化け物に成長していた。

その後、合流した私はノエルの腕を治すため、大森林の中で遺跡を探し回るハメになる。回復装置があるだけでなく、守りやすい遺跡でないと駄目だった。

ソロンとノエルの二人はタナカの追撃を受けていたから、拠点に帰る訳には行かない。

ココでも私は失敗した。

なんとか都合が良い遺跡を発見し、さあタナカを待ち伏せしようとすれば、彼は一向に姿を見せなかったから。

私達はとつくにタナカを振り切っていた。素直に拠点に戻ればよかったのだ。

では待ち伏せする間に、強力な魔獣でも仕入れようかと私が留守にした途端、よりによつてユマ姫、いや高橋と木村が軍を伴つて侵入していた。

間が悪い。最悪な状況で、私は片目を失つてしまう。

「回復ポッドで治しましょう」

ソルンはそう言つてくれたけど、拠点に戻る時間も惜しいし、回復液の残量を考えるところの程度の傷でポッドに入るのは勿体なかった。

「では、せめてコレを」

「なに？ これ」

ソルンが差し出してきたのは、義眼、それも飾りじゃない。ちゃんと目として機能する物だった。でもそれは普通の目としてじゃない。

『赤外線』。不可視の光線による熱感知ね」

「ご存知でしたか！」

もちろんだ。すぐに解つた事だが、この義眼でも相手への洗脳が可能だった。

それからそう、砂漠に眠る古代兵器の起動に成功するものの、爆撃には失敗するし。戦争中に迫撃砲で横やりとか、ゾンビウイルスを撒いたり、虎の子の猟兵部隊まで投入したのに、雨で台無しになったり。

何もかもが破滅的に上手く行かなかった。でも、良く考えれば『偶然』に破滅を呼び込む相手が敵なんだものこれも必然。だったらいつそ無謀とも言える賭けに出るべきだ。

「無茶です!」

「作戦を選んでいられる状況じゃ無いでしょう?」

私は賭けに出た。星獣を呼び寄せて、私の能力で洗脳するつもりでいた。

「まさか、そんな作戦が上手く行くはずが……」

「駄目でも良いのよ、失敗したら星獣が地上に現れる。そしたら研究所から手に入れた星獣の子供の魔力波のデータを使ってヤツを誘導して」

「そんな事になったら、あなたは、どうして我々の為にそこまで」

ソルンは泣きそうな顔でそんな事を言うけれど、気にしないで良いのに。……初めから、全部私の為なんだから。

世界を混乱させること。彼らの手段が、私にとって目的なのだから。

「行かせません!」

「ふふっ」

だから、命懸けで私を止めようとするソルンを見てみると、思わず笑いが漏れていた。「良い子だから、そこをどいて」

「あ、う……」

目を覗き込む。それだけでソルンはへたり込んだ。私の能力は、いよいよ警戒している相手まで操れる様になっていた。

「じゃあね」

何が楽しいのか、私はたった一人地下で待ち受ける事が、心底楽しみになっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「私は、賭けに、勝ったわ」

タナカ、木村、高橋の三人を前にして、見事、星獣は地下から坑道の中に這い出てきた。

全部、私の筋書き通り。いやそれ以上だ。タナカを操る事に成功したのだから。

洗脳は単純な力じゃ無い、どんなに命じても、例えば友達を殺せと言っても、拒否感が強く普通は上手く行かないのだ。

なのに、この時は驚く程に上手く行った。タナカはユマ姫を殺す事に躊躇が無かった。

シャルティアも同様に、近くの木村を切り裂く様に書き換えても、抵抗がなかった。あまりにも上手く行きすぎている。今までに無かった事だ。

いつそ無理筋で破綻した計画の方が『偶然』のお陰で上手く行くのだ。私はやつとそれを理解した……。

一方で高橋君、いやユマ姫の状況は絶望的。

頼りになる仲間を操られ、魔獣に押さえ込まれた状態。それでも、彼女は諦めなかった。その悪足掻きが実ってしまう。

油断した私は王国兵に腹を裂かれて重傷を負った。回復液で治るギリギリの怪我だった。

「ヒヒツ、ふふふっ」

笑ってしまふ、無茶苦茶に暴れた人間ばかりが得をするんだから。

その時、いよいよ星獣が地の裂け目からその巨体を覗かせたのだ。

だから私は堂々と姿を見せて、叫んだ。無理でも無茶でも、何でも良いから場を荒らした方が得なんだもの。

「やつと会えたわ。化け物！ コツチを見なさい！」

私は星獣に向き直り、洗脳を試みる。

——ガアアアア！

「ヒヒヒッ！ コツチ、コツチよ！」

星獣の攻撃を避け、転がり、跳んだ。……らしくない大暴れ。結果、私は千載一遇の『偶然』を物にする。

「やつと、コツチを見たわね！」

星獣の目が開いたのだ。瞳に映る私の姿を……姿を？

「これで、これでえー！ 全部、終わる！ ヒヒヒッ！ コイツで、全部、壊してやる！ え、なに？」

爛々と輝く星獣の瞳。

……その先にあつたのは？

相手は巨大生物、その瞳に映る私は、きつとちっぽけなネズミ。

ちっぽけなネズミを星獣の子供に書き換える、そのつもりで準備していた。

だけど、違った。星獣の瞳に、そんなモノは映ってなかった。ネズミどころか、私の姿なんて欠片も無かった。

そこに有つたのは青い星。

地球だった。

星獣は私の出自、知識、それすらも見透かしていた。あまりにも生命としての格が違う。表層意識とは別に、もっと深い所に本質を持っている。個でありながら、全てもあ

る。ここで言う全と言うのは、星まるごとだ。

我々の人間とは根本から違う。まさに彼らは星の一部。
星獣なのだ。

「あ、グツ、うぎぎ！」

私が消える。ちっぽけな自分が上書きされる。

神が言っていたのはこういう事だったのか……、自分の姿が保てなくなる。私と星獣の境界線が消えてしまえば、私は人間で居られない。

取り込まれない為に、私は自分を単純化させた。存在を尖らせたのだ。

——ユマ姫を殺す！ それだけを考えてなんとか自我を保った。

クロス！ お前だけは！！

獣染みた殺意を胸に、私はユマ姫に銃を向ける。

そして、そして。

私はユマ姫にのし掛かられた、相手も獣の如き相貌で私に牙を剥いている。

恐るべき凶相、だけどその目に映る私もまた獣の顔をしていた。

同じだ、表と裏。

違うとすれば、ユマ姫がいつそゾツとする程に美しかった事。悪女然とした自分の姿よりよほどヒロインらしいと言える。

なるほど、勝てない訳だ。私は物語の主役になれる器じゃなかった。ココに至って、私はようやく理解したのだ。

首筋を噛み千切られる瞬間、私は今までの半生を思い出す。これが走馬灯かとぼんやりと考える時間すらあった。ユマ姫の長い睫毛に見とれる余裕があったぐらい。

ローグウッドさんと他の商會に殴り込んだ事。皇帝がカードゲームのルールに難癖を付けた事。神聖な遺跡ではしゃいで、ソルンに怒られた事、ノエルがショットガンを作って面倒なぐらいに自慢してきた事。それから、それから……。

私は気が付いた、前世の事なんてこれっぽっちも思い出せない事に。

思い出は全部、コチラの世界の事だ。地球の事なんて、母親の顔すらぼんやりとしか思い出せない。愛されたくて、いつも顔色を窺っていた地球よりも、私はずっとこの世界で自由だった。

……どうして、私はこの世界を壊したかったんだらう？

どうして、世界を壊そうと思っただけからの人生の方が、ずっと楽しかったのだろうか？
きっと、皆で目標の為にふり構わず頑張って、それがもう、楽しかったのだ。理由なんてどうでも良かった。

皆の事が、とつくの昔に好きになっていたから。

ああ、今更にそんな事に気が付くなんて。

首から血を垂れ流す私の目の前に、星獣の巨大な足が迫っていた。

ああ、でもこの世界が好き。壊したいぐらいに。

私はやつと、シヤルティア嬢の言葉が理解出来た。そして意識は暗転し、私の体が潰れる音が最期に聞こえた。

魔女の怨念

ここは隕石が落下したクレータ。泥と星獣の死骸が混じり合い、溶けている。中天に輝く月が深い穴の奥底を照らす時。泥にまみれる男の姿を照らし出した。

「ああ、嘘だ！ こんなのだ」

ソルンだった。古代人の男は泥と怪物の体液を必死に掻き分ける。しかし、掘り返せど掘り返せど、泥は容赦なく穴を塞いでしまう。深まるのはソルンの絶望だけだった。

ソルンは魔女クロミーネに発信器を付けていた。義眼に仕込んでいたのだ。

その反応が、グチャグチャに崩壊した星獣の遺骸から発せられている。星獣に喰われたに違いなかった。

その事実を考えない様に努めながら、きつと彼女は無事だと、今も助けを求めているのだと、ソルンは自分に言い聞かせる。

星獣の死骸は王国軍に守られ、昼間は近づけなかった。日が暮れるのを待ち身を潜める間も、ソルンは身が切られるような焦燥を感じていた。

夜になった途端、危険も厭わず飛び出したソルンはクロミーネと共に何度も改良してきた井戸を掘る魔道具を用い、穴を掻き分けて発信源を探す。しかし作業は遅々として

進まず、ソルンを苛立たせる。

(……だから、言ったのに。無茶だった、星獣を操ろうなんて)

ソルンは魔女クロミーネを愛していた。しかし止められなかった。

彼女が「私なら星獣を操れる」と豪語していたからだ。そして、それしか手が無い程に彼らは追い詰められていた。

ソルンはバックアップを任せられていた。もし星獣の洗脳に失敗した場合、古代遺跡で研究素材となっていた星獣の子供、その魔力波をドローンから照射し、星獣を王国軍にぶつける計画だった。

遺跡で入手した星獣のデータは詳細で、魔女の能力を抜きにしても、悪くない賭けだと思われた。

だが、星獣はソルンの操るドローンにまるで反応しなかった。

それはそうだ。もつと『坊や』に近く、より強力なユマ姫の魔力が、星獣の近くにあったのだから。しかし、そんなことソルンは知る由もない。

失敗を覚悟したソルンだが、事態は意外な方向に転がった。

王国軍は星獣と戦う事を選んだのだ。

結局、目論み通りの展開。星獣の強さを知るソルンは内心でほくそ笑む。

ソルンが見つめる先、王国軍は罫を張り、大砲を放った。しかし、そんな原始的な攻

撃で死ぬ星獣では無い。

街を一つ灰燼に帰す程の高火力が必要なのだ。丁度、スフィールに放った核弾頭の様
な超兵器が。

古代人すら悩ませた星獣の脅威が、今だけは頼もしい。大森林で散々に追いかけて回されたタナカの剣ですら、星獣にはなんの痛痒も与えて居ない事に、ソルンは溜飲を下げたりもした。

「あんな、化け物だったなんて」

想定外はユマ姫だった。以前、砂漠の空で戦った時よりも遙かに危険な存在に変貌していた。

たった一人で星獣と切り結び、そして最後には隕石を呼んで星獣を撃破した。

……実際には、ユマ姫は隕石を呼んだ訳では無い。だが、ソルンにはそうとしか見えなかった。そうとしか思えないタイミングだった。

「あんな、あんなのに敵うはずが……」

星獣を、あそこまでピンポイントに破壊する兵器をソルンは知らない。

ソルンにはユマ姫が未知の怪物に思えて仕方が無かった。たとえ古代人が全盛の時代であっても、人間の大ききで、アレほどの魔力を秘めた存在に対抗する策などあるのだろうか？

「……………」

そこまで思い至った時、ソルンは古代文明全盛期、それこそプラントが暴走して衰退が始まる直前の時代に作られた、自律小型兵器ソルステイスの存在を思い出す。

(アレならば、ユマ姫を……いや、もはや意味のない妄想だ)

ソルンは安っぽい希望を頭から振り払う。ソルステイス、いわゆる最強の小型ロボットは最近になって遺跡から発掘したばかりだった。

だが、動かす事が出来ない。魔力の質の問題だ。

エルフの国では、魔石の大小に特別な価値は無かった。純度の低い魔石でも、精製することでも純度を上げる事が出来たからだ。

魔力の密度は電力で言う電圧、それは精製で高める事が可能だ。そして電流にあたる魔力量は、魔石の量で解決出来る。

だが、ユマ姫の魔導衣にグリフオンの魔石が必要だった様に、もしくは星獣をおびき寄せる為『坊や』の魔力波を使った様に。

魔力にも、電力の様な『周波数』が存在する。高度な魔道具、それこそロボット兵器となれば、『周波数』が安定した魔力が必要だった。

すなわち高度な科学力で安定化させた液体魔力。プラヴァスで発見した巨大兵器ラーガイン、あのメイン動力に使っていた様な燃料が必要だった。しかし、現状、ソル

ンには手に入れる術が無い。

「クソツ！ クソツ！」

何もかもが間が悪い。もう少し早くソルスティスを発見していれば……プラヴァスから持ち帰る事も可能だったのに。

叫びながら、ソルンは再び井戸を掘る魔道具を起動する。

これ以上、魔道具で穴を掘れば生き埋めになる危険が高い。ソルンはそれで構わなかった。ココで生き埋めになり、魔女と共に死ねるなら。

しかし、運命は彼に死ぬ事を許さずに、無情な現実を突きつける。

「あ、ああっ！」

遂に、ソルンは魔女の義眼を発見する。

「そんな！ そんな！」

そして、そこにこびり付いた変わり果てた肉塊も。

「ああああああっ！」

嗚咽が、漏れる。もう古代人の復讐などソルンにはどうでも良かったのに。彼女と共に暮らして行けたなら、他には何も要らなかつたのに。もう二度と、それを伝える事が出来ない。その現実が何よりも辛かつた。

万が一、クロミーネが生きていたら、傷ついた彼女と共に逃避行に出るつもりだった。

山奥の小さな小屋で、二人で静かに暮らす日々。

夢に描いた彼女との幸せな生活。しかし、もうそれは叶わない。

いや、果たしてそうなのか？

現実には打ちのめされたソルンは、甘美な夢に囚われた。だが、それは妄執としか言えない代物であった。

「そうだ！ 彼女は神の使徒、特別な存在だ！」

ソルンが思い出したのは、ユマ姫の復活。ノエルはユマ姫を焼き尽くしたが、それでも培養ポッドで復活し、彼らの前に立ち塞がった。本来は消滅するはずの、記憶さえも伴って。

同じ神の使徒ならば、クロミーネも復活が可能はず！ いや、可能で無くてはおかしい！

……いや、しかし。

時間が無かった。本来、人間の再生は下手したら数ヶ月の時間が掛かるモノ。細胞が分裂し、増殖するのをゆっくりと待つのが当然だ。

凶化したユマ姫のケースこそが特殊。グリフォンを思い出すまでも無く、凶化した生命は他の命から幾らでも肉を取り込めるからだ。普通の生命体でそんな事をすれば、拒絶反応で死んでしまう。

かと言つて、凶化は夢の遺伝子技術では無い。

変質した世界に対応するべく凶化は盛んに研究されたが、全て破棄され禁忌となつた。

凶化した肉体は、変化が始まれば二年と待たずに自分の姿を保てなくなる。

意志を失つた怪物は、最悪の破壊をもたらした。それこそあのおぞましいゾンビすら、凶化の一種なのだから。

だとすれば、培養には数ヶ月掛かる。あらゆる戦力を失つた現状。そんな悠長な時間はソルンに残されて居なかつた。

なにせ培養ポッドのある魔女の拠点は、帝都の貴族なら知られた場所にあるからだ。攻め込まれた際に、守る術がなにも無い。まして、あの化け物、ユマ姫に対抗する術など……。

「……………?!」

その時、ソルンは青白い月明かりが、まだ自分を照らしている事に気が付いた。

良く考えればそれは尋常では無い。なにせココは深い穴の底、月の明かりが届くのは、中天に月が架かる一瞬のハズだから。

「なんだ？　これは！」

良く見れば、壁がうつすらと光っていた。まさかと思ひソルンは泥壁を掻き分ける。

「熱ッ！」

ソレは、まだ星獣の体内にあった頃のままに、灼熱を内部に湛えていた。青く強烈な光が、内包したエネルギーを物語る。

「これは！ 魔石？ 星獣の魔石か！」

ソレは、ひと抱えもあるような巨大な魔石だった。

（単体でこの大きさ！ 多くの魔獣を押し固めた精製魔石とは違う！）

大出力が欲しい場合、複数の魔石を精製し、結合する。しかしその場合、魔力の周波数はバラバラになってしまう。

この魔石ならソレが無い。

（コレなら、ソルステイスを起動出来るかも知れない！ まだだ、まだ、天は我らを見放して居なかった）

運命に導かれるようにソルンが広げたのは、ぼろ切れ同然となったクロミーネの服だった。

魔物の糸で編んだ防弾性能の高い布。これで魔石をゆつくりと包み込む。

すると、魔石は途端に輝きを失い、ソルンの腕に収まった。見た事もない巨大な魔石だが、それでも抱きかかえて持ち出せないサイズでは無い。

「よし、コレでコレでえー！」

歓喜に震えるソルンの目には、狂気が宿りつつあった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何故だ！ 何故、記憶が戻らない！」

大型ドローンで拠点に戻ったソルンはすぐさま魔女の細胞を培養し始めた。幸い収穫期を前に侵攻は収まり、冬の間も帝都が攻め込まれる事は無かった。その間に、ゆつくりとクロミーネを培養する事が出来ていた。

そして春を目前に、クロミーネは元の肉体を取り戻す。しかし、その瞳に意志の光が宿る事は無かった。

典型的な、『体だけが大人』の人造人間そのものだった。

「そ、そうだ、外部の刺激があれば……」

そう言つて、ソルンは培養ポッドを開けてしまう。

ざぶんとポーションが排泄されて、クロミーネの体が研究所の床に投げ出される。ポーションが不足している現状、こうなれば二度とポーションの培養液に戻す事は出来ない。

コレが最後のチャンスなのだ。

「クロミーネ、僕だ！ ソルンだ！」

「ぶえっ？」

ソルンは呼びかける。しかし、クロミーネの目はとろんとしたままであった。

「そんな、どうして!」

「ぶええええええん」

クロミーネは赤ん坊になっていた、何も知らない大人の肉体。中身は生まれたばかりの赤ん坊。

歩く事も出来ない肉人形。決して長くは生きられない存在だ。

「そんな、嘘だ、嘘だろう?」

「びええええええん」

ソルンは必死に呼びかける。しかしその日、クロミーネが泣き止む事は遂になかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ほら、ごはんだよ」

「ダー!」

それから数日後、豪華な椅子に腰掛けたクロミーネの口に、ソルンは離乳食を運んでいた。

見た目だけなら、高慢な女主人が執事を傳かしている様にも見える。

生前の魔女は似た事をやらせていたし、知らぬ者ならば、魔女は健在に見えるだろう。

現に、帝都から使者が来た時など、ソルンはクロミーネを椅子に座らせ上座に据える。『魔女に秘策アリ』と使者に嘯き、その姿を見せつけもした。

しかし、その目が違う、ぼんやりと意志のない瞳はクロミーネにはあり得ないモノだった。

「まだ、記憶は戻らないかな？」

「だあだ！　だあだ！」

言いながら、ソルンはもうこのままでも良い様な気がしていた。

きつと間もなく嘘はバレるだろう。こんなクロミーネと二人で逃げる事など不可能なのだ。きつと二人して断頭台に上げられる。

でも、そんな最期も悪くないと思ってしまう自分が居た。ハッキリと終わりの時を自覚していた。馬鹿な事をしていると頭では解っている。それでも空虚な幸せに浸っていた。

「あ、ー」

「ごめん、飲み込めないのかい？」

ソルンは離乳食など作り慣れない。大人の体を持つクロミーネに歯はあるのだが、噛み砕く事すら上手く出来ないのだ。

そういうとき、決まってソルンは自分の口で離乳食を噛み砕き、そつとクロミーネに

口付けるのだ。まるで雛に口移し食べさせる親鳥のように。

「んー」

むずがるクロミーネに唇を合わせる。ソルンとて、幼児となつたクロミーネに不埒を働くのは罪悪感があつた。だが、これだけは必要な事だとソルンは言い聞かせる事が出来たのだ。

——ガタン！

その時、部屋の外から物音が響く、使用人もいないこの屋敷ではあり得ない事である。

「誰だ！」

——ピーピーピー！

鋭く誰何するソルンの言葉に答え、扉からヌルリ姿を見せたのは……黒鉄で出来た蜘蛛だった。ソルンの倍近い、三メートルはある体高のロボットながら、その大きさの大半は細長い脚。

脚を畳めばこうして扉を潜る事だつて造作も無い。

「なんだ、ソルスティスか」

——ピー！ トウルトウー

機械音が返事を返す。そう、コレこそが自律小型兵器ソルスティス。ソルンは星獣の魔石をもって究極と唄われる兵器の起動に成功していた。

この兵器こそが、彼の余裕を保っている。

ソルステイスは蜘蛛型の魔獣、ザルアブギユリ大土蜘蛛を再現するロボットとして開発された。最強の兵器を作るにあたり、古代人は圧倒的な踏破力と防御力で知られる魔獣を目標に据えたのだ。

しかし、古代技術の極点でもたらず防御力は、元となる魔獣を遂に超えた。

空化ホウ素で出来たボディは魔剣すらもはじき返すし、蜘蛛の脚を折りたためば、どんな拠点にも侵入可能。

最強の制圧兵器として、古代人の歴史の終わりに、究極の制圧兵器が完成していた。

「良いから、見回ってこい」

——ピーピーピー！

機械音を残し、ソルステイスは音も無く部屋を出て行く。その動きには何処か人間めいた愛嬌すらあった。

しかし、もうそんな事はソルンにはどうでも良かった。それどころか、意志を持って自律行動するソルステイスがクロミーネと二人の世界に入り込んだ異物の様に感じて、疎ましくすら思っていた。

「ふう、じゃあもう一度」

そう言って、ソルンはむずがるクロミーネを押しさえ付け、再びのキスをした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

春が来て、暖かい日が続いた。眠りの深くなる季節にも関わらず、ソルンは眠れずにいた。夏になれば王国軍は帝都に迫るだろう。そうなれば全てが終わる。今はつかの間の夢の中で生きている様なモノだった。

こうして夜中にふと目が覚めてしまえば、狂おしい程の焦燥感が胸を焼く。冷や汗に背を丸め、必死に眠る事だけを考えていたソルンだが、その時隣室から聞こえて来たクロミーネの幼い悲鳴が耳に届いた。

「なんだ！ 敵襲か！」

着の身着のままクロミーネの部屋に転がり込んだソルンが見たモノは？ 果たして

クロミーネにのし掛かるソルスティスの姿だった。

「何をしている！」

激昂したソルンは力の差も忘れ、必死にソルスティスをクロミーネから引き剥がそうと試みる。それを見たソルスティスは、渋々といった様子でゆつくりとクロミーネの上を退いた。

「なんのつもりだ！」

——イブツ！ ハイジョスル！

ソルスティスに取り付けられたステータスマニターに、文字が浮かんだ。

解像度の荒いモニターながら、短い文章が表示出来るのだ。

「またか！ 彼女は異物なんかじゃない！」

ソルステイスには拠点に侵入する異物、敵を排除しろと命じていた。実際、何匹ものネズミを始末している。だが、何度教えてもクロミーネを異物として認識してしまっただ。

——イブツ！ イブツ！

「違うー！」

ソルンは怒りに我を忘れた。

クロミーネは人間ではないと、ただの肉人形であると、機械に歴然と突きつけられた様な気がして、声を荒らげ激昂した。

本当はソルンにも自覚があるのだ。だからこそ、認められなかった。

「出て行け、お前など見たくない！」

そう言つてソルステイスを追い出すと、怯えるクロミーネに声を掛ける。

「怖いのかい？ そうだよね？」

蜘蛛の機械に襲われたクロミーネは、すっかり青ざめて声も出ない。中身は赤子なのだ、無理からぬ事である。

「大丈夫、今日は僕も一緒に眠るから」

そうやって、ソルンはクロミーネとベッドを共にした。それが最後の一線だと知りながら。

そして、次の朝。それは呪いか、はたまた奇跡か、待ち望んだ瞬間が訪れる。

「ソルン？」

寝ぼけた頭に響いた声、初めは夢を見ているのだとソルンは思った。

「ソルン、あなたでしょ？ ココはどこ？」

「まさか！ クロミーネ様、記憶が？」

「ねえ、私どうしたの？ 洞窟でアイツらを待ち伏せて、それから記憶がハッキリしないのよ」

「ああ！ 良かった！ 良かったあ！」

「もう、どうしたのよ一体？ らしくないわよ」

ワンワンと泣き続けるソルンを、優しくなだめるクロミーネ。その瞳には以前の光が戻っていた。

——ピーピー

そして部屋の隅、それを見守るロボットのカメラにも、赤い光が宿っていた。

新しい私

「大復活！」

シノニムさんに殺されかけて、勢い余つてシヤリアちゃんも食べちゃったりして、俺は大変な事になってしまった。

一ヶ月で帰るつもりが三ヶ月ぐらい掛かった訳で、いやー、驚いたね。

ようやく、明日には王都に帰れる場所にまで戻ってきた。

既に季節は春、俺は十五歳になっていた。十六までに死ぬとすると、もう一年も時間が無い。後はもう好き勝手に暴れる事に決めた。

ここまで何をしてたかと言うと、足も生えない内から大暴れ。ゼスリード平原では襲つてきた恐鳥リコイを片っ端から返り討ちに。もっしやもっしやと肉を食らった。

それがあんまり美味しかったもんだから、こつそり装甲車を抜け出して、鳥を狩って喰らう日々。食い過ぎて寝込んだりして、幼少の苦い思い出が蘇った。蘇ったけど、引かないし媚びないし省みない。

……滅茶苦茶にお腹が減って仕方が無いからだ。

俺の胴体はかなりコンパクトになってしまった。バイバイ大腸、サヨナラ小腸。いく

ら食っても太らない体質と言えば聞こえは良いが、食っても食っても垂れ流しだったのが実情だ。つまり吸収率が極めて悪かった。

凶化したとは言え体を戻すには大量の肉を必要としたのだ。

魔法を使い上半身だけでカツ飛んで行って、巨大な恐鳥^{リコイ}を狩ってくる俺の姿はちよつとしたホラーだったに違いない。運転手もビビりまくっていた。

それで、ようやく胴体が塞がって、ゆっくりと足が生えてきたのだが……

……なんか翼まで生えてきた。

なにを言ってるか解らんし、俺にもさっぱり解らんかった。

でも、生えたもんは仕方がない。醜ければもいでおもうかと思っただけれど、純白の羽があんまり綺麗だったから、なんとなく生えるに任せてしまったワケだ。

だいぶ人間を辞めてしまった訳だが。ユマ姫マジ天使！ って感じで大丈夫だろう。きつと。

他にも色々寄り道をして、そろそろ王都に戻ろうかと言うタイミング、どうもオーズド伯が王都で俺の悪評をばらまいているらしい事を知る。

これはド派手に帰還して、俺のニューボディを見せつけるしかないだろう。

今までも何度かやって、毎回大好評の凱旋パレードだ。そこで、俺の人気を見せつける。

美少女の主張とくたびれたオッサンの訴えでは、民がどちらを信じるかは知れたモノ。

つて、思ってたんだけどさ。

だけど、今回、なんか羽が生えちやつてるじゃん？

どうなの？ コレ。人間辞めてない？ 大丈夫？

天使を通り越して、悪魔って言われない？

異端審問会キヤンセル火炙りの、即死コンボを決められそう。

皆の反応が楽しみな反面、ちよっぴり怖かったりもした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、翌日、何事も無く王都に辿り着いていた。しかし、俺は装甲車で待機。

登場はなるべく劇的に、人が多い場所で行きたいからだ。

俺に乗せた装甲車は、いよいよ王都のメインストリートに差し掛かる。

車内からでもザワザワと人いきれが聞こえてくる、いつも通りの大盛況。目を瞑れ

ば、輝くばかりの運命光が取り囲んでいた。

良いタイミングと言えるだろう。

「出ますー！」

宣言を一つ、俺は選挙カーみたい改造された車内のハシゴを登り、装甲車の上に身を乗り出した。

「「ウオオオオオオ！」」

絶叫の様な歓声に押しつぶされそうになる。

俺の人氣はいまだ健在だ、まずはそれに安心する。紛れて飛んで来たクロスボウのボルトを人差し指と中指で挟んで受け止めると、俺は背中の中の羽を思い切り広げた。

「皆さん、ご機嫌よう。ただいま戻りました。ユマ・ガーシエント・エンディアンです」
決まった！

完璧な挨拶。拡声の魔法で、街路の隅々まで声が響いた。

「「……………」」

しかし、返されたのは重い沈黙だった。

アレ？ やっちゃったかな？俺はテヘへと照れながら指に挟んだボルトを捨てる
と、皆に向かってとびきりの笑顔を振りまく。

「「……………」」

しかし、誰も何も口にしない。ぽかんと大口を開けて、俺の姿を見上げている。

なんだろう？いきなり暴動が起こるような雰囲気ではないのだが、こうも無反応だ

とりアクションに困る。

異端審問会が始まるなら、早くして欲しい。逃げるから。

俺は開き直って天井に設置した椅子にどっしり座る。

開き直ったついでに羽まで大きく広げ、大きなため息をつくのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【パレード前日、王宮にて】

「ネルネさん？ あなた、こんな所に居て良いの？」

「え？」

顔見知りの侍女が伝えてくれた話は、私にとつてあまりに衝撃だった。

「ええっ？ 姫様、明日帰ってくるんですか？」

「はい、先触れがいらっしやいます……」

「むー」

私、ネルネード・スピュラムは頭を抱える。ちなみにスピュラムはこの国の宰相の姓。私はお嬢様と言う事になるんだけど、どうにもピンと来ない。

なにせ養女になったばかり。同じハーフェルフと言う立場からユマ姫様の侍女を続ける以上、ある程度の身分があつた方が良いと押し付けられる格好だったから。

「嬉しくないのですか？」

「そんなことー」

もちろん、ユマ姫様が王都に帰るのは嬉しいし、待ちわびていた。

戦争に連れては行けないとお留守番を命じられて以来、私は王宮で肩身が狭い思いをしていたんだもの。だって、私の仕事は宰相様にユマ姫の情報を流す事だから。

だからそう、ユマ姫が帰ったら、やっと仕事が出来るぞ！

つて喜ぶべき所なんだけど……

今は、マズい。

だって、もう私はユマ姫様の事も大好きだから。姫様の悪い所は伝えたくない。

だからこそ、今の状況はマズいのだ。私はシヨンポリと俯いた。

「……今の王都は荒れてるんですもん」

「そうねえ……」

その原因がユマ姫の後見人だったオーズド伯なのだから参ってしまう。

王国は戦争に勝った。それは間違いないらしい。だけど総司令のオーズド伯が戻ったのに、戦勝パレードは全く盛り上がらなかった。

当のオーズド伯が見るからにやつれ、憔悴していたからだ。あれでは負け戦の将にしか見えない。

そして……国民の前で宣言してしまう。

「ユマ姫は悪魔だ」と。

もちろん、王国は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。どうもユマ姫はオーズド伯が止めるに構わず、そのまま帝国に攻め込んだらしいのだ。

それを聞いて私は……正直ユマ姫ならやるだろうな、と思つてしまった。一見穏やかで優しそうに見えるユマ姫だが、一皮剥くと中には怖^{おし}気を震う程の狂気を孕んでいるのを何度も見てきたから。

そんな姫様が敵を前にして手打ちになど出来るハズが無い。勝つたところで停戦し、有利な条件を引き出したいオーズド伯とウマが合うハズが無かつた。

「でも、姫様を極刑に、つて話ではないでしょう？」

「そこが、微妙なんですよ」

私は事態の複雑さに泣きが入つてしまふ。

総司令の命令を無視し、多数の兵を引き連れて帝国に踏み込む。普通だつたら即座に追放、最悪処刑モノの罪らしい。

だが、オーズド伯が帰るに先んじて、キムラ様の使者も王宮に届いていた。

曰く、ユマ姫は自らを人質に敵陣に飛び込む計略を実施した。その献身もあり、王国軍は大勝。ただし多過ぎる捕虜の扱いに苦慮する。

捕虜を虐殺するしか無いと決断したオーズド伯だが、優しい姫はそれを良しとせず、

オーズド伯と袂を分かつ。

そして捕虜の兵を連れ、自国民すら人質に病原菌を撒き散らす魔女を討つために、帝国深く侵攻を開始したと言うのだ。

コレを聞いた軍部や議会、国民まで巻き込んで喧々譁々の大議論。ユマ姫が正しいか否か、国を真つ二つに割る論争が始まってしまった。

総司令を無視する独断専行なれど、侵略に用いた兵の多くはユマ姫の親衛隊と、ユマ姫が敵から寝返らせた捕虜の軍隊。失つたとしても深刻な被害とはならない。

しかも、その後も連戦連勝。帝都深くに切り込んで、良い様にかき混ぜている。

コレにはユマ姫を応援する派閥は大盛り上がり。

しかし、それも話が星獣の事になるまでだった。

「ユマ姫はスールーンで魔女が用意した巨大生物を相手に、神の使徒としての力を解放、致命的な怪我を負いながら撃退し、王都へと帰還しています」

こんな報告をされてしまうと、どこまで嘘か真かすら誰にも判断がつかなくなつてしまった。

余りにも荒唐無稽、夢物語の様な活躍にも程があつたから。

そんな大荒れの状況だから、悠長に先触れなんて出すのが私には不思議だった。

戻るにしても姫様はせっかちで、空から飛んで帰る事すら最近が多かつたのだから。

それが先触れを出して戻ると言う事は、大々的にパレードでもして自らの帰還をアピールするつもりに違いない。

「うう、これは荒れますよお……」

ユマ様は一騒動起こすつもりだ。それがお付きの侍女である私としては不安で仕方が無かった。

でも、一方で私は、ユマ姫様のパレードが楽しみでもあった。

久しぶりに会うユマ姫はどんなに美しくなってるんだらうって。

だって、王都が真つ二つに割れている時に、堂々とパレードをしようって言うんだもん。

ユマ姫はきつと、見違える程、キレイになつてるに違いないのだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ね、寝坊した!!」

不安で眠れなかった私は、翌朝、窓から差し込む光の強さに絶望した。すでに昼前の時間だったから。

朝食どころか顔も洗わずに急ぎ着替え、王宮の城門へすべり込む。姫様の帰還となれば、街は大騒ぎになっているに違いなかったから。

大人気であるユマ姫の帰還。

人出を見込んで屋台も出るし、吟遊詩人がおひねり目当てにそこらで音楽を奏でる。お祭り騒ぎになるのが通例なのだ。

気が重いドンチャン騒ぎ。でも、街を目指して城門にすべり込んだ時、不思議な事に気が付いた。

「音が、しない?」

静かなのだ、ユマ姫が来たにしては。

それどころか、この時間となれば普段の王都でも喧噪に溢れている。なのに、一切の音が奪われていた。

「まさか! 敵襲?」

ピンチの帝国がイチかバチかの破壊工作を行い、街が警戒態勢に移行したのかも!

そう思って私は門塔を登り、街を見下ろす城壁の上に出る。

想像していたのは戦時下の閑散とした街。だけど違った。街は人でギユウギユウ詰め、そんな中をユマ姫を乗せた車は大通りを進んでいる。

私は今でも憶えている。

初めてユマ姫が来た時も、プラヴァスから帰還した時も、大騒ぎになった。

今回の人出はその時に勝るとも劣らない。

なのになんだろう? 不気味なまでに静まり返っている。

その原因はすぐに解った。装甲車の上に設えた椅子の上、優雅に寛ぐユマ姫の姿が遠くからでも見えたから。

「羽が……生えている?」

その背中には天使の羽が生えていたから。

余にも神々しいその姿に見惚れ、私は言葉を失った。

「み、見違えるにも程がありますよおお!!」

私はその場にへたり込むしか出来ませんでした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

人ごごった返すのに、不気味な程に静かな王都。こんなのは生まれて初めて見た。

みんなユマ姫の姿に見とれているのだ。ひと言も発せない程に。それは私、ネルネにしても一緒だった。

それほどに、衝撃的なまでに美しい姿だった。天使が現れたのかと本気で思った。

その証拠にユマ姫が城門を潜った後、姿が見えなくなつてから、ようやく人々は止めていた呼吸を思い出したのだった。

「「オオオオオオ!」」

地を揺るがすような歓声が、石造りの城を揺らしたほど。そんな強烈な美を目の当たりにして、見慣れたハズの私まですっかり言葉を失っていた。

「ネルネ、お久しぶりですね」

だから、言われても返事が出来なかった。馬鹿みたいに口を開けて見上げるばかり。車の上から逆光に見上げるユマ姫は天使そのもの。

「ネルネ、どうしたの？」

大きく羽を広げ車の上から飛び降りたユマ姫が、私を見下ろす。

そう、見下ろすのだ。ユマ姫はハッキリと背が伸びていた。すらりと長い足はまるでお伽噺の妖精の挿絵の様だ、まるで現実感が無い。

いや、長すぎるんですけど？ 胴体なんてまるで縮んだみたいに短く見える。それ程に足が長い。身長自体は他の貴族のお嬢様、それこそシャリアちゃんと同じぐらいなんだけど、胴が短くて足が長いから驚く程にスタイルがよく見える。

「ネルネ？ 生きてる？」

ユマ姫が私のほっぺを両手で挟む。

「ムムウウウ！ 苦しいです」

「良かった、生きてた」

痛いッ！ 華奢な見た目で力が強い！ 銀色の髪だから魔力は欠乏状態と思うのだが、肌を感じる魔力のプレッシャーはむしろ以前よりも大きく感じた。

今なら解る、城よりも大きな化け物を倒したと言うのは、たぶん嘘じゃない。

恐る恐る私は尋ねた。

「あの、その羽は？」

「ああ、これ？ 鳥ばかり食べてたら生えちゃった！」

普通生えないと思うんですけど……。

「あ、それでね……」

困惑している私を無視して、申し訳無きそうにユマ姫が言う。

「服が色々、サイズが合わなくなっちゃって」

そう言っただけで振り返った背中、雑に切り取られて大きな穴が空いていた。羽を通すためだ。

「え？ シノニムさんにシヤリアちゃんは？」

あの二人が居れば、こんな服を着るなんて絶対に許さなと思うんですけど……。

私が首を傾げると、コチラを見下ろすユマ姫の瞳と目が合った。

「二人なら戦場に残りました。向こうは全く手が足りませんから」

「……そそそ、そうなんですな」

私は怖かった。見下ろす瞳の中に夜の星みたいな神秘の輝きが見えたから。

アレは人間の目じゃない。きっと神とか、それこそオーズド伯が言う様に悪魔とか、そういう人間とは次元の異なる生き物の目だ。それが途轍もなく怖かった。

もう、私知っているユマ姫は居ないんだ。もつと恐ろしい何か、この少女の形をした体の中に巣くっている。

「は、はい。あのその、針子さんを呼んできます」

「お願いね」

私の声は上ずっていたに違いない。ユマ姫が怖い、けれども人間が戦ってどうにかする様な存在じゃないと思う……。

そう思うと、逆にユマ姫を心配していた自分が馬鹿みたいで、いつそオーズド伯が可哀想に、私は思った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【翌日、王宮にて】

「ネルネ、終わったらヨルミちゃんに会いに行きます」

「え？ その格好ですか？」

お針子さんに採寸されているユマ姫がそんな事を言い出すのだから、手伝っていた私は変な声が出てしまう。

「変かしら？」

「変ですよ！」

ユマ姫が着ているのは『いぶにんぐどれす』とか姫様が言うキラキラと夜の星みたい

に輝くお召し物。これもキイムラ子爵の趣味というけど、なんと言うか背中が丸見えなのだ。

肩だけはショールで無理矢理隠しているけど、ソレが却ってえっちなのです。

今の、ヨルミ女王に会いに行くには最悪の格好と言えるでしょう。

「でも、こう言うのじゃないと羽がじゃまでしょ?」

「過激です! 目に毒です」

スカートには凄いスリットが入っている。元々入ってたスリットだけど、長くなつた足にあわせてより深く入れてしまった。

まるで美脚を見せびらかす様だ。いや本当に見せびらかしているに違いない。

そんなものを見せつけられるヨルミ女王は堪つたモノではないだろう。なのに、ユマ姫は変な事を心配し出す。

「ふうーん、確かに王女付きの侍女って、感じが悪いし意地悪ですからね」

「そんなこと」

ない。とは言い切れない。王女付きの侍女となれば、上位貴族の花嫁修業の場みたいな所があるから、気位の高い女性が多いんだもの。

それを教育するべきヨルミ様が、良いや良いやと細かい事を気にしない性格だから、侍女達はすっかり増長している。

ユマ姫とヨルミ女王が会話をしている間、外で待つ私みたいに成り上がりの娘に、手ひどい意地悪や暴言を仕掛けてくるのだった。

……だった。過去形だ。それが恐ろしいんだけど、ユマ姫様にやんわりと伝える言葉が見つからない。

まごついてると、ユマ姫様はしびれを切らした。

「もう埒が明かません、行きますよ」

「ま、待つて下さい。今行くのは、特にそんな格好で行くのは絶対にマズいですよ!!」

「私と女王の仲ですよ?」

「だからですよお! なにこれ? ってなりますよ?」

「何のことやら」

私の制止を聞かずに、ユマ姫はドレスの裾を払って歩き出した。深いスリットから見える太もものほくろが余りに色っぽくて、女の私でも目が奪われてしまう。

その足のほくろ。シャリアちゃんにも同じ場所にあった気がして。私は余計な事を考えないように頭を振った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なにこれ?」

「ホラ、言ったじゃないですか!」

「こんなの、信じられる訳ないでしょう?」

でも、真実なのです。

ヨルミ女王の離宮は王宮庭園の端にあります。

王の離宮だけあって大きくてすごしやすいと、決まってヨルミ女王はここに居ます。

その離宮のエントランスで何人もの侍女が出迎えて、それは普通だけど、普通じゃ無いのは、全員が膝を折って、地に伏せて、地面に頭をこすりつけて出迎えている事。

罪人でもないのに、やんごとなき身分の淑女がここまで頭を下げるのは異常だった。

こんな格好は相手の尊厳を踏みにじる行為と平民相手でも認められていない。やらせたとしたら、貴族の品位が疑われるから。

でも前はこうじゃなかった、それどころか軽く会釈をすれば良い方で、一切頭を下げない侍女まで居たのに。

「なにこれ?」

「いえ、ですから……」

「ヨルミ女王は二階のバルコニーです」

私達が言い争っていると、地に伏せたままの侍女がそう言った。以前は賓客のユマ姫にまで馬鹿にした様な目を向ける侍女だった。ユマ姫もそれを覚えていたのか、不気味そうに顔をしかめる。

神懸かった存在になったユマ姫をここまで動揺させるなんて、ヨルミ女王は流石だと思っただけだ。

「その背中……」

ユマ姫がその侍女の背中に手を触れる。それでも侍女は地に伏せたまま、ビクンと体を震わせた。敏感な地肌を触られたからだ。

そうなのです、ヨルミ女王付きの侍女のメイド服は最近大幅にデザインが変更されてしまった。背中を大胆に開けられて、とても過激な衣装になっている。

しかも、その開けられた背中には……

「酷い傷跡、鞭ね」

「は、はい」

「あの子がこんな事するなんて……」

ユマ姫が決意を込めて二階を見上げる。

そう、ヨルミ女王は他人を苛めて喜ぶサディスティックな趣味に目覚めてしまったのです。

戦場から帰ってから人が変わってしまった。戦場が人を変えると言うのはこういう事かと、当時は恐ろしく思ったもの。

「あ、あの」

その時、侍女が初めて顔を上げ、必死の形相でユマ姫に取り縋った。ユマ姫はそつと彼女を手で制する。

「解っています、私がヨルミ女王と話をつけます」

「あの、一度だけ、一度で良いので踏んで頂けませんか？」

「……………」

ユマ姫は途方に暮れて目を瞑った。「手遅れかも……」と弱気に漏らす声を聞いて、私は何故か安心してしまったのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「来たわね」

二階のバルコニーに出るや、ヨルミ女王に声を掛けられた。

でも、私も姫様も絶句してしまう。ユマ姫様に声を奪われるどころか、ユマ姫様から声を奪うなんて、流石は女王……と思いたくはない光景だった。

なんとか気を取り直したユマ姫が、女王を見下ろす。

「何をしているの？」

「椅子に座っているだけだけど？」

椅子ではなく、四つん這いにした侍女に座っているから問題だった。手にした鞭を弄ぶ自信に満ちた女王の姿に以前の面影はない。やはり戦場は怖い。だけど変わったと

言えばユマ姫の方がずっと変わった、何せ背中に羽が生えている。

「あのね、侍女を苛めるのは止めなさい」

「あら、侍女がイヤと言ったのかしら？ あなた嫌なの？」

ヨルミ女王は椅子にした侍女の顎先を、鞭でもってクイツと持ち上げた。

「い、いえ、嫌じゃないです」

「嫌じゃない、それだけ？ 違うでしょ？ コレが欲しいんですよ？」

そう言つて、侍女のお尻を鞭でピシヤリと打つのだ。凄く痛そうで見えていられない。なのに打たれた侍女はどこか嬉しそうな声を出すから気持ち悪くて仕方がない。

「はい、そうです！ 申し訳ありません！」

「素直にそう言えば良いのよ。ねえ？」

女王は更にピシヤリと鞭を打つ。いや、何なのでしょうこれ？ 何を見せられてい

るのか私には解りません。

「あのね、嫁入り前の女の子を鞭で打つのは止めなさい」

ユマ姫はそう言つて、侍女の上からヨルミ女王をどけると、侍女の傷だらけの背中に手をかざす。

「ああつ」

「大丈夫、もつと気持ちよくしてあげるから」

背中の女王の重みが消えて、いつそさみしそうな声を出す侍女も侍女だけど、それに頓着せず、背中の傷に魔法を唱えるユマ姫はもつと凄い。

そして、回復魔法が更にその上、途轍もなく凄いののは、私も知ってる。

「なにコレ！ 気持ち良いです」

「ホラ、もつと私を受け入れなさい、気持ちよくしてあげるから」

そう言つてユマ姫が背中を撫でると、侍女の背中の傷はみるみる消えていった。

回復魔法、私も何度か掛けて貰った事があるけれど、凄く気持ち良い。しかも昔よりずっと強力になっているように見える。階下に居た侍女達も、傷を治されると皆腰砕けになつてしまった。

「す、凄いー！」

この真正正銘の奇跡の前に、さしものヨルミ女王もポカンとしていた。非情な女王の仮面が外れ、かつてのヨルミ様の姿が戻った様で、モジモジとユマ姫に話し掛ける。

「あ、あのね、一人治して欲しいの。コレで打つたら心が壊れちゃって」

そう言つて、テカテカと黒光りする鞭を取り出したから、私はゾツとしてしまった。水牛の鞭は罪人を処刑する鞭である、それにしたつて残酷だからギロチンで首を落とす事が大半になっているほど。

そんなモノで侍女を打ち据えたなんて！

でも、それを聞いてユマ姫は怒るところか、困ったものだと言いたげな表情でボリボリと頭を掻いた。

ユマ姫はたまにこうして男つばい顔をする、そのギャップに惹かれてしまうんだけど、私は変態なんだろうか……。

いや、私なんて変態ではない。ユマ姫の言葉の方がよっぽど変態だった。

「それで女の子を叩くのは二度と止めると誓いなさい」

「で、でも！」

「それで叩いて良いのは私だけ、良いですね？」

そう言つて、ガバツと開いた背中と翼をヨルミ女王に見せつけたのだ。神懸かった美しさと、艶めかしい色気を誇る、その背中を。

「あ、う、え、あの？ 鞭で打つて良いの？」

「構いません。私が何をしたか知つてるでしょう？ 司令官を前にして命令違反。重罪です？ いっそ壊れるまで、気が済むまで打ち据えなさい。そう、私だけに」

そう言つて、愛おしそうにヨルミ女王の顔を撫で回すものだから、女王はすっかり顔を赤くして、コクコクと首を縦に振るだけになった。

ユマ姫は歌うように続ける。

「私がどんなに泣いても、気絶しても、鞭を振るい続けなさい」

そんな！ 死んでしまう。そう口にしかけたけど。ユマ姫はそんな事じゃ死なない気がした。もし仮に死んでしまったとして、もういつそそれで良いような気さえしてしまい、私は何も言い出せなかった。

でも、次のひと言にはゾツとした。

「でも、男は別です。その鞭で断罪するべき男が大勢居ます。私にだけ鞭を打つてはズルいでしょう？ 国が混乱している責任は、両方に取らせないと」

そう言つて微笑むユマ姫の顔は恐ろしく、顔を真っ赤に俯くヨルミ女王とどちらが罰を与える側か、私にはもう解らなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【オーズド伯、私邸にて】

「クソツッ！ どうしてだ！」

その日の夜、かつてユマ姫も滞在していたオーズド伯の書齋にて、オーズド伯は一人蒸留酒を煽っていた。

「こんな……こんなハズじゃ」

ユマ姫は化け物。その証拠を探し国民に突きつけるつもりだったのに、ユマ姫は自らが人外の化け物だとばかり姿を晒した。鳥のような純白の羽を背中に広げて。

「なにが、天使だ！ 馬鹿らしい！」

オーズドは空になったグラスを書斎机に叩きつけ、抜け毛が落ちるのにも構わずに頭を掻きむしった。途轍もない化け物を育ててしまった。その慚愧の念故だ。

プロパガンダに少女を使うのは何時の時代、どこの世界でも良くある手である。複雑に利権が絡み合う大人の世界に、年端もいかない少女が正論で切り込むのは端から見る分にはセンサーショナルに映るからだ。

オーズド伯もユマ姫をそうして利用した。

ユマ姫が初めてオーズドと出会い、それから王都まで長い旅路の間、オーズドは王都でのプロパガンダに努めていた。育て上げた諜報員の力を遺憾なく發揮して、ユマ姫が辿り付く頃には王国一のアイドルが完成していた。

異種族のお姫様と言う肩書きだけで、王都に辿り付いた瞬間から人気をさらえる訳が無い。

ユマ姫人気のカラクリは、自分の手によるモノのハズだった。

そんなユマ姫は、当然ながら故国を滅ぼした帝国の悪事を声高に語るだろう。それが主戦派であるオーズド伯の狙いだった。

作戦は上手く行った。否、上手く行きすぎた。

王子と婚約、大商人までも味方に付ける。王都はどんどんと対帝国への開戦ムードが高まっている。

上がってくるユマ姫の快進撃に快哉をあげていた、かつての自分を殴りたい。

せめて一昨年の夏、ゼスリード平原で巨大な土の壁を作り命を救われた時点で、気が付くべきだった。もうあの時、とつくの昔に人類では制御不能の怪物に育っていたのだ。

ユマ姫につけたシノニムの報告を鵜呑みにしてしまった。彼女が大丈夫と言う声に絶ってしまった。

そのシノニムとも、連絡がつかない。きつともう……

パキリと右手のグラスが割れた。血が流れるにも構わず。オーズドはユマ姫を殺す事を決意する。いや、今日だってパレードに紛れて殺すつもりで手を打っていた。

だが、無駄だった。何重にも張り巡らせた殺し屋の内、実際に行動を起こしたのは一人だけ、他はユマ姫に見とれ指一本動かさなかったと言うのだから言葉もない。

国民は丸ごとユマ姫の味方だ。きつと貴族の幾らかも。軍部に至っては絶望だ。

オーズドは自らが所属する主戦派と、かつて敵対した穏健派までを縦断し纏めあげ、ユマ姫に抵抗する勢力を作る事を誓う。

手始めにユマ姫に近い王女ヨルミをなんとしても説得しなければと決意する。

……その決意が、いつその被害を生んでしまうとも知らずに。

シノニムを失ったのはオーズド伯に取ってなによりの痛手だった。

今のユマ姫を見たネルネは宰相殿下に「危険だから絶対に触るな」と警告し、宰相はその報告を頭から信じた。

ネルネの人を見る目はアレで案外正確なのだ。宰相はそれを知っていた。いや、誰であれ、近くでユマ姫を観察していれば気が付くだろう。誰しも一目で魅了する怪物に抗う術などある筈が無い。

ユマ姫はそれほどの化け物に成長していた。

公開処刑1

「ラミイさん、もうちよつと寄って下さいよお」

「無理ー！ え？ ラミイって私の事？」

本日はお日柄も良く、絶好のイベント日和。私はプラヴァスから奴隷としてやってきた、カラムティイさんと中央広場のイベントに來ています。

「そうですよ、名前長いんですもん。私なんてネルネードなのにネルネって呼ばれてるんですから」

「そんな事言われても……。まあ良いけど。コレ、何が始まるの？ 私、忙しいんだけど」

「またまたー忙しいなんて、結構良い待遇だつて聞きましたよー」

ラミイちゃんは奴隷と言っても、実はプラヴァスのお嬢様。政変の都合とか諸々でキイムラ様に貰われて、なんだかんだユマ姫様の預かりみたいなの、良く解らない立場になっっている。

ユマ姫は戦場に行ってしまったので、今はキイムラ商会で働いているらしいけど、本当に奴隷みたいな強制労働をさせられているハズはないでしょう。

なのにラミイさんはゲツソリと俯く。

「結構キツイ仕事ばかりで本当に辛いんだけど！」

「そ、そうなのですか？」

その真に迫った嘆きに、私は思わず身構えた。可愛い彼女にキツイ労働と来れば一つしかないからだ。

「そう！ 戦争関係の帳簿が山積みで、ちゃんと管理出来る人が全然足りないの。毎日遅くまで計算して、やっと出来た休みなんて！」

「なんだ、そうだったんですね」

「なんだって……」

てつきり性的な接待かと焦ってしまいました。なんせ初めは性奴隷とか玩具とか物騒な言葉で紹介されたんですけどもん。

そういうえば、プラヴァスでは優秀な学生だったって言うたかも。帳簿計算とか出来るんだ……。

私の勘違いを見透かしたのかジト目で睨まれたけど、ラミイさんは一転して上目遣いでもじもじと尋ねて来た。

「あの、それでキムラ様は帰ってないの？ それに、お姉様は？」

「お姉様？」

「えと、シャリア様……あ、それにシノニムさんも」

「あ、うん、その二人はまだ戦地だつて」

……ちよつと怖くて聞きにくいんですよね。生きてるのかな？ シャリアちゃんとか殺しても死にそうに思えないんですけど。

「じゃあ、キムラ様は？」

「あ、はい、キムラ様も戦場で補給とかを指揮してるつて」

「そう……」

ラミイさんは露骨にシヨンポリと俯いた。そんなにキムラ様の事を好きだった様には見えなかつたけど。

「あ、あのね、私、結婚したいなつて……」

「え、!？」

き、き、き、聞いてないですよ？ つてかあなた奴隷だし！ 許されませんよ。裏切り行為です！ 私を差し置いて許されないうですよ？

「だ、だ、誰？ ファイダーソン老？」

「なんで!？ お爺ちゃんじゃない！ 物知りだから良くお話を聞きに行くけど」

「じゃ、じゃあ誰ですよ？」

「あ、あの……商会の、フィーゴ君」

「ええっ!」

……私より若いのにキイムラ商会のナンバー2の男の子だ。それはもうメツチャクチャ頭が良い。ちよつと怖いぐらい。

そっかー、玉の輿に狙つてたのになあ……。そりや二人で仕事をしてるとは聞いたけど、ラミイさんなら大丈夫だと信じていたのに。だってシャリアちゃんを見る時、目がトロンとしてるし、ユマ姫の脇を美味しそうにペロペロ舐めるし、私てつきりそう言う人かと思つてた。ちよつと警戒してたぐらい。

でも彼女の立場を考えるとシャリアちゃんに心酔するのは無理もないのかな。

ラミイちゃんはシャリアちゃんに助けられた時の事を熱っぽく語っていた。そして、今はフィーゴ君の仕事っぷりを頬を染めて語るのだから、出来る人を好きになっちゃうってだけみたい。

「あ、あのね、彼、女装するよね、凄く可愛いのに」

……あ、やつぱりそっちの人なのかも知れません。嫌疑保留です。保留。

「私の事より! 強引に呼び出して、何が始まるのよ?」

「えっと、端的に言いますと」

「言うど?」

「処刑です」

「え?」

私が宣言するとラミイさんはポカんと間拔けな顔をした。

「しよしよしよ?」

「しよ?」

「処刑いい? そんなのを見るためにこんな人数が集まつてるの?」

ラミイさんがバツと後ろを振り向くが、見るまでもなく中央広場はギウギウウの人だかり。王都に於いて、処刑は何よりの見世物なのだ。私達が柵で守られた最前列で見居られるのは、コネがあるから。

「そ、そんなの野蛮だよ」

だけど、プラヴァスではそうではないのかな? 南方は中央よりずっと野蛮と聞いていたのだけど、ラミイさんを見てると解らなくなる。でも、キムラさんなんてプラヴァスを歩くと曲刀を担いだ強面に次々絡まれたって言ってたんだけど……。

それに、本当の事を言うと私も人間が死ぬところを見て喜ぶ趣味はない。今回、処刑の最前列で待機してるのは理由があるからだ。

「実は、さる御方に処刑の様子と、民衆の反応を事細かに報告するように言われていて」
「……それってユマ姫でしょ? あなたに命令するんだから」

「えへへ」

宰相がこんな命令するわけないので、バレバレでした。

「で、ユマ姫がそんな風に民衆の反応を気にするなんてよつぼどの大物よね？ 誰が処刑されるの？」

「え？ ユマ姫ですよ？」

「は？」

ラミイちゃんはいよいよ褐色の美しい顔を歪ませて、瞳と口をまん丸に見開いた。

公開処刑2

いよいよ、処刑が始まった。壇上に上がるのはヨルミ女王。

一国の最高責任者。実は王様が民の前に出るのは王国において極めて異例だ。私は前国王の姿など、数えるほどしか見ていない。

だけどヨルミ女王は何度も国民の前に姿を晒している。それどころか、ユマ姫と劇場の舞台に立ったり、イベントとあれば挨拶を欠かさない。その分貴族のお茶会にはちよつと足が遠いとか。

……本人から聞いたけど、暗殺対策だつて。

それに、お召し物も王様としては異例だ。体に張り付く真っ黒なドレス。ロンググローブにストッキング、キムラ様が開発した異様に踵の高いハイヒールと言う靴も黒光りして、艶めかしくも不思議な威圧感がある。

そんな女王は拡声の魔道具の前で口を開く。

「今日は非常に残念なお知らせがあります。王都を混乱に導いた不届き者を処罰せねばならないからです」

そう宣言し、そうそう錚々たる貴族の名前を挙げていく。

貴族派、議会派、王族派、分け隔て無くお構いなしだ。穩健派、主戦派を問わず、大きな利権を抱えた貴族家の名前が拳がっていく。

一見バラバラだけど、私は知っている。

主戦派として戦争の陣頭指揮まで執っていたオーズド伯は、王都に戻るなり穩健派に鞍替え、ユマ姫を封じ込めるため主戦派のコネを使ってまで貴族達を纏め、ユマ姫を封じ込め、戦争を収めようとした。

今回処刑されるのはそのメンバーだ。

罪状は王都騒乱罪。だからもちろん、最後に名前を呼ばれたのは、オーズド伯と、そしてユマ姫だ。

だが、ユマ姫の名前が呼ばれた途端。広場の様子は一変した。

「静粛に！ 静粛に！」

群がる人々を兵達が押し返すが、混乱が収まる様子は少しもない。私達も背後に柵がなければぺちやんこに潰されていただろう。

衣を斬り裂くような悲鳴と、大地を揺るがす怒号が鳴り止まない。

終いには兵達が銃を天に向け発砲し、威嚇によって、なんとか鎮めた。もちろん、民衆が納得した訳でなく、射貫くような視線で壇上の女王を睨んでいる。

「静かになさい！ ！これは王国を守る為に必要な措置です」

なのに、壇上のヨルミ様は堂々としていた。頼り無かった昔とは大違い。自信と迫力に満ちている。

……その変化の原因、知ってるだけに穏やかで居られませんかよ。

「では、一人目、ザンガード子爵」

キュラキュラと音がして、運ばれて来たのは巨大なハム。

皆、訳が解らず、広場には一瞬の静寂が訪れた。

「なんのつもりです！ 代々王国の酒番として、粉骨碎身、酒運上を管理していた我らザンガード家が何をしたと言うのです！」

私は驚きに目を睜る。

「ハムが喋った！」

「いや、違うでしょ！ あなたドコに目がついてるの？」

ラミイちゃんに言われて良く見ると、キャスター付きの吊り台に両手を縛られ、一本釣りに運ばれて来たのはハムではない。貴族のザンガード子爵だった。

「むしろ、なんでハムに見えるの？ お腹減ってるの？」

「ダイエツト中です、ユマ姫の隣に居ると自分の体型が気になって」

「止めなさいよ、今でも十分可愛いから。耳が長いのもあって、愛らしいわよ」

「え、そうですか？」

照れるなあ、いやでも、ラミイちゃんの嫌疑は深まりましたよ！

「で、酒税の管理人が何の罪なの？」

「それはですね……」

と私が解説する前に、壇上のヨルミ女王が叫ぶ。

「戦場に送る酒に関しては酒税は免除。それはお前も納得していたはずだ。だが、戦争が長引き運ばれる酒が増えるとなると、お前は戦争反対を声高に叫ぶようになる」

「いや、それは真に王国の将来を考えて！」

「問答無用！ 王国の将来のためでなく自らの利権の為に戦争の是非を語るなど言語道断だ！ それだけなら目を瞑ったモノの、今回、反乱を企てる会合に参加していたのが運の尽き」

ピシヤリと言い放つ。たしかに料理酒も高くなって大変なんですよ。だって戦場に運べば送料を考えても免税で安いし、買ってくれる酒飲みの兵士さんが沢山居るんですから。配給のお酒以外も一杯売れるらしいですよ。フィーゴ君曰く。

もちろん戦場ですから、飲んで良い量は決まってるんですけど。捕虜ながら一緒に戦ってくれている帝国兵の分もお酒を運ぼうってなつたので品薄で品薄で。

お酒の量が減ると酒税で儲けていた貴族は干上がってしまいますもんね、戦争反対に回るのも納得です。

「それだけじゃないと思うよ」

私がそうやって解説すると、ラミイさんは渋い顔をした。

「実はゼスリード平原は大穀倉地帯になりそうなの。魔女が水利を整備して、火薬の力で恐鳥コイの群れも脅威ではなくなったから」

「え、それじゃ」

「そう、原料が採れるスフィール周辺に酒蔵が移動しそうなのよね。すると王都周辺の酒蔵で酒税管理の利権をもつザンガード子爵は衰退するって訳。短期的には耐えられても長期的な衰退は話が違うってトコでしょ」

「な、なんでそんな事知ってるんです？」

「その、ゼスリード平原の酒造りを担当しそうなのがキムラ商会だから」

「うへえ」

「なんですか、あの人は。商売で世界征服でもしようって言うんですかね？ 手広くやり過ぎですよ。」

「でも、あのハムを処刑してくれるなら面倒が無くて良いわね」

「あ、ハムって言いました！ いまハムって言いましたよねラミイさん！」

「イチヤイチャする我々を差し置いて、女王が刑の内容を宣言する。」

「ザンガード子爵は、鞭打ち五回！」

高々と宣言すると、広場にはなんだと言う空気が広がった。

ハムみたいな貴族の尊厳を傷つける扱いにこそ驚いたものの、鞭打ち刑ならばソコマで酷い刑じゃない。痛い事は痛いしシヨックで死ぬ事もあるけれど、それも五回ならば滅多にない。

そんな油断も、ヨルミ女王が鞭を素振りするまでだった。

——パアアアン！

ザワめく広場でもハッキリ聞こえた、銃声に負けない爆発音。

「い、今の音、何？」

「何って、女王の振る鞭の音ですよ？」

「え？ 鞭って音じゃないでしょアレ！」

女王が振ったのは水牛の鞭。なんか上手い人が振れば鞭先は音速を超えてさつきみたいな破裂音が出るんだって。ユマ姫が言ってた。

「お、おかしいでしょ！ 鞭打ちってプラヴァスにもあるけど、パピルスで編んだ植物の鞭だもん」

「あ、そうなんですか？ 私達は籐の鞭で執行する事が多いですね」

「いや、あれ違うでしょ！ 革でしょ！ どう見ても！」

そう、水牛の鞭なんです。それも、しなやかで凶悪に黒光りする逸品、当たったらど

うなるか……

鞭で打たれた侍女を見たのですが、大きく肉が抉れ、シヨックでアーとかウーしか言えなくなっていました。それをユマ姫は丁寧に精神魔法と回復魔法で治したんですよ。

……でも、本当に恐ろしかったのは、治った侍女がまた女王に鞭を打たれたいつて言い始めた事なんですけどね。

飴と鞭ならぬ、気持ちが良い回復魔法と激痛の鞭。交互に浴びれば精神がすっかり二人に依存してしまうのです。

まあ、怖い事はもう忘れましょう。とにかく「なんだ鞭打ちか」と言った弛緩した空気は、女王の一振りで吹き飛びました。

皆が固唾を飲んで壇上を見守る中。

吊られたハムに向けて、女王が鞭を振り抜きました。

——パァン！

一振り目、肉が爆ぜる派手な音。豚の悲鳴みたいな声がして、吊られたままに足をバタつかせたとしたら、ガクリと力が抜けました。

「し、死んだの？」

違うと思います、シヨックで気絶したのでしょう。

——パァン！

その証拠に二振り目、カツと目を見開いた子爵は再び暴れ出し、嘔まされた猿ぐつわの間から、声にならない絶叫が漏れます。

そして再びガクリと力が抜けて、今度は目を見開いたまま動かなくなりました。

「また、気を失った？」

「いえ……」

多分、死にました。あんな鞭で二度も打たれたらショック死するのも当然です。

三振り目、四、五と女王が繰り返すも、今度は吊られた子爵はピクリとも動きません。血飛沫が舞い、肉片が飛び散りますが、子爵は吊られたまま揺れるだけ。

その揺れ方が鞭の衝撃を如実に表していました。

「なにこれ、なにこれ」

怖がっているとはいきや、ラミイさんは目に見えて興奮してるんですけど……私はあな
たが怖いんですけど？

それは広場の人々も一緒に、弛緩した空気はとうに霧散し、皆が処刑の残酷さに飲ま
れていました。

それから続くのはひたすらに残虐ショーです。私はギロチンが平和的な処刑方だと
言う意味が初めてわかりました。鞭に打たれ痛みへのうち死ぬよりも、よっぽどギロ
チンのが良いですよ。

鉄を買い占めていた婦人や、戦地で夫を亡くし戦争反対と行軍を邪魔した未亡人など、女性であつても構わず女王は鞭を打ちます。

こうなつてくると、二発で死ねたザンガード子爵はむしろ幸運。四発目まで生きていたチンクル伯なんて最後には気が触れて「ユピピピッ」みたいな変な鳴き声あげてましたもん。

そして、遂に先の戦争の功労者であるオーズド伯様までが、無惨に吊され壇上に現れたのです。

「王国の行く末に幸あれ！ 私の死に様とくと見届けよ！」

吊らされながらも大音声で叫びます。すっかり残虐ショーに興奮していた観衆も、息を飲みました。

「凄い体！ ねえ本当にあの人も殺しちゃうの？ 総大将だったんでしょ？」

「え、ええ、そうなんですけど」

他の貴族はみつともなく泣き叫び、ぶよぶよに太った体を晒して泣き叫びましたが、オーズド伯は違います。

鍛えられた肉体は鋼のようですし、やつれて見えた顔も吊された今となつては当然。むしろ悲劇の被害者といった雰囲気を作ります。それに、やつれていても目だけはギラギラと正義と信念に燃えているのです。

「や、やばくない?」

「やばいかも……」

オーズド伯はネルダリア領の統治も健全で、王国でも評判が良い領主様です。その評判は細作の活躍で作ったモノと言う意見もありますが、それだけじゃありません。実際にネルダリアは栄えているし、暫定統治しているスフィールも活気を取り戻しているのですから。

加えてオーズド伯は男前で、武芸で鳴らしたお人柄。そんな人だからこそ、人気抜群のユマ姫の危険性を叫んで尚、誰もが耳を傾けたのです。戦場で轡を並べた者だからこそ、ユマ姫の本性が解るのではと。

そんな大物ですから捕まえるのも一苦勞、軍部で圧倒的な人気を誇るユマ姫の力で、演習に見せかけて夜中に一気に軍を動かしパーティーの途中に雪崩れ込んでの大捕物でした。

そんな人が、命を懸けてユマ姫の危険性をこの大一番で語ろうとしている。

下手を打てば、民衆や貴族が一斉に敵に回る可能性があるのです。

それどころか、その頑強な体をもって鞭打ちを耐えれば、より強力な政敵になるに違いありませんでした。

「オーズド伯、あなたは主犯です、鞭打ちの数は十」

だからこそ、他の人の倍の鞭打ちが宣言されました。コレなら最低限、生き残る事は無いでしょう。

一振り目、ピシヤリと鞭打つ。オーズド伯は食いしばって耐えました。

叫ぶのは戦場でのユマ姫の魔法、無数の雷が敵軍をなぎ倒したと。あんな力があれば我々が戦う必要など初めから無いのだと、人間同士を戦わせる事が目的なのだと言います。

二振り目、流石に悲鳴が漏れます。ですが、叫びます。ユマ姫に感った帝国兵が残らず祖国に攻め込んだ異常事態。下手をすれば、我らが王都も同じ事になるかも知れぬと。

三振り目、血を吐いて、それでも気絶せずに耐えました。ユマ姫の癒やしの力は人間の常識を越えていると。

四振り目、意識を瞬間失いました。それでもカツと目を見開いて、ユマ姫に味方するタナカさんの剣の異常な冴えが、悪魔のそれだと語ります。

五振り目、いよいよ意識が朦朧としながらも、キムムラ様のせいで変わってしまった王都の食事や、風景、古き良き王都を懐かしく語ります。

六振り目、この辺りになると皆が固唾を飲んでオーズド伯の、いえズタボロになる一人の男の宣言を噛み締めていました、それだけ真に迫っていたのです。

民衆の前で貴族に鞭打つ、この儀式こそが王都が呪われ始めた証拠だと。ヨルミ女王の乱心を訴えます。

七振り目、ユマ姫を暗殺しようとした事を告白します。そして、向かわせた暗殺者が残らず無惨な死体で見つかった事も。

八振り目、ユマ姫付きの侍女が一人、行方不明と語ります。実は自ら育てた優秀な特殊作業員だったと。実の娘の様に思っていたと、ですがその娘と連絡が取れないと。

「え、お姉様の事よね？」

「あ、いえ、違うと思いますよ」

多分、シノニムさんだ。私は心がざわざわとして胸が搔きむしられます。

そして九振り目。オーズド様は最期に「カフエル」と言い残して死にました。

つつきりシノニムさんかと思ったのに、カフエルとは誰でしょう？

そして十振り目、オーズド伯はピクリとも動かず、吊られたままに揺れるだけでした。広場はすっかり静まり返ります。頭が冷えた民衆にユマ姫の恐ろしさが染み込み込んだみたいでした。

ざわざわと皆が顔を見合わせます。先程まではユマ姫の処刑は命に代えても止めてやると意気込んでいた男達も、オーズド伯の覚悟を見て両成敗、ユマ姫も責任を取るべきと言う空気が出てしまいます。

興奮が冷めやらず、それでもヨルミ女王は宣言します。

「最後に、ユマ姫」

そうして、いよいよ我々がユマ姫が壇上に姿を現したのでした。

その時、分厚い雲の合間から一筋の光が刑場へと差し込み、吊られたユマ姫の姿を浮かび上がらせました。

それは余りにも幻想的で、現実感が喪失する光景でした。民衆はあまりの美しさに息を飲み、そのまま呼吸を忘れた程です。

そんな中、ラミイさんのうっとりした声だけが聞こえます。

「キレイ」

思わず呟くのも解ります。両手は絡みついた鎖で吊り上げられて、純白に統一された衣装と拵げた翼がキラキラと輝き、天使そのもの。

着ているのは肩と背中を大胆に露出したドレス。だから上半身はバニーガールとか言うのに近いでしょうか？ あの破廉恥な衣装です。

違うのは鼠径部まで曝け出したハイレグではなく、短いとは言えスカートを穿いていること。肩だつて短い襟付きケープで隠していますから、最低限痴女と呼ばれる格好ではありません。鎖が巻き付いた両腕には、純白のロンググロブもつけています。

他にも露出は決して多くありません。ドレスの上から白い革のコルセットでお腹を

守っていますし、下半身はガーターベルトで白のストッキングを吊っています。少し透けてますけどね。素肌を晒すのはミニスカートとストッキングの僅かな隙間だけ。

靴も純白のハイヒール。足が届かずにピンと伸ばされたつま先が、僅かに掠るだけの地面を求めて必死に伸ばされていて、とても痛々しく見えます。

髪は銀髪のアートヘアで、大きめのリボンを付けています。全身純白のコーディネート。リボンも含めて白の濃淡だけでコントラストを作りました。

清楚でありながら、少しだけエッチな、完璧なコーディネート……らしいです。

「ああ、凄い。見えそう！ 見えそう！」

ラミイさんも体をくねらせて、舞台の上を睨め上げます。

……ラミイさん？ その姿、客観的に見てヤバいですよ？ 嫌疑十分。私、かなり黒めに見えます。

でも気持ちも解ります、ミニスカートとガーターベルトがチラチラと、スカートの中、下着まで見えそうでドキドキなのに、短いケープと吊り上げられた腕で脇が見え、頑張れば肩だって見えそうな、何とももどかしい罪作りの衣装なのです。

……因みに角度とか相当拘って調整しました。多分オースド伯を捕まえる為の演習よりも気合が入ってましたよ。

「なんなの、あの衣装！ 可愛い！ 凄い！」

ラミイさんは大興奮です。

「ラミイさんも着てみたいですか？」

足の長さは合わないと思いますけど、上半身は調整がきく範囲だと思うのですけど。

「ううん、フィーゴ君に着て欲しい！」

つて照れた様子で言われても。私の中で、もうラミイさんは黒ですよ、真つ黒！ かなりヤバい人です。間違いなく。

民衆もわざわざわと興奮が冷めません。何と言うかオーズド伯が命を懸けて作った、重い決意が一瞬で流れてしまいました。ここまでは狙い通りです。

ヨルミちゃんがユマ姫の罪状を読み上げます。

「ユマ姫、そなたは司令部の制止も聞かず兵を連れて帝国に進軍。成果をあげるも命令違反を犯した。相違ないな」

「ありません」

「何か弁明は？」

「ありません」

決意の籠もったユマ姫の瞳は迷いなく正義に輝いて見えます。とても笑いながら暗殺者を解体していた人と、同一人物とは思えません。

ヨルミ女王の口上もどこか同情的で、その戦果を認めるようなモノでした。

「では、ユマ姫の刑を発表する」

だから広場の民衆にもどこか期待した空気が流れます。せいぜいが鞭打ち一発、たとえばあの水牛の鞭でも死ぬ事はなく、むしろ痛みに苦しみ、ユマ姫が悶える姿を期待している雰囲気すらありました。

「ユマ姫には鞭打ち、百回」

だから、宣言された数字に理解が追いつかず。広場は静まり返ります。

——!!

声にならない悲鳴、皆が息を飲む音が重なり、次に悲鳴。そしてパニックが始まりました。

それもそのはず、ヨルミ女王は死んだ後も決して鞭打ちを止めませんでした。

黒光りする水牛の鞭、それを百も叩けば、か細いユマ姫の体など細切れに千切れてしまうに違いないのですから。

まあ、普通はそう思います。でも、私はどう考えても死ぬとは思えないんですよ。ユマ姫は、オーズド伯を捕らえるまでの一ヶ月、何人もの暗殺者を返り討ちにしてきました。

それどころか軍の演習場に赴き、戦意を鼓舞して回った訳ですが、その際、演舞中の兵士の手から槍がすっぽ抜けユマ姫の胸に突き刺さったのです。

横で見ている私は「あ、人間ってこんなアツサリ死ぬんだ」と呑気に思ったりしたのですが、地面に縫い付けられたユマ姫はバタバタと暴れ、自分で槍を引き抜きあつという間に体を治してしまいました。

完全に化け物です。心底驚きました。それも、槍を投げた兵士はお咎めナシ。暗殺者じゃないかと疑われましたが、殺意があつたら私は絶対に気が付いたから違うと断言してしまいましたよ。

どうして解るんですかね？ 殺意の有無なんて。まあ、そんなの今更ですけどね。

……因みに、今は私の方が死にそうになっています。現在進行形です。

パニックで柵が折れ、民衆にギユウギユウに押されているのです。現実逃避にユマ姫の事を思い出していましたが、走馬灯になりそうな気配です。

兵士達は盛んに空砲を撃ちますが、民衆は止まりません。

そんな私の命を救ったのは、他ならぬヨルミ女王と……ユマ姫でした。

パァン！ と空気が破裂する音。そして可愛らしくも切羽詰まったユマ姫の悲鳴が広場に響きます。

その声の可愛らしさ、そして悶えるユマ姫の切なさたるや。つま先が必死に地面を擦る様子がいじらしく、皆が言葉を忘れ見入ってしまったました。

ヨルミ女王が容赦なく、ユマ姫に鞭打ったのです。

公開処刑3

ヨルミ女王は容赦なく、ユマ姫に鞭を打ちました。

すかさず二振り目。絹を引き裂く悲鳴と共に、大きく背中を反らしてユマ姫が悶え苦しみます。背中から抜けた羽が飛び散ると同時、キラキラと汗も宙を舞いました。

「……………」

もうラミイさんは言葉もなくかぶり付きで壇上を見上げています。今日一番で目と口をまん丸にして、顔が三つの真円で構成されていました。もう彼女はダメだと思いません。

三振り目、真つ赤な鮮血が舞い、純白の衣装を汚して行きます。純白の中に鮮烈なまでの赤のコントラスト。白い羽が舞い、赤い血が飛び散ります。

いよいよショック症状で引きつけを起こしたユマ姫が、口をパクパクと開き悲鳴も出せずに痙攣します。大きく開かれた目が明滅し、最後にはガクリと首を垂れ、ピクリとも動かなくなりました。

意識を失ったのです。

そんなユマ姫にヨルミ女王が近づくと、口にか噛ませました。革製の猿ぐつわで

す。

氣絶した事で流石の女王も姫を許したのかと期待した民衆は、ココに来てへたり込む者も少なからず居ました。

もう、ユマ姫が苦しむ所は見たくないと。そのハズなのに、誰もユマ姫から目を逸らす事が出来ないのです、それはまるで呪いのようでした。

しかし容赦なく四振り目、打たれると同時に、ユマ姫が飛び起きました。使命も理想も忘れた様子でバタバタと藻掻き、噛み締めた革の隙間からくぐもった悲鳴が漏れました。

五振り目、遂にユマ姫ははらはらと泣き始め、目からは大粒の涙が止めどなく溢れます。汗で額に張り付いた前髪と噛み締めた口枷が、異様な色気を放っていました。

その悲しげな瞳が助けを求めているように見えて、皆が冷静でいられなくなりました。

「死んじやう！ 死んじやうよ！」

ラミイさんもパニックに陥ります。でも、ユマ姫のコレは演技だと思えますよ。

なんて言つても、ユマ姫は全てがおかしいのです。私が包丁を落として、ユマ姫の足に落とした時なんて……いえ、違うんですよ？ 本当は私だつてそんなにドジじゃないんです。本当です。誓つてワザとじゃないんです、おかしいんですよ、あり得ないので

す。

とにかく、ユマ姫の足には傷ひとつ付きませんでした。表皮を一時的に固くする事も出来るんですって、不意打ちじゃなければ刃物も通りません。

完全な化物です。

だから、今のユマ姫はワザと鞭を受けているのです。それも色っぽい仕草とか衣装、角度まで研究して！　そしてどう見えたか感想まで求めて　私に舞台の下に立たせるのですから、もう病気ですよ。

私は何一つ心配していません。胸に大穴が開いたつてすぐに直せるぐらいですもの。ですが、ですがですよ。ユマ姫様のあまりに気合いの入った痛がり様に、なんだか私までドキドキしてしまいます。

六振り目、今度は足を打たれました。ユマ姫の長い足が大きく弾かれ、体全体が大きく揺れます。もうユマ姫は意識も朦朧といった様子で動きも少なく、白いストッキングは斬り裂かれ、赤く染まって行きました。

七振り目、鞭の衝撃に耐えられず革製のコルセットがはじけ飛びます。

八振り目、守るモノがなくなった腰を容赦なく打ち付けます、コレには意識が朦朧としていたユマ姫も飛び起き、両腕に巻き付いた鎖をガチャガチャと揺らして悶えるのですが、それも数秒後、パタリと動かなくなりました。

九振り目、ひっくり返して今度はコルセットのない下腹部を打ち据えます。

柔らかな下腹部は今までで一番大きな破裂音をあげました、ユマ姫も狂った様に飛び跳ね、噛み締めた革の隙間から獣染みた声が漏れます。

十振り目、続いて腰に一撃。ミニスカートが切り裂かれ、キレイな太ももが大胆に晒されました。柔らかな太ももを叩かれれば、平手でも痛みに悶えるモノです。

それが弱い少女に、水牛の鞭とあればどうでしょう？

ユマ姫は金切り声をあげ、下着が見えるのも構わず足をバタつかせ暴れました。

それも、すぐにカクンと首を垂れ動かなくなります。

え、演技ですよね？ あまりにも真に迫っていて怖いんですけど？

でも、コレで十発の鞭を耐え抜きました。それだけで人間離れています。他の誰も為し得なかった所業です。

でも、まだ90発も残ってるんですけど。もうラミイさんには刺激が強すぎたのか、ガクガクと震え、意識は朦朧としています。民衆もそんな人が大勢居ます。だけど誰も目を離せないのです。

鞭打つヨルミ女王も重労働でしょう。汗を拭って息を整え、そして一気にペースを上げました。

十一、二、三、四！ 次々と鞭を打ち据えます。まるで楽器を叩くみたいに、パアン

パアンと小気味良く叩くのです。遂にユマ姫は気絶する事すら許されず、右へ左へ鞭に叩かれるままに揺れながら、切羽詰まった悲鳴をあげ続けました。

そして二十振り目、ズタボロになったユマ姫の口から猿ぐつわが外れ、とうとう子供みたいに泣きじやくりました。

「痛い！ もう嫌！ 助けて！ 痛いの！ お願い！」

もはや決意が籠もった瞳も、神の如き神々しさも投げ捨てて、ただただ無様に泣き叫び、助けを求めるのです。

ですが、この時になるともう誰も指一本動かす事も出来ず、異様な雰囲気飲まれていました。

しかし、それでもお構いなしにヨルミ女王は鞭を振ります。猿ぐつわが外れた事で、ユマ姫の口からはひっきりなしに、断末魔の悲鳴があがりました。

悲鳴は徐々に掠れていき、いよいよ金属が裂けるような、何か大切なモノが、それこそ魂が壊れる音が聞こえて来ます。

三十振り目、いよいよ見開かれたユマ姫の瞳からは生気が消え失せ、焦点が定まらず、鞭を打たれる度にぐるんと目が回り、ぐらぐらと瞳が揺れます。口を開け放ち、舌を出し、口角からは血の泡を吹いた哀れで惨めな顔を曝け出します。とうに正気は失つていくでしょう。

神々しさや高貴な気配は既に無く、破壊し尽くされた無惨な姿。

それでも、人目を惹きつけて止まず、言い知れぬ程に加虐心を煽り、同時に罪悪感が身を焦がす。恐るべき呪いが人の心を病みつきにしていきます。

そして四十振り目。いよいよグチャグチャになった太ももの肉が弾け、飛び散り。舞台下の私の顔にまでドロリとした赤黒い液体が張り付きました。

もうすっかり朦朧としていたユマ姫ですが、さしもの衝撃には耐えきれず、大きな悲鳴と共に飛び起きて、壊れた拡声器みたいに、気を違えたみたいに、断続的な悲鳴を撒き散らします。

その後、瞬間的にユマ姫は正気を取り戻し、一瞬だけポカンと民衆を見つめると、掠れた声で、絞り出すように、縋るように、必死に懇願したのです。

「ころして、おねがい、コロシて……」

ああ、そんな！ そうだ、私が！ 他の誰もが異様な空気に飲まれて、動く事すら出来ないなら。ずっとユマ姫と居たわたしが！ 私はずっと、痛ましいユマ姫と一緒に死にたいと思っていたのだから。

私は太ももに括りつけた護身用の短剣を引き抜き、握り締め、壇上に……

——パァン！

と、壇上に這い上がろうとしていた私の出鼻を挫いたのは、発砲音でした。

音の方を見れば、一人の兵士が銃をユマ姫に向けていて、銃口からは硝煙が舞っています。

おそらくですが、余りにも無惨で悲痛なユマ姫の姿に耐えきれず、楽にしてあげたい一心で銃を撃つたに違いありません。短剣を握った私の気持ちも似たようなモノでしたから。

でも、ユマ姫は死にませんでした。

それどころか、銃弾は当たってもいません。最前列で壇上に身を乗り上げた私だからわかります、ユマ姫の目の前に透明な壁があつて、ソコで銃弾がピタリと静止していました。

え？ 魔法？ ユマ姫の？

驚きユマ姫を見つめると、瞬間、つまらなそうに銃弾を見つめる血まみれのユマ姫と目が合いました。その目はゾツとするほど冷たくて、人間の気配がありません。

そして、銃弾が突然に逆方向に加速、飛んで来た軌道を辿るように戻って行き、発砲した兵士の頭が弾けました。

……怖ッ！ 全てが完全に演技！ 私も、もう少しであの兵士みたいに殺される所だった。

熱くなっていた頭が、冷や水を浴びせられたみたいになりました。

熱狂に包まれ、ユマ姫が翻られる姿を見せつけられて、それでも動く事すら出来ない自分が情けなくて、辛くて……私は冷静さを失って居たようです。

きつとあのままでは、罪悪感を抱えて、このショーが終わった後はユマ姫に逆らえなくなつていたと思います。

それこそが初めから狙いなのです。そんな狂気でユマ姫は民衆を操ろうとしている。私にもそれがようやく飲み込めました。

でも、今の騒動で私と同じように冷静になれたのか、ざわりと空気が動き出しました。コレは何事と考える余裕が出来たのです。

「黙りなさい！ 誰が勝手に喋つて良いと言つたの」

しかしヨルミ女王が動きます。話し掛けた相手は民衆、では無く、助けを求めたユマ姫でした。

「余計な事が言えないようにしてあげるわ」

そう言うと、千切れて余計に短くなったユマ姫のミニスカートに、容赦なく手を突っ込んだのです。

そうしてユマ姫から剥ぎ取つたのは、紐で結ばれた小さな下着。

ええ!?! いけませんよ！ ただでさえ千切れてスリットが入つたミニスカート、これでは何かの拍子に見えてしまいます。

そればかりかヨルミ女王は、剥ぎ取った下着を容赦なくユマ姫の口へと突っ込んだのです。

「んんっ！」

意表を突かれたユマ姫は、甘くぐぐもった悲鳴をあげます。猿ぐつわが外れた口から、再び言葉が封じられました。

いえ、言葉を失ったのは観客もです。皆が顔を赤くして、一時流れた不穏な気配を掻き消したのです。頭を失った兵士が倒れていると言うのに、もう誰も見ていません。

異様な空気が広場を包んでいました。

そしてヨルミ女王はそのまま鞭打ちを続行します。

広場には鞭を打つ破裂音だけが連続しました。パンツを噛み締めるユマ姫は切なげな悲鳴を漏らし、下着を失った下半身をモジモジと摺り合わせます。

あまりにも色気に溢れる可哀想な光景。

さつきまで死に掛けてたのに随分と余裕ありますね、って気もしてしまうのだけど、見ている男性諸君にはそんなのは何の障害にもならないみたいで、顔を真っ赤に馬鹿面で涎を垂らしながら壇上を見上げていました。

ヒラヒラと揺れるスカートから目が離せないみたいです。

あ、横のラミイさんも同じでした。同じ女の子として恥ずかしいです。

そして五十振り目。純白だったドレスもすっかり赤く染まり、深紅のドレスへと変じていました。ユマ姫の顔は羞恥に色付き、擦りあわせるふとももは悩ましい色気を放ちます。

……その太もも、さつき弾けてた気がするんですけど？

私はそんな事を考える余裕が出来るぐらい、落ち着いて見る事が出来て居ました。

私が一番、ユマ姫の異常さを知ってますからね、慌てる事は有りません。

でも、ヨルミ女王の様子がおかしいのです。ガクガクと震え、呼吸も浅く、私にはユマ姫よりもよっぽど追い詰められているように見えました。

「ら、罅が明かないわね。コレを使うわ」

上ずった声でヨルミ女王が取り出したのは、また別の水牛の鞭？ いえ、より長くて

立派な水牛の鞭、なんとそれに有刺鉄線を巻き付けています。

もうこれは、刑罰用の鞭と言うより単純に人を殺すための凶悪な武器ですよ。

さしものユマ姫もそれを見た瞬間。「え？ 嘘でしょ」と言いたげな表情で取り乱したので、コレは本気で予定外の恐れがあります。

つていうか、あんなので打つたら剣で斬りつけるのと変わりません、鞭打ち刑でもなんでもないですよ！

本気で焦ってるユマ姫を見ると やっぱり今までの演技だったんだなと思う反面、

これで打たれたら流石にどうにもならないと言う事です。

凶悪な武器を手に、ヨルミ女王は興奮と恐怖に震えていました。

これは、ユマ姫を殺す気です！ 良く考えたらそりやそうかも知れません。賢いヨルミ女王のこと、これほどまでに危険な姿を見せられて、施政者としてユマ姫を生かしてはおけぬと考えても無理はないのです。

五十一振り目、有刺鉄線のトゲに、純白のケープが残らず剥ぎ取られ、ユマ姫の滑らかな肩が無造作に晒されます。

ココまでの人数、衆人環視の中で肩を曝け出した女性はストリップパーでも居ないでしょう。あまりにあまりな仕打ちと言えます。

更に何度も鞭が振るわれ、白く滑らかな肩が瞬時に赤く染まります。パンツを噛み締めたユマ姫は狂った様に悶え苦しみ、狂気を孕んだ悲鳴と、鎖が奏でる金属音が、絶え間なく響きます。

六十振り目、いよいよ鞭を打つ場所が減ってきました。それほどにユマ姫の体は血で赤く染まり、多くの肉が弾け、そぎ落とされた無惨な姿になっていました。

それこそ、生きているのが不思議なぐらい。

そこでヨルミ女王が打ち据えたのは、腕。鎖で縛っていたので守られていた部分です。二回三回と鞭を振るうと、白い皮のロンググローブがあつという間に赤く染まり、

細腕を守り切れずに無惨に斬り裂かれます。

そればかりか、針のついた鞭ですもの、音速の鞭を受ければ少女の腕などどうなるか。「え？」

ユマ姫の可愛らしい指が残らず飛び散り、舞台下に撒き散られました。革のグローブに包まれたまま飛んで来た小指なんて、ぽかんと開けたラミイさんの口にホールインワン。

「ゴホッ！ え、ぐ」

吐いた方が良いですよ、きつとあんまり体に良くないです。

気が付けばユマ姫の手からは指がなくなっていました。そして腕もボロボロに肉が削ぎ落ち、巻き付いていた鎖が固定されずグラグラと揺れています。

「あつー！」

叫んだのは誰でしょう？ 私かも知れません。

七十振り目、とうとうユマ姫の腕が外れ。吊り下げられたユマ姫がドチャリと地面に落下しました。

人間が転がる音じゃありません。ユマ姫も床も血まみれで、水風船が潰れたような、奇妙で不気味な音がしました。

死んだ、間違いなく。

無抵抗な少女を、これ以上なく残酷になぶり殺した。

皆がそう信じて、もう苦しむユマ姫を見なくて済むのだと、悲しみとか喜びが混じり合つたグチャグチャの感情で、声にならない声で引き攣つた呼吸音を響かせています。

でも、それでも、なのに！

ヨルミ女王はユマ姫を立たせ、吊しました。

肉がなくなつた腕を縛る事が出来ず、金属の無骨なフックに指のなくなつた手の平を突き刺して。

そんな目にあつても、ユマ姫はピクリとも動きません。

もう止めてくれ、その娘はもう死んでいるんだ。死体をこれ以上傷つけないでくれ。

そんな民衆の願いは、容赦ない鞭の一振りでなぎ払われます。

七十一振り目。

「アアアッッ！」

漏れた悲鳴は、ユマ姫がまだ息がある証拠でした。

しかし、既にその声に真つ当な精神は含まれておらず、狂気だけが音を伴つて口から漏れ出るようでした。

天使が完全に破壊された瞬間です。

今度のヨルミ女王が狙つたのは、その天使の象徴たる羽でした。

七十二、七十三、七十四！ 鞭を振る度に純白の羽が舞い、その羽もあつと言う間に深紅に染まりました。

七十九、遂に殆ど羽もなくなり、翼は手羽先みたいな無惨な姿になっていきます。いいえ、酷く肉がこそげ落ちた様は、いつそ食肉として下ろされた手羽先よりも無惨だったかも知れません。

八十振り目、今までで一番力が乗った一撃。とうとう羽毛がなくなり、最後の力を振り絞ったユマ姫が痛みに暴れると、吊られたフックから再びズチャリと落ちました。痛ましくも手の穴が裂け体を支えられなくなったのです。

……そして、そして、ヨルミ女王は今度はズタボロになった翼に容赦なく大穴を開け、フックでユマ姫を吊し上げたのです。

「ああ、なんと罰当たりな」

どこかでお婆ちゃんが呟いた声が聞こえました。

翼をフックで吊るし、むりやりに開かせた光景は本当に食肉のようで、血まみれで骨ばかりになった翼が痛々しくて、天使をと畜してしまつたみたいなの、魂の奥底から恐ろしい地獄の光景に、震える事しか出来ないのです。

更に鞭打ち、翼で吊されたユマ姫の体は不安定にグラグラと震え、噛み締めた下着の奥から絞り出す金切り声は、狂気そのまま形になった様でした。

九十振り目、ひきつけを起こしたユマ姫がガクガクと震え、濁った悲鳴をあげます。顔がみるみる青く変じ、開かれた目が明滅します。

どうやらシヨックで下着を飲み込み、舌に絡まり、喉に詰まった様でした。そんな無様すら、異様な美しさがあるのです。

暴れた事で翼に突き刺したフックも外れ、再びユマ姫は地面に落ちて、潰れた音を出しました。

そんなユマ姫に近づくと、ヨルミ女王は優しい手つきで口の中に手を入れて、唾液と血にまみれた下着を喉の奥から取り出したのです。

ああ赦されたんだな、と安心したのもつかの間。女王はユマ姫の小さくて可愛らしい舌を掴み、思い切りひっぱりました。

取り出したのは、大型のフック。

まさか？ そのまさかでした。女王はユマ姫の小さな舌に、図太いフックに突き刺したのです。

ジャラジャラと鎖を鳴らし、今度は舌だけでユマ姫が吊り上げられます。

「ギエーッ # \$ %」

声にならない悲鳴、背中が弓なりに仰け反り藻掻く度に全身から血が飛び散ります。もうとつくに死んでいなければいけない体のどこにそんな力がと思わせる程。

そんな、ユマ姫に女王は更に鞭を振るいます。

腕が吹き飛び、腹が裂け、内臓も零れます。それでも、鞭で打たれる度に激しく痙攣するユマ姫の体が、まだ生きている事を我々に伝えるのでした。

そして百回目、打ち下ろすような一振り。ユマ姫の舌が裂け、鮮血が舞いました。

床に叩きつけられたユマ姫がグチャリと血の海に沈むと、グチャグチャになった体は死体そのものの、いえ、ここまで無惨な死体もそうは無いと言い切れる程の姿。

「あ、ああ……」

終わった、全部。そして完全に死んだ。

しかも、そこまでされた死体を女王はゴミを処分するように片付けて舞台袖に引っ込もうとするのです。

私は弾かれた様に舞台上に飛び上がり、女王の後を追いました。私が、吊つて、そして、一緒に死んであげないと。

——グチャグチャ

そんな私が見たモノは、赤黒い粘液が巨大なハムをむさぼる姿。

私には解ります。それは、ユマ姫でした。

「殺せなかった、殺せなかったああ！」

一方のヨルミ女王は、舞台上で見せた氷の仮面を脱ぎ捨てて、顔を蒼くしてガクガクと

震えていました。

……やっぱり、殺そうとしてたんですよね？

いや、もうコレ見ちゃったら、殺した方が良くと私も思いますけどね、怖いですもん。そんな我々の目の前で、みるみるユマ姫は元の可憐な姿を取り戻していきます。それどころか！

「皆様の祈りが通じ復活しました」

そう言っつて、舞台上に舞い戻るまで数刻も経っていませんでした。

こんなの、こんなの……どうやったら殺せると言うのでしょうか。きっと、もう、王国は終わりです。

戦場に舞い降りた天使

季節は夏。茹だるような暑さと、乾いた砂、そこに今日は硝煙が混じった。

ここはスールーン。巨大な城壁の街であり、大胆に戦場を押し上げた王国にとって、最前線の街でもある。

その街が今、絶体絶命のピンチを迎えていた。

「クソツ、キリが無い」

側防塔（城壁と一体化した塔）の屋上で、双眼鏡を覗く木村は忌々しげに呟いた。

視線の先、三百メートル離れた場所に、ズラリと並ぶ遠投投石機を見たからだ。

「夜の内に設置していたかあ」

遠投投石機は木村が遊んでいたゲーム^Aでの名前、地球で言うところの正しくはトレレヒュンシュット^B。平衡錘投石機^C。重りの振り子運動で巨大な石を投げる攻城兵器である。それが堅牢を誇るスールーンの城壁へ向けて集結していた。

木村は塔から大砲を発射し、既に二台の投石機を破壊していたが、百を超える投石機を前には焼け石に水と感じていた。

「いや、しかし、この距離でコレほど正確に投石機を破壊出来るなら、十分に持ちこたえ

られるのでは？」

焦る木村に声を掛けたのは、領主に次ぐナンバー2、スールーンの防衛を担う男だった。

「男に言わせれば、投石機が強いのは弓の射程外から城壁にダメージを与えられる事である。コチラにも反撃の手段が、それも投石機より射程と精度に優れる新兵器『大砲』があるのなら、幾ら投石機が数で勝ろうと恐るるに足らないと考えた。

だが、木村は苛立たしげに首を振る。

「まさか！ とにかく逃げる準備だけはしておいて下さい」

「ははあ、どうやらキムラ子爵は投石機を過大評価しているようだ」

「と、言うとは？」

苛立ちながらも、木村は男の言葉に付き合った。次弾装填中の大砲はまだ発射出来そうにないからだ。

「2ダオン（当世における人間二人分の重さ、約100kg）を超える石が飛んでくる様は確かに恐ろしいですが、直撃などは滅多にありません。そして、いかな巨石とてスールーンの城壁を壊すには十分ではありません、百や二百の石を放った所で……」

「石じゃない」

「なに？」

「アイツらが放とうとしてるのは石じゃないんだ！」

投石機が石を放たない？ 男は鼻白む。

「では、腐った死体？ 病原菌ですか？」

「違う！ 逃げますよ！」

言つたそばから敵の投石機が稼働した。弓なりに石が迫つて来る。しかし、男に言わせれば投石機から石が飛ぶ度に逃げていたら防衛戦など成り立たない。少なくとも、男の常識ではそうだった。

「なっ、なにを！」

「良いから！」

だから木村は動こうとしない男の腕を苛立たしげに引つ張り、強引に側防塔から飛び降りた。

だが、コレはハッキリと自殺行為。スールーンの城壁は星獣対策を見据えて国家主導で建てたモノ。壁は10メートルはあるし、塔部分に至つては20メートルに迫る、この世界では最大級の建築物だ。そんな所から二人で飛び降りればタダでは済まない。

「ヒッ」

男は悲鳴を飲み込み、顔を青に変じる。

「ヨット！」

しかし、木村は何事も無かった様に着地した。しかも男を抱えてだ。右手の自在金腕ルー・デルオンを壁に引つ掛け、左手は着地点でバネ状に拡張、衝撃を完全に殺してみせる。木村はいよいよ自在金腕ルー・デルオンを使いこなしていた。

「な、なにをしますか！　こ、こ、こ、こんな事！」

「伏せろ！」

木村は混乱する男の頭を地面に押しさえ付ける。

——ドオオン！

直後、腹に響く振動。そしてパラパラと落ちる石くずを見て、遂に男の顔色は土気色に至った。難攻不落のスールン城壁が傷ついた証であるからだ。

見上げれば、先ほどまで居た側防塔の屋上で黒煙が上がっている。

「ななな、何が？」

「火薬です！　やつら石じゃなく、火薬を装填してやがる！」

木村が忌々しげに舌打ちする。あのまま留まっていたならば、二人纏めて肉片と成り果てていただろう。

最期まで装填作業をしていた男はそうだったであろうし、虎の子の大砲はスクラップに変じたに違いなかった。

地球では火薬の登場と共に、投石機は戦場から姿を消した。大砲で鉄球を飛ばした方

が精度も威力も良いからだ。

しかし、魔力で窒素を固定し、大量に火薬が作れる世界ならどうだろうか？ 射程が300メートルを超えたとされる古代の投石機。それで火薬を放り込む戦略は、決して馬鹿に出来たモノでは無かった。

大砲の製造が間に合わないなら悪くない。在庫処分にはうつつけだ。

そうしている間にも、次々投げ込まれる火薬がスールーンの城壁を越え、ところ構わず爆発を始めた。

赤茶色の屋根が並ぶスールーンの街並みが瞬く間に硝煙に飲まれていく。街がパニックに陥り、逃げ惑う市民が城門に殺到するのも時間の問題に思われた。

しかし、そんな木村の悪い予感はまだ見通しが甘いと言えた。

「よお、こんな所に居たか」

「田中！ お前、今までなにやって……」

木村は言葉に詰まる。現れた田中が血に塗れていたからだ。それも全身にカーボンの鎧を着込み、抜き身を担いだ物々しい姿で。

「西門が爆破されたぜ、細工されてたんだろうな」

「マジか？」

驚くのも当然、そんな爆発、木村には全く聞こえてこなかった。

「マジだよ、お前が大砲撃った直後だ。完全にやられたな」

「俺の反撃も計算の内かよ、それで？」

「乗り込んで来たのは騎士百人と、コッチにも通じてたヤツが数人、全員斬った」

「ヒュウー」

田中が既にして完全防備、鎧を着て待ち構えて防衛していたと言うなら、初めから市街地での乱戦を想定していた証拠でもある。恐るべき勘と言える。

この男が居なければ、とうに街は占領されていただろう。

らしくないほど下手な口笛を吹いて囃し立てる木村だが、真夏だと言うのに体は冷え切っていた。余裕ぶるのも無理がある程に、状況は悪い。

スールーンの防衛を担う男に至っては、顔色だけでなく二人の活躍に声も失っていた。とんでもない戦いに巻き込まれたと、今更に後悔している所だった。

ソコからの戦いは苛烈を極めた。あえて開け放った城門の真ん前に大砲を据え、飛び込んで来た騎士達を木村が一網打尽にすれば、田中は単騎駆けで迫り来る別働隊を次々と切り捨てた。

しかし、そんな二人の英雄的活躍にも限度がある。いや、英雄的な活躍をしたのはユマ姫を信望する騎士全員であったが、それでも敵軍の豊富な火薬と物量の前には、抗う術など何処にもなかった。

なにせ敵は好き放題に火薬を投げ込み、銃弾を乱射してくるのだ。こんな軍隊と正面から殴り合うのは自殺行為。だからそう、いつそ敵の目の前でチヨロチヨロと踊るのが一番良かった。そうすれば同士討ちを恐れて爆弾も銃撃も好きには撃てない。

超人的な能力を持つ田中と木村、その二人にして、もはや城壁の上で敵兵相手に追いかけてつこをして時間稼ぎをするのが精一杯の状況に陥った。

無惨にも敵中に取り残された、とも言う。

「おおおおお！」

「やべええええええ！」

城壁の上、必死に走る二人の背後を無数の弾丸が切り裂いた。風に飛ばされた木村の帽子が蜂の巣になり、マントも穴だらけ。カーボン製の田中の鎧も大きく欠けてしまい、役割を果たせそうにない。

「おい、ずらかろうぜ！」

「言ってる！ 行くなら一人で行け！」

「クソツ、やるしかねえか！」

今回ばかりはスールンを見捨て逃げを提案する田中。それを洩るのが木村だ。

星獣が迫っていた時と立場を真逆に変えたのは、ひとえに攻め寄せるのが人間だからである。

田中としてはこれ以上スールーンを戦場にいたくなくかつたし、木村としては城壁があるスールーンから引けば軍を立て直すのは不可能と感じていた。

意見を対立させながら、田中が引き下がるのも前回とは真逆。田中にして、火薬が十分な相手から防壁のない平原で逃げを打つのは、あまりにも分が悪いと理解していたからだ。

つまり、スールーンに留まるも地獄、逃げるも地獄の状況。

「だが、市民も限界だ。これ以上の籠城は俺達の居場所がなくなるぜ？」
「解ってるよ」

籠城している街で市民に嫌われてしまえば、駐留する王国兵にとつては未来がない。

そうならないように木村はスールーンにお金が落ちるシステムを築いてきたが、街が爆撃されるとなれば、そんな苦労は水の泡だ。帝国への忠誠心が低いスールーンと言え、王国軍はあくまでも占領軍なのだから、彼らはよそ者の外国人である。

城壁の上、二人は話しながらも側防塔に飛び込んだ。

「来たぞ！ 迎え撃て！」

だが、当然ながら既にスールーンの城壁は敵に占領されていた。待ち構えるのは敵の兵士ばかりである。大盾を持った男が立ち塞がり、背後には火縄銃を構える兵士が並ぶ。

「オラッ！」

しかし、田中は大盾ごと騎士を斬り裂き、木村は銃を構える兵士を残らず撃ち殺した。軽口を叩きながらも、二人の動きに淀みはない。

「どうよ？」

「やべえ！」

それでも、窓の下を覗くと無数の兵士達が城壁に迫っているのが嫌でも目に入る。敵の本隊も街に雪崩れ込もうとしていた。

「ここまでか？」

「降伏か？」

「まさか！」

自分達が人質となれば、あのお姫様がどう動くか？ それだけが二人に共通する心配事。

「いつそ、ぶちかますか？」

「しかたねえ」

だからこそ、覚悟を決めた二人は再び城壁の上に飛び出した。いつそ敵の注意を引きながら、そのただ中に飛び込もうと考えたのだ。

そうやって、二人がまるきり自殺行為の作戦を覚悟した、その時だった。

「羽?」

純白の羽が舞い落ちて、見つめ合う二人の前へとすべり込む。反射的に空を見上げると、目を灼く真夏の太陽と、それを背にする天使の影。

「……………」

嫌な予感がする。二人は今度こそ、顔を見合わせた。

田中が尋ねる。

「どう思う?」

「ユマ姫か?」

「気配の感じ、半分は、そうだ」

半分、それがイヤに不吉で、木村は絞り出す様に尋ねた。

「じゃあ、残り半分は?」

「トカゲの気配だ」

「あー」

いよいよ木村は頭を抱えた。嫌な予感を肯定するように、爆発音は間近で響いた。

敵兵の兜が吹き飛んで、10メートルの城壁の上にもまで飛んでくる。

やったのはユマ姫だ。

投石機から放たれた火薬を空中で受け止め、城門前に群がる帝国軍に投げ込んだの

だ。

それはちょうど処刑の時、ユマ姫に打ち込まれた銃弾を撃ち返したのと同じ。ユマ姫は撃たれた弾丸を受け止め、加速させて反射させる事も可能になっていた。

そこからは地獄絵図だ。翼を上げたユマ姫の周囲には、無数の火薬が張り付いていた。ユマ姫の指差す先、火薬は次々と落下して爆炎を撒き散らす。

「メテオかよ」

木村はもう、乾いた笑いしか出ない。ゲームの最強魔法を思い出す派手な演出だった。

そればかりかユマ姫は、空を飛びながら自分の身長と等しい大弓を掲げ、事も無げに引いてみせた。

ピンク髪ユマ姫が純白の翼を拡げ、見た事も無い大弓を引き絞る姿は、戦場の戦女神と形容するしかない美しさだった。

爆炎と硝煙に薄汚れた戦場が、華やかな神話の戦いへと豹変する。

びいびいと澄んだ音が、喧々たる戦場に不自然なほどに大きく響いた。狙ったのは投石機が並ぶ真ん中、輝く矢が突き刺さるのがハッキリと見えた。

——ドオオオオオオオン！

今までの爆発が、ただの火遊びに思える程に大きな火柱。震える大気が300メートル

ル離れた城壁にまで殺到し、ビリビリと震えた。燃えさかる弓矢が火薬を積み上げた荷車に突き刺さったに違いなかった。

たったの一発で本陣は大崩れ、戦場の雰囲気は一変する。まして城門に集う一般兵にしてみれば、紛れも無い天使が愚かな人間に鉄槌を下した様にしか見えなかった。

祖国から侵略者を追い出すんだと士気も高かった兵士達が、蜘蛛の子を散らす様に散っていく。

「アイツ一人で、勝てそうじゃね？」

「だけどアレが俺達の知ってるユマ姫かどうかわからねーぜ？」

見上げる二人が見つめる先、神々しくも禍々しい少女が空を飛ぶ。田中の様な直感をもたない木村でも解る。もうユマ姫は人間の枠を超えた存在になっていた。

「試してみるしかないな」

覚悟を決めて、木村や呟く。

ユマ姫は上空でゆったりと旋回しながら、少しずつ高度を落としてくる。

二人の存在に気が付いたのだ。

そんな少女がついに二人の前、城壁の上へと舞い降りる。

『よお！ 見たか？ 俺の活躍』

日本語で、イタズラっぽい邪悪な笑顔。それはまるきり『高橋敬一』の笑顔であった。

ホッと息を吐いた二人は頷き合つて、ユマ姫に向き直る。

『いや、見てない!』

田中は言う。

『え?』

『今からでも、見せてくれないか?』

木村は真つ直ぐに目を見て、訴える。

『いや、見ただろうが! 俺の大活躍を!』

ユマ姫は戦場を指差し叫んだが。しかし二人は、いや木村は、まるで納得がいつていなかった。

『空飛んでるのに、全然。パンツが見えなかったぞ!』

『死ねツ!』

ユマ姫が木村に放つた大弓には、堅牢な城壁を大きく削る威力があつた。

残された時間

ぼんやりと、夢を見ていた。

白く染まった針葉樹林。枝に積もった雪がドサリと落ちて、舞い上がる粉雪がキラキラと輝く。震えるほど寒々しい景色が、どこまでも続いていく。

凍りついた森の中、雪を踏む母の足音だけがどこまでも続いていく。

これは、生まれたばかりの俺の記憶。冬の森をひたすらに歩く母と、背中で揺られる俺。

寒くて寒くて、おぎやーおぎやーと泣き続けたっけ。

俺の誕生日はたぶん冬の終わり。参照権があるとは言え、乳児の日付感覚はあやふやだ。でも実の母親であるゼナは人間の街で俺を生んだ、それは間違いない。そして、生まれたばかり、首も据わらぬ俺を担いで彼女は冬の大森林を突っ切った事になる。

良く考えれば何から何まで変な話だ。ゼナが大森林に定住しなかつた理由が解らない。王である父様と愛し合って、子供を作って尚、危険な冒険者家業を続ける必要がどこにある？

だから最初は、周りの目が嫌になったのだと思っていた。エルフの人間差別は酷いも

のがある。なにせハーフの俺にだって、あからさまな嫌悪を向ける奴らが大勢居たのだから。

だけど考えを改めた。森を出てから、魔力がいかに自分の体を蝕んでいたのか気が付いたからだ。

俺は自然と『母は魔力に蝕まれ、大森林に留まれなかった』と思うようになっていった。

それに俺は救われた。単に居心地が悪かったから俺を置いて出奔したのではなかったのだと思いたかった。

だけど、よくよく参照権で確認すれば、彼女は大森林でも元気に動き回っている。きつと並外れた健康値を持っていたのだろう。父様との出会いにして、大森林の最深部だ。ただ過ごすだけなら何の問題も無いだろう。

だとすると、ひとつの仮説が立てられる。まず、母が大森林を出奔したのは父様と愛し合った後。

彼女は自分の妊娠に気が付いていた。気が付いたからこそ、自分は平気でも濃厚な魔力がお腹の赤ちゃんに毒になると、大森林を離れたのだ。

だとすれば、それは正しい。なんせ俺は魔力に健康値を削られて、幼い頃は歩く事もままならない程に病弱だったのだ。もしあのままゼナが大森林に留まれば、俺は生まれ

る前に胎内で死んでいただろう。

……つまり、彼女は、ゼナは知っていた事になる。魔力の危険性の全貌を。きつと誰よりも。

当たり前に見えて、これはおかしい。人間は、魔力が健康値を傷つける事はおろか、魔力や健康値なんて概念すら知らないからだ。まして胎児に与える影響など、エルフの学者でもそこまでの知識が無いだろう。

だとすれば彼女は何者だ？ そもそも、父様に会った時、彼女は大森林の最奥で何をやっていた？ そして、俺を置いて何処に消えた？

様々な仮説がグルグルと頭を巡るが、どれもハッキリと形取らない。ぼんやりとした俺の意識が徐々に浮かび上がっていく。

「ふわぁ……」

夢の時間は終わりだ。微睡みから目が覚める、固めた魔力をぶん投げて木窓を弾き上げると、強い光が部屋を満たした。ここはスールン城の中。あてがわれた部屋は個室なのはもちろん、天蓋付きベッドの好待遇ではあるが、羽が生えてしまった今となっては普通のベッドでは少々寝づらい。仰向けは論外で、うつ伏せでもそれなりに育った胸が圧迫してしまう。

俺はパジャマ代わりにしているシルクのベビードールを脱ぎ捨て、フリルブラウスに

袖を通す、背中に羽を通す穴が開いた特注品である。その上からレザーのオープンバストコルセットで持ち上げて、とどめにシヨルダーベルトで挟んで、育ち盛りの胸を強調。足にはガーターストッキング。そしてプリーツの入った黒のミニのスカパンで絶対領域を演出している。

スカパン。スカートオンパンツである。短パンの上にスカートが一体化してるみたいなヤツだ。空を飛ぶからと、木村の商会に作って貰った。

なのに当の木村は「ホントに恥ずかしくないパンツを穿くヤツがあるかよ！」って激昂していたが、知った事ではない。こう言うのは常時見せてたらありがたみが薄れるからな。清楚さを印象付けた上で、たまにチラ見せするから良いのだ。

とは言え、バニーやミニスカドレスで大暴れと、既に大安売りをしてしまった感もある。だからこそココからはガードを高めていこう。

「ふふふふふふ」

俺は鏡の前で一回転。抜けた羽毛が舞い上がり、天使みたいな俺の姿を演出してくれる。抜け毛が飛び散ったと考えると汚いので、冷静にならないのが大切だ。

このブラウンのコルセット、ウエスタン風でお気に入りである。吊したホルスターともマッチするし、なにより育った胸を実感出来る。

ただ、お嬢様然とした黒のプリーツスカートやストッキングとはあんまり合っていない

かなあ？

しかし、下半身までジーンズで西部劇っぽくしてしまおうと、今度はお姫様としての雰囲気や天使の羽と調和が取れない。ならばデニムスカート？ いや、やはり今の俺にはデニム自体が似合わない気がするな。

どうするべきか……ココは悩み所よな。

「遅えよ！ 何時まで踊ってんだ！」

部屋の外から田中の怒鳴り声が聞こえて来た。見られた？ コイツ！ あり得ねえ！

「乙女の着替えを覗くなんて！」

「覗いてねえ！ 気配で解るだろうが！」

そうなん？ え？ 俺が鏡の前で可愛いポーズを研究してるのもバレバレ？ 恥ず

かしいだろ！ 止めろ！

「乙女の気配を探るなんて！」

「んだ、クソ！ 十メートル先からでもお前がクルクル踊ってるのが解るわ！」

なるほどな、今の俺の気配はそれほどに強烈か。確かに今の俺は、それだけ死から遠い場所に居る。ちよつとやそつとじゃ死なない体になった。

季節は夏。俺が十六歳になるまで、もう半年。さあ？ どうなる？ 今の俺を殺すな

ら特大の『偶然』が必要だぞ。

また隕石か？ それとも地殻変動か？ 地震に地割れ、津波や竜巻って可能性もある。

目指すは帝都。そのど真ん中で、俺は『偶然』と踊ってやる。

考えるほど楽しくなってきた俺は、勢い良く部屋から飛び出した。部屋の外でぼんやりしていた田中を置き去りに、走り出す。

「ぼやぼやしないで、置いていきますよ！」

「ドコに行くんだっての！」

「作戦室です、国盗りの仕上げと行きましょう！」

「そっちは外だ、司令室はコッチ！」

なるほどな、俺は回れ右してバンバンと田中の背を叩く。

「早く、早く！ 案内なさい！」

「はー、ぶった斬りてえ！」

物騒な事を言う、まあ、今の俺は斬られたぐらいじゃ死なないけどな。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『偶然』を恐れて一刻も早く進軍したい俺。一方で、俺の復讐が終わるのを恐れるのが木村だ。生きる目標を失った俺が、何をしでかすか解らないと恐れているのだろう。

無理もない、俺自身どうなるかなんてまるで予想が付かないからだ。

そうなるよ、木村はあの手この手で進軍を遅らせるに違いない。

「一刻も早く進軍すべきです」

しかし、木村の選択はすぐさまスールンを発つ事だった。

「どういふつもりです？」

「やつら、『焦土作戦』を仕掛けています」

「『焦土作戦』とは？」

「撤退しながら、奴らは農地や重要施設を略奪もしくは焼いているのです」

ん？ つまり、進軍する俺達に物資を渡さない様にしてるって事だよな？ コレまで

も俺達は敵を捕虜にしたり、魔女の軍からは火薬を奪ったりもしてきた。かなりの量を星獣戦で使ってしまったと言うが、残りが今でも戦線を支えてる。

そう考えると、敵の戦略は酷く当たり前に聞こえてくる。

この場に居るのは俺達三人だけ、だから下手な事を言っていると、当たり前じゃんって馬鹿にされそうな空気がブンブン漂う。木村は嫌味な所があるからな。

そんな時に声を出すのは田中の仕事だ。

「撤退するときに物資を引き上げる。ンなモン当たり前じゃネーか？」

「ところが、この世界じゃさうでもないんだよ、覚えてるか？ フィーナス川に掛かった

ゲイル大橋

忘れるはずがない。帝国と王国はフイーナス川を挟んで、この橋を舞台に何百年もいがみ合つて来たからだ。この前だつて橋を挟んで何日も戦線が膠着していた。

だが、それが何だと言うのだ？ 解らんかった俺と違って、田中がしたりと領いた。

「なるほどな、何百年前に架けたゲイル大橋がまだ落ちてない。それこそが焦土作戦なんてしてこなかった証拠か」

「そう、この世界、戦争つてのは騎士同士でやる試合みたいなモノなんだよ」

「橋を落とすのはルール違反つてか？」

「火薬も無かつたからアレだけの石橋を瞬時に落とすのが不可能つてのもあるけどね。でも、そうじゃなくても物資を焼いたり橋を落としたりマズい理由があるんだよ」

「解るように説明しろよ」

「そもそもさ、川を挟んで西が帝国、東が王国つて時代が建国以来、千年以上も続いている。これ自体が異常だ。他の国なんて無いのに。全面戦争にならない」

ん？ それは、決着がついた話だつたはずだ。

「それは、私達エルフが干渉して来たからでは？ 或いは我々の存在そのものが人間同

士の争いに抑止力になつていた」

「にしても、千年あれば何かの拍子に統一されてもおかしくない。星獣が出た時は惜し

かったみたいだけど、アレだつて星獣ナシでも統治は上手くは行かなかつたらうね。ここ一年スールーンに留まって実感したよ」

ん？ そんなに大変だったの？ 俺は首を傾げる。

「それは？」

「みんな、なんだかんだ自分の国が好きなんだ。川で真つ二つに分断されてるから帰属意識が強い。帝国に冷遇されてきたここスールーンだつて、王国から来た俺達には結構当たりが強かつた」

「そうなんですな」

俺なんて、ぱつと見で解るぐらいに異種族の民なのに、訪れた日から王都では大歓迎されたもんだから、てっきりこの世界の人々はナシヨナリズムとは無縁と思つていた。

いや、アレだつて憎き帝国に国を追われた哀れなお姫様つて設定と、俺の美しさが噛み合つただけかも知れない

木村が続ける。

「その帰属意識こそが、国を保つ鍵になつてる。これがもし、例えば王国が攻められた時、スフィールを焼き払つて帝国の進軍を止めたなんて事をしてしまえば、スフィールは王国を恨んで、帰属意識なんて吹き飛んでしまう」

「その、帰属意識がなくなると何が問題なのですか？」

尋ねると、木村が指を一本、ピツと立てた。

「まず、補給が出来ない」

「帝国から運べば？」

「補給ルートがゲイル大橋を渡るしかないのです、長い上にルートが絞られて襲われ易いのです」

確かに、補給ルートが限られてるので奇襲もしやすいよな。

「次に占領も上手く行かない」

「市民の抵抗が強いと？」

「そう、商人だつてロクに物を売ってくれない。本国の圧力とかなくてもね」

「そうなのか、だったらココ、スールンで逗留するのも苦労が多かつただろう。実際のその通りだと木村は言う。」

「こつちには先の合戦でぶんどつた豊富な資金があつて、更にはゼスリード平原で帝国が育てていた小麦も手に入れていた。魔導車が早いから補給もギリギリ間に合つた。占領下で奪つたモノより与えたモノのが多いぐらい。ここまでやって初めて橋頭堡を築けた。今までこんな事は無かつただろうね」

「それにしたつて、ここスールンが元々治安が悪くて、愛国心がないつてのが効いてるだろうな」

「それもある。じゃあ歴史上、侵略した軍隊がどうしてたかって言うと、現地で物資を略奪するしかなかった。帝国なんて侵略する度に王国の都市から略奪した。結果的にスフィールやネルダリアなど、国境に近い場所は今でも帝国への憎しみが強い。そして散々に略奪して荒らしてしまえば、更に王国の奥にまで踏み込もうとすると、今度は本国から物資を輸送するしなくなる。その物資は荒れ果てたスフィールやネルダリアを通過せざるを得ない、益々補給が困難になる。悪循環さ」

その悪循環が二国の存在を維持してきた。どつちかがまかり間違つて焦土作戦なんてやっていれば、この世界はとつくに統一されていても不思議じゃなかった。

一度、そんな事をしてしまえば、焦土にされて帰属意識を失った地方を足掛かりに統一が成っていただろう。そう言う事らしい。

それが解っているから、焦土作戦などしない。スポーツ感覚の奪い合いに終始していた。

そこで、田中が疑問の声を上げた。

「じゃあなんで今更、アイツらそんな事をしてるんだ？ 自国民を傷つけて」

「そりゃ、上手く行ったからだよ。大森林ではな。お前も嫌と言うほど見ただろ？」

「グツ」

俺は怒りに歯を食いしばる。そうだ、奴らは大森林から撤退する時、略奪の限りを尽

くした。

だって元々統治なんて出来ないし、するつもりも無い民だからな。

「だけど、焦土作戦なんてココでは有効じゃないんだ。なのに奴らはやろうとしている。それも中途半端に」

「中途半端？」

「そ、報告を聞いてると半端なんだよ。腰が引けてるって言うか。農兵なんて他人の畑を焼くのは殺人と同じって価値観だからね。それを後ろを気にしながら略奪するってのは難しい」

「それって……」

「そう、だから一晩ゆっくり休んで。略奪するチャンスを与えたって訳。近くの村が略奪されたのを知れば、スールーンの帰属意識も吹っ飛ぶだろうからね」

コイツ、昨日はテコでも軍を出そうとしなかったのはソレか。俺より悪魔じゃんか。じつとりと睨んでいると、田中が鼻を鳴らした。

「コイツのそういうトコは、今に始まったことじゃねえぞ」

「そそ、スールーンに居る間に帝国はハラスメント行為を何度も仕掛けてきた。王国兵のフリをして略奪に来たりとか」

「そのたびに、俺がバイクで成敗しに行くんだから堪らねえぜ」

「ただ、それだつて下手くそなんだ。略奪つて簡単にいうけどコレも案外難しい。それも敵陣に切り込んで略奪なんてリスクが凄い。よつぽど機動力に自信が無けりや無理だ。なのにコツチにはバイクに乗った田中が居る。なり立たないんだよなあ」

「あんだだけ情報が事前に漏れてりや俺じゃなくても十分だつたら、嫌味つぽいぜ。略奪が始まるまで、待たされる方がよつぽどしんどかつたつーの」

二人してニヤニヤと褒め合つていて気持ち悪いが、こんな話は初めて聞いた。

「馬鹿な帝国が、そんな事をしてくれたから、俺達だつてスールーンを維持出来たんだ」
「確かに、そうじゃなきゃ、流石に資金も物資が足りなくなつて終わつてただろな、一時は砥石一つ手に入らなかつたんだぜ？」

「こつちには装甲車があつたし。ゼスリード平原は穀倉地帯になつたから食料も事欠かない。あとは輸送ルートだけが問題だつたけど、帝国が荒らした土地で食料を配るだけで占領はスムーズに進んだつて訳。スールーン以東は今やすっかり王国に恭順してる」

「今回も早く駆けつけてやりやあ良いのに。悪の帝国が暴れてから俺達が颯爽と現れるシナリオと来た。相変わらず胸くそワリいぜ」

「それを言うならお前、昨日あんだだけの戦いの後、人助けに飛び出して行けたのかよ？」
「無理だな」

「だろお？」

コイツら男同士でイチヤイチャしやがって。ムカつくなオイ。

俺が露骨にムスツたれてると、木村は真剣な顔で俺に向き直った。

「でも結局はユマ姫様、全てはあなた様の活躍のお陰ですよ」

「えっ？」

オイオイ、急にヨイシヨが来たな？

「この世界、愛国心やら帰属意識、スポーツじみた騎士道精神が邪魔をして、統一がなされない。つまりイヤって程、平和な世界とも言える。ここまでは黒峰さんも気が付いていた」

「そうなのですか？」

「ええ、だから黒峰さんは帝国情報部を拡充していた」

「ああ」

俺達がスフィールで壊滅させたのが、その新設された情報部の連中だったってのは調査の末に判明している。

「スフィールのグプロス卿と通じてたのもそう、川の向こうに拠点を作り拡げるのが絶対に必要なったから」

「魔女はそこまで考えて？」

「ええ、黒峰さんは本気で国盗りを狙っていた。それを挫いて来たからこそ今がある。全ては無駄じゃなかった」

情報部が壊滅してなければ、ちゃんと訓練された奴らが証拠も残さず破壊工作に励んでいたか。

なるほどな、今までの俺の旅と冒険は、遠回りに見えて帝国を侵攻するのにどれも必要な事だった。そう言いたいのか。でも、俺は素直に喜べない。

「つまり、魔女は死んでいると？」

木村の目を見て確認する。敵の戦略が半端で、一貫しないなら、そう言う事になる。

俺は何となく黒峰の最期に引つ掛かりを覚えていた。グチャグチャに死んだのは確かに見た。だけど、彼女の運命光が消えたように見えなかったから。

だから田中と木村には「まだ終わってないかも知れない」とそれとなく伝えていた。だけど木村は戦術家として、自信を持って断言する。

「間違いありません。魔女の噂はまだ聞こえて来ますが、間違いなく偽物でしょう」

「その根拠は？」

「この半端な焦土作戦こそ魔女が存命なら決してやらせなかったでしょう。その概念を伝えたのは彼女でしょうが、聞きかじった知識で最悪の選択を重ねている。もし黒峰さんが生きていれば、決してやらせなかったはずだ」

「そうですか……」

まあ、生きていようが死んでいようがどうでも良いか。もう、俺を止める事など出来ないだろう。今の俺は策を弄してどうにかなる存在じゃない。

木村は俺の顔をみて宣言する。

「後は仕上げです。戦争に負けそうな今、帝国の民は不安に思っている。敵には神の使徒と言われるユマ姫が居て、帝国を断罪しようとしている。本当に皇帝を信じて良いのか悩んでいる。そこにトドメとばかり味方のハズの帝国兵が自分達を略奪の対象にするのですから」

なるほどな、俺に求められる仕事が見えてきた。

「そこで天使の如き私が颯爽と現れて、単身、敵兵をなぎ払うと言う事ですね？」
立ち上がって堂々宣言すると、あらやだ、二人して馬鹿を見る目を向けてくる。

「お？ 狂った？」

田中！ 殴るぞ！ 木村は？

「いや、聞いてた？ 一人で行っても食料も援助出来ないし、なにより死ぬでしょ」

コイツも駄目だ！ 信用してない！

「誰が今の私を傷つけられるのでしょうか？ そして、私が天から舞い降りて魔法で敵をなぎ倒し、傷ついた人々を魔法で癒やせばもう、食料など無くても私の前に跪いて、ユ

マ様ありがとうございますと恭順を誓うでしょう?」

堂々宣言すると、二人してあんぐりと口を開けた。

「うーん」

「まあそうかも知れねえけどよお」

「それ、もう俺達が居る意味無くない?」

知った事か。正直、もうコイツらと一緒に居るのは危険な気がしてならないぐらいだ。このままではきつと巻き込んでしまうから。

『じゃ、ユマ姫行きまーす』

「お、オイー!」

止めるのも聞かず、俺は軽い調子で呟いて明かり取りの窓から飛び出した。

城の上層から落ちていき、地面に墜落する直前、翼が風を掴んで上昇に転じる。

「ああ、飛ぶのが気持ち良い」

翼を拡げて、風の魔法で作った気流に身を任せると、風を切つてドコまでも進んでいく。

とは言っても、肩甲骨から生えた背中の翼はバサバサと羽ばたいて浮力を生み出せる程の力はない。メインの推進力はあくまで魔法だ。

翼の役割は、せいぜいが自由に動くグライダーが背中に付いてる程度。だけど、それ

がとても気持ちが良い、旋回も滑空も思いのまま、魔法を組み合わせれば、自由に空を飛べるのだから。

真夏の太陽が俺の羽をじりじりと焼くが、それすらも心地よい。乾いた大地が作る地平線、彼方に見えるのが地図で見た村だ。馬車で数日の距離でも、飛んだら数分。

乾いた風を頬に受け、俺は風に乗ってどこまでも空を泳いでいく。

全てが終わったなら、誰とも関わらずこうやって空を飛ぶ毎日も良いかもしれない。

そうすれば、誰も俺の『偶然』に巻き込まない。

「いや、そうも行かないか」

俺の体は徐々に変異している。鳥は恐竜が進化したモノだと聞いたが、だとすると翼が生えるのはあのトカゲの体を取り込んだ影響もあるだろう。

隕石でグチャグチャになった俺の体は、同じくグチャグチャになった星獣の細胞をいつの間にか取り込んでしまったらしい。

そして、俺は無敵になった。星獣の回復能力を手に入れたから。だけど、星獣の回復能力とは何か？ 細胞をあるべき形に戻す力だ。

その、『あるべき形』が歪んでいる。凶化の影響だ。グリフォンや古代人ポーネリアがそうだった様に、俺の体が他の生き物を取り込んで変化している。

自分の細胞が他のモノに置き換わっていく感触がある。

きっと体が少しずつ、あのトカゲに変化している。それが俺の死なのか？　それが死と言えるのか？

解らないけど、空を飛べた事に後悔はない。千五百を越えた俺の魔力値でも、まだセレナみたいに自由に空を飛ぶほどの力は無い。セレナの魔力値は二千を超えていたのだから。

だけど、翼があればあの日みたいに自在に飛べる。セレナと同じ。それがとても嬉しかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「行っちゃまったか」

残された田中は作戦室でボリボリと頭を掻いた。その脳天気さが、俺にはどうにも癪に障った。

「他人事だな、俺達じゃもうアイツの助けにはなれないって事だろ、悔しくないのかよ」
「今更だろ？」

しかし、田中は肩を竦めて鼻を鳴らす。それどころか足を机の上に投げ出してふんぞり返ってみせる。

「今更？　今更って、お前今まで何を、アイツは何度もピンチになってお前はそれを助けて……」

「そうかね？　じゃあアイツが死ななかつたのは『偶然』か？」

そう言われると、解らない。ユマ姫は何時も紙一重で生き抜いてきた。それが『偶然』なのか？　『偶然』は敵、常にユマ姫を殺そうとしてるんじゃないや？

悩んでいる俺に向かって、田中は妙な事を口走る。

「なあ、お前は十六年しか生きられないと言われりや、どうやって死にたい？」

「どうって？」

問われて俺は自分の死に様を考える。

とっさに思い出したのは、ユマ姫の細い首を絞めた事。ああやって死ねたら……いや、ダメだ。必死に頭を振って、妄想を打ち払う。

そんな俺を無視して田中が語った。

「俺はな、戦って死にてえよ。剣士だからな。捕虜になつて拷問されて死ぬよりも戦いで死にたい。戦士なら誰だつてそうだろう」

「まあ、戦士ならそうかなあ？」

「そうさ、なんせ俺もそう若くねえ、コレからノビしろがある訳じやなし、負けたらソコで終わりで良い」

「刹那的だなオイ」

「そんな価値観だからよ、俺は躊躇無く人を斬つちまうんだよ。戦つて死ねるなら良い

だろうってな」

真剣な顔をしてそんな事を言う。

「そりゃ」

「解つてんだよ、価値観の押し付けだつてな。でも、ロクに罪悪感もねえ。死にたくないなら剣なんざ握るなつて理屈よ」

「まあ、そうか」

剣をとつて向かつてくれば、手加減なんぞ不可能だ。商人である俺には理解出来ないが、手加減なんて失礼、何故本気で殺さないんだつて怒つて来る奴まで居るらしいしな。「でもよ、アイツは誰彼構わず殺すぜ？ 罪悪感もなく。その理屈が「俺みたいないな美少女に殺されるなら本望だろ」と来たモンだ」

「……………」

心中しようとした俺にはなんも言えない。死んでも良いと思えてしまったからだ。解つてしまう。共感出来てしまうのだ。その狂気の理屈が。

「アイツも俺も、狂つてる。けどよアイツの狂気は、相手を丸ごと飲み込んで、その狂気に染めてしまう」

「何が言いたいんだよ」

「アイツが殺そうとしても、誰もそれを嫌がらない。そんな怪物になりそうじゃねえか

「？」

怪物、だとしたらどうなる？ 俺に止められるのか？ それとも？

「じゃあ何だよ、お前がアイツを殺すのか？」

「そうじゃねえ」

いや、何なんだよ？ 今のそう言う流れの話じゃないのか？

「上手く言えねえけど、違和感がある。全部仕組まれてるんじゃないかってぐらいに」

「なんだよ、感覚の話をされても困るっての」

「アレは本当に俺達知ってるユマ姫かって話だ」

「そりゃ、半分星獣の細胞を取り込んで……」

「星獣？」

何故か田中は聞き返してくる。なんだ？ 違うのか？

「ああそうか」

「なんだよ？」

「言い方を変えるぜ。なあ？ アレは本当に、俺達が知ってる『高橋敬一』か？」

俺には田中の言っている事が、まるで理解が出来なかった。

ロンカ要塞 1

『クソねむい』

俺は積み上がった干し草に頭から飛び込み、身を隠して時を待つ。

夏の真つ昼間にそんな事をしていれば暑くて仕方が無いハズだが、今の俺には苦にならない。むしろ丁度良い休憩時間だ。

ここ数日、俺は空を飛び回り、周辺の村を救って回っていた。焦土作戦を防ぐ為だ。難しい事は何も無かった。俺や木村が心配していたのは、帝国兵が王国兵になりすまして略奪をする事だった。そうなれば物資が手に入らないばかりか、王国への感情がますます悪化してしまうから。

だけど、帝国はあろう事か「皇帝陛下の思し召しだ！」と書状まで見せつけて物資を徴発して畑を焼いていた。何かの罠を疑うぐらいの愚行である。

後で聞いた話だが、初めこそ王国兵になりすましていたらしい。

世間知らずの軍人達だ、我らが悪名高い王国兵だと宣言して、これ見よがしに銃で脅せば、村人など黙って全てを差し出すと考えていたと言う。

だが皮肉にも、帝国への愛国心が強いからこそ、村人達は必死に抵抗した。

更に言えば、略奪をするにもコツがある。種もみまで全部奪つて農地まで焼かれれば、農家は死ぬしかない。だつたら敵と勇敢に戦つて死んだ方がマシと腹を括つてしまふ。

略奪と言うのは、やり過ぎてはいけないのだ。

更に言うと、これ見よがしに振り回した最新のマスケット銃。コレが死ぬ気で突つ込んで来る農民に、ひたすらに相性が悪かつた。剣を振り回した方がずっとマシ。最新の武器だから強いに違いないと思ひ込んだ。運用ミスの典型だ。

帝国軍の戦略は終始こんな感じで、良く言えば臨機応変。悪く言えば思いつきの机上の空論。

例えば、余りある投石機で火薬をぶん投げるなんてのは、木村が驚く程に理に適つていた。火薬には大砲つて先入観が強かつた木村では、火薬のコストからも尻込みしてしまふ策。

一方で、この焦土作戦は酷い。全体的に聞きかじつた戦略を当てずっぽうに試している感じがする。

きつと皇帝の思し召しだ。

帝国は皇帝の権限が強い。だからこそいち早く新しい技術を取り入れた帝国だが、いまはソレが悪い方向に發揮されている。

それを抑える家臣達は、魔女が残らず殺してしまつたに違いない。

尋問した帝国軍から聞いた話だが、この焦土作戦は「物資を帝都に集め」「王国の悪評を広め」「物資もない餓えた農民を押し付ける事で王国軍の進軍を遅らせる」

まさに一石三鳥、起死回生の作戦だと自信満々に布告されたらしい。

しかし、実際には自国民と軍隊が潰し合い、結局物資も集まらない。

最悪の結果が待つていた。

だから慌てての方針転換、皇帝の名の下に挑発を開始したと言うワケ。とにかく物資を干上がらせれば、焦土作戦としては成功するからだ。

愛国心が強い帝国の民である。今度は物資の提供までなら従つた。自分達を見捨てて撤退するのだと聞いても我慢していた。勇ましい帝国兵がすぐに領土を取り返してくれると心の底から信じていたから。

だけど、畑まで焼くと言われれば話は別だ。そんなのはこの世界の常識に合わない。村人達は収穫した作物を王国兵に渡すつもりがないだけに、帝国兵の行動が少しも理解出来なかつた。説明しようにも、魔女から焦土作戦と言う概念を聞きかじつた皇帝の発案なのだから、誰も詳しい事を説明出来ない。

村人達は絶望した。愛する祖国に苦しんで死ぬと言われたに等しいのだから。

信じていた皇帝に裏切られ、焼ける畑の前で呆然と立ち尽くす。

空を飛び、村々を巡った俺は、そんな人々を大勢見てきた。だけど、彼らは救われた。

奇跡が起きたのだ。

雲の合間から現れた天使が、荒れ果てた大地へ舞い降りて、彼らの前に降臨したのだ。まあ、アレだ、俺だよ。

そう、俺は行く先々で、タイミングを見計らって、彼らの前に現れた。するとどうなるか？

じゃあ早速やって見せようか。丁度今から、始まるところだ。

俺だって、何も好き好んで牧草の中で何時間もスタンバっていたのでは無い。鈍足の帝国軍に先回り、村の片隅で息を潜めて待っていた。

そろそろ頃合いかな？ まだかな？ 俺は牧草の中、集音の魔法で村の様子を窺った。

「おら、燃やせ燃やせ！ 燃やし尽くせ」

「オイ！ 女も犯していいんだよな？」

「やれやれ、皇帝陛下は略奪をお望みだ」

「ヒュー」

あーあ、ダメだこりゃ。コイツらただの略奪と焦土作戦の区別がついていない。所詮は寄せ集めの兵士だ、こうなれば山賊と変わらない。

意気揚々と非道な略奪の真っ只中。だが、まだ早い、村人達が絶望した辺りで登場するのが望ましい。俺は干し草の中でジツと待つ事にした。

しかし、季節は夏、時刻は正午過ぎ。流石に暑くなってきた。俺は星獣の細胞を取り込んで、暑さにはかなり強くなったつもりだ。それでも暑いんだから相当である。

……いや、幾ら何でもコレは殺人的だ。まるで燃えてるみたいじゃないか。

「牧草は始末したか？」

「うっせーなやつてるよ、馬が腹ぺこなら、奴らも追って来ねえからな」

「火には注意しろよ、俺達のメシまで焼けたらシャレにならん」

はい、燃えてますね。このままじゃ美少女の蒸し焼きだ。

俺は慌てて魔法で上昇気流を生み出すと、干し草と共に空へと舞い上がる。

干し草まみれの空飛ぶ美少女。流石にマニアックが過ぎる。

おのれ帝国！ 何時間も待っていたのに台無しだ。

するとどうだろう？ 俺の怒りが燃え移ったのか、舞い上がり空気と攪拌された干し

草は瞬く間に燃え上がり、巨大な火柱へと変じてしまう。コレには俺も驚いた。

地上は皆が半狂乱の大惨事。見れば家畜小屋に次々と引火して、大変な事になって

い。

俺は大慌てで風を止め、燃えさかる火柱を打ち消した。今の俺にはこの程度、造作も無い。

我ながら冷静だ。ナイスフォロー。

「……………」

だが、恐ろしい程の静寂。

村人も帝国兵も隔てなく、全員が呆然と俺を見上げている。

なるほどなるほど。突如吹き上がった火柱の中から、天使の如き美少女が現れたのだ。驚きもするだろう。

想定より派手な登場をキメてしまった。派手なのは良いけれど、問題は天使というより悪魔寄りの演出ってトコ。

いや、まだだ、まだリカバリー出来る。

雲の合間から差し込む光を、大きく広げた翼に受けて、俺は空から拡声の魔法で大音声の託宣を下す。

「帝国は神に仇なす存在へ堕ちました。私、ユマ・ガーシエントが、主に成り代わり天罰を下します」

天使っぽい武器と言えば弓で決まりだ。言い終わるや否や、上空からひたすらに帝国

兵を射貫いていった。人間など俺にとつて的でしかない、俺が矢を放つ度、帝国兵はギヤーギヤーと喚いていたがすぐに沈黙した。永遠に。

あとは燃え移ったボヤの消火活動だが、良い感じに雨雲が出ている。これならと死苔茸チリアムの粉を上昇気流に乗せてやれば、程なくして雨が降り始めた。ここまで完璧である。

全てが終わつた事を確認し、俺は降りしきる雨の中、彼らの前に舞い降りる。

「おおっ！」

「なんと、なんとお！」

「天使だ！」

そしたらもう、村人達は泣いて大喜び。雨だか涙だか解らんぐらいにグチャグチャになつて、泥だらけで俺の足下に跪く。

一時はどうなる事かと思つたがリカバリーに成功したようだ、こうなれば後は良く知る流れである。いや、むしろ皆の反応はいつもより良いぐらい。すっかり俺を天使だと信じている。

俺は、彼らに宣言する。

「私は、天使ユマ。魔女に与する皇帝を、私は討たねばなりません」

これには村人一同、流石に息を飲んで黙り込んだ。天使の正体は悪名高い王国軍の総

大将、ユマ姫だったから。

そして皇帝を討つと宣言。

祖国に裏切られた彼らであるが、それでも皇帝とは神に等しい存在と、帝国人民の根つこの部分まで染み込んでいる。

俺の罰当たりが過ぎる宣言に、婆さんなんて一心不乱に聖句を唱えているし、村長らしい爺さんなんて「恐ろしや」と連呼し続けブルブル震えるばかりであった。

だけどそんなのは知った事ではない。

「皇帝を名乗る彼の者は、非道な兵器で地上を焼き、疫病をばらまいた」

思い当たる所があるのだろう、村人たちは揃って棒を飲んだような顔をした。

寒村であるこの村にも、戦場の噂は届いている。ゾンビに怪獣、何でもアリだ。

極めつけに先ほど目の当たりにした凶行。彼らだつて皇帝がおかしいと思ひ始めている。それでも俺にこうまでハッキリ言われれば、大変にショックだったに違いなく、誰もがぐったりと項垂れた。

そこに、追い打ちを掛ける。

「あなた方は狂った皇帝に与したばかりか、命じるままに我が軍勢を裏切り者と誹り、天使である私を悪魔と断じた。その罪、軽くはありません」

「そ、そんな！」

話の雲行きが怪しくなったのを感じ、彼らが一斉に顔を上げる。これもまた狙った流れだ。俺は跪く村長の肩に手を置き、宣言する。

「見たでしよう？ 帝国の横暴を。私の故郷も同じく帝国に蹂躪され、家族は全員、殺されました。そんな横暴を他人事と見過ごしていた罪が、今度はあなた方の家と畑を焼いたのです」

「そんな、まさか……」

俺の言葉に覚悟を決めた村長が、泥だらけの顔で必死に縋る。

「悪いのは私です。ユマさま、私がユマさまを悪魔と罵るべしと、皆に命じていたので、罰するなら私を」

どうもそうなのだ。最近では帝国でも俺の人氣が高まっているらしく、それが気に入らない帝国は、俺を悪魔と宣言せよと、こんな小さな村まで強要していた。だから、村の全員が俺に引け目があるのだ。

村長は地面に顔をこすりつけ、首を差し出すように俺の足元に蹲る。

「どうか、どうか、私めの首一つでご容赦ください」

「良いでしよう」

言わなければ無理矢理引つ張りだすつもりだったのに、今回は手間が省けた。

支配には暴力も必要。痛みを忘れれば罪も忘れる。だけど罰するのは一人で十分だ。

別に丸くなったつもりはない。俺は今でも家族の死に様を夢に見て、そのたび帝国人を殺して回りたくなる。

人畜無害なコイツらだつて例外じゃない。エルフの都が焼かれていた時、コイツらは何も知らずぬくぬくと暮らして居たに違いないのだ。

ただソレだけの事が、どうしようもなく、俺を苛立たせる。

でも、ここは帝都じゃない、ただの田舎の寒村だ。ココで暴れても仕方が無い。

彼らには帝都を攻める俺の軍に、物資を供給する役目がある。

殺すのは必要な分だけ、それで十分だ。

「覚悟は、良いですか？」

「お許しを！ お許しを！」

ひたすらに懺悔を繰り返し、村長は俺の靴にキスでもするように、泥だらけの地面に頭をこすりつける。

「黙れ！ 見苦しい！」

俺はそんな小汚い後頭部をブーツで思い切り踏みつけて、しゃらりとサーベルを抜き放つ。

「空っぽの頭に罰を」

踏みつけた頭部が泥に埋まり、息が出来ない村長はバタバタと暴れる。だが窒息で殺

すつもりは無い。俺はすぐさま頭を蹴飛ばしひっくり返すと、今度は顔を直接ぐりぐりと踏みつけた。

そして、泥だらけの鼻先にサーベルを突き付ける。

「真実を見ようとしない目、噂に惑わされる耳、嘘を垂れ流す口、全てが罪深い」

そのまま顔を踏みにじり、泥をこ擦り付ける。

「役立たずの頭には泥を詰めた方がマシだ。誓え！ 愚かな皇帝を捨て、私に従うと」
「ち、誓います。ユマ様」

村長は迷いなく宣言した。狙い通りである。

「良いだろう、我らへの献身をもって、汝の罪を赦そう」

俺は鷹揚に宣言し、村長のケツを蹴飛ばした。コレで一人も殺さず恭順を誓わせた事になる。

コレが案外苦勞するのだ。それほどに帝国人民の忠誠心は厚い。

ここまで色々試してきたが、こうやって物理的に顔を踏みにじるのが一番だった。

村長プライドをへし折りRTAタイム更新である。

これでもう王国軍は補給には困らないだろう。

結局使わなかったサーベルを鞘に収め、ホッと息を吐く。

「おおっー」

「赦された！」

「天使ユマ様、バンザーイ！」

村人達はこれで全部解決と大喜び。

呑気なモノだ、略奪する兵士が略奪する天使に変わったただけなのに。考えさせる隙を与えないのが略奪のコツと言える。

今回も上手く収まった。全部狙ったとおりに決着した。

ただ、完璧に見えタイムも早いこのやり方、一つだけ問題がある。

純真な彼らは本当に俺が天使だと信じてしまうのだ。

そして、教会もないこんな寒村に、天使が舞い降りたらどうなるか？

居合わせた農民が、揃って俺の足元で頭を下げる。懺悔大会が始まってしまうのだ。

「俺もだ、俺も、罪深い」

「こつちもだ、ユマ様が悪魔だと、何度も罵った」

「罰してくれ、役立たずの頭を」

「踏んで！ 踏んでくれ」

いや、これ懺悔か？ なんか違う気がするが？

……何故か、俺は全員の後頭部をゴリゴリと踏むハメになるのであった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「と、言う訳でね」

「はーくだらねー」

俺は軍に合流した。気が付けば前線は帝都最後の盾と呼ばれるロンカ要塞を望む場所にまで進んでいた。

張られた天幕の下、俺は木村と田中に首尾を報告したのだが、褒められるハズか呆れられた次第である。納得いかない。

「いや、補給路の襲撃やら蜂起を心配するどころか、周辺の村が率先して物資の提供、交換に応じてくれるから成果は疑ってませんけどね」

「俺らが必死にゼスリード平原から食料を提供したり、色々工作して恭順させて来たつてのに、お前は踏んづけるだけで全部解決とか、スーパーマリオか？」

「別に踏んづけただけではないですが？」

お前もクリボーにしてやろうか？

「とにかく、後はあの要塞を落とせば終いだ」

「帝国の盾、ロンカ要塞ですか」

遠くからでもその威容が解る。水を入れた堀と厚さ3メートルで高さ10メートルの城壁が四方を覆い、立ち並ぶ側防塔は30メートルにも達する。普段は練兵場として使用する中庭は、有事の際は帝都市民を避難させる役割も果たす。地下には大量の物資

を保管出来るスペースがあり、何年でも戦えるのかなんとか。

ここが落とせたら帝都まではすぐそこ、帝都最後の守りと言うだけあって、強固な要塞となっている。

「普通に戦っても難攻不落なんですがね」

ため息混じりに木村が付け加える。どうも火薬も火器もかなりの量が運び込まれていると言うのだ。

「知つての通り、城を守る兵を破るには倍以上の兵力が必要です。でもコレが銃を揃えて待ち構える相手では、もう倍じゃ済まない。籠城戦では何と言つても射程兵器が重要ですからね」

確かに、城に籠もった剣豪なんて城が落ちる間際にしか役に立たない。かといって弓を引くのも訓練が必要だ。農兵に弓を教え込むのは手間が掛かる。

それが銃ならば引き金を引くだけ、曲射や偏差射撃も殆ど不要だ。農兵だつて熟練の弓兵と同等以上の戦果を期待出来てしまう。

トリガーを引くだけと言うのはソレだけ簡単で、現に訓練も受けていない侍女のネルネが父様にクロスボウを命中させている。

なにより帝国にはそれこそ銃が売るほどあるのだ、城壁や側防塔に、ズラリと鉄砲隊が並ぶ光景がありありと目に浮かぶ。当然だが大砲だつて設置されているだろう。

「うえええ」

想像するだに面倒だ。俺は作戦卓にグデツと身を投げる。

やるとすれば、俺が空からチクチクと削るしか無い。気の長い作業だし持ち前の『偶然』で穴だらけになるに違いないのだ。

「仕方ありません」

そうは言っても、ま、やるしかないよな。俺は椅子を蹴飛ばし、立ち上がる。

「いや、ジツとしてて」

「座ってろ」

飛び出そうとした所を木村と田中に止められた。どうやら違うらしい。

と言う事は、要塞を落とす方法が他にあるのだ。俺はジツと卓上の地図を見つめる。

帝国へは一本道、見事にロンカ遺跡を通過している。平時なら関税の徴収や荷の改めもココでやってしまいうらしい。周囲には目立った地形もなく、平地で戦いを挑むしか無さそうだ。

水はどうか？ 堀に水を張れるぐらいだから、川から水を引いている。しかし城内には井戸もあるらしく、毒を撒いても効果は薄いだろう。地下の備蓄だけでなく、背後の帝都から物資も運ばれるので、兵糧攻めも無理。石造りだから火攻めも効果は限定的。

うーんわからん。唸りながら爪を噛む俺の仕草をギブアップと取ったのか、木村が駒

を卓上に並べ始めた。

「まず、兵をですね……」

「ちよつと待つて下さい」

「ええ……」

もうちよつとで思いつきそうなんだよ、この要塞を落とす一世一代の作戦がさ！

「……………」

「……………」

「……………ぐう」

いや、嘘。全然解らんわ。田中なんて寝ちやつたし、俺も寝て良い？ 今更まるで解

らんとか言い辛いわね。デユフフ。

小首を傾げて木村を見上げ、はにかむ笑顔で誤魔化していく。

「無駄な可愛さ！ はあ、えーと、まずは兵をこう動かします」

木村は駒を摘まんで、要塞から遠く離れた森林地帯に並べていく。

なるほどね、俺もその森が怪しいと思つてたんだ。

「そこまで敵を釣り出すのですね？」

「違います」

「じゃあ、森を焼く？」

「違います、そんな事すれば、姫様以外は全員焼け死にますよね？」

失礼な！ 俺だつて焼かれれば暑いぞ！ この前も焼かれたし。

「ここから狙撃出来る兵器が……」

「ありません」

「じゃあ、じゃあ……」

参った、解らん。

「あの、どうするのですか？」

「森から要塞を迂回して」

「それで！ それで？」

「そのまま帝都を攻めます」

「ふざけんな」

「痛っ！」

駒を掴んで木村にシユート。超エキサイティンツ！

『普通は知識チートで要塞を攻め落とすとコだろ！』

「あ、ごめんなさい、それ品切れなんですよ」

入荷しろ！ ひり出せ！

「いつそ、魔女に習って疫病を流行らせるとか」

「ですからごめんなさい、それは冬場だけのメニューでして」「死ねっ!」

ふざけているけど、本当に冬じゃないと病気を広げるのは難しいと、木村は力説する。「ただでさえ健康値なんて守りのある世界ですからね。この世界に来て10年以上、深刻な疫病の話は聞きませんでした。湿度も温度も低い冬のスールンにはパンデミックもあつたようですが、今は夏ですよ? それに疫病なんて流行ろうもんなら、良いんですか? 復讐どころじゃなくなっちゃいますよ」

……それも、そうか。

「しかし、迂回などすれば、結果的に帝都と要塞の兵に挟撃されるのでは?」

「その為に、射線の通らない森の中、高地を選んで進みます」

「こんな場所、進軍可能なのです?」

「星獣との追いかけっこをお忘れですか? アレに比べれば何でもありませんよ。我が軍の士気と練度は驚く程に高く、山間部の移動も可能と判断しました。地元の道になりませんが、姫様のお陰で近隣の猟師から協力も得られています」

「そう言う事でしたか」

なるほどと頷いたモノの、どうにもスッキリしない。俺は派手に要塞を落としたのだ。最終決戦なのに、活躍の場面がまるで無いではないか。

「で、でもドーンと！ 上空から私が狙撃してみると言うのは？」

「と言う事で、姫様は余計な事をせずに控えて下さい」

「空から偵察など……」

「座つて下さい、それで十分に士気の向上に繋がりますから」

「わかりました、士気の向上に努めます」

「無駄に兵を刺激しないでください、作った服ですがサイズが合わなくなってますよ」

「……………」

完全に封じ込められている。

いや、待てよ？ 俺には秘密兵器がある。ポケットをまさぐると、布面積の足りない

マイクロビキニが。

「しまつて下さい」

「はっ」

流石にコレはないね。

そうして俺達は山間部からの迂回路を巡る事にした。

ロンカ要塞 2

俺達は肅々と山道を進んでいた。

山道と言つても、強行軍でも何でもない。のんきなモノだ。

森の木々は真夏の日差しを木漏れ日に変え、べたつく湿気は涼風で洗い流す、深呼吸をすれば濃厚な緑の匂いが肺を満たし、鳥たちのさえずりが耳に心地よい。

心地よい陽気だ、ハイキングならウキウキで歩いたに違いない。

しかし、兵を率いての行軍中となれば話は別。イライラに足下の小石を蹴つ飛ばす。「かつたるいすね」

ぼやきが口を衝いた。道幅が狭く、羽を広げて歩くと雑草やら木の枝がピシピシとぶち当たる。

「なにも先頭を歩まずとも、後から来て頂ければ十分なのですが？」

木村が肩を竦めてみせる。たしかに今回の行軍は下見のようなモノ。

最低限、装甲車が通れる道幅を確保しなければ、帝都を攻めようにも攻城兵器が運べないからだ。今も後続が下草を狩りながら道を広げているらしい。地味に見えて、むしろそちらが作戦の肝。

俺達は先行して偵察と安全確保をしてるだけなのだから、俺が先頭に立つ必要がないのは、その通り。

だが、間尺に合わない。俺はよそ行きの笑顔で問いかけた。

「そう言うキイムラ子爵が先頭を歩んでいるのは、何かあると考えての事でしょうか？」

「そうですね……」

木村は素直に頷いた。俺は羽を畳んで聞きに回る。

「帝都の戦力は殆どがああ、のロンカ要塞に集められて居る訳です」

「それは聞きました」

「逆に言えば帝都の守りは薄いのです、我々が大砲で城門をぶち抜けば後は市街戦に雪崩れ込みます。帝国は鉄砲隊ばかりを育て、残った騎士も多くはこちらに下つていきます。市街戦なら十分に勝機があるでしょう」

戦車が無い世界。騎馬隊は市街の制圧に最も効果的だと言う。

「なので、敵はこちらが森を通過するのを黙って見ている訳には行かないハズです」

「つまり、威力偵察で釣り出すと言う事ですね」

「そんなちよつかいを出さずとも、向こうからやって来ますよ」

「おいおい、物騒じゃないか。上機嫌になった俺は歯を剥き出しに笑った。

「——ッ！」

すると、俺を見る木村は息を飲んで押し黙る。そんなに怖い顔してたかな？ どうせ化け物なんだ、少し脅かしておくか。

『どうした？ まるで担いだ天使が悪魔だったと、今さら気付いたみたいな顔して』

『いや、物騒な顔も可愛いなって』

『はあ……』

筋金入りの変態だな。負けるわ。

俺はもう、無敵の化け物なんだよ。空から敵を殲滅する姿をお前も見ただろう？ ちよつとはビビったらどうなんだ？ 人間を挽き肉にして食べる女の子はお好き？ だったら変態過ぎてむしろ俺がビビる。

まあ木村は鈍いから良いとして、戦いとなれば異様な鋭さを見せる男はどうだ？

「……………」

『オイ？ 楽しいか？』

気が付けば、黙々と俺の翼に引つ掛かった草とか、木くずを丁寧に除去している男が一人。

「モフッ！」

田中である。

しばらく見ない内に日本語が退化している。かなりウザイ。

あと、たまに羽ごと耷るから痛い。枝毛かな？ 大きなお世話だ！

丁寧にお姫様らしく抗議をしよう。

「……あの、止めて下さりますか？」

「モフツ！ モッフ、モフモフ！」

ダメだ、モフラーが進行している。つーか熱中している。

大雑把な癖に、こう言う仕事はアホほど丁寧にやる男だったりする。一度始めると中々止めようとしれない。良い迷惑だ。

こんなの一人でもうんざりだと言うのに、何故か木村まで、もう片方の翼を毛繕いしはじめ。

「抜けた羽で羽毛布団とか作れないかな？」

「それは俺も欲しいな」

なんでそつちとは普通に会話してんだ。キャラを徹底しろ。モフ語を捨てるな。

「羽毛としてはどうなん？ すべすべで気持ち良いけど」

「真面目に言うのと、ここまで大型だと布団はな。このサイズでここまで艶やかなのは貴重だ、飾りや装飾品に使うかな」

「だよな、綺麗だ、見とれるぜ……」

「……………」

なんだこれ？ 意味不明な照れと、気持ち悪さと、無限に湧き上がるクソ感情。なんて言うかき、木村と違って田中は俺の容姿をあんま褒めないからさ、綺麗って言わせたい気持ちがあつと有る。

だけど、なんて言うかこう、違わない？ 毛並みを褒められても……。

むしろ、アレだよ？ 他に言う事ない？ しばらく見ないうちに羽が生えてるんやぞ？ スールンで再会してから時間も置いて、いよいよナニコレ？ って聞いても良いタイミングじゃない？ スルーするどころか、当たり前みたいに馴染まれてもね。

「モフモフッ！ モフモフッ！」

とりあえず、モフ語で文句を言っておく。

「モフフ？ モフフ、モフモフッ！」

「モフウ」

いや、二人して通じたフリするの止めろ。知能指数が下がる。

困惑していると、田中は急に真面目な声を出した。

「オマエ、俺に毛づくろいなんかさせてるけどさあ」

頼んでないんだが?????

「侍女はどうしたん？」

……そうだよな、気になるよな。それだって、俺は説明してなかった。

「遠いところに居ます、今や私に必要ではないでしょうから」

「ふうん」

納得してないな……

「じゃあ、あのおっかないのは？ 一度ぐらい連れて来ても良いんじゃないか？」

「シャリアちゃんか……」

「彼女も、置いてきました。あちらも物騒ですから守る人間が必要です」

「そうかよ」

嘘をついた。

俺はどうしても、コイツらに、仲間ですら喰つちまう化け物だって、言いたくなくなつたから。

「まあ何でも良いけどよ」

『いいのかよ』

そこは気にしろよ。なにも俺だって、隠しきれるとは思っていないんだ。

「どうやら動いたみたいだぜ」

「それは？」

聞き返す前に森が途切れ、展望のきく崖に出た。二十km先にロンカ要塞がすっかり見下ろせる距離。

だが、異様なのは要塞の様子ではない。そこから溢れ出し、こちらに向かう兵士の数だ。

見下ろすと群がる蟻の如く、余りにも数が多い。

「オイオイ、何人居んだよ？」

「約三千、ロンカ要塞のほぼ全員だ」

いつの間に田中の横に立つ木村が、双眼鏡を片手に答えた。

「こう言うのは数え方があるんだ、面積と密集具合で何となく解る」

「オイオイ、マジかよ」

今ココに居る『ユマ姫親衛隊（笑）』は千人足らず、突っ込んで来られると分が悪い。だったらと、田中は背後に見える俺達の陣地を指差した。そこには今も三千人が詰めている。数の上では同数だ。

「んじやよ、この隙に本隊を動かして、城を落とすしちまえば良いだろ？」

「いや、罨だろ？ どうみても」

「罨でも良いだろ、他に使い所もないし」

確かに、微妙に使い道に困る軍隊だ。

さて、俺達に与えられた、この兵はどこから沸いてきたか？

えっへん、俺が王都で穏健派を根絶やしにしたお陰だ。

ココが好機とヨルミちゃんも張れるだけ張り込んだと言うワケ。

ソレにしたってたった三千。正直ちよつとガツカリした。兵站を考えると出せるのはこの程度が限界らしい。

三千と数字だけ聞いて、少ねえなーとか思ったが、実際に見ると、とんでもない。馬鹿みために多かつた。

ここらは細い道ばかり、平原と違って広く展開することも出来やしない。

今更これだけの兵が居てもつて、ちよつと扱いに困っていたりする。

良く考えれば、前世の中学の全校生徒が五百人足らず。アレが六校分となれば大概だ。

「敵も三千、味方も三千。城の有利はなくなつたし、失敗しても追加で五千や六千動員できんだろ?」

「まあそうだな……」

田中の指摘に木村はバツが悪そうに答える。

「けど事実だ。去年の決戦で捕虜にした兵士はゼスリード平原で農業にいそしんで貰っているが、夏の間なら動員する事も可能。」

すると、親衛隊が千、王都常備兵が三千、農兵が五千で、敵兵の三千を圧倒する。

城と火薬の有利さえなければ、数字的に俺達に負けはない。

「ただ、アイツらぶっちゃけズブの素人だからさあ、銃がなければ突っ込んで行くぐらいしか出来そうにないのよ、ここでソルダム軍団長率いる三千を無駄にしたくない。それにしたって実戦経験は皆無だけだな」

「敵だつて大して変わらねえよ、ここから見たつて練度が低いのが解る」

木村としては罨を考え乗り気じゃないが、田中は面倒だからとつとと戦争を終わらせたがっていた。

田中にしてみりや銃が主体になった集団戦に、興味が持てないだけだろう。

因みに俺も田中と同じだ。『偶然』と言う時間制限もあるのだから、すぐにでも終わらせたい。

じゃあ、どうするか？ 俺がやる事は決まっている。

「では、上空から様子を見てきます」

「オイ馬鹿、止めろ！」

田中が俺の首根っこをむんずと掴む。だけど、そんなんじや今の俺は止まらない。止められない。

「お前ッ！」

田中の顔が驚愕に歪む。

俺が田中の手首を掴み返し、引き剥がしたからだ。今の俺は、単純な膂力ですら田中

を上回る。

「行きます」

「死ぬぞ!？」

「死にませんよ、もう誰も、私を殺せない」

「のぼせんな、馬鹿! 木村、お前も止める!」

「……………」

しかし、木村は動かなかつた。手を伸ばすが、言葉が見つからない様子だった。

そうだ、ちよつと考えれば解る。今の俺を止める必要はない。止める事も出来ない。

田中の言葉を無視して、俺は崖沿いの道から身を投げた。

慌てた田中が俺を追つて崖から身を降り出す、遅い。

「オイ! テメエ!」

「すぐに帰ります」

落ちながら、笑い、応える。普通の人間ならダイナミック自殺だが、今の俺には翼がある。広げた翼に風を受け、魔力で作った気流にのつて飛び上がる。

夏の日差しは羽が溶けると錯覚するほど暑いし、湿度で肌がべたついて服に貼り付く。

だけど、ソレすらも気持ちが良い。俺は戦いの予感に酔っていた。



【山中：残された二人】

「行っちゃまった」

崖の端に座り込み、田中は舌打つ。しかし慌てたのは彼だけではない。飛び去ったユマ姫を見て、今まで様子を見ていた周りの兵士達も堪らず集まりだしていた。

「今のは？ 姫様はいずこに？」

……寄つてたかつて問い詰められても、木村にだつて答えられない。

しかし、予想は立つ。

「敵は全軍をこちらに向けて進軍しています。要塞はもぬけの空でしょう。我々は徐々に後退し、敵を引きつける。その間に姫が空から要塞の残存兵力を確認した後、常備兵を率い、から空きのロンカ要塞を落とす。そのつもりでしょう」

「馬鹿なっ！ 罠です」

「誰だつて解らあ！ 何故止めなかつた」

兵士は勿論、田中も非難轟々だ。そうだよな、と木村は思う。

しかし、止められなかつた。ここまで敵は、恐らく皇帝は、黒峰から聞きかじつた生兵法に徹していたからだ。

面白おかしく語るに値する有名な戦術は案外少ない。一つは焦土作戦、もう一つは

……。

『空城の計』の可能性がありません」

「クウジヨウノケイ……とは？」

日本語の解らない兵士が木村に尋ねる。

「城を敢えて空にして、罾と誤認させる事で手控えさせる作戦です。我々の世界では、その隙に兵を逃がした将がいました」

「つまりアレか？ あの前兵士は俺等を蹴散らした後、攻めるに攻められなかった常備兵を小馬鹿にしながら、まんまと元の帝都に戻ろうとしてるって事だな？」

「その可能性はあるでしょう」

割って入った田中に木村が頷く。

このまま俺達に迂回されてしまえば、ロンカ要塞は死に兵だ。安全に帝都に戻りたくなくても不思議じゃない。

しかし、兵士達、それに田中も難しい顔をした。

「そんなのは、樂觀が過ぎる。違いますか？」

「そうだが、それはそれとして、罾を仕掛けても罰はあたらねえ」

そう言われても、木村が行かせた訳ではない。その可能性が頭にチラついて、どうにも止められなかっただけなのだ。

これがまともな戦略家が相手なら、木村とて確実に罨だと断言出来る。

だが、皇帝は聞きかじった知識を試している。帝都まで目前に迫られたこの期に及んで空城の計など不合理な作戦を試すのも、あり得ぬと言いつれ切れない。

相手が幼稚だからこそ、木村には先の手が読めなくなっていた。

「罨か、罨でないか、姫様はそれを単身見極めるつもりなのです」

ほぞを噛む思いで言葉を絞り出す木村に対し、兵達は感極まった様子で震えていた。

「つまり、我々の事を思つて、無駄に兵を死なせないため、ユマ姫様は危険な偵察任務を引き受けたのですね？」

そうとも言えるし、そうじゃないとも言えた。少なくとも木村はそんな事ひと言も頼んで居ないからだ。だが、兵士達はそうは思つていなかった。

口々にユマ姫をたたえ、盛り上がる。

『クウジョウノケイ』あり得るからこそ、この隙を見逃せなかつたのか」

「どうして俺達に相談してくれないんだ！」

「馬鹿言え、そんな事したら俺達が止めると知っているから、姫様は俺達に解らない神の言語で二人に相談したんだ」

「クソツッ！ 我ながら情けない。こんな時の為に、俺はタナカ殿から二ホンゴを習つて来たと言うのに！」

「俺もだ、なのに俺なんて、ただモフモフ言ってる様にしか聞こえなかったんだぞ?!」

……ソレは本当にただモフモフ言っていただけである。木村は頭を抱える。

「皆さんの気持ち、姫様も嬉しく思うでしょう。しかし、こうなったらもう、ユマ姫様の為にあの三千の兵をなるべく遠くまで引き寄せるしかありません、皆さん覚悟は良いですか?」

「キイムラ様!」

「やりましょう、一人でも多くコチラに、城に戻れない距離までおびき出しましょう」

兵達は盛り上がり、戦意も旺盛に、迫り来る敵軍を睨んだ。

ホツと息を吐く木村であるが、田中は一人、ユマ姫が飛んで行った空を見続けた。

「アイツ、本格的に一人で戦争する気かよ」

愚痴りながらも田中は踵を返して、今来た道を戻ろうとする。

バイクを取ってこようとしているのだ。馬で進むのも躊躇われる山道、バイクで併走しても魔石がもつたいたいないと、後続の装甲車に乗せていた。

田中は姫を追う気だ。

「待てよ!」

木村はソレを呼び止め、小声で尋ねる。

『今のユマ^{アイツ}姫は強いじゃん? 罠とか有っても大丈夫じゃないの? 何がそこまで心配

なのよ?」

木村だつて見たのだ、スールーンに迫る帝国軍を空から蹂躪するユマ姫を。彼女は空に浮かび、時折銃弾に撃たれながらも、何食わぬ顔で攻撃を続けていた。

彼女はもう人間の武器では死なないのではないか? 心配する必要がないのではないか、そう思つたのだ。

だが、あろうことか田中が心配している。今まで、ユマ姫が炭化して下半身だけの姿になつたときですら、ここまで心配していなかつたのに。

「アイツは、もう自分が死なないと思つてやがる」

「そりゃ、不死身じゃないだろうが、銃弾ぐらいでは死にそうにないか?」

「どうかな?」

田中は肩を竦めてた。

「今のアイツなら、俺は斬り殺せる自信があるぜ。アイツは強くなった。でも、脆くなつてる。……昔の方がよっぽどマシだ」

「オイオイ」

物騒な言葉に、木村は嫌な汗が止まらなかつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は空高く飛び、大きく迂回してロンカ要塞を指した。真つ直ぐ向かうと三千の敵

軍と鉢合わせしてしまうから。

空からは軍の動きが手に取るように解る。俺が空から指揮をするだけで、十分なチートになるだろう。自由に動く翼はグライダーで飛ぶよりずっと制御が楽だった。

だから二人と別れてから二十分と経たずロンカ要塞に辿り付いた。圧倒的に早い。

「綺麗だな」

真夏の太陽を受けた石造りの要塞は真っ白で、周囲の草原は緑の絨毯、剥き出しの中庭はクレヨンで塗ったみたいな茶色に見えた。

まるでオモチャの城だ。四角い枠みみたいな城壁の角には大きな塔が立ち、真ん中には茶色の地面が覗いている。

外から見えない中庭に、巨大兵器でも並んでいるのかと警戒していたが、杞憂だったみたいだ。

罨と見せかけて何も無い。こう言うのなんて言うんだったかな？ まあ良いや。

飛び込んでみれば、解る事だ。

大きく翼をはためかせ、弓なりに背を反らす。

それだけで、くるりと世界が反転し、地面が頭上に、太陽が足下に。

翼を畳むと、青い地面から追い出され、石と土で出来た空へと吸い込まれていく。天地が逆さまになった世界。俺は垂直に落下した。

この世界、バリスタも、大砲も、真上を攻撃する方法など一つもない。

瞬間、足下で分厚い雲が太陽を隠し、原色で彩られた世界が終わり告げた。

まばゆい日差しに慣れた目に、色のない世界が訪れる。

輝く白い城壁は、くすんだ灰色の檻となり、中庭の茶色い地面は、真つ黒な奈落へ変じてしまった。

まるで俺を地獄へ飲み込もうと、待ち構えているようだった。

錯覚だ。自信満々の気持ちとは裏腹に、どうやら俺は不安を抱いているらしい。

鼓舞するように、俺は奈落のど真ん中に飛び込んだ。

地面スレスレを待って翼を広げる。折られたみ傘を開いた時の衝撃を何十倍も強くしたみたいな力を背に受けて、ふわりと体が浮き上がる。

強烈な浮力に任せ、体を反転させれば、空は頭上に、地面は足下に。

常軌を取り戻した世界を祝うように、太陽が雲を振り払い、原色で彩られた世界が再び現れる。

「静かですわね」

思わず呟いた。つま先から静かに着地したのは中庭のど真ん中。消え失せた奈落は

茶色の地面へ戻っていた。見上げる白い城壁もだ。

何が俺をそんなに不安にさせたのか、その原因をようやく悟った。

余りにも静かなのだ。

人っ子一人現れない。人間が空から降ってきたのだ。誰か一人ぐらい気が付いても不思議じゃない。なにより、俺はスールンで空から何人もの帝国兵を屠った。きつと空がトラウマになるほどに。

なのに誰も空を見上げず、気が付かないなんて、あり得るだろうか？

『まあ良いや』

日本語で呟いて、目を閉じる。そっちが居留守を決め込むなら、勝手に調べさせて貰う。

運命の光を覗くのだ。しかし、冷たい城壁は何の気配も映さない。

「本当に、誰も居ない？」

いや、居た。たった一人。中庭の片隅に物置みたいな小屋。その中に一人。

「お邪魔します」

可愛らしく宣言して、踏み込んだ。思った通りの物置小屋。石造りの小屋の中には、鞍や蹄鉄といった馬具に、煤けた箒、凹んだ盾などが雑然と置かれている。

一見して、なにも陰謀めいた場所ではない。けれど俺は、二階へ上がる階段に運命の

輝きを見た。階段状の隠しタンスは見た事があるが、ここでは人が入れる隠し部屋にしているらしい。

入り口は……見当たらない。まあ良いか。俺は積まれた石垣を掴み、引き出すと、ぽっかりと小さな穴が開く。

「みーつけた」

「なっ? どうして?」

小さな暗がりには、男が一人、隠れていた。

その驚きようと来たら、中々のモノだった。考えてみれば無理もない。無人となった要塞で、たった一人隠し部屋に残って中庭の様子を窺っていた。そこに空から少女が舞い降りたのだ。この時点で非常識。

それが真つ直ぐに自分の所にやってきたかと思うと、石垣を素手で引き抜き、中を覗き込んできたのだから、ホラー以外の何物でもないだろう。

「まさかッ! ユマ姫! お前一人か?」

「そうですよ? あなたは?」

と、尋ねると、会話の最中男は不自然な仕草で壁を三回叩いた。何かの合図? でも他には誰も居ない。

ああ、地下へ伝声管が伸びている。居るのか、地下に、仲間が。

そこで、ソイツは何をやっている？

「地下にお仲間が？ 何をやっていますか？」

俺がそう問うと、ビクリと体が跳ねた。バレバレだ。

「何でも無い、何にも無いさ」

有ると言つてるようなモノ。トンだ素人だ。俺は石垣に手を突っ込んで、男の首をむんずと掴んだ。逃げようにも、極狭い空間、逃げ場などどこにも無い。

「言いますか？ 言いませんか？」

そのまま壁に埋まるほど押し付ける。男は口から泡を吐き、抵抗を続けた。

「あつ」

ゴキリつと折れる感触。首の骨をへし折ってしまった。力の加減に失敗した。

まあ、良い。まだもう一人居る。石垣を蹴飛ばし崩して、隠し部屋に飛び込んだ。思った以上に狭い。男が一人しやがみ込むだけのスペースだ。アイツはこんな不自由なスペースで何を待っていた？

直接聞いてみれば良い。

「こんにちは、ッきげんよう」

俺は鈴が転がるような可愛い声で囁いた。伝声管の向こうから、息を飲む声が聞こえて来る。

「お、お前は、一人か？」

上擦った声で、返事が返る。

「ええ、一人よ。あなたは？ わたし会いたいわ」

「あ、うつ」

「私は、ユマ姫よ。二人つきりで会いたくない？」

「く、来るな！ 来ると、死ぬぞ」

殺すぞ、じゃなくて、死ぬぞ？ なんだろう？ 意味が解らない。

「ねえ、どうやったらそっちに行けるの？ わたし早く会いたい」

「来るな、止めろ。死ぬぞ！」

意味が解らない。いや、死ぬぞ？ 幼稚な印象の男の声。ひよつとして死のうとして

いんち

「わたしの事、知ってる？ 最期にユマ姫に会ってみたいと思わない？」

「あ、ぐう……」

案内してくれるかと勝負に出たが、黙ってしまった。もう、話し掛けても返事がない。さて、どうしよう。伝声管は地下へと伸びている、それも運命光が見通せぬ程の地下だ。どうにかして地下に行かねばならない。

俺は物置小屋を飛び出すと、地下への階段を探した。この手の城の構造は大体予想が

つく、地下に物資を保管しているなら、門から荷車で入って地下へと運び込む動線があるはずだ。

あつた、門から轍を追いかけると北の側防塔に入っている。門を叩き壊して入城すると、すぐ横に地下へと続くスロープがあつた。

時間が勿体ない、駆け下りるとそこには地下とは思えぬ巨大なスペースが広がっていた。

物資の保管庫だ、雑然と弓や武器、馬具などが積み上がっている。コレが罨ならば、物資は当然持ち出されていると思つていた。しかし、武器防具はおろか、火薬までしつかり残っている。

しかし、食料は無い。別の場所に保管しているのか、見当たらなかつた。なんなんだ？ コレは。

何よりおかしいのは、人の気配がまるで無い事だ。走り回つて探す、運命光も見えない。

ドコだ？ いや、もつと下か？ ギユツと目を瞑つて光を探す。

「居たー！」

更に下に微かな光がある。しかし、ドコにもこれより地下に続く通路は見つけられない。魔力を流して探知を図るも、隠し階段などありそうにない。空間が存在しないの

だ。

いつそ地面を破壊するか？ そう考えただけで、首筋にチリリと痛みが走る。運命が削れた、要塞が崩れて、俺は生き埋めになってしまふのだろう。

では、どうやって更に地下へと潜るのか？ 考えても解らない。

俺の探知を掻い潜る高度な建築など、この世界にあるのだろうか？ いや、ひよつとして、初めから地下があつたのではないか？

木村が言っていた。この世界、人口規模の割に立派な建物が多い。平原での大決戦に一人程度程度の兵しか動員出来ない国が、十メートルを超えるの城壁を築くのは、いっそ不合理とさえ言っていた。

ソレを可能にするのが基礎だ。あらかじめしつかりした基礎が築かれているから、工期を短縮出来るのではないかという。

つまり、立派な建物の下を調べると、古代遺跡の残骸や基礎がある。その可能性は高いと言う。

だとしたら、この地下にも古代の遺跡があつてもおかしくない。そこへは、まっとうな階段で繋がっていないのではないか？

俺は側防塔を飛び出して、再び中庭に。その隅に古ぼけた井戸を見つけた。

きつと、ココだ。

「また、古井戸の中ですか」

魔女が待つ場所に潜った事を思い出す。俺は翼を畳んで、井戸の中に飛び込んだ。

ロン力要塞 3

地下への入り口を探して、俺は井戸へと飛び込んだ。

何故って、地下への階段がどうしても見つからなかったから。

地下に秘密の部屋があるのは確定している。無人の要塞で、たった一人隠し部屋に潜んでいた男は、地下へ延びる伝声管で『誰か』に話し掛けていたからだ。

慌てて俺は地下保管庫を搜索したが、そこでは人っ子一人見つけられなかった。

だけど、魔力を巡らせると更に下にスペースがある事が解った。運命光で誰か居るのも確定。しかし、どうしてもそこへ繋がる階段が見つからない。

そこで思い出した。この世界の大きな建造物は、古代遺跡の基礎を利用して作られている事が多いらしい。

だったら、真つ当な入り口がなく、たまたま繋がってしまった場所があるだけかも知れない。

すると一番怪しいのは井戸。

そうして俺は水の張られた井戸の中に身を投げたのだ。

覗いた時から解っていたが、この井戸、かなり深い！ どうやってここまで掘ったのだろう？

ボチャンと水音がして俺の体が着水したのは、飛び込んでからしばらくたった後だった。

地下水は冷たいが、なにせ真夏の陽気だ。むしろ気持ちが良いぐらい。困ったのは、井戸が深く、真つ暗で何も見えない事。

『我、望む、我が身に光の輝きを』

真つ暗な井戸の中、魔法の光で照らし出す。

光の珠を浮かべるのではなく、自分の体が発光する魔法。制御が不要で、こう言う時にすこぶる便利だ。

この魔法、セレナと二人で成人の儀を受けた時の事を思い出す。私よりずっと魔力が多いセレナが、この魔法に驚いていたっけ。

俺は冷たい水の中に沈みながら、しみじみと昔の事を思い出していた。

すると、思った通り、井戸の底に横穴がある。迷わず入り込むと、うねる横道は排水パイプみたいの上に向かって捻れていた。

良く考えれば当たり前か、そうでないと地下が水浸しになってしまう。

ゴ丁寧にハシゴまでついていた。これで、誰かがココを使っているのが確定した。

水面から這い上がり、そのまま穴から這い出した。行き着いた先はだだっ広い空間に、どこまでも続く暗闇だった。

自分の呼吸と心音だけが、耳に痛いほど響いていた。ぼんやりしていると静寂と暗闇に吸い込まれそうになる。

俺は魔法を使えるから構わないが、ただの少女なら恐怖に震えていただろう。

いや、俺も震えていた。ただし寒さにだ。地下室で濡れ鼠となると流石に寒さを感じる。

まず髪の毛を、次にスカートの端を絞って乾かす。客観的に見ると、この仕草、女の子っぽくて可愛いんじゃないかな？

その上、うっすら発光しているせいで、ブラウスが思いつきり透けてしまっている。ちよっとサービシし過ぎだろうか？ でも、まあこの位は良いだろう。

どうせ見るのはたった一人だ、そいつも直じきに死ぬ。

「ヤッ……」

思った通り、古代遺跡のなれの果て。しかし、生きた遺跡ではなさそうだ。思い出すのは前世の地下駐車場。コンクリート打ちっばなしの簡素な内装だ。

俺が這い出てきた穴は、ちょうど排気ダクトだったようだ、ダクトがたまたま井戸に繋がってしまったのだろうか？

しかし、まあ、拍子抜けだ、危険な古代兵器などはドコにもありそうにない。

ズラリと並んでいる樽は、全て真新しいモノだった。保管庫に入りきらない分をココに運び込んだだけだろう。

「いえ……違う？」

良く見れば、同じ種類の樽ばかり。一つ選んでたたき割ると、真つ黒な粉がパンパンに詰まっていた。中身はなんだ？

「火薬……ですか」

まあ普通か、戦争となれば大量に消費するだろう。拍子抜けした思いで、俺は呪文をとなえる。照明の魔法だ。

『我、望む、この手より放たれたる光の奔流よ』

薄暗い地下室に光の珠が舞い散ると、まばゆい光に包まれた。そうして見渡せる様になった地下空間は、想像以上に広がった。広いと思つた要塞地下一階の保管庫より、尚広い。だだっ広い空間が昼間のように照らし出される。

「これは……」

俺は今度こそ驚いた。

目に飛び込んだのは見渡す限りの樽。全部、さつきと同じ樽。

これが、全部、火薬？　こんなのが引火したら……。

ゴクリとツバを飲む。今の俺でもタダでは済まない。

コイツら、俺達を引き込んだ後、要塞もろとも爆破する気だったんだ。さつき殺した男は、兵士が入城したタイミングで合図して、もう一人の男が地下からコレだけの火薬を爆破する。

やはり罠。だけど、俺が一人で来たもんだから着火するのをためらっている。

「ふっふっ」

甘く見てくれるじゃないか。要塞一つをなげうつて、小娘一人じゃ割に合わないと侮ったか？

後悔するぞ！ 万の軍勢よりも、俺の方が厄介だと思い知らせてやる。

！
明るい中で、あえて目を瞑る。途端に運命光が浮かび上がった。やはり、ここに居る

俺は気のない素振りで積み上がった樽の間をテクテクと歩いた。それでいて、少しずつ対象に近づいていく。

待ちきれないのか俺の歩みは自然とスキップに変わっていた。ひとつ♪ ふたつ♪ みつつ！

踏み切った先、もう対象は目と鼻の先、一気に駆け出した。

コレだけの火薬、着火されたら堪らない。運命光が隠れる樽の影へと、走り、すべり

込む。

居た！ たった一人！ 小太りで風采の上がない男である。しかし着ている服は上等なモノ、ただの市民ではないだろう。ただし、大貴族とか、将校つて貫禄は無い。小綺麗な姿なれど、やる気が見えない表情が、冴えない印象を与えていた。

貴族の三男坊つて見た目である。こんな所に一人で居るのは似つかわしくない。

俺は男の奥襟を掴むと、そのまま地面に引き倒した。力も弱く、戦う男じゃないことは、それで解つた。

「え？ えっ？」

錯乱する男を無視して、腹の上にドツカリと座り込む。俗に言うマウントポジションだ。

「ごきげんよう、初めまして」

マウントポジションのまま、俺はニツコリと笑いかける。

「え？ 何？ だれ？」

男はまだ事情が飲み込めていなかった。俺は大げさに首を傾げ、上目遣いで甘えた声をだす。

「あら、先ほど挨拶させて頂いたと思うのですが？ では、改めまして。私はユマ・ガーシエント・エンディアン。エルフのユマ姫ですわ」

クスクスと可愛く笑った。自分でも、マウントポジションにする挨拶ではないと思う。こんな女の子が現れたら、恐怖以外の何物でもないと思うのだが。ひたすら鈍いのか男はまだ呆然としている。

「さ、さっきの！ ホントに来たのか！ 冗談かと、ここへどうやって……」

「勿論、井戸に飛び込んで」

「え？ あ、どうしてココが解ったの？」

「それ以外に入り方が解りませんでしたから」

答えたようで、答えになってない返事で馬鹿にする。だけど、まだ男は事情が飲み込めて居なかった。

「あの、外は？ 連絡が来なくなっちゃって、外はどうなってるの？ 兵士は来た？」

やっぱり、外から連絡を貰い、折を見て自爆するつもりだったのだろう。しかし、俺が単身乗り込むイレギュラー。

「いいえ、私はたつたひとりでココに来ました」

「そうなの？ あの、いや、ココは危ないよ。すぐに逃げた方が良い」

……なんだか調子が狂ってしまう。そして、話が噛み合わずイライラする。

女の子らしく、優しく聞き出してやろうと思ったが埒が明かない。もう良いか。

そうだよな、遠慮する事なんてないんだ。

俺は尚もズレた寝言を口にする男を無視して、ギユツつと拳を握り締め、そのまま男の顔面に打ち下ろした。

「ギャツ！ 痛いッ！ なんで？」

「乙女を前に、マナーがなつてませんわ。女性に名乗らせて、自分は名乗らないおつもりですか？」

「あー！ えっ、その……でもね、それはちよつと」

何も喋るなど言われている。そんなところか？

こんな意志のない男にそんな命令、意味がないだろうに。俺が拳を握り締めて微笑むだけで、男は大慌てで名乗りを上げたのだ。

「ぼ、僕は、アルサ・ランバード。ランバート家の三男で、えと、階級は中尉」

本当に三男坊だった。それで中尉ってのも、貴族が軍に押し込まれた時の最低ランクみたいな所がある。

「じゃあ、どうしてアルサさんはこんな所に一人で居たの？」

「いや、それは」

また言い淀む。

馬鹿かよ、そんなのは見たら解るんだ。さっさと喋れ！

「この樽は、全部火薬ですね？」

「え、あ、うん」

「あなたは合図があつたら、この火薬に火を付けて、敵軍もろとも自爆しようとしていた。違いますか？」

「そ、それは、あの……」

クソツッ！ イライラする。言えよ！ 派手に自殺しようとしてたんだろ？ 敵軍をたつぷり三千巻き込んで、派手に死のうと決めてたんだろ？

それがこんな小娘に看破され、今まさに失敗しようとしている。

もつと悔しそうにしろ！ 何なら嬉しそうにしろ！ ぼんやりするな！

「あなたは王国兵三千を道連れに死のうとしていた、違いますか？」

「……………」

とうとう何も言わなくなってしまった。

噤んだままの顔面に、俺は無言で拳を打ち下ろす。バキリと鼻が折れた。

「イギイ！ 痛いッ！ 痛っ！ なんで？」

「言いなさい！ 今更黙り込む意味が何処にある？ 言え！」

「そんな！」

ゴミみたいな男だ。

知恵も、度胸も、何も無い。この期に及んで黙りこくる意味なんて何も無いのに、ま

だ事態が飲み込めて居ないのだ。

苛立つて仕方が無い、俺は黙って拳を振り下ろす。

「グエツ！ あう」

だが、俺の今の脅力でぶん殴り続けられれば、数発で死んでしまう。手加減しなくては。そうして何発も殴りつけ、前歯も折れて、顎の骨も折れた後、ようやく語ったひと言は余計に俺を苛つかせた。

「そ、そうだよ、兵士が来たらココを爆破する。だから危ないんだ、早くココから逃げ、なるべく遠くまで」

「……キイウウウ」

ボケた言い分に変な鳴き声が出てしまう。自分でも、呆れる程の怒りが駆け巡る。

逃げてつて、馬鹿かよ！ 頭がクラクラする、血が沸騰しそうな程に苛立つ。

深呼吸を一つ、おれは努めて冷静に問い直す。

「私が逃げたら、要塞の地下にはたっぷりの火薬があると、罨だと言いますよね？ そしたら誰もこんな所に近寄りませんよ？」

「ええっ？ それは困るよ」

困るよじゃねーよ！ 死ぬよ！ 馬鹿との会話に血管がブチ切れそうだ。

腫れ上がった顔で焦るアルサの懇願は、余計に俺を苛立たせた。

「なるべくなら、ソレは秘密にしてくれると……助かる」

「馬鹿がつ！」

俺は思わず、下品に叫んでしまった。

もう、限界だった。

「秘密にするとか、しないじゃねえよ。既に作戦は失敗！ もうココに兵士は来ない。

お前は、一人で死ぬ！」

あーやだ、下品に罵ってしまったわ。

いや、もう、ホント苛立つ。コイツはまだ事態を飲み込めていない。

「そんな！ 困るよ！」

「困ってる！ クズが！ お前はまともに自殺すら出来ず、無意味に死ぬんだ。帝国は

滅亡、ランバート家とやらも全員処刑だ馬鹿！」

イライラが止まらない。

「なんで？ そんなの、止めてよ」

いい加減、頭が悪過ぎる。

だからこそ、こんな自爆を命じられたのか。そう考えるといつそ哀れだ。

「お前は使い道のない無能だから、ココで火薬に火を付けて死ぬと言われたんだろ？」

「そんな事ない、命を投げ打って、帝国を勝利に導く誇り高い任務だつて」

「本当に、そう思ってるのか？」

「……………」

「解ってるんだろ？ 体の良い在庫処分だ。帝国の得意技さ。騎士様だって、戦場でゴミみたいに捨てていったよ」

「そんな…………」

ようやくと飲み込めた所で、俺は可愛く微笑んだ。

「あなたを捨てた人たちに、一泡吹かせてみませんか？ あなたに命令した指揮官は？」

「この作戦の立案はどなた？ 火薬の残量は？ 帝国の様子はどうなっていますか？」

「捨てられたんじゃない。僕がやりたいって言ったんだ」

「…………素直に言わなければ、苦しむ事になりますよ」

俺はピツと人差し指を立て、微笑む。ゆらゆらと指を振れば、訳が解らぬとアルサが目で追ってくる。そのままスイツツと指し示す先は、ブクブク太った柔らかかなお腹。

俺はそのままズブリと突き刺した。

「があ！ グギヤアアア」

「言いませんか？ まだ苦しむのですか？」

指を引き抜き、顔を寄せ、上から覗き込んで、アルサの間近で聞いてやる。

脂汗でグチャグチャになった男は、絞り出す様に言った。

「あ、う、喋ったら、どうなるの？」

「えーと」

俺は血まみれになった指を顎にあて、ワザとらしく思案してからニツコリ笑って教えてやる。

「楽に殺して差し上げます！」

苦しんで死ぬより、良いでしょう？ そう言うと男はパクパクと口を開き、呟く。

「だったら、言わない！」

「そうですか」

それは助かる。俺は拳を振り抜いた。

「グエ、ガフツ」

殴る度、蛙が潰れたみたいな音がする。殴られた声すら汚い。素直に吐かれたらどうしようかと思っていた。イライラして仕方無かったから。

「グゲエ」

殴る所もなくなり、いよいよ悲鳴すら聞き苦しくなつて、俺は再び問い詰める。

「喋る気になりましたか？」

「い、言わない」

「どうして？ そんなに義理立てするような恩でもありますか？」

「ない、ないけど」

「けど?」

「一人で死ぬよりも、三千人を道連れに死んだ方が良いと思った」

「……それで?」

「でも、君に殴り殺される方がずっと良いから」

「……………」

それも、そうか。

俺の前世の一つ、男の嗜好を読む事に長けたプリルラ先生は、コイツをマゾと判定しなかった。どちらかと言うとサディスト。だから油断した。

でも、そんな判定は極限状態じやなんの意味もない。簡単にひっくり返る。

コイツは、俺に嬲られて、それで死にたいんだ。

そして、無性に苛立つ自分の気持ち、やっとならした。

コイツは、俺だ。

この世界、貴族の三男として生まれると、いい歳になればバックアップの意味もなくなる。自分一人で生きていく気概もなく、家では厄介モノ扱いされて、終いには軍に押し込まれた。もちろん軍でもお荷物扱い。

それが敗色濃厚になればどうなるか?

前線に立たされてゴミみたいに処分される

のが目に見える。

お先真つ暗だ、いつそ死にたいと願った。コイツはそれほど追い詰められた。

だけどコイツを追い詰めた王国の兵士達は、コイツの名前だつて知らない。知ろうとしない。貴族だから名ばかりの階級はあるが、司令官でもなんでもないヤツなんて居ないも同じだ。

だけどここで自爆すれば、そんな兵士を三千人も巻き込んで死ぬる。

コイツは本当に志願したのだ。

下らない人生を終わらせる一世一代のチャンスだったから。

俺も、そうだ。『偶然』を押し付けられて、それを利用して魔女に、帝国も、いや王国だつて巻き込んで、下らない世界を全部道連れに死にたいと願った。

帝国の民だつて、殆どは戦争の顛末さえ知りもしないだろう。でも知らないからこそ、思い知らせてやりたいのだ。

ココに俺は居るぞ！ と。

ハッキリ言つて八つ当たりだ。

薄汚い自分を見せつけられた気がして、無性にイライラした。だから苛立ちのまま殴り殺そうとしたら、抵抗もしない。

それはそうだ、テロみたいな自爆をするよりも、可愛い女の子に殺して欲しい。俺

だってそう思う。痛いほど、気持ちが解る。

……だけど、俺は俺を止めてくれる女性を殺してしまった。

何だか殴り殺すのすら癪に感じて、俺はアルサにのし掛かったまま、ぼんやりと考え込んでしまった。

それがいけなかった。

「ッー」

首筋に、激しい痛み。俺は天井を見上げた。この痛みを知っていたから。

冗談だろうと思うけど、ハッキリと解ってしまう。馬鹿みたいだと笑うしかない。

「また?」

隕石が、落ちる。

『偶然』め、どうやっても俺を殺したいか! ぶ厚い城壁に囲まれた要塞。さらに隔絶された地下。そして、見渡す限りの火薬。

俺を殺すならココがチャンスと、そう言う訳か?

「ふふふ、ハハハッ」

笑ってしまう。笑うしかない。何だコレは。どう足掻いても、結局、死ぬのか。

下らない、馬鹿馬鹿しい。全部、無駄だった。

「なに? どうしたの?」

ゲラゲラ笑う俺と、呆然と見つめるアルサ。

こんな所で、この冴えない男と心中か、クソ同士で死ぬのがお似合いって事かよ。

いや、そうだな。

「アルサさん」

「な、何？」

「火薬は、どうやって着火する予定だったのですか？」

「それは……」

案内されたのは壁のそば、伝声管の横に導火線が延びていた。ココから着火するつもりだったのが見てとれる。

単純な仕掛けだった、一目で解る。

唯一解らなかつたのが、既に火が着いていた事だ。

「な、なんでだよ？ 僕、何もしてないのに」

「……………」

『偶然』に殺されるぐらいなら、自分から派手に死んでやろうと思つたらコレか。

良く見ると、導火線は小さな箱に繋がっている。

どうせ、この情けない男が思いとどまる可能性を考慮して、時間が経つたら自動的に着火する装置が仕掛けてあつたのだろう。

そうでもしないと、この男が尻込みすれば大量の火薬と物資がコチラの手に渡ってしまふ。これぐらいの保険は打ってしかるべき。

「何で？ 何でえ！」

みつともなく泣き喚くアルサを白けた目で見つめる。火を消そうと踏みつけているが、火薬が混じった導火線はそんなもんじゃ消えない。

いや、それにしても着火が早過ぎるな。要塞の保管庫には火薬以外にも、大量の物資が残されていた。

あれだけの量だ、発見した王国軍は迷うに違いない。罾かもしれないけど物資は惜しい。でも、運び出すのも時間が掛かる。そうやってモタモタしている内に、まとめて爆発する算段だ。帝国軍は目一杯張り込んだ。

だとすれば、着火までには長い余裕を持たせたはずだ。このタイミングで爆破するのは間尺に合わない。

……つまりコレは『事故』だろう。

この手の時限着火装置は、誤作動を起こしやすい。水が蒸発する速度とかで調整するのが精々だから、アルサがちよつと揺らすだけであつさり時間が狂う。

結局はコレも俺の『偶然』のなせるワザ。小娘一人殺すのに、隕石に加え城一杯の黒色火薬。何とも念の入った事だ。つくづく面白く無い。

「も、もうダメだあ……」

そして、苛立つのがコノ男、アルサだ。

お前はどのみち死ぬ気だったんじゃないのか？ 何を今更、悲しんでるんだよ。結局は覚悟もないのか。見ているだけでイライラする。

「私と一緒に死ぬのでは、不満ですか？」

自然と口をついた。こんな美少女と死ぬるなら本望だつて喜べよ。三千の兵と死ぬよりよっぽど良いだろうが。

しかし、アルサは喜ぶどころか、ハツとした様子でまじまじと俺の顔を見る。

「そ、そうだ！ 君だけでも逃げない」と！

どうも、俺を逃がしてくれるらしい。まあ、今からココを出ても隕石が落ちるんだが。井戸を這い出て、濡れた翼を広げ、魔法で飛びだすのに十分は掛かる。無駄に時間を使った今、絶対に間に合わない。

「ココ、コッチ！」

そう言つて、俺の手を握ると、俺が入ってきた通気口へと走り出した。やっぱり入り口はココしかないらしい。

つまり、もう、手遅れだ。

「早く、早く！」

俺を先に通気口に押し込んで、ヨタヨタと自分も乗り込んで来た。

「ダメだ、間に合わない」

どうもあの導火線に火が着くと五分もせずに爆発する仕組みらしい。

ちようど、隕石の落下と同時にぐらいか、『偶然』の調整たるや、ダメだと言うしかない。

「井戸、井戸の底なら！」

ソレは俺も考えた。あの深い井戸の底、爆風だつて水で減衰する。

だが、大丈夫だったとしても、ここまで執拗に俺を殺そうとしてくる『偶然』に俺は疲れてしまっていた。気が進まない。

「早くー！」

でも、必死に俺を助けようとするこの男に免じて。俺は井戸に飛び込んだ。

続いてアルサも井戸に飛び込む。

水の底、暗い井戸の中、アルサが俺に抱きついて、爆風に備える。

ああ、こんな場所で、こんな男と死ぬのか……。

俺の体を、真つ白な閃光と爆音が貫いた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

沸騰する水の中で、アルサは自分の人生を振り返っていた。

名門ランバート家の三男として生まれ、自由もなく、自由もなく。ぼんやりと生きている内に、気

が付けば三十路、家では腫れ物のように扱われていた。

帝国の危機を救つて欲しいと兄から頼まれる形で軍に入ったが、こんなのは厄介払いに過ぎないと、鈍いアルサにだつて気が付いていた。

厳しい軍での生活。能力も無く、甘えた性格のアルサは苛烈な虐めに遭い。死のうと思つた事も数え切れない。

そんな中で耳にした決死作戦。爆弾を使い、三千の兵を道連れにする。アルサは身を乗り出して立候補する。

命懸けで帝国の危機を救い、歴史に名を残す。幼い頃からアルサはそんな妄想を続けていたからだ。

数々の英雄譚を読み漁り、自分に重ね、妄想の世界に生きてきたアルサ。だけどいつしか自分には不可能なモノだと諦めるようになっていた。

それに手が届く、一騎当千の勇者になれる。それが嬉しかった。それが、ただの生贄だと気が付いていたのに。

ドキドキと心臓が脈打つ。暗闇の中で、アルサはかつて感じた事が無いほどの緊張と興奮を味わっていた。

決死の秘密作戦、静寂の中で伝声管に耳を澄ます。「まだか？」と何度も急かして、隠し部屋に潜む情報部の男を呆れさせた。

情報部の男は自爆を命じた後、脱出する手はずだ。死ぬのは自分だけである。まさに捨て駒。

それが、却ってアルサには嬉しかった。三千人殺しの英雄は、自分だけだと思えたから。

そんな興奮を吹き飛ばしたのは、情報部の男の叫びだった。

「なんだ！ アレは？！」

トラブルかと思った。しかし、違った。

「天使？」

その眩きは耳を澄ますアルサに、ハッキリ聞こえた。

「馬鹿な？ アレはまさか？」

それきり黙りこくる情報部の男に、アルサは必死に呼びかける。しかし情報部の男は伝声管を塞いでいた。ユマ姫に見つからない様に、呼吸さえ控え息を飲んでいて。アルサはそんな事知る由も無い。

ヤキモキする中、次に聞こえて来たのは、まさに天使の声だった。

「こんにちは、きげんよう」

ただの挨拶。だけど、それがアルサにもたらした効果は劇的。

可愛い声が伝声管を伝い、天使が耳元で囁いた。脳みそをくすぐられたアルサは息を

飲む。

「ただ、異常だった。情報部の男はどうしたのか？ 三千の兵士はやって来たのか？」

「お、お前は、一人か？」

「なんとか絞り出す。」

「ええ、一人よ。あなたは？ わたし会いたいわ」

「あ、うっ」

美しい声の主、会ってみたいと心底思った。だけど、それはマズい。

「私は、ユマ姫よ。二人つきりで会いたくない？」

ユマ姫、森に棲む者の悪魔。だけど、本当なのだろうか？ 話に聞いていたよりも、

ずっと可愛らしい声。

きつと、アルサを騙すため。無関係な少女に名乗らせているのだと、アルサは思った。

「く、来るな！ 来ると、死ぬぞ」

「ねえ、どうやったらそつちに行けるの？ わたし、早く会いたい」

「来るな、止めろ。死ぬぞ！」

「罠だ、それぐらいアルサにも解った。こんな罠に、何も知らない少女を巻き込むなんて王国は外道に過ぎる。」

アルサはそう思おうと、何とか自分に言い聞かせる。

「わたしの事、知ってる？ 最期にユマ姫に会ってみたいと思わない？」

「あ、ぐう……」

「だけど、解ってしまった。」

「何度も耳元で囁かれる内に、解ってしまった。」

「彼女は本物だ。だからこそ、こんなに心がざわめくのだ。彼女は本物の悪魔だ。超常のモノ、人間とは違う、だからこんなにも心を揺さぶるのだ。」

「暗闇の中で蹲り、アルサは脳に入り込んだ悪魔を打ち払う。」

「まだ火薬に着火は出来ない。直前に届いた合図は三回。作戦保留の合図だ。恐らくは情報部の男は、あの悪魔に殺された。」

「殺された？ あの甘い声の悪魔に？」

「それが羨ましいと思うってしまう自分に気が付き、アルサは息を飲んだ。あれだけの間に、悪魔に洗脳されている自分に気が付いたから。」

「いや、違う。こんなのは女に相手にされない自分の妄想だ。アルサは頭を振る。」

「きつと情報部の男が娼婦と遊びに行ったのだ、その際に、初心な自分が娼婦からからかわれただけ。きつとそうだ。こんなイタズラは何度も経験した。」

「本当にそうか？ アルサは錯乱した。幾ら伝声管に尋ねても、もう返事は返らない。どれぐらいそうして居ただろう？ ブルブルと震えていると、突如世界がひっくり返

る。

「え？ えっ？」

違った。ひっくり返ったのは自分だった。気が付けば、自分のお腹の上に、可愛らしい少女がドツカリと座り込み、笑顔でアルサを見下ろしていた。

「ごきげんよう、初めまして」

天使だと思った。本当に。

可愛らしい声、そして姿。しつとりと濡れた桃色の髪、幼げな顔立ちに大人びた表情、お腹に感じる小ぶりなお尻、投げ出されたすらりと長い足。天使の証明とばかり、大きく広げた翼。

そして何より、濡れそぼったブラウスからは、匂い立つような艶めかしい肌が、うっすらと透けて見えるのだ。

思わずゴクリとツバを飲んだ。

アルサには、少女の存在そのものが輝いて見えた。何で天使がこんな地下に？

「え？ 何？ だれ？」

「あら、先ほど挨拶させて頂いたと思うのですが？ では、改めまして。私はユマ・ガーシエント・エンディアン。エルフのユマ姫ですわ」

「さ、さっきの！ ホントに来たのか！ 冗談かと、ここへどうやって……」

質の悪い娼婦が、自分をからかっているのだとアルサは何度も自分を言い聞かせてきた。

「だけど、違った。そんな女とは、まるで違う！」

「あの、外は？ 連絡が来なくなっちゃって、外はどうなってるの？ 兵士は来た？」

「いいえ、私はたったひとりでココに来ました」

彼女は、本当に天使だった。

「そうなの？ あの、いや、ココは危ないよ。すぐに逃げた方がよい」

アルサがそう言うと、拳を握り込む少女が見えた。その暴力的な仕草があまりにも不釣り合いで、それが却って、狂おしい程に可愛くみえた。

「ギヤツ！ 痛いツ！ なんて？」

「だけど、振り下ろされた拳の威力はとてもじゃないが可愛らしいモノではなかった。

「たちまちアルサは屈服した、何もかも洗いざらい話してしまう。そうして気が付いた、このままじゃこの美しい少女も死んでしまう。」

「そ、そうだよ、兵士が来たらココを爆破する。だから危ないんだ、早くここから逃げ、なるべく早くまで」

「……キイウウウ」

可愛らしい声で、少女が鳴いた。それが合図だった。

取り繕ったボールが剥がれ、醜悪な本性が姿を現す。

天使が悪魔に変わってしまった。だけどアルサには、その悪魔の本性すら、いや天使の外面よりも尚、可愛らしく思えてしまうのだ。

見とれてぼんやりとしていると、更に殴られた。

「グベツ」

「私が逃げたら、要塞の地下にはたつぷりの火薬があると、罨だと言いますよね？　そしてたら誰もこんな所に近寄りません！」

「ええっ？　それは困るよ」

英雄の妄想が、最後の夢が、壊れてしまう。

アルサは情けなく懇願する。

「なるべくなら、秘密にしてくれると……助かる」

「馬鹿がつ！」

更に殴られる。頭がクラクラした。可愛い声で口汚く罵られる。

「秘密にするとか、しないじゃねえよ。俺にバレて押さえ込まれてる段階で作戦は失敗

！　もうココに兵士は来ない。お前は、一人で死ぬ！」

悪魔に騙されて、結局何もなせずに死ぬのだと、無情に突きつけられたのだ。

最後に残された自分の存在意義すら否定されてしまった。

「そんな！ 困るよ！」

「困ってる！ クズが！ お前はまともに自爆すら出来ず、無意味に死ぬんだ。帝国は滅亡、ランバート家とやらも全員処刑だ馬鹿！」

天使な少女が、悪魔みたいにアルサを罵る。不思議と、脳が灼けるほどに快感だった。「なんで？ そんなの、止めてよ」

「お前は使いだのない無能だから、ココで火薬に火を付けて死ぬと言われたんだろ？」

「そんな事ない、命を投げ打って、帝国を勝利に導く誇り高い任務だって」

「本当に、そう思ってるのか？」

「……………」

「解ってるんだろ？ 体の良い在庫処分だ。帝国の得意技さ。騎士様だって、戦場でゴミみたいに捨てていったよ」

「そんな……………」

解っていた。解っていたから目を逸らしていた現実を突きつけられた。

絶望モノだ、全部台無しにされた。目の前の少女は憎むべき存在だ。

でも、少しも嫌では無い。ボロボロに殴られ、傷つく事すら快感に感じて、アルサは激しく混乱する。

まさに少女は悪魔だった。

凶悪な笑顔から一転、猫なで声でアルサに迫った。

「あなたを捨てた人たちに、一泡吹かせてみませんか？ あなたに命令した指揮官は？」

この作戦の立案はどなた？ 火薬の残量は？ 帝国の様子はどうなっていますか？」

「捨てられたんじゃない。僕がやりたいって言ったんだ」

「……素直に言わなければ、苦しむ事になりますよ」

そう言つて、立てた人差し指。不安げに目で追うと、信じられない事に、根元までアルサのお腹に突き込んだ！ そのまま柔らかな内臓をかき回す。

生まれて初めて味わう、激烈な痛み。

「があー！ グギヤアアア」

「言いませんか？ まだ苦しむのです？」

美しい顔がアルサの眼前に迫り、優しく囁く。

アルサはすっかり屈服していた。こんな小さい少女にみつともなく屈服する事が、堪らない喜びですらあった。

「あ、う、喋ったら、どうなるの？」

だから、期待を込めて尋ねる。

「えーと」と声を出し、わざとらしい程に可愛い素振りで、悪魔は悩んでみせる。すっかり自分の命が玩具にされている。それがどうにも心地よかった。

少女がどんなに残酷な提案をしてくるのか、楽しみですらいた。だけど少女の回答はアルサが望んだモノでは無かった。

「楽に殺して差し上げます」

それで喜ぶと、少女は本気で思っ居るようだ。だけどそんなのは嫌だ。

「だったら、言わない！」

「そうですか」

そうして、ただひたすらに、猫が小鳥をいたぶるように延々と殴られた。

アルサは軍の中で、上官や、部下にさえ、いつも苛められて過ごしていた。こつぴどく殴られた事は何度も有る。

だけどソレとは全然違う、ずっと酷い！ ずっと痛い！ 数十倍は苛烈であった。

なのに不思議と、少女に殴られ、屈服し、死ぬるなら、本望だと思えてしまう。

しかし、幸せは続かない。目を細めた少女が尋ねる。

「喋る気になりましたか？」

「い、言わない」

「どうして？ そんなに義理立てするような恩でもありませんか？」

「ない、ないけど」

「けど？」

「一人で死ぬよりも、三千人を道連れに死んだ方が良いと思ってたんだ」

それは掛け値無し、それがアルサの本心だった。こんなクソツタレた世界を傷つけて死ぬるなら、なにより楽しい最後だと思ったから。

「だけど、違った。」

「……それで？」

「でも、君に殴り殺される方がずっと良いから」

「……………」

言うてから、アルサはしまったと思った。きつと、気持ち悪いと軽蔑された。

コレじゃあ、もう傷つけてくれないし、殺しても貰えない。すると残るのは、自爆さえ出来なかった情けない自分だけになってしまふ。

「いっそ殺してくれと頼もうかと悩んでいると、少女は壊れたみたいに笑い出した。」

「ふふふ、ハハハッ」

「なに？ どうしたの？」

アルサが不安になって尋ねると、少女は柔らかに微笑んだ。

「アルサさん」

「な、何？」

「火薬は、どうやって着火する予定だったのですか？」

「それは……」

そこに少女を案内した、ここ数日籠もっていたこの場所で、少女に殺して貰おうと思つたから。

だけど、なぜだろう。すでに導火線に火がついていた。このままじゃ、すぐにでも爆発する。

「な、なんでだよ？ 僕、何もしてないのに」

アルサは少女に殺して欲しいと願つた。だけど、少女には生きていて欲しかった。

自分を殺した少女に、代わりに生きて欲しかった。でも、これじゃソレも叶わない。

「何で？ 何でえ！」

慌てふためく、一方でその様子を不満げに見つめるだけの少女が、信じられない言葉を吐いた。

「私と一緒に死ぬのでは、不満ですか？」

その時、初めてアルサは理解した。この子も自分と一緒になのだ。この少女もまた死の方を探していたのだ。

だからこそ、少女の中身を知る程に惹かれていたのだと。悪魔だからじゃない。同類だからこそ、少女に自分を理解して欲しかった。

「そ、そうだ！ 君だけでも逃げない！」

何かないか？ 生まれて初めて本気で願った。生まれて初めて本気で悩んだ。そして、閃く。

「井戸、井戸の底なら！」

少女の手を握り、二人で駆け出す。

二人きりの逃避行、それがどうにもくすぐったくて、忘れていた青春が蘇る。

楽しかった人生が巻き戻り、昔の事を思い出す。

子供時代、自分だけ理不尽に叱られて、立たされていたとき、庇ってくれた少女が居た。

彼女の手を取って逃げていたら、今頃どうなって居ただろう？

その少女の顔がユマ姫に置き換わる。ねつ造されたアルサだけの走馬灯が、脳内にゆっくりと流れていた。

「早くー！」

少女を井戸に押し込むと、水の中で少女に覆い被さる。

この世の全ての理不尽から、一人の少女を守る為に。

爆音と閃光に体を貫かれながら、アルサは思い出す。

そうだ、本当の本当は、こうやって好きな少女を守って死にたかったんだ。

消えゆく意識の中で、叶った夢を宝物みたいに抱きしめた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「う…………ん」

意識がゆっくりと浮かび上がる。

ココは？ 俺は、どうして？

体が痺れる、声を出そうと持ち上げた舌が、形を保てずベチャリと崩れた。内部からズタズタになっている。

そうだ、思い出した。俺は隕石と火薬のど真ん中で井戸に飛び込んで。

……そして、死んだ。

強烈な爆発は、衝撃波となって水を揺らした。電子レンジに突っ込まれたタマゴみたいに俺の体はズタズタになり、内部から崩壊した。

とんでもない爆発だったに違いない。井戸の中、地下深く、水に浸かって居たハズだ。抉り出されたクレーターの深さと、残らず蒸発してしまった水の存在が、爆発の強さを教えてくれた。

でも、俺には星獣から受け継いだ回復能力がある。電子レンジみたいな衝撃に晒されたのはきつと一瞬。外傷もなく、破壊された細胞はすぐに回復した。

それでも、普通の人間なら即死だ。回復能力で生き残っても、一度壊れた脳細胞から記憶は失われ、廃人になっていただろう。

死ぬのはコレで二度目だ。だからこそ、さつきまで死んでいた自分を強く自覚する。今も意識が残っているのは『参照権』のお陰に過ぎないと確信する。

でも、これで生きていけると言えるのだろうか？ これではゾンビと変わらない。

見渡せば、それこそポストアポカリプスな終末世界の有様だった。

グチャグチャの瓦礫の山、溶けてひしゃげた兜や鎧が雑然と転がる。生き物の姿など何処にもない。

巨大に抉れたクレーター、そのど真ん中で、死んで、生まれて、たった一人だ。

ぐらぐらと頭の中で声がした。

生きていて、何の意味がある？

一見、綺麗に見える俺の体だが、中身の神経はズタズタに千切れている。指一本動かすのもかかったるくて、息を吐く。

誰も俺の疑問に答えてはくれない。

そこでようやく気が付いた。俺に覆い被さる様に、べちゃりと貼り付いた肉片に。

いや、良く見ると上半身だけは原型を保っている。まだ生きているのかと錯覚するほどに。

慌てて手を動かして、撫でた。それだけで、薄くなり始めた髪の毛が、肉ごとゴツソリと剥がれて落ちる。

当たり前だ、死んでいる。アルサの変わり果てた死体だった。それが何故だか、無性に悲しい。あんなにも苛立つ男だったのに。

……それにしても笑ってしまふのはアルサの顔だ。どうにもこうにも幸せそうな死に顔ではないか。

俺の胸で息絶えた冴えない男、アルサは穏やかに笑っていた。

……そうか、そうだよな。

誰だつて一人で寂しく死にたくない。

誰からも必要とされず、捨てられたみたいに死ぬぐらいなら、世界を巻き込んで死にたいと願う。俺だつてそうだ。

でも、それよりも美少女に殺されたいと望んだ。確かに、ソレこそが生きるのを諦めた男にとって最高の慰めだと、俺も思った。

だけど、だけど、更になががあつた。

俺には解る、男だつたら誰だつて懂れる。お伽噺みたいな結末を。

女の子を守つて、それで死にたい。

コイツは、本当に望んだままに死ねたのだ。

コイツが身を挺して守らないでも、肉壁一個だけじゃ何も変わらなかつただらう。現に俺は死んでいる。

同じように死んで、同じように生まれただろう。

だけど、たった一人生まれ寂しさが、気付けば何処かに飛んでいた。

救われた気持ちで、胸にへばりつく死体を眺める。

いやしかし、アレだけの火薬、そして隕石。それでも原型を保っているのはどうしてだろうか？

城壁が壁になり、衝撃が逃れる所もない。俺達はさながら、打ち上げ花火の筒の中に居たようなモノ。全て弾けて消えてしまうのだと思った。

さらには蓋をするように、隕石まで落ちてきた。星獣だって粉々になる隕石の火力を俺は良く知っている。

ひよっとして、爆発が相殺した？

戦車には爆発反応装甲と言うのがあるという、自分から破裂して、衝撃を拡散するんだとか。いやしかし、そんな奇跡があり得るだろうか？

神は言っていた。俺の『偶然』は皆が俺を守りたいと願う事で、少しだけ力を失うと。皆がシュレディンガーの猫を心配し、終始観察していれば、箱の中で猫が人知れず死んでいる確率は下がる。

解るようで解らない話だが、俺は信じてみたいと思った。

アルサが守りたいと思った気持ち、俺を助けてくれたのだと。

俺はぼんやりと、真夏の太陽を見つめていた。少し陰り始めているが。大して時間は経っていないかった。

この爆発だ、しばらく助けは来ないだろう。

「おーい」

そう思っていたら、間拔けな声がした。

田中だ。

「生きてるか？ 死んでるなら死んでるって言え。あつ生きてた！」

クレーターの端から顔が覗く。気配に敏感なコイツの事だ、とつくに解ってるだろうに、ふぎけた男である。

颯爽とクレーターを滑り降りると、枕元で俺を見下ろす。

「死んだか？」

死んださ。目で訴える。

「待ってろ、スグに助ける」

しかし、俺はその申し出を目で断った。今動く、体が内部から崩壊するからだ。田中は鋭いやつだ、ソレですぐさま手を引つ込めた。

それに、しばらくこうして空を眺めていたい。

アルサ
コイツを腹に乗せたまま。

そうしてぼんやりしていると、田中が訊ねる。

「なあ、お前は どうして生きてるんだ？」

……そう言われても、俺にも解らない。復讐のためだが、その為にもっと大切なモノを失った気がする。

それでも、生きたい。どうしてだろうか？

……いや。

俺は腹の上のアルサをジツと見つめる。

コイツの為だ、コイツみたいに俺を守って死んでいった、マーロウにゼクトールさん、殺してしまったシノニムさんだって俺の中で生きています。

家族の復讐、それだけの為だけじゃない。生かしてくれた人の為に、生きている。

だったら、こんな死に方はダメだ。俺は声を絞り出す。

「生きる為に、生きています」

誰かが生かしてくれたから。誰かの命で生かされている。

そうだ、だから俺は。

「ガブツ」

アルサの死体に噛み付いた。柔らかく、血が蒸発した肉は、案外に旨かった。生臭さ

がなくて、しっかりと肉の味がする。

そんな俺に、呆れた様に田中が問う。

「旨いか？」

「あげませんよ」

これは、俺のだ。

だけど、どうかかな？ アルサは人を食う俺を、気持ち悪いと嫌うだろうか？

きつと嫌がらない。俺なら、可愛い女の子に喰われるのも悪くない。

昔は交尾したら食われてしまうカマキリのオスを無惨だと思つたが、そうでもない
と、今は思える。

田中は羨ましそうにコチラを見ていた。

どちらにだ？ 死体を喰う俺か、喰われる男にか？

「旨そうに喰うね」

「そうですか？」

「なあ？ 俺が死んだら俺も喰つて良いぜ」

「ふふっ」

そうだよな、口を真つ赤にしながら俺は笑つた。

聖女伝説1

「とくと見よ！ コレが魔王ユマの姿だ、皆、石を持って！」

閑散とする帝都の目抜き通り、ズルズルと台車を引き摺る集団が現れた。

帝都の治安維持隊である。

勇ましい兵士達、派手なパネルを乗せた台車を牽いて往来のど真ん中を進む光景は、一見すると楽しいパレードの如くであった。なのに、鬱々とした雰囲気全てを台無しにしている。

参加を強制された人々の顔は暗い。道行く人は渋々と石を持ち、パネルへと投げつける。

「魔王め！」

「帝国の怨敵、許すまじ！」

口々に魔王ユマの描かれたパネルをなじり、石を投げる。ただし、誰も本気ではない。そればかりか、そそくさと逃げる者まで居る。

兵士達はツバを飛ばして怒鳴りつけた。

「ソコの者！ キサマも石を投げるのだ！」

捕まったのは、道行く一人のシスターだった。突如として腕を引かれ、警棒を突きつけられると、困惑を露わに泣き声をあげる。

「え、え？　なんですか？」

何事と身をよじる姿に、兵士達は思わずツバを飲む。薄い修道服は少女シスターのスタイルの良さを隠し切れていなかった。

「お前も石を投げるのだ！　さあ！」

「あの、ドコに、ですか？」

「ドコってお前」

良く見れば、少女シスターは両の目を黒地の目隠しで覆っていた。これではパネルなど見えようはずがない。

「おまえ、その目は？」

「あの、わたし生まれつき目が……」

「そ、そうか」

ならば、パネルに石を投げるなど不可能。仕方無く、兵士は少女シスターの手を取り、石を持たせる。職務に忠実な男だった。

なれど少女シスターの手は滑らかで、兵士の心をかき乱した。

「あ、う、この石をあちらのパネルに投げるんだ、軽くていい」

「は、ハイ。解りました、アツチですな」

少女シスターの声は涼やかで、夏の蒸し暑さを忘れさせた。

「あの？ パネルには何が描いてあるのですか？」

「ああ、敵将のユマ姫だよ」

「それに石を投げるって……」

「神の使いを自称するユマ姫を崇める奴らが、帝都にも少なくないんだ。そいつらを炙り出そうと上も必死だよ」

「は、はあ……一体、どんな絵が描いてあるのですか？」

不思議そうに聞かれて、兵士は小声で囁いた。

「化け物さ。背中には翼、口は耳まで裂けて、獣みたいな尻尾や耳まで生えてやがる。空を自在に飛び回り、人間を食い殺すんだとよ」

「まあ！」

「馬鹿みたいだよな、そんな生き物、居る訳ねえのに。けど上は本気で怯えてるんだ」
自嘲気味に囁く兵士の耳に、ドゴンと大きな音が聞こえた。

不思議に思つて前を見ると、大変な騒ぎになっていた。

「な、なんだ？ パネルが粉々だ！」

「ど、どうなってる？」

目を離れた一瞬で、パネルがひとりりで壊れてしまった。突然の事態に同僚達は大きに慌て、嘆いている。

呆然とする兵士は肩を叩かれ、振り返る。

ニツコリと微笑む少女シスターと目が合った。もう、石は投げた様だ。

「では、私、行きますね」

「あ、ああ」

笑顔があんまり可愛くて。兵士はその後ろ姿をぼんやりと見送った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おい、ソツチに行くんじゃない」

「え?」

「そつから先は地獄だ」

帝都の外れ、薄暗い路地へと迷い込んだシスターに声を掛けたのは、地面にへたり込んだ老人だった。

「悪い事は言わねえ。ソツチはマズい。なんでこんな所に来た?」

「こんな所とは?」

「お前、目が!」

シスターは目隠しをしていた。遊んでいるのでなければ、目は使い物にならぬのだろ

う。

「そりや、余計にマズい。そんなんじや猛獣の前に飛び出すウサギだ。喰われに行くよ
うなものだ」

「喰われについて……」

「例え話じゃないぞ」

そう言つて、枯れ木のような手でゴザをめくると、伏せる体には足がついていなかった。

「それは……」

「喰われたんだよ。後ろからぶん殴られて、気が付けばこの様。まあ俺にしたつて喰える死体でも無いかとスラムに立ち入ったんだから、人の事は言えないがな」

「まあ、そんな!」

「俺はココで死ぬ。死んだら今度こそ誰かのエサだ。ココはそう言う場所だ、近づくん
じやない」

言いながらも、見えないハズのシスターが哀れな自分の姿に反応した事に、おやと不思議な感じがしたが、盲目の者なりに特殊な感覚でもあるのだろうと老人は深く考えな
かった。

現に、シスターは全く物怖じせず自分に向き直り、淡々と自分の仕事をこなそうとす

る。

「あの、祈らせて下さいませんか？」

「馬鹿言え、今更祈られたって何にもならねえ」

「でも、さつき死んだようなモノって、ならば死者に祈りを捧げるのは当然ですよね？」

「そりや……」

死んだも同然なら、死ぬ前から祈っても同じ。余りにも合理的考えだが、口とは裏腹に生にしがみつくと老人には、受け入れ難いものがあつた。

冗談まじりにからかいの声を出す。

「どうせなら、殺しちやくれねえか？ このまま生きてまま腐って死ぬぐらいなら、お嬢

ちゃんに殺された方がマシだ」

「そうですか」

「悪い、冗談だ。言ってみただけだよ」

そんな事、出来るはずがない。こんな少女に人殺しなど。

ゴミみたいな路地裏で、ひっそりと腐って死ぬのだと老人は覚悟を決めていた。

……だが。

「死にたいですか？」

「なに？」

「私に殺されるのは、嫌ですか？」

「そりゃ」

良く見ると、少女の顔は目隠しをして尚整って見えるし、体つきは年頃からは考えられない程の色気を放っていた。

「悪く、ないかもしれん」

気が付けば、そんな事を呟いていた。

すると、少女はゆっくりと手を伸ばす。

「そうですか」

「いや、そんな」

こんな少女に、そんな事が出来るはずがない。そう思っていた老人は、最期に神を見た。

「お、おおっ！」

神を信じぬ老人が、神に祈った。

目隠しを外した、シスターの相貌に女神セイリンの面影を見たのだ。

——ゴキリ。

そして、最期に首の骨が折れる音を聞き、意識は永遠に暗転する。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「お前、その荷物を置いていけ」

スラムに立ち入ったシスターは、すぐさま四人の男に声を掛けられた。

ナンパではない、その証拠に男達はスカーフで顔を隠し、手には不格好な棍棒を持っている。

「まあ、どなたです?」

「お前、目が!」

「丁度良い、黙ってその荷物を置いていけ」

シスターは大振りな『何か』を引き摺って歩いてきた。ゴザに包まれて全貌は窺えないが、少女シスターには不釣り合いなほど大きな荷物だ。

「ソレは何だ!」

好奇心に駆られ、男の一人が尋ねると、得たりとシスターは頷いた。

「お肉です、炊き出しでも出来ればと思ひまして」

シスターの言葉に、男達は色めき立った。肉など何日も食べていないのだ。

最後に食べたのは……思い出そうとして、殴り殺して足を千切った老人の姿を思い出してしまう。顔をしかめたのも一瞬、マジマジとシスターを見つめる。

「おいおい、コイツあ」

「楽しめそうだな」

「馬鹿言え、そのまま売っぱらった方が良い」

物騒な会話を前に、きよとんとシスターは首を傾げる。

薄手の修道服は体のラインをハッキリと晒している。中に収まるすらりと長い足や肉付きの良い体まで、容易に想像がついた。

顔だつて通つた鼻や、ほつそりとした顎だけで、潰れた目を補つてあまりある美しさだ。

これならば、今のご時世でも買い手には困らない。教会を敵に回すのは怖いが、このまま餓えるよりよっぽどマシだ。

「あんたシスターなんだろう？」

「俺達に恵んでくれないか？」

「寂しい息子に、施してくれや」

口々に下卑た声を掛けられて、それでもシスターは動じなかった。

「炊き出しを手伝つてくれるのですか？」

「違えよバァーカ！」

「俺達が欲しいのは、その体よお」

ふむ、と考え込んでから、シスターは男達を諭した。

「何かを求めるなら、まずは同じだけ差し出さなくてはなりませんよ？」

「何言ってやがる?」

馬鹿にする声を質問と判じたのか、シスターは胸を張る。

「私の体を求めるなら、まずは体を差し出すべきです」

「へえ……」

よつぽど炊き出しに人手を欲しているらしい。しかし、シスターは美しく、男達は女に餓えている。

体を差し出せと言われれば、別の解釈をするまでだ。男達はシスターを売り払うプランを修正する。

「求められたら仕方ねえよな?」

「ああ、男なら答えねえと」

男達は粗末な服を脱ぎ捨てると、シスターの修道服に手を掛ける。困惑したシスターは尋ねた。

「あの? 炊き出しを手伝ってくれるのですよね?」

「ああ、勿論だぜ」

そう言つてゲラゲラ笑い、修道服をめくりあげようとした。

「!?!」

だが、シスターの手に押さえられ、少しも動かない。細い体からは考えられぬ、異常

な腕力。なのにシスターはニコニコと笑うのだ。

「ありがたい、ひとつでは足りないと思ってたんです」

その笑顔は、男達が見た事が無い程に、美しいモノだった。

しばらくして、日が暮れたスラムに子供の声が出る。

「お兄ちゃん、炊き出しが出てるんだって！」

「ふざけんな、誰がするんだそんなもん」

スラムに施しをしていたお優しい貴族様だって、とつくに帝都を逃げ出している。

後に続こうにも門は締め切られ、逃げ出す事も出来やしない。少ない食料は全て軍部に押さえられてしまった。

今ではスラムに鼠一匹、それどころか大きな虫だって見かけない有様だ。

子供達は下水道の細道に、身を寄せ合って暮らしていた。見つければ大人に喰われてしまう。

この前は、足を千切られ喰われる老人をこの目で見た。

大人達は、魔王ユマが人を食らう恐ろしい化け物だと喧伝して回っているが、子供達に言わせれば、人を食らう化け物は既にそこらに闊歩していた。

帝都には、人が作る地獄が顕現していた。

だけどまだ、人の世を諦められない子供も居る。

「でも、シスター様が炊き出しを」

「教会か、なら」

貴族が無理でも、教会ならばこのご時世に食料を隠し持っていて不思議じゃなかった。

とは言え、無条件に信じる事はリーダーの少年に許されない。

「罨かも知れない。一網打尽に喰われちまうかも」

「でも、このままじゃ」

子供の身で、何日も喰わずに生きる事は不可能だ。夏だからマシだが、それでも夜の下水道は容赦なく体温を奪っていく。

「行くか、薄いスープでも温かいだけでごちそうだ」

イチかバチかの賭け、最後に夢ぐらい見ても良いと、少年は立ち上がる。

しかし、ソレを訂正したのがシスターから直接に話を聞いた少女だった。

「ううん、お肉たっぷりのおスープだって」

「そりゃあ良い！」

やけっぱちで飛び出した少年少女は、シスターの炊き出しにありつけた。

そこには多くの肉が骨ごと煮込まれていたという。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「お前が炊き出しをやっていると言うシスターか」

ザワリとスラムの空気が震えた。

ついに炊き出しの場に兵士がやって来たからだ。シスターの炊き出しでなんとか命を繋いで来た者達は、シスターを守ろうと必死に兵士の行く手を遮る。

「馬鹿め、どけどけ！」

しかし、食い詰めのスラム住人と、職業軍人では体格からまるで違う。180cmはある兵士に対し、立ち塞がる者は150cmあれば良い方で、守るべき少女シスターと変わらぬ身長だ。

まるで大人と子供、足止めにもならない。

「ほほう、麦粥に、肉まで入っていると」

兵士が配られた碗を見やれば、今の時分では中々に豪勢だ。門を守る兵士でもここまでの料理を食べられないのが現状だった。

「なんですか、あなたは！　ちゃんと並んで下さい！」

そして、突っかかって来る少女シスターはふつくと血色も良く、美しい。兵士は舌なめずりせんばかりに、シスターの腕を掴んだ。

「この食料はどうやって手に入れた！」

「それは……私の個人的な伝手^{ツテ}で……」

「ほほう、それはそれは」

兵士の目がキラリと光った。コレは使える。現在帝都は王国軍に包囲されているが、目聡い者は抜け出して王国軍から食料を買い取っていると聞く。

だとすれば、おおかた少女の美しさに目が眩んだ王国の兵士が、こつそりと流しているに違いなかった。

「こつちに来い！」

強引にシスターを攫おうとする兵士の行く手を、小さい幼女が遮った。

「お姉ちゃんを連れてかないで！」

それは、スラムの住人の総意であった。少女シスターがどこからか持ち込む食料こそが、住人にとって最後の希望だったから。

しかし、兵士ですら厳しい食糧事情、どこからか食肉を調達するシスターが目を付けられるのは当然と言えた。

「うるさいどけー！」

「きやつ」

「やめて、その子に酷い事しないで！」

「ほう」

幼女を蹴飛ばすと、シスターは身を挺して守ろうとする。ソレを見て兵士は使えるところを判断した。

「よし、お前もついて来い！」

「いやー！」

兵士は幼女を担いでしまう。

そうして連れ込まれた詰め所の中、シスターは兵士達に警棒で小突き回されていた。

「きゃっ！　痛いッ！」

「オラ！　食料を隠し持っていたそうだな！」

「スラムのゴミ共には良くて、帝都を守る我らには供せぬというか！」

体格の良い大の男六人に囲まれて、少女シスターは滅多打ちにされてしまう。

肉体的にも精神的にも少女に耐えられるはずがない。

散々に恐怖を与え、頃合いとみたところ。兵士達は人質に連れて来た幼女を外へと投げ飛ばし、その小さい背中を踏みつける。

か弱い悲鳴が、辺りに響いた。

「なにををするのです！」

傷だらけの体に構わず、シスターは幼女を追いかけて外に這い出た。

人質の効果に満足した兵士は、顎で命じる。

「その荷車に食料をたっぷり載せてこい」

「コレに？」

「そうだ、三日以内にな」

「三日……」

兵士にしても、シスターを殺す訳には行かない。こうして人質を使い、食料を横流しさせる必要があった。

三日の猶予だつて恩情ではない。どうやって城壁の外にいる王国兵に連絡を取るのか知らないが、その位の準備は必要に思えたからだ。

しかし、少女シスターは首を振る。

「三日も要りません」

「そうか？　ならば明日に」

「一刻で十分です」

「なに？」

そう言つて、スタスタと兵舎の中に戻つていく。その足取りは、散々に小突かれた女のモノと思えぬ程にしつかりしていた。

男達は理解不能な少女シスターの行動に顔を見合わせる。

「どういふつもりだ？」

問い正す言葉も無視し、兵舎の中心に居座った少女シスターは、その場でくるりと一回転する。

ゴン、ゴン、ゴン、ゴン、ゴン、ゴン、ゴン、

六回、音がした。

それは固いモノが落下する音。詰め所の中で、小気味良いほどリズムカルに響いた。

兵士達は突如低くなった目線に焦り、互いに目を見合わせるも、そのまま視界は暗転する。

恐らくはその瞬間に至っても、何が起こったか解らなかつたに違いない。

最期まで。

それから程なく、スラムの広場で不安に身を寄せあう人々は、怪我一つなく戻つて来たシスターを見てホッと胸をなで下ろした。

「ご無事でしたか!」

「当然です、見て下さい! 兵士達がお肉を提供してくれたんですよ」

そう言つて、シスターは牽いてきた荷車を見せつける。中には肉が山と載っていた。スラムの人々は快哉を叫ぶ。

「おおっ」

「ユマ姫は、自由に隕石を落とせるのだ」……と。

大変な誤解だが、俺を狙った直撃弾とは誰も信じない。なにせ、当の俺が生き延びている。

そして帝国軍は隕石の衝撃に情けなくも転げ回った。爆発の衝撃は彼らの理性を残らず奪ってしまったからだ。

一方で俺達の軍はどうか？ 奴らには初めてでも、ユマ姫親衛隊にとつては二度目の隕石だ。皆が目を瞑り、耳を塞いで、衝撃に備えた。結果として、木村が指揮する親衛隊は散々に帝国軍を追い回し、三千の兵を帝都の中に押し込めた。

いっそ、帝都に入り込んで虐殺する事だつて出来たと言う。でも木村はやらなかった。

「あなた抜きで帝都を落としても、意味がないと思いましたが」

チラリとコチラを窺う木村は、晩夏の日差しを遮る幕舎の中で、ひっきりなしに書類にペンを走らせている。

「それはそうでしょう。ココまで来て、寝ている間に全部終わりました。では納得出来ません」

そう言つて、俺は金のスプーンでアイスを頬張った。物欲しそうにする木村にも、アイスを渡してやる。

暑い時のアイスは旨い、口に運んだ木村はホッと一息つく。

「帝都では食糧難に喘いでいるのに、コレは贅沢ですね」

「そうなのですか？」

近隣の農村ではそんな様子はなかった。むしろ、牛馬が多く、大変に賑やかだった印象なのだが。

「奴らはゼスリード平原の穀物を当て込んでいたのです。それで畜産を増やしてしまっただけです」

「そうでしたか」

もしもの為に備蓄すべき小麦まで使って、家畜を殖やしてしまっただけらしい。

そして、いよいよと畜するかと言う時に、俺等が攻め込んだ。更には略奪も俺が防いでしまった。

だから余ってしまうほどに牛乳があるのか。俺はアイスをパクついた。

隕石が落ちた後、俺はボロボロになった体を癒やす事に務めた。だけど魔力は腐るほどある、退屈した俺に振られた仕事は牛乳の分離だった。

目当ては日持ちする脱脂粉乳、保存食やスープの素に大活躍だと言う。

そうして、大量の生クリームが生み出された。コレは日持ちしないのでまたも俺の魔法で大量のアイスを姿を変える事になる。卵はともかく砂糖が足りないので麦芽水飴

で作ったが、評判は上々だ。麦芽のせいではんわりと茶色で、素朴な甘さに仕上がったようだ。

真夏の午後には、アイスを頬張る贅沢を満喫する。

ふと、家族と湖畔に遊びに行つたとき、コレがあつたら最高だつたらうなと思う。

俺が冷凍魔法をもつと早く極めていけば……。

いや、帝国が攻め込んで来なければ。こんな暑い日には、セレナと二人でのんびりアイスを食べる未来もあつたのだろうか？

そう思えば、大詰めとなつた帝国への復讐へも力が入る。

「中はどうなっているのです？」

「控え目に言つて大混乱。大げさに言えば地獄だとか」

「そうですか……」

中の様子は調べるまでもない。

既に帝都を見切つて逃げ出す貴族も少なくないからだ。木村は逃げ出す馬車から物資を略奪（曰く、既に暫定統治下にあるので徴発）している。馬車の住人から聞こえてくる話だけでも、無惨な様子は十分解る。

よくよく思い返せば、ロンカ要塞にも食料は殆ど見当たらなかつた。武器や火薬は捨てたとしても、食料だけは捨てられなかつたと言う事だ。

帝国の奴らが食料難に苦しむ姿を想像するだけで溜飲が下がるが、苦しんでいるのは平民ばかりに違いない。

ここでもまた、帝国軍人が無抵抗な民をゴミみたいに屠っていると思うと、ムカムカとこみ上げる怒りがあつた。

「少し、様子を見てきましようか」

宣言と同時に、立ち上がった俺はチラリと木村の様子を窺つた。

こんなん止められるに違いないからだ。……だが。

——カリカリカリ

ペンが走る音だけが響く、ガン無視である。

心配してくれると思つていただけに、少し寂しい。

「止めないのです?」

「止めても無駄でしょう?」

無駄だけどき、一応様式美つて事で止めてくれても良いじゃないか。

「ユマ姫、私はね、心底情けないんですよ」

「どう言う事です?」

「私では、どうやっても好きな女性一人守れないと言う現実が」

……ソレって隕石? ンなモン全人類守れないだろ。

ってか、好きな女性ってどうなの？

「わたしの事を、化け物と思っているのではないのですか？」

「そんな事、誰が言いました？」

木村は心外だと俺を睨む。うーん、どうしたことだ？

俺は『参照権』で記憶をまさぐって尋ねる。

「私が気絶しているとき、耳に聞こえました。キムラ様、あなたがタナカ様に尋ねる言葉を」

「……………」

木村は無言で先を促す。

「訊いていましたよね？」「アイツは本当に『高橋敬一』なのか……………」

ソレを聞いて思ったのだ、親友ですら、もう俺が化け物になったと疑っていると。

俺が化け物になったから、俺が死に行こうが気にしないのだと、そう思ったのだが、どうにも様子がおかしい。

困惑する俺に、木村はクルクルとペンを回しながら、鼻で笑った。

「まず……………聞きたいのですが」

「はい」

「あなたが『高橋敬一』でなかったとして、困る事などありますか？」

「え？」

「むしろ、その方が素直に口説きやすくて良い！」

—— オイオイオイ、前向きかよ。

「あなたが困らずとも、私自身が困るのですか？」

「そんなもんは知りません」

—— オイオイオイ、こつち向けよ。目を逸らすな。

何だそりゃ？ 俺としては俺が俺だから、『高橋敬一』だから、親友の二人が大切ってトコがあるんだが？ なのにお前は俺が高橋じゃない方が都合って、冷たくない？

まあいいや、俺だって俺みたいな美少女だったら、中身がなんだろうが大抵のモンは目を瞑るし、なんなら親友以外のなんでも良いまである。

ん？ つまり、俺じゃない方が良いのか？ まあ深く考えないようにしよう。

だとすると、何で俺を止めないんだ？ か弱い美少女が敵陣に乗り込もうとしてるんやぞ？

木村にそう聞くと、首を傾げる俺に向き直り、手を取って、真剣な目で見つめてくる。「私がユマ姫を止めない理由は、第一に、愛した女性が無抵抗な市民を虐殺するところなど、見たくは無いからです」

そうか、そうだよな。誰だってそんなの見たくないよな。

俺が帝都に忍び込み、市民に情でも移ったら、復讐に狂わずに済むだろうか？

「それもありませんが、帝都の惨状を見て、むしろアナタが帝国への恨みを深くするなら、それは彼らの自業自得、私としても折り合いが付きませう」

なるほどねえ、俺はウンウンと頷いた。

「そして第二に、私はアナタを守れない、だけど帝都の市民なら？」

どう言う事だ？ 俺はコテリと首を傾げて先を促す。

「かわいい、えと、ユマ姫の『偶然』は注目を浴びるほどに効力が薄まる。

かわいい、ならば、帝都に乗り込んで、多くの人に愛され、いつそ恨まれる事すらも。

『偶然』による死を遠ざける一助になるのではと、かわいい」

なるほどね。

かわいいがしつこい。

「そのための食料は幾らでも融通しますよ。ただし城壁の向こうに送る手段は限られませんが……」

そんなモンは担いでよじ登れば良い。俺の身体能力ならただの石壁など無いも同じ。

隕石にやられた俺は、羽がボロボロに朽ちてしまった。だけど、今となつては特段必要なモノじゃない。目的の帝都はスグに手が届く場所にあるのだから。

もう飛ぶ必要なんてドコにもない。

むしろ、潜入するには余分なモノがなくて、いつそ丁度良いぐらい。

「では、早速帝都に忍び込みますか」

「待って下さい」

ウキウキと席を立った俺に木村が待ったを掛ける。

なんだ？ 今更止めろとか言うんじゃないだろうな？

「その格好は目立ちます、コレを」

「……………」

シスター服、それもちよつと薄手で体のラインが出る感じの。

コイツ、ブレないな。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

帝都のメインストリートをプラプラと歩く。薄手のシスター服がなんとも落ち着かない。

今の俺は、シスター服に加え、見るからに怪しい黒い目隠し。なんか訳アリキャラって感じがして楽しい。主人公を導く謎の存在とか目指しちやおうかな。

なんでって、目は柔らかく複雑な部分なので、まだ完全に戻ってないのだ。太陽光が目には痛い。

そうでなくとも俺の特徴的な目の色で、スグに正体がバレてしまう。

「とくと見よ！ コレが魔王ユマの姿だ、皆、石を持って！」

するとまあ、奇妙な連中が現れた。え？ なにこのイベント。

どうやら、帝都にも俺の過激なファンがいて、ソレを炙り出す催しだとか。なるほどね。意味がワカラン。

手取り足取り、ねっとり石の投げ方を教えてくれる兵士さんには悪いが、知りたいのはパネルの絵だ。

どんなのか気になるじゃないか、目隠しして魔力視と運命光に頼る俺じゃ、どんな絵が描いてあるかまではわからない。

仕方無いから兵士に尋ねた。

「化け物さ。背中には翼、口は耳まで裂けて、獣みたいな尻尾や耳まで生えてやがる。空を自在に飛び回り、人間を食い殺すんだとよ」

「まあ！」

大体あつてる。たまげたなあ。

「馬鹿みたいだよな、そんな生き物、居る訳ねえのに。だけど上は本気で怯えてるんだ」

……いや、馬鹿みたいとは何だ。 いるさつ ここに ひとりな!!

俺は思いきり石を投げつける。

直撃！ パネルは粉々に砕け散った。

「では、私、行きますね」

それだけ言い残し、呆然とする兵士を置き去りに、俺はスラムを目指す。

そして、スラムに入る直前、地面に蹲る爺さんに止められた。

ココから先は危ないと、本気で止めてくる。知ってるがな。

でも、自分も死を待つばかりだと言うのに、本気で心配してくるのだ。その運命光は砂粒みたいに小さい。

しかも、掛けられたゴザをめくって見せてくる下半身には、足が無かった。

「それは……」

「喰われたんだよ。後ろからぶん殴られて、気が付けばこの様。まあ俺にしたって喰える死体でも無いかとスラムに立ち入ったんだから、人の事は言えないがな」

聞きしに勝る地獄。

……でも、人間を喰うのが地獄ってなら、俺の存在が地獄みたいなトコあるよな。魔王ユマ姫だから仕方ないね。

まあ良いや。ココで腐っていく位なら、俺が送ってやろうじゃないか。

聞いてみれば、本人もソレを望んでいた。

俺は老人の首をへし折った。

そして、スラムに立ち入ると、三人の男に呼び止められた。

ナンパか？ 流石スラムだ、治安が悪い！

「ソレは何だ！」

「お肉です、炊き出しでも出来ればと思ひまして」

老人の死体を手に、俺が元気に答えると、露骨に喜んで見せる男達。

なるほど、ナンパじゃなかった。喰いたいだけだコイツら。スラムじゃ人間だろうと構わず喰うつてのは本当らしい。

でも、どうせなら炊き出しを手伝ってくれないだろうか？ ドサクサに訊いてみよう。

「炊き出しを手伝ってくれるのですか？」

「違えよバアーカ！」

「俺達が欲しいのは、その体よお」

なるほど、あくまで狙いは老人の肉か、俗に言う『貴重なタンパク源』だもんな。

しかし、コレを渡す訳にはいかない。麦だけは木村から貰ったが、麦粥だけつてのは味気ない。

スラムでは人間を食べるのも普通みたいだし、肉を足そうと考えたのだが、コイツらもどうやら肉を諦める気が無いらしい。

分けてやりたいが、でも、枯れ木みたいな老人たった一人じゃ、ただでさえ炊き出しにも足りないのだ。

うーん、……ソッチは三人も居るんだから、二人で一人喰えば良いじゃん？ 俺は提案した。

「何かを求めるなら、まずは同じだけ差し出さなくてはなりませんよ？」

「何言ってるやがる」

やっぱりその気は無いらしい。

「私の体獲物を求めるなら、まずは体獲物を差し出すべきです」

「へえ……」

俺がそう言うと、なんと男達は次々に服を脱ぎ始める。

「え？」

俺は混乱した。一人で良いと言うのに、三人とも食肉加工がお望みとは。

身を挺してスラムを救おうとする思い切りの良さに、俺は激しいショックを受けてしまった。

あれだけ炊き出しを手伝わないと言っていたのに。ツンデレかな？

取り敢えず、食肉は増えた。

そして、炊き出しをスタート。内臓は丁寧な塩で洗って、圧力鍋で何時間も煮込めれば美味しくなる。骨だつてしっかり出汁になる。

地球でも昔は食肉のかなりの部分を捨てていたみたいだが、焼き肉屋の仕込み動画を
見ていた俺に隙は無い。現代知識チートの一種だろう。

そうして、炊き出しを行ったのだが、大好評だった。

だけど、ニコニコの皆と違って、俺の気分は沈んでいった。

みんな、いい人過ぎるのだ。それも、度を超えて。

子供達は炊き出しを笑顔で手伝ってくれるし。

スラムをブラつけば、食肉となるべく体を差し出してくる若者が後を絶たない。ましてコレで解体して下さいとばかりに、ナイフまで差し出して来るではないか。

喰われるために、自らたき火に飛び込んだウサギの話を思い出す。

こんな献身があるだろうか？ 一方で俺はバクバク食ってばかりで、なんて醜いのだと自己嫌悪に陥ってしまう。

恨むべき、殺すべき仇と言える帝都の人間が、愛情に溢れて暮らす現実に、俺は打ちのめされていた。

そんな折、救世主が現れる。

「お前が炊き出しをやっていると言うシスターか」

無礼な帝国兵が現れた。コイツらならきつと性根が腐っているはずだ。

兵士は俺の期待に違わず暴れ回り、幼女を人質に俺を兵舎に連れ込んだ。そして、寄つてたかつて警棒で殴りつけてくる。

何と言う悪党！一周回つて、俺は嬉しくなつてしまった。なんて最低のゲスなのだ。

これなら、心置きなく殺せる！しかし俺は思いとどまつた。一つ確認すべき事がある。

「あの？」

「なんだあ？」

「ひよつとして、あなた方は大森林の遠征に参加しましたか？」

「あああん、したぜえ」

まさか？ 本当か、本当に？

俺の期待に応えるように、男達は口々に囁し立てる。

「したした、メチャクチャにぶつ殺してやった」

「森に棲む者を並べてバンバン首を刎ねるの、たまらねえぜ？」

「女は好きただけ犯して回つた、あんなに女を抱いたのは初めてだぜ、またやりてえ」
俺を脅かそうと、ゲラゲラ笑つて武勇伝を自慢してくる。

何と言う事だろう、ゴミ屑な帝国軍人はココに居た！

まるで復讐の正当性に太鼓判を貰ったみたいで、俺は嬉しくて堪らなかった。

なにせ、捕虜にとったマークス始めロアンヌの騎士達も、親衛隊に寝返った捕虜の騎士達も、一人残らず気の良い奴らだった。

そして、帝都の薄汚いスラムの人間すら、性根が綺麗な人間ばかり、ひよつとして俺が間違っているのではと不安で仕方がなかったのだ。

だけど殺すべきクズはしっかりと存在した。それが、こんなにも嬉しい。

自国民の幼女すら人質に、俺に命じるではないか。

「その荷車に食料をたっぷり載せてこい」

「コレに？」

「そうだ、三日以内にな」

ああ、三日なんて我慢出来るハズが無い。

「三日も要りません」

「そうか？ ならば明日に」

「一刻で十分です」

「なに？」

そして、俺は兵舎のなかで踊った。

そこで俺は誓いを破る。

ずつとずつと、心に誓って生きてきた。エルフの街を略奪した連中は、生まれた事を後悔するぐらいに、ひたすらに黜つて殺そうと。

それだけが生きる希望だったから。

だけど、ありがとうの気持ちを含めて、俺は一瞬で、優しく、彼らの首をコトリと落とした。

その音は、俺の晴れやかな気持ちを表すように、リズミカルな音で兵舎に響いた。

噴水のように血が噴き出して、俺はその中心でクルクルと回り、ごきげんに歌う。

ああ、世界の全てを祝福出来そうな程に、気分が良い。

気が付けば、大量の食肉と荷車まで手に入った。

積まれた肉を見て、思う。

なるほど、心持ちはどうあれ、結果は一緒なのだ。だからこそ、彼らもまた聖なる行いをしたと言える。

俺の炊き出しは評判となり、いつの間にか聖女伝説が帝都で語られていく事となる。

俺が一切名乗らなかつたものだから、ついたあだ名は聖女ウルフィア。

この世界で死を運ぶ天使の名がついたのは、俺が何をしていたのか、皆が薄々気が付いていた証拠であろう。

聖女伝説2

多くの兵、多くの市民を抱えたままに、敵軍に完全包囲された帝都。市民を守るハズの城壁が、いつしか逃亡を許さぬ檻へと変じてしまった。

元来、食糧の備蓄に乏しい帝都。大人も、子供も、等しく餓えに苦しむ地獄と化すまで、長い時間は掛からなかった。

そんな飢餓に苦しむ帝都において、地獄の底の、更に底、スラムの惨状ともなれば、人が人を当たり前に食らう悪鬼が住まう真の地獄へ成り果てた。

そんな帝都のスラムが二つに分かれ、それぞれの勢力が雌雄を決するべく、今まさにぶつかろうとしていた。

ここはスラムのど真ん中。スラムを救うべく教会が建てられたのも今は昔、崩れ落ちたレンガと、うち捨てられた女神像だけが、かつての名残を残すのみ。

雑然とするスラムの中で、ぽっかりと空いた広場。

今日、ココで、スラムの雌雄を決する戦いが始まる！

さあ選手の入場だ！

西から姿を見せたのは、ずた袋を被った解体屋ブッチャーの集団だ。

目出し帽代わりのずた袋に、血塗れのノコギリを掲げ、野太い声で威嚇している。

ついさつき屠畜場から這い出して来たみたいな奴らだが、コイツらが解体するのはブタではない、紛れも無く人間である。

大人も、子供も、お構いなし、相手が兵士だろうが逆らう者は構わず殺す。

殺して、バラして、そして喰う。

本気でヤバイ奴らである。絶対に関わり合いたくない人種だ。

彼らの主張を聞いてみよう。

「おらあ！ 食い物の恩義を果たせ！ 俺達の居場所を守るんだ！」

「俺は、怪我で死ぬハズだった。それを聖女サマに治して貰ったんだ」

「あの方は本物の聖女だ！ 逆らう者には死を！」

「魔王を崇拜する邪悪な存在を帝都から追放せよ！」

「死をもって、肉となれ！ 肉だけが正義！」

「聖女ウルフィア様に供物を捧げろ！」

……彼らの正体は、聖女ウルフィアの信望者だった。

聖女ウルフィア、一体何者なんだ？

……俺だよ。

……なんで？ どうして？

おっと、彼らに敵対するもう一方の勢力が登場だ。

東側から現れたのは、銀に輝く集団だった。

身に付けた全身鎧こそ銀の輝きを放つが、正規兵でないことは一目で解った。凹んだ兜に、歪んだ鎧、溶けかけた具足を身に纏い、掲げる槍は捻れている。

まるで、悪魔を象った不格好なブリキのおもちやだ。そんな奴らが集団で、体を軋ませながら、ギシギシと行進してくる様は異様のひと言。

誰一人、まるで正気が見られない。

いつの間に現れた、スラムを二分する勢力。

一体、コイツらは何者なのか？

「天使に恭順せよ！」

「逆らう者には天からの裁きが下るぞ！」

「終末の時は近い、人を食らう鬼は地獄へ送られる」

「振り下ろされる鉄槌は、全てを浄化する」

「手遅れになる前に鬼どもを地獄へ返すのだ！」

「大天使ユマの導きのままに！」

大天使ユマの信望者だった。

……俺だよ。

どうして？

……どうしてこうなったのだッ！

城の天辺、屋根の上から、オペラグラスで様子を見つめていた俺は、頭を抱えて蹲る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は少し遡る。俺は聖女ウルフィアと呼ばれ、持ち上げられ、『いい気』になっていた。シスターの格好で、帝都の様子を見るためだった炊き出しを、止め時もなく、ずるずると続けていたのだ。

去年の秋、穀倉地帯となったゼスリード平原では麦が大豊作だった。隕石でポロポロになって帰国した俺も、装甲車の窓から金の麦穂を眺めたモノだ。

だから麦はそれこそ配るほどに余っている。

塩だつて無限に調達できる。幼児の時から、俺は空気から水分を抽出するのが得意技だった。今なら大量の海水から水を抜いて、塩を作るなんて朝飯前。

すると、アレだ、足りないのは肉。

だけど、それだつて向こうから『寄ってくる』。

そうして炊き出しを続ける事、数日、見慣れぬ集団が列に混じった。

彼らは、他のスラムの住人と比べて明らかに体格が良い。食い詰めたスラムの住人は身長が俺と同じ、150cm程度もあれば、立派なぐらい。

そんな中、彼らは170cmを越える人間も珍しくないのだから、酷く目立つ。

「彼らは？」

尋ねると、毎度手伝ってくれる幼女は、苦虫を噛み潰した顔で教えてくれた。

「きつとヨウハイだよ」

「傭兵？」

食い詰めた傭兵がスラムに堕ちたか。それ自体は珍しい事ではない。

「あのね、ネンキンつてのが無くなったんだって」

幼女はそう付け足した。

ちなみに、この幼女、俺が助けた幼女である。歳の割に非常に賢いのだが、賢さゆえに肉の正体に気が付いて以来、死んだ目をしていたのを思い出す。

ただ今では、積極的に俺を手伝ってくれるようになった。かわいいかわいい。

それにしても、年金が打ち切られたか。

帝国で戦争に参加した傭兵は、戦えなくなっても年金が貰えると聞いた事がある。いや、それだつて見た感じは五体満足なのだし、城の防衛に働けるのでは？

俺は直接、訊いてみる事にした。

「あの、どうしていらしたのですか？ 失礼ですが、私たちも食料に限りがありますから」

「ううっー！」

すると、大の男がボロボロと、堰を切ったように泣き始める。

「すまん、私には生きる資格もない。それでも、腹が減るのだ。神よ……」

話を聞けば、彼らは精神的に戦う事が出来なくなったらしいのだ。

PTSDだった。

彼らは戦争で、心に癒えぬ傷を負った。その原因は何か？

エルフの虐殺だ。

霧の悪魔に倒れたエルフの民を、帝国は無慈悲に殺して回った。

彼らは懺悔を口にする。

「わた、私は、苦しむ少女を、生きたまま火にくべたのだ。娘と年の頃が同じぐらいの少女を」

「俺は息子を逃がそうとする妊婦の腹を抉った」

「魔法が怖くて、敵の兵士を取り囲んでグチャグチャになるまで皆で殴った」

あの戦いは、それだけ酷いモノだった。話を聞くだけで胸に暗い火が灯る。

エルフは魔法を使うし、人間ではない。そして霧の悪魔のお陰で俺達は一切の抵抗が出来なかった。

目を覚ましたら、魔法で反撃されるかもしれない。積年の恨みに、恐怖がスパイスと

なつて、ストッパーが外れた軍隊は、果てのない暴力と、残虐性を露わにした。

そうして後から冷静になった時、彼らは既に心に傷を負っていた。もう軍には居られない程に。

少ない年金に加え、護衛として生計を立て、口に糊をして生きて来たが、いよいよ全てが打ち切られたらしい。

「辛かったでしょう……」

俺がそう言つて抱きしめると、彼らは崩れ落ち、後悔を口にする。

「そんな事！ 我々が殺した、森に棲む者、いやエルフの方がずっと苦しかったでしょう」

「彼らに安らかな眠りを」

「ううつ、思い出すだけで、胸が苦しくなる」

さめざめと泣く彼らを見て、俺は自分でもどうかと思う程に感動し、胸を打つ何かを感じていた。

帝国兵は血も涙もない鬼畜。そう思つてきたし、実際そんな奴らを多く見てきた。

だけど、まともな奴らも居たのだ。まともであるが故に心に傷を負い、兵士で居られなくなつただけ。

「許します」

だから俺がそう宣言すると、彼らは呆然と俺を見上げた。

「な、何を？」

「誰が許さないと言おうとも、私が許します。あなた方はもう十分に苦しんだ」

「おおっ！ おお……」

聖女である俺が堂々と宣言すれば、彼らはオイオイと泣き出した。

コレはただの少女が、何となく言っただけの慰めの言葉ではない。虐殺された側の俺が言うのだ、無上の説得力があつただらう。

「ありがとう、ありがとうございます」

そうして皆が感謝を述べる。俺は益々気持ちよくなつていた。

そんな時だった。

「お前ら、何を企んでいる！」

無遠慮な兵士がゾロゾロと乱入してきたのだ。こいつら帝都を守る兵士は、虐殺で心に傷も負わずに軍に残つた方、つまり選りすぐりのクズである。

彼らは彼らで、無抵抗な者を甦る暴力に酔ってしまった。人間として壊れてしまった。

きつとそうだ、目を見れば解る。

ゼスリード平原で帝国兵を大量に捕虜にした時、俺は大森林侵攻に参加した者を探

し、話を聞こうとしたのだが、驚く程に少なかった。それがずっと不思議だったのだが、今、解った。

きつと使い物にならないのだ。クス過ぎて。

「この集いはなんだ！ 責任者を出せ！」

集まるのが食い詰めたスラムの民ばかりならともかく、屈強な男達まで集めて居るとなれば、兵士としては黙っていられなかつたらしい。

そんな帝国兵を見て、引け目のある元傭兵達は、肩を震わせ子ウサギのようだった。そんな彼らを俺は優しく慰める。

「忘れないで下さい、殺すのは罪ではありません」

「え？」

シスターらしからぬ言動に、みんなポカンと口を開ける。

「だとしたら、日々動物を狩る猟師は最も罪深い職業になってしまいます」

「そ、それは」

「罪深いのは、意味のない殺戮です。だからこそ、あなた方の殺人は罪深く、後悔の念が絶えずに居る」

俺はそう言つて、彼らを置き去りに、帝国兵達の前に進み出た。

「私が責任者です」

「ほう……誰の許しでこんな事をしている」

言いながらも、俺の体を無遠慮に眺めるコイツらの、品の無い事。いつそ清々しい程だ。

見られるに構わず、俺は堂々と胸を張る。

「誰の許し？ もちろん、神の許しです！」

「ふん、神が許そうが、我らが許さぬ」

「いいえ、あなた方の罪も許されます」

「何を？」

言い終わる前に、俺は兵士の首を次々と刎ねた。魔法じゃない、手に持った粗末な鉈でだ。

この程度、今の俺なら造作もないこと。

噴き出した血が、広場を濡らす。血抜きは大切だから仕方が無い。

そのままズルズルと死体を引き摺ると、顛末が信じられぬと呆然とする彼らの前に、次々と並べた。

「全ての罪は、最期には許される。肉をもつて他の命を繋げば、許しとなるでしょう」

「何を言っていますか？」

「解体しましょう、殺した以上は、食べねばなりません」

俺は、そう宣言した。

「まさか、まさか！」

彼らは先程まで食べていた肉入りの麦粥をジツと見つめる。

「食えば、許される？」

「殺すのは罪ではない？」

「そうか、そうだったのか」

そうして、彼らは完全に開き直って、人食いの集団と化したのだ。

……いやさ、勘違いしないで欲しいんだけど。俺だって人を食うのが教義とかそういう言う危ない思想を撒き散らしたい訳じゃないよ？

たださ、飢餓に苦しむ帝都でさ、殺したら食わないと勿体ないかなうってそう思って、炊き出しの麦粥に混ぜ込んでただけでね。

でも、流石にバレバレで隠し通すのも無理なタイミング。仕方無いからそう言っただけ。

食って許しつてのも方便みたいなモンでさ。罪悪感なく食えるようになって俺の気遣いよ？

それで、俺だって無選別に殺して回った訳じゃなくてね、襲ってくる奴を返り討ちに

してたら、どんどん食肉の在庫が積み上がっただけなんだ。

どうかどうか、お願いだから、信じて欲しい。

初めはさ、スラムの人達は、喰われる為に絡んで来ると、そう、本気で思ってたんだよね。凄いやつだと感動さえしていた。

……ここまで来ると、流石に信じられないか？

でもさ、自分がライオンになったつもりで考えて欲しいんだけど、前足を必死に甘噛みしてくるウサギが現れたらどう思う？

あれ？ コイツ俺に食われないのかな？ って思うだろ？

俺にとっては食い詰めたスラムの人間、それも武器とも言えないその辺の木っ端を握っただけの人間なんて、子ウサギ程度の脅威でしかないのよ。

流石の俺も、途中でコレ違うなって気が付いたね。その時にはもう遅かったんだけど。

そうして、気が付けば屈強な人肉解体集団が出来上がって居たワケよ。

目隠ししたシスターがスラムをウロつけば、カモだと襲いに来る奴らが現れる。

それを皆で返り討ち。向かってくるのが兵士だろうが、構わず殺した。地の利はコチラにある、逃げつつ各個撃破すれば、奴らの被害は広がるばかりだ。

味方が怪我をしても、多少なら俺が魔法で治せるしな。

そう、俺は『いい気』になって魔法まで使ってしまった。これは前世で見たネット小説が悪い。

聖女って言うなら、回復魔法ぐらい使ってもいいだろうって、我ながら寝ぼけた判断だ。

気が付けば、奇跡の聖女ウルフィアの名は凄い勢いで広まり、不気味な人肉解体集団はスラムの一大勢力となってしまうたつてワケ。

それでもどうにもならない怪我をしたら、もつたないから味方であろうが俺は構わず解体した。

すると益々、生と死を分かつ死天使の如く、恐れ、敬われ、聖女ウルフィアの名は益々広まって。いつしか帝都全体で見ても巨大な勢力に育つていたと言う訳。

この段に来て、流石に木村から普通の肉とかも融通して貰うようになったんだけど、全ては手遅れだった。

そんな俺達の前に立ちはだかったのが、もう一つの勢力。大天使ユマを崇拜する一団だった。

初めて彼らを見た時は、それはもう驚いた。

グチャグチャに溶けた防具を身につけて、えっちらおっちら歩いているのだから無理ないだろう。

もうね、新種の魔獣かと思つて殺す寸前だったわ。見た目は完全に悪魔崇拝者である。

そんな彼らが通りを練り歩く時の掛け声を聞いて、二度驚いた。

「天使ユマに血肉と魂を捧げよ！」

彼らが崇拜している悪魔は、俺だった。流石にたまげたね。何も見なかつた事にして殺す寸前だったわ。

『アレなんなんだよ？ マジで頭イカれてるだろ、いい加減にしろ』

陣地に帰つた俺は、たまらず木村に苦情を言つた。

『え？ 俺の所為なの？』

木村は無罪を主張した。聖女裁判の始まりである。

『まず、お前が支援してるんだよね？ アイツらを』

『まあ、そうだよ』

当たり前だ、歪んだ兜だろうと、鉄と言うだけで価値が有る。帝都のスラムはそんなモノでも貴重だ。

それに、思いだして欲しい。帝都のメインストリートでは、衛兵が連れ立って『魔王

ユマ』の崇拜者狩りをしていた事を。それだけ脅威となる勢力なのだ。誰かが支援しているに違いない。

『そりゃ、コツチの味方になる反政府組織を支援するに決まってるだろ?』

木村は悪びれずに言う、確かに戦争の常套手段だ。アメリカも良くやってる。

俺の存在は神懸かりだから、この際、俺を崇拜する集団になるのは良い。だが、あんな妙ちきりんな装備を与えるのだけは納得が行かない。

木村は難しい顔で弁明する。

「新品の防具なんて渡せる程、こっちにだつて余裕は無いですよ」

「かといって、あんな防具を渡す必要はないでしょうが!」

木村が真面目な顔して語り出したので、俺もお姫様らしいツンデレおしゃまな口調でなじつてやる。

途端に目尻を下げて相好を崩すが、木村は取り繕つて言い募る。

「いや、私も多少は打ち直してから渡そうとしたのですが、彼らはそのままが良いと」「なぜ?」

「曰く、天使ユマの聖遺物であると」

あちゃー。

俺は額を押さえて仰け反った。

彼らに渡した防具の出所は、あのロンカ要塞である。残された大量の防具は俺達の足を止めて確実に爆殺するためのエサだった。

しかし隕石が落下し、ボロボロになった武器防具の数々。木村は打ち直し、彼らに提供しようとしたところ、待ったが掛かったと言うワケだ。

「丈夫な防具が砕けて歪む、その創痕こそが天使ユマの偉大さを象徴していると聞いて聞かないのです」

「正気では無いですね」

「でも、彼らにとってはあの防具を身に纏う事は、神の権威を纏うに等しいのです」
マジかよ……。

「でも、その集団と、私が育てた聖女派が一触即発なんですが？」

「困りましたね、私からも敵対しないように言っておきます」

「私からも、炊き出しの時に言っておきましょう」

そうと決まれば善は急げ、戦いが始まる前に厳命しておかないと。

俺は即座に席を立ち、人間離れた脚力でもって飛び出した。

「お待ちを！」

背後で木村が呼び止めるが、もう遅い。俺の体は、狭い幕舎を飛び出した。

……だが。

「ぐえええ」

飛び出した俺の体は、蜘蛛の巣に囚われた蝶のように、雁字搦めに墜落した。草原をゴロゴロと転がって、もがき苦しむ。

「あぐ、うぐつ」

首が絞まる。背後から伸びた自在金腕ルーデルオンが俺の首に巻き付いていた。

「おま、お待ちを」

数メートルも引き摺られただろう、背後から木村がずるずる這い寄ってくる。

「いったいコイツは何なんだ！ 俺の首に自在金腕ルーデルオンが締まるのはコレで何度目だ？」

俺の首を絞めて喜ぶ趣味でもあるのかよ！ お前がどうしてもって言うなら、夜中にコツソリ、ちよつとぐらいは締めさせてやるぞ？

良く見れば、巻き付いた自在金腕ルーデルオンは首の一本だけではなかった。体中に絡み巻き付いて、俺の体を緊縛していた。

……完全に趣味だな。しかし、木村は恥ずかしげもなく追いつがる。

「お願いします、待って下さい」

変態クソ野郎が！ 真つ昼間から何をする気だ！ 罵詈雑言で文句を言いたい気持ちをグツと抑えて、俺は涙目で訴える。

「えっちー！」

「うぐっ」

着衣が乱れ、体を縛られた状態。涙目でえつちと責められれば、男の精神は無惨に破壊されるのだ。

コレ豆な。機会があれば是非試してみて欲しい。

しかし良く見れば、自在金腕ルーデルオンが巻き付いた木村の右手だって、俺の人間離れた脚力をまともに引き受けて、ボロボロになっていた。

指は二、三本千切れ掛けているし、骨は残らず折れている。

「見せて下さい」

「くう、器用さがウリなのに戻りますかね？」

「任せて下さい、神経の一本、毛細血管の全てを繋いで見せます」

木村の手を握り、回復魔法を唱える。まるで健康値の抵抗がない。本当に俺が化け物だと警戒していないようだ。

「一体、何事ですか？」

「あのですね、聖女派に呼びかけるのはお待ち下さい。天使派とは対立させて置きましょう」

天使派やら、聖女派やら、結局どっちも俺なんだが？

恥ずかしい思いを抱えて尋ねる。

「……どうして?」

「まず、反政府組織を一つに纏めるのは却って危険なのです」

木村が言うには、反政府勢力が一本化され王国の支援を受けているとなれば、帝都の兵にしてみれば潰すのに躊躇はないだろうと、そう言うのだ。

「現在、私達が帝都攻略に本腰を入れないのは、天の使いを自称するユマ姫の立場から市民を巻き込めないのが理由だと、そう思われている節が有ります」

ふむ、実際は隕石で内部からボロボロになった俺の体が、まだ本調子に戻らないからなのだが、それは良いか。

「だからこそ、帝国は市民を籠城に巻き込んでいる。本当はなるべく殺したくはない。しかし、それでも公然と牙を剥く勢力には容赦がないでしょう。とは言え、二つの勢力があり、互いに対立しあっているとすればどうでしょう?」

兵をすり減らすのも馬鹿らしい、潰し合うに任せると言う事か。

それを狙って、帝都は食糧の供給を絞っているなんて噂まで有るといふ。

「なので、対立したフリをさせながら、決定的な対立だけは防いで行きましょう」

「それで最終的に、どう収めるつもりです?」

「そうですね、ユマ様が良いと言うタイミングで天使派には蜂起して貰い、開門を促しましょう。我々が天使を正門から堂々と迎え入れるのだと言えば、彼らは喜んで行動に移

すに違いない。その為に、一時的に聖女派と協力を取り付ける」

「聖女派は？ あの人達はどうも私を魔王と思っけていますか？」

言つてから気付いたが、アレだな、彼らとて人間を食う行為にやはり引け目を感じているのだろう。

天使を名乗る俺に裁かれるのではと、恐れている節がある。まあ本人が誰よりも食つてゐるだけだな。

「聖女派は、最終的に天使派に迎合して貰いましょう」

「そう上手く行きますか？」

俺は首を傾げた。この手の思想は過激さを増していく。後から天使派は敵じゃ無いと諭しても、既に恨みは飲み込めない程大きくなつてゐる恐れがあつた。

「畏だと言えば良い。一時的に協力するフリをして、諸悪の根源である天使を正門から招き入れた後、そのまま殺してしまえば帝都は救われると、聖女派にはそう言つておけば良いでしょう？」

「ええっ」

ソレつて正門から堂々と入城する俺が、正面から堂々と殺される危険があるのでは？ 「それはユマ姫様、あなたの美しきで黙らせれば良い」

……無茶苦茶過ぎない？

「あなたの姿には、その位の力がある。お忘れですか？ 多過ぎる捕虜を生き埋めにするしかなかった場面、そのままそっくりコチラに寝返らせた時の事を」

「むしろ忘れたくない記憶なのですか？」

まあーた、バニー衣装で人前に出ろつてのとかコイツは。

この世界の歴史の教科書に、バニーガールが残る流れだぞコレ。流石にダメだろ。

「衣装の方はもつと品があるモノをコチラでなんとかします。とにかく一度相手の氣勢を削げば、後は天使の正体こそ聖女だったと名乗る事で、全てはコチラのモノとなります」

「……色々言いたい事はありますが、まあ、良いでしょう」

どうせ俺は派手に帝都を示威行進して、帝城の前まで乗り込むつもりだった。

城に引き籠もる皇帝に、自分らの街が占領されたことを見せつけてやる。

だから元々、人目を引く派手な格好で度肝を抜くつもりでいた。それがまあ、ちよつと刺激的になるだけだ。

そうこうしている内に、木村の指が治った。

「流石ですね……」

「当然です。では、私は聖女派に向けて、天使派は邪悪と宣言しつつも、コチラからは決して手を出さない様に言い含めます」

「よろしくお願いします。私も天使派に同様に働きかけます」

そうして、今度こそ俺は飛び立った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

で、だ。

「自らを天使と名乗るなど、余りにも不遜。彼らの存在は邪悪です」

俺は聖女派の前で、とんだマッチポンプに励んでいた。もちろん少女シスターの聖女ウルフィア姿でだ。

シスターなんだから、天使を名乗る少女に怒り心頭なもの無理がない。

周囲もウンウンと頷いている。

「やはり、そうですか」

「ふてえ奴らだぜ」

「奴らは見世物みたいに人を殺す」

「隕石で全てを吹き飛ばす魔王ユマの所業は、罪そのもの！」

「殺した命は、食ってこそ許されると言うのに」

……ん？ 最後のはなんかおかしくない？

良く見ると、ズラリ揃った聖女派の面々は、ずた袋を被って手に手に血塗れの包丁やノコギリを持っている。

……ナニコレ？

良く見れば、俺の後ろをちよこちよここと付いて来るあの幼女まで、ずた袋を被つて血に塗れたナイフを掲げているんだけど？

幻覚かと必死に目をほぐしながら、恐る恐る尋ねる。

「あの？ その格好は？」

「ああ、どうせ殺して食うなら、この方が手っ取り早い」

「新鮮なまま解体出来るしな！」

「コレを見ると、皆、逃げる、俺達、無駄な殺し、しないで済む！」

ダメだろコレ。完全にホラー映画の住人だ。目を揉みながら優しく尋ねる。

「あの、鏡はありませんか？」

「鏡ですか？ ンな上品なモノはココにはありません」

だったら、お前ら、冷静に互いの姿を確認しろ！ それでどの面下げて聖女派を名乗ってるんだ。どう見てもホラー映画の『解体屋』^{ブッチャー}のソレだろ！

ま、まあ良いや。俺は何も見なかった、良いね？

「とにかく、気をつけて下さい。天使派には絶対にコチラから手を出さない様に」

「何故です！」

「アイツら、好き放題やってやがるんだ」

いやいや、好き放題に人間を殺して喰ってるのはコッチだろ……、いやお互い様なのか？

何にせよ、コッチの設定を押し付けるだけだ。

「天使と言うのは真つ赤な嘘でも、魔王の力は本物です。ユマに目を付けられたら私などあつと言う間に殺されてしまうでしょう」

「そんな！ 馬鹿な！」

「無敵の聖女ウルフィアが？ 冗談でしょう？」

「隕石でも死なないと言われて居るのに！」

いや、お前等の中で俺はどう言う存在になっているんだよ。痛む頭を押さえながら、俺はなるべく厳かに宣言した。

「聖女たる私に、唯一対抗出来る存在、ソレこそが魔王ユマなのです」

だって俺だしな。

「そんな！」

「俺達、どうすれば？」

俺はコホンと咳をひとつ、勿体ぶって託宣を下す。

「魔王ユマを帝都におびき出します」

「それこそ、冗談でしょう？」

「俺たち、隕石でペしゃんこになっちまう」

ザワめく彼らに、俺は一本指を立てる。

「ですが魔王を討つ方法が一つあります」

俺は立てた指先で、ついつと少女が持つナイフを指差す。

「人の身で城門を潜った時は、魔王と言えども少女の姿——ですから、殺せませう」

「じゃあ、聖女サマがやるんです？」

「私は、魔王を人間の殻に押し込めるので精一杯。あなた達がやるのです」

「そんな！」

俺の芝居は絶好調だ。気が付けば皆が引き込まれていた。

「あなた達が魔王を殺す、それが憎しみの連鎖を断ち切る唯一の方法」

「わ、わかりました！」

勢い良く立ち上がる幼女だが、お願いだから大人しくしていて欲しい。

「とにかく、それまで決して天使派に手を出さない様に。そうすれば、天使を名乗る彼ら

だつて手を出せません」

尤もらしい感じだが、きつと向こうも同じ事を言つてるだろう。

襲つてきた奴は殺して食おうつてのがコッチの教義？ だしな。理に適っている。

だけど、彼らは納得しなかった。

「でもよお、奴らは聖女様を人食いの鬼が化けた姿だと言ってやがるんだ！」

「鬼が人間のフリをして、帝都の人間を夜な夜な食らつてるとな」

「こちとら、好きで食つてるワケじゃねえのに。俺たちも鬼の軍勢だだよ」

……鬼かあ。俺の称号、物騒なのをコンプリートしてるよな。

俺は遠い目でぼんやりしながら、彼らをなだめに回るのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、とうとう二つの勢力がぶつかる場面がやつてくる。

俺は帝城の円錐屋根の天辺に舞い降りて、オペラグラスと集音の魔法で様子を窺う。

お互いに絶対に手を出すなと言いつつ、含めてあるが、一歩間違えば暴徒となる危険もある。そうなれば身を挺して止める必要があるだろう。

まず広場の真ん中で語り出したのは聖女派の面々だ。手を出せないで彼らは必死に口を出す。

「自ら天使を名乗る頭がおかしい女を信じる馬鹿共が！」

「罰があたるぞ！」

「その正体は魔王だろうが！ 良く考えろ、獣の耳が生え、鳥のような羽で空を飛び、魔法を使う？ そんなモン天使じゃねえ。バケモンだ！」

止めろ！ お前ら！ 止めてくれ！ その言葉は俺に効く！

対する天使派も負けていない。

「罪を抱えた者達よ、天はお前達を許しはしない」

「人間を喰らう聖女ウルフィアだと？ 人を食うのは鬼ではないか！」

「人間に人間を食わせる。これ以上の悪徳があるか？」

お前等も止めるんだ！ その言葉も、俺に効く！

何だコレ？ ただの俺への悪口合戦じゃねーか！ いい加減にしろ！

何だか心底悲しくなって、屋根の上で蹲って一人で泣いていた。しかし、事態は俺に容赦をしない。

「お前ら、これが天使ユマ様のお姿だ！ 邪悪な者どもよ、ひれ伏すが良い！」

——ガラガラガラ。

車輪の音を響かせながら、転がり出でるは例の台車だった。魔王ユマの絵が描かれたパネルである。帝都に來た初日、俺がメインストリートで出会ったヤツだ。

しかし、その絵が違った。きつと台車を奪ったのだろう。化け物が描かれていたらしいあの時とは違い、可愛らしい女の子のイラストがパネルに大きく描かれている。

萌え萌えな感じで!!

何アレ？ 奴ら頭がおかしいのか？ ……アレは、木村の絵だ！ それを大きく書き写している。

固唾を飲んで見守っていると、天使派は口々に声を上げる。

「見よ！ これぞ天使ユマの（ご）尊顔なり！」

「美しさにひれ伏すが良い」

「煌めく瞳、すらりと長い足、これぞ造形美」

天使派？ 違う！ アニメ絵を崇拜するおたくの集団だコイツら。

「コレを読め！ ココに偉大な天使の冒険の数々が余すところなく描かれている」

手に取って掲げるのは、木村が描いた同人誌？ だった。薄い本がとても分厚くなっている。

この世界、紙は貴重。粘り気のある木をカンナで薄く削ったモノを紙代わりに使ったりしている。

だけど、エルフの国では当たり前に紙と印刷技術が発達しているのを俺は知っている。

思い出して欲しいのは、俺の生誕の儀。その顛末を描いた瓦版だ。そんなモノを作れる程度には、エルフの技術は発達している。

技術を手にした木村は、すぐさま俺の半生を薄い本にして厚くした。

何を言ってるか解らないだろうが、俺にだってさつぱりだ。

それを今回、聖典として数冊手渡していたのである。

「見よ、困難に直面したユマ姫の健気な姿！」

「大きな瞳に涙をたたえる様！」

「恥じらう顔がなんといいじらしいのか」

「鞭を打たれる姿が、なんとも言えない。罪深い我らを許し給え」

止めろ！ 本当に止めてくれ。俺は後で帝都を行進せねばならぬのだ。

実物を知らないままに、妄想の産物でハードルを上げるんじゃない！ 幾ら何でも俺だって、そんなに目ン玉デカくないからな！

思ってたのと違うとか言われたら立ち直れない。

それに最後！ お前だよ！ 鞭に打たれた姿って、既にして危険な性癖に目覚めてい
るじゃないか！ 遠慮しろ。

……そしてそして、悲しいかな、オタク趣味は万人に受け入れられるモノでは無いの
だ。

パネルを見た聖女派の面々が鼻を鳴らす。

「ハッ、これが天使？ ガキじゃネーかよ！」

「んな幼子に発情してやがんのかあ？」

「目がデカすぎるだろ、化け物かよ。なんだその絵は！」

散々なディスプレイ様である。絵に描かれた俺とは言え、ちよつと傷付く。

「んなガキより、聖女ウルフィア様のがよっぽど美しいぜ！」

止めるろ！ お前等も無駄にハードルを上げ続けるな！

ん？ なんだ、コチラも何かを引き摺つて来るではないか。

——ガラガラガラ。

コツチもパネル！ なんなんだお前等？ 仲良しか？ え？ まさかね。

「これで、聖女ウルフィアの姿だ。本当の美つてヤツをお前等によつて教えてやる」

同じくパネルに描かれていたのは、油絵だった。画材はとても高級品なのだが、日持ちする絵の具なんかは、今の帝都では食料よりずっと安いモノだ。

そうして絵心のある聖女派の人間が描いたのは、シスターの姿で身をくねらせる、肉感的な俺の姿だ。

「この胸、この腰、見ろよ！」

「たまんねえ！ 食べちまいてえ」

「俺は食べられる方でも構わねえぞ」

本気でヤベエ奴らだ。どこの誰だ！ こんな奴らを野に放つたのは！

絵の方だつて酷い、胸は思い切り盛られているし、腰は必要以上にくびれている。そ

れでいてお尻は大きめと、どうかと思うぐらい性的なわがままボディである。

そうなつてくると、薄手の修道服や黒い目隠しが酷く性的に見える。

あまりに直接的なエロスに、天使派までもがゴクリとツバを飲み。凝視する。

「貴様ら、それでも天使派の信徒か！」

たちまち、オタクっぽい容貌の天使派総長が叱責して回る。オタクは宗旨替えに厳しいからな。

「なんだこれ？ え？ 俺はコレどうすりや良いの？ 絶対にこの場に登場したくないぞ？」

本当に暴動だけは止めてくれよ？ この空気で俺が出て行つて。「なんだ、ちんちくりんか」とか言われたら再起不能だからな？

そして、劣勢と見たのか、天使派の総長はゲラゲラと笑つて聖女派を挑発する。

「ふん、体に脂肪を蓄えおつて。ブタか？ 育てて食うつもりじゃあるまいな」「なんだと！」

もちろん、聖女派はいきり立つた。

しかし、なぜか涎を垂らすヤツが居るんだけど？

「食う、俺たちが、聖女サマを？」

「どんな味かな？」

ふざけんな！ 食欲に負けるな！ 怖いから止めてくれ。俺は最近、お前達の前に立つのがちよつと怖いんだ！

その後も、天使と聖女、お互いをデイスリまくる口喧嘩大会は、日が暮れるまで続いたのであった。

それを延々聞かされた俺は、精神が病みそうになっていた。

デイスられるのはむしろ良いんだ。

だけど、あり得ない期待感で持ち上げるのだけは止めてくれ。

美しさに呼吸が止まるとか、自然とひれ伏すとか、そう言うの止めてくれ。ハードルは低めに設定しろ！

余りにも不毛だ。全部俺へのダメージとなる。

暮れゆく夕日を見ながら、俺はポロポロと涙するのだった。

どうしてこうなった……。

おっぱいチエーン

季節は秋に差し掛かり、帝都周辺の穀倉地帯も黄金色に色付いていた。

隕石で内部からグチャグチャになった俺の体は、もうすっかり回復した。

外から見て解る変化こそないが、体を動かしても、軋んだり、痛んだりする所がない。羽こそ生えて来なかったが、あんなもん生やそうと思つて生やしたワケじゃなし。むしろ人間に近づいたと喜ぶべきだ。

……ひよつとして、人間を食べまくった所為で人間に近づいてる？

だとすれば皮肉なもんだ。

さて、そうと決まれば、後は帝都を落とすだけ。

内部から蜂起を促し、正門から堂々と乗り込んでやる。

それには馬が必要だ。総大将がテクテク歩いてご入城では締まらない。

だが、ここで大問題が発生した。馬なんてなんでも良いと放置していたのが良くなかった。

俺を乗せてくれる馬がないのである。

俺が近づくだけで、怯えまくって逃げようとするし、むりやり背中に乗ろうものなら

制御不能だ。老成した馬ですら暴れ馬に早変わり。怯えて動かなくなる馬まで居る。軍のベテラン馬丁はしきりに首を傾げていた。

方々から手当たり次第、色んな馬を連れて来て貰ったのだが、どれもダメ。

ミニエールから奪った、あの白馬のサファイアがどれだけ貴重だったのか思い知った格好だ。あいつが普通に乗せてくれるから、大丈夫かなと油断していた。

あんな名馬を殺してしまおうとは。意識が無かったとは言え、本当に不味い事をした。……まあ美味しかったんだが。

で、とうとうコツチから乗り込んだ。やって来たのはロアンヌ地方。

ロアンヌは帝国で名の知れた馬の一大産地。あのサファイアもココの生まれだ。

思い出すのはマークスやタリオン伯。死んでしまった彼らだが、思えば馬には一家言ある連中だった。

ここなら流石に見つかるだろう。

……で、牧場を案内して貰ったのだが。

「コイツは妙だ、どれも近づきやしない」

案内に雇った地元の馬丁がぼやく。俺が牧場に現れるや、馬たちが一目散に逃げのりだ。

想像してみて欲しい、のどかな牧場をミニスカのお姫様がてくてく歩く、すると、馬

達は同じ分だけ距離をとり、絶対に近づこうとしない。そんな光景を。

それはもう、端から見たら、とても愉快的な光景だろう。

だが、当の俺は愉快じゃない。ここまで嫌われると、流石の俺も傷付いた。

なにせ今日の俺は馬に乗る気満々のコーディネートで来てしまっている。例のお気に入りレザークルセットに、デニムスカート、拍車付きのブーツに、カウボーイハットまで被ってるんだぞ？

コレだけ揃えて「馬に乗れませんでした」って恥ずかし過ぎる。

それに、動物に手を伸ばして逃げられるのは精神的に辛い。逆アニマルセラピーか？自分を否定された気がする。

俺はコレから皆の期待を一身に、天使ユマやら、聖女ウルフィアとして、帝都に乗り込まねばならんのイメージが悪いにも程がある。

「私よー」って城門を潜ったら、サーツつと人が引いていったらどうしよう？

カワイイ女の子である俺が現れるや、悪魔みたいなブリキの怪物や、ホラー映画の解体屋までが一目散に逃げていく。まるであべこべの光景を想像してしまった。

俺が変な妄想にため息をついている間も、馬丁さんのぼやきは止まらない。

「いやあーこれはオカシイ、どれも大人しい馬なんですがね」

そう言いながら、チラチラと俺を見てくる。何なんだよもう。

俺は、うんざりのため息をつく。

あれだな、「俺でも乗れる馬を探してくれ」とオーダーしたのがマズかった。馬丁は女の子の俺に、乗りやすい初心者用の馬を宛てがおうとしている。

だけど馬から見ると、俺は可愛い女の子ではなく、怪物だったと言うワケだ。

解ったよ、認めよう。俺は怪物ですよ。認める。認めます！ 私は化け物です！

もうこうなったら、逆転の発想だ。化け物には化け物をぶつけんだよ！

「違います」

「へ？」

「私が乗れる馬は、私にしか乗れない馬です」

「何言って、やがるんで？」

敬語も忘れてポカンとしている。

言い方を変えよう。俺が欲しいのは、恐れを知らない暴れ馬だ。

「人を殺した事がある馬は居ますか？」

「はあ？」

「わたしはー、そう言うアブナイ馬もお、一目見てみたくなってえ♪」

「……はあ、さいですか。構いませんが人手が要ります。弾んで下さいよ？」

ぶりっ子して言えば、お嬢様のわがままにうんざりしながらも見せてくれる事になっ

た。

悪くない。俺は、俺が選んだこの失礼な馬丁に、全幅の信頼を寄せている。

だって、コイツは俺をジロジロと見ないのだ。一方で馬の体は涎が出るほど凝視して憚らない。

『ホンモノ』ってヤツだ、この手の男は信用出来る。流石は馬の名産地。

そうして待っていると、大の男が四人掛かりで一頭の馬を引つ張ってきた。

他より二回りは大きい馬体に、額には一筋白い流星が流れる、見事な黒毛だった。

凶抜けた巨体もそうだが、黒々とする毛艶が何よりすごい。漆みたいに筋肉の盛り上がりが輝いて、周囲から浮かび上がって見える。

なんだよ、スゲエのが居るじゃないか。

「これが？」

「へえ、満足ですかい？」

良く見りや馬丁も何だか自慢気だ。嫌々連れてくるみたいなさ振りは、お駄賃をふんだくるため。本心ではコイツを見せつけたかったに違いない。

ロアンヌ一の名馬ってワケか。

……いや。ただの名馬ってワケじゃ無さそうだ。

「おい、頼むから大人しくしてくれ」

大人四人でも抑えが効かず、持て余している。馬は目が血走って、今にも暴れ出しそう。マジで人間殺してそんな迫力がある。

「どんな由来なのですか？」

「由来もなにも、コイツは、ここの王様だ。気に入らねえモンはスグに蹴り殺しちまう」
オイオイオイ、この言い方。一人や二人じゃなさそう。

「人を殺す馬を放置している？ 殺すべきでは？」

「ダメダメ、そりゃあコイツは人を乗せるような馬じゃねえ。だけど子供までそうとは限らねえだろ？ 見ての通り、コイツの馬体はピカイチだ。俺の夢はな、コイツの子供に乗って、野っ原駆け回る事ですわ」

早口でまくし立てる。よほど好きなのだろう。

「ふーん、名前は？」

俺は気のない会話を続けながら、ゆっくりと黒毛に近づいた。するとどうだ？ ビクリと体を震わせて、硬直するじゃないか。

……なんだ、コイツも臆病者か？ ガツカリだ。

「名前？ え、あ？ グラフエンですか？」

「そう」

いよいよ手を伸ばす距離まで近づくと、黒毛のグラフエンは目の色を変えて逃げ出そ

うとケツをまくった。

……いや。

「危ねえ！」

馬丁が叫ぶ。そう、グラフエンは俺から逃げようとしたのではない、殺そうとしているのだ。

前足に体重を預け、高々とケツを持ち上げる。そうして盛り上がった筋肉の躍動は、後ろ足に込められた力の程を教えてくれた。

少女の頭など軽く吹き飛んでしまうに違いない。いや、鎧を纏った騎士とて同じ事。兜の中身ごとぶちまけるだろう。

でも、俺は違う。

「な、なんだあ？」

振り払われて、地面に転がった馬丁が呆然と眩く。

俺が、蹄を、ガツチリと掴んで止めていたからだ。

「良い子ね」

俺は上機嫌で、笑った。

逃げられるより、蹴られる方がずっとマシだ。コレぐらい、骨のある奴を待っていた。グイツと引つ張って、引き寄せる。そのまま鞍も置かない背中に飛び乗った。

「やめるんだ、死ぬぞ！ そいつは乗った奴を残らず殺してる」

そうかそうか、じゃあ俺が、最初の一人だ。

——ヒヒイイーン！

嘶き、暴れる。棹立ちになって、俺を振り落とそうともがき始めた。

だけど、俺は足で馬体を挟んで、指先でたてがみを掴む。ただそれだけで、馬上でピクリとも動かない。

後は楽しいロデオの時間だ。どったんばったん暴れ回る。

「なんとか、降りろ！ 体力がある内に！ 降りた途端に踏み潰されるぞ」

馬丁が叫ぶが、降りる気は無い。先に体力が尽きるのは馬の方だ。

なにより、既にコイツはパニックを起こしている。今降りるのは却って危ないだろう。

むしろ、パニックで勝手に怪我をされる方が面倒だ。俺だって馬を治した事はない。

じゃあ、どう止めるか？ 自慢じゃないが、前世から俺は動物をなだめた事など一度も無い。動物に嫌われる体質だ。

うーん、もうダメかもわからん。俺だって馬が自爆するのまでは止められない。これは時間のムダになりそうだった。

どったんばったん揺られながら、時刻は既にお昼過ぎ。きゆうと俺の可愛いお腹が悲

鳴をあげた。

……腹減つたな。なにせ目の前には躍動する馬肉がある。

馬肉だつけ？ いや、馬肉だろ。もう、馬肉にしか見えん。

食べちゃダメかな？ まだお会計してないのにお菓子とか食べちゃう感じ。わんぱくで憧れる。

ちよつと可愛く聞いてみよう。いきなり嚙つたら怒られそうだ。

「食べちゃうぞ♪」

効果は劇的だった。

暴れていた黒毛、グラフエンはピタリと大人しくなり、ガタガタと震えながらぺたんと座り込むではないか。

……え？ どうした？ 俺そんなに怖い？

いやいや、安心して。エルフのお姫様だよ？

「……………」

メツチャビビつてらっしやる。ピクリとも動かない。漆の黒毛に、ダラダラと流れる冷や汗が光った。

脅し過ぎてしまったか、もう全く動かない。コレは失敗した。折角の有望株だったのに、コレでは台無しだ。

「こりや、どうしたでえ？」

ぺたりと座り込んだグラフィエンに、馬丁が慌てて駆け寄った。

「驚いた、こんなの今まで、一度だって……」

言いながら視線を上に見せると、馬上から見下ろす俺と目があった。

「ひえー！」

するとどうした事だろう。

案内してきた女の子が、実は恐ろしい怪物だったとようやく気が付いたみたいな顔をして、ひっくり返って腰を抜かすじゃないか。

……やめてくれよ、そう言うベタベタなりアクション。傷付くわ。

「ふう」

ため息をひとつ、グラフィエンから飛び降りて、冷や汗が浮かぶ馬体を優しく撫でてやる。

「……………」

それでも震えが止まらない。

参ったな、コイツがダメならどれも駄目な気がする。仕方無い、全く締まらんが、徒歩での入城しかなさそうだ。

いや、しかしエツチな格好で徒歩って……周りが騎馬なのに俺だけ歩いていたらどう

見える？ 捕まったお姫様がコレから乱暴されます、みたいな絵にならない？

立派な馬に跨がり、派手な衣装を身に纏って、見る者を圧倒する示威行進か、名馬に乗る騎士に囲まれて、破廉恥な衣装で城に連れ込まれるお姫様。

ニュアンスが大分変わってくるんだけど……

困ってしまったて、震えるグラフィエンの目を覗くと、恐怖に揺れる瞳と目があった。

——かわいいな。

さつきまで自信満々だった馬が、涙目で馬首を下げて恭順を示しているのは、何と云うか、とても可愛い感じがした。

自然と俺は、グラフィエンの額に流れる一等星に口付けた。

するとどうだ。

——ヒイイイン

興奮した様子で鼻息を荒くしたグラフィエンは、すつくと立ち上がった。

ついでに五本目の足も立ち上がった。

後ろ足の間から、人間の腕より太い、肉の棒がそそり立っている。

あら、ご立派。

血走った目で俺を見つめると、ペロリと顔を舐めて来るじゃないか。

——コイツ！ 発情しとる！

そして、発情する余り、俺への恐怖を忘れているッ!!

ヨシ! つまり俺の存在は、怖いより可愛いって事だな! 取り敢えず女の子の自信は取り戻せた。オマエ見どころあるぞ!

勢いのみあまり、俺は裸馬のままのグラフィエンに飛び乗った。大丈夫、乗れる! このまま有無を言わさない!

ニツコリと馬丁に微笑む。

「乗せてくれるようです」

「え、ええっ?」

恐慌に陥った馬丁さんに、請求は王国軍に回すように伝え、俺はそのままグラフィエンを走らせた。

「ま、待ってくださいえ」

馬丁を置き去りに、みるみる景色が後ろに流れていく。圧倒的な脚だ。

牧場を抜け、畑に飛び込む。黄金に色づいた小麦の間を風の様に通り抜け、蹄の音が心地良いこと!

まるで飛ぶように速い! いや、流石に飛んだ方が速いな。実際にグライダーで飛んできたのだから、そこは厳しめに行く。でも速い!

そうしてロアンヌから帝都まで、僅か数日で駆け抜けた。

『俺たちにとつてはどう見てもウエディングドレスだけど、この世界の人にしてみれば、酷いドレスケベ衣装だよコレ』

言われてみれば、そうである。この世界でエロスの象徴と言えば肩。その肩をむき出しにして、逆に出しても問題の無い手足は、これでもかと長いロングスカートに、ロンググローブで隠している。

言うなれば、エッチな局部だけをピンポイントで曝け出した、変態衣装なのである。所変われば品変わると言うが、ここまで印象が異なるドレスもそうは無いだろう。

「でも、少しインパクトが少なくは無いですか？」

「いやいやいや」

「誰かさんが、バニースーツや、私が鞭を打たれる絵をばら撒いたおかげで……」

「……………」

目を逸らすな！ こつちを見ろ！

それに、馬に散々に逃げられた俺は、何と云うか、嫌われる事が怖くなっていた。

「もつと、こう、布の面積を減らして……このこと、ココを」

「いやいや、ミニ四駆じゃないんですから、軽率な肉抜きはやめて下さい」

ミニ四駆言うなし。

俺が指示したのは、真つ正面の布だけを僅かに残して、脇と背中中の布地を大きくカッ

トしろ言うモノだ。脇とか背中とか素肌を見せつける感じ。

「だけど、木村には否定されてしまう。」

「……まあ、そうだよな。出来たドレスをそう簡単にいじれるハズが無い。でもなー、思い出すのは木村の同人誌だ、アレを見てしまうと、これじゃインパクトがない。計画を成功させるために、エロスと美しさの暴力で圧倒したいのだが。」

「もう少し、有無を言わさない凶悪な感じに……」

「今からコレを改造するのは……」

「……そうですか」

「まあ、考えようによつては肩だけ露出しての方がエロいっちゃエロいからな。諦めよう。」

「そう思っていると、木村が変なモノを取り出した。」

「それに、脇や背中を出すデザインドレスが着たいなら、私が個人的に着て貰おうと用意したドレスが既にありますから」

「……………」

「……………」

「数秒、見つめ合う。」

「え？」

いやいや、意味ワカランが？

木村がニコニコと嘘くさい程の笑顔で取り出したドレスは、上半身はシルクのビスチェ。それを大胆に、ミニ四駆みたいに肉抜きして、脇と背中をスカスカにした感じ。下半身のスカートは変わらさずロングスカートではあるものの、凄まじいスリットが入っている。あと、ちよつと透けてる気がする。

え？ ナニコレ？ 俺のオーダー通りのドレスが、ズバリ出て来たんですけど？

ここまで同じだと、コイツと同じエロセンスだつてのが恥ずかしいまである。

「そう言うと思つて」みたいに取り出されても反応に困る。オーダー通りだから文句も言えないし。

コイツは俺にコレを着せて、ナニするつもりだったんですかね……

つてか、エルフから魔導ミシンを買つてから、とんでもないスピードで凝った服を作つて来るよね君。主に私用で。

……まあ、良いか。

「では、コレで」

「ええっ！ 流石にコレを人目に晒すのは……」

お前に晒す方がよっぽど危険だろうが！

まあ、試しにちよつと着てみようぜ。

「良いですけど、アクセサリーはさっきのウエディングドレスにあわせたので似合うかどうか……」

「ともかく、試してみましよう」

アクセサリーに関しては、ドレス以上に高額だったので既に話は聞いている。

細い金のネックレスを何重にもかけて、滝みみたいに肩から流すデザインらしい。

この世界ではエロスの象徴たる肩や首周りを、キラキラと派手に彩ろうってアイデアだ。

ジャラジャラと金のネックレスと取り出す木村は、俺の眼前に自慢げに広げる。

「いやー急遽組み替えたので大変でしたよ。コレが完成品です」

「コレが……」

……え？

「……………」

「……………」

なんだ、この？　なんだ？

「なにこれ……………」

俺が呆然と眩くと、木村はウンウンと頷く。確信犯おっぱい教信徒の犯行の意だろう。

木村が取り出したネックレスは……これネックレスか？ 金色の蜘蛛の巣と形容するのがピッタリだった。付け方が全く解らない。

どうするのかと木村をみると、キリツとした顔で宣言する。

「では、お手伝いしましょう」

……君、随分自然に人の服、脱がすのね。

まあ構わんが。

金色の鎖が、するすると俺の素肌に纏わり付いていく。

で、だ。

「何です、コレ？」

「動かないで下さい、いま固定します」

ギョツギョツとお腹を金の鎖で縛り、肉をお胸に寄せてあげて、サイズアップを図っている。気分はまるでボンレスハムだ。

エロエロに肉抜きしたせいでコルセットがつけられないドレスだから、これは仕方無いのか？

それにしても、痛いし、苦しい。

「コレで、最後」

「んっ！」

変な声をあげてしまふ、ひたすら苦しい。

トドメとばかりに縛られた首筋は、呼吸も苦しく、血の巡りが悪い程に圧迫されている。

鏡を見ると、それこそ金色の蜘蛛の巣に囚われた少女が身をよじってる。何だコレ？この時点で、文句の一つも言つてやりたいが、取り敢えず前貼りみたいなエロいドレスを着てから考えよう。

……本当に貼り付ける様に着るしかないのな。

それにしても、金の鎖が締め付けて、着替えるためにちよつと動くのも辛い。ガーターストッキングにハイヒール。ロンググローブも嵌めて、コレでようやくフル装備となつた時には息が上がっていた。

疲れに肩を落とそうにも、金色の鎖にギリギリと締め上げられて、自然と胸を反らせた姿勢になる。

すると華奢な体に肋骨が浮かび、体の中心から伸びた金の鎖が、肋骨の間に沿うように締め付けてくるからたまらない。

大きく息を吸い込むと容赦なく締め付けて、痛みに肌が紅潮する。噴き出した汗が流

れ、金の鎖をつうーと伝うと、くすぐったさに身悶えする。

すると、また、金の鎖が体を締め付けるのだ。

反らせた胸は、寄せて上げた効果か、自分でも驚く程に大きく見えた。

その上でキラキラと踊る金の鎖は、締め付けはしない。ただゆつたりとおっぱいの柔らかさと曲線を強調しながら谷間へと流れ落ち、ドレスの少ない布地の中へと消えていく。

だけど、身をよじつたり、前屈みになると、その金の鎖も牙を剥く。圧迫された肉が金の檻から逃げ出そうとはみ出して、肉の柔らかさをコレでもかと強調するからだ。

浮かんだ珠の汗までが柔らかさを競うように、胸の上でふわふわと揺れていた。

肩はもう、酷い。

容赦は要らぬとばかりに締め付けて、その柔らかさと、滑らかさを強調しながら、金の輝きで彩っている。

肩を彩る金の鎖に付けられたブローチは右はピンク、左は銀に輝く宝石が踊り、俺の瞳の色に併せたモノに間違いないだろう。

コレも酷い。

この世界の基準で言えば、局部を縛り、宝石で彩ってるようなものだ。

首筋は、痛々しい。

それまでの人形じみた美を裏切り。あくまで生きた人間だぞと、声高に主張している。

か細い首は容赦なく締め付けられて、呼吸も苦しいのが一目で解る。肌はすこし赤黒く染まり、透き通る肌に浮かび上がった青白い血管はどこか苦しげだ。

ふと首を傾げた時に覗く鎖の下の素肌など、締め付けに赤く染まっている。普通の少女が身に付けられれば、酷い跡が残ってしまうに違いない。

痛々しさが可哀想な反面、嗜虐心を煽り、見る者を狂わせる。

色々なエロ衣装を着てきた俺ですら、気恥ずかしさと、息苦しさに身をよじる。するとまた、容赦なく体を締め付けるのだ。

胴も、胸も、肩も、首も、苦しくて。そしてエロい。

やり場がなくなつた目で更に上を見ると、鏡の向こうで可哀想な程に顔を赤くして、切なげに息を吐く少女と目があつた。

……俺だ。

何だコレ？ ドエロい。

どうなのかと鏡越しに木村を見ると、俺の後ろで真っ白に燃え尽きていた。

「あの？」

『尊死』

尊死じゃねえよ、死ぬなら苦しんで死ぬ。俺ばかり苦しませるな。

「ちよつと、苦しいのですか？ 特に首筋が」

「緩めましようか？」

……いや、どうしよう？ この痛々しい感じ。コレはコレで最高にエロい。

この可哀想と同情を誘う痛々しさこそが、俺を『偶然』から守ってくれる気がしないでもない。

「一応、ちよつと力を入れると全体が弾け飛ぶので、締まって死ぬ事はないはずす」

なら、大丈夫か。これなら期待を裏切らない、ほつと一安心。

「とにかく、コレなら皆を黙らせる効果はありそうですね」

「永遠に黙る事になりそうな気がしますが?？」

流星に言い過ぎだろ。そんなに物騒な見た目ではない。

「いえ、裸ですら見慣れて、耐性がある私が死に掛けてるので、本当に危ないですよ」

「用意しておいて、良く言いますね。この鎖、まるで緊縛ではないですか」

聞いていた話と、全く違う。

「……初めは肩と胸の曲線を強調するように、金の鎖を流すアクセサリーだったので、自在ルーデルオン金腕デルオンに縛られたユマ姫があんまり可愛かったので」

「……やっぱり緊縛ではないですか」

コイツもヤバイ趣味をもってるな。ヨルミ女王に続いてSM趣味の人間しか居らんのか？

それに、よくよく考えるとおかしい。

「肋骨に沿うような鎖は元のウエディングドレスでは見えないでしょう？」

元々、このエロいドレスを着せるつもりだった疑惑がある。

「それは、ドレスの下は秘かに金の鎖で緊縛されてるのって、想像するだけでドエロいかと」

「やっぱり緊縛じゃないですか！」

いい加減にしろ！ お姫様を羞恥緊縛プレイに巻き込むな！

「それに、スリットが入ってるこのドレスはともかく、ウエディングドレスでは馬に乗れないでしょう？」

「いえ、それは普通に、装甲車から手を振るのだとばかり」

「……………」

なるほどね、王都に帰った時もそうだったのにすっかり忘れていた。

まあ、良いだろう。馬も手に入ったし、衣装も準備が出来た。

後は蜂起を待つて、正門から入って堂々とメインストリートを練り歩くだけだ。

木村と田中はどうするんだ？　そう言えば最近では田中を見ていないが。

「それなんですが……」

なんと、田中も木村も帝都攻略には参加しないと言うのだ。

「この衣装で行進するところを、見たくないのですか？」

「うぐつ、見たい、見たいですが、一方で見たく無いモノもあるのです」

……そうか、コイツは俺が無差別に、無抵抗な人間を殺す所を見たくないのだ。田中も虐殺するなら協力しないと云ってたつけ。

「だから、私達の事は気にせず、やりたいようにやって下さい。ただし、死んでも助ける事は出来ません」

「……良いでしょう」

元より、帝都を包囲した段階で勝ちは確定している。

あとはどう占領するかだけの問題だ。二人が必要なピンチもないだろう。あつたとして、それで死んだら自業自得だ。

「でしたら、あなた達はどうするのです？」

「実は、アイツに探させていた研究所が見つかったのです」

「研究所？　それは魔女の？」

「ええ、そこにまだ魔女が居るといふ噂もあります」

……へえ？

「興味がありますか？ 蜂起を遅らせて、まずは魔女を討つても良いですが」

「いえ、もう興味がありません」

アイツは、死んだ。目の前で、アイツの野望を打ち破ってやったのだ。

実は生きていた、そんな展開があつたとして、今の俺の敵では無い。邪魔をするなら殺すが、わざわざ会いに行く必要を感じなかった。

「あなた達こそ、敵地に取り込んで死んでも私は助けに行けませんよ？」

「良く言いますね」

いや、俺が助けた。パターンも結構あるじゃんね。

なんにせよ。

「全てが終わるのですね」

近づいた終局に、俺は思いを馳せる。

既に夜の帳は落ちて、夜空には大きな月が輝いていた。

蜂起と開門

穏やかな秋晴れの朝。澄み切った空は遙か高く、雲は彼方を流れている。まだ微睡む者も多い時間。突如響いた砲声が、緩慢な空気を切り裂いた。

王国軍の帝都攻めが始まったのだ。

平和な空とは対照的に、濁った硝煙の雲からは銃弾の雨が降り注ぎ、地上には死が満ちていく。

これまで王国軍は帝都を包囲しながらも、積極的な攻勢に出ていなかった。それが、一転しての大攻勢。帝都の城門は大混乱に陥った。

城門を守る責任者であるガーランド中將は、門塔の守衛室から戦場を見下ろして呻いた。

「奴らの狙いはなんだ？ 今になって、どうして攻めてきた？」

副官のゴスル少佐は城内の地図を広げ、答える。

「しびれを切らした、と言う事でしょう」

「今更か？」

「今だから、ですよ」

広げた地図には拡大するスラムが詳細に記入されていた。

今まで王国が打って出なかつたのは、平和を愛するユマ姫が市民を犠牲にする事を嫌った為と言われている。

しかし、食料不足はいよいよ深刻となり、暴動が繰り返し起きている。路頭に迷う人は増える一方だ。

もはや市民を巻き込まない為に、手控えする理由はなくなつたと言える。

「市街地はどうなっている？」

「市民に動きはありません」

外からの攻勢と連動し、内からは暴動が起こる。そこそがガーランド中将の恐れる所だつた。しかし、動きは無いと言う。

「いつそ、アレをやるか」

「正気ですか？」

ゴスル少佐は顔を顰める。ガーランド中将が秘かに温めていたのは悪魔の計画だ。

「名付けて『強制市民の盾』作戦、良いじゃないか」

それは、無辜の市民を盾にして城門の防衛にあてるといふ、非人道的な策だつた。

炊き出したのなんだと嘘を付き市民を誘導。戦場へと誘い出して直接的に盾にする。

その悪辣さにゴスル少佐は抵抗を示したが、それも優しさからではない。下手をすれば暴動が発生し、余計に被害が拡大するからだ。

「寝た子を起こす事になりかねません」

「ふん、このまま放置しても何時かは抜かれる」

ガーランド中将の言う事も一理あった。秋の収穫期を迎えても兵が引かないと言う事は、王国は帝都を諦める気がないと言う事。

このままではジリ貧だった。

「今すぐ、市民を誘導しろ。抵抗するなら撃ち殺しても構わん」

「了解しました」

そうして、悪魔の計画が実行に移される直前。外から一際大きな歓声上がる。

「何だ？ ナニが？」

窓に駆け寄ったガーランドは信じられないモノを目にし、固まった。

守るべき城門が、既に開け放たれていたからだ。

「内通者か！」

それしか考えられない。城門は左右の門塔から同時に操作し、鉄格子を開ける必要がある。その上で、巨大な門を数人掛かりで外して、やっと開門するものだ。大砲の一撃で吹き飛ばす程に脆くは無い。

しかし、犯人捜しにいそしむ時間など無い。既に敵の騎士が城内に雪崩れ込んでいたからだ。ここまで踏み込んでくるのも時間の問題。

「行くぞ！ 第二城郭まで下がる」

「ハッ！」

ガーランドは即座に貴族街にある第二城壁までの撤退を決断した。市街地の安全な
ど、この男には些事である。

「ワシの馬は？」

「裏口に！」

ガーランドとゴスルは守衛室を飛び出し、石積みの螺旋階段を早足で駆け下りる。も
はや一刻の猶予もなかった。

しかし、その足が止まる。

階段のど真ん中、ずた袋を被る大男と鉢合わせになったから。

手には血に染まった鉈を持ち、首のない死体をズルズルと引き摺っている。

ガーランドとゴスル。二人が揃って回れ右をしたのは言うまでもないだろう。

「な、何だアレは！」

「アレが内通者でしょう」

「化け物ではないか！」

叫びを上げ、今来た階段を必死に駆け上がる。

この門塔からは、外に出られそうにない。

「閣下！ コチラです！」

「早くせんか」

二人は銃弾飛び交う城壁を這い渡り、対面の門塔に転がり込んだ。

「コチラは安全なのだろうな？」

「ココには精銳が詰めてますので、それに一人や二人なら私めが」

「ふんっ」

先ほどは、たった一人の大男に尻尾を巻いたではないかとガーランドは鼻を鳴らす
が、自分も逃げ出したため文句は言えない。

それほどに、不気味な相手だった。まさか斬り合いたいとは思えない。

「あんな化け物、そうは居ないでしょう」

「まさしく、騎士の一人や二人ならワシの剣の錆にしてしんぜよう」

「おお！ 音に聞こえたメルモンドの金獅子の剣捌きを見られるとは、役得ですな」

「ハハッ、任せておけ」

そうして駆け下りた再びの螺旋階段。階下で待ち受けていたのは、ギシギシと不気味な動きで這い回る、異形の怪物の群れだった。

金属の外殻に、奇妙な唸り声。悪魔の軍勢と形容するのがピッタリな威容である。ガーランドとゴスル。二人が揃って回れ右をしたのは言うまでもないだろう。

「な、何だあれは!?!」

「アレは、天使ユマの信望者ですっ!」

「何だと? アレが天使派? あのナリでか?」

「は、ハイ。あの? ……それで、金獅子の剣技は?」

「馬鹿モン! あんなモノを斬れるか! 剣が汚れるわ」

前を走るゴスルは舌を出す、ガーランドから見えはしない。

再び階段を駆け上がり、また別の塔を目指して城壁の上を駆け出した。

しかし、城壁の上、ガーランドとゴスルの前に、一人の王国騎士が立ち塞がる。

「よお! お二人さん。そんなに焦ってどうしたんです?」

ごく軽い調子で二人に話し掛けてくる。そこに、強者が持つ凄みは感じられない。手に持つ槍も酷く簡素で、それすら持て余している様に見えた。

ガーランドは笑みを深くして、今度こそ剣を抜く。

「貴様は、一人か?」

「まあ、そうっすよ」

「よくもコノコとワシの前に立ったな、後悔させてやる」

獯猛に笑うガーランドに対して、立ち向かう王国騎士は酷く悲しそうだった。

「あの？ 僕の名前、知りませんか？」

「ハッ！ キサマなぞ知るか！ お前こそワシの名前を知らん様だな」

「いや、ガーランド中将ですよね？」

騎士は中将を知っていた。それでいて、つまらなそうに頭を掻く。

その仕草を弱気の現れと判断し、気をよくした中将の舌は良く回る。

「ほう、ワシをメルモンドの金獅子と知って挑むとは、見上げた奴だ。その勇氣に免じ、見逃してやつても良いのだぞ？」

既にしてやる気満々、ガーランド中将は剣をひけらかす。

すると益々、相対する騎士は悲しみを深くし、肩を落とした。

「はあ……」

「どうした？ 今更怖じ気づいたか？」

「逆ですよ」

「？」

「どうして、僕には怖じ気づかないんですか？」

「なにを？」

瞬間、距離が詰まった。

城壁の上、遙かに居た騎士が、既に目の前。

慌てて剣を振ったガーランドだが、まるで速度についていけない。気が付けば騎士はガーランドを置き去りにして、既に背後に立っていた。

「お疲れ」

それどころか、騎士はガーランドの背に隠れていたゴスル少佐の肩を叩いて労つてみせる。それほど余裕ぶり。そして、その手には武器がない。全くの丸腰であった。いつの間に追い越して、背後から声を掛ける。余りにも馬鹿にした行動だ。

瞬間、頭に血が上ったガーランド中將は、振り向きざまに剣を振るおうとし……動かない体に気が付いた。ここまで全くの理解の外。

いや、そこで初めて思い出す。この騎士は、先ほど声を掛けてきた時、手に槍を構えて居たはずだ。あの槍は何処に行つた？

まるで理解が及ばなかったガーランド中將は、いつそ幸せだったと言つて良い。不幸にも理解をしてしまったのは、背後から全てを見ていたゴスルだった。

「あ、ああつ」

か細い悲鳴をあげる。一本の槍が彼の腹を貫いていたからだ。

——前に立つ、ガーランドごと！

「な？ あ、りえな、い！」

死に瀕し、ガーランドは貫かれた腹を見る。中將として恥ずかしくない上物の鎧を着て戦場に参じている。それがアツサリと貫通し、まして背後の少佐ごと貫くとは、考えられない威力。どんな腕自慢でも到底出来る事ではなかった。

不可能を当たり前にやってのけた騎士はポリポリと頭を掻きむしる。その顔は苦渋に満ちていた。

「折角、練習したのに相手がこんなザコとはなあ」

その槍は、魔槍。エルフが名付けるは神槍アイフェル。かつてゲイル大橋の一騎討ちでバーリアン・ローグウッドが使っていた槍だった。

死に瀕したガーランドが血を吐きながら尋ねる。

「お、オマエは？」

「グリードですよ、ユマ姫親衛隊の隊長に納まっちまった男です。知らないですか？」
勿論、名前だけは知っていた。だが、タナカやゼクトールと比べると影が薄く、これまで注目されていなかった。

帝国軍は、ユマ姫親衛隊など色物と高を括って来たが、守るべき姫を思い描き、怪我を恐れぬ練習に明け暮れる騎士団の練度は群を抜いていた。

「ま、さか……」

戦う相手を間違った。死の間際、ようやくガーランドは気が付いた。

一方で、勝つてなお、シヨックを隠せないのがグリードだ。

「はあ、隊長はともかく、あの変な奴らに負けるとは」

通常、決して扱えない魔槍。グリードは血を吐く練習の末にモノにした。

それなのに、奇妙な格好をしたスラムの一般人にすら、強者の貫禄で負けている事が少なからずシヨックであつたのだ。

「髭でも生やそうかな」

後悔を口にするが、もう戦争は終わる。

それこそ後の祭りだと、戦火の上がる帝都の街並みを見下ろして、グリードはぼんやりと思うのだった。

聖女伝説3

瞬く間に市街地を制圧した王国軍だが、第二城郭に踏み込もうとはしなかった。

しんと静まり返った市街地に響く、侵略者たる王国兵の声。しかし、それは略奪によるモノではなかった。

「食糧を配る。表に出ろ！」

王国軍は、まずは食べ物で住民を懐柔する策に出た。帝都の新たな支配者を強烈に印象付ける事が何より大切だったから。

食べ物につられ、おっかなびつくり外に出た市民が見たモノは、メインストリートに立ち並ぶ王国兵の勇姿となった。

餓えた野犬の群れと聞いていたのに、実に統率がとれている。我が物顔でウロつく帝國兵など比べものにならない。

数々の悪評はプロパガンダに過ぎなかった。これがまず、帝都の市民にとって最初の衝撃となる。

帝国は真実負けたのだと、認識させる一助となった。

「ユマ様がおいでになる！ その目に焼き付けろ！ 食糧はそれからだ！」

そして、その兵士達が一点を見つめ、一切を見逃すまいと城門から目を外さない。ユマ姫とはそれほど存在のだと、印象付けるに十分だった。

この手のパレードで食糧が配られるのは良くある事。それに、コレから姿を見せるのが噂に名高いユマ姫とあれば、配給などなくとも見物であった。

気が付けば、街頭には人が溢れかえり、先ほどまでの静寂が嘘の様にザワめいた。

誰もがユマ姫を待ちわびて、不安が期待に塗り替えられていく。

……集まった民衆は、まだ知らない。

現れるユマ姫に、この世の全てが塗り替えられていく事を。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

開け放たれた城門。脇にそびえる門塔には王国旗がはためき、道の左右を王国騎士がびっしりと固めている。

もはや城門は完全に王国に占領された。

ユマ姫親衛隊隊長であるグリードが手を振ると、管楽器の音色までもが響きだす。

いよいよパレードが始まる。この方こそがユマ・ガーシエント様だと、万人に見せつける示威行進だ。

グリードは確信していた。帝都の市民がひと目ユマ姫を見た瞬間に、神格化された皇帝への信仰心は消え去り、新たな神の降臨に歓喜すると。

その光景を想像するだけで、自然と笑みが深くなる。

なのに、城門前、いまだユマ姫の姿は見えない。朝から装甲車の中に籠もりきりであつた。

女性のお色直しは長いと、グリードはのんきに考え、ぼんやりと遠くを見ていた。

「なんだ、アレは？」

だから、いち早くそれに気付いた。彼方から一匹の裸馬がコチラに駆けてくるではないか。

それは凶抜けたサイズの黒毛。騎士ならば誰でも懂れる馬体であつた。それがそのまま、ユマ姫が待機する装甲車へと突撃してくるではないか。

「マズいぞー！」

それこそ異常な不運に見舞われる主君を思えば、グリードは慌てて装甲車に駆け寄つた。

それがマズかつた。

目に飛び込んだのは装甲車から突き出された、すらりとのびる『足』。

薄い絹糸で縫い目もなく編み上げた白く透けるようなガーターストッキングに、同じ

く純白にキラキラと光を反射するハイヒール。

それらが装甲車から飛び出すや、艶めかしくもくねらせて、そのまま馬上に飛び乗った。

「苦勞」

ユマ姫だった。

馬上から、ひと言、グリードに応ずる。

しかし不敬にもグリードは返す言葉を持たなかった。それどころか、呼吸さえままならない。

見上げる馬上のユマ姫が、余りにも美しかったからだ。余りの衝撃に尻もちをつき、そのままピクリとも動けずにいた。

どこまでも漆黒の馬体と、輝くような純白のユマ姫のシルエツト。

切り取られた光景は、現し世と画する絶佳ぜっかを誇る。

圧倒的な美、もはや暴力となつた美しさを目にしたグリードは、脳の情報量が飽和し、シヨツク症状に陥っていた。

呼吸も忘れ、バクバクと心臓が高鳴り、パクパクと口を動かすも、仕事を放棄した体は少しも自由にならなかった。

見上げる姿勢に逆光となり、ユマ姫の姿をハッキリと目視出来なかった事が、グリー

ドの命を救ったと言って良い。

そうで無ければ、間近からユマ姫の姿を見上げたグリードは、その場でショック死したとして、すこしも不思議では無かったぐらいだ。

いよいよ酸欠になり、チアノーゼを起こした顔がようやくやく酸素を取り込めたのは、既にユマ姫が城門をくぐり抜け、だいぶ後になってからだ。

ゼゼエと酸素を取り込みながら、グリードは命の危険を感じ、ユマ姫の後ろ姿を見送れなかつた程である。

見なくて正解と、そう言えるであろう。

髪が風にそよぐ度、覗く背中は滑らかな素肌を外気に晒し、金の装飾が容赦なく締め付ける様は、命を奪う程の美しさと、

……狂気に満ちていたのだから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

城門の向こう、市街地の広場で待っていた帝都の市民は何事と顔を見合わせた。

高まった期待感を爆発させるように、城門からは管楽器の音が響いていたハズだ。いよいよ始まるパレードに、誰もが快哉を叫んでいたハズだ。

それが急に静まり返ってしまったのだから、混乱するのも無理はない。

本来は津波のような歓声が徐々に迫ってくるのが恒例である。それが逆、やって来た

のが静寂だったのだから不思議でならない。

帝都の市民は皇帝の生誕パレードなどで、この手の行事に慣れっこだった。それだけに首を傾げる。

ナニか事件かと、それまでと違った喧噪が場を支配していく中、それでも王国兵達は、当然とばかり微動だにしなかった。

何かとんでもないモノが来るのだと、市民は遅ればせながら理解した。

市民の脳裏を過ぎったのは、プロパガンダに石を投げた魔王ユマのパネルであった。まさかと信じていなかったユマ姫と称する怪物の姿。

何人もの市民が、まさかひよっとするのかと、恐怖に引き攣りツバを飲み込む。

しかし、現れたユマ姫の姿は、そんな彼らの想像を上回る程に凶悪であった。

静寂が、場を、支配する。

音が無くなった世界を、ユマ姫が進む。

ゆったりと馬を歩ませる音だけが、空気に伝わる全てであった。

まず目につくは、信じられない大きさの黒毛の牡馬だ。

帝国民民にして、これほどの名馬、皇帝への献上品としても目にした事が無い。艶やかな毛並みは、この馬一頭でもパレードが成り立つほどに絢爛であった。

耳聴い者ならば、この馬がロアンヌが誇る『主』だと気が付き、二度驚いたに違いな

い。

かの馬は決して懐かず、人を乗せないと有名だからである。

しかし、そんな驚きも、馬上に跨がる人物を目にすれば掻き消える。

だが、そもそもにして、多くの人間は姫の姿を直視する事すら叶わなかった。

生存本能が、目視する事を引き留めたのだ。

衝撃に耐えられず、精神を壊してしまふから。

漆黒の馬体に伸びる、白いおみ足を見るだけで脳が揺さぶられる。大胆に開いたスリットから覗く足は、視界に過ぎるだけで破滅的な狂乱を脳にもたらしした。

鞍も置かず、黒毛の背中に直接腰を下ろす様は何とも言えず官能的で、見てはイケないモノに思われた。

毎年のパレードで、「高貴なる皇帝陛下を無遠慮に見るな」と言いつけられる帝国市民であるが。

本当の高貴なる美を前にすれば、自然と頭が下がり、直視など叶わないのだと知る事となる。

誰もが息を飲み、ツバを飲む事さえ許されず、ポカンと開いた口から唾液を垂れ流す。こうなれば市民は間抜け面を晒すしかない。

ならば、ユマ姫を見慣れた護衛の騎士たちはどうか？

彼らはスリットから覗く官能的な足、馬に跨がる臀部までは耐えられた。

しかし、シャンと伸びた背筋、煌めく銀の髪、そして、大胆に素肌を晒す脇腹を見るや、自然と体が固まった。

くびれたお腹の正面にだけ、へその形まで解る程に貼り付いた僅かな布地は、却って大きく開け放たれた脇腹の美しさを強調する。

まして、華奢な脇腹に浮かんだ肋骨の、痛ましいまでの美しさたるや。それだけで、か弱くも儂い少女の苛烈な狂気を体現していた。

更に、その痛々しくも浮かび上がった肋骨に沿うように、か細い金の鎖が過酷なまでに体を締め付けられているのを見て、冷静を保てる者がどれだけ居るのか。

ユマ姫を見慣れた騎士であつても、立っているのが精一杯の惨状である。

そんな、音が殺された広場にあつて、奇妙な金属音がシャンシャンと響き始める。

ユマ姫以外に、この場に動ける者が存在したのだ。

それは悪魔の一団だった。

歪んだ金属の鎧を身に纏う異形の怪物。彼らは天使ユマの信望者だ。

元々、生きながらに多くの伝説を持つユマ姫だ。

噂が噂を呼び、話が大きくなるにつけ、遠く離れた帝都に於いて、ユマ姫を天使や神

と同列に語る信望者が生まれてしまうのは必然といえた。

まして戦端が開かれてからは、その信仰心を補強するエピソードに事欠かない。ゾンビ退治に巨獣退治、空から隕石を降らせ、略奪に苦しむ村へと降臨してみせる。

信望者の中で、一度も実物を見た事が無いままに、ユマ姫への妄想ばかりが大きく膨れ上がっていった。

そこに持ってきて、木村が配布したユマ姫の物語を記述した一連の叙事詩は、『漫画』と言う見慣れない、それでいて革新的な形式で物語を彩った。

もはや彼らにとつてユマ姫とは神を越える存在となる。その神が遂に帝都に降臨するのだ。

一世一代の待ちわびた瞬間。彼らにとつて、この場に奇跡が満ちるのは当然だった。

ひたすらに上げ続けた期待値。だからこそ、彼らはユマ姫の美にあてられて、それでも動く事が可能であった。

鎧の音を不規則に響かせながら、壊れたゼンマイ仕掛けのロボットの様に、ユマ姫に近づいて行く。動けない市民も、王国騎士すらも撥ね除けて。

なにせ、彼らの覚悟は決まっていた。これだけの一大時。ユマ姫の姿を人間に過ぎない自らの網膜に焼き付けるには、当然に命懸けになると、城門に攻め込む時よりも、なお危険を伴うと覚悟してこの場にいる。

それどころか、彼らの中には、天使ユマと自分の世界を永遠のモノにするべく、狂気のままに武器を握り締め、完全な世界を導こうとする者すらも居た。

ユマ姫の血肉を世界に捧げ、完全な世界を導こうとする者すらも居た。

狂信者たちは、唇を噛み締め、歪んだ鎧が体を貫くに任せ、痛みで狂気を加速させる事で、暴力的な美に抗った。

鎧の隙間から血を滴らせ、それでも歩みを止めない様は、真実、悪魔の集団と言える。彼らはあわや、ユマ姫に槍が届く距離にまで近づいてしまう。

その行軍も、馬上で背筋を反らし、大きく突き出されたユマ姫の双丘を見るまでだった。

肋骨が浮き出る程に華奢な胴に対し、胸のふくらみは柔らかく、豊かだった。

その優美なる曲線をなぞるように、金の鎖が掛けられている。金鎖が流れ落ちる双丘の狭間には、この世の神秘が丸ごと納まっているかに思われた。

その時、奇妙なブリキの集団の接近に驚き、ユマ姫を乗せた馬の足が、少し乱れる。

それだけの動きで、締め上げる鎖の痛みにはうと悩ましげに息を吐くユマ姫。気恥ずかしさに紅潮した肌に汗が浮かぶと、胸元に踊る珠の汗が雫となって、胸の狭間に吸い込まれていく。

更には、身をよじる事で金の鎖が双丘を締め付け、暴力的な柔らかさを伝えてくるの

だ。

コレを見てしまえば、どんな覚悟も吹き飛ばしかない。

妄想と妄執で上げ続けたハードルを、加速する現実が置き去りにしていく。

悪魔に成り果てた集団は、ブリキのおもちやに変じてしまった。ガラガラと崩れ落ち、中の人間を晒して、悪夢の行軍は終わりを告げた。

それに呼応して、広場の対面からは別の集団が姿を現した。

ずた袋を被り、血に塗れたエプロン、ガタガタになった鉋やノコギリは血の跡が錆となりこびり付く。

聖女ウルフィアの信望者たちだった。

彼らに込められた覚悟、そして決意は、天使派すらも凌駕していた。

なにせ、この瞬間は、彼らの命を救った聖女ウルフィアが命を賭して作った時間。彼らはそう信じているからだ。

ユマ姫の正体は魔王。無数の邪悪なる権能を小さな少女の体に押し込んだのは、他ならぬ聖女である。

この機を逃せば、聖女は魔王に殺され、帝都は、世界は、闇に閉ざされる。

ユマ姫の自業自得ではあるのだが、そこまでの決意をもって彼らはこの場に参じていた。

彼らに掛かっていたのは、自らの命ではなく、自らを救ってくれた聖女の命。自分の命だけを賭け、ユマ姫の美に立ち向かった天使派とは訳が違う。

締め上げられる肋骨の痛みや、柔らかな双丘の美しさを見ても、彼らの歩みは止まらない。

歯を食いしばる事で、痛々しくも、過酷な美に抗った。今も命を削り、悪魔と戦う聖女の苦しみを思えば、抗えた。

市民の間を縫い、騎士を蹴飛ばし、ブリキのおもちやを跳ね除けて、とうとうユマ姫に肉薄する。

しかし、そこまでだった。

中天に差し掛かった太陽が、金の鎖に彩られたユマ姫の肩を輝かせたからだ。

締め付ける金の鎖は狂気そのもの、彩る宝石の淫靡さたるや悪魔の王を名乗るにふさわしい、視覚への暴力となって彼らを貫いた。

まして、か細い首を締め付ける金の鎖が、ユマ姫に込められた覚悟と決意を物語る。それは、聖女ウルフィアの命が掛かった聖女派ですら及びが付かない狂気を示して止まない。

苦し気に浮き出た青白い静脈は、彼女もまた命を賭してこの場に居るのだと訴えた。

苛めたい、殺したい、食べたい。そして、助けたい。

聖女派の決意は、欲望で上書きされ、さらには痛ましい悲哀の美しさに塗り替えられる。

人ならざる超常の者が命を賭け、自らの恥辱すら投げうちこの場に居るならば、ただの人間が持つなけなしの覚悟も、決意も、もはや意味をなさない。

一人、また一人と、その場に突っ伏して動けなくなる。

今も命を削る聖女に申し訳無いと涙を流しながら、それでも頭をグチャグチャにされるユマ姫の色気と可憐さに脳を壊され、聖女派すらも膝を折り、動けない。

ただ一人を除いて。

彼女は女性である事、まだ色気も理解出来ない歳である事、なにより短い人生の輝ける時間、その全てが聖女ウルフィアがもたらしたものだっただから。

零れ落ちそうだった命も、家族と呼べる仲間すら、聖女に貰った全てである。

幸せだけでなく、絶望までも彼女は聖女から貰って生きていた。

強そうな兵士達の命が目の前であっさりと散っていく。その光景は今も彼女の目に焼き付いて離れない。死に際の顔に浮かんだ苦しみ、恐怖、そんな彼らを丸ごと喰らって生きていく罪すらも、聖女によってもたらされた。それら全てが宝物。

だから不格好な『ずた袋』を被った幼女は、とととととと歩く。歩き続ける。

そうして、辿り付いた。広場を貫く通路のど真ん中。やっと辿り付いた終着点。

ユマ姫の行く手を、遮る様に立ち塞がった。

まだ幼い彼女だけが、小さいナイフを握り締めて辿り付いたのだ。

なれど、神々しい光輝を直視せぬよう、ぼんやりと一部始終見守ってきた市民にしてみれば、幼女の行為はあまりにも無謀だった。

ユマ姫がなにもせずとも、立派な体躯の牡馬にあっさり踏み殺されてしまうに違いない。

幼女が踏み殺される光景は想像するだけで痛ましく。少しだけ市民を正気に戻した。

「……………」

一方で、ナイフを構え、ガチガチと歯を鳴らす幼女が立ち塞がる様を、ユマ姫は馬から困ったように見下ろしていた。

そう、見下ろした。だから二人の目が合ってしまった。

だから幼女は、刺し違える覚悟で構えていたナイフを取り落とす。

見つめるユマ姫の瞳が、余りにも美しかったから。桃色に輝く右目と、髪と同じに輝く銀の左目、それは肩を彩る宝石と同色であった。

整ったかんばせは、この世の全ての辛苦と愉悦を同時に体现する。

なにより、その頭上を飾る冠の輝きは、皇帝の王冠よりも遙かに優美で荘厳だった。

我こそが神だと主張するように。

それはユマ姫の秘宝。成人の儀で勝ち取った、エルフが誇る宝であったから。

ユマ姫は、この日にこそは、秘宝を身に付けると決めていた。

父の王剣は馬に括り、掘り返した兄の双剣も柄だけをぶら下げている。

そしてセレナの秘宝はユマ姫の中で輝き続けていた。

「やったよ、みんな」

小さな呟きは、誰にも聞き取れなかっただろう。

微笑むユマ姫は、ヒラリと馬から飛び降りる。

(その時、高く上げて組み替えられる足の動きに幾人かの意識が刈り取られるが、彼女の知るところではない)

「ごめんなさい、ウルファイアさま」

そうして蹲って聖女に謝り続ける少女の前に降り立つと、首根っこをむんずと掴み、立ち上がる。

市民は、幼女がユマ姫に食われるところを幻視した。あんなに美しい姫が人を食うところを想像出来てしまう。それが異常だと思いつつも、何故か想像出来てしまう。

思わず、目を瞑る。

けれど、そうはならなかった。ユマ姫は少女の首根っこを掴み、そのまま馬上に飛び乗った。

そして、そのまま幼女を自分の前に乗せたのだ。優しい手つきで幼女の被るずた袋を剥ぎ取ると、可愛らしい幼女の素顔が晒される。

ユマ姫は、幼女の頭を撫で、微笑む。ユマ姫は幸せだった頃の、昔の自分を思い出していた。

一方の幼女は、突然の展開について行けない。

「なに？ お姉ちゃんは？ だれ？」

悪魔だと、魔王だと聞いていた。だけど、幼いゆえに直感的にそれが違うと気が付いた。

頭に手を置く優しい暖かさには覚えがあったから。

ユマ姫はニツコリと微笑んで、黒い目隠しを取り出し、身に纏う。

そこで、気が付いた。

「あつ、ああつ！」

「私の名前は、天使ユマ。そして、聖女ウルファイアです」

澄んだ声での宣言は、広場の隅まで、もれなく届いた。

瞬間、凍り付いた空気が爆発する。

聖女は天使だった。

全ての奇跡は、ココにある。

人々の祝福は天へと駆け上り、爆発的な歓声が鼓膜をつんざく。

きつと、帝城へも届いたに違いない。それはユマ姫こそが帝都の本当の主だと印象付けるに十分だった。

その時、天使派と聖女派、それぞれが持ち寄ったパネルが独りでに切り裂かれ、吹き飛んだ事に、誰も気が付きはしなかった。

後で気が付いたスラムの人々は、本物と比べ、まるで至らない稚拙な絵に神々の怒りが落ちたのだと結論付ける。

幼い儂さと、溢れ出す大人の色気。

両方を矛盾なく内包する狂気的美貌が現実にあるのだから。

帝城攻略戦

ユマ姫は聖女であり、天使である。

正義の体現者として、彼女は帝城に降臨した。

ユマ姫を前にして、既に貴族街への城門は開け放たれている。湧き上がる民衆を前にして、多くの貴族が戦わずして諦めた。

そのままの勢いで、ユマ姫は第三城郭、本丸である帝城の前へと辿り付く。

ココに来て、ユマ姫は黒毛の名馬グラフエンから飛び降りた。

魔法を十全に行使するために、馬の健康値が邪魔になるからだ。

たった一人、巨大な城門に相對する。

臨戦態勢の巨大な帝城を前にして、少女が一人。

異常な光景だ。華麗にして色気を振りまく装束が、見る者の狂気を加速させる。

だから総大将である少女が一人戦おうとする様を、誰も止めない。止められない。

姫を守るべき騎士だって、神話の如き場面を前に立ち入れない。

今だって、とつくに敵の射程内。矢狭間から銃を撃たれれば、常人ならば死は免れない。

なれど、誰もその光景を想像出来ない。たった一発の銃弾に倒れるユマ姫を想像出来ない。

人が神に触れる事など出来はしない。そう信じて疑えないのだ。

目を開ければ、そこに奇跡はある。

ユマ姫がゆつたりと手を上げるだけで、城門の鉄格子はバラバラに分解された。

それは、魔法だ。エルフの中では体系だった技術に過ぎない。

しかし、ここでは誰もそれを奇跡と区別出来ないし、する気も無い。

もつと大きな奇跡があるのだから。

手を挙げるとき見えた無防備な脇、締め付ける鎖に見せる悩ましげな表情。

ユマ姫の美しさの方が、よほど大きな奇跡であった。

城門の巨大な扉が、ただユマ姫が近づくだけでひとりでに開いていく。もちろん自然な光景だ。だが、その程度の事は何でもない、市民は黙って見守った。

しかし、それは畏だった。

次の瞬間。市民達は突然の出来事に悲鳴をあげる。

つんぎく轟音と共に、ユマ姫が吹き飛ばされたからだ。

開かれた城門の向こう、鎮座していたのは巨大な白砲。

ぽつかり空いた砲口は、もくもくと硝煙を吹き出していた。

白砲とは？

木村や魔女が好んで使ったのは、カノン砲。砲身が長く、弾速が速い。その代わり、砲弾は小さい。

装甲車に括りつけた砲など、野球ボールサイズの砲弾しか撃てない。

対して白砲は、砲身が短く、弾速が遅い。そして砲弾はひたすらに大きい。

狙いもつけず、砲弾の重さで対象を破壊する。役目としては投石機に近い。

質量をもつて城や砦を破壊する兵器なのだ。

そんなモノが人間に直撃したら、どうなるか？

つんざく悲鳴の大きさが、ユマ姫の様子を物語る。一抱えもある鉄球が、小さな少女を挽き潰したのだ。

直径にして30cmを越える鉄球の重さは、100キロを優に超える。そんな物体が直撃して、生きていられる人間など居るはずがない。

では、人間でなかったら？

その答えが、コレだ。

白砲の後ろで勝ち誇っていた帝国兵の笑顔が固まる。

無理もない、潰されたユマ姫が、片手で鉄球を押し退けたのだから。

この程度の攻撃、ユマ姫は予想していた。

だから、ユマ姫を傷つけたのは100キロを超す鉄球の質量ではない。ユマ姫を飾る、金の鎖の輝きだった。

ちよつとした衝撃で弾けるハズのか細い金鎖の輝きは、鉄球の衝撃に耐え抜いて、ユマ姫の首をギリギリと締め付けた。『偶然』にも鉄球の衝撃が、自壊を促す安全装置を壊してしまった。

痛みに慣れたユマ姫なれど、苛立たしげに舌打ちをひとつ。

体のダメージが深刻だったからではない。

むしろ、体の中には尋常ならざる力が満ち満ちていた。

その力が、制御出来ない。

鉄球の衝撃と、締め付けられた苦しさに、体が人間の姿を諦めようとしていた。

一抱えもある鉄球の質量よりも、なお激しい力が体内を駆け巡る。うずくまり、曝け出されたユマ姫の背中が盛り上がる。

少女の殻を、何か巨大な力が突き破ろうとしていた。

ギチギチと悲鳴をあげる金の鎖は、まるでユマ姫を人間の体に留める軛くびきのようだ。

肩甲骨を引き裂くように、背中から現れたのは翼だった。それは、以前より大きい翼。今、再び、ユマ姫が翼を授かる。

翼だけではない。

身を起こした頭には獣の耳が、臀部には尻尾まで生えている。

思い出すのは、魔王ユマの描かれた醜悪なパネル。

だが、語られる姿は同じでも、ユマ姫の美しさは減じるところか、夢幻の神秘を獲得していた。

市民は、目の前で立ち上がった幻想に息を飲む。

もはや、人類を超越した何かである事は疑いようが無い。

翼を広げれば金の鎖は一斉に弾け、虚空に舞い踊り、金の輝きでユマ姫を彩った。

神々がユマ姫の美しさを祝福するようだった。

だとすれば、装飾の無くなったユマ姫の首や肩周りは寂しくなったか？

違う。

締め付けられた証として、赤い線条が白い肌に走り、見る者を狂気の美へと誘った。いざな

金に輝く空気、白い肌に、赤い跡、そして銀の髪がゆっくりと桃色に変じていけば、いよいよ狂乱の宴が始まった。

トンツつと軽い跳躍、それだけでユマ姫は城内に入り込む。

白砲の前に降り立つと、剣をひと撫で。白砲ごと人間はバラバラになって崩れてしま
う。

舞い散る血煙も、ユマ姫に添えられる花に過ぎない。

もう誰も、少女を止める事など出来はしない。

唯一、少女を止められる二人の男は、遙か遠く、この場に居ないのだから。

歩みを止めないユマ姫が、王剣を振るう。音もなく扉が崩れると、いよいよ宮殿へと踏み込んだ。

無骨な城門と打って変わって、宮殿内部は豪華絢爛。ふかふかの絨毯に、煌めくシャンドリア。しかし、ユマ姫は目もくれない。

ただ、黄金で彩られた大鏡を前にして、ユマ姫は一度だけ足を止める。しばし、自分の体を確認したのだ。

獣の耳も、尻尾も、大きな翼だつて気にならない。目についたのは素肌を彩る赤い線條。流れる汗が、痛々しい跡に吸い込まれ、伝つていく。

それを見て、思わず、身じろぎ、後ずさる。

余りにも色っぽい、自らの姿に魅入つてしまう。

気恥ずかしさに頬を赤く染め、困惑するが、それも一瞬の事。キュツと唇を結び、決意を新たに髪をかき上げた。

ピンクの髪に絡みついていた金鎖の残滓がキラキラと舞い上がる。

それを見てしまった守備兵達は、哀れであった。一步も動けずただ硬直するのみ。

真つ正面から歩いてくる侵入者を前に、ただ首を差し出すしかない。まるで天使の断

罪を待つが如く。

振るわれる王剣は、草木のように命を刈り取っていく。

ユマ姫が歩いた廊下には、首のない死体が直立姿勢のまま立ち尽くしていた。

何体も、何体も。

まるでプレートメールの置物の様だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

辿り付いたのは舞踏場^{ダンスホール}。

高い天井に絢爛なシャンデリアが揺れ、まばゆい輝きが大理石の床に反射する。

壁にはいくつもの美しい絵画が飾られ、一つ一つがどれだけの値打ちか、計算するの

も馬鹿らしい程。

そこに歩みを進める淑女が一人。

ユマ姫だ。

ロクな抵抗も無いままに、宮殿の中心部まで辿り付いてしまった。

「ふいっ」

ダンスの相手がいないお姫様。そんな妄想に、ユマ姫は自嘲した。

だが、手を差し伸べダンスに誘う紳士がたった一人。舞踏場の出口で待っていた。

「ようこそ、我が王宮へ」

「あなたは？」

ユマ姫の姿を見ても、硬直しない。ただ者ではなかった。

そして、若い。十代の半ば、ユマ姫と変わらない年頃は、少年と言うのが相応しい。しかし、まだ幼さの残る顔立ちには自信に満ちている。

「おや？ 私を思つて遙々来てくれたと思つたのだが、とんだ自惚れだったらしい」

気障な仕草だ。金の髪を掻き上げ、肩を竦める。

姿絵で、何度も見た顔だった。ユマ姫とて、驚きに目を瞠^{みは}る。

「皇帝……？」

「そうさ、その通り、知っているじゃないか」

大物ぶつて笑うには、まだ貫禄の足りない顔だ。それでも、下げた事のない頭には傲慢と不遜が満ちて、権威に裏打ちされた威光が備わっていた。

本物だ。偽物だとして、ユマ姫に相対してマトモに動けるだけで、ただ者ではない。

「皇帝が、他国の姫と話すには少々殺風景だな」

悠然と言い放ち、指を鳴らす。

何を？ と問う間もなく、ぞろぞろと人が湧き出した。

楽団だ。男も女も燕尾服やドレスを身に纏い、手に手に楽器を持っている。何をするつもりか？ 楽器に見えて槍なのか？ はたまた銃か？

違つた。ただ、一斉に奏で始める。

軽やかなメロデイがダンスホールに響き、支配する。

当たり前に見えて、当たり前ではあり得ない。

今、帝城は攻め入れられ、滅亡の際に瀕している。なのに、この余裕。

姫がたった一人城に討ち入る、とびきりの狂気。立ち向かう皇帝は更なる狂気で上書

いた。

「なんのつもりです?」

「終わりぐらい、豪華に飾りたいだろう?」

皇帝は、音楽にあわせ、歌うようにして、銃を構えた。

それは巨大なりボルバー。施条を掘った銃身に、葉莢に詰めた弾丸。最新式の銃

だった。

皇帝は躊躇せずトリガーを引く。

パンツと軽い発射音。施条がもたらす回転が空気を切り裂き、弾頭がユマ姫を指し

て直進する。

——ピシッ

あわや頭部に直撃する直前。宙で弾頭がひしやげ、ピタリと止まった。

何も無い空間がひび割れて、その向こう側でユマ姫は艶然と微笑む。

ココに来て、タダの弾丸でどうにかなるユマ姫ではない。

いよいよ、奏でる曲はクライマックスに差し掛かり、テンポアップしたりズムに弦楽器をかき鳴らす男は汗だくだ。一心不乱に奏で続ける。

冗談みたいな光景。だが、全員が、命を懸けてこの場にいる。

楽しくなつて、ユマ姫は問う。

「おしまい、ですか？」

「まさか」

今度は銃口を上に向け、撃った。

それが合図。曲のクライマックスを引き裂くように、一瞬の静寂が訪れる。

そして、巨大なシャンデリアがユマ姫目掛けて落下した。

強烈な破砕音、ガラスが割れる音に、金属がひしゃげる音。

割れたクリスタルがキラキラと飛び散り、転がる蠟燭の炎とガラス窓から差し込む光が乱反射して輝く。

しかし、シャンデリアの残骸、そのただ中に立ち尽くすユマ姫は、全くの無傷。

その艶姿をプリズムの光が七色に照らし出していた。

皇帝ですら、その美しさに一瞬、見惚れた。

しかし楽団は構わずドラムを打ち、シンバルを叩く。静寂も、破砕音も、楽曲を彩る

演出の一つとなり果てた。

彼らは足元だけを見て、何も考えずひたすらに奏でよと命じられている。おかげで皇帝は正気を取り戻した。

これは真実、狂気を押し付け合う戦いだった。飲まれたら最後、エンディングにあるのは死だ。

皇帝は魔女の洗脳能力を知るが故に、意識を奪う力への抗い方を知っていた。

とにかく、気を逸らし、相手に集中してはならない。

神より授かった魔女の力とは異なるが、ユマ姫の美しさも奇跡そのものだから。

止まらない楽曲にユマ姫は感心し、一層盛り上がる曲に気をよくする。

「次は？」

可愛らしくねだってみせる。

しかし、皇帝はもちろん、ユマ姫だって端から見る程の余裕は無い。

ただ、相手に飲まれたら負けなのだ。コレは、そう言う戦いだった。

「そうだな、こんなのはどうか？」

開け放たれる窓、そこから飛び込んだのは巨大な異形。

コレは、まさか？ ユマ姫ですら、驚き、後ずさる。

天井の高いダンスホールいっぱい翼を広げると、ユマ姫も良く知る姿をさらけ出

す。

鷲の上半身に、獅子の下半身。

「グリフォン！」

「おや、知っていたかな？」

異形の怪物がダンスホールに降り立ち、皇帝を守るように立ち塞がった。

まさか、生きていた？ いや、培養した？

あり得る話だと、ユマ姫は納得する。

ユマ姫自身、一度死んで、細胞から復活している。ネックとなる記憶も、獣ならば関係がない。

魔女が皇帝の為に、最後の護衛として形見を残したとしても不思議じゃない。

「どうだ？ 気に入って貰えたかな？」

「ええ、懐かしいわ」

——コイツとは、直接決着をつけていなかった。

ビイイイイイイ

相對する獣が二匹、吠える。

円舞曲の中、化け物の舞踏が始まった。

舞踏会の獣

舞踏場に人外の獣が二匹。

翼を広げた大鷲の上半身に、筋肉が盛り上がる獅子の下半身。

この幻獣を地球人が見たならば、誰もがグリフォンと呼ぶだろう。

相対するのは可憐な姫。ピンクの髪に、大胆に肌を晒す純白の衣装を身に纏い、身の丈を越える大剣を軽々と振るう。

豪華な舞踏場にはシャンデリアの残骸が転がり、蠟燭の光をキラキラと反射する。

二匹の獣を囲む様にズラリと並んだ楽隊は、一心不乱にハイテンポな曲を奏で続ける。

メチャクチャだ。

メチャクチャな光景だった。

ユマ姫にして内心で「安っぽいゲームみたいだ」と虚勢を張って、鼻で笑って正気を保つのが精一杯。

それほどに現実感が乏しい景色。

だから、CGも、特撮も無いこの世界で、まして息が届きそうな距離でコレを見てし

まった男は、不幸としか言い様が無い。

「な、な、な、なんだ？」

弦楽器を弾く男は、チラリと前を向いてしまった。

それだけで、もう、動けない。

幻想に取り込まれ、現し世うらよに帰る事が叶わない。

常識が殺された世界を前に、現実を忘れた。

だから、死んだ。

「手を止めるな！」

皇帝が、銃を撃つたのだ。

男の頭は脳漿のうしようを吹き出し、ガクリと垂れる。

「ヒッー」

それを見て、他の楽士は必死に奏でる。

彼らは音楽のみが魔王の邪悪な結界を破壊すると、そう言い含められている。

それゆえ、狂気にあてられないよう、足元だけを見て、奏するべしと命じられていた。

命じた皇帝すら、半信半疑の命令だった。気を紛らわせるためだけの音楽だった。

だが、ココに至り、吐いた嘘は真実と混じり合い、境界を臆にする。

この現実を前にすれば、如何なる妄想も、妄想と断ずる事が出来なくなつた。

楽隊は自分達の音楽が世界を救うのだと、崇高なる決意を決める。

だが、それにしたって、限度があった。

だから、決して見てはいけない。目の前に天国と地獄が同時に現出しているのだから。

死んだ男の手から零れた弦楽器がギリギリと不協和音を奏で、床へと落ちる。

ビィィィィィィィッ!

異音が咆哮と溶け合い、世界を狂気へいざなつた。

それを合図にグリフォンが動く。巨大な爪が小さな少女に振り下ろされた。

ユマ姫は踊るように躲すと、両手に掴んだ王剣を振り上げる。

それだけで、グリフォンの爪は虚空を舞った。ただの一太刀で切断したのだ。

血風を向こうにユマ姫は薄く笑う。拍子抜けだと。

今の自分は、かつてと大きく異なる。流れる魔力は桁違いで、星獣の記憶から、魔力を臂力に置き換える技すらモノにした。

剣の腕など必要無い。駄々っ子の様に剣に振り回せば、触れたモノ全てが壊れていく。

——ギユオオオオオオオオオオオ!!

「あら、どうしたの?」

だから、尻尾を巻いて逃げようとするグリフォンを前に、余裕さえ見せてしまう。

「クツ、クソ！ 逃げるな！ 戦え！」

皇帝は慌てる。コレが正真正銘、最後のカード。今のユマ姫を相手には、万の兵を率いても勝てる気がしなかった。

だから、グリフォンの鼻先に銃口を突きつけ……

「だめでしよう？ そんなに楽に死んでは」

ガチリと音をたてる嘴の咬合を間近で見た。

ユマ姫が襟を引つ張らなければ、皇帝の頭はスイカみたいに潰れただろう。

「なっ？ に？」

今、確実に死んでいた。助けられたのだ。

なんで？ なにが？ どうして？ 様々な思いに錯乱する皇帝。

どうしてと問い正そうとして、恐怖に舌が回らない。

しかし、まだだ。

まだ、コレから。

本当の狂気が加速するのは、ココからだった。

腰が抜けた皇帝を、ユマ姫が後ろから優しく抱きしめる。

「だめでしよう？」

耳元で囁く、その声の甘い事。皇帝の理性はたちまち溶け出した。背に押し付けられる胸の柔らかさ、なによりみずみずしい体から立ち上がる甘い香気が、脳を直接蕩かしていく。

皇帝とて、名の知れた美女を飽きるほど抱いた。女達は身に纏う香水や香粉で家が建つと自慢げだった。

そのどれも、コレほど芳しく、甘い匂いはしなかつた。

ユマ姫が耳元で息を吹きかけ、愚かな子供を諭すさとように唄う。

「だめでしょう？ 勝手に死んでは。殺すのは、わ・た・し」
「あ、う」

皇帝は、瞬時に理解した。

猫が鼠を囮るみたいに、ユマ姫に殺されるのだと。だから助けたのだと。それが故郷を滅ぼされた彼女の復讐なのだ。理解した。理解してしまった。

だからこそ、皇帝は心底恐怖した。

それは、痛みを恐れ、ユマ姫を嫌悪したからではない。

逆だ！

ユマ姫に黜られ、死ぬ事を、望んでしまった！ 心より先に体が屈服してしまう。

「ガッ！ ぐう！」

打ち上げられた魚の様に、酸素を求め。だけど正気が取り戻せない。

「待っててね、指先から、ちよつとずつ千切つてあげるから」

——ビイイイイイイ

危険な姫に後ろから抱きかかえられ、目の前には正気を失した怪物。

冷静で居られるハズがなかった。

——ギユオオオオオオオオオオオオ!!

グリフォンは出血しながら、咆哮をあげ続ける。ともすれば断末魔にも聞こえるだろう。

だが、田中がこの場に居たら、すぐさま殺せと声を張り上げたに違いない。

この咆哮が、合図になった。

「ぐえ」

皇帝は蛙が潰れた悲鳴をあげる。目の前から、不可視の質量に押しつぶされたのだ。後ろのユマ姫ごとゴロゴロと転がる。

「な、なんだ？」

訳が解らず、皇帝は誰ともなく問う。

きつと目の前のグリフォンがやったのだ。だが、どうやって？

「口内に、ザルハウネイルス大王蝙蝠のヒダ」

思いがけない返事。共に転がったユマ姫の声だった。

こんな時だと言うのに、絡み合う様に転がった事実が皇帝の頬を赤く染めた。

「なんだソレはー！」

「あり得ない……超音波の衝撃波。でも、そうなのね……」

皇帝には意味が、解らない。

だが、ユマ姫には心当たりがあった。蝙蝠の魔獣は衝撃波を放つ。枝を弾く程度の力だが、グリフォンが使うそれは立派な凶器。

この超音波。ユマ姫はあの男から、話には聞いていた。

だとしたら、更に危険な攻撃がある。

ユマ姫はゴクリとツバを飲む。

——ビィギョオオオ

気が付けば、グリフォンの咆哮は聞くに堪えない不協和音。リズムが乱れた演奏と混じり合い、この場の狂気をひたすらに加速した。

そして、舞踏場の窓ガラスが、一斉に割れる。

つんざく悲鳴。

キラキラと反射する破片が凶器となって、楽隊に血の雨を降らせていく。

遂に止まった音楽になり代わり、空気に溶けるは獣の唸り声と不協和音。

こうなれば、誰も狂気の世界から皇帝を救わない。

「クソツ、に、逃げッ」

「伏せて！」

「グエ」

ユマ姫は、腰を浮かせる皇帝のベルトを引つ張り、転がした。

——シユバツ！

空間を切り裂く擦過音が、皇帝の頭上を通過する。

——ズズズズズ

そして、地響きが鳴りだした。

舞踏場全体が、唸り声をあげるようだった。

「な、なんだ？ 何だコレは!？」

その光景に絶句する。

皇帝はグリフオンの能力として、こんなモノは聞いていなかった。こんな破壊力は魔女から説明されていない。

舞踏場の壁が切り裂かれ、ずり落ち、美しい庭を一望する景色が現れていた。

こんな威力は聞いていない、聞いた事が無い！

まさか、宮殿の誇る石造りの壁をバターの如く切り取る破壊力があるなど。

しかし、ユマ姫は、この少女だけは寧猛に笑う。

「コレが、そうなのね」

ユマ姫にだけ、見えていた。

壁を切り裂いた不可視の斬撃。その正体は、風の魔法だ。

田中から、グリフォンが魔法を使ったとは聞いていた。

だけど、それは何かの間違いだと信じていなかった。魔獣の生態を良く知るユマ姫にとつて、それだけあり得ない事だった。

魔獣が魔法をつかうなど。エルフ千年の記録に於いて、そんな記述は一切無かった。だけど、本当だった。その奇跡が目の前にある。

「面白い」

グリフォンの魔法は、人間はもちろん、エルフの常識を遙かに超えた威力を誇った。では、人間はもちろん、エルフの範疇を超えてしまった、今のユマ姫と比べては、どうだ？

——ビィギョオオオ

『我、望む、この手より放たれたる風の刃を』

咆哮と、詠唱が、交錯する。

空中で風の魔法が相殺し、荒れ狂う余波が部屋の全てをもてあそぶ。

「ヒエッー！」

皇帝は腰を抜かし、へたり込んだ。

眼前を渦巻く暴風にガラス片が混じり、触れるモノ全てを切り裂く死の結晶として結実する。

転がる楽隊の死体は、ミキサードでかき混ぜたような、無惨な姿に変じてしまった。

——ギョオオオ！　　ビイイイイ！　　おおおん！

「ふふっ、たのしい」

魔法の威力は、全くの互角。完全に相殺されて消え失せた。

その事実には、本当の少女みたいにユマ姫が笑う。

星獣の力に目覚めてからのユマ姫は、欲求不満が溜まっていた。全てが脆く、物足りなかった。

それがようやく相手を見つけた。

獣のように獯猛に、湧き上がる衝動の全てを解放する。

「お前は、邪魔だ。後で迎えに行く」

皇帝のケツを蹴飛ばす表情は、既に姫のソレではない。

狂戦士のモノだった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「ハハハハハッ」

——ギョオオオン！

二匹の化け物と、二つの火球が衝突する。

またしても、威力は互角。それは人知を越えた威力を誇り、舞踏場を火で埋め尽くし、漏れ出した分は、ホールから這い出した皇帝の尻を焼いた。

「ギエー！　なんだ？　なんツなんだあれは！」

悲鳴混じりの文句を聞く者は、もう誰も居ない。彼を守る部下の内、忠誠心に篤い者はとうに肉片に代わり、そうでない者は逃げ出した。

——シュバツ！

化け物二匹の戦いは続く。

グリフオンの風魔法が再び閃く。

それだけで、大理石の床が縦横無尽に切り裂かれて行く。

「フフツ」

なれど、その暴力を少女は正面から受け止めた。銃弾を軽々防いだ結界の魔法、今は全力で展開している。

それだけではない。

『我、望む、この手より放たれたる風の刃を』

——ギョオオオ!

お返しに放たれた魔法、風の刃はグリフォンの羽を切り裂いた。

「ヒヒャアアア! 脆い! お前、魔力の割に健康値は並だなあ!」

ユマ姫は少女の見た目を裏切って、狂った嘲笑を吐き出し続ける。

それは可憐な外見を突き破り、中から悪魔が覗いたようだった。

放つ風刃は、グリフォンの体を細切れに千切っていく。

——ギゴガゴキイイー——

そして、運命光が分裂し、グリフォンは一つの形を保てなくなる。

爆発の、前兆だ。

体内に濃縮された魔力が暴走し、爆発する。

「もう、飽きた」

その直前、飛び上がったユマ姫は王剣を振り下ろす。

それだけで、グリフォンの体はパンクしたタイヤみたいに弾けて、散った。

ユマ姫が知るところでは無いのだが、それは彼女の父親がエルフの王宮でグリフォンの最期にやって見せたのと同じ太刀筋。

グリフォンはまたも王剣の前にその命を崩壊させた。

「さて、後はデザートを食べるだけ」

ユマ姫は皇帝が逃げた先を見つめ、ペロリと舌をなめずった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おおつ、ユマ姫が帰ったぞ」

ユマ姫親衛隊だって、何も遊んでいた訳では無い。

帝城に散らばって、すっかり制圧を終えていた。

姿を見せつけるだけで脳を焼き、草を刈るように命を奪うユマ姫の進軍速度に足並みが揃わなかっただけの話である。

そのユマ姫が戻り、片手に一人の男の首根っこを掴み、引き摺っている。

男は無惨にもずた袋を被せられ、手は縛られて、拘束されている。

見ている者全てに、まさか、と言う思いがあった。

だが、ユマ姫が市街地の広場に戻り、設えた壇上で男のずた袋剥ぎ取ると。市民からは狂った様な悲鳴があがった。

ユマ姫は、真実狂気にまみれていた。ケラケラと笑い、さび付いたナイフを取り出す。「今から、皇帝の解体ショーを行います♪」

世界一有名な例の洋館

「ゾンビとか出る奴じゃんコレ」

「言うと思っただぜ」

木村と田中。

地元の人間でも解りにくい山道を抜け、見えてきたのは古びた洋館だった。

「地下に研究所とかあるんだらうなあ……」

「ま、あるだろな」

「完全にアレじゃんか」

木村は有名ホラーゲームを思い出す。洋館にゾンビが出る奴だ。

バイクの後部から飛び降りて、尚もぼやきは止まらない。

「黒峰さんも冗談キツツイわ」

「どうだかな？ 生きてると思うかよ？」

「さあね、とにかく何か魔女っぽいモノは居るんだろ」

木村は自在金腕ルー・デルオンを伸ばし、鉄の門扉を開け放つ。だが罨はおろか鍵すら掛かっていな

かった。

田中は慎重にバイクを敷地内へ走らせる。

馬鹿を言いながらも、二人の動きに油断はない。

「生きてるなら、何故出てこねえ？」

「知らんて、恥ずかしがつてるんじゃない？」

「なるほどな」

生きてたとして、人目に晒せない姿になっている？

あり得ない話じゃなかった。二人は星獣に潰される黒峰の姿をこの目で見ている。

「お前に言われてココを捜し出したけどよ。黒峰が居るって情報はどっからだ？」

「帝都の貴族だよ。真っ先に逃げた公爵サマ。なんつったかなあ？」

「ソイツ、信用出来んのかよ？」

「わざわざ、嘘を言う理由もないからね。ポルタ山の洋館に呼び出されて、クロミーネと

会ったってさ」

「マジかよ、化けて出たか？」

話していれば、いよいよ扉の前に辿り着く。

田中はバイクを脇に停めて、当たり前みたいに蹴破った。

「たのもー」

「ノックぐらいしろよ」

木村は控え目にドアノッカーを叩きながら、怖々と顔を覗かせる。

しかし、コレだけ騒いで人が出てくる気配がない。

屋敷の中は静まり返っていた。

「マジか、中までまんまかよ」

吹き抜けの玄関、正面には階段があり、左右に扉。

洋館は不気味なまでに、前世のゲームを思わせる。

「いやいやいや、こんなの一般的な作りだし?」

「じゃあ、確かめてみようぜ」

田中が駆け寄ったのは向かって左の扉だ。

「こつちにダイニングがありや、黒峰の奴、完全に狙ってるね」

「そうかあ?」

もう気分は探検ごっこだ。ココでも田中は蹴り開けた。

「オイオイ、マジでダイニングじゃん」

「一階に食堂があるのも普通だって。水回りが二階ってあり得ないから」

「そうは言ってもよ、じゃあ、コッチでゾンビが人間食ってりや確定な」

馬鹿を言いつつ、ズンズンと洋館を進んで行く。

「オイオイ、見つけたぜ」

はたして見つかったのはゾンビではなく、地下への階段だったのだ。

「いきなり地下つてのはな、エンディングにはまだ早いぜ」

「ゾンビよりマジだろ」

二人で石造りの階段を下りていく。

ソコで見たモノは、牢屋だった。この手の屋敷では、特段に不自然なモノでは無い。

地方領主の屋敷には、地下に罪人を囚える牢屋があるものだ。

だからあり得なかったのは、牢屋の中の生き物だった。

モルガンザルデン
「一目大猫！」

「あの汚えネズミも居るぜ？」

それらは魔女が死んだ地下坑道の化け物だ。

「間違いねえみたいだな」

「だな、マジかあー」

木村は渋面を覆う。

信じたくないが、本当に魔女はここに居た。そして、少なくとも今も魔女に協力する

何者かがいるのだ。だから魔獣はまだ生きている。

と、よくよく見れば牢屋の怪物は、それだけではなかった。

クワツァ
ザルアフキユリ
地竜、大土蜘蛛も居る。他にも見覚えのない魔獣が何匹も。

「化け物の見本市かよ」

「……………」

木村は考え込んでいた。

エサはキチンと与えられているし、糞尿の世話もされている。

誰かが居るのは間違い無い。

……いや、しかし、こんな化け物の入った檻を掃除出来るのは、黒峰の洗脳能力無しではあり得なかった。

本当に魔女が居る？

実のところ、ここまで木村は信じて居なかった。

魔女の形をしたクローン人形に違いないとそう結論付けていた。

……だが、コレは？

「おい、先行こうぜ」

「あ、ああ……………」

考えても仕方が無い、まだ地下は広い。

二人は無言で無機質な地下を進む。

「なあ、アイツはなんて言ってた？」

「え？ あ、ああ。ユマ姫の事？」

「そ、アイツ、黒峰の事はもう良いのか？」

「なんか、もう興味なさそうだったよ」

木村はユマ姫の様子を思い出す。

魔女が生きていると伝え、ソコを調査すると言つても、ユマ姫は乗り気ではなかった。

「復讐にや、もう興味ないってか」

「そんな事ないと思うけどね」

木村は田中の言葉を否定する。

復讐を忘れる。それ自体は良い事だが、田中の言葉に、今は喜べない事情があった。

田中は今のユマ姫が、かつてとは異なると、もう『高橋敬一』ではないと言っている。

ユマ姫の気配がトカゲ、星獣だと、そう言っているのだ。

ユマ姫は星獣の記憶を取り込んだ。

だが、それは取り込んだつもりで、取り込まれたのではないか？

確かに、今までもユマ姫は、他の人格が表に出てくる事があった。

例えば、プラヴァスの太守にして黒豹に例えられる美男子、リヨン氏を目にした時な

ど、ユマ姫は女の子らしい反応を見せてしまった。

だが、それでもあくまで人格の主導権は『高橋敬一』のモノだった。

しかし、今回取り込んだ相手は余りにも大きい。

お陰で人外の力を手に入れたものの。代わりに意識が乗っ取られても不思議じゃなかった。

木村はブンブンと頭を振り、嫌な想像を追い出した。

「でもさあ、帝都、それも皇帝はユマ姫にとってメインディッシュだったわけで、優先するのは当たり前じゃない?」

「だとしたら、ソレを解消しちまったら、アイツはどうなるんだよ?」

「そんな事言い始めたら、どうしようもないじゃん」

先の事など何も解らない。とくにあの姫に関しては。

「だがよ、今のアイツは強いようで脆いぜ?」

「そうなん?」

木村には、にわかには信じられない話であった。

今のユマ姫から感じる気配、武に疎い木村にして、ただ事ではなかった。

どうやっても殺せない。そんな気がしてくる。

「どうやっても殺せない? そう言うのが一番危ねえんだよ。とくに殺しあいの世界ではな」

「そう言うもん?」

「そう言うもん」

木村にはピンと来ない話だ。そもそも、トカゲの気配と言うのが解らない。

「トカゲの気配は良いんだ。だが、トカゲ違いなんだよ」

「なにそれ？」

田中の言葉は要領を得ず、木村にも良く解らなかつた。

言っている本人も、上手く言語化出来ないのだろう。

その時、無数に並ぶ檻。その前で、唐突に田中は立ち止まる。

「コイツは！」

「お知り合い？」

檻の中、一人の人間がミイラになって息絶えていた。

「ああ、学者先生だよ」

「学者？」

「たしか、ドネルホーンだったかな。エルフの学者さ」

田中は大森林で出会った一人の男を思い出していた。

この男の理想は、飢えのない世界を作り出す事。そうすれば、人間がエルフの森に攻め入る事もなくなると信じていた。

世界からは争いがなくなると。

だけど、違う。飢えがなくなれば、増えた人間は大挙して森に押し寄せる。

人間の欲に限りが無い事を、地球に生きた田中は良く知っていた。

それどころか……

「この人が、火薬を？」

「たぶんな」

空気から肥料を作る技術。それは即ち、空気から火薬を作る技術に等しい。

ココで死んでいると言う事は、ドネルホーンは火薬の製造に反対したのだ。

「ちよつと、調べさせてくれない？」

「いいぜ」

田中が腰のモノで鉄格子を一閃すると、木村はズカズカと檻の中へと入り込む。

「もう匂いもない、外傷も。痩せ細って死んだんだ」

「だろうな」

ドネルホーンを良く知る田中は、ありそうな事と頷いた。

ハンガーストライキの末に自殺したのだ。

「いやあ、無念だろうね」

言いながら、木村は無遠慮にドネルホーンの死体を漁る。

何か手掛かりがないかと調べているのだ。

「自業自得さ。欲つてのはデカすぎちゃ身を滅ぼす。」

たとえ、それが世界平和だろうとな」

「身につまされるんだけど？」

まさに今、何か新しい技術の痕跡でもないのかと死体を漁る木村にはゾツとしない話であった。

いや、ゾツとするどころか、飛び上がる程に驚かされるハメになる。

「ヒッ！」

突然、死体がもぞもぞと動き、何かが飛び出したのだ。

「な、ななっ？」

「びびんなよ。コレだ」

「なにこれ？」

田中が手渡して来たのは、拳大の大きさで、ワシヤワシヤと動く円形のロボット。

「ちっさいルンバみてえだな」

「ホントだ」

コレが蠢いて、死体を動かしたのだ。

「いや、ホントにルンバみたいよ」

「ふーん、便利だな」

良く見れば、小さい口は結構な勢いで吸引し、ゴミを吸い取っている。

こんなモノがあるのなら、牢が汚れて居ない理由も解るし、エサだって自動で与えられていても不思議じゃない。

やはり、魔女はもう死んでいるのか？

釈然としないまま、二人は先を急いだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

更に地下へと続く階段が見つかった。

下りた先、既に洋館の面影など欠片も無い。

「随分と近代的になったな」

「ここからが遺跡なんだろうね」

二人は一層警戒を深くする。

剣の達人だろうと、閉じ込められれば命はないからだ。

「つつてもよ、危険は多分ないぜ」

「ガスも大丈夫だと思おう」

遺跡を見れば雰囲気は知れる。

歩く廊下はリノリウムみたいな床材に、ペラペラの壁と、並ぶ引き戸。

開けてみれば中にはゴチャゴチャと良く解らない機材がならぶ。

どちらかと言うと学校に近い。SF的なシエルターだったあの遺跡とは様相が異な

る。

木村に言わせれば、大学の研究室みたいな場所だった。

壁も薄いし、こんな場所に閉じ込めるのは不可能だ。

それに危険な気配もない。

拍子抜けした田中は呟く。

「研究所なのは間違いないねえな。しかし、もぬけの空じゃねえか」

「だねえ」

《それはどうかな?》

聞こえて来たのはソルンの声。スピーカーからだった。

慌てて懐の銃を握る木村に対し、田中は柄に手もつけない。

「よお、久しぶり」

《フフツ、君は変わらないね。勝手に入ってきて、その口ぶり》

『『インターホン』は鳴らしたんだぜ』

馬鹿な事を言つて、余裕をみせる。

殺すつもりなら早く出てこいと挑発しているのだ。

そして、ソルンはその挑発に乗った。

《いんたーほん? ああ、呼び鈴か。コチラこそ迎えに行けなくて悪かったね》

《いま、迎えを寄越すよ》

「水くせえな、わざわざ要らねえよ。コツチから行くから黙って待ってろ」

《フフツ、僕たちは二人で楽しんでるんだ。邪魔しないでくれ》

ソレだけ言つて、ブツリと通信は切れた。

「どう思うよ？」

「……マジで、黒峰さんは生きてるってワケね」

二人。それにインターホン。地球の言葉を説明した人間は、黒峰以外にあり得ない。

木村にはそれが衝撃だった。

「ソツチじゃねえよ、来るぜ！ きつとヤベエのが……」

田中が言い終わるよりも早く。

廊下の先。曲がり角からニユツと現れたのは、真つ黒な脚。

這い出した漆黒は、巨大な蜘蛛の姿をしていた。

田中には見覚えがあるフォルム。

強固な骨格を誇る蜘蛛の魔獣、大土蜘蛛ザルアブギユリにソツクリな姿。

ただし、コレは機械で出来た金属の魔獣。

言わば、蜘蛛型ロボットである。見るからに強そうでもあった。

「へえ、カツコイイじゃん」

ロボが大好きな木村は目を輝かせる。そして、この一大時に一切の恐れがなかった。コチラには、こう言うのを大の得意とする男が居るのだから。

「よし、タナカ！ 君に決めた！」

「人をポケ○ン扱いすんな！」

文句を言いつつ、獰猛に笑う田中は蜘蛛の足元にすべり込む。

目にも止まらぬ神速の踏み込み、そのまま腰に手を伸ばし

……固まった。

「チッ！」

横っ飛びに蜘蛛の脚を躲す。

「おーい、どうしたあ？ タナカ先生エ、無敵の日本刀でバツサリいつて下さいよー」

見物に回った木村はいい気なモノである。

——ビッ！

しかし、それも蜘蛛の目から飛び出したレーザーが、木村の帽子を焼くまでだった。

「うげっ！」

慌てて転がり、姿勢を低くして様子を窺う。

「……………」

「……………」

共に転がった二人の視線が、一瞬、交わる。

「ズラかるぞ！」

「ヤベエって！ なんなのアレ？」

田中と木村。二人が揃って回れ右をしたのは言うまでもないだろう。

学校に近い施設。細長い廊下をひたすらに逃げまくる。

地球での文化祭。ヤンチャして先生から逃げ回った時の事を二人は思い出していた。

「何で斬らんかったの？」

「斬れねえんだよ！ アイツに効かねえ！」

「マジ？」

木村は心底驚いた。

この世界。魔剣、もしくは田中の日本刀で斬れないモノなど、今まで一つもなかったからだ。

しかし、それにしてもオカシイ。田中はまだ一度も黒い蜘蛛に斬り掛かつては居ないのだ。なのに、斬れないと断言した。

コレは一体？

「俺ぐらいの実力だと、斬る前に斬れるかどうか理解^ワつちまう」

「できない理由を探す前に、できる方法を考える！」

「因みに、お前は斬れるぜ？」

「まあ、人間、誰しも向き不向きはあるよな」

駆けながら、馬鹿な事を言い合う。

つまり、ここに至って、まだ余裕があった。

それも、上階への階段にまでだった。

「ツ！ ヤベエ、戻るぞ！」

「ういー！」

折角の出口を前に、田中は踵を返す。木村は理由も問わず、後に続いた。

付き合いが長いからこそ、木村には解る。

今、この瞬間。余裕が無くなったのだ。

——ピーピピピ！

そして、引き返すと言う事は、当然後ろから追いかけて来た蜘蛛と再び相対するハメになる。

——ビッ

田中は危険なレーザーを見切り、無数の脚の下をすり抜ける。

続く木村も、脚に自在金腕ルーデルオンを引っ掛け、反動を利用し、脚の下を潜った。

二人は見事に股抜きを決めたのだ。

何故こんな無茶を？ 声に出して聞けなかった木村は、チラリと振り返る。

すると、黒い蜘蛛の向こう側。階段からゾロゾロと下りてきたのは無数の魔獣。牢屋の魔獣が解放されて、二人を追って来たのだ。

——やはり、魔獣は操られている！

黒峰は生きている。

その事実には、木村は背筋の凍る思いを抱えて走るのだった。

研究所

田中と木村。

魔女の痕跡を辿って忍び込んだ洋館は、地下が巨大な研究所になっていた。

そこに現れたのは、田中ですら斬れない漆黒の蜘蛛。そう鋼鉄よりも堅いロボットだ。二人が打つ手無く尻尾を巻いて逃げる先、行く手を塞ぐは洗脳済みの魔獣達。

やはり、ここに魔女が居る。

慌ててUターン。通路を塞ぐ巨大な蜘蛛を相手取り、足の間をくぐり抜け窮地を脱した二人であるが、依然として危険な逃避行が続くのであった。

「やつら、同士討ちとかしないの?」

「どうだかな」

二人は走りながら、背後を窺う。

そこでは魔獣と、蜘蛛型ロボットが鉢合わせになっていた。

向かい合う両者に、僅かな間。

——ピッ!

「ええっ?」

同士討ちどころではない。

蜘蛛が脚で示す先に、魔獣が走りこんでいく。

逃げる二人に回り込ませる動きだった。

「嘘だろ?」

蜘蛛が魔獣を操っている! そこには確かな意思の疎通が感じられた。

「マズいぜ」

「ドーすんの? ドーすんの?」

「それはお前が考えんだよ!」

「じゃあ、ソルンを探そう。アイツを人質にするしかないわ」

「だな」

頷くと同時、田中が走る。それも全力だ。

たちまち木村は置いていかれるが、自在金腕ルー・デルオンを壁に引っ掛け、なんとか追いつがる。

「下だ!」

「あいよ!」

見つけた階段を落ちるように下りていく。

以前、回復ポッドがあつた遺跡は、階段の位置がバラバラで一気に階下まで下りられ

ない設計だった。恐らくはテロを想定した作り。階層は二十を超えていた。

だが、今回そんな事はない。自在金腕ルーデルオンを駆使する木村は、ジグザグに飛び降りて、一気に五階下まで降りてみせる。きつとここが最下層。

「そつちじゃねえ、コツチだ」

「マジ？」

しかし、田中は最下層に降りず、一階上から木村を呼んだ。

考えてみれば、領ける話ではあつた。なにもラスボスではないのだ。逃げ場の無い最下層で敵を待つ道理はない。

それにしても驚くべきは田中の本能と嗅覚、いや気配を視るワザか。

「ここか？ いや、コツチだ」

何かを探る様に、田中はどんどん奥へと入り込む。すると様子が変わってきた。

学校のような無機質な廊下が、少しずつ生活感と温かみを増していく。さらに奥に行けば、壁紙は華やかに、明かりは品の良いランプになった。

走りながら、木村はどこか奇妙に感じていた。

どうにも、あのソルンの印象とはかけ離れている。どちらかと言うとコレは……。

「コ！コ！だー！」

「ハイ！なの？」

辿り着いた大扉。

廊下の突き当たりを塞ぐ姿は、地下の研究施設に似つかわしくない。洋館に逆戻りしたような、木製の豪華な大扉。

「いや、これ……」

「斬るぜ」

木村の言葉を待たずに、田中は剣を振るった。木製の大扉はあっさりと断ち切られ、崩れる。

そこは真つ白な部屋だった。

まず真つ白な壁紙が目飛び込む。右には真つ白な天蓋付きのベッドに、左には同じく白いクローゼット。

そして部屋の真ん中に陣取るは、華奢な作りのテーブルと、二脚の椅子。これも白い。「あら？ どなた？」

その椅子に座り、優雅にお茶を飲むのは、黒峰だった。

まさか、本当に生きていたのか。木村は息を飲む。

「邪魔するぜ」

だが田中は躊躇わない、扉を蹴飛ばしズカズカと踏み込んだ。

「呼んでないわ」

それでも黒峰は構わずお茶を飲み続ける。とんでもない肝の太さ。

いつもの体の線が出る黒いドレスが、真っ白の部屋の中で強い存在感を放っていた。

おかしな所はないか？ 木村は慎重にその様子を観察し、二人の会話に耳を傾ける。

「つれない事言うなよ。はるばる会いに来たんだけ？」

「私は会いたくないのよ」

その言葉は真実に思われた。

黒峰の目に、以前はあつた怨念じみた殺気や、恨みがましいモノが見られない。

毒気を抜かれたようにサツパリとしていた。

木村は眉をひそめる。何かが違う。だが、その何かが解らない。

見た目は完全に黒峰だ。ソツクリさんではない。

ではクローンかと言うと、ソレも違う。その眼差しは余りにも知性に満ちている。

思い出したのは、ソルンと同じ顔の男の古代人、ノエルが語った言葉だった。

細胞からクローンを作っても、記憶のない人形にしかならない。幼児のような大人が

出来るだけ。

その例外になったのは『参照権』を持つユマ姫だ。

ユマ姫の魔石が魂の核となり、『参照権』で記憶を取り戻す。蘇るや、強固な意志で、

たちまちノエルを刺殺してみせた。

黒峰が持つのは『更新権』。

同じ例外が、黒峰にも適用されるのか？

「てつきり死んだかと思つてたんだがな」

「死んだわよ」

アツサリと言い放つ。その声はすつきりとして、全てを断ち切つたように見えた。

「死んだ？ 生きてるじゃねえか」

「あなたも知つてるでしょ？ ユマあの子姫と同じ。私も蘇つたのよ」

それはオカシイ。

参照権だつて、ユマ姫の魔石が必要だった。それも死にたてホヤホヤの魔石が必要だった。

黒峰は星獣に食われ、その星獣は隕石に砕かれ。あの状況で回収出来たとは思えない。

「私からは、あなた達にもう関わらないわ。それじゃダメなの？」

「そう言われてもな、また星獣でも呼び出されたらたまらねえ」

「そう言うの、もううんざり。平和に暮らしたいだけよ」

本当にウンザリして見える。

まるで憑きものが取れたような黒峰に、二人は違和感が拭えない。

いや、違う。

木村は違和感の正体に思い当たった。

むしろ、コレが、これこそが黒峰さんだ。

前世で良く知る、頭が良くて、すこし自分勝手に、周りを小馬鹿にした、冷めた少女。コレこそが黒峰さんだ。クラスメイトの頃、こんな女性になるんだろうなと想像した姿。

おかしかったのはむしろ今まで、狂った様に世界を恨み、悪辣で破滅を望む黒峰は、それこそ恐ろしい魔女であった。

何が彼女をあそこまで変えてしまったのか？ 木村は長い間、訝しんでいた。

それが、消えた。

そして、今の彼女にはどこか余裕があった。

勘の鋭い田中が、その事に気が付いて居ないハズが無い。

「お前、変わったな」

「そう？ こんなものでしょう？」

「今のお前なら、悪くない。なあ、ソルンに言つて、俺等を追い回すのを止めさせてくれ。俺達はスグに出て行くぜ」

「そう？ でも、私は彼に何か言う立場にないわ」

寂しそうに黒峰は肩を竦める。

コレもオカシイ。かつては口を出しまくっていた。自分こそが首謀者にして黒幕だと。尊大な態度で誇っていた。

「ソコを頼むぜ、お前が言ってくれば奴も……」

《無駄だよ》

そこに聞こえて来たのはソルンの声だ。三人の会話は聞かれていた。

コレも、木村には少し意外に感じられた。ここは黒峰の部屋である。

自室が盗聴されていたと言うのに、黒峰はケラケラと笑うのだ。

「あら？　心配してくれるの？」

《そうさ、まだ君は不安定なんだ。それに変な約束をして欲しくない》

「そう？」

《ああ、ココを知られたからには、生きては帰せない》

「ふうん？」

それでも余裕を崩さず、黒峰はコチラを見る。

「らしいから、死んでくれる？」

「嫌だね、何ならお前を人質に」

「触らないで！」

田中の手を打ち払い、黒峰は拒絶した。

その反応がどうにも劇的で、木村はまた違和感を抱く。

腕力で田中に敵うはずがない。それが解つていながら、それでも大声で拒絶する。先ほどもでの余裕が嘘のよう。

まるで男嫌いの潔癖症。

それこそ木村からすれば違和感が無い。いや、無さ過ぎる。

中学生の頃のまま。初心な少女みたいだ。それが逆にオカシイ。

コチラで見かけた黒峰さんは、どこか退廃的で、婀娜つぼい所があった。それが消えている。男に触られる嫌悪感で剥き出しだった。

そして、中学生の黒峰さんとも違う所がある。

男が嫌いで潔癖症な前世の黒峰さんにして、田中だけは例外。興味津々、自分から絡みに行っていた。きつと好きなのだと思っていた。

その黒峰さんが、こうも田中を拒絶する。それが不思議だった。

田中に触った手が汚らわしいとばかり、黒峰さんは鋭い言葉で吐き捨てる。

「もう、どうでも良いのよ。こんな世界好きにすれば良い」

「そりやどうも、だが、ここを出れなきやどうしようもねえ」

「知らないわそんな事」

「手の一本ぐらい、斬っちゃっても良いんだぜ？」

田中は余裕無く刀を突きつける。まるで三下の悪役だ。らしくないのはコチラもだった。余りにも余裕が無く、焦っている。

木村は思わずと背後を確認する。まだ追っ手の姿はない。それにホッとする。

この田中の余裕のなさ。ソレだけあの蜘蛛のロボが強いと言う事だ。こと戦闘となれば異様に目端が利くのが田中だと、木村は全幅の信頼を寄せている。

だからこそ、状況はあまりよろしくない。このまま気を急いでクズみたいに振る舞えば、クズみたいな死が待っている。そんな予感が拭えない。

木村は堪らず頭を下げる。

「頼むよ黒峰さん。俺達はもう君に関わらない。約束する。だからせめてあの黒い蜘蛛の機械だけは止めてくれ」

「蜘蛛。ああソルスティスね」

「ソルスティスって言うのか。お願いだ。アレだけ止めてくれればスグに出て行く。いや、止めなくて良い。この屋敷を出るまで僕らを襲わないようにしてくれればそれで」

「無理よ……」

「無理？」

意味が解らない。無理とはどう言う事かと、木村も田中も首を傾げる。

「だって、私、あのコに嫌われてるもの」

余計に意味が解らない。

「いや、アレは機械だろ？ 嫌われてるって」

「自律型なのよ。私の言う事なんて全然聞かない。さつきも言ったでしょう？ 私生まれればかりなの、ココは病室よ」

病室。言われて木村には腑に落ちるモノがあつた。

真つ白な部屋。全てが筒抜けに盗聴されて、それでも文句の言わない黒峰。

「まだ記憶も曖昧だし、本調子じゃないの。笑っちゃうわ、機械すら従わない」
「そんな……」

何かがオカシイ。良く考えれば、どうして田中はココに来たのだろうか？ 木村の思考がグルグルと巡る。

その田中は厳しい目で黒峰を睨んでいた。

「なあ？」

「なに？」

「俺達と、来ないか？ 今のおまえなら俺達と一緒に、仲間になれる」

「ふん、願ひ下げよ」

「そうか……」

心底悲しそうに、田中は俯いた。コレもまたオカシイ。異常だと言って良い。

木村は焦燥に駆られた。歯車が噛み合わない。皆が見えているモノが、自分にだけ見えていない。

そのヒント、田中が小声で教えてくれた。

「ヤベエ」

「何だよ？」

「ソルンの気配が見えねえ。俺に見えたのは黒峰コイツの気配だけだ。それも、今、消えた」

「何だつて？」

それは、この場にいる生物の死が確定していると言う意味だ。

「ソレに、驚け。俺にはコイツが黒峰に見えねえ」

「そっか」

それは、不思議と木村にもすんなり飲み込めた。

田中は尚も語ろうとする。

「そんなでな……」

「何を二人で話してるの？」

黒峰が立ち上がり、コチラを見ていた。その目にはあの不気味な義眼はなく、眼差しは柔らかで、優しかった。

「もう、あなた達に興味は無いわ。死のうが、生きようが」

「そうかよ」

「私は、行くわ」

そう言つて、背中を見せる。部屋の奥へと下がっていく。

「おい待て！」

「なあに？」

黒峰が振り返ると同時、チーンと甲高い音。ソレが合図。

何も無い部屋の奥、壁が割れた。中はひたすらに大きな空洞。そこに金属の檻がせり上がつて来る。

コレは??

エレベーターだ！ 壁だと思つていたのは、搬入用の巨大エレベーターだった。

何食わぬ顔で、黒峰は逃げようとしている！

「待てよ！」

「待つてくれ」

田中が走る、木村は自在ルーデルカシ金腕を伸ばす。

だが、金網が開いて黒峰がエレベーターにすべり込むと同時に、入れ替わる様にエレベーターの中から先客が這い出して来た。

グチャグチャと音を立て、不気味な怪物が真っ白な部屋に侵入してくる。

「コイツ!」

パウギユリヴアル
「王蜘蛛蛇!」

遺跡でも戦った、不定形の怪物だ。

ひよろ長い体に、脚か角か解らない無数の触手を生やした姿。まるで太古のハルキゲニアを思わせた。

以前、二人は遺跡でこの怪物に大変な苦戦を強いられている。

この怪物には、剣も銃も効果が薄い。

効果があつたのは火。ユマ姫の魔法と、灯油と火薬の爆発だ。

「木村ア! 爆弾は?」

「コイツに効くようなのは持ってきてない!」

「はー、つつかえ」

木村はただの爆弾なら持っているが、灯油と組み合わせたアンホ爆薬は大型で、とても持ち込めなかった。

その間に、エレベーターに乗り込んだ黒峰はボタンを操作する。

たちまち閉まった金網が、二人の行く手を遮ってしまう。

金網の向こう、意地悪な微笑みを浮かべ、黒峰が命ずる。

「もう恨みもないけど、死んで貰うわ。バウちゃん、この二人を殺しなさい！」
——ギョオオオオオオオ！」

不定形の魔獣が、聞くに堪えない唸りをあげる。

……だが。

「バウちゃん？」

バウギョリッアル
王蜘蛛蛇は動かない。二人を襲おうとはせず、ただ、立ち塞がるのみだ。

「コレだから。もう！」

毒づく黒峰。彼女を乗せたエレベーターはゆつくりと下降し始めた。最下層に逃げる気だ。

「さようなら。もう会いたくないわ」

それだけ言い残し、階下へと消えていく。間もなく壁も閉じ、白の部屋は完全に閉ざされた。

部屋に残されたのは、木村と田中、そして不定形の怪物のみ。

しかし、それでも怪物は動かない。

「どう思う？」

「洗脳が不完全みたいだな」

それが解つても、二人には打つ手が無い。この化け物に背中を見せて、蜘蛛と挟み撃

ちに遭う事こそが最悪だからだ。

「ちよつと俺にやらしてくんない?」

「よしキムラ、君に決めた!」

「人をポケ○ン扱いですんな!」

文句を言いつつ、木村は懐から小さな球体を取り出すではないか。

田中は目を剥いた。

「マジでモンスターボールを取り出すやつがあるかよ」

「黙って見てろつて」

木村はバウギユリヴアル王蜘蛛蛇を刺激しないよう、目の前にゆつくりと転がしてみせる。

球体が燐光を放って、白い部屋を転がっていく。コロコロと転がる音だけが、部屋に響いた。

——キユ?」

可愛らしい鳴き声で、バウギユリヴアル王蜘蛛蛇は触手を伸ばし、ソレを転がす。

転がして、転がして、そして、食べた。

「何ツ?」

「あれは、魔石だ」

「凶化してないのに、魔石を喰うのか?」

「王蜘蛛蛇は魔獣バウギユリツアルつてよりも魔法生物。魔力で形をたもつてるスライムだわな。だから魔石は大好物つてね」

「それで、なんだ？ エサをあげて手懐けるのか？」

「まあ、みてるよ」

呟いた木村が見つめる先、王蜘蛛蛇バウギユリツアルが暴れ出す。

——ギョオ？ ギョギョギョ！

四方八方に触手を伸ばし、粘性の体がブクブクと泡立つ。終いには赤黒く変色する。明らかに、死に瀕していた。

「オイ？」

「毒だね」

「ンなモンが効くなら、どうして？」

王蜘蛛蛇バウギユリツアルはエルフの天敵。ユマ姫から田中はそう聞いていた。

実際に、斬つても撃つても死なない不定形生物は無敵だった。火だつて森の中では派手に使えないだろう。

それが、毒で死ぬなら、こんなに簡単な事はない。

「ただの毒なら効かないんだろね」

「何を使った？」

「あの遺跡は箱船だった、機能は停止し、空っぽになっていたけれど、全部の生命の痕跡が保存されていた。だからその中で一番強力なのをね」

それは赤棘毒蛙マネギアスタルの毒だった。

何百年前に絶滅した蛙の毒。それこそが、王蜘蛛蛇バウギユリウアルの天敵だった。

無敵の魔獣、王蜘蛛蛇バウギユリウアル。伝説の生き物と言われるほど数を減らしたのは、この蛙こそが原因だった。

王蜘蛛蛇バウギユリウアルは触手を伸ばして蛙を食い尽くす。蛙は対抗する毒をもつように進化した。やがて王蜘蛛蛇バウギユリウアルが姿を消し、伝説の生き物となってしまった後は、用済みとばかり、エルフが危険な蛙を刈り尽くしてしまった。

——ギョオオオオオ！

遂に、王蜘蛛蛇バウギユリウアルは地に伏して、姿を保てず液体に戻った。

完全に死んでいた。もう、魔石が溶けた液体が流れるのみ。

かつての強敵がこんなにもアツサリと。田中は呆然と淡く光る液体を見つめる。
「良く、そんな毒のこと、知ってたな」

「ああ」

木村はユマ姫から聞いていた。

何度も何度も。

家族と旅行した湖畔での思い出を。蛙の幻覚で旅行を台無しにしてしまった苦い記憶を。

だから、遺跡で蛙の毒を調べた。そして苦戦した王蜘蛛蛇バウギユリツアルについても。そして奇妙な相関関係に気が付いた。マネギデスタルマネギデスタル赤棘毒蛙バウギユリツアルが現れると同時に王蜘蛛蛇は数を減らしていたからだ。

だから、全ては木村の仮説に過ぎない。でも、きつと正しい。溶けて死んだ王蜘蛛蛇バウギユリツアルが証明していた。

「ちよつと待ってろ」

木村が感傷に浸っている間、田中が部屋の奥へと踏み込む。

壁を無理矢理こじ開けると、刀で金網を切り裂いていく。

そこにはガランとした空間が。

そのまま、ふうと呼吸を一つ、腰だめに刀を構える。

「なにしてんの?」

「良いから見てろ!」

裂帛の気合いで振り切ると、田中が切り裂いたのは、エレベーターのワイヤーだ。

「はっ?　なんで?　追うんじゃないの?」

「お前、このエレベーター乗りたいか?」

「いや……」

言われてみれば、敵が制御しているエレベーターなど檻も同然。

下りた先で待ち構えられたら何も出来ない。この辺り田中は戦い慣れている。

「コレでエレベーターは使えない。俺らはゆっくり階段で迎えに行こうぜ、黒峰と、ソルンをな」

「そーだな」

踵を返し、二人は階段に戻った。まだ蜘蛛の機械は姿を見せない。きつと何処かで待ち伏せしているに違いなかった。

目指すは先ほどの部屋の真下。そうして再び踏み込んだ最下層。しかし様子は一変していた。

「何も見えねえ」

「明かりつけるわ」

電気が消えていた。真つ暗な廊下を木村のランタンが照らす。

不気味な廊下がひたすらに続いていった。

綺麗な黒峰

——ガガガガガガッ！

連続する発砲音。ガリガリと削られる床と壁。

「どうすんだよコレ？」

「どうするって言われても……」

忍び込んだ研究所の最下層、田中と木村は設置された機関銃に行く手を阻まれた。

「やっぱ、もう止めとく？」

「馬鹿言え」

黒峰を追ってこのまま最下層の奥を目指すか、いつそ、尻尾を巻いて逃げ出すか？

木村はあまり乗り気ではなかった。

「でもさ、黒峰さん、もう俺らにも興味無さそうじゃん」

「だな、ただし、黒峰は良くてもソルンに俺らを逃す気は無えだろ？ それに……」

「それに？」

「これは勘だけだよ、このまま逃げたら後悔する」

「そか」

なら進むしかない。

悩んだ木村は物陰から手を伸ばし……そして、スグに引つ込めた。

——ガガガガガッ！

引つ込めた空間を銃弾が切り裂いていく。

「セントリーガンだな」

「自動制御って事かよ？」

「そうそう」

だから、しびれを切らすのを待つなんて戦略はとれない。

「弾切れを狙うつてのはあるけどさ」

「何年掛かんだよ」

「だよな」

現状も既に危険だ。

動きを封じられ、後ろから蜘蛛型ロボットに襲われたら一卷の終わり。

黒峰曰く、名をソルステイス。田中の剣でも切り裂けない、あまりに危険な兵器であつた。

「二、三発喰らう覚悟で突つ込むか？」

「まあ、待てて」

「おっ？ 頼むぜキムラエモン！」

「今度こそ、コレよ」

木村が懐から取り出したのは、またも小さな球体だった。

「でたあ！ モンスターボール！」

「それはもう良いから」

導火線が伸びる姿は明らかに爆弾だった。

手早く着火すると、自在金腕ルー・デルオンを振り子代わりに、反動で遠投。セントリーガンの根元に転がした。

ドオンと低い爆発音。

木村は先ほどと同様に手を伸ばすが、今度は反応がない。

「行こう！ 蜘蛛が来たら厄介だ」

「だな」

駆け出した先、扉が見える。鉄板でできた簡素な扉だ。

今度の扉は、らしい。木村がソルンと顔を合わせたのは、遺跡での一度きり。それでも冷酷な古代人、ソルンと言う人物を思わせる殺風景な扉だった。

「斬るぞー」

田中は駆け寄るなり、抜き打つ。

分厚い鉄板で閉ざされた扉が、いとも簡単に切り裂かれた。

やはり田中の剣の冴えは半端ではない。木村はすこしも太刀筋を見切れなかった。

だからこそ、この太刀をもってして斬れないソルステイスの硬さは尋常ではない事になる。

そう思うと、木村は後ろが気になって仕方がなかった。一方で、背後など一顧だにしない男が一人。

「お邪魔しまーす」

田中は空気を読まず、とぼけた調子を崩さない。扉を蹴飛ばし、ズカズカと部屋の中へと踏み込んでいく。呆れ半分感心しながら、木村はここでも控え目に後に続いた。

中はコンクリート打ちっ放しの寒々とした部屋。魔力の青い燐光が異様な雰囲気を出している。

「本当にお邪魔よ」

「僕も歓迎出来ないね」

迎えたのは再び黒峰。今回はソルンも一緒だ。

ソルンは脚の短いラウンジチェアにどっしりと座り、後ろに立つ黒峰はソルンの首筋にしなだれ抱きついていた。

どこか甘やかな空気が流れている。木村はソコに違和感を覚える。だが、はつきりと

何かは解らない。

とにかく相手は余裕を崩さない。

ココは遺跡の最奥、つまりは袋の鼠である。しかし、追い詰められたのは、果たしてどちらか？

木村は慎重に口を開いた。

「いえいえ、お構いなく。ご挨拶が済んだら、お邪魔虫はもう、すぐに帰るんで」

「まあ焦る事はないよ、折角来たんだ」

「チツ」

ソルンの言葉に、田中は舌打つ。

その意味はすぐに解った。今来た通路を振り返れば、魔獣がゾロゾロと向かって来る。やはりタダでは帰してくれそうになかった。

「ならコツチも手ぶらじゃ帰れねえな」

「あいにく、土産にはこんなモノしか用意出来ない」

刀に手を伸ばす田中に、お返しとソルンが突きつけたのはリボルバーだ。

恐らくはハンドメイド。なのに、木村から見ても良く出来ている。この距離は躲せない。良くて大怪我、当たり所が悪ければ即死だ。

かと言って、田中の踏み込みは早い。一步間違えばソルンだつて無事じゃ済まない。

一瞬で胴体を泣き別れにするだろう。

睨み合ったのは一瞬。その一瞬が致命傷となる。

——ギーツ！

部屋の奥、擦過音と共に火花が散った。

そこは空になったエレベーターの昇降路。落下してきたのは巨大な影。

壁を削りながら停止して、のそりと部屋のなかに踏み込んだ。

浮かび上がった細長いシルエットは、脚を伸ばした黒い蜘蛛。最も恐れていた相手、ソルステイス。

「やつと来たか。これで歓迎の準備は整った」

ソルンがゆっくりと立ち上がる。その顔は余裕で満ちていた。

最悪だ。

木村は挽回の手を探すが、思い至らない。

背後には大量の魔獣、前には田中でも斬れないソルステイス。

そして銃を構えるソルン。

状況は悪化の一途。

この張り詰めた状態で、田中の気の抜けたジョークが、思いがけず突破口を開くことになる。

「皆さんお揃いで、おまえらの結婚式には似合いの招待客だな」
「貴様ア！」

ソルンは声を荒らげる。

彼は真実、黒峰を愛していたからだ。

だからこそ、こんな日陰の生活をさせる事を負い目に感じていた。地下深く魔獣と蜘蛛を侍らせる姿を揶揄され、激怒する。

——パァン！

だから軽率に引き金は絞られた。なれどタイミングを読まれた銃弾は躲すに容易い。

田中の頭を狙った銃弾は空を切った。

それが、合図。

——ピーッ！ ピピピ

——ギユオオオ

機械のビーブ音と、魔獣の咆哮、二つの音色が溶け合わさる。

たちまち乱戦が始まった。

木村もボーッと見ていた訳じゃない。田中へ銃弾が放たれた瞬間、既に動き出していた。
た。

放り投げたのは爆弾。それも二つ同時だ。

コレで木村が持つ爆弾の在庫はナシ。虎の子の二つ。

——パシユン！

気の抜けた音で、まず破裂したのがトリモチ弾だ。

コレは、黒峰を粘着性のトリモチで拘束し、無力化する為に用意した爆弾だった。所詮はただのトリモチ。強力な魔獣を封じる力などあるはずが無かった。

だが、今回ソレを使ったのは黒峰に対してではない、ソルンにでもない。

木村はあろう事か、粘着弾をソルスティスに使った。

繰り返すが、ただのトリモチ。魔獣はおろか兵器たる蜘蛛を封じる力は微塵も無い。真つ白な粘液が封じたのは、ソルスティスの目。赤い四つのカメラを白に封じた。

瞬間、ソルスティスは木村と田中を見失う。

——パァン！

そして、二個目。

コチラは催涙弾だ。それも原始的な催涙弾。

——ギユピイイイ！

唐辛子の刺激が、魔獣の目を灼いていく。

胡椒や山椒、カレー用スパイスまで幅広く仕入れる木村は、この世界最大のスパイス商人である。

そんな木村が注目したのが、この特殊な唐辛子。

木村が買い付けるまでは、地元の農家が魔獣から作物を守る為に植えていた劇薬。食用ですらなかった種類の唐辛子。

それを爆弾にたっぷりと練り込み、吹き飛ばしたら、どうなるか？

これも無傷で黒峰を無力化するための策だったが、幸い魔獣にも効いてくれた。

——ギョピイイイ！

巨大な化け猫や、ネズミ、トカゲの怪物が黒峰の制御を外れ、激痛にのたうち、暴れ始める。

たちまち部屋の中は大変な惨事となった。

「クソツ！ 招待客のマナーがなつてねえぞ！」

田中は暴れるトカゲを斬り殺し、ネズミを蹴飛ばす。

「引き出物が鉛じゃ無理ないっしょ」

木村は大きなソファアを転がして、物陰にすべり込んだ。

「いつもいつも、オマエらは！」

ソルンもラウンジチェアをひっくり返し盾にして、黒峰と身を寄せ合う。

一瞬にして、状況がひっくり返った。

——ピーッ

いや、まだだ。

まだ、最強の兵器であるソルスティスは無力化されていなかった。

黒い脚を振り下ろす先、剣を振るったばかりの田中が居た。慌てて体を捻るが、田中とて避けきれないタイミング。

「コイツ！ 視えてやがる！」

一命を救ったのは、田中が着ていた黒い鎧だ。エルフの技術で作られた鎧が蜘蛛の脚を滑らせた。

しかし、たったの一撃でカーボンの鎧はバターみたいに抉られた。やはり強度では何物も上を行く。

「赤外線だ、熱だよ、ほら、体温消して！」

「消せるかボケッ！」

ソファアの影から、木村による無責任なアドバイス。田中はキレた。

巻き込むのも構わぬと、木村の隣へ転がり込んだ。

「ども！」

「ちよつと待てつて、じゃあ誰がああ蜘蛛を抑えるんだよ」

「木村サンにお任せします」

「無理だつて、ムリムリのムリムリン」

「またまたあ、出来ますよ木村サンなら」

「いやいや、ココは大森林の英雄たる田中サンに」

「ふざけるな！」

——パァン！

激昂したソルンの銃弾が、ふざけあう二人の間に突き刺さる。

「……………」

「……………」

一瞬の沈黙。

そして、長年の付き合いによる瞬間のアイコンタクト。

ソファアの影から、二人同時に飛び出した。

田中はともかく、木村らしからぬ大胆な行動には理由がある。乱戦の中でも、二人は冷静に銃声を数えていた。先ほどが五発目。しかし相手は六連装のリボルバー。まだ一発残っている計算だ。もちろん数え間違いではない

この最後の一発が撃てないモノなのだ。田中は勘で、木村は経験でソレを知っていた。

素人でも五発目までは気楽に撃てる。だけど、身を守る虎の子を人間は中々手放せない。五発目を撃った後こそが、全弾撃ち切った後よりも、むしろ大きなチャンスとなる。

たった一発しか撃てない拳銃に、己の全てを委ねてしまうから。

まして二人同時に飛び出せば、瞬間、どちらを撃つべきか決められない。ソレが致命的な隙となった。

木村はソルンに駆け寄ると、自在金腕ルー・デルオンを伸ばし、リボルバーを封じた。

同時に田中は走り込み、ラウンジチェアを回り込んで黒峰の首根つこを掴んでいた。そのまま無理矢理に立たせると、羽交い締めにして動きを封じる。

「よお！ 久しぶりに話でもしようぜ」

「私には話なんてないわ！」

「ぐへへ、つれないねえ」

「田中さーん、頼む！ ザコっぽい言動だけは控えてー！」

「貴様らア！ クロミーネから手を離せ」

——ピーピピッ

グチャグチャになった。

ソルステイスも、何を成すべきか判断出来ず、動作が止まる。

田中は必死に黒峰を口説いた。

「なあ、頼むぜ、俺はマジで話がしたかっただけだ」

「私には話す事なんて」

「お前、帝国じゃ顔が売れてるが、王国じゃ誰もお前の顔なんて知らねえ。協力するぜ、平和に暮らせばいいじゃねえか」

「今更ッ！」

黒峰は身をよじって逃れようとする。その仕草は魔女と呼ばれた不気味さとは無縁の少女に思われた。

そして、それは、もう一人、古代人の男もだ。

野望ではなく、黒峰のためだけに。銃を封じた木村にせがんだ。

「クソツ、お願いだ！ クロミーネを離してやってくれ」

「あ、ああ。解ったよ。絶対に黒峰さんを傷つけない」

「本当だな！」

「コレで、信用する？」

「なにっ？」

木村はリボルバーの銃口を咥えてみせた。まだ、トリガーにはソルンの指が掛かっているにも関わらず。

田中が黒峰を傷つけたら、俺を殺せと、そう言う事だ。

そうして、会話する時間を作ると同時。ソルンと密着することで、今も虎視眈々とコチラを狙う黒い蜘蛛、ソルステイスの攻撃を防ぐ狙いもあった。

状況が落ち着くのを見て、田中はゆっくりと黒峰に語る。

「今のお前だったら、俺は信じられる」

「何言ってるの？」

「今のお前は、世界を壊そうなんて思っていないだろ？」

「そりゃ」

「『高橋』の命だつてどうでも良いハズだ、神だつて恨んじやいない、違うか？」

「どうして？」

「そこまで解るといふのか？」

黒峰は、この世界が嫌いだった。だから、この世界に送り込んだ神も心底恨んでいた。だから、『高橋敬一』を殺して、神の邪魔をするつもりだった。

田中はその事を見透かしていた。

「お前は他人に従う癖に、後で文句言う悪癖があった」

「……………」

「文化祭覚えてるか？ お前はメイド喫茶が良いって言ったのに、お化け屋敷に決まっちゃまって、口ではどっちでも良いみたいな事言いながら、裏では足を引っ張った」

「今更、なんの話してるの!？」

「だから、前世のお前が一番嫌いだったのは、親だ。違うか？」

「……違う！ 私は！」

黒峰は親に好かれたいと願っていた、だからこそ良い子でいようと心がけた。嫌いだななんてあり得ない。

「違うな、親のために良い子で居る事が嫌で、お前は何処かで親を憎んでいた」

「そんな事！」

「あるさ、それでも無ければ俺みたいな、馬鹿な男に興味を持つ訳ねえだろ」

「………」

「だけど、この世界では親にあたれない、お前が恨んだのは神だった。どうしてこんな世界に送り込んだのかって」

「……そんな事、勝手に決めないで」

「丁度、前に会った時だ、異世界で女帝になって。何でも壊してやるって、顔に書いてあったぜ」

「だから、なんなの？ いい加減になさいよ、何が言いたいのよ！」

「そのくせ、お前は楽しそうだった。心底、楽しそうだったんだよ」

「それで？」

「お前は、反抗するのが好きなんだ。争うのが、ぶち壊すのが好きなんだよ」

「………そうかもね」

黒峰は気が付いていた。

全てを恨み、暴れ回ってメチャクチャにする事それ自体が、楽しかったのだと。

誰かの顔色を窺うのでは無く、相手をコントロールして、世界を破滅に導くのが楽しかった。

異世界に送り込んだ神を恨みながら、彼女は異世界を誰よりも満喫していた。

でも、最後の最期、死ぬ間際に、黒峰はその矛盾に気が付いてしまう。

仲間と共に、一緒に暴れた時間の方が、地球での思い出よりも楽しくなっていた。

神や世界を恨む理由はドコにも無いのだと。

「でも今のお前は違う。以前はなんも言い出せなかったが、今なら誘える」

「違わないわ、私は、何も、変わってなんかいない！」

「違うさ、お前は変わった。もう何も憎んでないし恨んでない」

「……そりゃ、もう何にも無くなっちゃったから……だからもう」

「なら、新しく作れば良いだろうが、田舎で狩りでもして暮らせれば良い」

「そんなの無理！ 皆が私を恨んでる！」

特に恨んでいるのがエルフ、それにユマ姫だ。隠れる場所なんてドコにも無い。

「そんなぐらいいは、俺が守ってやれる」

「何言ってるの？ どうやって？」

「世界が平和になりや、俺だつてやる事がねえ、二人でのんびり田舎で暮らしたつて」
「ッ！」

それ以上、先を言わず、黒峰は田中を振りほどき、正面に見据える。

——パンッ

そして、頬を叩いた。

黒峰はポロポロと泣きながら、田中を放置してソルンへと駆け寄る。

「邪魔！」

「うえっ！」

木村を引き剥がし、打ちひしがれるソルンを抱きしめる。

「クロミーネ、様？」

「いいの、私はもう、地下^{□□}でソルンと暮らすから」

そう言つて、抱きしめて、口付けた。

「おーおー、見せつけてくれるぜ」

囃し立てる田中は、ここに至つてまだ三下のようだ。

それが死亡フラグに見えて、すこしだけ木村を不安にさせた。だからソルスティスを

示し、叫ぶ。

「おい、もう良いだろ？ 頼むからあの蜘蛛を止めてくれよ」

「何故だ！ ソルステイスはまだ負けていない」

ソルンは強がるが、田中は刀を突き付け。

「解れよ。ロボが無敵でも、お前はそうじゃ無い。殺る気なら、もう殺ってる」

「……解ったわ。ソルステイス、止まって」

黒峰の言葉で、蜘蛛は振り上げた脚をそつと下ろした。

「それで良い。助かるぜ」

「それで、どうするつもりなの？」

「どうもしねえ、いや、俺に出来る事なら、協力する。約束だからな」

「ふうん」

意地悪に黒峰は笑う。

「私はもう憎まない。でも、ユマ姫あのかが私を殺すと言ったら？」

「だったら、俺がアイツを殺す」

「えっ？」

木村は、慌てた。ユマ姫はやる。間違はなく、許さない。

田中とユマ姫。このままでは二人が殺し合うのは目に見えていた。

二人のやり取りに、黒峰は薄く笑う。

「それ、本気なの？」

「ああ、それに、俺には今のアイツが『高橋敬一』なのかも確信が持てねえ」
「何ソレ? ……でも、そうなのね」

「そうだ、今のお前を殺すつて言うなら、アイツはアイツじゃねえ、俺が殺す!」
「なら、信じるわ」

木村は苦々しい思いで二人の会話を聞いていた。だから気が付かなかった。田中がまだソルスティスを警戒している事に。

田中は、尚も暴れる魔獣を斬り殺しながら、二人に背を向ける。

「じゃあ、行くぜ。今度はマシな祝儀を持ってくる」

「要らないわ、変なのを寄せ付けなければ、それで十分」

「わかった、何とかする」

そう言つて、田中は立ち去ろうとする。

慌てたのは木村だ。

「ちよ? え? マジで帰るの? あの、黒峰さん? 俺は色んなモノ用意出来るから、カレーライスとか食べたくない? ラーメンとか」

「ふふつ、楽しみにしてる」

ソルンと抱き合う黒峰の笑顔はとても澄んでいて、かつての絶望にしか笑えなかった彼女とはかけ離れたものだった。

だから、油断した。その笑顔が余りにも美しかったから。

木村は振り上げられたソルステイスの脚に気が付かなかつた。

「え？」

呆然と呟く木村。だけど、既に脚は振り下ろされていた。

その横を田中が駆け抜けるが、間に合わない。

——ザズツ！

蜘蛛の真つ黒な脚が、命を刈り取る。

「なん、なんで？」

木村には、理解出来ない。

ソルステイスが、黒峰とソルン、抱き合う二人の腹をまとめて引き裂いたから。

「ガッ？　グッ！」

誰が見ても致命傷。おびたらしい出血は、間もなく心臓を止めるだろう。

その僅かな時間。背中から貫かれたソルンは、必死に振り返ろうとする。

自分を、そして、愛する黒峰を殺した憎き相手を最後にひと目、睨もうとする。

だけど、黒峰がソレを止めた。

振り返ろうとするソルンの顔を抱き、向き直させる。

そして、最期に二人は口付けた。

それで、死んだ。

——ズビュ!

まっ黒い脚は引き抜かれ、二人の血が混じり合う。

倒れた二人は、幸せそうに死んでいた。

「なんで……?」

「馬鹿が! だから、コイツを止めろって言ったんだ」

田中は見上げる。天井いっぱい立ち塞がる真つ黒な蜘蛛を。

「自分を祝う事も出来ねえのかよ」

「何を言ってるんだ?」

「コレで満足なのかよ、ソルスティス!」

——ピーピピッ!

「いや、クロミーネ」

《イツカラ》

ソルスティスの赤い四つの目に、文字が浮かんだ。

それは、カタカナだ。

「え? なんで?」

「木村ア、コイツが、コイツこそが黒峰だ」

「なんで？ 機械だろ？」

「知らねえよ！ でも、コイツからは黒峰の気配がする」

「意味が……」

解らない。いや、でも、木村は思い出す。

確か、黒峰さんの能力は『更新権』。そう更新する権限だ。

それが、まっさらな人間に自分の記憶を書き込む事が出来たなら？

「考えるのは後だ！ 来るぞ」

《コロス、ゼンブ、ユルサナイ》

目に浮かんだ文字が、スクロールして、流れていく。

単純なカタカナなのに、そこには狂気があふれていた。

汚い黒峰

コンクリートの冷たい部屋で、青白い照明と真つ赤な目が交互に煌めく。

浮かび上がるのは真つ黒なシルエツト、細い八本の脚で立ち上がると、天井スレスレの高さに迫る。

姿は真つ黒な蜘蛛。堅牢で知られる蜘蛛の魔獣、ザルアブギユリ大土蜘蛛を元に作られた古代の兵器。

自律小型兵器ソルスティス。古代文明の極致であつた。

《ワタシハ》

《クロミネ》

そして、黒き魔女と恐れられたクロミーネの変わり果てた姿でもある。

狭い部屋で、その脅威から逃れる術は無い。

「ヤベツ、クソツッ！」

田中が身を隠すソファアを、ソルスティスの脚は軽々とぶち抜いた。

「効かないんだけど?」

木村が放つ弾丸は、ソルスティスの赤いカメラに命中するも、ヒビすら入らない。

一番弱そうな場所に、最大火力が通用しない。木村にとって詰みの状況だ。「なんとかしろ！ 俺だつて斬れねえ！」

田中は田中で、天井スレスレ、本体上部のカメラには手が届かない。

もはや、二人に打つ手は無い！

《ドウシテ》

《ワタシハ》

《シンダ？》

《デモ》

《イキテル》

「死んでるよ！ 黒峰、お前はもう、死んでる」

田中が叫ぶが、その言葉は届かない。

《クロミネ》

《チガウ》

《ワタシハ》

《ママ》

意味が解らない。

いや、解った。木村には解ってしまった。

「まさか」

星獣か？ そうだ、黒峰は最期に星獣を洗脳しようとした。

でも、失敗した。逆に星獣に取り込まれそうになって、苦しんで、食われて、死んだ。はたして、そうか？

アレは、本当に失敗していたのか？

共鳴して、同一化して、そして食われて、黒峰と星獣が一つに溶け合ったとしたら？
……そう言えば、この機械はどうやって動いている？ 動力は？

木村の背筋をゾクリと冷たいモノが走る。

止めないと！ 殺してあげないと、ダメだ。

「頭を下げさせろ！」

田中は叫ぶが、自分でも不可能な注文だと解っていた。恒例の無茶ぶりジョーク。

しかし、木村は命を懸ける覚悟を決めていた。

だから、危険過ぎる可能性に辿り着く。

それほど必死に、いますぐこの機械を止めたかった。

「ちよ？ おまつ！」

木村の暴挙に田中は叫ぶ。

あろう事か、木村はソルステイスの目の前に躍り出たのだ。

「よおー」

木村らしくない挑発。熱線で穴の開いた帽子をクルクルと回してみせる。

しかし、相手は機械だ。ためらいなく脚を振り上げた。

終わりだ。躲せない。田中でも鎧があつたから一命を取り留めたのだ、もはや逃れる術は無い。

——ガツ！

しかし、前脚はコンクリートを抉るのみ。乾いた音を響かせた。

どうやって？ 実は、木村は一步だつて動いていない。

ソルステイスが脚を滑らせ、ひとりでにバランスを崩し、狙いを外した。

コンクリート打ちっぱなしの寒々しい部屋だ。いくつかマットが引いてある。

木村は、その一つを自在ルー・デルオン金腕で横に引いた。

振り上げた前脚の後ろには、当然、体重が掛かった後ろ足がある。振り下ろす直前、絶妙なタイミングでソレが横に滑ったら？

不自然に脚が広がり、バランスを崩し、狙いを外す。ただソレだけ。

分の悪い賭け、言うならば捨て身のイタズラ。

ソルステイスは見た目より軽く、脚が細い。だからこそ成功した。

「よっしー」

ぶざまに開かれた足を田中が見逃すはずが無い。足場にして、飛ぶ。たちまち低くなったソルスティスの頭へと襲いかかった。

「シッ！」

その一閃で、四つのカメラが同時に割れた。

相手が^{ザルアブキヨリ}大土蜘蛛ならコレで終わり、視力を失い、無力化される。

——ピーピピッ！

「クソッ！」

駄目だ、着地した田中を無数の脚が襲う。

確かに攻撃の精度は落ちている。だが、無力化には至らない。赤外線カメラを失い、まだ見えている。

——パァン！

その時、死んだソルンのリボルバーが突然鳴った。

木村が自在^{ルー・デルオン}金腕で引き金を引いたのだ。しかしデタラメ、狙いはつけていない。ただ引き金を引いただけ。

——ガッ！

しかし、そのお陰で、田中を狙うソルスティスの脚は狙いを外して地面を抉った。

「音だ！…心音消して！」

「消せるかボケッ！」

ならばと、木村は自前のリボルバーを連射した。

大きな発砲音がソルスティスの耳マイクを惑わすが、長くは保たない。

「逃げるぞー！」

「いやだー！」

引こうとする田中に、今度は木村が従わない。

木村は黒峰をこのままにしたくなかった。こんな地下で、こんな体で、ずっと生きているなど、悪夢に思えた。

しかし、届かない。木村の攻撃など、どれも。

目の前に有るのは、悪夢そのものなのだから。人間の攻撃など届かない。

だから、悪夢には、悪夢をぶつけるしかない。

「こんにちわ」

部屋の奥、エレベーター昇降路。ソルスティスが落ちてきた場所。

そこに、新たな悪夢が降り立った。

「ねえ、私も混ざっていい？」

可愛らしく首を傾げ、微笑む。

——そして、

狂暴に叫んで、飛んだ。

「死ねッ！」

あまりにも、速い。

木村にはまるで見えなかった。

気が付けば、間近でギヤリギヤリと金属が削れる音。火花が散って、降り注ぐ。

振りかざす王剣が、ソルステイスの脚と衝突していた。

ユマ姫だ。

もうひとつの悪夢が、今、この場所に、間に合ってしまった。

「なんで来たー！」

「我、望む、この手より放たれたる風の刃を」

田中の叫びを無視した詠唱。そこに込められた力は、余りにも異常。

なにせ、魔力を知覚出来ない田中や木村にもハッキリと視えたのだから。

ユマ姫がイメージしたのは、グリフォンが放った人外の魔法。

エルフの王宮を切断し、帝都が誇る舞踏場を両断した、あの魔法と比肩する威力。

いや、既にして超えていた。小型に圧縮された風の刃は空気を発火させながら、蜘蛛の脚だけを狙う。

火花と共に、ギリギリと異音が鳴り響く。

「マジかよ」

田中が呆然とするのも無理はない。

斬れないはずの蜘蛛の脚が、次々切断されていく。カランと崩れて落ちていく。

潰れた蜘蛛は、しかし、それでも戦うのを止めない。

——ビッ！

吐き出されるレーザー、ユマ姫は難なく弾くと、王剣を射出レンズに突き刺した。

さしものソルスティスもここまで、完全に沈黙する。

「なんだよ、コレ」

木村は事態について行けない。

ユマ姫登場から、ここまで僅か二分。

無敵のソルスティスを瞬く間に無力化してみせた。

ユマ姫は想像を超えた怪物になっていた。

「さて」

落ちていたユマ姫は、踵を返し、部屋の隅で何かを担いだ。ソレは、巨大なバツクパツク。どうやら秘かに持ち込んだモノらしい。

ここでようやく冷静さを取り戻した木村が、口を挟む事に成功する。

「なにそれ？ あと、ど、どうしたの？ あの？ 帝都を制圧するハズじゃ？」

「ああ、ソレはもう、済みました」

「は？」

早過ぎる！ 木村は息を飲む。

木村が帝都を発つたのが昨日、黒峰が潜む洋館に辿り着いたのが、今日の午後。田中のバイクをもつてして、それだけの距離がある。

そして、帝都攻めは今日、明け方から開始のハズ。まさか、無抵抗で降伏した？ そんな事はあり得ない。

一体帝都で何があったのか？ 木村には想像も付かない。

不気味なのは、ユマ姫が漁るバツクバツクもだ。

余りにも巨大で、こんなモノを担いで山中のこんな場所にまで来られるハズが無かつた。

「さてさて、あつたあつた」

考え込む木村を無視して、ユマ姫が取り出したのは真っ赤に染まった……ずた袋。

「はい、どうぞで」

取り出したのは、枝肉だった。

枝肉と言うのは、と畜されたばかりの肉だ。皮と内臓を処理され、元の姿が想像出来るサイズで吊されている。小売りされる前のグロテスクな肉。

ホラー映画で良く見るが、この世界の肉屋ではあたりまえに吊してあるので、木村も慣れてしまった。

だが、なぜユマ姫が枝肉を？

「うっ！」

違った。コレは枝肉ではない。

ピクピクと脈打っている。

コレは、まだ、生きています！

残らず皮が剥がされ、背骨と、最低限の内臓だけになって、それでもコレは、まだ生きています。

木村は戦慄する。

聞きたくない。聞きたくない。でも、聞かざるを得ない。

「な、何？ コレ？ 何？」

まさか？ と思いながら聞かざるを得ない。

「ふふ、コレ？ コレはね、

皇帝です。

帝都で捕まえてきたの」

木村の目の前が真っ暗になる。

最悪だ。

帝国での皇帝は現人神。これは神をと畜したに等しい所業だ。

戦争は、もう終わらない。帝国と王国、どちらかが死に絶えるまで、もう終わらない。「黒峰さんと知り合いだったみたいだから、最期に会わせてあげようと思って」

余計なお世話だ、ゲスを極めた悪魔の思考。

いや、人知れず皇帝を攫ったなら、まだチャンスはある。バレなければ、まだ大丈夫だ。

しかし、ユマ姫の言葉は木村を絶望させるに十分だった。

「帝国の広場で、少しずつ千切ってあげたの。指先から少しずつ。黒峰さん、あなたにも見せてあげたかった」

最悪だ、最悪の最悪、そのまた下の最悪だ。

それでは、今頃帝都は狂乱と殺戮に塗れている。もう、誰も命を命として扱わない。命尽きるまで戦う怪物の群れになったに違いない。

掠れた声で、木村は問う。

「それで、今、帝都は？ 残された王国軍は？」

「別に、何もっ？」

何も無い訳はない。ユマ姫は何もかも投げ打って飛んで来たのだ。

木村は胸が締め付けられる思いだった。何故そんな、恨まれる真似を。少女の狂気が深すぎた。

もう、最期まで殺し合う未来しかないのだと、悲しくて、辛かった。

しかし、事態は木村の想像を超えていた。

「失敗したの」

「失敗？」

「帝都の人間を絶望させて、狂わせて。それが復讐のはずだった」

そうは成らなかつたと言う事か？ ホツとした木村は、ようやく周囲を窺う余裕が出来た。

既に田中は元に戻したソファアにどっかり腰掛け、聞きの姿勢だ。こんな時、木村はこの男の精神が羨ましくなる。

俯いたユマ姫はぼつりぼつりと語り出した。

「私は、皇帝を広場の真ん中で処刑した。皮を剥ぎ、肉を引き千切った。みせしめに」

「……それで？」

「でも、誰も皇帝を助けようとしなかつた。それどころか、誰も抵抗しなかつた」

そんな、馬鹿な！ 帝国において、皇帝は心底敬われている。

だからこそ、王国よりも強い中央集権が成り立っていた。

その皇帝が、見せしめに黜られて、市民が冷静で居られる訳が無い。

その狂乱をもって、少女は復讐を終わらせるつもりだった。

問題は、なぜ、そうならなかったのか、だ。

「ある意味、私は皇帝に負けました」

負けた？ 何が？ 何で？

錯乱する木村に見せつける様に、ユマ姫は皇帝と呼ばれた肉塊の戒めを解いた。

ハムを縛る紐みたいなソレは、口らしい場所を封じていた。

「ゲウウウウ」

途端に、獣染みた悲鳴があがる。聞くに堪えない痛ましい声。当然だ、こんな目に合わされれば。

目は抉られ、耳だって聞こえないだろう。ただ悲鳴を奏でさせる為だけに持つて来たのだ。

正気を削る声だった。

木村は、本当にこの枝肉が生きていたのだと、突き付けられる思いだった。吐き気がこみ上げ抑えられない。

そしてユマ姫は、その肉塊に容赦なく爪を立て、抉る。

可愛らしい指先には、見た目からは想像出来ない力があつた。肉と共に見る者の精神

をガリガリと削っていく。

「クウ、アアアアア♪」

精神を削るのは、肉塊の悲鳴もだった。

いや、悲鳴なのか？ 解らない。その声はどこか甘く、艶めいている。

——ピーッ

悲鳴を聞かされたソルスティスが、折れた脚を振り回して、壊れたみたいに暴れはじめた。

ソレを見て、今まで俯いていたユマ姫が、ようやく嬉しそうに笑うのだ。

「そうよ、ふふつ、皇帝の声、解った？」

——ピー、ピーッ！

「ヒハッ、そうよね、可愛い子。私がどんなに苛めても、みっともなく泣き出さなかった」

——ピーー！ ピーピーピー！

「気が強いのだと、流石は皇帝だと思った。でも、違った。彼は喜んでるの」

ユマ姫は、見せつける様に肉塊によりそって、舐めた。

意味が解らない。その笑顔は美しい狂気に彩られている。

「私の事が好きだから。彼、私にぞっこんよ？」

——ピーッ！ ピーピーッ！

「だから、どんなに傷つけても嫌がらない。喜んでしまうの。彼だけじゃない、帝都の市民まで、私に殺されたいと首を並べた。これじゃ、どうあっても、私の復讐は叶わない」
笑って、笑って、ポロポロと、ユマ姫は泣いていた。

全く意味が解らない！

木村はユマ姫が狂ったのだと思った。正気を保てず、言葉の意味も、人の悪意も、喜びも、苦しみも、何もかもが解らなくなったのだと。

でも、良く見れば、違った。違うと解ってしまった。

狂ってしまったのは、喜びも、苦しみも、何もかも解らなくなったのは、むしろ見ているコチラ側だ。

泣いているユマ姫が可哀想で、正気を保てなくなる。

グチャグチャの肉塊にされた皇帝が、どこか羨ましくなる。

苦しみも、苦しみとして、成り立たない。

殺されたいと思う。美しくて、可愛くて、綺麗なユマ姫に、剣を突き立てて、殺して欲しいと願ってしまう。

もはや、存在そのものが狂気で出来ている。

こんなモノを見せられて、こんなモノに魅せられて、誰一人冷静で居られなかったに違いない。

「悪趣味だな」

いや、ただ一人、冷静な男が一人。

「満足したか？」

「ええ」

——ぞんっ！

刀を肉塊に突き立てれば。ピクリと跳ねて、動かなくなる。

それで、皇帝を殺した。

田中だ。

彼だけは、狂気に抗った。

「じゃあ、早くコイツも殺してやれ」

ソルステイスを指差し、命じる。

「そうね」

呟いて、ユマ姫はソルステイスのハッチをこじ開ける。

まるで、蟹の殻を割るみたいだと、木村はぼんやりと思う。

その感想はあながち的を外してはいなかった。

「あつたあつた、黒峰さん、お久しぶり」

引き出したのは、余りにも巨大な魔石。

それこそが、星獣と黒峰が混じった魔石。ユマ姫はずるりと引き出した。機械の心臓部、神経同然のチューブがブチブチと引き裂かれる。

機械が壊れるだけの光景。なのに、ソレは殺人だった。

——ピッ——

この瞬間。今度こそ、黒峰は死んだのだ。

——そして。

「いただきます」

ユマ姫は魔石を嚙った。

その姿は、まるきり悪魔のようだった。

ピンク色の髪が、青い魔力光に怪しく輝く。

背中には翼、頭には獣耳、尻尾まで生えて、人間を止めた姿に変わっていた。

——コレが、ユマ姫？ 本当にそうなのか？

僅か一日で、ユマ姫の姿は大きく変わっていた。

木村にして、恐怖する。

でも、本当に恐ろしいのは、ソレでも美しいと見とれてしまう事だった。

大胆に肌を晒すウェディングドレス。身の丈を越える大剣を手に、人間をやめた幻想

生物の美しさ。

さらけ出された首筋の赤い線条には返り血が入り込んで、深紅に彩り、さらなる狂気を加速する。

喜びも、苦しみも、美しさも、暴力も、同じに、同時に、ソコにはあった。

変わったのは、何か？

——駄目だ、とても正気が保てない。

目の前のユマ姫はウエディングドレス風の衣装で大胆に肌を晒し、身の丈を越える大剣を振り回す。

艶めかしい肌には、返り血で彩られた赤い線条が走り、見る者の狂気を加速する。困惑する木村は、田中に目線で助けを求め。

「おい」

「なあに？」

ユマ姫は身を屈め、上目遣いで田中を見つめた。

その姿が可愛くて、なにより恐ろしい。

「お前は、何だ……」

「あ！ その前に」

ユマ姫は、巨大なバックパックから、またも何かを取り出した。

木村は、再び嫌な予感に苛まれる。田中に至ってはガリガリと頭を掻きむしった。

「じゃーん」

取り出したのは、手足をもがれた女神像。

いや、生きている女性だ。瞑った目がパチリと開くと、辺りを見回し、ムスつくれて頬を膨らませた。

「こんな風に連れ回されても困るわ」

シヤリアちゃんだった。もはや意味が解らない。

ココに来て、木村の理解力はすり切れた。

「待ってくれ、もう限界だ、何で？ 何なのコレ？ 何で手足が無いの？」

「食べちゃった……」

ユマ姫はテヘへと可愛らしく笑ってみせる。でも、事態は少しも可愛く無い。

「何で食べちゃったの……」

「勢いで」

もう、狂気が渦巻いて意味が解らない。

「去年、星獣を殺し、足がもげて帰り道。私はシノニムさんに殺された。心臓を刺されたの」

「ええっ……」

驚きながらも、あの思い詰めたシノニムさんを考えれば、ありそうな事に思われた。

木村は己の不明を恥じる。だが、だったらどうするべきだったのかは、もう解らない。

「私は、失った心臓をシノニムさんの心臓で補った」

「で、足はシャリアちゃんのを千切って奪ったと？」

「それは勢いで食べちゃった」

「ええっ……」

聞いているだけで、正気を削る。ユマ姫の言葉。

「それで、ココにはポーシヨンの在庫を探しに来たのです。アレをポッドに満たさない
と欠損は治らないから」

「ああ、ソレで連れて来たのね、ふむふむ」

ようやく話が繋がった。木村は何故だか安心した。

いや?? 冷静に考えると、まるで繋がっていない。

「結局ポーシヨンは在庫切れ。でも、代わりがあるじゃない？」
嫌な予感がする。

ユマ姫が見つめた先には、黒峰の死体があった。

話は繋がらない。繋がるのは、別のモノだ。

ソファアールから飛び出した田中が、ユマ姫の前に立ち塞がる。

「お前！」

「ねえ、それ、くれない？ くつつけるから」

プラモデルみたいになだつてみせる。狂気が加速する。

田中は泣きそうな顔で訴えた。

「俺は、ソイツをお前から守ると約束したんだ」

「でも、死んでるでしょ？ 約束は守れなかった」

木村は舌打つ。気が付いてしまったから。

ユマ姫は、もつと前からココに居たのだ。二人の会話も、聞いていた。

だから「私も混ざって良い？」と聞いたのだ。戦闘が膠着するまで、待っていた。観戦を決め込むぐらい、余裕がある。

「クソツ」

田中が泣きながら、ユマ姫に刀を突き付ける。

「クソツ、クソツ」

「私を斬るの？ 斬っても良いけど、ソレって自己満足じゃない？」

「グツ」

泣きそうな田中に、笑顔のユマ姫。

田中がここまで打ちのめされているのを木村は初めて見た。

それだけ、田中は本気で黒峰を守る気だったのだ。

でも、その約束は守れない。死んだ者は生き返らない。一部の例外を除いて。

クローンでしか無い彼女は、その例外ではない。

項垂れる田中を無視し、ユマ姫はアツサリと黒峰クローンの手足を千切っていく。

いたたまれない、でもシャリアちゃんの手足になると言われると、誰も駄目だとは言えなかった。

何と言うべきか悩んだ木村は、根本的な疑問をぶつける。

「ねえ、その黒峰さんって、一体なんだったの？」

「私にも、解りません。でも魔力の波長から、予想はつきます」

そう前置いて、ユマ姫は語る。

黒峰さんの洗脳は、相手の中に、思い描いた自分を作る力。

だけど、星獣と言うキャンバスは大きすぎて、描いた自分が本当の自分より大きくなって飲み込まれた。

星獣と一体化した黒峰さん。その魔石で起動したソルステイスは、当たり前のように黒峰さんの『更新権』を持つていた。

そして、ソルステイスは幼児として生まれた黒峰クローンに、理想の黒峰を上書きしてしまった。

理的で、可愛くて、不条理に人を嫉んだりしない黒峰だ。

まさに、キレイな黒峰。

だからこそ、ソルンにも田中にも愛された。

だからこそ、本物の黒峰は、嫉妬した。

星獣と溶け合い、機械になり果てた黒峰だが、嫉妬こそが黒峰の本質だ。

その強い感情がソルスティスに本当の自分を思い出させた。

「彼女は自分の本質に気が付くのが遅すぎました。破滅そのもの楽しんでいる自分にもっと早く気がつけていれば、結果は違ったかも知れない」

それは……自分に言い聞かせている様でも有った。破滅を楽しむ自分を肯定するよ
うに。

語りながらも、ユマ姫は切り取った黒峰の手足をシャリアちゃんに宛がった。あんまりなやり方だ、当のシャリアちゃんも複雑な顔をしている。

「死にますよ?」

「なんでです?」

「わたくしが、人間の体をくつつけた事が無いとでも? そんな事をして両方が腐るだけです」

「普通ならね」

「違うの?」

「うん、この体は、プレーンだから適合するはず」

シヤリアちゃんは疑わしげに、ユマ姫を見つめる。

「どうしてそんな事が解るの？ 信じられないわ」

「食べたから。そんな味がしました」

「……たとえ自分の手足でも、繋げたって動く様にはならないわ」

「大丈夫、神経も、血管も全部繋げる。今の私なら、ソレが出来る」

そう言つて、回復魔法で細胞を活性化させながら、繋いでいく。

既に肉が丸まつて、手足が無い事を受け入れているシヤリアちゃんの肉体を削り、こじ開け、無理矢理に繋いでいく。

流石の彼女と言えども、強烈な処置に呻きをあげた。

「グツ、あつー！」

「ふふっ、苦しい？」

「痛いのに！ どうして？ どうしてこんなに気持ちが良いの？」

シヤリアちゃんにして、耐えられず、困惑する。

玩具みたいに手足を繋げられる不愉快を不愉快として感じられない恐ろしさ。

殺し屋としての資本である、自分の体を好きな様に弄られて、それでもまるで抵抗出来ない。奇妙な感覚。

「はい、くつついた」

「……そうね、動くわ」

すぐに手足はくつついた。それが、余りに不気味であった。

「新鮮なのが良かったみたい。早く処置しないと間に合わなかった」

ユマ姫は自分の仕事に満足していた。

「ただ彼女以外は、皆がもうボロボロだ、精神に傷を負っていた。

ただ一人元気なユマ姫は、くるりと回って微笑んだ。

「それで、田中さん？」

「んだよ？」

「私の用事は終わったけど、どうするの？ 私を、殺すの？」

「クソッ」

田中はガリガリと頭を掻きむしる。

「お前は、なんだ？」

「私はユマ姫だけど？」

「違う！ お前はユマ姫とも、『高橋敬一』とも、何かが違うんだ」

「ふうん？」

ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべ、ユマ姫はソファアにへたり込む田中に正面から覆い被さった。

「何のつもりだ？」

「私のこと、好きになりましたか？」

「いや、素直に怖いが？」

田中はのけぞり、心底おののいている。

「またまたあ、私が『高橋敬一』だから、俺がアイツなんか好きになる訳が無いって、そう言い聞かせてるのでしよう？」

「いや、素直に怖いってば」

「好きだとは思いたくない。だから、私が『高橋敬一』じゃないって、別の何かだと思おうとしている、違いますか？」

「違いますよ？」

「ふうーん」

妖しくもじやれついて、今度は田中の前に立って、クルクルと回ってみせる。

そして、急に狂暴な顔で笑うのだ。

『安心しろよ、俺だって、自分で自分の可愛さにおかしくなりそうなんだ、俺に欲情したって、別におかしなことじゃない』

『話聞け！　ほんとチゲーって、マジで怖いから』

『えー？』

心底納得いかないと、ユマ姫は田中と顔を突き合わせ、抱える。

ガツチリと押さええられ、田中は顔を逸らす事も出来ない。

『この顔、可愛いと思わない？ 思わないなら、不能だろ！』

『いや、顔は可愛いと思う、思うつての！ でも怖いだろ！ 普通に！』

『怖いつてのと、可愛いつてのは、両立するさ、お前は俺を可愛いつて思うのが怖いんだよ』

『そう言う事じゃねーんだけどなあ……』

困り果てた田中を見るのは珍しい。それだけ追い詰められていた。

『お前に欲情するのは、ソコに居る奴だろ』

『アレは変態だからノーカウント』

『酷くない？』

散々な言われように、木村は拗ねた。

無視して田中は言い募る。

『いや、別に俺がお前に惚れたつておかしかねえよ？ でも、それにしたつて惚れ方がある』

『惚れ方つてなんだよ』

ユマ姫にジト目で聞かれ、田中は柄にもなく照れた。

『俺はな、どつちかって言うのと、気が強いお姉さんが好きなの!』
「解つています、だからこうして迫っているのでしょうか?」

ええ?」

木村と田中は内心で悲鳴をあげた。

そういうつもりで迫っていたのか? と。

『お前の中の「気が強いお姉さん」ってドコ基準? 貞子?』

「失礼な! 可愛いでしょう?」

『まあ、良いや、そうだな、覚えてるか? 遺跡から脱出する時、俺はお前に囓られた』

『なんか、噛み付いてペロペロしたんだっけ? 覚えてないけど』

『そう! それ! うなされるお前に囓られて、俺は、興奮した』

『ドMじゃん』

『それなら、まだ解るんだが……なっ!』

一転攻勢。田中は、のし掛かるユマ姫のか細い首を掴んだ。そのまま締め上げ、引っぱがす。

すかさず体を入れ替えると、今度は田中がユマ姫をソファーに押し倒した。

背中の羽が潰れる程にソファーに押し付けて、首を絞め、馬乗りのにし掛かる。

『俺は、あれから、お前の歯を一本一本へし折って泣かせてやりたい衝動に駆られる事が

ある』

「まあ！ そう言う性癖だったのですね！」

押し倒されて、とんでもない告白をされたにも関わらず、ユマ姫は嬉しそうに笑ってみせる。

その程度、なんでも無いと思っているのだ。

それが、田中の正気をガリガリと削った。

『チゲーよ、さつきも言ったが、俺が好きなのは、強気なお姉さんとか、ツンデレヒロイんだ。お前が高橋なら、知ってるハズだろ？』

確かに、そうだった。田中だって、木村と高橋、二人の友達である。こう見えて、そこそこオタクアニメを履修していた。

そして、田中が好きになったのは、悉くその手のキャラだった。

『殴られるならともかく、俺に女をぶん殴る趣味はねえんだよ！ まして歯を折るなんてあり得ねえ。なのに、お前と居るとおかしくなる』

『そんな事を言われましても、隠れた性癖があつたのでは？』

『断じて、無い！ お前のリョナ趣味に影響されたんだ』

「とんだ言いがかりです」

『お前、人の性癖歪ませる特殊能力とか持つてるだろ！ オカシイんだよ！ 黒峰の洗

脳能力と同等のヤベエ力がある、絶対!」

「ふふっ解りました、新しい性癖の扉が開くのは誰しも怖いモノですからね」

そう言つて、ユマ姫は聖母のように微笑んで、田中を押し退け立ち上がる。

「貸してください」

「え、ええ……」

そして、木村から自在金腕ルー・デルオンを奪い、バックパックからは無骨なペンチを取り出した。

ペンチは血に塗れ、錆まで浮いている。

……極めて不穏な気配を放っていた。

そうして、へたりこむ田中をソファルー・デルオンからどこかすと、代わりにちよこんと座り込む。

そして、魔力で自在金腕ルー・デルオンを操つて、自分の両手両足をグルグルと縛りはじめた。

雁字搦めにソファルー・デルオンに縛られて、トドメとばかりに首にはベルトを巻き付け、固定し

てしまう。

そうやって、自分で自分を拘束し、ソファルー・デルオンに固定したのだ。

そこまでやって、あーんと口を開け、可愛い歯を見せつけて、田中にねだつた。

「ほら、ソコのペンチで一本ずつ引き抜いて良いですよ」

「出来るか、ボケツ!」

田中がキレた。ペンチを地面に叩きつける。

「大丈夫ですよ、多少暴れますが、縛ってますから」

「だから、何だつての!」

「あ、歯なんて、すぐに生えてきますから。抜くだけじゃなく、潰したり、抉ったりして、のたうち回るのを楽しんでるでも良いですよ」

『だから! そんな趣味はねえよ!』

ユマ姫の口から覗く歯は、可愛くて丸っこい。

端から見えている木村まで、何故だか引き抜き、潰し、苛めたい衝動に駆られてしまう。

狂気が満ちた空間で、ユマ姫の表情が変わる。

キツと鋭い視線で田中を睨みつけ、それでいて、目には涙を溜めている。

「アンタが私を疑うからでしょ! 好きなだけ尋問して、捌ればいいじゃない!」

『はあ……』

「のたうち回るあたしを見て、楽しめば良いじゃない! アンタはあたしを何度も救ってくれた、この位なら我慢するわ」

『タイム! ちよい待ち、無理!』

ココで田中、たまらずタイムを要求。

『オカシイだろ、なんだよその、ツンデレ系ヒロインの口調。行動と一致しねえぞ』

『趣味じゃ無かった?』

『いや、興奮した』

『あ、良かった』

『良くねえよ！ ソレが異常だつて言つてんだろ！』

田中は無防備に晒された、ユマ姫の鼻を摘まんだ。

『んぐ、これまた特殊な趣味だね』

『なあ、お前、まさか自分がもう死なないとも思つてないか？』

安易に命を晒してみせる、その姿が田中には不快だった。

こんな風に、自傷を厭わないのが不快だった。いつ死んでもおかしくない癖に。

これでは今まで何の為に守つて来たのか解らなくなる。

だけど、ユマ姫はもう自分の命を大切にしていない。

一転、狂暴な顔で歯を剥き、牙を鳴らし、吠える。

『じゃあ、お前に、俺を殺せるのか？』

実のところ、ユマ姫は、すっかり化け物になった自分を自覚していた。

だからこそ、田中に別人と言われるのが辛かった。お前は『高橋敬一』だと言つて欲しかった。

その一方で、化け物と断じられ、すぐさま殺されたいと願つてもいた。

その矛盾、どちらでも良いと言う思いが、ユマ姫を捨て鉢にさせている。

ユマ姫には時間がなかった。もう十六歳の誕生日は目前に迫っている。

隕石でも殺せないなら、『偶然』はどうやって自分を殺すのか？

そこに一つだけ、心当たりがあるからだ。

凶化の暴走。

グリフオンがそうであったように、膨らんだ魔力が制御出来なくなり、意識がなくなる。殺戮を求めて暴れ回る。

既に、ずっと一緒にいたシノニムさんを殺し、シャリアちゃんまであと一歩で食い殺す所だった。

ユマ姫の意識は、本能に食われ始めている。

もう、生きているのが怖かった。

このままでは、田中も木村も、全てを殺して、最後には弾けて死ぬ。

それが何より怖かった。

だから、殺して欲しかった。

でも、もう、自分は人間に殺される事はない、そんな脆弱な生き物では無い。

ユマ姫は、そう思っていた。

だから、自分の命を危険に晒す。殺してくれとばかり、暴力を求める。

だが……

『今のお前なら、俺でも殺せるぜ？』

『え？』

『今のお前は、変わっちゃまった。脆くなった』

田中は全く逆の事を言う。

『あり得ないだろ！ 俺は、ちよつとやそつとじやもう死なない』

『それでもない、逆だ、今なら、斬れる。斬れちまうんだよ！』

『やってみろよ』

『よし』

そう言つて、田中は腰に手をやり、刀を抜いた。

「え？」

ユマ姫の体に剣閃が走る。

命の核。ユマ姫のど真ん中を壊されて。意識が遠のく。

そして、死んだ。

意識が暗転する。

もう、どうやつても戻らない、確実な死。

「ハア！ ハア！」

幻覚だ。

田中は刀を抜いてもいない。

「今のは? なに?」

口が渴く、余裕ぶった笑顔が固まり。冷や汗が止まらない。

いま、本当に死んでいた。

田中は肩を竦めて鼻を鳴らした。

「ふん、見えたのか?」

「何なのかと聞いています!」

今度はユマ姫の余裕が無くなる番だった。

「俺は、刀を振る前に、斬れるかどうか解っちゃまう」

「……………」

「そうじゃなきゃ、刀を駄目にしちまうからな」

「それで?」

「実は、今までも、何度かお前を斬ってきた、何度も何度も」

「え?」

「だけど、お前は死ななかつた。お前は運命に守られていた」

「ええっ?」

「だが、今のお前なら、俺でも殺せる。お前は脆くなった。何かが、変わった」

ユマ姫にして、全く意味が解らない。ただ、ひとつだけ、わかった。

「そっか、私、死ねるんだ」

「なんで、笑う」

田中が殺せるなら、まだ自分で死ななくて良い。それがユマ姫には嬉しかった。救いだった。

一方で、田中には今のユマ姫が、刹那的で、とても脆く見える。何かが変わってしまった。でも、ソレが何か解らない。

「あの……」

悲しくも、不気味な空気が漂う中、田中の肩をちよんちよんと突く者が居た。

「やらないなら、私が！ わたくしが！ 代わりにやってもいい？ いえ、よろしいですか？」

シャリアちゃんだ。

ペンチを手に、興奮でおぼつかない敬語。ワクワクとユマ姫の歯から目を離さない。

そう言えば、元よりそう言う趣味の人間がココに居た。

「あの、今大事な話してるからよ。ちよつと待ってて貰っていいか？」

「ええっ？ 私抜きたいのだけど？ 我慢出来ない！」

田中は騒ぐシャリアちゃんを押し戻すと、再び拘束されているユマ姫に向き直る。

「やっぱり、お前が周りの性癖を歪めてるだろ！」

『アレは前からだ！』

言い争いながら、田中はユマ姫の丸っこい歯をツンツンと突いた。

『なんだよ！』

「だからさ、俺だつてお前が、自分こそ『高橋敬一』だと信じている事を疑っている訳じゃねえ」

「どういう？ 事です？」

「自分が信じているモノが、記憶が、全部正しいとは限らねえんだ。魔法のクローンを見ただろう？」

そう言われてしまうと、ユマ姫には反論する術が無い。

転生した自分が『高橋敬一』であると言うのは、自我と記憶だけの問題だ。

証拠など何処にもありはしないのだ。

「そんな事、言われても」

「何か違和感が無いか？ 違いに思い当たる所はないか？ 俺に言わせれば、いつの間にか、お前の本質が変わっちまっている」

『違和感しかねえよ！ 女の子になっちまってるんだぞ？』

『そうじゃねえ、その後だ、もっと根本的に変わっちゃまった』

それ以上に根本と言われても、ユマ姫は困った。

『俺が知っているお前は、空っぽの奴だった。他人なんてどうでもいいと思ってた』

「それはそうでしょう？ 私は家族も国も何もかも失って、復讐のために全てを投げ打つ覚悟を……」

「いや、前世からお前はそうだった。それがどうだよ？ 姿は人間辞めたくせに、どこか人間らしくなっちゃまった」

「ええっ？」

ユマ姫はビックリした。

コレで！ この有様で！ 人間らしくなったと責められるのは、何か違う。

朝起きたら巨大な毒虫になっていたのに、今日は顔色いいねと褒められる様なモノ。

でも、そう言えば、かつてよりも人間を憎んでいない。

家族を殺された後は、人間を根こそぎ殺して回りたいと願っていた。

自分に『偶然』がある事が、むしろ嬉しくて堪らなかつた。

全てを巻き込んで、人類全部を、エルフさえも、世界の全てを殺して回りたいかかった。

だけど、今は違う。悪魔みたいな天使派を見て、ホラー映画みたいな聖女派を見て、帝

都の人に無駄に死んで欲しいとは思わなくなつた。

あんなに殺したかった帝国の人間を、これまで何人も救ってきた。

……それは、何故だ？

「私は、人間も、エルフも、全てが嫌いでした。こんな目に遭ったなら、全部殺してやりたかった」

「程度問題だけどき、前世からお前はそんな所があつたぜ？ 不幸なのに助けてくれな
い、だから人間が嫌いだったろ？」

「なのに、何時からか、私はあんまり人間が嫌いじゃなくなった。どちらかと言えば、もう、好きかも知れない。……それが違いです」

思い当たった自分の変化。気が付けばとても大きなモノに思える。

何時からだ？ 何時から変わってしまった？

ユマ姫はジッと手を見る。変わってしまった？

だからこそ、化け物に近づいた？ いや、人間に近くなった？

「オマエが、人間嫌いじゃ無くなった？」

そして田中はユマ姫の言葉を反芻する。人間が嫌い、確かに以前からそうだった。

普通の人間でありたいくせに、人間が好きじゃない。

そんな矛盾を抱えているのが『高橋敬一』だったから。

そこに違和感の正体がある。

俯いて、考えて

……突然、笑った。

「そうか！　そう言う事かよ」

「何が解ったのですか？」

「やっぱり、お前は『高橋敬一』だ！　変わっちゃまったが無理もない」

「え？」

勝手に疑って、あげく勝手に納得した田中。ユマ姫は苛立ちを隠せない。

拘束をほだき、田中に詰め寄る。

「結論を言いなさい！」

『俺は、前世でグリーンピースが大嫌いだった』

「は？」

『それで、給食の炒飯から丁寧により分けて、残した。高橋は勿体ないってソレを食ったんだ』

「それが何か？　私は豆は嫌いではないのですから、当たり前でしょう？」

「じゃあ、お前は、何が嫌いなんだ？」

「それは……」

「その時の俺も聞いたんだ。『お前、嫌いなモノは無いのか』って」

「だから何です? 全然関係無いでしょう?」

『お前は言ったよ、食べられない物が嫌いだってな』

「……言いましたね、まさか?」

「そうだ、でも、お前は人間を喰った。食えるなら、お前はもう、嫌えない」

「そんな事で? そんな事で私が変わったと言うのです?」

「お前は人間を食って、怪物になった。だからこそ、人間らしくなった」

「なんですか、それは?」

ユマ姫はあきれて、拗ねた。

無理もなかった、化け物扱いされて、意味不明な理屈で納得された。

だけど、田中は自信满满。自分で自分の理屈に納得している。

『だから、お前は安全になった。何故なら、食えるモノを無駄に殺せない、捨てられない。』

お前は、そう言う奴だ』

「そ、そんな事で? 馬鹿にしているのですか!」

散々田中に振り回された格好だ。田中に怒るのは無理もない。

でも、結局、田中はユマ姫を『高橋敬一』だと断言し、殺せる事まで証明した。

またも田中はユマ姫を救ってみせた。

だから本心では嬉しいのだが、笑顔を見せるのも癪がさわる。

「なら、私は帝都に帰ります。良いですね？」

「え？」

「おいおい、待てよ」

「なんなの？」

呆然とする三人を残して、ユマ姫は昇降路から飛び上がる。

「さよなら」

「嘘だろ？」

昇降路は、地上まで繋がっていた。見上げても、もうユマ姫の陰も見えない。

「はあ、本当に行っちゃったよ」

「なんなんだろうな……」

「……………」

木村と田中、そしてシャリアちゃん。残された三人はげっそりと俯く。

シャリアちゃんは、動く手足の調子を確かめ尋ねる。

「私は歩いて帰るべきかしら？」

「……バイクで送る。木村は馬で帰ってな」

「乗馬、苦手だし、俺はしばらくココを調べるよ」

「そっか」

「でもさ……」

納得が行かないのは木村も同じだった。

ここまで田中に振り回されてきたのだから。

「お前が、ユマ姫からトカゲの気配がするって言うから、俺、色々考えて、悩んだんだけど、アレはなんなんだよ？」

「そうだな……」

田中は、ガリガリと頭を搔く。

「でもよ、良く考えたら、昔からアイツはトカゲなんだよ」

「は？」

「アイツは『ウーパールーパー』だからな」

「ハア」

木村に呆れられながら、田中には確信があった。

やはり、アイツは『高橋敬一』だ。ならばアイツの『偶然』はもうすぐ動き出す。何かが、起こる。終わりは、近い。

皇子の記憶

「クソッ！ 馬鹿にしてんのかアイツ！」

研究所で大暴れした俺は、一度王都まで戻って、自分の部屋でゆっくり寝た。ふて寝である。

そうして冷静になって考えてみたんだが、どう考えても田中^{アイツ}、頭おかしいわ。まるでイライラが納まらない。

暴れ回ってやろうか？ そんな事を思いつつ超高速でカツ飛んで帝都に舞い戻ると、帝城の屋根に着陸した。

今の俺は、この世界の端から端に横断するのに三十分も掛からない。翼を広げ羽ばたく俺の姿に、皆が空を見上げる。下ではガヤガヤと奇跡だなんだと騒いでいるが知った事じゃない。

俺は、コレでも心配してたんだ。凶化した俺が、暴れ回って市民も、アイツらも、全員殺してしまう事を。

なのに、全部要らん心配だと、お前なんて簡単に殺せる。それどころか他人の心配するのがらしくないって、田中^{アイツ}の理屈はそう言う事だ。

「う〜っ！」

考えれば考えるほど腹が立つ。

いつそ暴走して、グチャグチャの化け物になってアイツに噛み付いてやろうか？

田中も木村も、全員食い殺して死ぬ。

そんな終わりだつて悪くないような気がしてしまう。

いや、落ち着け、そんなんで本当に化け物になつたら余りにも間抜けだ。今の精神状態ならマジであるから困る。化け物になりたいと願えば、すぐに変じてしまうだろう。

——今だつて、危なかった。

俺は体の内で暴れ回るエネルギーを歯を食いしばり制御する。

「ふう……」

何なんだろうな、もう。

自分の体が、どんどん制御出来なくなっている。凶化の暴走がすぐソコまで迫っている。

こんな俺の死因だとしたら、もうどうしようもないだろう。こんな『偶然』を止める術などドコにも無い。

いや、本当にどうしようもないだろうか？

さつきみたいに、自分を捨て、変わろうと願えば、化け物に変わってしまう。

ならば、今の自分が大好きで変わりたくないと思えば、少しは抵抗出来るんじゃないだろうか？

善は急げだ、とびきりに可愛くてカッコイイポーズを取ろう。

俺は城内の壁から大鏡を引つpegすと、目指した先は玉座である。最高にカッコイイポーズを取るなら、最高に偉そうに出来る場所。

身の丈を超える大鏡を持って、あてどなく宮殿をフラつく。巡回する王国兵がギョツとした様子で見ってくるが、ひと睨みして下がらせた。

そうして、ようやく見つけた。この扉の向こうが謁見の間、そこに玉座はある。

思ったよりもこぢんまりとしている。大理石の扉は小さく、簡素だ。

コレでは見つからない訳である。王宮のど真ん中によく物置作つたなって、何度か通り過ぎていた。

しかし手で押すと扉は尋常じゃなく重い。大理石の扉と言うより、大理石そのものだ。きつと人間が一人で開けるもんじやない。その時点でまともな場所ではなかった。

俺は力を込めて大理石をズラすと、隙間から謁見の間にすべり込む。

「おおっ！」

謁見の間は、圧倒される程に。美しかった。

お姫様として生まれた俺でさえこうなのだ、庶民はビックリ仰天、貴族だって腰を抜

かし、皇帝を神と崇めるのも無理はない。

ココに至るまで宮殿はドコモかしこもキラキラと目に痛いほど豪華絢爛、しかし、それは前フリだったに違いない。

「こう来るか……」

謁見の間はシンプルに白い。ただ、ひたすらに白い世界が広がっていた。絢爛とは程遠い、簡素な空間と言える。

白磁の輝きで、見渡す限りの白だけの世界。そこに唯一、天へ向かって橋が架けられている。

その真つ白な架け橋はひたすらに長く、そのまま天国へと通じているかに思われた。死後の世界を思わせる演出だが、俺だけは死に至る階段など無い事を知っている。だから神秘に圧倒されずに済んでいた。

それだけ、踏み込む事を躊躇させる空間。だけど俺は、鼻を鳴らし、鏡を背負って、ズカズカと階段を上がっていく。

真つ白い部屋だから、遠近感がおかしくなる。階段の幅は上に上がるほどに極端に小さくなって、下から見上げた時に感じたよりも、実は高さがなかった。

錯視トリックだ。

……なるほど、下から見上げると上段の皇帝はずっと大きく見えるだろう。

天空の彼方から巨大な皇帝が階下を見下ろす、そんな演出になるはずだ。いよいよ最上段、設えてあったのは、拍子抜けな程、シンプルな白い椅子。

コレが玉座？ この、ただ背もたれがちよつと長いだけの椅子が、玉座？

しかし、シンプルながら、静かに輝いて見えるのは、気のせいか？

はたして後光が差すように計算された照明の所為だろうか？ 天窓から注ぐ真つ直

ぐな光が、ちよつとした奇跡をその場に作っている。

コレは、違う。

想像していた玉座とはまるで違う。てつきり豪華絢爛な黄金の彫金に、赤い布地のテンプル玉座だと思っていた。

偉そうにゴテゴテ飾られた玉座にどっかりと座り込み、不遜で可愛い自分の姿を目に焼き付ける予定だった。

だが、コレはコレで？ 俺はこの椅子に座った自分を見てみたいと強く思った。

玉座の前に大鏡を設置。コチラはロビーから引つ剥がした彫金のゴテゴテした大鏡である。この部屋の中ではかなり浮いてしまったな。

……或いは、浮いてしまうのも計算の内か。

あのゴテゴテしたダンスホールに合わせた衣装でノコノコとこの謁見の間に踏み込めば、ギラギラと着飾って虚飾に満ちた自分と向き合うハメになる。

ここで美しくあるためには、シンプルな純白の衣装が必要だ。そして、偶然にもウエディングドレスを意識した俺の装いは、その基準を満たしていた。

天国みたいな場所で、シンプルな椅子にちよこんと腰掛ける。なかなか、悪くない。

豪華な椅子で、不遜に足を組んで高笑いするつもりだったが、コッチの方がずっと良い。

鏡に映っていたのは、まさに天使だ。

天国みたいな場所で、肌を晒す純白の衣装を着こなす銀髪の少女。背中には羽、頭には獣耳、そして尻尾。

現実感が空気に溶けて、鏡の中に幻想を映していた。

しかし、この耳、馬の耳っぽいんだよな。この世界の馬は元の世界よりも大きな耳だから、どうにもバニーっぽい印象になってしまう。

そして、頭には俺の秘宝たる王冠めいたティアラもある。白で埋まったシンプルな世界の中にして、ゴテゴテと宝石が輝いて主張する。

そして宝石よりも尚、大きく輝く俺の瞳がその主張を塗りつぶす。

手には身の丈よりも巨大な王剣を持ちながら、何でもないとすまし顔。

降臨した天使が、玉座で王様の真似ごとをしていような、不思議な光景。

俺は、この姿を絵に残したいと思った。

そうと決まれば絵師を呼ぼう。帝都にも絵師ぐらい何人も居るだろう。木村に任せ
てアニメ調にする事は無い。

まずはこの邪魔な大鏡を持って帰ッ——

その時、俺は階段の上から足を滑らせた。

なんで？

階段上部は足場が狭かったから？

大鏡を持って前が見えなかったから？

王都から飛んで来て、体に疲れが溜まっていたから？

落下しながら、走馬灯のようにアレコレと考えるが、違う。

コレは？ 記憶？

記憶の片鱗に触れたのだ。

そう気が付いた時には、最上段から落下した体は抱えた大鏡の上に墜落していた。

鏡が割れ、無数の破片が体を切り刻むのを感じながら、俺はゆっくりと意識を失った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【睨まれた従軍絵師】

ユマ姫に睨まれた兵士は、小さな少女を恐ろしいと心底思った。何より美しく、何より恐ろしい。

コレは人間ではない、神だ。そうとしか思えない存在だった。

暴力と狂気の化身がソコに居た。

あまりの事に、一度は逃げた。しかし、その恐ろしさは脳を灼き、麻薬の様にもう一度会いたいと、少しでもその姿を目に収めたいと、そう思わずに居られない。

そして従軍絵師でもある彼は、ユマ姫の姿を絵に残したいと神に祈った。

キャンバスと絵の具を手に、兵士は宮殿の中、ユマ姫の姿を捜し回る。

そして気が付いた。謁見の間に続く大理石の塊が、僅かにズレている事に。

覗き込んだ先、兵士は神秘を目撃する。

真っ白な部屋に、鮮血が広がる。その中心に少女が居た。

天へと続く階段の更にも上から真っ直ぐに光が差し込んで、散乱する鏡の破片がキラキラと反射する。

その鋭い切っ先が少女を切り刻み、じわりと滲んだ鮮血が、白だけの世界を強烈な赤で彩った。

奇跡の様な、神秘の光景がソコにはあった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

【皇子の記憶】

皇帝は孤独だった。

少なくとも、息子である皇子から見て、そう見えた。

皇帝とは何か？

皇帝とは始まりの民の末裔である。

始まりの民とは何か？

寄る辺ない民を導いて、荒野を切り開いた神の使い。帝国の礎を作った英雄。

そう言われているが違う。

始まりの民の末裔だけが代々語り継いできた。

ホムンクルスと旧人類の間に生まれた新人類。ソレこそが始まりの民である。

新人類と言えば聞こえは良いが、旧世界に於いて、彼らは不義の子でしかなかった。

あやまちの象徴だった。

奴隷である人造人間ホムンクルスと子供を作るなんて、歓迎されるはずが無い。彼らは汚れた『あ

いのこ』だった。

人造人間とは地下深くにて魔力資源を採掘するべく旧人類に作られた存在だ。薄暗

い地下で活動するため、光を取り込む目は巨大に、音を拾う耳は長く設計された。

なにより、彼らは汚染された高濃度の魔力下でも活動出来る様に作られている。

彼らにとって魔力は毒でも資源でもなく、食糧だ。肌から魔力をエネルギーとして活動出来る。口にする食事は僅かで良い。余分に取り込んだ魔力は、魔法として行使すれば無駄もない。

魔法とは何か？

古代人は回路に魔力を通し、魔道具を作った。魔道具で光を生み出し、地下世界へと進出する。更には寒い冬には魔力を燃やして暖を取り、プロペラを回して風を作つて夏を過ごした。

いつしか古代人は魔術回路で演算し、ドローンを飛ばし、銃を作つて戦争を始める。地球人が電気で行う殆ど全てを、彼らは魔力で実現した。

だが、電気と魔力のもつとも大きな違いは、人の意志に反応する性質だった。だから古代人は悪魔の計画を実行する。

ホームクルス
人造人間の作成だ。

人造人間は改造された脳に魔術回路が焼き込まれている。脳こそが意志の力がもつとも強く働く場所だから。

念じるだけで穴が掘れるし、暗闇を照らせるし、体が壊れた時は、自分達で修理もこなす。

それが魔法だ。

地下で暮らす古代人にとって、彼らはどんな重機よりも経済的な道具だった。魔力で変異した怪物と戦う兵器にもなる。

そんな怪物を奴隷として使役して危険じゃないか？ 心配無用だ。奴らは魔力で生きていく。人類が住む場所には決して入って来れない。健康値の膜で遮られ、立ち入れない。

だが『あいのこ』はどうだろうか？ 魔力が無くても奴らは生きていける。健康値の膜にも入れる。思うだけで自在に魔法を使う恐ろしい怪物が、いつか人類に牙を剥くかも知れない。

だから古代人類は『あいのこ』を酷く恐れた。

実際の『あいのこ』は魔法も使えず、目も耳も弱く、魔力にだって強く無い。ただだ脆弱なだけの存在なのだが、人類は不確定要素を嫌った。

不義で生まれた『あいのこ』は秘かに檻の中で飼い殺しにされる運命だった。

だが、ある日を境に状況は一変する。

地下から魔力が溢れ出し、押し出される様に健康値の膜は空の彼方に消えてしまった。

奴隷である人造人間から、支配階級の旧人類を守る壁は無くなった。

その時、あの『事故』が起きたのだ。

反乱は苛烈を極めた。

人造人間は瞬く間に古代人類を制圧。奴隷に墮とし、狼藉の限りを尽くした。

結果、新たに大量に生まれたのが古代人類と人造人間の『あいのこ』だ。

その『あいのこ』の管理を任されたのが、飼い殺しにされていた元々の『あいのこ』。不義の子供達だった。

反乱の後も、彼らは人造人間にも仲間と見なされず、奴隷として扱われていた。

奴隷にされた古代人類は濃厚な魔力に耐えられず、バタバタと死んでいく。もちろん『あいのこ』として生まれた子供達も見捨てられ死にゆく運命だった。

管理を命じられた不義の子供達は、同じ『あいのこ』である幼子を連れて逃亡する。

なるべく人造人間が追って来られない、魔力が薄い土地を目指して。

彼らこそが始まりの民である。新しい人類の誕生だ。

『あいのこ』は多少の魔力には耐えられるし、魔力が無くても生きていられる。

新しい世界に生きるには、とても適した生き物だった。

国はみるみる大きくなった。

作物は魔力だけでなく太陽の光を受けてすくすくと育った。危険な魔獣は薄い魔力の土地には住み着かない。

不義の子供達が旧世界から持ち出した魔道具の数々は聖遺物となり、開拓を助け、自

然災害を鎮めた。

それらを使いこなす始まりの民の末裔が、いつしか皇帝と呼ばれ君臨するのは自然な流れと言える。

だから、初代皇帝として祭り上げられた始まりの民の末裔は、ただの不義の子供の末裔だ。神の使いなど大層な存在ではない。

それを知っているから、語り継いで来たからこそ、皇帝の悩みは深い。

皇帝は恐れていた。薄い魔力を克服した人造人間達が大挙して帝都に押し寄せる未来を。

なにせ彼らが使う魔法は強力で、旧人類から奪った魔道具の数だって桁が違う。脆弱なだけの新人類など瞬く間に滅ぼされてしまう。

毎夜毎夜、人造人間の大量に攻め入られる悪夢にうなされる初代皇帝。

だが、皇子にしてみればそんな心配は無駄な事。全ては百年も昔の話。お伽噺に怯える老人ぐらいに思っていた。

だけど、違った。

ある日、悪夢の一端が皇帝を襲った。神話はお伽噺では無かった。

旧人類からの使者が、皇帝を尋ねて来たのだ。

皇帝を絶望させるに足る情報を携えて。

謁見の間で旧人類の使者は皇帝に迫った。

魔力の噴出は止まっていない。

このままでは千年、いや数百年でココも魔力に飲まれ人の住めない土地になる。

魔力の噴出を止めなくては、早晚新人類は滅びる。

旧人類も人造人間も、争っている場合ではない。魔力を止める方法を見つけなくては。

皇帝は顔色を変え、苦悩に揺れた。

しかし、皇子はそんな与太話は信じない。

魔力の噴出など、穴を塞ぎ止めてしまえば良い。それが大森林にあるのなら進軍するまでだ。

人造人間なんたるモノぞと軍を動かし、人造人間が住む大森林へと攻め入った。

いや人造人間と言う言い方はマズい。古代人類の存在が明るみになれば、自分達が『あいのこ』であると言う事実もまた明るみになってしまう。

始まりの民の神話が崩れる。

だから帝国は人造人間に新しい名前をつける。

森に棲む者。

森に住む悪魔をそう呼称した。皇子の軍は悪魔討伐の軍となる。

弱腰の皇帝を隠居させ、玉座にて堂々と進軍を命じた。

そこに、再び旧人類の使者が現れる。

突然だ。前触れもなく、突然に玉座の間に現れた。

「残念です」

そう言つて、剣を抜き、皇子を貫いて、玉座へと縫い付ける。

当時の謁見の間は、今の様な洗練された空間ではなかった。雑然と豪華な調度品が飾られていた。まるでおもちゃ箱の中、壊れた人形みたいに、皇子は死んだ。

ユマ姫が見た、今の様な白一色の謁見の間が作られるのは、この後の事である。

おそらくは天へ至る場所として作り直されたのだ。無念にも道半ばで殺された皇子の魂をその場所に保存するために。

死の間際。

皇子は使者の顔を、間近に見ている。

気の強そうな赤い髪の女性だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ゼナー！」

声を張り上げ、叫んだ。

使者は俺の実の母、ゼナの姿にソックリだったから。

しかし、おかしい。アレは千年近く昔の記憶だ。アレがゼナだなんてあり得るだろうか？

ご先祖様？ クローン？ そのどれもが違う、アレは母であるゼナ本人だ。俺には『参照権』がある。ちよつとした癖だつて見比べられるし、ほくろの位置だつて比較出来る。

アレは間違いなくゼナだった。

なんでだ？ 何が起こっている？ 意味が解らない！

意味が解らないのは今の状況もだ。

気が付けば、俺の体はベッドの上。体は酷く、重くて怠い。

なんだ？ ココはドコだ？

「ユマ様！ 気が付いたのですね！」

「あなたは、グリード？」

現れたのは親衛隊隊長となったグリードだった。

「ココは医務室です。大変だったのですよ。大怪我した姫様が謁見の間で見つかつて」

「それは……申し訳ありません。足を踏み外したようです」

余りにも間抜けだ。そうだ、神は言っていた。皇帝の息子に魂を宿したと。

アレは帝国初代皇帝、その息子の事だったのか。それぐらい想定しておくべきだつ

た。

それにしても……体調が悪い。

「あの、姫様？」

「なんです？」

見つめると、グリードの顔には焦燥が浮かんでいた。

「いえ、心配で。なにしろ発見から、助けるまで、随分と時間が掛かってしまった」

そう言えば、フラフラする。体中の血が抜けてしまって、考えが纏まらない。

きつと、俺の体は数時間も放置され、出血し続けて居たのだろう。

「出血が酷く、四日も寝込んでいたのです」

「まあ……」

ソコまでの重傷だったか。いや、そうだな。あの時の俺は体に力も入れられず、重要な血管を鏡の破片でズタズタに引き裂かれてしまった。

そんな状態で放置されたら、今の俺でも死んだっておかしくない。

しかし、なんであんな目立つ場所で倒れて、放置されにやあならなかったんだ？

イライラする。

田中も、助けてくれない兵士の連中も。

腹が減った。血が足りない。

喰ってやろうか？ 目の前のグリード。喰い頃だ。

そんな事を続けければ、化け物になってしまおう？ いいじゃないか、もう化け物で。

「ねえ、グリードさん？」

「なんですか？ 何でも言いつけて下さい」

「何でも？ でしたら、食べる物を提供して下さいませんか？」

「もちろん！ 今すぐ何か——」

「いえ」

俺は立ち上がるグリードの上着の裾を掴み、止める。

喰うのは、お前だ。ギチギチと体が悲鳴をあげ、人間の殻を突き破ろうとしていた。

「なんです？ 姫様」

「……………」

しかし、殺す寸前。どうしても気になった。

「どうして怪我をした私は、長い時間放置されて居たのです？」

「放置…………いや、そうですね。皆が何かの儀式では無いかと不安に思い、姫様を動かせなかつたのです」

「……………そうですか」

クソッ！ 何が儀式だよ！ 馬鹿にしゃがって。

「そう思ってしまう程に美しい光景だったのです。見て下さい」
「？」

グリードが指差す先には、書きかけの絵があった。

いや、書きかけに見えて、絵は完成している。

真つ白なキャンバスに描かれたのは、あの真つ白な謁見の間だ。だから書きかけかと思う程に、殆どが白い。

そして、謁見の間に倒れ込む俺。そこから染み出す鮮血だけが、毒々しいまでに赤かった。

色らしいモノはその赤だけ。

「これは……」

確かに、新手の儀式を疑う光景だ。

偶然、こんな事になったとはとても信じられない。真実、足を踏み外しただけなのに、グリードは信じていないだろう。ソレだけ不思議な光景だ。

この絵は、俺の痛々しいまでの狂気と美しさを余すところなく表現している。

美しい、この芸術を崩したくない。このまま美しい自分で居たい。

そう思った。

「綺麗でしょう？ 我々としても儀式の内容を考え、手が出せなかったのです。しかし、

出血が激しくこれ以上は危険だと判断し、治療をするために医務室に運びました。念の為状況を絵に起こしたのがコレです。お役に立てば良いのですが」

「ええ、とても役立ちました」

お陰で、怪物にならずに済んだ。

俺は、今の体を失いたくないと。強く願った。

「それは良かった。絵師は何度も正気を失いながらも、この絵を描き上げ、描き上げると同時に、亡くなりました」

「まあー」

気持ちには、解る。もう、コレで終わりで良いと、そう思える絵だ。命をそのまま叩きつけた様な絵であった。

一見雑に書き殴った箇所ですら、却って危うい美しさを表現していた。

「覚えていますか？ 王宮を警備している時に姫様に睨まれたと言っていました、ソイツが従軍絵師でした」

「そう、だったのですね」

そう言えば、誰か睨んだな。

結局、俺は誰かに生かされている。

病床に腰掛け、描かれた絵を見ながら、俺はそう思わずに居られなかった。

そして、母、ゼナは。一体何者なのだろう？

ひよつとして、数千年の時を生きて、今も何処かに居るのだろうか？

不思議な縁に導かれ、俺は何時か必ず出会う事になるのだろうかと確信していた。

お誕生日会の誘い

季節は冬。

チラチラと雪が降る日も増えてきて、きつと今年は寒くなる。

この冬で、俺は十六歳になる。『参照権』で何度も確認した結果、正確な誕生日も解っている。あと二ヶ月だ。

俺は今の美しい姿を皆に見て貰いたい。その思いをもって体の変化を食い止める事にした。

「お誕生日会を開きましょう」

だから、大々的にお祭りを開く事を決めた。

「危険じゃないですか？」

口を挟んだのは護衛の責任者、親衛隊隊長であるグリードだ。

「危険と言うのは？ 市民を心配しての事ですか？」

「勿論、姫様がですよ」

俺の嫌味にも動じない。いやしかし？

「帝都の誰が私に危害を加えると言うのです？」

「誰でもです、誰もが姫様を前に冷静で居られない。無論、私も」
「ふふっ、お上手ね」

「……いえ」

グリードは渋るが、俺にだって解っている。

俺の美しさは神懸かり。人心を惑わせ狂気をいざなう。自分で言うのもアレだが、事実であった。

人間の本能を最も刺激するのは、恐怖だ。特にこの世界では。

この世界、人間より強い魔獣は枚挙に暇がない。一見弱そうな虫が恐るべき魔獣だったりもする。魔力が肉体を補助するからだ。

だからこそ、地球よりも相手の力量を見定める本能が発達している。そうでなければ生き残れなかったに違いない。

そのカラクリもまた、魔力だ。きつと人間は魔力や健康値の大小で相手の実力をなんとなく感じとり、判断している。

そして俺は人間どころか魔獣を遙かに超える魔力を持っている。そんな存在が、小さくて可愛い女の子の場合、どうなるか？

きつと神だと誤認する。超常の女神と思い、崇めてしまう。

そうでなくとも美しさとは、恐怖と紙一重の場所にあるモノだ。

だからグリードの指摘も間違っちゃ居ないのだ。不安と恐怖に駆り立てられて、市民が何をしでかしても不思議じゃ無い。

……だけど、たとえ帝都の市民全員が気が狂って暴れたとしても、俺を殺す事など出来はしない。

今の俺の魔力は1600。俺以上の魔力を持っていた生き物なんて、妹のセレナぐらいしか俺は知らない。

……冷静に考えるとオカシイよな、セレナの魔力。

ひよつとしてセレナは周囲から恐れられて居たのかも知れない。

侍女や衛兵がセレナと会話している所を見た事が無い。あんなに人懐っこい性格だから考えてもみなかった。

だとしたら、あの甘えん坊な性格も寂しさから俺に甘えていたのか。

そう考えるとやるせない。

幼少期の俺は健康値が小さすぎて、セレナの魔力の大きさを全く感じられなかった。それが却って良かったのかもしれない。

もし、セレナが本気で魔法を使ったらどうなっていたのだろうか？

今の俺は、あの時のセレナと戦って勝てるだろうか？ そんな事を考えてしまう。

俺が物思いにぼんやりしていたら、グリードが心配そうに覗き込んできた。

「姫様？ お疲れですか？ あの、警備ですが……」

「大仰なモノは必要ありません。私を殺せる存在は限られています」

田中とかな。

「では、キムラ様に相談したいのですが、予算や規模などはどのようによ？」

「細かい部分は任せています、商会の人間に聞いて下さい」

木村にはもう許可をとった。アイツはまだ魔女の屋敷で端末から情報を抜こうと格闘しているので、段取りはアイツの部下に丸投げだ。

「ならば、私としてはこれ以上はありません、ただ……」

「ただ、なんですか？」

「御身を大切にして下さい。あなたがどれだけ強くても、我々が何より姫様を思っている事には変わりはないのです」

「勿論です。誕生日会を開くのだって、なにより私の安全の為ですから」

「でしたら、良いのですが……」

信じてないな。

まあグリードにしてみれば、占領下の街でお祭りを開くなんて自殺行為に見えるだろう。

俺を殺そうとする人間が幾らでも入ってくるし、皆の前に顔を晒すなんて論外だ。

でも、俺にしてみれば殺し屋なんて怖くない。シャリアちゃんにして、もう絶対に殺せないと悔しそうに泣いていたぐらい。あれ以上の殺し屋など居て堪るかと言う話だ。

だったら、皆に観測されている方が『偶然』の余地が少なくなる。

さて、お祭りとなれば俺に何が出来るだろう？ この羽があれば世界中の珍味を新鮮なまま集める事が可能だ。

そのついでに各所に話を通しておこう、来たいと言うなら招待しても良い。二ヶ月もあるなら、特別な移動手段がなくなるとも来る事は可能だろう。

俺はリュックサックを抱え、空へと飛び立った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おおっ！ 良かった！ 本当に！」

まず、向かったのは砂漠の都プラヴァス。リヨンさんの所である。

そしてリヨンさんは俺との再会を大袈裟なまでに喜んでくれた。

俺みたいな女の子に人目を憚らず縋りついて、ボロボロと泣いている。

そんな彼は松葉杖をつけていた。

「あの、その怪我は？」

「あ、実は……」

なんと、リヨンさんは星獣との戦いで大怪我を負って足の腱が切れてしまい歩けなくなってしまうたとの事。

「そんな……」

もう一年以上この状態と言う事だ。

水くさい。言ってくればどうにでもなるのに。

「良いのです。自業自得ですよ」

悲しそうにリヨンさんは俯く。

どうも、星獣に斬り掛かろうとして、尻尾に吹っ飛ばされて気絶していたらしい。不相应にでしやばって足を引っ張ったと気に病んでいるのだ。

あれだけの質量、むしろ生きているのが奇跡、若気の至りが足の一本で済んで万々歳である。そう言う理屈だ。

あの時、リヨンさんは雨を降らせて星獣を沼に嵌め動けなくしてくれた。なにより沼でなければ地面に潜れず俺だつて隕石に潰されて死んでいた。結果的に不相应どころか大金星である。

だが、そう言い聞かせても納得はしなかった。

「そんな！ 私を雨を降らせる祈禱師としてあの場所に参じたわけではありません。あのバケモノ相手に果敢に戦い、プラヴァスの誇りを見せつけるハズだった」

リヨンさんは血が出るほどに唇を噛む。ソレほど悔しかったのだろう。

だが、あの戦いは超常の戦いだった。星獣はソレほどに強かった。

木村が大砲で撃ち抜こうと、田中が縦横無尽に切り裂こうと、星獣にダメージが入ったと言いい切れない。

俺が飛び回って王剣で斬りつけたのだから、効果があつたかは疑わしい。

人間が何とかなるレベルの戦いじゃなかったのだ。表面を引つ掻いただけの木村や田中にコンプレックスを感じる事は何も無い。

「ですが、自分で自分が許せないのです」

「それにしたって、ひとこと言つて頂ければ足ぐらい治しましたのに。その足では汚名返上の機会すらないでしょう?」

「まさか! 下半身を失つた姫様を前に、足が痛いから治してくれなど言えるハズがないでしょう?」

泣きそうな顔でリヨン氏が言う。

そう言えば、最後に彼と別れたのは星獣戦の時、俺は大怪我をして下半身を失つてた。あんなのは普通ならどうやっても治るハズが無い大怪我。

だからこそ無事な俺の姿を見て、リヨンさんは大袈裟に喜んでみせたのだ。

随分昔の事に思える。人間を止め過ぎて、そんな事すら忘れていた。

「気にしないでください。お陰様で、今の私は人間の範疇を超えています。良いか悪いかは解りませんが」

俺はそう言つてバサリと翼を広げてみせた。

この姿になつて、気軽に話し掛けてくれる人は減つた。

神か悪魔か？ 人ではない何かだと、誰の目にも明らかになつてしまつたから。

だけどりオンさんは首を振る。

「私にとつて、初めて出会つた時からあなたは女神です。それでこそユマ姫です」

「まあ……」

照れるね。イケメンはこんなセリフがスラスラ出てくるから凄い。

二人して、照れ照れと見つめ合う。

因みに、ココはプラヴァスのメインストリート、ど真ん中だつたりする。

空からラクダに乗るリオンさんが見えたから、つい舞い降りて話し掛けてしまつた。

周囲は神だ天使だと大騒ぎ。そんな中でイチヤイチャしていたから、人が群がりゆつくり話す雰囲気ではなくなつてしまつた。

「今夜、屋敷に伺います」

「お、お待ちを」

「お、お待ちを」

飛び去つてしまおう。リオンさんが引き留めるが、大名行列をする時間はない。他に

も何カ所か回りたいからな。

翼を広げひとつ飛び。俺はプラヴァス郊外のボロ小屋に飛び込んだ。

「どうです？ 体の調子は」

次に訪れたのはポンザル家のバイロンとドネイルの所。先のプラヴァス動乱の首魁がこの二人だ。

と言つても結局は帝国の手の平で弄ばれて居たワケで、実際にクーデターを起こす前にこの二人は寝返つた。麻薬中毒にされ、操られて居たのを俺が治した経緯がある。

だから後遺症でもないか見に来た次第。

「お、おおっ！」

「なんとという！」

まあ、久しぶりに会つて翼が生えてたら驚くよな。俺は今までの経緯を説明し、バイロン達の近況を尋ねる。

どうもオッサン二人は今も遺跡で発掘作業をしてるらしい。地下には魔力が滞留しているので体に良くない仕事だが、仕方無いよな。

「気にすんな、アンタのお陰か、体は痛まねえ」

「それに面白いモノを見つけたんだ」

そう言つて出てきたのは小さな箱。これはひよつとして？

「冷凍庫ですか？」

「そんな名前なのか？ 魔石を入れてくと中のモノが凍るんだ」

「食料品の保存に良いと思うんだけど、流石に容量がね」

まあ、家庭用の冷凍庫が一つあっても、余り意味がないか。

金持ち向けに季節外れの食材を幾つか保存して、小銭が稼げる程度。売れそうな果物は凍ると美味しくないし、そんなんじや余りお金にならないだろう。

なったとしても、かなりの魔石を消費するから割に合わない。

いや、しかし困ったな。こんなモノが発掘されているとは。

「アイスクリームを持ってきたのですが……」

そうなのだ、冬でもプラヴァスなら暑いだろうと大量のアイスを持ってきてしまった。だけど冷凍庫があるならお土産としてパンチが弱い。

「いや、何だコレは？ 旨い！」

「乳を凍らせたのか？ 凄いコクだ」

意外にも好評だった。考えてみれば、冬でも氷点下に至らないプラヴァスに氷菓などあり得ない。発想自体が無かったわけだ。

「ひよっとして、コイツで同じ物が作れるのか？」

「似たものでしたら作れるでしょう」

ラクダの乳でアイスクリームが作れるかは知らないけどな。

俺は二人に作り方を教える事にした。

「ありがとよ、コレで一勝負出来そうだ」

「ユマ姫様、あなたには感謝しきれない」

「いいのです」

コイツらも帝国に家族を奪われた様なモンだからな。

それに冷凍庫は年中熱いプラヴァスでこそ価値が有る。

二人に見送られ、次にやって来たのはステージがある高級酒場リーリッド。シヨーが見られる酒場って言うと、現代で言うシヨーパブか？

途端にいかがわしい感じに聞こえるが、ちゃんとしたお店である。

俺は一時期ココで働いていた事もあるので、裏口から堂々と入り込む。

「こんにちわ」

「あら？ ユマちゃん!? ど、どうしたの?」

楽屋でいきなりシエヘラさんに会えた。プラヴァスの歌姫である。

シヨーパブの歌手って言うと急にエロく感じるから困る。

何度も言うけど、このお店で歌うのが夢って人がいっぱい居るぐらい格式あるお店である。

それにしても、昼間からシエヘラさんに会えるのは嬉しい誤算だ。彼女は稼げる夜のシヨーが専門だからね。

「シエヘラさんこそ、お元気そうで何よりです。今日も歌うのですか？」
久しぶりに聞いていこうかな。

「それがね、私、ココでは最近歌ってないのよ、今日も後輩の指導に來ただけで」
「そうなのですか？」

なんだかプラヴァアスの歌謡界も大きく変わってきているらしい。

それもこれも、遺跡から巨大なスピーカーが発掘されて、俺が聖地で歌って以來、あそこでライブをやるのが流行っているのだとか。

「元々、プラヴァアスの人って歌って騒ぐのが好きでしょう？ それにお酒も」
「確かにそうでしたね」

だから、たき火を囲んで飲んで歌って親交を深めるのがプラヴァアス流。室内で歌にお金を払うなんて酒場ぐらいだったわけ。だから大きなハコが無かったのだ。

「でも、野外でもアレだけのスピーカーがあれば大勢の前で歌えるじゃない？ 最近は何に一度はあそこで歌っているのよ」

「そうだったのですね」

シエヘラさんの歌が酔っ払いの酒のつまみつてのは勿体ないと常々思っていたのだ。

高級店だし、子供や女性は歌姫の歌声を聞く機会が一切無かった。

「せっかくだし、今度の週末、私と一緒に歌わない？」

「せっかくだすが……」

「そうなの？ でも、今日だってアナタ、歌うつもりで来たんでしょ？ しつかり衣装もキマってるじゃない。本物みたいよ、その羽」

「……………」

残念ながら、本物です。

「え、嘘でしょう？」

驚くシエヘラさんが羽を触るが、血を通った羽である。

俺がバサリと翼を開いてみせると、口をポカンと開けて驚いてくれた。

俺がプレゼントした大鏡には、部屋一杯に羽を開いた少女が映っている。

「す、凄いわ。ステージで映えそうー！」

「ふふっ」

この羽を見て、感想がソレか。流石である。

「コレ、お土産です」

「なにこれ？」

アイスだ。美味しいと驚かれ一緒に食べていると、ショーに出ていた子達もガヤガヤ

と楽屋に戻ってきた。

「あなたは！」

「すごい！ キレイ！」

「羽が生えてる！」

取り囲まれてしまった。アイスは一杯あるので問題ない。

「冷たくて美味しい！」

「都会の味ねえ」

「この鏡、プレゼントしてくれたって本当ですか？ 凄く助かってます」

賑やかで楽しい。俺がココで彼らに混じって踊ったのはホンの一瞬。ポンザル家の

二人の注意を引き、俺を置いていった木村と田中の前にド派手に登場するまでだ。

なのに、彼らの印象に強く残っていたらしい。

しかし、あんまりのんびりもしていられない。

「わたし、そろそろ行かないと」

「忙せわしないのね、相変あわらず」

シエヘラさんが笑う。良く考えたら彼女ぐらいは誕生日に招待してもいいかもしれ
ない。

「あの、二ヶ月後、帝都でお誕生日会をするので、来ませんか？」

「二ヶ月後？ ソレも、帝都で？」

流石に無理だよな、プラヴァスは砂漠のど真ん中。ココの民が帝都や王都に行くなんて、大冒険にも程がある。

だけど、今は帝国が麻薬の密輸に使っていた水路がある。昔ほどの道のりではないはずだ。

「あの、一応、リヨンさんに頼んでブラッド家からも人を出すように頼むつもりなので、彼らとなら安全に辿り着けると思いますよ」

「うーん、そうねえ……」

尚も悩むシエヘラさん、顔を赤らめ、チラリとコチラを窺った。

「あの、誕生日会にはあの……タナカさんもいらっしやるのかしら？」

田中？ そりゃ、来るでしょ。護衛の名目で。

「ええ、来ますよ」

「そ、そう。なら行こうかな」

チラチラと俺の反応を窺ってくる。いや、別にアイツの事は好きにして良い。

だけど、当日はどうか？ アイツと俺は離れられないかもしれない。

アイツは俺の護衛、もとい、本当の仕事がある。

十六歳になった俺が暴走した場合。

俺を殺すのが、アイツの仕事だ。

俺が何でも無いのを見て、シエヘラさんは決心したようだ。

「ブラッド家の人に言えば良いのね？」

「ええ、コレが招待状です」

俺のマークが入った招待状だ。魔術的な処理もしてあるから偽装も無理。

「それにしても帝都かあ、本当に征服したんだね。嘘みたい。皇帝を倒しちゃうなんて」

「ええ、もう皇帝はこの世に居ません」

肉塊になって、死んだ。

「大丈夫なの？ 反乱とか」

「今のところ、治安は問題ありません」

反乱を起こそうなんて貴族は皆無だ。市民も大人しいモノ。暴動が起きても俺が顔

を出せばすぐに納まる。

「じゃあ、行かせて貰うわ。外国に行くのって初めて！」

「お待ちしています」

俺がニツコリと微笑むと、シエヘラさんだけでなく、男である支配人や楽士のおじさんは勿論、可愛いダンサーの女の子たちまでが顔を赤くして俺に見とれていた。

「ふっふっ」

……気持ち良い。自分が可愛い事を素直に喜べる。

もう面倒ごとに巻き込まれるリスクなんてないからな。

「では私はコレで」

俺は窓から飛び出すと、羽を広げて空へと飛び立った。

そうしてブラッド家に降り立ち、再びリヨンさんと会う事に。

俺と二人きりになると、リヨンさんは懐かしそうに目を細めた。

「こうしていると、初めて顔を合わせた時の事を思い出しますね」

「いえ、私は忘れました」

俺がそう言うと、リヨンさんは大変ショックを受けていた。

だって、初めて会ったときってアレだよ？俺が鞭をしばいてリヨンさんを犬にした

時だからね。

「それで、用件はどのような？」

しかし、仕事になるとリヨンさんの眼光は鋭い。

俺は今までの流れをかいつまんで説明した。

「それで、帝都で大々的に私の誕生日会を開くので、プラヴァスの代表として参加して頂きたいのです」

「それはつまり、ユマ様が皇帝として即位すると言う事ですね？」

え、そうなの？ でも、そうなるか？

主人が居なくなつた帝城で堂々と世界中の要人を呼びつけて誕生会を開く。

それが皇帝じゃなくて何なんだと言う話。

「まあ、近いモノでしょうね」

「いや、皇帝なんて器の小さい話ではない。世界を統一した初めての王の誕生になる。だとしたら私も参じないワケには行きません」

なんか知らんが凄いテンションだ。

「そうして頂けると……とりあえず足を治します」

「そんな！ 恐れ多い！」

俺が跪いて足を治そうとすると、リヨンさんは固辞する。いや、困るんだが。

「帝都に来るにも、その足では不便でしょう？」

「それなら、私が跪きます。客人を、いえ次代の統一帝を跪かせるなど出来ません！」
言うや否や、リヨンさんは四つん這いになって、俺の前に頭を垂れる。

いや、頭を出されてもさ。治したいのは足だし。

コレで俺にどうしろと？

「……………」

「……………」

しばし無言で見つめあう。

しようがないにやあ。

「この犬め！ さつきとその薄汚い足を出しなさい！」

「わ、ワン！」

またコレかよ。

とりあえず、誕生日プレゼントとして大量のウコンなどスパイス、それにカカオと蒸留酒（木村が好きらしい）、あとなんかスパイスの利いた幼虫を貰って、俺はプラヴァスを後にした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、王都。

プラヴァスから王都なんて、何百キロもあるのだが、今の俺なら空を飛んで数時間で辿り着いてしまう。

「と、言うワケで。再来月に誕生日会を開く事にしましたので」

「ちよつと、待つて！ 私はさつき早馬で帝都攻略が成ったと速報を聞いたばかりなんだけど？」

ヨルミ女王、焦る！

場所は例の離宮である。周りのメイドさんの目がなんか怖い。

あんまり大っぴらに話せない事も有るだろうと、翼を広げ、ヨルミ女王を包み込む様に目線を遮り二人で会話しているのが、どうにも耽美に映るみたいで、やたらと興奮しているのが何人か。

「翼を見て解るでしょう？ 早馬に追いつくなど簡単です」

「べ、便利ね」

ヨルミちゃんを翼で撫でるが、以前にも見せているので反応は薄い。

むしろ獣耳としっぽに驚かれた。

「それで、再来月に帝都で即位するから、私も参加しろと言うのね？」

「出るんですか？」

「来月ならともかく、再来月でしょ？ そりゃ、行くわよ」

いや、再来月でも急だし、帝都は遠いと思うんだけど。なにせ早馬でも半月以上掛かる距離なのだ。

「多分、魔導車なら半月も掛からず着くよ？」

「え？」

確かに魔導車なら悪路を考慮しても半月で着いてしまう。

最近、早馬よりも輜重隊の車が早いとか、意味不明な事が起きているのが王国軍なのだ。

なんだか拍子抜けである。気が付いたら世界は小さくなっていた。

「じゃあ、そう言う事で」

「ま、待ちなさいって！」

招待状を人数分手渡しして、じゃあ次行くかと翼を広げたら呼び止められた。

「何を持っていけば良いの？ 王都に名産品とか無いけど」

「いえ、あるでしょう？」

特に圧力鍋は喜ばれるはずだ。アレは木村の商會がコッチの鍛冶屋に作らせたモノ。

「アレ、一応商會の機密じゃないの？ まあ良いか」

「それに、スパイス。キムムラ商會が開発した山椒とか、バニラみたいな香料は無いと思

います、それにお菓子も」

「ああ、私だけ知らない美味しいモノが一杯あったのよねえー」

「むう……」

いまだにヨルミ女王には恨みがましい事を言われる。完全に八つ当たり。

俺が口を尖らせていると、ヨルミちゃんがジッと見てくる。

「何より、アナタの伝記や姿絵を持っていった方がウケそうね」

「それは、あるかも知れません」

変なシンパがやたらいるからな。

しかし、止めてくれ。自分の誕生日に、自分を褒め称えるポエムや絵をプレゼントに配ったら、完全に痛い人である。

「それでは」

今度こそ、俺は次の目的地へ飛び立った。

次は……ポルドー王子の所だ。

空から見える目印は思い出の湖畔、その脇にひっそりと佇む石碑の前へと降り立った。

墓前には、王子の母であるキュリアナさんが居た。

「ご無沙汰しております」

「あんたかい。あらまあ」

翼を見て驚かれるのは毎度の事。今までの事を説明する。

「飛べるなんてね、それに次の皇帝とは。遠いところに行っちゃったね」

「彼ほどではないですよ」

俺はポルドー王子の墓前にアイスを捧げた。冬場とは言え、すぐに溶けて流れてしまっただろうけど。

「違うないね。アイツが一番遠くに行っちゃったよ。帝国も王国も無い、平和な世界が来たってのに」

そうやって目を瞑るキュリアナさんは寂しそうに見えた。

「そうだ！ 帝都に来ませんか？ 私の誕生日を祝って欲しいのですが」

「馬鹿言うんじゃないよ。年寄りには遠すぎる」

「魔導車なら半月ほどなのですが……」

「いいんだよ。私はココで死ぬ。私ぐらいココでこの子を見守ってあげないとね」

「そうですか……」

たしかに俺は、王子の墓を守り続ける訳には行かないからな。

俺には、多くの人を巻き込むしか生き残る術が無い。

それに、こんな小さい墓に入り込んで、死んでまで王子に迷惑掛ける訳にもいかんだろう。俺は翼を広げ、空へと飛び立った。

だけど小さな湖畔の思い出が名残惜しくて、俺はしばらく空から輝く湖面の姿を目に焼き付けた。

次は、アレだ、俺の故郷。大森林のエルフの都だ。空の魔獣もなんのその、俺はエルフの都、生まれ育った王宮に降り立った。

「今は、王の家名からエンディアンの都と呼んでいます」

そう説明してくれたのはセーラさん。俺の弓の先生にして、王家の血を引く数少ない生き残りである。

場所は宮殿。俺は幼少期、殆どは家族と離宮で暮らしていたので、実は本宮はイマイチ馴染みがない場所だったりする。

話を聞くと、セーラさんは暫定的に王女としてエンディアンを支配しているらしい。「しかし私など、王の器ではありません。ユマ様こそ新しい王として即位するべき。そうしなければ、決して帝国との戦いに勝てません」

「もう勝ちました」

「へ？」

「皇帝は死に、帝国は私の支配下にありません」

俺は今までの流れをざっと説明した。説明が多くて流石に慣れてきた。

「そ、そんな！ でしたら益々、我々の王として君臨して頂かなくては！」

「私に、そのつもりはありません。大森林を統治するのはセーラ。あなたです」

「そんな！ 何故です!?! 私など!」

うーんめんどくさい。

しかし、帝国とは違って大森林は俺が即位するのが筋なだけに、反論は難しい。ココに顔を出しただけでも、既に大騒ぎになっている。

いいや、適当な事を言っってはぐらかそう。

「私は神へと至りました。もはやエルフの王ではなく、王国も、帝国も、世界の全てを見

「守る存在なのです」

「まさかそんな事が！」

「ないけどね。ないけど、こんな所で過ごしていても、俺には意味がない。」

「家族の居ない王宮なんて、辛いだけだ。」

「セーラよ、誇りなさい！ エルフの作る魔導車がどれほど戦争に貢献したのか計り知れません。王国の勝利はエルフである我々の勝利でもあります」

「勿体ないお言葉」

「コレからは人間と共存する方法を見つけする必要があります。それにはハーフである私よりも純粋なエルフであるアナタこそが相応しい」

「今の俺はハーフエルフ（笑）って見た目だしな。」

「私など」

「神に至った私が命じます、セーラ。あなたがエルフを新しい世界に導くのです」

「私が……」

「うんうん、王権神授だよ！」

「と、言うワケで。王として私の誕生日会に出席してください」

「え？」

「俺は強引に招待状をセーラのポケットにねじ込んで。王宮を後にした。」

後の騒動など、知った事ではない。

そして、最後に辿り着いた。

旧パラセル村。

焼け落ちた家は、そのまま放置されていた。

だけど、その姿は大きく変わっていた。炭化した家の残骸からは木々が芽吹いて、中

心からは大きな木が生えていた。

「セレナ……」

この木の下に、セレナが居る。

あの日の思い出も、焼け落ちたセレナの死体も、木の栄養になり果てて、何時かは消

えてしまうのだろう。

きつと私も、最後には、大森林の一本の木になるのだ。

だったら良いなど、せっかくならセレナの隣が良いなど、そう思った。

あの日みたいに、また二人で。

十六歳

いよいよ明日は誕生日会だ。

俺は不安と期待がない交ぜになり、寝付けずにいた。

夜風にあたろうと帝城の屋根に翼を広げ、活気溢れる帝都を見下ろす。

月明かりの下、煌々と松明や魔道具の光が踊っている。

昼夜を問わず、俺の『お誕生日会』の準備が進んでいるのだ。ゼスリード平原の小麦で作られたビールが惜しげもなく振る舞われている。先日までの餓えた帝都が嘘みただ。

活気溢れる様子は、悲惨な戦争を忘れるための空騒ぎ。本番は明日だと言うのに夜の内から歌声が響き、肩を組んで騒ぎ立てている。

俺に親族を殺された者だつて居るだろうに。皆が俺の誕生日を祝おうとしている。目につく敵を殺し尽くすまで復讐しか考えられなかった自分が、少し悲しい。

俺は、自分の手をじつと見つめる。すこし殺し過ぎた。でも、まだバケモノになるよ
うな兆候は無い。

俺は本当に明後日まで生きられるのだろうか？

明日ではない、明後日。

明後日こそが、俺の本当の誕生日。

嘘をついた。

だって、俺が十六歳になれないならば、俺は最後の誕生日を祝って貰えないだろう？

最後の最後、可愛い嘘だ。

それぐらい許して貰いたい。

俺の魂が一万回繰り返して、一度も到達した事がない十六歳。

十六歳になれば、俺の中で何か変わるだろうか？ 『偶然』の理由が解るだろうか？

おそらく何か解決する事は無い。それ以降も俺は運悪く死に掛けるだろうし、体の変

化に怯えて暮らすのだろう。

でも、俺の中で区切りにはなる。

きっとコレが人間として皆と過ごさせる最後の誕生日になる。そんな確信があった。

「寝るか」

誕生日会が楽しみで当日寝不足なんて、子供みたいな真似はしたくない。

俺は部屋に戻って眠りについた。目覚めない恐怖に怯えながら。

「生きてるな……」

翌日、俺は当たり前のように目を覚ました。体はなんともない。

まだ前日とは言え、このまま目が覚めない事も覚悟して寝たのだから、少し嬉しい。死ねないならば、人間として、お姫様として、やらねばならぬ事が山ほどある。

まずは身だしなみだ。鏡の前に座ると、当たり前のように現れたシャリアちゃんが無言の髪を梳かし始める。

「やっぱりあり得ない。なんの理由もなくアナタは死なないわ」

「そうかも知れませんか」

そもそもにして、神様だって原因が解っていないのだ。下手に考えても無駄である。ただ、今日この日だけは準備は万全にしておきたい。俺は魔石を嚙って魔力を循環させる。

鏡の中の俺の髪が、みるみるピンクに染まっていった。

「綺麗……」

ピンクに輝く髪を見て、シャリアちゃんが呟く。

俺としては銀髪のが神秘的だが、この世界の人間的には銀髪は珍しくはない。

ってか、うっすらピンクに光ってるからそりや珍しい。

さて、次は衣装だ。

帝都で俺と言えば、例のエロいウエディングドレス。

「ねえ寒くない？ 真冬よ？」

シヤリアちゃんが衣装を見てたじろぐ。たしかに肌を晒し過ぎではあるよな。「大丈夫です」

でも大丈夫。むしろ魔力を循環させているから、体温が高くて仕方ない。コレぐらいは全然平気だ。

この衣装は皆の記憶にも焼き付いているハズ。だから、今日はコレが良い。さて、いよいよお祭りの始まりだ。

朝食を平らげると、俺は帝城のバルコニーから顔を出す。

——ワアアアアア！

予告もしていないのに、目聡い者が見つけたらしい。帝都中から歓声があがる。気をよくした俺は微笑んで手を振ってやる。すると、一層歓声は大きくなった。

言っておくが、かなり距離がある。今か今かと城を見ていた人間が居なくては、こうはならない。

ま、俺は羽が生えてるから遠目でも目立つんだろうが。

調子にのって、俺はバルコニーの手すりに飛び乗った。

見るからに危険行為。歓声と悲鳴が入り交じる。だが、今の俺がこんな所から落ちたぐらいで死ぬとでも？

後ろを向いて、背中中の羽を見せつけた。

その時、足元がつるりと滑り、俺はバルコニーから落下した。まあ案の定ってヤツだ。そんな気はした。

遠くに悲鳴と絶叫が聞こえてくる。

このままで俺の体は二十メートル下の石畳に叩きつけられるだろう。しかし、そうはならない。大きく翼ひろげ風を受けると、そのまま背面宙返り。俺の体は浮き上がる。

悲鳴も、絶叫も、ピタリと止まった。翼をはためかせた俺が、一転し空高く舞い上がったからだ。

つんぎくような歓声。みなが空を指差し、俺を見つめた。俺はそのまま帝都を一回り、ぐるりと遊覧飛行としゃれ込んだ。

時間にして精々が十分程度。それでも皆の熱狂は大きなうねりとなって空にまで届く程。

やっと戻ったバルコニーには、呆れたシャリアちゃんが待っていた。

「はしやぎ過ぎでしよう?」

「ふふつ、お誕生日ですもの」

子供っぽくそう言えば、シャリアちゃんは顔を赤くして、目を潤ませた。

「あ、うつ、け、結婚しましょう! 私と!」

「なんで!？」

「ああつ! 可愛すぎる!」

いや、知らんし。抱きつくな!

俺は頭の病人を置き去りに、一人ガレージに逃げ込む。

上空から見て解ったが、メインストリートの準備は既に万端。

ガレージに鎮座するのは巨大な龍。もちろん実物じゃない。木彫りの彫像。それが山車に載っている。

コレの為に帝都にレールを敷いたのだ。コレが本日の出し物。超重量、超巨大な山車でメインストリートを練り歩く。

「ユマ姫様! コチラにどうぞ!」

現場の責任者がエスコートしてくれるみたいだが、そんな必要はどこにも無い。

俺はふわりと飛び上がり、巨大な龍の頭へと飛び乗った。皆が息を飲み、ここでも感嘆の声が飛ぶ。俺は大いに気をよくした。

さて、この巨大な龍のオブジェは何なのか? 元々、この帝城の象徴たる逸品で、たまに倉庫から引つ張り出して一般公開していたんだとか。帝都の象徴の様なモノらしい。

それを山車に乗せて、帝都を練り歩こうってワケだ。盛り上がりがないハズが無いし、

皆の度肝を抜くに違いない。

俺は龍の頭に足を掛け、王剣を構えポーズをキメる。

「おおっ！」

「戦女神だ！」

早くも作業員達が、やいのやいのと盛り上がる。

「いいから出発なさい！」

命じると同時、巨大な山車が動き出した。

覚悟していたのだが、特に事故とかはなさそうだ。

さあお祭りの始まりだ！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

帝都のメインストリートを巨大な龍がゆっくりと進む。

山車に括りつけられた色とりどりのランプがキラキラと輝き、乾いた空気を暖めていく。

皆が熱狂の元に山車を見上げ、龍の頭に立つ俺の姿に見入っていた。

かなり派手な絵であろう。だが、この程度じゃ終わらない。

さて、ここらで仕掛けを動かすか。

俺が山車のスイッチを押すと、龍の体からゴゴゴと低い重低音。市民は何事かと騒ぎ

出す。

魔道具を起動させたのだ。その正体はただのポンプ。龍の体に仕込んだ樽から水を吸い上げ龍の口から吹き出す仕組み。魔女が井戸に使っていたポンプの流用だ。

真冬に水をぶっかけるなんてと、みんなに大反対をされたギミックだが、心配無用。水が吹き出る直前。俺は吹き出される水から一気に熱を奪っていく。

水が瞬時に氷となって周囲に舞い散る。ダイヤモンドダストだ。

色とりどりのランプの光がキラキラと乱反射して、幻想的な景色を作り出していく。

「何これ？」

「キレイ」

「夢みたい！ コレが魔法！」

寒い事は寒いが、皆が夢心地で熱に浮かされ興奮している。

大成功だ。ついこの間、ぶっ壊れたシャンデリアのクリスタルがキラキラと輝いて、光の反射が余りにも綺麗だったから、似たものが出来ないかと考えていた。

更に更に、ついだとばかり、俺は光の魔法も併用する。

ハツタリを極めた俺の光魔法は既に芸術の域にある。それが、ダイヤモンドダストに彩られると、どうなるか？

舞い踊る光と、乱反射する氷が、幻想の中で共演する。

真つ昼間なのに、太陽よりもなお強烈な幻想の光が、世界を夢幻に誘っていく。

市民にもはや言葉はなく、俺が起こした一人イルミネーションにぼんやりと見惚れていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふう……」

山車は帝都を抜け、城門の外に出た。次は夜の部に同じ山車に乗って帝城までとつて返す。それまでしばらくは自由行動で良いだろう。

ココで俺はお色直し。イメージチェンジして、コッソリと屋台を回って羽を伸ばす。

……いや、物理的に羽が伸びてるからコッソリも糞もないのだが。あの露出の激しいドレスで遊び回るのは流石にアレだった。

さて、お祭りとあらば、俺が着たかったのはコレ。

山車の中、俺は浴衣に袖を通した。

そう、浴衣だ。女の子になったのだし、浴衣でお祭りに参加してみたかった。

十六年も経って、心まですっかり女の子になった証拠だろうか？ でもせつかくだし着てみたい。

背中に大胆に穴を開け、翼も出せるようにして貰った。真冬に浴衣つてのもどうかと思うが、露出だらけのエロ衣装よりはマシだろう。

遊ぶ気満々でお着替えして、ウキウキと山車を下りた俺を出迎えたのは、正装で準備万端のリヨンさんだった。

完全に出待ちされていた。

いつものターバンに長衣の民族衣装だが、純白の民族衣装に特徴的な黒糸の刺繍があらわれている。

太守にしか許されない意匠だ。プラヴァスの代表として来てくれた証拠。

「お迎えにあがりました。右も左も解らぬ私めに、帝都を案内して下さいませんか？」

跪いて俺の手を取ろうとする。浅黒い肌に、端整な顔立ち。

いつも思うが、どえらいイケメンだ。しかし、今日の俺はその手を取る訳にはいかない。

「申し訳ありません。今日は先約がありました」

「それは……」

「オイ、行くぞ」

現れたのは田中だ。俺の護衛、と言うのは名目で、暴走した俺を殺す役割。今日は一緒に祭りに参加する事になっている。

不穏な空気がじつとり流れた。リヨンさんがジツと田中を見つめる。

それで、田中の服こそが問題だった。着流しに羽織りを纏った和服姿なのである。考

える事は同じと言う事か、コイツも祭りを楽しむ気満々であった。

これでは浴衣の俺とコーディネートを合わせたみたいに見えるじゃないか！

「やはり、そうですか」

案の定、リヨンは悲しげに手を引つ込めるし、後ろで様子を窺っていた歌姫シエヘラさんはヤレヤレとため息。

大惨事である。

誤解されるにしても相手が田中と言うのはキツイ。勘弁して欲しい。

しかし、どちらにせよ俺はリヨンの手を取れない。

手を取れば、俺の偶然に巻き込んで、きつと殺してしまうから。

俺はリヨンさんが誤解するに任せる事にした。

そして、俺を待っていたのはリヨンさんだけではない。

「あ、居た居た！」

「走らないで下さいよお」

カラミティちゃんに、ネルネの二人だ。既にリング飴もどきを頬張って祭りを満喫している。

……この娘らを見るとホツとするね。巻き込んで死んでしまっても、いまさら罪悪感が湧かなそうなのもポイント高い。

そのカラミティちゃんが、おずおずと聞いてくる。

「あの、ユマ姫様？ キイムラ様はどこに？」

「キイムラは別の仕事をしていて、今夜到着する予定です」

「よ、呼び捨て！ 既に深い仲に？」

ちやうがな。

俺は帝都で神扱いだから、あんまり他人を様付けで呼べないのよ。特に木村は爵位持ちとは言え、ただの商人って扱いだからね。

そこにネルネが割って入った。

「あの、ラミイちゃん結婚したいから、その許可をキイムラ様に貰いたいらしくて」

なぬ？ あ、なんか聞いたかも。確かフィーゴ君とだっけ。

木村さまあああああ！

「良いでしょう。許します！」

「え？ なんです？」

「カラミティさん、アナタの身柄は実際は私の預かりとなっています」

「あ、そうか！」

「それに、私はキイムラに命令する立場にもあります」

「で、でも一応、直接話しておきたいなって」

「今の私は神も同然。次代の皇帝を任命する権利もあります。その私が許可するので、不満ですか？」

「え？ ええっ？」

困惑するカラミティちゃんに、魔法の光をクルクルと纏わせる。

「カラミティ、フィーゴ、二人の結婚に祝福あれ」

「は、はい！ ありがとうございます！」

カラミティちゃんは目を真っ赤にうるうると感動している。

周囲では、ユマ姫に祝福された結婚だと大騒ぎだ。事情を知らない帝都の女の子もキヤアキヤアと憧れの目を向けている。

実際は、木村への嫉妬による呪われた祝福だが、喜んでくれたのだから正義だろう。

さて、俺は残った大物の相手をしなければならぬ。

「本当にキレイね、いつ見ても」

「ヨルミ女王……」

ヨルミちゃんである。

犬猿の仲である帝国と王国。その王が帝都に訪ねてくるなんて、有史以来初めての事だった。

彼女が来てくれる事で、俺こそが皇帝を超える神的存在と、皆がスナリ信じてく

れたのだ。統治が順調なものもお陰。

なにせ、名目では俺がヨルミちゃんを帝都に呼びつけた事になっているのだ。

「もう呼びつけるの止めてね？ ホントに遠かった……」

……いや、彼女の中でもそうなっていた。そんなに無理矢理呼んだっけ？

んー、良く考えると、普通にビビられてた感じがしないでもない。

そのヨルミちゃんはどうにもため息が多い。きつと長旅にお疲れだ。なんだかんだ着いたのは昨日なんだから無理はない。

「はあー、コレでアナタと比較されずに済むのね。なんせ相手は神なんですもの」

「……いえ、そんな事は」

流石に時の権力者に、そんな陰口は言わないだろう。それにヨルミちゃんも十分に綺麗だし。

「それでも比べるのよ！ 口さがない連中は！ コツチは外見で勝負なんてしてないのに！ つていうかこんなのに勝負出来る人間が居るワケ無いでしょ！ コツチは顔に顔を描いて凄いでるの！」

駄目だ、次から次へと闇が溢れ出して止まらない。振り回す鞭がビュンビュンと唸る。え？ コレ、俺が鞭で打たれる流れなの？

流石にマズい。帝国と王国の和解。歴史に新たなページが加わるハズが、薄い本が

増ページしてしまう。

「あの、お、落ち着いて。ね?」

「ううう、それもコレも、鞭に打たれるアナタを見てからおかしくなったのよお! 責任とってえ」

「責任って……」

今日はやたら結婚を迫られる日だなオイ。

「あの、私じゃなくてもっといい人がいますから」

「なによお、もう変態になった私と一緒にされる人なんて……」

「向こうにプラヴァスの領主様が来てますよ? 挨拶してみては?」

「ふんだ、プラヴァスなんて砂漠ばかり。王都のいち地方より生産力は低いでしょ?

王様になっちやった私に釣り合わないし」

「まあ、まあ、ちよつと会いに行きましよう」

……そして、俺はヨルミちゃんをリヨンさんに紹介することになったのだが。

ヨルミちゃんはリヨンさんを見つけるや、目の色を変えた。しやなりしやなりと近づいて、口元を扇子で隠して誰何する。

「妾は四十二代目ビルダール王、ヨルミ・ラ・ガードナー・ビルダールじゃ。そちの名は?」

いや、お前誰だよ？ 王位継承でもそんな喋り方してなかったろ。

コレにはリヨンさんもドン引き……してない。流石はリヨンさん、場慣れしている。

「これはこれは、私はプラヴァスの太守を務めさせて頂いているリヨン・ブラッド。今回はブラッド家の名代、そしてプラヴァス代表としてユマ様のお祝いに駆けつけた次第で……」

「あなた、ユマ様とはどんな関係？」

あ、ヨルミちゃん。そこに突っ込むのね。

よほどアレだな、俺と比べられるのイヤだったんだな。様子見で様付けが口調と噛み合わなくて泣ける。

「ユマ様にはプラヴァスを救って頂いた。そればかりか愚昧なる私にも指導を頂き、混乱するプラヴァスを立て直す事にも成功したのです。この恩を少しでも返せたらと」

「いいえ、あのコは愚昧な人間にはかかずらわれない。あのコが目を掛けるのだから、ソレだけであなたの優秀さは自明でしょうね」

「い、いえ……そんな、恐れ多い」

「どう？ 少し国政について話をしませんこと？」

「それは勿論。喜んで」

……逃げて、リヨンさん逃げて！

まあアレだな、イケメンは全てを解決する。コレで問題は片付いた。

「ヨシッ！」

「良くないだろ、知らねえぞ!？」

細かい文句を言う田中の手を取って、俺は帝都の屋台へと繰り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

アイスを食べたり、金魚（もどき）掬いをしたり。木村の息が掛かったお祭り会場を俺はすっかり楽しんだ。

周りにはすっかりバレているが、遠巻きに話し掛けてこようとはしない。

「いや？ お忍びデートって言われてるんだが？」

「まあ良いでしょう」

ソコは喜んでおけよ。

「暗殺されそうじゃね？ 街を歩けねえだろ、もう」

「歩く必要無いでしょう」

「うわあ……」

一蓮托生だ。俺達は人でごった返す帝都の中を遊び回る。

さて、隕石なり、地震、地割れなり、何でも来い。

二人して、寂れた一画にも堂々と踏み込んだ。ここはうち捨てられた教会である。神社がないから代わりにね。

「何も来ませんね?」

「どこがだよ! 面倒くせえ!」

田中は斬り込んで来た市民(に見せかけた暗殺者)を真つ二つにぶつた斬りばやいた。石畳に血が染み込んでいく。

「でも、コレでも今日は少ない方ですから」

「オイオイ、お前いったい何人殺したんだよ?」

田中が呆れるが、仕方無いだろう。俺は帝都で多くの人間を殺してしまった。恨まれるのも無理はない。

それに俺は『可愛い』が過ぎるのだ。

俺を殺したくて襲ってくる奴が居るまでは想定内。だが、俺に殺されたくて襲ってくる奴が後を絶たないのは想定外だった。

そのあまりに無謀な突撃に、きつと俺の可愛い見た目に騙されて、無為無策に襲ってくるのだろうと勘違いしてしまった。

だから素手で人間を引き千切るパフォーマンスまでやったのだ。俺はお前らじゃ絶対に殺せないんだぞと見せつけたつもりだった。

それが却って良くなかった。

俺に手ずから殺して貰えると、喜んで死にに来る奴らが殺到してしまったのだ。

「どう言うことだ？」

「自殺したいほど困ってる人が多いのでしよう。戦後の不景気、今後の課題です」

「そうかあ？」

きつと、そうだろう。

皇帝が失脚どころか分解され、政治体制も大きく変わる。立場を追われ、一人さみしく自殺するより、女の子に殺して貰いたい人間が居ても不思議じゃない。

「いや、皆、聖句を唱えながら突っ込んで来るんだが？ お前に殺して貰うのが信仰の一

部とかになつてない？」

「……………」

知らんがな。俺が一番迷惑している。

俺が殺すと却って増えるので、他の人に殺して貰うしかないのだ。

ゾンビに襲われる気分である。俺は屋台で買ったチャーシューを嚙って、ぼやく。

「血の匂いがしては、お祭りも興ざめですね」

「オメーはさつきからハムとかチーズとか、やたらと喰いまくってるじゃねえか！ 俺

にも食わせろ」

「あっ！」

持っていたチャーシューを囓られた。

「もうっ！」

文句を言うが、田中はどこ吹く風……ではなかった。

「この肉……」

顔を青ざめ、吐き出した。

「あ、勿体ない！」

「お前、これ？ どうなって？」

吐き出した肉に呆然とする田中の前で、街の解体屋が死体をどこかへ引き摺って行く。

「クソツ！ そう言う事か！」

驚いたか？ 死んだら肉！ ソレがこの街のルールだ！

「馬鹿かツ！ 違えよ！ だから死にたがるヤツが減らねえんだ、目の前で仲間をぶつた斬つてもニコニコしてる連中が、俺が肉を囓った時、初めて突き刺さる殺気を出しやがる」

「そうなのです？」

「みんなお前に喰われたがってる、ソレが奴らの宗教なんだ」

そうかな？ そうなの？

「糞ツ、食え食え！」

おいしい！ 一度嚙った唾液まみれの肉片を喰わせようとすんな！

「どんな性癖ですか！」

「性癖じゃねえ！ 俺の事なんだと思ってるの？ 斬るよ？ 今すぐ！」

マジで二人してゲンナリしていたのだが。

後で聞いたところ、なんか二人でイチャイチャしてるように思われていたらしい。

解せぬ。

遊び終わった俺は、龍の山車に乗って帝城に帰還。

俺はてつきりこの龍の彫刻が倒れて死にそうになるとか、そう言うアクシデントがあると思っていたのだが、何にも無かった。

朝よりも派手に舞い踊る光の幻想は市民に大好評だった。夜だからめっちゃ寒いけど。

その後はヨルミ女王と俺で、帝国と王国の歴史的な和解式典。

式典会場の真ん中に飾られたのは俺を描いた例の絵だ。

真っ白な中に、鮮烈な血の赤が浮かぶ斬新な構図は、衝撃を持って迎えられた。

そして、世界交流による大パーティー。木村の用意したローストビーフやソーセージは各国の香辛料で個性的な味付けに仕上げられており、世界平和を象徴する料理と大好

評だった。

王国の料理は、木村の「うま味革命」以降、圧倒的に進化している。帝国のシェフは王国の料理など田舎風と侮っていただけに、顔を真っ青にしていたのが印象深い。

もちろん、チョコレートや生クリーム、アイスを使ったお菓子の数々は女性陣を大いに魅了した。

特にチョコレートが人気だ。むしろコレは持参したりリヨンさんが驚いていた。カカオがソレほどに美味しいとは知らなかったらしい。木村の加工技術は並ではなかった。他にもリヨンさんが持参した蒸留酒やスパイスに皆が目の色を変える。プラヴァアの貿易が一変しそうだ。

トりに披露したのは、シエヘラさんの歌。そこへ俺がプラヴァアの踊りを合わせた。こうして俺のお誕生日会は大好評のままに幕を閉じる。

そう、誕生日会は終わった。地震も隕石もないままに。

あと数十分で本当の誕生日。そして俺は十六歳になる。

俺はたった一人、グリフォンと戦ったダンスホールにやってきた。

魔法で切り裂かれた壁から、ぼんやりと空を見上げる。

あまりにも月がキレイに見えたから、俺はズタズタになった大理石の床にへたり込

む。

「何やってんの？ 護衛の俺としては困るんだけど」

いや、田中が居た。今日のコイツは本当に俺から離れようとしなかった。

「もうすぐ私は十六歳になります」

「そうか」

田中は何の反応も示さない。気が付いていたか。

「ま、わざわざ誕生日に人を集めるのはオカシイと思ってた。危ねえからな。むしろもつとズラすかと思っただけ、隕石降ってきたらどうしようもねえじゃん」

「……ええ」

そう言う事はもつと早く言えよ。

「で、どうなんだ？ 死にそうか？」

「ぜんぜん」

体に異常は無い。とても死ぬとは思えない。

「良い事じゃん、いつそ全てが偶然。神の考え過ぎなんじゃないか？」

「……本当に、そう思ってますか？」

「んにゃ、きつと何かある」

「はあ」

ムカつくな。適当に喋りやがって。

「考えても無駄だろ？ どうせ、なるようにしかならねえし」

「そうですね」

俺は立ち上がり、田中の手を取った。

「なんだ？」

「踊りましょう。ダンスホールですから」

俺がそう言うのと、呆れたとばかり田中は鼻で笑い飛ばした。

『踊る阿呆に見る阿呆ってか』

『いいから付き合えって、落ち着かないんだよ』

体を動かした方が、余計な事を考えずに済む。

それに、オルティナ姫の記憶を持つ俺と違って、田中はダンスなんて素人だ。コイツをからかってやるには丁度良い。

リードしてやろうと、手を引いて簡単なステップ。

……問題なく付いて来る。

ならばと、俺は田中に大きく体を預ける。

当然小揺るぎもしないが、リードするにはステップの踏み方も解らないだろう。

俺は田中の腕の中でニヤリと笑った。

しかし。

「どうだ？」

田中は俺の体を受け止め、ステップを踏む。

力に任せて俺の体を振り回す向きはあるが、足裁きに怪しいところは一切無い。力強く、田中らしいリードとも言える。

『やるじゃん』

「イヤと言うほど誘われるからな」

その言葉に、ムツとする。確かにコイツの武勇伝を話半分にも信じれば、目をつける良いところのお嬢様が鈴なりに群がっても不思議じゃない。

コイツは本当に理想の異世界チートをしているよ。

俺は幾ら強くなっても、いつ死ぬか解らない恐怖に怯えているのに。

「では、もう少し激しく行きましょう」

「おいおい、勘弁しろよ」

俺は今亡きカディナル王子へ挑んだステップを刻む。体を大きく預け、腕力とりズム感が必要な大胆なダンスだ。

かの第一王子は俺のステップを受け止められず、俺に怪我を負わせる失態を演じた。思えば、このダンスこそが王国動乱の最初の一步だった。

俺は体当たりするように田中の腕の中で大きく倒れ、体重を預ける。

「おっと、こうして、こうか？」

見た事もないだろうステップに、田中はなんとか付いて来る。

体力に余裕があるからだ。ステップはともかく、体重を支える手は少しも揺るがない。

「筋がいいですね」

「だろっ？」

流石に運動神経が良い。

魔法に切り刻まれ、ガタガタになった大理石の床に、足を踏み外す事も無い。

「ここは、こうです」

「面倒くせえな」

田中は細かいステップを大胆に省略してしまう。それでも様になるのは動きが大きく、キレがあるからか。

「ふふっ」

俺は次第に楽しくなってきた。

壁を切り裂かれ、外から丸見えになったダンスホール。シャンデリアもなくなった室内を真っ青な月の光が照らしている。

二人の衣装はパーティのまま。

俺は本当は行進で着るはずだった、露出が無い方のウエディングドレス。田中は黒い礼服を無難に着こなしている。腰に吊した刀が似合わない。

調子に乗った俺は、田中の腕に体を預けると同時、翼を羽ばたきを反動にそのまま背面にクルリと一回転。

「おっと」

しかし、田中はそんな無茶な動きに動じない。俺の腰をとって引き寄せた。

田中の顔が、間近に迫る。

月明かりのせいとか、妙に格好良く見えた。それこそあのリヨンさんよりも

いや、オカシイな。ムードに流され過ぎている。或いは死ぬのが怖くて錯乱しているのか。

俺は更に激しく、ステップを踏もうとした。

「あっ！」

その時、俺はついに躓いた。魔法で切り裂かれた大理石に足が引つ掛かったのだ。

田中をぎゃふんと言わせようと無理をしてこのザマだ。勢いをつけた俺の体は、硬い大理石に叩きつけられる。

「痛えな。オマエ馬鹿だろ」

いや、俺がぶつかつたのは鍛え上げられた胸板。俺は田中に受け止められて、二人で地面を転がった。

とつさに田中が抱きしめて、体を入れ替え俺を守つた。

田中の腕の中で、首を傾げる。

「どうして？」

別に今の俺なら、怪我をしたつてすぐに治る。

「いや、背中から落ちると羽が痛むじゃん」

そう言つて、羽をさする。

コイツ、生粋のモフラー。

でも、背中をぶつけると羽が痛いから助かる。

田中を抱きしめ、心音を聞く。

どくん

どくん

脈打つ音。

生きている。

生きているのは素晴らしい。

久しぶりに、そう思えた。

浮ついた気持ちだが、少し落ち着く。

その時だ。

——パアアン

月明かりではない、紛れも無い火薬の破裂音。同時に極彩色の光がダンスホールを七色に照らした。

すわっ、敵襲か！ 田中の胸から身を起こした俺の頭を田中が押し止めた。

「木村^{アイツ}が用意した花火だよ。今日の終わりに打ち上げるんだと」

「花火……」

そんなモノ、俺に黙って準備していたのか。

コレは、本当の俺の誕生日を祝う祝砲らしい。

つまり、俺の嘘は初めからバレていた。

「んっー」

変な声が出た。くすぐったい。

改めて花火を見物しようとした俺の獣耳を田中が無心でなで続けるからだ。

「もふもふ、もふもふ」

駄目だコイツ。

俺は無視して花火を見上げる。

「キレイ」

「だなあ、結構大変らしいぜ」

「だろうなあ、金属を混ぜて色を作るんだっけ？　良く解らん。」

「どうよ？　十六歳になった感想は？」

「そして、この花火が打ち上がったと言う事は。俺は晴れて十六歳になったのだ。」

「田中は俺の耳をモフリながら尋ねる。俺は田中の手を逃れ、窓辺に立って、答える。」

「私、幸せです」

「振り返り、微笑むと同時。背後で大きな花火があがった。」

「せつかくの大花火、見逃してしまったな。」

「でも、後悔はない。俺に見惚れる田中の顔が見れたのだから。」

「ちっ」

「悔しそうに、舌打ちして照れている。」

「俺達は二人、笑いながら花火を眺めた。美しい庭園はおろか、遙か遠い果ての山脈までが花火の光で輝いて見える。」

「この世界は美しい。心底そう思えた。」

「……ん？」

「山脈の稜線が、動いた？」

ゾクリと首筋に痛みが走る。

何が起きている？ ワケも解らない焦燥感が、俺を苛む。その時だった。

「よっ、しつぽりやってる？」

明らかに寝不足な男が目にも濃い隈をぶら下げ乱入してきた。

木村である。

「おう、お疲れ」

「いやー大変だったよ。色々調べて。お陰で色々解った」

「それよりも、コイツが十六になってもなんにも起こらねえ。その理屈はなんだよ？」

ん？ 木村がそう言ったのか？

そう言えば、この一大時に現れないのは薄情だなとは思っていたのだ。

今こそ最終決戦。俺はそう思っていたのだから。

「そりゃね、解ってたよ。だってユマ姫が十六になるのは初めてじゃない。他ならぬ高

橋が既に十六歳を超えていた」

「いやいや、コイツは俺らと同じ中坊だったろうが」

「そうじゃない。歳のが念が違うんだ」

そう言って、木村は砂時計を取り出した。

「コイツは地球時間で三分を計れる砂時計。ユマ姫の参照権で合わせたから間違いない」

だからなんだ？ いや、まさか？

「そうさ、コレで測った。この世界の一日は二十四時間じゃない」

そうか、もし一日が地球よりも短い、例えば二十時間なら、一年で何時間もズレる。前世の俺はこの世界の十六年よりも長く生きていた可能性がある。

「この世界の一日は大体二十六時間だ。地球よりむしろ長い」

「ええ……」

それじゃ真逆だ。計算が……あつ！

「そう、そして、この世界の一年は365日じゃない。今は後冬の十日。知つての通り前月と後月は25日しかない。中月は30日。四季毎に繰り返して(25+30+25)×4で320日しかない、後は適当にうるう日で調整するらしい」

公転周期が早いのだ。どおりで一年が早いワケだ。

………いや、俺だつて気が付いてたよ？ だつて25日までしかない月が三分の二もあるんだもん。

いや、それにしたつて。そんなに違うか？ 逆に一日は二時間も長いんだよ？

俺はなにも早生まれじゃない。死んだ日だつてむしろ十五歳になったばかり。誕生

日から二ヶ月半しか経っていなかったハズ。

「十分だよ。一年で440時間ずれるんだ。十五の誕生日から二ヶ月半として、あと三日ぐらいは高橋敬一のが年上さ」

そうなん？

じゃあ、本番はコレから？

ゾクリとして、俺は振り向いた。切り裂かれた壁の向こう。山の稜線をもう一度見つめる。

「どうした？」

田中を無視して、俺は最大出力で光の魔法を練り上げる。

今の俺の魔力をもってすれば、レーザービームみたいな光が果ての山脈へと突き刺さる。

そして、遙か遠く、蠢く陰が照らし出された。

「嘘だろ？」

山の稜線。そのシルエツトが不気味に蠢いている。

いや、山が生きている。そして、あのサイズの生き物は他に居ない。

星獣だ。

山の稜線だと思っていたシルエツトは、無数の星獣へとすり替わっていた。

俺と、田中、二人が呆然と見つめる中、木村がため息混じりに頭を掻く。

「はじまったかー」

いや、そう言う思わせぶりなの止めて欲しい。知っているのか木村！　みたいなツツコミの元氣は湧きそうにない。

「古代人の生き残りがさ、二人だけじゃなかったみたいだね。通信ログがあつたんだよ」
えー？　それじゃ？

「果ての山脈の向こう側、コッチの人間じゃ生きられない世界の地下に、生き残ったコロニーが幾つかあるんだって」

「……………」

「最近新しい技術が見つかったらしいよ。星獣を手懐ける方法が『偶然』に」

マジかよ。ここうしちゃ居られねえ！

飛び出そうとする俺の首に木村の自在金腕ルーデルオンが巻き付いた。

「まあ待つてよ、あと数日ある。それに」

「それに、なんです？」

「奴らが向かっているのはココじゃない、それどころか誰も住んでいない場所だ」

……そうか、俺も解った。吸血鬼として死んだ古代人、ポーネリアの記憶を辿るまでもない。

思えば、あそこが一番魔力が濃い場所だった。魔力欠乏を起こしていたセレナが元気に居られた唯一の場所。

「大森林の最奥。エルフの古都」

俺とセレナが、成人の儀を受けた場所。

最後の戦いが迫っていた。

終末の刻

「で、どうすんだよ、アレは？」

真夜中のダンスホール。切り抜かれた夜空の向こう側を指差して、田中はぼやいた。花火も魔法も消えた闇夜は、ただ黒を映すだけ。それが却って恐ろしい。

あの山脈に見えるシルエツト、正体は蠢く巨獣の群れなのだ。

一匹でもどうにもならなかった星獣が、群れで大地を侵略してくる。

果たして人類に未来はあるのか？ どうしても、そんな考えが頭を過ぎる。

この未曾有の事態。予知出来たのはたった一人。

俺と田中は自然、木村の言葉の続きを待つ格好になった。

「……………」

答えは沈黙。え？ まさか？

「……………え？ いや？ 俺からはもう特に何も無いし、今から寝るけど？」

いやー、驚いたね。

まさかのノープラン木村に、田中がキレた。

「ふざけ」

「いや、どうしようも無くない？　まずは寝ようよ」

あくびを噛み殺していいやがる。

俺も一緒になって罵りたい所であるが。問題がひとつ。

実は俺も眠い！

「なるほど、一理ありますね」

「いや？　ねえけど？　オイ!?　露骨に眠そうな顔をするな！　怪獣が来てンだぞ？」

いや、揺さぶられても困る。眠いし。さつきまで今日にも死ぬかって緊張してたから

さあ。

「寝不足で戦う方が危ないでしょう？」

「今のうちに市民を避難させるとか、あるだろうが！」

「どこにです？」

「どこにつて……」

田中が面食らう。

そうだ、星獣がどこに来るかなど解らない。逃げ場などどこにも無い。

いや、ひとつだけ、市民が逃げるべき場所がある。

「私が居ない所でしよう？」

歯を剥き出して、俺は笑った。

隕石も、星獣も、突拍子もない厄災は、全て俺を目掛けて降り注ぐ。

「お前……」

「だから、私は明日ここを発ちます。今日ぐらいは寝かせてくれても良いでしょう?」

合理的判断だ、市民が逃げるより、俺が出て行った方が早い。

そう言うのと、ツバを吐き捨て田中が睨んだ。

「気に入くわねえな」

「何がです?」

「お前が嬉しそうだからだ」

「解りますか?」

「さつきまで不安そうに震えてた癖に、ニコニコしやがって」

田中はぐにぐにと、俺のやわらかほっぺを引っ張りはじめた。

「むにゆう」

可愛らしく鳴きながら、引っ張られるに任せ、俺はニヤリと笑った。

剥き出しになった俺の歯列を見て、田中が息を飲む。それもそのはず、凶悪に生えそ

ろった俺の歯は、肉食獣のソレに変わってしまった。

見た目以上に、俺の中身は、もう、怪物だ。

「私は嬉しいのです」

「何がだ？」

「アレが相手なら、私は戦える」

確かに星獣はどうしようもない。どうしようもないぐらいに強い。そんな怪獣があの数だ。絶望的と言つて良い

だから、却つて安心した。

俺を倒そうとする『偶然』の最後の一手として、申し分ない。

『偶然』自分が得体の知れないバケモノに変わつてしまうより、ずっと良い。

「自己犠牲に酔つているワケではありません。もし三日後に死ぬとして、病で死ぬよりも誰かに殺される方がアナタだつてマシでしょう？」

「そりや……」

田中は口ごもる。剣士なら、好敵手に殺される終わりは、病に死ぬよりずっと良いはず、きつとコイツはそう言う奴だ。俺にも今ならその気持ち解る。

「でもよ、そいつあ戦士の理屈だ。お前は今まで、何を巻き添えにしても、生き延びようとしてたじゃねえか？ それが帝国を征服した途端一人で出てくなくて、死のうとしてるようにしか見えねえよ」

「何も一人で出て行くとは言つていません」

「そりや……」

「私と共に死にたいと言う者を、止めるつもりはありません」
「……………」

結局死ぬ気かよ、と止められるかと思ったが、そうではなかった。

そりやそうだ、星獣が相手ではどんな軍隊も意味を成さない。

大勢で挑むのも、一人で挑むのも、大差が無い。等しく自殺だ。

俺は二人に背を向け、ダンスホールを後にする。

「とにかく、今は寝ましよう。良いですね？」

「チッ」

俺の捨て台詞に田中は渋々引き下がる。一方で楽しげに笑う木村の声。

「立場が逆転したな」

「ンだと？」

「思い出すのは、ユマ姫が死んで、カプセルで復活した時。お前は敵中にも関わらず余裕綽々、グースカと寝て見せたじゃん？」

「ああ、お前が黒焦げの下半身を抱えてた時だな」

「そうさ、あの時俺は、コレで終わりかと不安だった。そんな中、お前だけに未来が見えていた。寝ていたお陰でお前はガスの効果も薄く、体力も温存した。そうだろ？」

「あん時は、コイツが『高橋敬一』なら、こんな所で死ぬハズがねえって思えたんだが

……」

「変わらないだろ？　今なら俺も信じられる。ユマ姫がつまらない死に方をするハズがない」

「どうだかな……」

拗ねた声で田中は吐き捨てる。

オイオイ、二人して、勝手な事を言いやがる。

俺だつて死ぬときはあつさり死ぬよ？　心配してくれないと、わざわざ美少女に生まれ変わった意味がない。

お前らがその気なら、俺にも考えがある。

踵を返し、二人の間に割つて入った。

「誰がつまらない死に方をするのです？」

「お前だよ」

めんどくさそうに田中が答える。

「じゃあ」俺は背伸びびして、田中のネクタイを引っ張る「私がつまらなく、惨めで、無惨な死に方をしたとして」顔を引き寄せ、間近に囁く「骨は拾ってくれるのでしょうか？」

こんな美少女に囁かれたと言うのに、苦虫を噛み潰したような顔をしやがる。田中、それに木村まで。

「そうだ！ 骨だ！ 比喩でもなんでもないぞ？」

俺は心底楽しくなつて、唄う。

「そうしたら骨と、首と、千切れた肉片を綺麗に並べて、コレがユマ姫だったモノだと、皆の前に晒して下さい」

皆が守りたいお姫様が、惨めな肉片に変わってしまった。

ソレを見せつけられた皆の悲しみを想像するだけで、大変に気持ちが良いじゃないか。

「趣味がワリいなー」

「私は悪趣味なのです」

「知ってるよ」

前世の俺は、死のうが生きようが誰にも哀しまれない普通過ぎる少年だったからな。

無惨に死んだ俺を見て、罪悪感に狂つてくれるなら、こんなに嬉しい事は無い。

それにより。

きつと俺は死体になつても綺麗に違いない。バラバラ無惨な変死体になつても、尚美しい自分を想像すると、不思議なぐらいに興奮する。

鼻息を荒くする俺を見て、田中は呆れた。

「解つたよ。お前がタダで死ぬ気が無いって事がな」

ボリボリと頭を掻きながら、去って行く。ソレを見送ると、俺も自分の眠気を思い出した。もうクタクタだ、手足から力が抜けていく感じがする。

「それでは、私も寝ます」

「さいなら、私はちよつと調べ事をしてから寝ますよ」

木村は何だかんだまだ仕事があるみたい。ご苦労なこつた。

俺は一人、寢室に引き籠もり、闇夜に叫んだ。

「シヤリア、寝ます。起きたら忙しくなりますよ。山向こうに現れた星獣の群れと戦う算段を立てます」

「はい」

闇に浮かんだ気配から声がする。

うーん、やっぱりシヤリアちゃんは、無闇に事情を聞いてこないのが良いね。

「疲れたので、ぐっすり眠ります。決して起こさないように」
「かしこまりました」

こう言う時の彼女は仕事モードだ。

俺は安心して眠りに落ちた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ゴゴゴゴゴゴゴッ

微睡みの中、地響きを感じた。

パチリと目を開ける。

よく眠ってしまった。窓から入る光から、もう昼過ぎだ。

ここは帝城の寝室。だけど妙に薄暗い。帝城の魔導照明は、昼間には全点灯するはずなのだが……

「ツー！」

体が、妙に重い。余りにも鈍いのだ。まるで二、三日絶食した後みたいな。

……まさか？

俺は『参照権』で確認する。アレは俺の無意識の意識すら、神の世界に送信している。大体の時間が解るハズ。

「うそっ！」

俺は、丸々二日半、眠っていた。

あの時、木村はあと三日は猶予があると saying していた。つまり前世の死亡時間に、半日ほどこしか時間が無い。

もう、俺はいつ死んだっておかしくない。

何が？ どうなってる？

そうか、俺の体は自分で思う程『大丈夫』ではなかった。誕生日が過ぎて緊張の糸が

切れ、不安定な体のオーバーホールが入ったのだ。

今、どうなってる？

「ユマ姫様……」

力ない声があった。フラフラと現れたのはシャリアちゃん。

その姿は血に塗れ、足を引きずる満身創痍。彼女にしてらしくない程追い詰められていた。

「その姿は……」

「私、守りました。守りましたの。決して起こさないようにって」

「それは！……そうですか」

時と場合があるだろうと、一瞬怒鳴りそうになった。

だけど、どうだろう？ 二日も寝込むダメージがあったなら、途中で起きて戦ったりしたら、俺の体はバラバラに砕けてしまったに違いない。

だとすれば、真実、彼女は俺を救った事になる。

「お疲れ様でした」

「はい、お休みなさい」

彼女は眠った。死んだように。

ぐっすりと眠る俺を無理にでも起こそうとする人間が大勢居たに違いない。

ソレほどに、今、この城は追い詰められている。早く逃げ出した方が良い程に。俺は王剣を掴んで、立ち上がる。

昨日、いや一昨日？ なんでも良いや、あの日、俺はウエディングドレスのまま眠ってしまった。

スカートを切り裂いて大胆にスリットを入れながら、走る。

断続的に続く地響きはあまりにも異質だ。万の軍隊の突撃でも、ここまで揺れはしないだろう。

しかも、地響きがする方向は城下町と反対側。帝城の裏側だ。帝城を背後から攻めてくる軍隊なんてあり得ない。

なぜなら、帝城の裏手は二十メートルもの急峻な崖になっている。天然の城壁だ。

そして、城の高さは三十メートル。合計五十メートルの高さとなれば、この世界の投石機などどう頑張っても届かない。あらゆる軍隊も侵入を諦める。

ならば、相手は？

俺は、帝城の裏手に作られたバルコニーへと飛び出した。

なにせ高さ五十メートル。このバルコニーからの眺望は、皇帝も自慢の景色だったと言おう。

しかし、今、目の前に広がる光景は？

視界一杯。星獣の巨大な顔面。それだけだった。

全長五十メートルを超える星獣。その顔が、手を伸ばせば届く場所にある。

——ガアアアア！

《やつと、見つけた！》

「そうかよ！ 《俺もだ》」

俺は魔力波を飛ばし、星獣の言葉で返事をする。

一瞬、星獣はポカンとした。俺が喋れるとは思ってもいなかったに違いない。

王剣を構え、無防備に晒された眉間に突き込む。

《ギイイイ！》

魔力で脳に響く悲鳴が心地良い。

俺も、待っていた。無条件に力を振るい、好きに殺せる大物を！

俺の体が星獣の体温を守る泥にめり込み、肉を抉った。

たちまち高圧のマグマみたいな血が飛び散る。ソレを魔法で吹き飛ばしながら、有り

余る膂力で更にねじ込む。今の俺だから出来る芸当だ。

俺は巨大な一発の弾丸になって、星獣の脳を抉っていく。

《ギアアアアアア！》

断末魔の悲鳴。星獣の核となる魔石は四つある。その内で一番大きいモノを今、砕い

た。

俺はそのままの勢いで、星獣の頭蓋を切り裂き飛び出ると、翼をはためき空へと舞い上がる。

眼下では、巨大な星獣がゆっくりと大地に倒れ伏す所だった。地響きが上空まで聞こえてくる。

それにしても、ここまで攻め込まれるとは。

やはり、人間ではロクな抵抗が出来なかつたに違いない。

そう思った俺の想像は、城下を振り返った時に吹き飛ばされた。

上空から、俯瞰して見えた城下は、散々に星獣に踏み潰されて、城壁は抉れていた。

星獣の泥で汚れた街の様子は、バケモノが散々に暴れ回った証拠である。市民が一丸となつて、星獣に抵抗したのだ。だから嫌気をさして裏の崖から回つてきた。きつとそうだ。

街中に、赤黒いシミが広がる。大勢の市民が、踏み潰されて肉片になり果てた。

その事実には、ゾツとする。

それだけじゃない、きつと国民皆兵の精神で戦つてしまった。

メインストーリーで龍の山車を乗せていたレールはそのままに、今は空っぽのトロツコが並んでいる。物資を次々運び出したんだ。

どこへ？ 戦場だ。きつと全ての物資を投げ出した。

そこから続く街道、大森林や北の山脈に続くか細い道に、点々と人が、馬が、そして見た事も無い怪物が倒れている。

みんな戦ったのだ。戦って死んだ。

眠り続ける俺を守る為に。

気が付くと、ギリギリと音がするほど、奥歯を噛み締めていた。

『私と共に死にたいと言う者を、止めるつもりはありません』そうは言った。

だが、そんな人間が何人居るのかと思っていた。しかし、どうやら、帝都のほぼ全ての人間が、俺の為に死んでしまった。

細い街道をなぞるように、ぼつりぼつりと死体が並ぶ。蟻の行列に、殺虫剤をぶちまけたらこうなるだろうか？

こんな時だと言うのに、そんな・残酷なたとえが頭を巡り、自分が嫌になる。

「みんな、みんな、死んだ？」

あの日の帝都には、世界中の要人が集まっていた。

ヨルミちゃん？ ネルネに、カラミテイちゃん、リヨンさん。

それに、木村は、田中は？

積み上がった死体を俯瞰して、戦慄する。

「終末の刻」

思い出した。エルフの伝承で、世界の終わりを示す黙示録。

真冬の分厚い雲が遙か上空に蓋をして、雲の合間からときおり光が差し込むと、ス
ポットライトみたいに、凄惨な光景を浮かび上がらせた。

本当に、世界の終わりの光景だった。

終末の刻2

空から帝都を見下ろすと、ゾツとするほど不気味な戦争の形が見えてきた。

北の山脈から帝都まで、死体が点々と続いている。

降りたって良く見れば、人間の死体も僅かにあるが、緑色の猿みたいな怪物の死体が多かった。

意味が、解らない。

い。こんなの、今まで見たことも聞いたことも無い。誰の記憶にもこんな怪物は存在しない。

死体を見ればその特性も解る。人間の死体よりずっと多いので、きっとあまり強くはないのだろう、それどころか知能だって低いハズ。

陣形も組まずに、馬鹿みたいにひたすらに帝都に向けて突撃し、順番に次々と殺された。だから道ばたに点々と死体が転がっているに違いないのだ。

それでも構わずこの怪物は突撃を繰り返し、死体で道を作って帝都の近くまで辿り着いた。こんな不気味な生き物があるか？

ゴブリン。テレビゲームを知る俺は、そんな名前呼びたくなる。

この期に及んで、全く知らない種族が紛れ込んでくる。
この薄気味悪さはどうだ？

世界が一変してしまった。こんなテンプレ的なモンスターが跋扈する世界じゃなかったはずだ。

気持ち悪さを振り払う様に、翼を広げる。

前線へ行こう。

いや、前線など、とうの昔に崩壊している。だからこんな所までモンスターの死体が転がっているのだ。

きつと見たくないモノを見る事になるだろう。

それでも、俺は翼を広げた。

全部終わりにする。俺にはその責任があるはずだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「見えた」

不安と焦燥を抱え、俺は空を飛んだ。

程なく見えたのは北の平原。そこに広がる地獄絵図だった。

「星獣の、死体！」

巨大な星獣の死体が、十、いや二十?? どうやって倒したんだ？

俺が倒したのは、抜けてきた最後の一体だったに違いない。星獣がそこら中で死んでいる。

しかし、当然ながら人類の被害も大きい。蟻のように踏み潰されて、平原に赤黒いシミが滲んでいる。

死体ばかりの戦場は、不気味な程に静かだった。

誰か生きていてくれと、上空から必死に探す。すると平原の隅に蠢く異形があった。銀色の蜘蛛型ロボット。きつとソルステイスの同系機。

殺す！

俺は蜘蛛へと目掛け加速する。王剣を構えたまま、音速に迫る勢いで落下する。

派手な爆発音。舞い散る金属片と大量の土砂が俺を中心に津波みたいに広がって、残されたのは、地面に空いたクレーターと、俺だけだった。

指は残らず吹き飛んで、腕は断裂。羽で守らなければ服だって消し飛んだに違いない。

落下の勢いに加え、魔法でも加速して、音速で地面にぶち当たればこうもなる。

完全なオーバーキル。蜘蛛型ロボは玩具みたいにひしゃげて壊れ、一方、俺の腕はすぐさま元の形を取り戻す。

完全に人間を止めた再生能力だ。だが、今は頼もしい。

流石にガタが出始めた王剣を握り締め、俺は蜘蛛が囓っていたモノを見つめた。箱？ いや、小さな魔導車だ。

横転していたソレを力尽くで元に戻すと、歪んで開かない扉を強引に引き千切った。中で眠るのは……褐色の少女。

カラミティちゃんだった。

気絶している。え？ なんで？ ココに？ 怪我?? 頭にちいさなたんこぶ、それだけ。ひっくり返った時に頭をぶつけたんだ。この程度なら！

俺は、有り余る魔力で回復魔法を掛けていく。

すると彼女の瞼がゆっくりと開いて、朦朧とした瞳を露わにする。

「てんしさま?..」

カラミティちゃんは俺を見て、夢見心地にそう言った。その瞳にゆっくりと意識が戻っていく。

「えっ? ユマ様! 嘘っ!」

「はい、私です」

「よかった! よかったよお!」

泣きながら抱きついてくる。それよりも、今は状況を教えて欲しい。

「みんな! みんな死んじゃった!」

その言葉がじわりと脳に染み込んだ。

みんなとは？ 誰が？ どこまで？

いや、良い。揺れるな。全員死んだものとして考えろ。

だってそうだ、寂しくなんて、ないだろう？

どうせ、俺も、ソツチへ行く。

「私が眠っている間、何があったのです？」

「それは……」

聞いた言葉は大半が予想通り。目覚めない俺を守る為。全軍で星獣の群れを迎え撃つたと言うモノだった。

それも、出撃したのは帝国軍だけではなかった。ヨルミちゃん王国軍に、リヨンさんのプラヴァスの兵も、あの場に揃っていた全てが動いてしまった。

人類と、古代人の、存亡を賭けた総力戦。

「そんな……」

弔おうにも、全てはグチャグチャの赤黒いシミになってしまった。どれが誰だか、もう解らない。

「じゃあ、カラミティさん、アナタは？ どうして？」

「わ、私も戦ったんです。ネルネさんと……」

言うなり、ボロボロと泣き出してしまおう。いま、なんて言った？

「ネルネ？ どうしてネルネが？ どこに？」

「あ、ああつ……」

駄目だ、錯乱している。

……いや、解つてる。きつと死んだんだ。ネルネも、みんなも。

俺はカラミティちゃんを抱えて、空に飛んだ。

死に瀕しているのは彼女だけじゃない事に気が付いたから。目指したのは森の中、多くの運命光が集まる場所へ目掛け、カラミティちゃんを抱えて飛び降りた。

「ユマ様ッ!？」

「ユマ様だっ!？」

「我らが天使が戻ったぞ!？」

「勝てる! いや、勝った! 我々の勝利だ」

狂った様に快哉をあげる。しかし、状況は悪い。怪我人だらけの中、押しかけるゴブリンの群れに抗っている。

……なら、みんな、死ね!

『我、望む、この手より放たれたる風の刃を』

俺が生み出した魔法の刃が、ゴブリンを、木を、味方さえ区別無く切断した。

生きとし生ける者に、等しく死をもたらず風の刃が、全てをなぎ倒していく。

見晴らしがよくなった視界が、赤に染まった。

味方さえ躊躇無く殺す俺の魔法に、アレだけ熱狂的だった喝采がピタリと止んだ。

ソレでも俺は躊躇なく血の絨毯に踏み込むと、魔法に巻き込まれた味方の死体を鷲掴みにする。

「あつ、ぐつ、ひめさ……」

「黙っている」

胴が千切れても喋れるモノなんだな。そんな取り留めも無いことが脳の表面を滑っていく。

『我、望む、汝に眠る命の輝きと生の息吹よ、大いなる流れとなりて傷付く体を癒し給え』

回復魔法。それも超精度、超魔力で行使する。真つ二つに泣き別れになった胴体にくつつける位はワケが無い。

「……………」

あまりの光景に、皆が息を飲む声までも聞こえてくる。

水をうったような静寂に、俺の翼が羽ばたく音だけが響いた。それが益々、人間離れした俺の力を主張する。

「どうだ？ 俺は、もう、バケモノだ。」

「お前らに守って貰う必要はドコにも無い。」

「ゆ、ユマ姫。コレが……ユマ姫？」

困惑した声。だけど、コイツらは俺の予想を超えていた。

「ユマ姫！ ユマ姫！ ユマ姫！ ユマ姫！」

無数の掛け声が、俺を称える。

まったく、馬鹿ばかりだ。俺は飛ぶように移動して、森の中、敵の残党を狩って回った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「誰か、状況を説明して下さいますか？」

目につく敵をあらかじめ倒し。俺は期待を込めて声を張る。

せめて、誰か、誰でもいいから生き残ってはいないのか？ 現れたのは、たった一人、

憔悴しきった一人の少年。

「フィーゴ君だった。」

木村の腹心にして、カラミテイちゃんの旦那さんになる人だ。女の子に見紛う榛色の瞳が、絶望に揺れている。

まさか？

嘘だろ？ 言うな！ 言うな！

……いや、良い。今更だ。そうだろう？

「申し訳ありません、ユマ様。我が主、キイムラ様が……」

「そうですか……」

木村が、死んだ。

目の前が、暗転する。アイツが死んだことよりも、一緒に死んでやれなかった事がないにより悲しい。

「何があつたか、教えて貰えますか？」

「はい……」

経緯はこうだ。

眠った後、俺は昼になっても起きてこなかった。その間も、太陽の下照らし出された星獣の群れに帝国は大騒ぎ。

俺を起こそうにも、侍女であるシャリアちゃんが決して許さない。

そもそも、昼過ぎにもなつて起きないのはオカシイ。よほど疲れているのだと俺を残して進軍を決めた。

出陣したのは王国、帝国、プラヴァスの、歴史的な連合軍。

あの星獣の群れを見れば、ココで戦わない選択肢はドコにもなかったと言う。

「キイムラ様は言いました、アレは古代人の軍勢だと。負ければ人類は残らず奴隷になるしかない」と

エルフは古代人の奴隷であり、そのエルフと古代人のハーフこそが人間である。古代人が治める世界では、人間もエルフ等しく奴隷だ。

「しかし、星獣相手に戦う術など」

「それが……コレです」

「コレは？」

森の中、砕かれた巨大な大砲の残骸が転がっていた。直径は白砲に近いが、長い砲身はカノン砲のようでもある。コレは？　なんだ？

「コレは、魔導砲です。キイムラ様がエルフと作ったと聞いています」

聞けば、プラヴァスのラーガインの砲身を解析し、エルフの技術で作ったモノらしい。

火薬の力で初速を得て、砲身の魔道具で更に加速。トドメに複数のエルフの戦士が矢の魔法で加速する。

そうか、大森林に近いココならばエルフの戦士も戦える。俺のリボルバーと一緒にだ。火薬と併用すれば、圧倒的な火力が出る。

「しかし、魔導砲は大きく、乗せた魔導車の速度は遅かった。皆が決死隊となり、星獣の動きを止めたのです」

その結果が、平原の無数の死体か！

星獣の足止め。簡単に言うが、あんな巨獣を止める術などあるはずが無い。

じゃあどうしたか？ 平たく言えば、蟻んこみたいに群がって、自分から踏まれに行つたのだ。

「しかも、敵は星獣だけではありませんでした。緑色の猿までが大量に現れて」

「アレは？」

「キムムラ様は、アレこそが古代人だと」

「どう言う事です？」

「私にも解りません。敵は恐るべき魔導兵器を幾つも操っていました。あんな猿が作れるはずがない。……でも」

「でも？」

「キムムラ様は進化と退化の果ての姿だと」

「……………」

古代人は、元々星の健康値の膜の中で生きていた。ソレが健康値に異物と判定されるようになり、魔力も暴走し文明が崩壊。

大気が薄く、電磁波も降り注ぐ地表に古代人は放り出された。

過酷な環境で生き残る為に肌の色は変色、食糧も少なく済むように小柄になったのだ

と、木村が残したレポートには記載されていた。

……メモ書きの様に、緑の肌で光合成を行っている可能性にも言及されていた。この世界の窒素固定プロセスに魔力が関わっていた事から、あり得ない話ではないと言う。「しかし彼らは、むしろ魔導兵器に操られているようでした。兵器を操縦している人間はここまで姿を現していません」

フィーゴ君はそう言うが、姿を現していないではなく、現せないのだ。

コールドスリープで命を繋ぎ、退化を免れた古代人は、魔力のあるこの世界では生きられない。

最悪、脳みそだけは機械の中に収まっていたかもしれないが。

「絶望的な戦局で、唯一の光明となったのは、星獣と魔導兵器で足並みが揃っていない事でした」

どうやら星獣は俺が居る帝都を目指し、古代人の機械は大森林の奥地、エルフの古都を目指していたと言う。

古代人は星獣の洗脳に成功などしていなかった！ オカシイと思っていた。あの星獣は、俺を殺す事を目的にしていた。確固たる意志があり、操られてなど居なかった。

「それでも結局、一目散に帝都を目指す星獣を前に戦線は崩壊、我々は数匹の星獣を倒すに留まりました。姫様の無事を按じ、多くの兵が後を追って平原を離れ、ソレを追って

緑の猿も……」

街道に連なる死体はそう言う事か……いやでも、星獣は一匹しか流れてこなかった。

それに、なにより……

「なぜ、カラミティさんや、ネルネまで戦っていたのです？」

「それは……」

「それは、私が説明するわ」

「ヨルミ様！ 安静に！ 無茶です！」

現れたのは、包帯でグルグル巻きのミイラになったヨルミ女王だった。

俺は、有無を言わず回復魔法を発動する。

「ありがとう、生きながらえてしまったわ」

彼女には、腕がなかった。こればかりは魔法では治せない。回復ポッドがなくては無理だ。

「大砲を撃とうとしたら暴発してね、日頃の行いかしら」

そんな事はない、良くある事だ。この世界の大砲は木村や黒峰の急ごしらえで、技術の進歩に由来しないからその多くは完成度が低い。撃つだけで命懸けなのだ。

「私の乗る魔導車は、蜘蛛のような敵の魔導兵器に襲われました。鉄で出来た兵器を前には、鍛え上げた騎士も役にたたず、ただ死を待つばかりに」

それで、大砲か……。

「ネルネさんが苦し紛れに撃った銃が、魔導兵器を破壊したのです。彼女には天性のセンスを感じた私は、彼女とカラミティさんに大砲を乗せた魔導車で遊撃に回るよう命じたのです」

「ネルネ凄かったんだよ！ 何匹もの星獣を撃ち抜いたんだもん。でも最後には砲が破裂して……」

悔しそうにカラミティちゃんが泣いている。

そうか、そうやってみんな俺の為に、俺が眠る帝都に星獣を行かせないように。ひたすらに大砲やらを撃ちつくし、死んでしまった。

「木村もそうやって？」

「キムラ様は、魔導砲を撃っていました。しかし、帝都に向かう星獣を止めたい人間と、大森林を侵略する敵兵器を止めたいエルフと足並みを調整するのに苦心して」

フィーゴ君は悔しそうにするが、それは当たり前だ。誰もが自分の故郷を優先する。

「セーラと名乗る女性のお陰で、魔導砲を撃つ事は出来たのです。しかし、巨大な魔導砲は目立ち過ぎました。最後には星獣に踏み潰されて」

「では、この下に？」

ひしやげた魔導砲を差す俺の指は、情けないことにすこし震えていた。

「この下に木村が居る？」

「いえ、もう一つの魔導砲、平原の南側で……死体を引き上げることも出来ず」
「案内してください……」

俺はフィーゴ君を抱え、飛び立った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

戻った荒野には、やはり生きて動く者はドコにも居なかった。

無数の死体と血の染み、壊れた魔導兵器と、山のような星獣の死体が転がっている。普通の戦争ではこうはならない。皆が死兵となって、誰も動かなくなるまで潰し合ってしまった。

「あそこです」

フィーゴ君が指差したのも、そんな瓦礫の山の一つ。

俺が魔導砲の残骸を持ち上げると、その下に緑のマントが挟まっていた。マントをめくると、下には木村が隠れていた。

死体となって。

かつての俺とは違う。死体を見間違う事は決してない。

……死んだ、か。

不思議な程に、死体を見てもショックを受けなかった。

むしろ、コレから俺もソツチに行くから、待っていてくれと言う思いがある。

俺は、形見として、木村の指に嵌まっていた自在金腕ルーデルオンを外して、指に巻き付ける。

「あの……コレ、ユマ姫様が現れたら見せてくれって」

フィーゴ君は木村の胸ポケットから、一通の手紙を取り出した。

勿体ぶる必要はない、俺はすぐさま開封する。

『高橋、いやユマ姫。アナタが星獣の夢の中で聞いた敵の名前。

魔力波で会話する星獣なので、意味を調べるのには苦勞しました。

ですが、星獣を操ろうとする古代人の記録にも、同じ名前が何度も登場するのです

古代人が呼ぶ、その名は、ザイア』

「ザイア……」

俺は木村の手紙を握り締め、燃やした。

そうだよな……そんな事だと思っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は、エルフの古都に向かっていた。そこに田中が向かったと聞いていたから。

星獣を倒すのに、エルフの協力は欠かせない。田中が大森林に向かうのが、協力を維持する条件だったのだとフィーゴ君は言っていた。

確かに、あの巨大な星獣が相手では、田中の剣はそれほどの役にはたたない。

それよりは、魔導兵器を切り刻んだ方が田中を戦力として活かせる。木村の采配は間違っていないだろう。

空を飛ぶ俺は、どうか生きていてくれと思いつつも、心のどこかで、いつそ死んでいてくれと、皆で一緒に死にたいと、歪んだ願いを抱えている自分を否応なく自覚した。「なんだろう、この気持ち……」

どれだけ捻くれて、歪んでいるか？

もういつそ、全てが壊れていて欲しいと願ってしまう。

まるで、帝国に故郷を追われ、兄やセレナを失ったあの時みたいだ。それほどにやけっぱちになっている。

「それも良いか」

もう全部終わりだ。最後に向けて、ただ走るだけ。

終点に近づくにつれ、俺は恐ろしい光景を目の当たりにする。

おびただしい程の魔導兵器の残骸。エルフの古都に続く道のりにひたすらに続いていく。

「これを、全部田中が？」

凄惨な戦果だ。まさか本当に一人で……。

戦慄すると同時に、空から見つめる光景に、俺はどこか懐かしいモノを感じていた。そ

うか、あの日も俺はセレナと空を飛んだのだ。アレが生身で空を飛んだ最初の記憶。あれも冬の終わり、当時と同じように南をみつめると、同じように春の足音が迫っていた。

あの時、俺達は魔導コンパスを頼りに古都に辿り着いたつけ。

今の俺に、そんなモノは必要無い。今の俺は魔力の流れが見えるから。

魔導コンパスは地球のコンパスとは違う。地磁気が存在しないこの世界、磁石は北を示したりしないから。

魔導コンパスは、魔力の流れを可視化し、必ず古都を指し示す。全ての魔力は古都から地上に吹き出しているのだ。

つまり、暴走した魔力プラントはエルフの古都に存在する。

考えてみれば解りきった話であった。帝国軍も古代人も、ココを目指して進軍して来ただに違いない。世界の命運を決めるのはこの場所だ

十二歳の時だから、もう四年前。

四年ぶりに、俺はセレナとの思い出の場所。エルフの古都へと舞い降りた。

「ななほん」

——ゴオオオオン！　ゴオオオオオン！

そこで俺が見たモノは、二体の巨大なエルフ像。参照権で確認するまでもなく、試練

の洞窟の左右に立っていた石像だ。

なんと、それが動いている。群がるゴブリンを、蜘蛛の機械を、ちぎっては投げの大暴れ。この世の光景とは思えない。

初めから、魔導兵器だったのだ。きつと時が来たらプラントを守る為に稼働するように作られていた。

きつとエルフ達も、かつてはプラントの守人だったに違いない。それが吹き出す魔力が強くなるにつれ耐えられず、やむなく遷都したに過ぎないのだ。

「お疲れ様」

俺は多重に起動した風の魔法を縦横無尽に発動する。

それだけで、石像も、古代兵器も、ゴブリン達もバラバラに弾け飛んでいく。

俺の魔力値は千六百。石像も、古代兵器も、ゴブリンだって健康値などロクに持っていないのだ。俺の魔法に抗う術はドコにもない。

そうして、俺は試練の洞窟に飛び込んだ。あの日と同じように。

違うのは、隣にセレナが居ないこと。そして、俺が入り口を塞いでしまうことだ。

俺は魔法で洞窟の入り口を塞いでしまう。こうすれば、もう敵は入って来れない。

……と、同時に洞窟の中の魔力値が跳ね上がる。

当たり前だ、魔力の出口を塞いでしまえば、殺人的な魔力が洞窟に満ちるのは当たり

前。だから塞ぐ事も出来ず、開けっぱなしになっていたに違いない。

……まあ、良いや。どうせみんな、死ぬ。

コレから戦う敵が、思ったとおりの相手なら、誰一人逃れることなど出来はしない。洞窟の中には、既に入り込んだ敵の魔導兵器やゴブリンの群れが潜んでいた。そのどれもが既に戦闘能力を失った姿であった。手足が千切れ、瀕死の状態。

トドメとばかりに、俺の所為で濃厚になり過ぎた魔力にジタバタと藻掻いている。そうして乗り込んだ最深部。そこにアイツが居た。

「田中……」

大の字になって寝転ぶ田中。俺は慌てて駆け寄った。

その顔色は、紙のように白いじゃないか！俺はコイツのこんな顔を見たことがない。

魔力を散らさないと！

「よお……俺はやったぜ」

死にそうになりながら、それでも差し出してきたのは、大きめの魔石だった。

「木村のヤツが解答を^{こたえ}だしたが、俺だつてコイツを殺れなきやカツコがつかねえ」

見渡せば、白い粘液が辺りに散らばっている。コレは……

王蜘蛛バウギユリヴァル！ 真つ白な不定形魔獣。父様も苦戦したバケモノを劍の一本で倒したの

か。

「魔獣なんだから、魔石がある。ソレをぶった切ればこの通り」

「しゃべるな！ 死ぬぞ！」

いや……もう手遅れだ。運命の光が消えかかっている。

それだけじゃない。人一倍溢れるように輝いていた、田中の健康値の輝きが、すっかり消え失せている。

多分、その前から無理をし過ぎてている。体中傷だらけ。なのに健康値が足りない。これでは回復魔法が毒になる。

「ここから先は、ネズミ一匹通してねえ……みんなみんな斬り刻んでやった。俺はもう満足だ」

「喋らないで下さい、すぐに外に……」

魔力で健康値がすり減っている。入り口を塞いでなければ……俺はなんて馬鹿な事を！ 田中がココにいる可能性に思い至らないなんて！

いや、違う。結局間に合いはしなかった。田中の胸には大きく抉れた傷がある。人間の魔石がある場所だ。ココが壊れると、健康値も魔力もマトモに働かない。

「ああでも、本当は、俺は、お前を」

「何です？ なにが！」

俺に出来る事なら、聞いてあげたい。

……いや、聞いて良いのか？ 俺はココで死ぬのにな？ 俺はコイツの墓を作る事すら出来ないのに。

でも、もう、それきりだった。田中は二度と、喋ろうとしなかった。

死んでいた。あんなに強かった運命の光が、どんなに目を瞑って探しても。もう見えない。

なんで？ どうして！

いや、コレで良いんだ。コレで心置きなく終われるじゃないか。

俺は、何故だか無性に、ホツとしてしまった。もう頑張る必要がないんだって、安心すらしてしまつたんだ。

——キュウ！

そしたら、可愛らしい腹の虫が鳴いた。

そうだ、俺は寝込んだまま、ロクにご飯も食べていないじゃないか。

『参照権』で思い出す。田中の言葉が聞こえてきた。

「なあ？ 俺が死んだら俺も喰って良いぜ」

なるほどな。全部お見通しか。それがちよつと癪に障る。

「いただきます」

俺は、田中の体に口付けた。

ザイア

試練の洞窟の最深部。

あの時、俺とセレナは祠からビー玉みたいな宝玉を持つて帰った。

巨岩をくり抜いて作られた荘厳な広間、歴史を感じさせる光景に圧倒されたっけ。

そうそう、ココにも巨大な像が二つ並んで立っている。

あの時はただ鎮座してただけの像が、今は侵入した俺に反応し、ゆつくりと動きはじめるじゃないか。

「無駄」

俺は王剣の一振りですべて巨像を粉々にする。今の俺には敵じゃ無い。

祠の裏から吹き付ける強力な魔力だつて、むしろ心地が良いぐらい。そう言えば、元気がいっぱいなのはセレナが可愛かったっけ。アレだつてきつと魔力の影響だ。

あの時、祠の裏からひよっこり王蜘蛛バウキユリウヅアルが出て来た時点でオカシイと思うべきだった。この先が魔力の吹き出す場所なのだ。魔力が特別に濃い場所なのだ。

巨石がそびえる祠の裏手が、今はポツカリと空いている。そしてあの時よりもはるかに強烈な魔力が吹き出していた。

「セレナ、私、行くよ」

俺は胸に埋まったセレナの秘宝に語り掛ける。

あの時、俺とセレナはここで引き返した。

だけど今日はここから更に、奥へと進む。そして、全てを終わらせる。

飛び込んだ洞穴は、はるか長く地下へと続いていく。

吹き抜け？ いや、空調ダクトだ。地下世界には良くある設備。時折ぶち当たる間仕

切りを王剣で切り裂いて、俺は下へ下へと降りていく。

きつと、終点は近い。

さて、辿り着いたのは近代的な建築物。

一口に古代遺跡と言ったって格がある。ただの倉庫だったロンカ遺跡の地下、大学の設備みただった黒峰の屋敷。俺が黒焦げになった場所なんて、種の保存を目的にした研究施設だった。

その中でもここは別格だ。当時、全盛を極めた古代文明の極致。もつとも栄華を極めた時代に、技術の粋を集めて作った魔導プラント。

設備のレベルがまるで違う。

コンコンと壁を叩く。コンクリートと言うよりは、白いプラスチックのような壁、
だけど強度は折り紙付きだ。王剣だつて斬れるかどうか。

俺は宇宙船みたいな通路をひたすらに歩く。きつとこつちだ、なんとなく解る。

時折現れるドローンや警備ロボなど、触れさせる事もなく処理していく。たかがオモチャに今の俺は止められない。

そうして何かに導かれるように、歩んだ先には大きな扉。何かのドッグだろうか？

開けるには四桁の暗証番号が必要。

設備の割りに余りにもアナログだ。しかし、指紋や虹彩など、体を入れ替えられる世界では信頼出来ない。こんなパスワードに頼るのも、無理はないのだろう。

以前、俺が黒焦げになった遺跡でも同じ様なパスワード入力があったと言う。その時は、木村が繰り返して押しされた跡を見て、推測したと聞いている。アナログ過ぎて笑ってしまった。

だけど、ここにそんな跡はない。普段はカードキーでも併用しているのか、もしくは滅多に開けないか。

さあ困ったぞ？ 王剣で切り裂くにはあまりに壁が固すぎる。

適当に入力して、それから考えよう。さて、何を打とうか？

その時、俺には閃くモノがあった。まさかな……と思いつつ、その数字を打つ。

何って？ そりゃあ迎えたばかりの俺の誕生日に決まっている。

後冬月の十日だから。

0310

ガコンと音がした。

扉がゆっくりと開いていく。

ウソだろ、ツイてる……のか？ それとも向こうから開けたのか？

そして、現れたのは、見上げるほどに巨大な戦車。

「ラーガイン？」

いや、流石にプラヴァスのアレよりは小さい。だが前世でみた戦車よりは倍ぐらい大きい。

その砲身が、ゆっくりとコチラに旋回する。

マズい！ 身を低くして、走る。同時に背後から爆発音と衝撃。コイツ、女の子に向けて戦車の主砲をぶっ放しやがった！

俺は怒りに任せて王剣を振りかぶり、飛んだ。

殺意を乗せて、斬る。魔力を込めた一撃は戦車の装甲を少し切り取るに終わってしまった。

爆発反応装甲？ 斬ったと同時に弾かれた衝撃で、全く剣筋が通らない。

厄介な！ どうする？ ちまちまと削って行くか？

いや、自分を信じる。失敗しても失うのは俺の命だけ！

俺は王剣を腰だめに構え、思い切り息を吸い、吐いた。
濃厚な魔力を吸い込んで、全てを己の体に溜め込んでいく。

来い！

小型ラーガインの主砲が旋回し、コチラを向いた。

今！俺は最大最強の魔力を込めて、結界を張る。

——ビィィィィン

弦が張り詰めるような強烈な音！

ラーガインの主砲は俺へ到達する直前に、結界に阻まれて止まってしまった。

——そして、停止の結界と言うモノは、加速の魔法と全く同じ構造。全く同じ理屈で出来ている。

結界を破れず停止すれば、停止の魔法。

結界を破れば、ソレまでのエネルギーが一気に加速に変わる。デコピンを親指でグツと溜める要領だ。

更にはぶち破った結界の魔力まで推進力にすり替えて、圧倒的な加速が生まれる。

今、主砲の強烈なエネルギーが初速となって、俺の分厚い結界でギリギリと音を立てている。

結界と、主砲のエネルギーがせめぎ合っている状態だ。

そこに、俺の全開の膂力が加わったらどうなるか？

「おおおおおおお！」

俺は腰だめに構えた王剣を、最大最強、全力全開のフルスイングでぶん回す。

キイイイーン！

快音が響いた。そして、閃光。

打ち出された金属弾が空気の摩擦で発火した。ソレほどのエネルギー。そのまま一筋の光線となり、戦車へと突き刺さる。

気が付けば、戦車には大穴が空いていた。それどころか、打球に込められたエネルギーは戦車を赤熱、変形させた。

そして、爆発。

爆風と金属片、破壊的な衝撃が遺跡を揺らす。死を運ぶ衝撃が、俺の体をズタズタに引き裂いていく。

爆風が止んだ後。あんなに固かった遺跡の壁が抉れ、土壁が覗いていた。

「ふう」

ホツと息を吐く。想像よりもずっと上、馬鹿みたいな火力が出た。俺だって巻き込まれて重傷だ。

だけど、引き裂かれた俺の体は、すぐさま元の姿を取り戻す。困ったのはむしろ装備だ。

「ゴメンね、父様」

王剣が、折れてしまった。俺の力で乱暴に振り回して、むしろ、よくここまでよく保つてくれた。

「コレもか」

木村がつくつてくれたウエディングドレス。蜘蛛の糸で編んだ防弾性能を備える生地だって、ボロボロになってしまった。

だけど、爆発の瞬間、伏せる様に身を守った影響だろうか？ 切り裂かれたのはほぼ背中側。体の正面、大事な部分を隠せる程度には布地が残ってくれていた。

つまり、あれだ。示威行進の時に着た、あのエロエロなドレスと殆ど同じ姿になり果ててしまった。

「つたく。アイツは……」

アイツの執念が俺を守ってくれた気がして、苦笑しながら形見の自在金腕ルー・デルオンをさすり、天国の木村に文句を言った。

いや、地獄かな？

そうで無いと困る、俺が行けるのはソツチだ。

俺は武器の一つも持たず、遺跡の最深部に歩き始めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

遺跡の最深部、細い通路に辿り着いた。この通路の奥に求めるモノがある。

俺は直感していた。

長い通路を進むと、ようやく人間らしきモノが出迎えてくれた。

待っていたのは三人の男たち。全員がエルフに近い見た目。目が大きくて耳が長い。

そして、揃いもそろって、髪が、青い。

「チッ」

思わず、女の子らしくない舌打ちが漏れた。青い髪、苛つく見た目をしている所為だ。

俺は嫌な想像に胸くそが悪くなる。

なにせ、こんな魔力が濃い場所だ。人間はおろか、たとえエルフだって、本来なら数

刻と生きられない。

じゃあ、コイツらは一体何だ？ いっそ、聞いてみるか？

「い機嫌よう」

初対面だし、第一印象は大事である。

俺はよそ行きの笑顔で挨拶。まるでお茶会に呼ばれたお嬢様。衣装の露出が激しい

のはご愛敬。いつそ殿方ウケは良いだろう。

しかし、コイツら、こんな美少女が挨拶したというのに返事もしない。

「引き返せ」

「あら？」

喋れるのか、目が虚ろだから喋れもしないのかと思っていた。

「我らは守人だ」

「守人……わたくし遊びに来たのですけど？ 案内して下さらない？」

「帰れ」

そう言つて、杖を構える。

何だソレ？ 触媒か？ そんなもの補助輪と一緒に。自分で未熟と宣言している様

なモノ。

「あら？ その玩具で、私と遊んでくださるの？」

「我々の魔力値は千を超える」

だからなんだよ。

魔力値が千。だからなんだ？ 当たり前だろう？

コイツらは髪が青い。きつと真祖のエルフだ。ハイエルフとでも言うべきか？

……いや、そんなに良いモノじゃないな。

コイツらはホームンクルス、最も自然の生き物から遠く、最も人間離れた怪物。試験

管で生まれた生体兵器。

魔力をドーンと与えられ、爆弾代わりに魔法を使うべく作られた存在だ。

ソレに比べて、俺達は？ エルフはどうだ？ コイツらを程良く薄めて、もう少し安

全に、魔力が低い場所でも運用出来るように作られた存在だ。

戦車と乗用車ぐらいにモノが違う。

……きつと、コイツらもそう思っているに違いない。

「ふふっ」

笑ってしまう、そうだ笑えるじゃないか。

「たったの千ですか？」

「私は千と百だ。それでも歯向かうか？」

三人の内、奥の男がのたまう。

俺は笑いが抑えられない。自分の中身がはみ出してしまふ。

「フヒ、ヒヤヒヤ……」

「笑うな！ 不快だ！」

「笑うなつて？ そりゃ、笑うだろうが！ 何の冗談だ？」

俺は、歯を剥き出して笑ってみせた。

「たったの千？ だったら俺は千六百だ！」

「愚かな……、それとも、魔力値すら知らないか？」

知ってるよ。ソレと、健康値だけは、生まれた時からずっと測って生きて来た。

「ウソだと思ふなら、確かめてみる、その首で！」

「何を!？」

「死ね！」

正面に立つ男の首を刎ねる。防御魔法など、圧倒的な魔力を前に意味を成さない。

「貴様！」

残った二人が多重詠唱。仲睦まじいね。羨ましいよ。掛け合わせて2・5倍ぐらいの威力になるんだっけ？ 骨董品みたいな魔術だ。

どんな魔法だ？ みせてくれよ？ 千と千百。掛け合わせて幾らになる？

「ハアツ！」

ようやく放たれた魔法は、俺の結界に打ち消され、消えた。

「あら、おしまい？」

俺は首を傾げて尋ねる。

「馬鹿な……」

「まさか、せんろつびやく……本当に」

俺は二人の魔法を軽々と受け止めた。俺の魔力値は千六百。コイツら二人は千と千

百。

ただし、魔力値は指数関数的に威力を増すのだ。コイツらが何人居ようと、俺の敵は無い。

「ヤッよなら」

俺が片手を挙げるだけで、二人はバラバラに切り刻まれた。こんな奴らは眼中になり、俺は死体を踏み越え先へと進む。

その足取りは軽やか、血の池でステップを刻み、鼻歌まで歌ってしまふ。

奴らを見た時の胸の奥のムカムカが、もうすっかり消えてしまった。むしろ死んだ三人に感謝までしてしまう。

セレナはどうしてあんなに魔力が高いのか？ 子供の頃の俺は、それがずっと不思議だった。だけど、いつの間に、まるで気にならなくなった。

セレナは特別。ソレで良いのだ。

そこに来てあの男達。青い髪のエルフ。真祖のエルフ。だからセレナは魔力が強かった？

違う！ セレナは特別だ。それ以外の理由なんて、必要無い。

だって、セレナの魔力値は二千。

やっぱりうちの妹が一番なのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
通路の終点。俺は最後の隔壁にぶち当たった。

そして、俺の背後でも隔壁が閉まる。閉じ込められたのだ。
そして吹き出す健康値の霧。

ふうん、今度はそうやって搦め手で来るか。

いや、違う?? そうだ、ココは魔力が濃すぎる。ならばコレは除染作業だ。

例えるならば、宇宙船のエアロック。ココで魔力を除去しなければ、この先の間人が死んでしまうから。

……つまり、この先に居るのは。

こじ開けるまでもなく、ひとりでに前方の隔壁が開いた。

想像通りそこからは一転、魔力が全く無い世界となった。それでも俺は、内包する魔力で十分動ける。

霧ギョルドスの悪魔に苦しめられた昔とは違うのだ。

歩みを進めると、宇宙船みたいな無機質な部屋に木製の家具が目立つようになった。これまでと打って変わって、随分生活感がある。

居住スペースだ。良く見ると部屋を区切る、シダのすだれまで吊されていた。残念ながら枯れてしまっているが、エルフの王宮でも良く見たヤツである。

それらに若干の懐かしさを感じながら、俺は最後の部屋に踏み込んだ。隔壁を強引にこじ開ける。

「おじやましませーす」

最後の部屋、そこはこの遺跡の管理室だった。無数のモニターにはべらぼうな警告が踊り、耳に痛いほどアラームが鳴り響く。

管理室の主だろう。部屋の中で、一人の古代人が待っていた。全てを諦めたように、ぐったりと椅子に背中を預けている。

「よくも来たわね、バケモノ。殺すなら殺せ、どうせもう誰も助からない」
手で顔を覆い、後悔に塗れる銀髪の女性。俺はこの人を知っている。

「あら、傷付きますわ。わたくしのドコがバケモノなのでしょう？」
俺は空いている椅子に勝手に座って足を組む。

その余裕にあてられたのか、目の前の女は狂った様に叫び始めた。

「一体、お前は何者だ!? 高濃度の魔力にも、低魔力下でも行動可能! 傷はただちに癒え、魔法も力も人間離れしている! どうやって!? アイツらはどれだけ悍ましい人体実験の果てに、お前のような存在を生み出した!」

なるほど、俺を古代人の尖兵だと思っているのか。

とんだ勘違いだ。

「あら？ 私がどうやって生まれたのか。一番良く知ってるのはアナタでしょう？」
「お前は、何を言っている」

呆然とする女性に向けて、左手でボロボロになったスカートの切れ端を掴み、右手で胸を押さえてのカーテシー。

「お久しぶりです、ゼナ。いいえ、こう呼んだ方が良いですか？」

——お母様、と」

「まさか……」

呆然とする実の母親に、娘である俺は初めての自己紹介。

「私はユマ・ガーシエント。」

エリプス王と、古代人の研究者ゼナの間に生まれたお姫様。それが私です」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「まさか、そんな事が……」

俺は、ゼナに外の様子を説明した。

彼女が迎え撃とうとしていた古代人の軍勢は既に滅びている。同時に人間の軍勢も死に果てた。

しかし、ゼナはそれどころではないと言った様子。

「本当にあの子が、あの赤ん坊が、アナタなの？」

ゼナが気にしていたのは、結局は俺の事。

「ええ、私はアナタから生まれた子供です」

「だって、だって、あなたは普通の子供だった。いいえ、いつそ病弱だったぐらい。濃厚な大森林の魔力で、死んでしまうかもって思っていたのに」

……やっぱり、知っていた。それでも敢えて俺を父様に預けて旅に出た。

その理由は、増大した魔力の原因調査。そうだろう？

「本当です。私は母に、パルメに実の子供のように育てて貰いました」

「……なんで、それでどうして？」

「あなたも知っているでしょう？ 帝国が森に棲む者の、いいえ、あなた方が言うところの人造人間の国に攻め込んだのです」

「……………」

やはり知っていた。知っていて、ココに居た。出たかも知れなかったのだ。

「……みんなは生きてるの？」

「死にました。私以外、みんな、みんな!! あなたの大切な人は、ひとり残らず死にました」

俺がそう言うと、ゼナはハッと息を飲み、顔を蒼くしてへたり込んだ。

不謹慎だけど、ソレが無性に嬉しかった。やはり父と母は愛し合っていた。父様は古

代人に騙されて結婚した哀れな王ではなかった。それが、なによりの救い。

「私は……」

「ゼナ、アナタは、コールドスリープを繰り返して、世界を見守ってきた」

「どうして、それを！」

「やっぱりだ、彼女はここの管理者だった。」

俺の予想と、ゼナの答え合わせ。おおむね俺の予想は当たっていた。

ゼナは元々ココの管理者。そしてプラントが暴走した後も制御を続けていた。しかし、吹き出す魔力を止める術はどうとう見つからなかった。

少しでも蓋をして、魔力の放出量を調整したモノの、完全に蓋をすると魔力圧が高まってプラントは爆発してしまう。

ちよつとした刺激で爆発してしまうプラントの前に、彼女はコールドスリープを決める。

「圧力が高まったら、コールドスリープから目覚め、何度となくその原因を取り除いたわ。よく出口が塞がってしまうのよ。時には人造人間の生き残りがこのプラントにちよつかいを掛けないように、政治にも介入してきたのに」

プラントの出口に神殿を作らせ、エルフに管理させていた。

帝国もだ、あの皇子の記憶。時には実力行使も辞さなかったに違いない。

その度に、外の魔力下で活動出来る様に彼女は自分の体を改造した。過剰な魔力に命が削られて、髪を赤く変じながらも。

「それが、数年前からどうやっても魔力圧の上昇を止められなくなったの。仕方無く私は施設周辺の大森林に原因がないか、体を凶化して探し回った」

険があるゼナの苦しそうな顔が、すこし緩んだ。

「そこで、あの人に出会ったの」

当時のエリプス王子。父様だ。

「人造人間の末裔、その王族。いけないと思ったけれど、私は愛してしまった」

そうして身籠もったのが、俺だ。

「だけど、任務は放棄出来ない。子供達の未来の世界を守る為にも。私は森の外、あいのこ達が生きる世界も調査した。でも、結局なにも解らず仕舞い」

そして、お腹の俺が生まれてしまう。ゼナは慌てて俺をエリプス王に預け、そして再びこの施設に戻ってきた。

「解ったのは、もう魔力の暴走を止められないと言う事。なんとか枷を嵌めようとしたけれど、星の魔力は今にもはち切れそうな程に高まっている」

それでも、なんとか作業を続けて居たらしい。

ココに居ても、外の様子はドローンで断片的に窺えるのだと言う。帝国が攻めてきた

事をゼナは知っていた。

「ただ、凶化には限界がある。ポーネリアだって凶化したまま壊れてしまった。長年調査で外に出ていたゼナはもう凶化する事が出来なくなっていた。

「狂いそうなほど心配だった。あの人の事、ソレにあなたも……まさかこんな事になってるなんて思っても居なかったけど」

俺は鼻で笑った。今更だ、今更なに言われても、俺にとってゼナは母親じゃない。俺の母親はパルメだけ。それもあの日、死んでしまった。

ソレよりも、古代人が突然攻めてきた理由。そっちの方が気になった。

「最近、外との通信が復活したのよ。どういう訳かね」

「……きつと、ソルン達が何かやったのだ。奴らも外とコンタクトをとっていた。通信塔でも復活させたに違いない。」

「外の彼らは、プラントを壊せば全部解決すると思っていた。そんな訳ないのに！ そんな事をすれば、それこそ大爆発して、誰も住めない世界になる。でも、アイツら何度説明しても、理解しようとしなかった」

ゼナは悔し涙を流しながらデスクを叩く。

なるほど、外から攻めてきた古代人、その上層部はココにゼナが居る事を知っていたのだ。そして、それでも、プラントさえ破壊すれば世界は救われるのだと、かりそめの

希望を捨てられなかった。

コールドスリープで種を繋ぐだけの古代人も、千年の時の前に、もはや限界だったのだ。

外の世界で生き残った同胞とその子孫も、遺伝子の劣化でゴブリンみたいに変じてしまった。

いつそ世界が滅びてしまえば良い。そう思っていたのは、俺だけではなかったと言う事。

ゼナがエルフと手を組んで、魔力溢れる世界を作ろうとして嘘をついている。その可能性に縋ってしまった。

実際は、高濃度の魔力はエルフすら害する。そんな事を願っているはずがないのだ。

「もう終わりよ。もうすぐ信じられない様な爆発が起こる。もう誰も止められない」

高まり続けるプラントの圧力は、俺達が話している間もひっきりなしに甲高いアラームで危険を報せているのだから。

なるほどな、魔力暴走の原因が解らないか。

「私には解りませんが、魔力が暴走した原因が」

俺がそう言うのと、ゼナはガタリと椅子を蹴飛ばし立ち上がる。その顔には信じられないと書いてあった。

「なんで？ なにが？」

「簡単な事です、初めから魔力など操れるモノではなかった。プラントなど作ろうが作るまいが、結果は変わらなかったでしょう」

「それは、どう言う？」

問い正されても、俺に答えるつもりはなかった。

きつと、千年以上追い求めた答えだろうが、解説してやる義理は無い。俺達を見捨てた事、後悔したまま死んでいけ。

「私はプラントの中心部に向かいます」

「馬鹿ね！ 今、あそこにどれほどの魔力が渦巻いていると？ それだけじゃない、マントルの付近は高温高压の地獄よ。生きていられる場所じゃない」

「それでも向かいます、このままでは終われない」

管理室からは、プラントまで直通するエレベーターが存在していた。長年稼働していなかったソレに、俺は迷わず飛び乗った。

当然、コレが今生の別れ。泣きじやくるゼナは俺に尋ねた。

「最期に、最期に……あの人はなんて？」

まったく口クでも無い親だ。死んでいく娘を前にして、死んだ男の事が大事だなんて。

でも、不思議と苛立ちはしなかった。俺の事を心配されるより、その方がずっと嬉しい。

俺は参照権で思い出す。

「ゼナ！ 会いたかった……と」
「ツ!?!」

エレベーターが閉じる瞬間。俺がそう言うなり、ゼナはボロボロと泣いた。泣いて泣いて、蹲った。

泣きじゃくるゼナをガラス扉越しに見守りながら。俺を乗せたエレベーターは、この星の深部へと降りていく。ソレはどこまでも続く奈落の底のようだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

暑い。俺が暑いと思うのだからよっぽどだ。

高温高压高魔力。エレベーターはとつくの昔に壊れてしまった。俺は生身でエレベーターの縦穴を自力で舞い降りる。どこまでもどこまでも、はるか地の底に向かって。

そうして舞い降りた終着点。見渡す限りの大空間に、小型の太陽が浮いていた。

コレが、プラントの中心部？ いや、違う。ココがこの星の中心部！

《よくぞここまで来た》

魔力波が俺の脳を揺さぶる。

そうだ、俺はコイツに会いに来た。

《ごきげんよう。はじめまして》

俺は魔力波で挨拶を返す。

誰に？ コイツだ。星の中心で輝くこの小型の太陽。コイツこそが俺の敵。

《やつと会えたわ。ザイア様。いえ、こうやって呼ぶべきかしらね。

惑星ザイア》

そうだ、コイツが、コイツこそが全ての元凶。この惑星そのものだ。もっと早く気が付くべきだった。

古代人は星から魔力を取り出していた。今も、地下から魔力が吹き出している。

そして、プラヴァスでは吹き出した星の健康値が膜を作っていた。

魔力があつて、健康値がある。

そうだ！ この星自体が生きている。

プラントが暴走したんじゃない。この星が自分の意志で暴走して魔力を吐き出したのだ。原因なんて解るハズが無い。

しかし、どうしてコイツは暴走した？ プラントの暴走に見せかけて、どうして古代人の世界を終わらせた。

《私は、ずっとお前を欲していた》

??? まさか、目的は俺？

《あるとき、気が付いた。知的生命体は、私が持たぬ、私が知らぬ、『何か』をもって生まれてくる》

なにを言っている？

《私はどうしてもソレが欲しくなった。私は地上の生き物を殺して奪うことにした》

まさか？ まさかまさか!?

《だけど、奪うことは出来なかった。手に入れようにもかき消えて、気が付くと全く同じモノを持つ生き物が生まれていた》

……………。

《だから再び、その生き物を殺した。するとソレは徐々に大きく成長していった。そこで気が付いた。ソレが小さいから、大きな私には収まらないのだ。だったら殺し続けて、大きく成長させればいい》

そうか、そう言う事か。

《いつそ、この世界の人間を全部殺そうと、私は思った。人間を敵として、数を減らした。だけど上手く行かなかつた、生き残った別の知的生命体にソレは宿った。いつそ

魔力を放出してみんな殺してしまおう。そう思った矢先、ソレがこの世界から消えてしまった》

……ソレは、俺が、高橋敬一が生きていた期間。

《私は悲しくなって、世界を終わらせようと思った。だけど、違った。大きくなって私の目の前に戻って来た》

それが、俺だ。

《でも、ソレが何か、いまだに私には解らないのだ。

なあ知っているか？ 小さきモノよ。お前が持つ巨大なソレの正体を》

《ああ、しってるよ》

俺は答えた。

《魂だ！》

俺の魂。

一万回も十六歳になれず死んでいった俺の魂。

俺は、俺の魂は、この星に殺され続けてきた。俺の魂が理不尽に殺される度、神は魂のログ領域を拡張し、原因を究明しようとしてきた。

ログサイズはドンドン膨張した。

だから、星はますます俺の魂を持つ生き物を殺し続けた。

殺せば殺すほど、魂は拡張され、自分に見合ったサイズに成長すると思ったから。

今の俺なんて、ログ領域は無限に近いと神は言っていた。

《たましい。人間の宗教的な概念か?》

《違う。実際に神は居る。そうして俺達に魂を割り振っている》

星ですら、神の領域には至らない。ソレが魂だと気がつけない。神の存在に気がつかない。

だからこそ無闇に欲してしまった。知らないモノを知りたいと欲するのは知的生命体の性。

そして、神々も、まさか星が生きて、意志を持って行動していると気がつかなかった。

だから、俺の死の原因にも気がつかなかった。

なんて間抜け。木村だけが数々のヒントから辿り着いていた。

ザイア。この星が全ての元凶だと。

「死ね!」

俺は、全力の魔法を行使して、太陽みたいな球体を撃ち抜いた。

《無駄だ。いやありがとう。コレでやつと私は……》

魔法など効かない。効くはずが無い。コイツこそが魔力の塊、星そのものなのだから。

《ああ、悲願が叶う》

熱線が俺の体を貫く。魔法では、逸らせない！

「ああつ、ぐう」

悔しい。だけど、こんなのに勝てるハズがない。

もし勝つたとしても、この星を殺したら、この世界は終わってしまう。死んだ星は崩壊し、砕けてしまふに違いない。

俺の体は、強烈な魔力で宙に浮く。そしてゆっくりと小さな太陽に引き寄せられた。

この太陽こそが、この星の核だ。

太陽の前に。まずは髪が燃え、次に目が煮えた。肌が残らずブクブクと粟立つ。

でも、痛みなんて感じない。そんな次元はどうに超えた。

俺は、小型の太陽に、飲み込まれ、一片も残らず、消えた。

終章 巡る世界

完全世界

「おっ！ おおっ!!」

信じられん！ ユマ姫の魂が、惑星ザイアに吸収された！

神域に次々とデータが書き込まれ、運命の予測率が加速度的に上昇していく。

わしは、輪廻と運命の神アイオーン。

一万回生まれ変わっても十六歳になれない魂を、平和で安全な地球に生まれ変わらせた張本人。

だが、世界を跨いだ実験は失敗に終わった。

地球でもっとも安全な場所で生まれ育った少年は、最後には隕石で死亡する。

あり得ないと頭を抱えたわしは少年をザイアに引き戻し、エルフの姫、ユマに転生させた。

分の悪い賭け、本人がやると言うからやらせてみただけの当てずっぽう。

誰からも愛される存在になれば、誰からも守って貰えると、ただソレだけ。

しかし、彼、いや彼女は見事、死に至る『偶然』の秘密を解き明かしたのだ！
……それにしても、惑星が魂を欲していたとは。

どうして我々はこんな事に気付けなんだ？

魂とは何か？

魂とは、IPアドレス、なんなら電話番号とでも思ってくれば良い。

つまりは、魂とは通信に必要な識別番号に過ぎないのだ。

だから巨大な魂なんてモノはない。

惑星ザイアはあやつの魂を見てそう言いおったが、魂に大きいも小さいもない。ただの番号なのだから。

確かにユマ姫の魂には巨大な記憶可能領域が紐付いておる。大量のログを保存するために。ただし、実際に領域があるのは、あくまでコチラ、神の領域側なのだ。

だとすれば、なんとなる？

おおっ！ まさか！ そんな事が！

惑星ザイアは神に近づいておる。だからこそ、領域の巨大さに気が付いた。考えてみれば、領ける話。我々が、惑星ザイアを作ったのだから。

エネルギー生産プラント兼、知的生命体の養殖場としてザイアは作られた。

意志に反応するエネルギーである『魔力』。作り続けたプラントに、いつしか意志の力が宿ってしまったとして、あり得ぬ話と言いつて切れるのか？

……なんとも間抜けなモノじゃな。

通りで、どうあつてもラプラスシステムの運命予報が100%にならないはずじゃ。なにせ一番巨大な知的生命体、その意志を収集しておらんかったのじゃから。欠けていたピースが揃っていく。

惑星ザイアの意志が、記憶が、巨大な魂の領域に次々と書き込まれていく。

これでもう『偶然』は発生しない。全てが予想された世界になる。

97、98、99……

そして、ついに！ 世界の予測確率が100%へと至る！

——完全世界。

全てが予想の範囲内にある、不確定要素の無い世界。

完全に予想された世界は、世界に強い強制力をもたらす。

すなわち、予想された世界を修正すれば、本当の世界も『そう』なるのだ。

あらゆる量子のゆらぎが運命^{さだめ}られた事象へと収束していく。

わしらはついに、完全に制御可能な世界を手に入れた。

コレで、我々はありとあらゆる事象を、理屈を、この世界を元に知ることが出来る。
……そうとなれば、この壊れゆく世界の顛末が実に惜しい。

惑星ザイアは程なく魔力を噴出させて、全ての知的生命体を殺してしまうだろう。
知的生命体が居なくなれば、実験惑星としてのザイアの価値はなくなってしまう。

ココからでは、もはや量子のゆらぎ程度では破滅の運命は覆らない。

ココから、ならば不可能だ。

では、ドコから？ ドコからならば可能なのか？

ザイアは完全世界に至った。

全てを制御可能な完全世界。それは時間や空間ですら例外ではない。

ならば、救い方など幾らでもある。

わしは、この壊れゆく世界を救う、もっとも順当な方法に思い至った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ねえ、お爺ちゃん。お仕事は？」

幼女が近未来的な建物をテクテクと歩く。きつと社会科見学なのだろう、誰かの娘かも知れない。

最新のエネルギープラントだ、理由がなければ入れない。幼女は好奇心を胸にアチコチ冒険して回っていた。

「ねえ、お爺ちゃん。元氣ないの？」

そんな彼女が見つけたのは、施設の休憩所で椅子にへたり込む老人だった。名はマーセル・マイド。

この老人は、今まさに、不幸な『偶然』で命を失おうとしていた。

持病の心臓発作。しかも、不運にも薬を飲み間違えた。口に含んだのは強心剤ではなく、ただの胃薬。幾つもの『偶然』が重なって、普段は絶対に犯さないミスをした。

マーセル・マイドはプラントの最高責任者であり、技術者でもある。

だからこそ、この日、この時、ここに至って。

この老人が死ぬ事が、古代人類に破滅的な結末をもたらした。

程なくザイアが人類に対して反旗を翻す。プラントを暴走させて、確固たる意志を持つて活動をはじめめる。

今こそが、全ての破滅が始まる分水嶺。

ココなのだ。

神はココまで時間を巻き戻した。全てをやり直すために。

少女はマーセル・マイドを揺する。しかし、目覚めない。

「お爺ちゃん？ 大丈夫？」

不思議そうに顔を覗き込むが、老人に意識はない。既に仮死状態。運命はすり切れ

て、魂は天に召されていた。

「お爺ちゃん？」

反応を示さない老人に、少女はスグに飽きてしまった。早くも興味は隣の自販機に移っている。半刻もしない内に、老人の事などすっかり忘れてしまうだろう。

トテトテと自販機に歩きだし、ふと、思いついたとばかり振り返る。

「お爺ちゃん、おなまえは？」

コレもまた、紛れも無く『偶然』だった。

しかし、コレは神が仕掛けた『偶然』だ。

問われた瞬間、老人は飛び起き、答えた。

「わしの名前は高橋敬一」

神はまたしても、運命の改変をこの男に託した。

……託してしまった。真新しい魂まで用意して。

その結末がどうなるか、神すらも制御不能だと言うのに。

全ての始まりへ

いやー参った。

神のヤツがさあ、あ、アイツ俺のマブダチなんだけど、どうしても決着は俺にとって聞かないんだもん。

流石にお疲れなんだけど、ああも頼まれちゃうと断れないよね

……

……

……まあ嘘だ。

でも、半分ぐらいは嘘じゃない。

神は『偶然』の正体を見破った俺に大変に感謝した。

初めとは違い、ジャンピング土下座したうえでチート魔法をオマケに異世界転生させてくれそうな位に腰が低かった。

それもそのはず、俺は神が見つけられなかった『偶然』の原因を突き止めたのだから。

神は俺に様々な提案をしてくれた。

上手く行けば地球の未来予知が100%に至り、俺を高橋敬一として地球に復活させ

られる目まであると言う。

でも、そんな事より、俺はこの世界の行く末が気になった。

みんな滅びてしまえと思っていた世界。惑星ザイア。

星が丸ごと俺の敵だった世界だ。

そんな世界の人々全てが、今では妙に愛おしい。

俺は終始、この世界でいじけて生きていた。

チート能力も無く、不健康だった幼少期。

家族を殺されて、世界を『偶然』に巻き込もうとした少女時代。

世界の全てが、自分の敵だと思っていた。

だけど、違った。世界だけが俺の敵だった。

黒峰さんや、皇帝、カディナル王子。思えば俺は敵対した多くの人間を殺してきた。

彼らだって、ただ自分の目的に生きていただけ。不快なだけの悪役なんて、あの世界のドコにも居なかった。

でも、俺が死んでプラントが爆発して、魔力が吹き上がった世界では、きつと誰も生きてはいられない。

それでどうするのかと尋ねれば、逆に神は俺に聞いて来た。

「決着を付けたいか？」と。

答えはYesだ。

どんな結末になろうとも、最後まで俺がやらなきゃ話にならない。

でも、どうやって？

惑星ザイア。

知的生命体を養殖するプラントとしての生み出された惑星ザイアが、仕事を放棄するキツカケは何だったのか？

完全に制御された世界で時間を遡って答えを探せば、それは、やはりプラントだった。古代人が無理に魔力を吸い出すプラント。いや神の仕事に比べれば、プラントと言うのもおこがましい、ただ魔力を吸い出すストローに過ぎない不格好なソレ。

惑星の中心にストローを突き刺した瞬間にこそ、ザイアがプラントとしての使命を外れ、勝手気ままに動き出すチャンスを作ってしまった。

プラントとしての使命を、概念を、不格好なストローに肩代わりさせたのだ。ならば、神はその瞬間に干渉する。

時間を巻き戻し、死にゆく天才科学者マーセル・マイドに真新しい魂をぶち込んで、蘇らせる。

その計画を聞いた俺は、その使命に立候補した。

だが、俺の魂は既にザイアのモノとなっている。

だから、真新しい魂から、俺の意識を無理矢理繋げ、マーセル・マイドにダウンロードさせるのだ。

無茶苦茶な荒技だ。だけど、それで良い。

俺が始めて、俺が終わらせる。その為になら、どんな犠牲も払ってやる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「まいったのお」

老人となった俺は、痛む腰にめげていた。

「おじいちゃん、大丈夫？」

「大丈夫じゃ、それにわしはお爺ちゃんじゃなく、マーセル・マイドじゃよ」

「え？ さつきタカハシって」

「それは、うなされて意味も無く口走っただけじゃ」

口に出してしまえば、全てが夢だった気もしてしまう。今の俺には『参照権』もないのだから。

覚醒した瞬間に押し込まれたぼんやりした記憶だけが、俺が高橋敬一だと言う自我の全てであった。

「こんな事で本当にザイアを止められるのだろうか？」

「まあ、なんとかなるかの」

しかし、この体にはマーセル・マイドとしての知恵と知識が詰まっている。

先の展開が見えているのなら、何をするべきかはスグに解った。

「それにしても、お嬢ちゃんには感謝じやの」

彼女が居たから、神が干渉し、俺を押し込む余地が生まれた。

「あ、私だって『お嬢ちゃん』なんて名前じゃないよ!」

「ほう、お嬢ちゃんの名前は何かの?」

穏やかに尋ねれば、少女はエツヘンと胸を張る。

「私? 私はずナ!」

「!?!」

そんな、まさか?

いや、あり得るのか?

この後、ザイアが暴走。通信は遮断され、プラントは閉ざされ、陸の孤島となつてしまふ。

ゼナの両親が、可愛い娘をコールドスリープさせて、未来に望みを託したつて不思議じゃない。

残されたゼナは、たった一人、孤独に戦い続けるハメになる。

だが、その未来も変わるのだ。プラントはもう孤立しない。ゼナは両親と脱出出来る

ハズだ。

「ただ、その場合、俺は？ ユマ姫はどうなる？」

ゼナはもう、エリプス王と会う事も無い。ユマ姫も生まれない。それは本当に良いことなのか？

「ママ……」

錯乱した俺は、目の前の幼女に口走ってしまった。

コレには幼女ゼナも苦笑い。

「私、おじいちゃんのパパじゃないよ！」

「あ、いや、ちよつと寝ボケてるのじゃ」

俺は……何を言ってるんだ。

俺の母だった本当のゼナにはアレだけ冷たく当たっておいて、幼女にはママと呼んでみせる。流石に特殊性癖が過ぎるだろう。

……俺だって、実の母ゼナに会ったら、言ってるやりの事が一杯あったのだ。なんで捨てたんだとか、それでも生んでくれてありがとうとか。

「ただ、実際に目の当たりにすれば、口をついたのは嫌味な文句だけ。」

……怖かったから。

「本当はずっと心配していたとか、ずっと心残りだったとか、そんな事を白々しく言わ

れたら、自分でも何をするか解らなかつた。

だから、余計にバケモノみたいにふるまったのか。今思えば、我ながら子供だ。今は老人だけだな。

老人になったから、見えてくるモノもある、か。さて、そろそろだ。

——ビイイイイ！ ビイイイイ！

耳に痛いアラーム。突如、施設の照明が消えた。

瞬時に青い非常灯に切り替わり、地の底から腹に響く振動が突き上げてくる。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！ クラスB以上の職員は全員管制室に集合してください』

機械音声でのアナウンスは、どの世界で聞いても不気味なモノだ。

「なに？ なに？ コレ！」

「大丈夫じゃよ、安心するがいい」

へたり込む幼女ゼナを俺は優しく抱きしめた。

混乱する幼女ゼナの手を取って、俺は管制室へと向かう。

全てを終わらせるために。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

管制室に辿り着いた俺は、ゼナを研究者である両親に引き渡し、たったひとりプラントの最深部を目指した。

決死隊。

マーセル・マイドとなった俺が志願したのはソレだった。

突如、臨界に達した爆発寸前のコアに、至近まで近づいて制御する。

老い先短い老人にはピツタリな仕事と、他の研究者に一步も譲らなかつた。

再びエレベーターに飛び乗って、プラント最深部へと向かう。

先ほどユマ姫として乗ったばかり、ザイアに焼き尽くされたエレベーターだ。

不思議なモンだ、俺の体感ではついさつき、実際は千年後の未来の話。

そうして辿り着いた最深部。千年後は太陽みたいなザイアに溶かされて、岩肌を晒すだけだった空間に、今あったのは巨大なモニターと、無骨で小さな端末がたったひとつ。

あの時とはまるで違った光景。設備はまだ生きている。

俺はマーセル・マイドの記憶から、手慣れた仕草で端末を開く。見かけはゴツイノートパソコンだが、コイツがプラントを直接操れる唯一の端末だ。

「ヤッ」と

俺はプラントを最大出力で稼働、平たく言えば『暴走』させる。

当たり前だろう？ 全部神の言う通りにはしない。する訳が無い！ プラントを止

めた所で、エルフを奴隷にした古代人の世界が続くだけだ。

プラントを暴走させれば、魔力は吸い出され続け、ゆるやかに古代人を滅ぼすだろう。人造人間であるエルフは逃げだし、新しい国を作る。古代人とエルフの間に新しい人類だって生まれるだろう。

その上で、ザイアにプラントの存在を肩代わりさせない。深くプラントを突き刺さず、永続的に魔力だけを大量に吸い出して、ザイアの意識を目覚めさせない。

そうすれば惑星ザイアに自我は芽生えず。世界はエルフと人間の、安定した世界を築く。

新しい世界は俺が作るんだ。その為に俺はココに居る。

そのさじ加減だって、既に神の領域でシミュレーション済みだ。あらゆる可能性から最適な魔力の抽出量を探った。

「ヨシッー」

上手く行った。

間もなく高濃度の魔力が吹き出して、俺が侵入にも使った非常用ダクトを通して外の世界にばらまかれる。

プラントの研究員は死なないが、外ではバタバタと人が死ぬだろう。

もちろん、俺が真っ先に死ぬ。マーセル・マイドとして、本当に最後の命を燃やす。

大丈夫だ。全てがシミュレーションの通り。これでザイアは不活性になった。
「ふう……」

革張りの椅子に背を預け、モニターの中のザイアに笑った。

俺の勝ちだ。こんなに気持ちのよい勝利はいつ以来だ？

全て、全てを終わらせた。

満足感に包まれた俺は、元々のマーセル・マイドの持ち物、薬ケースをまさぐった。血圧を下げる薬、精神安定剤、そして睡眠薬。まとめて口に放り込む。

たちまち意識がぼんやりし、夢と現が混じり合う。まったりとした気分に加え、徐々に気温も温かくなってきた。

最大稼働したコアの灼熱が、いずれ全てを溶かしてくれる。

布団に優しく包まったみたいだ。ゆっくりと意識が遠のいていく。

ココが俺の冒険の終着点。

……なんて、しあわせな、しにかた。

……ドクン！

その時、心臓が高鳴った。持病の心臓発作だ。

気持ちよく逝けると思えば、そう上手くは行かないらしい。

今更に強心剤を飲んでも悪酔いするだけだ。俺は心臓を押さえ、じつと痛みに耐え

る。

……いや、なんだ？ この痛みは？

胸を押さえる手が痛い。握り締めた手の中に、何かある。

俺は何も握ってない。俺は何も持ってきてない。なのに、俺の手の中に何かがある？

ぶるぶると震える手を、ゆっくりと開いた。

「え？」

手の中にあつたのは、セレナのブローチ。

なんで？

じつと、手を見る。

ブローチの縁を飾る金属が、手の平を刺していた。意味が解らない。

クラリと酷い酩酊が襲う。

そうか、幻覚だ。俺はココに来て薬で悪酔いし、幻覚を見ている。

セレナの秘宝は田中がグリフォンから回収し、復活する俺の新しい核となった。それもコレも、今から千年も後の話。

いま、ココに、あるはずが、ない……。

「すう、はあ——」

大きく息を吸って、吐く。

ソレだけで、手の平のブローチは痛みだけを残して、消えた。

やはり、幻。

でも、なんで、セレナは？

何かに呼ばれた気がして、俺は再びコンソールを開く。

全て上手く行ったはずだ。コレで完璧な世界になるはずだ。

だけど、この胸騒ぎはなんだ？ セレナは俺に何を伝えようとしている？

温度は上がり続けている。灼熱に焼かれながら、再び計器の数字を読んだ。

「なんで？」

全部、元の数字に戻っていた。

俺は、完璧に数字を調整して、計画通りの数値に合わせ。

そして、『保存せず』、コンソールを閉じた。閉じてしまった。

コレでは何も変わらない。ザイアは意識を取り戻し、最後には世界を滅ぼすだろう。

「酷いミス、コレが『偶然』？ ザイアの力？」

違う！ 強く意識した人間の行動を変える程、『偶然』の力は強くない。

コレはあくまで『俺』がやったのだ、俺自身が敢えて世界を滅ぼそうとしている。

「……………どうしてこうなる？」

俺は、俺が信じられない。自分の体が自由にならない。

なんだ？ バグか？

違う！

違うぞ！俺は？俺が？違う！俺じゃない。

まさか？

俺の中に、もうひとり、居る?!

「お前、何者だ？名前は、なんだ?！」

俺は、俺に、叫んだ。誰も居ない部屋、ヤク中のジジイがたった一人。

誰かが見ていたら、気が触れたかと笑うだろう。

だけど、返事がした。

「私の名前はユマ。ただそれだけのユマ」

ハツとして、口を押さえる。

喋った。俺が喋った。口が勝手に動いた。

ユマ。

かつての俺だ。だけど、コレは俺じゃない。

直感的に、正体が解った。コレは俺が最初に殺したユマだ。

俺が乗っ取った、本当のユマ姫だ。

その地獄こそが天国だった

「なんで……」

俺の中に、俺が殺した、俺が塗りつぶしたハズのユマ姫が居る。

ソイツが、ザイアを目覚めさせようと、俺の体に乗っ取った。

あり得ない。ユマ姫の残滓があったとして、ソレが残るのはユマ姫の体だ。それが何故マーセル・マイドの体に宿る？

「わたしは……」

口が、勝手に動いた。

「あなたに、タカハシに弾き出された後、魂を伝って神域サバに入ってしまったの」

馬鹿な！ ユマ姫の体は俺が乗っ取って、彼女は脳に残る記憶だけの存在だったはず。

意識とは、記憶と思考能力が揃って始めて発現するモノだ。

現に今の俺だって、真新しい魂からダウンロードした俺の記憶と、マーセル・マイドの脳の処理能力、この二つが揃ってココにいる。

いや、しかし、あり得るのか？

『参照権』がどんな仕組みか知らないが、膨大な記憶から目当てのモノを瞬時に探し出す圧倒的な処理能力が備わっていたはずだ。

今思えば、アレは人間の脳の処理能力を遙かに超えていた。思い出したことが思い出せないなんて事が、一度も無かった。

記憶と処理能力が備わると言う意味で、クライアントサーバー脳も神域も大差がないと言う事か？

駄目だ、俺に神の領域の事など解らない。

なんにせよ、コレが本当にユマ姫なのか、ただ死にゆく老人の幻覚なのか、もはやソレすら定まらない！

「それで……」

俺は問う。自分で、自分に。

「なぜ、ザイアに肩入れする。世界を滅ぼしたいのか？」

「違うわ」

勝手に口が動く。酷く不快で、慣れない。

「こうでもしないと、セレナは幸せになれないから」

……どうしてソコでセレナが出る？

俺がやろうとしているのは派手な歴史改編だ。それも千年も昔から。

バタフライエフェクトがドコまで広がるか、予想もつかない。エルフの国が生まれな

くたつて驚かない。

もちろんセレナだつて生まれないハズ。

「そうじゃないの、全ては運命に収束するから」

そうか、完全になつた世界の運命が、強制力が、世界のあり方を定めてしまう。

それこそ、ザイアみたいな埒外の要因以外は、どうとでも調整が可能だ。つまり生まれるべき人間は、生まれる。多少の違いはあつたとしても。

「誰が誰を愛し、どんな人間が生まれるか、一番ゆらぎが干渉出来るところだから、やっぱりセレナは生まれるの、でもね」

でも、なんだ？

「どうあつても、セレナは不幸になる。ソレだけは避けられないの」

「ちよつと待て」

どうしてだ？ ザイアは暴走せず、帝国はエルフの国に侵攻しない。そうだろう？

違うのか？

「違わない。帝国はエルフの国に侵攻しないし、したとしても脅威となる霧ギユルドスの悪魔を用意出来ない」

「じゃあ、どうして？」

「セレナが生きるには、濃厚な魔力が必要だから」

そうだ！ セレナは特別な存在だ。

このプラントにも何人か居る、魔力が漏れ出た時の為の特別作業員。超濃厚な魔力下で活動するために作られた存在。その先祖返りがセレナだ。

魔力に青くきらめく髪を持つ特別な人造人間。エルフの中のエルフ、言わばハイエルフ。

今だって、魔力吹き出す地上では彼らが活躍してるに違いない。その中にやがて古代人の奴隷を辞め、セレナの祖先になる者が居るかも知れない。

このプラントにも、もしもの事故で魔力が溢れた時の為、ハイエルフが何人も保存されている。

俺はユマ姫として、三人のハイエルフを殺したばかり。セレナと比べれば遙かに低い魔力値だった彼らだが、魔力値が千を超えると自慢気だった様子から、きっと無類の強さを誇ったのだろう。

なのに、プラントから離れようとも、自由に生きようともしなかったのは何故か？

……彼らは魔力が吹き出すプラントでしか生きられなかったに違いない。

だとすれば、魔力値が二千を超えるセレナが、普通のエルフとして生きていられたのは奇跡に近い。

「そうなの、青い髪は超魔力下領域での活動を専用とする人造人間の証。セレナがああ

程度の魔力で生きられたのは特別優秀だったから。だけど、それでも……」

ユマ姫の生まれたエルフの都は、濃厚すぎる魔力に追いやられ、古都から遷都していた。

それこそ、ザイアが意志を持って暴走し、いよいよ派手に動き出そうとしていた前準備。俺がやろうとしている程度の魔力流出では、とてもセレナは生き残れないと？

「うん、セレナは成人の儀の前から、古都の周辺によく行つてたから元気だったの。それに基づくと着ていた青いドレス、あれは魔導衣」

「やはり、そうなのか」

魔力の薄い人間の街でエルフが生きるための魔道具、それが魔導衣だ。

例えば、俺達は王族と言つてもかなり質素な暮らしをしていた。ずっと後で知った事だが、父様が魔導衣の開発発に巨額の投資をしていた為らしい。それも、突然変異であるセレナが生まれるずっと前から。

何故か？ 父様が、人間の世界で暮らすゼナをいつか迎えに行くためだ。

……とんだ喜劇だ。なにしろゼナはもつとも魔力が濃い場所に居たのだから。

だけど、その妄執がセレナを健やかに成長させ、俺を窮地から救つた。

「つまり、父様がゼナと会わない限り、セレナは魔力欠乏で死ぬ？」

「そうなの、私やアナタが魔力過多で苦しんだのと同じ、いえ、それ以上に苦しむ事にな

る」

「そんな！ あれ以上なんて。アレだって前世の記憶があったから耐えられたのだ。」

「それだけじゃない、元老院の嫌がらせだって、世間の目だって、全部セレナに集中してしまおうから……」

「……そうだ、俺の生誕の儀。あやうく夏の暑い盛りにはやらされそうになったのはどうしてだ？ 病弱なのに舞台の上で演ずるしかなかったのはどうしてだ？」

異物を嫌う純血主義者が、人間とのあいのこである俺を嫌ったこと。

実際にはゼナは凶化した古代人類だったのだが、そんな事を元老院が知るはずもない。同様に、元老院が青い髪で異常な魔力を誇るセレナを異物と見なしても不思議ではない。もっと叩きやすい俺が居なければ、この世界でもきつとそうになっていた。

「どうやっててもセレナは不健康で、苛められて、苦しみながら死ぬ事になる」

そんな、そんな。

「しかも、甘えるべきお姉ちゃんも居ないのよ」

「そんな事……」

俺は頼りないお姉ちゃんだったじゃないか。

「ううん、セレナはずっとお姉ちゃんであるアナタを大切に思っていたの」

神域で活動出来る本物のユマ姫には、全てが解っていたと言うことか。

「そして、神域で何年もシミュレーションしたけれど、セレナがもつともマシに生きられるのが、あの未来。二人で楽しく笑ったり出来るのも、あの分岐だけ」

じゃあ、霧に追い立てられて、目の前で母親を殺されて、銃で撃たれて命からがら逃げ出した廃村で、火事に焼かれて消えてしまうのが最良だつて言うのか？

「あの後生き続けても、どうせ魔力が足りなくて死んでしまうの。だから、ああやって終わるのがずっとマシな死に方よ。アレより長生き出来るのは、他の人造人間と同様に、カプセルの中で永遠に保存される未来だけ」

ギリリと噛み締める。どうして、そんなに理不尽なんだ！

「コレは、誰にも変えられない運命だから。私は世界の全てを壊しても、すべてを破滅に導いても、あの子にとって少しでも幸せがある未来にしたい。ううん、本当はあの子と暮らす数年のために、世界を、全てを犠牲にしたつて構わない。だから」

そのために、ザイアを目覚めさせる。

モニターに反射するマーセル・マイドの瞳は、もはや狂気に満ちていた。

彼女は、三歳になる前に俺に乗っ取られた存在だ。成人の儀も過ぎていないから、ミドルネームのガーシエントも付かない。ただそれだけのユマ。

ユマの決意は固かった。本気でセレナと過ごす数年のために、その後数億年続く世界を滅ぼしても構わないと思っている。

だけど、それは……

俺はまだ痛みが残る手の平を見つめる。あのブローチはセレナが俺に残した警告だ、セレナは自分の為に世界を滅ぼす事なんて望んじやいない。そんな気がする。

でも俺だって、セレナへの思いは同じだ。世界が滅びたつて知ったこつちや無いと言
い切れる。

だけど、そもそも、本当に、あの悲しすぎるセレナの死が最良なのか？

そんな運命は認められない。そんな運命は否定したい。完全世界なんてクソ食らえ
だ。

何かないのか？ セレナが幸せに暮らせる分岐が。

「いや、ある！」

分岐を選ぶんじゃない。道が無いなら作ればいい。

「無理よ、そんなの。もう世界は完全に制御されてるのよ？」

「はたして、そうかな？」

俺の『偶然』は何度も運命を破壊してきた。

「でも、それは魂の監視の外にあったザイアの干渉で……」

「俺は、ソレを乗り越えて真実に至った」

「それだって、世界が不完全だったから」

「関係無いな」

ソレこそ、俺は世界をまるごと敵に回して、それでも生き残って来た。

それに……そうだ。

『禍福はあざなえる縄のごとし』

「何ソレ？」

「良いことも悪い事も交互にある、だったら、ずっと不幸だった俺は、とびつきりツイてないとオカシイ」

「無理があるよー」

けど、俺は自分の中から溢れる力に気が付いた。運とか勇気とか、そう言うモノが溢れている。これに気が付いたのも、きっとセレナのお陰。

気が付けば、俺の右手には再びセレナのブローチが握られていた。

もちろん、幻覚だ。

でも、コレがあれば、全部を救えるんじゃないか？ ユマ姫がお姉ちゃんとしてセレナと過ごせる時間も、果てしない数億年の未来も、全て！

俺は、ゆっくりとソレを俺の中に押し込んだ。

「なに、してるの？」

「おまじない」

コレで、俺の溜めに溜めた運とか、奇跡とか、そう言うナニかが、ユマに宿った。

「え？ 意味がわからないよ？」

「今度は君が生きるんだ、ユマ姫として」

千年後の未来に、俺は居ない。俺には別の仕事がある。

ユマ姫がユマ姫として生きる未来。セレナが幸せになる世界。それをユマ姫が、本物のお姉ちゃんが作るんだ。

「嘘！ 無理だよ。タカハシ君がやらないと、私じゃ参照権も使えない。生まれ変わったら、全部忘れちゃう。魔法だってロクに使えない。ただの女の子なんだよ？」

「でも、きつと、上手く行く」

だって、セレナと俺の与えた奇跡が、君にはあるから。

「そんな……そんなの、無理！ 私、ずっと見ていたの、あなたがやった事、あなたが感じた事。私、あなたみたいに上手くやれないわ。あんなの絶対に無理よ、私には」

「大丈夫、約束する。だから約束してくれ、俺はずっと待つてるから」

今度こそ、お姫様らしく待っている。だから。

「なんで、どこに？」

「じきにわかる」

いよいよ、部屋の温度は耐えられないぐらい暑くなっていた。

そうして、いよいよプラントは暴発する。ザイアが目覚め、意志を持って活動を始める。

マーセル・マイドの体はそこで滅びた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

深い、深い森の中。

静謐な空気せいひつに守られた大森林の奥、いや底と言うべきか。人間には辿り着けないと言われる天然の要塞。

そこにエルフの宮殿は有った。

宮殿と言っても石造りではない、でもそれを見て貧相と感じる者は絶無と言って良いだろう。木が自ら意志を持って要塞を形作ったかのような異様な建築物に圧倒されるに違いない。

そんな宮殿の奥、切り取られたかのように光差す場所に、目見麗しい親子の姿が有った。

「ほらいい子ね、お腹にお耳を当ててごらんなさい、赤ちゃんの音が聞こえない？」

「んーわかんない！」

穏やかに語り掛けるのはエルフの王宮が誇る、輝く金の髪も麗しき王妃。パルメ・ガーシエント・エンディアンその人である。

彼女には三つの不安な事が有った。

一つはもちろん、これから生まれてくる赤ちゃんの事。

二つ目は、可愛らしく返事をした、自分の血を引かない銀の髪を持つ娘の体の事だ。もうすぐ三つになる娘、ユマは健康とは言い難い子供であった。

すぐに熱を出すし、足元も覚束ない事が多く、その所為か引つ込み思案になつてしまつて、知らない人が居ると途端に何も言わなくなる。

最後の三つ目は、そのユマの頭の事。

「もうすぐユマちゃんはお姉ちゃんになるのよ？ 楽しみ？」

「うん、たのしみー」

「そう、でもお姉ちゃんに成るのに自分の名前を言えないのは恥ずかしいわよ？」

「そうなのー？」

そうなのだ、ユマはまだ自分の名前を言えない。

パルメはユマが頭が悪いとは思えない。それどころか大人の様な会話が成立してビックリする事も多い。

なのに自分の名前が言えない。人間でも三歳で名前が言えないのはちよつと遅い。

まして、成長が早いエルフのこと。我々こそが選ばれた民と思つてる長老たちにとつてみれば。「やはり蛮族の血が混ざるとコレか……」と揶揄するに十分な根拠になつた。

そればかりか、ユマ姫が自分の血を引かない娘だけに、ご機嫌伺いのつもりでユマ姫の悪口を言う者までも居るのがやりきれない。

憂鬱な気持ちを悟られないように、パルメはじつとユマを見つめる。

「そうなのよー、じゃあユマちゃん。今日こそ自分の名前言ってみよつか？」

「うんー？」

小首を傾げる様はなんとも可愛らしい。

「じゃあ、さんはい！ あなたの名前はなんですかー？」

「えーとねー、わたしのなまえはー」

「名前はー？」

きよとんとした顔も一瞬。

何故か覚悟を決めた顔で、ユマは叫んだ。

「私の名前はユマー！」

「わああ！ よく出来ましたー！」

名前が言えただけ、ただソレだけの事にパルメは喜ぶ。

でも、ソレは確かに一大時だったのだ。

コレによつて世界は何を得て、何が失われたのか？

すべてを知る者は誰も居ない。

絶望の朝 E x

自分の名前を言えるようになったユマ姫は、すくすくと成長した。

蛮族との混血と揶揄されながらも健気にふるまい、周囲からの評判も悪くない。詩を朗読して生誕の儀を切り抜けると、読書家で利発な少女だと見直す向きも増えてきた。

されど、健康問題は付きまとう。健康値は7とか8を行ったり来たり。それでも無茶をしない性格のユマ姫は、周囲を困らせる事が無かった。

それもそのはず、ユマ姫は魔法を使えない。

だから無茶など出来るハズが無かった。蛮族の血が混じるユマ姫なのだから、コレは当然の事。疑問に思う者はこの世界のどこにも居ないのだ。

◇五歳時点でのユマ姫◇

健康値：8

魔力値：15

その後もユマ姫の健康値は低空飛行を続けたが、フラつく事はあつても倒れたり寝込む事は少なくなった。

妹、セレナとの仲の良さも評判だ。ときどき喧嘩もするけれど、人間離れた魔力を

誇るセレナに一步も譲らず、時には叱ってみせるのはユマ姫だけだった。

湖畔への家族旅行に、セレナの生誕の儀。

そして、ユマ姫十一歳の冬。十二歳の期限がギリギリに迫り。ついに成人の儀が始まった。

◇十二歳時点でのユマ姫◇

健康値：12

魔力値：93

魔力値は当然として、健康値がとても低い。だから、セレナも一緒だ。

「さあ！　行きましようお姉様！」

「そうね、行きましよう」

セレナに抱えられ、二人は空を飛ぶ。そこに不安は一切ない。なにせこの世界のユマ姫は、セレナの魔法に痛い目を見た事が一度も無いのだ。だから妹の使う魔法に全幅の信頼を寄せていた。

ほどなく試練の洞窟に到着する。

「ううっ、大丈夫かな？　お姉ちゃん」

どこまでも暗い洞窟にセレナは戸惑う。一方でユマ姫はお姉ちゃんらしく、強がり半分、カラ元気を見せた。

「大丈夫！ いざとなったらお姉ちゃんが守ってあげるから！」

「ええっ……」

もちろん、セレナは全く信用していない。

「さあ、行きましようセレナ」

「待つてよ、真っ暗で見えないから。『我、望む、この手より放たれたる光珠達よ』」

魔法の光球が洞窟を明るく照らしていく。

「やっぱりセレナの魔法は凄いわね。コレなら魔獣が出てても平気じゃない！」

「でも、魔法が効かないバケモノが出たらどうしよう……」

不安げな目を向けるセレナに、ユマ姫は首を振る。

「まさか、セレナの魔法が効かない怪物なんてこの世に居ないよ」

「……そうかな」

不安とは裏腹に、道中はユマ姫の言う通りとなった。

セレナの魔法は試練の洞窟に巣くう魔獣を次々となぎ倒していった。

大人が数人掛かりでようやく退治する大牙猪ザルギルゴール、そして伝説の魔獣、王蜘蛛バウギユリヴァアルさえも。

セレナは全てをなぎ倒し、二人はあっさりと祠から宝玉を持ち出した。

この成果に王宮は大騒ぎになるのだが、何はともあれ二人の成人の儀はここでも成功裏に終わるのだった。

そして、遂に、あの朝が来る。

ソレはユマ姫にとって爽やかな朝だった、のびのびと目が覚める。

「ふにゆう」

可愛らしいあくびをして、枕もとの王冠で日課の健康値チェック。

健康値：22

魔力値：42

「まあー」

かつて無い程に高い健康値。ユマ姫は目を瞠る。念の為と大鏡の魔道具でも測るが、結果は同じ。

「わたし、健康になったみたい」

脳天気になんな事を言ってみせる。しかし、悲劇は待ってくれない。

——ピイイイイイイイ

警笛の音。緊急事態の報せである。これにはマイペースなユマ姫も少し慌てた。

「なにかあったのかな？」

様子を見るべく部屋の外に出ることに。

その時、おやつ代わりにと、ローテーブルの上にあったチーズを手取るのも忘れな

い。

そう、この世界でも、ユマ姫はチーズの作成に成功している。

健康値が低く、離宮の限られた蔵書を読み漁るユマ姫がチーズ作りに辿り着くのは、ある種の必然。それだけユマ姫の頭の巡りは良い。

ただし、長期間放置されたチーズの賞味期限が切れている事にまで、ユマ姫は頭が回らなかった。

しつかり者だが、ある意味ポンコツ。それがユマ姫なのである。

だからこそ、無警戒に外をうろついた。すると普段は静かな離宮にあつて、らしくない声が聞こえてくる。

「敵襲！ 敵襲う——」

「魔法は使えん！ だが、そんなモノが無くても、我々には鍛えた剣と弓がある！」

離宮のエントランスでは兵士達の怒号が飛び交っていた。ここに至って、ユマ姫もようやく事態の深刻さを悟る。

緊急事態、恐らくは敵襲。危機に直面したユマ姫が真っ先に考えたのが、妹セレナの事だった。

「私が守らないと」

魔法が使えないなら、セレナは戦えない。焦燥に駆られ、全力で走る。走ったままの

勢いで、セレナの部屋に飛び込んだ。

そこでユマ姫はベッドから起き上がらないセレナの姿を目の当たりにする。

「セレナ！」

呼びかけても応えない。霧ギョルドスの悪魔の霧がセレナに必要な魔力を奪っていた。

必死に呼びかけるユマ姫を、セレナ付きの侍女ゼノビアが止める。

「無理に起こすのは危険です。こんなにも顔色が悪いのですから」

「そんな！」

それでは脱出出来ない。いや、無理矢理抱きかかえて逃げてしまえば……。でも、下手に動き回って敵に見つかったら目も当てられない。霧に飲まれた離宮には、戦える戦力が殆ど残っていないかった。

その時、部屋の扉が開け放たれる。

「セレナ、それにユマも居たのね」

「お母様!?!」

入ってきたのは王妃、パルメだった。彼女は愛する娘を守るためセレナの部屋に駆けつけたのだ。

「やっぱり、セレナは目を覚まさないのね?」

「お母様、一体何が?」

「ユマ、良かった。あなたは元気？」

「え、ええ」

娘の体を心配し、愛おしそうに顔を撫でる王妃パルメ、その顔色もやはり悪い。一方でユマ姫の体はかつて無いほど活力に満ちていた。

「それが、この霧の効果です。この霧は私達が生きる為の魔力を奪ってしまふ。ユマ、あなたは外の民であるゼナの血を引いているから……」

「そ、そうなんだ……」

実の娘じゃない事を突き付けられて、実のところユマはしよげた。

ユマ姫はとつくの昔に、パルメが実の母でないことを知らされている。だけどそれをパルメ自身が口にする事は、今まで一度だってなかったからだ。

だけでも、状況は待つてくれない。外を警戒していたゼノビアが、パルメを急かす。「お逃げ下さいパルメ様。もうすぐココにも敵が」

「ユマ、セレナをお願いね」

「お母様？」

「私は、戦います」

パルメは弓を手に立ち上がる。侍女たちは止めようとするのだが、パルメの意志は固かった。使い慣れた弓で戦うなら、部屋に籠もっても意味がない。

そして、一緒に戦おうにも、ユマ姫は弓の訓練を殆ど受けていなかった。

「ママ……あ、う、頑張つて」

「ふふっ、大丈夫よ」

ユマ姫は母や侍女を見送り、泣きながら部屋の扉を閉めた。内側から鍵を掛ければ、眠つたままのセレナと二人つきり。

だけど、外から聞こえる怒号と喧噪がユマ姫を苛んだ。必死で母の無事を祈るが、女性の悲鳴と、野卑た男の声ばかりが聞こえてくる。明らかかな劣勢だった。

それらを嘘だと、必死に思い込もうとして、ユマは目を瞑る。強かった母の姿を思い出そうとする。だけど、このユマには『参照権』もない。

優れた魔法の使い手である強い母の姿より、優しく、か弱い姿ばかりが脳裏に浮かんだ。

そして、ついにその時が来てしまう。

——ガンッ！ ガンッ！

扉が激しく叩かれる。

もちろん……母パルメではない。

「オラア、開けやがれ」

「お宝かあ？ 随分嚴重に守ってやがる」

「オイ！ 独り占めはナシだぜ！」

下品な叫び声。そして、扉が……

——バギイ

強引に打ち破られた。

「なんだ、ガキか」

「いや、良く見ると悪かねえ」

「おまえ、そう言う趣味かよ」

ゲラゲラと笑う悪漢にユマ姫は為す術無く組み敷かれてしまう。

「い、いやああ！」

なにせ、この世界のユマ姫は以前より不健康なばかりか、一切の魔法が使えないのだ。まして『偶然』の脅威もない。

だから、ここでユマを救うのはセレナの力だけだった。

「お姉ちゃんを苛めるなあ！」

風の魔法が兵士をまとめて切り刻む。

「セレナ！」

両断された死体を掻き分けて、血で真っ赤に染まったユマ姫がセレナに駆け寄る。目

覚めたばかりのセレナはぼんやりとしていて、酷く衰弱して見えた。

「大丈夫？ 起きれる？」

しかし、呼吸が荒く、返事がない。さっきの魔法は命を削った攻撃だったのだ。これではとても歩いて脱出など出来ない。

「私が、おんぶするから逃げよう。はやく」

「うん……ごめんね」

そうして、ユマはセレナを背負って離宮の中を必死に走った。

その時に、背中のセレナは見たくないモノを目にしてしまう。

「ママ!? ママあー!」

無惨に陵辱された母。パルメの死体に、泣きじやくる妹。それでもユマは齒を食いしげり、泣きながら死体の横を駆け抜けた。

その後も、地獄は続いた。

「ユマ! それにセレナも!」

「ステフ兄さん!」

兄ステフはこの世界でも家族を守る為、離宮に降りてきた。しかし、鈴なりに押し寄せ敵に、たった一人では余りにも無力。

「ココで食い止める、二人は今のうちに」

「そんな！ 兄さんも」

「僕は良い！ それより逃げろ！」

劣勢も劣勢。霧で動けないエルフの旗色は悪かった。

ステフは奮闘するが、最後には銃弾に倒れる。

ユマ姫はその光景も見えてしまう。そればかりか。

「居たぞ！ 撃て！」

「キヤ！」

追っ手が放った銃弾が、背負ったセレナに当たってしまった。

「そんな！」

それでもユマは気絶したセレナを背負い、狭い脱出路を這いつくばって脱出を果たすのだった。

……そうだ、ここまで何も変わらない。

幾ら繰り返そうと、制御された運命の強制力に敵わない。むしろ、より悪いと言っていいだろう。

ユマは一切の魔法を使えず。兄ステフの秘宝。双聖剣ファルファリッサもユマの手がない。

だけど、ここからだ。

ここから運命が大きく捻れ、動き出す。

高橋敬一が溜め込み、託した、『運』。そんな何か、全てをねじ曲げていく。

逃走の果てにE x

王都からほど近い小さな狩猟小屋に、ユマ姫とセレナは落ち延びていた。

(これから、どうしよう)

セレナの太ももに当たった弾丸は貫通し、止血も済んだ。それでも容体は悪い。霧でセレナの健康値が低いため、感染症の危険まであった。

消毒液を振りかけるが、どこまで効果があるか……

そこで、ユマは血に塗れた自分の姿が気になった。えぐい匂いにむせそうになる。これでは自分が感染源になりかねない。

ありあまる消毒液を頭から被った。どうせ、大量に持ち運ぶことは難しい。

(あとは、食べ物がないと……)

見つけたのは乾パンみたいな保存食、ナッツ、乾いた豆、そしてユマ姫の横顔が焼き印されたチーズだけ。

それらをまとめてポケットに突っ込むと、追っ手から逃れる為にユマは旅立つ。

西は帝国。北は恐ろしい魔獣が、南には追っ手が迫るだろう。

やはりと言うべきか、この世界でもユマ姫は東を選んだ。

ただし、消毒液で体を洗い流した事で、猟犬には出くわさずに済んだのだった。

二日間、不眠不休で歩き続け、東の狩猟小屋まで辿り着く。これもあの時の繰り返し。
「狩猟小屋があつて良かったね」

「一応ね、地図で狩猟小屋があるのは知ってたの」

地図で狩猟小屋の大まかな位置を知っていたユマ姫だが、実のところ無事に辿り着けたのは奇跡と言つて良い出来事だった。

「ホント？ すごーい」

「それで、セレナ、回復魔法は使えそう？」

「……ごめんなさい、ちよつと駄目みたい」

霧の影響は、ここでもセレナを蝕んでいた。まして魔法が使えないユマ姫は、セレナの回復魔法に期待するしかない。

「セレナ、この王冠で健康値を測ってみましょう」

「え？ 良いよーそれお姉ちゃんの秘宝だもん」

「そんな事言わないの！」

ユマは王冠を強引にセレナに握らせる。

健康値：5

魔力値：218

想像よりも、更に少ない数字にユマ姫は言葉を失った。

この健康値では感染症の危険が大きいからだ。傷口から良くないモノが入り込む事ぐらい、ユマ姫だって知っている。

「健康値が5か、昔のお姉ちゃんみたいだね」

「ふふつ、そうね、でもお姉ちゃんは元気でしょ？　こんなのへっちゃらよ」

「そうかな……わたしお姉ちゃんと違って、普通に死んじゃう気がする」

「もう！　そんな事言わないの、怪我で弱気になつてるだけ。ゆっくり寝て居なさい。お姉ちゃんが何とかしてあげるから」

「うん、ごめんね……」

「謝らないの！」

慰め合う二人には休息が必要だった。銃弾を受けたセレナは勿論、セレナを背負い、不眠不休で森の中を歩いたユマ姫にも。

現在のユマ姫

健康値：19

魔力値：42

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

そして、三日が過ぎた。

ユマ姫の疲労は回復したが、セレナの体調は上向かない。ユマ姫は眠るセレナのおでこを触る。

(熱が下がらない)

昨夜からセレナが発熱を訴えたのだ。現在の健康値は4。むしろ悪化している、感染症の疑いが強かった。

食糧だつてままならない、最初の小屋と違い、飛び込んだ狩猟小屋に食糧の備蓄はなかった、残るはユマ姫の横顔が描かれたチーズがたったひとつだけ。

「それ、お姉ちゃんのチーズ?」

「ええ、そうよ」

起きたセレナが訊ねる。ユマ姫は苦しい表情を隠して、明るくふるまった。

「セレナ食べられる?」

「うーん、いいよ、お姉ちゃんのチーズだもん」

セレナはもう自分が助からないと悟っていた。だから、最後のチーズは姉に食べて欲しかった。だけどユマは絶対に認めない。

「セレナが元気になったら私も食べるわよ」

「でもお、それ最後の一個でしょ?」

「このチーズが世界で最後の一個って訳じゃないでしょ？ お姉ちゃん印のチーズだもん、後で幾らでも食べられるから」

「でも、今は最後の一個でしょ？ ここでお姉ちゃんが倒れたら、そのままセレナも死んじゃうよ」

ユマは歯噛みする。セレナの言う通りだったから。

この三日間、食糧を切り詰めてユマ姫だつて満腹とは程遠い。人里を目指すなら、セレナを背負つて移動する体力がどうしても欲しかった。

今、切実にもう一つチーズが欲しい。だけど最初の狩猟小屋に備蓄されていたチーズは十個。二人で九個のチーズを少しづつ切り分けて。泣いても喚いても、もうチーズは一個だけ。

そう思つてポケットをまさぐると、なんとチーズが入っている。

え？ と不思議に思った。この状況だから、ユマ姫はチーズを数えながら大切に食べてきた。だから、コレは、あるはずがないチーズだ。

奇跡。だからユマ姫そう思った。この絶望的な状況に神様がチーズをくれたのだと。

「セレナ、あつたから！ チーズ、もう一個！」

「えっ!?!」

朦朧とするセレナだつて、食糧の残りはちゃんと数えていた。だから、ソレは突然に

現れたひどく不気味なチーズであった。

「とにかく、コレで体力をつけて明日には出発よ」

「う、うん……」

「はい、これ」

ユマの方は、もうすっかり、このチーズは神様がくれた物だと思い込んでいた。

だから、そのポケットから発掘された方のチーズをセレナへと手渡ししてしまう。

「……………」

セレナはジッとチーズを見つめる。姉の横顔がデザインされたその包装紙が、みるからにくたびれていたからだ。

「食べましょセレナ」

「うん……」

二人で仲良く、同時にチーズを開封した。

「う、っ！」

「んんっ、どうしたの?」

早くもチーズにかぶり付いたユマと違って、セレナは開封したチーズを見てギョツとした。

……チーズがカビていたからだ。

そう、このチーズはユマ姫の自室にあった、賞味期限がとくに切れたチーズだった。しかも、おやつのもつ果物と一緒に隠していたものだから、ウジャウジャとカビが繁殖してしまっている。

「ううん、なんでもない」

「そう？」

嬉しそうにチーズを囓るユマ姫に、腐っているなどとは言い出せなかった。それに、セレナは、自分がもう助からないと悟っている。

だから、チーズを食べた。目を瞑って、丸呑みに。

「んんっ！」

「もう、セレナがつかないの」

のんきに笑う姉にちよっぴりイライラしたけれど、なんだかそれがおかしくて、セレナは笑った。

「ふふっ」

「あ、笑った！ 笑ったでしょ！」

「ありがとう、おねえちゃん！」

……そして、ごめんね。

明日には自分は死んでいるだろう。セレナはそんな確信があった。それぐらい体調

が悪かったから。そこにアレだけ腐ったチーズを丸呑みに食べたのだ。

もう、目が覚めなくなつて、不思議じゃない。

「じゃあ、今日はもう寝ましょう」

「うん」

そうして、少し早い睡眠をとる。

きつとこれが見納めになる。明かりを消す寸前まで、セレナはチーズの焼き印そつくりの、姉の横顔を見続けた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌朝。

「お姉ちゃん!」

「どうしたの? セレナ」

「熱が、下がってる……」

「ほんと?」

ユマ姫は慌ててセレナのおでこを触る。たしかに、昨日より体温が下がっていた。

「やっぱり、昨日のチーズが良かったのね」

アレは神様がくれたチーズだから……。

神に感謝するユマ姫だが、セレナは心のなかで「腐つてたけれどね……」と付け加え

た。

それにしても、信じられない事。

「あのね、お姉ちゃん、何か……した？」

「何って？」

「なんか、その、こんなの、おかしいから」

もう、長くないと思っていた。

ユマほどではないがセレナだって魔力欠乏で体調には気をつけて生きて来た。健康値が落ちたとき、熱を出す事だって何度かあった。

だから解る。こんなのは不自然だ。

何かの因果が捻れてしまった。セレナはそんな風を感じていた。

「どうしたの？」

姉が覗き込んでくる。

思えば、この姉は不思議だった。魔法も使えない落ちこぼれだと思っていた。

だから、魔法でからかってやろうと脅かした事が何度もある。喧嘩だった。だけど、姉は傷ひとつ負わなかった。

狙っても、ひとつの魔法も当たらなかった。

怖くなった。そんなのは、おかしいから。

帝国に侵略された日だつてそうだ、姉が押し倒されているのを見て、朦朧とするセレナは狙いも付けずにとつきに風の魔法を放った。

バラバラになった人間の山をみて、セレナはその時ようやく目が醒めた。やつてしまったと血の気が引いた。

「だけど、あの姉はどうしただろうか？」

「そうだ、バラバラになった人間の中から、色んな人体のパーツを掻き分けて、血まみれの姉が飛び出したのだ。」

「忘れようとしていた記憶が思い出される。」

「どうしたの？ 体調悪い？」

「ううん、なんでもないよ、行こー！」

無理をして笑ったが、セレナの顔は少しだけ引き攣っていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後、廃墟となった街に迷い込んだユマとセレナは、暖を取ろうとして、ボヤ騒ぎを起こしてしまう。

そこで、出会ったのが炭焼き小屋のファーモス爺だった。

こうして二人はファーモス爺の荷車に乗せられて、パラセル村に辿り着く。

二人揃って！

こうして、歴史は変わってしまった。
これから何が起るのか……誰も知らない。
そう、神さえも。

黒衣の剣士？

今回のユマ姫は、セレナと共にパラセル村に辿り着いてしまった。

全てはカビたチーズのお陰。様々な偶然が噛み合った奇蹟。しかし、妹が助かったとは言え、大切な家族を失った事には変わりはない。

あの時ほど自棄でも苛烈でもないが、今回のユマ姫も帝国への敵意は健在だ。

何事と不安がる村人を前にして、ユマ姫は宣言する。

「帝国に侵攻され、王都エンディアンは陥落しました」

仰天する村人達。立て続けにユマ姫は恐るべき提案をする。

「私は外の街へ、出来れば王都に向かいたいと思います」

ユマ姫は打倒帝国を掲げ、東の王国と手を組むとぶち上げた。

普通なら考えられない提案。なのに、皆がなるほど頷いた。敵に魔力を封じる霧がある以上、魔力が無くても動ける外の人間の協力は不可欠。王族でありながらハーフであるユマ姫は交渉にうってつけの人選だ。

「俺も行くぜー!」

「俺だって!」

大勢の若者がお供を志願する中、今回は生き残った妹セレナだけが、その光景を悲しそうに見守っていた。

「大丈夫かな……」

姉であるユマは体も弱いし、戦う力もまるでない。だから、長旅なんて耐えられるはずがなかった。

……ソレとは別に、なにか不吉なモノを解き放ってしまうような、セレナには得体の知れない不安があつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「セレナー！ お姉ちゃん行つてくるね！」

「……ほんとに、行くの？」

馬車の荷台に腰掛け、ぶんぶんと手を振るユマ姫は元氣一杯。一方で太ももの怪我に足を引きずり、薄い魔力に元氣がないセレナ。

普段とは真逆の光景になつた。

「そりゃ行くわよ、だつて私は魔法も使えない混血だもん。ここに居たつて何も出来ない。でも、だからこそ外の街へ助けを呼びに行ける。セレナの方こそ大変よ？ 魔力が濃い場所はアイツらが占領してるところから氣をつけて」

「うん、そうだけど……」

終始こんな様子でセレナは落ち着かない。ユマ姫は不安がるセレナを一晚説得したのだが、納得しては貰えなかった。不安な部分が違うのだから当然である。

そこにユマ姫と同行を買って出た、村の若者達が割って入る。

「心配しないでセレナ様、ユマ様は僕らが守りますから」

ポーズを決めて、安っぽい魔道具を構えてみせる。

セレナには玩具同然に思えたが、弱い魔獣ぐらいなら追い払えるだろうと文句の声を飲み込んだ。

「……お願いします」

「オウー！ じゃあ行こうぜー！」

歓声に包まれて、馬車は出発してしまった。笑顔で応える若者達も、見送る村人も、皆が希望に満ちている。

不安そうに見つめるのはセレナだけ、そんなセレナはさっそく森から飛び出した魔獣を見つけてしまった。

「もうー！」

大きいだけの魔獣だけど、幸先が悪い。魔獣が街道に飛び出すや、セレナはその巨大なイノシシを魔法ひとつであっさり両断して見せるのだった。

「ええ？」

「大牙猪? 嘘だろ!? 初めて見たぜ」

馬車に乗る若者達は、腰を抜かしてひっくり返った。なにせはるか北の果ての山脈や、ピルタ山に住む魔獣だ。こんな人里に姿を現すのは珍しく、パラセル村の人々にとつては遠い世界の無敵の魔獣なのだから。

「そうなんですか? 都では良く見ますが」

「……………」

ユマ姫の言葉に、手に持つ魔道具が急に頼りなく思え、不安に顔を見合わせる若者達だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

けれども旅は順調だった。なんの事件も起きないままに、大森林の外縁部まで辿り着く。

……………しかし、である。

「うう、体が重いわ」

漏らしたのは村長の娘。彼女をはじめ、村の若者は皆が生粋のエルフである。外縁部の薄い魔力が若者達を蝕み始めていた。

「悪い、ユマ様。引き返そう。こんなに外がキツイとは思わなかった」

「いや、ピラーク（馬代わりのダチヨウ型の騎獣）も限界だ、とても引き返せねえ。近く

に、あいのこの村があつたはずだぜ、一旦そこで休もう」

「オイ！ やめろ！」

「あつ！」

「……………」

気まずい空気にユマ姫はギュツとスカートの裾を握り、唇を噛み締めた。

ユマ姫だつてハーフなのだ、差別的に言われて面白いはずが無かつた。

「私、馬車を降ります！」

「待つてくれ、死に行くようなモンだ」

制止する若者は、プルプルと震えて頼りない。一方で、澁刺としたユマ姫はひらりと

馬車を飛び降りた。

「あいにく、私、とつても元気ですから」

ユマ姫にとつて、日の光の下で思い切り走れる生まれて初めてのチャンス。本当は、

もつと早く馬車を降りて、自分の足で駆け出してしまいたかつた。

「今までお世話になりました。妹にはよろしくお伝えください」

「おい、待つて！」

ぺこりと頭を下げるとユマ姫は制止も聞かず、ただまっすぐに駆け出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ユマ姫の健康値、魔力値

健康値：38

魔力値：150

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

歩き続けたユマ姫はついに大森林を抜けた。そして、ソノアール村に到着する。いわゆる外の民、這ホいつくばるズ者。もつと酷いときは無能やら蛮族やら言われる人々が暮らす外の世界の村である。

「ハアハア……」

大森林の外縁からとは言え、魔法も使わずに数日駆け続けたユマ姫は、やはり疲れ果てていた。

「うう、大丈夫かな」

加えて、外の民、人間に対する恐怖は大きい。かといって、尻込みしていても何にもならないとユマ姫は理解していた。

「ごめんください」

「ん？ な、なんだ？ 嬢ちゃん！ どっから来た？」

サンドラのおいちゃんと出会い、ユマ姫は一晩の宿を得る。

その時にこれまでの経緯をかいつまんで説明すると、難しい顔で、「翌日、村長に話し

てくれ」とだけ言われてしまった。

そうしてやはり、ユマ姫はここでも村役場の村長室へと連れて行かれる。

そこで語ってみせるのは、森に棲む者の都が落ちたと言う事実。そして、帝国の新兵の器の数々だった。

その最中、やはりあの男が姿を現す。

「邪魔するぜ」

蹴破るように現れたのは、全身黒ずくめの危険な男。

「おもしろい客が来てるらしいじゃねえか」

田中だった。

そうだ、ここはただ、ユマ姫が自分の名前を宣言しただけの世界。それだけが違う世界。

神だって、完全な世界をわざわざ傷つけようとはしないのだ。

だから当然、この男もそのままココに現れる。

違うのは、唯一、ユマ姫の反応だ。

「……あの、どなたですか？」

おつとりと首を傾げる。ソレだけであつた。

「人の名前を聞く前に、まずは自己紹介、そうだろ？」

やはり、ウザイ調子で田中が応える。ここまであの時と、まるで変わらない。

そして、ここでのユマ姫は田中を知らない。田中の登場に驚く理由は、ユマ姫のどこにもないのだ。

「そうですね、わたくしは——」

……だから、驚くのはユマ姫ではない。

「お前はッ!?!」

田中だ。

ユマ姫の言葉を遮って、田中は声を荒らげる。

ヘラヘラとした軽薄な笑みはいっぺんに吹き飛んで、仰天し、我を忘れた。

田中はユマ姫の肩を掴み、ブンブンと揺する。

そして正面からユマ姫の目を覗き込み

……訊ねた。

「おまえ、高橋か?」

驚愕を顔に貼り付けた、黒衣の剣士がそこに居た。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「ワリいな、変な事言つて」

「構いませんけど……」

その日は村長の家に泊めて貰える事になった。二人は暖炉の前で今後の予定をすりあわせる。なるべく早くスフィールに到着しなければならなかった。

なにせ村長の家に泊まれるのは今日だけ、明日には発たねばならないのだから当然だ。

それもそのはず、ユマ姫は魔法もまるで使えない。ただ耳が長く、瞳が大きい一般的な森に棲む者の少女である。

我こそは、姫であるぞと宣言しても、説得力がまるでなかった。

「安心しろよ、俺がついてる。大船に乗ったつもりで、任せとけ」

村人も、村長も、だれもが真偽を疑う中、この剣士だけがユマ姫の言う事を全面的に信じてくれたのだ。名の通った剣士の言葉がなければ、今日だって村長の家でふかふかのベッドで眠れたかも知解らない。

ユマ姫にしてみれば、すこしおかしな事を言われるぐらいは何でも無かった。

「そのタカハシと言う女の子は、私と似ているんですか？」

……ただ、それでも少しばかり気に掛かる。

「いや、男だな」

「え？ それは……」

私は、そんなにも男っぽいだろうか？ それともタカハシと言う男の子がよっぽど女の子みたいに可愛いのだろうか？ と、ユマ姫が悩んだのは無理も無いだろう。

思い出すのは王都で評判の子役マーロウ。あんなに可愛い男の子ならば、似てると言われても悪い気はしない。

「いや、似ても似つかない海トカゲみたいなヤツだな」

「……ええ」

人間ですらなかった。

涙目になったユマ姫に、田中は悪びれず笑う。

「ハッ、見た目じゃねえんだ、雰囲気かな」

「雰囲気？ 私が、トカゲと、ですか？」

「……まあ、そうだな」

「余計に酷いです」

「いや、ちげーんだ、オイ」

「ふふっ」

「泣き真似かよ……」

「仕返しです」

涙目で、笑ってみせる。ユマ姫は根っから明るくて、賢い女の子なのだ。つまらない事にこれ以上、腹を立てたりはしなかった。

「安心しろよ、俺が護衛につけば帝国の追っ手だろうがなんだろうが、叩き斬ってやるさ」

「頼もしい、です」

「まあ、な、これでも腕には覚えがある」

田中はそう言つて、自然な仕草で腰のモノに手を伸ばす。業物のツーハンドेटドソー、上背に見合う大剣だ。

上位の魔獣にこそ歯が立たないが、その辺の剣士なら剣ごと叩き斬れる自信があつた。

その田中の手の平が、緊張にじつとりとベタついていた。どんな魔獣が相手でも軽口を絶やさず、飄々と余裕を保つ事が信条の男が、だ。

まみれた緊張を振り払う様に、握り締めた剣を抜き放つ。
そして、叫んだ。

「——キエー——ッ！」

猿叫えんきょうを発し、立ち上がると同時、上段に構え、そのまま振り下ろす。

他ならぬ、ユマ姫へ。

全身全霊を掛けた、必殺の一太刀。

タンツ！ と小気味良い音。座る椅子ごとユマ姫を脳天から唐竹割りに引き裂いた。引き裂いた？ 引き裂いたハズだ！

「どうしたんですか？ 私の顔に何か？」

イメージの中のユマ姫と、実際のユマ姫、二つの姿が重なって、同じ言葉を投げかける。

そうだ、本当の田中は、一歩だつて動いていない。まして、剣を振り下ろしてなどいるハズがない。

実際の田中は大きく息を吐き、椅子に背中を預けるので精一杯。その体は汗でぐっしよりと濡れていた。

絞り出す様に、語る。

「剣士ってのはな……」

「はい？」

「全てのモノを、二つに分類して生きている」

「それは、どうやって、ですか？」

「斬れるか、斬れないかだ」

余りにも物騒で、端的な答え。平和な世界で育ったユマ姫は顔を顰める。

「ええ……」

「そうやって、見極める癖を付けねえと、斬れねえモノを斬ろうとして、握りしめた剣を折っちまう。そんなのは二流よ」

「はあ……」

それが何か？　と言いたげなユマ姫の顔に、田中は毒気を抜かれてしまった。

「わりいな、もう寝よう。明日にはスフィールに向かう、良いな？」

「ええ、それはありがたいですが？」

悲劇を語る術が無かったユマ姫には、路銀もロクに与えられていない。報酬だってまるで出せない。

それでも、この剣士はスフィールへの護衛を了承してくれた。文句を言う筋合いはどこにもない。

「……………」

一方で、複雑なのは妖獣殺しの二つ名が通る田中の方だ。のんびりと果実を囓る少女の姿から目が離せない。

先程から、肌が粟立ってしかたなかった。

田中は、不気味な少女に、世界の秘密を見出した。

スフィール騒乱

ユマ姫と田中、二人は今回もソノアール村で邂逅を果たした。

翌朝、村長の家を出た二人は、スフィールに向けて旅立て……なかつた。

肝心のユマ姫は手ぶらに近い。雑貨屋で最低限の旅支度を買い込む必要があつただ。
だ。

あの時のユマ姫は、巧みな口上で村の人々から支援を受けたが、今回は細々としたものを自腹で購入せざるを得ないのである。

だが、少しも苦ではない。田舎の雑貨屋ではあるが、ユマ姫にとって全てが新鮮に映っていた。

「この石は、何に使うんです?」

「火を付けるんだ。知らねえのか?」

「え? この石が魔道具?」

「違えよ、タダの石だ」

説明されても、いまいち理解が追いつかない。無邪気なユマ姫に田中は苦笑し、何か買ってやろうと財布を開いた。

「何か欲しいモンとかないか？」

「そうですね、敢えて言えば乗り物でしょうか？」

しかし、田中の思いとは裏腹に、ユマ姫が欲しがったのはあまりにも大物だった。

「流石に馬は高えな……、だがロバぐらいなら行けるか？」

「馬とロバって何が違うんですか？」

「サイズだな。それ以外の違いあんのかね？ 俺も良く知らん」

「あの、ちよつと良いですか？」

二人の雑談に割り込んだのは一人の少年だった。ニット帽を深く被って、少し怪しげだ。田中は店主に目を向ける、何者か、と。

「ああ、ソイツは獵師の息子さ、良くココで塩や麦を買っていく」

「ふうん」

鍋や鎌、くわ 鋤すき、雑多な金属製品に埋もれながら、店主はカウンターの向こうで無精髭を撫でている。小さい村だ、全員が顔なじみ。怪しい人間ではなさそうだ。

「良くねえよ、どっか行け」

「えええ？」

気のない返事でそっぽを向く。田中は少年への興味を失った。

「オラッ！」

様に見せかけ、振り返ると同時、少年のニット帽を引つpegす。

「ああつー！」

「やっぱ、エルフか」

少年の耳は尖っていて、森に棲む者特有の形をしていた。

「店主、知って……は、いないみてえだな」

「あ、ああ……知らん知らん。こりやおでれえた」

村ぐるみではない。ならばと田中は少年に向き直る。

「何の用だ、姫様を取り返しに来たのか？ 攫った訳じゃねえんだぞ？」

「うう、酷いよ」

帽子を奪い返した少年は、深く被って耳を隠した。

「何で隠すんだ？ やましい事はねえんだろ？」

「村には森に棲む者を怖がる人が居るからさ。塩なんかは森じゃ高いから……」

聞けば、大森林の端っこに森に棲む者と人間のハーフが村を作っているらしい。そこで狩りをして、余った肉を売り、塩を手に入れていたんだとか。

「漬物を作るにしたって、塩を買いすぎだとは思ってたがなあ」

しみじみと語る店主に、田中は水を向ける。

「どうなんだ？ 森に棲む者と知ったら、もう取引出来ねえか？」

「いんや、ボウズが持つてくる肉はこの村の生命線よ。ワシらじゃ危なくて、とても森には入れんからな」

「つてこつた、わざわざ隠すから却つて怪しい」

「でもさあ……」

なお口ごもる少年に、田中は問い正す。

「で、なんで俺らに話し掛けてきた？」

「それは……」

聞けば、いま、彼らの村には多くの客人が訪れているらしい。

「ああつ、きつと彼らですな」

「姫様を途中まで送つて来たつて奴らか」

「……失礼な事をしてなければ良いんですが」

「それが……」

どうもやらかして居るらしい。少年が苦々しくも白状した所には、態度が大きい若者が村で傍若無人に振る舞っているとか。

「少し休ませろつて入つてきて、酒を出せとか、飯が不味いとか、ホントに勝手に困つちやうよ。危ない武器も持つてるし。でも、せつかくだから村の近くに巣くつた大岩蠟螂ザルディネフエロを退治して貰おうとしてるんだけど」

「ふうん、で？」

「いや、奴らがさ『ユマ姫を連れ戻さないと！』って言つてたから、慌てて村まで様子を見に来たんだよね」

「ふうん。で、どうするんだ？」

「うーん」

悩ましの少年だが、チラリと田中を見て、降参と手をあげた。

「どうにも出来ないよ。村は手一杯だし」

「じゃあヨロシク言っておけよ、姫様はこの田中が王都まで送り届けるからよ」

「解ったよ」

そう言つて、しづしづ少年は引き下がった。

こうして、今回はハーフェルフの襲撃は起こらなかつた。

元より大牙猪をエサにした大岩蟻螂ザルゲルゴールのスタンピードも発生しない。だから例年より数を増やした程度のカマキリの群れは、魔道具で武装したパラセル村の若者に駆除される事になるのだつた。

あの時、命からがら逃げ込んで鬱になっていた若者は、今回は村長の娘に良いところを見せたりして、ちよつと良い雰囲気になったとかならなかつたとか。

勿論、この顛末は二人の知るところではない。

「では、出発しましょうか！」

「ああ」

そうして、何の障害もなく、二人はスフィールを目指すのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「それで、エルフと言うのは何ですか？」

旅の途中でユマ姫は訊ねた。田中が少年に掛けた言葉が気になったのだ。

「ああ、森の民だとか、外の民だとか、解りづれえだろ？」

「はい、かと言って森に棲む者と言われているは、私達が怪物の様で、面白くないです」

「だろ？ だからエルフってな、俺の生まれでは森に住む魔法を使う耳が長い民をそう

呼んだんだ」

「ええ!? そうだったんですか！ エルフ！ 良いですね！」

そんなこんなで、二人の旅は長いものとなった。

なにせ、ユマ姫は魔法を使えない。十二かそこらの箱入り娘が歩いて旅をすれば、距

離が稼げないのは当然と言えた。

しかし、それでも構わなかった。

ここでのユマ姫は復讐に突き動かされも、生き急いでも居ないのだから。

だからゆったりとした旅の空で、ソレは起こった。

「何でしょう？ アレは？」

ユマ姫はロバに乗ったまま訊ねた。このロバは余りにも歩みが遅いユマ姫に焦れた田中が旅の途中で買い求めたモノだ。格安の、潰される寸前の老いたロバである。

それほど今回の二人の旅路は遅い。あの時であればとつくにスフィールに着いて、街の観光どころか、グプロス卿の謁見もとつくに済ませた時期である。

そんなロバの上、ユマ姫が指差した先、北の空から無数の陰が迫って来ている。

「マズいな、恐鳥リコイだ！」

「え？」

背後から追いかける様に、恐鳥リコイの大群が二人に迫っていた。悪い事に逃げも隠れも出れないゼスリード平原のただ中である。

「走れ！」

「はい！」

それでも戦う事など考えられない。田中はロバに括りつけた荷物を背負えるだけ背負い、ユマ姫は軽くなったロバを思い切り走りさせた。

身を隠せる森の中へと、二人で飛び込む。目一杯のスピードのお陰で、間一髪で間に合った。

「誰か襲われています！」

違った。間に合つたのではなく、恐鳥リコイに見逃されただけ。もつと大きい獲物があつたから。

ユマ姫は木陰から見てしまう。恐鳥リコイに襲われる哀れな集団を。

「助けないと!」

「いや、良く見ろ」

田中は飛び出そうとするユマ姫の頭をそつと押さえた。

「真ん中でキラキラ光ってる男。帝国軍の甲冑だ」

「まさか! でも、確かに……。ここは王国領ですよね? どうして帝国兵が?」

「ああ、でもよ、姫さんは我こそはエルフの姫君つて宣言してここまで来ただろう? そ

ろそろ待ち伏せがあつても不思議じゃねえよ」

そうだった、あの時と違い、二人の歩みは遅く、噂話を置き去りにスフィールに辿り

着く様な旅程ではなかった。察知した帝国軍に待ち伏せされたつて不思議じゃない。

「それにしたつて、あんな大軍で……堂々と」

「百人以上は居るか? 子供一人に大袈裟な奴らだ」

「本当、なのですね」

まだ冒険気分の抜けきらないユマ姫だったが、ようやく追われる身だと自覚した。それも自分一人の為に、王国領土に堂々侵攻するほどに狙われているとは。

「こりや、ひよつとしたらスフィールに行くのもヤベエかもな」

「それは？」

「迎え撃つ王国軍の姿が見えねえ、既に話が済んでいる可能性があらあな」

「王国が私を売り渡した？ ホントに？」

「可能性の話だ、今はココを乗り切らねえと」

森の中に留まるのも得策ではない。恐鳥リッコイだって大きいのばかりじゃない、敵はあくまで鳥なのだ。小型の恐鳥リッコイに森の中で群がられれば、平原で襲われるよりも尚マズい。

「今がチャンスかも知れねえ、奴らが襲われてる隙に突っ切るぞ！」

「解りました」

余りにもリスキーな賭け。不運にまみれたあの時ならば確実に反対しただろう。しかし、今の彼女には反論する言葉はない。

「行くぞ！」

「ハイ！」

機を見計らって飛び出した。

しかし、二人の前に帝国兵が立ち塞がる。

「何者だ！ 貴様ら！」

「怪しいぞ！ 噂のユマ姫ではないか!？」

やはり、狙われていた。彼らも恐鳥リコイに襲われながら、必死に任務を果たそうとしてる。

「まじいぜ、姫様。ココは俺が引きつける。その間に逃げるんだ」

「そんな！ 出来ません！」

ここまでの旅で、ユマ姫は田中に大変良く懐いていた。優しいユマ姫は、田中を恐鳥リコイの群れの中に置き去りになど出来ない。

しかし、そんなまどろっこしい問答を待つてくれる帝国兵ではないのだ。

「ええい！ 動くな！ 行くぞ！ 取り押さえるんだ！ なっ!? ぎやああああ！」

銀の兜の帝国兵が駆け出すや否や、恐鳥リコイに空から襲われた。あつという間に宙づりにされて、皆が見上げる最中、無惨に地面へと叩き落とされる。

皆が言葉を忘れ呆然とする中で、ロバに乗ったユマ姫が堂々と進み出る。

「愚かなる者どもよ！ 道を開けなさい！ さもなくばっ！」

馬上で指差す先、同じく銀の兜の兵士が高々と恐鳥リコイに吊り上げられる。

「まさか！」

「魔獣を操るとは本当だったか！」

森ザに棲む者の王族は魔獣を操る。

勿論真つ赤なウソである。だが、ユマ姫はそんな噂が有る事を知って、一芝居打ったのだ。

彼女は精一杯に威厳を見せようと、背筋をピンと張り、王族の証たる王冠の秘宝を堂々と付け、少しも恐れずに恐鳥リコイが飛び交う平原に飛び出した。

小さな彼女を乗せれば、潰される寸前の老いたロバが、まるで一角の名馬のように錯覚する。

ハツタリだ。本当は怖いが、ハツタリをしてみせた。

……実は、この演技力とハツタリだけが、ユマ姫が元来持つ唯一の資質。

「道を空けなさい！ さもなくば」

また銀の兜の兵士が吊り上げられたのを見て、慌ててユマ姫はそちらを指差した。ちよつと遅れてしまったが、注意深く観ていたからギリギリのタイミングで間に合った。

「クッ！」

「マズいぞ、死にたくねえ！」

ココに集まったのは、寄せ集めの第三特務部隊。早い話が情報部の三軍だ。士気は低く、恐鳥リコイの群れに冷静さを失っていた。単純なハツタリが見破れない。

堂々と、ゆつくりと平原を歩むユマ姫に自然と道を空けてしまう。

「ふざけるな！ 止めろお！」

隊長であるマルムークは、しかし恐鳥リコイにたかられて、ユマ姫を止めに入れない。

皆が悔しげにユマ姫を見つめる中、ニヤリと笑った田中が、付き従うように横に並んだ。気分は槍持ちの従者である。

ロバに乗った少女だからいまいち締まらないと思いきや、巨漢の田中だからこそ、そのチグハグな大きさの対比が却ってサマになって見える。

恐鳥リコイが飛び交う平原を悠々と進む、ちいさな少女とおおきな剣士。

いつそ絵になる光景だった。

「やるじゃねえか、姫様」

ユマ姫の暴挙、田中だけはハツタリと見抜いていた。イタズラっぽい笑みを浮かべ、小声で話し掛ける。

「……………」

「……姫様、どうした?」

しかし、ユマ姫はしてやったりと笑っていない。顔を蒼くして震えていた。「どうしまししょう? どうしまししょう!」

「ん? どうした?」

「もう、兜を付けてる人が居ません」

「んだそりゃ? あ!」

そう言えば、吊り上げられたのは揃って銀の兜をつけていた。

恐鳥リコイに襲われ続け、馬車の下に縮こまるマルムーク隊長も銀の鎧を着けている。

何のことは無い、指差した兵士が襲われるのは銀の兜の兵士を指差して居ただけだ、光り物に惹かれる鳥の本能を逆手に取っただけの事。

しかし、もう銀の兵士が残っていない。

「は、は……」

「は？ どうした？」

「走ります！」

ユマ姫は一気にロバを走らせた。ドタドタと。

ポカんと見送った帝国兵であるが、見送らなかつたモノがたつた一匹。

——ビイイイ

グリフォンだ。恐鳥リコイの群れから飛び出したグリフォンが、狙つたのはキラキラと光る

ユマ姫の王冠。なにより大切な秘宝だった。

「え？ イヤっ！」

間一髪、ロバの背で身を屈めたユマ姫だが、気が付けば頭上の王冠はグリフォンに啜えられ、持ち去られていた。

「嫌だ！ 取り返さないと！」

「待て、姫様！」

慌てて踵を返そうとするが、それは余りにも危険だった。

「ふざけんな！」

「可愛い顔して、謀りたばかやがった！」

なにせ今の襲撃で、魔獣を操つてなど居ないと帝国兵にもバレたからだ。後ろから猛然と追いかけてくる。

「どんだけ大切な品か知らねえが、今はマズい」

「ですが！ アレこそ私が私が王位継承者であると認められた証なのです！」

「そうかよ……」

王族として、成人すると与えられる秘宝。だから、ユマ姫の言葉は嘘では無い。

嘘では無いのだが、この言葉は誤解を生んだ。

田中は、アレこそがエルフの王権を示す、文字通りの王冠だと判断したのだ。皇帝の王冠と比べても遜色の無い豪華さなのだから、田中の勘違いも当然だ。

魔法的な効果は健康値の測定しか無いのでエルフにとって宝飾品としての価値しかない。だから王家の秘宝としてはランクの低い品なのだが、そんな事は田中にとつて知る由はない。

「ちつ、でも、今は逃げるぞ、アレは俺が絶対に取り返す」

「約束ですよ……」

惜しみながらも、駆け出して逃げる。

なにせ今も、後ろを追いかける帝国兵は銀に輝く剣を掲げ、大挙して迫ってくる。

そのため、恐鳥リコイに次々と啄まれてはいるのだが、彼らは最後まで自らの失敗に気が付く事は無かった。

細い山道に至り、ようやく恐鳥リコイの襲撃を振り切るや、彼らはスフィールの衛兵達に囲まれたからだ。

「お前らは？」

田中は慌てて誰何する。スフィールの衛兵に見えるが、まだ味方とは限らない。

「我々はスフィールの衛兵だ！ 怪しいヤツが居ると聞いてやって来た」

叫んだのはヤツガラン。丁度、この時も訓練の途中であつたのだ。田中は直感的にこの男は信用に足ると判じた。

そして、その通り、ヤツガランと衛兵達は、追い縋る帝国兵を次々捕縛していった。

彼にとつて、年端もいかない少女を追いかける帝国軍など、捕まえてくださいと言っているようなモノ。

ましてバタバタと走り続け、疲れ果てた帝国兵。無力化させるなど簡単だった。

「事情を聞かせて頂けますか？」

「ああ、構わねえよ」

「わ、私も！ 話します！」

そうして、二人はヤツガランと共にスフィールに向かうのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「では、二人が襲われた理由はそこのお嬢さんが、森に棲む者の姫だからと？」

「だから、そう言ってるだろ？」

道すがら質問に答える田中。

ユマ姫は、ここは田中に任せる事にして不安げにやりとりを見守っていた。

「しかし、王族だとしても、帝国が少女ひとりに出兵などしますかね？」

「そんなこと俺が知る訳ねえだろ？」

「この場で捕らえなければいけない理由も無いでしょう？」

「んな事言われてもな」

田中は肩を竦める。

実際、二人が知るところでは無いのだが。帝国にしてみれば、スフィールに辿り着かれるだけで、マズい状況だった。

この時、既に黒峰は旧都の強固な防衛網を目にしている。動く石像に稼働する魔導戦車ではとても手が出せない。

王族の協力があれば或いは止める手段があるのでは、とユマ姫を探していた。

なにせ今回も魔力過多でピンクに染まったユマ姫の髪は、伝説にある赤い髪の調停者、ゼナの姿絵によく似ていたからだ。

この時既に、ユマ姫は帝国から最重要人物としてマークされていた。なるべく無事に身柄を確保するように、伝書鳩により特務部隊には命令が下っている。

しかし、スフィールに辿り着いてから都市の中でユマ姫を攫うなり、引き渡すなりを要求すれば、帝国に協力的なグプロス卿の失点になりかねない。

帝国にしてみれば、ゼスリード平原で捉えるしか無かったのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、ヤツガラン達とスフィールに辿り着いた二人だが、恐ろしい現場に直面してしまふ。

スフィールが軍隊に包囲されていたのだ。

それも包囲しているのは帝国軍ではない、隣領ネルダリアの兵士達だった。

グプロス卿は亡命を図る森に棲む者の姫を帝国に売り渡そうとしている。

シノニムからそんな一報を受けたオーズドは、早くも派兵し、スフィールを一網打尽にする計画であった。

……あの時、シノニムはユマ姫を助ける事を意識して、数少ない情報部の手駒をゼスリード平原に派遣してしまった。

そうして、ズーラーをはじめとする、グプロス卿の手駒が一斉に城内から居なくなる絶好のタイミングをフイにした。

今回は、見ず知らずのユマ姫にソレほどの価値が有るとは思わず、帝国兵を釣り出すエサとして見殺しにするつもりだったのだ。

精々、平原にはヤツガラン達を訓練として差し向ければ良い。ヤツガランが帝国兵に負けようが勝とうが、帝国が侵略して来た証拠にはなるからだ。

だからこそ、このタイミングで蜂起と包囲が発生する事になる。これはヤツガランにも寝耳に水の出来事だ。彼は真面目過ぎる故に、シノニムの蜂起計画を聞かされていなかった。

「何が起こつてるんだ？」

「こつちが聞きてえよ」

呆然とする一同の前に、並外れた駿馬に跨がる一人の偉丈夫が進み出た。

「君は、ひよつとして森サに棲バむ者の姫かね？」

「ンだ、テメエは？」

「私か？ 私はオーズド・ガル・ネルダリア。ネルダリアの領主だよ」

「まさか？ じゃあこの兵士は？」

割って入ったヤツガランに、オーズド伯は鷹揚に頷く。

「左様、ネルダリアの兵士達だ。スフィールは其処なる姫を帝国に売った。それどころかスフィールごと帝国に下ろうとしている。これは立派な背信行為である」

「……馬鹿な」

「思い当たるフシは無いかね？」

嫌と言うほどあった。まるで防衛を考慮しない改造の城。減っていく守備隊の人員。

城壁の補修予算は年々減っている。ヤツガランは俯いた。

「なにより、君が捕縛した帝国兵、ソレが何よりの証拠だ」

「全部、計画の内ってワケですか……」

「そうだ、君だけには知らされ無かった様だね。そろそろ仕上げだよ」

シノニムが指揮をして、城内で蜂起が起きる。ヤツガラン以外の衛兵隊長は、既にして蜂起に回っている。

その時、逃げ出したグプロス卿が向かうのは何処か？ 人が抜けて、最も兵士が少ないヤツガラン隊が警護する北門だ。

内。開け放たれた城門から、グプロス卿の馬車が飛び出す。全てはオーズド伯の計画の内。

たちまち身構えていたオーズド伯の騎士に捕縛される。

「簡単なモンだな」

田中が呆れの声を上げる。計算され尽くした城攻めだが、裏を返せば今のスフィールがそれだけ脆いとも言える。

しかし、この男ならば、と田中は思った。

「なあ、オーズドサマよ、この姫様を王都に届けちゃくれないか？」

「ふむ、いやしかし」

オーズドの視線の先には、ロバの上でぼんやりとスフィールを見つめるユマ姫。

そこには国を追われた鬼気迫るモノを感じない。まして、音に聞こえる森に棲む者の魔法も何も使えないと言うでは無いか。

どうにも、証拠が薄い。流れの傭兵が森に棲む者の姫を捕まえたとき、手の込んだ詐欺に勤しんでいる様には見えないのだ。

「何か証拠があるだろうか？ 帝国に追われていただけでは弱い。奴らだって偽者に踊らされていたと私は見ている」

「オイオイ、目ん玉ついてるのか、どっからどう見たって」

「わあ、凄いや、凄いや！」

田中が指差す先で、ユマ姫は兵士の活躍を無邪気に手を叩いて喜んでいるではないか。もはやただの少女になって、馬だつてみすばらしいロバでしかない。

「……本当は証拠があつたんだがな」

「ほう？」

「王権を象徴する王冠を持たされていた、ソレが厄介な妖獣に奪われた」

「妖獣殺し、その言葉で確信したよ」

「なんだと？」

「貴様の下手な詐欺だとね！」

「テメエ！」

オーズドにしてみれば、王冠を小娘に持たせるハズがない。見え透いた嘘に感じたのは当然だ。

オーズドと田中、まさに一触即発。だが、事態はより切羽詰まった悲鳴に斬り裂かれる。

「ぐわあああー！」

二人とも歴戦の猛者、同時に悲鳴の先へと向き直る。

「奴らは！」

「破戒騎士団か！」

北門から流れ出たのはスフィールの主であるグロス卿だけではなかった。スフィールの外へも知られた破戒騎士団の精鋭達。

魔獣退治専門に名を売る彼らだが、対人戦でもその実力は本物だった。

オーズド伯自慢の騎士を一刀の下にねじ伏せて脱出を図る。

「いかん！ 出るぞ！」

「俺がちんけな詐欺師じゃねえ所を見せてやる！」

オーズドと田中、二人が駆ける。相手はこの世界最高レベルの実力を誇る騎士団だ。

「ありゃ？ アレはひよつとしてオーズド伯かな？」

「妖獣殺しに、ユマ姫も居るね」

破戒騎士団にとってみれば、敵の頭がわざわざ来てくれたのだ。それに、帝国へ逃げ出すならば手土産が欲しい。降って湧いた幸運だ。

そのぐらい、彼らは一切負ける気がしないのだ。

「クソツッ！ こやつら！」

「強え！」

オーズド率いる虎の子の騎士団も、破戒騎士団にはまるで歯が立たなかつた。

「ハハツ、ローグ隊長、コレがネルダリアの精鋭ってホントかな？」

「まあ、こんなモノでしょう、だが、この男だけは中々やる」

唯一、田中だけは互角に渡り合った。が、それでも隊長であるローグを相手には分が悪い。

実は、刀を持った田中は例外として、ローグこそこの世界最強の一画だった。まして

馬上から攻撃するローグに対して、田中は足を使つて攪乱するしかない。

田中は、馬上から槍を使うローグの懐に入り込めずに居た。

「クソツ隙がねえ！」

「隊長、ソイツ俺にやらせてよ」

「君じゃ無理でしょうね」

「そんなー」

破戒騎士団は無敵だ。

『偶然』さえなければ、壊滅させる術は無い。あの時だつてユマ姫の『偶然』に巻き込んでようやく倒せただけの事。

だから、ここで彼らが死ぬのは、再びの『偶然』。

ある意味での必然だった。

——ビイイイイ

グリフォンだ。舞い降りたグリフォンが田中と死闘を繰り広げる破戒騎士団団長ローグを真上から踏み潰した。

「なっ！」

オーズド伯は間近に観るグリフォンの姿に狼狽する。

見た事もない化け物なのもそうだが、スフィールを包囲するのは千に迫る完全装備の

ネルダリア兵。そのただ中に飛び込んでくるなど、魔獣とは言えマトモな肝の据わりようではない。恐れを知らない怪物であつた。

——ビイイイイ

恐ろしい妖獣。しかし、その足を指差して田中は叫んだ。

「アレだ！　あの足を見やがれ！　あの王冠がエルフの姫の証だ！」

「なんと！」

グリフオンの足の指にはユマ姫の秘宝が嵌まつていた。よほど気に入つたのか、指輪の様に見せびらかしている。

その見事さにオーズドは目を奪われた。確かに王権の象徴と言われても不思議じゃない。森に棲む者を人の住めぬ大森林を治める蛮族と侮つていた自分を恥じる程には、緻密で繊細な宝飾品である。

「取り囲んで倒せ！　アレがあれば帝国を攻める理由に十分だ」

森に棲む者の協力を得るにも、帝国と戦う主戦派を鼓舞する為にも、怪物を倒して森に棲む者の王冠を奪い返したエピソードは武器になる。

オーズドは其処までソロバンをはじき、破戒騎士団より先にグリフオンを討とうとする。

——ビイイイイ

しかし、破戒騎士団以上にグリフォンは無敵だった。

隊長を失った破戒騎士団は統率を失い、徐々に数を減らしたが、グリフォンに傷は与えられない。

オーズドの騎士団は対人専門。魔獣相手は専門外であったから無理もない。

「うおおお！」

そんな中、気炎を吐いたのが田中だ。斬り掛かる破戒騎士団の男を隠れ蓑に、グリフォンの背に飛び乗った。

「キエエエエ」

猿叫と共に翼を切り裂く。始めてグリフォンにまともにダメージが入った瞬間だった。

——ビイイイ

悲鳴を上げて、グリフォンが飛び去っていく。気が付けば、破戒騎士団はグリフォンとオーズド伯の配下の手で全滅していた。

「勝った、のか？」

オーズドはホッと息を吐く。スフィールへの肅正、何ヶ月もかけて緻密な戦略を描いたハズが、思いの外ギリギリの戦いになってしまった。

そして、完全勝利ではあるのだが、失った王冠は余りにも魅力的だった。

結局、傷を付けられたのはタナカだけ、妖獣殺しの二つ名は伊達ではないと言う事だ。餅は餅屋に任せるに限る。

「田中殿、あの王冠を見た以上、そなたの言う事、信じよう」

「遅えよ」

「姫が私を責任を持って王都に届ける。そこで、君にはひとつ依頼をしたい」

「ふうーん、前金は？」

オーズドが田中に手渡したのは大金貨十枚。約一千万円。そしてオーズド伯が身に付けていた指輪だった。黄金で出来ていて、はんこの様になっている。

「その指輪はネルダリア領の玉璽だ、ネルダリアでは、あの王冠と同じ様な価値のモノと
思っって良い」

ソレを耳にしたユマ姫は「えっ？」と思った。あの王冠に王権を象徴する価値など無いからだ。だが「あの王冠別に特別な意味とかないですよ」と言ってしまうと、誰も取り返してくれない空気を感じたユマ姫は、ここは黙っていようと心に決めた。

ユマ姫は純真だが、ちよつとズルい所もあるのだ。

「解った、姫様、俺はここでお別れだ。次会う時は王都で王冠を返すときだな」

「ええ、お、お、お願います」

すこしばかり罪悪感を感じながらも、ユマ姫はシノニムと共に、王都へと旅立つの

だった。

田中はここでも大森林にとつて返す。そこで王冠よりも重要なモノを手に入れるのだった。

恐ろしいモノ

豪華な部屋だ。高い天井にはシャンデリア、落ち着かないほど華美な調度品に、壁紙までが輝きを放って主張してくる。

そんな部屋の中央で、優雅にティータイムを楽しむお嬢様と、後ろに控える老執事。「気に入りませんか」

「あら？ どうして？」

老執事の諫言に耳を貸さないお嬢様、派手なドレスに身を包み、縦ロールを揺らして笑っている。

高橋敬一が見たならば悪役令嬢まんまだと笑っただろう。

だが、このお嬢様と老執事、悪役などと言う生やさしい言葉では収まらない。

シャルティアだ。このお嬢様こそ、シャルティア・フォン・ダックラム。

ここはユマ姫が到着する前のビルダール王都。このお嬢様と老執事が意見を交えるならば、話題となるのは次のお茶会の予定などではありえない。

殺人組織の運営方針だった。

「適正のない素人を取り込み過ぎです。目指すべきは少数精鋭。完璧な仕事には、完璧

な人間が必要かと」

「完璧な人間なんて存在しえないわ」

「私を知る限り、あなたこそがソレに近い。私の理想を体現出来る」

「あなたの理想に興味はないの。コレから私の戦争が始まるんだもの」

「お嬢様の、戦争？」

「そう」

眉を顰めた老執事に、シャルティアはティーカップを下ろす事で答える。カチリと音がいやに固く響いた。

老執事は尚も食い下がる。

「お聞かせ願えますか？」

「そうですね」

シャルティアは片目を瞑って、イタズラっ気のある顔を覗かせた。

「情報戦よ」

「情報戦？」

「帝国が森に棲む者の都を落としたのは知ってるわね？」

「無論です」

「なのに私達は帝国が森に棲む者を攻略した方法を知らないし、もっと言えば何故、帝国

は長年森に棲む者を敵視していたのか、ソレすら知らないのよ？ そんなのつてあるかしらっ。」

「ふむ……」

「手が要るの。もつと多く、もつと長く、もつともつと。情報こそが全てを征する」

「あまり、そそられませんか」

「あら？ コレを見てもソレが言える？」

シャルティアが取り出したのは豪華なティータイムにそぐわない鉄の武器。

小型のクロスボウだった。

「この大ききで、威力はロングボウと同じなの」

「信じられませんな」

「見た方が早いわ」

言うなりシャルティアはティーカップの下からソーサーを引き抜いた。そのままカードを投げる気軽さで放り投げる。一見するとお嬢様が見せるティータイムでのイタズラ。

しかし、結果はイタズラとは程遠い。ソーサーは奇妙なほど良く飛んだ。空気を切り裂き、部屋を横切り、そのまま壁に突き刺さる。

暗器だ。薄く鋭い鉄で作らせたソーサーは、お茶会に持ち込めるシャルティアの隠し

武器。

——ダンッ！

そして放たれたクロスボウのボルトは、鉄のソーサーをぶち抜いてそのまま壁へと縫い付けた。

「何と言う威力！」

「このサイズで、発射は引き金を引くだけ。誰でも使える。誰でも殺せる。これこそが帝国の武力、侮れないわ」

「……………」

執事は黙った。この武器が仕事にどれだけの革命を起こすか計り知れないからだ。

「話には聞いた事あるでしょう？ 『ボウガン』と言うんですって、聞かない響きよね？」
「何が言いたいのですかな？」

「帝国はどこからか、未知の技術を手に入れた。古代文明とも恐らく違うわ。魔力が無くても再現出来る。そして、そんなモノをサンプルにどうぞと、敵性国家である我々にポンと譲ってくれたのよ？ コレがどう言う事か解る？」

「舐められている？ ですか？」

「違うわ、こんなの何の価値も無いのよ、もっと危険なモノを作っている」

実際、張力を得るために木より固い鉄で弓を作る程度の事は誰だっと思って考える。

だが、威力のあるクロスボウを作るには、まず粘り気のある、しなやかな鉄が必要だ。堅くても折れてしまえば意味がない。良質な鉄がなければ威力が出ない。

そして、トリガーの発射機構にはそれなりの工作精度を必要とする。技術がなければマトモに飛びはしない。

それだけの工業力を身に付けた上で、このボウガンは前座に過ぎないとばかり、いよいよ本場に作りたいモノに辿り着いたとしたらどうなる？

既に王国は何周も遅れている。このままでは滅びるのも時間の問題。

もはや情報こそが王国の存亡を決定づける。コレはそう言う戦争だと、シャルティアは直感していた。

「カディナール様はなんと？」

「私の婚約者様は、もう帝国と秘密同盟を結ぶつもりよ」

お茶を飲み干したシャルティアの瞳が爬虫類みたいに細まった。

「一足飛びに同盟なんて、王子はどんなモノを見せられたのかしらね？」

「それが新兵器だと？」

「名前だけは知ってるわ。ジユウと言うんですって……」

「ジユウ……」

「小さな鉄の弾を飛ばす兵器だそうよ、方法は不明。そろそろ見せてくれるかしらね？」

「それが、人間を増やす理由ですか？」

そう問われると、シャルティアは人差し指に顎を乗せ、小首を傾げて苦笑した。

「それもあるけど、一番は心細いから、ね」

「お嬢様が、心細かい？ 何かの冗談ですか？」

あんまりな物言い。コレにはシャルティアも肩を竦めた。

「だって、たった一人で帝国と戦うなんて怖いじゃない？」

「……話が、見えてきませんか」

「わからない？ 力を付けた帝国と同盟なんて、平等なモノにはならないわ。王国は何を差し出すハメになるのかしらね？」

「まさか！」

「同盟に人質はつきものよ。その点、王妃になった私はピッタリじゃない？」

乙女のようにウツトリと語る。しかし目だけは邪悪な爬虫類。

「ねえ？ 王妃サマが国一番の殺し屋なんて、一体誰が信じられるかしら？」

「ひよつとして、皇帝を？」

「それも、いいかもね」

気のない素振り。嘘。

シャルティアは、現人神と呼ばれる皇帝の首筋を斬り裂いて、人間であることを証明し

たくてたまらなかつた。

可愛いぬいぐるみの中身。残らず引き裂いて綿を抜き出し、両親を困らせたのが幼少のシャルティアだ。その本質は少しも変わって居なかつた。

剥製作りもその一環。全ての謎を解き明かし、全ての中身をぶちまけたのがシャルティアなのだ。

まして帝都で情報収集にあたり、秘密の全てを白日に晒せば、表と裏がひっくり返る。戦争の主役が暗部が変わる。自分の手で戦争を決められる。ソレだけの力を欲していた。

「やはり、気に入くわなないですな。我々はあくまで裏方。暗部の領分をわきま弁えない限り、破滅はすぐに訪れます」

「何言ってるの？ ベイター。弁え過ぎてダックラム家が滅びかけてたじゃない」
「……………」

その通りだった。

老執事の名はベイター。彼こそが暗殺で名を売ったダックラム家の本丸。その技術を受け継ぐ最後の一人だった。

しかし、彼と彼の先人達には仕事の美学があり過ぎた。仁義なき仕事はしないと、プライドが邪魔をした。平和な世にあつて、次第にダックラム家は没落していく。

極めつけに、当代ダックラム公は愛する妻との間で子宝に恵まれず、ダックラム家が消滅するのは時間の問題。このまま暗殺技術も途絶えると思つた矢先、ようやく一人娘を授かつた。

娘が可愛くて仕方が無いダックラム公は、あろう事か悲劇の美姫オルティナから名前をとつて、シャルティアと名付けてしまふ。

そして、シャルティアの誕生に嬉しくなつたのは、執事であるベイターもだ。そうしてダックラム家はシャルティアを中心に回り始める。

しかし、生まれてきたシャルティアは滅多に笑わない子供だつたのだ。

両親も、ベイターも、何とかシャルティアの笑顔が見たい。そうして、ベイターは手品代わりに暗殺技術の一旦を見せてしまつた。

音も無く歩く技、高い壁を越える跳躍、闇に紛れる呼吸法。シャルティアは、どんな玩具よりベイターの技に興味を示した。

ソレが全ての始まりだつた。

いや、全ての終わりだつたのかも知れない。

はじめから間違ひだつた。暗部は執事が取り仕切り、当主は隠れ蓑に徹して裏の仕事に決して関わらない。これこそがダックラム家の基本理念だつたはず。

間違つても、当主の一人娘、お嬢様に教えて良いモノではない。いや、実際の所、本

当に覚えてしまうなんて、ベイターは夢にも思っていないかったのだ。ちよつとした大道芸として、消えゆく技を誰かに見せたかっただけ。

気が付けば、たおやかな貴族のお嬢様はベイターを遙かに超える暗殺者へと変貌していた。

決してあり得てはいけな事だった。だが、もはやこのお嬢様を止められるのはベイターしか居ないのだ。

「行き過ぎを諫めるのも臣下の勤め」

「やるき、なのね？」

二人の間で殺意が渦巻き、空気が軋んだ。

煌びやかな貴族のティータイム。お茶の香りに混ざるのは、肌が粟立つ死の気配。

「失礼します」

そこへ新たに、若い執事が飛び込んだ。

「ウイルター、どうしたの？」

「それが、一週間後には森に棲む者の姫が到着すると」

「へえ？」

情報を広く集めるダックラム家は、王宮よりも耳が早い。ネルダリア領の人間を除くと、もっとも早くユマ姫の情報を手に入れていた。

「どうなさいます?」

「……そうね」

ユマ姫はネルダリアのオーズド伯の紐付き。主戦派の急先鋒だ。

秘密同盟は勿論、王妃を帝国へ人質に出すなど、看過するはずがない。シャルティアにとつて邪魔な連中だった。

ユマ姫に帝国の非道を喧伝させれば、主戦派が勢いづくのは間違いない。

一転、戦争の悲惨さを語らせる事に成功すれば、厭戦ムードが際立つだろう。まして帝国に対してもカードになる。

そうして思いついたのは、ベイターとの決着の付け方だ。

「ユマ姫を攫った方が主導権を握るってのは、どう?」

「ほう? それは随分と私に不利なルールですな」

難色を示すのも当然。シャルティアは組織の多くを動員出来る。対してベイターは表向き一介の執事に過ぎない。

「安心して、今回、私もウィルターも動かないわ」

「それは?」

「あなたが有象無象と切つて捨てた連中だけ使うって事よ。そうで無ければ意味がないでしょう?」

「なるほど、良いでしょう」

そして、ベイターとシャルティアの戦いが始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

動き出したシャルティア。早くもあの時と大きく筋書きが変わろうとしている。

これは何故か？

それには、以前のユマ姫が王国に至るまでを説明する必要がある。

あの時、ユマ姫は田中の死を目の当たりにして憔悴しきっていた。毎日毎日体調を崩し、青い顔で馬車の揺れと戦った。

それでも狂氣的な復讐心に突き動かされ、行き先々の村々で帝国の非道を語って見せると、鬼気迫る迫力の人々は魅了されていった。

その間、たつぷり一ヶ月。

ネルダリアの情報部は王都でユマ姫の噂話に花を咲かせ、結果、王都に辿り着いたユマ姫は大歓声で迎えられる事になる。

今回は、どうか？

元氣一杯のユマ姫は、順調に馬車の旅を続け、半月と少しで王都に辿り着こうとしていた。

だからこそ、シャルティアとベイターの戦いに間に合ってしまった。

あの時のシャルティアはベイター派の肅正に手を取られ、ユマ姫歓迎の舞踏会にも顔を出せないありさまだったのだ。

ならば、今回は？

まだ旅の空の下に居るユマ姫の下、シャルティアの部下が到着してしまう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

寂れた村で一時の休憩をとっているユマ姫に、冴えない男達が語り掛けた。

「ユマ姫様であらせられますか？」

「はい、そうですか？」

シャルティアの命を受けたのは、余りにも平凡な町民が六人。全員がニコニコと笑みを浮かべている。以前はケチな詐欺師だった連中だ。

「本日から特製の馬車に変わります。王都までの道のり、今までよりずっと快適な旅をお約束しますよ」

「本当ですか!？」

ユマ姫は、内心ネルダリアの揺れる馬車にウンザリしていた。それでも最高級の馬車なのだが、ユマ姫の基準は殆ど揺れないエルフの車だ。

『ユマ姫はネルダリアの馬車に不満を持っている』

そこまでの調査が済んでいるシャルティアにとって、こんなのは簡単な仕事だった。

凄腕の人攫いなど全く不要なのである。

「どうぞで、こちらに」

「ええ、ありがとう」

ユマ姫にしてみれば、お姫様をエスコートするのに、侍女と行者一人ずつでは少なすぎた。小型で早い馬車を用意したシノニムの苦勞など知る由も無い。

四頭立ての大型馬車にお供が六人の旅こそがお姫様には相応しいと、嬉しく思つてしまつたワケだ。

そうして乗り込んだ馬車の中、ふと、ユマ姫は思い至つた。

「そうだ、シノニムさんにひと言伝えなければダメですね」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

完璧にハマつたシャルティアの策。しかし、シャルティアとてまだまだ十九の小娘。彼女の頭では測りきれぬモノがあつた。

普通の人間は、どこまでも怠惰で、間抜けなのだと言う事を。

夜の闇の中、煌々と輝く焚き火を前にして、車座に六人の男達が仕事の成果を祝つて
いる。

「簡単な仕事だなオイ」

「こんな上手く行くかね？」

「違いねえ、婆さん相手にケチな詐欺してたのが馬鹿らしいぜ」

「俺達が森に棲む者のお姫様を誘拐なんて、信じられるか？」

「俺達は、信じられねえ大仕事を成し遂げた！」

「俺達の将来に！」

「俺達の栄光に！」

男達は木のカップを掲げ、ぬるいビールを一息に煽った。

たき火を囲んでのちよつとした打ち上げ。馬車にユマ姫を閉じ込めたまま、街道脇に馬車を停めて、城門が開くまでと盛大に祝っている。

勿論、シャルティアはこんな事を命じていない。作戦終了までは一斉に食事をとらず、交代で見張りに付けと口を酸っぱく言っていた。ましてや酒など論外である。

「あれ、何か急に眠く……」

「俺も……」

次々と男達が倒れていく。

そこで闇から姿を現したのが、ベイターだ。

「無様な、コレだから素人は。やはりお嬢様は間違っている。素人なんて存外に間抜けで、言われた事も出来ぬのだ。そのくせ行動は読みづらい、盤面から排除するに限る」
酒を飲めば細かい味など解らない。判断力も落ちて、食事に睡眠薬を混ぜ込むなどべ

イターには何でも無い。

「鍵は……コレか」

そうして、豪華な馬車の扉を開けた。後は姫の身柄を確認し、王都まで運べば勝負に勝てる。

「卑怯とは言いますまいな」

想像するのは悔しがるお嬢様の姿。

その笑みがかき消えたのは、馬車の扉を開けた時だった。

「なんだとー」

馬車の中はがらんどろ。ユマ姫はどこにも居なかったのだ。

「やられた!!」

まんまとハメられた。素人丸出しの六人は囧。本物は既に王都に移送されている。

敗北を悟ったベイターは失意のままに王都に帰還する。

だが、驚いたのはシャルティアの方だ。

「ユマ姫が居なかった?」

「さよう、まさかシャルティア様ではなかった?」

予想外の事態にシャルティアは爪を噛む。

「森に棲む者の魔法、侮れないみたいね」

「と、言うとは？」

「あなたも見たでしよう？ あの馬車は特別製。鍵も簡単には開かないし、トイレもある。何より、誰にも見咎められずに抜け出すなんて出来ないわ」

「それが、魔法だと？」

「偶然、誰も見ていないタイミングで外に出た。と考えるよりは自然よね」

偶然なのだが、シャルティアには解るハズが無い。

「コレはもう、私達が争っている場合ではないのかしら？」

「そのようですな。一度、ユマ姫の人となりを確認する必要があるでしょう」

「そうね、まずは舞踏会。未来の王妃として、森に棲む者の姫君を見極めてみようかしら」

そうして、シャルティアはユマ姫の歓迎舞踏会に参加する事にする。

そこで、真に恐ろしいモノを目の当たりにするとは、夢にも思っていなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

何事もなく、ユマ姫は王都に到着した。

あの騒動で一時、行方不明になったものの、シノニムはユマ姫が迷子になっただけとしか思っていない。

豪華な馬車が迎えに来たと言うが、現場に行ってみればもぬけの空。村人だつて誰も

知らないと言うのだから、白昼夢でも見たのだろうと判断されるのも無理はなかった。そうして辿り着いた王都では、ユマ姫の宣伝はまだ行き渡っておらず、熱狂的な歓迎とはならなかった。

馬車から眺める目抜き通りには、ポカンと見つめる町民が目立った。誰が乗っているかも解っていないのだ。

「ちよつと、不安ですね」

「ユマ様が姫君と言う証拠もない訳ですからね」

「ううっ……」

グリフォンに秘宝を盗られ、今のユマ姫はお姫様と言う証拠もない。

何だかんだ、あの時のユマ姫は派手な秘宝に助けられていた。思い詰めた様子とその頭上に輝く王冠は、誰がどう見てもお姫様であると主張していた。

いまのユマ姫にはどちらもない、何せ生来の楽道家。セレナを救えたのだから、それ以上は考えても仕方が無いと思っっている。

そんなお姫様が憧れるモノは何だと言えば、当然に宮廷ロマンスと言う事になる。

「ビルダールの王子様は素敵な方ですか？」

「ユマ様とは歳が違いますよ、相手にされないと存じます」

「そんなあ……」

王子と言つても若いとは限らない。王が存命ならオツサンになつても王子である。

「うう、でも、素敵なオジサマなら、多少は……」

それでも諦めきれないユマ姫は、華やかな宮廷でのパーティーに期待していた。

なにしろ成人した瞬間に国を追われ、一度もパーティーなど経験のないままなのだ。

そんな事を知らないシノニムは、胡散臭げにユマ姫を眺めるばかり。

そうして、ユマ姫の顔見せである、宮廷舞踏会が始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ううつ、場違いではないでしょうか？」

「そうですか？ とてもお似合いですよ」

ユマ姫に派手なドレスを着せてみると、シノニムが思った以上に華があった。なんだからだお姫様なのだと感心もする。

それに動作も洗練されている。無駄にドタバタと動かない。扉一つ開けるのもシノニムや従者に任せる。中々出来る事ではない。

「いえ、あの……私、扉を開けるのが苦手で」

「え？」

「あんまり力がないから開けられないんです」

「……………」

シノニムが思った以上に、ユマ姫は虚弱だった。

「でも、最近私だって力が付いてきたんですよ！」

「そうですか……」

実際、ユマ姫は食欲も旺盛で以前よりもふつくらと健康的になつてきた。それが却つて悲劇のお姫様らしさを失わせて居るのだが、シノニムとしてはダメとは言い辛い。

今もユマ姫は子リスの様にビスケットを美味しく嚙っていた。

「コレ、凄く美味しいです」

その様子をシノニムは微笑ましく見つめる。

本当は舞踏会で用意される軽食は飾りで、食べるのははしたないのだが、そんな事を言うのは野暮に思われた。

「エルフの国にはビスケットはないのですか？」

「いえ、蜂蜜とナッツをたっぷり使った美味しいビスケットがあつたのですが、コレは何も入っていないのにずっと美味しいのです。ほらっシノニムも！」

「はいはい」

差し出されたビスケットを口に含むと、実際、恐ろしく美味だった。

「癖のない牛の乳で出来たバターをふんだんに使つてますね」

「牛のバターですか……」

ビスケットが美味しいのはユマ姫としては嬉しい反面、複雑だった。外の文明など未開と侮っていただけに、嗜好品がここまで美味しいならば、文明の高さが窺えてしまう。コレは勿論、木村の商会が図抜けているだけだ。だが、そんな事はユマ姫の知る由では無い。

「これはこれは、気に入って頂けたようで」

その機を逃さず、木村が現れる。

コレは勿論狙ったモノ。あの時みたいに広場で派手にやる手は使えないが、ビスケットは今回も狙い目だった。この国の舞踏会では貴族はお菓子に手を付けない。だから、どこの業者も納入に本気にならないし、味だつて気にしない。

それがエルフのお姫様なら手を出さだろうし、味が良ければ、顔を売るチャンス。今回も木村の読みは当たったのだ。

「いよいよユマ姫と対面する。」

「いや、噂に違わぬ美しきー!」

「ええ? 大袈裟ですよ!」

実際、可愛らしくも美しいので本心から褒めてみれば、ユマ姫は子供らしく照れてみせる。

あの時のように、何もかも投げ捨てて尽くしたいと思える病的な美しさのないユマ姫

ではあるのだが、素直に応援したい可愛らしさを備えていた。

「もつと食べたくなりましたら、我がキムラ商会にいらして下さい。ユマ様になら幾らでも提供しますよ」

「あ、ありがとうございます」

これは木村の商人としての打算を越えた本心だった。

お菓子を頼張るユマ姫は可愛くて、萌え系四コマの女の子みたいだなと木村は秘かに癒やされていた。国を追われた悲劇のお姫様とは思えない。

と、その時、背後から緊迫した声が響いた。

「まあ？ どうされたの？」

「早く！ お医者様を！」

俄に会場が騒がしくなる。何かトラブルがあったようだ。

「失礼！ 少し様子を見てきます」

新進気鋭の商人である木村にとって騒動こそ商機。踵を返すと、人混みに紛れて消えてしまった。

「……嵐の様な方でしたね」

「機に聡い商人とはそう言うモノです。このビスケットも私が知っているビスケットとはかけ離れたおいしさでした。決してエルフの技術が劣っている訳では無いでしょう。」

キイムラ商会が異常なのです」

「そうなのですね、少し安心しました」

「あの様な方が、ユマ姫のバックアップについてくれれば私も楽になるのですが……」
「無理ですよお」

シノニムとそんな事を話して居ると、ユマ姫の耳にも騒動が聞こえて来た。

「どうやら、シャルティア様が倒れたらしいぞ？」

「王子と結婚に至らず、心労が祟っているというのは本当か？」

バタバタと落ち着かず、誰もが主賓であるユマ姫を素通りである。

「あの……シャルティア様って？」

「第一王子カディナル様の婚約者であらせられますね」

「まあ！ それは大変ですね」

そう言いながらも、気持ちが籠もっていない言葉だ。知らない人を心配する余裕はユマ姫にはない。

そうして、舞踏会は終わってしまう。何事もなく。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

舞踏会に出たシャルティアは、一体どうしてしまったのか？

「みなさま、ご機嫌よう」

そのちよつと前までは、取り巻きを引き連れて元気に挨拶を交えていた。

「おおっ！ お久しぶりです」

「なんてお美しいの！ 華やかだわ！」

表舞台にあまり姿をみせないシャルティアが現れた事で、舞踏会は盛り上がっていた。

なにせ、シャルティアは第一王子の婚約者であるだけでなく、派手な容姿に、煌びやかな装いをしている。舞踏会となれば耳目を集めるのは当然だ。

だが、彼女が探すのは森に棲む者の姫君、ユマ姫ひとりだ。

「あら、今日の主役はユマ姫でしょう？ 私より彼女の所に行かずいいの？」

「でも、彼女はダンスも踊れませんから……」

「そう、そうよね……」

だから、休憩室で壁の花になっているユマ姫を迎えに行つた。その後ろには、シャルティアに媚びを売ろうとゾロゾロとお供が付いてくる。

ちよつとした大名行列だ。これでは、どちらが主役か解らない。

だが、ソレもシャルティアが、ひと目ユマ姫を見るまでだった。

それは丁度、ユマ姫がビスケットを囓つているところ。うしろのお供たちは、その様子を見て田舎のお嬢様と鼻で笑つて馬鹿にした。

しかし、当のシャルティアは、どうだ？

「ヒッ！」

顔を蒼くしたシャルティアが、ぺたりと床にへたり込む。

「なんっ！ なんなの!? アレは！」

そして、みつともなく取り乱した。髪を振り回し、腰が抜けたまま逃げようとする。

「どうされたの？」

「早く！ お医者様を！」

いつも泰然としたシャルティアを知っているだけに、周囲は騒然とした。こんなのは、らしくない。

そうして、取り巻きに支えられ、シャルティアは舞踏場を後にする。

噂はシャルティアの体調不良として王宮を駆け巡る。

しかし、本人にしてみればそんなモノでは済まないのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「早く！ 早く運び出すのよ！」

深夜のダックラム公爵家。一人叫び続けるシャルティアが、家中の資料を燃やし、金目の物だけを屋敷の外へと運び出していた。

まるで、夜逃げ。いや、夜逃げそのものだ。公爵家が夜逃げ。まるであり得ない。

「一体、どう言う事が教えて貰えんかな？」

その横で敵めしい顔をしよげさせて、気の弱い当主ダックラム公が実の娘に汗顔で訊ねる。

余りに意味が解らないからだ。舞踏会から青い顔で引き上げて来たと思つたら、狂つた様に荷を纏め、どこかに消えようとしている。公爵家ごと。

「ユマ姫よ」

「ユマ姫？ 森に棲む者の魔法とはそんなに恐ろしいモノだったのかい？」

「違うわ」

シャルティアは魔法など見ていない。魔法など知らない。そして、知らないモノを恐れる程に初心でもない。

「あんなのは、魔法じゃないわ」

「じゃあ、一体何を見たんだい？」

知っているのは、殺人技術。頼れるのは、自分の目利き。

人に会つたとき、その中身は何か？ どうやったら殺せるか？ イメージしてしまふのがシャルティアだ。

ぬいぐるみも、人間も、変わらず中身をぶち撒けてきたシャルティアにだけ許された鑑定眼と言って良い。

そんな彼女から見て、ユマ姫は？

「アレは、化け物よ？」

「バケモノ？ 森に棲む者はそんなに恐ろしい民族だったのか……」

「民族？ 違う！」

青い顔で、シャルティアはブンブンと首を振る。

「首を切つても死なないなら、人間とは言えないわ！」

「なにを、馬鹿な」

「なによりも！」

血走った目でシャルティアは言う。

「中に何も入っていないければ、生き物とは言えないわ。アレは動く剥製よ」

「……………」

もう、ダックラム公には言葉もなかった。

「このままでは終わらせ無いわ。いつか必ず、空っぽの中身を引き摺り出してあげる」

書類を燃やす火を見つめ、シャルティアの目は燃えていた。

暴きたい、本当の不思議を見つけてしまったから。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

シャルティアが狂乱するのを見て、納得出来ないのがベイターだ。

ベイターから見て、ユマ姫は普通の少女。恐ろしいバケモノだとは夢にも思わない。「お嬢さまもヤキが回ったか。果たして心労か」

既にオーズド伯の屋敷に侵入して、ユマ姫を襲うチャンスを探っていた。なんだかんだ可愛いシャルティアお嬢様の心労のタネを潰そうとしているのだ。

そして、今のユマ姫は騒動の中にあつて、王宮に泊まる事が出来ずに居た。婚約者の攪乱に、カディナールは賓客に気を遣う余裕がまるでなかった。

そうしてユマ姫は、主人の居ないオーズド伯のお屋敷で、宙ぶらりんの扱いを受ける事になる。

そんな状況だから、暗殺技術を知り尽くしたベイターにとつて潜り込むなど朝飯前。

「ふわあ、歯を磨かないと」

なにより、馬車での誘拐未遂の予備調査で知られた事だが、このお姫様はどうにもガードが緩い。就寝前にたった一人で洗面所に現れた。

コレだけは、と本国から持って来た歯ブラシで、せつせと歯を磨く。その姿はどこまでも隙だらけ。

その首筋に、ワイヤーが絡まった。

ベイターは両手のワイヤーを一息に引つ張る。

これこそが、ベイターの鉄系殺と呼ばれる技。それは絞殺ではなく斬殺。刃の様に鋭

い線が、少女の首程度なら抵抗も無く斬り裂いてしまうのだ。

——む??

しかし、バイターは首を傾げる。

幾らなんでも抵抗がなさ過ぎた。

絡まった鉄糸が、ユマ姫の首筋を通り抜け、ピンと伸びて張り詰めた。

だから、首は斬り裂かれたハズなのに、そこに達成感はなく、ただひたすらに空しい。まるで空気を斬ったよう。

いや? しかし?? コレでユマ姫の首が落ちるなら……。

斬ったハズ、斬れたハズ。

糸は首を通り抜け、手元にある。結果は斬った事を物語る。ただし、手応えと確信が得られない。

例えるならば、家の鍵をかけ忘れた気がして、不安が拭えない感覚に近い。確かに鍵を掛けた記憶はあるのだが、それが今日の記憶かまでは確信が持てないあの感じ。

バイターは、ユマ姫の首にワイヤーを引っ掛けた記憶が、どうにも現実感なく感じてしまう。

そんな事はありませんのに。

と、バイターが見る前で、ようやくユマ姫の首がぐるりと回った。

「え？ どなた？」

違う！ ただユマ姫は振り返っただけ。傷ひとつ負っていない。

「ば、馬鹿な！」

ベイターはジツと手を見る。斬り裂いたハズだ。鉄糸は首を通ったはず、しかしその確証が持てない。手に実感がない。全てが夢に思えてしまう。

「く、曲者ーッ！」

「くっ！」

ユマ姫は大声で人を呼ぶ。しかし、当主も居ないオーズド伯の館に、それほどの警備は詰めていない。

「あつ、なんですか、あなた！」

だから、出て来たのはネルネがたった一人。これでは凄腕の暗殺者なら、どうとでもなってしまう。ベイターは慌てていなかった。じっくりと観察し、後ろに下がる。

「えいっ！」

それも、ネルネが包丁を投げつけるまでだった。ベイターは完全に虚を突かれる。まさかいきなり武器を投げるとは。

「むっ!？」

こんなもの普通なら、軽く弾いて終わり。

しかし包丁は、どうやっても防げない角度で飛んで来た。関節の可動域や重心から、ちようどそこだけは防げない絶妙なタイミング。

見えているのに、防げない。ネルネが夜食に剥いていたギツトの実の果汁が滴る様までバイターには見えているのに。

それでも、体が動かない。強い力で弾いたら指を切断してしまう。軽くないせば却つて急所に刺さる。

だから包丁は真つ直ぐに飛び、深々とバイターの肩に突き刺さった。

「がっ！」

「あ、当たった！」

コレには投げた本人もビックリした。しかし、バイターはそうは思わない。それなりの腕の護衛だと、排除すべしと目標を変えた。

「引き際を弁えない者は二流ですよ」

そこを横合いからシノニムのレイピアで串刺しにされる。流石にここまで騒げば彼女も駆けつける、それでもシノニムはネルダリア情報部の腕利きなのだ。

バイターは腹を刺され、コレではもう逃げられない。シノニムは引き抜いたレイピアを喉に突き付ける。

「どこの者だ！ 言え」

「……ぐっ！」

訓練された暗殺者が敵の手に落ちた時どうするか？ 諸説あるが、独特の美学で生きて来たバイターが選ぶ道はひとつだ。

すぐさま自ら喉を斬り裂いた。

「そんなー！」

迷いのない判断。その素早さにシノニムは戦慄する。

それほどの組織が動いている証明だからだ。そして、それだけの暗殺者に襲われて無傷で切り抜けたユマ姫、やはりただ者ではないのでは？

思わず、顧みる。

「ふわあ、ビックリしました。ドキドキして今夜は寝られないかも」

のんびりとそんな事を言うユマ姫に、シノニムは気が抜けてしまう。

このお姫様はこんな目にあつて、まだ眠るつもりで居るのだ。あまりにも図太い、図太すぎる。いつそ鈍いと言った方が良い。

シノニムには、全て『偶然』のような気がしてしまうのだ。

いや、実際に『偶然』なのだ。

しかし、それは尋常な『偶然』ではない。それをシノニムの知るの、ずっと後の事になる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後、姿を消したダックラム家に王都は騒然とする。

婚約者に逃げられたと、カディナール王子の評判に傷が付いたのを切掛に、王子は急速に求心力を失っていくのだが……。

「王都は美味しいモノが一杯で良いですね」

ユマ姫はそんな事、知った事ではないのであった。

今日もキイムラ商会にお邪魔して、ユマ姫はビスケットを嚙っていた。

これが、魔法？

豪華な客室。二人の少女が世間話に花を咲かせる。

「まさかユマ姫様って、魔法が使えないんですか？」

「そ、それはね、あの、使えるんだけど。ここじゃ危ないじゃない？」

勿論、嘘だ。

ユマ姫は、輝くネルネの目を見て、使えませんと言えなかつた。ユマ姫にとって年齢の近い初めてのお友達。ネルネにはちよつと見栄を張りたいお年頃。

ここは王都、ネルダリア領主の別邸。中央から派遣されてきたネルネは、同じハーフエルフとして、ユマ姫の魔法に興味をもっていた。

「ええ！　じゃあひよつとして私にも使えますか？」

「えと、あの、厳しい修行が必要だから……」

勿論、嘘だ。

ハーフエルフは魔法が使えない。脳の魔法回路が不完全であるからだ。

古代人の奴隷として、魔力が濃い地底での作業を強いられていたエルフ達。彼らは魔力を顕現させる回路を脳に刻み込まれている。望む作業を口にする、無意識に魔法回

路が頭に浮かぶのだ。

エルフは魔法を使って、穴を掘ったり、明かりで照らしたり、魔獣と戦ったり、なんでもござれ。言わば歩く重機。古代人は便利に使って来たのだが、彼らに反乱されては堪らない。

そのストッパーの一つが、魔力が無くては動けない事。もう一つが、血が薄まると魔法が使えなくなる事だった。

古代人とのハーフは魔力が無くても生きていける。ただし、肝心の魔法が使えない。脳に刻まれた魔力回路が壊れてしまうから。

だから、あの時のユマ姫は魔術回路を参照権で代用していた。複雑な魔力回路を思い浮かべる事で、正確になぞる事が出来た。

他の誰にも真似出来ない事だ。もちろん今のユマ姫では使えない。だからこそ、ネルネの決意に困ってしまう。

「わたし！ どんな厳しい修行にも耐えて見せます！」

ええ〜！ 声に出来ない悲鳴を噛み締め、眉をハの字に困ってしまう。

そんな様子をシノニムは微笑ましく見つめているのだが、本人は堪ったモノではない。

「あの、まずは弓が使えないと話になりませんから、エルフの奥義は弓矢を加速して制御

する魔法ですもん」

「わかりました！ 弓を借りてきます！」

「ええ〜！」

今度こそ、声に出してしまうのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「借りてきました！」

そうして、ネルネの弓の修行が始まった。

いや、借りてきた弓で遊んでいるだけだ。弦を引く事もままならない。しかしネルネはツボに嵌まったようで、文句も言わずに練習し始める。

良かったコレで解決、すぐに飽きて音を上げる。ユマ姫はそう思って、お菓子を頬張るのだった。

「あの、ちよつと弓を見て貰って良いですか？」

「ぐふっ！」

だから、三日後にそう言われた時は、え？ と思った。頬張ったビスケットが喉に詰まる程驚いた。

「まだ三日しか経っていないじゃ無いですか！」

「でも、これ以上どうして良いか解らないし……」

……ユマ姫にだってどうすれば良いか解らない。

「とりあえず、見て下さいよ。我ながら筋が良いと思うんです」

「……そうですか」

そうして、洗濯物が干される中庭で、ネルネの腕前を見る事になった。

ネルネは木の幹に、これもまた借りてきた藁的を括りつけると、弓を手にテクテクと距離を取る。

「え?」

「どうしたんです?」

「いえ、何でも」

3 mぐらいの距離で矢を射るのかと思ったら、優に10 mは距離を取る。ユマ姫の力では矢も届かない距離である。

「では、見せて下さい」

「わかりました」

ユマ姫の前でネルネが矢を番え、放つと、矢は真つ直ぐに的に当たった。それもど真ん中である。

「おお〜!」

「ね、凄いでしょ」

思わず拍手。偶然とは言え、ど真ん中だ。中々凄い。きっと毎日何時間も練習したの
だろう。いや、ひよつとして次も真ん中に当ててしまったりするのだろうか？ とユマ
姫は焦って見ていたのだが……。

しかし、ネルネは二射目は放たず、再びテクテクと的に近づき、突き刺さる矢を引つ
こ抜いた。

「何してるんです？」

「だって、同じ所に当たった矢が壊れちゃうじゃないですか」

いやいや、一射するたびに的から矢を引つ剥がしていたら練習にならない。おおかた
借り物を万が一にも壊したらマズいと臆病になっているのだろう。この調子なら大し
て練習出来ていないなど、ユマ姫は胸をなで下ろした。

「じゃあ、次！」

「はいー」

ニコニコと見守る先、シュツ！ と鋭い音がして、無情にも矢はど真ん中に。

「……………」

「凄いでしょ？」

「……………ええ、ええ」

偶然、なのか？ いや、しかし。ユマ姫は焦った。

「あの、そのまま、もう一射して下さい」

「ええ?　じゃあ、ちよつと右に当てますね」

嘘だと思ったら、本当にちよつと右にズラして矢が突き刺さる。

「……………」

「ね?」

ね、じゃない。あり得ない。10mだ。風だつてある、洗濯物がバサバサと揺れている。

「あの…………」

「なんですか、まだ足りませんか?」

「次は、完全にど真ん中を狙って下さい」

「ええ?　最初の矢がまだ刺さってますよ?　壊れちゃいますよ?」

「いいから!」

そうして、放たれた矢は、ど真ん中に刺さる矢のお尻、筈の部分に突き刺さり、ぶらぶらと揺れた。

継ぎ矢と言うヤツだ、魔法もなしでこんな事は滅多に無い。

「ほら、壊れちゃったじゃないですか!　弁償して下さいね!　怒られるのは私なんですから」

「うん、ええと……」

ユマ姫は困惑する。こんな事、狙って出来るモノなのだろうか？ いや、違う。こんな事は不可能なハズ。でも現にやっている。本当に弓の天才なのかも知れない。

いやいやいや、そんな事より問題なのは、こんなに弓が上手なら、魔法を教えない訳には行かなくなつた。焦つたユマ姫が苦し紛れに出したのは滅茶苦茶な課題。

「じゃあ、次はその矢のお尻に、また矢を刺して下さい」

「えええ？ 本格的に怒られますよ！ 弁償ですよ！」

「いいからー！」

「知りませんからね」

継ぎ矢した場合、当たり前だが二本分の矢の長さになる。そよ風で大きく揺れてもいる。こんな所に矢が刺さるハズが……

「はいー！」

刺さつた。継ぎ矢に次ぐ継ぎ矢。こんなのは魔法を使つてもちよつと無理だ、聞いたことも無い。

「あつー！」

三本分の重さに耐えられず、藁に刺さつた最初の矢が抜けると、三本が一緒にぼとりと落ちた。あんまりな出来事にユマ姫は矢に駆け寄つて、トリックがないかと調べ始め

た。

「どれも、筈のお尻のど真ん中。少しもズレてない」

あり得ない。でも、本当に？

焦ったユマ姫は、ペンを取り出して、赤いインクで木にちよんと印を書いた。

「今度はここに射って下さい」

「ええ？ 木を傷つけると園丁さんに」

「良いから！」

と、いうか、ペン先で刺しただけの点、見えるだけでも驚きなのだが……もつと驚くのは、寸分違わぬその場所に矢を突き立てて見せるネルネの腕だ。

もう怖くなって、ユマ姫は青くなる。

「嘘でしょ？ 嘘だよね……」

思わず駆け寄って、少しもズレていない事を確認する。だが、ネルネも慌てた。

「えええ！ 危ないですよ」

ネルネは、当然今度も継ぎ矢をするものと準備して二射目を引き絞っていた。息を吸うように矢を番え、息を吐くように矢を放つ。染みついたリズム、突然には止めがたい。

このままではユマ姫に刺さって……刺さって？

「刺さらない？」

ネルネは目標に矢が刺さった姿を想像し、そこから逆算して矢を放っていた。

だから、ユマ姫に矢が刺さる心配が、そのまま発射のイメージになつてしまう。一度イメージしてしまえば、止めがたいタイミングで矢は放たれる。

だけど、矢は放たれなかった。放てなかった。

どうやっても、刺さるイメージが湧かないから。こんなのはおかしい、弓を持って数日だけど、今までで一度もなかった。

「なんで？」

だからネルネは矢を番えたまま、ムキになつて刺さるところを探してしまった。頭、腕、背中、足。どこも刺さらない。不思議に思いながら狙い続けると、一点だけ刺さる場所が見つかった。

体のど真ん中のど真ん中、ほんの、ほんの小さな点。矢のお尻？ インクの点？ そんなモノはネルネにとって、巨大な点。

ユマ姫は、針の先つぽよりも小さい点で、そこから少しでもズレると当たらない。だけど、ココなら当たる、当てられる。

ネルネは喜んだ。だけど、喜べないのがユマ姫だ。

「なっなんで！」

腰を抜かしてしまう。矢の考察に気を取られ、気が付けばネルネが真っ直ぐコチラを

狙っているのだから無理もない。

「ごめんなさい、ごめんなさい!」

ユマ姫は、必死で謝る。嘘がバレたのかと思ったから。腰が抜けたまま、後ずさる。それでも、ネルネの構えた鍬がピツタリと追ってくる。

「ううっ」

「あっ!」

泣きべそをかくユマ姫を見て、ようやくネルネは正気に返った。

「ご、ごめんなさい」

「危ないですから! もう止めてください」

「で、でも! 弓の腕は十分でしょ、練習したんですもん!」

……ここダメと言うと後が怖い。また弓で狙われたら堪らない。

そう思ったユマ姫は、嘘に嘘を重ねてしまう。

「もう、出ていきます」

「ええ? どこが?」

「その命中率! 他の誰にも真似出来ないでしょう。保証します! それこそが魔法です」

「えー! そんなの地味ですよ」

「そう言うモノです！」

苦し紛れの嘘。だけど、本当だった。

ネルネの魔力は250もある。そして、思考に影響されるのが魔力と言うエネルギー。

だから、これはネルネの魔法。体系だった魔術回路から発現する法則と違う、思いから結果を引き出す、言わば本物の魔法。

だけどネルネは納得しない。

「じゃあ、その、ユマ様が使っている、矢が当たらない魔法を教えてくださいよ」
「え？」

ユマ姫にとって、寝耳に水なのであった。

「そ、それはまた今度ですね」

「ええ〜」

そうしてまた嘘を吐いてしまうのだった。

因みに、矢の弁償でユマ姫のおやつは大分減った。矢は案外高いのだ。

思惑を探って？

「どうやら、継承争いが激しくなっているようですよ」

「ふうん、そうですか」

ユマ姫は気のない返事、意識はプリンに釘付けだ。皿に盛られた大きなプリン、早く食べたくて仕方が無い。帝国への復讐なんて頭から抜け落ちている。

ユマ姫だって最初は考えていた、いや夢見ていたと言うのが正しいか。人間の王子様と恋に落ち、手と手をとって帝国へと攻め込む未来絵図。

だけど、憧れの王子様は十二歳のユマ姫にとっておじさんに見えたり、挨拶にだって来てくれない。コレでは憧れだってしぼんでしまう。

「ダックラム家の抑えが効かなくなったカディナル王子は力を失い、昼行灯と言われているボルドー第二王子が活発に動き始めました。王都は今、混迷を極めています」

「へえ……」

ユマ姫も混迷を極めていた。

目の前のプリン、悩ましげに震える様を必死に目で追う。コレは食べて良いのか？ いやでも、まだ話の途中だし……。

集中力を欠いたユマ姫に、シノニムはプリンを遠ざける。

「ああつー！」

「そこで、重要になってくるのがユマ様の動向です」

ユマ姫が気になるのはプリンの動向だ、恨めしげに見上げるお姫様に、しかしシノニムは釘を刺す。

「事と次第で、プリンがもう食べられなくなるかも知れませんか？」

「ええっ！　なんで？」

「このプリン、どこからの頂き物だと思いますか？」

「それは、キイムラ商会です」

「そう、そのキイムラ商会が問題なのです」

勢いづくボルドー王子は軍部からの支持層は厚いモノの、貴族からの支持は極めて少ない。雅みやびを心得ぬ者と敬遠されてすら居る。

「ユマ様も貴族の端くれ、生まれてこの方、ご機嫌伺の連中は多かつたのでは？　どんな贈り物が心に響きました？」

「あの、私はハーフで継承権も低くて、なので、そういうのはあんまり……でも、怪しい贈り物に心動かされたりしませんよ！」

このお姫様はとことんポンコツ。顔には出さずシノニムは続ける。

「そうですか、では、このプリンこそが付け届けと言ったらどうします？」
「うっ？」

心動きまくりである。

「ええっ？ コレ、そんな陰謀めいた贈り物なんですか？」

「ある意味では……」

全く陰謀めいたモノではない。

木村はユマ姫が遊びに来る度、お土産にお菓子をを持たせるが、必ず一つはその場で食べて意見を聞きたがる。

表向き、エルフの味覚が知りたいとの依頼だが、だったらハーフェルフのユマ姫では片手落ちだ。

幸せそうに食べるユマ姫の様子を見て、木村が癒やされたかっただけ。シノニムはもちろん気が付いている。けれども、それで収まらなかったから問題なのだ。

「キイムラ商会は流行りの食品、衣料品、化粧品を扱っている。プリンみたいに貴族だつて中々手に入らないモノを多く抱えている」

「そうでしょうね……」

「ボルドー王子にしてみれば、貴族と渡りをつけるため手が出るほど欲しい商会です。ですが如何なる勧誘も断っている。その断り方を知っていますか？」

「さあ……」

「キムラ商会は『ウチはユマ姫派だから』と断っているんです」

「え？ ユマ姫派なんてあるんですか？」

「ありません」

「ないんだ……」

無いのである。お気楽なお姫様に付いていこうなんて派閥、あるはずが無い。

「体のいい断り方に使われているのです、商人ゆえに勝ち馬がハッキリするまで保留と
言う事でしょう」

「へえ……、それって問題が？」

「だから！ お鉢がコツチに回ってきました。ボルドー王子がウチと同盟を結びたがっ
ているのです」

「ええっ！」

ここでプリンに脳を支配されていたユマ姫の脳みそがようやく動き始めた。

念願の王子からのお誘い、嬉しい事は嬉しいが所詮は第二王子、勢力は？ 失敗すれ
ばどうなる？ 考えるほどにリスクが高い。

ユマ姫だって、勝ち馬に乗るために保留にしたい。

「あの、ウチはプリン派ですって言って下さい」

「プリン派……でしたら、ご自身で使者におっしゃって下さいね！」

「ええ〜」

「恥ずかしいし、言えるはずがない。」

「それに、キムラ商会を勧誘しているのはボルドー王子だけではありません。第一王子、カデイナー様もです。新しく発表された婚約者、ルージュ様が足繁く通つてらっしゃるとか」

「ほへえ〜！ でも実際、凄い商会ですよ？ 今まではどうしていたのです？」

「今までものらりくらりと、しかし、商会長のキムラ様は変わり者。どんな女性にも靡かないとか」

「あ、そうなんです、ふふっ」

「ふふっ、ではない。」

「コイツは自分の色気でキムラ商会を籠絡したとも思っているのか？ 小動物扱いの癖に。」

「何故か得意なユマ姫に、シノニムは苛立ちが抑えられない。」

「そこに現れたのがユマ姫です、そして降って湧いた継承権争い。王の体調不良も重なって、大変な事になってます」

「あの、それで私はどうしたら……」

ユマ姫は悩んでいた。現状はお姫様の証拠すらなく、全く動けないでいる。そんな自分出来る事などあるのだろうか？

「どちらの王子につくか、考えても良いのではないですか？」

「それこそ危ないでしょう？ 仮に私がボルドー王子に夢中になったとして、シノニムさん、果てはネルダリアのオーズド伯は納得してくれます？」

「それは……」

シノニムにしたって、動きたくても動けず苛立ちが募っているのは同じだった。現状はカードが少なすぎる。

「下手な賭けに出る前に、情報を集めませんか？」

「それは……情報部は全力で動いてくれますが、予断を許さない程に二つの勢力は拮抗しているとか……」

それも、拮抗の仕方が異なる。明日にでも王が死んだとして、単純に貴族の投票で継承者を決めたなら間違いなくカディナールの勝ちだ。

しかし、第二王子ボルドーが軍部を動かしてクーデターを起こしたらどうなるか？

そうなってくると、状況が読めない。なにより、国を割る事態は主戦派にしたって望む所ではないからだ。

「だったら、状況をコントロールする方法を考えた方が良くないじゃないですか？」

「それは?」

「まずは、ネルネさんに話を聞きませんか?」

「……なるほど」

シノニムはユマ姫を見直した、やはり王女、やはり姫。こう見えて賢い少女だ。

侍女として送られたネルネード、友達の様に振る舞いながら、中央の紐付きだと理解している。だからこそ、彼女が流す情報で場をコントロールしようと言う話。

ただ、ひとつ気になるのが急にネルネをさん付けで呼び始めた事。一体二人になにがあつたのか……。

ひとまず、ネルネを呼び出すことに決めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ネルネ、私達はあなたを尋問しなくてはなりません」

「じんもんっ!!? なんて? 私悪い事なんて、してないですよ?」

「本当に?」

「ええ? なんですか? この前、勝手にプリン食べちゃった事ですか?」

「あつ、アレやつぱりネルネだったんですね!」

「姫様、今は控えて下さい。そうでは無く、あなた、宰相へ我々の情報を流しているでしよう?」

「うう……」

シノニムが問い詰めると、ネルネは涙目でぽつりぽつりと語り始めた。

「私は確かに宰相様から派遣されてユマ様にお仕えする事になったのですが……」

「宰相に？ 直接ですか？」

「は、はい。あの、元はグレインビルド様の所で侍女をして、宰相様と仲が良い方で今度やって来る森に棲む者のお姫様の為につて事で派遣されたのです、優しそうでおじいちゃんみたいだったのに……」

「続けて下さい」

「で、ですね。ユマ様が何を考えているかとか、森に棲む者の戦力とか、後は魔法の力の秘密とか、何でも良いから教えてくれつて」

「そう！ それです！ 正にスパイじゃ無いですか」

「うう、で、私言われたとおりに色々伝えたんですよ！ 優しそうなお爺ちゃんだと思つたのに、それなのに……」

「それなのに？」

痛くなるほど膝を握つて、ネルネは声を絞り出す。

「それなのに、聞き取りの担当は別の人で、その人はすぐ怒るんです！ 全部本当の事なのに、信じて貰えないんです！」

「……えっと、ネルネ、あなた何を報告したのです？」

「あの、ユマ姫様はロクに魔法なんか使えませんよね？ 全部嘘ですよね？」

「うっ!？」

バレていた。ユマ姫は誤魔化せているつもりだったが、流石にずっと一緒に居ればネルネだつて気が付いた。

「でも、信じて貰えなかつたと？」

「そうなんです、なぜだか中央ではユマ姫が恐ろしい魔法の使い手と言う事になっていて……」

「ええ〜!」

驚いたのはユマ姫だ、寝耳に水。魔法なんてちつとも使えない。それこそ妹のセレナなら一日で王都を焼け野原に出来るけど、自分がそんな風に恐れられる日が来るなんて、夢にも思っていなかった。

「それは、どうしてそんな事に？」

「まず、ゼスリード平原です。ユマ姫は並み居る帝国兵を恐鳥リコイに襲わせて、悠々とその真ん中を駆け抜けたつて話になってて」

「ああ〜」

「それにスフィールの破戒騎士団も魔獣でボコボコにしたつて」

「……………」

『偶然』なのだが、誰もそんな話は信じなかった。なぜか？

「なにより、ダックラム公が逃げたのは、ユマ姫を一目見るなり、恐れをなしたって事になつてゐるんですもん！」

「え！ 私、そのダックラム公つて人、会つたこともないんですけど……」

「でも、なんでか、そう言う事になつてゐるんです！」

「ええ〜」

「あれですよ、私も知らなかつたんですけど、宰相が言うには、この前死んじやつた暗殺者もダックラム家の人間らしいですよ」

「あの、ネルネの包丁に慌てふためいていた人ですよね？ 凄腕なんですか？」

「……あれは、シノニムさんが倒したんだと思いますけど」

「即座に自害したので、実際はかなり訓練された者だとは思いますが」

相対したシノニムとしても、凄腕の雰囲気は感じていた。

しかし、その手応えと、実際の結果が伴わない。隙だらけのユマ姫一人殺せないなんて。

だけど、コレは考えようだ。

「ひよつとしたら、これはチャンスかも知れせんね」

「な、何がですか？」

ギョツとした顔で、ユマ姫はシノニムを見上げた。プリンを忘れるぐらいに嫌な予感がしたからだ。

「いっそ、ユマ姫は恐ろしい魔法の使い手として宣伝してしまうのはどうですか？」
「うぐっ！」

逃げようとしたユマ姫は、シノニムに首根っこを掴まれた。ネルネを利用しようとして、利用される側に回ってしまった。

「むり！ 無理でしょ？」

「しかし、結果は出ています。結果だけみればユマ姫は恐ろしい魔法の使い手と言って良いでしょう」

「あの！ 私、あんまり嘘は得意じゃなくて……」

ネルネも控え目に手を挙げる。実際に嘘を吐くのは自分の役目になるからだ。

「嘘は必要ありません、ただ大袈裟に事実を伝えれば良いのです」

「どう言う事ですか？」

「そうですね、凄腕の暗殺者に襲われてもどこ吹く風、怪我一つ負わなかった。ココまでは本当ですよね？」

「はい」

ネルネはコクコクと頷いた。満足したシノニムは、ユマ姫に指を突き付ける。

「ユマ姫はどんな事をしても死なない、不死の呪いに掛かっていると言えば良いのです」
「ええ？ ユマ様って呪われてるんですか？」

素直に信じたネルネの横で、ユマ姫がプルプルと高速で首を横に振る。苛立つたシノニムはゆっくりと首を振る。

「違います。でも、コトは呪いなんですから、根掘り葉掘りは聞かれません。暗殺者に狙われて無傷だったのは事実なんですから、そのぐらい話を大袈裟に盛ってしまえば良いのです」

「それって……」

「ユマ姫は呪いの力で不死になっている。どんな武器でも傷ひとつ付けられない。だからこそ帝国兵に囲まれたエルフの都から一人脱出出来たのだと」

「あつ、それなら大丈夫そうですね」

「……………」

ココまで盛ると丸つきり嘘。だけど察しが悪いネルネが、妙に自信をもって頷いた。

それにちらりと違和感を持ったシノニムだったが、悪い事ではないと気にしなかった。

「あとはそうですね、中央はユマ姫がどんな魔法を使うと考えていますか？」

「あの、絶対に外れない魔法の矢がどこまでも追ってくるのか、死の呪いが周りの人に降りかかるとか、そんな荒唐無稽なのを信じてるんですよお」

「それは良いですね。逃げる敵は魔法の矢で撃ち抜く。殺そうとすると死の呪いが降りかかる。無敵じゃないですか」

それなら暗殺者も減るだろう。シノニムは満足げに微笑んだ。

「わたし、弓矢なんて引けないのに……」

方や、やるせなくぼやいたのはユマ姫だ。それを聞いたネルネは飛び上がる。

「えっ？ 弓も引けないのに魔法の修行と称して私に弓の練習させたんですか？」

「だって、魔法を教えてくださいってせがむから」

「ひどい！ 私、手を豆だらけにして練習したんですよ！」

「上手になったから良いじゃないですか！」

「はあ……」

二人の低レベルな争いに、シノニムはため息が漏れた。

彼女は知らないのだ。低レベルどころか、ネルネの弓は上手という範疇を逸した腕前になっている。

まして、ネルネは知るはずが無い。

同じ所にだけ何度も刺さった的と、三本に連なった矢を見た中央の人間が、ユマ姫の

魔法だと誤解したなどと。

「取り敢えず、一人だとボロが出そうなので、私も一緒に話を付けに行つてきます」

シノニムはそう言うのと、ネルネと二人で出て行つてしまふ。ネルネの所属を主戦派に変えてくれと交渉に行くわけだ。

残念ながら、それまでおやつはお預け。

「結局、プリンは食べられませんでした」

一人残されたユマ姫は涙目だ。一気に暇になつてしまった。

他にお菓子はないかと、キイムラ商会からの贈り物を漁り始める。

「これは、何かの衣装ですかねー」

見つけたのは服。それも、見たことも無いデザイン、装飾。

木村が見ていたアニメ、エルフの美少女リユーナのモノだった。婚約衣装ではないのであの時ほど手の込んだ作りではないが、それでも安っぽいコスプレとは隔絶するクオリティを誇っていた。

婚約衣装ではなく、今回はあくまでお遊び。だからこそ、杖などの小道具までフルセットで揃っている。

今にも魔法が飛び出しそうなデザインである。

「でも、ちよつと似合わないかも」

今のユマ姫はシヨックを受けておらず、髪はピンクのまま。決意を秘めた銀髪エルフのりユーナの衣装は、あんまり似合っていないかった。

木村は、ユマ姫が昔は銀髪だったと聞いてイメージを膨らませて衣装を作っていたが、ふわふわした印象のユマ姫にはあんまり似合わない。

だけど、魔法使いっぽさはよく出ていた。元がアニメだからこそ、全く異なる世界から来た魔法使いとして、練り上げられたデザインであるからだ。

「良く見ると、カツコイイかもー！」

ユマ姫は、ワクワクしながら鏡の前でファッションショー。杖を構えたり、カードを並べたり、ご満悦である。

そこに、ガヤガヤと、中央から二人が帰ってきてしまった。

「複雑ですよお、私の報告は何にも信じてくれなかったのに、なんで睨んだだけで人を殺せるとか、鍵の掛かった部屋にも侵入出来るとか、適当な嘘を信じちゃうんでしよう？」
「そう言うモノです、後はブランディングをしませんと」

その時、ユマ姫はマジカルファッションショーの真っ最中。

『我望む、天と地を揺るがす原初の火』あつ！

これは恥ずかしい。ユマ姫はノリノリで呪文を唱え、カードを投げたタイミング。バッチリ二人に見られてしまった。

「なっ！ なんですか！ ちゃんとノックをして下さい！」

顔を真っ赤に猛抗議。

「開きっぱなしでしたよ……」

「その格好！ 本当に魔法が？」

呆れるシノニムと裏腹に、ネルネは目を輝かせる。こう言う衣装は彼女の憧れるところだった。

「はあ、違います。コレはキイムラ商会からのプレゼントに混じっていた服で……」

シノニムは、言ってから気が付いた。コレは使える。

この衣装で踊って、ちよつとした光でも魔道具で浮かせれば魔法使いの完成だ。

「ユマ姫様。ご自慢の魔法、たっぷりネルネに見せてあげましょう」

「えっ？ あの、そういうのはちよつと」

シノニムの邪悪な目で睨まれて、ユマ姫はすっかり腰が引けてしまった。

「コレで色々抑えが効きます。ひよつとして私達がダックラム家のポジションに収まる事も……」

ソロバンをはじき始めるシノニムだが、そう言えばキイムラ商会のお土産には鍵を掛けていたハズと思い出すが……。

あまり深くは考えなかった。

厄災そのもの

「エルフの使者を名乗る方がお見えになりました、ガイラス様と言うらしいです」

「やっ！ よかった！」

ユマ姫は喜色満面、ソファアから立ち上がる。

王都に来てからと言うモノ、本国からの接触がまるでなかった。コレほど放置されるとは。本国に見放されたのではと不安で仕方が無かったのだ。

「信じて貰えますでしょうか？」

シノニムとしては、身一つのお姫様を本物として扱ってくれるかが不安であった。

「それは大丈夫です！」

しかし、ユマ姫は自信満々。

「私みたいなエルフは他に居ませんから！」

「はあ……」

ユマ姫にしてみれば、自分のようなピンクの髪の少女は二人としない。

果たして応接室に乗り込むと。畏まった使者が待っていた。

「おおっ！ ユマ姫様！ よかった！ 私はガイラスと申します、姫様はご無事でい

らっしやいますか?」

「もちろんです」

もう、頭からユマ姫と信じていた。いや、はじめからユマ姫がココに居ると確信していた。何故か?

「まずはこれを、タナカ様からです」

「え? タナカ?」

差し出されたのは田中からの手紙だった。

それにしても、グリフォンを追っていった田中を、なぜ使者が様付けで呼ぶのか?

「タナカ様は、大森林に踏み込むや帝国兵をなぎ倒し、幾つもの村を解放。今や救国の英雄と囁かれています」

「ええっ?」

ユマ姫にしてみれば、グリフォンを追いかけていった田中がどうして救国の英雄になつているか不思議でならない。

「何かの間違いではないですか?」

「私も連絡員に何度も問い詰めましたが、間違いないそうです。我々は勝利に餓えていゝる。小さな勝利を大袈裟に騒ぎ立てているだけの可能性は高いですが、全くの嘘ではないでしょう」

「うーん」

まだ信じられない。ユマ姫にしてみれば田中はそこまで図抜けた強さではなかったからだ。スフィールでは逃げだそうとする破戒騎士団と同じ程度の強さに見えた。

しかし、ガイラスは熱っぽく語る。

「なにより、姫様がココに居る。魔力が薄い土地で姫様が普通に暮らせているなど、その手紙を見なければ信じられませんでした」

「……そこまでですか」

パラセル村の若者が魔力不足でダウンしているのはユマ姫も見た。だが、自分はハーフで、ネルネだつて王都で暮らして居る。そこまで心配されるのは意外であった。

「ハーフであっても、魔力が濃い場所で育てば土地に順応します。都で育つたユマ姫さまが元気に過ごされているのは奇跡でしょう」

「そうだったのですね、私の行動は無謀だったでしょうか……」

魔力欠乏がそこまで体に悪かったとは、それでは誰も訪ねて来ないはずだとユマ姫は納得した。しかし、今度はエルフと人間で同盟を組むのも難しい。

先走つて王都に来たが意味がなかったかも。そんな不安が頭を過ぎる。

「いえ、なにも共に進軍するばかりが同盟の形ではありません。私も同盟締結に尽力致します」

「そういうものなんですね」

「そういうものです、何か入り用があれば、コチラに連絡して下さい。ハーフエルフの男が詰めています」

その言い方にユマ姫はふむ、と唸る。

既にエルフと言う言葉が浸透している。田中の功績は本当に大きいようだ。

そうして、ユマ姫は本国からのバックアップが受けられる運びとなった。

本人は余り自覚していないが、エルフの国は他では決して作れない魔道具や金属、カーボンにセラミック、宝石の類も多く抱えている。そして、帝国に侵略された事で食料品が不足していた。

つまり、貿易相手としてはかなりオイシイ。その窓口がユマ姫になった。今までは正体不明の自称お姫様だったユマ姫は、誰もが無視出来ない存在になっていく。

なにより、だ。

あの時と違って使者であるガイラスが、田中からの手紙を持って来たのはなぜか？
こんなにも早く、田中の活躍が聞こえて来たのはどうしてか？

それは、単純に知名度の問題だ。あの時、ユマ姫は既にして王都で大人気。誰もがユマ姫に渡りをつけたいと狙っていた。もちろんヒーロー役として田中の名前も知られていた。

だからこそ、ガイラスは、田中の手紙など渡されても本物だとは夢にも思わない。連絡員が田中の話をして、噂が混入したのだと判じてしまった。

姫を救った英雄が実は秘かに生きていたばかりか、大森林で英雄に収まっているなど、出来過ぎていて世迷い言としか思えない。

ガイラスだって、キチンと情報収集はしていた。帝国の侵略以前から、エルフの使者として王都では知る人ぞ知る存在だった。具体的には宰相や中央にある程度顔が利く。だからこそ、ユマ姫が王都に居るなんて、あの時は絶対に信じなかった。

なせ、あの時のユマ姫の行動は派手のひと言。広場でのスピーチ、オルティナ姫の生まれ変わりを騙っての堂々たるダンス。劇場では女優顔負けの演技。

それらエピソードの数々は病弱なユマ姫から結びつかない。むしろ、目立ちたがり屋の偽者らしいエピソードに思えて仕方無かったと言う訳だ。

田中と、ユマ姫。二人のやり過ぎた活躍で、入るべき情報がガイラスに入らなかった。しかし、今回は違う。

存在感を増したユマ姫を中心に、シャルティア不在の王都は更に混迷を深めていく。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

手紙を受け取ったユマ姫は、その足で木村の商会を訪れていた。田中からの手紙には木村に宛てたメッセージも混じっていたからだ。

二人が知り合いなのも驚いたが、いきなり手紙を渡すのはダメと言うのも驚いた。ユマ姫は手紙の文面を読み上げる。

「ぬるぼー！」

「ガッ！」

微妙な沈黙が、豪華な応接間を支配する。

「何ですか？ これ？ ぬるぼー？」

「私と田中の間の符丁です。偽者に情報を渡さぬようにと」

「まあ、慎重なんですね。暗号の上に符丁まで」

感心しながら、ユマ姫はおずおずと手紙を差し出した。

受け取りながらも、木村はため息。いや、まるで意味がない。ただの嫌がらせだ。

木村は以前、ぬるぼとだけ書き殴った手紙を帝都の田中に届けた事がある。ガッとききに王都まで来いという招待状だ。あの酷すぎる手紙を田中なりに根に持っていたに違いない。

木村にしたって手紙に書くのは良いが、声に出してガッと言うのは恥ずかしい。まして相手は何にも知らないお姫様だ。

大体にして、日本語で書けば解読不能なのだから、凝った符丁など一切不要だ。案の定、田中の手紙は日本語で記されていた。

『わりいな、まだそっちに行けそうにない。日本刀を手に入れて好き放題斬りまくってる内に、何故だか英雄みたいになっちまった。』

……なあ？ そっちで高橋は見つかったか？ 俺は見つけられてねえ、ただし、近いモノは見つけたぜ。アレは確実にアイツと関係がある。

……………そうだ、

ユマ姫だ。

アレは得体が知れない。

絶対に歯向かうな。

アレを人間がどうにか出来ると思うな。

死ぬぞ』

「……………」

「……………なんと書いてあったのです？」

ユマ姫がニコニコと問いかける、木村は初めてその笑顔が恐ろしいと感じた。

木村としてコチラの世界で商売を広げ、多くの人間を見てきた。だから解る、貴人でありながら、ユマ姫ほど無邪気な存在を木村は知らない。

そんなユマ姫を、親友は何よりも恐ろしいと断言した。こうなると、底抜けの無邪気

さが逆に怖い。

思いつくのはユマ姫を巡る噂の数々、左手に呪い、右手に奇跡。左目に繁栄、右目に破滅。左右の色が違う彼女の瞳が恐ろしげな噂を加速させた。

ダックラム家の執事が彼女の右目に睨まれて死んだとか、当主が取るものも取りあえず逃げ出したとか、全部がタチの悪い噂だと思っていた。

だが、見る人が見なければ解らない類の呪いだとしたら、どうだ？

「いえ、なんでもありません。ユマ姫をよろしくとだけ」

恐怖などおくびにも出さず、木村は笑って手紙を捨てた。

ユマ姫が恐ろしいからと言って、敵対するのは論外だ。むしろ、必ず味方でなければならぬ。高橋と関係があるなら尚更だ。

「あつ、その、今後もよろしくお願い、出来ますでしょうか」

「もちろんです」

深々と頭を下げるユマ姫に、木村は微笑む。

我こそはお姫様と、なにかと権威を保とうとするユマ姫だが、プリンンの供給元である木村にだけは腰が低い。後ろで見ているシノニムがハラハラするほどに。

しかし、とんでもない爆弾を投げ込んでくれたものだ。木村は頭を悩ませた。田中にはぬるほの礼もしなくてはならない。

そこで閃いた、悪友に対する絶好の反撃方法。

「我が親友、タナカの活躍に報いたい。そうですね、彼の活躍を劇にするのはどうですか？」

「劇、ですか？」

「そう、たつたひとりエルフの国に踏み込んだ人間が、帝国兵をバツタバツタとなぎ倒しエルフの女性と恋に落ちる、こんな筋書きはどうでしょう？」

「え？　タナカさんがエルフと？」

「そこはモノの例えです、多少は膨らませても罰はあたりません。なによりこの劇を見れば帝国恐るるに足らずと、市民が勢いづくのは間違いない」

「そ、そうなのですか？」

ユマ姫は振り返ってシノニムに問う。

しかし、シノニムにしたって劇の台本になど詳しくない。ユマ姫の名を使って、閑古鳥が鳴けば評判に傷が付く。

一方で、木村はこの脚本に絶対の自信があった。

妖獣殺しとして名を馳せた田中が、帝国で叙勲され騎士爵を授かるも、貴族の習慣に馴染めず出奔。

旅の途中でエルフの姫と出会い護衛として同行するものの、現れた妖獣に姫の秘宝を

奪われてしまう。

そうして辿り着いた大森林で、エルフの味方をして帝国兵を退治し、エルフの村を奪還。姫の秘宝も取り返し、英雄と崇められ、エルフの女性と恋に落ちる。

いわゆる、白人酋長はくしんしゅうちょうモノだ。

そして、ユマ姫の存在が白人酋長モノの欠点を埋めてしまう。それはヒロイン。

蛮族の女など伴侶としては不適合。そんな男が多いし、女性だってヒロインだぞと言われても、蛮族を自分と重ねるには抵抗が強い。

だが、ユマ姫は可愛らしく、あと数年で絶世の美女になる事が想像に難くない。実際のユマ姫を見れば、誰もエルフを蛮族などと罵れない。お姫様だけあって、非常に文化的な洗練を感じる佇まい。

なにより、悲劇のお姫様であるユマ姫の存在は、女性の憧れを受け止めるのに十分だ。そうして、急遽封切られた『黒衣の剣士タナカの物語』は王都で大人気になっていく。もう王都にはタナカの名を知らない者は居ないほど。これが木村の田中に対する意趣返し。

しかし、木村にも予想外だったのはユマ姫が案外芸達者だったこと。彼女は劇の合間のスピーチや小芝居に登場し、その可愛らしさで人気を博した。

エルフの国のティアンズと呼ばれる弦楽器と、木村のギターのセッションは王都中の

話題を攫ったりもした。

そうなれば今回も、その時がやってくる。

ボルドー王子が劇場に現れ、ユマ姫に声を掛けたのだ。

「え？」

しかし、ユマ姫はプリンに夢中で話を聞いていなかった。

「同盟、ですか？」

シノニムは、ボルドー王子とユマ姫の間に割って入る。

「そうだ、我々はどうにもアピール力が足りていない。ユマ姫の人気にあやかりたいのだ」

ボルドー王子らしいあけすけな物言い。それも、人の目がある劇場で堂々と誘ってきた。断るとメンツを潰してしまう。そんな状況を作られた。

「突然言われても困ります」

「突然では無いはずだ、君には何度も話を通す様に依頼してきた。今日は直接ユマ姫と話をしたい」

「……………」

シノニムは唇を噛む。十二歳のユマ姫にこんな荒技に出てくるとは想定外だった。

このままのらりくらりとどちらにも付かず趨勢を見守りたかったが……でも、考えようによってはチャンスでもある。

継承争いは、何と言つても第一王子のカディナールが優勢だ。病床の王がいつ後継者として指名するか解らない。しかし、田中とユマ姫の人気、そしてボルドー王子の軍への顔利きがあれば、十分に逆転可能。

そうなった時、どれだけの恩が売れるのか？ シノニムはソロバンを弾く。勝ち馬のカディナールに乗つても、大したおこぼれに預かれない可能性が高い。

「ユマ様は、ボルドー王子をどう思いますか」

だからこそ、ユマ姫を信じて話を振つてみた。無邪気で楽観的な所があるが、このお姫様の地頭は悪くない。

「……あの、同盟と仰いましたが、対等な関係と思つて良いのでしょうか？」

はたして、緊張を隠さず、少女が尋ねる。ボルドー王子を見上げる眼差しには決意が籠もつていた。

シノニムは確かに条件を聞いていなかったと反省すると同時に、流石に対等は難しいと現実的に捉えていた。

いや、最初はふっかつけた方が良い。やはりユマ姫の頭は悪くない。

しかし、本当に意外だったのはボルドー王子の反応だ。

「そうだな」

言うなり、ユマ姫の前に膝を折った。

「なっ！」

あり得ない、周囲もザワつく。王子たるもの父である王以外に膝を折るなど許されない。ましてや他国の姫君だ、まさか結婚を申し込む場面ならともかく、国の権威を損なう行動とみなされる。

いや……まさか！ その、まさか、なのか？

その可能性に気が付いて、心なしかユマ姫の顔も上気していた。

「あの、えと」

ユマ姫にとってボルドー王子は冴えない地味なおじさんで、キラキラした印象の第一王子と比べても印象が良くなかった。見た目の派手さに目を奪われがちなお年頃という奴である。

だが、偉そうに頭ごなしに話し掛けて来る大人が多い中、偉い王子様が膝を折って自分と目線を合わせてきた事に緊張を隠せない。

どうしても意識してしまう、間近で見ればボルドー王子の顔は粗野で朴訥、ニキビの跡すら目立っている。

だけど、どうしようもなく誠実で、瞳の奥には狂おしい程の寂しさを湛えていた。そ

れは母や兄を目の前で失った自分と通じるモノだと、ユマ姫は直感した。だからこそ、ゴクリとツバを飲み込んだ。ボルドー王子の言葉を待つ。

「対等も対等。私は、君を家族として迎え入れたい」

「え……その」

手を取られ、ジツと瞳を覗き込まれる。ユマ姫は錯乱した。対等な女性として扱われるなど今まで無かった。

「家族、ですか？」

ユマ姫の妄想は止まらない、冴えない王子を支え、国を盛り立て、帝国を征服。最後には幸せな家庭を作る夢から帰ってこられない。

「だけど、そんなお姫様の妄想は、王子の次のひと言で断ち切られた。」

「ああ、君を私の娘として迎え入れたい」

「え？」

ユマ姫は呆然とするが、これが当たり前だ。

王子は二十七、十二のユマ姫など娘としてしか見られない。

「私は、七年前に婚約者を失っている。私がもう少しヤンチャだったら、君ぐらいの娘がいたっておかしくなかった。もつと私に勇気があったならと後悔して止まない」

「え？ あなの？」

「どうか、私に君を守らせてくれないか？ あいつみたいに君を失いたくない」

「ええ〜」

夢が醒めてしまったユマ姫は、じわりじわりと後ずさる。

「そんなあ」

落胆するユマ姫だが、周囲は首を傾げるばかり。これは最上級のお誘いだからだ。後ろ盾の乏しい少女を王が妻にする場合。一度養女に迎えてから王妃にするケースもあり得るのだから、これが当たり前の反応、これ以上ない申し出である。

なにしろ、まだユマ姫は十二歳。いきなり婚約と言うのは早過ぎる。それこそあり得ない。

……そのあり得ないがあり得てしまったあの時のユマ姫は、人の耳目を強烈に集めるオーラがあった。なによりヒリつく様な危険な色気を纏っていた。

ユマ姫に恋い焦がれて正気を失う男が後を絶たない程。それこそ朴念仁で知られる近衛隊長のゼクトールが筆頭だ。一方でいまのユマ姫にあるのは天真爛漫な可愛さだけ。娘にと言うのが関の山。後数年たてば求婚が殺到する美女に育つだろうが、まだ早い。

一方でユマ姫の反応は信じられぬ程に苛烈であった。

恨みがましい目でユマ姫はボルドー王子を睨む。その目は日頃の無邪気なユマ姫か

らは考えられぬ程に剣呑で、子供扱いに怒ったと言うにはあまりにも物騒。

なぜ、ユマ姫はこんなにも怒りを露わにしているのか。それが誰にも解らない。

ユマ姫は、目に涙を溜め、問い詰める。

「なんで？」

「何か、お気に障ったかな？」

「私には……」

「??」

ポロポロと涙を零しながら、声を絞り出す。

「もう、父様が居ますから！」

そう叫んで駆け出してしまふ。その後をボルドー王子は追えなかった。

ユマ姫の言葉にハツとしたからだ。確かに帝国がエルフの王の首級をあげたと言う

話は不自然なほど入ってこない。

状況証拠としては十分過ぎる、しかし、あの少女は諦めて居なかった。毎日どんな気持ちで本国の情報を聞いていたかと思うと胸が締め付けられた。

「私はどうにも女心がわからんらしいな」

劇場には、肩を竦めるボルドー王子が一人残された。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

「ハアハア……」

劇場から駆け出したユマ姫は、いつの間にかたった一人で街中に飛び出していた。ここまでどうやって来たかも覚えていない。

「これは、まずいかも」

薄暗い街路にお姫様が一人。格好のカモである。

「あの、ひよつとしてユマ姫様じゃありませんか？」

そんな時、ゆつくりと現れたのはセミロングでライトブラウンの髪の毛の少女だった。

あんまり特徴が無い顔なのだが、よくよくみれば非常に整っても見える。不思議な印象の少女だ。高橋が見たら「乙女ゲームのヒロインみたいだな」と言うかも知れない。

「あの、あなたは？」

「あつ、ごめんなさい！ ご挨拶が遅れました。私、ルージユです。ルージユ・トリアン」カディナールの新しい婚約者が、一人で彷徨うユマ姫を見つけてしまった。

それが厄災そのものだとも知らずに。

破滅と踊れ

「ユマ姫の様子はどうかなんだ？」

「それが、よく解らないのよね」

尋ねるは、カディナル王子。

答えたのは、黒いドレスの女。

妖艶かつ危険な雰囲気を隠そうともせず、吐き出す息すら淫靡で有害。まさに絵に描いた様な毒婦。

そんな相手を前に、カディナルは優雅にくつろぎ、皮肉げに笑ってみせる。

「ほう、そなたにも解らんか？ 魔女クロミーネ」

相対するは、帝国の黒き魔女。そう、黒峰だ。この時、黒峰は王都に居た。

ここはカディナルの持つ離宮の一室。彼にしては地味な、白磁の大理石で統一された極めて私的な空間だった。

そこに、黒峰が居る。

王国の第一王子であるカディナルが、帝国の魔女と密会をしている。それも、この砕けた雰囲気。初対面と言う事はないだろう。実際、二人は既にして秘密裏に同盟を結

んでいた。

だからこそ、魔女は王子のあからさまな挑発を気にした風もなく、キセルに口をつけ、ねっとり紫煙を吐く。

「手強いんじゃないのよ。手応えがないの」

「どう言う意味だ？」

「そのまま……よ、あの子、何も知らないのよ？ 国の事も、魔法の事も、遺跡の秘密も

ね、期待外れもいとこだわ」

「まだ子供だ、不自然ではないだろう？」

「本当に、そう思う？」

カディナールは押し黙る。彼の片腕であったダックラム公は、ユマ姫を見るなり裸同然で王都から逃げ出した。

信じられぬ事だ。あれだけの権力を手にすれば、誰しも破滅の瞬間まで権力に縋ってしまう。一瞬の判断で全てを投げ捨てて、逃げ出すなどよほどの事。

果たしてダックラム公はユマ姫に何を見たのか？

「私だって、おかしいと思うわ。でも、アレを演技とは思えない」

「では、側近に危険な魔術師が居るのか？」

「かも、知れないわね」

黒峰は髪を掻き上げ、ヒールで大理石の床をカツカツと鳴らす。

どうにも腑に落ちない。言い知れぬ予感に黒峰は焦っていた。自分の言葉と裏腹に、ユマ姫をただの子供と思えなかった。

どうにも、手応えがなさ過ぎる。こんな事は彼女の『更新権』に今まで一度も無かった。

まず、洗脳する前段階、トランス状態にするまでが簡単に過ぎた。薬師であるルージユの手を借りる必要もまるで無い。聞いたことは何のためらいもなくスラスラと答えてくれる。ちよつと太ったとか、トイレの回数が増えたとか、極めてプライベートルな事まで、あけすけに淀みなく。もちろん回答に矛盾も歪みも存在しない。

これはおかしい、人間の心理につけこんで人を支配する黒峰としては、逆に取っ掛かりがないとも言える。

ひよつとして、魔法なり何かの力で洗脳に掛かったフリをしているかと疑った。しかし、どんな役者でも子供の真似は難しい。余りにも無邪気な回答に、心の隙間が見当たらない。

そのうえ、尖った針を突き付けて、ユマ姫の眼球に触れるほど近づけても、まるで反応を示さない。

これは、強烈にトランス状態に入っている証拠。どんな役者もこうは行かない。ここ

まで来れば、どんな尋問も、洗脳も、思いのまま。

ひよっとしたら、ユマ姫は何の悩みも無い馬鹿なのかも知れない。いや、そうとしか思えない。なのに、違和感が募る。

煮え切らない魔女に、カディナールは結論を求めた。

「まあいい、洗脳は効いたんだな?」

「効き過ぎたのよ。簡単に」

「良いことではないか、これでアイツを葬れる」

カディナールは黒峰に、ユマ姫を洗脳してのボルドー王子殺害を命じていた。

黒峰にしてみれば、父親に成り代わろうとするボルドー王子を殺せと、ユマ姫に悪感情を植え付けるのは簡単だった。

「でも、きつと失敗するわ。心に取っ掛かりが少ないから、人殺しをさせる程の決意を引き出せないの」

「かまわんさ、養女にしようとしたユマ姫に攻撃される。それだけでアイツの傷になる」

「そう、だったら私はもう帰るけど、良いわね?」

「見届けないのか?」

「洗脳した、銃も預けた。オマケまで渡したのよ? もう十分でしょう? ルージユを

託すわ。あの子も薬学の専門家よ、大抵の問題は解決出来る」

「ふん、魔法の魔法も品切れらしいな」

カディナールに悪態をつかれながらも、黒峰は奇妙な焦燥感に灼かれ、この場を立ち去りたくて堪らなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ふわあ、寝過ぎたかもしれません」

魔女と王子が密会しているまさにその時、ユマ姫はカディナールの屋敷で目を覚ましていた。

記憶が曖昧だ。どうやら馬車の中で眠ってしまったらしい。これは淑女らしからぬ行動とユマ姫は反省する。

……実際はルージュに睡眠薬を盛られ、その間に黒峰の洗脳を受けたのだが、そんな事は自覚にない。

「トイレに行かないと」

流石にヨソのお屋敷でおもらしなんて外聞が悪すぎる。ユマ姫は必死でトイレを探した。

暗い中、寝ぼけまなこでゴソゴソと歩き回って、結果、迷い込んで、地下への階段を転がり落ちる。

「うろう、何ですか？　ここは！」

ひたすら真つ暗な部屋に迷い込み、手探りで見つけたランプになんとか火を付ける
と、ユマ姫はソレを見てしまう。

「うひゃ！ お化け！ あ、人形？ ……綺麗」

それは美しい女性の人形だった。今まで見たことが無いほどに、精巧な。

「ああっ」

驚いたあまり、ユマ姫は粗相をしてしまうのだが……全ては人の居ない地下室のこ
と、誰にも気が付かれなかつたし、恥ずかしくてユマ姫はソレを誰にも明かさなかつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌日、カデイナールの屋敷から馬車が出て、ユマ姫はオーズド伯の屋敷へと送迎され
た。

「もう！ 心配したんですよ！」

シノニムは怒り心頭。なにより会話の途中で逃げ出すのは失礼にも程がある。

「ボルドー王子にも謝らないといけません。良いですね？」

「ええ〜！」

「ええ〜じやありません！」

そして、二人はボルドー王子の屋敷へと向かう。

「昨日は申し訳ありませんでした」

「いいや、謝るのはこちらの方だ。父親を亡くしたばかりの少女に養女にならないかなんて、デリカシーがなかったよ」

「そんな！ ほらっ！ ユマ様も謝って下さい！ ……ユマ様？」
「ウウウウー」

シノニムは黙りこくるユマ姫の頭を抑えるが……少女の様子は尋常では無かった。

洗脳だ、黒峰の洗脳が牙を剥く。

父親に成り代わろうとするボルドー王子を前にして、ユマ姫渾身の攻撃が炸裂する。

「がうー」

噛み付いた。ボルドー王子の腕に、思い切り。

「グフツ！」

笑える程に、ちっとも痛くない。むしろくすぐったいぐらい。それでもユマ姫は本気で噛んでいるのだ。王子は笑いを噛み殺せず、変な声が漏れてしまった。

ユマ姫が誇る最強の攻撃も、拗ねた子供のわがままに過ぎず、可愛らしいだけの行動だった。本人は大真面目に殺す気なのだが、これでは鼠一匹殺せない。王子は苦笑するばかり。

慌てたのはシノニム一人だけ。

「なっ！ 何をしてるのです！」

「いや、良いんだ。罰だと思ふ事にするよ。むしろ、ちよつと嬉しいぐらいだ。死んだルミナスも、喧嘩した時こうやって嘔み付いてきたもんだ」

ボルドー王子はそう言うのと腕に嘔み付くユマ姫を抱きかかえ、今は亡き婚約者、ルミナス・ピーグルの肖像画が飾られた部屋へと一同を案内した。是非、ルミナスを見て欲しかったから。

「あれ？　ここは？」

しかし、目を覚ましたユマ姫の反応は、望んだモノとは大きく違った。

「あつ！　この人、あの人形とそっくりです！」

そう、肖像画に描かれたルミナスの姿は、ユマ姫が見た、あの綺麗な人形に良く似ていた。

「ソレは、どこで!？」

「はい！　カディナル様のお屋敷で、ソツクリの人形が飾られていましたよ。まるで生きてるみたいなんですもの、驚いちゃって」

「何だと！　いや、まさか……」

考え込むボルドー王子。兄カディナルが動物の剥製をコレクションしている事は良く知っていたからだ。でも、まさか、人間を剥製にするなんて流石に信じられない。

しかし、ボルドーが婚約者ルミナスの死に長年不可解なモノを感じていたのも事実。

ルミナスは公爵家の娘。結婚でコチラの勢力が拡大するのを恐れてカディナールが暗殺したのでは……と、疑ってはいたのだ。

しかし、動機が弱い。だったら他に妨害の方法など幾らでもある。それが可能なほどに、カディナールは権勢を誇っていた。

なによりカディナールはシャルティアやルージュなど、弱小貴族の娘達と婚約し、強権を振るって彼女達を無理矢理に引き立てている。

そんな事が出来るのだから、公爵家の娘を殺す意味がない。殺すにしても婚約前だ。ルミナスの実家は今でもボルドー王子を支援してくれている。あのタイミングで殺して、疑心暗鬼を抱かせて、カディナールは得をしない。そう思っていた

しかし、それもこれも、美しさが評判だったルミナスを剥製にしたかったとすれば、どうだ？

今すぐ、ルミナスの墓を確認しなくては。

かといって、故人の墓を暴くならそれなりの理由は必要だ。ボルドーはユマ姫に向き直る。

「死んだルミナスに、君を紹介させてくれないか？ 娘として」

「だから！ あなたの子供にはなりませんって！」

「頼む、今だけはそう言う事にさせてくれ」

「えー?」

そうして、ユマ姫に見せるため、王子はルミナスの墓を暴くことにした。肝心のユマ姫の意志を考慮せず。

そうしてユマ姫を連れ立って訪れたルミナスの墓。結婚前であった故に、王族の自分と同じ墓に入れられぬ事を悔しく思い、ボルドー王子らしくからぬ豪華さで、小さいながらも王墓に近いモノを作らせた。

いま、あえてその墓を掘り起こす。

……まさか、あり得ない。そう思いながらも、もうボルドー王子は止まらなかった。婚約者の墓を暴く事に罪悪感を覚えながら、それでも、王子は棺を開けた。

そこにあつたのは、ボルドー王子が送った安い髪飾りが一個だけ。

「ツ!! カ、カディナル!!!」

掘り出した棺桶はもぬけの空。犯人は誰か? こんな事が出来るのは、兄カディナルに他ならない。

「クソツ! クソオ、俺は! 空の棺桶に欠かさず墓参りをしていたのか、とんだ間抜けだ!」

血が出るのも構わず、ボルドーは空の棺桶を殴った。グチャリと肉が軋む音がして、白い棺を赤く染めていく。

それを誰も止めない。止められない。

親友にして側近のガルダも、ユマ姫を守るべきシノニムも、顔色を無くして見ている事しか出来なかった。

「うっうっ！ グッー！」

棺桶に縋りつき、吠える。グチャグチャの感情が、まるで整理がつかないからだ。ポルドーの精神は壊れ始めていた。

今まで気が付かなかった自分への苛立ち、思い返せばカディナールが墓参りに来た事もあった。あの時、アイツはどんな気持ちで弔辞を述べた！ 殺してやる！

ポルドー王子は悔しさに狂い、ボロボロと涙を流す。

その鬼気迫る様子をポカンと見るしかなかったのがユマ姫だ。

「あのー？ 私は、そろそろ帰っても良いですか？」

「そうは行くか！」

だが、王子はユマ姫の肩を掴んで離さない。

「今からカディナールの屋敷に行く、案内して貰うぞ！ ルミナスの所まで」

「ええ！」

取り繕っていた優しい父の顔をかなぐり捨てて、ポルドー王子は憤怒の表情を貼り付けていた。その暴走をもう誰にも止められない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「あら、お揃いでどうなさったの？」

カディナールの屋敷に踏み込んだボルドー王子以下、親衛隊の面々。慌てて応対したのはカディナールの婚約者、ルージュであった。

「貴様はいい、カディナールを出せ！」

「そ、そんな事を仰つても……あの人は今留守で」

「どけー！」

「きゃっ！」

ボルドーはルージュを突き飛ばす。ルージュにしても温厚で知られるボルドー王子の暴走は理解不可能。

いや、心当たりがひとつある。困惑顔で後ろに付き従う少女を見れば一目瞭然。ユマ姫への洗脳がバレたのだ。

「地下に部屋があるはずだ。言え！」

「あらっ？」

だから、ボルドー王子が探しているのが地下室だと聞いて意外に思った。

……実は、ルージュも黒峰も、剥製にしたルミナスの事は聞かされていない。だからボルドー王子の狙いが解らない。

どちらにせよ、ルージュは王子を黙らせに掛かった。

「秘密の地下室なんてものがあつたら、空気の流れのひとつもあるものでしょう？」
そう言つて、お香を焚く。

「むっ？」

「どこでも、好きに調べてください。この屋敷にそんなモノありませんから」
知らないからこそ、躊躇無く調べると言つてみせる。怪しい素振りなどあるはずが無かつた。

更に言えば、見つければタダでは済まない剥製の地下室。煙の流れ程度で発見出来る程、雑な作りではあり得ない。

「確かに、何も無いな。ユマ、おまえは本当に見たのか？」

「ええ？ だつて真つ暗でしたから良く覚えてませんよ」

アレは夜のこと、更に言うとうマ姫は寝ぼけていた。自信が持てない。

そうしている内、遅効性の毒はゆっくりとボルドー王子一行の体を蝕んでいた。
「な、うつ？」

気が付けば、体が痺れる。意識が混濁し、目を開けていられない。

お香に混ぜられたしびれ薬の効果であつた。

「貴様！」

朦朧としながらも、ボルドー王子はルージュへと手を伸ばす。しかしルージュは軽く払って、王子を逆に地面へと引き倒した。

「馬鹿ねえ、頭に血が上って、こんな小勢で乗り込んで」

「ぐっ、なぜ？」

「私に毒なんて効くはず無いでしょう」

ルージュは薬の専門家。長年の研鑽によりしびれ薬が効かない体を作っていた。だから人前で堂々と薬を焚ける。だからこそ、王子もそれを守る親衛隊も油断してしまっ

た。
直接殺す毒こそシャルティアに分があるが、しびれ薬や眠り薬はルージュの得意とするところ。意識を朦朧とさせ、洗脳前のトランス状態を作り出す。魔女のサポートに欠かせない役目を担っているのだ。

そして、薬の効き方には個人差がある。ルージュは全員の様子を窺い、瞳孔の動きから薬の効き方を推察。お香の焚き方を調整し、ほぼ同時に全員を奪ってみせた。

まさに神業。

「お望み通り、地下に案内してあげる。どう？ 地下牢よ」

そして、ボルドー王子も親衛隊も、当然ユマ姫も、揃って囚われてしまうのだった。

◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇
◇

見舞いと称し、王である父の薬に細工を施す。策謀を終えたカディナールが聞かされたのは、ユマ姫の洗脳が空振りし、ボルドー王子が屋敷に殴り込んだと言う凶報だった。「失敗？ いや、悪くないな」

聞けば既にルージュが鎮圧済み。屋敷に押し入り暴れ回った事実はボルドーの大きな汚点となる。

そして、再びユマ姫の身柄も確保した。それにしても噂は所詮噂。ユマ姫はただの子供で、何の力も無かったと言うことか。

「じゃあ、見せて貰おうかな、アイツの悔しがる顔をさ」

カディナールの屋敷は広い。地下室だってひとつやふたつではなく、ボルドー王子達を監禁した牢屋はそれなりに広い。ここに全員が囚われていた。

鉄格子越し、カディナールはご機嫌でボルドーを見下ろした。

「さて、気分はどうかな？」

「カディナール！ 貴様！ ソレでも人間か！ 恥を知れ！」

「勝手に人の屋敷で大暴れして、酷い言い草だね」

「墓荒らしの上、子供に嘘を吐かせて、そこまでして俺を始末したいのか！」

「なんの事だい？」

カディナールには解らない。ボルドーは何を言っているのか。

「ルミナスの墓を荒らし、ユマ姫に嘘を吐かせ、俺をおびき寄せた。違うのか!」

「……………」

違う! 何もかも。

ボルドー王子は勘違いをした。全てがカディナールの策謀だと。

まず、ルミナスを見たユマ姫に嘘を言わせて疑念を植え付ける。後は死体を抜き取った棺を掘り起こさせれば、ルミナスを剥製にしたと誤認させられる。頭に血が上って何も考えられなくなる。

そうやって、まんまとおびき寄せられた。兄の家に討ち入った間抜けの出来上がり。それが今の現状だと、ボルドーはそう思ったのだ。

だからボルドーは許せなかった。子供に嘘を吐かせ、墓を暴いて死体まで利用するカディナールの鬼畜さに激昂した。

だが、ボルドーの推理を聞いて、カディナールはほくそ笑むどころか、憔悴を露わにする。

「ここにルミナス嬢の剥製があると、まさか……そうユマ姫が言ったのかい?」

「そうだ……お前が、言わせたのだろう?」

「そのユマ姫はどこに居る?」

「何を言ってる? ユマ姫はお前らの手先ではないのか?」

致命的に、噛み合わない。

お互いが、お互いに、ユマ姫は敵側だと思っている。

「ルージュー！」

「な、なんですか？」

地下室にカディナールのヒステリックな声が響いた。

「ユマ姫は！ 捕まえたのだろうか？ どこだ！」

「え？ 確かに一緒に牢に……」

「ッ!？」

その言葉に、その場の全員がまさかと、劇的に反応した。必死で見渡す。

しかし、少女の姿はない。殺風景な牢の中、見逃す事などありえない。

「居ないぞ！」

「なんで？」

あの時、どうしたか？ 執事を動員して、動けない王子や近衛兵、もちろんユマ姫も確かに牢屋に閉じ込めた。なのに今、牢屋の中にユマ姫が居ない。ユマ姫の侍女も居る、なのに姿が見当たらない。

これには、牢の中のポルドー王子も驚いた。

「茶番は止めろ！ 目が覚めた時、既にユマ姫は居なかったぞ！」

「ちっー！」

こうなれば、カディナールは落ち着けない。

なにしろユマ姫は、あの少女は！ なぜかここにルミナスの剥製があると知っているのだ。慌てて屋敷中を探させた。

脳裏に過ぎるのはユマ姫の噂だ。

「呪われた姫君。どんな拘束も意味を成さず、閉ざされた部屋にも侵入し、決して殺せない。魔法の矢はどこまでも追いかけて、目を合わせれば、死ぬ！」

「そんな事、あり得ませんわ」

ルージユは否定する。しかし、今の現状はどうだ？

ユマ姫はルージユにも秘密にしていたルミナスの剥製を目にしている。更には誰にも見咎められず、厳重に守った牢屋から人知れず抜け出してみせた。

そして、屋敷中を探しても、見当たらない。

「残るは、あそこだけだ」

カディナールは飾り暖炉の中、地下室への隠し通路をこじ開けた。特定の手順でブロックを動かせば、壁がズレる。

「こんな場所が？」

ルージユは初めて見る仕掛け。カディナールは自ら銃を持ち、命ずる。

「準備をしろ、オイ、お前ら、ありったけのジュウを持ってついて来い」

「ここにユマ姫が居ると言うのですか？」

「ここに無いだろうが！」

果たして、地下への階段を下りた先。そこにユマ姫は居た。

ルミナスの剥製を前にして、堂々と佇む。

ルージユは思わず、息を飲んだ。

「まさか！ 本当に！」

「やっと、来たんですね」

しゃがみ込むユマ姫は奇妙な衣装を着ていた。まるで異国のシャーマン。得も言われぬ神聖と、尋常ならざる気配を纏っていた。

……実際は、自分が漏らした痕跡をなんとか消そうとしていただけ。

彼女は昨日から変な風に寝かされて、人より早く起きてしまった。するとドレスの皺が気になって、馬車に戻って衣装に着替えたのだ。

その目は虚ろで、何も映していなかった。ソレが不気味で、恐ろしい。

「臭いですね」

全ては誤魔化す為、さも自分は関係ありませんと言う態度。

「何がだ！ どうやってここに来た！」

カディナールは恐怖する。どこにも侵入の痕跡などなかったからだ。しかし、意に介さず、ユマ姫はカディナールに言い放つ。

「汚物の匂いがします」

「なんだと！」

人間を剥製にする鬼畜。汚物同然と罵られ、カディナールは吠えた。もはや、敵対するより他にない。

「殺せ！ ジュウを撃て！」

カディナールが号令すれば、護衛達が手にする火縄銃が一斉に火を噴いた。

「もう、うるさい！」

しかし、ユマ姫に一発たりとも命中しない。

確かに火縄銃は精度が低い、それにしても一発も当たらないなど、あり得るのか？

「なんだ、何なんだアイツは！ 本当に死なないとでも言うのか」

「カディナール様、あれは魔法です！ 霧を！ 霧を使います！」

「そ、そうか！」

ルージュに言われてカディナールも気が付いた。これは魔法、ならば魔女から切り札を預かっている。

霧ギョルドスの悪魔だ。ダックラム公が居ない今、ユマ姫への対抗として、あの時よりも手厚い

支援を受けていた。

手で持てるごく小型の霧ギユルドの悪魔ながら、狭い地下室を霧で満たすには十分だった。

「ちっ！ 何も見えないぞ！」

しかし、ただでさえ硝煙に満ちた地下室で、霧まで焚いたら何も見えない。ただひたすらに真つ白の空間。果たしてこれでユマ姫は無力化出来たのか？ 見通せない世界でカディナールはひとりぼっち。固唾を飲んで霧の向こうを窺った。

「なにっ？」

白だけの世界、突如霧を切り裂いて現れたのは小さな手の平。

「これ！ セレナを撃った武器！ どうして！」

ユマ姫だ。霧の中迷わず突き進み、カディナールが持つ火縄銃に手を掛けた。

「離せ！ クソ！ 死ねえええ！」

「きやつ！」

カディナールは恐怖した、小さな手を必死で振りほどく。一寸先も見通せぬ霧の中、ぼんやりと見える小さな影、震える手で至近から銃口を突き付け、撃つ！

乾いた銃声。すると霧の向こうから可愛らしい悲鳴が聞こえた。それでも、何も見えない。

釣られたように、周囲から銃声が連続する。どうやらカディナールの護衛はまだ戦つ

ている。

「ふー、ふー、ふー」

「ふー、ふー、ふー」

荒く息をつく。もはやカディナールは霧の中で縮こまるしか出来ずにいた。

そして、ようやく風が吹き抜ける。通気口がようやく仕事をして、地下へと新鮮な風を送り、霧と硝煙を吹き飛ばす。

果たして、そこに立っていたのは銀髪の少女がただ一人。

誰だ？ と問いそうになるカディナールだが、顔を見れば疑いようもない。

ユマ姫だ。魔力が抜けて銀髪に変じたユマ姫だった。

立ち尽くすのは血塗れの地面。周囲には倒れ伏す無数の護衛。

そして、ぴくりとも動かないルージユの遺体。

カディナールが撃ったのは、可愛い悲鳴をあげたのはルージユだった。

至近距離でありながら、ユマ姫に銃弾は掠めもしなかった。あり得ない。

「なんだ、なんだお前は！」

「セレナを撃った武器、どこから手に入れたんですか！」

両者、睨み合う。

睨み合ってしまった、カディナールはユマ姫のピンクの瞳を覗き込んだ。

その時、思い出したのは、睨んだだけで人を殺す、ユマ姫の呪い。

「あ、ぐっ」

呼吸が苦しい、口から血が溢れる。

これが呪いと、カディナールはユマ姫に齒向かったことを後悔し、そして死んだ。

もちろん、呪いでもなんでもない。

「カディナアアアアアール!!」

ボルドー王子だ。牢屋を抜け出したボルドー王子が、背後からカディナールの首筋を切りつけた。

「クソッ！ クソオオオオオ！」

そして慟哭。

地下室で、ルミナスの剥製だけが無慈悲に微笑んでいた。

王国の行方E x

『カディナール王子死す、ボルドー王子が殺害か?』

ゴシップ誌にデカデカと見出しが躍る。見出しは事実でも中身は嘘も多い、いや嘘ばかり。

矯めつ眇めつ、胡散臭げにゴシップ誌を読んでいたユマ姫は、ハアとため息。

「世間は大変な事になっているようですな」

「えっ?」

アンタ、事件のど真ん中に居ただと、ネルネは仰天した。

実際、いま王都は大変な事になっている。

王子が王子を殺した未曾有のスキャンダル。ソレだけで話題性十分なのだが、貴族令嬢ルミナスの剥製が、噂の拡散に拍車を掛けた。

あまりにも美しく、あまりにも重要な証拠品。隠せるモノでは無かった訳だ。

極上のゴシップを前に、人の口に戸は立てられぬ。王都は大変な騒ぎになった。憶測が憶測を呼び、何が真実か解らない。

ルミナスを剥製にしたのはカディナール。ソレを発見したボルドー王子が激昂し、殺

害に及んだ。

これが真実ではあるのだが、カディナール派貴族は全ての罪をボルドー王子になすりつけた。つまり、ボルドーが死んだ婚約者を惜しみ、ルミナスを剥製にしたと主張したのだ。

なるほど、剥製趣味の王子が弟の婚約者を殺して剥製にしたなんて物語よりも、ずっと飲み込みやすい。

しかし、宰相率いる中央政府のメンバーが本格的に調べれば、程なく真実はつまびらかになる。カディナールの隠し部屋はひとつでは無かったからだ。他に何体もの剥製人形が見つかった。

更に、その隠し部屋、作った技師はルミナスの玄室を作った人間と同じだったのだ。こちらにも隠し通路が見つかった、秘かに死体を運び出すために違いない。

カディナールならルミナスの死体を手に入れて剥製に出来る。いや、これほど見事な剥製を作れるとしたら、カディナールしか居ないのだ。

主犯はカディナール、そしてダックラム公が共犯だ。

ただし、その主犯も共犯も、既に居ない。自白が望めない以上、この奇想天外な事件に決着がつくことが無い。

皆が皆の信じるストーリーを信じて、誰もが納得しない。王都は大混乱に陥った。

だから、落とし所が必要になる。

「俺は……隠居する」

そう宣言したのは、一気に老け込んだボルドー王子。

ユマ姫が間借りするオーズド伯のお屋敷にやってきて、ソレだけ言った。

「それは……わたくし何と言ったら良いのでしょうか？ あ、謝った方が良いですか？」

「いや、良い」

明日には関係者を集めた内々の説明会をするらしい。その前にいち早くユマ姫に知らせてくれたのだ。

「むしろ、言うべきは礼だ。復讐を遂げられた。俺は元より王位など興味はなかった。だから感謝してもしきれない」

ちつとも感謝している様には見えない。取り繕う言葉も少なく、ボソボソと語った。それほど精神的に追い詰められている。

「誰が何の為に、どうしてルミナスは死ななきやいけなかったのか？ 俺はずっとソレを追い求めて居たんだがな、真実は気持ちの良いモノでは無かった」

「はあ……」

「いや、悪い。本当は誠心誠意礼を重ねるべきだ。それは解ってるんだ。きみのお陰で俺は知りたかった真実を知れたんだから」

「別に構いませんよ」

「それは、助かる。元気に礼を言える気分じゃないんだ……」

「じゃあ、お兄の代わりに私が言うねーありがとー」

元氣良く飛び出したのは、ボサボサ髪で地味な印象のとぼけた女性。

「どなたです？」

「ヨルミちゃんですよー」

ヨルミだ。あまりにも、気が抜けた態度。凶々しいユマ姫にして面食らう。

「あの？ この人は？」

「ああ、妹のヨルミだ。王族の中では俺と気が合うのはヨルミだけだな。代わりに、な」

「ああ……そうですか」

王位継承権の争いから身を引く。口で言うのは簡単だし、そうでもしなければもう収まりがつかない所まで来ているが、今まで支援してきた人にしてみれば、ハイそうですかとはならない。

形だけでも、代わりに担ぐ馬が必要だったと、ユマ姫は正しく理解した。

それも本当に形だけだろう。なんてったって、出馬する本人にやる気が見られない。

「ま、私は人気なんて皆無だからねー」

「はあ……」

ユマ姫にしてみれば、勝手にして下さいと言ったところ。だが、まじまじと覗き込んでヨルミが放った言葉は聞き逃せない。

「でも、ユマ姫と目を合わせると死ぬってのは、嘘だねー」

「あの、その噂、どこまで広がってるんです？」

嫁入り前の女の子に付きまとう噂としてはあんまりである。まだロマンスを諦めきれないユマ姫は、この騒ぎで自分の噂も忘れられるだろうと楽観的に考えていた。

ところが、だ。

「ん？ そりゃ王都中だよ？ だって、実際に死んだでしょー？ カディナールは」

「ええっ？ 殺したのはソコの人でしょー！」

「あ、いや、すまない」

ばつが悪そうに謝るボルドー王子をヨルミは鼻で笑って見せた。

「んー、お兄は隠居せざるを得ないし、だから、ね？」

「えと、どういうことですか？」

「ま、噂を広めたのはウチらの派閥って事？」

「ええっ？ 困るんですけど？」

やっと、ユマ姫も理解した。

つまり、ユマ姫の噂をカディナール派残党への抑止力に使ったのだ。軍部に強い影響

力を持つボルドー王子が隠居すれば、今までボルドー王子を支援していた人間が肅正さ
れかねない。ユマ姫の脅威は、その為の牽制だ。

「あの、本当に迷惑なんですけど……」

「いやー謝るしかないねー、ほら、万が一私が王位継承すれば、埋め合わせはするからさ」
「うー」

ヨルミは見るからに王位を取りに行く気が無さそうだ。空約束も良いところ。不満
に思うユマ姫と裏腹に、シノニムはニコニコだ。

「悪い事ばかりではありませんよ。ユマ様の存在感は益々高まるでしょう」

「それ、絶対ダメな存在感じやないですか！」

ユマ姫の絶叫に、この時ばかりはボルドー王子も大声で笑った。ヨルミなんてゲラゲ
ラと笑った。

……笑えなくなったのは次の日、説明会の最中だ。

病床の王が亡くなったと報せが入ったのだ。これでもう余裕がなくなった。有力な
王子二人が舞台から消えて、遺言もなく、王太子も決まっていない。動乱の幕開けが予
想された。

有力な継承候補と見られたのは、二人。どちらもカデイナル派に属し、人脈が広
かった第一王女。同じく優秀な調整役の第二王女。

そして、何が起こったか？

カディナール派が真つ二つに割れた。その後には始まったのは、お互いの暴露合戦だ。するとまあ、出るわ出るわ、人間を剥製にするのと同レベルの悪行三昧。

使用人を面白半分^にに殺したとか、ダーツの的にしたとか、無実の罪をなすりつけたとか。

そうして、元々大して人気の無かった王女二人の評判は地に堕ちた。

一方で、王位なんぞ興味の無いヨルミちゃん^は、ユマ姫と一緒に呑気に劇に出演したりする。これは支援者に宣伝を頑張っているよというアピールでしかなかったのだが

……これが予想外の作用をもたらした。劇場の控え室、顔合わせしたユマ姫は呆然と見つめる。

「案外、化けましたねえ」

「案外つてー？ 幾ら何でもすごい失礼ー、え？ 嘘！ これ私？」

間延びした口調が引つ込むぐらい、ヨルミは鏡に映った自分の姿に驚いた。

念入りに化粧を施されたヨルミは、まるで別人だったのだ。

「いやあ、ヨルミ様は化粧映えする顔立ちですからね、腕が鳴りましたよ」

犯人はもちろん木村である。南方の少数部族の血を引いているとかで、ヨルミは日本人的な、ほりが浅い顔立ちだ。適切なメイクをこの世で唯一知っているのは木村だけ。

更に言うとヨルミの素朴で癖の無い顔立ちは化粧が映えた。場合によつて色々な印象を作れる顔は、為政者にとつて大変な強みになる。

ユマ姫の横に立つて、見劣りしない顔が作れる。

可愛らしいユマ姫と、エキゾチックな魅力溢れるヨルミ王女の組み合わせは、あつという間に評判になった。

それに、少しスピーチなどさせてみればヨルミの地頭の良さは明らかで。他の王女二人とは比べものにならない。

社交界には顔を出さず、兄ボルドーのサポートのためと、趣味と実益を兼ねて家で勉強していたのは経済学。

すると、まあ、収まるところに収まる訳だ。

「なつちやつた、王様に……」

様々な歯車が噛み合つて、今回もヨルミ女王が誕生した。

もちろんユマ姫は喜んだ。これで嫁ぎ先も心配が要らないと、平らな胸をなで下ろす。

「よかつたあ！ あの、約束通り、協力して下さいね？」

「ううっ」

しかし、ヨルミ女王は、ユマ姫が祖国の奪還を目的にしていると判断した。

女王になれたのも、主戦派の重鎮、オーズド伯からの援助が決め手だっただけに、もう戦争は避けられない。

「ううう、大変な出費になるよう」

大森林への出兵となると、掛かる予算など想像もつかない。だが、天はヨルミちゃんを見放して居なかった。

ヨルミ女王が即位して間もなく、田中がエルフの王都エンディアンを奪還したと報告が入ったのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、夏が過ぎ、秋も越え、冬が来る。

ユマ姫ももうすぐ十三歳。激動の一年を終えようとしていた。

「ううん、暇ですね……」

しかし、このお姫様は連日連夜、家でゴロゴロ出ようとしなない。

「だらけすぎでは無いですか？ たまには社交界に顔を出しては？」

「だって！ 全然歓迎されないじゃないですか！」

シノニムの小言に、キツと音が鳴りそうな程、睨み返したのがユマ姫だ。

「睨んだだけで殺すってだけでも酷いのに、隠し事があれば、鍵の掛かった部屋でも構わず侵入するって酷すぎませんか？ 誰も招待してくれないんですけど？」

「……………」

アンタは実際にカディナールの秘密部屋に入ったろがと、そうシノニムは思ったが口にはしない。

あれはいまだに理屈が解らないのだ。幾ら本人に聞いても、普通に入れたと、それだけ。実のところ、シノニムはユマ姫が測りかねていた。

そこに、ネルネが顔を出す。

「あのお、ガイラスさんがお見えになりました」

「通して下さい」

エルフの使者である。しかし、現れたガイラスは元気が無い。

「これはユマ姫様、ご機嫌麗しく……」

「良いから！ 一体何があつたのです？」

「……まずはこれを」

「これは？」

差し出された小包、中身はユマ姫の秘宝。それに、魔導衣だった。

「これがあれば、魔力が薄い土地でも活動出来ます」

「そうなんです」

他人事、ユマ姫は魔力の薄さにあまり困っていなかった。魔法を使う訳でも無いの

で、魔力不足に陥らない。こんなモノがあっても嬉しくない。

「それに、秘宝です」

「はあ……」

今更手に入っても、もう誰もユマ姫をエルフの姫と疑っていない。むしろ、恐怖の対象になっていて困るぐらい。だから秘宝もあんまり嬉しくない。

これは成人の儀をクリアした証であるので嬉しいと言えば嬉しいが、この世界ではセレナは死んでいないので、思い出の品としてソレほどの思い入れも無いのである。

「次に良くない報せなのですが……」

「うっ」

良い報せからワンクッション置いただけに、本当にマズい報せだろう。ユマ姫は身構えた。

「実はセレナ様の容体が優れないのです」

「ええっ?」

今までの余裕が吹き飛ぶぐらい、ユマ姫は顔色を無くした。

「それは、あのジユウの傷が?」

「いいえ、早々に回復魔法で怪我は完治しています。ですが……」

聞けば、王都奪還戦で霧キュルドレスの悪魔の霧を吸ってしまったらしい。ただでさえ魔力が無い

場所では生きられないセレナが霧を吸い。魔力が薄い土地で療養せざるを得なかった。

そのため、体調が急速に悪化したのだ。

「それなら！ 魔力が濃い古都に行けば良いじゃないですか！」

「それが、奴らが何をしたのか古都は今大変なありさまです」

「えっ？」

遺跡と化したエルフの古都は、今や古代兵器と魔獣が闊歩する地獄になったと、耳を疑う報告だった。これは帝国の侵攻にゼナが遺跡を稼働させたからなのだが、それは誰も知らないことだ。

残る高濃度魔力地としては、北限にある果ての山脈。しかし、今度は危険な魔獣がゴロゴロ居る。

「それで、東のピルタ山脈で療養する事になったのですが……」

「なるほど、私がお見舞いに行けば良いのですね？」

「その通りです」

ピルタ山脈は、今居る王都ビルダールからも近い。むしろこの山脈が魔力と魔獣をせき止めているから、王都は安泰なのである。

そうなれば、時間が惜しい。ユマ姫だってお姉ちゃんらしいところを見せつけたい。ちゃんと頑張ってますよとアピールしなくては。

「と、言うワケで軍を出して下さい」

「なんでっ?」

王宮に乗り込んだユマ姫は、そうヨルミに突き付けた。

「セレナの療養地を作ります。さあ! 今までの借りを返す時ですよ!」

「ええ」

セレナが気に入った場所に拠点を作ろうと、そうユマ姫は考えたのだ。

しかし、新米女王ヨルミの財布はペラペラだ、出せる出費ではない。

「そう言うの、キイムラ商会にお願いしたら……」

「もちろん、私が出資しますよ」

「いつの間に?」

許可もなく、堂々と王の執務室に入り込んだこの男こそ、木村であった。

何と、ユマ姫は先回りして木村と話を付けていた。むしろヨルミへ話を持っていったのが最後である。

木村としても、エルフと貿易する上でピルタ山脈が最大の障害となつている。魔獣が溢れる危険地帯であるからだ。そこに流通拠点を作れるなら又とない機会。

ならばとヨルミちゃんは安心した。

「キイムラさん! じゃあ! 資金の問題は?」

「資材や輸送費、食糧は提供するので、軍は国から出して下さい」
「ええ〜」

それでも軍を動かすにはかなりの予算が必要になる。ヨルミは渋ったが、貿易のためなら言い訳も立つ程度の予算に収まりそうだ。ついでに冬場の農閑期に行軍訓練が出来るはずは悪くない。

「じゃあ、行つてきまーす」

そうして、資材を集め軍を召集し、ユマ姫はピルタ山脈へと旅だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ひえっ！ ひええー」

しかし、呑気だったのは出発前まで、行軍は多くの被害と、恐ろしい程の死者を出す。ピルタ山脈は聞きしに勝る危険な場所だったのだ。

「ま、また！ ザルギルゴール 大牙猪!!」

巨大なイノシシに、千からの軍隊がまるで役に立たない。狭い峡谷で逃げ場もなく、次々と吹つ飛ばされて死んでいく。

ダンプカーが突つ込んで来る様なモノだ、人間が剣や槍で対処出来るハズが無い。

「姫様、お逃げ下さい」

——ブオオオオオ！

ガイラスが放った矢が大牙猪ザルギルゴールの目に突き刺さる。

結局、人間よりもエルフの魔法の矢が頼みの綱。しかし、それだけでは止まらない。人間を蹴散らしながら、大牙猪ザルギルゴールが迫ってくる。

「ひい〜」

「え、ユマ様？　こちら、逃げるなあ」

ユマ姫は総大将。なによりユマ姫のわがままで始まった出兵なのだから、後方でデーンと構えてなくては士気に関わる。なのに、ネルネを身代わりに据えて、誰よりも先に逃げ出す始末。

そうして軍は被害を出しながら潰走し、いつの間にか異常な場所に迷い込む。

「はあ、はあ、ここは遺跡ですか？」

「その様ですね」

「ここは、どこでしょう？　道が解りません」

「逃げようにも、外には大牙猪ザルギルゴールが待ち構えています」

気が付けば、ネルネやシノニム、木村、ガイラス、ゼクトール隊長など主要メンバーが揃って、遺跡の中に追い立てられてしまう。

もう、ニツチもサツチも行かない事態になった。そこで、ユマ姫の決断は？

「セレナに助けて貰いましょう」

他人任せだった。しかも、見舞いに来たはずの病気の妹に頼るといふから前代未聞。これにはシノニムも呆れてしまう。

「あの、セレナ様は療養の為に来るんですよね？」

「はい、セレナは案外病弱で、魔力が薄い場所が苦手なんです」

「なのに、助けて貰うって無理でしょう？」

シノニムにしてみれば、それが常識。エルフの少女と言うのはユマ姫やネルネぐらいしか知らないのだから無理もない。

セレナの実力を知っている者は、この場ではユマ姫と、そしてエルフの諜報員であるガイラスの二人だけ。

「ユマ様？ 一体、何を仰る！ セレナ様の魔法……噂では聞いていますが流石にあのレベルの魔物には効果が無いでしょう？」

……いや、エルフのガイラスにとってもユマ姫の発言は完全に意味不明。魔獣には魔法が効かない。コレが常識であるからだ。

矢を加速する事で魔力を物理エネルギーに変換して攻撃するのが関の山。魔獣が持つケタ外れの健康値に、魔力が掻き消されてしまうから。

魔法が得意だからと言って、セレナが大牙猪ザルギルゴルを倒せるなどあり得ない。

噂にはセレナの実力を聞いているガイラスですらコレなのだ。木村やゼクトール達

率いる親衛隊の面々なんて、ユマ姫は恐怖でおかしくなったのかと疑ったほど。

彼らは兵士だけに、エルフの戦士や魔法の力がある程度把握している。

ガイラスはエルフの戦士。その実力は噂以上のモノだったが、それでも大牙猪ザルギルゴールは規格外。現に魔法の矢が当たった所を目にしたが、矢羽根まで胴体にめり込んでいながらも、大牙猪ザルギルゴールはビクともしなかったのだから、当然だ。

見舞い相手の女の子が、そんなエルフの戦士より強いなど想像だにしない。

彼らはセレナを知らないが、最大に見積もってエルフ一流の戦士であるガイラスと同等を想像するのが関の山。

ユマ姫の頭を疑うのも仕方のない場面。

しかも、それだけではない。遺跡を調べていた木村は見たくないモノまで見つけてしまう。

「ユマ姫様。疑う訳ではないですが、セレナ様を呼ぶのは止めた方が良いでしょう」

「え？　なんで？」

「……………」

なんで、つて言葉が出るのがむしろ信じられないシノニム達だったが、構わず木村は先を続けた。

「……」を見て下さい、この扉は最近開いた形跡がある。恐らくはこの遺跡、既に帝国軍が

発見している」

「ええっ？　じゃあ、私達帝国の基地に迷い込んでしまったんです？」

「間違いないでしょう」

「ここはそう、あの回復カプセルがある遺跡である。帝国軍情報部がしっかりとキープしている。中に入ればドローンや魔獣に攻撃されるだろう。」

しかし、外では大牙猪ザルギルゴールに追い回される。もう一行に打つ手は無かった。

絶体絶命の状況に、ユマ姫の決断は？

「じゃあ、それこそセレナにやつつけて貰わないと」

やつぱり妹任せだったのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「この遺跡、お姉ちゃんが見つけたの？　凄おーい」

「ふふっそうでしょう？」

ユマ姫達が遺跡に立て籠もって僅か一日。果たして、本当にセレナはやって来た。

「……ええ？」

「はっ。」

「んんっ？」

しかも、いよいよ腹を括って外に出ようとした一同の目の前。大牙猪ザルギルゴールをあつさり

ぶち殺して現れた。

えいっと可愛らしい声でいきなり巨大な獣が三枚におろされたのだ。

あまりにも常識外の光景に、ユマ姫とセレナ以外、誰も現実を直視出来ない。魔獣の皮膚や毛皮の硬さを身をもって知っているメンバーだけに、意味が解らない。

……だからこそ、いち早く正気を取り戻したのは素人のネルネだった。

「え？ 何ですか？ 今の？ ガイラスさん？」

「あ、ああ……え？」

「さっきのセレナ様の魔法です。あれ何て魔法なんですか？」

「え？ 今のって、魔法？」

「は？」

ガイラスにして、セレナの魔法を初めて見たのだ。

健康値が百を越えるコトもザラな大牙猪ザルギルゴルに魔法を当てるなんて、意味が解らない。魔力値が千あつても消されてしまう計算だ。

それが可能なのがセレナの圧倒的な魔力。

魔力値で二千越え。エルフのエリートの更に十倍。

握力や腕力が十倍の人間が存在しないように、セレナの魔力は異常。魔力汚染事故用

エルフの先祖返りとしても、あまりにも凶抜けた魔力。

「お姉ちゃん！　ここ、すつごく魔力が濃いよ！　気持ちいい！」
 「それでしょ！　それでしょ？」

だからこそ、遺跡の濃厚な魔力をセレナはすぐに気に入った。こうなればもうセレナに敵は居ない。

しかも、彼女は一人で来た訳では無い、当たり前前に護衛を連れて来た。

「あ、わたしタナカと申します。この度は護衛として参じました、どうも、はじめまして」
 「ご丁寧にも、わたしは王都で商いを営んでいるキイムラと言います。ぬるぼ」

「ガッ！」

「叩くな！　初対面だろう！」

アホな挨拶を済ませ、田中と木村も再会を果たす。

田中とセレナ、強力無比な二人を前にすれば、霧もパウギユリヴアル王蜘蛛蛇も意味が無い。

帝国情報部は壊滅し、遺跡は一瞬にして制圧される。いとも簡単に。

ただし、ソルンと魔女は今回もまた、逃してしまふ。

「うそ、お父さん!!」

「そんな！」

父であるエリプス王が、姉妹の前に立ち塞がったのだ。

球形飛行機に乗って遠ざかる父の姿を二人は呆然と見送った。

セレナの拠点

「キイムラさん！　ちゃんと父様の行方、捜してくれてます？」

「あの、目下調査中でして……」

アレから数日が経った。

ここはキイムラ商会の執務室。この男はかれこれ十日もこの部屋に缶詰になってい
る。だから今日は、焦れたユマ姫の方から乗り込んだ格好だ。

それもそのはず、ピルタ山脈に拠点を手に入れてから、木村は大忙しだった。

エルフとの貿易は木村の商会に莫大な利益をもたらした。魔道具のミシン、照明、な
により輸送車の存在は、物流革命を起こすに十分。

素材分野も凄い。ゴムや樹脂、魔獣の素材など、様々な分野から引き合いが強い。木
村の商会はそれらを一手に引き受けている。

「ちゃんと探してくれています？　セレナもやきもきしてるんですよ！」

「……承知しております」

その功労者は誰か？　なんとと言ってもこの生意気なお姫様、ユマ姫の妹であるセレナ
だった。

セレナは魔力が濃いピルタ山脈を大変気に入ったらしく、遺跡を拠点に生活を始めた。

すると、周囲の魔獣を次々と討伐していったのだ。今、ピルタ山脈にかつての様な危険は無い。それがエルフとの貿易を支えている。

ユマ姫よりも幼い少女が、千の軍勢でもまるで歯が立たなかった魔獣を次々と狩り尽くす。この目で見ていなければ、木村だって信じられなかった。

そもそも、今回の出征、元々は彼女のお見舞いとか言う話ではなかったか？ 今となつてはさっぱり意味が解らない。

とにかく、木村には仕事が多かった。彼女らの父であるエリプス王の行方も気になるが今はまるで手が足りない。

なにせ、ユマ姫以外にも次々と来客が……

「キイムラサーン！ こんでもない事になってるんですけど？」

ユマ姫との会話が終わらぬ内に、顔を蒼くして乱入してきたのは女王であるヨルミちゃんだった。

「はしたないですよ、ヨルミちゃんはもう、王様なんですから」

「ユマちゃん！ 居たの？ 今はそう言うの良いから！ そう言うの無理だからー！

あーのね、ぜんぶあなたの所為なのよ？ 連れていった軍隊？ アレどうしたの？ 三

割ぐらいしか帰って来ないだけど？」

「あ！　そうですね！　軍つて言うのに、全然役に立たなかつたんですよ！　ふーん、一応、三割は帰ってきたんですね」

「は？　頭おかしくない？　ななひやくにん死んでんでんでん？」

「でんでん言われても、冷静になつてください」

「なれるかあー」

ヨルミちゃんはユマ姫を締め上げた。迷惑だからヨソでやつて欲しい木村だが、見て見ぬフリは難しそうだ。

「あの、予想以上に魔獣が強力だったのは間違いありません。ユマ姫の指揮の問題ではなく、誰がやつても被害は抑えられなかつたでしょう」

「そうですね！　三割も帰つて来たんですから。全滅しなかつただけ良いと思わないと」

「全滅だからね？　損耗率が七割つて全滅だからね？　ちよつとは責任感じて！」

ヨルミちゃんはギャン泣きして、木村商会の執務室でのたうちまわった。

「議会から突き上げ食らうし、遺族に補償をしないとだし、労働力不足で食糧危機が間近だよおキムラさーん」

「それは、問題ですね」

実際に、木村にとつても頭が痛い問題だった。

エルフとの貿易の肝は小麦などの穀物だ。エルフ達も農業どころではなくなり食糧が枯渇している。だからこそ足元をみて商売が出来るのだ。

それが、コチラまで食糧難になったら？ なぜエルフに食糧を売るんだと暴動になる恐れがある。

「ただ、対策はあります」

「え？ なになにに？」

「うんこです」

「うんっ……」

露骨にガツカリしたヨルミだが、木村にとつては今回の遠征で最大の収穫。

そう、^{リコイ}恐鳥のフンだ。

あの時、木村がピルタ山脈で^{リコイ}恐鳥の巣と、積み上がったフンを見つけたのは、帝国との戦いが本格的に始まる直前だった。

今回は、セレナがピルタ山脈を平定したためずっと早く発見できた。

「これで、食糧問題は解決しますよ」

「ほんとにいい？ うんちで？」

「約束します」

懐疑的なヨルミだが、木村には勝算があった。ピルタ山脈には夥しい程の鳥の糞の化石があったのだ。

地球のナウル島は渡り鳥の休憩地で、鳥の糞で出来た何も無い島だった。それが世界一裕福な島と言われるぐらいに成長出来たのは、化石化した鳥の糞がそれだけ肥料として価値が有ったからだ。

更に言えば、地球と違つてこの世界の植物は魔力で窒素固定を行っている。だから最も足りないのはリンとカリウム、鳥の糞は特に不足しがちなリンを補うのに最適な肥料である。

「それに、フンのお陰で銃の量産も始まります」

「おぉ〜」

鳥の糞の発見が早かつたので、今回の木村は銃の量産に躊躇わずに済んだ。火薬の供給に不安がないからだ。

硝石を抽出するのも恐鳥リコイのフンは最適だった。洞窟の中に残されたフンからは硝石が溶け出しておらず、人間の汚物から丹念に抽出するよりずっと効率が良い。

帝国は魔石を使い、ハーバーボッシュ法を上回る効率で火薬を作っているのだが、良質な鳥の糞で火薬を作る木村は、ヘタすれば効率で上回る。

ただし、鳥の糞はいつか取り尽くしてしまう。地球の楽園だったナウル島は、最後に

は破綻してしまうのだが、木村に数十年後の心配をする義理は無い。

「とにかく、諸々心配は要りません。私が保証しますよ」

「ん、もし革命でも起こって、私が断頭台に送られたら一生恨みますからー」

「それ、一生終わってるんじゃないですか？」

「また、ユマ姫は酷いこと言うし」

二人はガヤガヤと退出していった。なんとも騒がしい二人である。

因みに、その後、逃げ散った兵士もポツポツと帰還しはじめて、最終的な行方不明者は三割、三百人程度に収まった。なんとか国体が揺らぐような暴動は起こらず済んだのである。

農夫は数を減らしたが、恐鳥リコイのフンは補って余りある収穫をもたらし、エルフとの貿易は順調に進んでいく。

だが、木村への来客は女王だけに止まらない。

「おーつす、どうつ？」

田中だ。我が物顔で執務室にやってくるなり、常人なら手で触るのも躊躇する高級木材の執務机、その飴色に磨き込まれた天板に、さも当然とケツを下ろす。

「飲むか？」

「助かる」

ただし、木村は嫌な顔をしない。田中は情報集めのついでに、世界中の銘酒を土産に持ってくるからだ。

今回も、田中はバイクを手に入れている。だからプラヴァスとの往復だつて苦にならない。

「くうー！ コイツはまた、キツイ酒だな。だけどうつま」

「だろ？ 隠し味はスパイス、それと……」

「あの田中サン？ この浮かんでは……」

「幼虫だ。なんの虫かは知らね」

「グブツ！」

木村がこの蒸留酒に漬けた幼虫を気に入るのはもう少し先の話になる。

「で、どうなん？ エリプス王や魔女の足取りは？ プラヴァスで魔女を見たつて噂は？」

「さつぱりだ、それよりお前が探してるコーヒーのが目がありそうだぜ？」

「え？ マジで？ 切実に頼むわ」

木村はコーヒーが恋しくて仕方が無かった。タンポポっぽい植物の根っこを茹でて変人扱いされる程度にはコーヒーを渴望していた。

「それがよ、ポンザル家つてトコが独占しててな、しかも友好的じゃねえと来た」

「マジかよちよつとぐらい手に入らねえの?」

「薬扱いなんだよ、元々、量が知れてる」

「くうー」

遺跡では米を手に入れて、いよいよ欲が出て来た木村であった。

当たり前だが、今回のユマ姫は米やカレーに執着しない。する理由も無い。なのでプラヴァスは情報収集ついでに、木村の趣味で調査を進めている。貴重なスパイスは木村の商会のメイン商材、エルフとの取引にも使えるからだ。

そして、田中も自分の欲に正直な男。

「そーういや、俺も聞きてえ事があつたんだわ」

「何よ? 給料は十分払ってるだろ」

「そうじゃねえよ、金なんざ手に持てる分で十分だ。俺が聞きたいのはユマ姫の護衛のエルフの話よ」

「ん? ガイラスさんの事?」

ユマ姫に専属の護衛などいない。木村が思いつくとすれば連絡役兼、エルフの戦士であるガイラスだった。

「そうか、流石に厳つい名前だな」

「ガイラスさんがどうしたん?」

「アイツ、相当やるぜ？　どんな魔法を使うんだ？」

田中は強い相手に餓えていた。ソレほどに、刀を手に入れた田中には敵と言える相手が居ない。あまりにも強過ぎて、戦える相手を欲していた。

しかし、木村に言わせれば、もつとヤバい存在が田中のそばに居たハズだ。

「そりゃ、強いけどさ。強さで言えばお前が連れて来たセレナ姫のが圧倒的っしょ」

「まー、確かに、俺も初めてセレナの魔法を見た時ビビったわな。だがよ、戦争ならともかく一対一の戦いにアレほどの火力は必要ねえだろ？」

「確かに、だけど、あんな魔法、躲せないでしょ？」

「どうかな？　近づけば魔力を乱せる。なにより、アレは違う。戦士じゃねえ。火力を持った子供だ。例えばダイナマイト持ったお前が強いかって言えば、戦う相手としちゃ不足だわな」

「いや、戦わねえし」

「そう言うなよ、とにかくアイツが初めてなんだ、俺の太刀筋を初見で見切った奴は」
「はっ？」

斬り掛かったのか？　それはマズい、国際問題になると木村は慌てた。

だが、田中はパタパタと手を振って否定する。

「実際に斬り掛かった訳じゃねえよ。そらっ！」

「ん？」

「今、斬った」

「は？」

「だから、殺気だけでな、斬れるかどうか確認してるんだ。見えねえんだから普通は反応もしねえし出来ねえ」

「それで？」

「でも、アイツは初見で躲しやがった。相当やるぜ？」

「まあ、魔法も弓矢もバリバリ使える人だからね」

「やっぱりか、ちっ、やっぱ世界は広いな」

田中は獯猛に唸る。この男は誰よりも自分が求める強さに純粹なのだ。

「なあ、ちよつと話を聞く事は出来ねえか？」

「いや、俺も殆ど接点ないし」

「はー、つつかえね」

物騒だから絶対に会わせないようにしようと思う木村であった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、銃の量産を進めるとして、新しい武器には訓練が必要だ。射程兵器である以上、数を揃えてキツチリ運用しなければ意味が無い。

「どうです？　中々ではないでしょうか？」

「立派ですね」

木村がユマ姫を招待したのは射撃訓練場だ。従来の弓の訓練場と違い、的の距離が遠い。50 m以上の距離だ。

ズラリと並んだキムムラの商会の人間……つまりずぶの素人が、必死に的を狙って次々と火縄銃を撃っていた。

それを見て、ユマ姫は顔を顰める。

「この距離で当たるモノですか？」

「当たります。だからこそ、戦場に革命をもたらすのですよ」

火縄銃の有効射程は100 mほど。ただし流石に100 mとなればなかなか当たらないし、当たっても減衰して威力は無いが、50 mぐらいまで引きつけて撃てば、確実に敵の機先をそげる。

和弓で一般的な近的が28 mなので、50 mで当たってくれるなら悪くない。

それが木村の計算である。

「ロングボウの方が射程が長いようですが？」

「しかし、それなりに訓練が必要ですし、火縄銃は威力もありますから」

「そんなモノですか……」

ユマ姫は納得していないが、誰もが使える射程兵器と言うのが重要なのだ。農兵を使うにしても、槍で突っつかせるよりも銃を撃たせた方が確実に活躍させられる。ソレで十分。

論より証拠と、木村はユマ姫に撃ち方を教えるのだが……

「……これ当てるの、ホントにそんなに簡単ですか？」

しかし、ユマ姫は器用では無かった。50mの的にも中々当てられない。後ろからソレを見て、うずうずしているネルネであった。

「あの、姫様、ちよつと貸してくれませんか？ 撃ち方が違うと思うんですよ」

「えー？ ネルネが撃つと、また的を壊しちゃうじゃないですかあ」

「睨んだだけで人を殺せるエルフの姫君に言われたくないですよーだ」

「またそうやって意地悪言うし！」

じゃれ合う女の子二人。木村は大いに癒やされていた。

「大丈夫ですよ、的は壊れる為のモノですから。むしろ大いに壊して頂きたい」

「ほらやつぱり！ じゃあ、姫様見てて下さいよ」

言うだけあって、ネルネの構えは堂に入っていた。重心もブレがなく、引き金を引くとしつかりと的に命中する。

「お見事！」

「ほら！ こうやって狙うんですよ」

流石にど真ん中とは行かないが、しつかり当てられるだけで立派なモノだ。一方ですつかりスネてしまったのがユマ姫だ。

「むー、もう良いですよ。ネルネが的を壊しちゃうから」

「あ、そんな事言うんです？ キムラさんも何とか言つて下さいよ」

「えと、ユマ様には護身用に、もつと性能が良い銃を作らせていますから」

「もう良いですー！ ジュウはネルネに持たせてください」

「あーへソ曲げちゃいました。もー」

木村は二人をニコニコと見守った。実際、護身用にしたってユマ姫が銃を撃つ事はないだろう。

……この時、木村はすつかり田中の警告を忘れていた。このユマ姫が危険な存在とは思えなかった。

そして、演習が終わり、いよいよ木村の仕事だ。それぞれの銃の命中率を調べ、どの形状の銃が使いやすいか、的の銃痕を確認しながら運用方法を模索する。

そこで、やけに綺麗なのがひとつ有ることに気が付いた。

ユマ姫の狙っていた的だ。銃痕はない、いや良く見ると木目のフシの部分にひとつだけ、これがネルネが当てた場所だろう。

つまり、結局ユマ姫は一発も的に当てられなかったのだ。

苦笑しながら、的を手に取る。その時だ。

——ピシッ

的が、割れた。ひとりでに。

亀裂は細かく、そしてあつという間に伝播した。まるで傷が入ったフロントガラス。跡形も無く粉々に砕け散る。

「え？」

意味が、解らない。木がこんな風に砕けるところを木村は見たことがない。

頭に駆け巡ったのは、的を憎々しげに睨みつけるユマ姫の視線。そして、呪いの姫君の噂話。田中の「決して逆らうな」と言う警告。

「まさかな」

眩きながらも、冷や汗が止まらない。

だから二人の会話の違和感と、本当の犯人の存在に、思い至らない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その日の夜、噂の二人は、同じベッドにパジャマ姿で揃って寝ていた。

暗殺者が襲って来た日から、度々、影武者としてネルネがユマ姫のベッドで寝る事になつてのだが、枕が変わると寝付けないユマ姫が別の場所で眠るのを渋って、結局二

人で寝てたりするのだ。

もちろん、これでは影武者として全く意味が無い。シノニムにとって頭が痛い問題であつた。

女の子が二人、パジャマ姿でする会話としては、愚痴めいた人間の品評会みたいなモノとなる。

その中でも、ダントツに審査員受けが悪いのが、あの男だ。

「あのタナカつて人、最低じゃ無いですか？」

タナカだ。ネルネは田中を心底嫌つていた。

「ええ……そんなに悪い人じゃないと思うけど」

一緒に旅をして、最後にエルフの国を救つてくれたのが田中だ。信じられなかったが妹セレナが言うのだから本当だろう。

それに元を正せば、エルフと言う名前も田中の発案だ。救国の英雄。あんまり悪く言つて欲しくないユマ姫だった。

「剣に生きる、ストイックな人ですから」

「でも、あの人なんか臭いし」

「ほら、ずっと運動してるし、あと燃料の運搬とかしてるから……ね？」

「それに、ガサツで荒っぽいし」

「戦士ってそういうモノですって」

ユマ姫は、どうして自分が田中のフォローを、それも侍女にしなければならないのか？ 理不尽なモノを感じながら、それでもネルネの剣幕は大変なモノで、ユマ姫はなだめるしか出来ない。

「なにより、人の名前間違えるし！」

「ネルネって、言いにくいんじゃないかしら……」

「一番最悪なのは、いきなり襲ってくるんですよ！」

「ええっ！」

流石にソレは問題だ。ネルネだって女の子、それにネルネはユマ姫の侍女にして影武者なのだから、変な噂になっても困る。

「それは、どんな？ 無事ですか？」

「ちよつと！ めくららないで下さい！ そう言うんじゃ無いですよ」

「じゃあ、暴力を？」

あんな大男が小さいネルネを襲う想像に、ユマ姫は顔を引き攣らせる。

「違いますよ、睨んで、シャツ！ って感じでこう」

「斬られたのです!?!」

「いや、なんかこう殺気が」

「え？」

「斬られそうな気がビツつと飛んで来て、ヒヤツとしたんですよ」

「はあ……寝ますよ。明日も早いですから」

「あつ、信じてないですね！ 信じてくれないとおねしよをバラしますよ！」

「ええ……」

ユマ姫は仕方無く、田中は無闇に人を斬りつける狂人と信じてあげる事にするのだつた。

紛争の始まり E x

銀の穂先がズラリと並び、夏の陽光をキラキラと反射する。

長大な槍、抱え並ぶは鎧姿の男達。その数は千にも届かんばかりの大軍で、この時代の戦車とも言える重装騎兵まで百も控えている。

彼らこそ、王国南東部、テンタクル領のデルタ騎士団。そのほぼ全軍だった。

「ルメルド伯、まさかこれほどの多勢を出して頂けるとは、感謝の至り」
頭を下げたのはオーズド伯。

それもそのはず、ここはゼスリード平原。オーズドが治めるスフィールの領内だ。急な要請、それも遠く離れたテンタクル領がほぼ全軍を出してくれるとは、望外の事。

「無論だ。国の大事ぞ！ 情弱なお主らに任せては置けぬ」

「これは手厳しい。若輩の身、今回は勉強させて頂く所存でございます」
へりくだりながらも、オーズド伯はルメルド伯の焦りを手に取るように把握していた。

ルメルド伯はカディナル王子派の重鎮だった。つまり次代国王の腹心と見られていた人物。

それが人間を剥製にする王子の凶行で、あつという間に立場を悪くした。今回の帝国の侵略は、その挽回に絶好の機会だったまで。

とは言え、帝国の戦略が見えぬ以上は他領の軍勢をひと当てし、まずは様子を見たいオーズド伯。利害が一致している以上、頭を下げる程度は何でもない。

と、ココまではあの時と全く同じ。

違うのは、ココからだ。

「しかし、何のつもりじゃ！ あのチンドン屋は！ 戦争を何だと思っている、下がらせろ！」

「いえ、アレは支援者であるキイムラ商会たつての要望でして……」

二人が苦々しく見つめる先には、極彩色で彩られた高い櫓がそびえている。

——キユラキユラキユラ

しかも、動く！ キヤタピラっぽい構造で！ 馬鹿げた玩具。地球で近いモノとしてはお祭りの山車だろうか？ とにかく戦争に似合わぬ派手な存在。

その山車の上層、ミニ天守閣と言った風情の場所に控えるのはユマ姫であった。それも木村謹製、コスプレっぽいド派手な衣装を着させられて、それでも陽気に笑っている。

「ふわー良い眺め！」

「せせせ、戦場ですよ！ 高いし、怖いですよお」

そして、ネルネは被害者だった。一人じゃ心細いとユマ姫に無理矢理連れて来られた格好。

もちろんココに居るのは彼女達二人だけではない、天守閣の上、二畳程度のスペースにもう一人、木村が控えている。

「まあまあ、前線には出ませんから、この高い櫓から戦場を睥睨するユマ姫に、皆の士気も上がるでしょう」

「え？ 私そんなに人気があるんですか？」

「……………まあ、そうですね」

「なんですか、その間は！」

正直、ソレほどの人気は無かった。むしろ、呪いの姫君として恐れられている。

だからこそ、恐怖の姫が上から睨め付ける事で、味方には決して逃げるなど脅し、敵は大いに竦み上がる。そんな効果を見込んでいた。

そして、いよいよ戦争が始まった。

「やあやあ、遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ。我こそは——」

——パアアアン！

ルメルド伯お気に入りの騎士は、たった一発の銃弾に倒れ伏す。

「卑怯なり！ 武人として恥を知れ！」

顔を赤くして叫ぶルメルド伯。ここも同じ。

しかし、今回はコレを待っていた者が居た。

「さあ、狙つていきますよ、ハイお願いします」

「は、ハイ！」

もちろん、木村だ。

櫓の上のユマ姫に魔法の杖っぽいモノを持たせ、戦場を指し示して貰う。

「おおっ！」

「呪いの姫がお怒りだ！」

感嘆と恐れが混じった兵士の声。

ユマ姫が杖を突き付けたのは、非情にも騎士の名乗りを狙撃した敵兵だ。

そのタイミングを逃さず、ユマ姫の隣、櫓の上で銃を構えるのは木村。

——パアアアン！

大きな炸裂音。堪らずユマ姫は抗議の声を上げるが、木村も耳をやられて聞こえていない。コレはソレほどの火薬をぶち込んで作った特別製の狙撃銃。

「なにいつ！」

「敵兵の頭が吹き飛んだぞ！」

「あれは、名乗りの途中で騎士を撃った卑怯者ではないか？」

「なんとなんと！ では、アレこそが！ ユマ姫の呪い！」

やいのやいのと騒ぐ兵士達。見上げて驚く顔色に、次第に畏怖の念が混ざっていく。「なんか……トンでもない誤解が広がってるんですけど……」

見下ろすユマ姫の顔色にも、負けじと畏怖が念が混ざっていく。

「さあ、バンバン行きましょう」

木村は鳥の糞から大量の火薬を作った。だから銃の改良も早く進み、あの時より一年早く、狙撃銃を作り上げていた。

もちろん、一丁一丁が木村の手作り。とても量産出来ないが、こんなモノは一丁だけで戦争を変えかねない。

タダでさえ、登場したばかりの銃。木村の作った狙撃銃は、その常識を更に越える超射程。300mを超すロングショットを実現していた。

だから、誰もソレを新しい銃の一撃とは思えない。

「呪いだ！ ユマ姫の呪い！」

「ダメだ、睨まれたら殺される！」

人間は理屈が解らないモノを恐れる。その意味で、新しい銃で相手を狙撃するよりも、ユマ姫の呪いとした方が効果があると木村は踏んだ。その目論見が当たった形。

「次は右の兵士に」

「は、はい！」

木村に言われるままにユマ姫が杖を突き付け、すると敵兵が死ぬ。

「また、呪いだ！」

「くそつやつてられるか！」

こうなればふざけた極彩色の櫓さえ、呪いの術具に見えてくる。

混乱を鎮める立場の将校達すら、ユマ姫に睨まれるのを恐れ物陰に隠れたりと、完全に浮き足立っている。その中には木村の狙撃銃さえ届かぬ後方で、指揮を執るべき敵の大將さえ含まれた。

コレでは戦意など上がるはずがない。

「ふむ、これは想像以上に上手く行っています」

「そ、そのようですね……」

櫓の上、木村はほくそ笑んでいた。一方、ユマ姫は胸をなで下ろす。これならあまり危険はない。

無邪気に振る舞って居たモノの、戦場に連れ出されると聞いて、本音ではユマ姫は気がでなかつたのだ。必死で抵抗したものの、プリンの前にあっさりと陥落。

せめてもの抵抗が、侍女のネルネを道連れにする事だった。

「人が！ 人からグチャってしたのが溢れて、オエッ」

そのネルネはもう、たまったモノでは無い。

ユマ姫はなんだかんだ、人が死ぬところをかなり見ている。一方でネルネは戦場は初めて。それも目が良いものだから、人間が死ぬところをハッキリと見てしまう。

「汚い、吐かないで下さいよ!」

「でも、人間がグチャってなるのううう、怖いですよお」

「そんなの戦場ですから当たり前ですよ!」

「あの、私は侍女なんですけど……」

「ほらほら、得意の射撃を見せて下さい」

ユマ姫はそう言って、護身用にと持たされた火縄銃をネルネに突き付ける。

「そんな、無理い」

「無理もヘチマも、戦場に立った以上。もう戦うしか無いんですよ!」

「わたし、無理矢理立たされたんですけど??」

「大丈夫ですよ、何事も経験ですから」

偉そうに言いながら、本当に敵が迫れば、真っ先に逃げ出すのがユマ姫だ。

いや、ソレを微笑ましく見ている木村にしたって、敵が攻勢に出る気配ならば二人を連れて逃げるつもりでいる。

今回は、呪いの恐怖を敵兵に植え付ければ十分なのだ。だから、二人のやり取りを面

白そうに見つめるだけ。

「ほら、早く撃って！」

「えええ……あの、本当に？」

「早くしないと！ コチラから撃てると言う事は、相手から撃たれる危険もあるんですよー！」

「ううう」

実際は、殆ど危険は無い。そもそも、普通の銃で届く距離じゃ無い。だから、彼女達が押し付け合ってる火縄銃で、人殺しになってしまう心配なんてまるで無いのだ。

「ね、狙います」

だから、ネルネが櫓から身を乗り出して曲射で相手を狙おうとするのに、木村は秘かに驚いた。なるほど、抜群の射撃センスがある。この距離は曲射じゃないと絶対に届かないとネルネは直感的に悟ったのだ。

しかし、だ、そもそも火縄銃の丸い弾丸。曲射で当たるようなモノでは無い。微笑ましく木村が見つめる先、結局、ネルネは引き金を引かなかつた。

「やっぱ無理ですよ。人殺しになんて、なりたくありません」

「ええーいくじなしー」

「そんな事言うなら、ユマ様が撃って下さいよ」

ネルネは火縄銃をぐぐいとユマ姫に突き返す。

「私が撃つても当たりませんから！　ここは射撃が得意なネルネの仕事ですよ」

ユマ姫はユマ姫で、必死に火縄銃を押しつける。

と、二人の微笑ましい押し付け合い、木村が笑顔で見えていられたのはココまでだった。ネルネが疑問の声を上げたのだ。

「あの、キイムラさん。左右から敵兵、来てませんか？」

「何？　マジか！」

木村が仰天してスコープを覗くと、たしかに両翼から敵が迫っていた、それも鉄砲隊だけで500人ずつ、完全に挟まれている。

「なんか左右の軍を併せると、コチラと同じぐらいの数になりませんか？」

「ねえ、キイムラさん、ホントに大丈夫なんです？」

「ダメっすー！」

「ええっ？」

コレほどの銃を配備しているとは……木村には予想出来なかった。

事前に把握していた鉄砲隊は対岸の百人。だからこそ勝機があったのだ。

もはや数の優位すらなく、射程兵器を持つ相手に囲まれれば勝ち目は薄い。

いや、もっとおかしいのが、敵が既に渡河している事だ。

「ヤベエ！ 何でだよ！」

木村はパニックに陥った。

水量の多い夏のこの時期、ゲイル大橋以外から渡河するのは一仕事。無理をして一列に並んで河を渡る兵士など良い的だ。

まして渡河で濡れてしまえば帝国自慢の火薬が使えなくなる。革の袋で防水するにも限度があり、湿気つてしまえば不発が増える。

あまりにもリスクが高いので、木村は可能性を捨てていた。橋を挟んでの小競り合いに終始すると見ていたからこそ、ユマ姫を連れて来た。

この想定外の裏にはあの時同様、帝国に寝返ったエルフの植物学者、ドネルホーンの技術がある。

成長の早い竹や蔓を使った自然の橋を一晚で完成させる、木村の常識を打ち破る奇策だった。

「逃げましょう！ 早く！」

「え？ ええ？」

こうなれば逃げの一手。慌てて櫓を降りるや、部下に命じる。

「櫓を倒せ！ 防壁にするんだ！」

「はい！」

コレも初めから想定した使い方。

木村は百丁の銃を持参し、オーズドの配下に持たせている。いざと言う時は櫓を壁に立ち回れば、数の不利すら覆せる作戦であった。

……ただそれも、左右から挟まれれば効果は薄い。

「すみません、姫は馬に乗って逃げて下さい。お願いします、オーズド伯！」
「承知した」

いざと言う時は駿馬に姫を乗せて戦場を離脱する準備も整えていた。

何時だつて最悪への備えは欠かしていない。だが……

「いかんー！」

その馬が真つ先に敵の銃弾に倒れた。しかも、それで終わらない。

——ドゴオオオン！

間近で上がった轟音は、敵の野戦砲が櫓に着弾した音だった。

「あんなモノまであるのか！」

木村は齒噛みする。コチラが浮き足立った瞬間に、ゲイル大橋を堂々と渡ってきたのは木村にとっては見慣れた、この世界では初めて目にする兵器の数々。

野戦砲に迫撃砲、ガトリングライフルまである。

——ヒヒイイーン

こうなれば、もう馬は使い物にならない。棹立ちになつて暴れ回るばかり。火薬の爆音に驚かないよう訓練をするには、とても時間が足りなかつたのだ。

そして、敵はコチラを誰一人逃がす気が無いらしい。左右の鉄砲隊はじわりとコチラを包囲している。

「これ、ヤバイんじゃないですか？」

「あうあうあう」

少女二人は完全にパニック。櫓の傍で右往左往を繰り返すばかり。

「こ、こつとなつたらもう、本当にネルネに撃つて貰わないとー！」

「え？ え、え？」

今一度、ユマ姫はネルネに銃を押し付ける。

「わ、私が銃を？」

「だって、撃たないとみんな殺されちゃいますよ」

……もはや笑つていられない。誰もユマ姫を止めたりしない。

もちろん、木村だつてネルネに声を掛ける余裕も無く、濡れた藁を積み重ね、僅かでも陣地を厚くしようと手を尽くしている最中。

戦場の誰にも、少女二人に構っている余裕が無くなつていた。

死地に立たされ、少女は選択を迫られる。

「私が、う、撃たないとダメ？」

「大丈夫！ 頑張って！」

「うう！」

ネルネは銃を構えた。手はガクガクと震え、指先に力が入らない。足元はグラグラ揺れて、気を抜くと立ってられない。

全身の血が沸騰し、でも手足だけが凍ったみたいに動かない。

「ハアハアハア」

初めて味わう、殺人の予感。いや、確信。

引き金を引けば、人が死ぬ。照準の向こうには大声で叫ぶ敵兵の表情までハッキリ見えた。

それでも、少女は殺人への覚悟を決めようと、ゆっくりと引き金を引き絞る。

「だ、駄目。わたし撃てません」

が、ネルネは引き金を引けない。

何故か？

本来、引き金を引くのは刃物で斬りつけるよりもずっと心理的ハードルは低い。

なれど、ネルネの絶対に当たる確信が、どうしても決意を鈍らせる。こんな精神状態で撃てば、急所を外すことが逆に難しい。

「ええ！ 撃つて下さいよお」

そんな事を知らないユマ姫は気楽なモノだ。

「じゃ、じゃあユマ様が撃つて！」

「え、えええ……」

そうしてユマ姫が銃を構えても、致命的にセンスがない。それはもう、誰でも当たる距離でも当たらない。精々が威嚇程度、戦況は悪くなるばかり。

いよいよマズイ。抵抗の無駄を悟った木村は、ユマ姫に提案する。

「散開して逃げましょう」

「ええ？ いっそ捕虜になった方がマシじゃないですか？」

「この陣形、敵は捕虜を取る気がありません。このまま押しつぶすつもりです」

「うそお！」

ソレは、ユマ姫が聞いてきた戦争の流儀とは全く違う。貴族なら普通は捕虜にとり身代金をせびるモノ。

しかし、魔女の軍隊は真実、全員をココで殺す気でいた。

だからこそ、名乗りの途中で狙撃する挑発。だからこそ、試作段階の高火力兵器の数々。

なにしろ呪われた姫君など危ないだけだ。情報を持っていないのは魔女の洗脳で既

に割れている、抱える意味が何も無い。

「うううう」

イチかバチかの決断を迫られたユマ姫は……しかし、恐怖に竦んで決断出来ない。

少女らしい戸惑い、だが戦場で迷う事は許されないのだ。

こう言う時は、一刻一秒が致命傷になる。

——パァン！

一発の銃声、ソレがやけに耳に残って、銃弾がスローモーションみたいに、ユマ姫の頭部に命中するところまで、その時、木村は確かに見た。

「ええ？」

木村の目の前で、ドサリとユマ姫が倒れる。

突然の出来事を飲み込めず、とりとめもない思考が高速で渦巻く。

——敵が近い！ まさか、こんなにあつさりとか？ 何の罪も無い少女が死ぬのか？
知らずに陣地に入り込まれていた！ 俺が無理言つてユマ姫を連れて来なければ！

あまりにも突然！ 見張りは何をしていた！

——いや、ヤバイ、そんな事を考えている場合じゃない。そんな場合じゃない。動け

！ 敵が来てる！ 逃げろ！

しかし、突然の事態に木村だって動けない。それほどの衝撃。

「そうだ！」

錯乱した木村の思考は、ユマ姫の死体をこのままにしておけぬと、手を引いて起き上がらせる。数ある中で最も無駄な選択をしてしまう。

「ああ、ビックリしました」

「……………」

「逃げると言われても、わたしそんなの決められませんよ」

「……………」

「なんで、ベタベタ触るんですか？」

「生きている？ ユマ姫には銃痕どころか出血すら見られない。

見間違い、だったようだ。木村はそう結論付けた。そもそも、銃弾は小さい球体だ。混乱のさなか、ハッキリ見えるなんてあり得ない。

「ふう……私としたことが、ユマ姫が急に倒れるので混乱しました」

「キイムラさんが脅かすからでしょう！」

「いや、しかし……このままでは」

——ポツリ。

再び決断を迫ろうとした矢先、冷たい液体が頬を濡らした。

今度こそ血？ いや、水。

「雨です」

ユマ姫に言われて気が付いた。コレは、雨だ。しかもあつという間に勢いを増し、気が付けば強烈なスコール。

目の前が見えない程の大雨が降り始め、そして閃光。雷鳴が轟き、一気に戦場の景色が変わってしまった。

これなら、火薬はもう使えない。

「我に続けえええー」

好機とみたのか、はたまた緊張に耐えられなくなったのか、飛び出したのはルメルド伯、ここぞと重騎士が後に続く。

木村は、今まで重騎士がこんなにも頼もしく思えた事は無い。

「やったー」

あの時とは違った。ルメルド伯の虎の子、デルタ騎士団は無謀な突撃しておらず、温存されていた。

それは他ならぬユマ姫が敵の機先を削いだのと、味方のデルタ騎士団すらユマ姫の呪いを恐れて手控えたからに違いなかった。

ココに来てソレが生きた。火薬が使えなくなった鉄砲隊は、もはやただの農民に過ぎない、何人居ようが重騎士の突進を止められない。蹂躪が止まらない。

「うーん、銃剣つて馬鹿にしてたけどマジで検討しないとな」

一気に形勢が変わった戦場をぼんやりと見つめながら、木村は生産性を犠牲にしてでも、銃剣を取り付ける事を誓った。

木村は、これまで銃剣を否定していた。銃の先っぽにオマケみたいに剣をつけてどうするのかと想っていた。

稚拙な製鉄技術でペラペラの銃剣を振り回しても壊れるだけ。銃が使えない状況なら、とつとと捨てて腰の剣を抜けば良いと思っていた。

しかし、刻々と変わる戦場、強力な銃を即座に捨てるなんて、農兵に出来るハズが無かった。今も目の前で農兵達は使えない銃を手には撫で斬りにされている。

まあ、そんな先の事を考えてしまうのは木村なりの現実逃避だ、まずは目の前の事態を冷静に判断しないと。

「まあ、アレだな、こりや痛み分けた」

季節外れの雨は、運が良かっただけ。今は敵を蹂躪しているが、一転攻勢には既にコチラの被害は大き過ぎた。無理に敵陣を攻めれば無傷で温存された敵の騎士団が出てくるに違いない。

「しかし、兵器開発じゃアッチが上か……」

コレは木村にとってショックだった。まさか器用さや兵器の知識で黒峰さんに負け

ているかと悩んだが、それはあり得ない。

だとしたら、黒峰のバツクに工業製品に強い人間が居るのだ。渡河の方法も含め、自分の知識が通用しない相手。

「古代人、マジで厄介だな」

何としてでも突破口を見つけない、木村はそう思った。

セレナの思い

「はー、先週は酷い目に遭いました」

ゼスリード平原で生きるか死ぬかの戦争に巻き込まれたユマ姫は、ようやく王都に戻ってきた。

「私が居ない間、何かありましたか？」

「それが……」

シノニムが取り出したのは瓦版。見出しにはデカデカと事件のあらましが書かれている。

『帝国潰走、呪いの姫君がひと睨み』

「あの？ この呪いの姫君と言うのは？」

「ユマ姫様であらせられます」

「んうう！」

戦場に引き摺り出されたと思ったら、不気味な二つ名がより強固になってしまった。

「わたくし、こんな風聞で婚約者が見つかるでしょうか？」

「それは、大森林を開放したタナカ様と結婚なさるんでは？」

「ええっ?」

「はあ?」

コレにユマ姫以上に反応したのはネルネだった。

「絶対ダメですよあんなの! ゴミです! クソ以下です!」

「何も、ソコまでは思いませんが……」

ユマ姫にとつて祖国を奪還してくれた男だけに、悪くは言い辛い。それに、スフィー
ルまでを二人で冒険した思いもある。

「そんな! じゃあ、ユマ様はタナカと婚約するんですか?」

「あ、うーん、でも、ちよつとあの人はガサツだなどは思っていて……」

「そうですよ、あんな人あり得ません」

「タナカさまと言えば、こんなモノを預かっています」

「えと?」

シノニムさんが差し出したのは、手紙であった。

「コレは?」

「セレナ様からです」

「本当ですか!」

「タナカ様に届けてくれと」

「ええ？」

驚いたユマ姫だが、冷静に考えればセレナと田中は二人で王都を奪還したのだ。手紙のひとつぐらいあつても不思議じゃない。

「それにしてもですよ！ お姉ちゃんを差し置いてタナカさんに手紙なんて！」

「ユマ様への手紙は毎月貰っているではないですか。それで、この手紙、どうしますか？」

「読みますよ！ お姉ちゃんですから！」

姉だから手紙を読んで良いことにはならんだろうと思いつつも、シノニムは手紙を手渡した。

「ななな！」

ソレを受け取ったユマ姫は、驚きに目をまん丸にするのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「キイムラさん！」

またまた木村の商会に乗り込んだユマ姫は、机を叩いて猛抗議。

「私、呪いの姫君つての辞めたいんですけど！」

「それは何度も説明しましたが、悪評であると同時に我々の切り札として、帝国を震え上がらせる手なのですから……家族の仇を取るためと納得したではないですか」

「その家族からの評判が地に堕ちてるんですよ！」

突き付けたのがセレナの手紙だ。

ちよつとポエミーな、恋する乙女の文面だった。

——私が病に苦しみ、ぼんやりと森を眺める日々を過ごしている時でした。あなたが私の前に現れて、大牙猪ザルギルゴールを叩き斬ったのは。

——私が倒さないとして、無理をして出て行つた頭を撫でて、子供は寝てると言い放ち、魔法も使わずに切り裂いた光景が今も目に焼き付いています。

木村は唸る。

「……なるほど、しかし、セレナ様が田中に憧れるのは無理もないのでは？」

なにせ救国の英雄である。

「違いますよ！ その先ですよ！」

なになに？ 木村は続きを読んだ。

——なにより、私が嬉しかったのはあなたが私をバケモノと呼ばなかった事です。

見事に魔獣を切り裂いたあなたに対抗意識が芽生えた私は、無理を押しして強力な魔法を披露しましたね。けれど、あの時の私は、しまったと後悔していたのです。

——また、バケモノと恐れられるんじゃないかって。

——だけどあなたは、火の海になって抉れた地面を前に、何でも無いように笑って、ミ

サイルみたいだなって笑ったんです。

——ミサイルが何なのか、私には解りません。

——だけど、こんな力が当たり前の世界から、あなたが来たと言う事だけは解りました。

「ふむ、実際、こう言う兵器が存在する世界を我々は知っているのですよ」

「だから！ その先です」

「どれどれ？」

木村は文面に目を通す。

——更にあなたは言いましたね。

——『ひよつとして、お前がアイツの妹か？』と

——私は言いました。私はセレナ・ガーシエント。姉はユマ・ガーシエントですけどって。

——そしたら、あなたは言いました。

——そのひと言に、私は救われたのです。

——『アイツの妹にしちゃ、普通だな』って。

——私、あんまり感動して、何も言えなくなっちゃいました。

——そう、そうなんです。私が恐れられるのは良いんです。他の誰よりも強力な魔法

を使えるんですから。

——でも、お姉ちゃんの方がずっとバケモノなのに、無能な姉と違って凄い。そんな風に言われるのが嫌で嫌で、仕方がないって、その時初めて気が付いたんです。

「ホラ！ ココ！ ココですよ！」

ユマ姫は手紙をバンバンと叩いて主張する。

「愛しのセレナが、呪いの姫君とか言う風聞をすっかり信じているんですよ！」
「そう……なのですか？」

木村のプロパガンダも大森林までは届いていないはずだ。むしろ恐ろしいのはアレだけの魔法使いであり、ユマ姫の妹であるセレナが、ユマ姫こそが危険だと、そう認識している事。

田中からの忠告もあいまって、その事実が木村にじんわりと染み込むと、目の前の少女があまりにも不気味に思えて来た。先週見た光景も脳裏に浮かぶ。

「ちよつと！ そんな目で見ないで下さい！ ホラ、続きを読んで！」

洩々、木村は続きを読んだ。

——私が、どんな魔法を使っても、姉には傷ひとつ付けられません。

人間をバターみたいに切り裂く風の魔法も、耐火レンガを溶かす火の魔法も、辺りを燃やし尽くして空気に毒が満ちたときですら、姉さんは何でもない顔をしていました。

——なにより本当に恐ろしいのは、それが当たり前だと、凄くも何ともない事だと、そう思ってしまう事なのです。

——私は、本当を、真実を解つてくれる人をずっと探していたのかも知れません。

——また、姉さんについて話せることを楽しみにしています。タナカさまへ。

「なるほど……流石は呪いの姫君だ、恐ろしいですね」

「あなたが！ 広めた！ 噂でしょうが！ 幼気な妹が完全に鵜呑みにしています！

なんですか不死つて！ 私だつて火の魔法で普通に熱かったですからね？ あの時なんて、セレナが倒れちゃったから助けてあげたのに！」

「まあまあ」

……ユマ姫をなだめながらも木村は気になった。

辺りを燃やして空気に毒が満ちた？ 変なモノを燃やしたのだろうか？

まさか、空気から酸素がなくなつた？ それでもユマ姫は動けるのか？ まさか！

それでは本当に不死身ではないか、と。

「何にせよ、呪いの姫君つてのはもう辞めます！」

宣言したユマ姫だったが、木村は木村で、別の手紙を差し出した。

「これはっ！」

「ちようど、その田中からの手紙ですよ」

「まさか、あの二人が文通!? 何歳差だと思ってるんですか! お姉ちゃん許しません

よ」

「違います」

「え?」

「コレはユマ姫様への、あなたへの手紙です」

首を傾げながら、それでもユマ姫は封を開けた。

——やべえ、プラヴァスがキナ臭え事になってきた。

——暴力で解決出来るなら良いが、そうじゃねえ。どうにも麻薬が蔓延し、恐らく帝国が裏で糸を引いてやがる。

——正攻法じゃダメだ、とにかくポンザル家をビビらす必要がある。

——しかもだ、アイツの父親が居るかも知れねえ。

——まん丸の空飛ぶ機械と、エルフを見たつて奴が居るんだ。俺じゃ丸く収める事は出来やしねえぞ?

——アイツを呼べよ、ユマ姫を。呪いの姫君をさ。

「何ですコレ!」

「田中があなたへ助けを求めています。呪いの姫君の力が必要だと」

「そんな事より、父様が?」

「ええ、プラヴァスに居るかも知れません。そして、ハツタリでも何でも良いから相手を動かさないと事態が収まらないと」

「え？　じゃあ？」

「はい、呪いの姫君は続行でお願いします」

「そんなー」

こうして二人はプラヴァスに向かうことになる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あのー！　何にも見えないんですけど？」

魔導車の車内に押し込まれ、ユマ姫は目隠しをされていた。

だが何も、誘拐された訳では無い。

「コレで完成です」

「あの？　ホントに何にも見えませんか？」

満足げなシノニムにユマ姫は不安を訴えるが、運転席の木村がフォローを入れた。

「呪いの姫君の噂は、遠いプラヴァスではより物騒なモノになっていました」

「え？　まさか、私が見ただけで死ぬってアレですか？」

「その、まさかです。ユマ姫のハツタリを最高の状態にする為にもその姿でお願いします」

「ええ……」

そうしていいよ、ユマ姫はプラヴァスへと乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「これはこれは、遠くからお越し頂き、光栄、と言うべきかな？」

「トボけやがって、おい皆、このオツサンがバイロン、ポンザル家の当主代理だ」

プラヴァスに到着するなり、一行は問題のポンザル家へと直行させられた。

田中曰く、ボロが出る前に決めた方が良く、そう言う事だ。

「……………」

いきなりポンザル四兄弟の長男にして、当主代行であるバイロンの目の前に連れ出さ

れたユマ姫は困惑していた。

「しかし、ソレが噂のユマ姫か、なるほど不気味だな」

そして、バイロンも困惑していた。この世界でもユマ姫は黙って居れば美しく、目隠ししに加え、異国の衣装を身に纏った姿となれば、異様な雰囲気がある。

「なあ、今日はハッキリ教えてくれよ。なんで麻薬なんて扱った？ アレはやベエって言っただろう？ 帝国の言いなりになってえのか？」

「ふん、余計なお世話だ。それにアヘンは毒なだけではない。痛み止めやなど様々な効果がある」

「痛みを忘れて、取り返しをつかないことになるぞ」

「外の間人には我らの苦しみ解らぬだろうな」

……さて、この田中とバイロンの気安きはどうか？

今回は、歌姫の伝説を探る必要のなかった田中は、主にコーヒーを目的にポンザル家と密に会談を重ねていた。

だからこそ、今回はリヨン氏のブラッド家よりもポンザル家との関係が強固になっている。

と、そこでいよいよユマ姫にお鉢が回ってきた。

「おいユマ姫様よ、お得意の眼力でこのオツサンを見透かしてくれよ」

「何を言っている！」

「ユマ姫の呪いは隠し事や悪事を全て見透かす、隠そうとすれば死が近づくぜ？ 何も後ろめたい事が無ければ問題ねえだろ？」

そう言う設定だ。

だから、田中はユマ姫のハツタリでバイロンの動きを探ろうとした。目線や仕草の一つ一つに注意を払う。隠したいのは地下か、境界地か？ それとも帝国の陰謀に巻き込まれただけなのか？ とにかくユマ姫には事態を解決する何らかの力があると、田中はそう直感しているのだ。

しかし、当のユマ姫はそんな思惑をぶち壊しにしてしまふ。
きゆうくくと、可愛らしい腹の音が鳴ったのだ。

「……………」

一瞬の、静寂。その場に集まった一同に、何とも言えない空気が流れた。
少しだけ恥ずかしそうに、控え目にユマ姫が手をあげる。

「あの、わたくしお腹が減ったんですけど……」

台無しだ。せつかくの神秘性が台無し。

しかし、ユマ姫の言葉も、無理はない。長旅の末に、ロクに食事も摂れず会談の場に突撃させられたのだ。

だが、お腹が減ったなどと、あまりにも呪いの姫君らしからぬ物言い。化けの皮が剥がれたと、コレはただの子供だと、バイロンはニンマリ笑った。

「これはこれは、客人を空腹にさせるなどポンザル家の恥、もちろん食卓を共にして頂けるのでしょうか？」

バイロンは呪いの姫君の化けの皮を剥がす気でいた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「是非、自慢のごちそうを、と言いたい所ですが、普段の我々の食事こそが最もプラヴァスらしさを感じて頂けるでしょうな」

食堂に移動した一同にバイロンが供したのはプラヴァスではありふれた芋。

「フォツガか、俺もコイツは気に入ってる。ホクホクしてウメエんだ。それにしてもコレが普通の食事とは御大臣だな。フォツガは高いモンじゃねえが、近年の不作でこんなデケえフォツガは最近見てねえぞ」

「フツ、少々見栄を張りましたかな」

なるほど、美味しそうなお芋であった、チーズをふんだんに使ったソースが掛けられていて、匂いだけで食欲をそそる。大皿の大きなフォツガを女中さんが目の前で切り分け、配っていく。

目の前のフォツガに木村は興味津々、コレは芋でなく茸では？ と正解に気付いたし、シノニムはどう食べるのがマナーに沿うかと悩んでいた。

そして、当のユマ姫は？

「あの、コレ取っても良いです？」

まだ目隠しをさせられ困惑していた。

もう、台無しの台無しである。すっかり諦めた一同は、ユマ姫の目隠しを取る事に。

「どござ……」

「はー良かった」

シノニムさんに目隠しを取って貰ったユマ姫は嬉々として皿を見て……固まった！

「なっ！ なー！」

珍しい位に顔を蒼くして、狼狽えるではないか。

「どうしました？」

心配そうに尋ねた木村に、バンバンと机を叩き、歯を食いしばって訴えた。

「コレ！ 毒ですよ！」

場が、凍った。またぞろ、ユマ姫が失礼な事を言い始めたからだ。

「オイオイ、こりやプラヴァスではありふれた芋だぜ？」

「大皿から取り分けたのですから……」

「味が心配なら我々が先に食べますよ？」

仲間からもこの扱い、ユマ姫は面白くない。

「え、疑ってる？ どう見ても毒じゃないですか！ コレ、死苔茸チリアムですよ？」

「死苔茸……」

木村も聞いたことぐらいいはある、死苔茸チリアムは最強の毒の一つ、解毒薬もなく一度飲むと

絶対に助からない。

「ま、ありふれた毒ですけど、対処が遅れると下手すれば死んじやいますからね」

ただし、大森林の魔力が濃い場所で取れるキノコなので、エルフにとつては馴染みの毒キノコであった。

しかし、同じキノコでも魔力が薄いプラヴァスで育ったモノは毒がないのだ。ここでは芋として扱われて、常食されている。だからこそバイロンは心外だとばかり鼻を鳴らす。

「ふん、とんだ言いがかりですな。我々のフォツガが毒ですと?」

「誰がどう見ても、毒ですよ!」

爛々と目を輝かせ、ユマ姫はフォツガが載った皿を突き返す。食べれるモノなら食べて見ろと言うのだ。

自信満々な姫の態度にあてられて、バイロンはユマ姫の瞳を見てしまう。

オツドアイ。ココでのユマ姫も左右の瞳は色が異なり、見る者を圧倒する。毒を盛られたと確信し、揺るぎない。子供であるが故に、嘘も欺瞞もまるでない。

これが呪いの姫君の目かと、バイロンは心の内で唸った。確かに嘘をつくところしい気がしてくる。

「これは参った、いや、確かにその芋は毒だ」

素直に認めた。バイロンにしてみれば、ちよつとしたイタズラだ。呪いが話半分でも命を賭ける気にはならなかった。

大森林の死苔茸チリアムと違って魔力の薄いプラヴァスではフォツガと呼ばれ常食されている。

ただし、魔力が濃い地下遺跡でとれる一部のフォツガには毒が含まれていた。そうは言っても急に毒性が強まる訳じゃない、魔力がほどほどなら、腹を下す程度の毒で済む。無敵と恐れられる呪いの姫君が、腹を下してのたうち回る様を笑ってやろうと言う魂胆だったのだ。

「ワシは多少は慣れてるからな、この程度なら腹も下さん」

「ちつ、トンだ歓迎だな」

悪態をつきながら、田中は口に含んだフォツガを吐き出した。

こうなると途端に元気になるのがユマ姫だ。

「ほらあー！ やっぱり毒じゃないですか！ 皆さんこんな当たり前な毒キノコも知らないんですかあ？」

「……………」

ウザいことこの上ない、どや顔で周りを責め始める。

「はー、皆に酷いこと言われて、わたし、喉が渴いちゃいましたよ。飲み物ないんですか？」

「どうぞ……………」

渋々、シノニムが水差しを手渡した。ユマ姫はひったくる様に奪うと、ゴクゴクと水を飲む。美味しそうに飲み干して、ホッと一息。

そのユマ姫が、カッツと目を見開いて、叫んだ。

「この水も、毒じゃないですか！」

場が、凍った。またぞろ、ユマ姫が失礼な事を言い始めたからだ。

しかし、二度目となれば、もう、笑う者は居なかつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「と、言う事は遅効性の毒が含まれていると?」

「そうです、金属が少しずつ体に溜まるんですよ」

ユマ姫は、王族である。

当たり前だが、忘れそうになる事実。だからこそ一通りの毒に知識がある。それもあの時と違って、舌を傷ついたり、刺激が強いモノを好んで食べたりもしていない。

人一倍、味覚は敏感であつた。

「この手の毒は、僅かな味の違いで判断するんです。口当たりが凄く重いのに、ぬるりとして奇妙な滑らかさを感じるのは良くないんです」

「よく、解りませんね」

僅かなら害は無いと聞いて飲んでみるが、シノニムには違いが解らない。もちろん、木村もだ。

ただし、木村には知識があつた。重金属中毒だ。ユマ姫の発言もソレを思い出させる

に十分。

「遺跡で金属を発掘すると、周囲の水が汚染されることがあるんです。少しなら毒ではないのですが、ずっと飲んだると酷い事になりますよ」

「症状を聞いても良いか？」

乗り出して尋ねる。バイロンには心当たりがあつた、あり過ぎた。

「一番は関節痛。強烈で、それこそ麻薬でないと抑えられないほど。耐えられず発狂し、のたうち回る事になるって聞きました」

「ぐう……」

まさに、ソレこそがポンザル家の当主であるバイロンの父親を苦しませている病。もちろん当主だけではなく、ポンザル家の者全てが少なからず訴える不調の原因だったからだ。

ポイザンは洗いざらいを白状した。

それと木村の予想を組み合わせると、出来上がった物語は、こうだ。

「まずは帝国の人間が、ポンザル家の地下から現れた、遺跡を通じて。遺跡の上に居を構えるポンザル家すら知らないルートで帝国との交易を持ちかけた」

「そうだ」

「遺跡を通つて驚いたと、希少な金属が山とあると、発掘してくれないかとポンザル家に

依頼した」

「そうだな」

「ソレが罠だ。もちろん金属だつて欲しかったろうが本当の狙いは重金属中毒を引き起こす事」

それによつて、重金属中毒が蔓延し。麻薬が売れる。麻薬ナシで生きられなくなる。

その後は坂道を転げ落ちるようなモノ。

「金が無くなると、今度は奴らは水のように持ちかけて来た」

「水を？」

プラヴァスで水は貴重だが、流石に高値で売れる程では無い。プラヴァスの近くには聖域と呼ばれる豊かな湧き水があるからだ。

「ソレを止めると言うのだアイツらは」

「なに？ そんな事が出来ンのか？」

「出来るんだろうな、奴らは遺跡を知り尽くしている」

つまり、水を止めるから地下水を独占的に売れと。

「そんな事をすれば暴動になると止めたさ、ワシもな」

「なら武器も売ると、そう来た訳か」

「悪魔だな」

まずは貴重な金属を買い叩く。もちろん金属中毒の危険は教えない。

すると重金属中毒になり、痛み止めに麻薬を売りつける。

ポンザル家に金が無くなると、次はプラヴァスの水を止め、傀儡となったポンザル家に水を売らせる。自らは姿を見せず、ポンザル家を矢面にプラヴァス中の金を吸い上げる。逆らう者はこれで殺せと、銃を渡す。

銃は火薬が無くては使えず、帝国には逆らえない。麻薬だつてある、逆らえるはずがない。

そして重金属中毒が広がれば、さらに麻薬が売れる。

自らは一滴の血も流さず、骨の髄までプラヴァスから生き血を吸うための策。どこまでも卑劣で、帝国にはどこで止めても一切の損がない。

全ての真相を明らかにすれば、バイロンの腹は決まった。

「これから、奴らが来ることになっている。会って貰えるか？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「全く、崇つてくれるわね！」

魔女クロミーネとソルンが球体ドローンに乗って逃げていく。

不意打ちは決まった。しかし、決めきれなかった。

「シユウウウ」

「うおおおお！」

この男が居たからだ。エリプス王、ユマ姫の父親を捨て駒にして魔女は逃げた。

最強の剣士同士の戦いは、だれもその剣閃を目で追えない。常人には立ち入れない。

「父様！」

いや、居た。ユマ姫だけは剣戟の嵐の中に躊躇無くツッコんだ。

誰も立ち入れないハズの嵐のただ中、全ての剣戟がユマ姫をすり抜けた。

たまたま当たらなかったのか、当たったのに当たらなかったのか？

木村には判別がつかない。

「父様、どうして」

とにかく、ユマ姫はエリプス王の下まで辿り着いて、縋りついた。動きを止めたエリプス王をすかさず田中が峰打ちすれば、エリプス王の意識を奪うことに成功する。

しかし、倒れ伏したエリプス王は目を覚まさない。症状を見て、木村は宣言する。

「遺跡に、連れていきます！」

エリプス王は魔力欠乏に掛かっていた。急いでプラヴァスを離れる必要がある。それも、魔力が濃くて医療設備がある場所となれば、セレナが住む遺跡しかない。

……普通なら、プラヴァスを隔てるゴツデム砂漠を気絶した患者を抱えて踏破するなど不可能。ただし、今回の一行は貴重な魔導車を貸し切つて来ている。気絶した病人を

一人ぐらいなら運べる。

「行つてきますー！」

そうして、木村が運転し、看病にシノニムがついて、魔導車は旅立った。

ユマ姫は置いてきぼりである。

「うー何で？ 私の父様ですよ？」

「いや、主役のお前がいねえと場が収まらねーよ」

ユマ姫は納得行かないが、プラヴァスを鎮める為にも、王族であるユマ姫の看板は必要だった。それに看病となればユマ姫は力にならない。仕方のない人選だ。

「ワシからも礼を言う、何と言つて良いか。これでブラッド家とも争わずに済む」

横柄なバイロンが神妙に頭を下げた。しかし、ソコに駆け込んだ男が慌てて耳打ちするのだ。

「なに？ ボイザンの奴が？」

突然の凶報。

四男のボイザンが、ブラッド家の姪っ子、カラミティを攫つたと言う報せだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

四男のボイザンは既にアヘンに冒され、正常な判断力を失っていた。

三男のガーラッシュは帝国と通じていて、水が毒であると知っていた。

結局、この世界でも二つの生首を土産に、バイロンとドネイルはブラッド家に詫びを入れる。

「この通りだ、済まなかった」

「いえ、良いのですよ。結局、カラミティの奴も何もなかったのですから」

リオンは鷹揚に頷き、二人を許した。あの時と違い発見が早く、今回のカラミティには何もなかったからだ。

「むしろ、詫びを入れるならユマ姫様にでしょうね。この度、我らは異国の姫君になんと世話になった事か」

「うむ、そうだな」

リオンとバイロンは頷いて、提案する。

「よろしければ、ウチのカラミティを連れて行ってはくれませんか？」

「何にも無かったとは言え、大通りで攫われたとあっちゃ、影で色々言われちゃうからな。責任もってポンザル家がたっぷり持参金を持たせる。異国で貴族として扱ってはくれないか？」

「えええ？」

かくして今回もカラミティちゃんは王国に送られる事になるのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして、田中のバイクの前後に乗って、カラミティちゃんとユマ姫はプラヴァスを後にする。

完全に定員オーバーだが、小柄な少女二人だからこそ何とかかなりそうだ。スロットルを吹かして発進する直前、田中はプラヴァスを振り返る。

「ソレにしても、結局プラヴァスは救えなかったな」

「ええっ？」

ユマ姫としてみれば、完全に全てを解決したつもりで居たのだ。

「いや、事件は解決したさ。ただ、本当にヤベエのはここんとこの日照りでな、このままじゃ全員干上がっちゃう」

「なんだ、そんな事ですか」

事件はともかく、お天気までは解決なんて出来っこない。心配するだけ損である。

「ワカンネーかも知んねえが、砂漠の水は命そのものだけ」

「ふふっ、だいじょーぶですよ、エルフに伝わるおまじないを伝授しましたから」

おまじない。女の子が好きな奴かと田中は肩を竦める。

「雨乞いのまじないか……ないよりマシかね？」

「効くんですよ、丁度、死苔茸チリアムがあつたから良かったです」

「毒キノコを何に使うんだ？」

少し興味が湧いた田中に聞かれ、ユマ姫はムスツクれて答えた。

「毒キノコの死苔茸チリアムを太陽に捧げるんです、すると太陽が死んで、雨が降る。そんな言い伝えがあるんですよ、でも……」

「なんだよ？」

「あの人達、どうせなら呪いの姫君が太陽を呪い殺してくれって言うんですよ？　太陽を見たせいで、わたし目が痛くなっちゃいました」

「ハッ、そりゃ良いや！　ただし、本当に太陽を殺すのは止せよ？」

「殺せませんよ！　馬鹿にして」

ゲラゲラ笑う田中を無視し、ユマ姫はさつきから黙ってるカラミティに声を掛ける。

「あの、カラミティさん？」

「な、なんです？」

明らかに元気がなく、口数も少ない。突然事件に巻き込まれ、望まぬ出国を余儀なくされたのだから無理はなかった。

何か話題はないかと考えると、頭に浮かんだのはプラヴァスで見たあの美青年。

「あの、リヨンさんについて何ですけど、あの人、結婚してますか？」

「リヨン叔父様ですか？　とくに婚約者も居ませんか？」

ユマ姫は唸った。しなやかな黒豹を思わせる美青年のリヨンは、見とれるほどに格好

良かったからだ。

「うう！　なんでタナカさん！　パイロンなんてオジサンじゃなくてリヨンさんと仲良くしてくれなかったんですか!!」

「いや、知らんがな！」

姦しく騒ぐユマ姫に、田中はすっかり参ってしまった。

殺意が少女に芽吹くとき

陣内は人いきれでむせかえるようだった。

カチャカチャと響く鎧の擦過音、馬の嘶き、転がる荷車、駆け出す兵士、足元で跳ねる泥、獣染みた叫び声。

無数の音が幾重にも重なる。

雑然とした中に、確かに漂う緊張感。

——戦争が近い。

誰もが激しい戦を予感いひかしていた。

そんなピリつく男達のド真ん中、一際派手な馬車が乗り付けた。

皆の視線が集まる中、ガチャリとドアが倒れてタラップに変じる。

居合わせた兵にとつては見たこともない最新の馬車。どんなお貴族様かと見守る中、その少女が姿を現した瞬間、戦場とは異なる種類の緊張感が覆い尽くした。

「ユマ姫だー」

誰かが叫んだ。噂の美姫が開戦直前の陣中へ突然の来訪。快哉に沸くのが必然。しかし、声が出せたのはホンの僅かだった。

多くの兵士は言葉無く、ただ固唾を飲む。

「呪いの……姫君」

目隠しをされ、口には猿ぐつわ、リボンが幾重にもあしらわれた衣装は華麗に見えるが、その実、グルグル巻きに体を固定されて、自由に手も伸ばせない。

これではまるで、拘束具だ。

たった一人の少女にここまでするか、ここまで嚴重に封印せねば、呪いが味方にまで牙を剥くのか。呪いの強さを理解するに十分な光景。

「こんな、バケモノを……」

戦争に使うのか？ 呻いた兵士のひと言にユマ姫が反応する。目隠しに、猿ぐつわ、表情が見通せない顔を兵士に向けた。

「ひつ、ひいー」

ソレだけで兵士は腰が抜けてしまう。ソレを見たユマ姫は……いや見えているか居ないかは判然としないが、とにかく興味を無くしたように歩きだした。

「あつ、う」

ユマ姫が足を踏み出せば、遠巻きに見ていた兵士達が同じだけ後ずさる。だれも呪いの姫君に近づけない。

呪いの姫君に付き従うのは、同じくエルフの少女がたった一人。目を伏せ、呪いの姫

の手を取り、ただ静々と進んでいく。

誰も二人に立ち入れない、凍り付いた空気の中で、兵士達は少女達の姿を見送った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何ですかあ！ 完全にバケモノ扱いじゃないですか！」

「文句を言いたいのはコッチですよ！ また私まで戦場に連れ出して！」

不可侵なる呪いの姫君と付き従うエルフの侍女。一步陣幕の中に引き籠もれば、正体はコレだ。

少女二人はかしま姦しい。

ココは作戦司令部と化した王国軍が徴収した小屋の中。連れて来られたのはユマ姫と、そしてネルネ。

そう、またネルネはユマ姫と戦場に駆り出された。

シノニムはプラヴァスの件以来、セレナとエリプス王の居る遺跡に派遣される事が増えている。木村も開戦を前に武器の輸送に忙しい。

「だって、私ひとりじゃ寂しいじゃないですかあ……」

「巻き込まないでくださいよお、もう戦争なんてこりごりですから」

ユマ姫とネルネは昨年の戦争で敵に囲まれ、一步間違えば死ぬ所だった。

それだけに、絶対に戦場には行かないぞと頑張ったのだが……

「申し訳ありません、ただ、敵将は百戦錬磨のテムザン將軍、敵軍は意気軒昂で侮りがたし、戦意を挫く手段がなんとしても欲しいのです」

待ったを掛けたのが他ならぬオーズド伯だ。ユマ姫を危険視してたあの時とは真逆。ユマ姫の呪いの噂が広がるのを聞いて、使わない手は無いと閃いた。

恨めしげに睨みつけるユマ姫に苦笑しながら、作戦を伝える。

「何も戦場に立てと言うワケではございませんので」

「当たり前ですよッ！」

「ただ、宣戦の使者にひと言挨拶をして頂きたい、それだけですから。エルフと我らの同盟を誇示し、エルフの代表として侵略戦争を仕掛けた帝国の蛮行を追及する者が必要でしょう」

「むう、確かに……」

もちろん、嘘だ。

オーズドの狙いは、ユマ姫の呪い。その風聞だ。

昨年の戦争以来、ユマ姫の呪いは想像以上に帝国で話題になったらしい。信心深い農兵たちはユマ姫が戦場に出ると言うだけで腰が引け徴兵に支障が出たと言うからよっぽどである。そして銃が中心の軍隊となれば、むしろ騎士よりも主役となるのがその農兵達なのだ。

彼らが震え、錯乱すれば、銃と火薬の少なさを十分に補える。

キムラ商会に依頼した呪いの姫君の衣装も驚いた、コレなら呪いの姫君の説得力も抜群、流石は演出家としても知られたキムラ子爵とオーズドは唸った。

だが、ユマ姫としてはその衣装が頂けない。

「あの、この衣装なにも見えないし、口は痛いし、なにより可愛くないんですけど……」
「宣戦の使者に手出しは厳禁、それは知ってますね？」

「もちろんですよ」

「それは、刃物を突き付け驚かす事も含めてです。ですが、ただの少女に勝手に驚くならどうでしょう？ コチラは何も悪くない」

「うー」

ユマ姫にも話が見えた。先ほどの腰が抜けた兵士の姿を思い出したのだ。

勇ましく宣戦布告をしに来た使者が、震え上がって逃げ出せば相手の戦意が削がれるに違いない。

「じゃあ、ちよつと脅かすだけですからね」

「ご厚情痛み入ります」

オーズド伯はユマ姫相手でも腰が低い。いや、総司令官で四十を過ぎた自分が異種族の小姑娘に必要以上にへりくだった態度を見せる事こそが、何より効果があると理解して

いるのだ。

ソレを見たユマ姫は、もちろん良い気になって調子に乗った。

「私にはちゃんと三食、温かくて美味しいモノを用意してくださいね。レーションなんて食べませんからね」

「それは、もちろん」

オーズド伯は金で解決する問題なら、どこまでも妥協するつもりである。

「ふむふむ、良いでしょう。しかし、蒸し暑いですね。ちよつと外を回ってきて良いですか？」

ユマ姫が言う通り、この季節は蒸し暑い。仰々しい衣装を着ているのだから尚更だ。有る意味でコレは当然の欲求。

でも、コレは即座に却下された。

「いえ、外に出るのは控えて頂きたく。どうしても言うならソレを付けて頂かなくては」

オーズドが指差したのは、異常に動きにくい木村が作った目隠しと口枷、それに体を縛るリボン。こんなモノを付けたら暑いだけだ。

「えくやだあー」

「まあ、そう言わずに……」

宣戦の使者が来るまでの数日、オーズド伯はユマ姫をなだめるのに難儀するのであった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「お初にお目に掛かる。私は帝国軍、竜騎兵部隊の隊長、騎士ミニエールだ」

それから四日後、オーズド伯待望の宣戦の使者がやって来た。

しかしソレは、オーズド伯が思い描いた姿とは大きく違っていた。当然に帝国を代表する音に聞こえた『もののふ』が来ると信じて疑って居なかつた。

「まさか、使者がこんな美しいお嬢さんだと思わず、こんな殺風景な陣で申し訳無い」
「いえ、私など」

ミニエールは美しい騎士だった。通った鼻筋に薄い唇。意志が強そうな瞳は澄んでいて、なにより長い金髪がキラキラと華やいでいる。

これでは驚かせる策が裏目だ、彼女が泣きながら陣に帰れば、敵軍に戦意が漲るに違いない。完全にしてやられた格好だ。

そのミニエールが司令部である小屋の片隅をチラリと見て、ぶるりと震えた。

ユマ姫だ。目隠しに、口枷までされた少女の姿。毅然とした態度を心がけていたミニエールにして、腰が抜けないようにするのがやつと。

おどろおどろしいユマ姫の噂は数あるが、実物は輪を掛けて悍ましく思われた。

なにせ、ここ数日のユマ姫は暑い中をロクに外出も許されず、ようやく外出できたと
思ったら拘束具姿で、兵士に挨拶をすれば悲鳴をあげて逃げ惑うのだから堪らない。

じくじくと恨みつらみを抱え、いつそ本当に呪ってやろうかと不機嫌そのもの。部屋
の隅には真つ黒なオーラが渦巻いている。

ソレを見て、「すぐ引つ込めますんで」と言いそうになったオーズドは、必死に言葉を
飲み込んだ。

「あ、とりあえず彼女の事は後で……」

「は、はい」

そうして宣戦の儀が始まった。

「どうやら我々は戦で決着をつけるしかなさそうだ」

「残念です」

そして、終わった。

まあ、こんなモノは儀式に過ぎず、これで戦争を止めるなどあり得ない。つつがなく
終わってくればソレで良い。

脅かすまでもなく、こちらにはユマ姫が居るぞと見せただけで十分と言える。

オーズドはホツと息を吐く。

ただ、部屋の隅ではすっかり諦めの境地。いじけてしまったユマ姫が儀式の終了を

待っていた。

「あの、彼女は？」

「あ、ああ。紹介していなかったな。彼女こそが詔書しやうしよにもあつた森サに棲バむ者、いやエルフの姫君、ユマ姫だ」

「やはり、そうか。どうか、彼女と少し話が出来ますでしょうか？」

「……どうぞ」

やはり女性ながら宣戦の使者、流石に肝が据わっている、ミニエールの方から話したいと言うならオーズドに止める道理はない。

「ユマ・ガーシエント姫！ コチラへ」

「……」

オーズドに呼ばれたユマ姫がしずしずと部屋の中央へ進み出る。

しかし、髪はボサボサ、足元はおぼつかない、更には目隠しに猿ぐつわの異様な姿。待ちくたびれただけなのだが、それが呪いの姫君らしいうらぶれた雰囲気を演出していた。

その口枷を、侍女のエルフがゆつくりと外していく。

「なんででしょう？」

可愛らしい、声だった。

「コチラがミニエール殿、帝国からの使者である。彼女が貴女との対話を望んでいる。しかし、あくまで今回貴女は我らの客将として参じて頂いている。あまり過分な事を言わぬよう注意して頂きたい」

「承知しました」

それだけ言つて、まだ目隠しは外さない。

本当の所は純真無垢な瞳を見せない為なのだが、ミニエールには不気味に映つた。

とはいえ、まずは挨拶。これでも相手はお姫様である。

「ご紹介にあずかりました。ミニエールです」

「……どうも」

何とも淡白。ユマ姫の声はどこまでも平坦で、感情が見えない。

実際に、何も考えていないし、何もかも面倒になつて居るのだが、ミニエールにしてみれば恐ろしい。

帝国軍の使者、ユマ姫にとっては仇であるハズ、それを前にして感情の起伏が見られないとは。これほど不気味な事は無い。

ミニエールは緊張しながらも言葉を紡ぐ。

「我が大将、テムザン將軍がユマ姫に会えたなら、言伝と。」

まず、大森林への侵攻があつた様な惨事になつたのは、本意では無いと」

「そうですか」

明らかな挑発。

なのに、気のない言葉。まるで他人事。それがミニエールには不気味であった。

「そして、あの様な悲劇を繰り返さないためにも早期の降伏を望むと」

「……………」

それでもユマ姫は無反応。下らないと鼻を鳴らした。

「それだけですか？」

「え、ええ」

「はあ…………じゃあネルネ、コレ外して下さい」

「は、はい！」

流石に顔も見えないと、仇だろが何だろが反応に困る。ユマ姫にしてみればタダ

それだけだった。

いよいよ、ユマ姫の目隠しが外される。

——かわいい。

それがミニエールの第一印象だった。その目は純粹で邪気が無い。子供が好きなミニエールは、親戚の子供の面倒を見ることが多かった。だから解る、これは紛れも無い子供の目。ユマ姫は十四と聞くが、もっと幼く感じる程だ。

その純真さは、呪いの姫君などタダの噂だと断じるに十分だった。

落ち着き無く視線は漂い、オーズド伯を見つけると、いじけた瞳で睨んで、口を尖らせる。拗ねているのだ。その仕草がいちいち良い子で、可愛くて、思わず笑みが漏れる。

そのクリクリとした瞳が巡り、ミニエールを捉えたときだ。

忙しなく動いていた瞳がピタリと止まった。まん丸に見開かれ、スツと感情が消えたのだ。

「ツ!？」

ミニエールは悲鳴を飲み込むのでやっと。目の前で、幼気な少女が呪いの姫君に変わってしまった。

——突然に。

「それだけ、ですか？　ほんとうに？」

「え、ええ……」

最後だったハズ。ミニエールがそう思いながらメモを確認すると、小さな文字で追記があった。

ミニエールはこの時まで忘れていた。

テムザンが最後、思い出した様に付け加えたひと言を。

「ああ、そうだ。最後に一つ。テムザン将軍が言っていました

ユマ姫殿、貴女の髪を結える日を待ち望んでいると……」

好々爺こうこうやが孫に語りかける様なメツセージ。何気ない言葉。

だと言うのに、ユマ姫の反応は強烈だった。

まんまるの瞳に涙が溜まり、嗚咽が漏れそうな唇を必死に噛み締めて耐えている。

「ツ!？」

呆氣にとられたミニエールは、突然立ち上がったユマ姫に、反応が遅れた。

ユマ姫は両手でミニエールに掴み掛かる。

「どおしてえええ、なんで、そんな事するのおおおー！」

ユマ姫は、泣いていた。

ボロボロと涙を流し、継るようにミニエールに抱きつくと、そのまま押し倒す。

「痛っ！ なに?」

「うううう!」

でも、それだけ。ユマ姫はミニエールにのし掛かった体勢、俗に言うマウントポジション。それでも殴ることも出来ず、ただ泣くだけだったのだ。

このユマ姫は暴力なんて、まるで無縁だったから。

「あの、私がおかしただろうか?」

突然のユマ姫の反応に、ミニエールは困惑していた。こんな少女を悲しませるなんて何事かと思ったのだ。

「だってえ！ どうしてえ……ひどいよおおお！ ひどいよおおお！」

それに対して、ユマ姫はただ泣くだけ。何を言ってるかも要領を得ない。感情のままに押し倒し縋りつき、しまいにはミニエールのカツラを奪ってしまう。

「ああつ！ もう！ ユマ様つたら！」

ココに来て、我に返ったのがネルネだった。お客様のカツラを取るなんていたずらにしてもやり過ぎだ。

「何やってるんですかユマ様！ 突然暴れないで下さい！」

強引にユマ姫を引っ剥がす。

「何があつたんですか？ 暑いなら私が扇ぎますから——えっ？」

ネルネは、焦った。

ユマ姫が泣いていたからだ。

いや、ユマ姫はよく泣く。ピーピーと騒がしい程。だけど、今回は違う。本気で悲しくて泣いていた。

いつもお気楽で、憎たらしい位にマイペースなユマ姫が、泣いていた。

「だって、だってえ」

「どうしたんですか？ どこか痛いんです？」

「母様が、母様が……」

「お母様がどうしたんです？ ミニエールさんに似てたとか？」

それとも、考えたくないがミニエールさんが母親の仇なのだろうか？

悲しい想像に唇を噛んだネルネの前で、ユマ姫は大切に抱きしめたカツラをネルネに差し出す。

「これが……母様」

「えっ？」

キラキラの金髪、綺麗なカツラを渡されて、ネルネは呆然とするしかなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

傷心のユマ姫はスフィールに帰還した。その道中、ずっと母親の髪の毛で作られたカツラを大切に抱えたまま。

スフィールの城内、人払いした一面に二人は引き籠もった。静まり返った城内に響く、正気を失った少女の怒り。

「殺してやる！ ぶっ殺してやりますよ！ 私があ！ 絶対に！ 殺してやります！」

ネルネだった。ガンガンと地団駄を踏み、暴れ回る。

一方のユマ姫は、困惑していた。自分以上にキレ散らかしているネルネを目にして、

ちよつと冷静になつてしまつていた。

「あの、もう良いですから……母様の形見が手に入ったんですもん」

「良くありません！ 悔しくないんですかあ！ ソレでも姫ですか！」

「姫は関係ないでしょう、いや悔しいですけど」

そうまで怒られたら、私の分の怒る分がないではないかと、ユマ姫は別の意味でいじけはじめていた。

「あのーお見舞いに来ましたよつと」

そこに現れたのが木村だった。

「キムラさん！ 良いところに！ さあ！ 貸して下さい火縄銃を」

「え？ はい……」

ネルネのあまりの剣幕、当惑しながらも、木村はたまたま持つていた火縄銃を手渡した。コレは錆潰すつもりでいた旧型である。

一方ユマ姫は、突然やつて来た木村に少し嫌な予感がした。

「あの、何をしに……」

「一応、聞いておこうと思ひまして」

「それは……」

「もう一度、戦場に立つ気持ちはありますか？」

「うっ……」

正直恐い。テムザンの強烈な悪意にあてられて、ユマ姫は人間が恐くなっていた。

しかし……

「殺ります、殺つてやりますよ！ ユマ様はココでゆつくりして下さい。私が、私がつ
！」

しかし、ネルネは止まりそうにない。ユマ姫はふうつと息を吐く。

「もう！ ネルネが居なかつたら私の侍女が居なくなつちやうじやないですか」

「ぐっ、そんなの……」

「それに、私だつてテムザン將軍をやつつけるトコをこの目で見ないとスッキリしませ
んもん、ネルネが行くなら私も行きますよ」

「ユマ様あー！」

少女達は泣きながら抱き合つた。

木村はそんな二人の友情を利用するみたいで、死んだら地獄行きだなと少しだけ自己
嫌悪するハメになったのだった。

あらゆる因果律を越え、そして少女に殺意が宿る。

そこにだけ、唯一の奇蹟があつたから。

塔の上の戦い

「正直、戦況は良くありません」

翌日、戦場へと向かう車内にて、木村は二人に包み隠さず打ち明けた。

「それは、私が逃げ帰ったからですよね？」

「そうですね、使者に言い負かされて泣いて帰ったと、よほど失礼な事を言われたんだろうと噂になってます」

言葉なら良かったと、ユマ姫はカツラを抱きしめる。ソレを見たネルネは音が出るほどに奥歯を噛み締めた。

「じゃあ、私がテムザンって奴を殺せば良いんですね？ 殺しますっ！」

「ネルネ、それは……」

流石に無茶とユマ姫はなだめるが、あろう事か木村は頷いた。

「確かにそうです」

「キイムラさん！」

「ですが、そのテムザンが居るところが問題なんですよ……ほら、見えてきました」

魔導車の車窓から見え始めたのは、高い櫓だ。いや、もはや塔と言うべきか？

「な、何ですかアレ？」

「この前まであんなの無かったじゃないですかあ！」

あんなのが建つていけば、平原の入り口からでも丸見えだ。あの塔はここ数日で建つた事になる。

「恐らくは、ユニット工法」

木村が呟く。帝国はパーツを組み立てるように僅か数日で塔を作ったのだ。

「なに、あのド派手なの！ あの上階にテムザンが？」

「間違いありません、奴はあそこに居る」

そう、塔はあまりにも派手だった。きつと去年に木村が立てた櫓の意趣返し。

「呪いの力、殺せるモノなら殺してみると、ド派手な塔、どこからでも見える最上階に居座って、そう言っているのです」

「くやしー！」

塔には塔を。呪いの姫君の噂を完全に逆手に取っている。

呪いを恐れ、人目を憚る兵士が多い中、誰よりもユマ姫の恨みを買った総大将が目立つ塔の上にデンと構えているのだ、呪いなど存在しない証明に、これ以上のモノはない。でも、どうやってあんな所を攻撃するんですか？」

ユマ姫の疑問はもつとも、塔は30メートル以上。遙か遠く、隔てるフィーナス川を

挟んで敵陣のど真ん中。フィーンナス川ギリギリまで近づいたとしても600メートルは距離がある。

これでは絶対に届かない。

……コレも、木村の失敗と言えば失敗。

前回の戦場、木村はライフルで狙える距離の将校を次々撃ち抜いた。それはあまりに見事だった、見事過ぎた。

——だから見切られたのだ。

木村の作ったライフルの有効射程が、約300メートル前後だと。

その倍の距離、加えて高所で陣取れば、弾は絶対に届かない。そう計算されたのだ。

「あんま舐めてくれるなよ、ブチ切れてるのはコッチも同じだ」

木村は、秘かに怒っていた。こんな舐めた真似をされて、怒っていないハズはなかった。これは明確に木村に対しての挑戦なのだから。

改良した長大なスナイパーライフル、収めた物々しいケースを撫でて、極彩色の塔を睨む瞳は決意に燃えていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「こんなモノどうやって?」

ユマ姫が驚くのも無理はない。

こちら側、王国軍にも塔が建つたのだ、それも、一晩どころではない、一瞬で、だ。「寝かしておいた塔を立てただけですよ」

「そんなことが？」

なんでも無いように木村は言うが、出来るハズが無い。なにせ普通なら強度が足りない。強度を求めると、百人掛かりでも立ち上がらない重さになる。

しかし鉄よりも軽く丈夫な素材。たとえばそう、蜘蛛の魔獣の足を組み上げた塔ならば、どうだろうか？

そのまさか、即席の魔獣の骨塔が、フィーナス川の川岸にそびえ立つ。

「な、何て不気味な！」

見上げるユマ姫は思わず腰が引けてしまった。

「登りますよ」

「はいいいい」

「殺すツ殺すツ」

三人でハシゴを登る、それがユマ姫には恐ろしい。高さがあるのに軽い塔はとにかく揺れるのだ。

「た、高い！」

そうして辿り着いた骨塔の頂上、極狭いスペースに三人が陣取った。

「それでも、向こうよりは低いですね」

ネルネの言う通り、アチラは30mでコチラは20m程度しかない。

「塔はこれで精一杯、後は腕の見せ所と言う事です」

「殺りますよ、絶対に、殺します！」

木村はライフルを取り出し、ネルネは旧式の火縄銃に火薬を込めた。木村はゾーンに入っていた極限の集中状態で塔を睥む。だからネルネの方を見ていない。

見ていたら、きつと止めた、あまりにも多くの火薬を込めていたからだ。

実のところ、木村はネルネの腕をちよつと筋が良い程度に見積もっている。だから、無茶はするまいと思っていた。

だが、ソレは間違いだ。ネルネは限界まで火薬を入れた、これ以上入れたら火縄銃が壊れる本当のギリギリまで。

決められた量の火薬が詰まった銃弾と違い、前装式の火縄銃は、やろうと思えば幾らでも火薬を入れられる。もちろんやり過ぎれば銃身が弾け大怪我をするのだが、ネルネは全く厭わなかった。

そんな事を知らない木村はスコープを覗き込む。コレも丹念にレンズを磨き抜いた特注品。敵は600m先、なのに表情まで見通せる倍率。

それにしても憎らしい顔の爺さんだ。

そう思った時、木村の隣でネルネが吠えた。

「ぐうううう！ あのハゲがテムザンですね！」

「!? そ、そうでしょうね」

木村は心底驚いた、なにせネルネの火縄銃にスコップなどない、600m先のテムザン將軍は点のようにしか見えないハズだ。尋常では無い視力。

しかし、思い直す。

この世界、驚く程に目が良い人間はそれなりに居る。珍しいが居ないではない。ネルネちゃん流石だなど、木村はそれだけ思うだけだった。

そのネルネは銃を構え、「うー当たらないよう」と呻いている。

やはり筋が良い、とここでも木村は感心する。構えた段階でとても当たらない距離だと悟ったのだ。それでも諦めず必死にテムザンを狙おうとするネルネに、木村は勇気を貰った気がした。

次は自分だ、木村は慎重にダイヤルを回し、ゼロインを合わせる。

「500までしかねえや」

だが、ダイヤルは500mまで、600mの狙撃など木村だって想定していなかった。繰り返すが、この世界の銃の精度はあまり良くない。射程も短い。100mでキツチり当たれば上等と言う所。

なにせこのスナイパーライフルにして、バレルの旋条も、弾丸へ雷管と火薬を詰めるのも、ひとつひとつ木村の手作りだ。

600mはゼロインが取れない。だから500に合わせたダイヤルから更に少し上を撃つ。もちろん勘で。高低差だつて考えれば、かなり上にハズして撃つ必要があった。

木村は大きく息を吐く、きつとチャンスは一度きり。

逆に言えば、一度撃つまでは大丈夫だ。相手はユマ姫の呪いなど無いと、証明したがっている。その為にわざわざ塔まで建てたのだから。

ユマ姫がポーズをとってテムザン將軍を指し示し、そこをすかさず木村が狙撃する手筈。

しかし、相手にしてみれば危険を冒すのは一度で十分。二度三度と撃たせてくれるハズが無い。コチラが立てたひよろひよろの骨塔は大砲でも食らえば倒壊は免れない、撃つた後は即座に撤退するしかないのだ。

引き金にかけた指が震える、ほどよい緊張が体を巡った。

「やっつて下さー」

「はーっー」

合図と共に、ユマ姫が構える。見せかけだけの魔法の杖。それを極彩色の塔の頂上、

テムザン將軍に向けて突き付けた。

今だ！ 木村は引き金を引く。

——パァン！

大きな手応え、それでもブレずに銃弾は発射され、木村が思った通りの軌跡を辿る。もちろん肉眼で見えるはずがない。だが、引き延ばされた時間の中で、木村には発射した弾丸が見える気がした。ソレほどの集中力。

放たれた弾丸はそのままテムザン將軍に迫る、あわや命中、その瞬間だ。

ピシリと空間がひび割れ、將軍の目と鼻の先、弾丸が止まった。何故か？

「ガラスー！」

テムザンは、二重三重に保険を打っていた。

魔女が持つ防弾ガラスを買い取り、吹きっ晒しに見せかけた塔の最上階、その前面を守らせていた。

スコープで覗く先、ひび割れたガラスの向こうで笑うテムザンの顔までハッキリ見えた。

やられた！ 木村が齒噛みする横で、声がする。

「今っ！」

——バァァン

続いてネルネが発砲したのだ。その音に、どれだけの火薬をぶち込んだのだと木村は驚愕する。

運良く壊れなかった銃身は、それでも大きな反動でネルネを転がした。

「ネルネッ！」

ユマ姫が受け止めなければ、塔から落下していたに違いない。

「姫様ッ！」

二人はそのまま、抱き合った。泣きながら。

「私、撃てました！ やりましたよ！ グチャグチャのメタメタにしてやりました」

「ありがとう、ありがとう」

感動的な光景。木村ももらい泣きしながらも、一応スコープで塔を見る。

……誰も居ない、既に引き上げたようだ。

当たり前だが、ネルネの弾丸が当たった形跡もない。

いや、コレで良いんだ。ココからはオーズド伯とそして自分の仕事だ、二人の戦いを見て、兵士だって勇気づけられたに違いない。

木村は決意を新たにした。

「さあ、敵が攻撃してきますよ。塔を降りましょう」

「はい！」

「わかりましたあ」

そうして、引き上げた本陣。オーズド伯と合流する。

「お疲れ様でした、首尾は？」

「失敗です、やれませんでした」

「でしょうな」

当たったらラツキー程度の策、オーズドも大して期待していなかった。

そうして、向き直った戦場。ユマ姫とネルネを本陣深くに預け、木村は虎の子の鉄砲隊を率いて前線へ向かう。フィーナス川を挟んでのにらみ合い、ゲイル大橋は絶対に渡らせてはならない。

……そうやって、勢い込んで戦場に立った木村だが、何かがおかしい。

戦は生き物と良く言うが、生き物であるが故に隠そうとしても隠せないモノが有る。敵陣がザワザワと落ち着かず、不穏な空気が伝染していく。

農兵だけでなく、騎士クラスにも、我先に逃げようとする者が現れているのが見て取れた。

何かがおかしい、コレはなんだと味方にまで恐怖が伝染しかけたその時、風采の冴えない男がフラリと木村の傍を通りかかった。

木村が個人的に放っていた密偵の一人だ、目立たない男、だからこそ役に立つ。男はどさくさに紛れ、小さい手紙を木村の服に忍ばせて、消えた。

木村は、何気ない仕草で手紙を広げる。

『テムザン將軍変死』

ただそれだけが、書かれていた。

呪いの力

「テムザンのジジイめ、くたばりおったか」

テムザン將軍死亡のニュースは、帝国陣地を瞬く間に駆け巡った。

死因は、転落死。肝いりで建てた華美な塔、その天辺から無惨に転落したと言う。

報告を聞いたタリオン伯は、馬上で笑う。

「ジジイめ、年甲斐もなく高い所ではしゃぐからそうなるのだ」

罵りつつも長年の戦友に祈りを捧ぐタリオン伯。その横でポツリと呟く声があった。

「まさか、呪い……」

「馬鹿な、お前まで老碌したかミニエール」

そう、タリオン伯は、ロアンヌ領の領主であり、宣戦の使者であるミニエールの父である。彼女もまた轡を並べ、女だてらに父と戦場に立っていた。

「しかし、私は宣戦の後、くだんの姫君と実際に会話をしています」

「くだい！ お前自身、ユマ姫は呪いなど無縁と申したではないか」

「ですが、彼女が呪いと無縁にしても、周囲までそうと限りません」

「ふん、迷信だ、呪いなど」

「そうでしょうか？ 私のカツラはテムザン殿が用意した。あれはユマ姫の母君の髪の毛で作らせたモノ。エルフがテムザンを呪うには十分な理由になる」

「だとしたら、お前も呪われるのか？ ミニエールよ」

「解りません」

絞り出したミニエールの力ない声に、タリオン伯は激昂する。

「情弱だぞ！ 心まで女になったか！ ならば戦場になど踏み込まず編み物でもしていれば良いモノを！」

「ですが、あのテムザン殿が転落など……」

「むう」

確かに、テムザン將軍はそこまで耄碌していなかったはず。タリオン伯は使者に水を向ける。

「どうなのだ？ 流れ矢に撃たれて落下したとか、そんなところか？」

「それが……」

「まさか？ 貴様までが呪いなど信じるか！」

しかし、良く見れば使者の動揺は尋常ではなかった。脂汗が浮かび、唇は青く震えている。

まさかと周囲に目を向ければ、じわりと兵士にも落ち着かない空気が伝播している。

何かがあつたと見るべきだ。

「話にならない！　ワシが検分してやる！　行くぞミニエール」

「は、ハイ！」

戦況はゲイル大橋を挟んで膠着している。ならばとタリオン伯はテムザンの死体を検めるべく塔へと向かった。

そこでタリオン伯が見たモノは？

「これがテムザン將軍です」

「何の冗談だ？」

信じられるはずがない。

テムザン將軍の小姓を散々に脅して、ようやく出て来たのが、小さな頭蓋骨だったのだから。

「馬鹿を言え、今朝までピンピンしておった者が、どうして白骨死体に成り果てる！」

それはあまりにも綺麗な頭蓋骨だった。人力で肉を抉ってもこうはならない。野ざらしにされて数ヶ月は経過した白骨と言うのが相応しい。

「それに、他は、体はどうした？」

「コチラに……」

そういつて、戸板に乗せられ奥から引つ張り出されたのは、グチャグチャのメタメタ

に溶けた肉塊だったのだ。

「な、何だコレは！」

「テムザン将軍のご遺体でございます」

「言うに事欠いて！ ワシも戦場に長いが、こんな死体は見たことも無い」

「では、コレを何と見ます？ 死体ではないと？」

「むう……」

まだ腐つてもいない新鮮な肉が、スライムみたいなゲル状になり果てるなど、歴戦のタリオン伯にして、見たことも聞いたこともない。

しかも、衣装だけは殆どそのまま原形を保って肉の間に埋まっているのだ。

生きながらに肉が溶けたと言うほか無い。こんなモノを見せられて冷静で居られないのがもう一人の呪いのターゲット。顔を蒼白に、歯の根も合わない。

「の、呪い！ コレが呪い！」

「待てミニエール、うろつ、狼狽えるな！ 話せ！ テムザン将軍に何があつたのだ！」

「それは……」

将軍の小姓はぽつりぽつりと、塔の上での顛末を語り始めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ほっほ、愉快愉快」

テムザン將軍はそう笑い、上機嫌でした。

一晚で天にもそびえる塔を建てたばかりか、我々が止めるも構わず、昨夜は塔の天辺で酒を飲み、大いに騒いで見せたのです。

もちろん、ただ享樂に耽つていたのではなく、全ては呪いを恐れぬ御身を見せつけるため。

華美な塔が夜空に輝いて、真昼の様な明るさだったと兵達は語ります。

「それは知っておる、聞きたいのはその続き、先ほどの攻防だ！」

タリオン伯が机を叩けば、小姓は首を竦める。

もちろん話します。ですが、隣で見えていた私にも良く解らないのです。

……いえ、そう慌てず、順を追つて、最後まで話を聞いて下さい。まずは塔を建てた翌日、ユマ姫を乗せたと覚しき敵の車が戦場に現れました。

それにあわせて、突如として川岸にあの塔が建つたのです。

「ソコまではコチラからでも見えておつた。あんなものは寝かせておいた物見櫓を立てただけ、だから何なのだ？」

そうでしょう、そうでしょう。あの塔はコチラの塔ほどではないですが、それは十分に大きかった。戦場のどこからでも見えたに違いありません。

そして、遠くからご覧になつては解らなかつたでしょうが、私は將軍から遠見鏡を貸

して頂き、その姿をハッキリ確認しております。

「だから？ あの塔がなんなのだ！」

……アレは魔獣の骨で出来た呪いの塔だったのです。

「呪いだと？」

そうとしか思えません、そうでないなら骨で塔を組み上げる道理などありません。

事実、あの塔が立った後、ユマ姫が塔の天辺に現れました。

「何だと!？」

ええ、ええ、間違いありません。あまりにも距離がありました、あの不気味な姿、見間違えるなどありえません。

「それで!？」

はい、それでもテムザン將軍はご機嫌で、ユマ姫に舞を披露すると踊り始めるありさまでした。何とも肝の太い御方です。

「ジジイめ、それで落ちたか」

いえいえ、そうではありません。

始まった塔と塔とのにらみ合い、まずは敵塔でユマ姫がコチラに向けて杖を構えたのです。

「フンツ、どうなった？」

そして、その隣、例の商人が、銃を構えて撃つたのです。吹き上がる煙がハッキリと見えました。

「やはりな！ 呪いなど、そんな所だと思つておつたわ。距離は？ 5デルはあつたと見えたが？」

その通り、通常の銃ならば、とても届かぬ距離でした。それが、なんと敵の銃弾はコチラに届いたのです。

「ほう！ まことか？」

間違いありません、小さな弾丸ですが、突き刺さる所を確かに見ました。

「なるほどな、ジジイめソレでくたばったか」

違います、突き刺さったのはガラスに、です。

「ガラス？」

ええ、ええ。テムザン將軍は決して油断しておりませんでした。魔女から強固なガラスを借り受けて、呪いに対する返しにしたのです。銃弾はガラスに阻まれ、テムザン様には決して届きませんでした。

「では、何故？」

そこからが、解らないのです。

テムザン様はひび割れたガラスの前で、呵呵と笑つておりました。呪いの正体見破つ

たりと、堂々宣言されたのです。

しかし、その後、急に胸が痛むと苦しみました。

私は、敵の弾丸が命中したのかと焦ったのですが……目立った外傷はありません。

「では、何故死んだ？ 病でか？」

それが、ふらりふらりと足取り覚束ず、ずるりずるりと後ずさり。そのまま、足を踏み外し、塔から落ちてしまわれたのです。私にも何が起きたのかサッパリ。

「ソレだけか？ 信じられん！ ならば何故、死体はああも無惨な姿になる？ どこかですり替えられたのではないか？」

しかし、しかし、本当なのです。なにせ塔は本陣のど真ん中。幾人もの兵が落下した瞬間を目撃しております。

奥に落ちたのが不幸中の幸い。転落する姿こそ戦場から見えなかったでしょうが、本陣に居た味方には隠しようありませんでした。

「ジジイが、テムザンが落下した後、何があった？ 死体はどうしてこうなる！」

それは、私がつとも知りたい事で御座います。あの時、私はテムザン様を一刻も早くお助けしようと、慌てて塔を駆け下りました。そして、落下した御大に駆け寄った時既に、このありさま。

私は何かの間違いと、これは他人の死体と判断致しました。転落死した人間の体が溶

け、骨が浮かぶなど、聞いたこともありません。

しかし、しかしです、居合わせた者に話を聞けば、塔から落ちたとき、ソレは確かにテムザン將軍の死体だったと言うのです。

ココからは、俄に信じられぬ話では御座いますが……

「何を聞いた！ 言え！」

それが……死体がグエと呻いたと、そして助けなければと慌てて駆け寄った兵士の目の前、ボンツと弾け、こうなつたと。揃って皆がそう言うのです。

小姓は最後に、テムザン將軍だった肉塊を指差した。

「……………」

タリオン伯はあまりの不気味さに、言葉をなくした。ミニエールに至つては、へたり込み、動けない。

これ以上は語ることがないと、小姓はこう締めくくる。

「コレが私が見たこと、聞いたことの、一部始終にございます。嘘と言うなら、テムザン將軍が落下するところ、そのお体が爆ぜ、肉塊に果てる所まで、多くの兵士が目撃しております。ご自由にお調べ下さい。ですが、もう誰も語ろうとしないかも知れません。ソレほどに恐ろしい光景だったと口を揃えておりました」

小姓は一息に言い切つて、ひたすらに祈りを捧げるのだつた。彼自身、この異常な現実をまだ受け止められずに居る。

コレが呪いではないと、もう誰も言い切れなくなつていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、では一体何がテムザン将軍を殺したのか？ タネを明かすと、それはもちろん、ネルネの弾丸だ。

あの時、ネルネの弾丸はひび割れたガラスまで迫り着き、そしてひとかけらのガラスを弾き飛ばした。

鋭く尖つたガラス片は、テムザン将軍の胸に突き刺さり、魔石を砕く。

この世界の人間には小さいながらも魔石がある。胸に魔力を処理する臓器があつて、処理しきれなかつた魔力が溜まつて石になる。魔石とは、言わば結石だ。

その魔石が砕かれて、血流に乗り魔力となつて瞬間的に体中を駆け巡る。そうなれば反動で大きく減じた健康値に足元がフラつくのも当然だ。

魔石が砕けたテムザンは、胸を押さえて苦しみだした。

だがしかし、それで足を滑らせて塔から落ちる事までは、『当然』とはとても言えない。

まして、落下の衝撃で魔石のエネルギーが内部から体をズタズタに破壊して、肉塊になり果てるなど、まるで奇蹟としか言い様が無い。

そして、ネルネにだけはこの『奇蹟』が見えていた。

いや、見えた結末から逆算し、ソコへ至る弾丸を放つたと言うのが正しい。運命を感じる力は、かつてのオルティナ姫や田中にも備わっているが、ネルネには運命の『その先』が見えている。

望んだ運命をたぐり寄せる。それは神に近い領域の力に他ならない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一方で王国軍もまた、突然の事態に揉めていた。

「敵が引いていきます」

「やはり、テムザン將軍の死は真実」

「しかし、変死とは？」

オーズドをはじめとする王国軍の幹部達には、この降つて湧いた吉報の正体が毒入りの罠か、はたまた天の配剤か、どうにも判断がつかずにいた。

オーズドも密偵を放っていたが、その情報がどれも判然としないからだ。

その目でテムザン將軍が死ぬ瞬間を見たぞと言う男を捕まえても、ただ「呪いだ、呪いだ」と震えながら呟くのみ。

「どう考えても、罠ではないですか？！」

「あり得る。ゲイル大橋を渡ったら後は隠れる所のない平原。そこを圧倒的な火力で蹂

躡る。テムザン将軍が考えそうな策でしょう」

「いや、橋を渡る時こそがもつとも危ない」

「昨年見た、魔女の兵器こそ侮りがたい、一網打尽にされるでしょうな」

どれもありそうに聞こえる。誰も先陣を切ろうとしない。

「私が出ましよう」

手をあげたのは木村だった。あの時と同様、いや、今回はセレナの頑張りで、あの時以上に魔獣の素材が充実していた。だから、木村は魔獣の骨で塔を作るだけでなく、装甲車もまた完成させていた。

だからこそ、皆が木村こそ適任と領いた。畏と知ってでも飛び込まなくてはならないのなら、あの装甲車以外にあり得ない。

だが、次の挑戦者の存在は頂けない。

「じゃあ、私もー」

手を挙げたのはユマ姫だ。これには皆が仰天した。渦中のユマ姫が死ぬ事になれば正に敵の思うつぼ。

「ユマ姫様、あなたは私達の切り札なのですから……」

やんわりと木村は止めようとするが、ユマ姫は領かない。

「私の呪いで敵を脅かすんでしよう！ なら私が行かないと！」

「いや、それは」

既にそんな状況は越えている。

喉から出かかった言葉を、テムザン将軍の『変死』と言う表現の異様さが押し止めた。

——まさか、本当に？

仕掛け人の木村にして、もはや噂と真実の境界が、まるで解らなくなっていた。

そうして、ユマ姫は装甲車に飛び乗った。

「もう、なんで敵陣に乗り込もうなんて言ったんですかあ！」

「だって！ ネルネがテムザン将軍を倒したのに、誰も信じて無いですもの」

ネルネも一緒だ。今日も二人は姦しい。しかし、前回と違い、今回は紛れも無く決死行。作戦は単純、魔獣素材の装甲車に乗って、ゲイル大橋を駆け抜ける。あまりにも乱暴な作戦に、帯同する誰もが死を予感していた。

なのにもまるで似つかわしくない空気の二人。

「お二方、今回は本当に危険ですから、止めるなら今ですよ」

「ほらあ！ キムラさんもそう言ってるじゃないですか」

「でも、みんなしてテムザン将軍の作戦だぞーって言ってるの、悔しいじゃないですか」

「私は別に良いですから」

「私が良くありません！　せっかくネルネのお手柄なのに！」

「でも、私、人殺しを自慢する気はないですもん……」

「じゃあ、私が自慢します！　私の呪いでテムザン将軍をやっつけたんだって」

「えー、何ですかソレ！」

「二人とも、そろそろ出ますよ」

木村の真剣な声。いよいよ逃げ場ないゲイル大橋に、魔獣の素材を貼り合わせた車が、飛び込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「お偉いさんがケツに帆をかけ逃げてるってのに、俺達は居残りかよ」

「そう言いなさんな、逃げ場のない橋を目掛けてコイツを撃つだけだろ。楽勝さ」

気弱な男に、もう一人の男が銃を叩いて励ました。

ここはフィーナス川を挟んで帝国軍側。多くの鉄砲隊が王国兵の侵入を防ぐべく、橋の出口を守っていた。

「じゃあオイ、聞いたか？　あの噂」

「ユマ姫の呪いでテムザン将軍が死んだってヤツか？　馬鹿臭え。じゃあお前テムザン

将軍の死体を見たのかよ？」

「でもよ、戦況は押し立てたのに急に撤退とか、おかしくねえか？」

「何かの作戦だろ？ 敵を引き込むとか」

「だったらなんで俺らは橋を死守しなきゃなんねえんだ？」

「何かあったんだろ、俺らの知った事じゃねえよ」

「じゃあよ……」

兵士はいつそう声を潜めた。

「知ってるか？ ユマ姫の呪いは生贄を使うらしいぜ」

「何言ってるやがる？」

「二年前の冬、王国兵が千人から忽然と消えてるんだ」

「また胡散臭えな」

「マジだ、俺の親戚が王国軍に居るんだが、ユマ姫が大森林に千の軍を率いて出兵して、目的は不明。そして誰一人帰らなかつた」

「オイオイ、そりゃ」

「だからユマ姫は千人分の魂を使い、人間を地獄に引き摺り込めるんだ。地獄に魂を引き抜かれた人間は、この世に醜い肉だけが残るんだとよ」

「くだらねえ……」

ユマ姫の噂は、こんな調子で帝国軍を蝕んでいた。

「オイ、なんだあれ？」

そんな時、誰かが対岸を指差した。ゲイル大橋に乗り込まんとする大きな影を見つけたからだ。

「どれどれ？ 今度はどこの猪武者サマだ？」

「懲りないねえ」

「いや、アレは魔導車だ、ふうん？」

「ワザワザ蜂の巣なりに来たのかよ」

兵士を魔導車に乗せ、敵陣に突っ込ませるのは帝国でもありふれた作戦だ。しかし、コレだけの銃に狙われれば、中の兵士はタダでは済まない。

どんなに外壁を強化した馬車でも、すぐさま棺桶に早変わりだ。

「いや、違う！ アレは？ なんだ」

しかし、現れたのは棺桶よりも不気味な存在だった。

ゲイル大橋に現れたのは紛れも無い魔導車。しかし様子が尋常ではなかった。ソレは地獄から這い出て来たと言われても信じられる程、不気味な姿を誇っていた。

「嘘だろ？ 何だあれ！」

「まさか魔獣の骨で出来ているのか？」

「アレが呪い？ まさかユマ姫が乗っているってのか？」

今回の装甲車はセレナが倒した山盛りの魔獣の素材をたっぷり使っている。それは

もう景気よく。性能重視で木村は全く気にして居なかったが、それはオーズド伯が引くぐらいにはおどろおどろしい見た目をしていた。

「クソツクたばりやがれ！」

誰かが放った銃弾は、しかし、弾かれるだけに終わる。燃費は悪く見た目はおどろおどろしいが、硬さだけは折り紙付きだ。

「撃てッ！ 撃てッ！」

次々と放たれるマスケット銃。しかし、装甲車には僅かなダメージも与えられない。

「どけどけ！ コイツでやる」

鉄砲隊を掻き分けて現れたのは、移動式の大砲だ。

「オオッ！」

「コレなら！」

頼もしい鉄の塊は、どんな悪魔も地獄に送り返すかと思われた。

「てえ！」

しかも、担当するのは凄腕の砲手。『あの時』は砦の上から砲撃し装甲車を横転さしめた男である、木村の狙撃がなかったら、あの時のゼスリード平原攻略はなかったに違いない。

その砲手が今回、ゲイル大橋を真つ直ぐ進む装甲車に狙いを定めたのだから、外れる

道理はドコにもない。

——ガアアアン

甲高い音を立て、装甲車がガリガリと石畳の橋を削って後退する。ソレほどの衝撃だった。

さて、大砲の直撃を食らった車内の様子はどうか？

「ふぎいいいいい！」

「痛い、痛い！ 舌噛みました！」

「お尻打ったんですけどお！」

やかましい少女がふたり。つまり、割と大丈夫だった。

それだけ装甲車の壁は厚く、重量もあるため、今回は横転まではしなかったのだ。

「何ですか、今の！」

「大砲です」

木村は答える。コレぐらいは想定内。

「タイホウ？」

「ねえ！ 全然ツ！ 敵は呪いに驚いてないじゃないですかあああ！ 敵軍は逃げ腰つて聞いて付いて来たのに、ユマ様の嘘つき！」

「じゃ、じゃあ！ 今から脅かせば良いんです！」

そんな事を言つて、天井のハッチを開けて顔を出そうとするユマ姫。

普通なら木村が止めるが、今回止める気はない。ソレだけギリギリの状況だ。

「助かります、少しでも動きを止めて頂ければ」

その瞬間に打ち抜ける。木村はスナイパーライフルを取り出した。

ソレを見て、ユマ姫も本格的に覚悟を決めた。いや、決めたのだろうか？ 決死の作

戦だと言うのに、その声はどこまでも明るく、脳天気。

「じゃあ、行きますよー」

「あ、待って下さい、姫様コレ」

そう言つて引き留めるネルネの手には、不気味な紋様の刻まれた目隠しと、猿ぐつわ。

「えっ?」

「呪いの姫君ですから」

うんざりするユマ姫を無視して、ネルネはユマ姫を拘束していく。

「うー」

「ほら、早く早く」

そして、急かすように目が見えないユマ姫をハッチへと送り出す。

その時の、その姿、対岸で狙いを定める帝国軍からどう見えたのか？

「な、何だあれは」

「悍ましい！」

魔獣の素材を貼り合わせた装甲車から、目隠しに口枷の少女が這い出す姿。

ソレは魔獣が繭を破って少女へと羽化した様な。生まれてはいけない怪物が誕生した瞬間の、あまりに不気味な姿であった。

しかも、その時のユマ姫のあまりにも堂々とした姿たるや。

「なんだ、恐くないのか？」

「弾なんて当たらないって顔してやがる」

「アレが不死の姫君」

もしもユマ姫が目隠しをされていなければ、コチラを睨むあまりにも多くの兵隊と、並ぶ銃口の多さに怯え、とても堂々とはしていられなかつただろう。

見えていない事を良いことに、ユマ姫は装甲車の上に姿を晒しまくっていた。

ちよつと顔を出すだけと思っていたネルネにしてみれば気が気では無い。

「ちよつと！ 姫様！」

「うー、うーうー（大丈夫）」

「大丈夫じゃないですからもう！」

止めるに構わず、脅かすなら徹底的にやってやろうと、ユマ姫は腹を決めていた。

そうして取り出したのは、あの杖だ。木村がアニメのコスプレ衣装として作ったモノ

ではあるが、コレで呪いのターゲットを山ほど殺して来た。そう言う事になっている。これにも帝国軍は大慌て。

「杖だ！」

「逃げて下さい！」

呪われるのは、装甲車を止めた砲手に違いない。大砲を撃てる人間は帝国軍にも少ないため皆が下がらせようと声を掛けるが、砲手自身は一向に強気を崩さない。

「早く次弾を持つてこい！ 撃ち抜いてやる！」

堂々としたモノだ。彼は呪いなど寸毫も信じていなかった。

「うー！」

そして、遂にユマ姫の杖が振り下ろされた。

しかし……

「え？」

「なんだ？ 何を？」

杖はまるで見当違いの方向を指し示した。ソコには何も無い。いやギリギリ鉄砲隊の左の端に引つ掛かるかと言うぐらい。

戦場に静寂が訪れる。

「うー？」

ユマ姫は、静かになった戦場に首を傾げる。

そう、目隠しされているから、全然狙いが定まらないのである。

(ユマ様、ズレてます！ 右、もつと右です！)

小声でネルネが指示すると、ユマ姫はスツと杖を右にずらす。

「うー？」

(行き過ぎ！ 行き過ぎですつて！)

そんなやり取りを知らない帝国兵は、どうなったか？

「嘘だろっ！」

「俺達をまとめてなぎ払う気だ！」

盛大に勘違いした。これで兵の多くは完全に腰が引けてしまった。

ただし、冷静に考えれば少女が杖を突き付けただけ。将校の中には発破をかけ、踏み止まる者も少なくない。

「ハツタリだ！ 怯むな！」

「逃げてみる、汚いケツを撃ち抜いてやる！」

しかし、その頑張りもそれまでだった。

「ちよつと、どいて！ どいてください！」

人混みを掻き分けて、一人の丁稚が両手に荷物を運んでいる。

大砲の火薬だ。大砲の火薬はこうやって一発ずつ運ばせるのが定石。大砲を連射する為には前線に火薬を積み上げて置きたいが、それでは爆破してくれと言つてゐる様なモノ。こうして運ばせるのが一般的だ。

「早くしろ、次弾まだか！」

「今すぐ！」

後方から陣地を突つ切つて運ばれる火薬。通常、そんなモノを狙えるハズがない。

「どいてユマ様、もうっ！ 撃ちますよ！」

しかし、ネルネは狙つた。堂々と姿を晒すユマ姫に紛れ、ハッチから顔を出し、火薬が敵陣のど真ん中に運ばれた瞬間を撃ち抜いた。

——カァン

金属が弾ける音がした。

「ちよつと、どいて下さい、え？」

その時、丁稚は陣内の人が多いところを掻き分け進んでいた。だから自分が打たれるなんて少しも思つていなかった。

何故つて、そこからは戦場など見通せない。人垣で前も見えない。射線など通つていない。

静電気防止の銅缶に鉛玉が命中し、甲高い音を立てる。その直後、曲射で命中した弾

丸は、火薬を押し分け発火する。

——ドオオオン

陣のど真ん中、理不尽な爆発が鉄砲隊を襲った。

「な、なんだ？」

「の、呪い！ コレが呪いの力」

「逃げるッ、呪い殺されるぞ！」

「やってられるか！」

ユマ姫が鉄砲隊を指し示した直後である。まさか火薬の暴発とは誰も信じなかった。「クソッ、気をつけて運べと言っただろうが！」

いや、たつた一人、砲手だけは見慣れた爆発が火薬のモノだと理解した。だからこそ、歯を食いしばりユマ姫を睨む。

「どんな手妻を使ったか知らんが、撃ち殺してやる」

大砲を諦め、背負ったマスケット銃を向けると、照星の向こうにユマ姫を望んだ。

「うー？（何が起こったんです？）」

実のところ、混乱していたのはユマ姫も同じだった。突然の爆音に敵陣が騒がしい。コレで気にならない方がどうかしている。

もう呪いの姫君とか知ったことではない。杖を手放し、両手で目隠しを剥ぎ取った。

ユマ姫はこの時、初めて戦場の全容を目の当たりにする。
「うえ？」

目の前に広がる大惨事。呆然としてしまったのも当然だ。ぼんやりとする目線の先に、逃げずに立ち向かうのはたった一人になっていた。

「……………」

自然、その男と目が合う。

感情のない瞳で見つめられた砲手は、知らずの内に手が震えていた。

(アレだけの事をしておきながら、なんて涼しい目をしてるんだ！)

あの少女は、コチラの命など何とも思っていないのだと、砲手は全てを理解した。間違った方向に理解した。いつの間に恐怖に指先が震えていた。

呪いなどないと、もう信じられなくなっていた。

——パアアアン

だから、死んだ。

動きが止まった瞬間に、木村のライフルが脳天を撃ち抜いたのだ。

「の、呪いだあ！」

「頭が吹き飛んだぞー！」

こうなれば、後は蜘蛛の子を散らすばかり。背を向けて逃げ出す鉄砲隊など、どこま

でも無力である。

ゲイル大橋から渡河を果たした王国軍は帝国軍を追い回していった。

自然、呪いの姫君の噂は更に広がることになる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おい、聞いたか?」

「ああ、戦乙女の話だろ?」

兵士達は口々に噂する、たったひとつの希望を胸に。

追い回された帝国軍が逃げ込んだのは、ため池用に作られたすり鉢状の窪地であった。

ユマ姫の視線も届かない場所として、安心して陣を構えることが出来たのがココだけだったのだ。

圧倒的な戦力から一転、敗戦濃厚の陣内にあつて、兵士達がひとつの希望に縋つてしまふのは無理もない。

曰く、ユマ姫の呪いが効かない唯一の人物。

曰く、聖女として、神々の加護を一身に受けている人物。

曰く、彼女こそが帝国を救うべき戦乙女。

「噂をすれば、来たぞ!」

「おおつ、ミニエール様！」

「なんと美しい！」

白馬に跨がり、現れたのはミニエールだった。

彼女は宣戦の儀のあと、ユマ姫をなじつて泣かせたのだと、テムザンの演説で紹介されている。だとすれば、彼女が真つ先に呪い殺されていなければおかしいと、皆がそう考えた。

しかし、帝国軍はソレをもつて、呪いなど無いのだと強弁する事は避けた。代わりにミニエールこそが聖女であり呪いを無効化する力があるのだと広く喧伝する事にしたのだ。

彼女を陣内に回らせる事で、帝国はなんとか寄せ集めの軍を潰走させずに保たせている。

「ミニエール様ア！」

「呪いなど、打ち破つて下さい！」

「呪いの姫君に、正義の鉄槌を！」

声援を受け、馬上から鷹揚に手を振るミニエール。白馬に白銀の鎧を身に纏い、皆に希望を抱かせるに十分な美しさだった。

後ろに仕えるロアンヌの騎士団も勇壮で、戦意を鼓舞して止まない。

彼らは陣内の巡回を終え、ゆっくりと幕舎の中に姿を消した。その際、入念に扉を閉じるのを忘れない。そうでもしないと不安に怯えた兵士が飛びこんで来てしまうのだ。

そうして、タリオン伯や騎士団長のマークスなど、身内だけの面々になってから、ようやくミニエールは人心地がつくのであった。

父であり領主のタリオン伯が自らミニエールの外套を脱がせ、騎士団長マークスが跪き、具足を外す。

「ミニエールさまの堂々としたお姿、皆が魅入っております」

「そうじゃぞ、ミニエール。ワシも父として誇らしい」

二人揃って褒めそやす。彼女は既に、それだけの重要人物になっていた。

厳しかった父や、上官にあたる騎士団長の豹変に、当のミニエールの心境は？

「どうして？ どうしてこうなったの？ 私が聖女な訳ないでしょ？ 女の子らしく編

み物する！ お家帰るうう！」

もう、すっかり折れていた。

戦乙女VS呪いの姫君

「ふわああ、暇です」

「ユマ様、お口をバカみたいに開けないで下さい」

「バカ!? バカとはなんですか! バカとは!」

「口枷付けます?」

「うぐっ」

ネルネとユマ姫、今日も二人は退屈をもてあまし、狭い天幕の中ゴロゴロとだらけていた。

場所はゲイル大橋を渡った帝国領、ゼスリード平原のど真ん中である。

アレだけ劇的に帝国軍をやりこめておきながら、王国軍の侵攻は芳しくない。もう何週間もゼスリード平原で足止めを食らっていた。

何故か? それは、敵がすり鉢状の陣地に引き籠もってしまったからだ。

元々はため池として掘られた巨大な穴を流用した陣地である。そのため池を中心に、蜘蛛の巣みたいに広がる水路が丁度、塹壕として機能した。

これは帝国軍が狙った訳では無いのだが、近代の戦争を想定したような陣地が自然と

完成していた格好だ。

旗振り役はミニエールである。彼女は竜騎兵として銃を手に、白馬に跨がり献身的に戦場を駆け回り、崩れかけた戦線を立て直してしまった。

竜騎兵として銃の扱いも知り尽くしているため、指揮も確かだ。

……彼女に言わせれば、憂さ晴らしに愛馬で駆け回っていただけ。なにより呪いを恐れ、人目につかない水路での戦いを好んだだけなのだが、周囲はそうは受け取らなかったと言うワケだ。

「私が脅かしに出ても以前ほど怖がらなくなっちゃいました。あの人、ミニエールさんでしたっけ？ アレだけ綺麗な人に励まされると士気もあがるモノなんですわえ」

「憧れちゃいますよわえ、カッコイイですもん」

「えー？ ネルネのが凄いですよー、ズドンと撃ち抜いちゃえば良いじゃないですかー」

「流石に嫌ですよおお、私、宣戦の時にミニエールさんとお話ししちゃいましたもん」

「そんなー」

……そう、ミニエールが呪われない理由。と言うかネルネに狙撃されないのは、むしろネルネと会話をしたからだった。

宣戦の儀に仕組まれたテムザン將軍の罠、ミニエールは知らされていなかった。

泣きじゃくるユマ姫を必死になだめ、カツラがユマ姫の母の髪だと聞けば、テムザン

將軍からの預かりモノとしながらも、謝辞を述べながらどうぞと譲ってくれたのだ。

ミニエールにしてみれば、ただでさえ危険な使者なのに、余計な恨みまで買っては堪らないとテムザンに全てをなすりつけた格好。しかしネルネは優しかったミニエールに、どうしても敵意を持たずに居た。

それでどうにもダラダラと戦場で過ごす日々、ユマ姫はそろそろ柔らかいベッドが恋しくなっていた。

そんな時、ようやく事態は動き出す。

「そのミニエール様がいらしたようですよ」

「え？ シノニムさん!？」

突然現れたシノニムに二人は驚く。

彼女はセレナやエリプス王が療養する拠点や補給線での事務処理を担当し、長く前線を離れていた。それが何故このタイミングで現れたのか？

「そりゃ、戦争も佳境だからですよ。タナカ様も一緒です」

「え、？ あのクズも?」

過剰に反応したのはネルネだ。不躰な田中が、ネルネはどうにも好きになれない。

あんまりな発言。だが、窘めるどころか顔を蒼くしたのがシノニムだ。

「……言葉には気をつけて下さい。彼は本当に、驚く程に強い方ですよ、それはもう怖気

がするほどに」

シノニムは魔獣はびこる大森林の拠点に通う内、田中の剣技をつぶさに見たのだ。剣も刺さらぬ魔獣を鼻歌まじりで撫で斬りにするのだから、恐怖を抱くのも当然。

ソレを見て、魔力欠乏に苦しむセレナはともかく、田中が戦場に居ないのは大変な損失と思つた訳だ。

そして、その予感は当たつた。

「丁度良かったと言ふべきでしょう、ミニエール様は代表者同士の一騎討ちをお望みですから」

膠着する戦線にしびれをきらしたのは相手も同じ。

正確に言うとうと、ミニエールは勝敗に関わらず、この辺りで手打ちにして家に帰りたいかつたと言ふのが本音であつたのだが……

そして、一騎討ちと聞くや、何故かどや顔になつたのがユマ姫だ。

「ふふつ、一騎討ち！ だったらネルネが出れば楽勝ですね！」

「もう、嫌ですよ」

「??」

シノニムにしてみれば、どうしてそこでネルネが出てくるか解らない。

いや、シノニムもネルネが戦場でちよつとばかり銃を撃つて活躍したとは聞いてい

た。だが、それにしても違和感があった。こんな場面でネルネの小さな頑張りを揶揄して空気を読めないジョークを言うユマ姫では無かったハズなのだ。

「ともかく、ミニエール様はユマ姫さまとの会談を希望しています、どうぞコチラに」「ええっ？ 私が？ あの、わたくしは、戦ったりとかはその……」

「……そうでは無いですから、お早く！」

やっぱり空気が読めないだけなのかなと、シノニムは思い直すのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

突然現れた噂の戦乙女。王国軍が沸き立つのも当然だ。

一目見ようと、多くの王国兵は本陣近くへ、それとなく集まっていた。

「オイ？ アレが？」

「ああ、帝国の戦乙女、ミニエールだ」

「憎らしいほど堂々としてやがる」

「きれいだ……」

「オイッ！」

美しい敵将の堂々とした姿、思わず見とれた兵士を皆が小突いた。敵対する手前、しかし無理もないと内心では頷いている。それだけ美しかったのだ。

そんな無数の視線の中で、相対する王国軍総司令オーズド伯は困惑していた。

「停戦、それに一騎討ちですか……」

「ええ、始めた手前、何も無しでは昂ぶった兵士が納得しませんでしょう？」

「ソレを我々が受けるだけでも？」

オーズドにしてみれば、敵将が死に、ほぼ無傷で領地に踏み込んだ大チャンス。みすみすファイにする道理は無い。

コレに対してミニエールは？

「まさか本当に有利だと思っておいでなら、大変な思い上がりと言わざるを得ませんね」
「むう」

ソレだけ、圧倒的な数の銃があると暗にそう言っているのだ。事実なだけにオーズドは唖った。よくよく見れば目の前の人物、数日前の宣戦の時とはまるで別人。

戦場で少しやつれた様にも見えるが、それが一種の凄みを生み、ミニエール生来の美しさに花を添えている。

仕草も堂に入ったモノだ。決められたセリフを読むだけのスピーカーだった宣戦の儀とはまるで違う。今も自分の考えでモノを言っているに違いない。

それに今やミニエールは帝国の重要人物だ。戦乙女の伝説が呪いの姫君の不気味な噂を掻き消して、帝国の士気を支えているとはもっぱらの評判。

ソレが僅かな手勢で堂々と敵陣に乗り込んで、少しも不安な様子を見せないのだから

ら、肝の太さは敵ながらあつばれと褒め称えるしか無い。

この短い期間で成長したものだどオーズドは舌を巻いていた。

果たしてミニエールの内心は？

(どうなの？ 停戦するの？ しないの？ 殺すの？ 殺さないの？)

……実際は、ただの破れかぶれである。

ミニエールに言わせれば、呪いがあるのなら軍に囲まれて居ても安心は出来ない。なにせ何者も寄せ付けない遙かな塔の上ですらテムザンは死んだのだ、ではどうするか？
(殺すなら殺しなさいよもうっ!!)

捨て鉢になっていた。だからこそ、堂々とした態度。

どうせテムザンみたいに溶けて死ぬなら、味方の陣地で人知れず死ぬよりは、敵陣で無惨に死んだ方がよっぽどマシだと腹を括っていた。

仮に、この瞬間、敵陣で死んだならば、怒り狂った帝国軍は決死の覚悟で王国へ攻め込むだろう。今の自分はそれぐらいの人氣があると自負している。

だからこそ、敵陣の方がむしろ安心ぐらいに思っていた。

私を殺せば痛い目を見るのはお前らだぞと、堂々と睨みつける。

その気の強さがオーズドの腰を引かせた。

「解りました、その提案、受けましょう。細かい条件は少しずつ詰めていく、それで良い

ですね？」

「もちろんです（やった！ やった！ やった！）」

オーズドも膠着した戦争の止め時を探っていた。だから、ミニエールの提案は渡りに船だ。

欲を言えばテムザンの死を切掛にもう少し帝国側に切り込んで大きく譲歩を引き出したい所だったが、小麦を湛えた帝国側のゼスリード平原を見て考えを変えたのだ。

この大穀倉地帯を踏み荒らすよりは、講和条件に麦を吹っ掛けた方が建設的だ。それにより、一騎討ちの結果次第で講和条件を変えると明記すればよい。

コチラには絶対に負けない『英雄』が居るのだから。

「では、一週間後に雌雄を決しましょう。健闘を祈って、どうです？ 食事など」

「その前に、私はユマ姫に謝らなくては、知らなかったとは言え宣戦の儀では酷い事をしました」

「ふむ？ なるほど、丁度良い、今呼ばせています」

ふられてしまった事以上に、この後に及んでまだユマ姫に会いたいなどと言う事にオーズドは驚いていた。ここ数週間できつくにタネが割れたのだと考えていたからだ、そうでなくては堂々と陣地に乗り込むなど、考えられない。

（ユマ姫にわたしは無実ってアピールしないと）

しかしミニエールにしてみればコチラこそが本番と言つて良い。

「おじやまします……」

そこに静々とユマ姫が姿を現した。今日は拘束具はなし、お姫様らしく猫を被つてゐる。

ソレを見たミニエールはどうしたか？

「おおっ！ ユマ姫様！ お元氣そうでなりよりです。もう一度、お目にかかりたかったです」

大袈裟なまでに喜んでみせた。それはもう必死の仲良しアピールである。

しかし、その様子を遠目に窺っていた兵士には、全く違うモノに見えたのだ。

「おいおい、あの女騎士様、呪いの姫君を全く恐れちゃ居ないぜ！」

「綺麗なばかりじゃねえな」

「なんてえ度胸だ」

そう、まだ王国兵たちはユマ姫を恐れていたのだ。

だからこそ、ユマ姫に駆け寄つて抱きしめてみせたミニエールに敬意を抱かざるを得ない。

ミニエールにしてみれば必死の『私達仲良し！』アピールなのだが、周囲はそんな事を知る由も無い。

そして、突然抱きつかれたユマ姫も大いに動揺していた。

「えええ？　なんですか？　突然」

「失礼、私はあれから貴女を泣かせてしまった事をずっと後悔していたのです」

「そんな！　ミニエールさんの所為じゃないですから」

待ち望んだ言葉に、ミニエールは小さいガツポーズ。しかし、コレを機に枕を高くして眠りたいミニエールは止まらなかつた。泣き笑いの表情で、ダメ押しでポツリと零してみせた。

「しかし、エルフの呪いと言うのは恐ろしいな。戦争が始まるなりテムザン將軍は非業の死を遂げたのだから」

カマを掛けたのだ。コレにユマ姫の反応は？

「え？　あつうん、そうですね」

そう言つてチラリと侍女の顔色を窺う。上流階級の子女には良くあるしぐさ、想定外の事を言われたらとりあえず侍女に確認する。

それ自体は自然な素振りではあるのだが、目線の先を追いかけて、侍女の姿を認めたミニエールは短い悲鳴をあげるハメになる。

「ひっ！」

ネルネが必死の形相で睨んでいたからだ。

言うまでもなく、ネルネが睨んでいたのはユマ姫だ。軽率に、彼女こそがテムザンの死の原因ですよと紹介されては堪らない。命の危険もそうだが、相手は秘かに憧れているミニエールさん。嫌われたくはなかったワケだ。

それが再び、誤解を生んだ。

(なんて、殺気！ やっぱり彼女が！)

純真無垢なユマ姫が呪いの発生元でないのなら、怪しいのは傍に居るハーフエルフの侍女しか居ない。実のところ、ミニエールは初めからネルネこそが怪しいと予感していた。

この的外れに思える予想こそ、一周回って大正解なのだが、ソレはソレだ。震える声でユマ姫に尋ねる。

「あの、彼女は？」

「あつ！ 彼女は私の侍女でネルネです」

「そうか、ネルネさん……？」

「どうも……」

「ヒッ！」

挨拶にと一歩踏み出したネルネに対し、ミニエールは大袈裟なまでに後ずさる。

「??」

ソレを見て、首を傾げるシノニムとオーズド。

「そんなあ」

悲しくなったネルネ。

では、当のユマ姫はどうだ？

「ふふっ、大丈夫ですよ。ネルネにはミニエールさんに手を出さない様、私がしっかりと
言っておきますから」

嬉しくて堪らなかつたのがユマ姫である。ついさつき、ズドンと撃ち抜いちやえと
言つた事もすっかり頭から消えている。

それもそのはず、自分よりネルネを恐れる。コレはつまり、ミニエールだけがネルネ
の実力に気付いたに違いないからだ。

ユマ姫は、ネルネの大活躍を評価しようとしないうちに周囲に不満を持つていた。テムザン
將軍暗殺だけでなく、火薬に引火させた一発だつてタダの偶然だと思われているのだから
堪らない。

ユマ姫はソレが途轍もない奇蹟なのだとして理解していた。幼少から弓矢の訓練は強制的
に受けさせられていたから、ネルネの腕が本当の奇蹟だと彼女なりに解るのだ。むしろ、
どうして解らないのかが解らない程。

だからこそ、今のネルネの評価が面白く無い。

そこにきて、帝国で名の知れた射撃の名人であるミニエールは、ネルネを一目見るなりその偉業に気が付いたのだ。

やはり、見る人が見れば解つてしまうのだと。ユマ姫がご機嫌になったのも無理はない。

大いなる勘違いなのだが、とにかくユマ姫はそう思った。そして、内心で木村やオーズド伯の評価が暴落した瞬間でもあった。

「えへへ、ネルネは凄いですよー」

「そ、そうか。彼女はエルフの戦士なのかな？」

「いいえ、私の侍女です！ 私を守ってくれるんです！」

だから、ミニエールがネルネをエルフの戦士と称したのも、まるで不思議に思わなかった。

ミニエールにしてみればエルフに呪い、ぐらいに思つて居るのだから、一見ひ弱に見える侍女が護衛でも全然驚かない。そうして二人の会話はズレたまま噛み合っていく。

「はは、もしも一騎討ちに彼女が出て来たら我が軍はお手上げだな」

「大丈夫ですよ、彼女はそう言うの苦手なんで」

「それは良かった」

本人たちは大真面目なのだが、この口上を聞き、いよいよ周囲はミニエールのジョー

クなのだと受け取ってしまった。

しかし、ジョークでは済ませられない事もある。

「一騎討ちなど本当に良いのですか？ 我々には『英雄』が居るのでしょ？」

出過ぎた事と思いつながら、それでもシノニムは問いかける。当日になってソレはズルいと言われては話にならないからだ。

それでもミニエールは怯まない。呪いと比べたら田中などまるで恐くないからだ。

「『英雄』殿か、恐ろしいが、所詮は人間、勝てない相手ではないな」
「!？」

コレには、田中の強さを知るオーズドやシノニムは度肝を抜かれた。

刀を手にして以来、田中の強さはまるで別人。大森林を追い払われた帝国がソレを知らないハズが無いからだ。

しかし、それでもミニエールの表情は曇らない。

「コチラにも腕利きは揃っているのだ、大森林で斬られた雑兵と同じとは思わない事だ」
この自信である。

しかし、しかし！ 実際の所、ミニエールは田中の強さをまるで知らないだけなのだ。

「言うて人間でしょ？」位に思っている。大森林に出兵したのは一山幾らの傭兵ばかりだったので、噂が変に大きくなっただけだと思っているのだ。

ミニエールから見ても、妖獣を倒して騎士に叙任されたのは凄い事だし、長い帝国の歴史でも何人も居ない偉業。しかし、逆に言うとなんか居るのだ。

流石に戦況を一人でひっくり返すには及ばない、ハツタリと判断したと言う塩梅だ。

「……………」

しかし、良く見ると凍り付いた空気がどうにも怪しい。ミニエールはそれほど王国軍のタナカへの信頼が大きいと理解した。

「コレは、どうも怒らせてしまったみたいだな、失礼するよ」

英雄タナカの人気の高さを思い知ったミニエールは、ボロが出ない内にと回れ右、退散しようとしたのだが……

「見くびってくれるじゃねえか、そんなに俺は弱そうに見えるかよ?」

立ち塞がったのが、その田中である。漆黒の鎧に刀を差して、完全装備の姿であった。

190を越える男が戦闘態勢で立ち塞がって、ソレでもミニエールは怯まない。

「おや? あなたが英雄殿か?」

「なあ? 帝国の代表者ってのはそんなに強えのか?」

田中にしてみれば、気になったのはソレ一点である。

「勿論だ、ただ……彼女が相手では分が悪いかな?」

チラリとネルネを見る。呪いを相手には、剣では戦えないからだ。

しかし、周囲は息を飲む。聞きようによつてはキツイジョークだ。お前など侍女より弱いとそう言ったも同然なのだから。

「チツ、言つてくれるじゃねえか」

しかし、田中はソレを真つ正面から受け止めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、一週間後。

「な、なにこれ……」

ミニエールはあまりの光景に我を失っていた。ポカンと開けた口から、涎が垂れないようにするのがやっと。

舞台は例のすり鉢である。一旦本陣を別の場所に移してまで、ココでの開催となった。

大勢が観戦出来る場所なんて、戦場にココしかなかったからだ。コロシウムに見立てて改造し、帝国軍と王国軍が丁度半々観戦している。

そこまでは予定通り。

予定通りでは無かったのはその試合の内容だ。

「やるじゃねえか!」

「そつちこそ!」

一騎討ちと言っても、真つ平らの場所に向かい合つてチャンバラをするワケではない。

より実戦を想定し、戦場を見立てた舞台には、鎧や剣が転がり障害物まで並んでいる。少しばかり大袈裟な障害物、設置したのは他ならぬミニエールだ。エルフの呪い、ちよつかいを出すとしたら決闘の最中である。その正体を確かめるべく障害物は厚く、堅くしていた。

その障害物が、鎧が、剣が！ どれもがバターみたいに切り裂かれ、剣戟の嵐に飲み込まれていく。

「嘘でしょ？ なんで？」

ミニエールは田中の強さを完全に見誤っていた。

そんなミニエールをヨソに、二人の戦いは苛烈さを増していく。田中が切り飛ばした鎧の破片が足元に転がるが、踏み抜いて怪我をするような間抜けが相手では無い。

「しかし、あのお嬢ちゃんが言うだけの事はあるぜ、コレだけの使い手が帝国に居たとはな」

「コツチのセリフだ。親父やアニキを殺つたつてのは嘘じゃないらしいな」

彼はバーリアン・ローグウッド。剣で知られるローグウッド家の鬼っ子。テムザン將軍の残した最終兵器だ。

彼は魔槍を手に、転がる剣を切り飛ばして牽制し、一瞬の突き込みは戸板を貫いて田中に迫った。

「なんの!」

「オラア!」

掛け声と共に、目にも止まらぬ剣戟が交錯する。

「何なのコレ!」

悲鳴をあげたのはミニエールだ。

あまりにも非常識な戦い。剣閃はとても目には追えない速度で、切り刻まれる障害物はミニエールの決闘の概念を破壊した。

田中にはもちろん味方のバリアンだって、これほどの化け物とは夢にも思って居なかった。

なにせ、テムザンは引き継ぎもなく死んでしまった。バリアンは不真面目で、普段の戦闘に参加しなかった。

……いや、不真面目でロクに戦闘に参加しない男が一騎討ちに選ばれていたのを、ミニエールはおかしいと気が付くべきであつただろう。

プライドの高い騎士達が、それでも一騎討ちとなればバリアンしか居ないと認めていた証。

そして、その理屈はある意味でタナカも一緒だ。

不真面目で、規律めいた軍事行動など出来はしないが、誇張でもなんでもなく局地戦に投入すれば、あっさりと戦況を覆す力をこの二人は秘めている。

「クソが、キリがねえ」

「さっさと死ね」

だから、お互いの実力は伯仲。

余裕で斬り殺したあの時とは違った。何故かと言えば、田中はプラヴァスでエリプス王との死闘に競り勝って居ない。魔剣同士の戦いの経験が不足している。

それに、今回のように用意された一騎討ちとなれば鎧を着ずに戦闘開始は許されなかった。

剣の腕で言えば、相手も天才。あの時と違い、手にする魔槍の正体もわからなければ、田中にしたって様子見に回る時間が増える。

すると、見慣れない剣術にバーリアンが慣れる時間が生まれてしまった。天才故に、初見の剣術を次々と吸収していく。

……それでも、だ。

「これで終いだ」

「……参った」

田中が勝った。

時間にして、30分程度、真剣での決闘としてはあり得ない長さ。

「英雄の名は伊達じゃないか、手加減しやがって」

バーリアン・ローグウッドがぼやく。逃げ場のない体勢に追い込まれ、刀を突き付けられて勝負は決した。

やはり、対人戦に於ける引き出しの多さで田中が競り勝った格好だが、コレほど長引いたのは田中がバーリアンを殺したくなかったからだ。

なにせ今回はハッキリと試合形式。荒れた決闘となったあの時とは違う。

ココで戦争を手打ちにするならば、殺さずに試合を終わらせるべき。その位はやってやると、田中は試合の前に誓っていた。

「お前も悪くなかったぜ」

「その剣術。次は見切ってやるからな」

「戦場に次はねえよ！」

バーリアンに言い捨てて、すり鉢を後にする。

勝利した田中に笑みはない。アレだけ大口を叩いて大苦戦、ミニエールに喧嘩腰で絡んだのがみつともなく思える。

良く考えれば、ミニエールはタナカなんぞ楽勝と言ったワケでは無い。同じ人間なん

だから勝敗は解らないと至極まっとうな事を言っただけ。

事実、その通りの試合になったのだ。

田中は非礼を詫びるつもりでミニエールを探した。

「よおー！」

「あ、あう……」

今更に田中の実力を思い知ったミニエールは、声を掛けられ後ずさる。

「ん？ ああ、汗くせえのは勘弁してくれ。変な難癖つけて悪かった。実際アイツは強かったよ。俺がもう少し魔剣相手になれてなきや、結果はわからなかったぜ」

「そ、そ、そ、そうか、それは良かった」

良かった？ 何が良かったのか、言ってる本人も解らない。

ミニエールにしてみれば、いきなり人外バトルが始まって、ぼーつと見てたら決着して、何故か謝られた格好だ。

「ソレにしてもよ、アンタから見て、俺とアイツにはそんなに差があるかい？」

田中が顎で示したのはユマ姫、ではなく、横に居るネルネである。

いや、そんな事を聞かれても全然解らないのがミニエールである。鉄をバターみたい

に切り裂く剣士と、人をグチャグチャにする呪い。

比べろと言われるても困ってしまう。

「そ、ソレは、比べられるモノでは無いだろう？ 強さの次元が全く違うと、そう言わざるを得ないな」

知った顔でそんな事を言うのが精一杯。

「そうかよ……」

功労者である田中はシヨンボリと肩を落として消えていった。

「?!」

良く解らないながらも、ホツと息をつくミニエールは、あらためて周囲を見回す。

結局、恐れていた呪いはない。

全ては考え過ぎだったのか？ そう思った時だ。

「この決闘、無効である!!」

看過出来ない声が帝国側からあがったのである。

アレだけの戦いを見て、なおそんな世迷い言をほざくか！ と、怒り心頭になったミニエールは、慌てて声の主に詰め寄った。

下手をすれば停戦が台無しなので必死であった。

「貴様！ どういうつもりだ！」

「どうもこうも、勝手な事をされては困ります」

「なんだと？ 今は私が全ての責任を……」

……言っている途中で気が付いた。

この男は、あの小姓だ。テムザン將軍の死に際を語って見せた、あの小姓である。
「責任者は貴女ではない、あの御方だ」

「……馬鹿な!？」

小姓はすり鉢の縁に立つ人物を指し示す。

それは紛れもなく、死んだはずのテムザン將軍だったのだ。

転進する戦乙女

「テムザン、將軍？」

ミニエールは目を疑った。

テムザン將軍は呪いの力で肉塊になり果てた。その姿、彼女は確かにその目で見ていた。

人が一瞬にして肉塊となり果てる非常識。作り話と笑い飛ばすには、肉塊はあまりにももらしかった。父のタリオン伯など最後まで疑っていたが、彼女はソレが紛れも無いテムザン將軍なのだと理解した。

だからこそ、あり得ない。

呆然とするミニエールを他所に、周囲は沸き立つ。

「將軍！ 〴〵無事でしたか！」

「將軍が存命ならば、この戦、勝てるぞ！」

「停戦は中止だ！」

快哉を叫ぶ兵士達の声すらも、どこか遠く聞こえる。

なにより、この決闘が無効と言うのはマズい。既に停戦条約は結ばれた。反故にする

となれば、それなりの理由が必要だ。

一番ありそうなのが、テムザン将軍死亡に伴う暫定司令官の認定プロセスに難癖を付けられ、自分が処分されること。

だからこそ、ミニエールは必死だ。坂道を駆け上がり、すり鉢の縁に立つ将軍に食い下がる。

「将軍、今までドコに？ それに停戦が無効とは？」

「近づくな女郎、無礼だゾ！」

「なにっ！」

しかし、ミニエールは将軍に近づく前に、将軍の親衛隊、見上げる様な体躯の騎士に押し止められてしまう。

そこで思い出す。

そう言えば、テムザン親衛隊は司令部の命令を無視して戦線を離れていたのだ、その理由がまた傑作だ。

『呪われたテムザン将軍を、魔女に解呪させる』

あの肉塊をどうするつもりなのか、担いで消えてしまったワケだ。

体の良い言い訳とばかり思っていたが、まさか本気だったとは。夢にも思わなかったミニエールである。

それにしても女郎とは言ってくれ。ミニエールは正式な手順を踏んで暫定司令官として任命されている。それをこの扱ひ、彼女にとつても面白いハズがない。

声を荒らげ、食い下がろうとしたその時だ、人垣の隙間から、テムザン將軍の姿がハッキリ見えた。見えてしまった。

思わず、ゴクリとツバを飲み込む。その目が、とても正気には見えなかったから。

あまりに変わり果てた姿。振り上げた拳から、思わず力が抜けるほど。

そして、下からは見えなかったが、テムザン將軍は自分の足で立つても居ない。騎士が担ぐ輿に乗っている。

誰もその異常事態を指摘しない。

確かに、一見すると、すり鉢の縁に立ち、輿の上から両軍を睥睨するなんて、いかにもテムザン將軍らしい登場の演出に思える。決闘が終わったタイミングも見事。

だが、力ないその足先に、だらんと垂れ下がる腕に、意志の力が籠もっていない。なによりもその眼差しに、ギラつく力が感じられない。

(コレは、人形だ！ 魔女が作った、呪いの人形！)

ミニエールは直感的に理解した。全ては仕組まれた魔女の罠だと。

ミニエールは、解らないものを解らないままにしておける性格だ。解らないモノは仕

方がないと深く考えない性格だ。

これは、愚かな様で、愚かではない。

簡単なようで、簡単ではない。

あり得ない事象に直面した時、人はなかなか現実を直視出来ない。何かの間違いだと思おうとする。

例えば、タリオン伯などがそうだ。状況証拠と証言から間違いないと言うのに、肉塊をテムザン將軍の遺体だと信じ切れなかった。

或いは、木村の様な人間であれば、既知の事象から納得出来る正解を導こうとする。

グチャグチャに変じたテムザン將軍の遺体を前にすれば、体に爆弾を仕込まれたとか、時限式の毒を盛られたのだとか、何か理由を付けて納得しようとするだろう。

しかし、ミニエールは深く考えない。自分程度に解らないモノは、この世の中に当たり前にあるのだと思っている。

だからこそ、彼女だけがテムザン將軍殺害の犯人に気が付いた。

テムザン將軍の遺体には、犯人の強烈な怒りが籠もっていた。

ユマ姫が犯人ではないとすれば、怪しいのは傍に居るエルフの侍女しか考えられない。あらゆる思い込みを捨てて冷静に観察すれば、ユマ姫の反応からも明らかだ。

一介の侍女がそんな大それた事を一人で出来るはずが無いとか、そんな常識にミニ

エールは囚われない。

理解出来ない力なのだから、理解出来る犯人だとは限らないからだ。

実際は呪いではなく、ネルネの持つ奇蹟の技なのだが……

呪いも、奇蹟も、区別する必要など、まるで無い。

ミニエールにとって、目で見て感じたモノが全てであった。

だからこそ、今回も気が付いた。

突如現れたテムザンは間違いなくニセモノ。アレはただの人形だと。

普通だったなら、そんな事は思わない。見た目がソツクリな人物が突然現れるなどあり得ない。

怪我が治ったばかりで足腰が立たず、シヨックでぼんやりとしてるだけ。

そもそもテムザン將軍の死は欺瞞だった。訳あつて隠れていただけ。

そう考える方がよほど自然。

だけど、良く見れば、あの肉塊はどうみてもテムザン將軍の遺体だったし、目の前のテムザン將軍は同一人物とは思えぬ程に覇気が無い。

ならば、アレは人形なのだ。

どんなにソツクリに見えても、魔女が悪意を込めて作った呪いの人形だ。

実際は、黒峰が肉塊を元に研究所で培養した人造人間。中身はまっさらな赤ん坊と

なったテムザンのクローン。呪いどころか、科学技術の結晶だ。

しかし、ソコにどれほどの違いがあるのだろうか？

十分に発達した科学を前にして、魔法と区別する必要などドコにもない。

解らないモノにXを代入するように、呪いの仕業と仮定すれば、テムザン將軍の死も呪いだし、その死体が魔女の元で人形に変わったのもまた呪い。

重要なのは、誰が何を企んでいるか。ミニエールはそれ以上に難しい事は考えない。だからこそ、周囲を見つめ、気が付いた。

良く見れば、既にすり鉢は見慣れぬ軍隊に取り囲まれている。

その数、三千は下らない。

このすり鉢の地形、縁まで近づかれてしまえば撃ち下ろすばかり、絶好の鴨撃ち場になつてしまう。

ソレが解つていながら、哨戒はどうしていたのかと叫び出しそうになるミニエールだったが、その手品のタネもよくよく見ればスグに解つた。

魔導車だ、夥しい数の魔導車で一気に軍を展開した。これなら騎兵の注進よりも早く包囲が完成する。

笛で伝令しようとも、一騎討ちに盛り上がる歓声に全て掻き消されたに違いない。

何の為にこんな事を？ コレではまるで殲滅陣だ、すり鉢の中の誰も生かして帰さな

いと言う布陣。

ここでも同じ、ミニエールはテムザン将軍が味方ごと殲滅するなどあり得ない、とは考えない。

だからこそ、考えるべきは『どうして味方まで殺すのか』と言う一点のみ。

(そうだ！ テムザン将軍がただの人形ならば、皆を騙し通せるハズがない。自分など、ひと目見ただけで気が付いたのだ。だからこそ、短期決戦。魔女は一息に全てを焼き払うつもりだ)

そう考えれば、全ての仮定が繋がってしまう。

一瞬にして、ソコまで思い至ったミニエールの行動は？

「に、逃げないとッー」

ただ逃げ出す事だった。すり鉢の底に残る同胞の騎士団も、父であるタリオン伯ですら見捨て、ただ一人で逃げ出すこと。

それだけ、包囲されたこの状況は詰みに限りなく近い。

ならば逃げの一手。幸いにして、今ならミニエールに注目する者は誰も居ない。既にすり鉢の縁にまで来ているのだ、どきくさに包囲を抜けるのは難しくない。

「や、やった？」

こつそりと包囲を脱したミニエール。しかし、その前に立ち塞がる影があった。

「サファイア！ 来てくれたの!？」

ソレは、彼女の愛馬。白馬のサファイアだったのだ。

「啞えているのは……まさか軍旗?」

——ブルウ

サファイアは大きな軍旗を啞えていた。

そうだ、コレを掲げて本陣の戦力と合流しよう。一騎討ちの観戦を許されたのは騎士や直属の軍閥だけで、多くの農兵を本陣に待機させている。銃を持った彼らは、戦力として見れば、もはや少数の騎士を圧倒するのだ。合流すれば、敵だつて易々と手は出せないだろう。

王国軍に停戦を持ちかけた時と一緒だ。目立てば却つて殺せない。

ミニエールは旗を掲げ、本陣へ向けて白馬を走らせる。

策は当たつた、誰も旗を掲げたミニエールを的にしない。悠々と本陣へ帰還を果たす。

「ミニエール様!」

「ミニエール様が戻つたぞ!」

「さっきの、馬のない馬車の集団はなんですか!」

本陣に帰るなり、ミニエールは農兵達から質問攻め。

まつさらな平原からは、魔女の軍勢はよく見えていたらしい。既に本陣は混乱に陥っていた。何せ指揮する者が誰も残っていない。

だから遠慮なく、ミニエールは好き勝手言えるのだ。

「皆の者！ よく聞け！ アレは、魔女が放った呪いの軍勢だ！ 魔女は帝国を裏切った！ 我に続け！ この地に呪いが満ちる前に！」

滔々と宣言する。

そうだ、本陣に合流したミニエールはそのまま撤退するつもりだった。

それもそのはず、包囲された味方を助けようにも、その場合はテムザン將軍に弓を引けと命じなくてはならない。

アレは魔女の作った呪いの人形だと説明しても、現場の混乱は免れない、なにより万が一にもミニエールの勘違いならシャレにならない。

良く解らない事が起きたら、まずは撤退して仕切り直す。ミニエールが教わった戦術の基礎だった。

突然の撤退命令、農兵達の反応は？

「まさか、魔女が？」

「だとすれば、テムザン將軍の死も領ける！」

「全部アイツの仕業だったか！」

思いがけない返事が返った。

なるほど、テムザン將軍の死まで魔女の所為にしてしまうのは、ミニエールにとつても悪い手ではない。

下手な混乱が起こる前に、ミニエールは先手を打った。

「そのテムザン將軍を、魔女は呪いの人形として復活させた！ 地獄の窯を開いてしまった！ 逃げるのだ！ 間もなくここも地獄と変ずるぞ！」

「そりゃ、ホントですかい？」

「おっかねえ！」

「だが、真実だ！ 我に続け！ 死地を脱する！」

こんなモノは言つた者勝ちである。

そして信心深い農兵達の間で、戦乙女として知られるミニエールの人気はすこぶる高い。

多くの兵を引き連れて、堂々と逃げを打つ。その矢先、だ。

「痛ッ！」

肩に激痛が走った。

何事と、手を当てればだくと血が流れている。撃たれた？ ドコから？

見渡せば、今来た道を追いかけてくる車が一台ある。

魔導車だ、それもとびきり不気味な一台。その天井で、仁王立ちにコチラを見つめている相手こそ、あのユマ姫の侍女、ネルネだった。

「コレ、の、呪いなのか？」

ミニエールには彼女に呪われる心当たりが山ほどあった。

停戦をエサに王国軍を釣り出し罠に掛け、自分は一人だけ逃げようとする。

現状はそう思われて当然なだけに、顔面がハッキリと蒼に染まった。

「ミニエール様？」

「大変だ！ 血が出てる」

周りの農兵も、いよいよ異常に気が付き始めた。

「心配ない、少し呪いが掠っただけだ」

「呪いが？ そんな！ 早く逃げないと！」

「いや……」

もう逃げられない。呪いは自分に狙いを付けている。

そして、いよいよ怪しげな魔導車が逃げようとする軍勢の目の前にすべり込み、行く手を遮る。

「なんだこの不気味な車は！」

「お助けを！」

「慌てるな」

パニックに陥りそうな軍をミニエールが抑える。

そうして木村が運転する魔導車から飛び降りたネルネは、貫つたりボルバーを手に、ミニエールに詰め寄る。

「ミニエールさんッ！」

「は、はい……」

「一人で逃げるなんて、酷いですよー！」

「す、スミマセン」

ミニエールはビビリ倒していた。なにせ相手は魔女よりも、よほど恐ろしい相手である。

しかし、周囲はそうは思わない。ネルネは一見すると普通の侍女でしかないからだ。

「何だ、あの娘っこは？」

「えらい剣幕だが」

「あの変な杖はなんだ？」

リボルバーなど見たことがない農兵達。彼らにとって銃と言うのは長い火縄銃だけである。

「アレが呪いの姫君なんだべか？」

「まさか！ オラはユマ姫を見たことあるが、そらあ恐ろしい姿をしていたべ」
だから、まさか立派な騎士であるミニエールが、小さな侍女に脅されているとは夢にも思わない。

「あなたは約束を破りました！ このままでは呪いで死にますよ！ 良いんですか！ 殺しますよ！」

「ひゃー！ やめて……！」

腰が引けたミニエールに、ネルネはリボルバーを突き付ける。

「ほらっ早く！ 引き返して！ ユマ様達が、まだあそこに残ってるんです！」

「え、ええ〜」

「四の五の言わない！ 行きますよ！」

渋るミニエールをヨソに、ネルネはミニエールの白馬の後ろによじ登り、背中からゴリゴリとリボルバーを押し付けた。

「私は、弾丸に呪いを込めて発射します！ グチャグチャになって死にますよ！ 本当ですよ？ だから早く！ ユマ様を助けて！」

「いや、無理です！」

ミニエールだって仲間を見捨てて逃げるのに、葛藤がなかったワケでは無い。しかし、敵の配置と武装を見れば、既に勝ち目は無い。数で勝っても地形と武装が違い過ぎ

る。なにより、帝国兵はまさかテムザンが敵だとは、すぐには信じられないだろう。戦いにもならない。

そんな所に突っ込んでどうすると言うのか？

と、ソコで閃いた。この侍女の呪いの力があつたならチャンスがあるのでは？

ミニエールは背後のネルネに尋ねる。

「あの……呪いを弾丸に込めると言うが、それは、魔女の軍勢にも効くのですか？」

「ええ？ ええ？ あの、ええと」

呪いを弾丸に込めるなど大嘘。まだ人殺しに慣れてないのがネルネである。

しかし、人殺しは苦手などと言ってしまえばもう脅しにならない。

「そ、そりゃあ、効きますよ！ 呪いでもん！ 無敵でもん！ その、あの、そんな

に一杯は無理なんですけどその……」

「……何人ぐらいなら倒せる？ テムザン將軍や親衛隊を何人か討つだけで流れが変わる」

要はアレが呪いの産物だと見せつけければ良いのだ。呪いには呪いをぶつける！

僅かな可能性に縋るミニエールが、ネルネへ熱っぽく語る。

「えええ？」

自分にお鉢が回ってくるとは、思ってもなかったネルネである。ミニエールを脅して

帝国兵をぶつけるぐらいにしか考えて居なかつた。

一方のミニエールは、ネルネの呪いに賭けた。テムザン將軍が再び呪いで肉塊に変じれば、魔法の軍勢に味方する者はいなくなる。

「えと、あの……多分五人ぐらい？」

熱っぽい目で見つめられ、ネルネは一人だつて殺したく無いとは言えなかつた。

リボルバーが何発撃てるかも知らないネルネは、覚悟も定まらぬまま、適当に答えてしまつた。

しかし、それでミニエールの腹は決まつた。

「皆の者！ 聞け！ 魔法の呪いに、ユマ姫の呪いをぶつける！ 今こそ好機、魔法の軍勢を平原から追い払うのだ！」

「なんと！」

「やつてやりましょう！」

「オオツ！」

ミニエールの人気は兵士達の間ですこぶる高い。やれ聖女とか、やれ戦乙女と崇められている。

そんな彼女が今しか無いと言うのなら、その通りに違いないのだ。突然の方針転換に文句を言う者など一人も居ない。

「えええ？　なんで？　あの？　止めましょ！　危ないですって！」
ネルネを除いて一人も居ない！

いつの間にか、戻ろうとする者と、逃げようとする者、立場がそっくり逆転していた。そして、もうヤケクソなミニエールである。

「まず、私が突っ込む！　敵が混乱した所を呪殺しろ！　奴らをひっくり返してやろうじゃないか！」

「ええっ？」

ひっくり返ったのはネルネだ。後はミニエールを心配する農兵達。

「そんな！　それじゃ姫騎士様が！」

「馬鹿！　戦乙女様に弾丸が当たるかよ」

「ソレで良い！　いざとなったら私ごと撃て！」

「あの、私は？　私には当たるんですけど？」

ミニエールはヤケクソだ。呪いの力を味方に、すっかり気が大きくなっていた。そして、ネルネは泣きそうだ。

「イチかバチか！　付き合っつて貰います！」

「ふえええ！」

ネルネは悪い事はするもんじやないと、呪われたのは自分だったのだと今更に後悔し

まくっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、時は少し巻き戻る。

まだ決闘の熱気が冷めやらぬすり鉢をヨソに。木村はお祭り騒ぎの為に物資の搬入に追われていた。

魔導車に乗って、既にスフィールとの間を三往復目。木村は決闘になど興味は無く観戦していなかった。どうせ田中の圧勝に違いないからだ。

すると、思いの外盛り上がったらしい決闘の歓声に驚きながら、車を走らせすり鉢の脇に車を止めた。

その時、運び出す物資と入れ替わる様に、魔導車に飛び込んで来た人間が居た。

「はあ、もう、気持ち悪い」

ネルネである。

聞けば、決闘が終えた田中が、ネルネをねつとりと睨みつけて来るのだと言う。

「ははあ、いや、アイツも悪気はないと思いますよ」

「はあ？ 悪気がなかったら死んだ方が良いですよあんなの！」

嫌われたモノだと木村は頭を掻く。

それにしても……だ。

田中は、ネルネみたいな娘がタイプだっただろうか？ もつとこうお姉さんののが……いや、しかし、こうやってツンツンしてるのは好きかもしれない。

なにより、人の好みと違うのは変わるモノだ。それにしても、見つめ過ぎで嫌われるとは、どれだけ初心で不器用なのかと呆れてしまう。

「アレ？ 何ですか？」

ネルネに言われて気が付いたが、すり鉢は気が付けば異様な軍勢に取り囲まれている。

「マズいぞー！」

木村はすぐにその正体に気が付いた。魔女の軍隊だ！ 魔導車で一気に包囲し、大量の重火器ですり鉢を撃ち下ろすつもりに違いなかった。

しかし、既に状況は詰みに近い。王国軍の主要な部隊はすり鉢に集まっている。

全てが帝国の罠だった？ いや、ソレにしてはミニエールさんにそんな邪気は感じなかったのだが……と木村が周囲を見渡せば、そのミニエールが白馬に乗って帝国本陣へと駆けていく。

「やはり、罠だった？」

「いや、ただ逃げますよアレ！ 追ってください！」

ネルネに言われて魔導車を走らせる。

「ソレにしても、追いついてどうします？ 我々だけじゃ……」

「ミニエールさんは、私の事を怖がっているんです。私が呪いの正体だと思って思っているから」

「え？ どうしてそんな事に……」

「いいですから！ 早く！ あと銃を貸してください。帝国軍の前に回り込んで！」

「正気ですか？」

そうしてミニエールが率いる帝国軍、撤退するその鼻先に回り込んだのだ。

コレは普通に自殺行為。木村は穏便に交渉しようとしたのだが、鼻息が荒いネルネが一人飛び出して、銃を片手にミニエールと『お話し』を始めてしまう。

すると、どうだ？ 覚悟を決めたらしいミニエールが軍を転進させ、すり鉢への突撃を開始するではないか。

「皆の者！ 聞け！ 魔女の呪いに、ユマ姫の呪いをぶつける！ 今こそ好機、魔女の軍勢を平原から追い払うのだ！」

「オオツ！」

戦乙女の掛け声と、鬨の声が勇ましく響く。

ネルネはやったのだ。たった一人、ハツタリだけで軍勢を動かしてみせた。

数千の軍が雪崩を打って転進、すり鉢を包囲する魔女の軍隊へ向け、雪崩を打って進

撃を始めた。

コレに感動した木村は、先頭をひた走るミニエールに装甲車で併走し、叫んだ。

「装甲車を盾にします、その隙に斬り込んでください！」

「助かる！」

ミニエールから威勢の良い声が返った。

よし、行ける！ 勢い良くアクセルを踏む木村だが、勇ましいミニエールの後ろで顔を蒼くしているネルネが気になった。

アレだけ強気な事を言っていたのに、おかしな話ではある。

「まあ、女の子だしな」

木村は、こんな時に限って深く考えなかった。戦いの予感に、柄にもなく興奮していたからだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後はとんでもない乱戦になった。

先陣を切って飛び込んだ木村の装甲車は、車輪を撃たれて横転した。

その後をミニエール達帝国軍が斬り裂いていく。

すり鉢では田中や、魔槍使いのバーリアン・ローグウッドが奮戦している。他の騎士だって、一騎討ちを観戦していたのは猛者ばかり。一方的に撃たれる状況でなければ十

分に戦える。

戦況が読めない所まで巻き返していた。

「グオオオオ！」

そんな状況が一変したのは、テムザンの親衛隊がその体を化け物に変じさせた時だった。

「まさか、改造人間か！」

木村は、遺跡の奥で、人間を培養する機械や、生き物を保存した痕跡を見つけて以来、ひよつとして思っていた。

やはり、古代には恐ろしい怪物を作成していた、その技術を黒峰は手に入れたのだ。

膨れ上がった人型の怪物が、縦横無尽に暴れ始める。

「なんだ、アレは！」

「ば、化け物！」

そうなれば、もう、総崩れだ。信心深い異世界の人々に、筋肉の膨張した兵隊は悪魔の軍勢に見えたに違いない。

そこに、ミニエールが斬り込んだ。

「無茶だ！」

木村は叫ぶ。相手は普通の人間に敵うような相手では無い。最低でも田中のような

常識外の力が必要だ。

白馬に跨がるミニエールは美しく、伝説の一場面に見える。しかし、これはハッピーエンドが約束された物語ではない。相対する親衛隊は化け物と化し、馬に跨がるミニエールよりも更に大きく、振り上げる拳は巨石の様だ。

このままでは、白馬ごとミニエールとネルネは挽き肉にされてしまう、その瞬間。しかし、神話の如き奇蹟は起きた。

筋肉の怪物は次々と弾け、肉塊になり果てる。

「失敗作、だったのか？」

その正体に、木村は気づけない。ネルネの射撃だ。不安定な体などネルネにとっては的に過ぎない。それになにより、人間に見えない姿なのだから、彼女にとっても罪悪感が薄いのだ。容赦なく、弾き飛ばした。

「テムザン、覚悟！」

そして、ミニエールがただの人形であるテムザン將軍の首を刎ねた。

その光景たるや、それこそ神話の一ページにしか見えない。

「ぐびっ」

切り飛ばされた、テムザンの首が聞き苦しい悲鳴をあげる。

ロクに覚悟も意識も無い人形だからこそ、斬られたショックに呻いただけだ。だが、

それはその場の全員の耳に不気味に響いた。

——ドオン！

その時、爆音が響いた。

魔女の放った迫撃砲。あの時と同じ、失敗を悟った魔女の、最後の仕掛け。

だが、タイミングが完璧だった。これでは殺されたテムザン将軍が呪いとなつて、空から死を撒き散らしているようにしか見えない。

「太陽が降つてくる！」

「天が俺達を殺そうとしているぞ！」

「お助け！」

「くそ、俺達は死ぬのか！」

パニックに陥る軍隊の中で、誰よりもパニックに陥つたのはユマ姫だった。

「ひいー」

彼女はひっそりと、木箱の中に隠れて震えていた。ハツタリで逃げ出すために呪いの衣装に着替え、身を縮こまらせて嵐が過ぎ去るのを待っていた。

それが、迫撃砲の爆発で木箱ごとすり鉢の底に転がった。這々の体で木箱から這い出したユマ姫は、目隠しを外して呆然と天を見上げる。

「なにこれえ……」

転がるテムザンの生首と、グチャグチャに崩壊した肉塊。空からは爆弾が次々と降り注ぎ、人を紙くずみみたいに吹き飛ばす。

泣きたくなるほどに酷い状況。だが、ソレは周囲から見れば全く違う光景に映った。

「呪いの姫君!」

「どこから? どこから現れた!?!」

呪いの姫君がすり鉢の底に突然に現れて、天を見上げる。

すると、どうだ?

「雨だ!」

「ユマ姫が太陽を殺した!」

「攻撃が、止んだぞ!」

実際は、援軍にきたリヨンさんがフォツガで雨を降らせただけ、雨に濡れた迫撃砲が発射しにくくなったただけなのだが、ソレはこの戦いを説明するのに十分ではないだろう。

全てのタイミングが完璧に噛み合って、神話の景色を作り出していたからだ。

「なにが起こってるんだ? 嘘だろ? 本当に神が?」

戦場全体を見下ろし、全てを見ていた木村ですら神の存在を感じるほど。

それほどに、この戦場には奇蹟ばかりが起こっていた。

もう誰も、誰が何をして、何が起こったのかなど、理解出来て居なかった。

戦車と怪獣

危機は去った。ざあざあ降りの雨は嘘みたいに過ぎ去って、雲の合間から差し込む光が、すり鉢の底まで照らし出す。

先程までの絶望が嘘のよう、希望に満ちた光景だった。

魔女の罠をしのぎ切ったのだ。勝利に気が抜けたこのチャンス、虎視眈々と窺っていた女性が一人。

「私は魔女を誅する！　かの悪女、もう罷りならん。皇帝陛下の御乱心を正すのだ！」
ミニエールである。

白馬に跨がり、軍旗を振りかざすミニエールの勇姿。まだ神話は終わっていないのだと印象付けるに十分だった。

「我らは戦乙女と共に！」

「正義は聖女にあり！」

農兵達を中心に大きな声があがり、動揺する騎士の間にもぼつぼつと賛同の声が広がった。神話のような奇蹟の連続に、その場の全てが吞まれていた。

ソレを見て、上手く行つたとミニエールはホツと息を吐く。

なにせ魔女クロミーネはおろか、神に等しき皇帝の乱心まで口にすれば、もうタダでは済まない。後戻りなど出来ない。非常に危険な賭けだった。

だが、なあなあで済ませれば、また自分が悪者にされる。彼女は皆が見つめる中、テムザン將軍の首を刎ねてしまった。もう全部の罪を魔女になすりつける以外に道が無いのだ。

ところが、魔女は皇帝陛下のお気に入りでもある。皇帝の浅慮を正さなければ、自分は今も自領ロアンヌの未来は閉ざされる。ミニエールは妄執に囚われていた。

一歩間違えば、皇帝への反逆とも取れる、ミニエールの衝撃の発言。押し通すチャンスは彼女が狙っていたのだ。

後世の絵師は証言を頼りにこの瞬間の絵画を描く。虚空を見つめ感情の読めない戦乙女の眼差しに、神性を見出す者が続出したと記録に残る。

この時のミニエールの思考、歴史家の間では議論の的だ。

しかし、実のところはどうだろう？

(ヒヒツ、やってやる！ も、もう！ 行くところまで行くしか！)

ミニエールはヤケクソだった。目はグルグルと渦巻き、正気は失われている。

なにせ、彼女を悩ませるのは帝国内部のイザコザだけではない。

王国軍と停戦を結んだのは他ならぬ彼女である。王国から見てこの騒動はどう映っ

たか？ 彼女が思うに、停戦を反故にされ、罠に嵌められたも同然と怒っているに違いない。恐らくこのまま引つ込む事はないだろう。

帝国だけでなく、ミニエールは王国からの突き上げも恐れていた。責任を問われ、殺されかねない。

かといつて、間近でネルネの呪い？ を目の当たりにした彼女に、もう王国軍と争う選択肢はない。

「思えば、大森林への進軍も、全てが魔女の描いた絵図。我らは諍う様に仕組まれたのだ！」

だからここでも軍旗を振り回し、呪いの矛先を魔女に向けるのを忘れない。帝国も王国も、全てのヘイトを魔女に向け、この場を乗り切るつもりであった。実際に殆ど魔女が悪いので罪悪感もない。むしろ必死である。

しかし、彼女の暴走に頭を抱えてしまったのが、他ならぬ王国軍の総司令、オーズド伯だ。

「ぬう……」

彼にとつて、混乱が鎮まらぬ最中へミニエールの宣言は寝耳に水。

先ほどの爆撃は帝国将校も構わず巻き込むモノだったので、彼女の仕向けた罠だとは露程も疑って居ないのだ。実のところ、オーズドは停戦に十分な条件を吞ませた時点

で、もう戦争を終わらせたかった。

後は帝国の内乱、好きにやってくれと手を引くつもりだった所に、ミニエールの宣言だ。

もう味方の騎士達はすっかりその気で、ここで手を引けば腰抜けと笑われるに違いない。

そればかりか、仇を討つ絶好の機会を棒に振ったと、エルフとの同盟まで危うくなるだろう。魔力の関係で轡を並べる事は難しくとも、魔導車の提供だけで戦争が大きく変わったのは将校なら誰でも感じる所。

ソレを敵に回す可能性。エルフがミニエール派への鞍替えとなると非常にマズい。なにせ、ミニエールはエルフの侍女を背に乗せて戦場に舞い戻った。既に何らかの話が済んでいる可能性もある。

オーズド伯は、ネルネの事をユマ姫が連れて来た連絡員だと思い込んでいる。

「やられたな……」

オーズド伯にしてみれば、完全にミニエールにしてやられた格好だ。

なにより、タイミングが素晴らしい。オーズド伯ですら演説に胸を打たれた。

こうして王国軍は、まんまと帝国の内乱に巻き込まれてしまったのだ。誰も望まぬ形のままに。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
かくして、戦乙女の軍勢と王国軍、揃って帝国領に切り込んだ。

そこに戦闘は発生しない。

勇ましくも美しいミニエールの勇姿に、帝国の領主達は黙って道を譲ったからだ。

何より、奇蹟の連続を目の当たりに興奮する帝国兵の口が回ることに回ること。領主達も魔女の非道と戦乙女の評判を聞きつけて、食糧の提供まで約束するほど。

なにせ、王国軍に切り取られるのは、ゼスリード平原までと決まっていると言うのである。無理して戦う理由がドコにもなかった。

そうして帝都までも窺える場所、スールンまでやって来た。

かの地は泥炭の産地であるが、乾季となれば燃えさかる乾いた土が舞い、魔獣がウロつく地獄である。

しかし、何も無い荒野と言う事は、魔女の軍勢が決戦の地を選ぶ可能性が高いと言う事。

魔女は機動力に勝る魔導車を大量に保有している。だからこそ、すり鉢の包围もアレだけ迅速だったのだ。

魔導車で鉄砲隊を運用し、距離を保って銃を撃たれば、どんな軍勢でも勝ち目が無い。乾季であるが故、雨の心配も無い。

向かうところ敵無しミニエールと王国軍も、スールーンの荒野に立ち入るには躊躇し、直前で野営を張った。

「思った通りだ、奴らスールーンで決めるつもりだぜ」

単身バイクで先行していた田中が舞い戻る。その顔にはらしくないほど憔悴が浮かんでいた。

「何を見たんだ？」

「聞いて驚け、奴ら戦車を作ってやがった。それも大量に！」

「おいおい！ マジで？」

叫ぶ木村と対照的に、ピンと来ないのがこの世界の人々だ。木村はかいつまんで説明した。

「早い話が、この装甲車に大型の大砲を積めば完成です。矢も槍も刺さらず、一方的に攻撃されます」

「そんなモノ相手に、我々はどうすれば？」

「……………」

ミニエールの言葉に、木村とて、黙るしかない。

コチラも大砲で迎撃するか、田中の魔剣で戦うしかないだろう。それぐらい戦車と言う存在は厄介だ。

今回の帝国は、ゾンビや星獣ではなく、戦車を揃えて戦うつもりでいる。さて、何故コチラの世界ではコレほど帝国の戦法が異なるのか？

実は誰よりも魔導車に可能性を感じていたのは、帝国情報部のギテムツド老。あの時はゼスリード平原でグリフォンに殺されてしまったが、この世界では生き延びて、魔導車の改造に心血を注いでいた。

そのため、予算が足りず、魔女のゾンビ計画や、星獣の復活計画は立ち後れて居たが、ソレを補つて余りある程の成果として戦車をズラリと揃えてみせた。

騎士がえいやと戦う世界に、不完全ながら大砲を備えた鉄板で補強された車が走れば、騎士など一方的に蹂躪するのが必然。

もはや戦場は戦車が蹂躪する近世の領域に踏み込んだ。騎兵と火縄銃を幾ら揃えても勝ち目がない。

——バアアアーン！

どんよりとした空気が支配する陣地の中、火薬の爆ぜる音が遠くに響いた。

「なんだ？」

「随分と遠いが？」

断続的に聞こえ始めた爆発音に、皆が顔を見合わせる。

「スールーンだ！ 奴ら、何かと戦ってやがる！」

誰よりも耳が良い田中がバイクに跨がり、とつて返そうとアクセルを吹かした。ソレを止めたのが木村だ。

「待て、俺達も行く」

「危ねえぞ！」

「だが、チャンスかも知れない。戦車を潰せる機会があるのなら今しかない」

「知らねえからな！」

そうして、田中を先頭にミニエール、王国連合軍はスールンへと駆けだした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

戦車が待ち受ける戦場。そこに駆け込んだ田中達が見たモノは？

パニックに陥る戦車部隊と、それを踏みつけ蹂躪する巨獣の姿だった。まるで安っぽい怪獣映画みたいな光景に、田中はあんぐりと口を開く。

「な、何だよ？ アレは！」

「星獣……本当に居んのかよ」

「木村？ お前アレを知ってんのかよ？ あんなの魔獣じゃねえ、怪獣だぜ？」

そう言われても木村だって、資料で見たただけだ。古代人の記録の中に、怪獣映画が混じったのかと訝しんだ程。

その非現実が目の前で暴れている。

「マズいぞ、奴らがやられたら、次は俺達だ」

戦車砲の一撃も、星獣にはまるでダメージを与えて居なかった。ギテムツド老率いる帝国情報部が次々と蹂躪されていく。

「マズい、コツチに来る！」

誰かが叫んだ。その通り、星獣の狙いは王国軍でもあったのだ。全軍がパニックに陥り、来た道を慌てて引き返す。

前代未聞の撤退戦が始まった。

……さて、今回、星獣の息子は非業の死を遂げていない。完全になった惑星ザイアは、もう魂などに興味がなかったから。

なら、なぜ星獣は暴れているのか？

ザイアは面白くなかった。完璧な世界が崩れていくのを感じたからだ。世界を壊すイレギュラーが存在するに違いないと地上を星獣に探させた。

そうして地上を探させれば、運命がねじ曲げられて、死ぬべき人間が生き残っている。だからまず、ギテムツド老が踏みにじられた。そうなれば次はもちろん王国軍だ。

——ガアアアア！

〈あなた達、死になさい！〉

耳をつんざく咆哮。ドスドスと音を立て、星獣が迫る。このままでは王国軍は蹂躪さ

れる。その時だ。

「どうした？ お前！ どこに行く！」

その時、勝手に隊列を離れたのがミニエールだ。正確に言うと、その愛馬であるサファイアがミニエールの手綱を無視して駆けだした。旗印である戦乙女の単独行動、帝國軍は大いに動揺した。

しかし、誰より慌てたのはミニエールである。

「コラ！ 言う事を聞け！ どうしたんだ？」

そんな事を言われても、サファイアは死にたくなかった。もちろん主人であるミニエールも殺したくない。来た道を取って返すと言う事は、後続の軍隊に詰まってしまう。だったら一人で逃げた方がマシ。

のろまな軍隊と心中などゴメンとばかり、主人を背に乗せ、たった一人で単独行動。軍隊から離れ、敢えて星獣の横を駆け抜けるルート、スーローンの荒野をひた走る。

「ミニエールさん？ まさか、逃亡？」

「いや、待て！」

撤退の指揮を執るべきミニエールが、一人で勝手に逃げ出した。

慌てる木村の叫びを田中が遮る。

——ガアアアア！

〈 あなたは、逃がさない！ 〉

この場で、死んでいるべき人間は誰か？　あの時は死んでいたハズの人間は誰だ？
他ならぬミニエールだ。

彼女は世界を壊しながらココに居る。だから、誰よりも星獣に狙われた。

「なんで？　なんでコツチに来るの?？」

パニックになったのは、ミニエールとそして愛馬のサファイアだ。

人間の犬群を無視して、怪獣は一人と一匹を執拗に狙ってくる。ソレをみた王国軍の
反応たるや、劇的だった。

まずは田中が飛び出した。

「アイツ、一人で囷になる気だ」

「嘘だろ！　どうして」

「自己犠牲、つて感じじゃねえな、やれると思ってるんだろ。行くぜ！」

もちろん、後に続くのは戦乙女の信望者である帝国の兵士達。

「戦乙女を守れ」

「ミニエール様を化け物に蹂躪されてたまるか！」

臆病なハズの農兵達ですら、見上げる程に大きい巨獣へと挑もうと駆けだした。

そうして、怪獣と軍隊の追いかけっこが始まった。

逃げる白馬に、追う巨獣、更にソレを追いかける装甲車に、騎士、遅れて歩兵の大群だ。

ここでもまるで、お伽噺の一ページ。但し、当人にしてみればシャレでは済まない。先頭を駆ける白馬に、真っ先に追いついたのはバイクに跨がる田中であつた。

「よおー！」

「たたた、助けて！ 振り切れない！」

「落ち着け、南で木村が沼地を作つた。あのデカブツを沼に嵌めるんだ！」

「沼、どうやって？」

「企業秘密だ！」

リヨンさんが雨を降らせて沼を作つて待つている。

実は、コレこそが木村が立てた戦車への対抗策だつたのだが、ソレをそのまま怪獣への罠として流用しようとしていた。

全軍をソコに待機させ、沼に嵌まつた瞬間を狙い撃つ。

……とは言つても、沼に嵌めて銃を撃ち、騎士が槍で突つついた所で、倒せる星獣ではないのだが、彼らはソレを知らずに居た。いや、知つても愛する戦乙女を諦められなかつたに違いない。

しかし、バイクと違い、サファイアもミニエールも、体力の限界だ。

なんとかミニエールから注意を逸らそうと、木村が装甲車から大砲を発射する。「コレでも食らえ！」

——ウガアアアア

ソレはなんの痛痒も星獣に与えはしなかったが、爆音と煙は星獣を大いに不快にした。

コレには、装甲車に乗っていたユマ姫が悲鳴をあげる。

「え？ コツチに来ましたよお！」

「振り切ります。ユマ様はしっかり捕まって！ ネルネさんは私に代わって大砲で気を引いてください」

「は、はいいい」

「あの……」

泣きながら手すりを掴むユマ姫とは裏腹に、ネルネは装甲車の天井に取り付けられた大砲をじっと見つめる。

ガタガタと盛大に揺れる車内から、木村に向かって言い放つ。

「別に、アレを殺しちやっても良いんですよね？」

「……………」

あんまりなネルネの一言、木村は一瞬言葉に詰まった。

幾ら相手が巨大とは言え、揺れる車内から撃てばただ当てるのだから一苦労。それどころか、狙い通り星獣の眉間にあてた木村の一撃ですら、何のダメージも与えていないのだ。

絶望的な状況ながら、強がってみせる威勢の良いネルネのひと言。

木村は勇気を貰った気がした。

「是非！ お願います！」

「ハイ！」

そして、星獣は死んだ。

常識に隠された真実

荒野に散らばる星獣だったモノが、この世ならざる景色を作り出していった。

シリコンに近い半透明の肉と、アルコールやオゾンめいた血の匂い。通常生命とハッキリ異なる死骸が山のようにそびえている。

そんな超常の産物を前にして、木村は何が起きたのか測りかねていた。

いや、本当は知っている。ネルネが大砲を撃つたのだ。そして星獣が死んだ。直後の「やった！ やりましたよお！」と言う嬉しそうな声が、はつきり耳に残っている。

しかし、あんな大砲で死ぬ相手では無いのだ。古代では核兵器で追い払ったとか、そんな記録が残っている。

……偶然だろうか？ たまたまそのタイミングで自壊した？

思い出すのは、前世で見たアニメ。なぎ払え！ の後、巨〇兵がひとりでに崩れる様は、今でもハッキリと脳裏に焼き付いている。

今回も同じ。魔女が仕込んだ未完成の星獣が、制御を外れ帝国を攻撃。最後には耐えられず自壊した。

ありそうに思える。普段の木村だったら、そうやって結論を出すだろう。

ただ、同じように人間が崩れる様を最近木村は最近間近で見ている。それもまた、ネルネが銃を撃った直後、相手は化け物と化したテムザン親衛隊。

……そして、忘れもしない。変死したとされるテムザン將軍自身もまた、ネルネに銃を撃たれている。

一度なら偶然、二度目は奇蹟。しかし、三度目となれば必然と言うしかない。

しかし、解らない。理屈が、何も。

秘められた力？ 魔法の使い手？ まさか本当に呪いなのか？ 木村は必死に記憶を

ひっくり返していく。

良く考えればユマ姫は繰り返していた。「ネルネの射撃の腕は世界一なんですよ」と。

それを木村は本気にしていなかった。ネルネは照れて「もう、大袈裟ですよ」と文句を言っていたし、思春期の少女にありがちな、身近な人間を過大評価するノリなのだと思います。

……そう言えば、ネルネさんが銃を撃った事って？ 今まであったか？

その時、木村の背筋がゾクリと震えた。思い出したのだ、火縄銃の試射会を。ユマ姫が撃つたのが、手に取った途端にポロポロに崩れ落ちたのを。

どうして忘れていたのだろうか？ ただのが風化していただけと思えばもうとしたの

だ。一瞬、ユマ姫の呪いかと疑って、馬鹿な考えとすぐに脳から追い出した。的に当てたのはネルネなのに、ユマ姫が隠れ蓑になり、その犯人に思い至らなかった。そうだ、彼女が撃ったモノは、全てグチャグチャに、原形を保たぬ姿に崩れ落ちている。

木村は必死にその理屈を探そうとする。しかし、何も思い当たらない。

その時だ。長年の親友が背後から語り掛けたのは。

「流石だな、ガイラスさんの魔法はよ」

星獣の死体を眺めてしみじみと語る。

一瞬、木村は何の事か、誰の事か、まるで解らなかつた。

「ガイラス？ エルフの戦士であるガイラスさんが来ているのか？」

「ん？ いや、ずっと前から居るだろ？」

そんなハズはない。純エルフの彼は大森林からこんなに遠いとくに長く居られるハズがないのだ。まして魔法なんて。

「俺は、見てないぞ？」

「は？ ずっとユマ姫の護衛をしてるだろ」

……そうなのか？ 俺には感じられない程に遠くから？

「一日中べったりじゃねえか、よくやるぜあの嬢ちゃん」

「え?」

嬢ちゃん?

「それって、ネルネさん?」

「おい……ネルネってのは愛称じゃないのか?」

「……………」

木村は、ここで、すれ違いがある事に気が付いた。

ユマ姫の護衛のエルフ。凄腕の戦士で、田中の見えざる剣を見切つてみせた戦士。

田中が言っているのはガイラスの事だと思つていた、思い込んでいた。

だが、それにしたつて田中の勘違いは酷い。

「いやいやいや、ガイラスをどう略してもネルネにはなんないだろ、変だと思えよ」

「名字なり、コードネームなり、幾らでもあるだろうが。オカシイと思つたぜ。おいお

い、じゃあ何だ? お前らはあの嬢ちゃんがただの侍女だと思つてたのか? 寝ぼけて

んのかよ? エルフの護衛だろ。見ての通りだ、俺でもこうは行かねえぞ」

田中はそう言つて、見渡す限りの星獣の残骸を顎で示す。

「いや、そんなはずは、彼女は宰相から派遣された侍女のハズだ」

ネルネの身辺に関してシノニムさんと散々洗つている。彼女は宰相から派遣された侍女で間違いない。

「知らねーよ、コレが結果だ。事実だけを見れば良い」
「事実って」

ネルネが銃を撃ったら、必ず相手は碎け散る。ユマ姫は彼女を射撃の天才と言っている。

確かに事実は積み上がっている。

「見えてないのはお前ぐらいだぜ？ 帝国の姉ちゃん、ミニエールだっけか？ アイツも気が付いて居ただろが」

「まさか、嘘だろ……」

いや、そうだ。

木村はまた思い出す。ミニエールさんは、ネルネとだけは戦いたくないと言っていた。たとえ田中を敵に回しても。

アレはただの挑発だと思っていた。田中の実力を知らないから、余裕の態度でそう言ったのだと。

しかし、彼女は田中に匹敵する魔槍の使い手を用意していたと言う。

……全ての事実は、ネルネの実力を物語っていた。気が付いて居なかつたのは我々だけ？

「だな、お前は捻くれず、人の言う事を真っ正面から受け止めた方が良いぜ？」

ま、そう言う俺はお前の言う事を受け止めて大恥かいたがな」

皮肉を残し、田中は立ち去ろうとする。木村はソレに待ったを掛けた。

「待ってくれ、じゃあ教えてくれ。コレはどうやったんだ？ 魔法……なのか？」

田中は立ち止まり、悔しそうにポリポリと頭を搔いた。

「俺にもワカンねえんだよ」

「おい、何だよそりゃ」

それじゃあ、やはり勘違いの可能性もあるじゃないかと、木村はまだ常識を捨てきれない。

「俺はあの時、目の前のデカブツそちのけで、ガイラス、いや、ネルネが何をやるかを観察してた」

「それで？」

「魔法と言ったが、俺らが知ってるような魔法じゃなかった。大砲は普通の威力で、音も衝撃も何も変わらねえ」

「……………」

「だがよ、ひとつ解るのは、アイツは、ネルネは撃つ相手を、星獣すらも見ていなかった」
「え？ それってやっぱり」

当てずっぽうに撃つただけ。星獣の死とは無関係なのでは？

「違えよ。最初はぼんやりと全体を見ていた。凄腕の剣士がやるような奴だ、俺だつてやつてる。だけど、その後だ。アイツは良く解らない所を凝視して、必死に何かを合わせていた。大砲に時計でもついでいて、時刻合わせでもしてるのかと思つたぜ」

「何だソレ……」

「さあな、どうにも嫌われちまつて、聞いても教えてくれねえんだ」

「はあ……」

「とにかく、アレは魔法だ。それもエルフが使う技術としての魔法じゃない。奇蹟としか言えない何かだ」

「オイオイ」

胡散臭くなつた田中の物言いに、木村は鼻白む。

「それじゃ、まるで呪いじゃないか」

「そうだ、ユマ姫の不死と一緒さ」

「お前さあ」

ソレは、適当にでつち上げた噂話の物語だ。確かに田中は初めからユマ姫が無敵だと言っているが、それだつて想像の剣で切つただけ。実際に斬つたら、切れるに違いないのだから。

「……だから、人の言う事は素直に聞けよ。事實は目の前にあるんだ。いつだつて」

「……………」

木村は、思い出す。去年のゼスリード平原。目の前で頭を撃ち抜かれたユマ姫の姿。アレが見間違えでなかったのなら……本当に？

でつち上げた嘘で、民衆を騙しているつもりだった。

しかし、実は騙されているのは自分達ではないのか？ 自分の嘘に自分自身が。

「難しく考え過ぎだ。良く見て、良く考えるな」

「ンだよそれ」

「考えたって、この世界の事なんて、俺らにや全然解つちやいねーんだからな」

田中はそう言つて去つて行くが、考えるなど言うのは木村にとって土台無理な注文だ。

しかし、それでも田中の言う事を意識せざるを得ない事態が、程なくして起こるのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

陣地では、星獣討伐の祝勝会がささやかに行われていた。物資に不安はなく、もう敵も居ない。たき火を囲み、酒を酌み交わして、互いの健闘を称え合っている。

星獣が死んだ理由は解らないが、あれだけの怪物を撃退した事実が皆の自信に繋がっていた。

もちろん、騒ぎの中心はミニエールだ。彼女はたった一人で星獣の囿になった。皆が持ち上げないハズが無い。

輪の中心で、恥ずかしそうにミニエールが愛馬を撫でる。

「いや、恥ずかしながらコイツが怪物に恐れをなして、言う事を聞かなくなっただけなのだ」

正直に打ち明けるが、それでも周囲の兵士は褒めるのを止めない。

「無理もない。なにせ、あの怪物だ。俺の馬だって勝手に駆け出し止まらなかった」

「ですが、この白馬は群れを離れ、星獣の横をすり抜けるように逃げましたよね？」

「そんだけでスゲエ度胸だわ」

「その方が、生き残る可能性が高いと思っただろうな。実際、あのまま逃げてたら後続の歩兵にフン詰まって、俺達ペチャンコにされてたぜ」

「それに足もスゲエ。飛ぶようなスピードで、アレだけ走るとはたまげたぜ、俺らはその馬に命を救われたようなモンだ」

ソコまで言われれば、言う事を聞かなかった愛馬でも誇らしく思えてくる。

「ははは、コイツは私に似ず、とても賢いのだ。私よりよっぽどな」

愛おしそうに愛馬を撫でるミニエールの前に、お調子者が飛び出して戯けて肩を竦める。

「するつてえと、我らが戦乙女は馬よりお馬鹿つて事になつちまう」

「オイ！ ずいぶん言つてくれるじやないか！」

ミニエールは男を軽く小突いて、ゲラゲラと皆で笑いあう。

彼女は皆の人気者だ。貴族のお嬢様らしからぬ態度で、騎士や一般兵と隔たらず、心を開いて本心で語り合っている。

しかし、だ。

幾ら心を開いているにしても、例えどんな愚か者だとしても、本気でミニエールが馬より馬鹿だとは思っていない。

いわゆる、犬や馬が好きで人間が使う常套句。獣の本能や直感の鋭さを指して、人間よりも賢いと評しているだけだと思っている。

だが、ミニエールは本気も本気。愛馬のサファイアが自分よりよっぽど賢いと思つていた。もしもサファイアが喋れるなら、自分の代わりに領地経営を任せたいと考える程に。

それぐらい、サファイアは異常な賢さを誇る馬だった。

だが、誰ひとりそんな事には気付かない。ミニエールの言葉を真に受けず、ゲラゲラと笑い合う。その異常性に気が付かぬままに。

いや、たった一人、ミニエールの言葉を真に受ける者が、居た！

「えー、馬が人間より頭が良いなんて、あり得ないじゃないですかー！」

グイツと胸を反らし、威張ってみせる。

「絶対に、私の方が頭が良いですよ！」

ユマ姫だった。皆が愚かな少女の乱入に苦笑する。

「コレはコレは、参ったな」

ミニエールが頭を搔くと、お調子者が割り込んだ。

「なあ、お嬢ちゃんは何歳だい？」

「んー？ 私は今年で十四歳ですよ！」

「本当かい？ 十歳ぐらいかと思つたよ」

「なんですとー」

また、皆でゲラゲラと笑い合う。

木村やオズド伯は、その光景を目を細め眺めていた。当然、サファイアが異常な知能を持つ馬などと、夢にも思つて居ないのだ。

そんな中、ユマ姫だけは本気も本気で、馬を相手にいきり立っていた。

「じゃあですよ、馬に計算出来るんですかあ!? ホラ、3+5は！ 答えてください！」
皆が可哀想な目で少女を見つめる中、サファイアは、パカラパカラと、蹄を八度、鳴

らしてみせる。

「八だそうだ、正解かな？」

ミニエールは腰を屈め、ユマ姫を覗き込む。

ぬぬぬと、ユマ姫は指を折々、数を数える。それを見たお調子者が囁し立てる。

「どうやら少なくとも、お嬢ちゃんよりはずっと頭が良いらしい」

「ぐう！ 八なのは解つてますよ！ 蹄が本当に八回鳴つたのか思い出して数えてたんです！」

言うまでもないが、コレは本当。精神的に幼い部分もあるがユマ姫の頭は悪くない。

「苦しいぞー！」

「負けを認めろー」

周囲からやんやとヤジが飛び、ユマ姫の顔は真っ赤に染まる。

「じゃ、じゃあ！ 14×27はどうですか！」

全く大人げなく、二桁のかけ算を馬へと問う様は、いつそ惨めで滑稽だ。そして、この辺りがユマ姫が紙もペンも使わずに出来る計算の限界だった。

しかし、サファイアは嘶き、ミニエールは事もなく答える。

「378らしい、検算願おうか」

「ぬぬぬ！」

まさか瞬時に答えられるとは思わず、ユマ姫は今度こそ指を折りながら計算する。終いには地面に数式を書いて、しょんぼりと項垂れた。

「あつてます……」

「こりや、本当に馬の方が賢いみたいだなあー」

止せば良いのに、ピョンと目の前に飛び出してお調子者はユマ姫を挑発する。

「ううううー」

「コラコラ、子供を苛めるな。それに私だって計算は苦手だ」

「そりや、失礼しましたー」

戯けた調子でお尻をフリフリお調子者は退散する。勿論、そんな彼だって、本気で馬が計算したとは思っていない。

「はあ、まったく。ほら、ユマ姫も元気を出してくれ」

「ううん、疑ってごめんなさい。凄く賢い馬なんですな」

「ああ、自慢の愛馬だ」

そう言つて、サファイアを労うミニエール。それを皆が微笑ましく見つめている。

しかし真正正銘、ミニエールは計算が大の苦手だ。

二桁同士のかけ算どころか、二桁と一桁のかけ算ですら、少々怪しい。

瞬きと歯の打ち鳴らし方、長年培った符丁をもって、計算の答えを愛馬から聞いたの

だ。

だが、誰もそうとは思わない。夢にも思わない。それは、常識に囚われるなどアドバイスを貰ったばかりの木村もだった。

輪の中心をおてんばなユマ姫に任せ、王国側に挨拶に来たミニエールに相対し、感心した様子で尋ねる。

「暗算がお得意なんですね、驚きました」

「あ、ああ……あの子は本当に賢い馬だからな」

あくまで馬が計算したことにするのかと木村は苦笑する。

「なるほど、流石は名馬の産地ロアンヌだ、私も欲しくなりました」

「ソレはありがたいが、アレほど賢いのは我が愛馬だけだ、期待してくれるなよ」

そう言って、馬への愛情を見せつけてくる。

流石だなと感心し、木村は彼女との挨拶を終えた。気持ちが良い女性だと、人気の理由を確認した格好だ。

そうして踵を返した所、したたかに酔っ払った田中に絡まれる。

「ふざけんよ、お前、マジで馬鹿か！」

突然に頭を強烈に締められた。ヘッドロックだ。

「おい、痛えよ、シャレにならねえ」

「洒落じゃねえ！」

せつかく良い気分だったところを水を差された木村は面白く無い。

文句を言おうと向き直ると、田中はそれほど酔っ払っていないかった。目はハッキリと意志を宿して、怒りすらも宿った瞳で木村を見ていた。

木村は僅かに含んだ酒精も飛んだようで、ムスツくれる。

「一体、なんだよ？」

「お前、まだ見えてねえのか？ まだ騙され足りないのか？ いい加減にしろ。ただ冷静に、良く見ろ！」

指差す先では、ユマ姫がまだミニエールの愛馬、サファイアに絡んでいた。

「じゃあ、520×42は？」

——ヒヒーン。

「何言ってるか、解りませんよお！」

馬にベロベロとなめられて、汚いツと文句を言っている。微笑ましい光景だ。

「アレが、なんだよ？」

「良く見ろ、あの馬の目を！ 良く見るんだ！」

大変な剣幕で田中に言われて、そこで初めて木村はサファイアの顔を、その瞳を真剣に見つめた。

そこでしょうやく、気が付いた。

「な、なんだ、あの馬！ オカシイぞ」

良く見れば、サファイアの目は人間に近過ぎた。

野生生物の透き通る様な純粋な瞳ではなく、小馬鹿にした様子でユマ姫をからかっている、同時に計算を問われると、その目は複雑に揺れている。

ユマ姫を二回噛んで、一度舐め、八回歯を鳴らし、四回嘶いて、蹄は鳴らさない。

「まさか……嘘だろ？ マジで計算してるのか？ アレは」

「そうだろうよ、誰も嘘なんて言ってるねえんだ。俺はお前に言ったよな？ 考えすぎると、何もかもそのまんまの意味だよ」

「いや、嘘だろ？」

しかし、違和感をもって見れば、やはりサファイアの行動は通常の馬ではあり得ない。噛み付いて周囲の兵士から兜を奪うと、すっぽりとユマ姫に被せてしまう。

「ま、前が見えませんか！」

周りはゲラゲラと笑っているが、遠くから見ていた木村は笑えない。

冷静に考えれば、簡単に兜など外れない。ましてこつそり少女に上手く被せるなど難しい。あの目を見てしまえば、ただの偶然とはもう言えない。

サファイアはタイミングを見計らい、狙って笑いをとったのだ。人間にだってなかなか

か出来ることではない。

いや、それでもなんとか偶然と思いたかった木村だが、前が見えないユマ姫が転がりそうになる所を自然と回り込んで受け止めたサファイアを目の当たりにし、とうとう認めざるを得なくなった。

「いや、なんだよ？ あの手」

「知らねえよ、突然変異か何かだろ？」

田中にそう言われても、木村としては割り切れない。

「じゃあ、ミニエールさんはそんな得体の知れないモノに跨がってるって言うのかよ？」
「そうなんだろ、細かい事は気にしないんだろうな」

「いや、そんな」

あり得るのか？ 本当に自分より賢い馬に、何食わぬ顔で乗れるモノか？

「ミニエールはな、俺の剣が魔剣に匹敵する切れ味だと知っても、何故かと問うて来なかった。そんな奴は珍しいぜ？ 何で聞かないんだって逆に聞いてみれば、私では理解出来ないだろうから、どうせならもつと頭が良い奴に説明してやってくれ、だとさ」

「……な、なんだよそれ」

「どうだい？ お前は試しに聞いて見るかよ？」

「いや、どうせお前も知らねえんだろ」

「ご明察、俺も良く解らず使つてる。そんなモンだ」

木村には到底受け入れられない答えだ。田中はヤレヤレと肩を竦める。

「ただ、流石に大物だぜ？ アイツはよ」

「そうだな、俺が思つて居たよりもずっとだ」

「だから、遅えよ」

くびくびと酒を飲みながら上機嫌で挨拶回りに励むミニエールを見て、ただただ二人は唸るのだった。

季節は秋に差し掛かろうとしている。農兵が多いだけにこれ以上の戦争は続けられない。

スールーンを占拠して、帝国とはひとまずの停戦が結ばれそうになっていた。

帝国でも有数の領主であるタリオン伯と、その娘ミニエールの裏切り。皇帝の威信は地に落ちて、魔女も姿を見せない。

「いや、まさかな」

木村は頭を振る。なにせミニエールは野心めいたモノをおくびにも出さない。

だがその時、目を凝らした木村には戴冠するミニエールの姿がハッキリと見えてしまった。

皇帝と停戦

スールーンまで戦線を押し上げた王国だが、秋の収穫期を前に行軍は停止せざるを得なかった。農兵はゼスリード平原の開拓地に戻され、少数の騎士達だけでスールーン防衛にあたる事となる。

時を同じくして、タリオン伯とミニエールが収めるロアンヌ地方は帝国に対し一時的な独立を宣言。皇帝に魔女の身柄の引き渡しを要求すると、これに同調する領主がスールーン以東で続出した。

皇帝は確実に追い詰められている。だが、現人神とまで言われた皇帝がこのまま引くハズがない。

翌年、夏を前にして、再び戦争が始まる。皆がそう思っていた。

「停戦、ですか?」

ユマ姫はポカンとした顔で問い直す。

帝国から停戦協定の打診が入ったと言うからだ。嘘ではないと、シノニムは資料をめくる。

「左様でございます。皇帝の署名も入っております。これを受け女王陛下は停戦受け入れを宣言なさいました。先方は調停にあたり、女王もしくはユマ様の出席を希望されています」

「えー？ ヨルミちゃんは忙しいし、じゃあ、私が出席する事になるですよね？」

「そのようです。私としては、むしろキムラ様からネルネも同席するようにと要望があった事が気になるのですが……」

「むふふ、そうですね、去年はネルネが大活躍だったんですから」

「……はあ」

シノニムは今でも信じていない。

なにせ、ユマ姫の言葉は荒唐無稽。600メートルの距離から敵将を撃ち抜いたものの、橋の上から敵の火薬を撃ち抜いて数千の兵を蹴散らしたのだの。

とどめは、城よりも巨大な怪物をネルネが大砲の一撃で撃ち殺したのだの、信じられるはずがなかった。

しかし、キムラからの手紙を見るに、全てがウソではないらしい。とにかく、シノニムは今年も留守番となった。

「ええ？ 私、また戦場ですかあ止めましょうよー」

しかし、危ない思いをした当のネルネは、もう全く乗り気ではないのだった。

しかし、ゼスリード平原からスールンまでの長旅で、ジツとしていられるユマ姫ではなかったワケだ。

ひとたび人目に触れる機会さえ増えてしまえば、ユマ姫の、そのにじみ出すヌケた愛らしさは隠しようも無かった。

最終的には、皆に面白おかしく弄られる程度には、愛されキャラに収まっていた。

「それが、却ってマズかったのだ」

「ミニエールさん!」

現れたのはミニエール。彼女もまた停戦の準備の為にスールンに逗留していた。

「実はな、去年お前をからかっていた男が居ただろ」

「はい! アイツいつも私をおちよくってー!」

「死んだんだ」

「え? しんだ?」

「そうだ、死んだ」

「死んだ、んですか?」

「ああ」

「そんな!」

これには大変ショックを受けたユマ姫だ。

戦争だから人は死ぬ。祖国を侵略された時から嫌と言うほど知っている彼女だが、この停滞で彼が死んでいるとは思っていなかった。

お調子者の男にからかわれ、馬鹿にされ、怒りまくっていたユマ姫だが、呪いの姫君として一般兵から避けられていた彼女が馴染めたのは彼のお陰。

解っているからこそ、本当に嫌いなワケでは無かったのだ。それどころか一番仲良くしていた兵士。

「なんで？」

「知っての通り、奴はお調子者でな」

だから、スールーンから飛び出して、偵察に行った先で流れ弾で死んだ。

「ううっ」

「運がなかったんだ、部隊の中でアイツだけが死んだ。それで、な」

ミニエールを除けばユマ姫が一番仲良くしていたのが、あのお調子者の男だった、不敬にも小馬鹿にしたように弄り回していた。

だから呪いで死んだのだと噂が回るのに、ソレほどの時間は掛からなかった。そう言う訳だ。

「しかもだ、今回の停戦もユマ姫の呪いを恐れての事らしい」

「地方領主が次々と皇帝に直訴していますね。テムザンみたいになりたくない」と

木村の補足に、ミニエールは更に付け加える。

「それどころか、魔女自身が停戦に乗り気と言うぞ？」

「えー、ソレは怪しいじゃないですか！」

「いや、どうかな？ 領主も魔女も、きつと見たんだろうアレを……な」

「え？ ええ？」

皆の視線が、ユマ姫の後ろにくつついてきたネルネに集中する。

「アレだけ巨大な生き物が、粉々に砕け散った。現場にはまだ星獣の死骸が転がっている」

「誰も、アレを見てユマ姫と戦おうとは思わないでしょうね」

頷き合う二人とは裏腹に、ココで名前が出た事に、ユマ姫は飛び上がる。

「え？ なんで私？ アレは、ネルネが……」

「誰も、そうは思っていないのだ。残念ながらも」

「そ、そんな！ あんな怪物を倒す女の子と結婚する人、居る訳ないじゃないですかー」

ユマ姫は遠ざかった婚期を自覚して、頭を抱えてへたり込む。しかし今更だ。そんな事を言うのなら呪いの姫君を名乗った時点で手遅れである。

木村とミニエール、二人がソレに苦笑する中、笑えなかったのがネルネである。

「え？ 結婚出来ないとか、そう思ってたのに、私に化け物殺しを押し付けようとしてた

んですか？ ねえ！ 答えて！

「ええ？ でも、倒したのは本当にネルネなんだし……」

「じゃあ！ 私の婚期はどうなるんですか！ 毎年毎年こんな遠くまで引つ張り出されて！ 出会いもないんですよ！」

「そ、そこは世界を救った英雄として、お嫁さんでも娶れば良いんじゃないですか？」
「いいワケあるかあ！」

ユマ姫を突き飛ばし、地面に転がすネルネを見て、また騒がしくなったなど笑う木村であった。

一方で、木村と違いミニエールは気がつき始めていた。

このネルネと友達なのだから、ユマ姫だって普通ではありえない、と。

自分には解らないだけで、この一見まぬけなだけのお姫様にも、きっと何かあるのだと予感せざるを得なかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「な、中々可愛いですね」

調停式を前にして、ユマ姫はまた例の呪いの衣装を着させられるのかとゲンナリしていた。

しかし、木村が用意したのは真っ白なゴスロリ風衣装だったのだ。

ユマ姫は鏡の前で一回転。

「今までの、黒くてドロドロしたのとは全然違います」

「動きやすいとは言いませんが、前よりマシでしょう?」

「ずっと良いですよ」

白いビスチェに、白いスカート、白いストッキングまで穿いて、しかし紐やリボンだけはピンポイントで銀を使い、シャープにみせている。

この世界にはゴスロリファッションなどないのだから、過剰なまでにレースがあしらわれた衣装は、異様なまでに華やかだ。

「そして、コレですよ」

とどめにと、木村が取り出したのは眼帯である。

この男、中二ファッションを極めるつもりでいた。

「また、目隠しですか? 嫌ですよソレ」

「いや、片目だけです。コレで姫様のピンクに染まった片目を隠すんですよ」

「こうですか?」

「思った通りだ、美しい」

トドメに真っ白な眼帯で右目を隠す。銀髪のユマ姫は真っ白で、雪の精霊の様だった。

「それで、ピンチになったらこう、思わせぶりな仕草で、眼帯を外す！」
「……こうです？」

「そう！　すると、真っ白な中に輝くピンクの瞳！　呪いが発動！　相手は死ぬ！」
「遊ぶなああ！」

白いハイヒールで木村を蹴つ飛ばすユマ姫。

しかし、可愛いとは思ったのか、やはりこの衣装で停戦調停に臨む事にした。

調停式の布陣。こちら側はミニエール、ユマ姫にネルネ、オーズド伯に護衛の田中、木村は留守番だ。

他には立会人としてプラヴァスのリヨン氏も呼ばれている。

「相手は魔女と、それに皇帝が来るんですよ？」

「そうですね、他には帝国の有力者が何人か」

ユマ姫はむう……と唸って難しい顔をする。

「おかしくないですか？　こっちはヨルミちゃんが出てないのに。皇帝が格下だって認めるようなモノじゃないですか」

「そうですね、しかし、そんな嘘について意味がありますか？」

「うーん」

ユマ姫は悩んでしまう。

権威の問題なのだから、影武者を使っても意味がない。言ってしまうえばコチラとしては皇帝と名乗る別人が来たとしても構わないのだ、正しく帝国の代表として来てくれれば十分。

だから、皇帝が魔女に操られてるとしても、問題ない。

問題なのは、皇帝を名乗る人物が何を企んで、何をするかだ。

「調停の場所が、帝都に近い見晴らしの良い丘の上つても、どうなんです?」

「狙撃の心配ですか?」

「そうですよ、危ないじゃないですか」

「だとしたら、私や軍団長を舐めすぎでしょう。別にオーズド伯やユマ姫が居らずとも、

その場所から帝都を攻撃するのは簡単です。卑怯にも停戦の場で狙撃など士気にも関わらる」

「えー」

その想定は、調停式に出席して殺される場合のコト。仮定としてもゾツとしない。

「あり得ないと思います。何にしても、停戦の場にユマ様が居ないのは無理があるでしょう」

「うー」

ユマ姫はエルフの王族で、王国との渡りをつけた人物だ。一応そうなっている。彼女

が参加しない道理はない。

割り切れない思いを抱え、調停式の日はやってくるのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

当日、まだ朝露に濡れる夜明けの草原を装甲車が走る。

ああは言つたが、木村は狙撃の可能性を考慮して周囲を警戒していた。狙撃に限らず迫撃砲や地雷なども警戒するが、そんな痕跡はドコにもない。

周囲に怪しい仕掛けはドコにもない、木村は拍子抜けした思いでいた。

一方で丘の上、会場に護衛として同行した田中も拍子抜けしていた。

「やる気がねえな」

「まあね」

現れた魔女、黒峰の気怠い仕草には覇気が無い。ココから一波乱起こしてやろうと言う気持ちが見えない。

「良いのかよ？ 身柄の引き渡しが決まれば良くて縛り首だぜ？」

「あら、そんな事？ それなら人形を用意するわ」

「そんなんで納得するかよ」

「じゃあ、挨拶ぐらいはしても良いけど、アナタが途中からすり替えてくれれば良いじゃない？」

「俺が従うとでも?」

「別に、従わなくても良いわ。死んだらそれまで」

そう言つて椅子の背に身を預け、ひらひらと手を振る。あまりにも捨て鉢な態度。

「本格的に覇気がねえな」

「そりゃあね」

黒峰は片目で田中をチラリと見た。

「この世界、私は主人公じゃない」

「ンだと?」

今更、子供みたいな事を言い始めた黒峰に、田中は眉を顰める。

「オカシイと思わない? 何かが噛み合わないのよ」

「そりゃ、ろくでもない悪だくみばかりしてるから……」

「天使とか、悪魔とか、そう言うモノが干渉してるならいつそ納得するけどね、私達はそんな存在がいらないと知ってるでしょう?」

それはそうだ。この世界は神の実験場。彼らは天罰を与えるような存在ではない。

「でも、オカシイの、上手く行くはずなのに、上手く行かない。こんなのはあまりにも不自然よ」

「負けが込んだ奴はみんなそう言うんだ」

「そうかもね」

いつそサツパリした様子で黒峰は息を吐き出す。

「何をしてもし上手く行かないから、私はもう何もしたくない」

「そうかよ……」

「コレなら、特に警戒は必要ないな、と田中は黒峰の警戒を一段下げる。

「じゃあ、皇帝はなんで今更停戦しようとしている？　こんな場所で」

「さあ？」

「知らねえのか？」

「知らない。ただ、何か企んでるかもね。私を引き渡すことに最後まで反対してたのも

彼よ、私は良いって言ったのに。でも彼は私の無実を証明するって」

「無実なのか？」

「少なくとも、あの怪物を呼び出したのは私じゃない。呼び出したいと思ってたけど、上

手く行かなかった。あのタイミングで出て来たのは偶然よ、私にとつて最悪のね」

「他には？　テムザンや、親衛隊を改造したのは？　それにプラヴァスに毒を撒いただけ

っ？」

「それは私よ、でもね？　テムザンを治療してくれって言うから私は治しただけ、親衛隊が強くなりたいてって言うから強くしてあげただけよ。プラヴァスは、地球の戦争を導入

しただけ。似たような事、アナタもやってるじゃない」

そう言つて、黒峰は田中の日本刀を指差した。それで何人斬つたのかと言つている。それに火薬を作つて泥沼の殺し合いを始めたのもお互い様。

田中は舌打ちを返すしかない。

「ねえ、私の質問にも、ひとつ答えてくれる？」

「なんだよ？」

「星獣は、どうして死んだの？」

「……………」

この質問に田中は黙つた。彼自身測りかねていたからだ。

「知らねえ」

「なによそれ」

「お互い様だ、マジで知らねえ。ただ犯人は知つてる。だが俺が勝手に言う訳にもいかねえ」

「ふうーん？」

「なんだよ？」

「木村でも、あなたでも、ないのね？」

「違うな、呪いや魔法でもない。神懸かつた技の一種だと思つてる」

「なーんだ」

そうやって、黒峰は足を投げ出した。

「神のやつ、人類最高峰のチートをくれるって言ったのになあ」

「お前が言うかよ、お前の力は洗脳能力。そうだろう？」

「まあ、そうね」

「使い方次第で、何でも出来たはずだ、違うか？」

「更新権」

「なに？」

「私の力よ。相手の領域にデータを書き込む。でも、そんなに便利じゃないのよ？ 書き込めるのは僅か。相手の人生をひっくり返せるほどじゃない。思考誘導能力って言う方が近いかもね」

「何にしろ、超常の力だ」

「でも、あんな怪物は殺せない。そうでしょ？ それとも、あなたなら出来る？」

「出来ねえよ、人類最高峰の身体能力を貰ったが、アレはそう言う次元じゃねえ」

「そうよね、やつぱりオカシイのよ。何かが、神をも越える何かが、干渉してる。神よりも……」

そうやって、黒峰は顎を摘まんで考え込んだ。何かを思い出したのだ。

「ねえ……ドコに居るの？ 高橋君は、元を正せば彼が全ての元凶でしょう？」

「……知らねえ、俺達が一番知りてえよ」

「そう……何にしろ、もうどうでも良いわ。異世界転生してチート能力で好き勝手出来るかと思つたら、ただのモブキャラなんだもの」

本当にやる気をなくした魔女が居た。

これは演技か？ いや、そんなモノかも知れないと田中は思う。

人間は何もかも躓くと、途端に投げやりになつてしまふ。思い返せば魔女はあまりにも運が悪かつた。彼女が撒いた種は悉く、どこか理不尽に摘み取られてしまつた。

思い返せばそこには常にユマ姫が居た。田中はやはり自分の直感は正しかつたと確信する。

アレは敵に回してはいけない。あの寂れた村で出会つた時から、不気味なモノしか感じていない。

そして、調停式が始まつた。

皆が席につき、しんと静まり返つた会場で、最後の最後、やつて来たのは皇帝だ。

この場でもっとも格上とされる人物ゆえに、それは問題無い。ただ、ココに来て、まだ顔を隠した装束だけが問題だつた。

派手な被り物にヴェールを流したデザインは、全てを覆い隠してしまう。これでは真

賈定まらず、調停どころではない。

王国側の静かな苛立ちを知ってか知らずか、皇帝は上座に座るなり苛立たしげに被り物を脱ぎ、机に転がした。

「ふん、空の対席と調停か」

晒された顔に、帝国有力者は息を飲む。皇帝の顔はこのように晒される習慣がないためだ。何せこの会場は、皇帝の意向もあつて丘の頂点で全軍に晒されている。

つまり、陣幕ひとつ張られずに完全な野ざらし、皆に歴史的な瞬間をみせるため、皇帝の趣向と説明されていた。

果たしてその顔は、恐らくは十代なかば、幼いとまでは言わないが、年若く生意気盛りの少年のモノだった。恐ろしく整つてはいるが、神かと問われれば、そうではない。

そして、空の対席とは？

向かい合う席には、同格の者が座るべきとされている。

今回で言えば、長机の短辺、俗に言うお誕生日席には主役である皇帝が座り、向かい合う席は空になっていた。座るべきヨルミ女王がおらず、代わりに王冠のみが鎮座する。

「それで、余は誰と調停すればよい？ その王冠か？」

皇帝の皮肉を受けて、オーズド伯が王冠を抱き立ち上がる。

「このオーズドが、主の名代として」

「ふん、早くしろ」

なんとも投げやりだ。ここでも田中は眉を擡める。

全て諦めて、ヤケクソで停戦する。それなら良いが、年若い皇帝はそんな潔さとは無縁に見えた。

しかし、調停は進む。皇帝は乱雑な筆致でサインを重ねた。

「これで良いか？」

「確かに」

皆が疑問に思う。皇帝はこんな雑な仕事を皆に見せつけたのかと。

しかし、その時は最後にやって来た。

「書類だけでは味気ないな、余は森に棲む者いや、エルフの姫と挨拶がしたい」

これにはザワリと会場が揺れた。

なにせ、ザバの姫と言えばユマ姫しか居ないのだ。呪いの姫君と恐れられる彼女とワザワザ挨拶するなど、危険な意図があるとしか思えない。

しかし、皇帝はザバという蔑称からエルフと言い換えるだけの分別をみせた。

——どうだ？ 呪いなどモノともしない姿を民衆に見せつけたい、それだけなのか？

田中は政治を知らない。ただ、皇帝の投げやりな一挙手一投足に目を配る。

しかし、皆が反応を示す前に、ユマ姫が立ち上がる。

「光栄、と申し上げるべきでしょうか？」

立ち上がったユマ姫は美しかった。

レースをふんだんにあしらった純白の衣装に、銀の髪トリボンが踊り、呪いとは真逆の神秘を纏っている。

今日は普段の無邪気さもなりを擧め、猫を被ってお姫様らしい仕草をみせる。

その姿は皇帝をも唸らせた。

「ほう、美しいな、噂とは違う」

「事実とは噂と異なるモノなのです。そのお言葉は、死んでいった民に頂きたかった」

ユマ姫の言葉に、皆が息を飲んだ。そしてあまりの猫被りに、お前は誰だと田中は苦笑する。

言わんとするのは、悪鬼の如き森に棲む者の悪評も所詮は噂だと、帝国の大森林侵略を責めているのだ。

「ふんっ」

このユマ姫の一刺しに皇帝は鼻を鳴らし、それでも挨拶にユマ姫と向かい立つ。

右手で左手の肘を握り、左手を女性に差し出す仕草。貴婦人へ向けた挨拶で、女性が手を取れば悪からず思っている事の証明、友好の証と言える。

皇帝から差し出された左手にユマ姫はすこしばかり顔を顰めるが、それでも左手で皇帝の手を握った。右手を胸に当て、軽く会釈する。これもまた、マナーに沿った所作である。

「おおっ」

誰かが、或いはその場の全員が、感嘆の声を抑えられない。

年若い皇帝も見映えは悪くない。悪くないどころか、豪華な衣装に輝く金髪、鍛えられた体つきは誰よりも目を引いた。

それこそ美形と言うだけなら同席するプラヴァスの太守、リヨンも一流ではあるが、年齢的にもユマ姫とは少し釣り合わない。

ユマ姫と並び立つなら、ザイア広しと皇帝しか居ないと、そう思わせるだけの優美さがあった。

まだやわらかな朝の日差しを受けて、二人の影が長く伸びる。太陽を背にどこまでも神々しく歴史的な和解の瞬間。

なるほど、皇帝はこれが見せたかったのかと、誰もが納得した瞬間。それは、起こった。

——パァン！

乾いた銃声。

「ぐっ！」

皇帝が撃たれたのだ。

その腹部、豪華な召し物に滲んだ赤。皇帝は声を絞り出す。

「ビルダール王国、ひ、卑怯なり！」

「違う！ 我らではない！」

オーズドは声を張る。実際、計略ではない。その意味もない。

一部始終を見ていた田中は、秘かに舌打ちをひとつ。犯人は皇帝が投げ捨てた被り物だ。そこに仕込まれた自動発射装置が皇帝の腹を抉ったのだ。

自作自演。ヤケクソの自傷行為に違いなかった。

挨拶の為と言え、すこしばかり不自然な皇帝の立ち位置は、その調整をしていたに過ぎない。

この会場にありながら、検査を受けずに持ち込めたのは皇帝の召し物だけだ。

良く見ていれば気が付く事、この場にも察した者は少なからず居るだろう。

だが、その場の勢いと言うのは恐ろしい。皇帝の怪我は、彼を現人神と崇める帝国民をパニックに陥れる。冷静な判断力を奪ってしまう。

帝国兵が王国への敵意を漲らせるに十分な一助となる。

これこそが、この自作自演が、皇帝の狙いだっただけか？

いや、違う！

「私は、呪いになど屈しない」

「きやあー！」

皇帝は、ユマ姫の手を強く引き、後ろ手に締め上げる。右手にはリボルバー。そのままユマ姫へと突き付ける。

ユマ姫を人質にとつたのだ。そして高らかに宣言する。

「呪いも、不死なる力も、我が前に無力と知れ！」

いや、違う！ これは人質では、無いッ！

皇帝は自作自演によりユマ姫の呪いを受けて、なお無事な姿を見せるだけでなく、その不死性をも祓おうとした。

皇帝の権威を前にすれば、全ての奇蹟が揺らぐのだと証明しようとした。

だから、すぐさま引き金を引く。助かりたいのではなく、自らが唯一の神だと証明するため。

——パァン

ユマ姫の顎下に突き付けられたリボルバーは彼女の脳天を貫通した。

この場の誰もが、それを目にした。

「薄汚い女狐め！」

そればかりか皇帝はユマ姫を蹴り飛ばし、力なく倒れたユマ姫の死体目掛けて引き金を引く。

——パアンパアンパアン！

全てが命中し、全てが即死の一撃だった。

少女を一人殺すにはやり過ぎと言える追撃だった。

不死などないと嘯く皇帝も、またユマ姫の呪いを否定しきれては居なかった。

だから、死ぬ事となる。

「ぐっ」

駆け寄った田中がリボルバーごと皇帝の右手を切り取る。しかし、それは少しばかり遅すぎた。あまりの事態に、彼にして行動が遅れていた。

だから目の前で、皇帝の首が飛ぶ。

「なっ？」

あまりの事に、田中が呻いた。

キイーンと金属の澄んだ音が遅れて聞こえる。それほどの太刀筋。

ほどなく聞こえたのは憤る女性の声。

「なんて事を！」

皇帝を殺したのはミニエールだった。

彼女はただただ、恐れていた。それはユマ姫の呪いではなく、皇帝の死による帝国兵の狂乱でも、ユマ姫の死による王国の反撃でもない。

ただネルネの凶弾が、真なる呪いが、全てを破壊することを恐れていた。

だから、疾く皇帝の首を刎ねた。この謀略に、自分達は無関係と切り捨てた。

この場で彼女が恐れていたのは、突然の事態に狂乱する軍でもなければ、自らの命が失われる事ですらない。たった一人の少女の苛烈な怒りだったのだ。

城よりも大きな巨獣を一撃で仕留めた暴力が、もしも帝国の臣民に降り注いだら、一体どうなってしまうのか？

ミニエールは止まらぬ冷や汗と強靱な精神力でもって、ユマ姫の侍女を探した。見たくないモノを、それでも目に収めようとした。

「ヒッー」

しかし、彼女は、ミニエールは、自らの目を疑う事となる。

ある意味で、想像の何倍も恐ろしい光景を目の当たりにする。

ネルネは、何の感情もなく佇んでいたからだ。

狂乱する周囲をよそに、たった一人なんでもない様子で佇んでいる。その姿はいつそ周囲から浮き上がり、異様であった。

平時と変わらぬその姿に息を飲むミニエール。彼女の視線に気が付いたのか、ネルネ

はトコトコと歩き出す。机の水差しを手に取るとミニエールに近づいた。

「お清めになりますか？」

はじめ、ミニエールはその意味が解らなかった。解らないままに首を縦に振った。

「ジツとして下さい」

ネルネが布巾を濡らし、ミニエールを拭った事で、ようやく皇帝の返り血を自覚した。血塗れの姿であったのだ。しかし、今はそんな事はどうでも良い。

「私より、亡くなった君の主人を清めてやってくれ」

「？ 亡くなった？ ああ……」

気のない、返事。これではまるで……

ミニエールはゾツとした。

死んだハズだ、これ以上ないほどに、これ以上どうやるのかと言うほどに。

しかし、まさか。

視線を送った先、倒れ伏すユマ姫を見ると、奇妙であった。

そこだけ浮き上がって見えるのだ。現実感が乏しい光景。混乱するミニエールだが、

彼女は持ち前の感性で、それでも良く観察した。

違和感の正体。

綺麗なのだ、皇帝に蹴られ、地面に転がり、それでも純白の衣装には泥染みひとつ見

られ無い。浮き上がって見えるのも当然だった。

ミニエールが息を飲んだ時、本当の奇蹟が起こる。

真つ白な少女が、ユマ姫が泥の中のっそりと立ち上がる。

「もう、いきなり突き飛ばしてえ！ 痛いじゃないですか！」

被った猫もかなぐり捨てて、文句さえ言ってみせる。怪我ひとつ認められない。まるでそこに居る侍女とじゃれあつてる時みたいな気軽さで。

その姿、その場の全員が見てしまった。誰も、何も、言葉なく立ち尽くす。

「不死なる者」

「呪いの姫君」

誰もが畏れを胸に抱いた。不死なる姫君に戦慄した。

「これは??? 一体?..」

そんな中、ミニエールだけは理由を求めてユマ姫の侍女を見る。

すると、ネルネは諦めた様子で呟いた。

そのひと言は、終生ミニエールの脳裏にこびり付き、彼女を苛む事となる。

「あんなんで殺せるなら、私がとつくに殺してますよ」

なんっ???

ミニエールには絞り出す声もなく、ヒュと息を吸い損ねた音だけが喉で鳴る。もう一步も動けない。

しかし、事態は収まらない。

彼女だけでなく、その場の誰もが固まる中で。空より巨大な影が飛来する。

——ギョオオオオ！

グリフォンだ、グリフォンが飛来した。

調停の場、皇帝が狙撃され、ユマ姫が殺され、皇帝の首が飛び、ユマ姫が復活した。

そこに幻想生物の降臨。

皆が現実を受け止められずにいた。

「黒峰ええー！」

いや、ただ一人、犯人を察した田中は魔女に向かって剣を突き付ける。

しかし、その黒峰にして、この事態は想定していない。

「知らない！ その子は護衛の為に皇帝にあげたのよ」

「早く引つ込めやがれ！」

「言つたでしょ、そんなに便利じゃないの！ 制御出来ない！」

このグリフォンは皇帝を守ることだけを真つ白な脳みそに叩き込まれたクローンだ。

このグリフォンも、被り物に仕込んだ銃と一緒に、タイミングを測って皇帝の奇蹟を演

出するはずだったパズルのピース。

しかし、既に仕事をなくし、うろうろと皇帝だったモノの周りを回るしかない。

「ぱぎやー」

その時だった、無惨にもユマ姫がグリフォンに踏み潰されたのは。

そのあまりにあっけない死に様に、ミニエールは呆然とする。

まだ皇帝の近くに居たのかと、あまりにも鈍臭く、あまりにもあつさりと、再びユマ姫は死んだ。アレだけの巨体に踏み潰されて、流石に生きている道理はない。

確認の為にネルネを見れば、一顧だにせず面倒臭そうに落ちている皇帝の右手を拾っていた。

それを見て、まさかと思う。自然、顔が強張る。

そして、視線を戻せば、見たくないモノを、ミニエールは見てしまう。

踏みしめるグリフォンの足の間から、何食わぬ顔でユマ姫が這い出してくる所を。

殆ど恐怖の光景だ。ソレは足の間から這い出したと言うか、足を貫通して生えてきたような、木村が見たら出来の悪いゲームのバグかと疑う光景だった。

「ハア、ハア」

腰を抜かし、過呼吸に陥るほどミニエールが恐れたのは、グリフォンか、それともユマ姫か？

しかし、グリフォンは皇帝が死んでいる事に気が付いて。そしてその犯人にも気が付いた。皇帝の匂いがベツタリと染み込んだミニエールを見つけてしまった。

「なっ！ くっ！」

慌てて立とうとするも、立ち上がれない。ユマ姫を笑えない間抜けさだった。

そこを助けたのも、またユマ姫だった。

「コラーツ！」

可愛らしい声をあげ、グリフォンの背後に立つ。その姿は丘の上、朝日を背にして実物よりも大きく見えた。

「呪います！ 呪いますよー」

ゆつくりと眼帯を外す。ユマ姫、渾身のハツタリ。しかし、動物相手には意味がないのだ。

背後でうるさい少女に、グリフォンはのっそりと目を向けた。

真っ白な少女に赤い目が灯るのを、その時、その場の、全てが目の当たりにする。

——そして。

——パンツ！

軽い発砲音。まさかとミニエールがネルネを見れば、拾ったりボルバーを撃っていた。

まるで落ち穂を拾うように、グリフォンを見てもいない。

放たれたのは、たった一発の非力な弾丸。

——パチュン！

そして、水を打つような音がした。

ほどなく、グリフォンの巨大な体が波打つようにぶるりと震える。

その時、ミニエールは。いやその場の全員が初めて呪いの瞬間を目の当たりにする。

——ベチャリ

グリフォンだったモノは、その全てを肉塊に変じてしまった。ドロリと崩れ、丘の上に広がるのみ。あまりにも不気味な光景。

こうして、奇蹟と呪いを白日の下へと晒し、調停式は終わりを告げた。

皇帝は死に、後嗣も居ない。

ユマ姫の呪いは神話に至り、対抗出来るのは唯一、戦乙女の加護のみ。

こうして、ミニエールは皇帝になった。

二回目の十六歳

呪いの姫君。

ユマ姫の噂は、止まる所を知らない。

噂を否定しようとした皇帝が、命をもって呪いの存在を証明してしまった。

呪いも、畏れも、悍おそましきですら、裏返れば神性に至る。噂は神話に変わる。

もう誰も、彼女をただの少女と思わない。皇帝ではなく、彼女こそが本当の現人神だと理解した。

市民が抱くユマ姫への畏れはあまりに深く、世は乱れ、帝都は荒れた。

それもそのはず、自然災害にも等しい怪獣の死骸はスールーンに山と積み上がり、溶け出したグリフォンの死骸は帝都からほど近い丘の上に祀られている。

これで畏れるなど言うのは無理な話だ。

大森林を攻略した皇帝の功績は、ユマ姫の恐怖で裏返る。

どうして神を怒らせたのか？ このままでは帝都は呪われてしまう。

人々はユマ姫の怒りを鎮める手段を求めてしまった。

ユマ姫が祝福する戦乙女ミニエールを皇帝に据えるしかない、市民が考えるのも当

然の流れ。

しかし、ミニエールは皇帝の血を引かない。帝国貴族ゆえ何代か遡れば血は繋がるが、即位するにはあまりにも薄く、反対する者も多く残った。

それでも、だ。

白だけの玉座に、白に溶け出しそうな少女が天から舞い降りて、地上のミニエールに戴冠する姿を見れば、反対派すら黙らざるを得なかった。

ここに、本当の王権神授が成立してしまった。

その瞬間は一枚の絵画に残され、長く語り継がれる事となる。

こうして、平和が訪れた。

そのハズだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから数ヶ月後、冬。

ユマ姫は帝都にて、十六歳を迎えようとしていた。

「なんでこうなつたんですかー」

「なんでこうなつてしまったんだあー」

帝城の奥まった一室で、皇帝と邪神はぐだぐだと寝転がる。

彼女達は、軽々に出歩くことも難しくなつてしまった。

「それもこれも、ミニエールさんが皇帝になてなるからじゃないですかー」

「元を正せば、ユマ姫が呪いの姫君なんて名乗るのが悪い」

お互いに責任をなすりつける。

「そんなの、自分で名乗った事ないんですけど!」

「私だつて戦乙女など名乗っていいない、乙女だと? 私か幾つだと思つてる!」

二人して、同じように睨み合う。うんざりとため息まで重なった。

ミニエールはすっかりと似たもの同士になつてしまったユマ姫の頬を抓る。

「痛い痛い!」

「本当に、呪いなどあるのだろうか? 不死とは一体?」

「知りませんよそんなの! ほっぺを抓られれば痛いです」

「むう」

「なんで不思議そうな顔をするんですかあ! 何度も言いましたけど、覚えてませんよ」

ユマ姫は調停式で撃たれた時の事をまるで覚えていなかった。

本当に、ユマ姫は不死なのか? あの後ネルネに聞いてみれば、ジツとしてれば殺せ

ない事もない。と言う答え。

何故そんなに死なないのか尋ねても、ネルネだつてそんな事は知らないと言うばかり。

しかし、こうして間近で見ても、まるきり普通の少女に見える。これは一体どうい
うカラクリだ？

——まあいいか、解るわけないし。

ミニエールは面倒になって考えるのをやめた。

そんな時だ。

「あ、またココに居た！ 二人とも、大変ですよお！」

そのネルネが、小部屋に踏み込んできたのだ。ここでも二人は揃って顔を顰める。

「あー、もう！ 面倒な挨拶はヨソで頼む」

「私も！ 変な格好で思わせぶりなセリフを言わされるのはもう嫌ですー」

二人はなにかと怪しげな行事に連れ出される事に嫌気が差していた。

しかし、だ。今回はそんな甘い報告ではなかった。ネルネは青筋を立てる。

「またダラけて！ 違いますよ！ 本当にヤバいんです」

そう言われて、何度、自称大物貴族と挨拶させられたか解らない。

「もう動かないもんねー」

「ねー」

再び顔を見合わせ、変顔で睨み合う二人。しかし、今日のネルネはひと味違った。

——パァン！

見つめ合う二人の鼻先に弾丸を撃ち込んだのだ。

「……な、なんでしようか？ ネルネさん」

「私達、お仕事頑張りますよ？」

「良いから付いて来て！」

今日のネルネは機嫌が悪い。二人はキョトンと三度みたび見つめ合うといよいよ何事とネルネの後を追いかけた。

「ドコに行くんですか？」

「こっちはバルコニーしかないぞ」

「いいから急いで！」

そうして城の裏、バルコニーに顔を出した二人は信じられないモノを見てしまう。

「な、何だあれは！」

「山が、動いています」

朝日に照らされたのは蠢く山脈。いや……

「星獣！」

かの星獣が何十匹も連なり、帝都に向けて進撃してくる地獄の光景だったのだ。

「なんで？ いつの間に？」

「あんなのが押し寄せたらひとたまりもないぞ！ 帝都はパニックになる」

驚きおののく二人であるが、今度はネルネがため息を漏らす番。

「言っておきますけど、帝都は既にパニックです！ 一番最後ですよ、あなたたち二人が」

「……………」

「……………」

どうやらダラけ過ぎていた。またまた見つめ合うユマ姫とミニエール、どうして良いかも解らずに、揃って肩を竦めるのだった。

訪れたのは終末の刻。今回も、やはり世界は滅びに向かっている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「我々は、エルフとの共同戦線を展開する」

ミニエールは、エルフとの同盟を宣言。人里離れた北の平原で敵を迎え撃つ準備を始めた。しかし、今回はユマ姫の誕生日として、世界中から人を呼んでいない。

王国軍やプラヴァスの協力は得られず、軍も召集していない。

市民はユマ姫の美しさに魅了されておらず、国民皆兵で戦おうともしないだろう。

自然、軍の規模はあの時を大きく下回る。

しかし、それで構わない。

有象無象の兵隊など、怪獣を相手には足止めと肉壁にしかない。今回は遙かに強

力な駒が揃っている。

その筆頭、一人の少女がズルズルと格納庫を引き摺られていく。

「ちよつと待って下さい！　なんで？　私はもう必要ないと思います」

ネルネだ。邪神ユマ姫と皇帝ミニエールに活を入れ、仕事は終わったと引つ込もうとするとところを捕まった。

「いえ、あの？　あなた以外に誰が必要かって位ですよ？」

木村はネルネを見つけると、帝城の格納庫に連れ去った。そこにあの時の龍のオブジェは存在しない。

代わりにデンと鎮座していたのは、主砲を備えた魔導車である。それもとびきり大きい一台。

「なんですか、このデツカイの！」

「戦車です！　あいつらは最後の一台、とっておきを残していた。コイツの装甲ならちよつとやさつとの攻撃じゃビクともしませんよ、帝国で最も安全な場所だと私が保証します」

自信満々な木村の顔。しかし、ネルネは騙されれない。

「嘘だあ！　コレ、怪獣に踏み潰されてたじゃないですかあー」

「まあまあ」

彼女らはこの日、襲撃が有ることを知っていた。しかし、追い詰められた古代人たちは、もはや止めようが無かった。

最後だからこそ、ゆつたりとした死を望む。そこに今、単身乗り込んだ男が一人。「今までの事、チャラにするから働けとよ」

田中だ、彼はたった一人、彼女らの屋敷に乗り込んだ。

「そう言われても、知ってるでしょ？ 真正銘ロクな戦力が残ってないの」
気怠げに魔女が嘯くと、構わず田中はソルンに訊ねる。

「あるんだろ？ 出せよソルステイスを」

「ッ！ どこで、ソレを!？」

田中から出るハズのない名前が出た。これには魔女もソルンも腰を浮かせる。

ソルステイス、それは古代文明の粹を集めた最強の自律小型兵器。俗に言う黒い蜘蛛。ソルンも魔女も、発掘したことは、今の今まで誰にも話していない。

停戦し全ての戦力を手放したフリをして、全てのコンピューターを解放したフリをして、ソルステイスだけは地下深くで温存されていた。

コンピューターでロックされた情報は、ソルン以外にはアクセス出来ないハズなのだ。

木村はこの世界の人間と比較して、圧倒的なまでに魔導コンピューターを使いこな

てみせるが、専門家であるソルンを欺く事など出来るはずがない。

ましてや田中が知っているなどあり得ない。

「わかんねえんだよ、俺だつて」

しかし、田中はガリガリと頭を搔く。

「最近、俺じゃない俺の記憶が流れ込んでくる」

彼の記憶は混濁し始めていた、夢と現実が混じり合い、あの時の記憶が混じり合う。

「あなた、何言ってるの？」

「お前の洗脳能力に近いな、誰かにデータを書き込まれたみたいな感覚だ」

「それって、高橋君？」

黒峰は、居るはずがないクラスメイトの名前を口にした。彼らがこの世界に来て既に十六年が過ぎている。

『高橋敬一』がこの世界に転生していたとして、何も起こらないはずがない。いや現に今、起きている。世界は滅びに向かっている。あの男が関わっていないはずが無い。

「解らねえよ、とにかくソルスティスを起動しろ」

「無理よ、魔力の密度が……電圧みたいなモノね、魔石が幾らあつてもダメなモノはダメ」

「だろうな、ほらよ使え」

そう言つて、田中がバックバックから取り出したのは、青く輝く巨大な魔石。あまりにも大きく、黒峰は抱えきれず転げそうになる、ソレほどの大きさ。慌てて駆け寄つたソルンが黒峰を支える。

「何これ？ ドコからこんななの？」

「これは……まさか星獣の!？」

「おまえら、仲が良いな」

「うるさいわね……」

照れたように拗ねたように黒峰は視線を外す。

「悪くねえよ、今のお前は悪くねえ、それで、出せるか？」

「やってみるさ」

魔女の代わりに、ソルンが答える。全てを諦めた割に、どこか幸せそうな顔をしていた。

「でもね、幾らソルステイスが強くても、とても星獣には敵わない」

「大丈夫だ、そつちはアテがある」

苦々しげに田中は言った。星獣を倒すのが自分でないことが残念でならない様子だった。

「それは俗に言う、ユマ姫の呪いってヤツだね？」

「あら、見物ね、ソレ」

一方で星獣を倒した方法、ソルンはもちろん魔女にだって興味があった。

しかし、田中は肩を竦める。

「それだけじゃねえ、アテは二つある」

「二つ？ まさか星獣を倒す方法が二つあると言うのか？」

「へえ、益々面白いわね」

世捨て人同然の黒峰は、この世界を最後まで観戦するつもりでいた。

盤面から降りた今の方が、ずっと世界を楽しめていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、大森林の西部では、もう一人の鍵となる少女が既に星獣の群れを臨む位置に居た。

「うわああ、一杯いるうー！」

それは、空！ 風吹き荒ぶ上空二千メートル。

この世界で唯一、彼女だけが生身で空を飛べるのだ。

「コレ、効くかなあ」

少女が魔法で生み出したのは、風の刃。それがどんどん大きくなった。

身の丈よりも、家よりも、城より大きく、星獣よりも更に大きい、風の刃。

魔法の常識を越える、絶対にありえないハズの大きさ。

それもそのはず、なにせ、彼女の魔力値は完全なる規格外。

より濃密な魔力が存在した古代の世界でも、これほどの魔力の持ち主はいなかった。真祖のエルフでも魔力値は千が精々、あの時のユマ姫ですら1600がやっと。

しかし、しかし……だ。

信じられない事に、少女の魔力値は2200。

これは星獣すらも上回る。

セレナだ、セレナは報せを聞いて、地下遺跡から飛び出した。彼女ほどの魔法使いが戦場に与える影響は如何ほどか？

魔法の強さは、指数関数的に上がっていく。

2200の魔力から全力で出される魔法は、前代未聞の威力となった。

今、巨大過ぎる風の刃が星獣に降り注ぐ。

——ガガガガガッ

まるで星ごと切り取るようだ。押しつぶされた星獣が、真つ二つに千切れていく。星獣が誇る無敵の回復能力がまるで追いつかない。

星獣が力なく倒れた後は、大きく地形が変わってしまった。斬り裂かれた星獣の死骸が山となり、斬り裂かれた断裂が河となって血が流れる。この世の地獄が一人の少女に

よって作られた。

地上に群れる緑色の猿が、上空のセレナを指差してギャアギャアと騒ぎ。古代人の操る無数のドローンが雷雲のようにセレナに群がる。

「もう、邪魔!」

魔法のひと薙ぎで無数のドローンが墜落していく。誰もセレナに触れない。誰も彼女を傷つけられない。まさに無敵。

「はあ、疲れたあ……」

ただしセレナは燃費が悪い。生きていくのに大量の魔力を必要とする。

彼女だけでは、戦線を維持出来ない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

愛しの妹が待つ戦場に、ユマ姫は行かないとは言えなかった。ミニエールと一緒に装甲車に乗り込み、戦場へと向かう。

「ずいぶんと用意周到ですけど、これってあらかじめ解ってたんですか? 私聞いてま

せんよ!」

「私もだ」

二人して拗ねている。ちなみに、木村はミニエールに何度となく説明したのだが、めんどくさいと無視されていたりする。

難しくて面倒な事ばかり言うので、ミニエールは木村が苦手だった。

「資料は渡されたが、私にはサツパリだ、読むか？」

「……読みます」

駄目な大人だなあといいながら、ユマ姫は木村が書いた資料を受けとった。

「どれどれ？」

——魔力に満ちた古代世界、人々は大量の魔力を星から採取して生きていた。健康値の膜に守られながら。

しかし、あるとき健康値が毒へと変わってしまう。原因は星から魔力を吸い出す新しいプラント。魔力を吸い出す古代人を、星が排除するべき異物と認識してしまった。

魔力も健康値も毒となれば、古代人はどちらもない場所に逃げ込むしかなかった。

外の世界とは、シガイセン？ が降り注ぐ地獄の土地である。外は外で別の毒が満ちていた。

我々が世界の全てだと思っている場所は、惑星ザイアのほんの一部でしか無い。そんな彼らが、世界を取り戻す為に侵攻を計画している。

「うー難しいよ」

ひどい殴り書き、それに話も荒唐無稽でユマ姫には理解が追いつかない。

ユマ姫は理解の追いつかぬままページをめくる。

——一部の古代人は眠りについて自らを保存した。それが魔女のお供であるソルンとノエルの二人。彼ら以外の個体は全て睡眠中に死に絶えている。

彼らは人工的に作り上げた強い肉体を持っていて、古代人でありながら魔力にも健康値にも耐性がある。

この肉体が完成するまで、彼らは千年以上も眠っていた。

この肉体が完成したからこそ、古代人は侵攻を開始した。

「千年も眠れるモノなんですね」

コールドスリープなど知らないユマ姫は、ズレた所に感心した。まして脳みそだけ保管して新しい体に移植したなど知る道理もない。

解らないままにページをめくる。

——近年、吹き出す魔力の量が増えている。エルフも土地を守り切れずに遷都するほどに魔力が濃くなっている。

プラントが暴走しかかっている。古代人はプラントの破壊を急いだ。

それらの情報は、通信塔を修理したソルンが、外の古代人から直接手に入れたモノである。

しかし、通信が回復したことでもっと恐ろしい事実が判明する。

プラントの中にはまだ古代人の生き残りが居たのだ。

プラントの破壊などんでもない。彼女が中で制御しているから、ギリギリのところ爆発を免れている。破壊などしたら、今度こそ世界は終わる。古代人はソレを信じていない。どうしても、信じたくないのだ。

そして、木村の資料には、ミニエールにも解るように最後に一行
へ古代人の侵攻を食い止めなければ、世界は滅びます！<>
ソレだけがデカデカと書いてある。

「ええ〜！」

あんまりな結論に、ユマ姫は仰け反った。

「まあ、なるようになるだろう。駄目ならどうしようもないし」

ミニエールは投げやりに答えるだけだった。

終末の刻 Ex

古代人の侵攻。人類の存亡を懸けた戦いが始まってしまった。

「なんだ、この戦場は!?!」

王国側を代表し、僅かな手勢で参じたオーズド伯は信じられないモノを目の当たりにする。

電磁波が飛び交いオーロラが輝く空で、無数のドローンが空を飛ぶ少女を追い回している。

大地は城よりも大きい星獣が埋め尽くし、鉄の蜘蛛が這い回る。緑色の猿まで駆け回っているのだから堪らない。

報告には聞いていたが、実際にこの目で見ても、現実感が伴わなかった。

地獄の光景としても、ここまで酷い絵画をオーズドは知らない。

果たして、味方だって負けてはいない。

森に棲む者改め、エルフの戦士達が輪になると、輪の中心で竜巻が生じ、次々とドローンを撃ち落としていく。

そうかと思えば馬もなく車が動き、怪獣へ大砲を放っていた。

そこまではオーズドにも、まだ解る。戦場の常識とは外れるが理解出来る。エルフは魔法、車は帝国の新兵器、戦車。

解らないのは、魔獣までもが鉄の蜘蛛に噛み付いて攻撃している光景だ。人間と魔獣の共同戦線？ いや、そんなハズはない。

「魔女、生きていたのか！」

死んだハズだ。オーズドも吊られる所を確認している。しかし、こんな事が出来る人間が二人と居るはずがない。

或いは生き返ったのか？ 我々は地獄に迷い込んだのではないか？ そんな事までオーズドは考えてしまう。

その時、空を飛ぶ少女から無数の風の刃が撃ち下ろされた。

ぎやりと金属が切断される音が連続し、地上にはびこる鉄の蜘蛛をバラバラにしよう。

風の刃は鉄も、地面も、構わず引き裂いた。百にも届く魔法の全てがオーズドが知るどんな兵器よりも恐ろしい威力を秘めていた。

命中率もありえない、まさに百発百中。

いや、違う。一匹だけ、黒い蜘蛛だけは風の刃を躲していた。恐らくボスに違いない。

「まだ、アレが撃てるのか」

見上げれば、更に倍の刃が少女から放たれて、雨の様に大地へと降り注ぐ。

「これが、戦争なのか？」

一瞬で、まるきり地形が変わってしまった。更に驚くべきはその無数の風の刃をするすると黒い蜘蛛が躲していく光景。尋常では無い機動力。

しかし、それでも取り囲まれて、躲しようがない一撃が黒い蜘蛛に迫る。

——ギイイイン

しかし、黒い蜘蛛は風の刃を弾いてみせた。銀色の蜘蛛と明らかに作りが違う。硬さが違う。騎士が束になって斬り掛かっても、傷ひとつ付けられないに違いない。

正に超常の戦い。こんな戦場に我々の居場所などない。オーズドがそう悟った時だ。鉄の馬車から拡声の魔道具によるひび割れた声が響く。キムラ子爵の声だった。

「すいませーん、黒い蜘蛛は味方です。攻撃は止めてくださーい！」

しばらくして、空に浮かぶ少女から返事が返る。

「そう言う事は先に言っておきーい！」

あの魔法に似つかわしくない、幼い声だった。

……気が抜ける。二重の意味で。

オーズドは息を吐き、鞍上にどっかりと尻をつく。気が付けば鎧の上に立ち上がって
いたのだ。

「これは、夢か？ それとも地獄か？」

オーズドは神話の戦いに巻き込まれてしまったのだと、本気で思った。

——ドオオオン！

そこに戦車から二発目が放たれ、巨大な怪獣が大地に崩れ落ちていく。

決して人間の立ち入れない戦場がそこにはあった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

日が沈み、夜が来た。

機械の軍隊は止まることなく押し寄せてくる。電磁波で出来たオーロラの輝きは美しさよりも不気味さが勝った。

一日中戦い続けたセレナだが、体力も魔力も限界。今は装甲車でぐっすりと寝ている。

ユマ姫は絶対に妹を、セレナを失いたくなかった。しかし、戦況は微妙である。なにしろ星獣とマトモに戦えるのがセレナとネルネぐらいしか居ない。

人間の仕事と言えば、緑色の猿に囲まれないように露払いをするぐらい。

「戦況はどうなっています？ なんだか押し込まれてませんか？」

ユマ姫は装甲車の窓を開け兵士に尋ねる。実際、戦場はズルズルと後退していた。

「敵の数が多すぎます」

「奴ら死に物狂いだ」

緑色の猿、通称ゴブリンは劣化した古代人の子孫。古代人達は彼らを容赦なく使い捨てにしていた。同じ人間だと認めてもいないのだ。

そして、彼らは人間よりもずっと弱い。騎士ならば何十匹と相手に出来るていどの存在。

だが、死兵となったゴブリンに取り囲まれて、戦車が機動力を失えば、たちまち星獣に踏み潰される。

「こちらは逃げながら戦うしかないのであつた。

「一部の敵は大森林に向かっています」

「プラントって所に行かれたら終わりなんですすよね？」

「何匹もの鉄の蜘蛛が既に抜けてしまいました」

「タナカ様は奴らを追って、単身大森林に！」

「ええ？」

無茶である。蜘蛛の機械だつて、一体で何人もの騎士を殺せる怪物だ。

これは死んだな、とユマ姫は田中のご冥福を祈った。

しかし、人の心配をしてる場合ではない。ユマ姫のいる本陣ですら、盤石ではないからだ。

ネルネの砲撃は星獣を倒せるが、ソレは狙った所に当てられればこそ。

主砲の射程は1kmぐらい。高さが50mの星獣を相手に頭部に当てたいならば、実射程は500メートルがせいぜいとなる。逆に、近付かれ過ぎても仰角が取れず、狙った位置に当てられない。

更に言えば、帝国の戦車は正面の僅かな角度にしか大砲を発射出来ない。現代の戦車のようにぐるんと砲塔を一回転させるような機構を備えていない。

だから砲撃は運転する木村と、照準を合わせるネルネの共同作業。どちらかが操作に手間取れば、そのまま星獣に踏み潰されかねないのである。

だから囲まれないように少しづつ後退しつつ、牽制の砲撃も織り交ぜて、どうにか星獣を近寄らせないだけで精一杯。

神経のすり減る作業。もうネルネだって限界に近い。ネルネが倒れたら、疲労困憊のセレナを叩き起こしてでも戦って貰うしかないのであった。

ユマ姫は、無力な自分が悔しくなった。それは名もなき一般兵も一緒の思い。

「ユマ姫様、祈禱をお願いします」

「呪いと、祈りを！」

無茶な注文だ、ユマ姫には呪いの力なんて無いのだから。

「わかりました」

それでもユマ姫は頷いた。

日頃はすっかり飽きてウンザリしているお祈りも、今回ばかりはやってやろうと決意した。

少しでも士気があがって、皆が頑張ってくれるなら、効果が無いお祈りも、思わせぶりなお告げも、なんでもやろうと装甲車を降りる。

「星に、祈ります」

でも、まずは星に祈った。地面に簡単な図を書いて、印を組んで祈るのだ。

これはエルフ伝統の儀式。ただの気休めだ。呪いでも、魔法でも、何でもない、星に願う伝統的なお祈りである。

「おおー、これが呪いの儀式ー」

「やつらめ、死に絶えるがいいー」

盛り上がる兵士に、ユマ姫は内心ため息をひとつ。騙している様で気が引けるが、これは本当にただのお祈り。呪いみたいな攻撃的なモノでは無いのだ。

星に願うだけ、女の子が好きなおまじない。

ふと、ユマ姫が空を見上げると、オーロラに負けないぐらい星々が瞬いて見えた。空に吸い込まれそうなほど。

その中で、とりわけ強く輝く流れ星。

「わあー！」

吉兆のサイン。祈りの最中に流星を見れば、願いが叶うと言われている。

「神様、セレナを守って！ それにネルネも、みんなも」

かつて無いほど、熱心に祈るユマ姫。

しかし、少女の純粋な願いとは裏腹に、周囲は物騒な盛り上がりを見せるのだった。

「星が落ちてくる！ これが、呪い！」

「まさか、星を殺すなんて」

流星を指して、星を殺したとは笑ってしまう。前にも似たような事があった、天を殺して雨を降らせた、今もユマ姫には雨乞いの要望がひっきりなしに入っている。

なんと言うか、人間はいつも風情がないなどユマ姫は呆れてしまう。こう言う時はただ静かに星に願うべき。

目を瞑り、胸の中で何度も願いを復唱する。

気が付けば周囲の喧噪は消え去り、願いを呟く自分の声だけが聞こえてくる。

こんなにも祈りに没頭したことは今までなかった。これは、本当に願いが神に通じたのではなからうか？

ユマ姫はそう思って、そつと目を開ける。

「え？」

目の前の流星が、あまりにも大きい。流れ星は何度も見たユマ姫だが、こんなのは見たことがない。これではもう、吉兆どころの騒ぎじゃない。

「なにこれ？」

どう言う事か聞こうとして、周りに誰も居ない事に気が付いた。

「な、なんで？」

皆、もうとつくに避難していた。誰もユマ姫の呪いの儀式を止める事が出来なかった。

降り注ぐ流星が、星獣へ向けて落ちてゆく。いま巨大な火の玉となって、地面へと落下する。

着弾の瞬間訪れた、耳が痛いほどの静寂。

星獣の肉体が沸騰し、土砂を巻き上げ、衝撃波が津波となって迫ってくる。

もはや逃げようもなく、降り注ぐ土砂を見上げるユマ姫の顔は引き攣っていた。

「なんでえー」

戦車砲より何倍も大きい着弾音は、衝撃波から僅かに遅れてやって来た。

ユマ姫の悲鳴は、あつという間に掻き消されるのだった。

「あーもう、なんで置いて行っちゃうかなー」

一人の少女が掘り返された柔らかな黒土を踏みしめて駆ける。

「あの子、寂しがり屋だし、結構根に持つんですからね！」

「いえ、しかしこれは、そう言う問題では……」

ネルネ、後に続くのは木村だ。

二人はユマ姫を探しに、全てが死に絶えた戦場に戻ってきた。

昨晚、死闘を続けていた二人は隕石が落ちたのは神の奇跡と喜んだ。そして、敵の追撃が止んだのを確認するなり、疲れ果てた二人は仮眠をとってしまったのだ。

ユマ姫が置き去りになっているなど、夢にも思っていないかった。

朝起きて、一部始終を聞いて顔を蒼くしたのは言うまでもないだろう。

木村の目的はユマ姫の死体を探す事。寂しがり屋とかそんな話では無いハズなのだ。

「ほら、このあたりですよ。あつ、ほら」

「ひっ」

それは、黒い大地から突き出た少女の右腕だった。間違いなくユマ姫のモノ。

その不気味さに、木村は腰が引けてしまった。

……実は、調停式でのユマ姫を見て以来、木村は少しユマ姫が苦手になっていた。ご

機嫌伺いも減って、疎遠になっていた。

ユマ姫があまりにも常識をかけ離れた存在なのだと、ようやく気が付いてしまったからだ。

これは当たり前前のこと、変わらず接することが出来る皇帝ミニエールの凶太さがオカシイと言うしかない。

「もう、キムラさん、早く引き上げて！」

「え？ ですが……」

「別に手を握った位で何ともないですよ」

手を握る？ 木村には意味がわからない。

いや、確かに、貴族のお嬢様の手を取って許されるのは、ダンスの時ぐらい。そういう貞操観念の世界ではある。

しかし、断じてそう言うつもりで遠慮したのではない。

「あの……」

「早く！ 拗ねると面倒ですよ！」

拗ねる？ 死体が？ 木村はネルネの言葉が恐ろしくて堪らないのだ。

「うーん、よーっと！」

「……………」

二人で引つ張ると、驚く程にあっさりとユマ姫は抜けた。姿は綺麗なまま、着衣の乱

れすらない。

それが却つて不気味であつた。

「朝ですよ！ 起きて」

あさ？ そんな馬鹿な。息を飲む木村の前で、いよいよネルネはユマ姫の頬を引つ張つた。

「んん、ネルネ？ おはよう」

そして、ユマ姫は目を醒ます。何事もなかつたように。

……着衣の乱れどころではない。

良く見れば、衣服には泥染みすらない。真つ黒な土に埋まつて、真つ白なままなのである。

ユマ姫の服を手がける木村に言わせれば、そんな仕掛けは一切無い。

間近で見せつけられた奇蹟、木村は息を飲み、思考が止まつた。

「あ、なんでキイムラさんが居るんですか？ 寝起きを見ないで下さい！」

寝起きがどうか、そんな次元の話では無いハズなのだ。

「ソレよりも、周りを見て下さい！ ユマ様」

ネルネが注意する。

そうだ、辺り一面が真つ黒な大地。これは一体どうした事か、どうやって生き残つた

のか、ソレが重要だ。

しかし、ユマ姫は何が起きたか覚えてはいなかった。

「え？ なにこれ！ どこですかココ！」

「だからあ！ 昨日と同じ場所ですよ、隕石が落ちたんです！」

「あ！ そうだ！ でも、なんで？」

「もう！ ユマ様！ 隕石を落とすなら、そう言つて下さいよ。迷惑です」

「知りませんよこんなの！」

「ほんとうですかー？」

ネルネはユマ姫のほつぺたをツンツンと突つつくものだから、ユマ姫はみるみる不機嫌になった。

「こんな事が出来るなら、初めから帝国軍に向けて隕石を落としてますよ！」

それはそうだ、だからこそ木村には解らない。そして、ネルネにだつて解らないのだ。

「でも、タイミング良く隕石なんて、それこそ呪いみたいじゃないですか。言つておきまずけど、これは私じゃないですからね！」

「だからつて、何ですか、ネルネまで人を化け物みたいに！ 許しませんよ！」

「そんな事言われましても、軍ではユマ姫の呪いがまたやった！ つて大盛り上がりですけど？」

「そ、そんなー！」

ユマ姫は大変にショックを受けている。

木村としては、隕石以上に、どうして無事なのが気になつて仕方がないのだが。

呆然と立ち尽くす木村を、ユマ姫は睨んだ。

「まさか！ キムラさんまで、私がやったって思つてるんですか？」

「い、いえ……」

言葉に詰まつてしまう。もう、絶対に違うと言い切れない。

「頭がおかしいんじゃないですか？ こんなので出来る訳ないでしょうが！ 全く、どうかしますよ」

どうかしてるのは、一体誰か？ 頭を抱える木村をよそに、もう一人の非常識が空を飛んで駆けつけた。

「お姉ちゃん！ 大丈夫?!」

「せ、セレナあー！」

愛しの妹、セレナである。

さつきまでプリプリと怒っていたユマ姫の顔は、へにやりと崩れた。

「大丈夫です、この通り」

「……姉様、わたし心配してしまいました」

「セレナ！ セレナだけですよ私を心配してくれるのは」
ユマ姫は感激に妹を抱きしめる。

しかし、『姉様』と言い直したのは何でだろう？ どうにも他人行儀だなど訝しんだが、大人のキイムラ子爵を前にお行儀良くしてるのだと理解した。

なるほど、セレナだって成長している。やっぱり妹は賢くて可愛いのだと嬉しくなった。

「私は大丈夫です、なんともありません。セレナこそ、あれだけ魔法を使って大丈夫なんですか？」

「うん、でも、そんな事より、姉様が凄いです」

「凄いですか？」

何が？ とユマ姫は首を傾げる。まさか、と嫌な予感をした。

「だって、隕石を落とすなんて凄すぎます！ 最強です！ 私よりも、ずっと！」
「……………」

セレナは目をキラキラと輝かせ、姉を見上げた。

それは、ユマ姫が初めて味わう、妹からの尊敬の眼差しだったのだ。

一瞬、ユマ姫は言葉に詰まった。妹が変な影響を受けたとか、良い子だから騙され易いんだな、とか、一瞬で色々な思いが脳裏を過ぎる。

ここは、妹の将来のためにもハッキリ訂正するべきだ。変なスピリチュアルなヤツにハマってしまうと大変な事になる。

「……………」

しかし、セレナはキラキラと輝く瞳でユマ姫を見ているのだ。

愛する妹を、セレナを失望させたくない思いと、凄いお姉ちゃんて居たい気持ちで勝ってしまった。ユマ姫は今日だけは万能感を味わいたかった。

普段なら決してそんな事はしなかっただろうが、昨夜に感じた、途方もない無力感がそうさせた。

妹の肩をとると、言い含めるようにゆっくりと口にする。

「セレナ、でもこれだけは覚えておいて。これは、便利に使える力ではありません。時と場所、大気に溶けた魔力と、精霊のお導き、それらが噛み合った時にだけ神に許された行為なのです」

……なんだか適当に、それっぽいな事を言い始めた。

同時に、二度と出来ないといふめかすのも忘れない。

悪い事に、ユマ姫は最近すっかり癖になつていたので。思わせぶりの言葉で、呪いを信じる人々を煙に巻く言葉の紡ぎ方。

セレナはすっかり信じてウンウンと頷いて、ますます輝く尊敬の眼差しを強くする。

ちよつとマズいなと冷静になったユマ姫は、もうこれつきりだと念を押す。

「セレナ、この力は人間に扱えるモノではありません。決して調子にのつてはダメ。軽々しく口にするのもいけません。途端にしつぺ返しにあいますよ」

「そっだよね」

だけど、セレナはずつと前からユマ姫を尊敬していた。セレナは誰よりもユマ姫の異常性を知っているから。

まして第一声に「大丈夫、この通り」と綺麗なままの衣服まで見せられれば、セレナすら、あまりの奇蹟に目眩すら感じてしまう。

そして、ユマ姫が適当に紡いだ言葉は、大筋で真実だった。

これは確かに、時と場所を選ばなければ決してあり得ない。とてつもない『偶然』が味方して初めて起こる奇蹟である。

そして、ミソなのは、自分がやったただなんて、ユマ姫はひと言だつて言っていない。胡散臭い言い回しは手慣れたモノだ。

唯一の問題としては、ネルネが胡散臭そうな目でユマ姫を睨んでいる事ぐらい。

「キムラさん、さつき頭がおかしい、とまで言われてませんか？」

「今まさに、頭がおかしくなりそうではありますねえ」

「私もです！」

ブーイングがうるさい二人を横目に見ながら、もちろんユマ姫は華麗にスルー。

そんな漫才をしていれば、後続の軍隊も追いついた。

「これは！ まさかご無事とは！」

「我々は、自らを犠牲に隕石を呼んだのだとばかり」

全く無傷なユマ姫を見て、祈禱を願った兵士達ですら腰が抜けている。神を拜むような姿勢で頭を垂れる。

ソレを見て、もうすっかりユマ姫は出来上がっていた！

染みひとつない真っ白な衣装で、取り出した扇子で優雅に口元を隠して兵士達を一瞥する。

「わたくしの隕石で、わたくしが怪我をするでも？」

見くびってくれるなよと言わんばかりの態度、加えてもうハッキリと、わたくしの隕石とか言い始めている。これには兵士達だって「滅相も御座いませぬ」と恐縮するしかない。

その様子に、ネルネは益々、ユマ姫への目つきを険しくする。

「あの人さつき、決して調子に乗るなどか言ってませんでした？」

「軽々しく口にするなども言っていましたよね？」

「良い言葉ですよね！」

ネルネに木村、それにセレナまで無自覚にユマ姫を煽るのだった。

「ユマ殿、無事だったか！」

「ミニエールさん」

そこに、白馬に跨がる新米皇帝も合流した。

「それにしても、無傷とは恐れ入る。まさか、汚れてもいないのか。不思議だな」

「そうですか？」

とほけるユマ姫の後ろでは、大きく頷く木村の姿。

それは、この場の誰もが気にしていながら、言い出せない言葉であったからだ。

ここにいる全員、誰も彼も、昨日からの戦闘で疲れ果て、土埃に塗れている。そんな中、浮き上がるようにユマ姫だけが輝く姿を保っているのだ。これで気にならない方がおかしい。

「私、ずっと装甲車に居ましたから」

「昨夜はどうした？ ココで祈っていたのだろうか？」

「あんまり覚えてませんが、そう言えば私、昔からグツツて気合いを入れると汚れないんですよね」

「そうか、便利だな。私も是非習得したいところだ」

そう言うミニエールは確かに汚れの目立つ姿であった。ユマ姫が羨ましくて仕方が

無い。

しかし、馬上のミニエールを見上げたユマ姫の思いは違う。

「確かに、汚れています、けど……」

馬上のミニエールは全身、泥とゴブリンの返り血。顔には少しだけ擦過傷。それらしい戦闘の痕跡は、ミニエールの凜々しい美しさを際立たせるばかりだ。

この間まで一緒にだらけていた姿が嘘のよう。凜々しくて、格好いい。なによりユマ姫と違いメリハリのある体を馬上に晒している。

お互いに、羨ましいなど見つめあう。

なんだこの二人は……。

謎が解けるどころか深まってしまった。意味が解らずに、木村は項垂れてしまう。

ユマ姫は、そんな周囲に気を配らない。ミニエールに気合いの入れ方を伝授しただけ。

「やってみますか？ こう力を入れるんですがって」

「こうか？」

二人して並び、中腰になって力を入れる。無論、ミニエールに変化はない。

ただ中腰になっただけ。

その頭上に死が通過した。

ビインと、金属が弾ける様な音がした。

「ぎやああー！」

誰かの悲鳴に振り向けば、人間が生きたまま燃えていた。先ほどユマ姫に声をかけた、帝国軍の兵士であつた。

「え？」

ユマ姫は、いや、その場の全員が何が起こつたのか解らない。

解つたのは凄まじい地響きで大地が揺れ始めてからだつた。

「星獣ー 生きていたのか」

グズグズに溶けた星獣が三匹、地面から這い出して来た。黒い土の山だと思つたソレは、死に掛けた星獣の体だつたのだ。

彼らは口から熱線を放つ、超高温の体内から、熱や血を吐き出している。これは寿命を削る星獣としても使いたくない攻撃方法である。

しかし、死に掛けた今、もう星獣は後先を考えない。体が冷えるのも構わず、邪魔な泥をも剥ぎ取つて、目の前の人間を殺す気でいた。

「た、退避ー！」

愛馬サファイアに跨がつて、ミニエールが全軍に号令する。いや、しようとした。

愛馬にそつぽを向かれたのだ。サファイアに拒否された。こんな事は初めて。

「なんだ？ 言う事を聞け！」

ここに来て、サファイアはミニエールの言う事を聞かない。決して背に乗せようとならないのだ。その代わり、一人の人間を背に乗せる。

「ええ？」

ユマ姫だ。サファイアはユマ姫の襟に噛み付いて、器用に背中に乗せた。すると一目散に全速力で駆け出したのだ。主人であるミニエールを置き去りに。

これは一体？ 止めようと伸ばしたミニエールの手、その僅か先を熱線が貫いた。

「なっ?？」

思わず手を引っ込めた目の前で、二匹目の星獣から再びの熱線。狂った様に走るサファイアに掠って、真っ白なしっぽに火が着いた。

ここでミニエールにも、ようやく解った。狙われているのはユマ姫だ。

ココに来て、星獣も遅ればせながら気が付いた。この少女こそ本当に殺さなくてはならない存在だと。

星獣の狙いを白馬サファイアはいち早く察し、だからこそ、ユマ姫を背に乗せて、全速力で駆けていく。

だからといって、サファイアはユマ姫が大切なのではない。むしろ、ミニエールと距離を離れたら、さっさとユマ姫を落馬させるつもりだった。

悪いとは思っているが、ミニエールを守る為。サファイアにユマ姫と心中するつもりはない。

「わわっ！ 何するんですか！」

しかし、ユマ姫は落馬しない。服のリボンがたてがみに絡まってしまった。それに、ユマ姫だつて落馬などしたくないのだから、必死に手綱を握つて耐えた。

星獣がグングンとサファイアに迫る。その速度は昨日までのソレではない。ひたすら逃げる一人と一匹、逃げ込むべき場所は限られていた。

見晴らしが悪く、道が狭い、大森林へと飛び込んだ。

「追撃だ！ ユマ姫を救出する！」

それを見て、一転してミニエールは星獣への追撃を決意する。

ユマ姫が大切なのは勿論だが、彼らが向かった先にプラントがあるからだ。

そうして、ユマ姫を先頭に、星獣、そして帝国軍。もちろんエルフ達も巻き込んで、世界の命運を懸けた追いかけっこが始まってしまった。

巡る世界

「ちよつと待つて！ 止まつて！ 止まつてくたさい！」

ユマ姫は跨がる白馬に必死に縋つた。たてがみを引つ張つたり、背を撫でたり、必死に言う事を聞かせようとする。

それでもミニエールの愛馬サファイアは止まらない。ユマ姫を乗せたまま冬の森を駆けていく。

深い針葉樹の森には数日前の雪がまだ残っており、白馬の蹄が粉雪を舞い上げ、吐く息は真つ白だ。

白く染まった世界。厳しい冬の森はエルフが何百年も守ってきた聖域だった。静謐な空気がユマ姫の頬を撫でてゆく。

——ガアアアアア

しかし、その空気をぶち壊す存在が、背後から現れた。

バリバリと木が倒れる音が背後から迫ってくる。色の抜けた白と黒の森が容赦なく削られる。必死に駆けるサファイアよりも、なお早く。

星獣だ。

星獸はなりふりを構わず、溶けかけた体を四つ足で踏ん張って、体からは急速に熱が奪われて湯気を発し、それでもサファイアを追いかける。

森が雪ごと溶かされて、灼熱の体に飲み込まれていく。

「ふえええ！」

恐る恐るユマ姫が振り返れば、すぐソコにまで星獸の顔が迫る。爬虫類みたいな、それでいて溶けかけた顔はどこが目かも解らない。解るのは目につく限りの巨大なクチバシ。

そのクチバシがゆっくりと開かれる。中に詰まっていたのは、剣山みたいな狂暴な歯列。全てが炭化ケイ素で出来た、この世で最も危険な凶器。

粘つく熱気がユマ姫を包んだ。あわやサファイアごと噛み殺され、バラバラに分解される。その瞬間。

——ガゴン！

星獸の口に巨木が挟まる。そのままつかえ棒となつて、紙一重で星獸の歩みが止まる。サファイアが朽ちかけた巨木を蹴飛ばして、星獸の口に突っ込んだのだ。

——バリバリバリ！

しかし星獸は口の中に挟まった巨木を何の抵抗もなく噛み砕く。

「ひええええ、止まって止まって！」

ユマ姫は半狂乱になってサファイアに乞う。

サファイアは人間の言葉を解する。極めて頭が良い馬だ。異常と言っても良い。言われずとも体力の限界。止まってやるよ、と嘶きをひとつ、足を緩めた。

これ幸いと、ユマ姫は下馬を試みる。

「え、もう来た!?!」

すると、すぐに星獣に追いつかれた。ユマ姫は降りるタイミングが掴めない。既に背後に星獣の熱を感じる距離。

「待つて、止まらないで! 急いで早く!」

止まるか進むかどっちなんだと、いらつきながら。再びサファイアは駆ける。

この白馬にして、ユマ姫は大変不思議な存在であった。先ほどから切り株を飛び越え、木を蹴飛ばし、サファイアは大森林の獣道を暴れ回っている。

どんな名人でも落馬を免れぬところを年若いユマ姫が食らいについているのだ。乗馬の経験もなさそうな、この少女が。

コレは流石にあり得ない。サファイアもこの少女がまともではないのだと理解した。変に心配することも、囧として振り落とす事も止め、サファイアはただひたすらに森の中を駆け抜ける。

「ちよつと! 追いつかれてますよ!」

しかし、相手は怪物。雪の冷たさで動きが鈍ってはいるものの、元々のサイズが違う。サファイアが必死に駆けぬけた距離をたったの一步で詰めてしまう。

——ガアアアア！

「ヒッ！」

しかも、時折吐き出す熱線が行く手を阻む。ユマ姫の顔の数センチ横を熱線が貫いた。

コレを躲せているのはサファイアの異様な勘と、後は殆ど運が良かっただけのこと。しかも、躲した熱線は森を焼き、溶けた雪の蒸気が視界を白で埋め尽くす。

「何も、見えません！」

足元すら見通せぬ霧、馬上のユマ姫は不安げにキョロキョロと見回すのみ。サファイアにしたって、前も見えない獣道、足を緩めざるを得なかった。

その背後、ぬるりと星獣は近付いた。魔力を感知する星獣に、視界なぞオマケに過ぎない。

一人と二頭に気取られず、確実に仕留められる距離まで忍び寄る。

——ガパア

「え？」

振り返ったユマ姫の視界一杯に、剣山地獄が顕現した。星獣の口内、もはや地獄から

逃れようもないタイミング。

——ブギヤアアア

その星獣の巨大な顔が吹き飛んだ。切り飛ばされて、森を破壊しながらゴロゴロと転がる。

「お姉ちゃんーん」

「セレナ!?!」

セレナだ、セレナの魔法が間一髪、ユマ姫を救った。救ったはずだ。

「ありがとうセレナ。でも、どうして?」

なにせ、この霧である。ユマ姫には自分の足元すら見えないのだ、どうやって狙ったと言うのか?

「う、うん……お姉ちゃんには魔法は当たらないと思って」

「え?」

セレナは良く見ずに、魔法を放っていた。姉であるユマ姫が死ぬなんてまるで考えてなかったから。

コレにはユマ姫も反省する。隕石を呼び寄せたとか、あまりにハツタリを利かせすぎたのだと。

しかし、そうではない、ずっと前からセレナは、姉であるユマ姫が自分の魔法で死ぬ

と、言った直後。先程までユマ姫が居た場所を星獣の巨大な足が踏み潰した。

「ふべええ」

衝撃に煽られながらも、ユマ姫は横目でセレナの無事を確認。あのままジツとしていたら妹までも巻き込んでいた。

「もつと！ 走って！」

だから再び身勝手な物言い、サファイアは面倒臭そうに嘶くが、全速力で駆けていく。
「来てる！ 来てるよ」

振り返れば二匹目の星獣が背後から森を掻き分けながら接近してくる所だった。そのサイズは20メートル程はある。あまりにも巨大な怪物。

……それでも、だ。

「小さくなってる！」

元々は50メートルに迫る怪獣。マントル付近の超高エネルギー環境で生きているのが星獣だ。体内の高熱がなくなればもう生きてゆけない。隕石を食らって爛れた体に、冬の雪道が急速に体温を奪って、そのサイズを減じていた。

「これなら！ え……」

しかし、その分小回りが利くようになり、瞬発力が上がっている。

今も間一髪、サファイアの跳躍がなければ。パツクリと喰われていた。

「もつと早くうう！」

うるさいユマ姫に、迷惑そうに鼻を鳴らすサファイアだった。

駆けていくと、次第に森の景色が変わってくる。旧都に近付き、獣道が少しずつ広くなる。

「まづいよー！」

言われなくても解っている。道が広くなれば、それこそ星獣に有利なばかり。それでもサファイアは旧都に向かわざるを得なかった。誰かに追い込まれているような感覚。

——ピー、ピー！

その行く手を遮る様に、無数の蜘蛛型ロボが道を占領している。

コレから一気に旧都のプラントに侵攻を掛けようという準備の最中であった。

嘶きをひとつ、気合いを入れたサファイアはロボの間を縫うように駆け抜けた。

——ガアアアア！

後ろから迫った星獣は、蜘蛛型ロボを巻き込むのも構わず、全てを撞り潰しながら迫ってくる。

——ピー！　　ピーピー！

蜘蛛型ロボだつてやられるばかりではない、星獣に群がり進路を塞いだ。これはユマ姫にとって好都合。

「あいつら争ってる、仲間割れなの？」

元々、星獣は古代人の言う事を聞いていないわけでは無い。古代人の侵攻を利用して、この世界を滅ぼそうと操られたフリをしているだけなのだ。

もう、そんな演技は不要だ。全てのイレギュラーである運命のズレの原因が、目の前の少女にあると見破ったのだから。

しかし仲間割れはユマ姫にとって好都合。しつこい星獣と、プラントを破壊する蜘蛛の潰し合い。ようやく人心地がつき、いよいよ下馬しようと思った時だ。

——ガアアアッ！

目の前の森を突き破って現れた、新たな星獣。

そうだ、星獣はまだもう一匹居た。

「逃げてえー！」

サファイアの首を叩くも、間に合わない。

——ドオオオン

その時響いた重低音。聞き慣れた大砲の音だった。

星獣の眉間に穴が空き、弾ける様に体が崩れる。

「ウエッ！ ペッペー！」

星獣の血。オゾンとアルコールめいた匂いにむせながら、ユマ姫は恨めしげに背後を

振り返る。

「無事ですかあー？」

ネルネだつた。遅い戦車から装甲車に乗り換えて、荷台の上に括りつけた大砲を放つたのだ。

「無事でーす！」

ようやく援護が来た。今度こそユマ姫は馬を下りようとして、嫌な予感がして、止めた。

ネルネが乗った装甲車が、中々コチラに近寄つて来ないから。

「あの一？ どうしましたあ？」

「スイマセン、故障しましたー」

拡声器のひび割れた声は木村のモノだつた。

「ええ！」

ユマ姫は驚くが、道なき道を全開で追いかけて来た装甲車の足回りは既に限界だつた。ここに間に合ったのが奇蹟に等しい。

「逃げてください、来ますー！」

「だと思つたあー！」

先ほどの星獣が蜘蛛を片付け、凄い速度で追いついて来たのだ。動けない装甲車に目

もくれず追い越し、ユマ姫を目指す。

その体長は既に1.5メートル程になっていた。かつての怪獣の面影はなく、サイズと
しては^{ザルギルゴール}大牙猪と大差ない。

しかし、尚その危険度は桁違い。スピードは装甲車にも勝るだろう。このままではあつという間に追いつかれる。

——ドオオオン

そこに、二発目のネルネの砲撃。

しかし、急だったことと動けない装甲車の上では狙える範囲は限られる。それでも可能な限り最大の成果として、星獣の後ろ脚を一本吹き飛ばした。

「うええええー！」

それでも星獣は止まらない、顔を蒼くしたユマ姫を追ってひたすら大森林の中心部へと駆けていく。

一人と二頭、一怪獣の追いかけてこはまだ終わらない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その時、田中は旧都のプラント前。すなわち、成人の儀の場でもある神殿の前まで辿り着いていた。

「んだありや？」

ここまで機械の蜘蛛を無数に葬ってきた田中だが、それらを上回る残骸が神殿の前の広場に転がっている。百に届かんばかりの数である。

この蜘蛛の強さは田中が誰より知っている。それをこんな風に無造作に倒せる存在が、ココには居るのだ。

「ヤベエなオイ！」

犯人は神殿の前に佇む二体の石像。一見すると巨大なオブジェだが、既に田中の存在に反応し動き出していた。

「待て待て！ 俺は、ココをぶっ壊しに来た訳じゃねえ！」

慌てて飛び退いた石畳、振り下ろされた石像の拳が叩き割った。

「問答無用かよ」

人間の中では大男で知られる田中だが、それにしたって相手は10メートルは下らない石像だ。食らったらひとたまりもない。この一撃は鉄で出来た蜘蛛の機械もペチャンコにしてしまうに違いないのだ。そんな残骸を見たばかり。

「クソやべえなオイ！」

しかも相手は固かった。田中には、斬らずとも斬れないと解ってしまう。コレもまた、古代文明の遺産なのだ。

外側だけはエルフが石像のようにかたどっているが、中身は金属製のロボットが収

まっている。

「面倒くせえな」

実のところ、田中は遺跡の中に入り込み、そこに居るといふ古代人と話そうと思つていた。

それで何かの解決になるとは思えないが、自分達がこの異世界に來た意味、そして行方不明の高橋についても何か解ると思つていた。

しかし、二体の石像に阻まれて叶わない。

あの時は、神殿に入り込み、そして王蜘蛛蛇バウゼリケアルと死闘を演じ、命を落とした田中であつたが、今回は入り込む事すらままならない。

なぜか？

機械の蜘蛛の数が少なかったからだ。あの時の田中は蜘蛛に紛れて遺跡に入った。今回は蜘蛛の数があまりにも少ない。石像があつさりと処理出来てしまう程。

蜘蛛の本隊は、遙か後方でまとめて星獣に掃り潰されていた。

「クソツ、隙がねえ」

逃げ回るしか出来ない田中。タイミングを見て神殿に入り込みたいが、どうしてもイチかバチかの賭けになる。

何かキツカケが欲しい。その時だ。

木々がなぎ倒される音、そして馬の嘶きと、少女の悲鳴。

「タナカさあーん」

「おまつー！」

何故だかユマ姫がこんな所までやって来た。それも白馬に跨がって。

そればかりか、背後に迫る良く解らない怪獣のオマケ付き。

「まさかソレ、小さい星獣か？」

「たすけてー」

ユマ姫は、いや白馬のサファイアが全速力で駆けて来る。その背後から同じだけのスピードで星獣も追ってくる。

その姿は大きく減じ10メートル。ただし凝縮されたエネルギーは白熱し、体の全体から強い光を放っていた。一步二歩と踏みだした先、旧都の石畳が溶けだしている。

一体どれだけの温度なのか、想像も難しい。

「オイオイオイ」

前からは無敵の石像、後ろからは今にも爆発しそうな星獣。田中は逃げ道を塞がれた。

しかも、サファイアは田中の隣を素通りし、そのまま瓦礫を掻き分け廃墟の中に消えてしまった。

……置き土産として、ユマ姫を振り落として。

「ふべっ！」

「おい、大丈夫か？ いや、それどころじゃねえ！」

なんとか受け止めた田中。サファイアに成り代わり、今度は彼が姫を抱えて走るハメになる。

なにせすぐソコまで星獣が迫る。地面から発する蒸気と、石が溶ける臭気が、嫌と言うほど危険を主張していた。

アレはマズい、田中は一転、二体の石像に向かって駆ける。

「ぐびっ、痛いです！ もっとゆっくり走って！」

「無茶言うな！」

転がるように二体の石像の間を駆け抜けた。まさに間一髪、当然ながら後ろから来た星獣は二体の石像に行く手を塞がれた。

——ガガガッ、ビー

——ギャガアア

そして始まる怪獣大戦争。

「冗談だろオイ！」

「ひえええ」

周囲の被害は凄まじく、神殿の柱は次々と折られ、綺麗な石畳が粉々に踏み荒らされていく。

「姫様は神殿に入れ」

田中は押し込むように、神殿の中にユマ姫を追いやった。狭い入り口、この中にまであの怪物達は入って来られないだろう。

「タナカさんは？」

「俺はもうちょい、遊んでいくさ」

振り返れば目の前で、二体の石像はジュウジュウと溶けだして、更に小さくなった星獣がコチラを窺っていた。

既に体は5メートル程度。大きめのワニだ。悪い事に、これならば神殿に入ってユマ姫を追いかけるのも不可能じゃないサイズ。

「おもしれえじゃねえか！」

そして同時に、これならば田中の刀で斬れるサイズでもあった。

遺跡めいた旧都の神殿で、白熱し発光する神の化身と、黒ずくめの男がひとり。

真つ向睨み合って、譲らない。

いつそ、ゲームのよう。だが、コレは現実だった。

「シッ！」

まず、田中が動く。石畳を蹴り飛ばし間合いを詰めた。

——ギヤアアア！

狂乱する星獣。

真実、この半神は発狂していた。死を厭わず、戦いを挑む。

まず飛び出したのは熱線だ、口からではない。もうこの怪物に体の内も、外もないのだから。全身すべてが危険な灼熱、どこからでも吐けるのだ。熱線を！

体中から四方八方に吐き出されるレーザー光線みたいな熱線が、石畳を、石柱を、神殿を、縦横無尽に切り刻む。

「ヒッ！ 堪んねえ！」

田中はそれら全てを紙一重に躲してしまふ。まずは横つ飛びに飛ぶ、全くの初見の熱線をぶっつけて躲した。

そして、そのままローンダート。地面に手を付き、体を跳ね上げる。その腹のスレスレを熱線が通り過ぎる。

「ハッ」

勢いで、そのままバク宙を決めた。コレは熱線を躲すためではなく、ただの勢い。

普通は余計なばかりのアクションが、星獣の狙いを攪乱した。無数の熱線は悉く狙いを外し、全ての熱線は空振り、ひとつに集中してしまふ。

即ち、星獣の周りにはがら空き。着地の衝撃で低く構えた田中が、獲物を見定め、柄に手を掛ける。

「シッ！」

一瞬で、十歩の距離をゼロにする。

しかし、相手はマグマより尚、白熱するエネルギーのカタマリ。

斬れるハズもない。剣を振るう田中だつて跳ね上がったテンションに体を突き動かされただけ。

そして、星獣自身もまた、斬られるとは夢にも思つて居なかつた。

間近に田中の接近を許すまでは。

星獣の鋭い感覚は、田中の姿を完全に捉えていた。

体内で練り上げ、活力とした魔力の動きも、ぶ厚いゴムの様に、引き絞られた筋肉の躍動も。

目の前の石畳で、しゃがんだような低い姿勢で刀に手を掛けた瞬間も、つぶさに感じた。

そして、悟つた。

自分はココで死ぬのだと。

ただの鉄で出来た刀である。それが、確かにエネルギーを斬り裂いていく。

振り抜いた刀は、星獣の体を突き抜けた。

コツンと軽く、でも確かな手応え。星獣の魔石を斬ったのだ。

「アツチイイ」

勿論、刀は溶けてしまった。慌てて手放すが、火傷を負った。ソレほどの温度。

引き替えにズブズブと星獣は溶けていく。その巨体には、もうなんの力も籠もっていないかった。

「やった！ やったぜ！」

田中はこぶしを握る。

超常の戦い。自分が出ないと思っていた相手。そこに手が届いた。

今なら、斬れなかったモノも斬れそうな気がして、思わず脇差に手が伸びる。

馬鹿な考えだ、田中はすぐに冷静になって頭を振った。

まずは助けるのが優先だ。斬るのは後でも構わない。

ユマ姫は神殿に押し込めたまま、あの熱線の巻き添えを食ってなきや良いのだが、とまで考えて、田中はあのお姫様に限ってそんな訳ないと、ひとり笑った。

しかし、笑えたのもココまでだった。

「ンだこれ！」

神殿の入り口が、閉まっていた。それも石壁の大質量で。これでは、もう何人も立ち

入れない。

何かが、始まろうとしていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「もう、終わりね」

その時、神殿の地下遙か深くに隠された古代人のプラント。

その最深部で、ひとりの女性が諦観のため息を漏らしていた。

「もう誰も、世界の終わりを止められない」

ゼナだ、古代人プラント責任者、最後の生き残りとして、ギリギリまでプラントの管理をしていた。魔力を大量に放出し、プラントの内圧が上がりすぎるのを防ごうとしていた。

そのゼナが隔壁の全てを閉めた。その意味はひとつ。

「もう、破局爆発は避けられない」

惑星のエネルギーが暴走する。それは噴火よりも尚酷い。空は灰に覆われ、大地は灼熱のマグマで満ちるだろう。地下だつて殺人的な魔力が吹き荒れる。

もう、この世界にはどんな人間だつて生きられなくなる。

破滅的な爆発を少しでも和らげるため、ゼナは隔壁を閉じたのだ。それだつて、どこまで意味があるか解らない。却つて酷い事になるかもしれない。

「最後に、会いたかったな」

最愛の夫、それに愛しい我が子。

リクライニングを思いきり倒し、見上げる天井は見飽きた白色。浮かんだ涙で視界が歪む。

歪んだ視界の端つこで、何かが動いた。いよいよ幻覚？ それとも異常なエネルギーの暴走を前に、施設が壊れ始めたか？

ガコンと軽い音がひとつ、ダクトの蓋が外れてしまった。

「お邪魔しまーす」

「え？」

中から這い出して来たのは、ユマ姫だった。これにはゼナも意味が解らない。

「ど、どうやって？」 だって、ココは、全部隔壁も閉めたのに」

「え？ どこです？」 ココ」

「あなた……」

呆れてしまう。偶然迷い込んだ？ そんな事があり得るのか？ いや、あり得ない。

「だって、隔壁が、侵入を報せるアラームもあつたでしょ？」

「隔壁って、なんでしたっけ？ アラーム？ 警報ですか？」

そこから？ ゼナは飛び出しそんな悲鳴を必死に飲み込んだ。

「扉よ！ 絶対開かないようにした扉！」

「扉？ 私扉を開けるの苦手なんですよね」

へへつと舌を出して、ユマ姫は笑った。なにせ幼少期から非力だったユマ姫は自分で扉を開ける習慣すらない。

「だから、誰も見てない所だと潜っちゃうんですよね。はしたないって思ってはいるんですけど」

「なにを……言ってるの？」

言葉は通じているのに、話が全く噛み合わない。

ユマ姫はマイペースに自分の話したい事だけを話す。

「あの、あなたは？ あ！ まずは、私から自己紹介をさせて頂きます」

「え、ええ？」

「私の名前はユマ・ガーシエント・エンディアン。いえ、森^ザに棲^バむ者のお姫様って言った方が良いでしょうね」

「は？」

今度こそ、ゼナは目を剥いた。

「あなた、本当に？」

「そうですけど？」

覗き込んだ瞳、良く見れば、僅かながら愛する人と自分の面影を感じた。

「ほんとの、ほんとに？」

「ホントですよ。私がエルフの、いやあの、森に棲む者のお姫様のユマ姫です」

ユマ姫は、呪いの姫君と言う二つ名を飲み込んだ。幾ら何でも、初対面の相手に自分から名乗ったら終わりだと思ったのだ。

「あなた、お父さんの名前は？」

「父は、エリプス・ガーシエント・エンディアンですけど？」

「母親は？」

「母様は、死にました」

ゼナはハッと息を飲む。ソレでも問い詰めるのを止めない。

「名前は？」

「パルメ・ガーシエント・エンディアンですけど……」

ユマ姫は、執拗に両親の名を聞く相手を不審に思った。こんな相手は近年めつきり居なかつたのだ。

そうだ、逆に言えば、昔は良く居たのだ。自分の出生に拘る嫌な大人が。

「確かに、私と母様の血は繋がりませんですけど」

「名前は！」

「え？」

「実の母の名前……」

それはユマ姫にとつて一番嫌な質問だ。

この世界のユマ姫はパルメの詩を朗読して生誕の儀を切り抜けた、実の母であるゼナになんてまるで思い入れもないのだから。

「名前！」

でも、あまりに必死な目の前の女性に気圧された。

「ゼナ、です！」

「まさか、本当に？」

「それが、何か？」

恐る恐る聞いてしまう。ユマ姫にだって、まさかと言う気持ちがあったから。

「私が、ゼナよ！」

こうして、ここでも二人は出会った。

ザイア?

「ゼナ? あなたが、おかあ……さん?」

「そう! そうよ!」

言いながらも、ゼナだつて半信半疑。

これは死ぬ間際の幻覚だとすら思っている。

なにせ、ここはガチガチのセキユリテイが固められたプラントの最深部。まさに世界が終わりを迎える瞬間に、思いを馳せた実の娘が現れたのだ。現実だと思ふ方がどうかしている。

だけど、ゼナはこの奇蹟を疑わなかった。疑いたくなかった。もう、何かを疑う必要も感じなかった。

「神様も、最後には粹なコトするじゃない」

「ええええ?」

ユマ姫を抱きしめて、グルグルと振り回す。

これはきつと神が見せてくれた泡沫の夢、ゼナの動きに容赦はない。

「ふ、ふ、ふ、振り回さないでくださいいい!」

「ふふ、大きくなったわね。持ち上がらないわ。今幾つ？」

「じゅ、十六です」

「十六！ そのわりには小さいのね」

「なっ！」

ユマ姫、これにはショックを受けた。背が低いのは気にしていたのだ。なぜならユマ姫は150センチ程度しかない。

農村の子供なら普通だが、エルフの中では小さい方だ。

「むむう」

「でも、そうね、生き残って元気な姿を見せてくれただけで嬉しい」

死んでしまうのだと思った。もしくは、家族と王都では暮らせないのだと思った。でも、そうじゃなかった。全てが都合が良い夢の物語。

だから、口を滑らせた。

「ねえ、あの人は元気？」

「……………」

ユマ姫は悲しそうに唇を噛む。

ゼナはしまったと、夢から醒めてしまうような感覚に陥った。

そうだ、森に棲む者の王都は落ちた。王が無事なワケが無い。

「生きてはいますけど……」

「生きてるの?」

コレにはゼナが驚いた。あの人は、最後の最後まで戦うタイプだと思っていたから。

「でも、結構無理をして、長い間液体漬けです」

「液体?」

「ココみたいな地下遺跡で、そこに体を治す液体があつて……」

「え? どこ?」

タブレットに地図を映せば、ユマ姫はこの辺りと指を差す。

「まさか、52番施設!? 命の揺りかご! 確かにあそこなら高品質なポッドがある。

なんて奇蹟!」

「奇蹟じゃありません! セレナが敵から奪還してくれたんです」

「セレナ?」

ようやく飲み込めてきた。帝国に与する古代人はゼナも知っていたからだ。この間、

通信が入って、会話までしている。

確かに偶然ではない、そいつらが使っていた遺跡を奪ったのだ。

解らないのは、起動した遺跡で待ち構える古代人を倒せるセレナの存在。

「セレナは、私の妹です」

「そう、そうなのね……」

ゼナだって自分の後釜にパルメが結婚するのは知っていた。応援もしていた。

だから彼女にも娘が居ることが嬉しかった。

「それで、セレナは無事なの？ 見てみたいわ、あの子の娘なら可愛いに決まってるもの」

「そりゃあー！」

セレナの可愛さの話になって、ユマ姫は勢い込んだ。

本当に、夢にまでみた実の母なんだと徐々に飲み込めて来たからだ。目一杯、自慢の妹の可愛さを話したかった。

本当は、実の母に会えたならもっと話したい事があった。吐き出したい恨み言も、聞いて欲しい泣き言もあった。けれど、やっぱり何よりはセレナの事だった。

「セレナは凄いですよ！ 天才なんです！ 誰よりも魔法が凄くて、可愛くて、ちよつとやんちゃですけど、でも優しく、可愛いし」

「はいはい……」

ゼナは微笑んでユマのピンクの髪を撫でる。

「そして、青くてツヤツヤした髪がとても綺麗で……」

「え？ 青い？」

ゼナは一転、奈落に叩き落とされた様な気持ちになる。

青い髪は、特別なホムンクルスの証だ。魔力事故を起こした現場、この遺跡みたいな場所だけで生きられる哀れな存在だ。

たまに、先祖返りで同じ特徴の森に棲む者が生まれるが、魔力欠乏で長生きは出来ない。

ゼナはそんな彼らをストックし、良い様に利用している。

それが、まさか、あの娘とあの人との間に生まれてしまうなんて！ ゼナは因果を呪った。

しかし。

「セレナは元気で、今日も星獣を千切っては投げ千切っては投げ……」

「え?」

不可能に決まってる。言うに事書いて星獣とは！

星獣は古代人ですら倒せず、核兵器で追っ払う、街ごと滅んだ事が何度もある、そういう相手なのだから。

でも、まさか?

「セレナはエルフの歴史始まって以来の天才で、魔力値は二千を超えるんですよ！ 凄いですよね?」

「に、二千？」

二千と言えば、プラントで吸い出した純魔力に匹敵する。

決して、人間に使う単位ではない。ストックしてある純正のホムンクルスでも、魔力値は千を超えるのがやっと。

「嘘でしょ」

「本当ですよ。そうじゃなければここまで来れませんもん」

「……………」

荒唐無稽過ぎる。信じられるハズが無い。さっきから話が滅茶苦茶だ。

だが、だからこそ、これはひょっとして現実なのではないかと、ゼナは一周回ってそんな事を思い始めた。

非現実が連続し、整合性を生み出している。どこか不気味に感じる程に。

全てが都合のいい夢。そうじゃないと仮定したら、どうなるのか？

だとすれば、話はまた巻き戻る。最大の謎が残ってしまう。

そうだ、この娘はどうやってここまで入り込んだのか??

目の前の、ピンクの髪の少女は一体？

当のユマ姫は可愛らしく小首を傾げる。

「そういえば、ここって魔力を吸い出す場所だって聞いたんですけど、なんでそんなモノ

を作ったのですか?」

「え、うん。それはね」

可愛い娘? の質問に、ゼナは一旦考えるのを止めた。

「本当は、必要な分だけ採取するはずなの。必要な分つて言っても凄いや量よ? このプラントみたいな施設を何個も動かすぐらい、でもね、失敗しちゃった」

「失敗ですか?」

「そう、あのマーセル・マイドつてボケ老人。アイツがワザと暴走させたときか思えないの。あの時、私が殺してさえいれば」

ゼナは、あの日、自分があの老人に声を掛けなければ、こんな事にならなかったのではないかと後悔しきりだったのだ。その罪悪感がこの何千年もの時空を越えたプラント管理の原動力だった。

前周あのとぎはどうか? ゼナが声を掛けたにも関わらず、マーセル・マイドはひっそりと息を引き取ってしまう。

ゼナはプラント技術者であるマーセル・マイドを助けられなかった事が事故の原因になったと思ひ込み、あの時も心のトゲになっていた。

どちらにしろ、ゼナは自分を責める事になる。

だけど、今回のユマ姫はそんなゼナを叱る。

「ダメですよ、殺すなんて！」

「あ、うん、そうよね。でもあの人が居なければ、もっと多くの人が助かったの」

世界が滅びる事もなかった。

気が付けば、ゼナは長年の後悔をユマへとぶつけていた。母親なのに、コレではあべこべだ。心の中で自嘲する。

だけど、ユマは自信満々に言い切った。

「でも、それじゃ私は生まれませんでした。父様も、なによりセレナは生きられませんでした」

「ツー！」

確かに、そうだ。

あの事故があつたから、ホムンクルスは自由になった。国を作れた。

「だから、ありがとう……」

なにより、あの事故があつたから、過剰な魔力があつたから、セレナも生きられたのだと、ユマ姫はゼナにお礼を言った。

ゼナは救われた思いで、ユマ姫を抱きしめる。

「私こそ、ありがとう、ありがとう」

泣きながら、抱きしめる。

「ええ、もう、子供みたいですよ」

ユマ姫だつて、本当は、自分が子供みたいに甘えるつもりでいた。だけど、今はコレが心地良い。

出会えるはずがない親子の奇蹟の対面だつた。

——ビッ

その時、突然、明かりが消えた。

赤い非常灯の鈍い光に切り替わる。

世界の、終わりが、近い。

「ごめんね、こんな壊れかけの世界しか残せなかつた」

ゼナはユマを抱きしめて懺悔する。だけど、ユマ姫はあつけらかなとしていたのだつた。

「あの? 壊れないようには出来ないんですか?」

「もう、無理なの。何も……出来ない」

はらはらと泣くゼナに、ユマ姫はぼんぼんと背中を叩く。必死に励まそうとしてる。

ゼナは思い直した。この子はやはり神の使いなのだ。

最後に私の罪を許してくれる存在なのだ。

「大丈夫ですよ、私がなんとか話してみます」

「??????」

しかし、ユマ姫はまるで意味不明な事を言い出した。

呆気にとられている内に、ゼナの腕から抜け出して、テクテクと歩いて。

そして、入ってしまった。

「え？ え？ なんで？」

それは、このプラントの最下層。惑星のコアに近い場所。魔力の採掘ポイントに向かうガラス張りのエレベーターの中だった。

「どうやって？」

勿論、とつくに封鎖している。もう二度と、開かないはずだ。なによりユマ姫は扉なんて開けなかった。なのに、中に居る。

ゼナは目の前で見ていた、だからこそ意味が解らない。

「通り抜けた？」

ガラスの扉をユマ姫は素通りしたのだ。目の前で。

「なんで、どうやって？ 早くコツチに？ 熱くない？ 熱気が来てるはずよ？」

「大丈夫です」

「え？ なに？ なんで？ 今どうやって入ったの？」

ゼナは封じられたガラス扉をガンガンと叩く。しかし、当然ながら通り抜けられるはずが無い。

「これ、どうやって入ったの? 開かない!」

開かない様に封じている。非常時となればゼナとて解除の方法はない。

だから、ユマ姫が中に居ることが信じられない。

「私、昔から扉を開けるのが苦手で、ここに来るまでも、こうやって入って来たんです」
……それを聞いて、ゾツとした。

この娘は、神の奇跡で沸いてきた訳でも、死ぬ間際に見る幻覚でもない。

もつと、不可思議な、何かだ。

「あの、私、呼ばれているみたいなんです、きっと約束があるんです」

そして、ユマはそう言うのだ。

「誰に? 何を?」

「あの、セレナによくって、心配しないでって伝えてください」

「何言ってるの? 解らない! ……ねえ答えて!」

しかし、ユマ姫を乗せたエレベーターはすすると地底へと降りていく。

「ユマッー!」

ゼナはガラス扉に貼り付いて、何とか下を覗き込む。ユマ姫のつむじだけが見えた

が、それも間もなく消えた。地下の闇に溶けていった。

「何なの？ 夢？」

ガラス扉を叩く。鈍い音だ、分厚くて割れる気配など無い。なのに触ると熱いぐらいで、中には熱気が充満していると窺えた。

「聞こえるわけ、ない」

よくよく考えれば、あり得ない。

なんで、普通に会話が成立したのか？ 声なんて届かないはずだ。それだけ分厚いガラスである。もつと言うと、実際は強化樹脂の一種。

数センチの壁を、声を通り抜けるなんて、ありえない。それにとつくには灼熱だ。普通に会話なんて出来っこない。

やっぱり、あれは幻覚だったのか？

狐に抓まれたような気持ちで、ゼナは再び椅子に座る。ゆつたりと眠る様に死のうと思つたのに、もうすっかり目が冴えてしまった。

何となく見つめたモニターの一つ、信じられないモノを見てしまう。思わず、スピーカーを入れる。

聞こえて来たのは幼い声だ。

いつそホラーのよう、子供のはしゃいだ声だった。

「おねえちゃん、どこー?」

それは、青い髪の少女だった。

ひよっとして、コレが? いや、それにしても、あり得ない。

「ラーガインⅡが一撃?」

最強の戦車が、少女の魔法で真つ二つに切断される所だった。

「ねえ、脱出しようよ。魔力が濃いから私は良いけど、お姉ちゃんには危ないよー」

セレナの呼びかけが、管制室に響いていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

延々と降りていくエレベーター。

あんまり長いものだから、ユマ姫は途中であくびをしてしまう。

「う。ぷっ」

口の中に、水が入った。気分は最悪。

「もうー」

しかし、ソレは水じゃ無い。

気が付けば、全身が光る液体に浸かっていた。

「はあ、もうこんなところ嫌、早く帰りたい」

そう言うユマ姫は、もうエレベーターになど乗っていなかった。

そんなモノはとつくの昔に溶けてしまった。ここはそう言う場所、星の核に触れる場所。

「熱いなあ」

ユマ姫が潜るのは、溶岩の中だ。溶岩の中を潜って、地下へ地下へと降りている。百万気圧のマントルに押しつぶされて、数千度の溶岩がユマ姫を灼いている。

なのに、死なない。

こんな事は、あり得ない。

そもそも、扉を貫通出来るはずが無い。でも、出来ている。

その原因は？ 意味不明な現象を支えているのは、全て運の良さだ。

天文学的なんて次元ではなく、数字と確率の限界値。

ユマ姫は運が良い。なぜなら高橋敬一の不運が裏返った幸運を貰っている。

だから、トンネル効果で壁を貫通する。

まず、ユマ姫の肉体や洋服が持つ全粒子が壁に衝突、それによってトコロテンみたいに壁から押し出された電子などが、偶然全く同じ姿をとって、扉の向こう側でユマ姫の存在を確定してしまう。

奇蹟と言うのも馬鹿らしい、冗談と悪意に満ちた『偶然』だ。

ソレを、ユマ姫は何度もこなしている。彼女は生まれてこの方、自分で扉を開けたこ

ともない。全部無視して貫通している。

今だって、溶岩の熱やマントルの圧力は、全てユマ姫を素通りしてしまおう。

死をもたらす魔法も、弾丸も、誰も彼女を傷つけられなかった。

ユマ姫は、そう言う存在だ。

そんなユマ姫がやって来たのはあの時と同じ場所。惑星ザイアの核を望む場所だった。

いや、あの時よりも尚悪い。なにせ、あの時のザイアはユマ姫の魂を受け入れようとしていた。おびき寄せるために、バケモノじみたユマ姫だけが入り込める環境を作った。

だけど、今回は違う。星がうねりをあげ、圧力のままにエネルギーを滾らせて、あらゆる侵入者を拒もうとしている。

そんな場所、どんなに科学が進んだとしても人間が辿り着けるはずが無いのだ。

なにせ、あらゆる物質が溶け出して、どんな魔法も形にならない。

そんな場所に、ただの少女が運だけで辿り着く。

ザイアには、意味が、解らない！

《 おまえは、なんだ? 》

ザイアは問う、しかし、返事など無いと思っていた。なにせコレは魔力の声だ、魔力の意思伝達方法、人間に通じるはずがない。

だけど、返事は返る。

《 わたしは、ユマ・ガーシエント・エンデイアンです。始めまして 》

コレにはザイアも腰を抜かした。惑星に腰を抜かすと言う慣用句が適当かは解らないが、そうだとしか言いようが無い。それほどに、驚いた。

《 何者だ! 》

《 さっき言いましたよ? 》

とぼけたユマ姫の言葉に、ザイアは苛立ちが隠せない。

途方もなく巨大なコアが、灼熱の塊が、明滅する。

《 何故だ? 何故お前は完全な運命を壊せる? 》

《 運命ってなんです? 》

だけど、ユマ姫は解らない。何もかも。

そして、ザイアだって本当の意味で解っては居ないのだ。

《 この世界の趨勢は決まっている、決まった通りに動かさないと駄目なのだ 》
魂を手にしたザイアは、完全なる世界を維持する事を信条とした。

なぜなら、この世界を魂を作ったのは神だから。神の目的は完全に制御された世界を手に入れる事。誰よりも巨大な魂を持つザイアは、その目標に影響された。

入力される未来予想図を遂行するマシンとなった。

だから、あの時を繰り返そうとして……

だけど、全てが上手く行かない。

その原因は、全て目の前の少女にあった。

《 死ねッ！ 》

《 ええ？ 》

殺意がユマ姫に突き刺さる。それも、惑星の殺意が。

魔力とは、思考に影響を受けるエネルギーである。

そしてザイアは魔力を作り出すプラントでもある。そんな存在が、凶悪なる意志をもって、殺意を抱けばどうなるか？

途轍もない濃度で意志と魔力をぶつけければ、ソレはどんな魔法にも勝る凶器となった。

殺したいと思うだけで、ソレは叶う。そうやってザイアは何匹もの動物や人間を殺して来た、完全世界の秩序を守ってきた。

《 えと、なにか？ 》

だけど、ユマ姫は死なない。死ぬハズがない。何をされたかも解らない。

《 おかしい、お前はここで死ぬハズなんだ 》

《 そんな酷い事言わないでください 》

本当だったら、セレナもボルドーも、エリプス王も、ミニエールもマーロウもゼクトールも死んでいるハズだ。

それらが、死んでいない。全ての運命を目の前が少女が歪めてしまった。

ましてや、ノコノコと惑星の中心部まで現れてしまう。

それも、生身で。

《 おまえは、何者だ！ 》

《 さつき言ったじやないですか！ 》

ユマ姫は、自己紹介するのに引け目がある。実のところ、ガーシエントまではともかく、勝手に国名にあたるエンディアンを名乗ってる所がある、式典の前に侵略されて、式な儀式の完了が済んでいないから。

《 だけど、今は自身満々に唱える。 》

《 私は、ユマ・ガーシエント・エンディアン、エルフのお姫様で、そして、セレナのお姉ちゃん！ 》

《 ??? 》

ザイアには意味が解らない。話が全く噛み合わない。守るべき秩序が守れない。だから、全てがどうでも良くなった。

《 もう、いい 》

《 え？ なんで？ 》

《 もう、全部、消してしまえばいい 》

《 えー？ 止めて下さいよ 》

《 止めぬ！ 》

ザイアは思った、目の前の少女も、上手く行かない運命の遵守も。全て壊してしまえば良いと。

ゲームに癪癪を起こし、コントローラーを投げつける子供と一緒に。

全てをぶち壊し、ゲームの電源を切るように、終わらせるつもりだ。魔力を吐き出して、全ての質量を爆発させる。

自殺である。

全てを巻き込んで、巨大な爆弾となって、塵も残らず消えるつもりだった。

《 失せろ！ 》

だから、もうユマ姫は邪魔なだけ。とっとと追い出そうとマントルがうねる。

だけど、ユマ姫は動じない。溶岩に浸かり。マントルに揉まれながら何でも無い顔で

そこに浮かんでいる。

困った表情すら浮かべて、言った。

《 あの、困ります。私、用事があつて来たんです 》

《 知るか、死ね！ 》

《 嫌です！ 》

ザイアの熱線がユマ姫を貫く。星獣の何千倍も太く熱い熱線だ。数万度に達する熱線だ。

それでも、ユマ姫に何のダメージも与えられない。

《 どうして？ どうして死なんのだ！ 》

《 あの、わたし、用事が終わったら出て行きますよ 》

ユマ姫は誰かに呼ばれたような気がしていた。だけどその相手がわからない。

ここで、絶対にやらなくてはいけない何かがある。

自分は、きつとその為に生まれてきたんだと、そんな事すらうつすらと思い始めた。

《 何が目的だ！ 何をする！ 》

ザイアは星を震わせて、威嚇する。

しかし、ユマ姫は首を捻って、不思議な気持ちで居た。

何かが噛み合わない。目的と手段が逆なような？ 据わりの悪さ。

でも、それこそが、目的なのだ。とにかくやるべき事は決まっていた。

《 あの、もう良いです 》

《 何だと？ 》

《 もう良いですから、最後に一つだけ、質問しても良いですか？ 》

ユマ姫は、その答えを求めに来た。

しかし、ユマ姫だつて意味が解らない。

普通、それは手段であつて目的ではない。

激昂するザイアは震え、うなり声みたいな地鳴りが響いた。

《 知るか！ いや！ 言え！ お前の目的は何だ！ 聞いてやる！ 疾く言え！

《 どうして！ 私の！ 世界を！ 邪魔する！ 》

《 邪魔はしません！ 》

その物言いは、ユマ姫にとつて不快である、少女は誰かの邪魔をしたいワケじゃない。

《 ただ、最初に聞くべき事を最後に聞きたいんです！ 》

《 許す！ 言え、何だ！ 》

ようやくザイアも聞く気になった。この不気味な存在の目的を。

そして、惑星と少女が向かい合う。

《 ふう 》

ユマ姫は柄にも無く緊張していた。

こんな事を聞くのに、どうして緊張するのか解らなかつた。

覚悟を決めて、息を吸い。

問う！

《 あなたの 》

《 名前は 》

《 何ですか？ 》

答えが、返る。

《 俺の名前は『高橋敬一』

——どこにでもいる普通の中学生だ 》

ザイアが震える。

いや、それはもう、ザイアではなかった。

《 あの？ 》

ユマ姫には意味が解らない。タカハシケイイチ？ 何処かで聞いたことがある気がする。それにチユウガクセイ？

《 いやー良く来たね、ありがと 》

ザイアは、いや、高橋敬一はそう言った。

ザイアは高橋の魂を持っている。

そして、その魂には『参照権』が付いている。

だから、そう、名前を呼ばれば目覚める。

この世界で、ようやく高橋敬一が産声をあげた。

しかし、ユマ姫には意味が解らない。

《 ど、どちらさま？ 》

《 さつき言いましたよ？ 》

ユマ姫が言った言葉をオウム返し。これは、高橋のちよつとした意趣返し。何千年も待たされた彼の、ちよつとしたイタズラだ。

《 ええく？ 》

ユマ姫は可愛らしく仰け反った。

高橋が明滅する。

《 いやー、そろそろココから出て行った方がいいね 》

《 な、なんで? 》

《 ここに来るのに、少しでも君の奇蹟を返して貰った 》

《 ??? 》

ユマ姫には意味が解らない。

だけど、なんでだろうか?

先程まではポカポカと暖かいだけだったのに、今では妙に息苦しくて、暑苦しい。

《 もしかして、ピンチ? 》

《 ピンチもピンチ、このままだと、死んじゃうよ? 》

《 ほ、ホント? た、助けて! 》

《 まあ、いいけどね 》

ユマ姫の体が、ゆっくりと上昇を始めた。

徐々に惑星の核から、高橋から遠ざかっていく。

それが何故だか悲しくて、ユマ姫は必死に手を伸ばす。

《 あの! 》

《 ん？ なに？ 》

《 本当に、ありがとうございました！ 》

ユマ姫は眼下の惑星にお礼を言った。理屈は解らない。でも、どうしても言わなくちやいけない気がした。

《 いいつてことよ！ 》

最後に聞こえた言葉は、それだけだった。

ユマ姫の体から、ゆつくりと奇蹟が抜けていく。少女は神ではなくなつた。

グングンと体が上昇し、地表へと引つ張られていく。

「ふはあ」

地上に、出た。空には燦々と輝く太陽。

溶岩と共にユマ姫が飛び出したのは、旧都からほど近い池だった。

「綺麗！」

見渡す限り、睡蓮が咲いている。真っ黒な池に浮かぶ、ピンクの睡蓮。ユマ姫のピンクの髪色も溶け出して、幻想的な景色を作り出していた。

しかし、湧き出したマグマは次第に池を浸食し、池は沼へと変じてしまう。

池の水は溶け出して、水位はユマ姫の膝ぐらいの高さになった。

「うえ……」

足元がドロドロに汚れている。体にだって泥が跳ねている。

「えいつー！」

泥を透過させようとして、ユマ姫は気合いを入れた。それだけで、ユマ姫はあらゆる汚れから無縁だったから。

「え？」

でも、汚れが取れない。

「な、なんで？」

ユマ姫は奇蹟を失った。前の様にはいかなかった。

いまだけ、いまだけは無敵ではなくなった。

——だから、この瞬間を狙われた。

「グッー！」

ユマ姫が倒れ伏す。沼に突っ伏して、動かない。

背中には深々と刺さるボルト。

ピンクの髪に混じって、白いドレスに赤が広がる。

「ヒヒッ」

偏執的な声があった。

「やっと、殺せる。今なら殺せる！」

泥に混じって姿を現したのは、爛々と輝く爬虫類の瞳。

「ずっと、見ていたの！　ずっと　狙っていたの！　狂おしい程に！　全てを投げ打つて、それでもあなたを殺したかった」

シャルティアだった。

取り残された者の戦い

ユマ姫が、倒れた。

背中にはポルトが刺さり、沼に突っ伏して動かない。

目に見えて致命傷、そうでなくとも、このままではすぐに窒息だ。

ここは、旧都からほど近い美しい池だった。しかし今はマグマが湧き出して、真っ黒に染まり沼と化す。浮かぶのは睡蓮の花。紅やピンクに狂い咲き、この世ならざる天上の景色を作り出している。

その中で、眠る様に倒れたままのユマ姫と、ギラつく瞳で睨め付ける女がひとり。

天国みたいな場所に、悪魔みたいな女であった。黒づくめの衣装に、ボウガンをぶら下げて、沼の中から這い出した。

「ずっと、見ていたの！　ずっと　狙っていたの！　狂おしい程に！　全てを投げ打つて、それでもあなたを殺したかった」

シャルティアだった。

シャルティアは王都を逃げ出し、ずっとずっとユマ姫を殺す機会を窺っていた。

悲劇の王妃として裏から帝国を牛耳る野望も、情報で世界を支配する企みも。

全てを投げ打って、もう彼女の望みはユマ姫を殺す事だけ。

今だけだ、今だけ、ユマ姫が何かを成し遂げて、奇蹟が薄まるこのタイミング。逃せば、一生チャンスが訪れないことをシャルティアは直感していた。

気配を探り、地脈を読み、ユマ姫が帰還するなら、温かい湧き水が出るここが怪しいと、殆ど勘だけで待ち伏せた。

情報を整理し、待ち伏せるのは暗殺者の本領。だが、それにしたって無理がある。あり得ない程の勘の冴え。極限の妄執がもたらした。

これはそう、ネルネの射撃や、セレナの魔法に匹敵する神の御業^{みわざ}。暗殺者としてのシャルティアの到達点。それがあらゆる奇蹟を貫いてユマ姫に届いた。

毒を塗り、深々と刺さったボルトは致命傷。

もう、まさかはない。放っておいても、勝手に死ぬ。

それでも、シャルティアは油断しない。二本目のボルトの装填など待ちきれず、確実に首を刎ねるべく、短剣を抜く。

「ッ!」

だけど、音がした。甲高いモーターの駆動音。機械蜘蛛の残党かと思えば、違う。

何かが真つ直ぐ、コチラに来る。

バイクに乗った男であった。

脇差しを抜き放つと、バイクのステップに仁王立ち。

田中だった。バイクのままに、沼地に突っ込む。ビチャビチャと泥を跳ね上げながらシャルティアに迫った。

このバイクは防水でもなんでもない、機関部やギアに泥が混じれば故障する。貴重な魔導エンジンが壊れる可能性は高いだろう。

それでも、田中は止まらない。アクセルを吹かせて、シャルティアに迫る。動きの制限される泥の上、そのまま轢き殺すつもりだった。

「シッ！」

シャルティアは、突っ込んで来たバイクを横つ飛びに躲した。

一方で、制御不能に陥ったバイクはつんのめり、宙でぐるりと回転した。反転する世界で田中が見たモノは、バイクの前輪に絡まるシャルティアの短剣。

「チッ！」

舌打ちをひとつ。バイクが泥に突っ込む直前、蹴飛ばす様にバイクから脱した田中は、転がり泥にまみれながらもユマ姫の元に駆けつける。

「おい！」

腕を掴んで、泥からユマ姫を掬い上げる。

「いっ、がふっ」

「嘘だろ?!」

泥から引き上げたユマ姫の顔は蒼白で、血の気がない。

そしてなにより、田中なら解る。今のユマ姫は紛れも無く普通の女の子。簡単に、殺せる! 死んでしまう。あの、ユマ姫が。

ポルトには毒まで塗つてあるのだろう、尋常じゃない発汗。このままでは命がない。いや、この世界の医療では、もうどうあつても助からない。それぐらい、出血だつて酷いのだ。

「シッ!」

愕然とする田中をヨソに、シャルティアが再び短剣を投げる。

「このっ!」

田中は寸での所、脇差して短剣をはじき飛ばす事に成功。同時に頭に血が上る。無理を続けた体の痛みも、死に掛けたユマ姫のシヨックも、全てを忘れた。

「テメエエ!」

田中はらしくない程、激昂し、叫んだ。

なぜか? それは、先ほどの短剣。田中を狙ったモノではなかったからだ。

「テメエ、どういふつもりだ!」

シャルティアはあくまでユマ姫を狙っていた。もう死にかけの少女に、それでもトド

メを刺そうとした。

「今じゃないと、今しか、今だけ、そのコを殺せない！」

「お前……」

シャルティアは妄執に取り付かれていた。ユマ姫を殺す以外の生き方を見失っていた。

けれども、田中にはシャルティアの気持ち解ってしまう。

剣に生きる田中とて、絶対に殺せない少女を前にしてプライドが傷つけられなかった訳じゃない。どうやったら殺せるのか、寝ずに考えた夜だって何度もある。

この世界、田中とシャルティアは初対面。

それでも、どこか通じるモノがあった。一つ間違ったら、自身がこうだったと、目の前の女を見つめる。

良く見れば、格好も自分に近い。

実用一辺倒の真っ黒な動きやすい服、殺意に満ちた目。殺人に取り憑かれた者だった。

脇差しを構え、向き直る。シャルティアは構えず、だらりと手を下げた不気味な姿勢。

柔らかな風が、頬を撫でた。

真っ黒な沼の上、空は不気味なぐらいの晴天で、睡蓮の花びらが舞い上がる。

眠り姫となつたユマ姫の周囲ではピンクの花びらが舞い踊り、姫を狙う黒ずくめの悪魔と、姫を守ろうとする黒騎士が向かい合う。

だからそう、これはきつと、お伽噺のワンシーン。

神に取り残された者達の戦いが始まつた。

田中は脇差しを、低く構える。

巨漢の田中だ、短く見えても、脇差しだつて普通の日本刀に迫る長さがある。

「キエエエエ！」

えんきよう猿叫をあげ、踏み込む。

沼地にあつても、力強い踏み込みは速度が乗る。紅い睡蓮を散らしながら、真つ黒な劍士の突撃。

劍士らしからぬ大きく足を上げる歩法は、こんな沼地すら想定した日本劍術の懐の深さを物語る。

あつと言う間にシャルティアに肉薄、そのまま水平に薙ぐ。この足場にあつて人間では躲せぬ一閃だつた。

——たんつ！

しかし、シャルティアは跳んだ。小気味良い音がした。体が羽の様に舞い上がる。

田中は、あまりの事に見上げてしまった。普通はそんな回避は無謀のひと言。躲しよ

うがない空中を斬り裂いて終わりだ。

しかし、背面跳びで飛び上がったシャルティアは、ぺたりと触った。どこに？ あろう事か残心の最中である、田中の肩の上。

倒立した姿勢で手を衝いて、軌道を変更。捻るように体を制御し、くるりと向き直る。シャルティアは、一瞬で田中の背後をとった。

田中は慌てて振り返る。

その顔面に、一陣の風の如き、鋭い突きが放たれた。

——キンツ！

固い音がして、弾かれた。シャルティアの短剣、田中が小手で打ち払ったのだ。

防具の性能に助けられた格好。田中の鎧はカーボン製、軽くて固い。決して斬れない。
い。

「ふうー」

田中は深く息を吐き、集中を高める。目の前の敵は格上なのだと理解する。

同時に、悔しさに歯噛みした。星獣を倒して、いい気になっていた。

なにせ、今の攻防。本来ならば三回は死んでいた。

肩に手をついたとき、一度首筋を斬られた。着込んでいたインナーの防刃性能に助けられる。

背後に着地されると同時、脇腹に、集中してなければ気が付かぬ程の僅かな感触。恐らくは吹き矢を当てられた、毒も塗られていただろう。コレもインナーに弾かれた。

そして、最後の突き。普通の鎧だったなら、当たり前に貫通する威力が乗っていた。並の攻撃では効かぬと見て、すぐに手を変えたのだ。

女だと思ったら大間違い。大の男顔負けの瞬発力まで備えている。

早期決着が見込めるような相手ではない、しかしユマ姫には時間がない。

田中は焦燥感に灼かれながら、それでも余裕を崩さない。

飲まれたら、負けだ。

「どうした？ そんなんじゃ傷ひとつ付けられないぜ？」

「……………」

今回のシャルティアは、気の利いたお喋りなどに付き合わない。

ただ、ユマ姫を殺すだけしか考えられない。言ってしまうと、ユマ姫を殺した後ならば、目の前の男に殺されたって構わない。

ユマ姫を殺せれば、もうソレで満足。本来、死ぬ事を覚悟した相討ちなど、殺し屋の矜持は許さない。美学に反する。素人の仕事。ただのテロ行為。

それでも、シャルティアは、もうユマ姫を殺す事しか考えられない。

「キイイイイ！」

虫みたいな奇声をあげて、田中を睨む。

ユマ姫を殺したい！ 殺して中身をぶちまけたい。衝動が溢れて壊れそうだった。ソレを邪魔する、目の前の固いヤツ。使い慣れた短剣ではどうやっても斬れない。ならば、もっと切れ味が良い武器を。

シャルティアの体がガクンと崩れる。まるで、糸が切れた様、本当は人形だったと言わんばかり。

そして、とぶんと泥に潜った。

「ッ！ ンだど？」

あり得ない、沼の水位は精々が脛まで、人が潜れるはずがない。

まるで魔法、果たして本当に悪魔だったのか？ 勿論違う、これは暗殺技術の一種、泥の中で待ち伏せするための技。それがシャルティアに昇華され、僅かな水位をワニの様に泳ぐ事を可能にした。

しかし、田中は運命が見通せる。そうでなくとも凄腕の剣士、気配を探るぐらいいはワケが無い。

こう言った搦め手は、田中には通用しない。泥からの奇襲など意味が無い。

しかし、待ち受ける田中をあざ笑うかの様に、シャルティアは襲って来なかった。

それどころか、沼に浸かったまま一点に留まり、動かない。

田中はそつと距離を詰めた。待ち伏せのつもりだろうが、気配と運命を感じる田中には丸見えだ。この浅すぎる水位にどうやって潜んでいるか摩訶不思議ではあるのだが、楽な姿勢ではないだろう。上から突き込んで終わり。

「……ふう」

しかし、嫌な予感がした。田中はこう言う予感には逆らわない。まずはゆっくりと息を吐く。一刻を争う容体のユマ姫に気を揉みながら、それでも、手を出さない。

「慎重なのね」

息が切れたのか、シャルティアが沼から湧き出した。

湧き出した、としか表現しようがない。なにせ脛までの水位にも拘わらず、垂直にぬるりと立ち上がる。それこそ魔法としか思えない。

その両手には、一対の剣。いつの間にか手にしていた。恐らくは、あらかじめ沼に沈めておいたのだ。

不思議な剣だ、鞘に収まって尚、雰囲気がある。

この期に及んで、普通の剣ではあり得ない。

注視する前で、堂々とシャルティアは剣を抜く。双剣が陽光を受けてキラキラと輝いた。

田中は、思わず、息を飲む。

その双剣があまりにも美しく、あまりにも鋭い切れ味を感じさせたから。並の剣ではない。一体、こんなモノ、世界のドコにあったのか？ それこそ違う世界から持つて来た様な、ソレほどに場違いな切れ味を予感させた。

……違う！ 田中は同じような剣に覚えがあった。

それは、剣を交えたエリプス王の巨大な王剣。これはソレに近い。

「苦労したのよ、手に入れるのに。でも、コレでもあの子は殺せなかつた」

双聖剣ファルフアリツサ！ ユマ姫の兄、ステフの剣。

シャルティアの妄執は、帝国の手にあつたハズのエルフの秘宝を盗み出す事にすら成功していた。

田中は直感する。あの剣ならばこのカーボンの鎧すら易々と斬り裂くだろうと。

こうなれば、鎧などただの枷となる。エリプス王との戦いを経験し、田中はソレを知っているのだが、それでも今更鎧を脱ぐチャンスはない。

こんな相手から一瞬でも目を切るなんて、ありえない。

それを良いことに、堂々とシャルティアは双剣の片方を田中へ突き付ける。片腕を思いきり突き出した不格好にも見える姿勢、双剣は元来珍しいが、それにしても独特の構え。

違う！ コレは構えではない。暗殺者は決して構えない。構えたとしたら、別の理由がある。

——ピッ！

泥が、飛んだ。目を見開いた田中の顔に命中する。

本命は突き付けた剣じゃない、双剣のもう片方。体に隠し、何気ない姿勢で自然に剣先を泥に漬けた。

そこから、全くのノーモーションで泥が吹き付けられたのだ。

何故か？ それは魔剣の構造によるもの。魔剣とは超振動するチエーンソーが刃先に並んでいる様な構造だ、一見してそうと見えないぐらいの微小粒子が高速移動して、一度相手を捉えるや、バタミみたいに斬り裂いてしまう。

その機構が泥の中で発動されれば、弾かれた泥は勢い良く飛ぶ事になる。

機先を取るのにコレより優れた奇襲はない。何せ振りかぶる必要もなにもない。ただ魔力を込めて魔剣を起動するだけ、予備動作がまるでない。

見切る事など不可能。

奇襲が通ると同時、シャルティアは泥の上を跳ねる。

これもまた、暗殺者の歩法。軽い体重を生かし、泥の表面張力を蹴る。泥の中でありながら、少しも音がしないのだ。目を潰した相手には打って付け。

一足飛びに距離を詰め、飛び掛かる様に斬り掛かる。

……だが。

「ッ!?!?」

冴え冴えとした鉄の輝きが、シャルティアの眼前、既にして突き付けられていた。

飛び掛かった瞬間を狙い澄ました一刀は、殺意が完全に消臭されていた。ノーモーシヨンにはノーモーシヨンを。

これが、これこそが田中が至った剣術の極意、無為なる一刀。

これは突きではない、そんな殺意は籠もって居ない。

ただ優しく、そつと置かれていた。

飛び掛かるシャルティアに先んじて、顔面ど真ん中、来たるべき空間に、前もって。

このタイムミング、通常ならば躲せはしない。顔面に刺さつて終わりの場面。

しかし、シャルティアはファルフアリッサを起動する。無理な姿勢から地面を薙ぐと、泥を掠る様に抉った。

反動を使い、体を捻る。突き出された脇差しを紙一重で躲したシャルティアは泥の上を転がった。

「クソッ!」

この悪態は田中のモノ。

千載一遇の好機、追撃に田中は一步踏み出そうとして、泥の重さに足を取られた。

疲れもあるが、泥がどんどんと重くなっている。剣士の足が封じられている。自慢の剣術とはいえ、コルターみたいな泥で自在に動くのは不可能だ。

それでもベチャベチャと格好悪く歩を進め、すぐにコレはダメだと舌打った。

こんな無様であの女を、シャルティアを倒せるハズが無いからだ。

「本当に嫌な相手」

シャルティアがのっそりと立ち上がる。やはり、倒れ伏した様子は、怪我をしたフリ。虎視眈々とカウンターを狙っていた。

それでも無事ではない様だ、脇差しに頬をザツクリと斬り裂かれ、鮮血が止まらない。コレでは動きも悪くなる。

「許せない!」

しかし、シャルティアが悔しがるのはそんな事ではなかった。

本当は血の一滴まで、少女に捧げたかったのだ。一緒に死のうと思っていた。

こんな男に流すための血ではなかった。

「殺す!」

双剣を構える。体重の軽いシャルティアは泥の上を跳ねる様に移動出来る。泥が重いほど好都合。

一方の田中には泥は味方しない。どうしても、鎧の重さで体が沈む。剣士の命とも言える歩法が使えない。

それでも、田中は気配察知に優れ、搦め手が通用しない人間だ。シャルティアが得意とする、先ほどのような奇襲も意味が無い。

本来ならば、田中にとって相性の良い相手といえる。しかし沼の不利がそうはさせない。

つまり、この場なら、実力は五分。お互いに攻め手が無い。だからこそ膠着する。

そして、二人は焦っていた。

なにせ、ユマ姫は死に掛けている。

田中はユマ姫を死なせたくないし、シャルティアは自分の手でユマ姫にトドメを刺しきりたかった。

だから、どちらも時間がない。

見つめ合う時間が狂おしい。

一瞬が引き延ばされて、一秒が何日にも感じられた。

二人だけの極限状態が作り上げられていた。

その時、だ。

——パァン！

かなり、遠くで、乾いた銃声。

しかし、極限状態の二人を前にして、ただの銃弾など意味が無い。

背後から頭を撃ち抜く軌道の弾丸を、田中は僅かに首を傾げるだけで躲けてみせた。撃たれた方を見ようともしない。

神懸かった集中。

それはシャルティアも同じだ。

田中が影となつて、弾丸の軌道など見えなかつただらうに、当たり前の様に弾丸を弾いて……

……弾いて？

おかし。

首を傾げて、スレスレを抜けて行つた弾丸。見送つた田中が、最初に異常に気が付いた。

この弾丸、躲せない。シャルティアに、当たるのだ。

理屈は解らないが、当たる。常人の目では飛来する弾丸など捉えられないが、スローモーションの時間で生きる今の二人には、山なりに飛ぶ弾丸の丸い形までハッキリ見えている。

それでも、躲せない、弾けない。端から見ても、ソレが解る。

あまりにも不気味な弾丸。ちよつとした意識の隙間にするりと入り込んでいる。

どんなに守備の名医でも、時としてつまらない落球をするように。どんなに防御が得意なボクサーでも、テレフォンパンチに当たることがあるように。

シャルティアは、真つ正面からゆつくりと跳んでくる弾丸を躲せない。

ただ、愕然とした表情で、鉛弾が胴体に吸い込まれるのを見送るしか出来なかった。

そのまま、パタリと倒れる。止まっていた時間が動き始めた。

「大丈夫ですかあー」

ネルネだった。

そんな気はしていた、田中は鳥肌が止まらない。

実力は把握しているつもりだった。

ただ者ではないと思っていた。

しかし、間近で見れば次元が違う。

意味が解らない。そもそもにしてさっきの弾丸は……

田中が呆然とする中、木村の運転する装甲車から飛び降りたネルネは、スカートをしたくし上げ、バチャバチャと沼に入ってくる。

——なあ、俺が躲さなかったらどうするつもりだった？

田中は言葉を飲み込んだ。

まず、そんな場合ではない。ユマ姫は死に掛けてる。

次に、理屈を聞いても絶対に解らない。アレは理外の力であるからだ。

「ユマ様！　なんで!?!　あんたがついてながら!」

「すまねえが、俺だつて駆けつけた時にはこのザマだ」

「でも、なんで、どうやって傷を?」

ネルネに言われて、気が付いた。ユマ姫に、奇蹟が戻っている。今のユマ姫は斬れる気がしない。

……あとは、出血さえ止めれば。

「お姉ええちやあーん」

セレナが、来た。

空から高速で飛来して、泥の中に突っ込んだ。ずっぽり体が泥に埋まった。

そして、爆発。

泥も睡蓮の花も吹き飛ばし、凄い勢いでユマ姫に縋りつく。

「す、凄い!　どうして?　どうやって?　え?」

良く解らないリアクション。明らかに錯乱していた。

田中はセレナの手をとって、敢えてゆっくりと喋る。

「回復魔法を、背中に!　矢が、刺さってんだ!」

「私が、治しますー!」

セレナが呪文を唱える。強烈な魔力が渦巻くと同時、田中はタイミングを合わせてユマ姫の背中のボルトを引き抜いた。

——ッ!

まるで感触がない、ひとりでに抜けた様だった。コレが、奇蹟。驚くべき事に、毒も抜けている。

そして、真に恐るべきはセレナの魔法。

「スゲエー!」

あつという間に、傷が塞がる。これでもうユマ姫は死なない。

「良かった!! 良かったようー!」

セレナはボロボロと泣いている。

それはそうだ、ユマ姫の容体、田中から見ても危ない所だった。ギリギリで助かった命。

「良かったよお、お姉ちゃん、ちゃんと人間だった」

「……………」

気持ちは解るが、流石に酷い。

話を聞けば、セレナは先程まで遺跡の中で人命救助にあたっていたとか。

遺跡の中にはユマ姫の面影が窺える、彼女の母親が居たのだとか。

「私、姉さんは精霊から生まれたんじゃないかって思ってたから」

「……………」

田中にしても、言いたい事は痛いほど解る。

「まあな、確かに血を流すとは思わなかった」

「お姉ちゃんの血も赤いんですね」

「どうやって当てたんだろ……………」

三人して、凄いい言草である。

「うう、酷い……………」

ユマ姫が、目覚めた！

「お姉ちゃん！」「ユマ様！」「大丈夫か？」

コレで全部解決だ。

先程までは断続して起こっていた地震が、今はピタリと止んでいた。何故だかちつとも解らないが、これで全部終わったのだ。

あまりにもハッピーエンド。

どこか嘘くさい程に。

『お前がやったのか？ 高橋』

眩いた日本語は、睡蓮の花と共に散ってしまった。それだって、沼に飲まれていくだろう。

美しい光景。黒と紅のコントラスト。舞い散る花びらがあまりに綺麗で、思わず田中は目で追った。

花びらは風に舞い、倒れ込む悪い悪魔の周りで祝福するように渦巻いていた。

「そう言う事か」

田中はボリボリと頭を掻き、姉と感動の再会を果たし、感極まっている少女の肩を叩いた。

「あの、セレナ？ ワリイがアイツの事も治してやっちゃくれないか？」

「え？」

ポカンとした顔。

ネルネは信じられないと怒るが、セレナは田中の頼みを断らない。

シャルティアを治療した。

めでたし、めでたし？

めでたし、めでたし。

ユマ姫は死ななかつたし、シヤリアちゃんは……まああんなもんで良いだろう。

ネルネがあんなに恐いとは思わなかつたけど、良く考えたら前周もアレあのときだけ星獣が現れて、ギリギリ軍が壊滅してなかつたのはネルネの活躍が想像以上に大きかつたのかも知れない。

そして何より、今回はセレナが生きてる。

俺がセレナの為に、必要な魔力を分け与えられる。だから、もうセレナが死ぬ事だつてない。

……もう、俺はお姉ちゃんじゃないけどな。

俺の名前は高橋敬一、どこにでもいる普通の中学生……では無いよな。

俺は、星になってしまった。みんなとお喋りする事は出来ないけれど、ずっと彼らを見守っていける。

だけど、そうだよな。

星の一生と、人の一生は違い過ぎる。

ふと気が付くと、もう数年の時間が流れていた。

いつの間にか、ユマ姫が結婚していた。それも、マールウ君とだ。

今回の彼は、役者を続けていたらしい。面食いでミーハーなユマ姫の事、イケメンの彼を見るなり一目惚れ。彼女から猛烈に迫ったとか何とか。

何と言うか、俺の時とは真逆になってしまったな。

それで、肝心のセレナはと言うと、コレが酷い。

なんと、田中と結ばれてしまった。それも、セレナの方が好きになっただけで、田中が根負けした格好だ。

最強のエルフト、救国の英雄。二人の結婚は大変に歓迎された。エルフの未来は明るい、大盛り上がり。

だからこそ、ユマ姫が役者と結ばれても誰も文句を言わなかったのだから、悪い話じゃないだろう。

ただ、俺がちよっと目を離している隙に、田中とシャリアちゃんの間で、子供が居たのはいただけくない。

……コレもシャリアちゃんが迫ったみたいだ。田中総受けかな？

彼女としては、自分がユマ姫を殺せないなら、子供に託そうと思っただけ。それで身近に居る一番強そうな遺伝子を取り込んだと。

いや、まあ、本気で好きだったかも知れないけどね。一応、そんな節もある。とにかく、田中はセレナだけでなく、シャリアちゃんとの間にも子供を作った。

彼女達との間の子供だ、世界を巻き込んでとんでもない事になるのは言うまでもないが、それはわざわざ俺が話す事も無いだろう。

帝国はミニエールの統治が長く続いた。

名君と言って差し支えなく、戦乙女は内政も見事にこなすと大評判。瞬く間に国境線をファイナス川にまで戻してしまった。

ただし、彼女の愛馬が老衰で亡くなった後は酷かった。途端に治世もおざなりになり、国が一気に荒廃した。

そんなに馬が大切だったのかと、豪族達はこぞつて皇帝に名馬を献上したが、ミニエールは納得せず。

結局、愛馬サファイアの息子が名馬へと成長すると、そこからまた安定した統治が続いたとか。

それだけ、皇帝ミニエールは白馬を愛していたと、そう言われている。

……いや、間違いなく馬が帝国を統治してるだろうコレ。

恐ろしい事だ。あの馬はマジで何なんだろう？ 星になった今でも良く解らん。魔力値が高いから多分魔獣の一種だ。

そして、王国。王国は、木村とヨルミ女王が結婚した、んだと思う。

あんまりベタベタする二人じゃないからな。結婚というより同盟に近いモノがあった。

それでも結局、ヨルミちゃんは例のアブナイ趣味が覚醒しそうになってたから、やっぱり俺の影響で変な趣味に走ったワケじゃないか。俺は無罪です、無罪。

……それで、肝心のネルネは誰とも結ばれなかったのだ。

俺にはソレが気になった。シノニムさんだって近衛兵の……誰だっけ？ グリッドだかなんだかと結ばれてたって言うのに。

まあ、星になってしまった俺が言える事ではないよな。

なにせ時間の流れが全然違うんだ。

気が付けば、みんな寿命で死んでしまった。そしたらすっかり彼らの息子や孫の世界だ。その辺まではまだ楽しく見て居られたが、その次、更に次と世代を重ねると次第にソレほど興味も持てなくなつて、ふと目が覚めると百年ぐらい時間が経過している。

人間はまた魔力を文明に活用し始めて、古代人が作つたみたいな施設を何個も作つた。俺だって無理矢理魔力を吸い出されて、軽く怒つた事も何度もある。

で、あいつらとうとうやりやがった。

——核戦争だ。

魔法つてのは、核兵器を簡単に作れるワケだ。だから一步間違えれば何時だって核戦争が起こりうる。

そう言う意味で、あの古代人だって、考え得る限りは最高に上手くやっていたとも言える。惑星に怒られるなんて無理ゲーが発生するまでは、一応は平和に統治してたんだから。

そして、今回の人類は派手に失敗してしまった。

見渡す限りの荒廃した大地。放射線が飛び交って、虫も生きられない世界になった。

死に絶えた世界は、俺にとって益々退屈になった。

寝て起きて、また眠る。ニート生活。

数億年の月日が経ったとき、体が冷たい事に気が付いた。

惑星の、死だ。

気が付けば、巨大になった太陽が地表の全てを焼き尽くしていた。

俺の健康値の守りがなくなったのだ。成長する太陽の魔力や紫外線に侵略されていく。

《 ああ、最期はそんなのか 》

死の間際、呟いた。

惑星になっても、魔力の濃さと太陽の暑さに苦しめられるとは、夢にも思っていない

かったから。

思えば、最初がそうだった。この世界で生まれた俺は、濃厚な魔力に押しつぶされそうな子供だった。

あの頃俺は、ユマ姫だった。

ああ、思い出す。避暑地の湖に、セレナや父様、母様、兄様も、家族と遊びに行ったこと。

病弱な俺は、巨大な太陽を見上げ、殺す気がかって愚痴ったモノだ。

ザイアが健康値で電磁波や紫外線から、人間を守っているとも知らずにな。

あの時の俺は水で温度を下げたけど、もう地表は川も海も干上がってしまった。

きつと、惑星としてはこのまま太陽に殺されるのだ。

形としては生き残っても、太陽の魔力に貫かれれば、残るのはただの惑星の死骸だ。核が動かなくなれば、惑星が生きているとは言えないだろう。

……ああ、悪くない人生だった。

いや、星生か？ なんだか色々あったなあ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

大往生じゃのう。

気が付けば、俺はまた例の空間に居た。目の前には神様。

「いや、もうオーバーワークでしょ、もうなんもしないよ」

もう、疲れた。流星に人間の精神で星の寿命は堪えたわな。

そんな事は言わんでくれ。

……なんだか神様の元気がない。ドヤ顔で『魂とは何か?』って説明してくれた尊大さを感じさせない。

もう、ワシにはわからないんじゃないか。

それも、そうか。

神様に見れば、世界の予測率を上げる事は悲願だった。

物質的な状態全てに止まらず、魂なんてシステムを作り上げ、誰が何を考えているかまで収集して、世界の全てを把握しようとした。

その結果、遂に手に入れた完全に予想された世界。ザイアに魂を付与することで全てを予想可能になった。

なのに、世界は滅茶苦茶になった。何一つ予想とは外れてしまった。

それもこれも、俺が神の言うことを聞かず、ザイアを暴走させたせい。

でも、コレはまだいい。俺の意識を投入すること自体が既にイレギュラーだからだ。実験の為に手を加えた事で、思った通りの観測結果が得られないなんて良くあること。

問題は、その後の予測もまるでの中しなかったことである。

俺は、神の予想が外れていく様をリアルタイムで観察していたのだ。

なぜなら俺の意識は、システムに紛れていた。ちょうど、俺が元々のユマ姫の意識を押し出したみたいに、俺の意識は神の作ったシステムの狭間を彷徨っていた。

俺の所為でイレギュラーが起きてしまった世界。ある意味では前と何も変わらない。

だからとりあえず神様は前周あのときと同じ結果が出るように、量子のゆらぎを制御した。偶然が許す範囲で、前回と同じ様な展開が繰り返されるハズだった。

だけど、ユマ姫が、運命を次々と破壊した。そして、運命の破壊が進むにつれて、俺の意識もハッキリして、最後には俺が惑星をのつとつた。

こんな筋書きは断じて神が用意したモノでは無い。

俺がマールセル・マイドになって惑星を暴走させたのがイレギュラーに過ぎるのだから、とりあえず同じ世界を繰り返して、同じ結論に達する世界を保とうとしていた。

神様はデータにズレが出る度に、何度も再計算を繰り返して、世界を元の形に保とうとした。

保とうとして、保てなかった。

結局、全てが制御された世界など作れなかった。予測率100%なんてまやかしかつたのだ。

もう、ワシには生きる気力が湧かんのだ。

そんな事を言うぐらいいには、神は萎んでいた。

「えーと、アイオーンさん？」

なんじや……

アイオーン。時の神だっけ？ コレだつて偽名だ。木村が言うには人間が認識出来るような名前を付けるハズがないんだとか。

そう言えば、惑星ザイアつてのも人間が勝手に付けたモノ。星獣達とザイアは魔力波でコミュニケーションを取っていたから、音で出来た名前なんて持つていないのだ。

神様だつて同じだろう。古代ギリシャの神様の名前を解りやすく名乗つているに過ぎない。

彼はきつと科学者だ。完全に制御された世界を求めていた。

わしの悲願は叶わなかった。完全な世界と、お主の『偶然』が、量子の揺らぎと世界の不確かさの原因を教えてくださいと思つたんじや、しかし、全ては徒労に終わった。何の意味も無かった。お主に苦勞を掛けただけ。

まあ、そう言うなつて。俺は結構楽しかったよ、今となつてはさ。

酷い目に何度も遭つたけど、何だかんだ異世界で大冒険つてヤツが出来たからな、夢が叶つた。

そうか・・・そう言つて貰えると救われるの。

いいつて事よ。悪くなかった、あのまま隕石に挿り潰されて終わりだった俺の人生がユマ姫として生きる事で救われた。俺はそう思つてる。

今となつては全てがいい思い出だ。

そんな風に感傷に浸つていたら、アイオーン神はとんでもない事を言い出した。

——なあ、お主、ワシの代わりに。神になつてみんなか？

「は？」

流石に意味不明だ。神つて簡単に継承出来るの？

出来んな。ワシは消える。そうして権能全てをお主に引き渡す。

「いやいやいや」

いきなりワケが解らない。

神と言うのはな、言わば意志を持ったエネルギーの塊なのじゃ。エネルギーとはつまり魔力のことじゃな。

「え？」

意味が、解らない。神が魔力？

魔力は意志の力に影響を受ける。だから大量の魔力も、何かの拍子にまた意志を持つ。

「そうなの?」

いや、実際、魔力を生み出す惑星ザイアもいつの間にも意志を持っていた。

普通はひとりでに意志など持たん。臨界付近まで高まった魔力が指向性を持ち、それこそ『偶然』に意志を持つ。

「それが、神?」

そうじゃ。そして、ワシが死ねば制御を外れたエネルギーが無法凶に放たれる。

「ど、どうなるの?」

幾つもの世界が吹っ飛ぶだろう。ワシが管轄している世界は勿論。直接管轄しない、地球だって例外ではない。

「そ、そんな!」

滅茶苦茶に迷惑な死に方じゃんか。

迷惑だろうな。だから、お主の意志でワシのエネルギーを制御せんか?

「つまり、ソレって俺が、神になるって事?」

そうじゃ。

とんでもない話だ。神になるってのは、何でも出来る様になるに等しい。

さつき、神は完全に制御された世界を得られなかったと言ったけど、望む通りになった世界が欲しいだけなら、神様は余裕でそんな世界を作れるのだ。

欲しい世界になるまで、何度だって繰り返せば良い。

神様は全ての情報が書き込まれたサーバーを持っている。

木村が言うにはアカシックレコードとか言う概念。世界の全てが詰まった箱。

惑星ザイアに魂を付与した段階で、サーバーと世界の同期が取れてしまった。

同期した世界は、サーバーの時間を巻き戻せば本当の世界も巻き戻る。コピーされたデータと本当の世界に違いが無くなった。

だから、時間を巻き戻して俺がマーセル・マイドの体に入る事だって出来たし、神は同じ事を何回でも繰り返せる。

つまり、何回も何回も世界をやり直せば、神様は望んだ世界を手に入れられる。

でも、そんなモノは神様にとって意味が無いのだ。

サイコロを振って、次に何の目が出るかを知らないので、六が出るまでサイコロを振って良いと言われるても、そんな事に何の価値も無い。

神様にとつての世界とはサイコロと一緒にだ。全ての事象を把握して、望んだ目が出る様になって初めて意味がある。

意味が無い世界の管理にすっかり嫌気がさしてしまったと。そう言う事らしい。

そうじゃ、今度こそと思っても、世界にブレが出る理由がどうしても解らない。

「そうなんだ……」

なあ、興味は無いか？ お主なら『偶然』の正体を突き詰められるかも知れん。ワシはどうしても、もうやる気が起きんだ。このままではタダ意志のないエネルギーに戻ってしまう。

「うーん」

まあ、興味が無いと言えば、嘘になる。

結局の所、俺がユマ姫に渡した奇蹟だつて。どう言うモノか解つて居ないんだ。俺だつて何となく直感的に、何かを掴んだに過ぎない。

アレこそが神の言う『偶然』のカタマリと、そう言う可能性もある。だとしたら真実に一番近いのが、俺だ。

「良いよ、やつてみる」

そうか、では……。

「でも、ちよつとだけ待つてくれ」

なんじゃ？

「俺は、神になる前に、俺が俺である内にやつておきたい事がある。救つてあげたい人が居る」

それは……妹のセレナ嬢かの？

「違うよ、セレナは救えた。救う役目だった本当のお姉ちゃんが、確かにセレナを救った

んだ、アレがアレこそが本当のハッピーエンド」

じゃあ、誰じゃ？ 一体全体、誰を救いたい？

「それは……」

それは？

「俺だよ」

真つ白な空間で、俺はニヤリと笑った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

真夜中のダンスホール。

切り抜かれた夜空の向こう側には、無数の怪獣。

決戦の予感に胸を高鳴らせ、遠足の前みたいにワクワクしながら俺はベッドに潜った。

今、俺の目の前には、グースカと寝ている俺の姿がある。

俺は時間を巻き戻した。

翌朝、突如現れた星獣の群れに帝都は大騒ぎ。それでも一向に目覚めないお姫様。

これは呪いか、はたまたま姫の霍乱か。解らぬ内に軍隊は出陣し、眠り姫を守る為に世界中が結束してしまう。

国民皆兵となって、星獣に無謀な戦いを挑んでしまう。

神に近い権能を手に入れた俺が訪れたのは、そのタイミング。

世界中の軍隊が、星獣と戦ってしまふその前だ。

精神だけになった今の俺に、肉体はない。

神に近い権能を持ちながら、それでも世界に直接影響を及ぼせない。

だから、俺は肉体を手に入れる。

俺は俺の精神に乗り込んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何ですか？ アナタは！」

我ながら混沌とした精神だ、あらゆる人格が混じり合いカオスとしか言えない。

そんな中にありながら、望まれぬ客として乗り込んだ俺に、お姫様らしく誰何するのがこの世界での俺だ。

こんな時、こんな場所でも、外面はお姫様を保っている。我ながら大した物だ。

そして、誰かと問われれば、答える言葉はひとつ。

『私は、俺だよ』

ハッキリと、日本語で言ってる。

『なんだと？』

荒っぽい日本語が返った。相手の混乱が手に取るように解る、俺だしな。

『それって、俺の、高橋敬一の深層心理とか、そういう？』

「違います、私はユマ・ガーシエント・エンディアンでもある」

『えええ？』

「私は、未来から来たユマ姫。そして過去から来た高橋。全てを知る神として、今アナタの目の前に立っています」

『あの、サツパリ解らないんですけど……』

「安心して下さい、私にも解りません」

『くつそムカつくわ、お前、ひよっとして俺だな？』

『話が早くて助かる』

まあ、俺だしな。俺の事は俺が一番解る。ならば相手だつて俺の事が解るだろう。

流石に星として数億の経験を積んだ俺の全ては解らないだろうが、俺が俺だつてぐら
いは解るに違いない。

『それで、何をするんだ』

「アナタの肉体を乗っ取ります」

『断る！』

『どうして？』

『誰が、突然現れた化け物に体を明け渡すんだよ』

「それはそうですね、でもこのままじゃアナタの体は崩壊する」
『……………』

黙るよな、俺は俺の体が崩壊寸前な事に気が付いていた。

この後、俺は自分の体をなんとか形にして、空を飛んで星獣を撃破。古代遺跡で戦車と戦ったりするのだが、そんな人外の力を振るえる存在がまともに生きられるハズが無い。

アレは怪物になる寸前の、不安定な体だったのだ。

星に溶かされなくなつて、数日と生きられなかつたに違いない。

ソレでも俺は、戦える体を望んだ。その結果、ギリギリに間に合った、間に合わせたのがあの時の俺だ。

星獣と戦って死ぬるなら、凶化した体の暴走で他人を巻き込んで死ぬよりもマシだと、あの時の俺は心の底から世界の崩壊が嬉しかったつけ。

戦いの中で無惨に死んで、それでも世界を守る。

皆が俺の死に打ちひしがれて、無力感に苛まれながら泣いてくれる事を考えると、ゾクゾクするほど興奮したっけな。

まあ、趣味が悪いよな。でも、それが俺だ。どうにもならない事を悟って、気持ち良い死に方を求めている。

「でも、私なら。神に近い私ならアナタの肉体を制御出来る。暴走させずに上手く使える」

『だからって、誰が！』

「アナタが駄目と言つても、奪います。遠慮はしません」

『何でだよ、俺はココまで来て、それで、俺の手で全部終わらせたいのに』

「ソレで出来たのが私ですよ。それでは何も起こらない。全て私に任せておきなさい」

『そんな……』

俺は私に飛びついて、柔らかな首筋に噛み付いた。

「頂きまーす」

『あ、ぐっ』

俺は、私を乗っ取った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「で、結局何です？ アナタは！」

そして、俺は目覚めた。俺の目の前には瓜二つな俺が居る。

ココは天蓋付きのベッドの上。精神世界でも何でも無い。

俺は、いや私は、ニッコリと微笑んだ。

「俺は、私です」

「あ、う……」

それだけで、目の前のユマ姫は顔を真っ赤に目を逸らす。

それもそのはず、今の私は、俺よりも美しいのだから。

「あなたは一体？ ソレに私は……乗っ取られたハズじゃ？」

「解るでしょう？ もうアナタの体は壊れない」

もうユマ姫は凶化していい。魔獣の遺伝子を取り込んでいい。ただの人間。

何故なら、化け物みたいな部分を全部私が奪ってしまった。

「化け物の部分をアナタが？ でも……アナタは私より、美しい」

「それはそうでしょう」

ユマ姫は、下半身が吹き飛んだ所に星獣の体も混じったし、その他諸々の魔獣を喰らった。

だけど直近で一番多く食べたのは何かと言うと、ユマ姫は、魔獣よりも人間を多く喰らった。帝都で何人も人間を喰らった。

だから、ベースは人間。そして猫耳とか羽が生えて、髪の毛はピンク色。

そうだ、人間離れたユマ姫の美しさの構成要素の殆ど。濾過された人外の美しさの全てを俺が引き取った。

一方で今、目の前に居る俺は、銀髪エルフのユマ姫だ。普通のユマ姫。両目ともに銀

色。

凄く可愛いし、色々知識を吸収し、星獣の魔力を臂力に変換する技もある。魔力値だつて並のエルフの戦士よりずっと高い。普通のエルフよりはずっとずっと強いだろう。それに抜群に可愛い。

でも、星獣と一人で戦えるような埒外の強さは無いし、人を一瞬で狂わせる様な美しさもない。

対して私は、猫耳、しつぽに羽まで生えて、髪も両目も、アニメみたいなどピンクだ。ユマ姫の禍々しい部分を全てコツチに引き取った。

今の私は星獣を一ダース相手にしても、数秒で退治出来る。それぐらい強い。人外の存在そのものだ。そして、人外の美しさも手に入れた。

もしも目の前の俺がこんな肉体に宿ったならば、モノの数秒で制御を保てず崩壊する。それぐらい不安定な体だ。それを私が神に近い力で強引に纏めている。

ソレほどに滅茶苦茶で、強さと美しさだけで作られた怪物が、今の私だ。

「それで、そこまでしてアナタは？」

何をするのかと？ 間抜けにも俺は私にそう聞いてくる。

ちよつと苛立つた俺は、とぼけた調子ではぐらかす。

「そうですねえ、何だと思えます？」

『いや、わからんて』

「ふ、ふっ」

本当に、解らないのか？ 解つて居るんだろ？ 日本語で答えてはぐらかす始末。悪

い俺だ。

だから、いたずらに微笑んで。

私は、俺にキスをした。

「あ、う」

目の前のユマ姫は、顔を真つ赤に錯乱する。

頭が真つ白になって、キスした唇を切なげに撫でている。

ソレが、私にとって最高の快感だった。

同じ女、同じ自分を、美しきで屈服させるのが、コレほどの愉悦とは思わなかった。

目の前の俺は、いやユマ姫は、美しき化身となった私の抜け殻である。

じゃあ、美しくないのかと言うと、違う。元々のユマ姫が、この世界で一番美しい少女なのだから。

たけど、禍々しいまでの美しさだけを抽出した俺には敵わないというだけの話。

戦士が一番嬉しいのは、美女に強さを褒められる事では無く、同じ男に強さを認められ、自分ではとても敵わないと屈服させる事なのと同じ。

女である私が一番嬉しいのは、同性である俺が、私の美しさに打ちのめされる所を見る事だ。

私こそ一番可愛いのだと、自分に見惚れさせるのは何と気持ちが良いことか。

私は、突然のキスに顔を赤くして目を彷徨わせる俺の首筋を、優しくなでた。

「ん、やだっ」

「あら？ 本当に嫌なの？」

自然な仕草で、パジャマのボタンを上から順に外していく。

優美な曲線を描く私の人差し指が、俺の柔肌を下に下にとなぞっていく。

「あ、う」

『あらあら、女の子みたいな声で鳴くのね』

『ぐう……』

とうとう、目には涙を湛え、恨めしげに私を睨んだ。

「や、優しくして！」

「ふふっ、アナタ男としてのプライドは？」

「ぐっ！ うう……」

恥ずかしさに、必死に顔を隠そうとする。

私は俺の手を強引に開いて、真っ赤になって涙でグチャグチャになった顔を、力尽く

で無理矢理さらけ出してやった。

「見ないで……」

「可愛い」

女としてのプライドも、男としてのプライドも、どちらもグチャグチャに引き裂いてやる。

何と愉しいのだろう。自分で自分を屈服させるのは。

克己心こそ何より大事ってホントだな。いや、意味が違うか？

このまま一晩中遊んであげても良いのだが、流石にソレは可哀想かな。

「遊んでないで立ちなさい、良いモノを見せてあげるから」

「えっ？」

私がそう言うと、ベッドに突っ伏していた俺は絶望的な顔をする。

「何を期待していたの？ ほら立って」

「ちよ、ちよっと！」

パジャマをはだけさせたユマ姫は、立ち上がらない。真っ赤に紅潮した体は興奮に震えて、どうしてもボタンを付けられない様子だった。

「何なら、裸にひん剥いてあげてもいいのだけれど？」

「な？ あ、うう」

仕方無いと諦めて、パジャマをはだけさせたまま、ユマ姫は立ち上がる。

真つ白な肌が、羞恥に真つ赤に染まっていた。

そんな俺の手を引いて、私はベランダに、バルコニーに向かう。

外に出る段になって、俺は、ユマ姫は弱々しくも抵抗した。どうやら恥ずかしいらしい。

「あの、その……」

「どうしたの？」

「だって」

チラリとコチラを見る。

そうか、ユマ姫の肉体を分離しただけの私の体は素っ裸。一糸纏わずさらけ出して
いる。

自分の体に近いモノが晒されるのが恥ずかしいのか。

いや？ 待て、私は自分の体が恥ずかしかった事などあっただろうか？

「うう……」

そこで、俺が、銀髪のユマ姫が、自分の体を悲しそうに見下ろしているのが目に入る。

ソコで私は気が付いた。

気が付くと同時に、ある種の快感が脳を灼いた。化け物となった私の脳を狂わせるの

だから大したモノだ。

そう、俺は、ユマ姫は、何だかんだ自分が一番美しいと自信があつた。だから肌を晒すのも、そこまで抵抗がなかつた。半裸みたいな格好で人前に出られた。

だけど、自分よりずっと美しい私が現れた。だから、自分の体が恥ずかしくなつたのだ。

初心な少女に、初めて羞恥心を植え付けた背徳感。屈服感よりも更に甘美な心地よさ。

私は強引に俺の腕をとる。

「いいじゃない、見せつけてあげましょう」

「あう……」

そうして、バルコニーに飛び出した。

ま、そうは言つても真夜中だ。誰が見ているワケでも無い。

北の平原では、星獣が勢揃い。もうすぐ地獄の様な戦いが始まる。

まずは星獣の熱線が夜の闇に煌めいた。十km以上は離れているのに、ここまで閃光が届く程。

「うっ」

明るくなった夜に浮かび上がった裸体、目の前のユマ姫はパジャマを抑える。

おいおい、あの光で何人もの兵士が死んだんだぞ？

ま、コレからが本番だけだな。

俺は軽く、神の権能を使う。無理矢理に望む結果を引き寄せる。失敗したら戻せば良い、それぐらいは何でも無い。

夜にも拘わらず、夜空はオーロラが輝いて美しいイルミネーションを描いている。

時折輝くのは大砲の光と、星獣の熱線。

そんな光のパレードに、流星の輝きが加わった。幾筋も。

「え？」

俺がポカンと口を開く。奇蹟とデタラメのバーゲンセール。

流星群が星獣を残らず葬り去っていく。

「これだけじゃありません。惑星ザイアの暴走も、今、私が止めました」

「そ、そんな！ これでは本当に神ではないですか」

「だから、神になったのです。いえ、正確には私はもうすぐ神になる」

「うええ」

驚きながらも、俺であるユマ姫は、チラチラと私の裸体を横目に見ている。

目の前で、世界の形が変わっているのに、それよりも私の体が気になるのだからよっぽどだ。

「嫌らしい目で見ないで頂けますか？」

『無理だろそんなん！』

男の精神で逃げられても面白く無い。

もう一人の女の子の意見でも聞こうかな。

「アナタは、どう思いますか？」

「ヒッ！」

私が首筋を鷲掴みにして、バルコニーの壁に押し付けたのは、シャリアちゃんだ。

彼女は、主人が起き上がった気配を感じ、やって来た。ソコで私を見てしまった。

あの時は、無敵のユマ姫を見て腰を抜かしたシャルティアだが、その後は、何とか殺

してやろうとひたすらにストーキングを繰り返した。

しかし、今の私はその比では無い。無敵で最強なのだから。

彼女は悟ったのだ、私が思うだけで、自分など簡単に死んでしまうのだと。

「ハアハアハア」

過呼吸になるほど息を吸い、完全に私に怯えている。

……怯えながら、美しさに飲み込まれ、一步も動けずに立ち尽くしていた。

そこを無理矢理取り押さえて、壁に押し付ける。首筋を掴んでの壁ドンである。

「ねえ？ 私の事、どう思う？」

「ゆ、許して……」

いきなりの命乞い。思わず、ニンマリと笑ってしまふ。

「あらあ、人を化け物みたいに、酷いですわ。傷付きましたわ。謝ってくださいませんか？」

「ご、ごめんなさい」

「ふふっ」

殺意の塊みたいなシャリアちゃん、完全に屈服している。

サデイスティックな喜びが溢れてしまふ。

世界は雑に救われた事だし、後はどうやって遊んであげようか？

まずは無粋な黒い戦闘服を剥ぎ取ってあげよう。

と、思ったら右手を掴まれた。

俺だ、ユマ姫だ。

「苛めないであげて」

「……………」

恐いだろうに、プルプルと震えながら、女の子らしく懸命に訴えかけてくる。

うん、そうだね、やり過ぎたね。

まさか、神に近付いた私が、ただの俺に諭されるとは思わなかった。

これが強過ぎる力に飲まれると言う事か。

私は、何だか自分が恥ずかしく思えてきた。

「ふ、ふっ、冗談よ」

そんな事を言いながら、素っ裸のままベランダから身を投げる。
投身自殺である。

ま、死ぬわけ無いけどな。俺は世界を転移して、神の元へと戻るのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

なにしてんの？

戻ってみれば、アイオーン神にはすっかり呆れられてしまっていた。

必死に言い訳で取り繕う。

「いや、レンタルして貰った神の力の使い方を試したんだって。丁度良い練習じゃん？」

……ただ己の快楽に身を任せただけに見えたがの。

いやー面目ない。

で、そろそろいいかな？ 神になる決心は？

「いや、もう一人救いたい人が居るんだって、それだけ、それで最後」

はあ・・・癖になったんじゃなかるうな？

「否定出来ないけど、ホントに初めから考えてたから」

ソレは誰じゃ？

「いやいや、解っている癖に。
「勿論、俺だよ！」

最終回？

私は、昏い世界に投げ出された。

まず、異常をきたしたのは耳。

酷い耳鳴りに、鋭い痛み。頭痛まで発症した。

次に、痛かったのは、肌。

全身が泡立つ感触に、血が沸騰したみたいに熱さを感じる。

そのくせ、全身は凍える様な冷たさを訴えた。

そして、喉。

吸い込もうとして、空気が無かった。

可愛らしい私の口はパクパクと動くだけ、呼吸が出来ない。

最後に、平衡感覚。

クルクルと体が回転し、ひたすらに回り続ける。止められない、止まらない。

ここは酷い所だ。普通の人間なら数秒と生きられない。最悪の場所。

でもそれら全てが、景色の良さだけでお釣りが来る。

それほどの光景。

「綺麗……」

思わず呟いた。

呟く空気もないけれど、沸騰した血を吐き出して声を絞り出す。

めくるめく視界。全周360度、その全てが煌めく星空だったから。

ここは、宇宙。

人の立ち入れぬ、死の領域。

そこに、私は居た。

私の名前は、ユマ。

ユマ・クロス・セレナーデ。

表記は、ユマクロスセレナーデが良いかな？

中二な感じが癖になる。

……………いやいや、だつてさ。

今の私がガーシエント家の名前とか、エンディアンの国名を名乗るのはどうかなつて。

まあ、あれだ、なんてつたつて最終形態だからね。名前だつて盛れるだけ盛りたいたいだろ？

本当は、ユマ&セレナ・アルティメット 極ザイア・Z・タカハシにしようかと悩んだけど、長すぎて
言いにくいから止めた格好だ。

止めたのはワシじゃよね……

「あの、マスコットさんは黙って貰えますか？」

なんと肩には、子ウサギみたいなマスコットまで乗せている。

魔法少女には小動物が必須だよきゃびね♪

……吞まれておるな。

「……………」

お主、完全に力に吞まれとるじゃろう。

そりゃ、吞まれますよ。

惑星の力を手に入れたときですら、良く解らんハイになった。

それが、神はさらに力の桁が全く違う。

ただ、在れ。と願うだけで、衣服なんて簡単に作れた。

もちろん、ヒラヒラでふわふわ、ミニスカートにガーターストッキング。頭には秘宝

の王冠、胸にはセレナのブローチ。ファンシーな杖まで装備した。

そう、今の私は完全に魔法少女スタイル。

だからって、ワシがこんな格好。

「……………」

尊い犠牲だよ。

そうだ、コイツは神だ。アイオーン爺さんだ。

そりやそうだよね、どうしても付いて来たいって言うなら、私のスタイルに合わせて貰わないと。

付いて来たかった訳では無いわ！

「またまたあゝ」

お主が好き勝手に暴れたからだろうが！

……まあ、ね。

神に近い力を手に入れた私は、まずは肉体を求めた。

だけど、ソレをゼロから作ったらどうだろう？ ただの人形になってしまふ。

かといって縁もゆかりも無いオツサンの体を奪ったって面白く無い。そんなのは私じゃない。

と言うワケで、あの日の俺から、怪物になりかけた私を切り離れた。

世界を救い、過去の自分を救い、今の私も救う。一石三鳥の企み。

そのついでに、アレだ、ちよつとはっちやけ過ぎた。

やり過ぎじゃ！ アレはあやつも見ていたのだぞ？ ワシが一緒に無ければ、お主が

コチラに来る事も認めなかった。

「サーセン」

幾ら私が神になったからって、何でも出来る訳じゃない。

彼の許しが無くては、私はココに来る事も叶わなかった。

彼とは？

無重力を制御して、私は見覚えのある惑星を見つめる。

眼下には、青い惑星が輝いていた。

地球。

そうだ、私は地球に帰ってきた。

彼とは地球の神様だ。冴えない大学生みたいな見た目は木村か、それとも黒峰の入れ知恵か？

とにかくアレだ、地球の神様はこんなに好き放題暴れる私が、コチラの世界に来る事を認めなかった。

仕方無く、お目付役として異世界の神、アイオーンさんがマスコットとして付いて来たのである。

マスコットにしてくれとは頼んでいないがな。

「いやいや、この格好の私に浮世離れた派手な爺さんが一緒って、援交みたいだし

……」

そんなワケあるか!

怒られた。

いやでもだって、せっかく可愛くしてるのに保護者同伴って恥ずかしいじゃん。やらされている事は保護者以外の何物でもないのだが?

「サーセン」

新米の神様だしね。

仕方無いよね?

——ゴオオオ

と、そんな馬鹿な漫才をしている私達のすぐ横を、巨大な質量が通過していった。

実際は全くの無音。宇宙だからね。だけど、それが却って恐ろしい。肌にビリビリと感じるぐらいの途轍もない質量が、何の音も無く超音速で飛んで行く恐怖。

その正体は石。ただただ、巨大な石。

それが地球の引力に吸い込まれていく。

地球に、落ちる。

行ったか……さあどうする?

アイオーン爺の言う所はひとつ。

追いかけるか、否か？

「もちろん！」

そうか……。

追うに決まってる！ その為に、私は来た。

魔力を噴射して、加速。

ジェット機みたいな速度を得た。

大気圏に突入。体が灼けそうに熱いけど、今の私は火傷とは無縁だ。今更そんなので怪我をするハズが無い。

徐々に熱さが収まる。試しに呼吸をひとつ。薄いながらも、空気がある。

昏かった世界が、明るい水色に包まれる。

空だ！ 大気圏を抜けた。

耳から血の塊が吹き出すと同時に、ようやく音の存在を伝えてきた。

聞こえて来たのは轟々と風を切る音。

そして、落下する隕石の衝撃波。

破壊するか？

「もうちょっと待とうかな」

だって、せっかくの魔法少女。登場は派手な方が良いだろう？

滅多に見られない光景だ、眼下の景色は地図帳のページを広げた時みたい。関東平野の形がハッキリ解る。

アレは富士山かな？ あっちは北海道？

おい、そろそろ行くぞ。

「うん」

私は名残惜しくて地球の景色から目が離せない。

だって、本当に神様になったら、二度とこんな風に地球には来れないだろう。こんな干渉が許されるのは神になる寸前の今だけだ。

私はこの景色を目に焼き付けた。

「よしー」

すぐさま隕石が斬り裂いた空気の間隙に入り込む。

ちよつとしたスリップストリーム。殆ど真空になった空間を、私は垂直に落下する。

そうして地表に迫ると、地元の景色が見えてきた。もちろん真上から見ると初め

て。
あれは市内で一番高い山、小学生の遠足コース。あれは学校の近くの川、それに近所の寂れた商店街まで。それに、それに……

あ、あつた！

アレは、私の家。母さん居るかな？ 父さん元気かな。そして遂に。

——パアアアン！

私は隕石に追いついて、無尽蔵の魔力を叩き込んだ。隕石は衝撃波と閃光の余韻を残し、風船みたいに弾けて消えた。

いま目の前に広がるのは、私の通っていた、いや俺の通っている学校だ。そうだ、私は救った。

あの日、あのとき、あの時間、学校で隕石に殺された自分自身を。

火球となった隕石の名残が、次々とグラウンドに落下する。周囲はたちまちパニックだ。

でも、人間を吹き飛ばすような威力はない、直撃する人だって居ない。その位は計算している。今の私にその程度はなんでもない。

それに混じって隠し味、魔法でオーロラみたいなエフェクトを追加した。ユマ姫だったとき、得意だった演出のひとつ。ソレの強化版。

キラキラと虹色の軌跡を描いて、私は校庭に着地する。

「魔法少女ユマ！ 見参！」

降り立つと同時に、自分でも良く解らん謎の決めポーズ。

なにしてんの？

神の冷たい言葉。いや、確かに見参つてのはどうか？ 時代がかっている。もつと

魔法少女らしいファンシーな決めゼリフある？

そうではない！

……はい。

落ち着こう。ちよつとテンションがおかしい。

私のもつとこう、清楚系の魔法少女のハズなのに。

……はあ。

と、周囲を見渡すと、コチヲをポカンと見つめる三馬鹿トリオと目が合った。俺、田中、木村だ。黒峰さんも居る。

全員が腰が抜けたように、ひっくり返っているもんだから、何故か吹き出しそうになつてしまった。

いや、良く考えたら空から隕石と魔法少女が降つてくりやそうもなる。そりやそうなんだけど、危ない所だった。魔法で驚かせて、取り乱す姿を笑いものにする魔法少女とか最悪だ。理想の私とは程遠い。

深呼吸をひとつ。誤魔化す様に私はトトトと近付いた。まともに歩くのが久しぶりな気がする。可愛らしく、女の子らしく。清楚に。

「ご無事ですか？ お怪我は？」

心配そうに、眉根を寄せて。

するとどうだ？ 男三人、いや黒峰さんまで、顔を赤くしてポカンとコチラの顔を見つめている。

やっぱりそうだよな、それぐらい今の私ほかわいいハズだ。

優越感にニツコリと微笑むと、田中も、木村も、黒峰さんも硬直した。

そんな中、スツと立ち上がったのは、意外にも俺だった。

「あ、あの……！」

カチコチに体を硬直させて、どもりながらも口を開いた。

どうも俺は、滑稽なほど緊張しているらしい。なんだか私は嬉しくなった。

今の私は、ヒールを履いても俺よりも少しだけ身長が低い。だから、私は小首を傾げて上目遣いに見つめてみせた。今の私の一番可愛い角度で俺に迫った。

「なんですか？」

「あ、あの……！」

俺は途端に顔を赤くして俯いてしまう。

ああ、そうだよ。今の私は、俺の好みのだ真ん中。そうなるように調整したんだ。

自分で自分を救いたいなんて、建前。

本当は、完成した最強に可愛い私を中学生の俺に見せつけたかった。

お前が夢に見た、それでいて居る訳ないって諦めた。完璧な美少女がココに居るぞ、つてな。

だから、私は俺の手を取って、ずずいと下から見上げて迫る。

「どうしましたか？ お体の調子が？」

「え、あの、あなたは？」

どもりながらも俺はソレだけ言っただけ言っただけだ。

ソレだけ言ってくれたのだ。

何より欲しかった、そのひと言。

「私、ですか？」

「は、ハイ！」

「私は……」

よくぞ、よくぞ聞いてくれた！

私はコレを、コレだけを待っていた。

だから、私はぼつちりポーズまで決めて、ご挨拶！

「私の名前はユマ。魔法少女ユマクロスセレーナーデー！」

これだ！ これを言うために私はここに戻って来た！

魔法少女は実在する！

何だってー？

そんな軽快な反応もなく、後ろの三人は、いよいよ非現実には押しつぶされていた。

木村は渋い顔だし、田中は警戒している。黒峰さんは頭を抱えて混乱していた。

だけど、俺はどうだ？ 俺も同じだろうか？

「魔法少女、ほ、本当に？」

「ええー！」

違うよな、そうだよな。俺はいつも、そんな下らない妄想をしていたから。

「あの、じゃあ君は何かと戦ってたとか？ 魔法が使える？ そのマスコットに力を

貰ったの？ それにどうやってそんな力を……」

あたふたとオタク特有の早口でまくし立てるじゃありませんか。

良く見ると俺は本当にウーパールーパーみたいな顔をしている。可愛いような、可愛

げがないような、まぬけで微妙な顔だ。

私は、そんな俺の言葉を遮った。どうやって？ 上手く回らない俺の唇を人差し指で

押さえたのだ。

そんな事をされれば、女の子に耐性のない俺なんてイチコロである。

「あう……」

照れている。

女の子に唇を触られる、俺はそんな事すら初めてだから。

私は小悪魔みたいな微笑みで、俺に尋ねる。

「その前に、私からも、ひとつ質問して良いですか？」

「う、うん！」

顔を真っ赤に頷いた。我ながら可愛いモノだ。

私はニッコリ笑って質問する。

「あなたの名前はなんですか？」

「え？ あっ！」

そこで、俺はようやく自分がまだ名乗っていない事に気が付いたらしい。

今思い出したみたいに、ゆっくりと口を開いた。

私は、俺の名前を知っている。当たり前だ、自分の名前、知らないはずが無い。

『高橋敬一』だ。知ってるに決まっている。

だけど、それを私は俺から聞きたい。聞く事で、私は高橋敬一じゃなくなるから。新しい神としての私が始まるから。

いま、その言葉が紡がれる。

「俺の？ 僕の名前……？」

「そう、あなたの名前は？」

ああ、ここで全てが始まり、そして、終わるのだ。

私はその言葉を聞くために来た。

そして、遂に。

「僕の名前は……『偶然』だよ」

最終章 NZ

傾ける者

「僕の名前は……『偶然』だよ」

え???

いま、何て言った?

「偶然さ、僕が、僕こそが『偶然』だ。君が誰よりも憎んだのが、僕だよ」

俺は、高橋敬一はそう言った。

ウーパールーパーみたいな可愛げの無い顔で、そう言ったのだ。

パチンと指を弾く、音はスカスカで姿勢も悪い。格好付けてるのに格好悪い。

まさしく俺だ。指を鳴らすのは何時だって意味の無い格好付けのポーズ。

だけど、今回に限って、その効果は劇的だった。

「なに、なに……」

世界は瞬時に暗転した。

隕石に混乱するグラウンドも、耐震工事で不格好に補強された校舎も、全て一瞬で消え去った。

「何？ 何なの？」

どんな光も、魔法も、気配すら感じられない闇の世界。

神になった私に、観測出来ないモノなんて無いはずなのに、何も感じる事が出来なくなつた。

今まで感じていた、無敵とも思える全能感なんて一瞬で吹き飛んだ。宇宙だろうが、灼熱の星のコアの中だろうが、私は無敵だつた。

なのに、ココでは何も感じない。虚無。

「なんで？ なんで？」

人間だつた時も、暗闇は恐かつた。音がない地下も、味覚をなくした時も恐かつた。だけど、神に至つた今だからこそ、何も感じぬ世界がなにより恐ろしい。

この世界から私以外の全てが消えてしまったみたいだつた。置き去りにされたみたいだつた。

これは、これこそが、世界のバグ？ ゲームの中でポリゴンの隙間から下へ下へ落ちていくみたいな感覚、喪失感だけが体の中をグルグルと巡る。

ほんの数秒、たつた数秒で、私は発狂しそうになつていた。

落ち着くんじゃ。

「ヒッ」

腕を、掴まれた！

パニックになって、引き剥がそうとして、気が付いた。

「アイオーン？」

さよう。

神だ。爺さんの姿で私の腕を掴んでいた。

「なんで？ いつの間に？」

気が付けば、この姿だった。ココでは嘘がつけないらしい。自分が自分だと思ふ姿になる、形のある姿を強制される。私が存在を保てたのは、お主に見せていた爺の姿があつたからだ。そうで無ければ、この空間でワシは消えていただろう。

「そんな、じゃあ、私は？」

今の私は、自分で好きに調整した姿だ。ニセモノの姿と言つても過言じゃない。ひよつとして今の私は高橋敬一の姿に？

そうではないようじゃ、お主はお主のまま。よほどその姿が馴染んだらしい。

「そっか……」

良かった。素直に、そう思った。もう高橋敬一の自分より、ユマ姫みたいな自分で居たい。

なんだか、そんな自分がおかしく思えた。

「ねえ、ココがどこだか解る？」

いや、サツパリじゃ。でも、まさか……。

「何か知ってるの？」

私は必死に神へと縋る。ココは全く意味が解らない場所だから。

神の力で転移しようにも、座標も何も解らない。適当に転移しようとしたら、無限に広がる世界の中で、私はきつと消えてしまうだろう。

全く意味不明な世界、ただどアイオーンは何かに思い至った様だ。

そうじゃ！　ここは、ひよつとして！

「ようこそ、Nの世界へ」

爺さんの言葉を遮る様に、馬鹿っぽい声がした。俺の声だ。

俺は、高らかに唄う。

「初めまして、私。

初めまして、ユマクロスセレナーデ」

「ツ！」

他人に、いや自分に。改めて呼ばれてしまうと、あまりにも恥ずかしい名前だった。

……だから言ったのだ。

「黙って下さい」

「そうさ、君はオーディエンス、黙っていてよ」

「えっ?」

俺は、高橋敬一はそう言うのと、アイオーンを物言わぬ小さなウサギに変えてしまった。コチラの意志をまるで無視して。

「少女と変なお爺さんじゃ、まるで援助交際みたいだしね」

私と同じ思考。あり得ないシンクロ。

紛れも無く、コレは俺だ。

でも、俺に、高橋敬一にこんな事が出来るハズがない!

「アナタは、一体?」

《さっき言いましたよ?》

「ツ!?!」

コイツ! 知っている。

惑星になった俺が、ユマ姫をからかって言ったセリフ。オウム返しにしたセリフ。それを、更にコイツに返された。魔力波で、返された!

俺が何をして、どうやってここに来たのかもコイツは全て知っている。

だったらコイツは、紛れも無く。高橋敬一じゃない。俺にそんな力は無かった。

「果たして、そうかな?」

「なにを？」

「本当に、高橋敬一には何の力も無かったのか？」

「そんなの！」

「一番私がよく知っている。俺は何の力も無い、不運なだけの中学生だった。」

「本当に？」

「……………」

「不運どころか、高橋敬一は誰よりもツイている中学生じゃんか」

「え？」

俺がツイている？

「そうだよ、俺はツイてる。欲しいモノは何でも手に入った。絶対に外れたくないってハガキを出して、抽選で手に入れたモノが部屋に幾つもあるだろう？」

「それは……そうかも？」

「そうさ、大好きだった漫画のサイン本も、エロゲーの限定版も、割と都合よく揃っただろっ？」

「そうだ、ここぞという時、欲しいモノは大体手に入った。手に入らなかったのは、なくとも良いかと思つたモノだけ。」

「でも、俺は、高橋敬一は何度も死に掛けて」

「それはただバランスを取っただけ。実際には死ななかつたしね」

「バランス？」

「別にバランスなんて取る必要なかつたけどね、でも無意識に俺はそれを望んだ。自分
はついてるだけの男だつて思いたくなかつたんじゃないかな？　むしろツイてないと
自嘲したかつた」

「……………」

「……そうかも、知れない。」

俺は、ゲームでも適当に運だけでクリアするのが嫌いだった。実力で攻略した達成感
を欲していた。

「だから、僕は君の中にずっと居たのさ。僕は『偶然』そのもの、ずっと君の傍に居た。
君がユマ姫に手渡した奇蹟。アレだつて僕の一部」

「そんな！」

「僕？　僕とは？　俺の中に僕が居た？　なんだ、それ。」

自分でもよく解つていなかった力。ユマ姫に渡した奇蹟。アレがコイツの欠片だつ
た？

運命を破壊して、神すらも欺いたのはコイツだったのか！

「アナタは、一体？」

俺の中に居たコイツの正体は、神を越えるコイツはなんなのか？ 私はその本質が知りたい。

「……そうだなあ、説明すると少し長くなるけど良い？」

「ええ」

「じゃあ、座ろうか」

途端に世界が一変した。黒から白へ。真っ白な空間は神の領域に近い。でも違う、今なら解る。あそこよりずっと広い。無限に広い。

そんな中で、目の前の高橋は椅子に座った。教室にある、パイプと合板で出来た簡素な椅子だ。

中学生の俺に、よく似合っている。

「でも、君にこの椅子は似合わないね」

気が付けば、私はふかふかのソファーに腰を下ろしていた。

柔らかくて、肌触りは滑らか。なのにどうやっても壊せない、壊せないのだと解ってしまう。

神に近付いた私にして、どうやって出来ているのか解らない。

でも、そうだ、ここまで来たら腹を括る！

「あら素敵、ところでお茶のひとつも出して下さらないのかしらっ？」

「コレは失礼」

俺はニチャリと粘つく苦笑を浮かべ、ユマ姫時代に愛用したティーセットを現出させる。目の前に、突然に、何の感知もさせないままに！

やはり、格が違う。目の前で、ポットが浮かんでひとりでお茶が入った。震える手でカップを掴む、味だって同じだ。

私はそこに、シノニムさんの幻影を見る。彼女のお茶の淹れ方を完璧に再現している。

だからそう、このお茶を飲むと何時だって私は落ち着けるのだ。

「それで、私にも解るように説明してくださいませんかしら？」

艶然と微笑みを浮かべると、俺は、高橋敬一は、まぬけ面で少し見とれたように顔を赤くした。

そうだ、神の力なんて所詮は借り物。私はユマ姫として、最強の美少女として生きて来た。その時間だけが私の力！

私は少しだけ自分を取り返した。

「僕が何者かって話だよね？」

「そうです、教えて下さいますか？」

「いいよ、僕は君が言うところの『偶然』。だけど自分ではこう名乗っているんだ

『NZ』ってね。意味解る？」

私は静かに首を横に振る。解るワケない。ハナから解らないと思ってコイツは喋っている。

「いいえ、解らないわ。今からソレを教えてくださいるのでしよう？」

「じゃあ、説明するよ」

「ええ、お願い」

俺による、『僕』のNZの解説が始まった。

教室みたいな黒板が現れる。これは学校のつもりか？ そうなると豪華なソファも、私の格好もアウエーに感じる。

居心地の悪い思いをしていると、俺が笑顔で私に尋ねた。

「ねえ、ユマちゃんは世界がどうやって始まったと思う？」

「ユマちゃん？」

自分に私をそう呼ばれると気持ちが悪い。

「じゃあ、何て呼べば良い？」

「そう言われても」

よく解らない。どう呼ばれても違和感がある気がする。

「まあいいや、君は世界の始まりをどう考える？」

「いえ、そんなの」

コレだって、解るハズが無い。

「僕が知りうる最初の世界は、ドコまでもフラットだった。ドコまでも直線で、ドコまでもムラがない世界だった。ちょうどここみたいなね」

「ここみたいな？」

「ここは本当に何も無い、何も無いから自分のありようも定まらない。

「僕は気が付くと、そんな世界に一人で居たんだ。僕は僕がどうやって生まれたのか、実はそれは僕にだって解らない」

「……それって？」

「どこまでも真っ直ぐで何も無い世界なんだ、本当にここみたいな感じ」

俺は、高橋は、黒板に図を書いた。Nと書いてからひたすら長い横棒を一本だけ。

PCのペイントツールで書いたみたいな絵。

「コレが、フラットな世界。ドコまでも真っ直ぐな世界。コレをニュートラル、僕はNの世界と呼んでいる。Nは何もなくて本当につまらない。こんな所に居れば、すぐに発狂してしまうよ」

ソレは覚えがある。私だって、さつき数秒で気が狂いそうになったから。

「だから、僕が何かと問われれば、気が狂った僕が生み出した妄想かも知れないし、真面目だった僕が何も無い世界で狂った果てに、新しく生み出した精神かもって思うんだ」

「そんな話は良いから、続けて下さい」

「ふうん、まあ解つたよ」

僕はつまらなそうに口を尖らせた。チラチラとコチラを盗み見ている。

やはり、コイツは私の反応が気になるのだ。きつと私が好きなのだ。今の私ならそれが解る。

でも、どうしてだろう？ 神を遙かに超える力を持ちながら。私に？

NZの話は続く。

「まあ、良いや。とにかく僕は退屈だった。狂いそうだった、既に狂っていたかも知れない。だから世界を傾けた」

「え？」

次に、コイツはさっきの図を傾けた。横棒が縦棒に、そして……

「NがZに？」

「そう、だから僕は言うならばNZ、そう思ってる」

ソレが、コイツの正体？ でも、意味が解らない。

「まあ、本当は垂直に傾けたワケじゃないんだ。でも、無限に広がるNの世界。1度傾けるのも、90度傾けるのも違いはない。無限に長い棒が少しでも傾けば、それだけで高い所は無限に高くなるし、低いところは無限に低くなる」

「そ、そうね」

解る、解る気がする。コレはその位途方もない世界の話だ。

「でさ、位置エネルギーっての解る？ 無限に高い所と無限に低い所が出来たって事は、無限の位置エネルギーを持つ所と、無限の負の位置エネルギーをもつ場所が出来たって事なんだ」

「待って？ ちょっと」

意味が、解らない！

無限の位置エネルギー？

「いや、実際に位置エネルギーがあるワケじゃないよ？ 重力なんてない世界だ。でも近いモノはある。フラットな世界が傾くとエネルギーのムラはとんでもない事になる。途轍もなくエネルギーを抱える所はドコまでも高エネルギーになり、途轍もなくエネルギーが奪われた所は負のエネルギーが充満する」

「負の、エネルギー？」

「そう、熱いところがあれば寒いところがあるように。負のエネルギーと言う概念がある。こちら側の世界では決して観測出来ないけどね」

意味が、解らない!! 神に近付いた私でも、コイツの言葉が理解出来ない。

「仕方無いよ。本質的に理解わかつてしまったら。もし、こちら側から負のエネルギーを観測してしまつたら、君は消えてしまうからね。だってコッチはあらゆる全てが正のエネルギーから成り立っているんだもん」

「????」

解らない。でも、何か不思議と飲み込めた。

「それで? どう言う事なの?」

「そうそう、こんなのは何となくで良いんだよ」

俺は、高橋は満足そうに頷いて、続けた。

「でね? 無限にエネルギーを煮詰めると、どうなると思う?」

「え、それは……」

不定形なエネルギーが圧縮されて、固まって、そうすると? 私はその答えを知つて

いた。新米の神様だけど、既に実践していたからだ。

「エネルギーが固まって、物質になる?」

「そうだ、そうやって君も星がひとつ死んで生まれるような超エネルギーから、小さな衣装を作ったよね？」

「そうだ、私は「ただ、在れ」と、エネルギーを固めるだけで衣装を作った。」

巨大な星がひとつ砕けるような、無尽蔵のエネルギーを注いで、魔法少女の小さな小さな衣装を作った。

「そうさ、上へ上へと高まって、行き詰まった無限のエネルギーはやがて物質になる、それも左右真つ二つに分離する。右側に正のエネルギーの＋物質として、左に正のエネルギーの－物質に分離するんだ」

「正のエネルギーのマイナス物質????」

「いよいよ意味が、解らない。」

それに図を見ると逆側には下に伸びた負のエネルギーの＋物質と－物質もある。

縦棒の両端は枝分かれ、気が付けばカタカナのエミみたいな形になっていた。

「コレ、負の物質は、プラスとマイナスの向きが逆じゃありません？ 右側がマイナスになってるけど」

「コレであってるんだ。負の世界は全てが対称になるからさ」

そうなのか？ 頭がおかしくなりそうだ。

「正のエネルギーのマイナス物質は不思議な存在だ。解ってるだろ？ 君は既にソレを見たハズだ」

「……ええ、そうですね」

私は衣装を作るときに、何でもない石や土を犠牲にした。

エネルギーから衣装を取り出すと、同じだけ不安定な塊が出来てしまったから。ソレは何かと触れるだけで爆発してエネルギーに戻ってしまう。破壊の塊。

「そこそがマイナスの物質だよ」

「マイナスの物質……」

私は、ずっと昔から、そんな存在を知っている気がする。SFかどこかで聞いたような。

「まあいいや、とにかく煮詰まったエネルギーは物質に変わる。でも、知つての通り+の物質と-の物質はぶつかると対消滅して、またエネルギーに戻ってしまうんだ。グルグルグルグル。コレじゃ全く面白く無い」

エネルギーから二つの物質が生まれ、二つの物質がぶつかるとまたエネルギーに還

る。無限ループみたいな地獄の世界だ。

きつと神様だつて数秒で消えてしまふだろう。そんな世界があるのだと、何となく理解出来た。出来てしまった。

私はゴクリとツバを飲み込む。

「それで？」

「それでも何も、そんな世界、まるで面白くないだろう？」

確かにそうだ。一生爆発し続ける世界が面白いはずがない。

「だから、僕はまた世界を傾けた」

「え？」

なにこれ……こんなの、コレって？

カタカナのエの横棒が傾いて真ん中でくっついた。

90度右に傾いた▽みたいになった。

「見ての通り！ 傾いた世界で、正のエネルギーの―物質と、負のエネルギーの+物質が

くつついたのさ」

「そうすると、Nになる？」

「そう、だって＋物質と－物質が対消滅して、生み出された正のエネルギーと負のエネルギーも対消滅して、全てが完全に消滅する。Nに戻るんだ」

「そんな、事が？ そんな事があるのだろうか？」

「あるんだよ、あるからこそ、残された正の＋物質と負の－物質が拡散し、世界は拡大していった。それこそが君らが言うところのビッグバン」

「途方もない話ですね……」

私はティーカップを引き寄せて、グツと飲み干した。

頭がおかしくなりそうだったから。

だとしたら、そうだ、目の前にいるコイツは……。

「つまり、アナタが世界も私も、ゼロから作ったと、そう言う事ですね？」
「うーん？」

しかし、俺は、目の前のコイツは、何故だか悩み出した。

「なんでだろう？ だって何もなかった虚無のNからエネルギーを生み出して、物質を作り出したのがコイツなのだろう？」

「だったら、コイツこそが全ての生みの親。全ての元凶。」

「いや、直接的には、それでも無いかなって」

「それは？」

「君は、神ってヤツはどんな存在だと思う？ その小動物がさ」

「え？」

思わず見つめる。アイオン神は子ウサギになり果てて、豪華なソファアの肘掛けに座り込んで、悲しそうにコチラを見ていた。

どうも、喋れないだけで知能はあるっぽい。

「えと……」

「地球よりも、ずっと原初のエネルギーに近い存在なのさ、コイツらはね」

「世界のこの辺で、コイツらは生まれた」

「エネルギーの分岐から近い場所……」

「そう、それで、地球はどの辺にあると思う？」

「それは……」

きつとこの辺だ。私はエネルギーの分岐から遠い場所を指さす。

「違うよ」

「なんで？」

エネルギーよりも、ずっと物質に変化した場所のハズ。なのにココではない？

「なあ、オマエは知ってるだろ？ 教えてやれよ。地球がある場所をさ」

俺がそう言うのと、ピョンとウサギが、アイオーンが跳ねた。

差し出した黒板の上、ある一点を差した。悲しそうに。

「そ、そこは??」

「そう、地球があるのは、ココだ！」

N！ 小さなN！

「そうだよ！ コイツらは次元を越えて世界の果てに、小さなNまで辿り着いた。世界の欠片を手に入れてしまった」

「なんで、そんな事」

「そんな事？」

俺は、高橋はきよとんとしている。

「だから、コイツらは君達の神様なんだよ、好き勝手出来る世界を手に入れた。正真正銘君達の生みの親さ」

「そんな」

神はそうやって、地球や、異世界を作った？

「なんでそんな事を？」

私は子ウサギに向き直る、でもアイオーンは俯くばかりで何も言わない。

そう言えば、神は完全に制御可能な世界を欲していた。でも、どうしてそんな世界が欲しいのか？ それは全く説明して貰っていない。

神は世界を管理するのが当たり前だと、そう思わされていた。

だけど、わざわざ世界の欠片を拾って、世界を作っていたとすれば話は全く変わってくる。

アイオーンは答ええない、喋る事を忘れたみたいだ。話せないように作り替えられてしまった。

代わりとばかり、あざける声で俺が笑った。

「コイツらは知リたかつたんだよ」

「知リたかつた？ なにを？」

「なについて、人間だつてそうだろ？ 自分達がどうして生まれたのか、ミッシングリング

を探している。自分のルーツを欲している。コイツらだって、そうだ」

「え？」

「どうして、世界にエネルギーが生まれたのか、それを知りたかったんだ」

「そんなの……」

解るハズが無い、だってコイツが、NZが世界を傾けていたんだから。

「そうだよ！ 小さなNを手に入れたコイツらは、どうしたら世界にエネルギーが生まれるかひたすらに観察した。でも、Nから勝手にエネルギーが生まれるハズが無い。何もないNを観察して、ひたすらにヤキモキしていた。外からエネルギーを注入して、歪んだ世界を作ったりもした。それでも世界誕生の切っ掛けが解らず困り果てていた。そうだ、僕が傾けないと世界は生まれえない」

NZが笑って、ウサギであるアイオーンを摘まんで、ポイツと投げ捨てる。

「だから僕がコイツらが持ち帰ったNも、こつそりと傾けてあげたんだ。そしたらコイツら驚くのなんのって、どうして世界にエネルギーが生まれたのか必死に研究を始めた。でも理由が解らない。解るハズが無い」

無菌室で泥の中からウナギが自然発生するみたいなモンだ。

誰かがイタズラで稚魚を仕込んでしまったら、まともな研究なんて成り立たない。

「それでコイツらは考えたのさ、全ての事象が解明されて、制御がとれた完全な世界をつ

くって、時間を巻き戻して観測すれば、世界の成り立ちが解るんじゃないかってな」

その為に、それだけのために、果てしない実験を繰り返したのか……

「僕はね、面白がってそれを見ていた。色々な世界が泡のように生まれては消える。こんな愉しい事はない。誇って良いよ。僕が自分で作るよりも、神の方がよっぽど世界の作り方が上手かった。僕は毎日、新しい世界を見つめて過ごすようになった」

それで、そうやって神様をからかっていたのか。

「ソコで見つけたんだ、ドコまでも虚無に、何がしたいでもなく毎日を暮らしている人間を」

「??? それって、まさか?」

「僕だよ、そして君だ。高橋敬一を見つけたんだ」

なんで、そこで、俺が出てくる?

「シンパシーを感じたんだ、だから僕は俺になった」

だから、俺は欲しいモノは何でも手に入れていた?

ツイてないんじゃない。ツキ過ぎていた?

「平和な世界、ちよつとした幸せ。普通過ぎる俺は、そんなので喜んでる。でも、そこそが宝物。僕が見たかった、感じたかった世界の全て。だからこそ、僕は俺に欲しいモノを何でも用意したさ」

小市民な俺は、神を越える力でちよつとした幸せを噛み締めていたのか。

そうして、愉しい時間を過ごしてきた。何でも思う通りだったに違いない。実際に、あの時の俺は幸せだった。

でも、だとすると、何でだ？

何で私は、ユマ姫になって、アレだけの苦勞をさせられた？

俺は、それとも私は、可愛い女の子に成りたかったのか？

違う、中学生の俺は性同一性障害ではなかった。TSモノの小説は読んだけど、取り立てて、女の子になりたかったワケじゃない。

じゃあ、なんで???

疑問に思っていると、目の前の高橋は呆れた様に肩を竦める。

「でもね………たつたひとつだけ、どうやっても用意出来ないモノがあった」
「え？」

神を越える力をもってして、あらゆる確率を傾けて偏らせ、それでも叶えられない俺の願いつて、何だ？

俺は、高橋敬一はそんな大それた願いなんて無かったハズだ。

「それでもないさ、君は神をも匙を投げる奇蹟を望んだ」

「それは、どんな望みです？」

そう聞けば、N Zはどうにも言いたくないらしい。ボリボリと頭を掻きむしる。

それでも最後には、降参とばかり、言葉を絞り出す。勿体ぶって口を開いた。

それは余りにも下らない願いだった。

「彼女だよ、俺が望んだのは彼女だった」

「ハア？」

そのの、どこが！ 神をも匙を投げる奇蹟の望みだよ！

男子中学生として、めっちゃめっちゃ平凡な望みだろうが！

「違うだろうが！ 胸に手を当てて思いだしてみろ」

「え？」

思わず、自分の胸に触れる。確かな柔らかさ。丁度良いサイズ。

「それも望みのひとつだ。完璧なサイズ、完璧な形。普通ではあり得ない」

私の自慢の胸である。そういう風に育ってくれた。

「それだけならまだ、何とでもなった。でもさ、無理だろ？ エルフでピンクの髪で、猫

耳、しっぱ、最強の力をもつ魔法少女で、痛くされるのも嫌いじゃない。自分だけを愛してくれる女の子。こんなのは無理だ、何度世界を作り、滅ぼしても、こんなのが偶然
出来上がるなんて無理がある」

「……………」

中学生の妄想の塊だ。理想の彼女。アニメみたいなキャラクター。

私は言葉をなくした。不格好な自分の妄想を突き付けられたみたいであった。

「どこまでも都合が良い、自分好みの女の子！ どうやっても作れないなら、自分で買って貰えば良い。それでしか絶対に作れない！」

まさか、そうなのか？

不幸に巻き込まれて『偶然』に立ち向かうために、同情をかうために女の子になったつもりだった。誰からも愛される、理想の女の子を演じてきた。

でも、違った。理想の女の子になるために、私は不幸になっていた。

はじめから、逆だった。

目的と、手段が！

「それに、君は望んで居たはずだ。異世界に転生して大冒険」

「そんな……な」

「君はお手軽チートを貰って、悠々自適の異世界冒険なんて物語は嫌いだったはずだ、本当の冒険を求めている」

確かに、そうだ。お手軽チートで好き勝手に暴れる主人公が私は嫌いだったのだ。

「それでいて、君は不安だった。誰も居ない異世界で自分なんか活躍出来るだろうか」と悩んでいた。頼もしい味方が欲しかった」

「まさか……まさか！」

「そうだよ、だから君は、友達と異世界で大冒険する世界を望んでいた」

そんな、まさか、全部、全部、私が犯人だった？ 私が望んで皆を巻き込んだ？

「違うさ、君に巻き込まれたなんてモンじゃない。あんな異世界なんてのは、君が望んだ事で初めて存在しえた舞台なんだ。アレだって僕が、そう在れと作ったモノに過ぎない。因果を弄って生まれた存在。ソコの神は、そんな事は夢にも思っていないかったけどね」

神すらも、全てがコイツの手の平の上だった？

全ての因果律をコイツが制御していた？

でも、私は私で、自由に勝手に行動していた。そうでなければ意味が無いからだ、誰かに操られるだけの女の子なんて俺は好きじゃないから。自分から理想の女の子を演じていた。

だとしたら疑問がある。もし、私が異世界で間違いを犯したら？

聞くのが怖い。でも、聞くしか無い。

「私を異世界に送り込んで、もし私が他の男と結婚したら、エッ！……な事したらアナタはどうするつもりだったんですか！」

俺は、高橋敬一は処女厨でもあった。経験済みの女の子は理想じゃないハズだ。一方

で、実のところ女の子になった私はエッチな事にも興味津々だったのだ。

自分で言うのもアレだけど、私はガードの緩い女だった。一步間違えばあやまちも起こり得た。

そうでなくとも、異世界の治安の悪さで私が犯されてしまったら、コイツはどうするつもりだったのか？ それこそ黒峰さんみたいに。

「そりゃさ、因果律は調整した。そう言う人間は死ぬ運命だ」

やっぱり、ボルドー王子が死んだのも私のせい……。

「もちろんそれだけじゃない。不安だからって呼び寄せた親友だって、一步間違えば間違いを犯す可能性があった。どう調整したって、間違いが起こる可能性は幾らでもある」

まさか、いざとなったら田中や木村も殺そうと？

「いいや、アイツらなんて確率を弄れば、いつだって簡単に殺せるよ。だけどさ、世界をやり直すには君を殺さないとならないだろ？ むしろそっちが難しかった」

「??？」

「ハハッ！ 知らないか！ 知らないよな！ 無理もない、コレまでずっと、危機一髪の一ギリギリを上手いこと切り抜けたつもりで居たか？ 違う！ 危機一髪で切り抜けた君だけが残された！ 何万人、いや何億人もの君が失敗作として死んでいる。おめでと

う、君こそが完成品、君だけが辿り着いた。一億分の一の最高傑作だ！」

……俺が、私が、死んでいる？ 神の力をもってすれば、何回でもサイコロを振れるのと同じ。コイツもただひたすらにサイコロを振り続けたのだ。敢えて危険な世界にぶち込んで。

私が、ギリギリの大冒険を望んだから？ スリルの在る展開を望んだから？ ちよつとした恋愛要素もあれば良いなって思ったから？ それが一億回も？

そんなのつて！

「間違いが起こる度。僕は世界をリセットした。トリガーは君さ！ ただ君が死ぬだけで最初からやり直すルールになっている。リセマラさ、SSRが出るまで引き直した。ループの片鱗は君だつて感じたはずだ。あの二周目はその応用に過ぎない」

「アレも、本当のユマ姫に交代したあれも、アナタが仕込んだルールを利用した変則技だつた??」

「そうさ！ その通り。どうしても困つたのは君が強くなり過ぎて、その上で田中や木村あたりとヤツちまつた時だな、無敵の化け物になってしまふルートだよ、コレが一番恐かつた」

「ええ……」

考えたくないが、実はひよつとしてギリギリだつたかも？

凶化して意識をなくした俺が、アイツらを強引に犯したり殺したりする？ 人間らしさも失つて？

あり得ない可能性じゃない。いや、良く考えたら人間で居られたのが奇蹟。

「そうなるよ、もう誰も君を殺せない、世界がリセット出来なくなってしまう。その為に僕はリセットボタンも用意した」

……そうか、やつと解った。

その為に、彼女が居たんだ。

「それが、ネルネー！」

「そうさー！ おかしいと気付いていたかな？ 彼女は僕が君を殺す為に用意したスイッチだ。理想の君をつくるのに失敗したら、彼女が君を殺してリセットする。その為の力を持たせた」

そう言えば、何かとネルネは私を殺そうとしてきた。そういう風に作られていた？

そんな！ 全部、全部が、作られたモノだった？

今までの冒険は、私の頑張りは？

「そりゃあ、君が俺の彼女になるためさ」

そんな事のために！

「嫌かな？」

「当たり前でしよう！」

自分なのに、私は俺が高橋敬一の姿が心底気持ち悪い。じんましんが出るほど悍ましい。

「そうかな？ 本当に？」

ウーパールーパーみたいな間抜け面しやがって、気持ち悪い。

いや、なんでだ？ コレだっておかしい。あんなナリでも、過去の自分だ、こんなに嫌いなのがあり得ない。

そして、嫌いなハズなのに、どこか惹かれてしまう!!!

何だコレ、なんで？ なんでそうなる？ これじゃツンデレヒロインみたいじゃないか。

「君は、そうやって出来ている」

私は、どこまでも、都合の良い存在？

「なあ、俺達付き合わないか？」

「ふざけるな！ なにを、なんで？」

テンプレみたいな告白をするな！ こんな奴に、こんなクズに！

それでも、私は、俺を、憎めない。

どこまで行っても、俺は私だ。この姿だって、自分に見せつけたくて、遙かな世界を

渡つてここまで来たのだ。その時点でおかしい。

俺を見つめていると、私の頭がおかしくなる。

私が、俺を、好きになる。

頭がボーツとして、気が付けば信じられない事を口走っていた。

「ねえ俺君、キス、して良い？」

なんだよ俺君って、出来の悪い二次創作か？

さつきまで自分が気持ち悪かったハズ。いや、それだって不自然だ。なんで自分を気持ち悪く感じていた？

きつと、第一印象が裏返るのを期待して、悪感情すらも仕込まれていた。

だから今は、全てが愛おしくて堪らない。

初心で、女の子をリードなんて出来ない俺に、女の子の方からグイグイ迫る。

これじゃまるで出来の悪いラブコメヒロイン。

私はなんて都合が良いんだろう。

悔しい、でも、逆らえない。私は、自然に顔を寄せ、そのまま俺に口付けた。

「あっ」

声が重なる。コレがお互いのファーストキスだったから。

シャリアちゃんやユマ姫とキスしたのはノーカウントだろう、女の子同士のキスは都

合よく気にしないのだ、高橋敬一と言う人物は。

一度、キスをするのと止まらない。愛しい気持ちが溢れてくる。

私は、俺を、俺は、私を好きになる。

それで……それで？ それで自分は何を望むのか、自分は彼女が出来たらどんな事がしたかったのか？

どんな恋愛に憧れていたんだろう？ どんな恋愛ゲームが好きだったっけ？ 俺が望む全てをしてあげたくなる。

どうにもそこら辺の記憶が曖昧で……

それを思い出したとき、私のお腹に鋭い痛み。

目の前で高橋敬一が不気味な笑みを浮かべていた。

「ありがとう、僕も好きだよ、だから……」

死んでね」

ナイフで、刺された。

そうだ、俺はリヨナ陵辱ゲームが好きだった

誰よりも、歪んだ性癖をもっていた。

最終回

「なん………で？」

聞く迄も無い、俺は可愛い女の子が苦しむ姿が好きなんだ。

ぱっくりと裂かれたおなかから、ぼろぼろと内臓が零れ落ちる。

「ああ、流石だ、内臓まで美しい」

私から零れる内臓を、受け止める俺。

そして、両手一杯、グロテスクにも見える小腸を掬い上げ、見せつけるようにキスをした。

変態だ、気持ち悪い変態。でも、それが、俺だ。

「あ、ぐっ」

痛い、痛いッ!! 痛い? 何で? こんなに?

視界が赤く染まり、明滅して、歪む。喪失感と絶望が指先を冷たくする。

おかしい、今の私には内臓なんて飾りだったハズ、物質的な攻撃で死ぬような私じゃない。神に近付いたハズなのに。

ぱたりと仰向けに倒れた私に、内臓を手にニタニタと笑う俺が迫る。

「ココでは、神の力は使えない」

そんな……それじゃ、普通に血肉で生きるだけ？

じゃあ、どれだけ？ どれだけ内臓が零れた？ 飾りぐらいに思っていたそれらが、

今では私のいのちの欠片。

倒れ伏した私が横目にとみると、べちゃりと機能を失った生ゴミが広がる。

私の小腸と大腸だ、こんなにも溢れ出した。これじゃ、もう。

「食べる事も飲むことも出来ない。どうあつても、もう死ぬ」

そう言つて、俺はペチャンコになつた私のお腹を踏みつけた。

「ぐぶっ」

強烈な痛みに、ビクンと体が跳ねる。意志を無視してビチビチ跳ね回る。自分の体を止められない。

出てはいけない大事な内臓が傷口からグチャリと飛び出して、口からはドロドロの血を吐き出した。

真つ赤な視界が激しく明滅しているのは、意識を失うのと、痛みで覚醒するのを繰り返しているから。

「おもしろえ、魚みてえ！」

痙攣する私を見て、俺は馬鹿みたいにゲラゲラと笑っている。

死ぬ、死ぬのか？ 神の力を封じられ、人間に近い体にこんな事をされたなら、幾ら私だってすぐに死んでしまう。

「大丈夫、グチャグチャに内臓をかき回しても、すぐには死なない。知ってるだろ？ その位には君は丈夫だ」

「あ、ぐ……」

そうだ、凶化したユマ姫から引き剥がした私の体は、それぐらいに強い。

だからこそ、長く苦しむハメになる。

「だから、一日ぐらいは生きられる。たっぷり楽しんで、精一杯鳴いてくれ」

心底楽しそうに俺が笑った。

そうだ、俺は、可愛い女の子を台無しにして、グチャグチャに殺してみたいって、そんな猟奇的な願いがあった。

最悪だ、最悪の願い。歪んだ願望。

それが、私に牙を剥く。

「コレは臍臓かな？ コレはなんだろう？ なあ、知ってる？ 知らないか、どうせ潰すし」

「あ、あああ……」

ひっくり返った私に見せつける様に、俺は私の内臓を、大切な内臓をグチャグチャに

踏み潰す。

台無しにしてしまう。

「あー靴が汚れちゃった」

ひとしきり、つま先で私のおなかや内臓を踏み潰して遊んだ後、俺はがらんとどうにもなった私のおなかに腰掛けた。

マウントポジションだ。

そのまま、無造作に無遠慮に、私の髪の毛で靴を拭った。

「ぐふ……」

「なんだ、つまんないな」

この頃になると、私はもう痙攣して飛び跳ねる力もなくして、手足はだらんと投げ出されたまま。

「安心して、永遠に甦るなんてしない。内臓も無しに長くは保たないでしょ。大丈夫、最後に僕が殺してあげるから」

「ふー、ふー、ふー」

ウーパールーパーみたいな顔しやがって！　なんて、ムカつく！　怒りを糧に、私は血を吐き出しながら、なんとか呼吸を整える。

確かにそうだ、私は、ここで死ぬ。コイツは神の上、世界を作ったようなヤツに勝て

るはずがない。

でもただで死んでやらない、私はずっと、そうやって、生きて来た。

ぐらぐらと揺れる視界で、ニタニタと笑う俺。

私は歯を剥き出しに鬪志を滾らせ、挑発するように言つてやる。

「こんな事が、本当に楽しいのですか!？」

だって、私達はまだキスしただけ、あんな事もこんな事もしないまま、ぐちゃぐちゃに壊してしまうなんて馬鹿げている。勿体ない。そうだろ？

猿みたいに盛って、思うがままに犯してみろ！ 噛み千切つてやる。

「うーん?」

すると、俺はちよつと困つたような顔をする。

「だって、俺は新品が好きみたいだから、綺麗なままの君を壊したいんだ」

「そんな……」

想像以上の、ド変態。

なんだ、コイツ、本当にイカれている。

いや、それが俺だ！ 悔しいが、悲しいが、コレが俺だ。

グチャグチャな欲望が混ざり合つて、まともな形になつていない。ピンク髪のエルフで猫耳魔法少女を望む様な、とりとめのない欲望のごちゃ混ぜが、私の体で発散されよ

うとしている。

それが、怖い。

「何て、馬鹿な事を！」

「ふーん、ずいぶんと生意気だなあ」

私があんとか声を絞り出すと、マウントポジションでのし掛かる俺は心底嬉しそうに笑うのだ。

そして、拳を振り上げる。

「キャッ！」

痛い、え？ 嘘？

色々されると思ってた、犯されたり舐められたり。でもコレだけはやられないと思っていた。

だってそう、これじゃ丸つきり台無しだから。

私はグーパーパンチで、思いつきり顔面を殴られた。

「な、なんで？」

片手で触り、顔を確認する、鼻が折れて、血が噴き出していた。形の良い鼻が崩れてしまった。

どうして？ ひたすらに奇蹟を起こし。私を用意したんじゃないの？ 完璧に可愛

い女の子を作ったんじゃないの？

顔は、顔だけは殴られないと思っていたのに。

「違うだろう？ 知ってるはずだ、俺は自分で自分が可愛いって思ってる女をズタズタに壊したかった」

「ヒッ！」

そんな、なんで？ いや、そうだ、そうだった。俺はそう言うゲスだった。

「グッ、ギッ」

目の前で、思い切り振り下ろされるパンチ。必死に両手で顔だけは守ろうとする、それが私のアイデンティティだから。

でも、人外の膂力と、丈夫な骨格をもつはずの私が、いとも簡単に壊される。

腕の骨が折れて、指があらぬ方向にへし曲がる。それでも俺は殴るのを止めない。

途轍もない威力、まるきり人間の力じゃない。ハンマーで殴られてもこうはならない。
い。

痛いッ！ 痛いッ！ やめて！

「あーもう、殴りにくいなあ」

なのに、俺は私にそんな事を言う。

「素直に殴られてよ、ほら、両腕を開いて」

「??」

意味が解らない。

従うハズがない。従う道理が無い。そんな風に言われた所で、コチラには。

「え?」

でも、私の体は、私の意志に反して、べたりと腕を開いてしまう。左右にガバツつと、全てを受け入れる様にして。

「ツ!?!」

マウントポジションの相手に! 顔面を殴ろうとする相手に! まるで無防備に!

顔を晒した!

その時、ドクンと心臓が跳ねた。名状し難い興奮が、私の体を駆け抜けた。

「なん………で?」

意味が解らない。信じられない。

はじめは、魔法を使われたのかと思った。或いは洗脳されたのかと思った。

目の前の俺が、神を越える力を持ったNZが、私の体を操ったのだと。

でも、違う。それだけは解る。

コイツはただ、私にお願いしただけ。

それだけで、殴って下さいとばかりに、私は顔を晒け出す。

な、んで？ 私の体は、顔面を、殴られたがっている??

認めたく無い……認めたくないけど。

紛れも無く、私は興奮していた。

ゴクリと飲み込んだツバは、恐怖ではなく、期待。

とんでもない膂力で、容赦なく顔面に振り下ろされる拳を想像して、鉄よりも尚固い拳が、可愛らしい私の顔面にめり込む様を想像して。

私はハッキリと発情していた。

その事を、認められず、ポカンとした私の目の前で、ゆっくりと拳が振り上げられる。今、目の前に、高く振り上げられた拳がある。

「ぎッ！」

容赦なく、拳が、私の顔面にめり込んだ。

グシャリと壊れる音がした。強烈な痛みを意識が飛んだ。

「がッ！」

でも、次の一撃で、飛び起きた。

目が覚めると同時、後頭部が地面に打ち付けられて、すぐさま気を失う。

「ギッ！」

三発目で、前歯が折れた。

きつとまぬけな顔になった。グルグルと視界が回る。

もう、顔面はグチャグチャだ。

コレだけ殴られれば、普通は本能が顔を守ろうとする。とつさに腕を振り上げる。

だけど、私の腕は意地でも本能に抗った。

爪がボロボロと剥がれるぐらいに、地面を搔きむしり、それでもべたんと腕を開いたまま、振り下ろされる拳を顔面で受け入れる。

「あつああああ……」

そして、何より、殴られる度に下半身がピクンと跳ねるのだ。

それが、何より恐ろしい。

絶望の中、私はひたすらに殴られる。

殴られながら……発情していた。

グチャリ、グチャリと、振り下ろされた拳が顔面に沈む度。

ゴン、ガン、ゴン、ガンと、後頭部と地面がリズムを刻む度。

腰がピクンと跳ねるのだ。

イツっている。

それも！ 激しく！

意識が飛ぶまで無慈悲にぶん殴られるたび、ピクンピクンと腰が跳ねる程。

疑いようも無く、私は殴られる事に興奮していた。

「なんえ？」

回らない呂律で、私は尋ねた。

ケラケラと笑いながら、俺は答える。

「そりや……決まつてるだろ？ 君が根つからのドMだからだよ」

「あ……？」

そんな!? だから私はこんなにも快感を？ ぶん殴られて悦ぶのが、俺の理想の女の

子なの？

じゃあ、いままで私は、こんな風にぶん殴られる為に、苦労して、辛い思いをして、冒険をして、惑星となつてまで、何億年も過ごして来たの？

それが、悔しい。粉々に砕けた眼底から、水晶体と一緒に涙が零れる。

「フヒヒ、そんなになつても、グチャグチャになつても、それでも君は美しい」

楽しそうに、嬉しそうに、俺はケタケタと笑うのだ。

それが、それが……だよ？ 悔しいのに、悲しいのに……

どうしようもないぐらいに、嬉しい気持ちが溢れてくる。私を殴つて、彼が喜んでくれるのが嬉しくて堪らない。

それが、恐ろしい。興奮にハアハアと息づく自分の声が信じられない。

「でも、喜んでばかりじゃ興ざめだなー、僕は君が泣き叫ぶ所も見たいんだ」

「ふえ?」

「だから、コレ」

俺が、私の目の前に取り出したのは、ゴツゴツとした、鈍色の金属。

巨大なペンチ!

「ペンチじゃなくて、プライヤーって工具だよ、工具! 知らない? このゴリゴリの金属のカタマリで摘まんたら、どんなモノでもズバツつと抜けるよ」

抜く? なにを?? なんて?

ニヤつく顔で、俺は、私に、おねだりをする。

「だから、さあ、早くしてよ!」

「??」

意味が、解らない。

解りたくない!

抜く? 何を?

「ほら、あーんして!」

「ツ!!」

私の、歯を!?

嫌だッ！ そんなの。

なのに、私の口は私の意志を無視して、あーんと開いた。丸っこくて可愛らしい歯を無防備に晒すのだ。

「いい子、いい子、じゃあ始めようかな」

金属のカタマリが、私の丸っこい歯をギリリツツと掴む。

そして、そのまま……

——ゴキッ！

「あ、ギッ！」

いきなり犬歯を抜かれた。それも敢えて捻って、へし折りながら。弄ぶみたい。

私の全身がピンと硬直する、同時に意識が明滅する。ハッキリと感じる程に失神と気を絶を繰り返し、穴という穴からボタボタと体液を垂れ流す。

痛い、痛い！ 痛いッ！

痛みだけが脳を支配する。

そんな私の錯乱を無視して、可愛らしい私の口内に、再び容赦なく金属のプライヤーが侵略する。まだ痛がっている途中、視界は明滅し、バタバタとのたうつ最中、なお構い無し。

金属が口内にゴリゴリと押し入って、奥歯に狙いを定め、強引に掴んだ。

——バキッ!

そのまま、潰した。視界は激しく明滅する。明るくないのに眩しい、暗くないのに、視界が欠ける。

そして、まだ終わらない。砕けた歯はまだ抜けていない。だからコイツは遠慮も無しに、歯が砕けて剥き出しになった私の神経を、ゴツゴツしたプライヤーで……グチャリと挟んだ。

挟まれたのを、遠い意識で私は感じた。もうそれだけでひっくり返って仰け反る痛み。

でも、それで終わりじゃなかった。その剥き出しの神経を、無理矢理、そのまま、強引に引き抜いた!

目の前で、キラキラと星が舞う。夜よりも、宇宙で見たよりも、激しく瞬く。

痛みに脳が吹き飛んで、宇宙まで飛び出したみたい。いつそ爽快感すらあった。

それも僅か一瞬の事だ。すぐさま熾烈な、言葉に出来ない、今まで感じた痛みとは次元の異なる激烈な痛みで上書きされた。あっさりと私の意識は飛んだ。

そして、ビタンビタンと、ガツンガツンと、音がした。

遠いところから鳴ってるようで、それは間近で鳴っていた。

良く見れば、自分の頭や、腕が、地面に叩きつけられる音だった。

あまりの痛みに、痙攣する手足が地面をのたうち、震える頭が後頭部をガンガンと地面に打ち付けていたのだ。別の生き物になったみたいに。

何より信じられないのは、そんな死のダンスを踊る私を、目の前の俺が腹の上にとっかりと座ったまま、心底楽しそうに観察している事だった。

「おもしろー、たまんねー。じゃあ、ガンガン抜いてつちやおうかなー」

「あ、え、う……」

サーツつと血の気が引く。

嫌だ、恐い。心底そう思った。口を開けたくない。

生きようとする本能が、神に植え付けられた愛情すらも上回る。

押し入ろうとする無骨な工具に、口を閉じる事で、本能が控え目な抵抗を示した。泣きながらプライヤーを啜えるだけの精一杯の抵抗。

それでもまだ、私の腕はぺたんと開いたまま。ひたすらに服従を貫いている。望むがままに暴力を受け入れる。

その、あまりにも惨めで、健気な、ひとかけらの抵抗は、余計に俺を興奮させた。

「ふへへ、イヤマジでエロい。可愛い。顔が半分グチャグチャでも、それでも、いや、だからこそ」

俺はあからさまに、興奮している。

それが、興奮して貰える事が、心底嬉しいのだから、自分が恐い。信じられない。調子にのつた俺は、ゴツい金属のカタマリを、プライヤーと呼ぶ拷問器具を、私の目の前でぶらぶらと振る。

「大丈夫、優しくするから、ね？ はい、あーんして？」

嘘に決まってる、そんなモノを手に口を開けさせて、やることなんて決まっている。

なのに、私はあーんと口を開けてしまった。

すると、もちろん、どうなるか？

——ブチッ！

躊躇せず、小白歯を抜きやがった。

もう、何度目か、ビクンと大きく体が跳ねた。

でも、今度はワザと痛くするような抜き方じゃなかった、折つたり潰しながらじゃなく、ただ垂直に引き抜いた。

だから、刺激に慣れきった体は変な反応を示す。

ピンと足が跳ねたのだ。ハイヒールが飛ぶぐらい激しく。

そして、歯だけでなく、足からも訪れる激しい神経の痛み。そう、攣つたのだ。

「へっ？」

絶望の悲鳴でも、絶叫でもなく、私の喉から変な声が出た。それほどに現実を受け止

められない。

なぜかって？ 別に足が攣ったぐらいで不思議がる事ではない？ コレだけ痛ければ足がつるのも当然？

普通はそうだ、でもこの攣り方はちがう。

思いつくのは中一の夏休み。猿みたいに自慰に耽った俺が、ベッドの上で痛みに仰け反った記憶。

足がピーンと攣った記憶。

これは、ソレと、同じ！

殴られるたびにイッて、煽られるたびにイッて、歯を抜かれて絶頂イキまくって。

何回も、何十回も、体の限界まで達した証。

私は、認めざるを得ないほど、激しく発情している。浅ましいほどに乱れて、壊れるのにも構わず、絶頂している。

「あぐつ、え？」

痛みで？ 歯を抜かれて？ イッってる？

そんなのって！ そんな女の子、酷過ぎない？

痛みの刺激と、快楽が同時に脳を刺激して、グチャグチャにかき回す。

視界が赤く染まり、脳内がピンク色に染まる。吐き出した血に溺れながら、だらんと

舌を突き出した。

痛みには耐えられる。だけど、快感に抗う術が、ない！

「じゃあ、どんどん抜いちやおうかな」

そんな私の異常を知ってか知らずか、俺はテンポよく、私の歯を抜き始めた。それでも私の口はあんぐりと無抵抗を貫いたまま。ぺたんと腕を開いたまま。

——ブチッ！ ブツッ！ ベリッ！

——ピーン！ ピーン！ ピーン！

歯を抜くと同時、連動して、私の心を無視して、ピーンと足が攣る。

そのたびに、私はみつともないほど発情した。

もう、隠しきれない。

「えっ！ うっ！ がっ！ あ？ んっ？ ひあ？」

声まで、漏れる。だらんと舌を投げ出して、無様なアへ顔を晒す。

吹き出した血に溺れ、突き出した舌が喉に詰まり、殆ど窒息状態。なのにゲホゲホと苦しみながら、のたうちながら、絶頂^{イッ}ている。

なんて、みつともない生き物だろう。なんて、はしたない生き物だろう。

こんな無様を晒せば、当然に俺にも気付かれた。

「マジ？ 歯をブチブチ抜かれて絶頂^{イッ}ってんの？ スゲーー！」

ゲラゲラと腹を抱えて笑っている。

「あう、ううう」

嫌だ、恥ずかしい、死にたい。

今更だ、もう殺されるだけのハズ、なのに私は恥ずかしい。

真つ青に血の気が引いた顔が、羞恥と興奮に真つ赤に染まる。

惨めで、はしたない姿を、大好きな彼に見せたくなくなつたと、そう言う乙女心らしい。

何だコレ？ これじゃ、いつそキチガイ。

でも、ソレが私。こんな女の子を理想として、私は自分を仕上げてしまった。

「せつかく面白くなって来たのに、歯は全部抜いちゃつたな」

気が付くと、私の歯は残らず抜き取られてしまった。奥歯も残さず、全部！

私の口内は、もう腫れ上がった肉が血を吹き出すだけの場所。

「うーん、何かないかな？」

そんな中をプライヤーでかき回しても、何も残っていない。もう潰すモノも引き抜くモノもない。

「ふえ？」

そう思ったのに、私の体は、ココでも私の意志を無視した。快樂に壊されていた。

舌でペロリとプライヤーを舐めたのだ、最後にコレを潰して、引き抜いて下さいと、お

ねだりをするように。

ヒッ！ と息を飲む。絶望に血の気が引く。体と心がまるで一致しない。

心臓だけはドクンドクンと脈打って、俺の様子から目を離せない。

「ん？ 舌？ でもなあ、コレを抜いちやうともう鳴けないでしょ？ それに、舌はもうやっただじゃん」

ソレはきつと、俺が針で舌を突き刺してポロポロにしたことを言っているのだろう。

もう二番煎じだからやりたくない、本当に嫌なヤツだ。

でも、助かった。ホッと息を付く。

なのに、私の体は舌を苛めて貰えないと解ると、露骨にガツカリした。肩が落ちて、シユンとしよげている。

まるで体が思う通りにならない、痛みを快楽に置き換えて、完全に支配されている。「だから、もつと面白いモノ出してよ」

俺は俺で、好き勝手な無茶を言う。アレだけ歯をブチブチと引き抜いておきながら、プレイヤーでつまらなそうにペチペチと舌を叩いて、もつと出せとおねだり。

そして、物のついでとばかり、舌先をプレイヤーでグチャリと潰した。

「ギッ！」

それだけで、激烈な痛みが体を駆け抜け、仰け反る。視界が明滅し、ついでとばかり、

腰が跳ねる。きわめて雑に扱われ、またイッった。

健気で、いじらしく、なにより惨めな、精一杯の私の反応。

なのに、なのに、俺はつまらなそうにため息を吐いた。

「飽きたなあ……その反応」

滅茶苦茶な言い分、狂おしい程に腹が立つ。

なのに、ソレだけ酷い事を言われた事実ですら、私は興奮していた。雑に扱われる事に喜んでいた。

ぐちゃぐちゃにされた感情に、翻弄される。

「うーん、あ、コレとかどうだろう？」

そう言いながら、俺はぐちゃぐちゃに歯肉をかき混ぜて、肉の間から掘り返したのは神経だった。

それも、一際ぶつとい、本線みたいな一本。

ソレをプライヤーで軽く掴む。

「！ # \$ % &」

それだけで、もう、意味が解らない程の痛み！ 腹にどっかり座られたまま、それでも体がビタンビタンと飛び跳ねる。

「ロデオみてー」

俺は、腹の上から見下ろして、飛び跳ねる私を無邪気に楽しんでいた。

朦朧とした意識の中で、私はほんやりと覚悟を決めた。

どうせこの神経のカタマリを潰したり、引き抜いて遊ぶのだろう。

そうしたら、今度こそ、私はシヨック死するか、発狂して精神が破壊される。それなら死んだと一緒だ。いっそ、早くやってくれ。

……………いや、違う。

いい加減認めるしかない、私はソレを期待している。胸が高鳴り、ワクワクしている。

何と言う……。業の深さ、こんな女の子を望んだ事が何よりも罪なのだろう。

ココが地獄だろうか？

しかし、私の期待は裏切られた。

俺は、神経を無造作に潰したり、引き抜いたりはしなかった。

「よつとー」

ただ、ピンツと引っ張った。音がしそうな程。

もちろん、気を失う程の激しい痛み。

——ピーン！

そして、足が攣った。引っ張られた神経と足の神経が直接繋がったみたい。

そんな私のピーンと伸びたつま先を横目に、俺はニヤニヤと神経を引っ張ったり、縮

めたりして、弄ぶ。

ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！
ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！

ピン！ ピン！ ピン！ ピン！ ピン！ ピン！ ピン！ ピン！
ン！ ピン！ ピン！ ピン！ ピン！

歯の神経を引つ張られると、同じだけ足がピンと伸びて、攣った。

足が攣る度に、攣る回数の十倍ぐらい、私は達イッたした。

激しい痛みを快樂に置き換えて、体が滅茶苦茶にに発情した。

「オモシレー、連動してる」

すつかり玩具だ。私はぐるりと白目を剥いて、ボロボロの顔面は更にグチャグチャ痛みと快樂、脳みそを左右に揺らされて、強烈な刺激に翻弄される。

ピンッ！ ピンッ！ ピンッ！ ピン！

ピン！ ピン！ ピン！ ピーーーーーン！

「ヤベエ、引つ張つたままだと、ピーーーーーンって！」

神経を引つ張つたままにすると、足もピンとつっぱつたままになる。

何が面白いのか、俺はゲラゲラ笑っている。

楽しそうで何より。だけど、私は堪ったモノでは無い。

ピーンとしていた間、コッチはずーっとイキっぱなしなのだ。

「アゲ??? あがつ??? ぐぎい???」

脳内がピンク色に占領される。私の全てが溶けていく。

「あれ、反応しなくなった」

「あ、えう……」

違う！ イツたまま、帰って来れなくなったのだ。

ぼんやりとしたまま、頭がピンクのふわふわに包まれる。快樂が痛みを追い越してしまった。

こんな……こんな生き物があるのだろうか？

生命の維持に必要なサイン、死をもたらす痛みを前に、アヘアへとイキまくるなんて、あり得るのだろうか？

こんな女を俺が望んだとするならば、そりゃあ、どんな奇蹟でも作れないに違いない。まるでバカだ、アホ、間抜け。

でも、それが私だった。

「可哀想だから、そろそろ終わらせようかな」

そんな調子で、締め雑炊を食べるかのようにあつさりど。

俺は、私の首筋に、手を掛けた。

殺すのだ、捌りに捌って、もう飽きたから。

「あがつ……」

万力の様な力が、私のか細い喉を締め上げる。

ああ、なんて、甘美な、心地良い苦しみ。

「ゴボツ！ ガツ」

のたうち回り、血に溺れながら、ソレでも私は安らかだった。

もう、認めるしかない。

私は喜んでいる。死を捧げたい位に、私は目の前の俺が好き。

「??」

なのに、なのに。もう少しで死ぬると言う所で、急に力が弱まる。最後まで捌れるだけ捌って、ゆっくり殺して貰える。そう言う事か？

だったら、嬉しい。

私はチラリと、彼の顔を盗み見る。彼も楽しんでるだろうか？ 最期の瞬間に彼の姿を目に焼き付けようとして……

「?!」

なぜか、何故だか解らないが。

その表情と、あの時の木村の顔が重なった。

だから、言った、言ってしまった。

「ねえ、はやく、わたしを、殺して！」

「ツ!？」

信じられない！彼の反応は劇的だった。

ビクンと大袈裟に驚いて、手を離れたのだ。

ソレを見て、私は急速に頭が冷えるような気がした。裏切られたと思った。

「なん………で？」

殺してくれるんじゃない、なかつたの？

冷え切った脳が、発火する。怒りに沸き立つ！

許せない！裏切られた！

私は千切られた自分の歯をかき集める。両手一杯に。

すると、手にはシヤリアちゃんの短剣が握られていた。

ソレを躊躇せず、俺に、高橋敬一の姿をしたNZの目の玉に突き刺した。

だって、コレは！シャルティアの剣だから。

「あ？　ぐっ」

信じられないと言う顔をして、俺は立ち上がり、後ずさる。

届いた！　コイツに。

これは神の力だ！ 神の力が戻っている？ でもなんで歯から剣が？

私は無意識に、シヤリアちゃんの短剣を作ってしまった。

物質を作るとき、マイナス物質が生まれてしまう。作ったモノと対消滅させない為に、代わりの何かを消さなくてはならない。

だけど、この世界に私が自由に出来る物が殆ど無い。真つ白な世界。全ては私には壊せないNZの産物。

だけど、私の歯なら、私が持ち込んだ物なら対価になる。

ならば！

私は、グチャグチャの顔を修復する。壊れただけでパーツは足りてる。

そして、魔法少女のふわふわヒラヒラな衣装を分解。大胆に脇や背中を大胆にカットして質量を減らす、代わりに窮屈に胸を締め付けるチェーンを追加。

そうだ、コレは示威行進の時のドエロい衣装。俺の趣味と言うより、木村の趣味だが、相手を圧倒するには向いている。

可愛さや愛らしさだったら魔法少女の方が上かも知れない。でも、コレには木村の妄執が詰まっている。自分で想像可能な限界を越えたエロスがある。

「あ、あう……」

だから、俺は顔を赤くして吞まれてしまった。

きつと、殺したくないと思ってしまったのだ。だから、私にも神の力が行使出来た。次に、私がかき集めたのは、ボロボロと零れ落ちた命のかげら。

私の内臓だ、内臓をかき集め、創造する。

田中の使っていた、日本刀。

今、ようやく思い出したから。

一周目、目の前で死んでいく田中は何と言ったのか？ 唇の動きを見返せばもつと早く解ったはずだ。

だけど、悲しすぎて、辛すぎて、私は参照権でそのシーンを見返せなかった。でも、今なら解る。アレは俺に対する愛の告白でも、何でもなかった。

「ああでも、本当は、俺は、お前を……

殺したかった！」

アイツはそう言い残して死んだんだ。

アイツは、初めから俺が全ての元凶だと知っていた。殺せない化け物だと解っていた。知っていながらずっと手助けしてくれた。

「今、その望みを！」

俺の前に、私は刀を構える。

「馬鹿な、君に斬れるハズが」

「斬れるー！」

私は、知っている。殺せない俺を殺す方法を。

ネルネの、目。ソレを思い出す。ただ、在れと。

グチャグチャの左目が溶けて、生まれ変わる。

その目を以て、目の前の、俺の姿を見つめる。そこにあつたのは広大な宇宙。いや、その宇宙にコイツは居ない、宇宙の外にある宇宙、そして、そのまた外にある世界。

その奥に、コイツの本体が居る。

ネルネはこんな存在を殺せるのか？ そりゃ、星獣なんて簡単に殺せるハズだ。

投げたダーツが大気圏を越えて、宇宙を飛び出し、外宇宙へ、無の世界を飛び越えて、果てに到着、小さなNの外へ飛び出す、最後にはその殻をも突き破って、コイツに当てるイメージ。

そのイメージを一本の線にして、目の前の俺を斬る。

斬る？ 斬った？ 斬る！ 斬った！ 斬った!!!

過去も、未来も、時間軸も多次元も含めて、斬った事象を完結させる。

でも、実は私はまだ刀を振っていない。振って、斬り裂いた結果に同調するように、

そつと重ねる。

「シッ！」

思い切り、刀を振り抜く。ピタリと影が重なった。

結果が確定する。

「え？」

ずるりと俺の体が傾いだ。胴体がずり落ちる。

そして、消えた。

勝ったのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

……それで、アイツは死んだのかの？

目の前にはアイオン爺が居た。NZの影響が消えて神に戻ったのだ。

私は空っぽになったままのお腹を切なげに撫でる。

「わかんない、でも多分、死んでない」

そうか……。

だって、世界のエネルギーの基底となるアイツが死んだのなら、私達の世界諸共滅んでしかるべき。

きつと、適当な場所に隠れたに違いない。ヘタレだから顔を出せないのだ。しかし、どうやった？ あんなヤツをどうやって追い払ったと言うのじゃ？

「うーん」

私は、いや俺はガシガシと頭を掻きむしる。

あまり、言いたくない事だからだ。

随分と男らしい仕草じゃの？

「そっかな？ まあそうだよ」

だって、女の子らしく、可愛らしく振る舞うべき俺が、もう居ない。

私は、いや、もう俺で良いだろ？ 俺はもうウンザリだ。

「それで、どうやって撃退したかだっけ？」

そ、そうじゃ……

何故だかアイオン神は落ち着きが無い。どうした事かと思いつながらも、話を続ける。

「まあ、結局さ、ドコまで行っても俺は童貞クソ野郎って事だよ。下らない」

それは？ どう言う意味じゃ？

「そのまんま。だって、そうだろ？ 変態を極めたみたいな顔して、結局は自分を好きだって言ってくれる女の子を殺す事なんて、出来やしなかったんだよ」

木村と一緒にだ。いや、別に俺はアイツに好きだつて言つてないけどな。

言つてないよな？ 参照権も効きが悪い。

ふうむ、結局は口だけだったと？

「まあ、そうかな？ ソレに、可愛い女の子に日本刀でぶつた切られたいつてのもアイツの望みだったのかも」

業が深いのお。

ひよつとして、俺はヒロイン失格だったのだろうか？ なんせ最後の最後に俺は、アイツと木村を重ねてしまった。殺そうとして殺せない情けない俺の姿に、とつさに思い出してしまった。

ラブシーン？ でそれは、理想の彼女としては許されぬ事だろう。何故だか少し、後悔もある。

「或いは、もっと可愛らしくお上品にしてりや殺してくれたのかもね」
むう。

「どうしたん？」

いや、お主が殺されなくてよかったとな。

「ふうん？」

どう言う意味？

いや、今のお主はワシから見ても、可愛い。少々荒っぽい仕草がな。可愛いと感じる人間の気持ちだが、データではなく本質で初めて理解出来た。

「そ、そうなの？」

なんだか、照れてしまう。

……ぐう。

そして、神も参っている。どうにも罪作りな俺である。

所在なさげな神様は、チラチラと申し訳なさそうにコチラを見るのだ。

それでな、相談なんじゃが、神の力を返してくれんか？

「あ、良いよ。内臓を何とかしてからだけど」

あつけらかなと、俺は言い放つ。別にもうこだわりもない。もつと面白そうな事を見つけてしまった。

いいのか？　せつかく神になれるのだぞ？

「爺さんも、アイツの事が気になるんだろ？　だから神を止めるつもりがなくなった。今度はアイツの正体を探りたい、違うか？」

違わん。研究者としてあんな存在を見て興奮しない方がおかしいじやろう。

そうだ、世界を作った俺達にとっての神は、俺らの世界で言う研究者だ。

あんなヤツを見せられて、引退して死ぬなんて出来っこない。

それで、お主はどうする？ 十分な神の力の片鱗は残すかの？

「うーん、そうだなー」

それこそ、欠片でも何でも出来る力だ。

俺は、NZの図を思い出す。

「ねえ、この世界の向こう側、反対側に負のエネルギーで出来た私が居るんだよね？」

そうじゃな。きつとそうじゃ。

「ソレに会いに行きたい」

馬鹿な！ 対消滅して消えてしまおうぞ！

「でも、データだけなら？」

データだけで彷徨っていたユマ姫みたいに、データだけなら向こう側に干渉出来るんじゃないだろうか？

神の力を、全てのエネルギーを捨てて、ただのデータに？

ま、そう言われるとね……あまりにも酔狂だ。

しかし、神と話しているとアレだな、良くない。さつきまで良かったが今はダメ。

自分を好きそうな奴と話を長引かせてはいけないのだ。可愛くなくなる。

突き離す様に、俺はお姫様の口調を取り戻す。

「ソレも良いかなと言う話です。まずはやりたいことがあります」

そして、神の領域から外の様子を窺う。混乱するグラウンド。

そこには、突然消えてしまった俺を探して、キヨロキヨロと辺りを見回す俺『高橋敬一』の姿があつた。

「あれは？」

正真正銘、何の力もないただの学生じや。邪悪な何かはあやつのガワを残して何処かに消えたらしいな。

「そうですか、じゃあやり直さない」と

やり直す？

神の返事も待たず、私は高橋敬一の前に飛び出した。

「あつ！ 出て来た？ あの、どこに？ え？？」

まくし立ててる高橋君は、俺の衣装が変わっている事に気が付いてしまった。

そう、露出バカ高の、おっぱいをチエーンで縛った激エロ衣装である。

「あえうえあえ」

だから、一瞬にして顔を真っ赤に錯乱する。

だが、知ったことでは無い。俺はコイツに質問する。ほつぺたをぎゅつと挟んで逃がさない。

「アナタの、名前は！」

「え？ 僕？ 俺？」

「僕ではなく、俺の！ アナタの名前です！」

もう、強引に聞き出す、言わなきや今度は、おっぱいでグリグリ挟んで殺してやる。

「あうえ？ 俺の名前は……」

ああもう！ じれったい！

「俺の名前は高橋敬一、ドコにでも居る中学生。でしょ？」

「はい！」

無理矢理言わせた。

こうして俺は、私と出会った。

ホンモノの高橋敬一と。

コホンと咳払いを一つ、私は俺に、堂々と宣言する。

「私の名前はユマー！ ユマクロスセレナーデ。人呼んで

死憶の異世界傾国姫！」